月光を追いかけて

チャッピー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月光を追いかけて

【Ｎコード】
Ｎ９９９５Ｏ

【作者名】
チャッピー

【あらすじ】
父親と喧嘩して家出をした中１の少年。
公園でホステスに拾われる、夜街で個性的な人々と触れ合う内に成長していく。
届かないと知りながら、愛するとは何かを追い続ける。
７０年代という熱い時代を背景に、９０％のノンフィクションで書いてみました。

原点回帰

悲しい時には空を見る、あの時のあの人のように。

私は４月２日生まれで、通っていた幼稚園の出席順が、誕生日順だったので１番でした。
入園・卒園式やあらゆるイベントで、代表をさせられていました。
その影響でしょうか、齢５０が近い今でも、かなりの目立ちたがりやです。

年長、桜組の担任は洋子先生、華奢な体に高いトーンの声で、ケラケラとよく笑う先生でした。
多分大学を出たばかりだったのでしょう、その愛らしさに初めて、儚い恋心を抱いていたと思います。
５月の中旬でした、園児全員を集めて。

「お友達同士で、二人一組さんを作ります」と突然洋子先生が言いました。
全員を並ばせ、洋子先生が二人組みを作っていきます。
私は普段１番に呼ばれるのに、最後まで呼ばれませんでした。
『洋子先生、俺は？』そう声をかけた瞬間、始めて見る真剣な顔を私に近づけて。
「チサちゃんでいい？」と耳元に囁きました。

チサは障害児で、上手く歩くことも、話すこともできない少女でした。
私は互いの家が向かいということもあり、物心つく前から遊んでいたので、チサの表現を理解していたからでしょう。
『いいよ！』私は何も気にする事も無く、笑って答えました。

それから夏休み前までは、チサとも遊んでいました、夏休み明けからチサが来なくなり.
幼い私は、気にとめる事もなく過ごしていました。

２学期の終了式が１２月２４日だったと思います、クリスマス会などがあり楽しい一日でした。
「今日は先生が一緒に帰るから」と洋子先生に言われ、私は小躍りして手を繋いで帰りました。
家が見えたとき、チサの家に沢山の人がいました。

『チサん家なんかあったちゃろか?』と先生を見ると。
立ち止まり、拳を強く握り眉間に力を込めて、チサの家を見ていました。
私はその表情に圧倒されて、黙って家に帰りました。
家に帰ると母が待っていて。

「制服は脱がんとき」と着替えようとする私を制止した。
「先生・・残念やったよ」と後から入ってきた、洋子先生に声をかけました。
「本当に・・なぜ」洋子先生は俯いたままで、まるで誰かに囁くように言いました。
「チサが死んでしまって、天国に行ったとよ」母が私に向かって言いましたが、未熟な私には【死】の意味が理解出来ずに、ただ黙っていました。

チサの通夜の帰り、元気のない先生を見て。
「お前も男なら先生をバス停まで送ってこい」と母に言われ、断る洋子先生の手を引いて、笑顔で歩きはじめました。
先生は私の後ろを、俯き加減についてきます。
私は洋子先生をなんとか笑わせようと、他愛もない話を矢継ぎ早に

繰り出していました。
「チサは洋子先生みたいに、なりたいって言ってたよ」どういう話の流れでそうなったのか、覚えていない。
先生は立ち止まり空を見上げた。

昭和４３年のクリスマス、空気は澄み渡り夜空は満天の星が瞬き、寒さは感じなかった。
私が見上げる洋子先生の頭上から、気の遠くなるほどの、長い旅路の果てに届いた光が、優しく照らしていた、暗く寂しい想いを。

『先生どしたと?』夜空を見上げ続ける洋子先生に聞いた、純粋な心のままに。
「サンタさんが見えないかと思ってね」そう言って優しく微笑んでくれた。
私は無意識に心のシャッターを押した.
忘れられない大切な一瞬が、私の心のアルバムに追加されていた。

それから１５年後私の親父の通夜の席で、酒を飲みながらチサの母親から真実を聞いた。
チサの両親はチサを普通の子供として育てたかった、幼稚園も普通の子供と同じ所に通わせたく、園長先生に相談に行った。
園長は大きな寺の住職でもある、情も懐も深い素晴らしい人だったが。
この件ではさすがに二の足を踏んだという。
無理からぬ事だ、担当する者の負担を考えると、簡単に了承できない。
園長が悩んでいると。

「園長、受け入れましょう」と洋子先生が笑顔で言った。
「本当に勇気のある人だったとよ、私達の心の負担まで考えて、終

止笑顔のままでね」チサの母親は親父の遺影を見ながら語る、忘れた事のない愛娘の思い出を。
洋子先生は入園前の春休み、何度もチサに会いに行き触れ合った、業務外の行動だったのだろう。
自らの言葉に責任を持つ、簡単にできる事ではない。

二十歳の私は上京しバブルという、空虚な祭りをただ謳歌していた。
親父の死を受け入れる、準備もできてなく、ただ寂しさだけがあった。
「本当の優しさは気付きにくいもんやね、あんたの親父さんも、本当に優しい人やったよ」チサの母親は笑顔で私を見ている。
私の親父は戦時中生まれの頑固な職人で、鉄拳制裁が教育方針の堅物だった。
私はいつの頃からか、親父と距離を置き避けてきた、そしてそのまま親父は逝った。
親父との思い出を回想していると。
「遅くなってすまん、親父は残念やったな」その暖かく太い声が私の心を戻した。
『兄さん・・豊兄さん』私はその身長１９０ｃｍ近くある大きな男を見た時に、心の何かが切れ、その場で号泣した。
「今は泣け、そして後悔しろ、だがな親父は何も後悔しちょらんぞ」私の目を見据えた豊兄さんの目は、出会った時と同じ暖かさを湛えていた。

途切れ途切れの未熟な心が愛おしく懐かしい・・・大切な時

私の生まれ育った宮崎では、冬のワンシーズンに数回しか雪が降らない。
雪が降ると、小学校では授業を中断して校庭を走り回った。

微かな粉雪の感触を必死で感じようと、空を見上げ口を開けて走った。
それほど貴重な物だった、雪国の人は信じられないでしょう。

忘れもしない小6の冬、その冬は寒く2学期の終わり目前で、もう3度も雪が降っていた。
私は頼まれて新聞配達をしていた、ちょうど近所の中1のツッパリ君がサーフィンを始めて。
《かっけー！》と思い、夏までにボードが欲しかったのだ。
つっぱり君の姉が中3の恭子さん、ショートカットの髪を、軽くウェーブをかけ小さい体に小さい顔。
何も入ってないであろう、薄い鞄がトレードマークで、アイドルのような可愛さがあった。
恭子さんもバリバリのツッパリで、私の姉と駄菓子屋のリーゼントのマキさんを加えた3人を【限界トリオ】と呼んで、小学生の私たちは恐れていた。

2学期の終業式前日だったと思う、新聞を配り終えて愛車のママチャリで帰っていると。
ツッパリ君の家のガレージから、恭子さんが手を振っている。
私は格好付けて、急ハンドルで車体を傾けて近づいた。

『早いねどしたと？』と笑顔で声をかけた。
「待ってた、駅までのせてって」と恭子さんは、ママチャリの後ろに乗りながら笑った。
「レッツゴーーー！」私はチャリを漕ぎながら、背中に触れる恭子さんの確かな胸の弾力に緊張していた。
『どこいくと？』前を見て速度を上げながら聞いた。
「大きな街、今年はサンタになるかい」私の耳元に囁いた。
その声は強い意思があり、向かい風の北風を押し返していた。

私は宮崎刑務所（現在は公園）の高い塀沿いに進んだ。
悪ガキの秘密の遊び場である、駅裏の狭い路地を抜けると、宮崎駅のホームが見えた。
「うんうん、ダテに悪ガキをしてないねー」と恭子さんは妙に感心して、チャリを降りた。
『乗るとや？』私はチャリを停め、かごのスポーツバッグを恭子さんに渡しながら聞いた。
その瞬間恭子さんは、その可愛い顔に似合わない不敵な笑みを浮かべた。
「ダッシュ！」と言ってホームに向かって走り出した。
一瞬呆気に取られた私も、スポーツバックを肩に掛け追った。
恭子さんは、線路の安全確認をしながら走っている。

顔を出し始めた太陽がその光で、恭子さんの背中を照らし。
冬の朝特有の、澄んだ世界が見守っていた、無鉄砲な挑戦者を。
１番ホームに発車待ちの寝台特急が停車していた。
恭子さんが線路の方から駅員がいないか、チェックしてる所に私が追いついた。

「決定やね」恭子さんは振り返り、笑顔でウィンクをした。
『どこ行き？』私は汽車を見上げながら聞いた。
「どこでも宮崎よりわ大きい街があるやろ」自分に言い聞かせるように呟いた。
二人で寝台急行に乗り込み、夫婦二人旅であろう人の後ろに、目立たないように席を確保した。

「ＯＫやね」不意に私は頬にキスされた。
「ありがとう、なんもお礼できんから」恭子さんの最高の笑顔が、私の顔の前にあり私は凍結した。

「誰にでもせんかい、貴重だからね」そう言って笑った。
私は姉に連れられてよく遊びに行って、限界トリオのパシリをしていたが、それを楽しんでいたし自慢だった。
『俺、帰るね』自分の中に、新たに芽生えた気持ちの整理がつかない私は、逃げるように汽車を降りて走った。
「気～つけてね、誰にも言わんとよ～」逃亡者の私の背中に、挑戦者の声が響いてきた。
チャリまで戻り発車を待った、鈍い音の合図があり汽車はゆっくりと走り出した、夢を乗せて。
踏み出せない、未熟な心を置き去りにしたまま。

その日の夜８時位に、恭子さんの母親から姉に電話があった。
何も知らない姉はそう言って電話を切り。
「あんた何も知らんよね？」と私に聞いた。
『どしたと？何かあったと？』私は必死にとぼけていた。

次の日が終業式だったと思う、私が学校から帰ると、母が恭子さんの母親と玄関で話していた。
恭子さんの母親は後妻さんで、若く綺麗な人だった。
恭子さんややツッパリ君と打ち解けようと、必死に頑張っていると、近所の大人達の話で聞いていた。
その母親が、心配そうに話しているのを見てられずに、私はさっさと遊びに出かけた。
近所の駄菓子屋が、私達悪ガキの溜り場で、そこに集まり何をするのか話し合う。
駄菓子屋に向かっていると、駄菓子屋の外にツナギを着た大きな背中が見えた。

『豊兄さん！』私は大きな声で呼び、走って近づいた。
「おう悪ガキひさしいの～、チ〇コに毛がはえたか？」と言って右

手に拳を作り差し出した。
豊兄さんは、昨年中学を卒業した元番長さんで、その時に１８０ｃｍ有る長身の美少年だった。
豊兄さんの差し出した、大きな拳に私は右手の拳を当てた。
『まだ』と照れた笑顔で呟いた。
この挨拶が私達の憧れで、同級生のマセた女子の中には、真剣に紹介してくれと言う者までいた。
『豊兄さん、話があるんやけど』私は恭子さんとの約束を必死に守って、誰にも言わないでいた。
だが未熟な私には辛かったのだろう、豊兄さんに全てを打ち明けた。
「そうか、大丈夫や恭子は帰ってくるかい・・・お前は黙っちょき」
そう言って、綺麗に纏めたリーゼントの髪に手をかけて笑った。
出会った時から憧れていた、容姿ではなくその生き方に、今現在でも・・・。

その日の夜、１０時過ぎに私の部屋の窓を、コンコンと誰かが叩いた。
開けて見ると、赤い服を着た恭子さんが立っていた。
『恭子さん』私が呼ぶと「恭子じゃないよ、サンタだよ」とおどけた。
恭子さんは窓から侵入してきた。
「はい、クリスマスプレゼント」と言って紙袋をくれた。
「ＶＡＮやかい高いちゃかいねー」と可愛く微笑んだ。

それから、博多の駅で降りて改札を飛び越えた話や、帰りの話を早送りのように話した。
「私ね」急に声のトーンが変わりはっとした。
「中学でたら豊君と結婚するの」満面の笑顔で言った、「でも親父がね・・・」少し暗い表情になり呟いた。
恭子さんの親父は、警察官で堅物の頑固者だった。

『話したの？』と私は聞いた、「今からね、頑張ってみるよ」そう言って帰って行った。

次の日、新聞を配り終えて帰ろうとした私は、恭子さんの家のガレージに、人影を見つけ近づいた。
ガレージで、恭子さんと豊兄さんと、後妻さんとツッパリ君が座っている。
いや土下座しているのだ、年末の早朝コンクリートの上に、正座などできるだろうか。
ただ４人は正座し土下座している。
よく見るとガレージの車の中に、恭子さんの父親が運転席に座っている。
《お願いしてるんだ！》未熟な私にも理解できた。

私は急いで家に帰り姉に報告した、姉は駄菓子屋のマキさんに電話して出て行った。
私も追って出ようとした時に、母に呼び止められ事の次第を話して、恭子さんの家に向かった。
恭子さんの家のガレージの土下座には、姉とマキさんも加わっていた、私は感動していたその姿に。
もちろん未熟な私には、はっきりと何かが理解できた訳ではない。
しかし、その６人の背中が、確かな想いに溢れていた。

恭子さんと豊兄さんはお互いを想い、後妻さんとツッパリ君は二人を想い、姉とマキさんは友を想って。
私も姉の横に座り、土下座に加わった、不思議と冷たさや寒さを感じなかった。
どれほどの時間が過ぎたのだろう、その膠着を破ったのは、チサの母親だった。
チサの母親は助手席に座り、恭子さんの親父と話始た。

今現在、娘を持つ父親になって考えると、許せる訳がないと思う、
その時は当然わからなかった。

数分後チサの母親は帰っていった、恭子さんの親父は、意を決して
車から出てきて。
「数年後の将来、恭子は後悔する時が来るかもしれん・・・その時
はお前が命がけで支えるか？」と豊兄さんに聞いた。
「はい！この命、必ずかけて」即答だった、揺れないのだわかりも
しない明日などに、そういう生き方をしている。
あの頃も、５０を過ぎ孫を抱いている今でも・・・。

チサの母親の話は、後日私の母から聞いた。
チサが幼少の頃、チサの母親は外に出さなかった。
あの頃の子供は純粋であるがために、時に残酷な者だから。
だがチサは皆と当然遊びたい。
その幼いチサの手を引いて、子供の世界に連れ出したのは、小３の
豊兄さんだった。
私達に仲良くやれと教え、最初の頃は常にチサの傍らにいて、上の
子供にも何も言わせなかった。
誰かに頼まれたのではない、自らの心のままに行動したのだろう。

チサの母親は、豊兄さんに心から感謝していた、そしてその生き方
を信じていた。
チサの母親は、恭子さん父親にこう言った。
「あんたは豊を知っている、本当は嬉しいよね・・・少し早いだけ、
でもチサは５歳で逝ったよ」
人は忘れない暖かい想いは。

教科書や参考書には載っていない・・・大切な教えは

恭子さんの失踪事件の、1年前の年末だった、私達小5の悪ガキ仲間に事件が起きた。
私達悪ガキ仲間の二人が、中1のグループにやられた。
冬休みの私達は、駄菓子屋の2階に集まった。
駄菓子屋は、古い木造の母屋の1階が店で、奥が婆さんが暮らす家。
小さな離れが隣接しており、1階の開き戸を開けると大きなテーブルに椅子が数脚あった。
皆がマンガや、親に見られたくない雑誌を置いていた。

離れの2階に2部屋あり、右がマキさんの部屋で、左がちゃぶ台だけある何もない部屋だった。
私達は駄菓子屋の婆さんに断って、2階の左の部屋に集まった。
多分8人だったと思う、その内の二人がやられていた。
長い沈黙があり、Mが口火を切った。

「どげんするや？やられっぱなしじゃ、いかんやろ」それに対しSが「そりゃそうや！」と返した。
私達の仲間ではMとSが武闘派で、すぐに手がでる。
私は口も立っていたので、交渉と作戦はまかされていた。

「お前が豊さんに相談でけんとや？」やられたYが言った。
『でけん、お前らでなんとかせいって、絶対言われるし』私は確信的に思っていた、無傷の私が相談しても無駄だと。
『でも何もせんわけにはいかん、俺らが中学上がった時に、そいつら3年やかい』私の言葉に皆が頷いた、私はそれを見て。
『やり返そう』と叫んだ。

その時代、下が上に逆らうとはどういう事か、悪ガキの私達は知っていた。

重い空気をそのまま背負い、部屋を出た時、薄暗い階段の下の扉が開いた。
光とともに、綺麗なリーゼントのマキさんが現れた。
後光に照らされて、上から見るマキさんを、綺麗だと思っていた。
マキさんはトントンと階段を上り、私たちを見た。

「どしたと？戦争にでも行くような顔して」と微笑んだ、私達が黙っていると。
「急がんでいいが、美味しいクッキーあるから食べていき」と私達を元の部屋に押し返した。
マキさんが怪しげなクッキーの缶を差出した。
「外国製やからねー旨いとよー」と明るく話し、やられた仲間に絆創膏を張りながら。
「いい男が台無しやねー」と笑顔で言った。
私達は黙ってクッキーを食べていた。

「なんや決めたんやろ、決めたんなら前向かんね」少し強い語気で言うと、「命までとりゃせんやろ」と笑顔に戻った。
その言葉が私達を押した、部屋を出て階段の下で靴を履いていると。
「あんたらが怖い時は、相手も怖いっちゃかいね、堂々とやられておいで」と言って手を振った。
あの頃は、そういう時代だったのだろう、日本は戦後の復興を果たし、成長を続けていた。
親達は皆忙しく働き、子供には子供の世界があった。
上が下をみる、そんな当たり前のシステムが、脈々と受け継がれ完成していた。

私達は一度【仲良し公園】に行き話し合った。
「誰からやるとや？」Ｍの問いに『キングやな』と私が返した。
キングとは中１で１８０ｃｍ以上あり、相撲部屋がスカウトに来た

と言われるほどの、巨漢の有名人だ。
私の言葉に、ＭとＳが頷き他の５人の顔は緊張した。
私が呼び出す事になり、奴等の溜り場のたこ焼き屋に向かった。
たこ焼き屋の扉を開ける時《いないでくれと心で願った》扉を開けると、奥の席にキングとコオロギ（命名：私）が寝転んでいた。
私はキングの前に立って、キングを正面から見た。
『話があるけん、表にでろや』と私は、映画の菅原文太をまねた。
「なんやークソガキ」いきり立つキングを、コオロギが抑えた。
「まぁ待て、こいつは１区やかい」とコオロギが言った。
１区とは私達の学校の地区割りで、私の住んでいた地区は大きく、１区２区と区分けされていた。
そして１区には、豊兄さんがいたのである。

「なぁお前、誰ときたんや？」コオロギがメガネの奥の細い目を、より細めて聞いた。
『心配せんでも俺らだけやけん、落とし前つけにきたんや』文太継続中、『仲良し公園でまっちょるかい逃げんなよ』私はそう言って、足早に表に出た。
仲良し公園に戻る途中で、マキさんを思い出していた。
足りない頭で必死に考えた、その言葉の意味を。
公園に着き、仲間の顔を見てわかった、幼く未熟だったと思っていた。

「おったとや？」と声をかける、心配げな仲間に向かい。
『おったキングとコオロギや』と真顔で返した、沈黙が支配した。
『今回は俺とＭとＳでやる、お前らは手を出すな』と私が言った。
「なんで？」とＵが聞いた。
『俺達は１区やかい、キングには勝てんし、それで終わりやないかい』私の言葉を、ＭとＳは理解したように頷いた。

キングとコオロギが来て、いきなり始まった、勝負は5分ほどでついていただろう。
文太をやった私が1番激しくやられて、うずくまった所に、2発腹に蹴りが入り立てないでいた。
「そんくらいでいいちゃない」すぐに誰の声かわかった、「ねーもういいころやねー」二人も！私はその声をうずくまり聞いていた。
「関係ないやつは口出すな」明らかに動揺しているコオロギが叫んだ。
そのコオロギの顔の前１０ｃｍ位に、恭子さんの顔があった。

「ガキ共が帰らんかい迎えに来たとよ、１区は家族やかいね」目の前のコオロギから、視線を外さずに立っていた。
その目は噂に聞いた【狂子】だった、コオロギは視線を逸らし黙りこんだ。
「とく、あんたもえろなったね～」キングに向かい、マキさんが歩み寄っていた。
キングも黙り後ずさりしている。

「あんたらも、3こ下に手をだしたんや、私らもあんたらに手を出していいんやね？」夕焼けを浴び、照らされて輝いていた。
日本人離れした、彫の深い顔がさらに深くなり、その深さの遥か深い物を、その目が湛えていた。
「あんたらに、私らに逆らう勇気があるならね」と微笑んだ。

コオロギとキングが黙って帰り、私達も解散した。
ＭとＳの家に恭子とマキのコンビで送り二人の母親に。
「怒らんでやって下さい」と言うと。
「ありがとね、やられた方が魂が入るかい、いいとよ」と二人の母親が言った、まるで申し合わせたように。

「さてと、最後は1番の問題児やね」恭子さんが笑顔で言うと。
「今夜は、2階の左の部屋に泊まり」とマキさんも笑顔で言った。
私が親父との関係上、帰りにくい事を知っていたのだ。

駄菓子屋に着くと姉が待っており、私の顎を掴んで見回し。
「なんね、たいしたことないねー」と言って、限界トリオ3人で笑った。
「ほれ今夜は帰らんやろ」と着替えの入った紙袋をくれて、恭子さんと二人で帰っていった。
「風呂にはいりー、まっこつこん、ガンタレがー」駄菓子屋の婆さんが、いつのまにか立っていて、風呂を指差した。
私は、風呂に入るとあちこち痛んだが、開放感の方が強く、気にならなかった。
風呂から上がり、婆さんから握り飯を貰い2階に上がった、しばらくしてマキさんがやってきて。

「この部屋何も無いかい、私の部屋で食べよう」と言ったマキさんについて、私も部屋に入った。
マキさんの部屋は以外にピンクが多く、可愛い感じの部屋で、唯一CAROLのポスターが、異彩を放っていた。
『やっぱ永ちゃんかー』私の言葉に、「もちろんよ」と笑った。
マキさんは、家庭の事情で親と暮らせず、祖母である駄菓子屋の婆さんと暮らしていた。
長身で細身の体に、彫の深い顔、少し茶色の髪が綺麗だった。

だが中学入学して、髪の色と長さを注意され、生まれつきですという主張も無視された。
その無視に対し、翌日から髪を切りリーゼントで登校した。
校則は肩までだからOKで、それ以来ずっとそのスタイルだ。

宝塚の男役って感じで、女子からも絶大な人気が有り、バレンタインデーには、チョコをどっさり貰っていた。

「なんでキングなん？」マキさんが突然聞いた。
『豊兄さんなら、そうすると思ったかい』と私は、マキさんの目を見て言った。。
「なんで豊にぃに、相談せんかったん？」とマキさんが、微笑んで言った、
『だって怒られるよ、自分でなんもせんで相談すんなって』と真顔で答えた。
「おつかれちゃん」と笑顔で、優しく言ってくれた。
子供の私は眠くなり、何も無い部屋に帰って爆睡した。

翌朝、私は人の気配で目覚めた、豊兄さんが私を見ていた。
「起きんでいいぞ、どうしたん？」と豊兄さんが真顔で聞いた、私は事の成り行きを正直に話した。
「そうか大変やったな、お疲れさん」と豊兄さんが、笑顔を見せた。
その時、遠くからバイクの音が近づいて来た。
「早いなー、お前は寝ちょき」そう言って豊兄さんは、部屋を出て行った。
バイクは駄菓子屋に入り止った。
「朝からうるさいから、エンジン切らんね～」豊兄さんはバイクの男に声をかけた。
私は部屋の窓を少し開けて、覗いていた。

「おぅ、すまんねー、ひさしいの～豊」バイクの男は源氏君、名前の由来は知らないが、武闘派集団の水産高校の頭である。
「心配せんでいいよ、源氏君と豊にぃは仲良しやかい」知らぬ間に、マキさんが後ろに立っていた。
『なんしにきたと？』と私はマキさんに聞いた。

「よく見て、絶対に忘れんじょき、滅多に見られんかい」そうマキさんが笑顔で言って、部屋に帰っていった。

「豊、今回はすまんかった」源氏君は頭を下げた。
私は驚いて見ていた、多分親にも教師にも下げた事のない頭を、中坊の豊兄さんに下げているのだ。
「小僧相手やったと昨日聞いたんや、ムネ（コオロギ）が来て、豊にやられる言うてな」二人は互いの目を見ている。
「やられてこいって言ったかい勘弁な」源氏君はもう一度頭を下げた。
「小僧達がとく（キング）に向かった、意味をわかちょらんわ、ワシの駄目なとこやなー」豊兄さんは黙って聞いていた。
「もういいかい、源氏君が来たんなら俺はいいかい」豊兄さんは笑顔を見せて「でも次は」とまで言った時。
「わかっちょる、そん時は覚悟を決めさせるかい」と源氏君が言った。
幼い私はどんなルールの上で、この会話が成り立っているのかなど、考えもしなかった。
多分二人は、ギリギリの状態で会話していたのだろう。
下を想って言葉を選び、無意味な争いを避けるために。

私が高1の夏に、駄菓子屋の婆さんが亡くなった、葬儀は地区の公民館で行われた。
通夜には、幼い子供から老人達まで集まり、思い出話をしていた、それはまるで町葬のようだった。

「婆さんは残念やった」私は不意に声をかけられて、振り向くと源氏君が立っていた。
高校を卒業し、父と共に漁師になっていた。
仕事帰りに駆けつけたのだろう、作業着に魚臭いタオルを顔に当て

て、誰はばかる事無く泣いていた。
やはり愛すべき人間なのである、私も寂しく悲しかったが、泣けなかった。
周りを気にする、小さい人間だったのだ。

「豊は？」公民館の床に座り、源氏君が聞いた。
『まだ来てないよ』私は隣に座り、真顔で答えた。
「実はあん時婆さんが見てた、俺と豊を」源氏君は遺影を見て、溢れる涙を拭いながら。
「嬉しかった守られてるようで本当に・・嬉しかったんや」と言い俯いて泣いていた。。
その時入り口から豊兄さんが入ってきて、斎場は静寂に包まれた。
豊兄さんは祭壇の前まで進み、正座して遺影を見た。

「ありがとうございました」と叫んで、豊兄さんは頭を下げたまま、号泣した。
「豊の寂しさは別格やかい」源氏君もまた泣いていた。
豊兄さんも源氏君も、駄菓子屋の2階に泊まった事がある。
風呂に入り握り飯をもらった「こん、ガンタレが」と愛されながら。

両親のいない豊兄さんは、碁盤職人の祖父と二人で暮らしていた。
小学校入学から、中学卒業するまでの9年間、遠足やその他の弁当が必要な時には。
全て駄菓子屋の婆さんが、登校する豊兄さんを待って手渡しいた。
豊兄さんは、まるで宝物を扱うように、大切に弁当を持っていたのを、今でも時折思い出す。
生産と廃棄を際限なく繰返す、今の時代だからこそ・・・。

ロウソクの光が照らす、祭壇の中央にある遺影には、いつもの割烹着を着た婆さんが微笑んでいた。

まるで泣いている豊兄さんに、優しく語りかけるように。
祭壇の前に座る豊兄さんの横には、歩き出したばかりの愛娘が、心配そうに寄り添っていた。
豊兄さんの手を握り、見つめていた、父の真直な生き方を。

今思うと、小5から小6の私は、成長していたのだろうか？
多少疑問が残る、私がその時点でも今現在でも、成長できたと確信できるのは、中1のあの暑い夏である。

決断を迫られた時、自らの幸せを選ぶとは限らない、それ以上の幸福もあるのだから

いきなり殴られた、中1の夏休み。
夏休みに入ったばかりの7月末、私は親父の大切なカメラを持出して、プールに出かけた。
親父が仕事から帰るのは、常に夜9時を過ぎた頃なので、安心して持ち出したのだ。
しかしその夜、私の不注意で事の次第がばれてしまい、殴られたのである。
もちろん勝手に持ち出した、私が一方的に悪いのである。
しかしその日の私は、それまでに溜まっていた物が噴出し、親父に殴りかかってしまった。
それまでは怖かったし、勝てるはずもないので、逆らった事はなかったのだ。

親父は激怒して、向かってきた私を容赦なく殴りつけ、最後は担がれて、玄関から投げ捨てられた。
「2度と家の敷居をまたぐな」そう言って鍵をかけられた。
親父に刃向かった私は、放心状態で道路に座っていると。

姉の部屋の窓が開き、姉が靴を投げてくれ手招きをした。
「これ」と言って母から預かった３０００円をくれ「しばらく帰らんほうがいいよ」と言って窓を閉めた。

母も姉も祖母の家に行くと、思っていたのだろう。
しかし、少し大人になったと勘違いしていた私は、大金も手に入れ、気持ちも大きくなり。
繁華街に向かって歩きだした、最高の出会いと切ない別れが待っているとも、知らないままで。

出会い

その時の日本は増殖を続けていた、後にバブルと言われる時代に突入する。
その前である時代も熱かった、多くの大人達はその得体の知れない熱に、焼かれながら踊っていた。
豊になろうと働き続けてはいたが、その豊かさのボタンは掛け違えたまま、疾走していたのではないだろうか。

昼間の暑さを、夜風が少しづつ和らげはじめていた、私はチャリを使わなかった。
繁華街まではチャリならば１０分程で着くのだが、夜中にチャリに乗っていると、職質される事を知っていた。
だけら歩く事に決めたのだ、それほど本気だった。

最短距離を歩こうと、未舗装の細い砂利道を、月明かりを頼りに歩いた。
空には無数の星が瞬き、古寺の竹林から爽やかな風が流れ込み、そっと背中を押してくれた。
今よりも圧倒的に街灯は少なく暗かった、２４時間営業の店も、繁華街に数件あるだけで、コンビニなど存在すらしていなかった。
今では全国的に有名になった、宮崎県庁の横を通るときに空腹を覚えた。
今夜は、親父が珍しく早く帰宅したので、母は張りきっていて。
《我家では珍しい御馳走が、茶の間を賑わしていたなー》と思った。

その楽しいはずの夕食を、私の暴挙が破壊して、その罰として空腹が襲ってきたのだ。
私は、メイン通りの橘通りを意識的に避け、裏通りを歩いた。

その当時出来たばかりの、【若草通り】というアーケード街に向かった。
繁華街が近づくにつれ、人工的な明かりが月明かりを支配した。
人工的な明かりが、こっちにおいでと、道を照らし誘っている。

若草通りには、まだ沢山の人が行き来していた。
酒を飲みに行くのであろう、スーツ組のサラリーマンや、雑貨屋で小物を選ぶ、若いＯＬ・外食を楽しんだのであろう家族連れ。
幾多の人々が、同じ時の中すれ違い、個々の巣に帰る準備をしていた。
若草通りまでが、私の中学の校区内だった。
仲間の外山君の家である、大きな模型屋が見えていたが、立ち寄ることはしなかった。

私は大好きな【四海楼】という中華屋で、激安あんかけ焼きそば、（８０円だったと思う）を食べ若草通りを抜け橘通りに出た。
交差点で信号待ちをしているとき、向かいの夜街の明かりが、空をも照らす勢いで見えた。
信号が変わったが、私は動けなかった。
《帰れなくなる》漠然とした気持ちが心に充満し、渡れなかったのだ。

向かいの一番街という、大きな看板が税関のようで、未熟な私はパスポートを持っていなかった。
諦めて引き返し、若草公園まで歩いた、どこで寝ようかとベンチを物色して。
裏通り沿いの、建物の明かりが微かに届く、ベンチに決めて座った。
建物は教会で、木枠の掲示板を白熱灯が照らしていた。
掲示板にはマリアが描かれたポスターが張ってあり、私の目はなぜか、そのマリアに支配されていた。

「家出少年みーーーっけ」大きな明るい女性の声で、私は支配から解け振り返ると。
２０代であろう、ミニスカートに派手目の化粧の女性が、両手を胸の前で合わせ、人差し指を突き出し。
【銃】を突きつけるようなしぐさで、仁王立ちで立っていた。
「動くな！動いたら撃つ」と笑顔で叫んだ。
私は、酔っ払いだなーと思い、その場でベンチに座ったまま、ゆっくりと両手を上げた。
「腕を下げるなよ」と言いながら、体勢はそのままに、前日までの雨が製作した、オブジェのような水溜りを。
「ほい！」という間の抜けた掛け声で飛び越え、私の座るベンチまでやってきた。

近づくと顔の表情までがはっきりと見え、その美しさに見とれていた。
私の周りにはいない、別の輝きをまとっていた。
彼女は美しい笑顔で、私の横に座り、ニヤニヤと笑いながら切りだした。

「名前は？」刑事口調継続中だ、『沢田です』私は退屈だったし、やはり寂しかったのだろう。
酔っ払いであるが、女性なので安心していたのであろうか。
いや彼女だったからなのだと、今は思っている。
「下は？」職質継続『研二です』少しの沈黙があり、彼女は美しく微笑んだ。
「あだな名は？」私は得意げに彼女の目を見て。
『ジュリーです』と笑顔で答えた。
美しい花が満開を迎えた時のような、華やかな笑顔で彼女が笑った。

そしていきなり立ち上がると。
「ジュリーーーーー！」と大声で、ＴＶドラマの、寺内貫太郎の婆さんをまねて、大きな動作で腰を細かく振った。
私は爆笑して、なぜだか笑いが止まらなくなり、しばらく笑っていた。
彼女は笑う私を優しい目で見ていた。しばらくして落ち着いた成長期の私は、また空腹を覚えた。

「どうした家出少年？」彼女の笑顔の問いに。
『笑ったら腹減った』と照れて見せると。
「何食べた？」彼女は少し真剣な視線で聞いた。
『四海楼のやきそば』私のその答えが、終わるか終わらないかの時には、私の膝に彼女のバックが投げられた。
「肉、食べに行くよ」と笑顔で言いながら、彼女は歩き出した。

私は慌ててバックを持ち、彼女に追いついて並んで歩いた。
「ご馳走するんや我慢しな」と彼女が笑顔で言って、腕を組んで来た。
彼女のかなり弾力のある胸が、私の五感を刺激していた。
あれほど渡るのに躊躇した、橘通りを簡単に渡って、大人達が焼かれている魔界に、足を踏み入れて行った。

ワシントニアパームというやし科の木が、海まで連なる中央分離帯を越え、橘通りの対岸に到着した。
彼女は何の躊躇も無く、赤玉駐車場を横切り、すぐ横の【つぼや】というホルモン屋に入った。
私は彼女の後に続き、少し緊張しながら入って行った。
つぼやはお世辞にも綺麗な店でなく、木造の【バラック】という表現が、ぴったりとマッチするような店で。
カウンター席だけがが１２席あり、２席に一つ七輪が置いてあり、

その上で肉を焼いてくれるというシステムだ。
店の外観と反比例して、肉は上手いし、価格もリーズナブルで、客足は絶えない。
店に入ったとき手前の席には、若いサラリーマン風の男が、3人飲んでいた。
彼女が中央に座ろうとしたのを、私が制して奥まで進んで、1番奥の席に彼女を押し込んだ。
中坊の出歩く時間は過ぎていたし、何より入った時のサラリーマンの、彼女への視線が気にいらなかった。
「おやじ、レバーとカルビと・・・んーお肉いーっぱい」酔った思考回路を立ち上げるのが、面倒くさくなったのか、アバウトな注文に切り換えた。
知り合いなんだと私は気づき、安心して彼女を見ていた。

「私、生ビール飲むけど何にする?」と聞いたので駄目もとで、『俺も生ビール』と笑顔で言ってみた。彼女の視線と私の視線が交わり、少しの沈黙のあと。
あの満開の笑顔になった。
「そうこなくちゃなー」と満開で言って、私の肩を遠慮なしに、バシバシと叩いた。
生ビールが大ジョッキで運ばれて、私はその量の多さに驚き、不安になった。
悪ガキの私は、ビールを飲んだ事はあったが、それは僅かな量だったのだ。
彼女と元気よく乾杯して飲んだ、彼女にせかされるように、肉をかなり食べた。
肉も美味かったが、ご飯に醤油ベースで味付けした鰹節をまぶした、《けずりかけ》通称《猫まんま》がとにかく美味かった。
「なんで家出したん?」彼女は2杯目のビールを飲みながら聞いた。

『親父と喧嘩した』私は半分ほど減った、自分のジョッキを見ながら答えた。
「理由は？」彼女も手に持ったジョッキに、顔を近づけて前を見ていた。
『俺がバカだから』少し酔った私は、素直にそう答えた。
「バカと思ったんなら、もうバカじゃないよ」彼女はそう言いながら、優しい瞳で私を見ていた。

「靴汚いな～」急に彼女が話題を変えた、優しさだったのだろう。
「私ね、昼間は一番街のテ〇カ靴店にいるから、明日おいで」そう言って微笑んだ。
店を出て彼女にお礼を言った。
「今日が家出初日やろ？」彼女は真剣な顔で聞いた、『うん』私が素直に返事すると。
「なら今夜は公園で寝な、それも良いことやかい、明日必ずお店においで」最後はあの美しい笑顔に戻っていた。
彼女はタクシーに乗り「必ずおいでよ、約束やかいね」と窓を開け手を振りながら叫んだ。
私は走り去るタクシーに向かい頭を下げて、『ありがとう』と呟いた。
産まれて初めて心から。

どんな偶然が出会わせたのか、もし運命というものが、何かの意思により存在するのなら、私はその何かに感謝したい。
タクシーを見送る私の中には、確かにあの白熱灯に照らされたマリアの笑顔と、満開の花のような彼女の笑顔が存在した。
その時の自分が気付かぬままに。

マリアの傍で寝よう、私はゆっくりと歩き出した。
急激に衰えていく、不満という若さと、新たに芽生えた感性に促さ

れるように。
南国の夏はその熱を発散しており、時代に翻弄されている人々が、
癒される場所を求めて放浪していた。
私は、何か楽しい事の始まりを、感じて歩いていた。
もう寂しくも辛くもなかった・・・。

捨猫

繁華街の雑踏を離れて、橘通りを渡りしばらくすると。
若草公園の唯一つの、街灯が照らす滑り台が見える。
栄養の摂取が満ち足りた私は、公園の左端を歩き、今夜の宿泊先である、ベンチに腰を下ろした。
振り向くと掲示板のマリアが、変わるはずもない優しい笑顔でそこにいた。
私はマリアに、『おやすみ』と声を出して言葉にして寝転ぶと、空には無数の星が瞬いていた。
やはり疲れていたのだろう、いつ眠りに入ったのか覚えていなかった。
翌朝、自己主張の強い真夏の太陽と、永い地中での生活から開放された、セミ達の声で起こされた。
元来私は夜型人間で、睡眠時間は5時間もあれば充分な方だった。

私はおもむろに立ち上がり、水のみ場まで歩いて。
Tシャツを脱ぎ上半身裸のまま、顔を洗い脱いだTシャツで拭くと、Tシャツは汗と焼肉の匂いで、かなり臭かった。
さて、どうしようかと考えながら、異臭の漂うTシャツを着た。
信の家でも行くかなと思い立ち、マリアにさよならをして歩き出した。

仲間の信は母子家庭で、母親は早くに仕事に出かけるのを知っていた。
15分ほど歩き信の家に着くと、信の部屋の窓を静かにノックしてみた。
「誰？」声の主は妹の千鶴だ。
『俺だよ、可愛いチャッピーちゃん』私はおどけて声をかけた。

ガラガラと窓が開き、千鶴が顔を出した。
「朝早くからどうしたの？」小５になった千鶴は、少し背伸びをしたい年頃なんだろう、大人びた笑みを必死に作って笑った。
『ちょっと見ない間に、可愛くなったな～千鶴ちゃん』私は思ったことをわざと口に出し、大人びたい年頃の少女の機嫌をとった。
「そうやろー、そうなのよー」と千鶴は少女の笑顔で答えた。
『信は？』私の問いかけに、私の目的に気付いた千鶴は。
「寝てるよ、かあさんは出かけたよ」と言って、玄関の鍵を開け、中に入れてくれた。

信の家で風呂を借り、千鶴の作ったチキンラーメンを食べ、信を起こしてＴシャツを借りて着替えた。
「これから、どげんするとや？」信は好奇心を全面に出して聞いた。
『とりあえず、働くんや』私は強がり漠然とした計画を言った。
「豊さんには言ったと？」信は心根の優しい男で、私の事を本気で心配してくれいた。
『なぁ信、誰が俺の事を聞きに来ても黙っててくれ、たとえそれが豊兄さんでもだ』私は信にとってわ、非常に酷な事を約束させた。
「わかった、あてわあるんかい？」私は昨夜の彼女の言葉を思い出し。
『まぁな』と信をこれ以上心配させたくなくて、無理やり笑顔を作った。

信の家を出たのが、夕方の５時少し前だった。
その日は土曜日で、若草通りも対岸の一番街も、いつも以上に活気に溢れていた。
テ〇カ靴屋はすぐに見つかったが、私は入れずに向かいのパチンコ屋の入り口から、靴屋の中をうかがった。

店内で昨夜の女性が、おばさんを接客中だった。
《相当酔っていたから覚えてるのかな》と私が不安に思っていると、彼女と目が合った。
私が照れ笑いを浮かべると、彼女も笑顔で、おいでおいでと手招きをした。
『昨日はありがとう』と店に入り笑顔で、彼女に声をかけると。
「いっちゃがいっちゃが」と満開で微笑んだ。

「靴のサイズは？」の問いに、『２６』と私が答えると。
「待ってて」と言い残して店の奥に消えた。
しばらくして、コンバースの箱を抱えて彼女が戻ってきた。
「履いてみて」と箱の中から、真っ白いコンバースのローカットを取り出した。
私が受け取り履いてみると、彼女が屈み靴の前と後ろを、指で押しチェックして。
「いいみたいやね、このまま履いていき出世払いでいいよ」と笑い私に近づいて耳元で。
「マルショクの1階の休憩所で待ってて、一緒に帰ろう」と小さな声で囁いた。
店を出た私は、週末の人混みを、マルショクに向かい歩いた、靴を汚さないように気をつけながら。

マルショクの休憩所で、コーラを飲みながら彼女を待っていた、真っ白いコンバースを眺めながら。
1時間程過ぎた頃、大きな紙袋を抱えて彼女がやってきた。
「ごめんねー、待ったね」と少し赤らんだ頬で言った。
『全然大丈夫です』私は彼女の紙袋を持ってあげながら答えた。
「今日は車で来てるから、いこうか」そう言った彼女について、私もマルショクを出た。
真夏の太陽は、まだその主張弱めずに街を熱していた。

横に並ぶ彼女は、ハイヒールでなかったので、昨日より小さく感じた。
「私ね」突然彼女が、私を見て語りかけた。
「火曜と金曜と土曜の夜ホステスしてるの、ＴＶのある部屋があるからあなたも行く？」そう聞いた。
『金曜って昨日は？』私の問いに、舌を少し出して。
「マネージャーと口喧嘩して出てきたの」私の背より１０ｃｍは低いであろう、彼女を見ながら。
『行って良いなら、行ってみたいな』と答えた、彼女は満面の笑みで。
「そうなの、良かった～」と笑い「私の名前は蘭よ源氏名だけど、あなたも何かいい名前を考えよう可愛いやつを」と言った。

『チャッピー』私は仲間の同士の、通り名である名前を口にした。
「いいじゃない、可愛いし」と言うと、私の手を握りそのまま手を繋いで歩いた。
手を繋がなければ姉弟に見えただろう、躊躇無く繋いでくれた事が、私には嬉しかった。
綺麗に整えられ、マニキュアで色付けされた指が、大人の女であると実感させ、不釣合いだな～と思っていた。

駐車場につくと、「あれよ」彼女が1台の車を指差した、指した方を見て私はしばらく固まった。
彼女の車はケンメリのスカイライン、ブラックメタルのボディーに、ゴールドのスポーク型アルミホイールを履き。
エンジンは国産認定外の２８００ｃｃで、ソレックスの５０πキャブにタコアシを装着していた。
その轟音に負けない、ケンウッドのコックピット型ステレオの大音響で、ズンシャカ走る。

『かっけー！高いやろ～』私の喜ぶ顔をみながら嬉しそうに。
「こいつの為に、蘭をやってるもん」と満開で笑った。
車に乗り込み、夕暮れの街を一周した。
宮崎神宮の手前を右折して、競馬馬の育成牧場の近くに、蘭のアパートがあった。

2階の部屋に入る前、鍵を差し込んで振り返り。
「襲うなよ」と笑った、『がんばります』と私は意味不明の返事をして部屋に入った。
玄関の入った所がキッチンで、小さなスペースに冷蔵庫などが置いてあった。
右のガラス戸を開けると、8条ほどの広さの部屋に、TVにベット小さなテーブルなど、生活する全ての物が、女性の部屋らしく整頓され置いてあった。
左の部屋は3条程の広さで、衣装だけが掛けてあった。

「この部屋を自由に使っていいから、今は男はこんかい安心しな」とおどけた。
『彼氏いないの？』私の失礼な突っ込みに、あの少し舌を出す小動物のような表情で。
「残念ながらねー」と笑顔で答えた。
「私、急いで準備するからTVでも見て待ってて」と言いシャワーに行くのに、普段の癖が出たのだろう。
私の目の前で服を脱ごうとし、ハッ！とした表情になって。
「覗くなよ」と照れて笑った。
『がんばります』と私も返した。
私はガラス戸を閉めてTVを見て待っていた。

シャワーを浴びて、ジャージに着替えた蘭が入ってきて、テーブルに鏡を置きながら。

「変身する姿を、男に見せるのは初めてだから、光栄に思いなさい」と言って夜用の化粧をはじめた。
『変身する姿を見られると、普通はいなくなるもんだよ』私は正義のヒーローを、引き合いに出して言った。
「うん、いなくなるよ・・多分男がね」と言った自分の言葉が、自らの笑いの壷に入ったのか、一人で楽しそうに爆笑していた。

蘭は化粧を終え、着替えに出て行った、しばらくして。
「おまたせー、どお？」と言ったので振り固まった。
そこには、若草公園で手で銃を作った女でも、靴屋でおばさんの接客をしている女でもない。
別の女性が立っていた、凛とした目は強調され、強い意思さえ感じた、私は見とれていたその美しい姿を。
「合格みたいやね」私の表情を読み取りそう言った。
『まぁ合格点かな』心が見透かされたと思った私は、この言葉を言うのが精一杯だった。
二人で連れ立って部屋を出て、蘭の自転車に私が前で漕ぎ、蘭が後ろに乗り灼熱の夜街に出動した。

宮崎の夜街は、大きく二つの通りで構成される、1本が西橘通り良心的な店が多く紳士的、もう1本が中央通り怪しげな店も多く冒険者向き。
中央通りを西に1本外れた小路が、怪しさの増す西銀座通りがある。
全ての通りから南に抜けた、所にソープ街があり。
その西奥に昔は赤線だった、末広町が鎮座してる。（現在の状況は異なります）

私達は一番街のとんかつ屋で、ヒレカツ定食を食べていた。
「TVルームには小さな女の子が3人いるから、面倒見てあげてね」食べ終わりお茶を飲みながら、蘭が言った。

『大丈夫です、得意ですから』その言葉に蘭が「そんな感じだね」と微笑んだ。
私は豊兄さんを継承していたので、昨年小６まで、近所の子供の面倒を見ていた。
だから子供の相手には、自信があったのだ。

とんかつ屋を出て、蘭の勤める店に向かった。
店の名は【パラダイスガーデン】今で言う高級キャバクラであろう、西橘のその当時一際目立つ大きなビルの、３階ワンフロアーを占拠して営業していた。
当時女性の登録者だけで、８０人ほどいたのだ。
華やかなビルの横を通り、裏階段から店に入った。
小さな事務所にいくと、恰幅のいい髪を綺麗にオールバックにした、迫力のある４０代の男がいた。

「徳野さん、昨日はごめんなさい」蘭は挨拶もせずに謝った
「俺も少し言い過ぎたよ、すまんかった」太く静かな声で語った。
「蘭、お前には皆期待してるんだ、辛いかもしれんが頑張ってほしい」諭すような口調が、安心感を与えた。
「はい、がんばりまーす」いつもの蘭に戻ったなと私は思った。
「で、その少年は？」徳野さんの問いかけに蘭は慌てて。
「昨日公園に、ダンボールに入れられて捨てられてたの、名前はチャッピーです、この子がいるから頑張れるから、ＴＶルームにおいて下さい」と深々と頭を下げた。

徳野さんは私を見ながら少し考えて。
「うちの店で一番大切なものがあるから、それを面倒見てやってくれ」と私に言った。
『ありがとうございます』と私は礼を言った。
私が今まで関わったことの無い何かが、この徳野という男にはあり、

私は完全に自分が男として下なのだと、痛感させられていた。
蘭の表現があまりにも的確で、私は昨夜の蘭に出会う前を思い出していた。
確かに捨て猫のような心境だったと。
あのまま蘭に会わなければ、私は自ら何も切り拓けずに、全財産の３０００円が尽きた時には、親父に頭を下げてたのだと思っていた。

目の前に立つ美しい女性は、見ず知らずのガキの為に、お金を使い頭まで下げてくれる。
蘭の役にたちたいと真剣に思っていた、それまで誰かの役にたちたいと思った事など、一度もなかった。
薄暗い事務所で、徳野さんと談笑している蘭の後姿は、その精神性の強さを映し出し輝いて見えた。
私の大切な経験の幕が上がった。

監督も脚本家も演出家もいない物語は、登場人物の了解も無く幕を上げる。
そして観客のいない舞台で悩み苦しみ、そして楽しむのである。
自分は常に、自分を見ているのだから・・・。

嗚咽

薄暗い事務所と呼ぶには、あまりにも狭い空間で。
私は本名さえ知らぬ、美しく強い女性の後姿を、飽きる事無く見ていた。
私達の関係は、本名を知らぬままに続いていく、名前などに興味が持てぬほど、濃密な時間だった。
私はこの時には蘭を愛していた、それは恋愛感情では無い、不思議な感情だった。
この時の私は蘭の傍にいたい、その感情だけはしっかりと認識していた。
餓鬼の心で、愛する者を守る事さえ、わからないまま。

蘭が徳野さんとの話を終え、二人で事務所を後にした、ＴＶルームに行きながら。
「お店では、私の事は蘭ねえさんと呼んでね、そして他のホステスさんにも、姉さんを付けてね」と注意事項を説明した。
『はい、蘭ねえさん』私の言葉に「合格」と言って蘭が笑った。

パラダイスガーデンを皆ＰＧと呼んでいた、ＴＶルームのドアにはＰＧ関係者専用と張ってあった。
ＴＶルームにはその当時では、電気屋の陳列でしか見たことの無いような、大きなＴＶがあった。
冷蔵庫のジュース飲み放題、お菓子食べ放題という、子供に取っては夢のような空間が演出されていた。
ただ唯一、防犯用として据え付けられている、店を全部見渡せるマジックミラーが異彩を放っていた。
ＴＶルームの子守担当は、松さんという５０代の女性で、蘭は松さんに私を紹介した。

「何でも言って、こき使って下さい」と蘭が満開の笑顔で言った。
「蘭が拾ってくるなら訳ありやね、まぁ私は助かるからいいけどね」と言って私を見ていた。
蘭が仕事の準備に行き、私はＴＶの前でコーラを飲みながら、松さんの興味本位の事情聴取を受けていた。
そんな時助け舟、幼稚園年中のミサが、私に《みにくいアヒルの子》の絵本を持ってきた。
私は受け取り『読むの？』と聞いた、ミサは私をじっと見つめて。
「よんで」と言ったので、事情聴取に疲れていた私は『いいよ』と言ってミサを膝の上に座らせた。
ミサの姉の小１のエミを呼んで、【グヮ】とか擬音を駆使して面白おかしく読んであげた。
ミサもエミも子供らしくケラケラと笑い、松さんは２歳のマリアの寝顔を見ながら笑っていた。

ＴＶルームの３人娘は、９時過ぎには寝る、まぁマリアは好きな時に寝るのだが。
ＴＶは声を小さくするだけでＯＫで、部屋の照明を暗くする。
全員が寝ると、松さんがマジックミラーにかかっていたカーテンを開けた。
そこには私の知らない世界があり、それはどんなＴＶ番組よりも、私を惹きつけた。

「まずいのがきたねー」興味津々で見ていた私の後ろで、ＴＶドラマを見ていたと思っていた松さんが呟いた。
『誰のこと？』私は生まれながらの、旺盛な好奇心が起きだして、松さんに尋ねた。
「ここでの私の話は、ここだけの話だよ」そう松さんが釘をさした。
『了解しました』私は真剣な表情を、意識して作った。

元来話好きの松さんは、中坊のガキとわいえ、話し相手が出来たのを喜んでいたのだろう。
事あるごとに、そのバックグラウンドまで、丁寧に話してくれた。

「あの右から3番目の席に一人で来てる男、マリアの父親だよ、母親に会いにきたのさ」松さんのその言葉に、私は振り返り。
『なんでマリアの父親が、母親に会いに店に来るの？』その私の問いには答えず。
「絶対に覚えておき、今ピアノの前を歩く、白いでドレスの女がＮｏ１の百合だよ、マリアの母親さ」
私は振り返り、白いグランドピアノの方を探した。

その時の衝撃を忘れることは出来ない、グランドピアノの横を歩く姿に、私は息を呑み見入っていた。
その人は、背中の大きく開いたドレスを纏い、笑顔を振りまきながら歩いていた。
その姿はそれまで私が見た中で、比べるのも失礼なほど妖艶で美しかった。
いやこの歳になっても、絶対的な１番である。
私は１８で上京し、バブルの時代にＴＶ局でバイトをしたことがある。
その時に、多くの第一線の女優を間近で見た、確かにその人たちには表現しにくい強いオーラが有った。
しかし、百合と呼ばれるその女性の放つ物は、何よりも強く美しかった。

百合さんは、そのマリアの父親という男の席に行き、その美しく妖艶な笑顔で挨拶し横に座った。
『仲いいんだ』私の呟きに。
「子供やねー、あれがプロの仕事だよ」そう松さんが言って「あの

男はいけすかない奴さ、マリアに会いたいと言いながら、百合を忘れられないだけさ。」
「自分の娘に興味さえ示さない、冷たい男だよ」最後は吐き捨てるように言った。

私は時を忘れて、その妖艶なプロの仕事を見ていた、本当に夢中になって。
しばらくすると、百合さんは別の席に呼ばれ、ユリさんが付かなくなると、男はすぐに帰って行った。
男が帰って数分後、バタバタと派手な婆さんがＴＶルームに入ってきた。
「松、マリアの帰る準備をしてくりー」その婆さんは、宮崎アニメに出てくるような（ゆばーば）感じで迫力があった。
婆さんは私を見つけて「坊や誰ね？」と言った。
松さんが慌てて、私を蘭が連れて来たことそして、徳野さんが許可した事を説明した。
「ふーん」婆さんは興味無さげに私を見て我に返り。
「それどころじゃないよ、西野が下で待ってる、マリアに会わせろと言ってるらしい」と早口の年寄り言葉で言った。
「あの男は」松さんも怒っているようで、私は呆気に取られてただ眺めていた。
「西野には、マリアに指一本触れさせん、百合の覚悟やかい」・・
「たとえワシがこの商売でけんなってもな！」と言った、松さんも頷いた。
「松、マリアを先に帰す、店のもんは使えんかい、ケイが連れて行くかい準備してくり」そう言うと足早に去っていった。

松さんは急いでマリアの用意を整えて待った。
その時話してくれた、西野という男は公務員で、警察関係にも顔が利き、商売上睨まれるとやっかいな奴だと。

数分後、婆さんがまだ幼さの残る、私より少し上であろう少女を伴いやってきた。
「おい、小僧」婆さんは私を呼んだ「バイトせんかい？蘭の許可はもらったかい、給料ははずむでー」と私に言った。
私は立ち上がり、婆さんの所まで歩いて。
『どんな？』と聞いた「ケイのボディーガードや」と婆さんは微笑んだ。
松さんの抱いているマリアを抱いて、婆さんに向かって。
『俺には公務員より、不良高校生の方が怖いよ』と言うと、婆さんはニヤリと笑った。
「ここに入れとくで」と私のジーンズのポケットに、手が切れそうな一万円札をねじ込んだ。
「ほなはよいこ、堂々とエレベーターでいくんやぞ」そう言いながら皆で部屋を出た。

部屋を出てエレベーターに向かっていると、百合さんと蘭が走ってきた。
私は間近で見る百合さんに、圧倒されていた。
「ごめんね、よろしくお願いね」と言われ『大丈夫です』と根拠のない言葉を吐いた。
「ケイ頼むね」と百合さんは心配気に言うと。
「はい、任せて下さい」とケイはしっかりした口調で答えた。
『いつでも帰っておいで、待ってるからね』蘭は笑顔で言いながら、私のポケットに合鍵を入れた。
「さぁ懇情の別れでもないんやから、はよういきな」と婆さんに促され、松さんが止めていた、エレベーターに乗った。
1階に着くと、西橘の出口に西野が見えた。
「私が抱こうか？」とケイが前を見たまま、静かに言った
『大丈夫、先に行ってタクシーを止めて』と私も目を見て言って、

意識してゆっくりと西野の方に歩いて行った。

西野は私をじっと見ていた、私は西野の横に並ぶと、マリアの顔が見えないように注意して。

『おっさん、なんガンつけちょるん』と静かに言った、俺は豊兄さんだと心に念じながら。

「その子は？」西野の問いに。

『俺ん妹や、触るなよ』意識して静かに、西野から目を逸らさずに言えた。

《引いてくれ》と心の中で祈った。

確かに殴り合えば勝つ自信はあった、中坊なりに修羅場も積んでいた。

だがやはり、どこかで守られていた。

今は誰もいない、そして私に、本意じゃないだろうが全てを預けているマリアがいた。

その絶対の存在の重さを感じ、私の心は震えていた。

西野はそれ以上何も言わなかった。

「こっちよ～」ケイの声に促され、私は慎重に意識して、ゆっくりとタクシーの方に歩いた。

タクシーに乗り橘通りに出た所で、私は緊張の糸が切れ目を閉じて俯いた、その時小さな手が私の頬に触れた。

目を開けて見ると、マリアが手を伸ばし、私の頬を触りながら笑っていた。

私も自然と笑顔になり、良かった～と心の中で呟いた。

タクシーは国道１０号線から、平和台の方向に進路を変え、すぐに止まった。

ユリさんのマンションは、その時代宮崎では珍しい、１０階建ての瀟洒な高級マンションの、最上階だった。

ケイが鍵を開け入り、私は明かりが点くのを待って入った、腕の中

のマリアは可愛い寝顔で、いつの間にか眠りに落ちていた。
ケイに案内され、大きなダブルベッドと可愛いベビーベットのある部屋に入った。
ベビーベッドに、静かにマリアを寝かせた。
「電話してくるね」とケイが言い部屋を出た、私はマリアの寝顔を見ていた。

「ちょっといい？」ケイの呼びかけで部屋を出た、「マリア頼んでいいかな？」と聞かれた。
『大丈夫、マリアは良い子だから』それを聞きケイは又受話器を取った。
私は広いリビングのカーテンを開けた、眼下には夜街の夜景が広がった。
《すげーや》私はその光景を、驚きながら見ていた。

「じゃあ私行くね、百合さんが冷蔵庫もシャワーも、自由に使っていいって」そう言いながらケイは玄関に向かい、私はその後を追った。
靴を履きながら「土曜は雑用が多いのよ」と微笑んだ。
「あなた歳いくつ？」ケイに聞かれ『１３』と答えると「１３！」ケイは大袈裟に驚き。
「私１７よ、よろしくね」と少女らしい笑顔を見せた。
『よろしくお願いします、ケイねえさん』それを聞くと「初めてねえさんって呼ばれたよ」そう言って嬉しそうに帰って行った。
私は鍵を閉め、ソファーにあったクッションを持って、マリアの寝るベビーベッド横で寝た。

私は微かな物音で目を覚ました、暗い部屋のマリアの横で百合さんが泣いていた。
声を殺し嗚咽をもらし、泣いていたのだ。

ガキの私にはかける言葉も見つからず、抱きしめる事も出来ずに、
寝てるふりをする事しか出来なかった。
私は目を閉じて、ただ考えていた。
容姿にも、経済的にも恵まれていると感じた、百合さんの涙の訳を。
答えなど見つかる訳も無く、ただ時だけが過ぎた。

暗い部屋の中、百合さん嗚咽だけが心に響いてきて。
私は想っていた・・・母の事を。

孵化

真夏の深夜の静寂が支配するその部屋で、微かなその嗚咽が響いてくる。
その声は、発せられた中心から、波紋を描き深く拡がる。
それは耳以外の場所、身体のいたる所から侵入し、響いてくる。
私は動くことも出来ずに目を閉じていた、その暗がりから映像が浮かび上がって来た。
自らも忘れていた記憶の深層にあるものが。
幼い私の手を引いて、月光を頼りに歩く母の姿が。
私はその自分自身の小さな背中と、母の悲しげな背中を見ていた。

どれほどの時が流れたのか、ユリさんが部屋を出る音で我に返った。
ここに私が居ては、ユリさんがゆっくり休めないだろうと思い、私もリビングに戻った。
ユリさんは浴室であろういなかった。
私は大きな白い革のソファーに腰を下ろし、夜景を見ていた。
夜街の光はいまだ衰える事無く、自然光を拒み続けていた。
窓ガラスに映る自分の姿を直視できずに、目を逸らせた。
足りないものが多すぎて、それを補う方法さえ解らぬ自分に苛立っていた。

「ありがとう」不意に私の首に腕を回し、石鹸の素敵な香りと共に、ユリさんの声が私の耳元で響いた。
私は言葉を返す事が出来ないでいた。
「怖くなかった？」腕を回したまま呟く声が、より近くに感じた。
『公務員は怖くなかったけど、マリアの夜泣きが怖かった』私はやっと言葉が出てきた。
ユリさんはクスクスと笑い腕を外した。

「頂き物だけど、お寿司食べる？」私は振り返り『いただきます』と必死に笑顔を作った。
ユリさんの化粧を落とした素の顔が、私の予想より遥かに近くにあり、圧倒されていたのだ。
《化粧しないほうが綺麗だ》そう思っていた。
ユリさんはキッチンに迎いながら。

「私ビール飲もうかな、チャッピーは何がいい？」私は昨夜同様意を決して。
『同じ物でお願いします』と言ってみた。
ユリさんが振り返るのを、まるでスローモーションのように見ていた。
薄手のネグリジェに包まれた身体が、肩のラインから骨盤の基点になる所まで、背骨で綺麗に繋がり。
背骨の各部位が滑らかにスライドした、ウエストのくびれと腰のラインに繋がるポイントに、確かな分岐点があった。
回転運動による負荷を受けとめ、腹筋が微かに隆起する。
全ての動きが収まるまで、一度たりとも姿勢は崩さなかった。
《完璧やな～》と私は感動すらしていた。
私は近所の空手道場の道場主と私の親父が友達で、小学校に上がる前から通わされていた。
中1のその時には、準黒帯を巻く資格を有していた。
その道場主の、シゲ爺の言葉を思い出していた。

【人の内面はその後姿に必ず出る、本当に実直に生きる人間は必ず美しく立つ。
　そういう人間を強いと表現するんだ】

今思うと私は、話しを聞く才能にだけは恵まれていたのだろう。
理解できない内容の話でも、他人の話を聞くのがただ好きだった。

その道場主の言葉の真意に、触れた気がしていた。
「今夜だけ特別よ」百合でなく薔薇の笑顔で微笑んだ。
大きな寿司の折箱と、小瓶のラガービールとグラスを持って、ユリさんが私の真横に座った。
深夜だったので下から灯る間接照明だけの雰囲気が、ＰＧのフロアーのようだと思っていた。
ユリさんからグラスを受け取り、ビールを注いでもらいながら。
『ＰＧだったら高いんだろうな～』と思わず声に出して言ってしまった。
「あら、私をご指名じゃなかったかしら」ユリさんは楽しそうに返した。
『まさか！そんな大それた事、ただの餓鬼ですから』と真顔で言った、ユリさんと視線が交わり。
「ガキなの？」ユリさんの表情は少し真剣みを帯びた。
『馬鹿な餓鬼です』私は正直に呟いた。
悲しむ美しい女性にかける言葉も、抱きしめる勇気も持たない、自分の事に気付き、かなり落ち込んでいたのだ。

「子供の時は子供を楽しんで、嫌でもどんなに拒絶しても、大人になるわ」視線を逸らさずにゆっくりと優しく。
「子供の時にしか出来ない事も沢山あるわ、私は今凄く期待しているのよ。あなたが3人娘に何を残し何を教えるのかを」ユリさんは大事な想いは、どんなに未熟な人間にも目を見てきちんと話す。
その言葉に押し付けはどこにもない、だから内側に入ってくる。
その言葉は染み渡り、内から温かくなる。
私は自然に笑顔になり。
『探してみたいな』と素直に言えた事に自分自身が驚いていた、その圧倒的な存在に出会い、素直になれた自分に。

乾杯して寿司を食べた、その経験したことの無い、あまりの美味さに夢中で食べていた。
「美味しいでしょう」ユリさんは夢中で食べる私を、嬉しそうに見ながら言った。
『寿司ってこんなに美味いもんだったんだね、滅多に食べれないし、食べても安いものしか食べたことないから』と私は笑顔で言った。
「だから大人達は食べるのよ、自分の成功の証としてね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

私は箸を止め寿司を見ながら。
『わかる気がする』と呟いた、ユリさんは薔薇の笑顔で「さぁ全部食べてね」と促した。
それから他愛も無い私の話をしていた、私は本当に楽しかった。
初めて感じる素直な自分を、心から楽しんでいた。

時計が2時を指した頃。
「そろそろ寝ましょうね」とユリさんがテーブルの上を片付けながら、初めて見せる悪戯っ子のような表情で。
「ソファーで寝る？それとも一緒に寝る？」と聞いた。
『餓鬼だからソファーで寝ます』と冗談で返すことすらできなかった。
ユリさんは楽しそうにキッチンに迎いながら。
「最初がおばさんじゃやっぱり嫌よね～」と笑っていた。
私は勿論未経験の餓鬼で、興味は人一倍あった。
《ユリさんが教えてくれるなら最高だろうな～》と思っていた。
ユリさんにお休みをして、ソファーに寝転んだ、気分は快晴に戻っていた。

翌朝、私は耳を引っ張られて起こされた。
見るとマリアが、【桃太郎】の絵本を私の目の前に突き出していた。

思考回路が少し覚醒した私は、《昨夜マリアだけ絵本を読むときいなかったなー》と気付き、絵本を受け取った。
私が読もうとすると、私の手を掴みマリアが首を横に振った。
『読むんじゃないの？』私は意識して優しく言った。
するとマリアが屈み私を天使の笑顔で見ながら。
「あっこ」と天使の笑顔で言った。
『そっか～、ごめんごめん』と言いながら床に胡坐をかいて座ると、マリアがチョコンと乗ってきた。
私はマリアの目の前で本を開き、得意の擬音を駆使し読んであげた。

マリアは都度「もも、じぃ、ばぁ」とそのボキャブラリーを披露してくれた。
私は上から、クルクルの可愛い癖毛の天使を見ていた。
家出して、寂しさを和らげてくれた掲示板のマリア。
そして今、私の膝の上でなんの疑問も不安も見せない、二人目のマリア。
昨夜私はこの天使に守られていたのだと感じた、優しくマリアを抱きしめた。
マリアは天使の笑顔で見上げていた。
私は孵化に近づいていた、人の何倍も時間を費やし、回り道をしながら。

今思うに、私の成長の基点はこのマリアである。
その後、私に教えてくれるのだ、その無垢な心と行動で、最も大切なもの。
生きる【理由】でなく【意味】を。

絵本が読み終わると、「まんま」とマリアが言った。
『そっかー、お腹空いたよな～』私は疲れてるであろう、ユリさんを起こしたくなくて考えていると。

マリアがキッチンに歩いて行った。
私が慌ててついて行くと、戸棚から箱を取り出して、私に差し出した。
受け取ってみるとコーンフレークだった、恥ずかしい話、私は初めてコーンフレークを見たのだ。
説明書を読み、二つ皿を出してコーンフレークを入れ。
冷蔵庫から牛乳を出して注ごうと思ったが、適量がわからないので、ヒタヒタなるほど多めに入れた。

食卓の可愛い子供用の背の高い椅子に、マリアを抱いて乗せた。
皿を差し出すと、食べ始めたので一安心して、マリアを見ていた。
『おいしい？』と聞くと「おいち」と天使の笑顔で返してくれた。
私もマリアの向かいに座り、その初めての美味さに感動して。

『美味いな～、アメリカ人ってのは、案外美味いもんを食ってるね』とマリアに言うと。
「くってる」と言ったので私は笑いながら、《マリアの前では言葉に気をつけねば》思っていた。
食事が終わると、ソファーのテーブルでマリアがお絵かき道具を持ってきて、お絵かきを始めた。
私はピカソも驚くであろう抽象画を、飽きる事無く見ていた。

ユリさんが１０時過ぎに起きてきて。
「ご飯までしてくれたの、ありがとう」と言って、二人でマリアの絵を見ながら笑っていた。
豪華な昼食をユリさんが作ってくれ、それを食べていると。
「今日の午後暇なら、マダムがお店においでって言ってたよ、蘭は靴屋の仕事だそうよ」とユリさんが言った。
蘭が仕事なら行くとこも無いし、婆さんの所に行ってみようと思っていた。

車で送るというユリさんを断って、歩いて出かけた、マリアが追い泣きをして可愛かった。

外に出ると灼熱の太陽が迎えてくれた、目の前の公園の木々達がキラキラと輝いていた。

砂場で遊ぶ子供達を、守っているようだった。

目で見る景色が少し変わったと感じながら、私は街へと歩き出した。

蘭が存在する場所を目指し、急かせる心を楽しみながら。

ケイ

灼熱の、南国の夏の日差しを浴びて、私は歩いた。
背中を伝う汗を、不快に感じる事もなく、気分は爽快だった。
県立病院の横を抜け、高松通りに出ると、その先に目指す、一番街の西入口が見えた。
私は足早になり、蘭のいる靴屋の前までやってきた。
蘭は私を見つけると、満開の笑顔で店の前まで出てきた。

「あんたもやるわね～、ユリさんの家に泊まるなんて、遊び人の憧れよ」と言って、私のわき腹を親指で突いた。
『これからは、夜の帝王と呼びなさい』私は両手を腰に当て、コントの芝居の様に、大袈裟に威張ってみせた。
「生意気なんだから～」蘭が今度は私の脇腹を、力を込めてつねった。
蘭とは緊張も格好も付けずに話せた、まるでずっと昔からの知り合いのように。

『婆さんが話があるみたいだから、行ってくるよ』私がそう言うと。
「絶対に婆さんなんて言ったらだめよ、マダムって呼びなよ」と笑顔で言った。
『マダムか～、頑張ります』と言って蘭と別れた。

昼間はゴーストタウンのような夜街を歩き、昨夜同様ビルの裏階段から店に入った。
裏口の鍵は開いていた。
ＴＶルームに行くと、ケイが葉書の宛名書きをしていた。
「おはよう、昨夜はありがとう」と私を見て、少女らしい笑顔で言った。

『もう昼過ぎてますよ』と私は笑顔で言った。
「夜の世界は会った時がおはようなのよ」とケイが笑顔で、教えてくれた。

『おはようございます、ケイ姉さん』と姉さんを強調して言った。
「やっぱり姉さんの響きはいいな〜」とケイは笑顔で、その響きを噛みしめていた。
『婆さんに呼ばれたんだけど？』と笑顔で言った。
「絶対に婆さんなんて呼ばないのよ、フロアーに居るはずよ」と言ったので、行こうとしたその背中に。
「婆さんは絶対駄目だからね！」と念押しされた。

フロアーに行くと、マダムは昨夜の売上げ計算を、算盤でしていた。
『おはようございます、マダム』私はマダムを強調して言った。
「おっ来たねチャッピー、ユリの所に泊まったなんて誰にも言うなよ、刺されるかい」と顔を上げずに言った、私にはあまり冗談に聞こえなかった。
「ちょとそこに座って待ってくり、これが終わるまで」私はマダムの向かいに座り、店内を見回した。
それはマジックミラー越しに見たイメージより、かなり広かった。

計算の終わったマダムは顔を上げ。
「すまんな、で・・いつまで帰らんつもりや？」と聞いた
『わからないけど、夏休み中は帰らんつもり』と真顔で返した。
マダムは私の表情を注意深く見てから。
「親が捜しにこんかのー？」と質問を変えた。
『それは無いよ、警察のご厄介にならない限りは』私は確信していた、育った環境からして放置されると。

「手伝うかい？」とマダムから意外な言葉が出た、私は家に帰るよ

うに説得されると思っていたのだ。
『バイトならいいよ』と笑顔で答えた。
「よし、決まりやな。明日徳と話して内容を決めとくかい・・ケイにもフロアーの勉強を少しづつさせないかんし」と呟いた。
『今からは？』私のその言葉に、少し笑顔になって。
「そのやる気いいねー、ケイを手伝ってやり」その言葉に頷いて、ＴＶルームに戻った。

「マダムって言えたみたいね」とケイが微笑んだ。
『覗いてましたね～』とニヤ顔で言うと。
「心配でね、唯一姉さんって呼んでくれる人がね」と言って笑った。
『ケイを手伝えって言われたんだけど』とケイの隣に座りながら言うと。
「マダムが！・・珍しい」と驚いていて私を見た。

『ケイ姉さんにもフロアーの勉強させないとって言ってたよ』と言った私を、ケイが本気で驚いた表情で見て。
「本当にっ！」私はそのケイの驚きに驚いて『うん』と言った。
「何か飲むチャッピー君」とご機嫌で言って、冷蔵庫の方に歩いて行った。

ケイに与えられた、切手張りの手を休めずに。
『フロアーの仕事できるの嬉しいんだね』と聞いてみた。
「そりゃね、ここに居るのならね～」ケイは真顔で呟いた。
私は、ケイは高校に行っていないだろうと思っていた。
ケイはＰＧで働いているが、少女の香りを残し、その時期の特有の輝きを、惜しげもなく振り撒いていた。

「私ね、あなたと同じなの・・・」ケイが教えてくれた、そのケイの歴史を。

ケイは県南の漁師町で産まれた、父親はケイが3歳の頃病死した。
ケイの母親は、ケイと4歳上の姉を、女手一つで育てた。
「姉がね、福岡の美容学校に行くことになった時・・・」
ケイが中3に上がるその時、母親は再婚したいと言った。
ケイも姉も、母親に幸せになってほしくて大賛成した。
しかしケイは1年で、新しい父親との生活には限界が来ていた。
《原因はこの時話していないので後記します》

中学の卒業式の翌日、こっそり用意したバックを持って、ケイは始発の列車に飛び乗った。
「宮崎に出て自立しようと思ってたの、最悪風俗でも行ってね・・・」
風俗という言葉が全く似合わないほど、ケイは純真な可愛さがあった。
しかしケイは、風俗の扉を叩く勇気もなく行き詰まり、一番街の角でしゃがみこんでいた。

夕方、突然顎を掴まれ顔を上げさせられた、目の前にはマダムの深い皺の刻まれた顔があった。
「歳は」・・・「16です」・「行くとこがないんやな」ケイは恐ろしくて「はい」と答えるのがやっとだった。
「がんばるかい？」《売られる》ケイはそう思ったらしい。
「どうだい？」マダムは後ろにいたユリさんに聞いた。
「素質は充分ですね」ケイはその言葉の方を見た、出勤前のユリさんが立っていた。
見惚れていたその美しさと優しい笑顔に、そしてマダムにすがり付き。
「何でもします、頑張ります」と泣きながら懇願した。
泣いているケイを、ユリさんが抱きしめて、ハンカチを渡した。

「沢山の人が歩いていたのに・・何の躊躇もなく抱きしめられて、本当に嬉しかった」ケイは天井を見つめて呟いた、心から感謝していたのだろう。
それからマダムが食事に連れて行き、ケイの家に電話をして、母親に強引に了承させた。
マダムとケイの契約は、１８～２２までは店で働く事で高校に出すという内容だった。
ケイが高校には行かずに、店を手伝わせてほしいと言って譲らなかった。

「私は高校なんか行きたくなかったの・・・」ケイは父の記憶が無い、母は常に必死で働いていたのだろう。
ケイは幼い時から、自立を目指していた、母を助けたくて。
その時点では、母は新しい愛をみつけ、ケイの援助を必要としていない。
しかしケイの心は変わらない、ひたむきに自立を目指していた。

ケイはその後、自他共に認めるＰＧのエースになり伝説を残す、だがその時もひたむきさは変わらなかった。
私が高２の年末ケイに食事に誘われた、高級ステーキ店でシャンパンで乾杯して。
『何のお祝い？』と聞くと、窓の外の大淀川を見ながら。
「今月初めて指名で２番になれたの、マダムやユリさん・・・皆にやっと、少しお返しができたよ」と目を潤ませていた。
その目の輝きは、出会ったこの時のままに澄み切っていた。

夕方ＴＶルームのドアが開き、蘭が顔を見せて。
「若人諸君、労働に励んでいるね」と笑顔で言った、ケイが蘭に近寄り。
「蘭姉さん、私フロアーの勉強をさせてもらえるの」と嬉しそうに

言うと。
「よかったね、今からが大変だよ頑張るんだよ」と蘭も本当に嬉しそうに言った。
その言葉はやはり優しかった。
「そうだよ、今からが本当の勝負だよ」気付くと、蘭の後ろにマダムが立っていた。
「お前はユリに認められたんや、お前の今後はユリの今後と同じ意味じゃかいな」ケイはその言葉を噛みしめて「頑張ります」と頭を下げた。
マダムも蘭も優しい瞳でケイを見ていた。

マダムが夕食をご馳走すると言うので、４人でマダムの行きつけの居酒屋に出掛けた。
ＰＧは日曜で定休日、夜街の人通りも少なかった。
居酒屋に着くと、蘭が食べ物をこれでもかって言うほど、遠慮無しに頼んで。
「マダムと私はビールだけどケイは？」と聞いた、迷っているケイに。
「ビールにしな、練習さ」とマダムが言った。蘭が私の方を見たので。
『俺も練習してみます』と言うと「こん男だけは、まったく」とマダムが笑った。

これからの始まる、この食事会の大切さを気付くはずも無く、ただ楽しんでいた。

ケイの真直ぐな生き方と、純な笑顔を隣に感じながら。

深心

まだ沈みきれぬ夏の陽が、外を照らしていた、夕暮れはすぐそこまで迫っていた。
蘭が注文した料理もかなり運ばれ、ビールで乾杯した。
蘭の豊富な面白い話題で盛り上がり、楽しいひと時が過ぎていた。

「マダムはいつからこの仕事してるんですか～」３杯目のビールに入り、かなり酔ってきた蘭が聞いた。
「相変わらずお前は、仕事以外は弱いの～」マダムは苦笑いしながら、話始めた。
「ワシは闇市から商売はしちょるよ・・・」
マダムは戦後の混乱期、闇市で芋粥などを売って生計を立てていた。
必死に働いて少しのお金を貯めて、日本の成長と共に小料理屋を持った。
小料理屋も軌道に乗り、時代も安定してきて飲み歩く客も増えてきた。

「時とは残酷なもんじゃよ、ワシはその時スナックをやりたかったが・・・」
しかしマダムは自分の年齢を考え、客は呼べないと諦めて、誰か任せられる女性を探していた。
そんな時期も５年が過ぎた頃には、もう諦めていたらしい。
そんな時、その頃はチンピラを生業にしていた、常連客の若い徳野さんが来た。
「女将、この子がどこかスナックで働きたいらしいんやが、良い所紹介してくれんね」と１８歳のユリさんを連れてきたのだ。
マダムはユリさんを見て話して。
「私に預からしてくれんね」と徳野さんに言って、ユリさんを預か

った。
次の日、マダムはユリさんを連れてその頃台頭始めた、地元では大きなパチンコチェーンの社長を訪れて、ユリさんを紹介し。
「この子がトップになる、必ず返すからワシに融資してくり・・・あんたも夜の帝王ならわかるはずや」と頭を下げた。

「そんなに凄かったんだ」蘭が口を挟んだ。
「凄かった、化け物やと思ったよ、夜の為に産まれてきたと思ったわい」沈黙が流れた。
「じゃがな、どんなに才能が有ってどんなに努力しても、自分が幸せになるとは限らんよ」マダムは蘭とケイを交互に見た。
今を生きる者と、これから挑戦する者を、その目は厳しさを湛えていた。

「どうして西野さんなんですか？」ケイは意を決してマダムに聞いた。
「愛しただけだよ、その時は本気で愛していた」そのマダムの言葉に、蘭も頷いた。
「よかった～」ケイは嬉しそうに微笑んだ。
「ケイは幸せだよ」蘭が言った「えっ！」驚くケイに。
「私もマダムとユリさんに拾われたかった」と蘭が真剣な表情で言った。
ケイは黙って目を閉じた、思い出していたんだろう、行き詰まった時を。

「それも違う」マダムが割り込んだ「お前（蘭）は一番街でしゃがみこんだりしない、自分で切り開くタイプや、だからユリも一目で認めて、自分のヘルプに付けたんじゃよ」とマダムが笑顔で言った。
「本当ですか？」と蘭が叫びに近い大声で言った。
「ああ、自分と違う力があるとな、きちんと仕事としてやり、きち

んと辞められる人間だとな」マダムの言葉に、蘭はその大きな瞳から大粒の涙を流した。

「忘れんでいてほしい、人は皆それぞれや。」二人に染み渡るように。

「皆同じなら家で酒を飲む、皆同じなら全てユリの客や、だが違う・・・愛する者も好きな事も、受け入れられない事もな」暖かい静寂が包んでいた。

「お前達は幸せや、ユリと同じ時代を生きれる、ユリは女帝と呼ばれる覚悟をしているからな」私には昨夜の嗚咽が響いてきた。

「ユリはユリ、蘭は蘭、ケイはケイじゃから・・・信じるようにやればいいんじゃよ、ユリは必ず応えてくれるかい」マダムの静かな言葉に、蘭とケイは俯いて泣いているようであった。

「それとなケイ、お前がフロアーに出るからには、一つだけ話しておかんといかん事がある」とマダムがケイを見た。

「はい」とケイは言って、顔を上げた。

「本人に固く口止めされたから、今まで黙っちょったが、本人がいるからいいやろう」とマダムが蘭を見た。

「マダム」と言った蘭を、マダムが手で制した。

「蘭、ケイにとっては、大事なことなんじゃから」そう優しく言いながら、蘭を見ていた。

「なんなんですか？」ケイが不思議そうに聞いた。

「蘭なんじゃよお前を見つけたのは」マダムの言葉に、ケイは蘭を見た。

「お前が一番街でしゃがみこんだのを見て、ワシに電話してきての、早く来てどうしても見てほしいと、懇願したのはここにいる蘭じゃよ」とマダムは静かに言った。

ケイは蘭をずっと見たまま、何も言えずに涙だけ流した。

「蘭姉さん」ケイのそれだけの言葉で、皆には感謝の意が充分伝わっていた。
「いいのよ、私はきっかけだから」蘭は照れくさそうに、「あなたが頑張ってきたからここにいるんだよ」その優しい言葉にケイは静かに泣いていた。

私は昨夜の徳野さんに頭を下げてる、蘭を思い出した、その大きさを再確認して蘭を見た。
それに気付くと、困った表情でおどけて見せた。
私は蘭に魅入られていた、その心の底知れぬ深さに。

「マダム、私、明日から毎日出てもいいですか？」と蘭が突然切りだした。
「お前に出るなと言う理由がないよ、チャピーにも仕事があるし」マダムの笑顔の言葉に。
『ドレスは着ないよ』と私が言うと、皆が大爆笑した。
「さすがに蘭が拾っただけの事はあるわい」そう言った、マダムの本当の笑顔を私は見ていた。

居酒屋を出て、マダムにお礼を言いケイにバイバイをして、橘通りを歩きながら。
『マルショクまだ開いてるかな～』と蘭に言った。
「何かいるの？」・・『着替え』と私が言うと。
「あっ！」と言って、蘭は時計を見て私の手を握り。
「走るよ～」と言うが早いか走り出した。

マルショクに入ると、閉店のアナウンスと君が代が聞こえて。
「あんたは1階で下着を買いな、私は上で着替えを見てくる、お金持ってる？」の問いに私はポケットの1万円を見せた。
「今度おごってね」笑ってそう言うと、階段を駆け上がって行った。

私は下着の柄は見ないでサイズだけ見て買い、必要な物が分からずに蘭を待っていた。
閉店特価のケーキが目に付き、イチゴのショートを2個買った。
蘭が降りてきて、「なんだそれだけ？」と聞いたので、ケーキの箱を見せると「上出来」と笑顔になった。
蘭のチャリに二人乗りして家路についた、途中蘭が【名物大盛りうどんの伝説】を話し、二人で爆笑しながら帰った。

部屋に着くと、「先にシャワーしな、覗かんから」と言ってタオルをくれた。
シャワーで汗を流し、脱衣所に戻るとジーンズがなくて、赤いジャージが置いてあった。
しかたなくそのジャージを穿いて蘭の所へ帰ると、その姿を見て、蘭は足をバタバタさせて笑い転げ。
「私の高校のやつやから、似合うよ・・匂い嗅ぐなよ」と言いながらシャワーに行った。
私がＴＶを見ていたら、蘭が戻ってきて二人でケーキを食べた。

「ほい！」とマルショクの袋をくれた、中にはＴシャツ４枚とジーンズ１本に、歯ブラシが入っていた。
『お金は？』と言った私の言葉に、蘭は急に真剣な顔で私を見て。
「いる時は私が請求する、だから１つだけ約束して、黙って居なくならないって」なぜか少し悲しそうな目で私を見ていた。
『約束するよ』私は素直に言った、蘭は満開で頷いた。

「アルバム見る、見たいよね～」蘭はいつもの笑顔になり聞いた。
『みたいな特に中１の頃とか』と返した、蘭は嬉しそうに。
「惚れるなよ」と笑った、《惚れてるよ》と心の中で返した。
アルバムを見ながら二人で笑った、吐息がかかるほど近くに蘭がいた、時間が止まればと願っていた。

「そろそろ寝ようね」と１１時を過ぎた頃、蘭が言って不適な笑顔になった。
「あっちでねる、それとも一緒に寝る？」と聞いた、私は余裕で。
『昨日の夜、ユリさんに同じこと言われたよ』と言い右手でＶサインを作った。
「うそ！で、なんて答えたの？」興味津々で蘭が聞いた。
『ガキだから、ソファーで寝ますって言った』と私が笑顔で言うと、蘭は満面の笑みで。
「やるねー、てことは今夜私がチャッピーを落とせば、初めてユリさんに勝てるって事だ」蘭はわざと舌なめずりをした。
『襲うなよ』私の言葉に「がんばります」と蘭が答えて、お休みをして部屋に戻った。

布団を敷きタオルケットをかけて寝転ぶと、蘭の匂いに包まれた。
蘭は特別な存在だと思っていた。

目を閉じると。
「黙って居なくならないで」そう言った時の、蘭の瞳の悲しげな影が、いつまでも私を見ていた。
「そんな悲しい顔をするなよ、ずっとそばにいるから」瞑想の世界の私はそう言って、蘭を抱きしめていた。

逃げていかないように、消えないように・・・。

宿題

目を閉じた暗闇、瞑想の映像には悲しい瞳の、優しく美しい女性がいる。
私は必死に腕に力を込めて抱きしめるが、するりと消えて別の場所に現れる。
永遠とも思われるその繰り返しを、私は追いかけ何度も何度も繰り返し、眠りに落ちていた。

翌朝、カタカタという音で目が覚めて、キッチンに行くと蘭が朝の準備をしていた。
「おはよ、ゆっくり寝てていいんだよ」私を見て蘭が言った。
『大丈夫、朝は得意なんだ』私は自然と笑顔が出ていた。
蘭の買ってくれた歯ブラシで、歯を磨き顔を洗うと朝食の準備ができていた。
蘭の部屋で二人で、トーストとハムエッグにコーヒーを飲んだ。

『コーヒーって案外美味しいね』私はコーヒーを何度かしか飲んだことがなかった、それはただの苦い飲み物とイメージされていた。
「お！少し大人になったね」蘭が微笑んだ、『大人か～』私が言うと。
「早くなりたい？」と蘭が微笑みを崩さずに言った。私は考え、心のままを口にした。
『今はなりたい、なってＰＧの客としても、蘭やユリさんが見てみたい』その言葉に、蘭は嬉しそうに微笑み。
「ユリさんは１００年早い」と頬を膨らました、目だけは笑顔ままで。
「それにあんたが大人なら、ここにはこうして居れないよ」蘭は探るような目で言った。

『愛されないと駄目なんだよね？』私は素直に聞いた、蘭は首を横に振り。
「愛されたいなんて思ったら駄目だよ、どれだけ愛したか、それだけなんだと最近思うよ」蘭は最後は照れて笑った。
私はその言葉を忘れないように、心で復唱していた。
『少し大人になったね』私が笑顔で言うと。
「いきなり中坊を持つ、母親になったからね～」と私の大好きな、小動物の笑顔で舌を出した。

蘭がバタバタと用意して。
「私は車で行くから、チャリは使っていいよ」と玄関に歩きながら言い。
「マダムとの話しは教えてね、晩御飯だけは一緒に食べたいな～」と満開の笑顔で言った。
『わかった聞いてみるよ』と私も笑顔で答えた。
「私の下着とか探すなよ」と蘭が笑顔で言った。
『そんなことするぐらいなら、襲うよ』私も笑顔で答えると。
「キャ～～」と言いながら階段を降りて行った。
私はケンメリに爆音が発生し、ゆっくりと出て行くのを見送った。

私は午後1時からの出勤でいいと言われていたが、する事も無く、昼飯食べるにも街の方がいいと思い。
１１時少し前にはアパートを出て、蘭のチャリを漕いで街に向かった。

靴屋を覗き、蘭の仕事をする姿を確認してビルに向かった、ビルの下でケイが掃除をしていた。
『おはようございます、ケイ姉さん』私が姉さんを強調して言うと、ケイが嬉しそうに。

「おはよう、早いね～」と少女の笑顔で答えた。
『暇ですから』と返すと、ケイは笑顔を崩さぬまま。
「マダムがＴＶルームにいるよ、あなたの彼女と」ケイが言った、
【彼女】の意味が分からずに、ＴＶルームに行った。
ＴＶルームのドアを開けると。
「チャー！」と言って可愛い天使が駆けてきた、私は笑顔で抱き上げて。
『マリア～おはよ』と言うと、「おぱいよ」とマリア語で答えた。
ＴＶを見ているマダムの所に近づきながら。
『マダムおはようございます、昨日はご馳走様でした』と笑顔でお礼を言った。
「マリアを手懐けたね」とマダムが私を見た。
『まぁ男としての魅力ですかね』と笑顔で返すと。
「言っとけ！」と少しマダムの笑顔が見えた。

マダムと向き合い座り、マリアを膝の上で抱いた。
「仕事じゃが、当面はたばこや花、その他もろもろの買出しと、営業中はケイのフォローと松のフォローをやってくり」マダムは仕事のことなので真剣だ。
『了解しました、夕食だけは蘭姉さんと食べたいんだけど』私の言葉に、マダムは皺を深くして微笑み。
「いいよ、夕方は人手が足りてるかいな」と言った。
『今からは？』と私が聞くと、マダムは立ち上がり
「マリアの相手、ユリが帰ってくるまでな。得意やろ」と笑顔で言った。
『大丈夫です』とマリアを見て答えると。
「じょうぶ」とマリアが笑顔で言った。
「いいコンビじゃよ」と言いながら、マダムは部屋を出て行った。
私はマリアとブロックを積んで遊んでいた、ユリさんが帰ってきた

のが１２時少し前だった。

「おはよう、ありがとう」ユリさんはその時着物を着ており、美しさも際立っていた。

「あれ、おかしい？着物好きなんだけど」返事が出来ない私に、ユリさんが言った。

『すいません、見惚れてました』と素直に言うと、クスクスと薔薇の笑顔で。

「ありがとう」と微笑んだ、美しかったその笑顔が。

「なんかお礼をしないと、お昼もまだでしょう？」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

『いいですよ、お礼なんて』と私も笑顔で返した。

「子供は遠慮しないの、何か欲しい物はないの？」と薔薇の笑顔のまま聞いた。

『日記帳が欲しいんですけど』と私は少し照れて言った。

私は悪ガキだったが、何故か日記は付けていた。

日記というよりその日聞いた話しを、書いていたのだ。

そしてこの素敵な人達の事を、書いておきたいと、昨夜の瞑想の時に思ったのだ。

「買いに行きましょう」ユリさんは嬉しそうに言った、マリアを私が抱き出掛けた。

山形屋というデパートで日記帳を見ていると。

「これにしなさい」とユリさんが黒革の部厚い、１０年日記帳を差し出した。

『いいの？』私は高価な物だろうと思い聞いた。

「子供は遠慮しないの、忘れないであなたはマリアを守ったのよ、その行為に対して、高価な物など私には無いわ」と美しい真顔で言った。

私は凛と立ち、素敵な言葉で、その心を表現できる人をずっと見ていた。
どうすれば、こんな大人になれるのだろうと思っていた。

ユリさんがお金を支払い戻ってきた。
「はい」と手渡された包装された日記帳を受け取り。
『ありがとう』と笑顔で言うと。
「自分の感じた通りに書いてね、いつか本当に大切な人ができた時に、見せてあげてね」薔薇の微笑みで言った。
『うん、わかった書いてみるよ』私の答えに、私の目を見て頷いた。

1階に下りると、スーツを着た見るからに偉いであろうオヤジが走ってきて、ユリさんに挨拶を始めた。私はマリアが、化粧品に興味を持って見ているので、マリアの後ろに付いていた。
『ママの方が綺麗だね』化粧品のポスターを見ている、マリアにそっと声をかけた。
「まま」マリアは振り返り、天使の力を見せつけるように笑った。
販売員の女性が、そのやりとりを笑顔で見ていた。
「ごめんね、行こうか」迎えに来たユリさんを見て。
「本当だ」と販売員の女性は、独り言のように呟いた。

山形屋を出て、小路を入り天麩羅屋に入った。
『昨夜、蘭姉さんに黙って居なくならないでって言われたんですけど、何かあるんですか？』食事をしながら、ユリさんに聞いてみた。
ユリさんは箸を置き、真剣な表情で私の目を見た。

「それは蘭が話す事だから、いつか話してくれるわ」私の目を見たまま。
「最初は私もマダムも、あなたとの事を心配したけど、今は良い事だと思っているの」優しい響きで。

「あなたは自分の思ったままを蘭に伝えて、正直に」と最後は薔薇で微笑んだ。
私は蘭の悲しみを帯びた目を、また思い出していた。
『俺は甘えていいのかな？』私の問いかけに、ユリさんは優しい笑顔で。
「甘えたい時は甘えなさい、それが蘭の唯一の望みだから」と優しく言った。
私は包まれていた、その暖かさに。気が付くとマリアが見ていた、天使の力を振り撒いて。

食事が終わり店を出て、若草通りから一番街に渡る信号待ちをしていた、マリアを抱きながら。
『俺ね、家出の初日ここを渡れなかった』と真横のユリさんに言った。
「どうして？」とユリさんが聞いた。
『帰れなくなる気がしたんだ』と正直に答えた。
真夏の太陽が焼く、一番街という大きな看板を、ユリさんと見ながら。
「あなたは帰るわ、蘭も他の皆も解ってる・・大切なのはそんな事じゃないこともね」とユリさんが前を見て、強く言った。
私は【自立】というケイの言葉が響いてきて、ケイの凄さを感じていた、自分は甘いガキだと。

店に帰ったらＴＶルームにケイがいて、エミとミサの姉妹が来ていた。
マリアは私に抱かれ眠っていたのに、ミサの声を聞くと、すぐに起きて近寄り、二人でままごとを即効で始めた。
「ケイここは子守のプロに任せて、行きましょう」ユリさんがケイに声をかけた。
「はい」ケイは慌てて立ち上がり、「お願いね」と言って部屋を出

たユリさんを追いかけた。

「私が今日おかあさんだから、マリアが子供ね」とミサが言い「こもど」とマリアが言って、仲良く始めたので。

テーブルで勉強を始めたエミの横に座って、日記帳の包装を開くと、中からパーカーの万年筆が出てきた。

ユリさんのさり気ない優しさに感謝しながら、その部厚い日記帳を開いた。

エミが横で主張の強い大きな目で、私を見ていた。

私は最初の1行に【本当の優しさってなんなんだろう＝　　】と書いている。

＝の後の答えを書くための、空白はまだ埋められていない。

提出期限の無い宿題のように残っている、今もまだ・・・。

授業？

幼い時漠然と生きていた、子供らしい遊びをただ楽しんで。
その季節が来たら【反抗期】と言う名前に甘え、ただ全ての不満の矛先を他に求めた。
自らを振向く事が怖かった、何も持たない事が・・・。

私は日記を閉じて、ミサとマリアを見ると。
「駄目でしょマリアお片づけしないと！」とミサがお母さん光線を発射して。
「ごめさい」とマリアがぬいぐるみを片付けていた。
横のエミの勉強を何気に見て、私は驚いた、割り算をしてるのだ。
『エミちゃん何年生だっけ？』と笑顔でエミに言った、エミは私を見て。
「1年生だよ、言ったやん」と屈託無く笑った。
『それで割り算！』エミはその特徴である目力を増し。
「うん、始めたばかりで解らないから。チャッピーが教えてね」と少女らしく笑った。
『ギリギリ大丈夫です』と言うと「中学生でしょっ」と笑顔で見ていた。

私はエミに割り算を教えながら。
『エミちゃん、勉強好きなんだね？』と聞くと。
「好きじゃないよ、でも今お父さんが入院してて・・出来ると喜ぶの」と顔を上げずに言った。
私は恥ずかしかった、つまらない事で親父に逆らって、家出までした自分が。
目の前にいる、幼く可愛い小1の少女は父を喜ばす為に、掛け算九九を理解し、今独学で割り算に挑戦している。

何を我慢しているのか、中1の私だからリアルに分かっていた。

『エミちゃんは大人になったら何になりたいの？』との私の問いに。
「お医者さん」と笑顔で即答した。
「お医者さんって凄いんだよ、お父さんを助けてくれるもん」小1の少女の笑顔だった、ただその目力で遠く将来を見ていた、確かなターゲットを見据えて。
『なれるよきっと』私は確信的にそう思った、そしてエミに医者になってほしいと願っていた。
自分の夢は何なんだろうと問いかけたが、確かな答えなど持っていない自分を感じていた。

「ミサはね～」ミサが私を可愛い声で引き戻してくれた、「ユリちゃんになるの」と可愛く笑った。
私はエミと顔を見合わせて微笑み。
『それはお医者さんになるより難しいよ、頑張って』と言うと、ミサは拳を力強く握って。
「うん、がんばる」と笑顔で言った。
私もエミも笑っていた、ミサは両手の拳に力を込めたまま。
ふと見るとマリアがミサを見ていた、天使の笑顔で。

人は教えてくれる、その意思ある行動で、それは年長者だけではない。
どんなに幼くとも、強い意志は必ず響く、見るものが心を開いていれば。
その時のエミの目には、見えていたのではないだろうか、小児科で病気と闘う今の自分が。

3時を過ぎた頃、松さんが来て。
「マダムが呼んでるよ、フロアーに行き」と言ったので、松さんと

交代した。
フロアーに行くと、マダムが6番席に座っていた。
「まぁ横に座って待っちょき、済んだら買出しの店に紹介に行くかい」そう言ったマダムの横に、私は腰掛けた。
『何が始まるの？』とマダムに笑顔で聞いた。
「楽しみに待っちょき、ワシもワクワクしちょるんやかい」前を見て語るマダムは楽しげだった。
その時奥から、薄化粧をし真っ白なドレスを着たケイが、ユリさんと現れた。
髪をアップにして、恥ずかしそうに歩くケイは、輝いて見えた。

「いいねー、良い感じだよ」マダムは冷静に言ったが、本当に嬉しそうだった。
「どうだい、気分は？」マダムの問いに、ケイは始めて顔を上げて。
「やっぱり、恥ずかしいです」と照れ笑いを浮かべた、マダムもユリさんも暖かく見ていた。
「どうだい、お前も男だろ感想は？」とマダムが言った、私はケイを見て。
『眩しくて誰かと思ったよ、素質は充分すぎるほどあるね』と笑顔で言うと。
「お前だけは」とマダムが言い、ケイにも笑顔が戻っていた。

「じゃあ行くかな」とマダムが言ったので、私も立ち上がると。
「どこに行かれるんですか？」ケイが聞いた。
「買出し業者の挨拶や、なんせ未成年やしな」それを聞きケイが慌てて。
「私が行きます」とケイが言った。
「お前は従業員にお披露目や、店にはまだまだ出せんがそのままでいな」とマダムが諭した。
「マダムは徳野さんとの打合せがあるのでしょ、私が行きますから」

とユリさんが言った。
「ユリと挨拶回りか」私を見て「お前も運が強い男やな」と言ったので。
『運も実力、刺されないように気を付けます』と笑顔で言って、皆で笑った。

ユリさんとエレベーターに乗ると。
「ケイ綺麗だったでしょう？」と薔薇で微笑んだ。
『うん、びっくりしたよ』と言うと、あの悪戯っ子の微笑で。
「女は魔物よ～」と楽しそうに言ったので。
『キャ～～』と大袈裟に怖がった、楽しかった。
挨拶回りをしながら【ユリと挨拶回りする強運】と言った、マダムの言葉の意味がすぐに分かった、外を歩くだけで皆が挨拶する。
食べ物屋の仕込みをしてる人は、手を止めてわざわざ出てきて、ピンク系の呼び込みさんは慌てて、持っていた怪しげな手持ち看板を隠しながら、皆ユリさんに笑顔で話し出す。
ユリさんは都度丁寧に挨拶をし、私を紹介してくれた。

「PGで預かっている子ですから、よろしくお願いします」と頭を深々と下げて。
次の日から私は、皆に笑顔で挨拶されるようになるのである。
マダムがケイに言った《お前の将来はユリの将来でもある》その言葉の真意に触れた。
ユリさんは夜街の人々に、全て見られているんだと感じた。
その仕事も、生き方も、【女帝】マダムの言ったその言葉が蘇ってきた。

挨拶回りも終わり、帰り道。
『どうしてケイに素質があるとおもったんですか？』と聞いてみた。
「行き詰まっているのは一目で分かったわ、マダムに顔を上げされ

られた時」空を少し見て。
「マダムを見ながら背筋も綺麗に伸びたのよ、怖かったでしょうきっと・・でも真直ぐにマダムを見たの」私を見て。
「もちろん、何があったのかなんて知らなかったわ、でもね向き合える子だと思ったの」私に教えるように優しく。
「自分の悲しみや辛さや寂しさを内側に潜ませて」ユリさんは目を逸らさない、私は動けない魔法にかけられたように。
人通りの多い昼間の一番街で、ユリさんはそんなこと気にもとめずに続ける、伝えたい気持ちに溢れている。
今じゃないといけないと言うように。
「他人とも真摯に向き合えると思ったわ、その悲しみや辛さとも」
私の目を見続け。
「結局人は、本当に大切な事は教えてくれない、いえ教えられないと思ってるの・・自分で感じないといけないわ」
そして最後の言葉は、私に問いかけるものだった。

「経験はしただけじゃ駄目、自分の内側に刻み込まないと」

その目の奥は厳しさがあり、言い訳は許さないと言っているようだった。
どれだけの経験がこの人を作ったのか、想像もできない。
自分は、辿り着けるのだろうかと思っていた。
夏の日の午後、最高の教師による特別授業の1時限目が終了した。
私は笑顔に戻った美しい教師を見ていた、その遥か遠い人を。
何も言えずに、ただ心に刻もうとしていた、その薔薇の言葉を。
店に帰りＴＶルームでエミとミサと一緒にプリンを食べていると、蘭が迎えに来た。
車でアパートに帰り、時間が無いのに手作りのカレーを食べさせる

と言って、作ってくれた。
「美味しい？」とカレーを食べる私に、蘭が真顔で聞いた。
私はわざと答えずに天井を見た、蘭のカレーはお袋のよりも辛めで、具も大きく美味しかった。
「ねっ、美味しい？」必死な蘭が可愛くて、その顔を楽しんで。
『美味しいよ、いつでもお嫁さんにいけるね』と笑顔で言うと、あの満開の笑顔になった。
「よかったー」と満開のまま言って、蘭も食べ始めた。

食べながらエミの話しをした。
「エミちゃんは頑張り屋さんだから、割り算教えておやり」ニッと笑って「解ればね」と言ったので。
『蘭にも教えようか？』とニッで返すと。
「掛け算の４の段からにして」と蘭が言って、二人で笑いながら食事をした。

蘭が身支度をして、タクシーに乗って夜街に出掛けた。
ビルの前に着いたのが、７時４５分でお金を払い蘭は焦って。
「やばいからダッシュしまーす」と言って裏階段を駆け上がった。
《よく走る奴だな～》と私が暢気に考えていた時だ。
「キャーーー！」と蘭の叫び声が響いた、私は慌てて。
『蘭！』と叫びながら階段に走った。

「気をつけて！」その蘭の叫びと同時に１階の踊り場で男とかち合った。
その男は私のＴシャツの首周りを両手で掴んで、思いっきり引っ張った。
「ガキが！」と言いながら。
私は蘭の【気をつけて】が有ったので、準備は出来たていた。
男は紺の雨合羽の上下に、タイガースの野球帽、サングラスをかけ

ていた。

「お前バカだろ」と私は笑顔で言った。
相手の私を掴んでいる両腕の上から、左手を奴の顔の前で開き、それで右手の拳を掴み、そのまま肘を思いっきり男の顔面に入れた。
相手は倒れ、サングラスが飛んだ。
そして目が合った瞬間、私は今までに感じた事の無い目を見ていた。
《死人のような目だ》そう思った、その男は逃げた、私は蘭の事が気になって駆け上がった。
2階と3階の中間の踊り場で蘭は立ち尽くしていた。

『蘭！』と呼んで近づくと、蘭が抱きついてきた。
『怪我は？』と蘭を抱きしめて、耳元に優しく囁いた。
「大丈夫、突き飛ばされて転んだだけ」と蘭は笑顔だった。
《本当に良かった》私はそう実感していた。
「ラッキーって思ってるだろう」私に抱かれてる蘭が、突然ニッと笑った。
『少し』と私は腕を放さずに顔だけで照れた、蘭の顔の近さに少し戸惑っていた。
「お願いあと1分だけこのままでいて」蘭は横を向いて静かに言った。
《何時間でも》心ではそう言って。
『甘えん坊』と言葉にして、腕の力を微かに強めた。

私は昨夜の瞑想を思いだしながら、蘭の髪の香りを感じていた。
私は理由など考えないほど、ただ蘭が好きだった。
いつでも元気に走り・笑う華奢な女性が、そして海のような深い心が。

しかし二人が気付かぬ所で、合図が鳴り響いていた。

大事件はスタートの合図を、蘭にやらせていた、その悲鳴が始まりの合図だった。

合図を出させて走り始めた者は、止まる事も知らない、ゴールすら知らない相手だったのだ。

船出

微かな潮の香りを連れた、爽やかな南風が吹いていた、幻想の雑居ビルの密林を歩く人々にも。
私の腕の中で、眠ったように目を閉じる女性は、一瞬でも目を逸らすと、消えてしまいそうだった。
そのどこか儚げな事を、気付かせぬよう常に笑う。
そしてどんな時も、自らに従う強さを秘めている。

「行こう、今夜はケイのお披露目だから遅れられないよ」蘭は顔を上げ無理やり微笑んだ。
蘭は【突き飛ばされたでけ】そう言ったが、それだけでは無いことは、その微かな震えで分かっていた。
私のただ1つだけある、悪ガキの経験からそう思っていた。
私は蘭から腕を離し、私から手を繋いで店の前まで行き。
『無理してない？』と蘭に優しく聞いた。
蘭の受けた精神的恐怖が心配だった、蘭は最高の満開の笑顔で。
「今はあなたが私の側についているんでしょ？それなら私は大丈夫だよ」と蘭は私の目を見て言った。
『うん』と私の蘭の目を見答えた。
《もう怖い目には合わさないから》そう誓っていた、心で。

「ケイのお披露目とミーティングが済んだら、二人で徳野さんに報告しようね」と蘭が微笑んだ。
『うん、わかった』と私も言って、店に入った。
蘭と別れＴＶルームに向かおうとすると、松さんが大きな声で私を呼んだ。
「おーい、間に合ったね」と手を振り「マリアを頼めるか？」と聞いた。

私は松さんに駆け寄り、マリアを抱き上げて。
『どこに行くの？』と笑顔で聞いた。
「決まってるやろケイのとこさ」と言って松さんはＴＶルームに戻り、エミとミサを連れ出した。

２人の可愛いドレス姿を見て、私も自然に笑顔になった。
『二人ともフロアーデビューかな？』と笑顔で２人に言うと。
「可愛いでしょ～」とミサが自慢し、エミは数時間前のケイと同じように照れていた。
二人はドレスを着て、花束を持たされて、後を歩いて来た。

フロアーには、中央にマダムと徳野さん、ユリさんがいた。
早出の女性が１２名、蘭は着替えが間に合わなかったのか、私服で１０番席に座っていた。
そして入口のアプローチに、ボーイが８名白い制服で整列していた。
松さんがボーイの後ろに立ったので、私はその横に並んだ。
エミとミサは松さんの指示で、廊下に今は隠れている。

「仕事前の緊急ミーティングに、来てもらってすまん」マダムが話し始めた。
「ワシらとボーイだけでしようと思ったが、蘭に叱られてワシも気付いたよ」
「ケイの船出は盛大にやるべきじゃな」マダムは笑顔で蘭を見た。
「皆に報告がある、ケイ入れ」そうマダムが大きな声で言った。

ＰＧには花道があった、銀の扉のから繋がる３ｍ程だろうか。
扉の奥はようするに、女性の休憩所なのだが、マダムの考えで休憩して仕事に戻る時、緊張感を戻す為に、わざわざ目立つようにしているらしい。
その銀の扉が開いてケイが出てきた。

3歩程進み深々とお辞儀をして、前を向き堂々とマダムの横に進んだ。
「ケイにフロアーの仕事を教える時が来たようじゃ、皆協力して助けてやってほしい」マダムが全員をゆっくり見回した。
「じゃあケイ、挨拶を」とマダムがケイを促した。

「よろしくお願いいたします」と言って、ケイは深々と頭を下げた。
「ケイ、綺麗だよ～」松さんが大声で叫んだ、泣いていると思った。
「ケイ頑張って」蘭が言うと、女性全員が立って「頑張って～」拍手した。
「ケイ頑張れよ」ボーイはバラバラに大声で言って、全員で拍手した。
そしてエミとミサが花束を渡して。
「ケイちゃん、綺麗」とミサは言葉にして見つめていた。
ケイは嬉しそうに、しかし必死で涙を堪えてるように見えた。
「あいがとうございます、私はここで働ける事が本当に嬉しい・・・・必ず頑張ります」と言った時だった。

「けい！」私は驚いてマリアを見た、抱いている私でも声の主がマリアだと思わなかった。
それ程明朗な発音の大きな声だった。
「がんば！」とマリアが天使の笑顔で言った。
ケイはマリアを見た、マリアは天使発散レベルを最大にして、満面の笑みで笑っていた。
ケイはその笑顔を見て、限界が来て涙をこぼした、皆静かに見守っていた。
《ケイは愛されている》私はそう感じていた。

『偉いねマリア、よく言えたね～』と私がマリアに笑顔で言うと。
「えやい」と元のマリア語で答えて笑った。

マリアの言葉で皆が笑顔になった、その不思議な力を感じながらマリアを見ていた。
ユリさんを見ると、マリアを見つめ嬉そうに笑っていた、優しい笑顔で。

「それともう一つ、ケイが忙しくなるので」マダムが私を見た。
「ケイと松のフォローとして、知ってると思うがチャッピーがやる、皆で鍛えてやってくれ」とマダムが言った。
私が【よろしくお願いします】と言おうと思った瞬間。
「未成年のようですが、身元保証人はだれでか？」と背の低いボーイが言った。
マダムと蘭が私だと言おうとしたその時。

「私が彼の身元保証人です、彼の全責任は私が取りますので。よろしくお願いします」とユリさんが深々と頭を下げた。
立つ姿は勿論美しいが、頭を深々と下げた、その姿も美しいと思っていた。
ボーイ達はユリさんに頭を下げさせた事に驚き、慌てて振り返り全員が私を見て。
「よろしく」と口々に言った。
私はマリアを抱いていたので、浅めのお辞儀をして。
『よろしくお願いします』と言った。
「それじゃあ仕事だよ、解散」マダムの言葉で皆持場についた、蘭が来て。
「徳野さんとマダムＴＶルームに連れてくるから」と言ったので。
『了解』と笑顔で答えた。

ＴＶルームで待ってると、すぐに蘭とマダムと徳野さんが来た。
只ならぬ雰囲気を察して、松さんが３人娘と静かに遊びだした。
「蘭から内容は聞いた」徳野さんが言った「お前は絡んだのか？」

と真顔で言った。
『肘を一発だけ入れた』と真顔で返すと、徳野さんはニヤリと笑い
「やっぱり分かるようだな、なら分かった事を報告してくれ」と徳野さんが、笑顔で言った。
私は悪ガキの喧嘩の相談の時の様に話した、それが徳野さんの【分かる】の意味だと気付いたから。

『分かった事が３つあります。
１番目が歳が４０前後で身長約１６５ｃｍ（自分との比較で）痩せている事。
２番目が誰かか何かを恨んでいる、俺に対し【ガキが】と叫んで向かってきたから。
コソ泥とか、そんな者じゃないと思う事。
３番目が殴りあう喧嘩など殆ど経験がないと思う』

徳野さんの真剣な目を見ながら、真顔で言った。
「なぜだ？」徳野さんの試すような問いに。
『相手の襟首持つなんて、柔道の試合でしか通用しないでしょう』と言って、徳野さんを見た。
「すまん、そうだ」と徳野さんが言った。

「問題は次だ、あるか？」と徳野さんが真顔で聞いた。
『１つだけと』と私は言って蘭を見た、これ以上怖がらせたくなかった、それを察したのか蘭が。
「私は大丈夫よ、私にはあなたがついているんでしょ」と真剣な目で言った、私は蘭を見ながら頷いた。

『肘を入れたとき、サングラスが飛んで目が合った。
上手く言えないけど初めて見た目だった。
普通は向かってくるか悔しいかどっちかの目なのに違った』

そこまで言って、次の言葉を想像してる徳野さんと目が合った。
『死人のような目だった』と真顔で言った、その直後徳野さんの眼光が変わり。
「マダムとりあえず厳戒体制にして上を調べてきます」と言って出て行った。
「蘭、怖かったろう仕事できるか？チャッピーと帰ってもいいぞ」マダムが心配げに言った。

この言葉で確信した、突き飛ばされただけじゃないと。
私を心配させぬよう、私の怒りが増さぬよう、蘭が言わなかったのだと感じた。
その深い心は、どんな状況でも、先に相手の事を想うのかと感じた。
私は蘭を見ていた、その深く温かい心に触れて。

「大丈夫、そんな人に負けません」と蘭が言って、私に微笑んで仕事に向かった。
「松、すまんが2×2体制や、今夜だけ厨房のフォローに行ってくれ、ここはワシとチャッピーでやるかい」とマダムが松さんに言った。
「まかせて下さい」と松さんは言って、出て行った。
「ふー」と言ってマダムは座り私を見て「良い説明じゃったよ、徳のあんな顔久々に見た」マダムは疲れてるように見えた。
ミサが来てマダムの肩を揉みだした、この子も不思議な感性で動くもんだと、感心していた。

『2×2の体制って、どんなの？』私はマダムに聞いた。
2×2とはビルの入口に一人、裏階段に一人、1階エレベター前に一人、3階エレベーター前に一人ボーイが立つ事だと教えてくれた。
「チャッピー」マダムの静かな言葉に私はハッ！としてマダムを見

た。
「お前はわかっちょるか？今の自分の状況が？」とマダムが言った、私は分かっていた。
『ユリさんが身元保証人になった事やろう』と真顔でマダムに言った。
「そうや、だからお前は絶対無茶したらいかんぞ・・・なんか行動する前には、必ず一度止まって考えるんやぞ」マダムは笑っていない、でも優しかった。
「ただ、愛する者を守る為なら・・その行為なら、ワシもユリも何も言わん」と真顔で言った。
その言葉で、蘭の微かな震えが、私の中に蘇ってきていた。

沢山の経験がその皺を深く刻んだ、その中にはあの理不尽な戦争も、その後の混乱も刻まれている。
その言葉は、重く染み込むようだった。

マダムの【愛する者を守る行為】その言葉は、遠い過去からの叫びだった。

経験者には、忘れる事の許されない、記憶からの・・・。

幻想

【もはや戦後ではない】そのころ政治家であろう、誰かが言っていた。
メディアに何の力が働いたのか、流行語に押し上げた。
誰かなど覚えていない、心には響かない空虚な言葉だった。
その当時、私の家の近所には義足の人・盲目や片目の人・寝たきりの人、沢山の傷ついた人がいた。
駄菓子屋の婆さんは、旦那を失っていた。
親や子供や旦那を、失っていた人が沢山いた。
空手道場のシゲ爺は、長崎の被爆者で、一瞬で全てを失った。
なぜ自分だけ生きてるのだと、神を呪ったと言っていた。
私は元来の聞き魔だったから、特に年寄り達には可愛がられて、沢山の話を聞いていた。
その人達の心には、戦後などという言葉すら、なかったのだ。

マダムは深い皺を、より深くした笑顔で。
「ミサ上手くなったの～」と肩を揉むミサに言った。
「の～」マリアがすかさず笑顔で、語尾をまねた。
「マリアは好きやな、の～が」マダムは優しく見ていた。
「の～」マリアがもう一度真似た、マダムは笑顔で見ていた。

私は隣に座るエミと、そのコントを笑って見ていた。
その時徳野さんが部屋に入ってきた、3人娘の手前笑顔を作りながら。
「マダム、ディープの子らしいです。逆恨みされてるそうです」徳野さんが小声で、マダムに報告した。
「相手は？」マダムも小声で、聞き返した。
「元はサラリーマンですが、今は無職で強度のアル中で、錯乱する

そうです」と徳野さんが言った、マダムは暗い表情になり。
「当面2×2でいこう、帰りはタクシーに乗るまで見送る事」とマダムが指示した。
「わかりました」と徳野さんが、真顔で答えた。

「俺とボーイ、9人で守らんといかんからな」と私を見て、徳野さんが言った。
「お前に一番大切なこの3人娘、お前がTVルームにいる時は一人で任せていいか？」と真顔で言った。
『わかった、いつも側に付いておくよ』と真顔で返すと。
「頼むぞ」と言って徳野さんは、出て行った。
私は徳野さんに仕事を与えられた事が嬉しく、3人娘を見ていた。

マダムが鍵を私に差し出し。
「誰かトイレに行く時は、必ず鍵をかけて付いて行け、ノックが有っても誰か分からん時は、絶対に開けるなよ」とマダムが真剣に言った。
『了解』と私も真顔で返した、マダムは私の表情を読み取り。
「頼むで」と出て行った。
マダムが出て行き、鍵をかけるて振向くとエミと目が合った。
《賢い子だから話の内容理解したか》私はしまったと思い、笑顔でエミの横に座った。
『心配しないでいいよ』とエミに言うと。
「怖くないよ」と少女の笑顔で答え、ミサとマリアを見ていた。
私はその横顔を見ながら《怖くないか、守る気でいるのか二人を》と思っていた。
その小さな身体に秘めた、強い力を感じて、安心していた。

夜も9時を過ぎた頃。
「さぁ、歯磨きの時間で～す」とエミが言って、ミサとマリアに歯

ブラシを配った。
マリアの歯は、変なゴムの歯ブラシで私が磨いた。
それから3人娘を連れて、従業員用のトイレに行き、女子トイレの前で。
『ここで待ってるから頼むね』とエミに言った。
「はーい」とエミがミサとマリアを連れて行った。
エミが居てくれて良かったと、心から思っていた。

暫くして3人が出てきた、エミが私に。
「中で千秋ちゃんが潰れてるよ」と真顔で言った。
『普段はどうするの？』と私はエミに聞いた。
「カー君の担当だよ、駄目な人はＴＶルームのベットに寝せるんだよ」とエミが教えてくれた。
ＴＶルームの奥に、簡易ベッドが有るのを思い出した。
今は人手が足りんし、でもトイレで一人にもできないなと思った。

3人娘をＴＶルームに入れて、エミを笑顔で見た。
『エミちゃん鍵をして、ノックがギャートルズの時だけ誰なのか聞いて』とエミに笑顔で言った。
「楽しそう、わかった」とエミは屈託無く笑い、ドアを閉めて鍵をした。

私はトイレまで戻り、大きな声で。
『失礼します、入ります』と言って女子トイレに入った。
トイレは清潔だったが、香水の香りが強かった。
千秋という女性は、洗面所の横に足を投げ出して座り、俯いて寝てるように見えた。
投げ出されたミニスカートの、足の奥の下着まで丸見えだった。
しかし私には、ラッキーと思う余裕すら無かった。

私は千秋の横に屈み、肩に手を当て。
『大丈夫ですか？』と優しく揺すってみた。
「誰！？」千秋は目を見開き、私を見て言った。
『チャッピーです』と私が焦って答えると。
「いや～ん、チャッピー可愛い」と千秋が抱きついてきた。
咄嗟に私は両手で支え、抱きしめる格好になり、身動きできなくなって、どうしようと思っていた。
千秋は私の肩に顎を乗せて、目を閉じている。

「お、家出少年、トイレプレーとは中々やるね～」と赤いドレスの若い女性が入ってきた。
『どうしよう？』と私は言って、助かったと思っていた。
「千秋、千秋」とその女性は千秋の頬を、わりと強めに張った。
「駄目だねこりゃ、ボーイには言っとくから、ＴＶルームのベッドで寝かせといて」そう言いながら、後ろから千秋を支えた。
私は腕を抜き、千秋をお姫様抱っこをした。
「やるね～不良少年、明日は私が潰れようかな～」と赤いドレスの女性が、私を見て艶やかに笑った。

私はトイレを出てＴＶルームの前に来て、後悔をしていた。
《ギャートルズは失敗だった、簡単なのにしとけばよかった》と思っていた。
抱えている千秋さんは、細身だったが完全な脱力状態で重かった。
私は自分なりのイメージで、ドアを足でノックした。
《はじめ人間ゴ・ゴン・ゴ～ン》と呟きながら。

「チャッピー？」エミの声がした。
『うん、開けて』と静かに言った。
「私が今している勉強は？」と返事があった、なんて賢くて慎重な子なんだろうと、関心していた。

『割り算』と答えると。
「ピンポ～ン」とエミが言いながら開けてくれた。
『エミちゃん』と部屋に入り私が言った時。
「鍵かけたよ」とすぐにエミの返事があった。

私がベッドに行くと、綺麗に整えられていた、普段は手荷物とかが置いてある。
凄い子だよな～私は三度感心して、千秋を寝かせハイヒールを脱がせた。
大きなバスタオルが置いてあったので、それを下半身から胸までそっとかけた。
「松さんはブラのホックも外すよ」と声がして振向くと、エミが少し大人びた表情でニコニコしてる。
『お子ちゃまは寝なさい』と笑顔で言うと。
「は～い」と少女の笑顔を残し、飛んで行った。
私は横になった3人娘のベッドの横で、照明を暗くして、座っていた。
静かに耳を澄ますと、微かに聞こえる、戦場のフロアー音の中に、蘭の声を探していた。

3人娘の寝息を感じながら、私は目を閉じ瞑想に入っていた。
蘭の顔を浮かび上がらそうとしたが、浮かび上がるのは、あの死人のような目だった。
コンコンと静かなノックの音がした。
『誰ですか？』と私は静かに聞いた。
「私、ケイ」と返事があった、私は声でケイだと分かったが、悪戯心が起きだした。
『合言葉を』・『ケイ？』・・・少しの沈黙があり。
「可愛い」プッと自分の言葉に吹き出していた。
『ピンポ～ン』私は笑顔でドアを開けた。

「もう、馬鹿なんだから～」そう言いながらケイは笑顔で入ってきた。
『可愛い、とくるとは』私の言葉に、ケイは少し頬を染めて。
「ピンポ～ンって言ったじゃない」と微笑んだ。
『事実でしょ』確かに私はケイの事を、心から可愛いいと思っていた。
「本当にお喋りは天才ね、女の機嫌をとるのも」と言って可愛く笑った。
ケイは簡易ベッドの、千秋さんを見に行った。
「今夜は駄目みたいね、ボーイが最近フロアー慣れてない人で、一気させられたみたい」ケイはそう言って。
「よろしくね、襲ったら駄目よ」と笑顔で出て行った。
私はマジックミラーのカーテンを開け、今夜も盛大な宴を見ていた。その華やかな裏に隠された、真実を少しだが垣間見て、仕事は大変なんだと実感していた。
《幻想》なのだと、この宴は彼女達が必死に作り上げている。
【幻想の宴】だと思っていた。
私から見える正面の席に、蘭が来て座った。
マジックミラー越しだから、私が見える事は絶対にないのに。
蘭が私に向かって、満開で微笑んだ。
少し疲れたような、その微笑をじっと見ていた、そしてお客と談笑し笑っている姿を。
《きちんと仕事としてやり、きちんと辞められる人間》マダムが言った。
ユリさんの言葉を思い出していた、強く輝く蘭の姿を追いながら・・

月光

鏡のようなガラスに仕切られた世界は、全く別の様相を呈している。私は静寂の中から、華やかな幻想の宴の世界にいる、ドレス着る女性達を見ていた。

「今、何時」と後ろから声がして振向くと、千秋さんが覚束ない足取りで立っていた。

『１１時４５分ですね』私は時計を見て伝えた。

「またやっちゃった」と舌を出して微笑んだ。

動く千秋さんの若さ溢れる姿を見ていた、綺麗と言うよりまだまだ、可愛いという感じだった。

『大丈夫ですか？』と笑顔で言って近寄ると。

「大丈夫かな、王子様に抱っこされていたから」と可愛く微笑んだ。

『起きてましたね～』とニヤで言うと。

「パンツ見たでしょ」と笑顔で突っ込まれた。

『いえ、夢中で』と私は焦って、笑顔で返した。

「何色だった？」と可愛いニヤ聞いてきた。

『薄いピンク』私は笑顔で即答した。

「ほら～、私が必死に足閉じようとしてたのに、声かけて入って来るのが早いから」と微笑んだ。

『以後気を付けます』私も微笑んで返した。

千秋さんが部屋を出ながら。

「抱かれた時、本当に気持ち良かったよ、又よろしく」と笑顔で言って、出て行った。

１２時が過ぎたとき、ケイと彫の深い背の高い女性が来た。

「エミとミサの母親でサクラです、いつもありがとう」と美しい笑

顔で言った。
『エミちゃんにいつも助けられていますよ』と私も素直に言った。
「そうだよね～」とケイが言ったので。
『ケイ、仕事は終わったのかの～』と密かに練習していたマダムの真似をした。
サクラさんとケイは、必死に声を殺して笑っていた。
《いけそうだ》と私は心で思っていた。

「お願いやめて、皆が起きちゃうから」とケイは必死の形相で懇願した。
近くで見るサクラさんは、６歳の子供がいるなど想像もできないほど若かった。
彫りの深い顔が、日本人離れしていて美しかった。
「今夜から乗り合わせで、タクシーで帰る事になったから、タクシーまではボーイさんが、見送るらしいから」とケイが説明した。
見るとサクラさんがミサを抱いて、まだ覚醒できないエミを起こしていた。
その時松さんが来たので、私はエミを抱いた。

「いいの？」サクラさんが笑顔で言った。
『可愛い妹ですから』と笑顔で返すと、サクラさんは嬉しそうに。
「ありがとう」と言って、２人でエレベーターに向かった。

エレベーター前に、私服の女性が１０人以上待っているのが見えた。
「エミとミサ」誰かが言って、皆が譲ってくれた。
「ありがとう」とサクラさんが言って乗り込んだ。
操作盤の前に、さっきの背の低いボーイがいてエレベーターを操作していた。
私はそのボーイの後ろに立った。
「さっきは悪かったな、仕来りみたいなもんや。俺もやられたよ」

前を見てそう言った。
『そうだったんですか』と私が言うと。
「でもまいったよ、身元保証人にユリさんがなるなんて、俺が頭下げさせたみたいで焦ったよ」と言った。
「ユリさんがなったの！」一緒に乗った小柄の女性が言った「あなた、何者？」と言って私を見た。
『ただの家出少年です』と笑顔で返して思っていた。
ユリさんは何故、俺なんかの保証人になったのかと。

外に出ると西橘の左端に、タクシーが数台並んでいた。
側にボーイが立っていた、サクラさんがミサを抱いて乗り、エミをそっと隣に乗せた。
「ありがとう」とサクラが微笑んだ。
『おやすみなさい』と笑顔で言って、タクシーを見送った。

帰りのエレベータは一人で乗った。
「ボーイのカズや、よろしく」と背の低いボーイが右手を出した、私は握り返しながら。
『よろしくお願いします、カズ兄さん』と笑顔で言うと。
「いい響きや～」とケイと同じ顔をして笑った。
『ＰＧの女性の問題でもないのに、凄い体制ですね？』と聞いた。
「俺も知らないんやが、昔にたような事があって、徳野さんは後悔してるって言ってたよ」とカズ君が答えた。
『そうなんですね』と言った時にエレベーターが着いた。
私は一礼して降りた、カズ君は右手を上げた。

ＴＶルームに向かっていると。
「チャッピー、ちょっと」と千秋さんが呼んだ。
私が小走りに駆け寄ると、廊下の隅で蘭が体育座りで、膝に顔を付けていた。

『蘭・・姉さん』と私は慌てて言って、何も確認せず躊躇無く抱き上げた。
「やっぱりね。いいな～蘭姉さん」と千秋が言った。
「本当にいいな～、私も欲しい」と女性控え室から、若い女性が３人出てきた。
一人はトイレの、あの赤いドレスの人だった。
「チャッピーお疲れ」と４人が笑顔で言ったので。
『お疲れ様でした』と笑顔で言って、蘭をお姫様抱っこしたまま見送った。

私は蘭を下ろさずに抱えたまま。
『目を開けたら』と言った、蘭は目を開けない。
私はそのまま歩き、裏階段から店に入った角の小窓の所に行った。
小窓に向かい《月が出てればなー》と思いながら、ミュージカル調に大袈裟に。
『おお、神よ姫が目を覚まさないのです、どうすればよろしいのでしょうか』と言った。
蘭は笑いをこらえているのだろう、微かに揺れた。

『おお、そうですかキスをすれば、目覚めるのですね』と言って蘭を見た、蘭は目を開けない。
私は蘭を抱えたままゆっくり屈み、おでこにキスをした、顔を離すと蘭が目を開けていた。
「案外、意気地がないね～」と蘭が満開で微笑んだ。
私は蘭の顔を見ながら、少し元気が出たかなと思っていた。
私は蘭を抱えたまま、蘭も体を預けたまま、何も言わなかった。

「ごめんね、心配した？」蘭は真顔で聞いた。
私は座ってる蘭を見たとき、かなり焦って心配していた。
『蘭、心配なんかいくらでもするから、だから・・勝手に消えるな

よ』と本気で言った、蘭は深い瞳で私を見ていた。
「ユリさんと帰るから、もう少しかかるはずだから」と言って蘭は目を閉じて。
「あと3分だけこのままでいさせて」と言って動かなくなった。
蘭の重みが私に安心感を与えた、消えてないその証拠が。
私は蘭の顔を見ていた、少し濃い化粧に隠された、疲れも不安も悲しさも、今の私ではどうにもしてやれないかもしれない。
でも寂しさだけは、少しは埋めてやれるのではないかと思っていた。
今の私に出来ること、ガキの私に出来ること。
ユリさんの最初の教えを、反復しながら考えていた。
そして蘭の忘れられない言葉を、今の私でその全てをかけた時に、どれくらい愛せるのかを。
全てをかけていい、蘭になら、それが全て無駄になったとしても、何も後悔はしない。
それだけが分かっていた。
私に全てを預けて目を閉じる蘭は、薄紅色の唇を合わせている。
小窓から入る微かな光で、艶が出ている・・私は小窓を見た。
小窓から射し込む微かな光は、月光ではなくネオンだった。
その場所は城でなく、ビルだった。
私は王でなかった、金も地位も名誉も、何一つ持ってなかった。
だが蘭を抱く、今の自分が世界一幸せだと感じていた。

私は１つ誓いをたてた。
蘭の薄紅色の唇に、自分の唇を合わせる時。
それだけの資格のある男になれて、蘭を一生、笑顔でいさせられる男になった時。
そして蘭が、それを望んだ時。

その時には、王にもなれないし城も持てないが。

月光の照らす場所にしようと。

その蘭の待つ、月光の照らす場所を、必ず探し出そうと誓っていた・・・。

水域

真夏の、日付が変わったばかりの深夜。
小窓から見える空には、星も見えなかった。
静寂の中、私に抱かれ支えられている、美しい目を閉じた女性の、呼吸だけを感じていた。
濃密な時間だった。

「いこう、マリアが待ってるよ」と蘭は私を見て、満開で微笑んだ。
『うん』と笑顔で言って、蘭をゆっくりと起こした。

「千秋がね、とっても安心できて、気持ち良かったて言うから」私を見ながら。
「1番目が私じゃなかった事に、やきもち妬いてみたの」と満開で微笑んだ。
「千秋の言ったのが分かったよ、私達の周りには存在しない・・絶対に襲わない男だからね」とあの小動物の笑顔を見せて、私の手を握って歩き出した。

TVルームに帰ると、マダムとユリさんはまだ来てなかった。
私はマリアの寝顔を確かめた、可愛い寝顔で寝ていた。
「遅かったですね？」とケイが蘭にニヤで言った。
「チャッピーを説教してたの、女子トイレに入る癖をやめなさいって」と蘭が微笑んで返した。
ケイと松さんは、クスクス笑っていた。

「癖だったの」とケイがわざと睨んで、私を見た。
『病気です』と私もわざと頭を掻いて言った。
「ケイ、奴は会話の先生としては強敵やな～」と松さんが笑顔で言

った。
「本当にどんな環境で育ったのか？」と蘭も満開で微笑んだ。
『蘭、そろそろ両親に挨拶にいくか？』と笑顔で言うと。
「本当に、やっと決心してくれたの。マイダ～リン」と満開で微笑んだ。

「凄いな～蘭姉さんは、言葉の返しが早くて、それも面白くて」と言ってケイが蘭を見た。
「やっただけだよ」と蘭が言って、私の手を引っ張った。
「このロボットは会話練習マシンだから、ケイが使いたいときはどんどん使って」私のお腹を押して「ここがスイッチだから」と満開で笑った。
「ロボットだから、何も恥ずかしがらないでいいよ」と蘭が言ったから。
『ヨ・ロ・シ・ク』と私はロボットぽく言ってみた。
ケイも松さんも必死に声を殺して笑ってた。

「蘭姉さんありがとう、お借りします」とケイが笑顔で言った。
「たまに動きが悪い時は、マリアの近くに持っていくと、良くなるから」と蘭の言った言葉で、皆で笑った。
「楽しそうね」とユリさんとマダムが入ってきた。
『ユリさんありがとうございました』と私は頭を下げた、『俺なんかの、保証人になってくれて』と素直に言った、ユリさんは私の目を見て。

「なんかのなんて言ったら駄目よ、あなたが来て、３人娘に笑顔が増えたわ」いつものように目を逸らさずに。
私はこの時には、ユリさんが目を見てくれる、この時間が大好きで、心のどこかで常に待っていた。
「それだけでもあなたは、ここに居る価値がある人よ」最後は薔薇

の笑顔で言った。
【価値がある人】私は初めて言われたその言葉に、心は嬉しくて震えていた。
それを言ってくれたのが、ユリさんだったから、嬉しさは倍増していた。

「よし、帰るかの・・松はワシとケイと、蘭はユリとやな」そうマダムが言ったので。
『俺は？』とわざと笑顔で言ってみた。
「おや、今夜はどこにお泊りだい色男」とマダムが笑顔で返してきた。
『マダムの家でもいいよ』と言うと。
「家は駄目や、可愛いケイがいるでの～」と笑った。

「あなたは私の家に泊まるのよ、蘭と」とユリさんが言って、蘭を見て。
「明日は靴屋の仕事休みでしょ、どうかしら？」と蘭に薔薇で微笑んだ。
「本当に！いいんですか？」蘭が満開で微笑んだ、嬉しそうだった。
「あなたが入った時から、ずっとゆっくりと話したいと思っていたのよ」ユリさんも嬉しそうに言った。
「うれし～！」蘭の心の叫びのような言葉を聞きながら、私はそっとマリアを抱いた。
この時には考えずに、マリアの好きなポジションが分かっていた。

ユリさんは多分、蘭の味わった恐怖と、それから発生してるであろう、不安を想っているのだろう。
私は蘭と談笑しながら、すぐ前を歩くその後姿を見ていた。
遥かに遠く感じる・・・その美しい薔薇の後姿を。

エレベーターに乗ると、カズ君がいた。
「ごめんね、遅くまで」ユリさんが言うと。
「全然大丈夫です」と照れているようだった。
「ユリさんの指示で乗っているのに、上の店の女性達に俺が感謝されました」そのカズ君の言葉で分った。
カズ君がエレベーターに乗っているのは、上に勤めてる女性も、安心できるんだと思っていた。
「私はこの世界で働く人は、全て仲間だと勝手に思ってるの、確かにお客様を、奪い合ったりする人達もいるけど」カズ君の背中に語りかけるように

「同じ深さに住む、同じ海流に乗る魚のような」

「そんな仲間だと、思っているわ」と薔薇で微笑んだ。
皆黙って聞いていた。その心を変換した言葉を・・・。
その時を必死で生きる、蘭やケイやカズ君にはどれだけ響いていたのだろうか。
その時の私には、想像もつかない。
まだ自分で生きていない私は、ただ思いだしていた。
【お前達は幸せや、ユリと同じ時代を生きれる】そう言ったマダム言葉を。

現在、私はこの時のユリさんより、１５も年上のオジサンになった。
だが伝えられるだろうか。
社会に漕ぎ出した、【平成】と言われる時代に産まれた若者達に。
人生と言う、難解な問題に取り組む仲間に。
答えなど無いであろう、その難問を楽しむための大切なヒントを。
押し付けでなく、ユリさんのように、優しく語りかけれるだろうかと。

タクシーにユリさんが乗り、私がマリアを抱いて乗り蘭が続いた。
ユリさんが行き先を指示して、タクシーは走り出した。
その暖かく優しい教室に向かって、大切な授業を受けるために。

ユリさんの家に入ると。
「チャッピーお願いね、寝かせて1分でいいから、マリアを見ていてね」と薔薇で微笑んだ。
『何時間でも』と私は今度は言葉にできた。
ユリさんの薔薇と蘭の満開が咲いていた。
ベビーベッドにマリアをそっと寝かせると、マリアが無意識に、私の右手の親指を握った。
私はマリアを見つめながら、その力が抜けていき、離れるまでマリアを見つめていた。

リビングに戻ると、浴室の洗面所の方から、楽しそうな二人の笑い声が聞こえた。
私はソファーに腰を下ろして、夜景を見ていた。
公園のベンチで、暗い気持ちだったのが、遥か昔の事のように思えた。
まだ4日しか、たっていなかった。

しかし時は確実に進んでいた、7月も終わりを迎えようとしていた。
私に残された時間は、後一月と少しだと思っていた、自立できない限りはと。

【自立】ケイのあの直向な目を思い出していた、遠い夜街の幻想の光の中に・・・。

問心

暗闇は恐ろしくないよ、暗く何も見えなくても、何も無くなっていないから。
いつか暗闇に目が慣れたら、少しづつ見えてくるから。
その時最初に君が見る者に、私はなりたい。

私がソファーで夜景を見ていると、笑いながらユリさんと蘭がキッチンに歩いて行った。
蘭が、色々な地方名産品を盛り付けた、大きな皿を持ってきてテーブルに置いた。
『何か手伝おうか？』と笑顔で言うと。
「一応男なんだから座っときな」と満開で微笑んだ。
「一応よ、一応」と笑いながらキッチンに戻って行った。

ユリさんと蘭、二人で準備をし、ユリさんがビールを持って。
「今夜だけ特別よ」と薔薇の笑顔でウィンクをした。
『はい』と私も笑顔で言って、グラスを持った。
「高いよ～」と蘭が満開で言った。
「あら、お店でも、誰が注いでも同じ値段よ」とユリさんが言った。
「価値がちがいます」蘭はグラスを見ながら言った、ユリさんは微笑んでいた。

3人で乾杯した、私は見たことも無い名産品を、1つ1つ食べていた。
「どんどん食べてね、私一人じゃとても食べきれないほどあるから、捨てるわけにはいけないから、たまに必死になるの」と私を笑顔で見ていた。
『いつでも助けに来ますよ、成長期ですから』と笑顔で返すと。

「頼もしいわ」と薔薇で微笑んだ。
「食べる事と喋る事は得意だもんね」と蘭が満開で笑った。
「私は、チャッピーに1つ、謝らないといけない事があるの」私は驚いてユリさんを見た。
ユリさんが私に謝る事など、有るはずが無いからだ。
「私の事から話していいかしら？」と薔薇で微笑むと。
「是非、お願いします」と蘭が即答して、目を輝かせた。
私は口の中に笹かまぼこが、これでもかっていうほど入っていたので、2度頷いた。

「私はね、鹿児島の薩摩半島南部にある造り酒屋に産まれたの・・・」
ユリさんは、歴史ある大きな造り酒屋の、一人娘として生まれた。
母親は病気がちの人で、一人でも子供を産んだのが、奇跡だと医者に言われたらしい。
母親は、ユリさんが3歳の時に亡くなった。

「母の記憶は殆どないの、色が雪のように白い、綺麗な人だということぐらいしか・・・」
ユリさんは父方の祖父と祖母に育てられた、父親は忙しく働いて、幼い時は朝しか会えなかった。
ユリさんが中学に上がる時に、父親が再婚した。
「とっても素敵な人で、小百合さんって言うの、今でも凄く仲良しよ」ユリさんは蘭を見て。
「だから私の源氏名は百合なの、その名前にしたら、絶対に汚せないと思ったから・・・」蘭は瞳を輝かせ頷いている。

ユリさんの高校受験の発表の日、小百合さんが男の子を産んだ。
「私は無理して挑戦した、高校に合格した事よりも、弟が産まれた

事が数倍嬉しかった・・・」ユリさんは夜景を見ている。
ユリさんは、鹿児島では有名な進学校に合格して、その高校でも成績優秀だった。
「でもね、高3の時限界が来ていたの、私はずっと良い子を演じていたから」静寂のリビング、ユリさんの優しい言葉だけが響いている。
「父が再婚し弟が出来て、より演じるようになっていたの」ゆっくりと噛み締めるように。
「心に違和感を抱えながら、大学受験をしたの・・・」
「第一志望に落ちて、早稲田に行けと言う父に」一呼吸おいて。
「早稲田に行くお金を貸して下さい、自立してホステスがしてみたいと頼んだの」と美しい真顔で言った。

「ユリさん第2志望が早稲田って、国立はどこですか？」蘭の当然の質問に。
「東大よ、無茶したのよ」と照れて微笑んだ。
蘭と私は顔を見合わせた、言葉が出なかった。
『彼氏とかいなかったんですか？』私の馬鹿な質問に。
「良い子ぶってたから、告白された事も無かったわ」とユリさんが言うと。
「うそ！」と蘭が驚いた。
『無理ですよ、ハードルが高すぎて見えないから』私の呟きに、ユリさんと蘭はクスクスと笑った。

当然父親は大反対で、がんとして譲らなかった。
「小百合さんが一緒に説得してくれたの、今でも感謝してるわ」蘭を見ていた、その瞳はいつもより深いと感じていた。

ユリさんは高校卒業と同時に、父親と宮崎に来て、アパートを借りて一人暮らしを始めた。

「親元を離れないと、駄目だと思っていたから、でもあまり遠いと、父に心配かけすぎると思った時」蘭をずっと見ている、蘭も視線を逸らさない。
「宮崎と決めたの、旅行で何度も来ていたし、宮崎の海が大好きだったから」そこまで言って立ち上がり、キッチンにビールを取りに行った。

「どうして・・・なぜ水商売なんですか？」とその背中に蘭が聞いた。
「子供の頃からの憧れよ、変でしょ」と薔薇で微笑んで、キッチンに消えた。
【憧れ】その言葉が響いていた。
ケイは自立する為に選んだ、いや選択肢がなかったからだろう。
蘭は車の為だと言ったが、他に何かありそうだった。
他の女性達も何かしら、理由がありそうな気がしていた。

高校までひたすら歩んだ道を、違和感を感じ、全てを捨てて憧れにかける。
私にできるだろうかと思っていた。
蘭は静かに夜景を見て考えている、多分自分の今までの道を。

ユリさんがビールを持ってきて、蘭に注いだ。
「ありがとうございます」蘭は真剣だった、聞き漏らすまいと。
「酔っていいのよ、今夜は」ユリさんの染み渡る声だった。
多分ユリさんは、今から伝える事を前に、蘭にその時間を与えたのだろうと、私は後に思った。

「それから１０年過ぎた時ね、私はなんて自分勝手な人間だったのかと、思わされたの」蘭の手を取って床に二人で座った。
ユリさんは手を握ったまま、蘭は静かに従っている。

「私はその子の心の問いかけに、言葉が見つからなかった。・・・私も同じだったから」蘭の手を離さずに。
「私はねチャッピー、弟と過ごしたのは、弟がまだ可愛い3歳までなの」蘭が俯き震えている、手を強く握ったまま。
「誤解されたくないから、先に言っとくわね・・聞いてくれる？」
ユリさんは私を見ながら。
『はい』と私は答えた、蘭の震える背中を感じながら。

「あなたは絶対に誰かの代わりじゃないから」と静かに言った。
【うっ、うっ】と蘭が嗚咽を漏らしている。
『はい』と私は返事をして、ユリさんから目を離せない。
「その子の魂の叫びの問いかけに、愕然とした私は帰省したの、弟と話したくて」
蘭は必死に何かと戦っている、ユリさんの手を味方にして、涙をこらえて。

「でも、中学生の弟は、それが普通なんでしょうけど、話してくれなかったその心は」
蘭は崩れそうな自分を、必死に支えているようだった。
「だから、あなたと初めてここで話した時・・・本当に嬉しかったの、その時期のその心に触れたのが」
蘭の体の震えが、限界じゃないかと思うほど震えた。

「でも、絶対に誤解しないでね。あなたは誰かの代わりじゃないのよ」

ユリさんは美しい真顔で、私の目を見ながら、静かに言った。
『わかってるよ』と私は蘭を見ながら言った、間違えなく蘭に向けた言葉だった。

ユリさんは震える蘭を起こして、手を離して両手を広げた。
「蘭、おいでっ」と蘭に強く言った。
蘭は叫びのような泣き声をあげながら、ユリさんに抱きついた。
「もういいのよ、泣いても」とユリさんが優しく言った、蘭はユリさんに抱かれて泣いていた。

その時である、突然蘭の頭にに小さな手が乗った、【マリア！】私が思った時。
「りゃん、よちよち」と言ってマリアが蘭を見てた。
「マリア・・・ありがとう」と蘭がマリアに言って、泣いていた。

私はマリアを抱き上げて、「マリア」と言って抱きしめた。
「あい」と天使の笑顔で答えた、私はその本物の天使に。
「チャーと寝んねしようね」と笑顔で言った。
「ねんね」と急にマリアは眠い顔をした。
私はマリアをベッドに連れて行き、手を握っていた。
マリアはしばらく、私の顔を見ていた。
『だいじょうぶだから、マリアありがとう』と優しく言った。
マリアはそれを聞いて、ゆっくりと目を閉じた。

私は何も分からなかった。
【それは蘭が話す事だから、いつか話してくれる】ユリさんの言葉を思い出していた。
ただ1つだけ分かっていた、今は二人の時間だと、マリアがそれを作ったと。

私はマリアの寝顔を見ていた、その不思議な力を有する、その小さな体を。

ユリさんと違う、何かを持って産まれた、その本物の天使を。

私は寝ているマリアに、誓いの話をした、おとぎ話をするように。

『・・・・だから俺は月光を追いかけてみるよマリア、蘭の笑顔をずっと見ていたいからね』

そう言って、マリアを見ていた・・天使の寝顔を・・・。

授業？

深海に棲む魚は光を好まない。
周りの他の仲間が、明るく輝く上を目指しても、心は揺れない。
他者から光を受け輝く事に、価値を感じない、それが只の反射であることを知る。
深海に棲む魚は、光を好まないのではない。
自らが発する輝きを、信じているだけなのだから。

私は暗い部屋で、マリアの寝息だけを感じながら、マリアに話かけていた。
今までの事を正直に、事実と感じた事を、マリアの寝息だけを相槌に。
1時間程が過ぎた時、静かにドアの開く音がした、私は振向かなかった。
低い椅子に座っている私を、後ろから抱きしめた、香りで蘭だと分かっていた。

「ごめんね、泣き虫で甘えん坊で」と蘭が言った、私は考えていた話をした。
『蘭、俺実は・・蘭の涙拭き取り専用ロボットです、スイッチは背中に有るので抱きしめて、手を回して押してください』蘭は静かに聞いていた。
『その時はロボットだから、蘭の想いを叫んで下さい・・・何もできないけど』私は向き直り、蘭を見て。
『蘭から手を離すことはないから・・・一人にする事は、絶対にしないように出来ています』と真顔で言った、蘭は私を抱きしめてた。
背中に手を回して押して、「ありがとう」と囁いた。
《マリア頑張ってみるね》と心で話しかけた。

【がんば！】マリアの声が確かに聞こえた、私の内側から。
「ユリさんが待ってるから行こう」蘭に満開の笑顔が戻っていた。

リビングに戻ると、ユリさんが新しいグラスを用意していた。
「ごめんね、待たせて」と薔薇で微笑んだ。
『はい、すごく心配してました。・・仙台の牛タン燻製が、全部食べられてないかと』と笑顔で言った。
その言葉で二人の薔薇と満開が咲いた。

ユリさんが私と蘭に新しいビールを注いでくれ、蘭がユリさんに注いだ。
2度目の乾杯をした。
『第2話の乾杯ですね、ユリさんお願いします』とユリさんを見た、微笑んで話しはじめた。

「宮崎に来たその日に、家財道具と食材を揃えて、父を見送り夕方街に出たの」
蘭はユリさんを見ている、その瞳は輝きを取り戻していた。
「スナックの求人を探そうと思って・・・」
ユリさんが夜街を歩いていると、少し前を行く、自転車に乗る婆さんが転んだ。
ユリさんが駆け寄り、助けようとしたその時。
派手なスーツの男が、婆さんを後ろから抱いて立たせた。
「婆さん大丈夫か」と言いながら。
ユリさんは、かごから散らばった荷物を拾い集めて聞いていた。
その優しい言葉を、チンピラの徳野さんだった。
婆さんが二人に礼を言って去ると。
「すまんかったな」と言って、徳野さんが背中を向けて歩き出した。
ユリさんはその背中に声をかけた、どこかスナックで働きたいので、紹介してもらえないかと。

「確かに派手な感じで、見た目は怖かったわ、でも優しい人だと確信していたの」
蘭は頷いた、同意するように。
徳野さんはユリさんを、その足でマダムの小料理屋に連れて行き、マダムのあの話に繋がるのである。

「ＰＧが開店工事をしていた時、私はマダムとスナック【百合】という、小さな店をしていたの・・・」
蘭はビールを飲むのも忘れたように、聞き入っている。
「私にとって最高の修行の場だったわ、蘭、マダムが夜街で何て呼ばれてる？」の問いに、蘭は言い難そうに。
「ごうつくばばあ」と言った、ユリさんは微笑んで頷いた。
「そうよ、マダムと○野酒店の女将をそう呼ぶわ・・・」
○野酒店とは、その当時夜街の酒を支配していた。
常時沢山の配達員を抱えていて、深夜でも突発的な注文に対応していた、大きな酒屋である。

「真実に背を向ける人は、勝手な事を言うわ、○野の女将は男世界である酒屋を守っている」
蘭を見ている、蘭はその大切な授業を、必死に心のノートに書いていた。
「マダムは女社会である、ＰＧを守っているの、どちらも大変な事よ、だからお金に厳しいの」
蘭は頷いている、それが返答だと、ユリさんも私も分かっていた。
「私ね、スナックを始めた時凄く嫌だったの」蘭を見ている目に力が漲ってくる。
もうすぐだ大切な言葉が来る、私はそう思って聞いていた。
「夜働く女性に向けられる偏見がね。そんな時マダムから言われたの、降ろさせてやれ、それで客が何かを降ろして、家路に着けるな

らそれでいい、それが金を取る仕事というもんだとね」
蘭は集中している、瞳が深さを増している。

「私は自分の甘さを感じたの・・・蘭、マダムの事を、誰が何と言っても、反論なんかしないでいいのよ。」優しく。
「そんな反論マダムが拒絶するわ、そういう覚悟なのよ、私達を守る為に」
ユリさんが今言ったマダムの、【非難を受け入れる覚悟】と。
マダムが言ったユリさんの、【女帝と呼ばれる覚悟】は同じだと思っていた、未熟な心で。

「確かに女を売っている、昼より高い報酬の裏も色々あるわ・・でも俯いて歩くような事は何もないわ」力が入ってくる。
「私は世の中で、売買ができないできない物が、１つ有ると思っているの」熱を帯びてきた。

「たとえ心と体が売れたとしても、愛は売れないと信じている」

「だから、俯いて歩くことはない、前を見ているのだから」と美しい真顔で言った。
見開いた蘭の瞳から、大粒の涙がとめどなく溢れた。
その本質に触れ包まれていたのだろう。
幸せを感じていたのだろう、ユリさんと同じ時代に産まれた事に、そして巡り会えたその幸運に。

「マダムは私によく言うの・・ＰＧの女性は、辞めた後も尋ねて来てくれる、子供が産まれると見せに来てくれる、沢山の子供と孫を持てるワシが、誰がなんと言をうと世界一幸せだって」
蘭は涙を惜しげもなく流しながら、瞳を閉じた。

感謝していたのだろうマダムに。

「蘭、ありがとう」とユリさんが言った、蘭が瞳を開いた。
「今夜のケイの船出式、マダムに直接伝えてくれて、マダムは本当に喜んでいたのよ」
蘭は何も言えない。
「蘭はワシに意見しよった、ケイの為に・・・蘭は本物や、その時に青く燃える。赤などではない、全てを溶かし包む青い炎やと言ったのよ」
ユリさんと蘭は見つめ合ったまま。
「そう言ったマダムは、本当に嬉しそうだったわ」暖かい静寂の中に見つめ合う二人は、まるで絵画のように美しかった。

私はマダムの言った【青い炎】という言葉で、気付いていた。
公園で【動くな、動いたら撃つ】とおどけた蘭を、なぜ一瞬で受け入れたのか。
そしてどうして、一瞬で魅せられたのかが。
私はあの時、青い炎に包まれていたのだと、そしてその青い炎が溶かしてくれたのだと。
私の寂しさも、未熟な不満も、無意味な闘争心まで・・一瞬にして。
絵画のように動かない、二つの美しい薔薇は、お互いの目で会話をしている。

それを鑑賞している私は、包まれていた。

百合と名のる薔薇の、遥かなる大きなの世界の中で、青い炎に包まれながら。

「がんば！」遠くから聞こえてきた、その絵画の上を、微笑みなが

ら飛ぶ天使の声が・・・・。

登頂

決断を迫られたその時に、自分自身に対し何の疑念も持つ事無く、従えるだろうか。
自分自身を信じ、それに賭けれるだろうか。
試さなければならない、それがどんなに辛い事であろうと。

深夜の静寂の中、ユリさんと蘭は見つめ合っていた。
ユリさんは果てしなく大きな衣を広げ、その中で蘭は青い炎を纏っていた。

「ユリさんありがとう」蘭が言葉を先に使った。
「あの時悲しみの中にいる私を抱きしめて、叱ってくれて・・・私はあれが無かったら」
ユリさんは優しい目で蘭を見ている。
「叱ってもらえなかったたら、抱きしめて引き戻してもらえなかったら」
蘭も話しながら、ユリさんを見ている。
「私は・・・ここまで来ることはできなかった」
蘭にあの目が戻った、炎を湛えたあの瞳が。
「私は今の自分が好きだと心から言えます・・・やっとここまで来れました」と蘭が真顔で言った。
ユリさんは、その言葉で初めて一筋の涙を見せた、薔薇が朝露に光るような笑顔のままで。

私は後に、蘭に話しを聞いた時に、この会話の重さを知る。
それは私の想像より、遥かに崇高で重かった。
しかしこの時感じていた事は、間違えでなかったことも知った。

私はその光景を見て、ユリさんは多分初めて、自分の本質を理解してもらったと、感じたのではないかと。
ユリさんが立つその遥かなる高みに、誰も挑戦すらしないで、自分に言い訳して諦めていた。
しかし気付くとたった一人で、その強い意志で、ボロボロになりながらも登ってきた。
その影を見つけて、息吹を感じて、喜びが溢れたのだろうと。

私はその時、1つの疑問が解けていた、ユリさんをどこか懐かしく感じた事が度々あった。
それはある部分で、豊兄さんと重なっていたと。
ユリさんのその孤高さが、自らを曲げるくらいなら、孤独すら恐れないその心が。
私もどんなにボロボロになろうとも、登るのを諦める訳にはいかないと。
そうしないと、豊兄さんに何も恩返しができないのだと、気付かされていた。
ユリさんの一筋の涙で。

「チャッピー、私達少し喉が乾いたから」ユリさんが私を見て。
「あなたの話を何か聞かせて」と薔薇で微笑んだ。
『どのようなのがお望みでしょうか？』と聞くと、蘭が。
「名前の由来がいい、面白そうだから」満開で微笑んだ。
「楽しみね～」とユリさんも薔薇で微笑んだ。

私は少しもったいつけて、ニヤニヤ笑顔で。
『涙用にタオルを用意して下さい』と言うと。
「感動でかしら？」ユリさんが蘭を見た。
『いえ、笑いすぎて』と私が笑顔で言うと。
「早く早く」と蘭が急かせた。

「あれは忘れもしない、小3の2月、とても寒い日でした・・・」
得意の物語で口調で始めた。
小3の私は、その時飼育係りだった、前日もその日も雨だった。
前日に弱っている兎がいて、私はどうしても気になって、早朝学校に行った。
飼育檻の中で、その兎は冷たくなって死んでいた。
俺はショックで、兎の亡骸をタオルで包んで、古寺の生臭坊主の所に持って行った。

「生臭なんだ〜」蘭が微笑んだ。
『それは最強の、だって自分じゃ買いに難いから、駄菓子屋に来て、俺達に刺身とか買いにいかせるぐらいの人』と笑顔で言った。
「まぁ、素敵」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「それでそれで」蘭がまた急かせた。

坊主は亡骸を見て、【天寿を全うしたんだ、手厚く葬ってやろうな】そう言って、二人で寺の隅の、大きな楠木の側に埋めて。
坊主はわざわざ文字通り、大袈裟な袈裟を着てきて、お経まであげてくれた。
俺は少し元気が出て、今から学校にも行けないと思って、寺を出て家路についていた。

大淀川の公園の所で、大きな男に声をかけられたんだ。
【坊やこの辺に、釜揚げうどんの美味しい所があるらしいんだけど、知らないかね】てね。
なんか凄い喋りのトーンが違う大男でね。
『知ってるけど、説明難しいな、ご馳走してくれるなら連れてくよ』っていつもの調子で言ったんだ。【助かります、何杯でも食べていいですよ〜】て感じで、なんか調子狂う感じの人で。

二人は微笑みながら聞いている、私は得意げで話した。

その人は大きな体で筋肉質でね、寒いのに薄着でサングラスをかけていた。

【色々声をかけてみたけど、皆さんお忙しそうでね～】て言うから。

『おじさんこの辺でサングラスかけてたら誰も相手にしてくれないよ、そこが○○組の親分の家だからね』と言うと。

【そうだったんですね～】て感じで、なんか調子狂う人だったけど。

なんか暖かかったんだ。

うどん屋に入って、サングラス取って。

【坊やは何かスポーツしてますか？】て聞くから。

『空手』って答えると【それは素晴らしい、スポーツはいいですよ～】てな感じ。

『坊やはやめてよ』て言ったら。

【これは失礼しましたお名前は？】って聞くから、どうせここ出たら会わないやって思って。

『チャッピー』ってさっきお別れした、兎の名前を言ったんだ。

【それは素敵な名前ですね～、きっと外国の血が入ってるのですね～】なんて一人で納得してるの。

ユリさんも蘭も笑っている。

食べ終わった時に【チャッピー君は野球はしないの？】て聞くから。

『あれは金持ちのスポーツだからね、グローブもバットもユニフォームも高いんだ』て言ったら、俺の目をじっと見てるの。

なんかそん時、動けなくて。

感じた事のない、優しさみたいな感じに。

で店の前で別れたの『おじさん仕事した方がいいよって』生意気言って。

【チャッピー君何小学校？】て聞くから『○○小学校』て正直に言

って別れたの。
もうなぜか元気になってたよ。

それから一月位過ぎた時、緊急全校集会があったの、で校長が言うんだ。
「この学校にチャッピーと名乗って、親切に道を教えてあげた人がいますか？」て聞くんだ。
俺は恐る恐る手を上げたんだ。
「おお、君がそうかここえ来たまえ」て言われて、そん時思い出したんだ学校さぼってたって。
「そりゃまずいね」蘭がニッと笑った、ユリさんは微笑んでいる。

まずい全校生徒の前で怒られると思ってた、そうしたら。
「みなさんも困ってる人は助けましょう」なんて校長ご機嫌なんだ。
「そのお礼に、これが学校に届きました」て言うと。
１０人位の先生が、沢山のバットやグローブやユニフォーム、ベースやもろもろ持って出てきたんだ。
二人は興味津々で私を見ている。

奴はお金持ちだったか、もう一杯食べときゃよかったな～、なんて暢気に思ってた。
そしたら同封されてた手紙を、校長が読んだんだ、なんて事ないお礼の手紙だったけど。
読み終わった時、一瞬静まりそしてどよめきが起こったんだ。
俺は何があったのか分からないで、校長から手紙を受け取ったんだ。

その手紙には、最後にこう書いてあった。
状況を乗り越える努力をおしまねば、道は必ずつながります、あの時のささやかなお礼として送ります。

【読売巨〇軍　長〇茂雄】

てね、キャンプに来てて雨だったから、暇だったんだろうね。
それから俺は【チャッピー】て呼ばれてるんだ。
俺は今になって思ってる、超一流という人は、優しくて暖かいんだと。
ユリさんを見た時も、同じ物を感じました。

「ありがとう、とっても素敵な話だった」とユリさんが薔薇の笑顔で私を見ていた。
「私は？私は？」と蘭が満開で聞くから。
『蘭は明日から2軍で千本ノックだ！』と笑顔で言うと。
「はい、コーチ頑張りますから。明日、日南に付き合って下さい」
と蘭が笑わずに言った。
【日南】そこに何かあるんだ、私はそう思った。

ユリさんも笑ってなかった、私はユリさんを見て感じていた。
登ろうと・・・どんな事をしても、何があっても、蘭の背中を見える位置までは登ろうと。
絶対に蘭を諦める訳にはいかないと。

「蘭が望むなら、俺はいつでも何処へでも行くよ」と真顔で答えた。
そこが暗闇でも怖くはないだろう、蘭の吐息が聞こえるのならば。
親父が額に入れて、家宝のように飾る、あの言葉を思い出していた。

【状況を乗り越える努力を惜しまねば、必ず道は繋がる】

そう私に送ってくれた、最高峰の山に単独で登る、偉大な孤高の男の言葉を。

蘭の目は、明日の戦いを前に限りなく深く澄んでいる。

青い炎のオーラに包まれて・・・。

心叫

全ての生命は海から産まれた、その時その場所にいると、確かに感じる。
海から沢山の何かが上がってくるのが、恐怖などは無い。
遠い彼方にある、記憶の深層に眠るもの。
船人は知っている、だから敬い祭る。
上がってきた何かは伝える、感じた人は口を揃えて言う、自分の幹の部分に響いたと。
生きることを恐れる必要はないと、そう響いてきたと・・・。

ユリさんと蘭が片づけをして、寝室に消えた。
私はソファーで寝た。
１０時位にマリアを連れて、２人が出てきた。
ユリさんの作ってくれた、豪華な昼食に近い朝食を食べた。
蘭が準備して、出掛ける前にトイレに行った。

私は突然ユリさんに抱きしめられた、私は初めてユリさんに抱かれて、動けないでいた。
「私の言ったこと覚えてる?」私の耳元でユリさんが囁いた。
『俺は自分の感じたままを伝えるよ、それがどんなに辛い事でも』と囁いた、ユリさんに抱かれたまま。
「あなたは自分の才能を信じていい頃よ、私は信じている、あなたにしか出来ないと」そう言って体を離した。
ユリさんはマリアを抱いて、私に抱かせた、その時に蘭が戻ってきた。

『マリア、行ってくるよ』私はマリアだけに聞こえるように囁いて、ユリさんにマリアを渡した。

玄関で2人で、ユリさんにお礼を言って出ようとした時。
「りゃん」とマリアが言った、蘭はマリアを見つめていた。
『マリア・・ありがとう』蘭が満開で言って、出かけた。
灼熱の熱が全てを燃やす、真夏の場所へ。

タクシーで蘭のアパートに帰り、部屋に入らずに車に乗った。
「どこか、行きたい所ある？」蘭がエンジンをかけながら聞いた。
『海、少し泳ぎたい』私がそう言うと。
「それは、好都合」と笑顔で言って、走り出した。
橘通りをひたすら南下して、できたばかりの青島バイパスを通り、
子供の国・青島と過ぎた。
「なんか緊張してますね、旦那」と蘭がおどけた。
『全然、楽しくて遠足みたいで』と私も笑顔で返した。

車は堀切峠に入った。
「おやつは３００円までですよ、守りましたか検査しま～す」と蘭
が微笑んだ。
『先生、バナナはおやつですか？』とニヤ聞いた。
「バナナはおやつじゃありません、果物です」と満開で笑った。
堀切峠の、何人もの若者の命を奪ったカーブをクリアしていた。
最終右コーナーを右に曲がると、目の前には海しか見えない。
宮崎の若者なら、何かしらの思い出のある場所だ。
「おーーーーし！」蘭は叫んでカーブを切った。
ケンメリの、Ｌ型エンジンの響きが、蘭の背中を押しているように、
唸っていた。

日南海岸を快調に飛ばし、助手席の真横に広がる、遥かなる太平洋
の深い青に包まれていた。
心が開放されていた、その限りない大きさと深さを感じていた。
日南市に入り、すぐに右折して、小さなスーパーで、蘭は花とジュ

ースを買った。
その姿は落ち着いていたが、緊張してるように見えた。
ケンメリは日南の城下町【飫肥】に入った。
飫肥城跡を過ぎ、小さな山の山道を登り、広い路肩に車を止めた。

「こっからは歩きなのです」蘭は無理やり笑顔を作った。
小さな獣道ほどの広さの道を登った、蘭が繋いだ手の、微かな震えを感じながら。
真夏の太陽の攻撃を、大きな杉の木が防いでくれる光道を。
辿り着いた場所は、【墓地】だった。
蘭は奥に進んで、大きな墓の前で止まった。
立ち尽くしていた。

数分して、蘭は気を取り直して花を変え、ジュースを供えた。
私は横の石版を見て硬直した。
【・・・誠二　享年　十六歳】その文字が飛び込んできたからだ。
蘭を見ると背中を震わせていた、必死に語りかけているようだった。
闘っていた、目を逸らすまいと。
私はその姿をただ、愛おしいと思っていた。
そして心で《がんば！》と言った、マリアのように。

どれだけの時が、刻まれたのかわからない、遠く霧島の峰から爽やかな風が吹いてきて。
「うん」そう呟いて蘭は立ち上がり、私を見て。
「ありがとう、一人で来れなかったの、今はまだ」そう言って手を出した。
私は手を握り何も言わなかった、ただその握った手の強さで《蘭が大切だ》と伝えた。
来た道を帰り、車の停めてある路肩まで来ると、飫肥の街が一望に見えた。

「あの赤い屋根の隣、軽トラが止まってる家が私の実家」私が教えられた方を見ると。
大きな家が見えた、その家は大きな母屋と、小さな離れがあり。
車庫と牛小屋みたいな物まであった。
そこから見ても、綺麗な日本庭園風の庭である事が分かった。
「まだ、帰れないけど」蘭はそう呟いた。
「さっ、海に行こう。特別な場所に連れてってあげる」そう笑顔で言って、車に乗った。

防潮林であろう松林の間の道を抜けると、海が広がった。
「いいでしょ遊泳禁止だけど」そう言うと突然、蘭が着ていたタンクトップを脱いだ。
私が呆気にとられていると、白いホットパンツに手をかけ脱いでビキニの姿を見せた。
「行くよ！」と満開で微笑んだ。
『遊泳禁止じゃ？』と私が言うと。
「悪ガキなら、らしくしな」とニヤで言って、海へ走って行った。

私は慌てて、Ｔシャツと靴下とコンバースだけ脱いで、走った蘭を追いかけた。
蘭は２０ｍ位沖で、プカプカ空を見ながら浮いていた、私はその横まで泳ぎ。
『いつビキニを着たのかな～？』と海から顔だけ出して聞いた、蘭は空を見ながら。
「決めていたの、最初から今日行こうって、だから準備してたの」
そう空に向かって話した。
私は目の前の、蘭の横顔を見ていた。
太陽と海の反射を、撥ね返すような強い輝きを。

「そこの君達～ここは泳いだらいけませーん」と爺さんに突然言われ、蘭が慌てて。
「すいません、知らなかったから、すぐに上がります」と大声で言うと、右手を上げて爺さんは帰って行った。
私達は陸に上がり、ケンメリの待つコンクリートの場所にくると。
「さて、あなたは何を着て帰るのでしょう？」と満開で微笑んだ。
『げっ！』と言って私は困っていた。
「運転席の横に立って、誰も来ないか見てて、覗くなよ」と言って、体を拭いた蘭が車に入った。
私は運転席に背中を向けて立っていた。

着替えた蘭が出てきて、私にバスタオルをくれた。
「シート汚すと嫌だから、自然乾燥を待ちますか」そう言いながら海を見た。
私も横に立って海を見ていた。

突然蘭が私を引き寄せ抱きついて、手を背中に回し押した。
私は蘭の背中に手を伸ばし、力を入れた離さないように、一人にさせないように。

「弟がいたの３歳下に、事故で死んだの１６の時」蘭は私の胸に顔を付けて。
「私は何も知らないの」叫びだった、底から噴出したような叫びで話した。
「あの子が何が好きで、何が嫌いで、どんな夢を持って、何に憧れて、何に喜んで、何に悲しみを感じて」泣きながら、震えながら。
「どんな友達がいて、どんな悩みがあって、どんな歌が好きで」震えが強くなり、私は腕に力を入れた。
「どんな子が好きで、自分のことどう思って、私の事をどう思っていたのか」涙が私の胸を伝っていた、そして最後は私に問いかけた。

「楽しいことはあったの？好きな子はいたの？」

私は蘭の顔を両手で持って、自分に向けて。
「あったよ沢山、いたよ絶対」そう答えて、手を背中に回して抱きしめた。

私はただそう感じた、そして間違っていないと確信していた。
穏やかな波の音と、蘭のすすり泣く声を聞きながら。

ガキの私にもできると思っていた。
この今にも海に駆け出して、消えてしまいそうな、愛すべき存在を受け止めておく事だけは。

俺のやるべきことだと、いや俺にしかできない事だと・・・。

波音が包んでくれていた、まるで終わりのない物語のように・・・。

波音

その波音を奏でているのは、月だと言う。
海に満ち・引きを与え、生命を育んだ。
その距離に負けない強い力で、どんなに離れていても届くと、強い想いは必ず届く。
結果は関係ないのだと、どれだけ強く想っていたのかと問う。
波をおこしたのかと・・・。

穏やかな太平洋の波音だけの世界に、すすり泣く声が届いていた。
蘭が私に問いかけた、その質問は、私には極簡単な問題だった。
しかし蘭が背負っていた物は簡単で無い、私は詳しい話は後日聞くのである。

私の胸の中にいる華奢な女性は、雛鳥のように泣いている。
幾程の後悔があるのだろうか、私には分からない。
あの叫びはその中の、ほんの僅かなのかもしれないと思っていた。
気がつくと蘭が静かになっていた、震えも無く目を閉じていた。
私は考えるのをやめた、どうでもいいことだと思ったのだ。
私は今ここにいる蘭が好きなのだから、それをどれだけ愛せるかなのだからと。
蘭が過去で悲しいなら、こうしてればいいんだから。

「上半身裸で、蘭様を抱き続けるとはいい度胸だね」私は蘭を見た、瞳に輝きが戻っていた。
『この後、どうすればいいのか分からなくて』私は目だけで照れた、抱きしめたままで。
蘭は私をみて微笑んで。
「どんな大人になるんだろうね？」と満開の笑顔で言った。

『見ててくれる？』と私も笑顔で返した。
「観察日記を書くね」そう言ってまた胸に顔を付けて、私の鼓動を聞きながら。
「ただ優しくキスをするんだよ、それだけで女は安心するから」蘭の腕に力が入り。
「お願い、あと5分だけこのままでいさせて」そう言って目を閉じた。
《1分が3分になり、今5分になった、それでいい、いつか永遠にと言わせれば》私はそう思っていた、波音に包まれて。

帰りの日南海岸線に入って。
「渋滞を避けたいから飛ばすよ～」と言った、蘭が復活したと思って嬉しかった。
『捕まるなよ』私が笑顔で言うと。
「大丈夫、私は運がいいから」と蘭が左手で、Ｖサインを出した。
『俺もだよ、蘭に会えたから』私は前を見て、心のままを言った。
「泣かすなよ、これ以上」蘭がそう言って、アクセルを踏んだ。
蘭の横顔越しに海が見えた。沖の深い青も、波打ち際の浅い青も輝いていた。

「帰りたい？」突然、蘭が聞いた。
『まだ帰れない、親父に素直に謝る自信がない』と言った、蘭は前を見ている。
「ユリさんもマダムも、チャッピーが何かを持って帰れると、いいと思ってるよ」と静かに言った。

「探してないかな？」と蘭が聞いた。
『それはないよ、来るのなら伝えに来る、その人が来たら逃げてる言い訳は通じない』私は思っていた、来るなら豊兄さんが来ると。
その時何を伝えるのかを、心のどこかで楽しみにしていた。

「きっと素敵な人ね」蘭は微笑んだ。
アパートに帰り、汗と潮を落として、５時位にタクシーで街に出た。
若草通りのブティックに蘭が寄った。
「とーーーう」と言ってミサが飛びついて来た、私はミサを抱き上げた。
「チャッピーは、ネェネとマリアしか抱っこしないもん」と頬を膨らまして怒った。
『起きてたね～』とくすぐって機嫌をとった。
「甘えん坊」エミがミサを見て言った。
蘭は忙しいサクラさんの為に早めに出て、二人を迎えにきたのだ。
私がミサを抱き、蘭がエミの手を繋いで歩いた。

「ねぇ、ダーリン早く3人目が欲しいわね」と蘭が茶化すから。
『後でコウノトリに電話しとこう』とエミの感性を考えて言った、下ネタを言えなかった。

ＰＧ着くとＴＶルームに松さんが来ていて、マリアの相手をしていた。
ケイが来て蘭を見て。
「蘭姉さん！早いですね」と驚いて言うと。
「昼が休みだったから、日南で泳いできたよ」と蘭が笑顔で返すと。
「変わってませんか？」とケイが聞いた、そういえばケイも県南出身だったなと思い出した。
「な～んも、ただの田舎だね」と蘭が微笑んだ。
「あっ！」ケイが私を見て「蘭姉さん、口だけロボット借りていいですか？」と笑顔で言った。
「どうぞどうぞ、でも口だけで役に立たんよ」と蘭が笑った。
ケイは楽しそうに、私の前に来てお腹を押して。

「行くわよ」と笑った、私はわざと。
『ギーガシャン、ギーガシャン』とオンボロロボットをしてると。
「分かったから、私が悪かったから急いで」とケイが笑顔のままで言った。

『どうしたの？』と私はケイに追いついて聞いた。
「ボーイさん達が忙しいから頼み難くて」とアプローチまで小走りに行くと。
「ここの上の電球がもう弱いのよ、交換お願い」と電球が入ってるダンボールを渡された。
「背だけは高いでしょ」とケイがニヤで言うから。
『ギーガシャン、ギーガシャン』と私がやると、笑いながら。
「分かったから、頼りにしてるわ素敵なあなた」と言って、受付に消えた。
私は電球の交換が終わり、受付に行くと電話が鳴った。
受付の女性がまだなのでケイが出た。

「はい、いつもお世話になります・・・はいありがとうございます・・・確認して折り返しご連絡いたします・・・ありがとうございました」そつなくこなし受話器を置くと。
「忙しくなるよ～」と私に笑顔で言った。
奥にいるマダムの所へ2人で行って。
「マダム、今○電の飯塚様から電話があって、7時半に14人の予約を、受けてくれないかとの事です」とケイが言った、マダムは時計を見て。
「誰が出れる？」とケイに聞いた。
「今日は四季が揃ってます、それと蘭姉さんが来てます」ケイは即答した。
「それにユリを足せば・・大丈夫だね、受けな」とマダムが言った。

ケイと小走りに女性控え室に行って、連絡した。
6人で談笑していた、女性の空気が変わった。
「大丈夫、準備するから」と蘭が言い「急ぎましょう」とユリさんが促した。

それから又走り、受付に行きケイは受話器を取って、その旨伝えた。
受話器を置いて、「ふ～」と一息ついた。
『ケイ姉さん、陸上部で長距離やってました？』と笑顔で聞くと。
「早いでしょ」と笑顔で言うから。
『いや、下半身が充実してると思って』とニヤで返した。
「この～」とケイは言って、「この～じゃ駄目ね」と自分で反省した、愛らしかった。

その時受付の女性が来た。
「受付のリンです、よろしくね」と笑顔で言った。
『よろしくお願いします』私も挨拶した。
ケイが状況説明を始めた。
ケイの説明は的確で無駄が無い、リンさんもケイを信頼してると思って見ていた。
説明が終わると、私の所にケイが来た。

「今夜から、あなたの席はあそこ」と花道横の窪んだ所にある椅子を指差した。
『了解、でなにするの？』と聞くと。
「女性が来て、色々リクエストするから、それを私かリンさんに伝えて」とケイが真顔で言った。
仕事の話は違うな～と関心していた。
「他に質問はある？」とケイが聞くから。
『シキって何？』と聞いた。
「そうだよね～」と言って、指名実績表を見せながら説明してくれ

た。

指名1位は当然ユリさんで、2位のアイさんの2倍以上である。
アイさんは中堅の柔らかい感じの、日本的美人で癒し系、3位が蘭だった。
「蘭姉さんは、週3の実績だから。次からは2位確定よ、ライバルが多いわね」と微笑んだ。
『がんばります』と力こぶを作って見せた。
4位がサクラさん、旦那さんの入院で復活した。
エミとミサを守るために、彫りの深い美人でスタイルが抜群で頭の回転が速く、お笑い系を演じていた。
四季はね、四季とは千春さん、千夏さん、千秋さん、美冬さんの4人を合わせた称号で、20代前半の若手。
4人で協力して仕事をする、そのコンビネーションが巧みだった。
蘭も23歳と若かったが、指名3位で、ユリさんが自分のヘルプに指名した事もあり、一目置かれていた。

「まぁ、こんな感じ後は、おいおい自分で覚えてね」と言って閉じようとして。
「あっ！」と何かに気付き、私の顔を見てニヤを出し。
「この人が次のエース候補の、カスミさん入店3ヶ月で二十歳だけど・・見たらわかるよ」と意味深に言った。
『その次に、本当のエース候補が出るのか、ケイという』と笑顔で言って、ケイを見ると、少し俯いて。
「私に魅力あるかな～？」と真顔で聞くので。
『ユリはユリ、蘭は蘭、ケイはケイだよ』とマダムを真似た。
ケイは脇腹を押さえて、必死で笑いをこらえ。
「お願い、それだけはやめて」と懇願した。

予約のお客が7時20分に来店して、静かに始まった。

私は客からは見えない、特等席で見ていた、幻想の宴の開幕を。

「控え室に誰かいないか見てきて、いたら状況説明してきて」とケイに指示され。

『了解、行ってくる』と言って、控え室に向かった。

『失礼します』と言って入った私はその光景に我を忘れた、中１の私にはそれほど衝撃的だった。

その人は背中を見せて下着姿で、ハイヒールを履いて、今ドレスを着ようとしていた。

私の侵入にまったく動じる事無く、肩までのストレートヘアーを靡かせて、上半身だけ回転させて私を見て。

『おはよう』と美しく笑った。

足が細く恐ろしく長く、全く無駄の無いウエストに、少し割れた腹筋が微かに隆起していた。

上半身は、その細身の体系からは想像できないほどの、豊満な胸が主張していた。

笑った顔は小さく、綺麗な配置でバランスしていて。

薄い唇が綺麗に閉じて、その大きな切れ長の目と共に芯の強さを表現していた。

《完璧》そう思っていた。

「で、家出少年、堪能した？ドレス着てもいいかな？」と笑顔で言われて、我に返った。

『失礼しました、完璧なのを始めて見たから』と真顔で言うと。

「へー、噂以上だね。私が悪いの奥で着替えないから」とドレスを着て微笑み。

「で、チャッピー何を伝えに来たのかな」と微笑んだ、言い表せぬ何かが輝いた。

『あっ、今・・・・・』私は慌てて説明した。

「ＯＫすぐにでると、ケイに伝えて」とウィンクをした。

そのウィンクで、私は背中に一筋の汗が流れるのを感じた、そして行こうとして気づいた。
『すいません、お名前は？』と笑顔で聞いた。
「カスミちゃんです、覚えてね」と笑っていた、輝きを発散して。

会えばわかる、ケイの言葉に嘘はなかった。
私は初めて芸能人に会ったような、そんな高揚した気分だった。

だが、アイドルの雰囲気とは違う。
その直接心を鷲掴みにするような、迫力のある容姿だった。

カスミとの、不思議な関係の始まりだった、恋心でも親近感でもない感情だった。

そして、カスミに教えられる・・・闘うという本質を、勇気とは何かを・・・。

従順

ルールは自らが自らに課す、何の罰も罪さえ、問われないであろう。
だが守らねばならない、それだけは絶対に。
そうしないと、舵が利かなくなるのだ。
流れは必ず楽な場所に向いている、流されだしたら止まらない。
常に心に《面舵一杯》と、指示を出してから。
心に問う、そこが目指す場所か？・・・辿り着きたい世界なのかと・・・。

受付のケイの所へ、裏の小さな潜り戸を抜けて向かった。
『ケイ姉さん、カスミ姉さんがすぐ出れるそうです』とケイに報告した。
「ありがとう、最高のタイミングだわ」とケイが言って、リンさんを見た。
「これで大丈夫ね、場も暖まった所だし」リンさんも一安心という感じだった。
「ユリさんに、報告はいいですよね？」ケイが聞いた。
「カスミなら、問題ないわ」そうリンさんが微笑んだ。

私は指定席に座り、ケイに開封を頼まれた、タバコのカートンを開封していた。
私の真後ろの、銀の扉が開くのを背中で感じた。
【カツ・カツ・カツ】ピンヒールの床を鳴らす音が響き、私の顔の真横で止まり。
深々とお辞儀をした、神聖な場所に敬意を示すような感じだった。
私は見上げた、黒い体の線を強調する、タイトなドレスを纏ったカスミを。
カスミはゆっくりと顔を上げ、正面を見て微笑んで、僅かにモンロ

ーウォーク気味に戦場に踏み出した。
カスミを確認しユリさんと、蘭が動いた。
お偉いさんであろう人の間に、カスミの戦場を作った。

「紹介の意味よ、カスミ姉さんフロアーに出てまだ3ヶ月だから」
ケイがいつの間にか私の横にいて、そう言った。
『そうなんだ～』と私はカスミの輝きを見て呟いた。
「見た感想は？」ケイは興味津々の表情だ。
『なんか、心が戦闘態勢に入った、そうしないと生き残れないって感じがしたよ・・その位の迫力が体全体にあった』と私は正直に言った。
「ふ～ん、会話ロボットの先生今後ともよろしく」とケイが笑顔で言った。
『ヨ・ロ・シ・ク』とロボット語で言うと、ケイも笑顔で。
「今は暇だから、見てるといいよ、今まで重鎮の場を、静かにユリさんと蘭姉さんが暖めてたから」ケイはそう言って、１０番席の戦場を見て。
「カスミ姉さんの登場で、一気に沸点まで持っていくはずよ、蘭姉さんがね」そう言って受付に戻って行った。

私が見ると、確かに四季が担当してる若いお客の方は、その時点で笑顔が溢れ、かなり盛り上がっている。
お偉いさんの方は、静かに会話を楽しんでいる感じだった。
ユリさんと、蘭とカスミに囲まれたその場所は、《破壊力抜群だな》と思い見ていた。
見ていると笑顔が増え始め、蘭が急に立ち上がり、カスミの胸の谷間を覗き込んだ。
カスミは胸を張って威張って見せている、蘭は自分の胸に手を当てて、俯いて顔を両手で覆って泣きまねをした。
ユリさんは薔薇で微笑んでいる、お偉いさんが本当に楽しそうに何

かを言って。
皆が笑顔で盛り上がり出した、沸点を目指して、蘭は炎のスイッチを入れたなと思っていた。
【それが金を取る、仕事というものや】ユリさんが教えてくれた、マダムの言葉を思い出していた。

午後8時を過ぎると徐々にお客も、女性も増えはじめ。9時には満席状態だった。
「う～ん、チャッピー」千秋さんだ「6番お茶農家タッチしすぎ、ユリさんヘルプ」そう微笑んだ。
『了解、今夜は一気するなよ、千秋』とわざと睨むと。
「嫌、酔ってまた抱っこしてもらうもん」そう千秋が言ったとき。
「だめ～私の専用」と後ろに蘭が立っていた。
「ちゃんと、なんか貰って食べなよ」私にそう言って、控え室の銀の扉に向かった。
「どこで拾ったんですか～、私も欲しい」と千秋さんが、蘭に言って。
「公園、多分まだ2人残ってるよ」と蘭が言って笑いながら、扉に消えた。

私がケイを探していないので、リンさんに千秋さんのリクエストを伝えた。
「了解」とリンさんが微笑んだ。
リンさんが、客の入店管理と清算をする。
30代前半の理知的な美人で、常に冷静な大人の女性だった。
席に戻るとケイが、焼き鳥といなり寿司とイチゴのショートケーキを盛った皿を持ってきて、私に渡しながら。
「ごめんね、今こんな物しかなくて」とコーラを差し出したので。
『ありがとう、充分です』と言いながら、私はケイのその視野の広さを関心していた。

かなり離れたあの場所で、この宴の騒ぎの中、蘭の言葉を聞き分けたのかと。

ケイは仕事に従順だった、この時まだ１７歳。
ＰＧに来て雑用を初めて、まだ１年半である、その時も自分の能力の全てを、惜しげもなく使っていた。
ケイは面をあらゆる角度から見る、自分の立つ場所を中心にして。
そして点で動く、フロアーデビューしても、その感性は衰えるどころか拡がっていった。

私は社会に出た時、このＰＧでの経験が最も役にたった。
仕事をしながら常にケイを思い出した、俺は全て使っているかと、問いかける事ができた。
ケイのあの従順で真摯な瞳に見られながら。
ケイはきちんと準備していた、巣で過ごす時に自分の飛ぶ空をイメージしていた。
飛ぶための訓練を必死にやった、そして飛び立っても常に巣を想っていた。

「私の原点は、ここなの」ケイがトップになったころだった。
久々に会って食事をして、一番街を歩いていた時に言った、角のその場所を指差して。
「迷ったらいつもここに来るの、ここで自分のルールの確認をするの」美しい翼を得たケイは、静かに。

「辿り着きたい世界は見えているかと、流されてないかと」

「確認するのよ」と微笑んだ。
私はその日の帰り、若草公園のあの場所に行った。

ベンチは無かったが、教会はあった。
そして問いかけた、辿り着きたい世界はどこかと。
その精神世界に辿り着きたいと、再確認していた。

この時の私は、ケイに対する感情は複雑で、歳が近く可愛いケイを好きだった。
でもそれは恋愛感情ではなく、仲間意識のような物だったのかもしれない。
私が座って最後のケーキを食べていた。
「チャッピー」耳元で囁かれ、ギクっとして顔を向けると。
私の顔のすぐ前に、屈んだカスミの顔があった。
「2番の初客、酒癖C」と微笑んだ。
『了解です』私はあまりのカスミの近さに、そう言うのがやっとだった。

カスミは意味深に笑うと、顔を私に近づけてきて、硬直してる私の顔の前まで来て。
「下着姿の見物料」と微笑んで、戦場復帰して行った。
私はケーキを見ながら《間接キス》なんて馬鹿な事を考えていた、その時後ろから。
「親分、奴は危険ですぜ、女子の笛こっそり舐めるタイプですぜ」と千秋さんが隣の蘭に言った。
「うむ、ワシも気をつけよう、笛は金庫に保管するとしよう」と蘭が、私にあの小動物の笑顔で舌を出して、2人で戦場復帰して行った。
私がケーキを食べ終わると視線を感じた、見るとリンさんとケイがニヤニヤしながら私を見ていた。
私は大袈裟に頭を掻いて見せた。

ユリさんが私の所に来て。
「チャッピー、時間がある時マリアの寝顔を見てきて」と薔薇で微笑んだ。
「あなたを感じると、マリア安心するみたいだから」とユリさんが言った、私は嬉しくて。
『了解しました』と笑顔で返した。
「今度、日南の話聞かせてね」そう言って、控え室に消えた。
やはり別格だな～と感じていた。

そして心の中に蘇ってきた、マダムの言葉が。
さっき自分で真似をした、あの言葉が。
【ユリはユリ・蘭は蘭・ケイはケイ】それぞれの物で仕事をすればいいと、伝えた言葉が。

私は蘭を探した、恋愛対象として愛する者は、蘭一人だと再確認できたから・・・。

和解

輝く照明で作られた、幻想の世界は人々を惑わす。
それは支払う者も、受け取る者も同じである。
光の当たらない場所にも、大切な物は隠れている。

夏の夜も１０時を過ぎた、ＰＧの幻想のフロアーは熱を帯び。
戦士達は集中力を増している、顔には微笑みを湛えながら。
２×２の体制によるボーイの数が、圧倒的に足りない状況で。
主力の女性達は、アイコンタクトで動いていた。
最も顕著なのが四季である、客に悟られないように目で会話する。
ケイに聞いて私も興味を持って見ていたが、その巧みさに驚いていた。

ＰＧに来店するお客の中で、最近回数が増えてきたが誰も指名をしない客を、徹底的に攻める。
一人が付き、自分じゃ指名取るの無理そうだと感じるとサインを送る。
そうやって４人が違う雰囲気で、違う話題を振るのである。
それだけでも、お客は４回楽しんで帰るのだから、充分成り立っている。
四季はプロ思考ではなかった、千秋さんをはじめ３人が女子大生、
一人が専門学校生だった。
しかしマダムにもユリさんにも認められていた、その新しい感覚を。

そしてそのフロアーの裏で、ケイが格闘しているのである、どのお客のヘルプに誰を付けるか。
何も見ないで、頭に中に書き記した物を見ながら。
お客の嗜好を考え、若手にできるだけ平等に、チャンスを与えるよ

うに。
全てはケイが決めるのだ、私はそのケイを見ながら、ケイが愛されている理由を感じていた。
『ケイ姉さん、トイレとＴＶルームに行ってきます』と声をかけると。
「お願いね」と可愛く微笑んだ。

私がＴＶルームに行くと、マダムと松さんがいた、３人娘は眠っていた。
「チャッピー、明日早出してくれんか？」マダムが言った。
『いいですよ、何？』と返事をして、マダムを見た。
「エミとミサを１０時に迎えに行って、連れてきてほしいんや」とマダムが言った。
『了解、ブティックに行けばいいんだね』と言うと。
「頼むな」と笑顔を見せた。
ＴＶルームに出て指定席に戻ると、終焉が近づいて、残り２組になっていた。

「今夜も無事に終わりそうね」ケイが来てそう言った。
『ケイ姉さん何か食べました？』とケイを見た、多分ケイは休憩もしてないと思っていた。
「あなたが美味しそうに食べるから、ケーキを１個食べたよ」そう言ってニッと笑った。
『旨かったでしょう』と笑顔で言うと。
「美味しかったけど、あなたのような表情はできなかったわ」と微笑んだ。
『役者ですから』とニヤで言うと。
「役者ね～」と笑っていた。

最後の客が帰り、終焉を迎えた。

私がＴＶルームに戻ると、サクラさんが帰る準備をしていた、私はミサを抱き上げた。
「ありがとう、明日よろしくね」と美しく微笑んだ。
『おまかせ下さい』と私が言うと、笑顔でエミを抱いた。
エレベーターにはカズ君がいた。
「チャッピー、明日エミの様子見ててくれない？」私がサクラさんを見ると「明日、主人の手術なの」と真顔で言った。
『了解です』と私は笑顔で答えた。
サクラさんがエミを抱いて乗り、ミサをそっと乗せようとした時、頬にキスされた。
『また起きてたね～』と言うと「おやすみ」とミサが笑った。
『おやすみ、あすお迎えに行くから』と言って見送った。

ＴＶルームに戻ると、蘭が私服を着て待っていた。
疲れているように見えて、隣に座ると顔を私の肩に乗せてきた。
《何年分も泣いたからな》私はそう思っていた。
ユリさんが来て私がマリアを抱き、タクシーに蘭が乗り、私がマリアを抱いて乗りユリさんが乗った。
タクシーが走り出したとき蘭が言った。
「ユリさん、ありがとうございました」静かに「私少し和解できました、あの頃の自分と」前を見て、自分に語りかけるように言った。
「分かってたわ、今日あなたをＰＧで見た時に。凄く嬉しかった」優しかった、圧倒的に暖かかった。
「必ずいつか全てと和解できる時がくるわ、」ユリさんも前を見て。
「あなたが、自分を裏切らない限りは」最後は厳しさも忘れずに。
「やってみます、もう目を逸らさずに」最後はユリさんを見て、私越しに見つめあっていた。
２人とも微笑んで、私はそれを感じながらマリアを見ていた。
ユリさんのマンションに着き、マリアを渡すと。
「これで払ってね」とタクシーチケットを渡された、蘭と二人でお

休みをした。
私が蘭と間を空けて座ると、腕を引かれた。
「肩」そう言って微笑んだ、私は蘭と触れ合うまで側によった、蘭が肩に顔を置いた。
蘭の髪の香りがしてきた。
「今日沢山泣いたから、寝物語をして、面白いのがいい」そう囁いた。
『取っておきのをしてあげる、笑い死ぬなよ』と私も囁いた。
「楽しみ～」と言う蘭に。
『1つだけ条件がある、蘭はベッドで横になって聞くこと』できるだけ優しく言って。
『怖い、襲われそうで？』と聞いてみた。
「全然、あなただけは私を、絶対に傷つけないもん」蘭はそう言って目を閉じた。

タクシーの車窓から見える、平和台の平和の塔のシルエットが見えた。
守るべき者に出会えた感動を味わっていた。
その繊細で壊れやすい者を、大切に肩に乗せていた、ただ蘭の香りに包まれていた。

部屋に帰り、蘭が化粧を落としベッドに横になって微笑んだ。
私は電気を消して、カーテンを開けた、微かな月光の光で、蘭の顔が見えていた。
私は蘭の顔の少し後ろでベッドにもたれて座った。
「わくわく」そう蘭が満開で言った。
『それは俺がチャッピーと呼ばれる2年前、小1の時のお話しです・・・』蘭は私を見ている。
窓からの微かな光が2人を見守るように照らしていた。

『9月末だったと思う、いつものように台風が来た、わりと大きい・・・』
その頃の私達は、台風が過ぎると大淀川の小船の桟橋に行って、激流が運んできた物を見に行くのが、習慣だったんだよ。
たまに凄い珍しいもんとか有るんだよ、まぁ小1には何でも珍しいから。

『蘭、エミをイメージしたら駄目だよ』と言うと、蘭は微笑んで。
「分かってる、もっと愚かで鼻を垂らしてるイメージだから」と笑った、私は蘭の高い鼻先を優しくつねった。
「早く、早く」蘭の声に促され、続けた。

その日は日曜日、台風が夜通過して、朝はまさに台風一過の快晴だった。
私は6時過ぎには、こっそり家を抜け出したんだ、ばれると怒られるから。
まぁ相当危険だからね、今思うと怖いよ。
近所の悪ガキ仲間のマサを誘って、桟橋に行ったんだ。
堤防を桟橋に下りる頃には、2人ともそれに気付いていたけど、お互いに何も言わなかった。
沈黙のまま桟橋の中央まで行くと、2m先ぐらいに浮いてるんだ。
俺が先に『マサ、あれはあれだよな?』と聞くと「あれだよ、多分」て言うから。
俺達は二人で顔を見合わせて、沈黙が流れたんだ。

「だれか大人を呼びに行こうや!サキの家が近いが!」てマサが言ったんだ。
そこで俺は考える訳、天才だからさ。
蘭を見ると笑顔で大きく頷いた、私は右手でVサインを作った。
俺はその時サキが好きやったんよ、でもサキの親父は俺ら悪ガキを

嫌ってたから。
《間違いは許されん》そう思ったんだよ、馬鹿だよな〜。
で言ったんだ『違うかもしれんが！』て叫んだのマサに。
「じゃあお前が調べろよ」って返された。
『どうやってや？』と聞くと、長い竹を指差して。
「それでひっくり返せばいいんやが」て言われた。
まずいって思ったら。
「おじっか？（怖いのか）」て俺の一番嫌いな言葉で、とどめ刺しやがった。
『おじことねーわ』そう言って竹を拾って、桟橋に乗ったんだよ震えながら。
もう気付いたかも知れないけど、浮いていたのは女性の死体だったんだ。
背中を見せて浮いてる、髪の長い全裸の。
蘭の目は期待で輝いている。

俺は恐る恐る竹を当ててみたんだ、そしたらクルンって。
俺もマサも凍ったよ、その顔は苦痛に歪み、限界まで口を開き、目には生命の光が無かったんだ。
『うおーーーーー』って叫びながらサキの家まで走ったよ、逃げるように。
サキの家には親父もいて、「本当に死体やなっ！」て聞くから。
『間違いない、女ん人や！』て言ったんだ、その顔を親父が見て、警察に連絡してから。
サキの親父と桟橋に行った、その時にはもう得意満面でさ。
蘭はそれは興味津々で、疲れも眠気も忘れたようだった。
私は加速した、沸点に向けて。

桟橋が見える所まで来たら。
「しまったー」とサキの親父が呟くの。

その時遠くから、パトカーがサイレン鳴らしながら近づいて来たんだ。
パトカーは3台も来て、《Gメンみたいやかっけー》て暢気に思ってた。
サキの親父の所に私服刑事が来て、「通報された方ですね」と聞くと。
「申し訳ございません、こん子らが見つけて確認もせんと通報しました」って必死で謝るの。
俺達は訳が分からんで、ただ見てた。
「君達が見つけたの？」て刑事に聞かれたから、直立不動で『はい』って答えたら。
「危ないから、台風後の桟橋なんか来たら駄目だよ」って言われて、直立不動のまま。
『はい』って答えた、もう敬礼しそうな勢いで。
そしたら制服警官が来て、「〇〇さん、どうしますか？」って聞いたら。
「こんだけ野次馬が来てるんだ、シートをかけて回収して、撤収」って指示した。
見たら野次馬が凄いんだ、でも皆笑ってる。
でサキの親父に聞いたんや、『どうかしたと？』って。
「お前らが悪くは無い、あれは死体じゃない、大人が遊ぶ玩具や」ってね。
「グッグッ」っと言って蘭は口を両手で必死に押さえ、声を出さないように笑ってた。

私はその笑顔に。
『おしまい、もう寝なさい』と優しく言った、蘭は笑いが治まるのをのを待って。
「ありがとう最高だった」と言って、「私をマリアだと思って寝るまで、そこで見てて」と甘えた。

『蘭だと思って見てるから、安心して寝なよ』笑顔で言うと。
「おやすみ」と言って目を閉じた。

私は月明りに照らされる、愛すべき美しい寝顔を、飽きる事無く見ていた。
蘭が深い眠りに入っても。

その日が私の成長したのかを問う、1教科目の試験日とも知らぬまま・・・。

試験

その時に伝えられるだろうか。
教えるなどではなく、その想いを言葉と行動で。
自らが伝えられ響いた言葉を、自分の言葉に変換して、伝えられるだろうか。
その試験は必ず来る、何度も何度も。
その時に真実を語れる人間でいたい、想いを行動で語れれる、人間になりたい・・・。
憧れのあの人達のように。

私はいつの間にか、蘭のベッドにもたれて眠っていた。
さすがに疲れていたのか、目覚まし時計の音で目覚めた。
９時だった、蘭は靴屋に出掛けた後だった。
テーブルに朝食と置手紙、【元気になったぜ！エミとミサをよろしく】と置手紙に書いてあった。
私はシャワーを浴びて、朝食を食べ９時３０分過ぎにバスに乗り出掛けた。

ブティックに行くと、ミサが駆けてきて飛びついた。
『おはよ』と言うと「おぱいよ」とマリアを真似た。
「マリアじゃないんだから降りなさい」とエミがミサに言った、私はエミを見ていた。
「おはよう」とエミは無理して笑顔で言った。
『おはよう、いこうか』と左手を出すと、繋いできた。

我慢してるのか、この小１の小さな可愛い少女は。
父を心配しながら、妹を託されて必死に我慢してるのかと、その手の温もりを感じながら思っていた。

私は右腕でミサを抱き、左手でエミの手を握って歩いた。
ミサの保育園での自慢話を聞きながら、繋いだ手に集中していた。

ＰＧに着くと、ケイとマダムがいた。
「お昼何がいい？」とマダムが聞くと。
「ハンバーグ！」とミサが言い、皆それに乗った。
ＴＶルームでエミはミサと遊んであげていた。
私はＴＶを見る振りをして、エミを見ていた、その小さな背中を。

お昼にハンバーグ弁当を、ケイも来て４人で食べた、食べ終わりケイが出て行く時に呼ばれた。
「エミはどう？」とケイが心配そうに聞いた、さすがケイだなと思いながら。
『闘ってる、ミサの為に。凄い小１だけど、限界も近いよ』と言うと、私を見て。
「がんばって」と私でなく、ドアの中のエミに言った。
私はケイはユリさんの継承者だと感じていた、その優しさに。

暫くしてミサがお昼寝をした、私が抱いてベッドに寝かせ、振向くとエミが勉強道具を出していた。
私はエミの隣に座り、頭に手を置いて。
『もう、泣いてもいいよ』と優しく囁いて両手を広げ。
『エミ、おいで！』とユリさんを真似た。
エミは私に抱きついて、声を必死に殺して泣いていた。
私はこの宝物を抱きしめて。
『大丈夫さ、お父さん元気になるさ』と言っていた、ただ祈りながら。
エミは泣き疲れると私の腕の中で寝ていた。
その雛を優しく、その雛が最も大切にしている、雛の横にそっと寝かせた。

《マリアこれでいいよな？》そう心に語りかけていた、何故かマリアに。

2人が起きて、おやつをを食べながら得意の絵本擬音朗読で、2人の笑顔を作った。
エミの少女の笑顔を見て、少し元気になったなと思っていた。
ユリさんがマリアを連れてきて、3人娘はままごとを始めた。
ユリさんはエミを優しく見て、その背中に。
「がんばれ」と聞こえないように囁いた。
3人娘は、本当にPGのスタッフに愛されていた、女性もボーイも皆、常に気にかけていた。
そして話す時には、膝をつき視線を合わせて話した、その大切な事を知っていた。
無神経な人はただ見ただけで《寂しいでしょう、かわいそうに》と言って、自分を納得させるだろう。
だが彼女達は輝いていた、むしろ安定した家庭に育つ子供よりも。
自らが輝いていた、子供らしく。
そして運命とも闘う、強い意志を示していた、ユリさんの囁きは耳には届かないだろう。
だがエミの心には確かに存在した、ユリさんの薔薇が。

「蘭姉さんから電話があって、ギリギリだから一人で帰って準備してくるって、本当に優しい人ね」と嬉しそうにケイが言った。
『俺もそう思う、想像できないほど深いよ』と返した、ケイはそれを聞き微笑んだ。
「松さんが来たら、マダムと松さんでTVルーム見るから、定位置に集合」と可愛く微笑んだ。
『了解しました、ケイ姉さん』と言って敬礼した、その姿を笑顔で見ながら。
「よし！」と頷いてケイは受付に戻った。

蘭は多分、いや絶対に私を3人娘の側に、置いておくためにそう言ったのだろうと。
ケイも私も確信していた。

マダムと松さんが来て、私は定位置に行った。
『何からやりましょうか？ケイ姉さん』と声をかけると。
「予約の確認から」そう微笑んで、予約表を見せながら。
「丸印が重要度よ、最高が5重丸だからね」そう言って説明を始めた。
その日の予約は１８組で、最高ランクは４重丸の医師会だった。
ケイはその１８組を見ながら、ラークとかセーラムとか特殊なタバコを書き足した。
何も見ずに、客の名前だけ見てである。

「これが有るかチェックよろしく」と書き終わった予約表を渡された。
『ケイ姉さん、勉強できたでしょう？』と聞くと。
「人並みにね、エミの足元にも及ばないけど」と笑った。
私はその後、何度もケイの記憶力には驚かされた、その仕事に対する姿勢にも。

８時を過ぎ、その夜も静かに始まった。
蘭は間に合っていた、カスミも四季も来た。
順調だった。９時過ぎにマダムが来るまでは。
マダムの焦った表情に、私は緊張した。
「エミがいないんじゃ、寝ちょった思っちょったのに」と私に訴えた、私は隣で聞いているケイを見て。
『ケイ』この時は姉さんをつける余裕がなかった『サクラさんは？』と聞くと。
「まだ来てない」とケイが即答した。

私は思った、エミは限界がまた来たと、ミサが寝て母親が来ていない、限界が来たのだと。
『マダム、俺が必ず探し出す、子供は本通りを歩く』そうマダムを見て真剣に。
『必ず探し出すから、行かせてくれ』と言うと、マダムは少し考えた。
「行きなさい、そして必ず見つけるのよ」振向くと、ユリさんが立っていた。
「はよ、いってこい」とマダムが言い「頼むぞ」と加えた。
私はユリさんの頷く姿を見て、駆け出した裏階段に。
全速力で、エミの震える小さな背中を想っていた。

マダムは〇野酒屋の女将に電話して、エミの特徴を話した。
『わかった、空いてる配達員全員出して探すかい、連絡を待ってくれ』と言う女将に、心から礼を言って受話器を置いた。
私は裏階段を下りると、カズ君が立っていた。
「探しに行くのか？」と聞かれた。
『うん、病院』と言うと。
「江〇病院、歩いてか？」と驚いて言った。
『絶対さ』と返すと、ポケットから鍵を出して私に投げた。
私が受け取ると、角のママチャリを指差して。
「俺のマシーンを使え、今はお前しかいない、頼むから早く見つけてやってくれ」そう言って、頭を下げるのだ。
『必ず見つける』とチャリに乗って言って、走り出した、カズ君の優しさに背中を押されて。

橘通りを、市役所の方に信号を無視して走った。
《豊兄さんならどうする？ユリさんなら何と言葉にする？》そう自分に問いかけながら。
必死に漕いだ、小さな宝物を探して。

その姿は突然見えた、市役所の横を橘橋の坂を上がりきり、川を渡る所だった。
私は市役所の交差点を、何台ものクラクションを浴びながら、信号を無視して渡った。
その音でエミが振り返った。
私は坂の下で、右横の緑地にチャリを倒し、立ってエミを見た。
エミは私を見ながら、両手で拳を強く握っていた。
左横にある車道で、車が信号待ちで並びだしエミの横にも並んで、そのヘッドライトで、エミの表情がはっきりと分かった。
涙を必死にこらえ闘う姿が。

『だめだろう、誰にも言わないで脱走したら』エミは私を睨んでいる。
『俺にも言わないで』できるだけ優しく言った。
「お父さんに会いたいの！」昨日の蘭を思い出した、心から底から噴出した叫びだった。
『行こうか、一緒に』と笑顔で言うと、エミの目に力が戻った。
「でも、面会時間過ぎてるよ？」と目力を増しながら聞いた。

『エミ、お前は気付いてると思うが、俺は良い事ばかりする中学生じゃない』エミは私を見ている。
『だから、面会時間が過ぎようが。医者がなんと言おうが』私は大切なその小さな戦士に。
『どんな事があっても、お前をお父さんに合わせてやる』そう言って両膝をつき手を広げた。
エミの強い意志を反映した瞳から、大粒の涙が流れた。
『エミ！おいで』そう大声で叫んだ。
エミが車列のヘッドライトが灯す光道を、全速力で駆けてきた。
私はエミを受けとめて、抱き上げた。

私にすがりつき泣いている、小さな戦士を抱きしめて、《よかった〜》と思っていた。

爽やかな南風に乗って、潮の香りがした・・・。

夜空に聞いてみた、これでいいんだよね？豊兄さんと・・・。

約束

無理だから諦める、無理という基準は自らが作る。
もう一度考えてみないか、本当に無理なのかと。
それは自分が可愛いから、傷つきたくないから、じゃないのかと。

橘橋に並ぶ信号待ちの車列を追い越して、南風が包んでいた、幼い戦士と未熟な私を。
私はチャリを放置して、市役所の反対側に信号を渡った。
電話ＢＯＸが有るのを、知っていたからだ。
コンクリートの堤防の横にそれはあった、私はドアを閉まらないように足で押さえて。
エミを見ながら、笑顔を意識して作っていた。
受話器を取り１０円玉を入れて気付いた、電話番号が分からない事に。
「２〇ー〇〇〇〇」エミが笑顔で教えてくれた。
『さすが、エミちゃん』と言ってダイヤルした。

電話が繋がると、幻想の宴の音が響いてきた、出たのはリンさんだった。
「見つかったの？」と聞いた。
『はい、市役所の近くで、今一緒にいます』私がそう言うと。
「良かった～」と安堵の声が聞こえてきた。
『マダムはいますか？』と言うと「ちょっと待ってね」と言った。
「見つかったんやな？」マダムは近くにいたんだろう、すぐにそう言った。
『うん、市役所の所で、今一緒にいるから』マダムの「ふー」と言う溜息が聞こえてきた。
『マダム病院行ってから、帰るよ』マダムは少し考えて。

「必ず連れて帰るな」と言った、『約束するよ』と言うと。
「金は持ってるか？」と聞くから、『大丈夫』と言ってエミに代わった。
エミはマダムに心から謝った。

電話が終わり、エミの手を繋いでチャリの場所まで行った。
チャリを立てて、どこかに止めてタクシーに乗ろうと思っていると。
エミがチャリの後ろに乗った。
『チャリでいいの？』と言うと、「チャリがいいの」とエミが笑った。
私はエミを後ろに乗せて、橘橋の坂を押して、坂の上の頂上まで来てからチャリに乗った。
エミが背中をトントンと叩いた、私が振り返るとエミが市役所の前の河川敷を指差して。
「あれ何してるの？」と聞いた、私が見ると河川敷で沢山の人が作業していた。
『花火大会の準備だね』チャリに跨り、エミを見て言った。
「ミサは花火大会見たことないの、私はあるのに。私よりミサが可愛そう」と河川敷を見ながら呟いた。
この状況でもミサを想うのかと、そしてこの子にもＰＧの血が脈々と流れているな～と思っていた。
『じゃぁ、行くか』と笑顔で言うと、可愛い花が咲くように笑顔を向けて。
「連れてってくれるの？」と嬉しそうに言った。
『もう、脱走しないと約束するなら』とエミを見て言った。
「約束します」とエミは真顔で誓った。

私はエミの手を取って、私のベルトに持っていき。
『離すなよ』と言った「うん」とエミが微笑んだ。
私は病院に向けペダルを漕いだ。

「私、ユリちゃんが言ったこと、分からなかった事が1つ分かった」と向かい風に負けない大声で言った。
『どんな言葉？』私も負けないように大声で。
「世の中の悪いって言われる事の、全てが駄目とはかぎらない」
「って、さっきのチャッピーの言葉で分かったよ」と叫んだ、私は嬉しかった。
そしてユリさんの凄さを、再確認していた、届くのだと。
相手がどんなに幼くても、強い想いはいつか届くのだと気付かされていた。
向かい風を押し返すエミの言葉で、私は快調にペダルを漕いだ。
病院に着くと1階の受付は誰もいなかった、暗いロビーを歩きながら。
『病室しってる？』とエミに聞いた。
「前のは、でも今日手術だから」私はエミの手を引いて、階段で2階に上がった。
「エミちゃん」と2階の廊下で、若い看護婦に声をかけられた。
「アズちゃん」とエミが言った。
「お父さんに会いに来たの」と屈んでエミに聞いた、視線を合わせて。
「うん」と言うエミを見て。
「静かについてきて」とエミの手を引いて歩き出した、私はその後ろを歩いた。
「もう、遅い時間だから静かにね」と病室の前で微笑んで、エミに言って、2人で入っていった。
私は廊下の長椅子に座って待っていた。

アズと呼ばれる女性が先に出てきて。
「ありがとう、マダムは元気？」と私に言った。
『戦争を生きた人は元気です』と言うと笑顔になって。
「ユリさんも？」と聞いたので『マリアも元気ですよ』と言うと。
「気をつけて帰ってね」と微笑んで仕事に戻って行った。
元ＰＧの女性だったかと、思いながら見送った。

数分後にサクラさんが出てきた、私を見つけ小走りで。
私は立ち上がり声をかけようとすると、抱きしめられた。
私はＰＧの女性は皆、直接伝えると思っていた、その想いを。
「ありがとう」体を離して言った。
『旦那さんは？』と聞くと、サクラさんは笑顔になり。
「大丈夫、成功したわ」と嬉しそうに言った。

「本当にありがとう」と言われたので。
『見つけて、連れてきただけですよ』と照れながら言った。
「カズ君の家は近いから、帰りはタクシーで帰ってね」と言うので。
『はい、ゆっくりでいいですよ』と言ったときに、エミが出てきた。
「帰ろう」と私の手を笑顔で握った。
『まだいいよ』と言うと「ミサが待ってるから、皆が待ってるから」
とエミが笑った。
私は握る手に少し力を入れて。
『そうだね』と言った、笑顔のエミに。

サクラさんが手配したタクシーに乗って、エミとＰＧを目指した。
「花火大会、約束だよ」とエミが私を見た。
『必ず連れて行くよ』私は笑顔で返した。
「ミサもだよ」と言うので。
『勿論、マリアもな』と言うと、小１の少女らしく嬉しそうに微笑
んだ。

『俺がマダムに話すから、エミちゃんはお母さんに話しといてね』
と笑顔で言った。
「ラジャー」とガッチャマンを真似て微笑んだ。
エミが駆け出した、橘橋の北詰を過ぎると、夜街の明かりが見えた。
人工的な明かりに、初めて安心感を覚えた、帰る場所があると。
蘭が待つ場所があると。

裏階段から入ろうとすると、カズ君が駆け寄った。
「ごめんなさい」エミは謝った、カズ君は膝をつき。
「俺も悪かったよ、気付いてやれなくて・・ごめんな」そう言った、優しい目だった。
『マシーン、明日取ってくるよ』と私がカズ君言うと。
「気にすんなって、いつでもいいぞ」と肩を叩いて、「おつかれさん」笑った。
私はこのカズという男を、好きになっていた、その優しさが。

TVルームに行くと、マダムと松さんが代わる代わるエミを抱きしめた、エミは心から謝った。
私はミサとマリアの寝顔を確認して、指定席に戻った。
「お疲れさま、マダムのおごり」ケイがそう言って、寿司折を渡して。
「ケイって呼んだ時の顔、素敵だったよ」と可愛く微笑んだ。
『惚れるなよ』と笑顔で返すと。
「でも1回だけにしてね、あなただけだから姉さんって言ってくれる人」と笑顔で言った。
『はい、ケイ姉さん』と言って、2人で笑った。

「さすが、蘭様が拾った男だけわあるね」振向くと、蘭が笑顔で立っていた。
『蘭姉さん、拾ってくれて本当にありがとう』この時なぜか私は、

蘭に礼を言った。
「仕事中にしんみりするなよ、調子狂うから」と満開笑顔で戦線復帰して行った。

「ありがとう」振向かなくても分かった、その優しい声は。
「あなたはやっぱり分かる子ね、そして分かってあげられる子だわ」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
『ユリさんが教えてくれたから、ガキにしか出来ない事もあるって』と笑顔で返した。
「ありがとう、今日の事も、マリアの事も、蘭の事も」そう笑顔で言って、戦場に戻った。
それから、女性達が次々に来て、面白可笑しく褒めてくれた。
私もここに居ていい人間になれたと実感できて嬉しかった、幻想の宴を見ながら。

本当に良かったと思っていた、エミを見つけられた事、父親の手術が成功して、エミに笑顔が戻ったことが。

エミの、あの強い意志を示した、瞳を思い出していた。

俺も頑張らないと、そう呟いていた・・・。

紋章

惹かれたなら話しかけてみないか、その時は一瞬だから。
恥をかいても、無視されてもいいじゃないか、その時も一瞬だから。
運命なんて無いんだから、それは後からの言い訳だから。
もし運命があるのなら、それは勇気を持って、踏み出した先にしかないよ。

強弱も角度も計算された、光の照らすフロアー、それはまるで舞台のようだ。
演者はドレスを纏い微笑みかける、全員が主役である。
皆、次のカーテンコールを待ちわびている。

その日も順調に幻想の宴が終了した。
私がＴＶルームに行こうとすると、徳野さんに呼び止められた。
「いい仕事だった」と小さな箱を渡された。
「俺からの礼だと思ってくれ、ここで開けるなよ」と言った。
『ありがとうございます』と私は受取り礼を言った。
徳野さんは、照れくさそうに背中を向けて、右手を肩まで上げて立ち去った。

私がＴＶルームに行くと、松さんが笑顔で私を見た。
「あんたは、口だけロボットじゃないよ」と松さんが言った。
「度胸は蘭譲りやな、いい顔しちょったぞ」とマダムが笑顔で言った。
『ただ、夢中で』私は照れてそう言った。
３人娘の寝顔を見ながら。
「マイダ～リン、今夜はユリさん、マダムの家にお泊りらしいから、

帰ろうか」と蘭が言って、目敏く私の手に持ってる小箱を見つけた。
「誰のプレゼントかな～、この浮気もん」と言って笑った。
『徳野さん』と私が言うと、「えっ！」と蘭が驚いた。
マダムも松さんも驚いているようだった。
「中身は？」蘭が聞いた、その時ユリさんが来た。
『俺の前で開けるなって言われたから、まだ見てない』と笑顔で返した。
「早く、早く」と蘭が言った。

私は小箱の蓋をそっと開けると、中からＰＧと彫り込んであるバッジが出てきた。
「うっそー！」蘭が驚き「まぁ、素敵」とユリさんが言って。
「徳もにくい事が出来るようになったもんや」とマダムが笑顔で言って、「本当に」と松さんも笑顔だった。
「認められたんだよ、あなたも一員として」と蘭が嬉しそうに言った。
『本当に！』私は嬉しかった、その無骨な優しさが、銀のバッジを見ていた。
「それを返せと言われない限り、あなたは何処にいても、どんな時もＰＧの一員だから」ユリさんが薔薇の笑顔で。
「いつでも、帰ってきていいって事なのよ」バッジを見つめる私に。
「それは、マダムにも私にも贈れない物なの、徳野さんだけが出来る事なのよ」と薔薇の笑顔で言った。
『大切にします、返せと言われないように』私はそう誓っていた。

私は蘭とエレベーターに乗った、ユリさんはマダムの家に、エミとミサが泊まるので応援に行ったのだ。
エレベーターは四季と一緒で。
「蘭姉さん最近艶っぽいですね～」と千秋が言った。
「男と暮らすと艶っぽくなるよ」とニッと蘭が笑った。

「カズく～ん、今夜予定ある～」とあのトイレに来た美冬が言うと。
「冗談でもやめて下さいよ、徳野さんに殺されるから」とカズ君が笑った。
カズ君と四季と別れて、蘭とタクシーに乗った。

「大丈夫疲れてない？」と蘭が私に言った。
『全然、毎日が楽しいよ』と笑顔で答えた。
「じゃあ、肩」と甘えた、私が側によると肩に顔を乗せた。
『蘭の方が疲れてない？』私はそう思っていた。
「大丈夫、毎日が楽しいよ」と目を閉じたまま微笑んだ。
『今夜は何の話がいい？』と私は蘭の耳元に、囁いた。
「いいの？」と蘭が聞いた、『勿論』と笑顔で言うと。

「うれし～、でも約束して、私が寝たらちゃんと布団で寝るって」と心配そうに言った。
『約束するよ』私は笑顔でそう言った。
「じゃあ、伝えに来る人との話しがいいな～」と微笑んだ。
『いいよ、俺も蘭にお願いしていい？』と蘭に囁いた、蘭は私を見て。
「なに？」と言った。
『蘭の靴屋の仕事が、休みの前の日だけでいいから、蘭の話しが聞きたい』と笑顔で言った。
「いいよ、でも泣くなよ」と蘭が言った時に、タクシーがアパートに着いた。

蘭が昨日同様化粧を落とし、可愛いハート柄のパジャマに着替えて来た。
ベッドに横になりながら、少女のような笑顔で「ワク、ワク」と言った。
私は電気を消してカーテンを開け、昨日と同じ位置に座った。

『俺はその人を、豊兄さんと呼ぶんだ。血の繋がった兄貴じゃもちろんないけど、それ以上なんだよ』蘭は頷いた。
『今日はその出会いの巻きです、それは俺が幼稚園年中だったから、ミサと同じ時』私は蘭を見て。
『そのイメージは消しなさい、鼻は垂らしてない』と言うと、わざと驚いたように。
「あなた超能力者！」と満開で笑った、私が笑ってると。
「早く、早く」といつもの催促をした。

『勿論記憶が曖昧なところがあるけど、ご勘弁を』と言って蘭を見ると、笑顔で頷いた。

『それは桜も儚く散り始めた頃だった・・・』
４歳の俺は、学校から帰り遊びに行った、姉貴を追いかけて外に出た。
お袋も姉貴も、気付いてなかった。
どこをどう行ったのか、全く分からないけど、要するに迷子になったんだ。
蘭は笑顔で聞いている。
俺はただ漠然と歩いていたと思う、見たことがある風景だと感じながらね。
それでやっと堤防を見つけたんだ、嬉しくて駆け上がったよ。

春の夕暮れは早くて、もう日が沈みかけてた。
薄暗くなっていきて、海から吹いてくる風が、まだ冬の名残があって、寒くなってきたんだ。
でもとぼとぼと歩いたんだ、帰りたくて。
寂しくて、寒くて、不安で泣き出しそうだったけど、我慢してた。
親父の【男は泣くな】って、絶対の教えがあったからね。
それでどんどん歩いたんだ、今考えると家と反対方向に。

もう暗くなって、怖くなって。
明かりの点いてる家が見えて、でもそこに行くのは、堤防の雑草を掻き分けないといけない所でね。
どっちにするか悩んだの、この辺から記憶が鮮明なんだ。
それで決めたの、暗いよりいいってね。

走った夢中で雑草を掻き分けてね、雑草っていっても、その時の俺の身長より高かったよ。
だから必死で走ったよ、夢中になって。
蘭は笑顔で私を見てる。

やっと野球をやるスペースまで出た時にかち合ったの、２匹の野犬と。
まだ沢山、野犬がいた頃だったから。
蘭は頷いた。
俺は動けなくなって、野犬は完全に幼い俺を見下して、ダラダラよだれを流しながら。
【ウー】って言って威嚇するんだ。
その時ね上から声がしたの。
「そのまま睨んで動かんで待っちょきー！」て堤防の上から。
豊兄さんだった、大人達が心配してる話聞いて。
俺の姉貴によく行く場所を聞いて、堤防って判断したんだよ、まだ小３の豊兄さんが。
ガサガサ音がして、俺の前に豊兄さんが立ったんだ。
そん時我慢の限界と、その大きな背中に安心して俺、泣き出したんだ。

「下がっちょき、あぶねーかい」て言って、俺は少し下がって見てた。
大きな背中と闘う意思みたいなの、勿論その時は分からなかったけ

ど。
でも感じたよその背中で、上手く表現できないけど。
「分かるよ、とっても」と蘭は微笑んだ。
豊兄さんは2匹を睨んで、拳を握って。
「なんねやるんね～」て犬に話しかけるの。
「いいよ～相手してやるかい」って微笑さえ浮かべてるんだ。
俺はその犬に話しかける光景が、ただ不思議でね、泣くのも忘れて見入ってた。
結果はあっけなくて、犬が逃げた。
その本能で分かったんだと思う、どっちが上かを。

「たー坊か？」と豊兄さんが聞いた、姉貴がそう呼んでたから。
俺は『うん』て頷いた、俺の服の誇りを手で払ってくれながら。
「こげん汚して怖かったな、帰ろうかね」って優しく言うんだ。
それから手を繋いでくれて、堤防を帰りながら。
「怖くても下向いたらいかんじ、自分に負けるかい」って、豊兄さんの最初の教えだった。
歩いてると親父がチャリで走ってきて、俺達の前で止まって。
「ありがとう、豊」そう言ったら。
「俺も何度も堤防で迷子になって、よく泣いたよ、寂しくて」って言うの。
今思うと、泣き腫らした俺の顔を親父に見らたから、必死にかばってくれた。
何度も言うけど、豊兄さんこんとき小3だったんだ。
蘭は静かに頷いた。

ただ俺が覚えてるのは、その時の親父の表情が、初めて見るものだった。
多分豊兄さんを認めていたんだと思う。

そらから親父は、「豊ならそうするか考えろ」って言い出した。
「お前は幸せや、本物がそばにいる」って言って。

次の日、豊兄さんが迎えに来て。
俺の手を引いて、駄菓子屋に連れてってくれた、それが俺の子供世界へのデビューだった。
誰に頼まれたのでもなく、自分でそうしようと思ったからしたんだ。
今でも勿論、喧嘩でも優しさでも勝てない。
でも1番勝てないのは、自分の心に忠実だという事なんだ。
多分世界中には、強い男は沢山いるだろうけど、それでも俺は豊が強いと思ってる。
だから、いつか勝ちたいとも思ってる、その強い意志を持ちたいと思ってるんだ。
そうしないと豊兄さんに、何の恩返しもできないからね。

蘭は聞き終わって、私の耳元に顔を近づけて。
「がんばれ、とっても良い話だったよ。ありがとう」と言って離れた。
『じゃあ目を閉じなさい』私が笑顔で言うと。
蘭はゆっくりと目を閉じて「おやすみ」と言った。

私はこの時には分かっていた、蘭が私の話を聞きたがる一因、いやかなり大きな部分として。
埋めたいんだろうと、その後悔の部分を少しでも、埋めたいんだろうと。
蘭を見ながら考えていた。

寝息をたてる蘭に、その美しい寝顔に。
『俺は全然嫌じゃないよ、それで蘭の笑顔が増えるなら、嫌なものなんかないよ』・・・

『ゆっくり、おやすみ』そう言って部屋に戻った。

蘭の香りに包まれながら、瞑想に入った。
蘭が笑っていた、私の肩に顔を乗せて。
もう追いかける必要がなかった・・・。

真夏を忘れる爽やかな夜風が部屋に流れ込み、私の大切な瞑想の時を快適にしてくれた。
瞑想の中の美しい女性は、満開の笑顔で問いかけている。
「今、楽しいことはあるの？今、好きな人はいるの？」かと。
私は即答できた。
「今が楽しいよ、目の前にいるよ」と、眠りに落ちるまで繰り返していた。

子供たちのラジオ体操に行く、楽しそうな声で目が覚めた。
蘭が朝の準備する音が聞こえた、蘭は朝食を作っていた。
『おはよ』とその背中に声をかけた。
「お、今日は早いね～」と微笑んだ、私は歯を磨き顔を洗って、蘭の部屋に入った。
『朝ごはん作るの大変じゃない？』と朝食を食べながら聞いてみた。
深夜まで仕事して、早朝から起きているからだ、一人なら簡単に済むのではと思ったのだ。

「全然、嬉しいの」と微笑んだ、そして少し真剣みを帯びた目で私を見て。
「誤解しないでね」と言ったので。
『してないよ、誰かの変わりだなんて、思ったことないよ』と笑顔で返した。
「忘れないでね」と満開で微笑んだ。
「昨日の寝物語、第何話まであるの？」と笑顔で聞いた。
『３００はあるね』と笑顔で返すと。
「そっかー」と少し寂しげな顔をした、この不思議な同棲の、残り時間を考えたのかと思った。

『蘭、俺はＰＧの正式メンバーだよ、たとえ何処にいても、蘭が求めるなら必ず飛んで行くよ』と笑顔で言った。
蘭は優しい目で私を見てる。
『俺はそうしようと勝手に決めたんだ』と微笑んだ、蘭も笑顔だった。
『しんみりする話はやめよう、靴屋で調子狂うと大変だから』と蘭を見て言った。
「うん」と蘭は満開で微笑んだ。

「カスミ、綺麗でしょう？」と蘭が探るような目で見ている。
『驚いたよ、芸能人かと思った』と笑顔で返した。
「まぁ、いきなりが下着姿で、それを見て倒れなかったんだから、立派なもんだよ」と笑った。
『１番が自分じゃなくて、やきもち焼かないのかな～』と上目使いで聞くと。
「あ、そっか、脱ごうか？」とニッと笑った。
『勘弁してください、失神するから』と頭を下げた。
「な～んだつまんない」と私の大好きな小動物の笑顔を作った。
『案外、意気地無しなんです』と笑顔を返した。
「遠慮しないでカスミと絡んでみなよ、私はそれが見たい」と真剣に、「最近のケイを見て思ったの、あんたは案外素敵な奴かなって」と私を見た。

『惚れたな？』と聞いた、冗談ぽく本気で。
「絶対に嫌いじゃないよ」と舌を出してかわした。
「カスミはどこか本心を出せない、少し辛そうで」蘭は深く澄んだ目で。
「引き出し上手でしょ、チャッピーなら警戒心取れるから」と笑顔を戻し。

「でも帰る場所は間違えないでね」と満開で言った、蘭の優しさにまた触れていた。
『迷子になるかも』と言うと、「堤防でしょ、迎えにいくよ」と笑った。

蘭が出掛ける前に。
「今日は掃除日でしょ？何するのかな？」と笑顔で聞いた。
ＰＧは昼間は週に一度の、清掃業者が入る日だった。
３人娘も来ないので、夜からの出勤でいいと言われていた。
『カズ君のチャリ、取りに行ってくるよ』と笑顔で言った、蘭は微笑んで。
「帰り靴屋に寄って、顔を見せてね」と言って手を振って出掛けた。

私は食器を洗い、《洗濯はまずいよな》と思い、掃除機を自分なりにかけてみた。
そしてバスで橘通り３丁目まで出て、乗り換えの江○病院行きを探していた。

【ファン・ファン】という間の抜けたクラクションが鳴った。
私が何気に見ると、純正じゃない空色で、ボンネットとトランクカバーだけがピンクの、可愛いスバル３６０が止まっていた。
屈んで覗くと、何かを発散しながら、カスミがおいでおいでしていた。
《蘭はやっぱり超能力者だな》と思いながら、車の窓から顔を入れ。
『カスミ姉さん、おはようございます』と笑顔で言った。
「とりあえず、乗って、ここ駐車うるさいから」と笑顔を見せた。

私が慌てて乗ると、その狭い室内のせいで、カスミの左腕と私の右腕が触れた。
カスミは気にすること無く、トコトコと発車した。

「どこ行くのかな？」と聞くので。
『江○病院、カズ君のチャリ置いてきたから』と返した、カスミは前を見ている。
その横顔があまりにも近くて、その輝く美しさに見惚れていた。
「何か顔についてる？」とカスミが私を笑顔で見た。
『目と鼻と口が、いい感じで』と私は無理して笑った。
「３０点」カスミはそう言って微笑んだ。
『厳しいな～、緊張してるからその分まけて』と笑顔で言うと。
「緊張してるんだ～、なんで？」とニヤでまた私を見た。
『てんとう虫が橘橋の坂登るのかと』と笑顔でかわした。
てんとう虫とはスバル３６０の愛称で、その頃もう旧車だった、カスミは笑顔で前を見てた。

「見てなさい、きっと登るから」と信号が変わると同時に、カスミが言って、アクセルを踏んだ。
車はトコトコと登った。
「ね、可愛い奴でしょ」と笑顔で言った、その美しさに少し押された。
『うん、可愛いね。意外に』と笑顔で言うと。
「意外って、引っかかるんだけど」と私を見た。
『カスミ姉さんのイメージから遠いから』と私は答えた。
「どんなイメージ？」と興味深げに聞いた。
『男が運転するオープンカーの助手席で、颯爽と街を流す感じ』と笑顔で言うと。
「それは、褒めてる？」と私を見た、『もちろん』と私も笑顔で答えた。

「時間あるんでしょ？」とカスミが前を見ながら聞いた。
『夕方までなら』と私が答えると。
「一人じゃ行きにくいとこ付き合って」と言ったとき、ラブホテル

の大きな看板が見えたので。
『いいですけど、俺経験ないから、優しく教えて下さい』と茶化すと。
「８０点」と微笑んだ。
車はひたすら南下していた、《蘭と走ったな～緊張してたな行きは》と思っていた。

「ケイに何て言ったの、私の感想？」と美しい、不敵な笑顔で言った。
『なぜでしょう？』と私は、焦って聞いた。
「すごくよかったですよって、ケイが言うから」と私を見ながら、
「はけ！」と取調べ口調で言った。
『見た時、心が戦闘状態になった、そうしないと生き残れないと感じた、それくらい迫力ある姿だったって』と言った。
カスミは前を見ながら不敵に微笑んだ。
「下着姿だったから？」とカスミが聞いた。
『分からないけど、違うと思う』と私は正直に答えた。
『確かに俺には、下着姿は衝撃的だけど、発散してる物がそう思わせたんだと思う、上手く言えないけど』と言うと。
「発散してるんだ、まだまだやね・・私も」と言って微笑んだ。

『ただのガキの感想です、それ以外は胸を見てました』と頭をかいて見せた。
「近寄りがたいって、感じなんだよね？」とカスミは笑顔で聞いた。
『どうなんだろう？・・でも俺は今好きな人いるから、考えなかったけど』と言うと。
「蘭姉さん？」と間髪入れず、カスミが突っ込んだ。
『はい・・自分勝手に、ただ大好きなんです』と照れると。
「いいね～それ、９８点」そう言って微笑み、「つづき」と言った。
てんとう虫は必死に、灼熱の道を駆けていた。

トコトコと可愛く、前だけを見て。

『大人の男は分かりませんよ、俺は今考えると・・俺には行けなかったんじゃないかと思う』と正直に言った。

カスミは青島の路肩に車を止めた。

「いけないって？」とカスミが聞いた。。

『恋愛対象として追うことを、最初から諦める感じ』と真顔で言った。

カスミは私を見てる、それはやはり、圧倒的な美しさがあった。

「やっぱり近寄り難いんだよ、だってあんたは、蘭姉さんにその歳で、チャレンジする気持ちを持ってるんだから」とカスミが真顔で言った。

カスミの顔の近さが気にならないほど、私は集中してきていた、自分の気持ちを表現する事に。

「だって私は蘭姉さんより、3歳もあんたに近いんだよ」と言ったカスミは真剣だった。

『近寄り難いって感じじゃなくて』私が少し躊躇すると。

「言って、今まで誰も言ってくれないの、男はただ綺麗だって言うけど」真剣に私の目を見てる。

『絶対に間違ってると、思って聞いてくれるなら』私はそれほど自信がなかった、だから失礼な事だと思ってた。

「不正解を教えて？」とカスミは言って、頷いた。

『近寄り難いんじゃないよ、カスミ姉さんは圧倒的に綺麗だよ』私は一呼吸おいて。

『でも人工的な感じがする、整形とか化粧とかそんなのじゃなくて、上手く言えないけど』私は必死に言葉を捜して。

『本当に良い銃は、凄く綺麗なんだって聞いたことがあるんだ、そ

れはもう鉄じゃないように、妖しく光るらしい』
カスミは頷いた。
『それは作り手が、精度を極限まで求めるからなんだって、でも銃の精度って、殺傷能力とかだから』
カスミは私から目を逸らさない。
『ようするに、闘うために極限まできて、その妖しさが出るんだと思う、そういう妖しさをカスミ姉さんに感じた』
カスミは頷いた。
『だから、戦闘態勢って言葉を使ったんだって、今話しながら分かったよ』と答えた、カスミは頷き。

「だから誰も、私の内面には、チャレンジしないと思うんだ？」と真顔で聞いた。
『そうじゃないと思う、その妖しさは別に悪い事じゃないと思うけど』と言うと、カスミは真顔で見て。
「ご機嫌とるなよ、ここまで１００点なんだから」と言った。
『俺、言うの恥ずかしいけど・・最近蘭を好きになって思う』と照れて言うと。
「恥ずかしくないから」とカスミは促した。
『当然年齢とか、経験とか今の生活の状況とか考えると、普通絶対無理だと思うよね』
カスミは頷いた。
『でも、どうしても諦められないんだ、まぁ未熟だからかもしれないけど、無理なんだよ』
カスミの目が優しくなっている。
『どれだけ愛せるか考えた時、全てを投げ出せるって思った、その位の覚悟がないなら、挑戦したら駄目なんだって、ユリさんが教えてくれた』
私は楽になっていく自分を感じていた。
話しながら、自分自身が楽になっていくのが気持ちよかった。

『絶対に間違いだけど、カスミ姉さんの妖しく光る、その輝きは突きつけてるんだと思う』
『覚悟はあるのかと・・だから半端な男じゃ、挑戦すら出来ないんじゃないかと思うよ』と言った。

「正直な回答ありがとう、のど渇いたね行こう」とカスミが微笑んで、二人で移動販売所に向かった。
車から出ると、カスミは白のタンクトップに赤いアロハを羽織り、白のホットパンツにスニーカーだった。
その颯爽と歩く姿は、モデルがステージを歩くようだった。
真夏の青島といえば、サーファー天国である、沢山のサーファーの目がカスミに集中した。

『やっぱり目立つな～、仕方ないけど』とコーラを飲みながら、カスミに言った。
カスミがニッと笑って、自分が座ってるベンチに呼んだ。
私が横に座ると、突然私の太ももに寝転んで、私を見上げ。
「良い経験でしょ・・今、視線は全て君のものだよ」そう言って私の腰に腕を回した。

真夏の太陽を、パラソルが助けてくれ、私は色黒の男達の視線を集めていた。
カスミは眠ったのではないかと思うほど動かない。
投げ出した足が、その長さゆえ、ベンチから放り出されている。
『カスミ姉さん、起きてます？』私の問いに。
「ごめんね、蘭姉さんに昨日頼んだの、あなたを貸してって」カスミが私を見た、少しその発散するエネルギーが落ちたと感じた。
「蘭姉さんが、偶然あった感じの方が、いいはずだって言ってくれて」と真顔で言った。

カスミは触れようと思えば、どの部分でも触れられるほど近かった。しかしその【至極の逸品】である容姿は、全てを拒むオーラに覆われていると感じていた。
「最近少し、しんどくてね、多分それを感じて、蘭姉さんが元気が出るロボットだから、いつでも使っていいよって、言ってくれてたの」カスミは輝きはそのままに、呟いた。

『スイッチはどこだって言ってた？』私が笑顔で聞くと。
「ここ～」と言って楽しそうに、私の額を押した。
「ヨ・ロ・シ・ク・カ・ス・ミ・ネ・エ・サ・ン」そう笑顔で言った。
私は嬉しかった、蘭の役に立てることが。
私を信じ託してくれる事が、カスミは笑っていた。

「姉さんはやっぱ、店だけがいいな～」と顔を向けたが、まだ起きようとはしなかった。
「蘭姉さんの事、普段なんて呼んでるの？」私はカスミを見ながら、笑顔で聞いた。
『蘭』と答えた、少しの沈黙があり。
「あんた、蘭姉さんが、どれだけ人気有るか知ってるの？」と不敵な笑顔を見せた。
『なんとなく、仕方ないよ魅力的だから、ガキの俺には関係ない事だから』私は強がり前を見て言った。
カスミは起きて、立ち上がり手を出した。

「もう、視線には慣れたろ」と不敵に笑った、私達は手を繋いで車に向かった。
「私の事もカスミって呼んで」とカスミが大声で言った。
私はいきなりカスミを、お姫様抱っこした、カスミは少し驚いて私を見た。

『視線に慣れたから、特別サービスだよ・・カスミ』そう笑顔で言って、信号を渡った。
「生意気で、負けず嫌いだね」と笑いながら首に手を回した。
夏を楽しむ、多くの海水浴の若者と、サーファー達の真ん中を、お姫様抱っこしたまま歩いた。
車を目指して、視線を浴びるのを楽しむように。

この変わった感性の、美しい女豹が、私の新しい教師として加わる。
このカスミとの始まりに、蘭の意図はどこにあったかを知るのは、まだ少し先である。
それを知った時、私はその心の奥深さに触れ、また心が震えるのだ。
カスミというその女性は、常に輝きの中にいた。
まるで鑑賞される為に産まれた、オブジェのように。
【至極の逸品】であるその姿は、忘れる事すら拒むように。
今も私の中に【凛】として立っている・・私の心に。

巣立

夏を楽しむ若者達が、その自慢の体と自慢の車で集まっていた、新たなる出会いを求めて。
夏の熱が何かを溶かし、開放感を楽しむように、笑顔が溢れていた。

若者という表現にも、到達できてない私は悔しかった。
その視線に対抗するために、カスミを抱きあげた。
カスミの言った【負けず嫌い】はそう言う点では当たっていた。
カスミは自分が、からかった事に対するものだと思っていた。
私はやはり、蘭のＰＧでの仕事上の客を羨ましく思い、どこかで妬んでいた。
だから、蘭と同じ世代の彼らに対抗して余りある、カスミという絶対の存在を抱き上げて歩いた。
その彼らが絶対に持ち得ない、最終兵器のような女性を、抱きあげられる事を見せたのだ。
それは子供染みた考えだった。
しかしこれを境に、私とカスミの距離は近づいていく。

「今から堀切を上がるよ」車に乗るとカスミが言った。
『冗談でしょ？ね？』私は聞き返した。
「その頂上にあるんだから、目的地が」と美しく笑った。
『ヤングのドッグ』私が笑顔で言うと。
「１００点」と言ってスピードを上げた。
【ヤングのドッグ】とは、その当時堀切峠の頂上駐車場にいた移動販売車で、ホットドックが名物だった。

『てんとう虫、大丈夫かな？』と心配顔で聞くと。
「見た目より根性あるんだよ」とカスミは微笑んだ。

『持ち主と逆だね』と笑顔で言うと。
「0点」と言って、カスミが笑った。
てんとう虫は命がけで堀切峠を登りきり、私はカスミとヤングのドッグを食べた。
「やっぱ、最高〜」と眼下に広がる太平洋に向かい、カスミが大声で叫んだ。
「あ〜すっきりした」と振向いて、輝きながら笑った。

帰りもトコトコと走っていた。
『カスミねぇ』言い直して、『カスミは、宮崎の人じゃないの？』と聞いた。
「どうして？」とカスミが返した。
『言葉が少し違うと思った』と素直に言った。
「私は博多タイ」と語尾を強調して微笑んだ。
『都会人やな〜』と私が言うと。
「変わらんタイ」と笑った。

『何で宮崎に来たの？』そう言うと、わざと悲しそうなふりをして。
「それを、聞くの」と泣き真似で言った。
『駆落ちか、逃避行か、追いかけてきたか、どれか正解ある？』と聞くと。
「あるよ」とカスミが笑った。
『なんだ、意外に面白くない』私が笑顔で言うと。
「面白いってどんなのよ？」と真顔で聞いた。
『失踪』と私は言った。
「確かに、そっちの方が響きがいいわ〜」と笑い、「今夜から使わせて頂きます」と微笑んだ。
『影ある女を演じないと駄目だよ』と笑顔で言うと。
「有るでしょう、暗いのが」と背中を見せた。
『0点』と返した。

『ありがとう』と江○病院に着いて、礼を言って車を降りた。
「今度また、一人で行きづらい第2弾付き合ってね」とカスミが美しい笑顔で言った。
『優しく教えて下さい』と笑顔で返した。
「教えるほど経験ない」と笑いながら帰って行った。

「今日はカスミ姉さんとデート？」ハッとして振向くと、マリアを抱いたケイが立っていた。
『奇遇ですね』と焦って言うと。
「マリアは騙せないよ、おんもって言うから今出た所」と可愛く微笑んだ。
『マリア、お仕事のお話してたんだよ』とマリアを抱きながら言うと。
「マリア騙されたら駄目よ、浮気者だから」とケイが笑った。
『ケイ姉さん、やきもち焼いてますね～』とマリアに笑顔で言うと。
「もち～」とマリアがケイを見て笑った。
「マリア、私が育てたのに」とケイが泣き真似をした。
「けい」とマリアが呼び、ケイが見ると「がんば」と言った。
ケイと私は2人で笑っていた。

「サクラさんの旦那さん順調で、今マダムとユリさんがお見舞いに」とケイが言った。
『よかったね』と2階の病室を見た。
エミとミサの笑顔が見えるようだった。

私はカズ君のチャリを漕いで、PGのビルに行き、元あった角に鍵をかけて止めた。
靴屋を覗くと蘭と目が合った。
「あと1時間」と蘭が口パクで言い。

『マルショク』と私は指差した、蘭は笑顔で頷いた。

1時間後、蘭が来て車に乗ると。

「今日は早いから、今夜はハンバーグよダ～リン」と満開で笑った。

『いいね～いつもありがとうな、マイハニ～』と私も笑顔で返した。

「一人じゃ作らないのよね」と蘭が言った。

『カスミみたいな事を言うんだね』とニヤで言ってみた。

「カスミちゃんに会ったの？」と蘭がとぼけて微笑んだ。

『会っておでこ押されたよ』と笑顔で返した、蘭はニヤで笑い。

「ばれてるっぽい？」と満開で微笑んだ。

『話、引き出すの上手って言ったのは、蘭だよ』と私も笑った。

「で、なんか良い事あった？」と私を覗き込むから。

『伝説を1つ作ってきた』と笑顔で言うと。

「なに？なに？」と催促した。

『カスミをお姫様抱っこして、青島の若者達の中を歩いてやった』

とニヤで言って、蘭を見た。

「やるね～」と満開で微笑んだ。

「さて、今から青島いくよ・・妬いたから」とわざと私を睨んだ。

『土曜の夜の一番街の方がいいよ』と私が言うと。

「それが、いいかも」と蘭が満開で笑った。

部屋に帰り、お互いシャワーをして、蘭がハンバーグ作るの見ていた。

「食器と掃除機ありがとう」と蘭が微笑んだ。

『洗濯はさすがにしなかったよ』と言うと。

「どうして？」とニヤで聞いた。

『嫌じゃないかと、下着とか』と照れると。

「嫌じゃないけど、恥ずかしいからしないでね」と満開で微笑んだ。

『すっごい、おばさんぽいの着てるとか』とニヤで返した。

「見せるよ」と笑顔で睨んだ。
『失神するから勘弁して下さい』とウルウルで言った。
蘭の手作りハンバーグを食べて、タクシーで出勤した。

本当に蘭とは楽しかった、その2人の時間は大切な物だった。
そして私は忘れていた、あの目の事を。
静かに忍びよってるとも知らずに、蘭と楽しんでいた。

PGに着いて、まだ早かったので蘭も一緒にTVルームに行った。
ケイがいて、3人娘はままごとを楽しそうにしていた。
『ケイ姉さん、今夜は余裕ですね』と笑顔で言うと。
「掃除の日はね、それに弟子もついたし」と可愛く微笑んだ。
「役にたってるの？」と蘭がニヤニヤしながら聞いた。
「はい、若手の人は客に嫌なことされたら、チャッピーで解消してるみたいだから」と笑った。
『やはり、そうだったか』と私は右手に拳を作り、震えて見せた。
「特に誰かな？」と蘭が笑いながら聞くから。
『四季が特に』と言うと、蘭もケイも楽しそうに笑った。

「ここが一番楽しそうだね」と突然カスミが入ってきた。
『おはようございます、カスミ姉さん』と言ったら
「2度目だろ」とカスミが笑った。
「はい、三松のういろう、お土産」とカスミがケイに渡した。
「ありがとうございます」とケイが笑顔で礼を言った。
「ケイ、早くフロアー出ろよ、楽しみに待ってるからね」と美しく微笑んだ。
「がんばります」とケイも微笑んだ。
「蘭姉さん、ありがとう」とカスミが笑顔で言った。
「中々の優れものでしょ」蘭が満開で笑った。
「すぐ調子に乗るとこを除けば」とカスミが言った言葉で、3人は

笑った。
カスミと蘭は一緒に準備に行った。
松さんとマダムが来て、私とケイも定位置についた。
予約確認が終えると、7時45分、ライトが灯され静寂が支配する。
私はこの時間が好きだった、なんともいえない緊張感に包まれるから。
「なにかした、カスミ姉さんに？」とケイが隣に来て言った。
『なぜ？』と真顔で聞くと。
「私にあんなこと言う人じゃなかったから」と探るような目で聞いた。
『本心でしょ、ライバルって欲しいもんじゃないですか』と思ったことを口にした。
「私が、カスミ姉さんのライバルに」とケイらしく考えていた。
ケイが私のお腹のスイッチを突然押した、私はケイを見た。
「あなたの正直な、感想を聞かせなさい」ロボットに対する命令口調で、前のフロアーを見て言った。
私はケイの横顔を見て、その真剣さに押されて話した。

『俺はフロアーの仕事は分からない、大変だという事しか』私もロボットらしく前を見て。
『この前ユリさんと蘭が話してるのを聞いて思ったんだ』静寂のフロアーに向けて。
『伝えられて響いた事は、伝達しないといけないって、昨日エミを見つけた時に確信したよ』ケイを見ずに、前をみて。
『俺は今ケイ専用ロボットだから、本当の気持ちを言うよ、でも普段は絶対に言わない、そして正しいかとか間違ってるなんて事で、判断はしないでほしい』
『俺はユリさんの継承者は、ケイだと思ってる、絶対にユリさんも、

それを望んでると感じている』そう言ってケイを見ようとした。
「まだ、見ないで」とケイが言った、「お願いだからもう少しロボットでいて」と優しい声で。

静寂の戦場を2人で見ていた、1人はもうすぐ戦地に行く、私はその時に決めた。
私が自分で稼いだ金でＰＧに来る時は、最初にケイを指名しようと。
その時に戦場から、ここを2人で見ようと。

元来の話好き・聞き好きの私は、完全に素直な自分を意識できるところまで来ていた。
それを言葉に乗せることも、かなりスムーズになってきていた。

私の巣立ちはまだ遠かった、隣にいる可愛い小鳥は、完全に巣立ちの準備が出来ていた。

踏み出せば必ず飛べる、美しい羽を隠して。

飛ぶ空をイメージしていた、前だけを見て・・・。

未来

その輝きの光源に何があるのか、光を追っても無駄なのだろう。
その光は拒絶を示している、外側でなく内側を見ろと。
そうしないと手に入らないと、主張し続ける・・意思を持ち妖しく光る、その内側を。

戦闘前の静寂のフロアーを、ケイと並んで見ていた。
銀の扉を開き女性達が入場し、フロアーの中心に円を作り出した。
私は横を通る赤い影を感じて、背筋に何かが走った。
その背中が腰まで開いた真っ赤なドレスに。
そのモンローウォーク気味の歩き方で、カスミと分かった。
それが体の真実の線だと分かるほどの、タイトな真っ赤なドレス纏い。
前を向いた時に、その胸の開きに暫し見惚れた。
谷間を主張するように、編みタイツの艶かしい足で綺麗に立ち。
アップにした髪が気品さえ演出し、その小さな顔の中心で、目だけが妖しく光ってた。

「カスミ姉さん凄い、それに似合ってる」とケイが呟いた。
『まさに、最終兵器だ』私も感じたままを口にした。
「今夜も、開演しましょう」ユリさんの言葉に「はい！」と全員が声を合わせた。
これが宴の始まりの合図である。

準備が終わると、美冬さんがきて。
「どんな魔法を使ったのかな？」と美冬さんが言った。
『何のことでしょう？』私は想定はしていたが、とぼけた。
「カスミに決まってるでしょ」千秋さんも来ていた。

『怖いですよね、今日のカスミ姉さん』と私は感想を言った。
「だから、どんな魔法で吹っ切らせたの？」と美冬さんが微笑んだ。
『サリーちゃんのパパじゃないんですから、魔法なんて』と笑顔で答えた。
「カスミが言ったんだよ、ドレス着ながら、魔法をかけて貰ったって」と千秋さんも笑ってる。
『ああ、びしっと言ってやりました、お前の力はそんなもんかって』2人を見て。
『負けず嫌いですから、カスミ姉さん』と笑顔で言うと。
「誰がびしっと言ったって」とカスミが来て言った。

『駄目だろう、そんな言葉遣いは』と動揺を隠し、カスミを睨み『影だよ影』と笑顔で言うと。
「がんばります、先生」とウィンクして戻った。
「先生か～、もしかして伝説を残す男なのかもね」美冬が言い、笑いながら2人も戦場に戻った。

「魔法をかけたんだ～」ケイがニヤニヤしながら見ている。
『何もしてませんよ』と笑顔で返した。
幻想の宴はその夜も静かに始まった。
その日も、客の出足は好調で、9時には満席になっていた。
「4番、泥酔気味、チェックよろしく」とサクラさんが来た。
『了解です、旦那さんよかったですね』と言うと。
「ありがとう、責任とってね」微笑んだ。
『なんでしょう？』と驚いて聞くと。
「エミは、あなたが初恋の人になるみたいよ」と笑った。
『それは光栄です、大切にします』と笑顔で返した。
「よろしく」と笑顔のまま戻って行った。
「もてる男は大変ね」とケイが来て笑った。
『ケイ姉さん盗聴器とか、この辺につけてます？』と言うと。

「耳は良いのよ、昔から」と微笑んだ。
『耳、も、でしょ』と笑顔で返すと。
「あら、間違えた。も、だった」と可愛く微笑んだ。

「6番の若者、胸ばかり見る」その声に、私は振向かずに。
『それは仕方ないですね、正直なんだその人』と背中を向けて言った。
「正直なの？」と言ったので振向くと、私は固まった。
カスミがわざと、胸の谷間が見えるように屈んでいたからだ。
『中坊には目の毒なんですけど』と必死で照れる振りをした。
「今日のお礼」と微笑んだ、美しかった。
『次はいつ行きます、待ち遠しいな～お礼が』と笑顔で返した。
「あんたが1番正直者だよ」と笑顔で戻った。

数分後。
「9番のおじさん、胸ばかり見る」どこで聞いてたのか、こいつも地獄耳だな～と思い。
『それはいい人なんだよ、可愛そうにって、思ってくれてるんだから』とやはり背中を見せて言った。
「良い人なの？」私が振向くと蘭が屈んでいた、私はわざと固まった振りを大袈裟にした。
「よし！」そう言って戦場に戻った。
この後、この会話の応用編（美脚編・お尻編・太股編・唇編）と、4回四季にやらされたのである。

しかし楽しい時間はそこまでだった、カズ君が駆け込んで来る時までだった。
カズ君は血相変えて飛びこんで来た。
「徳野さんは？」とケイに聞いた時。
「どうした？」と徳野さんが出てきていた。

「来ました、雨合羽の男が」そう息を整えながら言った、私は楽しい気分は消えていた。
あの目を思いだしていた。

カズ君は、裏階段の立ち番だった、その男は堂々と入ろうとしたらしい。
カズ君は男を制して、揉み合いになった。
もちろん、カズ君は手が出せないので、押し返すだけだった。
「どかんか！」と男は激しく抵抗したらしい。
そこにキャバレーの呼び込みのジュン君が来て、２対１になって男は逃げた。
しかし最悪の捨て台詞を残していた。
「お前の所の女から狙うからな！」そうカズ君に向かって叫んだのだ、徳野さんは厳しい顔を上げて。
「とりあえず、持場に戻れ」とカズ君に指示し、マダムのいるＴＶルームに向かった。
ケイの背中が微かに震えていた。

それから３０分位後にマダムと徳野さんが来た。
「リン、今夜終わってから緊急ミーティング、連絡してくり」とマダムが指示した。
「わかりました」リンさんが答えたが、緊張してるようだった。
「ケイちょっと」と徳野さんがケイを呼んで、私の所に来た。
「ケイは絶対に一人で行動するな」とケイに言って、私を見た。
「ケイを頼む、絶対に離れるな」そう真剣に言って。
「ケイだけはどうしても、外に出らんといかん時があるからな」迫力のある静かな言葉だった。
「どうしようもない時は、躊躇せずやってしまってかまわん、責任は俺が取る」そう言った。
『わかりました、必ずケイからはなれません』私も真剣にそう言っ

た。
幻想の宴を演じる、沢山の女性を見た、守りきれるのだろうかと思っていた。

その日も順調に宴は進行していた、しかしボーイの緊張が伝わり。
女性達も普段と、どこか違った。
「お祭りの参加申込書、持って行こう」とケイが言って、二人で裏階段を下りた。
ケイは階段での話しが怖かったのか、ゆっくりと探るように下りていた。
私はケイに並び、ケイの右手をとって繋いだ。
『離れるなって言われたから、役得・役得』と笑って見せた、ケイも笑顔になった。
階段の下にカズ君がいて、手を繋いでるのを見て。
「ケイにまで手を出すのか！」と笑った。

多分緊張してるケイを、元気付けようと思ったのだろう。
『徳野さんには内緒ですよ、殺されるから』と私が言うと。
「知ってる」とカズ君が笑った。
「1年後は絶対に、そんなことケイにできんから、今だけ楽しんどけ」とカズ君が笑った。
『1年後は刺されますね』と私が返すと。
「数百人のファンに囲まれて、ボコボコやぞ」とカズ君が笑顔で言った。
『それは怖い』と私も笑顔で返した。
ケイは笑っていたが、緊張はとけていないようだった。

2人で、橘通り沿いの雑居ビルにある、自治会事務所に書類を提出した。
「怖くないの？」とケイが急に聞いた。

『俺は』そこまで言ったとき。
「良いことばかりする中学生じゃないんでしょ」と微笑んだ。
『エミの奴、2人の大切な思い出を』と笑顔で返した。
「昨夜、エミちゃん興奮してて。ずっと話してたよ」とニヤで笑った。
『ユリさんも聞いてた？』と聞いた。
「勿論、一番熱心に」と微笑んだ。
『あちゃー、真似したのばれた』と頭をかいた。

「一番熱心に、一番嬉そうだったよ」と言って笑顔で、私を見た。
『2番弟子ですから』と右手でVサインを出した。
「1番弟子は？」とケイが聞いた。
『来年の今頃は、数百人のファンに追い回されてる人』と笑顔で返した。
「私そんなに凄くないよ、普通だもん」とまたケイの、考えタイムに入ったなと思い。
『ケイ、内緒の話だけど』とケイを見た、ケイは頷いた。
『カスミは外見は凄いよね』ケイは頷いた。
『でもね、その外見で悩んでたみたいだよ』ケイは私を見てる。
『内面を見てくれないってね』と私もケイを見た。
『人って色々あるんだよ、よくわからないけど。マダムの言葉が本当の事さ』と前を見て。
握ったケイの手で自分のお腹を押して。ロボットに変わり。

『俺が客で、今PGに来るならば、蘭を除けば』前を見たまま。
『ユリさんでも、カスミでも、四季でもなく。ケイを指名するよ』
手に少し力を入れて。
『ケイといる時が一番安心できるから、自分らしくいれると思うから、それを楽しいと言うんだと思ってる』と前を見て言って、ケイを見なかった。

「ありがとう、約束よ蘭姉さんがいなかったら、私を指名するって」とケイは明るい声で言った。
『7年位、待っててね』と笑顔で言った。
「２４歳か～、なんか２０歳位の子を、すぐ指名しそうだね」と微笑んだ。
『そんときは、赤玉駐車場の約束って言ってね、思い出すから』とケイを見た。
「了解」とケイは笑顔になった。

赤玉駐車場にに並ぶ車の列の前を、手を繋いで通り過ぎると。
【つぼやホルモン】が見えた。
あの日が鮮明に戻ってきた、蘭に感謝していた、そして愛していると実感していた。

夏の夜の繁華街で、唯一ケイと私だけ、夜空に未来を描いていた。

ケイの手の届く未来と、私の漠然とした未来の・・・。

好敵

争うのではない、競うのだ、同じものを目指すなら競い合う。
結果は自らが下す、そこには勝敗というものは、無意味だと書いてある。
競い合った時間が、宝なのだと。

ＰＧの入るビルを、ケイと2人で眺めていた、幼い兄弟のように手を繋いで。
雑居ビルの密林を、冒険者や狩人が徘徊している。
その中に紛れて、あの目が見ているような気がしていた。

ＰＧに戻ると、やはりどこか違う緊張感に包まれていた。
しかしそれを振り払うように、ドレスの女優達は笑顔を振り撒いていた。
１１時を過ぎた頃マダムが来た。
「予約は済んだか」とケイに聞いた。
「入店は終わってます」といつもの様に、即答した。
「じゃあ、今日はもう入れんかい、回転させろ」と指示を出した。
「分かりました」とケイが頷くと、マダムはＴＶルームに帰った。
「リン姉さん回転行きますね」とケイが言うと。
「了解、全組もう良いと思うよ」とリンさんが微笑んだ。

「チャッピー、そこからユリさんと、蘭姉さんかアイ姉さん見える？」と聞いた。
「全員見えるよ」と答えた。
「ユリさんに、こうやってサイン出して」と右手の手のひらを回す動作をした、私がユリさんにすると、微かに頷いた。
『ユリさん頷いたよ』とケイに言うと。

「ありがとう、そこにいてね」と微笑んだ。
『ケイ姉から離れないよ』と笑顔で言うと。
「じゃあ、お泊りに来るんだよね」とフロアーを見ながら笑った。
『優しく教えてね』と笑顔で返すと。
「私も知りません」・「あっ！」と言って俯いて照れた。

『聞こえなかったことでいいです』と笑顔で言うと。
「よかった～」と笑顔で言うので。
『聞こえなかった券は、あと2枚です』と笑うと。
「もう、話さない」と可愛く微笑んだ。
『そう言わないで、カイテンって何？』と聞いた。
「めったに無いけど、お店がお客様を出したいときに、気持ちよく出させる事よ」と笑った。
「これが、最高に難しいのよ」とフロアーを見ている。
「今夜は、蘭姉さんとアイ姉さんとサクラ姉さん、3人揃ってるからいいけど」と言いながら、目はフロアーに集中している。
「これは、プロじゃないと難しいの、四季でさえ回転やると、疲れるって言うぐらい」と言って私を見て。
「本当のレベルが試されるって、ユリさんが言ってた」と可愛く微笑んだ。

「ケイ」とカスミが来て呼んだ。
「なんですか？」とケイが言うと。
「教えて、今はどういう状態？」と真剣な眼差しで聞いた。
「回転と言って、お客を早めに返すための非常手段です」とケイも真剣に。
「ようするに、楽しませながら時間を意識させて、話しが盛り上がってところで、サイン出してチェンジします」と言った。
「わかった、やっぱり頼りになるね、早く来いよ」とカスミが微笑んだ。

「できるだけ、早く行きます、カスミ姉さんの一人舞台になる前に」とケイが微笑んだ。
私はその台詞に驚いていた、ケイの言葉とは思えなかったから。

「うん、その意気だよ」とカスミは本当に嬉しそうに笑って。
「中々のもんかもな」と私を見て戦線復帰した。
「なんで、何も言わないの？」とケイはフロアーを見ながら私に言った。
『ライバルって必要でしょ？』と聞くと。
「今のこの空気だけで、あんな目であれだけの反応を、カスミ姉さんにされたら、私だって燃えるよ」と微かに微笑み。
「だって競えるとしたら、最高の相手だもん」と言った、ケイの横顔は美しく、輝きを増していた。

「来るよ、蘭姉さん。こういう時は一番頼りになるの」とケイが言い、「えっ！」と言った。
『どうしたの？』私はケイに聞いた。
「チェンジのサイン、カスミ姉さんに直接出した」と驚いていた。
「私を見ながら、カスミ姉さんに直接出したの」と言ったケイは目は、静かに深く澄んで来た。
「蘭姉さんも早く来いって、今私にサイン出したんだ」と呟いた。
『蘭姉さんらしい、招待状だね』と私が言うと。
「うん、嬉しい。がんばるよ～」と言ってフロアーを見ていた、ケイの忘れられない横顔だった。
あの時多分ケイは踏み出したのだろう、巣から一歩を。

ケイの格闘を横目に、まずアルバイトの女性が銀の扉に消えた。
「あと、何組？」と後ろから声がした、私はあまりに意外で振向いた。
そこにユリさんが立って微笑んでいた。

「2組です」ケイは前を見たまま答えた。
「さあ、腕の見せどころがくるわ」と私の横に並んで、フロアーを見てた。
「ユリさん、私18にならないと駄目ですか？」とケイが聞いた。
「そんなこと、誰が言ったのかしら？」とユリさんが聞き返した。
「マダムも私も良いことばかりする人間じゃないわ」と言って私に微笑んだ、私は照れて笑った。
「がんばります」とケイがフロアーを見ながら、強く言った。

「カスミちゃんの魔法、私にもお願いしようかしら」とユリさんが私を見た。
『なにもしてませんよ』と返した。
「いいえ、あなたはエミちゃんにも魔法をかけたわ」と薔薇で微笑んだ。
『それは、私がかけられてた魔法を、そのままかけただけです』と笑顔で返した。

「蘭がくるわね？」とユリさんがケイに聞いた。
「はい、多分・・あそこを笑顔で締めます」とケイが前を見て言った。
『ユリさんはなぜ、ここに居るのでしょう？』と私は素朴な質問をした。
「やりにくいでしょ、私がいたら」と薔薇で微笑んだ。
「それに、こんな経験中々できないのよ」と微笑み「四季はよくやってるわ」と呟いた。
「本当ですね」とケイも呟いた。
「でも、カスミ姉さんがやっぱり凄い」とケイは微笑んだ。
その横顔を見ているユリさんは嬉そうだった。

「本当は蘭も下げるといいんだけど、まだ荷が重いでしょうね」と

ユリさんも真剣な眼差しで、フロアーを見ている。
『やっぱり、凄いんだ～』と私は呟いた。
「当然よ、私が産休の時、ずっとＮｏ１で店を引っ張ったのよ」と私に微笑んだ。
『そうなんだ～』私は最後の客を相手する蘭を見ていた。
「今のように毎日、昼と夜働いてたわ」とユリさんも蘭を見ていた。
「蘭は私のヘルプって、皆誤解してるけど、ＰＧのヘルプをしたと、マダムも私も思っているわ」と私を見て。
「辛いことを、乗り越えてる時期だったのに」と微笑んだ。

蘭は最後のお客と談笑している、カスミと2人で・・その瞳を見ていた。

どんなことにも揺るがない、自分を信じる強さを秘めて。

青く燃えていた、全てを溶かすように・・・そして包み込むように。

真価

相手を認め信じると、目で会話ができる。
そこには少しの疑念があっては、伝わらない。
相手を理解するのではない、自分を理解する事が第一条件である。

少し早い終焉に向けて、最終段階に入った４番席。
中年のスーツを着た、サラリーマン２人組みは笑顔を見せている、
青い炎と妖しい光に挟まれて。
私の後ろの狭い空間には、ユリさんとアイさん、サクラさんが揃って静かに見守っている。
その後ろに四季が来て、固唾を呑んで見ている、ラストシーンを。
蘭が突然ピョンと立って、お客２人を舐めるように見ると。
カスミもピョン立って、胸を隠して舐め回すように見た。
蘭は大袈裟なジェスチャーで、自分の胸元を隠したが。
お客が手を横に振って必要ないよ、言うように笑っていた。

お客の２人もピョンを真似て、立ち上がると、笑顔で会計に４人で向かった。
「うん、お見事」とユリさんは呟いて、最後の客の見送りに行った。
アイさんもサクラさんも、嬉しそうに見ていた。
「か～、うかうかしてたら、私ら脇役も貰えんね」と美冬さんが言い。
「本当に凄いのが来たもんだ」と千秋さんが言って、４人で微笑んだ。
「誰かが覚醒させるからね～、真昼間の、青島のど真ん中で、お姫様抱っこするんだから」と千春さんが言った。
『見たな～』と私は振向いて笑った。
「カスミを、そりゃあ目立つわ」と千秋さんが笑い。

「明日、青島に集合」と美冬さんが笑った。
蘭とカスミが店に戻ってきた、蘭が右手を開いて出すと、カスミがそれにタッチした。
蘭は微笑、カスミは本当に嬉しそうに笑っていた、ケイはその姿をじっと見ていた。
女性達が集まり、１０番に座りミーティングを待った、ボーイが戻るのを。
マダムが来たので。
『俺、松さんと代わろうか？』と聞くと。
「お前はケイの担当や、重要な仕事やからおらんといかん」とフロアーを見て言った。
『了解』と言って、片付けをしているケイを手伝った。
ボーイが揃い、アプローチに整列した。
ケイがそこに並んだので、その横に立った。

「仕事終わりにすまん」と徳野さんが経緯を話した、今夜のカズ君の事も。
「店では絶対に守るから、私生活に充分気をつけてくれ」とゆっくりと全員を見回し。
「早急に終わらせるから」と虚空を見つめながら言った。
「ＰＧであることを、悟られないように気を付けてくり」とマダムが言ったときに、手が上がった、蘭だった。
「なんだ、蘭？」マダムが指名した。
蘭は立ち上がった、私は見惚れていた、【その時】が来た表情を。

「確かに怖いです、でも下を向くような事は、したくありません」
青い炎を身に纏い。
「私達はＰＧである事に、誇りを持っています」周りを全て包み。
「だから、逃げているような事だけは、私はしたくない」そう言っ

て、炎で包んだ。

「賛成」とアイさんとサクラさんが即答し、手を上げると。
次々に手が上がり、女性全員が手を上げた、見るとケイも上げていた。
マダムは下を向いていた、嬉しさが溢れたのだろう。
気持ちが伝わっていると確信できて。
マダムは何も言えない、静寂が全てを支配していた。

「ありがとう、とっても嬉しいです」ユリさんが言った。
「でも、細心の注意は忘れないで下さい」と深々と頭を下げた、美しい姿勢のまま。
女性全員が立ち、頭を下げた、分かりましたの返事のかわりに。

「この事件が解決したら、本格的にケイをステージに上げます」ユリさんがケイを見て。
「今のＰＧなら絶対に大丈夫だと、今夜確信しました」と女性達を見た。
「ケイにその【真価】を問いましょう、ステージに立つのか、裏方なのかを」静寂がまた支配した。
その厳しい言葉は、全員に向けて発せられた事を、皆分かっていたからだろう。
ケイはユリさんを見ている、凛とした姿で、目を逸らさずに。

『ケイ姉さん、一言どうぞ』と小声で下を見て言った、【あっ！】と我に返り。
「ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い致します」とケイが深々と頭を下げた。
「よろしくお願いします」と女性達全員で頭を下げた、誰一人笑顔は無かった。

その緊張感の中で、ケイは華やかに咲こうとしていた。
もう目に迷いを探すことさえ、出来なかった。

「では、解散」マダムがやっと言葉を口にした。
「ありがとう、さすが私の会話ロボットね」とケイが微笑んだ。
『ケイ姉さん寝てるから』と笑うと。
「少しウトウトしただけよ」と美しく笑った。
『75点』私はカスミを真似た。
「いつまでも、厳しい先生でいてね」と微笑んだケイを、少し遠くに感じた。

「私はもう、外に出ないからサクラさんを助けてきて」とケイが言ったので。
『了解』と言ってTVルームに向かった。
TVルームには、サクラさんはまだ来てなかった、マダムと松さんがいた。
「蘭はやっぱり勇気があるね、たいしたもんだよ」と松さんが言った。
『俺もそう思います』と正直に言った。
「良い店になったよ」と松さんが言った、マダムは黙って微笑んでいた。

サクラさんが来て、私がエミを抱いた。
「ありがとう、エミはもう寝てる時しか、抱き上げられないかもよ」と笑った。
『おませさんだな〜』とエミを見た、静かに眠る宝物を。
サクラさんを見送り、エレベーターに乗って。
『ありがとう、助かりました』とカズ君にチャリの鍵を返した。
「いつでも貸すかい、言ってくれ」と笑った。
「ケイを頼むな」真剣に「俺達にとってケイは特別なんよ」と言っ

て照れた。
『全力を尽くします』と真顔で返した。
「よろしく」と笑った、本当に優しい男だと思っていた。

TVルームに帰ると、蘭が来ていた。
「かも～ん」と蘭が微笑み手招きをした、「早く魔法をかけなさい」と笑った。
『マハリクマハリタ』と笑顔で言ったら。
「それだったのか」と満開で笑った。
「今日の私の反省点は、セ・ン・セ・イ」と満開で言うから。
『胸のネタに頼り過ぎてるな、もう少し政治経済を頑張るように』と笑顔で言うと。
「やっぱっりばれてた」と小動物の笑顔で舌を出した。
マダムも松さんも笑っていた。

「ユリはまだかの～」帰ってきたケイに、マダムが言った。
「カズさんが上に送ったって、心配してました」とケイが言った。
「迎えにいって来い」マダムがわざと下を見て言った、ケイは笑顔で座った。
『この雰囲気は、俺なのかな?』と言うと。
「いい役やらせてくれるって、良かったね」と蘭が笑った。
「屋上です、ユリさんの一人になりたい時の大切な場所」とケイが言った。
『しかたがないな、ユリもいつまでも甘えん坊で』と言いながら立ち上がり。
『ちょっと、マハリクしてくるよ』と言うと、４人が声を殺して笑っていた。

私は裏階段を屋上に上がった。
屋上はベンチと、壊れかけのテーブルがあるだけの、ただ広いスペ

ースだった。
南風が強く爽やかだった、ユリさんは風が吹いてくる方の、手すりにもたれた風を受けていた。
私服のワンピースから出た、綺麗な脚が、風を押し返すために少し開き。
風に任せた髪が、綺麗に靡いていた、その美しい後ろ姿に暫し見惚れた。

『細心の注意をはらえって、言っておきながら、一人でこんなとこにいたら、駄目じゃないか』と大人っぽく言って隣に立った。
「ごめんなさい」少しトーンが違うので、ユリさんを見た、優しい顔をしていた。
「私、ずっと肩肘はって来たから、私がいないと駄目だって思ってて」前を見ている。
「今夜、皆が成長した姿見たら嬉しくて」私を見て薔薇で微笑んだ。

「一人じゃないって思えたから」と目を潤ませた。
「そうしたら、マリアの事を寂しい思いさせてると、感じて・・・」
ユリさんの目から涙が溢れて、頬に伝った。
私は無意識に抱きしめた、ユリさんを。
『確かにマリアは寂しいかもしれないけど、ユリさんの子供であることを』少し力を入れて。
『喜びに感じています、それだけは確かに感じます』と囁いた。
ユリさんは静かに抱かれていた、我に返った私は、その大それた行動に、自らが焦っていた。
「ありがとう、魔法使いさん」と微笑んで、「泣いてる女をこれからどうするの？」と静かに言った。
私はユリさんのあまりの近さに、焦りながら。
『優しくキスをする』と無理して笑顔を作った。

「正解」そう微笑んで、優しくキスをしてくれた。
たった一度の、浅く短いキスだった。

私には忘れることのできない、大切な思い出。

南風が運ぶ潮の香りと、遥かなる薔薇に抱かれて・・・。

再会？

海からの香りを乗せた、南風が吹いていた、微かな潮の香りも連れてきた。
遥かなる薔薇に抱かれ、私はただその短い時を楽しんでいた。

「マリア抱っこしてね」と薔薇の微笑で囁いた、私はただユリさんを見ていた。
覚めやらぬ想いで。

ＴＶルームに２人で戻ると。
「遅かったですね～」と蘭がニヤニヤしながら言った。
「いい線まで行ったけど、振られちゃった」とユリさんが微笑んだ。
「本当に伝説を作る男だったりして」とマリアを抱き上げた私に蘭が言い、全員が笑っていた。
『そんな大それた事、夜街の歴史に残る程度です』とニヤで返した。
「少なくともＰＧの歴史には残ったわ、現時点でも」とユリさんが微笑むと。
「汚点にしないように」と蘭が満開で言って。
『がんばります』と笑顔で答えた。

ユリさんのマンションで２人と別れて、蘭に肩を貸しながらアパートに帰った。
いつもの様に化粧を落とし、パジャマでベッドに入り。
「ワク、ワク」と笑った。
私は電気を消して、カーテンを開けて定位置に座った。
「今夜は、素敵なクリスマスの話です・・・」
そう言って、豊兄さんと恭子さんの、結婚承諾の話【原点回帰　参照】を話した。

「今夜のは特に素敵だった」と蘭が満開で微笑んだ。
『もう、おやすみ』と私も微笑んだ。
「おやすみ」と言って、蘭は目を閉じた。
私の大好きな時間が来た、ただ蘭だけを何にも邪魔されず、見ているだけの時間が。

翌朝、洗濯機のゴトゴトという音で目が覚めた。
蘭は余裕の表情で、眉毛の手入れをしていた。
『おはよう、今日は余裕だね』と声をかけた。
「今日は靴屋遅出だから、夕方は行けないからね」と鏡を見て言った。
『了解、ビルの下までタクシーで来いよ』と言うと。
「は～い」と明るい声で返事を返した。

「怖くないですか？旦那」と聞くから。
『自分に向けられるのは怖くないけど』蘭を見て。
『蘭や、他の皆や、特に3人娘に向けられると思うと・・怖いよ』と答えた。
「無茶しないでね」と蘭は深い目をして言った。
『約束するよ』と微笑んで返した。
「うん」と蘭も満開で微笑んだ。

蘭が出掛け、私は11時位のバスで出掛けた、ケイがその位には来るからだ。
PGは鍵がかかってた、暇なので1階の倉庫から箒と塵取りを出して。
ケイの真似して掃除をしていた。
「おっ、何か悪さしたな不良少年」と声をかけられた、【魅宴】と言う大きなクラブのママだった。
ユリさんとの挨拶回りの時に、ユリさんが会いに行った人なので、

覚えていた。
『昨夜、店の女の子と、手を繋いで街を歩いたもんで』と笑顔で返した。
「そりゃーまずかったね」と笑った。
和服を着たこの大柄なママを、皆【大ママ】と言って慕っていた。
どこか男っぽい、サバサバした魅力の人だった。

「ケイは、フロアーデビューするの？」そう言って横から、ケイぐらいの少女が出てきて聞いた。
『もうすぐ、みたいですね』と笑顔で返した、その子の不思議な魅力を感じながら。
「私も頑張らないと」とその子が呟くと。
「がんばっておくれ」と大ママが笑顔で言った。
『ケイ姉さんも、強いライバルが多くて大変ですね』と笑顔で、その子を見た。
「私なんて、目立たないから」とケイのように考えた。
『それは女性目線ですよ』と言うと。
「男性目線は？」と聞いた、調子にのるなよと自分に言い聞かせたが、やはり乗った。
『凄く懐かしい感じ、初恋の・・それも告白すら出来なかった、時期のような』少し照れながら。
『心に残る、淡い思い出に触れるような感じです、これは男にはたまらない魅力だと』と言って。
『中坊の私だからよく分かります』そう笑顔で言った。
又調子に乗ったと反省していた。

「チャッピーだったっけ？」と大ママが笑顔で言った。
『はい、可愛いでしょ』と笑顔で返した。
「今んとこ追い出されたら、家にきな」とニッと笑った。
『経験無いから、優しく教えて下さい』とニッで返した。

「いいよ～、手取り足取り教えてやるよ」と笑った。
『追い出されるように、頑張ります』と笑顔で返した、その子は笑って見ていた。

「なんか楽しそうだと思ったら、大ママと絡んでるとは」とマダムがやってきた。
「おはようございます、マダム」と大ママとその子が頭を下げた。
「おはよう、お稼ぎかね」とマダムも微笑んだ。
「おはようございます、大ママ」と小走りに来たのか、ケイが息を切らしていた。
「ケイ、おめでとう、いよいよデビューらしいね」と大ママが笑顔で言った。
「ありがとうございます、がんばります」とケイが微笑んだ。

「ワシはまだ、チト早い気がするんだが、ユリが許可したからの～」とマダムが言った。
「マダムの寂しさは、分かりますわ」と大ママが優しく言った、マダムも笑顔だった。
「ところで、こ奴が何か失礼を？」とマダムが笑った。
「スカウトしてたんですの、マミの勉強係りにいいかと」と笑った。
「それは、困るの～、ケイの会話練習ロボットじゃから」と言い。
「オンボロやけどな」と言った言葉で、４人で笑った。
『ギーガシャン・ギーガシャン』とすると、それを見ながら大ママとマミは、笑顔で帰って行った。
マミと言うなぜか忘れられない、少女との出会いだった。

「関心やな～掃除とは」とマダムが言うので。
『大事なケイを出来るだけ、外に出したくないからね』と笑顔で返した。
「お前、ホストにはなるなよ」とマダムが笑った。

『その道があったか！』と言うと。
「怖いからやめて！」とケイが笑った。

その日は、フロアーの模様替えで忙しく、3時過ぎにやっと一息ついた。
マダムとケイと3人で、カスミのお土産のういろうで休憩していた。
「チャー」と言ってマリアが駆けてきた、私は受けとめて膝に抱いた。
「おはよう」と言ってユリさんが入ってきた。

「マダム、今日大ママと会いました？」ユリさんが座りながら聞いた。
「下で会ったぞ」とマダムが答えた。
「出る前に電話があって、ケイがデビューする時に、無報酬でいいからマミちゃんを、2週間研修させてくれないかと、お願いされたんです」とユリさんが言った。
「何かしたな」とマダムが私を見た。
『何もしてませんよ』と慌てて返事をした。
「あら、やっぱりあなた」とユリさんが微笑んだ。
「何したの？」とケイが突っ込んだ。

「まぁ、事件も終わった後だろうし、マミちゃんの勉強になるでしょうから」とユリさんは微笑み。
「大ママの頼みでもありますから」とマダムを見た。
「ワシは全然かまわんよ」とマダムも笑顔だった。
ケイとは違う挑戦者が来る事が決まった、不思議な魅力の少女が。

その日は、サクラさんが休みで、松さんが遅れるので、私はマリアの相手をしていた。
『マリア、何するの？』と笑顔で言ったら。

「ままこと」と言って、ままごと道具を並べだした。
『チャーは何？』と聞くと、私をジーと見て。
「チャー、ワン」と言って、犬のぬいぐるみをくれた。
『ワンか～』と言いながら遊んでいた。

その頃である、フロントに背の高い男が尋ねて来ていた。
受付にケイがいた、後にケイは初めて、男に見惚れたと話してくれた。
その男は１９０ｃｍ近い長身で、白のパンツに白いシャツに麻のジャケットを羽織り。
日に焼けた、黒い端正な顔を強調するように、髪を綺麗にオールバックにしていた。
「すいません、酒は飲まないので、入れてもらえませんか？」とケイに聞いた、開店前の７時３５分だった。
ケイが返答に困っていると。

「かまわんよ、３番にお通ししろ」と徳野さんが後ろから言った。
「ありがとうございます」と深々と頭を下げて、徳野さんと目が合い、暫く二人は見ていたと、ケイに聞いた。
ケイが３番に通すと、銀の扉からユリさんが出てきて。
３番に歩いてくるところだった。
ＰＧの３番席とは特別な席で、常連でも簡単には座れない、特別席だった。

ユリさんは３番席に行き、深々とお辞儀をして横に座った、その男も立って返礼していた。
「ユリと申します、社会見学かしら？」と笑顔で聞くと。
「家出少年に会いに来ました」と微笑んだ。
「やはり、そうですか・・連れ戻しに？」と聞くと。

「帰るかを決めるのは、奴自身の問題ですから、私は久しぶりに会いたくて来ただけです」と微笑んだ。
ユリさんも薔薇の微笑を返した。

「あら、ごめんなさい、何をお飲みになりますか？」と聞いた。
「牛乳はありますか？」と答えた。
「勿論あります」とオーダーした頃、蘭が店に駆け上がって来た。
「蘭姉さん」ケイは待っていた、「ちょっと」と受付裏に連れて行った。
蘭はその男を見るなり。
「すぐに準備するから、絶対に待たせといて」とケイに頼み、駆け出した。

フロアーに集まりだした、女性の視線を気にする事無く、その男は座っていた。

ただ優しく前だけを見て・・・。

再会？

人生に原作者が存在するのなら、その男を常に波乱の中に導く。
その男自身は、常に平穏を愛する。
しかし何かがそれを許さない、彼の行く場所にそれをしかける。
常に挑戦を要求する、そして必ず答えを出してきたのだ。

幻想の宴は、開演前の静寂に包まれ、女優達も円を描いて、開演のベルを待っていた。
「開店前だったんですね、すいません」その男がユリさんに言った。
「お気になさらないで、マネージャーがＯＫしたんですから」と微笑み。
「少しだけ失礼します」と言って、フロアーの円の所に歩いていく時。
蘭が銀の扉から出てきた。

その男は蘭を見ていた、まるで全てを理解したようだったと、ケイに聞いた。
蘭も戦場へのお辞儀をして、その男を見ていた。
目が合って、その時心が震えたと後に聞いた。
「今夜も開演しましょう」とユリさんが言い、「はい」と全員の返事で開演を迎えた。
「ユリさん」蘭が駆け寄ると。
「行きましょう」とユリさんは微笑んだ。

「蘭と申します」と笑顔で挨拶したら。
「あなたですね、ありがとう」とその男は立って礼を言った。
「分かるんですか？」と驚いて聞くと。
「入ってきた時に、なんとなく分かりました」と微笑んだ。

「まぁ座りましょう、夜は始まったばかりですから」とユリさんに促され、3人で席についた。

「豊さんですね？」と蘭が聞いた。
「そうです、悪い話でも聞かれましたか」と苦笑いした。
「素敵な話ばかりですよ」と蘭も微笑んだ。
「奴は話するのが上手いから」と笑顔で2人を見た。
「ええ、それで助かってます」とユリさんが微笑んだ。
「私も随分助けられました、奴の一瞬にして、場の雰囲気を変える力に」と笑顔で言った。

「今夜は、お時間あるのですか？」とユリさんが聞いた。
「勿論、未成年ですから、後の予定はありません」と2人を見た。
「よかった～、少しお話ししても大丈夫ですね」と蘭が言った。
「いいですけど、奴みたいに面白くないですよ」と笑った。
「いえ、本当に会いたいと思ってました」と蘭が微笑んだ。
幻想のフロアーは何かに支配されていた、薔薇と青い炎ともう1つの何かに。

「ケイ、彼は何者？」とカスミがケイに聞いていた。
「多分、チャッピー関係と思います」とケイが言うと。
「次は私に振って、頼む」とカスミが言った。
「分かりました、チャンスがあれば必ず」とケイも返した。
「ありがとう」とカスミが微笑んだ。
「分かるんですねカスミ姉さん、私もついてみたいと初めて思いました」とケイが言うと。
「そう、匂いが違うよね、圧倒的に」とカスミが微笑んだ。
私は何も知らずに、『ワン』だけの言葉の世界にいた。

「どういうご関係ですか？」ユリさんの問いに。

「弟です、血は繋がりませんが、それ以上の」と静かに言った。
「彼もそう言っていました」と蘭は満開で微笑んだ。
「私は彼の両親にも、姉にも、そして彼自身にも、沢山の借りがあります」そう言って。
「今があるのは、周りの全てがあったからです」と微笑んだ。

「今日は誰かの頼みで、こられたんですか？」と蘭が聞いた。
「彼の母親に、頼まれたと言うか・・俺に任せると手紙をもらいました」と言って蘭を見た。
「素敵ですね」と蘭は微笑んだ。
「彼は今成長の時期です、今感じないといけないと思っています」と豊は微笑んで。
「貴女方2人に会ったので、安心しました」と言った。

「成長は感じないといけませんね」とユリさんが言った。
「そう思います、経験上からも」と少し考えて。
「彼は自分を信じられないで来た、それは私を追ったからです」2人を見て。
「人はそれぞれなのに、それを私は伝えてやれなかった」と静かに語った。
「伝わっていましたよ、あなたの想いは」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「私もそう確信しています」と蘭が満開で微笑んだ。
「ありがとうございます、貴女方に言われると、本当に嬉しいです」と笑顔を見せた。
その時蘭がケイにサインを送った、ＴＶルームを示して、ケイはＯＫのサインで返した。
私はマダムとマリアの相手をしていた。

「チャッピー」とのケイの言葉に。

『ワン』と答えた、マリアにワンしか言ったら駄目だと、命令されていた。
「ご指名よ、3番」とケイに言われ。
『ワン？』と答えた、マリアの命令は私には絶対だった。
私は、マジックミラーのカーテンをそっと開けて見た。
久しぶりに豊兄さんを見て、嬉しかった。

「指名だろ、行ってきな」とのマダムの言葉で、フロアーに向かった。
「いい男やな～」と受付で徳野さんが言った。
『はい』と答えて足が止まった。
『徳野さん、奴がなにかやるのは、今夜かもしれない』と言った。
「なぜだ？」と徳野さんが聞き返した。
『あの人はそういう星の下にいる、常に波乱の中にいるような、上手く言えないけど』と言った。
「ようくわかるよ、いい説明だ」と言い、「再度チェックしとく」と言った。

私が行こうと豊兄さんを見ると、目が合った、豊兄さんは右手で拳を作り私に向けた。
私は小走りに近づき、右手に拳を握り、豊兄さんの拳に当てた。
「ひさしーの、悪ガキ・・元気そうやな」と微笑んだ。
『うん、なんとかやってる』と照れ笑いした。
「座って話せるか？」と豊兄さんが聞くと。
「どうぞ、ごゆっくり、気にしないでいい子を後でつけますから」とユリさんと蘭は席を立った。
蘭が行く時に、優しく私の背中を叩いた。

「話は聞いてる、お袋さんから、お前の今の気持ちを聞きたい？」と鋭い目線で聞いた。

『俺は、今・・・』私は正直な今の気持ちを、蘭に対する想いも含めて、正直に話した。

「お前の気持ちは分かった、やってみろ出来るとこまで」そう言って微笑んだ、私は嬉しかった。

「俺と約束を１つしろ」私を見て「どこからでもいいから、学校には行くと」と優しく言った。

『約束するよ、必ず行く』と私は誓った。

「よし、この話はこれで終わりや」と笑顔になった時に、カスミが私のコーラを持って来た。

「カスミと申します、よろしくお願いします」と輝く笑顔で言うと。

「豊です、よろしく」と立って挨拶をした。

「お迎えですか？」とカスミが微笑むと、その目を豊兄さんは見ながら。

「どうして、そう思われますか？」と聞き返した。

「それが普通かと」お互いに目を逸らさない。

「そうでしょうね、でも先ほどのお２人や、貴女には説明の必要はないと、思っていますが」と目を見たまま言った。

それは見つめ合うと言うより、語り合う沈黙だった。

先にカスミが微笑んだ、そして豊兄さんも微笑を返した。

「こりゃ～帰りたくないわな～」と私を見て豊兄さんが微笑み。

「あんたの幸運に、嫉妬したよ」とカスミが私に言った。

「迷惑になるまえに帰ります」と豊兄さんがカスミに言って。

「ありがとうございます、必ずまたいらして下さい」と美しく微笑んだ。

「ありがとうございました」と徳野さんに深々と頭を下げた。

徳野さんは照れくさそうに、右手を上げた。

「１０００円になります」とリンさんが言って。
「安すぎませんか？」と豊兄さんが言うと。
「未成年割引です、成人したらまたおいで下さい」と笑顔で言った。
「必ず来ます」そう言って支払い、２人でエレベーター前まで来た。
「金はあるか？」と聞かれ。
『大丈夫、バイトだから』と言うと。
「あんまり無茶すんなよ」とエレベーターに乗って、右手を上げた。
『ありがとうございました』と閉まるまで頭を下げた。

しかし演出家はそのシナリオを書いていた、演者には秘密にして書き上げていた。

豊兄さんは、愛妻のお土産に【天津甘栗】を買っていた、夜空を見上げ。
「あと３つ、追加してもらえませんか」と言った。
「いいですけど、少し時間がかかりますよ」と言われた。
「かまいません」と笑顔で返事をしていた。

その時にＰＧの電話が鳴った、それが開演の合図だった。

行き場も、生きる希望も、無くした男が鳴らす・・・開演の響きだった。

波乱

真夏の夜に役者を集めた、演目は演者には知らされない。
その時の判断は、瞬時に要求される、迷ってる暇は与えられない。
頭が下すのではない、心が下すのだ。

電話にはリンさんが出た、私は定位置にケイといた。
徳野さんが電話を代わり、その表情が変わるのを、ケイがその広い感性で感じた。
私はケイの変化で徳野さんを見た、怒りに燃える目を。

その男は地元では、大きな建設会社に勤めていた。
家庭もあり、２人の子供の父親でもあった。
彼の転落は、同僚に誘われた新興宗教に、入信してからである。
入信後人が変わったようになり、妻もなんとか脱会させようとしたが。
聞く耳を持つことはなかった。
誘った同僚の保証人になった時に、妻は彼の元を、子供を連れて去った。
彼はそれでも、新興宗教に助けを求め、気がつくと莫大な借金をかかえていた。
同僚は姿をくらまし、その同僚の元交際相手が、ＰＧの上にある【スナック　ディープラブ】という店に勤めていた。
しかしその彼女は、かなり前に別れていて、行き先など知る由も無かった。
その言葉を信じることさえ出来ぬほど、その男は狂っていたのである。
ただその同僚に、復讐するためだけに生きていたのだ。

徳野さんが受話器を下ろした時、マダムが来た。
「徳なんじゃい？」と激しく言った。
「アイが捕らわれました」と怒りに燃えた目で言った。
その男の要求は、３０分後に徳野さんがディープの女性から聞きだして、下に来いという内容だった。
その情報と、アイさんを交換するとの内容だった。

「マダム俺を首にして下さい」と徳野さんは言った。
「お前がやるんかい？」とマダムが聞いた。
徳野さんは頷いた、ケイの瞳から涙が溢れてきた。
「サツにパクられたらそうする」とマダムは言った。
「３０分後にサツに連絡するかい、時間は少ないと思っとき」そう体を震わせながら、マダムは出て行った。

「後を頼む」と徳野さんがリンさんに言って、ボーイ頭のヒデさんを呼んで、二人で出て行った。
ケイが震えて泣いていた、私はケイを引き寄せて抱きしめた。
ケイは私の胸に、顔を埋めて泣いていた。
２０分後ヒデさんだけ帰ってきた、それをユリさんが呼び止めた。
「何があったの？徳野さんは？」と迫った。
「言えません」とヒデさんも固く口を閉ざした。
ユリさんが振り返りケイを見た、泣いているケイを見て、知ってると気付いたのだ。

「ケイ何があったの？」と強く聞いた、ケイは俯いて答えない。
「ケイ！」その声の強さで、ケイは泣きながら全てを話した。
「何分たったの？」の問いに。
『もうすぐ３０分経ちます』と私が答えた。
ユリさんはそれを聞き、振向くと出口に向かった。

『ケイこれ持っててよ』そう言って、私は大切な銀のバッジを渡した。
ケイが私を見た、私は自然に笑顔が出た。
私は走ってエレベーター前で、ユリさんに追いついた、ユリさんは両手で私の胸を押して。
「絶対に駄目」と叫んだ、私はユリさんの腕を握り。
『マリアの為に行く』と静かに言った。
その言葉で、ユリさんの力が抜け、二人でエレベーターに乗った。
ユリさんは白いドレスに、白いハイヒール、私は大切なコンバースを履いていた。

徳野さんが通りに出た時、一台のセダンが止まっていた。
助手席にアイさんを確認して、男が後部座席を指差したので、それに従った。
「アイ、怪我はないか」優しく言った。
「大丈夫です」とアイさんが答えた。
運転席と助手席の間に、鈍く光るナイフが見え、その先端はアイさんの脇腹に触れていた。

「さぁ話を聞こうか」と運転席の男が言った。
「女を先に放せ」と徳野さんが言うと。
「お前何も分かってないな、俺は復讐を済ませたら死ぬ」冷たく「交渉の余地は無い」そう言った。
徳野さんは考えていた、次の行動を。
しかしナイフとアイさんが、余りに近いため手が出せない。
車のドアは４枚ともロックされ、暑さの為か、３ｃｍほど開いてるだけだった。
「おい！」と運転席の男も興奮してきた。
前を見て考えてると、居酒屋の角から、大きな男が歩いてくるのが見えた。

あの男・・豊。
徳野さんは豊兄さんを見ていた、豊兄さんは視線に気付いた。
自分の入店を許可してくれた男の、緊張した顔を見た。
豊兄さんはスピードを変えず、車の横まで来て、アイさんに突きつけられてるナイフを確認した。
運転席の男も警戒はしていたが、私服の若い豊兄さんを、気にとめなかった。
豊兄さんは、徳野さんを見て微笑んだ。
それで徳野さんは理解し、素手の両手でナイフの刃を掴んだ。

その時、私とユリさんを乗せたエレベーターが着き、西橘通りに出る所だった。
豊兄さんが車の横で、野球のピッチャーのように振りかぶり、肘を後部座席の窓に、叩きつける所だった。
車の窓はその特徴である、四角い断面で粉々に砕けた。
豊兄さんはそこから手を入れ、助手席のロックを開けた。
助手席のドアを開け、「早く出て」とアイさんに言った。
アイさんは車外に飛び出し、ユリさんを見つけて駆け寄った。
運転席の男は一瞬の事に動転したが、ナイフを強引に引き抜き飛び出した。
ユリさんがアイさんを、通りに出て抱きしめた、男が近づいた時に、私がユリさんの前に出た。

「また会ったなガキ、お前からやってやるよ」と男が言ったが、私には恐怖感すらなかった。
何故ならば男の真後ろに、憧れのエースが、微笑みながら立っていたのだ。
「悪ガキ、俺の相手をとるなよな」と豊兄さんが言って、男がナイフを握ってる手首を掴んだ。

その時に遠くから、パトカーのサイレンが近づいてきた。
ナイフを持つ手を掴まれた時、その男は恐怖に震える表情をした。
掴まれた力の強さと、余裕で微笑む豊兄さんを見たからである。
豊兄さんが男の腕を背中にひねり上げると、金属音が路上に響いた。
その落ちたナイフを、豊兄さんが私の方に蹴った、私はそれを拾い上げた。
パトカーのサイレンがかなり近づいてきた。

「お迎えがきたね～」と男に囁き、ユリさんに抱かれる、アイさんの震える背中を見た。
豊兄さんの目が静けさを増した。
《きた！》私はそう思った。
この人は怒りを感じるほど、静けさを増す、それを知っていたからだ。

豊兄さんは男の手首を離し、両肩を持って自分の方に向けた。
「いい歳して女を泣かすなよ」と微笑み、渾身の右ストレートを、男の腹に埋め込んだ。
男はガクッと崩れ、手と膝をつき嘔吐した。
その時に2台のパトカーが現場に到着した。
中年の刑事と若い刑事が走りより、男を確保した。

「ユリ怪我人は？」と中年の刑事が聞いた、その時振向いた私は驚いた。
アイさんを抱くユリさんの周りに、カズ君他ボーイさん、キャバレーの呼び込みさん、酒屋の配達員、などの沢山の男が囲んでいたのだ。
「徳野さんが」ユリさんがそう言った時に。
「大丈夫や！」と徳野さんが右手を上げた、その右手は血に染まっ

ていた。
「徳はナイフなんぞじゃやれん」刑事は笑ってユリさんを見て、豊兄さんに歩み寄った。

「その人は」と慌てて言ったユリさんに。
「心配するなユリ、未成年は担当外や」と刑事が笑った。
「〇〇の〇〇豊やな？」と聞いた。
「はい」豊兄さんは刑事の目を見て、返事をした。
「噂以上やな、ヤクザにはなるなよ」と肩を叩いて、若い刑事に指示を始めた。
「ユリ、明日の１０時に被害者と、徳を出頭させてくり」とユリさんに言った。
「わかりました」とやっとユリさんに微笑が戻った。

私は若い刑事にナイフを渡した、簡単な現場検証があり、私も待っていた。
「終わったら、必ず豊君を連れてきてね」と私はユリさんに言われ。
『了解』と微笑んだ。
ユリさんはアイさんを抱いて、カズ君とエレベーターに消えた。

私は徳野さんと、豊兄さんの現場検証を見ていた。
あんな風に生きてみたいと思いながら。
中年刑事の計らいであろう、豊兄さんは救出の為に、車の窓ガラスを割っただけとなっていた。
先に豊兄さんが終わり、私のところに来た。
「ビビッてたな」と微笑んだ。
『ただ、夢中で』と照れて言うと。
「それがお前の良いとこやな」と笑った。

「ほれ、好きやろ皆で食べろ」と甘栗を3袋渡されて、「じゃぁな」

と言ったので慌てて。
『豊兄さん、店に来てくれって』と声をかけた。
「頼まれたんか？」と振返り言ったとき。
「この世界は礼を尽くすもんや、帰されんで」と徳野さんが笑顔で言った。
「まいったな～、そんなんじゃないのに」と困った顔をしていた。
3人で店に帰った。

徳野さんにマダムが駆け寄った。
「怪我は？」と言うマダムに。
「かすり傷です」と徳野さんは微笑んだ。
そしてマダムは豊兄さんの両手を握り。
「ありがとう、本当にありがとう」と泣いていた。
「お礼を言うのは俺のほうです、悪ガキを拾ってもらって」とマダムの両肩に手を置いて微笑んだ。
「なんか、礼をしたいんじゃが」とマダムは懇願した、豊兄さんは困った顔で考えた。

「それじゃぁ」と豊兄さんが言うと。
「うん、なんね？」とマダムが言った。
「俺、柄にもないんですが、来年世話になった人呼んで、披露宴しようと思ってるんです」と言うと。
「うんうん」とマダムが相槌を打った。
「その2次会をここでさせて下さい、周りのおやじ達、こういう所が好きみたいなんだけど」
「中々来れないみたいで、ここなら大喜びすると思うんです」と微笑んだ、マダムは明るい顔になり。
「全員だして、最高の宴にするかい」と又泣いていた。

「徳野さん、病院に行きましょう」とカズ君が来た。

「ありがとう、本当に助かった」と徳野さんが豊兄さんの、目を見て言った。
「お大事に」と豊兄さんも目を見ていた。
徳野さんが行くと。
「感謝されるのは、俺も苦手なので帰ります」そう言う豊兄さんを、マダムとエレベーターまで送った。
「ありがとう、ありがとう」とアイさんが駆け寄り、泣いていた。
「お世話になりました」とエレベーターに乗り、豊兄さんは頭を下げた。

愛妻へのお土産の、甘栗を1つ持って、不良少年の笑顔のままで。

波乱に愛された男を見送っていた、憧れを抱きながら・・・。

挑戦

その男は、絶対に自分を正当化しない。
そもそもの判断基準が、【正しいか・間違いか】などではない。
その魂が動くかという事である、障害や不遇を抱えた弱者には、圧倒的に優しい。
憧れに値する存在なのである、追い求め続ける存在・・・。

雑居ビルの密林を歩く、家路を急ぐ豊兄さんを、バルコニーから見ていた。
「寂しい？」振向かないでも分かった、薔薇の言葉は。
『大丈夫です、マリアがいるから』そう言って振向いた、ユリさんの薔薇の笑顔があった。
「私の前に立った後姿、素敵だった」と微笑んだ。
『強力な教師達が、教えてくれてますから』と私も笑顔で返した。
「帰りましょう、あなたが今いるべき場所に」そう微笑んで手を出した。
『はい』と手を繋ぎ店に戻った。

定位置に行くと、皆の視線を感じた、笑顔で優しい視線を。
蘭が俯き歩いた来た、花道から飛び降り、客から見えない位置まで来て、静かに私に抱きついた。
『終わったよ』と耳元に囁き、背中に手を回した。
「ばか、心配させて」と微笑んだ。
『ごめんね』と私も笑顔で返した。
「ありがとう、ぜーんぶありがとう」と満開で微笑んで。
「こうしてたいけど、泣くと困るから行って来るね」と言って戦場に戻った。

「おい！」そう呼ばれて振向くと、カズ君に抱きしめられた。
「お前はたいした奴だよ」と笑顔で胸を優しく叩いた。
『何もしてませんよ』と私も照れた。
「伝説には残ったぞ」と笑顔で言って、持場に戻った。

「はい」とケイが言って、銀のバッジを返してくれた。
「もう、2度と預からないからね」と微笑んで。
抱きしめてくれた、ケイのこの行為は、本当に嬉しかった。

「よしっ、今夜も稼ぐよ～」とマダムが言い。
「今夜も終了後、緊急ミーティング」とリンさんに指示し。
「了解です」とリンさんも笑顔で返した。
「ケイ、今夜も回転かけるが、早めに蘭を下げろ」とケイに言った。
「はい」とケイも微笑んだ。
「最後の一組は、四季とカスミに任せろ・・よく見とけよ」とマダムも笑った。
「はい」ケイにもその力が戻ってきた。

私が定位置でタバコをばらしていると。
「4番、怖い人が下に来いって言う」と後ろから声がした。
『やめとけって伝えて、私には全てを投げ出す、専属がいるからって』と言って振向いた。
蘭の満開の笑顔があった。
「言ってくる～」と微笑んで戦場に戻った。

数分後。
「6番、怖い人が、私に胸見せろって言う」と言った、また始まったかと思いながら。
『やめとけって伝えて、これはお礼でしか、見せられないからって』と言って振向いた。

カスミが輝きながら笑っていた。
「言ってくる～」と微笑んで戦場に戻った。
四季を探すと、全員ニヤニヤしていた、当然のようにこの後４篇させられた。

「そろそろいいですね？」とケイがリンさんに聞いた。
「ＯＫでしょう」とリンさんが返事した。
「ユリさんにサインお願い」と私をケイが見た。
『了解』と言ってユリさんを見た、ユリさんはサインに頷いた。

「ケイ」２人の若いバイトの女性が来た。
「なんですか？」とケイが聞いた。
「お願いだから、私達２人、できるだけ引っ張って」と真剣に頼んだ。
「最後２組が勝負です、お願いします」とケイがフロアーを見て言った。
「必ずやって見せるよ」と２人は戦場に戻った。

ユメとウミ２人の本気の挑戦の幕開けだった、そのまた違う感性が、花開こうとしていた。
『ケイ姉さん楽しそうですね』と言うと。
「なんか楽しいの、もうなにも怖くないから」と微笑んだ顔を見て思っていた。
その顔は、原野に強く咲く一輪の花のように、強い意思を示していた。

突然私は後ろから抱かれた、アイさんだった。
「ありがとう」と囁いた、『大丈夫ですか？』と私も囁いた。
「もう平気よ」と体を離し、癒しを発散させて微笑んだ。
ユリさんとアイさんが見守る、幻想のフロアーは残り３組になった。

3組目を蘭が笑顔で締め私の所に来て、満開で腕を組んだ。
『甘えん坊』と言うと。
「我慢してたんだから、許してね」と満開で微笑んだ。
「ユメちゃんとウミちゃん、やる気になったわ」とユリさんがアイさんに言った。
「元々良い物を、持ってますから」とアイさんも嬉しそうに、フロアーを見ていた。
「蘭がいないこの状況が、本当の勝負よ・・彼女達の」とユリさんは前を見て言った、ケイに聞こえるように。

ケイは集中している、サインを繋ぎながら。
千春・千夏、ユメ・ウミの2コンビ4人で、1組を先に笑顔で締めた。
「うん、うん」とユリさんが微笑んだ。
最後の席は、カスミと千秋と美冬の3人が、3人の年配客を囲んでいる。
「元ラガーマンをどう締めるかな、カスミちゃん」と私と腕を組みながら、蘭が言った。

カスミが立って、テーブルの上に右手を出した。
その上にお客と千秋・美冬が交互に手を重ね。
「おう!」と言って皆で手を上げて、笑顔で会計に向かった。
「やるね〜」と言った蘭も、ユリさんもアイさんも嬉しそうだった。

「早くかけてよ、カスミにかけた魔法」と蘭が私に微笑んだ。
「私もお願いするわ」とユリさんが薔薇で微笑み。
「当然、私も」とアイさんも微笑んで私を見た。
『なにもしていませんよ』と私も笑顔で返した。

カスミたちが帰ってくると。
カスミと四季と、ユメ・ウミ7人で【イェ～イ】と言いながら、タッチし合っていた、楽しそうに。
ケイはそれを見ていた、【もうすぐ行きます】とその横顔は言っていた。
ＰＧ伝説の夏が幕開けをした、その感覚で競い合う楽しい夏が。

昨夜と同じ位置で全員が揃った、ただ一人で病院に行った、徳野さんがいなかった。
「解決した、色々心配かけた・・・」マダムは事の経緯を話した、豊兄さんとの約束も。
話しが終わると、静寂の中拍手が沸き起こった、カーテンコールのように。

「チャッピー、お前にもなんかお礼をせんといかん、なんかあるか？」とマダムが私を見た、又静寂が戻った。
『1ついいですか？』と言うと、「なんだ？」とマダムが言った。
『来週の週末、3人娘を、花火大会に連れて行きたいんですけど』と言うと、マダムはニッと笑い。
「最高の場所をワシが用意する、ケイも一緒にな」と笑った。

「ユリなんかあるか？」とマダムが聞いた。
「はい」とユリさんが言って、ケイを見た。
「ケイの源氏名を命名したいと思います」と言った、ケイは驚いてユリさんを見た。
「ケイの会話練習ロボットに、お願いしようと思います」と言って私を全員が見た。
『えっ！』と私は固まった。
ケイが私のお腹のスイッチを押して微笑んだ、その笑顔で決めていた。

『遥かなる高原に咲く強く優しい一輪の花』私はケイを見て。
『ケイは、ハルカだね』と笑顔で言うと。
「ありがとう、素敵」と可愛く微笑んだ。
ユリさんが薔薇で微笑み拍手をして、皆が拍手をした。
待ちわびた挑戦者を歓迎するように。
「今からが、勝負の季節だかい、体調に気をつけて頑張ってくり、解散」とマダムが締めた。

TVルームに帰っていると。
「ありがとう、エミちゃんから聞いてたわ、ミサちゃんのために」とユリさんに声をかけられた。
『違いますよ、自分が見たいだけです』と笑顔で振向いた。
「豊ならこうする、豊ならこう言う。あなたの基本はそれね」と蘭が言い、「素敵な先生ね」と満開で微笑んだ、ユリさんも薔薇で微笑んでいた。

TVルームは松さんがいて、マリアは寝ていた。
「ありがとう、今夜の事もケイの名前も」と私の手を取り言った。
『どうですかね?』と聞いてみた。
「最高だよハルカ、ケイにぴったりや」と笑った。
私は嬉しくて笑顔で返した。

静かに眠るマリアの、可愛い癖毛を優しく触りながら、その天使の寝顔を見ていた。

《マリア守ってくれて、ありがとう》と心で話した。

《あい》と天使の返事が確かに聞こえた、私の内側に・・・。

資格

その場所は、年齢という資格しか問わない、学歴も家柄も全く関係が無い。
確かに暗い影が常に付きまとう、しかし恐れることはない、自分を偽らねばいいのだ。
いつの時代も新しい感性で、新しい価値観で挑んでくる・・女の世界。

平穏という安心感が、全てを笑顔にしていた、そして何かが動き出していた。
松さんと2人で、マリアの寝息を聞きながら話していた。
マダムがユメとウミとを連れて入ってきた。
「話はなんかね？」マダムが口火を切った。
「マダムお願いです、私達2人フルタイムでやらせて下さい」とウミが言った。
「心境の変化かの？」とマダムが聞いた。
「はい」と2人が答えた、真剣だった。

その時ユリさんと蘭とケイが入ってきた、状況を見て静かに座った。
「言ってみい、なぜ変化したかを、ユメが代表で」とマダムは優しく言った。
後で聞いた話しでは、ウミよりユメの方が表現力が、劣るからだとマダムが言った。
「私達は知っての通り、不良少女上がりです」ユメの目は必死だった、伝えようと。
「確かに今まで流して仕事してました」一呼吸いれて。
「でも昨夜の回転を見てて、四季やカスミを見てて」・・「悔しかった」マダムを見たまま。

「あんな笑顔で笑えない自分が、そして帰ってウミと話しました・・なぜかって？」言葉を必死に探して。
「今までも今も、全力で何かに挑戦してないからって思いました」・・「挑戦したいんです、あの笑顔に」とマダムを見る2人の、目は潤んでいた。
「そして、ケイいえハルカが来るのを感じて」・・「私達はいつもハルカに後ろめたかったんです」皆静かに聞いていた、その想いを。
「その運命と闘う強さを見て、私達のしてきた事を感じて」
「カスミ・四季・ハルカと同じ笑顔で競ってみたいそう思ったんです」とユメは強く言った、マダムは優しく聞いていた。

「条件は2つや」とマダムが2人を見た。
「はい」2人とも、真剣な返事だった。
「一度実家に帰り、母親に今までの事を侘びを入れる事」マダムも真剣だ。
「はい」2人は即答した。
「今、男と暮らしてるなら。同棲は一度やめる事。できるか？」厳しい表情だった。
「はい、やります」意思を伝える言葉だった。

「ユリいいかの？」とマダムが言った。
「もちろん、頑張ってね」とユリさんも優しく言った。
「ありがとうございます」と2人で頭を下げて泣いていた。

「じゃあ、私のヘルプやってもらっていいですか？」と蘭がユリさんに言った、ユメとウミが蘭を見た。
「蘭が、やってくれるの？」とユリさんも驚いて、蘭を見た。
「私でよければね」と蘭が2人を見て、満開で微笑んだ。
「蘭姉さん、がんばります」と2人が頭を下げた、震えていた喜びで。

「よろしく、がんばろうね」と蘭が優しく見ていた。
蘭はそれまで専属ヘルプは取らなかった、初の専属ヘルプを指名したのだ。2人の想いを信じて。

「ハルカ、ユリさんのヘルプ」その言葉に、ケイがハッとして蘭を見た。
「カスミと2人で頼めるかな？」と蘭が聞いた。
「蘭姉さん」とケイは何も言えなかった。
「よろしくね、ハルカ」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「がんばります」と頭を下げたケイは、ハルカになっていた。
「条件の件、お前達がやると信じる」とマダムが笑顔で言い。
「明日からがんばってくれ」と微笑んだ。
「必ず、期待に応えます」と2人は泣いていた。
2人が深々と頭を下げて出て行った。

「蘭姉さん、ありがとうございます」とハルカが頭を下げた。
「お礼は、仕事で見せてね」と蘭は笑顔で言った。
「ハルカなら大丈夫よね、ダ～リン」と満開笑顔で私に振った。
『ハルカ、君が伝説になれば。、命名した俺も、伝説になるから』とハルカを見て。
『たのむ！』と深々と頭を下げた、5人の笑い声が聞こえた。

私のお腹をハルカが押した、私はハルカを見た。
「恥ずかしいから、ロボットに言います」と可愛く微笑んで。
「遥かなる高原に強く優しく咲く一輪の花」私を見て。
「本当に嬉しかった、大切に使います。ありがとう」とケイが微笑んだ。
『ロ・ク・オ・ン・シ・マ・シ・タ』とロボット語で答えた、皆の笑顔を感じながら。
「よし、今夜まで乗り合わせで帰るぞ」そうマダムが言い、私はマ

リアを抱き上げた。

『俺は明日からボーイさん帰って来るから、何しよう?』とマダムに聞いた。

「お前があそこにおらんと」と私を見て「全体の動きが悪くなるから、今まで通りや」と笑った。

『やはり俺頼りか〜』とニヤで言うと。

「そうよ」とユリさんが薔薇で微笑んだ。。

『やめて下さい、ユリさんに言われると、本気で照れます』と言うと薔薇の笑顔で見ていた。

タクシーに乗ると。

「蘭、本当にありがとう」とユリさんが言った。

「ユリさんが私にくれたバトンを、次のランナーに渡しただけです」と蘭は満開で微笑んだ。

「あなたがいてくれて、本当に良かった」ユリさんの、心からの言葉だった。

「それは私の方です、ユリさんに出会えて本当に良かった」蘭も心の言葉で返した。

優しい時間が流れていた。

私はいつものように、マリアを見ていた、大切な天使を。

ユリさんとマリアにさよならすると、蘭が肩に乗ってきた。

「本当に怖かったんだぞ」と囁いた。

『ごめん、夢中で』と囁いて返した。

「でも、本当に嬉しかった」と言って蘭が目を閉じた。

アパートに帰り、蘭が化粧を落としベッドに入った。

疲れてるように見えた。

『今夜は寝なさい、見てるから』と笑顔で言うと。

「ありがとう、どこにも行かないでね」と静かな目で言った。
『俺はどこにも行かないよ、蘭がそれを望まないかぎり』と優しく言った。
「おやすみ」と微笑んで目を閉じた。
私は大好きな時間を楽しんでいた、この自分の心に忠実に生きる、愛する存在を見ていた。

次の日は、蘭がバタバタ出て行く音で目が覚めた、慌てて見送りに出た。
「行ってくるね、ダ～リン」と満開で微笑んだ。
『気をつけるんだよ、ハニ～』と笑顔で答えた。
蘭は手を振って出掛けた、私はケンメリを見送って。
朝食を食べ、食器を洗い掃除機をかけた。

１１時には蘭のチャリで出掛けた。
ＰＧに着くと鍵が開いていた、ＴＶルームにマダムと3人娘がいた。
私の顔を見るとミサが駆けてきた、私はミサを抱き上げた。
「チャッピー大好き、花火大会ありがとう」と右の頬にキスをしてくれた。
『どういてしまして』と笑った。

エミが来ないので、おませめと思いながら。
『エミ、こっち』と左の頬をエミにだした。
「もう」と言いながら歩み寄り、笑顔でキスしてくれた。
『お父さん、良かったね』と笑顔で言うと。
「うん」と少女の明るい笑顔になった。
マリアを抱いて。
『マリアもおはよ』と笑顔で言うと。
「おぱいよ」とマリア語で笑った。

『花火大会まであと一週間いい子にしてるように』と言ったら。
「は～い」とエミとミサが手を挙げて、それを見て「あい」とマリアも手を挙げた。
『じゃあ、お仕事してきま～す』と言って、マダムにお願いして。
フロアーにハルカを探しに行った。

『ハルカ姉さんおはよう』と声をかけた。
「おはよう、まだ慣れないな～」と微笑んだ。
『やっぱり気にいらなかったんだ』と泣き真似をした。
「気にいってるから、泣かないの」と笑った。
『何からやります？』と笑顔で聞くと。
「割り箸入れの印刷出来てるから、それだけ貰ってきて、午前中はそれだけよ」と笑顔で言った。
『了解しました』と言って出掛けた。

割り箸入れを受け取り、帰ろうとして通りにでた。
目の前を重そうなバッグを、両手に抱えたマミが通った。
私は走って追いついて、バッグに手をかけ。
『おはようございます、マミ姉さん』と声をかけた。
「びっくりした～、いいの？」と可愛く微笑んだ。
『一応男ですから』と笑顔で返した。

「ねぇ、お願いもう1回姉さんて言って」と笑った。
『マミ姉さん』と笑顔で言った。
「いいな～響きが」と嬉しそうに笑った。
『ハルカ姉さんと、同じですね』とニヤで言うと。
「ハルカ？」と不思議そうに聞いた、
『ケイ改めハルカです』と笑顔で言った。
「源氏名！ついたんだ～いいな～」と笑顔で言った。
『ハルカどう思います？』と聞いてみた。

「素敵じゃない、ケイのイメージだし」と微笑んだ、私はその言葉を一人で喜んでいた。

「うちの娘にも手をだすのか」と言われ、振向くと大ママが笑顔で立っていた。

『おはようございます大ママ』と頭を下げて。

『どうやって手を繋ごうかと考えていたのに』と笑顔を返した。

「まぁ、昨日の活躍があるから許すよ」と大ママが笑った。

『何もできませんでした』と真顔で言うと。

「ユリの前に立ってユリを守ろうとした事実だけでも、立派なもんさ」と笑った。

「口では色々言う奴は多いが、その時にできる奴は中々いないもんさ。」と私に並び歩きながら。

「それにケイの名前には、私は凄く感動してるんだよ」と微笑んだ。

「源氏名にそんなに想いが入ったものは、珍しいんだよ」と私を見て。

「ハルカは幸せさ」と大ママが微笑んだ。

『ありがとうございます』と言うと。

「チャッピーがつけたの！」とマミが驚いた。

『専用ロボットですから』と照れて笑った。

クラブのビルの前で大ママに荷物を渡し、帰ろうとすると。

「マミをよろしくな」と大ママが言って。

「よろしくお願いします」とマミが頭を下げるので。

『よろしくお願いします、マミ姉さん』と言って頭を下げた。

「素敵な響き」とマミが微笑んだ。

挑戦者達が集まってきた、違う感性と違う価値観で、競える相手がいる喜びを感じて。

後悔も反省も、辛い過去も全てを背負って、資格を問われない競技場に。

伝説の８月が、開始の合図を待っていた。

西橘通りから見える小さな青空に、入道雲が流れていた・・・。

転生

外面は内面を映し出す、外をどんなに飾ってもすぐに限界がくる。
内側を飾れと言う、心に確かな宝石を持てと・・・そうすると瞳が輝きを増す。
それに勝る、装飾は存在しないと。

入道雲が見守る道を歩いた、家を出て一週間経っていた。
ＴＶルームに帰ると、ユリさんが帰ってきていた。
ハルカも来て、３人娘のお絵かきを見ていた。

「おかえり、マミちゃん楽しそうだったわね」とユリさんが微笑んだ。
『見てました』と照れた。
「走って追いつく所から、タクシー止めてアイと徳野さんと」と薔薇で笑った。
『やばいな～』と頭をかくと。
「やばいことしたんだ？」とハルカが笑顔で突っ込んだ。
「大ママが路上で、あんなに笑うのを始めて見たわ」とユリさんが微笑んだ。
『ハルカの悪口を少々』と笑顔で言ったら。
「なんですって～」と笑顔で怒った。

「不思議な奴だってあの徳野さんが関心してたわ」とユリさんも楽しそうに。
『微妙な感じですけど』と言ったら。
「勿論、褒め言葉よ」ユリさんが薔薇で微笑んだ。
「お前、もうこの辺じゃ大変な事になってるぞ」とマダムがニッと笑って、。

「昨夜のあれと、大ママとそんな事をしたら」と笑った。
『大ママって凄いんだね』と暢気に言ったら。
「幸せな奴じゃわい」とマダムが笑って、ユリさんとハルカも笑った。

お昼ご飯を皆で食べてると。
「昨日の刑事さんがね、豊君に感謝状でもって電話したらね」ユリさんが楽しそうに。
「まだ悪いこともしたいので、辞退しますて言ったそうよ」と微笑んだ。
「一課の刑事に向かって言いよったって、刑事さん嬉しそうに言ってたわ」ユリさんも嬉しそうに。
「本物だって言ってね」と薔薇の笑顔を見せた。
『遠いな～』と呟くと、「凄いな～」とハルカも呟いた。

『ハルカ姉さんと同じ17歳だよ』と言うと。
「えっ！」と驚き、「私もがんばろう」と微笑んだ。
「ハルカ、今夜から正装の制服着なさい。フロアーサービスを始めるわよ」とユリさんが言った。
「分かりました」ハルカは少し緊張したように言った。
『サイン出すから見落とすなよ』とハルカを見て笑った。
「私がいないと何も出来ないくせに」と舌を出した、ユリさんもマダムも笑っていた。

夕方蘭から靴屋が土曜で忙しく、遅れると連絡があった。
7時過ぎにカスミが私の指定席の所に来て。
「蘭姉さんは？」と笑顔で聞いた、美しく輝いていた。
『今夜は少し遅れるらしいよ』と笑顔で返した。
「そうなの」とがっかりした様子だった。

『今夜からユリさんのヘルプだろ、気合をいれなさい』と笑顔で言った。
「そうなのよ～、嬉しくて蘭姉さんにお礼言おうと思って」と微笑んだ。
『ハルカには仕事で見せてって言ったよ』と笑顔で言うと。
「うし、気合入れます。先生」と妖しい瞳で微笑んだ。
『うし』と笑顔で返した。

「おはよう、今夜からは全て私に繋いでね」とリンさんが笑顔で言った。
『俺に言ってくるのは重要じゃないでしょう』と答えると。
「逆よ、ボーイさんには言いにくい事が重要なの」と微笑んだ。
『了解、がんばります』と笑顔で返した。
いつもより早く女性が集まり始め、１０番席に座った。
ユメもウミも少し緊張気味に座った。
ユリさんとマダムが来て、ミーティングが始まった。
ハルカは、ボーイと同じデザインの制服を着て座った。

「皆さんに報告があります」とユリさんが切りだした。
「私も少し反省しました、どこかで自分で線を引いていました」全員静かに聞いている。
「少し自分の価値観を押し付けてたところがありました」静寂の中。

「これからは皆さんに、自分の感性でやって欲しいと思います。
昨夜、蘭の予想もしない提案で気付きました。
競ってほしいと、同じ時間拘束され仕事をするのなら。
競いなさい、確かに指名とかも大切ですがもっと深い部分で競い合いなさい。
そして楽しんで下さいその大切な若い季節を・・どうでしょう？」

最後は全員を見て、薔薇で微笑んだ、全員の笑顔があった。
「はい」と若手全員で返事をした。
「それでは、最初のシステムを発表します」全員真剣だ。
「まず、蘭本人の指名により、ユメちゃんとウミちゃんが蘭のヘルプ」そう言うと。
「はい」と2人が返事を返した。

「当面、ハルカが一週間フロアーサービスをするので、私とアイとサクラ3人のヘルプを、四季でやってもらえる？」と薔薇で微笑んだ。
「はい」と四季が嬉しそうに、返事を返した。
「少し大変だろうけど、四季のコンビネーションの見せ場ですよ」と微笑んだ。
「がんばります」と4人が目を輝かせて言った。
「そして、私の専属ヘルプをカスミちゃんお願い」と言うと、その妖しい光を放ちながら。
「はい、がんばります」と輝きながら答えた。

「本人がいないので話しますが、蘭が私のヘルプをしたと思ってる人がいたら。
それは誤解です、私がマリアを産む前後8ヶ月間。
蘭とアイで引っ張りました、サクラもいないその時期に。
蘭はPGのヘルプです、その時21歳でした。
昼夜働いて、No1を取りました。
挑みなさい、その姿」

ユリさんの言葉は熱を帯びて、強くなってきた、そして最後に。

「挑みなさい自分自身に、そして全てを受け入れて、素敵な女性になって下さい」

静寂が返事だった、私は蘭の凄さを感じていた。
アイさんもサクラさんも、嬉しそうだった。
「他のバイトの皆さんの中にも、挑戦したい人がいれば行動で示して下さい」静かに。
「今夜、今からＰＧは生まれ変わります。検討を祈ります」と深々と頭を下げた。
女性全員起立して返礼した。
カスミと四季とユメ・ウミ、そしてハルカの目の輝きが確実に増していた。

「久しぶりにユリのあんな顔見たわ」そうリンさんが呟いた。
『なんか、嬉しそうでしたね』と笑顔で言うと。
「うん、嬉しいのよ絶対ね」と微笑んで受付に戻った。
開店準備が始まり、私もタバコを用意していた。

「たのむで～フロアーマネージャー」とカズ君が来た。
『よろしくお願いします』と笑顔で返した。
「しかし、大変だぜ若手達」とニヤで笑った。
『やっぱり？』と笑顔で聞くと。
「そりゃ、トップ４のお客っていったら重要人物ばかりだから」と微笑み。
「だから、今までお互いにヘルプしていたんだから」とフロアーを見た。
『そうなんですね』と私はその時、事の大きさを知った。
「どや、蘭姉さんと同棲してる自分の凄さを感じたか？」と笑ったので。
『俺、やっぱり凄いですね～』と笑って返した。
「そういうとこ好きや～」と笑顔で持場に戻った。

準備も終わり、いつもの静寂の中女性達が集まりはじめた、蘭は間に合っていた。
ハルカも初めて、その輪の中の一員になっていた。
「今夜も開演しましょう」の掛け声に「はい」のブザーで答えた。

土曜日のその日は、開演３０分で満員になった。
最高の舞台で、新しいＰＧがスタートした。
四季の動きがまずは目立った、そのコンビネーションは、もう完成の域に達していた。
重要人物を先についた方が、その嗜好をサインで伝達できるのである。
なんと、重要人物に対して４回チェンジを見せつけ、笑顔を作った。
飽きさせないそのテクニックに私は関心していた。

そして予想外だったのが、ユメ・ウミの独自のコンビ技。
不良少女の片鱗すら見せずに、少女を演じたり淑女になったり、一瞬にして２人がシンクロする。
蘭も１時間過ぎた頃には安心したのか、私の所に来た。

「ダ～リン今夜暇ね～」と満開で微笑んだ。
『満席ですけど～』と笑顔で言ったら。
「出番なくて、何か食べに行こうか」とニッと笑った。
『凄いねユメ・ウミコンビ』と笑顔で言うと。
「うん、元々凄いのよ」と微笑んだ。
『ハニ～も頑張れよ～』とニヤで言うと。
「はい、ダ～リン」と言って戻って行った。
そしてカスミが、その力を見せ付ける時間が迫っていた。

若い季節を楽しめと言った、ユリさんの言葉を思い出しながら見ていた。

競い合いそして楽しめと・・・

自分自身に挑み、全てを受け入れろと言った言葉が、いつまでも響いていた・・・。

帝王

その時に楽しいと実感できるのは、まだ最高ではない。
本当の楽しさとは、集中力の中にある、全てを出し切ろうとするその時にある。
後で思うのだ楽しかったと、大切な時だったと。

蘭の後姿を見送っていると、カズ君が来た。
「今から3番に入る客、見てろよ現役の帝王や、やっぱ嗅覚があるんやね～」と笑顔で言った。
私は3番に笑顔で歩いていく、４０代後半であろう、スーツを着た男を見た。
ハルカの案内で歩いていると、何人かの客が挨拶をした、その男も丁寧に頭を下げた。

『指名は当然ユリさん？』とカズ君に聞いてみた。
「あの人は指名はしない、だが指名料は払う」私を見て。
「自分でユリさんと誰にって言ってな」と微笑んだ。
「うちじゃぁ、トップ４しか受け取ってない、ボーイも酒を運ぶことしかできないんだ」と笑顔で私を見た。
『何者？』と私は真顔で聞いた。
「弁護士、自分で悪徳と名乗る面白い人」とカズ君が言った。
「ユリさん今指名ついたばかりやから、蘭姉さんが行くよ、面白いから見とけよ」と笑いながら戻って行った。

私が視線を戻すと、3番に蘭が挨拶するところだった。
若手の意識がそこに集中してるのを感じた、自分の担当のお客の笑顔を作りながら。
3番の帝王は楽しそうに、蘭と談笑してる。

その時蘭が入口を見た、自分の指名客を見送りに行くカスミを見た。
蘭が突然立ち上がり、あの手で銃を作って帝王に向けた。
帝王は笑いながら両手を上げた。
蘭は不敵に微笑、入口を見た銃はそのままに。
笑顔で店に戻ったカスミにサインを送った。【来い！】と。

その時のカスミは凄かった、全身から何かが発散し、飛び散るのが見えるようだった。
その圧倒的破壊力を見せ付ける容姿が、発光していた眩しいほどに。
帝王もカスミを笑顔で見ていた。
カスミが帝王と蘭の間に入り、帝王を守るように両手を広げた。
挨拶もせず、客に背中を向けるとは、絶対に許されない事である。
しかしこの2人はやってのけた、その常識を逆手に取って、帝王の本当の笑顔を引き出したのだ。
そして蘭が【バン】感じで腕を振ると、カスミが帝王を向き。
左手で胸を押えて、右手でドレスの裾を摘み、西洋の貴族のように挨拶をした。
帝王はそれは楽しそうに拍手をした。
帝王は立ち上がり、カスミを自分の横に招き入れた。

帝王が蘭に何か言うと、蘭は不敵な笑みで、又銃を作り帝王に【バン】をした。
帝王は胸を押さえ3番席に倒れこんだ。
その胸にすがりつき、カスミが泣きまねをした。
蘭は帝王を見ながら、両手の銃を【フッ】と煙を吹くようにし、て笑顔で3番を後にした。
PGの最も高い位置にある3番劇場は、第一幕を帝王の笑顔で下ろした。

客からは見えないが、女性達は感じていた。

最高峰にいる蘭とそれに、今挑み始めたカスミを。
燃え上がるような何かが、四季やユメ・ウミから出ているようだった。
ハルカは3番の後ろの最高の席で、立ち尽くして見ていた。
登る山の高さに胸を躍らせていた。

「蘭は凄い奴や」私が振向くとマダムが立っていた。
「やってのけた、打合せも何も無しに」と笑い。
「その難問に最高の答えを出した、カスミも凄いの～」とマダムは私を見た。
「PGはどうなって行くのか、楽しみになってきたわい」と私に笑いかけ、TVルームに引き上げた。
3番のカスミと帝王は楽しそうに談笑している。

蘭が控え室に戻るのに私の横に来た。
『お見事』と蘭に笑顔で言うと、満開の笑顔でウィンクをして銀の扉に消えた。
燃え上がる四季とユメ・ウミがその蘭の背中を見ていた。
挑むのにこれ以上は無い、最高の美しい後姿を。
帝王の席はカスミとユリさんが交代する所だった。
ユリさんが座るとそこはまるで、帝王と女王が鎮座する特別な場所のようになり。
《やはり別格》と私は思って見ていた。

1時間程が経ったころ、私に衝撃の話しが来た。
「帝王があなたに会いたいって、昨夜のヒーローの少年をご指名よ」とハルカが微笑んだ。
私は一瞬固まり、しかし考えた応用問題を。
『OK願ってもない相手だ』とハルカに無理して微笑むと。

「勉強させてもらいます」とハルカがニッと微笑んだ。
私は棚の大きな救急箱を持って、裏を通り3番に向かった。
女性の意識の視線を感じながら。
3番席の横で膝をつき、帝王を間近で見た。
帝王は笑顔で私を見た、圧倒的な何かに押されながら。

「わかりますか？ここはどこですか？」と私は言った、救急箱を開けながら。
帝王はすぐに理解したらしく。
「むっむっ胸を撃たれた」と胸を押えた、奥でユリさんが笑っていた。
『大丈夫ですよ～、蘭のヘナチョコ玉なら、致命傷には至りません』と言いながら立ち上がり。
『ご指名ありがとうございます、家出少年のチャッピーです』と深々と頭を下げた。
「おお、自ら家出少年と名乗るとは」と笑顔で。
「まぁ、座れよ」と隣を指差した。
「いいかな？ユリ」とユリさんに聞いた。
「もちろんですわ」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
私は一礼して隣に座った。
その梶谷とういう、底知れぬ男との出会いであった。

「どうして、家出したん？」と聞いた、その声は圧倒的に優しく響いた。
『バカですから、親父に逆らって』と照れながら言った。
「どの位経つのかい？」と笑顔で聞いた。
『今、8日目です』と完全に素直になれていると思いながら答えた。
「やるな～と言って」帝王が私を見た。
「昨夜はユリをありがとうな」と微笑んだ。

『何も出来ませんでした』私は素直にそう思っていた。
ユリさんの前に立ったが、視線では豊兄さんを見ていたと。
「それは問題じゃない、事実が大切なんだよ、その守ろうと言う気持ちがね」と優しく言った。
『ありがとうございます、キングに言われると本当に嬉しいです』
と笑顔で答えた。
「キングかっ！」と嬉しそうに言った。
『帝王とよばれてるんでしょ？』と聞いた少年らしく。
「それは、勝手に皆が言ってるだけさ」と少し照れた。
《ここだ！》と思った。

『それは問題じゃないです、その事実が大切なんです。愛されてるという事実が』と言って帝王を見た。
「ありがとう、家出少年に言われると本当に嬉しいぞ」と嬉しそうに笑った。
ユリさんも薔薇の笑顔で聞いていた。

「よし、ユリ少しこいつ借りていいか？」と聞いた。
「梶谷さんなら、かまいませんよ」と薔薇で微笑んだ。
「昨日の功績を称えて、どこか連れてってやる、ここしか見たことないんやろ」と微笑んだ。
『アフターですね』と笑顔で返すと。
「おう」と帝王が笑った。

「どこか行ってみたい所があるのか？」と嬉しそうに聞いた。
『魅宴』と笑顔で答えた、帝王はニッと微笑み。
「末恐ろしい奴だな」と笑った、ユリさんも薔薇の微笑みのままで。

帝王についてユリさんと会計に行った。
「ありがとうございます」とリンさんが深々と頭を下げた。

「リン、ありがとう」と微笑み。
「今夜は、ユリと蘭と、それとカスミと」振向いて私を見た。
『チャッピーです、覚えてね』とカスミの真似をした、帝王は笑ってリンさんに。
「そのネズミみたいな名前の少年を指名したから」と笑った。
リンさんも微笑みを返した。帝王が支払いエレベーターに行くと。
蘭とカスミも見送りに来た。

「梶谷さんありがとうございました」と蘭とカスミが頭を下げた。
「蘭、カスミ、今夜は本当に楽しかった」と微笑み「蘭、いい後輩ができてよかったな」と笑顔で言った。
「本当に喜びを感じています」と蘭も満開笑顔を返した。
カスミは本当に嬉しそうに微笑んだ。
エレベーターが来ると、カズ君がドアを止めて待った、帝王と私が乗り込むと。
「えっ！」と蘭とカスミが驚いた。
「ちょっと借りるよ」と帝王が微笑み。
『アフター行ってきます、帰ったら皇帝と呼びなさい』と言うとカズ君を含め全員で笑った。

私にとって、忘れられない時間が流れていた。

この底知れぬ懐を持つ男が教えてくれる、愛するとは何かを。

初日

帝王・・・いつの時代にもそう呼ばれる男がいる、
成功を手に入れた男を呼ぶのではない。
優しさを手に入れた、男を呼ぶのだと信じたい。

表現し難い何かに包まれて、エレベーターの中に2人でいた。
『梶谷さんは弁護士なんですか？』と聞くと。
「おう、悪徳のな」笑った。
『それは、素敵だ』と笑顔で返した。
「なぁ、俺のことキングって呼んでくれ、気に入ったから」と笑った。
『じゃあキングは俺のこと小僧って呼んで、その方が近い感じがして嬉しいから』と笑顔で言った。
「了解、小僧」と笑ったところで1階に着いた。

2人で並んで西橘通りを歩いた、キングは沢山の人に挨拶され都度右手を上げて微笑んだ。
「魅宴にお気に入りでもいるのか？」と探るように聞いた。
『まだ店に出てないみたいだけど、何か気になる子がいて』キングは楽しそうに聞いてる。
『その子も、ハルカと同じで』そこまで言って。
『ハルカって』キングは微笑み「ケイだろ、知ってるよ」と答えた。
『不思議な魅力なんだ、苦い初恋の思い出みたいなの』と照れて言った。
「お前は表現力あるよな～」と笑顔で私を見た。
『好きなだけ、話すのも・聞くのも』と返した。
「それが大事なんだよ」と笑顔のまま言った、私は大きな安心感に包まれていた。

『だから、その子のデビューし演じる舞台が見たいと思ってた』キングは頷いた。
『キングありがとう、自分じゃ到底見れなかったよ』とお礼を言った。
「なんでもね～よ」私の肩に手を置き、笑いながらビルに着き、エレベーターに乗った。

【魅宴】はＰＧより少し大きいビルの、やはりワンフロアーを占領する大きなクラブだった。
エレベーターを降りると、年配のボーイが駆け寄ってきた。
「梶谷様、ようこそお越し下さいました」と深々と頭を下げた。
「今晩は、俺の大事な客や」と私を見て、「酒は飲まさんかい、いいかな？」聞いた。
「勿論です、どうぞいつもの席にご案内いたします」と言ってボーイについて中に入った。

魅宴の店内はＰＧより照明が暗く、静かな感じで大人の雰囲気だった。
キングが入ると少し雰囲気が変わった気がした。
ここの女性も、帝王には反応するな～と思っていた。
席はやはり一番高い位置にある、一番奥の２人には広すぎる大きなＢＯＸだった。
すぐに大ママが飛んできた。

「梶谷様、いらっしゃいませ」と大ママが深々と頭を下げて、微笑んだ。
「それも、ＰＧのエースを連れて嬉しいわ」と言ってキングの横に座った。
「おう、昨夜のご褒美にどかがいいって聞いたらここって言うから」

と笑顔で言った。
「うれし～わね、ありがとうチャッピー」と微笑んだ。
『うん、スパイしに来ました』と言ったら、大ママは満面の笑みを浮かべた。
「マミの演じる舞台が見たいんだってよ」とニヤで私を見た。
『キング知ってたのか、人が悪いな～』と照れた。
「キング！」大ママは驚いた。
「唯一俺をそう呼ぶ男だ」とキングは笑っていた楽しそうに。
「チャッピーまだ追い出されないのかい？」と大ママが笑顔で聞いた。
『俺がいないと駄目みたいで、ユリが離さないんだよ』と言うと、2人が大きな声で笑った。

「そういえば、今どこにいるんだ？」とキングが聞いた。
『家出初日公園で、素敵な人に拾われて。そこにいる』と笑顔で返した。
「蘭か～」とキングが即答した。
『わかるの、やっぱ凄いな～』と言ったら。
「あぁ、蘭がな」と笑顔になった。
「この夜街でそんな行動ができるのは、俺が知ってる限りでは蘭だけや」とキングが言うと。
「私もだよ」と大ママが微笑んだ。

「そしてお前になぜ帰れって言わないのかも、分かる気がする・・お前は蘭の前では真っ白だろ？」と聞いた。
『うん、会った瞬間に溶かしてくれた。だから蘭の前では何も飾らないでいいんだ』と照れた。
「惚れたんだな」とキングが聞いた。
『うん、自分勝手に大好きだよ』そう言うと、2人が優い目で見てくれた。

「で、チャッピー」大ママが笑顔で、「マミを指名しないのか？」と言った。私は驚いて。
『いいの？』と驚いて聞いた。
「勿論、梶谷さんの連れに駄目なもんか」と大ママ笑った。
「私服でいいかい？」と大ママが聞くので。
『その方がいい』と笑顔で言った。

「ようこそいらっしゃいました梶谷様、マミです」と深々と頭を下げた。
「今晩は、また綺麗になったね」とキングがマミを見ながら微笑んだ、マミは照れていた。
「ん～、わかるね～」と言いながらニヤっとして私を見た。
『でしょ』と笑顔で言って照れた。
「ようこそいらしゃいました、チャッピー様」とマミが微笑むから。
『様はやめて下さい、マミ姉さん』と言うと。
「姉さんはやめて下さい」と笑顔になった。

「マミの生涯初めての指名した男だからね」と大ママが微笑んだ。
『あっ！それは駄目です、そんな大それた事』と慌てて言った。
「嬉しかったですよ」とマミが笑顔で私の隣に来て、私の隣に座った。
『えっ、でも大切なもんじゃないですか。そういうの』とマミを見ると。
「ケイの命名の話聞きました、凄く素敵でした」と可愛く微笑んだ。
「この前の私に言ってくれた言葉も、嬉しかった、それに、初めてでしょ？指名するの？」と笑顔で聞いた。
『勿論』と笑顔を返した。
「素敵、本当にありがとう」と優しく微笑んだ、その顔が今でも忘れられない。

「小僧、ハルカの由来聞かせろよ」とキングが言った。
『2度目は照れるな～、マミ姉さんお願い』と笑顔で頼んだ。
「遥かなる高原に咲く強く優しい一輪の花」とマミが言ってキングに微笑んだ。
「うん、ケイだな」とキングが私に言った、嬉しかった。

小一時間ほど楽しい話をして、店を出て西橘通りでキングにお礼を言った。
「また、行こうな」と笑顔で言ったキングに。
『よろしくお願いしますと』と言って笑顔で別れた。
その後姿を見送りながら、不思議な安心感を覚えていた。
キングとのこれからも知らないで。

PGに戻ると今だ満席状態で活気に溢れていた。
私の指定席にマダムがいた。
『勝手してすいません、マダム』と言うと。
「梶谷さんに付き合うなら、特別ボーナスもんや」とマダムが笑った。
『マダム、最初の指名してくれた客って大事なものなのかな?』と聞いてみた、マダムが私を見て。
「初体験と同じや、一生忘れん」と笑った。
『やっぱりな～』と私が呟くと。
「どうしたんだい?」と聞くので。
『俺は訂正してって言ったんだけど、本人がいいって言うから』と呟くと。
「らしくないね～ウジウジと」と言って笑った。
『マミ姉さんの最初の男になった』と照れて言うと。
「そりゃー、大それた事をしたもんだ」と私を見て笑った。
「責任とれよ」とニッと笑いながら、TVルームに戻った。

「初めての男って？」私はしまった～地獄耳だったと思い振向くと、蘭が立っていた。
『いや、指名の』と上目使いで言うと。
「誰のかな～」と真顔で聞くので。
『魅宴のマミちゃん』と恐る恐る言った。
「マミなら、よし」と笑顔になった、私はほっとした。
「でも妬いたから、今夜は2話お願いね」と言ったので。
『朝まででも』と笑顔で返すと。
「うん」と満開で微笑んで戦場に戻った。

宴は週末の最高潮にきていた。
トップ4は忙しく動き、若手7人衆も最後まで集中力を保った。
終焉を迎えた時には、7人衆は6番席にに集まり、動けないように座っていた。
ハルカが来て、「ちょっと来て」と言って私を10番席に座らせた。
『なに？』とハルカに聞くと、ニッと笑って。
「お客さま、生まれて最初の指名誰になさいますか？」と聞いた。
私は可愛い奴めと思っていた、6番の7人衆は興味津々で見ている。
『はい、初めてです』少しモジモジしながら言った。
「ご指名誰になさいますか？」とハルカが笑顔で聞いた。
『この店に凄く優しくて素敵な女性がいると聞いて、やきもち焼きの』と言うと。
「はい、在籍しております」とハルカは笑いを押し殺して言った。
7人衆はニヤニヤしながら見ている。

『その蘭っていう素敵な人をお願いします』と笑顔で言うと。
「わかりました、蘭姉さん初めてのご指名で～す」とハルカが振向き言った。
「は～い」と言って蘭が銀の扉から出てきてモジモジした。
そして私の前でモジモジを最高潮にして。

「生まれて始めてのご指名、ありがとうございます」と頭を下げた。
少しの間、頭を下げて。
「あ～～、すっきりした」と顔を上げて満開で微笑んだ。
7人衆が笑顔で拍手した。

蘭の笑顔を見ていた、その可愛い心を。

新ＰＧの初日は笑顔で幕を下ろした、熱を放出して。

そして、その熱をエネルギーにして成長していく。

大切な季節を見守るライトが、来週も灯り。

競い合う仲間達を待ちわびるのだ・・・。

そして、ある女性の運命の日が近づいていた、競い合う世界に。

告白

この世に神がいるとすれば、その真意は分からないが、やはり不公平である。
この世に唯一、公平なものが有るとすれば、それは【時】である。
時だけは平等に同じ速度で流れる、だから最も大切なのではないだろうか。

夏の暑さよりも熱い、土曜の夜が終わった、私は蘭の笑顔を見ていた。
女性が着替えに行ったので、ＴＶルームに戻った、サクラさんが準備をしていた。
私はミサを抱き上げた。
「もう事件解決したから」とサクラさんが言った。
『可愛い妹ですから』と笑顔で言った。
「ありがとう」と美しく微笑んだ。

「しかし、凄いね～」とエレベーターの中で、サクラさんが言った。
『えっ、何でしょう？』と聞いた。
「梶谷さんよ」と笑った。
『あぁ、家出少年が珍しいんでしょ』と笑顔で返した。
「エミとカスミの魔法は？」と微笑んだ。
『それは、魔法じゃないですよ』と照れて返した。

「エミのだけは、魔法よ」と微笑み、「少女らしくなったわ」と言った。
『可愛い1年生です、凄いけど』と笑顔で言った、サクラさんも微笑んだ。
サクラさんを見送り、ＴＶルームに戻ろうとしたら、7人衆と蘭が

来た。
「マダムとユリさんには挨拶したから、帰ろうダーリン」と満開で言った。
『うん、お疲れさん』とバックを持ってあげた。
「いいのかしら、皇帝に持たせて」と蘭が言うと。
「それはまずいでしょう、いくらオンボロでも」とカスミが言って、8人で笑った。
『カスミ、今日の撃たれた演技はなんだ、明日までに練習してこい』と言ったら。
「はい、監督」と微笑んだ。

一番街まで皆で歩いた、深夜だがまだかなりの人手があった。
「約束」と蘭が満開で微笑んだ。
『えっ！』と蘭を見た、ニッと笑った。
7人衆は蘭を見ている。
「カスミの分」と微笑んだ。
『あぁ、やきもちのＮｏ２ね』と言って、抱き上げた。
「なるほど～」とカスミが言った。
「伝説は確定やな～」と美冬さんが言い。
「青島と昨夜と、梶谷さん、で一番街」と千春さんが数えた。
「大ママとも絡んでるらしいよ」と蘭が言った。

7人衆が驚いて私を見た。
「将来何になる？」とカスミがニヤで言った。
『ＮＯ１ホスト』とニヤで返した。
「怖い」とユメが呟いて、8人で笑った。

『で、どこまでお姫様』と笑顔で言ったら。
「オ・ウ・チ」と蘭が笑った。
『姫ご勘弁を～』とウルで言うと。

「駄目じゃ、ワラワは疲れたのじゃ」と蘭がすねた。
「がんばれ～」との7人の声に押され。
人ごみを蘭をお姫様抱っこして、縫うように歩いた。
視線を楽しみながら、蘭の笑顔を見ながら。

橘通りで蘭が降りた。
『タクシー乗る？』と聞いたら、満開で腕を組んできて。
「明日、靴屋お休み」と微笑んで、「歩こう」と言った。
「何の話がいい？」と歩きながら蘭が笑顔で聞いた。
『蘭が辛くないやつ』と笑顔で言った。
「それは君に辛いよ」とニッと笑った。
『それは、ご勘弁を』とウルで返すと。
「やきもち妬く？」とニヤで聞いた。
『過去にも焼きます』と夜空を見た、蘭は私を見ていた。

蘭がお腹を押した、私は蘭を見た。
「ハルカ借りるね」と蘭が呟いた。

「私のこと好き」と聞いた夜空を見ながら、真顔で聞いた。
『大好きです』私も夜空を見ながら、正直に言った。

「１０歳違うんだよ」・『ダカラ？』
「あなたより、色んな経験してるんだよ」・『ダカラ？』
蘭は腕に力を入れた。

「なんで、そんなに優しいの？」と静かに言った。

『蘭が大切だから、蘭だけでいい。
俺は蘭がいればそれでいい、他の物はいらない。
蘭にどんな過去があっても、どんなに指名客が多くてもいい。

たとえ蘭が殺人犯でもいいんだ、いてくれれば』

「私、今は何も言ってあげられないよ」と蘭が言った。

『この前、小窓でお姫様したとき誓ったことがあるんだ。
あの台詞を言って、蘭が目を閉じて、蘭の唇を見てた。
窓からの光は月光じゃなくて街灯で、あそこは城じゃなくてビルで。
俺は王じゃないから、地位も名誉も金も持ってないし。
だから俺は蘭の相応しい男になろうと、蘭を一生笑顔でいさせられる男になろうと。
間に合わないかも知れない、時は俺にも蘭にも同じスピードで流れるから』

『でも、どうしても諦める事はできない』

『俺が蘭に相応しい男になって、その時に蘭が望めば。
俺は王にもなれないし、城も持てないけど唇を重ねる時は。
月光の下でしようと・・思ったんだよ』

『俺はそれまでは、蘭に何も望まない。何も言ってくれなくていい』

『蘭・・・・』

『お願いだから・・・・』

『愛する事だけは奪わないで・・・』

『蘭が誰かを愛して、結婚してもそれは仕方ない事かもしれない・・・』

『蘭、存在して・・それだけでいい、生きていてくれればいいんだ・・・』

『俺が蘭を愛する事だけは奪わないで・・・』

『それだけが、俺の望みなんだよ・・・』

「うん」と蘭が満開で微笑んだ。

蘭がお腹のスイッチを押した。

『何したの？』と私は微笑んだ、『ハルカいないから停止状態だったじゃないか』と笑顔で言った。

「うん、間違えた・・・間違えてた」と満開で微笑んだ。

「誰かが浮気者だから」と頬を膨らませた、私は頭をかいた。

「色んな女を感じてね」と満開笑顔で。

「そうしないと、そうした後じゃないとその時に響かないよ」と微笑んだ。

『頑張ります』と笑顔で返した。

「つきあえって言った訳じゃないよ」と笑顔で睨んだ。

『違うのか』と笑顔で返した。

「まだ分からないみたいね、私すっっっごい！やきもち妬きなのよ」と怒ってる顔をした。

『知ってるよ、もう我家が見えたから、やきもち第二段再開しようか』と笑顔で蘭を見た。

「うん」と言って満開で微笑んだ。

私は膝をつき両手を広げ。

『蘭、おいでっ』と言った、蘭が笑顔で私の首に両手を回した、私は大切な姫を抱き上げた。

『甘えん坊』と蘭の耳元で囁いた。
「甘えん坊で、やきもち妬きだよ」と蘭も囁いた。
『何をいまさら、それぐらい』私は腕に力を入れて蘭を引き寄せ。
『泣き虫で、それで』一呼吸おいて、『寝言をよく言う』と囁くと。
「うそっ！」と驚いた。
『明朗で鮮明な』と笑顔で返すと。
「なんて言ったのかな～？」と探りを入れてきた。
『多分、好きな男の名前と思う』とウルで言うと。
「その時泣いた、それともニヤってした？」と笑顔で聞いてきた。
『泣いたよ』と囁いた。
「じゃぁ、好きな人じゃないよ」と蘭が優しく囁いた。

『もう、寝なさい』と優しく囁いた。
「重くなるよ、落とすなよ」と微笑んだ。
『壊れやすい物を落としたり、傷つけたりしないよ』と蘭を引き寄せた。
「うん」と言って、蘭は静かになった。

私は蘭の香りと重みを楽しんでいた、気分は快晴だった。

道がどこまでも続けばいいのにと思っていた。

帰り着かなければいいと、そうすればいつまでも、蘭は私の腕の中にいるのにと。

真夏の夜空には入道雲、月はまだ見えてなかった・・・。

後悔

人は過去に縛られるのだろうか、過去は何も縛っていないのに。
後悔の無い人がいるのだろうか。
あの時にと、思わない人が存在するのだろうか。
今を生きよう、それしかできないから。

夏の夜、夜空には確かな存在を示して、入道雲が浮いていた。
私が姫を抱く横を暴走族の若者達が、騒音を撒き散らし走り去った。
部屋の前まで来て、眠っている蘭を見ていた。
《もう少し》と思って時が過ぎた。
『姫、城に着きました』と囁いた。
「知ってるよ」と目を開けて満開で微笑んだ。
『意地悪』と笑顔で返した。
「知らなかったの？」と笑って、蘭が降りて部屋に入った。
化粧を落として、パジャマを着てビールを持って来た。
「飲む？」と満開笑顔で聞いた。
『当然いただきます』と笑顔で返した。２人で乾杯した。

「帝王の感想は？」と蘭が聞いた。
『帝王って言うから、もっと怖い感じをイメージしてたから・・少し違った、あんな優しい人とは』と正直に答えた。
「あの人が特別よ」と蘭が満開で微笑んだ。
『徳野さんに会った時も思ったけど、安心感みたいなのがあるね』と笑顔で返した。
「よし、私がＰＧに入った話をしてあげる」と微笑んだ。
『ワク、ワク』と笑顔で言った。
「そのかわり、肩」と微笑んだ、私は蘭の隣に座り蘭が肩に頭を乗せた。

「私ねユリさんと同じで、高校卒業したと同時に宮崎に来たの・・・
母だけに言って・・・」
蘭は母親にだけ相談して、靴屋に就職を決めていた。
父親に言うと反対されるのは分かっていたし、争うのが嫌だった。
弟にも何も言わずに宮崎に出た。
元来の明るく社交的な性格で、靴屋の仕事にはすぐに慣れた。

「その時に出会った人がいて」と言って「聞く?」と囁いた。
『重要じゃなければ、カットで』と私は返した。
「やっぱ妬くんだ」と嬉しそうに笑った。
『子供をからかわないの』と体を揺すった。
「純愛だもんね〜」と蘭が言った。
『純愛じゃないよ、いつもいやらしい目で見てるよ』と笑顔で返した。
「知ってる」と笑って、「カスミがね、言ってたよ。あんなに正直に体を見る奴は初めてだって」と私の手をつねった。
『あれは見るでしょう、観賞用の作品だから・・俺はいやらしい目は、蘭専用です』と笑顔で言った。
「よし」と蘭も満開で笑った。

『それで、それで』私は催促した。
「で、出会った人がいて」とニヤで言った。
『そこ飛ばすんじゃないの?』とウルで言うと。
「妬くんだ」と満開で笑った。
『進まないんですけど〜』と言ったが、蘭の反応が無い。

蘭の重みが増してきた、寝息を感じた。
私は嬉しかった、安心してくれている事が。
キングが言った【真っ白】でいようと思った。

踏み出し望めば、蘭は許してくれるかもしれない。
でも今それを望んだら、この関係は終わる。
変え難いこの関係以上に、欲しい物は無いと思っていた。
私は蘭をそっと抱き上げ、ベッドに寝かせた。
しばらく蘭を見てから、部屋に戻って眠りについた。

翌朝、遅い朝食を蘭と食べていると。
「どこまで話したっけ？」と笑顔で聞いた。
『出会った人との愛を、濃密に』とウルで言って俯いた。
「そんなに濃密に？」と満開で笑った。
『枕、グジュグジュになったよ』と俯いたまま言った。
「そりゃ～干さないと駄目だな」と蘭がニヤで言った。
『もう干した』と笑顔で返した。

「今日はお買い物付き合ってね」と微笑んだ。
『何買うの？』と笑顔で聞くと。
「下着、おばさん臭いのじゃないやつ」と舌を出して睨んだ。
『派手なのにしろよ、最近まんねりだから』とニヤで返した。
「やっぱりそうだったの」と又睨んだ。

「それで、マミちゃんね～」と笑顔で頬を膨らました。
『マミちゃんは、なんかハルカみたいで可愛いから』とニッで返した。
「いいんだよね～、マミちゃん」と呟いて、「私が男なら惚れるね～」と私を見た。
『俺が男なら、蘭に惚れるよ』と笑顔で言うと。
「知ってる」と満開で笑った。

ケンメリに乗って街に出た、手を繋いでデパートに入ると。
「先にあなたが入りにくい方を済ましてくるね・・女の買い物は時

間がかかるぞ」と満開で微笑んだ。『知ってる』とウルで返した。

ベンチに座り、コーラを飲んでいると。
婦人服売り場に、見慣れた顔を見つけた。
『案外、おばさん臭い服が好きなんだ～』と後ろから声をかけた。
「びっくりした～」と笑顔で言って、「私のじゃないよ」と笑った。
『おはよう、ユメ姉さん』と微笑んだ。
「おはよう、一人？」と笑顔で聞いた。
『蘭が危ない下着選びに行った』とニヤで返したユメは笑っていた。

2人でベンチに座った。
『ユメ姉さんは何買いにきたの？』と言聞くと。
「母親にプレゼント」と可愛く微笑んだ。
『そか～、詫び入れに行くんだ』と笑顔で返した。
「やくざみたいに言わないで」と笑った。
『服にするの？』と笑顔で聞いた。
「分かんなくて、初めてだから」と少し寂しい目をした。
『親不孝したからな～』とわざと笑って見せた。
「家出少年に言われたくないよ」と可愛い笑顔を見せた。

「あんたなら何にする？」とユメが聞いた。
『それは、難問だな～』私は考え付かなかった。
『ユメ姉さんはいつ親元出たの？』と聞いてみた。
「17だよ」と言った。
『今は？』と聞き返すと。
「カスミと同じ20歳」と笑顔で言った。
『カスミより見ため若いね』と笑顔で返した。

「褒めてるの？」と微笑んだ。
『もちろん』と笑顔で返した。

ユメは確かに幼い感じの女性だった、元不良少女の面影などない可愛さだった。
『来年成人式？』と聞くと。
「そうだよ」と微笑んだ、可愛い笑顔で。

『俺のね知ってる漁師の親父が前言ってた、その親父の地元では娘が成人する時にね』ユメは私を見ている。
『娘の方から、時計と帯締めを母親に送るんだって』とユメを見た。
ユメは頷いた。
『時計は母親に、これからは自分の時間を刻んでという意味でね』
ユメは私を真顔で見てる。
『帯締めは、産んでくれてありがとうって子宮に感謝するもんなんだって』ユメは頷いた。
『ようするに、もう自分で生きれるからって。もう大丈夫だからって意味なんだって』と笑顔で言った。

「ありがとう、さすがね魔法使いさん」とユメが微笑んで。
「詫び入れに行ってくるよ」と立ち上がった。
『楽しんで』と言う言葉を送った、ユメは笑顔で手を振って別れた。

その背中を見ていた、マダムがなぜその条件を出したのか、少し分かった気がした。
その背中は綺麗に立っていた。
後悔を背負っても娘が母親を、忘れる事はないだろうと。
姉の顔を思い出していた。
マダムは降ろして来いと言ったんだ、カスミや四季と同じ笑顔でいたいなら。
それを降ろさないと駄目だと言ったんだと思った。
母親と娘の絶対的関係を、修復しろと言ったんだと思っていた。

なぜ不良少女を選択したのかは、その時は知らなかった。
しかしハルカの事を【運命と闘う強さ】と表現した、ユメのあの目を思い出していた。
きっとその時の自分を見ていたのだろうと、悔しかったんだろう。
時が戻らない事が。

「お～い」と言う蘭の声で振り返った、大きな袋を持って笑っていた。
そこにも自分に忠実に生きる笑顔があった、自分と和解しようとする笑顔が。
私は歩み寄り、袋を持った。
『次は？』と笑顔で聞いた。
「上、上を目指すのだ～」と満開笑顔で手を繋いだ。
エスカレーターで上を目指した、手を繋いで前だけを見て。
夏の日差しが降り注ぐ、上を目指していた。

自分もいつか何かで、後悔を背負うだろうと思っていた。

それが蘭との関係だけではないようにしようと、誓っていた。

蘭と手を繋いで、上を目指しながら・・・。

経験

どれ程の経験がそうさせるのだろう、自らがふるったもので自らが傷つく。
瞬時にして、人を想う・・そして迷わずに行動できる。
どれぐらいの経験を積めば、到達できるのだろう・・その世界は。

日曜の午後、家族連れの多いデパートで、不釣合いな手を繋いでいた。
外の日差しは全てを燃やそうと照りつけていた。
南国の夏は、その証として、人々の肌に焼印を押していた。
「疲れるでしょう？」と蘭が覗き込むように聞いた。
『別にデートみたいで、楽しいよ』と笑顔で返した。
「デートじゃないの？」と笑顔で睨んだ。
『デートでした』とウルで訂正した。

「同級生の女子とかに見られたらやばくない？」と笑った。
『全然、今さら俺が何しでかしても驚かないよ・・それより男子の方が面倒くさい』と笑顔で返した。
「どうして？」と興味津々光線を発射してきた。
『蘭みたいな綺麗な人と歩いてたらね～』とニッで返した。
「本当に素直ね」と笑顔で喜んだ。
『素直でしょ』と笑った。
「うんうん」と蘭は何度も頷いた。

『蘭の方がファンとかに見られたらやばいでしょ？』とニヤで返した。
「全然、別に気にしないし」と笑った。
『いきなり殴られたりして』と笑顔で言うと。

「そのくらいは覚悟しな」とニッで返された。
『がんばります』とウルで言った。
デパートを徘徊するように見て廻り、信じられない数の荷物を持たされた。
『車に全部積めるかな？』と笑顔で聞くと。
「積めない時は、歩いて帰ってね」と満開で笑った。

車に荷物を積み乗ると。
「どこ行こうか？」と笑顔で聞いた。
『蘭の生きたい所』と笑顔で返した。
「1つ行きたい所があるんだけど～」と思わせぶりに言った。
『どこかな～』と笑顔で聞き返すと。
「兎ちゃんのお墓参り」と微笑んで言った。
『いいけど、生臭とあんまり絡んだらだめだよ』と言うと。
「なぜ？」と笑顔で聞いた。
『やきもち』と笑顔で返した。
「よし」と満開で微笑み出発した。

シャコタンのケンメリで玉砂利を走り、本堂から一番遠い所に停めさせた。
楠木は、その成長は永遠だと主張して立っていた。
「わかるかな？」と蘭が聞くから。
『大きな石を置いてるから』と言いながら歩み寄ると。
「素敵」と蘭が言った。
私がそこを見ると大きな石の前に、牛乳ビンに花が差してあった。

「生臭じゃないじゃん」と蘭が笑顔で言うと。
「生臭じゃよ」と後ろから声がした。
《あちゃ～》と心で言った。
蘭が振り返り頭を下げた。

「ほ～、この寺の３００年の歴史で１番美しい人がおいでだ」と多分笑って言った、私は振向いてなかった。
「嫌ですわ～和尚様ったら」と蘭が嬉しそうに営業トーンで言った。
「家を出たと聞いたら、お前は本当に強い星を持っちょるの～」と私に言った。
『お久しぶりです、生きてるとは』と振向いて笑った。
「生きちょるわい」とシワシワで笑った。

「ごめんなさい、生臭なんて・・兎のお墓にまで花を飾る方に」と蘭が頭を下げた。
「いやいや、それはワシじゃない、豊という男が手向けたんじゃよ」と言った。
「豊君が！」と蘭が驚いて言うと。
「やはり知っちょったか」と和尚は笑顔になり、「美味しい草餅あるがどうかな？」と蘭に言った・
「いただきま～す」蘭が満開で笑った。
《絡むなって言ったのに》と思いながら、楽しそうな2人の後を続いた。

大きな本堂の隅で、草餅とお茶をご馳走になりながら。
「金曜日の夜、なんかあったのかの？・・豊が１０分位兎に話ししよったぞ」と和尚が言った。
「そうなんですか」と蘭があの事件を説明した。
「そうか、小僧関係でなんかあったとは思ったが」と和尚が言った。

「小僧なぜ豊は1発入れたんか、わかるかい？」和尚が言って、蘭が私を見た。
『多分、何かを払うために・・そんな感じだった』と正直に答えた、和尚は笑顔になった。
「いい、先生がついちょるの～」と笑顔で言って、蘭を見た。

「なぜなんですか？」と蘭が真剣に聞いた。
「怨みを背負ったんじゃよ、奴が」と蘭を見て。
「被害者はもちろん、関係者や傍観者もただ怨みをおぼえるからの」蘭は頷いた。
「それを、その1発でしとめたんじゃ、それが無かったら皆の気分ってのは、晴れんもんじゃかい」蘭は入り込んでいる。
「小僧の言った払うは正しい」蘭は頷いている。
「それは、犯人にも言えたんじゃよ。奴が入れなかったら辛いじゃろ」蘭は完全に入っている。
「ただ捕らえられるよりは、肉体的苦しみの方がましな時もあるかい」
「豊は修羅場に招待される男なんじゃ、本人は本当の平和主義者なんじゃが」蘭は頷く。
「だから一人で処理するんじゃよ、背負って帰っての」と和尚が言った。

蘭は和尚を見ていた、輝く深い瞳で。
「あの兎は世界一幸せな兎なのかもしれん」お茶を注ぎながら。
「死は全てが終わるわけじゃない」和尚は蘭を見ている。
「残るんじゃよ、あの兎は小僧が生きる限り残る」蘭を見たまま。
「そして小僧が関わり、その話を聞いた人間にも残る・・ワシが言っちゃ悪いが、墓標には意味が無い」
《気付いてるな》と私は思っていた。
「あれは、確認させる為の家系図や」と蘭に言った、蘭の目が潤んでくる。
「その者を忘れないのなら、それでいいんじゃよ・・そして、それを悲しんだらいかん」
「自分が楽しい時は楽しいと、語りかければいいんじゃ」優しく言って。
「現実は残酷じゃ、だが悲しみ続けるのは。その者も悲しむぞ」と

言って、蘭を見ていた。

「ありがとうございます」と蘭は俯いて泣いていた。
「いい役やらしてもらうぞ」と私に言い、蘭の前に座り。
「これを最後にせい、もう泣かんでええ」と蘭の手を握り囁いた、
蘭は静かに泣いていた。

蘭が静かになるまで、和尚は手を握っていた。
蘭が落ち着いたのを見て。
「ちなみに、店の名前は？」笑顔で蘭に聞いた。
「パラダイスガーデンの蘭です」と顔を上げて、満開で微笑んだ。
「指名するからな」と和尚が笑った。
「お待ちしてま～す」と最高の満開を咲かせた。

『ね、最強の生臭でしょ』と私も笑った。
「うん、最高の生臭」と笑顔で言って、和尚に抱きついた。
「今日は人生最高の日じゃ～」と言って、和尚は本当に嬉しそうに抱きしめていた。

和尚に礼を言って、楠木まで3人で歩いた。
蘭はご機嫌になり、和尚に店の場所を説明していた。
牛乳ビンの花を見ていた、その圧倒的優しさに感謝しながら。

車が見えなくなるまで、和尚が手を振っていた。
『ね、絡むなって言ったでしょ』と蘭に微笑むと。
「うん、でも指名また増えたよ」と満開で笑った。
「まぁ、来ることはないだろうな～」と真顔で言った。
『甘い、最強って言ったろ』と笑顔で蘭を見ると。
「素敵」と満開で微笑んだ。
『知らないぞ～』とニヤで言った。

「妬いてるんだ〜」と嬉しそうに、蘭がニヤを出した。
『帰ったら手を握るとこからするから』と笑顔で返すと。
「何回？」と満開の笑顔で聞いた。
『線香の匂いが消えるまで』とニヤで言ったら。
「は〜い」と満開笑顔で返事した。
蘭が少し元気になったかと思って、嬉しかった。

『で、車はどこに行くのでしょう』と蘭に聞いた。
「ヤングのドッグ」と笑顔で睨んだ。
『今日は夏休みのそれも日曜だから、青島抱っこはやめようね』とウルで言うと。
「嫌なの」とまた睨んだ。
海へ向かうバイパスは、青く霞む鰐塚山を背景に、開放の夏を主張していた。
5台の暴走族風のバイクが、ジグザグにケンメリを抜いた。

『絡むなよ』と笑顔で蘭に言うと。
「あんな事に興味ある？」とニヤで聞いた。
『バイクとか車は好きだけど、あれには興味なし』と笑った。
「今日もデパートの通路とかに、それっぽい中学生が睨んでたけど・・全然気にしないんだね」と満開で笑った。
『面倒だし、痛いの嫌い』と笑顔で言ったら。
「豊の弟だもんね」と笑顔を向けた。
海の香りがしてきた。
窓を全開にして、潮の香りを取り込んだ。
運転席の蘭の髪が風に靡き、逆光に照らされたシルエットが美しく映っていた。
修羅場に招待される男を想っていた、どれだけの経験がそうさせた

のか。

なぜ一瞬で判断できるのかと。

静かになっていくあの目を、想っていた・・・潮風に吹かれて。

逆転

海は全てを受け入れる。
満ちる時に夢を、引く時に思い出までを。
そんなに深くも広くもなれないけれど、受け入れる準備はしておこう。
ぞれがどんなに辛い事でも・・・。

真夏の夕暮れは遅く、陽はまだ霧島山系の上で熱を放出していた。
「満車か～」と青島を走りながら、蘭が呟いた。
青島の駐車場は、海水浴客で全て満車だった。
「ラッキ～と思ってるだろう」と私をニヤで見た。
『残念だな～』と笑顔で返した。

ケンメリは余裕で堀切峠を登り、頂上駐車場でヤングのドッグを2人で食べた。
帰りも快調に蘭はコーナーを楽しむように走った。
「どっちを思い出すんだろうね～、ヤングのドッグ食べる時」と私を見た。
『カスミ』と笑顔で返した、蘭は睨んでいる。
『蘭とは、ずっと一緒にいるからね～』と笑顔で言った。
「うん、よしっ」と満開になった。
アパートに帰り、沢山の荷物を運びいれ。
シャワーをして、デパ地下で買った、珍しい物を食べながらビールを飲んだ。

「それでは、ファッションショーの開幕です」と微笑んで、キッチンに行った。
「どう？」と蘭が次々に着替えて、笑顔で感想を求めた。

『素敵だ』と私は都度、笑顔で返した。
「はい」と紙袋を渡された、中には麻の真っ白なジャケットが入っていた。
「それにＰＧの紋章付けて、ロッカーに入れときな」と満開で笑った。
『ありがとう』と私は笑って、羽織ってポーズをつけた。
「素敵」と蘭は笑った。
『皇帝らしくなってきた』と笑顔で返した。

その日は早めに蘭をベッドに入らせて、駄菓子屋に泊まった話し【原点回帰　参照】を話した。
「素敵だね～、あんたは本当に強い星を持ってるんだよ。」と私を見ていた。
『うん、蘭に会えたからね』と微笑で返した。

『日曜しか早く寝れないんだから、ゆっくりお休み』と蘭を見ていた。
「おやすみ」と微笑んで目を閉じた。
私は大切な時間をたっぷり楽しんで、部屋に戻り眠りについた。

翌朝、陽の光で目が覚めた、快晴だった。
『おはよ』とキッチンに行った。
「おはよう、ありがとう早目に寝かせてくれて」と満開笑顔で言った。
蘭はさっそく昨日買った、ピンクのワンピースを着て朝食を運んでいた。
私は歯を磨き、顔を洗って、朝食を食べた。

『いいね～、ピンク可愛いよ』と笑顔で言うと。
「ありがとう」と嬉しそうに言いながら、「ホストにはなるなよ」

と睨んだ。
『ならないよ、天職だけど』と笑顔で返した。
「確かに天職だよね～、さらっと女が喜ぶ言葉がでるもんね～」とニッをした。
『蘭の時以外は、営業です』とニッで返した。
「よし」と満開で微笑で、返してくれた。
ケンメリを見送り、朝のお仕事（食器洗い・掃除機）をして気付いた。
《チャリがない》バスか～と思いながら出掛けた。
大切なＰＧの紋章が付いた、ジャケットが入った袋を抱えて。

靴屋の前で蘭を確認しようと思い覗いたら。
「チャ～」とマリアが天使で笑った。
私は駆け寄り抱き上げた。
ユリさんが蘭と靴を見ながら、振向いて微笑んだ。
「マリアを、お願いできる」とユリさんが微笑み「私今からお祭りの打ち合わせがあるの」と言った。
『もちろん』と笑顔で返し。
靴屋の時計を見た、１０時４０分だった。

『マリアの帽子あります？』と笑顔で聞くと、ユリさんがバッグから出した。
『時間あるから、マリア・・大切な場所で遊んであげる』とマリアに微笑んだ。
「大切な場所って？」と蘭が聞いた。
『若草公園』と笑顔で返すと、二人とも薔薇の笑顔になった。
蘭にジャケットの入った袋を預かってもらい。
マリアと2人で出かけた、光降り注ぐ場所に。
公園でマリアを抱いて、ブランコと滑り台をした。

マリアは楽しそうに、何度もせがんだ。
マリアが砂場で砂遊びをはじめたので、すぐ後ろのベンチに座って見ていた。
陽の光に輝く天使を。

１１時３０分を公園の時計が指した。
マリアの手を洗って、抱き上げて教会に行った。
掲示板には、マリアのポスターがそのまにしてあった。
『マリア、この人もマリアだよ』と囁くと、マリアはポスターを見た。
「まりあ」と言って、私を見て天使レベル全開にした。
私は元気が充電された。
あの思い出のベンチに一度マリアと座り、靴屋に紙袋を受け取りに行った。

店を覗くと大ママが靴の袋を持って、蘭と談笑していた。
『おはようございます、大ママ』と声をかけた。
「おお」とマリアが天使で微笑んだ。
「おはよ、エース」と微笑み歩み寄り、マリアを抱きながら。
「マリアちゃん、おはよ」とマリアのおでこにキスをした、マリアは笑っていた。

『お買い上げありがとうございます』と蘭から袋を受け取りながら、大ママに笑顔で言った。
「ちょうど一足欲しかったからね、梶谷さんのお礼もかねてね」と笑った。
「いつもありがとうございます」と蘭が笑顔で頭を下げた。
「店に行くのかい？」と大ママが聞いた。
『うん、今から』と笑顔で返した。
「じゃあそこまで一緒に行こうかね、蘭ありがとう」と言った大マ

マの後に従った。
「ありがとうございました」と蘭が頭を深々と下げていた。
『大ママ、マミ姉さんの指名のこと。本当に俺でいいのかな？』と横を歩き聞いてみた。
「お前が嫌でも、マミはもう変わらん」と微笑んで返してきた。
『嫌なわけないよ』と言って大ママを見た。
「マミは本当に喜んでいるんだよ、お前が舞台を見たいと言って来たことに」と言った、私は嬉かった。

「困りますわ、大ママ引き抜きは」とユリさんが後ろから声をかけた、薔薇の微笑で、。
「今、一番欲しい人材なんだよね～」と大ママは笑顔で言って、マリアを渡した。
「うちもですの」とマリアを受け取りながら、薔薇の微笑みは絶やさずに言った。
「あれは本当の話やったな」と私を見てニヤっとした。
『やめてください』と私は焦った。
「あら、何かしら？」とユリさんが、私を見て微笑んだ。
「ユリと蘭がいるところを離れられんって、私の誘いを断わったんだよ」と大ママが言った。
「嬉しいわ」とユリさんが薔薇の笑顔で私を見た。
『2人とも甘えん坊で、大変だけどね』と笑顔で返したら。
ユリさんと大ママが、楽しそうに笑っていた。
大ママに挨拶をして、PGに向かった。
ユリさんは楽しそうだった。

PGでマダムとハルカも入り、お昼を食べていると、ユメ・ウミコンビが覗いた。
「遠慮しないでお入りなさい」とユリさんが微笑んで、招き入れた。

「すいません、お昼の時間に」とウミが謝った。
「全然構わんよ、約束は守ったみたいやね」とマダムが2人を見て微笑んだ。
「はい、ありがとうございました」と2人は頭を下げた。
「で、なんじゃ？」とマダムが聞いた。
「チャッピー君をお昼の空いてる時間にお借りできないかと」と聞いた。
「ん？」とマダムが2人を見た。

「サインの通しを覚えてもらおうと、蘭姉さんとは出来るので」と真剣に言った。
「そういう事なら、いつでもいいぞ」マダムが嬉しそうに言った。
「ただし、ここでやる時は3人娘の面倒を見ること」と付け足すと。
「ありがとうございます」と頭を下げて、お昼を食べてくると出ていった。
「ゆり、蘭はPGの宝やな」とユリさんをマダムが見た。
「それ、以上です」とユリさんも微笑みで返した、マダムもハルカも笑顔だった。

『ハルカ姉さんも教えてよ』と私はハルカを見た。
「どれを？」とハルカが笑顔で返した。
『誰のお客で、重要度だけでいよ。多分四季も言ってくるから』と笑顔で言った。
「了解、難しいぞ～」と可愛く微笑んだ。
『エミに一緒に覚えてもらって、それを習うかな』と笑ったら。
「エミちゃんなら一回で覚えるからね～」と言いながらハルカがニヤっとした。

『ちょっと制服着ると調子に乗って、先週まで震えてたくせに』とニッで返した。

「女優だから、演じてたのよ」っと笑顔で返してきた。
『うん、第一段階は終了だね』と笑顔で返すと。
「やった～、やっと第二段階になった」と笑った、マダムもユリさんも楽しそうに笑っていた。
「第二段階はなんですか？」とハルカが笑顔で聞くから。
『ハルカが最も苦手な下ネタ』と言ってニヤニヤで返した。
「それは大変ね～、でもその返しが一番重要だから頑張って」とユリさんが嬉しそうに、ハルカを見た。
「はい、頑張ります」と微笑んだ、マダムも笑っていた。

「さすがね、大ママが今一番欲しい人材と言うだけあるわ」とユリさんが私を見て微笑んだ。
『あれは冗談ですよ』と照れた。
「多分、本気よ・・マミちゃんの最初の指名の話も、あなたにしたのは大ママよ」と薔薇で微笑んだ。
「そうじゃな」とマダムも笑顔で言った。

「チャッピーがなったの！」とハルカが驚いた。
『忘れられない男にね』と笑顔で返した。
「うん、絶対喜んでいるよ。それでか～蘭姉さん」とハルカが私を見て微笑んだ、嬉しかった。
『ハルカの1番は、俺がキングに頼んでおくよ』とニッで返した。
「キング？？」とハルカが不思議そうに言った。
「梶谷さんよ、梶谷さんをそう呼べる唯一の男なんだって」とユリさんが楽しそうに言った。
「お前が怖くなってきた」とマダムが言い。
「本当に」とハルカが笑った。

食べ終わると、ユリさんがマリアと帰り。
ユメ・ウミが来た。

マダムとハルカは、フロアーの準備に行った。
『よろしくお願いします、ユメ姉さんウミ姉さん』と微笑んだ。
「よろしく・・なんでユメだけに、魔法をかけるのかな～」とウミが笑顔で返した。
『魔法じゃないですって』と返すと。
「私には魔法だったよ」とユメが微笑んだ。
「ほら、早く」とウミがニッとしたので。
『マハリクマハリタ』とやって3人で笑っていた。

【人はいつでも、どんな状況でもやり直せるんだ、どんな時でも逆転はできるんだ】
ある時、私に生臭和尚が言った・・その言葉が蘇っていた。

2人の笑顔は、確かに変わってきていた。

母と和解したのだろうと思っていた。

私は親父と和解できるのだろうかと、家出して初めて親父を想っていた。

逆転に全てをかける、挑戦者の笑顔を見ながら・・・。

観賞

それは何度も来る、乗り越えないといけない壁は。
目を逸らし挑まなくても、前には進むだろう。
しかし到達地点が違う、戻りやり直す事はできない。
時は残酷だから・・・。

後悔を背負いながら、挑戦を決意した、２つの魂の熱を浴びていた。
「これで3本が蘭姉さんバックで」その楽しそうなウミの説明を、書きながら聞いていた。
ユメはエミとミサが来たので、エミの勉強を教えながらミサの塗絵を見ていた。
楽しそうに笑顔で、松さんが来て微笑んで見ていた。

「覚え、いいじゃない」とウミが笑顔で言った。
『なんか、スパイみたいで楽しい』と笑顔で返した。
「じゃぁ私達、帰って準備してきます」と松さんに挨拶して、２人で出て行った。
私は松さんにＴＶルームを任せて、ハルカと予約の確認をした。

蘭が迎えに来てアパートに帰って、蘭特製のオムライスを食べた。
ユメ・ウミの話をしたら、本当に嬉しそうに微笑んだ。

蘭と7時過ぎにＰＧに入った。
ＴＶルームで３人娘に会ってから、フロアーの指定席の準備をした。
「コールまでいい？」と準備ができたウミが来て言った。
『もちろん』と言って、明るい１０番席でサインの続きをしていると、ユメが来た。

「ユメちゃん、いつまでに終わりそう？」と千秋が来て、ユメに微笑んで聞いた。
見ると後ろに四季が揃って立っていた。
「明日で終わります」とユメが言って「覚えるかは別ですが」とニッと私を見た。
「それが、大問題」と美冬が言って、６人で笑った。

「とにかく、明後日から。うちらのもよろしく」と千春さんが笑顔で言った。
『どうしようかな～』と私が言うと。
「皇帝よろしく」と千夏さんが言った。
『よし』と笑って海と続きをはじめた。
四季はフロアーのセンターで綺麗に横一列になって。
バレエダンサーのようなお辞儀を、全員で揃える練習をしていた。
見ると、カスミが６番席で、ハルカに複雑なサインを聞いていた。
「綺麗に揃うようになってきたね、さすが四季だね～」と準備のできた蘭が、四季に微笑んだ。
「いつか見せる、舞台があるといいね」と蘭が言って、四季と笑顔で話していた。

時間も迫り女性が円になりだしたので。
私も指定席に戻ろうとした時に、受付にキングが来た。
私と目が合うと、キングは右手を上げて笑った。
私は一礼して駆け寄った。
『いらっしゃいませキング、先日はありがとうございました』と挨拶をした。
「なんでもね～よ」と笑顔で言った。
「いらっしゃいませ、梶谷様」とユリさんが言った。
「おう、ユリＰＧが新しくなったのを、もう少し見たくてね。いいかい？」と微笑んだ。

「勿論です、ご案内します」と言ってハルカを見た、ハルカが頷きキングを3番席に案内した。

「チャッピー開演まで、梶谷さんをお願い」と言って薔薇で微笑んだ。

『了解』と笑顔で言って、3番に向かった。

『四季を全員呼ぶサインは？』とハルカに聞いた、ハルカは不思議そうに。

「こう」と指で示した。

『了解』とニッで返した。

『ようこそいらっしゃいました、開演までお相手しま～す』とキングを見た。

「お手柔らかにな」とキングが楽しそうに笑った。

「ここで作れよ、ハルカ」と横で屈んで、キングの酒を用意してるハルカに、自分の隣を指差した。

「ありがとうございます、失礼します」と隣に座った、緊張しながら。

それをキングは優しく見ていた。

『キング、今日は早いですね』と笑顔で言った。

「おう、仕事で嫌な事があってな・・だから、今一番楽しいだろうPGにきたんや」と笑った。

『じゃあ今夜の第一幕は趣向を変えていいかな？』と笑顔で聞いた。

「おお、いいね～楽しみや」と笑った、その時。

「今夜も開演しましょう」のユリさんの声があり、「はい」のブザーが鳴った。

私は立ち上がり、まだ他の客が来ないのを確認して。

『キングの希望により、今夜の第一幕は趣向を変えます』とフロアーに向かい言った。

全員が私を見た。
私はハルカに聞いたサイン【四季】を出し【3番】を出し、フロアーのセンターを指差した。
その時の四季が凄かった、互いを何も見ずに横一列に綺麗に並び。
バレエダンサーのお辞儀をした、一瞬も流れは淀まず、綺麗に4人がシンクロした。
キングはそれを見て。
「素晴らしい」と笑顔で四季に拍手を送った。

四季が来て私とハルカは交代して、2人で3番をあとにした。
「どういう精神構造をしてるの？」とハルカが言った。
『まずかったかな？』と聞き返した。
「梶谷さんと、ユリさんの笑顔見たでしょ。悪いわけないよ」と笑った、私はVサインを出した。

「お前は、やるな～」と指定席に戻る途中で徳野さんに言われた、リンさんも微笑んでいた。
私は頭をかきながら、顔だけで照れた。
「絶対に、よそに引き抜かれないでね」とユリさんの声がした、私は振向き。
『勝手してすいません』と詫びた。
「なに言ってるの、褒めてるのよ」と薔薇になって、「四季の後は当然、ユメ・ウミを振りますから」と笑顔で言って、戦場に出て行った。

3番を見るとキングが4人に囲まれて、楽しそうに微笑んでいる。
9時前に8割程席が埋まり、ユリさんが3番にユメ・ウミを紹介していた。
キングは嬉しそうに、2人を招き入れた。
ユリさんは一礼して、3番を離れた。

「やるね～フロアーマネジャー」そう言って蘭が微笑んだ。
『お披露目の最高の舞台だったでしょ』と笑顔で返した。
「うん、四季は喜んでるよ～浮気するなよ」と笑顔で睨み戦場に戻った。
私が３番を見ると、３人とも笑顔で談笑していた。
《がんば》と心で応援した。

９時３０分を過ぎた頃満席になった、３番は帝王と女王の鎮座する場所になっていた。
「私とのスペシャルサインは～」と後ろから声がした。
『目を見れば通じるだろ俺達は』と振向きながら言った。
「うん」とカスミが妖しく微笑み、戦場に戻った。
まずいと思いフロアーを確認したら、満席で蘭も四季も忙しそうにしていた。
四季がそれぞれ来て。
「ありがとう」と言って微笑んだ、私は都度Ｖサインで答えた。

１１時になるころ、客も一段落した。
キングはまだいて、ユリさんと談笑中だった。
「いらっしゃ～い、うれし～」と蘭の声が受付で響いた、見ると生臭が来て笑ってた。
《やっぱり》と私はと思っていた。
生臭は一張羅であろう着物を着ていた。
６番に通そうとすると、キングが立って深々と生臭にお辞儀をした。
そして生臭を、自分の席にと手招きをした。
《わちゃ～知り合いだ》と私は驚きながら見ていた。

生臭と蘭が３番に座り、ユリさんが生臭に挨拶している。
生臭の見たこともない笑顔を見ていた。

キングと生臭とユリさんと蘭が座る、その席を怖いと思いながら見ていると。
蘭が沸点を目指して、炎を上げたのが分かった。

その日も終焉が近づいてきた。
「和尚に挨拶しておいで」と蘭が満開で微笑んだ。
『ねっ来たでしょ』と笑顔で返すと。
「うん、素敵な人ね」と笑って、「カスミを紹介してね」と言って銀の扉に消えた。

私はカスミを連れて3番席に行った、和尚とキングとユリさんが談笑していた。
『和尚、ようこそいらっしゃいました』と笑顔で言った。
「おお、がんばってるな」と笑顔で答えた。
『和尚に紹介します、今若手Ｎｏ１のカスミです』と言うと。
「カスミですよろしくお願いします」とカスミが前に出て、頭を下げた。
「見事だ、見事な外観じゃ・・だが内観を出すのが怖いか？」と優しい言葉で和尚が言った。
カスミはハッとして、和尚を見て立ち尽くした。
キングもユリさんも、見ていない振りをしていた。

私は蘭がなぜ俺に、言いに来たのかと考えて。
『カスミさんどうぞ、横に』とカスミを促した。
「失礼します」とカスミは言って座ったが、目は和尚と見つめ合ったままだった。

カスミはもう一段上がるために、乗り越える時が来ていた。
蘭が演出した、踏み出せないカスミに・・和尚とういうきっかけを。

私は何も分からずに、カスミを見ていた。

その圧倒的容姿に隠された物など、分かろうともせずに。

カスミの目は和尚を見ている、妖しい輝きを増して、何かを訴えている。

あの時豊兄さんは何を感じ取ったのだろう、カスミと目で語った時に。

私は何も分からずに見ていた・・その観賞するための容姿を・・・。

カスミ

心を閉じていたら何も感じない、開いていても感じてこない。
わかりたい、そう思わなければ。
決して理解してやる事など、できないだろう。
しかし、それが大切な【者】なら。
出来ないからと、諦める事ができない。

終焉が近づいたフロアーを見下ろす、浮いているような錯覚さえする小船。
３番の美しい挑戦者は、ただ黙ってみている。
その祖父ほど離れた世捨て人を。
「お前は良い子じゃな、本当に芯の優しい子じゃ」生臭はカスミを見て、優しく囁いた。
「だから、自分が許せんのじゃ・・近いうちに寺などにこんかい」と和尚が優しく言った。
「はい、お伺いします」とカスミが、顔を上げて微笑んだ。
「そこの小僧に案内してもらえ」と言って、「今夜は楽しかった」と笑顔になった。
カスミも輝く笑顔になった。

キングと生臭の後を、ユリさんとカスミが続いた。
「和尚ここは私が」とキングが言った、。
いいんかい」と和尚が笑顔で言った。
「これくらい、和尚に受けた恩にくらべれば」とキングも笑顔だった。

「リン、ありがとう」とキングが言って。
「ありがとうございます」とリンさんが、頭を上げるのを待ってい

た。
和尚とカスミはエレベーター前で話している、カスミには笑顔が出ていた。
「今夜は、ユリと蘭とカスミ、それとあの四季という四人と、ユメちゃんウミちゃんを指名したから」と微笑んだ。
「それと和尚の分」と言ってリンさんに近づき小声で。
「和尚が次から来ても基本料金だけで、他の分は全部俺に回してくれ」と笑顔で頼んだ、リンさんは笑顔でなずいた。
キングが支払うと、蘭と四季とユメ・ウミコンビが送りに出てきた。キングが最後の客だった。
「和尚様、また来てくださいね」と蘭が言うと。
「来るなと言っても、くるよ」と笑顔で返した。
キングと和尚がエレベーターに乗ると。
「あっ、小僧の指名料忘れた」と私にキングが笑顔で言った。
『やっぱり、女がいいんだ。浮気者』と笑顔で言った。
「そんなに怒るなよ、今度どこでも連れて行くから」とキングが笑った。
『ハワイでよろしく』と頭を下げて、全員の笑顔で見送った。
「なぜあんな返しがができるかね～」と美冬が言った。
『それは、キングが懐が深いからです』と笑顔で言った、本心だった。
「あなた達もこれからが、本当の自分との勝負です」ユリさんが言って。
「梶谷さんの指名を勝ち取ったんですよ全員」と薔薇で微笑んだ。
四季とユメ・ウミが飛び上がり喜んだ。
「自信を持って頑張って」とユリさんが笑顔で言うと。
「はい」と6人が笑顔で答えた。

蘭とカスミは6番席に座って話していた、カスミの話を聞く蘭は真剣だった。
ユリさんがそれを、優しく見ていた。
私はＴＶルームに戻り、サクラさんをミサを抱いてタクシーまで見送り。
帰っても、6番の2人は話していた。

私がＴＶルームに帰ると、マダムもユリさんもハルカも来ていた。
「お前は本当に怖いわい」とマダムが笑顔で言った。
『キングが仕事で嫌な事があったて言うから』と笑顔で言うと。
「その前に私に四季のサイン聞いたくせに」とハルカが笑顔で返した。
『ハルカ姉さん、わりと胸大きいんだね』とハルカの隣に座りながら聞いた。
「えっ」とハルカが私を見た。
『先が思いやられる』とニッで言った。
「あ～、難しい」と照れて笑った。

「ユリ、蘭になんかしてやりたいが・・金は受け取らんよの～」とマダムがユリさんを見た。
「それは絶対に受け取りませんよ・・あの子は」と言ってマダムを見た。
「あの子は、本当に自然にしているんです・・それに対し感謝される事を望みません」と薔薇の笑顔で言った。
「そうなんじゃよ」とマダムも言って考えた。

「遅くなってすいませ～ん」と蘭が慌てて入ってきた。
「ユリさん帰られてよかったのに」と満開笑顔で言った。
「帰れませんよ、誰かがお店の女の子の事を想って行動してる時は」

と薔薇で微笑んだ、蘭もユリさんを見て微笑みを返した。
「ダ～リン帰ろ」と笑顔で言った。
『俺の悪口２人で言ってたろ』と笑顔で返した。
「聞こえたの！」と言って笑った。

「ダ～リン、私とのスペシャルサインは？」とエレベーターで蘭が後ろから聞いた。
『俺達はどんなに離れていても、心で会話できるだろ』と振向いて笑顔で言った。
「うん」と蘭も満開笑顔で返した。
『なんで聞こえるかな～、謎だ』と呟くと、皆が笑っていた。
マダムがタクシーチケットをくれたので、タクシーに乗り家路に着いた。

「カスミが和尚の所行く時は、よろしくね」と私の肩に顔を乗せて蘭が微笑んだ。
『了解・・俺は子供だと、また確認させられたよ』と微笑で返した。
「あなたは、カスミがけれられてた魔法をといたわ・・私の時と同じように」と静かに言って目を閉じた。
私はその言葉を考えていた、蘭の髪の香りを感じながら。

部屋に着き、蘭がいつものようにパジャマを着て、ベッドに入り話し始めた。
「私は、カスミやユメ・ウミちゃんには、特別の想いが有るの」と私を見ている目は深かった。
「２０歳というその年齢で苦しんでいる、その時期に私も苦しんだから」と静かに言った。
「私にはユリさんがいたから、もがき苦しんでもここまで来れたの」と優しい笑顔で言った。
私は蘭を見ながら頷いた。

「だから、その大切な季節を心から楽しんでほしいの」蘭は天井を見ている。

「カスミは、男性恐怖症なの。それもかなり強い」と蘭が真顔で言った、私は衝撃だった。

「それだけは気付いていたの、会った時から」と深い目で、私を見た。

「私達、女には何も出来ないのよ・・何かが出来るなら、きっかけを与えられるのは」私を見ていた、優しい目で。

「あなただと思ったの、そしてあなたは１００点以上の答えを出したわ」満開の微笑で。

「本当に嬉しかった、でもまだ足りないのカスミ自信が踏出せない」と深い目で伝えてくれた。

「今夜、生臭さんが歩いてるカスミを見て。
強い子じゃ、自分が一番辛い場所で働いておる。
そして自分と戦っている、そう呟いたから、カスミを会わせたの。
この人なら、優しく背中を押してくれると思ったから」

蘭は真剣な目で私を見た、私も真顔で頷いた。

「お願い、その時にカスミに最も必要なのは」私を深く優しい目で見た。

「カスミの魔法をといた、あなたが側にいる事なの」と優しく微笑んだ。

『蘭、俺は何も出来ないけど・・その時はカスミの側にいるよ、それで蘭が笑顔になるなら』と蘭のおでこに手を当てて。

『もう、お休み』と囁いた。

「ありがとう、でもやきもち凄いからね」と目を閉じながら囁いた。

『知ってる』と私も囁きで返した。

大切な蘭を見つめる時間を楽しみながら、気分は深く落ち込んでいた。
私は全く予想もできなかった、あれだけ近くでカスミを見ていたのに。
あの拒絶のオーラの意味が分からなかった、いや正確には見ようともしなかった。
未熟だと実感させられていた。
部屋に戻り、瞑想の時が来た。
すぐにあの、至極の逸品の姿が現れた。
【近寄り難いの？】何度も何度も聞き返す、あの強い瞳が。
その苦しみなど考えもしなかった私は、何も言えなかった。
【私の内面には誰も迫ってこない】と叫んで。
その大きな瞳から、涙をとめどなく流すカスミが愛おしくて。
手を伸ばすが、遠すぎて届かない・・・。

私は眠ったのかどうか分からないまま、早朝目が覚めた。
静かに起きて、歯を磨き顔を洗って。
目玉焼きを焼いていた。
「素敵」と言って、蘭が起きたばかりの顔で微笑んだ。
『おはよ、寝起きも可愛いよ』と笑顔で返した。
蘭はびっくりするほどの、寝癖だらけの髪だった、私は必死に笑いを我慢していた。

「寝起きのこの状態が、一番男が冷める時なんだって」と蘭が言いながら洗面所に行った。
「あ～」と言って飛び出してきて、「正直に言いなさい、冷めたでしょ」と睨んだ。
『可愛いって言ったでしょ』と私は必死に笑いを堪えて言った。
「本当に？」と笑顔になった。
『可愛いよ、どんな時も』と笑顔で返した。

「当然」と笑って洗面所に消えた。

少し焦げた目玉焼きとトーストを食べながら。

「修行が足りんね、美味しいけど」と蘭が笑顔で言った。

『朝からあんなに可愛いもの見て、動揺したんだよ』とニッで返した。

「今度どっかに、写真撮りに行こうね」と満開で微笑んだ。

『いいよ、でも俺は蘭の写真は欲しいけど・・でも必要はないよ、もう目を閉じれば実像が浮かぶから』と言って少し照れた。

「胸、もっと大きいよ」と蘭は嬉しそうに笑顔で返した。

『相当大きく描いたのに』とニッで返した。

「見せるよ」とニッで返された。

『失神するからご勘弁を』とウルで言った。

蘭を見送り、朝のお仕事を終わらせたのが、９時１５分だった。

私が部屋で爪を切っていたら。

【ファン・ファン】と懐かしい、間の抜けたクラクションが響いた。

窓を開けて見ると、可愛いスバル３６０の横に、至極の逸品が立っていた。

夏の輝きを跳ね返し、自らが輝きを放出しながら。

対向車の男達の視線を独り占めにして。

その強い眼差しで微笑み、手招きをした。

私は目を逸らさずに、笑顔で見ていた。

部屋を出ながらカスミも違う意味で、私にとって特別な存在だと思っていた。

もう目を逸らさずに、豊兄さんが一目で感じた世界を、感じたいと思っていた。

【あんたの幸運に嫉妬したよ】階段を降りながら、その声が響いてきた。

夏の熱が、全ての水分を空に返そうと、背景を揺らしていた。

しかしカスミの、意思を反映するするその姿は、揺れていなかった。

私を見て、鮮やかに微笑んだ・・・私はただ追いかけるように走っていた。

私の成長を試される、第二試験のベルが鳴った。

ただ私は問題を解くのではなく、答えを探すのではなく、感じたいと思っていた。

【不正解を教えて】とカスミが微笑むから・・・。

怖暴

その背中は背負ってでも、前に進む意志を示している。
美しく生まれた事を後悔しないために、強い意志を示していた。
忘れるという言葉を拒否する、圧倒的存在・・・永遠の輝き。

夏の輝く日差しの中を、追いかけるように走った、その微笑に向かって。
「早いじゃない・・連れてってね、一緒に」と微笑みながら、優しく言葉にした。
『困ったもんだな、皆甘えん坊で』と笑顔で返した。

トコトコと街を抜けて、ケンメリを止めた同じ場所に、てんとう虫を止めた。
カスミの手を取って、楠木の石の所に案内した。
『ここに眠ってる兎が、俺にチャッピーって名前をくれたんだよ』と打明けた。
「兎ちゃんだったんだ」とカスミは微笑んで、屈んで手を合わせた。
本堂に行こうと振り向いたら、和尚が満面の笑みで立っていた。

「おお、この寺３００年の歴史で一番美しい方がおいでじゃ」と笑った。
『蘭に言ってやる』と私が返すと。
「それだけは、黙っちょってくれ」と手を合わせて頼んだ。
「ご招待にさっそく、甘えました」とカスミが笑顔で言った。
「美味しい草もちでも、どうかな?」と同じ台詞を言って、笑った。
「いただきます、嬉しい」と和尚に近づき、並んで歩き出した。
私は牛乳ビンの萎れかけた花を見てから、後を追った。
蘭と来た時と同じ本堂の隅のちゃぶ台で、草もちとお茶をご馳走に

なっていた。

「外観と内観という表現を初めて聞きました。」とカスミが切りだした、和尚は笑顔を絶やさずに。

「わしも人間に使ったのは、君で3人目じゃよ」とカスミを見ている。

「お願いします、意味を教えて下さい」と真剣に言って、頭を下げた。

「宗教とは色々な考え方がある、何を信じるも何も信じないもいいと、わしは思っちょる」カスミは静かに聞いている、頷きながら。

「その中で、人の体はその魂の入れ物という考え方がある・・人を外見で判断するなってよく言うじゃろ」カスミは頷いた。

「あれは他人から見た姿じゃよな」と和尚が言った、カスミは頷いている。

「外観という観念は、自らが見てる姿やな。
内観はこうありたいと思う姿や。
内観を出せないと言った、言い方が少し悪かった。
内観を見るのが怖いんじゃな」

和尚が真顔で言った、カスミは静かに頷いた。

「よくそこまで来たの、苦しかったじゃろうに。
本当にお前は優しい子なんじゃよ。
だから、壊れなかった自分にも優しいからな」

和尚は優しくカスミに言った、カスミは真顔で和尚を見ていた、美しかった。

広い本堂に、爽やかな風が流れ込んでいた。

内観を見つめようと、必死に闘う美の戦士に。

「私は博多のごく普通のサラリーマンの家庭に産まれました」カスミが静かに語り始めた。
『俺、出てようか？』とカスミが少し考えたので、そう聞いた。
「いて、お願いだから」と言ったカスミの目には、あの妖しさがなく深かった。
私は微笑んで頷いた。

「父は仕事人間で、母は教育熱心な人です。
２歳上に真面目を、絵に描いたような兄がいます。
今思うと、幼い時から変わった子でした・・・」
カスミは幼い時から人と同じ事ができなかった。」
幼稚園も小学校の時も、それがあまりに幼稚に感じて出来なかったと。
人と同じルールを、受け入れられないカスミを、母親は必死に矯正しようとした。

「凄く我侭な子供でした・・・」俯いて思い出しながら、その頃の自分を追いかけながら。
カスミは母の言うことが、分からなかったのだ。
そしてその強い意志で、自分を曲げなかった。
勿論、集団行動が出来なかったのではない。
学校生活の集団行動は、なんとか我慢してやっていた。
ただ納得が出来ない事には、どんなに叱られようが譲らなかった。
そんな子を、周りはの子供も避けだした。
中学は孤独に、３年間を過ごした・・曲げれずに。

「でも、高校で変わりました・・・」

高校は自宅から遠い、私立高校に行った。

中学のカスミを知っている、人間も少なかった。
そして、カスミは気づく男子が優しく接し始めて。
自らの容姿が、男子の目を引くほどの物だと。

「それから必死に、美しくなる事に貪欲になりました、私は孤独に飽きていました・・・」そう言って涙を見せた。
静かに、声をたてずに泣いていた。

そしてその輝きが増すと、博多の芸能事務所にスカウトされ広告モデルになる。
地元ＴＶにも出て、有名になっていく。
そして高校では、男子の憧れのマドンナにまで上り詰める。

「そうなると、女子とは一層疎遠になってしまいました・・・」
でもモデルという仕事で、大人の男性と知り合って。
酷い仕打ちも受けたが、辞める事ができなかった。

「孤独に戻ることが怖くて、もう出来なかったんです・・・」

高３になって、アイドルとして東京進出話しが現実味を帯び始めた頃。
一人の男と出会う、一流企業に勤める２７歳のサラリーマンだった。
カスミは仕事を捨て、男にかけた。
付き合ってる時は優しかった、そして決意する。

「私は１９で彼と結婚しました・・・戸籍上はまだ彼の妻です」
虚空を睨みそう語った。

結婚生活が始まると、彼が徐々に変わりだす。
異常な嫉妬心が、頭を持ちあげる。

それは地獄の日々だった。
そして加熱したその嫉妬心が、暴力に変わる。

「最後の暴力は顔が変形するほど殴られました」何かを睨んでいる。
「この顔があるから、心配なんだって言われながら」と言って震えていた、俯き拳を握り。

金だけを握り締め、カスミは家を飛び出した。
駅入場券を買い、特急列車に飛び乗った、腫れた顔のまま。
その列車の終着駅が宮崎だった。
ホテルで顔の腫れが引くのを待って、夜街に出た。
寮完備の風俗の募集広告を見ていたら、後ろから声をかけられた。

「あなたは自分の事が嫌い？」と、振向くとユリさんが立っていた。
その存在に触れ、その場でカスミは立ったまま泣いた。
ユリさんはその場でカスミを抱きしめて、自宅に連れて帰り。
マリアを任せて仕事に出掛けた。

「私をどこにも行かせないために、最も大切なマリアちゃんをあずけてくれました・・・」と涙と流しながら感謝していた。

「そして2歳の幼いマリアちゃんに、救われました・・・」
私はそこだけは明確にイメージできた。
マリアの天使の笑顔が見ている、カスミの腫れの残る笑顔が。
そしてユリさんがアパートまで契約してくれて、ＰＧで働かせてくれました。

「でも、私は男が怖い・・・少しでも手が動いただけで・・・心臓が止まるほど怖い」と俯いて搾り出すように語った。

それでも、そんな状況でもあれだけの仕事が出来たのか。
私は俯き何かと闘うカスミを見ていた。
私は感動していた、その強さに、自らで切り開こうとする強い意志に。

「最近私は少しずつ回復してきました、それはチャッピーが教えてくれました」私を見て。
「ありがとう、あなたが教えてくれた怖がらなくていいと」と言って、優しく私を見ていた。
絶対的な美しさは衰えを見せることはなく、輝きはそのままに。

「彼には何度も離婚してくれと電話で頼みました。
会って話してからそう言われて・・・怖くて避けてきました。
和尚様、私はケリがつけたい・・・私の全ての過去に」

和尚を見ながら強く言った、カスミの輝きが溢れていた。

「つけてこい、お前は愛されるべき人間じゃ。
愛される未来のためにつけてこい。
昨夜ユリという女性に会って、わしは何十年振りかに衝撃を受けた。
蘭がここに来た時も、その圧倒的温もりに驚いたんじゃよ」

和尚も強く言った、カスミは強い眼差しのまま頷いた。
「人が出会うのには意味がある、それが最も大切なものじゃよ」と優しく言って。
「この小僧はそれだけはわかっちょる」と私を見た。
「豊の弟じゃかい、豊が唯一認めた奴やかい分かるよな?」と私に問いかけた。

『博多ラーメンがどうしても、食べたくなった』とカスミを見て言った、自然に笑顔になった。
「しょーがないな、美味しいとこ知ってるから」とカスミも笑顔になった。

和尚に礼を言って、カスミの手を繋ぎ車に向かった。
振向くと、和尚が楠木の牛乳ビンの花を見ていた。
その萎れかけの花が勇気をくれた、未熟な私に。
カスミの目にはどこにも、迷いがなかった。

「お店行って、マダムに言ったら次の便に乗るよ」と私に微笑んだ。
『俺、飛行機乗るの初めてや』と笑顔で返した。
「乗せてやるんや、離れるなよ。そして必ず連れて帰れよ、蘭姉さんの所まで」と前を見ながら言った。
『絶対離れないよ、お礼が欲しいから』と笑顔で返した。
「お礼で死ぬなよ」と言いながら橘通りを左折した。

TVルームにはマダムと、ユリさんとハルカがいた。
「マダムすいません、今から博多に帰ってきたいので。今夜は遅れます」とカスミは頭を下げた。
「必ず帰ってくるな」とマダムはカスミを見た。
「約束します」とカスミは強い目で誓った、私が自分もと言おうとすると。
「辛子明太子を博多まで買いに行ってきてくり」と笑顔で私に言って、マダムは財布から5万円を出した。
『しょーがないな、行ってきてやるか～』と金を受け取り笑顔で返した。
「つりは返せよ」とマダムは微笑んだ。
マダムとユリさんとハルカの笑顔に見送られ、靴屋に向かった。
蘭にカスミが話をした、私は蘭を見ていた。

『お土産何がいい？』と話しが終わった蘭に言った。
「カスミ」と蘭が微笑んだ。
『ＯＫ必ずそれを持って帰る』と笑顔で返した。
「それと生意気な家出中学生、それがいないと眠れないから」と蘭が満開笑顔で言った。
『大丈夫、多分その粋な家出少年も、蘭の側じゃないと眠れないから』と笑顔で蘭を見ていた。
「さっ、早く行っといで」と蘭が笑顔で送り出した。
蘭はカスミを見ていた、優しい目で応援していた・・踏出した者を。
スバル３６０はその空色のボディーが、同化するような空の下を、トコトコと走っていた。
前を見て運転する女性は、輝きを連れている、発散する物は無い。
目の前をＹＳ１１が空から降りてきた、入道雲の上から帰還した。
「宮崎が好き、マダムも・ユリさんも・蘭姉さんも・ハルカもみ～んな大好き」
カスミはそう叫んで、私を見た。
「ありがとう」と微笑んだ、その背景は揺れていなかった・・・。

決着

なぜ人は人を、愛するのだろうか。
それが欲の充足では、絶対にいけない。
理由を求めたら、迷路に迷い込む。
失う事は怖い、失わない方法は難解である。

滑走路の先に海が見えていた。
旅人達が慌しく動く、喧騒のロビーに2人で手を繋いでいた。
１１時４５分発の便が取れていた、私は初めての飛行機に多少興奮していた。
「手を繋いでて恥ずかしくないの？」とカスミが聞いた。
『嫌なんだ』と泣き真似をした。
「私から繋いでて、嫌な訳無いでしょ」と微笑んだ。
『カスミとなら、自慢になるし楽しいよ』と笑顔で返した。

「自慢になるの？」と聞くから。
『友達全員に見せたいぐらいに』とニッで言った。
「そうなんだ～、私中学の記憶が無いから」とはにかんだ。
『今日、荷物とって帰るでしょ？』と笑顔で聞き返した。
「あ、そっか～、良かった連れて来て」と不敵に微笑んだ。
『アルバム見せて、中学の時の』とニヤニヤで言った。
「見たいの？地味だよ」と笑った。
『そんな地味な子が、成長するとこうなるってのを研究したいから』と返した。
「今の、蘭姉さんに報告します」とニッで返された。
『それだけは、ご勘弁を』と涙目で訴えた。

小さな飛行機に搭乗して、私が窓際にその隣にカスミが座った。

「はしゃぐなよ、子供みたいに」と中を見回している私に微笑んだ。
『あい』とマリア語で返した。
「可愛くない」と微笑み、私の手を握った。
私は離さないように握り、窓の外を見ていた。
飛行機が怖いのか、今からの事が怖いのかと考えていた。

離陸してすぐに、着陸した感じの短いフライトだった。
手荷物の無い私達はそのまま出て、天神行きのバスに乗った。
私はバスから見える天神のビル郡に興奮していた。
『やっぱ都会やね』と外を見ない、カスミに声をかけた。
「東京に行ったら倒れるぞ」とカスミは言って微笑んだ。
『でも宮崎の方がいいね』と笑顔で返した。
「うん」と笑って、カスミは外を見ていた。

カスミが旦那の会社に電話して、会社の近くの喫茶店に呼び出した。
私はカスミと背中合わせで座っていた。
「奴が来たら、背中をくっつけて。絶対に手をだすなよ」と背中越しに囁いた。
『了解、心配しないで』と私が囁いた時に。
【カラン・カラン】とドアの鈴が鳴って、カスミの背中に緊張が走ったのが分かった。
私は男を見ずに、男が座るのを感じて、カスミの背中に自分の背中をピッタリと付けた。

「やっと、帰ってきたんか」威圧的な男の声がした。
「分かれて、これを今書いて」とカスミは離婚届を差し出した。
「お前、ばかか。誰が離婚なんかするか」と吐き捨てた。
「離婚して！」とカスミは強く言った。
「顔腫らした時に訴えればよかったのに、今じゃお前の一存じゃ出来んよ」と言い捨て。

「学校もまともに通わんでモデルなんかしてるからや」と罵倒した。
「離婚して！」カスミは強くそれ以外言わなかった、背中は微かに震えていた。
「宮崎なんかで、飲み屋で働きやがって」と言われた時に、カスミの背中に電気が走った。
「そこに迷惑かけたくなければ、ここで仕事が終わるまで待っとけ」そう言って男は出て行った。

私は立ち上がり、カスミの席に行き離婚届を取り上げた。
『カスミここで待ってて、心配しないで殴り合いとかしないから』とカスミを見た、目が震えていた。
『絶対いてよ、俺迷子になるから』と微笑み。
『大丈夫、俺、策略と口では無敗だからね』と出来るだけ優しく囁いて、カスミの頭に手を置いて。
『待っててね』と言って自分で『うん』と自分で言って、カスミの頭を下げた。

私は走って男を追って、信号待ちしてる所に追いついて、男の後ろを歩いた。
天神の一際大きなビルに入って行った、私は付けながら会社名を見た。
日本人なら誰でも知ってる大手商社だった。
《こりゃ～好都合と思っていた》
大きな1階のロビーの綺麗な受付嬢の前で声をかけた。
『すいません、これ書いてくれないかな～』と笑顔で、男は振向き離婚届の用紙を見た。
「ガキなんのつもりや」と静かに凄んだ。
私は耳元まで顔を近づけ囁いた。

『ガキだよ１３歳、その賢い頭でよく聞いてね。
これ書かないなら俺、執拗にあんたを追い回すよ。
ここ首になっても徹底的に追い回す、執拗にね。
俺は１３歳だよガキなの、あと５年は厳重注意で済むの。
あんたは子供に手を出した瞬間に刑務所に行くの。
だから５年間執拗に追うの、賢い頭で理解できたかな』

男の耳元に静かに囁いた、男は動かなかった。
『じゃぁ始めるね』と男を見て微笑んでその場に土下座した。
額を擦り付けて、右手に離婚届の用紙を差し出して。
『姉と別れてください、姉を自由にしてやって下さい』と出来る限りの大声で叫んだ。
大手企業ビルの広いロビーの受付の前で、何度も繰り返した。

「おい、待ってくれ」完全に動揺してる男の声に。
《勝ったな》と思いながら、同じ台詞を連呼した。
「分かった、書くからやめてくれ」と私の耳元に囁いた。
『叫ぶのはやめる、土下座はやめんよ印鑑持ってきな、早くしな』
と囁きで返した。
男が慌て走る音を聞いていた、笑いをこらえて額を床に付けていた。

「もう行ったよ、もういいんじゃない？」と受付の方から女性の声がした。
『いやいや、締めが肝心です』と床に向かい言った。
「お姉さん幸せね」と言った言葉が優しかった。
沢山の人の通るのを感じていた、視線も感じていた。

「むこうで書くから、立ってくれ」と言ったので、立ち上がり受付嬢の美しい女性に。

『ここ使っていい？』と笑顔で聞いた。
「どうぞ、お使い下さい」と微笑んだ、私は男を見た。
男は離婚届を書き始めた。
「おでこが汚れてますよ」と言って私の額を拭いてくれた。
『ありがとう、清掃業者変えた方がいいね』と微笑んだ。
『まぁ社員が汚れだから仕方ないけど』と笑顔で言うと、受付嬢も笑顔で返した。

「ほら、2度と俺の前に現れるなよ」と最後のプライドで凄んだ、私は男から目を逸らさずに。

『俺、宮崎の西橘のチャッピーだから、その辺で聞けば皆知ってるから。
いつでも会いに来てね、楽しみ待ってるから。
姉貴には直接連絡はしないでね、どうしても連絡したい時は。
梶谷って弁護士が窓口だからそっちにしてね。
仕事が残って良かったね』

男から目を逸らさずに、静かに言った。
沢山の視線を感じながら、ロビーを意識してゆっくり歩いた。

出口の自動ドアのガラスの向こうに、カスミが屈んで泣いているのが見えた。
『だから、喫茶店で待ってって言ったのに』と駆け寄って、泣いているカスミを抱き上げた。
『こうなるだろ』とカスミに囁くと。
「策略、私の勝ち」と言って私の首に腕を回した。
『どこまで？』と私は霞を引き寄せて、聞きながら歩いた。
「ミ・ヤ・ザ・キ」と耳元で囁いた。
『勘弁して下さい』とウルで言いながら、天神のビル郡を歩いた。

カスミをお姫様抱っこしたまま、スーツを着た人々の視線を楽しみながら。

カスミの博多のアパートに行き、カスミが写真立てなどを投げて壊すのを見ていた。
「あ～すっきりした」と言った時に思い出して、ポケットの離婚届を渡した。
『お礼楽しみや～』と笑顔で言った。
「教えてあげようか？」と不敵に笑った。
『子供をからかうなよ』とニヤで睨んだ。
「蘭姉さんに殺されるしね」とカスミが笑顔で返した、それから荷造りをした。

私は大きな旅行バッグを、３つ持たされた。
外に出てカスミが鍵を締め、その鍵をドアのポストに入れた。
「あばよ」とポストに囁きながら。

「帰ろう」とカスミが微笑んだ。
『ラーメン』と私はウルで返した。
「そっか～、美味いよ～」と言いながら、腕を組んでタクシーを探しに、通りまで歩いた。

博多豚骨ラーメンの美味さに、感動しながら食べた。
カスミも美味しそうに食べていた。
「なに？」と私が見てるとカスミが睨んだ。
『似合わないから、イメージが』と笑顔で言うと。
「もう捨てろ、そのイメージ」と美しく微笑んだ。

辛子明太子を買って、１８時２５分の飛行機に乗った。
席に座るとカスミが手を握ってきた。

『飛行機が怖かったの？』とニッで言った。
「鉄が飛ぶか、どう考えてもおかしい」と呟いた。
『可愛い奴だな～』と笑顔で言うと。
「蘭姉さん借ります」と言って、私の肩に顔を乗せてきた。
私は窓から見える、沈み行く太陽を見ていた。
雲の上に出た時には、カスミは眠っていた。
これで良かったのかと考えていた、握ったカスミの手を見ながら。

てんとう虫を赤玉駐車場に入れて、ＰＧに着いたのが２０時２０分だった。
ＴＶルームに行って、カスミはマダムに挨拶して、準備に行った。
私はマダムにお釣りと明太子を渡した。
「ほれ、給料」と言って１万円をくれた。
『ありがとう』と礼を言うと。
「完璧な魔法をかけたな」とニッとマダムが笑った。
『ちょっと強いやつをね』と笑顔で返した。
３人娘と話していると。
「はよいかんと、蘭に殺されるぞ」とマダムが笑った。
私は走って定位置について、蘭を探したがいなかった。

「誰を探してるのかな？」と後ろから声がした。
『８時間も離れてたから寂しくて』と言って振向いた、蘭が笑顔で立っていた。
「よし」と笑顔で言って近寄り、「お帰り」と耳元で囁いた。
『ただいま』と耳元に囁き返した。
「後でたっぷり話は聞くから」と満開で微笑んだ。
『何もないよ』と笑顔で返した。
「楽しみやね～」と笑顔で戦場に向かった。
客が少しずつ入りだし、熱が上がってきた。

「サイン明日までに覚えてね」と声がした、ウミが笑っていた。
『すいません、マダムの業務命令で』と笑顔で返した。
「なんで2回かけるかな～」と意味深に戦場に戻った。
その時銀の扉が開いた。
純白のトレードマークである、タイトなドレスに身を包んだカスミが現れた。
その輝きは、熱量を増したような気がしていた。
圧倒的存在感を示し、堂々と歩く姿の裏に、鉄が飛ぶかと怖れる自分を隠していた

その美しい背中を見ながら、よかったのかもしれないと思った。

常に自分と戦った戦士が、今自分が望んだ戦場に出た。

競うのを楽しむために、大切な若い季節を楽しむために。

夜街の後世に語り継がれる、ＰＧの夏は始まったばかりだった・・・。

決別

何に対しても、決別する事が難しい。
心に残さない事は、不可能である。
別れを決めた心を持ち続け、挫折も後悔も連れて進む。
無意味な時間ではなかったと、いつか思える時が、必ず来ると信じたい。

熱が上がりだした幻想の宴を、蝶達のリクエストを聞きながら見ていた。
その日も１０時前には満席を向かえた。
マダムが言っていた、連続満席記録にあと６日と迫ってきた。
「４番の若者３人組、険悪・注意」と千夏さんが言って来た。
『了解、危ない感じ？』と聞いた。
「うん、チェック急いだ方がいいかも」と微笑んだ。
『了解』と笑顔で返した。
リンさんに報告して戻ると、ユメが待っていた。

『何でしょうユメ姉さん？』と聞くと。
「昨日言えなかったから、母さんと仲直りできたよ」と嬉しそうに笑った。
『それは、良かったですね』と笑顔で返した。
「うん、あなたの話通りにしてね」と笑って戦場に戻った。

「６番エコーじゃないと吸わないらしい」と頬を膨らまし美冬が言った。
『エコーか～、すぐ行ってきます』と頬を膨らまして返した。
「よろしく、カスミが２回で四季は０かね」と微笑むから。
『四季は皆幸せそうだから、出番無しです』とニッで返した、美冬

は笑顔で戦線復帰した。

私はタバコ屋に走り、カズ君に渡し戻ると、ハルカが休憩していた。
『疲れてるんじゃないの？』と声をかけた。
「まだ、慣れないからね」と微笑んだ。
『少しさぼってていいよ』と笑顔で返した。
「ありがとう、でも満席記録いくね～」と私を見て言った。
『凄い事なんだね』と聞き返すと。
「うん、3年振りの更新だからね」と笑顔で言った、私はハルカを見ながら。
『無理すんなよ、休みあまりないんやから』と言った。

「ねぇ、今度映画に付き合って」とハルカが言った。
『いいよ、俺でいいのかな？』と笑顔で聞き返した。
「あなたじゃないと駄目なの」とニッと笑った。
『第一段階は完璧なんだけどね～』とニッで返した。
「下ネタ苦手」と舌を出した。
『そこが可愛いんだけどね』と笑顔で言った。

「2番の若者が土下座して、やらせろって言う」又きたと思いながら。
『やめとけって伝えて、土下座は大切な人のためにするもんだって』と言って振向いた。
「分かった、言ってくる～」とカスミが笑顔で、小走りに戻った。
数分後。
「8番のおじさんが寝物語するから泊めてって言う」きた～と思いながら。
『やめとけって伝えて、私には死ぬまで寝物語してくれる人がいるからって』と言って振向いた。

「分かった、言ってくる～」と満開笑顔で、蘭が小走りに戻った。
当然応用編が４篇あった。

１１時半まで熱は冷めなかった。
終焉を迎えた時は蘭と７人衆は、疲れ果てて１０番に座っていた。
サクラさんを送っても、まだ蘭と７人衆が座っていて、蘭が満開で手招きした。
「さ、報告して」とニヤッとした。
「初めての飛行機と、５時間ぐらい手を繋いで」カスミが笑顔で続けた。
「天神抱っこが２ｋｍ位だった」とカスミが言った。

「お礼は」蘭は笑顔で頬を膨らまして言った。
「あっ、忘れてた」とカスミが私を向き、私の両手を掴んだ。
「よかったね、蘭姉さんのが触れるぞ」と言って引き寄せた。
「あっ、カスミ」と蘭が言った時には、私の手はカスミの豊満な胸の上に置かれていた。
『えっ！』私はあまりの事に固まっていた。
「まだかな？」とカスミが不敵に微笑んだ。
私は慌てて手を離して、恐る恐る蘭を見た。

「なぜすぐ離さない」と笑顔で睨んでいる。
『気が動転して』と頭をかいて照れた、蘭が私の前に立ち。
「んっ」と胸を張った。
『んっ、て言われても』と困っていた。
「生涯一度のチャンスかもしれないよ」と蘭が微笑んだ。
『そうならないように、頑張るために・・とっとく』と笑顔で返した。
「うん、カスミのは忘れてね」とニッとして、「着替えよっ」と笑った。

「本当にありがとう、蘭姉さんとこ追い出されたら、我が家に転がり込んでいい権利を授与する」とカスミは笑って言って、蘭と並んで歩き出した。
「あんたは、もう」と蘭がカスミに言って。
「今夜ぐらい喧嘩していいですよ」とカスミが蘭に微笑んだ。
「喧嘩なんてしないよ」と蘭が満開で微笑んで返した。

「伝説以上になってきたな～」と千秋が言って。
「でも2回ぐらい揉んだよな」と美冬が言い。
「いえ、5回は」とユメが言って、全員が私を見て、笑顔で控え室に戻って行った。

私がTVルームに戻ると、マダムとユリさんと松さんとハルカがニヤニヤしていた。
『見てましたね』と照れた。
「しかし、カスミをどこまで進化させるのかね～」と松さんが私を見た。
『元々持っていて、隠れてただけですよ』と笑顔で返した。
「あなたがいてくれて、本当によかった」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
『ラーメン食べに行っただけです』と照れた。

「私の時も、付いてきてくれる？」とハルカが真顔で言った。
『勿論、たとえ蘭が駄目って言っても、ハルカ姉さんが心から望むなら、どこでも行きますよ』と返した。
「いつでも休んでいいぞ」とマダムも真剣にハルカを見た。
「はい、少し考えようと思います」と強く言ったハルカを。
マダムもユリさんも松さんも、優しく見ていた。

「マダム、今夜ハルカ借りていいですか？」とユリさんが微笑み。
「蘭が明日靴屋休みで、蘭とカスミを招待してるので」と薔薇の笑顔で言った。
「ありがとうなユリ、頼む」とマダムも笑顔で言った。
「ハルカ、あなたはカスミから聞くべきです・・あなた達が本当の仲間になるためにも」とユリさんは優しく微笑んだ。
「ユリさん、ありがとうございます」とハルカは頭を下げた。

「遅くなりました～」と蘭が入ってきた、その後ろをカスミが続いた。
「ユリさん、ご招待ありがとうございます」とカスミが頭を下げた。
「ゆっくりと、くつろいでね」とユリさんは微笑んだ、カスミは嬉しそうに笑顔で答えた。
「マダム、ハルカを」と蘭がマダムを見た。
「行くよ、ハルカも」とマダムが蘭を見て。
「蘭、長くいてくれよ頼むから」とマダムが笑った、蘭も微笑みで返した。

タクシーに乗るマダムと松さんを見送ると。
「ハルカ私と行こう、車があるの」とカスミが言った。
「え、嬉しいカスミ姉さんの車って興味ある～」とハルカが笑顔になった。
『意外だから、心の準備しとけよ』と私が突っ込んだ。
「そのイメージ捨てろって言ったろ」とカスミが私を不敵で見た。
『鉄が走るかね～』とニッで返すと。
「３回揉んだくせに」と笑って、ハルカと赤玉駐車場に歩き出した。
「振り返らない方がいいかも」とユリさんも楽しそうな声が聞こえた。
『怖い』と言いながら振向くと、蘭が笑顔で睨んでいた。

ユリさんの家に着いて、私はマリアをベッドに寝かせ、寝顔を見ていた。
カスミとハルカが来た音がして、リビングに戻った。
カスミとハルカが洗面所に行き、ユリさんと蘭で準備をしていた。
皆が揃い乾杯をした、笑顔で始まった。
最初はお客の話で盛り上がり。
私はユリさんが特別に用意してくれた、味噌カツ丼の美味さに感動していた。

「蘭姉さん、ありがとう」と突然カスミが話し出した、和尚に話した歴史を。
ユリさんとハルカに伝えるために、そして過去と決別するために。
ただ一度も涙も震えも無かったのが、私には嬉しかった。
そして今日の決別の話まで来て、隣に座る蘭が、私の頭をヨシヨシしてくれた。

「本当にありがとう、ずっと手を離さないでくれて、抱き上げてくれて」カスミは私を優しく見てる。
「そして、演技でも土下座までしてくれて、あんなに人が通る所で・・初めてだった、自分の内側を抱かれた気がしたよ」と輝く笑顔を見せた。
私は何も言えず、照れていた。
ユリさんと蘭とハルカの笑顔が嬉しかった。

「あなたのあの姿は、絶対に忘れないよ」とカスミが微笑んだ。
『良かった、俺これで良かったのか分からなかったから』と微笑で返した。
「今回は豊君と違うやり方を選択しましたね」とユリさんが私に微

笑んだ。
『うん、心にずっとあの牛乳ビンの萎れかけた花があった・・お前のやり方を見せろって、ずっと見ていたきがする』と言ったら、蘭が抱きしめてくれた。

「私が豊君と見つめ合ったとき、多分私が今まで出会った中で。
一番喧嘩とか強いんだろうと思った。
でも全く怖くなかった、目がそう言った。
怖くないよ、何もしないよって・・優しかった。
だから、嫉妬した・・嬉しくて」と笑った。

『カスミ1つ抜けてたぞ』私はカスミを見てニッをして。
『鉄が飛ぶのが信じられなくて、震えてたろう』と笑った。
「飛ぶか、どう考えても無理だ」と笑った顔は輝いていた。

「私も、皆さんに聞いて欲しい事があります・・・」ハルカが前を向いて、あの集中した時の顔で言った。

飛び立つ時が来た、巣から出てパタパタと練習していた小鳥が、今遥かなる大空を見た。

数年後【奇跡の姉妹】と言われる、妹になるための、最後の扉を開くために。

開かねばならない事を、輝く姉が教えた、そこを目指すのならと。

扉の中で待つ、薔薇と青い炎を見るために・・・。

思春

その時期に受け入れられない事がある、いつか懐かしく思う。
その時に話そう、その時に許そう自分自身を。

夏の風を取り込もうと開けた窓から、深夜の爽やかな風が流れ込むリビング。
羽ばたこうとしている、その経験を糧に遥かなる大空へ。
ハルカは一度座り直し、語り始める・・飛ぶために。
「私の話は、義父との関係を誤解があってはいけないので、一度きちんと話したいと思ってました」そう言って。
「私は日南の漁師町で産まれました、でもその町の記憶はありません・・・」と語り始めたその歴史を。
幼いとき母の昼夜働く背中を見て、自律をずっと目指していたことを。

「そして、私が中3の時母が再婚しました、義父はとても優しい人です・・・」
しかしハルカは、男の人と生活するのが初めてで、思春期でもあって馴染めずにいた。
義父がお酒の好きな人で、酔うとハルカに話しかけてくるのが、嫌でたまらなかった。
自分の部屋に閉じこもりがちにになり、ギクシャクしたままの状態で時が過ぎた。

「進路相談の時期になり、進学しろという・・・」
進学を母と義父は進めた、ハルカは嫌がったが、最後は母の強い希望で折れた。
「私は先日ユメ姉さん、ウミ姉さんの話を聞いて、私は逆に良い子

を演じてきたと思っています」少し考え。
「人の目ばかり気にする子でした」と言葉にした。
「本当の自分をずっと隠してきました・・・」
自分を偽り、義父との関係に悩み、受験の重圧もあり限界が来ていた。
そんな時、ハルカが風呂に入ってるのを知らずに、義父が入ってきた。
謝る義父を、許す事ができなかった。
それからの、ハルカは義父を無視し、母親も板挟みになっていた。
「当然、母と義父の関係も悪くなり・・・」
高校受験が終わった頃には、別れる話になっていた。
「私はその話を聞いて、思い出しました」前を見て、「私が望んでいたのは、自立だったと」
そして、無計画にスポーツバッグ1個の荷物を用意して。
卒業式の日に、置手紙をして飛び出した。
「宮崎に来て、一日目に仕事を探しました・・・」
しかし、親の保証も無い中卒の女の子に仕事が有るはずもなく、持ち金は2日で無くなり。
3日目の夕方に、一番街の角で空腹と疲労でしゃがみこんだ。
「私はPGで働いて、お客さんを見て思いました。
義父は私を、愛してくれていたと感じました。
義父も私と、どう接していいか悩んでいたのだと。
それは、昨年には分かっていた、でも私も逃げていました。
早く伝えたいのに、勇気がなかった。
一度帰って、母と義父と話をします。
私も、もう逃げたくない、先送りにはしません」

ハルカは強い眼差しで、強く言った。
「うん、がんばれハルカ」と蘭が微笑んで。
「がんばれよ、待ってるから」とカスミが微笑んだ。
「やっと言ってくれました、嬉しいですよ」とユリさんは目を潤ませていた。
「ありがとうございます」とハルカが頭を下げて、静かに泣いていた。

「私はマダムがユメ姉さんウミ姉さんに出した条件は、私にも出したと思ってます」カスミを見て。
「そしてカスミ姉さんの話を聞いて、自分の弱さも確認できました」カスミは微笑んだ。
「ユメ姉さんの言葉を借りて、私もその笑顔に挑戦します」と笑顔を見せた。

「蘭姉さん、ロボットを借りますね、汽車の中が寂しいから」と蘭に言った。
「もちろん、話し相手には最高だよ」と満開で笑った。
『日南の名物ってなに？』と私はハルカに聞いた。
「たいした物ないな～」と考えた。
『じゃあ胸触らせて』と笑顔で言った、ハルカが返せないので。
『第二段階は絶望的だな』とニッとした、４人が笑っていた。

「少し楽しい話をお願いしようかしら」とユリさんが私を見た。
「あれ、台風やってあげたら」と蘭が微笑んだ。
「台風？」とハルカが言い。
「楽しみやね～」とカスミが不敵に微笑んだ。
私は台風事件の話をして、４人の爆笑を取った。

「それが事実なのが凄い」とカスミが笑顔で言い。
「イメージにピッタリなのも凄い」とハルカが脇腹を押えて笑った。
私は2人の笑顔を見ていた。
化粧を落としても輝きは落ちないカスミと、その純真でひたむきなハルカの姿を。

「面白いって、梶谷さんも褒めていましたよ」とユリさんが、薔薇の笑顔で言った。
『ユリさん俺、キングに謝らないと』と言って、カスミの旦那に言った内容を話をした。
「大丈夫ですよ、私が明日カスミちゃんと梶谷さんの所に行くから」と微笑んでカスミを見て。
「こういう事だけは、きちんとしときましょう」と言った。
「本当にありがとうございます、あの時ユリさんに会わなかったら」とカスミは頭を下げた。
「会わなくても、必ずあなたはPGに来ました」ユリさんは優しく。
「人は引き合うと私は思っています、必ず出会えると」と薔薇の笑顔で言った。

「それにしても、カスミちゃんの元旦那さん、さぞ困ったでしょうね」とユリさんが微笑んだ。
「相手の最大の弱点を突くからな～」と蘭も笑った。

『俺は確かめたかっただけ、仕事を捨てでもカスミを大切に思うのか。
覚悟は有るのかを、知りたかった。
何も無かった、それが悔しかった。
この程度の男が、カスミを一時期でも手に入れた事が。
その程度の愛情で、暴力をふるう男が。
カスミがどこにいるのか知ってて、迎えに来なかったその行為が。

そしてカスミに吐いた・・あの暴言が。
許せなかった、その傲慢さが。
その男が大手企業を背景にして・・凄む事が。
だから、何も持たない人間の強さを見せたかった。
ありもしない愛情で、カスミを縛る事が。
別れたくない理由も、愛情じゃない事が』

私はこの時なぜか感情が溢れて、止まらなくなった。

『どんなに愛しても、常に別れを覚悟してる今の俺には・・許せなかった』俯いていた、辛くて。

いきなり蘭が強く抱きしめてくれた、温かかったその想いが、蘭が泣いていた。
『泣くなよ、泣き虫、場がしんみりするだろ』と無理やり笑顔を作った。
「泣かすからだよ」と言って離れなかった。
「ありがとう、私は今本当に幸せだと思ったよ」とカスミが優しく、私を見ていた。
「カスミそれ私の台詞」と言って蘭が笑顔を見せた。
「早い者勝ち」とカスミが不敵に微笑んで。
「やっぱり、お礼に教えとけばよかった」とカスミが蘭に、不敵に微笑んだ。

ユリさんもハルカも笑顔になっていた。
「明日から、カスミと5m以内に近づくのを禁ずる」と蘭が私に微笑んだ。
『仕事になりません』と笑顔で返した。
「じゃあ、私が教えてあげようか」とハルカが言った。
『手取り足取りお願いします』と微笑んで返した。

「この状況でも返せるのか～」とハルカが悔しそうにしていた。
「ハルカちゃん清水の舞台から飛び降りたのにね～」とユリさんも薔薇の笑顔だった。

『で、予定はいつごろ？』とハルカに聞いた。
「明日、母に電話してみるね」と笑顔で返した。
『今回は楽だな、前回2回は緊張したけど』と微笑んだ。
「えっ、私の両親に娘さんをくださいって、言うのが緊張しないの」と返してきた。
『親が許さなかったら、二人でどこか遠い国に逃げような』と笑顔で返した。
「ん～、強敵だ」と笑った。

ふと見ると、私に抱かれて蘭は眠っていた。
『寝てる』蘭を指差して言った。
「そういうのを見ると、一番羨ましいもんですよ」とユリさんが微笑んだ。
「いいな～本当に幸せそうに寝てる」とカスミが言って。
「私も初めていいな～と思った」とハルカも言った。
「さっ蘭は預けて、私達もねましょう」とユリさんが言って、静かに片付けて部屋に消えた。
ハルカがタオルケットを持ってきて。
「襲ったらだめよ」と笑顔で言って戻った。

蘭を広いスペースまで運び、クッションを枕にさせて、静かに寝かせた。
窓から入る微かな月明りで、蘭の顔が見えた。
タオルケットをかけて、寝顔を見ていた。
いきなりパッと目が開き、クルクルと見回した。
『ユリさんの家だよ』と耳元に囁いた。

「あんたを探したんだよ」と蘭が手を出した、手を握ると。
「今夜は近くで寝れるね」と蘭が囁いた。
『蘭を見ながら、寝ていいの？』と囁きで返した。
「特別だよ、今夜だけって言っとくから、あなたが守って」と私を見た、優しい目だった。
『了解、頑張る』と微笑んで、蘭の横に寝転んだ。
触れないギリギリに、そして横顔を見てた。
「これ、月明り？」と蘭が聞いた。
『そうだよ』と囁いた。
「狼にならないでね」と私を見た、その近さに。
『こっちむくなよ、自信が無くなるから』と笑った。
「がんばれ」と蘭が微笑んだ。

「辛くないの？」と上を見ながら蘭が聞いた。
『幸せです、何も辛くないよ・・蘭がいるから』横顔を見ながら『もう、寝なさい』と囁いた。
「頑張って、目を閉じる」そう言って蘭が目を閉じた。
「眠ってそっち向いても、襲うなよ」と目を閉じたまま囁いた。
『がんばります、おやすみ』と囁いた。
私には最高の時間が来ていた、ただ蘭を見ていた、手を握って何も考えずに。
夜風が蘭の前髪を揺らしていた、何故感情が溢れたのかと思っていた。
自分では考えないでいた事が、逆に重圧になっていたのか。
受け入れる覚悟ができるのだろうか。

生家に帰って何をして過ごせばいいのだろうか。

蘭は寂しくて泣くんじゃないだろうか。

蘭は一人の暗い部屋に帰れるんだろうか。

暗い部屋で一人で、蘭は俺を呼ぶんじゃないんだろうか、辛くて寂しくて。

『蘭、それが俺には何よりも辛いよ』そう囁いた・・・夜風に。

舞台

幼き頃に描いた夢を持ち続け、強い意志で成し遂げ。
その描いた物に色付けをしている、華やかな色だけでない。
影にも色を塗る、光がさすようにと・・・。

夏の朝、窓から侵入してくる爽やかな海風に吹かれていた。
「なにしたの？」優しく囁く声が聞こえる、夢の中の蘭の声だと思っていた。
「なにしたの？」又響いてきた、私には画像が浮かばない。
「なにかしたの？」・・「クスクス」と周りに誰かいる気配、私は少し覚醒し目を開けた。
蘭の顔が目の前にあった。

「動くな」息がかかるほど近かった。
「この状況を、説明しなさい」と微笑んだ、唇が触れそうに近い。
私の額と蘭の額は完全に合わさっている、蘭は私の腕枕の中にいる。
タオルケット越しに、上半身は密着していた。

『分からない、多分蘭が近くにきたんだと・・・』動こうとすると。
「まだ、カスミどう思う？」と聞いた。
「酔って寝てる女を襲うとは、犯罪だね」と笑った。
「まぁ、いけない子だこと」とユリさんも楽しんでいる。
「やっぱり、酷い」と蘭が微笑んだ。
『微笑むなよ、唇が触れそうだから』と必死で返した。
「しどい」と頭の上からマリアの声がした。
『マリア誤解だよ、俺はマリア一筋だから』とマリアに訴えた。
「チャー、しどい」と上から覗きこんで笑ってる、皆が笑い蘭が離れた。

するとマリアが私の横に入ってきて、腕枕に寝転んだ。
「ねんね」と言って目を閉じた、私は又動けなくなった。
「絶対に勝てない相手だ」と蘭がマリアを見ながら笑った。
「マリアには妬かないんだ？」とカスミが笑った。
蘭とカスミは洗面所に歩きながら。
「妬くわけないでしょ」蘭が笑顔で言い。
「いやいや、蘭姉さんはわからん」とカスミが返して、笑っていた。

ユリさんが遅い朝食を作ってくれ、皆で食べていた、マリアもご機嫌だった。
「しかし、中学生にしては腕力あるね」とカスミが微笑んだ。
「暇があると、腹筋や腕立て伏せしてるから」と蘭が言った。
「体、凄いよね～」と蘭が見た。
『覗いてたの』と照れた。
私はその当時身長１７０ｃｍあり。
空手をしていて【ブルース・リー】に憧れていたので、体を鍛えていた。
腹筋は綺麗に割れ、胸の筋肉を動かして、友に自慢をしていた。
「
隣の部屋から男がハァハァ言ってりゃ誰でも覗くよね」と蘭がハルカを見た。
「怖いもの見たさで」とハルカも微笑んだ。
「でも、掃除も食器洗いも朝食も作ってくれるから。役に立つよ」と蘭が微笑んだ。
「欲しい」とカスミが不敵に微笑んだ。
『カスミの所に行ったら、洗濯もするよ』と笑顔で返した。
「よろしく、匂い嗅ぐなよ」と笑った。

「蘭姉さんのは、しないんだ」とハルカがニッとした。

『蘭は少女のように恥ずかしがり屋さんだからね』とニッで返した。
「あら、意外ね～」とユリさんも楽しそうに微笑んだ。
「絶対、伸ばしたり、素材の研究したりしそうだから」と蘭が私を見て微笑んだ、４人が笑った。

「そういえば、夏休みの宿題は？」とハルカが聞いた。
『したこと無い、俺の担任年寄りで心臓弱いみたいだから、俺が宿題なんか提出したら死ぬよ』と笑顔で返した。
「でも、成績悪くないだろ」とカスミが言った。
『悪くないよ、負けず嫌いだから』と笑顔で返した。
「チマチマ日記書いてるしね」と蘭が微笑んだ。
『読むなよ』と笑顔で言った。
「いつか、見せてね」と蘭が満開で微笑んだ。
『号泣するぞ』と微笑んで返した。
「楽しみ～」と満開になった。

「リストじゃねーのか？意地悪されたとかの」とカスミが不敵を出した。
『それもある、カスミＮｏ１だよ、さすがだね』とニッで返した。
「昨夜の胸の感触、たっぷり書いとけよ」と蘭を見た。
「消せ、記憶から」とカスミを見て舌を出した。
「ここに居るだけで、勉強になる」とハルカが呟いた、皆の笑顔があった。

ユリさんにお礼を言って、蘭と帰った。
２人で蘭の部屋の模様替えをした。
コーヒーで休憩してると。
「１つだけ言っとくね、昨日の言葉響いたよ、私は好きじゃない人と一緒になんかいれない」深い目で私を見ている。
「そして、合鍵返せって言わないよ、だからそんなに苦しまないで

ね」と微笑んだ。
『ありがとう、苦しくなんかないよ、少し寂しかっただけ』と少し照れた。
「だから、添い寝してあげたでしょ」と蘭が満開で笑った。
『やっぱり、蘭がきたんだ』と笑顔で返した。
「うん、本当に安心できて、気持ちよかった」と笑顔で言った、嬉しかった。

『今日の予定は？』と話題を変えた。
「あなたを送って、美容院に行ってくる」と満開で笑った。
『また、可愛くなるんだ～』私も笑顔で返した。
「うん、女は男で変わるんだよ」と満開で微笑んだ。
『俺、昨日給料出たから、今夜食事に行こうよ』と誘った。
「嬉い～、同伴ですな」と笑顔で茶化した。
『高いものは無理だぞ』と笑顔で返した。
「すご～くいいとこに連れて行くね」と満開で微笑んだ。

ケンメリを、デパートの前で降りた。
白のスリムパンツと、白いシャツを買ってＰＧに行った。
ＴＶルームには、マダムとハルカが話していた。
いつもと違う雰囲気なので、マリアを抱いて散歩に出た。
中央通りまで出ると、怪しい風俗の呼び込みの、マコト君がもう通りに出ていた。
『おはよう、マコト兄さん』と声をかけた。
「おう、おはよ子守か」と笑った。
『遊んでもらってます』と笑顔で返した。
「誰の子供？」と聞いた。
『ユリさん』と言ってニッをした。

「なんだって」と歩み寄り、「お菓子なにがちゅきでちゅか？」と

笑顔で機嫌を取った。
「マコト、なにさぼってんだい」と大ママが笑顔で立っていた。
「おはようございます」と慌てて深く頭を下げた。
「おはよう、大変だね昼から」と大ママが言った。
「大ママが、俺の名前知ってる事が嬉しいです」と緊張気味に言った。
「見込みありそうな奴は覚えてるよ、がんばりな」と言って、私の所に歩いてきた。
マコト兄さんは、嬉しそう立っていた。

『おはよう、大ママ』マリアを抱いていたので浅く頭を下げた。
「おはよ、エース」と言いながら、マリアを抱いた。
大ママはマリアを抱くと、人が変わったような笑顔になると思って見ていた。
「お前にだけ言っとくけど、PGの若い子が男とかなりもめてたらしいよ」と私を見た。
『やばい感じなのかな?』と聞き返した。
「男がたちの悪そうな奴だったって、別れ話だろうね」と言いながらマリアを返した。
「店の者には、その子も言い難いだろうからね」と大ママが微笑んだ。
『ありがとう、気にかけとくよ何も出来ないけど』と笑顔で大ママを見た。
「また、うちにもおいでよ」と言った大ママを見送った。
マダムの条件が頭に浮かび、ユメかウミかな〜と思っていた。
TVルームに帰ると、マリアは眠っていたので、ベッドにそっと寝かせた。
誰もいなかったので、TVでも見ようと思ってたらユメとウミが来た。

「おはよう」と小さい声で言った。
『大丈夫ですよ、マリアは好きな時にしか起きないから』と笑顔で返した。
「あとで、抱かせてもらおう」とウミがマリアを優しく見ていた。
『さっ、やりますか』と笑顔で2人に言った。

サインを教えてもらっていると、エミ・ミサが来た、ウミが嬉しそうに遊んでいた。
この2人も、本当に優しいんだと思って見ていた。
「これで、終わりあとは覚えるだけよ」とユメが微笑んだ。
『がんばります』と微笑んで返した。
2人はエミ・ミサとしばらく遊んで帰っていった。
ウミが帰りに、マリアの寝顔を見て残念そうだった。
ミサがお昼寝したので、抱き上げてベッドに寝かせた。
エミの勉強する隣に座った、割算もかなり進んでいた。

「サイン覚えた?」と少女の笑顔で聞いた。
『覚えるのはまだ』と笑顔で返した。
「私も欲しい、チャッピーとのサイン」と少し照れた、おませめと思いながら。
『手をこうやって胸において』とエミの手を胸に当てて。
『エミが辛い時、どうしても悲しくて涙が止まらない時、寂しい時はそうやって俺の名前を心の中で叫ぶんだ』エミは私をじっと見てる。
『そうしたら、エミおいでって必ず聞こえるから』と言って微笑んだ。
「うん」とエミは少女の輝きで頷いた。

十数年後、エミが国境無き医師団に、参加するのを見送りに行った。
搭乗窓口で振り返り、このサインを私に示した。

強い瞳は輝きを増し、自分が見てきた全ての挑戦者に恥じぬよう、凛として立っていた。
戦いの舞台は、不遇な環境におかれている子供達の笑顔のために。
命をかける覚悟で微笑んだ、私は両手を広げ。
『皆、待ってるから必ず帰れ』と叫んだ。
《えみ、おいで》と心で叫びながら。

松さんが来て、フロアーに行ってハルカを探した。
予約表を見ていた。
『昨日、エコーの人がいて焦ったよ』と声をかけた。
「まぁ珍しい」と微笑んで返した。

「明日、9時に宮崎駅集合」とハルカが微笑んだ。
『了解、決めたら早いね』と笑顔で返した。
「カスミ姉さんなんか、その足で飛行機に乗るのよ」と返してきた。
『ライバルだもんな』と笑顔で返した。
「そうなりたいと、本気で思ってるよ」と強く微笑んだ。

『ハルカ姉さんにだけ話すけど・・・』大ママから聞いた話をした。
「私の知ってる限りでは、美冬姉さんだけ」と真剣に返した、私には意外な名前が出た。
「四季で話してるの聞いた事がある」そう教えてくれた。
『そっか～少し見とくよ』とハルカを心配させないように、笑顔で言った。

【四季は幸せそうだから】と言った時の美冬の微笑を思い出した。
自虐的じゃなかったかと、思っていた。
幻想のフロアーは、今夜の舞台を用意していた。

女優達の登場を、待ちわびるように。

女優達は顔を変え、姿を変えてやってくる、まるで仮面舞踏会のように。

誤解も、偏見も、批判も、全て受け入れる覚悟で。

それが高い金を取るプロの仕事だと、俯かず前を見て歩くために。

連鎖

人は食物連鎖の頂点にいると、勘違いしてないだろうか。
連鎖に頂点など存在しない、永遠に周回する円である。
人がその頂点にいると思ったら、人間は絶滅危惧種の認定を受けねばならない。

全ての準備を整えた幻想の舞台の入口に、２つの塩の小さな山を作る。
静寂のフロアーは静かさの中に熱を秘めている、女優達は常に準備している。
その当時はまだカラオケが出始めで、無論携帯もネットも無かった。
女性達はＴＶと新聞で政治経済から、芸能・スポーツまで勉強していた。
蘭も全国紙２紙と、地元紙１紙にスポーツ新聞１紙を購読していた。
今と違い【会話】が全ての武器だった、容姿に頼っていれる世界ではなかった。

４時には四季が揃っていた、念密な打合せがあるのだ。
四季はプロ志向ではないが、真剣勝負を楽しんでいた。
千夏・千秋・美冬が大学３年生で、千春が看護系の専門学校生だった。
全員同じ学年で、千秋と美冬だけが元々の友人、他はＰＧで知り合っていた。
その時は夏休みで時間があったのだろう、本気の挑戦だった。
１歳下からカスミという、圧倒的存在が現れたのも大きかった。
本当に４人が仲良く、その後全員留年せず学校を卒業してＰＧも一度卒業した。

それをユリさんは感激して、四季の名前を継承名にした。
新たな学業と両立を目指す挑戦者に、目指している物を忘れさせない為に。
源氏名に誇りを持たせるために。
全員その当時の女子大生の最先端を歩み、若さ溢れる美しさがあった。
おじさん達の人気が絶大で、娘との関係を悩む人々の最高のアドバイザーだった。

１０番席で話し合う四季を見ながら、指定席の準備をしていた。
「全部終わったよ、ありがとう」背中に声をかけられた。
『おめでとう、新カスミの登場だね』と振向いた、その優しく深い目を驚いて見ていた。
「ガンガン行くよ、いつか本気で愛してくれる人が現れるまでね」
と輝きながら微笑んだ。
『大丈夫、カスミは愛されるべき人だろ』と和尚の台詞を真似た。

「何回魔法をかける、カスミばかりに」と千秋さんが言った。
『千秋姉さんにも、マハリクマハリタ』と言って全員の笑いを取った。
「姉さんって、仕事外でも言われるうちは駄目さ」と美冬が言った、美冬の笑顔を見ていた。
「千秋って呼んでいい権利を授与する」と笑顔で言った。
『一気するなよ、千秋』と返した、千秋の笑顔があった。
四季にカスミが入って談笑していた、美冬を見ても何も不安の要素は感じなかった。
《まだまだやな～》と自己批判をしていた。

タバコのチェックと、ハルカに任された予約客の誕生日チェックが終わり、座ってコーラを飲んでいた。

「カモ〜ン」とカスミが呼んだ、１０番席に5人に向き合って座った。
『流石に怖いな、5人揃うと』と正直に言った。
「今、好きな人に言葉で何か伝えた？」と千秋が聞いた。
『うん、気持ちはいつも伝えてる』と少し照れた。
「ふ〜ん、恥ずかしくないの」と千春が聞いた。
『恥ずかしいなんて思ってる暇は俺にはないから、それに相手が引出し上手な会話のプロだし』と照れて微笑んだ。

「私の好きな所言って？て言われたらどの位言える？」とカスミが不敵で聞いた。
『２００は楽に』と微笑んで返した。
「お願いしたいな」と美冬が微笑んだ。
『好きなとこは恥ずかしいな』と照れた。
「恥ずかしくないのは？」とカスミが優しく聞いた。
『実像をイメージする時の事なら』と照れて笑顔で返した。
「お願い」と言った美冬の目に押されて始めた。

『首から下、膝から上は知らないから』と笑顔で言った、。分ってる」とカスミが微笑んだ。
『上からね、少し右よりのつむじ、５．５対４．５分け目、微かなシャンプーの香り。
右より少し強い左のウェーブ、少し絶壁気味の後頭部、怒ると一本入る額の皺。
泣くと浮き出る右の額の血管、汗が流れる時水路のように通る左の額。
少し右が高い眉毛、鉛筆が乗りそうな長い睫毛、笑うと一本はいる目尻の皺、』
私は予想以上にスラスラと出てきて、自分でも驚いていた。皆黙っ

て聞いていた。

『何かを伝える時に深くなる瞳、涙をこれえる時に先に潤む右の瞳。
なぜか流す時は先に流れる左の瞳、鼻をすする時力が入る目と目の間。
右より少し大きい左の耳たぶ、小さくて可愛い耳、』

そこまで言ったところで、カスミが私に言った。
「ありがとう、その位にしとかないと仕事にならんなるよ」とカスミが顎で後ろと言った。

振向くと、蘭が屈んで泣いていた。
『あっ、』と言って私は駆け寄った。
『蘭』と声かけた。
「前髪切りすぎた」と左の瞳から涙を流し微笑んだ。
『可愛いよ』と微笑で返した。
「皺が多い」と笑顔ですねた。
『多かった』と照れながら手を出した。

「ご飯食べながら、数える」と満開で笑った。
『怒らない？』と聞いた。
「怒る」と笑顔で答えた。
「やっぱり、欲しい」とカスミが不敵を出した。
「無理、私の」と言って蘭が小動物でカスミを見た。
「少し魔法をかけてもらった」と美冬が言って。
「なるほど、魔法か」と千秋が言った。
「私にはいつ？」と腕を組みながら蘭が言った。
『蘭にはかけない、いつまでも側にいるから』と笑顔で返した。
「うん」と笑顔で言って、食事に向かった。

私はＴＶルームで買ったばかりの、白いシャツイに、白いパンツを着て。
蘭のプレゼントの白いジャケットを着た。
《皇帝だからこのぐらいはいいか》と思い出掛けようとすると。
「どうしたの！」とハルカが驚き。
『蘭と同伴』と言ってＶサインを出した。
「やっぱり怖い」とハルカが微笑んだ。

「キャー皇帝様」と言って蘭が飛びついた。
『同伴ぽいだろう』と笑顔で言うと。
「うん、それで夜街を歩けるあなたが凄い」と満開で微笑んだ。
「ホストになるって本気だったのか」とカスミが遠くから叫んだ、
私はＶサインを出して微笑んだ。

蘭と夕方の街を手を繋いで歩いた。
仕事帰りに飲みに行く人々をかわしながら、流れとは逆に。
産まれた場所を目指す魚のように。
一番街の西口に光が射し込んでいた、その輝く方に向かって。

【鳥】と大きく書いてある暖簾だけの店の前で止まった。
「ここが、美味しいのよ」と蘭が嬉しそうに微笑んだ。
『素敵だ』と私も微笑だ。
「もういいの～」蘭が店を覗いて言った。
「蘭ちゃんに駄目なんて言いません」と男の明るい声がした。
蘭が手招きして狭い店の中に入った。
「うれしーね、有名人連れで」と頭にねじり鉢巻をした、恰幅のいい中年男が笑顔で私を見た。
ミノルと言う暖かく大きな男との出会いだった。
店は削りだしの杉のカウンターに7席、奥の座敷に6席の小さな店

だった。
奥の隅に蘭が座り、私がその隣に座った。
「やっぱり、有名人？」と蘭がミノルに微笑んだ。
「そりゃー、ユリを守ったんや」と私を見た。
『何も出来ませんでした』と笑顔で返した。
「守ろうとした事実は事実や」と笑った、キングと同じ安心感を感じた。

「私ビール」と蘭が言って私を見た。
『仕事に差し支えるから、コーラ』と返した。
「うん」と笑顔で言って注文した。
「お肉適当に焼いて、お勧めは？」と蘭が聞いた。
「鶏刺しがあるよ」とミノルが微笑んだ。
「それ～」と蘭が笑顔で言った。

私は鶏刺しを初めて食べて、またその美味さに感動していた。
「美味いやろ～」とミノルが自分のグラスを蘭に差し出しながら言った。
『うん、鶏刺しってこんなに美味いもんなんだね』と笑顔で返した。
「普段は食べないの？」と蘭が私を見た。
『親父の酒の肴専用だから』と笑顔で返した。
「刺身は特別やからな」とミノルが微笑んだ。
「なぜ特別なの？」蘭の聞き魔癖がでた。

「最近は食うのに困らんなったよな、良い時代や・・だから感謝を教えないかんなったんよ」私も蘭も頷きながら聞いていた。
その優しい響きに引き込まれるように。
「俺はお前の親父と同じ位の歳や」と私を見た、私は頷いた。
「俺らは戦後の混乱期に子供時代やったから、鶏も特別なんよ。

その頃の宮崎のガキは、大概家の手伝いさせられちょった、鶏の世話もな。
卵を産ませたり、卵から雛を孵して親に育てたりしてな。
そしてある時、爺さんか親父に言われて鶏を捕まえさせられる。
そして目の前でさばかれるんや。
鶏でも友達みたいなもんやかい辛いんよ子供には。
泣いてると刺身を持ってくるの。
食えって、人ってそういうもんやって教えるんよ。
そうしないと、鶏も可哀想や言ってな。
多分俺らの親父達は反省しちょったと思う。
人と人が殺しあって、自分の子供らにそんな時代しか渡せなった事をな」

鶏を焼く煙がたち込める店内で、箸を止めて聞いていた、大切な話を。
「だから、刺身は特別なんよ」と笑った優しい目で。
私は刺身の皿を見ていた、感謝など考えた事もなかったと。

3人で楽しい話をしていた、他に客も来なかった。
蘭が私の魔法の話をした。
「そりゃ～お前達には魔法や」とミノルが蘭に微笑んだ。
「お前達は仕事柄仕方なく人の裏を見ようとするよな。
こいつは裏が無い、知りたいと本気で思っちょる。
その存在だと認めたら、絶対の存在になるんよ。
人の裏ばかり考えるのは、疲れるよな。
だからこいつの、言葉で救われるんよ心が。
そうなる奴は本当に自分が好きな、良い子なんだよ」

最後は笑顔で言った、優しい言葉だった。
「わかる気がする」と蘭も微笑んだ、私も少し分かった気がしてい

た。

私はその後何度も何度も、ここを一人で訪れ切り出しのカウンターで笑い泣いた。

その度にミノルさんは最後にこう言った。

「それでいいんや」と言って、優しく背中を押してくれた。

私は正直に生きようと誓っていた、今の自分はそれしか出来ないから。

それを蘭も望んでいるから、蘭の笑顔と少し短い前髪を見ていた。

彼女達の懐かしい、その当時の自分の気持ちに触れれる存在でいようと。

彼女達がそれでどこか嬉しいのなら、それで蘭が笑顔になるのなら。

煙の充満する、小さな店の大きな男の笑顔を見ながら・・・。

天使

その笑顔は全てを凌駕する、完全なる無垢。
何も無い、真の純白。
完成に最も遠い、完璧だった。
天が遣わし者・・・。

真夏の黄昏を背にして手を繋いで歩いた、今居るべき場所を目指して。
『自分で稼いだ金で初めて女性にご馳走した』と隣を歩く蘭に言った。
「うんうん、それで」と嬉しそうに催促した。
『初めての同伴』と笑顔で返した。
「うん、日記に書いてね」と嬉しそうに微笑んだ。

「私も初めての同伴だよ」と笑顔で言った。
『そうなの』と少し驚いた。
「お客さんとはお店だけ」と微笑んだ。

中央通で呼込みのマコト君に会った。
「お、夜は綺麗な人と同伴ですか」と笑顔で言った。
『営業です』と頭を下げた。
「良い人じゃない」と蘭は嬉しそうだ。
「そうでしょう、お名前は？」と笑顔で聞いた。
「ＰＧの蘭です」と満開笑顔で返した。
「失礼しました」とマコト君が、慌てて頭を下げた。
「やめて下さいよ～」と蘭はご機嫌だった。

『怖いんですけど』と蘭を笑顔で見た。

「噂が一人歩きするんだよ、ちょっとＮｏ１になったからって」と頬を膨らませた。
『ね～泣き虫で寂しがり屋の、甘えん坊なのに』と笑顔で返した。
「さっ、初めてさっきの最初から」とニッで返した。
『仕事にならなくなるよ』とニッで答えた。
「２人の時は大丈夫、嬉しいだけだから」と目で催促した。
私はＰＧのドアを開けるまで続けた、蘭は指で皺と言った数を楽しそうに数えていた。

裏口を開けるとサクラさんがいた。
「すっごい魔法をエミにかけたでしょう」と笑顔で言った。
『かけてませんよ』と照れた。
「母親には分ります、ありがとう」と微笑んで、蘭と準備に行った。

ＴＶルームで着替えて、３人娘にお土産のキャンディーを渡して指定席に座った。
フロアーは静寂が支配する緊張感がその日もあり、何かが開演を待ちわびていた。
私はサインのメモを見ながら、手で練習していた。
「なかなか、練習熱心でよろしい」とウミが覗いていた。
『影の努力家ですから』と照れた。
「そう言うのは自分で言わないの」と笑いながらフロアーに行った。

「明日、ハルカを頼むな」と後ろからマダムに言われた。
『頼むって、付いて行くだけですよ』と振向いて言った。
「それが、大事なんじゃよ」と皺の多い笑顔を見せた。
『夕方までに帰ればいいの？』と聞いてみた。
「遅れてもいいぞ、帰ればな」と笑顔を絶やさずに言った。
『了解、少し遊んで帰ろう』と笑顔で返した。
「頼む、そういう少女らしい事を少しさせてやってくれ」と真剣に

私を見た。
『了解、得意だからまかせて』と笑顔で返した。
マダムの優しさを感じていた、ハルカは幸せだと思っていた。

「今夜も開演しましょう」の言葉に、「はい」のブザーが鳴った。
その日も順調に客が入りだし、私も忙しかった。
珍しいタバコの注文が多かったのだ。
９時には満席になった、熱は高かった。
私はフロアーを見ながら、女性の動きをチェックしていた。

ユメ・ウミも蘭のヘルプに慣れたのか、動きが自然になったと思っていた。
四季がバラバラの席にいて、バイトのフォローをしていた。
ＰＧはバイトでもセミプロだった。
他店に比べ時給が高いと聞いていた、魅宴並だという話だった。
だからバイトでも面接は厳しかった。
マダムとユリさんと徳野さんがするのだから、さぞ怖かろうと思っていた。
サインというシステムもＰＧが一番進んでいた、蘭がユリさんがいない時に提唱した。
ボーイが接客中に女性近づき指示を出すのは、客がしらけるという理由だった。
それをユリさんが支持し、完成型にしていた。
そして、より複雑で緻密な物を、四季が完成させていた。
四季のそれは、会話が出来る世界だった。
ボーイはそれで、他の仕事に時間がさけるようになったが。
サインを覚えるのが大変だと言っていた。

１０時過ぎに和尚が来た、３番に通された。
キングの力は偉大だと思って見ていた。

蘭が楽しそうに話していた、和尚はそれは嬉しそうに飲んでいた。
《最高の生臭》と心で呟いた。
「蘭姉さんの次、和尚いきます」とカスミが笑顔で言った。
『少し、胸隠していけよ、和尚死ぬよ』と笑顔で返した。
「触っても死ななかったくせに」と笑顔で返した、その顔が可愛かった。
カスミを可愛いと初めて思った。

圧倒的な美があったのでそう思わなかった、確かに変わったなと、その後姿を見ていた。
１０時過ぎに、農協関係の３２人の団体の緊急予約が入り。
マダムが受け、ハルカが懐かしい定位置についた。
小さな回転をかけるためだ、狙う席を蘭と7人で衆で空けた。
見事だった、予約時間に間に合わせた。
ハルカのそのサイン捌きに、暫し見惚れた。

女性からは、ハルカの手のひらしか見えないのに。
ハルカはマジックミラーで見ているだけで送るのだ。
フロアーデビューした後、この信頼関係が、ハルカの最大の武器になっていくのである。
和尚はカスミと楽しそうに話していた、胸元を堂々と覗きながら。

「どんな魔法をかけたの？」後ろからサクラさんが微笑んだ。
『2人のサインを作りました』と笑顔で返した。
「きっと素敵なサインね」と微笑んだ。
『今夜も忙しいですね』とサクラさんに聞いた。
「うん、でも私もアイもかなり楽になったから」と微笑んで、「楽しいしね」と笑顔で戦場に戻った。
その堂々とした後姿は、別格の雰囲気を醸し出していた。
ＰＧの燃える夏は終わりがないと女性達が燃やし、その熱を浴びた

くて客が足を向ける。
その完全なサイクルに入っていた。
１１時過ぎに和尚が帰るので挨拶をした。
「いい仕事したみたいやな」と笑顔で私に言った。
『強力な教師に囲まれてるからね』と笑顔で返した。
「欲が取れていい顔になったぞ」と笑顔で返された、嬉しかった。
見送りに出た蘭とカスミに。
「又、草もち食べにおいで」と言って２人の笑顔に見送られて、嬉しそうに帰った。

その日も終焉ギリギリまで、熱は冷め無かった。
終焉の時には７人衆は完全燃焼で、１０番に座り込んでいた。
私はサクラさんをタクシーまで送ると、７人衆に蘭も加わって談笑していた。
ＴＶルームに帰ると、珍しくマリアが起きていた。
私はフロアーに戻りウミを呼んだ。
小窓の所にウミを待たせ、マリアを抱いて行った。

『マリア、ウミ姉さんだよ』とウミにマリアを差し出した。
「ちょっとまって」とウミはマリアを優しく見ていた、震えていた。
「うみ」とマリアが天使の笑顔でウミに言った。
その天使の笑顔を見て、ウミは崩れるように座り号泣した。
私は驚いてマリアを抱いて屈んだ。
「うみ、うみ、うみ」とマリアがウミに抱かれようと必死になった。
『ウミ姉さんこうして』とウミを壁に背中をもたれさせた。

「うみ、うみ、うみ」とマリアはウミを呼び続けている。
『手をこうして』ウミはそんなに、涙が出るのかというほど泣いていた。

『マリア、ウミに抱いてもらおうね』とマリアに言ってそっとウミの手に抱かせた。
「うみ、うみ、うみ」と言いながらマリアはウミの頬に手をあた。
天使の笑顔で涙の伝う場所を押えていた。

「うみ、うみ、うみ」と何かを引き戻そうと言うように、連呼していた。
ウミはマリアを優しく抱いて、マリアを見て涙を流し続けた。
ウミはマリアを優しく抱きしめた、マリアはウミの耳元で。
「うみ、うみ、うみ」と続けていた。
ウミはマリアを腕の中にもどし、優しくマリアを見た。
「うみ」とマリアが天使全開で笑った。
「うん」とウミは優しい目でマリアを見て笑った。
ウミが静かになったのを見て、マリアは笑顔のまま瞳を閉じた。
ウミはその寝顔を見ていた優しく。

「ありがとう、寝かせてあげて」とウミが私を見て言った。
私はマリアを抱き上げて、ＴＶルームに行こうとすると、角に蘭がいた。
蘭がマリアを受け取り。
「任せる、頼んだよ」と微笑み、ＴＶルームに入った。

私は呆然として座ってるウミの隣に座った。
『ごめんね、辛かったね』と小窓を見て囁いた。
「ありがとう、嬉しかったよ」とウミも囁いた。
『俺、子供だから何も分らないけど・・マリアの言葉はわかるんだ』
ウミは私を見た。
『そんなに悲しまないで、苦しまないで、泣かないでって言ってた』
静かに優しく感じた事を言葉にした。
「私もそう聞こえた」とウミの笑顔がでた、「間違ってなかったの

？」と私に問いかけた。
『絶対に間違いないよ、俺はマリアの言葉は分かるんだよ』とウミを見て微笑んだ。
『あの3回連呼は、そう言ってたよ』と優しく言った。
「良かった～」とウミの可愛い笑顔がそこにあった。

「1つだけ頼みを聞いて、控え室まででいいから抱っこして」と微笑んだ。
『それなら、頼んででもしたいですよ』と言ってウミを抱き上げた。
『軽いな～、ちゃんとご飯食べてるの』と引き寄せて聞いた。
「食べる、明日から元気出すね」と首に腕を回した。

私は控え室までをゆっくりと歩いた、ウミは静かに抱かれていた。
ドアの前で優しく降ろした。
『明日から元気出すって言ってたって、マリアに言っとくから約束だよ』とウミを見て微笑んだ。
「絶対守る、マリアとの約束だから」と笑顔になった。
『うし、おやすみ』と微笑んで返した。
「ありがとう」と２０歳の可愛い笑顔で微笑を返した。

ＴＶルームに帰りながら、マリアを想っていた。
なんて子なんだろう、必死にウミを呼ぶマリアを思い出して、涙が出そうになった。
私はＴＶルームに真直ぐ帰れずに、小窓を見ていた。
「帰ろう」蘭が優しく腕を組んできた。
『そうだね、帰ろうか』と蘭を見た。
優しく深い目が私を見ていた。
微笑みながら甘えていた、少し切りすぎた前髪で。

《マリアありがとう》そう心で囁いた。

《あい》いつものように天使の声が聞こえてきた・・・。

愛娘

愛情と優しさは、なぜ気付き難いんだろう。
その方が、本物が見分けられるからだろうか。
理由なく愛せる存在、我が子。

真夏の深夜木霊した天使の叫びの余韻が、いつまでも胸の中にあり温かかった。
蘭と腕を組み帰ろうとしていると、エレベータ前でユリさんに会った。
「下までお願い」とマリアを受け取った。
私はマリアの、可愛い寝顔を蘭と2人で見ていた。
「マリア、楽しかったみたいよ」よユリさんが薔薇で微笑んだ。
『良かった～、辛くなかったね』とマリアに囁いた。

ユリさんとマリアを見送り、蘭とタクシーに乗った。
蘭が肩に乗ってきた。
「明日、ハルカとデートやね～」と笑顔で言った。
『ハルカにも妬くの？』と笑顔で返した。
「3人娘以外は、妬きます」と私を見てニッとした。
『可愛い奴め』とニッで返した。

蘭が化粧を落とし、パジャマを着てベッドに入った。
「7回あった、皺」と睨んだ、私は電気を消しながら。
『仕方ないだろ、事実なんだから』とニッで返した。
「可愛い？皺」とニッで返された。
『もちろん、全部可愛いよ』と笑顔で答えた。
「今夜少し寂しいかな」と舌を出した。
『自分一人で楽しむから』と私も舌をだした。

『俺なんか記憶が無いのが残念でしょうがないよ』と少し照れた。
「あなたは、何もしないでそう出来るだろうけど、私は恥ずかしいの」と微笑んだ。
『泥酔しな、添い寝してやるから』と微笑んで返した。
「その手があった」と満開になった。

「でも、そんな我慢辛くない？」と優しい目で聞いた。
『全然無いと言ったら嘘だけど、俺は今はこの関係の方が大事だから、辛くはないよ』と微笑んだ。
「泥酔したら、絶対してね」と笑顔で返した。
『もちろん、でも激しく抱きついたりするなよ』とニッで返した。
「それは自信ない」と小動物の舌を出した。
『心配しなくてもいいよ、蘭が記憶がないような時になんかしても、寂しいだけだから』と微笑んで。
『もう、お休み』と囁いた。
「あれして、おでこからするの」と微笑んだ。
私は蘭のおでこに手を当てて、優しく下げて瞳を閉じさせた。
大好きな時間を楽しみながら、マリアを想っていた。
マリアは辛くなかったのかと。

翌朝、早くに目が覚めた。
深夜勤務に体が慣れたなと思いながら、歯を磨き顔を洗った。
冷蔵庫に赤いウインナーが有ったので、タコさんに挑戦していた。
「おはよ、やるね～こんなに嬉しいことないな～」と言いながら蘭が洗面所に行った。

「可愛い、イカさん」と朝食を見て、微笑んだ。
『イメージはタコなんだけど』とニッで返した。
「タコは足何本？」と聞きながら、美味しそうに食べていた。

『８本になる予定だったんだよ』と笑顔で返した。
「今夜の夕食はハルカと食べてきなよ」と笑った。
『そうする、マダムも少女らしい事、少しさせてくれって言ってたから』と笑顔で返した.
「少女だよ、少女らしいだからね」と笑顔で睨んだ。
『少女ね～、俺のイメージでいいの？』とニヤニヤで返した。
「足は８本だぞ」とニヤで返された。
蘭を見送り、朝の仕事をして。日記を書きながら、マリアのところに来て止まった。

私は事実以外にこう書いている。
マリアはなぜ悲しみをすぐに感じたのか？
これまでも度々ある、蘭の時もそうだった。
悲しみに敏感なのか？相手が泣いているから？
何かが根本的に違う気がする。
マリアという存在は、そういう常識の外にある。
常に心の中に存在する、声も聞こえる。
それだけで俺は幸せだ。

宮崎駅に着いたのが８時４０分だった。
快晴の空には、天空の要塞のような入道雲が流れていた。
不良高校生や、中坊の視線を無視していると。
「早いね～」とハルカが可愛いチェリー柄の、淡いピンクのワンピースで立っていた。
その辺の女子高生など敵じゃないと思いながら。

『デートだから嬉しくて、昨日寝れなかった』と微笑んだ。
「デートなの？」と笑顔で返した。
『違うんだ』と大袈裟に泣きまねをした、ハルカの同世代の視線を感じながら。

「もう、泣かないの」と楽しそうに腕を組んできた。
『意地悪言うから』と微笑んで、ハルカの唐網のバスケットを持ったげた。
『なんか、お泊りセットみたいな荷物だね』と時刻表を見ているハルカに囁いた。
「デートでしょ、泊まらないの」と笑顔で返した。
『優しく教えてね』とニッで返すと。
「その誘導には乗らないよ」と舌を出し微笑んだ。

9時10分発の2両しかない、小さな普通列車に乗った、海水浴客の若者が多かった。
ハルカが窓際に座り、私が隣に座った。
席が狭いので、ハルカと腕は密着していた。
『映画なに見たいの？』と笑顔で聞いた。
「ジョーズ」と微笑んだ。
『意外にそういうのが好みなんだ』とニッとした。
「面白そうじゃない」と微笑んで返した。
『サメに食べられるんだよ』と微笑んで返すと。
「あなたは、どんなのが好きなの？」とニッで返された。

『トラック野郎』と少し照れて言って、『文太かっけ～』と笑顔で言った。
「本当にイメージ通りだね」と楽しそうに微笑んだ。
『じゃあ2回目、文太』と笑顔を返した。
「2回も行ってくれるの？」と私を見た。
『何度でも、ハルカ姉さんに彼氏ができるまで』と笑った。
「デートでしょ、姉さんは禁止」と嬉しそうに笑った。

青島で、殆どの人が下車し貸切状態になった。
私はハルカと密着したままでいた。

『ケイって本名？』と聞いた。
「うん、死んだお父さんの、たった1つの贈り物」と私を見た。
『じゃあ、今日はケイって呼ぶね』と微笑んだ。
「うん」と明るい笑顔で返した。
『デートの時はケイだね』と笑顔で返した、ケイが手を出した。
「カスミ姉さんとはずっと手を繋いでたんでしょ」とニッできた。
『ケイは緊張するかと思ってね』と手を繋ぎながらニッで返した。

汽車は日南海岸の海岸線を、光る海を背景に快調に走っていた、楽しかった。
『ケイは今歌手は誰が好きなの？』と笑顔で聞いた。
「歌は百恵ちゃん、男は西条秀樹」と嬉しそうに答えた。
「あなたは？」と微笑んで返した。
『今はキャンディーズの真ん中』と微笑んだ。
「あ～」とハルカも嬉しそうに微笑んだ。
『歌はもちろん？』と言ってハルカを見た。
「年下の男の子！」と満面の笑みで答えた。
『正解』と言って微笑んだ。

「私とならやきもち、心配ないからいいね」とニッできた。
『妬くらしいよ、かなり本気で』とニヤで返した。
「なんか嬉しいな～」と微笑んだ。
『ライバルって思ってるんだよ』と私も微笑んで返した。
「蘭姉さんがPGにいるうちに、あの蘭姉さんの世界を覗いて見たい」と海を見ながら言った。
『蘭もそれを心待ちにしてるよ』と海を見る背中に囁いた。
海を見るハルカは、照り返しの光を受けて輝いていた。

日南に着き、ハルカと手を繋いで歩いた。
日南警察の近くに、ハルカの家があった。

『楽しんでこいよ、俺そこの公園で寝てるから、ゆっくり楽しめよ』と言って、バスケットを渡した。
「うん」と明るく笑顔で返し、堂々とした後姿で歩いて行った。
私は木陰のベンチに座り、ミサ位の3人の女の子の遊ぶ姿を見ていた。
海から届く風が潮の香りが濃く、海が近いのを感じていた。
ウミは辛かったなと思っていた、俺には分らなかったけど、マリアには分ってたな。
マリアが強力な魔法をかけたなと思っていた。
私はあまりに気持ちよくて、知らぬまにベンチで寝ていた。

「パラダイスガーデンの方かしら」と言う女性の声で目が覚めた。
ケイの母親であろう人が、笑顔で立っていた。
『はい、ケイ姉さんの付き添いで、方向音痴だから』と笑顔で返した。
「ありがとう」と微笑んだ、ケイの母親は若くて綺麗な人だった。
「やっと帰って来てくれて、嬉しくて」と私の隣に座りながら微笑んだ。
『強情な娘を持つと苦労しますね』と微笑んで返した、母親は楽しそうに笑った。

『今は、お父さんとケイ姉さんが2人ですか』と聞いた。
「その時間を作ってみたの、ケイが凄く成長してるから嬉しくて」と微笑んだ。
『俺、ガキだから何も分からないけど、ケイ姉さんが皆に、愛されてる事だけは分かります』と正直に答えた。
「ありがとう、本当によかった」と涙を見せた。
『泣かないで下さいよ、お姉さん』と笑顔で言った。
「母親です」と嬉しそうに微笑んだ。

『うそっ、４つ上のお姉さんとばかり』と大袈裟に驚いて見せた。
「やっぱり、夜街にいる子は違うわ」と嬉しそうに笑っていた。

母親の案内で、ケイの家に入った。
リビングにケイと父親が向き合って座っていたが、緊張感が抜けていなかった。
私は父親に挨拶して、ケイの横に座った。
母親が麦茶を出してくれ、父親の横に座った。
沈黙が流れた、ケイはモジモジしている。
《しかたないな～》と思い。
私はソファーの横に正座して。

『お父さん、私にケイを下さい』と頭を下げた。
「違うでしょっ！」とケイが慌てて私に突っ込んだ。
『今の空気はそうなのかと』と父親を見た。
父親も母親も楽しそうに笑っていた、ケイも笑顔になった。

「心臓が止まるところだったよ」と父親が優しい声で私に言った。
『大事な娘ですもんね～』と頭をかいた。
『でも、１０年もしないで同じ事がありますから、いい練習になったでしょ』と笑顔で返した。
「そうか～、１０年もしないうちに」と言いながら、父親はケイを優しく見ていた。
ケイも恥ずかしそうに父親を見ていた。
『まぁ、今の状態では、相手が見つかるかが心配ですけど』とケイを見てニッをした。
「知らないだけよ、わりともてるのよ」と笑顔になった。

母親が用意してくれた、豪華な昼食を食べた。
ケイの幼い頃の話を母親がして、私が都度突込みを入れて楽しく食

べた。
帰る雰囲気になって、ケイが父親に。
「来年のお正月は帰ります」と笑顔で言った。
「楽しみに待ってるから」と父親は優しくケイを見ていた。
父親がケイに何か買ってやると言うのを、ケイはいつものモジモジで断っていた。

『ケイ姉さん、水着持って来た？』とケイに聞いた。
「水着？」とケイが私を見た。
『ほら、忘れた。仕方ない、お父さんに買ってもらいなさい』とニッで返した。
「おう、そうか、じゃあ車で送るよ」と父親は嬉しそうに言った。
『お父様、派手なのでよろしく』と笑顔で言った。
「それは出来ん相談やな」と笑顔で返してくれた、ケイも母親も笑っていた。

日南のショッピングセンターでケイと母親が選んでいた。
「ありがとな、助かったよ」と父親が私に言った。
『来週には、ケイがフロアーデビューします、見に来ませんか？』と笑顔で返した。
「嫌がらんかな？」と私を見た。
『照れるでしょうけど、絶対嬉しいはずだと思います』と笑顔で返した。
「連絡くれるかい？」と笑顔で言った。
『もちろん』と笑顔で返した、父親から電話番号を書いた紙を受け取った。

日南駅まで送ってもらい、お礼を言った。
ケイが父親に歩み寄り、父親を見て。

「ありがとう、お父さん」と言った、父親は後ろを向いて俯いていた。

その背中が私には忘れられない、本当の愛情ある背中だった。
その微かな震えが全てを物語っていた、ケイはその背中をずっと見ていた。
母親は父親の手を握り泣いていた、美しい光景に私も見惚れていた。

真夏の潮風が包むように吹き抜け、希望ある楽しい未来を予感させた。

父親は振り返り、泣いているケイを見て。

「体に気をつけて、無理だけはするな」と優しく送り出した。

ケイの帰る場所に、挑戦を決めた愛娘の背中をそっと押すように。

ケイの瞳は輝き、もう一点だけを見つめていた。

薔薇と青い炎の世界を自分でこじ開け、必ず見るのだと瞳が語っていた。

強く・・・。

青春

その時期の大切さをいつ気付くのだろう、悩んでも苦しんでもいい。
外に出よう、光降り注ぐ場所へ。
細胞が沸き立つ時期ならなら、出会いも冒険も宝になる。

真夏のの潮風が全開の汽車の窓から流れ込み、最高の気分だった。
『どんな水着買ったの？』私は海を見てるケイにニヤニヤで聞いた。
「私は少し恥ずかしかったんだけど、赤いビキニにしろって、母さんが」と照れた。
『それは楽しみだ』とニッで返した。
「でも、タオルも何もないよ？」と聞いた。
『俺、こうみえてもサーファーだから、任せなさい』と笑顔で返した。
「本気で行く気なんだ」とハルカも笑った。
『時間少しだけど、もうすぐクラゲちゃんが出る時期だから、今しかないしね赤いビキニ』と笑顔で返した。

青島で降りて、ケイと手を繋いで小さなサーフショップに行った。
『カネさんこんちは』と店主の、金田という色黒のオヤジに声をかけた。
「おう、久しいな」とそこだけ目立つ白い歯を見せて笑った。
『旅行者用のバスタオル２つ貸して』と笑顔で言った。
「デートか」と珍しいそうに店内を見ている、ケイを見て笑った。
『まぁね』とＶサインを出した。
「いいな～、あんな可愛い子と」と言いながら、バスタオルをくれた。
私は裏の倉庫の自分専用のＢＯＸから海パンを出して、振向くとケ

イが笑っていた。
『なに？』と言って聞くと。
「あなた本当に中１」と笑顔で聞いた。
『この位で驚いてたら、ビーチ行ったら笑い転げるよ』と笑顔で返した。
ビーチに歩きながら、チャリでサーフィンしに来る、唯一の男伝説を話していた。

ケイの着替えを待ちながら。
海の家のトオル君に、パラソルとチェアーの、空いている中で１番いい場所を借りた。
ケイが恥ずかしそうに出てきた、私は見惚れていた。
その予想以上のプロポーションの良さに。
若さのためか少し顔がふっくらしていたので、その無駄の無い体に驚いていた。

「お前、こないだ凄い美人を抱っこしてたろ、で今日はこんなに可愛い子を」とトオル君が私に、肘打ちした。
『俺は幸せもんだ』とトオル君に笑顔で返した。
「もう、あんまりジロジロ見ないでよ」とハルカは照れていた。

２人でパラソルの下のチェアーに寝転び、夏の気分を満喫していた。
「やっぱり、気持ちいいね」とハルカが私を見て微笑んだ。
『海はいいんだよ、水着だし』と微笑んで返した。
「しかし、中１の体かね」とハルカが笑った。
『ブルース・リーが目標だからね』と胸を動かして見せた。
「お願い、なんか気持ち悪い」と楽しそうに笑いながら目を逸らせた。
『気持ち悪いって』と言って泣き真似をした。

『ケイは泳げるの？』と聞いた。
「漁師の子だからね」と笑顔で返した。
『それで、ジョーズか』とニッで返した。
「その話はやめて、海が怖くなりそう」と微笑んだ。
『入るの？』と聞いた。
「顔焼きたくないし、この方が気持ちいい」と嬉しそうに言った。
「あなたはどうぞ」と笑顔で言った。
『海水浴場で、海には入らん』と笑顔で返した。
「さすが、チャリサーファー」とニッで返された。

監視員のマー君が来た。
「お前、こないだのお姫様抱っこ、すげー噂になってるぞ」と笑顔で言った。
『暇な人が多いんだ』と笑顔で返した。
「あの女は誰だって、もっぱらの噂だし」とケイを見て。
「今日はこんな可愛い子と、どうなってるんや」と笑った、ケイは恥ずかしそうに喜んでた。

『この前の人は芸能人、街で声かけた』とニヤを出し。
『この子はケイ、今の彼女』とニッを出した。
「今度、少し分けてくれ」と笑いながら、監視小屋に帰って行った。
「さすが、カスミ姉さんね」とケイが私を見て笑った。
『明日からは、あの赤いビキニは誰だって噂になるよ』と笑顔で返した。
４時が過ぎた頃、シャワーをしてタオルを返し、宮崎に着いたのが５時過ぎだった。

「どうするの？」とケイが聞いた。
『とりあえず映画館行ってみよう』と笑顔で返した。
「今日行くの！」とケイが驚いた。

『折角のマダムの行為を無駄にはできん』と笑顔で返した、ケイも笑って手を繋いで映画館に行った。
その日の最後の上映に間に合った。
ケイが手を強く握って恐々見てるのが可愛かった、ケイの髪から潮の香りがした。

映画が終わって、ケイが行ってみたいと言った、水槽に囲まれた喫茶店でカレーを食べた。
『楽しかった？』と笑顔で聞いてみた。
「うん、とっても楽しかった、ありがとう」と輝く笑顔で返してくれた。
ＰＧに入ったのが、９時を過ぎていた。
ケイがマダムに挨拶して、準備に行った。
私はマリアを抱いていた、サクラさんは休みだった。

「ほれ、ボーナス」とマダムが１万円を出した。
『えっ』とマダムを見た。
「ケイのあの笑顔のボーナスや、金使ったんやろ」と笑顔で言った。
『ありがとう、遠慮なく』と言って受け取った。
「今度、ユリといる時に今日のこと聞かせてくれ」と笑顔のまま言った。
『１つだけ、最後にありがとう、お父さんって言ったよ』と笑顔で言うと。
「ケイ・・よかったの～」と俯いて呟いた。

私はマリアがいつもと変わらないのを確認して、指定席に座った。
お客は４組来ていた、蘭は接客中で私を確認し微かに微笑んだ。
「昨日は本当にありがとう」と後ろから声がした、ウミが笑顔で立っていた。
『ご飯食べたみたいですね』と笑顔で返した。

「うん、元気でたよ」と微笑んだ、可愛い笑顔だった。
『今度体重測定するから』と笑顔で返した。
「やったー、また抱っこしてくれるの」と微笑んだ。
『その方法が一番正確だからね』と微笑んで返した。
ウミの後姿を見ながら、マリアの魔法はやっぱ強力だと思っていた。

ケイも制服に着替えフロアーに出てきた、客は順調に入ってきて熱が上がりだした。
１０時少し前に満席になった、情熱のフロアーは踊り子の独壇場になっていた。
「楽しかったみたいやね～」と蘭が笑顔で立っていた。
『まぁ、普通かな』とニッで返した。
「あ～、なんで毎日がこんなに楽しいんだろう」と満開で笑った。
「報告会を、終了後開催するから」とニッで戦場に帰った。
『報告会って』とその背中に呟いた。
それからが目が廻る忙しさで、入口に入店待ちの客がかなりの人数になっていた。

私はサインが少し分るようになり、楽しくて蘭やユメ・ウミに出して遊んでいた。
「明日からやるよ」と声がして振り返ると、美冬が笑顔で立っていた。
『すいません、マダムの業務命令で』と微笑んで返した。
「昨日のあれ、ちょっと感動したよ」と微笑んだ。
『惚れるなよ、美冬』とわざと呼捨てにしてニヤで返した。
「生意気～」と笑いながら戦線復帰した、《普通だよな～》と思っていた。

マダムがカステラを持ってきてくれ、食べているとユメが来た。
「本当にウミの事ありがとう、乗り越えられると思ってなかった」

と言った目は潤んでいた。
『昨夜のは全て、マリアの力ですよ』と笑顔で返した。
「そうだけど、ありがとう」と笑顔になった。
その背中を見て、友達想いで素敵な子だと思っていた。

その日も終焉まで、熱が下がらず。
完全燃焼の舞台が幕を降ろした時には、7人衆は座っていた。
「ハルカちゃーん、カモ～ン」と元気な蘭が呼んで。
「は～い」とハルカが明るく飛んできた。
カスミが不敵を浮かべ、私を手招きした。

「報告よろしく」と蘭がカスミに笑顔で言った。
「はい、4時間位手を繋いで、青島で水着見せて」と言うと。
「ビキニかい？」とカスミが突っ込んだ。
「はい、赤い可愛いビキニ」とハルカも笑顔で返した。
「それで」と蘭が私をニヤニヤ光線で見ながら言った。
「映画のジョーズと水槽の喫茶店」とハルカが蘭に微笑んだ。
「特殊な事は？」と蘭が笑顔で聞いた。

「蘭姉さん胸ピク見たことあります？」とハルカが楽しそうに聞いた。
『あっ』と私が言った時には、全員ニヤで私を見ていた。
「見せてね」と蘭が楽しそうに微笑んだ。
「毎日楽しいですな～」とカスミも私に、不敵全開で微笑んだ。
『ここで？』と恐々聞いた。
「私は帰ってからでもいいけど」と蘭がニヤで皆を見た。
「そんなことしたら、お前ユリさんに怒られるぞ、輪を乱したって」
とカスミがニッとした。

「そうですよ」と後ろから薔薇の声がした、「私もそのピクが見た

いわ」とユリさんが現れた。
『しょうがないな～ユリさんまで来たんなら』と私はTシャツを脱いで。
胸ピクを見せていた。
「なんか気持ち悪いでしょ」とハルカが言い。
「あら、素敵じゃない」とユリさんが薔薇のニヤをした。
「あ～、もうおしまい」と急に蘭が私の前に立ち、皆に向かって舌を出した。
「案外、けちだな」とカスミが蘭を見て笑い。
「本当に」とユリさんも笑って、皆が笑った。
「だって、私の専用ピクよ」と蘭がニヤして、爆笑を取った。

女性が引き上げたので、TVルームに行くと又マリアが起きていた。
「チャー」と言って駆けてきて、抱き上げた。
『マリア、寝てなかったね』と笑顔で言うと。
「うみ」と天使を振り撒いた、。
『そっか～、ウミに会いたいのか』と言って出ると、蘭が帰ってくるところだった。
『マリアがうみって呼ぶんだよ』と笑顔で言ったら。
「OK呼んでくるよ、昨日の場所で待ってて」と微笑んで呼びに行った。

私は小窓の所で、マリアにサインを教えていた。
「マリアちゃん」明るいウミの声だった。
「うみ」と言ってマリアは駆け寄った。
ウミがそっと抱き上げて、それは嬉しそうにマリアを抱いていた。
目は潤んでいたが涙は無かった。

5分程で安心したのか、マリアはウミの腕の中で眠っていた。
その寝顔をウミが優しく見ていた。

「ありがとう、寝かせてあげて」と微笑んだ、ウミからマリアを受け取った。
『ちょくちょくＴＶルーム覗いてよ、マリアうみうみって言ってるからね』と言うと。
「うん」と明るく可愛い笑顔で答えた。
ＴＶルームに帰ると。
ハルカがマダムとユリさんと蘭と松さんに、楽しそうに報告していた。
ハルカの輝く笑顔と、４人の優しい笑顔を見ていた、天使を抱いたまま。
腕の中の天使は寝息をたてている。
その小さな体に宿る、想像もつかない何かを秘めて。
しかしマリアの驚きは第一幕だった。
その後、産まれてきた意味さえも感じさせる成長を遂げる。
１冊目の１０年日記には収まらない、長い期間の成長だった。
いつの日か、私に書くことが出来るだろうか。
その現実のファンタジーの世界が・・・。

期待

一度でも逃げたら、もう届かないかもしれない。
自分で諦めたら、消えてしまう。だから強くなろう、優しくなろう。

熱が冷めていく深夜の小さな小部屋で、可愛い小鳥が美しい羽を見せていた。
８つの優しい目に見られながら、笑顔で楽しそうに、嬉しそうに。
「本当にありがとう、話を盛り上げてくれて」とハルカがマリアを抱く私に微笑んだ。
『ハルカ姉さん、モジモジしかしないから』と笑顔で返した。
ハルカが微笑んで、私がハルカを下さいと言った話をしていた。蘭が笑顔で睨んだ。
「特別ボーナス足らんかったな」とマダムが私を見た、『充分です』と笑顔で返した。
皆で下に降りて、マリアをユリさんに渡し見送って、蘭とタクシーに乗った。

蘭が肩に乗ってきて、蘭の香りに包まれた。
「胸ピクごめんね」と微笑んだ。
『そうだよ～、蘭専用だろ』と微笑んで返した。
「自慢したかったんだもん」と舌を出して微笑んだ。
『楽しい？』と静かに聞いてみた。
「怖いぐらい、楽しいよ」と言って目を閉じた。
『怖くないよ』と囁いて蘭の寝顔を見ていた。

タクシーが着いても蘭が起きないので、抱き上げて階段を上った。
ドアの前で少し腕の中の蘭を見ながら。
『目を開けなさい、甘えん坊』と囁いた、蘭は目を開けて笑顔にな

った。
「1日1回はしてもらうんだもん」とニッで言いながら降りて、部屋に入った。
蘭がいつものように、化粧を落としパジャマを着て、ベッドに入った。
「ハルカの水着の感想を述べよ」とニヤで言った。私は電気を消しながら蘭を見て。
『予想以上にスタイルが良くて驚いたよ』とニッで返した、蘭は楽しそうに睨んだ。
「私のビキニ姿と比べたでしょう」と又ニヤを出した。
『蘭を誰かと比べた事はないよ』と少し真剣に答えた。
「よし」と微笑んだ。
「ハルカはやっぱり、私にとっても特別な存在だから」と私を優しく見て、「デートの許可を授与する」と微笑んだ。
『報告会があるからな～』とニヤで返した。
「それは、仕方がないね～」とニヤで返し、「今のＰＧの終了は最高の気分だからね」と満開になった。
『蘭でも完全燃焼するの？』と聞いてみた。
「もちろん、手なんか抜いたら楽しめないよ」と笑顔で返した、爽やかな顔だった。

『俺、マダムに1つ提案しようと思ってる事がある』と蘭を見た。
「何かな～」と興味津々光線を私に向けた。
『ハルカの最初の指名、お父さんにしてもらおうと。おかしな事なのかな？』と聞いてみた、蘭は起きて私を抱きしめてくれた。
「素敵じゃない、最高だよハルカも絶対喜ぶよ」と囁いて抱きしめてくれた。
『良かった～、マダムに言ってみる』と蘭の耳元に囁いた。
「またボーナスでるかもよ」と微笑んで、「同伴、よろしく」と言いながら寝転んだ。

私は蘭のおでこに手を置いて、少し蘭の顔を見てから目蓋まで下げて。
『おやすみ』と囁いた、「おやすみ」と蘭も囁いて目を閉じていた。
翌朝新聞のポストに落ちる音で目が覚めた、この辺配ってる奴は遅いな～と思いながら洗面所に行って。歯を磨き顔を洗った。
冷蔵庫を覗くと、赤いウインナーがこれでもかって程入っていた。
《修行しろって事だな》と思いながら一袋出して、慎重に切れ目を入れていた。
「板さん、その背中素敵～」と言いながら蘭が起きてきた。
『驚くなよ、今日はタコだぞ』と笑顔で返した。
「それは楽しみだ」と笑いながら、洗面所に消えた。
「タコじゃな～い」と嬉しそうな蘭と2人で朝食を食べた。
『才能だよ』とVサインをだした。
「ねぇ、今度サーフィン教えて」と笑顔で言った。
『いいよ～、厳しいぞ』と笑顔で返した。
「はい、教官」と微笑んだ、「可愛いの揃えよう」と笑顔になった。
『日焼けするよ』と笑顔で返した。
「良いじゃない、PGで目立たなくなって」とニヤで返した。
『確かに』と笑顔で返した、「そうしたら、沢山さぼれるし」と笑っていた。

蘭を見送り、朝の仕事を済ませて、日記を書きながら鼻歌を歌っていたら買い物に行くことに決めた。
10時過ぎにデパートに行き、お店でTシャツを見ていた。
「Tシャツですか？」と背の低い可愛い店員さんに声をかけられた。
『ネイビーブルーってどんな色？』と笑顔で聞いてみた。
「難しい色をお探しね」と微笑んだ。
『それ着て、真っ赤なりんごを頬張るの』とニッで返した。
「りんご？」と考えている顔が可愛かった。

「ちょっと待ってね」と奥に消えて、もう一人の若い定員さんと笑いながら出てきた。
『客商売としては、少し鈍いね』と笑顔で言った。
「ごめんなさい、年上の方とデートですね」と嬉しそうに笑った。
『うん、可愛いやつある？ネイビーブルー』と笑顔で返した。
「えっとね～」い言いながら2人探してくれた。
これ？とかこっち？と言いながら楽しそうに。
「これかな」と決まったらしく私に見せた。
『素敵だ、それ下さい』と笑顔で言った。支払って3人で楽しく話していた。
「もしかして、相手の女性ってすっっっごい綺麗な人？」と小さい方が笑顔で聞いた。
『うん、すっっっっごい、綺麗な人』と微笑んだ瞬間後ろから声がした。
「そりゃ～、私の事だろうね」と言った。
『当然だろ、カスミ』と言いながら振向いた、カスミが不敵な笑みで立っていた。
「うそ、凄いね」と2人が笑顔で言った。
『大した事無いよ、ありがとう』と笑顔で返して、カスミの方に歩いた。

「大した事ないって～」と輝きを放ち笑っていた、美しい笑顔に吸い込まれそうだった。
カスミはその時、真っ赤な下着が見えるんじゃないかと、こっちが心配になるようなミニスカートを穿いていた。
『それは犯罪ですよ』とミニから伸びる長い足を見ていた。
「なんか、去年より背が伸びたみたいなんだよ」と並んで歩きながら笑った。
『足だけ伸びてるんじゃないの』とニヤで返した。
「胸もでかくなってる、知ってるくせに」とニヤで返された。

『何買いにきたの？』と聞くと。
「働き口がないかと思ってね、洋服とか得意だから」と笑顔で言った。
2人で最上階の喫茶店に行った、沢山のお客や店員の視線を集めながら。
『お昼も仕事するんだ』とカスミと向き合って座り聞いた。
「うん、してみたくってね。蘭姉さん見てたら」と輝く笑顔で答えた。
「でも、ミニが失敗だと思って。今度出直すよ」と微笑んだ。
『男が面接するなら、絶対合格だよ』とニヤで返した。

「こないだの、常に別れを覚悟しているってあれ、かなり響いたよ」とカスミが急に真顔で言った。
『事実だから、なんかあの時感情が止まらなくて。蘭に悪いことしたよ』と正直に言った。
「悪くなんかなよ、どんなに嬉しかったかと思ったよ」とカスミが優しく囁いた。
『俺、気にはしないけど・・やっぱり俺が蘭を追いかけるの変な感じだよね・・大人から見ると？』とカスミに聞いてみた。

私はやはりカスミには特別な感情を持っていた、表現できないが存在として特別だと思っていた。
だから、ユリさんにも聞けない事をカスミに聞いたのだ。
カスミが私を見ていた、本当に深く優しい目だった。愛情さえ感じていた。
「他の人は知らない、でも私は凄く期待してる」優しく静かに、「蘭姉さんは絶対に自分に嘘はつかない人だよ」私は頷いた。
「あんたが、どこまで愛せるのか・・そしてどんな結果になって、その時あんたがなんて言うのか」絶対的輝きの中の深い優しさに包まれていた。

「障害は多いだろうけど、もしかして行くんじゃないかってね」
「見たいんだよ、その時の2人の笑顔がね」と優しく微笑んだ。
『ありがとう、楽になったよ』と真顔で返して、『カスミにしか話せないから』と笑顔で言った。
「いつでもどうぞ、家来る権利は永遠だぞ、男がいても追い出すから」と微笑んだ。
『うん、男見に行くよ』と笑顔で返した。

2人でデパートを出たら、カスミが不敵を出しながら手を出した。
私が繋ぐと、「靴見に行こう」と引っ張った。
『それが楽しいのか？』と聞くと、「最高に楽しい」と笑顔で言って歩き出した。
一番街に出ると、タイミング悪く蘭が外の陳列棚を見ていた。
カスミはそれを確認すると、私に腕を回して組んだ。私にニッをしながら。
「いや～ん、そんなに足ばかり見ないで～」とカスミは蘭に聞こえるように言った。
「ほほ～、危ないアベックだ」と蘭が私を見て、笑顔で睨んだ。
「洋服屋で、可愛い店員と楽しそうに話してから、捕まえてきました。隊長」とカスミが微笑み。
「うん、ご苦労」と蘭がニヤで返した。
「今夜も、報告会があって楽しいな～」と蘭が私にニッで言った。
『何もないよ』とニッで返した。
カスミが店に入り、蘭と靴を見始めたので。仕事に行くと言って別れた。
「マダムにハルカの話、しときなよ」と蘭が店の前まで出てきて微笑んだ。
私も笑顔を返して、手を振って別れた。
私はやはりどこかで負けそうだった、苦しかった愛することが。

カスミの存在とその言葉が救ってくれた、逃げるなと強く背中を押してくれた。

そしてマリアが常に私の中に居て、《がんば》と言ってくれていた。何度も何度も。

だから私は逃げなかった、その蘭という存在からは・・・。

ペチ

許せない事も沢山ある、許されない事も。
若いという事は、全てを許される事ではない、言い訳にもならない。
真夏の熱気が全てを包んでいた、アーケードの出口の光はその熱量を示していた。
家出して2週間が経っていた、私が光の中に出た時に声をかけられた。

「おはよう、チャッピー」と明るい声がした。
振向くとマミが小さな荷物を持って歩いてきた。
『おはようございます、マミ姉さん』と笑顔で返しながら、荷物に手を伸ばした。
「軽いからいいよ～」と微笑んだ、少女の匂いが強い可愛い笑顔だった。
『何か持ったほうが、魅宴のビルまで一緒に歩きやすいから』とニッで返した。
マミは笑顔で荷物を持たせてくれた。

「来週からお世話になります」と横で歩きながら微笑んだ。
『それは、楽しくなるな～』と微笑んで返した。
「ハルカに一歩先を越されちゃった」と少し俯いて言った。
『マミ姉さん、いくつ？』と笑顔を意識して聞いた。
「ハルカと同じだよ」と微笑んだ。
『そっか～、やっぱり俺の指名は、指名と思ってないんだ』と大袈裟に泣き真似した。
「してるよ、本当に嬉しかったよ」と笑顔を見せた。
『ハルカを一歩リードしたね』とマミを見て微笑んだ。

「うん、そっか～、大ママが欲しがるの分る～」と楽しそうに笑った。
『皆がそう言って困りますよ』と言って2人で笑いながら、人通りの無い昼の夜街を歩いた。
ビルの下で荷物を返し、マミと笑顔で別れた。

PGに向かって歩き出すと、又後ろから声がした。
「しっかし、驚かすの好きやね～魅宴の子にまで」振り返ると、美冬が私服で立っていた。
『おはよう、美冬』と笑顔で呼捨てにした。
「生意気癖が付いたな」と笑いながら隣に並んだ。
美冬は四季では1番背が高く、大人っぽい感じだった。

『美冬姉さんは、どうしたんですか？』と微笑みながら聞いた。
「サインだろ」と笑った。
『そうでした』と頭をかいた。
「うっ」と裏階段を上がる時に、美冬が少し呻き胸の下に手を当てた。
『歳だな～』と言いながら、額に伝う汗を見ていた。
「うるさい、ガキめ」と言って、無理やり笑顔を作った。

私はPGドアの前で美冬の手を持って振向かせた。
胸の下に手を当てた、美冬は驚き。
「なに！」と言った。
『ここが痛いの？』と真顔で聞いた。
「うん、少し」と美冬が額に汗を滲ませて答えた。
『肋骨、折れてるよ。なぜかな？』と真顔のまま聞いた。
「やっぱり、折れてるの？」と美冬は素直に聞いた。
『俺、空手やってるから、肋骨折った人沢山見てるから』と言って肋骨を少し押した。

「そこ」と美冬が辛い表情で言った。
『まぁ、病院行っても自然治癒を待ちましょうって言われるだけだけど』と美冬を見ながら。

『なぜ、折れた、美冬』と迫った、カスミのあの顔が浮かんでいた。
真夏の太陽が照りつける外階段の踊り場で、目の前の美冬に詰め寄った。
２人の体は、風の通る隙間しかないほど密着していた。
女に暴力を振るうという、行為に対する怒りが沸々と涌き。
カスミのあの顔が浮かんで、消えなかった。

スニーカーを履いている美冬は、私より５ｃｍ位低かった。
その若く美しい顔の前で、目を見ながら迫っていた真実に。
『誰にも言わないから、なぜ折れたんだ・・美冬』と優しく囁いた。
「元・・・彼氏にやられた」と悔しそうに目を潤ませていた。
『別れてくれないの？』と優しく聞いた。
「別れたけど、付きまとわれてる」と体を震わせた。
『他にどこか痛いの？』と手を離しながら聞いた。
「喧嘩慣れしてるみたいで、お腹しか殴らない」と呟いた。
『女を殴るのは、喧嘩慣れしてるって言わないよ』と優しく言って、
『怖いね』と美冬に微笑んだ。
「怖い、でも誰にも言えなくて」と涙を見せた顔が、カスミと重なっていた。

『どんな人なの？』と聞いた。
「大学の先輩、だから大事にしたくなくて、誰にも言えなくて」と俯いていた。
『千秋も知らないの？』と聞いた。
「付きまとっているのは知ってるけど、暴力は知らない」と私を見た。

『そっか～、美冬は本気で別れたいんだよね？』と確認した。
「うん、こんな事される前から、怖い面があってもう駄目なの」と私の目を見て言った。
その潤む目を見ていた、夏の熱風が吹いてきた。

私は今思うと、ストレスが溜まっていたのだろう。
カスミの時の土下座は、それがベストな選択だと思っていたが。
私のような未熟な悪ガキには、過度なストレスになっていたのではないかと。
私はその捌け口を探していたのだろう、そしてそれを見つけて。
多分心のどこかで喜んでいた。

『どこにいるの？』と聞いた。
「今なら海だと・・駄目よ何もしないで」と美冬が慌てて言った。
『てことは、サーファーだね？』と美冬の【駄目】を無視して聞いた。
「言えない」と私を見て首を横に振った。
『何もしないよ、名前は？』と出来るだけ優しく聞いた。
「言えない、やめて」と美冬は首を横に振り、真顔になった。
「昨日のハルカの話聞いたら、あなた知ってるかも」と美冬は強い意志を示した。

『じゃぁ、徳野さんに相談にいく？』と笑顔で聞いた。
「無理、大学で顔合わせるから・・・怖い」と俯き言った。

『ね～、年上が何しても、その反動が美冬に向くんだよ。
結局美冬が悪く言われるんだよ、ホステスしてるからとかね。
そう言う卑劣な奴は、先に手を打つから。
美冬がそれを分って、何も出来ないと思ってるの。
警察にも相談出来ないでしょ？』と美冬に優しく聞いた。

美冬は頷いた、震えていた静かに。

『大丈夫、ちゃんとした人に相談するから』と出来るだけ優しく言った。

「ちゃんとした人って？」と美冬が聞いた。

『そいつ、サーフィン好きなんだよね？』と聞いた。

「多分、何よりも」と美冬が言った。

『サーフィン諦めるか、美冬諦めるかって話しが出来る人』と笑顔で言った。

「嘘じゃないよね？」と美冬が言った。私は頷いた。

「〇〇」と美冬が姓を言って。

『マナブやな？』と私が聞いた、美冬が頷いた。

『今日のサインの先生は何人？』と美冬に笑顔で聞いた。

「今日は私一人だよ」とやっと笑顔が出た。

『今日、何で来たの？』と笑顔で聞き返した。

「車だよ、赤玉に止めた」と微笑んだ。

『少し控え室で待っててよ』と笑顔で言った、美冬は頷いた。

私は笑顔を意識して、美冬の手を取ってＰＧに入った。

今書きながら確信した、やはり私は喜んでいた捌け口を見つけて。

ＴＶルームに運良く、マダムとユリさんとマリアだけだった。

マリアを抱き上げて、ユリさんの隣に座った。

マリアが私の顔をじっとみて頬を【ペチ】と叩いた、マリアは天使の笑顔だった。

《鋭い子だ》と思いながら微笑んで見ていた。

「昨日のハルカの話に付け足す事はないかい？」とマダムが私を見た。

『1つ考えた事があるんだけど』とマダムを笑顔で見た。
「なんや、言ってみぃ」とマダムも笑顔で返した、ユリさんも私を見た。

『昨日ハルカ姉さんが、お父さんって言った時。
背を向けて泣いていたんだ、その背中を見てハルカ姉さんを愛してるって感じたんだ。
俺、その前に親父さんと2人の時に。
デビューが近いから見に来ませんかって誘って、連絡してって頼まれたんだ。
だから、ハルカ姉さんの最初の指名は。
親父さんが相応しいじゃないかと、勝手に思ったんだよ』と笑顔で言った。

「ありがとな、嬉しいよ・・そうしようなユリ」とマダムが言った。
「はい、最高のデビュー舞台を用意します」と私を薔薇の笑顔で見て。
「ハルカにとってあなたは忘れられない人になるわね」と言った顔は優しかった。

『マダム、今から美冬姉さんにサイン教えてもらうんだけど』とマダムを見て。
『美冬姉さん急に用事出来たみたいで、車の中で教えてもらうよ』と笑顔で言った。
「かまわんよ、じゃがあまり無茶はするなよ」と真顔で見た。
「大丈夫ですよ、マリアがペチしましたから」とユリさんが微笑んだ。
《なんとなくばれてるか》と思いながら、マリアに大丈夫だよよ心で囁いて出掛けた。

美冬と2人で赤玉駐車場に歩きながら。
「どこから行くの？」と美冬が聞いた。
『海に全て揃ってるよ』と微笑んで返した。
「美冬が怖いなら、どっか離れた駐車場で待ってて」と笑顔を意識して言った。
「大丈夫、そんなに弱くないよ」と微笑んだ。
「でも」と言って手を出した、「カスミとはずっと繋いでたんでしょ」と笑顔になった。
『甘えん坊』と笑顔で言って、手を握った。

美冬の車は可愛い軽自動車で、中もミッキーマウスで揃えられていた。
『ネズミが好きなのか』と笑顔で美冬に言った。
「可愛いでしょ、PGのお金で揃えたんだから」と笑った。
美冬の運転しながら緊張してる顔を見て、核心を聞いた。
『で、何が向こうの切り札なの？』と前を見ながら聞いた。
「えっ」と私を見た、『前見て、怖いから』と微笑んだ。
「切り札って？」と美冬はとぼけた。
『俺こんなの得意なんだ、何かあるさ、じゃなきゃ美冬でどうにか出来たはずやもん』と笑顔で聞いた。
「少し危ない写真を握られてる」と前を見ながら呟いた。
『マナブの奴、嫌いだと確信した』と笑顔で言った。

車は懐かしいバイパスに入り、南下している。
私はなぜか気持ちが落ち着いていた。
《マリアのペチは効いたな》と思っていた。
入道雲を追いかけるように、ルームミラーに飾られたミッキーが揺れていた。

「青島？」と美冬が聞いた。

『木崎だよ』と笑顔で返した。
今の時期のこの時間なら木崎浜だと思っていた。
「木崎か～、狭いから嫌い」と微笑んで返してきた。
『美冬ってもしかして運転で緊張してた？』と笑顔で返した。
「うん、ばれたか」と笑った顔は可愛い女子大生だった。
『心配して損した』とニッで返した。

木崎浜に入る狭い未舗装の道路を、美冬が恐々ノロノロと進んだ。
「奥にいる」と私に囁いた。
『手前に止めて歩こう』と笑顔で言った。
松崎さんという中年サーファーのジープの横に止めた。
「よう、チャリじゃないのか」と松崎のオヤジが笑顔で言った。
「おっ、可愛い子連れて、抱っこしないのか」と美冬を見て笑った。
『皆、暇やね～噂話が好きやな～』と笑顔で返して、歩いた美冬と手を繋いだまま。

マナブ達はいつもの４人で車の後ろの松林で休憩していた。
２人はナンパ目的のサーファーで、マナブとアキラという男の２人が要注意人物と噂されていた。
私は少し高い車の後ろから声をかけた。
『マナブ、うちの姉貴肋骨折れてんだけど、どうしようか』とマナブを見ながら微笑んだ。
「なんの事だ」と美冬を確認し私を睨んだ。
『ここにいてね』と美冬を見て笑顔で言った。

私はマナブまでゆっくり目を逸らさずに歩いて。
鼻と鼻が付きそうな位に顔を近づけて。
『とぼけるなよ、大学まで行ってて』と笑顔で言った。
「てめー、やるんか」とアキラが声をあげた。
『いいよ～４対１でちょうどいいハンディやな』とアキラを見た。

『お前ら、それで宮崎で波に乗れんぐらいの恥をかけよ』とアキラから目を逸らさずに言った。
「マナブ、肋骨やったって本当か？」とアキラが聞いた。
《なんだつまんね～》と思っていた、マナブに視線を戻した。

「お互い様や」とマナブは私の視線を外し美冬を見た。
『アキラ、口出さんな』と私はアキラを見ながら言った。
「分った」とアキラが言った。
『そっちの2人は？』と後ろに座る2人を見た、2人は頷いた。

『さっ、マナブ立てよ、お互い様になろうや、俺が姉貴の代打やから』とマナブのTシャツを掴んだ。
「中坊とやれるか」とマナブが凄んだ。

『お前、女としかやれんのか？
心配するなよ、肋骨2本でチャラにしてやるから。
なぁ、マナブお前俺のこと知ってるやろ。
どこまでも行くよ学校でも、家でもね。
お前来年就職するんやろ、そこにも行くよ』と静かに言った。

「分った、もうなんもせんかい」とマナブが俯いて言った。
『お前バカか、お前みたいな卑劣な奴の言葉、誰が信じるか』と大きな声で叫んだ。
周りのサーファー連中が集まってきた。

「マナブやばいぞ」とアキラが言った。
『立てよマナブ、一方的にやろうって、言ってんじゃないんやから』と笑顔で言った。
「どうすればいいんや」と私を見てマナブが言った。
《チェッ》と思いながら。

『中学生にやられるか、土下座して謝るかどっちか選べ・・はよせんと、ミスターが来るぞ』と耳元に囁いた。
ミスターとはマナブたちみたいなサーファーを、毛嫌いしてる、怖い系の元締めだった。

マナブは考えていた。
「はよせんか」アキラの声に押され、マナブはその場に正座した。
「怖い思いさせてすまんかった」と美冬に向かい土下座した。
美冬はその姿を、少し寂しげに見ていた。

『写真とネガどこにあるん?』と聞いた。
「俺の部屋の机の2番目や」と言った。
『鍵貸せ』と言うと、キーホルダーから部屋の鍵を抜いた。

『そっちの3人、マナブが学校でもどこでも姉貴の事なんか言ったら、次はお前らを執拗に追うからな』とアキラを見ながら言った。
「分った、心配するな」とアキラが言った。
『マナブ、俺はやりたいんやからな、忘れるなよ』と言って、美冬の所にゆっくりと歩いた。

美冬はマナブを悲しげな顔で見ていた。
『帰ろう』と声をかけた。
「うん」と笑顔になって手を繋いできた。
帰ろうとすると、ミスターが濡れた姿で現れた。
「小僧、何かイベントか?」と笑顔で言った。
『波に乗り遅れたね、今終わったよミスター』と微笑んで返した。
「今日は乗りきれんな〜」と笑いながらマナブ達を見ていた。

『嫌だった?ごめん』と隣を歩く美冬に言った。

「違うよ、本当にありがとう、あんな男を好きだったかと思うと、寂しくなっただけ」と微笑んだ。
「で、ちゃんとした人は？」とニッとしながら美冬が聞いた。
『最後に声をかけてきた人、あれだけでＯＫなの』と笑顔で返した。

マナブの家に行って美冬が写真を取って来た。
『あった、間違いない？』と聞いた。
「うん、ネガもあったよ」と微笑んだ。
『美冬だけじゃ心配だから俺もチェックするよ』と笑顔で手を出した。
「駄目～」と可愛く舌を出した。
『ギリギリのやつでいいから』とニッで返した。
「惚れるよ」と笑った美冬が可愛かった。
美冬が運転に集中して、緊張している姿を、ミッキーが揺れながら見ていた。
《結局マリアのペチで俺はやられてたな》と思っていた。
青空を見ていた、気分は爽快に戻っていた。

「お礼何がいい？」と美冬が前を見ながら言った。
『店以外では、呼捨てにしていい権利』と笑顔で返した。
「それ、もうやってるやん」と前を見て微笑んだ。
『お腹すいた』と涙目で訴えた。
「胸じゃなくていいの？」と前を見てニッをした。
『やめときます、まだ他の怖い男出てきそうだから』とニッで返した。
「駄目だな～、怖い感じが好きなんだよね～」と舌を出した。
『やっぱり』と微笑んで返した。

『で、今好きな人いるの？』と笑顔で聞いた。
「いるけど、今付き合えないの」と前を見て言った。

『ボーイさんか～』と突っ込んだ。
「なんで、そんなに鋭いの」と笑顔で言った。
『俺は好きだな～カズ君、でも徳野さんに殺されるしな～』とニッをした。
「負けたよ、内緒だよ」と楽しそうに笑った。
『意地悪したら、カズ君に言うかも』とニヤで言った。
「その手があったね」とニヤで返された。
橘橋を渡って、夜街が見えてきた。
明日は花火大会だと思い出した。
夏の風に押されながら、美冬は緊張して赤玉にハンドルを切った。

俺はまだまだ、未熟だと思っていた。

美冬のためじゃなかったと実感していた。

自分の欲求不満だったと、蘭を悲しませるところだったと感じていた。

【ペチ】が全てを解消してくれていた、またマリアに助けられたと感じていた。

最強の【ペチ】が私の中に刻まれていた、今もまだ・・・。

燃焼

完全燃焼できたと実感できる時は、本当の幸せを感じる。
生きるための力だけを残して、燃え尽きてみたい。

降り注ぐ光の中をゴーストタウンの駐車場に、慎重にゆっくりと入っていく。
「赤玉嫌い、狭いから」と美冬はふて腐れた表情で、誘導のオヤジを見ている。
美冬は何度か切換えして指定の場所に止めた。
外に出ると夏の暑さが迎えてくれた。
「何食べる？」と手を出しながら、美冬が笑顔で聞いた。
『肉』と笑顔で返した。
「水槽、私も行きたい」と可愛く微笑んだ。
『水槽で肉』と微笑んで返した。手を繋いで2人で歩いた、灼熱の道を。

「蘭姉さんの事、好きなの？」美冬は高菜ピラフを食べながら聞いた。
『やめろよ、照れるだろう』と私はチキン南蛮を食べながら、照れる振りをした。
「なんか素敵ね～」と可愛く笑った。
『まぁ、片想いですから』と微笑んだ。
「そうでもないでしょっ」と微笑んで返してきた。
『美冬は、何が専攻なの？』と聞き返した。
「教育学部よ、先生になるのだ」とニッで返した。
『そりゃ、受け持ったクラスの男子はラッキーだね』とニヤで返した。
「私も、そう思うよ」とニヤをして、「中学教師に変えようかな～」

と微笑んだ。
『俺みたいに、いかした奴はいないよ』とニッで返した。
「あんたのような奴が、あと一人でもいたら、驚きやわ」ど微笑んだ。

美冬がご馳走してくれ、ＰＧに着いたのが2時を過ぎていた。
ＴＶルームには誰もいなかった。
「さっ、やるかね」と言った美冬の隣に座った。
「私達のは基本だけでいいから」と言って初めた、私は書きながら美冬の長い指を見ていた。
「おはようございます、美冬姉さん」と言ってハルカが入ってきた。
「おはようハルカ、大変やわ不良少年に教えるの」と笑顔で言った。
『意地悪言った』と美冬をニヤで見た。
「今夜、伝えて」とニヤで返された。
『俺、素直だから』とニッで返した。
「まだ、心の準備がまだ」と慌てた。
『案外、意気地無しだな～』と微笑んだ、ハルカが不思議そうに見ていた。

「美冬姉さん、なんかされました？」とハルカが聞いた。
「裏階段の踊場で迫られた、私が可愛いからしょうがないけどね」と可愛く微笑んだ。
「今日の報告会が楽しみね」とハルカが私を見てニヤを出した。
「あれがないと、寝つきが悪いからね～」と美冬もニヤで見た。
『意地悪リストに美冬2回、ハルカ1回と足しとく』とニヤで返した。
「誰がトップ？」と美冬が楽しそうに聞いた。
『カスミが断トツだったけど、胸で－１０が入ったから接戦だよ』と笑顔で返した。
「あの胸は破壊力あるな～」と美冬が微笑み。

「よく死ななかったよね」とハルカも笑顔になった。
美冬が帰って、ハルカと予約確認をしていたら、マダムがやってきた。
「ハルカ、浴衣買いに行くよ」とマダムがハルカに言った。
「えっ」とハルカがマダムを見た。
「蘭のとこ寄って言っておくかい、ＴＶルーム頼む」とマダムが私を見て歩き出した。
『了解』とマダムの背中に声をかけた、ハルカが慌ててマダムを追いかけた。

ＴＶルームに行くとユリさんとマリアが来ていた。
「やっぱり、ペチが効いてたみたいね」と薔薇で微笑んだ。
『一生もんのペチでした』とマリアを抱きながら笑顔で返した。
「さて、お願いがあるの、ハルカの実家に電話してくれる代わるから」と微笑んだ。
『それでいいですか？』とＴＶルームの電話を見た。
「もちろん」と薔薇で答えた、私はマリアを降ろしポケットの紙を出した。

数回のコールで、母親がでた。
私は先日のお礼を言って、ユリさんに代わった。
電話の内容は、ハルカに内緒で明日の夜来店できないか。
父親にハルカの最初の指名をしてほしいと、丁寧にユリさんが話した。
母親は感謝して、承諾したようだった。
私はマリアと静かに遊んでいた。
ユリさんはホテルは用意すると言って、夕食をマダムと４人で食べる、約束をして受話器を置いた。

「明日、〇〇ホテルの８階を用意したから、そこで花火を楽しんで」と大淀川沿いの、花火大会には最高のホテルの名前を告げた。
『よくとれましたね、花火の日に』と笑顔で返した。
「たまには、交友関係も使わないとね」と嬉しそうに微笑んだ。
『なるほど～、納得です』と笑顔で返した。
「そこに、ハルカのご両親に泊まって頂くの、多分ハルカもね」と微笑んだ、圧倒的優しさだった。
『俺はニヤニヤしながらハルカを見て、花火が終わったら連れて帰ればいいんでしょ』と笑顔で聞いた。
「ニヤ位にしてね、あの子割と鋭いのよ」と楽しそうに笑った。
マリアが私の腕の中で眠っていた、天使の寝顔で。

『ユリさん俺気になってる事があるんだけど』とユリさんを見た。
「なにかしら？」と微笑んで私を見た。
『蘭と泊まった時、俺に謝る事があるって』と問いかけた。
「ごめんなさい、そうだったわね」と少し真顔になった。

「ＰＧにあなたを置く事に決めたのは、私なの」私は頷いた、「でもね、そうするとあなたから奪う物もあるのよ」真剣に優しく。

「あなたは、将来お酒を飲むようになっても。
どこに行ってもお客としては楽しめないの。
どうしても、内側に入ってしまう。
そして女性もそれを望んでしまうの。
だから、その楽しみを奪ってしまった事を。
お詫びしようと思ってたの」と優しく告げてくれた。

『良かった、俺はその方がいいよ。
キングと魅宴で話してた時に、お前が今の気持ちを忘れなければ。
本当の帝王になれるって言ってくれたんだ。

ユリさんの今の言葉で、少し分ったよ、ありがとう』と笑顔で返した。

「私が現役のうちに、その姿を見せてね」とユリさんも薔薇で微笑んだ。

『ユリさんがマダム位になるまでには』と笑顔で返した。

「じゃあ私も、1つお願いきいて？」と微笑を絶やさずに。

『なんでしょう？』と笑顔で聞いた。

「蘭とどんな未来があっても、3人娘の兄でいてくれるって」と優しく言った。

『駄目と言われてもなります、なってますかな』と少し照れて言った。

ユリさんの薔薇に包まれていた、やはり比べようのない圧倒的存在だった。

最高で最良の憧れの存在だった。

ユリさんが準備に行き、私は床でマリアの横で知らぬまに寝ていた。

「ウミ」と言ったマリアの声で目が覚めた。

ウミがマリアを抱き上げていた、嬉しそうに。

『マリア、ウミにおんも連れてってもらいな』とマリアに言った。

「おんも」とマリアがウミに、天使の微笑で催促した。

「いいの？」と嬉しそうに聞いた。

『絶対に離さなければね』と微笑んだ。

「離すわけないよ」と言いながら出て行った。

私は四季のサインの練習をしていた、マダムとハルカが帰ってきた。

「ウミ姉さん、下で本当に嬉しそうだったよ」とハルカが笑顔で教えてくれた。

『さぼりたくて、押し付けたよ』と笑顔で返した。

エミ・ミサが来てマリアも帰ってきた。

ウミが三人と遊んでいたら、ユメが来て一緒に遊びはじめた。
私は四季の識別サインを練習していた。
《これだけは間違えられん》と思いながら。
「なんか、ＴＶルームが最近楽しそうでいいね～」と松さんが入ってきた。
ユメ・ウミが笑顔で挨拶していた。

「おっ、いよいよ四季かい」と松さんが笑顔で私に言った。
『四季は難しいよ、後姿じゃ誰かも分らんし』と笑顔で返した。
「誰なら後姿でわかるんや？」と松さんが聞いた。
『トップ４とカスミかな』と笑顔で答えた。
「やっぱり、カスミは特別なんだ」とウミがニヤで言った、エミが私の前に立って私を見た。
『それと、エミとミサとマリア』とエミを見て言った。
「うん」と言って遊びに戻った。
松さんと、ユメ・ウミが笑顔で見ていた。
松さんにＴＶルームを任せて、指定席に座った。
静寂のフロアーを見ていた。
【完全燃焼しないと楽しめない】と言った、蘭の爽やかな笑顔を思い出していた。

「なんか、フロアーマネジャーらしくなるね」と後ろから声がした。
『おはようございます、大ママ』と振向いて頭を下げた。
大ママとマミとユリさんが立っていた。
『この時間が一番好きなもんで』と大ママに笑顔で言った。
「私もだよ、今でもな」と笑顔で返した。
「マミ、これがＰＧだよ、これが新しい感性のクラブだよ」と大ママがマミを見た。
「はい、少し明るい雰囲気ですね」と笑顔で答えた。

「そう、そして女性も違う感覚でやってるよ」と大ママがフロアーを見ながら言った。

「お前は幸せや、それを間近で見れるんやから」とマミを見た。

「はい、嬉しいです」とマミは笑顔になった。

「マミ、ユリは遠すぎて参考にはならんから、出来るだけ蘭を見ておけよ・・私が今までで一番欲しかった女やから」と私を見て微笑んだ。

『俺じゃないのか～』と大ママを見て笑顔で返した。

「それも、欲しいよ」と笑顔で返された、ユリさんもマミも笑顔だった。

「明日から頼む、花火からな」と大ママが言った。

『2人の思い出がまた増えるね』とニッでマミを見た。

「蘭姉さんに、殺されそう」とマミが微笑んだ、少女の匂いを振り撒いて。

静寂のフロアーが何かの力で、謎の原作者の気まぐれでメンバーを揃えていた。

暑い夏はその上昇を止めず、熱いフロアーの女優達は完全燃焼で応える。

熱に引き寄せられた観客が、今夜も笑顔を見せる。

マミはその純粋な目で目撃する、その後の証言者になるために。

確かに最高の夏の物語だったと・・・。

認知

貫くのは至難の技である、問われても明確な答えは無い。
ただ、思いのままに生きてみたい、出来ないと思いながらも。

音の無い広い空間に、熱だけがある。
待ち望んでいる、燃え上がる事を。
一人また一人と女優達が入場する、緊張感を背中に映しながら。
大ママとマミがユリさんと出て行き、再び静寂が戻っていた。
私は暗記した、四季の識別サインを練習していた。

「勉強熱心やね」と蘭が椅子を隣に置きながら微笑んだ。
『ご飯食べたかな？』と微笑んで返した。
「うん、いーぱい食べた」と笑顔で答えた。
『よし』と笑顔で返した。
「明日らしいね」とニッとした。
『うん、そうみたい』とニヤで返した。
「少し妬けるんだけど」と頬を膨らまし、「源氏名の時も、今回も」と笑顔になった。

『ハルカは、特別な存在なんだろう』と微笑んで返した。
「あの子を一番街で見たとき、感じたんだ出会う為にそこにいるってね」と深い目をした。
「そして、今まで見てきて、間違ってなかったと思うよ」と微笑んだ。
「生涯2度しかない気持ちだった」と私を見た目は優しかった。
『もう1度は？』と聞いてみた。
「若草公園」と言って肩に乗ってきた、静寂のフロアーに2人だけだった。

『必ず間違ってなかったって思わせるからね』と静かに囁いた。
「うん」と言って静かになった。
その広い空間は2人の揺り篭ののようで。
私も蘭の頭に、そっと自分の顔をつけた。
蘭の髪の香りを楽しんでいた。
【若草公園】と言った、蘭を思い浮かべながら。

「なんか絵になりすぎてて、声をかけれない雰囲気なんですけど」とハルカが言った。
『そうだろう、俺もそう思ってた』と微笑んで返した。
「ハルカ、明日浴衣なんだ」と蘭がハルカを見てニッをした。
「はい、マダムがプレゼントしてくれて」と嬉しそうに笑った。
「いいね～、明日は5人の美女と花火見物なんだ～」と蘭が私を見て、ニヤニヤ光線を発射した。
『俺は3人娘専門です』とニヤを返した。
「ハルカ、明日も報告会楽しみやね～」と言いながら、蘭は笑顔のハルカと準備に行った。

私はＴＶルームに行って、ネイビーブルーに着替えていた。
「チャッピー、ピク見せて」とミサが笑顔で言った。
私は3人娘にピクを見せていた、3人とも笑顔だった。
指定席に戻ると四季が、４人で打ち合わせ中だった。

「カモ～ン」と千秋が笑顔で手招きをした。
近づくと美冬がかなり胸の開いた、真っ赤なドレスを着ていた。
「これ、どういう事かな」と美冬の胸を指差してニヤをした。
『やっぱ、胸にしとくんだった』とニヤで美冬を見た。
「でしょ～、カスミのばっかり見てるからよ」と華やかに笑った、美冬の豊満な胸に驚いていた。
「一１０点くれるんなら、触っていいよ」と美冬がニヤニヤで言っ

た。
『それは、素敵だ』とニヤで返した。
「か～、やっぱり一人でサインやらせるんじゃなかった」と千秋が笑顔で言って、四季が笑っていた。
「－１０点てなにかな～」と蘭がニヤでやってきた。
「意地悪リストをカスミだけ－１０点にしたって言うから」と美冬が蘭に微笑んだ。
「今のＮＯ１は誰だい？」と蘭がニッで聞いた。
『接戦だけど、カスミ』と笑顔で言ったら。

「ほれ、もう一回許す」と後ろからカスミの声がした。
振向くとカスミが胸を張っていた。
『あっ、時間だ』と言って逃げた。
「さすがに、逃亡したか」と蘭が笑顔で言って、全員の笑い声が聞こえた。

ユメ・ウミ、ハルカも来て９人で談笑していた。
金曜日でスタートからの女性が多く、大きな円を作った。
「今夜も開演しましょう」ユリさんの言葉に「はい」のブザーが鳴った。
その日は開演１５分で満席になった、一気に熱が上がった。
ボーイの準備が追いつかない速さで、動き出した。

「最短記録や」とマダムが後ろから言った。
『そうなんだ』とマダムを見た。
「土曜に２０分が最高やったかいの」と嬉しそうに笑った。
「１０番四季全員、あれでいこうよ」とリンさんが私に指示を出した。
『了解』と返事して、ハルカの定位置に行って。

手だけ出して【四季】・【１０番】を出して、手のひらを回しフロアーを指差した。
四季は一度入口に全員揃うのを待って。
フロアーセンター１０番席の１８人の団体の前に出て、一糸乱れぬシンクロ挨拶を披露した。
１０番席以外からも拍手が沸き起こった、熱が異常に高くなっていた。

９時を過ぎても、入口に沢山の人が待っていた、女性も増えたが休憩は誰もとってなかった。
私も忙しかった、予約じゃないアイさんのお客が誕生日で花を買いに走り。
タバコの若葉がきて、タバコ屋に走ったりと。
４トップにカスミと、美冬と千夏の指名がついて。
フォローが全員バイトになっていたが、それをそつなくこなした。
誰も手を抜けない空気が充満していた、そしてそれを全員が楽しんでるようだった。
結局その日は終演まで、入れ替りで満席が継続した。

終演後はやはり7人衆は１０番に座り込んでいた。
一人だけ元気な蘭が、私とハルカを呼んだ。
「じゃぁ、美冬から報告聞こうか」と美冬を見て微笑んだ。
「２時間位手を繋いで、木崎浜で私の為に４人相手に凄んで、水槽で食事です」と美冬が笑顔で言った。
「そういうことか～、どおりで」と千秋が私を見て微笑んだ。

「特殊な事は」と蘭がニヤで聞いた。
「医者のふりして、裏階段の踊場で私のここを触りました」と肋骨を触った。
「で、大丈夫なのかい？」と蘭は少し心配げに聞いた。

「はい、偽医者が自然治癒でいいと診断しました」と微笑んだ。
「で、きちんと終わったのかい？」と蘭は深い目で聞いた。
「はい、終わらせてくれました」と言って私を見て。
「本当にありがとう、私の家にも転がり込んで良い権利を授与する」
と美冬が華やかに微笑んだ。
「んっ、」蘭が笑顔で体を寄せた、私は蘭の肋骨を触り。
『骨太だね』と笑顔で返した。
「よし」と蘭が舌を出した。

「次、カスミ」と蘭がカスミをニッで見た。
「はい、今日デパートの洋服屋で支払った後にも、可愛い店員と嬉しそうに話していました」とカスミがニヤをして私を見た。
『それには理由があるよ』と蘭をニヤで見た。
「言ってみてごらん」と蘭がニヤニヤを出した。
『俺が今大好きな人が、この色のTシャツが好きだって歌ってたから・・欲しくて』と蘭を見て微笑んだ。
「あっ」とハルカが私を見てニッをした。

『1番ハルカ』と言って耳に手を当てると、ハルカが私の耳に囁いた。
『正解』とハルカに言うと。
「やったー1番」と飛び跳ねた。
次が千春・ユメ・千秋・千夏・ウミ・美冬だった。
蘭とカスミは分からない事に焦っている。

「ヒント」とカスミが言ったので。
『このTシャツはネイビーブルーです』と言ったら。
「はい」とカスミが手を上げて、蘭に不敵を振り撒いた。
「まって、カスミちゃん、私を置いて行かないで」と蘭が泣き真似をした。

「どうして、本人が分らんかな～」と私の所に来て囁いた。
『正解』と言って私は蘭に微笑んだ。

「さっ、後は若い２人に任せて帰ろう」とカスミが言って、控え室に戻った。
「言わないでね」と蘭が考えながら、「先に着替えて来る～と言って」皆の後を続きながら。
「言うなよ～」と皆の笑顔の中、控え室に消えた。
《負けず嫌いめ》と思いながら、ＴＶルームに戻った。

「かえろ～、ダ～リン」と蘭が明るかったので。
『は～い』と言ってエレベーターで耳に手を当てた。
「まだ」と涙目で微笑んだ、「ヒント２」と言いながら腕を組んできた。
『本当はりんごも用意しようと思ってた』と横で腕を組み体重をかけてくる、蘭に微笑んだ。
「りんご？」とまた考え出した、その顔が可愛くて私は楽しんでいた。
『整理してみよう、俺が今大好きな人・ネイビーブルー・りんごです』とタクシーの中で微笑んだ。
蘭はまだ可愛い顔で考えている。

『俺が今大好きな人の源氏名は？』とニッで聞いた。
「蘭！」と元気に笑顔で答えた。
『その人が真ん中で歌っているグループは？』とニッで聞いた。
「キャンディーズ！」と満開になった、「年下の男の子！」と嬉しそうに答えた。
『正解』と微笑んだ。
タクシーから降りると蘭が屈んだ。
「頭、いっぱい使ったら疲れた」と地面に指で何か書きながらすね

た。
『そうだったね、一日一回しないとね』と言って抱き上げた。
「うん」と言って可愛く微笑んで首に手を回した。
蘭は問題が解けてご機嫌で。
【年下の男の子】を鼻歌で歌いながら、パジャマを着てベッドに入った。
私は電気を消して、蘭のご機嫌な顔を見ながら。
『蘭、ごめんね美冬の事、ここで話そうと思ってたんだ、蘭に心配かけるとこだったよ』と素直に謝った。
「いいよ謝らなくて、私はあなたを信じてるよ」と微笑んで。
「私はどんなに好きな人の事を考えてるとしても、生き方を変えるような事はしてほしくない」
「私は今日の美冬の事は、嬉しかったよ」優しい目だった、青い炎を湛えた。
「話してくれればいいよ、それも含めて私は好きになるから」と笑顔を見せた。
『うん、でももう無茶はしないよ・・出来るだけね』と蘭を見ながら言った。
「うん」と蘭は満開で微笑んだ。
『来年の花火は2人で見に行こうね』と囁いた。
「うん」と蘭も微笑んで返してくれた。
私は蘭のおでこに手を当てた、蘭がその手を握った。
「そのままにしてて、お休み」と囁いて目を閉じた。
『ゆっくりお休み』と私も囁いた。
私は蘭の額の温もりを感じながら、蘭の顔を見ていた。
時を忘れて。
好きな人のためでも、生き方を変えないで、それも含めて好きにな

る。

私にはこれほど嬉しい言葉は無かった。

認められたいというのは、【何で】ではなく【誰に】なのだと思っていた。

蘭の感じた【出会うために、そこにいた】それを証明しようと思っていた。

蘭の額の温もりを感じながら・・・。

バトン

それがどう見えるかは視覚ではない、その時の心で見る。
自然も芸術も、美しいと思える人でありたい。
そして人間が好きだと、言える者でいたい。

最高の曇天を感じて目が覚めた、窓から身を乗り出して空を見た。
《雨の心配はないな》と思ってほっとしていた、３人娘の笑顔を思い出していた。
洗面所で歯を磨き顔を洗って。
冷蔵庫を開けて考えていた、メニューを。
決意して、スクランブルエッグに挑戦してみた、途中でやばいと思いながら。
「なんで毎朝、こんなに幸せなんだろう」と笑顔で言いながら、蘭が洗面所に消えた。

朝食を目の前にして、少し固まって。
「今朝のメニューは何料理？」蘭が笑顔で聞いてきた。
『アメリカの西海岸をイメージしてみた』と笑顔で返しながら照れた。
「あら、でも美味しいよ」とニコニコになった蘭を見て、私も食べてみた。
『アメリカ人てのも、意外と美味いもん食ってるね』とマリアに言った同じ台詞を言った。
「アメリカ人に殴られるぞ、この見た目は」と蘭が楽しそうに笑った。

「花火楽しんできなよ」と蘭が微笑んだ。
『肝心な人がいないからな～』と微笑んで返した。

「もう、祭りも大きいのないからね、あっても土曜だし」と少し寂しそうだった。
『蘭、イブだけは、俺に蘭の時間をくれよ』と真顔で聞いた。
「あたり前でしょ、そこは」と笑顔になった。
『よし』と笑顔で返した。

「サンタは何をくれるのかな～」と微笑んだ。
『変わらぬ想い』と笑顔で言って照れた。
「ホストにはなるなよ・・今のかなり響いた」と静かに私を見ていた。
「それだけが・・・欲しい・・・それだけでいい」と満開の笑顔で言った。
蘭を見送り、朝の仕事をして。日記を書き、出勤した。

街を歩きながら、スポーツ用品店の前で足を止めて。
色紙を見ていた、琴桜の手形だった。
文房具屋に行って、色紙を5枚買ってＰＧに出勤した。
ＴＶルームにはマダムとマリアがいて、マリアが駆けてきた。
マリアを抱き上げた。
『おはようございます、マダム』と挨拶した。
「おはよう、毎日早いな」とマダムは微笑んだ。
『ハルカ姉さんは？』と言った時にエミとミサが来た。
「ユリと美容院に行ったよ」と言った。
『それは好都合』と微笑んで、『エミちょっと』と呼んだ。

私の横に座ったエミに色紙を出しながら。
『内緒だけど、今夜からハルカ姉さんがフロアー出るんだよ』とエミを見た。
「そうなの、素敵」と可愛い笑顔になった。
『だから、この色紙の上の方に何かエミが一言書いて、下に3人の

手形を押すから』と言って引出しからマジックを出して渡した。
「うん」と少女の笑顔で受け取り。
そのまま書きはじめた。見事な字で迷い無く書いた言葉が。
【ありがとうケイ　おめでとうハルカ】と綺麗な字で書かれていた。
私はその字を見ている、強い瞳のエミを見ていた。
ただ感動していた、その表現力に、その強い想いに。
私はその言葉に気付かされた、ＰＧではケイを送ってハルカを歓迎する日なのだと。
マダムは目を潤ませて、色紙の自分の文字を見ているエミの顔を見ていた。

「これでいい？」と私を見た笑顔は少、女の輝きで溢れていた。
『良すぎるよ』と笑顔で返した、エミは嬉しそうに笑っていた。
その字の下に小さく【ＥＭＩ】と書かせて、マダムに色紙を１枚渡して。
『マダムと、ユリさんと、松さんと、リンさんの分よろしく』と微笑んだ。
「わかった、本当にありがとな」とマダムが笑顔で私を見た。

『よし、皆でフロアーに行きます』と3人娘に言った。
「はーい」とエミ・ミサが返事して、「あい」とマリアが続いた。
私はエミの書いた色紙と残りの色紙を、エミに持ってもらって。
右腕にミサ・左腕にマリアを抱いて、指定席に向かった。
２人を降ろして、棚から粘性の強い墨汁を出して、エミを見た。

『マリアから押すから、終わったら手を上げさせて、トイレで洗ってあげて』と微笑んでエミを見た。
「ラジャー」とエミが、ガッチャマンになって微笑んだ。
私は小皿に墨汁を出して、マリアの手を浸けた。

マリアは楽しそうに天使の笑顔で従った。
色紙の真ん中に、マリアの開いた手を押し付けた。
綺麗に可愛い手形ができていた。

エミがマリアの手を上げさせたまま持って、トイレに連れて行った。
ミサが私の前に立って笑顔で手を出した、私はミサの手を優しく墨汁に浸けた。
ミサは気持ちが悪いのか、ケラケラと笑って、手形をマリアの左に押した。

『手を上げたままトイレに行けるかな？』と優しく笑顔で聞いた。
「４歳だよ、行けるよ」と可愛く笑った。
『そうだね、綺麗に洗ってね』と言って慎重に歩くミサの背中を見ていたら。

「おっ、楽しそうな遊びやな」とカズ君がミサを見て、私の所に笑顔で歩いて来た。
『おはよう、カズ兄さん』と笑顔で色紙を差し出した、カズ君は不思議そうに受け取った。
『徳野さんと、ボーイさんの分よろしく』と笑顔でカズ君を見た、カズ君はエミの字を見ていた。
「ケイの送別で、ハルカの歓迎やな」と笑顔で言った。
『そう、エミが教えてくれたよ』と笑顔で返した。
「ハルカ号泣やな」と嬉しそうに言った、その顔が優しかった。

『カズ君、彼女いるの？』とニッで聞いた。
「今はいないです」と大袈裟な泣きまねをした。
『好きな人はいるんの？』とヨチヨチをしながら聞いた。
「そりゃ～俺も若い男やからな」とニッできた。
『告白してないんだ～』とニッで返した。

「今は、出来ないんだよ」と無理に笑顔を作った。

『そっか～、お店の女性なんだ』と小さな声で囁いた。
「それに、学歴がな～」と寂しそうに囁いた。
『カズ君、俺カズ君の優しさが大好きだよ、学歴なんて・・俺なんか中坊で蘭に挑むんだよ』と真顔で言った。
「そうだよな～、中1で蘭姉さんに挑むんだよな」と私を優しく見た。
『そうだよ、四季ぐらい挑んでもらわないとね』とニッで返した。
「そっか～、そうだよな」と嬉しそうに笑った。
『徳野さんには、気をつけて』と笑顔で返した。
「重々、承知してます」とカズ君が笑いながら色紙を持って行った。
《やっぱり両想いじゃん》とその背中を見送った。

エミが2人を連れて帰ってきて、私の前に立って照れた。
《おませ発動やな》と思いながら、優しく手をとってマリアの右に押した。
綺麗な3人の手形ができた、エミは笑顔で手を洗いに行った。
私は出来た色紙を絶対にハルカの手の届かない、棚の上に乾燥のために置いた。

『じゃや、帰りまーす、ミサ姉さんマリアの手を繋いで下さい』とミサを笑顔で見た。
姉さんがよほど嬉しかったのか、ミサが最高の笑顔で。
「ハーイ」と言ってマリアと手を繋いだ。
TVルームに帰って、マダムと交代して3人娘が遊ぶのを見ながら。
奥の壁の出っ張りに指をかけてぶら下がり、懸垂をしていた。

ユリさんと、ハルカが帰ってきたのが12時少し前だった。
汗を流してやっている私を見て。

「意外と、努力家ね」とハルカが笑顔で言った。
『ピク出来なくなると、蘭に捨てられそうで』とニッで返した。
「カスミ姉さんと、美冬姉さんの部屋があるくせに」とニッで返された。
「あら、私の家もあるのよ」とユリさんがハルカを見て微笑んだ。
「伝説以上は、決まりね」とハルカが私にニヤできた。
『ハルカ、体拭いてくれ』とニヤでタオルを差し出した。
ハルカは返せなかった、私はニヤニヤでハルカを見ていた。
ハルカは舌を出して笑顔になった。

ユリさんが全員の分の豪華な弁当を用意してくれ、お昼を食べていた。
「お天気、曇りだね～」とエミが私を見た。
『エミ、花火は曇りが一番い綺麗なんだよ』と笑顔で返した。
「そうなの～」と嬉しそうに微笑んだ。
『今夜だけは、お月様とお星様にお休みしてもらおう』と笑顔で返した。
「うん、でも花火って綺麗だよね」と少女らしく笑った。
『エミ、花火が色々な色が出るのはなぜ？』と笑顔で聞いた。
「化学反応の違いでしょ、前なんかで読んだよ」と強い眼差しで微笑んだ。
『さすがだね、でも化学反応でその美しさが決まるんじゃないよ』と微笑んだ、エミは私を見てる。
『自分がその時楽しいなら楽しい色に、悲しいなら悲しい色になるんだよ』とエミを見た、その大切な宝物を。

エミは花が咲いたような可愛い笑顔で頷いた、強い瞳のまま。
『科学は大切だけど、全てが科学だけで決まるものじゃないんだよ』と意識して優しく笑った。
「うん、チャッピー先生」と少女を振り撒いて笑った。皆が優しい

笑顔で見ていた。

私にとって、エミという存在は、私の先生だった。
エミに何かを語りかける時には言葉を選ぶ、慎重に考えながら。
エミは必ず何かを返してくるから、私の予想を遥かに超えたものを。
私はエミに話しながら、常に自分の言葉を自分の耳で聞いて確認していた、本心なのかと。
だからエミには自分の考えてる事を、全て伝えた、その時々に。

【ユリさんが私にくれたバトンを、次のランナーに渡しただけ】
蘭のあの言葉が私の中にはあった。
同世代の下から追いかけて来る愛する者に、渡すバトンを持ちたいと。

そうすれば、あの笑顔で笑える未来があるのではないかと。

私のバトンを渡す相手は、最高のランナーだと思いながら。

その屈託のない、６歳の笑顔を見ていた。

そして柔らかく優しい感性の４歳の笑顔と。

２歳の本物の天使の笑顔を・・・。

未来図

あの時、夜空を見上げ話した。
今でもそこに行くと、空を見上げる。
幼い姉弟のように手を繋ぎ、見上げて描いた未来図を。

南国の夏の開放感と楽しい予感で、3人の可愛い少女は自然に笑顔になっていた。
松さんが珍しく2時過ぎには来た、マダムと何か打ち合わせしていた。
「チャッピー、ハルカを早く空けたいから予約確認してこい」とマダムが私を見て言った。
『了解』と言って出ようとした時に、ウミが覗いた。
『ちょうどよかった、3人娘お願いできる？』とウミに笑顔で聞いた。
「えっ、いいの？」とウミが嬉しそうに笑顔で返した。
『頼んでるんですけど』とニッで返した。
「うん」と可愛い笑顔で返してくれた。
「ウミ、いつもすまんね、助かるよ」とマダムがウミに笑顔で言った、ウミも笑顔で返していた。

フロアーでハルカを見つけて声をかけた。
『予約確認しましょ、マダムが早くハルカを空けろって』と笑顔で言った。
「なんか、変なんだよね～皆」とハルカが私を探るように見て微笑んだ。
《わりと勘が鋭いか》と思いながら、顔はとぼけていた。
『夜はもう・・・今夜で少女らしい思い出が出来ないかもって、マダムは思ってるんだよ』とハルカを真顔で見て。

『今日はご好意に甘えなさい、強情娘』とニッで返した、必死だった。

「うん、マミともゆっくり話せるから・・嬉しいの」と微笑んだ。
『最大のライバルやね～、十数年後どっちが女帝と呼ばれるのやら』
と私は笑顔で言った。
「そんな事にはなりません・・私が女帝・・無理」と自分で確認して笑顔になった。
だか、この私の冗談のような言葉が現実になる。
しかしその時もハルカとマミは【無二の親友】だった。
私にはそれが本当に嬉しかった。
その競い合いは常に相手を認めていた。
二卵性双生児のような関係は現在も、静かな生活で続いている。
同じ時代に産まれ、同じような環境を選択し、同じ道で違うやり方で登った。
だが登頂した先で、2人は再び出会って抱き合うのだ。
私はその光景を見ることが出来た、幸せ者である。

ハルカと予約確認が終わり、ハルカが早出のカズ君を見つけて近づき。
「カズ兄さん、今日はすいません。後、よろしくお願いします」と
ハルカが頭を下げた。
「心配せんで、楽しんで来いよ」と優しい笑顔でハルカの肩を叩いていた。
《カズ君と美冬、素敵なカップルだな～》と私はカズ君の笑顔を見ながら思っていた。

私はハルカとTVルームに戻ると、ユリさんも来ていた。
「ワシとユリで、ハルカと3人娘に浴衣を着せてホテルに送るかい」
マダムが私を見て言って。

「お前は6時半に魅宴にマミを迎えに行って、連れて来てくり」とタクシーチケットを差し出した。
『了解、良い役や～』と笑顔で受け取った。
私が荷物を持って、ウミがマリアを抱いてタクシーに乗せて。ウミと見送った。

「ありがとう」とウミが笑顔で私に言った。
『こちらこそ、助かってますよ』と笑顔で返して、『ウミ姉さんに頼みがあります』と言って2人でPGに戻った。

フロアーに行き、色紙の乾きを確認して。
2枚の色紙と3人娘の色紙を、ウミに差し出した。
『一枚はユリさん以外のトップ4と、四季とウミ・ユメ・カスミの分で、もう一枚に他の女性と、バイトも含めて今夜いる全員を書いてもらって』とエミの字を見ているウミに笑顔で頼んだ。
『花火が終わるまでに、よろしくウミ姉さん』と微笑んだ。
「了解・・・ねぇ時間外はウミって呼んで」と可愛い笑顔を見せた。
『頼んだぞ、ウミ』とニッで返した。
「よしっ、あなたが帰ったらこっそり渡すね」と言って笑顔になった。

私はタバコを買いに行き、花屋に寄った。
千恵さんという店員さんが店番をしていた。
『配達頼めるかな?』と声をかけた。
「あら、PGのエース」と振向き微笑んだ。
「もちろん出来るよ、ご要望は?」と笑顔で返された。
『真っ赤な開いてない薔薇を17本、12時にPGの俺まで届けて』と笑顔で頼んだ。
「ケイ、今日なの!」と千恵さんが驚いていた。
『内緒だよ』と微笑んだ。

「了解、現金？」と微笑んで聞いた。
『もちろん』と笑顔で返した。
千恵さんが格安にしてくれた、私は笑顔の千恵さんに礼を言ってＰＧに戻った。

ＴＶルームに松さんがいて、色紙をテーブルに置いて考えていた。
真剣な顔だったが、私を見て笑顔になった。
「難しくってね、マダムもユリも私に先に書けって言うから」と照れ笑いを見せた。
『俺が言い出したんだけど、俺も書けないよ』と笑顔で返した。
松さんが思考を色紙に戻したので、指定席に戻って準備の整った、静寂のフロアーを見ていた。

静寂の中、私は目を閉じて瞑想に入った。
広い空間で、揺り篭に揺られながら。
ケイと初めて話したときに、ケイは自分の事を話してくれた。
見ず知らずのガキを元気づけようと、自分の過去まで話してくれた。
【自分の悲しみや、寂しさを内側に潜ませ。他人の悲しみや辛さと真摯に向き合える人】
ユリさんのケイを初めて見た時の言葉が蘇ってきた、ケイの実像が浮かんできた。
家出をして以来、蘭を除けばケイが一番近くにいた。
常に微笑み、仕事を教えてくれた。
その真直ぐな生き方に、どれだけ助けられただろう。
その全力で生きる姿に、どれだけ勇気をもらったのだろう。
《ありがとうケイ、がんばれハルカ》と心で叫んで、目を開けて。
受付のカウンターで、千恵さんに貰ったメッセージカードに、こう書いた。

一番街でしゃがんでいる少女へ。

【7年後の花火大会の夜、ＰＧの3番席で待っている】
あの夜空に未来図を描いた仲間として。若草公園のベンチより。

そう書いて、ポケットに入れた。
振向くとケイの指定席の丸椅子が、寂しげにそこにあった。

時間は6時になっていた、私は着替えようとＴＶルームに向かっていると。
廊下に離れて美冬と千秋が立って考えていた、素敵な姿だった。
『やってますな～』と笑顔で言って、『誰か書いた？』と美冬に聞いた。
「まだ、最初は難しいよね」と微笑み、「ケイになんて言ったらいいのか、多すぎてまとまらないよ」と笑顔で言った。
『やっぱり、最初は蘭が書かないと無理か～』と言いながら、ＴＶルームに入った。

松さんが書き終わったらしく。
「書けたよ」と笑顔で言いながら、「さっ、私も久々に今日は忙しいからね～」と色紙を持って出て行った。
私は皇帝ルックに着替えて、ＴＶルームをでた。

「おい、ホストどこに行く？」と千秋がニヤで言った、その後ろで美冬もニヤをしていた。
『魅宴のマミが同伴してくれって煩くてね、たまには機嫌取らないと。ＮＯ１は大変なんだよ』と笑顔で返して背を向けた。
「大ママに喧嘩を売るとは、たいした度胸だ」と言った美冬の声に、右手だけ上げて裏階段に出た。

カスミが東の手摺りにもたれて、考えていた。
絵になる後姿に見惚れていた。

『悩んでる姿も可愛いな』と後ろから声をかけた。
「当然だ」と振向かずに言った。
「ケイに感謝って、どんなにしてもしきれないんだよ」と空に向かい言った。
『ハルカは競えるなら最高の相手だって言ってたよ、カスミを』と背中に囁き。
『同伴行ってくる』と声をかけて階段を向くと。
「ありがとう、今夜も報告会、楽しみにしてるよ」と後ろからカスミの声がした。
私は振り返らずに右手を上げた。

私は、呼込みさん達に冷やかされながら、魅宴に向かった。
魅宴の入口にいたボーイさんに、ＰＧから来たことを告げると、フロアーに案内された。
２０代後半位の綺麗な女性３人が談笑していた、私は魅宴のフロアーを見ていた。

「どうしたエース、ホストに転身か？」と明るい大ママの声がした。
振向くと大ママの後ろに、紺地の可愛い浴衣を着たマミが見えた。
『天職だって気付いてね、大ママも指名に来てね』と言いながら頭を下げた。
「いくよ～、お前なら楽しそうだ」と笑顔で返した、談笑していた３人が不思議そうに見ていた。
『で、手始めにマミを同伴しようと思ってね』ニッで返した、大ママもマミも笑顔だった。
「マミが見込みがあるって言うのかい？」と大ママがニヤで言った。
『将来的には、ハルカとマミの女帝争いだろうからね』とニヤで返した。
「本当に追い出されておいでよ」と嬉しそうな笑顔で大ママが、マミの背中を押しながら言った。

「頼んだよ」と言った大ママに。
『女帝修行をみっちりと』と微笑んでマミとでかけた。
大ママと3人の女性の笑い声に見送られて。
『浴衣、可愛いな〜』とエレベーターでマミを見ながら言った。
「ジロジロ見ないでよ〜、恥ずかしいから」と可愛いい笑顔で睨んだ。
私はエレベーターの中で、わざとジロジロ見てマミに優しくぶたれていた。
『待ちきれなくて早くきたよ、ごめんね』と通りに出た時にマミに言った。
「全然大丈夫だよ、ねぇ早いから歩いて行かない？」とマミが少女の香りが強い笑顔で聞いた。
『いいけど、条件がある』と私はニヤで言って、手を出した。
「いいよ〜、喜んで」と手を繋いでくれた。
私は得意になって、呼込みさん達の視線の中、ホテルに向かった。
私は花火大会の始まりを心待ちにしている、若いカップルを見ながら。
マミを自慢するように、手を繋いで歩いた。
PGの話をマミが聞きたがり、面白おかしく話しながら歩いていた。
空は最高の曇天、風も重く湿度が高かったが、気分は爽快だった。
ケイと3人娘が待っている、そして蘭が私の帰りを首を長くして待ってるから。
曇天の空の下には、マミの不思議な魅力の笑顔があった。
曇天の空の彼方に、遥かなる高原が見えるようだった。
その高原にどんな強風にも、積雪にも俯かないで咲く。

強く優しい一輪の花も見えるようだった・・・。

KEI

初めの一歩を忘れてしまう、しかし確かに刻んだ。
これが最初の一歩だと思い進んだ、未知の世界にも。

真夏の空を灰色の雲が飛行していた、ただそれを見る人は皆笑顔だった。
私はマミと手を繋いで、ホテルのロビーに入った。
フロントで部屋番号を聞いて、エレベーターに乗った。
部屋の前で、手を離しマミに囁いた。
『おませがいるから、少し遅れて入るね』と微笑んだ。
「了解」とマミが微笑んでノックするとハルカが開けて、マミが私に笑顔を向けて入って行った。

私は3分後に入った。
3人娘は、白地の少女らしい可愛い浴衣を着ていた。
「ミサ可愛い？」と真っ先にミサが来た。
『可愛いね、いつでもフロアーで働けそうだねミサ姉さん』と言ったら、可愛い笑顔になった。
『エミも可愛いね、少しお姉ちゃんになったね』とエミに微笑んだ。
「うん」と嬉しそうに笑った。
『マリアも可愛いね、お腹出てるけど』と笑顔で言うと。
「ぽん」と言ってお腹を叩いて天子の笑顔を振り撒いた。
『ハルカも可愛いね、少しおばさんになったね』とニッで言うと。
「ありがとう、子供には分らない、女の色気って言うのよ」と舌を出して笑顔を見せた。

『お腹すいた、もう食べようよ』とテーブルに用意されている、豪華な夕食を見ながら言った。

「そうしよっか」とハルカも言って、ハルカ・ミサ・マミで座り。
向かい合ってエミ・私・マリアで座った。
「いただきます」とミサが言い、皆で続いて『いただきます』と言って食べた。
私はいつものように、マリアのおかずを小さく切っていた。
3人娘は好き嫌いがないので、助かっていた。

「凄いね～、何でもできるんだ」とマミが私を見て微笑んだ。
『何でも出来ますよ、3人の召使だから』と笑顔で返した。
ミサの幼稚園の彼氏の話で笑い、エミの成績の話で驚き、私のマリア語講座で笑いを取った。
食事が済んで、3人娘はバルコニーに出て行き交う大勢の人を、楽しそうに見ていた。

『ハルカ姉さんと、マミ姉さんは外に出かけたら』とハルカを見て言った。
「いいの？」とハルカが笑顔で言った。
『もちろん、3人娘にお土産あるなら』と笑顔で返した。
「ありがとう」とマミが言って、2人が出かけた。

私もバルコニーに出て夏の風を感じていた、贅沢な気分に浸っていると。
【ど～ん】と一発目が上がり、その反射で3人娘の輝く笑顔が見えた。
3人娘は無言で花火を見ていた、笑顔が溢れていて嬉しかった。
エミが私の側に来て、指差した。橘橋のエミが駆け出した所を指していた。
私はエミを抱き上げて、膝に座らせた。
『俺も絶対忘れないよ、あそこを通る度にエミを思い出すんだよ』
と私の膝に座るエミに囁いた。

「私も忘れない、あそこが私の秘密基地だから」と振向いて笑顔を見せた。
エミは私の膝に座り、ミサとマリアが【ど～ん】と言いながらはしゃいでる姿を見ていた。
優しい目だった。

ハルカとマミが、花火大会の終了と同時に帰ってきた、楽しそうだった。
ハルカがお面を買ってくれ、エミが綿菓子を買ってくれていた。
3人娘は嬉しそうに笑顔でお礼を言った。

「はい」とハルカがタイガーマスクの、お面を差し出してニヤを出した。
『ハルカ、ありがとう。俺これが欲しかったんだ』と大袈裟に泣き真似をした。
「チャー・・がんば」とマリアが言って皆で笑って、ロビーに降りた。
タクシーに乗りＰＧに着いたのが１０時少し前だった、裏階段の入口にカズ君が立っていた。
「楽しかったか」と3人娘に笑顔で言って、マミと挨拶を交わし。
「ハルカとマミチャンはそのまま俺に付いて来てくれ」とハルカに言って。
「ＴＶルーム頼む」と私に言った。
『了解』と言ってマリアを抱いて、ミサとエミの後ろを歩いてＴＶルームに入った。

ハルカの父親と母親がマダムとお茶を飲んでいた。
私はエミにマリアを預けて、両親に挨拶し先日の礼を言って座った。
「本当にありがとう、感謝してるよ」と父親に言われた。
『お父さん緊張してますね』と笑顔で返した、母親は笑顔だった。

「こんなに凄いところは、日南にはないからね」と笑顔になって。
「ハルカは幸せだと感じたよ」と私を見た。
『ハルカ、いえケイ姉さんはお父さんが酔った時自分に話しかけるのが嫌だったと』父親は私を見てる。
『でも今はその頃の自分が許せないと思っているみたいです、愛情に気付かなかった事を』
『だから思う存分、酔っ払ってやって下さい』と笑顔で言った。
「飲んでいいんだね」と父親も笑顔で返した。

『もちろん、女性を指名して、飲まない笑わないでは・・ハルカ姉さんの評価に関わりますよね、マダム』とマダムを見た。
「そうです、出足が肝心ですから、飲んでやって下さい。心行くまで」とマダムも笑顔になった。
マリアが突然来て、ハルカの母親に手を伸ばした。
ハルカの母親はそれは嬉しそうに、マリアを抱いた。
マリアは母親を天使の笑顔で見て、瞳を閉じた。
父親と母親の優しい顔がマリアを見ていた。
《さすがマリア》と思いながら、定位置に向かった。

私が定位置に付くと空気が変わった、始まりの時を女性全員が感じたのだろう。
客席は3番以外満席で、3番を待つだけとなっていた。
蘭と目が合い微かに微笑んだ。
「準備OK、3番に入ってもらって」リンさんの笑顔に。
『了解』と笑顔で返した。
マミが入ってきたので、ケイの椅子に座って見てるように言って。
TVルームに戻った。
マダムが2人を連れて行った、私は3人娘を呼んで。
電気を消してマジックミラーのカーテンを開けた。
父親がカズ君に案内され、3番に座るところだった。

母親は私の指定席に座り見ていた。
静かに銀の扉が開き、ハルカが真っ白なドレスで現れた。
私はその美しい姿に見惚れていた。
3歩進んで深々と頭を下げ、頭を上げたその時、女性全員からサインが飛んだ。
【3番】と。

ハルカは3番を見て、グッと力を入れて涙を我慢して、父親に微笑んだ。
そして、プロとしての一歩を踏出して3番に向かった。
母親はハルカを見つめ、涙を流していた、素敵な光景だった。
女性全員が自分の担当の、お客の笑顔を作りながら、応援してるようだった。
ハルカは3番の父親に深々と頭を下げ、水割りを作りながら楽しそうに笑っていた。
父親も笑顔で話していた。
《よかったね・・ケイ》と心で呟いた。

私はカーテンを閉め、電気を点けて3人娘に。
『さぁ、歯磨きして寝るのだ～』と笑顔で言って、マリアの歯を磨いてやり。
パジャマに着替えさせ。ベッドに入らせて、照明を暗くした。
ベッドの側で、可愛い3人を見ていた。
微かに聞こえる宴の、楽しげな響きを聞きながら。

マダムと母親が帰ってきたので、照明を明るくして。
タイガーマスクのお面を持って、指定席についた。
ウミが来て、綺麗に包装された5枚の色紙を受け取った。
『包装までしてくれたの、ありがとう』と笑顔で言うと。

「頑張ったから、今度体重測定してね」と微笑んで戦線復帰した。
３番を見ると、ユリさんも加わり楽しそうに談笑していた。
ハルカと目が合った、私に微笑んで【３番　ＯＫ】のサインをくれた。
私も【ＯＫ】で答えた。
その日も宴の熱が高く、女性達はそれでも足らないと言うように熱を放出した。
待ちわびたハルカを歓迎するように、その熱で３番を包んでいた。
マミはその光景に圧倒され、黙って見ていたＰＧの熱を。

３番の父親は閉店３０分前に席を立ち、ユリさんとハルカに見送られ出て行った。
ハルカは着替えるために、控え室に戻った。
「ハルカ、綺麗だったね」とマミの後に大ママが立っていた、目を潤ませてマミを見ていた。
「しかし、久しぶりに見たけど凄い熱気だね～」とフロアーを見て大ママが言った。
「大ママ、本当にありがとうございます、こんな素晴らしい勉強をさせてもらって」とマミが頭を下げた。
大ママは優しくマミを見ていた、その時に終演を迎えた。

着替えたハルカが来て、大ママに挨拶をした。
アイさん・サクラさん・蘭と7人衆が１０番に座った。
「ハルカ、おめでとう。ご祝儀だよ、安い化粧品は使わないようにな」と大ママが笑顔で言った。
ハルカは泣きながら、受け取っていた。

そしてハルカが１０番に行った、全員が立って拍手をして迎えた。
私はタイガーマスクと色紙を持って、マミに後に隠すように花束を

持ってもらい。
ハルカが泣きながら、礼を言ってる所に近づいた。
ハルカが振向き私を見た。

『蘭、今夜の報告会は俺の自白からでいいかな』と笑顔で蘭を見た。
「ほほ～、いい心がけだ。言ってみな」と蘭が笑顔で返した。
『ハルカのために、皆にケイの送別の言葉を書いてもらった』と言ってハルカに色紙を渡した。
ハルカは私を見ながら、色紙を大事そうに抱えた。
「それから」蘭は私に微笑んで促した。
『生まれて初めて、自分で稼いだ金で女性に花を買った』と言って振向き、マミから花を受け取った。
『ケイ・・・今までありがとう』と言って花を差し出した。
「蘭姉さん、ごめん」と言ってハルカは花を受け取らずに、私を抱きしめてくれた。
私も優しく、ハルカを抱いていた。

しばらくして、ハルカが笑顔で私を見上げ。
「どうせ、凄いやきもちくるんだから、エレベーターまであれやって」とニッを出した。
私は蘭に花を預けて、ハルカを見て。
『しかたないな～』と言って抱き上げた、ハルカは首に腕を回して。
「ありがとう」と囁いた、私はエレベーターまでゆっくりと歩いて。
ハルカを降ろした。
蘭から花束を受け取り、ハルカに渡して。
『今夜は寄せ書き見るなよ、号泣するから』と微笑んだ。
「その花束のメッセージだけでも、号泣するぞ」と蘭が言って腕を組んできた。
ハルカはメッセージカードを読み、私を見て微笑んで頷いた。
そしてエレベーターに乗り、深々と頭を下げた。

全員の拍手で送った。

「で、そのトラはいつ出るの？」と蘭がニヤで言った。

『あっ忘れてた、笑いとろうと思ってたのに』と笑顔で照れた。

「ちと、かっこつけすぎでしたね～隊長」とカスミが蘭にニヤを出した。

「ちと、じゃない・・・い～ぱいだから」と蘭が私をニヤで見て。

「３倍で返してもらうよ～」と私を見てニヤで微笑んだ。

「３倍って、５１本か高いね～そりゃ」とカスミが笑い。

皆が笑いながらフロアーに戻った。

フロアーでユリさんと、大ママとマミが待っていた。

アイさん、サクラさん、蘭、四季、ユメ・ウミ、カスミが揃っていた。

ユリさんがマミを紹介した、マミが深々と頭を下げた、全員で返礼した。

大ママが最後に挨拶した。

「わたしは始めて水商売に飛び出す子の、デビューで泣きました」と皆を見回し。

「本当にＰＧは素晴らしい店になりました、羨ましく思いましたよ」と笑顔で言った。

女性達も皆、笑顔だった。ただユリさんだけ、一筋の涙を見せた。

私は離れた所から、ユリさんの涙を見ていた。

特別席の３番は主をなくし、静かに灯されていた。

情熱のフロアーには笑顔が溢れていた、そしてその熱はまだ足りないと言っていた。

燃え尽きるまで続く物語だと、それを楽しめと叫びながら。

週末の幕を降ろした・・・火種だけ残して。

宣誓

強く想わねばいけない、そうしないと心が折れる。
どんな障害も越える意志を強く持つ、それしか出来ないのだから。
情熱の舞台は女優を見送り、保温するための熱だけ残して休日を迎える。
女優達は短い休みを満喫し、そして備える次の舞台のために。
女性達が控え室に消え、私とユリさんで大ママとマミをエレベーターに見送った。
「マミのデビューの時は、当然来るんだろうね」と大ママが私に微笑んだ。
『もちろん、必ず行きます』と笑顔で返した。マミの笑顔があった。
「メッセージ、何て書いてあったんだい？」と大ママがマミに聞いた。
「一番街でしゃがんでる少女へ、７年後の花火大会の夜、ＰＧの３番で待つ、あの夜空に未来図を描いた仲間として、若草公園のベンチよりだったと」とマミは微笑んだ。
「ハルカは幸せだよ」と大ママは私に微笑みマミと帰って行った。

「本当にありがとう、私もそう思いますよ、ハルカは幸せです」とユリさんが薔薇の微笑で言った。
『ケイ姉さんは、俺を助けてくれたから、その行動と意志で』と笑顔を返した。ユリさんも優しく微笑んでいた。
「１つお願いしていいかしら」とユリさんの悪戯っ子の笑みを久々に見た。
『なんでしょう？』と微笑んで返した。
「控え室まで、私もあれやって欲しいの」と薔薇の微笑で言った。
私はユリさんを抱き上げた、ユリさんが首に腕を回した。その薔薇

の香りに包まれて。
『甘えん坊』と言ってゆっくりと歩いて行った。
控え室の方に曲がると、運悪く全員が着替えて出てきた。皆がその光景を見て固まった。
『もう、ユリが甘えん坊で困るよ』と必死に笑顔を見せた。
「確かに気持ちいいですね」とユリさんは微笑んで降りた。
「もう、ユリさんじゃ妬けないじゃないですか～」と蘭がユリさんに微笑んだ。
「あら寂しい、私も妬いて欲しいのに」と蘭を見て微笑んだ。
「それは、無理ですよ～」と蘭は笑顔で言って、皆でユリさんにお休みをした。

蘭が私をニッと見て、腕を組んできた。
「蘭姉さん、これ」とカズ君が蘭を呼んで、小さな紙袋を渡した。
「ありがとう、お礼にこの中から好きなのを選んでよし」と蘭がカズ君に言った。
「えっ、勘弁して下さいよ」と蘭を見て照れた。
「徳野さんに殺されるって言うもんね」と美冬がカズ君を見て微笑んだ。
「そんなんじゃ、ないですよ」とカズ君も微笑んで返した。2人は少し見つめあった。

エレベーターに乗ると蘭がご機嫌になっていた。
『なぜかご機嫌ですね』と私に腕を組み体重をかける、蘭に笑顔で聞いた。
「うん、明日は靴屋も休みだし楽し～」と満開の笑顔を見せた。
一番街まで皆で歩くと、蘭が腕を外し立ち止まり、私にニヤで微笑んで。
カズ君から受け取った紙袋から、ウイスキーを取り出して。

「あんたが悪いんだから、責任持って処理せよ」と叫んで、一気にラッパ飲みをした。
人混みの深夜の、一番街のネオンに照らされたボトルが光り。
蘭は一度顔を私に向けて満開で微笑んだ。

「どんな時も、何があっても、最後は私に帰れ」と叫んで。
もう一度ボトルに口をつけた、沢山の視線を浴びて輝きながら、上を向いた時に体が揺れた。
7人衆はあっけに取られて見ていた、私は慌てて蘭からウイスキーのボトルを奪った。
蘭が崩れるように私に倒れてきた、私は蘭を抱きとめた。
ボトルをカスミが受け取った。

「なんか、ドラマみたいで、素敵やね」とカスミが微笑んで。
「愛されてるね、幸せだね」と美冬が笑顔で私を見て。
「こんな素敵な愛情表現、初めて見たよ」とユメが微笑んだ。
私は蘭を抱き上げて、視線を楽しんで。ウミが止めたタクシーに乗った。
「がんばれ～」と7人の笑顔に見送られ、手を振って笑顔で別れた。
蘭は私の腕の中で眠っていた。

アパートに着き、蘭を起こしても起きないので。バッグから鍵を取り出し部屋に入った。
とりあえず蘭をそのまま寝かせ、どうしようと考えてたら。パッと目が開いて。
「化粧は落とさんと大変な事になるの～」と言って起きたが、うまく歩けない。
私が洗面所で支えて、蘭が化粧を落とした。抱き上げてベッドに寝かせた。
「ネビブルは？りんごは？薔薇は？」と蘭が私の腕を引っ張り囁い

た。

私は電気を消して隣に寝転び、腕枕をして静かになった蘭の髪を触っていた。

「クリスマスは？」と蘭が私を見た。

『変わらぬ想い』と微笑んで囁いた。

「うん」と私の胸に顔を埋めた、私はただ蘭が可愛かった。

その時が来たら我慢との戦いや～と思っていたが、全くそういう欲求が現れなかった。

「パジャマ、イチゴのパジャ」と私を見て笑った、私は籠の中の蘭のイチゴのパジャマを渡した。

「まわ～れ～みぎ～」と言ったので蘭に背を向けた。

がさごそと音がして床にワンピースが投げられた。

そしてブラジャーが投げられたのを見て。

《完璧な泥酔》と思っていた。

「よち、うで～」と蘭が言ったので振り返ると、泣いていた。

『どうした、蘭』と私は慌てて引き寄せて腕枕をした。

「おこってた・・むこうむいてた」と言って私の胸で泣いていた。

《可愛すぎる》と私は思っていた。

『怒ってないよ』よ優しく耳元に囁いた。

蘭は私のTシャツを引っ張り、涙を拭いていた。

「ほうこく・・・せよ」と私の顔を見てニヤみたいなのを出した、目はトロンだった。

『朝蘭を見送ってすぐ蘭の事考えて』と蘭の耳元で報告を囁いた。

「にゃんで、りゃんのこと考えた？」と笑顔で聞いた。

『蘭が好きだから』と照れた振りをした。

「きゃっ」と言って私の胸に隠れた。

《可愛すぎる》私にはこの感想しか浮かばなかった。

静かになった蘭の髪の香りを感じながら、優しく背中に手を回し支えていた。
眠るのが惜しくて、眠ることを諦めていた。
「どこいってた」と急に顔を上げて泣いていた、「一人にした」と涙が溢れていた。
『してないよ、ずっと側にいるよ』と優しく囁いた。
「いる？ずっといる？」と涙目で聞いた、『蘭の側にずっといるよ』と静かに言った。
「いる～」と言って強く抱きついた、ノーブラの胸が私の胸に当たっていた。
《普通ならここで限界だったな》と思っていた、蘭は又静かになった。
「と～も上にゃんだよ・・でもいっか」と独り言のように呟いて又静かになった。

真夏の深夜、全てが眠ったように静かな夜。
世界一幸せな私は、蘭を腕の中に抱き離さないでいた。
「りゃんね・・好きな人がいりゅの」と私を見た優しい顔だった。
『いるんだ～』と聞いてみた。
「うん、いりゅけどいわないの意地悪だから」と私を見ていた。
「ごめ～んね、いわなくて」と言ってまた抱きついた。
私は一人でニヤニヤしていた。
その最高に可愛い繰り返しを私は楽しんで、外が明るくなってきた位までの記憶がある。
私はいつのまにか眠りに落ちていた。

蘭の重みが消えたので目が覚めた、私は動かずに寝たふりをしていた。
蘭は窓辺の扇風機入れ、トイレに行った。

静かに忍び足で、そして帰ってきて静かにベッドの私の腕の中に戻ってきた。
私は寝た振りを続けながら、《可愛いやつめ》と心でニヤニヤしていた。

私はそれから1時間程蘭の香りと、重みを楽しんだがトイレに行きたくなり体を離した。
私がトイレから戻ると。
「頭が痛い」と蘭が涙目で微笑んだ。
『一番街でラッパ飲みすれば痛いよね』とベッドの横に座ろうとすると、ブラジャーが落ちていた。
『蘭、可愛いのが落ちてて座れない』とニヤで言った、蘭は慌てて拾い上げた。
「どうやったの？パジャマ？」と照れ笑いで聞いた。
『優しく着替えさせたよ、仕方ないだろうイチゴってうるさいから』とニッで言った。
「嘘だね、じぇったい嘘だね」とニッを出したが、自信なさげだった。

私は蘭の額に手を当てて。
『おでこ冷やそうか』と微笑んだ。
「うん」と蘭が笑って頷いた、私は氷枕に氷と水を入れて。
蘭の首を持ち上げて氷枕の置いて蘭を寝かせた。
「気持ちいい」と蘭は笑顔になった、私は蘭の横に座って蘭を見ていた。

「変なこと言った？」と蘭が探りを入れてきた、私は泣きまねをしながら。
『俺に出て行けって言った』とウルで蘭を見た。
「それは嘘だ、そんな事は絶対に言わないよ」とニヤで微笑んだ。

『うん、聞きたい全部？』とニヤで返した、蘭は少し考えて。
「いつか日記で読むからいい」と笑顔で照れた。
『そうだねさすがの蘭も、照れるからね』とニヤで微笑み、蘭の疲れの影が残る顔を見ながら。
『どこにも行かないから、もう少しお休み』と囁いた。
「お家から出ないでね」と微笑んで蘭は目を閉じた。
私は蘭の寝顔を見ていた。

私はシャワーを浴び、日記を持って蘭の部屋のテーブルで、ハルカのデビューを書いていた。
「ハルカ、嬉しそうだったね」と後から蘭の声がした。私は振り返り。
『そうだね、それにハルカ綺麗だった』と蘭に微笑んだ。
「ハルカのあなたに対する目に、妬いたんだよ」・・「愛情の溢れる目だった」と私を見ながら。
「でもすぐに気付いた、違う愛情だって。とっても素敵な事だって、思ったよ」と私に微笑んだ。
「そしてメッセージカード読んだ時、心が震えた・・嬉しくて」
蘭の私を見る目が優しくて、暖かかった。

「7年後、30か～何してるんだろ」と天井を見て蘭が呟いた。
『まだ、30か～同棲してる・・お嫁さんでも・・何でもいいから・・一緒にいる』と私も天井を見て呟いた。
「7年後の約束、私にも何かして」と私に微笑んだ。私は蘭を見ながら考えて。
『7年後の花火大会の翌日の正午、若草公園の教会の前で待ってる』と真顔で蘭に言って。
『一緒に暮らしていても別々に行こう、そして教会で俺は誓う想いは永遠だって』と言って少し照れた。
蘭は私を見つめていた、そして笑顔になって。

「ホストには、なるなよ」と蘭は微笑んで。
壁の方に寝返りをして、タオルケットを頭まで被った。
私はその背中を見て、《必ず行くから》と心で囁いた。

日記をめくり、7年後のその日であろう日に、【正午・教会で蘭にプロポーズ】と書いた。

そして10年日記の最後のページに、【蘭を今でも愛してる】と書いて閉じた。

そして日記帳に左手を置き、右手を肩まで上げて。

【宣誓】した・・・神にでなく・・・マリアに。

教会のマリアと、私には絶対的存在の天使のマリアに。

絶対に嘘はつけない・・・天使の笑顔に・・・誓いを立てた。

情熱

人は自分自身をどれだけ分っているのだろう？
結局全てを理解する事は出来るのだろうか？
私はこの歳になっても、かなり理解不能な人間である。

あの夏も暑い夏だった、でも今よりも爽やかで快適だった。
私はもう一度日記を開き、可愛い蘭の一言一言を思い出しながら書いていた。
一人でニヤニヤしながら、蘭は背中を向けタオルケットを被ったまま、寝てしまったのだろう。
私は書き終わり部屋に日記を持って行き、蘭の部屋に戻ると蘭がベッドに起きていた。
「私、お酒臭い？」と蘭が笑顔で聞いた、確かに蘭は酒臭かった。
『ラッパ飲みした時に首筋まで垂れたからね～』とニッで返した。
「シャワーしてくる、それからご飯食べにいこ～」と言って部屋を出て行った。

蘭がシャワーして、支度をしていた。薄化粧で、輝いていた。
『どこで、食べるの？』と笑顔で聞くと。
「決まってるでしょ、水槽」とニヤできた。
『そう来たか』とニッで返した、蘭は酒が抜け復活していた。
「それで、映画を見るのだ～」とニヤで言った。
蘭は元気になっていた、嬉しかった。

ケンメリで出かけ、水槽で食事をしていた。
『映画何見るの？』と蘭に聞いた。
「ローマの休日をまたやってるのよ、私好きなの」と嬉しそうに微笑んだ。

2人でローマの休日を手を握って見ていた、蘭が意外なところで涙をポロポロ流した。
《なぜここで泣くんだ》と思いながら蘭を見ていた。
映画館を出たら蘭はご機嫌だった。

「さぁ食材買って帰ろう」と繋いだ手を振って、マルショクに歩いた。
パスタコーナーで、屈んで蘭が悩んでいた。
『今夜は、イタリア料理ですね』と蘭に声をかけた。
「当然、でもイメージが掴めないのよ」と又パスタの袋の説明書きを、真剣な表情で読んでいた。
《すぐ感化されるんだから》と思い横に屈んで蘭を見ていた。

私は両手に食材の袋を持たされて、それでも手を繋がれて駐車場に歩いていた。
「ちょっと待ってて」と蘭が微笑んで、酒屋に入って行った。
私は人通りの多い路上に放置されていた。
暫くして蘭が満面の笑みで酒屋から出てきた。
「シャンパンが無いとね～」と言いながら、腕を組んできた。

部屋に帰り、蘭はエプロンをつけて、鼻歌混じりでキッチンに立っていた。
「ねぇ、ダーリンお風呂はいちゃって～」とご機嫌も最高潮で言った。
『は～い』と私も調子を合わせた。
《度が過ぎて少し怖いな》シャワーを浴びながらそう思っていた。

蘭の部屋には豪華な食卓が出来ていて、蘭がニコニコして待っていた。
ジャンパンで乾杯して、食べながら蘭のご機嫌な顔を見ていた。

『なんか少し怖いんですけど』と蘭を上目使いで見て微笑んだ。
「あぁ、私、お祝いよ～」と楽しそうに笑った。
『何のかな？』と恐る恐る聞いてみた。
「私、あなたを拾った時に決めてたの、１５日で帰そうって」と蘭は真顔になった。
『まさか・・・送別会とか』私はかなり焦っていた。
「バカね～それなら泣くよ・・あなたの合格祝いでしょ」と満開になって笑った。
『そっか、合格したんだ』と私は何に合格したのかも分らずに、喜んでいた。

蘭は楽しそうに笑っている、私はそれ以上聞かずに蘭にシャンパンを注いでいた。

「酔わせて、何するのかな？」と蘭に笑顔で痛いところを突かれた。
『昨夜は本当に楽しかった、蘭が可愛くて・・でも少し心配になった』私は正直に話した。
『蘭の体が心配だから、あまり無茶はするなよ』と真顔で言った。
「うん、靴屋休みの前しか酔いません、ストレート一気はもうしません」と笑顔で誓い。
「でも・・・今夜はもう遅いかも～」と甘えて微笑んだ。
『知ってる』と笑顔で返した。
結局蘭がシャンパンを飲み干して、私が止めたのにシャワーを浴びてパジャマで帰ってきた。
私の横に座り、腕を組んで一人でニヤニヤしている。

「今夜まで、特別だからね」と蘭が囁いた。
『恥ずかしくないのかな』と囁いて返した。
「少し、でも大丈夫かな」と私を見た。
『じゃぁ約束、今夜は早く寝るって』と蘭を見て微笑んだ。

「うん、お休み」と言って私にもたれて目を閉じた。
時計を見ると８時４０分だった。

私はかなり無理をしていた、蘭の体が心配なのは事実だったが、本心は嬉しくてたまらなかった。
私は蘭を抱き上げてベッドに寝かせ、窓を開け電気を消して蘭の横に腕を首に通しながら寝た。
蘭の寝息が聞こえていた、私は蘭のまだ乾ききらない髪から、蘭の香りがしてきて。
蘭の香りに包まれて、幸せに眠りに落ちていた。

翌朝は車のクラクションで目が覚めた、蘭は私の胸に顔を当て眠っていた。
私はゆっくりと手を抜き、静かに洗面所に向かった。雨の降る音が聞こえていた。
私が真剣に卵焼きの、焼き加減を見ていると、蘭が起きてきた。
「おはよ～、やっぱりよく寝ると、気持ちがいい～」と元気に洗面所に消えた。
私の自信作の朝食を見て。
「なんか、段々進歩しますな～旦那」と嬉しそうに食べ。
バタバタと準備して出かけた、私は見送り昨夜と朝食の食器を洗い、掃除機をかけた。

蘭の予備の赤い花柄の傘をさして出かけた、
靴屋の前で蘭に赤い傘をニヤで見られ、ＰＧに早く着き過ぎ入れなかった。
１階の倉庫から箒と塵取りを出してビルの１階を掃除してたら声をかけられた。
「あなたがエースかしら」明るい女性の声に振り返り固まった。
真っ赤なミニスカートに真っ赤なシャツの襟を立て、胸のボタンを

上から3番目まで開け。
豊満な胸元にはくっきりと谷間があり、セミロングのクルクルのパーマの髪を濡らして。
燃えるような瞳が、確実に得体の知れない何かを放っていた。
真っ赤な唇の右上の小さなほくろが、セクシーだった。
ＴＶで見た南米系の雰囲気で、リオのカーニバルをイメージさせた。

『そう呼ばれてるみたいですね』と見惚れながら微笑んで返した。
「若いのね～」と言いながら歩み寄ってくる姿に、少し押された。
『ジャパニーズＯＫ？』と笑顔で返した。
「日本語で話してるっ」と言って笑顔で睨んだ。
「純粋で生粋の日本人です」と手を両脇に持って行き威張って笑った。
私は何かに押される感じがしている。
『オ～・マイ・ガット！』と大袈裟に両手を肩まで上げて、必死で何かを押し返しながら微笑んだ。

私の目の前に立った時、誘惑の香りが鼻をくすぐった。
『凄い危険な香りがするんですけど、なんか変な液体出してます？』と燃える目を見て微笑んだ。
「危険な液体出してるのよ」と言って楽しそうに笑う姿にまた押された。
『何かに押されるんですけど、胸じゃなくて』と思ったままを言葉にした。
その女性は楽しそうに濡れた髪を、頭を傾けて搾った。
その時に胸元に、綺麗な蝶の刺青が見えた。

「押されるうちは駄目よ、外見だけで見てるんだから」と楽しそうに笑った。
『動かないで、いま捕まえますから、怖くないですよ～』と言いな

がら胸の蝶を捕まえる振りをした。
「ほいっ」と言いながら、胸元を広げた。
黒いブラジャーが丸見えになり、豊満な胸が全て見えた。
『やっぱり黒が素敵だ、もしかして大人ですね』と必死で返した。
どう見ても３０歳前後の女性に。
「２８ちゃいでちゅ」とニカって感じで笑った、その異質さに驚いていた。

家出をして蘭、ユリさん、カスミと衝撃的な美を見てきたが、彼女の美は私には異質だった。
その醸し出すエネルギー押されながら、強い何かに惹かれた。
『朝から、雨だったのにどうちて傘わちゅれたんでちゅか？』と幼児語で返した。
「ブッ」と笑い、「自分で傘さすの嫌いなのよ～」と言ってウィンクをした。
顔が近いこともあり、そのウィンクで倒れそうだった。

『人にさしてもらうのは？』とニヤで聞いた。
「好きよ」と言って私の腕を掴んで組んだ。
『仕方ないな～、特別サービスで送ってあげます』と笑顔で返した。
「ありがと～素敵～」と抱きついたその危険な香りに、私は動揺を隠すだけで精一杯だった。
『〇〇劇場でしょ』とストリップ劇場を言った。
「おしい」と楽しそうだった。
『ＯＸ倶楽部か～』と怪しいＳＭ倶楽部を言うと。
「そこ、前の前にいた」とニカを出した。
私はやっと調子が出てきた、彼女の胸が私の腕で潰されるほど触れていた。

『てゆうか、なんかＰＧに用があったのでは？』と聞いた。

「うん、ケイがデビューしたって聞いたから、あなた何時出勤なの？」と聞き返された。
『基本は１３時です、暇だから早く来てます』と笑顔で返した。
「じゃぁお昼食べに行こう、ご馳走するから」と引っ張った。
私は傘を持って、腕を組んで引かれながら出かけた。
「なに食べる？」とニカで聞いた、『肉』とウルで答えた。
「よし、男は肉を食べんと駄目やからね～」と言いながら、西橘通りに出た。
一番街の逆方向に向かったので、ほっとしていた。
報告会の恰好のネタになるのは間違いないからだ。
雨の西橘を相合傘で歩きながら、名前を聞いた。
「リアンで～す」とニカで微笑んだ。
何かに強引に心が惹かれていた。

【情熱の女　リアン】私には何かに撃たれたような、衝撃の出会いだった。
私は歩きながら気付いていた、蘭という絶対的な存在がいなければ危なかったと。
ユリさんもカスミも私がそれまでに出会った事のない、美しい女性だったしＰＧの女性も皆美しかった。
しかし私の外見的嗜好は、この人だと思っていた。
腕を組んで笑顔で歩く、その目と真っ赤な唇を見ていた。

「私に何か付いてる？」とニカを出して聞いた、私はもうこのニカが好きになっていた。
『俺、ガキだから初めて見る雰囲気なんで、珍しくって』と照れて笑った。
「いいね～噂通りで、蘭が言うとおりやね～」と私を見てニカを出した。
『知り合いか～』と笑顔で返した。内心ほっとしていた。

「私、ＰＧ卒業生だし、蘭だけは可愛い後輩だからね」と言いながら、高級焼肉店に入った。

向かい合って座ると、緊張した。必死に笑顔を作っていた。

『卒業して、今は踊り子さんですか？』とニッで聞いた。

「まだ、そのイメージが抜けないか～、今はまぁスナックみたいなのをしてるよ」と髪を縛りながら笑顔で返してきた。

『みたいなのって所が怖い』とニヤで返した。

「そんなに怖い？」と肉を焼きながらニカで聞いた。

『うん、蘭がいなかったら、完全に追い掛け回してる自分がいるから・・怖い』と照れた。

「そうなんだ～、追い掛け回してよ～」とカスミの3倍位の不敵を出した。

『怖い旦那の子分とかに、囲まれたりしません？』とニヤで言った。

「旦那も、今は彼氏もいません」と舌を出してイッとした。

『ヨチヨチ』と言葉だけで返した。

「で、蘭を追い掛け回してるの？」とニカで来た。

『同棲してるよ、片思いだけど』と泣き真似をした。

「ヨチヨチ」と返された。

「でも、蘭がそんなこと出来るのは絶対に好きなんだよ、あの子は違うから」と少し真顔になった、美しかった。

『違うって？』と真顔で聞き返した、私を見るリアンの目は何かが違う。

私は見つめながらその何かを探っていた、必死になって。

「蘭は絶対に流されない、今までも大きなクラブや、金持ちの男の誘いも全て丁寧に断っている」

「あの子は心がそこを指してないと、絶対にそれ以上はないのよ」

リアンの強烈な何かに私は動けないでいた、押えつけられ焼かれるように。

「今は、ユリさんとＰＧとあなただと思ったわ」と最後は綺麗な笑顔だった。

俺は蘭の何かに合格した、でも蘭の心は俺を指しているのだろうか。

だが、蘭は気まぐれで自分の決めた１５日を破ったりしない。

リアンの強烈な熱の言葉に焼かれ、それが私を第二の成長に押し上げていく。

この、ユリさんと正反対の個性に触れて、気付くのだ自分に足りないものを。

【動のアスカ（大ママ）・情のユリ・炎のリアン・水のユリカ】

私はまだ、こう呼ばれる四天女の、夜街伝説すら知らなかった。

ただ、その強烈な何かに焼かれるのを、楽しんでいた笑顔で。

副職

あの時違う選択をすれば、今はどう変わっていたのか。
それは誰にも分らない、その道は自分で閉ざしたのだから。

成長期の細胞を活性化させるかの如く、私は滅多に食べられない、高級和牛の焼肉を食べていた。
目の前の得体の知れない、何かに焼かれながら。
その瞳の持ち主は、私の食べるのを楽しそうに見ていた。

『ユリさんと喧嘩して独立したとか？』と笑顔で突っ込んでみた。
「まさか、ユリさんと喧嘩なんて、私じゃ相手にもならないし」と美しい口元だけで笑った。
「ユリさんが結婚する時、引退を覚悟していたのよ。そしてマダムもＰＧを閉めようと思ってたの」真剣な表情で、熱く感じる目で語った。
「その時、ある男性が融資するから、店をやらないかって話しがあってね」
「私は蘭だけ誘って、開店準備の為に辞めたの・・蘭はＰＧに恩があるから最後までいてから、来るって言ってたの」少し懐かしげに言葉を選びながら。
「ユリさんが産休の時に色々あって、離婚して復帰をする事になったから、今はこういう状況なのよ」と笑顔で言った。

『蘭は、２０歳位でそんなに凄かったんだ』と私が笑顔で返すと。
「あなた聞いたことないのね、蘭は夜街じゃ【最高の副職】って呼ばれてるのよ」とニカを出した。
「あの子は今でも、自分はバイトだと思ってやってる。そしてそれを貫いてるわ」と嬉しそうに笑った。

『そうだよね、そんな感じだと思ってた』と笑顔で返した。
「あの子がプロを志願したら、夜街トップクラスは間違いないよ」と私を優しく見ていた。
「ユリさんの復帰が決まってからの蘭は、凄まじかったからね。私も何度か様子を見に行ったけど・・怖かったよ、後光が射してて」と笑顔で言った。
『伝説のＮＯ１話ですね』と笑顔で返した。
「そう、今でも語り草だからね」と嬉しそうだった。

『じゃぁリアンさんは、最高のアルバイト取り逃がしたんだ』と笑顔で返した。
「そう、でも今は私には良かったかと思ってる、蘭が来たら絶対蘭に頼ってたからね」と真顔で言った。
『リアンさんは、パパさんがついてるから』とニヤで言った。
「ブーー、そんな関係じゃないよ。私と蘭を変な店に行かせたくないって、貸してくれたの。弁護士で、お金持ってる人だから」とニカで返した。
『やるな～キング』と私もニヤで返した。
「キング？？」と不思議そうに言った。
『梶谷さんだよね、弁護士って・・俺はキングって呼んでいいのだ』とＶサインを出した。
「そうなの、素敵じゃない」と熱を高めて笑った。

リアンさんと腕を組み相合傘で歩いた、強い雨の西橘通りを。
２人でＰＧのＴＶルームに入った。
「あら、やっぱり出会ってしまうのね」とユリさんが私とリアンさんを見て、薔薇で微笑んだ。
「おはようございます、ユリ姉さん」と言ってリアンはユリさんの横に座って、マリアを嬉しそうに抱いた。
２人が楽しそうに話だしたら、マリアが駆けて来たので、マリアを

抱いてハルカを探しに行った。
私はフロアーに向かいながら、【ユリ姉さん】と呼ぶ人に初めて会ったな～と思っていた。
アイさんやサクラさんでさえも、ユリさんと呼んでいた。
年齢関係でなく、今生きる地点の差が【姉さん】と呼び難くさせているのかと思っていた。
笑顔でユリ姉さんと呼んだリアンは、やはり相当高い地点で生きているんだと感じていた。

フロアーにハルカの背中が見えた、何か見て書いている。
『女優が雑用をしなくていいよ』と声をかけた。ハルカは振向いて笑った、可愛い笑顔で。
「ずっとするよ、これしないと落ち着かないから」と微笑んだ。
『貧乏性だな～』と私が言うと。
「な～」とマリアが追い打ちをかけた、ハルカはマリアに微笑んだ。

「今、言っとくね」とハルカが真顔になって、私の前に立った。
「私のデビューであなたがしてくれた事、絶対に忘れない。そして7年後の約束も、そしてハルカの由来も」
「お父さんの1番指名も・・全部ありがとう、本当に嬉しかった」と笑顔で言った。
『喜んで貰えたなら、よかった～』と笑顔で返した。
『今度、寄せ書き見せてね、号泣した？』とニヤで聞いた。
「うん、昨夜ずっと泣いてた。大切な宝物になったよ」と美しく微笑んだ、女優らしく。
『あっ、TVルームにハルカ姉さんにお客さん』と言って、ハルカとTVルームに戻った。

「リアンさん！・・おはようございます」とハルカが頭を下げた。
リアンは笑顔で見て。

「ハルカデビューおめでとう、これは私からのご祝儀」とハルカの前に立ち、笑顔で渡した。
「ありがとうございます、本当に嬉しい」とリアンを見て、笑顔で返した。
「あんたは、ユリ姉さんの秘蔵子で蘭世代の女だから、皆期待してるよ頑張って」暖かい言葉だった。
「はい、全力でやってみます」とハルカは明るい笑顔で答えた。
リアンも燃える笑顔で見ていた、踏出した若き挑戦者を。

「ユリ姉さんが、あなたを譲ってくれないの」とニカでリアンが私を見た。
『ユリさんの秘蔵子ですから』とニッで返した、ユリさんも薔薇で笑っていた。
「あなた、リアンさんとも絡んだの」とハルカが私を見た。
「も？」とリアンがハルカを見た。
「大ママも欲しいと言ってたんです」とハルカが笑顔でリアン言った。
「やるね～」と私を熱いニヤで見た。
『俺、未経験だから、踊り子さんの付人は無理かと』とニッで返した。
「ストリッパーじゃないって、3回言ったよ」とリアンが笑顔で返して、皆で笑った。

リアンが笑顔で帰って、マリアとユリさんも帰った。
ハルカと予約確認をしていると、マダムがやってきた。
「お前も驚かすのいい加減にしてくれんと、こっちの心臓がもたんわい」と私に笑顔で言った。
『どのことでしょう？』と私も笑顔で返した。
「リアンとピッタリ腕組んで相合傘で歩くなんて、誰かと思って見たらお前やし」と笑った。

『お肉食べさせてくれるって言うから、傘に入れてあげたんですよ』と照れて笑った。
「本当に、怖くなるんだけど」とハルカがニヤで言った。
「ハルカ、そいつとはもう、歩かん方がいいかもしれんぞ」と笑いながらマダムが出て行った。

「リアンさんって凄いんだね」とハルカに聞いた。
ハルカがニッと笑って、古い予約実績表を見せた。
「ここ、この12月ユリさんとリアンさんの差が、12ポイントなの」と私に微笑んで。
「12月って一番忙しい月に、たった12人しか指名で変わらなかったのよ」と言った。
『それは、凄い』と私もその数字を見ながら言った。
「そして、この月に今挑戦してる満席記録を作ったの、3位見た？」とニヤで微笑んだ。
私は数字を追って、3位を見た。
蘭だった、ユリさんに26ポイント・リアンに14ポイントの差だった。

「ユリさんはね、今でも満席で入らないお客さんは。
リアンさんの所を紹介するのよ、一番安心できてPGより安いから。
でも私はリアンさんを自分が辞めさせたみたいに、感じてるんだと思うの。
だから、応援してるんだと・・素敵でしょ本物のトップクラスは」とハルカは嬉しそうに微笑んだ。

『頑張って、トップになれよ』と笑顔で返した。
「挑戦してみる、どこまで行けるか、ユリさんと蘭姉さんの精神世界に」と言った顔は輝いていた。

【精神世界】と表現した、ハルカの感性が私は好きだった。
目指すのはその精神だと強く言う心が。

「あなた、まさか四天女知らないの？」と少し驚いたようにハルカが言った。
『知らない、てかまだ習ってない。ケイっていう人が、意地悪だったから』とウルで返した。
「ごめんごめん、泣かないの」とハルカは可笑しそうに笑って教えてくれた。
「今の夜街で、女帝と言われるのは飛鳥さんだけど」と言ったとき。
『アスカって誰？』と突っ込んだ。
「えっ、大ママよ～知らなかったの」とケラケラと笑った。

『ケイっていう人が』と言った時に。
「はいはい、ごめんなさい」と笑顔を絶やさず言った。
「でも、大ママも言ってるんだけど、ユリさんは同等と認められてるの」と嬉しそうに微笑んだ。
『さすが、ユリさん』と正直に言った、ハルカも笑顔で頷いた。
「そして、次世代の候補がリアンさんと、ユリカさんって人なのよ」
「この2人は因縁があって、リアンさんがＰＧ出身・ユリカさんが魅宴出身で同じ歳なの」
「この四人を四天女って夜街の関係者は呼ぶのよ」とハルカが説明してくれた。

『ユリカさんって、どんな感じの人？』と興味津々光線をハルカに当てた。
「ん～、表現するの難しいな～」と考えて。
「こう呼ばれてる・・動のアスカ・情のユリ・炎のリアン・水のユリカってね」と言って笑った。
『なるほど～、3人は良く分るよ・・・水ね～』と私が考えてると。

「いつか会えるよ、あなたなら」とハルカが微笑んで、「その時、感想を聞かせてね」と笑った。

【炎のリアン】まさにその通りだと思っていた、だがその時の私には色が分らなかった。

蘭の青い炎は、マダムの言葉だが納得できた。

蘭の炎はその時に強く燃え、全てを溶かし、暖かく柔らかい感じだった。

リアンの炎は常に燃え、自分も焼かれながら、全てを焼き尽くすような感じだと。

その強い魔性の炎に、人は魅入られるのではと思っていた。

夜雨

その目には何かが潜んでいる、表現し難い何かが、ある一部の人は強く惹かれる。
燃えるような時を過ごしたいと、炎に飛び込むようにその世界を目指す。

週のスタートの準備が整ったフロアーが待っていた、笑顔の女優が来ることを。
５時過ぎに蘭が迎えに来た、ご機嫌は継続中だった。
私は蘭と手を繋ぎ駐車場まで歩き、ケンメリに乗って家路についた。
『今日素敵な人に会って、お昼焼肉ご馳走になった』と笑顔で蘭に報告した。
「ほほ～最近自白が多くて、関心やね～」とニヤで笑い、「誰？」と聞いた。
『炎の女』とニヤで返した。
「きた～会ったのか～、リアン姉さんに」と蘭も笑顔で返した。
「ゆっくりと、夕食を食べながら聞こうか」とニヤニヤした時にアパートに着いた。

蘭がトンカツを揚げている後に座り、事情聴取を受けていた。
「一番だよね、あなたの好みで言ったら？」とニヤで蘭が聞いた。
『誤解されないように先に言っとくけど』蘭が振り返り頷いた。
『前も言ったけど、俺は蘭と誰かを比べた事は無いよ』蘭は振り返らずに頷いた。
『俺は蘭の美しい姿も勿論好きだけど』と言ったとき、蘭が振り返り満面の笑みで何度も頷いた。
『上手く言えないけど、蘭の生き方や、考え方、優しさ、そして心の奥深さが好きなんだよ』と背中に語りかけた。

蘭の反応が無い、黙っていると。
トンカツを盛り付けて、食事の用意を2人でした。
食べようと座ると、蘭が私を見て笑顔で。
「ありがとう、今まで噛みしめてたよ」と微笑んで、「続き」と催促した。
『それを前提に聞いてね』と食べながら言った、蘭は笑顔で頷いた。

『衝撃だった、そして分った俺の外見的な好みはリアンさんだと。
確かにユリさんやカスミにも衝撃は受けた。
でも、リアンさんは全然違うんだ、勿論性格とか何も知らないから分らないけど。
蘭という存在が無かったら、追い求めていたんじゃないかと思った。
どんなに焼かれてでも、追うんじゃないかって。
少し話して、それが確信になったよ』と言って照れた。

「うん、正直な回答だね」と微笑んで、「私も、あなたはそうなんだと思ってた」と笑顔になった。

「私をPGに誘ってくれたのは、リアン姉さんなんだよ」
「19の時、私の19ってあなたなら説明いらないよね」と真顔で言った、私も真顔で頷いた。
蘭の19とは、弟を亡くした歳である。
「リアン姉さんは、靴のお得意さまで気が合って、仲良くしてもらってたの」蘭の深い瞳が出て、回想の時が来たと思って聞いていた。
「勿論、ユリさんもお得意様だったけど、19の私には遠い人だったから。
その事があって、私が1週間休んで。

靴屋に復帰した日にリアン姉さんが昼間来て。
私を見て、靴屋の仕事終わりに又来てくれて。
強引に引っ張られるように、ＰＧに連れて行かれたの。
やってみろって、とにかくやってみろって。
リアン姉さんとユリさんが言ってくれたの。
それで私は気分的にも自信が無かったけど、やる事にしたのよ。
私はね、勿論ユリさんにも、リアン姉さんにも感謝してる。
そしてＰＧにも水商売にも、お客さんにも感謝してるの。
崖にいた私を引き戻してくれたから、だから今でもＰＧで働いてるのよ」と最後は笑顔になった。

『最高の副職・・リアンさんに聞いたよ、良い言葉だね』と蘭の目を見て笑顔で言った。
「それは良く言いすぎなの、私はただのアルバイトなんだから」と笑顔で返した。
蘭の深さにまた触れて、私は嬉しかった。
自分を曲げない、その生き方に憧れていた。

蘭とタクシーでＰＧに行き、蘭が準備に行った。
ＴＶルームにマミが来ていた。
『マミ姉さん、おはよう』と挨拶をした。
「おはよう、よろしくね」と可愛い笑顔で返してくれた。
「今夜から、３日はリンにマミを付いて貰うから」とマダムが私を見て。
「お前は忘れずに１１時半になったら、マミを魅宴まで送ってくれ」と言った。
『了解です、魅宴の入口までだね』と返した。
「当然、ドアに入るの見届けてるんや」とマダムが笑った。
「そこまでしてもらわなくても」とマミが遠慮したので。
『マミ姉さんに何かあったら、俺、一生後悔するからやらせてね』

とマミに笑顔で言った。
「ありがとう」とマミが嬉しそうに微笑んだ。

「マミ、ホストの言うこと信じるなよ、この業界の鉄則やぞ」とマダムが笑った。
「はい、早くも1つ勉強になりました」と私に微笑んだ。
『ひどい』と言って私は大袈裟に泣き真似をした、マダムとマミの笑い声を聞きながら。

「今夜が勝負やな、雨の月曜日」とマダムが私に言った。
『満席記録か～、確かに怖い雨だ』と私もマダムを見て返した。
満席記録は明日で並び、明後日で新記録のところまできていた。
マミを連れてリンさんの所に案内し、指定席に座った。
静寂のフロアーにはまだ誰も入っていなかった、私はフロアーを見ていた。
「なんだい、マミちゃんはリンさん付きかい。報告会の材料がないね～」とカスミが後から言った。
『そう毎日はないですよ』と振り返り笑顔で返した。
「それがあるんだな～」と後から蘭がニヤで言った。
「それは楽しみだ」とカスミが不敵をだした。

ハルカが恥ずかしそうに、可愛いピンクのドレスで出てきた。
『ハルカ可愛いよ・・・ドレスが』とニヤで言った。
「もう、緊張してるんだから、本当の事言ってごらん」とニヤで返された。
『着太りして見えるから、カスミみたいなの着ればいいのに、スタイル良いんだから』とニヤで返した。
「明日から、そうしよう」と笑顔で返して、フロアーに行った。

ユリさんが早目に入り、女性が円になった。

「今夜から、ハルカが本格始動します、遠慮なく鍛えて下さい」とユリさんが言って。
「よろしくお願いします」とハルカが頭を下げた。
「それでは今夜も開演しましょう」の声に「はい」のブザーが鳴った。
1番目の客はキングだった、3番席に座り案内したカズ君に何か告げた。
カズ君はサインを出した。【3番　指名　ハルカ】
それを見たハルカはキングに嬉しそうに微笑んで、その場で深々と頭を下げた。
《やっぱり格が違うな～》と思っていた、その優しさに。
キングはハルカの緊張を取りに、早く来たのかと思っていた。

ハルカは3番席まで行き、挨拶をして隣に座り楽しそうに話ていた。
マダムの心配は、完全に裏切られた。
客は8時を過ぎると続々と入り、8時45分で満席を記録した。
9時を過ぎたときに、キングが席を立ったので挨拶に行った。

「おう、頑張ってるな」と私に笑顔で言った。
『流石はキングだね、ハルカの緊張取りに来てくれて』と笑顔で返した。
「たまたまだよ」と私の肩に手を置いた、絶対的安心感があった。
「今度行きたい所あるんか？」とエレベーターに向かいながら聞いた。
『リアンさんの所が見てみたい』と笑顔で返した。
「本当に末恐ろしい奴だな・・今週中には連れて行くよ」と言いながらエレベーターに乗った。

ユリさんとハルカが見送りに来ていた。
「ハルカ楽しかったよ、ありがとう」とキングは笑顔で帰って行っ

た。
頭を上げたハルカに。
『さっ今からが本当の自分との勝負だぞ、頑張れよハルカ』とニヤで言った。
「生意気～、見てなさい私の実力を」と笑顔でフロアーに戻って行った。
ユリさんも薔薇で微笑んでいた。
《がんばれよ》とハルカの背中に囁いた。

雨の月曜、最悪の状況を物ともせず。熱気は上昇をやめなかった。
私も雨で滑らないように、エレベーター周辺のモップがけがあり忙しかった。
ハルカはユリさんか蘭に付いて回って、そつなくこなしてるようだった。
外の雨は勢いが増しているようだが、フロアーの熱は下がることが無かった。
「6番　アフターってしつこい」と美冬が言って来た。
『仕方ないな、美冬が可愛いから』と笑顔で返した。
「やっぱり、最近女見る目できたじゃない」と嬉しそうに笑った。
『良い情報あるんだけど、聞きたい？』とニヤで美冬の耳元に囁いた。
「うん」と少し緊張した。
『美冬の思いは今4分の1の確立です』と囁いてニッをした。
「うそ・・・4分の1って？」と嬉しそうに聞き返した。
『今の調査段階では、四季の中の誰かまでしか判明してないよ』とニヤで囁いた。
「本当に～・・・ありがとう、継続調査よろしく」と楽しそうな笑顔で銀の扉に消えた。
《世話がやけるナイスカップルだな》と思っていた。

「さっき、囁きで美冬になんか魔法をかけたろ」と千秋が来た。
『うん』と言って千秋を手招きして、千秋の耳元に『マハリクマハリタ』と囁いた。
「うん、効いてきた」と笑顔で言って銀の扉に消えた。
この囁きマハリクを千春と千夏にもかけた。
熱は１１時を過ぎても冷めなかった、１１時２５分にマミを迎えに行った。
マミはリンさんと、徳野さんに挨拶をして、２人で裏階段に向かった。

『マミ姉さん、傘持って来たの？』と階段の踊場で聞いた。
「もちろん、降ってたから」と笑顔で返して、「なぜ？」と聞いた。
『危険だから、相合傘がいいかと』と照れて笑った、マミも笑っていた。
通りに出る時、マミが傘をささずに私のに入ってきた。笑顔が可愛かった。

「蘭姉さんって、どうして一言目に、あんなにお客さんの笑顔が作れるんだろう」と私に微笑んだ。
『蘭は自分も楽しんでるから、客にも感染するんだよ』と私の思ってることを正直に話した。
「そっか～、分った気がする」と笑顔で返してくれた。
『ホストの言うことは真に受けるなよ』とニッで返した。
「分ってるよ」と私に微笑んだ、可愛かった。
魅宴の裏階段から上がって、マミにお休みをして別れた。

振り返ると夜街の夜景が雨で霞んでいた。

この狭い空間にいったい何人の女性が働いて、笑って・泣いているのだろう。

裏階段の手摺りに落ちる雨粒を見ていた。

【水のユリカ】私は全く想像が出来なかった。人を水に例えれるのだろうか。

ユリカに出会うのはもう少し先である、その時に私は感じる。

評価とは世界の大きさに比例するのだと、小さな枠組みでは理解できない存在もあると。

世界を広げないと楽しめないと、感じさせられる。

水の女・・・ユリカ・・・透明な女神。

獄炎

人は進化する過程で、どれだけの物を捨てたのだろうか。
その中には大切な物は無かったのか、本当に今の方が人として幸せなのだろうか？
原始の時代の人は、どうやって愛を表現したのだろう。

深夜の雨が昼間の熱を冷まし、傘を持つ放浪者は楽しげに歩いていた。
元来私は雨が好きだった、特に夜の雨が子供の頃から好きだった、幻想的で。
呼込みさん達に相合傘の事を冷やかされながらＰＧに帰った。
指定席に座ると、カスミがニヤを出しながら来た。

「で～土曜の夜、もしかしてもしかしたか」とニヤ全開で聞いた。
『カスミらしくないな、もしかとかぼかして言って』とニヤで返した。
「大人の階段上ったか、蘭姉さんご機嫌だからね～」ニヤをやめずに囁いた。
『俺と蘭にそいいう事は、暫くないよ』と微笑んで返した。
「なぜ？子供すぎるのか？」と不思議そうに聞いた。
『欲求は人一倍あるよ、でもまだ俺が到達出来ていない、今求めて蘭が許しても俺が楽しめない』と真顔で答えた。
「なるほどね～、６番の若い奴らに聞かせてやってくれよ」と不敵を出して戦線復帰した。

私はカスミには何でも話せた、それが興味本位じゃない事を知っていたから。
カスミは確かに私に対して言葉使いは悪いが、その深い愛情を感じ

ていた。
離婚の件の前から、不思議な感情だった。ハルカとの関係とは違う物だった。

カスミはその美貌と会話で上り詰める。
短い期間だったが自他共に認める、完全な夜街ＮＯ１になる。
しかし、その地点に立った時の選択が、実に爽やかでカスミらしかった。
カスミが夜街を去る事が決まった時、こう呼ばれた。
【光の女　カスミ　永遠の憧れ】
夜街関係者は皆、愛情を込めてそう呼んだ。
挑戦する勇気が無かった者も、挑戦が失敗した者にも、最後まで愛されていた。

この時点でカスミが私にくれた権利が、どれ程私の支えになっていたのか。
私は日記にこう記している。
【蘭に挑戦して敗れた時には、一度だけカスミの胸で泣こう】
私にとっては、心のお守りだったよカスミ・・・ありがとう。

その日も終演まで、熱は持続した。女性も完全燃焼をしていた。
終礼のようにハルカを含めた、８人衆が１０番に座った。
「キャモ～ン」と元気な蘭が、ニヤで手招きをした。
「相手は誰なのか言わずに、報告せよ」と私を笑顔で睨んだ。
『グラマーな女性と腕を組み』とまで言った時に。
「当たってたのかい？」とカスミが不敵で突っ込んだ。
『潰れるほど』と照れて返した。
「よし」とカスミがニヤで笑った。

『相合傘で西橘を歩いて、焼肉をご馳走になりました』と言ったと

ころで。
「店は？」と千秋がニヤで突っ込んだ。
『〇〇苑』と笑顔で言うと。
「なんて贅沢なランチなんだ」と美冬が突っ込み、皆がニヤをした。
「特殊事項は？」と蘭がニヤニヤ全開で私を見て聞いた。
『蘭を除けば、外見的に一番タイプでした』とニヤで全員を見た。
「その言葉は、私ら８人に対する挑戦状だね」とカスミが不敵全開で言った。
「納得出来ない相手の時は、意地悪は覚悟してるんだね」と美冬も不敵を出した。

「さて問題です、相手は誰でしょう？ハルカは知ってるから失格」と蘭が皆にニヤで言った。
「そんなに悔しかったのか、こないだの問題がビリだったのが」と蘭にカスミがニヤをした。
「うん」と蘭が笑顔で、モジモジをした。
「グラマーでタイプね～、まさかね～昼間に腕組んで相合傘でしょ・・無理だよな～」と美冬が呟いた。
「美冬、述べよ」と蘭が美冬を指名した。
「考えられないけど・・リアンさん」と小さな声で答えた。
「ピンポ～ン」と蘭が満開の笑顔で叫んだ。
「お、お、お前バカだろう」とカスミが笑い。
「うっそー」と６人が私を見た。
『リアンが寂しいって、目を潤ませて誘うからね』と全員にニヤで返した。
「帰ろう、今夜は相手が悪すぎる」と千夏が微笑み。
「賛成」と千春が言って、全員立って控え室に戻った。
私はその背中をニヤで見て、リアンの凄さを再確認していた。
ＴＶルームにはマダムと松さんがいた。サクラさんは休みで、マリ

アだけ寝ていた。
私がマリアの寝顔を見ながら、大好きな癖毛を触っていると。
「リアンの感想は？」とマダムが私を笑顔で見ていた。
『あの人に夢中になる男の気持ちが分る気がした、たとえ燃やし尽くされても追いたい、みたいな』と少し照れた。
「あの子の熱は獄炎だからね」とマダムは松さんを見た、松さんは頷いた

「ワシも初めて面接で会った時。
この娘は道を間違ったら、大変な事になると感じて、採用に躊躇した。
ユリがＯＫしたんや、そしてリアンの加入でＰＧは起動に乗るんだよ。
ユリとリアンのコンビ想像してみろ」とマダムが笑顔で私に言った。

『正反対に見えて、実は最も近いとか』と感じてる事を、マダムに聞き返した。
「少し成長したね」とマダムが微笑み。松さんも私を見て頷いた。
「歩む方法は全く違う、しかし芯の向きは同じや双子のようにな」とマダムが笑顔で言った。
『やっぱり、俺分からなかったけど、ユリさんを姉さんって呼ぶ人、初めて会ったから』と笑顔で返した。
「ユリを心から姉さんと呼ぶのは、リアンとユリカだけやからな」とマダムが言った。
『水のユリカ、会ってないのに永遠の謎みたいな感じや～』と私は呟いた。
「会うと、お前なら迷宮に入るぞ」とマダムが意味深に言って。
「それは楽しみやね～」と松さんが私にニヤを出した。

蘭が迎えに来て、2人で帰った。腕を強く組み、相合傘で歩いた。
『当たってるんですけど、子供には刺激がありすぎて』と隣の蘭にニッで言った。
「ごめ～んね、グラマーだから」とニヤで返してきた。
『リアンさんでもカスミでも何も感じないけど、蘭だと罪だぞ』とウルで言った。
「うんうん」と頷き、「何も感じないのは嘘だね」と笑顔で舌を出した。
『まぁ、柔らかいな～位かな』と舌を出して返した、蘭はニヤで見ただけだった。

タクシーに乗り、アパートに着いた。玄関で蘭が靴を脱いだが、上がらないですねた。
『どうしたの？』と優しく聞いた。
「一日一回」と微笑んだ。
『甘えん坊』と抱き上げて、部屋までお姫様して、暫く降ろさなかった。

『ちょっと待ってね、今夜が寂しくならないように、少し時間をちょうだい』と蘭の耳に囁いた。
「うん」と言って、抱かれていた。蘭の少し酒臭い香りを楽しんで、降ろした。
蘭が化粧を落とし笑顔でベッドに入って、私は電気を消して定位置に座り。
『月曜日だから、もう寝なさい見てるから』と蘭の額に手を当てた。
「ありがとう、お休み」と言って蘭が目を閉じた。
大切な時間を心行くまで楽しんで、部屋に戻り目を閉じて、瞑想無しに眠りに落ちた。

翌朝は快晴だった、爽やかに目覚めて洗面所に向かった。

冷蔵庫を開けて目的の赤いウインナーを出して、気合を入れて作業に入った。
こっそりサクラさんに教わった【カニさん】に挑戦するためだ。
「おはよ～、私は世界一幸せだ～」と笑顔で言いながら、蘭が洗面所に消えた。
私の用意した朝食を見て、目を輝かせて。

「こんな素敵な朝食、見たこと無いよ」と満開の笑顔で座って。
「このウインナーの、クモさん可愛い」とニヤで私を見た。
『イメージは・・カニさん』と私は上目使いに微笑んだ。
「ハサミは？自分だけ美味しいとこ食べたね」と蘭は嬉しそうに笑って食べていた。
蘭を見送り、朝の仕事をして、シャワーを浴びて日記を書いた。

快晴の空の下を、出勤した。
靴屋が見えた時に、店の前で蘭が誰かと楽しそうに、話しているのが見えた。
その後姿の美しさで、踊り子と分っていた。
「あっ、来たよ、カモ～ン」と蘭が笑顔で呼んだ、ゆっくりと振り返るリアンの熱に少し押された。
『これはまた、朝から最強コンビで悪い相談ですね』と2人を見てニヤで微笑んだ。
「蘭に許可もらいにね、体力あるんでしょ」とリアンがニカで微笑んだ。
『体力あるけど、未経験なんで優しく教えて下さい』とモジモジを出した。
「しかたないな～、夢中になるから、蘭にさよならしなさい」と情熱の瞳で笑った。
『すご～く残念だけど諦めます、蘭に代わる者など俺には存在しないから』と笑顔で頭を下げた。

「蘭、どこで拾った。ユリ姉さんがあんな笑顔になるはずやね」と蘭に微笑んだ。
「いいでしょ～、私もこの子に代わる者はないですよ」と蘭が笑顔で返した。
「ご馳走さまです」とリアンが蘭に微笑んで、「さぁ、行くよ」と私の腕を掴み組んできた。

「がんばれ～」と言う蘭の声に振り返り、ウルを出した。
蘭は満開で笑ったいた。
「なにが片思いだよ、嘘つきめ」とリアンが私にニカを出した。
『その資格が持てる男になるまでは、そう思って頑張らないと、心が折れそうで』と正直に話した。
リアンもやはり圧倒的存在で、素直になれていた。ユリさんと話す感覚だった。

「行くと決めたんだろう、果てしなく遠くても」と前を見て言った、その優しい響きに驚いた。
『蘭が別れを望むまで、行くよ・・果てしないけど』と私も前を見て囁いた。
「今の言葉、忘れないで・・全力でやって、木っ端微塵に砕けたら」
「私が裸で抱いてやるよ」その言葉が私を熱で包んでくれた。
私はこのストレートな言葉に感動していた、その熱い表現と燃えるような生き方に。
『その言葉約束だよ、それを軸にできるくらい重い言葉だから』と私はリアンを真顔で見た。
「嘘はつかないよ、蘭のあんな笑顔を出させた奴に」と私を見た目は獄炎の炎を湛え、優しく深かった。

気がつくと、少し先の西橘通りにカスミが立っていた。
リアンはカスミを見ていた、そしてカスミもリアンの瞳を見て、動

く事も出来ないで立っていた。
私はカスミのその表情を見ながら、蘭の言葉を思い出していた。
【出会う為にそこにいる】あの言葉が、美しく立ち尽くすカスミに重なっていた。
リアンとカスミの、本当の意味での出会いだった。
カスミは当然一方的には、リアンを知っていた。
その後カスミがトップになる為の大切な時が、数歩のところまで来ていた。
カスミはリアンの炎に焼かれながら、美しく発光していた。
情熱の女、そう呼ばれたリアンは隠すことをしない。
その炎に自らも焼かれ、隠す物など何もないのだろう。
その存在が常識の外にあった、微温湯に浸かっている者には理解しがたい女だった。
しかし、男は心のどこかでリアンを追い求めていた、焼かれながらも踊りたいと。
刻み込まれたＤＮＡの深い所に眠る何かが反応するように。
進化する過程で捨てた、大切な何かに触れるように・・・。

透明

普通・・何の為にあるのだろう、全体を統制しやすくするためなのか。
多数の者が支持する者が最良なのか、私には受け入れられない。
私には出会った記憶がある、普通とか多数などから最も遠い最良の者に。

真夏の陽の光を浴びて凛と立つ、美しい女は輝きを連れている。
しかしその代名詞といえる拒絶の光が無かった、リアンを見て美しく微笑み。
「おはようございます、リアンさん、ＰＧのカスミと言います」と笑顔で頭を下げた。
「おはよう、ＰＧは良い子が集まるね～」とリアンは嬉しそうに微笑み。
「ねぇ、カスミちゃんあなたには、姉さんと呼んでほしいわ」と獄炎の瞳で笑った。
その時のカスミの笑顔は、それまでに見たことがないほど華やかだった。

「ありがとうございます、リアン姉さん」と言って微笑んだ。
「これからどっか行く予定？」とリアンが微笑んで返した。
「いえ、早く目が覚めたから、ブラブラしようかと思っていただけです」とカスミは微笑を絶やさずに言った。
「なら、一緒に来る？こ奴が店の冷蔵庫移動してくれるの」と私をニカで見た。
「いいんですか、うれし～」とリアンに言って、「がんばれよ」と私に不敵を出した。
『今回の相手は冷蔵庫か、強敵だ』と２人を見てニッを出した。

２人は楽しそうに笑っていた。

リアンの店はその当時夜街でトップ３に入る、高いビルの最上階にあった。
店の名は【ローズリップ】黒い看板にゴールドの文字が印象的だった。
店は緩やかなカーブカウンターに１８席、ＢＯＸが３区画で役３０人は入る広い店だった。
奥の一枚張りの窓から、夜街を見下ろす景色が楽しめた。

「凄い・・・素敵」と窓から外を眺めカスミが呟いた。
「これをスナックと言うのが、凄い」と私もカスミの横で呟いた。
「何を言ってるのよ、ＰＧの人間が」とリアンが楽しそうに笑った。
「さて、肉食べさせるから、こっち」と私を呼んだ。
『仕方ないな～リアンの頼みなら』と笑顔で従った。
「こっちから、ここに置いて欲しいの」とニカで指示した。
冷蔵庫は予想より小さく安心していた。

『なんでもね～よ』と最近練習していた、キングの真似で言った。
「ブッ」と可愛い吹き出し癖で笑い、「男手がないから、助かるよ」と笑顔で言った。
『若い衆にやらせればいいのに』とニヤで返した。
「そのイメージ消えないね」と微笑み。
「私カスミちゃんと話したいから、よろしく」と言って、コーラをカウンターに出してカスミの方に歩いて行った。
私は冷蔵庫の移動はすぐに終わった。
カスミの楽しそうな顔を見て、行くのを遠慮していた。
カウンターで立ってコーラを飲みながら、ＴＶで見たバーテンを真似てシェイカーを振っていた。

出前の豪華な焼肉定食が届いて、窓際の景色を楽しみながら3人で食べていた。
『蘭もそうだけど、カスミもよく食べるよね～』と私がニヤで横のカスミを見た。
「うん、食べるの大好き」とキラキラで微笑んだ。
『どこに、内臓が入ってるのかい』と言いながらカスミの細いウェストを摘んだ。
「ここ」と言って笑顔で胸を張った。
『やっぱり、だからリアンさんより固いんだ』とニヤを出した。
2人の楽しそうな笑顔があった。

「しかし珍しい男だね、カスミちゃん男に触られるの相当嫌でしょ」とリアンが聞いた。
「実は鳥肌が立つほど嫌です、４ヶ月前よりはかなり良くなったけど」と静かに言った。
「この子だけ特別かな、練習ロボットですから」とカスミが微笑んだ。
「いいね～、益々欲しい・・蘭に殺されそうだけど」とニカで笑った。

『で、カスミの引き抜きの話は成立したの』と私はリアンにニヤで聞いた。
「そんな恐ろしい話できないよ、ユリ姉さん相手に喧嘩するほど、バカじゃないよ」と楽しそうに笑った。
「それに、今のカスミはＰＧだから出来てるんだよ、ユリ姉さんと蘭がいるからね」とカスミを見つめた、深い炎で。
「そうなんです、今は回復途中でユリさんと、蘭姉さんに守られています」とカスミも美しい真顔で言った。
カスミは簡単に宮崎に来た経緯と、ＰＧに入ったきっかけと、解決の話をした。

「うん、焦らずにロボット使ってやったほうがいいね」とリアンも優しく微笑んだ。

私の出勤時間が迫り、カスミ一緒にリアンにお礼を言った。

「うちの店の方が、かなり遅くまでやってるから、蘭と遊びにおいで」とリアンがカスミに笑顔で言った。

「はい、必ず遊びに来ます」とカスミも笑顔で返した。

『俺は？』とウルで聞くと。

「あんたはフリーパスだよ、私のお気に入りだから」とニカで言った。

「それと、夜街の男であんただけ、私をリアンと呼んでいいから」とウィンクした。

『惚れるなよ火傷するぜ、リアン』とニヤで言って、２人の笑いを取って店を出た。

「ねぇ、正直に・・頑張って」と帰る私にリアンが炎を増して微笑んだ。

その笑顔を私は見ていた、意味を考えながら手を振った。

カスミとエレベーターに乗ると手を繋いできた、それが２人には自然な事だった。

西橘を歩きながら、カスミの嬉しそうな笑顔を見ていた。

『カスミ、そんなに俺と手を繋ぐのが、嬉しいのか？』とニヤで聞いた。

「うん、楽しい」と強く腕を組んできた。

『調子狂うんだけど』と輝く笑顔のカスミを見ていた。

「で、固いのかい」と不敵を出した。

『そうこなくっちゃ～』とニッで返して密着して歩いた。

カスミとＰＧの下で別れて、ＴＶルームに行った。

３人娘と、ハルカがいた。

「ここ頼んでいい？」とハルカが私を見た。
『いいよ、貧乏性』と笑顔で返した。
「やっぱり、そうなのかな～」と考えながら出て行った。
私はエミの隣に座り、勉強を見ながらミサとマリアの不思議な遊びを見ていた。

『そうだ、エミちゃんリアンさん知ってる？』と聞いた。
「うん、知ってるよ」と少女の笑顔で返した。
『エミちゃんのイメージは？』と笑顔で聞いた。
「強くて曲がらない、でも焚き火のように暖かくて、隠せない優しさ・・かな」と考えながら答えた。
私はまたエミに驚かされた、その深い感性に。
これが小1の答えなのかと。

『ユリカって人も知ってる？』と本題を聞いた。
「うん、知ってるよ」と可愛い笑顔になった。
『イメージは？』と聞いてみた、答えを想像しながら。
「無色透明、包み込む優しさ、お風呂に浸かってるような暖かさ・・かな」と微笑んだ。
『エミちゃん、将来の夢もったいないから、ゆっくり考えてね』と笑顔で返した。
私はそう思ってた、今医者だけ目指すのはもったいないと、その感性に感動していた。
だが私の驚きはユリカに会った時に倍増する、その研ぎ澄まされたエミの感性に。

ユリさんとハルカが帰ってきて、皆でおやつのプリンを食べていた。
「1つお仕事頼まれてくれる？」とユリさんが私に悪戯っ子をだした。
『いいですけど、その笑顔は怖いな～』と笑顔で返した。

「何もないわよ」と薔薇で微笑んだが、ハルカもニヤしていた。
「このお店に、これを届けて欲しいの」と薔薇を崩さずに言った。
『いいですよ、このビルってリアンさん店の向かいの高いビルですね』と笑顔で聞いた。
「そうよ、なぜローズリップ知ってるのかな～」とハルカに突っ込まれた。
『さっき靴屋で会って、店の冷蔵庫動かしに行って来た』と笑顔で返した。
「まぁ、リアンも相当のお気に入りね」と私を見て薔薇で笑った。
「大丈夫ですかね～、お使い」とハルカがユリさんを見て微笑んだ。
「きっと大丈夫ですよ、帰って来ないと駄目ですよ」とユリさんが意味深に言った。

私は何か変だと思いながら、ユリさんの頼みで強く突っ込めずにでかけた。
ビルはやはりトップ3に入る高いビルで、店はやはり最上階にあった。
私は店の重厚なドアを少し開けて顔だけ出して。
『PGのユリにお届け物、頼まれたんですが～』と奥に叫んだ。
「ごめんなさ～い、今手が離せないから、入って」と明るい女性の声がした後に、「あっ」と声が聞こえた。
『おはようございます』と言いながら入ると。

薄いブルーのワンピースの女性が丸椅子上に、爪先立ちで天井の電球を交換していた。
『やりましょうか？男手がないとか』と私は声をかけた。
「うれし～けど、恥ずかしいんだけど・・動けないの」と言った。
足首は微かに震えている。
『ああ、そう言う事ですか』と言って、慌てて隣に丸椅子を置いて私が乗って。

『失礼しますね』と言って脇を支えた、その時に経験のしたことが無い、良い香りが漂った。
『もう大丈夫、離していいですよ』と言うと、手をゆっくりと離して私の首に手を回した。
その時初めて顔を見た、その肌荒れの跡さえない滑らかな白い肌にまず驚いた。
そして顔が正面になった時、その目に驚いた、大きいくて丸いのだ。怖くて見開いているのかと思った程、大きな目には涼しさがあった。
私が抱きとめた時、椅子が少し揺れた。彼女の力が入って体が密着した。
少し様子を見るためそのままの体制でいた。
彼女は目を閉じている、高さは１m位だった。

『もしかして、高所恐怖症だったりします？』と私は耳元に囁いた。
「かなりの」と彼女が囁いた。
『俺は楽しいからこのままが良いけど、降りましょうね』と優しく囁いた。
「楽しいの？」と彼女が囁いた。
『そりゃ～美しい女性と、この体制なら楽しいでしょう』と囁いた。

私は左足を自分の乗った椅子に、右足を彼女の乗ってた椅子に置いていて、実は困っていた。
『カウンターに乗ったらまずいですか？』と聞いてみた。
「助かるなら何でもしていいよ」と彼女が囁いた。
私は左足だけカウンターに移し、安定感を確かめた。
『何でもしていいって言いましたから』と優しく言って。
腰を落としそのまま静かに彼女を抱き上げて、カウンターに移動した。
《小さい人で良かった》と一安心していた。

彼女はまだ目を閉じている。
その小さく美しい顔を見ていた、その滑らかな肌を。
だが実は私は震えていた、今抱いているのは生きている人間なのかと。
それ程の静けさの中にいた。
呼吸も感じるし体温も、体重の重みも感じていた。
しかし目の前にある美しい顔に感情が持てなかった。

『怖かった？もう大丈夫ですよ』と可愛い顔を見ながら、優しく囁いた。
『降ろしますね』と言うと。
「どこに？」と目を閉じたまま言った。
『カウンターだから、安心ですよ』と意識して優しく言って。
なんて可愛い人なんだろうと思って、次の瞬間には本当にいるのかと思ってしまう。
「降りれないかしら」と彼女が囁いた。
私は隅の下に回収待ちの、裏返しのビールケースを見つけて。
『スペシャルサービスで降りましょう』と言って、足場を確かめて降りた。
ＢＯＸに座らせてやろうと、奥のＢＯＸまで抱っこしたまま歩いた。

『はい、ＢＯＸに到着しました』と明るく言って彼女を優しく座らせた。
そして彼女が握っていた電球を受け取り、交換して彼女の所に戻ると。
まだ目を閉じて、少し俯いていた。
彼女の向かいに座り、可愛い姿を見ていた。
全体的に漂う何かが優しく、目を閉じていてもその美しさは絶品で。
匠と言われる職人が作った人形に、生命が宿ったような感じだった。
こりゃーこれであの目なら、相当なもんだなと想像していた。

自分の感じていることに、必死で自分で触れぬようにしていた。
理解不能な感覚だったから、間違いだと自分で否定していた。

『落ち着きました？帰りますね』と静かに言った。
「帰らないと駄目？」と彼女は目を開けずに呟いた。
私は今日は蘭も夕方は来ないと言ってたし、別に慌てて帰る必要も無かった。
『まだ大丈夫ですよ、もしかして甘えん坊でしょ？』と優しく言った。
「かなりの」と言った時に目を開けた、やはり衝撃的だった。
目だけでこんなに変わるのかと驚いた。

しかし圧倒的に何かが違う、そこにいないのではと思ってしまう。
感情が入らないと焦っていた。
『怖くてまだ見開いてます、目？』と笑顔で聞いた。
「産まれた時から、見開いてます」とやっと笑顔出た、その笑顔が爽やかな風のようだった。
その小さな体から放出される爽やかさは、今までに出会ったことの無い物だった。
でもどうして、会話しながら独り言を言ってる気にさえなるのだ。
勿論、心霊的な事を言ってるのでは無い、存在はしてる、美しい微笑みすら浮かべて。

『こんな華奢な可愛い人に、電球交換させるなんて酷いママですね』と笑顔で言った。
「私、ママなんだけど・・見えない？」と爽やかに笑った。
『凄いな～こんな広い店を、でも何で最上階に・・怖がりのくせに』とニッで返した。
「ここがいいって、向かいの最上階の友達が言ったから・・実は窓際は怖いんです」と舌を出した。

『そんな酷い事言うのは、リアンですね』と笑顔で言ってみた。
「よく分るね、さすがＰＧのエース」と言って微笑んだ。
何か分らない・・全然分らないと思っていた。
この人の持ってるもの、凄い魅力なのにどうしても分らないと悩んでいて、気付いた。

『もしかして、素敵なあなたは・・水ですか？』と笑顔で聞いた。
「はい、ユリカです」と微笑んだ。
何かが大きく違う、私の少ない経験をどんなに調べても分らない、どうして惹かれないのかが。
こんなに美しく可愛い女性に、どうして感情が持てないのか。
そしてこの安らぐ感じは何故なのか、全く分らないで混乱すらしていた。
目の前で微笑む人は、絶品の容姿で可愛く微笑む。
しかし感情移入できない、でも存在しないとポッカリ心に穴が開いたように寂しいだろう。

【無色透明】エミの言葉が蘇ってきた、まさに無色透明・・水のユリカ。
これから始まるユリカとの出来事、私は上手く表現できるか不安で書いている。
この出会いには、何人かが関わっていた。私を会わせたのにも理由が有った。
しかしこの時の私は、ただ安らいでいた。
心が開放されていた、ユリカに見られて。
私が堂々と酒を飲める歳になった時、ユリカは消えていた。
チーママに店を丸ごと無償で譲り、忽然と夜街から姿を消していた。

私がこの物語を進行していく上で、絶対に必要な存在なので登場したが。

こんなドラマティックな出会いにも関わらず、この時の記憶はあまり残ってない。

日記に記してなければ、存在したのかさえ自信が無い。

しかし今でも酒を飲み寂しい時は、はっきりと思い出す・・その笑顔が。

そして会いたいと心から願う、ただユリカを見ながら独り言のような会話がしたいと。

その時は本当の自分でいられる、そして何にも邪魔されずに泣ける。

どこに消えたのかユリカ・・・逢いたい。

もう一度でいい、一瞬でいい・・・逢いたい・・・透明の女神ユリカに。

ユリカ

存在そのものに意味がある、考える必要はない。
分らない人には感じることもできない、耳を澄ませば今も聞こえる子守唄。

街を見下ろす最上階の広い空間、天空の要塞の司令室ように浮いている。
私の目の前に座る可愛い女性は、微笑んでいる少女のフランス人形のように。
『ユリカさんって、まさか２８歳ですか？』と驚きながら聞いてみた。
「うん、やっぱり見えない？」と少し照れて微笑んだ。
『未成年に見えるんですけど、雰囲気はマミちゃん位に』と微笑んで返した。
ハルカがユリカは魅宴出身だと言っていたので、マミを引き合いに出した。
「それは、言い過ぎよ」と楽しそうに笑った。
私はユリカの後ろの壁にかかる、アンティークの時計をチラチラと見ていた。
時間が気になったのではない。
時間が経過するのを確認して、現実だと理解したかったのだ。

「ごめんなさい、私待ってたの」とユリカが真顔で私を見た、その目に私は吸い込まれていた。
引き寄せる何かが、深い深海に誘う強い力があった。
「大ママと梶谷さんにあなたの事聞いて、昨日リアンも話してくれて」圧倒的静けさに包まれていた。
私は気持ちが良かった、乳児が母の子守唄を聞いているような、優

しい響きだった。
「リアンがユリさんに頼んでくれて、蘭と話したの」私を見ている、可愛い笑顔で。
「そうしたら蘭が、いきなり顔を見せないで、ゆっくりと見せる感じが出来ないかと言ったの」
「私、色々考えて・・あそこの電球だけ切れてたの思い出したの」と微笑んだ。
『二度と自分でしないで、俺を呼んで下さい』とニッで返した。
「気を悪くしないの？」とユリカは真顔になった。
私は気持ちだけ足を踏ん張った、引き寄せられそうで。
『なんとなく分ります、ユリカさんの事が分からないだけです』と真顔で返した。

「私ね、自分でも分からないの・・一部の人が言うのよ・・でもその事が理解出来ないの」と真顔のまま言った。
真顔のユリカは絶対的可愛さがあった、そしてその言葉は母の子守唄だった。
『高所恐怖症は本当の話ですか？』と意識して笑顔で聞いた。
「うん、実は動けなくなったのは、アクシデントなの・・私ドジだから」と笑顔になった。
『そっか～、違うものが怖いのかと思った・・俺この前、男性恐怖症の人に会ったから』
『でもその子とも違うから、でも高所恐怖症にしては、目を閉じてたのが長い気がしたから』と笑顔を返した。
「私・・上手く言えないけど、対人恐怖症なの」と言った言葉が、静寂を呼んだ。

言葉が聞こえてるのに、静寂が全てを包んだ。
私は必死さは無くなっていた、開き直っていたのだ。
考えたら混乱すると思い、大好きな人形に独り言で会話する、ミサ

をイメージしていた。
『よく、それで出来ますね・・こんなお仕事が』とユリカの笑顔に微笑んで返した。
最新のロボットだと思って。
「普段はいいの、感じない人には、ただの若作りな女だから」と笑顔が戻った。
本当に可愛い笑顔だった、確かにマミ位と言ったのは言い過ぎだったが。
確実に見た目はカスミの方が年上に見えた。

「だから、この仕事が好きなの・・寂しくないから」と真顔に戻って呟いた。
「どうしても、壁みたいなのがあるの、特に男性が・・」未熟な私に伝わるように、考えながら話してくれた。
「私も28だから当然分かってるんだけど、男性を好きになっても」
「性的対象と見られると受け入れられないの」と私を見た、深海の誘いを強めながら。
「どんなに好きになっても・・駄目なの・・だから寂しい・・」と呟いた。
『寂しいですね、それ・・俺も子供で未経験だけど、好きな人には強くそれを望みますから』と無理やり笑顔を作った。

「そこなの、私自身も試してみたかったの・・あなたを」と微笑が出た、絶品の可愛さだった。
「未経験で、唯一人の女性を愛してる、そのあなたに会いたかった」
「そして、アクシデントでも抱き上げられて少し分ったよ」と微笑んで。
「私、男の人にあそこまで密着したの初めてなの」と少し照れた、可愛かった。

『それは光栄です、忘れないでね』とやっと冗談めいた言葉が出た。
「絶対に忘れないよ」微笑んだ、宮崎娘とは信じられない白く滑らかな肌で。
「そして梶谷さんが、あなたの表現で感想を聞くと面白いって言ったから」
「マミの話も、ハルカちゃんの由来も聞いたから、私も楽しみにしてたの」と微笑んだ目は催促していた。
『ユリカさんのは時間が欲しいな、正直に伝えたいから・・てか何度も会いたいし』と笑顔で返した。
「うん、難しいでしょ」と明るく微笑んだ。
《可愛いな〜》と素直に思えていた。

そして私は思い出した、自分のやり方を。
ここに来てやっと少し戻った。
『ユリカさん、抱っこ怖いですか?もう一度してみたいんだけど』と笑顔で聞いた。
「目を閉じてていいなら、してほしい」と可愛く照れた。
『もちろん、さっきは俺も必死だったから、今度は楽しみますから・・いやらしい感じかも』とニヤで言った。
「かかってきなさい」と笑顔で言って、目を閉じた。

私は静かに近づき、出来るだけ優しく抱き上げて、窓際に立って風景をでなくユリカを見た。
さっきより閉じた目に力が入っていない、眠ってるように抱かれていた。
『首、辛いでしょ・・私の首に腕を回すと楽ですよ』と囁いた。
「あなた、わりと挑戦的ね」と言いながら、目を閉じたまま微笑んで私の首に腕を回した。
私は豊兄さんがカスミに目で言ったという。
《何もしないよ、怖くないよ》を心の中で連呼していた。

私の腕の中に眠る小さな女性は、その可愛い吐息がかかるほど近い。
その近さでも私の心は平穏だった、そして1つ分った事があった。
ユリカといる時に感じる、深海と母の子守唄がなぜイメージされるのかが。

『ユリカ・・俺の独り言だと思って聞いてくれる？』と優しく囁いた、意識して呼捨てで。
「うん」と言う声が、優しく響いてきた水の中にいるように。
『ユリカの水は、母のお腹の中なんだよ、その時の絶対的安心感なんだね』と正直に感じたままを話した。
『記憶には無いけど、絶対に忘れられない、みたいな・・分からなくて当然なんだよ多分』
『でも誰もが産まれている限り経験しているから・・懐かしいんだね』と耳元に近づいて囁いた。

その時あの瞳が開いた、大きな深海のような少しグリーンの入った色彩で輝いた。
『急に目を開けるなよ、照れるだろ』と何も言わないユリカを至近距離で見ながら、目だけで照れた。
「私の方が照れるでしょ、２８の少女なのよ」と爽やかに微笑んだ。
『可愛いユリカ・・ヨチヨチ』と余裕の笑顔で返せるまで、私は回復していた。
「生意気って言われるでしょ、相当の」と照れたのか、私の首筋に顔を動かし囁いた。
『そこが俺の武器ですから、年上を追いかける為の』と正直に囁いた。

深く優しい時の中にいた、私は完全にリラックスしていて、何も考えずに素直でいられた。
重みは感じていたが、降ろしたくなかった。

母のお腹で成長する細胞のような、透明な時間を楽しんでいた。
ゆっくりと優しくユリカを降ろした、精巧なガラス細工を置くように。
ユリカは目を閉じていなかった、爽やかな笑顔があった。
私はそれがたまらなく嬉しかった。
『俺に惚れるなよ、ユリカ』とニヤで言った、ユリカの笑顔に。
「本当に生意気ね、私こう見えても・・水のユリカよ」と深海の奥から、本当の笑顔が見えた。
「ありがとう、水のユリカって言われるの・・好きになれそうだよ」と可愛く微笑んだ。
『じゃぁ、ちゃんとした感想を言いたいから、この店フリーパスにして』と笑顔で返した。
「もちろん、それだけでいいの？」と初めてユリカのニヤが出た。
『ユリカって呼捨てにする権利』とニヤで返した、ユリカは可愛く微笑んで。
「もう、してたよ」と許してくれた。

ユリカがエレベーターまで見送ってくれ、手を振って別れた。
エレベーターが動き出すと、寂しさに支配された。
どうしようもない、理由の無い寂しさに。
私は泣きそうだった、必死に目を閉じて耐えていた。
ユリカに会いたいという欲求に。
そして、私に声が聞こえた。
愛する蘭の声が、私を帰した蘭の世界に。
【どんな時も、何があっても、最後は私に帰れ】と蘭の声が響いてきた。
嬉しくて目を開けた、もう寂しさはなかった。
通りに出ると向かいのビルに、ユリさんとリアンが立っていた。

私が2人の方に歩き出すと、リアンが駆け寄って私を強く抱きしめた。
「火傷したよ、あんたに」と言ってリアンは動かなくなった。
リアンに暖かかく抱かれ、完全に戻った自分を感じた。
『もしかして見えるのかな、悪趣味だね〜・・リアン』と優しく耳元に囁いた。
「ラブシーンを期待してたのに、子供だね」とリアンが耳元に囁いた、優しかった。

見るとユリさんも薔薇の笑顔で立っていた、圧倒的優しさを振り撒いて。
『昼間に西橘で、リアンとこの状況は伝説確定やな』と言って背中に手を回した。
夏の暑さを凌駕して余りある、リアンの熱を楽しむように。
視線を楽しみながら。

私はこのユリカとの出会いを、何度も何度も書き直して諦めました。
私の稚拙な文章力では、到底表現できない存在だった。
この日の日記に私はこう書いている。

【マリアは完璧な純白・ユリカは完璧な透明】

人としていつかは訪ねたいと願う、記憶には無い懐かしい場所。
羊水の揺り篭、その中に響いた子守唄・・もう一度聞かせて・・水のユリカ。

羊水

なぜその道を選んだのか今でも分らない、寂しくないからと言って微笑んだまま。
きっかけは聞いたそして歩んだ道も、長い時間を一緒に過ごした。
でも最後まで分ってやれなかった、その深い本質は。

夏の暑さを涼しく感じる熱さに包まれていた、昼下がりの繁華街で。
強く大きな熱を受け止めて立っていた、薔薇の笑顔を見ながら。
リアンが体を離し、２人でユリさんの立っている所まで歩いた。
「１つだけ聞かせて、ユリカの水は何だと思ったの？」とユリさんが薔薇の微笑で聞いた。
リアンも私を優しく見た、炎を湛えたまま。
『今感じたのは、ユリカにも言ったけど・・母親のお腹に居る時に包まれる水じゃないのかと感じた』と少し照れて言った。

ユリさんは最高の薔薇の笑顔で、リアンは熱い情熱の笑顔で私を見ていた。
「羊水って言うのよ、やっと謎が解けたわ、ありがとう」とユリさんが薔薇のまま微笑んだ。
「そっか、良かった～それなら納得できるよ」とリアンも熱を高めて笑った。
『水と呼んだ人が凄いよ、それにさっきエミにヒントを貰ってたから、そう感じたんだ』と笑顔で返した。

「梶谷さんよ水と呼び始めたの、漠然と水って感じたって言ってたわ」とユリさんが教えてくれた。
『流石だな～キング、漠然と分るのが凄い』と本音で感心していた。
「その問題を解いたお前もやるじゃない」とリアンが笑顔で、私の

肩を叩いた。
『本当の親友なんだね、リアンとユリカ、炎と水、素敵やな～』とリアンに笑顔を返した。
リアンは私を見ながら、頷いた。優しい瞳だった。
「近いうちに、一人でいいから遊びに来て、ゆっくり話し聞かせてね」とリアンが優しく微笑んだ。

私がユリさんと帰ろうとすると、ユリさんが腕を組んできた。
私は驚いてユリさんを見た。
「カスミにもハルカにもリアンにもするんでしょ」と悪戯っ子を出していた。
『困ったな～、本当に皆甘えん坊で』と笑顔で返した。
「いくつ伝説作るのやら」とリアンが笑顔で手を振った。

「ユリカちゃん、自分でも悩んでいたの。でも女性には分らない感覚なのよ」と真横のユリさんが言った。
『俺はユリカを最初感じたとき混乱した、そして考えるのやめた時に感じたよ』
『エミがお風呂に浸かってると言った言葉が有ったし、ユリカの声が子守唄みたいに響いていたから』と笑顔で返した。
ユリさんは腕を組んだまま、沢山の人に挨拶しながら微笑んでいた。
「でもこんなに素敵な回答は、想像もしてなかったわ」と私を見た、圧倒的な美しさを再確認しろと、言うように薔薇で微笑んだ。

『まだ、全然分らないことだらけだけど、ユリカさんの魅力は分ったような気がする。
帰りのエレベーターで理由無く寂しかった。
今別れたばかりのユリカに会いたいと思った』
蘭がいなけりゃ、危なかったよ』と照れながら言った。

「それが分るお酒を飲む大人なら、絶対に足を向けるでしょう、さすがねユリカ」とユリさんも嬉しそうに微笑んでいた。
2人でTVルームに帰ると、マダムがいてエミが勉強、ミサとマリアはお昼寝中だった。
『エミ、ありがとう、お前は本当に凄い子だね』と言ってエミを抱き上げた。
「何、どうしたの？」と少し照れながら、嬉しそうに笑った。
「あれ、やってほしいの」とエミが私の耳に囁いた。私はエミを見て微笑んで。
『特別サービス』と言って、お姫様抱っこをしてやった。
エミは少女の笑顔で笑っていた。

「して、問題は解けたのかな」とマダムがユリさんに聞いた、ユリさんは微笑んで。
「羊水らしいですよ」とマダムに笑顔で答えた。
「そうかい、それだったか・・うんうん」とマダムも私を笑顔で見て、頷いた。
「梶谷さんが聞いたら喜びますよ、アフターは確実だわね」とユリさんも私を見て微笑んだ。
私はエミを降ろして、頭を大袈裟にかいて照れた。
でも羊水の答えには自信があった。

私はフロアーに行きハルカを探した、私の席でフロアーを見ていた。
集中した素敵な姿だった、私は声をかけずにハルカを見ていた。
「私に見惚れてるんでしょう」とハルカが前を見たまま微笑んだ。
《しまったハルカの視野は常人じゃなかった》と思い。
『寝てるのを、起こしちゃ悪いからね』と言いながら近づいた。
「ユリカさんの感想を述べよ」と振り返りニヤを出した。
私は、ユリカに話した独り言をハルカに教えた。

『羊水って言うんだって』と最後にそう言って、ニッを出した。
「羊水ぐらい知ってます、私も女よ」とニヤで返した。
「でも、なるほどって感じね、ユリさん喜んだでしょう」とハルカが微笑んで言った。
『真昼間、ユリさんと西橘を腕組んで帰ってきた』とVサインを出した。
「なんか、夜街にとどめを刺した感じね、四天女制覇したし」とハルカが笑顔で返した。
『その伝説の男が、最初に贈った源氏名を持ってるんだ、頑張れよ』とニヤで返した。
「なんか素敵に響くから、怖いよ」とハルカは笑っていた。
ハルカと予約確認して、タバコを買いに出た。気分は快晴だった。

私は夕食を3人娘とハルカと食べて、指定席に座ったのが7時30分だった。
準備を済ませた蘭が来て、ハルカの椅子を持って私の横に座った。
『指名したっけ？』とニヤで聞いた、蘭は笑顔で睨んで。
「私の他に誰を指名するんだい」とニッを出して、「ユリカを聞かせて」とフロアーを見て言った。
私はハルカの時と同様に、ユリカに言った独り言を蘭に話した。

「ありがとう、そして隠しててごめんね」と言って肩に乗ってきた。
『蘭が言ったんだろ、色んな女を感じろって・・俺はその度に気付かされるよ、愛するのは誰なのかを』と私もフロアーを見て言った。
「泣かすなよ、仕事前に」と静かに言って、目を閉じた。
四季が出てきて、カスミが出てきた時に蘭が目を開けた。
立ち上がり私に微笑んでフロアーに向かった。
蘭がフロアーに歩く背中を見送りながら。
《蘭は最高の副職だよ》囁いた。

女性が円になり、ユリさんが出てきた。
「今夜が満席記録に並びます、リアンがいた時の記録を皆さんで破りましょう」と薔薇の笑顔で言った。
「はい」と全員の気持ちが１つになった。
「今夜も開演しましょう」の声に、「はい」のブザーで答えた。
開演して３０分で８割の席が埋まった、マミはリンさんの所に来ていた。
マミは経営まで覚えるのかと関心していた、そしてハルカもそれを勉強していたと気付いた。
９時を過ぎたときカズ君が私の所に来て。
「よっしゃー」とＶサインを出した。
満席タイ記録をマークした瞬間だった、私も笑顔でカズ君にＶサインを返した。
それで女性に伝わったのだろう、全体の熱が上がり上昇をやめなかった。

その時マダムがやってきた。
「同伴の指名だよ」と笑顔で言った。
『えっ、俺？』と聞き返した。
「マミを送る時間までには戻りなよ、ローズリップで梶谷さんの指名や」と嬉しそうに微笑んだ。
『了解』と笑顔で返して、蘭にサインで自分を指差し、【指名】、を出して頭の上に王冠の形を指で書いた。
蘭は満開で微笑み、頷いた。
私はマダムに席を譲り、ローズリップに向かった。

ローズリップの重いドアを開けると、カウンター内の可愛い女性が微笑んだ。
「なにかしら？」と笑顔で言った。

『キングに呼ばれたの』と笑顔で返した。
「キング？」と可愛く考えた。
「もう、すぐそうやって問題出すんだから」とリアンが来て私に微笑んだ。
私の腕を取り、そのまま組んで。

「梶谷さんよ」とその子に微笑んだ。
「まぁキングなの、素敵ね」と私に微笑んだ顔が可愛かった。
『俺の、今夜の指名は君で決まりだ』と笑顔で返すと。
「１０年早い」とリアンが笑顔で引っ張った。
私は手前のＢＯＸの、お客と女性の笑い声を受けながら。
奥の一番眺めが良いＢＯＸに座る、キングの所に連れて行かれた。

「今晩は、キングご指名ありがとう」と頭を下げると。
キングが笑顔で、キングの隣の可愛い女性が驚いていた。
「おう、よく来たな、店は大丈夫か？」とキングが笑顔で返した。
『ユリにしっかり頼むって、言ってきたから大丈夫』とキングの前に座りながら、笑顔で返した。
キングとリアンが楽しそうに笑っていた。
「ユリってまさか？」と私をキングの隣の女性が見た。
『あぁ、ＰＧのユリだよ最近頑張ってるんだ』とニヤで返した。
「どう返して良いのか、分らない」と可愛く笑った。
その顔を見て、皆笑っていた。

私のコーラがきて、４人で乾杯した。
「さっそくで悪いが、聞かせてくれよユリカの事、リアンが教えてくれなくてな」とキングが聞いた。
『うん、まずキングが漠然と水と感じたことに凄いと思った、お世辞じゃないよ』キングが笑顔で頷いた。
私は再びユリカに言った独り言を、帰りのエレベーターの事まで話

した。
『羊水って言うの俺知らなかったよ、でも素敵だなって思ったよ』
と話し終わった。
キングが優しい笑顔で、右手を私に差し出した。
私も右手で強く握った、暖かく大きな手だった。

「ありがとう」と言ってリアンが私の頬にキスをした、私は動揺を隠して。
『俺に惚れると』まで言った時に。
「もう、火傷したよ」と熱い笑顔で返された。
「やっと引っ掛かりが取れたよ、さすが小僧だな」とキングも楽しそうに笑っていた。
キングの後ろにユリカの店の明かりが見えた。
《ユリカ元気かな》と思っていた。
夜街を見下ろす天空の要塞で、笑顔に囲まれながら。

どうしてだろう、私はユリカ事は書きながら、感情的になってしまう。

日記を何度も読み直し、その時の感情になると震える。

私がユリカと最後に会ったのは、それから5年後の大晦日だった。
冬の宮崎駅のホームでユリカが笑顔で囁いた、「忘れないでね」と言った言葉が今も響いている。

ごめんねユリカ何も返答出来なくて、寂しくて寂しくて言葉が出なかった。

でもね、ユリカ、今でもあの場所に行くと思い出すよ。

ユリカの可愛い笑顔だけは。

親友

両極にいる、しかし互いに認め合った。
相手に対し何の疑念も無かった。
炎が安心して燃えるための水。
水が安心して流れるための炎だった。

星空が眼下に見えるような感覚になる、天空の要塞のコックピットに座っていた。
笑顔で笑顔に囲まれていた、大きな安心感の中、熱を浴びていた。
「じゃあ、私を述べよ」と盛り上がってる途中で、リアンが私にニカを出した。
『絶対条件として、照れくさいけど、俺は蘭と誰かを比べた事が無い』リアンは微笑み頷いた。

『ユリカに会った今でも。
俺の外見的な好みも内側から出る雰囲気も、リアンが1番だよ。
この前焼肉屋でも言ったけど、蘭かいなければ絶対リアンを追い求めている。
リアンも勿論キングも、知ってるから言うけど。
俺はリアンに会うまで、カスミだと思っていた。
でもリアンの衝撃は怖い位だった。
その内包された熱に押された、そして心が魅入られたその瞳に。
絶対に今の俺じゃ無理と分っててても、俺は追い求めると思う。
全てを焼かれないと、諦められないと思う存在だよ』と笑顔でリアンを見た。

「ありがとう、良い答えや〜」と情熱の笑顔で返してくれた。

「魔法使いやもんな、小僧は」とキングが微笑み。
「ユリカにかけたのは、強力だぞ」と熱を高めてリアンが笑った。
『この前、蘭と焼き鳥屋に行った時、教えてもらった魔法の意味を。少し分った気がしたよ』と笑顔で返した。
「聞きたいね～」とリアンがニカで言い、キングが笑顔で催促した。
私はミノルの言った言葉を、笑顔で伝えた。

「なるほどな～、ミノルだろ」とキングが笑顔で返した。
『キングには叶わないよ』と笑顔で返した。
「なに言ってんだ、四天女制覇したくせに」とニヤニヤでキングが返した。
「それもユリカの内側に入った男は、お前が最初だと思うぞ」と笑顔のまま言った。

「そして羊水と聞いて、俺も行きやすくなったよ。
今までは嫌な事があった時にしか、行かなかったからな」とキングが笑った。

PGから3番が空いたと連絡があり、キングと2人で店を出た。
エレベーターまでリアンと、2人の女性が見送りに出た。
「ちょくちょく遊びにおいで、フリーパスやらか」とリアンが私に微笑んだ。
『駄目って言っても来るよ、リアンは蘭を追うための心の支えだから』と笑顔で返した。
「真面目な話、ホストにはなるなよ。怖いから」とリアンがニカで言った。
「小僧がホストか、やる時は金は貸すぞ、絶対成功するからな」とキングが笑った。
『スポンサーできちゃった』とニヤでリアンを見た。
「ニヤはやめろ、本気で怖い」とリアンが笑って、手を振って別れ

た。

キングと西橘を歩いていた、昼にリアン・カスミ・ユリさんと腕組んで。

夜はキングかベストなメンバーだなと、一人でニヤニヤしていた。

「俺も１つ教えてやるよ」とキングが私を見て、教えてくれた。

「ユリカが魅宴の面接に１８で来たとき、大ママは線が細くて大丈夫かと思ったらしい」私は頷いた。

確かにユリカは２８の今でも、小さくて可愛い感じだった。

「だがな話してすぐに採用したらしいよ、大ママの凄いとこやな」とキングが笑顔で私を見た。

私も笑顔で頷いた。

「そして、とっておきの源氏名をつけた、ユリカってのはな」と私を見て。

「百合が香るって書いて、百合香なんだよ。大ママはユリが欲しかったんだよな～」

「そして、ユリの香りがする女をやっと見つけたのさ・・それがユリカなんだよ」と笑顔で言った。

『なんか分る、素敵な話やね』と笑顔で返した。

ＰＧにエレベーターで上がり、入口でキングに礼を言って、カズ君に案内を頼んだ。

「次は当然、ユリカの所に行こうな」とキングが微笑んだ。

『すっごく、楽しみにしてるよ』と笑顔で返して頭を下げた。

私の指定席に座るマダムに笑顔で。

『マダム、すいません代わります』と声をかけた、マダムは笑顔で私を見た。

「梶谷さんは、本物の帝王やな・・またハルカを指名や」と３番を見た。

３番にハルカが笑顔で、キングに挨拶していた。

「ハルカにとって、どれだけプラスになるか」
「梶谷さんを知ってる客の、ハルカの評価がどれだけ上がるか」
「それを知っててやってるんだよ、ハルカが可愛いからね」と嬉しそうに私を見た。
『あそこまでの男になりたいな～』と私も3番を見て呟いた。
「期待しちょるかい、ワシが死ぬまでには見せてくり」とマダムは笑顔で言いながら、TVルームに戻った。

その日も、11時を過ぎても熱は下がる気配が無く、上がり続けていた。
3番は帝王と女帝の鎮座する席になっていた。
私は四季のサインが頻繁に飛んで、必死に繋いでいた。
《四季め意地悪してるな》と思いながら、ハルカの指定席で汗をかいていた。
マミを送る時間になって、やっと開放された。
マミと裏階段で通りに出た時に、笑顔で言った。
『今、危ない酔っ払いの集団が通ったから』とニヤで手を出した。
「こわ～い」とマミがニヤで言って、手を繋いでくれた。

「大ママからの指令、ユリカさんの件報告よろしく」と私を見て微笑んだ。
『なんか、凄いメンバーが全員が関わっていたのか～』とマミに笑顔で返して。
ユリカに言った独り言を、マミにも話した。
「素敵だね、本当に素敵な答えだ」と嬉しそうにマミが私を見た。
『マミ姉さんの時も素敵だったよ』と笑顔で返した。
「うん、ありがとう」と笑顔で裏ドアの前で手を振ったマミに、手を振って別れた。
PGに帰る途中、ユリカのビルの下で上を見上げていた。
《ユリカ元気かな～》と思って。そそり立つ塔を見上げていた、そ

の上の夜空に星は無かった。

「すご～く会いたい人でもいるの？」と声がした、横を見るとユリカが立って見上げていた。

私のその時の嬉しさは格別で、見上げるユリカを見つめていた。

『内緒だけど、このビルの最上階に、高所恐怖症の可愛い人がいてね』上に視線を移して、夜空に言った。

「そんなに、可愛いの」とユリカも夜空に囁いた。

『絶対誰にも言わないでね、可愛すぎるほど可愛いんだよ』と夜空に微笑んだ。

「そんなに可愛いんだ～」とユリカも夜空に微笑んだ。

『ここを通ると、その人が元気かな～っていつも思って、こうして見上げてるの』と夜空に響くように囁いた。

「そっか～、いつも考えるんだ」と囁いてユリカが静かに、私の手を握った。

『うん、その人は上手く言えないけど、特別なんだ』と手に少し力を入れて。

『だから俺は、ユリカって呼ぶんだ』と言ってエレベーターに歩いた、ユリカの爽やかな笑顔を見ながら。

「見上げて思った時は、必ず分るからね」とユリカがエレベーターに乗り、可愛く微笑んだ。

『ごめんね、一日何回もあってうるさいかも』と笑顔を返して、手を振った。

ユリカの笑顔を、エレベーターの扉が隠した。

《やっぱ少し寂しいかな》と思いながら、《ラン～》と言いながら足早に帰った。

ＰＧの熱は結局終了まで継続した、そして８人衆と蘭が終礼の１０番席に集まった。

「今夜は自白あるのかい？」とカスミが私に不敵を出した。

『今日はすっっっっごい可愛い人を抱っこしました』とニヤで言った。
蘭も隣で満開ニヤで聞いている。
「まって、心の準備がいる人じゃないよね？」と美冬がニヤで返した。
『準備しなさい』とニヤで返した。
「でも大丈夫か、噂ではそういう事の出来ない人だから」と美冬が一人で納得した。
「美冬述べよ」と蘭がニヤ全開で美冬を指名した、私もニヤしていた。
「いよいよ、ユリカさん」と美冬が答えた。
「ピ～ン～ポ～ン」と蘭が笑顔で叫んだ。
「お前、リアン姉さんの次にユリカさんにまで、何か権利貰ったのか？」カスミが不敵全開で見た。
『お店のフリーパスと、呼捨てだけだよ』と私も全開ニヤで答えると。

カスミが恐ろしい程の、全開不敵で立ち上がり、私の顔を覗き込んだ。
「隊長気をしっかり持って、見てください・・これを」とカスミが蘭にニヤを出した。
蘭が私の顔を見ると、私を睨み。
「だれーーーーーがした」と蘭が叫んだ。
私は何かまだ分からなくて、唖然として蘭を見ていた。
残りの7人も見て、全開ニヤを出したところで。
私は気付いた《しまった～》と心で叫んだ。
『リアンが、お礼のチュってしてくれた』と反省を全面に表して、蘭を見た。
「リアン姉さんなら、ギリギリよし」と言って私に近寄り、反対側にキスしてくれた。

私は嬉しくて、ニヤニヤしていた。

「じゃぁ皆に提案します、私明後日靴屋休みだから」蘭は嬉しそうに、大きな声で。

「私が安くしてもらうから、明日満席記録の更新を、今までの記録保持者に、伝えに行きたいと思いま～す」と言った。

８人衆の顔が、華やいだ笑顔になって、次の言葉を待った。

「明日、店が終了してから～・・ローズリップに行く人」と蘭が手を上げた。

「は～い」とハルカ以外楽しそうに手を上げた、「ハルカ、どうした？」と蘭が優しくハルカを見た。

「未成年だから」と寂しそうに答えた、蘭が満開の笑顔でハルカを見て。

「中坊も行くんだよ、酒を飲まなければＯＫに決まってるだろ」とハルカにウィンクをした。

「は～い」とハルカも満面の笑みで手を上げた。蘭が私を笑顔で睨んだ。

『針のむしろ状態になりますかね～』と恐々蘭を見た。

「正解」と満開で微笑んで、両手で銃を作って私に向けた。

私はニヤで両手を上げた、蘭の楽しそうな笑顔を見ながら。

「会費はいりませんよ、私も混ぜてくれるなら」とユリさんが薔薇の微笑で歩いて来た。

「えっ、ユリさんも参加してくれるんですか？」と蘭が嬉しそうにユリさんを見た。

「皆さんに特別ボーナスも別に考えています、頑張ってくれたから」と全員に微笑み。

「それと明日のリアンへの報告には私も行きますから、参加費は無料ですよ」と薔薇になった。

「やった～」と８人衆は最高の笑顔でユリさんを見た。

「じゃあ、フリーパスの人予約よろしくね」と薔薇の笑顔で私を見た。
『了解です』と笑顔で返した。
全員が消えていく銀の扉を見ながら、最高のメンバーが揃ってる。
奇跡のように、呼び寄せられたようにと思っていた。

その時代、大ママとユリさんは別格だった。
女帝の称号を、関係者全員が与えていた。
次世代のリアンとユリカはその例え通り、【炎】と【水】だった。
両極端でありながら、本当の親友だった。
私は今に至るまで、この2人と並ぶ女性同士の親友は【ケイとマミ】しか知らない。

ユリカが消え、リアンが名実とも夜街トップになった時。
私の前で号泣しながら、リアンがこう言った。
「何もいらない、全部捨てていい・・それでユリカに逢えるなら」
と泣いていた。
そのリアンを抱きしめて、ユリカを想っていた・・逢いたくて。

合鍵

大切に扱わないと傷ついてしまう、最悪の場合壊れてしまう。
取り扱い説明書は無い、だから試される技量も心も。

静寂の広い空間に取り残されて、美しい１０人の背中を見ていた。
一人一人が今夜の充実感を漂わせ、心残りは無いと背中で語っていた。
明日からの新しい伝説の舞台の幕開けを、待ちわびるかの様に華やかな後姿だった。
私はＴＶルームに戻り、エミを抱きサクラさんをタクシーまで見送った。
ＴＶルームに戻ると、ユリさんと蘭とハルカが帰ってきていた。

ハルカがマダムに明日の夜の事を話していた、笑顔だった。
「ハルカ、今お前はどんなに良い時間を過ごしているか分ってるな」
優しいマダムの言葉だった。
ハルカも真顔で頷いた。
「お前の芯から真面目な事は良い事や、でもこの商売をやるのなら破らないといかん時もある」
「間違っていると分って破れ、それがお前には大事な事や」とマダムは笑顔になった。
「はい」とハルカも笑顔で頷いた。
「良い事ばかりする中学生じゃない、良い言葉やったぞ」とマダムが私を笑顔で見た。
私は照れた笑顔で返した。

私がマリアを抱き皆でエレベーターに乗った、ユリさんとマリアを見送り蘭とタクシーに乗ると。

蘭が笑顔で肩に乗ってきた、蘭の髪の香りがしてきた。
「ユリカ姉さんの事本当にありがとう、私にとっては恩人なの」と囁いた、深く優しい響きで。
「ユリさんやリアン姉さんには、少しづつお返しできてるけど・・ユリカ姉さんには何も出来ないと思ってた」
「今度のあなたの話で、ユリカ姉さんが来た時本当に嬉しかったよ」と言って静かに目を閉じた。
タクシーがアパートに着いて、降りた時に蘭を抱き上げた。
蘭が嬉しそうに微笑んでいた、そして私の頬にもう一度キスをしてくれた。
「リアン姉さんの1回には、2回で対抗しないと」と言ってニヤを出した。

蘭が化粧を落とし、パジャマを着てベッドに入った。
私は電気を消して窓を開け、定位置に座った。

「私、弟を亡くした時泣けなかった・・あまりの悲しみに泣けなかったの。
そして、PGに引っ張られた日、偶然ユリカ姉さんに会って、2人で話す時間があったの。
ユリカさんと世間話してて、号泣したの何故か分らずに、でも心から安心して泣けたの。
そして泣き終わった時に、ユリカ姉さんの笑顔を見て。
救われた、本当に心が救われたのよ・・だからPGでやれたと思ってる。
今日のあなたの回答、素晴らしかったし嬉しかった。
あなたの言った、羊水を世界中の全ての人が否定しても。
私は羊水だと叫べるよ」と静かに言った。

『ありがとう、その言葉も土曜の夜、私に帰れって叫んだ言葉も』

と蘭を見て微笑んだ。
真夜中の2人だけの、優しい時間が流れていた。
私は蘭の額に手を置いた、蘭は静かに目を閉じた。
「ユリカ姉さんと会える時間が有ったら、できるだけ会ってあげてね」と囁いた。
『やきもちは？』と優しく囁いた。
「妬くに決まってるでしょ、その権利は私にしかないんでしょ」と目を閉じたまま微笑んだ。
『そうだよ、それだけは蘭の永遠の権利だよ』と囁いた。
「うん、お休み」と言って静かになった。
蘭の寝顔を見ていた、特別の中でも最も特別な存在を。

翌朝起きて快晴を確認した、《満席新記録いけるな》と思っていた。
洗面所に行き、歯を磨き顔を洗って冷蔵庫を開けた。
鮭の小さな切り身が有ったので、ご飯を確認すると2人分は残っていた。
《今朝は和食でいくか》と一人でニヤを出していた。
「もしかして、和食なの！幸せ～」と言いながら蘭が洗面所に消えた。

私の朝の和朝食を見て。
「朝から泣かすなよ～」と微笑んだ、私はVサインで返した。
「今夜楽しみやね～終わってからも」と蘭が食べながらニヤで私を見た。
『8人衆は凄く嬉しそうだったね、ユリさんの参加とローズリップ』と笑顔で返した。
「初めて行くんだろうし、ユリさん参加となれば四天女の2人が揃うしね」と蘭も嬉しそうだった。
「まぁ誰かさんみたいに、四天女完全制覇をする奴もいるけど」と

ニヤで来た。
『俺は四天女より、最高の副職が一人いればいいよ』とニヤで返した。
「よし」と言って満開になった。

蘭を見送り朝の仕事をして、日記を書いていた。
ユリカの事を必死で書いたが、納得の出来るものは書けなかった。
１０時を過ぎた頃、出勤した。快晴の中、空に浮かぶ入道雲を追いかけるように。
靴屋を覗き蘭に手を振って、誰も居ないゴーストタウンをＰＧを通り越した。
ユリカの店のビルまで来て、見上げた塔のその上に、要塞のような入道雲が流れていた。
《ユリカ元気かな～》と心で呟いた、本心でそう思えた。
暫く見上げ、ＰＧに向かった。
《まだ誰も来てないだろうな～》と思いながら。

「まだ、今日一回だよ～」と後から声がした、その声で分っていた。
『もしかして、超能力者だねユリカ』と笑顔で振向いた。
可愛いユリカが、淡いピンクのワンピースで立っていた。
フランス人形のような可愛い顔で。
「うん、誰にも内緒だよ」とニヤをして、「お店でジュースでも飲む？」と爽やかに笑った。
『もちろん、いただきます』と言いながら、歩み寄り手を出してみた。
「生意気が加速してるの」と笑顔で繋いでくれた。
『昨夜すごく可愛い人の方から、繋いでくれたから』とニッで返した。
「忘れてほしい気もするんだけど」と可愛く照れたユリカを引っ張って、エレベーターに乗った。

『忘れるなんて無理です、あんな素敵な事』とユリカに微笑んで返した。

昨日と同じＢＯＸにユリカと向かい合って座った。

『ユリカってもしかして、この広い店の準備一人でしてるの？』とコーラを飲みながら聞いた。

「好きなのよ、掃除とか食器洗うのとか」と爽やかな笑顔で返してきた。

『良い奥さんになるね、旦那幸せやな～』私は思ったままを口にした。

「でも、いやらしい事できないよ・・不幸でしょ」と少し暗い目になった。

《そうか！》と私はここで気が付いた、未熟だと反省していた。

『ユリカ、俺未経験だから分らないけど』とユリカを見た、私を深海の深さで見ている。

『今、蘭と同棲してて、蘭の事勝手に愛してるんだ』と少し照れた。

「知ってるよ」とユリカに爽やかな笑顔が出た。

『昨日言ったみたいに、今でも心は激しく求めるんだよ。

でも今はたとえ添い寝してても求めない。

求めて蘭が許したとしても、今の関係が終わりそうで。

それに比べればそんな事は、大した意味がないんだよ。

たとえ一生出来なくても、一生側にいれるなら・・出来なくていい。

まぁ、未経験の子供の言うことだけどね』と言って照れた。

「どうして、そんなに優しいの」と水の中で子守唄が響いてきた。

私は完全なリラックスに入るのが分った、最良の時間が来た。

『ねぇ、ユリカ・・昨日２度目に抱き上げられて嫌だった？』と笑

顔で聞いた。
「初めて、気持ち良いと思ったよ」完全に子守唄の状態になった。
『少しづつ、愛してくれる人となら絶対大丈夫だよ、絶対にいるよ』と意識して優しく言った。
『ユリカの方が気にし過ぎなとこも、あったんじゃないのかな、自分が今出来ないと思うから特に』と微笑んだ。
「そうなの・・そう思うの？」と優しく響いてきた。

私は立ち上がりユリカの側に行き、屈んで微笑んだ。
『ユリカ目を開けてろよ』と優しく言って、ゆっくりと抱き上げた。ユリカは目を閉じずに、自然に私の首に手を回した。

『また、成長したね・・ユリカ』と至近距離のユリカに微笑んだ。
「そうなの？」と絶品の可愛さで微笑んだ。私はユリカをただ見ていた。
『ユリカ、今度好きな人ができたら言うんだよ、最初に・・少しづつ愛してほしいって』と微笑んだ。
「私も家出少年拾うかな」と爽やかな笑顔が出た。
『俺みたいな、ナイスな奴はいないよ』とニヤで見た。
「生意気ね」と言って私の顔に近づき「私、軽いからもう少し大丈夫？」と耳元に囁いた。
『１２時５０分までは、大丈夫』とユリカの耳元に囁いた。

ユリカは静かになっていた、顔は見えないが眠ってるように静かだった。
静寂の空間で、私はユリカの吐息と温度と重みだけを楽しんでいた。
「ユリカいる～」と聞きなれた声が入口から響いた。
「入っていいよ～今リハビリ中～」と私に抱かれたまま、入口に返事して。
可愛いニヤで私を見た。

「リハビリ？」と言いながら、リアンが入ってきて。
この状態を見て、大袈裟に驚いた。
「お邪魔だったかな、エース」とリアンが私を見て、ニカを出した。
『今から次の段階を、２人で研究しようと思ってたのに』とニッで返して、ユリカを優しく降ろした。
「ね～、ドキドキしてたのに～」とユリカもリアンにニヤをして、リアンの飲み物を取りに行った。
「今のユリカだよね？」と私に聞いた。
『魔法使いと呼びなさい』とニヤで返した。
「本当にそう思えて来るから、怖い」と獄炎で笑って、ＢＯＸに座った。
私も向かいに座った。

ユリカがリアンのジンジャーエールを持ってきて、リアンの横に座った。
「なんか悪戯されなかったか？」とリアンがユリカにニカで聞いた。
「大丈夫よ、私これでも水のユリカよ」と爽やかな笑顔で返した。
リアンも嬉しそうに笑顔で返した。
「そうそう、今度の西橘祭りの実行委員の下田のオッサンがね」とリアンがユリカに切り出した。
話の内容は、お祭りで各店代表の若手を一人出して、美人コンテストをしたいとの依頼だった。
審査方法は祭りの男性客の投票で、祭りを盛り上げるために協力してほしいと。

「四天女がＯＫすればなんとかなるって言われてね、なんか見せ物みたいで嫌なんだけど」
「無下には断れなくて、ユリカどう思う？」と真顔で聞いた。
「ん～、確かに若い子出して見せ物には抵抗あるけど・・ちゃんと選んで出せばなんとかなるかもね」とユリカが笑顔で返した。

「まぁ、問題は魅宴とＰＧなんだけどね」とリアンが私を見た。
『ユリさんは分らないけど、出すときはＰＧは勝ちに行くよ』とニヤで返した。
「カスミか！そりゃ～強敵やな～」とリアンが笑顔で返した。
『まぁ、ユリカが２０歳と偽って出てきたら、怖いけどね』と２人を見てニヤを出した。
「あぁ、その手があったね。私はＯＫよ」とリアンにニヤでユリカが返した。
リアンはそのニヤを不思議そうに見て。
「じゃあ、私もそれで出よっと」とリアンがニカで私を見た。
『リアン、もう少し自分を見つめ直した方がいいぞ』と私はリアンにニヤで返した。
「あんた昨夜、見た目は私が１番好きだって言ったよね」と強力なニカで来た。

『それと見える年齢は別、俺は３０歳のリアンの事を言ったんだよ』とニヤニヤで返した。
「２個も多いぞ、それにユリカも同じだぞ」と楽しそうにリアンが突っ込んだ。
「仕方がないわ、リアンは経験豊富だからね～」とユリカが私にニヤをした。
『怖いね～』と私もユリカにニヤをして、リアンを見た。
「私の大事なユリカを、どこまで進化させるの」と嬉しそうにリアンが笑った。
私の楽しい時間が流れていた、炎と水に囲まれて。
そして最高のプレゼントを貰う。

昼食をユリカが馳走してくれ、食べ終わり私の時間が近づいた時。
ユリカがテーブルに鍵を出して、私に微笑んだ。

「早く出てきて、ＰＧが開いてなかったら、ここで時間を潰していいよ」とユリカが鍵を見て、私に可愛く微笑んだ。
『本当にいいの、最高だよありがとう』と満面の笑みでお礼を言った。
私は本当に嬉しかった、ユリカのその想いが。
ユリカもリアンも、笑顔で私を見ていた。

鍵を受け取るとき、私は震えていた。

そのユリカの気持ちが嬉しかった、そしてリアンの笑顔も。

私の成長の起爆剤になるユリカ、そして強力に後押しをするリアン。

私は幸せな少年だった、蘭という愛すべき絶対的な存在に出会えて。

人を愛するという事を教えてくれる、教師達に囲まれていた。

大切な時間の中で・・・。

純白

備わっていたのか、覚えていったのか・・・分らない。
考えた事もない、理解しようと思うこともない。そんな事は無意味だと笑う。
常識の遥か先、色として強く主張する純白。会えば誰でも必ず感じる、その圧倒的癒しを。

真夏の快晴の空に入道雲が飛行していた、海へ誘うように流れていた。
私はニコニコ顔でユリカに貰った合鍵を、キーホルダーの蘭の部屋の鍵の横に付けた。
『仕方ないな～、ユリカの掃除手伝ってやるか』と笑顔でユリカを見た。
「作戦、ばれたのね」とユリカが可愛く笑った。
『椅子でもテーブルでも、ユリカでも運ぶよ』と笑顔で言いながら、立ち上がった。
「特に私を運んでね、次の段階に」とユリカも爽やかな笑顔で返した。
『そんな急ぎ過ぎなのが、ユリカの悪いところだ』とユリカの頭に手を置いて、ニヤで返した。
「はい、気をつけます」と可愛いく舌を出した。
「どっちが１５年上なのやら」とリアンも立って、私に強く腕を組んだ。

ユリカに見送られ、リアンとエレベーターに乗った。リアンのニヤニヤ顔が真横にあった。
『あっそうだリアン、ローズリップ予約入れて』と胸を押し付けるリアンに言った。

「もちろん、誰かな？」と熱を高めて私を見た。
『蘭とＰＧの女性９人、それとナイスな中学生一人の１１人』と微笑んで返した。
「うそ、うれし～」と擦り寄った、『胸押し付けて、楽しんでるだろう』とニヤで返した。
「ばれたか、ユリカにばっかり優しいからね～」とリアンもニカで微笑んだ。
『やきもちか～、蘭はやっぱりリアンに似てるな』と笑顔でリアンを見た。
「そう言われるのが、私には最高の褒め言葉だよ」と言って笑顔で強く密着した。

『あっそうそう、女性の中にはユリさんも入ってるから』とリアンと別れる時に、ニヤで言った。
「本当に本当の話やね」とリアンが強烈な炎を出して、私に微笑んだ。
『嘘なんか言わないよ、早くグラスの汚れとかチェックしなよ、業者任せなんだから』と笑顔で返した。
「最高や～、がんばる～」と嬉しそうに手を振った。
ＰＧの裏階段の方に細い路地を曲がると、ユリさんとマリアが屈んでビルの間を覗いていた。
マリアが振向き「チャー」と言ったとき、マリアの瞳から涙が溢れた。
私がその時どんなに慌てたのか表現できない、駆け寄って。
『どうした、マリア』と膝をつきマリアを抱きしめた、マリアが震えていた。
「あの子なの」とユリさんが私に目でそれを示した。
狭いビルとビルの間の少し入った所に、一匹の白い子猫がこっちを見て、必死に威嚇していた。
「昨日から居て、ハグレの野良ちゃんみたいなのよ」とユリさんが

困った顔で私を見た。
「マリアがもう限界みたいで、家では飼えないしどうしようかと思って」とユリさんが寂しそうに言った。マリアも天使の潤んだ瞳で私にしがみ付いている。

『良かった～マリアの涙見て心臓止まるとこだった、全然問題ないです』と言ってマリアを見て。
『マリア、大丈夫だよ』と意識して笑顔で優しく囁き、立ち上がりビルの間に歩み寄り。
『おい、お腹空いてるな・・怖くないから』と可愛い子猫の目を見ながら手を伸ばした、豊兄さんの教え通りに。
子猫を掴んだ時に、子猫が強く私の指を噛んだ。《元気はあるな》と思い、ほっとしていた。
私が子猫を抱くと、マリアが全開の天使レベルで微笑んだ。
『私の知り合いの絶対に可愛がる人の所に、猫がいなくなったのを思い出しました』と笑顔でユリさんに言った。
「ありがと～、良かった～」と薔薇の笑顔が出た。「私が車で送るわ」と笑顔を絶やさずに言った。
『それなら、絶対に引き取ってくれます』とニヤで言った。
「私の知ってる人かしら？」とユリさんが微笑んだ。
『生臭な人』とニヤで返した、「素敵ね、良かったね～」とユリさんが子猫を笑顔で撫でた。
不思議に子猫は大人しかった。マリアが私を下から引っ張った、天使の笑顔で。
私は屈んでマリアに見せた、マリアは子猫の目を見ながら微笑んで。
「ねんね」と言いながら頭を撫でた、子猫は静かに目を閉じた。私はマリアの天使の微笑を見ていた。
心が大きく震えていた、その形容し難い不思議な力に触れて。
「私が上がって、ハルカにこの事言ってくるから、マリアと待って

てね」とユリさんが薔薇の笑顔で言って、裏階段を上った。
私は裏階段の日陰に座って、子猫を天使の笑顔で見ているマリアを見ていた。子猫は眠っていた。
ユリさんがダンボールの空き箱を持って帰ってきた。
私がダンボール持ちと子猫を抱いて、ユリさんがマリアを抱いて駐車場に向かった。
ユリさんが鍵を開ける車を固まって見ていた、真っ赤なフェアレディーZだった。
「あら、初めてだったかしら？」と固まる私に薔薇で微笑んだ。
『あまりにも、似合いすぎて怖い』と笑顔で返した。
「私、一人の時はスピード狂なのよ」と薔薇で笑っていた。
私は子猫をダンボールに入れた、子猫は起きなかった。
マリアを抱いて助手席に座った、初めてのZに私は興奮していた。

真夏の光の中、真っ赤なZは快調に走っていた。輝くボディーに薔薇を乗せて。
途中でユリさんが子猫のミルクを買って、マリアに猫ジャラシを持たせた。
玉砂利をゆっくりと入り、蘭もカスミも止めた所にZを停めた。
楠木までマリアを抱いて、ユリさんがダンボールを持っていた。水の入った牛乳ビンだけが残っていた。
ユリさんが歩み寄りバッグから一輪の真っ赤な薔薇を、牛乳ビンに刺して大きな石に手を合わせた。
マリアも降りてユリさんの横で、ユリさんを真似て手を合わせた。
ユリさんが立ち上がり振向いて、薔薇の笑顔で頭を下げた。
「まさしく、この寺３００年の歴史で一番お美しい方がおいでじゃ～」と生臭の弾む声が聞こえた。
私はその弾むような声を聞きながら、マリアを抱き上げて振向いた。
和尚はマリアを見ていた、優しく深い目だった。マリアは和尚に天使を振り撒いていた。

「美味しい草もちでもどうかな」とユリさんを満面の笑みで誘った、ユリさんも微笑を返して。
「ありがとうございます、和尚様に頼みがあって参りました」とユリさんがダンボールをを持ち歩み寄った。
「全然構わんよ、ちょうどおらんなって、寂しく思っておったから」と和尚はダンボールの中を見ずに、笑顔で受け取った。
「良かった、本当にありがとうございます」とユリさんが薔薇で微笑んで頭を下げて、和尚に並び歩き出した。
私は和尚の見たことも無い笑顔を見ながら、マリアを抱いて後に続いた。
本堂の広い縁側の下で、子猫のミルクを作り飲ませていた。元気良く飲む姿を、マリアが微笑んで見ていた。
ユリさんは本堂の奥の御仏の前に座り、瞳を閉じて手を合わせていた。
美しい姿だった、正座する背中の美しさに見惚れていた。あまりにも絵になる姿に。

そしていつものちゃぶ台でお茶を入れながら、和尚が嬉しそうにユリさんを見ていた。
ユリさんがちゃぶ台に行き、楽しそうな和尚と談笑していた。
私はマリアに猫ジャラシのやり方を教え、楽しそうに子猫と遊ぶマリアを見ていた。
子猫も楽しそうに遊んでいたが、疲れたのか本堂に少し入った所で丸くなり眠った。
その安心して眠る子猫を見て、マリアが私に天使全開の笑顔で抱っこを要求した。
私はマリアを抱き上げて、ちゃぶ台に向かった。マリアの天使を浴びながら。
私がマリアを抱いて座ると、アリアが和尚に歩み寄り和尚の膝にチ

ョコンと座った。
「ワシは初めて悔しいと思いました」と和尚がユリさんを見て語った。

「時に逆らえない事が、この子の大人になった姿を見れない事が」
静かにマリアを抱きながら。
「だが、こんな子供にこの歳で出会える事に感謝もしました、間に合ったと思いましたよ」と最後はユリさんに笑顔を見せた。ユリさんも薔薇の微笑で和尚を見た。
「小僧、お前はもっと自分を信じろ・・お前がこの子を抱く姿に、ワシは感動さえしたぞ」と和尚は優しく私に言った。
私はマリアを見て、頷いて答えた。
和尚にユリさんと礼を言って、立ち上がると和尚はマリアを抱き上げて。
「いつでも猫ちゃん見においで」と笑顔のマリアに囁いた、マリアは天使の笑顔で。
「おしょ」と言って、和尚の皺だらけの頬に両手を当てた、和尚の目は潤んでいるように見えた。

和尚に見送られ、Zは帰路についた。ユリさんの微笑を連れて。
「本当に素敵な人、梶谷さんが恩人と言うのも分りました」と前を見て嬉しそうに呟いた、薔薇の微笑みのまま。
「サーファーさん、クラゲはもう出ましたか？」と薔薇の笑みでユリさんが聞いた。
『快晴の浅瀬なら、まだ大丈夫ですよ』と笑顔で返した。マリアは私の腕の中で眠っていた。
「3人娘の思い出第二段、動向してもらえる」と前を見ながらユリさんが言った。
『もちろん、喜んで行きますよ』と笑顔で返した、薔薇の横顔に。
快晴の強い光を受けた真っ赤なボディーが乱反射して、楽しい時の

方向にハンドルを切った。
運転する薔薇はどんな時にも姿勢を崩さない、乱れるという言葉が存在しない。
唯一無二の存在、最高で最良の生き方の憧れだった。今も追い求める、精神世界。

私の腕に眠るマリアは、その存在意味さえ感じさせる純白である。

そして成長過程でも、何色にも染まらずに純白だった。

いや正確には純白に純白を、何度も重ね塗りしていた。

絶対的な癒し、マリアはその内包する力を失う事はなかった。

会えば誰でも必ず感じる、純白の天使マリアを・・・。

記録

自分に正直でありたい、難しいことだ。
誤魔化したり、言訳したりはできる。でも嘘はつけない、自分にだけは。

街路樹の影がオアシスのように見える、灼熱の道を車体を熱しながら走っていた。
低い車体が路面の熱を浴びても、運転する薔薇は涼しげだった。
「今夜は遅くなるから、明後日にしましょう」と私見て薔薇で微笑んだ。
『了解です。ユリさんも水着、着ますか？』と私は初めてユリさんにニヤを出した。
「もちろん。私、泳ぐの上手いのよ」と前を見ながら微笑んだ。
『楽しみや～』と私も前を見ながら、ニヤを出していた。
「ハルカと、できればウミちゃんにも手伝ってもらいますね」と私を薔薇の微笑で見た。
『ウミは喜んで、泣きますよ』と私はウミの泣顔を思い出していた。
車は橘通りで止まり、準備に帰るユリさんと別れた。マリアは眠ったままだった。

ＴＶルームには誰もいなかったので、フロアーに行った。
ハルカが日南デートの時のワンピースを着て、背中を向けて立っていた。
『ケイ』私がそう呼ぶと、ハルカが驚いて振向いた。
『やっぱり、その服が一番のお気に入りだったね、可愛いね～』とニッで言った。
「偶然よ、数あるコレクションの中から偶然なっただけよ」とニヤで返した。

『も～照れ屋さんなんだから～』とニヤで返した。
予約確認をしながら、ハルカから漂う微かな香水の匂いを感じていた。
『そんな娘に育てた覚えはないよ、香水なんか１０年早いよ』とマダムを真似た。ハルカは私の顔の前に手を広げて。
「それだけはやめてって、言ってるじゃない」と必死に笑いを我慢していた。

私はタバコを買いに出て、ユリカのビルの前で行きと帰り、２回見上げて呟いた。
それからハルカと消耗品を買いに出かけた。
私はトイレットペーパーを両手に持たされて、一番街を歩いていた。
「ちょっと靴屋に寄るね」とハルカがニヤで私を見た。
『俺、帰っていい？』とウルで返した、ハルカがニヤをやめずに。
「まだ終わってないから、駄目～」と足早に靴屋に入った。
私は靴屋の外で、蘭と楽しそうに靴を選ぶハルカを見ていた。

ハルカが靴の袋を持って、蘭と一緒に出てきた。
「今日は夕方寄る暇ないから、自白するなら今述べよ」と蘭が笑顔で私を睨んだ。
私はニヤを出しながら、キーホルダーの鍵を見せた。
「何・・どこの鍵？」と蘭が鍵を見ながら聞いた、ハルカも鍵を見ていた。
『ユリカさんの店、早く街に来たら使っていいって』と全開のニヤを出した。
「えっ！」とハルカが驚き、蘭は満開の笑顔になった。
「ハルカごめん、私ＰＧを辞めないといけなくなった」と蘭がハルカをニヤで見て。
「店を持つよ、合鍵がいるから」と笑顔で言った、「残念です」とハルカも笑顔で返した。

「今夜、ここだけの話だから誰にも言うなよ」と蘭が私にニッを出して。
「今夜のローズは四天女が揃うからね、覚悟しな」と蘭が全開ニヤで微笑んだ。
『俺の地獄絵図なの？』と私がウルで返すと、「ピンポ～ン」と笑った。

俯いた私は、ハルカに引かれるように靴屋を後にした。
「楽しみ～、なんで毎日がこんなに楽しいの～」と言う、蘭の弾む声に送られながら。
「皆、驚くよ～四天女揃いなんて」と楽しそうにハルカが笑った。
『リアンとユリカが怖い、蘭のやきもち面白がって、多分意地悪する』とウルでハルカを見た。
「ユリカさんも？」とハルカが聞いた。
『あんなに可愛いのに、やる時はやる・・水のユリカ』とニヤで返した。
「でも合鍵見て、蘭姉さん嬉しそうだったね」とハルカが私に微笑んだ。
私も蘭の合鍵を見た時の、予想通りの満開の笑顔が嬉しかった。

私はハルカの後を、執事のように付いて回り。呼込みさん達に、大声で応援されていた。
「怖いんだけど、顔が広すぎて」とハルカが私を見た。
『エースと呼ばれていますから、命名は大ママだよ』とニヤで返した。
帰り道で、またユリカの店の前に来て、見上げながら呟いていた。
「どうしたの？」とハルカが見上げる私に聞いた。
『ちょっと待って、これしないと落ち着かないの』と見上げながら言った。
「４回目、ありがとう」とユリカの声が聞こえた。

「おはようございます、ユリカさん」とハルカが慌てて頭を下げた。
「おはよう、ハルカ。デビューおめでとう、遅くなったけどご祝儀」と笑顔でハルカに差し出した。
「ありがとうございます、本当に嬉しい」と笑顔で頭を下げて、受け取った。
ユリカも優しくハルカを見ていた。

『ユリカはやっぱり、超能力者だね』とユリカにニッで言った。
「うん、スプーンも曲がるよ」と可愛いニヤで返された。ハルカが不思議そうに見ていた。
『よし、その芸で俺と世界中で稼ぐか』とユリカに近寄ると、爽やかな笑顔で。
「優しく教えてね」とユリカがニヤで来た。
『ゆっくりと時間をかけるよ』と大きな目を見てニヤで返した。
ユリカの楽しそうな顔と、ハルカの驚いた顔を楽しんで。ユリカに手を振って別れた。
「本当に今夜、地獄絵図だね〜」とハルカがニヤで私を見た。
『作戦なんだよ』とニヤニヤで返した、「なんの？」とハルカに突っ込まれた。
『それだけは言えない、蘭の靴屋休み前日しかチャンスがないんだから』と真顔を作った。

夕食をハルカと3人娘と食べて、指定席に座った。
フロアーはいつもより緊張感に溢れていた、静寂の中目を閉じて瞑想に入った。
マリアを想っていた、蘭の泣いた時・ウミの号泣の時、そして今日の子猫を眠らせた時。
どうしてだろう、マリアは絶対に考えずにやっている。
マリアの可愛い天使の笑顔が浮かび上がると、《何も考える必要はない》と思えた。

「誰の事考えてるの？」と隣で蘭の声がした。
『マリア、今日またマリアの不思議な力を見たから』と目を開けて、蘭を見て微笑んだ。
「合鍵、凄いね～」と私に微笑んだ、「嬉しかったんだよ、本当は」と言いながら肩に乗ってきた。
『今夜のローズは思いっきり飲んでいいよ、必ず俺が連れて帰るから』と優しく囁いた。
「うん、最後は私に帰るもんね」と蘭が優しく囁いた。
『蘭以外に俺の帰る場所なんかないよ』と私も蘭に囁いて返した。
「うん」と微笑んで、静かに目を閉じた。

静寂のフロアーに円を作った女性達は、全員集中していた。ユリさんが来て、全員を見た。
「今夜ＰＧの新しい歴史が刻まれます、でも・・いつも通りでいきましょう」と微笑み。
「今夜も開演しましょう」の言葉に、「はい」のブザーを鳴らした。客足は順調で、９時前には３番を残すだけとなった。３番は相当の客じゃないと案内されない。
そして９時になった時現れた、キングが和尚を連れて来たのだ。
私は全員に見えるように、Ｖサインを出した。熱が一気に上がった。３番にはカスミとハルカが付いて、和尚がまたカスミの胸を堂々と覗いていた。
「やったね」とユメが来て微笑んだ、『皆凄いよ、誰がかけても出来なかったね』と微笑んで返した。
「うん、６番の若者泥酔気味、チェック」と笑顔で言って戦線復帰した。

ＰＧの８月伝説の１つ目が今達成された、しかし熱は冷めることを認めない。
走り出した挑戦者は、止まる事を認めない。全員が集中をしている、

その姿が美しかった。
小さく狭い世界の、大きな偉業を成し遂げても、それは通過点だと笑っていた。
キングと和尚が帰るとき、挨拶に行った。
「ユリカに会ったよ、ユリカをどこまで連れて行くんだ」とキングが笑顔で囁いた。
「ユリカが望む、俺が出来る最高の地点までは、やってみるよ・・ユリカも特別な存在だから」と笑顔で返して、笑顔のキングを見送った。

バルコニーに出ると、熱帯夜の夜空に星が瞬いていた。
何万年も旅をして届く光を見て、気分が高まった。
《残り日数を数えるのはやめよう、意味が無いから・・今を全力で生きよう》そう誓っていた。
南風が吹いてきて、潮の香りがしてきた。寂しさは無かった。
私には帰る場所があった、蘭と呼ばれる暖かく優しい場所が。
指定席に歩きながら、全員の姿が確認できた。そして蘭を見つけて手だけを出して、サインを出した。
自分を指差し、【指名　蘭】を出して、【ＯＫ？】を出した、皆が見える位置で。
蘭は満開の笑顔で手を上げて、指で大きく【ＯＫ】のサインを出した。
８人衆が全員【了解】のサインを出した、見るとユリさんも薔薇の微笑で【了解】を出していた。
蘭の満開の笑顔に、《愛してる》と囁いた、嬉しくて。
蘭はどんな時も自分に正直に生きていた、私も蘭には一度も嘘をつかなかった。
私は蘭を絶対に傷つけないように、そればかりを必死に考えていた。

他の事は何度も日記を読み直すが、蘭との事は最初の一行で今も鮮明に思い出す。

私は生きている実感を楽しんでいた、必死に集中して。

大切な時は進行していく、満開の笑顔を道連れにして・・・。

充実

記録を更新して燃え尽きてはいけない、常に気持ちの余力は残す。
そうしないと止まる、記録も・・前を目指そうとする心も。

踊り子がいない情熱の舞台で、女優達が全員が主役だと笑っていた。
観客の男達は支払う金額と、費やす時間に満足してると言うように、皆笑顔だった。
私がマミを迎えに行くと、マミはフロアーを凝視していた。
もう圧倒はされていなかった、楽しそうな挑戦者の横顔だった。
マミと裏階段を下りて、通りに出て驚いた表情を作った。
『大変、いやらしいお店のスカウトマンが、可愛い子を物色してる～』とマミをニヤで見て、手を出した。
「私、可愛いからこわ～い」とマミがニヤで手を繋いだ。

『マミ姉さんは、出身はどこ?』と歩きながら笑顔で聞いた。
「私、宮崎市だよ・・ちょっと田舎だけど」と笑顔を返した。
『あぁ、そんな感じだね』とニッで返すと、「どんな感じなのかな～」と笑顔で可愛く睨んだ。
『初恋の切ない』まで言うと。
「それ私には大切な言葉だから、茶化さないの」と私の脇腹を抓った。
『大切なの、嬉しいな～』と本心を言って、マミの笑顔を見ていた。
「あなたがチャリで通う所よ」とマミがニヤで私を見た。
『青島っ子か、憧れやな～』とマミに微笑んだ。
「何も無いけど、海が有るからね」とマミが微笑んで返した。
『波の音と、潮の香りだけで充分だよ・・俺蘭に拾われなかったら、多分今は青島で野宿してるよ』とマミを見た。
「旅行者の女子大生の宿とか、レディーサーファーの家を泊まり歩

くとかしてるよ」とマミが楽しそうに笑った。
『マミ姉さん、泳げるの？』とニヤで聞いてみた。
「当然、小さいときから海が公園みたいなものだもん」と微笑んだ。
私はマミの水着姿を想像して、マミを見てニヤニヤしていた。
「こら、またよからぬ想像してる～」と笑顔のマミに優しくぶたれながら、魅宴の裏階段を上った。
『マミの水着、必ず見てやる』とニヤを全開で手を振った。
「むりだよ～、誰に頼まれても見せないよ～」と笑顔で舌を出して、マミが手を振った。

ユリカのビルの下で、塔を見上げていた。星空があった。
《ユリカ元気か、後でまた会えるね》と囁いてＰＧに戻った。
ＰＧの客は６割位になっていた、指定席に座ると美冬が笑顔で歩いて来た。
屈んで胸の谷間を強調しながら、手招きをした。
『素敵なサービスや～』と美冬の耳元に囁いた。
「まだ新情報ないよね～」と笑顔で囁いた、『いらないだろ、美冬』と真顔で見た。
『相手に１つだけ後押しをしておいたよ』と私を真剣に見る美冬に。
『学歴の差を気にしていたから、俺なんか中１で蘭に挑戦するんだよって、言っといた』と最後は至近距離の美冬に囁いた。
美冬は可愛い女子大生になって笑顔を返した。
『確かに同じ店の者同士付き合うのは、駄目かもしれないけど・・気持ちを確かめるのは、悪くないと思うよ』と美冬を見て微笑んで返した。
「うん・・私が勇気を出せって事ね」と強い瞳で笑顔を見せた。
『がんばれよ、俺が告白される相手なら・・美冬からなら嬉しくて泣くよ』と笑顔で返した。
「うん・・出来るだけ長くそこに座っていてね、皆そう思ってるよ」と笑顔で言って、楽しそうに銀の扉に消えた。

私は嬉しくて、美冬の背中を見送った。

「美冬、なんかあったのか？」とカズ君が後から聞いた、私が振向くと。

心配そうなカズ君の優しい顔があった、《間違いないな、手のかかる人達やな～》と思っていた。

『子供にしか言えない悩み、好きな人と付き合える状況じゃないけど』私の真顔の言葉を、真剣な目でカズ君は聞いていた。

『美冬が気持ちを伝えるだけでもしたいって、俺が男なら気持ちだけは伝えるのに』と真顔を崩さないで言って。

『俺は常に別れと残り時間を背負っているから、イライラする、踏出さないで誤魔化す男は』と微笑んで。

『美冬が可愛そうだよカズ君、誰かにとられていいの？』とニヤで言った、カズ君の最高の笑顔があった。

「お前は最高だよ、俺の方から必ず伝えるよ」と笑った、私も嬉しくてカズ君を笑顔で見ていた。

カズ君の背中を見送ってる時に、終演を迎えた。

今夜はバタバタと控え室に皆が急いだ、四季の千の付く3人組が来て。

「美冬の囁き魔法の事情聴取後で3人でするから」と千夏が笑い。

「楽しみやね～」と千春が言って扉に消えた。

「ありがとう」と千秋が微笑んだ、私も微笑みを返して千秋を見送った。

１０番席に一人で座るカスミを見つけて、笑顔で歩み寄った。

『どうしたカスミ、充電切れたのか？』と意識して笑顔で言った。

「リアン姉さん所に行くのに、充電中」と少し疲れた笑顔で返して。

「充電抱っこしてくれ」とカスミが美しく微笑んだ。

その笑顔が可愛くて、カスミを見ながら笑顔で抱き上げた。

『カスミ遠慮しないで、いつでも充電抱っこ要求しろよ』と言いな

がら、ゆっくりと扉に歩いた。
「ありがとな、本当にありがとな」と耳元に囁いて、「で、固いんかい」と不敵を出した。
『柔らかいよカスミは、胸も心も』と言って微笑んで返した。
至近距離のカスミは圧倒的美しさを主張しながら、可愛い笑顔を見せた。

カスミを扉に見送り、ＴＶルームに戻って。サクラさんをタクシーに見送った。
皇帝ルックに着替えてマリアを抱き、マダムと松さんとマリアの乗るタクシーを見送った。
ハルカが迎えに来て、ＴＶルームのメインスイッチをｏｆｆにして、自分のメインスイッチをｏｎにした。
着物姿のユリさんの横を、蘭に強く腕を組まれながらローズリップを目指した。
８人衆がその後ろを歩き、まるで大奥の行列のようだった。
「おっ、やっと本命と腕組みか」と呼込みのドンの佐々木の爺さんが、ユリさんに挨拶して私に突っ込んだ。
『やっと辿りつきました』と笑顔で返すと、蘭が優しく脇腹を突いた。
「佐々木ちゃん、また情報よろしく」と蘭が佐々木に微笑むと。
「蘭ちゃんの頼みは必ずまもるね～」と皺だらけの顔で嬉しそうに笑っていた。
「今夜は最高の楽しい宴会になりそうね」とユリさんが私に悪戯っ子を出した。
『なん～だユリ、妬いてるのか～』とニヤで返すと、「相当に」と薔薇笑顔で返された。
「お願い、ユリさんとのそういう絡みはやめて、返せないから」と蘭がニヤで私を見た。
後の８人衆の笑い声に押されて、ローズリップに着いた。

ユリさんが最初に入ると、ローズの残っていた3人の女性が緊張した顔で。
「ようこそ、いらっしゃいました」と深々と頭を下げた。
「お世話になります」とユリさんも返礼して。
「楽しみたいので、堅苦しいのは抜きでお願いできる」と薔薇の笑顔で3人を見た。3人の嬉しそうな顔があった。
8人衆が入り、「すごー～い」窓の外の夜景を見ていた。そこに奥からリアンがやってきた。
「ユリ姉さん、いらっしゃい・・うれし～」とリアンがユリさんに飛びついた。
8人衆は一気に緊張して、リアンを見て全員深々と頭を下げた。
「もう、ユリ姉さんが言ったでしょ、堅苦しいのは無しって」とリアンが微笑み、8人衆も緊張が解けた。
「もう少しで揃うから、夜景でも楽しんでて」と8人に笑顔で言って、蘭に手招きをして何か囁いた。

蘭が私にニヤニヤで手招きをした、私が歩み寄ると。
「合鍵の姉さんのお迎えよろしく、ウルトラマンと同じ時間しかやらないよ」と強烈なニヤで蘭が囁いた。
『ウルトラマンは短いよ』とウルで言うと。
「カラータイマー点滅するよ、早くしな」と笑顔で背中を押した。
8人衆が窓際で楽しそうに笑う声を聞きながら、表に出ようとするとドアが開いた。
大ママとマミが入ってきた、私を見つけて大ママが抱きしめてくれた。
大ママを8人衆が確認したのか、店内が静寂に包まれて緊張感が伝わった。
「最高の贈り物をありがとう、私は絶対あんたを忘れない・・羊水・・心に響いたよ」と言って笑顔を見せた。

『じゃあ後で大ママ、お願い聞いて？』と笑顔で返した。
「私に出来る事なら、何でも言っていいぞ」と笑う大ママを見ながら。
『大ママにしか出来ないから、後でよろしく。お使い行ってきま～す』と笑顔で大ママに言って、ママに全力のニヤを出した。
「あっ、しまった～」と笑顔でマミが言った言葉を無視して、扉を開けた。
「なんだい、固い事は抜きだよ～」と８人衆に話しかける大ママの声が聞こえていた。

私がユリカ店のビルのエレベーターを待っていると、扉が開き４人の女性とユリカが下りてきた。
『姫、お迎えに参りました』と笑顔でユリカを見た。
「うん、ご苦労」と爽やかに笑って、バッグをを差し出した。
私は頭を下げて恭しく、両手を出して受け取り。
『行きましょう、姫』と言って手を出した、ユリカはニヤを出して腕を組んできた。
「お疲れ様でした、ママ」と４人の美しい女性がユリカに挨拶した、不思議そうな顔で。
「お疲れ様、気をつけてね」とユリカも笑顔で返し、向かいのビルに腕を組んで歩いた。
夜の蝶達が帰る時間で、ユリカを見ると皆頭を下げて挨拶した。ユリカも都度返礼した。
『イメージじゃないけど、さすが水のユリカ』と真横の可愛いユリカに微笑んだ。
「自分でも、イメージじゃないよ」と爽やかに笑い、舌を出した。
《可愛い、確かに可愛い》と思っていた。

ユリカと腕を組みローズに入ると、又８人衆が緊張して立ち上がった。

『固い事は抜きだよ、楽にしな』と私が得意のマダムの真似で爆笑を取り、緊張をほぐした。
最高の笑顔が溢れていた、楽しい宴会の幕が今上がろうとしていた。
蘭とユリカは見つめあい、どちらも嬉しそうに笑顔だけで会話していた。
窓から見える夜景は、輝きを放っていた。充実感の中にある女優達を照らすように。
最高の夏物語は終わらないと、輝く女性達を見ていた。
遥かなる薔薇の世界で、羊水の揺り篭に揺られ、獄炎の炎に焼かれながら。
青い炎に包まれていた、最高の気分だった。
私はどんなに無視をしようとしても、やはり時間を背負っていた。
常にその重圧との戦いをしていた、自立できない限り蘭と離れて暮らさねばならない。
その現実は無視できなかった、そしてこの宴会で違う答えを見つける。
最強の教師達に囲まれて、道を発見する。
過酷だが登れと、背中を押される。
愛されながら・・・。

乾杯

自分へのご褒美も必要である、納得できる充実感の後は。
そしてまた一段登ろう、果てしない上を目指して。

ネオンを見下ろす要塞の最上階に、充実感を漂わせ女優が笑顔で揃った。
少しの緊張と、ときめきを胸に。頂上に君臨する４人を見ていた。
私は右腕をリアン、左腕をユリカに組まれて立たされていた。
「じゃあ、乾杯の前に・・蘭報告があるんでしょ」とリアンが蘭に微笑んだ。

「はい」と言って蘭が笑顔で立ち上がって、リアンを見た。
「今夜は全員参加していませんが、報告します。
３年前の１２月でした、リアン姉さんがＰＧにまだいた頃に、作り上げた満席記録。
その２２日間を私は忘れられません、熱の高い日々でした。
ユリさん・リアンさん・アイさんに、引っ張られた楽しい日々でした。
そして、今回その記録が見えたとき・・本当に嬉しかった。
そして最高の仲間に巡り合えた幸せを感じました。
私達は確かな目標が持つ事ができた、幸せな後輩です。
そして、今報告します・・今夜栄光の記録を上塗りできました。
素晴らしい記録を授けてくれて、本当にありがとうございました」
蘭が笑顔でリアンに頭を下げて、８人衆も笑顔で立ち上がり。
「ありがとうございました」と頭を下げた。

「本当に嬉しいです、よくがんばりました」とリアンも炎の笑顔で返した、獄炎の瞳は潤んでいた。

「では、乾杯の音頭と祝辞を、大ママお願いします」とリアンが大ママを見た。
大ママはユリさんに一礼して、笑顔で立ち上がった。
ローズの3人の女性がシャンパンの注がれたグラスをを配りはじめた。

「ご指名ですから、一言。
私はこれまでこの世界で生きて、3度他人を羨ましく思いました。
一度目は、ユリに出会ったときに、マダムを羨ましく思い。
二度目は、リアンと蘭のコンビを見た時に、ユリを羨ましく思い。
三度目は、今です・・今皆さんの充実した顔を見て、ハルカを羨ましく思いました。
PGはユリの世界です、ユリが必死に作り上げたキャンバスに。
リアン・サクラ・アイ・蘭が必死に下書きをしました。
そしてその下書きに、貴女方が力を合わせて美しい色を塗りました。
本当に素晴らしい仕事でした、心からの賞賛を込めて乾杯します」

大ママは全員を見回し、リアンの店の女性を見て。
「貴女方もグラスを持ちなさい、この世界は同席すれば皆仲間ですよ」と笑顔で言った。
3人は本当に嬉しそうな笑顔で、グラスにシャンパンを注いで持った。
「それでは記録が今後も伸びる事を祈って・・乾杯」と大ママが笑顔で言って。
「乾杯」と全員が笑顔で答えて、グラスを傾けた。8人衆は全員目を潤ませていた。

皆が座ると、リアンが又腕を組み、ユリカも腕を組んだ。私は又、囚われの身になった。

「今夜のシャンパンは、プレゼントです」とリアンが笑顔で言って、メッセージカードを出した。
「ＰＧの姫たちへ、いつも楽しい時間をありがとう。記録更新のお祝いとして送ります・・梶谷」とリアンが全員を笑顔で見た。
全員が嬉しそうな笑顔になり、拍手をした。お礼の挨拶として。
「自己紹介の前に、特別事項を言っておきます」とリアンがニカをした。
「後の一番夜景が綺麗な所に、４人掛けのテーブルを見えないように用意しました」
「秘密の話や、聞きづらい事は相手を指名して使って下さい・・多分エースの席になりそうだけど」とリアンがニカを出し。
全員がニヤで私を見た、私は笑顔で震えていた。

「それと、今夜は私とユリカで可愛いエースに、伝説を又１つプレゼントします」とリアンが蘭を見て、強いニカをだした。
「あっ、リアン姉さん」と蘭が慌てて言った時に。
「エースありがとう」とリアンが私の右頬に、ユリカが左頬にキスしてくれた。
私は嬉しくて、照れてニヤニヤしていた。
蘭が頬を膨らまし、笑顔で睨んで近づいた。
「なぜ、そんなにニヤニヤする」と私の前に立って、笑いを堪えて言った。
『いや、突然の出来事で』と私は言いながら、蘭の顔の高さに顔を合わせて。
『蘭、おいで』と言って目を閉じた。

「さて、どこにするのやら」とカスミが多分不敵を出して言った。
「もう、ここよ」と言って、おでこに蘭がキスをした。
「あら、中学生のカップルみたい」と言ったユリさんの言葉で、全員が爆笑した。

私は笑顔の蘭に手を引かれて、蘭とユリカに挟まれて座った。
「それでは、ＰＧの７人だけ自己紹介をお願いします・・左からお願い」とリアンが千春見て微笑んだ。

千春が笑顔で立ち上がった。
「千春です、２１歳です。○○大学で、商業と経済を学んでいます。
私は親の負担を軽くしたいと、１８で最初居酒屋でバイトしました。
居酒屋に出勤する途中でユリさんを見て、追いかけてＰＧを探し当てました。
私はその時の自分を褒めてやりたい、よくあそこで踏出したと。
それがあって、最高の仲間にめぐり合えました。本当に今幸せです」と目を潤ませて頭を下げた。
全員が笑顔で拍手をした。

次が千夏だった。
「千夏です、２１歳です。○○専門学校で看護の勉強をしています。
私は車が欲しいという動機でＰＧの面接を受けました、車を買ったら辞めようと思っていました。
でも今は本当に楽しい、最高の仲間がいる場所が有る事が。
そしてきちんと評価してくれる人がいる事が。
私も今・・本当に幸せです」と笑顔で頭を下げた。
全員が笑顔で拍手をした。

次が千秋だった。
「千秋です、２０歳です。○○大学教育学部に在籍しています。
私は次の美冬と、大学生活で何か１つ挑戦しようと話して、ＰＧの面接を受けました。
最初２人の時は必死で、楽しむ余裕すらなかった。
でも最高の仲間が集まって、今は充実しています。

私は素晴らしい大学生活だったと、胸を張って言える。
私も今、本当に幸せです」と言って頭を下げた。
全員が笑顔で拍手をした。

次が美冬だった。
「美冬です、２１歳です。千秋と同じ教育学部に在籍しています。
私も最初必死でした、そして４人が揃った時に言われました。
コンビネーションでやればどうかなと、蘭姉さんに」
ここで残りの四季の３人が立って蘭を見た。
「蘭姉さんありがとう、バイトの私達をいつも見守って助けてくれて。
私達は蘭姉さんが私もバイトよと、いつも笑顔で言ってくれる事が・・どれほど支えになったか。
そして、全力で取組む姿に・・どれだけ勇気をもらったか分りません。
蘭姉さんがどんなに否定しても、私達アルバイトの四季にとって。
蘭姉さんは【最高の副職】です・・本当にありがとうございました」と美冬が言って全員で頭を下げた。
残る全員が笑顔で拍手をした。
蘭は照れて笑っていたが、体は微かに震えていた。私は蘭の手を握った、蘭は強く握り返した。
ユリさんは、涙を流して聞いていた。嬉しかったのだろう。

次がユメだった。
「ユメです、２０歳です。
私は不良少女上がりです、つい最近まで流して仕事をしていました。
でもＰＧの同世代の笑顔を見て、そんな笑顔で笑えない自分が嫌になりました。
今本気でプロになろうと挑戦しています、本当にＰＧに来て良か

った。
そうしなければ今もまだ、半端な暮らしをしていたと思います。
いける所まで、頑張って・・。
最後には必ず、素敵に笑える女になりたいと思います」と頭を下げた。
全員が笑顔で拍手をした。

次がウミだった。
「ウミです、１９歳です。
私もユメと同じ不良少女上がりです。
本気の挑戦をして良かったと心から思っています、今が人生で一番楽しいと。
悔しいと思わせるほどの、本気を出していた仲間に感謝します
そして、私達が本気の挑戦を承諾して貰った時」
ここでユメが立って蘭を見た。
「自分のヘルプに指名してくれた蘭姉さん、本当に嬉しかった。
あの想いを忘れずに私達は頑張ります、本当にありがとうございました」と２人で頭を下げた。
全員が笑顔で拍手をした。俯いた蘭の震えが大きくなった。

そして最後がカスミだった。
「カスミです、２０歳です。
私は旦那の暴力から逃げて、宮崎に来ました。ユリさんに拾われて、今ＰＧ４ヶ月目です。
私は自分の幸運に感謝しています、今この場所にいれる事が。
そして挑戦する場所が出来た事が、私は自分の限界まで登りたい。
そして蘭姉さんの背中が触りたい、今は何も迷いなく言えます。
私も今・・幸せだと」
そこで残りの６人と、ハルカが立ってユリさんを見た。

「ゆりさん、言葉に出来ないほど感謝しています。本当にありがとうございました」と8人で頭を下げた。
ユリさんは、涙を隠さず立ち上がり。
「私も今本当に幸せです、ありがとう・・そして蘭、本当にいてくれてありがとう」と涙の笑顔で言って、頭を下げた。
蘭は俯いて震えていた。私は蘭の手を強く握っていた。
「よかったね、よくここまできたね・・蘭」とユリカの言葉が完璧な子守唄で響いた。
蘭はユリカを見て大粒の涙を流した、ユリカは微笑んで蘭を手を握った。

「よし、湿っぽいのいかんから。エースかくし芸でもよろしく」とリアンがニカをして、私を見た。
『しかたないな～』と私はニヤで立ち上がり。
上半身裸になって、全員の視線を集めた。私はお腹にケイ、背中に蘭とマジックで書いていた。
「やるな～準備万端かよ～」とカスミが言って、全員の笑顔が出た。
「エース、私本気で惚れそうな体」とリアンが言って、「私も」とユリカが笑顔で言った。
「だめ～持ち主の名前が背中に書いてある」と蘭が2人をニヤで見た。全員が笑っていた。
「出し物はなんだい？」と大ママが笑顔で私に言った。
『特別ですから、最高の大技。逆立ち腕立て伏せ3回をご披露しよう』と笑顔で全員を見回して、拍手を要求した。
「怪我しないでね、抱っこ出来なくなると困るから」とユリカが蘭にニヤを出した。
「だれ～、ユリカ姉さんをこんなにしたの」と蘭がユリカを笑顔で見て叫んだ。
「背中にユリカって書いてる男」と言ってユリカが蘭に最高のニヤを出した。

「りゃんって書いてあるの～」と蘭も楽しそうにユリカを見た。皆の笑い声に包まれていた。
「お前の責任だ、５回やれよ」とリアンが全開のニカで私を見た。
８人衆とマミが「５回、５回」と言って拍手した。
私は必死に５回連続を成功させた、拍手を受けて蘭を見た。満開の笑顔だった。
宴会のプロだらけの楽しい宴会が、熱を帯びてきた。
最高のメンバーで、真夏の夜を楽しんでいた。

四季はその後、千春が証券会社・千夏が看護士・千秋と美冬が小学校の教師になる。

ユメとウミは長い期間ＰＧで働き、【ツウィンズ】と呼ばれ愛された。

２人ともほぼ同じ時期に結婚し、ＰＧを素敵な笑顔で去った。

しかしこの時はまだ８人衆は全員模索していた、まだ全力じゃないと思っていた。

この宴会で、リアンとユリカに触れて変化していく。

自分の個性を、見つめ直すきっかけになる。

最強の炎と、最良の水に触れて・・・。

称号

それが難しければ難しいほど、覚悟が要求される。
代償は大きいかもしれない、失う事を恐れては・・得ることはできない。

真夏の深夜、楽しい時間が過ぎていた、誰もが笑顔で語り合っていた。
ユリカが楽しそうに四季達に話していた、四季は嬉しそうな輝く笑顔をユリカに向けていた。
蘭とリアンがユメ・ウミコンビとハルカ・マミコンビの中で笑顔で騒いでいた。
本当に楽しそうだった、私は見てるだけで楽しかった。
私の隣には大ママと、ユリさんが鎮座して楽しそうに話していた。
「で、お願いはなんでしょう？」と大ママが私を笑顔で見た。
『金曜日、昼間マミちゃん貸して下さい。ユリさんたちと、海水浴に子供連れで行くので』と微笑んで返した。
「なんだいそんな簡単な事かい」と大ママが嬉しそうにに笑った。
「ありがとね、マミの事気にかけてくれて」と大ママが笑顔で私を見た。
『マミちゃんの水着姿が、見たいんです』とニヤを大ママに出した。
「じゃあ、私の頼みも聞いてくれ」と大ママもニヤで返してきた。
『怖いな～、引抜かも』とユリさんを見てウルを出した。
「危ないよ～」とユリさんも薔薇で微笑んだ。大ママも笑顔を私に向け。
「マミがＰＧの研修を終わる日に、マミの源氏名を付けてくれ」と大ママが微笑んだ。
「まぁ、素敵な話しですね」とユリさんも私に微笑んだ。
『了解』と私は簡単に笑顔で返事をした、実はもう自分なりのイメ

ージで考えていた。
「そうか、もう決まってるのか・・聞きたいな～」と大ママが探りを入れた。
『それは駄目です、でも自信作があります』と笑顔で答えて、『絶対にマミにも、内緒ですよ』と念押しした。
「了解、楽しみやな～」と大ママが笑顔で返した。

『お姉さん達も、ここに座ったら』と私は少し離れた所で待機する、ローズの3人に声をかけた。
「えっ」と3人が見た、『大御所も取って食べたりはしないよ・・多分』とニヤで返した。
大ママもユリさんも笑顔で、招いた。3人は嬉しそうに、緊張して座った。
大ママとユリさんが、楽しそうに話しかけ盛り上がっていた。リアンがやってきた。
「お前は、本当のエースだよ・・ありがとうな、彼女達がどれほど嬉しいか」と獄炎で耳元に囁いた。
『一人じゃ大変なんだよ、大御所2人は』と言って、笑顔で返した。リアンが笑顔で戻り、代わって美冬が来て。
「さっきの事、ユリさんに話したいの。BOXまで誘ってくれない？」と耳元で囁いた。
『了解』と言って、蘭を見て【チェンジ】のサインを出した。蘭は【OK】と笑顔で答えた。

『ユリさんBOXお願いします』とユリさんに微笑んだ、ユリさんも微笑んで頷き蘭と交代した。
私はユリさんと立って、美冬に目で合図を送った。美冬も立って、BOXに歩いた。
3人で奥の小さなBOXに座った。ユリさんを奥に、向き合って美冬の隣に私が座った。

「ユリさん、実は私・・・」美冬が真剣にユリさんに切り出した。
カズ君を好きだということを、正直に話した。
「絶対に私がＰＧに在籍してる時には、深い関係になりません」と最後はそう言った。
「話してくれて本当にありがとう、美冬・・あなたが自分に正直に選んで。
在籍中にそうなっても、私はあなたの見方ですよ。素敵な事だと思います。
ただ、あまり話は広がらないように、興味本位で話す人もいますからね。
自分の気持ちに正直に生きて欲しい、私はただそう思っています」
そう言って薔薇で微笑んだ。
「本当にありがとうございます、本当に嬉しい」と美冬は嬉しくて泣いていた。
美冬が落ち着くのを待って。
「美冬ちゃん、ウミちゃんと変ってくれる？」とユリさんが囁いた。
「はい」と言って笑顔で席を立った。

『俺も出ときましょうか？』とユリさんに聞いた。
「あなたは、居てちょうだい。その方がウミが楽でしょうから」と薔薇で微笑んだ。
ウミが少し緊張した顔で、席についた。
ユリさんがウミの後ろの誰かを見て、薔薇で微笑んで頷いた。私には分っていた誰なのか。
「緊張しなくていいのよ、金曜日にお昼空いてるかしら・・３人娘を海水浴に連れて行きたいの」と言ったユリさんを、ウミが最高の笑顔で見た。
「手伝ってくれますか？」と薔薇で微笑んだ。
「はい、私でよければ・・嬉しいです」とウミが最高の笑顔で返した。

「よかった～、そしてあなた達は本当に幸せですね・・最高の時代に生きています」とユリさんが席を立った。
そして予想通り、ユリカが来て爽やかな笑顔で深い目をして座った。

『ウミ、何も考えないで・・ユリカに子供の時の楽しい話をして』とウミに笑顔で言った、ウミは私を見て頷いた。
『ユリカの言葉だけを感じればいいんだよ、後は楽しい思い出だけをね』とウミに言って、ウミの手を優しく握った。
ウミは楽しく話して、ユリカの返答を聞いていた。そして涙をポロポロ流したが、終始笑顔だった。
ウミが落ち着いて、ユリカの笑顔を見て。
「凄い・・・楽になりました。本当にありがとうございます」と可愛い笑顔でユリカに言った。
『ユリカ、本当は疲れるんじゃない？そういうのやると』と私は心配になり真顔で聞いた。
「ＴＶの見すぎ、私は意識して何もしてないよ」と深く爽やかに笑った。
『じゃあ、もう一人いい？』と笑顔で聞いた。
「もちろん、カスミちゃんでしょ」と可愛く笑った、ウミにカスミに呼んでくれと頼んだ。

カスミも少し緊張して座って、ユリカを見て微笑んだ。
『カスミ、何も考えないで・・モデルの時の自慢話をユリカさんにして』とカスミを見た、カスミは真剣に頷いた。
『ユリカの言葉だけを感じて、モデル時代の楽しい事だけ考えて』と言ってカスミの手を握った。
「私は１６でモデルになりました」とカスミが言ったとき。
「本気で言ったの？」強かった、子守唄が強く響いた私が驚くほど。
カスミは人一倍感受性が強かったので、強烈な反応だった。
ユリカを見つめたまま、その場で動かずに大粒の涙を流した。

大粒の涙は後から後からあふれ出した。
しかしユリカはやめなかった。
「さっきの自分が行ける所まで行くと、言ったのは本心？」と完全なる羊水の揺り篭にカスミを入れた。
「本心です、やろうと思っています」とカスミも涙を気にする事もなく、真剣にユリカを見て言った。
「頑張ってほしい、あなたなら絶対にできるよ」とユリカが微笑んだ、深かった。
隣にいる私でも深い安心感に包まれ、完全なリラックス状態になっていた。
カスミはただ輝く瞳から涙を流していた、止め処なく涙が溢れていた。
カスミが落ち着いて、ユリカを見た。目の輝きは完全に復活の強さになっていた。
ユリカが立って手を出して、カスミと2人でＢＯＸを後にした。

私は一人残り、夜景を見ていた。向かいのビルのユリカの店が暗く映っていた。
そして気付いていた、【行ける所まで行くと言ったのは本心？】と言ったユリカの言葉。
あれは俺にも言ったのだと、ユリカが問うたのだと。
ユリカの感性なら、俺が残り時間ばかり気にしてることを、感じたんだと思っていた。
そして【頑張ってほしい、あなたなら絶対にできるよ】と言ってくれたんだと。
ユリカの店の暗い窓に映る、ネオンの反射を見ていた。後の女性たちの、笑い声を聞きながら。
《逃げる考えは捨てよう、蘭を愛する事だけ考えよう、それがどんなに難しく辛い道でも》と思って席を立った。
戻ると全員が大きな円になって、笑顔で話をしていた。私はその笑

顔を離れて見ていた。
時計が2時半を回った時、ユリさんが立って全員を見た。
「私は今夜本当に幸せな時間を過ごしました、ここにいる全員に感謝します。
そして3ヶ月に1度は、こういう会を開きましょう。もちろん全員参加で」と微笑んで。
「あなたもですよ」と私を見て薔薇で微笑んだ、強い言葉だった。
「四天女は今夜あなたに称号を送ります、【最後の挑戦者】と言う」とユリさんが真剣に私を見た。
「もう一度私達に夢を見せてください、私達がどこかで諦めた夢を。あなたが本気なら、必ず辿りつけると私達は全員思っています。ここに全てを使い果たし、眠る最高の副職もそれを望んでいます」と言ってユリさんが薔薇で微笑んだ。
蘭は幸せそうに眠っていた。全員が私を優しく見ていた。

『諦めない・・諦める事ができない。蘭という存在だけは』とユリさんに真顔で返した。
ユリさんもが薔薇で微笑みのまま、全員の暖かい目があった。嬉しかった。
「それでは今夜は閉宴にしましょう」とユリさんが全員に微笑んだ。
帰り支度を始めた、ユリカに。
『ユリカ、ありがとう・・強く響いたよ』と微笑んだ。
「お礼を言うのは私だよ、またゆっくり話そうね」と爽やかに笑った、私も嬉しくて笑顔で返した。
「さっ、大きな荷物の人は先に帰りな」とカスミが私に微笑んだ、強く輝き優しかった。
私はその場で、全員に頭を下げた。
蘭の肩掛けのポシェットを、私が掛けて蘭を抱き上げた。
「肩掛けポシェットの蘭？・・最初から計画抱っこだね」リアンが

ニカを私に出して。
「帰る事が全く心配ないなんて、蘭は幸せね」とユリカが私をニヤで見た。
私は大切な蘭を抱き、笑顔でローズを後にした。

タクシーに必死で乗り、アパートを必死で開けて。蘭をベッドに優しく寝かせて。
『ふ～』と一安心を声に出して、蘭を見た。楽しそうな微笑を浮かべて眠っていた。
テーブルに蘭の書置きがあった。
【添い寝よろしく、明日の朝9時に起こしてね】と書いてあった。
《可愛い計画的犯行だな》と蘭に近づき、体を優しく揺すりながら。
『蘭、化粧落とさないと・・お化けになるよ～』と優しく耳元に囁いた。
「おばけ、怖い」と蘭が目を開け、ウルをしていた。
私は優しく抱き上げて、洗面所で支えた。蘭はフラフラのご機嫌状態で、化粧を落とした。
ベッドに戻ると、用意してあった上着の長いパジャマを、すっぽりと被って微笑んだ。
「ぬげにゃい」と笑顔ですねた。
《もし試されてるのなら過酷な試験だ》と思いながらニヤニヤして頷いた。
私は電気を消して、カーテンも閉めて真っ暗にした。

蘭の吐息を頼りに近づくと、蘭のトロンの笑顔が暗闇に少し確認できた。
『スペシャルサービスで脱がせてやるから、絶対に大きく動くなよ』と蘭に優しく囁いた。
「エッチだにぇ～」と蘭は少しだけ揺れながら笑っていた。
私はスーツのジャケットを脱がし。ブラウスのボタンを慎重に、探

りながら外した。
《ブラは無理だ》と思いながら、《スカートはどうする》と自問自答していた。
『蘭、立っちできまちゅか？』と微笑んでみた。
「できゆよ～、りゃん２３ちゃいだかや～」と言ってゆっくりと立ち上がった。
立つと長いパジャマで膝までが隠れた、私は蘭を支えながら緊張して手を入れスカートを脱がした。
蘭を座らせて、一息つくと。
蘭が暗闇でガサゴソと動きパンストを脱いで、パジャマの下を穿いたようだった。

『ねんねしといてね、すぐくるからね』と蘭に優しく言って、ゆっくりと寝かせた。
「みゃだ・・みゃだ・・みゃだにゃにょ」と蘭が催促する声を聞きながら、カーテンを開け。
蘭のスーツをハンガーにかけて、ベッドに戻り目覚ましを８時３０分にセットした。
蘭の横に行くと、泣き虫蘭の時間になっていた。腕を蘭の首に通し、引き寄せて。
『泣かないでいいよ、側にいるから』と耳元に囁いた、蘭は私のＴシャツを引っ張って涙を拭いていた。
「りゃんのそばにいりゅ？」と私の胸に囁いた。
『今夜決めたよ、俺がチャリで頑張ればいいだけなんだよ。そんなに遠くないから』と蘭の耳元に囁いて。
『蘭、心配しないで・・学校に行っても蘭の側にいるよ』と優しく囁いた。
「うん、うん、うん、」と蘭は３回言って、私の胸に顔を付けて眠りに落ちた。
夏の朝の匂いが漂って来ていた、私は残りを数えなくなっていた。

親父に謝る覚悟が出来た。蘭を守るために、寂しい想いをさせないために。

私の生家から蘭のアパートまでは自転車で、普通に走っても２０分程度だった。

私が感じていた重圧は、時間でなく親父に対するものだった。

親父に蘭との事を説得など出来ないと、最初から諦めていた。

《誠意と策略》と思いながら、決意は固まっていた。

《俺も常識の外に自ら進んで出よう、リアンやユリカのように》

その事により何を失っても構わない、蘭を得るのであればと強く思った。

『蘭・・最後の挑戦者が、最高の挑戦者だと教えてやるよ・・四天女に』と優しく囁き。

蘭の額にキスをして、蘭を抱きしめて眠りに落ちていった・・・。

姿勢

常に準備をする・・危機管理。仕事や日常生活だけではない。
想定している、最悪の状態まで。そうしないと生きていけない。
生きる事に不慣れで、下手な・・私などは。

【リンリン】と優しく響く、可愛い目覚まし時計の音で、爽やかに目覚めた。
蘭は私の腕の中にいた、私は静かに腕を抜き洗面所に向かった。
歯を磨き、顔を洗おうと鏡を見ると、両頬と額に僅かにキスマークが残っていた。
《もったいないな、ユリカのが》と思っていた。
蘭は当然だが、リアンもあの性格ならまだ何度か頬キスはあるだろう。
しかしユリカは生涯一度かもしれないと思っていた、少しの寂しさがあった。
意を決して顔を洗い、キッチンに向かった。

祖母が二日酔いの人によく作っていた、お粥を思い出して、ご飯を確認すると2人分あった。
《朝和定食がお気に入りだな》と思いニヤしながら作った。
塩加減が分らないので、梅干を入れて爽やか風味で誤魔化した。
蘭の部屋に戻ると、蘭が足を広げて爆睡状態だった。
『女の子が駄目ですね～』と蘭の横に座り、額に手を当てて囁いた。
蘭が目を開けて、微笑んで返した。元気な瞳に安心していた。
『二日酔いは？』とニヤで聞くと、「あんなに楽しかったら、ならないよ」と笑顔で返した。
蘭が洗面所に行き、戻って朝食を見て満開になった。

「どうしてだろう、涙が出そう」と座りながら私に微笑んだ。
『ユリカの技を盗んでるからね』とニッで返した。
「ありがとう、昨夜のユリカ姉さんを見て本当に嬉しかったよ・・魔法使いさん」と微笑んで返してきた。
朝食を食べながら、笑顔の蘭に聞いてみた。
『なんで休みの日に、早起きするのかな?』とニヤで聞いた。
「母さんが宮崎に、１０時の汽車で出てくるの」と蘭が嬉しそうに微笑んだ。
『俺、散髪してスーツ買ってくるよ』とニヤで返した。
「うちの母親を殺す気なの、今のあなたが挨拶したら倒れるよ」とニヤニヤで返された。
『娘さんをくださいって、言おうと思ったのに』と笑顔のウルで返した。
「うん、必ず言ってね・・いつか」と満開の笑顔で笑っていた、私も嬉しくて笑った。

蘭が準備をして、ケンメリで出かけた。ユリカのビルの前で車を止めた。
「ユリカ姉さん疲れてるだろうから、頑張って」と蘭が微笑んだ。
『お袋さん、お泊り?』とウルで聞いてみた。
「3時位の汽車で帰るって、晩御飯食べに行く?」と蘭がニヤした。
『もちろん』と笑顔で言って、車を降りてケンメリを見送った。
《ユリカ、さすがにまだ来てないよな～》と思いながら、ビルを見上げて。
エレベーターで店の前まで来て、ドアを押してみた。鍵がかかっていた。
私は合鍵で店に入った。そして見つける、人形のように眠る可愛いユリカを。

ユリカは奥のＢＯＸで大きなバスタオルをかけて寝ていた。

素顔のまま、洋服は着替えていたので、１度は帰ったなと思い寝顔を見ていた。
朝の陽が少しづつ窓から侵入してきて、素顔のユリカは美しく輝いていた。
私はソファーの横の床に座り、ユリカを至近距離で見ていた。可愛い寝顔を。
ユリカの額に汗が光り、暑くなってきた思い。空調のスイッチを探してＯＮにした。
そして元の位置に座り、ユリカの額に手を当てたままユリカを見ていた。
「気持ちいい」とユリカは目を開けずに微笑んだ。
『ユリカ、疲れてるんだろ・・もう少し寝なさい』と優しく囁いた、手を当てたまま。
「時間まで居てくれる？」と目を閉じて静かに言った言葉が、子守唄の響きを連れてきた。
『もちろん、・・ねぇユリカ・・俺、上手く表現できないけど・・ユリカが好きだよ』羊水の揺り篭のに揺られて。
『すごく勝手な言い方だけど、蘭に対する感情とは別の意味で、ユリカが大好きなんだ』とユリカの耳元に囁いた。
「勝手じゃないよ、凄く嬉しい・・蘭をきちんと愛して、それで私を好きだと言ってくれる事が」
「私も、あなたが好きだよ」と子守歌の響きで囁いた
「今、分ったよ・・羊水の響き・・自分で感じてるよ」とユリカが可愛く微笑んだ。
『素敵だろ、水のユリカ・・永遠に忘れない響きだよ』と静かに囁いた、ユリカが愛おしくて。
ユリカが静かになって、深い眠りに落ちた。
私も継続している揺り篭が気持ち良くて、ユリカの眠るソファーにもたれて眠っていた。

「よし、頑張ろうか」とユリカの声が耳元で響き、目を開けるとユリカの顔が５ｃｍ位の近さにあった。
『可愛い顔で、脅かすなよ』と必死で動揺を隠して言った。
「練習しようと思ってたのに」とユリカがニヤで来て、少し離れた。
『俺なんか朝、顔洗いながら寂しくなってたんだから』とニヤで返した。
「何が、寂しかったの？」と立ち上がりながら、ユリカが笑顔で聞いた。
『ユリカのキスマーク、リアンはあの性格だから何度でもありそうだからね』とニッで返した。
「知らないの、私意外と挑戦的よ」とソファーに立ってバスタオルをたたみながら、ユリカがニヤで返してきた。
私は床のユリカのスリッパを手にとって、立ち上がり思いっきり遠くに投げた。
『掃除前の床を素足で歩けますか、姫』と全開ニヤでユリカに迫った。
「姫は歩けぬ、抱っこを所望する」と笑顔で言って、私の首に腕を回した。
私はユリカを抱き上げて、笑顔でユリカを見た。可愛いユリカが笑っていた。

ユリカが掃除機をかける方向の、椅子やテーブルを動かしながら笑顔でユリカを見ていた。
《ユリカ、お嫁さんの方が似合うよな～》とエプロン姿のユリカを見て思っていた。
ユリカがグラスを洗い、私が厳しく注意されながら拭いて。店の準備が終わった。
私がＢＯＸでコーラを飲んでいると、ユリカが化粧道具を持って私の横に座った。
鏡をテーブルに置いて、化粧をはじめた。

『男に化粧する姿見せるの、初めてかな？』とアイシャドーを塗るユリカにニヤで聞いた。
「もちろん、光栄に思いなさい」とニヤで返してきた。
『ユリカの初めての男記録、１つ追加～』とニヤニヤでユリカを見ていた。
「１００まで頑張ってね」とユリカが微笑み、鏡に顔を戻した。
『１００までか～・・ごめん今いやらしい事考えた』とユリカの可愛い横顔に言った。
「分ってる、私を誰だと思ってるの」と鏡に映る私に、ニヤを返した。

ユリカと腕を組み、昼食をホテルのレストランでバイキングを食べた。
ユリカが沢山食べるのを、驚きながら見ていた。
『どこに入っていくのだろう』とコーヒーを飲むユリカを見て笑顔で言った。
「私もそう思う、背が伸びなかったし」と可愛く少し照れて笑った。
『でも胸は大きいよね、意外に』と私はニヤで返した。
「どれで測ったの？それ正確な数字？」と楽しそうに可愛く笑った。
私はＴＶで見た、丹波哲郎を真似て。キーホルダーをテーブルに出して。
『今日部屋を取ってあるんだ、帰さないよ』と真顔で言った。
「駄目、私には主人がいるの」とユリカがウルで返した。
『旦那と俺のどっちが好きなんだい？』と言いながら、ユリカの手を両手で握った。
「駄目よ、絶対駄目・・これ以上苦しめないで」とユリカがウル全開で来た。
『さぁ、全てを捨てて俺に飛び込んでおいで』とユリカをウルで見た。
「全部受け止めてね」とユリカも爽やかな笑顔で言った。２人で笑

っていた。
周りの客もサービス係りの視線も無視して、楽しんでいた。
ホテルを出て、ユリカのビルの下で別れた、笑顔の可愛いユリカが手を振った。

ＴＶルームに行くと、ハルカがいて、エミとミサが可愛いビキニの水着を着ていた。
「ほら～」とミサが私に駆け寄って自慢全開の笑顔を出した。
『可愛いね～ミサもエミも』と言って２人を見ていた、少女の笑顔で輝いて見えた。
『ハルカは赤いの試着しないの？』とニヤで聞いた。
「出し惜しみしてるのよ、明日のお楽しみ～」とニヤで返してきた。
『楽しみや～マミとウミ』とニッで返した、ハルカは笑顔で睨んでた。
ユリさんとマリアが来て、昨夜のお礼を言った。薔薇の微笑みで返してくれた。
「あい」とマリアが袋を持って来た、私が中を見ると可愛い水着が入っていた。
『マリアも可愛いの良かったね～』とマリアに微笑むと。
「チャー、あい」と天使の笑顔で万歳をした。
『マリア、やきもちだね。私も着替えさせろって』と思わず言ってしまった、《しまった！》と思ったが遅かった。
「まぁ、蘭のお着替えまでしてくれてるの」とユリさんが悪戯っ子を出して。
「お着替えだけでしょうね～」とハルカが全開ニヤで私を見た。
『真っ暗にして、手探りで』とマリアの服を脱がしながら、照れた。
「変なところ探らなかった？」とハルカがニヤを継続しながら言った。
「ハルカ、少し進歩しましたね」とユリさんがハルカに微笑んだ。
『まだまだ、３段階は遠いけどな』とハルカにニヤを出し返した。

「教官、3段階目は何ですか？」とハルカが笑顔で返してきた。
『決まってるだろ、ハルカが一番免疫が無い・・男の口説き文句』
とニヤニヤで言った。
「それもあるのか～」とハルカが笑顔で呟いた。ユリさんが笑顔で
ハルカを見ていた。

『はい、出来上がり。マリアも可愛いね～』と笑顔でビキニのマリ
アを見た。
マリアはブラが嫌ならしく、取ってしまった。
『マリアオッパイ見えるから、駄目だよ～』と優しく言うと。マリ
アが私を見て天使になって。
「チャー、うえし？」と首を傾けた。ユリさんとハルカが爆笑して
いた。
「絶対、嬉しいんだよマリア」とハルカが脇腹を押さえて、うずく
まり笑っていた。
『マリア、チャーは嬉しいけど、着ないと駄目だよ』と言いながら
ブラを着せて、ハルカを笑顔で睨んだ。
「明日は1時にバスが迎えに来ますから、短い時間だけどよろしく
ね」とまだ余韻が残る笑顔でユリさんが私を見た。
『了解です』と言いながら、照れた笑顔を返した。

ハルカと予約確認をして、タバコを買いに行き。
ユリカのビルを見上げると、夏の空に飛行機雲が線を描いていた。
後から南風が吹いてきた、強烈な潮風を感じたいと思っていた。
見上げた最上階のユリカの棲家を見ていた、窓に入道雲が映ってい
た。
《聞こえるだろうユリカ、俺も頑張ってみるよ皆の近くにいたいか
らね》と心で呟いた。
8月の風が狭い通りに強く吹き抜け、背中を押されたが揺れる事は
なかった。

雲の上に親父の顔が見えた。
《待ってろよ、もうすぐ答えと、侘びの言葉と、策略と、愛する人を心に持って行くから》
そう呟いて、前を見た。熱に揺れる風景の先に見えた。
霞むことが絶対にないカスミが、強烈な輝きを連れて、美しく立って手を振っていた。
カスミとの次の章の幕開けを、喜ぶように笑っていた。

この時のカスミの輝きは強烈で、今でもはっきり覚えている。
後に私が【光りのカスミ】と称号を付けたのも、この時の輝きからだった。

カスミは常に闘う、自分自身とも世間という者とも。
強いのではない、弱い自分に対し負けず嫌いなのだ。

その立姿は圧倒的な美だった、モデルの経験からだろう歩き方も美しかった。

【姿勢】というものに、強くこだわり続けた。

身体的にも、精神的にも・・・。

葛藤

それは卑怯なことなのだろうか、今でも解答しない・・自分の心が。正直に生きるのは、辛いことなのだろうか・・それしか出来ないのに。

灼熱の光りを受けても、その輝きは自らが放つ。
全てを拒絶するように発光する、自分を見ろと強く主張する。
生まれながらに持った美を、強い心が押し上げた一品である。
学校のプール程の距離に立って、手を振るカスミを違和感を感じながら見ていた。
《何か変だ、疲れなのか？》と思いながら駆け寄った。
『おはよう、カスミ今日も綺麗だね』と笑顔で言った。
「おはよう、汚い時は無い」と微笑んで返した、陽に当たったせいか頬が淡い紅色になっていた。
「なんか悲しげに空なんて見るなよ、可愛く見えるだろ」と笑った顔が、影を纏っていた。
『可愛いからね』と言ってカスミの前髪を上げて、額を触った。その熱さに驚いた。
カスミは少し驚いて私を見たが、そのまま目を閉じた。
『何で高熱なのに、外に出るんだよ』と真顔でカスミに囁いた。
その時カスミの体がが揺れた、慌ててカスミを支えた、動揺しながら必死で。
タバコを持ち替えて、抱き上げた。真昼間の西橘通りで。

そのままＰＧのビルまで行き、エレベーターで上がった。
ＴＶルームにはユリさんとハルカいて、３人娘はお昼寝中だった。
「どうしたの！」とユリさんが驚いて言って、ハルカと二人で立ち上がった。

『熱が高いんだ、多分かなり』と真顔でユリさんに言って、『ハルカ、ベッドお願い』ハルカを見た。
ハルカが簡易ベッドに走り、ベッドを整えてくれた。私はカスミを優しく寝かせた。
ユリさんが額に手を当てて、ハルカの持って来た体温計を取ったので、私はＴＶの前に戻った。
ハルカが氷枕を出してきて、厨房に走った。
「３９度もあるわ、病院に電話しますね」と言いながら、受話器を取った。
私は動揺していた、カスミが揺れた時に経験の無い怖さが襲ってきたのだ。
カスミに対する、自分の想いの強さを再確認して震えたのだ。
《しっかりしろ、こんな事じゃ蘭の時は死ぬぞ》と自分を叱咤して、両頬を平手で打った。

「タクシーでハルカと病院に行ってきて」とユリさんが言った時に。
蘭が慌てて入ってきて、カスミのベッドに小走りに向かった。
その後をハルカが氷枕を持って続いた。
暫くして、蘭とハルカが出てきて。
「私が車で病院連れて行って、家に泊めます。我家にはカスミが一番安心できる奴がいるから」と蘭がユリさんに言った。
「蘭、お願いね」とユリさんが病院のメモを渡し、「保険証は後日でいいように、話はつけました」と蘭を見て微笑んだ。
「あなたも今夜はカスミを頼みます」とユリさんが私を見た、真剣な表情だった。
『了解です』と私も真顔で返して、ハルカにタバコを渡した。
「車、下に路駐してるから行こう」と蘭が無理やり笑顔を作った。
私はベッドに行き、カスミを優しく抱き上げた。
蘭が開けた助手席から、カスミを抱いて後部座席に乗った。

車はクーラーが効いていて、涼しかった。
カスミは額に汗を浮き出させ、苦しげに瞳を閉じている。
ハルカが持って来たタオルを受け取り、カスミの額の汗を拭いていると車が発進した。
ユリさんとハルカの心配そうな顔に見送られ、灼熱の車道を走った。
ルームミラーに映る蘭は、真剣な表情で運転していた。
「蘭ねえさん・・すいません」カスミの弱い声にカスミを見ると、目を開けていた。
その弱い光に私の心が掴まれて、カスミを少し引き寄せた。
「なに謝ってんのよ～、いいから喋らないで。今夜は専属ロボット貸すから、安心して眠りなさい」と蘭が優しく前を見たまま言った。
カスミが私を見て微笑んだ、『おやすみ、カスミ』と意識して優しく囁いた。

個人病院に着いて、蘭が受付してくると言って、エンジンを切らずに病院に入った。
私はカスミの熱を感じながら、後部座席で待っていた。
５分程で蘭が出てきて、助手席を開けて私に微笑んだ。やっと出た蘭の微笑みに安心していた。
私が抱いたまま降りて、エンジンを切る蘭を待って病院に入り、そのまま奥の診察室に入った。
診察室のベッドにカスミを優しく寝かせて、蘭に微笑んで待合室にまで戻り、長椅子に座って待っていた。
２０分位経って、蘭が出てきた。
「エンジンかけてくるから」と微笑んだ、『了解、待ってるよ』と微笑んで返した。
蘭が戻って、支払いを済ませ。診察室のカスミを抱き上げて、車に乗った。
カスミは閉じた目の力が弱まっていた、《少し楽になったかな》と思っていた。

アパートに着いて、蘭の部屋のベッドにカスミを優しく寝かせた。
「先にあなたの出来ない事をしとくね」と蘭が私にニヤした。
『了解、俺は蘭のお着替えしか出来ないから』とニヤで返して、部屋を出て。自分の部屋で待っていた。
「いいよ～」と蘭の声が聞こえ、蘭の部屋に戻った。
カスミがイチゴのパジャマを着て、私を見て微笑んだ。
『イチゴちゃん、可愛いよ』とニヤしてカスミを見ていた、カスミは顔だけで少し睨んだ。
蘭が氷枕を持って来たので、カスミの首を少し持ち上げた。蘭が頭の下に敷いた。
「ふ～」と蘭が一息ついて、カスミの横に座り。
優しくカスミを見ながら、カスミの額に手を当てた。
「バカ、無茶して・・今のあなたは、どれだけの人に愛されてるか分ってるの」と蘭が深い目で優しく囁いた、青い炎でカスミを包んでいた。
カスミは蘭を見て、少し頷き目を閉じて涙を流した。
蘭はカスミの横に寝転んで、カスミを優しく抱きしめた。涙をタオルで拭きながら。
私はその素敵な光景を見ていた、蘭の優しい青い炎に包まれて。

「起きてるうちに預かっとくね、車の鍵・・赤玉でしょ」と蘭は抱きしめているカスミに囁いた。
カスミは蘭を見て頷いた。
「靴屋の駐車場に入れとくから、心配ないよ」とカスミの額の汗を拭きながら微笑んだ、カスミは又涙を見せた。
「もう、泣かないの・・泣き虫なんだから」と蘭が笑顔で涙を拭いて、「少し寝なさい」と優しく囁いた。
カスミは蘭を見て微笑んで、体を離し上を向いて目を閉じた。
蘭がベッドから降りて、私の横に座って私の手を握った。私は蘭を

見て少し強く握り返した。
蘭は私を見た、その深く優しい瞳を見ていた、カスミの寝息を感じながら。

「買い物に行って来るね、ここに居てあげてね」と蘭が微笑んだ、私は微笑んで返した。
蘭を見送り、部屋から日記を取って、蘭の部屋のテーブルで書いていた。
「ごめんね」とカスミの声がした、振向くとカスミが微笑んでいた。
『眠れないの』と微笑んで返して、カスミの額に手を当てた。
「少し楽になったよ、夜大丈夫だからＰＧに行っていいよ」とカスミが私に言った。
『カスミ、俺はたとえ蘭が行けと言っても行かない・・今のカスミを置いて行けないよ』と額の手はそのままに、優しく囁いた。
「なんで、泣かすんんだよ」と私を潤む瞳で見た、『泣き虫』と微笑んでカスミを見ていた。
『なんで無茶した？』と真顔で聞いた、カスミの目を見たまま。
「面接行こうと・・あそこまでなんとか行った、あんたが空を見てるの見たら・・限界が来た」と素直に答えた、優しく深い目に少し光りが戻ってきた。
『焦るなよカスミ、まだ２０歳だろ』私も思ったことを静かに伝えた。
『俺を置いて必死に走るなよ、見えなくなるだろ・・大好きなカスミの背中が。
寂しいだろ、まだ追いかけられない俺が・・カスミが頂上に立つのを見たいと思ってる俺が。
寂しいだろ、カスミがどんどん遠くに行ったら・・不敵の笑みが見れない俺は』
私はカスミの額に手を当てたまま、カスミの目を見て囁いた。思ってるままに、正直に。

「なんで、泣かすんだよ・・みんな、なんでそんなに優しいだよ」
と言いながら泣いていた。
カスミの涙を見ていた、ベッド上がりカスミの横に座って、カスミの頭に手を置いて。
『おやすみカスミ、今夜は側にいるから』と囁いて、カスミの涙を拭いていた。輝く瞳を見ながら。
カスミは静かに頷いて、目を閉じた。
テーブルに戻り、日記を戻していた、カスミと出会った衝撃の下着姿まで。
私はその下にこう書いた。
【追記　私はカスミに出会えなかったら、絶対に蘭を追い続ける事は出来なかった。
カスミの不敵な笑顔に、いつも心が支えられていた。
私はこの出会いを忘れられないだろう。
いや、カスミという存在は、忘れるという言葉を拒絶している。
圧倒的美しさと、その下手くそな愛情表現で強く拒絶する。
カスミの心の叫びは、愛してくれと叫んでいる・・いつまでも】
書き終わり、やっと自分が戻った気がした、感情的な自分から。
振返りカスミを見た、静かに眠る完璧なバランスの横顔が、柔らかい光りを受けていた。
閉じられた瞳が、穏やかな精神状態を映していた。
常に必死で前だけを目指した、その心が休息しているようだった。
いつか本当のカスミを愛せる男が現れて欲しいと思いながら。
その時の寂しさに、俺は絶えられるのだろうかと思った。
俺は本心で【良かったね】と言ってやれる、人間になれるんだろうか。

俺はその時、カスミがくれた大切なあの権利を放棄できるのだろうか。
笑顔で返せるのだろうか、心に大切に持っているカスミの部屋の鍵を。
俺は浮気性なのだろうか、なぜユリカとカスミには感情的になるんだろうか。
人は一人の異性しか愛せないのだろうか、違う愛情を異性に持つのは罪なのだろか。
俺はずるい男なのだろうか、ユリカの事を好きだと言ったのは本心だったのに。
蘭を愛してる事は絶対なのに、誰よりも蘭を愛しているのに。
カスミどうして泣くんだよ、ユリカどうしてそんな寂しい目をするんだよ。

『未熟な俺には、どれかを諦める事なんて・・できないよ』とカスミに囁いた。
耳には届かないように、小さな声で・・静かに眠るカスミの心に問いかけるように。

私はこの時に混乱していた、蘭を愛している事には何の疑問も持たずに。

カスミの瞳が弱い光で、揺れた時の感情に自らが震えた。

そしてユリカを想っていた、ユリカが誰かと幸せになることを本当に望んでいるのか？

そう自分に問いかけた、返事の出来ない自分を知っていながら。

《蘭、早く帰ってきて》そう思って俯いた、未熟だと感じながら・・

春雨

記憶を辿ろう、原点を思い出そう。
そうしないとブレに気付かない、真直ぐ走ってると誤解したまま。

部屋を冷やすエアコンの音だけの世界、混乱する心を，、ドアの開く音が救った。
静かにキッチンを歩く足音が響いてきた、俯き目を閉じた私を帰した、愛する世界に。
私は目を開けて待っていた、蘭の顔が見えるのを。
静かに部屋の開き戸が横にスライドし、笑顔の蘭が姿を見せて私を見た。
「どうしたの？」と蘭が微笑んだ、『1時間も離れてたから』と微笑んで返した。
「よし」と言ってニッをして、カスミを見た優しい目だった。
そしてキッチンに戻り、夕食の準備を始めたようだった。
私は気分転換に、腕立て伏せをして腹筋をしていた、汗を流し必死になって。
落ち込んだ気分を払うように、夢中でしていた。

「カスミと2人きりの部屋から、ハアハア聞こえると料理が手につかん」蘭が覗いて笑顔で睨んだ。
『大人の想像は怖いな』とニヤで返した。
「私も怖かった」とカスミの声がした、起き上がりカスミを見ると微笑んでいた。
瞳の輝きがかなり戻っていた、嬉しくなり蘭を見た、蘭も嬉しそうに微笑んでいた。
「カスミちゃんご飯食べれそう？」と蘭が笑顔で聞いた。
「今は無理です」とカスミの声はまだ弱かった。

「じゃあ食べたくなったら、ロボットにお粥作ってもらったら、美味しいよ」と蘭が微笑んだ。
「はい、楽しみ～」と私を見た、『カスミのためだ、仕方ないな～』と笑顔で返した。

蘭の作った和食を2人で食べていた、カスミは静かに眠っていた。
私が肉じゃがを食べていると。
「母親のと比べるなよ」と蘭が笑顔で睨んだ。
『蘭と誰かを比べたりしないって』と笑顔で返した。
「男は女の料理を、すぐに母親の料理と比べるからね～」とニヤで返された。
『そうなの、俺は蘭の料理ならそれだけで最高だけど』と思ったままを口にした。
「味はどうでもいい、みたいに聞こえるんだけど」と目だけで睨んだ。
『そうじゃないけど、2人分作るって事は』私は蘭の瞳を見て。
『その時は俺のこと考えてくれてるんだと、そう思うだけで幸せだから美味しいんだよ』と思ったままを答えた。
「よし」と蘭は満開になって食べはじめた。
食べ終わり、蘭がシャワーをして、準備をはじめた。

カスミは静かに眠ったままだったが、顔色が良くなっていた。
「カスミ頼むね、店終わったらすぐ帰るから」と化粧をした蘭が微笑んだ。
『了解、蘭今日も綺麗だよ・・浮気するなよ』とニッで言った。
「カスミ襲うなよ」とニヤで返された。
蘭を玄関まで送ると。
「カスミがご飯食べたら、薬飲ませてね・・それと水分摂らせてね」笑顔のまま。
「食べ終わったら、テーブルあなたの部屋に入れて、あなたの布団

をベッドの横に敷いといて」と微笑んだ。
『了解、気をつけて行っといで』と笑顔で返して、見送った。
私は蘭の部屋に戻ってカスミの寝顔を確認して、シャワーを浴びて着替えた。
蘭の部屋に戻ると、カスミが目を開けていた。かなり光の戻った瞳に、安心していた。
『少しは良くなってきたかな?』とカスミに笑顔で言った。
「うん、私駄目やね・・人に優しくされた経験があまりないから、嬉しくて」と私を見て言った。
私はベッドに座り、カスミの額に手を当てて。
『今から、沢山優しくしてやるよ』とニヤで言った。
「口説くなよ、落ちそうやから」とカスミがニヤを出した。
『ばれたか、ご飯少しは食べないとね』とカスミを見て言った。「うん、お願い」と笑顔で返した。
私が氷枕の氷を交換してる間に、カスミがトイレと化粧を落としてベッドに戻った。
お粥と、ウインナーのタコさんとカニさんに、最近得意の卵焼きを作った。
「私、今まで生きてて、この料理が一番感動したよ」とベッドで座って笑顔で言った。
『味は愛情でつけたから、文句は言うなよ』と少し照れて返した。
「お願い」とカスミが両手を伸ばして、甘えた。
私は優しくカスミを抱き上げて、ゆりっくりとテーブルに座らせた。
カスミが美味しそうに食べるのを、笑顔で見ていた。
カスミは残さず食べて、笑顔で。
「ご馳走様、本当に美味しかった」と輝きを少し取戻して笑った。
『良かった〜少しカスミらしくなってきた』と私も笑顔で返しながら、薬を渡した。

カスミは薬を苦そうに飲み、両手を出して甘えた。
私はカスミを優しく抱き上げて、ベッドに寝かせて額に手を当てた。
少し熱が下がった気がして、カスミに笑顔を向けて。
『側にいるから、もう少しお休み』と囁いた、「うん」と言ってカスミは目を閉じた。
私はテーブルを動かして、布団を敷いた。カスミの寝息を聞いて。
折りたたみの小さなテーブルを出して、日記の補足を書いていた。
窓の外は暗くなり、蝉の声と車の音だけの世界だった。

１０時を過ぎた頃、カスミが起きてトイレに行った。
戻って横になると、私を引っ張った。私はカスミの横に座った。
『どうした、寂しいのかな』と笑顔で囁いた。
「お話しして、蘭姉さんにするみたいに」と微笑んだ、『どんなのがいい？』と笑顔で聞いた。
「豊君があなたを認めたのは、どうしてかが聞きたい」と微笑んだ、
『了解』と笑顔で返し。
『条件が１つ、目を閉じて聞くこと・・頷きもいらない、独り言を話す』とカスミに微笑んだ。
「了解、その優しさの原点を教えて」と言って目を閉じた。
私は電気を消してカーテンを開けた、窓から入る微かな明かりにカスミの顔が浮かんだ。
いつもの床に座って、カスミの美しい顔を間近に見ながら話はじめた。

『豊という男は生命に対し敏感なんだよ、そこから話さないといけない。
豊兄さんは両親の記憶が無い、１歳の時に事故で両親を亡くしている。
豊兄さんは奇跡的に助かったらしい、祖父である碁盤職人爺さんと二人暮らしなんだ。

俺達の育った地区は子供が多くて、共稼ぎの家も多かった。
だから子供社会が発達していたんだろうね、上が下を見るのが当然なんだよ。
俺達はカスミが言ったように、幸運だった豊兄さんが４歳上にいたから。
俺達が１年生の夏休み、豊兄さんは５年で宿題に昆虫採集があったんだ。
それを聞いた豊兄さんは、先生に詰め寄ったんだ。
生徒全員が昆虫採ったらどれだけ虫が死ぬんだと、それが何の勉強なんだと。
職員室で担任に意見したんだ、教師達全員に向かって。
日頃は全く問題を起こさない番長が問質した言葉に、教師は何も言えなかった。
無かったんだよ、生命を奪ってまで知らなければならない事など。
それで宿題まで変更させた、そうしないと豊兄さんが引かない事を知ってたんだよ。
そういう豊兄さんを見て育った俺達は、カブトムシとかクワガタとかでも採った事が無いんだ。
教えられてた、言葉ではなく・・行動と強い意志で。
豊兄さんが中３で俺が小５の春にある事件が起こった。小１の少女が行方不明になったんだ。
その子の家が離婚して、母親が出て行った。それで寂しくて、父親も呑んだくれでね。
それで母親の所に行ったんじゃないかって、でも母親の住まいは１年生じゃ行くのは無理だった。
見つからないで、段々大事になって。俺の親父も、探しに出て行った。
そしたら俺の部屋の窓を豊兄さんが叩いて、行くぞって言うんだ。
２人で探しに行きながら、どこかと考えてた。それで探してないだろう所考えたら。

船だって思ったんだ、その子の親父が小船を持ってて、好きだったんだよその子は。
こっそり乗って一人でままごとしてるのを、俺は心配でよく側で見てたから。
2人で走ってる時雨が急に振り出して、雨の中ずぶ濡れで走った。
真っ暗な中船に近づくと、泣き声が聞こえて。豊兄さんが抱き上げた。
その子もずぶ濡れで震えながら、「お母さん、お母さん」って泣くんだよ。
豊兄さんはそれをじっと見て、俺を真剣な目で見た。
「和尚の所に俺が連れて行く、お前は見つかった事だけ伝えろ」
「どんな事があっても、どこに居るかは言うな母親に会わせるまで」と言ったんだ。
真剣な目だった、俺は初めて真剣に頼まれた事が嬉しかった。
俺は伝えに行った、当然大人たちに囲まれて、どこか言えって詰め寄られた。
よく見たら、その子の親父は酒を飲んでいて、俺の所に歩いて来た。
外に出されてその子の親父に殴られた、酒臭いその息にて怒りが涌いてきて。
その子の、お母さんお母さんって言う言葉が蘇って。
一人で船に乗ってままごとしてる姿も浮かんできて。
そんな事も知らない酒臭い親父が許せなくて。
その場で雨に打たれながら土下座して、【言えない】と言って黙ったんだ。
そうしたら他の大人は何も聞かなくなった、俺の親父も黙っていた。
雨に打たれながら考えていた、親のいない豊兄さんはどれだけ辛かったかって。
俺でも響いたあの叫びが、どれだけ響いたのかって思ってた。

その子の酒臭い親父は一人で怒ってて、周りの親父達になだめられてた。
そしたら俺にこう言ったんだ、酒臭い息で頭の上から。
「うちの娘が死んだらどう責任とるんだって」激しく言われた。
俺はそこまでだった、立ち上がり殴りかかったその親父に。
「簡単に言葉で殺すな」って言って、どうしようもない怒りで我を忘れた。
俺の親父が俺を後ろから羽交い絞めにして抑えた、雨が強くなって。
土下座してた時、豊兄さんの事をずっと考えてた、出会ってから今までの事を。
親の記憶も無い男のことを、なぜ命に敏感なのかが少し分っていたから。
その親父の酒臭い息から出た言葉が、どうしても許せなかった。
それから、沈黙の時間が流れた。俺は親父に放されて、また土下座していた。
雨が強くて、俺だけ外で土下座していた、ずぶ濡れでも寒くなかったよ。
心にずっと豊兄さんがいたから、あの真剣な目が見てたから。
「このばかたれが～」って叫んだ和尚の声で全てが終わった。
その子は母親に抱かれて眠っていた、嬉しかった。
「お前達はなんぞ、人の親の前に、誰かの子供やったんじゃないんか」って。
和尚は激しく恫喝した、怖いぐらいに、何かが押していたよ生臭の背中から。
「お前が娘を母親にやらんなら、ワシにも考えがあるが」って和尚が父親に詰め寄った。
後で聞いた話ではその父親は、別れた奥さんを苦しめたいだけで娘を引き取ってたらしい。
多分周りの大人の中にもそれを知ってる奴がいて、和尚はそいつ

も許せなかったんだと思う。
【親である前に誰かの子供だっただろう】その言葉が響いて、豊兄さんを見た。
俺を見てあの右手の拳を突き出した、俺は嬉しくて駆け寄って右手の拳を当てた。
その日からだと思う、俺を弟のように接してくれたのは。
俺は沢山の事が分かったし、そして考えようと思うようになった。
春雨が教えてくれたんだ、傍観者じゃ駄目だって。
感じたら伝えろって、行動しろって、そうしないとあの少女はまだ、あの船の上で一人だって。
お母さんお母さんって泣いてるままだって思ったんだよ』

私はカスミの目を閉じた横顔を見ながら、話して良かったと思っていた。
忘れてた想いが蘇ってきたから、完璧な横顔を見ながらカスミの涙を拭いて。
『少しお休み、ずっとカスミを見てるから』と耳元に囁いた。
「登る姿をずっと見ててくれる？」とカスミは目を閉じたまま静かに言った。
『もちろん、カスミが疲れた時は側にいてやるよ、俺でよければ』と囁いて。
カスミの額に手をおいて、その冷め切れない熱を感じていた。
夜が深くなってきて、車の音は消えていた。
ただ蝉達の生きているという、それを主張する音だけが響いていた。
カスミが近くに感じられた、距離でなく深さが。
人と人の関係は、長さでなく深さで測るんだと思っていた。
また1つ近づいたカスミを見ていた、登ろうと決めた横顔を。

優しくされた経験があまりないと言った唇を。

優しくされた経験だけでも、作ってやりたいと思っていた。

愛情の形は色々あって良いよね・・・蘭

そう呟いてカスミを見ていた・・・。

予知

どこまでの変化に気付くのだろう、小さく微かな変化でも感じたい。
そうしないと遅れる、絶対に後悔したくないのなら・・感じるしかない。

深くなりゆく夜に蝉達の声だけが響いている、時折窓を叩く南風が誘っている。
開放の夏が来ていると、生命が産まれた場所を目指せと誘う、南国の夏。
私はカスミの復活してきた横顔を、飽きもせず見ていた。
時計は１１時を回っていた、カスミがゆっくりと目を開けた。
私を見た瞳には、はっきりと復活の光が現れていた。
『復活したな、心配かけやがって』と微笑んで、その輝きを見ていた。
「まだ、充電足りてない・・添い寝して」と少し照れた、可愛かった。
『激しく抱きついたりするなよ』と言って笑顔を返した。
「しないから、少しの時間でいいから・・腕枕して」と甘えた。

私はカスミのタオルケット越しに横になり、腕を首から通し少し引き寄せて腕枕をした。
カスミは私の方を向き、顔を胸に付けて静かになった。
その顔の小ささに改めて驚いていた、体に対するバランスが小さい事に。
「何考えてる？」と私の胸に向かってカスミが言った、目を閉じたまま。
『顔っていうか頭が小さいと、再確認してた』と素直に答えた。
「蘭姉さんも小さいぞ」と口だけ少し微笑んだ。

『うん、でも体のバランスから言ったら、カスミのは小さいよ』と囁いて返した。
「脳みそも少ないって聞こえる」と口だけニヤをした。
『カスミは頭いいだろ、あれだけの会話ができるんだから』と思ったまま言った。
「ギュするから、覚悟しな」と上を向き私に不敵を出した。
『やっと本当の不敵がでたね、涙出そうになった』と微笑んで返した。
「そんなに泣かせたいのか」と言って顔を下げて、強く抱きついた。
豊満な胸が私の腹筋で潰れていた、カスミの香りが漂っていた。

カスミはそのまま静かになった、私はカスミの頭と背中を支えていた。
何も考えていなかった、ただカスミが可愛くてそうしていた。
「私、やれるかも・・そう思ってるよ」とカスミが私の胸で言った。
『あんまり、急ぐなよ』と囁いて後頭部を撫でた。
「うん、響いたよ今日の言葉も、さっきの話も」と囁いて。
「私のこと・・好き?」とそこだけ少女のように小さな声で聞いた。
『好きだよ、勝手な言い方だけど・・カスミも特別なんだよ』と囁いて想いのままを話した。
『カスミが西橘で揺れた時、怖かった・・凄い恐怖に自分が驚いた。
もちろんその前から、カスミが特別だって思ってたけど。
自分の気持ちがそれほど強いことを、再確認させられて動揺したよ。
もちろん蘭を愛してる、心の底から。
俺さっき混乱してたんだ、未熟だから・・でも蘭の言葉を思い出して楽になった。
蘭がどんなに好きな人を想っていたとしても、生き方を変えてほしくないっ言ったんだ。
本心を言うと、俺はカスミともう一人特別な存在が、今は心にい

る。
でも絶対に蘭を悲しませる事だけはしない、でもその2人との関係も切らない。
俺は身勝手な人間だと思ってる、でもそれが俺の生き方なんだと思ってる。
だからはっきり言える、俺はカスミが大好きだよ』
カスミは静かだった、圧倒的静寂が2人を包んでいた。

「ありがとう、嬉しくて喋りたくなかった、私にとっても特別だよ」と静かに言って。
「今ので全部埋めてくれた、私の後悔していた未熟な時期も」と囁いてまた強く抱かれた。
「体を求めない男に初めて本当の意味で抱かれた、お前が初体験の男になったよ」と囁いた。
その声が、カスミの復活を主張して響いて、私は嬉しさに包まれていた。
「やっぱり、ユリカさんも特別か～」とニヤで私を見た。
『うん、贅沢な男だろ』と照れてる心を隠して、微笑んで返した。
「絶対その気持ち蘭姉さんは気付いてる、そしてあの人はそれを喜んでいると思うよ」と真顔で言った。
『俺もそう思う、素敵だよ蘭は』と心のままを口にした。
「お昼の仕事してみたいのは、蘭姉さんに近づきたいから」カスミは胸に顔を戻して囁いた。
「あんな風に生きてみたい、優しさも愛情表現も全て憧れてる」と静かに言って。
「土曜日の一番街のラッパ飲み、感動した心がブルブル震えたよ」と言って体を離した。
「ありがとう、また疲れたらしてくれるんだろ」と光が戻った瞳で微笑んだ。
『カスミがどんなに嫌だって言っても、その時は一人には絶対にさ

せないよ』と真顔で返した。
「楽しんでるだろ、泣かすの」と言って涙を流した。
私はカスミを氷枕に寝かせて、横に座り涙を拭いて額に手を当てて。
『お休みカスミ、ここにいるから』と優しく囁いた、カスミはゆっくり瞳を閉じた。
静寂の中、カスミの寝息だけが聞こえていた。私は楽になっていた。

カタンとドアの音がして目覚めた、私はベッドにもたれて寝ていた。
目を開けると、目の前に蘭がいて微笑んでいた。
私は無意識に蘭を抱きしめた、蘭も抱きしめてくれた。
「そっから押し倒すんだろう、寝たふりしといてやるよ」とカスミが後から言った。
「カスミちゃん、復活したね」と蘭は抱きしめたままカスミに言った。
「ありがとう、蘭姉さん」と言った言葉が優しく響いた。
「魔法いくつかけた」と少し離れて、私を笑顔で睨んだ。
『かけてないよ』と微笑んで返すと、「4つ」とカスミが言った。
「多い、ちょっと多すぎ〜」と満開で言ってまた抱きついた。

蘭が化粧を落とし、パジャマで帰ってきた。
『俺はどこに寝るのだろう?』とウルで蘭に聞いてみた。
「ここで私と背中合わせで寝るんだろ、カスミが何かあったら私じゃ抱けないよ」とニヤで返した。
「なんか急にめまいが」とカスミが不敵で私を見た。
『カスミはやっぱり良い子だね』とニッで返した。2人が笑っていた。
蘭が布団に入り、私も背中合わせで横になった。蘭の背中とお尻が当たってた。
「それは我慢なのか?」とカスミが聞いた。
『添い寝する前は、我慢との戦いだって思ってたけど、現実には我

慢しなくてよかった』と素直に話した。
「カスミに添い寝した時は？」と蘭が言った、『同じだよ』と誰にも見えないがニヤで答えた。
「それなんだよな～、その隠さない気持ちが魔法なんだよな～」とカスミが言って。
「私もそう思う・・・・」と蘭がカスミにミノルが語った話をした。
「蘭姉さん、今日のお礼に今度ご馳走するから、そこに連れてって」とカスミが言った。
『カスミも絶対好きになるよ、ミノルさん。カスミも聞き魔だから』と私が返して。
「よし、来週の靴屋が休みの日に3人で行こう」と蘭が言った。
「楽しみ～」とカスミが言って。
「うん、カスミもう寝ようね、今が一番大切な時間だよ」と蘭が言うと。
「はい、お休みなさ～い」とカスミが言って、お休みをした。

蘭が私の腰を手で優しく叩いた、私も手を伸ばして腰の上で繋いだ。
蘭が背中が暖かくて、最高の気分に包まれていた。
私がウトウトと眠りに入りかけた時、蘭が手を離し私の方を向いた。
目は閉じてて、眠ってる感じだった。私は優しく腕枕をして、軽く抱きしめた。
《恥ずかしがりやの、やきもちやきめ》と思いながら、多分意識があるだろう蘭を優しく抱いていた。
私は睡眠不足だったのか、いつ寝たのか記憶がなかった。
ただ2人の輝く女性の香りに包まれて、幸せに眠っていた。

翌朝、陽の光で目が覚めた、快晴だった、蘭は腕の中にいた。
《蘭、寝相いいよな～》と思いながら、ゆっくりと腕を抜き、静かにカーテンを閉めた。
朝陽に照らされたカスミは、完全復活を予感させる輝きを放ちなが

ら眠っていた。
洗面所で歯を磨き顔を洗い、ご飯がかなりあったので、3人分の朝食を用意した。
ハムエッグにレタスとトマトの皿に乗せ、上出来のカニさんタコさんを乗せた。
「ねっ良いでしょ～」と蘭が言って、「欲しい～」とカスミが元気な声で笑った。
2人が洗面所に消えて、私が布団を片付けテーブルを戻して、朝食を準備した。

「なんで、どうしてこんなに感動できるんだろう」と言いながらカスミが座り。
「あげないよ」と蘭がカスミにニッをしながら言った。
3人で朝食を笑顔で食べていた。
「今日はユメ・ウミ・マミの水着見るのか～」と蘭がニヤニヤで私を見た。
「残念だ～、私こんな調子じゃなかったら行こうと思ってたのに」とカスミが不敵で私を見た。
『カスミはもう青島じゃ有名人みたいだよ、それに1番の楽しみはその3人じゃない』とニヤで2人に返した。
「えっ、ハルカちゃんの見たんでしょ？」と蘭が突っ込んだ。
『君達みたいに、成熟してない体は見飽きた』とニヤニヤで返した。
「まさか！ユリさん水着・・着るの？」と蘭が驚いて返した、私はニヤで頷いた。
「蘭姉さん、靴屋休まないと危険だ」とカスミが蘭をニヤで見た。
「そうする、でも付いて行っても勝てない気がする」とニヤで私を見た。
『俺は蘭と誰かを比べないって言ってるでしょ』と微笑んで返した。
「うん」と言って蘭が笑った、「新婚さんみたいだ」とカスミが笑っていた。

私も蘭もその笑顔が嬉しくて、カスミを見ていた、輝きが完全に戻った姿を。

蘭とカスミが一緒にでかけた、玄関でカスミが振返り。
「お礼、今夜ね」と私を見て蘭にニヤした、「謹んでお断りします」と蘭がニッで返した。
私はウルしながら2人を見送って、朝の仕事を済ませて、日記を書いた。
１０時少し前には出掛けた、靴屋に入って蘭の背中に。
『綺麗な店員さん、ビーチサンダルありますか？』とニヤで声をかけた。
「もう少し大きい声で、もう一度」と蘭がそのまま要求した。
『宮崎で一番美しい靴屋のお嬢さん、ビーチサンダルありますか？』と少し声を大きくして言った。
「いや～ん、正直なお客さん、ありますよ」と満開で振返り、差し出した。
『それ下さい、綺麗なお姉さん』と言って返した。
「ありがとうございます、正直な坊や」と楽しそうに言って、袋に入れてくれた。
お金を渡し、お釣りを持ってきて耳元で。
「今日も夕方お迎え無理なの、私も充電がいる、仕事前に抱っこしてね」と囁いた。
私は指のサインで【ＯＫ・ＯＫ】と2回出して微笑んで返した。
満開の笑顔の蘭と手を振って別れて、ユリカの店に向かった。

途中で立ち止まって見ていた、カスミが揺れた場所を。
絶対に忘れてはいけないと、俺は前日もカスミを抱いて、深夜まで一緒に過ごした。
それなのに疲れてるとしか感じなかった事を、強く反省していた。
《抱き上げたのに、感じなかった》一番近くに体を寄せたのに。

俺は未熟だ、逆に俺が昨日カスミのような事になったら。
《絶対に蘭もユリカもカスミも前日に気付くだろう》と思いながら
アスファルトを見ていた。

「まだなの、そんなに道路が好き？」とユリカの声がして、横を見
ると可愛いユリカが微笑んだ。
『昨夜はごめんね、見上げてやれなくて』とユリカに笑顔で返した。
「うん、じゃあこれで勘弁してあげる」と言って手を繋いだ。
灼熱のアスファルトの上を歩いていた、もう少し全てに対し敏感に
なろうと。
そうしないと後悔する、それだけは避けよう。
ユリカの手の温もりと、可愛い笑顔を見ながら誓っていた。

結局私は、この関係の明確な何かをこの時には求めなかった。
確かに蘭に甘えていた部分も大きい、そしてこの2人との関係は続
く。

ユリカが冬のホームで汽車に乗るまで。

蘭に、この私の複雑な感情を話すのは2年後である。

その時の蘭の言葉に私はまた撃たれる、その限りない深さに。

どこまでも底が見えない、光輝く深海のような心に・・・。

伝言

どうやって伝えればいいのか、考えてもできない。
心の想うままに伝えてみたい、いつか感じてもらえると信じて。

真っ青な空が両脇の雑居ビルの通りの先に広がっていた。
灼熱のアスファルトの上は熱が放出されて、熱気が立ち上っていた。
でも私は気分爽快に可愛いユリカと手を繋ぎ歩いていた。
「カスミちゃん大丈夫？」とユリカが真顔で聞いた、真顔も可愛いと思いながら。
『うん、もう良くなった、よく知ってるね』と言いながらエレベーターのボタンを押した。
「昨夜、梶谷さんが来たの、あなた誘いに行ったけどって話聞いたの」と微笑んだ。
『あ～残念、ユリカの仕事する姿が見たいのに』と微笑んで返した。
「でもＰＧの女性は幸せね、あなたが側にいてくれて」と言いながら店の鍵を開けて入った。
『ユリカ』と私は言って、ユリカを抱き上げた、ユリカは自然に私の首に手を回した。
窓辺まで歩いて、ユリカを見た深く爽やかな目で私を見ていた。
『ユリカが体が辛くて寂しい時には、俺は絶対にユリカの側にいる』
窓の外を見ながら。
『その時にユリカが一人なら、俺は誰が反対しようが、ユリカが拒絶しない限り側にいるよ』
『そうさせてほしい、お願いだから・・ユリカ』と笑顔でユリカを見た。
「うん、約束だよ」と可愛く笑った、嬉しくて笑顔を返した。
抱き上げたまま外を見ていた、ユリカも外を見ていた。

『怖くないの、高所恐怖症の少女は？』と聞いた。
「こうしてると、何も怖くないよ」と微笑んで返してくれた。
『ねぇ、ユリカ聞いていい？』と微笑んで聞いた。
「なにかな、私があなたを好きかって聞きたいの」とユリカがニヤを出した。
『それは勝手に分ってるからいいよ、怖いし』とウルで返した。
『カスミと話したとき体調の事何か感じた？』と聞いてみた真剣に。
「初めて話したから、でも基礎体温が高い子だって思ったよ」と笑顔で答えた。
『そっか～、俺さっき反省してた、昨日あの場所でカスミが倒れたんだよ』と正直に言った。
「なんとなく分ってたよ、でもねそれは間違い」ユリカの深い瞳が私を見ていた。
「カスミちゃんはあなたを見たから倒れたの、あなたに会わなければもっと無理してたのよ」
「覚えててね、心を許すってそういう事よ」と最後は笑顔だった。
『ユリカありがとう、ユリカも俺を見たら我慢するなよ』と嬉しくて笑顔で返した。
「私はしないよ、最後の挑戦者の名付け親として、最後まで近くで見るよ」と爽やかに笑った。
『やっぱりユリカが付けてくれたんだね』と思ったままを口にした。
やはりユリカは気付いてた、私が時間ばかり気にして、その先を見てない事を。
それに対する激励として、称号をプレゼントしてくれたんだと。
『約束だよ、近くにいるって』とユリカの瞳に囁いた。

店の掃除をして、グラスを拭くと褒められた。
ＢＯＸに座って、カステラで休憩した、この頃からユリカは隣に座ってくれた。
『なんでユリカはこの店始めたの？』と横でカステラを食べるユリ

カに聞いた。
「大ママが独立して、やってみないかって言ってくれてね」と言って私を見て。
「似合わないって思ってるでしょう」と可愛く睨んだ。
『それもあるけど、大ママがよくユリカを手放したなって思ったんだよ』とニッで返した。
「リアンが独立して、大ママも変ったみたい・・そして私のその姿が見たいって言ったの。
お金も全部貸してくれて、そうすると真剣にやるだろうって言ってね。
私の事、全て分かってるから、将来の為にと思ってくれたの。
魅宴じゃ年齢が上がった時に辛いからね、優しくて大きな人だから。
だから私も頑張って、なんとかやれてるのよ」
深い目だった、でも子守唄の響きではなかった。
『なんとかじゃないよ、四天女に入るんだから・・やっぱり見たいなユリカの仕事』と微笑んで返した。
「フリーパスでしょ」と可愛く笑った。
『そうだけど、ちゃんと客としても見たいんだよ、知りたいのユリカの事もっとね』と正直に答えた。
「うん・・・少しもたれていい？」と可愛く照れた。
『もちろん、眠っていいよユリカ』と微笑んで返した。

ユリカは私に座って腕を組み、顔を肩に当て体重をかけて静かになった。
優しい吐息だけが聞こえていた、私もウトウトしながら楽しんでいたその心地よさを。
折角の心地よさを弁当屋のノックが破った、ユリカが出て受け取った。
食べながら、ユリカを見ていた。

『なんかお昼ご馳走してもらって悪いな～』とユリカに言った。
「いいよそれ以上の事してもらってるから、それにこれでもこの店のオーナーママよ」と胸を張って威張った。
『やっぱり大きいね、ユリカの』と下ネタで返した。
「本物はもっと凄いよ」とニヤで返してきた。
『誰にも見せるなよ、俺が寂しいから』と本気の言葉を誤魔化すためにニヤをした。
「まだまだ、そこまでは無理だって一番知ってるくせに」と爽やかな笑顔を見せた。
『俺ねユリカ、答えが出せなかったんだよ』と内容は言わずにユリカに言った。
「答えを今求めないで、感じなさいその心のままに、それが望みよ」と真顔のユリカが私を見ていた。
『うん、ゆっくりと時間をかけるよ、ありがとうユリカ』と真顔で答えた。
不思議だった、ユリカとの会話には説明がいらない、その感性の鋭さが怖くもない。
そしてその時に気付いていた、俺はユリカにだけは必ず会話の端々にユリカと呼んでいる事に。
2人しかいないのに、ユリカに対してだよと言うように。それが自然だった。

12時40分にユリカがエレベーターまで送ってくれた。
『また明日、今夜は囁き沢山するよ』と笑顔で言った。
「うん、あれ凄く嬉しい、元気になるよ・・色々話してね」と言って笑顔で手を振った、私も手を振って返した。
エレベータの中でも寂しさは無かった、ユリカの不思議な感性を、考える事もしなくなってた。
PGに歩き出すと、ビルの前に青島の有名ホテルの、送迎バスが停まっていた。

《ユリさんは何をやっても豪華だな～》と感心していた。
運転手は杉山の爺さんだった、私は声をかけた。
『今日はお世話になります』と運転席に笑顔で言った。
「おっ小僧、最近見ないと思ったら、夜街にいたのか出世早すぎやぞ」とシワシワで笑った。
『もういいかな～て思ってね』とニヤで返した、その時待ちきれないエミとミサが降りてきた。
「チャッピーいるじゃない、言ってくる～」と言ってエミが走って戻った。
私も杉山の爺さんに手を上げて、ＴＶルームを目指した。
ワクワク顔の３人娘が廊下で待っていた、ＴＶルームを覗いて挨拶した。

全員揃っていた、ユメ・ウミ・マミも来ていた。
「もう待ちきれないみたいなの」とユリさんが微笑んだ。
『バス来てるから、行きましょう』と言って、ビーチサンダルに履き替えた。
「あなた荷物ないの？」とユリさんが言った。
「ユリさん面白いですよ～、中１とは思えない交友関係が見れます」とハルカがニヤした。
「それは楽しみね～」とユリさんも悪戯っ子を出した。
『やめて下さいよ～、ユリさんの水着姿を楽しみに来たんだから』とニヤで返した。
「堪能してね、めったにないわよ」と悪戯っ子継続中だった。
『ハルカ今のが１００点の解答だ、メモしときなさい』とハルカにニヤした。
「はい、教官」とハルカが言って、皆で笑いながらバスに向かった。
私がマリアを抱いてエミ・ミサの後を入った。
『はーい良い子は一番後ろです』と言って３人をやり。

『じゃあユメ姉さんウミ姉さん、両端よろしく』と2人を見た。
「は～い」と楽しそうにユメとウミが両端に座った。
「小僧、全員揃ったのか」と杉山の爺さんが言ったとき、ユリさんが横に立って。
「今日はお世話になります、よろしくお願いします」と頭を下げた。
杉山の爺さんはユリさんを見て慌てて立ち上がり、頭を下げた。
『爺さんでも、美人には弱いね～』とニヤで言うと、「俺だって男やからな」とシワシワで笑った。
「早くも一人発見しました」とユリさんが私を見て微笑んで一番前に座った。
「じゃあ、出発しま～す」とご機嫌な杉山の爺さんの声に。
「は～い」と3人娘が答えた、少女の輝く笑顔で。
「小僧、ほれ」と杉山の爺さんがマイクを出した。
私は受取り、皆の期待の目を見て決めた。

『今から海に入る時に、注意することをお話をします』と言うと皆で拍手をしてくれた。
3人娘は興味津々の顔を向けた、陽の光を受けて輝いていた。
『青島の先、堀切峠を上がって少し行くと、とっても大切な場所があります。
そこは岩がゴツゴツとあって危ないので、人は泳げません。
昔昔のお話です、漁師のおじさんが嵐にあって流されてしまいました。
何日も食べるものも無くて、少しの水も無くなってしまいました。
海の水は塩が入ってるので辛くて飲めません、もう死んでしまうかもって思って空を見ていました。
そうしたら、横で何かが跳ねました。
覗いてみると大きな真っ白いお魚でした、お魚は顔だけ出しておじさんを見ていました。
「どこか一番近い陸に上がりたいんやが」っておじさんはずっと

寂しくて、誰かとお話したくて。
お魚にお話ししました、言葉が分らないと知っていても、どうしてもお話ししたかったんです。
お魚はおじさんを見つめて、【キュウッ】て鳴いて首を横に振りました。
そしておじさんに近づいて、首をいっぱい振りました。
おじさんはこのまま船にいても死ぬだけだと思って、海に飛び込みました。
そうするとお魚が潜って、おじさんを背中に乗せてくれました。
そして全速力で真直ぐ泳ぎました、一度も海に潜らずに。
おじさんはお腹が空いて疲れたたけど、必死に背びれを掴んでいました。
そうすると陸が遠くに見えてきました、おじさんは嬉しくて嬉しくて泣いていました。
お魚は真直ぐに泳ぎ、岩がゴツゴツの所に体をぶつけながら泳ぎました。
お魚はいっぱい怪我をしても、頑張って泳ぎました。
そうして小さな浜に着いた時には、体がネズミ色になっていました。
そして、おじさんが降りて浜に立つと、また海へと帰っていきました。
おじさんはその時気付きました、自分が一番近い所と言ったから怪我をしてまでここを選んだと。
その時の分りました、生き物には全てに愛情があるんだと。そして伝わるんだと思いました。
おじさんはお魚を探しました、海に入って呼ぼうと思いましたが。
昔昔でその魚には名前がありませんでした、仕方なくこう呼び続けました。
「どこにいるか、どこにいるか」と叫び続けましたが、もう会うことは出来ませんでした。

おじさんは何もそのお魚に恩返しできないので、その魚をイルカと名前をつけました。
その後に自分が忘れないように、他の人にも分かってもらえるように。
イルカが身を裂いてでも助けてくれた事に感謝して、その場所に【みさき】とつけました。
今でも海に出ている場所を岬と呼んでいます、生きている物全てに対して感謝をするためです。
海に入ると分かります、とっても優しい場所だと。
足が届かなくて困った時は、バタバタしたらいけません、勇気を出して体の力を抜くんです。
そうすると、体が浮かんでいきます、イルカが下から背中に乗せてくれるからです。
分かりましたか～』と笑顔で3人娘を見た。

「は～い」とエミが言ったがミサの反応が無い。
見るとミサは俯いて泣いていた。私は慌てて駆け寄って抱き上げた。
『ごめんね、ミサどうした？』と優しく聞いた、「イルカちゃん痛かった？」と聞いた。
『痛くないんだよミサ、誰かの為に何かをしてあげる時は痛くないんだよ』と優しく抱きしめた。
「痛くなかったね」と花開くように笑った、「ない」と言ってマリアが天使の笑顔で見ていた。
「イルカ岬って今でもあるの？」とエミが聞いた、『もちろん』と笑顔で答えた。
「帰り道、イルカ岬をまわりま～す」と杉田の爺さんが楽しそうに叫んだ。
「やった～、おじさん大好き～」とエミが嬉しそうに叫んで返した。
「初めて注意事項の意味が分かったよ」とユメが微笑んだ。

「素敵な注意事項だった」とウミも笑顔だった。
ハルカとマミも笑顔で私を見ていた。
前に戻ると、ユリさんが薔薇の笑顔だった、その横の窓に海が見えていた。
最高の季節を楽しめと、波が穏やかに寄せていた。
私は昨夜のカスミに話した事で感じていた、伝えたいと。
そして伝えるのに、これ以上の子供達はいないと思いながら、３人娘を見ていた。
傍観者じゃいけない、感じたら伝えろと、行動しろと私に言った。
あの強い春雨と、私の部屋の窓を叩くあの音が聞こえていた。
波音を連れて・・・。

感性

宮崎の夏は何かを誘う、どうしようもない誘惑がある。
その乾いた空気が呼びかける、上着を脱いでビーチに行こうと。
そこにはあった、全てが・・そしていつの頃から無くなった。
引き潮にさらわれたように・・・。

夏がある本物の夏が、密集して咲く大きなコスモスようにパラソルが開いていた。
海の家の面々はお盆前のラストスパートに、血気盛んで大声を出していた。
私はホテルの手前でバスを降りて、サーフショップに行って海パンを取ってバスタオルを借りた。
ビーチに行く途中で顔馴染のサーファーに、カスミの事を聞かれてとぼけていた。
《やっぱカスミは凄いな、水着姿見たかったな～》と思いながらビーチを歩いた。
面倒くさいので海の家を避けて、着替えて、ユリさんの言ってた大きなパラソルを目指した。
広いビーチに3張りしかない大きなテントなのですぐに見つかった。
そこにはパラダイスがあった、全員が水着に着替えていた。

『まさにパラダイスガーデンじゃ～』と和尚を真似た、想像を超える光景に。
真っ先に目を奪われたのはやはりユリさんで、そのスタイルは子供を産んだと思わせない物だった。
しなやかという表現がピッタリの柔らかい感じて、熟れた大人を見せ付けていた。
ユメもウミも想像通り無駄の無い綺麗な体で、女性らしいくびれの

ラインが素敵だった。
そして驚いたのがマミで、カスミのように腹筋が少し隆起していて、引き締まった体をしていた。
「最初はサーファー先生お願いします」とウミが言ったので、３人娘を呼んでストレッチをした。
マリアはウミが嬉しそうに補助していた。
『ＯＫでしょう、とりあえずユメ・ウミで浅瀬でミサ・マリア頼んでいいかな？』と笑顔で言った。
「は～い」と返事して浮き輪持って楽しそうに歩いて行った。
エミが私を見てる、私はエミを見て。
『小学生は俺がスペシャルサービスをしてやる』と笑顔で手を広げた。エミが嬉しそうに飛びついた。
『じゃあちょこっとハワイまで行ってきま～す』と言ってチェアーに寝転ぶ笑顔のユリさんとハルカとマミに、エミが手を振った。

私はエミを片手に抱いて、首まで入った所でおんぶした。私の首に両手を回させて握らせた。
『怖くない？』とエミに聞いた、「全然、楽しい～」と後から楽しそうな声がした。
「どこまで行くの？」とエミが聞いたので、『もちろん、あの小島』と沖にある大きな休憩用の浮島を言った。
「やった～がんばれ～」としがみつく手に力を入れた、『手を離すなよ』と言って平泳ぎで泳いだ。
浮島にエミを抱いて乗せて、私も乗ったかなり揺れるので。
『エミ怖くない？』とエミの手を握った、「全然、気持ちいいな～」と海を見ていた。
ミサとマリアが浅瀬で遊んでるのを見て、エミが立って大声で手を振った。
ユメとウミが手を振って、ミサが羨ましそうな感じだった。
「ミサ絶対来たいって言うよ」とエミが笑顔で横に座り手を握って

言った。
『ミサまでならなんとかしよう』と微笑んで返した。
「それで、イルカ見るまで帰らないって、ぐずるよ」と笑っていた、少女らしい笑顔が嬉しかった。
『それは困った』と困った顔で、エミを笑わせた。

「海ってこんなに気持ちがいいんだね」とエミが笑顔で言った。
『この位沖に出ると違うだろ』と笑顔で返した。
「うん、初めて来たよこんな所まで」と嬉しそうだった。
『来年はお父さんが一緒だといいね』と微笑んだ。
「うん、でもチャッピーいないとつまんないよ」と私を見た。
『もちろん来るよ』と笑顔で言って海に入り、エミをおぶって帰った。
それを見てたミサが待っていた、私はミサを抱き上げてテントに向かった。エミはマリアの所に行った。
『水泳部の可愛いマミちゃん、ミサを浮島まで連れて行きたいんだけど補助して』とマミを見た。
「どうして水泳部なの？」とマミが立ち上がりながら言った。
『腹筋が水泳部かと』とニヤで返した、「正解」とマミが笑った。
ハルカも立ち上がったので、私はハルカを見て。
『遠いぞ、足届かないぞハルカ』とニヤで言った。
「漁師の娘よ見てなさい」とニヤで返された、ユリさんが気持ち良さそうに薔薇の笑顔で見ていた。
私は肩まで来て、マミにミサを背中に回させ、手を首の所で握らせて、マミにミサのお尻を補助するように頼んで泳いだ。
ハルカの泳ぎが上手いのに驚きながら見ていた。浮島にハルカが先に乗りミサを抱き上げた。
私もハルカに両手を伸ばした、笑顔で舌を出された。
私が上がりミサを抱くと、ミサは沖を見ていた。

「イルカさんいないのかな～」と私を見た、『いるよ、でも今お昼寝かな』と笑顔で返した。
『ミサ、イルカさんもクジラさんも、小さなお魚だって沢山いるんだよ』とミサに囁いた。
「お魚さんいるんだね」と笑顔で私を見た、可愛い笑顔が直射日光で輝いていた。
『怖くない？』とミサに聞いた、「怖くないよ、優しい場所だってわかった」と笑っていた。
帰りはハルカが補助して、ママの美しい泳ぎを見ていた。
テントには皆帰って来ていて、ユリさんが氷でも買っておいでとハルカにお金を渡した。
6人で海の家に楽しそうに歩いて行った、私はユリさんの隣のチェアーに寝転んだ。

「さすがですね、楽しむという事をよく知ってるわ」と薔薇の微笑で言った。
『得意ですからそれだけは』と笑顔で返した、隣の水着のユリさんに緊張しながら。
「ユリカの事、本当にありがとう」とユリさんが言った。
『何もしてませんよ、遊んでもらってます』と海を見ながら言った。
「あの宴会の時、私も蘭もユリカを見て凄く驚きました、そして大ママは泣いてましたよ」とユリさんも海を見ていた。
『やっぱり、ユリカも愛されてるな～』と思ったままを口にした。
「特にあなたに、昨日のカスミちゃんを見る顔もそうでしたけど」と私を笑顔で見た。

『カスミの目の光が弱くて、揺れた時怖かった、そして動揺してました。
カスミに対する想いを再確認して、昨日はずっと考えてて、混乱してて。

勿論、蘭を愛してます、心から。それがあるのにって考えました。
結局何も答えは出なくて、今は出せないんだと思いました。
俺は勝手な人間だと思って、その部分で蘭に甘えてて、でも切り離せない。
ユリカとカスミはどこか特別で、今日ユリカに今は答えなんて出すなって言われて。
少し落ち着きました、未熟ですまだまだ』と正直に話した。

「そこなんですよ、最後の挑戦者にユリカが込めた想いは、蘭との事は当然ですけど。
他の女性との関係にも期待してるって、あのユリカの口から出るとは思ってもなかった。
あなたはもう分ってるでしょ、ユリカの研ぎ澄まされた感性。
あなたの気持ちを分っていて、それでもそれに賭けたいって言ったんですよ。
あの子の気持ちを開いたのはあなたです、思ったままにやってね。
何も隠せない最強のユリカが挑戦者に選んだ男ですよ、自信を持ってね」と薔薇で微笑んだ。

『そっか〜、ありがとうユリさん、少し分りました』と笑顔で言って。
『最後の挑戦者、必ずユリカをその場所まで引っ張り出します』とユリさんを見て言った。
「さすがね、そういう事よ。愛されているのよ、あなたも」と薔薇で微笑んだ。

私はまた勘違いに気付いた、ユリカが対人恐怖症と言った意味を誤解していた。
ユリカの鋭い感性なら、好きな相手の強い感情は読めるんだと。
今までそれに自らが苦しんだんだと、それで相手はユリカから去っ

て行った。
ユリカはもう飽きていたんだ、愛すると苦しむだけだから。
相手が気持ちを隠すのが、分ってしまうのが辛かったんだと。
だから未経験の唯一愛する者に会いたかったんだと、そして俺は選ばれたんだと。
ユリカの最後の挑戦者に、どこまで正直に貫けるのかの、俺はユリカに愛されてる。
もちろん、恋愛対象じゃないだろう、そんな小さな枠組みの話しじゃないと言ったんだと。
【最後まで近くで見る】と言った言葉を思い出し、ユリカを想っていた。
必ず引きずり出す、ユリカがどこかで諦めている、ステージまではと強く思った。
《大丈夫ユリカ、俺だけは逃げない蘭からもユリカからもカスミからも》と海に呟いた。

「はい」と言ってハルカがコーラを差し出した、『サンキュー』と言って受け取った。
「小僧は今何してるんだって、かなり聞かれたよ」とハルカがニヤした。
『忘れてないだろうねハルカ、青島じゃ俺の彼女になってる事』とニヤで返した。
「あっ、それでか～」とハルカが笑った、「今夜も報告会あるね」とユメがニヤした。
『昨夜は寂しかったろう』とユメにニヤで返した。
「それもあるけど、あの席にあんたがいないと調子でないよ」とユメが微笑んだ。
『皆さんの愚痴聞き件、不満解消ロボットだからね』と笑顔で返した。
「そうでもないよ、昨日皆感じてたよ、ボーイさんと違う安心感が

あるよ」とウミが微笑んだ。
『ユメとウミは本当に良い子だ、ハルカと違って』と泣き真似をした。
「そんなことないよ、ハルカが一番寂しそうだったよ」とマミがハルカにニヤした。
『ハルカ』とまで言ったら、「どっち言うの惚れるなよ、それとも火傷するぜ」とハルカがニヤで返した。
『ユリさんハルカが、反抗期に入りました』ユリさんを見ながら泣き真似した。
「良かった～、遅いから心配してたのよ～」とユリさんがハルカに微笑んだ。
「もう、ユリさんに振るのやめてよ、返せないの知ってて」とハルカが私を笑顔で睨んだ。
『どうして君達はユリちゃんに意地悪するんだ、仲間に入れてあげなさい』とユリさんを見た。
「いつも、私だけ仲間外れなんです」とユリさんも泣き真似をした。
『ヨチヨチ、ほら泣いてるじゃないか』とハルカを追い詰めた。
「参りました」とハルカが頭を下げて、皆で笑った。

マリアが私の所に来て抱き上げると、海を見て天使で微笑んだ。
『そっか、マリアも少しだけ入ってみるか』と言って海に歩いた。
私の肩までの高さで、マリアを浮かべて遊んでいた、天使の笑顔で笑っていた。
3人娘が充分遊んで眠そうになったので、帰る事にした。
私が着替えて、眠くてフラフラのミサを抱いて、バスタオルを返してバスに乗って待っていた。
全員乗ると、ユメが手を出したのでミサを渡して。前に行って座った。
杉田の爺さんは約束を守って堀切峠を登り、イルカ岬に連れて行った。

「素敵、素敵な所ね」とエミが輝く少女の笑顔を私に向けた。私は抱き上げて海を見ていた。
『あの海の向こうにも沢山人が住んでるんだね、地球は広いね』とエミに笑顔で言った。
「うん、きっと行ってみる、沢山の人に会ってみたいから」と海を見ていたエミは、未来を見ていたのだろう。

私も遥か彼方の未来を想って水平線を見ていた、最強に選ばれた挑戦者として。
青い水平線は気付かないほどの緩やかなカーブで、地球が丸いと主張している。
平穏な気持ちでエミを抱いていた、抜打ちテストが迫っていると知らないで。
その難問を解くための準備はまだ完全でなかった、次の出会いが変える根本的何かを。
その挑戦者は今動き出していた、背負っている者のために挑戦を決意していた。
【黒の魔女　蓮】と後に呼ばれる、最新型の秘密兵器がすぐそこまで来ていた。
私の次の難問を解く鍵を握り締めて、求人募集を見ていた暗黒の瞳で。

ユリカの事を誤解されそうで怖い、私の文章力の無さを痛感させられる。

ユリカの感性は無論、超能力とか霊感的なものではない。

だが勘が鋭いというレベルでもなかった、私の見上げて囁きの回数を間違った事はない。

私はその事には何故か興味を持たなかった、それがユリカ鋭い感性だと思っていた。

今後もっと不思議なユリカが出るが、どうか作り話と思って頂きたい。

しかし存在した、それは嘘でも妄想でもない。

確かにいた・・・透明の女神が。

魔女

変化の時を感じたら、受け入れる覚悟がいる。
人は変化をする、その時の環境や経験で変る・・恐れずに変ろう自分を信じて。

その強烈な個性は暗黒の囁き、完成されてない心の叫び、影を伴って進む。
違和感を感じる者、しかし最深部は紅の炎に包まれている。
帰路についたバスは快調に進んでいた、最後部に3人娘の寝顔が有った。
私はユリさんと密着して座っていた。
「少し蘭の場所借りても良いかしら」とユリさんが少し疲れた顔で微笑んだ。
『もちろん、お休みなさい』と微笑んで返した。
ユリさんが肩に頭を乗せると、潮の香りと薔薇の香りがした。
《やっぱ圧倒的やな～成熟度が違うな～》とニヤニヤしていた。

バスが静かにビルの前に着いたのが、4時を少し過ぎた時だった。
全員で杉田の爺さんに礼を言って、私はエミを抱き上げてエレベーターで上がった。
TVルームでマダムが待っていた、3人娘をベッドに寝かせて、ユメ・ウミ・マミは準備に帰った。
「面接受けたい子が来たんじゃが、難しい子でユリと徳に見てもらおうと思って」とマダムがユリさんに話した。
「久しぶりですね、マダムがそんな顔する子は」とユリさんが微笑みをマダムに向けた。
「あぁ、ユリも会えば分るよ」と訝しげにマダムが言って、私を見た。

「明日４時に来るかい、お前も見てみろ面白いぞ」とマダムが言った。
『どの位？まさかユリカレベルとか』と笑顔で返した。
「そこまでないが、化ける可能性はあるぞ」とマダムも笑顔になった。

ハルカが来て受付に行き、予約確認をしてると、カズ君が満面の笑みで歩いて来た。
『分りやすいぞ、カズ君そんなんじゃ、皆にすぐばれるぞ』とニヤで見た。
「悪い悪い、嬉しくて」と笑顔で言った、ハルカが不思議そうに見ていた。
「ハルカごめんよ、泣かないで聞いてくれ」とカズ君がニヤして言った。
私は受付に有った雑巾を手にした。
「俺、今日美冬に告白して、ＯＫをもらった・・泣くなよ」と笑顔で言った。
ハルカは大袈裟に泣き真似をした、私が雑巾で涙を拭こうとすると睨まれた。
「おめでとうございます」とハルカも笑顔で言った。
「やっぱハルカには読まれてたか、まあ気持ちを確かめただけで今からが大変だけど」と照れて笑った。
『美冬がエッチな事されても、客に殴りかかるなよ』とカズ君にニヤで言った。
「その辺が自信無し、顔には出るかも」とニヤで返した。
『俺みたいに修業をしなさい』と胸を張って威張って見せた。
「頑張ります、師匠」と言いながら右手を出した、『うむ』と笑顔で握り返した。

カズ君が仕事に戻り、タバコをチェックしてると。

「キューピットもするんだ～」とハルカが私に微笑んだ。
『ハルカの時はしない、邪魔する・・俺が寂しいから』と笑顔で返した。
「いいよ、その代わり、ずっとそこにいるんでしょうね」とハルカも笑った。
『当然、俺決めたんだ過酷でもそうしようと、リアンやユリカみたいに俺も常識の外に出ようと』
『そうしようとね、あの自分の台詞を復唱してるよ』と真顔でハルカに言った。
「良い事ばかりする中学生じゃない、本当は私凄く響いたよ」とハルカが笑顔で返してくれた。
『カスミとハルカとマミが登って行くのを見たいからね』と笑顔で返した。
「私が倒れた時も側にいてくれる？」私の大好きなハルカの真剣な眼差しを見ていた。
『失礼だぞハルカ、俺のハルカに対する、特別な気持ちを分ってるくせに』と真顔で返し。
『絶対側にいるよ、ハルカが拒絶しない限りね』と微笑んだ。
「うん、ありがとう、準備してくる」と笑顔で返し控え室に消えた。
《ユリカとカスミに対する感情が、ハルカに向ける物と同じなら楽なのだろうか》と考えていた。

タバコを買いに行く時に、ユリカのビルの前で止まって見上げた。
《ユリカ元気か、挑戦を受けるよユリカが好きだから、覚悟しな》と心で囁いた。
タバコを買って帰り道でも立ち止まり、見上げた。
《ユリカ何してる、さっきは強がった・・お手柔らかに》とニヤしながら囁いた。
「空に何があるのかな？」と後から声がした、振向くと少し固まった。

真夏に真っ黒なフリフリワンピースを着た若い少女が立っていた。
その真っ黒な瞳に暫し捕まった。
全体的な雰囲気も黒だったが、外見の可愛さには目を奪われた。
『魔法をかけないでね』とウルで返した。
「教えないと、石にする」と笑顔が出た、かなり違和感のある笑顔だった。
『何をでしょう、俺まだ未経験だから聞いた話と、雑誌の情報しかないけど』ニヤで返した。
「それじゃない、大きなクラブの関係者でしょ？出てくる所見てたから」と少し微笑んだ。
『この辺の人はＰＧって呼ぶんだよ、そうだけど』と笑顔で返した。
「今日面接頼みに行ったんだ、どんな感じが良いか聞きたくて、夜働くの初めてだから」と少し出す笑顔が可愛かった。
『ん～俺、人と話すときどこか触れてないと駄目なんだよ』とニヤで言って、手を出した。
私を黒い瞳で見たまま動かない、その輪郭は細く整った目鼻立ちが神経質さを映していたが。
外見の可愛さは隠すことが出来ないほど、秀でていた。
「あんた、変わり者やろ、私に手を差し出したのあんたが初めてだよ」と少しの笑顔で手を繋いだ。
その手の冷たさに少し驚き、でも次第に温まっていくのに気持ちよさを感じた。

私は呼込みさんの腕時計を覗き、時間があるので中央通りの、立ち飲みパーラーに引っ張った。
彼女がアイスコーヒーで私がコーラを注文し私が払った。
「ご馳走してくれるの」と笑顔がでた、『一応、男ですから』と微笑んで返した。
『魔女さんは、何が聞きたいの？』と笑顔を向けた、そのどこか違う可愛さを見ながら。

「面接の洋服とか、注意するとことか」と真剣な目の黒の深さに息を飲んだ。
『明日はユリさんって人も面接入るから、何を隠そうとしても無駄だよ』と真顔で答え。
『俺の感想だと、魔女は採用される、その気持ちを正直に話せばね』と微笑んだ。
「本物の女ってことだよね」と笑顔を出さずに聞き返した。
『圧倒的本物、でも会えば魔女も一緒に働きたいと思うよ』と返すと、「なぜ？」と返された。
『誰にも理解されなかった人には、女神のような存在だから』と感じたままを伝えた。
魔女は黙って私を見ていた、その暗黒の瞳が何かを感じていた。
《ユリカと絡んでなかったら、押されてたなこの瞳は》と思いながら瞳を見ていた
「少し分った、あんたを追いかけた私は間違ってなかったって」と微笑が出た、可愛さを絶対に隠せない微笑が。
『いい男だから、よく追いかけられるよ』とニヤで返した。
「言ってろ・・ありがとう、なんか凄く助かった気がする」と笑顔が出た。
『正直に、頑張って、何もしてやれないけど応援してるよ』と笑顔で言って、パーラーの前で別れた。
魔女は私を見ていた、暗黒の瞳は光が無かった、ただ外からの反射だけをするように。
なぜか私は漠然とユリさんは採用すると思っていた、ＰＧには無い何かを持っている気がしていた。
ユリカとは比べようもないが、マダムの【化ける】の意味は感じていた。
夕食をハルカと3人娘と食べた、ハルカは金曜なので早目にドレスを着ていた。

食べ終わり私は裏階段の踊場で黄昏ていた、海の方向の手摺りにもたれて。
「誰かを待ってた？」と蘭の声が後から聞こえた、振向かず。
『充電少ないって言うから、ずっと心配で待ってた』と言って振向き手を出した。
蘭が満開で手を繋いだ、私は蘭を引っ張って４階との中間地点の踊場で蘭を抱き上げた。
蘭は首に手を回し静かにしていた、少し痩せたかなと思っていた。
《敏感になれ、絶対に見落とすな》と心で言いながら、雑居ビルの森を見ていた。
『少し痩せたね』と蘭に囁いた、「夏だからね」と囁いて返した優しい響きで。
『しんどい時は隠すなよ、俺には』と蘭の耳元に囁いた。
「何も隠したりしないよ、あなたが聞きたくない過去以外は」と私の顔を見てニヤした。
『本当は別に気にしてないよ、俺と出会う前の事なんか、俺は今の蘭が好きなんだから』と微笑んで返した。
「よし、充電完了」と満開の笑顔になった、それを見て笑顔で降ろした。

蘭の背中を見送って、指定席に座った。
静寂のフロアーを見ながら、目を閉じた蘭の姿を見るために。
頭の上に柔らかい物が乗って、目を開けた。何なのか分らなかった。
「あるがとう、復活したよ」とカスミの声がした、フロアーの四季がこっちを見て笑ってた。
『お餅乗せてるだろう、お礼のつもりなのか』と前を見たまま、言った。
「こんなんじゃお礼にならないよ、重たいから乗せてる」と多分不敵で言った。
入場してくる女性達に、笑顔で見られていた。

蘭が入ってきて、一礼してこの状況を見た。
「こら～、カスミそんな変な物を置くな～」と慌てて私の前に来て、全開ニヤした。
「置いてごらん、楽だよ」と言いながら、カスミが離れて蘭に不敵を出した。
「やってみよ～」と蘭が後に回り、胸を乗せたので。
『蘭のは無理～大きすぎて首が折れそう』と言った。
「よし」と言って、笑いながらカスミとフロアーに向かった。
「やっぱりいないと駄目だよ、雰囲気が違うよ」とマミが笑顔で言った、嬉しくて笑顔を返した。
『マミちゃんは今どこでお勉強中なの』と笑顔のまま返した。
「今日までフロアーサービス、楽しいよ～」と微笑んだ。
『まぁあの腹筋なら体力あるよね、可愛い腹筋ちゃんが忘れられない』とニヤで返した。
「忘れなさい」と頭を優しく叩かれた、『無理～』とニヤで返して、マミを見送った。

美冬と目が合った、新しい輝きを身につけたかのように微笑んだ。
私はサインで、【了解】と出して笑顔を返した。《カズ君は幸せ者や》と思いながら見ていた。
社会人もお盆休みに突入して、ＰＧは昨夜も８時４５分に満席を記録していた。
その頃では夜街関係者の噂になっていた、ＰＧが今一番熱いと。
その熱さを加速される魔女の出現を、心待ちにするかのように女優達は集中していた。
憧れの女神が現れて、開演を告げるのを。
私はその場所に留まる事を誓っていた、それが自分の生き方だと信じていた。
今日また新たな仙人の来場を知らずに、私はフロアーを見ていた。

愛する蘭と、霞まないカスミと、踏出したハルカを目で追う時間が来るのを。

黒の魔女はその瞳まで暗黒を映していた、出会った時は違和感を感じた。

だが既に私は強烈な違和感の、ユリカに出会っていて免疫が有ったのだろう。

自然に対応していた、それが魔女の琴線に触れていた。

この魔女が見せてくれる、人は変化するのだと。

見えない脱皮を繰り返す生き物なのだと、教えてくれる。

薄皮を一枚一枚剥がすようなその生き方で・・・。

許可

その人は自らを信じる、そしてその決定に従順である。
今も語り継がれる神話、忘れえぬ温もり、薔薇の輝き。

この国の平和は多数によ成り立つのだろうか、少数派を差別する空気は今もある。
隔離された島国の空気に吐き気がする、許容量の少ない大人を見ると。
「今夜も開演しましょう」の声に「はい」のブザーで答えた。
熱い金曜の夜が幕を開けた、ぞろぞろと入場する観客を迎え入れて点火した。
熱が包み込むのに１０分、満席最短記録更新で第一幕が切って落とされた。
リース会社の運転手の１８人の団体が１０番に座り、四季が揃った。
その厳つい顔の団体を見て、《いきなりカズ君試練の時やな》と思いながら、サインを繋いでいた。
私もサインに慣れて、女性達も面白がって不必要に難しいのを振ってきた。
その都度【意地悪】という私が作ったサインで返して、女性達の微笑みに貢献していた。

９時を過ぎて、県庁職員６名のお偉いさんクラスが３番に入った。
ハルカが慌ててきて、「県庁の前園部長、確か誕生日８月の後半だった」と私に言った。
私が調べると、８月１８日だった、ハルカに伝えると私を見て。
「ユリさんファンだから、百合の花束のＡランク」と微笑んだ。
『了解』と言って、リンさんの後の電話を取って花屋に注文をして、裏階段からでかけた。

小走りに走って時間を稼ぎ、ユリカのビルの前で見上げて。
《ユリカ頑張ってる、無理するなよ、浮気するなよ》と囁いて花屋に走り、受け取って又走った。
《ごめん浮気するなっての言い過ぎた、でも浮気しないでね》とニヤして歩いてＰＧを目指した。

１０ｍ先の黒い服の少女が、危ない風俗の呼込みのスグル君に、店に案内されそうになっているのが見えた。
私は走って、魔女の腕を掴んだ、魔女は驚いて私を見た。
「なんだいエース」とスグル君が私を見た、
『スグル君ごめん、この子ユリさんの面接待ちなの、今は勘弁して』と少し睨みながら丁寧に言った。
「了解、それならしょうがないな、俺も梶谷さんのお気に入りと揉めるバカじゃないよ」と笑顔で言った。
『ありがとう、助かったよ』と笑顔で返して、腕を引っ張った。

裏階段まで連れて行き、真顔で魔女を見て。
『なんで待てない、なんでそんな寂しいことを自分にする』と強く言って、引っ張ってＰＧに入った。
私は彼女の腕を掴んだまま、カズ君に花束を渡して、ＴＶルームに引っ張った。
魔女は俯きながらも、逆らわずに着いてきた、ＴＶルームを覗くと３人娘が起きていたのでマダムを呼んだ。
『マダムこの子限界みたいで、投げやりになってるから、俺の席からフロアー見せていいかな？』と真剣に言った。
「おい、本気で稼ぐ気があるんやな？」とマダムも厳しい言葉で魔女に言った。
「稼ぎたい、稼がないといけないんです、本気なんです」と暗黒の瞳でマダムに言った。
「お前が望む舞台かどうかしっかり見て来い、営業終わったら面接

するかい」とマダムが優しく微笑んだ。
「ありがとうございます」と魔女が頭を下げた。
『ありがとう、マダム』と私が言うと、笑顔を返してくれた。
魔女を引っ張って、私の指定席に座らせた。魔女は放心状態でフロアーを見ていた。
『絶対どこにもいかないと約束して』と意識して優しく囁いた。
「うん、約束する・・ありがとう」と微笑んだ顔を見て、微笑んで返してハルカのポジションについた。
魔女はフロアーを飽きもせず見ていた、その横顔の暗黒の瞳は何を背負っているんだろうと思っていた。
私も満席で忙しく、魔女の存在を確認しながら、サインとタバコのオーダーをこなしていた。
「可愛いあなたに、少し頼んでいいかな」と蘭が来て魔女に微笑んだ、私は蘭を見ていた。
「はい、なんでしょう？」と魔女も蘭を見た、
「あなたを連れてきた少年に、よくやったと伝えて、私は舞台で待ってるよ、あなが来るのを」と言って蘭が微笑んだ。
その時が来ていた、深い蘭の瞳は青い炎を纏い、魔女を包んでいるようだった。
魔女は立ち尽くし、蘭を見ていた、魔女の微かな背中の震えが意志を反映していた。
蘭は私を見て、満開に微笑み頷いた、私も頷いて返し蘭を見送って、魔女の後から肩に手を置いた。
『座って見てなよ、今右端を歩いてる赤いドレスが女神だよ』と魔女に囁いた。
魔女は座ってユリさんを凝視していた、背中は微かに震えたままだった。
その時和尚が来た、私は固まった、空手道場主のシゲ爺を連れてい

た。
毛髪の一本も無い頭が艶々と光り、白い口髭が顎の下まで伸びた、どう見ても仙人にしか見えない風体の師匠が立っていた。
《満席であってくれ》との願いは叶わずに、奥の5番に通された。
私は2人の老人の楽しそうなニヤニヤ顔を見ていて、又固まった。
丁度空いていたのかユリさんと美冬が5番席に挨拶していた。
《よりによって美冬かよ、カズ君頑張れ》と囁いていた。
この世の楽園にでも来ているような2人の老人を見ていた。
美冬は何事も無く師匠を離れ、次がカスミだった。
《なぜそんな最強の流れでいくんだ》と思いながら見ていた。
豊満の連打で師匠の頭の光は強さを増して、その頭をカスミがペタペタと楽しそうに触っていた。

私は魔女にアイスコーヒーを持って行き、微笑んで渡した。
『感想は？』と笑顔で聞いた、暗黒の瞳の奥に確かな光があるような気がしていた。
「私どうしてもやってみたい、ここで・・この舞台で」と言った魔女は強い意志を黒に浮き出させた。
『今の台詞を、今の感じで女神に伝えな、もう一度言っとくけど隠しても無駄だよ』と笑顔で返した。
「うん、見て分ったよ」と微笑んで、フロアーに瞳を戻した。
私は少し安心して、老人に挨拶に行こうと見たら、蘭とカスミがついて大盛り上がりをしていた。
《なぜこの忙しい時に、スペシャルチェンジを老人にするんだ》と思いながら裏から5番に行った。
カスミの太股の後から顔を出して、無理して笑顔を作って。
『師匠、ご無沙汰しています』と挨拶した、照れながら。
「うむ、カスミちゃ～んちょっといいかな」とご機嫌で立ち上がり私の前に立った。
私の後ろはもう通路と壁しかなかった、《ここでもそれをやるのか

≫と私は少し下がり構えた。
カスミも蘭も興味津々で見ていた、沢山の女性の視線を感じていた。
「よもやと思うが、手を抜いていおるまいな」と仙人が笑顔で拳を握った。
『年寄りが減らず口を、骨折などするなよ』と腹筋に力を入れてニヤをした。
「では参ろうぞ、久しぶりやの」と老人とは思えぬ正拳を私の腹に入れた。
久々でかなり効いたが、必死で微笑んでいた。
『歳には勝てぬなご老人、今夜は楽しんで帰りたまえ・・和尚も』と必死に微笑んで言った。
「なるほど、欲は取れたの、素晴らしい教師やな」と蘭を見た、蘭も師匠に微笑んでいた。
私は後遺症を引きずりながら、持場に返った。
「お前の関係者、凄いのばっかりやな～」と徳野さんが珍しく笑顔で言った。
『大変なんですよ～』と笑顔で返した、徳野さんも笑って頷いた。

魔女を見ると私を見て笑った、その笑顔は今まで出さなかった、可愛い笑顔だった。
「今の何？」と笑いながら魔女が聞いた、まだ少女の匂いの強い笑顔で。
『中国の挨拶』と笑顔で返した、魔女は楽しそうに笑っていた。
私はその笑顔を見ながら、定位置に戻った。
マミを送る時間になって、マミを迎えに行き裏階段で下りて。
『マミ大変、山姥が走ってる』とニヤして手を出した、マミもニヤして。
「包丁持ってるの、怖～い」と言いながら、手を繋いだ。
歩きながらマミを見ていた、少し変ったかなと思いながら。
「でも、凄いの連れて来るよね～」と私をニヤで見た。

『あぁ魔女ね、面接頼みに自分で来たんだよ・・凄いの魔女？』と聞き返した。
「分ってるくせに、私は魅宴のマミよどれだけ女性を見てると思ってるの」と微笑んだ。
『失礼しました、姉御』と笑顔で返し、『で、凄いんだ？』と聞き返した。
「雰囲気が違うよね、そういう感じを確実に持ってる、夜の匂いみたいなの」と真顔で言った。
『なるほど、さすがは魅宴の姉さん』と笑顔で返した、マミは嬉しそうに笑っていた。

魅宴の裏口でマミと別れ、ユリカのビルを見上げた。
《ユリカ頑張りすぎてない？変なお客に苛められてない？》と囁いた。
「ないよ～、浮気してないよ～」とユリカの声がした、私が見ると可愛いユリカが立っていた。
『なんだ～ユリカ俺に会いたくてマミちゃん送るの待伏せしてたね、可愛い奴だ』と微笑んで返した。
「もう気付いたのか～つまんない」と爽やかに笑った。
ユリカと手を繋いでエレベーターに向かった。
「なんかいいもの拾ったでしょう？」とエレベーターに乗りながらユリカが笑った。
『ユリカに見せたいから、今度見て、感想聞かせてね』と笑顔で返した。
「了解、おやすみ」と笑顔のユリカが手を振って、私も手を振って別れた。

ＰＧに帰ると満席で、終演前の熱の上昇が続いていた。
魔女は少し落ち着いた感じて、フロアーを見ていた、そこにカスミが来た。

「見ててどう思ったの？」と魔女に微笑んだ、魔女はカスミ至近距離で見て固まっていた。
「凄く、心から上がってみたいと思いました」と魔女が返した。
「待ってる、あなたのその曲げない感じ・・嫌いじゃないよ」と笑顔で言って、フロアーに戻った。
その時初めて魔女が一筋の涙を見せた、カスミという同世代の輝く女の、下手くそな愛情表現に触れて。
今まで誰にも認められなかったのであろう強い個性を、【嫌いじゃない】と言う表現で認められた事に。
感極まったように静かに泣いていた、私は新しいお手拭を持って、魔女に渡した。
「絶対できると思う・・ここで私が？」と俯きながら魔女が聞いた。
『魔女、なめるなよ誰に腕掴まれて、引っ張って来られたと思ってるんだ、エースだぞ俺は』
『どうでもいい奴の腕を掴んだりしないよ、がんばれ・・魔女』と震える背中に優しく囁いた。
「うん、うん」と言って魔女が泣いていた、その頭に優しく手を置いてフロアーを見ていた。
ユリさんと目が合って、薔薇で微笑んで頷いた、私も真顔で頷いて返した。

その時に終演を迎えた、魔女の事を感じて８人衆もそのまま控え室に戻った。
「あんたは、最後まで付いていてやりなよ、ＴＶルームで待ってるから」と蘭が微笑んだ。
『了解、待ってて』と微笑んで返した。
「ごめんなさい、お待たせして」とユリさんが来た、「すいません、突然きて」と魔女が謝った。
「１０番で待ってもらって」とユリさんが私に微笑み、私は頷いて返した。

魔女の手を握り。１０番に座らせて、屈んで魔女を見て。
『正直に言うんだ、この舞台に立ちたいんだろ、待ってるって言われたんだろ』と優しく囁いた。
「うん、見ててくれるの？」と魔女が聞いた。
『もちろん、遠くから見てるよ』と微笑んで指定席に戻った。

マダムと徳野さんとユリさんが彼女の向かいに座った。
「許可します」とユリさんが一言目に言った、強い言葉だった。魔女は理解出来ずに固まっていた。
「ただし１８歳の子を受け入れるには条件があります」魔女は呆然と頷いた。
「何の為にと、早急に必要な金額を言ってもらいます」とユリさんは真剣に聞いた。
「私は母子家庭でした、その私の母が5月に亡くなって、妹の高校の授業料などのお金が必要なんです」
「妹は優秀なんです、どうしても続かせたいんです」とユリさんの目を見て訴えた、涙を流しながら。
「現段階でいくら必要なの？」ユリさんが優しく聞いた。
「滞ってるお金が１２万です」と静かに魔女が言った。
「私が５０万貸します、5年で返済してもらいます、それでいいかしら」と薔薇で微笑んだ。
魔女はその言葉を聞いて、両手の拳を強く握って、俯いて大きく震えて泣いていた。
ユリさんが隣に座り、静かに魔女を抱きしめた。魔女はただ抱きしめられて泣いていた。

ハルカとカスミを思っていた、２人ともこうやって抱かれたのだろうと。
【ＰＧはユリの世界です】と言った大ママの言葉が蘇ってきた。
その素晴らしい女神を見ていた、自分の心に従順な最高の女神を。

マジックミラーの内側で、カスミとハルカが泣いていた。その時に感謝しながら。

絶対に自分を信じる、そして自らが選んだ相手を信じる。

どれ程の経験をすれば到達するのか、想像さえ出来ないと思っていた。

たった一人の選ばれし者、生きるという美学。

ユリは今もその神話が残る、夜街が滅んでも残る伝説である。

出会った人々は皆こう言う、【幸運だった】と・・・。

蓮華

静寂のフロアーに響くその声は、暗い暗黒からの帰還の叫び。
巡り合った温もりに、溶け出した漆黒の闇。
抱かれながら拭われていく、そして導き出された挑戦者の顔を見ていた。

魔女が落ち着いたのを見て、ユリさんが私に微笑んだ。
「じゃあ源氏名をお願いしますね、エース」と言って薔薇で微笑んだ、魔女も私を見た。
私は歩きながら、和尚の話を思い出し決めた。
『今日来ていた和尚に昔聞いた事がある、蓮の花は泥水を浄化しながら水面に上るんだ。
地中の根から伸びた茎が、暗い暗黒の泥水を突き抜けて、水面に出るんだよ。
そして大輪の美しい花を咲かせる、暗黒を通っても美しく咲く。
その蓮の文字を絡めて、【一蓮托生】と言う言葉があるんだ。
暗い闇を恐れることは無い、そこから上がり大輪の花を見せて欲しい』と言って魔女を見た。
『魔女は暗闇すら恐れず進み咲かす花、蓮と書いて・・レンでどうかな？』と魔女に微笑んだ。

「ありがとう、その名前も腕を掴んでくれたことも」と言って私に微笑んだ。
「素敵な名前ね、本当にあなたは」と言って私を見て、薔薇で微笑んだ。
「じゃあレンちゃん、明日私１０時から用事が有るから、９時にここに来れるかしら？」とレンにユリさんが微笑んだ。
「はい、分りました」とレンも可愛い笑顔で返した。

「その時に細かい事を決めましょう、お金も用意しますから」と薔薇で語った、レンは立ち上がり。
「本当にありがとうございます、絶対頑張ってみせます」と頭を下げた。
「これで、今夜は帰ってよく寝るんじゃよ」とマダムがタクシーチケットを渡した、レンはもう一度頭を下げて受け取った。
「じゃあエース、タクシーまで送ってあげて」とユリさんが私に薔薇で微笑んだ。
『了解』と言って、魔女の手を握り、エレベーターに向かった。

エレベーターに乗ると、レンが笑顔を向けた。
『良かったね、がんばって』と微笑んで返した。
「色々教えてねエース」と言ってレンも１８歳の輝く笑顔を私に向けた。
『俺、未経験だから聞いた話と、雑誌の情報しかないよ』とニヤで返した。
「うん」と言ってレンが笑った、レンをタクシーに乗せて手を振って見送った。
ＴＶルームに戻ると、全員揃っていて、カスミもいた。蘭が大きく頬を膨らませていた。
『どうした蘭？』と恐る恐る聞いた。
「良すぎる、ハルカもレンも一生忘れられない名前付けた」と笑顔で睨んだ。
『俺は蘭って名前が一生忘れられなくなった』と微笑んで返した、蘭が満開になって。
「うん、かえろ～」と言って立ち上がり、「どっちが１０歳上なのだか」とカスミが不敵を出して蘭を見た。
全員で笑っていた。

エレベーターでユリさんが、マリアを抱く私を見て。

「あなたも明日9時に来れる？」と薔薇で聞いた、『もちろん』と笑顔で返した。
「今のレンにとって、あなたがいるのが心強いでしょうから」と優しい薔薇で言った。
「蘭姉さんも心配が絶えませんね～」とカスミが蘭に不敵を出した。
「本当に、変な物頭に乗せる人がいるから」と蘭がカスミにニヤで返した。
「カスミちゃんありがとう、そしてお願いしますよ、引っ張って下さいね、焦らずに」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「全力でやってみます」と言ってカスミが目を潤ませた、「泣くな多分」と蘭がニヤをした。
「やめて、泣かし屋さん」とカスミが蘭を見て必死に不敵を作った。私がカスミを見たら。
「とどめ刺すなよ、又添い寝させるぞ」と不敵を出した。
「蘭、私が熱を出したときも、貸してね」とユリさんが薔薇で蘭に微笑んだ。
「それは無理です、ロボットが制御不能になります」と言ってユリさんにニヤした。
「やっと私にニヤしてくれました」とユリさんが私を見て泣き真似をした。
『良かったなユリ、頑張ったから良い事あったんだぞ』とニヤで返して、全員で笑った。

ユリさんとマリアを見送り、カスミに手を振って別れて、蘭とタクシーに乗った。
蘭が肩に乗ってきて。
「よくやった、頑張ったね」と囁いた。
『四天女や蘭なら必ずそうすると思ったから、無意識にできたよ』と囁いて返した。
「うん、嬉しかった～」と言って瞳を閉じた、疲れてる蘭の顔を見

ていた。
タクシーが着き、蘭を抱っこした。
『日曜日休み？』と微笑んで聞いた、「うん」と蘭が微笑んだ。
『じゃあ蘭の時間を俺にくれない？』と囁いた、「いいよ、何するの」と囁いて返した。
『しっかり休んで、今は蘭の休息が一番の望みだから』と囁いた。
「うん」と言って満開で笑った。

蘭が化粧を落とし、パジャマでベッドに入った。
私は電気を消して、いつもの位置に座り話した。
『昨日カスミにした話をしとくね』と蘭の嬉しそうな顔を見ながら、話した。
話終わると、蘭が涙を見せて微笑んで。
「お願い、今夜だけ背中合わせして」と甘えた、『ちゃんと寝るんなら』と微笑んだ。
「うん」と微笑んで背中を向けた、私も背中をつけて手を握った。
5分もしないで目を閉じたまま蘭が私を向き、腕枕をして蘭の寝息を聞きながら眠りに落ちた。

翌朝蘭の手が顔に当たり目が覚めた、ゆっくりと腕を抜き洗面所に向かった。
歯を磨き、顔を洗って腹筋をチェックした、正拳の痕跡は無かった。
トーストを焼いて、スクランブルエッグとロースハムとトマトにした。
「ねえ、この幸せはいつまで続くの」と蘭が微笑んだ。
《やっぱり気付いたか俺の変化に》と思って、笑顔を向けた。
『蘭、夏休みが終わったら、親父の所に詫びに行く。
そしてここに帰ってくる、学校にも行くし成績も上げてみせるから。
ここに居させてくれないかな、出来るだけ迷惑はかけないから』

と真顔で言った。
「朝からなぜ泣かす、出て行けなんて言うわけないよ」と満開で笑って洗面所に消えた。
この時の私の嬉しさは表現できない、泣きそうだった。

ご機嫌の蘭と朝食を食べていた、蘭のご機嫌が嬉しかった。
「レンちゃん、話済んだら靴屋に連れてきて」と蘭が微笑んだ。
『了解、何かあるの？』と笑顔で返した、「入店祝いをね」と満開で笑っていた。
ご機嫌蘭を見送って、急いで朝の仕事をして、日記を書いて出かけた。
靴屋はまだシャッターが閉まっていて、ＰＧに向かうと下でレンと制服を着た、可愛い女子高生が話していた。
『おはよう、レン姉さん』と声をかけた、レンが振向き女子高生が頭を下げた。
『何してるの？』と言いながら妹であろう女子高生を見た、透明感のある爽やかな美少女だった。
「妹がどうしても行きたいって言うから」と困った顔でレンが言った。
『いいじゃん連れてくれば』とレンを見て微笑んだ。
「ありがとう、妹の久美子です」と微笑んだ、可愛いな～と思っていた。
『美人姉妹って言われてるでしょう』と久美子にニヤしながら言った。
「やめとけよ、絶対口じゃかなわん中学生だぞ」とレンが久美子に笑顔で言った。
『ひどい、レン一晩で変った』とウルで言いながら階段で上がった。
ＴＶルームにはマダムとユリさんにハルカとマリアがいた。
レンは挨拶して、久美子を紹介した。ユリさんが久美子も招き入れ

た。
「時間が無いから始めるわね、夜は８時から終了までで大丈夫？」
レンが「はい」と頷いた。
「レンちゃん、その分自給出すから１３時から準備の方にも入ってくれないかしら」とユリさんが微笑んだ。
「やらせて下さい」とレンも笑顔で答えた。
「良かった～誰かさんが学校は行くでしょうから、丁度よかったのありがとう」とユリさんが私を見て微笑んだ。
「それではこれが約束のお金、どうします自分で管理する自信がありますか？」とユリさんが真顔でレンを見た。
「できれば２５万で今はお願いして、本当に厳しくなった時に残りをお願いできますか」とレンが言った。
「分りました、無理せずいつでも言って下さいね」と薔薇で微笑んだ。

「すいません、お願いします皿洗いでも何でもします、私にも何かさせて下さい」と久美子が土下座した。
必死の訴えだった、私はその背中を見て感動していた。
「頭を上げてちょうだい・・・そうね、困ったですね」とユリさんがマダムに言った。
「こういう時のエースじゃろ」と私に振った。
『久美子は制服からして女子高だね、もしかして音楽科？』と聞いてみた、昨夜のレンの【優秀】と言った言葉があったのでそう思ったのだ。
「うん」と久美子が頷いた、『専門は？』と聞いた、「ピアノだよ」と少し笑顔で答えた。
『夕方でいいから、１年生と年中さんに基礎位は教えられるよね？』と言った時に、マダムとユリさんとハルカの笑顔が出た。
「それなら、出来るよ」と久美子も笑顔が出た、『家にピアノあるの？』と微笑んだ。

「今は無いよ」と答えた、凄い子だと思っていたピアノがなくて音楽科であることが。
『じゃあ、俺が母親に頼んでみるからＯｋ出たら頼むね』と言うと、
「うん」と笑顔で答えた。
『ただし条件がある、フロアー準備してる時音が無くて寂しいから』
『久美子が空いてる時間は来て練習して、自分の課題曲でいいから思いっきり弾いてよ、そうすれば準備もはかどるよねハルカ』とハルカを見た。
「お願いします、素敵」と言ってハルカも久美子を見て微笑んだ。
『いいよねマダム』と言ってマダムに微笑んだ。
「そんな提案を却下するほどモウロクしてないよ、頼んだよ」とマダムも久美子を見た。
「お前が本物のエースだって今気付いたよ、本当にありがとな」とまたレンが泣いていた。
『レン、俺が初めて連れてきたんだから、仕事で見せてね、頑張って』と笑顔で言った。

『じゃあ久美子ピアノ案内するから行こう』と言って久美子に微笑んだ、久美子が笑顔で立ち上がった。
「調律は今日きてもらいますね」とユリさんが薔薇の笑顔で言った。
ＴＶルームを出ると、久美子が近寄って。
「ありがとう」と言った、『お礼して』とニヤして手を出した、久美子が笑顔で繋いでくれた。
『あれだよ』と私の言葉に、白いグランドピアノを見た、久美子の輝く瞳があった。
「本当にこれを弾いていいの」と言いながら近づいて、嬉しそうに見ていた。
「お礼、手を繋ぐだけでいいの？」と久美子が微笑んだ。
『久美子の最初の単独リサイタルの一番良い席』とニッで返した。
「うん、約束する」と嬉しそうに笑い、ピアノを触っていた。

久美子とＴＶルームに戻ると、ハルカを紹介していた。それが終わるのを待って。
『久美子、この人がハルカ姉さん、久美子の１歳年上だから姉さんって呼ぶと泣くはず』とニヤでハルカを見た。
「よろしくお願いします、ハルカ姉さん」と久美子が頭を下げた。
「よろしくおねがいね、初めて女の子から姉さんって言われた」と嬉しそうにハルカが笑った。
「じゃあアパートは月曜日に探しましょう」とユリさんがレンに微笑み、レンがまた泣きながら頭を下げた。
「いつから出れますか？」とユリさんが聞くと、「今日からやらせて下さい」とレンが頭を下げた。
「じゃあハルカお願いね」とユリさんが微笑んだ。
『久美子いつから弾けますか？』と私が久美子を見ると、「今日から」と嬉しそうに笑った。

マリアが起きたので、抱き上げた、久美子がマリアを見て笑顔を見せた。
「その子には、まだ無理かしら」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「やらせて下さい、少しずつ」と久美子も笑顔で返した、皆の笑顔の真ん中に天使の笑顔があった。
私はレンと２人で靴屋に行った、久美子は楽譜を取りに帰った。
「本当にありがとな」とレンが言った、『もう聞いたよ、何もしてないよ』と微笑んで返した。
「いや絶対に忘れない、私も久美子も」と言って微笑んだ。
靴屋で蘭を呼ぶと、満開でレンを招きいれハイヒールを履かせいた。
私は一番街を足早に歩いた、サクラさんのブティックまで、もうすぐユリカも来ると思いながら。
忙しい日々を楽しんでいた、必要とされる場所と、帰る場所のある喜びに溢れていた。

レンの加入でＰＧが又変化するのはもう少し先である。

先に影響を与えるのが久美子の奏でるピアノだった。

その必死に練習する姿が全員の心を掴む、集中の中にある輝く光が魅了する。

１６歳の輝きに女性達が振返り、そして前を向くのだ自分達も集中する輝きを見せようと。

私自身もこの夏物語での自分の評価として、最も高いのはこの久美子への提案である。

その音色をが拍車をかける、夏は終わらないと。

熱は冷まさないと言いながら・・・。

音色

真夏の太陽が主張する光の先に、もう1つの通りが見える。
一人で寂しくて怖くて、踏出せなかった交差点が見えた。
今は渡れる、どちらにも簡単に、成長したのだろうかと思いながら渡っていた。

サクラさんのブティックを覗くと、サクラさんが笑顔で手招きした。
「どうしたの珍しいね」と笑顔で椅子を出してくれた。
『ちょっと頼みがあって来ました』と微笑んで返した。
「怖いわね～」と彫の深い美しい顔で笑った。やっぱり綺麗だな～と思っていた。
『実は昨日の俺の席にいた女の子見ました？』と聞くと、頷いた。
私は今までの経緯をサクラさんに説明した。
『まだレッスン料とか決まってないけど、安くで大丈夫だと・・どうでしょう？』と笑顔で聞いた。
「素敵じゃない～、もちろんＯＫよ」と笑顔を見せた。
『今日は2人は？』と笑顔で返すと、「昼から行かせる予定よ」と微笑んだ。
『じゃあ会わせときますね』と微笑んで返した。

「ずっと兄でいてくれるんでしょう？」と笑顔でサクラさんに聞かれた。
『もちろん、誰が何と言っても』と笑顔で返した、サクラさんも微笑んで頷いた。
『実はもう1つ今見つけたんですけど』と真顔で言った。
「今度こそ怖そうね～」とサクラさんが微笑んだ。
『表の募集の張り紙の面接をしてほしい子がいて』とニッで言って。
『もちろん不採用でも全然構わないんです、口が悪いから』とニヤ

して。
『カスミって言うんですけど、どうでしょう？』と笑顔で聞いた。
「本当に！探してるの」と嬉しそうに笑った。
『はい、本人はファションには自信があるみたいで、でも口悪いから』とニヤした。
「うちも若い子関係を力入れようと思ってたから、最高の人材よ」と笑顔で言った。
『じゃあ伝えときますんで、面接よろしく』と笑顔で言って、頭を下げて店を出た。

急ぎ足でＰＧに戻ると、ハルカとレンがＴＶルームで話していた。
私はマリアを抱いて、ハルカに笑顔で。
『マリアと散歩で、ユリカのとこ行ってくる～』と言って出かけた。
私はマリアとユリカのコンビが見たかったのだ、常識の外にいる２人が。
ご機嫌なマリアを抱いて、ユリカの店に着いた。
マリアを見たユリカは最高の笑顔で駆け寄った。
マリアもユリカを見て天使全開になり、「ゆいか」と手を伸ばした。
ユリカが抱いて、楽しそうにＢＯＸに歩いた。私は又不思議な光景を見ていた。
マリアがあの我侭を言わないマリアが、ユリカには我侭を言うのだ。
ユリカもマリアに対する時は、子供に戻ったように遊んでいる。
《同じだ、種族が同じなんだ》と私も漠然とそう思って見ていた。

マリアが眠くなりユリカが抱いて、陽の当たらないソファーに寝かせた。
「最高のお土産ありがとう、元気出たよ」とユリカが爽やかに笑った。
『じゃあ今のうちにユリカを寝かしつけるか』と私が立つと、ユリカが首に手を回した。

『成長著しいな・・ユリカ』と言いながら抱き上げた、ユリカの楽しそうな笑顔があった。
「マリアと私が遊んでる時変な感想言ったでしょ」とニヤで微笑んだ。
『変だった、同種族だと思っただけだよ』とニヤで返した。
「マリアは別格よ、物凄いからね～」と楽しそうに笑った、ユリカの見ているマリアが見たいと思っていた。
「それに今日は朝から上出来な事があったのね」と微笑んだ。
『自分自身も上出来と思ってる』と素直に言った。
「うん試験前だしね頑張れよ」とユリカが微笑んだ。
『やっぱり、試験が又来るのか～』と私はその言葉を自然に受け入れて微笑んだ。

ユリカとグラスだけ洗い、豆大福でお茶をしていた。
ドアの方から、「ユリカちゃんいる～」と薔薇の声がした。
「は～い、どうぞ～」と言って、ユリカが立った、ユリさんを見て笑顔で挨拶した。
ユリさんが薔薇の笑顔で、向かいに座った。
「本当にお見事でした、感動しましたよ」とユリさんが私を見て、薔薇で微笑んだ。
「そこまで、素晴らしかったの～」とユリカも笑顔を見せた。
ユリさんがさっきの話をした。魔女の昨夜も含めて。
「あなたが掴んだのは、今後のＰＧの発展なんだよ」とユリカが私に微笑むと。
「やはり、そうでしたか、本当によくやってくれました」とユリさんに褒められるので、照れていた。
「やはり核になりますか？」とユリさんが薔薇でユリカに聞いた。
「なりますね姉妹揃って、素晴らしい愛のある姉妹ですね、影響力が強いです」とユリさんを見て。
「変化を求められますね、特に現時点で夜街一番の人材、輝きの女

が」とユリカもユリさんに微笑を返した。
「やはりあの子が今一番ですか？」とユリさんも嬉しそうに返した。
「乗り越えた今、そして確かなる目標の蘭、それに責任感を得たあの容姿、どう考えても一番でしょうね」とユリカも嬉しそうに笑った。
「ユリカ、外してくれてありがとう」とユリさんが薔薇で頭を下げた。
「ユリ姉さんそれは違います、私はきっかけ、最後の扉をこじ開けたのは・・添い寝です」とユリカが私を見てニヤをした。
「やっぱり、最強の添い寝」とユリさんもニヤをした。
「ユリ姉さん次のお熱は私ですよ」とユリカが笑顔で言って。
「その言い方じゃ暫く、お熱はないですね」とユリさんも薔薇で返した。
不思議な2人の会話を聞きながら、何故か納得できるのだった。
そしてユリさんのこの会話の仕方、百合の名前を貰ったユリカ凄いな～と思って見ていた。

マリアが起きて私が抱いて、ユリカがマリアにキスをした。
私もユリカに頬を指差すと、マリアがキスしてくれた。
『マリアまた、やきもちだね』と天使の笑顔に微笑むと、「もち～」と返された。
「あなたの最高の指導者は厳しいね～」とユリカが笑った、私はウルを返した。
ユリカがエレベーターまで送ってくれて、手を振って別れた。
「どう思いましたユリカとマリア」とユリさんが微笑んで聞いた。
『ユリカにも言ったけど、同種族だと思った』と笑顔で返した。
「よかったね～、マリア嬉しいね～」とマリアを薔薇で見ていた。
ユリさんとマリアを駐車場に送り、車を見送りチキン南蛮弁当を買ってＴＶルームに帰った。

ハルカとレンと久美子が楽しそうに、お昼を食べていた。そのハルカの１７歳の笑顔に驚いていた。
『俺の悪口言ってたな』とハルカを笑顔で睨んだ。
「うん、まだ１割位だけど」と楽しそうにハルカが言った。
「あれで１割なのか、楽しみだな～」とレンが私を笑顔で見た、「怖い中１」と久美子も笑った。
『また意地悪な人が増えた、俺を兄さんて呼ぶ人いつ来るかな～』とウルをした。
「まぁ５年は無理ね、普通に考えて」とハルカがニヤして、２人が笑った。
食事をしながら、私が得意のマリア語講座で爆笑を取った。
バタバタとエミ・ミサが入ってきて、満面の笑みで。
「ピアノ習えるの」と２人で言った、私は笑顔を返して。
『こらこら、ちゃんとご挨拶しなさい、こっちが今度フロアーに入るレンさん、そしてこっちがピアノの先生の久美子先生だよ』と笑顔で紹介した。
エミ・ミサは本当に嬉しそうに挨拶をした、そして久美子を引っ張って。
「聞かせて、聞かせて」と連れて行った。

私達も時間が来たので、フロアーに行って久美子を見ていた。
久美子が一番良い位置に椅子を２脚置いて、エミ・ミサを座らせた。
そしてピアノの椅子に座り、ピアノを鍵盤を見た、その時の表情の変化に見惚れていた。
特別な物に敬意を示す視線と、まるで何かと闘うような目が静寂をつれてきた。
そして弾き始めた時に、心が震えたその強い音に揺さぶられた。
エミ・ミサはもう入り込んでいる、素晴らしい教師を見ている。
ボーイも全員集まって、徳野さんも優しい顔で見ていた、マダムもやってきた。

引き寄せられるように、皆黙って聞いていた、魂の響きを。
久美子は表情豊に弾いている、汗を流し何かを睨み、時に優しく時に激しく。
終わった時に、鍵盤を見て放心状態だった。
最初に拍手をしたのは徳野さんだった、そして皆、我に返って拍手した。
エミも立って拍手して、それを久美子が見て慌ててミサに駆け寄った。
ミサは泣いていた、感受性の強いミサは感動で泣いていたのだ。
久美子はエミとミサを優しく抱いて、ミサの涙を拭いていた、嬉しそうに。

「凄い・・あの才能の為ですね、頑張りましょう、レン姉さん」とハルカが集中してきた目で言った。
「頼りにしてるよ、何でも言ってねハルカ」と黒の瞳に確かな輝きがあった。
見るとマダムと徳野さんが久美子の所に行って、話していた。
「今夜７時５０分に今のをやってくれんね、皆に聞かせたいんじゃ」とマダムが言って。
「素晴らしかった、音楽は分らんけど、素晴らしかった」と徳野さんが言った。
「ありがとうございます、こんな素敵なピアノを使わせてもらえて」と久美子も頭を下げた。
「今まで死んじょった、お前が命を吹き込んでくれたよ」とマダムが言っていた。
２人が去ると、ミサとエミに教えていた、まだ子供用の楽譜が無いので触らせて音を出させていた。
私はエミを呼んで、久美子の練習時間も考えてねと頼んだ、エミにはこれで通るのだった。

私とハルカとレンで予約確認をした、私がタバコのチェックをしてると甘い調べが聞こえてきた。
《大正解、いいもんだな～生演奏は》と思っていた。
静寂の舞台にピアニストが登場し、ＰＧを加速させる音色を描き出すのだ。
私は気分良く鼻歌交じりでタバコを買いに出かけた、ユリカのビルを見上げて。
《ユリカ今日抱っこが短かったね、月曜日その分増やすね～》と囁いて、帰り道見上げて。
《ユリカ今夜は土曜日で忙しいけど無理するなよ、さぼってＰＧに遊びにおいで》と言って帰えろうとして、声をかけられた。
「小僧頑張ってるな、そんなにユリカが恋しいか」とキングが笑った。
『キングこんにちは、こないだ誘いに来てくれてありがとう』と笑顔で返した。
「ユリカが仕事するとこ見たいんやろ、今夜は忙しいやろうから来週行こうな」と笑顔で言った。
『ありがとう、本当に楽しみにしてるよ』と笑顔で返した。
「今夜８時に行くから、予約よろしく」と笑顔で背を向けたキングに。
『キング、７時４５分には来るのをお勧めするよ』とニヤで返した。
「楽しみやな～、必ず行くよ」と笑顔で右手を上げた。

ＴＶルームに帰るとユリさんとマリアも来ていて、久美子が３人と遊んでいた。
「素晴らしいそうですね、久美ちゃん」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
『分りやすく言うと、徳野さんが素晴らしいって本人に言いました』と笑顔で返した。
「それは凄い・・楽しみですね～今夜」とユリさんも関心していた。

『久美ちゃん今夜ドレス着せて、弾かせないといけなくなりました』と私が言うと久美子が私を見た。
『今キングの予約を、７時４５分で受けました』と私がユリさんにニヤで言った。
「まぁ素敵、久美ちゃん嫌かしらドレス？」とユリさんが薔薇で微笑んで言った。
「女ですから、憧れます」と照れて笑った、百合さんは薔薇で見たまま。
「良かった～、準備しますね、レンには内緒にしときましょう」と悪戯っ子を出した、久美子も微笑んで頷いた。

土曜日で蘭は夕方来れなく、夕食はレンも久美子も入って賑やかに食べた。
レンを先に着替えさせ、ハルカと早目にフロアーに出した。
私は指定席に座り、レンのドレス姿の華やかさに驚いていた。
《ドレスになるだけで、こんなに変るのか》と思って見ていた。
蘭も間に合って、７時４０分からミーティングがあった。
ユリさんがレンを紹介して、レンが挨拶し、女性が全員で拍手をした。
その時キングが来た、私が３番に案内し隣に座った、ユリさんが銀の扉に消えた。
女性達は１０番で座って待つように言われて、不思議そうに待っていた。
「なんかワクワクするな、小僧」とキングも楽しそうに言った。
『良い物見せますよ、キングは絶対気に入るはずだと思ってます』と笑顔で返した。
その時ユリさんが出てきて、私に【ＯＫ】を出した。

『それではご来場の皆様、お待たせしました、今夜ご紹介します、ＰＧの専属ピアニスト久美子です』と大声で言った。

久美子は純白のドレスを着て銀の扉から現れて、堂々と前に進み深々と一礼してピアノに向かった。
レンは驚きながら本当に嬉しそうに、愛する妹の晴れ姿を見ていた。
久美子がピアノに座り、正面を見た、その後にボーイが全員並んでいた。
そしてゆっくりと、深呼吸をした時に表情が変った、戦士のような瞳が出ていた。
鍵盤を見る目に恐ろしさを感じる程の集中力があった、完全なる静寂が包んでいた。
キングも久美子のその目を見ていた、真剣なキングの顔があった。
そして魂の演奏が始まった、一瞬で皆が引き寄せられるのが分った。
久美子は完全な集中に入り、輝きを放出している、時に笑い・時に怒り・そして泣きながら弾く。
魂の音色を楽しむように、汗を流して弾ききった・・・静寂が支配した。

「ブラボー、素晴らしい、最高だ」とキングが立って拍手した、そして皆我に返って拍手をした。
久美子は席を立ち、深々と頭を下げた、やり終えた満足感で輝いていた。
「小僧、ありがとう最高だったよ」と言ったキングと開演まで話をした。
久美子がある事情で姉がＰＧに入ったとキングに聞かれたので、概要だけを話をした。
静寂が戻ったフロアーにいる、女優達の目の色が変っていた魂の響きの余韻で。
久美子はそれを少し離れて見ていた、姉が踏出す船出を充実感を纏いながら。
レンには最高の船出の曲になり、挑戦の準備は出来ていた。
そしてレンを見るカスミの輝きは、全てを凌駕して発光していた。

久美子の、この演奏は忘れられない本当に心を鷲掴みにされた。

音楽に初めて触れたと思った、そしてミサの感性に響いていた。

ミサが音楽を目指すきっかけとなる久美子。

本当に素晴らしかったよ、１６歳の魂のピアニスト・・・。

母娘

開演前の静寂のフロアーに木霊した魂の響き、その曲は母に捧げる娘からの伝言。
【元気です】と叫んでいた、演奏の技術云々は分らない、ただ伝えたい気持ちに溢れてる。
いつまでも心に木霊する響きだった、同席した全ての者の心に。

土曜日の大きな女性の円が出来ていた、ユリさんが久美子を見た。
「久美子ちゃん、素晴らしかった感動しました」とユリさんが薔薇で久美子に微笑んだ。久美子は笑顔で頭を下げた。
「私からの提案です、７時からこの円を女性が描くまで時間のある限り弾いてください。
そして、その時間はあなたはプロです、お金を取るプロとして１時間に挑んでみませんか？
貴女にはそれだけの価値があります、どうでしょう？」と薔薇で微笑んだ。
「ありがとうございます、頑張ります」と久美子は１６歳の輝く笑顔で頭を下げた。
「それでは、今夜も開演しましょう」の言葉に「はい」のブザーを鳴らした。
ユリさんがレンを連れて３番に来た、私はキングに礼を言って席を立った。

レンの耳元に『頑張れよ』と囁いて定位置に向かった、久美子がピアノを片付けていたので。
終わった久美子を連れて、私の指定席に座らせた。
『見てて良いよ、お姉ちゃんの晴れ舞台、一緒に帰るんでしょ？』
と微笑んだ。

「いいのかな～、私高校生だよ」と笑顔で返した。
『そっか～高校は退学あるよね、心配しないで任せて、ゆっくり見といて、飽きたらＴＶルームに行けば３人娘喜ぶよ』と笑顔で返した。
「頼りにしてます、エース」と１６歳の微笑で返してくれた。
私はハルカポジションで待機していた、開店まで３分だった。
３番はキングとユリさんとレンが笑顔で話していた、積極的に話すレンを見て、安心していた。
「すご～く感動したよ」と蘭が久美子に満開で言って、「私泣いたから、化粧直して来たよ」とカスミも輝く笑顔で久美子を見ていた。
久美子は圧倒されながらも、笑顔で嬉しそうにしていた。

私は久美子に歩み寄り、カスミにニヤを出して。
『カスミ昼の仕事本気でやるなら、最高の所紹介するぞ』とニヤニヤで言った。
「本当か、やるよキチンとやる、やりたいんだ」と真顔で輝いた。
『絶対手が抜けない所だよ、それでもやる？』ともったいつけて、真顔で言った。
「やる、やりたい」とカスミも真顔で返した。
『じゃあ、自分で面接お願いしなよ・・・サクラさんに』とニッで言った。
「うそ、募集してるのサクラ姉さん所、うれし～」と跳ねて喜んだ。
『カスミ面接通った訳じゃないぞ、言葉使い要注意、今度の相手は谷間は通用せんぞ』とニヤニヤで言った。蘭も久美子も笑っていた。
「はい、エース、お礼倍にするね～」と蘭に不敵を出した。
「謹んでお断りします」と笑顔で睨む蘭とフロアーに戻った。

「皆さん、凄く綺麗」と久美子がフロアーを見ながら呟いた。
『レンも久美子も綺麗だよ』と囁くと、「ありがとう、本当にホストね」と笑顔で返された。

『ハルカの奴～、意地悪してやる』と久美子にニヤして、ハルカポジションに戻った時に開店した。
予約の客が全て開店時間に来ていて、その他の客と合わせただけで入れない客が出た。
塗り替える事の出来ない満席最短記録【開店時】をマークした瞬間だった。
９時前に久美子が私の所に来て。
「圧倒されたからＴＶルームに行くね、ドレスどうしよう？」と微笑んだ。
『ＴＶルームの松さんに言えばいいよ』と笑顔で返して、久美子を見送った。
《松さん喜ぶだろうな～久美子の出現》と思っていた、ハルカがデビューして寂しそうな、松さんの顔が浮かんでいた。

キングの席には蘭が付いていたので、３番に小走りに行った。
蘭の太股の後から顔を出した、キングが気付いて微笑んだ。
「小僧、鋭いな～今蘭を口説いてたのに」とキングがニヤをした。
『やっぱり』と笑顔を返して、『ごめんねキング１つ頼みを聞いて』と真顔で言った。
キングと蘭が微笑んで見た。
「なんだよ～改まって」とキングが笑顔を見せた。
『さっきのピアニストの久美子ちゃんにお守りちょうだい、夜補導されると高校生は退学とかあるから』
『その時のお守りで、キングの名刺くれないかな・・だめ？』と微笑んだ。
キングが笑顔になって、蘭が満開で私を見た。キングが名刺を出して【後見人】と名前の上に書いてくれた。
「小僧、俺の方から礼を言うよ、なにか応援してやりたかったんだよ」と言いながら名刺をくれた。
『本当にありがと、キング』と頭を下げた、「何でもね～よ」と笑

った。
私は裏を歩きながら状況を見て、一度定位置に戻り、ＴＶルームに向かった。

マダムと松さんがいて、久美子が３人娘と楽しそうに遊んでいた。
『久美子お守り、補導とかなんか怖い事があったらこれを見せて』と名刺を渡した。
『そんな時はすぐに、それを見せて、この人を通してくれって言えば大丈夫だから』と微笑んだ。
マダムと松さんが見て、私に笑顔を向けた。
「最高のお守りだの～」とマダムが笑顔で言って、松さんが微笑んだ。
「ありがとう、大切にするね」と久美子の笑顔を見て、指定席に戻った。
フロアーの状況は加熱していて、女性達は集中していた。
レンはカスミが連れて回っていた、《カスミとレンかユリカの言うとおりだな》と思っていた。
１０時前にキングが立ったので、お礼を言って見送った。蘭がヨシヨシしてくれた。

美冬が輝きながら笑顔で近づいた。
「ありがとう、確かめたよお互い、嬉しかった」と笑顔で耳元に囁いた。
『良かったね美冬』と言って右手を出した、美冬が握った。
『心に預かった美冬の部屋の鍵返すよ、ありがとう本当に嬉しかったよ』と微笑んだ。
「なぜ泣かす、仕事中に・・ありがとう、そこにいつまでもいてね」と笑顔で言って銀の扉に消えた。
《やっぱり少し寂しいな》と思っていた、熱の高いフロアーを見ながら。

「最後の最後まで美冬に魔法をかけたね」と千秋が後から言った。
「泣いてたぞ美冬、ありがとうな・・私の時もよろしく」と可愛く笑った。
『簡単な相手にしてよ、千秋は怖いな～趣味悪そうで』とニヤで返した。
「正解」と嬉しそうに笑顔で戦場に戻った。

四季の休憩時間は忙しいのだ、その巧みなコンビネーションをいつも関心していた。
４人が揃ってる時には安心感があった、アルバイトなどのレベルではなかった。
ユメ・ウミも完全に蘭の客層を理解したらしく、ほとんど蘭はユメ・ウミコンビを見なくなった。
そして蘭がカスミから受け取る、レンを連れて動き始めた。
レンは積極的な人間だった、黒い服を着て魔女の時もそうであった。
ただ見た目のイメージと家庭環境で、暗いと思われる事が多かったのだろう。
レンも久美子も明るくて、若者らしい輝きを持っていた。
カスミの言った【嫌いじゃないよ】、凄い愛情表現だと思っていた。
普通の人が言っても響かないだろう、やはりあの曲げないカスミの言葉だから響いたのだろう。
【現時点での夜街一番の人材】そう言ったユリカの笑顔を思い出していた。

マミが休憩に来た、私のコーラを持ってきてくれた。
『疲れてない、マミ姉さん』と笑顔で言った、「充実してるから大丈夫」と可愛く微笑んだ。
「やっぱり凄いじゃない、初日であれだよ」と嬉しそうにマミが言った。
『さすがマミ、大ママの継承者』と笑顔で返した。

「それは無理・・でも頑張ってみるね」と笑顔を返した。
『うん、俺を楽しませてくれよ、ハルカ対マミの登山競争』とニヤで言った。
「うん、レンさんの話したら、大ママがあなたを絶対欲しいって目を輝かせたよ」とニヤで返された。
『怖い・・食べられそう』とウルを出した、マミが可愛く笑っていた。

「お礼何がいい？」とカスミが不敵で来た、輝きが増したと思って見ていた。
『約束が欲しい、カスミが少しでも体調悪い時は教えるって約束』と真顔で返した。
「趣味になってるだろう、泣かすの・・約束するよ」と微笑んで、扉の奥に消えた。
レンが休憩に歩いて来た、笑顔だった。
『やるね～、俺の目は間違ってなかったね』とニヤで言った。
「ありがとな、今やる気で充実してる、しかし蘭姉さん凄いな～」と笑顔で返した。
『頑張って、まずカスミに迫れよ』と微笑んで返した。
「遠いな～、でもやってみるよ・・レンの名にかけてね」と笑顔で言ったレンを、笑顔で見送った。
「日焼けが痛い」とウミが笑顔で来た、私は大袈裟に驚いて。
『見ましょうか、焼けてないとこ』とニヤで返した。
「だめ～、蘭姉さんにヘルプおろされる、凄いの来たし」と嬉しそうに微笑んだ。
『凄いのか～』と微笑んで返すと、「分ってるくせに」と言いながら扉に消えた。

マミの帰る時間が来て、裏階段で通りに出ようとしたら、手を繋がれた。

「怖いから、手を繋いで」と微笑んだ、『甘えん坊』とニヤで返した。
「花火と海水浴、楽しかったよ」とマミが微笑んだ、少し大人の色気を感じた。
『なんか今、俺、怖いものを見た』と驚いた表情を作ってマミを見た。
「何かな～」とマミがニヤして返した。
『魅宴の姉御に不覚にも、女の色気を感じてしまった』とニヤで返した。
「不覚じゃないでしょ、不覚じゃ」と笑顔で睨んだ。
『人生最大の不覚』と笑顔で返した、私の大好きなマミの優しいパンチを受けながら歩いた。
マミと魅宴の裏口で手を振って別れて、裏に走り中央通りからユリカのビルの逆に出た。
こっそり覗くと、ユリカの背中が見えた、《可愛いな～ユリカ》と思いながら近づいた。
『好きな人を待つ姿が可愛いねユリカ』と後から声をかけた、ユリカが振向いた。
土曜なので疲れたのか、笑顔に影があった。私はユリカの手を握り階段に引っ張った。
ユリカを階段の踊場で抱き上げて、登りはじめた、ユリカは静かにしがみついていた。

『ユリカ疲れたね、明日はゆっくり休めよ』と囁いた、ユリカの頷きが私の首の所にあった。
『ユリカ絶対に無理するなよ、俺が寂しいから』と囁きながら登って行った。
夜景を見下ろす塔を、ユリカを抱いて最上階のユリカの棲家まで。
「ありがとう、元気出てきた」とやっとユリカの爽やかな笑顔が出た。

『うん、良かった』と笑顔で言って降ろし、笑顔のユリカと手を振って別れた。

土曜日の人混みを歩いていた、真夏の夜風が爽やかに吹いていた。そして後から声をかけられる。

「ごめんなさい、そこで聞いたらあなたが関係者だって聞いて」と４０代であろう綺麗な和服の女性が立ったいた。

『素敵だ、やはり熟れた女性は』とニヤで返した、その女性は華やかに笑った。

「あなたからしたら、熟れ過ぎでしょう」と笑っていた、華やかさを連れていた。

『関係者ってＰＧのこと？』と笑顔で聞いた。

「そうなの、パラダイスガーデンに行きたいの」と近づいた、微かに薔薇の香りがした。

『ご案内します』と言って腕をくの字型に曲げてニヤで見た、女性は笑顔で腕を組んでくれた。

『お客様じゃないですよね』と笑顔で見た、美しい顔に同業者だろうかと思っていた。

「組合の旅行で来てね、内緒で驚かそうと思ったら迷っちゃった」と華やかに笑った。

『失礼しました、組関係の姉さんとは知らずに』と文太ぽく行った。

「く・み・あ・い、よ酒造組合」と楽しそうに笑った。

『まさか！すてきな貴女は小百合様』と驚いて見直した、「正解です」と微笑んだ。

『で、内緒できましたね』とニヤニヤで言った。

「何か楽しんでます？」と微笑んで返した。

『楽しい事好きですか？』とニヤニヤ継続で言った、「もちろん」と微笑んだ。

『楽しそうだ～』と言ってハルカポジションに案内した。

『ここで仕事ぶりご覧下さい、もうすぐ閉演しますから』とニヤで

言った。
「ありがとう、最高よ仕事姿がこっそり見たかったの」と嬉しそうに笑った。
リンさんが不思議そうに見ていた。

２０分で閉演を迎えた、レンを合わせた９人衆が１０番に座った。
蘭を手招きして、ユリさんも１０番に座らせてと頼んだ、ユリさんが薔薇で座った。
私が小百合さんと打ち合わせして、１０番に向かった。
『今日の報告会の前に、反省会をします』私を全員が見ている。
『今日はユリさんの問題点を評価します』と言うとユリさんだけ薔薇の笑顔で、残る１０人が固まって私を見た。
『でわ、審査委員長お願いします』と呼ぶと小百合さんが歩いて来た、ユリさんは薔薇の笑顔で大粒の涙を流して見ていた。
「私の名前を使ってくれた、百合・・よくここまで来ました」小百合さんはユリさんを優しく見ている。
ユリさんは泣いていた、少し震えながら。１０人が驚いてユリさんの涙を見ている。
「そして、多くの素敵な仲間に囲まれてるのを見て、嬉しかった」
「本当に最高の娘を持てた喜びに満たされました」と華やかな笑顔を向けた。
私が拍手して、１０人衆が拍手した、感謝を込めて偉大なる薔薇に。
ユリさんが立ち上がり、小百合さんが手を広げた、二人は抱き合った。
その姉妹のようにしか見えない親子を見ていた。
薔薇の心の休息を告げる涙を見ながら、９人衆は立ち尽くしそれを見ていた。
唯一人２人の関係を知る、蘭が私に抱かれて泣いていた。嬉しそうに。

静寂のフロアーの明かりが照らしていた、本物の母娘の姿を。

今週の炎も種火を残すだけとなり、女優達の休息が来た。

蘭を抱く私は、蘭の休息だけを想っていた。

試験官の足音はすぐそこまで来ていた、難問を持って微笑んでいた。

炎の女リアンが微笑んでいた・・・。

先輩

静寂のフロアーに響くカーテンコール、感謝と愛が込められている。
抱き合う母娘は血の繋がりを越えて、深く信じあっていた。
踏出そうとした時に、そっと背中を押して見守った偉大な母にも、
涙が光っていた。

少し落ち着いたところで、私が笑顔で切り出した。
『お姉さんに見えますが、ユリさんのお母様の・・小百合さんです』
と9人衆に微笑み。
『なにぼさっとしてるのかな、ご挨拶しなさい』とニヤをだした。
「ユリさんには、本当にお世話になっています」蘭が満開で深々と
頭を下げ、慌てて皆が挨拶した。
徳野さんもボーイも飛んできて、挨拶をしていた。
マダムがマリアを抱いて来て挨拶をして、マリアを小百合さんに渡
した。
小百合さんは本当に嬉しそうな顔でマリアを抱き、マリアは天使全
開でこう言った。

「まま」、マリアの言葉に、小百合さんは又涙を見せた。
『小百合さんいけないな～』と私が小百合さんを見てニヤした。
「その笑顔はやめて、怖いから」と私を見て華やかに微笑んだ。
『仕方ない黙っててあげますから、貸しが1つですよ、ユリさんが
意地悪した時使います』とニヤニヤで返した。
「いつでもいいわよ、何でもどうぞ、それが守れるなら」と華やか
ニヤで返してくれた。
『最高の貸しが出来た～』と両手に拳を握り、飛び跳ねて喜んで見
せた。
「あ～、どうしてそんなに鋭い、先にとられちゃった」と蘭も満開

で微笑んだ。
皆で笑っていた、ユリさんの薔薇の笑顔を見ながら。

「小百合さん3分だけお時間頂けますか」と美冬が真顔で言った。
「もちろん、いいですよ」と小百合さんが微笑んだ。
「最高の人に立会人になって頂きたくて、よろしいでしょうか？」
と美冬も微笑んで返した。
「いいですよ、私が立会人って事は覚悟のある事ですね」と小百合さんも真顔で答えた、凛とした美しい姿だった。
「はい」と美冬も真顔で答えた、「わかりました」と小百合さんは微笑んだ。
「私達四人、四季と呼ばれているバイトです」四季が頭を下げた、小百合さんは微笑んでいた。
「そしてこの2人私達の1学年下の、プロ志望のユメとウミと言います」ユメ・ウミが頭を下げた。
「私達は今夜6人で話し合い、全員一致で結論をだしました。
昨夜レンを見て、今夜のレンの仕事を見て決めようと。
そして今夜のレンを見て、足りなかった最後のピースが揃ったと思いました。
私達は学校の関係上、来年4月からは全員揃うのは難しくなります。
だからこそ、3月までは全力でやりたいんです、心残りを残さないほど燃え尽きたい。
それには、カスミとレンとハルカを含めた9人のリーダーが欲しいのです。
そして決めました、それはカスミにしか出来ないと。
ここで宣言します。
四季はカスミを認め年齢に関係なく、カスミをこの9人のリーダーに推挙します」
と美冬が最後はカスミを見た、全員がカスミを見ていた。

カスミは俯き震えていた、嬉しかったのだろう。

「あなたがカスミちゃんね、引き受けて貰えますか？」と小百合さんが言った、優しい響きだった。

「はい、本当に嬉しい・・全力で頑張ります、皆さん助けてください」と顔を上げ泣きながら言った。

「分りました、頑張ってね・・私は今証人として聞きました、全力で皆さんが楽しむ事を期待します」と華やかに笑った。

全員でカスミに拍手を送った、ユリさんと蘭は泣いていた四季の想いが嬉しくて。

「そう言う事です、エース」と美冬が私にニヤで振った。

『カスミ、月曜から厳しくいくから、覚悟しなリーダー・・頑張れよ、見てるからなずっと』と真顔でカスミを見た。

「やっぱ趣味になってるだろ、泣かすの」と必死に不敵を出しながら、泣いていた。

『じゃあ、ゆっくり休んで月曜には輝く笑顔を待っている・・解散』と私が全員にニヤニヤを出した。

「は～い」と言って９人衆が笑い、「月曜３日分の報告会だから、覚悟しな」とカスミが本物の不敵を出した。

控え室に戻る女性達に向かって、ウル顔で。

『カスミリーダー、素敵なカスミリーダー』と叫んだが。

「負け犬が泣いてますね～」とカスミが蘭に不敵をだし。

「リーダー違いますよ、あれは捨て犬です」と蘭がニヤで返して、女性達の笑い声が扉の奥に消えて行った。

「素晴らしい人達が揃っていますね、女性も男性も少年も」と小百合さんが私に微笑んだ。

「私もそれを、本当に喜びに感じてます」とユリさんが薔薇で微笑んだ、私は照れた笑顔で返した。

ユリさんが控え室に入り、マダムと小百合さんの後を、ＴＶルーム

に向かった。
ＴＶルームでサクラさんと松さんと久美子が挨拶していた。
私はエミを抱いてサクラさんとエレベーターに乗った。
「ありがとう、最高の先生を見つけてくれて、本当に感動したわ」
とサクラさんが微笑んだ。
『俺もです、初めて音楽に触れた気がした』と笑顔で返した。
「ミサがあんな笑顔で話してくれたの初めてだったから、嬉しくてね」と嬉しそうに笑い。
「カスミちゃんも明日から来てくれるし、良い事だらけで怖いよ」
と微笑んだ。
『カスミは分りませんよ～、関係ないハゲ親父で店が溢れるかも』
とニヤで返した。
「それは有り得るね、怖い」と楽しそうに笑った。
サクラさんを、笑顔で送ると。レンと久美子が降りてきた。

「ありがとな、凄いお守り久美子が貰ってたから」とレンが笑顔で言った、私はタクシーを止めて。
『それは梶谷さんにレンから言って、久美子を何かで助けてやりたいって言ってたから』と笑顔で返した。
「泣かすの趣味だな」と笑ったレンと久美子を乗せて、手を振って別れた。
ＴＶルームに戻ると全員揃っていて、この頃からカスミも終了時来るようになった。
私を見てマリアが駆けてきた、抱き上げると頬にキスをしてくれた。
「蘭姉さん、反対側にしないと」とカスミが不敵をだして蘭を見た。
「マリアちゃんは特別です」と蘭がカスミを笑顔で睨んだ。
「マリア、今日ユリカの頬キスを食い止めましたよ」とユリさんが蘭に微笑んだ。
「マリア～、可愛い靴プレゼントするね」と蘭が満開でマリアに言った。

「りゃん」とマリアが天使全開で蘭を見た、「うん」と蘭も満開で答えた。
「マリアなら、最強の守護者だな」とカスミが言って、小百合さんを含めた全員で笑ってＴＶルームを出た。

ユリさんと小百合さんがタクシーに乗り、マリアを小百合さんに渡した。
蘭とカスミと3人で手を振って送った。
「さて、カスミのリーダー就任祝いでもするか」と蘭がカスミを見た。
「えっ！」とカスミが驚いた、「少しだけね、明日からサクラさんの所でしょ」と蘭が微笑んだ。
「うれし～」とカスミが蘭に飛びつき、腕を組んだ。
「案内しな」と蘭が振返り、笑顔で睨んで私を見た、『どこにでしょ？』と恐々聞いた。
「決まってるだろ、合鍵姉さん」とニヤで微笑んだ、『うん』と言って微笑んで返した。
「合鍵・・持ってるのか！」とカスミが驚いて私を見た。
『愛人だからね』とニヤニヤで返した。
「あんなたわ言、言ってますよ隊長」とカスミが不敵で蘭を見た。
「飲んでやる、やけ酒してやる」と蘭がニヤで私を見た。
『うん』と私も笑顔で返した、「添い寝作戦か～、いいな～」と笑ったカスミを連れて、ユリカの店に着いた。

蘭が覗くと、中からユリカの元気な声がした。
「らん～、カスミちゃんも、うれし～」とユリカが飛んできて私を見た。
「ごめんね坊や、お子ちゃまは入れないの～」とユリカがニヤで言った。
『ユリカ、意地悪1個追加』とウルで返した、ユリカが笑顔で手を

出したので繋いで入った。
店には客がまだ3組いて、奥の一番眺めの良いＢＯＸに案内された。
「こんな良い所じゃなくても」と蘭がユリカに笑顔で言った。
「いいのよ～、もう新客入れないから、こんな嬉しい3人組が来たんなら」と笑顔で返した時に、女性がシャンパンを持って来た。
「私から、お祝いなんでしょ」とカスミを見て微笑んだ。
「えっ、どうして」とカスミが驚いた、『どうしてって聞かないの、ユリカには分るの』と私がカスミに微笑んだ。
「そっか」と微笑み立ち上がり、「ありがとうございます」とカスミが頭を下げた。
「もう、いいから、楽しくやりましょう」と言って４つのグラスにユリカが注いだ。
私は４つ有るので、隣で注いでいるユリカにニヤニヤ光線を当てた。
「一杯だけよ」とユリカが笑顔で睨んだ、私はウルで返した、蘭の満開を見ながら。
「じゃあ、蘭、乾杯して」とユリカが蘭を見て微笑んだ。
「カスミ・・約４ヶ月でこんなに成長した子を私は初めて見たよ、レンとハルカが後から見てる」蘭の優しい声に、カスミはもう涙を溜めていた。
ユリカは深い深海の優しい瞳でカスミを見ていた。
「同じ時代を生きる者として、私はカスミに会えて本当に良かった、検討を祈る・・乾杯」と蘭が言って４人でグラスを合わせた。
カスミは一口のみ、グラスを置いて蘭を見て抱きついて泣いた。
「私の方が何倍も、蘭姉さんに会えて良かったと思ってる・・ありがとう」と蘭の胸で泣いていた。
「最近泣き虫に、拍車がかかってるな」と蘭が満開で言いながら、抱いていた大切な者を。

「がんばってね、カスミちゃん」とユリカが微笑んだ、カスミは体を起こし真顔で。

「ユリカさん、ありがとうございます、今夜もこの前の事も・・本当に楽になりました」
「全力でやってみます」とカスミがユリカに涙目で誓った。
「ねぇ、カスミちゃんリアンだけ姉さんって呼ぶと、私寂しいな」
とユリカが微笑んだ、カスミが輝きを増し嬉しそうな笑顔で。
「はい、ユリカ姉さん」と笑顔で言って、楽しそうに飲みはじめた。

「あのリアンがね、カスミちゃんとあった日に私の所に来て泣いたのよ、蘭に相棒が見つかったって」と言って、ユリカが向かいの２人を見た。
「リアンにとっても私にとっても蘭は特別なの、蘭が副職としてＰＧのＮＯ１になった時。
私達は祝杯を上げて２人で泣いたわ、その素晴らしい後輩を持てた事が嬉しくて。
そしてずっと私もリアンも気にしてたの。
このままじゃ蘭は、水商売に心残りを残すんじゃないかってね。
本当によく来たねカスミ、ありがとう・・そしてありがとう・・蘭」
優しい響きだった、揺り篭じゃなかったが本当に深く優しかった。
蘭もカスミも泣いていた、常に見ていてくれる先輩に巡り合えた喜びで。

私は向かいのビルの最上階のリアンの棲家を見ていた、リアンに会いたくて。
夜街の明かりは陰りも無く、女優と観客を照らしていた。
その小さな世界にある、大きな愛に触れて、私は３人を見ていた。
世代を繋ぐ愛すべき３人に囲まれて、幸せを感じていた。
感謝してもしきれない、偉大なる先輩・・豊兄さんを想いながら。

【最高の副職】の称号はやはり、ユリカが贈っていた。

蘭は謙遜して否定していたが、心からその言葉を大切にしていた。

私がホームでユリカを1人で見送り駅を出ると、蘭が車の横に立ち空を見上げ泣いていた。

私が蘭を抱くと、「寂しくない・・・寂しくなんかない」と私を見て。

「空に話せばユリカ姉さんが聞いてくれるから・・・」と泣きながら満開で笑った。

私は３０年近く経った今でも、空に話している。

ユリカが聞いていると、確信しながら・・・。

墓標

天に伸びる要塞の最上部、浮島に降られるような心地よさ。
世代を繋ぐ3人の美しい女優には、笑顔が溢れている。
認められ、求められ、必要とされる事に喜びを感じている。

「レンはどうですか？」とユリカが2人に聞いた。
『素晴らしいと思います、背負った者じゃなくて、意志としてやっているから』と蘭が満開で言った、カスミも頷いて微笑んだ。
「妹さんも凄いしね、私も聞きにいかないと」とユリカも微笑んだ。
「なんか押されましたよ、１６歳の本物の輝きに、本当に感動しました」と笑顔でカスミが言った。
「あなたが輝きで押されるなら、相当の本物ですね～」とユリカも笑顔で返した。
「正直にどう思ったの？」とユリカが私に微笑んだ。
『俺、夜で聞いたの2回目だったから2回目に分った。
叫んでた、多分亡くなった母親に、必死に聞こえるように。
【私は今ここにいます、元気です、心配しないで】って叫んでた。
心を鷲掴みみされるような響きだった、初めて音楽本質に触れたと思ったよ』と正直に笑顔で答えた。
「あなたの進歩に付いて行けないかも」とユリカが深海の瞳で言った。
「ユリさんでさえ、そう思ってるみたいですよ」と蘭が満開で微笑んだ。
「なんせ、最強の教師陣に自ら飛び込む、その度胸がいいよな～」とカスミも輝く笑顔で言った。
『好きなんだよそれだけは、小さい時から聞くのと、話すのは』と3人を見て言った。3人とも笑顔で私を見ていた。

『今日のユリカの最後言葉が嬉しかったよ、俺もそうじゃないかと思ってた』とユリカに笑顔で返した。
「なんて言ったの？」と蘭が私をニヤで見た。
『マリアを俺の最高指導者っ言ってくれた』と蘭に笑顔で返した。
「うん」と蘭が満開になった。
「私、マリアが恩人だよ」とカスミが言った、嬉しそうに。
「私はマリアがいつも応援してくれた、産まれたばかりの頃から、だからＮＯ１になれたの」と蘭も満開で言った。
『そして、ユリカはマリアと同種族だしね』とユリカにニヤをした。
「あっ、それ分る～」と蘭も満開で言って、「私も～」とカスミも笑顔で言った。
「だから、マリアのレベルは桁が違うの」とユリカも楽しそうに笑顔で返した。
『見たいな～ユリカが見てるマリア』と笑顔で返した。
「あなたと同じです、化け物みたいに言わないで」とユリカが笑顔で睨んだ、蘭が満開でその表情を見ていた。
「やっぱ、ユリカ姉さんって最近変ったんだ」とカスミがユリカに微笑んだ。
「あなたと同じ言葉の魔法と、抱っこでね、添い寝まだだけど」とユリカがカスミにニヤをした。
「ユリカさん、カスミとの添い寝の時何も無かったですか？」と蘭がユリカにニヤで聞いた。
「そんなに泣きたいなら教えるけど」とニヤでユリカが返した。
『ユリカ、その冗談は冗談になってないよ』と私がウルで言うと。
「あぁ、私、急にお熱が」とユリカが揺れた、「さぁどうするんだい」と蘭も満開ニヤで来た。
『蘭、それ以上飲むなよ』とニヤで返した、「正解」と蘭が満開で微笑んで、グラスを飲み干した。
「やっぱ、意地悪は楽しいな～」とカスミが不敵で私を見た。３人で笑っていた。

本当に楽しい夜だった、特に私は特別3人組みに囲まれて。
ユリカがエレベーターまで送ってくれた、エレベーターを待ってると。
「私、お熱が～」とユリカがニヤで言って、「私も又お熱が～」とカスミが不敵で言った。
「私、酔った」と蘭が満開で私を見た。
『蘭が正直者～』と言って蘭と腕を組んだ、2人の笑顔を見ながら。
ユリカにお休みして、カスミの乗ったタクシーに手を振って、タクシーに蘭と乗った。
蘭が肩に乗ってきて、満開で私を見た。
「今日の久美ちゃんのこと、今までで一番嬉しかった、ユリさんの話しながら笑う笑顔も」と蘭が満開で微笑んだ。
『俺もそれだけは、自分でナイスだと思ってる』と言って蘭と手を繋いだ。
「明日は一日寝てていいんだね、ずっと側にいるんだね」と蘭が少しトロンになって言った。
『そうしないと駄目～、夕食は俺の得意のスペシャルカレーをご馳走してやる』とニヤで言った。
「なんで、こんなに毎日が楽しいんだろう～」と満開で微笑み、瞳を閉じた。

タクシーが着き、案の定蘭は起きずに抱っこして、部屋を必死で開け。
ベッドに優しく寝かせると、上着の長いパジャマが用意してあった。
《起こすとあの可愛い蘭が登場しろよ》と思いながら。
『蘭、お化粧落とさないと、お化けになるよ』と優しく体を揺すった。
「おびゃけ、きょわい」とトロン蘭が登場した、《やっぱり、タクシーで気が抜けるんだな》と思いながら抱き上げて、洗面所で支え

た。
ベッドまで抱いて行き、パジャマの上着を頭から被せて、部屋を真っ暗にして。
上着を脱がせ、フラフラを立たせてスカートを脱がせた。
蘭が片足を上げた、下着が見えそうで焦った、パンスト履いてないから着せろって言ってるのか。
私は気付いて、パジャマのズボンを両足に通し、立ち上がって履かせた。
『りゃん、楽しんでる？』と暗闇に浮かぶトロン蘭に囁いた。
「たにょしいよ、みゃいにち」と笑顔で言った。
あまりに可愛くて優しく抱きしめてから抱き上げて、優しく寝かせた。
『待っててね』と優しく囁くと、「みゃだ、みゃだ」の蘭の声を聞きながらカーテンは閉めたまま洋服だけかけた。
ベッドに入ると、やはり泣き虫蘭タイムだった、私は優しく腕枕をして引き寄せた。
「でょこいってた、りゃんひとりにした」と涙を流して私を見た、私は蘭の涙を優しく拭いて。
『どこにも行かないって、言っただろりゃん』と微笑んだ。
「いかにゃい～」と言って抱きついた、可愛い蘭と遊ぶ最高の土曜の深夜がやったきた。
「りゃんじゃない、りゃんだよ」と睨んだトロンの目で。
『ごめんね、りゃん』と笑顔で囁くと、「うん」と満開になった。
『りゃんは好きな人がいるの？』と聞いてみたニヤしながら。
「わきゃらにゃいの」と言いながら、涙をポロポロ流した。
『ごめんよりゃん、分ってるよ』と言って慌てて優しく抱きしめた、最高の時間を楽しんでいた。
蘭が静かになって、私の脇の間から顔を胸に付ける、蘭の寝息を聞きながら眠りに落ちた。

翌朝私が起きたのが9時を過ぎていた、蘭は私の胸の上にいた。
優しく枕に蘭を寝かせて、部屋を出て洗面所に行き歯を磨いて顔を洗った。
冷蔵庫には恐ろしい程の食材が入っていた、蘭が起きてからにしようと思って日記を取って戻った。
蘭の眠るベッドに寄りかかり、日記を書いていた。
静かな日曜日だった、でも私には蘭が側で眠る楽しい日曜日だった。
蘭が昼過ぎに起きた、蘭がシャワーを浴びている間に食事を作った。
初めて鯵の開きを焼いてみた、上出来な感じにニヤニヤしていた。
「気持ち良い日曜日だね～、最高の気分だ何もしない日曜日」と満開の笑顔を見ながら食事をした。
蘭がキャンディーズのレコードをかけて、上機嫌の鼻歌交じりだった。
『蘭、１つ聞いて良い？』と微笑んで蘭を見た。
「難しくないことなら」とニヤで返した。
『心配だから聞くんだよ、お金しんどくない？』と真顔で聞いた、私の分の負担を心配していたのだ。
「それは大丈夫、ＰＧのＮＯ２だよその辺のオヤジより、収入かなりいいんだよ」と真顔で言いながら。
「今は気にしないで、あなたが未来で私を休ませてくれるんでしょ」と満開で微笑んだ。
『もちろん、俺は俺にその時出来ることを蘭にしようと思ってる、お世話になります』と笑顔で返した。
「よし・・・ありがとう」と満開で笑った。

「１０年後、どうなってるんだろうね」と食べ終わり蘭がニヤで言った。
私は日記を開き、１０年後の最後のページだけ蘭に笑顔で見せた。
【今でも蘭を愛してる】と書かれた文字を蘭が見ていた、深く優しい瞳だった。

「急に眠くなった」と言って立ち上がり、ベッドに入り私に背を向けてタオルケットを頭まで被った。
私は少し震える蘭の背中を感じながら、日記の続きを書き始めた。

その日の日記にこう記している。
【ユリカの言った、マリアが私の最高指導者は、絶対に間違いないだろう。
私は最も大事な宣誓もマリアに誓った、それは絶対に破ることが出来ないからだ。
マリアの笑顔も言葉も、そしてあのペチも心にいつも有る。
マリアありがとう、永い時間をかけてマリアにお返しするね】
そう書いて日記を閉じて、キッチンで鼻歌混じりでカレー作りに取り掛かった。
私は近所の子供に食材を持ち寄らせ集て、公民館でカレーパーティーをしていたから、カレーは得意だった。
私は称号通りカレーに対しては挑戦者だった、何でも入れて挑戦するのだ。
カレーパーティーも４回目位からは、興味津々の母親たちも集まりだして盛況になっていた。
良い時代だった、社会の懐が深かった。
現代と比べようも無いほど不便だった、しかし自由だった精神的自由があった。
携帯の無いあの時代、約束は絶対だったし、会えない時間は常に相手を想っていた。
大切な時間じゃなかったのだろうか、待ち合わせで待ってる時間というのは。

蘭は夕方まで眠っていた、私はそれが何よりも嬉しかった。
「あ～最高の気分、良い匂いもするし～」と蘭が起きて、満開で言った。

「お盆だから、少し出かけよう・・海まで」と蘭が私を見た、私も笑顔で頷いた。
「スッピンでいいかな？」と蘭がニヤで言った。
『もちろん、その方が誰にも気付かれないし』とニヤで返した。
「そんなに変るかな～」と珍しく蘭が考えた、私はその可愛い素顔を見ていた。
『俺は蘭が俺の前で、素顔でいてくれるのが嬉しいよ・・安心して眠ってくれる事もね』と微笑んだ。
「うん」と蘭が満開で笑った。

ケンメリで海に続くバイパスを走っていた、夕暮れはまだ遠く爽やかな風が吹いていた。
「墓標には意味が無い、和尚の言葉にどんなに救われたかわからないよ」と蘭が前を見ながら言った。
『俺のことも紹介してくれた、弟さんに』と思い切って言ってみた、今までタブーの話を。
「もちろん、応援してねっていつも言ってるよ」と私を笑顔で見た、その笑顔が嬉しかった。
「エミちゃんがね話してくれた、イルカ岬・・そこにしようと思ったの」と私を見て。
「弟に本当に話をしたい時は、イルカ岬にしようってね」と満開で微笑んだ。
『最高の場所だね』と笑顔を返した、蘭は前を見て笑顔で頷いた。

前を見ている素顔の蘭は、和解を提示して輝いていた。
南国の夏は分岐点を迎えていた、霊たちが戻ると伝えられる季節が来ていた。
しかし蘭は墓標を必要としていなかった、その季節でなくても常に語りかけていた。
《きっと蘭の弟が応援してくれている、誤魔化しや嘘などは通用し

ない相手が》と私は思っていた。

海が見えてきた、夏の輝きを乗せた波が立っていた。
夏物語は続いていく、諦めという選択を拒否し続ける私には。

私はこの蘭との会話の唯一のタブー、【弟】を乗り越えた時に感じていた。

行けるんじゃないかと、蘭との楽しい未来の日々に。

そして次は自分の番が来たと、私が【親父】と【常識】を乗り越える時が。

そして常識の壁を乗り越える為の、最後の大切なヒントを提示する常識外の存在。

リアンが待っていた、最高で最強の炎で焼いてやると。

そうしないとその壁は越えられないと、燃える瞳で待っている。

海を見ている私に、微笑んでいた・・・。

源氏名　蘭

海を見下ろす崖の上を疾走していた、海の彼方の国は信じられない程遠かった。
日南海岸国定公園、その当時はハネムーンの熱い旅人が闊歩していた。
いるか岬は小さなパーキングだけのスペースで、小さな看板が有るだけである。
そこには海しかない、海を見ると後を走る車の音を掻き消して波音が包む。

蘭がケンメリを停めると、若いカップルの男が女の腰に腕を回して、海を見ていた。
蘭はその熱いカップルを見て、私に最大レベルのニヤをして腕を組んだ。
『負けず嫌い』と私もニヤで蘭に言った。
「カップルに見られなかったら、シャクでしょ」とニヤ継続中。
『確かに・・蘭、意地悪1個』とウルで返した、「カスミに迫った？」と嬉しそうに睨んだ。
『デッドヒートですな～』と笑顔で返した。
岬の先端まで来て、蘭は海を見ながら目を閉じた、美しい横顔だった。
カップルの男が蘭をチラチラ見るのに気付いた、素顔の蘭と私の不釣合いのカップルを。
「よし、お願い」と蘭が満開で私を見た、私は蘭を見た次の言葉に緊張しながら待った。
「青島は勘弁してやるから、ここで今充電して」とニヤしながら、私の首に腕を回した。
隣のカップルの驚いた視線を感じながら、蘭を抱き上げた。

海を見ていた、蘭を抱きながら、蘭は嬉しそうに私を笑顔で見ていた。

『充電したいなら、目を閉じれば』と蘭をニヤで見た。
「お隣さんどうするんだろう？」と私にニヤニヤで囁いた。
『さっき彼氏の方が、蘭をチラチラ見てたよ』とニッで返した。
「センスの良い男だね～」と蘭は満開笑顔で囁いた。
『黒いケンメリに乗る、素顔の女が珍しいだよ』とニヤで蘭を見ると、全力ニヤで返されて。
蘭は私に強くしがみつき、私の首に顔を付けて。
「嫌・・別れたくない・・私を捨てないで」とかなり大きい声で言った。
私は隣のカップルの視線を感じながら、蘭に乗ってやった。
『仕方ないだろう、俺には妻も子供もいるんだから』と大き目の声で海を見ながら言った。蘭は震えている、笑いを必死で我慢していた。
「別れるって言ったから・・私、高校も辞めたのに・・酷い」と震えながら言った。
隣のカップルの女が、男を引っ張りながら車に乗った。
蘭が私を見て満開で笑った、私も可笑しくて蘭を見ながら笑っていた。
『女子高生は言いすぎだよ』と笑顔の蘭に言った、笑いながら。
「あなたの妻子持ち程じゃないよ」と小動物の笑顔で、舌を出した。
「車までお願い」と蘭がニヤニヤで言った、私もニヤで返して車に歩いた。
対向車と後から来る車の中の視線を、楽しみながら。

アパートに帰り、交代でシャワーを浴びて、夕食のテーブルについた。
「泣いてもいい・・嬉しくて」と蘭が満開で微笑んだ。

『味は保障しないよ、愛情のスパイスはたっぷり入れたよ』と笑顔で返した。
「うん」と言って一口食べて、「美味しい、スパイスも利いてるよ」嬉しそうに食べていた。
私も嬉しくて、蘭を見ながら食べていた、上出来なカレーを。
食べ終わって、２人で皿を洗ってビールを飲みながら、トランプで【神経衰弱】をしていた。
蘭が負けず嫌いを発動して、かなりの回数やった笑いながら。
「我家はＴＶいらんね、普段も見ないの？」とトランプを片付けながら、蘭が微笑んだ。
『見ないな～、第一家にいるのはご飯と夜寝る時だから』と笑顔で返した。
「ねぇ、家出したの何回目？」と蘭がニヤで聞いた。
『本格的なのは３回目、後は１００回位、婆さんの家に行ってたから』とニヤで返した。

「お母さんどんな人？」と蘭が深い目で聞いた。
『何も言わない、だから怖いよ・・親父よりね』と少し照れながら言った。
「素敵だよね、お母さんだけあなたの居場所知ってて、それを豊君に任せるって言うのが」と満開の笑顔で言った。
『うん、お袋は俺の事信じてるってしか言わないよ、だから俺は裏切れないのかな』と真顔で言って。
『蘭は好きになると思うよ、考え方が多分リアンに近い人間だから』と微笑んだ。
「うん、私もそう思う・・・お父さんは？」と聞いた、笑顔を戻して。
『皆誤解してるかも知れないけど、俺は親父が嫌いじゃない、生き方も好きだし。
教育方針が獅子なんだよ、子供を崖下に突落すみたいなね。

俺はつい最近まで分からなかったよ、だから時間を考えていた、この生活は夏休みまでだと。
それは距離じゃなかった、距離は問題じゃないんだ、親父だったんだよ。
でも親父は許さない人間じゃない、常識を重んじる人間じゃないんだよ。
それに最近気付いた、俺が逃げてただけだった。
迎えに来ないって事は試されてると思ってる、そして俺が蘭との事を話しても許せる人間だと。
親父の口癖、豊ならそうするか考えろって・・ずっと考えてた。
そして確信した、豊兄さんでもそうするって、だから今は親父にあやまれそうだよ』と笑顔で締めた。
「私は嬉しいけど、キチンと考えてね、それが自分の本当に望んでる事なのか」と蘭も最後は満開で締めた。

蘭がベッドに入り、私を笑顔で見て。
「一回目の本格的家出の話をして」と微笑んだ、私は頷いて返して、電気を消した。
『それは俺が小５の正月、前話した中学生にやられて明けた正月だよ』と蘭を見た、蘭は笑顔で頷いた。
『俺は新聞で読んだ冒険少年の話に感化されて、計画を立てていた誰にも言わずにね。
小６で北海道から東京まで、キセル乗車で旅をした少年の話を読んで興奮したんだよ。
それで思うわけ、小５の今が記録を塗り替える最後のチャンスだって・・バカだよやっぱり。
正月しかないって思ったの、お年玉があるからね。
そして日本地図を教科書から破って、地図を見ながらニヤニヤしてた。
それで考えたの記録更新なら、キセルじゃ難しいって、そしてどう

すれば記録更新になるんだってね。
で、決めた宮崎から北海道のその少年に会いに行って【俺の勝ちだ】って言ってやろうとね。
元旦にお年玉かき集めて、６５００円あったの、置手紙して夕方チャリに乗って出かけた。
そのまま宮崎駅に小さなリュック一つ持って、カスミと同じ駅入場券買って寝台特急に飛び乗った。
東京行きの【富士】だったよ、それで考えていた行動をとるの、夫婦２人旅を探すと年配の夫婦がいた。
その年配の夫婦の向い合う席が空いてて、『ここいいですか？』て満面の笑みの小学生で言ったの。
夫婦が凄く優しい人で、俺は婆さんの所まで一人旅って嘘言って、必死で楽しい話して仲良くなった。
車掌が来たときその奥さんの方が、言ってくれたの「まだ晩御飯はいらない？」って嬉しかった。
それで自分達の寝台席が空いてるって誘ってくれた、お金持ちだったんだよ特別席で。
割と広めのベッドに奥さんと一緒に寝たんだ、晩御飯も朝御飯もご馳走になった。
東京駅に着いたのも夕方で、奥さんが待っててって言って、待ってた祭りのように人の多い東京駅で。
そうしたら、ご主人が楽しかったからこれはお礼だって、弁当をくれたんだよ。
俺は嬉しくて別れが寂しくて、でも強がって『ありがとう』って言って別れた。涙を必死でこらえた。

迷路のような駅をやっと出た、正月２日の薄暗い東京に。
宮崎よりかなり寒かったけど、見るもの全てが珍しくてかなり歩いた。
知らない間に上野まで来ていた、上野駅の待合所で弁当を食べよう

と、弁当の蓋を取ると封筒があった。
開けると、手紙と一万円と宮崎までの汽車の切符が入っていた。
俺は震えながら必死で泣くのを我慢して、一万円と切符を大切にリュックに入れて。
手紙を読んだ、こう書いてあった。
【冒険は必要です、少しだけおうえんします、いつかあなたが同じ冒険少年に会った時に、その少年に返して下さい】って書いてあった。
俺はそのまま泣いていたんだ、どこの誰かも聞いてなかったって。
そしたら俯いてる泣いてる目の前に、真っ白なハンカチを出す女の人の手が出たんだ。
「泣いてたら前に進めんよ」って頭の上から声がした。
見上げたらリアン位の綺麗な女性が立っていた、俺はハンカチを受け取って。
『目にゴミが入ったんだ』と強がって笑った、その女性も笑ってくれて。
「おせち作りすぎて困ってるの、手伝ってくれない？」って手を出した、その出された手が嬉しくて、嬉しくて。
『しょうがないな～、手伝いましょう』って手を繋いでその人の家に行った。
凄く綺麗なマンションで、でも一人暮らしだった、綺麗な人なのにって子供ながらに思ったよ。
おせちが本当に沢山あって、２人で楽しく食べた、弁当も全部食べた。
お風呂に入りなさいって言ってくれて、泊まっていいの？って聞いたら。
本当の事話してくれるなら、そう言われて、馬鹿な家出の理由を話した。
そしたらケラケラわらって、「合格、お風呂いっといで」って言ったからお風呂に入った。

風呂から上がって、探されてないか聞かれて、それは無いって説明したら。
「合格」って笑って、その後学校の話しとか色々して、大きなベッドで一緒に寝た。
俺、子供だったけど緊張しながら寝たよ、素敵な香りに包まれて。
次の日に東京タワーに連れて行ってもらって、渋谷で人混みに驚きながら食事して。
暖かいジャンバー買ってくれた、ずっと手を繋いで俺はずっと話をしていた。
その日の夜彼女が真剣に言った。
「もう記録更新したよ、私が認める、だから北海道は諦めて明日汽車に乗りなさい」って言われて。
俺は彼女の言う事には逆らえないで、帰る約束をして一緒に寝たんだ、寝てる時ずっと手を繋いでくれた。
次の日東京駅まで送ってくれて、名前を聞いたんだその人に。
「名前なんか重要じゃない、私はあなたを忘れないから、それが重要な事よ」って笑って。
お弁当とおやつ買ってくれて、ホームで繋いでいた手を離して、背中を押された汽車の入り口に。
入口が閉まる前にこう言った、本当の話だよ蘭、信じてね。
俺はこの話は黙ってようと思ってた、でも蘭だから話すよ』と言って蘭を見た、潤んだ瞳で頷いた。

『その人は笑顔でこう言ったんだ。
「私の名前は・・蘭だよ、源氏名だけど、忘れるなよ〜」って叫んで手を振って涙を流した。
その時扉が閉まって、俺は寂しくて寂しくて、でも【泣いてたら前に進めないよ】て言葉があったんだ。
最初にその人の言った言葉があったから、必死で涙を我慢して。
忘れないからって、叫んで手を振ったんだ。

その時に汽車が発車した、それで席に座ったら車掌が切符見に来たから、聞いたんだ。
【源氏名って何？】って聞いたら、お酒を飲む男の人を相手にする女性が付ける名前だよって、教えてくれた。
俺はいつか必ず【源氏名　蘭】を探そうって思ってた、富士山を見ながら。
蘭が「私の名前は蘭、源氏名だけど」って言ったとき、本当は嬉しくて泣きそうだった。
昨夜【蘭って名前が一生忘れられなくなった】って言ったのも本心だよ。
俺にとっては、どんな名前より、素敵な名前だよ。
ハンカチを出した蘭、そして両手で銃を作って俺の全てを撃ちぬいてくれた。
運命の人・・【源氏名　蘭】最高の名前だよ俺にとっては』

そう言って泣いてる蘭の額に手を当てた。
『もう、お休み』と優しく囁いた、少し震える蘭を見ながら。
「頑張って一人で寝るね、頑張って目を閉じるね、話してくれてありがとう・・幸せだった」と言って目を閉じた。
私は蘭に隠し事が無くなった、もう何を聞かれても、全て話せると思っていた。
自分で話して自分が感情的になっていた、あの出されたハンカチを思い出していた。
この寒さをどこで凌ごうかと考えていた私を、救ってくれたあの白い手を。
ずっと繋いでくれた、暖かい手を。

私はこの話を大切に心に持っていたのは、蘭とも一夏の思い出になると思ってたからだろう。

そして蘭が受入れてくれた事で、話せたのだろう。

運命論は好きでないが、蘭が名乗った時に私は本当に嬉しかった。

あのマルショクを出て、躊躇なく繋いでくれた手も。

汽車の窓から見える、素敵な泣顔を思い出していた・・手の温もりを感じながら・・・。

感性？

思い出の中の女性は優しい目をしている、寒い上野駅で出された白い手。
ずっと繋いでくれた温かな手、そして私の背中を押した綺麗な手。
瞑想の中の私は手ばかりを思い出しながら、眠りに落ちた。

翌朝暗いうちに目が覚めて、日記を書いてから、洗面所に行った。
蘭が朝食もカレーが良いと言っていたので、カレーを温めて目玉焼きを乗せた。
「おはよ～、やっぱ寂しかったよ、寝る前に泣かすから」と満開で言いながら洗面所に消えた。
朝食を見て、満開になり。
「この一工夫が泣かせるんだよね～、又カスミに自慢しよ」と言いながら食べはじめた。
『やっぱりカレーは2日目だな～』と私が笑顔で感想を言うと、蘭も満開で頷いた。
「私の本名聞きたい？」と食べ終わった時に蘭が言った。
『俺、思ってる事がある、蘭が実家に帰るときは絶対に付いていく、あの浜で待ってるから』と蘭を見た、深い目で頷いた。
『その時に教えて、名字は知ってるから』と笑顔で言った。
「うん・・じゃあ私もあなたの家に行く時に、名前教えてね」と満開で返した。
『うん・・俺、ずっと蘭に会って思ってたよ、名前なんて重要じゃないってね』と微笑んで返した。
「うん、嬉しいよ」と満開で微笑んだ。
蘭を見送って、朝の仕事をして、腕立てと腹筋をして出かけた。
一番街に入ると可愛いワンピースを着た、綺麗な女性が出口に向か

って歩いて来た。
一瞬見て、綺麗な人だな～と思ってすれ違う時に、声をかけられた。
「私がなんかしたか、無視するとは良い度胸だな」とカスミの声がした。
『カスミ！・・うそ！』と言ってワンピースの女性を直視した、可愛い感じのカスミだった。
「可愛いだろ～」と一回転してみせた、輝く笑顔で。
『初対面がそれなら、夢中になってたよ』と感じた事を口にして、見惚れていた。
「今は夢中じゃないのかい？」と不敵をだした。
『夢中です・・でも不敵はやめろよ』とニヤで返した。
「楽しくてね～サクラさんの店、頑張ってくるよ～」と言って手を振った。
『カスミ可愛いぞ、浮気するなよ』とニヤして手を振った、カスミが舌を出して背中を向けた。

ＰＧを通り越して、ユリカの店に着いたが鍵がかかっていた、私は合鍵で開けて入った。
ユリカは奥のＢＯＸで裁縫をしていた、逆光で浮かぶシルエットが《まるで絵画のようだ》と思った。
『おはよう、ユリカ今日も可愛いね』と笑顔で声をかけた。
「おはよう、言葉より絵画の方が嬉しかったよ」と可愛く微笑んだ。
『逆光で裁縫してる姿が、絵になってるからね』と微笑んで返して隣に座った。
「お嫁さんの方が似合うからね」と可愛いニヤで返された。
『うん、でも土曜日の夜お店で見たら、案外様になってると感心したよ』とニヤで返した。
ユリカの綺麗な手が通す針を見ていた、その器用な動きに見惚れていた。
『ユリカ用心深いね、鍵いつもかけてるし』と真横のユリカに微笑

んだ。
「か弱い乙女が夜街に一人で居るんだから、かけるよ」と笑顔で返した。
『危険が迫ってるって、なんとなく感じないの？』と素直に思ったままを聞いた。
「自分の事は全然駄目なの、好きな人の事はかなりの部分、分る時もあるけどね」と微笑んだ。
《ありがとう、俺も好きだよユリカが》と心で言って、ユリカに微笑んだ。
「それ素敵過ぎるよ、今キュンとした」と爽やかに笑った。
『近いとなるんだね、良い事発見した』とニヤで返した。
「距離じゃないよ、嘘は分らないから、本心だけだからね」と深い目をして爽やかに笑った。
『そっか～、でもその方が好都合』と言ってニヤで返した。

裁縫が終わりユリカと掃除をした、エプロン姿が可愛かった。
グラスを洗いＢＯＸでコーラを飲んでると、ユリカが化粧道具を持ってきて化粧をはじめた。
『俺の試験が来るとか、どんな感じで分るの？』と真横のユリカに聞いてみた。
「全然分らないよ内容とかは、強い意志が出るみたいな感じが分るの」と私に微笑み。
「覚悟が必要みたいな感じだよ、あなたのしか分らないけどね」と爽やかな笑顔を見せた。
《ユリカ可愛いな～》と無意識に思った。
「うん」とユリカがニヤをだした、『いいかも～』と私も笑った。

ユリカが化粧を終えると、私を可愛い笑顔で見た。
「今日は沢山じゃなかったっけ」とニヤで言った、私が立ち上がるとユリカが首に腕を回した。

『ユリカ、シャンプー変えたな』と言いながら、抱き上げた。
「泣かすの趣味になったって、本当だね」と嬉しそうにユリカが私を見た。
『ユリカみたいに鋭い感性持ってないから、ユリカの事いつも見てるからね』と微笑んで返した。
「ありがとう、あなたがそう思ってくれるのが嬉しいよ」と言って、首に近寄り静かになった。
私はこの時は何も考えない、ただユリカの香りと温度と重みだけ感じていた。
「あなたは私を特別視しないから、最初に会った時に嬉しかったよ」とユリカが微笑んで。
「私に好意を持ってくれる男では、珍しいんだよ、興味本意が多いからね」と少し寂しげだった。
『最初の時俺は混乱してたんだよ、分らなくて、なんか生きてる人間と話してる感じじゃなかった』と正直に答えた。
「かまえてたからね、でも抱かれた事考えたら少し楽になって、それから見ようと思ったよあなたを」と言ったユリカは揺り篭に乗せてくれた。

私は揺り篭を楽しんでいた、本当に最高の時間なのだ、表現出来ない自分が悔しい。
『俺、ユリカだった聞いて、2回目抱っこして、水の意味だけ知りたかったんだ』とユリカに微笑み。
『それ以外はユリカの感性は個性だと思ってる、俺がユリカを好きなのには、それは関係ないから』とユリカの深い目を見ていた。
「本当に速度が速くなったね、元々も驚くほど早くてビックリしたけど」と優しく深い目で囁いた。
『何となく分るけど・・何が』と少し照れてユリカを見た、ユリカは腕に力を入れて、私の耳元に。
「心を言葉に変換する速度だよ、輪唱の歌を聴いてるみたいで嬉し

いの」と言って、静になった。
私も嬉しくて、子守唄が気持ち良くて、何も考えずにユリカを抱いていた。

その頃である、靴屋に大きな男が来店してスニーカーを選んでいた。
蘭は店の奥から出てきて、男を見て最大級の満開を出して近づいた。
「今日はお休みかな？、豊君」と声をかけた、豊は振返り笑顔を返した。
「誰かと思いましたよ、休み取れて、今市役所に行って来た帰りです」と微笑んだ。
「スニーカーかしら？」と蘭も満開で微笑んだ。
「はい、ここが一番サイズも豊富だから」と少し照れながら、「最近２８じゃ少し小さくて」と微笑んだ。
「なるほど、それは凄いね～」と蘭は微笑みながら、２８以上の在庫がある靴を出して見せていた。
豊が靴を決めて、蘭が社員価格で売って、礼を言う豊かにこう言った。
「お昼食べる時間無いかな～」と笑顔で囁いた。
「いいですね、俺も小僧の近況聞きたいと思ってました」と豊は微笑んで返した。
「５分待ってて、本当にいい男やね～近くで微笑むと怖いよ」と満開で蘭が言って、奥に消えた。

３分で蘭が準備して、豊に近寄り思い切って腕を組んで微笑んだ。
「奥さん、やきもちさん？」と豊にニヤをした。
「かなりの、でもあなたには妬きませんよ、俺は楽しいし」と微笑んで返した。
「お昼お弁当でいい？会って欲しい人がいるの、小僧の最高指導者」と満開で微笑んだ。
「それは是非、会いたいですね」と言いながら弁当を買った、豊が

支払ってＰＧに向かった。

蘭がＴＶルームを除くとマダム・ユリさん・ハルカ・マリアがいた。

「私の彼氏を紹介しま～す」と満開で微笑んで豊を引っ張りいれた。

全員の最高の笑顔を蘭が見て、豊が挨拶をした時に衝撃を受けた。

マリアが駆けてきて、豊に飛びつき抱っこをせがんだのだ。

豊は嬉しそうに抱き上げて、天使全開のマリアを見ていた、笑顔で。

「そっか～、君が最高指導者か・・ありがとうね」と豊がマリアに微笑むと、マリアが豊の頬にキスをした。

「やっぱり分るの、マリアちゃんって言うの」と蘭も満開で微笑んだ。

「名は体を表す、この子はまさにそうですね」と豊はユリさんを見た、ユリさんは最高の薔薇で微笑みで返した。

「さっ、はよう、座りなさい」とマダムも笑顔で招いた。

豊がマリアを抱いたまま、蘭と座ると、ユリさんが薔薇で微笑みながら。

「ありがとうマリアの事、あなたから言われると、本当に嬉しかったわ」薔薇で少し目を潤ませていた。

「どう感じたの？」と弁当を開けながら、蘭が興味津々光線を発射した。

「子供だけは分りますね、面倒見てきたから、でもこんなに白い子は初めて見ました」と蘭に微笑んだ。

「すごいの～、一瞬でそこまで分るか、面倒を見てもらった子達は幸せやの～」とマダムが笑顔で言った。

「感覚だけですよ、ほとんどの子供を見ても分りません」と豊は照れていた。

「何人位面倒みたんですか？」とハルカが微笑んだ。

「１００人位ですか俺は」と微笑んで返した、「１００人！」と驚くハルカを見て。

「小僧は１０００人以上関わりを持ってるはずですよ」と笑顔で返した。
「あ奴は、やりそうだ」とハルカも笑顔を返した。
「でも驚きました、女性は短期間でこんなに美しくなるんですね」と豊はハルカを笑顔で見つめた、ハルカは本気で照れて、少し俯いた。
「ハルカ本気で照れるなよ、奥さんいるんだぞ」と蘭がハルカにニヤニヤした。
「知ってます、でも・・嬉しくて」と豊を見て舌を出した、皆で笑いながら食事をしていた。

「なぜマリアが最高指導者って、分ったのかしら？」とユリさんが薔薇で豊に微笑んだ。
「小僧は俺より感性が広いから、マリアには絶対服従でしょうね、奴はそれができるから」とユリさんを見て。
「奴自信は気付いてないけど、奴は白くありたいと常に思ってます、その人並外れた探究心の為に。
俺が人とこんな風に話が出来るようになったのは、奴が注意してくれたからです。
こうやって話したほうが伝わるって、いつも教えられましたよ。
奴は常に見たいんです、【事実】でなく感情も含めた【真実】を、そこが俺の好きなところです。
だから、奴は白い心に憧れてますよね、そして圧倒的な純白です、このマリアは」
とユリさんに微笑んで、腕の中で天使の笑顔で眠るマリアを見た。
「あなたの幸運に嫉妬した、カスミの言葉が分るよね～」と蘭が満開で微笑んで。
「私、和尚様に聞いて、豊君のあの一発の見解・・凄く感動したの」と豊に言った。
「生臭に会われましたか」と豊は少し照れて笑った。

「今、よくいらして下さいますよ」とユリさんが薔薇で言って、「蘭、独り占めはいけないわ、教えて」と蘭に微笑んだ。
蘭は和尚が言った、怨みを背負う話をした。

「そんなに、恰好の良い話じゃないですよ、和尚は大袈裟ですから」と豊は照れて微笑んだ。
「私は今、本当に嬉しい、自分もまだまだと思えて、そこまでは分らなかった」とユリさんが嬉しそうに薔薇で微笑んだ。
「絶対あなたは感じてたよ、私は和尚の話を聞いて確信したよ、小僧はその時に気付いていたし」と蘭が満開で微笑んだ。
「ありがとう、皆さんに言われると、本当に嬉しいです」と豊は笑顔を見せた。
蘭の休憩時間が少くなり、蘭と豊が挨拶して立った。
「近くに来たら、マリアちゃんに会いに来ていいですか?」と豊がユリさんを笑顔で見ながら、マリアを渡した。
「今、それをお願いしようと思ってました」とユリさんが薔薇で微笑んで受け取った。
「お前さんは、フリーパスだよこの店は、待ってるから」とマダムも笑顔になった。

その時にレンと久美子が入って来た。豊を見て久美子が驚いて。
「豊さん!」と声を上げた、「知り合いなの?久美子」と蘭が久美子に微笑んだ。
「一方的に・・私達の年代の宮崎の女子で、知らない人はいませんから」と蘭を見て照れながら。
「伝説に近い憧れの人ですから、奥様は同学年のやはり伝説的存在ですから」と微笑んで返した。
「握手でもしてもらえば」と蘭が久美子にニヤをした。
「いいんですか〜」と久美子が頬を染めながら豊を見た、豊も微笑んで返した。

「それは全然かまわないけど、噂を信じたらいけませんよ」と豊が笑顔で手を出した、久美子は嬉しそうに緊張して握った。可愛い少女の笑顔だった。
ここまでを、1年後に蘭から聞いた、嬉しかった。

TVルームを出て、通りに出た所で遭遇した。
食事を済ませてPGにユリカと腕を組みながら歩く私と、蘭と腕を組む豊兄さんと。
私の驚きに、豊兄さんの笑顔と蘭の満開があり、ユリカの深い瞳が豊兄さんを見ていた。
「贅沢な生活をしてるな、悪ガキ」と言って右手の拳を出して微笑んだ。
私も右手の拳を出して当てた、笑顔で。
「靴買いに来て、会っちゃってPGで食事したの～、私の彼氏と」と蘭が全開ニヤで言った。
「ねぇ、早く私を紹介してくれないかな～」とユリカが爽やかに私に微笑んだ。
私は豊兄さんにユリカを紹介した、その時に衝撃を受けた。
「私、少し遠いビルなの、一人で歩くの怖いの」とユリカが豊兄さんに、目を見ながら腕を組み微笑んだ。
「いいですよ、あなたなら守らないと」と豊兄さんも深い瞳を見ながら、微笑んで返した。
私と蘭は嬉しそうな2人に、別れの挨拶をした。
そして唖然としながら、腕を組み歩く2人を見送った、その楽しそうに話す後姿を。

蘭が私に腕を組んできて、私に満開で微笑みながら。
「あんたの幸運に嫉妬したよ」と不敵を出した、私も笑顔で返して蘭を靴屋に送った。
蘭と手を振って別れ、ユリカの笑顔を思い出しながら。

《同種族なんだ、豊兄さんもユリカとマリアと》と確信的に思い、そして緊張した。
《豊兄さんに、今会うんなら今度の試験は、相当の覚悟がいるんだな》と感じていた。
真夏の光が照りつける、西橘通りで。

試験開始はもう少し後である、豊の存在の大きさを再確認して嬉しかった。

ユリカの初対面の男に対する行為としては、信じられなかった。

そしてその夜聞くユリカの感想に感動する、その研ぎ澄まされた感性に。

ユリカとの会話の仕方を、私は見つけつつあった。

その絶対に嘘がつけない相手が、私の成長に大きく関与する。

蘭との関係を継続する上で、最も大切な事を教えてくれる。

その研ぎ澄まされた、ユリカの感性とは思えぬ何かが・・・。

集中

夏の日差しが降り注ぐ路地を曲がると、女神が抱く天使が微笑んだ、目に涙を溜めて。
私は慌てて駆け寄って、天使を見た、その嬉しそうな顔に安心した。

「追い泣きしてね、初恋かしら」とユリさんが私に悪戯っ子で、楽しそうに微笑んだ。
『マリア浮気したね、あの人じゃしょうがないけど』と微笑んでマリアを抱いた。
「チャー」と言って天使全開で、頬にキスしてくれた。
「痛いところ突かれたのね、マリア」とマリアを見て、ユリさんも薔薇で笑った。
「私、準備に帰りますから、マリア頼んでいいかしら」と私に薔薇で微笑んだ。
『もちろん、マリアに俺が一番だと、言い聞かせないといけませんから』とニヤでユリさんを見送った。

ＴＶルームに戻ると、マダム一人でＴＶドラマを見ていた。
「会ったのかい」とマダムが笑顔で言った。
『はい、久々に会って嬉しかった』と笑顔で返すと、マダムも笑顔で頷いた。
マリアを抱いてフロアーに行くと、ピアノの甘いメロディーが聞こえてきた。
ハルカとレンが１０番で、指名実績表見せてハルカが説明していた。
マリアを抱く私を見て、ハルカもレンもニヤを出した。
「必死でマリアのご機嫌とってるのが、見え見えだよ」とハルカが笑い。
「無理だぞ、相手が悪すぎる」とレンがニヤニヤを出した。

『やっぱり、マリア浮気性だね～』とマリアに微笑んだ、「うわき」と天使で返した。
その明朗な言葉に私が驚いて、マリアを見て。
『うわきじゃないよ、うきわだよマリア』と優しく言った。
「チャー、うわき」と天使全開で返されて、私は焦っていた。

「あ～、ユリさんに怒られる、変な言葉教えて」とレンがニヤで言って。
「報告会の話題がまた増えた、マリアがそう言ったって言ったら、皆なんて言うかしら」とハルカも全力のニヤで見た。
『意地悪1回づつ追加』とウルで返した。
マリアを降ろすと、久美子の所に駆け出した、久美子が嬉しそうにマリアを抱いてピアノを触らせていた。
「久美子ちゃんがね・・・」とハルカが、久美子が豊兄さん見て言った言葉を教えてくれた。
『それは知ってる、俺の姉貴も久美子と同じ歳だから』と微笑んで返した。
「1つ上の私でも、噂は知ってるくらいだからね～」とレンも微笑んだ。
「いいな～宮崎市の人は、素敵な憧れがあって」とハルカが17歳の可愛い笑顔で言った、その笑顔で感じた。
『ハルカ、何か良いことあっただろう？』とニヤで返した。
「教えないよ～」と舌を出した、それをレンと2人で笑って見ていた。

私がタバコのチェックをして、マリアを迎えに行った。
久美子が笑顔で私にマリアを渡しながら。
「さすがねエース、あなたの交友関係」と輝く笑顔で私に言った。
『俺とは手を繋いでもそんな笑顔にならないくせに、握手したぐらいで』とウルで返した、久美子は楽しそうに笑っていた。

「チャッピー、ちょっと手伝え」とカズ君が呼んだ。
「あなたが、チャッピー！」と久美子が驚いた。
『久美子、俺の伝説は皆に内緒だよ』と微笑んで返して、カズ君の方に向かった。
「素敵な貸しができた～」と楽しそうに言った、久美子の言葉を背中に受けてニヤをしていた。

『カズ君なぁに？』と入口ホールにいるカズ君に笑顔で言った。
「これ並べてくれよ、ごめんなマリア抱かせてもらいたくて」と微笑んだ、私も微笑んで返してマリアを渡した。
「かー」と言いながらマリアは天使全開で抱かれた、カズ君の嬉しそうな笑顔を見ながら、花の鉢を並べていた。
「サンキュー」と言って並べ終わった私に、カズ君が微笑んでマリアを渡した。
『充電完了した？』とマリアを受け取りながら、笑顔で返した。
「満タンです」と微笑み、「それにピアノのメロディーがあるから最高だよ」と笑った、私も笑顔で頷いてカズ君と別れた。
マリアが寝ないので、ハルカにマリアとタバコを買いに行くと断って、出かけた。

マリアが歩きたがり、安全な所を歩かせていると。
「りあ」とマリアが呼んだ、私がその方向を見ると、最高の笑顔のリアンが駆け寄るところだった。
リアンはマリアを抱き上げて、炎を隠した優しい目で嬉しそうにマリアを見ていた。
私はその目に違和感を感じた。
『リアン、疲れてる？調子悪いだろ』と真顔で言った。
「なるほどね～、今度私も抱っこしてくれよ、少し疲れてるから」と笑顔で言った、陰の有る目で。
『遊びに行くよ、リアンのためなら』と笑顔で返した、炎の弱いリ

アンの瞳を見ながら。
「明日、午前中店にいるから・・ユリカには借りるって言っとくよ」と弱いニカで返した。
『了解』と言ってマリアを楽しそうに抱く、リアンを見ていた、《敏感になれ》と自分に言い聞かせながら。
リアンからマリアを受け取る時に、マリアがリアンの頬に両手を当てて。
「りあん」と綺麗な発音で言った、私は知っていた、それがマリアの力を発する時の仕草だと。
「うん・・マリア」とリアンも笑顔になって、マリアに囁いて、マリアを渡した。
「明日、待ってるね」と言ったリアンと、笑顔で別れた。
《俺はまだまだ未熟だね》とマリアを見て、心に囁いた。
「にぇっ」と言って、マリアが天使全開で私に笑顔をくれた。
『充電完了、ありがとうマリア』と囁くと、天使の笑顔のまま瞳を閉じた。

ユリカのビルの下で、眠ったマリアを抱いて見上げた。
《俺も頑張ってみるよユリカ、そうすれば皆の笑顔が、少しでも増えそうな気がするから》と心に囁いて、タバコを買って、帰りに見上げて。
《感じていてねユリカ、今は蘭とユリカとカスミ・・そしてマリアが支えだから》と囁いてＰＧに帰った。
大切な天使に直射日光が当たらないように、マリアの寝顔を確かめながら。

ＴＶルームに戻りマリアをベッドに寝かせて、マダムに頼んでフロアーに戻った。
エミとミサが久美子が用意した楽譜を見て大喜びで、ミサからドレミを習っていた。

エミが私の所に来て、最高の少女の笑顔で。
「頑張ったら、２人の誕生日のお祝いとして、お父さんがピアノ買ってくれるって」と笑顔で言った。
『それは凄いな～、誕生日いつなの？』とエミに笑顔で返した。
「私が８月２５日で、ミサが９月１６日だよ」と言ったのを私はメモしながら聞いた。
『もうすぐじゃない、頑張って』と言って微笑んだ。
「うん、来れる日は毎日３０分ずつ教えてもらうの、後は久美子先生の練習時間だよ」と笑顔で言った。
『うん、ありがとうエミ』と笑顔を返して、ピアノの側の椅子に向かうエミの背中を見ていた。
その常に人の事を考える、素晴らしい小１の背中を。

私が全ての準備の確認が終わった時に、久美子もエミとミサが終わり、２人に演奏を聞かせる時間になった。
その曲は激しい曲だった、久美子は狂おしく舞いながら弾いた、強く優しい魂の響きだった。
徳野さんが出てきていた、優しい顔で久美子を見ていた。
ボーイも集まって手を止めて聞いていた、素敵な光景だった。
演奏が終わり全員で拍手をした、ミサに涙は無かった、その笑顔は憧れを見る輝きに溢れていた。
久美子は笑顔で少し照れながら頭を下げて、おやつ～と言った２人に手を引かれてＴＶルームに行った。
私は静寂のフロアーを見ていた、響きが残ってるかのような静かさだった。

ハルカとレンが来て、最終チェックを３人でした。
「ハルカにはビックリだよ、よく１７歳でここまで出来るもんだよ」とレンが私に笑顔で言った。
『まだまだ、ハルカの突発的な事に対する、集中した時の記憶力は

超人だよ』と笑顔で返した。
「珍しい、私を褒めるなんて」とハルカが私にニヤを出した。
『俺は裏方の仕事はハルカが一番だと思ってるから・・女優業は今からだけどな』とニヤで返した。
「頑張ります、エ～ス」とハルカが嬉しそうに笑った。
「私も頑張らないと、で、私の評価は？」とレンが私にニヤした。
『レンはまだ猫被って積極的にやってるよね、凄いと思って見てるけど、その先って考えてるだろ？』とニヤで聞き返した。
「さすがだね～、少し悩んでる、他の８人と蘭姉さん見ると考えるよ」と真顔で言った。
『今度会わせるよ、圧倒的個性に。レンの個性を出すのは難しいかもしれないけど、やり方はあるんじゃないかな、分らないけど漠然と思うよ』と笑顔で返した。
「ありがとう、楽しみや～会うの」とレンが可愛く微笑んだ。
「なるほど～、水の先生か～確かにヒントになるかもね、圧倒的個性」とハルカも私に微笑んだ。
「そんなに凄いの」とレンが私に聞いた。
『先入観になるから言わないけど、感じる人には感じるよ』と笑顔で返した。
「しかし、どんな生活してきたら、あんたみたいな中１が育つのかね～」とレンがニヤで言った。
「１０００人以上の子供を、相手にして育つとらしいですよ」とハルカがレンを見てニヤを出した。
「１０００人か！」とレンがハルカに聞き返した。
『ハルカそれは聞き違いだろ、２０００だ』と２人を見ながらニヤを出した、２人とも笑っていた。

遅番の蘭が迎えに来れないので、ＴＶルームで夕食を食べた。
その賑やかさに、松さんの笑顔が絶えなかった。
そして松さんは優しい目で、久美子を見ていたフロアーを目指さな

い新しい娘を。
７時に久美子が弾き始めた、楽譜も無しに最初は優しく楽しげな曲を弾いていた。
四季が揃って静かに打ち合わせしながら聞いていた、楽しそうに。
カスミも５時に仕事を終えて、７時１５分にはユメ・ウミとフロアーに出てきた。
ハルカも出てきて、ボーイも全ての準備を終えて６番に座っていた。
７時３０分を過ぎた頃から、少し旅情的な曲になってきた。
蘭が来て、バイトの女性もかなり集まって来ていた、その出てくる早さに私も驚いていた。
そして、７時４０分が過ぎた頃、久美子が狂おしく舞いだした。
激しい響きに女優達は静かに、身を任せてるようだった。
私の後ろにはユリさんと松さん、そして３人娘が聞いていた。
久美子は汗を滴れせて弾き終わり、鍵盤を見つめて放心状態だった。
全員が立って拍手をした、輝く１６歳を笑顔で優しく見ながら、久美子は笑顔で立って頭を下げた。
「よし」とユリさんが薔薇で言って、フロアーに歩いた、綺麗な姿勢の背中を見ていた。

ＴＶルームに戻る久美子にエミ・ミサが駆け寄り、マリアを抱いた松さんが続いた。
「すばらしいよ、本当に素敵だよ」と松さんが最高の笑顔で久美子に言っていた。
ユリさんを確認した女優達が、円を作りはじめた集中した顔で。
「私達も負けずに集中して、楽しみましょう」とユリさんが薔薇で微笑み。
「今夜も開演しましょう」の声に、「はい」のブザーを鳴らした。
私は集中する女優達を見ながら、リアンを想っていた。
あの陰りは身体的問題じゃないのだろうと、精神的な疲れなのではないかと。

あの獄炎の炎すら疲れさせる原因など、考えも付かなかった。
リアンの弱い炎の瞳が、頭から離れなかった。

久美子の登場は、ＰＧに新しい何かを持ってきていた。

女優達は早目にフロアーに入り、一流アスリートのように集中を高めるようになった。

それが仕事であるのだから、ベストを尽くそうと集中した。

その気持ちが記録更新後のＰＧを牽引していく。

久美子の狂おしく舞う、その集中が拍車をかける。

常にベストをと・・・。

無鉄砲

静寂のフロアーに響く旋律の叫び、悲しみも寂しさも凌駕する。
どんな悲しみにも、立ち止まる事を拒否する、強い意志を示した１６歳の輝き。
まさに至宝だった、同席した全ての者の心には。

その夜は出足こそ鈍かったが、９時を過ぎた頃から徐々に熱が上がってきた。
３番に市議会議員の４名の、予期せぬ来店で満席になった。
私が作った満席Ｖサインを皆に提示して、微笑みの洗礼を受けてヒートＵＰした。
レンはもう慣れたのか、動きが自然で笑顔が絶えなかった。
《夜の匂いか～、マミは流石だな～》と思いながら、座って見ていた。
「今夜は余裕ね」と笑顔のサクラさんが立っていた。
『レンに慣れさせようと、女性達でサインを繋いでますから』と笑顔で返した。
「あの子は面白いよ、将来性がね・・カスミの表情も変ったから」とフロアーを見た、彫の深い横顔に暫し見惚れた。
『朝、カスミにあって驚いたよ、可愛くて』とニヤで返した。
「来店する若い女性が、カスミちゃんの言う事は熱心に聞くよ、あの姿を見ると説得力があるのよ」と嬉しそうに笑った。
『なるほど～、それは分るな～、でもハゲ親父の襲来は要注意です』とニッで返した。
「気をつけます」とニヤで言って、フロアーに向かった。
《エミはサクラさん似だから、あんな感じの女医か～患者が絶えんな》と一人でニヤニヤしていた。

「最近成熟度の高い人が良いって言ったのは、本心だな」とカスミが至近距離に屈んで、不敵を出した。
『カスミらしくないな、サクラさんと俺の話が気になるなんて』とニヤで返した。
「気にならない」と少し頬を膨らました、可愛いその顔を見てカスミの変化が嬉しかった。
『喜んでたよサクラさん、がんばれよリーダー』と笑顔で返した。
「リーダー言うなよ、緊張するから・・ありがとな」と輝く笑顔で返し、フロアーに戻った。
暇そうな私を見ては、ユメ・ウミが無駄なサインを送ってきた。
私はサイン【意地悪】でウルで返していた、その時マダムの声が後からした。

「飲協事務所で緊急会議、行って座ってこい・・何も発言するなよ」とマダムが不敵な感じの笑顔で立っていた。
『何の会議？俺でいいの』と笑顔で返した。
「徳が行くと頼られそうだから、ワシは好かんのじゃ関係者の集まりは」と真顔になった。
『危ない話だね、徳野さんが頼られるなら』と笑顔で返した。
「嬉しそうにするな、小さくなってろよ、無理だろうけど」と私の席に座りながら、マダムが笑った。
『了解、気配を消しとくよ』と言いながら蘭にサインを送った、マダムを指して【怖い】を出した、見ていた女性が全員で微笑んだ。
「はよいかんか」とマダムが苦笑いで振返った、私は頭をかきながら出かけた。

街外れの雑居ビルにある、飲食業協会事務所に歩きながら、ユリカのビルを見上げた。
《明日の午前中、リアンを抱っこしてくる、ユリカに会えなくて寂しいよ》と言って、光が漏れるユリカの店を見ていた。

飲協事務所の入口で派手な女性が3人で雑談中だった、私を不思議そうに見ていた。
『綺麗なお姉さん、そのプリントどこで貰うの？』と誰とは見ずに声をかけた。
「私の事ね～」と青いスーツの女性が笑顔で言って、「私でしょ」と派手な化粧の女性がニヤで返した。
「そこの受付に、お店の名前言うのよ」と一番落ち着いた感じの女性が教えてくれた。
『ありがとう、綺麗なお姉さん達』と笑顔で返して、室内を見た多くの女性と男の関係者がいた。
「どこのお店の代理かな？」と年配の受付のオヤジが私に聞いた。
『ＰＧ』とニヤで返した、後の3人が「うそ！」と言った。
「エース、こっちや」と大ママが一番前の席で、笑顔で呼んで。
『大ママ、おはよう・・食べない？』とニヤで大きな声で聞いた。
「早くしないと、お腹が空くぞ」と大ママが笑顔で返した、呆気に取られる視線を感じながら大ママの横に座った。

『今晩は大ママ、先日はお世話になりました・・なんか緊迫してますね』と囁きながら座った。
「嫌な奴が出所してきたんだよ」と大ママが真顔で言った。
『出所ってのが、すでに怖いな』とニヤで書類を見ながら言った。
「楽しんでるだろ、関わるなよ・・なんか危ないなお前は」と大ママが私に微笑んだ、私はウルで恐怖を演じて返した。
その時に議長らしきオヤジが語りだした。
内容はチンピラの海竜と呼ばれる奴が、2年の刑期を終えて出てきて、夜街に顔を出し始めたと。
2年前はかなり乱暴な事をして、後ろ盾がない店から金を取っていた事を話した。
「組はどう言ってるんだい、望月さんは？」と大ママが言った。
「まだ聞けないんだよ、被害が出た訳じゃないから」と議長が返し

た。
「望月さんは、最近一人ででも飲みに出ないからね～」と大ママが言った。
「とにかく、何かあったら早急に連絡してほしい」と議長が全員を見た、皆が頷いた。
「飲みに、客として来た時の対応は？」と和服の綺麗な女性が聞いた。
「そこが問題なんだよな～、ミチルママとリアンちゃんは」と議長が呟いた。
私はリアンの名前が出たので、驚いて議長を見て大ママを見た。
「お気にいりなんだよ、海竜の・・リアンは」と大ママが真剣に言った。
「リアンの所は大丈夫でしょう、梶谷さんが通ってるから、私は怖いな～」とミチルママが言った。
「とりあえず、緊急連絡先を渡しときます」とミチルに議長が言った。
「リアンちゃんはどうしましょう？」と大ママに議長が聞いた。
『リアンはいらない、俺が・・・徳野さんに頼むから』と議長を見ながら、最後は徳野さんを出した。
議長も大ママも私を見ていた、会場の多くの視線を感じた。
「この子はＰＧのエースだよ、梶谷さんの今一番のお気に入りや、この子の言う事には逆らえんよ」と大ママが議長を見て笑った。
「そうなんですね、お願いします」と言って議長が私を見た、私が頷き会議終了となった。
帰ろうとして、大ママが私の腕を掴んだ。
「絶対、徳に任せるんだよ」と真顔で言った。
『怖くて何も出来ないよ、ヤクザ相手に』と微笑んで返した。
「ユリカが感じてるんだ、すぐに分るんだからね」と大ママも微笑

んだ。
『大丈夫、ありがとう大ママ』と笑顔で返した。
魅宴のビルまで大ママと腕を組んで歩きながら、海竜の話を聞いた。
何度も大ママに注意されながら、笑顔で【怖い】と返していた、大ママに手を振って別れた。
ユリカのビルを見上げずに、ローズに向かった、リアンの顔が見たくて。

ローズの重い扉を押すと開かなかった、私は緊張した。
マダムの言葉を思い出して、夜景を見ながら考えていた。
《心配しないでね、ユリカ》と心に呟いて、ローズのドアをノックした。
「誰や」と若い男の声がした、『開けろよ、警察呼ぶぞ』と静かに言った。
相談しに行ったのだろう、少し間があって扉が少し開き、若いチンピラ風の男が顔を出した。
「ガキか」と男が睨み、『うん』と微笑んで扉を押して入った。
「こら！ガキなにしとんのじゃ」とそのチンピラが叫んで、私に詰め寄った。
『面倒くさいな、やるならやれば、中学生に手を出して物笑いになって、務所行きなよ』と微笑んで返して、奥に歩いた。
リアンと海竜らしき男が、ＢＯＸで向き合って座っていた、その後にチンピラがもう一人いた。
ローズの女性４人は緊張しながら、カウンターの中にいた。
『リアン大丈夫、意地悪されなかった？』とリアンを見ながら笑顔で言った。
「エース！駄目、帰りな」とリアンが立って私に駆け寄った、私はリアン強引に抱きしめて抱き上げた。
『リアン怖かったね、ヨチヨチ・・大丈夫だから』と笑顔でリアンに囁いた、弱い炎で私を見ていた。

リアンを元の席に優しく降ろして、隣に座って対面の男に微笑んだ。
「なんのつもりだ、ガキ」と静かに睨んで言った、その静かな目に少しビビッて押された。
『海竜さんかな？』と必死に微笑んで返した。
「ああ、そうだ」と厳しい視線を崩さずに言った、《バカじゃないな》と思いながら微笑んでいた。
『リアン困らせないでよ、可愛そうだよ』と微笑を絶やさぬように意識して言った、リアンの緊張した顔を感じながら。
「ガキが口出す問題じゃない、最初に言っとくが俺はガキでも関係ないぞ」と静かに言った。
『それは見て分ってるよ、でも関係なくない、リアンは俺の女だ』と視線を逸らさずに真顔で言った。
「悪ガキみたいやな、ヤクザに喧嘩売ったら、どうなるかは分ってるのかい」と微笑んだ、静かな恐怖がその微笑から漂った。
『仕方ないね、差し出すよ・・それで永遠にあんたも居なくなれば、充分価値があるよ』と微笑んだ、集中の中にいた、恐怖で震えながら。
海竜はドスを出して、テーブルに置いて、私に微笑んだ。
《覚悟を決めろ、この先まで自分で行かないと、ここが勝負なんだ》と心で言って覚悟を決めた。
リアンが私の腕を引いた、涙目で首を横に振った、その顔が可愛くて笑顔を見せた。
『海竜さんも、案外面倒くさい人だね、ほら』と言って、テーブルのドスを抜いて差し出した、その研ぎ澄まされた刃の光に緊張した。
沈黙が流れた、海竜は私をじっと見ていた、そして微笑んだ恐怖は連れたままで。
「今日の所は、お前の度胸に免じて勘弁してやるよ」と微笑んでドスを鞘に収めた。

『何大物ぶってるの、それなら今すぐに望月さん呼びなよ』とニヤで返した、少し楽しくなってきて自然のニヤが出た。
「お前、名前だけ知ってるからって、使ったらどうなるのか分ってんのか」と海竜が私を怒鳴りつけた。
その焦った表情で、少し楽になった、《ゲームはこれからだよ》と思ってリアンを見て微笑んだ。
『いいから、呼びなよ・・若頭』と笑顔で言って、『お姉さん電話貸してあげてね』と後の緊張する女性に微笑んだ。
「あっ！」と海竜の後の若いチンピラが私を見た、私は微笑んでそいつを見た。
『何も言わずに電話しな、早くしないとやばいよ』と微笑んで言った。
そのチンピラは電話に向かった、その雰囲気で海竜は感じたようだった。

「すぐに、お見えになります」とそのチンピラが海竜に言った。
私は海竜のその鋭さと、私を許した時の目が好きになっていた、《案外気が合うかも》と思っていた。
『海竜さん、ドスはしまいなよやばいから、リアンに何言ってるのか聞かないけど諦めて』と真顔で言った。
『そうすれば、俺が望月さんなんとかするよ』と微笑んだ。
「どうやってだ？」とドスをしまいながら、海竜が睨みのまま言った。
『望月さんにある俺の貸しを、海竜さんに回す、海竜さんに貸し1つでどうかな？』と真顔で返した。
「条件は？」と少し緊迫感を崩して言った。
『リアンにもミチルママにも会わない、夜街に意地悪しないでどうかな』と微笑んだ。
海竜の目を見ていた、沈黙が流れた、リアンが私の手を強く握った。
そして海竜が笑った、私も自然に笑顔が出た。

「お前か、望月の兄貴に対し、最後の喧嘩を売った小学生」と楽しそうに海竜が笑った。
『何の事でしょう』とニヤで返した。
「負けたよ、それで頼む約束する」と笑顔で言った、私も嬉しくて笑顔で返した。
『ごめんなさい、生意気言って、リアンが大切なんだ』と頭を下げた。
「俺も悪かったよ、リアンが務所でも忘れられなくて・・すまんかったなリアン」とリアンに頭を下げた、その男らしさが好きだった。その時に一人で望月さんが入って来た、私を見て笑顔で右手を上げた。
海竜が立って、深々と頭を下げた。
「どうした小僧、何があった？」と海竜の肩を叩いて座らせて、隣に座って私に微笑んだ。
『ごめんなさいミスター、俺が悪いんです海竜さんに喧嘩を売って、馬鹿だから』と床に土下座した。
『ミスターの1個を使わせて下さい、反省してます』と土下座したまま頼んだ。
「ふ～ん、分ったからもう椅子に座れよ」とミスターが言った。
私は真顔でミスターの向かいに座った、ミスターは焼けた肌で白い歯を見せて、ニヤニヤで私を見た。
「スライドか、小僧」とニヤでミスターが聞いた。
『何の事でしょう？』と必死で真顔で返した、笑いを我慢していた。リアンの炎が戻った視線を感じて、嬉しかった。
「まぁ、いいよ・・助かったな海竜」と海竜の肩を叩いて、財布を出して１０万円をリアンに差し出した。
「すまんかったね、貸切料だよ」とミスターはリアンに微笑んだ。
「こんなには、いりません」と慌ててリアンがミスターに言った、ミスターを見ながら。

「余ったら、その分は小僧の遊び代で取っといて下さい」とミスターが笑顔で言った、リアンは頭を下げた。
「お前、こんな素敵な人を追いかけてるのか、生意気にも程がある ぞ」と私の頭に手を置いて、立ち上がった。
「たまには海に来いよ、お前がいないと寂しいぞ」と言って背を向けた、ミスター達をを送りながら。
『ミスターありがとう、本当に助かった』と礼を言った。
「梶谷さんを使わない、そのリアンという女性が気に入ったのさ、俺のお気に入りにしとくよ」とミスターが振返り笑顔で言った。
リアンも炎の瞳で笑顔になって、頭を下げた。

エレベーターに送り、４人が乗り込むと。
「いつでも、何でも言ってくれ」と海竜が微笑んだ。
『何の事でしょう、ありがとうございました』と笑顔で言って、リアンと頭を下げて見送った。
エレベーターが降る事を示す、電光の数字を見ていた、ホッとしながら。
リアンが強く抱きついた、私が振向きリアンを見た、炎が戻ったリアンが見ていた。
リアンを抱き上げて、笑顔で獄炎の瞳を見ていた。
『バカリアン・・怖くて死にそうだったよ』と優しく微笑んだ、リアンは強くしがみつき何も言わなかった。
店に戻って、リアンをＢＯＸに座らせて、女性を呼んだ。
『今夜の事は忘れてね、変な噂が立つと俺も困るから』と笑顔で言った。
「はい、エ～ス」と宴会の時にもいた綺麗な女性が言って、４人が笑顔で頷いた。
『じゃぁ、今夜も稼ぐよ』と４人に微笑んだ、「は～い」と言って準備に行った。

『リアン大丈夫？』と隣のリアンを見たら、微笑んで両手で頭を掴まれた。
リアンが唇にキスをした、情熱の浅いキスだった。
『俺に惚れるなよ』と唇を離したときに、動揺を必死に隠して言った。
「火傷した、重度の」とリアンが笑顔で返した、私はリアンを見て微笑んで立ち上がった。
『お仕事してくる、マダムに怒られる』とウルでリアンに言った。
「明日、待ってる」と獄炎の炎で笑った、リアンに送らないでいいと言って、４人の女性に手を振って店を出た。

ユリカのビルで見上げようと思って見ると、ユリカが通りに立って私を見ていた。
「バカ～」と大きな声で叫んで、大粒の涙を流した。
私は慌てて駆け寄って、ユリカを抱きしめた、ユリカは強く抱きつき泣いていた。
『ごめんよユリカ、心配かけたね』とユリカに優しく囁いた。
「唇にキスされたのが・・バカ」とユリカが私を見上げて、爽やかに微笑んだ。
『事故だよ・・ユリカ』と笑顔で言って、ユリカを抱き上げてエレベーターまで歩いた。
私は深く反省していた、馬鹿な自分を戒めたいた。

【あなたが今、どれだけの人に愛されてるのか分ってるの】と蘭がカスミに言った言葉を思い出した。
「その通り、絶対に忘れないでね」とユリカが私に微笑んだ、私はユリカに微笑んで返した。
人通りの多い、西橘通りをユリカを抱いて渡りながら。
真夏の夜風がユリカの髪を靡かせて、ユリカの香りが漂って私はただ反省していた。

馬鹿な自分を。

私は会議のときにリアンと望月の名前が出たので、考えていたのだ。

そして考える時間が足らずに、突っ込んでしまった。

未熟な私は、守るための武器はそれしか持ってなかった。

唯一持っていた、交友関係という武器しか。

この時の深い反省が、私の次の段階を示してくれる。

愛するとは何かを、考えさせてくれる・・馬鹿な私に。

涙の痛み

真夏の夜風が狭い通りを吹き抜けて、ユリカを抱き歩く私は道化師の心。
ユリカを抱く私を見つけた、頬を染めた中年の集団に冷やかされてた。
私が抱くユリカは笑顔で私を叱ってくれる、そして優しく包んでくれた。
深海の深い瞳から流れた涙が、私には何よりも痛かった。

エレベーターの前でも、ユリカは降りなかった。
「駄目〜、上まで」と腕に力を入れて、私の首筋に顔を付けた。
『わりと挑戦的だね・・ユリカ』と言って、エレベーターに若い男2人と乗った。
「何階かな、羨ましい少年？」と少し酔った感じのスーツを着た、20代であろう男が微笑んだ。
『すいません、最上階で』と照れて頼んだ。
「最上階の女なのか、凄いな〜」ともう一人の連れが酔った笑顔で言った。
最上階にはユリカの棲家と、もう一軒しかないのだ、その二軒とも有名店だった。
3階で降りた2人に礼を言って、最上階が開いた、ユリカの店に行こうとして固まった。

大ママとマダムと徳野さんが待っていた。
「あんたは、私があれほど言ったのに」と大ママが真顔で言った。
『ごめんなさい、リアンの顔見たら・・つい』と言って反省の表情を作った。
ユリカは私にしがみついて離れない、私はユリカに申し訳なくてた

まらなかった。
ユリカが俺を守ってくれていたんだと感じていた、今も抱かれながら守ってくれていると。
「どうするかね～徳」とマダムが笑顔で言った、その笑顔で少し落ち着いた。
「次は俺に相談しろよ、ユリカちゃんに免じて返せとは言わないから」と徳野さんが私の所に近づき真顔で言った、私は真顔で頷いた。
「あの望月という懐の深い男に感謝しろよ・・しかしお前は面白いな～」と徳野さんが笑った。
『すいません、ご心配かけました』と謝った、徳野さんが私の肩を叩いて頷いた。
「ユリカにちゃんと詫びて、マミの時間までには帰れよ」とマダムも笑顔でエレベーターに乗った。
「残念だったよ、ＰＧ追い出されると思ってたのに」と大ママも笑顔で言った。
３人でエレベーターに乗ると。
「ユリカ、ありがとうな感謝してるよ」とマダムがユリカに声をかけた、ユリカがマダムを見て微笑んだ。
その時に扉が閉まり、私は頭を上げてユリカを見た。

『ごめんね、ユリカ』と心から謝った。
「もう、嫌い」と言ってユリカが顔を逸らした。
その言葉に心が潰され動揺して焦った、ユリカの横顔を見ていた。
「動揺するんだ～」とユリカが爽やかに笑って、私はウルで頷いた。
「蘭も言ったんでしょ、生き方は曲げるなって・・でも無茶過ぎるぞ」と笑顔で睨んだ。
『分ってるよ、ユリカには嘘つかないよ』と微笑んで返した。
「なぜ最初に望月って人呼ばなかったの？」とユリカが真顔の深い目で聞いた。
『呼べないよ、自分が何もしないで呼ぶなんて、出来ないんだよ』

とユリカに真顔で返した。
「豊が見てたよ、私は感じた・・最後は笑顔だったよ」とユリカが微笑んだ。
私は嬉しくて腕に力を入れて引き寄せた。
「豊はあなたに追われることを期待してる、そして信じてるよ、私が初めて男で測れなかった、あなたと豊はね」と言って微笑んだ。
『ユリカのあの行動に驚いたよ、嫉妬したよ、豊兄さんに』と優しく耳元に囁いた。
「知ってるよ、私はユリカよ、だからわざとした」とユリカもニヤで囁いた。
『ユリカ意地悪3個分』とウルで囁いて返した。
「頑張るわ、カスミにあと5に迫ったから」と爽やかに笑った。
『なぜ知ってる、日記も読めるのかな～ユリカ』とニヤで言って笑った、ユリカは可愛く舌を出した。

ユリカを降ろし、エレベーターを待っていた。
「明日、私もローズに行く・・唇奪われたらいけないから」と可愛いニヤで微笑んだ。
『ユリカ・・ありがとう守ってくれて』と真顔で言ってエレベーターに乗った。
笑顔のユリカに手を振って別れた、ユリカの笑顔が私に反省を迫っていた。
PGに戻り指定席のマダムに、もう一度謝った。
「もういいかい、ワシはお前の生き方は嫌いじゃないかい、徳もそう思っちょる」と真顔で言って。
「但し、愛する者を悲しませるなよ」と笑顔で言った。
『もう、無茶はしないよ、反省した』と真顔で答え、マダムを見送った。

私が座ると蘭が歩いて来た、深い目が青い炎を湛えていた。

「私には話してくれるんでしょう？」と真顔で言った、炎を燃やしながら。
『蘭に隠し事は絶対にしない、寝物語で話すよ』と真顔で返した。
「うん」と満開になって笑った、私も笑顔で返して見送った。
フロアーの熱を感じながら、蘭に心から謝っていた、そして考えていたそれが生き方なのかと。
そんな事で利用するために、幅広い人間関係を作ったのではないと思っていた。
私が考えていると、パンチだ飛んできた、優しいマミのパンチが。
「時間だよ、悩み多き少年」とマミが微笑んだ、私はそのパンチが嬉しくて微笑んで返した。
『女性関係の悩みだから、マミじゃ無理だな』とマミにニヤして返した。
「ど～んと任せなさい」とマミが胸を叩いたので。
『ど～ん』と言って胸に飛び付こうとしたら、焦って逃げられた。
『まだまだだな、マミ姉さん』と言って、優しいパンチを浴びながら、裏階段を出て手を繋いだ。

「かなりやばかったんでしょ？」とマミが私を見てニヤをした。
『何の事か分かりませんね～』とニヤでとぼけた。
「ユリカ姉さんがあんな顔して来て、徳野さんが出て行けば皆分るよ」とマミが笑顔で言った。
『ユリカ来たの！』とマミに驚きながら返した。
「大事にしなよ、蘭姉さんもユリカ姉さんも」とマミが真顔で言った。
『うん、頑張ってみるよ、ありがとうマミ姉さん』と真顔で返した。
「店以外では姉さん禁止」とマミが微笑んだ。

『マミ、最近本当に綺麗になったね、巣立ちが近いのかな・・少し寂しいよ』と真顔で言った。

「見ててくれるんでしょ、私とハルカ」とマミも真顔で返した。
『もちろん、俺はマミを最初に指名した男だよ』と微笑んだ、魅宴の裏扉の前に立ったマミが振返り。
「源氏名の命名者にもなるしね」とニヤで言った。
『引っ掛からないよ』とニヤで返した、マミが笑顔で手を振った、私も笑顔で手を振って別れた。

ユリカのビルの下にはユリカはいなかった、私は寂しくてビルを見上げた。
《ユリカ本当にごめんね、もうユリカを絶対に心配させたりしないから》と囁くと。
「ねっ可愛いでしょう〜」とユリカの声がした、見ると横にユリカとリアンが立っていた。
「なぜ、ユリカにだけ特別なんだい」とリアン獄炎の微笑で言った。
『リアン怖い、さっきまで可愛かったのに』とニッで返した。
「ほら、やっぱり可愛いリアンにやられてる〜」とユリカがニヤした。
「やられて、あんたの女なんだろ」とリアンが3倍不敵を出した、ユリカも爽やかに笑っていた。
リアンに腕を強く組まれて、笑顔のユリカにウルで手を振って別れた。

『お店は？』と腕を組むリアンに聞いた。
「気分が乗らないから、店の女の子に小遣いやって閉めた」とリアンがニカで返した。
『復活したねリアン、どこに行くのかな？』と笑顔で聞いた。
「ユリ姉さんと蘭には私から話す、その筋は通す、大切な人達やからね」と真顔で言った。
リアンをＴＶルームに送り、指定席に戻った。
閉店前で、客も5割程度に落ちていた。

「さっき来た人が、会わせたい人なの？」レンが笑顔で言った。
『そうだよ、ユリカ・・水のユリカって呼ばれてる』と微笑んで返した。
「凄かったよ、歩いて来るだけで、優しい何かを強く感じた、楽しみにしてるね」と微笑んで扉に消えた。
《レンあがりか、リアンに遭遇するな》とニヤをしていた。
「気持ち悪いぞ、思秋期がニヤニヤすると」とカスミが不敵を出した。
『想像がいやらしいぞ、カスミ』とニヤで返した。
「お礼に１つ教えてやる、顔は洗っとけよ、それじゃあ蘭姉さん泣くぞ」と不敵全開で微笑んだ。
『ありがとう』と私は焦って言って、トイレに走った。
唇に薄く口紅が滲んでいた、《カスミ鋭いな～》と思って洗った。

私が指定席に戻った時に閉店を迎えた、９人衆が集まり１０番に座った。
レンとユメ・ウミは着替えていた、蘭が満開で手招きをした。
「報告せよ」と満開でニヤした。
『カスミと添い寝した』と言うと。
「当たってたのかい？」と美冬がニヤで聞いた。
『お腹で潰れてました』とニヤで返した。
「よし」と美冬が笑顔で言った。
『レンと久美子と手を繋いで、ユリカを毎日抱っこして、小百合さんとも腕を組みました』と笑顔で答えた。
「なんか大きな事がないね～、なぜ顔を洗ったんだい」と蘭が最大級のニヤで見た。
『理由は言えないけど、リアンがお礼のチュウをしてくれました』と蘭を反省の目で見た。
「ど・こ・に？」と蘭がニヤニヤで聞いた。
『く・ち・び・る・・・に』と緊張して目を閉じて答えた。

柔らかい何かが唇に触れた、私が目を開けた時には、満開の蘭の微笑があった。
『何があったの？』と蘭に聞いた、蘭も９人衆もニヤで見ていた。
「罰として教えない」と蘭が微笑んだ。
「よかったね～」と後からリアンの声がした。
９人衆が慌てて立って、頭を下げた。
「お疲れ様でした、今夜のキスは感謝の意味で贈りました」と蘭を見て獄炎で微笑んだ、蘭も満開で返した。
「今夜久々にフロアーを見たけれど、素晴らしいですね、さすが満席記録更新するだけあります」と９人衆を見てリアンが言った。
９人衆は嬉しそうに笑っていた、ユリさんが来たのを見て察したらしく。
リアンに頭を下げて、控え室に戻った。
ユリさんと蘭とリアンが、１０番に座り話し始めた。

私は指定席で元気になったリアンを見て、心は蘭に謝っていた。
話しが終わり蘭が私の方に歩いて来た、真剣な目に緊張した。
「バカ、本当に大バカ」と私を睨んだ目には涙が光っていた、私は自然に蘭の顔に両手を当てて。
『ごめんね、蘭』と優しく囁いた、蘭は震えていた。
「謝らなくていい、でも謝れ、でも謝らなくていい」と言って蘭が涙を流した。
私は蘭を抱きしめた、それしか出来なかった、蘭の涙を直視できなかったのだ。
蘭の涙を見て、その強烈な痛みで心が張り裂けそうだった。
「ユリカ姉さんには謝ってきたの？」と蘭が抱かれながら囁いた。
『うん、ちゃんと謝ったよ』と囁いて返した。
「厳しい罰を与える・・今夜背中合わせで寝ること」と蘭が優しく囁いた。
『かなり厳しい罰だけど、がんばります』と囁いて返した。

蘭が着替えに消えて、ＴＶルームに戻るとマダム・ユリさん・松さん・ハルカがいた。
マリアが起きいて駆けてきた、マリアを抱き上げた。
私を顔をマリアが見て両手で私の両頬に、【ペチ】をして天使で笑った。
『ごめんよマリア、反省してるよ』とマリアに微笑んだ、マリアは私に天使全開をして目を閉じた。
「まぁ今回は、マリアの両手ペチでよしとしますか」とユリさんが薔薇で微笑んだ、私は真顔で頭を下げた。

蘭が来て、ユリさんとマリアを見送り、蘭とタクシーに乗った。
蘭が肩に乗ってきて、私を見て満開で微笑んだ。
「怒ってないよ、ただ怖かっただけ・・ユリカ姉さんをもう2度と怖がらせるなよ」と囁いた。
『うん、凄く反省した・・バカだったよ』と囁いて返した、蘭は微笑み瞳を閉じた。
アパートに着いて、タクシーを降りて蘭を抱き上げた。
蘭の疲れの見える顔を見て、胸が締め付けられた。
「もう、気にしないでいいよ、私はリアン姉さんの為にした事を、怒ったりしないよ」と蘭が満開で微笑んだ。
『選択肢は沢山あったのに、自分でやることしか考えなかった、未熟だよ』と蘭に微笑んだ。
「知ってる、だから私の側にいなさい」と満開で笑った、私も嬉しくて笑顔で頷いた。

部屋に入り、蘭が化粧を落としパジャマで帰ってきて、満開で微笑んだ。
「それでは罰を下す、絶対に離れることを禁ずる」と言ってベッドに入り背中を向けた。
私は嬉しくて、電気を消して蘭に背中を当てて、腰の上で手を繋い

だ。
蘭の背中が微かに震えていた、私はその震えがたまらなくなり言った。
『蘭、寝た振りしてね』と囁いて、手を離して蘭を自分に向けて腕枕で抱きしめた。
『蘭、ゆっくりおやすみ、離れないから』と囁いて、蘭を抱きしめていた。
蘭が静かになっていくのが、嬉しかった。
蘭の鼓動と香りだけの世界で、反省を迫られていた。
夏の夜風が爽やかに吹き、未熟な私は最も大切な鼓動を聞きながら眠りに落ちた。
翌日から関わる、魔性の冷たも知らないで、蘭の世界で幸せを感じていた。

新たに関わりを持つ、新しい教師ミチル【氷の女神】

その凍てついた心に触れて震える、人を愛することの恐ろしさに。
全てを賭ける事の意味を教える、私の覚悟など戯言だと微笑みながら。

心に触れてみろと誘う、凍死すら覚悟するならと。

私が目指す、前人未到の標高にはその覚悟がいると、極寒にも耐える心が。

立ち止まれば・・全てを失うと。

諦めたら、何も残らない・・無為な氷の世界だと・・。

氷河

後悔を背負う未熟さを、愛する者に救われていた。
絶対的安らぎで、未熟な後悔をを包んでくれていた。
私はその温もりと香りで満たされて、眠りながら泣いていた・・嬉しくて。

翌朝爽やかに目覚めた、蘭が胸の上にいた、笑顔の寝顔が可愛くて暫く見ていた。
静かに腕を抜き、蘭を枕に乗せて、洗面所に行った。
歯を磨き、鏡を見ると唇にほんの僅かに、口紅の跡があった。
《蘭可愛いな～、もったいないな～》と思ってニヤニヤしていた。
『えい！』と声に出して気合を入れて、顔を洗った。
朝食にトーストとスクランブルエッグとベーコンを焼いて、レタスとみかんを半分に切ったのを皿に並べた。
「おはよう、なぜだろう背中合わせは、良く寝れる」と蘭がニヤして洗面所に消えた。
朝食を準備して、蘭を待っていた。
「半分みかんが、素敵」と満開で笑って、２人で朝食を食べた。

『これを今回の最後にする、蘭、本当にごめんなさい』と真顔で頭を下げた。
「よし」と満開で微笑み、「そしてありがとう、本当に嬉しかった」と笑顔で言った。
「あんな事、リアン姉さんかユリカ姉さんにしか、しないだろうから」と蘭がニヤした。
『もちろん、その２人にしかしないよ』と笑顔で返した。
「リアン姉さんの話す顔に、嫉妬した、そんな時間を過ごした事に」と小動物で舌をだした。

『蘭とリアンは本当に似てるね、昨日再確認したよ』と笑顔で返した。
「あんたの女なんだろ、リアン姉さん」とニヤニヤで来た。
『言葉のあやだよ、そう言うしか、なかったんだよ』とニヤで返した。
「でもリアン姉さんに似てると言われるのが、私への最高の褒め言葉だよ」と満開の笑顔を出した。
『リアンもそう言ったよ、蘭が似てるって言われる事がってね』と笑顔で返した、蘭の満開が咲いていた。

『自分だって、豊兄さんと腕組んだくせに、俺も嫉妬した』とニヤで言った。
「そりゃ～、組んでみたいでしょう、あの男なら」とニヤニヤで返された。
『やっぱり、わざとか、ユリカもそう言ってた』とウルで返した。
「豊君には嫉妬なんかしないくせに、分ってるんだから」とニヤで返された。
『正解』と微笑んで、蘭の笑顔を見ていた。
「カスミに自慢するのを忘れてた、悔しがるぞ～あ奴は」と蘭が楽しそうに微笑んだ。
『あなたの幸運に嫉妬したって、言われるよ』とニヤで返した。
「楽しみ～」と言って満開になった。
蘭を見送り、朝の仕事をして日記を書いた。

その日の最後に、こう記している。
【絶対に忘れてはいけない。
蘭の震えも、そして心を引き裂かれた、あの涙を。
ユリカの痛い涙も、その心が感じた不安も、最後まで抱かれながら守ってくれた事も。
そして、あのマリアの両手ペチも・・・絶対に忘れてはいけない】

バスで出かけて、若草通りを歩いて、開店準備をしているカスミを遠くから見ていた。
エプロンをして、ミニのワンピースで可愛いカチューシャを付けていた。
輝いていた２０歳の圧倒的美を見せつけながら、通行人に笑顔を振り撒いていた。
《確かに凄い戦力だな、あの笑顔だけでも》と思って、声をかけずに背を向けた。
「明日も見に来いよ～、嬉しいから～」とカスミの声がした。
振向くと輝きの中にカスミの笑顔があった、私も笑顔で手を振って別れた。

靴屋を覗き、蘭に手を振って、ローズに歩いた。
少し黒雲の多い、空気の重い日だった、しかし私は快晴の気分で歩いていた。
突然腕を組まれた、昨夜と同じ着物を着たミチルママだった。
『脅かさないで下さいよ～、気が弱い少年を』と微笑んで言った、ミチルも艶やかに笑った。
私は多分この行為は、海竜との一件を聞いたな思っていた。
「気が弱いの～、可愛いわね」とその笑顔の艶やかな美しい顔に、見惚れていた。
しかし、その目の光がどこか出合った頃の、カスミのような拒絶の光を感じていた。
『いけませんね～、朝帰りは』とニヤで返した。
「そんな色っぽい事最近無くて、寂しい限りよ」と私を見て艶やかさを強めた。
『俺、未経験だから優しく教えて下さい』とニヤニヤで返した。
「いいよ～、今回のお礼なら、それ位の価値があるわ」と艶やかニヤを出した。

『怖いんですけど、夢中になりそうで・・氷の瞳が』と微笑んで感じたままを口にして、ミチルを見た。
その言葉でミチルが私を見た、その氷の瞳を見て背中に何かが走った。
寒さでも冷たさでもなかった、得体の知れない温もりを感じた。
ミチルは私を見つめたまま動かない、その氷の奥の確かな光を見ていた。
絶対的に高い位置に存在するであろうミチル、その地点にしか存在しない氷河の輝きを見ていた。

「よし！いいでしょう・・ユリが言って事に嘘は無かったね」と前を見て言った。
『初めて会いました、同世代でユリさんを呼捨てにする人を』と少し驚きながら、ミチルを見た。
「同学年で、夜街デビューも同じだし、仲良しなのよ」と私を見て妖艶に微笑んだ。
その言葉で確信した、相当の高い位置に存在する者だと、溶けない万年雪の上にいると。
『ここだけの話しですよ、誰にも絶対内緒ですよ』と私はミチルの目を見て微笑んだ、ミチルも楽しそうに頷いた。
『ミチルママの方が、５歳は若く見えますよ』と耳元に笑顔で囁いた。
「あなた、良い子ね～私の店もフリーパスにしてあげる」と妖艶ニヤできた、瞳は氷の輝きを放ちながら。
『ラッキー、ちなみにお店は』と笑顔で返すと、名刺を出して渡された。
『このビルＴＯＰ３のビルで、最上階ですか？』と笑顔で聞いた。
「そうよ、あなたはＴＯＰ３最上階を完全制覇よ、おめでとう」と妖艶に笑った。
『遊びに行きます、妖艶な氷の謎が知りたいから』と真顔で言って

みた。
「いいわよいつでも、但し覚悟してね、今までの経験は通用しないかもよ」と腕を離し微笑んだ。
『俺の称号知ってます？』とニヤで聞いた。
「もちろん、最後の挑戦者・・素敵な称号ね」と妖艶なまま、氷の瞳で私を見ていた。
『称号を貫くには、避けては通れぬ人だと思ってるんですけど』と真顔で瞳を見ながら言った。
「楽しみに待ってるわ」と妖艶笑顔で背中を向けた。
その背中を見送りながら、《世界は広いな～楽しみだな～》と思って見送った。

ローズに着いて、昨日開かなかった重たいドアを押した。
ドアは開き、中に進むとリアンが昨夜と同じ位置に座って、獄炎の笑顔で迎えてくれた。
「蘭に、キッス怒られなかった？」と全開ニカで来た、私はその復活した炎が嬉しかった。
『蘭はリアンを信じてるから、リアンのした事を怒ったりしないよ』と笑顔で言いながら、昨夜海竜が座ってた場所に座った。
「なんか、本当に泣かすの趣味やろ」と微笑んだ。
『リアンが元気になったから、俺はそれだけで満足だよ、かなり反省はしたけど』と真顔で返した。
リアンは私の目を見て、炎を強めて獄炎で微笑み頷いた。

「ユリカ来る前に、満タンになるまで充電して」と可愛いリアンを出して微笑んだ。
『可愛いリアン出すなよ、本気になりそうだから』と微笑み立ち上がって、リアンを抱き上げた。
「嘘つき、蘭以外眼中にないくせに」と微笑みながら、首に回した腕に力を入れてしがみついた。

リアンが静かだった、情熱で常に闘う姿勢を見せる心が、静かに休息していた。
「あんたは、何も聞かないんだね」とリアンが囁いた。
『終わった事だし、過去は聞きだす事じゃないし、俺は今のリアンが大切だと思ってるから』と囁いてかえした。
「やっぱり、趣味だろ・・そんなに見たいか私が泣くの」と囁いた、優しい響きだった。
『いいから、少し目を閉じてお休み・・リアン』と優しく囁いて返した。
静かなリアンを抱いていた、リアンの温もりを感じていた、その暖かさを。

「もう、限界でしょ～、これ以上はリアンが制御利かなくなるから」とユリカの声がした。
振向くとユリカが爽やかな笑顔で立っていた。
「ユリカの意地悪、少し早いぞ」とリアンがニカで言った。
「あなたの心の揺れが、いけない方向になりそうだったからね～」と爽やかニヤを出した。
「ユリカ、ありがとう」とリアンが微笑んだ、ユリカも微笑んで頷いた。
私はリアンを降ろしながら、その親友の世界を見ていた、素敵な2人を。
「しかし、あなたも休息をしない男だね～」とユリカが私に腕を組み言った。
『どれの事かな?』と気付きながらニヤで聞いた、ユリカが腕を組んだまま私の隣に座り。
「ミチルママに決まってるでしょ」と爽やかに微笑んだ。
「いよいよそこか～、そうだよな」とリアンも向かいで獄炎で微笑んだ。
『俺の感じた事は、間違ってなかったんだね』とユリカに笑顔で聞

いた。
「うん、避けては通れぬ相手よ」とユリカも微笑んで返した。
「がんばれよ、最後の挑戦者」とリアンも優しい炎で言った。

「私、気付いたと思うけど、海竜が嫌いじゃなかった」とリアンが用意してくれた、豪華なステーキの出前を食べながら言った。
「彼がヤクザじゃなくて、もう少し優しさの出せる人なら、付き合ってたと思う。
でも駄目だった、その時に駄目なら取り返しは出来ないの。
だからせめて、私が自分自身で海竜との決着をつけたかった。
でも彼は変らなかった、強引さも非情さも、本人の本質はそうじゃないと知りながら。
最後まで駄目なら、梶谷さんに相談しようと思ってた。
あんたの解決策に感動したよ、そして私に謝った海竜を見て嬉しかった。
あんたは自分を信じなさい、海竜を少し観察しただけで、あれだけ引き出せる。
その自分の力を、私は本当に感動したよ・・多分海竜も感謝してると思うよ」
リアンが最後は獄炎で微笑んだ。

「私もそう思ったよ、海竜って人、自分で自分の制御が利かない状態だったよ」とユリカが私を見た。
「あなたが思った案外気が合うかもは、間違っていないよ」と爽やかに微笑んだ。
『ヤクザじゃなければ、又会いたいと思ったよ』と私は2人に笑顔で返した。
「望月さんと仲良しのくせに、よく言うよ」とリアンが笑顔で突っ込んだ。
『あの人は別だよ、俺の中じゃ男として今、トップクラスだから』

と微笑んで返した。
「1番は？」とリアンがニカで聞いた。
『もちろん、キング・・圧倒的1番だよ』と笑顔で返した、リアンとユリカの笑顔があった。
『俺は最近行動を起こす時、最後にキングの真似をする、何でもね～よってそれで落ち着くんだよ』と少し照れて言った。
「私の羊水を聞いて、梶谷さんが来た時の笑顔が忘れられない、そして私に良かったねって言った言葉も」とユリカが嬉しそうに笑顔で言った。
「今の夜街の平和は、梶谷さんと望月さんの大きさで出来てるんだって、大ママが言ってた」とリアンも嬉しそうに笑っていた。
私は炎と水に囲まれて、楽しい時間を過ごしていた。
キングを想いながら、どうやったら辿り着けるのかと思っていた。
その本物の男に、ただ憧れていた、大きな優しさに。

氷のミチルの瞳はやはり忘れられなかった、その何かを隠した妖艶さも。

ユリさんと別の世界に棲む、違う進化をした種族を。

しかしこの時の私は、完全に誤解していたその世界を。

氷の女神　ミチル・・根底にあるのは。

氷河の温もり・・極寒に存在する本物の優しさ・・・。

選択

黒雲に覆われる天空が夏の陽射しを遮っていた、重たい空気を炎と水が軽くしていた。
両極である事を楽しむかのように、互いを認め合う2人を見ていた。
その会話に澱みは無い、全てを理解してこそ成立つ世界だった。

「ちなみにユリカの段階は、上がってるのかな?」とリアンが獄炎ニカで私に聞いた。
『絶対に急がない、それが一番大事だから、あんまり進むと俺が寂しいし』とニヤで返した。
「昨夜ここを出た西橘で抱きしめられて、強く抱きしめ返して、そのまま抱っこで上まで上がった」とユリカがリアンにVサインで微笑んだ。
「うそ!そこまで進んでるのか」とリアンが笑顔で驚いた。
「なんか自然に抱き返せたよ」とユリカが爽やかに微笑んだ、私は本当に嬉しかった。
「怖くないのか?」とリアンが真顔で聞いた。
「他の人は分からないけど、エースなら目の前で裸になれそう」とユリカがニヤでリアンに返した。
私は飲んでいたコーラを吹き出しそうになるほど、驚いてユリカを見た。
「それで、触らせないって修行をさせようかと」とユリカが私にニヤした、リアンが唖然とした顔でユリカを見ていた。
『その修行は自信なし・・無理です』とウルウルで返した。
「あなたなら、で・き・る・わ」と可愛い爽やかニヤで返された。
「どう責任取るんだい、淫乱ユリカになったじゃないか」とリアンも最強獄炎ニカで来た。
「淫乱・・憧れの響き」とユリカが両手を合わせ、天を見るような

ポーズで返した。
『憧れだけにしときなさい、３年早い』と笑顔でユリカを睨んだ。
「はい、先生・・３年後にはよろしく」と爽やかニヤで返された。
「３年後でもエースは１６歳だぞ、ユリカはいくちゅかな？」とリアンがユリカに最強ニカを出した。
「私は永遠の２０歳よ・・ね～」とリアンにニヤして、立って私に手を出した。
『そうだよ、ユリカは俺が追いつくまで永遠の２０歳だよね～』と私も手を握って立ち上がった。
「７年後・・考えたくない」とリアンが獄炎ウルを出していた。
「リアンが、ユリ姉さんみたいになれてるかしら？」とユリカが私にニヤをした。
『それは想像できませんわ』と特訓中のユリさんの真似をしてみた。
リアンとユリカの大爆笑の笑顔を見て、《そろそろいいかな》とニヤしていた。

エレベーターに２人で乗り、リアンに手を振って別れた。
「少し早く出たの分ってる？」とユリカが微笑んだ。
『もちろん、どれがいいのかな？』と微笑んで返した。
「運動不足でしょ、あれがいいの階段上るやつ」と嬉しそうに可愛く笑った。
『了解、頑張ります』と笑顔で返した。
ユリカのビルの裏階段に行き、ユリカを抱き上げた。
『しっかり掴まってろよ、ユリカ』と笑顔で言うと。
「充電して、昨夜相当使ったから」とニヤで言って、強くしがみついた。
上り始めると、ユリカは圧倒的静けさで、吐息だけが首筋から感じられた。
私はゆっくりと登り、ユリカの香りを楽しんだ、何も考えずに足元だけを確かめた。

登りきると流石に少し汗をかいた、ユリカが顔を上げて。
「意外と男臭いのね」と爽やか笑顔を出した。
『嫌なの男臭いの？』とウルで聞いた。
「そんな事無いよ、それが嫌じゃない自分が嬉しいの」と爽やか全開で微笑んだ、ユリカの元気な瞳が嬉しかった。
私はユリカを優しく降ろし、昨日の事をもう一度謝ろうと思った。
「もういいよ、私も本当は嬉しかったのよ」と言って爪先立ちで頬にキスしてくれた。
私は嬉しくてニヤニヤ全開だった。
「口紅付けてないから、ご心配なく」とユリカがニヤした時にエレベーターが着いた。
ユリカに手を振って別れて、エレベーターの中でもニヤニヤしていた。
《やっぱり蘭とユリカは別格だな～と思って、カスミの貰った事無い》と贅沢な事を考えていた。

ＴＶルームにはハルカとレンと久美子だけだった。
「何か良いことあったでしょう？」とハルカにニヤされた。
『教えない、ハルカも教えなかったから』とニッで返した。
「リアンさんにキスされたな」とレンがニヤできた、久美子が笑顔で見ていた。
『そんなに簡単には貰えません』とニヤで返した。
「でも驚いた～、あんなに情熱的な外見の人、初めて見たから」と久美子が微笑んだ。
『内面はもっと熱いよ、怖いくらい』と微笑んで返した。
「エースにまた礼を言わないとな、四天女と呼ばれる人にこんなに早く会えて」とレンが笑顔で言った。
『いずれ会えたよ、レンならね・・俺は相当レンには期待してるから』と微笑んで返した。
「了解、がんばるよ」と可愛く笑った。

時間になり久美子がレッスンを始めた、レンとハルカと予約確認をした。
「そうそう、お祭りの話聞いた？」とハルカが私に聞いた。
『もしかして、美人コンテスト？』と聞き返した。
「そう、大ママもユリさんも渋々承諾したって昨日話してた」とハルカが微笑んだ。
『そっか～、リアンとユリカが話してるのは聞いたけど、見せ物みたいで嫌だと言ってたよ』と真顔で返した。
「私だったら絶対に嫌だな～野次とかあるだろうし」とハルカも真顔だった。
「ＰＧは２０歳～２４歳って誰を出すか、エースに決めさせるってマダムが言ってたよ」とレンが私にニヤした。
『考える必要なし、酔った客を黙らせる程の、最終兵器を出す』と微笑んで返した。
「なるほど～、勝ちに行くんだね」とレンがニヤで言った。
『当然、ＰＧの名に賭けて、魅宴や他の店には負けれん』とニヤニヤで言った。
「あとはあなたの交渉次第だけど、なんか簡単にＯＫ取りそうね」とハルカもニヤした。
『私にまかせてもらいますわ』とユリさんの真似を試してみた。
ハルカもレンも大爆笑で、久美子がこっちを見て笑っていた。
「ちょっと、絶対それも禁止だからね」とハルカが脇腹を押さえて笑い。
「絶対、本人の前でやるなよ」とレンも止まらぬ笑いの中で言った。
《完成した～》と私は拳を握っていた。

タバコを買いに出て、ユリカのビルで立ち止まり、見上げた。
最上階の上の空には、黒雲の勢力が増していた。
《ユリカ～本当に嬉しかったよ、また貰えるように頑張るね～》と

囁いてタバコを買い、帰りに見上げて。
《ユリカあのね、本当は口紅付いた方が嬉しいかも～、ユリカ無理するなよ～》と囁いて帰った。
自分担当の最終チェックをした、久美子が初めてジャズを弾いていた、私は座って聞いていた。
《生演奏のジャズピアノ、最高の贅沢だな～》と思って目を閉じた。
久美子が奏でるジャズの淋しげな調べが誘ってくれた、瞑想の画面には蘭の泣顔が浮かんできた。
《2度と泣かせたりしないから、蘭・・笑って》と呟いていた。
久美子が弾き終わって、TVルームに行くのに追いついた。
『最後の曲何ていうの？』と笑顔で聞いた。
「サマータイムだよ、どうだった？」と微笑で返してきた。
『凄く好きだった、久美子ジャズも良いね～』と笑顔で返した。
「好きなの、クラッシックだけやると精神的に疲れるのよ」と言って。
「ここなら堂々と弾けるから嬉しくて、学校じゃ人目を盗んで小さくだから」と笑顔を見せた。
『どんどんやってよ、ジャズも他のも』と微笑んでTVルームに入った。

TVルームにはマダムとユリさんとマリアが来ていて、レンとハルカがおやつの、たい焼きを食べていた。
『ひどい、先におやつ食べて』とマリアの寝顔を確認して、ハルカを笑顔で睨んだ。
「久美ちゃんの演奏聞きながら、寝てたから起こさなかったのよ」とハルカがニヤした。
『一流の選手は瞑想して集中を高めるんだよ、それに久美子が眠い曲弾くから』とニヤで返した。
「その変わり身は、伝説通りね」と久美子がニヤで私を見た。
『可愛い久美子ちゃん、たい焼き俺の分も食べる？』とウルで言っ

た。
「あら、その話聞きたいわ、もしかして貸しかしら？」とユリさんも薔薇ニヤで私を見た。
「まだ貸し状態です、次で１つ出します」とニヤで私を見た。
「いくつ位あるの？」とハルカがニヤで聞いた。
「私が知ってるだけで、１５は有ります」と久美子がニヤで言った。
「楽しみだね～」とハルカがニヤニヤで私を見た、私は全開ウルで久美子を見ていた。
「ヨチヨチ、久美子お姉さまって呼びなさい」と可愛いニヤで返された。
『久美子お姉さま、可愛い久美子お姉さま』とウルウルで言って、皆に笑顔で見られていた。

「お祭りのイベント、本当にカスミちゃん大丈夫と思ってるの？」とユリさんが真顔で聞いた。
『今のカスミなら絶対大丈夫だと確信しています、そしてもう一段上がるんじゃないかと思ってます』と真顔でユリさんに返した。
「あなたがそう言うのなら安心ね、当然当日は側にいて下さいね」と薔薇で微笑んだ。
「カスミ姉さんまた一段上がるのか、怖い」とハルカが言った。
「エースが上げてきたのか、凄いよな～本当に」とレンが微笑んだ。
『俺は何もしてないよ、カスミが出し惜しみしてたのを出させただけ』と微笑んで返した。
「でも次の段階は、あなたが希望した物ですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
『カスミが美を追求してきて唯一後悔していた部分を、自然に出るようにしてやりたい、それだけです』と照れて返した、ユリさんが私を深い目で見ていた。
「２学期になっても、夜少しは来れますか？」とユリさんが聞いた。
『もちろん、蘭の側にいる為に親父に謝る覚悟が出来たし、蘭に成

績も上げると約束したから』
『毎日来て、エミと勉強します』とユリさんに微笑んで。
『マダム、蘭に少しでも自分の稼いだ金を渡したいから、仕事もさせて下さい』とマダムに頭を下げた。
「当たり前や、ここでさせんかったら、魅宴でバイトしそうだからな」とマダムも笑顔で返してくれた、私も笑顔で頭を下げた。
「よかった〜、心配してました、あなたらしくない結論を出しそうで」と薔薇で微笑んだ。
『リアンとユリカが教えてくれました、常識の外で良いんだと、それ位の覚悟がいるのだと』と真顔で返した。
「私達はユリカの事は最高点であなたを評価しています、昨夜のユリカを見て嬉しかった、その感性を受入れた姿が輝いていて」と嬉しそうに薔薇で微笑んだ。
『ありがとうございます、そうそう、ユリさんにお願いがあります』と最後はニヤで返した。
「怖いわね〜、何かしら?」と薔薇のまま聞いた。

『最後の挑戦者は、その名を貫く為に次は、妖艶な氷の瞳の訳を探しに行きます、許可を願います』と頭を下げた。
「許可します、氷まで分ったのなら大丈夫でしょう、でも手強いですよミチルは」と薔薇で微笑んだ。
「きた〜」とハルカが笑顔で言った。
「もしミチルの心が開いたら、私はミチルの友として、特別にあなたに何かを贈ります」と薔薇の笑顔で言った。
「ワシも特別ボーナスを出すよ、ミチルなら」とマダムも笑顔で言った。
『やはり最高難度、氷河の温もり極寒の輝き、吹雪に隠された優しさ、難解なりミチル』と感じたままを言って、ユリさんに微笑んだ。
ユリさんは私を見ていた、久々に見る真剣な深い眼差しで、大切な言葉が来ると思っていた。

「ミチルは敗れたのではない、自らが望んで敗北を選択ました。
決断の時、人は自らの幸せを選ぶとは限らない、それ以上の愛も存在する。
あなたの今の表現で、私は心から期待します、挑みなさいそれこそが最後の挑戦者です」

最後は薔薇で微笑んだ。
『やってみます、その万年雪の積もる氷河を目指して』と真顔で返した、ユリさんが嬉しそうに薔薇の微笑を返してくれた。
「深すぎて、ついていけない」とハルカが笑顔で言って。
「ハルカは幸せだよ、こんな練習ロボットがいるから」とレンが笑顔でハルカを見た。
「まぁその位はやってもらわないと、伝説が泣くよね、チャッピー」と久美子が微笑んだ。
「チャッピー、お前が台風桟橋のチャッピーか！」とレンが驚いた。
『レンそれはギリギリセーフだよ、皆知ってるから』とニヤで返して、マダムを見た。
「もちろん、ハルカから聞いたよ」とマダムも笑った。
「私も面白伝説あと2つ知ってるよ、良かった1番軽いの出しとい て」とレンが私にニヤで言った。
「あれが1番軽いの、他がどんなに面白いのか想像もできない」とハルカが笑って、皆で笑っていた。

私はユリさんのヒントを必死に頭に入れた、ユリさんらしい難しい表現のヒントを。
そして、マダムまで乗り出した事に、かなり重い何かが有る事も感じていた。
ただ私は先入観を捨てる練習は出来ていた、ユリカという常識外を愛するうちに。

そして、少し自分を信じてみようと思っていた、誰かの言葉でなく自らの感性を。
感じたままに伝えるしかない、その唯一の方法に賭けてみようと思っていた。

このユリさんのヒントに隠された深さに、私は感動する。

そして人を、本当に愛する時の決断に驚愕する。

その深い優しさの引き換えに得た、悲しみに触れ恐怖すら感じる。

愛の選択で得た、氷河の瞳・・・絶対零度・・氷のミチル。

台詞

雷鳴が響いてきた、遠く霧島の峰から。
夕立に人々は足早に家路を目指し始めた、空は黒雲に支配されていた。
私は裏階段の踊場でマリアと遊んでいた、雨の匂いを感じながら楽しんでいた。
怪獣の私は正義の見方マリアマンの、天使全開パンチを受けて苦しがっていた。

蘭がＴＶルームでご飯食べようと言っていたので、待っていた階段を上がって来るのを。
四季が来てマリアを交互に抱いて、準備に行った。
ウミが暫くマリアと遊んで、ユメが来た時に準備に行った。
次にカスミが上がって来た、マリアを見て輝きを強めて抱き上げた。
『カスミ俺を信じるか？』と真顔で聞いた。
「私があんたを信じないで、誰を信じるんだい？」と真顔の私を輝く瞳で見た、翳りなどどこにもなかった。
『実は今度の土曜の西橘祭り・・・・』とミスコンの説明をして。
『四天女は渋々了承した、酔っ払いの見せ物になる、辛いかもしれない』カスミの瞳を見ていた。
『でも俺はＰＧはカスミしかいないと思ってる、どうかなカスミ？』と最後は微笑んだ。
「勝ちたいって事だね」と私に不敵を出した。
『勝ちたいし、観客に見せてやりたい本物の輝きを、酔った連中を黙らせる程の美をね』とニヤで返した。
「あんたが、付き人してくれるんだろ？」とニヤで返された。
『もちろん、ずっと側にいるよ』と笑顔で答えた。
「ＯＫ、派手に行くよ～、祭りだから、祭り上げられてナンボやろ」

と笑った姿に暫し見惚れた、その圧倒的な輝きに。
輝きの中の天使は全開の笑顔で、カスミの両頬に手を当てた。
「かすみ」と言った、カスミはマリアを見て、瞳を潤ませた。
「うん、勝つよマリア自分にも・・ありがとう」と言ってマリアを優しく抱いていた。

「なんで私じゃないんだい」と言って蘭が顔を出して、満開睨みで私を見た。
『蘭を出したら、ユリカが２０歳って偽って出るって言ったから』とニヤで返した。
「それは困る、ユリカ姉さんの雰囲気に勝つ自信なし」とカスミも微笑んだ。
「なら仕方ないね～、リーダーに任せるか、熟れてないけど」と蘭がマリアを受け取りながら、カスミにニヤをした。
「オヤジは青い果実の方が好きなんだよ～」と不敵を出して、蘭を見た。
「青いのかい？」と蘭が私をニヤで見た。
『カスミは爽やか成分が多いよ、この2日で分った、隠されていた部分も輝いているよ』と2人に微笑んだ。
「よし」と蘭が満開になり、「うし」とカスミが嬉しそうに輝いた。
エミとミサが上がってきて、皆でＴＶルームに行った。

賑やかなＴＶルームを見て、松さんが本当に嬉しそうにお茶を出していた。
「蘭、とカスミよく頑張ってくれた、特別ボーナスや」とマダムが大入袋を2人に渡した。
「ありがとうございます、嬉しい～」と蘭とカスミが笑っていた。
「ほれ、エースお前の貢献度も大きいかい」とマダムが笑顔で差し出した。
『ありがとう、マダム』笑顔で返して受け取った。

「それからレンと久美子にも少しだけど、これから頑張ってくり」と笑顔で渡した。
「私達も！」とレンと久美子が目を潤ませて、嬉しそうに受け取った。
「ハルカは貯金でいいんやな？」とマダムがハルカを見た、ハルカは笑顔で頷いた。
「ハルカ、車買うぐらい貯まったでしょう？」と蘭がハルカに微笑んだ。
「言えません、ホストが聞いてるから」とハルカが蘭にニヤをした。
「そうだね～、奴はそれ聞くとすぐプロポーズするからね～」と蘭が全開ニヤで私を見た。
『ハルカ次のデートは、アメリカに行こうな』とハルカにニヤをした。
「それはハネムーンかしら～」とハルカがニヤニヤで返してきた。
『明日豊兄さんみたいに、婚姻届取りに行ってくるよ』とニヤニヤで返した。
「えっ、婚姻届取りに市役所に行ったの！」と蘭も他の全員も驚いて私を見た。

『俺の知ってる豊兄さんと奥さんの約束は、奥さんの１６の誕生日に婚姻届を贈るだったから。
それで、来年の豊兄さんの１８の誕生日に、奥さんが名前書いて提出するのが約束。
奥さんの誕生日が８月２０日だから、多分そうだと思うよ。
素敵やろ～、俺立会人やから、間違いないよ」と微笑んで締めた。
「か～、羨ましいじゃ足りないな～」とカスミが笑って。
「いいな～」とレンとハルカと久美子が言った、蘭はニヤニヤしていた。
「蘭姉さん余裕なんですけど、なんか約束しましたね～」とカスミ

が不敵を出した。
「それだけは、言えない・・大切なものだから～」と蘭がカスミにニヤで返した。

夕食が届いて、皆で食べていた。
私がマリアのおかずを切って、マリアが嬉しそうに食べていた。
「家事も子育ても完璧やな、さすがヒモ男」とカスミが私に不敵を出した。
『エミがヒモって何って聞くぞ、いいのかな～』とエミを見た。
「女の人に働かせて、遊んでる男の人でしょう」と少女の微笑で返された。
『参りました』と笑顔で返した、皆が笑っていた。
『そうだ、エミ、ミチルママ知ってる？』と笑顔で聞いた。
「知ってるよ、またイメージかな？」と笑顔で返された、『うん』と微笑んで返した。

皆の期待の視線を浴びて、エミが考えた。
「雪国の暖炉のような暖かさ、偽らない強い心、優しさで包まれた溶けない氷・・かな」と少女の笑顔で言った。
室内を静寂が支配した、マダムと松さんがエミを見ていた、優しい目で。
「あれ、変な事言っちゃった？」とエミが私を見た。
『ねぇエミ、皆エミが今お医者さんだけ目指すのは、もったいないって思ってるんだよ』と意識して笑顔で優しく言って。
『エミはその今感じてる事を、大切にして欲しいって、皆思ってるんだよ』とエミの目を見て言った。
「うん、だって私は夜街の女の人達に、育ててもらったから」と少女の笑顔に戻った。
「エミ、私達にとってあなたは誇りだし、希望なのよ自分らしく頑張って」と蘭が満開で微笑んだ。

「うん、やってみるね、ＰＧの沢山の女性に負けないような人になりたいから」その圧倒的な純な輝きの前に、誰も言葉を出せなかった。

エミのその感性は備わっていたのではない、幼い頃から父が病気に倒れ。
母を助け、幼い妹を託され、そして守り抜いてきた。
だから全ての人の優しさに対して敏感だった、それがミサを守りぬく為の武器だったのだろう。
そして生活の安定期に入っていたこの頃でも、その感性を持ち続けていた。
この時の蘭の言った、【誇り】と【希望】は四天女とＰＧの女性全員の想いだった。
託して余りある、【努力を楽しむ】という大きな才能をエミは持っていた。
自分自身がどこかで諦めた夢、女性の社会的地位が低かった時代の夢。
そして理由なく蔑まれて見られる、夜の女の世界に身を置き耐えている彼女達にとって。
エミの能力と感性は、未来に夢を見せてくれる存在だった。

「で、いよいよミチルママなのかい」と蘭が満開でニヤした。
『ユリさんの許可も貰ったし、俺じゃ年齢差から言っても何も出来ないだろうけど』と微笑んで返した。
「ユリさん許可出したのか～」と蘭が笑顔でハルカを見た、ハルカが笑顔で頷いた。
「そんなに凄い人なんだ、名前は聞いた事あるけど」とカスミが言った。
「うん、私でも伝説的な人だよ、とっても素敵な人」と蘭が満開で微笑んだ。

「世界は広いな～、やる気がどんどん出てくる、楽しい～」とレンが笑った、その笑顔を蘭とカスミが嬉しそうに見ていた。
『レン、明日１１時に来れる？』と私もその言葉を聞いて、レンに言った。
「もちろん、会わせてくれるのか」とレンが身を乗り出した。
『うん、でもその感じは捨ててね、自然に会ってほしいから』と笑顔で返した。
「特急列車で、レンを運ぶのね」と蘭が私にニヤで来た。
『そこまでは特急で大丈夫だよレンなら、後はリーダーの背中にお任せです』と微笑んで返した。
「ユリカ姉さんに会わせるのか、なるほどね～」とカスミも不敵を出してレンを見た。
「その笑顔が怖いです、カスミ姉さん」とレンがニヤで言った。
「私は特急列車に乗せてくれないの」とハルカが微笑んだ。

『ハルカ姉さん』久しぶりに姉さんを付けたので、ハルカが私を真顔で見た。
『冗談言ったら駄目だよ、店の内情も夜街の人脈も、この中じゃ蘭を覗けば１番だろ』と真顔で言って。
『出し惜しみしないで、そろそろフロアー第二段階見せてよ、カスミが焦る位のやつを』とニヤで返した。
「忘れてないよね」とハルカが真顔で言った。
『忘れてない。ハルカが望むなら、たとえ蘭が反対しても、ハルカが倒れたら側にいるよ』と真顔で返した。
「よし、そういう事です、蘭姉さん」と真顔のまま、ハルカが蘭を見た。
「もちろん、反対なんか絶対しないよ、お腹のボタンは永遠だよ」と蘭は優しく深い目で返した。
「かかっておいで、ハルカ・・全力で」とカスミも不敵で、嬉しそうにハルカを見た。

「よろしくお願いします」とハルカもやっと笑顔が出た、カスミが輝きながら笑顔で返した。

「素晴らしいミーティングですね」と後からユリさんが言った、皆が振向いた。

「今のカスミちゃんと全く同じ台詞を、聞いた事があります」と薔薇で微笑みながら、私の横に座った。

「蘭、嬉しかったね」と蘭に薔薇で微笑んだ、蘭は満開の微笑で返し頷いた。

「リアンが１９歳の蘭に言いました、全く同じ台詞でしたよ」とカスミに薔薇で微笑んだ、カスミの輝く笑顔があった。

ハルカも笑顔で薔薇を見ていた。

「最高の場所にいる、私は最高の場所で競える、本当に嬉しい」とレンも笑顔で目を潤ませていた。

久美子がレンを見ながら、本当に嬉しそうだった。

７時が近くなり久美子がピアノに向かい、楽しい感じのジャズナンバーから初めて。

四季が嬉しそうにノリノリで聞いていて、３人娘を見つけてユメ・ウミが楽しそうに聞いていた。

蘭とカスミとレンとハルカが出て、全員が揃った。

１０番で談笑しながら、聞いていた、笑顔が溢れていた。

久美子は今夜はジャズで通して、明るいナンバーで前半を終えた。

ジャズの時には楽譜を置いているが、ほとんど見てない感じだった。

《何曲頭に入っているんだろう》と感心しながら、座って聞いていた。

３人娘が私の所に来て、しりとりをして遊んだ、マリアの何でも有りのしりとりで笑った。

７時４０分を過ぎたとき、一瞬ピアノが止まった。

女性全員が分ったように、姿勢を正した、久美子の鍵盤を見る表情

が変った。
その日のラストナンバーは激しいリズムのジャズナンバーだった。
どこか悲しげで、それを振り払うかのようなリズムを刻んだ。
魂の響きが躍動して、久美子は最後のサビでは腰を浮かして、鍵盤を叩いた。
終わった時の久美子は汗を流し、天井を見ていた、美しく輝いていた。

「素晴らしい、本当に素晴らしい」と受付からキングの声と拍手がした。
見ると徳野さんとキングが立って拍手していた。
蘭がレンと久美子を連れて、キングに挨拶に行った。
レンと久美子が深々とキングに頭を下げていた、お守りのお礼を言っているようだった。
キングは優しい笑顔で口の動きから、【なんでもね～よ】と言っているのが分った。
フロアーは今夜も久美子が火をつけた、女性達はその響きを全身に受けて立っていた。
今夜も始まる自分達の、全てを出しきる舞台が開くのを待っていた。
笑顔のままで。

カスミを祭りに選んだのは、勿論美しさも秀でていたが、最近の可愛い感じが好きだった。

そしてこの見せ物興行的な舞台で、カスミが発光する。

それは私の想像を遥かに超えた光だった。

カスミの大きな変化の幕開けだった。

その持って産まれた姿に、塗り込んでいくように輝きを増す。

その全力の姿を前にすると言葉が出ない、圧倒的存在感。

観賞用でなく、存在する美に変化していく。

永遠の憧れと呼ばれ続ける者・・カスミ・・。

背心

夕立の火曜日、最悪の設定を天が示した、それでも到達できるのかと笑っていた。
キングが3番に座り、ハルカが指名で入った、集中した良い笑顔だった。
その時受付に徳野さんが慌てて出た、私は見て固まった。
ミスターが黒い笑顔で一人で立っていた。

「ご無沙汰してます、徳野の兄貴」とミスターが深々と頭を下げた。
「兄貴はやめろよ、人聞き悪いだろ」と徳野さんが笑顔で答えた。
「すいません、徳野兄さん」とミスターが白い歯で笑った。
「昨夜はすいません、徳野兄さんの店の人間に」と言って、もう一度ミスターが頭を下げた。
「こっちこそ、ありがとうな・・助かったよ」と徳野さんも笑顔で返した。
「飲んでいかないのかい？」と徳野さんがニヤで聞いた。
「いいんですか」とミスターが笑顔で返した。
「一人ならいつでも大歓迎だよ、それに向こうから手を振ってるぞ」と徳野さんが笑った。
ミスターが見て、満面の笑みで頭を下げた、キングが手を振っていた。
雰囲気を察して、ハルカがユリさんと蘭に変った。
「おい、ご案内しろ」と徳野さんが私に振った。

私は駆け寄りミスターに挨拶した。
『今晩はミスター、昨夜はありがとうございました』と頭を下げた。
「様になってるじゃないか、小僧」とミスターが笑顔で言った。
「お前、ミスターって呼んでるのか」と徳野さんが笑った。

「徳野兄さん、俺に最後に喧嘩を売った奴の話、聞いた事ないですか」とミスターが嬉しそうに笑った。
「あっ！・・お前か」と徳野さんが私を見た。
『何の事でしょう』と初めて徳野さんにニヤを出して、ミスターを案内した。

私が最近の波の話を聞きながら、3番に案内した。
「梶谷さんご無沙汰してます」とミスターが深々と頭を下げた。
「やめろよ、硬いの抜きにしようぜ」とキングが立って右手を出した、ミスターも笑顔で握り返した。
キングの横に蘭、ミスターの横にユリさんが付いた。
私が指定席に戻ろうとすると、徳野さんが笑顔で呼び止めた。
「大金星だぞ、あの2人が座る光景は」と徳野さんが笑顔で言った。
『そうなんですか、確かに凄いけど』と笑顔で返した。
「PGの格が上がる位の話だよ」と嬉しそうに言って、「まさかお前とはな～」と笑った。
『何の事でしょう』と笑顔でとぼけて指定席に戻った。

3番のミスターは上機嫌で、キングもユリさんも蘭も笑顔が絶えなかった。
ミスターが笑顔で話してる内容が気になりながら、サインを繋いでいた。
キングと蘭が食いついてユリさんが楽しそうなので、嫌な予感がした。
9時を過ぎても7割しか埋まらずに、《夕立恐るべし》と思ったいた。
10時前にキングとミスターが立った、私は挨拶に出た。
「小僧、今度な」とキングが笑顔で言った、私も笑顔で頭を下げた。
「お前、蘭ちゃんとリアンの他に、素敵な女性あと何人俺の女だって言うんだ」とミスターが笑った。

『2人』とニヤでVサインを出した、蘭が横腹を優しくパンチして。
「少し、お2人で叱って下さい」と蘭が満開で微笑んだ。
「俺には無理だ、あと1つ借りがあるから」とミスターが笑顔で言った。
「俺にも無理だ、四天女の店で嫌われるから」とキングが笑顔でエレベーターに2人で乗った。
笑顔の2人を見送った。
「ふ～、流石に緊張したぞ」と蘭が私に満開で微笑んだ。
「私も緊張しましたよ、でも噂通りの素敵な人でした」と薔薇で微笑んだ。

「明日からの夜街は、この噂で持ちきりでしょうね」ユリさんが蘭に薔薇で微笑んだ、蘭が満開で頷いた。
「初めて店に本当の貢献をしたな、褒めて使わす」と蘭が満開で笑ってユリさんと、フロアーに消えた。
《ミスター何の話をしたんだろう、怖い》と思いながら指定席に座った。
その時にバタバタと団体が入り、満席になった。
私がVサイン出すと一瞬安心感が広がり、熱が上がってきた。

マミがニヤ顔で、私のコーラを持って来た。
「もしかして、さっきの人望月さん？」とニヤ継続で聞いた。
『そうだよ、どうしてかな～』と恐々聞いた。
「明日たから、大ママから逃げた方がいいよ、食べられるから」とニヤで言って。
「梶谷さんと望月さんを、同席させたって聞いたらね」と笑顔で言った。
『マミ、今夜も綺麗だよ、内緒にして』とウルで頼んだ。
「無理、噂がすぐに入るから、言わない訳にいきません」と可愛く笑った、私はウルウルでマミを見ていた。

『2人同席は珍しいんだね』と私は暢気にマミに聞いた。
「望月さんが最近飲みに出ることが無いし、弁護士とそっちの同席は奇跡でしょう」とマミが微笑んだ。
『なるほどね～、俺はミスターはサーフィン仲間だから、そっちと思ってないからね』と笑顔で返した。
「とにかく、大ママには要注意よ」と可愛いニヤ全開で言った、ウルウルで返していた。

１０時前にマダムが来た、怖い笑顔で歩いて来た。
「エース指名や、ミチルがお礼をしたいらしいぞ」と笑顔で言った。
『怖いな、営業中は』とマダムに笑顔で返した。
「夕立にやられて、暇なんだろマミの時間には帰れよ」と不敵な感じで笑った。
『行ってきます、蘭に言っといて』と笑顔で返して出かけた。
雨は止んでいた、ユリカのビルで見上げると、空は真っ黒だった。
《ユリカ～、ミチルちゃん所に行って来る、無理しないで手を抜くんだよ～》と囁いて向かった。

ミチルの店のビルのエレベーターに乗って、最上階を目指した。
エレベーターを出ると夜景が広がった、その夜景を暫し見ていた。
《ここが1番夜景は綺麗だな～》と思って、ミチルの店の重厚なドアを押した。
客が3組と一人の客がカウンターに2人いた、カウンター内の可愛い女性が私に微笑んだ。
その可愛さに息を飲んだ、浴衣を着てアップにした髪に映えるピンクの口紅が印象的だった。
大きな目が微笑んで少し下がり、育ちの良さそうな雰囲気を振り撒いていた。
「なにかしら？」と笑顔で私に声をかけた、私は笑顔で近づいた。
『ミチルママ、接客中かな？』と微笑んで返した。

「今、ＢＯＸが入ったから、ママに御用なの？」と笑った笑顔の可愛さに見惚れていた。
《世界は広いな～》と楽しんでいた。

『じゃあ、ここで待ってるよ、お姉さんの方が楽しそうだし』と言って、１番手前のカウンター席に座った。
「いらっしゃいませ、お飲み物は何になさいますか？」と笑顔で聞いた。
『コーラを、ダブルのロックで』と少し渋く言って返した。
「素敵な注文ですね」と言いながら、準備していた。

「はい、どーぞ」と笑顔で言って、コーラとスナック菓子の盛りつけた皿を出した。
『お姉さんのお名前は？』と笑顔で聞いた、興味津々光線を発しながら。
「ホノカです、以後よろしくね」と微笑んだ、お嬢様って感じの笑顔だった。
『ほのかに香る育ちの良さかな、それともほのかに香る危険な香りかな？』とグラスを見て呟いた。
「後者に近いわよ～、危険でしょう～」と顔を近づけて、ウィンクした。
『やめて、夢中になりそうで怖いから、俺・・追い回すタイプだよ』とニヤで返した。
「じゃあ、私も抱っこしてもらえる可能性があるのか～」とニヤで返された。
『有名人は辛いな』と俯いて呟いて見せた。
その時肩を叩かれた、ミチルが後で微笑んでいた。
「いらっしゃい、エース」と笑顔で言った。
『忙しいみたいだから、又でいいよ、ホノカちゃんとお話して帰るから』とニヤで返した。

「そうはいきません、ＢＯＸにまいりましょう」と妖艶ニヤで腕を組まれた。
ホノカをウルで見て従った、ホノカが笑顔で小さく手を振った。
１番奥の眺めが良い、４人掛けの小さなＢＯＸに案内された。
「先にお礼を言わせてね、本当にありがとう」とミチルが微笑んだ。
『いいですよ～、こんな素敵な店をフリーパスにしてもらったから』と微笑んで返した。
「それで、何から聞きたいの？」と試すような目で言った、やはりどこか違和感のある目だった。
『ミチルママはなんで、五天女に入らなかったのかと思ってるだけ』と微笑んで返した。
「五天女ね～、素敵な響きだけど、私・・夜街の落ちこぼれだから」と真顔で私を見た。
《この人は真顔の方が綺麗だ》と思いながら、氷の光を見ていた。
『そっか～、落ちこぼれさんなのか～』と微笑んで返した。
「何故かは聞かないの？」と妖艶が少し出て、唇だけ微笑んだ。
『話したくないでしょ、多分夜街の落ちこぼれッて思ってるのは、ミチルママだけだろうから』と微笑んで返した。
「そうでもないけど、確かに私が１番強く思ってるかもね」と薄く笑った。
『そうしたいの、それともそうしないと駄目なの？』と真顔で聞いた。
「そうしないと・・駄目なの、バランスがとれないのよ」と美しい真顔で返した。
『じゃあ聞かない、子供が聞いても分らないから』と笑顔で言った。
「でも、それじゃあ本質には近づけないかもよ」と妖艶ニヤで返された。
『今までの人はそれだから駄目だったんだね、聞こうとしたから』と真顔で返した。

「聞かないでも分るとか？」と真顔で返された。
『ユリカじゃないから、そんな技は持ってません』と笑顔で返した。
ミチルは私を見てる、２０歳下の子供を真顔で見ていた。
『例えば、ミチルママに過去に何が有ったにしても、聞いただけじゃ分らないよ』と真顔で言って。
『俺はそんな事を知りたいんじゃないから』と微笑んだ。
「あなたの方法は？」と妖艶ニヤで返された。
『最初に抱っこして、それから感じていく』とニヤで返した。
「いいよ、実は凄く興味があったの、ユリカが抱かれる抱っこに」
と微笑んだ。
私は立って、ミチルママの手を取って、首に腕を巻かせて抱き上げた。
１番奥の窓の前に立って夜景を見ていた、ミチルは目を閉じていた。
暖かく柔らかい体だった、冷たさの欠片さえ無かった。
だが１つだけ違和感が有った、ミチルの首筋に違和感のある捩れを感じた。
背けてる、何かを強引に見ないように背けたんだ。
それも永い時間目を背けたから、捩れたんだと漠然と感じた。
ミチルの和服に隠された、華奢な体を見ていた、意識して何かを拒絶する姿を。

『ミチルママ、バランスって、強引にとってるって事だよね』と優しく囁いた、ミチルは頷いた。
『嘘ついてるんだ、自分に・・冷たい人間にならないと、許せないんだね』と囁き。
『だから首が微かに捩れるんだね、見てはいけないって拒絶してるから』と思ったままを口にした。
『何を見たらいけないって思ってるのか、分らないけど、辛いねミ

チル・・時間じゃ解決しないのは』と優しく囁いた。
その時ミチルが目を開き、暖かい氷河の光を瞳に強め、私を見た。
「期待してもいいの？私はあなたの母親と同じ位の歳よ」と妖艶に微笑んだ。
『何をいまさら、ミチルは常識の外にいるんでしょ、俺はその場所に自分も辿り着きたいんだよ』と微笑んで返した。
「覚悟は出来てるの、取り返しはつかないのよ」と美しい真顔で言った。
『出来てるつもり、そうしないと届かない者を追いかけるんだから』と微笑んで。
『だから感じたい、覚悟で失ったものを・・それにより備わったものまで』と真顔で答えた。
深いミチルの瞳の奥にある氷河の光は、拒絶の輝きを強めていた。
どれほどの覚悟で、何を失ったのか見当もつかなかった。
だが私が蘭との生活を選ぶ為には、それ程の覚悟が必要なのは感じていた。
そのミチルの本質に触れた時に震える、私は本当にそこまでの覚悟があるのかと。

氷の女神ミチル、この時ユリさんと同じ３３歳。

蘭が１０歳下の２３歳、そして私がそれより１０歳下の１３歳だった。

私の覚悟は同時に、蘭の覚悟も必要になると気付きながら、目を逸らしていた。

ミチルが教える覚悟・・それは命を賭けた愛だった。

自らの未来に背いてまでも、貫いた激情の愛だった。

氷河の輝き、今も胸に強く残る【覚悟】

最強の愛を放出した女神・・氷の暖かさ・・ミチル。

淡心

暗雲に覆われて、いつもより暗い夜だった。
全てを見下ろす天窓には、月も星も存在しなかった。
私は２０歳も年上の華奢な女性を抱いていた、影を慕いて歩く美しい人を。

「ユリは何も教えないよね、なら鋭いのかな」とミチルが妖艶に笑った。
『鋭くはないよ、そう思えない人達に囲まれてるから』と私は笑顔で返した。
「ユリカなんかと比べたら、誰でも鈍い人間になるわよ」と薄く唇だけで笑った。
『そうだね、でもユリさんとかでも相当鋭いよ』と真顔で返した。
「そりゃそうよ、でなきゃ女帝なんて呼ばれたりしないわ」と綺麗な真顔で返した。
『ミチルは女帝の道を、自分で捨てたの？』と聞いてみた。
「どうだろう・・目指してもなれなかったと思うよ」と少し考えて答えた。
『男の趣味が悪いから、酒癖悪いとか』とニヤで返した。
「酒癖は大丈夫だけど、男の趣味は悪かったね」と妖艶に微笑んだ。
『なぜ男は過去形なの？』と突っ込んだ。
「もう、６年も恋愛してないから、忘れたよ」と真顔で言った。
『そっか～、６年も・・愛するのは唯一人なんだね』と静かに聞いた、間近のミチルの瞳を見ながら。
「そう思ってるわ、そう思わせてるのかな、もう自分でも分らないのよ」と真顔で答えた。
『考えるんだ、人を好きになるのに・・俺は子供だな～』と窓を見て呟いた。

「考えないの？」と目を閉じて静かにミチルが言った、少し辛い話題になったのかと思っていた。

『最初は考えない、さっきのホノカちゃんにだって、もちろん可愛いから興味持って。

次に話してそれで感じて、また会いたいと思って、次に会った時は前より好きで。

もちろん嫌な所もあるだろうけど、そんな事気にならない位に好きが多くなって。

それを何度も繰り返して、その度に好きが増えていって。

そしたらその人が好きだと言えて、今度は側にいたくなって。

側にいても、好きの方が断然多くて、一緒に暮らして楽しくて。

それで愛してるって言える、この先は未経験の領域です』と微笑んだ。

「なるほど～、自慢じゃないけど、私もそんな時があったよ」と目を開けて、嬉しそうに笑った。

『ミチルは考えてるんじゃないもんね、自分に好きにならないように、言い聞かせるんだよね』と真顔で返した。

「多分・・そうなんだろうね、きっと」と真顔で考えて答えた。

『辛いだろ、もうやめようね・・ミチル』と意識して笑顔で言った。

「またくるしね」と妖艶ニヤで返した。

『もちろん、でも辛い話は言ってね、俺はそれは嫌だから』と真顔で返した。

「優しいのね、どうして？」とミチルも真顔で返してきた。

『次に会った時、俺は今日より絶対ミチルのこと、好きになってると思うから、ミチルが嫌じゃ寂しいから』と素直に答えた。

「２０も違う女を好きになるの？」と真顔で返してきた。

『俺、今好きな人がいなければ、この前初めて会った時、ミチルに教えてくれって頼んだよ、嘘じゃないよ』と真顔で返した。

「女として見れるの、私を」と氷の光を強め、妖艶に微笑んだ。
『もちろん、今も少しいやらしい気持ちで抱いてる』と微笑んで返した。
「いいね～、それだけの関係なら、私もいいかと今思ったよ」と妖艶ニヤを出した。
『ニヤはやめなさい、心が揺れるから』とニヤニヤで返した。
それで私は知りたかった点が１つ分った、今のが冗談と思えなかったので。
６年前の相手は、今はミチルの届かない所に居るんだと思っていた。
《今夜の収穫はこれで充分だな》と思っていた。
妖艶な笑顔の氷の輝きを見ながら抱いていた、天上の城で。

マミの時間が迫って来たので、ミチルを降ろして、又来ると言って出口に向かった。
ホノカちゃんに手を振って、エレベーター前でミチルに頭を下げて別れた。
《ユリカ～元気でやってる？後で会えるの楽しみにしてるよ～》とユリカのビルで囁いて、ＰＧに戻った。
夕立の影響で流石に客も、７割程度の入りだった。
指定席に座ると蘭がやってきた、満開ニヤをしながら。
「うふ、私とんでもない奴と、暮らしてるのかな？」とニヤニヤで聞いた。
『いかす中学生だろ』とニヤで返した。
「いかすじゃないね～、とんでもないだね～」と満開で微笑んだ。
『なんか聞いたんだ、ミスターから』とウルで返した。
「ユリさんと決めた、エースに貸し１つ」と満開に笑った、私はウルウルで蘭を見ていた。
「カスミと休み合わせて明後日になったから、よ・ろ・し・く」と満開で微笑んだ。
『了解、りゃん』とニヤで言った。

「何、りゃんって？」と少し真顔で聞いた。
『蘭の酔った時の、可愛いマリア語』とニヤニヤで返した。
「私、可愛い～」と言いながら、銀の扉に消えた。

「エース、疲れた～」と珍しくハルカが来て微笑んだ。
『今夜、ホテルでも行くか』とニヤで返した。
「優しく教えてね」とニヤで返された。
『どうやるのか、２人で研究しような』とニヤニヤ返しで応戦した。
「そんな余裕があるかしら、私のナイスな体を見て」とニヤニヤ返しで来た。
『明るくして、見て研究していいの、楽しみだ～』と深く突っ込んだ。
「降参・・想像したら照れた」と照れ笑いで、銀の扉に消えた。
《あぶなかった》と思いながら、ホッとしていた。

「研究したいのか～？」とレンが立っていた。
『レン、１８なのにその余裕はなんだ』とニヤで返した。
「ふん、子供だね～、そのぐらい私でもあるよ、可愛いから」とニヤで返された。
『手は繋いだことないのに、それがあるなんて危ないぞ』とニヤニヤ返しをした。
「そう来るのか～、なるほど勉強になるね～、ハルカに気合入れるから目の色違うぞ」と笑いながら扉に消えた。

マミの時間になって、迎えに行った。
裏階段を降りて、手を自然に繋いだ。
「今夜はどこでさぼってたの？」とマミがニヤで聞いた。
『新しい愛人のお店、ＴＯＰ３ビルの最上階、完全制覇してきた』
と笑顔のＶサインで返した。
「ミチルママ！とうとうそこまで」とマミが笑った顔に疲れの影が

見えた、その少し寂しげな瞳に私は刺された。
私は愕然としていた、私はマミの事を何も知らないと、そして向き合って会話もしていないと。
何がミチルだ、何がリアンだ、何がユリカだ・・その前にマミだろうと、自分に叱責された。
お前は間違っていると自分に言われた、その声に返す言葉すら持っていなかった。

『ねぇ、マミ・・今度ゆっくり話さない、俺考えたらマミの事何も知らない、田舎出身位しか』と真顔で返した。
「興味あるんだ〜」とニヤで返された。
『今日、ハルカにも言ったけど、ハルカがしんどくて倒れたら側にいるって、俺はマミの事も同じ位心配なんだよ』とマミの可愛い瞳を見ながら言った。
「泣かさないで！・・弱くなるから」と強い言葉でマミが私を見た、その瞳を見ていた後悔をしながら。
『泣きたい時は言えよ、側にいるから』とマミを見て言った、マミの手に力が入った。
「どうして、私はＰＧでもないんだよ」とマミが私を見た、真剣な可愛いマミを見ていた。
その言葉に私はまた撃たれた、《なぜ気付かなかった、どうして分ってやれなかった》と何度も心で繰返した。

『ねぇ、マミ、お店がどうとかは俺には関係ないよ、マミが大切なんだよハルカと同じ位ね』と優しくマミに囁いた。
「じゃあ、ユリカ姉さんみたいに階段抱っこして、私もＰＧの女性達みたいに抱っこして」と真顔で言った。
私は魅宴のビルまでマミを足早に引っ張って、抱き上げてマミを見た。
『遠慮するなよ、甘えん坊』と囁いて、『しっかり掴まれよ、マミ』

と微笑んだ。
「うん、気持ち良い」と可愛く笑ったマミを抱いて、ゆっくりと階段を登った。
マミは目を閉じて静かに抱かれていた、私はマミが愛おしく可愛かった。
そして美しくなるマミを見て、寂しかった、自分だけ置いて行かれるようで。
《ごめんねマミ、早くしてやればよかったね》と心で囁いた、マミの香りに包まれながら。
魅宴の裏扉の前で振向いて、夜街を見ていたマミを抱いたまま。
「本当に私が疲れて倒れそうな時は側にいてくれる？」とマミが目を閉じたまま囁いた。
『もちろん、大ママがどんなに反対してもね』と優しく囁いた。
「ありがとう、少し恥ずかしいから、このまま降ろして」とマミが囁いた。
私はマミを優しく降ろして、少し離れた。
『なぜ、階段抱っこ知ってるのかな？』と目を閉じたままのマミに聞いた。
「今夜の報告会で分るよ」と目を開けてニヤで言って、手を振った。
私はウルウルで手を振って別れた。

ユリカのビルを目指していた、落ち込みながら歩いていた。
《調子に乗っていた、周りが見えてなかった》と後悔していた。
「ほんとね～、気付かなかったら、どんな罰を与えようかと思ってた」と言いながら、ユリカが後から腕を組んだ。
『バカだね俺は、そして未熟だよ』とユリカに真顔で言った。
「がんばれ、私も付いてるよ、そして嬉しかった、あなたのマミに対する気持ちが」と優しく微笑んだ。
『ユリカありがとう、俺はユリカを必要としてるし甘えてるよ』と正直に囁いた。

「知ってるけど、そうやってたまには言葉にして、嬉しいから」と爽やかに微笑んで、エレベーターに乗った。
『ユリカ、大好きだよ』とユリカに真顔で言って、手を振った。
「まだ・・教えない」とユリカが爽やかニヤで手を振った、私は手を振りながらウルになっていた。

ＰＧに帰ると終演前の数組のお客だけで、よく今夜満席になったなと思っていた。
閉店２０分前に、客が引けて終礼のように１０番に集まった。
蘭が満開で手招きした、私は恐々歩み寄った。
『報告します』と言って私は蘭を見た、満開で頷いた。
『今夜ＴＯＰ３ビルの最上階抱っこを達成しました』と笑顔で言った。
「ちょっと待ってね、３つ目の最上階は」と美冬が考えた。
「まさか、ミチルママの店の子か！」と千夏が言った。
「ブー、店の子ではありません、ミチルママその人です」と蘭が満開でニヤした。
「怖い・・もうさすがに怖くなった」と千秋が言った。
「続き」と蘭がニヤで促した。
『そして反省しました、俺はミチルなんて早かったと』と真顔で言った、全員の視線が集まった。
『側にいるのに、気づいてやれなかった、反省を込めて魅宴のビルで抱っこしました』と笑顔で言った。
「やっと気付いたか、遅かったよ今回は」と蘭が満開で優しく言った。
『うん、本当にバカだった』と真顔で返した、皆の優しい視線を感じながら。
「よし、、ミチルママとマミじゃ特殊な事はないね」と蘭が千秋をニヤで見た、千秋がニヤで手を上げた。
「千秋、何でしょう？」と蘭が指名した、千秋がニヤニヤで立った。

「先日、真昼間のユリカさんのビルで、抱っこしたまま階段で最上階まで上がるのを見ました」とニヤで報告した。
「うっそ～」と言う声が飛び、全員で私をニヤで見た。
「それは凄いね～、まさかユリカ姉さんだけ特別じゃないよね～」と蘭が全開ニヤで見た。
『もちろん、マミも今夜は階段抱っこだったし、特別じゃありません』と笑顔で答えた。
「よし、ここにいる全員に階段抱っこの権利を3回授与する、疲れた時に使いなさい」と蘭が全員にニヤで言った。
「やった～」と全員が笑顔で喜んでいた、私はウルで見ていた。
「もちろん、私は無制限だよ」と蘭が満開で微笑んだ、私も笑顔で頷いた。

『1つ聞きたい事があります？』と私が蘭をニヤで見た。
「何でしょう」と蘭が笑いを我慢して、真顔で答えた。
『蘭が真昼間若い男と、腕を組んで歩いていました』とウルで言った、全員が蘭を見た。
「しかたないでしょ、豊君がどうしても組んでって言うから」と蘭が満開で笑った。
「ちょっとまって～、本当の事なの？」とカスミが私に聞いた、ハルカとレン以外全員が私の答えを待った。
『豊と浮気した』と私が大袈裟に泣き真似をした。
「え～」と言う声を、蘭が楽しそうに聞いていた。
「他には、何か有るのかい、特殊事項」とカスミが不敵で蘭を見た。
『ハルカが、短期間でこんなに綺麗になるんですねって言われて、本気で照れてました』と蘭が満開の連打で言った。
「私にも言うはず」とカスミが笑顔で立ち、「きっと私にも」と四季とユメ・ウミが笑顔で言いながら、控え室に歩いた。
私はその楽しげな背中を見送って、蘭がマミの事を聞いた時の顔を思い出した。

蘭もユリカも多分ユリさんも、それを待っていたのではないかと。
私は調子に乗っていた、全てが上手く行ってると錯覚していた。
マミの気丈な振る舞いに隠された疲れなど、気付きもしなかった。
マミがいることが当たり前だと思っていた、ＰＧに来てマミは疲れていたのだ。
当然だろういくら魅宴のマミと言っても、１７歳なのである、気疲れして当然なのだ。
誰も居ないフロアーでマミを想っていた、マミの事を何も知らない事に腹を立てていた。
どこまでも未熟な自分が惨めで、立ち尽くしていた、静寂に包まれて。

私のマミに対する感情は、不思議なものだった。

ハルカに対する、仲間意識のような感覚ではなかった。

どうしても気になる存在だった、私はその後何十年とマミとは関係が続く。

その時々にハルカに会いに行ったり、マミに会いに行ったりした。

選択理由すら自分でも分らない、ただ感覚で動いていた。

マミの魅力それは【淡さ】だった、主張しない柔らかさだった。

主張の強い夜街の女性達の中で、存在感のある淡さに魅せられた。

何色にでも染まりそうな、男心をくすぐる淡い色。

ミステリー小説で最後に現れる、意外な犯人のような存在感。

魔道師の悪戯・・授かりし淡き心・・そよ風で揺れる淡き炎。

そう【淡】とは、水に炎と書くのである。

両極を備えし者・・マミ・・。

懺悔

静寂の舞台に一人立つ者に、淡い光が迫っていた。
どんな経緯でその道を選んだのか、なぜそこに至ったのか、何も知らなかった。
ただ同じ時間を過ごしていた、そして常に元気付けられていた。
その笑顔と強く主張しない姿に、私はただ受け取っていただけだった。

ＴＶルームに戻り、マダムと松さんと久美子が待っていた。
マリアの寝顔を見てから、久美子の横に座った。
「反省しきりやな」とマダムが真顔で私に言った。
『なんか、自分のバカさにまいったよ』と真顔で返した。
「間に合ったさ、明日から最終土曜日まで、マミをお前にまかす」
とマダムが笑顔で言った。
『うん、頑張ります』と笑顔で返した。
「午後から来るから、５時に一度魅宴に送ってくれ」と笑顔を絶やさずに言った。
『俺が何教えるの？』と笑顔で返した。
「マミはこの研修が終われば、フロアーデビューする、少女らしい思い出や」とマダムが真顔で言った。
『了解、やっぱりデビューするんだ』と真顔で返した。
「明日と金曜の午後２日やる、そして夜はお前にまかす頼んだぞ」
とマダムが笑顔で締めた、私も笑顔で頷いた。
マダムの生き方を感じていた、魅宴の助けになることを進んでする生き方に。
【同じ海流に乗る、同じ深さに棲む魚】そう表現した、薔薇の言葉を思い出していた。

レンが来て、レンと久美子をタクシーまで送った。
「そんなに落ち込むなよ、調子狂って可愛く見えるだろ」とレンがエレベーターの中で微笑んだ。
『大丈夫、明日には復活するから、俺には最高の副職がついてるからね』と微笑んで返した。
「私にもいつかしてね、抱っこと少女らしいこと」と久美子が微笑んだ。
『久美子お姉さまなら、いつでもいいよ、こっちからお願いしたい』と微笑んで返した。
「少女だぞ、少女らしい」とレンがニヤで言った。
『フロアーレディーは、想像が曲がってるね』と久美子にニヤで返した。
「本当に、我が姉ながら困ったもんです、順応性が出てきて」と久美子も嬉しそうに笑った。
『レン、明日の11時は魔女で来いよ、最強の魔女の気持ちで』と真顔でレンに言った。
「選択を迫られるのか」とレンも真顔で返した。
『どう感じるかはレンの事だから分らない、ただ出しきらせると思う』とレンに微笑んだ。
「水のユリカさん、遠くで見ただけで感じた、遥かに遠い人だと」とレンが真顔で答えた。
『本当に久美子が感じた順応性が出たのか、ただ無理をしてるのか感じるさ』と微笑んで締めた、レンは頷いた。
タクシーに2人を乗せ見送ると、エレベーターから四季が降りてきた。

「蘭姉さんには断ったから、来て」と千春か私の手を握った、私は手を繋いで裏階段に連れていかれた。
『千春、どうした疲れてるのか』と笑顔で言って、抱き上げた。
「うん、少し・・なるほど気持ちいいな～」と至近距離で笑った。

『しっかり、掴まってろよ』と笑顔で返して、ゆっくりと登り始めた。
「美冬ばっかり優しくするから、すねた」と私の首筋に言った。
『9人衆皆同じさ、必要としたか、しないかでしょう』と優しく囁いた。
「私が必要としたら、美冬の時みたいに」と優しく返された。
『同じ事をするよ・・少し目を閉じてな、千春』と囁いた。
千春は少し腕に力を入れて、静かになった、私は階段の最上階までゆっくりと上がった。
最上階の踊場で、千春を抱いて、目を閉じている千春を見ていた。
千春の少し疲れた女子大生の顔があった、《無理するなよ》と心で囁いて顔を上げた。
ユリカの店の明かりが見えた、《ここまで上がれば見えるんだ》と気付いて嬉しかった。

「ありがとう、元気出たよ・・帰ろう」と千春が微笑んだ。
千春を優しく降ろして、手を繋いで階段を降りて、PGの入口で千春に手を振った。
「あと2回、すぐ使うかも」と元気な可愛い笑顔で千春が手を振った、私も笑顔で見送った。
ドアを開けると蘭が待っていた、満開に微笑んで小窓の所に引っ張った。
「罰を与える、姫に懺悔せよ」と微笑んで、私の首に腕を回した。
私は蘭を抱き上げて、小窓を見た。
蘭は目を閉じて、静かにしていた。

『マリアよ許してください、愚かな私を。
　すぐに調子に乗る未熟な私を、愛する者に心配ばかりかける駄目な心を。
　ここにいる姫に誓った想いを、もう一度申し上げます。

私は姫を愛しています、その資格が持てるように成長して。
姫を一生笑顔のある暮らしがさせれる、男になります。
それまで姫に甘える事を許して下さい』

そう言って蘭を見た、微かな震えを感じていた。
「よし、降ろして目を閉じなさい」と蘭が囁いた、優しく蘭を降ろして、私は目を閉じた。
柔らかく暖かい物がが唇に触れていた、私は嬉しくて足が少し震えていた。
柔らかい物が離れて、静寂が流れた。
「なに突っ立てるの、帰ろう」と蘭の声がした、」目を開けて蘭を見ると満開の笑顔で手を出していた。
私は蘭と手を繋いでビルを降りて、タクシーに乗った。
タクシーに乗ると、蘭が肩に乗ってきて微笑んだ。
「落ち込む必要ないよ、気付いたんだから、それで充分だよ」と満開で微笑んで、瞳を閉じた。
『ありがとう、蘭』と言って頭を傾けて、蘭の頭に乗せた、蘭の香りに包まれていた。
タクシーが着いて、蘭を抱き抱き上げた。
「私の側にいなさい、いつまでも」と言って強くしがみついた、私は蘭の優しさに元気が出てきた。

部屋に入り、蘭が化粧を落としパジャマで帰ってきた。
「しかし、罰を与える・・背中合わせで眠ること」と満開で微笑んで、ベッドに入って背中を向けた。
私は嬉しくて、電気を消して背中を合わせて、手を繋いだ。
『蘭、いつまでも側にいるよ』と囁いた、蘭の手に力が入った。
「もう寝てる・・もう寝たよ」と蘭が静かに囁いた。
私は手を離し、振向いて目を閉じてる蘭を見て、首に手を入れ腕枕で引き寄せた。

『蘭は寝つきがいいな～』と囁いて、抱きしめていた、そして額にキスをして。
『おやすみ、蘭』と囁いて蘭を見ていた、私の中で眠る蘭を。
私はかなりの時間蘭を見ていた、そして眠りに落ちた。

翌朝、暗いうちに自然に目が覚めた。
蘭は私の脇の間から顔を出して、胸の上にいた。
その可愛い寝顔を見ていた、少しづつ明るくなる空を感じながら。
時間になって、静かに腕を抜き歯を磨き、顔を洗った。
朝食はご飯が有ったので、卵焼きとロースハムとレタスにした。
「おはよ、元気でたな～悩める少年」と蘭が満開で笑った、私も笑顔で頷いた。
蘭が洗面所から戻って、満開で笑った。
「卵焼きのレベルが、日々上達するね」と微笑んで、食べはじめた。
『自分でも、才能有るかと思ってる』と笑顔で返した。
「うん、でも調子に乗るなよ」とニヤで返された。
『うん、もう乗らない・・てか乗れない』と微笑んで返した。
「マミは大切なんだよ、ハルカと同じで四天女にも私にも」と微笑んだ。
『うん、俺もハルカに向けるのと同じだよ』と微笑んで返した。
「でも、妬くからな」とニヤで返された。
『うん、でも蘭を傷つけたり、悲しませたりはしなしよ』と真顔で言った。
「うん、分ってる」と満開で微笑んだ、私も笑顔で返した。

蘭を見送り、朝の仕事をして、日記を書いた。
反省文を書いて、それで自分のけじめをつけた。
バスで出かけて、若草通りを隠れながら歩き、カスミを見ていた。
店の前の通りを掃除していた、バンダナを三角巾のように被り可愛かった。

私を見つけて、輝きながら笑顔で手を振った。
私も笑顔で手を振って、カスミに背を向けた。
靴屋を覗いて、蘭に手を振ってユリカの棲家に向かった。

合鍵でユリカの店を開けて、奥に進むとユリカが座って目を閉じていた。
私はユリカを抱き上げた、ユリカが首に腕を回して微笑んだ。
「さすが蘭だね、元気になったね」と嬉しそうに笑顔で言った。
『俺は蘭とユリカに甘えてばかりです』と微笑んで返した。
「そんな事ないよ、私も蘭も充分あなたに甘えてるから」と爽やかに微笑んで。
「ご依頼を聞こうか？」と笑顔で言った。
『１１時に一緒にＰＧに行こうよ、レンに会って、久美子のピアノを聴いて、俺がボーナス出たから、ユリカにお昼ご馳走するでどうかな』と笑顔で返した。
「素敵、今日は店の掃除いいから、抱っこ長めでよろしく」と爽やかニヤを出した。
『もちろん・・ユリカ目を閉じて、今はその方が俺は嬉しい』と囁いた。
「うん、良かった輪唱に戻ったよ」と微笑んで瞳を閉じた。
私はユリカを見ながら抱いていた、何も考えずにユリカの体温と重みを感じていた。

「それだけでいいの？」と２０分程経ってから、ユリカが私に微笑んだ。
『ごめんね、ユリカは気付いてるよね、マミの事どうかな？』と私は詳しい内容を話さずに、ユリカに聞いた。
私はマミを夜の何時間か、ユリカとリアンの店のカウンターに、立たせてみたいと思っていたのだ。
「もちろん、私はＯＫよ嬉しい提案だし、リアンもＯＫするよ」と

微笑んで。
「まぁ、今のリアンはあなたの言う事なら、何でもＯＫだけどね」とニヤで言った。
『今夜ユリカの店ＯＫでいいの？』と嬉しくて、笑顔で返した。
「もちろん、ハルカも来たければ、いつでも連れて来ていいよ」と爽やか笑顔で言って。
「あなかが考えてる程の、勉強に成るかは別だけど」とニヤで言った。
『なるよ、絶対ユリカとリアンなら』と微笑んで返した。
「あなた凄いよね、マミの源氏名私でも分からない」と真顔で言った。
『うん、内緒だからね・・ユリカにも』とニヤで返した。
「うれし～、私、初めて内緒されたよ」と強くしがみついた。
『どんな相手に？』とすかさず聞いた。
「教えない・・まだ」と爽やかニヤで返された。

１１時少し前に、ユリカと手を繋いでＰＧに向かった。
ＴＶルームにレンと久美子とハルカがいて、立ち上がって挨拶した。
「ユリカです、よろしくね」と爽やかに笑顔でユリカが言った、かなり強い静けさがあった。
レンだけ連れて、ユリカと１０番席に座った、レンは黒い魔女衣装と化粧をしていた。
『レン、子供の頃の楽しい思い出を話して、何も考えずに思い出だけ』とレンに言った、レンが真顔で頷いた。
「私は２人姉妹で、歳の差が２歳あります」までレンが言ったとき、強烈なユリカの揺り篭が来た。
「あなたはきっかけは妹さんだけど、今はどうなの？」強かった、一瞬で隣の私も揺り篭に乗った。
レンは動けずに、ユリカを見ていた、目に涙を溜めて。
「あなたは多くの人に認められたくなったの？自分が嫌いになった

の？」とレンを深海の囁きで誘った。
レンは大粒の涙を流しながら、ユリカを見ていた。
「今は決めなくていいのよ、悩まなくていいの、あなたはきっと出来るよ」と囁いた、優しかった。
レンはただユリカを見て、涙を流していた。
私も揺り篭に揺られ、そして私に向けても発せられた最後の言葉を聞いていた。

レンが落ち着くのに、かなりの時間がかかった。
「本当にありがとうございます、ユリカさん」とレンが可愛い笑顔で言った、元気な声に私は驚いた。
「ごめんね、少し言い過ぎたね」とユリカは優しく囁いた。
「全然そんなこと無かったです、考え方の間違えに気付きました」とレンが笑顔で返した。
「じゃあ、久美子ちゃんを呼んでくれる、ピアノが聴きたいの」とユリカも微笑んで返した。
「久美子まで、ありがとうございます」とレンが言って、足早にＴＶルームに向かった。
「久美子ちゃんの時は、あなたは離れててね」とユリカが私に言った、私は頷き指定席に座った。
久美子が来て、ユリカが微笑んでピアノの久美子の横に座った。

久美子がユリカを見て、鍵盤を見た時に表情が変った。
ユリカは至近距離で久美子を見ていた、優しく深い目だった。
そして久美子が初めてＰＧで弾いた曲を弾き始めた、魂の響きで。
ユリカは優しく久美子を見ながら、何かを囁いていた。
久美子の表情が優しくなり、目が潤んでいた。
そして響きが変った、魂が訴えかけてきた【寂しい】と音色が語っていた。
徳野さんも、ボーイも来た。マダムとユリさんとハルカとレンも来

た。
ユリカは久美子を支えるように、何かを囁いていた。
そして魂の響きが、【寂しい、会いたい】と言っているように響いてきた。
レンもハルカも泣いていた、ユリさんが抱くマリアが天使全開でピアノの2人を見ていた。
最後は久美子が渾身の魂を込めて、【ありがとう】と叫んだようだった。
弾き終わった久美子は、ユリカに抱きついて泣いていた、悲しい涙ではなかった。

「本当に素敵な演奏だったよ、今まで通りで頑張ってね」とユリカが優しく久美子に囁いた。
私は2人を優しく見ているユリさんに近寄り、マリアを抱き上げた。
マリアを抱いて、ユリカを見ている久美子に近づいた。
マリアが久美子に両手を手を伸ばし、久美子の両頬に触れて。
「くみこ」と言って天使全開で微笑み、久美子も嬉しそうに微笑んで頷いた。
マリアはユリカの両頬にも手を当てて、ユリカを見た。
「ゆりか！」強い言葉だった、マリアの発したとは信じられない程強かった。
「マリア」とユリカはマリアの両手を握り、深海の深い瞳で返した。
静寂だけが包んでいた、同種族の者を。
私はマリアの強い言葉で、完全に自分が戻ったのを感じていた。
ユリカのマリアを見ている、深海の瞳が潤んでいた。
誰も言葉を発せずにその2人を見ていた、美しく輝くユリカと。
純白の天使を・・・。

ユリカの力について、色々な意見を聞いた。

だが私はどれも違うと思っていた、正解など無いと信じていた。
それは考える事ではないと、ずっと思っていた。
今でもそうである、ユリカが街を出た理由は私しか知らない。
蘭も私に聞かなかった、私はユリカを今でも信じてる。
必ず聞いてくれていると、私が唯一感じるのは。
ユリカが今でも何処かで、元気に暮らしている事だけである。
だから、淋しくないよ・・・ユリカ。

心残り

静寂のフロアーに木霊したのは、寂しいとの叫び。
１６歳の本心、常に明るく前向きに努力をしてきた輝ける心。
そして最後のありがとうは、聴いている全員の心を揺り動かす程の強さで響いた。

「ユリカ・・」ユリさんが優しい薔薇で微笑んだ、ユリカも爽やかに微笑みで返した。
全員でＴＶルームに戻った、ユリカがマリアを抱いていた。
『マダム、マミを今夜ユリカの店のカウンターに立たせる、ユリカの許可は貰ったから』とマダムに真顔で話した。
「そう来るか、うんうん・・良い考えかもな」とマダムは笑顔で返してくれた。
『明日か明後日にリアンの店にも立たせる、俺に夜でしてやれる事はそれ位だから』と笑顔で言った。
「それが頼める、あなたが凄いよ、マミは絶対喜ぶよ」ハルカが私に微笑んだ。
『ハルカの分のＯＫも貰ったよ』とハルカにニヤで返した。
「えっ」とハルカがユリカを見た。
「勉強になるかは別だけど、私はいつでもいいよ」とユリカが爽やかに微笑んだ。

「ユリカありがとう、どんなに2人の勉強になるか」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「ユリカさん、ありがとうございます、よろしくお願いします」とハルカが笑顔で頭を下げた。
「エースの考えは、ハルカとマミの性格じゃ、１７歳の壁で研究する事が出来ないって思ってるよ」とハルカを見て。

「レンちゃんとかは、すぐに見に来ようと思えば、一人ででも来るでしょ」とレンに微笑んだ。
「もちろん、でもカウンターに立って見るのは世界が違うかも」とレンが真顔で返した。
「いつでもどうぞ、見てみたいなら、私はＯＫよそのままの服装でいいわよ」とユリカが優しく微笑んだ。
レンは嬉しそうに、微笑んで頷いた。

「私とリアン、真逆と言われている、その本当の意味を感じて欲しい」とユリカが微笑んだ、ハルカとレンが笑顔で頷いた。
「リアンもＯＫするかしら？」とユリさんがユリカに聞いた。
「今のリアンはエースの頼みなら、教えてと言われたら喜んで教えるでしょうね、それが心配の種です」とユリカが爽やかニヤで、ユリさんに返した。
「蘭という足枷がなかったら、危なかったね～情熱の女は」とユリさんが悪戯っ子で、私に微笑んだ。
『ユリ、又やきもちだね～』とニヤで返した。
「はい、私だけ階段抱っこの権利貰えなかったから」と薔薇でニヤ返しされた。
『仕方ない、特別に１０回分授与します』と微笑んで返した、ユリさんも嬉しそうに薔薇で微笑んだ。
そのときマリアが私に駆けてきて、私が抱き上げた。
「もち～」とユリさんをマリアが見て、天使全開で微笑んだ。
「マリア的には、母親のユリ姉さんが１番危険と判断しましたね」とユリカがユリさんにニヤをして。
「まぁ、マリア・・よく分ったね～」とユリさんがマリアに微笑んで、皆で笑っていた。

ユリカと私が、２人で食事に出かけた。
靴屋の前をユリカがニヤで腕を組んで歩いた、蘭が満開ニヤでユリ

カに手を振った。
ユリカも爽やかニヤで手を振っていた。
ユリカが行ったことが無いと言った、思い出の【四海楼】に連れて行った。
「美味しいね、ここで家出初日泣きながら一人で食べたんだ～」とユリカがニヤで言った。
『泣いてないよ、希望に満ち溢れていた、ここまでは』と笑顔で返した。
マーボー豆腐と八宝菜と炒飯を、ユリカも美味しそうに、笑顔でかなり食べた。
四海楼を出て、腕を組んでサクラさんの店に寄った。
カスミがユリカを見て嬉しそうに寄って来た、輝く可愛い笑顔で頭を下げた。

「カスミちゃん、可愛くなったね～驚いた」とユリカも爽やか笑顔で返した。
「ユリカ！・・おはよう」とサクラさんも驚いて出てきて、３人で楽しそうに話していた。
私は離れた椅子に座ってその光景を見ていた、美しい３人をお客のＯＬ２人組みが笑顔で見ていた。
サクラさんとカスミに挨拶をして、ユリカのビルまで送って、エレベーター前で手を振って別れた。
ＰＧに帰ろうとすると、手を繋がれた。
「見るなよ、昨夜の抱っこ気持ち良かったけど、今は少し恥ずかしいから」と隣でマミが言った。
『恥ずかしがり屋さんだな、マミも』と前を向いて言った。
「今日の昼の研修は？先生」とマミが私に微笑んだ。
『さぼり方の勉強、マミ映画何が見たい？』と微笑んで返した、マミは明るい笑顔になった。
「笑わない、絶対笑わないって約束してくれる」とマミが可愛く私

に囁いた。
『絶対に笑わない、約束します』と真顔で返した。
「カッコーの巣の上で」とマミが真顔で私を見た。
『なぜそれを笑うの、俺も見たかったよ、話題の問題作』と微笑んで返した。

一度ＴＶルームにマミと寄った、マダムとユリさんとマリアがいた。マミがマリアを抱いて、私の横に座った。
『それとねマミ、今夜の俺の研修は・・マミがユリカの店のカウンターに立つだから』と隣のマミに微笑んだ。
「本当に！うれし～」とマミが私に明るい笑顔で、返してくれた。
『だから、マミっぽい服で夜はここに来てね、明日か明後日はリアンの店に立ってもらうよ』と笑顔で返した。
「ありがとう、エースにしか出来ない事を、してくれるんだね」と笑顔を絶やさぬマミが言った。
『それしか出来ないから、後はどう感じるかはマミ次第やし、俺は座って側にいるから』と真顔で返した。
「うん、頑張ってみるね・・大ママには気を付けてね」と最後にニヤを出した、私はウルで返した。
「梶谷・望月の同席話、大ママは何て言っちょった？」とマダムがマミに笑顔で聞いた。
「信じられない、エースは貰うって笑ってましたよ」とマミが笑顔で返した。
『俺が同席させた訳じゃないよ』とウル継続でマミに言った。
「あら、あなたが同席させたのよ、あなたと望月さんを感じて、梶谷さんが招いたのよ」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「そうだろうな、そうでないと同席はありえない」とマダムも笑顔を私に向けた。
「大ママの信じられないは、本気だったよ」とマミも微笑んだ。
『また伝説を作ってしまった』と微笑んで返して、３人の笑顔を見

ていた。

マミと2人で手を繋いで、PGを後にして映画館に向かった。
靴屋の前で蘭が目敏く見つけて、歩み寄った。
「蘭姉さん、お借りします」とマミが蘭に笑顔で頭を下げた。
「どうぞどうぞ、マミの専用ボタンを右胸に作ったから」と満開で微笑んだ。
「本当ですか、嬉しい～、いざという時は押してみます」と可愛い笑顔で蘭に言った、蘭は満開で微笑んでいた。
蘭に手を振って別れた、蘭が最後に満開睨みで私を見た。
1時45分上映の【カッコーの巣の上で】をマミと手を繋いだまま観た。
私は引き込まれて観ていた、ジャック・ニコルソンに感情移入して。
難しい内容を必死に考えて、字幕を読みながら入っていた。

「難しかったけど、面白かったね」とマミが映画館を出ながら微笑んだ。
『うん、面白かった、俺、アメリカ～行くな多分』とマミに笑顔で返した。
「行きそうね～、蘭姉さんと離れるよ」とマミがニヤで言った。
『連れて行くさ、蘭と離れる選択は俺には無いよ』と微笑んで返した、マミも嬉しそうに微笑んで頷いた。
水槽の喫茶店に入り、マミがアイスコーヒー私がレモンスカッシュを頼んだ。
「ちょっと、水槽多すぎて気持ち悪いね」とマミが微笑んだ。
『俺も最初からそう思った、魚は海か川にいるもんだよね』と笑顔で返した。
「私のお父さん、板前だから、魚はまな板に乗ってるもんだと思ってるかも」と可愛く笑った。
『お父さん、板前さんなんだ～素敵だね』と微笑んで返した。

「青島の〇〇ホテルの板前だよ」と有名ホテルの名前を出して、微笑んだ。
『お母さんは？』と笑顔で聞いた。
「パートで同じ所に行ってるよ、昼間客室掃除に」と微笑んで返した。
『マミ姉さんは兄弟は？』と笑顔を意識して聞いた。
「弟が一人、あなたの２つ上だよ」とマミも笑顔が絶えなかった。
《なぜ大ママの所に来たのだろう、でも焦って聞いたら駄目だな》と思って微笑んでいた。

「聞きたい光線が出てるよ」とマミがニヤして私を見た。
『聞きたいな～、そんな普通の家庭の子が、なぜ１７で大ママの所にいるのかが』と真顔で聞いた。
「私大ママの姪っ子なのよ、大ママが私の父の妹」と笑顔で言って、少し真顔に戻し。

「私、高校を一ヶ月で挫折して、不登校になって部屋に閉じ篭もってたの。
そんな生活をしてたら、大ママが私の部屋に来て。
遊んでるなら店を手伝えって言われて、強引に引っ張って魅宴に連れていかれたの。
最初は嫌々やってたけど、ケイに会って変ったの。
ケイの必死でやる姿を見て、私は何をやってるのかって思った。
それから必死でやって、この世界で生きようと思うようになったのよ」

マミは最後は笑顔で締めた、私も笑顔で頷いた。
『俺もケイには勇気を貰ったよ、それと取組む姿勢に影響を受けた』と微笑んで返した。
「凄いよね～、私ケイに会わなかったら、どうなっていたのか分ら

ないよ」とマミが真顔で言った。
『お父さんもお母さんも賛成してるの？』と笑顔で聞いた。
「うん、お父さんは妹の言う事だから、お母さんも大ママと仲良しだからね」と可愛く笑った。
『じゃあ、今のデビュー前のマミの心残りは、高校の挫折なんだ』と真顔で突っ込んだ。
マミが私を真剣な目で見た、私の好きなマミの瞳の淡い光が強まった。
マミが私の右の胸を押した、私は黙って真顔で頷いた。

「私、親友と一緒に○高校に進学したの、汽車で南宮崎駅まで乗って通学してたの。
その親友が入学2週間目に、一年先輩の地元の高校生に、青島駅を出た所で乱暴されたの。
その子は部活をしていて、帰りは一人だったのよ。
でも被害届を出したら、その子がまだ傷つくって事になって。
その先輩の家も地元の有志で、親も金を詰まれて示談にしたのよ。
その子は福岡の親戚の家に移って、今は福岡で高校生をしてるよ。
私はどうしてもそれが許せなくて、その先輩の顔も見たくなくて、不登校になった。
今でも許せない、どうしても許せないの。
その気持ちがまだ抜けないのよ、それだけが心残りなの」

真顔で真剣な目でマミは語った。
『そっか～、それは許せないね・・許したらいけないね』と私も真顔で言って。
『きちんとそいつに、マミのケジメをつけに行こうよ』と真顔のまま言った。
「言えるかな、私が」とマミが淡い炎を強めて言った。
『言えるよ、魅宴のマミだろ・・女帝の秘蔵子だろ』と強めに言っ

た。
「手を出さないって、約束してくれる？」と私に真顔で囁いた。
『俺はＰＧのエースだよ、手なんか出さないよ』と微笑んで返した。
「ＯＫ金曜日の１２時、宮崎駅に集合でいい？」とマミも笑顔で言った。
『もちろん、水着持って来いよ、サーフィン教えてやるから』と笑顔で返した。
「楽しみになってきた～」とマミが可愛く笑った、覚悟を決めた表情が少し遠くに感じた。
マミと手を繋ぎ、魅宴のビルで手を振って別れた。

ユリカのビルを見上げた、空には青空が広がっていた。
《ユリカ、今夜会えるね、俺の横にずっといていいよ～、後で行くね～》と囁いてＰＧに戻った。
ＴＶルームを開けると、マダムとユリさんとミチルがいた。
『ミチルママ、おはようございます』と笑顔で頭を下げた。
「エースがママを付けるな、母親みたいな響きになるから」とミチルが艶やかに笑った。
『そうだね、ミチル・・俺に会いたくなったのかい』と大人っぽく言いながら、横に座った。
「そうなの、愛人話進めようと思って・・今、蘭の所に寄ってきたのよ」と艶やかニヤを出した。
『何の許可もらいに？まさかその関係だけ貸してっとか』とニヤニヤで返した。
「それも言っとけば良かった、夕食に貸してって言っただけ」と楽しそうに笑った。
『それはラッキー、ご馳走になります』と笑顔で返した。
「肉？魚？」と楽しそうなミチルが聞いた。
『ミチルには遠慮しないでよさそうだから、寿司』とニヤで言った。
「了解、食べたことも無い、美味い寿司食べさせてやるよ・・この

前のお礼に」と艶やかに微笑んだ。
マダムもユリさんも、この会話を笑顔で聞いていた。

「ミチルの所ね、今度のお祭り・・ホノカちゃんって子を出して、勝ちにくるそうよ」とユリさんが薔薇で私に微笑んだ。
『わちゃー、最強のライバルやホノカちゃん、歳はいくつなの？』とミチルに笑顔で聞いた。
「もうすぐ２０歳だからＯＫだって、ＰＧから凄いのが出るって昨夜リアンが来て、ホノカの前で話したから」と楽しそうに笑い。
「そうしたら、ホノカに火が点いて、出るって言い出したよ・・リアンの作戦みたいだったよ」とミチルが艶やかに微笑んだ。
『リアンは本当に、蘭が可愛いんだな～』と微笑んで返して。
『ミチル、今夜蘭とカスミの２人、仕事終わりに連れて行っていい？』と笑顔で聞いた。
「もちろん、楽しみだね～、ホノカにもかなりプラスになる出会いなんだろ？」とミチルも笑顔で返してきた。
『多分、同じ歳だし、仲良くなれると思うよ・・さすがリアンだよ』と微笑んで返した。

「ユリ、この子ちょうだい」とミチルがユリさんに妖艶ニヤを出した。
「それだけは出来ません、ＰＧのエースだからね」と私が初めて見る、薔薇のニヤで微笑んで返した。
「いいよね～ＰＧ、噂以上ですねマダム、四天女が１つになってる感じがして」とミチルがマダムに微笑んだ。
「お前も入ってるじゃないか、ワシは今でも自分では、五天女だと思っちょるよ」とマダムが言って。
「お前が出会った、そのホノカを見に祭りに行くよ」とマダムが笑顔でミチルに返した。
「ありがとう、マダム」とミチルも笑顔で頭を下げた、マダムとユ

リさんの優しい笑顔があった。
ミチルが来てくれたのが、私は嬉しかった。
そして蘭に会いに行ってくれたことが嬉しくて、ミチルの笑顔を見ていた。
マリアの寝息を感じながら・・・。

リアンのホノカへの誘いの意味を感じていた。

私はそこまで感じなかった、それを聞いて分った。

カスミに足りない者、そして多分ホノカにも足りない者。

その後、カスミとホノカはお互いに刺激しあう、互いに輝きを増すために。

この2人は友達と言うより、戦友という感じだった。

圧倒的な存在感のある、仲間になっていく。

【銀河の奇跡　カスミとホノカ】その称号が始まる夜が近づいていた。

リアンが描いたシナリオ通りに、蘭がＮＯ１の頃の気持ちに、帰れる日も迫っていた。

カスミの光の速さの成長が始まる・・輝きを追い越して。

バランス

まだ陽が高い真夏の夕方、暑さの和らぐ気配すらない通りを歩いていた。
和服の美しい、女としての盛りの時期を向えている女性に、腕を組まれて。
通りの呼込みさん達が、珍しい物を見るように微笑んでいた。

『やっぱり有名人ですね～』と真横のミチルに微笑んだ。
「あなたがでしょ、私がここを歩くのが珍しいのよ」と妖艶に微笑んだ。
『和服良いですよね～、ママって感じで』と正直な感想を言った。
「面倒くさくないから、洋服は選ぶの面倒なのよ」と口元だけ笑った。
「珍しいカップルが歩いてるね～、ミチルその子は私が狙ってるからね」と大ママが後から言った。
２人で振り返り、笑顔の大ママを見た。
「大ママご無沙汰しています」とミチルが笑顔で頭を下げた。
「本当にご無沙汰だね～、今でも綺麗やね～ミチル」と大ママも笑顔で返した。
「もう歳ですよ、ユリのようにはいきません」とミチルも妖艶に微笑んで返した。
「なに謙遜してるんだい、２０歳も下の男と腕組んでて」と楽しそうに大ママが笑った。
「愛人にしようかと、今誘惑中ですの」とミチルも最高妖艶笑顔で笑った。
大ママはその表情を嬉しそうに見て、私を見た。
「マミに魔法をかけてくれて、ありがとな」と私に微笑んだ。

『なにもかけてませんよ』と微笑んで返した。
「今夜からの研修も最高だよ、お前にしか頼めないからね・・気をつけな、ミチルの誘惑は怖いからね」と私達に微笑んで背中を向けた。
「怖いのよ～、どうする？」とミチルが妖艶ニヤで私を見た。
『楽しそうだ、頑張ります』とニヤで返した。

寿司屋は門構えから立派で、高級店の雰囲気を強烈に演出していた。ミチルが入ると女将らしい人が出てきて、綺麗な和風庭園が見える個室に案内された。
『凄いな～、成功者の場所だね』と笑顔でミチルに言った。
「金さえ払えば、誰でも来れるよ」と庭を見ながらミチルが言った。
『その襖を開けると、布団が敷いてあるとか・・時代劇みたいに』とニヤで聞いた。
「しまった、それ頼んどけば良かったわ」と妖艶ニヤで返された。

大きな一人分の皿に、握り寿司が綺麗に盛り付けられて、テーブルに運ばれた。
「飲み物はお茶でいいの？」とミチルが聞いた、私は笑顔で頷いた。
『見た目も味の一部だね』と初めて本物の寿司屋で食べる、寿司の味にに感動して、笑顔で言った。
「そう言うことよ、大切なのは気分も含めてでしょ」とミチルが微笑んで返した。
『でも嬉かったよ、ミチルが誘いに来てくれて』と正直に返した。
「私も少し、あなたに抱かれて考えたから」と氷の光を強めた。
『前向きに、現状維持に？』と真顔で聞いた。
「前向きはまだ無理だね、でも後ろ向きじゃないよ」と綺麗な真顔で、口元だけで微笑んだ。
『なら良かった、出会って何も無いじゃ、いくら歳の差があっても辛いから』と笑顔で返した。

「この前より好きになった？」とミチルがニヤで聞いた。
『俺、ミチルにも嘘は言わないよ・・好きになったよ』と笑顔で答えた。
「私も・・そうだよ」と綺麗な笑顔で囁いた。

『どうしてミチルはバランスを気にするんだろうね、確かに大切な事だけど、意識してやる事なのかな？』と笑顔で聞いてみた。
「意識してないと、尚更・・辛いからかな」と真顔で答えた。
『そっか～、俺サーフィンやるから、バランスってどっか波任せのイメージが強いのかな』と笑顔で言った。
「あれはバランスのスポーツだよね、考えないの立ってる時とか？」と興味を持ったのか笑顔で返してきた。

『うん、バランスは考えない、楽しむ為にはそれは考えないよ。
ただ波の強さと向きを感じたいと思ってる、2度と同じ波は来ないからね。
強い波も、優しい波も、結局は海水なんだよ。
そう思うと楽しめるよ。
最初の頃は上手くなりたいって必死で考えたけど、それじゃあ楽しくないし。
結果上手くはならなかった、楽しもうと思ったら自然に上手くなったよ。
楽しんだら、バランスが良くなったんだよ』

最後は笑顔で答えた。
「何でだろう、何故か響くよね～」と嬉しそうに笑った。
『子供と接してないから、響くような気がするんじゃないの？』と笑顔で返した。
「でも今意識して、楽しめって言ったよね」と真顔で返した。
『うん、本音を言うと・・今のミチルがもったいないと思ってる』

真顔で。
『絶対に美しいし、気持ちも優しい人だと感じてるから、自分を縛ったまま時が経つのを見るとね』と微笑んだ。
「もったいないか～」とミチルが笑った。
『ミチルがその事に縛られるのは、仕方ないんだろうけど、時は戻らない・・だからもったいないような感じかな』と感じた事を、真顔で言った。
「例えばあんたなら、どうやって考えるの？」とミチルも乗ってきて、笑顔が出ていた。
『目を閉じて瞑想する、2人の自分を出して話し合わせる、一人は完全なる素直な自分でね』と笑顔で返して。
『それで結局、結論出なくても、なんか少し楽になるから・・子供でしょ』と微笑んだ。
「OKやってみる、抱っこお願い」とミチルが妖艶に微笑んだ。
私はミチルを抱き上げて、庭を見ていたミチルの温度と重みを感じながら。
ミチルは目を閉じて、静かだった。
閉じた目に力が入ってなかったので、安心して抱いていた。

「なるほど、ありがとう・・良いこと教わった」とかなりの時間が経って、ミチルが目を開け微笑んだ。
『やりたい時は、いつでも言ってね・・ミチル抱っこするの好きだから』と笑顔で返して、ミチルを優しく降ろした。
「今夜の飲み代はサービスでいいよ、ホノカにも良い事なら大歓迎だから」と妖艶を戻して笑った。
『うん、ありがとう・・ホノカとカスミ俺も楽しみだよ』と微笑んで返した。
「それに蘭まで来て、ホノカだけじゃなく、女の子全員ぶっ飛ぶよ」と嬉しそうに笑った。
『やっぱり蘭は、有名人だね～』と微笑んだ。

「当然だよ、伝説の副職だからね・・あなたは常識の外に出ないと、年齢的には確かに厳しいね」と言って。
「でも、それに値して余りある女だよ、蘭なら」と最後は妖艶に微笑んだ。
『うん、だから今後もミチルにも、お世話になります』と嬉しくて笑顔で返した。
「私があなたに教えられる事は、全て教えてあげるよ」とニヤで返された。
『ニヤはやめてよ、心が揺れそうだから』とニヤで返して、店を出た。
ミチルにお礼と、今夜のお願いをもう一度言って、手を振って別れた。

私は呼込みさんに冷やかされられながら、ＰＧの下で蘭を待っていた。
蘭が歩いて来るのが見えて、笑顔で手を振った。
蘭も満開で笑って、手を振りながら足早に近づいた。
「可愛いことして、何か後ろめたい事があるのかな？」と蘭がニヤで言った。
『階段抱っこで、確かめる？』とニヤで返した。
「もちろん、そうします」と言って首に腕を回した、私は優しく抱き上げた。
『ＰＧの裏階段は、やっぱり目立つな』と言いながら、裏階段を登った。
ＰＧを過ぎて、少し汗ばみながら頂上に着いた。
蘭は目を閉じていた、爽やかな南風が蘭の前髪を揺らしていた。

『蘭、今夜招待する、蘭とカスミを』と囁いた。
「素敵～、どこに・・そしてなぜ？」と満開で聞いた。
『ミチルママの店、リアンもそうしようとしたみたいなんだけど』

と蘭を見た、満開で頷いた。
『ミチルママの店のお祭りに出る、ホノカちゃんってカスミの同じ歳の子と、カスミを会わせてみたい』と微笑んだ、蘭は満開継続中で頷いた。
『絶対、カスミもホノカもお互いプラスになると思った、リアンの話を聞いて』と笑顔で言った。
「素敵ね～、ありがとう」と満開でしがみついて、「そんなにホノカ、可愛いのかい？」と首筋に言った。
『ＰＧにはいない感じ、どっかお嬢様的な美しさ』とニヤ囁いた。
「私は、お嬢様じゃないの？」と蘭がウルできた。
『蘭、俺は蘭には絶対嘘は言わない、お嬢様系ではない』とニヤニヤで返した。
「飲んでやる、酔ってやる」と満開ニヤで返された。
『うん、りゃん』と笑顔で返した、蘭も満開で微笑んでいた。

『それとね、今夜マミをね・・・』ユリカの店で研修する事と、リアンの店の事を話した。
「それも素敵、よく出来ました・・そしてあなたにしか頼めない事よ」と満開で返された。
『うん、リアンとユリカに感謝です』と微笑んで返した。
「うし、元気満タンになったし、カスミは内容言わずに誘っとくね」と言った、笑顔の蘭を優しく降ろした。
『お金は気にしないでね、ミチルママが今夜はサービスでいいって言ったから』と微笑んだ。
「何したのかな～、ミチルママに？」と蘭がニヤをした。
『お寿司屋、個室抱っこ』とニヤで返した。
「沢山する事が増えたね～」と満開で笑って、手を繋いでＰＧに向かった。
蘭が準備に行き、私はＴＶルームを覗いた。

レンとハルカと久美子が楽しそうに話していた。
「今日はマミと、午後どこで研修したのかな？」とハルカがニヤで聞いた。
『カッコーの巣の上で』と笑顔で答えた。
「いいな～、面白かった？」とレンが聞いた。
『難しい内容だけど、面白かったよ』と笑顔で返して、『ハルカ、ローズに少し行ってきていいかな？』と聞いた。
「もちろん、レン姉さんと私の分も頼んでくれるなら」とハルカが笑顔で返した。
『了解、久美子の最後の曲は聴きたいから、それまでには戻るよ』と笑顔で言って、足早に出かけた。

ローズに入ると、女性が2人カウンターの中で準備していた。
「今晩は、エ～ス」と2人が微笑んだ、どちらも宴会の時にいた女性だった。
『今晩は、リアンはまだ？』と笑顔で聞いた。
「もう来るよ、座って待ってて」と微笑んだので、カウンターに座った。コーラを出してくれた。
「どうしたの、何かあったのかな？」と興味津々光線で聞かれた。
『リアンにお願いがあって来たの』と笑顔で返した。
「リアンさん何でも聞くよ、あなたの頼みなら」と楽しそうに微笑んだ時に、リアンが入ってきた。
リアンが後から抱きついて、胸を背中に押し当てた。
『素敵なサービスだ』とリアンに言った。
「どうしたの？嬉しい来店」と耳元に囁いた。
『まず最初はリアンに会いたかった、それとお願いがあるの』と横に座って腕を組んだリアンに言った。
「ど～んと来なさい」と獄炎で微笑んだ。
『実は魅宴のマミと、ＰＧのハルカとレンをね・・・』リアンに説明した。

「ＯＫよもちろん、それが何かの勉強になるなら」と獄炎で笑った。
『絶対になるよ、ユリさんも蘭も言ったし』と笑顔で返した、リアンも笑顔で頷いた。
「エースもいるんでしょ？」とニカできた。
『もちろん、カウンターの隅で気配消します』とニヤで返した。
「うれし～」とリアンが言って抱きついた、私は立ってリアンを抱き上げて。
『お礼にエレベーターまでサービス』と微笑んだ、リアンは嬉しそうにしがみついた。
一人の女性がドアを開けてくれ、礼を言って外に出た。
バルコニーでリアンを見ていた、目を閉じて静かだった。
元気そうで、安心してエレベーターまで歩いて、優しくリアンを降ろした。
「明日、マミちゃんを連れて来てね」とリアンが微笑んだ。
『よろしく、明日ね～』と笑顔でリアンに手を振って別れて、足早にＰＧに戻った。

フロアーに行くとマミが、ハルカの指定席に座っていた。
久美子は静かで優しい曲を弾いていた、マミはそれに聴き入っていた。
少し化粧の濃いマミは大人の女を演出して、そのアンバランスな可愛さと相まって輝いていた。
《やっぱり淡いよな～、その魅力・・淡い色彩》と思って見ていた。
「見惚れてるでしょう、マミちゃまの大人っぽさに」とマミが前を見たまま微笑んだ。
『マミも、ハルカ並の視野を持ってるのか』と微笑んで返した。
マミが久美子を見たまま、微笑んで頷いた。
その時久美子のピアノが止まった、久美子は深呼吸して鍵盤を見た。
集中した良い表情だった、マミも久美子を凝視していた。
久美子がその日の最後の曲に選んだのは、初めから終わりまで激し

さの続く曲だった。
久美子の表情は楽しそうで、狂おしく舞いながら弾いた。
汗を飛ばし、笑顔で虚空を睨み、そして腰を浮かせて最後を弾いた。
最後は叩きつける感じで、違う世界に久美子だけいた。
終わった時に、久美子は満足感で自然に笑顔で鍵盤を見ていた。
全員の拍手の中、我に返り可愛い笑顔になり頭を下げた。

「感動したよ、凄かった～」とマミが私に微笑んだ。
『うん、凄いよ久美子も・・ユリカも』と私は感じたままを呟いた。
久美子の音色は少し変った感じがした、何かを手に入れて幅が広がった感じだった。
マミの淡い炎がそれまで見た事が無いほど、強くなったいた。
存在感も淡いという圧倒的存在感、淡い色に惹かれ続ける男心。
私はこの日のマミを見て、寂しさを抱いていた。
マミが遠くにいるような、どこか切ない淋しさを・・。

マミの研修で私が目撃する、マミの魅力の根源。

それは私のイメージが、浅かったと感じさせる。

主張しないという淡い主張、そして芯の強さ。

マミは魅宴のＮＯ１に２２歳で成る、それこそが【生きる伝説】と呼ばれた所以だ。

どうしても逢いたくなる、その淡き心と笑顔。

忘れられない思い出を映写する、その姿・・・忘れられない。

男心

その姿は何故か気になる、どうしても目で追ってしまう。
同じ金を支払うなら、同じ時間を費やすなら。
そう考えた時必ず現れる淡い色彩、染まらずに進む永遠の淡さで。

久美子がピアノを片付けて、私の所に来た。
「感想は、エ～ス」と可愛く微笑んだ、汗が滲む額を晒し輝いていた。
『なんか新しい物を手に入れた感じだね、柔らかい場面が感触まで伝わる感じだった』と感じたままを言葉にした。
「なるほど～、ユリカさんの言うとおりだね、今後も感想聞くからよろしく」と微笑んでＴＶルームに戻った。
「凄いよね～、その変換方法・・手法かな勉強になるよ」とマミが微笑んだ。
『これしかないからね、マミこっちに椅子持って来て』と笑顔で招いた。
マミが椅子を持ってきて、私の横に座った、私は基本的なサインを教えた。
「いいの！サインなんか教えて」とマミが美しい真顔で私を見た。
『いいんだよ、マダムもユリさんも、何も隠さなくていいって言ってたから』微笑んで返した。
「ＰＧの研修では、サインが1番勉強になるのよ、魅宴のと比べられない位に発達してるから」と嬉しそうに笑った。
『時間無いから、基本しか無理だけど、サイン分って見ると世界が違うよ』と笑顔で説明をした。

その時にユリさんが入ってきて、女性の円が出来た。
「今夜も開演しましょう」の言葉に、「はい」のブザーが鳴った。

『じゃあマミはここに座って、リクエスト来たら聞いてね』とマミに微笑んだ。
「了解、何時に出るの？」と笑顔で聞き返した。
『9時少し前にに出よう、それから帰る時間まで頑張って』と笑顔で返した。
「うん、本当にありがとう」と淡い光で微笑んだ、私も微笑んで頷いた。

「今夜、すっごく嬉しい招待ありがとう」とカスミが輝きながら笑った。
『カスミと長く一緒にいたいの』とニヤで返した。
「やめろよ、可愛いのは・・倒れるぞ」と不敵で返して。
「何か楽しみなんだけど、蘭姉さんの笑顔がそう思わせた」とニヤ微笑んだ。
《可愛さと美しさを使い分けてる、変化が速すぎる・・でも自然だ》と関心して見ていた。
『俺が考えたんじゃないよ、リアンにヒントを貰ったんだ、カスミに贈り物をね』とニヤで返した。
「楽しみ～、絶対に親父さん説得して、ここに居ろよな・・私が寂しいから」と最後は私の決め台詞を真似て、輝きながら微笑んだ。
カスミの背中を見送っていた、マミもカスミを見ていた。
「確かに、ぼやぼやしてたら、カスミ姉さんの一人天下になるね」とマミがフロアーを見て言って。
「私達世代のＴＯＰ候補ＮＯ１だよ、ハルカの言った通りだな～」と私を見て微笑んだ。
『カスミは競う相手が強ければ強いほど、レベルが上がるんだよ』と言って。
『今は年下に強敵が揃ってるから、レンとハルカと、そしてマミがね』と微笑んで返した。

「私も入ってると、本当に思う？」と綺麗な真顔で聞いた。
『俺はカスミの付き人だよ、その目を見れば分る、マミの事凄く意識してるよ』と笑顔で返した、マミも嬉しそうに笑顔で頷いた。
「絶対言わないから私には教えて、贈り物は何？」と可愛いニヤで来た。
『カスミに足りない最後のピース、同じ歳の強いライバル』とニヤで返した。
「いるんだ～、夜街も広いね～」と嬉しそうに笑った。
『いるよ、圧倒的な人・・ミチルの店のホノカ、覚えといた方がいいよ』とニヤで返した。
「了解、ＰＧの研修に来て本当に良かった～」と微笑んだ。
『俺は大ママに頼もうと思ってる、ハルカの魅宴の研修をね』と微笑んで返した。
「エースが付人で来るなら、絶対ＯＫよ」とマミも笑顔で返してくれた。

私はレンが準備してくれた、タバコと予約表をチェックした。
レンに笑顔で【ＯＫ】のサインを出した、レンも微笑んで【了解】で答えた。
その日から客の入店も、お盆前のペースに戻ってきた。
８時３０分に８割の席が埋まった、マミはサインを確認しながらフロアーを見ていた。
女性達はレンを慣れさせる為に、内々にサインを繋ぎ私は暇だった。
レンは覚えが早く、すでにサインは私と同じ位に理解していた。
マダムの声が後からした、振返るとマダムが笑顔で手招きをした。
私が奥に歩み寄ると、１万円を差し出して微笑んだ。

「梶谷・望月同席ボーナス、マミにも金がいるやろ」とマダムが笑った。
『ありがとう、マダム』と笑顔で受け取った。

「ユリが久しぶりに別の笑顔が出てたぞ、ミチルの変化が嬉しいのさ」とマダムが言って。
「ワシも期待しちょるぞ、ミチルボーナスを払うのをな」と笑顔で言って、マミの所に行った。
私は蘭にサイン、【行きます】と出して微笑んだ、蘭も満開で微笑んで頷いた。
マミと2人で裏階段を出て、手を繋いだ。

『マミ、緊張してるな』とニヤで言った。
「それはするでしょう、ユリカさんの店に立つんだから」と微笑んで返した。
『まぁね、ただ突っ立ってる訳にはいかない状況を、期待してるよ』とニヤニヤで返した。
「見てなさい、マミちゃまの実力」と笑顔で返してくれた。
ユリカの店を開けると、BOXに2組カウンターに2人組みと、単独の客が2人いた。
《いきなり最高の展開・・さすがユリカ》とニヤした、それを見てマミもニヤで返した。
ユリカが笑顔で迎えに来て、若いスーツの2人組の前にマミを立たせた。
ユリカが笑顔でマミを紹介して、マミが淡い炎を強めて可愛く笑って頭を下げた。
私はカウンターの一番手前の席に座り、そのマミの初めて見る笑顔を驚きながら見ていた。
若い男性客は嬉しそうにマミに話かけていた、マミも笑顔で返して盛り上がりだした。

「研修の必要ないね、さすがね魅宴のマミちゃん」と言ってユリカの店の、可愛い女性がコーラを出してくれた。
『俺も驚いたよ、大ママは厳しいんだね〜』とニヤで返した。

「怖そうだね～、ユリカさんは優しいって言ってたけど」と可愛く微笑んで、単独客の間に戻った。
《さすがユリカ、女性も凄いのを揃えてるな～》と感心して、マミを見ないように声だけを聞いていた。
マミは勧められた水割りを飲みながら、歳は１９歳と誤魔化して会話を弾ませていた。
《マミの方が受入れやすいんだな～、ハルカならどうするのか楽しみだ～》と一人でニヤニヤしていた。

「エース私と一緒なら、ＢＯＸにマミ連れ出していい？」と後からユリカが言った。
『もちろん、願ったり叶ったりです』と振向いて笑顔で返した、ユリカの仕事中の美しい笑顔に見惚れていた。
若い２人組みが立って、ユリカとマミで見送り、戻るとそのままＢＯＸに２人で入った。
マミのそつのなさに驚いていた、デビュー準備完璧だな～と関心していたら、背中を叩かれた。
振向くとキングが笑顔で立っていて、その後に大ママが笑っていた。
私も笑顔で返し、キングと大ママの後ろに続いて奥のＢＯＸに座った。

「お前の考えが怖いよ、そしてそれを頼めて了承を得る事がな」とキングが対面で笑った。
『必要無いほどのレベルだよマミは、ユリカもＢＯＸに連れ出したし』とキングと大ママに笑顔で返した。
「エース、本当にありがとう、マミにはどれだけ大切な経験か分らないよ」と大ママが笑った時に、ユリカが私の横に立ち２人に挨拶した。
「ユリカ、本当にありがとう」と大ママが笑顔でユリカを見た。
「勉強になってもらえば、嬉しいですよ私も」と爽やかな笑顔で返

した。
飲み物が揃い４人で乾杯をした、全員笑顔だった。
「もう私がいなくても、ＢＯＸでも全く問題ないですよ」とユリカが２人に笑顔で言った。
「来週の金曜が大安だから、その日にマミの魅宴デビューをするからね」と大ママが言った。
「よし、俺が小僧を同伴しよう、いいよな小僧」とキングが笑顔で言った。
『もちろん、キングあと3人いいかな～？』と笑顔で聞いた。
「いいぞ～、誰や？」とキングが楽しそうに聞き返した。
『ユリさん・リアン・そしてユリカ、キングの誘いならＯＫでしょ』とニヤで返した。
「ユリとリアンはお前から話せよ、ユリカはどうだい？」とキングがユリカに微笑んだ。
「嬉しいです、もちろん同伴させて頂きます」と深い目で微笑んで、頭を下げた。

「エース・・お前は、ありがとな・・幸せだよマミは」と大ママが真顔で言った。
「ハルカもマミも、俺には特別だから」と微笑んで返した。
「最高よ、輪唱が分らない位のレベルになってきた」とユリカが私に腕を組んで、笑顔で密着した。
「ユリカ、最近独り占めしてるでしょ、私が狙ってるんだからね」と大ママがニヤできた。
「大ママ、梶谷さんと望月さんの同席話、かなり堪えてますね～」とユリカが爽やかニヤで言った。
「そうなんだよ、梶谷さんに直接言えないし」とユリカにニヤで返した。
「言ってるのと同じじゃないか～、それじゃあ」とキングも楽しそ

うに笑っていた。
『キング、この前ミスターが何の話したの？』とウルでキングに聞いた。
「それは言えない、俺とユリと蘭の大切な秘密だから」とキングが笑顔で言った。
『ユリカ教えて』と真横のユリカにウルで聞いた。
「化物みたいに言わないの、そんな事は分かりません」とユリカが笑顔で、私の鼻を優しく抓った。
「進化するな～、早過ぎないかユリカ」とキングが楽しそうに言った。
「まだエース限定ですから」と爽やか笑顔で返した。
「やっぱりお前が怖い、ユリカにリアンそして蘭・・贅沢すぎるぞ小僧」とキングが楽しそうに笑った。

「最近、ミチルとも絡んでるんですよ、今日ミチルを見て驚きましたよ」と大ママがキングに言った。
「やっと行ってくれるか、俺はミチルが前向きになったら、何でも言ってくれていいぞ」とキングが真顔で私を見た。
『キング、ミチルの店には何故行かないの？』と真顔で返した。
「俺が行くと、今はまだ辛いことを思い出すからだよ」と優しい目でキングが言った。
『そっか～、俺は年齢差的にも何も出来ないけど、ミチルに教えてもらいたいんだよ』
『覚悟の意味と、それにより失う物と持たされる物をね・・俺にもその覚悟が必要だから』とキングに真顔で言った。
「お前まさか、その事をミチルに言ったのか？」とキングも真顔で返した。
『うん、自分が教えられる事は全て教えてくれるって、今日約束してくれたよ』と笑顔で返した。
キングも笑顔になって右手を出した、私は意味が分からずに手を出

して握った。
「それで、充分だよ・・そこまで持って行けただけでも、お前は凄いんだよ」とキングが笑った。
大ママもユリカも笑顔で私を見ていた。

「ミチルママの心の変化を少し感じて、私は今日感動してたよ」と抱きつきながら、ユリカが言った。
「復活を待ち望んでるんだよ、四天女は全員ね」と大ママも微笑んだ。
『そんな感じは、ユリさんの笑顔で感じた・・初めて見る仕事から最も遠い笑顔だと思った』と感じたままを言葉にした。
「そりゃ～、ユリの嬉しさは格別だよ、それもあんたが引き出したのなら、2倍嬉しいはずだよ」と大ママが言って、キングとユリカが頷いた。
『ユリカ、どうしたの？』私は胸にいるユリカの涙を見て、驚いて聞いた。
「最高の時が来たのよ、初めて心と言葉が重なった人に出会えて」と私を見て優しく笑った、私は笑顔でユリカを見ていた。

BOXの客が立ち、ユリカが立って見送りに出た。
ユリカとマミが戻ってきて、私の横にユリカが、その横にマミがキングに挨拶をして座った。
「ユリカさん、最高の経験ありがとうございます」とマミが頭を下げた。
「何も出来ないけど、リアンの店に立った時に感じてね、その感想を期待してるから」とユリカも笑顔で返した、マミも嬉しそうに笑顔で頷いた。
「大ママ、私・・1つだけの心残り、自分にケリを付けて来ます」とマミが大ママに真顔で言った。
「本当かい、決心がついのたかい」と大ママが弾む声で返した。

「今日、怒られました、魅宴のマミだろって・・そして付いて来てくれると言ってくれたから」とマミが私に微笑んだ、私も微笑んで頷いた。
「エース・・何が望みだい」と大ママが私に笑顔で聞いた。
『マダムにもユリさんにも話してないけど、ハルカの魅宴での研修』と笑顔で返した。
「もちろんＯＫさ・・本気で言ったんだね、女帝争い？」と微笑んで返された。
『そこまでは・・でもベストを尽くす２人が見たい、同世代として』と笑顔で返した。
「ベストか～、その為にあの最高の素材を進化させ続けるから、凄いよね～」とユリカが私に微笑んだ。
「カスミか、確かに最高の素材だね～」と大ママも笑顔で言った。
キングとマミも笑顔で頷いた。

『リアンの考えに驚いて、そして気付いた、ユリカのこの前の言葉も有ったから。
俺もそう思ってる、蘭をもう一度最高の状況でやらせてやりたいんだ。
下から最高の女性達の足音を感じながら、集中の中に蘭を行かせてやりたい。
その姿にカスミもハルカもマミも、又登れると思ってる。
俺は見たいんだよ、本当の全力の蘭の姿を。
そして水商売に感謝してる蘭が、なんの心残りも無く引退できるように。
その手助けを少しでもしてやりたい、勿論それが下から上がろうとする者に対しても。
良い影響であると信じているんだ、だから今はカスミに俺が出来る事をしたい。
全てを使って、環境を整えてやるんだよ、マミもハルカも必死に

なるほどのをね』

最後は笑顔で締めた、本音だった、ユリカが私に強く抱きついて聞いていた。

私にはそれが何より嬉しかった、そして少し自分も変化してると感じていた。

《ありがとうユリカ、俺は少し成長したよ》と心で囁いた。

ユリカが顔を上げて私を見て。

「うん、嬉しいよ」と深海の響きで微笑んだ。

キングと大ママの笑顔と、淡い最高の光が宿るマミの瞳に囲まれていた。

マミのこのユリカの店での姿に、私は驚いていた。

それは存在感が全く違うのだ、淡い光の魅力はその場面で輝きを増す。

男にしか分らない感覚だった、しかし男共通の感覚だった。

マミが魅宴のＮＯ１になった時、周りの女性は理解できなかった。

何故マミなのか、何が惹きつけるのか。

それは考えても、どんなに研究しても解らない。

淡い想い、絶対に忘れていない、心のどこかに残る・・初恋。

それに触れさせるマミ・・その武器は【後悔】に命中する。

あの時勇気があればという、その【後悔】に深く刺さる。

一撃必殺の魅力・・淡き妖精・・マミ。

序章

真夏の夜の天空の城、王と女王が鎮座していた。
夜街の明かりは冒険者と狩人をの歩く道を照らし、誘い込む蟻地獄の番人も笑顔だった。
私の横に座る女神は感覚で話し、その隣に座る妖精は幻想を見せていた。

楽しい時間が過ぎて、４人で席を立った。
大ママとマミと私はキングに礼を言って、エレベーターまで送ってくれたユリカに手を振って別れた。
通りに出て、私は3人に挨拶をして別れて、ＰＧに帰った。
指定席には誰もいなかった、満席は9時１５分に達成していた。
熱の高いフロアーを見て、蘭と目が合い笑顔を送った、蘭も満開で返してくれた。

「5番のお年寄り、血圧危険、チェック」と千春が微笑んだ。
『何か激しいサービスしたな、千春』とニヤで返した。
「隣に私が座るだけで、激しいサービスになるのよ」と可愛い女子大生で笑った。
『なるほどね～、今夜の左気味の髪型、可愛いよ』と微笑んで返した。
「気付くの！・・なんか嬉しいもんだね～」と嬉しそうに笑って、戦場に戻った。

「何かけた～、千春に～」と千夏が来てニヤをした。
『今夜の髪型可愛いねって言っただけ、初めて少し左より見たから』とニヤで返した。
「私は・・私の変化は？」と微笑んだ、キラキラと若さで輝いてい

た。
『昨夜から変えた口紅の色、大人ぽくって素敵だよ・・千夏』と微笑んだ。
「うそ！分るの・・ほんとだ嬉しいな～」と嬉しそうに笑って、銀の扉に消えた。
私は敏感になれと自分に言い聞かせていたので、９人衆の微妙な変化まで分っていた。
《こんな事で喜ぶんだな～、女性は不思議な生き物だ》と思っていた。

私がタバコを整理している時に、終演を迎えた。
終礼の１０番席に、全員が揃ったので、私も１０番席の前に立った。
「リーダー、今夜は趣向を変えて、反省会をしましょう」と千春がカスミに微笑んだ。
「はい、内容は？」とカスミが微笑んで返した。
「エースが私の髪型と、なんと千夏の口紅の変化まで気付いたのに驚いて、嬉しかったんです」と私にニヤした、全員が私を見てニヤをしていた。
「了解です、エース全員の変化を、感想も添えて述べなさい」とカスミが不敵を出した。

『ＯＫ、じゃあ美冬から。
美冬は最近視野が広がったね凄いです、でも歩く時に少し前屈みになりがちです気を付けてね。
千秋は歩く時少し左に負担をかけてるね、大した事無さそうだけど長期間は駄目だよ。
ユメはお酒を少し飲みすぎています、翌日目の下に隈が出来やすいので気を付けてね。
ウミは安定したね、最近ちゃんとご飯食べてるね、少し体重が増えて歩く時の姿勢が良くなったよ。

ハルカはレンが来て昼も忙しいけど、フロアーの仕事積極的になったね。
でも休みにはキチンと休んで欲しい、右肩が僅かに下がってるよ、疲れだからね。
レンは少し急ぎすぎてる、周りに合わせようとし過ぎてるね。
今は少しずつで良いから楽しんで欲しい、振返る時にスピードが速すぎてるよ。
カスミは使い分けを意識して出来だしたね、今夜ビックリしたよ。
でも少し満足感が出てるよね、そんな所で満足されてたら困るよ。
まだまだ発展途上だと思ってるから、満足感は今のカスミには毒だぞ。
蘭は・・・いつも可愛いね～』

最後は蘭に笑顔で言った、蘭は満開の笑顔で。
「うん」と言って、皆にVサインを出した。
「確かに、いいかも～週一でお願いします」と美冬が微笑んだ。
「うし、それじゃあ週一でよろしく、解散しま～す」とカスミが言って。
「は～い」と全員が笑顔で返して、控え室に戻った。
私は少し疲れを感じて、これからが大変だと思いながらTVルームに行った。
ミサを抱いてサクラさんを見送って、帰ろうとしたら蘭とカスミが降りてきた。

「カスミが急かせて、もう大変」と蘭がニヤで言った。
私が歩み寄ると、右腕に蘭・左腕にカスミが腕を組んで微笑んだ。
「押し付けるなよ」と蘭がカスミを笑顔で睨んだ。
「押し付けなくても、当たります」とカスミが不敵に微笑んだ。
楽しい2人のかけ合い漫才を聞きながら、ミチルのビルに着いた。
「もしかして、ミチルママの店？」とカスミが輝きを増して、笑顔

で聞いた。
「ピンポ～ン」と蘭が満開で微笑んだ。
「うれし～、それだけでも最高のプレゼントだよ」と微笑んで、強く腕を組んだ。
「こら～くっつき過ぎ～」と蘭も満開で微笑んだ。

最上階に着き、ミチルの店に入ろうとすると。
「ちょっと待って」とカスミが自分をチェックした。
蘭が笑顔でそれを無視して先に入った。
「蘭～、いらっしゃい、よく来たね～」とミチルの声がした。
私の後ろにカスミが緊張気味に続いた、お客はカウンターに2人組が残るだけとなっていた。
奥のＢＯＸに通されて、カスミが緊張したままミチルに挨拶をした。
「ＰＧのカスミです、ミチルママよろしくお願いします」と頭を下げた。
「よろしくね、カスミちゃん・・なるほどね～」とミチルも妖艶笑顔でカスミを見た。
「蘭さん、お会いできて嬉しいです、ホノカと言います、よろしくお願いします」と奥でホノカが蘭に笑顔で挨拶した。
「よろしくね、硬いことは抜きにしてね」と蘭も満開で返していた。

そしてカスミとホノカが向き合った、私はその光景を少し感動して見ていた。
沈黙が少しあった、お互いの目を見ていた。
「カスミ、ホノカちゃんだよ、カスミと同じ学年だよ」とカスミに微笑んだ。
「あっ！ごめんなさい、あんまり可愛いから見惚れちゃった・・ＰＧのカスミです」と笑顔で頭を下げた。
「私もあまりの美しさに見惚れちゃった、ホノカです」と笑顔で返礼した。

私は蘭の隣に座り、蘭が最高の満開笑顔で迎えてくれた。
『まぁ見惚れた同士はそこでお話し、しててていいよ』と蘭が満開で微笑んだ、2人も嬉しそうに笑って頷いた。
「蘭、エースありがとう、ホノカには最高の出会いだったみたいよ」とミチルが妖艶に微笑んだ。
「いえ、こちらこそカスミにも最高の出会いでしょう」と蘭が満開で返した。
カスミとホノカは打解けて、笑顔で話していた。

蘭とミチルも楽しそうに話していた、私はそれを笑顔で見ていた。
カウンターの男性2名の客が帰り、見送りから帰ったミチルが蘭に言った。
「蘭、あとの2人の女の子、あなたと話したいと思ってると思うの、良いかしら？」とミチルが微笑んだ。
「もちろん、それならママには、こ奴を貸しますから」と満開で微笑んだ。
ミチルが2人を呼んで、紹介した。
「PGの蘭ちゃんとカスミちゃんです、色々教えて貰いなさい」とミチルが2人に微笑んだ。
2人が嬉しそうに挨拶して、蘭とカスミも挨拶をした。
蘭が2人を誘い、5人で大きな輪になって話し始めた。

私はミチルとカウンターに行った、ミチルは店の鍵をかけた。
『もう、閉店？』と笑顔でミチルに聞いた。
「今夜はいいでしょう、今後のこの店の為にはね」と私の隣に座りながら、ミチルが微笑んだ。
『ミチル、少し疲れてるでしょ、捩れが大きいよ』と感じたままを言った。
「少しね、大丈夫よ気持ちは上がってるから」と妖艶ニヤで言った。
『ミチル、絶対に焦るなよ、今まで時間をかけたんだろ』と真顔で

言った。
「ありがとう、後でいっぱい・・やきもち妬かれて」と私に腕を組み、もたれて目を閉じた。
私はミチルを見ながら、後から聞こえる楽しそうな笑い声を聞いていた。
蘭が点火して、盛り上がっていた、私は声を聞くだけで楽しかった。

「今日の、自分と自分に話させるの、凄く感心したよ」とミチルが10分程で目を開けて微笑んだ。
『上手く話せたの？』と笑顔で返した。
「素直な方が、口下手で」と妖艶ニヤで言った。
『口下手じゃなくて、人見知りなんでしょ』とニヤで返した。
「そっちだね、絶対」と笑いながらカウンターの中に入り、ビールとグラスを2つ持って来た。
『ラッキー』と笑顔でミチルを見た。
「もう、帰るだけでしょ・・愛の巣に」とニヤニヤで注いでくれた。
『うん、でもミチルと蘭は仲が良いんだね、蘭が自分でも伝説的な人だってミチルの事を言ったから』と2人で乾杯して言った。
「私の全盛期の話を、リアンに聞いてるからでしょ」とミチルも微笑んで返した。
「私ね、リアンがPGにいた頃が全盛期で、ユリとも仲が良かったからね」と真顔で言った。
『カスミとホノカも、ミチルとユリさん・リアンとユリカみたいに、なってくれると良いな～』と思ったままを口にした。
「私もそう思ってるよ、それにエースは知らないんだね・・蘭とナギサを」と微笑んで返した。
『ナギサ・・知らない』とウルで返した。
「ナギサは魅宴に居たんだよ、今はスナックを手伝ってるよ。
リアンも蘭も必死で止めたのに、やばい男に引っ掛かってね」と真顔で言った。

『そうなんだ～、蘭の友達なら、魅宴でも優秀だったのかな？』と聞いてみた。
「２１でＮＯ２に成ったんだよ、凄い子さ」と言った瞳は氷の光が増した。
『そっか～、蘭は辛いんだね、知らない事にしとくよ』と微笑んで返した。
「そうだね、辛いと思うよ蘭の性格ならね」とミチルも笑顔で言った。
午前２時を過ぎた頃、蘭がトイレに行きカウンターに来た。
「ミチルママ、今夜は楽しかった～、そろそろ帰ります」と満開で微笑んだ。
「うん、こっちこそありがとう、又来てね」とミチルも妖艶に微笑んで返した。
カスミも来て、ドアの所まで見送りに来たミチルと３人の女性に挨拶して別れた。

エレベーターでカスミが私に不敵を出した、可愛いカスミの目が少しトロンだった。
「ちょっと失礼、蘭姉さん」と言ってカスミが私に抱きついて。
「ありがとな、最高の贈り物・・満足なんかしないよ」と耳元に囁いた。
『うん、カスミは俺をいつも驚かせてくれよ』と囁いて背中に手を回し支えていた、蘭が満開で微笑んでいた。
「まかせろよ、飽きさせないから」と言って、頬にキスをしてくれた。
「あ～、とうとうカスミもキスした～」と蘭がカスミをニヤで見た。
「頬だから、許してね・・お礼のチュウだから」と私から離れ蘭に不敵で言った。
「明日、お昼もご馳走してね」と蘭が私に腕を組みながら、カスミ

に満開で微笑んだ。
「は～い、ケンメリでお迎え来てね、また乗ってみたいの～」と可愛い不敵で微笑んだ。
私がタクシーに乗り、蘭が乗ってカスミが続いた。
「もう、きょんなに酔って、だめにゃ子だにぇ」と蘭もトロンで言った。
私は蘭を支えて、笑顔で返していた。

カスミのアパートは、新築の綺麗で可愛い物だった。
「おやすみ～」と降りたが足取りが危なく、蘭が見かねて私に送れと言った。
私がカスミにを抱き上げて、二階の部屋まで連れて行った。
「作戦成功、本当にありがとな・・嬉しかったよ」と輝く笑顔で言った。
私は優しくカスミを降ろして、笑顔で返して。
『おやすみカスミ、部屋は覚えたよ』とニヤで言って、手を振って別れた。
カスミがタクシーが出るまで、見送ってくれた。

カスミが見えなくなると、蘭が肩に乗ってきた。
「うんうん・・うりぇしきゃった～と～てみょ」と可愛いりゃん語で囁いて手を握り、目を閉じた。
私は蘭の顔を見ながら、ナギサの事を考えていた。
《蘭の辛さを和らげてやる事は、できないのだろうかと思っていた》蘭の静かな寝息を聞きながら。
タクシーは真夜中の街を抜け、帰路についた。
私は蘭を想っていた、手を握り体温を確認しながら。
【ナギサ】の名前が頭から離れなかった、私がどうにか出来るとも思えなかった。
しかし私は翌日リアンに話を聞いてしまう、そして会いに行く。

ナギサに会った時に感じる、蘭の心には底など無いと、どこまでも深く暖かい場所が続くのだと。

【夜の申し子　波音の誘惑　風のナギサ・・放浪する女神】

ホノカの結婚前夜のパーティーで、酔ったホノカが教えてくれた。

カスミに会った時に、自分の負けず嫌いな性格に驚いたと。

そして決意出来たと、水商売でやってみようと。

そのパーティーの挨拶でカスミが言った。

「ホノカが私の理想です、私はホノカを愛しています」と言って泣いたカスミ。

その時カスミとホノカ２８歳、カスミがＰＧだけでなく夜街ＮＯ１の称号を得た時期だった。

その挨拶を聞きながら、ホノカが私に泣きながら笑顔で言った。

「私の理想もカスミよ、そして私もカスミを愛してるよ」と泣いていたホノカ。

【銀河の奇跡】と言われた双子の、美しく優しい物語の始まりだった。

霧のホノカ・・永遠の幻・・ほのかに香る誘惑の香り・・。

囚人

草木も眠る深夜の国道１０号線を、タクシーが北上していた。
私の肩には生きる為の力だけを残した、可愛い人が乗っていた。
その寝顔をずっと見ていた、疲れの中に寂しさはないのかと。

タクシーが着き、必死で蘭を抱き上げて、部屋の鍵を開けて蘭の部屋に入った。
私は真暗な部屋で、暫く蘭を抱いていた愛おしくて。
『りゃん、お化け怖いかな～』と耳元に囁いた。
「おびゃけ・・きょわい」と涙目で訴えた、私は洗面所で優しく降ろして支えた。
「まっきゃなりんごをほほばりゅ～・・・」と蘭は鼻歌交じりのご機嫌で、化粧を落とした。
抱き上げてベッドに行くと、上着の長いパジャマが用意してあった。
私は蘭の頭から被せて、上着を優しく脱がせた。
「ブリャがきちゅい～」と蘭がトロンで微笑んだ。
『そこまで、レベルＵＰを要求するのか～』と蘭に優しく微笑んで、背中に手を回した。
何度かやって、やっと外れてベッドの下に落とした。

『りゃん、たっちしてくだしゃい』と蘭に微笑んだ。
蘭は笑顔で立ち上がった、スカートを脱がせてパジャマの半ズボンを穿かせた。
『呼びながら、待っててね』と蘭を優しく寝かせて、蘭の服をハンガーにかけた。
「みゃだ・・みゃだ・・みゃだなにょ」と声を聞きながら、ベッドに入り腕枕で引き寄せた。
『ごめんね、淋しかったね』と泣いている蘭の涙を拭いていた。

「いいことしたにょ、にゃにした？」と満開トロンで聞いた。
『りゃんのブラ外したよ』と微笑んで返した。
「いやん・・はずきゃしい」と私の胸に隠れた。
私は最高に可愛い蘭を見ながら、タイミングを計っていた。

「きゃしゅみが、すきにゃの？」と私を見た、優しいトロンだった。
『カスミ・ユリカ・リアン・ハルカ・マミ・9人衆とマダムにユリさん、そして3人娘全員好きだよ』と微笑んで返した。
「りゃんがいにゃい」と又泣いた、私は蘭の涙を拭きながら。
『りゃんは愛してるんだよ』と耳元に優しく言って、額にキスをした。
「そっきゃー、しょうだよにぇー」と満開トロンで笑った。
『蘭は、カスミが好き？』・・「しゅき」
『リアンは？』・・「しゅき」
『ユリカは？』・・「しゅき」
『ハルカは？』・・「しゅき」
『ナギサは？』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・「しゅき」
と言って大粒の涙を流した。
私は震える蘭を抱きしめて、涙を拭きながら蘭を見ていた。
蘭は私に強く抱きつき、震えていた寂しくて悲しそうだった。

『蘭、ずっと側にいるから・・ゆっくりお休み』と優しく囁いて、蘭を支えていた。
《寂しいね・・蘭、友達に会えないのは》と心で囁いた。
蘭が段々静かになって、寝息を感じた。
私は不思議に思っていた、蘭と添い寝する時は気温の高いのが気にならないと。
蘭も抱かれてるのに、ほとんど汗をかかなかった。
私も蘭の香りに包まれて、目を閉じた。
瞑想の中に浮かんできた蘭は泣いていた、大粒の涙を流し寂しそう

だった。
《会いに行くだけ、顔を見るだけにしよう・・ナギサに会いに行こう》と自分に誓って、眠りに落ちた。

翌朝蘭の寝返りで目が覚めた、７時２０分だった。
静かに腕を抜いて、蘭を枕に寝かせて洗面所に行った。
歯を磨いて顔をチェックした、綺麗にカスミのキスマークが残っていた。
私はニヤニヤしながら、顔を洗った。
自分の部屋に戻って、窓を全開に開けて日記を書いていた。
８時に蘭の部屋の目覚ましが鳴った、私が蘭の部屋を覗くと蘭が満開で微笑んだ。

『早いね～、お休みなのに』と私は蘭に微笑んだ。
「デパートでバーゲンがあるのよ、カスミと行くの～」と嬉しそうに微笑んだ。
『そっか～、でも午後は少しはゆっくりしてろよ』と笑顔で返した。
「うん・・ブラどうしたのかな？」と少し恥ずかしそうに聞いた。
『ヨッパの蘭が、レベルＵＰを要求した』とニヤニヤで返した。
「そうなの～、ごめんね」と小動物で舌を出した。
『謝るなよ、楽しかったから・・でもそれ以上は要求しないでね』と微笑んで返した。
「無理かも～、怖い？」とニヤで返された。
『怖くないよ、楽しみだ～』とニヤニヤで返して、キッチンに向かった。
蘭はご機嫌で、洗面所に消えた。

朝食はご飯が有ったので、蘭の事を考えて。
お粥と鮭の切り身と漬物のみの、シンプルで軽い物にした。
蘭が満開で食卓に着き、食べはじめた。

『ホノカの感想は？』と笑顔で聞いてみた。
「驚いたよ、世の中広いね～いるんだよね、凄いのが」と嬉しそうに満開になった。
「そして、カスミと仲良くなるよ、夜街の噂になるの間違いなしだね」とニヤで言った。
『リアンがね、ミチルの店に行って、ホノカの前でＰＧからお祭り凄いのが出るって、わざと言ったらしいよ』と笑顔で返した。
「さすがリアン姉さん、鋭いんだよね～昔から」と蘭が嬉しそうに満開で言った。
『リアンとユリカの鋭さは怖いよ』とウルで返した。
「ユリカ姉さんは、鋭いなんてレベルじゃないでしょう」と蘭もニヤで来た。
『そうだね、昨日ユリカに褒められた、ユリカを泣かせてしまった』とニヤニヤで言った。
「なに、なに、早く言いなさい」と蘭が笑顔で急かせた。
『初めて心と言葉が重なった人に会ったって、泣きながら褒められた』と笑顔で言った。
「素敵～、最高じゃない・・よくそこまで行ったね、うんうん」と最高の満開で言った。
私も蘭のその笑顔が嬉しくて、笑顔で返していた。

９時２０分にケンメリで蘭と出かけた。
『バーゲンって、開店から行くんだね？』と笑顔で聞いた。
「もちろん、だから今週は今日休んだんだから」と満開で微笑んだ。
『蘭、俺馬鹿だから聞いてなかった、蘭の誕生日？』とウルで聞いた。
「そうだったけ～、あなたに出会う少し前・・７月７日七夕娘だよ」と微笑んだ。
『そっか～、じゃあクリスマスが先だね』と微笑んで返した。
「クリスマスは？」と蘭が満開で聞いた。

『毎年贈るよ、変らぬ想いと何か記念になる物・・ずっと、永遠に』と言った時にユリカのビルに着いた。
「化粧落ちるだろ、泣かすなよ」と蘭が満開で手を振った、私も手を振って見送った。

ユリカの店の鍵を開けて、店に入った。
奥のＢＯＸでユリカが何かを書いていた、真剣な表情が可愛かった。
『おはよう、ユリカ』と笑顔で言った。
「おはよう、私のクリスマスは？」と爽やかニヤで来た。
『同じだよ、ユリカに対しても変らぬ想いと記念になる何か』と微笑んで、隣に座った。
「うん、嬉しい～・・集中すると本当に重なるようになったよ」と深く爽やかに微笑んだ。
『ユリカのおかげ、俺は大切な事を学んだし、自分を少し信じれるようになったよ』と真顔で返した。
「本当に感動するよ、今のが重なってた・・こんなに嬉しい事ないんだよ」と可愛い笑顔で言った。
『ユリカは気付いてるよね・・抱っこしていい？』と優しく囁いた。
「もちろん」と爽やかに笑って、私の首に腕を回した。
私は優しく抱き上げて、窓辺に行った。

「本気で会うんだね・・ナギサと」とユリカが私の目を見て強く言った、一瞬で揺り篭に乗せられた。
『俺じゃあ何も出来ないだろうけど、どうしても見たいんだよ』と正直に言った。
「自分を信じるんでしょ、ミチルママが教えたんでしょ？」と優しい響きでユリカが言った。
私は完全なリラックス状態で、完全なる素直な自分を感じていた。
『そうだよ、ミチルが教えてくれた』とユリカに微笑んだ。
「その事に大きな意味があるのよ、ミチルママがあなたならもしか

してって思った事がね」とユリカが優しい波を出してくれた。
『俺は、ただ蘭やユリカやカスミの笑顔が見たいんだよ、悲しい顔は見たくないんだ』とユリカに微笑んだ。
「うん、もう少し抱いていて・・後でリアンを呼ぶから、２人で説明するね」と優しい波の連打で、私の揺り篭は揺れ続けた。

『ユリカ目を閉じて、俺はユリカの少し高い体温の方が気になるから』と微笑んだ。
「そこまで分るの・・ありがとう、本当に嬉しいよ」とユリカも爽やかに微笑んで、瞳を閉じた。
私は揺り篭が気持ちよくて、ユリカの体温が少し高い事に集中していた。
《大丈夫だね、心配するレベルじゃないね》と心で囁いた。
「うん」とユリカが優しく返してくれた。
私はユリカにリラックスしてもらいたくて、何も考えずにユリカの重みと香りを楽しんでいた。

暫くして、ユリカが降りて、電話に向かった。
「リアンすぐに、飛んで来るわよ・・凄く喜んでいたよ」と私の隣に座りながら、爽やかに微笑んだ。
リアンは５分程で来た、私の前に獄炎を強めて笑顔で座った。
「本気だねエース、蘭は逆に傷つくかもしれんよ」と真顔で言った、その美しい真顔の炎に見惚れながら。
『それでも会ってみたい、蘭の為じゃない・・自分のために』と真顔で返した。
「よし、私もミチルママやユリカに乗るよ、あんたに賭ける」と獄炎を強めて微笑んだ。

「ナギサは魅宴に１８で入ったんだ。
大ママはその素質と魅力を高く買っていたんだよ、そしてＰＧに

入った蘭を見て。
ナギサを蘭に会わせた、２人はすぐに仲良くなった。
蘭は夜街じゃ、同学年ではナギサしか友達がいないんだよ。
ユリ姉さんも私も、色々探したけど・・蘭に肩を並べられる子を探せなかった。
夜街は特殊な場所だから、レベルが違うと上の人間の負担になるんだよ。
要するに、蘭もナギサも唯一の友同士だったんだ。
ナギサは凄かった、２１で魅宴のＮＯ２に成ったんだよ。
魅宴はＰＧと違って、大ママは重要な客しか相手にしないから、女性同士の戦いなんだよ。
ユリカがずっと断トツのＮＯ１だった、そしてユリカがこの店の開店で辞めたから。
魅宴は戦国時代に入ったんだ、その時に皆が気付くんだよナギサの凄さを。
ナギサは入店３ヶ月でユリカの指名で、ユリカのヘルプになった。
今で言うカスミレベルの女だったよ、蘭とは違う怖いぐらいの華があったんだ。
１９歳で【夜の申し子】と呼ばれた、そして蘭に会って変化を繰返すんだ。
圧倒的な温もりの蘭を認めて、同学年の大きな存在が拍車をかける。
そして蘭とナギサは親友になり、あの季節が来るんだ。
蘭の伝説のＮＯ１の季節が、その時のナギサも凄かったよ。
ユリカの次は私の時代だと豪語してるようだった、そこまでは順調だったんだ」
そこまで言って、リアンがユリカを見た。
「私はね、１８のナギサを見た時に、この子が魅宴を変えると思ったの」とユリカが私を見ながら話し始めた。

「凄く素直な子で、でも外見がそう見せなかった。
リアンが例えた通り、あなたが出会った頃のカスミちゃんだったのよ。
蘭はあの性格だから、ナギサの悩みを1番理解していた。
でも女性では何も出来ないの、男の視線と感覚が分らないのよ。
私も色々考えたけど、出来なかった。
ナギサはまさに【夜の申し子】だったから、華やかさに隠されてしまうの。
ナギサの内面は純粋に愛を求めるのに、外見がそう見せないのよ。
私が辞めて、忙しくて・・リアンも、ローズの開店で忙しかった。
そしてその時期、蘭もあの時代が来て超多忙だったの。
その時なの、ナギサの心に入った男がいた。
でもそいつはその才能で入っていたの、ＮＯ１ホスト・・マキ。
そしてナギサを食い物にする、心も体もお金もね。
私もリアンも、当然蘭も止めたの・・でも無理だった。
その純粋な心が受入れた者を、自分自身で見つめ直す事が出来なかった。
だから蘭はユリ姉さんが復帰した時に、ＰＧの仕事を減らすのよ。
心身ともに疲れていたの、もちろん蘭はあなたが1番知ってるように、傷もずっと抱えてたし。
そして忙しかった事を理由になんて、絶対にしないのよ・・蘭の心は。
蘭は自分を責めていたのよ、ずっと・・その人に出会うまで。
カスミを見た時に、蘭の心は躍ったはず・・でも最初は深い関わりを持とうとしなかった。
それは怖かったの、ナギサと同じ匂いがしたから。
そして出会うのよ、蘭は・・若草公園であなたに。
そしてあなたが蘭の後悔を解くのよ、傷を癒し・・そして。
カスミをあなたに委ねるの、蘭がどれほどの覚悟をしたのか想像

も出来ないわ。
そしてあなたはカスミに対し、最高の答えを蘭に見せたの。
蘭は本当に嬉しかったと思うよ、そしてあなたは見せ続けるカスミの変化を通して。
蘭は今、本当の寂しさを感じている、カスミを見る度にナギサを思い出すの。
私はそれだけは分かってた、蘭のその気持ちだけは。
蘭はカスミの変化を心から喜びながら、ナギサの事で自分を責める。
ナギサの事をあなたに言わないのは。
あなたが蘭の悲しみに対しては、全てを賭けると知っているから。
蘭は絶対に、あなただけは失いたくないのよ」

ユリカも美しい真顔で私に言った。
「ナギサの心は今も蝕まれているんだよ」とリアンが言った。

「ＮＯ１ホスト・マキはその独特の才能で、女の内面に滑り込む。
しかし痛い目にあってたの、自分の名前を売るために魅宴の女を狙う。
そしてＮＯ１だったユリカを狙うんだよ、馬鹿だから自分の才能に溺れていたんだよ。
そしてユリカに心を丸裸にされるんだ、その貧相な心を。
それでも懲りずに、ユリカが辞めるのを待っていたんだ。
狙ったのは、誰にも本質を理解されていないと判断したナギサだった。
この辺がマキの凄さなんだけど、マキの内面は薄いのペラペラの。
そしてマキは大ママと揉めるのを恐れて、ナギサをナギサ自身で魅宴を辞めさせる。
大ママは事の次第に気付いて、ナギサを夜街の主流店に勤めさせないように、指令を出したんだ。

大ママの優しさだった、魅宴に戻そうと思ってたんだよ。
でもナギサは今も囚われている、マキに操られて自分を見つめられない。
ナギサを救い出す方法は1つ、ナギサの内面に本当に入って。
中に潜むマキを引きずり出せる男・・それは一人しか出来ない。
最後の挑戦者と言われる男にしか」

リアンもユリカも私を真顔で見ていた。
私は嬉しかった、蘭が愛されている事が、何よりも嬉しかった。

『会ってみるよ、その時にしか決められない。
今回一度だけ蘭との誓いを破るよ、蘭に秘密にする。
俺は蘭の笑顔が見たいんだ、その為に最も大切なのは。
俺の存在だと信じて、今回はやってみるよ』

2人に微笑んで、決意して締めた。
「パーフェクト、今の言葉本当に綺麗に重なってたよ」とユリカが爽やかに笑い。
「私もそしてあのミチルママが期待したんだ、私もユリカも今回だけ蘭に黙っとくよ」とリアンが最強獄炎で私を見ていた。
私はナギサを感じようと思っていた、そうして無理だと判断したら諦めようと。
自分に最も大切なのは【蘭】だと、そう誓っていた。
深海の深さと、獄炎の炎の瞳に、誓いをたてた。

私はナギサに出会った時に感じる、なぜ蘭が黙っていたのかを。

私にはナギサとの最初の場面は辛かった、そして愚かにも導き出す・・捌け口を。

ＮＯ１ホスト・マキという獲物を、そして不思議な戦いの幕開けに心が躍る。

偽者に対して、自分が本物だと主張する。

マキ・・摩り替えの魔道師・・心無き言葉。

弱肉強食を自ら選んだ、弱者を見つけ。

心踊らせてしまう・・未熟な心を。

風の渚

光が射してきていた夜街の正午前、真夏の光が勢力を伸ばしてきた。
深海の深い瞳と、獄炎の炎と宿した瞳に見られていた。
私は罪悪感すら抱えて進む道を選んだ、その笑顔の為と言い訳して。

「ここだから、一人でやってるらしい」とリアンがメモをくれた。
『ありがとう、行ってみるよ』と微笑んで受け取った。
「いつ行くんだい？」とリアンが真顔で聞いた。
『今夜、マミにお願いして行くよ、リアンもマミをお願い』と真顔で言った。
「了解、無理と思ったらすぐに引けよ」と獄炎で微笑んだ。
「私も1つだけアドバイス、今回は厳しい時間設定を自らに課しなさい」と昼食の注文の電話を終えた、ユリカが私に言った。
『了解、一気に行きたい、今回はそうしたいと何故か思ってるよ』と笑顔で返した。
「そうだよね、もし泥沼から連れ出したらどうするつもり？」とユリカが隣に座りながら微笑んだ。
『大ママは、もう無理だろうね？』と2人に聞いた。
「魅宴で雇うのは無理だよ」とユリカが真顔で言った。
『俺が大ママに頭を下げて、ナギサの指令を解いてもらう・・そしてマダムとユリさんに頭を下げてみる』と真顔で言った。
「PGか～、もしナギサの気持ちが昔に戻ったら、そしてユリ姉さんが許したら、PGは凄い事になるな」とリアンが嬉しそうに微笑んだ。
「あなたなら出来るような気がする、私達は幸せだよ、その夢が見れるだけでも」とユリカが爽やかに微笑んだ。
昼食の豪華な海鮮定食を、3人で食べた。

楽しい話題を3人とも意識して話した、私は落ち着いていたユリカの言葉で。
腕を組んだリアンとエレベーターに乗り、ユリカに手を振って別れた。
「今回はお前にとっては男はチョロイけど、ナギサは強敵だぞ」とリアンが腕に力を込めて、微笑んだ。
『大丈夫、俺にはリアンとユリカが応援してくれるから』と笑顔で返した。
私は笑顔のリアンと別れて、ＰＧを過ぎて足早にナギサの店の確認に行った。
ナギサの店は西銀座の細い路地を入った、小さな店だった。
私が遠巻きに見てると、店の中から男が出てきた。
「じゃあ、４時に来るから、準備しとけよ」と命令口調で言って、こっちに向かって歩いて来た。
痩せた３０代前半の男、顔は整っていて派手目のスーツを着て、見るからにホストだった。
私はずっと男の目を見ていた、私に近づいて来た。

「ガキが遊ぶ所じゃないぞ」と睨みながら私に言った。
『何大物ぶってるの、あんた何処の誰？』と目を逸らさずに、微笑んだ。
「は～ガキ・・怪我するぞ」と目の前に迫ってきた、私は呆れていた。
《迫力の無い奴だな～、殴り合い経験あるのかな～》と笑顔でその目を見ていた。
『やるの、あんた人を殴った事あるの？』と笑顔で聞いた。
「ちょっと来い」と私の肩を掴み、店に引き入れた。
カウンターの中に女性がいた、私は久しぶりに凍結した。
疲れた顔で、化粧もあまりしていなかったが、その雰囲気に息を飲んだ。

華やかだった、真顔で驚いて私達を見ていたが、華やかさが凄かった。
《これで笑顔だったら、どれだけ美しく華やかなんだろう》と私は男に引っ張られながら、ナギサに微笑んでいた。
店の奥の１つしかない、小さなＢＯＸに連れて行かれた。

「ガキ、大人に喧嘩売ったら大怪我するぞ」と凄んだ、あまりの迫力の無さに笑顔が絶えなかった。
『どうするんだよ、兄さん早く誰か呼べば』と微笑んで返した。
「あんた、いい加減にして・・相手は子供じゃない」とナギサが出てきて、男に怒鳴った。
「うるせー、お前は口出すな」と男が怒鳴って返した。
「私、もう嫌・・やっぱり出て行く」とナギサはかなりの剣幕で言った。
「お前住むところも、働ける所も無いくせに・・風俗でも行くんか」と男が吐き捨てた。
「街を出る・・本気だから」と背を向けたナギサの腕を私が掴んだ。

『ナギサ、迎えに来たんだ・・本気でやり直すか？』とナギサの瞳を見て聞いた。
「なに？どういう事」とナギサが驚き私を警戒して言った。
『ナギサ、もう自分に嘘を付くことをやめる？こんな愛情の無い男と別れる？』とナギサを引き寄せて、男の反対側に２人で座った。
「てめー、なに訳の分からん事を言ってるんかい」と男が私に向かって喚いた。
『いいから切り札呼べよ、その方が話しが早いから』と静かに男の目を見て言った。
私のその表情をナギサが見て、ナギサの警戒の力が消えた。
男が電話をしていた、私はナギサの髪の毛を上げて目を見て微笑んだ。

『本当に綺麗だね・・ナギサ』と意識して笑顔で言った、ナギサはただ放心状態で私を見ていた。
『ナギサ、もう分ってると思うけど。
あの男、電話は出来るけど俺からナギサを取り返す事もしないんだよ。
ナギサは奴のどこが好きなの、愛情の欠片も無いような男のどこがいいの？
ナギサはどうして自分に嘘をつくの、ナギサはどうして愛されてるのに逃げるの？
教えてナギサ、信じられないだろうけど俺がこの生活から出してやるから』

優しく笑顔で、ナギサの目を見て言った。
「愛されてない・・愛された事ないんか無い」と目を閉じて眉間に皺を浮かべて、震えながら静かに言った。
私はナギサを抱きしめて、耳元に囁いた。
『嘘つきだな～ナギサは・・蘭は今でも待ってるぞ、ナギサを愛してるぞ』と優しく囁いた。
その時ナギサの腕に力が入った、そして声を上げて号泣した。
男は離れた席から私を睨み見ていた、私は男に興味が無くなり無視してナギサを抱いていた。
《一気に行け、ユリカもそう言ったんだ》と自分で確認した。
『ナギサ、またやらないか・・俺が大ママにナギサの指令を解いてもらうから』とナギサの両頬を両手で持って、顔を向けて目を見て優しく言った。
『最後のチャンスに賭けろ、ナギサ・・全てを賭けてみるか？』と強く言った。
「助けて、必ず必死でやるから、今の私を離さないで」と泣きながら言った。

『良く出来ました、ナギサ・・側にいるから少しお休み』と言って抱きしめる力を強めた。

その時店のドアが開いて、外の光が射し込み、若い男が2人入って来た。

そのどう見てもチンピラの2人組みは私を見て、男に言った。

ナギサは2人を見て、私にしがみつき震えた。

「マキ、まさか絞めて欲しいって、この子じゃないよな」とマキに凄んだ、マキも一瞬怯んだが頷いた。

「お前バカだろう、水商売しててこの子を知らないのか」と背の高い方がマキに怒鳴った。

その時ナギサが私を見上げた、私はナギサに微笑んで頭を撫でた。

「又会ったな」と背の低い男が私に微笑んだ、私も笑顔で返した。

『怖い人が来たから、驚いたよ』と微笑んで言った。

「よく言うよ、海竜の兄貴も望月の兄貴まで友達のくせに」と笑った。

その会話で、マキが引きつった表情で私を見た。

「小僧って呼んでいいかな?」と背の高い方が言った、『もちろん』と笑顔で返した。

「どうするかね、このバカ」と微笑んで返してきた。

『今日のところは引き揚げてもらえませんか、話があるので』と丁寧に言って、頭を下げた。

「了解、こいつの事で何か有ったら、電話してくれ」と背の低い方が名刺をくれた。

『ありがとう、助かったよ』と笑顔で言った、2人も笑顔で帰って行った。

『さて、マキ・・やろうか、ここでいいか表に出るか』とマキの目を見て、静かに言った。

「勘弁してくれ」とマキが頭を下げた。
『条件は沢山あるぞ、いいんやね』と静かに聞いた、マキは頷いた。
『今は時間が無いから、まず明日の昼までにナギサの部屋のあんたの荷物引き揚げて。
もちろん、言わなくてもいいだろうけど、2度とナギサに近づかないで。
それと今後絶対に、ナギサの事を口にしないで。
そして言ってやって、正直に言わないと電話するよ。
ナギサに近づいた訳を、今ここで言って』

私はマキの目を見ながら、意識して静かに言った。
「名前を売りたかったんだよ、魅宴の女を引っ張って、それだけさ後は金ズルだよ」とマキが言った。
ナギサが立って殴りかかろうとするのを、私が抑えた。
『ナギサ、もういいよ・・こんな奴に触れるなよ、俺がこいつには条件出しに行くから』とナギサを振向かせ抱きしめた。
『じゃあ、又会いに行くよ、さっさと部屋を片付けな』と微笑んだ、マキが立ち上がった。
『おい、金は用意しろよな今夜掻き集めろよ、そうしないと電話海竜に回すぞ』と真顔で言った。
「いくらいるんだ」とマキが小さな声で聞いた。
『最低でもナギサが1年は余裕で暮らせる位、それとこの店の処分もよろしく』と微笑んだ、マキは頷いて出て行った。

『さっナギサ・・とにかく化粧しようね』とナギサの顔を見て微笑んだ。
「あと5分だけ、お願い」と笑顔で抱きついて、甘えた。
『蘭にそっくりだ』と耳元に囁くと、「ありがとう、最高」と強く抱きついた。
ナギサが化粧をしてる時に、PGに電話してマダムに謝って。

ＴＶルームに出来ればユリさんと居てほしいと、頼んで切った。
ナギサは少し元気が出たようで、化粧をする瞳も輝きが戻っていた。
ナギサの化粧が終わり、奥でゴソゴソと着替えをして出てきた。
「これで良いかな？」と私に微笑んだ。

私は見惚れていた、確かにまだ顔の張りなどは疲れが残っていたが。
全体的な美しさは絶品で、その華やかさに目を見張った。
『噂以上、さすがだね・・ナギサ』と笑顔で手を出した、ナギサは
笑顔で腕を組んできた。
光溢れる路地に出た時に、ナギサが空を見上げ華やかに笑って。
「最高に気持ちいい～」と叫んで私の腕を引っ張った。
《さて、これからの方が難関だよ、ユリカ今から行くから》と心に
囁いた。

ユリカのビルのエレベーター前で、ナギサが緊張して私を見た。
『ちゃんと謝れよ、ユリカも心配してたんだぞ』とナギサに微笑ん
だ、ナギサは真顔で頷いた。
ユリカの店を開けようとすると、ユリカが先に開けてナギサに抱き
ついた。
「お帰りナギサ、遅かったね待ってたよ」と深く静かに言った。
ナギサは泣いていた、声を上げてユリカにしがみついて。
「ＢＯＸまでお願い」とユリカが私を見たので、ナギサを抱き上げ
てＢＯＸに運んだ。
『ユリカ、俺』まで言ったら、「もう来るよ、大ママもリアンも」
と爽やかに微笑んで、ナギサの隣に座った。
その時に大ママとマミが入って来た、私は大ママに深々と頭を下げ
た。

「エース・・お前」とナギサを確認して、私の肩に大ママが手を置
いた。

「ナギサに貸しを付けな、その方がナギサの今後にいいよ」と大ママが私の耳元に小さく囁いた、私は嬉しくて目だけで合図した。
「エースの話なら聞こうかね～」と大ママが真顔で私に言った。
私は大ママに土下座した。
『大ママお願いします、ナギサを魅宴に戻してなどと贅沢は言いません、ナギサの指令だけ解除して下さい』と必死の振りをして叫んだ。
ナギサが走ってきて、私の横に土下座した。
「大ママ、私がバカでした・・許して下さい」と必死に頼んだ。

「仕方ないね～、エースの頼みだから解除するんだ、絶対にこの土下座忘れるなよ」と大ママが言って帰って行った。
ユリカが見送りに行った。
私はナギサの肩に手を置き、体を起こした。
『良かったね、ナギサ』と微笑んだ、ナギサが抱きつき泣いていた。
「なんだい、もうそんな関係かい」とリアンが駆け寄ってナギサに抱きついた。
「お帰りナギサ、心配してたぞ～」と獄炎全開で微笑んだ、ナギサはリアンに抱かれて泣いていた。

『ユリカありがとう、でも感じてたねナギサが逃げたがってるの』と腕を組んできたユリカに言った。
「そこまでは分らないよ、ただあなたから覚悟の気配が無かったからね」と爽やかに微笑んだ。
『さて、今からいくらでも会えるんだから、ナギサ化粧を直してね』と微笑んで。
『俺が出来る限りの事はする・・ＰＧの面接だよ』と真顔で言った。
「本当に面接してもらえるの？蘭と同じ場所で働けるの？」とナギサが真顔で言った。
『働けるかは、面接のナギサ次第だよ・・面接までは俺が必ずして

もらう』と微笑んだ。
「なぜ・・私なんかの為に」とナギサがまた涙を流した。
『俺、蘭を愛してるんだよ、そしてリアンもユリカも好きなんだよ、だからナギサも好きになりたいんだ』と屈んでナギサの肩を持って優しく言った。
「絶対に好きにならせる、必ずＰＧ・・ユリさんのＯＫもらうよ」と華やかに泣きながら微笑んだ。
ナギサがユリカの化粧品で、化粧直しをしていた。
「大ママ泣いてたぞ、どんだけ大ママ泣かすんだい」とリアンが微笑んだ。
『大ママ凄いよ、大きさが・・女帝だね』と微笑んで返した、リアンも笑顔で返してくれた。
ナギサの化粧がほぼ終わり、私にナギサが微笑んだ。
《疲れが取れたらどれほど綺麗なんだろう》と思っいながら、笑顔を返した。
「あなたの想像以上よ」とユリカが微笑んだ、私は大袈裟に驚いてみせた。
ユリカとリアンに見送られ、ナギサとＰＧに行った。

ＴＶルームの前で、ナギサを小窓の所に待たせて、一人で入った。
マダムとユリさんとハルカとレンがいた、マリアは寝ていた。
『マダム、かってしてごめんなさい』と真顔で頭を下げた。
「理由があるんやろ、はよ話せ」とマダムが言った。
私は座り、マダムとユリさんを見て、真剣に言った。
『マダム、ユリさん一人面接して下さい、お願いします』と頭を下げた。
「もう、冷や冷やしましたよ、来てるんでしょ今からやりましょう」と薔薇の笑顔で言った、マダムも頷いた。
私はナギサを呼び入れた、その時マダムもユリさんもハッとしてナギサを見た。

『俺が大ママの指令をさっき解いてもらったから、面接お願いします』と言って、ナギサを座らせた。
「マダム、ユリさんご無沙汰しています・・絶対に迷惑はかけません頑張ります」とナギサが土下座した。

「頭を上げて、ナギサ」と薔薇で微笑んだ、ナギサを聞いてハルカが私を見た、優しい目だった。
「許可します、条件は最初のうちは蘭に付く事、そして若手にその技術を伝授すること」とナギサを見た、ナギサは泣きながら頷いた。
「そしてあなたの紹介者に感謝して、絶対に裏切らないと誓いますか？」と最後は薔薇で微笑んだ。
「誓います、ありがとうございます、必ず何かのお役に立てるようにがんばります」ともう一度頭を下げた、私はナギサの手を握っていた。
「いつから、やりますか？」と薔薇で聞いた。
『今夜からだよ、今夜は帰れないよ・・俺の布団貸すから蘭の家に泊まってね』とナギサに言った。
ナギサは私に抱きついて、泣いていた私はこの時点でやっと安心していた。

「蘭はそういえば、今日は靴屋休みよね？」とユリさんが私に薔薇で微笑んだ。
『もうすぐ来るよ、化粧を直して髪もちゃんとしないと、蘭が泣くよ』とナギサに言って。
『ハルカ、案内頼んで良いかな？』とハルカに微笑んだ。
「もちろん」とハルカが微笑んで返して、ナギサを連れてレンと出て行った。

『マダム、ユリさんありがとうございます』と頭を下げた。
「何言ってるか、またボーナス出さんといかん女やぞ・・ナギサは」

とマダムが微笑み。
「私、蘭と同じですよ、なぜ毎日がこんなに楽しいのかと、今思っています」とユリさんも薔薇で微笑んだ。
私はもう一度笑顔で礼を言って、フロアーに行った。
久美子が練習していて、私を見て微笑んだ。
『久美子、お願い・・サマータイム1回だけ』と笑顔で言った、久美子も笑顔で頷いた。
私は指定席に座り目を閉じて、久美子の弾くサマータイムを聞いていた。
マキのナギサに言った言葉が蘇り、怒りが涌いてきた。

「もう、久美子ちゃん独り占めにして～」と蘭が後から抱きついた。
『今夜は、ミノルさんとこ行くんだったね』と蘭に笑顔で言った。
「うん、どうしたの・・なんか疲れた？」と私を見て蘭が言った、
私は微笑んで返した。
蘭の後ろにユリさんとマダムが来ていた。
『大丈夫だよ蘭、話しがあるからちょっと来て』と笑顔で言って、
蘭の手を繋ぎ10番に行った。

『蘭、俺また蘭に黙って行動した、ごめんね』と真顔で蘭に言った、
蘭は緊張して私を見ていた。
『蘭にお願いがあるの、今夜からフロアーに入る人のフォローを頼みたいの』と蘭に微笑んだ。
「何、何・・どうしたの？」と蘭が私に真顔で言った。
『やってくれる、ちゃんと受入れてやってくれる？』と蘭の顔の前に近づいて、蘭を見ていた。
「あなたの頼みなら、どんな子でもやるよ」と蘭が微笑んだ。
『じゃあ、お願い・・この人を』と振返りハルカを見た。
ハルカが頷き、銀の扉を開けた。
ナギサが立っていた、蘭を見て立ち尽くし大粒の涙を流した。

蘭はナギサを見て、やはり大粒の涙を流して。
「ばか～・・・早くここに来て！」と叫んだ涙を流し満開の笑顔で。
ナギサはその言葉に我に返り駆け出した、そして蘭も立って両手を広げた。
ナギサは蘭の胸に飛び込んで、蘭はそれを受け止めて2人で泣いていた。
私はそれを見て久美子だけを残して、全員でＴＶルームに戻った。
私も嬉しくてＴＶルームを通り越して、裏階段に行って踊場で外を見ていた。
《ユリカ・リアン・・ありがとう、蘭も喜んでくれたよ》と青空に囁いた。
ＰＧの伝説のメンバーが全員揃った、ナギサは見せる全力の本物の姿を。
そして炎は燃え上がる、世界は広いのだと・・まだ見ぬ美しさも有ると。

蘭とナギサのコンビは一気に伝説を作る。

そのコンビネーションに、９人衆は触発されて上を目指す。

最も強い影響を受けるのが、ユメ・ウミコンビである。

【ツウィンズ】の始まりも近い、ＰＧは失速を拒絶した。

誰も止まることを選ばない、全員がその姿でこう叫ぶ。

【人はどんな状況からでも、必ずやり直せる】と叫んでいた。

その姿が観客に乗移り、客足の絶えない日々が続いていく。

ナギサの本質が花開くのも、もうそこまで来ていた。

夜の申し子・・儚さの誘惑・・波音の囁き。

放浪の女神・・風のナギサ・・。

復活の時

陽に照らされて輝く街を見下ろしていた、陽はまだ高かったが暑さを感じなかった。
私は最高の気分で、空を見ていた。
《こんな時にタバコって吸いたくなるのかな～》と思っていた。

「やめろよ、空を見るのは」と後から突然カスミが抱きしめた。
『可愛いやろ～』と前を見たまま言った。
「まず、昨日のホノカの事、本当にありがとう」と耳元に囁いて。
「そして、今の蘭姉さんを見て私も幸せになったよ、内容は分らないけど」と強く抱きしめた。
『俺が蘭やカスミに出来ることって、少し考えてたんだよ』と体を回してカスミを抱きしめた。
『ありがとう、カスミ・・いつも見ててくれて』とカスミの耳元に優しく囁いた。
「化粧が崩れる・・もう何も言うなよ」と言って抱かれていた、カスミの優しさが嬉しかった。
「もういいかな～、それ以上があるのかな～」とハルカが笑顔で言った。

『またハルカが邪魔したよ、リーダー』とカスミに囁いた。
「ハルカの意地悪」とカスミが振返り、ハルカに微笑んだ。
「危なそうだったから、エースが迎えに来ないと動けないって、蘭姉さんの指名」とハルカがニヤで言った。
『仕方ないな～、甘えん坊ばっかりで』と体を離したカスミと、ハルカに微笑んでフロアーに行った。
１０番で蘭が一人で待っていた、俯いているので顔が見えなかった。
私は駆け寄って、屈んで蘭を覗き込んだ。

『蘭、大丈夫？』と優しく声をかけた。
「大丈夫じゃない・・大丈夫じゃない」と俯いたまま蘭が言った、
私は蘭の隣に座った。
『蘭、良かったね』と優しく囁いた。
「ばか～、どうして泣かすの・・どうして・・どうして出来るの」
と言って私に抱きついて、泣いていた。
『蘭が大切だから、昨夜ミチルが教えてくれて、今日リアンとユリカに聞いたんだよ』と泣顔の蘭に微笑んだ。
『蘭は四天女とミチルに感謝して、俺は自分の為にしたんだから・・蘭の寂しそうな顔を見たくなくて』と言って強く蘭を引き寄せた。
「嫌だ、あんたに感謝する・・だから私の側にいて」と蘭が強く抱きしめて、私に満開で微笑んだ。
『ずっと側にいるよ』と微笑んで返した、蘭は満開で頷いて私の胸に戻ってきた。
静寂のフロアーにサマータイムが響いてきた、久美子の優しさが嬉しかった。

私は蘭と手を繋ぎＴＶルームに戻った。
マダムとユリさんとナギサが話していて、カスミがマリアと遊んでいた。
「部屋はどうするの？」とユリさんがナギサに薔薇で微笑んだ。
「出来るだけ早く出ます、嫌な思い出しかないから」とナギサが微笑んで返した。
「お金は有るの？」とユリさんが心配そうに聞いた。
「大丈夫です、こっそり貯めといたから・・それにエースがあのバカに金払えって言ってくれました」とナギサが私を笑顔で見た。
「最後の交渉、一人で大丈夫？徳野さんに同行してもらう？」とユリさんが私に聞いた。
『大丈夫です・・・』私はチンピラの話をして、ユリさんを安心させた。

「分りました、蘭いいですね、あなたにリハビリを任せて」と蘭に微笑んだ。
「はい、やらせて下さい、まぁすぐに戻るでしょうけど」と蘭がナギサに満開で微笑んだ。
「ありがとう、蘭」と言ってナギサが目を潤ませた。
「もう泣かないの、ご飯行くんだから」と蘭がナギサの手を握った。

「じゃあ、細かい事は明日以降に決めましょう」と薔薇で微笑んで、私を見た。
「蘭、カスミちゃんとナギサと先に行ってて、エースを借りますね魅宴まで」と蘭に薔薇で微笑んだ。
「どうぞどうぞ」と蘭も満開で微笑んで返して、「今夜は場所を○○に変えたから」と私にも満開で微笑んだ。
『了解、後で行くよ』と笑顔で返した。
「行きましょう、私も大ママに挨拶します」と私に腕を組み、薔薇で微笑んだ。
『了解です、行こうか・・ユリ』と微笑んで返した。
「はい、あなた」と悪戯っ子で微笑んだ。
「チャー・・うわき」とマリアが言って駆けてきた私が抱き上げた、皆が大爆笑していた。
「マリアにいけない言葉、教えたのは誰かかしら?」と私に薔薇ニヤできた。
『マリアＴＶだよね～』と天使の笑顔のマリアに言いながら、ユリさんとＴＶルームを出た。

通りに出ても、ユリさんは笑顔で腕を組んでいた。
私は左でユリさんと腕を組んで、右腕にマリアを抱いて歩いていた。
『ナギサの事、本当はユリさん的にはどうなんですか?』と真顔で聞いた。
「本当の事を言いますね、私は蘭があなたに言わない気持ちも分っ

ていました」と私を見て。
「私から言うべきかと悩んでました、誰から聞いたのかしら？」と薔薇で微笑んだ。
『ミチルママです、昨夜・・』私はカスミとホノカの事を話した。
「ミチルですか！だからユリカもリアンもあなたに賭けたんですね」と嬉しそうに薔薇で微笑んだ。
『ミチルが教えた事に、それ程の意味が有るとは思いませんでした』と真顔で返した。
「期待して良いのね、ミチルも・・本当に楽しい日々よ」と美しく薔薇で笑った。

『ユリさん、そうそう来週の金曜日・・』とマミの件を話した。
「素敵ですね、もちろん同伴しますよ・・お店はナギサが起動に乗れば私も自由に動けるから」と楽しそうだった。
魅宴に着くと、入口にいたボーイさんが飛んできて、フロアーに案内された。
すぐに大ママが出てきた、笑顔でマリアに手を出した。
「大ママ、ナギサの事」までユリさんが言うと。
「使ってくれるのかい？」とマリアを抱きながら、大ママが笑顔で聞いた。
「はい、エースを信じて」とユリさんも薔薇で微笑んで返した。
「ありがとう、ユリ・・感謝するよ」と笑顔で言って、私に歩み寄り軽く抱きしめられた。
「見事だった、本当に嬉しかったよ・・ありがとうエース」と大ママが言った。
『自分がもう限界みたいだったよ、ナギサ』と私も大ママに笑顔で返した。
「それでも、お前が突っ込んだからさ、ナギサの内面までな」と優しく囁いた。
大ママが離れて、ユリさんが薔薇で微笑んだ。

「ユリ、それと明日マミの・・・」大ママがマミのケジメの話をした。
「かまいませんよ、PGはエースを信じていますから」とユリさんが大ママに微笑んで返した。
「ありがとう、マミは2週間で驚くほど成長したよ」とユリさんに言って。
「まだ言ってないのかい？」と私を見た。
「何の事かしら」とユリさんも私を見て、微笑んだ。
「ハルカだよ、エースに魅宴の研修頼まれて、OKしたんだよ」と大ママが微笑んだ。
「本当に良いんですか、魅宴で研修なんてハルカは幸せですよ」と嬉しそうに薔薇で返した。
「何言ってるんだい、少しでも勉強になるのなら私も嬉しいよ」と大ママが笑った。
ユリさんと大ママに礼を言って、魅宴を出た。
駐車場に行きながら、ユリさんは私と腕を組んだまま微笑んで挨拶をしていた。

「PGはどうなるのかしらね～」と嬉しそうに薔薇のまま微笑んだ。
『凄いんですよね、ナギサ・・見ただけで圧倒されました』と微笑んで返した。
「あなたは見たいんですね、本当の本気の蘭を」と美しい真顔で私を見た。
『うん、見てみたい・・その為の環境を、俺の出来る範囲で全力で作りたい』と笑顔で返した。
「怖いですよ～、その時の蘭は」と薔薇の微笑で返された。
『うん、蘭には心残りなんて残してほしくないんだ』と笑顔で言った、ユリさんも薔薇で頷いた。
マリアを車に乗せて、運転席のユリさんを笑顔で見た。

『ユリさん、この車あと5年は乗ります？』と笑顔で聞いた。
「そうですね、何もなければその位は乗りますよ」と薔薇で返した。
『ミチルボーナス、5年後この真っ赤なユリスペシャルZを、格安で譲って下さい』と笑顔で聞いた。
「いいですよ、5年後の約束をしてくれるのね」と薔薇で笑ったユリさんとマリアを見送った。

私は蘭の言った、マダムとハルカと行った居酒屋に歩いていた。
5時を少し過ぎた夜街は、開店前の準備の匂いに溢れていた。
私は大好きなその匂いを、思い切り吸い込んで深呼吸をした。
居酒屋の個室の座敷に案内されると、蘭の隣にカスミが座り向かいにナギサが座っていた。
カスミが楽しそうにナギサと話していた、ナギサも今までと違う笑顔が出ていた。
『ラッキー、ナギサの隣が空いてる～』と言って笑顔で座った。
「ナギサが目で、怖いくらい訴えた」と蘭が満開でニヤした。
『ナギサ、俺に惚れるなよ』とニヤでナギサを見た。
「もう遅い、あの状況の、あの出会いなら・・惚れるよ」と笑顔で返してきた、ハッとするほど華やかだった。
私のコーラが来て、皆で笑顔で乾杯した。

「カスミちゃんには聞いて欲しいから、私から話しとくね」とナギサがカスミに微笑んだ、カスミも嬉しそうに微笑んで頷いた。
「私は魅宴に18で入ったの・・・」ナギサが自分の歴史をカスミに話した。
カスミは美しく輝く真顔で頷きながら聞いていた。

「蘭、待っていてくれてありがとう、そして最後まで信じてくれてありがとう。
今日私は気付いたよ、エースに愛される事から逃げるなと言われ

て。
愛された事が無いと言ったら、嘘つきだって言われた。
今でも蘭が私を愛してるって言ってくれた、本当に嬉しかった。
ありがとう・・蘭・・愛してくれて」

ナギサは最後は蘭を見て、涙を見せて言った。
「うん、ありがとう・・私も嬉しかったよ、友達だろ当然だよ」と蘭が満開で微笑んだ。
ナギサは静かに泣いていた、そして誰よりもカスミが泣いていた。
「はい、終わりにしますこの話は今ので終了です」と蘭が言ってビールを一気に飲んだ。
「美味しい～」と満開で笑って私を見た。
『仕事前に大丈夫かな、明日は靴屋もあるでしょ？』とニヤで蘭に言った。
「靴屋は明日も休み、さっき日曜出勤の子と交代してもらった」と満開ニヤで返した、私はその嬉しそうな笑顔が何よりも嬉しかった。
「ナギサ姉さん、私も昨夜エースに友達になりたくなる子を、紹介してもらいました」とカスミが輝く笑顔で言った。
「それは良かったね、でもカスミちゃんの相手なら凄いんだね」とナギサが華やかに微笑んで返した。
「凄かったです、でもすぐに受入れられました・・自然に」とカスミも微笑んで返した。
「私も蘭を見たとき、すぐに受入れたの・・今までで初めて唯一の存在よ」と笑顔を2人に向けた。
「私もだよ、ナギサだけだったよ」と蘭も満開で返した。
楽しそうな3人を、私も笑顔で見ていた。

「蘭は私の事をエースに言わないのに、誰に聞いたの？」と華やかに微笑んで私を見た。
『ナギサ、本当にナギサは愛されてるよ、俺にナギサと蘭を想って

言ってくれたのはね』とナギサを見た。
ナギサは真顔で私を見ていた、美しさに吸い込まれそうだった。
『ミチルだよ、そしてユリさんも俺に話そうかと思ってたらしいよ』
と笑顔で言った。
「蘭、ごめんね」と言ってナギサが私に抱きつき、私は受け止めて
優しく抱いていた。
蘭とカスミは優しい目で見ていた。
「あの腕を掴まれた時、凄く嬉しかった・・理由無く嬉しかったよ」
と私を見上げて微笑んだ。
「そして、最後のチャンスに全てを賭けろって言ってくれた事も・・
でもね1番嬉しかったのは」と言って蘭とカスミを見た。
「言葉の端々にナギサって言ってくれる事だった、それが何より嬉
しかった」と微笑んだ。
「分ります、凄く分ります・・本当に嬉しいですよね、私を見てく
れてるって思えて」とカスミが輝く笑顔で返した。
蘭が私を見て満開で笑った、私は嬉しくて笑顔で返した。

『ナギサ、ユリさんが凄く期待してたよ、ナギサの登場でPGに与
える変化をね』とナギサの耳元に優しく言った。
「見ててね、私は絶対に全てに恩返しをするよ・・水商売にも」と
言って腕の力を強めた。
「皆、喜びますよ～、本物が好きだから」とカスミが輝く笑顔でナ
ギサに言った。
「カスミが1番嬉しいでしょ」と蘭が満開でカスミに微笑んだ。
「うん、ワクワクが止まらない感じ・・私はやっと自分が出せる世
界に来れたと感じてる」と輝いた。
「似てるな～やっぱり、出合った頃のナギサに」と蘭が満開でカス
ミに返した。
「うれし～、その言葉が1番うれし～」とカスミが蘭に抱きついた。
ナギサが嬉しそうにカスミを見ていた、優しい目だった。

「エース、お願いもう大丈夫だから、聞かせて今思ってる事？」とカスミが私に笑顔で言った。

『カスミ・・嬉しいよ、よくそこまで来たね。

俺、最近色々な店に行って少し感じた、誰にでも同じじゃ結局駄目なんだって。

それは仕事だから仕方ないって、思えばそうなんだろうけど。

ユリさんでさえ、キチンと分けている。

相手に対してどこまでという、線を引いているんだよ。

蘭も、きっとナギサも・・リアンもユリカもミチルも引いている。

そしてその線を相手に気持ちよく意識させる技術、それが難しいんだね。

ＰＧでは、ユリさんと蘭とアイさんサクラさんは、それが出来ているんだよ。

そして多分ナギサも出来る、９人衆はまだどこかで自分の制御がかかるね。

カスミはまだ最後の段階で、信じていないよね。

カスミ俺はカスミには、生意気だろうが何だろうが俺の気持ちは全て伝える。

もう自分を信じていいだろカスミ、お前こそが次世代のトップだと俺は信じている』

最後はカスミに微笑んだ、カスミは私を見ていた。

「本当に全部伝えるな、そして見てるな」とカスミが真顔で言った。

『見てるよ、俺はカスミで夢を見てるし期待してる。

そしていつか本当の意味で、カスミを愛してくれる男が出現するのを祈ってる。

そしてその時の、俺の寂しさも覚悟している。

俺はその時に心から祝ってやれる、人間になりたいと思ってる。

だから伝えるカスミには、全て残らずに俺の気持ちは伝える。
ユリカにもハルカにも、そしてナギサにも全て伝えるよ』

カスミの輝く瞳を見ていた、その隣で蘭が満開で泣いていた。
「うし、夢を見せてやるよ・・そしていつか寂しい想いもさせてやる」とカスミが静かに言った。
「蘭、この子復帰祝いにちょうだい」と雰囲気を変える為に、ナギサが蘭にニヤをした。
「親友でもたとえ母親でも、それだけは出来ん」と蘭もニヤで返した。
「お前、伝説以上をどれだけ作るんだよ～」とカスミも不敵で微笑んだ。
『スーパースターとはそういう者だよ』とニヤで返した。
3人の笑い声に包まれて、ナギサの体温を感じていた。
蘭の満開が嬉しかった、絶対に散らない、儚さの影もない満開の桜のような笑顔が。

私の想像は完全に裏切られる、ナギサは圧倒的に本物だった。

その姿は歩くだけで、華やかさを撒き散らす。

それをカスミは間近で見続ける、そして気付き本当の美しさを追い求める。

カスミにとって蘭とナギサの存在が、最高の生き方の憧れとなる。

絶対に完成されない者・・カスミ、挑み続ける強固な意志。

その輝く姿が最高の目標になる、強固な意志では絶対に負けない。

ハルカの心を開放する、カスミの不敵の笑顔が誘い続ける。

ハルカをその世界まで来いと、余裕で笑い続ける・・全力で来いと。

ＰＧの夏は灼熱の舞台、そして復活の叫びが木霊する。

そして全員が目撃する、蘭の本当の姿を。

その温もりに包まれる、最高の時も迫っていた。

笑顔で話す私達４人にも・・・。

イメージ

夕暮れが近づく時刻を、壁にかけられた小さな時計が刻んでいた。
小さな和室でくつろぐ私達には、笑顔しかなかった。
7時を少し過ぎた時に、蘭が満開で言った。

「そろそろ行きますか、戦場が待ってるから」と微笑んだ。
蘭が支払って、ナギサとカスミから受け取らなかった。
「次回はどちらかに、出して貰うから」と楽しそうに笑って、私と腕を組んだ。
ＰＧの裏階段が見えると、エミとミサが私を呼んだ。
私は笑顔で手を振った、その時にサクラさんが現れてナギサを見た。
「ナギサ！・・」と言って笑顔になった。
ナギサも笑顔で駆け寄って、サクラさんに抱きついた。

「サクラ姉さん、今帰りました・・そしてＰＧでお世話になります」と目を潤ませた。
「お帰りナギサ、楽しみだよ～頑張ってね」と抱いていた。
サクラさんが蘭を見て、優しい瞳で微笑んだ。
「良かったね・・蘭」と笑顔で言った。
「はい・・嬉しくて」と蘭も満開で微笑み、目を潤ませていた。
私がミサを抱いて、エミと手を繋いで最後を歩いた。
「チャッピー・・私にもあるの？」とエミが少し恥ずかしそうに聞いた。
『どうしたのエミ、何が？』と意識して優しく笑顔で聞いた。
「階段抱っこ」とエミが恥ずかしそうに可愛く微笑んだ。
『当たり前だろエミ、エミとミサとマリアは無制限であるよ』と微笑んで返した。
「うん、良かった～」と少女らしく笑って、手に力を入れた。

「私は？」とサクラさんがニヤで振向いた。
「お母さんは、お父さんがいるでしょ」とエミが笑顔で返した。
「すいません」とサクラさんが笑顔で謝って、全員で笑いながらＰＧに入った。
ＴＶルームに私がエミとミサを連れて行き、女性達は準備に行った。
松さんとハルカが話していた、エミ・ミサはマリアと遊び始めた。
「また凄いのを捕まえてきたね～」と松さんが私に微笑んだ。
『９人衆の最近の緩みを、締め直すためにね』と２人に微笑んで返した、松さんが楽しそうに笑った。
「緩んでるの？」とハルカがニヤで聞いた。
『記録更新直後は危なかっただろ、俺は天気とか状況での言い訳は聞かないよ』とニヤで返した。
「確かにね、でも本当に凄い人だね」とハルカが嬉しそうに笑った。
『ハルカ、最近綺麗になったね・・そして本物を受入れるんだね』と微笑んだ。
「女帝になってやる、あなたに勝つにはそれしかないから」と笑顔で立って私の手を取った。

ハルカと手を繋いででフロアーに歩いた、私はハルカを見ていた。
「明日、マミお願いね」と可愛く笑った。
『うん、必ずマミに心残りを残さない状況は作ってやるよ』と笑顔で返した。
「ありがとう、私も頑張るよ～」と微笑んで返された。
『頑張れよ、魅宴でも』とニヤで返した。
「何！魅宴って？」とハルカが驚いて、私を見た。
『大ママのＯＫもユリさんのＯＫも出たよ、魅宴の研修頑張れよ』と笑顔で言って、指定席に向かった。
「本気なんだね、本気で私とマミを見ててくれるんだね」とハルカの声がした。

『ハルカ、ずっと見てるから・・俺に夢を見せてくれよな』と振返り笑顔で言った。
「見せてやるから・・ずっと見てて、日記に書いてね」と美しく笑った。
その時の笑顔を見て、ハルカも遠くに感じて寂しかった。
私はハルカの背中を見送り、指定席でレンが準備してくれた物をチェックしていた。

久美子はその夜はジャズの、明るく楽しいナンバーを弾いていた。
《久美子、ジャズも良いよな～》とチェックを終えて、座って聞いていた。
四季とユメ・ウミが座って静かに談笑しながら聞いていた。
レン・カスミ・ハルカ・蘭・サクラさんの順番で入って来た。
「大ママ本当に喜んでたよ」とマミが後から言った。
『違うぞマミ、大ママが1番嬉しいのは、マミが心残り無くデビューする事だよ』と振向いて微笑んだ。
「うん、大丈夫・・覚悟は出来たから」と真顔で返した、可愛さの中に美しさを秘めていた。
『さすが、魅宴の姉御・・貫禄あります』とニヤで返した。
「どの辺の話かな～」とニヤをしながら、椅子を持って私の横に座った。
『可愛い腹筋ちゃん』とニヤニヤで返して、マミの優しいパンチを受けていた。

その時久美子のピアノが止まった、そして弾き始めたのはやはり激しい曲だった。
行進曲のような、少し軍隊をイメージさせたが、暗い感じではなかった。
「久美子ちゃん、凄い子だね・・これ戦争から帰還する時の喜びの曲だよ」とマミが久美子を見ながら微笑んだ。

『そっか～、ナギサの帰還を久美子なりに感じたんだ～』と私も久美子の踊るように弾く姿を見ていた。
久美子は最後はやはり腰を浮かし、弾き終わった時に右手を上げて笑った。
最高の１６歳の笑顔に、全員で立って拍手した。

静寂が戻った時に銀の扉が開いた、女性達全員が息を飲んで見ていた。
私は真横の姿が見れなかった、強烈な何かが近づくのを感じていた。
その強烈な何かは、深々と頭を下げてフロアーに歩いた。
その背中は綺麗に立ち、背骨のラインが美しく真直ぐに伸びて。
肩のラインと綺麗なクロスを描き、首筋から下顎にかけて得体の知れない色気を放ち。
真っ赤なドレスの主張を全て掻き消して、華やかに女性達の前に立ち一礼をした。
ナギサだった、私は自分の想像力の無さに愕然としていた。
それ程美しく華やかだった、そしてどこか自由な女だと思って見惚れていた。
ユリさんが現れて、女性が円を描いて立った。

「今夜から、ナギサがＰＧに加わります、数年前まで蘭と同じ評価を受けていました。
その姿を近日中には、見せてくれると思います。
感じて欲しい・・蘭とナギサ。
貴女方世代の本物の女を・・それを私は期待します」

ユリさんがそう言って、ナギサを見た。
「私はユリさんにチャンスを頂きました、このラストチャンスに全てを賭けます。
そして、ＰＧの何かの役にたちたいと思っています。

皆さん色々と教えて下さい、よろしくお願いします」と言って深々と頭を下げた。
「よろしくお願いします」っと言って女性全員で返礼した。

「伝説以上だ、さすが大ママが惚れ込んだ逸材だね」とマミもナギサを見て呟いた。
『夜の申し子・・分る気がする』と私も呟いた。
『楽しくなりそうだ～・・マミ今夜も９時前に出るよ』とマミに微笑んだ。
「了解・・ローズか気合入れます」と可愛く微笑んで返された。
私はマミに笑顔で頷き、ハルカの位置にスタンバイした。
その時に開演を迎えた。
「今夜も開演しましょう」の声に、「はい」のブザーを鳴らした。
木曜なのに出足が凄かった、８時２０分に満席を達成した。
私は満席Ｖサインを出した、それで炎が上がった。

ナギサは蘭に付いて回り、その存在感をお客にも女性達にも見せつけた。
蘭とサクラさん指名の２人客が来ると、カスミがナギサと動き出した。
輝きと華やかさが２人で動くだけで、視線が追うのが分った。
ナギサは全くブランクを、私には感じさせなかった。
その華やかさと会話の技術で、カスミを圧倒していた。
《本当の実力はこれ以上なのか、蘭と肩を並べるのか～凄いなナギサ》と思っていた。
マダムが来て、私に笑顔を見せた。
「自分が連れて来た、女の凄さが今分ったかい」と微笑んだ。
『俺は想像力の無い人間だと、確信させられたよ』と笑顔で返した、マミと変るマダムを見送り。
蘭にサインを出して、満開の笑顔で頷くのを見て、カスミとナギサ

を見た。
2人とも私に微笑んでくれた、マミが来たので2人で出かけた。
通りに出て、マミと手を繋ぎローズを目指した。
「明日、駅集合でいいの？」とマミが私に微笑んだ。
『何処でもいいよ、俺はユリカの所から行くから』と微笑んで返した。
「じゃあ、ユリカさんの店に私が行くね」と可愛く言った。
『マミ、怖い時は言えよ、無理はするなよ』と真顔で返した。
「怖い事なんてないでしょ、私にはエースが付いてるんでしょ」と笑顔で言った。
『もちろん、ずっと側にいるよ、ハルカとマミが登るのも見てるよ』と笑顔で返した。
「うん、もう話さないで・・折角の可愛いマミちゃんが台無しになるから」と前を見て私を引っ張った。

ローズに入ると、BOXは満席でカウンターに3人組と2人組みがいた。
《またまた最高の展開》とマミを見てニヤをした、マミもニヤで返した。
リアンが来て、マミを連れて3人組の前に立った。
上司と部下と思われるサラリーマンにマミを紹介した。
3人は嬉しそうにマミを見ていた、マミも淡い光を強めて笑顔で頭を下げた。
私はカウンターの一番手前に座った。
ローズの綺麗な宴会にいた女性が、オレンジジュースを出してくれた。
「また何か良いことしたでしょう、リアン姉さんご機嫌よ」と笑った。
『そうなんだ～、リアンは可愛いね～』と微笑んで返した、笑顔で

返されて2人組みの前に戻った。
私はマミをチラチラ見ていた、少し驚きながら。

マミが相手をしている男な中で1番嬉しそうなのは、中年の上司だった。
もちろん若い2人も楽しそうだが、上司の笑顔は違っていた。
《なるほど～淡い魅力は歳を重ねた方が効くんだよな～》と関心しながら見ていた。
ＢＯＸの一組の団体が帰り、リアンが見送って私を後から抱きしめた。
『良いのかな～、営業中に・・俺刺されたりしない』とリアンに言った。
「だって嬉しいんだもん」とリアンが私の耳元に囁いた。
『明日、早目に来てユリカの店においでよ、蘭とナギサも行くみたいだから』と振向いて微笑んだ。
「楽しみだな～、マミは大丈夫だから行ってきな・・ミチルママに報告に」とリアンが獄炎で微笑んだ。
『うん、少しだけ行ってくるよ、マミに言っといてね』とリアンに微笑んで。
マミにサイン【少し】【出る】を出した、マミは目だけで頷いた。

私はミチルの店に足早に行った。
店を覗くとＢＯＸに3組、カウンターに2人組みがいた。
《さすがミチル、ここも凄いな～》と思ってカウンターの1番奥に座った。
ホノカが私の所に来て、美しく微笑んだ。
絶品だった上品さを惜しげもなく出していた、その高貴な輝きに暫し見惚れた。
「エース、ありがとうカスミと会わせてくれて」と言って笑った。
『今度お礼して、ホノカを抱っこしてみたい』と笑顔で返した。

「やったー、私凄く興味あったの、昨夜カスミも少し話してくれたから」と上品に笑った。
『楽しみにしてるね』とニヤで返した時に、ミチルが来た。

「嬉しいね～、通ってくれて」と妖艶に微笑んだ。
『ミチル本当にありがとう、話してくれて、ユリさんも喜んでたよ』と笑顔で返した。
「ナギサ！もう行ったのかい？」と驚いて私を見た。
『ナギサ、今夜ＰＧデビューしたよ・・ありがとう、ミチル』とミチルの前に立って頭を下げた。
その時にミチルに抱きしめられた、ミチルは強く抱きしめた。
「なんだろう、最高に嬉しいよ」とミチルが囁いた。
『俺も嬉しかった・・蘭の笑顔も、ナギサの笑顔も』とミチルに囁いた。
「ねえ、こうやって来てね、私が2人の自分と会話が出来るまで」と私を見て微笑んだ。
『もちろん、ミチル・・今日またミチルを好きになったよ』と微笑んで返した。
「わたしもよ」と言ってもう一度強く抱きしめて、ミチルが離れた。
私はミチルとホノカに礼を言って、ローズに向かった。

ユリカのビルを見上げた、夜空に星が瞬いていた。
《ユリカ無理してないか、少し熱が高いから無理するなよ、明日蘭とナギサも連れて行くね》と囁いた。
私がローズのビルに入ろうとすると、ユリカの声がした。
「お熱があるの～、階段登れないの～」と爽やかに微笑んだ。
私はユリカに駆け寄り、額に手を当てて微笑んだ。
『ユリカが大変だ、階段抱っこしないと～』と微笑んで、ビルの外で抱き上げた。
通りを歩く人々の視線を楽しんで、階段に向かった。

ユリカは笑顔で抱かれていた、私も笑顔でユリカを見ていた。
「女はね基礎体温が変化するんだよ、知らないの？」とユリカが爽やかニヤできた。
『そうなんだ～、知らなかったよ』と笑顔で返した。
「でも普通は気付くレベルじゃないんだよ、だから嬉しかったの」と腕に力を入れて近づいた。
『そうなの、俺はすぐに気付いたよユリカの事は』と囁いて返した。
「明日はマミをよろしくね」とユリカが囁いた。
『その言い方は覚悟が出てるのかな？』と囁いて聞いた。
「全然、でも辛いんだね・・ハルカもマミも先に行くのが」とユリカが優しく囁いた。
『少しね、でもユリカが永遠の１８歳でいてくれるなら大丈夫だよ』と囁いて返した。
「今のも本音なの！私にそんな酷な要求するのね」と私の顔を見て、可愛いウルで言った。
『本音だけど、ユリカが側にいてくれればいいんだよ』と微笑んで返した。
「なるほど～、そんな風に使うのね～これからの変化が楽しみ～」と爽やか笑顔で言った。
最上階でユリカを降ろし、手を振って別れた。

ローズはＢＯＸに２組、カウンターに単独客が３人来ていた。
マミはリアンとＢＯＸの中年の団体席で、笑顔で接客していた。
「あれで１７歳でしょう、怖いねなんか」とローズに初めて来た時に会った、可愛い女性が私の前で微笑んだ。
『うん・・お姉さんあまり見ないよね、いつも探すんだけど』と微笑んで返した。
「なるほど～噂通りだね、嬉しい事をサラって言えるんだ」と可愛く笑った。

『嬉しい事って考えてないからだよ、思った事を言ってるだけ・・子供だから』と笑顔で言った。
「私、リアンの妹のシオンです、接客はしないのよ、お手伝いをたまにね」と目だけで笑った。
『美人姉妹だね、でも歳が離れてるよね』と微笑んだ。
「半分だけだから、血がね・・私は後妻の子供」と真顔で言った。
『そうなんだ～、なんで接客しないの？』と笑顔で聞いた。
「苦手なのよ人と話すの、かまえちゃって」と微笑んだ。
『そっか～、俺は子供だから良いのか～』とウルで言った。
「違うよ、自分から話題を振るのが苦手なの・・それと沈黙の時間が苦手」と舌を出して笑った。
その可愛さは秀でていて、完成されていないアイドルのような雰囲気があった。
確かにリアンとは違う優しい顔立ちで、ただ視線の定まらない感じが気になっていた。

『接客中の沈黙は、嫌なもんだろうね』と微笑んで返した。
「うん、でも女友達とでも、もちろん彼氏とでも嫌だよ」と少し近づいて真顔で答えた。
《遠かったんだ、少し距離をとるんだな～視線が落ち着かないのは何だろう？》と思いながら。
『シオンとだったら、俺は沈黙も楽しいけどね』と笑顔で言った。
「沈黙が楽しいの？」と真顔で返した、又半歩近づいた。

『楽しいよ～絶対、沈黙の時には相手の吐息や鼓動まで感じたりできるし。
それに言葉ってどっか脚色されるでしょ、本心って案外沈黙の方が分りやすいんだよね。
シオン・・見せたくないの、それとも知りたくないの？
常に距離をとるのは良い事だろうけど、恋愛相手なら寂しいよね

その距離が』

最後は微笑んだ、シオンは私を見てカウンターの奥に向かった。

《まずかったかな、怒らせちゃった》と焦っていたら、シオンが歩いてきて私の横に座った。

「どうして距離をとるって思ったの」と真顔で言った、間近のシオンはやはり可愛かった。

２０歳位であろう、若さに負けない肌の張りと少し気の強そうな目が印象的だった。

『実際に立ってる時も離れてたし、視線が定まらなかったでしょ・・距離を補足してたんだよね』と意識して優しく言った。

「うん、どうしても相手の目を見て話すのが続かないの」と唇だけで笑った。

『シオン先に聞いとくけど、何か辛いことがあってそうなったの？』と真顔で聞いた。

「違うよ、家庭も良い家庭だったし、リアンも優しくて恵まれてた方だよ」と久々に笑った。

『恋愛関係は？』とニヤで聞いた。

「人並かな、もちろん激しいのは経験なし」と可愛く笑った。

『シオン、今いくつなの？』と情報収集を笑顔ではじめた。

「今年１９歳になるよ、短大生なのだ～」と笑顔で威張った。

『その感じだよね～可愛さは秀でてるから・・女友達との関係は難しいのかな～』とニヤで言った。

「男は可愛いって言ってくれるけど、自分自身はリアンを見て育ったから、全然そうは思えないんだよ」と少し照れて笑った。

『確かに１０歳上にあれがいれば、トラウマになるよね～』とニヤニヤで言った。

「リアン、私を凄く可愛がってくれて、今でもだけど・・半分母親みたいな感じ」と笑った、その笑顔が輝いた。

『はい、止めて～・・今、その笑顔がシオンの笑顔です・・可愛いよ、やっぱり』と笑顔で言った。
「可愛いの私・・人並でしょ」と可愛いニヤできた。
『可愛いよ～、全体的な雰囲気も柔らかくて・・好みの問題でリアンにも勝ってるよ』と真顔で返した。
「そう思う？・・えへ」と１９歳の笑顔が出た、その時目が緩んで優しい光が放たれた。
『なるほど～、気の強そうな目は意識して作ってるんだね・・防御本能かな？』とニヤで聞いた。
「ん～、多分リアンを追い求めたから・・子供の頃間違ったんだよイメージを」と言って私の肩を叩いて、ケラケラと笑った。
『あの炎の瞳を、そうとったのか～可愛い奴め』と私は笑顔のシオンの頭を撫でた。
「仕方ないでしょ、子供のイメージだから」と間近に寄って微笑んだ。
《よし、この距離感だ、ここからが大切》と自分で確認した。

『でも根本的な問題はまだだね、距離の問題・・心の距離』と微笑んだ。
「自分でも分らないの、でもかまえるって言うか・・自意識過剰みたいな」と可愛い真顔で言った。
『家族以外って事？』と優しく聞いた。
「そうだね～、家族だけかな」と微笑んだ。
『そっか～、考え過ぎなんだよ・・シオンさっきと一緒、イメージ間違ってない？』と微笑んで返した。
「間違ってるのかな～・・」と考えた、可愛かったその素直な心が。
《やっぱりね～、素直で真面目過ぎるんだ・・ハルカタイプ》と思っていた。
『シオン、今何に対するイメージを確認したの？』と笑顔で聞いた。
「女友達に対する時と、今までの彼氏との時」と上目使いで聞いた、

間違ってたのと瞳で問いかけた。
『シオン、多分シオンのイメージで間違ってるのは・・自分自身だよ』とニヤで言った。
「えっ」と私を見て、「先生・・教えて」と可愛く笑った。

『シオン人って多分そんなに完璧じゃないよ、素直で真面目は良い事だけど。
それを自分をイメージする時には外すんだよ、シオンのはこうでないといけないって感じでしょ。
自分をイメージするってもっと楽しい事だよ、こうありたいとか、こう成りたいとかね。
さっきのリアンのイメージの間違いで思ったよ。
シオンのリアンへの憧れは実は外見じゃない、外見なんて重要視してないんだよね。
リアンのそのどこか自由な生き方に、憧れてるんだね。
シオン間違ったら駄目だよ、自由ってそれを外してから生まれるもんだよ。
それでシオンが傷つくかもしれないけど、距離感は消えるよ。
そしてシオンが近づけば、相手も近づくと思うよ。
沈黙は恐れる事じゃない、沈黙が気にならない相手の事を。
好きな人だと言うんだと思う、そして相手もそう言うよ・・好きだって』

笑顔で言って、隣のシオンを優しく抱いてみた。
シオンは拒否反応を示さずに、軽く私の背中に腕を回した。
『シオン・・何も言うなよ、沈黙で感じろ・・俺が練習ロボットになるから』と囁いた。
ＢＯＸから見えないカウンターの隅で、シオンを優しく抱いていた。
シオンの温度と吐息を感じていた、シオンが少しづつ近づいて。
最後に私の胸に横顔を付けた、目を閉じて静かだった。

私は立って支えていた、その時リアンが覗いた。
その驚いた顔を見て、【静かにね】って目でサインを送った。
リアンは嬉しそうに獄炎で私に微笑んで、頷いた。
私にとってこのシオンが生徒になる、私の夜街での経験を全て注ぎ込む。
カスミやレンの時はまだまだ手探りだった私は、この素直なシオンに伝える。
シオンの心は白かった、そしてシオンの変化を喜びながら見続けるのだ。
天使の微笑み、白い温もり、嘘のない世界に棲む者。
私にとってシオンは本当に可愛かった、その白い心が好きだった。
その後シオンは自ら決断して、夜街の女になる。
短い期間だった、だが人々の心には深く残った。
どこか歌うように話す言葉、流れ込む心地よさ。
優しい響きに心が癒された。
優しく響く愛の詩・・その名も　詩音。

無意識な伝言

天空の城の頂上に漂っていた、白い妖精の吐息だけが響いていた。
目を閉じた妖精は少女のような香りと、美しい季節の到来を合わせ持っていた。
純粋無垢ではない、心の下地が白かった受入れる能力に優れていた。

「気持ち良いんだね、鼓動って」と目を閉じたまま、シオンが囁いた。
『少し興奮してるから、早いかも』と私もシオンの耳元に囁いた。
「興奮してるんだ～、私が可愛いから？」と唇だけで微笑んだ。
『もちろんそうだよ、てか可愛くない子にはしないよ』と優しく囁いて返した。
「そっか言葉って音だから、内側にも響くんだね」と少し腕に力を入れて、耳を私の腹に押し当てた。
『彼氏の聞いた事ないんだね、案外嘘が分るって思わない？』と聞いてみた。
「うん、この方が分るね、今まではその時だけしか密着しなかったから」と少し照れて言った。
『シオン、大人な発言が似合わないね』と囁いて返した。
「うん、自分でもそう思った、ちゃんと愛せてなかったんだね・・今まで」と私を見上げて微笑んだ。
『仕方ないな～、シオンがちゃんと誰かを愛せるまで、ロボット貸すかな』と微笑んで返した。
「貸してね、私がちゃんと皆と話しが出来るまで」と微笑んだ、目の不必要な力が抜けて可愛かった。
シオンが離れて、私も椅子に座ってシオンの目を見ていた。
『シオン、俺は約束する、シオンには嘘は言わないって』と目を見

たまま微笑んだ、シオンは可愛く頷いた。
『だからシオンも俺と話すときは、目を見てね』とシオンに真顔で言った。
「はい、先生頑張ります」と可愛く微笑んで、「先生・・抱っこもしてね」と笑った。
『もちろん、それをさせて貰えないと、俺はシオンの事が分らないから』と微笑んで返した。
「リアンの妹だから、優しくしてくれるの？」と私の目を見て真顔で聞いた。
『怒るよシオン・・シオンだからに決まってるだろ』と真顔で返した。
「ごめんね、確認したかっただけ」と舌を出して笑った。
『悪い子に減点1点』と微笑んで返した、シオンはウルを出していた。

「うちの可愛い妹にまで、手を出すのかい」とリアンがシオンの後ろに来て、獄炎で微笑んだ。
「ねっ、子供ならイメージするでしょ」とシオンが言って、目に力を入れた。
『確かに、シオンも苦労したね～・・ヨチヨチ』と言ってもう一度抱きしめて、リアンにニヤを出した。
「エ～ン、エ～ン」とシオンが私の胸で泣き真似をした。
「何した、私のシオンに・・魔法をかけたね」とリアンが嬉しそうにニカで言った。
「かけてもらった、すっごいやつ」とシオンが振向きリアンに微笑んだ、その顔をリアンが見ていた。
「嫌じゃないの、密着されて？」とリアンが優しくシオンに聞いた。
「気持ち良いよ、ユリカちゃんの言ってたのが分ったよ」と可愛く微笑んで返した。
「やってくれるんだね、カスミ・ハルカに負けないやつを・・シオ

ンに」と私にリアンが微笑んだ。
『シオンが可愛いから、俺の思った事は全て伝えるよ』と笑顔で返した。
「約束だぞ～」とシオンが私の腕を取って、腕を組んだ。

『シオン・・仕方がないな～もう少し時間が有るから、サービスしてやるよ』とニヤで言った。
「やった～、何？何？」と言って立ち上がった。
私はリアンにニヤをして、シオンと店を出てエレベーターに乗った。
「何かな～、楽しみだ～」とシオンはエレベーターでもご機嫌で、私に微笑んだ。
『リアンにもまだしてない、大サービス』と笑顔で返して、エレベーターを出て階段に行った。
『シオン、目を閉じて怖くないから』と優しく言った。
「怖くなんかないよ」と笑って、瞳を閉じた。
私はシオンの手を持って、私の首に巻かせて優しく抱き上げた。

『怖くないね・・シオン』と優しく囁いた、シオンは頷いた。
『何も考えなくていいんだよ、感じてシオンを大切に運ぶから』と囁いた。
シオンは口元だけ微笑んで、目を閉じたまま頷いた。
私はゆっくりと階段を上がった、足元を確かめてシオンの体温と重みだけ感じて。
シオンは静かに抱かれていた、閉じた目に力は入っていなかった。
３階を過ぎると、爽やかな南風が吹いてきた。
シオンの髪を揺らし、シオンの香りが漂ってきた。
私は４階で少し止まって風に吹かれていた、気持ちが晴れていた。

「重くなった、大丈夫？」とシオンが目を閉じたまま囁いた。
『全然大丈夫、風が気持ち良くてね』と優しく囁いて返した。

「私、全部気持ち良いよ、抱かれてるのも風も鼓動も吐息も」と言って目を開けて笑った。
『もう目を開けれるのか、成長早いぞシオン』と微笑んで登りはじめた。
「蘭ちゃんが好きになるの分るな～」と私に可愛いニヤできた。
『動揺させるなよ、シオン』とニヤで返した。
「１０歳年上のそれも蘭ちゃんに挑む男か～、先生としては最高です」と可愛く笑った。
『シオンが俺の最初の生徒だよ』とニヤで微笑んだ。
「すっごく嬉しいよ、その経験を使ってくれるんだね」と少女の力の方を強めて笑った。
『もちろん、全部使うよ・・それしかないから』と微笑んで返した。
シオンがずっと目を見て話す事が、嬉しかった。

最上階に着くと、ちょうどリアンとマミが団体をエレベーター前で、見送ったところだった。
「そんなサービスがあるのか～」とリアンが獄炎ニカで言った。
「あら、リアンさん知らなかったんですか、ユリカスペシャルってＰＧで呼ばれてますよ」とマミがニヤで言った。
「今週中に、リアンスペシャルも作るように」と最強獄炎ニカで言った。
『考えとくよ、リアンスペシャル』とニヤで返しながら、シオンを優しく降ろした。
マミが店に入って、帰る準備を終えて出てきた。
マミがリアンとシオンに挨拶をして、私の腕を組んで笑った。
リアンとシオンに手を振って分かれた。

通りに出てもマミは腕を組んで、ご機嫌だった。
『マミ、ご機嫌だね』と微笑んだ。
「うん、ユリカさんの言ってたのが少し分った、両極の２人・・で

も最も近いんだよやっぱり」と嬉しそうに微笑んだ。
『そうだよね～、俺もそう思ったよ』と笑顔で返した。
「それにしても、シオンちゃんにまで魔法をかけるかね～」とニヤできた。
『シオンは素直で、話してて楽しいよ』とニヤで返した。
「私は素直じゃないって言ってるのかな～」とニヤ返しされた。

『マミ・・マミの魅力は【淡い】なんだよ、それは最高の魅力だよ。
どんなに身に付けようと思っても、無理なんだよ。
天性の資質だからね、その優しく淡い揺らめきを忘れないでね。
俺はマミの真直ぐな所が好きなんだ、そして周りを優先する心が。
今から沢山恋をするだろうけど、それだけは忘れないでね。
マミ・・自分を信じて良いよ、マミの魅力は絶対の力になるよ。
俺はマミにもハルカにも、本音は幸せな家庭を持ってもらいたい。
でも挑戦するなら、トップを目指して欲しいんだよ。
さっきカスミにもハルカにも言ったけど、マミにも言うよ。
俺に夢を見せてくれよ、マミ・・ずっと見てるからね』

真顔で言って、魅宴のビルの下でマミを抱き上げた。
「顔を見ないで、少し泣かせて」とマミが言ってしがみついた。
『今夜だけいっぱい泣けよ・・マミ』と囁いてゆっくりと階段を登った。
マミの微かな振るえを感じていた、マミの覚悟が揺らがぬように大切に抱いていた。
私は幸せを感じていた、蘭を愛することで自分が分ってきたことが。
マミの震えて泣いている気持ちが、私にも深々と伝わって切なかった。
魅宴を過ぎて最上階を目指した、日付が変ろうとしていた。
また新しい一日が始まると思いながら、マミの香りを感じていた。

「ありがとう、もう充分泣いたよ」とマミが笑った、美しい輝きを身に纏っていた。
『よし、今からだね・・マミ』と微笑んで、優しくマミを降ろした。
「明日、よろしくね」とマミが笑った、私も笑顔で頷いて手を繋ぎ階段を降りた。
魅宴の裏口で手を振って別れて、ユリカのビルで見上げた。
《ユリカ、階段抱っこユリカスペシャルって言うんだって、俺嬉しかったよ、また明日ね》と囁いてPGを目指した。

終演前のフロアーはまだ7割の客の入りで、熱気に包まれていた。
「凄い人を、ありがとう」と美冬が来て微笑んだ、私は手招きした。
『肋骨どうだ、痛みはとれたか？』と囁きで聞いた。
「うん、大丈夫・・もう痛みは無いよ」と美しい笑顔を見せた。
『よし、もう前屈みはやめろよ、少し癖になってるから、美冬の場合は胸だけでもそうなるからね』とニヤで返した。
「いつもありがとう、気をつけるね」と微笑んで、扉に消えた。

ナギサが歩いて来た、私は正面から見るドレスのナギサに見惚れていた。
「エース、ありがとう最高の舞台に連れて来てくれて」と華やかに微笑んだ。
『ナギサ、俺は初めて女性に素敵な事をしたと思ってるよ、舞台はナギサを待ってたね』と微笑んで返した。
「私があなたを見ててあげる、蘭の事を中途半端に、絶対諦めさせないよ」と真顔で言った、美しい顔だった。
『よろしく、もし弱気になったら腕を掴んで・・叱ってね、ナギサ』と真顔で返した。
「まかせなさい、私はナギサよ」と微笑んで、戦場に復帰した。
「化物だよ、美しい化物だ・・また楽しくなったよ」と後からユメ

が微笑んだ。
『今しか見れないかも知れない、蘭とナギサのコンビネーション見とけよ、次のステップの為に』と微笑んで返した。
「あなたの、私達コンビに対する気持ちが聞きたいな～」とユメの後からウミが言った。

『正直に言うね、俺はカスミやハルカには、トップを目指せって言ってるんだよ。
でもユメ・ウミにはそう言わない、もちろん成れないって思ってるんじゃないよ。
俺はユメ・ウミはきっと素敵なプロになると思う、でもきっと素敵な家庭を作ろうとする。
俺は本心で、ユメとウミのその笑顔が見たい、子供を抱き少し所帯染みた笑顔の2人が。
だからユメとウミにはその時の笑顔を期待するんだ、2人が言ってる素敵な笑顔をね』

最後は2人に微笑んだ、ユメは微笑んで頷いた、ウミは泣いていた。
ユメがウミを抱きしめて、扉に消えた、ウミの泣顔を想っていた。
《ウミがんばれもう少しだろ、ウミにはマリアが付いてるんだから》と心で囁いた。
指定席の片づけをしていた時に、終演を迎えた。
9人衆が10番に座り、蘭とナギサが隅の皆が見える位置に座った。
私が10番の前に立つと、カスミが立ち上がって私に不敵をだした。
「今夜は私達9人衆で最初にエースに礼を言う」とカスミが微笑んだ。
9人が立って、私を見た。
「ナギサ姉さんを、私達に与えてくれて本当に感謝する、ありがとう」とカスミが言って、9人で頭を下げた。

『やめてよ・・怖いから』と笑顔で返して、蘭の満開とナギサの華やかな笑顔を見た。
『座ってよ、俺も今夜は少し生意気を言うね。
俺は、四季の燃え尽きたいも、ユメ・ウミの素敵な笑顔も心から期待しているよ。
そしてカスミとレンとハルカの未来に夢を見ている、だから9人衆を大切に思ってる。
さっきリアンの妹のシオンと話をして確信した、夕方カスミには言ったけど。
9人の次のステップは、距離感なんだって思った。
お客さんはもちろん、女友達でも彼氏でも、その心の距離感が大切なんだね。
蘭とナギサは絶妙なんだよ、やり方は全然違うけど、最終的に同じ距離にお客を置いている。
それはギリギリ、夢を見せながら夢だと気持ち良く意識させる、ギリギリに居る。
だから人は何度も会いに来る、その心地よさに戻ってくるんだね。
9人はどこかで待っている、誰かが踏出すのを。
それは良くないよ、チームならチームであると思うなら。
少しずつ踏出せよ、燃え尽きたいなら、素敵な笑顔で笑いたいなら。
そして本物のプロに成りたいなら、自分で勇気を持って踏出すしかない。
でなければ、チームの存在価値が無いと思う。
蘭はその状況が来たから、出来たのかも知れない。
ナギサも魅宴で、そうだったのかも知れない。
俺は9人は出来ると信じている、その準備は整っていると。
幸せじゃないか、踏出し過ぎても見ていてくれる先輩がいるんだよ。
ユリさんアイさんサクラさん、そして蘭ともちろんナギサも。

ずっと見ててくれるじゃないか、出来ると信じてくれてるじゃないか。
ユリさんが慌てる位踏出してみろ、ユリさんが目を見張るほど輝いてみろ。
それでしかユリさんには恩返しできないと思え、指名で伸ばしたとか満席記録とか。
そんな物ではユリさんは本当には喜ばない、ユリさんに感謝してるなら。
輝いて見せろ、その地点まで必死に登って輝いて笑って見せろ。
俺はその姿が見たい、千春・千夏・千秋・美冬・ユメ・ウミ・カスミ・レン・ハルカ。
俺は常に愛を込めて呼んでいる、そして信じている。
検討を祈る、以上』

私は感情的になっていた、でも自分の想いを言葉に出来た、考えずに。
蘭が抱きしめてくれた、ナギサと9人衆が真顔で見ていた。
「エースが見ててくれるんだね、そして常に伝えてくれるんだね」
と美冬が言った、美しい真顔で。
『俺にはそれしか出来ないから、だから嘘無く正直に伝える、大切な者だから』と真顔で返した。
「よし、皆自分で考えよう、そしてお互いをキチンと見よう、エースに泣かされてばかりじゃ悔しいから」とカスミが8人を見て言った。
「よし、いつかエースを号泣させてやろうね」と千春が笑顔で言って。
「うん、今夜はナギサ姉さんに免じて、エースのシオンとの絡みを追求はしない・・解散」とカスミが不敵で言って。
「お疲れ様でした」と蘭とナギサに9人で頭を下げた。
「お疲れ様、私が水商売をしてきて、最高の終礼だったよ」とナギ

サも9人に微笑んだ。
9人衆は嬉しそうに笑顔で、一人一人が私の肩を叩いて控え室に消えた。

「蘭、やっぱりちょうだい・・エース」とナギサが蘭にニヤで言った。
「それだけは、絶対にできない」と蘭もニヤで返して、2人で笑いながら控え室に向かった。
私はサクラさんが眠そうなエミを連れていたので、走って近づきエミを抱き上げた。
「私は初めて見たよ、ユリを本気で泣かせた男を」とエレベーターの中でサクラさんが微笑んだ。
『聞いてたのか～、恥ずかしいな』と照れた笑顔で返した。
「多分、ユリはあなたを離さないよ、あなたで夢を見る・・ユリも私も」と美しく微笑んだ。
『全力でやってみるよ、3人娘の兄として恥じぬように』と笑顔で返した、サクラさんも笑顔で頷いた。
サクラさんを乗せたタクシーを見送り、遠いユリカのビルを見て囁いた。
《ユリカ、楽しませるよこれから、俺分って来たよユリカの教えが》と囁いた。
通りには沢山の人が歩き、道を探してるようだった。
常に道に迷い、回り道を選択していた私にも、その意味が分かってきていた。
《これで良かったと、いつの日か思えるのじゃないだろうか・・蘭の笑顔に》そう思って夜空を見ていた。
ハルカと見上げた、未来図を描いた夜空を・・・。
多分この時点の私は、ＰＧを夏休みで去る事になる覚悟も同時進行でしていた。

その時は気付かなかったが、今書いていて確信した。

私はどんな事をしても、蘭とは離れないでいようと誓っていたが。

ＰＧに残る事は、諦めなければならないかもと、思っていたのだろう。

９人衆にもマミにも感情的になったのも、ユリさんを想っていたのも。

根底にはそれが有ったのだ、どこかで寂しさと闘っていたのだ。

私は覚悟の意味をまだ理解していない、次のミチルとの会話まで間違って進む。

そしてミチルが示してくれる、背中を押してくれる。

ユリとミチルが教える、未熟は悪い事ではないと。

未来など決まっていないのだと・・・。

責任

深夜の狭い雑居ビルの森、仕事を終えた女優達が闊歩していた。
私が見上げる夜空には満天の星が瞬き、古のロマンに誘っている。
私は突然きつく抱かれた、香りだけで誰か分っていた。

「だから、頼むから・・空を見るなよ」とカスミが耳元で言った。
『ごめんねカスミ』と私もカスミの耳元に囁いて、背中に腕を回した。
通りを歩く人の視線など考えない、カスミの生き方に包まれていた。
「蘭、絶対危険だよあの感じは」とナギサの声がした。
「最近あんな事ばかりするの、いけない子なの」と蘭が満開で笑った。
「くそ～また邪魔が入ったか～」とカスミは顔だけで振向いた。
「最近リハビリ頑張ってるね～、カ・ス・ミ」と蘭が最強ニヤを出した。
「あら、私はもう大丈夫って言ってたような～」とナギサが華やかニヤで続いた。
「お前のせいで、怖いコンビが出来たじゃないか」と離れながら、不敵で言った。
『カスミ、まだリハビリは終了してないぞ』とニヤで返した。
「うん、そうだよな～」とカスミが微笑んで、お休みをしてタクシーに乗った。

私も蘭とナギサとタクシーに乗って、帰路についた。
「確かにあんな素敵な子とあの関係なら、寂しいよね～」とナギサが私に微笑んだ。
「大丈夫よ、後からどんどん湧いて来るから」と腕を組んでる蘭が笑顔で睨んだ。

「私がいるからね～、私暫く男はいらないから」と華やかニヤで言った。
『蘭、信じるなよ、すぐにコロッと行くから要注意だぞ、華やか娘は』とニヤニヤで返した。
「了解です、隊長」と蘭も満開ニヤでナギサを見た、ナギサは華やかウルを出していた。
「で、シオンちゃんに何したか述べよ」と蘭が満開で聞いた。
『少し抱きしめて、ローズビルでユリカスペシャル』と反省の顔で言った。
「なぜ出来るのかな～、シオンちゃんも難しい子なのに」と蘭が満開ニヤで言った。
「難しいから行くんだよね～、私の所に来た時も本当に楽しそうだったよ」とナギサが微笑んだ、蘭も満開で微笑んでいた。

その時にアパートに着いた、蘭とナギサが洗面所に消えた。
私はテーブルを運び、私の布団を蘭のベッドの横に敷いた。
ナギサが先にイチゴのパジャマを着て部屋に入った、私に最強華やかニヤを出して。
私の手を引き、布団で腕枕をさせた、その間近に溢れ出る色気に少し緊張した。
「こら～、違うでしょ・・大きく間違ってるでしょ」と蘭が満開で言った。
「あら、そうだったの」とナギサが華やかニヤでベッドに行った。
「なぜ従う、お熱も無いのに」と私の横に座って、笑顔で睨んだ。
「お熱ある時はいいの！」とナギサが笑顔で言った。
「添い寝だけよ、その華やかさどっかに隠しときなさいね」と蘭が満開で微笑んで。
「ナギサ、今日は疲れたでしょ、ゆっくり休んでね・・本当によく帰ってきたね」と蘭が真顔でナギサに言った。
「蘭・・ありがとう、もう心配かけないから」とナギサは涙を流し

て言った。
「私はもう泣かない・・私は5秒で寝るからね」と言って蘭が電気を消した。
「1・2・3・4・5」と言って私の腕の中に入って来た。
私は蘭を引き寄せて、震えて泣いている蘭を抱きしめた。
ベッドの上からナギサのすすり泣く声が聞こえた、蘭の喜びが伝わってきて嬉しかった。

私は眠れずに蘭を見ていた、静かになっていたが眠ってはいなかった。
ナギサは疲れていたのだろう、寝息が聞こえた。
「眠れないの？」と蘭が小声で囁いた、私の胸に顔を付けたまま。
『蘭こそ、眠れないの？』と静かに囁いた。
「嬉しくて眠れないよ、こうしていたいの・・酔ってなくても出来たから」と囁いた。
『蘭、俺は蘭のおかげで自分が少し理解出来てきたよ・・ありがとう』と囁いた。
「うん、嬉しいよ・・ナギサの事は勿論だけど、今夜の9人への話は嬉しかった」と言って顔を上げた。
『顔上げるなよ、近すぎて緊張するだろ』と焦って言った。
「寝てるよね～」と蘭が満開で微笑んだ、私は嬉しくて目を閉じた。
「ありがとう、ずっと側にいてね・・大好きだよ」と言って唇にキスしてくれた、私は嬉しくて少し震えた。
「起きるなよ、恥ずかしいから」と私に強く抱きついた、私は目を閉じたまま蘭を支えていた。
蘭の寝息を確認して、蘭の額にキスをして眠りに落ちた。

翌朝自然に目覚めた、蘭は私の胸の上にいた、優しく腕を抜いて蘭を枕に寝かせた。
ベッドのナギサを見ると、嬉しそうな笑顔の寝顔で眠っていた。

私はクーラーをＯＮにして、洗面所に向かった。
歯を磨き、顔を洗ってキッチンに行った。
ご飯を炊いて、味噌汁に挑戦した、豆腐とワカメに薄切り大根を入れた。
祖母の家に脱走していた時は、常に手伝っていたので味噌汁は少し自信があった。
卵焼きを焼いて、鮭の小さな切り身を焼いていると、蘭とナギサが起きてきた。

「蘭、本気で言うね、エースちょうだい」とナギサが美しく笑って、蘭を見た。
「いいでしょ～、幸せな生活ってこういう事だよ」と満開ニヤで返した。
「いいな～、ちょうだい・・ねっちょうだい」と2人で笑いながら、洗面所に消えた。
私は布団を片付けて、テーブルを戻して、窓を全開に開けた、真っ青な青空が向かえてくれた、マミの水着姿を想像してニヤニヤしていた。
朝食の準備が出来た時に、2人が帰ってきた。

「涙が出そうになるね、蘭は幸せだね」とナギサが蘭に華やかに微笑んだ。
「味噌汁は私も初めて、ナギサが来たからスペシャルサービスだね」と満開で笑った。
3人で朝食を食べた、2人が味噌汁を褒めてくれた。
「ユリカ姉さん何時に来るの？」とナギサが私に聞いた。
「大丈夫なんだよ、誰かさん合鍵持ってるから」と蘭がナギサにニヤをした。
「やっぱりエースが、ユリカ姉さんを解放したんだね」と華やかに微笑んだ。

「確かに、解放って言葉がピッタリだよね」と蘭が満開で返した。
『俺には分らないよ～、今のユリカしか知らないから』と笑顔で返した。
「魅宴を辞める頃は、もっと聡明で近寄り難い雰囲気があったよ」とナギサが言った。
「独立して、少し変ったけど、最近の変化は驚くばかりだよ」と蘭が満開で微笑んだ。

『そうなんだね、この前ユリさんが、ユリカの感性を受入れた姿に感動したって言ったから』と笑顔で言った。
「その相互効果で、あなたも自分を受入れられたんだよね～」と蘭も笑顔で返した。
「エースは凄いよ、私はあんな風に人の話を聞けたのは、初めてだったよ」とナギサも微笑んだ。
『うん、ユリカと話す時は考えをストレートに話すから、それが訓練になってるんだよ』と返した。
「今まで男では、誰も出来なかったんだよ、特にユリカ姉さんに好意を持ってる男はね」と蘭が嬉しそうに満開で微笑んだ。
私はその表現と満開が嬉しくて、笑顔で頷いた、ナギサも笑顔で私を見ていた。

食事が終わり、私が食器を洗ってる時に、２人が化粧をしていた。
楽しそうな声が響いていて、私も楽しくなっていた。
９時３０分に３人でケンメリで出かけた、私が後部座席に乗った。
『蘭、そういえばマミとね・・・』とマミのケジメの話をした。
「うん、最近のマミちゃん綺麗になったね、最後まで付いていてあげてね」と蘭がルームミラー越しに微笑んだ。
「なんか、幸せなんだよね～今のＰＧの女性も、エースが関わる女性は」とナギサが振向いて笑った。
「ミチルママはどんな感じなの？」と蘭が聞いた。

『ミチルには時間をかけるよ、ユリさんとの約束5年後にしたから』とルームミラーに微笑んだ。
「何かな～約束？」と蘭が興味津々光線を出した。
『ミチルにはユリさんボーナスがあるの、5年後にユリスペシャルZを格安で頂くよ』とニヤで言った。
「生意気もそこまで来たか～」と蘭が笑い。
「でも、ミチルママを解放したら、ユリさんくれるよZだろうが何だろうが」とナギサが蘭を見た、蘭も前を見たまま頷いた。

赤玉駐車場にケンメリを止めて、ユリカの店に行った。
私が合鍵で開けて、奥に進んだ、その後を2人が付いてきた。
ユリカはいつもの位置で、レース編みをしていた、私達を見て爽やかに微笑んだ。
ユリカの向かいに蘭とナギサが座った、3人とも笑顔だった。
『ユリカ、キッチン貸してね・・ユリカにスペシャルサービス』と微笑んで行こうとすると。
「待って・・どうして、どうやってるの？」とユリカが驚いて私を見た。
『ユリカ、出来るんだよ・・ユリカを大切に思えば、喜ばそうと思えばね』と笑顔で答えた。
「最高～、読めない想いってこういう事なのね」とユリカが目を潤ませた。
『泣くなよユリカ、泣くのはサービス見てからだよ』と微笑んでキッチンに向かった。
その時リアンが来た、駆け寄って笑顔が溢れた。
4人の楽しそうな笑い声を聞きながら、ユリカとリアン分の味噌汁を用意した。

『俺が初めて作ったから、味は我慢してね』と言ってリアンとユリカに差し出した。

ユリカが私を引き寄せて、抱きしめてくれた。
「少しだけ、泣いていい・・冷めないうちに食べるから」と言って私の胸に顔を付けた、私はユリカを抱いていた。
3人の優しい笑顔に囲まれていた、嬉しかった。
「よし、食べよう・・美味しそうじゃない」とユリカがリアンに言った。
「美味しかったよ～、もう食べちゃった」とリアンが獄炎でニカした。
「何でもすぐ食べて、飽きたらポイするんだからリアンは」と爽やかニヤで返した。
「ユリカ姉さんですよね～」とナギサが華やかニヤで言った。
「そうよ、あなたが変な男と関わってるうちに、時代は変化したのよ」爽やかニヤニヤで返した。
「ユリカ姉さんが違う怖さを手に入れてる、どうしてくれるんだい」とナギサが私に華やかニヤをした。
『良かったねナギサ、怒られて』と微笑んで返した。
「カスミが言った通りや、泣かせるの趣味だな」と目を潤ませて、強引に微笑んだ。
「ナギサ、我慢しても無駄だよ・・私でも泣かされたんだから」とリアンが獄炎で微笑んだ。

「戻って来れて・・本当に良かった、一生後悔するとこだった」とナギサが言って、蘭に抱きついて泣いた。
「最近、泣き虫が多いな～」と蘭が言って、優しくナギサを抱いていた。
「美味しい～、蘭そろそろ飽きたんじゃない？」とユリカが雰囲気を変える為に、蘭に爽やかニヤを出した。
私はユリカに乗って、ウルウルで蘭を見ていた。
「ユリカ姉さん、本気にしてウルしてますから、やめて下さいよ～」と満開で微笑んだ。

「リアンが本気で、今喜びました」とユリカが爽やかニヤをリアンに出した。
「ばれたか」とリアンも獄炎ニカで応戦した。
「蘭は波乱万丈じゃないと思ってたが、誰かのせいで波乱万丈になりそうだね」とナギサが言って、皆で笑った。

5人で楽しく話をしていたら、マミの声がした。
「マミちゃーんどうぞ、入って～」とユリカが言った。
マミの後に大ママが笑顔で歩いて来た、ナギサが緊張した。
『ナギサ、緊張するなよ、大ママお腹空いてないみたいだよ』とナギサにニヤして、立ち上がった。
「よく分るねエースは、私もナギサと話したくてね」と大ママがナギサに微笑んだ、ナギサは本当に嬉しそうに笑顔を返した。
「蘭、エースを貸してくれてありがとうね」と大ママが蘭に微笑んだ。
「エースの意志ですから、マミちゃんが可愛くてたまらないみたいですよ」と蘭が満開で微笑んで返した、大ママが嬉しそうに頷いた。
「頼むねエース」と大ママが真顔で言った。
『大ママ駄目だよ、そんな表情はマミが緊張するでしょ』と大ママに笑顔で返して。
『マミ、水着持って来た?』とニヤでマミに聞いた。
「は～い」と可愛い笑顔で言って、バッグを差し出した。

私はバッグを受け取り、5人を見てニヤを出して。
『俺の可愛いナギサに意地悪するなよ、いってきま～す』と笑顔で言って、マミと手を繋いで出かけた。
「蘭姉さん、ありがとう」とマミが笑顔で蘭に頭を下げた、蘭は満開の笑顔で頷いた。
私はマミと店を出て、光射す海の方を見てマミを見た。
「大丈夫だよ、全然平気・・昨日ユリカスペシャルで元気出たよ」

とマミが笑顔で言って、私の手を引っ張った。
私はマミの輝く姿を見ながら、手を強く握って街を歩いて海を目指した。

「お腹空いてない？」と駅のホームでマミが言った。
『終わってから、ゆっくり食べようよ・・その方が美味しいでしょ』と笑顔で返した。
「うん、そうだね」と可愛くマミが笑った。
汽車に乗ると、海水浴客が減ったので空いていた、私はマミに密着して座ってニヤをしていた。
「どうしよう、電話で呼び出そうか？」とマミが真顔で私に言った。
『家、駅から遠いの？』と意識して笑顔で聞いた。
「近いよ、○○商店の裏だから」とマミが真顔のまま言った。
『シゲルか～、悪い奴だ』と微笑んで返した。
「知ってるの！・・そうだよ」とマミの緊張が少し解れた。
『○○高校は俺の中学の校区内にあるから、あそこの悪は全員知ってるよ』と微笑んで。
『家に行こうよ、こっちがコソコソする必要ないだろ』と真顔で言った。
「うん」とマミは力強く言って、握った手に力を入れた。

シゲルの家は大きな敷地に、二階建ての大きな家だった。
私はマミの手を握ったまま、呼び鈴を押した。
母親が出てきて私を見た。
『シゲル君いますか？』と意識して笑顔で言った。
「ちょっと待ってね～」と笑顔で返して、呼びに行ってくれた。
私は庭にあったベンチにマミを誘って、2人で座った。

シゲルはすぐに出てきて、私とマミを見て警戒した。
「小僧か、久しいね、何の用かな？」とリーゼントの髪を整えなが

ら、マミを無視して私に言った。
『シゲル・・ケジメ取りに来た・・マミが』と静かに言った、私の表情でシゲルに緊張が走った。
「終わった事や、示談したんやかい」と必死にシゲルが言った。
『示談？・・なぁシゲル俺達不良に示談なんてあるの？・・高校ではあるんやね』と真顔で静かに聞いた、シゲルは黙っていた。
『とりあえずマミの話を聞けよ、それからやね』と私は微笑んでマミを見た。
マミは立ち上がり、シゲルに歩み寄った。私は座ったままマミを見ていた。

「なぜ・・なぜあんただけ高校なんか行ってるん、落し前をつけろよ」とマミは叫んで。
「私は魅宴って店のマミだから、あんたを宮崎の夜街に入る事を禁ずる、破った場合はどんな事があっても知らんからね、これから一生やから」とシゲルの目を見て言った。
マミの美しく伸びた綺麗な背中を見ていた。
『シゲル、分ったんかい、知らんやろうけど魅宴のママは今の女帝やぞ、守らん時は俺が相手やかいね』と静かに言った。
マミは輝きながら、満足そうな笑顔で振返り私の横に座った。
「勘弁してもらえんか、俺も来年3月で卒業したら、飲みに出たいんや」とシゲルが私に真顔で言った。

『お前、なにとぼけた事言ってるの、宮崎出ればいいやろ、被害者の子は今どこにおるんかい。
何、勝手な事ばっかり言ってるの、なんなら俺が学校行こうか』とシゲルに強めに言った。
「それは・・・困る」とシゲルが俯いて言った。

『なあ、シゲル・・示談なんてないんや。

勝手が良い時だけ法律に頼るなよ、親に頼るなよ。
俺を説得できんやろ、お前が何のペナルティーも受けて無いからや。
それで逃げ切ろうなんて、虫が良すぎるぞ、高校も卒業しようなんて。
自分のケジメは自分でつけろよ、夜街出入り禁止じゃ足らん位やぞ。
それとも俺に示談しようとでも言うかい、お前の事をそんなに心配してるお袋さんは』

シゲルの後に立った、母親に向かって言った。
「ごめんなさい、どうすればこの子を卒業させてくれますか？」と母親が私に聞いた。

『お袋さん・・ふざけないで下さい。
あんたは女やろ、女じゃないの・・どうして被害者の女の子の気持ちが分らんの。
話にならんね、シゲル決裂や・・・覚悟しな』

私はマミに手を出して、微笑んでマミを見た。
マミも笑顔で立って、手を繋いだ。
「待ってくり、夜街は受入れるかい・・勘弁してくり」とシゲルが必死に言った。
『なぁ、シゲル高校そんなに卒業したいなら、被害者の父親と母親に土下座して来い、それが条件や』と振向いて言った。
シゲルは黙って考えた。
「はい、言わんね！あんたがバカやかい・・私は言われた通り女よ・・あんたを一生許さんよ」と母親が叫んだ、心から溢れた叫びだった。
『お袋さんに任せるよ、シゲルがどうするのか』と母親に真顔で言

った。
「ごめんね・・私も主人に言われてずっと我慢してたの、やっと分かったわ」と泣いていた。
私はその涙が切なくて、振向かずに家を後にした。

青島ビーチの方向に、マミの手を繋いで歩いた。
「ごめんね、エースの方が辛かったね」とマミが私を見た、優しい目だった。
『全然、大丈夫だよ・・ただマミの友達が可哀想でね』と微笑んだ。
「うん、ありがとう」と言ってマミが泣いていた、私はマミの涙を見てマミを抱き上げた。
『マミ、地元で伝説を残しとけよ』と私の首に腕を回した、マミに微笑んだ。
「うん、お昼はどこで食べるの？」とマミが笑顔になって聞いた。
『もちろん、青島〇〇ホテル、そこの板さんに娘さん下さいって言うの』とニヤで言った。
「いいよ～、言えるもんなら言ってごらん」とマミが可愛いニヤできて、腕に力を入れた。
私は海が見える所で立ち止まり、青い海を見ていた。
気分が晴れるのを感じた、海しかないな・・最後に帰る場所は。
そう思って、マミの香りを楽しんでいた・・・。

この時の母親の叫びが、私に刺さっていた。

責任を取るという事を、考えさせられていた。

自分で言いながら、自分の言葉に考えさせられた。

そしてその感情のまま、夜マキに会いに行く。

マキは不運な男だったのかも知れない、私の集中力は確実に上がっていた。

そしてマキに告げる、責任をどう取るのかと。

その答えを聞いて、私はマキに再度怒りを覚える。

そして感じる、自分は出来るのかと問いかける。

責任をとれる人間になれるのかと・・・。

MAMI

青と青が重なる場所を見ていた、空の青と海の青が重なる線を。
アメリカに夢を馳せていた、その時代まだまだ遠い国だった。
マミの香りを感じ、ジャック・ニコルソンが蘇った。
【責任】という言葉が、重く圧し掛かっていた。

大きなホテルが見えた所で、マミを降ろした。
マミが手を繋いで、引っ張りながら振向いた、美しい笑顔だった。
「怖くなったの、挨拶するの？」と可愛くニヤを出した。
『大丈夫、ハルカの親父にも言ったから経験済み』とニヤで返した、マミも笑顔だった。
《また綺麗になった、外れたな～、やっぱり寂しいな》とそのマミの輝く姿を見ていた。
ホテルに入るとマミがフロントに行った、知り合いなのか笑顔で女性と話していた。

「行こう、居るみたいだから」と私の手を取って、2階の大きな割烹に行った。
窓際の海が見える席に、マミと向き合って座った。
『良いな～、こんな所で働きたいな～』と海を見て呟いた。
「マミ」と言って母親らしき人が駆けてきた、マミは笑顔で立ち上がった。
《マミは母親似なんだな～》と私も笑顔で、マミと嬉しそうに話す母親を見ていた。
「この子が付いてきてくれて・・シゲルに会ってきたよ、自分にケジメをつけた」とマミが母親に笑顔で言った、母親は目を潤ませて何度も頷いた。
『お姉さんですね、マミちゃんにはお世話になっています』と笑顔

で頭を下げた。
母親は嬉しそうに笑って、私を見ていた。
「母ですよ、ありがとう、本当良い子なんだね～」と笑顔で言った、
私は大袈裟に驚いてマミに優しくぶたれていた。
「やっぱり夜街の子は違うな～」と母親の後から店名入りの法被を
着た、大きな親父が立って笑っていた。
そのマミを見る優しげな目に、私は嬉しくなって気分も快晴に戻っ
ていた。

「ありがとうな、マミがそこまで出来たのは君の存在だな、見て分
ったよ」と父親が笑顔で言った。
『はい、いずれマミを下さいって、土下座する時の複線を引きまし
た』と笑顔で返した。
「もう、なんでそんな事が言えるの、バカなんだから～」とマミが
また笑顔でパンチを出した。
その笑顔を両親が嬉しそうに見ていた。
親父さんが用意してくれた、豪華な海鮮丼を食べていた。
3人は楽しそうに話していた、私はたまにマミに突っ込みを入れて
笑顔を作っていた。
帰る雰囲気になって、マミが来週のデビューの話をした、美しい真
顔だった。
「分った、俺は仕事だからいずれ見に行くよ、母さんに行ってもら
うな」と父親がマミに微笑んだ。
「うん、私もこれからはちょくちょく帰るから」とマミが2人に笑
顔で言った。
『マミ、ここは宮崎市だろ、免許も来年取れるんだろ・・サーフボ
ード積める車買ってね』とウルで頼んだ。
「仕方ないな～、あと5年も免許取れないチャリサーファーは」と
マミがニヤで返した。

「君がチャリサーファーか！」と親父が私を見てニヤらしき物を出して、母親が微笑んでいた。
『お父様、それ以上は内密にお願いします』とウルで頭を下げた。
「仕方ないな～、じゃあ代わりにマミを頼むな」と笑顔で言った。
『了解しました、変な虫が寄って来ないように、俺が変な虫になっときます』と笑顔で返した。
３人が楽しそうに笑っていた。
マミが立って、私も立って両親に挨拶して、手を繋いでホテルを後にした。
サーフショップに歩きながら、マミの笑顔を見ていた。
「すぐ乗れるの、難しいんでしょ？」とマミが微笑んだ。
『マミは大丈夫、海を知ってるからね』と微笑んで返してサーフショップに入った。
金さんに更衣室を借りて、マミを着替えさせて日焼け止めクリームを渡した。

「可愛くなったな～マミちゃん」と更衣室に入ろうとした私に金さんが言った。
『さすがに地元っ子、知ってるんだね』と笑顔で返した。
「勿論、水泳で宮崎市の中学女子の、１００ｍ自由形の記録保持者だったんだぞ」と金さんが笑った。
『それで、あの腹筋か～、サーフィンはまるな・・マミ』と笑顔で返した。
「うれしいね～、マミちゃんには大サービスしよっと」と金さんも楽しそうだった。
マミがクリームを塗り終わり、私が水着に着替えてマミを見た。
『マミ意地悪した、ビキニじゃない』とウルで言った。
「ビキニで初めてのサーフィンなんか、出来ないでしょ」とマミがＴシャツを着ながら微笑んだ。

私は離れの倉庫にある、自慢の真っ赤なサーフボードを出して、ワックスをかけた。
「なんか高そうなボードね、中学生のくせに」とマミがニヤで言った。
『ミスター望月のお古頂いたの、ウルウルしてね』とニヤで返した、マミは笑っていた。
私がボードを担いで、マミが隣を歩いてキャンプ場を抜けて砂浜に入った。
『自由形のマミちゃん、準備運動よろしく』と笑顔で言った、マミは頷いて入念にストレッチをした。
《さすがに本格的だな、競泳用水着も案外セクシーだ》と私も体をほぐしながらニヤニヤをしていた。
「ニヤニヤしないの」と笑顔で睨まれた、私はウルで返した。

その日の青島の波は穏やかで、地元サーファー達は木崎に行ってるようだった。
旅行者のサーファーが数人居るだけで、ベストな展開と思っていた。
私は腰までの深さで、マミをうつ伏せにボードに乗せてパドリングの説明をした。
マミはさすがに競泳選手だけあって、飲込みの速さに驚いていた。
私がマミが乗ったボードをアシストして、沖に出てマミをボードに跨いで座らせた。
マミはご機嫌だった、海水に濡れた笑顔が輝きで溢れ、解放の夏を満喫してる表情だった。
「最高だねこの景色、水平線上に浮かぶんだね～」と輝きを増して笑った。
『いいだろ～、冬も良いんだぞ景色が変わって』と笑顔で返した。
『マミ、波に乗ろうと思うなよ、波は直線じゃ来ないから。
今は右からの波を感じろ、マミは視野が広いから前を見てれば大

丈夫。
　そしてボードが浮いた時、少し押す感じで立ってみるんだ、後は前だけ見て風を感じろよ。
　最高の時を感じてね』

そう笑顔で言った、マミは笑顔で頷いてボードにうつ伏せになった。
前を見て静かになった、私は横で立ち泳ぎをしながらその輝く横顔を見ていた。
マミは波に気持ちを合わせ、ボードを押した、最初のトライで一瞬立った。
私は驚きながら、マミの方に泳いだ、水から顔を出したマミは。
「最高～、気持ち良い～」と輝きながら笑った、直射日光を跳ね返し輝いていた。
『マミ、女子で最初のトライであんなに立った子を、俺は初めて見たよ』とボードをマミに渡しながら、笑顔で言った。
「そうなの、私才能あるんだ～、行くよ～」とマミがパドリングをして沖を目指した、私も嬉しくてボードを押していた。
マミは輝きながら何度もトライし、最後の方はかなり乗れた。

『後で疲れがくるから、今日はこの辺でやめようね』と笑顔で言った、マミも輝きながら笑顔で頷いた。
「あなたは乗らなくていいの？」とマミが笑顔を継続しながら言った。
『プロは、こんなお子ちゃま波は乗らないの』とニヤで返した、マミもニヤで返してくれた。
マミとサーフショップに戻って、マミを先に簡易シャワーと着替えをさせた。
私はボードを指定の位置に片付けて、顔馴染のサーファー達にマミの事を冷やかされていた。
マミが出てきて、私が着替えに入った。

マミの金さんと話す、楽しそうな声が聞こえていた。
私の準備が終わり、金さんに礼を言って、マミと手を繋いでサーファー達に別れを告げて駅を目指した。

「はまるかも、いやはまったかも」とマミが私に微笑んだ。
『問題は、日焼け対策だけだよ、大ママに怒られるぞ～真っ黒マミになったら』とニヤで返した。
「日焼け対策研究しよう、そうしてでもやる価値があるね」と笑顔で言った。
汽車に乗り、マミの横に座ると私の肩に頭を乗せて目を閉じた。
私はマミの寝息を感じながら、空港を飛び立つ飛行機を見ていた。
《大空にトライしたいな～、スカイダイビングの開放感ってどんなんだろう》と思いながら青空を見ていた。
隣に眠るマミは、新しい何かを身に付け輝いていた。
《俺は寂しくないよ、マミ・・マミが楽しい夢を見せてくれるから》と囁いて手を握った。
窓から流れ込む潮風が、マミの髪を揺らしキラキラと輝いていた。
夏は続く、南国の解放の夏が、その力でまた一人の少女を女に変えた。
その熱で少女の心の鍵を溶かした、私には寂しさは無かった、希望の方が大きくなっていた。

宮崎駅に着いて手を繋いで歩いて、若草通りのロックカフェで休憩した。
「不良の溜り場の雰囲気が、素敵だね～」とアイスティーを飲みながらマミが笑った。
『そうなの、俺マッチしてないな～』と笑顔で返した。
「ありがとう、凄く響いたよ・・母親に言った、女だろって言葉・・嬉しかったよ」とマミが微笑んだ。
『もう、忘れようねマミ・・これからの方が重要だから』と微笑ん

で返した。
「うん、少女の思い出いっぱい出来たよ・・最高の夏だった」と輝きを増して笑った。
カフェを出て、サクラさんの店の前でマミと強く腕を組んで、ウィンドウ越にカスミにニヤを送った。
最強不敵で返されて、私とマミはカスミに笑顔で手を振って夜街を目指した。

マミを魅宴のビルに送り、ユリカの店に寄ってみた。
店に入るとユリカがまたレースを編んでいた、逆光で輝き爽やかに笑った。
『ユリカを抱っこしないと、落ち着かなくて』と笑顔で言って近づいた。
ユリカも爽やかに笑って立ち上がり、私の首に腕を回した。
私はユリカを抱き上げて窓辺に行った。
「よく考えてね、あなたにはまだ時間が有るんだから」と深い目で微笑んで、揺り篭に乗せてくれた。
『うん、責任のとれる人間になりたいと思ってるよ』とユリカに微笑んで返した。
「今日のプレゼント、最高だったよ・・あんなに嬉しい事初めてだった」と強くしがみつき耳元に囁いた。
『これからもっと驚かせてやるよ、ユリカには俺にしか出来ないことが、有る事が嬉しいんだよ』とユリカの耳元に囁いた。
ユリカが頷いて静かになって充電に入ったので、私はユリカの重みと体温を感じていた。

「明日のお祭り、あなたが出場する、女性全員を見ていてね」とユリカが微笑んだ。
『何かが、ありそうなの?』と真顔で返した。
「分らない、あなたじゃないけど、誰かの強い気持ちが出る感じ・・

強く発光するような」とニヤで言った。
『次段階にいよいよ入るか、大丈夫・・俺が見てるよ全員の驚く姿を』と微笑んで返した。
「うん、私も忘れるなよ～」とユリカが微笑んだ。
『忘れた事なんて、一度もないよ』とユリカを観た。
「パーフェクト、最高の重なった響きに・・お礼」と言って頬にキスしてくれた、私は嬉しくてニヤニヤしながらユリカを抱いていた。

ユリカがエレベーターまで送ってくれて、頬を指差して笑った。
『ありがとう、その方が嬉しいよ・・洗う時寂しいけど』と笑顔で返した。
「うん、貴重だから貰えるように、がんばりたまえ」ユリカが笑顔で手を振って、私も手を振って別れた。
TVルームに入る前にトイレに行って、ニヤニヤしてから。
『えぃ！』と気合を入れて顔を洗った。
TVルームに入ると、ハルカとレンがサインの話をしていた。
「どうだった？」とハルカが私を見て言った。
『ハルカ、気合を入れろよ、マミは輝きだしたぞ』と笑顔で返した。
「うん、ありがとう」とハルカが美しい真顔になって言った。

『レン、来週の週始め・・リアン・ユリカの店、攻めるか？』とレンに言った。
「いいのか！頑張るよ」とレンが笑顔で言った。
『よし、俺が学校始まったら、何時に来れるか分らんからね』と笑顔で返した。
「ありがとな、ユリカさんの店は魔女でやってみるよ」と真顔で言った。
『当然、ユリカもその方が喜ぶよ』と微笑んで返した。
「ハルカの魅宴研修も、来週の木曜から行ってもらいますね」とユ

リさんが薔薇で微笑みながら入って来た。
マリアが駆けてきて、私が抱き上げた。
「ユリさん、ありがとうございます」とハルカが頭を下げた。
「ハルカ、それはエースに言って、魅宴の大ママに頼めるのはエースだけですよ」と薔薇で微笑みながら、私の隣に座った。
「来週になれば、ナギサが完全復活しますから、ハルカもレンも心置きなく頑張ってね」と2人を見た。
2人も笑顔で頷いて返した。
「カスミちゃんが6時位に来ますから、貸衣装屋さんに案内して、お祭りのドレスでない衣装を選んで来てね」とユリさんが私に悪戯っ子を出して言った。
『派手に行きますよ～、全員がぶっ飛ぶような』とニヤで返した。
「カスミ姉さんも、完全復活になるのね」とハルカが微笑んだ。

『うん、そこからがカスミの変化の始まり、2人ともボーっとしてたら背中も見えなくなるよ』と2人にニヤを出した。
「よし、頑張ろうね、ハルカ」とレンが微笑み。
「はい、頑張って踏出してみましょう、エースを信じて」とハルカが私を見た。
『魅宴はPGより暗いから、フロアー踏み外すなよ・・ハルカ』とニヤで返した。
3人の笑い声の中、マリアが天使で私を見ていた。
私はマリアを見ながら、マリアも分るんだよねと思って。
《マリア、俺も頑張ってみるから、ずっと見ててね》と心で囁いた。
「あい」とマリアが天使全開で私に微笑んだ、私はマリアを優しく抱いていた。

マミと過ごしたこの日は、私の心に深く残っている。

マミは2年後、シゲルの成人式の前日に、夜街出入り禁止を解いた。

シゲルが私の所に挨拶に来て、後悔を全身に漂わせて泣いた。

１０数年後、シゲルが言った、あの２年が無かったら自分は駄目な人間だったと。

マミに感謝していた、大ママの後継者マミ。

その優しさは自分に対する厳しさの上にある、自らに最も厳しい２人。

マミとケイ、私もこの２人に会えなかったら、駄目な人間だったかもしれない。

その生き方が示す、優しさとはそこから生まれるんだと。

強固な意志と、行動力で進む・・憧れの精神世界を目指して・・・。

最後の道標

静寂のフロアーの準備が整い、週末の熱を持っていた。
その静寂に木霊して響く音色は、若さの鼓動を強く伝える。
状況に負けない力、そして突き進む強さで背中を押していた。

私は自分担当の最終チェックをして、座って久美子の練習曲を聴いていた。
「また久美子ちゃん独り占めにして～」と蘭が後から言った。
『ナギサと楽しんでる？』と振向いて笑顔で言った。
「うん、今夜の晩御飯はカスミとデートを許す、私はナギサとデート・・だから背中合わせで寝ること」と蘭が満開で微笑んだ。
『了解、日曜も靴屋あるんだから、無理するなよ』と真顔で返した。
「ありがとう、私は大丈夫だよ・・あなたがいるから」と満開で微笑んでＴＶルームに戻って行った。

５時少し過ぎにはカスミがやってきた。
ピンクのフリルのワンピースを着て、大きな夏用の帽子を被って少女の雰囲気でやってきた。
『可愛いね～、カスミちゃん』と微笑んだ、カスミも嬉しそうに可愛い笑顔で返した。
「皇帝に着替えてね」と可愛く笑った、輝きは隠せなかった。
私はカスミの手を繋ぎ、ＴＶルームに向かった。
カスミの姿を見て、蘭とナギサとハルカとレンが固まった。
「カスミ姉さん可愛い～」とハルカが笑顔で言った。
「エースが喜ぶのよ、可愛い感じ」と４人を見てニヤを出した。
「蘭、危険だよ～、この感じは」とナギサが蘭にニヤを出した。
「ナギサ大丈夫なの、奴のカスミとの出会いは下着姿だから」とナギサにニヤで返した。

「それは、強烈な出会いだ」とナギサが笑った。
私が皇帝に着替えて出てくると、ナギサが華やか最強ニヤで見て。
「私が許せない感じの衣装を着てる」とニヤで言った。
『そこにも後で行ってくるね』と笑顔で返した、ナギサが微笑んで頷いた。
『カスミ何モジモジしてるの？』とニヤでカスミを見た。
「初めてのデートで緊張してて・・うふ」と可愛く笑った。
『ぼっぼっ僕もは・は・初めてなんです』と右手を大袈裟に震えさせて、カスミに差し出した。
カスミも大袈裟に震わせて、少し触れたら慌てて引っ込めて。
「いや～ん、はじゅかしい」と俯いて手で顔を覆った。
４人は笑顔で、このコントを見ていた。

『かっかっカスミさんはご趣味は何ですか？』と必死な感じで聞いてみた。
「お茶と、日本舞踊とお花を少々」とモジモジで言った。
『まぁそれは素敵ですわ～』と必殺ユリスペシャルを出した。
５人が大爆笑した、カスミも私の肩をバシバシ叩いて笑った。
「それは駄目って言ったじゃない」とハルカが横腹を押さえて笑って。
「いつ練習してるのよ～、上手すぎるよ」と蘭が満開で笑った。
『蘭が寝てから、耳元で練習してるよ』とニヤで言って、蘭の満開の笑顔を見て。
カスミの手を握って光射す、夜街に出かけた。

裏階段を降りて、通りに出たらカスミが腕を組んできた。
『少女は疲れたね』とカスミにニヤで言った。
「１時間が限界だよ、現在修行中」と微笑んで返してきた。
『衣装どんなの考えてるの？』とニヤニヤで聞いた。

「ホノカは絶対お嬢様系で来るから、私は当然1番派手なやつで勝負だよ」と不敵で言った。
『当然だね、カスミ一気に夜街の噂になるよ』と微笑んで返した。
「称号付けてくれよな、優勝したら」と輝く笑顔で言った。
『俺でいいの？』と真顔で返した。
「お前がいいんだよ、ハルカとレンの名前に、やきもちだよ」と美しく微笑んだ。
『ＯＫ後世に残るのを付けるよ』と笑顔で返した、カスミも笑顔で頷いた。

貸衣装屋でカスミが衣装を見ていた、私はマネキンの着ている衣装を見ていた。
「いくか！それで」とカスミが私の横で言った。
それはＳＭチックな真っ赤なボンテージ衣装だった。
上半身は胸だけ隠す小さなベストで、赤い革調の下地に黒の縁取りで銀のビスが打ち込まれていて。
左の胸に銀の刺繍で薔薇があしらわれ、背中はコルセットのように紐で編まれていた。
下半身は同じ素材のお尻が見えそうな小さなホットパンツで、左腰に鎖が巻かれ。
右のヒップに銀の刺繍の蝶がデザインされていた、靴は真っ赤なロングの編込みブーツだった。
『大丈夫なのか、これで大衆の前に立つんだよ』とニヤで言った。
「試着してみよう」と不敵で微笑んで、店員を呼んだ。

カスミが試着室に入ると、店員の若い女性が私に微笑み。
「あれを着たいと言われたの、初めてです、楽しみですね」と笑顔で言った。
試着室が開きカスミの背中が見えた、胸を押さえて顔だけ振向いた。
「きつく縛ってくれ」と不敵に私に微笑んだ。

『良い役だ～』と言って、下から紐を締めていき一番上できつく結んだ。
カスミが振り返り、不敵全開で微笑んだ。
私も女性店員も息を飲んだ、その見事なプロポーションで服のいやらしさが全て消えていた。
豊満な胸が強調され、胸の谷間から見える部分の張りが若さを出し。
形の良い胸だと主張して、腰のくびれた部分は内臓の存在をイメージできないほど細く。
腹筋はマミ程は無いが、確実に隆起の影が出来て色気を発しており。
ホットパンツの下から伸びた足は細く長かった。

「お客様、プロの経験ありますよね、頭身測ったことありますか？」と店員の女性が見惚れて聞いた。
「１７の時に、７．６頭身でした」とカスミが微笑んだ。
「７．６！」と店員が驚いていた、私は頭身が分からずニヤニヤしてみていた。
カスミが発光しながら、私の表情を見ていた。
「決まりやな、これでいこう」と輝きながら笑顔で言った。
『うん、良いかも・・カスミらしいよ』と私も笑った、カスミも笑顔で頷いた。

私が衣装の袋を持って、貸衣装屋を後にした。
『カスミ、腹筋鍛えてるの？』とニヤで聞いた。
「うん、お腹だけ皮下脂肪がつきやすいんだよ」と笑顔で返した。
『足とかは？』と興味津々光線を出した。
「誰にも言うなよ、私来る時だけ歩いて来るんだ、意識して綺麗に歩くんだよ」と微笑んだ。
カスミの部屋から、夜街までは歩くと３０分以上はかかる。
私はカスミの飽くなき努力を感じて、またカスミが好きになっていた。

絶対に状況や不運を言い訳にしない、強い魂が作り上げた【美】が花開こうとしていた。

『やっぱり俺の思った通りだ、カスミは凄いよ』と笑顔で返した。
「お前は分かるよな、中坊であれだけの体作るんだから」と不敵に微笑んで、フランス料理屋に入った。
「一人で来れない第二段、素敵やろ～」と可愛く微笑んだ。
『少し、緊張するような店やね』と言ってカスミの後を続いた。

「カップルじゃないと、来難いんだよ」とコース料理を頼んだカスミが静かに言った。
『そんな感じだね、でもカップル見ても、たいした女性いないね』とニヤで返した。
「お前は凄いのに、囲まれ過ぎなんだよ」とワインを飲みながらカスミが笑った。
『カスミを筆頭にね』と微笑んで返して、初めて赤ワインを飲んでみた、渋かった。
「蘭姉さん除いて、自分の好みじゃなくて、見た目は誰が1番だい？」とカスミが不敵に笑った。
『正直に言うよ、怒るなよ・・カスミ』と笑顔で言った。
「お前はご機嫌取らないよな～、嬉しいね～」と輝く笑顔を見せた。

『ご機嫌なんかとらないよ、俺はカスミが1番だと思ってるよ。
蘭を覗けばの話なら。
外見的好みはリアン、まぁ内包してる熱も含めてだけど。
カスミはやっぱり俺にとっては、怒るかもしれないけど、可愛いんだよ。
勿論、出会いの衝撃も、青島の事も、博多の事も、お熱の事もあるけど。
それを抜きにしても、可愛くてたまらないんだよ。

そして、いつもパワーを貰えるし、不敵で元気もらうよ。
そしてカスミの愛情表現が好きなんだよ、下手くそだけど愛情に溢れてるから。
あの俺にくれた権利、本当に大切に心に持ってるよ。
心の支えになってる、美冬には返せたけど・・カスミには返せる自信が今はないよ』

最後はカスミに微笑んだ、カスミも優しい笑顔で私を見ていた。
「返す必要は無いって言っただろ、たとえ男が出来ても返すなよ、受け取らないし」と微笑んだ、圧倒的美しさが輝いていた。
『うん、ありがとう』と笑顔で返した。
「ユリカ姉さんは、どんな感じなの？」とカスミの聞き魔が出てきた。

『ユリカは表現が難しいけど、凄く愛おしいんだよ。
ＰＧでないのも大きいのかも知れないけど、凄く愛おしい。
ユリカのあの感性は関係ないんだ、究極を言えば外せるなら外してやりたい。
ユリカを苦しめる物を１つでも減らしてやりたい。
そしてユリカの事を分ってあげたい、どうしても俺はユリカを少しでも理解したい。
確かに年齢差は１５もあるけど、自分の娘のように愛おしいんだよ』

真顔で答えた、カスミは優しく微笑んで頷いた。
「最近思うんだけど、お前もユリカ姉さんと同種族じゃないのか？」とカスミが真顔で言った。
『えっ！』と言って固まった、考えた事も無かった自分の事をどうなのかなど。
「マリアを考えてみろよ、どう考えてもお前には特別だぞ、マリア

は」とカスミが微笑んだ。
『それはそうだと思うけど』とカスミを見ていた、カスミは優しく微笑んだままだった。
『そうなのかもって、今思った・・多分同種族の落ちこぼれみたいな』とニヤで言った。
「１００点」とカスミが美しく笑った。
私はカスミのこの言葉が本当に嬉しかった、そして感じていたユリカに対する想いを。
カスミとユリカに対する愛情に自信が持てた、嬉しくてカスミの強い輝きをじっと見ていた。

素材が何か分らない美味い物を食べながら、笑顔で沢山食べるカスミを微笑んで見ていた。
『カスミ聞いて良い？』と真顔で言った。
「お前が私に遠慮をするなよ、寂しいだろ」と可愛く微笑んだ。
『実家に連絡入れてるの？』と気になってる事を聞いた。
「心配してくれてありがとな、母親には電話してるよ」と笑顔で返した。
『そっか～、良かった』と笑顔で返した。
「家出少年に心配された」と輝きウルで返された。
『俺は寂しくないから、カスミの部屋見たら・・一人の部屋に帰るのかって思って。
カスミのような素敵な女性が、そうなんだって思って。
カスミが寂しいんじゃないかって思って・・なんか辛かった』
正直にカスミの目を見て言った、カスミも真顔で聞いていた。

「今は一人が快適なんだよ、嫌な奴と暮らしてたから」と優しい笑顔で返して。
「それに本当にしんどい時は、お前が側にいてくれるから安心だよ」と微笑んだ。

『うん、お礼の約束忘れるなよ、そして遠慮はするなよ』と微笑んで返した。
「ありがとな、その言葉が私の心の支えだよ」と可愛く笑った、私も笑顔で頷いた。
デザートの柔らかいケーキのようなアイスを食べた、美味かった。
7時5分にフランス料理屋を出た、カスミと手を繋いでＰＧのビルの下で。

『カスミ、マミに言っといて、少しだけ遅れるかもって、ホストに会ってくる』とカスミに笑顔で言った。
「了解、嬉しそうだね～、がんばれよ」と手を振ったカスミに、手を振って別れてホストクラブを目指した。

中央通りにある大きなホストクラブの、呼び込みのトキオ君に笑顔で声をかけた。
『トキオ君今晩は、忙しい？』と笑顔で聞いた。
「おう、エース、なんだい？」と笑顔で返してくれた。
『マキのバカ来てる？』とバカを強めに言って、微笑んだ。
「お前か追い込んだのか！マキバカやね～昨夜血相変えてたよ、もう来てるよ」とニヤで返してきた。
《やっぱ身内にも人気無い奴やな～》と思って。
『マキって今でもＮＯ１なの？』と情報収集した。
「今は接戦かな、若手のホープにジンってのが出てきたからな」と笑顔で言った。
『ありがとう、ちょっと入るね』と笑顔で頭を下げた。
「ごゆっくり」とトキオが笑顔で答えた。

派手なシャンデリアの下がる大きな入口で、若いホストが４人で並んで客待ちをしていた。
私はホストが嫌いになっていて、いきなり４人の目の前に立って。

『マキのバカは来てるの？』と微笑んだ。
「なんや、ガキ」と４人が睨んだ、こいつらもバカかと思って無視して中を目指した。
いきなり後から殴られた背の高い痩せた奴だった、私は振返り満面の笑みを見せた。
『お前達アウト』と笑いが止まらなかった。
「何したんか！」とマキが慌てて走ってきた。
『お前がやらせたんやろマキ、殴られたよどうしてくれるん』と微笑んだ。
「バカかお前ら！」とマキが叫んで恫喝した。

『マキいいから、話し合おうや、店のトップ呼んで来いよ』とマキに微笑んだ。
『おい、殴った奴、１番良い席に案内しろよ』と笑顔で背の高い若い男に言った。
男はマキに恫喝されてビビッていた、私が無言で見てると案内してくれた。
『４人そこに立っとけよ、いきなり殴るってどういう事か教えてやるかい』と静かに言った。
マキが中年のスーツを着た男を連れて来た。
「なんやガキ、何様や」と中年男がいきなり喧嘩越しで言った。
『マキ、説明してないんやね、時間が無いんや電話貸せよ・・望月さんにかけるかい』とマキに微笑んだ。
マキは真っ青になって、中年男に耳打ちした。
「お前は・・バカか！」とマキが中年男に恫喝された。
『俺、時間ないんだけど、内輪もめは後で頼める』と中年男に微笑んだ。

「失礼した、知らんかったもんやかい」と中年男が頭を下げた。
『ねえ、オジサン・・知らんで済むのホストの世界は。

あんたは知らんかったって言う客やホストを許すの、教えてよ？』と静かに言った。
「それは・・・」と口ごもった。
『俺はＰＧのエースって呼ばれてるの、大ママにでも聞いてみるよ』と微笑んだ。
中年男はハッとして私を見た。
「勘弁してくれ、それ相応の金を出すから」とまた頭を下げた。
『オジサン、俺の事馬鹿にしてるんだね、おれそこの４人の誰かにいきなり殴られたんだよ』と微笑んだ。
「えっ」と言って私を見た、私は笑顔で返した。
『さて、どうしよう、とりあえず知り合いの弁護士呼ぶかな』と言って立ち上がった。
「待ってくれ、それだけは勘弁してくれ」と中年男が頭を下げた。

『どうするん、どう責任取るの・・教えて？』と座って微笑んだ。
沈黙が流れた。
『もういいよ、それは俺が考える・・マキ金は？』とマキに言った。
「１００万ある、それが精一杯なんだよ」と頭を下げた。

『何も知らん女を騙して、人生狂わせて１００万で。
自分達のした事は勘弁してくれで終わりか、そんなに勝手な商売が成立するの？
あんたらチンピラ以下だよ、相手の年齢や外見で強気に出て。
しくじったら、知らんかったで頭を下げて、女を食い物にして。
いざとなったら、金で何でも解決できると勘違いして。
力も金も通用せん相手には、どう責任取るんや。
マキ、女の一生の内で、最も輝く季節の代償が、自分の今出来る範囲なんかい。
お前どうするん、俺はお前だけは許さんよ、どこに逃げても追いかけまわす。

平穏な生活は諦めろよ、そんな覚悟なら・・そんな生き方なら。
お前が奪った物の大きさを知れよ、女の絶対に取り返せない季節の重さを知れよ。
時の重要性を認識させてやるよ、それでしか・・償えんよ』

私は感情的になって、自分の言葉に自分が撃たれていた。
私は気持ちが深く沈んでいた、沈黙の中で。
《自分はどうなんだ、蘭の大切な季節の代償を持っているのか》ともう一人の自分が久々に現れて、怒りに満ちて私に叫んでいた。
《お前が愛すれば愛するほど、蘭は傷つくんじゃないのか、勝手なのはお前も同じだ》と心の中で連呼されていた。
私はいたたまれなくなって、早急の解決に踏み切った。

『ねえおじさん、マキに高利であと１００万貸してよ、それでおじさんとマキはチャラにするよ』と中年男に微笑んだ。
「分った持ってくる、それでチャラやね」と中年男も笑顔になった。
『４人は別だよ、それとマキから利息取ってね』と笑顔で言った。
「もちろん、取るよ」とニヤで言った、不気味なニヤで寒気がした。

『それで、４人はどうするの？連帯責任を取るのかな？』と笑顔で４人を見た。
「どうすればいいんや？」と殴った男が聞いた。
『何言ってるの、そんな事知らんよ、分らんなら警察呼んで普通に処理するしかないね』と静かに言った。
沈黙が流れた、中年男が部厚い封筒を持って来た。
「間違いなく１００万ある、マキには明日高利貸しで借りさせて返済させるよ」と中年男が微笑んだ。
『良かったねマキ、解決して、働けばすぐに返せるよ・・店があればね』と笑顔で言った。
マキはハッとして、４人を見て、中年男に耳打ちした。

「どうすればいいか考えんか、警察来たらお前らも店もアウトやぞ」と中年男が怒鳴った。
４人は沈黙していた。

『ジンって人来てるの、来てるなら呼んで』と言ったら、裏から若い男が出てきた。
彫の深い端正な顔立ちの、２０歳位の男で爽やかな優しい目が印象的な。
男の私でも、ハッとするほど良い男だった。
「俺がジンや、話は裏で聞いてたよ」と私に微笑んだ。
《やっとまともなのがいた》と思って微笑んで返した、私は心の限界を感じていた。
『やっぱ、あんたしか話分らんね、どうしたらいいの？』と笑顔で聞いた。
「背負わせるしかないね、君は金は受け取らんやろうから」と微笑んだ。
『ジンさん、俺子供だから疲れたよ、ジンさんを信じるからよろしく』と立ってジンに頭を下げて、店を後にした。

「おい、待てよ・・大丈夫か、ごめんな絶望させて」とエレベーター前でジンが私の腕を掴んで、私を見て優しい目で言った。
その目が私には豊兄さんと重なって、私は俯いて泣いてしまった。
心の中のもう一人の自分は、傷ついたレコードのように連呼を続けて、私は限界が来ていた。
ジンが私を優しく抱いてくれ、階段の方に歩いた、優しかった本当に優しい温もりだった。
「本当にごめんな、辛かったんやな・・泣けよ」とジンは優しく言って私を見ていた。
私が見るとジンも泣いていた、屈んで私を優しく見ながら泣いていた、暖かい何かに包まれていた。

【最後の道標】と呼ばれた男・ジンと【最後の挑戦者】を背負った私の出会いだった。
私はただ泣いていた、豊兄さんともキングともミスターとも違う、男の温もりに抱かれて。
私は絶望していた、もう一人の私に叱責され続けて。
ジンが腕を掴んでくれなかったら、抱いてくれなかったら。
どうなってたのか想像もできない。
ジンとの関係の始まりは、お互いの涙で幕を開けた。
悲しみの貴公子と呼ばれたジン、疲れて道に迷った女性達が愛を込めて贈った称号。
【最後の道標】・・ジン・・ありがとう・・泣いてくれて。
俺はあれで止まったよ、道を間違えなかったよ。
ジンの涙が、道を示していたから。
涙の道標に【諦めるな】と、書いてあったから・・・。

回復

全てを包まれていた、大きく暖かい何かに。
私の肩を抱く男は外見に負けない、内包する大きな温もりを持っていた。
常識などから遥かに遠い場所にある、最高の優しさを持っていた。
私はただ甘えていた、幼子が兄に甘えるように泣いていた。

「なぁエース、俺はお前の事を沢山聞いたんだよ」と私を見てジンが微笑んだ、私は少し落ち着いてきていて、頷いた。

「俺が今、心から愛してる女が教えてくれた、お前の事を。
俺はずっと会いたいと思っていた、そしてさっきの言葉を聞いて嬉しかったよ。
でもお前の最後の顔を見て、分ったんだよ、自分を責めてる事を。
だから俺はお前の事が一瞬で好きになったよ、その心をダイレクトに言葉に変換して。
自らも傷つくお前がね・・友達になってくれよなエース。
俺は友達だから言うぞ・・エース・・進め、お前の今思ってる事を心に刻み込んで進めよ。
挑戦する価値がある最高の副職の為に、そしてお前に託した四天女の想いの為に。
お前にしか出来ない・・俺の誇らしき友・・最後の挑戦者と呼ばれし者」

優しかった、圧倒的優しさが響いてきた。
私は自然に笑顔になってジンを見た、端正な顔の中の優しい瞳が笑っていた。
『ジン、ありがとう、俺危なかったよ・・友達がいなかったら』と

嬉しくて笑顔で言った。
「おう、俺も久々泣けたよ、ありがとな」と立って笑顔で手を出した、私も笑顔で手を握って立った。
「回復するために、誰かと話せよ・・いっぱい相手はいるんだろ」とジンが微笑んだ。
『うん、それだけは幸せだよ、そして今からは選択肢に男もできたから』と微笑んで返した。
「おう、いつでもいいぞ、待ってるかい・・絶対に回復しろよ、そのまま愛する人の前に出るなよ」とジンが笑顔で言った。
『ジン、友達なら教えてよ、ジンの愛する人は誰なの？』と笑顔で返した。
「まだ俺の想いは届かないけど・・ホノカ」と少し照れて笑った。
『それは素敵過ぎるカップルだね、ジンとホノカなら』と微笑んでエレベーターに乗った。
「片思いだからな、ホストはイメージ悪いから、大変なんだよ」とニヤで言った。
『俺も頑張ってみるから、ジンも頑張って・・ホノカなら全てを賭ける価値があるよ』と笑顔で手を振った。
「必ずまた連絡しろよ、メシでも行こうな」とジンも笑顔で手を振った時にドアが閉まった。
私はエレベーターの中で嬉しくて、そして思っていた。
《覚悟が足りないんだ、覚悟してると言ってるだけなんだと》感じていた。

ＴＶルームに着いたのが、８時２０分だった、マダムと松さんがいた。
私を感じてマリアが飛び起きて、抱っこをせがんだ、私はマリアを抱き上げた。
天使全開の笑顔で、私の両頬に両手を当てた。
《マリア・・ありがとう、本当にありがとね》と心で囁いた。

「チャー・・あい」と言って、私にしがみつき瞳を閉じた、マリアの小さな体が暖かかった。
『マダム、遅れました・・これ預かってて下さい』と2つの封筒を出した。
「ナギサの手切れ金か・・金額は？」とマダムが真顔で聞いた。
『金には変えられん時間だけど・・２００は取ってきたから』と真顔で答えた、マダムは私を見て。
「一度指定席で、全員に顔を見せて安心させろ、すぐワシが呼びに行くかい、どっか行って来い」とマダムが優しく言って。
「そんな顔、蘭やナギサや9人衆が見たら、全員仕事にならんわ」と最後に微笑んだ、私も微笑んで頷いた。

私はトイレで一度顔を洗い、笑顔を意識して作って指定席に入った。
マミが私の顔を見ていた、静かな美しさに包まれているようだった。
『マミ、ごめん普通にしてて、俺・・皆に心配かけないように、回復に行ってくるね』とマミに無理やり笑顔で言った。
「私に出来る事があったら、何でも言ってね」とマミも言葉とは裏腹に、可愛い笑顔を全開にして笑った。
《凄いな～、さすがマミだな》と思って笑顔でマミに頷いた。
マミの笑顔で勇気が出て、フロアーを見た。
意識して笑顔で、全員を見ていた、マダムが来て、私は大袈裟な演技をして出かけた。

行く場所は、ジンに言われた時から決めていた。
私はユリカに悟られないように、必死で心を隠して歩いた。
ミチルの店の前に立って、深呼吸をして笑顔を意識してドアを開けた。
カウンターのホノカと目が合って、私はあまりの客の多さにミチルは無理だと思って。
『ホノカ、また来るよ』と無理に笑顔を作って言った、ホノカが私

を見ていた。
私は右手を上げて、背を向けて店を出た。
エレベーターを待っていると、いきなり抱かれた、ホノカの甘い香りがした。

「バカだね、帰らせる訳にいかないよ、今ミチルママが必要なんだろ」とホノカが私に微笑んだ。
《やっぱりホノカ、素敵な子なんだ・・ジンが好きになるほどの》と思って華麗な笑顔を見ていた。
『迷惑かけるから、出直すよ』と必死に笑顔で帰した。
「エースのその顔見て、ママが他の何を優先するの！・・私には分るよ」とホノカが強く言った。
美しかった、意志の強さを反映した瞳の華麗な輝きに、暫し見惚れた。
そして感じたホノカの深い心を、感性の鋭さと優しい心を。
『ホノカ・・少し元気分けてね』と微笑んでホノカを抱き上げた、ホノカが私の首に腕を巻いて笑った。
「なるほど～、気持ち良い」と上品に笑った、私はそのまま奥まで歩き夜景を見ていた。
ホノカは目を閉じて静かに抱かれていた、絶品の美しさに負けない心に触れて、少し戻った自分を感じた。

「それで、どうしたの・・そんな顔して」と後からミチルが言った。
私は振向き、優しくホノカを降ろして。
『ホノカ、ありがとう・・嬉しかったよ』と微笑んで、笑顔で手を小さく振って、店に戻るホノカを見送り。
ミチルを見た、妖艶な和服姿のミチルが美しい真顔で私を見ていた。
『ミチル・・俺は覚悟が足りないのかな？』と真顔で言った、ミチルの優しい氷の瞳を見て、涙が出そうだった。
ミチルが私に歩み寄り、抱きしめてくれた、何も言わず何も聞かず

静かに。

「どうしたの・・私は辛くないから教えて」とミチルが静かに言った、私はミチルを抱き上げて話した。

『さっきね、ナギサの決着をつけに行って・・・』私は抱き上げて間近にある、ミチルの目を見ながら話した。

『俺は、覚悟が足りないから、そう思ってしまうのかな？蘭を愛してる事に疑問なんて無いのに』とミチルに話し終わり、ミチルを見ていた。

「愛してるからだよ・・人を愛するって事を、恐ろしく感じる時もあるんだよ」と優しく囁いた、深い響きで入って来た。

「愛しすぎてるからなんだよ。

よくそこまで愛せてるね、そして間違えたら駄目だよ。

お前が愛する事で、結果として蘭が傷ついたとしてもね。

それは無為な時間じゃ無かったんだよ、大切な時間だったんだよ。

蘭はそんな事にこだわる人間じゃない、それはお前が1番知ってる。

お前は結局、年齢差という常識に負けてる。

蘭の時間が過ぎることに焦ってる、お前が最後まで蘭と一緒にいるんじゃないのかい？

それなら焦る必要は無いよね、結局お前は途中で破綻した時の事を考えてる。

その時に蘭が取戻せない時間の事をね、どうして・・・なぜ？」

ミチルは目に涙を溜めて私を見て、強く言って。

「今お前が蘭と別れても、同じだよ・・蘭は壊れる。

そして自分を取戻す時間が必要になる、取戻せないかもしれないよ。

お前が足りない覚悟は、お前が思ってるそれじゃない！
お前は愛される覚悟が足りない、勝手に愛してるって逃げて来たから。
どっかで片想いって逃げて来たから、今・・蘭に愛されてると感じて怖くなった。
お前が次の段階に踏み込むしかない、愛される覚悟をしなよ。
愛するよりも・・・強い覚悟を」

ミチルは大粒の涙を流しながら、強く言った。
私も泣きながら、頷いてミチルを強く引き寄せた。
『ミチルありがとう、俺分ったよ・・辛いのに伝えてくれてありがとう・・ミチル』とミチルを強く抱き上げて耳元に囁いた。
ミチルは震えて強くしがみつき、泣いていた。
ミチルの抱えてる辛さが今の言葉で少し分って、私も辛かった、ミチルに甘えた事が。
だが私にはこのミチルの解答は、１００点以上の効果があった。
私はミチルに完全に引き戻された、自分が戻った事を確認できていた。
私は階段にミチルを抱いたまま座り、ミチルの頬を伝う涙を指で拭いていた。
ミチルは静かに泣いていた、戻った私を見て嬉しそうな笑顔で泣いていた。

そして本当のミチルの解放は、ここから始まる、言葉に出した事で決壊する。
巨大なダムのように必死に貯めてきた想いを、私に伝えようと少し開いた事で、心に亀裂が生じる。
そして巨大な水圧に耐え切れず、決壊する笑顔を連れて。
静かな呼吸を取戻したミチルが私を見ていた、優しい目だった。

「お帰り、焦ったぞ・・あんな顔されたら」と妖艶に微笑んだ。
『ただいまミチル・・この話はミチルじゃないと駄目だったんだよ』と微笑んで帰した。

「うん、嬉しいよ・・そして話して良かったよ。
抱かれてたから、話せたよ・・そしてエース、お前だから。
お前のあの寂しげな顔を見たら、決心なんていらなかったよ。
そして話してて、私は少し取戻したよ・・自分を。
ありがとうエース・・今夜、私を選んでくれて」

そう言って微笑んだ、２０歳上のミチルが可愛くて、微笑んで返して。
『俺、勘違いしてたんだね・・覚悟ができそうだよ、２０歳上の女性でも愛せそうだよ』と微笑んだ。
「そうこなっくちゃー、エースじゃないね・・今夜も好きになったかい？」と妖艶ニヤを出した。
『うん、好きになった・・このまま行くと怖いよ』とニヤで返した。
「人を愛するのは、怖いんだよ～」と妖艶ニヤで言って、私の頬にキスして立ち上がった。
私はミチルを店のドアまで送り、笑顔で手を振って別れた。
快晴の気分で夜街を歩いて、ユリカのビルを見ると、ユリカが立っていた。
私は慌てて駆け寄った、ユリカは俯いて顔が見えなかった。

『ユリカ、ごめんね・・心配したね』とユリカを下から覗きながら言った。
「意地悪した、私のビルの近くを歩く時に、意地悪した・・もう嫌い！」と俯きながら下にいる私を睨んだ。
私はまた心を掴まれて動揺して、焦ってユリカの表情を見た。
「焦るんだ～」と爽やかニヤで言った。

私は立ち上がり、ユリカを抱きしめて。
『怖かった～、それだけはやねてよユリカ、心臓止まりそう』と囁いた。
「だめだな～、同種族の落ちこぼれには・・私も弱いな～」と顔を上げて、私の背中に腕を回した。
『ごめんね、ユリカ姫』と反省を出して、真顔で言った。
「何言ってるの、ミチルママで正解・・私を悲しませないようにしただけでしょ」と爽やかに微笑んだ。
『うん、ユリカの悲しい顔は、俺には辛すぎるんだよ』と微笑んで言った。
「よし、完璧に同調したね・・時間有るんでしょローズ行ってきて、シオンちゃんで完全に戻るから」と爽やかに言って、私を引っ張った。

私はローズのビルのエレベーター前で手を振るユリカと別れた。
《ユリカありがとう、頑張って落ちこぼれでも一段ずつ上がるから、上で待っててね》と囁いた。
ローズを覗くとやはり満席に近く、カウンターの隅でシオンが帰る準備をしていた。
『シオンちゃーん、遊びましょ』と小さく声をかけた、シオンが振返り可愛い笑顔になった。
「お疲れリアンちゃん、デートして帰るね」とＢＯＸにニヤをしてシオンが駆け寄った。
「あ～もう、エースこんな時に来て・・週初めにゆっくり来てよ」とリアンが獄炎ニカを出した。
『来週来るよ、レンを連れて』と微笑んで返した、リアンも微笑んで頷いた。
私がシオンに手を出すと、腕を組んできた、私は笑顔で睨むリアンに手を振って別れた。

『少し時間あるけど、どっか行きたい所ある？』とニコニコ顔のシオンに言った。
「夜の海・・素敵でしょ」と車の鍵を見せて微笑んだ。
『素敵だ～、危険な匂いがプンプンする』とニヤニヤで言った。
「するよね～、女一人じゃ行けないから」と笑顔で言った。
『そっか～、可愛いと大変だね・・シオン』と微笑んで返した。
「うん、可愛いから・・た・い・へ・ん」と言って私を引っ張った。

赤玉駐車場の可愛いピンクの軽自動車に2人で乗った、車の時計は9時45分だった。
『シオン、この車純正の色じゃないね？』と運転席のシオンに聞いた。
「可愛いでしょう～、塗り替えたのよ」と自慢げに笑いエンジンをかけた。
「どの辺にしようか？」と橘通りに出ながら言った。
『よし、シオンなら特別な場所に連れてってやる』と笑顔で言った。
「やった～、よろしく」と可愛く笑った、ミニスカートが上がっていて、下着が見えそうで焦りながら楽しんでいた。
「ねぇ、例えば男の人なら、誰とでもやりたいの？」といきなりストレートに聞いた。
『未経験の人間に、普通聞くかな～』とウルで顔を近づけた。

「例えばよ、例えば」とシオンが楽しそうに笑った。
『男は征服欲が強いって言うから、あるんだろうね』と笑顔で答えた。
「女子高生のとかの～？」とシオンが天然を出して聞いた。
『シオン、やめてくれよ～愛してしまいそう、その可愛さ・・その制服じゃないよ、世界征服の征服』と笑顔で言った。
「そっか～、そっちの征服ね・・でも人は征服なんて出来ないでしょう」と可愛く笑った。

私はシオンのこの感性が好きだった、その白い心が元気をくれた。
『出来ないよね、絶対に出来ないよ。
俺の尊敬する、女神の言葉を教えてあげるね。
たとえ心と体が売れたとしても、愛は売れないと信じている。
そう言ったの、素敵でしょ～』
シオンを見たら、泣いていた・・可愛くて可愛くて私はシオンを見ていた。
必死に前を見て、涙を流しながら運転していた。

「素敵だね、響いたよ・・心までは我慢して売れても、愛は絶対に売れないよね」と信号待ちで私を見て微笑んだ。
『そうだよね、愛は売れない、もちろん心も形がないけど少し固体な感じがするよね』とシオンを見た、前を見て頷いた。

『でも愛は完全なる気体のイメージなんだよ、それはきっと最後まで持って行くから。
俺は、たとえ肉体が滅んでも、愛は持っていくと思ってるんだよ。
心霊的な話しじゃないよ、気体だから消滅しないと思ってる。
世界中に愛は満ち溢れていると思ってるんだよ、それを皆が吸い込んでるんだ。
人がここまで繋がって来たのは、その行為をしたからじゃないと思う。
欲の充足じゃ辿り着けなかったよね、愛があったから子供が産まれたんだよ。
そして繋がった、だからその行為は重要じゃないと思ってるよ。
未経験の子供はね』

シオンは考えてるようで、何も言わなかったその横顔が可愛かった。
車は松林の細い獣道を抜けて、一気に目の前に海が広がった。
『シオン、ブレーキ！』と叫んだ、シオンがブレーキを踏んだ。

「先生が泣かせるから、ブレーキ遅くなった」と言って私の胸で泣きだした。
私は波音と星の瞬きと水平線を見ながら、シオンの頭を支えていた。
『シオン運転席で待ってて、迎えに行くから』とシオンを起こして見た、可愛く涙目で微笑んだ。
私は助手席を降りて、運転席に周りシオンを抱き上げて、テトラポットに座った。
「素敵ね、星も海も波音も・・こんなに安心して聞くと違うんだね」とシオンが私を見た。
『シオン、焦らないで・・ゆっくり進もうね、いつか好きな人と安心して見られるよ』と優しく囁いた。
「うん、先生は好きな人に入れたら、駄目なの？」と真顔で聞いた、可愛くて倒れそうだった。
『もちろん、良いよ、俺もシオンが好きだよ』と微笑んだ。
「うん・・蘭ちゃん貸してくれてありがと～」と海を見て言った、海の照り返しの煌きでシオンが輝いた。

私はシオンに救われていた、その白い妖精に心を救われていた。
完全復活を感じて、シオンを見ていた、シオンも可愛い笑顔で微笑んでいた。
入道雲に遮られていた、月が現れ海面に光の道を作った。
希望に繋がる道に見えて、シオンに誓いの話をした、なぜかシオンに話したかった。
『・・・だから俺は月光を追いかけてみるね、シオン・・蘭の笑顔が見たいから』と静かに囁いた。
「うん、がんばれ先生、がんばれエース・・私は辿り着けると思ってるよ」と泣きながら私に抱きついた。
私は子供のような心の、シオンを抱きながら、光射す暗い海を見ていた。
必ずあるであろう、蘭との明るい未来の道を探しながら。

ホノカとジンが付き合うのは、これから約3年後の事である。

ジンは目標額を貯めて、3年後ホストを辞め起業する。

ジンのホスト最後の夜のパーティーに私も招かれ、その席でホノカが笑顔で言った。

「ジンは3年、肉体関係無しで愛してくれた、だから私は幸せになれるよ」と華麗に笑った。

ホノカの結婚前夜の席には、新郎のジンが微笑んでいた。

今もあの優しい目で、孫に囲まれて暮らしている。

ジンとの物語は、いつか別の物で書きたいと思う。

悲しみの貴公子となぜ呼ばれたのか。

そして【最後の道標】の素敵な本当の意味も・・いつか必ず。

青の試験

月光が暗い海面に作りだす、一筋の光の道が誘っていた。
私の抱く女性は妖精の心、嘘の無い国から舞い降りた光。
今も忘れえぬ白い輝き、何度助けられたであろう純粋という神秘に。

「先生・・ごめんね、私バカだから、先生に何もしてあげられないね」と泣いているシオンが言った。
『シオン、今夜、俺疲れ果てていたんだよ・・シオンが心を助けてくれたよ、ありがとう』と素直に言って、シオンの可愛い泣顔を見た。
「本当に、本当に本当？」と少しベソかいて、3回聞いた。
『シオンに嘘つかないって約束したろ、本当だよ』と微笑んだ。
「うん、私で元気出るんだね、私が好きだから」と可愛い笑顔になった。
『うん・・ねえシオンお酒飲んでないよね？』と聞いてみた、この前のローズと雰囲気が全然違っていたので、心配になったのだ。
「飲んでないよ～、これが本当なの・・ローズじゃ無理してるの、嫌いになった？」と最後は真顔になった、可愛くて少し引き寄せて。
『本当のシオンの方が好きだよ、可愛いよ』と微笑んだ。
「やった～・・・おバカな子みたいじゃないの？」喜んで落ち込んだ、その喜怒哀楽の激しさが好きになっていた。

『シオンはおバカじゃないよ、心が白いんだよ・・素敵な事なんだよ』と抱き上げて言った。
「白い心・・素敵」と擦り寄ってきて、シオンの鼻が私の頬に触れていた。
シオンを車に乗せて、私も助手席に乗った。
「また、一緒に来てくれる？」とシオンが微笑んだ。

『もちろん、俺が仕事が無い時はいつでも行くよ』と微笑んで返した。
国道に出て、街灯で少し明るくなった道を夜街を目指した。
『シオン、お願い聞いて？』と笑顔で言った。
「待って・・・

が解放されていた。
シオンの白が、私を帰した・・蘭の愛の中に。
橘通りで車を降りて、まっすぐ帰れと念押しして、手を振って別れた。

ＰＧに着いたのが１１時少し前だった。
ＴＶルームを覗きマダムと松さんに笑顔でＯＫを貰って、指定席に着いた
『マミごめん、復活したよ、ありがとう』と笑顔で言った。
「もう、心配させて・・怖かったよ」と可愛く微笑んだ、私は嬉しくて笑顔を返した。
『マミ・・ありがとう』と微笑んだ、マミが美しく笑顔で頷いた。
蘭が歩いて来るのが分った、真顔の蘭に少し緊張した。

「今夜は眠いから、終礼無しにしてもらったからね・・帰ってすぐ寝るよ」と満開になった。
『うん、早く帰ろうね・・ゆっくり寝ようね、蘭』と笑顔で返した。
「うん、すぐに着替えるから、赤い・・いやらしい服に」とニヤを出して戦場に戻った。
「赤い、いやらしい服って何かな～」とマミがニヤを出した。
『カスミのお祭り衣装、凄いの』とニヤニヤで返した。
「魅宴は結局出さないんだって、大ママ負けず嫌いだから、カスミとホノカが出るなら、出さんって言ってたよ」と可愛い笑顔で言った。
『マミが２０歳じゃなくて、良かったよ』と微笑んで返した。
「私なんて・・あっ！」と私の真顔を見てマミが気付いて、舌を出した。
『淡い・・だろ』とニヤで言った。
「復活すると誘導尋問するのね、さっきの方が可愛かったよ」とニッで返された。

私はウルをしながら、ハルカ位置についた。
誰もサインは出さずに、私に微笑んでいた。
《やっぱりばれてるよね、皆ありがとう》と心で囁いて、笑顔で返していた。
マミの時間が来て、フロアーから手を繋いで出かけた。
通りに出て、マミが真顔で言った。
「本当は怖かったよ、エースがいなくなるんじゃないかと思って」
と前を見て言った。
『ごめんねマミ、大丈夫だよ・・俺もマミみたいに強い気持ちを持てたから』と微笑んで返した。
「それ以上強くなるの・・怖いよ」と微笑んで返してくれた。
『ねぇマミ、俺は魅宴も覗きに行くからね、マミが頑張ってるのを』
と笑顔で優しく囁いた。
「約束だよ、そして私が辛い時は言っていいのね」と美しい真顔で返してきた。
『マミ、誓いを立てよう』と言って、魅宴のビルの裏にある、通り地蔵の所に連れて行った。

『マミが辛い時は連絡して、ここにいる事、そしたら俺は必ずここに来るよ・・必ず来る』とマミを真顔で見た。
「うん、約束する・・私も我慢はしない、あなたには甘える」とマミも真顔で言った。
『よし、じゃあ誓いの儀式をする』とニヤで言った。
「浅くならいいでしょ、初めては・・・私はエースにして欲しい」
とマミが真剣に言った。
私はマミを優しく抱いて、マミは瞳を閉じた、私はかなり緊張してた。
でもマミが可愛くて、愛おしくて、唇を合わせた。
短く浅いキスだった、私は体を離した。

「目を閉じて、１０数えて」とマミが目を閉じたまま言った。
『閉じたよ』と目を閉じて言った、マミが頬にお返しのキスをしてくれて、走る足音が響いた。
「また明日ね～」とマミが大声で裏ドアの前で手を振った、私も手を振ってマミを見送った。

ニヤニヤしながら歩いていると、後から声がした。
「そんなに楽しい事があったんだ～」とユリカの声が聞こえた。
『うん、素敵な事考えていた』と言ってユリカに微笑んだ。
「やきもち妬かせようと、思ってるの？」とユリカが爽やかニヤできた。
『よし！ユリカ、初めてはずしたね』と笑顔で返して、ユリカを抱き上げた。
「外したの・・うれし～」と爽やかに笑った、私は可愛いユリカを見て階段を登った。
ユリカは目を閉じて充電していた、私は最後を登る時心で呟いた。
《ユリカ、やきもちじゃないよ、ユリカを大好きだって思ってニヤしてたんだよ》
私は、マミとの緊張をユリカが感じたと思い、歩く時ユリカを好きだと言いながらニヤニヤしていた。
ユリカはそれを感じなかった、強い私の緊張に気を取られていた、それが嬉しかった。
「そっか～、逆に取らせたの～楽しい～」とユリカが目を開けて、爽やかに笑った。
最上階でユリカを優しく降ろして、笑顔を見ていた。
『また、明日・・考えてくるよ』とニヤで手を振って、笑顔のユリカと別れた。
エレベーターの中で、もう一度心で囁いた。
《ユリカのやきもち・・可愛いね、おやすみ》と言ってニヤニヤしていた。

指定席に戻ると、終演前の熱が高く、女性達も輝いていた。
私はナギサを見て、ハッとした、昨日より歩くスピードが僅かに遅くなり。
色気を発散して歩いていた、華やかさも増したようだった。
９人衆も今夜は私に笑顔だけを振り撒いて、優しかった。
終演を迎えた時にカスミが来て、美しく笑った。
「脅かすなよ、心臓止まりそうだったぞ」と言って銀の扉に消えた、
私は嬉しくて見送った。
ＴＶルームに帰ると、マダムに金の袋を渡された。
蘭が来たので、ナギサを呼んでと頼んだ、満開で頷き呼びに行った。

私は小窓の所で待っていた、ナギサが一人で来た。
『ナギサ・・ナギサの失った時間は金には変えられんけど、これしか方法がなかった。
これで、明るい部屋と、好きな洋服と、美味しいものでも食べて。
ごめんね・・ナギサ、辛い思い出を早く忘れて。
もう２度とマキはナギサの前には現れないから・・安心してね。
俺は無力だったよ、でもナギサをこれから見てるから。
お願いだから、体が辛い時は遠慮しないで早く言ってね』

そう言って、２００万の袋を渡した。
私は辛かった・・金で解決をする事が、何より辛かった。
ナギサは金を受け取り、私を見ていた美しい立ち姿で。
「ごめんね、辛かったね・・そんなに優しい男に初めて会ったから・・分らなかったよ」と言って抱きしめてくれた。
私はナギサの背中に腕を回し、必死に涙を我慢していた、悔しさが溢れてきた。
「ありがとう、大切に使うよ・・２部屋の所を借りるから、私も勿論あなたに転がり込む権利を授与するよ・・永遠に」と言ってもう

一度抱きしめてくれた。
ナギサの震えが止まって、２人でＴＶルームに帰ろうとすると、蘭がＴＶルームの前から駆け寄った。
「ごめん、家までもたない」と言って、私の腕を掴んで小窓まで引っ張った。

小窓で私に抱き付いて、蘭が震えていた。
「何が有ったのか言わないで、本当に怖かった・・１つだけ言わせて」と私を見た、私はたまらず蘭を抱き上げて、頷いた。
「私は、あなたがいないともう駄目なのよ、絶対に遠くに行かないで」と強く言って泣いていた。
「そして、あなたが今関わってる女性全員が、あたたを心で頼りにしてるからね」と優しく言った。
『蘭、ごめんね・・もう大丈夫、絶対に蘭の側を離れないよ』と言って引き寄せた、蘭がしがみつき泣いていた。
『蘭、俺はもう一度はっきり言う、俺は蘭を愛してる、そして蘭との明るい未来を必ず探し出すよ』と泣いてる蘭に優しく言って。
そのまま、エレベーターに乗って家路についた。

通りでも蘭を降ろさずに、通りにいたレンがタクシーを止めてくれ。
レンと久美子にお休みをして、タクシーに乗って蘭を抱いていた。
アパートに着いて、蘭が抱かれたまま鍵を開けて、ドアを開けた。
蘭は抱かれたまま靴を脱いで、暗い部屋まで入って蘭を抱いていた。
『蘭、ありがとう、愛してくれて』そう言って蘭の額にキスをして、洗面所の前で降ろした。
「あ～、よく寝てた、もうお家に着いたの」と満開で微笑んだ、私も微笑んで頷いた。
蘭が化粧を落として、パジャマを着て部屋に入り満開で笑った。
「約束の背中合わせ、私は３秒で寝るから」と満開で言って、ベッドに入って。

「1・2・3」と素早く数えた、私は嬉しくて電気を消して。
蘭を私の方に向かせて、腕枕をして引き寄せた。
蘭は少し震えていたが、涙は無かった、私は何も言わずに蘭を支えていた。
蘭が静かになって、眠りに落ちた、私もそれを確認して蘭の香りに包まれて眠った。

翌朝快晴の気分で目が覚めた、蘭の足が私の上に乗っていた。
《過酷な試練を与え続けるな、蘭》と可愛い寝顔を見ながら思っていた。
ゆっくりと蘭を枕に移し、足を持って綺麗に寝かせて洗面所に向かった。
歯を磨きながら顔を見ると、ミチルのキスマークが綺麗に残っていた。
マミは薄化粧なので痕跡は無かった、少し寂しかった。
《最近は9人衆も蘭もキスマークじゃ騒がなくなったな》と思いながら顔を洗った。
朝食は、トーストとハムエッグにレタスとトマトを添えた。
「おはよう、意地悪少年」と蘭が満開で微笑んだ。
『意地悪したかな～？』と笑顔で返した。
「昨日のあの顔は、私ら全員に対する意地悪だったよ、仕返しが怖いね～」とニヤしながら洗面所に消えた、私はウルで見送った。

蘭が満開で笑って、朝食を食べはじめた。
「マミちゃんから、話を聞いたよ・・嬉しかった～、よく言ったね・・女の代弁をしてくれたよ」と満開で微笑んだ。
『蘭は分ってるだろ、俺は変換をしただけ、心がそう語ったんだよ』と微笑んで返した。
「うん、ユリさんが涙ぐんでたよ・・嬉しかったよ私も」と真顔で言って。

「そしてナギサに言ったことで、分ったよあなたが何を感じたのか、誰がそこまで復活させたの？」と満開で聞いた。
『ジンが１０％ホノカが１０％ミチルが６５％シオンが１５％、かな』と微笑んで返した。
「内容を述べよ、ジンから順番に」とニヤで言った。
『蘭、ジン知ってるんだね』と笑顔で返した、蘭は満開で頷いた。

『ジンが俺を引き止めた、そして友達になってくれて、道を示してくれた。
ホノカが俺の顔を見ただけで、ミチルに会えと言ってくれた、抱っこして元気をくれた。
ミチルが教えてくれた、俺の覚悟の勘違いを、自分も辛いのに話してくれた。
俺はミチルの話の内容も響いたけど、ミチルが泣きながら話してくれた事で。
完全に引き戻された、その自分を投げ打つ愛情で強引に引き戻してくれた。
そして、ユリカに言われて、シオンに会いに行った。
シオンが回復してくれた、その真っ白な心が救ってくれた俺の心を。
でも、俺には分ってる・・俺を本当に救ってくれたのは・・・。
マリアの天使の笑顔だった・・俺は蘭以外に愛する人ができたよ。
マリアという存在は、絶対に切り離せない、愛すべき天使だと思った。』

最後は蘭に微笑んだ、蘭も満開に微笑んで。

「よし、マリアの事が理解できてるなら、もう何も聞かない。
ジンは靴屋のお客、素敵な男だよね。
ジンは夜街の女にこう呼ばれてる、【悲しみの貴公子】とね。

そして称号は、愛を込めて【最後の道標】とつけられてる。
称号の命名は・・だ～れだ？」
満開ニヤできた、私は考えた。
『どんなに素敵な男でも、ホストに称号はユリカはつけないよな～。
リアンも称号贈るタイプじゃないし、大ママもナギサの件があるから付けないし。
えっ、もしかして・・・ユリさん！』
自信は無かったが蘭に聞いた、蘭は満開で笑って。
「ピンポ～ン」と嬉しそうに叫んだ、『うそ！』と思わず私は言ってしまった。
「昨日の罰で、命名理由は本人から聞くこと、教えてくれるかな～」と蘭がニヤで言った。
私はウルウルで返した。
「ウルウルしても無駄・・今は聞くなよ、悲しい物語は今はやめときな」と最後は深く優しく言った。
『分った、でもさすがユリさん、素敵な称号だね』と笑顔で返した。
「理由を聞いたら、あんたなら・・泣くよ、その深さに」と満開で微笑んだ、私も嬉しくて笑顔で頷いた。
蘭を見送り、朝の仕事をして、日記を書いていた。
ジンとの出会いの最後に書いてみた。
【最後の道標】字で書いてみて、私の心は震えていた。
ユリさんに、あの若さでこれだけ重い称号を贈られる、ジンという男の遠さを感じていた。
《誇らしき友、最後の挑戦者と呼ばれし者》ジンの言葉が蘇り、嬉しくて日記を閉じた。

私は１０時少し前に出掛けた、若草通りでカスミに手を振り。
靴屋で蘭に手を振って、ユリカの店のドアの前で固まった。
張り紙がしてあった、【今日は防虫剤を散布するから、ダメ～罰だよ　ユリカ】と書いてあった。
私は振返り、外の景色を見ながらウルしていた。
仕方なく通りに出て、慌てて駆け出した。
通りの先に金髪の外国人の女性が、しゃがみこんでいたのだ。

『大丈夫？えっと～・・ユー・ＯＫ』と微笑んで見た。
その子が顔を上げて、真顔で私を見た。
私は完全に凍結した、生まれて初めて金髪の少女を見たのも有ったが、その可愛さに全てが停止した。
間近で見るブロンドの髪が、直射日光を弾き返し、直視が危険と思わせるほど輝いて。
肌の色は新雪のように白く、小さな顔の中の大きな瞳が南の島の海のように青かった。
「イングリッシュ・ＯＫ？」と少女が無理やりな感じで微笑んだ。
《楽園の輝き》と思って微笑んで。
『ごめんね、ＮＯだけど、目的地までは必ず連れて行くよ』と笑顔で言って手を出した。
「ＮＯ・・・ＯＫ！」と笑って私の手を握って立ち上がった、その立ち姿に又も固まった。
日本人ではありえないスタイルの、その迫力が。
細身の体に信じられない大きさの胸が、強く何かを主張した。
スニーカーを履く彼女は、私より３ｃｍ位背が高かった。
しかし彼女のスリムなジーンズの腰は、私の腰の遥か上にあった。
《カスミ～、世界は広いぞ～》と心で叫んだ、彼女を笑顔で見て手を繋いで歩き始めた。
水槽の喫茶店で涼みながら話を聞こうと、笑顔の彼女を笑顔で誘っ

た。
『えっと～、どれがいいかな？』と言ってメニューを見せた。
「カフィー」と微笑んだ、楽園のブルーが強引に誘った、パラダイスに行こうと、私は気持ち足を踏ん張って微笑んで頷いた。
店員の女性を笑顔で呼んで、手招きした。
『この子、カフィーが良いって言ってるんだけど、有るの？カフィー？』と囁いた。
若いバイトらしい女性が私に笑顔で頷いて、彼女を見た。
「アイスｏｒホット？」と微笑んで聞いた、「アイス、プリーズ」
と彼女が楽園笑顔で言った。
私は安心して、私のコーラを頼んだ。

『ん～とね、マイ・ネーム・エース』と笑顔で言ってみた、エースが１番説明がいらないと思っていた。
「オ～、エース・ビューティフル・ネーム・・・」と少し安心したのか、楽園が強くなった。
「リンダ」と訳の分からない、早口の英語の最後にそう言って微笑んだ、引き寄せられそうで怖いほどの笑顔だった。
『オ～、リンダ・ビューティフル・ネーム』と大袈裟に手を広げて、笑顔で言った。
リンダを見ると、大粒の涙を流して、笑っていた。
私は慌ててリンダに歩みよって、間近でリンダの顔を見た。
『リンダ、寂しいの・・泣かないで』と優しく言って、隣に座ってリンダの泣き顔を見た。
リンダが私を見ていた、楽園のブルーの瞳から、スコールのような涙が溢れていて。
美しいブロンドがキラキラと輝いて、私は切なくてリンダを引き寄せて抱いた。
リンダも私に手を回して、強く抱かれていた。
『リンダ、泣かないで・・必ず連れて行くから、リンダの目指す場

所まで、一緒に行くから』と分らないであろう日本語で優しく囁いた。

私の抜打ち試験のベルが鳴った、問題の提出者達は私をニヤで見ていた。
私はブロンドの輝く髪を優しく撫でながら、強く思っていた。
《言葉なんて必要ない、必ずリンダの本当の楽園の笑顔を見る》と強く思っていた。
そしてブロンドの女神が教えてくれる、世界は広いのだと楽園は存在するのだと。

文化の違いを受入れろと、それがストレートに出来るのかと教師達が笑っていた。
お前の最大の武器、【言葉】が使えない美しい問題に取組めと、真顔で見ていた。
そして私は何も知らずに必死に取組む、そして1つの答えを導き出す。
愛は通じるんだと、解答用紙に強く書く、愛は共通言語だと・・。

思惑があった出会いにせよ、私には本当に大切な経験であるリンダ。

青き瞳が輝く時、希望が溢れ出す。

自分の悩みや欲求が、小さい事だと思い知らされる。

世界を見ろと誘う、手を繋いで行こうと誘惑する。

その楽園のブルーの瞳が、憧れと希望と夢を反映して輝く。

リンダ・・楽園の輝き・・ブルーの誘い。

そして人種など、無意味な区別だと教えるブルー。

肌の色や文化や宗教で人は区別できないと、強く主張するブルー。

遠い国から来たブールーの瞳、冒険の女神・・リンダ。

Summer　Time

金色に輝く髪は遠い国へと誘い、青い目が微笑む時に楽園を示す。言葉の意味を失った私は、強い気持ちで抱いていた、寂しげな女神を。

私の心の中にはもう一人の蘭が蘇っていた、上野駅の冷たいベンチと不安な心を連れて。

『大丈夫だからね、心配しないで・・ＯＫだから』と私は静かに抱かれてるリンダに囁いた。

「ＯＫ？」と私を見た、真っ青の瞳が輝きを取戻して、微笑んでいた。

『ＯＫさ、ＯＫ・ＯＫだよ』と笑顔で言った、リンダは私を見て頬にキスをしてくれた。

私がニヤニヤしていると、リンダが自分の左頬を突き出した。

私はかなり緊張して、優しくキスをした。

女性の店員がそれを見て微笑みながら、飲みの物をテーブルに置いて去って行った。

『カフィーってコーヒーなんだね、１つ勉強になったよリンダ』と笑って言った。

「カフィー」と笑顔で飲んでいた、私も一口コーラを飲んで、自分を落ち着かせて聞いた。

『リンダ・・フロム・ハウス？』と単語を並べて笑顔で聞いた。

「ニューヨーク」とかなり考えて笑った、本当に引き込まれそうになる笑顔だった。

『カッケー、ニューヨーク・・憧れやな～』と満面の笑顔で返した。

「カッケー」とリンダが私の真似をして笑った。

《そっか！でかいマリアと思えば良いのか！胸のでかいマリア》と

私はニヤニヤしていた。

『リンダ、ゴー・どこ・ミヤザキぶ～んどこ？』と身振り手振りで笑顔で聞いた。

「ＭＩＹＡＺＡＭＩブ～ンＴＯＫＹＯ」と飛行機の離陸を手で示した、私は笑顔で頷いた。

『トゥデイ？』と聞いた、「ＹＥＳ」と笑顔で答えた、楽園の輝きが強まった。

『チッケット・ルック・ミイ』と手でチケットを見せてと言った。

リンダは可愛いピンクのリュックをゴソゴソ探して、チケットを出した。

リンダが探すのにテーブルの上に、着替えらしい派手なピンクの小さなパンティーまで出していた。

『リンダ、デンジャラス・マイ・ど～ん』とパンティーを指差して、撃たれた真似をした。

「ど～ん」と笑って「ど～ん！」と両手で胸を持って私に突き出した。

『ヘルプ・・・ミィ』と言ってリンダに思い切って倒れこんでみた、リンダは私を抱いて泣き真似をした。

『じゃ～ん』と言って復活をした、リンダは楽しそうに笑っていた。

私はリンダの胸が私の右腕に当たっているのを楽しみながら、チケットの確認をしていた。

１５時４５分発の東京行きの便だった、私はリンダを笑顔で見て。

『ＯＫ・リンダＯＫ・時間あるね』と微笑んだ。

「ＯＫ・・・エアポート・ＯＫ？」とリンダが笑顔で言った。

『ＯＫ・マサセナサ～イ』と笑顔で返して、リンダも楽園のブルーを深くして。

「ミャキャシェニャシャーイ」と真似をした、私とリンダは何度もそれを大声で繰返したいた。

水槽を出て、リンダの重いリュックを右腕に担ぎ、左腕をリンダが組んで靴屋に寄った。
蘭が少し固まって、我に返り駆け寄った。
「新しいガールフレンドは、そこまで行くのか」と満開で微笑んだ。
『リンダ・マイ・ハニ～・ラン』と蘭を紹介した。
「オ～・ラン・イッツ・ビューティフー」とリンダが蘭に笑顔で言った。
「リンダ・サンキュー・ユー・ビューティフー」と蘭が満開笑顔で返した、蘭の凄さを感じていた。
『迷子みたいだから、空港まで送ってくるよ』と蘭に言って、蘭の満開で頷くのを見てＰＧに向かった。
その時代の宮崎では外人というだけで珍しく、特にブロンド美人だから周りの視線を全て浴びていた。

ＴＶルームを少し開けて、顔だけ出した。
マダムとハルカとレンがいた、私はマダムに笑顔を見せた。
『マダム、ごめんなさい、カスミの準備には帰るから、お暇下さい』と真顔で言った。
「ん？理由は？」とマダムが顔しか出さない私を見て聞いた。
『迷子見つけて、この子』とリンダと一緒に部屋に入った。
３人の固まるのを見て、《田舎者め》とニヤニヤして。
『空港行って来るから』と微笑んだ。
「わかった・・気を付けてな」とマダムが言った、ハルカもレンもリンダの美しさに固まっていた。

私は笑顔でリンダとエレベーターに向かおうとすると、ピアノの音が聞こえた。
私はリンダを連れて、フロアーに向かった。
リンダをハルカの指定席に座らせて、久美子に声をかけた。

『久美子、サマータイムリクエストして良い？久美子が世界で通用するか、聴きたいから』とニヤで言った。
「ふふ～ん、かかって来なさい」とニヤで返された、私はリンダと手を繋いで出て行った。
「素敵～、綺麗なブロンド・・可愛い～」と言ってピアノを向いた。
私はリンダと６番に座った。
『リンダ、サマータイム』と笑顔で言って、手だけピアノを弾く真似をした。
「オ～！」と言ってリンダがピアノの横に立って久美子を見た。
久美子はリンダの瞳を見て、笑顔になった、そしてリンダに目で合図を送った。

「サ～マタイム・・・♪」とリンダが歌い始めた、私は立ち尽くして見ていた。
私は歌詞が有ることすら知らなかった、そしてリンダの子守唄のような美しい声を聞いていた。
そして久美子とリンダが、たまに目を見てお互い合図するのを感動して見ていた。
《音楽凄いな～言葉が無駄な物に感じる、久美子凄い子だな～》と思って見ていた。
段々とリンダも入ったようで、腹筋を押さえて叫びに近くなった。
サビになったら、２人とも汗をかいて何かを表現しようとしていた。
私はただ感動して見ていた、一流のオペラ歌手の独演のような２人を。
終了して、リンダが久美子の頬にキスをした、久美子も立ってリンダにキスを返した。
拍手がおこった、徳野さんと数人のボーイとマダムとハルカとレンだった。
リンダと久美子が笑顔で頭をさげて、リンダが久美子に何か言って、

久美子が笑顔で頷いて座った。
「エース・プリーズ」とリンダがフロアーのセンターで私に手を出した。
私は笑顔で手を出すと、リンダが私の手を持って型を教えてくれた。
リンダが久美子に目で合図を出した、久美子がワルツを弾きだした。
「ワン・トー・スリー」と下を見ながら、リンダが教えてくれた。
私は楽しくて、リンダの気持ちが嬉しくて、必死にやっていた。
楽しかった、リンダの美しい笑顔が間近で溢れていて、少し早い鼓動まで感じた。
久美子が3曲奏でてくれて、終わった。
リンダが私を抱きしめて。
「サンキュー・エース」と微笑んだ。
『サンキュー・リンダ』と笑顔で返して、リンダを抱き上げて6番まで歩いた。

リンダが皆に手を振って、エレベーターに乗った。
リンダの笑顔が嬉しくて、楽園のブルーの瞳を見ていた。
『リンダ、お腹空いただろう』と言って食べる真似をした。
リンダはお腹を押さえ、私に楽園ウルをした、可愛くて可愛くて泣きそうだった。
『アメリカ・チャイナ・イタリア・ジャパン？』と国の名前を言った。
「ジャパン・スタンダード」と言って、麺を食べる仕草をして微笑んだ。
『ＯＫ・ウドン・ソバ・ラーメン？』と笑顔で聞いてみた。
「ソバ！」と笑顔で返してきた、私も微笑んで返した。
有名な蕎麦屋に入り、店の全員の視線を浴びながら、奥の座敷に並んで座った。
『リンダ・ホットｏｒアイス』と聞いてみた、リンダは私を見て可

愛く微笑み。
「アイス・プリーズ」と言った、私は食べやすい、大盛りぶっかけ蕎麦を頼んだ。
リンダが隣で何か書いていた、私は英語なので、ただリンダを見ていた。
リンダが小さなアルバムを出して、色々な国の事を写真を見せながら話してくれた。
私はリンダと笑顔で写ってる、人種も肌の色も違う人々の笑顔を見て、笑顔で頷いていた。
リンダは笑顔で話したり、時には悲しそうに、時には寂しそうに話した。
私にはそれが何より嬉しかった、通じないなんて些細な事で諦めない、その姿が好きだった。

リンダは目の前に置かれた蕎麦を見て、瞳を輝かせて私に楽園ウルをした。
私はリンダが可愛くて、微笑んで返して。
割り箸をリンダの目の前で割って見せた、リンダは最強楽園で微笑み割り箸を割った。
『リンダ・上手だね』と笑顔で拍手した、リンダは威張って胸を張った。
私は笑顔で食べ方を教えた、リンダは私を真似て美味しそうに食べていた。

リンダは沢山話してくれた、私は頷く事も無くリンダのブルーの瞳を見ていた。
リンダの感情で深みの色の変化する、楽園の海のブルーを見ていた。
リンダは大盛りを全部食べて、満足そうだった。
そしてカメラを出した、私が店員のおばさんにシャッターを頼みリンダと写った。

リンダが紙とペンを出して、私に微笑んだ。

「エース・ネーム・アドレス」と私に微笑んだ、少し寂しげなリンダを見ていた。

『どこの国でもこうやって、別れを感じるんだね・・強い子だね、リンダ』と無理やり笑顔を作った。

私は実家の住所と名前をローマ字で書いて渡した。

リンダはその書かれた紙を大事そうにしまい、私に無理やり微笑んだ。

私は手を繋ぎバス停に歩いた、リンダが隣で必死に笑顔で話すのが切なかった。

私はバスの中で、隣で必死に話すブルーの瞳を見ながら、涙を必死に我慢して笑顔を作っていた。

リンダも私も同じ必死であると、お互いに分っていた。

真夏の太陽光線が、リンダの髪で反射して美しく輝いた。

リンダは何かを話しながら、瞳の色で私に伝えた。

空港に入り、リンダが搭乗手続きをして、私に手招きした。

受付カウンターを横に歩いて、一人の窓口の女性が付いてきた。

リンダが私に手紙を渡した。

「・・・・」リンダが話し出した。

「私の住所が書いてあるので、必ず遊びに来てね」後の女性が通訳してくれた。

「私はあなたを絶対に忘れない、きっかけは頼まれたけど。

水槽に入る前から、そうじゃ無かったよ、楽しかった。

あなたがずっと守ってくれた、必死に笑わせてくれたね。

サマータイムもダンスも蕎麦も、全部忘れないよ。

日本が本当に好きになったよ。

日本で1番良い思い出ができたよ、ありがとう。」

リンダが歩み寄り抱きしめてくれた、私もリンダを抱きしめた。
「エース」とまで言って、リンダが私を見た、潤む楽園の瞳を見てなんと言ったのか分った。
『Ｉ　Ｌｏｖｅ　Ｒｉｎｄａ』と言ってリンダを笑顔で見てから、抱き上げた。
リンダは私の首に腕を回し、強くしがみついた。
私は人混みのフロントを、リンダを抱いて歩いた。
搭乗を呼ぶアナウンスを聞きながら、２階に階段を登った。
搭乗窓口前でリンダを抱いたまま、泣いているリンダを見た。

『リンダ、必ず会いに行くから、まきゃしぇにゃしゃーい』と微笑んだ。
「ど～ん」と言ってリンダは笑顔で撃たれた振りをした。
『リンダ、忘れないよ・・絶対に忘れない・・リンダ』と笑顔で言って、リンダの笑顔を見てゆっくりとリンダを降ろした。
いきなりリンダに唇にキスをされた、私は嬉しくて笑顔を返した。
リンダが髪の毛を一本抜いて、私の手を取って手首に縛った。
「ワシュレナイ」と潤むブルーで言って背中を向けた、私はリンダの背中をそっと押して。
『ありがとう・・・リンダ』と囁いた、限界を感じていた、必死に立っていた。
リンダの背中が見えなくなっても、動けなかった寂しくて寂しくて固まっていた。

私は慎重にリンダの髪の毛をほどき、大切にポケットに入れて。
『よし！』と気合を入れて、見送りの展望デッキに行った。
飛行機の窓を探していたが、ブロンドは見えなかった。
《飛行機の別れは寂しいな～》と思って見ていると。
最後の乗務員らしき人が、扉の確認をしていた。
そこにリンダが突然現れて、両手を私に振った。

私も両手を必死に振って、リンダを見ていた。
リンダが乗務員に促され帰る時に、指のサインを出した、ＰＧのサインを。
【了解】【戻ります】と出して見えなくなった、私は手摺りに手を突いて泣いていた。
限界が来て、ただ一人で泣いていた。
飛行機のエンジン音が響いて、動き出した。
反転した飛行機の反対側の窓に、煌くブロンドが見えた。
リンダが小刻みに手のひらを振っていた、私は両手を振って大声で叫んだ。

『Ｉ　Ｌｏｖｅ　Ｒｉｎｄａ』と叫んでいた、海に向かい機首を上げた飛行機に向かって。
私は青空を見上げていた、世界の広さを感じて。
夢と希望に包まれて、空を見ていた。

トボトボと空港を出て、バス停のベンチに座っていた。
「帰ろうエース」と隣で美冬の声がした、四季が全員立って泣いていた。

『ありがとう、大切な思い出が出来たよ』と必死で笑ったけど、涙が溢れた。
私は駆け寄った美冬に抱かれて泣いていた、大空に夢を馳せながら。
「１００点以上の答えを見せて貰ったよ、幸せだった」と千秋が抱いてくれた。
「リンダも絶対、大切な思い出を持って帰ったよ」と千夏が抱いてくれ。
「まだ夏は終わらないよ、帰ろうね・・蘭姉さんが待ってるよ」と千春が抱いてくれた。

『四季に意地悪3個づつ追加』と笑って立ち上がって。
4人に囲まれて、笑いながら帰路についた。
美冬の運転する車を、橘通りで降ろしてもらい、レコード屋に入った。
サマータイムのジャケットを見て、驚いていた。
始まりは、戯曲の子守唄だった、私は説明書きを読みながら、アメリカを想っていた。
《リンダ、待ってろよ必ずマイハニーと行くからね》と心に囁いた。
1番良いと店長らしき、オヤジが勧めたのを買って、PGを目指した。

赤玉駐車場に祭りの舞台を作っていた、私はそれを横目に通りに出た。
「聴きたいんでしょ」と腕を組まれた、ユリカが爽やかに微笑んだ。
『あ〜、ユリカも共犯だね、意地悪3プラス』と微笑んで返した。
「いよいよ最大のライバル、カスミを捕らえたわ」と嬉しそうに微笑んだ。
私は祭りの準備の沢山の人の前で、可愛いユリカを抱き上げて。

『どうするユリカ、降りるかい?』とニヤで聞いた。
「どうして降りるの、姫は疲れたのじゃ〜、誰かが毎日泣くから〜」と笑顔で言って、私にしがみ付いた。
『今日は泣くさ、ブロンドのボインだよ・・辛いよ』とユリカに囁いた。
「折角リンダの話、通訳してやろうと思ったのに、今のでや〜めた」と爽やかニヤで返された。
『ユリカ姫、ボインのユリカ姫』と機嫌をとりながら歩いていた。
週末の祭りの熱が上がりだした、細い通りを。
《リンダ、東京着いたかな〜》と空を見上げた、ユリカも空を見上げて。

「バスの中で、リンダが言ったよ・・世界を旅をして、初めて別れが辛くて涙を我慢してるよって」とユリカが囁いた。
『俺、英語分ってきたかも』と微笑むと。
「違うよ・・女が分ってきたんだよ」とユリカが微笑んで、瞳を閉じた。

私は夏の熱が揺らす通りの先の、リンダがしゃがんでいた所を見ていた。
真夏の陽射しが照りつける、輝くブロンドとブルーを蘇らせながら。
私の視野を何時間かで広げてくれたリンダ、世界中を旅する女神。
私はそれから何度もリンダに会う、そして教えてもらう。
人には翼が有るのだと、言葉などに縛られては駄目だと。
あの狭い通りで、ＮＯと言って笑顔で手を出した気持ちを忘れるなと。
言葉に頼ってきた、この時の私には最高の経験だった。
リンダありがとう、話してくれて。
リュック１つで旅をする女神・・ＲＩＮＤＡ
あのリンダのサマータイムが、１番響いたよ。
どんな一流のミュージシャンよりも・・。
ブロンドの煌き・・青の言葉・・最高の楽園・・【Ｉ　Ｌｏｖｅ

Rinda

Rinda　Dream

祭りの季節だと男達が笑っていた、露店の熱以外の熱気が溢れていた。
私は未だに寂しさを連れて、可愛い女性を抱いていた。
何も隠すことも出来ない事が、逆に安心感を抱かせる不思議な女神を。

エレベーターに乗ると、ユリカが私向かって頬を膨らました。
『どうちたの～、ユリカ姫？』と恐る恐る聞いてみた。
「私の事飽きたのね、倦怠期かしら・・階段さぼるなんて」と爽やかニヤをだした。
『でかい女を階段抱っこして・・腰が』とウルで言った。
「ど～せ、私は小さいですよ・・ボインじゃないですよ」と爽やかウルで言った。
『ユリカ・・昨夜のやきもち引きずってるね』とニヤニヤで返した。
「マミちゃんにね、勇気があるな～って思ったよ、まぁ勇気を教えたのはエースだけど」と爽やかに微笑んだ。
『ユリカ・・勇気を出して、瞳を閉じてごらん』とニヤで言った。
「一生させない、今決めた・・さっきまでいいかな～って思ってたけど」と爽やかニヤニヤで返された。
私は全開ウルウルウル攻撃を出した。
「無駄なウルはやめなさい、楽園ウルで泣きそうだったくせに」と全開爽やかニヤで返された。
『今分った・・あれね～そうだったのか～ユリカ』とニヤを出してユリカを見た。
「違うわよ！何考えてるの？」とユリカが焦った。
『ユリカの言葉とは思えないね・・何を【想像】したの？ユリカでも【想像】するんだ～』とニヤで言った。

「あっ！」と言って、爽やかテレを出して、顔を逸らした。
ＢＯＸでユリカが出してくれた、バニラアイスを食べて、ユリカを待っていた。
ユリカがレコードに針を落とした、サマータイムが流れてきた。
ユリカが私の隣に座り、私の手を握ってくれた。
「泣いていいよ」とユリカが強く言って、揺り篭に入れてくれた。
私は初めて揺り篭の本質に触れていた、ウミもカスミもレンも揺られた揺り篭の。
目を開けているが、見えているのにリアル感が無くなって。
視覚でない映像が浮かんできた、リンダの全ての場面を思い出して、泣いていた。
スピーカーから流れてくる、サマータイムがニューヨークに連れて行った。
リンダが手を振っていた、明るく笑い両手を大きく振っていた。
私は最高の気分で、涙を流していた、ユリカの香りに包まれて。
私が落ち着いて、ユリカが話してくれた。

「昨夜、あなたのあの顔を見て、四季が帰りに４人で寄ってくれたの。
私嬉しかった～、来てくれたことも、そして提案も。
美冬ちゃん本当に凄い子だね、数年前の蘭を思い出したよ。
リンダは昨日、美冬ちゃんが大学で拾ったんだって。
リンダ、大学の教授を訪ねたらしくて。
帰りに大学の門の前で、ウロウロしてたんだって。
それで美冬ちゃん、生の英語に触れたくて声をかけたら。
リンダ泊まる所も決めてなくて、美冬ちゃんが部屋に連れて帰ってたの。
それでリンダと話をして、好きになってたんだって。
それで昨夜のあなたの顔を見て、四季で話して、私を選んでくれ

たの。
本当に嬉しかったよ、そして私が作戦を授けた。
四季は半信半疑だったよ、まずあなたが声をかけるのかって思ってた。
私はそこは自信があったの、それで、状況を見てばらそうと思ってたのよ。
あなたがリンダを見た瞬間に駆け寄って手を伸ばしたのを、ここで見ててね。
四季はその時点で泣いたよ、素敵な4人組だよね、まさに奇跡が集めたメンバー。
水槽で、リンダトイレに行ったでしょ。
あの時美冬ちゃんが、終わりにしようって言ったら。
リンダが最後までやらせてって言ったらしいよ、どうしてもってね。
それで四季で付いて回ってた、四季のメンバーが何度泣いたかと思うよ。
美冬ちゃんあなたに本当に感謝してるね、決別も今の恋も・・全て。
そして昨夜のあなたの顔を見て、心が締め付けられたんだよ。
でもあなたが戻った、それで試験を出したいって私に言ったの。
あなたの最大の武器、心を変換する言葉が使えない試験を。
もう2度とあなたの、昨夜のような顔が見たくなかったのね。
美冬ちゃん、凄く後悔してたよ。
あなたが返した心の鍵を、喜んで受け取ったこと。
だから・・試験を提案した、あなたを愛しているからよ。
そして最高の試験官がいた、リンダ・・最高クラスの女性よ。
そしてあなたは見せたの、言葉など必要ないとね。
あなたは最後飛行機が飛び立つ時に、心の解答用紙に書いたでしょ。
なんて書いたの？そこだけが分らなかった。

あなたの叫びで・・・聞こえなかった。
お願い教えて・・・解答はなんて書いたの？」

ユリカが私を見て、真顔で言った。

『言葉はいらない・・愛が世界共通言語だって心に書いたよ』とユリカに微笑んだ。
「完璧な同調・・完璧な解答」と言ってユリカが私に抱きついて、嬉しそうに泣いていた。
私はユリカを抱きながら、四季に感謝していた。
そして美冬の鍵を返した時の、美冬の顔を思い出していた。
泣きながら、ユリカが続けた。

「リンダの感情の波が常人より遥かに強くて、最初に感じたとき私も焦った。
そして思ったの、本物だって・・辛さや悲しみを人の数倍経験してるって。
私はそれを感じて、あなたがリンダの心を開くのは、幾らなんでも無理だと思った。
リンダはあなたに対して、どこで心を開いたと思う？
英会話をＮＯと言って笑顔で手を出した時よ、リンダの数々の経験にも無かったの。
ＮＯと言って笑顔で手を出す男がいるなんて、思ってもなかったのよ。
その時のリンダの感情の揺れで私は泣いた、リンダの喜びに触れたから。
リンダは多分、相当の言語を話す、勿論日本語は話せないけど。
でも、言葉の理解出来ない国にも、相当行ってるのね。
そしてそこで、挫折や寂しさに、当然遭遇していたでしょう。
伝わらないもどかしさや、言葉が通じないと言うだけで、相手に

されない寂しさに。
それを一瞬で払拭した、あなたのＮＯと言った笑顔が。
そして、あなたがずっと瞳を見て、読み取ろうとした事が。
リンダは嬉しかったの、伝える手段に気付いて。
リンダは最高の幸せを感じていたよ、あなたと別れる時に【ど～ん】をしたでしょ。
あれはリンダの最高の愛情表現よ、あなたに撃たれたと言ったのよ。
ＮＯと笑顔で言った男が、今までで１番楽しませてくれたの。
そしてリンダの寂しさを１番分ってくれたのよ、リンダにとって忘れられないよ。
あなたが水槽で、リンダの涙を見て側に行って、日本語で心配した時。
リンダは感動してたよ、言語の違いなど問題でないって、あなたの顔が示したから。
そして【ど～ん】で笑わせた時に、本当に嬉しかったのよ。
リンダの中で、今最高の言葉は【ど～ん】だよ、それは間違いない。
自分の寂しさも、悲しみも全部撃ちぬいた【ど～ん】なんだよ」

ユリカの言葉で、私は嬉しくてリンダを想っていた。

ユリカは静かに私を見て、私から離れて最強爽やかで微笑んだ。
「寝てるよね～」と爽やかニヤで私に言った。
私はハッとして、ユリカを見た、そして目を閉じた。
ユリカの少し震える唇が、私の唇に触れた、私は嬉しくて震えていた。
５秒の短く浅いキスだった、私はそのままユリカに倒れて抱きしめた。
嬉しさで目が開けたくなかった、そしてこう心に囁いた。

《ユリカごめん、意地悪ポイント－１０点》
「ありがとう、また意地悪頑張るね・・今日は最高の夢を見させてくれたお礼だよ」と言って抱きしめてくれた。
私はユリカに抱かれ、幸せを感じていた。

少し照れてるユリカに見送られ、ニコニコ顔で手を振って別れた。
ＴＶルームに珍しく誰も居なくて、フロアーに行くと。
１０番で、マダム・ユリさん・蘭・ナギサと９人衆にマミと久美子が加わり話していた。
私は怖いので、側に寄らずに、レンの用意した物をチェックしていた。
四季が話していたので、リンダの話だと思っていた。
四季以外の笑顔が溢れて、私も楽しい気分で座っていた。
話しが終わったらしく、全員で拍手がおこって。
蘭が満開ニヤニヤで手招きした。

私は恐々１０番の前に立った。
「今日の報告を述べよ」と蘭が満開ニヤで言った。
『今日は、ブロンドのすっっっっごい可愛い、リンダちゃんに出会って。
手を繋いで、頬キスの交換をして、腕を組んで、空港抱っこして。
お礼の唇チュッを貰って、別れが切なくて泣きました』と反省顔で言って蘭を見た。
「可愛いリンダちゃんに最後になんて叫んだの」と最強満開ニヤできた。
『Ｉ　Ｌｏｖｅ　Ｒｉｎｄａ』と叫びました。
「何かプレゼントを貰ったね」と満開ニヤ継続で言った。
『宝物です』と言って、ポケットのブロンドの髪を皆に見せた、全員ニヤで見ていた。
「それをどうするんだい？」とカスミが全開不敵で聞いた、全員の

ニヤが見た。
『日記に貼り付けます』と笑顔で答えた。
「特殊事項はないね？」と蘭が満開で聞いた。
『1つあります、夢を見せてくれたお礼にって・・唇チュッを貰いました』とニヤニヤで言った。
「ちょっと待ってよ」と蘭が私のニヤニヤを見て考えた。
「まさかな～、いくら何でも無理だろう」と蘭が腕組みして言った、私は蘭に最強ニヤを出した。
「まさか・・・ユリカ姉さん！」と蘭が叫んだ。
『正解』と蘭に微笑むと、最強満開ニヤで私に抱き付いて。
「もう、いけない子～」と言って抱きしめてくれた。

「驚いて、声が出ませんでした」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「信じられない、嘘だと言って欲しい」とナギサが最強華やか笑顔で言った。
「昨日心配した、私らが馬鹿みたい」と千春が言って。
「てか、リンダ効果で・・パワー上がったような」とカスミが不敵で言った。
「もう1つあるよね～」とマミがニヤをした、私はマミを見てニヤで返した。
「マミ、心臓に悪いことじゃないだろうな？」とカスミが不敵でマミを見た。
「たいしたこと無いよね～、エース」とマミが微笑んだ。
私はマミのこの発言が、本当に嬉しかった。
蘭と私に隠し事をさせたくないと、思って言った事を、蘭は瞬時に理解したようだった。
私もマミの気持ちと、変化が嬉しくて笑顔になった。
『昨夜、マミと帰り道で誓いを立てました。

マミが辛い時に集合する場所を決めて、誓いの儀式をしました。
マミの浅いファーストキスを頂きました、ありがとう』と言って反省で蘭を見た。

「本当に悪い子だ～」と蘭が満開で私を優しくパンチした、私は一応ウルで答えた。
「大ママに殺されるぞ～」とカスミが不敵を出した、全員が唖然としていた。
「ハルカ、どうするの？マミに差をつけられたよ」と蘭が満開ニヤで言った。
「もう、どうしてマミはそんな事を・・先にするの」とハルカが言って立ち上がり、前に出てきた。
全員が呆気にとられて見ていた、そしてハルカが私の前に立った。
「私も浅いファーストキスは・・・エースがいい」と真顔で私を見た。
私はハルカを真顔で見て、その真直ぐな瞳を見ていた。
私はハルカを優しく抱き寄せた、ハルカが少し微笑んで目を閉じた。
私はハルカに優しく浅いキスをした、かなり緊張していた。
ハルカの唇が少し震えていた、愛おしくて少し長めで合わせて、離した。
ハルカは目を開けて、笑顔で私を見た、私も笑顔で返した。

「いけない子だニャー」と蘭が満開で笑って、腕を組んだ。
「何を作りたい・・伝説や神話じゃ足りないのか」と不敵全開笑顔でカスミが言った。
全員嬉しそうに、優しい笑顔でハルカを見ていた。
「リンダ効果恐るべし、ハルカが踏出したよ・・気を付けないとゴボウ抜きにされるよ」と蘭が微笑んだ。
「は～い」とハルカ以外の８人が返事をして、終了になった。
「どうして、毎日がこんなに楽しいんでしょうね、蘭」とユリさん

が薔薇で微笑んだ。
「本当に怖いいぐらい、毎日楽しいですね」と蘭も満開で微笑んだ。
「ついて行けるかな～、私」とナギサが華やかニヤで言った。
「あら、もうトップランナーでしょ、華やかさん」とユリさんが薔薇でナギサに微笑んだ。
ナギサはその言葉で、本当に嬉しそうに、華やかに微笑んだ。

女性達が準備に行く時に、美冬が私を呼び止めた。
「これ、あれから教授に会いに行って、貰ってきたよ」と一冊の英語の雑誌を差し出した。
「本当にありがとう、本当に感動した、あの時間が本当に幸せだったよ」と美しく微笑んで、控え室に背中を向けた。
『美冬、鍵は返したけど・・俺にはあの時の美冬の顔が・・今でも心の支えだよ』と背中に笑顔で声をかけた。
「泣かさないで・・ありがとう」と背を向けたまま言って、銀の扉に消えた。

私は雑誌を開いた、小さく折り目が付けられたページが開き、封筒が挟まっていた。
リンダがアフリカの子供であろう、沢山の子供に囲まれて最高の笑顔で笑っていた。
文章の冒頭の大きな文字はこう書いてあった。
【ＲＩＮＤＡ　ＤＲＥＡＭ】と書かれていた、私はリンダの笑顔を暫く見ていた。
そして１０番に座り封筒を開けた、美冬の文字であろう。
綺麗な女性の文字が書かれた、３枚の便箋が出てきた。
便箋にはこう書かれていた。

【私が和訳するね、正確じゃないかもしれないよ。
この記事はアメリカの著名なジャーナリスト〇〇〇・トーマスが

ＴＩＭＥ誌に掲載した物です。

リンダの夢は何なのだろうか？

リンダは幼い頃全てを失った、そして莫大な財産を相続した。

リンダは飛び級で、１９歳で大学の修士課程を修了している。

世間で言う【天才】である、しかしリンダは自分をこう呼ぶ【Ｃｈａｌｌｅｎｇｅｒ】だと。

その飽くなき探究心で、世界中を飛び回る、その探求の根源は【平和】である。

子供達の心の平和、それを探し続ける、【Ｃｈａｌｌｅｎｇｅｒ】として。

お金を寄付する事など、リンダにとっては簡単な事だろう。

しかしリンダはそれだけで満足しない、その心は満足などから最も遠い所に存在する。

リンダは常に【生まれた意味】を背負っている、ピンクのリュックの中に入れている。

小さなアルバムの写真の中に隠している、その写真中にある・・リンダの本質。

私はリンダとの単独取材の中で、永い時間を過ごしたが見せてもらえなかった。

その深く潜ませた本質を、誰かに話す時が来るのだろうか、来て欲しいと願う。

リンダは言う【財産なんて使うためにあるの、何に使うのか、それを探したい】と。

その天真爛漫な少女の香りの強い、リンダの本質はどうやって見ればいいのだろうか？

外見に隠された悲しみを、誰かが本当の意味で理解できるのだろうか？

リンダのブルーの瞳は、何を見ようとしているのだろうか？

俗世間に侵された私などには、理解するのは無理な事だろう。

世界中のあらゆる国の子供達の笑顔だけが、リンダの心の支えになっている。
リンダは挑戦を止めない、それが生きる意味だと信じている。
遠い・・遥かに遠い、リンダの心は気高く遠い・・・その場所に咲く。
リンダの心には国境や人種など存在しない、人間という枠組みでしか見ない。
突き詰めれば、生命という枠組みしかない。
私達凡人は、せめてリンダを悲しませない世界を作ろう・・それしか出来ないのだから。
何かが作り出したのではない、リンダが自ら作り出した・・そのリンダという存在。
諦めから最も遠い希望、青き瞳の戦士・・私はリンダに贈ろう。
リンダを表すのに、最も近い表現方法のこの言葉を。
【Ｌａｓｔ　Ｃｈａｌｌｅｎｇｅｒ　Ｒｉｎｄａ】
リンダ・・出会えただけで、幸せだった。

この翻訳をしながら、何度も泣きました。
私達４人で、そして幸せを感じました。
本当にありがとう、大切な夢を見せてくれて。
【Ｌａｓｔ　Ｃｈａｌｌｅｎｇｅｒ　Ａｃｅ】に４人より・・
愛を込めて。

私は読み終わり、四季とは逆に深く考えされられた。
蘭がいないので、ユリカに語りかけた。

《ユリカ、リンダにもう一度会えるよね。
俺は何も解ってやれなかったよ、リンダに会いたいよ。
そしてもう一度、ど～んと言ってあげたい。
リンダに撃たれたと、そして会わせてあげたいマリアに。

リンダの１つの答えであろう、天使の微笑み・・マリアに。
そっか、そうだね、今回マリアに会えなかったのは、次回があるって事だね。
その時に言うね、もう一度心を込めて
Ｉ　Ｌｏｖｅ　Ｒｉｎｄａ・・・そう言うね》

そう心に囁いて、雑誌を閉じた、カスミが不敵で立っていた。
最高の輝きで誘った、最高の愛情表現で言った。

「今、出来る最高の事をしような、それが未来に続く道なんだろ？」
と輝きながら手を出した。
私は嬉しくて、笑顔で手を握り。
『祭り上げられて、ナンボやろ・・俺達は』とカスミに微笑んだ。
「当然だ」と笑った、その笑顔に誓った・・【ベストを尽くそう】と。
リンダに次に会うときに、笑顔でど～んと言えるように・・。

リンダはその年の、クリスマス前に突然やってきた。

中国に行く途中の、短い滞在時間だった。

リンダが笑顔で【ど～ん】と叫んで、私に後から飛び込んできた。

私は嬉しさの涙を流し、泣いているリンダをそのまま抱き上げた。

『Ｉ　Ｌｏｖｅ　ｒｉｎｄａ』とリンダの楽園ブルーに囁いて、ＴＶルームに行った。

マリアはリンダを見て、駆け寄って天使全開で微笑んで泣いた。

リンダはマリアを抱き上げて、マリアを見ながらこう囁いた。

「Ｍｙ　Ｄｒｅａｍ」と言って、抱いていた天使全開のマリアを。

私は冬の暗い夜の空港で、福岡便に乗るリンダに叫んだ。

『ど～ん、リンダ！・・・Ｉ　Ｌｏｖｅ　Ｒｉｎｄａ』

リンダは最高楽園笑顔で振返り、サインを出した。

【了解】【戻ります】と出して両手を振った。

私も両手を振った、雨季が到来した楽園ブルーを見ながら・・・。

魔性の女？

真夏の夕暮れにはまだ早い、露天の連なる狭い通りを歩いていた。
私の隣の輝きは内側から発光していた、出会ってまだ3週間しか経っていない。
しかし同一人物と思えない程、笑顔が輝いていた。

『先にドレス審査なの？』と隣で腕を強く組むカスミに微笑んだ。
「あぁ、白いドレス・・男はヴァージンロードを期待してるんだろ」と不敵で言った。
『なるほどね～、白いドレスか、可愛いバージョンだね』とニヤで返した。
「その通り、今回は頑張るよ、可愛いきゃすみちゃんで」と可愛く微笑んだ。
屋台が並ぶ人混みを、カスミと腕を組んでかわしながら歩いた。
受付に数人の女性が来ていた。
「エース、その人がPG代表？」と大きなキャバレーのキャンディーちゃんが微笑んだ。
『うん、きゃしゅみちゃん』と笑顔で返した。
「さすが、PGね」と微笑んで受付をはじめた。

『さすがだって、きゃしゅみ』とニヤをした。
「当然だ」と不敵で笑った。
「元気になったね、エース」と後からホノカが言った、振向くとフリフリ衣装のホノカが立っていた。
『ありがとう、ホノカ抱っこして、元気出たよ』と笑顔で返した。
「ホノカ、可愛くおしゃれしてきたな」とカスミがホノカに最強不敵を出した。
「そう、いつもより抑えてるんだけど」とホノカが最強華麗で返し

て。
「カスミも足、いつも以上に出してるね～」とカスミのミニスカートを見ながら、私の右腕を組んできた。
「そう、いつもより長いでございますのよ」とカスミが微笑んで返した。
私を挟んで、バチバチと火花を散らせた。
『火花はやめて、熱いから』と2人を交互で見て微笑んだ。

『2人の対決なんでしょ？』とホノカに笑顔で聞いた。
「ピーチクラブから、可愛い子が出てくるらしいわ」とホノカが華麗に微笑んだ。
「かぶったね、ホ・ノ・カ」とカスミが不敵で微笑んだ。
「白いドレスで、私がリードして・・逃げ切るわ」と華麗ニヤをカスミに出した。
「先生～」とシオンが走ってきて私の前に立った。
『今日も可愛いね～』とわざとシオン名を言わなかった。
シオンが私の腕が空いてないので、ウルをした。
カスミが受付に行ったので、シオンがすぐに左腕に組んできた、その時ホノカも呼ばれて行った。

『シオン、まさか出るんじゃないよね？』とシオンを笑顔で見た。
「シオンちゃん、１９歳なのだ～」と可愛く笑った。
『そうだったね、遊んでるの？』と笑顔で聞いた。
「リアンの代わりに、受付のお手伝い」と可愛く笑った。
『遊んでて、良いのかな～』とシオンに微笑んだ。
「少し疲れたから・・ちょっと充電して」とシオンが真顔で言った、その顔にキュンときて抱き上げた。
人混みの祭り会場で、可愛いシオンを抱いていた、シオンは私に強くしがみつき瞳を閉じた。

「ありがとう、頑張ってくるね」とシオンが目を開けて微笑んだ、私はシオンを優しく降ろした。
『無理するなよ、シオン』とシオンに目線を合わせて微笑んだ。
「は～い、また後で」と可愛く笑って、受付に走って行った。
「可愛い子だね、出るの？」とカスミが聞いた。
『カスミ、挨拶しなかったね～、シオンちゃん・・リアンの妹だよ～』とニヤで言った。
「どこに行ったの、シオン様～」とカスミが笑顔で言った。
「後でねエ～ス・・勝った方をステージから、抱っこして帰ってね」とホノカがカスミに華麗ニヤをした。
「良かった～、帰り歩かないでいいんだ～」とカスミが不敵ニヤで応戦した。
私はこの素敵な友達関係を、笑顔で見ていた。

「私、順番最後になったから、最初のドレスの時は状況見とけよ」とカスミが私に微笑んだ。
『了解、最後って、真打って言うの・・トリかな』と微笑んで返した。
「チャンピオンって言うんだよ」と不敵で返してきた。
『なるほど～、さすが元プロ集中してきたね』とニヤで返した、カスミは全開不敵で微笑んだ。
ＰＧに帰り、カスミはＴＶルームに食事に行った。
私はＴＶルームがあまりに混んでいたので、指定席に座って瞑想していた。
瞑想の映像にはリンダが出てきて、寂しそうなブルーで両手を振った。
私はリンダに両手を振って、ど～んと叫んでいた。
「リンダちゃん、見えた？」と横から久美子が言った。
『うん、少し寂しそうだった』と久美子を見て、微笑んで返した。

「リンダちゃんのサマータイムで、良い事教えてあげようか～」と久美子がニヤを出した。
『うん、教えて久美子お姉さま』とウルで頷いた。
「1対1で女性と話すとき、そうだっけ？」と可愛いニヤで来た。
私は久美子の手を引いて、フロアーのセンターで抱き上げた。
『はい、お姉さま』と笑顔で久美子を見た、久美子は嬉しそうに笑った。

「サマータイムはミュージカルの第一幕に歌われる子守唄なの。
でもね、歌って聞く人の感覚で変るから、色々な意味が後から付くのよ。
そしてサマータイムには、もう1つの意味があるの。
ニューヨークって、確か日本の東北位寒いのよ。
そして、ニューヨークにはホームレスの人が沢山いたの。
今も居るのかもしれない、ホームレスの人は冬は凍死が怖いの。
だからサマータイムを聞くと、夏の到来を感じ喜びに沸くのよ。
少なくとも凍死で死ぬ事はないから、外で眠れるようになるから。
だから特別なの、特に黒人達には特別な歌なんだよ」

久美子は目を潤ませてそう言って。

「リンダちゃんのサマータイムは、その夏の到来を喜ぶ方の響きだった。
私は感動してたの、その魂の叫びに震えたわ。
白人のあんなに可愛い子が、その叫びで歌える事が。
ありがとう、会わせてくれて・・本当に良かった。
リンダの歌が間近で聴けて、伴奏まで出来て」

久美子は涙を流した、私は久美子を引き寄せて。
『久美子、目を閉じて充電して、リンダの響きを感じよう、俺もそ

うするから』と微笑んだ。
久美子は涙目で頷いて、瞳を閉じた。
私は久美子の微かな震えを感じながら、リンダを想っていた。
もう一度でいいから会いたいと、会えないのなら、会いに行こうと決意していた。
私の価値観を大きく変えた、リンダ・・もう一度会って、その瞳と話そうと想っていた。
滑走路を飛び立とうと機首をを持ち上げた、その先に見えていた太平洋が誘っていた。
ブルーは永遠であると、世界のブルーを見に行きたいと、欲望が渦巻いていた。
その数年後世界に飛び立つ、久美子を抱きながら。

「いよいよ、久美子ちゃんなんだ～」とハルカの声がした。
「私の可愛い久美子に、何するんだい」とレンの声がした。
私は振返り、久美子が寝てると合図した、２人が覗き込み笑顔になった。
「６時５０分まで、寝かせてあげてね」とハルカが言って。
「変な所触るなよ」とレンが笑顔で睨んで、１０番に座ってサインの練習をはじめた。
私は久美子の子供のような寝顔が可愛くて、久美子の寝顔を見ていた。
私は久美子を抱いたまま、６番に座って時間が来るのを待っていた。
入場してきた女性達が、代わる代わる久美子の子供のような寝顔を見て。
嬉しそうに微笑んでいた。

「う～ん」と言って久美子が両手を伸ばして、目を開けて私の顔を見て固まった。
「キャ～～～！」と言って飛び起きた。

『キャーって、久美子ひどい』と呟いてウルウルで久美子を見た。
「ごめん～、ビックリしたのよ～」と笑顔で言った。
私は久美子の手を引いて、私の指定席に座らせて、ＴＩＭＥの雑誌と美冬の翻訳を見せた。
久美子は真剣に呼んで、俯いて泣いていた。
久美子にとって、人生が変る出会いだとは誰も知らぬままに。
「ありがとう、最高だねリンダちゃん」と美しさを秘めて笑って、ピアノに向かった。

最初の曲は、サマータイムだった、泣いていた響きが泣いていた。
そして段々喜びに変って行くのが、手に取るように分った。
私はサマータイムが終わると、久美子に右手を上げて笑顔を見せて、ＴＶルームに行った。
急いで食事しながら、マリアのマリア語に相槌を入れて、エミのご機嫌を取って、ミサの自慢話を聞いていた。
皇帝ルックに着替えて、祭りに出かけた。
路地は大変な人出で、会場に着いた時に疲れを感じた。
美人コンテストは始まっておらず、来賓席に大ママとユリさんが、話してるのが見えた。
整然と並べられたテーブルはほぼ満席で、皆飲んだり食べたりしていた。
私はステージの前を通って、来賓席に歩いていたら右腕を強く組まれた。
リアンが獄炎ニカで私を見て、胸を押し付けていた。

『リアン、案外小さいな』とニヤしながら歩いた。
「誰と比べたのかな～」と最強獄炎で微笑んだ。
『リンダちゃん、大きいよ～』とニヤで言いながら、大ママに挨拶した。
「どこのストリップの子だい、リンダって」とリアンが笑顔で言っ

た。
「ニューヨークよ」と私の左腕を組みながら、ユリカが言った。
「ニューヨークか～、そりゃ～負けるな～」と獄炎で微笑んだ。
「マミちゃん成長著しいですね、大ママ」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「誰かさんが、ファーストキスを奪うからね」と大ママが私をニヤで見た。
「お前、マミちゃんに、自分からしたのか」とリアンが獄炎ニカで私を見た。
「今日は皆の前で、ハルカのファーストも奪いましたよ」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
大ママとリアンが固まった、ユリカ笑っていた。

「いいな～、ファーストならしてもらっても、蘭怒らないよな～」とリアンが呟くと。
「今度は、エースからしてね」とユリカが爽やかニヤを私に出した。
「ユリカ、頬を言ってるんじゃないよ」とリアンが楽しそうに言った。
「リアン、私もリアンに並んだよ、唇1回」と最強爽やかニヤを出した。
またも大ママとリアンが固まった、ユリカが楽しそうに笑ってた。
「リアン、交代」と言ってリアンを押しのけて、シオンが私に腕を組んだ。
「先生、唇チュッはしていいんだ～」とシオンが可愛く笑った。
「シオン昨日何かされなかったか？」とリアンが獄炎ウルでシオンに言った。
「覚悟だけだよね～」とユリカがシオンに微笑んだ。
「うん、先生とならしてもいいかな～って・・覚悟した」とシオンがリアンに可愛く言った。
「私・・頭が痛くなってきた」とリアンが言うと。

「お熱はありませんね、今度のお熱添い寝は私ですよ」とユリさんが悪戯っ子を出した。
「お熱添い寝があるの・・やった～」とシオンが言った。
「風邪が大流行したら、どうするのかな～」とリアンが獄炎で微笑んだ。
「その時は絶対、蘭を元気でいさせましょう」ユリカが爽やかニヤで言った。
「面白そうだな～、誰に行くのか」とリアンが言った時に。

「私よ」と後からミチルが妖艶に微笑んだ。
「私の事は会うたびに好きになるらしいから、私は愛人でもＯＫって言ってるからね～」と近づいて妖艶ニヤをした。
「本気・・・です」とユリカが言って、私の腕を外して、ミチルが組んできた。
「ユリカ、残念だけど、その成長スピードじゃ、熟れた女の勝ちね」と妖艶ニヤを出した。
「ミチルママ・・・また本気」とユリカが爽やかに笑った。
大ママとユリさんとリアンが固まっていた。
「で、エース優勝者を店まで抱っこするそうだね～、私も２０歳で出ようかね～」と私に妖艶ニヤを出した。
『ミチル、そんなに遠慮しないで、ユリカスペシャルいつでもするよ』と微笑んで返した。
「蘭みたいに土曜の夜の、一番街抱っこがいいね～」と妖艶ニヤできた。
『了解、いつでもどうぞ・・ミチル』とニヤで返した。
「うれしね～、ユリ、エースちょうだい」とユリさんに妖艶ニヤを出した、ユリさんはミチルを見ていた。
「駄目ですね～、今５年後の約束が成立しましたから」と薔薇で微笑んだ。
『ありがとう、ミチル・・最高だよ』とミチルにニヤを出した。

その時に、コンテストが幕を開けた、司会のアナウンサーが大きな声で開幕を告げた。
四天女とミチルが来賓席に揃い、五天女になって座っていた。
シオンが手を振り、受付に戻った。

そして私は衝撃を受ける、黒いマントを羽織り、私の目の前に立った女に。
「優勝者は、抱っこして帰ってくれるの？」と微笑んで聞いた。
ＵＰにした髪から下がる、白いベールで本当の正体を隠し。
細面の小さな顔に、主張をやめない涼しい瞳があった。
その瞳の清涼感に息を飲んで、ベールの中からでも感じる妖しい輝きに捕まった。
薄いピンクの唇が微笑みで少し上がり、筋の通った鼻とのバランスが絶妙で。
魅惑の色彩を放っていた、妖しい何かは確実に心に入り込む存在を示していた。
美しさは最高級のＡＡＡと表示され、高価な者だと微笑んでいる。
全てを差し出しても、内側には入れないと。
瞳が提示するその言葉、【諦め】を強く認識させるよだった。

『もちろん、あなたなら頼んででもしたいよ』と微笑んで返した。
《こういう女を、ボロボロになっても追いたいって言うんだな》と思っていた。
「やる気が出てきたよ、ありがとうエ～ス」と笑った、その笑顔が誘った、来るなら来いと。
『ちなみに、美しいあなたのお名前は？』と思い切ってベールを上げながら微笑んだ。
「ピーチのリョウよ、以後よろしく」と私の肩に両手置いて、ギリギリの近さに迫り耳元に囁いた。

背筋に緊張が走った、呪文のような響きに誘われた。
優しい人間などいないと、暗黒からの手が伸びた。
顔を引くときに、妖しい傷ついた女の手が私の心を掴み、強い力で引き寄せられた。
私はリョウの涼しい瞳をずっと見ていた、その私の対応にリョウが微笑んだ。
その微笑で完璧に暗闇に誘われた、そしてどうしても分らなかった、女の腕の正体が。
ただ漠然とした恐怖が私の背中に居座った、暗闇に潜むただならぬ気配を感じていた。
リョウは五天女に、深々と頭を下げてステージ裏に消えた。

「最後の挑戦者が、新しい難問を見つけましたね～」とユリカが爽やかに笑い。
「カスミちゃんとホノカちゃんの、慌てる顔が楽しみですね～」とユリさんが薔薇で笑った。
「本当にこの世界は飽きないね～、今は絶対に絡んで行く奴もいるし」と大ママがニヤを出し。
「また、お熱添い寝メンバーが増えるのかな、体が幾つあるのやら」とリアンが獄炎で微笑み。
「楽しい時代に生まれたんだね～、私達は」とミチルが妖艶で笑った。
魔性の女リョウ、絶対に忘れえぬ妖しい囁き。
男を滅ぼす事を快楽にする香り、逃げることを選択させない強い力。
奥底から出してくれと何かが叫ぶ、狭い空洞を通るような響きを連れて来る。
血の滲む女の腕だけが、泥沼から地上に出ている、苦しみを表現し

た手のひらが誘う。

爪の剥がれた人差し指を曲げて、こっちだと誘う。

前人未到の鍾乳洞に覆われた、暗黒の地下に滑り込めと。

指名され誘われたのら・・・覚悟を決め、行くしかない。

光なき暗黒の底に・・・清らかな地下水が流れてると信じて。

覚醒

真夏の夜会に現れたのは、苦しみを示す腕だった。
潜む者の影を見せない、闇の中の叫び。
薄暗い狭い空洞を疾走する轟音、反響して形を表す漆黒の響き。
誘われてしまった、そして受けてしまった愚かな心。

「どう感じたの、リョウは何色？」とユリカが私に真顔で聞いた。

『レンが黒なら、リョウは闇・・でもそれはリョウが作り出してる世界じゃないのかな。
本当の色は、直射日光により作り出された影・・かな。
そして、誤解している・・影を作れば闇と同じだと思ってるような。
確かに深い何かはあるんだろうけど、１つだけ分らない・・腕』

私は思ったままをユリカに伝えた。
「なるほど、凄いな～、リンダの力は、また覚醒してるね」とユリカが私に爽やかに微笑んだ。
「リンダちゃんの力？」とユリさんがユリカに聞いた。
「はい、リンダという超一流の女が見せた、瞳の色の会話、短い時間で訓練になってますね」とユリカが爽やかに微笑んだ。
『そっか～、それでか・・腕』と笑顔で言った。
「分ったの？」とユリカが言った。
『ユリカ、彼女の波動感じた？』と聞き返した。
「隠したから、分らなかったよ」とユリカが真顔で言った。
『囚われてるじゃないのかな？何かが彼女の本来の姿を、どこかに誘拐してる、腕だけは伸ばせるんだ』とユリカを真顔で見た。
「怖くなってきた、あなたが・・そこまで行っても、どこか楽しげ

で」と爽やかニヤをだした。
『あんなに素敵なリョウは、外見に負けない中身があるんだよ多分・・どこかに』と私が言った時に、背筋に触れた重い空気のような何かが。

ステージにリョウが上がるところだった、純白のドレスを着たリョウは圧倒的に美しかった。
外見だけしか見せていなかった、ＡＡＡの容姿しか、笑顔も作り物だと思っていた。
《リョウを監禁してる者、なぜ出てきたのこんな場所に、最も嫌なはずなのに》と心でリョウに囁いた。
リョウが私を見た、目が合って涼しさが増した、違和感のある涼しさだった。
リョウは目を逸らさない、私を見続けている、つまらない質問に答えながら。
私はリョウの瞳の涼しさが全く分からなかった、そして色も深みも変らない無感情の瞳に、恐怖を感じていた。

「よう、お姉ちゃん可愛い顔して、やるこたやってんだろ～脱げよ～」と若いヤンチャ系の集団の一人の男がリョウに叫んだ。
リョウはその集団を見て、笑った・・何かが強引に笑顔という、プログラムを発動した感じだった。
そして私はリョウの右腕を見て震えた、色が左腕と全く異なるのだ。
左腕は黄色人種特有の色なのに対し、右腕は蒼白な感じがした。
そして右腕だけワナワナと震えていた、その涼しい笑顔とは対照的に、右腕だけ別の感情のように。
そして左腕が上がって、白いドレスの胸元を掴んでニヤっと笑った。
「よ～待ってました～、脱いじゃえよ、どうせ誰とでもやるんだろ～」とバカな男がまた叫んだ。

五天女は沈黙して、その集団を見ていた、それに気付いた主催者側が緊張した。
リョウは左腕を少しづつ下ろして、胸の谷間がかなり見えてきた。
私はステージに走った、野次は人数が増して、ヒートＵＰしている。
私がステージのリョウの正面に立った時には、胸元がかなり開いていた。

『リョウ・・リョウ！』と叫んだ、その声にリョウが反応して、私を見た。
涼しい瞳の奥に何かが見えた、深海に棲む泥の中で獲物を狙うような生物的な感じだった。
『リョウ、駄目だよ～俺、経験無いから・・鼻血が出そう』と笑顔で言った。
野次はかなり熱を上げて、私もターゲットにされている。
私は司会をしてる男を睨み、手招きした。
『なんでリョウをとめんの！楽しんでるんか・・夜街の女に喧嘩売るんなら覚悟してけよ』と叫んだ。
野次に負けないように、司会者を見て。
『追い掛け回して、仕事も家庭も狙うぞ・・俺ガキやから止まらんぞ』と静かに言った。
司会者は両手を胸の前で合わせ、スマンって感じの仕草をした。

『リョウ、ブラ見えてるから・・ナイナイしようね』とリョウに優しく笑顔で言った。
リョウが屈んで私の方に顔を近づけた、その時右手が私の方に動いた、それだけ別の意志があるように。
私は必死に笑顔で、感じている恐怖と戦って、リョウの右手を掴んで私の首に巻かせ。
その勢いでリョウの体を引いて、そのまま抱き上げた。
首に巻かれた右腕と、左腕の体温の差に驚いていたが、恐怖は不思

議と消えていた。
抱かれたリョウは私を見て、少女のように微笑んだ。
私はその時初めてリョウのその美しい顔に感情が持てた。

『リョウ、綺麗だね～ビックリしたよ、世界は広いね～』と微笑んで、来賓席の方に歩いた。
野次は続いていた、その時シオンが駆けてきた、笑顔で必死に。
怒号と野次にさらされる、私の方に必死に走って来る、その怒号に負けないパワーで。
「先生、大丈夫？何にも悪いことしてないのに、ひどいね～」と私の前に立って大きな声で言って、可愛く微笑んだ。
私はシオンのこの優しさに撃たれていた、感動していたその純粋という意志に。
『シオン、ごめん、この子の胸元上げて』とシオンに微笑んだ。
シオンが笑顔で上げてくれた、リョウを見たら瞳が変化していた。
私は驚きながら見ていた、シオンを見て目が潤んでいた。
潤んだ水分の透明度に目を見張った、純水だった果てしない地中を通り抜けた、地下水のようだった。

怒号を背に受け、来賓席のテントの前に行くと、ホノカが黒いマントを着て立っていた。
『ホノカ、やめてもいいぞ・・無理して行くなよ』とホノカの目を見て微笑んだ。
「カスミなら、行くよね？」と私を真顔で見た、美しく華麗な光を放っていた。
「当然だ、酔っぱらい相手に引く事は、自分を否定する事だろ」とカスミが私の後ろから、最強不敵でホノカに微笑んだ。
黒いマントのカスミは発光していた、顔だけしか見えないのに強い光だった。
「可愛いバージョン、諦めたのね・・きゃしゅみ」とホノカがカス

ミに強力華麗ニヤを出した。
「私は女優よ～」と最強不敵で、高らかに笑った。
「なに、2人の戦いみたいに言ってるのかしら、未成熟の青い体が～」と私に抱かれた、リョウが強力涼しげニヤで2人に言った。
「出してやる・・胸元勝負なら、負けないよ」とカスミがリョウに不敵ニヤを出した。
「私、着痩せするのよ・・爆弾2発持ってるんだから～」とホノカが両手で胸を押さえて、最強華麗ニヤをリョウに出して笑った。
「抱っこされて、お店に帰るのは私よ・・今、予行練習してるの～」とリョウが笑った、カスミとホノカも笑っていた。

私はリョウを不思議な気持ちで見ていた、そして自分の好奇心が動き出してるのを確認した。
「行ってくるよ、見てなよ～」とカスミが私を見て、リョウを見た。
「高みの見物しとくよ、意地悪言われて・・泣くなよ」とリョウがカスミに微笑んだ。
「きゃしゅみは、危ないわ泣き虫だから」とホノカが先に歩き、カスミが後を続き、笑顔で話しながらステージ裏に消えた。
『なんで、胸元開けたのかな、いけない子だね・・リョウ』とリョウを見て微笑んだ。
「オスを呼んでみたのよ、どのオスが1番反応するのか試したの・・反応強すぎだよエ～ス」と涼しげニヤで返された。
五天女がやっと笑った、緊迫感を抑えるために、ステージでは司会者が必死になっていた。

「ハルカとマミは大変な時代に、生まれたのかも」とユリさんが薔薇で微笑んで。
「なんか、若い頃のリアンが3人いるみたいだね～」と大ママが笑って。
「これは、夜街崩壊の合図かしらね～」とミチルが楽しそうに笑っ

た。
「ノストラダムスも、計算を間違ったみたいね～」とユリカが爽やかニヤで私を見た。
「褒められてないな・・多分」とリアンが獄炎で照れ笑いした、五人で笑っていた。
その笑顔が、圧倒的な余裕があって、私も少し落ち着いた。

『リョウ、着替えに帰らなくていいの？』と笑顔で抱かれている、リョウを見た。
「一時審査の結果で、順番が決まるのよ・・私は最後の組でしょ」と私に涼しげニヤを出して。
「怖いの～、離さないで～」と私に強くしがみついた。
「独り占めしてる・・後で私もしてね・・先生」と言って、シオンが笑顔で受付に戻った。
「覚醒してきたね、シオンちゃん・・誰かさんの作品だからね～」とユリカが私にニヤを出した。
「完成して、望むのなら、私が面接しますよ」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「ユリ姉さん！・・本気ですか？」とリアンが驚いて言った。
「もちろん、素敵な魅力だわ」とユリさんが薔薇で返した。
「あの子が相手なら、私は最終選考辞退しましたよ・・絶対に勝てないと感じました」とリョウがリアンに微笑んだ。
五天女も嬉しそうに微笑んで頷いた、リアンが私を優しい炎で見ていた。

私に抱かれている美しいリョウを見ていた、その涼しげな瞳が潤んだときの純水を想っていた。
《多重人格》その言葉が頭をよぎった、昨年読んだ小説の主人公の少女が現れた。
私は視線にハッとした、ユリカが真顔で優しい瞳でリョウの目を見

ていた。
リョウもユリカを見て、瞳が変化をしていた、深い底の何かが現れそうで怖かった。
ユリカがリョウに爽やかに微笑んで、リョウも微笑を返した。
私がほっと安心した時に、会場が静かになった。

ステージに上がるホノカが見えた、裾の広がった正にウエディングドレスを着て上がってきた。
その高貴な笑顔を振り撒いて、センターのマイクの前に立って深々と頭を下げた。
顔を上げていくのが、スローモーションのように輝きが流れた。
そして微笑んだ時に感じた、一緒に暮らしたらどんなに幸せだろうと。
楽しく暮らせるだろうと、そして悩みや疲れも全て吹き飛ぶだろうと感じた。
その腰の分岐点を強調したドレスのウェストが細く、やはり内臓をイメージできなかった。
そして確かに爆弾を胸に2発持っていた、それを支える肩のラインが美しく。
細い首筋に青い静脈が浮き出るほど、肌が白く内側の輝きを反映して発光していた。
客席の静まりを喜ぶように、ターンをしてみせた。
野次でなく、拍手がおこった。
それを嬉しそうに笑顔で受けて、私の方を見てリョウに微笑みかけた。
リョウも楽しそうに、笑顔で返した。
拍手を浴びながらステージを降りる、ホノカの後姿を見ながら。
《この雰囲気で次に出れるのは、カスミだけだな》とニヤニヤしていた。

そして会場を圧倒的な静寂が包んだ、白のタイトなドレスを着たカスミが上がってきた。
その体の真実の線に沿う、水着のような体にピッタリと張り付くドレスに、目を見張った。
首のラインから胸元にかけての大きな切れ込みに、銀のスパンコールが縁取りされて輝いた。
胸の谷間は、少し汗ばんだのか、妖しく光り。
その形を完全に浮き出させて、完璧を主張していた。
腰のくびれは絶対に内臓は入らないと思わせ、確かな分岐点でヒップに続いている。
体に対して少し大きめのヒップがセクシーで、その下に伸びる足がハイヒールをプラスして、恐ろしく長かった。
顔の美しさは申し分のないＡＡＡで、小さい顔の中の瞳が恐ろしい輝きを放って微笑んだ。
《ホノカを見て、可愛いバージョン諦めたな、カスミ》と思って見ていた。
会場の静寂は続いていて、息を飲む音しか聞こえないようだった。
カスミは司会者の質問を緊張して答え、それが観衆の心には可愛いと映ったようだった。
《言葉使いを考えて、緊張してるのがプラスに出てる》と私はニヤニヤしていた。
その時カスミが私とリョウを見て、一瞬不敵を出しそうになって、慌てて抑えた。
その動揺の笑顔が、またも観衆の可愛いに結びついたようだった。
【永遠の憧れ】私にはその言葉しか出ない、カスミに対してはそれしかないと確認していた。

「うん、凄いね2人とも、こうじゃないとね～生きるのがつまらなくなるよね」とリョウが私に微笑み。
「ありがとう、とっても嬉しかったよ」と頬にキスをしてくれた、

私は全開ニヤニヤで返して、リョウを優しく降ろした。
カスミは静寂を引き連れて、ステージを降りていた、その時やっと大きな拍手がおこった。
圧倒的な存在感と輝きを背に、カスミが見えなくなった。

一時審査の結果は。
リョウ２２８点、ホノカ２３２点、カスミ２３４点の大接戦で幕を下ろした。
会場を包む感想を話し合う、楽しいそうな声を聞きいていた。
カスミはマントを羽織る事無く私に持たせ、白いドレスのまま腕を組んできた。
私はカスミと腕を組んでるのが嬉しくて、得意満面でカスミと会場を後にした。

『ねぇカスミ、パンツ穿いてるの？』と私は疑問に思った事を、少年の笑顔を意識して聞いた。
「失神するなよ、穿いてない」と最強不敵ニヤで言った。
『そうなんだ！・・・緊張してきた』と焦りながら笑顔で返した。
「勝負なら、全力だよ・・価値があるだろホノカとリョウなら」と美しく微笑んだ。
『リョウも入って来たね』と笑顔で返した。
「当然」と微笑んで、裏階段前で止まった。
「疲れた・・充電を要求する、１回分」と不敵で微笑んだ。
私はカスミを抱き上げた。
『カスミ、回数数えるなよ・・カスミは無制限だよ』と笑顔で言って、登りはじめた。
「ありがとうな・・ノーパンに緊張して落とすなよ」と不敵で微笑んで、目を閉じた。
私はカスミに言われて、思い出して緊張した、カスミを直視できなくなった。

カスミが控え室に着替えに行き、私はフロアーに行ってみた。
マミが私の指定席で、なんとサインを繋いでいた。
『マミ、ひどい・・それじゃ俺の評価が落ちる』とウルウルで言った。
「落ちるほど高いの？」と可愛いニヤで返された、私はウルウルウル攻撃で対抗した。
『マミ、ありがとう・・嬉しかったよ、あの発言』と微笑んだ。
「うん、私も言ってよかったよ」と微笑んで、「ハルカとどっちが良かった・・キッス」とニヤニヤで来た。
『ユリカ』と言ってニヤ返しで逃げた。
「そっか～、ユリカさんも自分からするのはファーストだよね、多分」とマミが笑顔で言った。
その言葉で私は気付いて、ニヤニヤしていた。

「カスミ姉さんの調子は？」とマミが笑顔で聞いた。
『一時審査、僅差でトップ・・マミ凄いのがどんどん後から涌いてくるぞ』とニヤで言った。
「誰が、出現したのかな～」と興味津々光線を発射してきた。
『ピーチのリョウ・・カスミ・ホノカに一歩も引けをとらないよ』と笑顔で返した。
「聞いた事あるよ、【心酔の涼】って呼ばれてるんでしょ」と真顔で言った。
『どんな字？』と私は焦って聞いた。
「心が酔う涼しさよ」とマミが笑った。
『涼しいで・・・リョウなのか～』と私は考えながら、土曜の熱の高いフロアーを見ていた。

そして解った、ユリカの言った【覚醒】の意味が。
私の見るフロアーで、リンダと私がワルツを踊っているのが、薄い

映像で見えた。
私の深層心理に深く刻まれたリンダが、確かな笑顔でステップを教えていた。
リンダを見ていた、嬉しかった、薄く映るリンダが楽しそうで涙が出そうになった。
私は初めての経験に慌てる事はなかった、ユリカがヒントを出してくれていたから。
目を閉じる必要も、強く想う必要もないんだ、そう思っていた。
《ユリカ、また少し分ってきたよ、人を想うという事が・・ありがとうユリカ揺り篭に乗せてくれて》と心で囁いた。

そしてリンダが消えて、リョウが現れた。
別人のリョウが涼しげな瞳の奥の、暗い泥沼から突然女の腕が飛び出した。
傷だらけで、血の滲む女の手が・・恐怖が支配していた、私の心を感じて何かが来た。
駆けてきた、純粋という無限のパワーで走ってきた。
笑顔の妖精、白の魔術師・・シオンが笑った、全てを凌駕するパワーを秘めて。
洗い流したその泥をと血を、無垢でない、絶対的な純粋で。
そして地下の奥深くには、地中の沢山の土や石で清められた、純水が流れてると教えた。
《今回のテーマは、【純粋】と【純水】だねユリカ、頑張るよ》と囁いて、思考を切った。

そして蘭を見ていた、その満開の笑顔が、私にくれる愛情というエネルギーを。
私に気付いた蘭が満開で笑った、私は満タンになるのを感じて笑顔を返した。
《大丈夫だよ蘭、俺には最愛の蘭と、最強のマリアがいつもついて

いるから》と微笑んで背を向けた。
波乱の匂いの強い、祭り会場が誘っていた・・来るなら来いと。
私は肩の力が抜けて、想っていた。
《潜ってみるか、ジンが言ったんだ・・誇らしい最後の挑戦者と》
《そして、遥か上にいる同じ称号を持つ、ＲＩＮＤＡが見ている》
そう想っていた。
蒸し暑い夏の夜に・・・。

リョウの出現は、カスミとホノカの何かに火をつけた。
私はただ探究心に逆らえず、リョウの闇を目指す。
奥底で大切な物を探し当てる、愛されるとは何かを。
魔性の女と言われたリョウ、その魔性は隠すための手段。
柔らかく繊細な、触れることも禁じられた心。
純水でしか生きることの出来ない、古代の異物。
不純物は無い、心を酔わす冷たさ。
熱に負けない一陣の風・・・涼。

制御

小窓から流れ込んでくる喧騒の響き、酒を楽しむ大人達の声。
制御が利かなければ破綻する、自らを制する心・・自制心。
無ければ暴走する、終着駅は無い、ただ破滅に突き進むだけ。

「カスミちゃんが、呼んでるよ～」と休憩中なのか、ハルカがニヤで呼んだ。
私は久々に控え室に入って固まった、カスミが出会った時と同じ場所で、胸元を押さえていた。
「サービス、忘れられたら困るから」と不敵で微笑んで、丸い椅子に座った。
『失礼だなカスミ、忘れる訳ないだろ』と言って近づいて、背中の編みこみをはじめた。
「きつくな、きつく縛って～」と色っぽい声を出した。
『パンツ穿いたのか・・カスミ』と耳元に小さく囁いた。
「残念、穿いたよ」と不敵で小さく答えた。
「あ～、またカスミが変な事させてる～」と蘭が入って来た。
「エースじゃないと、絞めれないって言うんですよ」とハルカが蘭にニヤで言った。

「今夜は仕方ないね～、でもカスミ忙しいから、帰ったらそのまま出なさいね」と満開ニヤで言った。
「了解」と全開不敵ニヤで返し、「蘭姉さん、自分で出来ない事は頼んでいいんですね～」と笑顔で言った。
「しょうがないね～今夜は、私も同じ事帰ってするから」と蘭も満開で微笑んだ。
私が縛り終わり、カスミを見た。
「うん、良い感じ、次は危ない無駄毛を剃ってくれ、下半身は敏感

だから注意しろよ」と最大限のパワー全開不敵で言った。
『うん、どれで剃るの？』と私もニヤニヤで蘭を見た。
「だめ～～～、それは私には恥ずかしくて、出来ないから」と蘭が満開で睨んだ。
「話の飛躍が凄すぎて、まだついて行けない」とハルカが笑って、フロアーに戻った。

カスミが靴を履き、鏡で全身をチェックした。
「リンダ、素敵な人だったね、雑誌も見せてもらったよ」と蘭が満開で微笑んだ。
『うん、忘れられない存在になったよ、四季に感謝した』と微笑んで返した。
「良いもの、貰ったんだね」と蘭が満開継続で私の目を見て言った。
『うん、素敵なものを貰ったよ』と笑顔で返した。
蘭の鋭さが嬉しかった、愛されてる実感に包まれていた。
蘭がフロアーに、満開笑顔で手を振って戻り。

カスミが衣装に納得したらしく、化粧の最終仕上げをしていた。
「リョウを見て何感じた、あんだけ抱っこしてたら感じたろ」とカスミが鏡に映る私に言った。
『難しい人だね、どれがリョウなのか分からない感じ』と真顔で答えた。
「全部リョウなのさ、私もそうだったよ酷い時は」とカスミも鏡に真顔で言った。
『そっか、そうなんだね』と笑顔で返した、鏡に映るカスミも笑顔だった。

カスミが仕上がり、マントを纏った。
「少し早いけど、行こう、様子見たいから」とカスミが笑顔で言った。

腕を組んで、人混みを歩き来賓席のテントの椅子に、カスミを座らせた。
「カスミ、こっちにだけ衣装見せろよ」とリアンが言った、全員が笑顔で見ていた。
カスミが立って、五天女を向き、不敵をだした。
「ジャジャーン」と言って見せた、五天女が驚いて、笑顔になった。
「そこまで、そんな服で出れるのか～、そこまで行ってるのか～」とリアンが獄炎ニカで言った。
「エースが、これが好きだって言うから～」とカスミが全開不敵で笑った。
「似合うのが凄いよ、いやらしさまで消せるし」と大ママが微笑んだ、カスミが嬉しそうに微笑んで返した。

私が立ってステージを見てると、後から忍び寄った。
「ピーチは遠いよ、抱っこで行ける？」とリョウが後から耳元に囁いた、完全に胸が背中にあたっていた。
『素敵なサービスだね、リョウ』と言って振向いて、固まった。
その派手な化粧が細面の顔にマッチして、頭に乗せてる虹色の鳥の羽飾りも映えていた。
『可愛いね、リョウ・・覗かせて』とニヤで言った、リョウが涼しげニヤでマントの襟首を右手で持った。
私がニヤニヤで覗いて、固まったリョウの左手がマントの中でサンバっぽい衣装を引っ張っていた。
完全に小さなブラで隠された、綺麗な形の胸が全て見えていた。
「大変、エースが倒れる・・救急車を呼んで」とユリカが爽やかニヤで言った。
『ギリギリセ～フ』とユリカに必死に笑顔で返した。

『リョウ露出狂だね・・今は誰？漢字・ひらがな・カタカナ、どのリョウ？』と微笑んでみた。

リョウはハッとして私を見て、なぜか嬉しそうに笑った。
「今は漢字の・・すずしいの、涼」と涼しげな笑顔で答えた。
『漢字が可愛い露出狂ね、できればいつも漢字ちゃんがいいな～』
と微笑んだ。
「そうはいかないんだよ・・主役は私だから」と耳元に囁いた。
恐怖が全身を走った、声のトーンも声質も全く違う声だった。
その声は狭い洞窟を這い上がってくるかのように、反響しながら上がってきて耳に響いた。
小さな無数の虫が直接鼓膜に張り付き、身悶えるような響きだった。
そして完全に誘った、称号を捨てろと、でなければ来いと手を出した。
私には薄い映像が映っていた、血と泥に塗れた女の傷ついた手が。
リョウは体を離し、私に微笑んだ、その涼しげな瞳にに映った物を見て、凍りついた。
私の姿が反映されて映っていた、その私の足を女の手が掴んでいた。
映像に入り込んで来るのか、それとも恐怖が見させるのか。

『あなたは、だ～れ』こう言うのが精一杯だった、瞳に掴まれていた。
「漢字だよ・・狩猟の猟だよ」と真顔で言って、ステージの方に歩き出した。
『難解なり・・・リョウ』と呟いて、笑顔がこぼれた。
「やっぱり危ない男だね、変な性癖持ってるでしょ？」とホノカが目の前に立っていた。
大きなピンクの可愛い帽子を被って、可愛い化粧をして高貴に割った。
『性癖分らない・・ホノカで試して良い？』とニヤで返した。
「それはカスミに言って、絶対変な性癖持ってるから」と華麗ニヤを出した。
「普通だよ、２０歳になって制服なんて着ないよ」とカスミが不敵

全開で言った。
「かわいそう、似合わないのね、エース私中学のでも大丈夫だからね」とホノカが私の手を取って言った。
『うん、嬉しいよ・・ホ・ノ・カ』と言ってウルウルをした。

「ホノカを良いって言ってないぞ・・エース」と声がした、ジンが立っていた端正な顔で笑っていた。
『ジン、こんばんわ・・ホノカが心配で来たんだね』と笑顔で返した、ジンは五天女に頭を下げて、私に微笑んだ。
「危険な匂いがしたんだよ、最後の挑戦者が挑まなくていいのに、ホノカを知ろうとしそうで」と笑った。
『やきもちだね、ジン』とホノカにニヤした。
「なんで妬くのよ・・ＮＯ１が、私なんかに本当は興味ないのよ」とホノカが華麗ニヤをした。
『ホノカ、嘘ついたね、右の鼻だけ動いたよ』とニヤで返した。
「な、なに言ってるのよ、右だけ動くわけないでしょ」とジンと手を繋いで歩いて行った。

「ホノカの負けね、よく短い時間で研究したね」とミチルが微笑んだ。
『得意ですから、研究観察』と微笑んで返した。
「てことは、ここに居る全員の癖は見抜いてるんだな」と立ち上がりながら、カスミが言った。
『大ママとユリさんは分らない、嘘つかないから・・あとシオンも、そして蘭も』と言ってニヤで返した。
「私のを言ってごらん」とリアンが獄炎で言った。
『リアンが１番簡単だよ、拳を握る・・親指を中に入れてね』とニヤで返した。
「えっ！」とリアンが言って、「正解よリアン」とユリカが爽やかニヤで言った。

「自分で気付いてなかったんですね～」とユリさんが薔薇で微笑んだ、全員のニヤが飛んだ。
「きゃしゅみにまで、ニヤされた」とリアンが笑顔のウルをした、皆で笑った。
笑い声に送られて、カスミが私に不敵を出して、ステージ裏に消えた。

「せんせーい、終わったよ、頑張ったよ、疲れたシオン」とシオンが笑顔で来た。
私はその場でシオンを抱き上げた、シオンが嬉しそうに笑っていた。
「酔っ払い酷いね～、あんな事言って」とシオンが頬を膨らませた。
『シオン、酔っ払いが酷いんじゃないよ、制御が利かない人が駄目なんだよ』と微笑んで返した。
「制御ね～、かからない人いるよね」と可愛く笑った。
『シオンは心に制御かけたら駄目だよ、今までかけ過ぎてて、混乱してたんだから』と意識して笑顔で言った。
「かけなくていいの？でも・・」とシオンが考えた、可愛くて少し引き寄せた。

『シオン、シオンの事変に言う人は、シオンが羨ましいんだよ。
シオンみたいに正直に生きれないから、だからシオンを悪く言わないと、自分が嫌になるんだよ。
シオン、この前言ったように、シオンはバカじゃないよ。
心が白いんだよ、素敵な事なんだよ、だから心に制御で色を塗らないで。
シオン、白も色なんだよ、誤解してる人が多いけど、白は色だよ。
子供も頃から絵を書くときに、白い紙に書くから、白が無色と思ってしまうんだよ。
シオン、白は色だから何かを無理に、塗らなくていいんだよ。
シオン、心を制御しないといけない人は、他人を傷つける可能性

があるからだよ。
シオンは誰も絶対に傷つけないから、心に制御なんて必要ないんだよ』

笑顔でシオンの可愛い笑顔に言った。
「うん、先生・・やっと分ったよ、白は塗らないでいいんだね」と可愛く笑った。
「完璧な同調、と言うより1つになってた・・感動したよ」とユリカが爽やかに笑った。
「先生、リアン泣かせた～」とシオンが笑った。
「シオン、エースだけは、私を泣かせていいんだよ」とリアンが泣いていた。
その涙を見ていた、妹をどれだけ愛しているのかが伝わって、嬉しかった。
「でも、シオンおバカな発言するから、しょうがないけどね」と笑った。

『シオン、おバカな人って、知ろうとしない人だよ。
シオンは知ろうとして、人と話すんだから、良いんだよ。
誰も最初は知らないんだよ、先生なんか子供だから、知らない事沢山あるよ。
だから知りたいんだよ、シオンがどうして人と、お喋りが上手に出来ないのかな～とか。
どうしてシオンが自分の事、おバカって言うのかな～とか。
シオンが何が悲しくて、何に寂しいと思って、何が楽しいのかな～とか。
それが知りたいんだよ、難しい計算問題の解き方が、知りたいんじゃないから。
シオン、自分をおバカって言うのは、禁止にするからね。
シオンが変な事言ったと思ったら、こう言うんだよ。

シオンは知らないから、知りたいから教えてねってね。
そうしたら人は、シオンをおバカって言わないよ。
今はシオンが先に、自分をおバカって言って、逃げてるだけなんだよ。
シオン、逃げたら楽しくないよ、シオンが逃げなければ沢山友達できるんだよ。
向こうの方から、友達になってシオンって言ってくるよ。
シオン、友達が宝物になるよ。
リアンとユリカを見てごらん、楽しそうだろ。
一人で良いから、最初に友達を作ろうね、それが宿題だよ。
シオンが教えてって言った時に、笑顔で教えてくれる人と、友達になってみようね』

「うん、がんばる～」と言ってシオンが私を見ていた。
私は可愛いシオンの潤む目を見て、感情的になっていた。
リンダのいない寂しさが私に襲ってきた、一人でピンクのリュックを担ぐ背中が見えていた。
映像の制御が出来ない事に気付た、どうしようも無い寂しさに襲われていた。
自分の中にある、リンダの存在の大きさに気付いて動揺していた。
それは恋愛対称でない、自分の生き方として存在した。
もしリンダが、私が必要だから一緒に行こうと誘いに来たら、行ってしまう自分を感じた。
世界に夢を巡らせていた、世界中の子供に会いたいと思った。
もしかして俺でも伝えてやれる事が、あるんじゃないかと感じた。
シオンが愛おしくて、伝えたことで、リンダの本質が少し垣間見えていた。
自分のその旅立つ欲求が怖かったのだ、蘭を愛する事と両立しない事が。
定職など遠い、中学生の私に、生きる本質が迫ってきた。

リンダという、最高峰に立つ女神に会って。
そしてあの記事を読んで、感じていた、なぜリンダと出会ったのかと。

そして私はまた間違いに気付いた、知らなかったと感じた。
なぜ蘭はあの日、徳野さんと揉めたのかと、今の蘭を見たら職場放棄は信じられない。
そして、なぜ若草公園に来たのかと、アパートにも逆方向で、飲み屋も存在しない所に。
運命論を語るなら、そこからだろうと感じた。
その根本的な何かを知らないで、リンダで迷っても仕方ないと感じた。
リンダに合えたのも、蘭を愛したからだと感じて、戻った自分を感じていた。

「お帰り先生、遠くに行かないでね、シオン寂しいから」とシオンが微笑んだ。
私は包まれていた、シオンの感性に、その暖かく鋭い白に。
『ただいまシオン、ありがとう・・行かないよどこにも』と笑顔で返した。
視線を感じてユリカを見た、爽やかな笑顔で頷いた。

その時ステージに最終組３人が上がった、一時審査順にリョウ・ホノカ・カスミの順に並んだ。
その荘厳な光景を見ていた、まだ３人ともマントを着用していた。
それでも、圧倒的に華やかだった。

「はい、いよいよ予選ＴＯＰ３の登場で～す」と司会者が大声で言った、大きな拍手が響いた。
３人はなぜか全員ニヤニヤしている、お客も時間がかなり経過して

酔いも回ってきていた。
「ではリョウちゃんから、マントを取ってマイクに向かって一言アピールして下さ～い」と司会者が言うと音楽が流れ出した。
リョウがマントを投げた、リオのカーニバルさながらのブルーの衣装が登場した。
上下繋がったスパンコールだらけの衣装で、お腹の所が開いていた。
その開きの下がへそよりかなり下で、見えるのではないかと思うほどの開きだった。
加工して開いたスカートの下が見えていて、そのスタイルの良さを主張していた。
両手を頭の上で繋ぎ、綺麗に処理された脇をあらわにして、激しく腰を振りながらマイクに近づいて。
「キャモ～ン・・ヘイ・チェリーボーイ」と少し上を向き、色っぽく言って腰を振りながら帰った。
会場は圧倒されていた、水商売関係者だけ大うけで笑っていた。

そしてホノカがおしとやかにマントを脱ぎ、正座して綺麗にたたんでから立ち上がり。
大きなピンクの帽子も被っているのに、夜空を見上げ眩しそうに手を翳して。
ピンクの日傘をさして、微笑みながら歩いて来た。
これでもかという程のピンクのフリフリワンピースに、ピンクのバッグに靴。
それが大袈裟に見えなかった、ホノカが着ると普通に可愛いのだ。
マイクの前まで来て、モジモジした。
「えっと～、えっと～・・ごめんなさい恥ずかしい」と言って後に走って帰った。
私の後ろの五天女が爆笑して、私もその演技に笑っていた。

そしてまたカスミが静寂を作る、マントを投げて出た衣装が会場を圧倒した。
どこで借りたのか、玩具の大きなマシンガンを担いだ、その姿は雑誌のグラビアのようだと思っていた。
大きなモンローウォークでステージの右から左に歩いて、マイクの前に来た。
そして全力最強不敵を出して、マシンガンを構えた。
「私が欲しけりゃ、死ぬ気でおいで」と完璧な不敵で言った。
五天女だけが笑いが止まらずに、楽しんでいた。

「あの3人はやってくれるんですね、来年は開催されないように」とユリさんが楽しそうに薔薇で微笑んだ。
「しかし、3人も同時に出るなんて、面白い時代になるな～」とリアンも笑いながら言った。
《なるほど～、最初のニヤニヤはぶっ壊すのが楽しみでしてたのか～》と私も笑いながら思っていた。

「それでは、少し質問してみましょう」と恐々の司会者が言った。
リョウは小さく腰を振りながら立ち、ホノカは俯いて手を右手で太股にモジモジを書き、カスミはマシンガンを構えたままだった。
「では会場の皆さんが聞きたい質問を、アンケートで頂いてます・・1つ目は好きな男性のタイプお願いしましょう」と司会者が言った。

リョウ・・「機能できればＯＫ」
ホノカ・・「私の事を一日１０００回可愛いって言ってくれる人～」
カスミ・・「財産があって長生きしない男」

「次に・・嫌いな男性のタイプお願いしま～す」司会者も必死になってきた。
リョウ・・「機能できない男」

ホノカ・・「私の事を一日９９９回しか可愛いって言えない男～」
カスミ・・「貧乏で長生きする男」

「さ～盛り上がって来ましたね～次は好きな食べ物で～す」少し司会者が疲れてきていた。
リョウ・・「ウサギ」
ホノカ・・「スズメ～」
カスミ・・「カエル」

「次は会場の皆さんから質問をいただきましょう」と言って、手を上げた中から若い男を指名した。
「どういう時に男の魅力を感じて、どういう時に幻滅しますか？」とバカな質問を笑顔でした。
リョウ・・「上手い時感じて、下手な時覚める」
ホノカ・・「眠ってる時感じて、起きてると覚める」
カスミ・・「後姿で感じて、前を見て覚める」
五天女は笑い死ぬんじゃないかと思うほど、笑っている。

「残念ですがこの辺で、最後に将来の夢をお願いしま～す」と司会者が逃げに入った。
リョウ・・「玉の輿」
ホノカ・・「お姫様」
カスミ・・「未亡人」
「ありがとうございました～投票用紙をお持ちの方は残り１０分になりま～す」と司会者が必死で締めた。

「先に帰りますね、カスミちゃんあのままで、フロアー出てもらってね」とユリさんが悪戯っ子を出した、私もニヤで頷いた。
大ママ、ミチルを見送り、リアンが来てシオンを見た。
シオンは私に抱かれ、かなり前から眠っていた。

「ありがとな、シオン幸せだよ」とリアンが言って、シオンを起こして、私が優しく降ろした。
「先生、またね～」と言った、シオンとリアンを見送った。
「焦ったら駄目よ、制御できるようになるから、それとリンダで悩まないでいいのよ」とユリカが微笑んだ。
『うん、大丈夫・・リンダが心に居る事が嬉しいよ』と微笑んで返した。
「うん、いよいよマミちゃんの源氏名が聞けるのね」と爽やかニヤで言った。
『ご期待あれ～』と笑顔で言って、ユリカに手を振って別れた。

ステージに司会者が上がり、私は用意していたタイガーマスクのお面を準備した。
「発表しま～す、優勝は僅差でしたが・・・・カスミちゃんで～す」と叫んだ。
カスミが笑顔でステージに上がった、そしてトロフィーを受け取って、挨拶を促された。
私はTシャツを脱いで、タイガーマスクを付けた。
カスミは私に気付き、最強不敵で笑って、マイクに向かって。

「タイガ～、助けて～」と叫んだ、私は走ってステージの前に行き。
カスミに両手を広げた、カスミが笑顔で腕を首に回し抱かれて、そのカスミの上にトロフィーを置いた。
カスミを抱いたまま、会場を後にした。

『カスミ、タイガー上にあげて』と息苦しいので頼んだ、カスミが笑顔で上げてくれた。
カスミの顔に疲れの影が見えた、目を閉じて静かになった。
私はＰＧを通り越して、最上階まで上がって夜景を見ていた。
南風が吹いてきて、微かに夏の終わりを感じていた。

カスミの綺麗なストレートヘアーがサラサラと揺れて、疲れの影を見せた。
「心配するなよ、大丈夫だから・・嬉しかったよ、戻ったと感じたよ」と目を閉じたまま囁いた。
カスミがお腹の上のトロフィーを下に降ろして、目を閉じたまま微笑んだ。
「姫は目覚めん・・どうするのかな～？」と静かに言った。
私は階段に座り、カスミを少し起こした。

『神よ、聞いて下さい、姫が起きないのです。
常に前を向き戦い続けた姫に、どうか褒美を下さい。
いつも私を助けてくれる女神に、不敵の女神に。
私の愛する可愛い女神カスミに、贈ります。
【永遠の憧れ】と言う称号と・・・これを』

そう言って、カスミの唇に浅いキスをした、離れたくなくて暫く重ねていた。
カスミの感情が伝わってきて、嬉しかった。
私も伝えた【大好きだよ、カスミ】と。
夏の終わりを告げる、夏祭りの喧騒が響いていた。
私の夏物語は続く、そして挑む時も近づいていた・・猟という者に。
そしてその正体を知り、私は泣く・・号泣する。
どこかで感情のバランスが崩れていた、この時期の私は。
リンダの影響が強かった、５時間弱の関係で変化していた。
しかし私は、蘭のあの日の行動を聞いて震える。
運命を信じない私に突きつける、運命はあるんだと。

偶然の積み重ねでない、必然もあると。

そして繋がっていく、螺旋のに描かれた時間が。

上の駅の蘭から、リンダまでが繋がる。

そして足りないピースが近づいていた。

月を背負って、歩いていた・・月下の雫。

美しい幻影・・・リンダ分身・・月のマチルダ。

永遠の憧れ

夜街の夏の終わりを強引に告げる、夏祭りの喧騒が地上から響いていた。
私は最高級品の容姿を持ち、内面の心のダイヤも輝きだした女を抱いていた。
重ねた唇を離せなかった、感情が溢れてきて止まらなかった。

私は制御不能に陥り、幻想の映像はカスミと出会ってから、今までの全ての事が流れていた。
カスミも何かを伝えてきていた、それが嬉しくて徐々に戻った。
唇を離し、間近のカスミを笑顔で見た。
「ありがとな、嬉しかったよ・・伝わったよ」と輝きが放たれた。
その強い輝きに目を奪われて、カスミの瞳の奥にある光源が、少し見えた気がした。
『カスミ、また変化してきたね、俺の想像はもう追いつかないよ』と微笑んだ。
「楽しませてやるから、ずっと見とけよ」と可愛く微笑んだ。
『楽しみだな～』と笑顔で返した。
「【永遠の憧れ】重過ぎないか、私には」と真顔で見た、。
最高級品の輝きに内面の自信が加えられ、発光する光源が深さを増したと感じた。

『足りない位だよ、それしか思いつかなかった・・それしかない、カスミには』と微笑んだ。
カスミがもう一度唇に短いキスをくれ、立ち上がった。
「うし、満タン・・戦場に行くよ、マシンガンを用意しな」と振向いて不敵に笑った。
私は走って、祭り会場に戻って、主催者に断ってマシンガンを担い

だ。
ＰＧに戻り、トイレから出てきた、ユメにマシンガンを渡した。
ユメは最強ニヤニヤで受け取り、控え室に消えた。
私は走って、フロアーに戻った、客席は満席で笑顔で溢れていた。

その時銀の扉が開き、カスミが右腕にマシンガンを担ぎ、左手でトロフィーを持って現れた。
笑顔で溢れる静寂がフロアーを支配した、カスミは３歩進み、トロフィーとマシンガンを床に置いた。
そして神聖な場所に敬意を示すように、深々と頭を下げた。
そして顔を上げて、マシンガンを持った。
今までで最強の不敵な美しい笑顔で、大きなモンローウォークで右から歩き出した。
女性が手拍子をはじめて、お客も最高の笑顔で手拍子をした。
カスミは隅から隅まで不敵を振り撒き、センターの位置に着いた、手拍子がやんだ。
カスミはマシンガンをかまえて、不敵を最大に戻して微笑んだ。

「今夜も心を撃ち抜くぜ、ＰＧがＮＯ１の称号を得た夜だから」と叫んだ。
そしてまるで弾が出てるかの様な、腕の反動をつけながら、右からマシンガンをゆっくり振った。
女性もお客も笑顔で、撃たれた振りをして、まるでウェーブのように倒れていった。
全てを撃ち抜き、マシンガンを担いで最大不適を出して。
「私が欲しけりゃ、死ぬ気でおいで」とニヤリと笑い、銀の扉に消えた。
お客も女性も最大級の拍手で送った、全員が楽しそうな笑顔だった。
フロアーに残された、大きなトロフィーが、ＰＧの２つ目の夏の伝説を証明していた。

カスミは一気に、夜街次世代のトップ候補に躍り出る、ホノカとリョウを連れて。
その輝きが本物になっていく、内面から溢れ出てくる、限界は無いと不敵に笑いながら。

ここで、その後のカスミを記しておこう。
カスミはこの祭り以降、変化を繰返す、それは女性の全てのタイプを取り込むように。
リアンの炎も、ユリカの爽やかさも、アイさんの癒しも、サクラさんの話術も。
そして下からも、ハルカとマミの真直ぐさも、レンの曲げない強さも。
その後に登場した、最新型の女性達からも、貪欲に吸収した。
そして挑んだ、ナギサの華やかさと、蘭の温もりに。
そして【永遠の憧れ】であるカスミが永遠に憧れた、ユリさんの生き方に。

リョウが２６歳で結婚引退をして、ホノカが２８歳でジンと手を繋いで去った。
カスミはホノカが去ってから、現役（接客をする）ＮＯ１を手に入れる。
その容姿は圧倒的で、気さくで不敵な微笑を持ち、内面の温もりには蘭が存在した。
絶対に完成しないと内面の光が提示して、常に前を見て上を目指した。
その当時女帝と言われたリアンと、姉妹のような関係で共に夜街の華だった。

カスミが私に寂しさを感じさせるのは、カスミ２９歳、私が２２歳

の冬だった。
紹介された男を見て、私は嬉しかった、その真っ白な男が。
畜産農家を営む３２歳の、純な男がカスミに腕を組まれて照れていた。
暖かい男だった、カスミに会う為に月に2度だけ夜街に通った。
その期間・・６年、男は酒も飲まず、カスミに会いたくて指名していた。
自ら主張する事無く、カスミの話を聞いていた、優しく目を見ながら。
３年が過ぎた頃には、２人は話す事も無く、その男の時だけはカスミは目を閉じていた。
テーブルの下で、手だけを繋いで、充電するように瞳を閉じていた。

カスミが紹介してくれた夜、終演したＰＧのフロアーで私は右手を出した。
カスミは涙を流して、首を横に何度も振り続けた。
私は強引にカスミの右手を掴んで、必死に笑おうとしたが、泣いていた。
『カスミ・・ありがとう、返すね・・そしておめでとう、嬉しかったよ』と必死で言った。
カスミは俯いて泣いていた、私はカスミを抱き上げて、その輝く瞳を見ていた。
「ありがとう・・幸せになれるよ・・あの夏があるから、熱いあの時が支えてくれるから」と目を閉じて泣いていた。
私はカスミを控え室に見送り、１０番に座り一人で泣いていた。
《ユリカどこにいる、逢いたいよ、今はユリカに逢いたいよ》と心で叫んでいた。
私はその時も、勿論蘭を愛していた、しかし心を支え続けた2人が消えて淋しかった。

そして私は抱きしめられた、２６歳の美しい女・・ハルカに。
ハルカは何も言わずに抱いてくれた、ハルカの全身から出ている温もりに抱かれていた。
「まだ、終わらない・・ケイとマミが現役でいる限り、あなたの夏には終りは来ない」とハルカが強く言って、唇にキスをした。
それで私は自分に戻った、１３歳の未熟な夏に、忘れえぬ時に。

昨年カスミの家も口蹄疫の問題で、牛を全て殺処分された。
農協の対策会議で、３００人の暗い表情の人々の前でカスミは発言した。

「人は産まれた時には０だった、今は０に戻っただけだろ。
人は何度でもやり直せる、私はそれを知っている。
この目で見たし、感じてきた・・暗い顔でいても明るい顔でいても、同じ時間だ。
前を見よう、幸せだと感じよう・・また０から楽しめるんだから」

そう言って輝きながら最強不敵を出した、５０歳を過ぎたカスミ。
その輝きは衰えを拒絶していた、挫折などで止まるのを拒否していた。
その心には確実に、あの薔薇が存在していた。
今でも私は声を大にして言える・・カスミこそ【永遠の憧れ】だと。

カスミが扉に消えて、マミが私に微笑んだ。
「あのカスミ姉さんを、追わないといけないんだね・・やってみるよ」と美しく笑った。
『がんばれ・・マミ』と言ってマミの頭に手を置いて、フロアーを見ていた。
ユリさんとカスミがいなくても、土曜の満席を維持できるその女性

達を。
私が状況をチェックしてると、またフロアーに静寂が訪れた。
カスミが一時審査の白いドレスを着て、扉から出てきた。
一礼して、フロアーに笑顔を見せた、その発光は全てを凌駕して輝いていた。

私はサインも飛ばなくなったので、リンさんと話しているマダムに断ってマミを誘った。
マミと手を繋いで、通りにでた、祭りの音がまだ響いていた。
「どこ行くのかな～、デートかな～」とマミがニヤで言った。
『研修終了試験・・マミの花を蕾にする試験』と笑顔で言った。
そう言って、魅宴の裏扉に連れて行き、マミに微笑んだ。
『案内せい・・姉御』と笑顔で言った、マミは嬉しそうに笑って。
「殿・・こちらでございます」と微笑んで、扉を開けた。

私は初めて魅宴の裏口から入り、事務所のようなＴＶのある部屋に案内された。
大ママが若い女性とお茶を飲んでいた、私を見て笑顔を見せた。
「やっと魅宴で働く覚悟が出来たんだね～」と微笑んだ。
『いつでも、追い出されていいように、勉強に来たよ』と笑顔で返して。
『大ママ、マミにＰＧ終了試験をしたい・・マミに後で白いドレスを着せて、俺が抱っこでＰＧまで歩く、マミに伝説を１つプレゼントする』とニヤで言った。
「最後の最後まで、マミを見てくれるんだね」と大ママが嬉しそうに笑顔で言った。
『最後・・マミが女帝になって、ヴァージンロードを歩くまで』と笑顔で返した。
「試験受けるんだね、マミ」と大ママが笑顔で言った。
「もちろん、カスミ姉さんに負けれませんから」と美しく微笑んだ。

大ママも若い女性も、そのマミの表情を嬉しそうに見ていた。
私は時間が有ったので、魅宴の裏の全てが見渡せる場所から、フロアーを見ていた。
マミはボーイと話して、私に微笑んで、奥に消えた。
私は飽きもせず、ＰＧより少し暗く静かなフロアーを見ていた。
「研究熱心ね、エース」と声をかけられた、私は振向いて案の定固まった。
２０代半ばの少し気の強そうな目をした、美しい女性がスカイブルーのドレスで立っていた。
その瞳の強気な光に息を飲み、その全体が醸し出す【余裕】に心が掴まれた。
『素敵なあなたは、ＮＯ１ですね』と笑顔で返してみた。
「正解・・よく出来ました～」と笑顔で歩み寄った、近づく時のその余裕がＰＧにはいないと感じた。
『やっぱり、魅宴は凄いな～ＮＯ１も怖い』とニヤで言った。
「何が、どう怖いのか２００字以内に述べよ」と美しく笑った、笑顔でも目の強さが落ちなかった。

私は左手を出して、数える振りして目の前の女性に眉間を、右手で指差して。
『ここ』と笑って、『２字で済んだ！』と驚いた表情を作った。
「そこは癖なの、緊張するとなるの」とニヤで返した。
『緊張してるの・・俺に惚れるなよ、火傷するぜ』といつもの台詞で返した。
「抱っこの条件ってあるの？」とニヤニヤで返してきた、美しくそして余裕のある笑顔だった。
《全体的な余裕だけなら、ユリさんクラスだな～》と関心していた。
『基本的には美しいこと、体重６０ｋｇ未満で、香りが良いこと・・そして俺に意地悪言わない事』とニヤで返した。

「私は、クリアーという事でいいのね？」と近づいて笑った。
『そのまま、最終チェック』と言って顔の横に鼻を近づけた、冗談でしたのに誘惑された。
その初めての香りに、爽快な高原の木陰に吹く風のようだった。
『ギリギリ・・セ～フ』と真横の耳に囁いた、その時彼女が首を振り私を見た。
あまりの至近距離で見られて、私は焦っていた、彼女は余裕で微笑んで。
「ギリギリなの・・ギリギリなんだね・・ギリギリなのかい？」とニヤ出で言った。
唇が触れそうなほど近かった、彼女の爽やかな口臭が流れてきた。
『実は、１００点です・・満天です・・完璧です』と言って思い切って抱き上げた。

彼女は余裕の笑顔で、私の首に腕を巻いた。
『俺、負けず嫌いなんで・・その余裕が憎らしい』とニヤで言った。
「無理でしょう、中学生が何しても、焦りませんよ」と余裕満開で笑った。
『必ず焦って、最後は感動で泣かせて見せますよ・・素敵なあなたのお名前は？』と笑顔で聞いた。
「魅宴のミコトです、よろしくね・・ボ～ヤ」と不敵な余裕を見せて微笑んだ。
『どんな字でしょう？』とウルで聞いてみた。
「命って書くのよ、それでミコト」と微笑んだ。
『それは凄い名前だ～、魅宴の命か～』と本当に関心していた。

「あっ！」と言って、マミが駆け寄った。
「ミコト姉さん、大丈夫ですか、何もされませんでした？」とマミがニヤをした。
「大丈夫よ～、私のような美しい女に、手なんか出せないみたいよ・

・ボ～ヤ」と余裕ニヤで返した。
『ミコト、いきなり意地悪３点』とウルで言った。
「マミは何点なの？」と余裕笑顔で聞いた。
『１８点、ちなみに今のＮＯ１はカスミの３６点』とニヤで返した。
「すぐにＮＯ１になってあげるわ、ハルカの研修の時だけで」と余裕ニヤをした時に、ボーイがミコトを呼びに来た。
私はミコトを優しく降ろし、笑顔で見送った。
『ハンカチ常に持っとけよ、ミコト・・号泣するから』と背中に声をかけた、振向かずに右手だけの余裕の返事で返してきた。

「本当にどういう神経してるの？ミコト姉さんを抱き上げるなんて～」とマミが微笑んだ。
『マミ、やきもちだね』と微笑んで返した。
「ほらほら、遊んでないで帰りなさい、後で迎えに来るんでしょ」とマミが笑顔で私の背中を押した。
私は裏口で、マミに手を振って別れた。
ユリカのビルの下にユリカが笑顔で手を振っていた。
私はユリカの笑顔で、完全な制御不能に陥って、動けずにその場で泣いた。

ユリカいる通りの反対側の、リンダがしゃがんでいた所だけ光って見えて。
ブロンドのリンダが座っていた、そして笑顔で楽園ブルーからスコールを流した。
私はユリカを見ようと必死になった、駆け寄るユリカが見えていた。
そしてユリカに強く抱かれた、でもブロンドのリンダ手を引いて、水槽に向かう自分が見えていた。
「リンダを初めて見た時に・・本当は私は凍ったの、あなただったから」とユリカが囁いた。

「本質的な心が向きが全く同じだったから・・探究心の角度が向きが同じだった。
強さはリンダの方が圧倒的に強いけど、向きが同じなの。
幸せな事よ、そんな相手にめぐり合えて・・奇跡だよ。
だから、悲しまないで、今は追わないで・・リンダを。
私が淋しいから！」

ユリカの叫びが、完全に私を復元した、リンダがきちんと記憶の中に入った。
通りを歩く人々の視線を集めて、ユリカと抱き合っていた。
『ユリカ、瞳を閉じて』と微笑んだ。
ユリカは私を見上げ、瞳を閉じた。
私は少しユリカを引き寄せて、唇に浅いキスをした。
ユリカに気持ちを伝えるのに、長く唇を重ねていた。
通りを歩く人々の、視線など気にもとめないで。
大切なユリカの淋しい思いを、消し去るために・・・。

カスミは私にとって大切な宝物だった。

しかし今でも近くに存在するので、安心感がある。

ユリカはやはり早くに別れたので、感情的になってしまう。

しかし私とユリカの5年間は、蘭との関係の次に濃密だった。

私が自分からユリカの唇に、唇を重ねたのはこの一回だけである。

この時のユリカの叫びは、今も心の中にある。

普通の女性の叫びだったから、本当に嬉しかった。

揺り篭でない、心の叫びだったから。

ユリカ・・ありがとう・・愛してくれて・・・。

白い弾丸

土曜の夜の１０時過ぎ、人通りは最高潮を迎えていた。
祭りの影響もあり人であふれていた、私は小さく華奢な女に上から唇を重ねていた。
人々の視線に晒されて、心のどこかで自慢していた聡明な女神を。
ユリカも瞳を閉じて、伝えてくれた・・私が必要だと。

唇を離し、ユリカを見ていた、きつく抱きしめたままで。
ユリカが目を開けて微笑んだ、爽やかに深い瞳が見ていた。
「戻ったでしょ～、やっと・・世話がやけるね～、嘘まで言わせて」と爽やかテレを出した。
『ユリカ本気だったもん、嘘じゃなかったもん』とウルですねてみた。
「何故なのか、２００字以内で述べよ」と余裕の表情を作って、可愛く使った。
『左の眉が下がらなかった』とニヤニヤで囁いた。
「それ、本当の話だね、本当だね？」とユリカが珍しく2度聞き返した。
『ユリカ、今のこの嬉しい気持ちを取っときたくて、気持ちを読まないんだね』とニヤして。
『可愛い奴だな、ユリカ・・本当だよ』と耳元に囁いた。
「帰って、早急に研究する」と爽やかニヤを出した、私はユリカを抱き上げた。
エレベーター前でユリカが降りた、私に微笑んだ。

「リョウは強敵だね、でも凄く良い子だね・・ミコトが泣くの見たことないから、よろしく」と爽やか笑顔で手を振った、手を振ってユリカと別れた。

《まだ、早いな～、どっか遊びに行こうかな～》と思って歩いていた。
完全に未熟な自分に戻っていて、映像はもう出ないかもな～と思っていた。
それが嬉しくて、帰りたくなかったのだ、そして現れる回復の妖精が走ってきた。
手を大きく振りながら、最大級の喜びの笑顔で走ってきた。
「せんせ～い、何処行くの？遊んでるんだ～」と腕を組みながらシオンが言った。
『シオンは帰るの？』と笑顔で返した。
「ローズ多くて・・疲れたから脱走てきた」と可愛く笑った、私は笑顔で返していた。

『シオンは短大でたら何するの？目標は？』と優しく聞いてみた。
「通訳になりたくて、英語が好きなの、心が安心できるの英語で話すと」と笑顔で言った。
私は驚いてシオンを見ていた、話の内容でなく言葉の流れに。
《自分の自信のある話をする時は、こんなに流れるように話すのか！》と思っていた。
『素敵だねシオン、俺も今日アメリカ人と会って、英語が話せたらな～って思ったよ』と微笑んだ。
「そっか～、リンダちゃんアメリカ人なんだ～、素敵な人だね」と笑顔で返してきた。
『どっかで見たの、リンダと俺を？』とニヤで聞いてみた。
「先生またからかって～、お話しした後見せてくれたでしょ、リンダちゃんとの事」と笑って。
「だから、先生が遠くに行きたいって言ったから、シオン行かないでって言ったよ」と可愛く微笑んだ。
私は完璧に何かに包まれていた、真っ白い暖かい何かに。
《俺は大きく間違ってるのか、シオンの事を》と思って子供のよう

に、嬉しそうに笑うシオンを見ていた。
【素敵な魅力です】と言ったユリさんは、どこまでシオンを深く見ていたんだろう。
そう思い、私はその計り知れない純な妖精を見て、嬉しくなって笑顔になった。

「先生に会うまでは、日本語が嫌いだった・・嫌な事が多かったから。
私の家の近所に、教会の牧師さんがいてね、その人外人さんでね。
来たばかりの時、日本語が全然駄目で、私が中2の時で牧師さんに日本語教えて。
牧師さんが英語を教えてくれたの、だから牧師さん今でも日本語変だけど。
私、英語だけは出来るんだよ、でも使わないと忘れるから。
忘れたくないの、心を救ってくれた言葉だから」

シオンが可愛く微笑んだ、流れる言葉だった、まるで歌うようだった。
そしてその時私は気付く、シオンの名前を。
『シオン、シオンって源氏名、漢字で書くの？』と笑顔で聞いた。
「うん、詩に音でシオン・・ユリカちゃんがつけてくれたのだ～」と可愛く威張った。
『最高の名前だね、詩音・・ユリカ凄いな～素敵な響きだ』と正直な感想を、ユリカにも届くように言った。
ユリカの凄さをまた見せ付けられた、そして感動していた、奥深い愛情ある名前に。

『シオンは外国に行きたいの？』と笑顔で聞いてみた。
「自分の貯めたお金で、自分の時間で行きたいの、ゆっくりと見てみたい自分の流れで」と微笑んだ。

何度目だろう、私の驚きは・・完璧な歌だった。
そしてその言葉は【詩】だった、心の表現方法が詩なのを感じて、また感動していた。
そして調子に乗っていた自分に気付いた、ユリカに褒められ、私は有頂天だったと。
【シオンには勝てない】そう言ったリョウの言葉を思い出して、ハッとした。
《あの言葉は、猟の言葉だった、得体の知れない猟が勝てないと言ったんだ、シオンを》と思いながら、シオンを連れてＰＧに方向を変えた。
《必要になる、近い将来ＰＧにシオンが絶対に必要になる》何故かそう確信的に思っていた。

『ねえシオン、今から沢山時間をかけて、先生と色々話しをしようね。
それでシオンがシオンの好きなように、誰とでも話せるようになったら。
蘭ちゃんと一緒に働いて、お金を貯めないかな？
シオンは絶対みんなに愛されるよ、そしてユリちゃんもいるから怖くないよ。
どうかな～、考えてみてね・・・シオン』

笑顔で優しくシオンに囁いた。
「シオンにいつか出来ると思う？先生が出来ると思ったときに言ってね、シオンはやりたいから」と可愛く微笑んだ。
『出来るよシオン、絶対に近い将来シオンは出来るよ』と笑顔で言った。
そして問われる私の未熟を、白い弾丸が飛んでくる。
「先生が映画見せてくれた時、どうして蘭ちゃんと離れると思った

の？
そこだけシオン分らなかった、だって先生が行きたいって言ったら。
蘭ちゃん凄く喜んで自分の用意をするよ、蘭ちゃんって心に従う人だもん。
蘭ちゃんはシオンの目標だから、分るんだよ。
絶対そうする、先生は間違ってるよ・・蘭ちゃんは1番に先生を考える。
先生と一緒だよ、だから絶対先生を引っ張って、世界を巡るよ。
そしてリンダちゃんは、蘭ちゃんに会った時に思った事が現実になるんだね。
リンダちゃんが思った、この人と旅をしたいって感じた事が」

私は泣きそうだった、シオンに何発も白い銃弾を撃ち込まれて。
シオンは可愛い顔で、私を見て笑顔で返事を待っている。
シオンを心配させたくなくて、私は涙を我慢できた。
『どうして、蘭と会った時の、リンダの気持ちが分ったの？』と笑顔で優しく聞いてみた。
「えっ、リンダちゃんがそう言ったよ、先生英語少し勉強しなさい」と可愛く睨まれた。
『すいましゃーん』とウルで謝りながら、シオンを見ていた。
そして私は再び反省していた、自分の自信過剰な心を。
《リンダの旅の意味からすれば、俺の何十倍も蘭の方が必要だ・・あの青い炎が》と思っていた。
『シオン、ごめんね・・先生間違ってたよ・・ありがとうシオン』と微笑んだ。
そしてまた問われる、私の未熟をシオンが白い弾丸で問う。

「じゃあ、教えて・・どうして・・・なぜ？
先生は猟ちゃんが怖いのか教えて、猟ちゃん助けてって言ったの

に。
どうして怖がるの、シオンじゃ引っ張る力がないのに。
あんなに出たがってるのに、シオンやユリカちゃんじゃ力が足りないのに。
先生しか引っ張れないの分って、猟ちゃんが頼んだのに。
どうして、怖がるの？・・なんで先に怖いと思うの？
あんなに傷ついて、泥だらけで、やっとあそこまで来たのに。
先生を見つけて、あんなに猟ちゃん喜んだのに。
どうして、怖いの・・・シオン分らない！」

シオンが泣きながら強く言った。
シオンの強い歌が、心に響き渡り、私は苦しかった。
私は限界を感じて、シオンを抱き上げて、裏階段を頂上まで登った。

『シオン、先生分らなかった・・怖いものを勝手に自分で作ってたよ。
自分の作ったのが、絶対間違ってないと思ってたよ。
猟の手は出たくて頑張って登ってきて、怪我してたんだね。
奥に引っ張ろうとするのは、出たいからなんだね。
だからシオンは洗ってあげたんだね、先生また間違ってたね。
先生は猟ちゃんの手は、引きずり込もうとしてるのかと思ったんだよ。
シオン、大丈夫・・先生が潜って後から猟ちゃんを押して。
最後に引っ張り上げるからね、心配しないで』

優しく笑顔で言って、シオンを見た。
「うん、頑張ってね先生・・シオンがついてるよ」と涙目で可愛く笑った。
その時の私にとって、どれほどこの言葉が、心強かったか表現できない。

『シオン、ありがとう・・少し充電しなさい』と優しく囁いた、シオンは笑顔で頷き瞳を閉じた。
そして私は思っていた、今までの事を。
私が解放したと言われる、カスミやユリカやナギサの事を。
今の私のように、言葉に撃たれたのだろうかと思っていた。
私の言葉がシオンの言葉ほど、強かっただろうかと自分に問いかけて、自信の無い自分を見た。

《シオンには、固定観念がないんだ。
イメージなどに左右されないんだ、だから物事をそのまま見る。
だから全てを直接見れるんだ、俺は先に頭にある経験に照らし合わせてる。
不必要なイメージが多すぎる、捨てないとこれ以上は望めないのかもしれない。
自分では好奇心と思っていた、人から探究心と呼ばれるもの。
それを捨てれない以上、いらないイメージを捨てないと、入りきらない。
俺の凡人の頭には・・天才のリンダに追いつこうと思ったら、捨てるしかない。
俺は心で常に追えばいいんだ、リンダを豊兄さんと同じ位置づけにすれば良いのか。
そうすればリンダに会える、堂々と会えるよね・・ユリカ》

そう思って、遠いユリカの店の、ぼんやりと見える明かりを見ていた。
シオンが目を開けて、私に微笑んだ。
『シオン、猟ちゃんかわいそうだから、絶対助けてあげるね』と笑顔で言った。
そしてとどめを刺される、シオンの白い弾丸が私の心に深く刺さる。

「先生・・人を【かわいそう】って言ったら駄目だよ。
先生が【かわいそう】って言って良いのは、蘭ちゃんにだけだよ。
【かわいそう】って言葉は、他の人には使ったら駄目だと思う。
その人の事をそれからずっと面倒見る人じゃないと、言ったらいけないと、シオンは思う。
シオン【かわいそう】って言われて、沢山傷ついたよ。
言うだけだから、言って自分が満足するだけだから。
リンダちゃんは絶対に言わないと思うよ、どんな境遇の子供に会っても。
その言葉は言わないよ・・だって自分が負けを認める言葉だもん。
その言葉を使うぐらいなら、行動するよリンダちゃん。
シオンはそう思う、人は強くないけど・・弱くもないと思う。
【かわいそう】じゃない、そう言う人は・・理解してないだけだよ。
理解しようとしないだけだよ、弱い人の言葉だよ。
弱い人が、もっと弱い人に言う言葉だよ。
だからシオンは・・先生には使って欲しくない！」

シオンの涙の叫びの白い弾丸が、私の最も深い所まで入った。
私はゆっくり階段に、シオンを抱いたまま座った。
そしてシオンを抱き寄せて泣いた、未熟な自分が悔しくて。
シオンの言葉が嬉しくて、泣いていた、数時間前にカスミといた同じ場所で。
シオンはハンカチを出して、私の涙を拭いてくれていた。
「もう、泣かないで先生・・ね・・ね」と可愛く微笑みながら。
それを見ながら私は思っていた、シオンのトラウマをもし外せたら。
どんな素晴らしい女性が、現れるんだろうと思っていた。
私に想いのままを話すように、誰にでも話せるようになったら。
この時私は初めて見つける、その人に届くかもしれないと思わせる女を。

《シオンなら・・薔薇に届くかもしれない》そう思っていた。
笑顔で涙を拭いてくれる、シオンを見ながら。

『シオンありがとう・・先生シオンに、ど～んって撃たれたよ・・
忘れないよ、シオン』と笑顔で立って、シオンに手を出した。
「シオンなんか先生に、ど～んど～んど～んって、沢山撃たれたよ」
と可愛く笑って手を繋いだ。
階段を2人で降りて、TVルームでマダムに言った。
『マダム、シオンちゃんにフロアー見せて良いかな？』と笑顔で聞
いた。
「もちろん、いいよ・・シオン綺麗になったね～」とマダムが微笑
んだ。
「エースが綺麗にしてくれました～」とシオンが笑顔で返した、マ
ダムも松さんも笑顔で見ていた。

私の指定席にシオンを座らせると、興味津々でフロアーを見ていた。
蘭が素早く見つけて、歩み寄った。
「シオンちゃん、どうしたの？エースにスカウトされたの～」とシ
オンに満開で微笑んだ。
「うん、もう少し勉強したら、蘭ちゃんと一緒に働けるようになる
って言われたの～」と可愛い笑顔で返した。
「楽しみ～、待ってるね～」と満開で微笑んで、戦場に帰った。
シオンのフロアーを見る顔が楽しそうで、私も楽しい気分で見てい
た。
9人衆のシオンを意識するのが分った、かなり気にしながら見てい
た。
《待っとけよ、もうすぐ最強の爆弾を投下してやるから》とニヤを
しながらそれを見ていた。
フロアーの熱は冷める事無く、マミのいない場所には、シオンが座
っていた。

その可愛い笑顔で、純な瞳で見ていた、近い未来の自分の姿を。
シオンはその年の１１月２２日に、ＰＧのフロアーデビューする。
そして私を驚かせ続ける、その可愛さと天然と歌の言葉で。
シオンは翌年の４月に、カスミを指名で一度抜く。
その時のカスミは凄かった、シオンと休日をずっと過ごした。
カスミが辞める少し前に、私にこう言った。
「ユリさんでも追ってみたけど、唯一人追えない女がいた・・・シオン」
「完敗だった、女としても人間としても・・だから私はここまで来れた」
カスミは輝きながらそう言った、嬉しそうな笑顔で。
シオンは約３年ＰＧで勤めた、そして海を渡った。
永い旅だった、ニューヨークのリンダの家に寄って。
リンダと２ヶ月近く旅をしたからだ。
リンダがシオンを表した言葉・・・【Ｐｕｒｅ　Ｗｈｉｔｅ】
白い妖精・・歌う言葉・・観念無き世界

完璧な純粋・・詩音・・ありがとう、伝えてくれて。

修了の時

灼熱の土曜の夜、フロアーの熱は上昇を続けた。
フロアーを見る純な瞳は、その世界に入っていた。
ただ心に固定観念を持たずに見る、見たままに伝えてくる唯一の存在。

「シオンちゃん、さっきは挨拶もできなくて、ごめんね」と発光しているカスミが笑顔で言った。
「こちらこそ、すいません・・先生ばかり見てて、おめでとうございます」とシオンが頭を下げた。
「ありがとう、エースに連れて来られたって事は、興味あるんだ？」と嬉しそうにカスミが言った。
「はい、先生のＯＫが出たら、面接受けます」と可愛く微笑んだ。
「楽しみだね～、待ってるからね」と微笑んで、フロアーに戻った。
シオンは待ってるって言われたのが嬉しかったのか、ニコニコしていた。

「今晩は、シオン姉さん、なんか凄く綺麗になりましたね～」とハルカが笑顔で来た。
「先生が抱っこで、綺麗にしてくれたよ・・ハルカちゃんも綺麗になったね」と可愛く微笑んだ。
「ありがとうございます、興味あるんですねフロアー」とハルカが微笑んだ。
「うん、凄く興味でてきた、先生のＯＫ早く貰って、面接受けるね」と嬉しそうに笑顔で言った。
「楽しみに待ってますね」と笑顔で返して、フロアーに戻った。
シオンのニコニコが全開になった。
《シオン、人に期待されると嬉しいんだな～、本当に可愛いな～》

と思ってシオンを見ていた。

時間が迫り、シオンと手を繋いで、ＴＶルームでジャケットを取りだし。

シオンをローズに送った、ニコニコ継続中のシオンを見ていた。

『シオン、明日の日曜日、昼間何するの？』と笑顔で聞いた。

「別に・・何も予定なし」とウルで答えた。

『先生とデートしようよ・・駄目？』とウルで聞いた。

「駄目なわけないよ～、うれし～」と飛びついた。

『面倒臭いから、リアンには内緒ね、待ち合わせどこがいい？』とニヤで聞いた。

「蘭ちゃんの家知ってるよ、お迎え行こうか？」とニコニコ笑顔で返された。

『それは助かります、何時？』と微笑んだ。

「５時でも６時でも大丈夫だよ」と笑顔で返された。

『そんなに早くなくていいよ、蘭が靴屋に出かけて、朝のお仕事するから・・９時でいい？』と微笑んだ。

「は～い、先生ありがとう・・私を選んでくれて、嬉しい」とウルウルで言った。

『今はシオンと１番お話ししたいんだよ、シオンの事いっぱい、知りたいんだよ』と笑顔で返した。

ローズの前で、シオンと手を振って別れて、ユリカのビルを見上げた。

《ユリカ、俺まだまだだね、だからユリカが側にいてね、ユリカとシオンが挑戦の支えだよ》そう囁いて魅宴を目指した。

魅宴に裏口から入り、事務所は覗いたが誰も居なかった。

大ママもフロアーに出たらしく、私の裏に出てフロアーを見ていた。

大声で怒鳴る男の声がした、静かな魅宴だから目立っていた。

ＰＧなら、そんなに目立たないし、ボーイがすぐ行くのに、魅宴は

対応遅いんだ～と思っていた。
男が怒鳴り散らし、女の髪を引っ張ってフロアーに出てきた。
女はミコトだった、男は５０代のスーツを着たごつい男だった。
私は襟のＰＧのバッチを外し、ポケットに入れて様子を見ていた。
ボーイが止めに入っていたが、魅宴のボーイは大人しく、客を止めきれていなかった。

「お前が愛想が悪いんじゃ～、こげな店のどこが高級なんじゃ」とミコトの腕を思い切り引っ張った。
ミコトは静かな強い目で、黙って男を見ていた。
《ミコト、心も強いけど・・それは逆効果だよ～》と思っていた。
「俺は市会議員やって知ってるな、潰してやるぞこんな店」と言って、ミコトに向かって唾を吐いた。
私は情報収集が済んで、ニヤニヤしながら一度入口方向に周り、そこから静かに近づいていた。
ミコトは黙って、男の目を見ている、その目が静かだった。
男はその目に耐え切れず、右腕を上げた時に私が男の腕を掴んだ。

『せっかく楽しく遊んでるのに、おじさんうるさいよ、帰れば』と腕を掴んだまま言った。
「ガキのくせに、何意見しよるんか」と怒鳴って腕を振り払った。
『ほら、殴らせてやるから、市会議員のおじさん、偉いんでしょあんた？』と微笑んだ。
「ガキ、帰らんと大変な事になるぞ」と凄んだ。

『呼べば、誰でも・・誰呼ぶの？こんなみっともない事して、女性は商品じゃないよ。
金払えば、何でもできるわけじゃない、あんたに唾なんか、かける権利は無い。
あんたなんぞに、手を出させる訳にはいかん。

大切な女性達だから、必死で生きてる女を見捨てる事なんて出来んよ、ガキだから。
女の我慢がわからん奴に、指一本触れさせんよ、汚らわしい。
謝れよ、悪徳議員・・詫びろよ無礼を・・でなきゃ議員を降りてもらうよ。
俺、中学生だから、何でもできるよ、そしてあんたなんぞに手は出せんよ。
あんたに手が出せるのは、何かを持ってる人間だけなんだよ。
何かを守ってる人間の、弱みに付け込む事しか出来んのよ。
1対1じゃ何も出来んくせに、議員が偉いんじゃないよ、職業に優劣なんか無い。
人間として、あんたは本気で、ミコトより上と思ってるの？
分らないの、馬鹿でもなれるんやね議員って、どうするん？
詫び入れんなら、明日からあんたを執拗に追い掛け回すよ。
何処までも執拗に追う、あんたが入るビルの前で叫んでやるよ、詫びろって。
家の前でも叫び続けるよ、詫びろって。
逮捕できるんか？補導できるんか？・・そんなもの怖くないよ。
嘘だと思うんなら、このまま帰れば、でも動き出したら止まらんよ俺は。
交渉の余地は無いよ、俺は別に中学辞めてもいいんだから。
どうするん・・無礼を詫びろよ・・プロの女性に』

完全に考えずに言えた、私は楽しくてしょうがなかった、そして男の様子を見ていた。
市会議員はワナワナと震えていた、悔しいんだろうと思って、そろそろかなと思い。
近づいて、とどめを刺した。
『な～んも出来んくせに、威張るなよ悪徳議員』と目の前で笑った。
我慢の限界が来たのだろう、私に殴りかかった。

私は弱いパンチを浴びていた、ニコニコ顔で。
『終了やな、警察行こうよ、ここには呼べんから』と疲れて肩で息をしている、バカな議員に言った。
『無抵抗の少年殴ったんや、揉み消せんよ』と笑顔で言った。
その時やっと酔いが覚めたんだろう、顔色が真っ青になった。
『行こうよ、行かんなら呼ぶまでや』と静かに言った。
「ちょっと待ってくれ」と冷静になったのか、静かに言った。
『何待つの？顔殴っといて、議員ってのはそんな権限まであるの？』と静かに聞き返した。
沈黙があり、《もういいかな～》と思って。
『おじさん、ここをチャラにしてやるよ、その代わりミコトに土下座しろ、そして俺に貸しだよ』と耳元に微笑んだ。
『３０秒で気が変わるからね』と急かした。

「すまんかった、悪酔いしちょった」とミコトに土下座した。
『じゃあ営業妨害になるから、行こうか』と出口に誘った。
入口のボーイに紙とペンを借りて、議員に渡した。
『今日の日付、西暦から、名前と住所、そして殴った事、恩を一度借りますって書いて』と微笑んだ。
渋々議員が書いていた、最後までいけ好かない奴だった。
書いた紙を確認し、笑顔を向けた。
『なんか出来たら連絡するよ、選挙前までに・・次は落ちるだろうから』と微笑んで背を向けた、笑いが止まらずニヤニヤしてながら裏に戻った。

「ほら大ママ嬉しそうでしょ、貸付のエース」と真っ白なドレスを着たマミが笑った。
その美しいドレス姿に見惚れた、美しく変化する兆しが垣間見えた。
「エース、頼むからうちにおいでよ～」と大ママも笑顔で言った。
『追い出されたら、真っ先に来ますよ』と大ママに笑顔で返し。

マミの美しい姿を見て、ニヤニヤしていた。
『馬子にも衣装ですね～』とニヤニヤをマミに向けた、マミが笑顔で睨んだ。

「あの位じゃ泣かないよ、でもお礼」と言ってミコトが頬にキスしてくれた。
『あんなんで泣かれたら、張り合い無くなるよ・・次は唇にお礼を頂きます』と余裕を意識して返した。
「最後の挑戦者って、何人の女からキス貰うかの挑戦者ね」余裕で返された。
『誰にも内緒ですよ・・・正解』とニヤで囁いた。
「なるほど、ＰＧが熱いわけだね～」と少し不敵を出して、フロアーに戻った。
この市議会議員と聞いて、策略で貰った紙切れが、この後に大きな役に立つとは考えてもいなかった。
私は、魅宴の女性に印象を付けをしたかった、ハルカと来週から来る時に楽しいように。
そして、市議会議員の貸しが欲しかった、コレクションの一部として。

「貸付のエースは、どの位貸付してるの？」とマミがオレンジジュースを飲みながら言った。
『その貸付のエースはやめてよ、人聞き悪いでしょ』とウルで返した。
『そんなに無いよ、だって権力者のじゃないと意味無いでしょ、子供が権力者には会えんよ』と微笑んで返した。
「今までで、一番の権力者は？」と興味津々でマミが聞いた。
『そりゃー、ミスター望月かな』と笑顔で返して。
『面白いのでは、○○ＴＶの社長と○○銀行の頭取』とニヤで言った。

「お前・・何者だい」と大ママが突っ込んだ。
『つぶさに観察すると、大人は楽しいよ』と笑顔で返した。
「最後の挑戦者ね～」とマミがニヤで返してきた。

時間になって、マミと大ママと通りに出た、最高のステージが用意されていた。
人通りが恐ろしく多かった、深夜なのに熱が高かった。
『大ママ先を歩いて、人を散らせてね』とニヤで言った。
『行こうかマミ、絶対に顔を背けるなよ、泥酔者と思われるぞ』とニヤニヤで言った。
「伝説作るよ、可愛いマミちゃまの、笑顔を振り撒いて見せるよ」と笑顔で返してきた。
私は静かに抱き上げて、マミは私の首に腕を回し、前を見て微笑んだ。
大ママが前を歩き出した、それを少し空けて歩いた。

「おっマミちゃんいいね～、もうデビューかな?」と呼び込み達が笑顔で声をかけた。
「マミ～、いいね～変ってよ～」と客引きのホステス達も笑顔で声をかけた。
《さすがマミ、顔が広いし、好かれてるな～》と思いながら歩いていた。
ユリカのビルに近づくと、ユリカとリアンが待っていた。
2人で楽しそうに紙吹雪を撒いてくれた。
「マミ、綺麗だよ、良かったね」とユリカが爽やかに微笑み。
「研修に来たときより、数倍綺麗だよ」とリアンが獄炎で微笑んだ。
マミは目を潤ませて、笑顔で答えていた、その美しく変化していくマミを見ていた。
自分の選んだ道を、誇らしく歩くであろうマミを。
そして後悔ともいつか和解するであろう、芯の強い少女を見ていた

沢山の笑顔に囲まれて。

『マミ、泣くなよ今だけは・・頑張れマミ』と囁いた、マミは必死で笑顔を作っていた。

ＰＧのエレベーターに乗り、ドアが開くとボーイが整列していた。

全員でマミに頭を下げた、マミは必死だった笑顔を作るプロになったんだと、笑顔が言っていた。

フロアーに向かうと、女性が全員で拍手で迎えた。

マミは笑顔で答えていた、嬉しそうに涙をこらえて。

そしてフロアーセンターにゆっくりとマミを降ろした。

大ママとマミが深々と頭を下げた、全員で返礼した。

「マミ・・２週間本当によく頑張りました」ユリさんが薔薇の微笑で話はじめた。

「マミとケイは、私と大ママの１つの答えです。

そして希望です・・高校も行かずに水商売を選んだ２人。

世間に認められ辛い仕事です、理由無き中傷もあります。

受入れて欲しい、いつの日か受入れて欲しいのです。

そして拒否しなさい、認められる事を拒絶しなさい。

そして人生の答えを探して欲しい、全ての人にある別々の答えを。

恥ず事は何もありません、将来子供が出来たら自慢して教えなさい。

素晴らしい仲間と、一緒に作ったと、素晴らしい作品を残せたと言って欲しい。

マミ、ＰＧはあなたを仲間として、いつでも歓迎します。

遠慮せず遊びに来てください、同じ海流に棲む同じ流れに乗る魚なのだから。

マミ頑張って・・ＰＧの全員が見ています、検討を祈ります」

薔薇で微笑んで、マミを抱きしめた、マミは号泣していた。
強い言葉だった、マミとケイと本名で呼んだ、強く優しい言葉だった。

「ＰＧの皆さん、本当にありがとうございました」大ママが挨拶をはじめた。

「私はエースと初めて話した日に、ユリに研修を頼みました。
ケイの変化に驚いたからです、マミは魅宴では変化に時間がかかると思いました。
そして今のＰＧなら、マミを受入れてくれるだろうと、大正解でした。
マミは2週間で急激に成長しました、皆さんの姿を見たからです。
必死に競い合う姿を、私は毎日マミが帰って来るのが待ち遠しかった。
笑顔で沢山の話をしてくれることが、そして成長が手に取るように見えることが。
そして最後に、エースありがとう、マミの心残りを外してくれて。
あの日帰ってきたマミを見て、私は心が震えました。
マミは本当に幸せ者です、最も熱いＰＧの姿を感じる事ができて。
必ずそれを生かしてくれると期待しています。
本当にありがとうございました」

大ママは頭を下げた、涙を隠さずに泣いていた。
私は大ママの心の大きさと、優しさが本当に好きだった、尊敬していたその生き方を。

「ユリさん、研修を受けて下さって、本当にありがとうございました」マミが挨拶を始めた。

「私はこの研修で沢山の事を学びました、競うとはどういう事か。
笑顔はなぜ出るのか、そして仲間とは何なのか。
とても考えさせられました、そして思いました、お互いを見てる者同士だと。
些細な変化にも気付く者の事だと、べったり仲が良いのではない事に気付きました。
私はこの仕事が今は本当に、やりたいと思っています。
全力で取組む価値があると思っています、本当にありがとうございました」

最後は笑顔で頭を下げた、全員で頭を下げて拍手を贈った。
マミは輝いていた、肉体の強さを示す綺麗な姿勢で立って輝いていた。
「それでは、エース・・マミの源氏名を命名しておくれ」と大ママが私に微笑んだ。

『マミに初めて会った時、マミは言ったね・・私なんか目立たないと。
俺は正直に答えたよ、マミの存在感・・・【淡い】
それは最初のイメージから変らなかった、マミを知っていっても。
泡い想い、男には後悔の香りがするんだよ、未熟な時期の後悔が。
その時に踏出せなかった後悔、話かけられなかった後悔。
リアンの店で接客してるのを見て確信した、男は絶対に忘れないと。
ねぇマミ、自分を信じてね・・あの夜2人で見上げた夜空は忘れないから。
マミいつの時も忘れないで、マミの存在感・・淡い。
それは圧倒的な存在感だと。

淡い色彩の代表、桜・・桜は散る儚さが命と言われる。

散り際の美学に心を奪われる、しかし散らない・・強い意志ある花は散らない。
淡く永遠に咲く、唯一散らない心に咲く淡き桜。
過去を想わせ、未来に咲き続けて欲しい・・マミは未来に咲く。
未来の未に咲くで・・ミサキだね」

笑顔でマミを見た、マミが私に歩み寄り抱きしめてくれた。
「私が囁いたの聞こえてたの、いるか岬の話の時に。
岬の命名が素敵だって言ったの・・岬を好きになったって言ったの聞いてたでしょ」とマミが言った。
『好きになってくれて、ありがとうマミ・・岬の命名の箇所も俺が作ったんだよ』と囁いた。
「やっぱり、そうだと思った・・それを私にくれるのね・・ミサキ、本当に素敵、ありがとう」と言って強く抱きしめた。

『ミサキもう1つ意味があるんだよ、ユリカのユリが咲く峠を走るとね、ナギサがあるの、その先にミサキがあるんだよ』と言って。
『がんばれミサキ、続いてるんだ魅宴の世界も』と言って抱き上げた。
マミは美しく泣いていた、降ろしたくなかった。
マミとの離れるのがやはり、寂しかった。
しかし一人去り、また現れる・・最新型の外国製・・緑の瞳の挑戦者。
最強のパワー・・マチルダ。

ハルカとミサキは昨年から高校に通っている。

後悔したからではない、経験したいからだと言う。

同級生の若者達に絶大な人気がある、当然だろう潜り抜けた修羅場

が違う。

同級生の若者は幸せである、その偉大な2人に相談できるのだから。

ミサキの名前はマミのｉ言う、いるか岬の呟きで、繋がっていた。

あのとき3人娘に伝えたくて、アドリブで入れた岬の命名。

それに反応した、マミの淡い光が忘れられなくて贈った。

マミが去りそして訪れる、変化の波、グリーンの瞳。

マチルダが近づいている、微笑みながら目指している。

ＰＧとだけ呟きながら・・・。

詩音の歌

静寂のフロアーに響くカーテンコール、巣立ちを喜ぶ声が木霊する。
誰も産まれる場所は選べない、しかし誰しも未来は選べる。
選択した未来を楽しめと言う、辿り着きたいのならば。

泣顔のマミを抱いて、エレベーターまで運んで、優しく降ろした。
大ママとマミはもう一度頭を下げて、エレベーターに乗った。
全員の拍手で見送った、エレベータの扉がゆっくりと閉まった。
「ご苦労であった、今夜は疲れたね、すぐ着替えてくるから」と蘭が満開で微笑んだ。
『うん、早く帰ろう・・蘭も疲れただろ』と微笑んで返した。
私もさすがに疲労を感じていた、午前中のリンダから始まった一日がハードだった。
リンダの思い出が遠い過去に感じていた、それで良いと思っていた。

指定席で、ＴＩＭＥ誌を取り、ＴＶルームで待っていた。
蘭がすぐに来て、腕を組んでタクシーに乗った。
「働き過ぎだよ、まぁ趣味の部分も多いけどね～」と私の肩に乗りながら、蘭が満開で囁いた。
『うん、今日はさすがに疲れたよ』と正直に言って、蘭を見ていた。
「【永遠の憧れ】カスミが凄く喜んで、皆に自慢してたよ、ユリさん嬉しそうに頷いてたから、正式称号だね」と蘭が満開で微笑んだ。
『そっか～、良かった』と微笑んで返した。
「永遠の憧れか～、良いな～」と蘭がウルで私を見た。
『蘭を憧れとは呼べない、現実に追うんだから、未来でも必ず捕まえるんだから』と真顔で言った。
私はやっと蘭と2人の時間が来て、嬉しくて少し感情的になっていた。

「うん・・・何人分のキスマークつけて、そんな台詞吐くかね～」
と笑顔で睨んだ。
『蘭、今夜だけお願い、罰をちょうだい・・背中合わせのの罰を』
と囁いた。
「当然だよ・・罰を与える」と微笑んで瞳を閉じた。
タクシーを降りて、蘭を抱き上げて、蘭が化粧を落とす前に顔を洗って着替えた。
蘭がパジャマで現れて、電気を消した。
「心配だから、充電してやる」と言って抱きしめてくれた。
『蘭、なんか凄く離れてた気がする・・寂しかったよ』と静かに囁いた。
「私はあなたの3倍、そう思ってるよ」と言って強く抱いてくれた、蘭が胸に中にいることで落ち着いた。
「私は、3秒で寝るからね」と言って、「浅いキスを頂戴、月光が必要無い浅いキスを」と言って目を閉じた。
私は本当に嬉しかった、誰の時よりも緊張していた。
そして少し引き寄せて、唇を重ねた、やはり特別だった。
蘭の優しさが伝わってきて、私も愛してると伝えた、かなり永い時間重ねていた。
唇を離すと、蘭が満開の笑顔になって、ベッドに入って。
「ファーストキス頂き～・・1・2・3」と数えた。
私は蘭を優しく私に向かせて、腕枕をして蘭を見ていた、蘭も疲れていたのか眠りに落ちていた。
私は蘭の額にキスをして、知らない内に眠りに落ちた。

翌朝、陽の光で目覚めた、快晴の気分だった。
蘭は胸の上にいた、少し汗ばんで微笑んでいた、楽しい夢を見ているように。
静かに腕を抜いて、洗面所に行き歯を磨き、顔を洗おうと鏡を見て

考えた。
《リンダが頬と唇、カスミが唇、ハルカが唇、ユリカが唇、ミコトが頬、そして蘭が唇》と数えて。
《俺は幸せ者だな～》と思ってニヤニヤして、まずいユリカに悟られると思った。
朝食はトーストとタコさんカニさんに目玉焼き、トマトにキュウリのスティックを乗せた。
「おっはよ～、今日も幸せ～」ご機嫌蘭が洗面所に消えた。

朝食を見て満開になって、食べはじめた。
「今日は誰とデートするのかな？」と満開で睨んだ。
『疲労が残ってるから、1番気を使わない相手』とニヤで返した。
「そっか～、シオンちゃん喜んだでしょう～」と満開で微笑んだ。
『うん、シオン変化が速すぎて・・それに昨日かなり撃たれたよ、心が穴だらけ』と笑顔で返した。
「リアン姉さんが、嬉しそうにあなたを借りるって言ってたよ、私も嬉しかった」と笑顔で言った。
『シオンは凄い子だよ、俺なんか教わる事ばかりで・・でも練習台にはなれるかな』と嬉しくて微笑んだ。
「頑張って、そして絶対に傷つけるなよ・・シオンだけは」と真顔で言った。
『分ってる、今は最新の注意を払ってるよ』と真顔で答えた。
「うん、心配してないけどね、沢山撃たれておいで」と満開に戻り微笑んだ。
『夕方、靴屋に行くね』と笑顔で返した、蘭も満開で頷いた。

蘭を見送り、朝の仕事をして、日記に向き合った。
リンダとの事実を書いて、ブロンドの髪の毛を綺麗に貼り付けた。
そして感想をこう書いている。

【リンダ・・本当に出会えて良かった。
世界が一瞬で広がった、夢を持たせてくれた。
私は多分簡単に弱音の吐けない、人間になった気がする。
崇高なるリンダが、アルバムを見せた人間として。
それを本当に誇りに感じている、絶対にリンダを失望させたくない。
だから俺もシオンに学ぼう、どんな大人に成りたいのか、その１つの答えがシオンにある。
純粋はもう無理だろうが、固定観念を捨てる事は出来る。
大きな世界をイメージするなら、小さく必要の無いものは全て抹消しよう。
リンダと、今は旅を出来ないのなら、せめてイメージだけでもリンダといよう。
ありがとう・・リンダ・・Ｉ　Ｌｏｖｅ　Ｒｉｎｄａ】

私はこれを書いて、リンダを心の豊兄さんと同じ場所に座らせた。
２人が嬉しそうに話してる映像が見えた、同種族・・そう思えて嬉しかった。
感傷的な私の心を、シオンがまた戻してくれた、その可愛いクラクションで。
窓から覗くと、可愛いワンピースで少しおしゃれした、シオンが手を振った。
私も笑顔で手を振って、ＴＩＭＥを持って出かけた。
朝陽の中のシオンは輝きを増し、笑顔が溢れて、大きく手を振っていた。
私は走って近づいて、笑顔を返した。

『すごく可愛いね、シオン』と微笑んだ。
「デートだから、頑張った」と可愛く笑った、本当に可愛かった。
車に乗り込み、ＴＩＭＥを後部座席に置いた、シオンにＴＩＭＥを

見せてやりたかったのだ。
「シオンの行きたい所で良いの？」と可愛く聞いた。
『もちろん、シオンが行きたい所が、見てみたい』と笑顔で返した。
「シオン、お弁当作ってきたよ・・嬉しい？」と笑顔で聞いた。
『また泣きそうなほど・・嬉しい』とウルで答えた、シオンが可愛く笑った。

車は西に進路を示していた、私は楽しみに待とうと思って、行き先を聞かなかった。
シオンの楽しそうなニコニコ笑顔を見て、私も楽しい気分になっていた。
『シオン、意外に運転上手だよね～』と思った事を口にした。
「うん、好きだから・・シオン、運動できる子だよ～」と笑顔で威張った。
『凄いな～、何が得意なの？』と意外な答えを追求した。
「走るの・・インターハイにも出たのだ～」と大きく威張った。
『えっ、凄すぎるね～、長距離？短距離？』と興味津々で聞いた。
「長距離選手、５０００ｍを走ったよ」と笑顔で答えた。
『本当に凄いな～、シオンには驚く事が多くて、楽しいよ』と前を見ている、ニコニコのシオンに言った。

「長距離は走ってる時、完全な一人になれるから・・楽しいの。
普段はいつも誰かが見てる気がしてて、トイレも寝るときも。
でも走ってる時だけは、一人を感じるの、追いかけて来るのは・・風。
どこか遠い素敵な場所から吹いてきた・・風。
私の顔に向かってくるのも・・風。
だから、ちっとも走ってて苦しくないよ、ニコニコして走るから。
ニコちゃんランナーって呼ばれてたよ」

可愛い笑顔で、歌うように言った、心地良い響きがしていた。
『素敵な称号だね～、ニコちゃんランナー』と笑顔で返した。
「うん、お気に入りです」と私をチラッと見て微笑んだ、可愛くてウルして見ていた。
『今は、やってないんだね？』と聞いてみた。
「競技としてはやってないよ、夏は少ししか走らないけど、冬は沢山走るよ」と答えた。
『そうだよね、シオンは走るのが、好きなんだもんね～』と笑顔で返した。

「うん・・・競技は疲れるの、何食べたら駄目とか。
何時に寝ろとか、恋愛するなとか、強制的に走らせたりとか。
シオン、人とペースが違うから、疲れちゃうの。
誰かより早く走りたいんじゃないの、風を感じたいだけなの。
遠い国から吹いてくる風を、それを感じたいの。
だから走り終わると、寂しいの・・どこまでも走りたいから」

《完璧な歌だな～、なんて素敵な響きなんだろう、会話じゃないな～》そう感じていた。
『風はいいよね、それに走るのはいいな～、何処でも何時でもできるから』と笑顔で言った。
「うん、サーフィンは海が必要だもんね～」と前を見て笑顔で言った。
車は小林を過ぎて、左に折れ、えびの高原を目指した。
深い夏の緑に覆われた山脈が間近に迫り、その緑で心が解放されていた。
ハンドルを握るシオンは、照り返しを受けて輝いていた、ニコちゃんのままで。
えびの高原をひたすら登り、本道を離れて細い道に入った。

深緑のトンネルのような狭い道を、シオンが慎重に走った。
途中から未舗装になり、ガタガタと揺れた、そして開けた場所に車を止めた。
「少し歩きま～す」と笑顔でシオンが言った。
『なんか素敵な予感がするね』と思ったままをシオンに言った。
私が弁当と、レジャーシートの袋を持って、シオンの大きなバッグにＴＩＭＥを入れてもらった。
腕を組んで、木々の生い茂る獣道を歩いた、シオンは虫が怖いのか密着していた。
風が夜街と全く違って、その爽やかさで私は完全に解放されていた。
気分爽快に深緑が煌く光道を、ニコちゃんシオンと歩いていた。
緩い右カーブを曲がると、それが拡がった。

大きな湖が眼下に現れた、その不思議なブルーに目を奪われた。
ブルーなのだ、圧倒的なブルー・・初めて見る湖のブルーだった。
「素敵でしょ、ここの湖だけ、この季節だけの色よ・・特別な場所」
とシオンが私に微笑んだ。
『シオン、ありがとう・・最高のブルーだ』と笑顔で返した。
シオンと手を繋いで、草原を歩いた、初めて感じる完璧な開放感に包まれていた。
大きな木の下に大きなレジャーシートを広げた、シオンがお弁当を食べる用意をしていた。
私はシートを押さえる石を拾って、四方に置いてシオンからお手拭を受け取った。

可愛いお弁当を見て、笑顔が自然にこぼれた、私もニコニコなっていた。
２人のニコちゃんが、向き合って座り、お弁当を食べた。
どんな高級料理よりも、美味しかった、最後の味付けにシオンのニコちゃんがあったから。

お弁当をほとんど食べて片付けて、シオンが私の横でうつ伏せに寝転んだ。
風が靡かせるスカートの裾を、気にする事も無く、開放を楽しんでるようだった。
私はＴＩＭＥのページを開いて、シオンに笑顔で渡した。
シオンは、そのリンダの写真を見て、目を輝かせて笑顔になった。
シオンは、美冬の翻訳を見ることもなく、真剣に読んでいた。

私は湖を見ていた、海でなく空でない、不思議な神秘のブルーを。
深さにより、変化していく不思議な色を、飽く事無く見ていた。
「先生、お願い聞いて？」とシオンが言った。
『どうしたの、シオン』とシオンを見ると、泣いていた。
「少しでいいから・・ちょっとでいいから・・・腕枕して」と可愛く泣きながら微笑んだ。
私はキュンキュンで撃たれて、大切なシオンの首に腕を通して、腕枕で引き寄せた。
『シオン、ちょっととか少しとか言わないで、シオンがして欲しい時は、ずっとしてあげるから』と可愛いシオンの耳元に、優しく囁いた。
「うん、すご～く気持ち良い・・安心できるね、先生となら」と私の胸に囁いた。
『シオンこうしてるから、帰りも運転するんだから、少し眠りなさい』と優しく囁いた。
「お休み、先生」と言って、静かになった。

静寂が訪れた、自然の音しか聞こえない静寂が来た。
風の草木を揺らす音と、遠くで鳴く蝉の声だけの世界だった。
まるで、この世に私とシオンしか存在しないのではと、感じるほどだった。
私はシオンの爽やかな香りに包まれて、湖を見ていた、そして感じ

た。

《もし・・もし、蘭と万が一別れる事になって。
その痛みを俺が乗り越えたら、それが出来たら。
俺はシオンを追い求めるだろう、ユリカやカスミは届かないと感じる。
そして最も側にいて欲しいのは、シオンなんだ。
シオンの行動も言葉も、その一つ一つが俺にパワーをくれる。
そして絶対的安心感をくれる、その白い心で包んでくれる。
シオン・・詩音も俺の特別な存在だよ》

シオンが愛おしくて、額にキスをした、シオンの寝息を聞きながら。
私も解放された気分と、爽やかさで眠りに落ちていた。

ゴソゴソと歩く何かの足音で、目が覚めた。
首を上げて見て固まった、まだ成獣でない一匹の可愛い鹿が私を見ていた。
シオンも私の緊張を感じたのか、目が覚めた。
『シオン、怖くないから、ゆっくりと顔を上げてごらん』と優しく囁いた。
シオンはゆっくりと顔を上げて、鹿を見つけて、嬉しそうな笑顔になった。
「可愛いね、ごめんねもう少しここ使わせてね・・綺麗にして帰るから」とシオンが鹿に言った。
その可愛い心に、またキュンと撃たれて、少し引き寄せた。

「リンダちゃん、素敵だね・・素敵な人だね」と私を見て、瞳を潤ませた。
『うん、また来るよリンダ、その時はシオンも会えるよ、そしてリンダは絶対シオンを好きになるよ』と優しく囁いた。

「うん、会いたい・・そして聞きたい、鍵は1つでも見つかったのかを」と笑顔で言った。
『鍵？』と真顔で聞いた。
「先生の映画で、バスの中で、鍵が見つからないって言ってた・・大切な世界の鍵が」とシオンも寂しそうに言った。
『世界の鍵？』と私もその言葉で考えてしまった。

「先生に問いかけたんだよ、先生なら鍵を探せるかもしれないって。
リンダちゃんそう言ったよ、涙を我慢して。
言葉や、肌の色や、文化や、宗教がそれぞれ閉ざしてる、扉の鍵が見つからないって。
それを開ける鍵を探してるんだよ、リンダちゃん・・たった一人で。
私も手伝ってあげたい、もう少し頑張って自分の力で、リンダちゃんに会いに行きたい。
そして鍵を探すのを、少しでも手伝ってあげたい。
あの記事で1つだけ嫌いな言葉、【私達凡人はそれしか出来ないのだから】って。
逃げてるよね、逃げてる言い訳だよね・・凡人でも出来るよ、探す事なら。
あの記者の人は見せてもらえないよ、最初から心が言い訳してるから。
私も、多分ユリカちゃんも、先生に教えたくなかった言葉。
先生が背中を押した時、リンダちゃんが呟いた言葉。
昨日ずっと考えてた、ユリカちゃん、私から伝えてって言ってるんだって。
だから私が先生に伝えるね。
【いつか必ず2人を迎えに来ます、手伝って欲しい、2人に】って呟いたんだよ。
泣きながら・・・そう呟いた、強い言葉で」

そう言って、シオンが私にすがりつき泣いていた。
私はシオンが愛おしくて、抱きしめて囁いた。

『シオン泣かないで、ありがとう伝えてくれて。
シオン、ユリカはね、ユリカから伝えると、先生が混乱すると思ってたんだよ。
先生はシオンが伝えてくれると、キチンと聞けるからだよ。
シオンの白い心から出た言葉だからね。
シオン、泣かないで、いつか先生と蘭は、旅立つかもしれないけど。
それはずっと先の話だよ、リンダは先生が大人にならない限り、連れて行かないよ。
シオンなら分るだろ、先生の方が寂しいよ。
シオンの方が先にリンダと旅をするから、リンダは絶対シオンを必要とするから。
シオン、先生も頑張るから・・シオンも、もう少しだけ、積極的になってみようね』

私は優しくシオンに囁いて、抱きしめていた。
シオンはリンダの言葉を抱えたまま、ここに連れて来たことが分って。
その真っ白な心に撃たれていた、湖のブルーがあの楽園を思いださせた。
シオンの微かな震えを受け止めながら、想いを馳せた、天空に囁いた。

《ユリカありがとう、リンダ事で悩まないで良いと言ってくれて。
ユリカのその厳しい教えが、俺を成長させるんだね。
本当にありがとう、ユリカ・・愛してくれて》

私は昨夜、根源的なものに迫られていた、混乱の中に居た。
ユリカはタイミングを計っていた、撃つべきタイミングを。
そして魅宴を出た時と判断した、そしてリンダを記憶の奥にユリカが誘った。
それを考えるのはまだ早いと、今のままでは駄目だと。
成長しろと、ユリカが言ったんだと感じていた。

遥か大陸から吹いてくる、風を感じて、誓っていた。
目を逸らさずに進もうと、言い訳は許されない。
それに最も敏感な妖精が、これからは側にいる。
真っ白な妖精、シオンが・・・。

シオンは何度もリンダと旅に出る。

世界中を巡る、そして帰る度に私に話してくれた、高校生の私に。

その心は、白に白を塗り重ねていた。

どんなに経験を積んでも、何かに囚われる事は無かった。

【Ｐｕｒｅ　Ｗｈｉｔｈ】詩音・・癒しの妖精。

箱舟を拒否する者、絶対に言い訳はしない。

自ら負けを認めない・・諦めない・・その白い心は・・。

水の百合香

9月が近づき僅かに弱まった直射日光が、大樹の幹と枝で遮られている。
草原に一本だけ立つ大樹が、孤独に絶える強さを示していた。
私と妖精は地上に寝そべっていた、大地の鼓動と大陸の息吹を感じて。

「先生はね～、兎だよね・・白くない灰色のウサギ」と突然シオンが、私を見上げ笑った。
『何がかな～、干支？それとも好きな食べ物？』と笑顔で返した。
「それは、リョウちゃんでしょ、動物に例えるとだよ～」と頬を膨らました。
『それなら、白兎がいいな～可愛いし、バニーちゃんみたいだし』とニヤで言って、シオンの頬を親指で優しく押してみた。
「プシュー」と空気が抜ける音を真似て、可愛く笑った。
『なぜウサギなの？俺が可愛いから？』とニヤニヤで聞いた。
「ブー、フットワークの軽さだよ、どこに出現するか分らないから」と言って、ケラケラと笑った。
『シオン、褒めてない・・折角シオンだけ、意地悪ポイント付いて無かったのに～』ウルウルで返した。
「よかった～、私、初めて人に意地悪した～」と嬉しそうに微笑んだ。
私とシオンの距離は、息がかかるほど近い、それでもシオンが笑顔であるのが嬉しかった。

『シオンは、白鳥だね・・大空を羽ばたいて、国境も何も関係ない、白い鳥だな～』と湖を見ながら言った。
シオンを見ると涙が出ていた、私は焦って笑顔を意識して。

『シオン・・嫌だった、白鳥?』と優しく聞いた。
「嫌なわけないでしょ・・女心が分らない・・お子ちゃまね〜」と泣顔で微笑んだ。
『意地悪・・2点目』とウルウルで返した。

「先生はどうして求めないの、出来ないの?」と急に話題を大転換させて、突っ込んできた。
『出来るよ、絶対・・多分・・きっと』と段々声を小さくしながら言ってみた。
「きっと・・もしかしたら・・奇跡がおこれば」とシオンがニコちゃんニヤをした。
『意地悪、プラス3点で、合計5点・・シオン記録伸びすぎだよ』とウル全開で言った。
「素敵・・頑張るね先生」と言って強く抱きついた。
風が吹いてきた、遥かモンゴルの草原から、そんな香りの風だった。

シオンと2人で片付けて、私はシートたたみ袋に入れた。
シオンは関係ない所の、ゴミを拾ってきた。
「来た時よりも、美しく・・そうすれば地球は綺麗になるのです」と可愛く笑った。
真っ白い心に触れて、私も笑顔で慌ててゴミを拾った。
腕を組んで、ブルーの湖に別れを告げた。
ニコちゃんシオンを見ながら、歩いていた。
そしてシオンが真っ青になり固まった、私は焦って前を見た。
黒い大きな蛇が、3m前をニョロニョロと横切っていた。

『黒い奴、毒無いから大丈夫だよ』と意識して笑顔で言った。
「じぇ〜〜〜ったい、無理!」と叫んで私に飛びついた。
『仕方ないな〜、怖がりシオン』と言って屈んで背中を示した、シオンが私の背中に飛び乗った。

私が立って、シオンにシートが入った袋を持たせた。
『シオン、お尻に手が当たるからね』と優しく後のシオンに言った。
「どこ触ってもいいから、絶対に落とさないでね」と叫んで、震えていた。
私は後ろに両手を回し、シオンのお尻を支えた、その柔らかさに少し焦った。
蛇はゆっくりと横切っている、私は蛇を跨いで車に向かった。
私はシオンのお尻の感触と、背中で潰れる胸の感触にニヤニヤしながら歩いていた。

車に着いて屈むと、シオンが素早く降りて、素早く車に乗った。
私も助手席に乗り、笑顔でホッとしているシオンを見た。
『シオン、そんなに蛇が怖いの？』とニヤで言った。
「足が無いのは絶対無理、足がいっぱいも無理だけど」とウルで言った。
「先生は何が怖いの？」とシオンが慎重に運転しながら聞いた。
『オ・ン・ナ』とニヤニヤで言った。
「それは、怖そうだね～」と前を見たまま、顔を色んな表情に変えていた。
『何してるのかな～、可愛いシオン』と突っ込んでみた。
「カスミちゃんのあの顔が、出来ないんだもん」とまだ顔を動かしていた。
『不敵がしたいのか～、頑張れシオン』と楽しくて笑っていた。

「先生の特別な場所はどこ？」と国道に出て、余裕が出来たシオンが言った。
『若草公園のベンチ』と微笑んだ。
「どのへんの、ベンチ？」とシオンが前を見ながら真顔で言った。
『教会の前のやつ』とシオンを見ながら言った。
「蘭ちゃんと一緒なんだね」と前を見て微笑んだ。

『えっ！・・・そうなの？』と驚いて聞き返した。
「うん、理由は知らないけど、前言ってたよ・・先生も知らないんだ～」と微笑んだ。
《やっぱり出会いの日の事知りたいな～》と思っていた。
シオンがトイレに行きたかったのか、ドライブインに寄った。

お土産を何気に見ていたら、地球儀があった、日本から回してニューヨークを探した。
《近いね、リンダ・・近いよね》と心で囁いた。
「先生、アイス食べようよ～」とシオンが呼んだ。
2人でソフトクリームを食べながら、遥か霧島山脈を見ていた。
「雲は乗れないよね～、シオン・・飛行機怖いな～」とシオンが空を見て呟いた。
『鉄が飛ぶかって、感じ？』とニヤで言ったみた。
「違うよ、羽がパタパタしないのに、飛ぶかって感じ」と私を真顔で見た。
『そうだよね～、でもねシオン、あれはパタパタしてるんだよ、人の目には早すぎて見えないだけだよ』と安心させる嘘をついた。
「えっ、そうなの～、良かった～これでどこでも行ける」と空を見上げていた、可愛い横顔を見ていた。
4年後この嘘の事で、かなり怒られるのも知らずに。

橘通りに着いたのが、4時を少し過ぎていた、屈んで運転席のシオンに手を振って別れた。
蘭に終わる時間を聞こうと靴屋に行こうと思って立ち止まった。
ユリカのビルを見上げてからしよう、そう思い向きを変えた。
ユリカのビルの下で、上を見上げていると声をかけられた。
「蘭が駄目な時は、シオンちゃんなんだね～」とユリカの声がした。
私が声のした方を見ると、ユリカが立っていた。
爽やかニヤを出していた。

『だって、ユリカは意地悪するもん』とニヤで返した。
「唇奪ったくせに」と爽やかニヤにヤで来た。
『ユリカ帰るの？』とバッグを持ってる、ユリカにウルで聞いた。
「そうよ、今からすぐ帰る」とプイをした。
『プイしないでね、ユリカ・・プイは駄目だよ』とウルウルで返した。
「仕方ないね、お茶でも飲もうかな・・ス・イ・ソ・ウで」と言って腕を組んできた。
『ユリカ、もう俺、大丈夫って知ってるくせに～』と水槽を目指した。

店に入って、ユリカが先を歩いて、リンダの座ってた所に座った。
私はウルウルで向かいに座った。
「私は、カフィーね・・アイスのカフィーよ」と爽やかニヤニヤ攻撃で来た。
『ユリカは本当に負けず嫌いだね～、そんなに意地悪ポイント欲しいの？』とニヤで返した。
「うん、きゃしゅみには負けたくないのよ」と可愛く笑った。

「ミサキね～、それは分らないよね～、いるか岬の話じゃ」と爽やかニヤで言った。
『こじつけだったでしょ、でも満足したよ』と笑顔で返した。
「うん、良い名前だよ、ユリ・ナギサ・ミサキで、マミは喜び3倍だったよ」
「でも第一候補は何だったの、有ったんでしょ？」と鋭く来た。
『大ママに頼まれた時はね、でも使えなくなったんだよ』と真顔で返した。
「何なの～？」と興味津々の顔で見た。
『もう、消去したから理由は言わないよ、ホノカ』と笑顔で言った。
「あ～そうなんだ、でもミサキで正解よ」と爽やかに笑った。

『ユリカ凄いと思ったよ、詩音』と笑顔で言った。
「うん、ありがとう・・昨夜も聞いたけどね」と楽しそうに笑った。

『ユリカは運命って信じてるの？』と聞いてみた、興味があったユリカの答えに。
「探りを入れるのね、良い事は運命と思って、駄目な事は思わない」と笑顔で答えた。
『ユリカ嘘つくなよ～、眉毛』とニヤで言った。
「自分で気付かない、レベルなんだけど」と爽やかテレを出した。
「最近までは信じなかったよ、今は確かにあると思ってるよ」と真顔で答えた。
『そうだよね、考え方は変るんだよね』と笑顔で返した。
「１つ教えてあげようか、あなたが運命を受入れない訳」と真顔の深海の瞳で言った、私は緊張して頷いた。

「あなたの交友関係が、その年齢で恐ろしいほど広いからよ。
もちろん良い事だと思ってるよ。
でもそれだけ広いと、運命を受入れていたらもたないのよ、あなた自身が。
だから拒否していたのよ、知らぬまにね」

美しい真顔のまま言って、最後に微笑んだ。
私は痛い所を突かれた、まさにそうだと思っていた。
「聞きなさい蘭の話しを、そうして自分で感じるしかないでしょ」と微笑んだ。
『そうだね、そうするよ』と笑顔で返した。
「そこから始めないと、永遠に迷宮入りよ」と意味深に微笑んだ。
『繋がるんだね、何かが？』と聞いてみた。
「それはあなたが感じる事だから、私はまだまだ、あなたの側にいるからね」と爽やかに微笑んだ。

『うん、ユリカお願いね、ユリカが必要なんだよ』と真剣に言った。
「それだけ完璧に同調で言われると、仕方ないのよね～」と爽やかに微笑んだ。
私は嬉しくて、笑顔で返していた。

ユリカのその後を記しておこう。
迷いに迷ったが、書かなければ成立しない。
ユリカの街を出た真実、あの当時、皆が知りたがった真実を。
そうしないとこの物語は、本当の意味での完結に進まない、それは失礼な事だから。
稚拙な私の文章をここまで読んでくれた、皆様に失礼な事であると思うので記します。

これ以降ユリカは私に執着します、厳しい試験をしたり、会話もかなり徹底的に鍛えられる。
その背景を聞くのはユリカが街を出る、約1ヶ月前だった。
寒い11月の下旬、ユリカの手料理の夕食に誘われた。
久しぶりの手料理で、高3の私はニコニコ顔で出かけた、ユリカのマンションに。

『ユリカ、どうしたの？良い事あったんだね？』と暢気に微笑んでビールを飲んでいた。
「あったよ～、大事な話しがあるから、食事が済んでからね」と爽やかに微笑んだ。
33歳のユリカ、その若さは全く衰えずに、20代前半で充分通用する容姿だった。
私は違和感のあるユリカの笑顔に、少し緊張して食事をした。
食事が終わり、リビングでワインを飲みながら、照明を暗くして大淀川の流れを見ていた。

「大事な話しがあるから、横に座って」その声のトーンは、今までに聞いた事が無かった。
『ユリカ、俺は覚悟が必要な話なんだね』と静かにユリカの深い目を見て言った。
「そうだよ、覚悟をして・・聞いて欲しい」と深い深海の瞳で静かに言った。
私はソファーに座るユリカの横に座った、5年以上も座り続けたユリカの横に。
私はユリカの手を握って、ユリカを見て真顔で頷いた。

「あの、5年前の夏・・あなたがリンダに出合ったあの日。
その日に決めていたの、ごめんね今まで隠していて。
あのリンダ試験の前夜、四季が来た時に、美冬ちゃんに条件を出したの。
私が先にリンダと1対1で話させて欲しいと、そして会ったのよ8時に店でリンダと。
衝撃だった、本当に衝撃だったの、そして感じた運命をね。
リンダと話した第一声で、私は意識して出さないようにしてたのに、出てしまったの。
強い揺り篭が、英会話だから制御が利かなくて、リンダを乗せたの強い揺り篭に。
あなたに説明は必要ないよね。
そして私は見たの、常人を遥かに越えたリンダの悲しみを。
リンダが落ち着いた時に私に言ったのよ。
「私を助けて、お願いだから側にいて助けて欲しいと」懇願されたのよ。
「時期はいつでもいいから、いつか必ず来てくれると約束が欲しい」
そうリンダに泣かれたの、私は嬉しかった、私も生きる意味を見つけたから。

私の個性の意味を見つけたから、リンダをサポートする事で。
そしてこう言ったの、リンダに。

あなたが今から試験をする相手をキチンと見て、そして判断して。
彼が私の今考える事を、背負っているから、最大の愛情で接して
いるから。
私の気持ちを解放した彼を、心に何も持たずに見て。
リンダの気持ちも私には分るから、それで判断させて。

そう言って、試験に臨ませたのよ、そして結果は１００点だった。
あなたもそして、リンダも。
私はリンダに7年以内と約束をしたの、アメリカ国籍までリンダ
は用意している。
今5年だけど、リンダの状況が変ってる、理由無き中傷に晒され
ているの。
アメリカの国を動かしている、妖怪達の逆鱗に触れたのよ・・リ
ンダ。
リンダは一時地下に潜らないといけない、もう私も行かなければ
いけないの。
それが私の産まれた意味だと思うから、リンダを影で助ける。
私の個性はリンダの目指す【平和】の為に使いたい。
そしてリンダだけは守らないといけない、【希望】だから。
私は7年・・あなたが花火大会の翌日・・蘭にプロポーズするま
で見たかったの。
私の【夢】だから、そこまでは全力で、あなたを愛そうと思って
たの。
ごめんね、でも感じるから・・2年後必ず感じるからね。
もうあなたは私がいなくても大丈夫よ、愛する蘭がいるでしょ。
見てやらないといけない、女性達もいるでしょ。
だから・・・ごめんね・・・国を出るね」

私は何も言えなかった、ユリカの気持ちが入って来たから。
その後リンダは表に出てこない、当然ユリカも姿を見せない。
リンダは莫大な財産と共に消えた、ユリカを連れて。
活動はその後も続けただろう、表には出ない形で。
リンダの強い意志と、ユリカのサポートがあれば、成果は出ただろう。
リンダのニューヨークの家は、今でも管理されている。
リンダとユリカが戻る為の準備は、常にしてあるのだ。
ユリカとこの時に交わした３０年の約束、誰にも言わなかったよ、ユリカ。
そしてごめんね・・・マリア。
これが私の日記と記憶に残る真実です。
言えなかったんだよ、マリア・・君が7歳で別れた、ユリカを追い求めるから。
透明の女神、ユリカの幻影を追ってしまうから。
それだけは、ユリカが絶対にさせるなと言ったから。
マリアこそ・・希望だと言ったから。
今どこにいるの、マリア・・・読んでるのは分ってるよ。
戦い続けてるのは分ってるよ、それがユリカがマリアに残したもの

だからね。

一度帰って、顔を見せてね・・・逢いたいよ、マリア。

ユリカの【希望】、リンダの【夢】・・マリア。

ユリカは今も生きている、それだけは確信している。

断崖が取囲む絶海に清く咲く花・・百合香

完全で完璧な唯一の者・・透明な女神

羊水の揺り篭・・そこに響いた子守唄・・もう一度。

もう一度・・聞かせて・・お願いだから。

もう一度、もう一度でいいから聞かせて・・・永遠に愛する人・・

水のユリカ。

宣戦布告

様々な思い出の残る、水槽に囲まれた店内、その水槽の数に圧倒される。
ドアが動く度に金属音のベルが響く、水槽と、どこか不釣合いのジャズが流れる。
私の向いには爽やかな笑顔の、透明の女神が座っていた。

「リョウの事も、白い弾丸が、かなり入ってるね」とユリカが爽やかニヤで言った。
『シオンに、瀕死の重傷を負わされたよ』とウルで返した。
「でも、回復するのもシオンちゃんだから、いいじゃない」と爽やかニヤで返された。
『ねえユリカ、シオンの覚醒ってどんな感じの現象？』と聞いてみた。
「まだ、気付いてないのね、まだまだですね～・・ボ～ヤ」と最強爽やかニヤで来た。
『迫ってきたね、ユリカ・・きゃしゅみに』とニッで返した。
「シオンちゃんはあなたにしか分らないよ、あなたにしか心を開いてないから」と真顔になった。
『男でって、事でしょ？』と真顔で返した。
「そう、ナギサの時も言ったけど、同性は分らないのよ内の内まではね」と微笑んだ。
『確かに、俺もジンは分らないね、何も見えない』と真顔継続で返した、ユリカは微笑んで頷いた。

『ユリカは同性でも分る時があるよね、波動とか？』と感じた疑問を、率直に聞いた。
「あなたが絡むか、興味を持ってる女性だけよ」と爽やかニヤで返

された。
『じゃあ俺も、蘭が興味を持った男には、何か感じるんだね』と微笑んだ。
「それは無理ね、あなたが逆上して・・最後は号泣するから」と最強爽やかニヤで来た。
『そうかも・・自信無し』と正直に答えた。
「蘭は絶対にそんな事にならないよ、もしなったら即諦めなさい、相手に本気だから」とニヤ継続できた。
『その時は、ユリカの胸で泣かせて』とウルウルで返した。
「どうしてそれも本音なの、シオンちゃんの事も本音だったのに」と真顔で返してきた。
『ユリカが好きだもん、愛してるもん』とウル継続で返した。
「可愛くない！どういう神経構造してるのかしら、浮気性は間違えないね」と笑顔で睨んだ。
『俺はいつか自分に答えを出すよ、そのために今必死でやってるんだから』と真顔で答えた。
「うん、頑張ってね」と爽やかに微笑んだ。
ユリカの瞳の微妙な変化を感じていた、どこか愛情表現が強くなった気がしていた。
ユリカの爽やかな笑顔に、笑顔で頷いて、深海の瞳を見ていた。
店を出て、ユリカに手を振って別れた。

靴屋を覗くと蘭と目が合った、満開で微笑んでサインを出した。
【3】【0】【PG】と出した、私は笑顔で頷いた。
PG誰かいるのかな～と思いながら、裏階段から行くと裏ドアが開いた。
TVルームは誰も居なかった。
フロアーに向かうと、ピアノの音がしてきた。
久美子が一人でピアノを弾いていた。
『久美子駄目じゃないか～、ロックしないと』と笑顔で睨んだ。

「あっ、忘れてた、私可愛いから危険だった～」と可愛いニヤできた。
『こら、冗談じゃないよ、気を付けなさい、久美子に何かあったら、俺が辛いだろ』と久美子の頭に手を置いて真顔で言った。
「ごめんなさ～い」と久美子が舌を出した。

『よし、練習はじめ・・俺が厳しくチェックするから、間違えるなよ』と言って6番に座った。
「いらっしゃいませ～、久美子と申します、よろしくお願いします」と久美子が頭を下げた。
『おっ久美子ちゃんっていうの、可愛いね～、ま～ちこうよんなさい』と中年オヤジバージョンにした。
「お客様、初めてですか？」と笑顔で言った。
『おう、ここは初めてなんじゃよ～、次からは久美子ちゃんを指名するね』といやらしい感じで言った。
「久美子、うれし～」とウルウルで言った。
『で、く～みこちゃ～んの趣味は何なんだい？』と舐め回す感じで言った。
「ピアノを少々嗜みます」とグラスを出す感じのモーションで言った。
『それはいいね～、クラッシックかな？』といやらし二ヤで手を握った。
「はい、でも最近はジャズも少々」と少し体を密着させながら言った。
《むむ、やるな久美子、研究してるな》と思っていた。
『ジャズはいいよね～、ところで久美子ちゃんは彼氏いるのかな～』と最強いやらしニヤを出した。
「私なんて、誰も相手にしてくれませんよ～」と私の肩を平手で叩いた。
『そうなの～、寂しいね～、アフターしようか～』とニヤニヤで誘

ってみた。
「駄目です～、お子ちゃまはお断りなので～す」とニヤで言って離れた、ウルウルで返した。

「はい、練習終了・・どうだった？」と可愛い笑顔で言った。
『今日、皆・・意地悪する』とウルウルで言った。
「ヨチヨチ・・蘭姉さん待ってるの？」と微笑んだ。
『うん、もうすぐ来るよ』と笑顔で返した。
「ねえ、ダンスのステップ覚えてる？」と久美子が聞いた。
『基本的なのならね』と笑顔で返した、久美子が微笑んで立ち上がって手を出した。
私も笑顔で立って、手を繋いだ。

フロアーのセンターにに出て、久美子の腕を取り型を作った。
『左からだよ、こうで、こうで・・・・』と踏み込む順番を教え、久美子が頷いた。
『行くよ・・・ワン・トー・スリー・・・』と踊ってみた、徐々にスムーズになってきた。
久美子が笑顔になって、私も楽しくなって、2人で踊っていた。

「私が見たことも、聞いた事もない事してる～」と蘭が満開ウルウルをしていた。
「蘭姉さん、やってみますか？伴奏しますよ」と久美子が言った。
蘭が満開笑顔になって何度も頷いた、私は蘭にも久美子同様教えた踊った。
蘭は嬉しそうな満開笑顔で踊っていた、私も嬉しくて笑顔で踊った。
まだ練習をすると言う久美子と、裏ドアでさよならして、ロックの音を聞いて裏階段から通りに出た。
「ダンス楽しいね～、習いにいこうね～いつか」と蘭はご機嫌にな

って腕を組んできた。
『うん、いこうね～』と笑顔で返した。
「晩ご飯どうしようか～？」とご機嫌継続で、蘭が聞いた。
『蘭、疲れたろ、俺のボーナスでご馳走しましょう』と笑顔で言った。
「素敵～、フランスかい？」と満開ニヤで聞いた。
『居酒屋で』とウルで返した。

可愛い感じの居酒屋に、蘭が誘った、ご機嫌だった。
居酒屋は店内もメルヘンチックで、小さな個室に通された。
注文を聞く前に、生ビールが2杯運ばれた。
「お店からサービスです、エースに」と若いバイトらしい女性が微笑んだ。
『ありがとう、お礼言っといて下さい』と笑顔で頭を下げた。
蘭は生ビールを嬉しそうに見ていた、もう飲む決心が出来た顔だった。
『りゃん、車は？』とニヤで聞いた。
「明日、バスで行くから・・よし、乾杯しよ」と言ってグラスを持った、私も持ってグラスを合わせた。

料理も揃いだし、蘭は2杯目に突入して、ご機嫌も最高潮になっていた。
「美味しいな～、休みの日のビールは」と3杯目を頼んだ、少し目の周りが赤くなった。
『蘭、絶好調だね、可愛くなってるよ』と笑顔で言った。
「常に可愛いよ」とカスミの真似をして、不敵を出した。
《あまり酔っても、話は聞けないよな～、りゃんになったら無理だ》と思っていた。
『しかし昨日の3人組は面白かったよ、奇跡だって、同世代でリアンが3人揃ったって言ってたよ』と笑顔で言った。

「うん、ユリさんから聞いたよ、凄いらしいねリョウも」と満開で微笑んだ。
『うん、凄いよ、でも少し引っ張ってやらないといけないけど』と上目使いで言ってみた。
「頑張ってね、お礼は断るように」と笑顔で睨んだ、真顔で頷いた。

「Zも手に入れたらしいね～」と満開ニヤできた。
『今回は、棚から牡丹餅だけどね、俺に伝えようと話して、吹っ切れたみたい』と微笑んだ。
「シオンは、どんな感じなの？」と真顔で聞いた。
『PGで働きたくなって少し前向き、でもトラウマ強いから時間をかけるよ』と笑顔で返した。
「頼むね、シオンは可愛いんだよ、五天女も私も」と満開で言った。
『うん、それは感じた、可愛いよシオンは』と笑顔継続で言った。
「私も・・覚悟しようかな～」と満開ニヤできた。
『蘭、それはなし、蘭が覚悟したら・・俺、暴走するよ』とニヤで言った。
「そうなんだ～」とニヤニヤで返された。
『ニヤニヤはやめなさい、酔ってるし・・怖いから』と笑顔で睨んだ、蘭はニヤニヤ継続中だった。

「うん、もう大丈夫だね、1つだけ言っとくね・・酔うまえに」蘭が深い目になった。
私は真顔になり、青い炎が来ると思って、真剣な目で頷いた。

「私は今も、これからも、何に対してもこだわらない。
唯一あなたにだけ、こだわるよ・・ずっと、永遠に。
だから、時期が来たら早目に教えて、準備するからね。
そして、見せるね・・2年前の新聞の切り抜き、いつも財布に入れてたの」

そう言って、テーブルに古い新聞の小さな切抜きを出した、私はそれを見て固まった。
リンダが笑顔で写っていた、少し少女の香りの強いリンダが。

「新聞を何気に見てて、リンダのプロフィールに目が止まったの。
１９○○年7月7日、私と全く同じ生年月日だったから、そして記事を読んだの。
記事は大切に保管してるよ、私は感動したのよ、同じ生年月日の女の生き方に。
そして、救ってくれた・・後悔ばかりしてた私の心を。
何してるんだって、私は今何してるって・・リンダに言われた気がした。
そして、その月から、始まるの・・私のＮＯ１の季節が。
リンダに負けないように生きようと思ったの、生年月日が同じ女に負けないように。
あの日あなたが連れてきた時、似てるな～って思った。
そしてリンダって名前を言ったとき、本当に心が躍ったのよ、泣きそうだった。
どんなに嬉しかったか、言葉には出来ない、あなたが連れて来たから。
そして夕方、四季の話を聞いて、凄く嬉しかったよ・・そして感じた。
運命を・・感じたよ・・繋がった、若草公園のベンチから・・リンダまで。
私は弟の事故の知らせを聞いて、走って靴屋を飛び出して駅に向かったの。
でも若草通りで、心の限界が来て、動けなくなって座る所を探したの。
辛くて・・辛くて・・どうしようも無かった・・・」

そこまで言って蘭は俯いた、震えていた、私は蘭の横に座って手を握った。
『蘭、一気に話さなくていいよ・・帰ろうね、2人の場所に』と静かに言って、手を握っていた。
蘭は静かに頷いて、私を潤む瞳で見て・・満開で笑った。
「帰って、添い寝して聞いて・・それなら辛くないから」と抱きついた、私は強く抱きしめていた。
会計を済ませ、蘭と手を繋いでタクシーに乗った。
蘭は私の肩に乗り、目を閉じていた、蘭の香りと吐息だけの世界に入った。
《出逢った意味・・運命・・あるのかもしれない》そう思っていた。
アパートに着き、蘭を抱き上げた、満開で笑っていた。
部屋に入り、先に蘭にシャワーを浴びさせて、私は待っていた、映像が出ていたから。

私にはリンダとの最初から最後までの場面が、薄い映像で流れていた。
私は必死にリンダの言葉を暗記した、しかし明瞭でない部分が多すぎて諦めた。
シオンに出来るだけ会おう、そして英会話を習おう。
ユリかも出来るみたいだし、美冬もいるから出来るだけ英語に触れよう。
そう思って、映像を切った、停止の制御が出来初めていた。
突然現れるのは、まだ制御できていなかった。
蘭がパジャマで戻ってきて、私もシャワーを浴びて、少しでも蘭の笑顔が見たくて。
蘭の赤いジャージを穿いて、部屋に戻った、蘭は満開で笑った。
私がベッドにもたれて座ると、蘭が隣に密着して座って、ビールを飲んでいた。

美しい蘭の素顔の横顔を見ていた、辛さの影は無かった。
《蘭は完全に乗り越えている、蘭はどこにでも行く・・心が指せば、絶対に心に従う人間だから》と感じていた。

「私の美しさに、今でも見惚れるんだね～」と私を見た、至近距離の蘭に微笑んで頷いた。
『やっぱり、この時間が何よりも大切だよ、蘭が素顔で側にいる、2人の時間が』と囁いた、蘭も満開で微笑んで頷いた。
「目は閉じないよ、そんなに簡単に、蘭様の唇は奪えないよ・・浅くても」とカスミ不敵を出した。
『きゃちゅみ不敵は、怖い』よウルウルで返した、蘭は不敵継続で微笑んだ。
そしてビールを飲み干して、ベッドに入った。
私は電気を消して、カーテンも閉めたまま、真暗な状態にして手探りで、蘭を腕枕の中に入れた。

『蘭・・蘭の時間で良いよ、蘭のタイミングで良いよ・・話すのは。
蘭が1つは乗り越えたのが、今夜確信できたから。
俺は嬉しいよ、そして・・俺達には時間があるからね。
今日シオンと話して思った、もちろん俺は心では、リンダの助けがしたい。
リンダもそう思ってくれた気がする、でも今じゃない、俺が足りない。
経験が絶対的に足りないよね、だからリンダは・・今は誘いに来ない。
リンダね、蘭と旅をしたいって思ったらしいよ、一瞬でね。
青い炎を見ていたんだね、リンダ・・蘭を見ただけで気付いたんだね。
また何度も来るよリンダ、まだシオンにもマリアにさえ会っていないから。

そして・・『

《私はここで感じた、一瞬閃光が走った、ユリカがリンダには1番必要じゃんないのか》そう漠然と思った。

『そして、ユリカとも話してないみたいだし。
だからね、蘭・・急がなくて良いよ。
俺達はどんな事があっても、一緒にいるんだから』

蘭に優しく囁いて、少し強く抱きしめた。

「うん、ありがとう・・嬉しいよ。
常に私を1番に想ってくれる事が、靴屋休みの前の日に、添い寝で話すね。
乗り越えたけど・・泣くから・・泣き虫だからね。
私はシオンと違うから、覚悟なんていらないんだよ。
とっくの昔に出来てるよ、いつでも良いよ。
でもあなたは自分にも、そして私にも・・嘘はつかないと信じている。
だから、欲求に負けたりしないよね、だから寂しい時は言ってね・・添い寝するから。
私は毎朝言うけど、本当に幸せだよ・・愛する人に出会えたから」

静かに蘭が言った、私は嬉しくて、微かに震えていた。

『ありがとう、蘭・・心にクサビまで打ってくれて』と蘭に微笑んだ。
「その代わり、外してあげたでしょ、浅いキスなら月光は必要ないって」そう微笑んで瞳を閉じた。
最高の時を私は味わった、かなり長い時間唇を重ねていた、青い炎

に包まれながら。
唇を離したら、何も話さなかった、照れ屋の蘭が眠りに落ちるのを感じていた。
《自分のベストを尽くそう、それしか出来ないから、運命なら逆らわずに進もう》そう思っていた。
蘭の額にキスをして、幸せなまま眠りに落ちた。

私は、ユリカの事を感じた閃光は、日記にも書いているし、記憶にも残っている。
しかし私は、その後追求をしていない、私にとってユリカは完璧な人間だったから。
ユリカが、リンダにとって自分が必要だと感じたとしたら。
絶対にユリカはあの時に、リンダに会うはずだと思っていた。
だから気付かなかった、その後ユリカとリンダが話している時も、感じなかった。
ユリカは必死に隠したんだろう、私に悟られないように。
私はそれを感じたときに、号泣した・・ユリカにそこまで愛されていた事が嬉しくて。

蘭の出した、新聞記事のリンダを見た時に、私は【運命】を感じた。
そして、こう思った。
原作者がいる、そう感じていた・・・人生の原作者が。
しかし、こうも考えた。
その原作者は、私の行動や経験を見て、その後を書くのでないかと。
その原作者と私が互いに納得できる、そんな生き方をしようと思っていた。
翌日の日記に、私はこう書いている。

【宣戦布告
拝啓　原作者殿

楽しんで書いていますか？
俺は見つけましたよ、あなたの存在を。
勝負しましょう、それが俺の生き方だから。
俺は全ての経験を使って、策略を練ります。
あなたの想像力と闘いますよ、そして必ず俺が勝つ。
それがあなたの、唯一の望みだと感じたから。
俺が必ず勝つよ・・最後に笑う・・俺が。
心して全力できなさい・・そうでないと楽しめないから。
人生と言われる、難解な試験は】

多分これを書いたときが、私は次の段階に足を伸ばしたのだろう。
私は脱皮を繰り返し、人の何倍も時間をかけて、回り道をして・・
サナギになろうとしていた。
そして自分でも感じていく、自分の変化を。
蘭という生きる意味を得て、迷いが消えていく。
朝霧が晴れていくように・・霧が隠していた・・ブルーの湖が見えてくるように。
夏物語は熱く加速していく、運命などに負けれないと全員が叫ぶ。
私は心の中で常に叫ぶようになる、一日何度も。

《想像力が足りないね～》と笑顔で心に叫ぶ。

原作者に届くように・・・ユリカに届くように・・今、現在でも。
前話で、ユリカのその後を書いて、私は少し感情的になっていた。
やはりユリカは、特別な存在の中の特別だった。
5年のユリカとの関係の中で、私は8回、ユリカと添い寝をしている。

素晴らしかった、揺り篭に揺られて眠った。

ユリカの香りと、子守唄の寝息に包まれて。

私の１冊目の、１０年日記の中で、唯一５年で消えた特別な存在。

だが心の中には常に棲んでいる、透明の女神が。

マリア、連絡ありがとう・・嬉しかったよ。

だから教えてあげるね、マリアの質問・・ユリカがなぜ生きてると思うのか？

マリア・・俺には今でも感じるんだよ・・ずっと想い続けてきたから。

ユリカの・・暖かい波動がね・・だから淋しくないんだよ。

心の描写

最高の闇が全てを包んでいた、恐怖など、どこにも存在しない。
寝息が聞こえるから、最愛の人の安らかな寝息が響いているから。
朝は必ず来る、どんな暗黒の闇であっても。

翌朝、最高の気分で目覚めた、どうしてそうなったのか分らない。
蘭の唇が私の唇に触れていた、蘭は完全に眠っている。
私は嬉しくて暫く動かずに、目だけでニヤニヤしていた。
意を決して、腕を静かに抜き、蘭を枕に戻して洗面所に向かった。
歯を磨き、Tシャツを脱いで、体のチェックをした。
《最近さばってるな～、腕だけ使ってる、気を付けよう》と自分で言って確認した。
顔を洗い、キッチンに行って、トーストを焼いて、考えた。
キャベツを千切りにして、スクランブルエッグを作り、ハムを出した。
マヨネーズとマスタードをパンに塗り、ホットサンドを作った。
斜めに切り、三角形のホットサンドを見て、上出来な仕上がりに、ニヤニヤしていた。

「おはよ～、今朝も幸せ～・・でも思春期が朝からニヤニヤは怖いぞ」と満開で睨まれた。
『昨日、告白されたから・・ニヤニヤが止まらない』とニヤで返した。
「良い夢見たんだね～、もう朝だよ～早く起きなさい」とニヤを出しながら洗面所に消えた。

蘭が戻ってきて、朝食を見て、最高の満開で笑った。
「上出来じゃない、朝からニヤニヤするわけだね～」と満開のまま

座って食べはじめた。
私も上出来な味に、笑顔で食べていた。
『蘭、１つだけ教えて、どうしてもイメージ出来ないの、蘭が徳野さんと揉めて、職場放棄するのが』と意識して笑顔で言った。
「兄が来たのよＰＧに、兄との関係はその時話すけど、徳野さんがどうしても付けって言ったから、放棄したの」と真顔で言った。
『ごめんね、朝から変な事聞いて』と真顔で返した。
「全然、今まで聞かないのが、不思議なくらいだよ」と満開で微笑んだ、私も笑顔で返した。
私は【兄】の存在が、初めて意識させられた。
蘭の家族構成は、弟の話が有ったから、私が自分でタブーにしていた。

『シオンが可愛いの、カスミの不敵が出来なくて、必死に練習してたよ』と話題を明るいのに変えた。
「シオンちゃんの不敵、見てみたいね～、さぞ可愛いだろうね」と満開で返してきた。
『絶対出来ないよ、シオンの心には、不敵の意味すらないから』と笑顔で言った、蘭も満開で頷いた。
蘭を見送り、朝の仕事をして、腹筋と腕立てをして日記を書いた。
宣戦布告を最後に書いて、カスミ不敵を出して笑って閉じた。
バスに乗り出かけて、若草通りで可愛いカスミに手を振って、靴屋で蘭に手を振って、ユリカの店に行った。

合鍵で開けて奥に進んで固まった、ユリカがいなかった。
窓際に立って、ユリカが来るのをウルして見ていた。
「淋しいんだ～、可愛いユリカちゃんがいないと～」とニヤしながら、カウンターの奥からユリカが出てきた。
『昨日からユリカ変、意地悪ばかりする』とウルウルで言った。
「ごめんね、自分の変化に慣れてないのよ」と言って、私の首に腕

を巻いた。
私はユリカを抱き上げて、可愛い爽やか笑顔を見ていた。
『ユリカでも、進化するんだね・・まだ上に行くのか～』と微笑んだ。
「あなたに沢山伝えたいから、私も登るのよ・・泣いて良いよ」と爽やかに微笑んだ。
『揺り篭、揺れてないから・・泣かないよ』とニヤで返した。

「リョウはどうするの、作戦は？」とユリカが微笑んだ。
『一気に行くよ、だってリョウは自分で出たがってる、あそこまで来てるんだから』と笑顔で返した。
「正解、もう心配ないね・・イメージに踊らされたら駄目よ」と真顔で言った。
『うん、反省したよ・・シオンのおかげで』と微笑んで返した。
「私、今日はお友達のお付き合いで、１１時から展示会に行くの・・ごめんね」とユリカが言った。
『しょうがないな～、１１時まで抱っこするかな』と笑顔で返した、ユリカが爽やか笑顔で頷いた。
ユリカが瞳を閉じて、少しして寝息を感じた、私はＢＯＸのソファーに抱いたまま座った。
何も考えずに、ユリカの顔を見て、ユリカの香りを楽しんだいた。
１０時４０分にユリカを起こして、通りを腕を組んで歩いて、橘通りで別れた。

私はＰＧに向きを変えて、歩いていた、快晴の夏日だった。
夜街に入った所で気付いて、ピーチを確認に行くことにした。
街外れのソープ街の裏手の、大きなビルにピーチはあった。
《なんかいやらしい雰囲気が、プンプンだな》とニヤして、背中を向けた。
通りの角で、可愛いシオンが手を振っていた。

私は嬉しくて駆け出して、シオンに笑顔で近づいた。
『何してるの、可愛いシオンちゃん』と笑顔で言った。
「先生に話しがあって、ユリカちゃん所に行こうと思ってたの」と腕を組みながら、可愛く笑った。
『難しい話かな？』と微笑んでみた。
「ご相談」と可愛く笑った。
『じゃあ、お魚でも見に行こうか』と笑顔で言った。
「うれし～」と笑って腕に力を込めて、胸を押し付けた。
《シオンの方が罪深いな、カスミやリアンの胸は最近普通だけど、シオンのは意識するな～》と思いながら、ニコちゃんシオンと歩いた。

シオンが先に店に入り、ニコちゃんで水槽を見ながら、リンダ・ユリカと同じ席に座った。
『シオン、意地悪した』とウルで言った。
「へへ～、リンダ、カフィー・・アイスプリーズ」と可愛く笑った。
『意地悪3点・・シオン、トップ候補になってきたね』とニヤで言った。
「えへ・・・良いのお話しして？」とニコちゃんのまま言った。
『もちろん、どうぞ・・詩音の流れで話してね』と微笑んだ。
「シオンね、昨日の夜ね、リンダちゃんの言葉、分るだけ書いてみたの」と可愛く笑った。
『シオンは映画を見たときの、リンダの話覚えてるの？』と笑顔を意識して聞いた。
「うん、シオン小さい時から、自分の好きな事は、全部覚えられるのです」と少し威張った。
『凄いね～、今好きなのは、リンダなんだね』と微笑んで返した。
「もう、本当に女心が分らないのね・・先生が好きなんでしょ！」と頬を膨らませた。

『ごめんねシオン、でも先生も、シオンが大好きだよ』と言いながら頬を優しく押した。
「プシュー」と言いながら、シオンは嬉しそうに笑った、私も嬉しくて笑顔だった。

「それでね、シオン頑張ろうと思ったの。
シオン、早くは出来ないけど、感じたら少し早くなるんじゃないかって。
先生がシオンに出来るって言ってくれたのが、心にど～んだった。
そして、先生の大好きなリンダちゃんが言った、鍵が私も見たいの。
シオンも子供の頃から、鍵を探してきたから、皆と同じになれる部屋の鍵を。
でも先生が反対側の部屋を開けてくれて、こっちでも良いって言ってくれたの。
それが心にど～んでね、私・・分かったのユリカちゃんが、私にずっと言ってくれたこと。
シオンの個性の扉を開けてねって、ユリカちゃんが言ってたの。
私はずっと一人のお部屋で遊んでたから、でも先生が遊びに来てくれて。
こっちにも部屋があるよって、鼓動で教えてくれたから。
開けてみたら、その扉には鍵が、かかってなかったの。
それで、そのお部屋に入ったのが、今のシオンになのだ～」

そこまでニコちゃん笑顔で言って、アイスコーヒーを飲んだ。
私は泣きそうだった、嬉しくて嬉しくて、必死に涙を我慢していた、シオンを心配させたくなくて。
自分の思ったシオンのイメージを、シオンがそのまま受けてくれて。
その豊な表現方法で伝えてくれて、より具体的なイメージに出会ったので、感動していた。

「そして先生の宿題、お友達作るの・・ＰＧで。
仲間になりたいから、あの皆で一緒にがんばる所に、シオンもいつか入りたいから。
だからね、先生・・私、先生の指定席のお隣に、シオンの席が欲しいの。
絶対邪魔はしないから、ＰＧに・・ユリち・・ユリさんに迷惑かけないから。
先生と一緒なら、お友達出来るから・・お願いしたいの・・詩音」

シオンの真顔を見ていた、その瞳の変化に驚きながら。
嬉しかった、表現できないほど嬉しかった、その変化が。
『よく出来ました、シオン・・よくそこまで考えたね、先生嬉しくて泣きそうだったよ』と微笑んで。
『先生から、マダムとユリさんに頼んでみるから、シオンもちゃんと話すんだよ』と優しく言った。
「うん、リアンも呼んだ方がいいかな？」と考えながら言った。
『シオン、シオンの事１番心配してるのは、リアンでしょ・・大事な事はリアンにも話さないとね』と微笑んだ。
「１時でいいね、電話してくる～」と笑顔で言って、公衆電話に駆けて行った。

シオンがニコちゃんで帰ってきて、そのまま水槽で食事をした。
１時少し前に、ＰＧに着いた、ＴＶルームにはマダムとユリさんと、ハルカ・レンがいた。
リアンも来ていて、マリアは寝ていた。
私はシオンを連れて、向き合って座った。

『マダム、ユリさん、リアン、シオンが話があるから、聞いてあげて下さい。

今、私もシオンの話を聞いて、嬉しかった・・だからシオンの助けがしたい。
それが、私の気持ちです・・シオン、お話しして』
シオンを笑顔で見て、促した。
「突然来て、ごめんなさい、シオン・・やっと進む決心ができました。
今まで、ずっと心の一人の部屋で遊んでたけど、エースが出してくれて。
外の世界も楽しいと教えてくれました、シオンまだまだだからフロアーは無理です。
でもいつかフロアーに立ちたいと思っています、蘭姉さんがいるうちに。
私を助けてくれた、憧れの蘭ちゃんがいるうちに・・シオンの出来るところを見せたい。
だから、お願いですから・・先生の席の隣に、シオンの席を置かせて下さい。
絶対に迷惑はかけません、シオン・・感じれば、少しでも早くなりそうな気がして。
そしてＰＧの皆さんとお友達になりたいんです、仲間になるために。
シオン人より遅いから、そしてお話し下手だから。
でもエースが出来るって言ってくれたから・・見せたいんです。
見せてあげたいんです・・今でも一人の部屋で手招きをしてる、もう一人の私に。
もう私は・・・そこには戻らないと、言ってあげたい」
シオンはマダムとユリさんを見て、キチンと言った、美しい姿だった。

リアンはシオンの隣で俯いて号泣していた、嬉しかったのだろう。
「駄目です・・そんな気持ちじゃ」とユリさんが強く言った、静寂が支配した。
「仕事としてやりなさい、それなら許可しますよ。
シオンちゃんのペースでいいですからね、時間も自由でいいですよ。
でも、お仕事としてしなさい、そうしないと進めません・・前には」
最後は薔薇でシオンに微笑んだ、シオンは最高の可愛い笑顔で。
「がんばります、よろしくお願いします」と言って頭を下げた。
「ユリ姉さん、ありがとう・・本当にありがとうございます」とリアンも泣きながら、頭を下げた。
「シオンちゃん、いつから来ますか？」と薔薇で微笑んだ。
「今からお願いします」と笑顔で言った。
「それでは、来れる日は何時からでも良いですから、終わったらエースがローズに送るように」と薔薇で言った。
「何からやらせるんじゃ？」とマダムが私に笑顔で言った。
『最初は、全員の度肝を抜きますよ・・サインで』とニヤで返した。
「また楽しみが増えました、そして私もフロアーで待ってますね、シオンが扉から現れるのを」とシオンに薔薇で微笑んだ、シオンは本当に嬉しそうに笑顔で頷いた。
「エース・・私はあんたに、どんなお礼をすれば良いのか、もう分んないよ」と言ったリアンに、きつく抱かれた。
私は泣いているリアンを抱きしめながら、炎を見ていた、強まった炎を。
『リアンが、俺の心の支えの言葉を、常に持っていてくれれば・・

俺はそれだけで充分だよ』と笑顔で返して抱いていた。
その時私に衝撃が走る、マリアの声がする。

「シオン、シオン」とマリアが明瞭な言葉で呼んだ、シオンを。
シオンは最高の笑顔で立ち上げり、ベッドに歩み寄って、マリアにニヤをした。
「マリア、いつまで抱っこ言ってるの・・シオンは自分で歩いてるよ」とニヤ継続で言った。
「シオン・・・・・チャー」と私をマリアが見た、最強の天使全開で微笑んだ。
「マリア、無駄な抵抗はやめなさい、もう、甘えん坊、シオンが抱いてあげるから」と言ってシオンがマリアを抱いた。
そして、訳の分らない言葉で、マリアと会話をはじめた。
私は固まって、その不思議な会話を見ていた。
「初めて見たね、最強のコンビを」とリアンが私に獄炎ニカで言った。
「楽しくなりそう〜」とハルカが笑って。
「ハルカ、私は怖いよ・・シオン姉さんがフロアーに出たら、最強な気がする」とレンが微笑んだ。
「レン、あなたも凄いですね、それを感じるのなら・・正解です」と薔薇で微笑んだ。
全員がマリアと会話してるシオンを見ていた、四季が揃わなくなった時に、その代わりになる者を。
シオンの笑顔に、全員が期待をしていた、今までに見た事が無い物を、見せてくれそうで。

『リアン、レンを明日よろしく、厳しくやってね・・もうフロアーレディーなんだから』とレンにニヤをした。
「リアンさん、よろしくお願いします」とレンが慌てて頭を下げた。
「楽しみにしてるよ、レン」とリアンが笑った。レンも笑顔で頷い

た。
『レンは8時の開店からだよ、俺がシオンを送って行くまでね』と微笑んだ。
「了解、エースの顔に、泥は塗らないからね」と可愛く微笑んだ、私も笑顔で頷いた。
『じゃあ、ユリカの店が水曜で、それからハルカが魅宴で・・シオン俺忙しいけど大丈夫だね』とシオンに言った。
「大丈夫だよ、お金を貰う仕事なんだから」と可愛く笑った、私は嬉しくて笑顔で返した。
私の心配など、数時間後には吹き飛ぶのだ、シオンの感性に触れて。
その底知れぬ心のキャパを感じて、容量が圧倒的に違う。
心も頭脳も容量の表示の桁が違った、私などの凡人とは。
フロアーデビュー半年で、ユリカがシオンに贈った称号。
【慈愛の妖精　詩音】その輝きと、癒しが放たれる日も、そう遠くなかった。

「それではハルカ、シオンちゃんにサイン教えて下さい、エースを借ります」とユリさんがハルカに言った。
「ミチルの所に行きましょう、今日まだはあなたが、いて欲しいから」と私に薔薇で微笑んだ。
『了解です・・シオン、ハルカがサイン教えてくれるから、先生も覚えてないから、シオンが覚えて先生に教えてね』とシオンに微笑んだ。
「はい、先生、全部覚えとくね」と可愛く笑った。
『ハルカ、シオンにはサイン全部1回でいいよ、シオンは何も書かないから、よろしく』とハルカにニヤをした。
「了解・・凄く楽しみ～」と可愛く笑った。

ユリさんと通りに出ると、笑顔で腕を組んできた。
『ミチルは棚から牡丹餅でした、実は先日・・・・』ホストクラブ

で、混乱した夜の話をした。

「そうでしたか、あの夜ミチルが戻したんですね。
あなたは、ミチルにも愛されてるのですね、ミチルには辛い話でしたよ。
でもミチルはあなたの顔を見たら、決心すら必要なかったんですから。
タナボタではないですよ、あなたのその前があったからですから。
私は祭りの夜、ミチルの姿を見て、泣きそうになりなした。
乗り越えた姿が、私の想像より上だったから、嬉しかった」

薔薇で私に微笑んだ、本当に美しかった。

ミチルの店に入ると、窓際にミチルが座って、伝票整理していた。
私達2人を見ると妖艶に微笑んだ。
「嬉しいね～、ユリが来るなんて、何年ぶりかね～」と嬉しそうに笑った。
「ミチルが、敷居を高くしてたんでしょう」とユリさんも薔薇で微笑んだ。
《ユリさんやっぱり、ミチルと話す時だけ、話し方が違うな～》と思っていた。
ミチルがジュースを出してくれた、私はユリさんとミチルの、思い出話を興味津々で聞いていた。

「しかし、ユリカには脱帽したよ、エースの評判は本当だって、皆思ったはずだよ」と私に妖艶に微笑んだ。
「あら、ミチルを見てもかなり、上がったわよ」とユリさんが薔薇ニヤをした。

『ミチル、もう一度言っとくね、あの夜本当に響いたよ。

話の内容も勿論響いたけど、ミチルの涙と震えが、俺を強引に戻してくれた。
ミチルの愛情が、救ってくれたよ・・俺の未熟な心を。
本当にありがとう、ミチル・・俺は愛されてると感じたよ』

真顔でミチルに言った、本当に感謝していた。

「なに、言ってるんだい、私が救われてたんだよ。
エースの顔に、ホノカの慌てた表情に、何も考えずに話せた事に。
エースが私に言ってくれた、【もったいない】がずっと響いていたよ。
だから、決壊した・・私のダムが、スッキリしたよ。
ダムに亀裂を入れたのは、あんたの【もったいない】なんだよ。
正面切って、人に対して心を込めて、そう言える人間に出会えて。
私は幸せすら感じてたよ、ありがとう・・エース」

綺麗な真顔で、ミチルが笑った、氷の輝きが増していた。

私は幸せの中にいた、シオンのあの表現が確実に、私の何かを変えていた。
【先生が反対側の扉を開けてくれた】と言ったあの表現が。
私の漠然としたイメージに、確実に鮮明なイラストを描いてくれた。
本当の意味で私は、自分自身に自信が持てた。
白い心が、白い絵の具で描いてくれた、その絵のおかげで。

私の前には、復活を示す妖艶な、氷河の輝きがあった。
そしてそれを誰よりも喜ぶ、薔薇が咲いていた。
【子供の時は、子供を楽しんで】
最初の薔薇の教えを思い出して、私は自分の幸運に感謝していた。
《原作者、聞こえてる・・薔薇に出会わせてくれて、ありがとう》

そう囁いた・・心に。

この日のシオンとの、水槽での会話は、今でも鮮明に覚えている。

自分の心の霧が、一気に晴れていく気分だった。

私はシオンに何度、心を救われただろう、数えきれない。

常に物事をそのまま見る、そして感じた事を詩に変換する。

その会話は、歌うように響く・・そして誰でも感じる。

シオンの心には・・嘘という項目が無いと。

シオンは嘘を知らない、その存在すら知らない。

なぜなら、シオンは嫌いな物は、頭から全て消し去るから。

自分に必要でない物は、脳から抹消する事が出来るから。

他人にどんなに傷つけられても、絶対に他人を傷つけない者。

圧倒的癒し・・言葉の歌・・囁かれ連れて行かれる、天空に。

心の要領は・・銀河を凌駕する・・嘘の存在しない国からやってきた。

慈愛の妖精・・Ｐｕｒｅ　Ｗｈｉｔｅ・・詩音。

好きの中の・・・

曖昧な私の心のデッサンを、一瞬で描き上げた白い絵具。
その表現は映像を見せる、豊な表現方法がイメージさせる、リアルに。
自分の心には何も描かない、だから言葉に乗せて描けるのだ。
外からの不要な物は、全て拒絶する強さ・・慈愛の妖精。

薔薇の温もりに、氷河の暖かさがあった、最高の時だった。
「完全復活なのかしら？」とユリさんがミチルに聞いた。
「自分じゃ分らないよね～」とミチルが私を見た。
『知りたいの、今度試験しても良い？辛いかもしれないよ』とニヤで答えた。
「好きだね～、その挑戦的なとこ、そして絶対納得する事を仕掛けてくるんでしょ？」妖艶に笑った。
『納得出来るかは、わかんないけど・・俺にはこの方法しか、思いつかないから』と笑顔で返した。
「当然、受けるよ・・エースの試験なら」と妖艶に微笑んだ。
「本当に成長についていけません、困った事です」と私に薔薇で微笑んだ。
ユリさんと2人で、ミチルに礼を言って、帰路についた。

通りに出て、ユリさんが腕を組んで歩きながら聞いた。
「試験の内容は、なにかしら？」と薔薇で微笑んだ。
『キングを連れて行く、キングを見るとミチルは、辛いこと思い出すって言ってたから』と真顔で返した。
「そうですよ、あなたが判断したんですね、もう大丈夫だと」とユリさんも美しい真顔で返した。
『大丈夫です、ミチルの氷河が消えなかったから、本物ですよね・・

ミチル』と微笑んだ。
「本物です、人間としても、女としても」と薔薇で微笑んだ、強い言葉に自信が持てた。
ユリさんを駐車場に見送り、ＰＧに戻った。

ＴＶルームでマダムと遊ぶ、マリアを受け取りフロアーに行った。
１０番でシオンとレンとハルカが、サインの勉強をしていた、シオンが可愛く真剣だった。
私は持場は、レンが準備してくれていた。
ハルカに断って、マリアと散歩に出かけた。
マリアが一番街でパチンコの看板の、変なカエルの絵に興味を持って離れなかった。
「子持ちだったのか～」と後から声をかけられた。
私がマリアを抱きながら振向くと、リョウがニヤで立っていた、その美しい立ち姿に暫し見惚れた。
リョウはマリアを見て固まっていた、私はリョウの涼しい瞳を見ていた、マリアも天使の笑顔でリョウを見ていた。
《最高の状況、マリア少し天使お願いね》と心で囁いた。
「あい」とマリアが私を見た。

『猟・・狩猟の猟、出ておいでよ、引っ張り上げてやるから』リョウの耳元に囁いた。
リョウの瞳が変化した、瞳に映る私が少し動いて、泥沼から女の腕が出た瞬間。
「リョウ」とマリアが言った、私が驚くほどの強い言葉だった。
そしてマリアが天使全開でリョウに微笑んだ、リョウの瞳の女の手が柔らかな手になって消えた。
リョウは涙を流して、立ち尽くしていた、マリアがリョウに抱かれたがった。
『リョウ、マリアがリョウに抱っこして欲しいんだって、大丈夫？』

と笑顔で聞いた。
「えっ、本当にいいの！・・大丈夫、うれし～」と言って笑顔を見せた。
リョウにマリアを抱かせた、マリアは天使全開でリョウをみていた。
リョウは嬉しそうな笑顔でマリアを見て、大切に抱いていた。

「ありがとう、本当に嬉しかったよ」とマリアを渡しながら、リョウが微笑んだ。
『リョウ、近い内に時間頂戴、俺はリョウが辛いのは、見たくないから』とマリアを受け取り、意識して笑顔で言った。
「いいの？本当にいいの？」とリョウが真顔で言った。
「リョウ」とマリアがまた言って、両手をリョウの頬に当てて。
「リョウ」ともう一度強く言って、天使全開をした、リョウはまた涙を流した。
『ねっ、マリアもリョウの辛い顔、見たくないんだよ、だからお願いね』と微笑んだ。
「ありがとう、お願いするよ・・あんたに賭けるよ」と微笑んだ。
笑顔のリョウに、マリアと手を振って別れた。
『2度言ったね、マリア・・2人だね？』と笑顔でマリアに聞いた。
「あい」と天使の笑顔で言った、可愛い天使に笑顔で返した。

雑貨屋の前のベンチで2本棒のついた、ソーダアイスを半分にしてマリアと食べていた。
マリアは私の横で、嬉しそうに座ってアイスを舐めていた。
『マリア、俺はまだまだだね～、俺リョウの手が怖かったんだよ』とマリアに笑顔で言った。
「ない」と言って、マリアが天使で私を見た、私も笑顔で頷いた。
「マリア～」と言って、蘭が満開で駆けてきた。
「りゃん」とマリアも天使で蘭を見た、蘭は嬉しそうに笑って、マリアに靴を履かせてサイズをみていた。

「それは、ポイント稼ぎなのかな～」とカスミが不敵で立っていた。
「そうよ、見たわね～」と蘭も満開ニヤをした。
『カスミ、早いね、クビになったな』と私もカスミにニヤをした。
「そんなわけないだろ、今日は早いの、サクラさんの旦那さん退院なの」と笑顔になった。
「本当に～、良かった～」と蘭が満開で笑った、私も笑顔で頷いた。

『そうそう、今夜から俺に弟子がついたから、意地悪するなよ～』と威張って言った。
「誰かな～」と蘭もカスミも興味津々光線を出した。
「シオン」とマリアが言って、天使で微笑んだ。
「うそ・・うれし～」と蘭が満開になって。
「また、楽しみが増えた～」とカスミも輝いて笑った。
夕食はＴＶルームで食べると言って、蘭が靴屋に帰った。
私は右腕にマリアを抱いて、左腕をカスミに組まれてＰＧに戻った。
『カスミ、俺、リョウに行ってみるよ』とカスミに微笑んだ。
「ほんとか、嬉しいよ・・ありがとな」と嬉しそうに笑顔で返した。
『やれる事は、やってみるね』と微笑んだ、カスミも微笑んで頷いた。

ＴＶルームには、シオンとレンとハルカがいた。
「カスミ姉さん、おはようございます、今日からお世話になります」とシオンが可愛く頭を下げた。
「よろしく、頑張って、期待してるよ」とカスミも笑顔で言った。
「怖いんですけど、シオン姉さん・・サイン全部１回で覚えました」とハルカが微笑んだ。
「全部！って・・どの全部だよ」とカスミが驚いて言った。
「私が知ってるの、全部です」とハルカが微笑んだ、私も驚いてシオンを見た。
「先生が教えてって言ったから、頑張りました～」とシオンが可愛

く笑った。
『ありがとう、シオン・・先生シオンが来てくれて、凄く助かるよ』と微笑んで返した。
カスミは唖然として、何も言えなかった。
ハルカの全部は、ＰＧの全てのサインであり、四季のも全てであるから。
その数２００程度になるのだ、私は底知れぬシオンの可能性を感じて嬉しかった。

４人が楽しそうに話してるのを、マリアを抱いて寝かしつけながら聞いていた。
シオンが普通に笑顔で、会話するのを見ていた、ニコちゃんが出ていて嬉しかった。
マリアが眠って、ベッドに寝かせてフロアーに行って、タバコをばらしていた。
ハルカとレンが、シオンに予約表を見せていた。

「シオン姉さん、誰を知ってますか？」とハルカが聞いた。
「お店の人は名前なら、全員知ってるよ、この前見てた時に覚えたから」と可愛く答えた。
『シオン、見てたって、ここからでしょ・・それで分ったの？』と笑顔で聞いた、私は驚いていた。
「うん、ここから皆が呼び合う名前を覚えたよ、シオン偉い？」と私に近づき威張った。
『偉いね～、そして凄いね～・・どうやって聞き分けるの？』と笑顔で聞いた。
「聞いてないよ、お口の動きで分るよ」と可愛く笑った。
「えっ！・・本当ですか、凄～い」とハルカが笑顔で驚いた。
『シオンは凄いな～、サインってどうやって頭に入れたの？』と興味津々光線で聞いた。

「そのままだよ、ハルカちゃんの手と言葉を、そのまま写して、あいうえお順にファイルした」とニコちゃんで答えた。
『そっか～、ファイルしたんだね』と私は驚きを隠しながら笑顔で言った。
呆然としている、ハルカとレンにニヤニヤを出した。
私は楽しくてシオンを見ていた、どこまでも可能性の広がる、素敵なニコちゃんを。

久美子が来て、シオンと挨拶を交わし、練習をはじめた。
レンとハルカは化粧に行ったのか、シオンが私の所にニコちゃんで来た。
私はハルカの椅子を取り、私の椅子の隣に並べた、シオンのニコちゃんが強まった。
『シオン、焦って沢山覚えないでいいからね』と笑顔で言った。
「はい、先生・・楽しくて、PGの人はストレートに言ってくれるから」と可愛く笑った。

『そうだね・・シオン、PGには鉄の掟・・ルールがあるんだよ。
誰かの話をする時は、絶対その人がいる所で、しないといけないんだよ。
その人の直した方がいいとことか、やめてほしい事とかの時はね。
その相手の人の、いるところで言うんだ。
そうすると、自分の言葉を自分も聞くから、自分も確認させられるんだよ。
本心なのかって、愛情はあるのかって、確認させられる。
だから言葉を選ぶんだ、誰かに対し言うのは、勇気がいるんだよね。
シオンには絶対無いけど、影で人を悪く言う人もいるから。
影で色々言ったら、間違って伝わるんだよね。
特に女の人同士は難しいんだよ、感情が溢れるから。

だからユリさんは、絶対守らせてるんだよ、その掟・・ルールをね。
だからシオンは何も心配しないで良いんだよ、ＰＧの仲間は直接言ってくれるから。
シオンに、こんな時はこうしたらとか、キチンと目を見て言ってくれるよ。
辛い事があっても、シオンには蘭も先生もついてるからね』

優しく笑顔でシオンを見て言った。

「うん、素敵な事だね・・シオンいつもそれを気にしていて。
それでお口の動きで、何を話しているのか、分るようになった。
でも今の先生の話で、すご～く嬉しかったよ。
そしてお祭りの時の話も、ど～んだった、月夜の海も。
シオン出来るようになる、いままで【なぜ？どうして？】ばかりだったから。
今は【教えて？】に変ったよ、先生のおかげで。
シオン人を嫌いになった事がないから、でも今はそれがとっても良かったと思ってる。
どうして人が人を嫌いになるのか分ったから、人を嫌いになるのは。
寂しい人なんだね、だから頑張って、応援してあげないといけないんだね」

私は撃たれ続ける、シオンの白い弾丸に、その心地良い歌う言葉に。
『シオン、蛇は嫌いなの？』と笑顔で聞いてみた。
「違うよ～、怖いだけだよ、シオン嫌いな物はないよ・・好きの中の怖いだよ」と可愛く笑った。
『そっか～、素敵だねシオンは・・先生シオンに会うたびに、シオンの好きが増えるよ』と微笑んで返した。

「シオンもだよ、先生が好きだよ・・好きの中の大好きだよ」とニコちゃんで言った、私も笑顔で返した。
「私は～、シオン」と後から蘭の声がした。
「蘭ちゃ・・姉さん、もちろん好きの中の大好きです」とシオンが笑顔で立って。
「これから、よろしくお願いします」と蘭に頭を下げた。
「うん、ありがとうシオン、私もシオンが大好きです」と満開で微笑んだ。
3人でＴＶルームに戻った。
賑やかなＴＶルームで松さんの笑顔が溢れていた。
女性陣に先に食事をさせて、私はマリアとままごとをはじめた。

「チャー・・ニャン」と天使に言われ、猫のぬいぐるみを渡された。
『にゃん』と笑顔で返事をして、マリアが一人でブツブツ言いながら、人形を人形の家の中で動かしていた。
「先生、猫がお家に帰ってくるらしいですよ」とシオンが笑顔で言った。
『にゃん』とシオンに笑顔で返して、ぬいぐるみを家に入れて、『にゃん』とマリアに言った。
私の手の中の猫ちゃんは、どうやらマリアにブツブツ説教されていた。
「シオン、猫ちゃんは、何悪い事したの？」と蘭がシオンに満開で聞いた。
「えっ、・・浮気らしいで～す」とシオンがニコちゃんニヤで答えた。
蘭・カスミ・レン・ハルカ・久美子と、松さんまで大爆笑だった。
私はウルウルでマリアを見ていた、その時私に人生最大の衝撃が走る。
まさに人生最大の衝撃、私は心臓が止まりそうだった。
マリアが、あの天使のマリアが、私に・・・【不敵】を出した。

私は凍結した、そしてＴＶルームを圧倒的静寂が支配した。
『マリア・・今・・不敵した？・・もしかして不敵した？』と私は最強ウルウルでマリアに聞いた。
「きゃしゅみ～」と天使全開不敵で返してきた。
「カスミ、ど～してくれるんだい、私のマリアが、不敵マリアになったじゃないか」と蘭が満開で言った。
「どうしよう、私・・ＰＧクビになる」とカスミがウルウルで返した、全員大爆笑だった。
「いいな～マリア、私まだ練習しても出来ないのに・・不敵」とシオンが全力天然を発動して、追い打ちをした。
全員笑いが止まらず、ＴＶルームは笑いのパニック状態だった。

「久美子ちゃん、シオンに教えて？」と笑いが一段落して、シオンが久美子にニコちゃんで言った。
「はい、何でしょう、シオン姉さん？」と久美子も笑顔で返した。

「さっき練習してた曲、シオンとっても好きだったの。
でも４番目の波が引く時の、最後の場面の・・ポロンが、ほんの少し下がるから。
シオンどうしてもそこで、ンン～ってなちゃうの。
あそこ下がらないと駄目なのかな～、ほんの少し上がった方がいいな～って。
シオン、その方が好きなのに～って思ったの。
ごめんねシオン、音楽何も分らないのに」
完璧な歌声で、シオンが可愛い真顔で久美子に言った。
久美子はパッと輝いた、最高の笑顔でシオンを見た。
「ありがとうございます、シオン姉さん。

私、ずっと探してた間違いに今気付きました、そこは気持ちだけ上がるんですね。
ずっと探してたんです、シオン姉さんは音楽を最高に理解してますよ。
私、本当に感動してます。
シオン姉さんお願いします、これからも思ったこと、何でも聞いて下さい。
私、待ってますから・・練習してきま～す」

久美子は最高の笑顔で、シオンに頭を下げて、楽譜を掴み走って出て行った。
「シオン、良かったね、シオンが久美子ちゃんの、悩みを解決したんだよ」と蘭が満開で微笑んだ。
「シオンうれし～、最高に理解してますって、初めて言われました」と全開ニコちゃんになった。
全員が暖かい目で、シオンを見ていた、その限りない可能性を。
《もしかして俺は、PGにとって、最高のホームランを打ったのかな・・ユリカ》と心に囁いた。
その時初めて、ユリカの暖かい波動のようなものを感じた。
外気と違う暖かい波が、体全体に当てる感じの、微かなものだった。
私は何かは分からずに、ただ喜んでいた、ユリカと離れていても感じれる喜びに。

女性達が準備に向かい、シオンはピアノを聴きに行った。
マリアと2人でご飯を食べていた、マダムとユリさんが来た。
「カスミちゃん達、楽しそうですね・・シオン効果早くも出てますね」と私に薔薇で微笑んだ。
『ユリさん、俺・・PGに対して、最高のホームラン打ったのかな？』と笑顔で聞いてみた。
「今頃気付いたのかい、らしくないね～、ユリはシオンに会った3

年前に、リアンに予約入れたんやぞ」とマダムが笑顔で言った。
『さすが、ユリさん』と笑顔で返した。

「シオンが、前向きになって、もし夜の仕事を選んだ時は。
私に預からせてと、リアンに言ったんです。
あのシオンの魅力・・私も嫉妬を感じました。
そしてどうしても欲しかった、シオンの為にもＰＧの為にも。
あの許容量無制限の心が、その大きさを無駄にしない、捨てれる強さが欲しかった。
あなたは最高の場面で、最高のホームランを打ちましたよ」

薔薇で微笑んだ、私は嬉しくて笑顔で返した。
《シオンなら、薔薇に届くかもしれないと思った俺は、間違ってなかったね・・ユリカ》と心に囁いた。
暖かい何かが来た、私は本当に嬉しくて、ニコちゃんになっていた。
隣でマリアが、天使で私のニコちゃんを見ていた、私もマリアに微笑んで。
《マリア嬉しいよ、ユリカを感じれるようになったよ》と心に囁いた。
「あい」と言うマリアの返事と、少し強い波動が来た。
《驚いたね、動揺したねユリカ・・泣いてもいいよ、俺は今ニヤしてるけど》と心に囁いた。
マリアの天使が見守る私に、強い波動が来た、爽やか全開ニヤのような波動が。

カスミが引退結婚を発表して、残り2週間の頃、私に言った。
シオンが最初にＰＧに入った日、久美子に指摘した微かな音。
あの時に私は負けを認めたよ、シオンより私は、人間的に劣ってい

ると。

だからシオンに友達になってもらった、最高の友だった・・今でも最高だよ。

ホノカやリョウはもちろん友達だけど、現役時代はライバル色が抜けなかった。

友として本当に心が許せたのは、シオンだけだった。

シオンがＰＧを去って海外に飛ぶ時、私に言ってくれた。

「カスミ、不敵をありがとう、どんな言葉より嬉しかった」って。

最高だろうシオン・・最高だろうシオンは・・私の親友は。

そう言って泣いていた、カスミの輝きの中にシオンが見えた。

絶対に傷つけないという安心、そして表しかない者。

裏は存在しない、存在するのは表だけ。

好きな中の何かという区切り、詩の言葉が描き出す心。

シオンを表す事のできる唯一の言葉・・【最高】

最高の存在・・色として強く主張する・・【白】

ありがとう、同じ時代に産まれてくれて・・詩音

理解者

変化の時は来る、感じないと見過ごす。
変化を受入れる心、勇気と自信を問われる。
楽しんで受入れよう、若さとはそれが許される、季節の事だから。

７時を少し過ぎて、私はマリアを松さんに頼み、フロアーに入った。
四季とユメ・ウミが１０番で驚きながら、シオンを見ていた。
美冬が複雑なサインをシオンに送り、シオンがニコちゃんでサインを返していた。
私は唖然としてみていた、覚えたのは理解したが、使いこなせるとは、思っていなかったのだ。
千秋が笑顔で、私を手招きした、私は１０番に歩み寄った。

「私達はまた、エースに礼を言わないといけないみたいだね～、シオンをありがとう、エース」と千秋が微笑んだ。
『シオンの意志ですから、近い将来、フロアーに立ちたいらしいですから』と笑顔で返した。
６人がシオンを優しい笑顔で見ていた、私はシオンに笑顔で頷いて、指定席に戻った。
久美子が課題曲に入った、シオンが久美子を見ていた。
曲が進んで、シオンが最高のニコちゃんになって、飛び跳ねて久美子に笑顔を送った。
久美子も最高の笑顔で、頷いて答えた、輝いていた１６歳の輝きで。

シオンが私の席に戻り、久美子が演奏を止めた、集中した表情が出た。
その日の最後の曲は、静かに始まり段々と激しくなって、最後は腰を浮かせて鍵盤を叩いた。

シオンは目を閉じて聞いていた、可愛い横顔だった。
久美子は弾き終ると、放心状態でニヤニヤと笑っていた、納得した感じの良いニヤだった。
シオンが立って拍手をした、全員の拍手の中、久美子が頭を下げた。

ユリさんが入り、女性が円を描いて立った。
ユリさんが薔薇で、シオンに手招きをした、シオンもニコちゃんで円に加わった。

「今夜から、いよいよシオンが来てくれます。
近い将来、必ずエースの許可をとり、フロアーに来ると信じています。
シオンを感じて欲しい、必ず得ることが沢山あります。
私はシオンの才能、その感性に初めて触れた3年前に・・嫉妬しました。
シオンが久美子ちゃんと同じ、１６歳の時です。
私は2度だけ、１６歳の少女に嫉妬しました、詩音と久美子に。
私が持っていない感性に気付いて、だから今・・本当に嬉しいのです。
シオンの検討を、心から祈ります」

シオンに薔薇で微笑んだ、シオンは真顔で頷いた。
シオンが私を見た、私は意識して優しい笑顔で頷いた。

「シオンです、よろしくお願いします。
私は人より何をしても遅くて、普通の人とペースが合わなくて。
でも頑張りますから、皆さん教えて下さい。
シオン、簡単な事でも聞くけど、皆さん教えて下さい。
シオン、知りたいんです、色んな事、知りたいんです。
そして教えてやりたいんです、シオンも出来るって。

仲間がいれば、シオンにだって出来るんだって・・・・。
シオンは必ず出来るところを見せます・・・もう一人の寂しいシオンに」

シオンは真顔で頭を下げた、女性全員で拍手をした。
女性達は必死だった、プロとして開演前のフロアーに立つ、その時に涙は厳禁だったから。
シオンの心の叫びの、言葉の歌が伝わって、全員の顔が集中に変ってきた。
私はシオンを迎えに行って、少し後で開演の合図を見せた。

「今夜も開演しましょう」の薔薇の声に、「はい」のブザーが鳴った。
シオンはそれを、可愛い真顔で見ていた、いつの日かその円に入ると、言っているようだった。
シオンを指定席に座らせて、笑顔を向けた。
『シオン、サイン見ながら、誰か来たら話を聞いて、俺かリンさんに伝えてね』と微笑んだ。
「うん、頑張るね、先生」とニコちゃんで返した、私は笑顔で返して、ハルカポジションで待った。
開店2分前だった、入口には開店を待つ多くの人の声が、かなり響いていた。

「エース、ちょっと」と美冬が笑顔で呼んだ。
『なんでしょ〜、美冬』と歩み寄って声をかけた。
「私達、シオンちゃんとお話しがしたいから、ハルカポジションで頼める?」と微笑んだ。
『シオン、サインでお話ししてみる?』と笑顔で聞いた。
「はい、シオン頑張ります」と美冬と私にニコちゃんで言った。
「分らない時は、そう言ってね」と美冬がシオンに微笑んだ。

「はい」とシオンは可愛く笑って、サインで【了解】【美冬】と素早く出した。
「上手～、エースもう抜かれたね」と私にニヤを出した。
『美冬、気を付けろよ、シオン英会話得意だぞ』とニヤで返した。
「ほんとに～、嬉しい～楽しみ増えた～」と笑顔で言って、指定位置に戻った。

私はハルカポジションに、シオンを座らせて説明した。

『シオン、こっちからは見えるけど、向こうからは見えないんだよ。
だからサインを見て、返す時は手を上げて、送るんだよ。
疲れたら、休憩して良いからね』

ニコニコ顔のシオンに言った、シオンも頷いた。
私は指定席に戻って座った、その時に開店した。
月曜日を、ものともしないスピードで、客席が埋まった。
シオンはニコちゃん継続で、フロアーを見ている、楽しそうな笑顔に安心していた。
開演１５分で満席が達成し、満席記録更新の継続が決まった。
シオンに、Ｖサインを出させ、熱が上がった。

四季も落ち着いたのか、シオンにゆっくりとサインを出しはじめた。
残念ながら、四季の複雑なサインだったので、私には理解不能だった。
シオンはニコちゃんで的確に答えてるらしく、四季も楽しそうだった。
そして私にもフロアーの女性にも、衝撃が走る。
千夏と千秋のサインが重なった時に、シオンは両手を上げて、左右別々サインを2人に返した。
これにはユリさんまで一瞬停止した、私は女性達の反応を見て、驚

きながらニヤニヤしていた。
《シオン、何を見せてくれるんだろう、楽しみだな～》と思ってシオンのニコちゃんを見ていた。
次にフロアーに出てくる者の、その無限の可能性を感じて、熱が急上昇をはじめた。

その時にキングが受付に来た、私は受付に歩み寄った。
《さすがキング、感が鋭い》と思いながら、シオンを誘った。
『キング今晩は、紹介しますＰＧの新しい研修生の、シオンです』
と笑顔で言った。
「梶谷様、ようこそいらっしゃいました、シオンです」と可愛く笑って頭を下げた。
「おっ、シオンちゃん綺麗になったね～、ＰＧかリアン喜んだろ～」
とキングが優しく言った。
「はい、泣いてました～、リアン最近泣き虫です・・歳ですかね～」
とニコちゃんニヤで返した。
「シオンちゃん、エースに魔法をかけられたね」とキングも楽しそうに返した。
「はい、強力バンバンの奴を～」と可愛く笑った、キングも笑って頷いた。
シオンを席に返し、キングを見た。

「同伴行くか、小僧」とキングが微笑んだ。
『嬉しいですね、キング俺の行きたい店で良い？』とニヤで言った。
「なんか怖いけど、良いよ」と笑顔で返した。
その時マダムが挨拶に来て、同伴場所を、ミチルの店と小さく囁いたらハッとして、笑顔で頷いた。
シオンに、口パクで【ちょっと行ってくる】と言ったら。
ニコちゃんで、【了解】とサインで返してくれた。
エレベーターに向かう時、ユリさんを見た、目が合って真顔で頷い

た。
ユリさんは、深い目の薔薇で微笑み、【了解】とサインをくれた。
キングと通りにでて、私は真顔で言った。
『キングごめん、ミチルの店に付き合って。
ミチル、心が解放されたんだけど、自分で自信がまだ持ててない。
俺の試験受けるかって、今日聞いたら、受けるって言ったから。
キングに行ってほしい、俺には他に方法が思い浮かばないんだよ。
キングは嫌な思いするかもしれないけど、お願いしたいんだ。
駄目かな？』

真顔でキングを見た、キングも真顔で私を見た。
「なんでもね～よ・・解放の経緯だけ行きながら教えてくれよ」と私の肩に手を置いて言った。
『キング、ナギサ知ってるよね？』と笑顔で聞いた。
「もちろん・・ナギサが、どうかしたか？」と真顔で返した。
『キング最近忙しくて、夜街出てなかったね～』とニヤで言った、キングもニヤで頷いた。
『俺がナギサを連れ戻して、今ナギサＰＧにいるよ』と笑顔で言った。
「本当か！やってくれたのか」と嬉しそうに笑った、私も笑顔で頷いた。
キングが笑顔で右手を出した、私も笑顔で右手で握り返した。
「俺は久々に感動したよ、そして自分の夢が、叶うんじゃないかと思ってるよ」と私を見て。
「小僧と蘭がゴールインする、俺の夢がね」と優しい目で笑った。
『キング・・ありがとう、キングに言われると・・俺・・本当に嬉しいよ』と下を向いて涙をこらえた。

本当に嬉しかった、圧倒的高みにいるキングに言われて、感情が溢れていた。
キングは優しく、私の頭の上に右手を置いていた、その温もりが嬉しかった。

『それでね、ナギサを・・・』ホストクラブで混乱して、ミチルに会った経緯を話した。
キングは頷きながら聞いていた、優しい笑顔で。
話終わった時に、ミチルの店の前に着いた。
『キング、少しだけ待ってて』と微笑んだ、キングは笑顔で頷いた。
私は店に一人で入った、客はまだ来ていなかった。
カウンターにホノカが居て、私を見て微笑んだ。
「いらっしゃい、エース」とホノカが笑顔で言った。
私も笑顔で返した、その言葉でミチルが飛んできた。
「早いね～、試験かい？」と真顔で聞いた、氷河の光を確認して頷いた。
『ミチルが、早いと思うなら、今夜はやめとくよ』と真顔で返した。
「私は、ミチルだよ・・エースもいてくれるんだろ、やるよ」と妖艶に微笑んだ。
『分った、待ってて』と微笑んで、キングを呼びに行った。

キングが入口から姿を見せると、ミチルは固まっていた、でも目の輝きは落ちる事はなかった。
「ミチル、久しぶりだな、元気そうで良かった」とキングがミチルに近づいて微笑んだ。
「梶谷さんも、お元気そうで」とミチルが目を潤ませて、頭を下げた。
梶谷の名前に、ホノカともう一人の女性に緊張が走った。
『ミチル、大丈夫だね、ＢＯＸで２人で話してきて、俺カウンターにいるからね』とミチルに優しく言った。

ミチルは真顔で私を見て頷いて、キングを案内して、奥のＢＯＸに向かった。
私はその姿を見ていた、綺麗に伸びたミチルの背中を。
２人は段々会話が弾みだしたようで、少しづつ笑顔が見えていた。
私はそれで安心して、カウンターの隅に座った。
「本当に何倍にもして、返すんだね～・・さすが最後の挑戦者」とホノカが微笑んだ。
『最後の道標には、遠く及びませんよ』と微笑んで返した。
「エースと会った日、ジン帰りにここに来て、話してくれた、ジンのあんなに嬉しそうな顔、初めて見たよ」とホノカが華麗に微笑んだ。
『ジン、素敵だよ、男の俺から見ても』と笑顔で返した。
「ねぇ、エースどうして、あんなに混乱したの、ジンはエースの言った事までは、教えてくれたけど」とホノカが言った。
ホノカの美しい顔を見て、興味本位でない事は分った。

『ねぇ、ホノカ・・ホノカから今から言う事、ジンにそれとなく伝えて、男同士じゃ照れるから』と微笑んだ。
「了解、ちょっと待って」と言ってカウンターを出て、隣に座った。

『俺、あの台詞を言って・・自分の言葉に自分で撃たれたんだよ。
心のもう一人の自分が出てきて、お前も同じだろうと連呼されたんだ。
２３歳の女を１３歳で追ってる俺は、同じだって感じたんだよ。
そしてミチルに言われたんだけど、愛される覚悟が全然足りなかった。
最初の頃から、勝手に愛してるとか、片思いとか言って、自分を誤魔化していたんだ。
最近、愛されてる実感があって、もちろん嬉しいんだけど。

知らぬまに、どこかで重圧になってたんだね。
まだ仕事すら遠い中1の俺には、人生設計なんて想像も出来ないから。
それだから、愛されて、もし何年後かに破局したら。
蘭は取り返しがつかないって、思ったんだよ。
それでここに来た、ミチルに覚悟の本質が聞きたくて。
ホノカに腕を掴まれた時、本当に嬉しかったよ、涙が出そうだった。
ありがとう、ホノカ。
心の限界を感じて、もうフラフラで、ホストクラブのエレベーターまで、なんとか歩いた。
その時ジンが腕を掴んでくれて、大丈夫かって・・絶望させてごめんって・・・。
そう言って階段まで肩を抱かれて歩いたんだ、ジンに泣けって言われて・・泣いたんだよ。
見たらジンも泣いていたんだ・・・・俺はその涙で止まった。
断崖の上でギリギリで止まった・・・ジンの道標が有ったから・・・。
涙の道標に・・・諦めるなと書いてあったから」

ここで限界だった、ジンの話をして、ホノカとミチルの顔を見て、ついさっきまでシオンといたから。
鮮明に記憶が蘇って、全員に感謝の気持ちが湧いてきて、愛されてることが嬉しくて。
泣いていた、ホノカに優しく抱かれて・・泣いていた。
ジンに感謝していた、あの涙を思い出して、道を間違わなかったことに。
ホノカの優しい香りと、暖かい温度に包まれて。
微かに震えるホノカの体が、ホノカの泣いているのを伝えてきて、切なかった。

「ジンが言ってたよ、最後の挑戦者の意味を感じたって。
その深い意味に触れて、涙が溢れたって。
四天女が、１３歳の少年に送った、称号の意味を感じたって。
それは・・夜街、いえ大人達全員の、果たせぬ夢だって。
背負わされた物が、自分とは比べられないと言ってた。
だから俺は、全力で道を示すって・・辿り着いてほしいから。
最後の挑戦者に・・その頂上にって言ってたよ」

ホノカの優しい言葉で伝えられ、ジンを想っていた。
俺は絶対に諦められないと、そして言い訳もできないと、支えられて立っているんだから。
顔を上げホノカを見た、美しい顔が間近で微笑んだ、私も微笑んで返した。
高貴な光に触れて、元気が出てきた、果てしない道を歩く元気が。

『ありがとう、ホノカ・・俺はホノカが勝つと思ってたよ』と笑顔で言った。
「カスミという、化物作っといてよく言うよ」と華麗ニヤで返された。
『今から、千回可愛いって言おうかな～』とニヤで返した。
「それより、スズメを食べに、連れてって」と華麗に微笑んだ、美しいホノカの顔を見ていた。

「ホノカ2人で梶谷さん、頼める・・カスミと競うんなら、最高のチャンスだよ」ミチルがホノカに言った。
「もちろん、また来てもらいますよ・・エース、ありがとう」と華麗に微笑んで、ミチルに連れられて行った。
ミチルが妖艶笑顔で帰ってきた、その笑顔が嬉しかった。
「エース、お願い・・ユリカスペシャル」と妖艶ニヤを出した。

『了解』と言って立ったら、ミチルが腕を組んできた。
2人でエレベーターに乗って、階段前でミチルを抱き上げた。

『完全復活おめでとう、ミチル・・嬉しかったよ』と階段をゆっくり登りながら微笑んだ。
「ありがとう、エースのおかげで、間に合った気がするよ」と美しい真顔で言った。
『今からだろう、ミチル・・五天女なんだから』と笑顔で返した。
「五天女ね～、私が天女ね～」と妖艶ニヤを出した。
『いいじゃない、世間に呼ばせとけば、ホノカの為にも呼ばせときなよ』とニヤで返した。
「そうだね、ホノカの為だと思えば良いのか～」と微笑んだ。
『ユリさんだってそうだよ、お店の女性の為に呼ばせてるんだよ』と微笑んで返した。
「ユリは別格だよ、私は友として誇りに思うよ」と嬉しそうに笑った。
『俺も出会えて良かったと思ってる、ミチルにも』と微笑んで返した。
「また、好きになったよ・・エース、たまには来てね」と妖艶に微笑んだ。
『もちろん、俺も好きになったよ、今日は2回も』と微笑んだ。

店に帰ると、キングはご機嫌で、ホノカともう一人と話していた。
PGから電話が入って、キングが支払って店を出た。
通りに出てても、キングは笑顔でご機嫌だった。

PGにエレベーターで入って、カズ君に案内を頼んだ。
「小僧、ありがとう、最高の夜だったよ」とキングが笑顔で言った。
『キングありがとう、また期待してます』と笑顔で言って頭を下げた。

指定席に戻ると、シオンがニコちゃんで、まだサインを飛ばしていた。
私がオレンジジュースを持って、シオンを休憩に誘った。
『シオン大丈夫？疲れない？』と心配で聞いた。
「全然大丈夫で～す、楽しいよ、シオン」と可愛いニコちゃんで笑った。
『でも最初から、飛ばし過ぎたら駄目だよ、元長距離選手なら分るでしょ』と微笑んだ。
「はい、先生・・ニコちゃんランナーで頑張ります」と可愛く笑った。
3番を見ると、ユリさんが本当に嬉しそうに薔薇で笑ってた、私も嬉しくて笑顔になった。
そしてナギサが呼ばれた、少し緊張気味のナギサがキングに挨拶した。
隣に座って何か言われて、ナギサは笑顔で泣いていた、華やかを撒き散らして。

シオンの初日は順調に進んでいた、何かが確かに変化していた。
シオンは見せる、許容量の広さと大きさを、9人衆はすぐに気付く素敵な事の始まりを。
そしてこの夜の報告会で、蘭の爆弾発言が飛び出す、私はただウルウルを繰返す。
夏の夜の幻想の宴、男達は笑い、女優は微笑む。
生きている実感を求めるように、人生が一瞬の連続だと言うように。
シオンは小学校入学時に、普通のクラスは難しいと言われたらしい。
その時代、いや今でもある、行政の狭き心。

シオンはなんとか普通クラスで、義務教育を終了している。
私立高校に行き、この時短大生である。
シオンの才能は認められず、ここまで来ていた、なぜ理解者は現れないのだろう。
シオンの言うもう一人の寂しいシオン、とは・・・。
教師にも相手にされなかった、シオンだと本人が言った。
シオンこそが天才、そして最良の最高である。
家族以外の、他人に理解されるまでに、１９年経過している。
現代はそんな事は無いと、誰かが言いきれるだろうか？
心の一人の部屋で埋もれている才能は、無いのだろうか。
シオンのある日の呟き・・「普通って何だろう？どこにも書いてない、だから分らなかった」
シオン・・君は普通じゃないよ・・普通なんて・・ただの言い訳だから。
シオンは削除したんだね、それでいいんだよ。
だから普通の人になんて、ならなくていいよ・・・・詩音。

キスの伝言

心の中にいる・・もう一人の自分はね、寂しく暗い部屋で一人で遊んでいるの。
心が外に遊びに行くと辛いから、差別の目で見られて、かわいそうと言われるより。
一人でいるの・・。
かわいそうと言わせたら、その人達が辛いと思って。
差別の目にさせると、その人達が辛いと思って。
シオンの心を見て、他の人が辛いなら、一人で遊ぶよ・・シオンは皆が好きだから。
【詩音語録】

熱の高いフロアーは、笑顔の女優と、その笑顔が感染した観客達の世界だった。
シオンはサインを出しながら、ニコちゃんで楽しそうに笑っていた。
ＰＧの女性はその時点で、シオンを認めていた、必ずフロアーに出てくると確信していた。
シオンの才能に直に触れ、それを受入れる容量を、全員が余裕で持っていた。
そして見た事もない、楽しい何かの始まりに、心躍られるように輝いていた。

「完全復活を梶谷さんに頂きましたよ、本当にありがとう」ユリさんが私の所に来て、最高の薔薇で笑った。
『うん、俺も嬉しかったよ、ミチルの笑顔も、ユリさんの・・その笑顔も』と言って笑顔で返した。
「いよいよ、仕事中に私を泣かせる、挑戦を始めるんですね・・負けませんよ」と薔薇で微笑んで、フロアーに戻った。

ユリさんが私の所に来た時、常にそうなる、女性達の視線の集中に気付きながら、立ち上がり。
ユリさんの背中にサインを出した、【ユリ】【Ｎｏ】【１】【ＯＫ】と出して、笑った。
女性全員が笑顔で【了解】を返してきた、シオンもニコちゃんで【了解】を出した。
蘭の嬉しそうな、満開の笑顔を見ていた、散ることのない永遠の満開を。

可愛いニコちゃんとフロアーを見ていた、終焉前のフロアーを。
『シオン、疲れたね、初日からシオンには驚いたよ、凄いね～シオンは』と笑顔で言った。
「そうだった、嬉しい～、シオン明日も頑張ります」と可愛く微笑んだ。
『ねぇシオン、明日から少しずつ、先生に英会話教えて』とウルで頼んだ。
「前向きでよろしい、シオン先生は厳しいですよ～」と少し威張った。
『頑張ります、シオン先生』と微笑んで返した。
その時終演を迎えた、終礼のメンバーが揃った、シオンと１０番に歩いた。

「今夜は自信たっぷりだね～」とシオンを座らせながら、蘭が満開で微笑んだ。
『報告します、今日はユリカを抱っこして、ミチルをユリカスペシャル、以上です』とニヤを出した。
「キスは０かい？」と蘭がニヤで返してきた。
『キスなんて、しません』と威張って見せた。
「良い子だね～・・でも私から報告があります、私は明日から旅に出ます、君は若草公園の自分のベッドで寝るように」と全開満開ニ

ヤで言った。
私はあまりの事に頭が真白になり、理解できないで蘭を見ていた。
「分ったのかい？」と蘭がニヤ継続で言った、私はウルウルで首を横に振った。
シオン以外はニヤをしていた、シオンはウルウルをしてくれていた。
「靴屋の慰安旅行なんだよ、仕方ないだろう」と満開ニヤ継続で言った、私はウルウルで首を振るしかなかった。
「仕方ないね～、誰か泊めてくれるか聞いてみるから、その中から選べよ」と最強満開ニヤできた。
『あっ！』と私が言った時には遅かった。

「家無き子、泊めてあげる人～」と蘭が満開で手を上げた。
「は～い」と案の定、全員手が上げた、シオンまで、私はウルウルで見ていた。
「まさか、私じゃないなんて事、ないだろうね～」とカスミが最強不敵を出した。
「年長者の私に、恥をかかせないだろうね～」とナギサが最強華やかニヤで続いた。
「私達は、４人でサービスするわよ～ん」と美冬が代表で言って、四季が睨んでいた。
「私達は川の字になって、寝てあげるよ～ん」とウミが言って、ユメとニヤニヤした。
「私は久美子の着替えも、覗かせてあげるわよ～ん」とレンが久々の魔女ニヤを出して。
「私はいやらしいホテルに、連れて行ってあげるわよ～ん」とハルカがニヤして。
「シオンは、ずっと覚悟したままだよ」とニコちゃんで微笑んだ。
「シオンのが、１番危ないな」とカスミがシオンに不敵を出した、シオンは真顔で不敵の研究をしていた。

蘭はその可愛いシオンを見て、満開になって、私を見た。
「さっ、どうするんだい・・誰かを指名せよ」と蘭が満開ニヤで言った。
「亀裂が残らないように、慎重に選べよ」とカスミが不敵で言って、全員がニヤで見た。
『ん～とね、ん～とね・・・・ユリカ！』と笑顔で言った。
今までで1番強い波動が来て、私はニヤニヤしていた。
「その手があったか～」とカスミが悔しがり。
「それは何も言えん・・特に私は」とナギサが微笑み、全員が笑顔で黙った。
「よし」と蘭が満開で微笑んだ。
「蘭、もしかして、誘惑防護策だったのか！」とナギサが突っ込んだ。
「何の事かしら～」と蘭が満開で控え室に走った、全員が笑顔で追いかけて、終了になった。
私はシオンと腕を組んで、ローズに向かった。
横を歩くシオンはニコちゃんだったが、少し疲れの影が出ていた。
ローズのビルの入口が見えたときに、シオンを抱き上げた、シオンは最強ニコちゃんで微笑んだ。

『大サービス、シオンが頑張ったから』と微笑んだ、シオンは腕を私の首に回し、強くしがみついた。
「先生、出会ってくれてありがとうね、シオン本当に嬉しいよ」と私の耳元に囁いた。
『シオン・・ありがとう・・・目を閉じて充電しなさい』と優しく囁いて返した。
シオンが静かになってきた、ローズのビルのエレベーターを待っていると。
「どんな感じで、感じるの？」とユリカの声が後から聞こえた。
『ユリカ・・俺、嬉しくて、暖かい何かが波みたいに、何回か来る

んだ』と微笑んで返した。
「声とかは聞こえないのね、波だけなのね」と爽やかに微笑んだ。
『うん、でもユリカだとは感じるよ、香りがする、微かにだけど』
とニコちゃんになって返した。
ユリカがエレベーターの、最上階のボタンを押した。
「嬉しいような、複雑な気分ね・・まぁ返答しか分らないなら・・良いかな～」と爽やかニヤをした。
『俺なんて、ユリカが常に感じてくれるのが、嬉しいのに』とウルウルで言った、ユリカは爽やかニヤ継続中だった。

「私は大人の美しい女性よ、色々考えるのよ・・男なんて泊めれないから～」と最強爽やかニヤで言って、ローズの扉に走った。
私は眠っているシオンを抱いて、ウルウルで後を続いた。
ユリカがローズを覗き、振向いて手招きをした、爽やかニヤ継続中だった。
ローズはＢＯＸに１組と、カウンターに２人組みがいるだけだった。
私はシオンを、奥のＢＯＸのソファーに優しく寝かせて、リアンが持って来たタオルケットをかけた。
シオンの可愛い寝顔に絶え切れず、額にキスをして立ち上がった。
『シオン、初日から頑張ったよ、俺ＰＧに対して最高のホームランを打ったよ』とリアンに微笑んだ。
「シオンが、フロアー出れると、エースは本気で思ってるんだね？」と獄炎を強めて真顔で言った。
『リアン、もう自分の幸せを追っていいよ、シオンは絶対に出来る』と腕を組んだユリカと笑顔でリアンを見た。
「泣いていいわよ・・リアン」とユリカが爽やかニヤを出した。
「ユリカ、そのニヤはまさか、キス・・リードしたのかい？」と獄炎ニカで言った。

「まだよ、でも明日の夜、エース私の家にお泊りだから・・もう諦

めてね」と最強爽やかニヤニヤで歩きはじめた。
「ユリカ・・待って・・ユリカ、どういう事なのかな・・ユリカ」
というリアンの声を聞きながらローズを後にした。
エレベーターで私はニコちゃんで、ユリカを見ていた。
「そんなに、嬉しいの？・・蘭が怒るわよ～」と爽やかニヤで言った。
『分ってるくせに、蘭がユリカを選んだのを・・ユリカ、ありがとう』と真顔で言った。
「もう、目は閉じないよ・・すぐ調子に乗るんだから」と言って腕を強く組んだ。
「私の胸も慣れたのね、シオンのように罪じゃないのね」と爽やかウルできた。

『ユリカ違うよ、俺はユリカに対しては、ユリカのずっと側にいたいから。
基本的にその方向の感情は、まだ切ってるだけだよ。
ユリカが次のステップに上がるまでは、その部分だけ切れるんだ。
ユリカが教えてくれたんだよ、その切り方を。
あの初めてユリカを抱っこした日の、2度目の抱っこで自然に出来たよ。
人を大切に想うっていう、その意味が分かったような気がするよ。
羊水の揺り篭に揺られて、母の子守唄を聞いて、それを感じたよ。
ありがとうユリカ・・それが無かったら俺は、蘭を求めていたよ』

最後は微笑んでユリカを見た、ユリカは真顔で私を見ていた。
「目は閉じないよ・・でも嬉しい、完璧な同調」と爽やかに笑った。
ユリカのビルのエレベーター前で、ユリカに手を振って別れて、ニコちゃんでＴＶルームに戻った。
全員揃っていて、私がマリアを抱き上げた。
「問題は、ユリカ姉さんが泊めてくれるかだね～」と蘭が満開ニヤ

で言った。
「それは大問題ですね、さすがのエースでも、難しいでしょうね」とユリさんが悪戯っ子を出した。
「やっぱり家に来て、味噌汁作ってくれ」とカスミが不敵に微笑んだ。
『君達は何も分ってないね、もうＯＫ頂きました～』とニヤニヤで返した。
「信じられません、ユリカですよ・・男性を泊めるのよ」とユリさんが薔薇で蘭を見た。
「ユリさん、驚くのはこれからかも、奴は添い寝するかもですよ」と満開ニヤを出した。
「ユリカ姉さんの、あれ以上の変化って・・怖い」とカスミがウルを出した。
「カスミちゃんだめよ、常に不敵じゃないと・・マリアが完璧に覚えられないわよ」とユリさんが、悪戯っ子で言った。
「お前、ユリさんにもなんか、魔法かけたのか」とカスミが慌てて私に不敵を出した。

「かけてもらいました、ミチルとシオンで」と薔薇で微笑んで、私の頬にキスをしてくれた。
私はニコニコちゃんになって、少し照れていた。
「隊長、ユリさんの時だけ、奴は反応が全然違いますよ」とカスミが蘭に不敵を出した。
「だから、普通ならマリアがいるから、ユリさんに頼むんだけど」とカスミを見て。
「今夜の笑顔を見て、今回はユリさんに防護線を張ったのよ、危険な匂いがして」と蘭が満開ニヤでユリさんに言った。
「もう、蘭は鋭いから、いけないわね～・・正解です」とユリさんが薔薇で返して、２人が楽しそうに笑っていた。

ユリさんとマリアとカスミに手を振って別れて、蘭とタクシーに乗った。
蘭が私の肩に乗って、ご機嫌満開でニヤニヤしていた。
『ご機嫌だね、蘭』と囁いた。
「ユリさんの、あの笑顔を見ればね、屋上にあんたが迎えに行った時と、同じ笑顔だったから」と最強満開ニヤで言った。

『あの夜、ユリさん震えて泣いてて、俺は最愛の人に、教えてもらったばかりだったから。
泣いてる女を抱きしめた、そしたらユリさんが、この後は？って聞くから。
優しくキスをするって言ったら、ユリさんが優しく浅い、キスしてくれたよ。
俺の大切な思い出です』

そう笑顔で囁いた、蘭は満開で微笑んだ。
「やっぱり、さすがユリさん」とニヤニヤしながら、瞳を閉じた。
私は蘭の香りに包まれながら、窓の外を見ていた、夜空に星が瞬いていた。
大きな要塞の入道雲が流れていた、世界は広いのだと感じていた。
私は自分で話して、気付いていた、あのユリさんのキスが変化の始まりだったと。
あのキスが教えてくれたと、常識など無意味だと。

《原作者・・聞いてる？・・少し話をしようよ。
あなたなら知ってるんだろ、リンダの探す鍵は存在するの？
どうして言語を別々に作ったの、統一は無理な話なの？
肌の色は進化の過程の出来事だろうけど、どうして色のイメージを作ったの？
宗教って何の為に作ったの？

どうして人は豊になりたいの？それが楽しい事なのか分らない。
でも１つだけ分ったよ、どうして子供時代があるのか。
未熟な心が存在しないと、人類は滅びるんだね。
未熟な時代の反省が、どこかに残るんだね、俺は人より沢山残すよ。
今を生きるよ、あんたが未来をどんなに書いても、それは無駄だよ関係ないよ。
俺は未熟なガキだから・・反抗期の子供だから、あんたに従うか分らんよ。
あんたの思い通りには、絶対にならないよ。
策略で無敗の、最後の挑戦者だからね。
いつかリンダと蘭と旅に出て、見せてやるよ。
あんたが想像力の無い者だと・・必ず教えてやるよ、見てろよずっと。
あんたの浅知恵で隠したその鍵を、俺が必ず探し出すから》

心に囁いて、気持ちが落ち着くのを感じた。
国道１０号線を北上するタクシーの、窓に映った自分の顔を見て。
最強不敵を出してみた、子供である事実には、逆らえないと弱い不敵が言っていた。
私は子供の時代を楽しもうと思っていた、薔薇の教えだから信じてみようと。
天空の要塞が流れる空に、想いを馳せていた。

《リンダ、絶対に無理するなよ・・俺が届くまで待っててて、必ず行くから》と囁いた。
窓に映る私は、あの夜のユリさんの嗚咽を聞いて、落ち込んだ顔と外見は変らなかった。
しかし気持ちは全く違うことを確認して、変化を感じていた夏の夜空に。

タクシーが着き、蘭を抱き上げた、満開で微笑んだ。
『明日寂しいから、明日の朝も抱っこするから』と微笑んだ。
「当然・・そして今夜は、ユリさんキス黙っていた罰を与える・・背中合わせで」と満開で言った。
『はい、がんばります』と微笑んで部屋に入った。
蘭が化粧を落として、パジャマで戻ってきた。
「朝、シャワーちゃんとしてる？臭いの嫌だよ」と満開ニヤをした。
『朝のお仕事してから、ちゃんとしてます・・イザという時の為に』とニヤで返した。
「イザね～、今夜がイザかもよ～」と満開ニヤニヤを出した。
『蘭も負けず嫌いだね、意地悪Ｎｏ２とられたのが、そんなに悔しいの』とニヤで返した。
「えっ、取られたの・・私のＮｏ２」と満開で微笑んだ。
『最近ユリカ・・意地悪娘』とウルウルで言った。
「まずいな、明日でまた差がつけられる、しかしカスミのポイントは、永遠の憧れやね～」と満開で笑って、電気を消して私を引っ張った。

「今夜から、カウント無しに挑戦する・・ユリカ姉さんに追いつかれないように」と言って私の腕に入って来た。
『見上げるなよ、緊張するから』と私の胸に顔を付ける蘭に囁いた。
「離すなよ、明日が寂しいから・・酔えないし、眠れないかも」と囁いて静かになった。
私は蘭を抱きしめて、蘭の香りを楽しんでいた。
蘭の寝息を感じて、額にキスをして、眠りに落ちた。

私はこの頃から、原作者に心で語りかける事で、自分を落ち着かせる事が出来るようになる。
そうする事で、ユリカの波動を感じるから。

私の稚拙な文章力や表現力では、このユリカの波動は、悔しいが上手く表現できない。
私はこの現象は、今でも特殊な事と思っていない。
練習して泳げるようになった時と、同じ程度の事だと感じている。
この波動はそのままだった、声が聞こえたりという事には、ならなかった。
だから圧倒的ユリカがいたから、全く特殊と感じなかったのだろう。

この物語は実話ですが。
読み手の皆様の感じ方で良いと、私は思っています。
ファンタジーと思われても、ミステリーと思われても、私は嬉しい。
今後もっと不可思議な者が、登場するのだから。
私にはノンフィクションだから、素敵な経験が出来たと確信できる。

夜が深さを増していて、分岐点を過ぎた、朝に移行する分岐点を。
怖がりな幼い姉弟のように、抱き合って眠る、私と蘭は夢の中にいた。

緑の瞳の輝きは、要塞の雲の上を飛んでいた、羽田に向かって。
知りたがりの、好奇心で創られた、最新型・・月光を浴びて輝くグリーン。
微笑みかけられると、我を忘れる、理想という言葉でしか表現出来ない容姿。
鍵を探し求める者、リンダの使者・・月光の雫・・溢れだす感情。
距離を無意味にするその力・・その名は・・月のマチルダ。

私はどこかで逃げていた、歳の差という現実から。

薔薇が居なかったら、やはり苦しさに負けていただろう。

薔薇は常に私を見ていた、そして私の未熟な想像を、常に超えた判断をした。

その心は正解を求めていなかった、踏出す気持ちにこだわっていた。

【今まで】などの基準を簡単に捨てる、人の心に全てを託す。

憧れを越える存在、愛されたいと望む・・唯一無二の女神。

あの屋上の短いキス・・忘れる事が出来なかったよ・・今でも。

キスが教えた、あの優しいキスが・・追って良いのだと。

覚悟があるなら、常識など無意味だと。

ありがとう・・百合・・教えてくれて。

薔薇の香り・・受入れる心・・真実の瞳。

理解されない者達の、救いの女神・・情のユリ。

マリアを産んでくれて、ありがとう・・・。

希望の背中

蝉の幼虫は永い時間、土の中に居るけど、生きてるんだよね。
モコモコ動いて感じてるんだね、地上の事を、温度も風も・・もちろん雨も。
だから成長して羽が貰えるんだね、地上での生命が短いって、言う人もいるけど。
シオンはそうは思わないよ、蝉が音を出すのは、鳴いているんじゃないよ。
歌ってるんだよ、命って素敵だって・・地球って素敵な所だって。
嬉しくて楽しくて、過ごすんだね・・永い永い一週間を。
【詩音語録　エミに伝えた言葉】

翌朝、早朝目覚めた、蘭に蹴りを入れられた、弁慶も泣くところに。
私は早朝ウルをして蘭を見た、可愛い寝顔が少しニヤだった。
《蘭、最近寝相悪いな～、これが本来の姿だな、緊張してたな今まで》と思いながら腕を抜いた。
洗面所に行き、歯を磨き、時間が早かったのでシャワーを浴びた。
着替えてキッチンに立って、卵を牛乳でといてパンを沈めて、フライパンで焼いた。
ＴＶの料理番組で見た、フレンチトーストっぽく仕上がって、ニヤニヤしていた。
レタスとキュウリとトマトにハムを、皿に盛り付けナイフとフォークを準備した。
「おはよ～今朝も幸せ・・でも寂しいかな」と蘭が満開で微笑んで、洗面所に消えた。

フランス風朝食を見て、蘭が満開全開で微笑んだ。
「これで、フランス料理屋チャラじゃないよね～」と笑顔で食べな

がら睨んだ。
『まさか・・クリスマスまでには、連れて行くよ』と笑顔で返した。
「うん・・ユリカ姉さん所で、変な事するなよ」とニヤできた。
『出来るわけないでしょ、ユリカだよ・・怖い』とウルで返した、
波動が来なかった。
「シオンの目標はいつぐらい、デビュー？」と真顔で聞いた。
『１２月前かな・・四季が揃わなくなる４月には、慣れてて欲しいね』と笑顔で返した。
「了解、その感じで私も調整するね、シオンは面白いよ～、相当やるね」と蘭も嬉しそうに笑った。
食べ終わり、蘭が一泊の準備するのを見ていた。
少し寂しくなって、蘭を見ていた、蘭も笑顔でなかった。

『どこ行くの？慰安旅行』と意識して、笑顔で聞いたみた。
「指宿・・つまんないよね～、何にも無いし」と真顔で答えた。
『ユリさんの実家、確かそっちだよ・・小百合さんの、お土産の饅頭がそうだったよ』と微笑んだ。
「チェック厳しいよね、何に対しても・・記憶力も」と満開で微笑んだ、私は笑顔でＶサインを出した。

「よし・・・抱っこ」と旅行バッグを閉めて、満開になった。
私は蘭を抱き上げて、蘭を見ていた寂しさがあった。
「寂しいんだろ～、一泊だよ・・明日はＰＧに帰るよ」と無理やり満開で微笑んだ。
『うん、絶対帰って来いよ・・待ってるから』と微笑んで返した。
「戦争行くわけじゃないから・・さて行こうかな」と笑顔で言った、優しく蘭を降ろした。
玄関まで見送り、蘭が手を振って、私も手を振って蘭がドアを閉めた。

すぐにドア開いて、蘭が玄関に入って、目を閉じた。
私は嬉しくて、少し強く抱き寄せて、唇を重ねた。
《寂しいよ、待ってるからね》と唇で伝えた。
唇を離すと蘭が目を開けて、満開で微笑んで。
「浮気するなよ、行って来るね」と微笑んで、ドアを閉めた。
私は気分を変えるために、サマータイムのレコードをかけて、朝の仕事をした。
気分は上昇せずに、今一の気分のまま、着替えと歯ブラシだけ持って出かけた。
若草通りでカスミに笑顔で手を振り、靴屋のシャッターの張り紙を見て。
ユリカの店に入った、ユリカはいつもの場所で帳簿をつけていた。

『ユリカ・・赤字なの、表情暗いよ』と笑顔で言った。
「儲かりすぎて、困ってたのよ」と爽やかに微笑んだ。
「荷物それだけなの？」と私が小さなビニール袋1つなのを見て言った。
『女性は一泊でも、信じられない荷物があるよね、今朝の蘭も凄かった』とニヤで返した。
「そうよ、色々いるのよ・・変身セットとかね」と爽やかに微笑んだ。
『リンダを見習いなさい、世界中行くのに、リュック1つだよ』とニッで返した。
「ピンクのパンティーを、見習えって言うのかと思った」と爽やかニヤで来た。
『ユリカのイメージじゃないな・・リアンのイメージだ』と真横のユリカにニヤを出した。
「今夜、例の修行するわよ・・そんな事言うんだったら」と爽やかニヤニヤできた。
『それだけは勘弁して、俺まだそこには到達してない』とウルで返

した、ユリカがプイをした。
『だから～、ユリカ、プイは駄目だよプイは』とウルウルでユリカを見た。

ユリカはプイをしたまま、両手を上げた。
私はユリカの正面に屈んで、ユリカを見て笑顔で抱き上げた。
「その修行はさせないから、今夜はロボットでいて・・私の命令通りに動く」と深い深海の瞳で、私を見ていた。
『了解、ユリカ・・俺もその方が良いよ』と笑顔で返した。
「原作者の話ね、私感動したよ、教えられたよ・・そうなんだってね」と可愛く微笑んだ。

『俺より身勝手な奴を感じたから、俺は蘭に運命を感じたけど。
どっかでそれを、素直には受入れられない、変り者だから。
ユリカに説明は不要だろうけど、蘭が持ってたリンダの写真を見て気付いた。
リンダは絶望しないし、諦めない・・意志と覚悟が違う。
別の幸せを追えば、リンダなら・・何でも掴める、どんな幸せでも。
俺は最近シオンに教えられてる、シオンの言葉は厳しい。
心をそのまま詩に変換して、歌ってくれるから。
ユリカとシオンの2人が付いてる、俺はリンダを追うよ。
生き方として、強い意志と覚悟の出来る者を・・憧れとして。
俺には最強の教師陣がついてるよね、奇跡のように揃ってる。
今この時代しかなかった、俺はギリギリ間に合ったよ。
ユリカが、たとえ結婚しても、俺への波動は切らないで。
それだけ約束してほしい、俺はそれだけで、勇気が持てるから』

ユリカの深い深海を見つめて、考えずに言った、伝えたくて。
「約束するね・・あなたを切らない、絶対に・・あなたが私に語り

かけてる限り」と真顔で言った。
その瞳が深く深海に誘った、遥かに遠い底に、暖かく光輝く世界が見えた。
自然光でも人工光でもない、ユリカの内面の光に包まれた、暖かく優しかった。
透明の世界、圧倒的透明・・純水。

『ユリカ！・・ヒントだね、リョウの心は壊れやすいんだね、だから守ってるんだね』と嬉しくてユリカを見た。

「上出来、誘われても、素直に潜れるようになったね。
私でも、他の誰でも同じだよ、誘われれば。
イメージに縛られない、その部分はシオン先生がいるからね。
はっきり言っとくよ、シオンが最高の教師だよ。
そして、本当に迷ったら・・通訳してくれる。
シオンにしか分らない言葉を、あなたの最高指導者の言葉をね」

爽やかに微笑んで、瞳を閉じた。
「充電するんだからね、キスしないでね」と目を閉じたまま、唇だけでニヤをした。
《本当に迷った時に聞くよ、マリアの言葉は、お休みユリカ》と心に囁いた、波動で返された。
ユリカの寝息が聞こえて、ソファーに座りユリカを見ていた。
何も考えずに、ユリカの寝息と、香りと、重みと、温度だけを感じていた。

ユリカが起きて、店の掃除をしてグラスを洗った。
「お昼はＰＧで食べてね、私お部屋掃除してくるね・・男が泊まるから」と爽やかニヤをした。
『いいのに～、気にしないで・・ユリカだけ磨いとけば良いよ』と

ニヤで返した。
「修行させるよ」と爽やか笑顔で睨まれた、私はウルウルで返した。
通りまでユリカと腕を組んで歩いて、手を振って別れた。

弁当屋で弁当を見て、店員のトミさんという婆さんと、笑顔で話していた。
「後、つかえてますよ～」とハルカの声がした、私は振返り笑顔を返した。
『ハルカ、何人分？』と笑顔で聞いた。
「今日は一人分、レン姉さん1時から、マダム一旦帰ったし」とウルで返してきた。
『仕方ないな～、久しぶり水槽行くか』と笑顔で返した、ハルカも笑顔で頷いた。
トミさんに謝って、笑顔のトミさんと手を振って別れて、ハルカに手を出した。
ハルカはニヤで腕を組んできた、私はハルカの少し大人っぽい色気を感じた。

『わちゃー、また不覚や・・人生最大の不覚』とハルカを見て、ニヤで言った。
「何を感じて、不覚かな～」とハルカがニヤできた。
『ハルカに微かに、ほんの少しだけ・・大人の女の色気を感じた』とウルで返した。
「ウルじゃないでしょ、そこは・・少し大人になったね、エ～ス」とニヤで微笑んだ。
水槽に入ると、ハルカがリンダ・ユリカ・シオンと、同じ席を選んで座った。
『本当に鋭いよね、ハルカって』と言いながら、ウルウルを出していた。
「辛い思い出の席なのね、ここがいいな～って思ったよ」と可愛く

ニヤをした。

「私とミサキは、凄い時代に産まれたの？」とカレーを食べながら、ハルカが言った。

『カスミ・ホノカそしてリョウ、凄いよ２０歳トリオ・・やばいよね』とニヤで返した。

「心酔の涼さんか～、ピーチじゃなきゃ良かったのに」とハルカが真顔で返した。

『ピーチ、やばい店なの？』と興味津々光線を発射した。

「店自体の経営内容は良いらしいけど、若い子ばかりのＰＧって感じ」と微笑んだ、私も笑顔で頷いた。

「でも、経営者が危ない人だって、マダムが言ってたよ」とハルカが真顔で言った。

『そうなんだー、リョウぽいと言えば、そうなんだけどね』と笑顔で返した。

水槽を出て、腕を組んで一番街を歩き、ハルカが雑貨屋で文房具を見ていた。

私はハッとして、思い出した、エミの誕生日が近い事を。

『やっぱりエミには、文房具？』と笑顔でハルカに聞いた。

「うん、私は毎年、実用的な物にしてるの」とハルカが微笑んで返した。

『ハルカ、カスミとレンと久美子に言っといてね、エミの誕生日・・後から聞いたら怒るよ』と微笑んで返した。

「もう、言っといたよ、シオン姉さんは毎年贈ってるし」とニッで返してきた、さすがハルカと思い笑顔で答えた。

ハルカの選ぶのを見ながら、私はエミをイメージしていた、何を贈ろうかと。

《あの時、エミの割算を見て、本当に感動したよな～。

そして、あの橘橋で両手を強く握っていたエミ。
厳戒態勢の時に、ミサとマリアを守る決意をしたエミ。
ハルカの寄書きに、何の躊躇も迷いも無く、心の言葉を書いたエミ。
俺は間違いなく、エミに・・3人娘にも支えられている》

そう確信して、思いついた、それにしようと。
「感傷的なの、もう済んだ？」とハルカが腕を組んできた。
『うん、3人娘に感謝してたよ』と微笑んで、光射す通りを目指した。
通りに出ると、ハルカが眩しいのか少し俯いて。
「土曜の夜の魅宴の帰り、抱っこ伝説をちょうだい」と俯いたまま言った。
『了解、でも2人だから、ミサキより目立つよ』とハルカを見た。
「祭り上げられて、なんぼでしょう・・私、カスミ姉さんのこの言葉が好きなの」と顔を上げ微笑んだ。
『そうだね、この世界を表現してるよね・・カスミは戦うんだよ、自分に対し負けず嫌いだから』と微笑んで返した。
「その点では、私も負けません・・自分に対して負けず嫌いなら」と美しく微笑んだ。
私はハルカの変化が嬉しくて、笑顔で返して引寄せた。
真昼間の夜街の通りで、抱きしめてハルカを真顔で見た、ハルカは驚く様子も無く私を見た。

「ステップUPの背中を押すのね、いいわよマミをリードする・・真昼間のラブシーンで」と微笑んで目を閉じた。
私はハルカに唇を重ねた、ハルカは震えも無く、背中に手を回していた。
《背中を押すためじゃないよ、ハルカが見えなくなりそうで、キスしたかったんだよ》と唇で伝えた。

唇を離しハルカを見た、目を開けて美しく微笑んだ、輝いていた１７歳のハルカ。
私はニコニコちゃんで、腕を組んで歩いた、ハルカも笑顔で歩いていた。
灼熱の狭い通りを、未来を信じて２人で歩いた、上下の熱に負けないように。
弱い自分に負けないように、笑顔で歩いた・・自分で選んだ道を。

ＴＶルームに入り、エアコンをＯＮにして、ハルカと掃除をした。
レンと久美子が来て、シオンが来たニコちゃんで。
『シオン、疲れは残ってないかな』と笑顔でシオンに言った。
「全然大丈夫です、昨日ユリさんと約束しました、無理はしないって」と可愛く笑った。
『ＯＫ、先生が見とくから、先生が休めって言ったら、お休みするんだよ』と優しく返した。
「はい、先生・・シオン生まれて、１番今がニコちゃんです」と笑った、可愛い笑顔に安心した。
全員でフロアーに行った、久美子がピアノに行き、４人で予約確認をした。
シオンをハルカに任せて、タバコを買いに出ようとすると。
ユリさんとマリアが来た、マリアを抱き上げて、マリアの夕食まで頼まれて、笑顔で頷いた。
マリアと出かけた、光射す場所に。

タバコを後回しにして、若草通りのアクセサリー屋で、大きめのリングとワイヤーを買った。
マリアはご機嫌で、指輪を親指にはめて、天使全開で鏡を見ていた。
『マリア、２０年早い・・駄目ですよ～』と微笑んで、抱き上げた。
雑貨店で皮の紐を買い、若草公園まで歩いた。
マリアとブランコと滑り台をして、ベンチに座り、マリアの天使全

開を浴びていた。
帰りにサクラさんの店を外から覗いた、マリアが天使全開でカスミをみつけ。
「かしゅみ！」と呼んだ、カスミが振向いて最高の輝きを放って、笑顔を見せた。
私は店にお客が一人で、サクラさんと話してるのを確認して、店に入った。
カスミが嬉しそうに、マリアを抱いた。
お客が帰り、サクラさんが笑顔で歩み寄った。

『ご主人、退院、おめでとうございます』とサクラさんに笑顔で言った。
「ありがとう、エースうちの2人も、ＰＧに連れて行って、主人から離れないで大変だから」と笑顔で返した。
『もちろん、ＯＫです、久美子も来てるし』と微笑んで返した、サクラさんが呼びに行った。
「寂しそうだね～、そんなに辛いのかい・・一泊が」とカスミが私に不敵を出した。
『マリア、よく見てごらん・・右の唇の上がり方が少し違うでしょ』とニヤで返した。
「かしゅみ～」と言ってマリア不敵をカスミに出した。
「マリア、かしゅみ～したら駄目よ、ほら、かしゅみ～はこうよ」とカスミが慌てて、シオンニコちゃんをした。
『お互いに教えれば良いんだよ、不敵とニコちゃん』とニヤニヤでカスミに言った。
「そうしよう、ユリさんが怖いから」と楽しそうにカスミが笑った、輝きの中に温もりが出てきたと感じていた。

エミとミサが出てきて、私は左腕にマリア、右腕にミサを抱いて。
エミに買い物した袋を持ってもらって、ＰＧを目指した。

エミが父親の事を話してくれて、その可愛い少女の笑顔が嬉しかった。
「ねえ、これ何買ったの？」とエミが私に笑顔で聞いた。
『俺のサファーの友達で、横浜から来るオジサンがいるんだよ。
その人が教えてくれたの、ネイティブアメリカン。
インディアンだよね、そのお守りの作り方を教えてくれたんだ。
久しぶりに作りたくてね、ドリーム・キャッチャーって言うんだよ。
出来たらエミにも見せてあげるね、作る時は見せたらいけないんだよ。
心を込めて作らないと、いけないからね』
笑顔でエミを見て言った、エミも最高の少女の笑顔で頷いた。
「絶対見せてね、ドリーム・キャッチャー、素敵な名前、明日調べよう」と強い視線で笑った。
『エミは偉いね～、そうそうエミ、昨日からシオンが働きに来てるよ』と微笑んだ。
「うそ！早く・・早く行こう」と最高の笑顔で急かした。
私はエミのその表情が嬉しくて、先を歩くエミの背中を見ていた。
小さな６歳の背中に、限りない可能性を感じて、【希望】を背負った小さな背中を見ていた。

この少し後に、エミは英会話を習い始める。
小１のエミはその時には、世界を見ていた。
今の時代のように、インターネットが有る訳ではない。
ＴＶと映画と後は自分で調べて、触れて感じなければ成らなかった。
小１で世界をイメージしていた、その能力を試す舞台を感じていた。
そのエミに大きな影響を与える者が、羽田に降りた、圧倒的存在感を示して歩いていた。

シオンが初めて、ニューヨークに向かう前日、ＰＧにシオンが挨拶に来た。

エミは涙を必死に我慢して、シオンに抱かれて笑顔で言った。

「シオンちゃんが世界を見て、私にその話を聞かせて、シオンちゃんの言葉で」

「私にはそれが１番感じるから、シオンちゃんの言葉が・・１番響くから」

そう言って泣いた小５のエミ、シオンはエミを抱きしめて。

「エミはシオンの・・好きの中の憧れだよ」と泣いたシオン。

【希望】をずっと背負い、それを見せ続けたエミ。

少し休みなさい、原作者がエミに休めと言ってるんだよ。

休養してまた始めればいいんだよ、焦らないでね・・エミ。

リンダもマチルダも、そしてユリカも絶対に見てる・・そして想ってるよ。

エミの生き方を、自分達の誇りだと・・思っているよ。

シオンも・・そして・・私も。

洞窟の叫び

ダイアモンドの価値って何なんだろう？ただの硬い透明な石なのに。奴隷みたいな待遇の人に掘らせて、血と汗と涙が染み込んだ石なのに。
どうして価値があるんだろう？価値ってなんなんだろう？
それを身に付けるのが、美しいわけないよね、透明に見える血に染まった石が。
ＴＶも新聞も雑誌も嘘つきだね、シオンは欲しくない・・不幸の石なんて。
【詩音語録】

アーケードが光を遮る通りから、光射す狭い通りに出ていく、可愛い背中を見ていた。
振返り手招きをして笑った顔は、少女の輝きで溢れていた。
母親似の彫の深さが、６歳にして感じられ、未来の美しさを想像させた。

「りょう」とマリアが呼んだ、そこを見るとリョウが、中年男と立って話していた。
リョウがその声に反応して、美しい笑顔を見せた。
ミニスカートのリョウの美しさに、見惚れていた、そのスタイルと美しい立姿に。
炎天下の世界で、そこだけ涼しさを感じさせる、リョウの目が輝いた。
中年男との話を強引に打切った感じで、近づいて来た涼しい瞳で。
「３人の子持ちだったのか～」と私に涼しげな笑顔で言った。
『リョウお願い、マリアを抱いて・・２人はさすがに重いの』と笑

顔で返した。
リョウは嬉しそうにマリアに手を伸ばした、マリアも天使全開でリョウに手を伸ばした。
私はリョウを観察してるエミの手を繋いで、リョウと並んでＰＧに向かった。
『リョウ、不倫はいけないよ～、悪い子です』とニヤでリョウに言った。
「お店のマネージャーだよ、面倒くさくて」と笑顔で返してきた。
『注意されてたね、もっと愛想よくしろって』と微笑んで返した。
「私ＮＯ１だよ、愛想良いんだよ・・お店ではね」と涼しげニヤを出した。
『俺には・・愛想悪い、リョウ意地悪２点』とウルで返した、リョウがニヤを継続していた。

『リョウ、時間有るんでしょ、お礼にＰＧでジュースでもどう？』と笑顔で誘った。
「ラッキー、見たかったんだよね～、ＰＧ」と笑顔で返してきた。
ＴＶルームは誰も居ないので、フロアーに入った。
「シオンちゃーん」とエミとミサが駆け寄った、リョウはマリアを抱いてフロアーを見ていた。
「リョウ姉さん、おはようございます」とシオンがニコちゃんでリョウに言った。
リョウの名前にレンとハルカが反応した。
「おはよう、シオン・・やっぱり可愛いな～、シオンは」とリョウも嬉しそうに、シオンに笑顔を返した。
『シオン、３人娘ＴＶルームで遊んであげて』とシオンに微笑んだ。
「了解です、シオン得意ですよ」と可愛く笑って、リョウからマリアを受け取った。
私は受付裏の小さな冷蔵庫から、オレンジジュースを２本出してリ

ョウを誘った。
『こっちがレンで１８歳、そしてこっちがハルカで１７歳』とリョウに紹介した。
「ピーチのリョウです、よろしくね・・しかしさすがＰＧ、良い子が揃ってるね～」と涼しく微笑んだ。
「リョウさんこそ、噂以上にお綺麗で、驚きました」とハルカが笑顔で返して。
「やばいと思いましたよ、エースがまた凄い人、連れて来たと思って」とレンも笑顔で返した。
楽しそうな３人を見て、リョウを１番奥の５番に誘った。
５番に座り、リョウはフロアーをじっと見ていた。

『ねぇリョウ、どうしてピーチに入ったの？』と隣のリョウに笑顔で聞いてみた。
「どっちに質問する？」と首だけ回して、猟が微笑んだ、洞窟を駆け上がる響きを連れて。
『君にだよ、猟・・狩猟の君に』と微笑んで返した。

「無理だからやめとけよ、私はお前を嫌いじゃないから」と静かな轟音で言った。
雰囲気を察したのか、レンとハルカが久美子を誘って、ＴＶルームに戻った。
『猟、俺も猟が好きだから、教えてよ、そこまでしないと、守れないのは何故なのかを？』と真顔で答えた。
「守ってるんじゃないよ、修復してるんだよ」と体ごと私を向いた。
『猟が修復してるの？２つに別れて猟がしてるんだね？』と笑顔で聞いた。
「別れたのか、別の者なのか分らないんだよ・・今じゃどっちがどうかも分らない」と静けさを増した。
地下深くから狭い洞窟を駆け上がる、その反響の響きを感じて、考

えていた。
『2人とも、自分が本体だって主張するの？』と真顔で聞いた。
「逆だよ、2人とも譲り合う・・自分じゃないと」と完全な静寂に入った。
《ここだ、この雰囲気で恐怖を感じたんだ、この静けさで来るんだ・・腕》と思って猟の瞳を見ていた。

『猟・・2人ともリョウなんだよ、守るのと修復に2人必要だったんだね』と笑顔で言った。
「一人に戻した方が、良いいと思うのか？」と少し声のトーンが上がった。
瞳が動き出した、少し水分が増え、涼しさも増した。
『猟、抱っこしていい？俺はそうしないと、分らないんだ』と微笑んだ、猟が真顔で頷いた。
私は猟を優しく抱き上げた、素足の太股にも何も感じなかった、集中していた。
間近の猟の瞳は映し始めた、泥沼から中指が出て、少しずつ正体を見せた。
『猟、小さな洞窟は何？腕は関係ないよね、洞窟だよね問題は』と真顔で猟の目を見て言った。

「閉じ込められてた、さっきの真ん中の女の子位の時に。
母親が再婚した相手の男が、閉じ込めたんだよ・・私が邪魔で。
その当時の私の家は、宮崎市の外れで家の裏に、防空壕がまだあった。
私が何か些細な事をしても、そこに連れて行かれたんだよ。
怖かった、暗くて寒くて・・でも逃げ出せなくて・・泣いてたんだよ。
小学校4年頃から、その男の暴力がはじまって、毎日殴られた。
母親もしつけと自分に言い聞かせて、見て見ぬ振りを続けた。

そして中2の」

そこまで言った時に、私が止めた・・聞かなくても想像できた。
『猟、もういいよ、分ったから・・辛かったね、寂しかったね』と真顔で猟を見ていた。
『でも、なんで？・・猟はもう独立して、家を出てるんだろ？』と真顔のまま聞き返した。
「さっきの男が、その男だよ・・逃げられない、母親を人質に取られてるようなもんだから」と叫んだ、初めて聞いたリョウの本当の声だと思った。
猟の瞳に映る腕が力の限り、外に出ようとしていた、潤み出した瞳が光った。
その潤ませてる純水が、瞳から溢れた、私は5番に座って猟を抱きしめた。
震えていた、何かと闘いながら、私の背中に爪を立てた。

『猟、話してよ、相手の男の事を・・話すだけで良いから』と猟の耳元に優しく囁いた。

「元市役所職員、なんかヘマして辞めた・・でも今でも顔がきくから。
夜街じゃ誰も手が出せない、なんか言ったら保健衛生とか風紀なんて事で。
徹底的にやられるのを、皆知ってるから。
母親は今病気療養中で、私が引きとるには、金が必要なんだよ。
でも私は水商売しか出来ないし、そうなるとピーチでしか働けないんだよ」

私にしがみつき、震えながら言った。
『猟、ピーチにトンネルみたいな所ある？』と聞いた。

「あるよ、裏からフロアーに回るのに、小さなトンネルみたいな通路があるよ」と囁いた。
震えはかなり収まってきた、私の背中の指の力が抜けていた。
私は猟を少し起こして、意識して笑顔を見せた。
『猟のお母さんはどう思ってるの？今はその男の事を』と微笑んで聞いた。
「別れたいと思ってる、あの男もそう思ってる・・ただ私を離したくないだけさ」と静かに言った。
瞳が落ち着いて、清涼感のある輝きが戻っていた。

『猟も離れたいんだね、本心で今の現状を変えたいんだね？』と優しく問いかけた。
「できるもんなら・・そうしたいとずっと思ってる」と真顔で言った。
『変るなら、どんな店が良いの？』と笑顔で聞いてみた。
「静かな感じの、大人なお店・・今まで騒々しい店だったから」と少し微笑が出た。
『猟、その気持ち強く持ってね、チャンスが来たら強く持ってね』と私も微笑んで返した。
「何？考えてる・・無理だよやめとけ、ＰＧに迷惑がかかるよ」と真顔で返してきた。
『大丈夫、心配するなよ』と笑顔で言って抱きしめた。
その時素足の太股を感じて、焦っていた、かなりスカートが上がっていて、下着が見えそうだった。
「今頃、気付いて動揺したね・・サービスだよ」と言って、ゆっくりと右足を上げた。
光沢のある紫の、小さなパンティーが見えた。
『ありがとう、魔性の猟』と言って、スカートに手をかけて下げた。
リョウを通りまで送って、笑顔で手を振って別れた。
《さてと、やりますか・・頑張ってくるね、ユリカ》と囁いた、暖

かい波動が来て嬉しかった。
ＴＶルームに戻ると、マダムも来ていた、挨拶をしてロッカーに向かおうとすると。
「おい、返す必要はないぞ、ピーチとやりあうんだろ」とマダムが言った。
『なんでそんなに、鋭いのかな～』とマダムを見た。
「ピーチの武藤は見るだけで虫唾が走る、やってみい・・市役所の○○部長や武藤の子分は」とニヤで言った。
『失敗したら、ＰＧに迷惑がかかるよ』と真顔で返した。
「策略じゃ無敗なんだろ、ＰＧはそんな事じゃ揺らがんよ」とマダムが微笑んだ。
『じゃあちょっと、行ってきま～す』と笑顔で言って、ＴＶルームを出た。
通りに出て公衆電話で電話をして、居所を確認した。

連絡がとれて、３０分後に市役所で待ち合わせた。
時間があるので、歩いていた、前を歩く可愛い背中が見えた。
『昨日、呼び出し電話が無くて寂しかった・・ミサキ意地悪１点』とウルで声をかけた。
「もう、ビックリするじゃない・・そんなに簡単になりません」と笑顔で返してきた。
『ミサキって名前・・どうかな？』と笑顔で聞いた。
「凄く嬉しかったよ、本当に嬉しかった」と微笑んだ、私も嬉しくて笑顔を返した。
『ねぇ、ミサキ、魅宴は今、女性募集してる？』と笑顔で聞いた。
「常に募集してるよ、でも大ママの面接厳しいよ」とニヤで言った。
『それは大丈夫、実力は大ママも知ってるから』と笑顔で返した。
「そんな仕事もはじめたの、スカウトマン・エ～ス」とニヤニヤで返された。

『うん、ミサキが必死になる爆弾を持っていくよ、ミサキの未来の為にも』と言って魅宴のビルの下で、ミサキと別れた。

市役所に着くと、市会議員がもう来ていた、私は笑顔で歩み寄った。
『こんにちわ』と議員に微笑んだ、真顔で私に近づき耳打ちした。
「人目があるから、難しい事か？」と小さく囁いた。
『〇〇部長って呼び出せる？』と私も小さく囁いた、議員は頷いた。
『議員先生は一緒に居るだけでいいよ、それで貸し１つチャラ、６発殴ったから、後５つ』と囁いた。
議員は渋々頷いて、大きな応接室に通してくれた。
連絡を秘書にさせ、私の横の上座席に座った。
「なぁ、何したんか、〇〇は？」と興味津々で言った。
『公務員のくせに、ひいきしたの』と少年ぽく言って返した、議員はニヤを出して頷いた。
その時ノックが響いた、痩せた５０代の神経質そうな男が入って来た。

「まぁ、かけなさい・・この子は私の大切な知り合いだから、話を聞いてくれ」と議員が言った、部長は頷いた。
『ピーチの武藤・・知ってるよね？』と私は真顔で部長に言った、目を逸らし反応が無かった。
『ＯＫ、分った、机の荷物まとめなよ・・そんな対応じゃ懲戒免職だね』とはったりを言った。
部長は私を見て、真っ青になった。
「武藤さんは私の上司でした、知っています」と部長が青い顔のまま答えた。
《この青さは、相当の事をしてるな》と思って見ていた。
『ＯＫ、今から２人で行こうよ、武藤の所に・・あんたを助けてやるよ、それともここで追求されたい？』と微笑んだ。
「分りました、車を正面に回します」と言って立ち上がり、議員に

深々と頭を下げて出て行った。
「なんだよ、奴に1つ付けるのか」と議員が残念そうに私に微笑んだ。
『また楽しい事、持ってきますよ、ありがとうございました』と頭を下げて、部屋を出た。

正面玄関で、部長は公用車の横で待っていた。
私は後部座席に乗った、車は静かに出発した。
『ねぇ、この話・・俺の中で収めるから貸しだよ』と静かに言った、部長は頭を下げた。
『武藤を追い込むから、和解案を出してね』と笑顔で言った、部長は青い顔で頷いた。
ピーチに付き、部長の後を入って行った。
大きなフローアーもピンクで、客席も明るく危険な雰囲気がした。
客席で待ってると、武藤が来た、部長が立って頭を下げた。
「おっ、PGのエース同伴とは、嬉しいね～」と武藤が笑顔で言った。
『引き抜きに来た、リョウを解放してもらう』と真顔で返した。
「なに言ってるんだ、ちょっと名前が売れると、のぼせ上がって」と私の前に座りながら睨んだ。
《迫力無いな～、所詮元公務員か、つまんね～》と思いながら、武藤の目を静かに見ていた。

『部長さん、このバカ分らんみたいやから、やっちゃってよ、このバカに頼まれてした事、バカに対して』と静かに言った。
武藤はそれで理解した、部長が付いて来てる意味を。
「仕方ないですね、今からやります」と部長が静かに言った、武藤は部長を睨んでいた。
『2人で相談してきたら、武藤、言っとくけど変な策練ったら、梶谷か望月のカード使うぞ』と武藤を睨んで笑った。

それで武藤は青ざめた、《つまんね～》と思って、武藤の背中に声をかけた。
『武藤、客を一人で待たせるなよ、指名・・リョウ』と微笑んだ、武藤が頷いた。
さっきと同じ服で、リョウが走ってきた。

「何したの？」と真顔で言って、隣に座った。
『紫パンツのお礼～』とニヤニヤで返した、リョウが笑顔になった、本当に美しかった。
『リョウ、2人を無理に1人にしないで良いと思うよ、個性だと思ってればね』と微笑んだ。
「個性か～、そうだね・・そうしとくね」と涼しい瞳が輝いた。
武藤と、部長が戻ってきて、向かいに座った。
「エース分った、条件を言ってくれ」と武藤が真顔で言った、リョウの美しい笑顔が輝いた。

『リョウに2度と近づかない、そして母親と話して別れたい時は、無条件で離婚する。
リョウに慰謝料として、3年は親子2人が余裕で生活できる額を支払う。
もちろん、新しい住まいも、母親の治療費も考慮してね、少ない時は梶谷さんに回すから。
そして、2度と夜街にバカな手を使わない、そして大きな貸しを俺に1つ』

真顔で武藤の目を見て言った。
「分った、そうする・・それでこの話は、ここだけになるんやな？」と武藤が私を見た。
『もちろん、無かった話にするよ、現金である程度は出せるんだね？』と笑顔で返した。

「あぁ」と俯いて答えた、安心した感じだった。
『まぁ、今夜からホテルにでも泊まっててよ、引越しが済むまで』と静かに言った、武藤は頷いた。
『リョウ、荷物まとめな・・面接行くぞ』とリョウを笑顔で見た。
「分った、待ってて・・ここで絶対待っててね」と言って、背を向けて走って行った。
『部長さんありがとう、お仕事戻って、武藤さんもお仕事戻っていいよ』と笑顔で言った。
2人は頭を下げて立ち去った、私はトンネルを探した。
それは、奥の暗い場所にあった、這わなければ進めない程、小さい物だった。
《潰しとけばよかった、こんな店》と思っていた。
その暗く小さい洞窟を、必死に通る女性達の叫びが聞こえそうで、切なかった。
《女性達の理由があって選んだ道を、狭め閉じ込める洞窟が、何本この街にあるのか》そう感じていた。

「エース、終わったよ〜」とリョウの明るい声がした、その声の変化が気分を変えてくれた。
『可愛い声なんだね・・カタカナのリョウ』と笑顔で言って、荷物を持った。
「うん、自分でもビックリだよ」と腕を組んできた、清涼感に包まれて輝いていた。
《大ママに、また大きな貸しが出来そう》そう思ってニヤニヤしながらピーチを後にした。
通りに出ると、光が降り注いだ、眩しさに負けない輝きで、リョウが隣で笑っていた。
「それで、面接はどこの店？」と腕を強く組んだリョウが笑顔で言った。
『ここだよ』と魅宴の裏階段を登りはじめた。

「ちょっと待って・・本気なの、本気で私が務まると思ってるの？」と立ち止まって、リョウが真顔で聞いた。
『リョウ、自信を持てよ・・銀河の奇跡だろ、リョウとホノカとカスミは』と真顔で返した。
「銀河の奇跡・・私達３人の称号なの？」と目を輝かせた。
『今つけた、俺が・・いいだろ～』とニヤで手を出した。
「よし、やってみる・・エースに紹介されたんだから」と笑って手を握った。

魅宴の裏扉の踊場にリョウを残し、魅宴に入った。
大ママはマミとフロアーにいた、私は笑顔で大ママに頭を下げた。
『大ママ、おはようございます』と笑顔で言った。
「エース、爆弾連れて来たのかい？」と笑顔で返された。
『絶対に魅宴にも、ミサキにも、プラスになる爆弾です・・前の店とは綺麗にケリをつけました』と真顔で返した。
「よし、早く連れておいでよ、もったいぶらないで」と大ママが微笑んだ、私も笑顔で頷いた。
リョウを連れて、フロアーに戻った、大ママもミサキもハッとして、笑顔になった。

「ピーチにいました、リョウと申します、頑張りますのでよろしくお願いします」と綺麗な姿勢で、深々と頭を下げた。
「頑張るって、ＮＯ１を狙うんだね、その素質で？」と大ママが笑顔で聞いた。
「はい、必ず取ってみせます」とリョウも美しく大ママに微笑んだ。
「いつから、来れるんだい？」と大ママは嬉しそうにリョウを見て聞いた。
「出来るなら、今夜からでお願いします」とリョウが頭を下げた。
「よろしくね、リョウ」と大ママが微笑んだ。
「よろしくお願いします」と言ってリョウは頭を下げて泣いていた、

清涼感を振り撒いて。

リョウをミサキが案内して、奥に消えた。

『大ママありがとう、助かったよ』と笑顔で言った。

「なに言ってるんだい、こっちが大感謝だよ」と笑顔で私を抱きしめた。

『銀河の奇跡、そう称号をつけた・・カスミ・ホノカ・リョウの３人組』と笑顔で言った。

「私とユリとミチルも、競わせようという事だね」と体を離して大ママが笑った。

『正解、期待してます』と笑顔で返した。

「任せなさい、あれだけの素材、滅多にいないからね～」と笑っていた。

私は大ママにもう一度礼を言って、裏口から魅宴を出た。

階段を降りて、通りに出た所で呼ばれた。

「エース、ありがとう・・必ず見せるよＮＯ１リョウを」と手を振っていた。

その輝きを見ていた、美しい２０歳の輝きが嬉しくて、笑顔で手を振って別れた。

心酔のリョウの本番が幕を開ける、その圧倒的容姿と気さくな会話で、有言実行を成す。

２３歳で魅宴のＮＯ１になる、そして結婚で引退する２６歳までＮＯ１に君臨する。

心酔のリョウ・・魔性の女と言われるのを、楽しんでいた。

その瞳の涼しさが、いつまでも消える事は無かった。

【銀河の奇跡】・・今でも語られるそのトリオ、奇跡が同じ年に産み落とした者。

３人が違う個性を持ち、違う美しさで輝いた。
愛情表現も三者三様で、言葉使いにも個性があった。
夜の遊び人達は、自分は【誰】とタイプを話すのに、引き合いに出した。
深夜のディスコに、３人に誘われて行った時。
ＶＩＰルームに通される時の、満員状態の静寂を思い出す。
３人が並んでダンスフロアーを横切った、若者達が道を空け。
喧騒が静寂に変り、音楽だけが流れた。
同世代の若者達の、溜息が聞こえた。
リョウが涼しい瞳で微笑み、ホノカが華麗に微笑み。
カスミが不適に微笑んで座った、圧倒的迫力に全員が押された。
【私が欲しけりゃ、死ぬ気でおいで】・・カスミの名台詞が聞こえてきた。
銀河の奇跡・・まさに奇跡の３人だった・・。

銀河の奇跡

全部リアンが教えてくれたね、歯磨きも顔を洗うのも。
幼稚園も、手を繋いで送ってくれた、自転車も水泳も縦笛も勉強も・・全部。
私が学校に上がってから、普通のクラスは難しいと言われた時。
小学校に乗り込んだリアン・・高校1年生のリアンが涙で訴えた。
シオン出来るって叫んでくれたね、届いたよ教室まで・・嬉しかった。
その言葉が、私の支えだよ・・いつも叫んでくれる・・シオンは出来るって。
今でも・・ずっと・・だから大丈夫だよ、心配しないでね。
【誌音語録　最初の旅立ちの時、宮崎空港にて　リアンに伝えた、感謝の言葉】

狭い雑居ビルに挟まれた通りに、開店準備の気配が漂いだしていた。
怪しい風俗の呼び込みさんは、もう通りに出て獲物を狙っている。
私は呼び込みさん達に、都度笑顔で挨拶をして、ＰＧの裏階段を登った。
ＴＶルームには松さんが来ていて、エミが勉強、ミサはピアノ、マリアは蛙のように寝ていた。
エミから買い物した袋を受取り、フロアーに入った。

レンがタバコを買って来てくれていた、シオンはカズ君に付いて、客の案内の仕方を聞いていた。
私は工具箱からペンチを出して、リングに慎重に皮紐を巻いていた。
「また、怪しい事してるね、何が出来るの？」とハルカが聞いた。
『インディアンのお守り、ドリームキャッチャー』と微笑んで返した。

「なるほど～エミちゃんの、どうして人の心に、響くことを思い付くのかね？」とレンが笑顔で言った、ハルカも笑顔で見ていた。

「ところで、リョウさんどうなったの？」とハルカが真顔で聞いた。
『あぁ、魅宴に預かってもらったよ』と下を向いてニヤしながら言った。
「えっ！・・本当に」とハルカが驚いて言った。
『リョウが、静かな店でやってみたいって言ったから、俺・・静かな店、魅宴しか知らないから』と固まってる、2人を見て微笑んだ。
「信じられん男だ」とレンがニヤで言って。
「ミサキは燃えるね、そこまで考えたのね」とハルカが微笑んだ。
『3人の称号も付けといたよ、銀河の奇跡って、大ママもＯＫしたよ』とニヤ継続で言った。
「銀河の奇跡、いいな～」とレンが言って。
「銀河の奇跡の中の永遠の憧れ・・絶対その上は存在しないような称号ね」とハルカが微笑んだ。
『そんな事ないよ、そこまでくれば2人にも、良いの用意してるよ』と笑顔で2人を見た、嬉しそうに笑っていた。

ＴＶルームに戻ると、マダムとユリさんとカスミが来ていた。
「どうなったんや？」とマダムが笑顔で言った。

『つまんない相手だった、2度とこの辺を、大きな顔して歩かないよ。
リョウは魅宴に預かってもらった、静かな店で挑戦したいって言ったから。
カスミ・ホノカ・リョウの、3人の称号を贈ってきたよ。
銀河の奇跡・・中々でしょう、大ママＯＫしたよ』

笑顔で最後はカスミを見た、目を潤ませて輝いていた。

「素敵ですね、大ママとミチルと私も、競えと言う事ですね？」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
『正解です、ユリさんが1番大変ですね、口の悪い泣き虫ですから』と泣いているカスミを見て言った。
「お前が泣かせるんだろ、ありがとな」とカスミが無理やり笑った。カスミの優しさに触れ、嬉しかった、その暖かい輝きを見ていた。

女性達に食事をさせて、エミとミサとトランプで遊んでいた。
「エース、ローズに連れて行っては、くれるんだろ？」とレンが言った。
『もちろん、でもミサキみたいには付いてないよ、レンはＰＧのフロアーレディーなんだから』と笑顔で返した。
「了解、ありがとうな」と笑顔で返して来た。
「行ってみたいな～、ローズの研修」とカスミが笑顔で言った。
『カスミ、自分の事何も分ってないね、カスミを受入れる所はもう無いよ、レベルが違う』とニヤで返した。
「褒められました～」とレンとハルカに不敵を出した。
「ハルカ、いつかギャフンと言わせようね」とレンがカスミにニヤで返した。
「はい、そして不敵を、おみまいしましょう」とハルカもカスミにニヤで言った。
「カスミちゃん期待してますよ、まさかですけど、私が大ママやミチルに、負ける事はないでしょうね？」とユリさんが、悪戯っ子をカスミに出した。
「それはありえません、絶対に」と笑顔で返した、ユリさんも薔薇で微笑んだ。

「カスミ姉さん、一度ホノカさん遊びに連れて来て下さい、見たいな～」とハルカが言った。
「了解、ぶっ飛ぶよ、見たら可愛い系統は諦めるよ」とニヤで返し

た。
『なんか本気なのか、演技なのか分らないよね、ホノカ』と私が笑顔で言った。
「多分、自分でも分ってないよ・・お前の正直な感想は？」とカスミが不敵で聞いた。
『一緒に暮らせたら、どんなに素敵だろう、きっと幸せだろうと思うよね～、ホノカ』とニヤで返した。
「そこなんだよな～、強いよな～、その魅力」とカスミが本気で悔しがった。
「なんか、毎日楽しいねハルカ」とレンが笑顔で言って、「はい」とハルカが微笑んだ。
「私も楽しいで～す」とシオンもニコちゃんで続いた。
『良かった～、シオンが銀河の奇跡じゃなくて・・やばかったよ』とカスミがシオンに微笑んだ。
「シオン、不敵が欲しいんです」とニコちゃんで返した。
「カスミ、ニコちゃんが欲しいんです」とカスミが不敵で返した、2人のお見合いを全員で笑って見ていた。

「エースに今回のミチル・シオン・リョウの貢献を讃えて、私から特別待遇を贈ります、午後から営業時間は、フリーに行動してかまいません」と薔薇で私に微笑んだ。
『本当にいいんですか？』と笑顔で返した、嬉しくて自然に笑顔になった。
「あなたを信用します、そしてシオンも、あなたが常に側にいない方が、今からは良いでしょう」とシオンに薔薇で微笑んだ。

「はい、もう皆さんお友達になってくれました。
シオン初めてで嬉しい、特別な視線や言葉で接さない人達に囲まれて。
本当に嬉しいです、エースがＰＧなら大丈夫。

ユリさんの場所でなら出来ると言った、意味が分かりました。
エース、頑張ってね・・私は大丈夫です、エースが心にいつもいるから」

ニコニコちゃんで私を見た、私も嬉しくて笑顔で返した。

『ありがとうシオン、俺にとって、シオンは特別だよ。
近い将来シオンがフロアーに立つのを、いつも想像してる。
絶対に出来る、いや・・ただ出来るんじゃないね。
シオンは、そのシオンの心のままにやれば、カスミが震えるよ。
先生はカスミがニコちゃんを見て、楽しくて震えるのが見たいんだよ。
自分のペースでやるんだよ、ずっと見てるからね・・詩音』

笑顔でシオンのニコちゃんを見ていた、全員がニコちゃんシオンを、優しい笑顔で見ていた。

女性陣が準備に向かい、マリアも起きて、3人娘と夕食を食べた。
フロアーに入り、指定席でレンを待っていた、四季とユメ・ウミとシオンが談笑していた。
そのニコちゃんシオンを見て、嬉しくて、私も笑顔になっていた。
カスミ、サクラさんと入場した。

「ありがとうエース、本当にありがとう」と後から耳元に囁かれた。
振向くと、大ママと真後ろにリョウが立っていた。
純白のドレスを着た、美しいリョウが微笑んでいた、その美しさに目を奪われた。
フロアーの女性も、全員リョウを見ていた。
『リョウ、ドレスで挨拶周りなの・・やるね～』と微笑んで返した。
その時ユリさんが入場した、一礼して大ママとリョウを見て、薔薇

で微笑んだ。
大ママとリョウを、ユリさんがフロアーに誘った。
「今夜から魅宴に入った、リョウちゃんです、２０歳ですよ」とユリさんが薔薇で紹介した。
「リョウです、こちらのエースの紹介で、魅宴にお世話になります、よろしくお願いします」と言って、深々と頭を下げた。
「よろしくお願いします」と女性全員が返礼した。
「ユリ、ありがとう、素晴らしい子を譲ってもらって」と大ママが微笑んだ。
「本当に素敵ですね、お祭りの時より、輝いていますよ」とユリさんがリョウに微笑んだ。
「ありがとうございます」と嬉しそうな笑顔で、リョウが頭を下げた。

「しおらしいね～、にゃんこ被ってるね、リョウちゃん」とカスミが不敵を出した。
「あら、カスミちゃん不敵が弱いわよ・・もしかして、私に衝撃を受けたわね」とリョウが涼しげ最強ニヤで返した。
女性全員が２人をニヤで見ていた、楽しそうに笑っていた。
「楽しみだね～、このＰＧのメンバーにホノカとミサキと、そして最終兵器シオンを加えた時代は」と大ママが微笑んだ。
「本当に、後でニヤニヤしてる、誰かさんのおかげで」と全員が私を見た、慌ててニヤをやめた。
「大ママ、貸しって言われませんでしたか？」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「言われてないけど、エースには借りが多すぎて怖いよ」と笑顔で言って頭を下げて、リョウと帰って行った。
レンが可愛いワンピースを着て、迎えに来た、シオンに行ってくる

と言って出かけた。
通りに出て、腕を組んで来たレンを見ていた、大人への変化を確実に感じた。
『久しぶりに、腕を組むとレンの変化には驚くね、いよいよだね～』とニヤをした。
「楽しくてね～、久美子がそれを1番喜んでくれるし」と可愛く微笑んだ。
『そうだよね、レンが自分の犠牲じゃ、久美子は良い音は出せないよね～』と前を見て囁いた。
「泣かすなよ、ローズに勝負に行くんだから」と真顔で私を見た、私は微笑んで返した。
ローズのドアを開けると、リアンが飛んできて、レンを3人のローズの女性達に紹介した。

私は開店前なので、BOXに座ってその光景を見ていた。
リアンがレンの緊張を解くように、笑顔で話して、全員の笑顔を作っていた。
《なるほど～、リアンとユリカの違いか～、面白いね・・ユリカ》と囁いた、波動が静かに来た。

「なんで大ママにだけ、特別なのかね～」とリアンが獄炎ニカで来た。
『あぁ、リョウね、静かな店でやりたいって、言ったからね』と笑顔で返した。
「銀河の奇跡ね～、確かにそうだね」と美しい笑顔を見せた、燃える瞳に見られて、動けなかった。
『リアン、良い事あったね、熱量が増してる・・男だな』とニヤで言った。
「シオンだよ、今日のシオン見て、嬉しかったよ」と嬉しそうに微笑んだ。

『うん、俺もだよ、シオン俺の手を離れた、ユリさんが認めたよ次の段階、シオンは凄いよ』と笑顔で返した。
「そうなのか！シオンは良い時代に生まれたな～、最高のＰＧの時代に」と目を潤ませた。
その時に２０人の予約団体客が入った、私は笑顔で、レンにサインで【ＧＯ】と出して出口に向かった。
レンも笑顔で頷いて、【了解】を出してＢＯＸに笑顔で向かった。

通りに出て、ニヤニヤしていた、自由行動が嬉しくて。
「気持ち悪いよ、未経験のニヤニヤは」と腕を組まれた、ホノカが華麗ニヤをしていた。
『ホノカ、重役出勤だね』とニヤで返した。
「うん、今夜は遅出の９時出勤なのよ」と微笑んだ、可愛いな～と本気で感じた。
『まだ、時間あるね・・カスミの仕事覗く？』とニヤで返した。
「うそ！良いの、嬉しい～」と強く腕を組んで微笑んだ。
『確かに爆弾持ってるね・・ホノカ』とニヤニヤ顔で微笑んで、裏階段を登った。

ＴＶルームでマダムにホノカを紹介した、ホノカが笑顔で頭を下げた。
「ミチルも、素晴らしい子に、出会えたんやね～」とマダムが微笑んだ。
「ありがとうございます、私もミチルママに出会えた幸運に、感謝しています」と高貴な笑顔で返した。
ホノカを連れてフロアーに入った、一瞬女性達の目が集中した。
ホノカはカスミと目が合って、最強華麗ニヤを出した、カスミも小さく不敵を出した。
シオンがハルカポジションで、サインを繋いでいたので、私の指定席にホノカを座らせた。

可愛く華麗な笑顔で、興味津々でフロアーを見ていた。
開店直後の客は6割程度で、女性も余裕があるのか、ホノカをチェックしていた。
ハルカの反応が1番強く、ホノカを凝視していた。

『ホノカ、リョウを今夜から魅宴に行かせたから、そして3人の称号付けたよ』とホノカに微笑んだ。
「えっ、リョウをピーチ抜けさせられたの、ミチルママがあそこじゃ駄目だって、言ってたから」と驚いて私を見た、真顔も美しかった。
『うん、そうだったみたいだね』と微笑んで返した。
「ありがとう、エース・・そして称号は？」と最強華麗で輝いた、心を鷲掴みにされる微笑みだった。
『銀河の奇跡・・ホノカ・カスミ・リョウのトリオ』とニヤで返した。
「最高、ありがとう・・よし」と笑顔で言って立ち上がり、フロアーに向かい深々と頭を下げた。
頭を上げる時に、輝きを連れていた、圧倒的な可愛さを見せ付けて、最強華麗で微笑んで出口に向かった。
私はホノカを通りまで送って、手を振って別れた。
《凄いよな～、ホノカ・・頭を上げる時、輝きが残像のように溢れだすな～》と思っていた。

フロアーに戻り、シオンがニコちゃんで、業務のサインを繋ぐのを驚きながら見て、指定席に座った。
客席は3番を残すだけとなっていた、リョウ・ホノカの影響で、9人衆の熱が高かった。
私を見る視線が多いのを気付いて、意識してニヤニヤしていた、それでまた熱量が増した。
ユリさんが私に薔薇で微笑んだ、私も微笑みで頷いて返した。

大手電気メーカーの重役が3番に入って、9時過ぎに満席になった。シオンがVサインを出して、熱は上がり続けた、暑い夏を凌駕する熱に包まれていた。

《シオンが、最高のPGに出会ったんじゃないよリアン、シオンが入って完成するんだよ最高が》と囁いた。

暖かい波動が、同意を示したように感じて、嬉しかった。

『シオン、ちゃんと休憩しなよ、リョウの仕事見てくるね』とシオンに微笑んだ。

「はい、先生ありがとう、シオン本当に嬉しい」と可愛く微笑んだ。

私はキュンキュンで2発撃たれて、笑顔で返して、出かけた。

ユリカの店のビルを見上げて、囁いた。

《ユリカ、今夜意地悪しないでね、俺本当に楽しみにしてるんだよ、ユリカと添い寝するの》とニヤをした、強い波動が動揺を示した。

私はニコちゃんで、魅宴の裏階段を登った。

事務所に若い女性がいて、大ママはフロアーだと教えてくれた。

魅宴の裏から、フロアーを見ていた、大ママがリョウを連れて回っていた。

リョウの輝く笑顔を見ていた、涼しい瞳が魔性を強めて笑っていた。

《完全復活だね、リョウ・・良かったね》と囁いて、思い出していた。

ピーチの洞窟を、暗いほろ穴みたいなトンネルを。

《せめて照明を点けさせよう、暗い気持ちを、和らげる事だけでもしてあげよう》そう思っていた。

【同じ深さに棲む、同じ海流に乗る魚】薔薇の言葉が浮かんできた、その深い優しさを連れて。

「少し目が潤んだよ、リョウを見て、エースの気持ちを感じて」と後からミコトが囁いた。

『ミコトが焦る顔が、先に見たかったんだよ、最高の爆弾だろ』と

振向いて微笑んだ。
「心酔のリョウ、銀河の奇跡・・最高の爆弾だよ、私にも、ミサキにも」と美しく余裕で微笑んだ。
『ミコト、綺麗だね・・本当に綺麗だ』と素直に言った。
「ありがとう、あんたが言うと嬉しいよ」と笑顔で返して、フロアーに向かった。
その美しい余裕を漂わせた背中を見ていた、そこにキングが入って来た。
大ママがミコトにサインを出して、ミコトがリョウを連れてキングの席に向かった。
キングも嬉しそうにリョウを見て、2人を招き入れた、リョウは少し緊張気味に笑顔を出していた。

「しかし、大ママに、あれだけ貸しを付けるかね〜」とミサキが横に来て、フロアーを見ながら言った。
『目が燃えてるよ、ミ・サ・キ』とニヤで返した。
「燃えるでしょう、最高のプレゼントを貰ったなら」と私を見て微笑んだ、淡く美しく輝いた。
『土曜の夜、ここの帰り、ハルカが抱っこ伝説要求したよ』とニヤニヤで言った。
「やっぱり、私の次は?」とニヤで返して来た。
『真昼間のラブシーン、どうするミ・サ・キ』とニヤ継続で言った。
「受けましょう、なんなら土曜の夕方でも良いわよ」と微笑んだ、挑戦的な淡い目を見て嬉しかった。
『楽しみにしてるよ、誘いに来るのを』と微笑んだ、ミサキも可愛く微笑んでいた。
キングの隣のリョウは、緊張が取れて魔性を出していた、キングも楽しそうに笑っていた。
私は蘭のいない寂しさをずっと背負っていた、その大きな存在を感じていた。

しかし一方で、ユリカとの夜を楽しみにしていた、その複雑な心を楽しめていた。

突然、ベンチが薄い映像で出てきた、マリアのポスターを見ている、私の背中がみえた。
なぜか映像が潤んでいた、そして微かに揺れていた。
蘭の視覚の映像だと思い、切らないで見ていた、両手が銃を作り目の前に現れた。
潤みが止まり、揺れも治まった・・私が振返ろうとする場面で止まった。
《蘭が今イメージしたんだ、寂しいんだね、蘭・・俺も寂しいよ》と囁いた、暖かく長い波動が包んでくれた、嬉しくて映像を切った。
映像の進歩？私は考えないことにした、どうせ理解出来ない事だと思っていた。
この現象の原因は、間もなく判明する、強い力が東京にいたのだ。

私の映像の映写機をくれたリンダ、そのフィルムを託された女・・マチルダ。
距離を凌駕する心、月の満ち欠け・・教えるのは強い想い。
月が影響を与える・・潮の満ち引き・・生命誕生の源。
距離に負けない強い想い・・それは必ず影響を与えると囁く。
波を起こすために、創られた最新兵器・・会えば分る、月のマチルダ。

私は、このリョウの件は永く引きずる、あの洞窟が頭から離れなくなる。
リョウの心の変化は、2度のマリアとの絡みで、解れていた。
実質的なチャンスを、私が与えたに過ぎない、精神的にはマリアが解決したと言って良い。
リョウは2人の自分を、個性と信じて、上手く付き合ってコントロ

ールしていた。
６年後、リョウに結婚報告を受けるのに、食事に誘われた。
「・・・だから笑顔で引退するね、今までありがとう」とリョウが微笑んだ。
圧倒的美しさと、男を虜にしてしまう強い魔性を身につけた、魅宴のＮＯ１がいた。
『良かったね・・リョウ』と私が微笑むと。
「私は今一、賛成してないよ」と少し太い声になって、猟が言った。
『仕方ないな猟は、もう充分やったろ・・後はミサキに任せなよ』と微笑んで返した。
「それだけが、私・・猟の楽しみだよ」と笑顔で言って消えた、涼に戻った時も笑顔は変らなかった。
《個性で良かったよ、ユリカ》と消えたユリカに囁いた、微かな波動を感じて嬉しかった。
後日私は武藤を訪ねて、トンネルを明るくすることで、武藤の貸しをチャラにした。
どうしても許せなかった、その洞窟のような通路が。
どんな理由にせよ、夜の仕事を選んだ女性を潜らせる洞窟が。
闇から轟音を伴い響いた言葉と、あの傷だらけで泥まみれの腕が、心に残った。
幼子を虐待する人間が、どうしても許せなかった、そしてずっと引きずっていた。
私は慰謝料期限の３年後、結局別件で、武藤を追い込む、そして武藤は街を出る。

見たくなかった、その時の私には、武藤を見ると映像が流れたから。

今でもある、児童虐待・・どうか無くなって欲しいと願う。

暗い洞窟で泣いている声が、今も響いている。

耳を澄まそう、聞こえたら行動しよう。

そうしないと、リョウはまだ暗い闇の底にいる、一人で泣きながら。

腕だけを伸ばして・・助けてと叫んでいるから・・。

揺り篭に抱かれて

７０年代も後半に入ってきていた、夜空の星は無数に瞬いていた。
熱い８０年代の幕開けを前に、熱は上昇を続けていた、夜街に繰出す人々も確実に増加していた。
南九州は、特に酒を飲む文化が発展していた、今では珍しくなくなった芋焼酎の文化が。
私は魅宴を出て、通りで夜空を見上げて、蘭を想っていた・・逢いたくて。
歩きながら前方の小さな人影で、ニコちゃんになって、走り出した。

『ユリカ、またさぼってるね』とユリカに近づいて、笑顔で言った。
「寂しん坊の甘えん坊が、よく喋るから・・仕事が手に付かないわよ」と爽やかニヤを出した。
『そんなに緊張するなよ、可愛いね・・ユリカ』と笑顔で返した。
「リョウの事、マリアに任せたくせに、まぁ実質的な事はしたけどね」と笑顔で腕を組んで来た。
『ユリカ、俺の2人のリョウを個性と言ったの、どう思う？そこだけ自信ないんだよ』と真顔でユリカを見た。
「私にも何とも言えない、世間では病気と見られるけど、リョウを見るとそうじゃないと思うよね」とユリかも真顔で返して来た。
『うん、リョウが上手くコントロール出来れば、大丈夫な気がするよ』と微笑んでユリカを見た。
「あなたが見てるんでしょ、状況で判断するしかないわね」と爽やかに微笑んだ。
私はユリカを抱き上げて、階段を登った、ユリカは瞳を閉じて、静かに抱かれたいた。
最上階に着いて、夜景を見ていた、満天の星空と。

「ＰＧ終わったら、すぐに来るんでしょ？」とユリカが目を開けて微笑んだ。
『うん、走って来るよ、ダッシュで』とニヤで返した。
「明日の朝、お粥と味噌汁と卵焼き」と爽やかニヤで言った。
『了解、泣くなよ、ユリカ』とニヤで返した。
「そんなに、修行したいの～」と爽やかに微笑んだ、私はウルで首を横に振った。
ユリカを優しく降ろして、笑顔のユリカと別れた。

ＰＧに歩きながら、風俗店を見ていた、ピーチより悪い状況があるんだろうと思っていた。
フロアーに戻ると、シオンが休憩中で、美冬と英語で話していた。
『アメリカかぶれが、２人で自慢話してる』とウルで言った。
「シオンちゃん、英会話完璧だよ」と美冬が嬉しそうに微笑んだ。
「美冬姉さんも、凄いです」とシオンも振向いて、ニコちゃんで言った。
『ど～せ俺は、ど～んとかば～んしか言えないよ』とウルウルで返した。
「先生、それは素敵な事です、それでもリンダちゃんを、感動させたんだから」とシオンが可愛い笑顔で言った。
「出来ないよ、あの愛情表現は・・本当に暖かかったよ」と美冬が微笑んだ、私は嬉しくて笑顔で返した。
美冬が扉に消えて、シオンの隣に座った。

「先生は、どんな風に覚えるのが、得意ですかね～」とニコちゃんでシオンが言った。
『先生がシオンに、沢山お話するから、それを一行ごとに英語で言って、それが良い』と笑顔で返した。
「はい、楽しそう、お話が聞けて」とニコニコちゃんになった。

シオンがハルカポジションに戻り、終演前のフロアーを見ていた、熱は冷める気配が無かった。
「さっきのが、ホノカさん？」とハルカが来て微笑んだ。
『そうだよ、銀河の奇跡でしょ』とニヤで言った。
「世界は広いね～、リンダさんに会った時と、同じ衝撃だったよ」と笑顔で言って、扉に消えた。
客が３組になり、シオンを連れてローズに向かった。
豊兄さんとの出会いの話をしていた、シオンが英訳して返すのを聞きながら。
エレベーターで最後の場面になり、シオンがポロポロ泣きながら、英訳してくれた。
シオンが可愛くて、最上階に着いて、抱き上げて少し充電をさせた。

シオンを優しく降ろして、ローズに入った、ＢＯＸに一組カウンターに２人組がいた。
レンはＢＯＸで接客していた、可愛い笑顔が出ていて、安心した。
シオンとカウンターの隅に座った、シオンはニコちゃん継続中だった。
ＢＯＸが帰り、レンと挨拶をして、ＰＧに向かった。
「凄い勉強になるよ、リアンさん凄いな～」と腕を組んだレンが微笑んだ。
『凄いんだよ、リアンもユリかも』と微笑んで返した。
「明日は魔女でトライか～、頑張ってみるよ」と笑顔でレンが言った。
『頑張ってね、レン・・何か見つかると良いね』と笑顔で返して、裏階段を登った。
ＰＧは終了していて、フロアーには誰も居なかった。
レンと久美子をタクシーまで見送り、ユリカの店に走ってみた。
エレベーターのドアが開くと、ユリカが笑顔で出てきた。

『早いねユリカ、待ってたの？』と笑顔で聞いた。
「待ってたよ、今日は早じまい」と爽やかに微笑んだ。
ユリカとタクシーに乗り、ユリカのマンションに着いた。
大淀川沿いの、瀟洒な新しいマンションだった。
『さすが、ユリカ・・お洒落だな～』とユリカに微笑んだ。
「そう、あまりこだわらないけど、川が見えるからね」と言って、2人でエレベーターに乗った。
玄関に入り、中扉を開けると、大淀川が一望できた。
リビングまで腕を組んで歩き、夜景を見た、対岸のホテルの明かりが、川面に映り幻想的だった。

『素敵な所だね、ユリカらしい部屋だし』と笑顔で言った。
「らしいのイメージを、述べよ」と冷蔵庫を開けながら、ユリカが微笑んだ。
『清潔でシンプル、でも少しある遊び心』と言って、ヌンチャクを手に取って、ニヤをした。
「あら～、それを忘れてた」と爽やかに笑って、舌を出した。
『こんなに意外な物はないな、驚きも頂点だ』とニヤしていると、ユリカがビールを出してくれた。
「それでも飲んどいて、シャワー浴びてくるから・・一緒に浴びる？」とニヤを出した。
『修行はしません』とウルで返した、笑顔のユリカは浴室に消えた。
私はチビチビビールを飲みながら、ドリーム・キャッチャーを作っていた。

「何でも器用に作るわね」と頭にタオルを巻いて、ビールを持ってユリカが隣に座った。
シルクのような光沢の、白いパジャマを着て、良い香りがしてきた。
『好きなんだよ、何でも作るの』と笑顔で返して、少し緊張していた。

「そっか～、蘭は夜の仕事帰りはシャワーしないから、緊張するのか～」と爽やかニヤを出した。
『それもあるし、良い香りがしたから』と笑顔で返した。
「ソファー、寝るには小さいね」と爽やかニヤ継続で言った。
『うん、小さい』と笑顔で頷いた、ユリカのロボットになっていた。
ユリカの瞳が深海にの深さになって、立ち上がり私の首に腕を回した、私はユリカを抱き上げた。
「そこ・・それとここ」と楽しそうにユリカが指示をして、照明を消して。

「OK、その奥の扉」と爽やかニヤで言った、私が扉の前に立つとユリカが開けた。
大きなダブルベッドがあって、窓からは大淀川が一望できた。
私はそのベッドルームに圧倒されて、窓際までユリカを抱いたまま歩いた。
『この、展開と、このベッドルームだけでも、意地悪だね・・ユリカ』と微笑んだ。
「私と添い寝すると、辛いかもよ・・羊水で酔うかも」と真顔で言った。
『ユリカ、羊水は酔わないよ・・でも無理しないで良いよ』と優しく囁いた。
「添い寝してほしい、カスミちゃんの時に感じた、添い寝を私にもして」とユリカが微笑んだ。
『辛い時は言うと、約束するなら』と微笑んで返した、ユリカは笑顔で頷いた。

私はユリカを窓際に寝かせて、横に座りユリカを見ていた。
優しく深い目を見て大丈夫と思い、ベッドに入りユリカの首の下から、優しく腕を通した。
そのまま優しく私の方に向けた、ユリカは私の胸に顔を付けて静か

にしていた。
震えてないユリカを確認して、少し引き寄せた、甘い香りが漂った。
「眠れそう？・・大丈夫？」とユリカが囁いた、恥ずかしいのか、顔を隠したままで。
『ユリカ、俺の事は何も気にしないで、俺は眠るのが惜しいから・・眠らないかも』と優しく囁いた。
「カスミちゃんの気持ちが分ったよ、本当に安心できるね」と囁いて。
「私は完璧な添い寝初体験だからね、１つ足しといてね」と少し上を向いて微笑んだ。
『了解、カスミは１回かもしれないけど、ユリカは違うだろうからね』と優しく囁いた。
「私は本当に良い後輩を持った、本当に優しい・・蘭は」と爽やかに微笑んだ。
『ユリカが好きなんだよ、蘭は』と微笑んで返した、ユリカは笑顔で頷いた。
少女のようなユリカが、愛おしかった、川面の反射の微かな光に照らされていた、少女の面影が。

「押さえようと思ってるけど、揺り篭出るかも」と真顔で言った。
『ユリカ、押さえなくていいよ、リラックスして、俺はその方が良いから』と笑顔で囁いた。
『ねぇユリカ、それも嫌だったの・・揺り篭に乗せる事が』と優しく聞いてみた。

「そう、結局・・羊水の揺り篭って、あなたが教えてくれる前も、感じる人は感じていて。
　好きになった人に言われるのよ、でも誰もあなたのような、探求をしなかった。

途中で気持ち悪がったり、興味本位の方向に、走り出したり。
私はそれが分かるから、好きな人の感情が読めるから、辛くなった。
感情が読めるのを教えたのは、男性ではあなたが初めてよ。
普通はそこまでは行かない、それを知ると覚めるのよ、仕方のない事なの。
誰でも秘密はあるし、愛情で隠すこともあるわ。
疲れるのよ、隠せない相手って・・だから私は教えなかった。
あなたが最近してくれた、色々な事、特にお味噌汁の贈り物。
本当に嬉しかった、あなたが見せてくれたから。
隠せるって・・相手を想えば隠せるって、見せてくれたから。
ありがとう、エース・・寝てるみたいだから話せたよ」

そう囁いた、完璧な揺り篭に乗せられて、私は嬉しくて目を閉じた。
ユリカが少し体をずらし、私の顔まで上がってきて、唇を重ねた。
私は我を忘れていた、羊水の揺り篭に乗り、キスをされてユリカの感情が入って来た。
目を閉じた私は、完全な透明の世界にいた、そしてユリカの声だけが聞こえた。
その声は、【私を忘れないでね】と響いてきた。
私は《忘れたりしないよ》と心で囁いて、唇からも伝えた。
かなり長い時間ユリカは唇を重ねていた、私は透明の世界に包まれていた。
ユリカが唇を離し、元の位置まで移動して、私は目を開けた。
「忘れたりしないよ？・・どこから聞こえた事に返事したの？」と爽やかに微笑んだ。
『透明の世界、ユリカの世界で・・水の外から聞こえてきた、忘れないでねって』と微笑んで返した。
ユリカは笑顔で私を見ていた、私も笑顔でユリカを見ていた。

「映像がおかしいの？今夜何か感じてたんでしょ？」と真顔で聞いた。
『今夜突然、蘭との出会いのシーンが流れた、それも蘭の視点で流れたんだよ』と微笑んで返した。

「映像が見れるようになったのは、リンダの影響だから。
あなたがリンダを忘れない限り、残るんだと思うわ。
でも、蘭の視点で見えたって、それを蘭がイメージしたんでしょうね。
それを感じるのかな～、距離もあるのに」

ユリカが深海の瞳で囁いた、私はただユリカを見ていた。
『例えば、ユリカなら俺の想いは、どの辺まで感じるの？』と微笑んで囁いた。
「距離的な事は分らないけど、ＰＧもブルーの湖の時も同じだったわよ」と爽やかに微笑んだ。
『ユリカは蘭の精神状態は読めないよね、どうしてかな？』と素直に疑問に感じた事を言った。

「あなたが私より、蘭を愛していつから、それが消えたら、私はあなたに会わないよ。
蘭のあなたに対する感情だけ読めないの、リンダの写真とかの感情は読めるのよ。
私に対する物も、だから私は蘭に甘えてるの、今夜もこうして」

ユリカは真顔で答えて、そして爽やかな笑顔になった。
『そうなんだね、ありがとう、ユリカ』と笑顔で返した。
ユリカは私の胸に顔を付けて、静かになっていた、私は軽い揺り篭状態が続いていた。
その気持ち良さと、窓の外の景色が幻想的で、最高の気分で何も考

えずにいた。
ユリカの甘い香りと、寝息が聞こえていた、寝息で微かに揺り篭が揺れていた。
私はユリカの額にキスをして、眠りに落ちていった。

翌朝、陽の光で目覚めた、ユリカは私の腕の中にいた、可愛い寝顔を暫く見ていた。
ゆっくりと腕を抜き、カーテンを閉めて部屋を暗くした。
洗面所に行き、歯を磨き顔を洗った。
ユリカの歯ブラシやコップが、意外に少女趣味なのを見てニヤニヤしていた。
大きなキッチンで、冷蔵庫を開けた、食材がびっしり入ったいた。
私はご飯を確認し、２人分は有った、小さな土鍋がコンロの上に置いてあった。
《準備万端ですね～》と思ってお粥を作り、豆腐と大根とワカメ入りの味噌汁を作り。
卵焼きを焼いて、カニさんタコさんウインナーとレタスにトマトを添えた。

リビングでドリーム・キャッチャーを編んでいると、ユリカが起きてきた。
「おはよう、確かに幸せな気分になるね～」と微笑んで、洗面所に消えた。
朝食をリビングのテーブルに運んだ、ユリカが戻ってきて、最高の笑顔になった。
「確かに涙が出そうになるね、嬉しいな～」と爽やかに微笑み、箸と茶碗を出してきた。
「はい、お礼、私の家にあなたの茶碗と箸を、置いてあげます」と微笑んだ。
『ありがとう、凄く嬉しいよ・・ユリカ』と笑顔で返した。

2人で朝食を笑顔で食べていた、窓から入る川風が気持ち良かった。
「今夜から、少し寂しいかな」とユリカが微笑んだ。
『それを言うなよ、ユリカ・・俺も寂しくなるから』と真顔で返した、ユリカは微笑んでいた。
「うん、私、お熱用に、蘭も泊まれるようにしてるよ」と嬉しそうに微笑んだ。
『それは素敵だ、教えると泊まりに来るよ、蘭は』と微笑んで返した。
「よし、今度パーティーしよう、あなたのお父さん説得祝いでね」と爽やかニヤを出した。
『覚悟が出てますかね～』とウルで聞いてみた。
「無いのよね～、気配すら無いよね」と爽やかニヤを出した。
朝食を食べ終わり、二人で食器を洗って、私はシャワーを浴びた。

ユリかも化粧をして着替えていた、私はビニール袋を抱えて、ユリカと店に向かった。
ユリカの車は可愛い赤の、フォルクス・ワーゲンで、内装も可愛く仕上げてあった。
『ユリカ、運転するイメージないな～』と隣で運転に集中する、ユリカを見ていた。
「私もイメージないの・・話かけないで」と前を見て真顔で言った、その表情が可愛くてユリカを見ていた。
赤玉駐車場に停めて、ユリカのビルのエレベーターを待っていた。
「私から離れないでね・・強い何者かが上にいる」とユリカが手を強く握った。
『大丈夫だよ、ずっと付いてるから』と意識して笑顔で返して、緊張した。
最上階の扉が開き、私が先にユリカの店の方を見て、凍結した。
ユリカの店の前に、金髪の少女が体育座りして、顔を膝に付けていた。

ピンクのリュックが目に飛び込んで、最高の喜びを感じた。
『リンダ！』と私はユリカの手を引っ張って、駆け寄った。

「リンダ？」と言って、顔を上げて私達を見た、思考が戻ったのか笑顔になった。
私は人生最大の凍結を経験していた、その笑顔になる時に震えた。
リンダより少し銀の強い、プラチナブロンドの髪が煌き、瞳のグリーンに完全に確保された。
視点を合わせる時の、緑の深さの変化に息を飲んだ、淡緑が深緑に変化していった。
強い意志が大きな瞳と、その上の眉により示され、同時に優しさを湛えていた。
日本人にはありえない高さの鼻が、完璧な一本の細い筋で、頂上まで伸びていた。
肌の色はリンダよりも透明感があり、顎から首筋が美しくセクシーで。
唇は若さのためか、少し厚くそれが可愛さを引き立てていた。
理想、まさに理想のイメージだ、理想で描いていくと、こうなるんだと思っていた。

「エース」と満面の笑みで私に抱きついた、私は本当に失神しそうだった。
『ユー・わ・誰・ネーム・ファット』と全く理解不能の言葉を発し、後のユリカに笑われた。
「私は、マチルダ・・リンダの友達よ」と完璧な日本語を話して、微笑んだ。
本当に失神しそうな微笑だった。
『待って、微笑まれると、失神しそう・・なんか変な光線出してるね』と必死に微笑んで返した。
「失神ビ～ム」とビームだけ英語で言って、再び笑顔で抱きついた、

私は意を決して抱き上げた。
「まぁ、どうぞ入ってくつろいでね」とユリカが笑顔でドアを開けた。
私はマチルダの至近距離の顔が、怖くて見れなかった、それほど可愛かった。
突然顎をマチルダに掴まれて、下を向かされた、可愛い顔がふてくされていた。
「ルック・ミー」とニヤをした、《なんて可愛いニヤなんだろう》と思いながら、微笑んで見ていた。

ＢＯＸに座らせて、リュックを取りに行った、戻るとユリカと英語で話していた。
『マチルダ、出会って3分で、意地悪1点』とウルで2人を見た。
「トップは何点？」とマチルダが笑顔で聞いた、飛び込みたくなるような笑顔だった。
『３８点』と笑顔で返した、ユリカは楽しそうに私達の絡みを見ていた。
「明日には抜けるね、日本人は優しいのね」と不敵を出した。
《なんて可愛い不敵なんだろう》私はこの感想だけの世界に入っていた。
私がユリカの横に座ろうとすると、腕を掴まれた、私はマチルダを見た。
「私の事が嫌い？」とウルウルをしていた、私はど～んで撃たれてウルウルで返して。
『バカだな～、マチルダを嫌いなわけないだろう』と少し大人っぽく言って、マチルダの隣に座った。
ユリカが珍しく、声を出して笑っていた。

「それで、リンダちゃんの依頼で来たんですね」とユリカが爽やかに微笑んだ。

「はい、エースの周りの人々に、会ってきてほしいと言っていました。
リンダは時間が足りなかったのを、非情に残念だったようで。
今は忙しくて、手が離せないので、代わりに私が来ました」

マチルダが、ユリカに微笑んだ、私は緑の瞳を凝視していた、その変化が美しくて。
『マチルダ、日本語上手だね～』と笑顔で聞いた。
「私、日本産まれなの、１３歳まで東京に住んでたんだよ」と少し威張った、胸の大きさに驚いていた。
『そっか～、どおりで上手い訳だね』と笑顔で返した、マチルダはリュックから小さなメモ帳を出した。
「んと～、エース・・ウルウルに弱くて、胸に過剰反応」と言いながら書いていた。
『マチルダ、可愛いね、リセットしよう今からにしよう、ねっ・・ねっ』とウルで言った。
「駄目～、今から日曜まで頑張って、ご機嫌取りなさいね」と私の頭をヨチヨチしながら微笑んだ。
『がんばりま～す』と笑顔で返した、ユリカが楽しそうに笑っていた。

「マチルダ、泊まる所は決めたの？」とご機嫌のユリカが聞いた。
「今から、場所見て探そうかと思ってます」と可愛く微笑んだ。
「私、今夜から寂しいの、泊まってくれないかな～」と爽やかに微笑んだ。
「本当に良いんですか、嬉しいです」と笑顔が輝いた、本当に輝いていた。
「夜はここだから、それでも大丈夫？」と爽やか継続で微笑んだ。
「もちろん、私はエースが、色々案内してくれますから～」と笑顔

で返した、私はウルしていた。
「嫌なの？」とペンを持って、不敵を出した。
『光栄です、マチルダ姫、何なりとお申し付け下さい』と笑顔で頭を下げた。
「うむ、良い心がけだね・・エース」と言って笑った、少女の匂いが残る笑顔だった。
ユリカの笑い声を聞きながら、楽しい事の始まりを感じていた。
私は全く気付いてなかった、マチルダにリンダが託した本当の意味に。
ユリカから話を聞いていたリンダが、興味を持っていた、天使のマリアに。
ユリカの店の前に、マチルダが体育座りをしている姿は、今でも鮮明に覚えている。
その時の自分の喜びに、自らが驚いていた、リンダと思った時の喜びに。
その心に棲む大きな存在を、再認識させられて驚愕していた。
そして驚きは続く、リンダの使者、マチルダの感性に触れる度に。
マチルダは大きな影響を、皆に与える。
理想が創りだした美、微笑むだけで停止する背景。
辛い時必ず思い出す笑顔、絶対に逃げない瞳。
時と距離を無視する妖精・・緑が輝く時、笑顔が溢れる。

笑顔の配達人・・そこに誘って、笑顔にさせて・・マチルダ。

緑の使者

天空より舞い降りた使者、この世の理想の姿を見せる。
その緑の瞳は限りなく深く澄んでいる、見つめられると停止する。
背景も感情も停止を余儀なくされる、何者かの強い意志で創られし者。

「マチルダ、疲れてないですか？」とユリカがマチルダに真顔で聞いた。
「大丈夫です、東京で休暇をとりました」と微笑んで返した、私はその輝きの正体を見ていた。
緑の瞳の輝きが尾を引いて流れる、その残像が煌いて揺れるのだ。
プラチナブロンドの髪が、反射を繰返す、光の当たる角度で色自体が変化する。
意志の強い視線が見つめる、少女の香りの強さは、リンダを思い出す。
そして圧倒的何かを経験している、それゆえ心に余裕がある、それが隠れない。
《精神がリンダと同じなんだね、マチルダ・・楽しい事の始まりだね》とユリカに囁いた。
ユリカが私に爽やか最強の微笑で、頷いた。

「それで、今からどうしようか～、エース」とマチルダが笑顔で私を見た、キラキラと輝いていた。
『何からしたいのかな～？いやらしい事以外なら、何でもＯＫだよ』とニヤで返した。
「いやらしい事は駄目なの？蘭さんが怒るんだ～」と怖い位のニヤできた。
『リンダ、マイ・ハニーの事まで話したんだね』と少し照れて返し

た。
「いつ会える、蘭さん・・どうしても会いたいの」とマチルダが真顔で返した、私は嬉しかった。
予想通りの反応で、リンダの気持ちが伝わってきて。
『夕方には会えるよ、きっとマチルダも好きになるよ』と笑顔で返した。
「楽しみ～、リンダが一瞬で好きになったって言うのは、珍しいから、絶対に会いたかったの」と微笑んだ、緑の変化を見ていた。
感動的だった、その感情の変化で目まぐるしく変る、深みが神秘的だった。

『リンダは蘭と、挨拶を交わす時間しか、無かったからね。
実はねマチルダ、蘭はリンダを知っていたんだよ。
リンダが写る新聞の切抜きを持っていた、大切に肌身離さず財布に入れてたよ。
蘭とリンダは生年月日が全く同じで、それで興味を持って記事を読んで、感動したって。
その生き方に共鳴して影響を受けたらしい、それで自分も乗り越えられたと言ってたよ。
リンダに会ったのを、本当に喜んでたよ』

マチルダの深い緑を見ながら、微笑んで言った、緑は変化しながら深くなった。
「リンダが聞いたら、凄く喜ぶよ、絶対に」と微笑んで返して来た、圧倒的に輝いていた。
《カスミがマチルダに会った時も、楽しみだ》と思って笑顔で頷いた、ユリカの波動を感じていた。

「じゃあ、ユリカさんとは、ゆっくり時間が取れるから、エースのPGに行きたいな～」とマチルダが可愛く微笑んだ。

『ＯＫ、いいよ・・最初は言葉に注意するように、厳しい女神がいるからね』とニヤで言った。
「任せて、これでも世界中で仕事をさせて貰ったのよ」と可愛く少し威張った。
『威張る時、胸を張らないで、過度に反応するから』とウルで返した。
「リンダの言った通りだね～、面白い」と可愛いニヤニヤを出した。
「荷物は置いていて良いわよ、エースがここまで送ってくれますから」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「ありがとう、ユリカさん・・ユリカさんに会えただけで、この旅の意味がありました」とユリカに微笑んだ。
《すでに気付いてるのか、マチルダ、ユリカの力に》と思ってユリカを見た。
爽やかな笑顔で、深い深海の瞳で頷いた。
その笑顔が美しかった、ユリカの内面が全て出てるような美しさだった。
《そうだね、マチルダはユリカが怖いと思うような、強い何かがあるんだね》と心に囁いた、強い波動の返事があった。

「今からが面白いよ～、ＰＧで一度働かせてもらうと、面白いけどね～」とユリカが爽やかをニヤを、私に出した。
「それは素敵ですね～、よろしくエース」と私の耳元に囁いた、その近さに少し震えた。
『楽しんでるね、マチルダ・・リンダの方が素直で可愛い』と必死にニヤで返した。
「エース、本当にブロンドに弱いわね～」とユリカが楽しそうに、ニヤを出していた。
「そうなんだ～、で・・リンダの方が可愛いの～」と微笑みながら、顔を近づけた。
私は一瞬停止状態になった、マチルダ以外が全て停止した、感情も

停止したようだった。
何かに囚われたようで、だが不快でなかった、風を感じていた森を吹き抜ける風を。

『反則だよマチルダ、出来すぎてるよ、その顔』と停止が戻って、必死で間近のマチルダにニヤを出した。
「正直な子ね・・楽しくなりそう」と微笑んで、私の頬にキスをした、私は失神寸前だった。
マチルダが最高可愛いニヤで、自分の左の頬を差し出した、緑の視線から輝きが流れた。
私は震えを感じながら、余裕を装いキスを返した。

「はい、お土産」とマチルダがリュックから封筒を出した、私は受取り開けて見た。
蕎麦屋でリンダと、2人で写ってる写真が出てきた、リンダの笑顔を見ていた。
《この後が寂しかったな〜》と思っていた、空港の別れが蘇り、切なくなった。
「私との写真も、そうやって見させるよ・・空港で泣かせるね」とマチルダが真顔で言った。

『マチルダ、帰る想像今からさせるなよ・・見送るだけの人間は辛いんだから。
俺は今からマチルダが帰るって言っても、寂しくて泣くよ。
何も出来なかったって、感じると辛いんだよ。
リンダに何もしてやれなかったから、時間のせいにしたりしないよ。
マチルダ、何でも言って、楽しんで思い出いっぱい、リュックに詰めて帰ってね。
俺は空港で泣くけど、その時までは、マチルダの側にいるから』

真顔でマチルダを見ながら言った、マチルダも美しい真顔で見ていた。
「ごめんね、試すような事を言って・・エース、リンダが言った通りだった」と美しい真顔で言った。
「初めて感じたわ、言葉が追い抜いてた・・最高だったよ」とユリカが深い深海で微笑んだ。
マチルダも笑顔になって、私の方を向いて、圧倒的に深いグリーンで私を見た。

「目を閉じて、リンダを描いて・・出来るでしょ」とマチルダが緑を深めたまま微笑んだ。
『マチルダ・・ＯＫ』と微笑んで返して、目を閉じた、マチルダが私の両頬に手を当てた。
薄い映像が出た、リンダを見つけた時の映像が、静止画像だった。
「イメージして、１番イメージが出来る人を」とマチルダが囁いた。
私は当然蘭をイメージした、蘭の姿がリンダに重なってきた、背景が鮮明になった。
そしてリンダも鮮明になってきた、蘭は完璧な姿で満開で笑っていた。
私は蘭の満開が嬉しくて、笑顔になっていた。

「よし、今日はここまで・・出し惜しみ～」とマチルダが笑った。
『マチルダの・・ケチ』と目を開けてウルで返した。
「でも、よく受入れたね・・映像」とマチルダがニヤで言った。
『考えても理解できないことは、考えないの・・天才だから』とニヤで返した。
「なるほど～、ある意味天才だよ、リンダが惚れるんだから」と最強輝き光線ニヤを出した。
『本当の話かな～、・・俺も好きだよリンダ・・Ｉ　Ｌｏｖｅ　Ｒ

ｉｎｄａって叫んだのも嘘じゃないよ』と微笑んで返した。
「エースありがとう、リンダは大切な物を、エースに貰ったって言ってたよ」と微笑んだ、発光してきた美しく、内側が光を出してきた。
《少し心を開いたね、マチルダ・・可愛い奴だ、分りやすいね》と心に囁いた、ユリカが必死で声をたてずに笑っていた。

『俺の方が沢山貰った、世界を広げてくれた・・リンダは心の中に棲んでるよ』と笑顔で立ち上がって、マチルダに手を出した。
「私にもちょうだいね、大切な何か」とマチルダが腕を組んだ、私は笑顔で返した。
『ユリカ、夕方までに来るよ、ユリカ抱っこしないと、調子でないから』とユリカに微笑んだ。
「必ずよ、私も調子出ないから」と爽やかに微笑んで返した、美しさが少し強まったと感じていた。
ユリカに見送られ、エレベーターで降りて、通りに出た。

直射日光を浴びたマチルダの、プラチナブロンドの輝きが眩しかった。
『マチルダ、お歳はいくつ？』と笑顔で聞いた。
「２０歳になったばかりよ、若いでしょ」と輝く微笑でで返して来た。
光が当たっているマチルダを、直視が出来ないでいた、それ程の輝きだった。
《２０歳か～まさに銀河の奇跡》と思っていた。

「せんせーい、まって～」と後からシオンの声がした、２人で振向いた。
「先生、凄い～人と歩いてますね」と私にニコちゃんで言って。
「・・・・・・」英語でマチルダに、ニコちゃんで話しかけた。

『シオン、マチルダさん、日本語も上手だよ』と笑顔で言った、マチルダはシオンを優しく見ていた。
「シオンちゃん、マチルダです、お友達になってもらえますか？」とマチルダがシオンに微笑んだ。
「喜んで、シオンもそう思ってました」と全開ニコちゃんで微笑んだ、マチルダも嬉しそうだった。
マチルダがシオンの頬にキスをして、シオンが最高ニコニコちゃんで、キスを返した。
ＰＧの裏階段を登りながら、マチルダとシオンは英語で話していた。
シオンの本当に嬉しそうな、ニコちゃん笑顔を、マチルダの深い緑の瞳の笑顔が見つめていた。
《シオン、どんな影響を受けるんだろう、凄そうだ》と思った、暖かい波動が同意を示した。

３人でＰＧに入った、ＴＶルームにはマダムと、ユリさんハルカにレンが来ていた。
シオンを先に入らせ、マダムとユリさんに言った。
『マダム、ユリさん、俺の友達が遠方から来て、ＰＧを見せてと言ってるんだけど』と笑顔で言った。
「あら、らしくないですね、どうぞ入ってもらって下さい」と薔薇で微笑んだ。
私はマチルダを招き入れた、ユリさんとシオン以外が固まった。
「まぁ、素敵な女性ですね、どうぞこちらに入って」とマチルダに薔薇で微笑んだ。
「こんにちわ、マチルダと言います、突然来てすいません」と綺麗な立ち姿で、頭を下げた。
ユリさんが最高の薔薇でマチルダを見ていた、マチルダも嬉しそうにユリさんを見ていた。
マチルダの瞳が最高に輝いた、緑が澄み切った透明感を出していた。

「素晴らしい、本当に素敵です、よくその若さでそこまで辿りつきましたね」と最高の薔薇で微笑んだ。
「ありがとうございます、あなたのその言葉が、最高に嬉しいです」と微笑んだ、ハルカとレンは呆然とその輝きを見ていた。
《ユリさんどこまで見えてるんだろう、女性を見る本物のプロは》と思っていた。
私はマチルダにを座らせて、全員を紹介して、マチルダの来日目的を話した。
「経験もしたいという事かしら？」とユリさんが薔薇継続で聞いた。
「はい、チャンスがあれば、全て経験したいと思っています」とマチルダも微笑んで返した。
「ここもやってみますか？良い経験になると思いますよ」と薔薇で微笑んだ。
「嬉しいです、よろしくお願いします」と微笑んで頭を下げた、日本人のような対応だった。

その時久美子がマリアと帰ってきた、マリアはマチルダを見て駆け寄った。
マチルダはマリアを抱きとめて、天使全開のマリアを見ていた、優しい緑だった。
『マリア、マチルダだよ』と私がマリアに声をかけた。
「まちるだ！」と驚くほど強い声で呼んで、両手をマチルダの頬に当てた。
その時のマチルダの笑顔の輝きに、震えた、緑の瞳が発した輝きに、我を忘れて見入っていた。
マチルダは瞳で、何かをマリアに伝えてるようだった。
マリアは天使全開で見ていた、深い緑の森のような瞳を。

「マリア」とマチルダは優しく言って、マリアの両頬に手を当てた。
その時マリアが涙を流した、私は固まってその光景を見ていた、そ

の美しい光景を。
誰も動けなかった、マリアの流した涙の透明度に触れて、静止していた。
暖かい何かが包んでいた、出会うべくして出逢った者を、包んでいた。

「まちるだ、ありがと」とマリアが天使で言った。
全員に感動が溢れた、どうしようもない感情が溢れ出した。
マリアの長台詞を初めて聞いて、その声の美しさが、待ちに待った時が来たのを告げた。
強い波動が何度も来た、ユリカの喜びも伝わってきた。
ユリさんは泣いていた、嬉しそうに、マリアに薔薇で微笑みながら。

「マリア、ありがとう」とマチルダも目を潤ませていた、マチルダの瞳は発光を止めなかった。
マチルダの深いグリーンに映る、マリアを見ていた、天使の笑顔が緑で守られているようだった。
静寂の支配する、絵画のような光景を、全員が感動して見ていた。

少し落ち着いて、久美子が切りだした。
「私、久美子と言います、マチルダさんよろしくお願いします」と可愛く微笑んだ。
「よろしく、久美子ちゃん」とマチルダも輝く笑顔で返した。
「マチルダさんは、今は何処にお住まいなんですか？」と久美子が笑顔で聞いた。
「登録上はリンダの家になってます、一年の内１ヶ月程度しかいませんけど」と微笑んで返した。
マチルダが久美子を見ていた、グリーンが少し淡くなった。
《視点を合わすでけじゃないな、それだけならこれだけ変化をしない》と思っていた。

「あなたが、ピアニスト久美子ですね、リンダからの伝言があります。
もし将来の道で悩んだ時は、一年を挑戦に賭けなさいと。
その才能を早くから、クラッシックだけに捧げないで欲しいと。
本場を感じて欲しい、リンダはいつでも待っています。
ニューヨークに来るならば、生活の援助をリンダがしたいと言っています。
それだけの素質があると言ってましたよ、その時が来たら選択の1つにしてね」

マリアを抱いたマチルダが、優しい笑顔で久美子に言った。
この時の、久美子の喜びは想像できない。
久美子の顔が輝きを増して、目を潤ませてマチルダを見ていた。

「本当に嬉しいです、リンダさんにそう想われて、マチルダさんに伝えて頂いて。
選択の時、自分に正直に判断します、そしてその時はリンダさんに連絡します。
ありがとうございます、リンダさんの言葉だけでも勇気がもらえました。
たった一度のセッションだったけれど、私には一生の宝物になっています。
そうリンダさんにお伝え下さい」

16歳の最高の輝きで、マチルダを見ながら、久美子は微笑んで頭を下げた。
頭を上げずに泣いていた、自分の才能を最高の相手に認められ、嬉しくて泣いていた。
マチルダは私にマリアを預け、久美子の前に座り、抱きしめた。

「絶対に自分を信じるのよ、そして感じてね、世界の広さを」と輝きながら抱いていた。
愛おしい妹を抱く、姉のように優しかった、レンも泣いていた嬉しそうに。

「マチルダさんは、ご両親のお生まれは、北欧かしら？」とユリさんが真顔でマチルダに聞いた。
「ドイツです・・東ドイツ」とマチルダが真顔で返した、東ドイツの言葉が弱かった。
ユリさんの目が優しく深くなった、マチルダの緑も深緑になっていた。
2人は見つめあい、それ以上何も話さなかった。
ユリさんが薔薇で微笑み、マチルダも美しい笑顔を返した。
私は勉強不足で、東ドイツを聞いても、何もイメージ出来なかった。

「我家にも一泊してほしいわ、マリアの為にもお願いできる？」と最高の薔薇で微笑んだ。
「もちろん、光栄です」とマチルダの笑顔が輝いた。
「蘭の靴屋の休みを聞いてから決めますね、蘭とエースも招待します」と薔薇で微笑んだ。
「ありがとうございます、最高です」と輝く笑顔で返した。

『マチルダ、お腹空いてるだろ・・蕎麦食べに行く？』とマチルダに微笑んだ。
マチルダが最高の笑顔になった、引き寄せられていた、深いグリーンに。

「ここは自由に出入りしていいですよ、時間が有る時はできるだけいらしてね。
そして皆と話をして下さい、あなたの話を。

それだけで皆得る物があります、よろしくねマチルダ。」

ユリさんが薔薇で微笑んだ、マチルダも輝く笑顔で返して頷いた。

『ユリさん、マリアを連れて行くよ』と私もユリさんに笑顔で言った。

「マリア、良かったね・・マチルダに会えて」とユリさんがマチルダに抱かれるマリアに言った。

「よかった」とマリアが天使で返した、その言葉が明瞭で、ユリさんは涙を見せた。

「ほい、ミチルボーナス」マダムが笑顔で封筒を差し出した。

『ありがとう、マダム・・助かります』と笑顔で受け取った。

「明日は高級な物を、食べに行こうね・・エ～ス」とマチルダがニヤで私を見た。

『マチルダ・・慣れたよ、その笑顔・・文化に触れなさい、日本人は粗食です』とニヤで返した。

「そう、これも慣れたの」と言って胸を押し当てた。

『アメリカ人怖い、ストレートに来る』とウルウルで返した、全員が笑っていた。

マチルダの深い緑に映る、天使が微笑んでいた、その緑の大地に包まれて。

マチルダの驚きは、続いて行く、世界の広さを伝えてくれる。

リンダが感謝の気持ちで送り出した者、笑顔の伝道師・・距離を凌駕する心。

緑の世界、大地の息吹・・マチルダ。

久美子は高校を卒業と同時に、ニューヨークに渡る。

大学の推薦を全て蹴って、自分に賭けた。

ニューヨークでリンダの家で暮らした、そして本場のジャズに触れ続けた。

その活動は恵まれない子供の、笑顔の為にも弾き続けた。

セントラルパークを南西に行くと、大きな古い邸宅がある。

リンダの祖父と父が、血と汗で作り上げた遺産。

マチルダの父も母も、ドイツ統一前に亡くなった。

【壁を越えろ、それだけが望みだ・・マチルダ】と書かれた手紙。

リンダの家の暖炉の上に飾られている、父から１０歳のマチルダへのメッセージ。

その言葉が、生まれた意味だと知っている、最強の意志を持つ者・・マチルダ。

リンダの家には、今も久美子がご主人と、２人のお子さんと暮らしている。

笑顔で帰りを待っている、リンダとマチルダと・・そしてユリカを。

無用の壁

その瞳は感情を伝える、懐かしい大地の色で示す、大切な何かを。
海から上がった生命の、もう1つの故郷、緑の大地を匂わせる。
永い争いの歴史が漂う、西洋の神秘を湛えて輝く。
壁に閉ざされた世界を背負う者、マチルダ。

私がマリアを抱いて、マチルダが私と腕を組んで、マリアを笑顔で見ていた。
周りの人々の目は、全てマチルダに注がれている、金髪の美女が歩く方向に。
蕎麦屋に入って、店の静寂を楽しんで、リンダと座った座敷に上がった。
窓際から、マチルダ・マリア・私で座った、マチルダはご機嫌でマリアと遊んでいた。
『リンダと同じ物で良いの？』と笑顔でマチルダに聞いた。
「もちろん、それから始めたいよね～」と輝きながら微笑んだ。
私は大盛りぶっかけ蕎麦を注文し、マリアのおにぎりを頼んだ。

『マリアの感想は？』と言ってマチルダの膝に抱かれる、マリアに微笑んだ。
「間に合った・・そんな感じ」とマチルダが微笑んで返してくれた。
『同じ感想を聞いた事があるよ、爺さんだけど』と笑顔で返した。
「そこもお願いね、会ってみたい・・爺さん」と輝くニヤで返した。
「おしょう」とマリアがマチルダを見上げて笑った。
『マリア偉いね～、和尚覚えてるの～』とマリアに微笑んだ。
「ねこちゃん、おしょう」と嬉しそうに私に天使全開をくれた。
「どうして、リンダがマリアに会えなかったか分ったわ・・リンダは誘拐したかも、マリアを」と輝きニヤでマチルダが言った。

『リンダ、行動派だから・・危ないかもね～』と私もニヤで微笑んだ。
蕎麦が来て、マチルダは輝く笑顔で蕎麦を見て、割り箸を割った。
《何も教える必要ないな、さすがマチルダ》と思ってた。
私の蕎麦を小さなマリア用の器に盛りつけて、おにぎりとフォークと一緒に、マリアの前に置いた。

「いただきま～す」とマチルダが大きな声で言って、店の全員が見た、綺麗な日本語を話す金髪美女を。
「いただきま」とマリアも笑顔で言って、食べはじめた。
マチルダが美味しそうに食べながら、マリアの面倒を見ていた。
マリアがこぼしたのを、マチルダが笑顔で食べていた。
『マチルダが教えたんだね、リンダに蕎麦を』と微笑んで言った。
「美味しいよね～蕎麦、最近やっとＮＹにも日本食レストラン出来たけど、寿司ばかりでね」と真顔で返した。
『日本はアメリカの食べ物、ほとんど有るのにね～』とニヤで返した。
「基本的にアメリカの食べ物って無いんだよ、移民の国だからね、ネイティブアメリカンだけだから、祖国と呼べるのは」と少し寂しげだった。

『俺ね、今ドリーム・キャッチャー作ってるの、プレゼント用に』と意識して笑顔で言った。
「ハニ～、蘭に？」と輝きニヤで返して来た。
『ＰＧにあと２人女の子の姉妹がいて、６歳と４歳の、お姉ちゃんがもうすぐ誕生日でね、そのプレゼント』微笑んで返した。
「素敵ね、中編みする時、気持ちを織り込むんだよ、その子を想ってね」と輝きながら私を見た。
『うん、そうするよ、最後の中編みが残ってるから』と笑顔で返した。

マチルダはジーンズの右腰に付いている、キーホルダーを出した。
そこに数珠繋ぎに付いている、沢山の小石を見ていた。
そして、縛っていた紐をほどいて、私に差し出した。
「センターに付けてあげて、マチュピチュで拾った石、強い力が守ってくれるよ」と最高の輝きを放った。
『ありがとう、最高だよ・・マチュピチュってどこ？』と照れた笑顔で聞いた。
「天空の城・・あとは自分で調べなさいね～」とニヤで返された。
『天空の城か～、聞いただけで、ゾクゾクするね』とニヤで返した。
「あなたが行ったら・・失神するよ～、感動して」と輝きニヤニヤで返された。
私は【天空の城】と聞いただけで、心躍らせていた、その響きに。
マチルダがくれた石を、大切にポケットに入れた。

店を出て、マチルダがマリアを抱いた、私はニコちゃんでそれを見ながら歩いた。
「エ～ス」と後から大きな声が呼んだ、私は誰か分っていた。
《偶然かそれとも必然か？》と思いながら、笑顔で振向いた。
美冬が笑顔で必死で走ってきていた、私も笑顔で美冬を見ていた、その時マチルダが振向いた。
美冬は立ち止まった、２ｍ位手前で、マチルダを見て凍結していた。
『美冬、リンダの友達のマチルダさん』とニヤニヤで紹介した。
マチルダは美冬と聞いて、私にマリアを渡して、最高の輝きで美冬に抱きついた。
「Ｍｉｆｕｙｕ・・・・・・」と英語で何か言った、多分感謝の言葉だった。
「・・・・・・」美冬も英語で答えた、美しい笑顔だった。
マチルダが美冬の左頬にキスをして、美冬が嬉しそうにキスを返した。

『美冬、マチルダ・・意地悪1点』と英語で話す2人をウルで見た。
「えっ、マチルダ日本語できるの？」と美冬が驚いて、私を見た。
「できるよ美冬さん、私は日本生まれです」と輝きニヤでマチルダが言った。
「最高・・さんは必要ないよマチルダ、私の英語どうかな～？」と笑顔で返した。
「充分通用しますよ、自信もって話せば、もっとスムーズになります」と輝く笑顔で返した、美冬は最高の笑顔で喜びを表現した。
『どうせ暇なんだろ、美冬、ＰＧに行こう』と笑顔で美冬を誘った。
ＴＶルームには誰もいなかった、マチルダを誘ってフロアーに行った。
マチルダはフロアーのセンターに立って、瞳を閉じていた、美しかった。

久美子がサマータイムを弾き始めた、マチルダが最高の笑顔になって、久美子を見た。
そして、美冬とシオンに手招きした、そして久美子に目で合図した。
「サマタ～ム・・・」と3人が楽しそうに歌い始めた、シオンが最高のニコちゃんだった。
美冬も本当に楽しそうだった、そして真ん中でマチルダが輝いていた。
間奏が来て、私が初めて聴く、強めのアレンジで久美子が弾いた。
マチルダは最高の笑顔を、久美子に向けた。
久美子はマチルダを見て、１６歳の輝きを放った、徳野さんとボーイの笑顔があった。
ハルカとレンが体を同じように揺らしていた、マダムとユリさんも来た。
そして、蘭が駆け込んで来た、満開の笑顔でそれを見ていた。
私は蘭の満開の笑顔が見れて嬉しくて、蘭を見ていた。
歌が終わり全員で拍手をした、最高の笑顔の４人が頭を下げて、拍

手に応えていた。
蘭が私の所に駆け寄って、抱きついた、私は抱きとめて蘭の香りを感じて安心していた。
「寂しかったろう～・・最高の出迎えの曲だったよ」と私を見て満開に微笑んだ。
『寂しかった』と笑顔で言って、蘭を抱き上げて、マチルダの前で優しく降ろした。
『蘭、マチルダちゃん、リンダの友達だよ』と蘭にマチルダを紹介した。
「マチルダ・・良く来たね～嬉しい～」と蘭が満開の笑顔で、マチルダに抱きついた。
マチルダは蘭に触れ、瞳が深緑にになり、最高の笑顔を見せた。
「蘭さん、会いたかった・・本当に温かい」と輝く笑顔で蘭を見た。
「しかし綺麗だね～マチルダ・・子供が制御不能にならなかった？」と蘭が満開ニヤをマチルダに出した。
「危険な状態で止めました、蘭さんブロンドに染めた方がいいですよ」とマチルダが輝きニヤで返した。
「今から行ってくる、マチルダいつまでいるの？」と抱き合ったまま、満開で聴いた。
「月曜日の午前中の便で、東京に発ちます」と真顔で返した。
「よし、時間あるね・・マチルダ、今回・・今回は時間あるね」と満開で強く言った、青い炎が包んでいた。
「はい、今回・・今回は時間あります」とマチルダも最高の笑顔で答えた。
《蘭、やっぱり凄いよ、一瞬で溶かした・・マチルダの抱えてる物を》と心に囁いた、暖かい波動が来て嬉しかった。
蘭が強調した【今回】それを受けたマチルダの【今回】は、どちらも、次回の約束をしいた。
出会って数分で、蘭は包んだ青い炎で、マチルダの目は深く潤んで

いた。
全員が見ていた、蘭の凄さを感じていた、そして美冬・レン・ハルカは幸せを感じていた。
蘭の背中を追える幸せを、そしてサマータイムと蘭の炎で、シオンの瞳が輝きが変った。
その時には世界を見ていた、リンダとマチルダの棲む世界に行くには、蘭を目指そうと思っていた。

「じゃあ、ユリカ姉さんの家に泊まるんだね」と蘭がマチルダの前に立って微笑んだ。
「家にも一泊してもらいますよ、蘭の靴屋がお休みの前日に、蘭も皆さんもどうですか？」と薔薇でユリさんが言った。
「最高です、実は明日です・・金曜・日曜が休みです」と満開で微笑んだ。
「ユリさん・・皆さんって？」と美冬がユリさんに微笑んだ。
「もちろん、皆さんもお誘いしましたよ・・雑魚寝になりますけど」と薔薇で返した。
「最高です、雑魚寝」とマチルダが輝いて微笑んだ。
「本当にいいんですか！嬉しい～」と美冬が最高の笑顔で言った。
「大丈夫15人位までは、リビングをエースが片付けてくれればね」と私に薔薇ニヤを出した。
『了解しました、でも俺は雑魚寝には入れないから、ユリさんのベッドで良いんですね？』とニヤニヤで返した。
「それは2人の時に話そうと思ってたのに～」とユリさんが悪戯っ子を出した。
「蘭さんも、気苦労が絶えませんね～」とマチルダが素晴らしい日本語で、蘭に輝きニヤを出した。
「本当に・・ブロンドが次々来るからね～」と満開ニヤでマチルダに返した。
全員の笑顔が溢れていた、情熱のフロアーに。

１０番に蘭・美冬・シオン・レン・ハルカとマチルダが座り、マチルダが中心となって笑顔で話していた。
私はタバコを買いに行くと断って、フロアーを出た、ユリさんが帰るところだった。
「マチルダも最高のホームランでしたよ、ありがとう」と通りに出て、薔薇で微笑んだ。
『そう思いました、影響の強い何かを持ってますね、マチルダ』と笑顔で返した。
「最高でしょう、宮崎じゃちょっと出会えない存在ですね」と嬉しそうに微笑んだ。
『そう思います、ユリカも嬉しそうでした』と笑顔で返した。
「添い寝しましたか？」と悪戯っ子を出した。
『もちろん、一晩中・・揺り篭が微かに揺れて、最高でした』と微笑んで返した、強い波動が帰ってきた。
「それは素敵だったね、良かったね、ユリカ」とユリさんが前を見て言った、優しい波動が帰ってきた。
ユリさんの車を見送り、タバコを買って、ユリカの店に行った。

奥のＢＯＸでユリカが両手を上げて、爽やかニヤを出していた。
私はユリカを抱き上げて、ユリカの笑顔を見ていた、美しい笑顔だった。
『ユリカ、美しさが変化したように感じるよ、内面的な光みたいな』と笑顔で言った。
「添い寝効果よ、本当に気持ち良かったよ」と爽やかに微笑んだ。
『ごめんユリカ、言葉で伝えてなかった、今夜のレンの研修』と真顔で言った。
「そうだった、私も分らなくなってきた、言葉で聞いたのかどうか」と舌を出して笑った。

『今夜楽しみでしょう、マチルダとユリカか～・・怖い気もする』とニヤで言った。
「怖いってな～に、でも楽しみ・・凄いよ～マチルダ」と嬉しそうに微笑んだ。
『もう、影響受けてるよ・・特にマリアとシオン』と微笑んだ。
「うん、しかし我が後輩ながら、蘭は凄いね～、感動したよ」と爽やかに微笑んだ。
『何ですぐに分るのかな～、敏感なんだね・・悲しみとか寂しさに』と真顔で言った。
「蘭は心の許容量が違うのよ、ユリ姉さんレベル・・だから全ての経験を塗り込めるのよ、心に」とユリカも美しい真顔で言った。
『なんか良く分るよ、底の無い深さを感じていたから・・そこが好きなんだけど』と笑顔で返した。
「もっと愛してみなさい、その深さに驚くから・・私も忘れずにね」と爽やかに微笑んで、瞳を閉じた。
《忘れないって、言ってるでしょ・・ユリカを忘れたりしないよ》と囁いて考えるのをやめた。
ユリカの寝息を感じて、香りと重みと温度の世界に入った。

ユリカが起きて、優しく降ろして、手を振って別れた。
ＰＧに戻ると、ＴＶルームにエミとミサも来ていて、マチルダと楽しそうに話していた。
「蘭さん、一旦帰って来るって言ってたよ」とマチルダが輝きながら微笑んだ。
『了解、マチルダここにいてね、少し仕事みてくるよ』と微笑んで返した。
「大丈夫だよ、私はあなたの側にいるから」とニヤで言った、私もニヤで返してフロアーに向かった。
フロアーにはシオンとレンがいて、シオンがレンにサインを教えていた。

《凄いな～シオン》と思ってタバコをバラしていた。
久美子がジャズを弾いていた、私はドリーム・キャッチャーの最後の仕上げに取組んだ。
エミをイメージして、その強い瞳を想って編みこんでいた。

「素敵な物ができそうね」とマチルダが笑顔でやって来た、私が椅子を隣に置いた。
『最後の仕上げが、最高の石だからね・・どうしようか考えてたんだよ』と笑顔で言った。
「良いのよ、作り方も素材もたいした意味はないよ、作り手の想いに比べれば」と輝く微笑で言った。
『そうだと思うよ、偶像崇拝でも何でもそうだけど、形ある物にたいして意味はないよね』と真顔で返した。
「マチュピチュは知らないのに、偶像崇拝は知ってるのね」と輝きニヤできた。
『本で読んだよ、案外好きなのそっちの方は』とニヤで返した、マチルダの笑顔があった。
マチルダがフロアーを見ていた、美しい横顔を私は見ていた。

「アメリカでも、フランスでも経験したけど・・こんなに熱の残る場所は知らないよ」とフロアーを見ながら言った。
『想いが溢れてるからね、全力でやろうという想いが』と真顔で返した。
「大切な事よね・・全力でやる」と私を見た、美しい真顔に停止させられた。
「隊長、固まってますよ・・ブロンドに弱いロボット」とカスミの声がした。
「やっぱり、染めてこようかしら」と蘭の返しが聞こえた。
「マチルダです、よろしく」と輝く微笑で、カスミに言った。

「カスミです、よろしくマチルダ」と負けずに輝きを放出して微笑んだ。
『カスミ、マチルダも２０歳だよ・・銀河の奇跡』とカスミにニヤを出した。
「でも、カスミ本当に素敵ね～、日本レベルでは」とマチルダが最強輝きニヤをカスミに出した。
「あら、マチルダもブロンドレベルじゃ、素敵な方ね」とカスミが最強不敵で返した。
蘭と私はニヤニヤで２人を見ていた。
「明日、私もここのフロアーに入るから、私に付いてきて良いわよ」とマチルダも最強不敵を出した。
「あら、じゃあ私が案内してあげる、でもそれじゃあ目立たないよね～」とカスミがウルを出した。
「最高～、お友達になってね・・カスミ」とマチルダがカスミに抱きついた。
「当然、私もそう思ってたよ・・マチルダ」とカスミも優しく笑った。
「よし、ご飯行こう」と蘭が満開で微笑んで、４人で出かけた。
私が蘭と腕を組み、その前をマチルダとカスミが腕を組んで歩いた。
夜街の関係者全員が息を飲んで、マチルダとカスミを見ていた。
私と蘭はニヤニヤで後を歩いた、蘭の満開ニヤがすぐ横に有って嬉しかった。

その夜は、純日本風居酒屋に行った、マチルダが目を輝かせて喜んだ。
マチルダは嫌いな物が無く、自分でも何品か選んだ、それを聞いて３人で笑った。
オクラ納豆とイカの塩辛と肉じゃがをマチルダが頼んだからだった。
３人が生ビールで、私がコーラでウルで乾杯した。
「日本は２０歳からだね～、お酒」とマチルダが輝きニヤを私に出

した。
「マチルダ、ビールで良いの？何でも頼んでね」と蘭が満開で微笑んだ。
「私、血はドイツ人だから、ビール好きですよ」と微笑んで返した。
「ドイツか～素敵だな～、どっちなの？」とカスミが最後は真顔で聞いた。
「東よ、私自信は行った事無いけど」とマチルダも真顔で返した。
「行けるよ、あんな壁、そんなにもたないさ」とカスミが微笑んだ、優しい輝きだった。
「私もそう思うよ、必ず無くなる・・必要無い物は」と蘭が深い目で言った。
「本当に・・来て良かった・・言葉でこんなに嬉しい事は、今までないです」とマチルダが俯いた。

「こら、マチルダ・・泣き虫だな～、そんなんじゃ、明日は私の影に隠れるよ」とカスミが横のマチルダを抱いて言った。
蘭と私はその姿を見て嬉しかった、カスミの下手くそな、最高の愛情表現が。
「それは無いわ・・カスミが明日、ブロンドに変えたとしても」とマチルダがカスミに最強輝きニヤを出した。
「よし、その意気だね～マ・チ・ル・ダ」と最強不敵で返した。
4人で笑いながら食事をした。
マチルダが自分で頼んだ3品と、から揚げや焼き鳥まで沢山食べた、終始笑顔だった。

「蘭さん、何時何分に産まれたか、聞いていますか？」とマチルダが微笑んだ。
「うん、全部7だから覚えてるよ、午前7時7分」と満開で返した、マチルダが少し考えて、パッと明るく笑った。
「リンダ6時7分に産まれたと言ってました、香港で」と最高に輝

く笑顔になった。
「えっ！・・時差は？」と蘭が驚いて聞いた。
「日本が1時間早いです」と最高の笑顔でマチルダが微笑んだ。
「不思議だけど最高の気分だよ・・凄く嬉しい～」と蘭が最高満開笑顔で言った。
蘭の笑顔を3人で見ていた、蘭は不思議な運命を感じたのだろう。
居酒屋の喧騒の中、私達だけ世界に想いを馳せていた、どんな偶然があるのかと。

カスミとマチルダは素敵な友達になる、カスミの変化は蘭を追う中で身についていた。
その下手くそな愛情表現に、温もりが出てきていた、次の開花が迫っていた。

私は恥じていた、マチュピチュも、ベルリンの壁の意味すら知らなかった事を。
勉強しなければ、せめて自分に必要な事を、勉強せねばと感じていた。

これから十数年後、ベルリンの壁の崩壊が伝えられた。

カスミから電話があった、受話器の向こうで、カスミの啜り泣きが伝わってきた。

「マチルダどこにいるんだよ！教えてくれよ」

「どこで喜びを味わってるんだよ、逢いたいよ・・マチルダに・・」

そう言って泣いていた、その声も言葉も、この時の２０歳のカスミだった。

私はＴＶニュースの映像を見ながら、カスミの泣き声を聞いていた。

【あんな壁、そんなにもたない】と言ったカスミ。

【必ず無くなる、必要無いものは】と言った蘭。

私は誇りに思っていた、それを堂々と主張できる者を。

カスミ、絶対にマチルダもあの時、カスミに会いたかったと思うよ。

大丈夫、カスミの気持ちは伝わってるから、ユリカが伝えてくれたから。

あの緑の瞳の輝きを、また見せてくれるよ。

月下の雫・・月のマチルダが・・。

笑顔の伝達者

人は目を逸らしている、現状が自分ではどうしようもないと。
目を逸らさず見ている者がいる、伝えて波を起こそうとする。
一人で出来なくても、多くの人が波を起こせば、変ると信じている。

活気のある純日本風居酒屋、ハッピを着た男達が歓迎を叫ぶ。
注文を受けた女性が、注文内容を叫び、男衆全員で了解を伝える。
ブロンドのマチルダは、楽しそうにその光景を見ていた。

「マチルダも、リンダの手伝いをしてるの？」と蘭が真顔で聞いた。
「はい、手伝いというか、私は世界中で見た事を、世界中で伝えています、今はそれしか出来ないから」と輝きの微笑で返した。
「そっか～、伝える事は誰でも出来るからね、感じて伝える事は」
とカスミが私に微笑んだ。

「その通りよカスミ、無駄だと思ったときに、敗北が決まる・・リンダの言葉です。
確かに世界には、悲惨な状況も、とんでもない生活環境もあります。
それを見ると自分一人の力では、どうにもならないと思ってしまう。
でもそれを伝えれば、１００人に伝えれば、１人は共感してくれるかもしれない。
共感が共感を生み、それが波になるかもしれないと。
私達のような、若い女性だから聞いてくれる人も、いるんじゃないかと。
だからリンダは、マスコミの取材を受けています、本意じゃないけれど。

伝える事なら誰でも出来る、行動しないで敗北を宣言するなと。
私はそうリンダに教わりました、私が挫折をしている時に。
リンダは言います、人に祖国は無い、地球という故郷しかないと」
まっすぐに前を見て、強く言葉にした、マチルダの瞳を見ていた。
私はリンダを想っていた、その生き方を追いかけていた・・心で。
「マチルダ、ＰＧでも沢山話をして伝えて・・私は伝えるよ私の周りの人達に」と蘭が優しく言った。
「うん、マチルダ・・私も・・マチルダ友達だろう、全部教えてな」とカスミは泣きながら言った。
「ありがとう、本当に嬉しいです」と蘭を見て、カスミの手を握った。

「エース教えて、リンダはあなたに聞けと言ったの、あなたは何をリンダに伝えたの？」とマチルダが潤む瞳で私に聞いた。
『マチルダ、俺が伝える事が出来たのは・・言葉は不要だ、愛が世界共通言語だって事だよ』とマチルダに微笑んだ。
「素敵・・リンダ幸せだったね」と俯いて泣いていた、その涙が切なかった。

「もう、泣き虫だな・・緑の瞳は泣き過ぎでなったな」とカスミが必死に場の空気を変えた。
蘭はずっと微笑んで見ていた、カスミに任せていた、マチルダの涙を。
「カスミも目が、ウサギのようになってるよ」とマチルダも輝きニヤで言った。
「仕方ないだろ、マチルダに出会えて、嬉しいんだから」とカスミがニヤで返した。
「今、少し惚れそうにになったよ」とマチルダがウルをした。
「私が欲しけりゃ、死ぬ気でおいで」と最大不敵を出した、マチル

ダがお尻のポケットからメモ帳を出して。
「それ、頂いちゃいま～す」と最強輝きニヤで、ペンを走らせた。
蘭と私はその漫才を、笑って見ていた。

「さて行くかね、戦場に」と蘭が微笑んで言った。
『今夜は俺がご馳走するよ、ミチルボーナスが出たから』と胸を張って威張った。
「素敵、エース・・ユリカさんと添い寝するだけあるね～」とマチルダがスペシャルニヤできた。
「隊長、今夜が楽しみですね～」とカスミが最大不敵を出し。
「やっぱりね・・楽しみやね～」と蘭が満開ニヤをした、私は一応ウルをしていた。
私が会計をしてると、３人が出てきた、静寂が支配した、居酒屋の喧騒が消えた。

周りの注目を全て集める、輝き2人組みの後を、ニヤニヤで蘭と腕を組んで歩いた。
ＰＧに戻り、マチルダを私の指定席に座らせた、シオンが来て横にニコちゃんで座った。
そして英語で楽しそうに、２人で話し始めた、久美子が楽しげなジャズを弾いていた。
四季が登場して、シオンがマチルダを１０番に案内した、笑顔が溢れて話をしていた。
《なるほど、ユリカの言った、マチルダをフロアーに出すと、面白いの意味が分かったよ》と心に囁いた、暖かい波動が返ってきた。
ユメ・ウミが来て、サクラさんが入った、マチルダは一人一人に笑顔で挨拶をした。
久美子が旅情的な感じの曲になった、アイさんと蘭とナギサとカスミとハルカが入った。
その光景を私は笑顔で見ていた、マチルダが中心になって、カスミ

と漫才をして笑顔を作っていた。

ニコちゃんシオンを呼んで、レンを送って来るから、マチルダを後で指定席に座らせるように頼んだ。
レンが黒魔女で来た、私はニヤでレンを見た、女性達も笑顔で見ていた。
『どうしたレン・・怖いのか』とニヤニヤで言った。
「石にするよ・・行くよ」と可愛いニヤで返して、腕を組んで来た。
私は緊張気味の黒魔女と、ユリカの店に出かけた、通りを歩く時レンは少し緊張していた。
「エースに、なんて礼を言えばいいの？リンダの話」とレンが微笑んで言った。
『俺は関係ないよ、久美子が実力で勝ち取ったのさ・・・感謝するなら約束して』と微笑んで返した。
「良いよ、約束なら何でもするよ」と笑顔で答えた。
『久美子がどんな道を選んでも、笑顔で背中を押すって、そしてレンの幸せを探すと誓って』と真顔で返した。
「なんで、なんで泣かす・・頼むから、抱っこして連れて行って」と必死に涙を我慢してレンが言った。
私はレンを抱き上げて、笑顔でレンを見た、レンも笑顔で返して来た。
『抱っこ伝説もプレゼント、黒魔女の方が有名になるぞ』とニヤで言った。
「望むところだよ・・エース、誓うよ・・必ずそうする」と可愛く微笑んだ。
『よし、じゃあ・・ユリカスペシャル』と言って階段を登った、レンは瞳を閉じて集中していた。
暗くなった夜空に月が浮いていた、半月の光が照らしていた、魔女の可愛い顔を。

ユリカの店に入るとユリカが出てきた、爽やかな笑顔でレンに微笑んだ。
レンは頭を下げて、ユリカに連れられて、女性達を紹介された。
笑顔で話す黒魔女をＢＯＸで見ていた、ユリカが黒い服を見て何か言って、レンに楽しそうな笑顔だ出た。

「可愛いじゃない、黒魔女も」とユリカが来て、爽やかに微笑んだ。
『でしょ、俺は好きだけど、レンはやっぱり自信が持てないんだよ』と笑顔で返した。
「少しでも、自信になると良いけどね」とユリカが微笑んだ、美しく色気が漂った。
『ユリカ、急に綺麗になりすぎ、なんか緊張する』とニヤで言った。
「あれからリアンが来て、明日お熱出すって言って、帰って行ったよ」と楽しそうに笑った。
『リアン怖い、厳しい試験を絶対する』とウルで返した。
「筆記試験じゃないわよ、実技試験だよリアンは」と爽やかニヤで返された、私はウルウルで返していた。
お客が２組入ったので、レンに【ＧＯ】サインを笑顔で出して、レンの【了解】を見て店を出た。

通りをＰＧに向かっていると、呼び込みさん達に、マチルダの事をしつこく聞かれた。
私は逃げるように、裏階段を登った。
フロアーに行くとシオンとマチルダが話していた、女性達もシオンを想ってサインを送らなかった。
私はハルカポジションに立った、客は７割方入っていた。
「先生、マチルダちゃん疲れてるよ、充電してあげて」とシオンが真顔で言った。
『ＯＫシオン・・ありがとう』と笑顔で返して、マチルダを見た、少し影が出ていた。

『マチルダ・・今夜は充電してやるから』とマチルダの真横に立って、優しく笑顔で言った。
「良いの？」とマチルダが微笑んだ、少し弱い声だった。
『マチルダ、遠慮なんかするなよ・・俺にはこれしか出来ないんだから』とその場で抱き上げた、マチルダが私の首に腕を回した。
私はマチルダを笑顔で見た、マチルダも笑顔だった。
フロアーの女性の暖かい視線を感じて、蘭を見た、満開に微笑んで頷いた。
マチルダを抱いたまま、裏階段を登った。

「本当だな～、リンダが空港で抱っこされて歩いて、降ろされたくなかったって言ってたよ」とマチルダが微笑んだ。
『俺も・・降ろしたくなかったよ、そして追いかけたかった』と真顔で返した。
月光に照らされた、マチルダを見ていた、笑顔が美しく輝いていた。
最上階に着いて、夜景を見ていた、南風が気持ちよかった。
「少し、話をしようよ」とマチルダが微笑んだ。
私も笑顔で頷いて抱いたまま、階段に座ってマチルダを引き寄せた。
「慣れたね、プラチナブロンドに」と間近のマチルダが美しく微笑んだ。
『マチルダがね、抱かれても警戒の力が抜けたから、俺は警戒とかされると緊張するんだよ』と微笑んで返した。
「どうして？」と真顔で聞いた、彫の深い顔が半分闇に覆われて、逆に幻想的だった。
『最近出会った女性達が、何かしら心に傷があったから、女性を大切に扱うようになったんだよ』と微笑んだ。
「そっか・・さっきの偶像崇拝の話は、途中でしょ？」と可愛く聞いてきた。
『簡単な話で良い？難しく考えたくないから』と笑顔で返した、マ

チルダも笑顔で頷いた。
『物にはそれほどの価値がない、それを作るのに込めた想いにすれば。
マチルダの言葉嬉しかったよ、俺もそう思ってたから。
俺達はまだ子供だから、当然自由になる金は少ないんだよ、小銭だけ。
でも好きな人の記念日には、なにか贈りたいよね。
そしたら考えるの、色々考える、限られた範囲の中で、相手を想ってね。
そうしたら気付いたんだよ、相手もその時は、ずっと俺の事考えてるってね。
俺の事を想ってくれてるって分ったら、嬉しくてね。
そして思った、最高だとね・・その時間が最高のプレゼントだと思った。
その時を俺のために使ってくれる事がね。
リンダの記事を読んで考えたんだよ、色々と考えてみた。
宗教で争うのも、文化の違いを受入れないのも、肌の色で差別するのも。
全ての原因は、欲だよね・・豊な国にしたいとか、豊な生活がしたいとか。
でもその豊さって、結局どっか購入する豊かさが基本だよね。
俺は未熟な子供だから、理解出来ないんだよ、それが豊な事なのかと。
俺ね蘭と結婚して、子供が出来て、その子供達が独立したら。
どこか南の島で暮らしたい、海の近くで波音を聞いて。
そして蘭の笑顔があれば最高だと思ってる、明かりは月光で良い。
ＴＶも車も無くて良い、蘭と波音があれば、そう思ってるんだよ。
子供でしょ・・マチルダ』

マチルダの瞳を閉じた美しい顔を見ていた、月光に照らされた幻想的な顔を。

「子供じゃないよ・・素敵な話だね。

私も愛する人とそうしたいと思ったよ、いつか羽を休める時はそうしたい。

欲が原因・・正しい考えだよ、でも９５％の人が踊らされてるの。

この世界を牛耳ってる、ほんの一部の人間によってね。

マスコミ・・ＴＶも新聞も雑誌も、全てスポンサーで成立っている。

たから真実が伝わらない事がある、スポンサーの都合で曲がるんだよ。

そして１つ教えとくね、その一部の人間達は、誰一人平和を望んでいない。

平和は金にならないから、表では平和を叫び、裏では望まないんだよ。

文明は日々進歩している、アメリカのある企業の打ち出した計画。

インターネット・コミニケーションが普及すると、閉ざす事は難しくなる。

何処にいても世界と繋がるんだよ、映像でリアルに見れるんだ、素敵な事だよね。

でも忘れないで、自分で見ないと駄目、目だけで見ても感じない。

匂いも、感触も、音も、味も感じてみないと、リアルには分らない。

さっきの壁に対する、蘭さんとカスミの言葉、ストレートで本当に嬉しかった。

感動したよ、そして再確認した、不必要な物だとね。

世界には壁や線で仕切られた、同じ民族が沢山いるんだよ。

悪意を、子供のうちから洗脳して植え付け、無意味な憎悪でコントロールしたり。

強力な力で押さえつけたり、酷い現状は数限りなく存在する。
でも今夜本当に私は救われたよ、蘭さんのあの言葉、必要の無い物はなくなるって。
私も必ずそうなると思ってる、憎しみが不必要だと気付く時がくると」

マチルダは私を見て、最後は最高の輝きで、微笑んだ。
『うん、俺も思ったよ、絶対にそうだとね』と微笑んで返して。
『マチルダ、今夜はお休み・・ゆっくりと』と言ってマチルダの額に手を当てて、瞳を閉じさせた。
「安心できるね、充電か～、さっき女性達が言ってたから、私が眠っても、少しは抱いていてくれる？」
瞳を閉じたまま、囁いた、マチルダが愛おしかった、常に何かと闘ってる、顔の陰りが切なかった。

『浅い眠りの時は抱いてるよ、深い眠りに入ったら、マリアの側に寝かせてあげる』と静かに囁いた。
「ありがとう、お休みのキスをして」と囁いた。
私はさすがに緊張した、マチルダを少し引き寄せて、唇を重ねた。
離したくなくて、暫く重ねていた。
唇を離して、マチルダを見た、眠ってるように静かだった。
風が吹いて、プラチナブロンドが煽られた、マチルダの香りが漂ってきた。

マチルダの少しクタビレタTシャツが、可愛かった、大切に着てるのだろうと思えて。
綺麗な服を着たら、どんなに華やかなんだろう、そう思いながらリンダを想っていた。
映像が現れた、その鮮明さに驚いた、そして場面が蕎麦屋に飛んだ。
リンダが小さなアルバムを見せる場面だった、鮮明な画像に声も明

瞭に聞こえた。
リンダが一枚一枚説明してくれた、私はそれを見ていた、嬉しくて。
《これで何を言ったのか、分るよ・・ありがとうマチルダ》と心で囁いた、暖かい波動が包んだ。

半月とネオンに照らされた、私より少し背の低い美しい女性が、疲れを見せて眠りに落ちた。
完全な脱力が伝わってきた、寝息を感じた、本当に天使のような寝顔だった。
私は深い眠りに落ちたマチルダを、暫く見ていた、月光の下で。

《さてこれからが大変、脱力女を抱いて階段降ります、応援してね・・ユリカ》と囁いた、強い波動が応援してくれた。
私はマチルダを抱き上げて、慎重に階段を降りた、予想以上に下りは緊張した。
TVルームの扉を足でノックした、久美子が開けてくれた。
眠ってるマチルダを見て、簡易ベッドに走って、ベッドを整えてくれた。
マチルダを優しく寝かせ、額にキスをして照明を消した。

「エース、ありがとう・・リンダの話、本当に嬉かった」と可愛く久美子が微笑んだ。
『久美子が実力で勝ち取ったのさ・・お礼して』とニヤで言って、頬を向けた。
「生意気ね〜」と笑顔で言って、キスしてくれた。
『マチルダ、起きたらよろしく』と久美子に笑顔で言って、松さんに笑顔を向けてフロアーに戻った。

シオンがニコちゃんで、業務サインを繋いでいた、完全にスムーズになっていた。

私は指定席に座り、フロアーの蘭を目で追っていた、蘭の満開が私の気分を上げた。
「先生、シオン本当に嬉しかったよ、マチルダちゃん・・ありがとう」とニコちゃんがコーラを持って来た。
『うん、先生も嬉しかった、素敵な友達ができて』とコーラを受け取り、笑顔で返した。
「明日、私もユリさんの家に行きます、もっと皆と仲良くなりたいから」と可愛く微笑んだ。
『そっか～、良かった～、シオン来ないと、先生、意地悪された時の、味方が誰もいないから』とニコちゃんで返した。
「シオンが守ってあげましょう・・先生、私・・行くね・・世界に」と言ったシオンの真顔に見惚れた。
強い意志を反映させた時の、瞳の輝きが美しかった、私は嬉しくて笑顔になった。
『うん、シオンはそうすると思ってる・・そして先生も必ずそうするよ』と真顔で返した。
ニコちゃんに戻って、シオンが頷いて背を向けた、その綺麗な背中がデビューを予感させていた。
《シオンのデビューは・・やっぱり寂しいよ・・ユリカ》と心に囁いて、暖かい波動で包んでもらった。

「シオンの成長した背中を見て、落ち込んでる暇は無いよ」と蘭が来て真横で囁いた。
『うん、そうだね、蘭が帰ってきて、少し感情的なんだよ』と微笑んで蘭を見た。
「あなたが望んだ、私の本気の集中がもうすぐだよ、覚悟してね」と満開で微笑んだ。
『了解、楽しみだな～、ユリカ添い寝の罰は』とニヤで聞いた。
「罰じゃない、同じ事を今夜私にするように、背中合わせじゃないやつ」と満開ニヤで返された。

『了解、少し大人になったね・・蘭』と微笑んだ、満開で頷いて扉に消えた。

「ありがとうね、マチルダもユリさんの家のお泊りも、四季は全員参加よ」と美冬が微笑んだ。

『美冬、明日の午後空いてる？マチルダを、連れて行きたい所があるんだよ』とウルで頼んだ。

「うれしー、私に頼んでくれるの」と美しい笑顔で返して来た。

『全ての始まりは、美冬の勇気だろ・・ユリカが言ってたよ、数年前の蘭みたいだって、美冬が』と笑顔で返した。

「最高の人に、最高の褒め言葉をもらった・・嬉しい、明日1時に来るね」と最高の笑顔で言って、扉に消えた。

「私が、そんなに可愛いのか？」とカスミが不敵で来た。

『うん、カスミが可愛くてしょうがないよ、その変化が俺に勇気をくれるよ』と笑顔で返した。

「私も嬉しかったよ、マチルダと出会えて、世界が広がったよ」と美しく輝いた。

『うん、素敵な関係だと思って見てたよ、カスミ・・カスミの愛情表現、最高だよ』と微笑んだ。

「私も、自分を好きになってきたよ・・今からだよ、本物のきゃしゅみが出るのは」と微笑んで扉に消えた。

私は指定席に座り、安心感に包まれていた、見守られている事を感じて。

居場所がある幸せを感じていた、素敵な女性達に囲まれて。

そして感じた、そこまで行かなければならないと。

《ユリカ、マチルダを豊兄さんに、会わせるね・・決めたよ》と心で囁いた、強い波動が何度も来た。

私は考えていた、豊兄さんはどうしようかと、マチルダに会えば行ってしまうんじゃないかと。
豊とはそういう男だと知っていたから、心が示した場所に躊躇なく行く人間だから。
そして、不遇な環境の子供や、障害やハンデを持った子供に、圧倒的に優しい人間だから。
でも会わせない訳に行かない、マチルダの旅が完結しないと思っていた。

情熱のフロアーを見てると、映像が流れた。
野犬に対して拳を握り、微笑んで話しかける、豊兄さんの背中が・・・。

マチルダはこの夏物語以降、地下に潜るまでの5年の間に、9回伝えに来た。

一泊であったり、1週間滞在したり、来た時はとにかく楽しかった。
マチルダが世界を伝えてくれた、そしてエミが最も影響を受けた。
マチルダもエミに執着していた、その能力を認めていたから。
エミが全員にマチルダの話を伝えた、時に笑顔で、時に泣きながら。
だからこそ、直接心に響いた、エミの言う事だから。
リンダは地下に潜る前に、サクラさんにエミの奨学金を託していた。
エミが医学を目指すでも、何をするにしても使って欲しいと。

そしてその事実は、隠して欲しいと頼んだ、そうマチルダが伝言した。

エミ・・君は返したよ、その行動で・・リンダに奨学金は返済したよ。

あの時私が、この事実を話したのは、エミに誇りを持って欲しかったから。

リンダとマチルダが、託した人間としての、誇りを感じて欲しかったからです。

君は返したよ、リンダとマチルダの想いに・・強い想いと意志で返済したよ。

マチルダが笑っているよ・・「返済した利息分が多すぎるぞ、エミ」と言って。

不敵な笑みで微笑んでいる・・今のエミを見て・・嬉しそうに。

心の温度

情熱のフロアーを見渡す位置に、指定席がある、入場口に続く通路の真横に。
人は居場所を求める、必要とされたいと願う。
些細な存在でも良い、必要とされたいと。

その夜も満席記録を９時２０分に達成していた、私は雑用をこなしていた。
フロアーのサインは、シオンがニコちゃんで、完璧に処理してくれていた。
私はカズ君に呼ばれて、エレベーターホールの、モップ掛けをしていた。
「しかし、ブロンドは綺麗やね～」とカズ君が微笑んだ。
『美冬に言ってやろ、明日お昼に運転手になってくれるから』とニヤで返した。
「それだけは、ご勘弁を～」とウルウルで返して来た。
『怖そうだよね～、美冬』とニヤニヤで返した、カズ君もウルで頷いた。
掃除が終わり、カズ君がフロアーに戻った、私も暇になりＴＶルームを覗いた。

久美子が勉強、松さんがＴＶドラマを見ていた。
「マチルダ、相当疲れてたね、でも本当にお人形みたいだよ」と松さんが笑顔で言った。
『出来すぎだよね～、あれは反則だよ』と笑顔で返した、久美子も笑顔で頷いた。
私は３人娘の寝顔を見て、裏階段を降りて、魅宴に向かった。
魅宴の裏口から入って、事務所を覗いた、誰も居なかったのでフロ

アーに行った。
裏からリョウを探した、真赤なドレスを着た魔性の女が笑っていた。
その輝きが、落ち着いた雰囲気を漂わせていたので、一安心していた。

「マメだよね～、エース」とミサキが後から言った。
『明日からハルカを送り込むから、偵察です』と振向いて微笑んだ。
「噂になってるよ、ブロンド美人」とミサキが可愛いニヤで来た。
『目立つのは仕方ないよ、最終兵器だから』とニヤニヤで返した。
「見とかないと、いけないようね～」と微笑んで返してきた。
『お勧めしますよ、気持ちを強く持ってね・・ミサキは淡いだよ』
とニヤニヤ継続で返した。
「そんなに凄いんだ～、楽しみ～」とニヤで返された。
『リョウにも言っといて、２０歳だから・・カスミがライバル心剥き出しで、頑張ってるよ』と微笑んだ。
「了解、必ず見に行くね」と微笑んで仕事に戻った。
私はリョウと目が合って、ニヤを送った、リョウも微笑んで頷いた。
魅宴を出て、ＰＧに戻った、この頃はもうユリカを見上げなくなっていた。
常に語りかけ、伝わってるのを感じていたので、見上げなくなった。

フロアーは終演前で、６割程度の客だった。
ニコちゃんシオンに、マチルダを送ってレンを迎えに行くと言って、ＴＶルームに行った。
マチルダは起きていて、松さんをマッサージしていた、松さんの笑顔が溢れていた。
『元気になったね、マチルダ』と笑顔で言った。
「サンキュー・エース・・・・・」と英語の長文で、輝きニヤを返してきた。
『オ～・マイ・ガット』とニヤで返して、３人娘の寝顔を見ていた。

マチルダがマッサージが終わったので、ユリカの店に出かけた。
通りに出て、マチルダが強く腕を組んできて、輝く笑顔を私に向けた。
「もっと、有名人にしてやるね」と輝きニヤで言って、頬にキスをした、私もキスを返した。
『素敵だ～、サンキュー・マチルダ』と笑顔で返した。
マチルダは腕を強く組み、首を私の方に傾けて、輝きを放っていた。
全ての人の視線を楽しんで、通りを歩いていた、輝くマチルダを視線が追いかけていた。
ユリカの店を覗くと、ユリカが奥のＢＯＸと微笑んだ、私はマチルダを案内した。
静寂が訪れた、視線がマチルダに集中していた。

「東京じゃ、ここまでないんだけどね」とＢＯＸに座ったマチルダが私に微笑んだ。
『ここは、陸の孤島・・ＭＩＹＡＺＡＫＩだからね～』と向かいに座り、微笑んで返した。
「お帰りマチルダ、良かったね～、疲れ少しとれたね」とユリカが爽やかに微笑んで、私の隣に座った。
「抱っこ充電、良いですね～、リンダが欲しがるはずです」と輝きニヤで返した。
「まだ輸出しませんよ、私に必要だから」とユリカが爽やかニヤで返した、マチルダも楽しそうに笑顔で返していた。
「映像どうなったの？」とユリカが爽やか笑顔で、私に聞いた。
『鮮明になったよ、声もはっきり聞こえる・・リンダのアルバムの話、自分で訳してみるよ』と微笑んで返した。

「ちょっと待って！・・・リンダのアルバムって？」とマチルダが美しい真顔で聞いた。

『リュックに入れてる、小さいアルバム』と笑顔で返した。
「見せて・・話したの？」と美しい笑顔のマチルダが真剣に聞いた。
『うん、蕎麦屋であの写真を撮る前に』と微笑んで返した。
「エース・・私、あんたに抱かれたくなったよ」とマチルダが輝いて笑った。
『優しく、日本語で教えてね・・マチルダ』とウルで返した。
「無理・・その時は英語じゃないと、私が楽しめない」と輝きニヤニヤで言った、私はウルウルで返した。

「私が知る限り、あのアルバムを見せて話した相手は、あなたを含めて４人しかいない。
一人が男性の老人、インドの人で宗教的自由を唱えてる、哲学者。
素敵な人だよ、人間とは思えぬほどの静けさがあるの、圧倒的な優しさ。
もう一人が南アフリカの黒人女性、奴隷制度撤廃の影の戦士。
もちろん素敵な人、温もりが全く違う、無血運動を地道にやっている。
命を賭けて、奴隷を解放する道を探している。
そして、私とエースだよ・・頑張ろうね」

最後は輝きながら微笑んだ、私も嬉しくて、笑顔で返した。
『でも、マチルダの話を聞くだけで、心は飛ぶよ・・世界を巡る』と正直に笑顔で返した。
「明日、少しイメージを入れてあげる、よりリアルに飛べるように」とマチルダが微笑んだ。

『俺は本当に間に合いたいと思ってる、後何年か時間はかかるけど、会いたいんだ。
何にも出来ないけど、色々な国の子供達に会ってみたい。
どんな生活して、何が楽しくて、どんな夢を持っているのか。

楽しい事が出来ないのは、どうしてなのか？
夢を持て無いのは、なぜなのか？
辛い事を解決するのは、簡単じゃないと思う。
でも楽しい事を贈るのは、小さくても夢を持たせてあげるのは。
出来るんじゃないかと思う、俺でも・・一人だけにでも。
俺は唯一自信があるんだ、子供との関係は。
俺はその経験だけは、今でもそうだけど、子供のうちに沢山したよ。
凄く狭い範囲での事だけど、でもその経験がリンダの時に役立った。
俺、リンダが日本語を最初に真似した時に、でかいマリアをイメージしたんだよ。
そうしたら、少し分ってきた、リンダのブルーの瞳の色で感情の変化が。
リンダが伝えようと、話してくれたから、それが嬉しかった。
言葉が伝わらないなんて、些細な事だとリンダが言ってるようで。
俺もそう思ったから、瞳で必死に伝えた、言葉なんて必要無いと。
リンダを大切に想ってると、今考えたら、瞳の訓練は相当していた。
まだ話せないマリア位の子供や、障害を持つ子供との関係で、それをしていたから。
そしてリンダは、凄く感情表現が、瞳に強く出るから。
蕎麦屋でかなりの、感情の度合いに対する、瞳のブルーの深さが分ってきた。
そしてバスの中で、会話の内容がどんな内容かは、イメージ出来てきていた。
空港の受付で通訳してもらった後、リンダに抱きしめられて、エースだけ言われた。
間近でブルーを見た時に、流れ込んできたよ、リンダの想いが。
それは英語でも日本語でもなかった、原始の伝達方法のようなも

のだと感じた。
本当に嬉しかった、俺は考えずに返したよ・・Ｉ　Ｌｏｖｅ　Ｒｉｎｄａって。
その言葉しか出なかった、でも瞳で伝えたのは違うよ。
リンダにもう一度必ず会いに来て、迎えに来て、来なければ会いに行くと伝えたよ。
もしどこに居るか分らなくても、絶対に探し出すって伝えた。
マチルダを最初にここで見たとき、嬉しかった、グリーンの変化が凄くて。
その変化に驚いた、伝えたい想いに溢れていたから。
瞳の伝達なら、マチルダ・・リンダ以上だよ。
本当に素敵な女性だね・・笑顔の伝達者・・マチルダ』

マチルダの潤むグリーンを見ながら、そっと優しく伝えた、自然に笑顔が出ていた。
「伝わってたよ、エースの想いは・・ありがとう、最高に嬉しいよ」と深い緑から、美しい涙を流した。
ユリカが潤む瞳で、席を立って、私を促した。
私は立ってマチルダの隣に座って、マチルダを引き寄せて、抱きしめた。
私は感謝していた、原作者に、リンダとマチルダに会わせてくれた事を。
「どの位の子供と関われればそこまで届くの、それだけ今聞かせて」と潤むグリーンで私を見た。

『俺の兄のような存在である人が、俺達の面倒をみてくれた。
その人が不遇な子供や、障害を持った子供に、圧倒的に優しかった。
俺はその人の一番弟子だったし、今も家出中だけど、家に居ない子供だった。

俺の家のすぐ近所に大きな病院があって、俺は看護婦さんとかと仲良くなっていた。
そこに小児病棟があって、毎晩行くんだよ、晩飯食べてから家を抜け出す。
面会時間を過ぎても、俺には誰も何も言わなかった、消灯まで遊んでた。
俺用の白衣やマスク、消毒液まで用意してくれていたんだ。
夏は涼しく冬は暖かいし、入院してる子供が沢山いて、遊び相手には困らないし。
だから病気の子や、障害を持つ子とずっと遊んでた、学校に上がった頃から。
言葉の話せない子や、盲目の子・車椅子・寝たきり、様々な子供がいたよ。
俺は生まれながらのお喋りだから、考えたんだよ、伝える方法を。
自分が楽しくないから、必死で考えた、伝えようと。
そして出会うんだよ、忘れられない少女。
体を動かせない寝たきりで、盲目で耳が聞こえない・・ヒトミ。
全てを遮られた、少女と出会った・・小3の冬。
ヒトミも同じ歳で、転院してきた、本当に可愛い少女だった。
瞳を開けないヒトミを、俺は好きになっていたんだよ。
毎日、最後はヒトミに話をして帰っていた。
体中管が刺してあって、なんか機械がピコーン・ピコーンて鳴るだけの部屋で。
母親も俺に優しくて、おやつやジュースをもらっていた。
母親が帰った後の、消灯前に毎日寄って、真白い顔を見ながら語りかけた。
どうしても、伝えたくて・・必死に色々考えて試した。
俺にとっては辛い経験だったけど、でも伝えられたよ最後には。
そしてヒトミの感情も伝わってきた、その方法は・・体温だった。
唯一自由に触れられる、左手の温度、その変化を感じたんだ。

俺が面白いことを話すと、変化した、嬉しくてずっと話してた。
本当に分ったんだよ、微かな温度の揺れが。
ヒトミは年が明けて体調が悪くなり、成人の日に亡くなった。
でも俺は信じている、伝わってたと、ヒトミと互いに交信できたと。
だってヒトミの体温が・・笑っていたから、楽しそうに』

私はヒトミを思い出して、感情的になって、俯いて泣いていた。
マチルダが強く抱いてくれた、マチルダの香りと温もりに包まれていた。
「完敗だよ、私の負けだよエース、ありがとう・・もう1つ大切な物を貰ったよ」とマチルダが優しく囁いた。

「だからあなたは、カスミちゃんのお熱の時に、あんなに自分を責めたのね。
そして私の基礎体温の変化も気付いたのね、ごめんね・・私も分からなかった。
あなたの添い寝の意味を、あなたは温度で伝えてるのね、だからあんなに安心できるのね。
伝わっていたわ、絶対に・・ヒトミちゃんに」

ユリカが優しく深い深海の瞳で言った、その笑顔が温かかった。
「私もそう思う、絶対に伝わってたよ・・エースを好きだったよ・・ヒトミは経験できたよ、最も大切な、人を愛する事を」そう言ってマチルダが強く抱きついた。
私は2人を見て、回復していた、笑顔でマチルダを抱いていた。
窓の外に半月の月が浮かんでいた、その夜空に映像が流れた。
ヒトミが笑っていた、一度も見れなかった、瞳を開いて楽しそうに笑ったいた。
《俺は間違ってなかったね、瞳》そう月に話しかけた、月光に照ら

されて、ヒトミが微笑んだ。
１３歳の夏、私はもう一段上がろうとしていた。
沢山の友の死を乗り越えて、自分の成すべき事を感じていた、それが意味だと感じていた。
ユリカとマチルダに包まれて、心は青い炎に守られていた。
そして夜空に現れた、私の交友関係の原点、チサが松葉杖で立って笑っていた。
【がんばれ～、見てるからね】と笑っていた、５歳のチサが私を見ていた。
流星が流れた、トナカイのように・・真夏の夜空に、サンタとチサを運んできた。

団体客が帰り、レンが笑顔で来た、楽しそうな顔を見て、嬉しかった。
「レンちゃん、可愛いな～」とマチルダがレンに微笑んだ。
「日本では浮くんですよ～、珍しい者みたいに見られます」と照れた微笑で返した。

「日本は、それがあるよね、私なんか歩くだけで見られるから、疲れてたよ。
幼い頃は、自分のブロンドや高い鼻が、嫌で嫌でしょうがなかったよ。
１５年も前の東京だから、今の宮崎みたいだったから。
怖かったよ、自分で自分を受入れるまではね」

輝きながらレンに微笑んだ、レンはマチルダの輝きを見ていた。
「そうなんですよね、自分で自分を受入れないと・・駄目ですね」
とレンは笑顔で強く言った。
「好きな物は、好きなのよ・・人と違っていいじゃない、それで誰

かを傷つけるわけじゃないから」とマチルダが輝きながら微笑んだ。
「ありがとうございます、マチルダさん」とレンが最高の笑顔で返した、マチルダも笑顔で頷いた。
『じゃあ、マチルダ、また明日』と立ち上がろうとすると、腕を掴まれた。
「お休みの、キスは」と輝きニヤで、瞳を閉じた。
私はチュッって感じで、唇を一瞬付けた、マチルダは目を開けて微笑んだ。
レンとユリカと女性に礼を言って、レンと店を出た。

レンと通りに出て、腕を組んで歩いていた。
「すっごい勉強になったよ、ありがとな、エース」とレンが微笑んだ。
『それもあるけど、2店の女性達とも仲良くなれて、良かったでしょ』と微笑んで返した。
「うん、最高」と嬉しそうに笑った、可愛い魔女を見ていた。
フロアーに入ると閉店直後で、10番に集まっているところだった。
レンも座り、ユリさんも来て、薔薇で座った。

「昨日からの報告を述べよ」と蘭が満開で言った。
『ハルカを真昼間、西橘で抱き寄せて、浅いキスをして』と笑顔で言うと。
「ちょっとまった！・・本気か」とカスミが不敵を出した。
「はい、次の段階に上ります」とハルカがカスミにニヤを出した、皆唖然としてハルカを見ていた。
「よし、続けて」と蘭が満開の笑顔で促した。
『ミニスカートのリョウを抱っこして』と言うと。
「見えたのかな～？」とナギサが華やかニヤで言った。
『はい、お礼と言って・・紫のキラキラパンツを見せてくれました』とニヤで返した。

「蘭、紫のキラキラ持ってるかい」とナギサの最強華やかニヤで蘭に言った。
「もっ、持ってるわ・・キラキラ・・よし続き」と蘭が照れた満開で言った。

『そして、ユリカと一晩添い寝して、一度キスしてくれました』とニヤニヤで言った。
「待っておくれよ、本当の話かい？」とナギサがウルで聞いた、私は頷いた。
「ユリカ姉さんは、パジャマなのかい？」と蘭が満開ニヤで言った、私は真顔で頷いた。
「よし、いよいよマチルダ」と蘭が満開で促した。
『マチルダは抱っこと、お休みのキス2回です』と笑顔で答えた。
「特殊事項は？」と蘭がニヤで聞いた。
『蘭の笑顔が見れなくて、ウルウルしました』とウルで言った。
「よし、マチルダの話をユリさんお願いします」と」ユリさんに満開で微笑んだ。
「明日、マチルダの歓迎会を、閉店時から我家でしたいと思います、雑魚寝で良ければ皆さん参加して下さい」と立って薔薇で微笑んだ。
「ありがとうございます、参加出来る人」と蘭が手を上げた。
「は～い」と全員が手を上げた、蘭が私を見た。
「もしかして、ユリカ姉さん所が良いのかい」と満開最強ニヤで言った、私はウルで手を上げた。
「じゃあ、リーダー」と蘭がカスミに満開で微笑んだ。

「マチルダは伝えようとしてる、世界の状況を必死に伝えようとしてる。
私達も伝える事は出来るよね、会話のプロだと言うのなら。
響いたら伝えよう、少し時間を貰って、エースに話をしてもらうね。

エースお願い、豊があなたを認めた話を皆にして」

カスミが輝く真顔で私を見た、私は頷いて話始めた。

『・・・・・今もお母さんお母さんって、泣いているから』

私は感情的な自分を感じていた、女性達の涙を見て、自分にも出来る事があると感じて。

そしてユリさんの薔薇の涙が、背中を押した、積み重ねようと誓った。

今の土台に積み重ねれば、何かに辿りつくと信じようと思っていた。

蘭が腕を組み、頬にキスしてくれた、最も大切な満開を見ていた。

絶対に散らせないと誓った・・永遠の満開、そう思っていた。

私はヒトミの話をして、思い出していた、亡くなった沢山の友を。

家出して日記が手元に無かったが、全ての亡くなった友を思い出した。

ヒトミの部屋にある、グラフを示す装置。

常にピコーン・ピコーンと鳴っていた。

陽の光を浴びたことが無いであろう、純白の少女。

眠っていない、起きている・・そして生きていた。

体温の揺れは、４０年近く経った今でも、リアルに覚えている。

笑っていた、その笑顔で揺れていた。

体の温度じゃなかった・・あれは多分・・心の温度。

ありがとう・・ヒトミ・・教えてくれて。

ヒトミの瞳

熱の冷めやらぬ情熱のフロアーに、集結した女優達。
受入れる強さを全員が持っていた、一度受入れてから感じて考える。
それが出来ていた、初めから否定したりしない、それが薔薇の教え。

女性達が控え室に消えて、私はシオンと裏階段を降りて通りに出た。
シオンが腕を組んできて、ニコニコちゃんだった。
『ご機嫌だね、ニコちゃん』と真横のシオンに微笑んだ。
「だって、毎日素敵な話を聞けるから、先生が私をニコちゃんにしてくれます」と可愛く笑った。
『よ～し、今夜は素敵なクリスマスの話です・・・』と微笑んで、豊兄さんの結婚承諾話をした。
シオンが一行づつ英訳してくれて、それを聞いていた。
ローズのビルの前でクライマックスが来て、シオンが泣きながら訳してくれた。
私はシオンを抱き上げて、笑顔でシオンを見た、シオンも可愛い笑顔を見せて、瞳を閉じた。
エレベーターに乗ると、なぜか3階で止まった。
大きなクラブ【ゴールド・ラッシュ】の入口だった。

「シオンちゃん、ごめんなさい・・上ボタンも押してた」と笑顔で2人の美しい女性が入って来た。
「こんにちわ、セリカちゃん・グロリアちゃん」とシオンが抱かれたまま、ニコちゃんで言った。
「良いな～、シオン・・伝説の抱っこ」とグロリアと呼ばれる若い方が微笑んだ。
『いつでもしますよ、ミゼットちゃん』と私はセリカとグロリアが車の名前から取ったと思い、3輪トラックの名前で呼んだ。

「グロリアで～す・・本当に良いの」と美しいニヤで言った、セリカも私を見ていた。
『お２人とも条件は満たしてますから、体重６０ｋｇ以上無いでしょ』とニヤで返した。
「ありませんよ・・今度チャンスが有ったら、よろしくね」と笑顔で言った。
エレベータを降りながら、グロリアとセリカに笑顔を返して別れた。

ローズの前でシオンを優しく降ろした、店に入ろうとすると、シオンに腕を掴まれた。
『シオン、どうしたの？』と真顔のシオンに、微笑んだ。
「シオンからするの、初体験だから・・先生にキスしたい、シオンも」と俯いて小さな声で言った。
『シオン、ありがとう、先生凄く嬉しい』と言って、シオンの顔の高さに私の顔を合わせて、目を閉じた。
シオンが優しく唇を重ねた、私は嬉しくて心がニコちゃんだった。
シオンが長めのキスをして、唇を離して、少し照れた笑顔を見せた。
「今夜はここで良いよ、また明日」と可愛く笑って、ローズに駆け込んだ。
《可愛いな～シオン》と思っていた、強い波動が来て、ニコニコちゃんでＰＧに帰った。

裏階段の下で、蘭とカスミと美冬が話していた。
私を見つけて蘭が満開で手招きした。
「マチルダの歓迎会を、もっと大人数で、ボーイさんとか五天女とか含めて、出来ないかと思ってね」と蘭が真顔で言った。
『ＯＫ、やろうよ、俺も考えてた』と笑顔で返した。
「どうやるんだい？」とカスミが輝く笑顔で返してきた。
『どうもこうも無いよ、ＰＧを使う、日曜の午後・・俺がマダムとユリさんには話す』と笑顔で返した。

「さすが～、エースだ」と美冬が私に抱きついた、蘭の満開とカスミの輝く笑顔が見ていた。

『美冬から、カズ君に言っといて、そして準備は女性でする事。
フロアーにテーブルでも置いて、座ってやろうよ、後片付けはボーイさんも手伝う。
金は会費制で、子供は当然無料、久美子は少しピアノを弾いてもらうから無料。
マチルダの送別会になるけど、良いんじゃないかな。
招待は俺が全部するから、呼びたい人をリストUPしといて。
五天女と銀河の奇跡は分ってるから、俺的にはキングとジン。
そして・・豊兄さんを招待する、マチルダの今回の旅の完結として』

3人に笑顔でそう言った、3人の最高の笑顔があった。
「どうしてそこまで考え付く、本当にエースになってきたな」とカスミが輝いて微笑み。
「もう、駄目～、この流れはキスに発展するから」と蘭が私に抱き付いた。
「蘭姉さんのケチ・・暇な四季が準備の段取りをします、ユメ・ウミと」と美冬が微笑んだ。
「よろしく、私も出来るだけ手伝います」とカスミが美冬に微笑んだ。
「まぁ、了解は取るでしょう、エースだから」と蘭が満開で言った。
2人に手を振って別れて、タクシーに乗った、蘭はご機嫌だった。

「寂しかった？」と私の肩に乗りながら、蘭が囁いた。
『うん、表現出来ないほど、寂しかったよ』と蘭の香りを感じながら、囁いた。
「私も・・いっぱいお酒飲んだけど、酔えなくて・・9時に寝たけ

ど3時に起きて・・寂しくて眠れなかったよ」と囁いた。
『蘭、心配しないで・・絶対親父を説得するから、それが俺の唯一の望みだよ』と囁いて返した。
「嬉しいよ・・ありがとう」そう囁いて瞳を閉じた、私は蘭を感じて安心感に包まれていた。

タクシーが着いて、蘭を抱き上げた、満開の笑顔を見て嬉しかった。
部屋に入り、蘭が化粧を落として、パジャマで戻ってきた。
蘭が電気を消して、満開で微笑んだ。
「唇で充電して」そう言って、目を閉じた。
私は嬉しくて、蘭を優しく抱き寄せて、唇を重ねた。
長い時間重ねて、お帰りと伝えた、蘭はただいまと返してきた気がした。
唇を離し、そのままベッドに入って、腕枕で蘭を見ていた、私の胸に顔をつけていた。

『蘭、少しだけお話ししとくね、マチルダとユリカにした話』と囁いた。
「うん、ありがとう」と蘭が囁いた。
『俺は、蘭は知ってるけど、子供との関係は得意なんだよ・・・・・』ヒトミの話をした。
「ありがとう、また少しあなたが近づいた・・嬉しかった」と蘭が囁いた。
『明日は、一日が長いよ・・お休み』と囁いて返した。
「おやすみ」と蘭が囁いて、静かになった、蘭の香りと温度を感じていた。
《ユリカ、マチルダと楽しんでる・・おやすみ》と心に囁いた、強い波動が私と蘭を包んでくれた。
私は最高の気分で、眠りに落ちていた。

翌朝自然に目が覚めた、蘭は胸の上にいた、少し笑顔の寝顔が可愛くてニヤで見ていた。
優しく腕を抜き、洗面所に行き歯を磨き、顔を洗った。
珍しくフランスパンが有ったので、バターで焼いて、オムレツとハムとレタスにした。
「やっぱり、幸せだよ・・今朝は私が車でユリさんの家に送るから、準備してね」と満開で言って洗面所に消えた。
朝食を準備して、自分の部屋で着替えて、蘭の部屋に戻った。
蘭が満開笑顔で、テーブルに座って、朝食を食べはじめた。

「今日は美冬運転手と、どこに行くの？」と蘭が満開で微笑んだ。
『和尚の所と海かな』と笑顔で返した。
「明日は私が空いてるよ、どっかマチルダ連れて行く？」と笑顔で返してきた。
『うん、蘭には豊兄さん所・・蘭も行ったことないから』と微笑んで返した。
「嬉しいね～、でも決断なんでしょ・・マチルダに豊君会わせるの」と真顔で言った。

『そうだね、あの人は心が指したら、すぐに行動するから。
そして子供に対し、敏感だからね、マチルダの話を聞いたら旅に出るかも。
でも、リンダのマチルダに託した意味からすれば、会わせないわけにいかないよね』

蘭の目を見て、真顔で答えた、蘭は満開に微笑んだ。
「うん、マチルダの反応の方が凄いかもよ、離れなくなるかも」と蘭がニヤできた。
『そうだね、怖いね～』とニヤで返した。
「エミちゃん今日だね、誕生日」と満開で微笑んだ。

『製作終了したよ、ドリーム・キャッチャー・・蘭は何を贈るの？』と笑顔で聞いた。
「私は毎年靴よ、運動靴じゃない、お洒落な可愛いの」と嬉しそうに言った。
『マリア、誕生日いつなの？』と笑顔で聞いた。
「へへ～、やっと聞いたね・・４月２日よ」と蘭がニヤニヤで言った。
『うそ、俺と同じなのか～、運命の２人だな・・２年前のね～』と笑顔で言った。
「嬉しいでしょう、大変だったのよ、ユリさん難産で」と蘭も思い出したのか、真顔で言った。
『そっか～、最初だけ我がままましたんだね、マリア』と笑顔で返した、蘭も笑顔で頷いた。
蘭が準備をしてる間に、食器を洗った。

蘭が準備が終わり、ケンメリで出かけた、蘭はご機嫌だった。
「じゃ、頑張ってね」とユリさんのマンションの下で、蘭に手を振って別れた。
部屋の呼び鈴を押すと、ユリさんが薔薇の笑顔で出迎えてくれた。
リビングに招かれ、マリアを抱いて座った、ユリさんが紅茶を出してくれた。
『ほとんど、片付いてますね、俺がやったのに』と笑顔で言った。
「嬉しくて、手をだしてしまったのよ」と薔薇で微笑んだ。

『ユリさん実は、昨日帰りに蘭と美冬とカスミがいて、相談されたんですけど。
マチルダの送別会になるんですけど、ボーイさんと五天女やゲストも呼んで。
日曜日にやりたいんです、マチルダの今の活動の意味からすると、してやりたい。

もちろん準備と片付けは、ＰＧの女性が中心でやります。
会費制で、子供は無料・・どうでしょう、ＰＧ貸して頂けますか』
薔薇の微笑みを見ながら、笑顔で言った。
「私が断ると思ってないでしょうね、素敵です、もちろんＯＫですよ」と薔薇で言った。
『ありがとう、助かります』と笑顔で返した。
「マリアの時も、ドリーム・キャッチャー作ってくれるのかしら」と薔薇で微笑んだ。
『はい、ミサとマリアは、今回はそれにしようと思っています』と微笑んで返した。
「素敵ね～、マリア良かったね」とマリアに微笑んだ、マリアは天使で私を見た。
『マリアの誕生日は忘れませんよ、私と一緒ですから』と微笑んだ。
「そうなんですね～、マリア２つも良い事があったね～」と薔薇で微笑んだ、マリアが天使で微笑んでいた。

リビングのソファーとテーブルを、小さな部屋に移動して、観葉植物を窓際に移した。
かなり広いスペースが出来た、ユリさんも笑顔で満足そうだった。
「今日は私、準備がありますから、マリアを頼んでいいかしら？」と薔薇で微笑んだ。
『もちろん、今日は美冬に頼んで、和尚の所に行きますから』と笑顔で返した。
「おしょう、ねこちゃん・・まちるだ」とマリアが天使全開で言った。
『マリア・・お話、上手に出来るようになったね、偉いね～』と抱き上げた、天使全開で元気をくれた。
ユリさんが準備している間、マリアに絵本をよんでいた。

ユリさんの準備が終わり、真赤なZで出かけた、赤玉駐車場にZを停めた。
「ユリカの顔が見たいのよ、添い寝の効果が」と悪戯っ子を出して、私の腕を組んだ。
『凄いですよ、マチルダ効果かもしれないけど』とニヤで言った、ユリさんも薔薇で微笑んだ。
ユリカの店を合鍵で開けて、奥に進んだ、ＢＯＸにユリカとマチルダが座っていた。
「ユリカ・・マチルダ、おはよ」とマリアが駆け出した、２人が最高の笑顔になった。
ユリカがマリアを抱き上げた、逆光に映る３人が美しかった。
ユリさんが薔薇で微笑み、挨拶をして、ユリカの隣に座った。
私はマチルダに微笑み、マチルダの隣に座った。

「早急に、私もお熱になります、こんな効果があるのなら」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「ユリ姉さん、添い寝の意味が分かりました・・・・」ユリカが昨夜のヒトミの話をした。
「素晴らしいですね・・・病院はどこ？」とユリさんが真顔で、私に強く言った。
『〇〇病院です』と私はその強さに押されて、真顔で答えた。
ユリさんが私を見て、大粒の涙を流した、私は焦っていた意味が分からなくて。
「どうしました、ユリ姉さん」とユリカがユリさんを抱きしめた。
「２年前の誕生日、午後９時頃・・何してましたか？」とユリさんが泣きながら聞いた。

『病院で、誕生祝いをしてもらってましたね、その時間は多分』と微笑んだ。
私はユリさんの言いたい事が、全く分からなかった。

ユリカもマチルダも私を見ていた、ユリカの表情で、ユリさんの感情が高まっていると感じた。
「採血をしたでしょ・・○００ｃｃ」とユリさんが涙を流し続けて聞いた。
『ここだけの話ですよ、病院にも迷惑がかるので・・しました』と答えて、考えていた。
「あなたが、私とマリアの命を救ってくれたんですよ」と言って私の所に来て、抱きついた。
私はそれで理解した、あの夜の出来事はマリアの出産だったと。
私は震えるユリさんを強く抱きしめて、マリアを見ていた、優しい瞳で私を見ていた。

「とんでもなく、素敵な話しが今日も聞けそうだね」とマチルダが輝きながら、笑顔で言った。
「お願いだから、あなたが話して・・ユリ姉さんは今は無理だから、喜びが強すぎる」とユリカが最高の爽やか笑顔で言った。
私は震えるユリさんを抱きながら、ユリカの深海の瞳と、マチルダの深い緑に押されて話した。

『2年前・・小5の誕生日・・4月2日、俺は小児病棟にいつものように行った。
その夜は入院してる子供と、その母親と看護婦さん達が、ささやかにお祝いしてくれた。
7時過ぎに救急車が何台も来て、騒然としていたんだ。
多重事故で、怪我人が沢山運ばれたと言って、小児科の先生も応援に行った。
俺は暢気に楽しんでいたんだ、嬉しくて笑顔でケーキを食べていた。
9時少し前に小児科に連絡が入ったんだよ。
保護者で誰か、A型の輸血用の血液を、提供してくれないかと。

でも面会時間が過ぎてて、誰も居なかったんだよ、俺も帰る所だった。
それで慌ててる顔見知りの先生に、俺のを取ってA型だからと言ったんだよ。
その先生は俺の目をじっと見て、手を引いて連れていった。
手術室の隣の部屋は混乱してて、凄い状況で、必死にどっかに電話してたよ3人で。
そして先生が俺に言ったんだ、絶対に内緒にしてくれと。
俺は多分先生は法を犯すんだと思った、その真剣な目を見て。
年齢か、体の問題か、何かがあったんだね、俺は体が大きかったけど。
それで真剣に頷いて約束した、状況を見て感じてたから、集中してたよ。
それで採血され始めた、看護婦さんが笑顔で隣にいてくれて、先生と話してた。
血液がもう少し欲しいと、俺は看護婦さんに言ったんだ、採れるだけ全部採ってと。
駄目だと言う先生に、採らなければ、この話をすると脅して。
採ってもらった、終わっても全然何ともなくて、看護婦さんに家まで送ってもらった。
その途中で教えてくれた、出産で血液が必要だったと。
ユリさん、俺は忘れていたよ、そんなにたいした話しじゃないよ。
絶対にここだけの話にしてね、お願いします。
でも病院も駄目だな〜、当事者のユリさんに話すなんて』

笑顔で言って、少し照れていた、マリアが駆けてきて私の前に立った。
「ありがと」と言って天使全開で、私の横に座って抱きついた、私はマリアを優しく抱いていた。
「あなたにとっては、そうだろうけど、ユリ姉さんにとっては大切

な話しよ・・私からも、ありがとう」とユリカが深い深海の瞳で言った。
「もちろん私からも、お礼を言わせてね・・ありがとう、よく声をかけたね」とマチルダが輝く微笑で言った。
私は照れた笑顔で返していた、ユリさんとマリアの温度を感じながら。
ユリさんが起き上がり、私に最高の薔薇で微笑んだ、私は笑顔で返した。

「私は、あの病院の友人から聞きました、やはり絶対に内密と言われて。
私があなたに会う事さえ、禁じられました。
でもその友人は、どうしても話しておかないといけないと、言いましたよ。
今の話はかなり削除しましたね、私を想って。
あなたは土下座までしたんでしょ、採血しろと言って、そしてこう言ったんでしょ。
命とルールとどっちが大事か、俺は帰れない・・ヒトミが見てるって、叫んだんでしょ。
私の友人は泣いてました、ヒトミちゃんの話は教えてくれなかったけれど。
今、ユリカの話で繋がりました、本当に嬉しかった。
そしてありがとう、本当にありがとう・・マリアを助けてくれて」
ユリさんの、薔薇の瞳から流れる涙を見ながら、私は思い出していた。
あの時、本当にヒトミの視線を感じていたと、そして部屋まで連れて行って。
他の先生と話して、駄目だと言われた時に、土下座していた。
どうしてもしなければと思っていた、ヒトミがずっと見ていたから。

瞳を開いた姿を見たことのない、ヒトミの瞳がずっと見ていると感じたから。
私のヒトミが見ているを聞いた、小児科の医師が折れた。
その人がヒトミの担当医だった、全ての責任は自分が取ると言って、採血したのだ。

私はマリアを抱き上げて、マリアの涙を指でふいて、笑顔で見ていた。
『マリア・・ありがとう、産まれてくれて』と微笑んで、抱きしめた。
ユリカとマチルダの涙を感じて、ユリさんの薔薇の感謝が伝わってきて。
原作者に囁いた、ユリカにも伝わるように。
《原作者、聞いてる・・あんたの最も大切な試験は、俺は合格していたね》と囁いた。
ユリカが私を爽やかな笑顔で見て、頷いて泣いていた。

「マダムと蘭にだけは、私から話します・・蘭は知るべきだから、あなたをベンチで声をかけたのだから」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
『はい、もうこの話はおしまいにしましょう、俺は本当に忘れてたから・・照れくさい』と照れた笑顔で返した。
「くさい・・チャー、くさい」とマリアが私に微笑んだ。
『マリア、良く分ったね〜・・チャー今朝シャワーしてないの』と笑顔でマリアに返した。
「シャワー、マリアとしゅる」とマリア全開不敵できた。
『かしゅみはやめなさい、ね、マリア・・かしゅみは駄目だよ』と笑顔で言っていた。
マリアの天使の笑顔と、薔薇の笑顔と、爽やかな笑顔と、輝きの笑顔に囲まれて。

私は幸せを感じていた、【運命】でなく原作者の試験に合格した事を。

そして、誓った・・この土台に積み重ねようと。
マリアに私の血が、少しでも含まれているのなら。
マリアが恥じない人間になろうと、そう心で誓っていた。
夏の日差しが降り注ぎ、プラチナブロンドの輝きが、目に痛かった。
光射す窓に、映像が流れた、ヒトミとチサが2人で手を繋いで、微笑んでいた。
私とマリアを見ながら、嬉しそうな笑顔で・・・。

私は運命を受入れていなかった、この時点でも。

そして今でも、受入れていない、原作者の存在を創り出している。
その背景はやはり、幼くて亡くなった、沢山の命を見ていたからだろう。

その不公平な世界だから、人類は進歩したのだろう。

しかし今、現在でも、金により助かる命と、亡くなる命が存在する。
運命と言う訳にはいかない、悪質で悪戯な原作者の存在を創りだす。
そして闘う、いつの日か平等という言葉の、本質が理解できるまで。
ヒトミとチサの幻影を追いながら・・理想を掲げよう。
無駄だと思った時に、敗北すると言った。

リンダの教えがあるから・・マチルダが伝えてくれたから。

ユリカが感じてくれるから・・・。

愛の隠し方

窓辺から降り注ぐ夏の日差しが、勢力を強めていた天空の要塞。
薔薇の感謝に包まれながら、天使の微笑を見ていた。
黄金色に輝く髪が森の緑を覆い、深海の深い輝きが静かに見ていた。

「どうしてこんなに、毎日が楽しいのでしょうね、ユリカ」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「私もそう思いますよ、あのベンチで、蘭が声をかけてからですね」と爽やかに微笑んだ。
2人は楽しそうに微笑んだ、マチルダも輝く笑顔を見せたいた.
私の腕の中のマリアは、天使全開で微笑んでいた。

『ユリカ、一応言っとくね、日曜日よろしく』と笑顔で言った。
「もちろん、絶対に参加します、マチルダの第一回目の送別会なら」と私に爽やかに微笑んだ。
「えっ、送別会?」とマチルダが私を見た、輝いて美しかった。

『マチルダ、響く人達を集めるから、何でもいいから話をして。
そして伝えて、今を・・その現実を。
きっと響くから、そしてまた誰かに繋ぐから、そうしてね日曜日の午後』

マチルダの輝きを見ながら言った、マチルダは微笑んで返してくれた。

「分った・・・ありがとう、嬉しいよ。
エース、私のお願いも聞いて、月曜日はあなたが一人で見送って。
バスで空港に連れて行って、そして言葉を出さないで、私が英語

で話すから。
瞳で聞いて、瞳で伝えて・・そして空港で抱っこして。
お願いね・・エース」

マチルダが緑を深めて輝きを放ち、笑顔で言った。
『了解、マチルダ・・だから今夜はリラックスして、楽しんでね』
と笑顔で返した。
「最高に楽しい旅よ、ありがとうエース」と笑顔で言って私に近づいた。
マリアがマチルダの顔の前に手を出した、天使全開でマチルダを見た。
「まちるだ・・だめ～」と笑顔でマチルダに言って、振返り私の頬にマリアがキスをした。
「マリア～、意地悪1点」とマチルダが輝く笑顔で言った。
ユリさんと、ユリカが笑っていた、私もマリアに微笑んだ。
ユリさんを見送り、私が眠そうなマリアを、立って抱いて寝かしつけていた。

「リンダが惚れるわけだね、リンダに話すのやめようかな～、絶対迎えに来るよ、蘭さんとエースを」とマチルダが笑顔で言った。
「初めて感じましたよ、ユリ姉さんのあんな動揺」とユリカも爽やかに微笑んだ。
「ちょっといないですよね、ユリさんの年齢で、あれだけ自己を確立されてる人」とマチルダがユリカに真顔で言った。
「私も他には知りませんよ、あのレベルに到達するのは、普通は老人ですね」と微笑んで返した。
「そうですね、全ての欲が消えた老人ですよね」とマチルダも微笑んで返した。
私はマリアが眠ったので、陽の当たらないソファーに寝かせて、手を握っていた。

「何を感じようとするの、その時に？」とマチルダが私に微笑んだ。
『マリアの鼓動と温度、眠った瞬間が１番分るから』と笑顔で返した。
「一人一人違うの？」とマチルダが輝く笑顔で聞いた。
『マリアは小さいから、早いよね、でも精神状態が安定してるかどうかは分るよ・・あと蘭とユリカは分るよ』と笑顔で返した。
「ユリカさん、羨ましいですね～・・輸出お願いします」とマチルダが輝きニヤで言った。
「それはまだ早いと言いましたよ、私に必要なんだから～」とユリカも爽やかニヤで返した。
私はマチルダの隣に座ろうとすると、ユリカに腕を掴まれた、ユリカがウルをしていた。
マチルダを見るとやはりウルをしていた、私もどうしようもなくて、ウルウルをした。
３人で笑っていた、９月が近づいた夏の光を浴びて。

『それで、マチルダ揺り篭に乗ったの？』と隣のマチルダに笑顔で聞いた。
「うん、最高だった、羊水の揺り篭・・あなたのその発見にも感動したよ」と輝く笑顔で返してきた。
『リンダも次は、ユリカとマリアにも会えるよ』と微笑んで返した、２人は笑顔で頷いた。
「じゃあエース、今日の分を贈ります・・目を閉じて、地球をイメージして、月から」とマチルダが真顔で言った。
私は目を閉じて、地球をイメージした、暗い世界に地球儀のような地球が浮かんできた。
「ゆっくりと回転させて」とマチルダが囁いて、私の頬に両手を当てた。

私は地球を回転させた、その時星が広がった、数百万の星が瞬いた。
本当に美しかった、【無限】という言葉が浮かんだ、果てしない世界が包んでいた。。
太陽系の近い惑星が、その色や質感まで分り、遠くの星まで輝いていた。

「今！そのスピードを覚えて、それが地球の回転速度だよ」と言ったマチルダの声が、遠くに感じた。
私のイメージしている地球儀のような無機質な星が、生命を得たように色づいてきた。
私は自分では何もせずに、ただ映画を見るような感覚で楽しんでいた。
有機質な青と緑が拡がりだした、茶の部分が砂漠を思わせ、白い部分が雪だと思っていた。
青も緑も深さの波を作り、その深さを表現した。
赤道から上下に拡がったその色づけは、最後に北極圏と南極が白く塗られて終わった。
そして地球の地上の線が訂正され、綺麗に描きあがった。
美しかったその地球が、本当に青い地球だった。

「よし、今日はここまで、勉強しなさいよ、何処に何があるのか」とマチルダが言った。
『ありがとう、マチルダ・・訂正多くて大変だったね』と照れて微笑んだ。
「躊躇なく受入れて、変な感想を言うよね～・・楽しいけどね」と輝きニヤで返してきた。
『だって最高だよ、凄く美しかった・・地球』と笑顔で返した。
「私の理想だよ、もうそんなに綺麗じゃないかも、汚れたから」とマチルダが真顔で言った。

『俺、小5の時、正月家出して東京に行った時。
2日目に新宿から、富士山が見えたんだよ。
なんか嬉しかった、快晴の冬の澄み渡った空だったけど。
宮崎の青と全然違ってて、最初嫌だったんだよ。
でも、新宿で工事してる高層ビルを、確か神楽坂の方から見た。
富士山が見えたんだよ、その時感じた、今日会いに行く和尚が言ってた。
自然は絶対浄化するって、その生命を繋ぐために、必ず適応して浄化するんだって。
でも人間が浄化の対象になった時は、人は滅ぶんだよね。
でも・・知恵があるから、ギリギリで止まるはずだと思ってる。
俺、子供だったから、理解をしようとも思わなかったけど。
最近少し分るようになったよ、この前ある女性の話を聞いてたら。
その人の感情が映像で伝わってきて、自分はもう汚れたと言っていた。
無理やり暴力で犯されて、もう汚れた女だと叫んだんだ・・腕が。
俺はそうじゃないって、伝えたんだよ、外側は洗えば良いし。
内側は浄化出来るんだよ、絶対に出来る、だってその事自体は生命を繋ぐ行為だから。
次に愛する人に出会って、本当に子供を望んだ時に浄化すると思ってる。
生命を繋ぐためには、絶対に必要だから、だから人は汚れない。
誰かを愛そうと想っている限り、過去の経験で汚れたりしない。
そう思うようになったんだよ、洞窟からの悲痛な叫びが教えてくれた。
その泥沼から伸びてきた、傷だらけで泥だらけの腕に問いかけられた。
人は内面が汚れるのかと、その汚れは落とすことは出来ないのかと。
俺は確信してる、人は汚れない、人を愛する気持ちが汚れさせな

い。
なぜならば・・・愛は気体だから、汚すことはできないと思ったよ。
これが俺の前回の答えだよ・・ユリカ』
私はマチルダとユリカを見ながら、思いのままを口にした。
「最高だった、解答もそして・・心を追い抜いた言葉も」とユリカが深い深海の瞳で言った。
マチルダは泣いていた、俯いて少し震えて、辛い話だったのかと思って、優しく抱きしめた。
マチルダの微かな震えから、伝わってきた、その温度の揺れが伝えてくれた。
【私もそう思う】そう言っているようだった。
夏の光に照らされて、プラチナブロンドが輝き、翳りなど・・どこにも無かった。
私はユリカの指導をずっと受けていた、嘘も隠し事も出来ないユリカで感じていた。
言葉の持つ意味を、そしてシオンが教えてくれた、心の描き方を。
私の最後の挑戦者に込めた、ユリカの想いが伝わってきて、嬉しかった。
「あなたはあの時、話を切ったよね？その事が出る寸前で」とユリカが真顔で聞いた。
『うん、俺も聞くのが辛いし、あの子も言うのが辛いと思って。
その前の話で、腕の意味が分かったから、どうして俺に見せたのか。
俺が未経験だったから、見せたんだと思ったんだよ。
その前にシオンの、涙の問いかけがあったから、何に恐怖を感じ

たのかと。
それで色々考えて分ったんだ、経験が無い事だから怖いんだと。
それで、あの時、静寂の後に腕が出ると感じて、分ったんだよ。
聞かせたくなかったんだよ、絶対に・・俺を感じてる愛する人に。
今だから言えるけど・・これ以上隠せないから言うけど。
あれは、あの洞窟は・・女性のその部分、その物だったんだと感じた。
あの腕の動きの提示は・・【悔しい】だった。
そして、あの腕が問いかけたのは・・それでも愛せるかという事だと思った。
人の過去まで、それも含めて愛せるかって、問いかけていた。
それでも、愛する覚悟と、愛される覚悟があるのかと、言っていたんだよ。
少し楽になったよ、ユリカ・・隠し続ける事も出来るかもしれないよ。
ユリカを大切に想えば・・絶対に出来ると感じたよ』

私は呆然とするユリカを見ていた、この事実は隠していた。
男性と、その関わりを今はもてない、ユリカには聞かせたくなかった。
そして感じさせたくなかった、リョウの・・あの悔しさに塗れた腕と洞窟の意味だけは。
しかしマチルダの登場で、隠すのに限界を感じていた、緑の瞳が伝えてと誘うから。
昨夜ヒトミの話をした時に、溢れ出しそうになっていたから。
だから、このタイミングでユリカに告白したのだ、添い寝で確信していたから。
ユリカは大丈夫だと、その寝息と温度が教えてくれていた。
ユリカの瞳は今までにないほど、深く静かだった、マチルダもその

瞳を見ていた。
「どうやったら、どうしたら・・出来るの？」とユリカの圧倒的な静かな言葉だった。
『ユリカ・・聞きたいの、でも覚悟をしてね・・俺から離れられなくなるかもよ』と真顔で返した。
マチルダが座りなおし、ユリカを見ていた、ユリカは静かに頷いて。
「どうしても、聞きたい」そう静かに言った。

『ＯＫ、ユリカ・・味噌汁の時に少し実験したけど。
俺はこの方法しか思いつかなかった、それ以上考えたらユリカに悟られるから。
ユリカ・・ユリカが感じる波動、その声まで聞こえるその根本。
それは対象者の【心】じゃないんだよ、ユリカが読んでる物。
それは・・・【愛】なんだよ、俺はそれに先に気がついた。
だから隠す方法を考え付いた、それはユリカを想っていたらピンときた。
ユリカに悟られずに、ユリカを想ってやる事で隠すには。
それには・・俺が見つけたたった１つの手段。
それはその時に・・ユリカを・・別の自分で、憎む事なんだよ』

ここまで言った時に、ユリカの深海の瞳から、大粒の涙が溢れた。
私はマチルダに微笑んで、ユリカの隣に行って、ユリカを抱き上げた。
ユリカの深海から溢れ出る、大粒の涙を見ながら、抱いたままソファーに座った。
ユリカを引き寄せて、抱きしめた、ユリカは私にしがみついて、背中に爪を立てた。
ユリカの強い震えを感じて、腕に力を入れて体温で伝えた。
【大丈夫だよ、ユリカ】と伝えていた、ユリカの温度を感じながら。
ユリカが少し落ち着いた時に、マチルダが真顔で言った。

「ユリカさんの変わりに聞くね、どうやってユリカさんを憎むの？」と美しい真顔のマチルダが聞いた。

『ユリカは・・マチルダも感じてるだろうけど、俺はユリカを騙せないし隠せない。

だから俺は俺を騙す、自分に嘘をつく、ユリカを憎んでいると。

ユリカを愛する自分と別の場所に、もう一人の自分を作る。

そしてそいつにユリカを憎ませる、徹底的に憎む、親の敵のように。

そいつで感じさせる、ユリカに伝えたくない事柄は、そいつを出す。

だからその時は、ユリカに悟られない、そいつには愛がないから』

マチルダは深い緑の瞳を、私に真顔で向けて、私の何かを読み取ろうとしていた。

「じゃあ、なぜ・・ユリカさんは気付かない、エースのその自分を騙す行為を？」と静かに言った。

『ユリカはそれは気付かないんだよ、俺がユリカを憎んでるなんて・・嘘だからね、ユリカは嘘は感じないんだよ』と静かに言った。

「待ってくれよエース、出来るのか・・本当に出来るのか、それは自分で進んで、二重人格になることだろ」とマチルダが真剣に言った。

『簡単に言えばそうだよ、でも俺も・・・もし出来たとしても。

俺が混乱して、壊れるんじゃないかと思ってた、でもどうしてもやりたかったんだ。

ユリカの苦しみを少しだけでも和らげたかった、俺はユリカに貰ってばかりだったから。

味噌汁の時、１０分以上かかったよ、そして現れた、もう一人の自分。
でも俺は全く混乱しなかったよ、そいつでいる時も、全く混乱しなかった。
ユリカを愛してることに、全く疑念が無かったから、心からユリカを愛してたから』

ユリカの震えが再び強くなり、強くしがみついてきた、私も強く抱きしめた。
ユリカが首を横に何度も振って、私にキスをした、唇を合わせてきた。
それで、ユリカは少し落ち着きを取戻した。

「どうして・・どうして・・どうやって作るんだ？・・そいつを」
マチルダが、両手の拳を握って震えながら聞いた。

『簡単だったよ、魂を差し出す覚悟で、ユリカのためだと強く心で叫ぶ、それで出てきたよ』そう言いながら、乱れたユリカの髪を整えて顔を見た。
深海の瞳が優しくて、私は微笑んだ、ユリカは真顔で私を見ていた。
「バカ・・壊れたらどうするのよ・・私や・・蘭は・・私は蘭になんて言えばいいのよ」とユリカが叫んだ。
『蘭に何も言わなくて良いよ、蘭は分ってくれる・・それが俺の生き方だから』とユリカに微笑んだ。
「ばか～」と叫んで、強くしがみついた、ユリカが暖かかった。

「絶対言えない、この事だけは、リンダに言ったら・・リンダはエースを誘拐しに来る、ＣＩＡに依頼してでも」と呟いてマチルダは微笑んだ。

「まさか！あの子も自分で作りだしていたの・・もう一人の自分」とユリカが瞳を輝かせて言った。
『多分ね、だってどっちも、自分じゃないと主張するって、おかしいでしょ』とニヤで言った。
静寂が包んでいた、私は方法をユリカに伝えるつもりはなった。
しかしユリカの、あの深い深海を見た時に無理だと感じた。
無理ならば言葉で伝えないと、そうしないといけないと思っていた。

「そいつの存在は、常に感じてるのか？」とマチルダが顔を上げて、潤む瞳の真顔で言った。

『これも、シオンに教えてもらったんだけど、そいつは暗い部屋で一人で遊んでるよ。
案外楽しそうに、憎しみしか持たない奴だから、一人が好きなんだ。
だから、普段は全然感じないよ、そこまでは計算通り。
策略なら無敗・・俺は俺に勝ったよ・・俺天才だろ』

私はマチルダにニヤをした、マチルダもやっと笑顔が出た、ユリカも微笑んだ。
「ユリ姉さんに言った言葉、本気だったのね・・私をステージに上げるって」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「その前に、私が教えてあげるよ・・日本語で」とマチルダが最強不敵を出した。
『マチルダ、それは罪だぞ・・マチルダが言ったら』とニヤで返した。
「てことは・・私の方がカスミより上って事だね」と輝きニヤニヤできた。
『ノー・コメント』と笑顔で返した、２人が笑っていた、ユリカを見ていたそして心で囁いた。

《ユリカ行こうね・・次のステージに》と笑顔でユリカを見た、爽やかに微笑んで頷いた。

マリアが起きてきて、駆け寄ってユリカを見た、ユリカの両頬に両手を当てた。

「ゆりか！」と強く叫んで天使全開をした、私はマリアを見ていた。

リョウは2人だね、とマリアに聞いた時に、【あい】と微笑んだマリアを思い出していた。

あの天使の笑顔が教えてくれた、それで良いのだと、それは個性なのだと。

私は常識を1つ破った、自ら多重人格になる事で。

暗い一人の部屋で遊ぶ、憎しみだけの自分、今も遊んでいる、たった一人で楽しそうに。

ユリカとマチルダの化粧を直すのを、ニヤニヤで見ていた。

「エース、もしかして、この化粧直しは無駄な事なのかな？」とマチルダが輝きニヤを出した。

「私はもう、泣きませんよ・・もう怖いものも無いですから」とユリカが爽やかに笑った。

ユリカは新しい美しさを纏って、さらに上を目指すべく、深海を深め笑ったいた。

ユリカと私の愛の騙し合いは続く、ユリカの笑顔が見たくて、喜ばせたくて。

ユリカはこの後、常に進化していく、そして私は常に対抗策を考え出す。

これから5年以上に渡り、ひと時も離れる事無く、永い時間をかけて不思議な愛を貫く。

ただユリカに会いたくて、その笑顔が見たかった・・それだけで良かった。

その愛情に疑念を持ったことなど、一度も無かった・・・今でも。

人の能力とは、どんな物なのだろうか、私はあまり気にもしなかった。

確かにユリカの【それ】とは、騙し合いをしたが、それはユリカとの1つの遊びだった。

私はユリカとカクレンボをしていた、常にユリカが鬼だった。

私は隠れる場所を探し、ユリカが常に笑顔で私を探す。

そろそろ鬼を交代しようか、ユリカ・・俺が鬼になるよ。

ユリカとリンダとマチルダが隠れているから、その遊びが永過ぎるから。

そろそろ行くね、全能力と経験と策略を使って。

必ず言うよ、大きな声で・・笑顔で。

『ユリカ、み～っけ』と叫んでやるよ・・そして抱きしめてあげる。

私の方から、2度目のキスをするために・・。

真実の価値

ガラス越しの光を浴びるその姿、逆光のシルエットでも美しさが隠せない。
常に何かを求め探し続ける、強い表現力を有する緑の瞳。
ユリカとマチルダの化粧直しも終わり、昼食に出かけた、マリアは終始ご機嫌だった。
夏の日差しを直接浴びた、マチルダのプラチナブロンドの輝きに、暫し見惚れて歩いていた。

ホテルのバイキングランチに行き、ユリカとマチルダが驚くほど食べた。
『どこに入ったか不明で、全部出てる感じで、なんかもったいないね』とニヤニヤで言った。
「旅人は、食べれる時に食べとく癖がつくのよ・・特にバイキングはね」とマチルダが微笑んだ。
「そうなのよ、分った」とユリカが追い討ちをかけた。
『ユリカ旅人じゃない、嘘ついた』とウルウルで返した。
「私は嘘つくのも、隠し事も出来ますから・・一人の自分で」と爽やかニヤを出した。
「確かに世の中は不公平だね～」とマチルダも輝きニヤを出した、私は全開ウルをしていた。

食事が終わり、ユリカがご馳走してくれた、マチルダとお礼を言って通りに出た。
ユリカのビルの下でユリカと別れて、マチルダが強く腕を組んで来た。
『マチルダご機嫌だね、可愛くなってるね』と光を浴びて輝く、マチルダに言った。

「羊水の揺り篭と、エースの魔法でね・・でも不思議な男だね～」と私を見て輝きニヤを出した。
『不思議ちゃんに、不思議と言われても・・複雑だよ』とニヤで返した、マチルダが笑顔で睨んでいた。

「りょう！」とマリアが呼んだ、超ミニの赤いスカートを穿いたリョウが、最高の笑顔で笑った。
リョウが歩み寄り、マリアに手を出して、マリアを抱いた。
『マチルダ、リョウさん・・同じ２０歳だよ』とマチルダにニヤニヤで言った。
「マチルダです、よろしくね・・露出狂のリョウさん」と輝きながら微笑んで、頭を下げた。
「よろしく、厚化粧のマチルダちゃん」とリョウも涼しげに微笑んで頭を下げた。
「リョウさん、そんなに胸締め上げてＵＰしたら、体に毒ですよ」と輝きニヤで言った。
「いや～ん、マチルダも気を付けないと、来年には垂れるわよ」とリョウも涼しげ最強ニヤで来た。
「素敵・・お友達になって下さいね」とマチルダがリョウの頬にキスをした。
「私の方から、お願いします」とリョウがキスを返した。
《面白いな～、負けず嫌い同士は》と思っていた。

『リョウ、日曜日の午後空いてる、マチルダの送別会、午後ＰＧで』と笑顔で言った。
「もちろん、行くわよ・・銀河揃うの？」とニヤニヤで返した。
『ホノカ、今から誘うけど、何も無ければ来るよ』と微笑んだ。
「了解・・そん時にお礼するね、凄いやつ」とマリアを渡しながら笑った。
『怖いな～・・でも楽しみだ～』とニヤしながらマリアを受け取っ

た。
「私もカスミに、ミニスカート借りよう」とマチルダも輝きニヤで言った。
「ウエストが入るかしら・・パンツばかり穿いてると、緩むのよね～」と涼しげニヤで言って、背中を向けた。
マチルダはハッとして、お腹を摘んでいた、その姿が可愛かった。

「しかし、凄いメンバーが揃ってるね～、カスミだけでも驚いたのに」とマチルダが輝きニヤで私を見た。
『銀河の奇跡でしょ、もう一人に会うと納得するよ』と笑顔で返した。
「それは、ここに同じ歳で3人が揃ったからなの？」とマチルダが輝く微笑で聞いた。

『マチルダがレンに言った、日本人には特にある・・そういう視線。
ほとんどの子供が、どっかで自分の個性を諦めて、周りに合わせようとするんだよね。
でもカスミ・リョウ・ホノカは、強い意志で貫いたんだと思えるんだよ。
一人ならこの子は凄い子だな～って、単純に思うんだろうけど。
3人揃えば奇跡でしょ、3人が同じ道を選び出会った事が。
そして3人共一瞬で理解しあい、認め合ったのを俺は見たからね』

真横の輝くプラチナブロンドを見ながら、笑顔で言った。
「なるほどね、日本では奇跡だよね」と笑った、日光を跳ね返して輝いていた。
『マチルダやリンダはNYでも目立つんでしょ？』と素朴な疑問を聞いてみた。
「全然、普通だよ・・私達レベルは、その辺にゴロゴロいるから」と輝きニヤで返された。

『必ず行くよ・・NY』とニヤニヤで返した。
「あんたなら、ノイローゼになるかもよ・・関わりが多くなり過ぎて」と楽しそうに笑った。

TVルームのには、マダムとシオン・ハルカ・レン・久美子とエミ・ミサが来ていた。
エミがプレゼントを貰っていて、ご機嫌だった。
『マダム、日曜の事聞きました?』と笑顔で聞いた。
「あぁ聞いたよ、もちろん良いよ・・ワシは暫くお前の言う事は全て聞くよ」とマダムが笑った。
私はユリさんが話したと思い、笑顔で返した。

「はい・・エミちゃん、はい・・ミサちゃん」とマチルダが封筒を手渡した。
「ありがとう」とエミが最高の笑顔で言った、「いいの?」とミサも笑顔になった。
「さすがに、ミサちゃんの時に帰って来るのは、無理だからね」とマチルダが微笑んだ。
2人が楽しそうに封筒を開けると、コロンと緑の石が出てきた。
「綺麗〜」とエミもミサも嬉しそうだった、私はその石の緑に引き込まれていた。
「エメラルドの原石よ、パワーがあるの体調を整えたりね」とマチルダも嬉しそうに笑った。

「マチルダ・・高価なんじゃないの?」とエミらしく、子供の発想を超えてきた。

「エミ・・ただの石よ、エメラルドもダイヤもルビーも全部。
その辺の川に転がってる石と何も変らない、価値は誰かが付けただけなのよ。

綺麗な色をして、硬いとか・・それだけの事なの。
美しいと思う事は良い事だけど、それに価値を考えたらいけないよ。
着飾って、キラキラに付けても、ただの石よ、そう考えると可笑しいでしょ。
石を身に付けて、輝くと思う事は・・もう少し大きくなったら、シオンちゃんに聞いて。
私はシオンちゃんに伝えたから、値段に踊らされたら駄目よ。
本当に自分が美しいと思えるのか、それを考えてね、価値ってそういう物よ。
高い値段だから、価値があるなんて、思わないでね・・忘れないでね」

マチルダは真剣にエミとミサの顔を見た、エミも強い視線でマチルダに頷いた。

「マチルダ・・どうして、石油は高いの？
ただ穴を掘って出てきただけなのにね、枯渇するのかな～。
鉱物資源が、どうして高いのかな～・・石油の頼るのをやめればいいのにね。
石油なんて、駄目な事の方が多いのに、空気を汚すだけなのに。
飛行機はしょうがないだろうけど、どうして車も石油で走らせるんだろうね。
私、すぐ喉が痛くなるから、嫌いなの。
たかだか、運動効率を上げれば良いだけなのにね。
ピストンじゃないといけないって事、ないのにね。
やっぱり・・変だよね～」

少女の輝きで笑った、マチルダはエミを見て、ポロポロと涙を流した。

エミ・ミサ以外の全員が固まった、その感性が心を掴んだ。
７０年代の話である、エミのこの発想は驚異だった、手塚アニメの世界の発想だった。
【たかだか、運動効率を上げれば良い】【ピストンじゃないといけない事はない】
考えもしなかった、私は車もバイクも大好きだったが、考えた事はなかった。
燃焼・・爆発でピストンを動かす事は知っていたが、それを疑問に思ったことなど無かった。

この時のマチルダの喜びは、凄いものだった、探していた何かを見つけたという感じだった。
マチルダはエミを抱きしめ、微かに震えて泣いていた、エミは驚いて抱かれていた。
「エミ・・絶対に忘れないでね・・今を、その感性を」とエミを見て輝きながら微笑んだ。
「私、また変な事を言ったのかと思ったよ・・すぐ変な事言うから」と照れて笑った。
マチルダが泣いていたので、私がエミに伝えた。

『エミ・・ちっとも変な事じゃないよ。
エジソンもライト兄弟も、最初は変人と言われてたんだよ。
誰にも理解されない事が、間違ってるって事じゃないよ。
多数の言う事が、絶対に正しい訳じゃないよ、戦争も起こったんだし。
戦争を止める事が、誰にも出来なかったんだよ、それは多数だと主張したから。
普通とか常識とか・・それが正しい訳じゃない。
もっと言えば、正しいか、間違いかなんて、判断基準がおかしいんだよ。

正しいと主張し続けた人達が、戦争をしたんだよ、正しいからしようって言って。
人を傷つける事が正しいなら、正しいという考えが間違ってるんだ。
人と違う発想や考えを持つのは、絶対に悪い事じゃないよ。
何か言われても、気にしないで良いんだよ。
その人達はまだ、到達してないだけなんだから。
エミは絶対に変じゃないよ・・人より早いだけなんだよ進むのが。
エミ、思ったように生きて・・それがＰＧの女性達の願いなんだよ』

エミに微笑んで言った、エミの輝く少女の笑顔が見ていた、強い視線で。
私はロッカーに行って、ドリーム・キャッチャーを取り出した。
『エミ、これがドリーム・キャッチャー・・プレゼント』と笑顔でエミに言った。
「ほんとに！・・手作りの、嬉しい～」とエミが嬉しそうに笑った。
『真ん中の石は、マチルダがくれた・・マチュピチュの石だよ』と微笑んだ。
「素敵～、天空の城か～・・素敵だね」とエミが私に微笑んだ。
「完敗だね・・エース、勉強しなさい」とマチルダが最強輝きニヤで言った、私はウルで頷いた。

これ以降、マチルダはエミに執着する、そしてエミはその都度マチルダを、泣かせるのだ。
その圧倒的発想で、マチルダが凍結する・・そして天才と呼ばれたリンダですら、驚愕する。
エミはシオンに習っていた、心に描くという技を、エミはよく見上げていた。
天井であったり、空であったり・・妄想していた、ニヤニヤの可愛

い顔で。
図書館が棲家のように、エミは徘徊していた、解らない事が解りたくて。
エミは天才ではない、勉強が好きなのだ、理解できた時の気持ち良さが好きなだけだった。

美冬が笑顔で来て、四季からとエミにプレゼントを渡した。
部厚い世界の遺産とうい本だった、それを見て、マチルダは本当に嬉しそうだった。
美冬とマチルダと、私がマリアを抱いて出かけた、光射す場所に。
「世界の遺産か～、やるね～未来の教師は」とマチルダが美冬に輝きニヤを出した。
「エミは成長が早いから、常に一歩先を考えないといけないから」と微笑んで返した。
「あの子の発想の根源は、何なんだろう？」とマチルダが真顔で聞いた。

「多分・・理不尽かな、人生って不公平だから。
マチルダはアメリカ人だから、あまり言いたくないけど。
エミは最近、医者を進路に決めるまで、どうしても開発したい物があったの。
エミの母親のサクラさんは、凄く聡明で素敵な人だから。
エミを5歳の時に長崎に連れて行ったの、原爆資料館に。
エミは衝撃を受けて、色々勉強したのよ、歴史も今の現状も。
そしてこう言ったのよ、あんな爆弾で威張ってるのは、絶対おかしいって。
自分が作るって、核兵器を無意味なものにするものをって。
あの真直ぐな瞳で強く言われて、私は震えたよ。
そして、この子なら出来るかもしれないって・・思ったよ」

美冬も美しい真顔でマチルダに言った、マチルダは嬉しそうに笑顔で頷いた。
美冬とマチルダが前に乗り、私がマリアを抱いて後部座席に乗った。
真夏の国道を、慎重に美冬が運転していた、マリアは猫に会えるのが嬉しいのか、ご機嫌だった。
玉砂利を進み、本道側の駐車場に停めて、美冬が降りた。
「みふゆちゃんじゃないか～、嬉しいね～」と和尚が笑顔で声をかけた、美冬も笑顔で頭を下げた。
私がマリアを抱いて降りて、マチルダが降りた、和尚の最高の笑顔が溢れた。
「この寺３００年の歴史で、初めて金髪の女神のおいでじゃ～」と笑顔で言った。
「突然来てすいません、マチルダと言います」と輝く笑顔で頭を下げた。
「なんか、対応全然違いますけど・・和尚様～」と美冬がニヤで和尚に言った。
「そんなことないよ～・・まぁ上がって美味しい草もちでも」と和尚が慌てて、笑顔で促した。
私はマリアと広大な庭を歩いて、子猫を探した、本堂の縁側で丸くなって眠っていた。
マリアの靴を脱がせて、縁側に上げた、マリアは嬉しそうに子猫を見ていた。

私は本堂の奥に猫ジャラシがあったので、マリアに渡した、マリアは天使全開で受け取った。
その時、子猫が起きて、私は少し奥までマリアを連れて行き遊ばせた。
和尚は豊満美女2人に囲まれて、この世の春を楽しんでいた。
私はマリアが一人でも大丈夫そうなので、ちゃぶ台に行き、美冬の隣に座った。

「和尚様は、宗教家らしくないですね」とマチルダが笑顔で言った。
「ワシは職業としてここにおるんだよ、悩みを聞く事はするが、道を説くことはないんじゃ」とシワシワ笑顔で返した。
「仏教は世界的に見ても、争いは少ないですよね」とマチルダが真顔で問いかけた。

「宗教自体、それで争いが発生する事は、おかしな事よの。
ワシは無宗教という選択も、大いに結構だと思っちょる。
困った時だけの神頼みたいな、そんな関係でも良いんじゃと。
但し先祖は敬えと檀家の衆には言っておる、繋がってきて今の自分がおるんじゃから。
もちろん、宗教を信じ真面目に取組むのも、素晴らしい事じゃよな。
そういう人達は純粋なんじゃよ、だから騙されもする。
宗教家とは、その人間が聖人とは限らんから、しかし信じてしまうんじゃな。
最近は金を集める宗教も増えたし、西洋の歴史は宗教の争いの歴史でもあるしの。
聖書１つを取っても、解釈が多数存在して当然じゃろうな。
じゃがそれで争いが無くならんのも、悲しい事じゃよな」

和尚も真顔で言った、マチルダも美冬も真顔で頷いた。
「争いが絶える事はないと、思われますか？」マチルダがいつに無く真剣だった。

「国の格差がこれだけ広がると、難しいじゃろうな。
やはり人は豊な生活に憧れるから、その日の食事にも事欠く人々もおるから。
日本は敗戦国なのに運が良かった、立地条件がアメリカの目に止まったから。

そして奇跡の経済成長の起爆剤は、やはり他国の戦争だったしの。
その勤勉な性質が花開いて、今も経済的成長を続けておる。
日本は元々豊な国なんじゃよ、水と環境に恵まれておるから。
厳しい環境の中で闘っている国の人々は、宗教に心の拠り所を求めても仕方が無いよの。
マチルダちゃんは、国はどこかな？」

和尚は話を、途中で切った感じで、マチルダを見た。
「国籍はアメリカです、父母は東ドイツです」と真顔で返した、和尚と美冬は優しい目で見ていた。

「ドイツ人は優秀過ぎるんじゃよな、発想も勤勉さも持っちょるし。
奴・・ヒトラーが出現しなかったら、今どんなに素晴らしい国だったのかと思うよ。
日本人も勤勉では負けんだろうが、発想を主張出来る環境が無い。
東ドイツの国民が、我慢できる限界もそう長くはないだろう。
今の西ドイツを感じれば、ドイツ人魂を抑える事など、ロシア人には無理やかい。
結局、独裁政治や強権的なやり方は、長続きしないんじゃよ。
世界は日々近くなっているよの～、そうなったら先にソ連という国が変化を迫られる。
冷戦なんていう時代も終わるじゃろう、そして最後に問われる。
アメリカはどうするのかと、アメリカの軍事産業は需要を求め続ける。
また作り出すのか、需要が無ければ、需要をまたどこかに作り出すのかと」

強い言葉で和尚は締めた、マチルダも美冬も真剣だった。
私はまた勉強不足を反省していた、アメリカに憧れだけを巡らせていた事を。

戦争の原因の裏に、金儲けがある事など、考えた事もなかった。
マリアの楽しそうな声だけが響いていた、その純真さに救われていた。

爽やかな風が流れ込み、涼しさを増していた。
美冬の凄さを改めて感じていた、リンダに声をかけた事。
そして何にでも興味を持ち、行動できる事。
そしてその豊富な知識に、関心させられていた。
裏付けがないと駄目だと感じた、何をするにも、何を主張するにも。
知識という裏付けが自分に無いと、意味を成さないと感じていた。

美冬は将来結婚をしても、教師を続ける。

素敵な教師だった、芯の強い、愛情の深い教師だった。

マリアが小学４年の時に、美冬が人事異動で、奇跡的にマリアの担任になる。

マリアがいつも話してくれた、美冬の事を、楽しそうに。

美冬と夫になったカズ君が、蘭を尋ねて来た事があった。

長女の名前に源氏名を使わせて頂きますと、２人で笑顔で頭を下げた。

蘭は本当に嬉しそうに、満開の笑顔で頷いて返していた。

長女が・・蘭、そして次女が・・詩音と命名された。

机上で勉強だけした人間には、決して辿り着けない教育者になる美

冬。

そして常に伝えていた、世界の現状を、自らが調べて。

「突然、教室の窓から、リンダやマチルダが笑顔で覗きそうでね」

と笑った美冬。

教壇にこだわり続けて、今もそこに立つ。

凛とした立姿で、美しく優しい瞳のままで・・・。

感謝の命名

大きな古寺の庭園より忍び込む、微かに秋を想わせる風。
真夏の日中でも涼しさを感じる、薄暗い本堂で遊ぶ天使。
世捨て人と自らが名乗る老人、その言葉を聞く真剣な眼差しを見ていた。

マチルダは考えていた、美しい横顔が何かを示しているようだった。
美冬も思いを巡らせていた、自らの知識をフル稼働させている強い瞳だった。

「難しく考えんでも良いんじゃよ、所詮世捨て人の老人の戯言じゃから。
そこの小僧は面白いよの～、ワシが最初に会ったのは。
確か小僧が3歳位の時やった、その時から恐ろしい程の、好奇心を持っておった。
自分でここまで来れるようになると、よう遊びに来るようになって。
何か分らん事があるとワシに聞きよった、不思議に思ってある日聞いてみた。
なぜワシに聞きに来るのかと、小学2年の小僧に。
そしたら言いよったわい、人と違う事を平気で言える変な老人やからって。
ワシは嬉しくての、間違えちょっても良いんかいって聞き返した。
そしたら追い討ちかけてきよった、算数の問題聞いてる訳じゃないから良いよとな。
小僧は本質的に理解しちょったな、今日見て、また変化に驚いたぞ。
今の基本的な考え方を言ってみろ」

和尚が笑顔で私に話を振った、マチルダも美冬も私を笑顔で見た。
『最近・・まぁ和尚はよく知ってるけど、俺は運命を受入れない人間なんだよ。
それでも最近の出会いや、人との関わりの中で繋がってきた。
それで自分はどうしようかと考えたんだ、今後は運命を受入れてみようかと。
でも性格が曲がってるから、素直には出来なかった。
それで考え出した、人生には原作者が存在すると。
その原作者は、何年後なんて書いていないと。
俺の経験と生き方とかを見ながら、直後を書いていると。
俺は原作者に宣戦布告をしたんだよ、あんたの想像を超えて見せると。
それが原作者の、唯一の望みだろうと思ったんだよ。
そして最近は常に心で原作者に語りかける事で、落ち着けるようになったよ』

笑顔の3人を見ながら、笑顔で話した。
「素敵じゃない・・原作者か～」と美冬が微笑み。
「うん、素敵だね・・リンダも絶対喜ぶ話だよ」とマチルダも微笑んだ。

「本当に素晴らしい教師達がついちょるの～。
じゃがの～、なぜかまだ連れて来んの～。
小僧の側に常に付き添う、最強の教師の顔が見たいんじゃがの～」
和尚が虚空を見つめて、優しく言った。
「ゆりか・・おしょう、ゆりか」とマリアが大声で言った、その時強い波動が来た。

「おお、そうかマリア、ユリカと言う人なのか」と和尚が笑顔でマリアに言った、マリアは天使全開で頷いた。
「本当に素敵な人です、聡明で知的で・・世界を見ても滅多にいない存在です」とマチルダが嬉しそうに微笑んで、美冬も笑顔で頷いた。
「そうじゃろうな、伝わる気の存在が全く違うわい・・ワシも初めて感じたよ」と和尚が嬉しそうに笑った。
『連れてこんって、和尚に用があるようなタイプじゃないよ』と私も笑顔で返した。
「ワシが用があるんじゃよ、今度会わせてくれよ」と和尚が真顔で言った。
『それは良いけど、ユリカも嫌じゃないだろうから』と笑顔で返した、暖かい波動が来た。
「今のがＯＫの返事で良いんじゃろうかの～、ユリカさん」と和尚は私に微笑んだ。
私はハッとして和尚の目を見ていた、強い波動が来て、和尚が笑った。

その時、檀家であろう６人の老人が、縁側から本堂に入って来た。
６人ともマリアを見て笑顔になり、天使全開のマリアを、代わる代わる笑顔で抱いていた。
「和尚様、今日はありがとうございました」とマチルダが微笑んで頭を下げた。
「ワシも嬉しかったよ、また会えるのを楽しみにしちょるかい」と笑顔で返した。
美冬と私も和尚に礼を言った。
『和尚、今度の日曜日の午後、暇ならＰＧに招待するよ、マチルダの送別会』と笑顔で言った。
「おお、良いの～、参加させてもらうよ」と嬉しそうな笑顔で返してきた、私も頷いてマリアを迎えに行った。

マリアを抱き上げると、老人達に天使全開で手を振った、老人達も笑顔で手を振っていた。

「次は・・どこに行きましょう？」と美冬が運転席で微笑んだ。
『海が見たい・・俺３日も海を見ないと、死にそうになるの』とウルで言った。
「良いね～、賛成」とマチルダも乗ってきた、美冬も笑顔で頷いた。
車が走り出すと、すぐにマリアは眠ってしまった、楽しそうな笑顔で。
「でも、和尚様素敵だよね～、お客で来ても可愛いし」と美冬が微笑んだ。
「確かに素敵だよ、宗教家としての、１つの理想の姿なのかもしれないね」とマチルダも笑顔で返した。

真夏の光を浴びて、可愛い軽自動車が海へとひた走っていた。
防潮林である松林の樹海を見ながら、細い道を抜けると一つ葉の浜が見えてきた。
現在では人工ビーチと、マリーナになった辺りである。
右手に数組のサーファーがいて、左手にアベックらしき車が止まっていた。
マリアが起きたので、抱き上げて砂浜を波打ち際まで歩いた。
美冬とマチルダは、その場で海を見ながら、笑顔で話をしていた。
私はマリアがウルをするので、コンバースを脱いで裸足になった。
マリアを波が届くギリギリで、両手を持って立たせて、足だけ海を感じさせて天使の笑顔を見ていた。

かなり遊んでから、マリアを抱き上げた、天使全開で頬にキスしてくれた。
帰ろうと振返ると、美冬とマチルダに、サーファーの男２人が話しかけていた。

笑顔で話していたので、安心してコンバースを拾い、砂浜を歩いて戻った。
男達は仲間の元に帰って行った、2人がニヤで私を見ていた。
『美冬・マチルダをナンパするとは、勇気があるね～』とニヤで言った。
「そう思って話してみたら、中身が無くって・・あんたを見て慌てて逃げたよ」と美冬が笑った。
「怖い男だね～、どうして中学生をあんなに恐れるのかが、怖いよ」とマチルダも笑った。
『きっと、子持ちと思われたのさ・・どっちかが』とニヤニヤで返した。

「またあんなひどい事言ってますよ、美冬母さん」とマチルダが輝き最強ニヤを出した。
「本当に、胸の張りがお乳が出そうなのね、マチルダママ」とニヤニヤで返した。
私はコンクリートで足の砂を叩きながら、笑顔でその譲り合いを見ていた。
車に乗り込み、案の定マリアは即寝した、前の2人は楽しそうに、若い女性らしい話をしていた。
私はマチルダの笑顔とその話の内容に、なぜか少し安心していた。
マチルダの、普通の20歳の女性としての一面が見れたので、嬉しかったのだ。

「エース、お願い・・今からマチルダ借りて良い？」と突然美冬が言った。
『別に俺の許可は、不必要だと思うけど』と笑顔で返した。
「それは必要だよ、今夜マチルダ、フロアーに出るんだから」と美冬が前を見て言って、マチルダが振向いて微笑んだ。
『じゃあ、準備に間に合うように』と笑顔で返した。

「ありがとう、四季とユメ・ウミで食事しようと思ってね」と美冬が前を見て微笑んだ。
「素敵～、楽しみ～」とマチルダが輝きながら美冬を見た。
『美冬、マチルダ意外と、オジサン臭い食べ物が好きだから』とマチルダにニヤをした。
「そうなの～、・・私もだけど」と美冬が笑った。
『それと、食べる量はカスミレベルだから』と笑顔で言った。
「それは凄いよね～、マチルダもカスミも、それでスタイル維持出来るのが」と美冬が関心した。
「私、さっき痛い所突かれて、お腹少しやばいかも」とマチルダがウルで言った。
『腹筋しなさい、寝る前に１０回するだけでも違うよ』とニヤで返した、マチルダが笑顔で頷いた。

橘通りで私がマリアを抱いて降りて、２人に手を振って見送った。
ＴＶルームにはマダムとユリさんにウミが来ていて、エミとミサと遊んでいた。
マリアがパッと目を覚まして、ウミに駆け寄り遊びに加わった。
「ユリさん、疲れたんじゃないですか？」とユリさんの額に、影を感じて言った。
「少し張り切っちゃって、歳かしら」と薔薇で微笑んだ。
『ミチルが泣きますよ、ユリさんが誇りだと言ったんですから』と笑顔で返した。
「私も充電してもらおうかしら」と薔薇で微笑んだ、私は笑顔で頷いてマリアを見てユリさんを誘った。

裏階段に出て、ユリさんを抱き上げた、薔薇で微笑んでいた。
直射日光が当たらない時間になっていて、最上階まで登った。
ユリさんは目を閉じて静かに抱かれていた、美しい成熟した女の顔だった。

最上階に着くと、乾いた南風が気持ち良く、最高の気分で景色を楽しんだ。
ユリさんに直射日光が当たらないように注意して、階段に座って少し引き寄せた。
《静かだ、他の誰よりも圧倒的に静かだな～》と思って美しい寝顔を見ていた、暖かい波動が帰ってきた。
ユリさんは疲れていたのだろう、３０分ほど寝ていて、ハッとして目を開けた。

「ごめんなさい、あまりに気持ち良くて、本気で寝てました」と薔薇で少し照れた。
『３０分ですよ、疲れためたら駄目ですよ』と笑顔で返した。
「今日は朝から、最高に嬉しい事が有ったから、準備に制御がかからなくなって」と薔薇で微笑んだ。

『ユリさん、その事はもう心の中にしまって下さい。
俺はその何倍もの物を、ユリさんとマリアから受け取ってますから。
そして俺も嬉しかった、最も大切な試験に合格した気分でした』

ユリさんの間近の顔に圧倒されながら、薔薇の瞳を見て言った。
「ありがとう、そうしますね・・今日の和尚様はどうでしたか？」と薔薇で微笑んだ。
『マチルダにも美冬にも、充分意味が有る話をしてましたよ・・生臭のままで』と笑顔で返した。
「そうでしょうね、マチルダにとっては、宗教家という感覚すら変える存在でしょうから」と笑顔で返された。
『ユリカに会いたいので、会わせろと言われましたよ』と真顔で言った。

「いよいよですね・・私が子猫で訪ねた時も聞かれました。
何かを感じているみたいですね、絶対にユリカにとって、プラスになる事でしょう。
ユリカはもちろん、あなたに言った言葉なら聞いてますから、楽しみにしてますよ。
どこまで登るのでしょう、あのユリカという存在は、頂上が無い気がしますよ」

私を見ながら薔薇で微笑んだ、強い波動にユリカの喜びを感じていた。
『ユリさんでも、ユリカの頂上をイメージ出来ませんか？』と微笑んで返した。
「今日、見た瞬間に衝撃を受けました、変化の凄さに・・私の期待を遥かに裏切ってくれます」と最高の薔薇で微笑んで。
「頂上など存在しない、天に続く階段を登っているような感じですね、ユリカは」と嬉しそうに言って、立ち上がった。
私も笑顔で立ち上がり、ＴＶルームに戻ると、ウミが出る所だった。
『今夜、夕食会であまり飲むなよ』とニヤでウミに言った。
「仕事前にそんなに飲まないよ、それに最高の楽しみが、仕事終わりに待ってるし」と笑顔で返したウミと、手を振って別れた。

ＴＶルームに入ると、ハルカ・レン・シオンも戻って、カスミも来ていた。
『ハルカ、何時に行くの？』と笑顔で聞いた。
「今夜と明日だけ、裏方とサービスだから・・７時４０分には入ろうね」と笑顔で返してきた。
『了解、土曜からフロアー出るのか～』とニヤで言った。
「やめてよ、緊張するでしょ・・魅宴のフロアーなのよ」と真顔で焦っていた。
『会話の内容は同じだよ、ただ魅宴のお客の嗜好が、そう思わせる

だけ』と笑顔で言った。
「教官お願いします・・アドバイスを」と笑顔で頭を下げた。
『うむ、しかたあるまい・・。
俺もリョウが心配で、初日に適応できるか見に行ったんだけど。
ピーチが若い子ばかりの、ＰＧみたいな感じって聞いてたから。
でもすぐに順応してたよ、会話の内容は、ほぼ同じなんだよ。
ただ、多分硬い話しが好きな客が、多いんだろうね。
そして圧倒的に違うこと、客同士の会話が多いんだよ。
多分接待が多いんだろうね、だから女性も聞いていない振りさえする。
そして受けてから投げるんだよ、会話のキャッボールかな。
相手の全てのモーションを見て、受けれるけど、自分も見られる。
最終的に自分が構えた所に狂い無く、ボールを投げ返されると気持ち良いんだね。
ＰＧに求められるのは、相手の打つ球を予測して、素早く打ち返す卓球のラリー。
変化を付けたり、ギリギリに打ったり、いきなり手前に落としてみたり。
その変化の大きさと、スピード感が速いほど相手も楽しいよね。
だから同じだよ内容は、でもハルカが感じるほど勉強になるよ。
ハルカ、ミコトだよＮｏ１ミコトを見ろ、ＰＧに居ないタイプだから。
ミコトの魅力、それは余裕なんだよ、どこか安心できる余裕。
ミコトって漢字で、命って書くらしい、魅宴の命。
その意味が分ってくる、その本質に驚愕する、大ママは今でもユリさんが欲しいんだ。
ユリカのユリを貰った事も、ミコトに込めた想いも感じてしまう。
俺は大変な者をプレゼントしたのかも知れない、リョウはミコトを吸収する。

リョウは吸収力が抜群に強い、そして自分を変化させ続ける、それを楽しんでしまう。
そして心が折れない、俺はそれだけは確信している、ここまでの経験があるから。
リョウは今後どんな事があっても、絶対にその心は折れない。
そして言い訳をしない、リョウは完全にカスミと肩を並べる存在になったよ。
９人衆が本気ならば、ユリさんから目を逸らしてる時間は無いよ。
遠すぎるから、蘭からとか言ってる暇は無くなった。
ユリさん・アイさん・サクラさん・蘭とナギサ、全てから吸収しないと。
必死に研究しないと、リョウの背中が見えなくなるよ。
俺はリョウの初日の、ミコトを見る視線に驚いた。
魔性の女を隠す事無く、吸収する視線に。
笑顔で接客しながら、ミコトが動いた瞬間、片方の瞳だけ素早く動く。
ミコトも気付いて、それを喜んで楽しんでいる。
そして明日デビューしてくる、その熱い状況のフロアーにミサキが。
ＰＧまでリアルに見たミサキが、何を吸収するのか想像も出来ないよ。
現状はこんな状況、俺の個人的な感想だけどね』

最後はハルカに微笑んで、カスミを見た。
「了解、次のテーマの提示なんだな」とハルカが言葉が出ないので、カスミが私に不敵で答えた。
『楽しくて、涙が出そうだろ』とニヤで返した。
「楽しいよ、本気で最近楽しくて、寝る時間が惜しい位だよ」とカスミも輝いて笑った。
「ごめんなさい、ありがとう・・少し考えてしまって、私も楽しい」

とハルカが微笑んだ。

「確かにミコトは大ママが授けた名前です、４年前２２歳のミコトに命名しました。

その日に、ここに連れて来ましたよ、マダムも私もその雰囲気に驚きました。

私も大ママに少し嫉妬を覚えました、魅宴はその当時、絶対的ＮＯ１のユリカ。

そして１９だけど、その素質を誰もが羨むナギサが居ましたから。

うちには当然、リアンが居ましたけど、リアンの下が中々いなくて。

マダムも私も焦っていました、その時ですリアンが連れて来ました。

蘭を・・嬉しかった～、ミコトとナギサの分を埋めて余りある、その素質に触れて。

今のＰＧには、その蘭とナギサが居るのですよ、大丈夫ですよ。

あなたが贈ったリョウは、本当に素晴らしい素材です。

でも９人衆も負けないでしょう、絶対に心が折れない覚悟があると、私は信じます」

最後はカスミとレンとハルカを見て、薔薇で微笑んだ。

「もちろんです、覚悟は出来ています」とカスミが笑顔で返して。

「私もです」とハルカとレンが続いた。

「まぁＰＧには、エースがおるから、心が折れる前に気付いて手を出すしな」とマダムが笑顔で言った。

「そうですね～、それではその次の段階はどんな事でしょう？」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

『もう、大御所２人で答えまで教えて・・次は当然出しますよ。

本当の本気で集中した、蘭を・・９人衆にブルブル震えてもらい

ます。
そして間髪入れずに出しますよ、最終で最強の・・シオンを。
あのリョウですら、一目で勝つ自信が無いと言った、シオンを。
俺は、シオンだけは誰からも吸収しなくて良いと、言っています。
そしてシオンの中に残るのは、シオンが本当に好きな物だけです。
それで絶対に上手くいく、シオンは今までなどでは、比較出来ない存在だから』

最後はニコちゃんを見ながら、笑顔で言った、ニコちゃんシオンが嬉しそうに頷いた。
「今頃こんな質問しますけど、エースって誰かが命名したんですか？」とレンが言った。
「大ママだよ、こやつは大ママから通り名、五天女から称号を勝ち取ったんじゃ」とマダムが笑顔で言った。
「そうなんですか！私かなり大変な名前を貰ってる」とレンが微笑んだ。
「私が源氏名1号です」とハルカが笑顔で威張った。
「ほらね、あん時称号おねだりしといて良かったよ、こんな時が来るから」とカスミが不敵を出した。
全員で笑っていた、私は少しづつ理解してきた、この世界の商売という物を。
《ユリカ、後で魅宴の帰りに抱っこに寄るからね》と囁いた、暖かい波動で返された。

私はこの時点で、蘭と旅に出る覚悟をしていた。
それを5年後～7年後と思っていた、高校卒業すぐか成人した約束のプロポーズまでにだと。
だからリアルに近くで見れるのは、カスミがトップを取るまでが、限界だろうと思っていた。
結局その事は蘭とユリカにしか話さなかった、カスミにすら話さな

かったのだ。
だからＢＥＳＴを尽くそうとしていた、それから5年、あのリンダが地下に潜る事になるまで。
いつか離れる日が来ると感じながら、全力でカスミとレンとハルカを愛していた。
失う怖さを抱えて、必死で愛し続けた、納得して引退して欲しくて。
レンから4年後、久美子がアメリカに渡り安定した時に、相談される。
ユリさんと私は、レンに独立したいと相談される、スナックがやってみたいと。
前向きな挑戦にユリさんも賛成した、私も大賛成でユリカに相談した。
そしてユリカが自分が預かって、経営の勉強をさせると言ってくれたのだ。
レンはそれからユリカの元で必死に働き、1年が経過した時にユリカがレンに全てを譲るのだ。
辞める理由を言わずに、泣きじゃくるレンを励まして、ユリカは去ってしまう。
私がユリカの店の店名を、仮名すら使わなかったのは、思い入れが強すぎて出来なかった。

レンはユリカから受け継いで、本当に必死に店を守り抜いた、そして受け継いで5年後。

店の改名をする、新店名は・・【ユリカの棲家】だった。

レンの深い想いに皆感動して、泣いた・・リアンがその当時女帝だったリアンが。

エレベーターを出て、その看板を見た時点で蹲り泣いて、動けなくなった。

私がリアンを抱き上げて、ＢＯＸの一つだけ色の異なる位置に、リアンを座らせた。

そして私が隣に座った、その時にリアンが気付いた。

ユリカの場所なのか！私が頷くと、リアンは再び号泣していた。

私がユリカと毎日過ごした、ユリカの位置の部分だけ切り抜いた。

そして新しいソファーにも、それを張り替えていたのだ。

「約束は守ったよ、久美子の背中を押して、自分の幸せを追いかけたよ」と笑ったレン。

最高の愛情表現を見せてくれて、ありがとう、幸せだったよ。

レンとの出会いも、俺がユリカのビルを、見上げていた時だったね。

今でもあるよ、あの夜空だけは・・２人で見上げた夜空だけが・・。

青い挑戦状

8月も終わりが近づく晩夏の、午後5時をが過ぎていた。
若い挑戦者達は気持ちを高め始める、プロとしての自覚を持って。
積み上げてきた経験を武器に、更なる高みに登る為に。

「おはよ～、はい、エミちゃん」と蘭が、ご機嫌状態で入って来た。
「ありがとう、蘭ちゃん」とエミが嬉しそうに受け取った。
「ご機嫌ですね～、良い事あったのかな～・・良い男と知り合ったとか」とカスミが不敵を出した。
私はウルウルで振り向いて蘭を見た、蘭は満開で私を見た。
「うん、良い事あった・・毎日あるけど、私には」と蘭がカスミに満開ニヤで返した。
蘭が私の横に密着で座ってきた。
「私にも・・ある、少しなら」とカスミが自嘲的微笑んだ。
『カスミ、新しい技試した、自虐的微笑』と私がカスミに突っ込んだ。
「自嘲的なんだけど・・自虐じゃない」と笑顔で睨んだ。
「良い感じだよ、使えるしね～、ニューカスミには」と蘭も満開で微笑んだ。
「カスミ姉さん、鏡に囲まれた生活してます？」とレンが真顔で聞いた。

「もちろん、表情の研究には必要だよ」とカスミが輝きニヤを出した。
「自嘲笑いは、期間はどの位でしたか？」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「毎日徹底的にやって、5日目です」とかすみも微笑んで返した。
『カスミの、徹底的ってのは凄いよな～』と私も笑顔で言った。

「どの位のイメージで見てるの、エース？」とハルカが真顔で突っ込んだ。
『分りたければ、カスミのあの腹筋が出るまで、頑張ったら分るよ』と笑顔で返した。
「凄い道のりだとは、分る気がする」とハルカも微笑んだ。
『そして、もっと凄いのは、維持だよ』とニヤで返した。

「そうですよ、最も難しいのは、継続することです・・継続に対する銀河の奇跡なんでしょう」と薔薇で微笑んだ。

『そうですね～、マチルダとも話したんですけど。
日本人の多くは普通を愛していますから、子供の個性を奪ってしまいますよね。
個性を貫くには、子供であろうと、かなりの覚悟が要りますよね。
特に人より目立つとか、変ってるとかが好きだと、難しいですよね。
それを貫くと、沢山の物を失ったりするし。
辛い事が多くて、結局、性格に問題を抱えたりしがちです。
貫いた先に輝きがある、滅多に出会えない存在ですよね。
それが同じ時期に同学年で３人、同じ仕事を選んだ。
そして３人が全て一瞬で相手を受入れた、驚きました。
リョウが面接先を、教えないで連れて行ったら、魅宴の前で躊躇したんです。
その顔を見て、背中を押す為に、銀河の奇跡を贈りました。
称号などまだ早いと、言われると思ったけど、大ママは即了承してくれました。
私の想いは、たとえトップになっても、継続してほしいんです。
その強い意志で、貫いて欲しい、その先の輝きが見たいんだよ』
最後はカスミに微笑んだ、最高に輝く笑顔で返してくれた。

蘭が腕を組んで、私を見ながら満開で微笑み続けている、私も蘭に微笑んだ。
「私がトップを取ったら、エースの作品だと公言させろよ・・そしたら自分の違う幸せを追えるから」と最高の輝きの真顔で言った。
『俺もその時に、もう一度その台詞が貰える、人間になれるように頑張るよ』と真顔で返した、発光する瞳を見ながら。
「蘭、どうしましょう・・この楽しさは？」とユリさんが微笑んだ。
「ユリさん、私・・決めました、ユリさんに再挑戦します・・ユリさんが存在する時のＮｏ１に、よろしくお願いします」と姿勢を正して、満開で微笑んで頭を下げた。
完全なる静寂が支配した、ユリさんの最高の薔薇の笑顔が咲いていた。

「かかってきなさい、蘭・・全力で、最高の副職として」と薔薇で微笑んだ、蘭も最高の満開で頷いた。
「ゾクゾクする・・体中が」とカスミが笑った。
『カスミ、蘭を追うなら・・ユリさんに挑むって事になったね』とニヤで言った。
「この事だったんだ、さっきの話は」とハルカが驚いて私を見た。
「ハルカ、この男だけは甘く見ない方がいいよ、その考えは遥か先を見てる」と蘭がハルカに満開で微笑んだ。
「はい、分ってたけど、想像を完全に超えてくる」とハルカも微笑んだ。
「それでか、私にリアンさんとユリカさんの、店の女性とも仲良くなれて、良かったねって言ったのか」とレンが私を見た。
『レン、頑張っとけよ・・必ず探し出してくる、レンの同学年の最強を』とニヤで言った。

「マダム、どうしましょう・・私までゾクゾクしてます」とユリさんがマダムに言った。

「ユリ、構わんよ・・全力のユリを出して、見せてやりな」とマダムが笑った。
「許可頂きました、少し時間がかかりますが、お見せしますね」と不敵薔薇で微笑んだ。
「お願いします、１９歳の蘭じゃないので、それが望みです」と満開で微笑んで返した。
『よし、シオンも、もう少しだから頑張ろうね』とシオンに微笑んだ。
「はい、シオンも頑張ります・・エース、セリカちゃん１９歳です」とニコちゃんで言った。
「ゴールド・ラッシュのセリカ」と蘭がシオンを見た、シオンがニコちゃんで頷いた。
「銀河の奇跡も大変だね～、シオンとセリカに、なんて称号付けるのか楽しみだね～」と満開ニヤをカスミに出した。
「の、望むところよ」とシオンに不敵を出した。
「ニコちゃん、ビーム」とニコちゃん返しを発動した、全員に笑顔が戻った。

私の計算はここまでは、１００点で思惑通りだった。
本気の蘭は絶対にユリさんを狙う、そして本気のユリさんが見れると思っていた。
だが、私の遥か上にいた、蘭の本気もユリさんの本気も、凄まじかった。
しかしそれで覚醒する、ナギサが完全復活の本気になる、一歩も譲らぬ姿を見せる。
その姿には確実に、ユリカとミコトが存在していた、華やかを輝きながら撒き散らす。
その華やかさに、爽やかな知性と、何事にも動じない余裕まで纏っていた。

「エース、ワシからお前に1つ絶対的権限をやる、お前が休息が必要と感じた者には、強制休養をさせる事・・もちろんユリも含めてじゃぞ」とマダムが微笑んだ。
『分りました、敏感度、もう1つ上げときます』と微笑んで返した。
「危なかったわ、さっきのユリカスペシャルが無かったら、私が1号でした」と薔薇で微笑んだ。
「準備大変だったんでしょう、すいません」と蘭が真顔で言った。
「いぇ、違うのよ、あれで嬉しくて、制御がかからなくてね」と薔薇で照れた。
「私もあれで、楽しくて」と満開で返した、私は蘭を見ながら微笑んだ。
「皆さんごめんね、時効になったらお話しますね」と楽しそうに薔薇で微笑んだ。
「かなり楽しい話ですね～、時効って所が怖いけど、楽しみが又増えました」とカスミが輝きながら微笑んだ。
ハルカもレンもシオンも、笑顔で頷いていた。

「ハルカ、明日5時までに3人の仕事仕上げて、マチルダと夕食に行きましょう」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「はい、分りました、嬉しいです」と微笑んで返した。
「蘭もカスミちゃんも大丈夫？」とユリさんが聞いた。
「もちろん、ありがとうございます」と蘭が満開で微笑んで、カスミも笑顔で頷いた。
「蘭、ナギサも誘っておいてね」と薔薇で微笑んだ。
「分りました、ユリさん私達からも、たまにはお金取って貰わないと、こっちからユリさん誘い難くなりますから、明日は取って下さい」と蘭が真顔で言った。
「そうなんですね、ありがとう分りました、明日は取らせて貰いますね」と薔薇で微笑んだ。

「シオン、リアンに聞いてみて下さい明日の夕食」とシオンに薔薇で微笑んだ。
「はい、分りました、絶対来ますけど」とニコちゃんで答えた。
「ユリカは当然、エースよろしく」と私を見た。
『了解です、全員覚悟するように、ニューユリカに驚くなよ』とニヤで返した、強い波動が返ってきた。
「そんなに凄いの！」と蘭が私を見た、ニヤニヤで頷いた。
「私でもユリカの可能性が見えなくなりました、ユリカには限界とか、完成なんていう言葉は無いですね」と嬉しそうに薔薇で微笑んだ。
「結局・・誰にも満足させない、そういう世界を作ってるな」とカスミが私に不敵を出した。
『満足・・そんな物がこの世に存在するの、満足って金で買える物だよ』とニヤで返した。
「うし、絶対いつか、カスミ様参りましたと、土下座させてやる」と最強不敵で言った。
蘭が満開笑顔で手を上げた、そしてユリさん・レン・ハルカ・シオンと笑顔で手を上げた。
私はウルウルで笑っていた。

「夕食も来ましたから、最後に質問を・・エース、なぜローズの時、自分でドスを抜いて相手に渡す所まで、自分で突っ込んだのかしら？」と薔薇の真顔で聞いた。

『あの時は、会議で考えていたんですけど、纏まってなくて。
でもローズがそういう状況だと分って、マダムの言葉を思い出して。
夜景を見たんです、そして豊兄さんを考えていた。
そしたら、又気付いた、豊兄さんと2人で行く時に、考える時間なんて無かったと。

それで突っ込んだんです、そして先に海竜を好きになりました。
だから終わった時に、わだかまりを残したく無かったんです。
海竜がドスを出した時に鞘を抜かなかった、それは優しさなんです。
これで引いてくれよ、頼むから、俺は本当はこんな事したくないって言ったんです。
その鞘を抜かない事で、だから俺は愛情表現として鞘を抜いて渡した。
それは、もう良いんじゃないか、自分らしく生きてもと伝えたつもりです。
男同士って、そこまで行かないと分らないんです、馬鹿で言葉足らずだから。
そしてやっと考えが纏まった。
海竜に綺麗にリアンを諦めさせ、海竜にもプラスになる方法。
まぁ、あの望月って人が、大きい人間だから成立つ方法だけど。
全てが上手く行くには、あそこまでやらないと無理なんです。
そうでないと、海竜の中で俺は、ただの望月さんの知り合いで終わるから。
俺は豊の子分とか言われて、嫌な思いも沢山したから。
海竜の気持ちは分る気がした、あの望月の子分ならなおさらだと。
だから海竜に見せた、あんたに本気だって。
ただ、それだけの理由です・・バカな話しですよ』

照れながら立って、食事の席を空けた。
「先生ありがとう、そこまでしてくれて、シオン聞いたけど分らなかった」と目を潤ませてシオンが言った。
『シオン、良いんだよもう終わった事だから、リアンが大切でしたんだから』とシオンに微笑んだ。
「私の中では、あんたはもう豊と同等だよ」と蘭が満開で微笑んだ、私も笑顔で返した。

「9人衆に感じて欲しかったのは。
どうすればあれほどの、交友関係を構築出来るのか。
それを感じて欲しかった。
初対面の相手の事を、極限の状況でもあそこまでいける。
望月さんが言ってましたよ、海竜は小僧の為なら、躊躇無くまた務所に戻るって。
そこまで行った意味は、伝わってましたね。
私もあなたを、豊君と同等と認めます」

ユリさんは最後に薔薇で微笑んだ、私も笑顔で頷いた。
『ありがとうございます、嬉しいけど・・自分の中では遥かに遠いです、さぁ食事して下さい』と笑顔で促した、久美子が座って。
皆で食べ始めた、蘭が楽しい話題を振って、カスミが返す黄金パターンから笑顔が出た。

私はエミが見てる世界の遺産を隣に座って覗いていた。
「マチュピチュ見る？」とエミが可愛く微笑んだ。
『お願いします、エミ様』とウルでエミを見た、エミは楽しそうにページを捲った。
「はい」と少女の輝きで渡された、私は受け取ってエミも見える高さで見た。

私は魅入られていた、その圧倒的存在に、小さく南米の地図に場所が記してあった。
その時突然、あのマチルダの地球が浮かんで来た、そして南米が拡大されていき。
正確な場所に、記され、画像にマチュピチュと名称まで入った。
私は2重の感動に、泣きそうだった。
『エミ、素敵な所だね、ここの石なんだね・・絶対力があるよ』と

真横のエミに微笑んだ。
「絶対あるよ、マチルダがくれたマチュピチュの石を、チャッピーが織り込んでくれたから」と最高の少女の笑顔で返された。
『うん、エミをずっとイメージして織り込んだよ』と笑顔で返した。
「じゃあ、もう1つプレゼントして、ユリカスペシャル」と少し照れて言った。
私はエミをお姫様抱っこした、全員の視線を感じて、エミが笑顔で手を振った。
全員が笑顔で手を振った。

私は裏階段を、頂上までゆっくりと登った。
エミは綺麗な姿勢で手をお腹の上で組んで、目を閉じていた。
頂上で景色を眺めていた、エミは眠ったようだった、子供とは思えぬ静けさだった。
南風が優しく吹いていた、可愛い宝物の頬にも。
そのままTVルームに戻り、ベッドに寝かせた、3人娘全員が眠った。

女性が準備に向かい、私は一人で食事をした、ハルカが迎えに来てTVルームを出た。
通りに出て、ハルカに手を出した、笑顔で腕を組んで来た。
『さすがハルカ、緊張してないね』と微笑んだ。
「してるよ、凄いの見てきたから、元気出た」とニヤで返してきた。
『凄いの・・・マチルダ・ドレス!』と言ってハルカを見た。
「うん、カスミ姉さんの、対抗心が凄いし」と楽しそうに言った。
『楽しみだな〜』とニヤニヤしていた。
魅宴の裏階段を登り、ハルカが先に裏ドアから入って、事務所を覗いて。
フロアーに向かった、私はただ付いて歩いていた。
フロアーにミサキを見つけて、ハルカが向かった、私は裏の定位置

で見ていた。

「マチルダ、元気か？」と後からリョウの声がした。

『今日ＰＧの、フロアーを経験するよ、リョウ』と言って振返って驚いた、魔性の女が強くなっていた。

「リョウぽいだろ」と涼しげニヤで言った。

『うん、魔性の女完全復活だね』と笑顔で返した。

「そうなんだよ、当面はこれでね」と近づいて、耳元に顔を付けた。

「私じゃないと、涼は人見知りなんだよ」と小さく囁いた。

『良いんじゃないの、俺はどっちも好きだよ』とリョウの耳元に囁いて返した。

「おしいな～、俺はお前が好きなんだけど、涼は大人しい男が好きなんだ」と囁き返してきた。

『俺、すっごい大人しいのに』とウルウルで囁いた。

「なるほど～、それが噂の、エースの魔法のかけかたなのね」とミコトが後で笑顔で言った。

「もう、ミコト姉さんの意地悪、今口説いてたのに～」とリョウが明るい声で言った。

「リョウ、エースを口説いて魅宴に引っ張ったら、金一封出すよ」と大ママが現れた。

「ラッキー、それ私が頂いちゃいます」とミコトが微笑んだ。

「いや、それだけは譲れませんね、たとえミコト姉さんでも」とリョウが不敵を出した。

「面白い、リョウ全力でおいで、圧倒的な違いを教えてあげるから」とミコトが余裕で笑った。

「よろしくお願いします」とリョウも美しく微笑んで、頭を下げた。

「エースが来るだけで、これかい・・ＰＧがああなる訳やね～、行くよ」と大ママが笑顔で促した。

《魅宴の命か～、確かに泣かすのは難しいね、ユリカ》と囁いた、

波動が【がんばれ】と感じた。
私はあの地球の映像の、感動を思い出していた、マチルダに感謝していた。
リアルにイメージできるなんて、そんなレベルじゃなかった。
私は原作者の視点を手に入れた、そんな気分だった。
そしてＰＧのフロアーは、第３の伝説の開演を間近に感じていた。
青い炎が燃え上がろうとしていた、親友に火を点けようとしていた。
そして私は興味を持ってしまう、セリカに心が動いてしまう。
蘭の驚きをとカスミに言った、銀河の奇跡も大変という言葉で。
セリカは初対面の時、年上のグロリアが居たので、一言も話してない。
だが顔はなぜか覚えていた、可愛い少女の強い顔だった。
しかし瞳のイメージが無かった、光を消していたのだ。
２度目に感じたときに、驚愕する、最新型だと思ってしまう。
その光は・・流星の速さで流れる、長い尾を引いて心に残る。
そして心のエンジンが、最新型ＤＯＨＣなのだ。
生き急ぐ流星・・速さだけを求めた顛末・・ブレーキは無い。
止める方法は無い・・疲れ果て燃料が無くなるまで・・真直ぐ走ら

せるしかない。

苦悩の果てに辿り着く・・その目的を達成させれば良いと。

流星のセリカ・・目的は・・。

自傷の妖精・・リストカッター・セリカ・・最新で最深の闇。

時代が作った・・無感動・無機質の心・・鉄の魂。

青く燃えるしかない・・鉄でも溶かす・・青い炎でないと・・。

命の選択

真夏の日が落ちて、フロアーに灯が燈り、女優が集まりはじめる。緊張を集中に変える、自分に負けないようにと。
魅宴の早出の女性が手前の席に座り、大ママとミサキとハルカが立っていた。

「大丈夫だよ、ハルカなら」とユリカがいきなり腕を組んで言った。
『ユリカ、今から行こうと思ってたのに』と笑顔で返した。
「私も見たいよね～、マチルダドレス」と爽やかに笑った。
『そうだね、行こうか』と微笑んで、ミサキと目が合ったので【後で】【戻る】とサインを出した。
ミサキが目だけで、了解のサインをくれた。

通りに出て、笑顔のユリカと腕を組み、ＰＧに向かった。
『ユリカの店の女性は、皆素敵だよね』と微笑んだ。
「私に付いて来れるんだから、素晴らしいよ」と爽やかニヤを出した、その美しさを見てニヤしていた。
「ニューユリカを、お気に入りだね」と爽やかニヤで返された。
『大のお気に入りです』と微笑んで返した。
指定席に入ると、女性がほとんど出て、談笑していた。
久美子がジャズで、マチルダの気分を高めていた、ユリカと腕を組んだままフロアーに入った。

女性全員が気付き、慌てて頭を下げた、ユリカも笑顔で返礼した。
私はマチルダの美しさに、見惚れていた、純白のドレスを着たマチルダに。
「見惚れてるね、エース」とマチルダが最強輝きニヤで言った。
『ドレスって、西洋人の物なんだな～って感動したよ』と笑顔で返

した。
「綺麗だよマチルダ」とユリカも嬉しそうに、笑顔で言った。
「ありがとう、ユリカさん・・揺り篭のおかげで軽くなりました」
と微笑んで返した。
「ユリカ姉さん、どうやれば、そんなに美しく変るんですか？」と
蘭が満開で聞いた。
「２８年間添い寝も我慢すると、効果抜群です」と爽やかニヤで返
した、蘭が満開で微笑んだ。
「本当に、美し過ぎますよ～」とナギサが華やかに笑った。

「ナギサありがとう。
それでいつまでＰＧに遠慮してるの、私とミコトに恥をかかせる
気じゃないだろうね。
私はナギサが、私の魅宴を知る最後で最強と思ってるんだけど。
そんな気持ちでやってて、本気の蘭が覚醒近いのに、付いて行け
るの？
まさか、今の私には無理ですなんて言うのかしら？
それなら今言っといてね、帰りにミコトに伝えるから。
ナギサ、私はあなたを誇りに思ってるんだよ、リアンが蘭を思っ
てるように。
どうするんだい・・夢を見せてくれるのかい？」

ナギサから深海の深い瞳を逸らさずに、最後は微笑んだ。
厳しく優しい言葉だった、愛情が溢れ出して、止まらない感じだっ
た。
ナギサの瞳は確実に光を増した、喜びに溢れていた、その表情まで
変った。
蘭はユリカを凝視していた、必死に何かを盗もうというように。
他の女性たちは、ユリカの底知れぬ何かに、圧倒されて皆真顔で見
ていた。

「必ず夢をお見せします、蘭と同等だと、ユリさんも狙える人間だと」と最強華やかに微笑んで、頭を下げた。
「良かった、それでこそナギサです」と最強爽やかに微笑んだ、ナギサも嬉しそな笑顔で返した。
「かっかてきなさい、ナギサ・・全力で、その内に潜むユリカとミサキも使って」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「よろしくお願いします」と最強華やかに微笑んで、頭を下げた。
「ユリカ、本当にありがとう」とユリさんがユリカに薔薇で微笑んだ。
「いえ、ナギサがチンタラやってるから、私が楽しくないんです・・リアンに負けたくないので」と爽やかに微笑んだ。
「さすがユリカ、どこまでも追い込みますね」とユリさんが楽しそうに笑った。
「そしてあなたも、どこまでも行くんですね」と私に薔薇で微笑んだ。

『もちろん、ユリさんの今まで思っている本気の世界に、その上のステージが有ると教えてあげますよ』と微笑んで返した。
「最高に楽しみです、疲れ果てたら、添い寝よろしくね」と薔薇で微笑んだ、私も笑顔で頷いた。
女性達にも笑顔が戻り、円を描き始めた。
『マチルダ、凄いもの見せてね、期待してるよ』と微笑んだ、マチルダも最高の笑顔で返してくれた。
ユリカと2人で少し下がって見ていた。

「私は今が、今までで1番充実しています、最高の仲間がいるからです・・馴れ合わない仲間が」とユリさんが全員を見た。
「私は失礼の無いように、出来るだけ早く最高の状態にしてみせます、楽しみましょう」と微笑んだ。

「はい」女性が全員返事をした。
「今夜はマチルダが日本の文化に触れます、みっともない文化を見せないように」と真顔で言った。
「はい」とまた女性全員で返事を返した。
「それでは今夜も開演しましょう」の合図に「はい」のブザーで答えた。

私は、少し見とくと言ったユリカを、私の指定席に座らせた。
準備のチェックをしていた、カスミがやってきた。
「ユリカ姉さん、添い寝一晩しないと駄目でしたね～」と輝きながら微笑んだ。
「そうよ、ギリギリまで遠慮して、少しだったでしょ」と爽やかニヤを出した。
「はい、失敗しました～」と嬉しそうに微笑んで、頭を下げてフロアーに戻った。
「ユリカ姉さん、私の覚醒近いですよね？」と蘭が真顔で言った。
「ほら、蘭・・気持ちを抑えてばかりいると、難しくなるでしょう・・大丈夫もうそこにいますよ」と爽やかに微笑んだ。
「はい、少し反省しました、今回は継続させてみせます、ナギサがいるから」と満開に微笑んだ。

「蘭、また夢を見せてね、見果てぬ夢。
ユリ姉さんの最大の望み・・蘭、あなたが最後のチャンスです。
将来のカスミとユリさんでは、年齢差になってしまう、今しかないの。
ユリ姉さんの望みを叶えられるのは、私は期待している。
どんな時でも、どんな状況でも・・蘭ならやるんじゃないかと。
そう思って、見に来るね」

ユリカと蘭は見つめあったまま、ユリカが微笑み、蘭も満開に微笑

んで頷いた。
蘭が戻り、開店した、最初の客はキングと和尚だった。
私はユリカを見た、ユリカが私を見て、和尚を見ていた。
私はシオンにハルカポジションを任せ、ユリカの側に付いた。
３番にはユリさんとマチルダが向かった、キングの驚いた顔が見えた。
マチルダが最高の輝く笑顔で挨拶をした、キングが嬉しそうに笑顔で招いた。

「あの人だね、素敵な人・・素敵な事の始まりかも」とユリカが爽やかに笑った。
『多分、この後ユリカの店に行くよ、キングに聞いたんだね和尚、良い話だよ絶対』と微笑んで返した。
「１番奥、空けとかないと」と立ち上がって、腕を組んだ。
和尚の隣のユリさんに、ユリカを指して【ＯＫ】を出した、薔薇で頷いた。
和尚がユリカを見た、ユリカは爽やかに微笑んで、深々と頭を下げた。
和尚もウンウンって感じで、笑顔で頷いた。
楽しそうにマチルダと話す、キングを見て、ユリカの店に向かった。

ユリカは終始ご機嫌で、爽やか笑顔で、挨拶をしながら歩いた。
私はビルの下で抱き上げて、階段を登った。
「和尚様が来る時は、必ず来てね」とユリカが爽やかに微笑んだ。
『もちろん、俺も話し聞きたいし』と笑顔で返した、ユリカは頷いて瞳を閉じた。
最上階でユリカと手を振って別れた。

ＰＧのフロアーに戻ると、満席になっていた、フロアーの熱が高かった。

マチルダは蘭が連れて回り、カスミが連れて回ったり、全席のお客に1度は付かせていた。
この時代の宮崎の男性で、これ程嬉しい事は無かっただろう。
それほど外人、それもブロンド美女が珍しかった、疲れた男性達が最高の笑顔になっていた。
男性達は全員、マチルダに握手を求め、英会話に自信のある人は得意気に話していた。

蘭がその瞳の青い炎が常に点火状態で、歩くだけでオーラがあった。
柔らかい物腰が、更に柔らかくなり、笑顔の温もりを振り撒いていた。
そしてナギサが華やかな輝きを撒き散らし、積極的に笑顔で沸点をそこ彼処で作った。
9人衆で対抗出来るのは、カスミだけで、その発光をさせ続ける輝きを振り撒いた。
カスミは新しい技を駆使して、どんなお客も一瞬で笑顔を作ってみせた。

私はニコちゃんで、指定席で見ていた、四季が必死になってコンビネーションを駆使していた。
ハルカポジションのシオンが、的確に素早くサインを繋ぎ、四季も熱が上がってきた。
ユメ・ウミも感染したように、頻繁にシオンに繋がせて、コンビプレーを見せつけた。
レンとハルカの必死さが伝わってきた、集中しているハルカの瞳が輝きだした。

その時キングと和尚が立った、私はシオンに断って受付に向かった。
「小僧、行けるか？」とキングが微笑んだ。
『大丈夫、シオンが完璧になったから』と笑顔で返した。

エレベーター前で、ユリさんが和尚と話していた、薔薇で頭を下げていた。
見送りにマチルダも来た、キングはマチルダに日曜に来ると微笑んだ。
マチルダも、最高の笑顔で輝いて頷いていた。

『和尚、ユリカの話、楽しみだな～』とエレベーターで和尚を見た。
「うむ、どうしても伝えておきたいんじゃ、あの娘は規模が違うの～、世界に必要な女性じゃよ」と嬉しそうに笑った。
「楽しみやな～、小僧・・ワクワクするな」とキングが笑顔で言った。
『うん、ユリカも和尚を見て、楽しい事の始まりかもって言ってたし』と笑顔で返した。

ユリカの店に入り、キングが奥に隣に和尚、私がキングの前に座った。
「ようこそいらっしゃいました、和尚様・・お会いしたかったです、ユリカと申します」とユリカが美しい真顔で、深々と頭を下げた。
「本当に素晴らしい、自分でよくぞそこまで来ましたね、感服しましたよ」と和尚も笑顔で答えた。
ユリカが飲み物を用意して、４人で笑顔で乾杯をした。

「忙しくなる前に話をしたいんじゃが、ユリカさん、ワシを一度羊水の揺り篭に入れてくれんかの」と和尚がユリカに言った、ユリカは頷いた。
「本当に、和尚様のお話、楽しみにしてます」強かった、驚くほどの強い揺り篭が、隣の私にも響いた。
「素晴らしい・・本当に素晴らしい」と和尚は言いながら、涙を流した。
私は和尚の涙を初めて見た、本当に嬉しそうな顔だった。

「ユリカ・・年寄りの戯言だと思って聞いて欲しい」と落ち着いた和尚が静かに言った、ユリカも真顔で頷いた。

「小僧が子猫を連れて来た時に、ユリカには小僧の事は説明を省くぞ、必要なかろうから。

その前から小僧に誰かが寄り添って、守ってるのは分っちょった。

子猫の時、小僧がマリアを抱いていて、マリアがワシに見せてくれた。

マリアは凄い子供じゃ、ユリカのそれを気付く者を探しちょったよ。

そして、ワシが気付いた、ユリカそのものの存在が、浮遊している事に。

そしてマリアが話させてくれた、ワシの膝に座って呼び寄せた。

ユリカよ、良いかの・・始めるぞ」

ここまで和尚は言って、一口水割りを飲んだ、ユリカは真顔で頷いて、私の手を握った。

私は強く握り返して、《大丈夫、ずっとここにいるから》と心で囁いた。

「ユリカよ・・お前は産まれる前、羊水の中にいた時は双子じゃった。

ご両親は望みに望んで、４０過ぎて出来た、待望のお子さんじゃったんやな。

その喜びを、羊水の中の２人は本当に喜んでたんじゃよ。

しかし気付いた、２人とも成長すると、２人とも死すと。

そして・・母まで、死してしまう事に。

素晴らしい子供じゃ、よく気付いたの～。

そして話し合う、２人で必死に話し合い、結論を出す。

1人だけ生き残り、産まれようと、ワシは泣いたよその結論に。
体の強い今目の前にいる、ユリカにしようと決めたんじゃ。
3日間ずっと手を繋いで、そしてもう1人が栄養摂取を自ら切った。
ユリカは必死に我慢したの～、そしてもう1人は自分の栄養をユリカに流した。
そして消滅したんじゃよ・・・じゃが、その分身まで栄養と一緒にユリカに流れた。
ユリカよ、もう悩まんで良い、お前の能力は特殊じゃない。
妹が付いてるのじゃ、双子の妹が常についておる。
ユリカの1番大切な者の側に、常に妹が付いておるんじゃよ。
妹は小僧に出会ってからのユリカが、とても元気になって嬉しかったと。
そして今のユリカなら告白してほしいと、何かを覚悟して迷っているからと。
ユリカよお前の能力に、距離などは関係ない、瞬間移動ができる妹が付いてる。
妹は本当に喜んじゃったぞ、最高の姉の人生に付き添えてとな」
和尚は優しく見ていた、泣いているユリカを、私は感動していたその話に。

「和尚様・・本当にありがとうございます。
私・・ずっと悩んでいました、もう1人の誰かの存在を感じて。
羊水の中の出来事、何の疑念も無く受入れられました。
実はエースが私に初めて、揺り篭を振り戻してくれた時に会いました。
もちろんそんな話は出来なかったけど、嬉しかったんです。
私をずっと守り支えてくれたのが、分っていたから。
そして今気付きました、エースありがとう、そこまで深く愛して

くれて。
エースが言葉の端ばしに、ユリカと呼んでくれるのが、嬉しかった理由も分りました。
羊水の揺り篭・・それを聞いた時の感動も・・私、嬉しくて泣きました。
そこに響いた、母の子守唄・・それが終わった時にお別れしたんですね。
それだけが今、記憶から蘇りました・・母の子守唄。
私はエースに会って、和尚様にも会えた・・本当に嬉しいです。
エースありがとう、あの日のあなたが言った、素敵な事だねと言ってくれた言葉。
羊水の揺り篭、そこに響いた子守唄・・よくそこまで入ってくれた。
初対面の私の・・よくそこまで。
私は今後も、妹と二人三脚で生きていきます。
それが私の産まれた【意味】だから、そして生きる【意味】だから。
和尚様、本当にありがとうございました」

最後は和尚とキングを見て、最高の爽やかな笑顔で頭を下げた。
「うんうん、そうしてやってくり、それが妹の望みでもある」と和尚も笑顔で言った。
「良かったな・・ユリカ」とキングも優しく言った、ユリカは目を潤ませて頷いた。
「しかし和尚、小僧の力はどう見ます？」とキングが和尚に振った。
「こやつは力を持ってて当然じゃ、あれだけの子供を本気で看取れば、皆最後に何かしらくれるもんよ」と和尚が私に微笑んだ。
「小僧・・教えろよ」とキングが微笑んだ。
『キング俺はね・・・・・・』ヒトミの話をした、キングは真顔で聞いていた。

「そうか～、俺はお前を益々好きになって、少し怖いぞ」とキングが微笑んだ。
『大丈夫、俺の方が何倍もキングが好きだから』と笑顔で返した。
「小僧、ヒトミをいつ乗り越えた、亡くなった成人の夜、ワシの所に来た時には、乗り越えちょったぞ」と和尚が真顔で聞いた。
『ヒトミが亡くなる数時間前、最後に話した時、温度が言った。
今までありがとう、私は次に両親が入ってきたら逝くね。
でも悲しまないでね、あなたには成すべきことがあるでしょって。
そう言われた、温度の凄い変化で、完璧に伝わった。
そして病室を出て、窓から外を見てたら、看護婦さんに手を引かれた。
そして昨日まで空いていた、個室の病室に通されたんだよ。
和尚そこに居たんだよ・・ミホが。
ヒトミが言った、俺のやるべき事・・ミホがいたんだよ』
和尚に言って、俯いて泣いていた、その名前を出しただけで。
「そうやったんか、乗り越えたんじゃなく、ミホが出現したんか」と和尚も静かに言った。
「もう、駄目よ今は・・思い出したら、辛すぎるんでしょ」とユリカが強く抱いてくれて、私に優しく言った。
私はただ、ユリカの温もりに守られていた、ミホの映像が流れていた。
私は震えて泣いていた、辛くて悲しくて・・残念で残念で、悔しくて。
キングも和尚も優しく私を見ていた、キングは泣きながら。
私にも乗り越える時が来ていた、ずっと心に大切に守ってきた・・ミホ。

悔しくて悔しくて、封印していた天使を、成せずに終わったその結末を。
心に入るという事を教えてくれた、可愛い天使・・ミホ。
ユリカに抱かれていなかったら、多分私は・・混乱していた。

「もういいのよ、さっ特別に、ビール飲ませてあげるから」とユリカに明るく言われ。
『うん、のど渇いた～』と笑顔で顔を上げた、キングも和尚も笑顔で見ていた。
また1段美しさの増した、ユリカが体を密着させたまま、ビールを注いでくれた。
4人で仕切り直しの、乾杯をした、4人とも笑顔で。
8月下旬の夜空を見ていた、マチュピチュに思いを馳せていた。

和尚のこのユリカの話、私もユリカ同様、何の疑念も無く受入れた。

ユリカはこの話を、五天女と蘭だけに話ていた。

これ以降も私とユリカの関係は、なんら変らなかった。

ただユリカが、明るく積極的になっていく。

ナギサに対する事でも、それまでのユリカなら言わなかっただろう。

大きな変化に、この双子の話で、ユリカは完全に解放された。

私はユリカ以外の相手だったら、あの隠し事にこの時点で、気付いただろう。

ユリカは覚悟をひた隠しにして、5年間私を必死に愛してくれた。

多分気付かれたら、俺も行くと言うのが分かっていたのだろう。
こんな日々が、飽く事無く楽しく続いた、一度たりとも口喧嘩すら無かった。
最後の添い寝は、あの川面に光が揺れるだけの寝室で、ユリカの着替えをした。
月光だけが照らす部屋で、ユリカの裸体を私は見て、その美しさに感動していた。
最高の思い出と、辛い修行をありがとう・・ユリカ。
俺はこの物語を書いて良かったと、思うようになってきたよ。
ユリカを想う時間が増えたから、波動を感じる事が増えたから。
この夏物語が完結すれば、また旅に出るよ。
今度は・・ユリカを探す旅に・・待ってろよ・・透明の女神。
羊水の揺り篭、そこに響いた子守唄・・もう一度聞かせて。
水のユリカ・・・。

夢の段取

羊水の揺り篭に揺られていた、２つの細胞、母の子守唄を聞いていた。
選択の時、どちらかが生きる道を選んだ、そして強い心で実行した。ユリカが、聡明で知的な女性になって当然である、厳しい選択を細胞の時に下したのだから。

天空の要塞の最上部、透明の女神の爽やかな笑顔があった。
「和尚様はマチルダを、どうご覧になられましたか？」とご機嫌笑顔のユリカが言った。
「目指してる世界が素晴らしいの～、そして付いている人間が最高峰におるね、ただ若さゆえ疲れちょったね」と和尚も笑顔で返した。
「どういう子なのかい？教えてくれよ、ユリカ」とキングが微笑んだ。
「先にやって来たのが、リンダと言う子でした・・・」ユリカはリンダの話をした、終始笑顔で。
「なるほどね～、どおりで輝きが違うと思った」とキングも嬉しそうだった。
「はい、素晴らしいです、リンダもマチルダも」とユリカも楽しそうに微笑んだ。
「結局、全てのきっかけは、小僧なんだよな」とキングが私にニッで言った。
『うん、俺にとっても、リンダは特別な出会いだった気がするよ』と微笑んで返した。

「お前のは、ほとんど全てを、特別な出会いにするじゃろが」と和尚がニヤで言った。
『和尚、俺・・マチルダを豊兄さんに、会わせようと思ってるんだ

けど』と真顔で聞いてみた。
「当然そうなるな、避けては通れまい、お前の心配は分かるが、お前が1番恭子を知っちょろう、大丈夫じゃよ・・恭子は」と笑顔で返してきた、私も笑顔で頷いた。
「小僧ちょっと待ってくれよ、豊って〇〇豊か？」とキングが言った。
『うん、さすがキング情報網広いね』と笑顔で返した。
「小僧、梶谷が助けてくれたんやぞ、去年のドラッグ売人潰し事件の時、豊を」と和尚が言った。
『キング・・ありがとうございました』私は嬉しくてキングを見て、立って深々と頭を下げた。

「やめろよ、仕事でした事なんだから・・て事は、お前が組に殴りこんだ小学生か、それで望月か～」とキングが笑った。
「ヤクザも馬鹿よの～、豊と小僧を相手にして、勝てるわけないのに」と和尚も笑った。
「どうしてなんですか？なんとなく分りますけど」とユリカが和尚に興味津々光線を出した。

「失うものが何も無い、そういう人間が一番強いんじゃよ。
それに豊と小僧は命すら平気で投げ出す、生き方を貫く為ならね。
その覚悟が本物じゃかい、豊は小僧を可愛がるんだよ。
自分の持って無い物を、常に見せ続けてきたからの。
結局、小僧は殴りこみに行って、豪勢な食事をご馳走になって。
好きな人間と友達になって、帰ってきよったから。
豊はある意味では、小僧に憧れてる、自分を変えてくれた人間やからね。
あの春雨の日、ワシが母親に引き合わせ、小僧の所に行った時。
豊は土下座する小僧の背中を見て、ワシにこう言ったよ。
和尚、俺は運の良い人間なんだね、全てを託せる人間に出会えた。

そう言ったよ、ワシもあの土下座を見てそう思った。
小僧、自信を持て、今この現状のお前を、豊は認めておる。
豊は最後まで貫いて欲しいと思っておる、お前の生き方をな。
運が良いのは、お前の方ばかりで無かった、豊も運が良かったんじゃよ。
小僧、最後に教えとくぞ・・蘭という女性を選んだことを。
豊はなにより、喜んじょったぞ、最高の相手じゃと」

和尚は笑顔でそう言った、キングもユリカも嬉しそうに、私を見ていた。

『うん、和尚ありがとう、俺はやっと最近、自分が間違ってなかったって思えてるよ。
沢山の経験も、沢山の友を見送った事も、間違って無かったって。
もう少ししたら、ミホとの事も自分の中で、和解できそうだよ。
そしてもう一度、いや何度でもミホにチャレンジする。
あの時は守ってやれなかったけど、今なら違うやり方も出来る。
俺は必ずミホを引きずり出す、今も尚、全てを閉ざしたミホを。
そのままに出来ない、俺の愛は不変だと思い知らせてやる。
あの時の奴らに、何も分ってなかった、あいつらに。
人の心は机上でどんなに勉強しても、無駄だともう一度教えてやる。
理屈で理解できるような物じゃないと、必ず照明してみせるよ。
それが俺の経験の【意味】だから、絶対に成し遂げる。
ヒトミと約束したから、最後の言葉で固く誓ったから。
俺には最高の教師達が付いてるから、常識の外で良いと言ってくれるから。
大勢の素敵な女性達が教えてくれる、愛の形は色々あるんだと。
それで良いんだって、強い意志で教えてくれるから』

3人の笑顔を見ながら、笑顔で言った、気分が快晴に戻っていた。
ユリカが強く手を握って、私に爽やかに微笑んで、もう一度手を強く握った。

キングが支払い、和尚と礼を言って、ユリカに見送られ通りに出た。
日曜日の約束を、キングと和尚と交わし、PGに戻った。
満席状態が続いていた、熱が高かった、最高の熱に包まれていた。
私はマチルダを探した、蘭と魅冬と3番に座っていた。
最高の輝く笑顔を見せて、老人達の笑顔を作っていた。

「マチルダちゃん、凄いです」とニコちゃんシオンが、コーラを持って来た。
『本当だね、でもシオンも綺麗になったね』と笑顔で返した。
「先生、シオン絶対やりますよ・・エースが1から作ってくれた、最初の作品として」そう微笑んだ、ハッとするほど美しかった。
『うん、期待してるよ、シオンは先生にとって、特別だからね』と笑顔で返した、シオンもニコちゃんで頷いて、持場に戻った。

「ふ～、あれでまだ本当の姿じゃないのか、蘭姉さんとナギサ姉さん」とカスミが不敵で言った。
『まだまだだよ、でもさすがカスミ、付いて行けてるね』と笑顔で返した。
「楽しくてしょうがないよ、気持ちが治まらない、全部吐き出したい最高の気分だよ」と輝く笑顔で言った。
『吐き出してしまえば、また新しい何かが産まれるよ・・ユリカみたいに』と微笑んで返した。
「うし、そうなんだよな・・やってみせるぜ」と不敵で言って、戦場に戻った。

蘭とマチルダが休憩に、歩いて来た、2人とも怖い位の、充実した

輝きに包まれていた。
「マチルダ、最高だよ・・ユリさん欲しくてたまらないみたい」と満開で微笑んだ。
「えっ、そうなんですか、嬉しい～」とマチルダが最高の輝きで微笑んだ。
『マチルダが、その最大の武器に頼らないから、そこが素敵なのさ』と微笑んで返した。
「それで、ユリカ姉さんの変化のイメージ、今何％の地点なの？」
蘭が満開ニヤで言った。
『まだ、１０％行ったかな～、その位だよ』とニヤニヤで返した。
「よし、最高に楽しくなってきた、行くよマチルダ」と満開で微笑んだ。
「はい、どこにでも・・蘭姉さん」と嬉しそうな笑顔で、２人で扉に消えた。

「あれで・・１０％なのかい！」とナギサが華やかニヤを出した、輝きが完全復活を示していた。
『さすがナギサ、輝きが戻ったね』と笑顔で返した。
「ユリカ姉さんに、あんな最高の激励をされれば、戻れるよ」と最強華やかに微笑んだ。
『狙って見せてよね、ユリさんを・・全てを使って』と真顔で返した。
「倒れたら、添い寝してくれる？」と微笑んだ。
『もちろん、あの時、腕を掴んだ時から、最後まで見ると決めたから・・ナギサの事を』と微笑んで返した。
「よし、ありがとう・・これで怖いものはないよ」と華やかに輝いて、扉に消えた。
私はナギサを見送り、イメージを修正していた、ＰＧの次に来る最高のイメージを。
それをやって、シオンに断って、ミチルの店に向かった。

ミチルの店はＢＯＸ一組、カウンターに2人組みと単独客が1人いた。
私はいつものカウンターの隅に座った。
ホノカともう1人の女性がＢＯＸ、カウンターに女性が1人で相手にしていた。
「はいどうぞ、ミチルママ、すぐ帰って来るから」とカウンターの美しい、２０代後半の女性がコーラを出してくれた。
『ありがとう、ミチル、サボリ癖がついたね』と笑顔で返した。
「うん、梶谷さんをありがとう、最高の経験だったよ」と笑顔を残して、お客の元に戻った。

「あら～、嬉しい子が来てるね～」とミチルの声がした、振向くと団体を連れて来ていた。

『絶好調だね、ミチル・・忙しそうだから連絡事項だけ。
今度の日曜の午後１２時から、ＰＧで外人さんの送別会をかねて。
パーティーがあるんだよ、今日はミチルとホノカを招待しに来たんだ』

ミチルに微笑んだ、ミチルも嬉しそうな笑顔で頷いた。

「嬉しいね～、参加させてもらうよ、ホノカにも繋いどくよ。
ホノカ達の称号、【銀河の奇跡】最高だよ、本当にありがとうね。
あれ以来、ホノカ目の色が変ったよ。
リョウの件も驚いたよ、さすが最後の挑戦者、楽しませてくれるね」

笑顔のミチルに笑顔で返して、店を後にした。
魅宴に行くと、事務所で大ママとハルカとミサキが休憩をしていた。

『大ママすいません、不束な娘が迷惑かけてませんか』と笑顔で言った。
「全然、ハルカに教える事なんて、あるのかね～」と笑顔で返された。
「大ママ、既に沢山の物を、教えられました」とハルカが微笑んだ、大ママも嬉しそうに笑顔で返した。

『大ママ・・リョウにはこの前、ばったり会った時に誘ったんだけど。
今度の日曜の１２時から、今ＰＧに来てるマチルダの送別会をかねた。
パーティーを開くんです、大ママとミサキと出来れば、ミコトを招待したいんだけど。
リョウは来るって言ってたから、どうでしょう？』

笑顔の大ママに、笑顔で言った、ミサキも笑顔で見ていた。
「もちろん、ご招待受けますよ・・ミコトには話してみるね、多分行くよ最近ＰＧを意識してるから」と大ママが笑顔で言った。
『ありがとう、良かった～、ミコトはＰＧの女性と、お互いに良い刺激になると思うよ』と微笑んで返した。
「ナギサが焦るよ、まだどっかで遠慮してるみたいだから」と大ママがニヤをした。
『大ママそれはさっき解決したよ、実はユリカが・・・』ユリカがナギサに言った台詞を、大ママに話した。
「エース・・本当にありがとね、嬉しくてたまらんよ、ユリカの変化が激しくて」と大ママが笑った、瞳が潤んでいた、私は笑顔で頷いた。

「確かに、ミコトさんＰＧにはいないタイプだね、そしてリョウさんも凄い」とハルカが微笑んだ。

『でしょ、俺のイメージじゃナギサが内包する、ユリカとミコトを出したら。
今夜出した挑戦状も、案外勝つかもと思ってるよ』と笑顔で返した。

「ナギサ、蘭に挑戦状を出したのか！」と大ママが驚いて言った。
『大ママ冗談言ったら駄目だよ、復活したナギサだよ、挑戦状を出す相手は1人でしょ』とニヤで言った。
「まさか！・・ユリに出したのか」と大ママが私を凝視した、私はニヤニヤで頷いた。
「夕方、蘭姉さんも正面切って、ユリさんに挑戦状を出しました」とハルカが微笑んだ。
「なんて事なんだろう、ユリ・・嬉しかったろうに」と言って、大ママが一筋の涙を見せた。
ハルカもミサキも、笑顔でその優しい涙を見ていた。
私は大ママに笑顔を返して、ハルカとミサキに手を振って魅宴を出た。
通りを歩きながら、ジンは明日の早い時間に店に行こうと思っていた。

そのままユリカの店に、何も考えずに行った。
カウンターの隅で、気配を消してユリカを見ていた、美しく輝いていた。
「またママに、魔法をかけたでしょ～」とユリカの店の若い可愛い女性が、コーラを出しながら微笑んで。
『うん、少しマハリクしといた』とニヤで返した。
「それで隠れて、偵察してるんだね」と笑顔で言って、お客の前に戻った。
私は飾ってある、大きな花に隠れながら、ニヤニヤでユリカを見て

いた。
ニヤニヤの視線に気付いて、ユリカが私を見た、私は慌ててニヤニヤをやめた。
「最近、危ない趣味に走ってるの？」とユリカが私の隣に座って、爽やかニヤで言った。
『さっきの和尚の話が嬉しくて、ユリカを見に来たの・・美しいユリカを』と笑顔で返した。
「私も本当に嬉しかった、それをマリアが繋いでくれた事も」と爽やかに微笑んだ。
『俺もまた、マリアに驚かされたよ』と真顔で返した。
「なに言ってるの、マリアを覚醒し続けさせてるのは、あなたなのよ。
マリアはあなたの存在を感じると、凄く穏やかな精神状態になるの。
だからその秘めたパワーを、出し切れるのよ。
それに今は、シオンも側にいるから。
マリアにとっては最高の環境になってる、そしてマチルダも来てるし」
ユリカが私を見ながら微笑んだ、私も微笑んで返した。
『ユリカ、一応聞いとくね、明日の夕食大丈夫だね』と微笑んで聞いた。
「もちろん、その代わり午前中は来ないから、あなたも忙しいでしょ」と爽やかに微笑んだ。
『うん、明日は豊兄さんの所に行くから』と微笑んで返した。
「忘れずに、日曜日誘っといてね、私も会いたいから」と爽やかニヤを出した。
『またニヤする、ユリカ意地悪考えたね』とウルウルで返した。

「最高のパーティーになりそうね、あなたの火達磨パーティーに」と爽やか最強ニヤできた。
『俺もそんな、気がしてきた』とウルウルで返して、席を立った。
エレベーター前で、ユリカに手を振って別れた。

ＰＧのフロアーは終演前だというのに、満席で熱は上昇していた。
ユリさんが凄かった、歩くだけで気品有る輝きが尾を引いて流れ。
薔薇の笑顔に、絶対的自信と余裕を感じた、ユリさん見るとミコトはまだまだやな。
そう思って、片付けを始めた、シオンはニコちゃんでサインを繋いでいた。
《シオン、さすが長距離ランナー、体力あるよな～》と関心していた。
今夜も全員完全燃焼で、夜は盛り上がるだろうな～、と思っていた。

終演を迎えたとき、９人衆は最高の笑顔で、控え室に向かった。
マチルダも蘭もナギサも最高の笑顔だった。
ユリさんが、私の所に来た、充実感を漂わせて。

「ユリカの話、素敵な話でしたか？」と薔薇で微笑んだ。
『はい、感動しました、ユリカも大喜びでした、ユリさんには話すでしょうから、お楽しみに』と笑顔で返した。
「楽しみですね～、そしてもう１つ質問・・今回のリアンとユリカの店の研修、もう１つの狙いは」と悪戯っ子を出した。

『リアンとユリカの精神的な余裕、いつでも休めるという。
レンとハルカとミサキがいつでも、フォローに行けるという。
そして俺は最終的に、一度で良いから、リアンのＰＧとユリカの魅宴が見たい。
蘭とナギサ以降の世代の者達に、見せてあげたい。

難しい事だと思ってたけど、今夜のマチルダ研修で少し期待をしました。
案外ユリさんも、大ママも楽しんでくれるのではと。
どうでしょう、ユリさん？』

最高のユリさんの薔薇の笑顔を見ながら、笑顔で言った、最強の波動が返ってきた。
「最高ですね、もちろんリアンのＯＫを取れば、私はいつでもＯＫですよ・・多分大ママも」と薔薇で微笑んだ。
『今夜のユリカを見たら、案外ユリカは受ける気がします』と笑顔で返した。
「あなたが今でも、挑発してますからね～・・その時は見に行きますよ、伝説の魅宴のユリカを」と最高の薔薇で微笑んだ、強い波動が何度も来た。
ユリさんが控え室に消えて、ＴＶルームに戻り、エミの荷造りをしていた。
その間も何度も波動を感じた、《ユリカ、考えてるね》と囁いた。
最強の波動が帰ってきて、強く押された。

サクラさんが来て、エミの荷物は明日取りに来ると言って、私がエミを抱き上げた。
サクラさんをタクシーまで見送り、ＴＶルームに戻った。
ユリさんが来て、全員出るところだった。
私がマリアを抱いて、蘭とユリさんとマチルダとタクシーに乗った。

「しかしマチルダちゃん、こんなに欲しい人材も、中々巡り会えませんよ」と薔薇で微笑んだ。
「ありがとうございます、嬉しいです・・土曜日もう一度入らせてもらいます」と輝きながら微笑んだ。
「土曜日は、最高に楽しいよ、がんばれマチルダ」と蘭も満開で微

笑んだ。
「蘭、ユリカ見て衝撃だったでしょう」とユリさんが蘭に微笑んだ。
「ぶっ飛びました、まさかあんな感じで、あそこまで美しくなるのかと」と蘭も満開で微笑んだ。
「エースの告白で、もう一段上がりましたから」とマチルダが輝きニヤを出した。
「告白、今教えないと・・全員に教えないといけなくなるよ」と蘭が前に座る私にニヤをした。
『大した話しじゃないよ、俺がユリカを想って、隠す為に・・・』
私はもう一人の自分の話をした。
「本当に・・常に素敵過ぎる話をしますね」と最高の薔薇で微笑んだ。

「うん、あんたは絶対なんとかすると想ってた、そして一度だけ言わせて。
ユリさんとマリアの出生の事、本当にありがとう。
私は今まで生きてきて、この話しが1番嬉しかった。
ヒトミちゃんの話も聞いてたから、最高だったよ。
本当に夢を見せてくれて、ありがとう、幸せだった」

蘭が完璧な青い炎で包んでいた、私は顔は見えないが、その温もりで満開であると感じていた。
『蘭、ありがとう、ユリさんにも言ったけど、俺も最も大切な試験には合格したと感じたよ』とマリアを見ながら言った。
後の3人の笑顔を感じながら、マリアの天使の寝顔を見ていた。
私で覚醒するとユリカが言った、大切な天使の寝顔を。

私はマリアの出生のこの話は、やはり照れ臭かった。

自分では忘れていた、出来事だったし、ただ採血しただけだったの

で。

しかしユリさんの、私に対する物は完全に変った。

常に私を見てくれるようになった、そして私の考えを引き出し助けてくれた。

私の今後の成長にとって、どれほど効果があっただろう。

ユリさんが側で見てる事で、逆に手が抜けなくなった。

それが更なる成長を加速させる、ミホに向かう気持ちにさせる。

私は常にユリさんの、喜びと驚きが見たくて、必死に考える。

そしてリアンが、銀の扉から現れる日が、迫ってきていた。

どこかで9人衆が、全員イメージしていた日が。

その熱い炎で全てを焼き尽くす、力は上がってるんだと微笑む。

蘭もナギサも衝撃を受けて、そしてもう一段上がるのだ。

そして魅宴にも舞い降りる、透明の女神が。

伝説の魅宴の百合香が登場する・・衝撃を連れて。

ミコトがリョウがミサキが凍結する、全くの別世界に棲む者に。

ＰＧの夏の伝説は中間地点だった、どこまでも行くと主張し続けて

いた。

熱は冷めないと・・諦めないのだからと、叫んでいた。

女性に生まれて、女性として勝負できるのが嬉しいと、叫んでいた。

全員が・・集中して・・心を揃えて・・・。

最高の爆弾

真夏の夜会に集まってくる、最高の充実感に満ち溢れた女優達が。
初めての主力全員が集う、マチルダの歓迎会が始まろうとしていた。
ユリさんのマンションに着いた時には、カスミとハルカとシオンは着ていた。

私はマリアが起きていたので、無理に寝かさずに抱いていた。
蘭とマチルダとカスミ達が化粧を落とし、ユリさんを手伝った。
アイさんとナギサとレンと久美子が到着して、四季とユメ・ウミが来た。
豪華なオードブルとグラスにシャンパンが運ばれた、全員最高の笑顔だった。
サクラさんが一旦帰ってから、登場して全員が揃った。

「今、お隣はお留守で、下は空家ですから、今夜は無礼講で楽しんで下さい」と薔薇で微笑んだ、全員の笑顔があった。
「私は、今夜マチルダを見て、世界の広さを再確認しました、マチルダに一言、挨拶お願いします」とマチルダに薔薇で微笑んだ。

「ありがとうございます・・皆さんお疲れ様でした。
私は今夜フロアーに出て、驚きました、私はＮＹとロスとパリとロンドン。
そこでＰＧと同じような場所を経験しました、でもＰＧが１番熱かった。
エースに初日の開店前、全力を出そうという熱が残ってると、言われたのが理解できました。
素晴らしい仕事だと思いました、最高の仲間が作る、最高の作品があるのだと感じました。

リンダにエースと周りの人達に、休暇と思って会って来いと、言われて来ました。
リンダが初めて休暇という言葉を使いました、そして今・・最高に嬉しい。
私は皆さんのいるＰＧを、世界で唯一心から、休息の出来る場所にさせて頂きます。
今後ともよろしくお願いします」

輝きながら微笑んで、頭を下げた、全員が静かに拍手をした。
「ありがとう、マチルダ・・遠慮なくいつでも羽を休めに帰ってきてね・・では乾杯をカスミリーダー」とカスミに薔薇で微笑んだ。
シャンパンが注がれ始めた、私の分も蘭が注いでくれた。

「ご指名ですから一言・・マチルダ、今夜のマチルダの仕事を見て。
驚きました、その容姿に頼らない会話を見て、反省させられたよ。
私達が目指す会話のプロの１つの姿を見ました、最高の勉強が出来たよ。
ありがとう、マチルダ・・マチルダと全員の今後の健康と発展を祈って。
乾杯」

「乾杯」と全員笑顔で乾杯した、私は蘭とユリさんに挟まれて、マリアを抱いていた。
「でも、ＮＹ・ロス・ロンドン・パリと比べてもらえるなんて、最高ね」とサクラさんが微笑んだ。
「本当に、東京・大阪・中州辺りと、比べられてるのと訳が違うわね」とアイさんも笑顔で言った。
「あら、そろそろ銀座ＰＧを考えていたのに」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「本気に聞こえますけど、ユリさん」と蘭が満開で微笑んだ。

「本気よ、その時はエースを借りますね」と蘭に薔薇で微笑んだ。
「私が駄目って言っても、行きますよ・・こ奴は」と満開で返した。
「結局、最高のメンバーを揃えそうだね、エースなら」とサクラさんも微笑んだ。
「私はいつでも行きますよ、自由ですから、開店の応援でも何でも」とカスミが蘭に不敵を出した。
「あら、私も当然付いて行くわよ、東京だろうがＮＹだろうが」と満開ニヤで返した。

「なんか、成功は確定しましたね・・望まれれば、私も行きますけど」とナギサが華やかに微笑んだ。
「当然、開店の応援には私も飛んで行きます、世界のどこからでも」とマチルダも微笑んだ。
「ありがとう、長い時間をかけて、完璧な計画を作りますね」と最高の薔薇で微笑んだ。
全員の最高の笑顔を見ていた、希望に夢を膨らます顔を。

「サクラさん、エミちゃんが将来外国に出るのを、どう思われますか？」とマチルダが真顔でサクラさんに聞いた。
「素晴らしい事だと思うよ、自分で決意して、道を決めて欲しいと・・今回のあなたの登場を、私は大歓迎してますから」と美しく微笑んで返した。
「ありがとうございます、あの子の感性と素質、日本で留まらないでしょう、そしてＰＧという環境がある限り、成長も加速し続けるでしょうから」とマチルダは微笑んで返した。
「エミは変化を始めました、エースが愛情を惜しげもなく、注ぎ続けてくれるから・・ありがとうエース」とサクラさんが微笑んだ。
『３人娘は本当に可愛いから、俺はエミに常に助けられてます、あの強い瞳が常に見てるから』と照れた笑顔で返した。
「エミちゃん、ＰＧ以外の女性とエースが絡んでると、怖い顔する

しね～」と美冬がニヤで言った。
「そう言えば、リョウちゃんの時も怖い顔してました～」とシオンが追い討ちをかけた。
「りょう」とマリアが、私にマリア不敵を出した、初めて見た女性達が固まっていた。

「カスミ・・どう責任をとるんだい、可愛いマリアが」とアイさんがカスミにニヤをした。
「家の2人もやりだしたら、あんたが主人に侘びを入れてね」とサクラさんもニヤをした。
「マリア、かしゅみはこうでしょ・・こう」とニコちゃんカスミを出した。
「シオン」とマリアがニコちゃんで言って、「かしゅみ～」と言って不敵を出した。
「さぁ、どうするのかな、かしゅみちゃん」と蘭が満開で追い込んだ。
「銀河の奇跡ですから、きっと奇跡を見せるでしょう」と千秋が微笑み。
「谷間が使えないこの状況は、完全に不利ね」と千春がニヤで追った。
カスミが追い込まれて、困った顔を私に向けた。

『カスミは不適が最高なんだから、それをマリアに伝授したんだろ』と私が助け舟を出した。
「うん、そうだよ、どんな時でもマリアが頑張れるように」と輝きながら微笑んだ。
「エースは絶対、カスミは助けるんだから～」とユメがニヤで言った。
「ひいきだね、カスミだけひいきしてるね～」とウミもニヤで来た。
「さぁ困ったね、それじゃぁ、今のあんたが考える、次のＰＧの最

高地点のイメージを述べよ」とナギサが微笑んだ。
全員が笑顔で私を見た、私は笑顔に後押しされて始めた。
『俺は、最近考えたんだけど、ユリさんの最大の望みって。
それは本気で自分の位置を狙ってくる相手と、競いあいたいんじゃないかって。
実は大ママから聞いたんだけど、アイさんもサクラさんも、過去に本気で挑戦していた。
そして今夜ユリカに言われて確信したよ、最後のチャンスが蘭とナギサなんだって。
俺は当然蘭の全力が見たかった、蘭を将来引退させるのに、心残りを残さないように。
でもそれを考えた時に気付いた、蘭はその時はユリさんを狙うと。
そしてナギサも狙うんだと、ユリさんを、そこで次の最高の状況が来ると思ってる。
もちろん、ナギサはブランクがあるけど、今夜のユリカの話でナギサの可能性を上げたよ。
もしナギサの内面の、ユリカとミコトが登場したら、どれほど凄いのかと思った。
ユリカの聡明な知性と、ミコトのあの独特の余裕まで、ナギサが見せたら怖いとね。
俺は思ってる、教えるのじゃなく、盗むのが基本の世界だから。
９人衆は最高の盗む対象が出てくると、仕事だけじゃなく、女性としても。
本気の蘭にナギサ、そして本気のユリさんが登場すれば。
本気のサクラさんとアイさんも見れると思ってる、季節は１２月前位からかな。
１２月の最高の時に、最高の状態を作れれば、良いと思ってるよ。
そして俺は、最高の爆弾も用意している、本当に最強の爆弾を。
ユリさんのＯＫはさっき貰ったから、後は本人達に交渉するだけ。

絶対に投下してやるから、９人衆は瞬きもせずに見て欲しい。
そして、最高の状況の最後の切り札、シオンを投入するよ。
その頃にはね、感じて欲しいシオンを、最高の白い妖精を。
次のＰＧのピークは、群雄割拠の中にある、競い合う中に咲く花。
最高の年末を過ごして、希望溢れる新年を迎えて欲しい。
こんな感じかな、俺の勝手なイメージは』

全員を笑顔で見て、マリアが寝たので立ち上がった。
「爆弾だけ教えて、でないと私達、今夜眠れないよ～」と蘭が満開で微笑んだ。
『リアンとユリカの一夜限りの復活、できればユリカはＰＧにも舞い降りてもらう』とニヤで返した。
静寂が支配していた、蘭の満開とユリさんの薔薇と、アイさんとサクラさんの笑顔が見ていた。
「本当に見せてくれそうな気がする、夢にまで見た最高の瞬間を」と美冬が微笑んだ。
「ユリカのＰＧまで行きますか、最高ですね・・あなたは引きずり出すんですね、絶対に満足をしないユリカを」と薔薇で微笑んだ。
「本当に見せて欲しいね、私とサクラでもあの当時見たくて見たくて切望した、最高のユリカを」とアイさんが微笑んだ。
「多分、あの当時より確実に何かが上がってる、ユリカを見せるよね、エースなら」とサクラさんが微笑んだ。
「そして、熱量が増したリアン姉さんが光臨すれば、その後最高の時は必ず訪れるんだね」と蘭が満開で微笑んだ。
「やばい、また体中がゾクゾクしだした」とカスミが輝きながら微笑んだ、９人衆とシオンの笑顔があった。
「シオン的に見て、リアンさんの可能性は、どの位あると思うの？」と美冬が聞いた。
「普通に考えたら１０％だけど、エースが頼むんなら９０％ありそうですね」とシオンがニコちゃんで返した。

「多分エースはユリカさんは１００％の自信があるだろうから、見れるんだ！」と千秋が笑顔で言った。

「満足なんて、金で買う物の事だよって言葉・・響いたよ、そして今、そうだと確信したよ」とカスミが微笑んだ。

「そうなんだよね～、満足ってそういう物だよね～」と千夏も微笑んだ。

「満足が出来ない、最高の時を生きているって、事ですよね～」とマチルダも微笑んだ。

全員の笑顔で頷くのを見ながら、私は喜びを感じて、蘭の満開の微笑みに頷いた。

私は笑顔を残して、マリアをベッドに連れて行った、盛り上がる女性達の声を背に受けて。

度重なり来る波動が、ユリカの燃え上がる何かを示していた。

《ユリカ、今のユリカなら絶対に出来るよ、俺はどうしてもそれが見たい、ユリカを愛しているから》と囁いた、強い波動が一度来て、落ち着いた、了解したと感じていた。

私はマリアを優しく寝かせて、手を握っていた、天使の寝顔を見ながら。

そして、マリアにミホの話をした、誓いを立てる為に。

私の最も大切な覚悟のいる誓いは、全てマリアに立てると決めていたから。

『・・・だからねマリア、最後までミホに挑戦するよ、それが俺の生き方だからね』と微笑んだ。

可愛い天使の寝顔を見ていた、マリアを見て勇気が湧いてきた。

リビングに戻ると、いくつかの円が出来て、最高の盛り上がりを見せていた。

私は邪魔しないように、ソファーに座り、シャンパンを飲みながら

夜景を見ていた。
「黄昏てるね～、明日はいよいよ噂の男なんでしょ」とマチルダが隣に座りながら微笑んだ。
『そうだよ、明日会わせるよ、本物にね』と微笑んで返した。
「カスミが明日の事、意識してて面白いんだけど」とマチルダが輝きニヤを出した。
『カスミは、豊兄さんのファンだからね』とニヤで返した。
「そうなんだ！それは楽しみだ～」とマチルダが嬉しそうに微笑んだ。
『マチルダ、リンダに伝えてね、リンダも疲れて休息したい時は、俺の所に来てと』と笑顔で言った。
「うん、必ず伝えるよ、そしてリンダもそうすると思うよ」とマチルダも輝く笑顔で微笑んだ。

「まちゅりゅだ、口説いてりゅ、りゃんのエーしゅ」と蘭がトロンで来た。
「蘭姉さん、可愛い～」とマチルダが最高の輝きで抱きついた。
「りゃんきゃわいい～て、ほめりゃれた」と満開トロンで言った。
『良かったね、りゃん』と笑顔で蘭に言った、最高の満開で頷いてマチルダを抱きしめた。

「見せてくれるんだね、リアン姉さんと、ユリカ姉さん」と華やかを撒き散らして、ナギサが反対側の隣に座った。
『必ず見せるよ、ていうか俺も見たいんだよ』と微笑んで返した。
「今の時点のあの2人、見たいね～、多分最高の何かを見せるよね」と華やかニヤを出した。
『うん、それにねナギサ、日曜日ミコトも招待したからね』とニヤで返した。
「うそ！ミコト姉さんに会えるんだ～、緊張するよ」と真顔で返してきた。

『ナギサ、まだ遠慮してるんだろ、魅宴にも顔出せよ・・ミコト待ってると思うよ』と真顔で返した。
「うん、そうするよ・・らしくないよね、私はナギサだよね」と最高の華やかさで微笑んだ。
『そうだよ、どこのナギサでも良いんだよ・・夜街のナギサなんだから』と微笑んで返した。
「うん、エースありがとう」と最高の輝きで笑った、私も嬉しくて笑顔で返した。
「あーあ、蘭は本当に仕事以外は弱いね～」とナギサも蘭の所に降りた、蘭は満開継続中だった。

「ユリカはあなただからＯＫ取るとして、リアンの作戦はなんですか？」と薔薇で微笑みながら、ユリさんが隣に座った。
『リアンは絶対本気でやりますよ、俺はただシオンの為に、見せてくれと言うだけです』とニヤで返した。
「決まりですね、あなたがその台詞で言うのなら、決定と思って良いわね」と楽しそうな薔薇で微笑んだ。
「なるほどね～、最高の手段を用意してるのね」とサクラさんも来て、微笑んだ。
「決まりか～、本当にゾクゾクするわね」とアイさんも笑顔で来た。

『えぇ、ゾクゾクします、アイさんとサクラさんの本気が見れるから』と笑顔で返した。
「群雄割拠の戦国ＰＧですか～、何度も何度も、夢に見ましたよ」とユリさんが最高の薔薇で微笑んだ。
「ユリさん怖いわよ～、蘭・ナギサ、充分覚悟をして挑みなさい」とサクラさんがニヤで言った。
「大丈夫でしょう、あのリアンとユリカが、認めた世代の代表ですから」とアイさんが２人に微笑んだ。
「はい、私は全部、１つ残らず出しますよ・・アイさんからもサク

ラさんからも、盗んだ物まで全部」と蘭が満開で微笑んだ。
「それプラス、リアンか～、そりゃ楽しそうですね」とサクラさんがユリさんに微笑んだ。
「そして、ナギサが見せるんだ、ユリカとミコトを・・面白いね～」とアイさんもユリさんに微笑んだ。
「なんか2人とも、虎視眈々って感じの顔ですね～」とユリさんも、嬉しそうに薔薇で返した。
「こんな楽しいゲーム、乗らない手はないですから、脇役はまっぴらです」とアイさんが癒しで微笑み。
「当然私も、2人の娘に、母親の最高の姿を見せますよ」とサクラさんも彫の深い、美しい笑顔で言った。

「やっぱり、ニヤニヤしてるねエース」とマチルダが突っ込んできた。
『うん、ばれた・・こんなに楽しい事はないから』と笑顔で返した。
「次々に、爆弾は用意してあるんでしょうね～」とサクラさんが微笑んだ。
『もちろん、最高の爆弾を多数用意しています、自分が楽しむためにも』とニヤで返した。
「結局、蘭がこの夏一番の、特大ホームランを打ったんだね、若草公園で」とアイさんが蘭に微笑んだ。
「最高のホームランでしょ、私もそう思ってます」と満開の笑顔で返した。

「五天女もそう思ってますよ、明日のミサキのデビューには、五天女を揃えましたから、エースが」と薔薇で微笑んだ。
「ハルカの時は最高のお父さんで、ミサキの時には五天女揃いですか～」とサクラさんが笑顔で言った。
後の9人衆が、静かになった、そして皆の視線を感じた。
『ミサキはやっぱり特別だから、俺の出来る事はしてやりたい、だ

からキングに同伴を頼んだんだよ』と笑顔で返した。
「梶谷さんが四天女を同伴して、デビューを飾る・・最高の舞台を魅宴にも用意するんだ」とアイさんが笑顔で言った。
「大ママを泣かすのが趣味ですもんね～、エースは」と薔薇で微笑んだ。

『今日も泣きましたよ、大ママ・・蘭とナギサがユリさんに挑戦状出したと教えたら。
ユリは嬉しかったろうと言って、大ママ泣きましたよ。
本当に素敵な人です、大ママは人間が果てしなく大きい。
絶対に今の夜街で働いてる女性は幸せです、大ママとユリさんがいるから。
女帝と呼ばれる、本物の女性がいるから』

隣のユリさんの薔薇を見ながら、笑顔で伝えた、心のままに素直に。
「蘭ごめんなさい、少し借ります」と言って私に抱き付いて、ユリさんが泣いていた。
私はユリさんを抱きしめて、薔薇の休息を感じていた、そして来ると思っていた。
最高の状態のユリさんも近いと、リアンとユリカを急ごうと思っていた。

「あ～あ、ユリさんを完全復活に導いたりょ、気合いりぇにゃいと」と蘭が満開で微笑んだ。
「いりぇにゃいと、じゃ入らんでしょう・・蘭」とナギサが華やかに微笑んだ。
「だりぇにでみょ、はにゃやか出すにゃよ～」と満開ニヤで言った。
「これは出るの、持って産まれた物だからね～」とナギサがニヤニヤで返した。
「あぁ、きゃしゅみの、無駄なきゃぎゃやきと同じもんだにぇ」と

満開ニヤニヤで言った。
「無駄って・・無駄な輝き・・確かにあるな～」とカスミも酔っているのか、妙に納得した。
全員の笑顔があった、仕事を離れリラックスしている、最高の笑顔が。

私の腕の中の薔薇は泣きながら、心のギアをニュートラルに入れた。
今度の加速は1速から完璧に引っ張って、5速で最高記録を出すと言っている気がした。
今まで店の経営や、女性達の心の問題にまで気を配ってきた薔薇が、集中をしていた。
フロアーだけに全神経を集中すると、そして生きているステージが、まだまだ違うと教える為に。
その薔薇の満開の姿を見て、ユリさんも吸収していたのだと知らされる。
リアンの炎も、蘭の温もりも・・カスミの輝きまで、貪欲に吸収していた。
本当の本物のプロの姿を見せる、PGの3つ目の伝説の幕開けの為に。

私の提案をユリカは私の感じた通り、受けていた。

リアンも笑顔で了承してくれる、シオンのためだけでなく、蘭の為にも。

そして見せ付ける、圧倒的な炎と、繊細な水の凄さを。

ユリさんですら、震える・・2人の力は確実に増してると。

リアンもユリカも、PGと魅宴に立つ、そして見せ続ける。

月に2度だけ、最高のイベントとして開催される。

第一火曜のリアンと、第二水曜のユリカがＰＧ恒例イベントになり。

第三火曜のリアンと、第四水曜のユリカが魅宴の恒例イベントになる。

遊び人の男達で、魅宴とＰＧが溢れる、どうしても隣で2人を感じたくて。

ＰＧの燃える夏物語は、季節を凌駕して続く。

最高の場所で競えると笑う、若い大切な季節を賭けて挑むのだと。

その覚悟が伝わり、熱は上がり続ける・・限界は無いんだと。

満足などとは、所詮金で買う物なのだと・・叫びながら・・。

最後の恋

完全な休息に入った薔薇を抱いていた、その温度が教える本物だと。
今回は一度ニュートラに入れてから、加速を付けて最高の場所を目指すと、鼓動が言っていた。
最高の挑戦者達に触発されて、その本体が覚醒する。
最高の輝きも、温もりも・・全てを連れて来る、限界は無いのだと微笑みながら。

「ちょっと、お願いがあるんです」と落ち着いたユリさんに連れられて、キッチンに行った。

「皆、もちろん私もですけど、あなたのお味噌汁が食べたいの。
明日の朝、お願い出来るかしら、食材は全て使ってもらっていいから。
それとこれを使って欲しいの、私は自分で調理出来ないから」

ユリさんが薔薇で微笑んで、活きている大きな伊勢海老を2尾見せた。
『了解です、最高の食材ですね』と笑顔で返した。
「ありがとう、よろしくね・・楽しみです」と薔薇で微笑んでリビングに戻った。
9人衆もさすがに眠そうで、蘭は船を漕いでいた。
ユリさんの号令で、片付けをして、ユリさんの部屋にアイさんと、サクラさんが消えた。
四季とユメ・ウミにカスミとレンと久美子とシオンが笑顔で寝床を作り。
ナギサとマチルダが窓際に来た、蘭がマチルダを引き寄せた。

「まちゅるだ、今夜ぎゃんばった褒美として、半分きゃしゅてやるから」と私を寝かせて。
蘭が右から、マチルダが最高の笑顔で左から腕枕に入った。
「へんにゃことは、しゅりゅにゃよ」と私の胸越しに、マチルダに満開を出した。
「がんばります」とマチルダも輝きニヤを出した。
「酔うとサービスいいな～」とカスミが不敵で言った。
「マチルダが1番安全と判断したのさ、自分が酔って見境つかないから」とナギサが華やかニヤを出した。
「なるほど～、そういう事ですか～」とハルカが微笑んだ。
「最近はハルカも、危険ゾーンとみなされてるしね～」と美冬が微笑んだ。

「真昼間のラブシーンじゃ、もう完全な危険ゾーンだよね・・それにハルカは特別だからね」と千秋が微笑んだ。
「結局、最終的には、ハルカVSミサキが見たいんだよね・・私達も見たいけど」とユメが微笑んで。
「それは見たいな～、最高だね人生にこんなに、永い楽しみがあるんだから」とナギサが微笑み。
「そして、久美子とエミが、夢を見せ続けてくれそうだしね・・最高だよ」とカスミが久美子に微笑んだ。
「はい、私は姉に感謝してます、よくぞPGにしてくれたと・・そう思っています」と久美子が微笑んだ。
「結局、それもエースが腕を掴んだ事が始まりか、なんか怖くなるよ・・次に何を見せるのかと考えるだけでね」と美冬が微笑んだ。
「やっぱり、美冬の言葉は愛情が違うな～、まぁ仕方ないけど・・あれであれだからね～」と千夏も笑顔で言った。

「皆、それぞれあるでしょう、今後もあるんだから・・1つだけ言えるのは、私達は幸せだと言うことよ」と美冬が微笑んだ。

「そうだね、じゃあ感謝して・・襲いますか」とナギサが華やかニヤで言った。
「マチルダ・・ガード緩めてね」とカスミが不敵で言った。
「無理です・・最高の充電が出来そうだから・・ユリカさんの言った事が分かってきました」と輝きニヤを出した。
「なんの事かな〜・・今夜の最後に述べよ」とナギサが微笑んだ。
「エースは体温で伝えるから、だから本当に安心できるんです・・・・」とヒトミの話をした。
マチルダが私を至近距離で胸に乗ったまま、蘭が最高の満開トロンで聞いていた。
「そうだったんだ〜、なんか最高の夢が見れそう・・寝ましょうね」とナギサが言って。
「おやすみなさーい」と全員が言って、照明が消された。

窓際の蘭と左側のマチルダの、穏やかな体温に包まれて、私は最高の時にいた。
月光が窓から侵入していた、蘭が月光を見ていた、美しい顔だった。
「月光を追いかけよう、それが私達の人生だから・・いつか納得のできるように、南の島で暮らせるように」と満開で微笑んだ。
『うん、必ず沢山の笑顔を作ろうね・・出来るよ俺と蘭なら』と微笑んで返した。
「うん、マチルダ・・あんまり飛ばし過ぎるなよ、エースが寂しいからね」と蘭がマチルダに言った。
「はい、私も今回の旅で分かりました、自分が本当の笑顔が出せなければ・・他人の笑顔など引き出せないと」と輝きながら微笑んだ。
「OK、リンダにも伝えてね」と言って胸の上に戻ってきた、マチルダと蘭が私の胸の上で、微笑みあっていた。
「全く同じ日の同じ時間に産まれると、最大のライバルの可能性が高いですね」と輝きニヤを出した。
「最高の相手なんだから、そうなりたいでしょ」と満開で微笑んで

瞳を閉じた。
「はい、そうですね、リンダもそう思いますよ、絶対に」と輝きながら微笑んで、マチルダも瞳を閉じた。
私は両手で2人を軽く支えて、寝息のチェックをしていた、穏やかな息使いに安心した。
そして月光を見ていた、ミホを想っていた。
今も鉄格子の囲む部屋に隔離されている、全てを遮断したミホを。
その深層に潜む恐怖の体験を、私は幼心に見ていた、そして回復の階段を手を繋いで登っていた。
あの馬鹿な医師達が焦って、結果を求めたが為に、ミホはより深く沈んだ。
そして私からミホを遠ざけた、自分達の失敗を葬るために。
あの頃は俺も子供だったけど、今なら闘えるよ、絶対ミホの側まで辿り着く。

《原作者・・そしてユリカ聞いてる。
俺は後悔を残さないから、絶対にミホの内面にもう一度潜るよ。
俺の力が、先に逝った仲間の贈り物ならば、絶対に成し遂げよう。
親兄弟を目の前で殺されたミホの、内面に入り込もう、もう一度。
そして手を繋いで少しずつ、登ろう、光溢れる外を目指して。
俺には今、蘭とユリカとマリアがついてる。
そしてユリさんとシオンが、常に見てくれてる。
そして最強の女性達がついているから、絶対に成し遂げるよ。
ユリカ勇気を頂戴ね、ユリカの存在そのものが俺の支えだから。
やりきって見せるから、マリアに誓ったから》
心に囁いた、強く暖かい波動が包んでくれた、何度も何度も。
私はそれでゆっくりと、眠りに落ちていた、最高の状態で。

翌朝、朝陽で目覚めた、最高の気分だった、蘭もマチルダも私の胸の上にいた。
私はマチルダからゆっくり腕を抜き、蘭の腕を抜いて枕に寝かせた。
立ち上がりカーテンを閉めて、全員を見た、綺麗に寝ていた。

私はキッチンに行き、顔を洗って気合を入れた、お米を洗いご飯を炊いて。
味噌汁用の大きな寸胴を出して、火にかけて贅沢に、高級煮干で出汁を取った。
豆腐と大根と人参の薄切りを用意して、伊勢海老をぶつ切りにして、大根と人参と共に沈めた。
最高の香りがしてきて、暫く火にかける間に、卵焼きを焼いていた。
卵5個分を4回焼いて、ウインナーが大量に有ったので、リクエストと思い。
タコさんカニさんを大量に作った、伊勢海老のエキスが出きった感じになり、豆腐を加えた。
香り付けの大葉を細切りにして用意して、味噌を溶いて、保温状態にした。
味噌汁と卵焼きの味見をして、ニヤニヤしていた。
そこにハルカがマリアを抱いて来た、良い香りに最高のハルカの笑顔があった。

「朝から、最高の気分になるんだけど」とハルカが微笑んだ。
『なんせ、最高級食材、使い放題だからね』と笑顔で返した、マリアがテーブルの、自分の椅子に座ったので、牛乳とタコさんカニさんを2匹ずつ出した。
最高の天使の笑顔で、タコさんカニさんを見て、フォークで美味しそうに食べていた。
『皆、起きはじめたの？』とハルカに聞くいた。

「うん、こっちはほぼ全員起きたよ、ユリさん達も起きるはず」と笑顔で返してきた。
『じゃあハルカ、食器の準備をお願い』と微笑んだ。
「了解、ご飯とお味噌汁ね」と笑顔で返してきた、私は頷いた。

「最高の香りが、するんですけど」とユリさんが薔薇で現れた。
『最高級食材をふんだんに、使いましたから』と微笑んで返した。
「ご飯と、おかずまで・・蘭が羨ましいですね、ハルカ」とハルカに薔薇で微笑んだ。
「本当に、私も料理できる彼氏を探そうと、思っていました」と笑顔で返した。
朝食の準備が出来て、全員が席についていた。
「最初に言っときます、エースはあげませんから」と蘭が満開で微笑んだ。
「この朝食を見て、欲しがらない方がおかしいよ」とアイさんがニヤで言った。

「それでは、頂きましょう・・エースと食材に感謝して・・いただきます」と薔薇で言った。
「いただきます」と全員が笑顔で言って、まず味噌汁を飲んだ。
「なんなんだろう、涙が出そう」とナギサが微笑み。
「私、お熱の時、エースの料理で完全復活したんですよ」とカスミが笑顔で言った。
「うん、最高ですね・・やっぱり喜ばせたいという、愛情でしょうね」と薔薇で微笑み。
「蘭、毎朝なの・・贅沢すぎるよ、もう他の男とは付き合えんよ」とサクラさんが微笑んだ。
「良いんですよ～、もう人生最後の恋だから」と満開で堂々と返した、全員が蘭を笑顔で見た。
私のこの時の喜びは、表現出来ない、蘭はいとも簡単に言ってのけ

たのだ。
強い波動が完璧に包んでくれた、私の抱くマリアが、私に天使全開をくれた。

「なるほど、蘭が最強ですね、ユリさん」とサクラさんが微笑んだ。
「はい、蘭が入った時から、最後は蘭と本気の勝負がしたいと思ってました、今はナギサもいるし、最高でしょう」と薔薇で微笑んだ。

「エース、味噌汁余りそうですか？」とサクラさんが微笑んだ。
『沢山作りすぎて、おかわりいくらでもありますよ』と笑顔で返した。
「じゃあ、エミとミサに少し貰って帰ります、絶対に喜ぶから」と笑顔で言った。
「じゃあＴＶルームで、マダムと松さんも含めて、召上ってもらいますね」と薔薇で微笑んだ、サクラさんも笑顔で返した。

「エース、今度タコさんカニさん、教えてね」と千夏が微笑んだ。
『良いですよ～、最初は蘭にイカさんクモさんって、言われたけど』と笑顔で返した。
「しかし、卵焼きも日々上達するんだね～」とカスミが微笑んだ。
「最近、ホットサンドとかフレンチトーストも出てくるよ」と蘭が満開で威張った。
「素敵です～、リアンには絶対に、内緒がいいと思います～」とシオンがニコちゃんで言った。
「ユリカさんが、お泊りの時に、リクエストした意味が分かるわ～」とマチルダも輝きながら微笑んだ。
若手９人衆とシオンとマチルダが、とにかく食べた、何度もおかわりをして。
その状況をユリさん達が、嬉しそうに見ていた、最高の笑顔で。

「日曜日のパーティーに、エース得意のカレーを用意してね」と美冬が微笑んだ。
『了解です、それで準備は進んでるの？』と笑顔で聞いた。
「うん、着々とね・・食べ物系だけまだ、検討中の部分があるけど」と千秋が笑顔で言った。

『俺、1つだけ提案があるんだけど。
キングが来るけど、絶対にお客として扱わない欲しいんだ。
キングは絶対にそれを望んでいるし、そうありたいと願っている。
同じ会費を支払うんだから、同等で接して欲しい。
難しいかもしれないけど、今度の日曜だけはね。
まぁ、和尚とはすぐに出来るだろうけど、全員頑張ってね』

全員を見ながら笑顔で言った。
「よし、私は出来るよ、それが梶谷さんの望みだとも思えるし」と蘭が満開で微笑んだ。
「それでは、皆さんもよろしくね・・私も気を付けますけど、注意して下さい」と薔薇で微笑んだ。
「は～い」と笑顔で全員が返事をした。
「で、豊は来るんだろうね」とカスミが不敵を出した。
「えっ、本当に・・嬉しい、あの日ちゃんとお礼も言えなかったから」とアイさんが微笑んだ。
『何も無ければ来ると思います、豊とジンの絡みが見たいし』とニヤニヤで言った。
「それは、今現在の若手男性の、最高峰の出会いですね」と薔薇で微笑んだ。

「ジンって・・もしかして、悲しみの貴公子？」と千春が言った。
『そうだよ、最後の道標』と微笑んで返した。
「気合入れて、化粧もしないと、いけないみたいね」と千夏も微笑

んだ。
「がんばろう、銀河の奇跡も揃うし、なんせマチルダもいるから」と千秋が微笑んだ。
「ホノカって子・・なんか怖いような物が、あったよね～」と美冬が微笑んだ。
「確かに何か違うオーラを持ってた、リョウも本気で凄いけど」とウミが微笑んだ。
「誰かさんが、銀河の奇跡なんて、最高の称号を贈るから、また変化してるらしいよ」と蘭が満開ニヤをした。
「銀河の奇跡の永遠の憧れ・・やはりひいきだね」とアイさんがニヤで言った。

「はい、ひいきしてもらってます」とカスミが不敵笑顔で返した、アイさんが笑顔で頷いた。
「なんせ、人生の転換をしてくれたんだから、カスミはエースに思い入れ強いよね～」とナギサが微笑んだ。
「人生の転換なら、あなたも同じでしょ・・それも最高の状態まで、持っていってもらったくせに」と蘭がナギサに満開ニヤを出した。
「そうでした、ちゃんとお礼してないな～」と華やかニヤで返した。
「謹んで、辞退致します」と満開ニヤニヤで返した、全員が笑っていた。

私はマリアに沢山伊勢海老を食べさせて、満足そうなマリアを見ていた。
『全員で片付けて、ユリさんは昼間ゆっくりして下さい・・マリアは初恋の人の所に連れて行きます』とユリさんに微笑んだ。
「ありがとう・・良かったね～マリア」とユリさんがマリアに微笑んだ。
「マリア・・初恋の人が、豊なのか～・・最高だね」とカスミが微笑んだ。

「ゆたか・・ゆたか」と少しマリアが照れた、皆が笑顔で見ていた。
「寂しくて、ウルウルするなよ」と蘭が私に満開ニヤを出した。
『しないよ、マリアと俺は、もうそういう関係を、すでに超越したから』と笑顔で返した、蘭が満開で頷いた。

「マリア、どんな大人になるんだろう・・本当に楽しみですね」とマチルダが微笑んだ。
「3人娘はPGの全員の愛情を受けてますし、エースが本気で愛し続けるから、楽しみですね」とユリさんも薔薇で微笑んだ。
「学校始まったら、どうするの？」と美冬が真顔で聞いた。
『親父の許可を絶対取って、蘭と暮らす、もちろんPGにも毎日行って、久美子と勉強しながら仕事もするよ』と微笑んで返した。
「OK、四季で勉強を徹底的に見てやるよ、厳しいけどね」と千秋が微笑んだ。
「私とユメで、午後からは3人娘の方は、出来るだけ面倒を見るよ、頑張れよ」とウミが微笑んだ。

「良かったね、成績落ちたら強制送還だからね」と蘭が満開で微笑んだ。
『了解、頑張るよ・・それにシオンが英会話を、教えてくれてるから』と笑顔で返した。
「瞳と体温以外にも英会話もいきますか、シオン・美冬、私にもよろしく」と蘭が満開で微笑んだ。
「了解です、蘭姉さんなら・・すぐに覚えますよ」とシオンがニコちゃんで微笑んだ、美冬も笑顔で頷いた。
「覚えて付いて行かないと、こ奴はアメリカなんかに行ったら、帰ってこんだろ・・マチルダ」と満開で微笑んだ。
「それは保障します、絶対にとんでもない人間関係をすぐに作って、帰りませんね～」と輝きニヤを出した。

「そりゃ～、絶対ありそうだ・・はなから会話なんて無くても、可愛い子には突き進むから」とナギサが華やかニヤを出した。
「今、誰に興味を持ってるのかしら？」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
『この前の蘭の一言で、セリカに興味を持ってます・・一瞬しか会ってないけど』と笑顔で返した。
「急ぎなよ、あれだけの才能、このままじゃ本当に惜しすぎる」と蘭が真顔で言った。
「先生、お願いします・・先生なら絶対なんとかしてくれるって・・思ってるから、シオンは」と真顔の美しいシオンが言った。
難しいんだ、セリカ・・少し急ごうと思っていた。

「蘭は凄い地点にいるんだね、私も頑張るよ」とナギサが輝きニヤで微笑んだ。
「クラブ関係者のほとんどは、うちでハイヒール買ってくれるからね」と満開で返した。
「ゴールド・ラッシュのセリカちゃん、何度も大ママとの話にも出てますよ・・最高の素材だそうですね」と薔薇で微笑んだ。
「そうですね、１９歳の最新型でしょうね・・ただ闇も深いでしょうね」と蘭が私を見た。
「最後の挑戦者が、燃えてますね」とアイさんが微笑んだ。
「なんとかするでしょう、特にシオンのためなら」と美冬が微笑んだ。
「１つだけ言えるのは、私達は最高の時代に、生まれたって事ですね」とレンが微笑み、全員が笑顔で私を見ていた。
「チャー・・がんば」とマリアが言って、私に天使全開をくれた。
私はセリカに潜って感じる、その深い闇の正体に驚愕する。
そしてその想いを達成に導く、最も危険な賭けにでる、自分を信じて。

そして気付く、ミホの突破口をセリカが教えてくれる、出口は有るのだと提示する。
誘惑の少女セリカ・・生き急ぐ妖精、その最終目的は愛したいという欲求。
愛されなかった過去への叫び、そして目で見える傷に安定を求める。
その当時、言葉すら無かった、リストカッター・セリカ。

手首の浅い傷は、ためらいを提示する、愛して欲しいと叫び続ける。
その手首の何本もの浅い傷が、心の深い傷を示している。
自分は愛する資格が無いと叫ぶ、狂気すら連れて歩く。
私の答えは１つ・・愛するのに必要な資格など無いと。
生きようと前を見てる限り、愛する事は出来ると、セリカに叫ぶ。
ミホを思い出しながら、緊張と集中の中に潜り込む、セリカの中に。
結末のイメージすら出来ないで、ギリギリの攻防に入る。

本当に可愛い天使、セリカ・・最高の誘惑の微笑み。

機械的、無機質な輝きを脱ぐと現れる、強く守ってきた輝ける心。

どんな時代にも出現する、最新型の女性。

価値観もやり方も、存在意義すら変えて来る、時代が産み出した最新型。

しかし基本はなんら変らない、人間である限りは。

曖昧な甘えは通用しない、注意を引く為の行為なら危険が大き過ぎる。

不幸に溺れたらいけない、それに浸かり続けると腐ってしまう。

冷めている振りを続けると抜けられない、熱い部分を持たないと溶けて無くなる。

生きるエネルギーをチャージしよう、それが笑顔に続く唯一の道だから。

愛されたいと願う前に、誰かを愛してみよう、それしか無い進む道は。

強固な鉄に守られた心なら、強力な酸素を送り込み、青い炎を燃やそう。

鉄をも溶かす・・青い炎を・・。

心の出発点

本当の意味でのチームに成っていた、馴れ合わない個人の集団。
誰かと誰かじゃない、チームの中の誰になっていた。
全員で片付けをして、食器を洗い、私がリビングを元の形に戻した。
サクラさんとカスミが準備して、先に出かけた。
私は蘭とマチルダの準備を待ちながら、帰る四季やウメ・ウミを見送った。
レンとハルカと久美子とシオンが、最後まで片付けをしていた。

蘭とマチルダの準備が整い、ユリさんに礼を言って、私がマリアを抱いた。
マリアはご機嫌で天使を振り撒いていた、ユリさんに見送られ光射す場所に出た。
タクシーに乗り、靴屋の駐車場でケンメリに乗った。

「やっぱり蘭姉さんは、リンダと気が会いますよ・・車の嗜好も同じです」と助手席のマチルダが輝きながら微笑んだ。
「そうなんだ～、ガソリン撒き散らして走るから、リンダやマチルダは嫌いかと思ってたよ」よ満開で返した。
「撒き散らして下さい、無くなった方が良い物は、リンダもコルベット・スティングレーＬＴ１に乗ってますよ」と微笑んだ。
『カッケー、コルベットＬＴ１か～、女性的曲線美が最高だよね～』と私は思わず笑顔で、言ってしまった。
「ね～、何でも女性の体で、表現するでしょ」と蘭が満開ニヤをマチルダに出した。
「未経験のくせに、女性的曲線美なんて・・カスミのドレスのイメージですね」とマチルダも輝きニヤで返した、私はマリアにウルを出していた。

笑い声を乗せて、ケンメリは快調に飛ばした。
「今頃の時間に行っても、迷惑にならないの？」と蘭がルームミラー越に私を見た。
『全然大丈夫、親方は老人で、社長も豊兄さんに現場任せてるから、このケンメリ見たら喜ぶよ』と微笑んで返した。
長いスロープ状の細い道を登りきると、大きな整備工場が見えた、ケンメリは中の手前の駐車スペースに止めた。
「凄いのが入って来たと思ったら、これは最高の人が降りてきますね」と豊が最高の笑顔で言った。
「こんにちは、ここで良いかしら」と蘭が満開で微笑んだ。
「もちろん、後でエンジン覗かせて下さいね」と豊も微笑みで返した。

「豊君、この子はマチルダ、アメリカ人よ」と蘭がマチルダを紹介した。
『これは素敵な人を、ごめんなさい・・勉強しなかったから、英語は無理なんです』と豊がマチルダに微笑んだ。
「あなたには、英語は必要無いわ、その笑顔で世界中通用しますよ」とマチルダは輝く笑顔で微笑んだ。
「素敵な日本語ですね、そして圧倒的経験に、裏打ちされてるんですね、その若さで」と微笑んだ。
「か～、カスミがファンになるはずやね～エース」とマリアを抱いて降りた私に、マチルダが微笑んだ。
「ゆたか・・ゆたか」とマリアが豊兄さんに抱っこをせがんだ。
「マリア、ちょっと待ってね」とマリアの近くで囁き、ツナギの上半身を脱いで、手を石鹸で綺麗に洗ってマリアを抱き上げた。
直射日光にマリアを抱いた、豊が輝いた、蘭もマチルダも笑顔で見ていた。

その時事務所の方から、2人の女性の人影が近づいた。
私は焦っていた、恭子さんとマキさんだった、最高の笑顔で近づいてきた。
「蘭さんですね、本当に素敵な人・・小僧の事ありがとうございます」と恭子さんが言って、マキさんと2人で頭を下げた。
『いえ私も彼といることを選びましたから、豊君の奥さんですね』と青い炎を最高にして、2人を見た。
「はい、恭子といいます、こっちは幼馴染のマキです」と笑顔で返した。
「この子がアメリカから来た、マチルダです・・よろしくお願いね」と満開の微笑で返した。
「本当に素敵ですね、お2人とも・・まぁ事務所でお茶でもどうぞ」と恭子さんが笑顔で言って、嬉しそうにマリアに手を出した、マリアは最高の天使の笑顔で抱かれた。

「小僧は、残れよ・・確認するからね」とマキさんがリーゼントの、彫の深い笑顔を見せた。
『マキ・・やるのか、もう俺には通用しないぞ』と笑顔で返した。
「生意気な、少し成長したと聞いたら、生意気も加速してるんだね」とマキさんが微笑んで構えた。
美しい少林寺の構えを久々に見て、嬉しかった。
「何なんでしょう、あれは?」とマチルダが恭子に微笑んで聞いた。
「一種の愛情表現です、かなり強めの」と言って可愛く微笑んで返した。
「彼は本当に素敵な場所で、育ったんですね〜」と蘭も満開で微笑んだ。
「マキは特に小僧を可愛がりましたから、小僧の実の姉と私達2人は親友ですから」と恭子さんも笑顔で言った。
私はマキの鋭い足技をかわしながら、至近距離で勝負した、裏拳を

ギリギリで避けた。
少し冷やりとした、マキの逆を取ったとき、マキが消えた。
下から足ですくわれかけて、慌ててマキの右腕を掴んで、至近距離のマキの美しい顔に微笑んだ。
「小僧、少し鈍ってるな・・危なかったよ」と豊がマチルダと蘭に、微笑んだ。
「最高の愛情表現だわ、私が今まで見た中で・・最高です」とマチルダも微笑んで、事務所に案内された。
応接室に通されて、オレンジジュースを出された、蘭もマチルダも笑顔だった。
「小僧はすぐ来ますよ、俺の所に来たのは、マチルダさんの旅の目的の1つなんですか？」と豊が2人に微笑んだ。
「はい、実はリンダという子が先に来て・・・・・」と蘭がリンダの話をして、マチルダが来た経緯を話した。
「やっぱり出会えるんですね、豊もいつも言っていました・・世界の子供に会いたいと」と恭子さんが微笑んだ。

私はその時マキさんの挨拶も終わって、マキさんと話していた。
自分の今の気持ちと、今後の考えについて、正直に話した。
「なるほどね・・OK、姉さんには私から話しとくよ、良いんじゃないかな、蘭さんを見て、そう感じたよ」と笑顔で言った、私も嬉しくて笑顔で返した。

「世界の子供に会ってみたい、その基軸はなんですか？」とマチルダが豊に聞いた。

「俺は両親を知りません、1歳の時に事故で私だけ助かりました。
私には祖父がいましたから、祖父と2人で暮らしました。
確かに不便な生活だったけど、近隣の人々に助けられて成長しました。

私に出来る事は、近所の子供の面倒を見ることだけでしたから。
小僧を筆頭に、沢山の子供の面倒をみてきました。
俺の家の地区には施設もあって、親のいない子供も沢山いましたから。
そして中学に上がってから、小僧に全てを託しました。
小僧は凄い子供なんです、病院の小児病棟で全ての子供を相手にしたり。
施設の子供達の寂しさを理解して、守る行動をしたりしました。
私は今考えるんです、蘭さんは知ってるかと思いますが。
俺は修羅場に招待される男なんです、好き嫌いは別にして。
まぁそんな星の下に、生を受けたんでしょう。
だから考えてるんです、なぜこんな大きな体と体力を与えられたのかと。
そして今思ってます、何に使おうかと、日本はもう大丈夫でしょう。
ならば世界の辛い環境で生きる、子供達に使ってやりたいと。
私は思うんです、せめてスタート地点だけでも、出来るだけ平等にしてやりたい。
心のスタート地点だけでも、同じにしてやりたい、夢も希望も。
それは生きる為に必死に働かざる得ない、現状もあるでしょう。
戦争や争いの中で、怨むことを教えられたりするのでしょう。
でも心のスタート地点は、同じになれるんじゃないかと。
今の世界が競争社会と言うのなら、そのスタートだけでも夢の有るもので、あってほしい。
リンダさんの考えは分ります、言葉や文化や宗教で壁はあるんでしょう。
でも私は見ましたから、この目で・・伝える手段が無いと言われた子供と通じた者を。
泣きながら見送り、次の日には新たなトライする小僧を。
俺も黙って見ている事は出来ないですね、その為のこの体だと思

ってますから。
マチルダさん、俺にも聞かせて下さい、世界の事実を。
俺は親の記憶が無い人間として、そして周りの全てに、助けられた人間として。
この体と心を使いたい、そうしないと俺は和解できない。
恭子をきちんと愛したいから、自分に嘘はつきたくないから」

マチルダを真直ぐに見て、最後は微笑んだ、マチルダは何かに押されながら見ていた。
私は事務所の入口で、立ち尽くしていた、その大きな背中を見ながら。
常に強い意志で闘う、大きな背中から、何かが溢れ出していた。
マチルダは動けずに、涙を流していた、蘭はマチルダを抱きしめて豊を見ていた。
マリアは恭子に抱かれて、豊を見ていた、天使全開で。

「ありがとう、今回の旅で本当に色々と勉強になりました。
今度の日曜の午後ＰＧで、私の送別会を開いてもらいます。
その時にお話ししようと思っています、是非豊君も来て下さい。
私は本当に嬉しいです、初めて感じました、心のスタート地点。
そうですよね、人は産まれた時には０なんだから。
心のスタート地点の平等は、出来る事ですよね。
リンダの最高の笑顔が見えます、１つの突破口が見えたから。
日本に来たら、必ず連絡しますから、また話を聞いて下さい」

マチルダは輝く笑顔でそう言った、豊も恭子も笑顔で返した。
「恭子ちゃんは、どう考えるの・・豊君が暫く海外に行く事は？」
と蘭が真顔で聞いた。
「足でまといにならないなら、付いて行きます・・私は豊という人間を愛してるから、その生き方も愛します」と恭子は堂々と答えた、

その背中に迷いは無かった。
「うん、素敵ね・・私と年齢差はあるけど、あなた達と友達に成りたいわ」と蘭が満開で微笑んだ。
「それは、こちらからお願いします・・小僧の姉も含めて」とマキさんが笑顔で言った。
「そして、マチルダさんも・・お願いしますね」と恭子が微笑んだ。
「もちろんです、ありがとう」とマチルダも輝きながら、微笑んだ。

「小僧、日曜日、俺の知り合い誰か来るのか」と座った私に豊兄さんが聞いた。
『和尚と、そして・・梶谷弁護士』と微笑んで返した。
「梶谷さんに会えるのか、嬉しいね～」と最高の笑顔で返してきた。
「梶谷さん、知り合いなの・・豊君」と蘭が驚いて豊を見た。
「恩人です・・あの人がいなかったら、今頃少年院にいますから」と少し照れて言った。
「そうなんだ～、良かったね、出会えて」と満開で微笑んだ、豊も微笑んで頷いた。
「恭子ちゃん、日曜日女性が多いですよ～、それも綺麗な」とマチルダが微笑んだ。
「じゃあ、マチルダちゃんがガードして下さい、お願いします」と可愛くニヤを出した。
「了解、引き受けましょう」と最高の輝きニヤを出した。
「危ないガードだね、マチルダは」と蘭が満開で微笑んだ、恭子も微笑んで返した。

「親父の所にいつ行くんだ？」と豊が私に真顔で聞いた。
『夏休み終わる前、来週早々かな』と真顔で返した。
「ちゃんと話して、決める事だけ決めとけよ」と笑顔で返された。
『豊兄さん、まさか・・何か親父と話したの？』と真顔で聞いた。
「お前の為じゃないよ、蘭さんとマリアの為に、話はつけておいた、

あとは自分で正直に話せよ」と優しく微笑んだ、蘭の満開が豊を見ていた。
『ありがとう・・本当にありがとう、兄さん』と俯いて呟いた。
「あんたはどこまでも、私らに夢を見せるんだろ、常識とか普通なんて、元々無かったろう・・だから小僧なんだろ」と恭子が微笑んだ。
「そう、生臭の唯一の弟子なんだろ、見せてやりなよ・・分らない奴らに」とマキさんが微笑んだ。

『うん、俺・・ミホにもう一度チャレンジする。
いや、何度でも・・ミホが出てくるまでは。
あの時、俺が守ってやれなかったけど、今ならキチンと向き合えるから。
ヒトミの最後の時に、誓ったから、成し遂げると。
俺はこの夏の大切な経験で、色々分ったから。
ミホに会いに行く、どんな手を使っても絶対に会ってみせる。
そしてミホと、闇から手を繋いで出てくるよ、必ずね。
それが成すべき事だから、俺の愛の形だから。
机上で勉強だけした奴らに、もう一度強く言ってやるよ。
愛は本には書いてない、勉強しても無駄だと。
理屈や理論じゃないと、愛は生き物なんだからって』

3人を見て、最後は豊兄さんに笑顔で言った、豊兄さんは笑顔を返してくれた。
「生臭さんの唯一の弟子なのか～・・お寺の小僧なんだね」と蘭が満開で微笑んだ。
「生臭がいなかったら、小僧はとっくに壊れてますよ・・それだけの仲間を見送ったから」と豊が蘭に微笑んだ。
「本当に素敵な人達が、ずっと見守って、小僧が完成するんですね」

とマチルダも微笑んだ。
「それがこの子の星なんでしょう、お袋さんも姉も分ってますから、もちろん頑固な親父さんも」とマキさんが微笑み。
「蘭さんが近い将来会われるでしょうけど、その時の3人の喜ぶ顔が、今から想像できますよ」と恭子が微笑んだ。
「ありがとう、凄く嬉しいよ・・あなた達に言われると」と青い炎を最大にして、満開で微笑んだ。

蘭とマチルダと礼を言って、表に出た。
「マチルダ、悪いけど、滅多にないチャンスだから・・うちの整備の連中に会ってくれる？」と豊が微笑んだ。
「もちろん、良いですよ」と輝く笑顔で返した、恭子に連れられて工場にマチルダが入っていった。
私がマリアを抱き、豊兄さんが、ケンメリのエンジンを開けて驚いた。
「か～、Ｌ２８００じゃないですか、それもこれ城嶋スペシャルでしょ」と嬉しそうに、蘭を見た。
「そうなんですけど、城嶋さんいなくなって、これからは豊君がみてくれる？」と満開で微笑んだ。
「こっちからお願いしたいですよ、ありがとう」と微笑んで返した。
「でも本当に、素敵な奥さんね」と蘭が満開ニヤをした。
マリアを抱きながら、豊が照れていた、真夏の陽を浴びて。

「ユリカさんは、元気ですか？」と豊が微笑んだ。
「最近また美しくなって、日曜日、絶対ユリカ姉さんも、待ってますよ、豊君の事」と満開で微笑んだ、強い波動が来た。
「あの人も、本当に素敵な人ですね・・驚きました、あまりに透明で透けて見えそうで」と微笑んだ。
「本当に、豊君の感性にも驚くよ」と蘭が嬉しそうに微笑んだ。
マチルダが笑顔で帰ってきて、私がマリアを受け取ろうとすると、

豊の頬にキスをした。
全員が笑顔になり、私がマリアを抱いて、礼を言って帰路についた。
「しかし感動したよ、いるんだね～本物が、世界は広いな～」とマチルダが嬉しそうに言った。
「マチルダ、私達やっぱり、凄く幸運な場所と時代にいるのかな？」と蘭が満開で聞いた。
「間違いなく最高でしょう、このメンバーが揃ってるのは」と輝く笑みで答えた。
「よし、一度ＰＧに行って、エミちゃんの荷物運んであげよう」と蘭が満開で私に微笑んだ。
ＰＧの下にケンメリを突っ込み、ＴＶルームに入った、レンとハルカとシオンに、リアンが来ていた。
「リアン姉さん・・アメリカからのお友達、マチルダです」と蘭が満開で紹介した。
「よろしく、マチルダ・・本当に綺麗だね～」と獄炎で微笑んだ。
「ありがとうございます、リアンさんも英語で話したい雰囲気ですね」と輝く笑顔で返した。
「ありがとう、よく言われるけど、シオンと違って・・全然駄目なの」とニカで返した。

「今日はどうしたんですか？」と蘭が微笑んだ。
「シオンが帰らなかったから、顔見に来たの・・なんか成長が嬉しくて」と微笑んだ。
「子供じゃないですから、シオン１９歳です」とニコちゃんで言った。
「そうなんだよね～、駄目だね妹離れが出来なくて」と少し照れて言った。
『リアン、シオンの為にも、俺のお願い聞いて？』と真顔でリアンに言った。

「なんだよエース、改まって、何でもど～ぞ」と獄炎で微笑んだ。
『リアン・・蘭とナギサがユリさんに、挑戦状を出したんだ。
そしてユリさんも受けた、少し時間かかるけど、本気の競い合いになる。
その時シオンもデビューさせたい、だから見せて欲しいんだよ。
伝説のＰＧのリアンを、最高の炎を、全てを燃やす獄炎を。
一夜限りで良いから、復活して欲しい。
当然、ユリさんの許可は取ってる、ユリさんも楽しみにしてる。
ユリカも頼もうと思ってる、ユリカにＰＧも。
絶対に全員勉強になる、俺はそう確信している。
ローズの店のフォローは、ＰＧの時にはミサキが入る。
魅宴の時にはレンと、研修が終われば、ハルカが入るから。
どうだろうか、伝説のリアンを見せてくれないかな？』

静寂の中、一気に想いをリアンに伝えた。
「ＯＫ、良いよ、それでシオンのためになり、蘭の背中を押せるのなら・・蘭やるんなら本気でやりなよ」と獄炎で微笑んだ。
「ありがとう、リアン姉さん・・最高ですよ」と蘭が満開で言って、飛びついた。
「いつ位がいいの？私はいつでも行けるよ」と私に獄炎で微笑んだ。
『来週早々にしよう、大ママにミサキの件聞いてみるから』と微笑んで返した。
「大ママが望むなら、私は魅宴にも出ていいよ、ユリカがＰＧにも立つ為にも」とリアンがニカで言った。
『最高だよリアン、ありがとう』と笑顔で返した。
「エースの頼みだから、仕方がないね・・出し惜しみなんかしないよ」と最高の炎で笑った。
「やばい、カスミじゃないけど、全身がゾクゾクしてきた」と蘭が満開で微笑んだ。

「蘭は私の事は良く知ってるだろ、ユリカの仕事見たら・・凍りつくよ、生きてるステージが違うってね」と獄炎ニカで言った。
「そんなに、凄いんですか」とマチルダが微笑んだ。

「蘭と私は同じ燃やすタイプだから、まぁほとんどの夜街の女性が、このタイプなんだけど。
ユリカは全く違うよ、本当に癒すんだよ、隣に座ると絶対に感じる。
どんなに鈍い奴でもね、その圧倒的な深さに身も心も、沈めてしまう。
人は持ってない物に憧れるよね、蘭は絶対にユリカに憧れる。
もし蘭がユリカから、何か少しでも盗めれば、チャンスはあるよ。
私達の永遠の夢、ユリさんの希望に手が届くかもしれない。
最後の挑戦者が愛し続ける、蘭が最後の挑戦者になれるよ」

蘭とマチルダを見ながら、美しい真顔で言った。
「絶対的炎を、また見せてくれるんですね」と蘭が、満開で微笑んで返した。
「いいよ、それがＰＧの何かの為になるのなら、シオンの背中を少しでも押せるのならね」と獄炎で微笑んだ。
「レンちゃん、ハルカちゃん本気で、震えてますね」とマチルダが微笑んだ。
「はい、昨夜エースの話を聞いても、半信半疑だったけど・・現実になると、震えます」とハルカが言って。
「本当に見れるんだね、伝説のリアンさんと、ユリカさんが・・最高です」とレンが微笑んだ。
「レン、私が魅宴の時は任せるから、よろしくね」とリアンが微笑んだ。
「全力で頑張ります」と最高の笑顔で返した。

そこにナギサが笑顔でやってきた、リアンが最高の笑顔で迎えた。
「まさか！もうＯＫ取ったの」とナギサが私を見た、私は笑顔で頷いた。
「見せてやるよナギサ、あの頃覗きに来てたのを、すぐ側でね」と獄炎で微笑んだ。
「最高です、ありがとうございます」と華やか最強で微笑んだ。
「それで、今日は早いね、どうしたの？」と蘭が満開で微笑んだ。
「昨夜、エースに怒られて・・魅宴にも顔出せって、私も反省して大ママに会いに行こうと」と微笑んだ。

「ちょうどいいね、皆で魅宴に行こう、今の話もあるし、マチルダを紹介しときたいし」と蘭が満開で微笑んだ。
リアンとナギサとマチルダと蘭と、私がマリアを抱いて出かけた。

ユリカのビルの前に可愛い人影が見えた、私は嬉しかった、ユリカが笑顔で立っていた。
「ユリカ、鋭いね～、待ち伏せかい」とリアンが微笑んだ。
「なんか私には口頭連絡がないのに、話しが進んでるみたいだから」と爽やかニヤを私に出した。
『ユリカ、お願いね』と私が微笑んだ。
「仕方ないな～、リアン１人じゃ心配だし、ユリ姉さんが楽しみにしてそうだし」と爽やかに微笑んだ。
「やった～、最高です」と蘭が満開で微笑んだ。
「ナギサは・・もしかして私が、怖いのかい？」と爽やかニヤをナギサに出した。
「はい・・少し」とナギサが華やかニヤで返した、全員が笑っていた。

私が魅宴の裏ドアから入り、事務所に誰もいないので、フロアーに行った。

大ママとミサキとミコトとリョウが話していた。
「大ママ、お忙しいかしら？」とユリカが声をかけた。
「それだけのメンバーで来て、忙しいなんて言えんよ」と大ママがフロアーに手招きした。
「ミコト姉さん、ご無沙汰しています・・ナギサ戻りました」とナギサがミコトに深々と頭を下げた。
「ナギサ・・遅いよ、寂しい事をするなよ・・良かったね、安心したよ」とミコトが微笑んだ。
ナギサはミコトを見て、泣いていた。

「大ママ、アメリカからのお客様・・マチルダを紹介します」と蘭が言って、マチルダが頭を下げた。
「こんにちは、マチルダ・・本当に噂通り綺麗だね～」と微笑んだ。
「ありがとうございます、嬉しいです」と輝きながら微笑んだ。
「腹筋しめたか、マチルダちゃん」とリョウが微笑んだ。
「はい、締まってたよ・・今日は強引に胸をＵＰしてないのね、リョウちゃん」と輝きニヤで返した。
皆、笑顔で２人のやり取りを見ていた。

「それで、リアンとユリカが来て、本題はなんだいエース？」と大ママが私を見た。

『大ママ、昨日の蘭とナギサの挑戦の話の続きなんだけど。
ユリさんはＯＫして、リアンにもユリカにも今、ＯＫをもらった。
実はリアンとユリカに一夜限りで良いから、魅宴とＰＧに立ってもらおうと思ってる。
もちろん、今いる女性達にも、絶対良い刺激になるし。
それで、リアンとユリカの店のフォローに、ＰＧの時はミサキを出して欲しいんだ。
魅宴の時はＰＧから、レンとハルカが出るから。

絶対に良い話だと確信してる、どうでしょう大ママ、了承してほしいんだけど』

真顔で大ママを見て言った、大ママは驚いた表情で聞いていた。

「それは、本当の話なんだね、まぁ2人共来てるんだから信じるけど。

最高じゃないか、もちろんミサキで良ければ出すよ。

ミサキとレンやハルカの研修にも、他の意味合いがちゃんとあったんだね。

そして、待望のリアンが、魅宴に立ってくれるんだね。

最高だよ、ありがとうエース」

大ママが最高の笑顔で言った、私も笑顔で返した。

「蘭、本当に良く捕まえたね～、エース色々考えてくれて嬉しいね～・・そして蘭・ナギサ夢を見せてね、私達の見果てぬ夢を、最高のユリさんと勝負するという」とミコトが微笑んだ。

「はい、全力でやってみます」と蘭がミコトに満開で微笑んだ。

「ナギサは？まさかユリカ姉さんと私の前で、自信無いとか言わないだろうね」と余裕二ヤを出した。

「いえ、絶対にやって見せます、魅宴とPGを両方経験した誇りにかけて」と華やかに微笑んだ。

「よし、それでこそ・・ナギサだよ」とミコトが微笑んだ。

灼熱の晩夏の昼下がり、役者が揃ってきた、呼び寄せられるように。全力の夏は続く、そしてそれを牽引してきた、頂上決戦が幕を開ける。

誰も瞬きすら出来ない、炎が全てを燃やしつくし、何も残らない荒野を作り。

そこに清らかな水が降り注ぎ、生命の誕生を感じさせる。

リアンとユリカ、その力は伝説を超えてくる。
忘れられない時が近づいていた、灼熱のフロアーにも。
豊兄さんは私の親父に、私の現状と今の想いを話していた。
私の親父にとって豊兄さんの言葉なら、受入れると知っていたから
だろう。
親父は待っていた、私が帰るのを、そして気持ちを語るのを。
そして私の親父とお袋に、一人の最高峰の女性が会いに行く。
和尚に聞いて、ユリさんが私にも言わずに会いに行っていた。
全ての説得は終わっていた、豊兄さんとユリさんで。
私は覚悟をして、親父の前に出た時に知る。
俺は愛されているのだと、必要とされているのだと感じる。
最高の夏は、終わらない、私の策略も続いていく。
誰も止まらせない、今が進む時だとニヤニヤで燃料を注ぎ込む。
誰一人、燃えカスも、灰すら残さないように。
ただ蒸発して、気体に帰ろうと言うように・・。

幼さの後悔

８月が過ぎようとしている、晩夏の昼下がり。
静寂のフロアーに、女神たちが光臨していた。
終始笑顔で希望と期待を抱いて、輝きを放ち続けていた。

残ると言ったナギサと別れて、魅宴を出た、リアンが準備に帰ると言って通りで別れた。
「蘭、私の家で準備して良いよ、着替えはもう良いんでしょ」とユリカが微笑んだ。
「本当に良いんですか、嬉しい～」と満開で微笑んだ。
私がエミのプレゼントの山をケンメリに積み終わり、サクラさんのブティクに行った。
私とユリカが後部座席に乗った、マリアはユリカに抱かれ、幸せそうに眠っていた。
狭い通りに横付けで止めて、私がプレゼントを運び入れた。

「豊君に、会えたんですか？」とカスミが蘭に不敵を出した。
「うん、奥さんにも会ったよ、素敵な１６歳だったね～」と満開ニヤで言った。
「日曜日、私が豊君のガードを頼まれました・・特に銀河の奇跡に対して」とマチルダが微笑んだ、カスミが不敵で返していた。
「マチルダ、お願いがあるの・・この服着て、写真撮らせてくれない？店に宣伝用で飾りたいの」とサクラさんが微笑んだ。
「嬉しいです～、こんな可愛い感じは私ですね～」とカスミに輝きニヤを出しながら、試着室に入った。
「しかし、負けず嫌いは見てて楽しいね～」とユリカがマリアを抱いて入って来た。
「ユリカ・・もしかして、もう受けたの？」とサクラさんが驚いて、

微笑んだ。
「はい、エースの頼みは断れません、私もリアンも」と爽やかに微笑んだ。
「最高です、ありがとうございます、ユリカ姉さん」とカスミも輝きながら微笑んだ。
「楽しみだわ～、ユリカの仕事・・やっと見れるのね」とサクラさんも最高の笑顔で言った。
その時マチルダが出てきた、可愛いチェック柄のミニのワンピースを着ていた。
靴も履き替えて、髪を少女っぽくサクラさんが仕上げた。

「完璧だわ、さすがマチルダ・・17歳で充分通用するね」とサクラさんが微笑み。
マチルダが少し威張って、カスミにニヤをした、カスミは不敵に微笑んで返した。
店の外に出て、マチルダがポーズをとっていた、それだけで人が集まっていた。
マチルダは人目も気にせず、笑顔を振り撒いて、輝きを放ちながらモデルをしていた。
女子高生達の視線を集めて、男達の憧れの視線も全て集めていた。

「最高よありがとうマチルダ、その服と靴はモデル代として、持って帰って」とサクラさんが微笑んだ。
「良いんですか、ありがとうございます・・気に入ってました」と最高の輝く笑顔で返した。
サクラさんとカスミと別れて、四海楼でご飯を食べた、私の家出話で3人が盛り上がった。
その3人の食べる量を笑顔で見ながら、マリアも沢山食べた。
ケンメリに乗り、ユリカのマンションに着いた、マリアはぐっすり

と眠っていた。

ユリカの部屋に入り、蘭が満開でチェックしていた、ユリカも爽やかに微笑んでいた。
私はユリカの大きなベッドにマリアを寝かせた、マリアの手を握っていたら3人が覗いていた。
「このベッドルームは、かなり危険な香りがするんですけど」と蘭が満開で微笑んだ。
「雰囲気だけでも危険にしたいのよ、1人で寝るのは寂しいよ」と爽やかニヤで返した。
「さぁ、蘭からシャワーして・・それからゆっくりしましょう」とユリカが促した。
「それじゃあ、お先に～」と蘭が満開でバスルームに消えた。
ユリカとマチルダはリビングに消えた、私はマリアのチェックをしてリビングに戻った。

「しかし、豊という男は、絶対に期待を超えてくるんだね」とソファーに座った私に、ユリカが微笑んだ。
『今まで期待を裏切った事なんて、俺でも見たことないよ』と笑顔で返した。
「私もずっと考えてたけど、リンダも絶対にあの、心のスタートって話、感動するよ」とマチルダが微笑んだ。
『俺も聞いてて、背中を見てたけど・・怖かったよ、本気が伝わってきて』と真顔で返した。
「ちょっと待ってね・・マチルダどうぞ、話止めとくから」と蘭が戻ってきた。
「止めといて下さいよ～、入ってきま～す」と笑顔で言って、バスルームに消えた。
「なんか、高級ホテルみたいで、楽しいですね～」と蘭がユリカに満開で微笑んだ。

「私達は夜街の若い女性達に、夢を見せないといけないと、ユリ姉さんに言われてるからね」とユリカも爽やかに微笑んで返した。
「そうですよね、リアン姉さんの家も凄いですもんね」と蘭が笑顔で返した。

「リアンのは、また特別よ・・シオンの為でもあったから、リアンは今最高の時期が来てるよ」とユリカも嬉しそうに言った。
「そうですよね～、シオンに対して同性では絶対に出来ない事を、平気で誰かさんが、こじ開けるから」と蘭が私に満開で微笑んだ。
「その反動で、かなりの弾丸を撃ち込まれて、瀕死の重傷だったけど」とユリカも爽やかニヤできた。
『死にかけたら、復活させてくれるから・・シオンは』とニヤで返した。

暫く蘭とユリカが雑談をして、私は笑顔でその話を聞いていた。
「ユリカ姉さんは、セリカ知ってますか？」と蘭が聞いた、私は興味津々光線を出した。
「一度会ったけど、凄く自分を隠せる子で驚いたよ・・ゴールドは千鶴の店でしょ？」とユリカが蘭に真顔で返した。
「そうです、千鶴さんの店ですね・・千鶴さんミコト姉さんと同じ歳ですよね」と蘭も真顔で返した。
「うん、ゴールド出す前は、ミコトと千鶴は仲が良かったんだけどね」とユリカも真顔で返した。
『千鶴さんって、どこにいたの、出す前？』と私がユリカに聞いた。
「あんたが、潰さなかった所だよ」とユリカが爽やかニヤを出した。
『ピーチなの・・ピーチを辞めて、あんな大きな店を出したの・・凄いね』と真顔で返した。

「当然スポンサーがいるんだよ、ピーチの武藤も手を出せなかった奴がね」とユリカも真顔で言った。

「繋がるよ～、そのスポンサーは大きな病院の、院長の息子だよ、マチルダが帰ってきたら話してね・・ミホちゃんの話」と蘭も真顔で言った。
「蘭と私とマチルダがいるんだから、これ以上の状況はないでしょ」とユリカも爽やかに微笑んだ。
「私もそれを聞かないと、ＮＹに帰れないと思ってたよ」とマチルダの声が後からした。
マチルダが髪を拭きながら、ソファーに座った、私は３人の視線に押されて話した。
私は感じていた、ユリカが蘭を誘ったのも、この状況を作る為だったと。
そして、蘭もそれを分っていて来たのだと、多分マチルダも分っていたのだと。

『小３の１月１５日、ヒトミの体調が急激に悪化して。
俺は呼ばれたんだよ、小児病棟の看護婦さんが、朝俺の家に迎えに来た。
祭日の朝で家にいたから、ヒトミの病室に駆けつけた。
病室の前に両親と祖父母らしき人達がいて、母親が私を見て泣きながら病室に促した。
俺はヒトミの左手を握って、ヒトミ頑張れよ、俺が寂しいだろって伝えた。
ヒトミは、凄い温度の変化で伝えてきた、最後の力を振り搾って。
【今までありがとう、次に両親が入って来たら逝くね。
でも悲しまないで、私は楽しかったよ、そしてあなたは成すべき事があるのよ。
ずっと見てるから、頑張って・・本当にありがとう】
完璧に伝わってきた、その温度の変化で、原始の伝達方法で。
俺は泣かなかったよ、ヒトミに背中を押されたから、そして病室を出たんだ。

外階段のドアの前で、外を眺めてたら、小児病棟の婦長さんに手を引かれた。
昨日まで空いていた、特別個室に通された、そこのベッドに座っていた。
見た目は可愛い少女、ただ瞳に全く光が無い、６歳のミホだった。
お願いだから、お話ししてあげてねって、婦長さんに言われた。
俺はミホの横に笑顔で座った、それまで障害を持った子とはかなり遊んでた。
でもミホは障害も、病気も持ってなかった、ただ心に大きな傷を抱えていた。
それから毎日、俺の時間はミホに費やした、ヒトミの最後の伝言だと分ってたから。
４年生に上がる、桜が散り始めた頃、ミホの手の温度が変った。
ほんの少しだけど、俺は分ったんだ、ヒトミで徹底的にやってたから。
そしてそれから2週間したら、俺を見る時の瞳が変化した。
そしてミホが教えてくれた、温度の変化と瞳の深さで、見せてくれた。
俺にとって初めての経験だったけど、子供だったから何も違和感を感じなかった。
映像で流れたんだ、美穂の視点の映像で。
ミホが起きて歩き回るんだよ、血の海の中を、兄・父親そして母親の血の海を。
多分４歳位のミホが、母親にすがりつく、そして自分の手の平を見るんだ。
真赤に染められた、手の平を・・その時誰かが目の前に立つ。
大きな大人の男が・・いつもそこで映像が切れた。
俺は確かに怖かったけど、それよりミホが可愛くて。
毎日抱きしめて、伝えたんだよ、もう大丈夫だって。
ミホは少しずつ回復していた、夏前には俺や看護婦さんには笑顔

も出ていた。
言葉も近いと思ってた頃、院長の息子と名乗る医者が来た、刑事を連れて。
俺は絶対に駄目だって言ったんだ、その医者と刑事に。
刑事の方がまともだったよ、大丈夫ですかと何度も医者に確認したから。
そのバカなボンボンと、その取り巻きの若い医者が、大丈夫って言いやがった。
婦長も看護婦も大反対して、院長に相談に行ったが間に合わなかった。
その息子の医者が、ミホに写真を見せた、そしてミホは全てを遮断した。
俺はその医者に殴りかかって、刑事に止められた。
院長が来て、息子を恫喝したが、後の祭りだった。
そして、その息子と若い医師達が、ミホをどこかに隔離した。
ミホの祖父母に嘘を言って、俺から遠ざけた、誰も知らない場所に。
俺はその場所だけは、院長にかけあって突き止めた、必ず近い将来ミホに会いに行くと。
俺が守ってやれなかったから、ミホに辛い思いをさせたから。
ヒトミが最後に命を賭けて、伝えてくれた事だから。
俺にしか出来ないと、見送った仲間達が・・信じてくれるから。
だから絶対にミホに会いに行く、その方法も考えている。
俺には今、最高の女性達が付いているから、絶対に大丈夫。
必ずもう一度強く言ってやる、あのバカな若い医師達に。
机上には無いと、専門書にも書いてないと。
ミホを救い出せるのは、愛しかないんだと・・強く言ってやる。
それが俺の生き方だから、その為の力だから。
その力をリンダが上げてくれたから、マチルダが映像を鮮明にしてくれたから。

ユリさんが見ててくれるから、シオンが俺の間違いを正してくれるから。
カスミが不敵で応援してくれるから、沢山の女性達が見ててくれるから。
マリアが3人娘が、俺の生き方を見てるから。
豊兄さんがその背中で押してくれるから、キングが何でもね～よと言ってくれるから。
そして・・ユリカが俺を支えてくれるから、優しく厳しい愛で。
そして・・蘭が青い炎で守ってくれるから・・本気で愛してくれるから』

ここで限界だった、私は蘭に抱かれて泣いていた、悔しくて泣いていた。

「エース、がんばれよ、私はどっからでも見れるんだから。
あんたが本当に大変な時は、私かリンダが必ず来るからね。
豊も恭子もマキも、全員知っていたんだね、ミホの事を。
そしてエースの後悔も、それでも豊は微笑んだよ。
エースを信じてるんだね、あの3人も・・そして私も信じてるよ。
必ず見せてくれるって、理屈じゃない愛を」

マチルダが私を見ながら、深緑の瞳を潤ませて、優しく言った。

「やるしかないね、私も蘭もそう思ってる。
あなたがこの先に進みたいのなら、避けては通れない。
私は感じてるよあなたの事は、そして蘭がずっと側に付いてる。
これ以上の状況は無いよ、本気でやりなさい。
まずは・・セリカから、セリカが絶対にヒントをくれます。
そして千鶴も、応援してくれる、エースが本気なら」

深海の深い瞳で、ユリカが美しい真顔で言った。
「よし、大丈夫だね・・私が付いてる、どんな事でもきちんと見てる・・恭子と同じ台詞を言うよ、私はあんたの生き方まで愛してるから」と蘭が満開で微笑んだ。
『うん、やってみるよ・・必ず成し遂げて見せる、あの天使に誓いを立てたから』と扉を開けて私を見てる、マリアを見た。
マリアが私に歩み寄り、私の目の前に立って、天使レベル全開になった。
「ちゃっぴー・・えーす」と強く言って、私の両頬に両手を当てた。
私は最高の気分で心が満タンになるのを感じて、マリアを抱き上げた、天使全開で微笑んでいた。
3人がマリアを抱く私を見ていた、私はマリアの笑顔が支えだった。
リョウの時に感じた、マリアが伝えてくれる事が、私の自信になっていた。
3人の笑顔に見つめられて、私は至福の時にいた。

「ユリカ姉さん、和尚様の話・・素敵だったんでしょう」と暫くして、蘭が満開で微笑んだ。
「うん、最高だったよ、でも自分で話すのは照れるよね、エースよろしく」とユリカが爽やかニヤを私に出した。
蘭の満開と、マチルダの輝く笑顔が私を見た。
『俺もこの話は感動したよ、マリアと子猫を・・・』私はユリカの羊水の中の出来事を話した。

「最高の素敵な話しですね、凄く納得できました」と蘭が最高の満開で、ユリカに微笑んだ。
「私、この旅でどれだけの物を、貰って帰るんだろう・・最高です」とマチルダが輝く笑顔で言った。

「私も嬉しかった～、そして三度感動したよ。

羊水の揺り篭、そこに響いた母の子守唄・・エースの言葉に。
私は最初エースを警戒していて、完全に自分を遮断していたの。
だからエースも、最初は生きてる人間として、感情が持てなかったと言ったわ。
それを抱っこでこじ開けて、私の内面に入ってくれた。
私自身も記憶の無い、その深い世界にまで。
ただ水の意味だけを探しに、そして辿り着いた答えが。
羊水の揺り篭、そこに響いた母の子守唄だったの。
私はエースが帰ってから、震えて泣いたのよ、嬉しくて。
感情が止まらなかった、その答えが嬉しくて、その時に少し記憶が蘇ってた。
母の子守唄の記憶が、もちろん内容は分らなかったけど、ただ嬉しかった。
多分、妹も泣いたと思うよ、その最高の解答を聞いて。
そしてその夜、蘭が言った、世界中の全員が否定しても。
私は羊水って叫べると言った言葉、嬉しかったよ、ありがとう・・蘭。
そして分った、それ以降エースが言葉の端々に、常に言ってくれるのが。
ユリカって呼んでくれるのが、嬉しかった意味が、分ったの。
エースは感じてたのね、私の大切な妹の存在まで。
エース、あなたは自分を信じていい、あの解答だけでも私はあなたを信じるよ。
ミホちゃんの事、誰にも出来ない・・あなたにしか出来ないよ。
私と蘭とマチルダは、絶対にあなたを信じてるからね」

ユリカ美しい深海の瞳が見ていた、蘭とマチルダが笑顔で見ていた。
「マチルダ、リンダに報告する事が、多くて大変だね」と蘭が満開で言った。
「はい、全部書いてますけど、報告の時に・・どれだけ泣くんでし

ょう、怖いです」とマチルダも微笑んで返した。
『ねぇ、ユリカ・・覚悟って何の覚悟なの？』とユリカにニヤをした。
「決まってるでしょ、あなた以外の男を好きになる・・か・く・ご」と爽やかニヤで返された。
「多分泣くな・・絶対」と蘭が満開ニヤで私を見た。
「今度は、私の胸で泣いていいよ～・・ホレ・ホレ」とマチルダが輝きニヤで言った。
私は3人の笑顔を見ながら、ウルウルをしていた、マリアを抱いて。
ユリカはこの台詞で、完全に隠した、その本当の覚悟を。
私は2度とその事に触れなかった、寂しくなりそうで。

窓から見える大淀川の雄大な流れが、海へと続く道を示していた。
キラキラと夏の陽に川面が煌き、月の影響を受ける、海の満ち引きの影響を川も受けていた。

「よし、今の話でプレゼントは決めたよ、今日の分は距離を凌駕する・・強い意志があれば」マチルダが私に向き直った。
私は蘭にマリアを渡した、蘭は満開で受け取った。
「もう一度地球を出して、月から」とマチルダが真顔で言った、私は目を閉じて地球をイメージした。
あの美しい地球がすぐに現れた、段々遠くなり、足元に無機質な月の表面を感じた。
「生命の誕生・・その第一歩、月の影響・・海の満ち引き」とマチルダが静かに言って、私の両頬に両手を当てた。
私は心も頭も空にしていた、いつもの映画を見る感覚になった。

流星がいくつも流れた、地球に落下して、そこが爆発して、黒煙が上がっていた。
青い海が何度も大きくうねり、地上を侵食していた、そして光速で

私の視野が地球に降りた。
アフリカ大陸を見渡す地点で止まった、そして後から強力な力を感じた。
海に白波が立った、月の力が完全に届いていた、月と地球の永遠の関係を示唆した。
海に透明な無数の何かが発生して、それが徐々に増えだした、生命の誕生だと感じた。
そこで映像が切れた、マチルダが手を離した。

「ここまで、これ以降はあなたが感じて、これは私の考えだから事実と異なるよ」とマチルダが輝きながら微笑んだ。
『うん、勉強するよ・・マチルダありがとう最高だよ』と笑顔で返した。
「また良い物貰ったんだ、良かったね～」と蘭が満開で微笑んだ。
『蘭、慰安旅行の時・・夜寝る前、若草公園思い出した？・・俺、蘭の視点で感じたよ』と微笑んだ。
「うそ・・うん、思い出してた・・なんか嬉しいね、いつも一緒みたいで」と蘭が満開で笑った。
「蘭姉さんは、本当に凄いですね～、最高ですよ・・普通は嫌か、気持ち悪がります」とマチルダが微笑んだ。

「そうなの・・どうしてかな～？
私はユリカ姉さんが、この子を感じてくれてる事もすごく嬉しいよ。
当然、私の事も感じてくれるし、それが嬉しいの。
能力とかそういうの、私は分からないけど、でも絶対に否定はしないよ。
事実として、私はユリカ姉さんの、羊水の揺り篭で救われたし。
それに私もたまに何かを感じるし、この子を若草公園で見たときも感じたよ。

ハルカを一番街で見つけた時も、感じたの、出会う為にそこにいるって。
私は今やっと乗り越えたから、今は本当に心に従順でいられる。
周りの全ての人がいたから、誰一人欠けても、ここには来れなかったよ。
もちろんリンダもマチルダも含めて、だからこの子が私を感じるなら。
最高だよ、私には隠すものなんて無いから、全てを見せたいから」
ユリカの最高の爽やかな笑顔と、マチルダの深緑の瞳が見ていた。
私も嬉しくて蘭を見ていた、蘭に抱かれたマリアが天使全開で蘭を見ていた。
「蘭・・ありがとう、最高の同調を見せてくれて・・女性で初めて感じたよ」とユリカが微笑んだ。
その背景の大淀川が、いつの間にか停滞の時間が来ていた。
河口からの、潮に押され始めた、月の影響を受けて満ちてきていた。
マチルダの言葉を思い出していた、【距離を凌駕する、強い意志】という言葉を。
マチルダが、父の伝言を達成する為に、身に付けた力。
【壁を越えろ、それだけが望みだ・・マチルダ】その父の伝言に対する１つの答え。
マチルダは常にイメージで越えている、壁も山も海も・・国境も。
マチルダのそれの基点は月だった、マチルダは持っていた内蔵型ＧＰＳを。
感覚的バード・アイ、常に自分を上からも後からも見れる。

自分の存在を的確に地球上に表せる、その能力に驚愕した。

月に到達したばかりの時代である、ＧＰＳなど漫画の中にも無かった。

だからこそ到達できたのだろう、その研ぎ澄まされた感覚で。

進歩が常に新しい【便利】を提供して、人は何かを失ってしまうのだろうか？

最後の大切な物まで失うのだろうか、コミュニケーションの基本まで。

人と会って会話をする、相手の目を見て、息使いを温度を感じる事さえ。

最新型が最良品だとは限らない、必要が無ければ無くなってしまう。

人の感覚も感性も・・多分、愛することさえ・・必要が無くなれば・・。

流星のセリカ

流れが停滞している川面を見ていた、河口が近く、海の満ちる時が来ていた。
水鳥が川面を悠々と泳ぎ、小船から投げ網漁をしていた。
その当時、大淀川もまだまだ美しかった、水面の輝きも青空も輝いていた。

3人が女性らしい話で盛り上がってきたので、私はシャワーを借りた。
ユリカの家のシャワーは温度調節も、水量も申し分なく、シャワーを楽しんでいた。
私はケンメリに常時置いていた、着替えを持って来ていたので。
それに着替えて、リビングに戻った、3人の笑顔と笑い声が溢れていた。
真ん中でマリアも笑顔で、プリンを食べていた、私はソファーに笑顔で座った。

「洗濯物、置いて帰って良いのに、私が洗ってあげるから」とユリカが爽やかニヤで言った。
『駄目～、色んな経験を急いですると、俺の寂しい時も早くなるから』とニヤで返した。
「その時は、私とカスミとシオンだけじゃ無理だから、マチルダも来てね」と蘭が満開で微笑んだ。
「もちろん、リンダと2人で来ますよ」と輝くニヤで返した、蘭も満開ニヤで頷いた。
『楽しんでるね・・蘭とマチルダ、プラス1点』とウルで言った。
「私とユリカ姉さんの差は？」と蘭が楽しそうに満開で聞いた。
『6点差で、蘭が3位』と笑顔で返した。

「カスミがまた、独走状態に成りつつあるのね」とユリカが微笑んだ。
「カスミの愛情表現は、紙一重ですから・・エースで試してるんでしょうね～」とマチルダも楽しげだった。

「それでも、【永遠の憧れ】なんて呼ぶんだから、よっぽどカスミが可愛いのよね～」と蘭が満開ニヤをした。
「カスミは暫くはエースから離れられないよ、さぁ教えて・・カスミと青島に行った時に、カスミに提示した解答を」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「そうだよね～、私もそれは聞いてない、カスミは完全に乗り越えたから・・もう話してくれるよね」と蘭も満開で微笑んだ、マチルダも輝く興味津々光線を出した。

『カスミとの、下着姿の衝撃の出会いの時に感じた、ハルカに感想を聞かれたから。
心が戦闘態勢に入った、そうしないと生き残れないと感じた、と言ったんだ。
それほど迫力のある容姿だったと、答えたんだよ。
そして偶然を装って来た、カスミとドライブしたんだよ、冗談を言いながら。
そしてカスミにも聞かれた、ハルカに言った感想を、そして教えたんだ。
もちろんその時は、カスミの男性恐怖症なんて知らなかったし。
でもカスミの輝きが、拒絶を示してると思ってた。
そしたらカスミが、近寄り難いって事なのかと聞いてきた。
俺は正直に感じたままを、言葉にして伝えたんだ。
良い銃は鉄とは思えない、妖しい光で輝くらしいと。
作り手が精度を追求して、辿り着いた時に妖しい輝きも身に付くんだと。

でも銃の精度って、結局殺傷能力とかだから、妖しく光るんじゃないかって。
それと同じ妖しい輝きをカスミに感じたから、戦闘態勢って言葉が浮かんだと。
それでカスミが考えたから、俺はその妖しい輝きは悪い事じゃ無いと言ったんだ。
その妖しい輝きは突きつけてると、本気なのかって突きつけてるんだと。
だから中途半端な男じゃ、カスミの内面には挑戦出来ないじゃないかって。
そして、カスミを青島で抱き上げた、沢山の若者達の前で、俺は自慢したんだよ。
カスミを、その若者達に、若者にも届いてない俺の、子供染みた考えだった。
でもそれが、俺とカスミの距離を縮めたんだね。
その時の経験が、ユリカとナギサの時に役立ったよ。
カスミの強い意志が教えてくれたから、外側の輝きに惑わされるなとね』

3人の笑顔を見ながら、笑顔で締めた。
「なるほどね～、それで内面の光にこだわったんだね・・カスミ」と蘭が満開で微笑んだ。
「それを経ての、天神土下座なら・・カスミは離れられないね」とユリカが爽やかに笑った。
「そして称号でしょ、銀河の奇跡・・永遠の憧れ・・カスミの奴、幸せすぎですね～」とマチルダが微笑んだ。
カスミの話で私は気分が上昇してきた、ユリカも蘭もそれが狙いだったのだろう。
4時を少し過ぎた時に、ケンメリで出かけた、蘭は靴屋の駐車場に

止めた。
３人がＰＧに行くと言うので、私は別れて花屋にマリアを抱いて出かけた。
花屋には知恵さんと、店主のトキ婆さんがいた、トキ婆さんがシワシワ笑顔でマリアを抱いた。
「今日は何を、１７本にするの？」と知恵さんがニヤで言った。
『イメージはピンクの薔薇、淡いのがいいんだけど・・蕾で』と微笑んだ。
「了解、良いのがあるよ」と言って見せてくれた、私も笑顔で頷いた。
『後で取りに来るよ、おいくら？』と笑顔で聞いた、千恵さんがまた格安にしてくれた。
トキ婆さんと、千恵さんに礼を言って、ＰＧに向かった。

通りを歩いていると、薬局から見た顔が出てきた、悪戯な原作者を感じた。
『いけないな～、２０００ＧＴちゃん・・避妊具そんなに買い込んで』と笑顔で声をかけた。
「もう、びっくりした～・・２０００ＧＴなんて名前付けないよ、セリカだよ」と微笑んだ。
その時初めて瞳の光を見た、輝きの移動の早さに驚いた、早すぎてかなりの長さの尾を引いた。
『セリカ・・可愛いね～、もしかしてＮＯ１とか』と笑顔で返した。
「ありがとう、でもそこまでは無いよ・・頑張ってるんだけどね」と笑った、濃い茶の瞳の中で光が発せられ、それがキラキラと尾を引いて流れる。
そしてユリカと同じぐらいの小さな体だったが、存在感が凄かった。
小さな顔の作りも、少女の香りが強く残り、笑顔になる時の唇の動きが可愛かった。
ホノカとはまた違う可愛さだった、そして何よりその固さに驚いて

いた。
何も寄せ付けない、心の防御壁のような存在を、瞳の中に感じていた。

『それで、体調悪いの？・・無理したら駄目だよ』と店の方に歩き出した、セリカの横に並んで微笑んだ。
「包帯買っただけだよ・・少し怪我しちゃって」と私を見ながら、私に抱かれ眠ってるマリアを見ていた。
最高の笑顔をマリアに向けて微笑んだ、至近距離のセリカの可愛さに圧倒されていた。
「可愛いね～、良いな～子供欲しいな～」と笑顔で言った、光が増していた、その輝きの速さに息を飲んだ。
『俺、未経験だから、優しく教えてね』とニヤで返した。
セリカは声を出して、楽しそうに笑った、その時手首の包帯が見えた。
私はビルの下で、セリカの腕の包帯の上を掴み、エレベーターに乗って最上階を押した。

『セリカ・・怪我したって・・どうして、何でなの？・・教えてセリカ』とセリカに詰め寄った。
「関係ないでしょ・・私はＰＧじゃないんだよ」と緊張気味にセリカが答えた。
『関係なくないよ、俺はセリカと話して、そして今、セリカの事を知りたい・・辛いことは話さないで良いから』と優しく囁いた。
セリカと私はマリアを挟んで、至近距離で見つめ合っていた、不思議とセリカの拒絶を感じなかった。
その時エレベーターが開き、セリカが慌てて頭を下げた、リアンとシオンが立っていた。
私はリアンにマリアを預けた、リアンが状況を感じて、私に店の鍵

を貸してくれた。
笑顔のリアンと心配げなシオンを、セリカと見送って、セリカの手を引いて、ローズに入った。
セリカを奥のＢＯＸに座らせた、セリカは窓からの眺めを見ていた、落ち着いてる顔だった。
私はジュースを２本出して、ＢＯＸのセリカの前に笑顔で座った。

「噂以上のおせっかいなんだね・・私が可愛いからかな？」と可愛く微笑んだ。
『うん、セリカが可愛いからが１番で、将来の楽しみを作り上げるのに、必要だと感じたから』と笑顔で返した。
「私があなたの・・将来の楽しみ？」と真顔で返してきた、可愛かった、そして光が流れ続けた。
『流星だねセリカ・・素敵だね輝きが流れる、早すぎて尾を引いてるね・・流星のセリカ』と笑顔で言った。
「ふ～ん、初めて言われたよ・・嬉しいもんだね、いつか称号にＵＰするかしら」と楽しそうに笑った。
『セリカ次第だね・・心の防御壁が、固すぎる感じがするから・・それは守ってるの？セリカ』と真顔で言った。

「いいわ・・実はゴールドのママと、リョウ姉さんが仲が良くて。
あなたの事を聞いていたの、リョウ姉さんの変化に驚いて、銀河の奇跡に感動して。
ママも凄くあなたに興味を持ってるよ、私もだけどね。
挑戦させてあげるよ、私はセリカ・・とっても難しいよ」

可愛く微笑んだ、その時瞳の深さが変った、茶の部分が黒く変化した。
私は立ち上がり、セリカの横に屈んで、セリカを笑顔で見た。
『じゃあ、俺のやり方で・・役得です』と微笑んで、優しくセリカ

を抱き上げた。
セリカは自然に、私の首に腕を回して、笑顔で抱き上げられた。
私は不思議な重みを感じていた、感覚的にはユリカと同じ程度の重さと思っていた。
だがセリカは体重じゃない、体の中心点に違和感のある重みがあった。

『ねぇ、セリカ・・自分で重くないの、その鋼鉄製の心の防護服』と間近のセリカに真顔で言った。
「自分で作ったんだけど、脱ぎ方が分らないのよ」とセリカも真顔で答えた。
『恋愛は・・きちんと出来るの？セリカ』と意識して笑顔で聞いた。
「きちんとは・・無理なの、自分を隠してしまう・・まぁ大概の男は体目当てだから、それで良いみたいだけど」と真顔で答えた。
『ねぇ、セリカ・・辛いなら目を閉じて、俺もやめるから・・なぜ自分を傷つけるの？』と窓の外を見て聞いた。
「止まらないの・・衝動が襲って来るの・・自分でも理解出来ないものなの」と虚空を睨んで言った。
『セリカ、目を閉じて・・絶対に俺はセリカを傷つけないから、信じてね、セリカ』とセリカの目を見て微笑んだ。
セリカも可愛く微笑んで、頷いて瞳を閉じた。

私はソファーにセリカを抱いたまま座り、引き寄せてセリカの左腕を取った。
セリカは微かに震えたが、閉じた目に力が入ってないので続けた。
私は手首の包帯を、ゆっくりと解いた、そして現れた手首を見て凍った。
細い傷が、数えれるだけで7本入っていたのだ、私は優しくその傷に指を這わせた。
その時にセリカが、震えた、そして映像が流れた。

セリカが全裸で、浴室で泣きながら、剃刀を手首に当てていた。
洗面所の鏡で、泣いている自分を睨みながら、そして叫んだ鏡に向かって。
【あんたなんか、大嫌い！】と叫んで、手首に剃刀を這わせた、真赤な鮮血が滴った。
そしてセリカは湯の張った浴槽に、飛び込んで腕だけを出して、瞳をを閉じた。

『セリカ、今日はここまでにしようね・・辛かったね、でも自分をあんたって呼んだら駄目だよ』とセリカを抱きしめて、耳元に囁いた。
その時セリカの腕に力が入った、大きく震えて泣いていた、私は強く抱きしめた切なくて。
セリカの震えが治まるまで、強く抱いて温度で伝えた。
【もういいんだよセリカ、大丈夫だよセリカ】と優しく伝えていた。
セリカが静かになって、寝息を感じた、嬉しくて顔を見た。
安らかで可愛い寝顔に安心した、そして考えていた、どうして自分が嫌いなのかと。
心の防護服を自分で作り、そしてそれを、脱げないと言った時の瞳を感じていた。

《焦ったらいけないね、ユリカ・・セリカ、本当は、自分が大好きなんだね》と心で囁いた、強い波動が返ってきた。
私はただセリカの手首を握り、抱いていた、可愛いセリカを見ていた、何も考えずに。

「ありがとう、本当に気持ち良いね・・最後まで付き合ってくれるの？」と暫くして、瞳を閉じたままセリカが言った。
『もちろん、俺が出来る事は全部させてね・・そして約束してセリ

カ、その間は絶対に自分を傷つけないと』と優しく耳元に囁いた。
「約束するよ、エースが私を見ててくれる内は、大丈夫な気がするよ」と微笑んで、目を開けた。

『よし、約束の儀式をします・・誓いの儀式』とニヤニヤで言ってみた。
「可愛い事も、言えるのね」と輝きを走らせて、瞳を閉じた。
私は少し緊張して、セリカを引き寄せて、唇を浅く重ねて伝えた。
《セリカ、本当の笑顔の道を2人で探しに行こうね》と伝えた、セリカも唇で伝えてきた。
《私にも、その道がまだどこかに有るのかな～？》と感じた。
私は唇を離し、セリカを見つめた、瞳を開けたセリカの瞳に光が走った。
『セリカ・・必ずあるよ、心配ないよ』と笑顔で言葉で伝えた。
「うん、有るよね・・きっと」と笑った、その圧倒的可愛さに触れて、私は嬉しかった。

ジュースの空き瓶と、グラスを片付けて、セリカに手を出した。
セリカが笑顔で立ち上がり、腕を組んで来た、私も笑顔でセリカを見ていた。
エレベーターに乗って、3階と1階を押した。
『近い内に、セリカの仕事を見に行くよ、指名して・・でも入れてくれるかな？』と笑顔で聞いた。
「あなた案外自分の事分ってないのね、PGのエースを入れない店なんて、無いでしょ」と可愛く微笑んだ。
『良かった～、じゃあ行くね・・セリカに逢いたいから』と笑顔で言った。
「絶対だよ～、楽しみにしてるから・・凄い自慢になるし、流星のセリカって指名してね」と微笑んだ、輝きが光速で流れた。
『了解・・絶対無理するなよ、流星のセリカ』と微笑んだ時に3階

に止まった、笑顔のセリカと手を振って別れた。
ＰＧに向かっていると、女神の団体が歩いて来た、私は笑顔で立ち止まった。
ユリさん、リアン、ユリカ、蘭、ナギサ、マチルダ、カスミ、シオン、レン、ハルカの集団だった。
怖いほどの迫力があった、夜街関係者が、遠巻きに見ていた。
「本当に、すぐにどっかに消えるんだから」と蘭が私に満開で微笑んだ。
『場所どこなの？』と笑顔で聞いた。
「〇〇屋だよ・・どうしたの？」と蘭が満開で聞いた。
『皇帝に着替えてくる、先に行っといて』と笑顔で返して、走ってＰＧに向かった。
「そっか～、ミサキのデビューか」とカスミが笑顔で言った、私は右手を上げて走っていた。

ＴＶルームには、マダムと松さんと３人娘が、伊勢海老の味噌汁を食べていた。
『お味はどうでしょう？』と笑顔で聞いた、全員が笑顔で見た。
「最高じゃよ、美味いよ」とマダムが微笑んだ。
「なぁ、エース一度だけ言わせてな、本当にユリとマリアをありがとう」と松さんが真顔で言った、私は笑顔で頷いてロッカーに行った。
皇帝に着替えて、出かけようとした、エミが最高の笑顔で言った。
「美味しかったよ、また何か作ってね」とエミが少女の輝きで微笑んだ。
「私も～」とミサが笑顔で言って、「わたちも～」とマリアも天使全開で言った。
『了解、今夜も良い子にしとくように～』と笑顔で返した。
「は～い」と言う３人娘の元気な声に見送られ、通りに出て足早に

歩いた。
店の入口で、突然後から腕を組まれた、ミチルだった。
『なんか、会う度に綺麗になるね、ミチル』と部屋に案内されながら、笑顔で言った。
「嬉しいね～、五天女だから、気合が入ってるんだよ、最近は」と妖艶に微笑んだ。
部屋を開けると、荘厳な景色が広がった、その迫力に少し押された。
大きなテーブルに先ほどの、メンバーが笑顔で座っていた。
ミチルをユリさんが隣に誘い、私は蘭とマチルダの間に座った。

「4人揃うと、やっぱり迫力がありますね～」とカスミが微笑んだ。
「マシンガン構えて、死ぬ気でおいでって言うほうが、迫力あるよ」とミチルがカスミに妖艶ニヤを出した。
「あれは必死のアドリブでした、前のリョウとホノカが、あそこまでやると思わなかったから」と輝きニヤで返した。
「多分、ホノカも前のリョウが、カモーン・チェリーボーイって言うとは、思ってなかったよね」とリアンが獄炎ニカで言った。
「それを受けての、いや～ん恥ずかしいだから・・ホノカもやりますね～」とユリカが爽やかニヤで言った。
「結局、全員エースに対しての、コメントに聞こえますね～」とマチルダがカスミに輝きニヤを出した。
「裏で3人で話したの、ぶっ潰そうって、こんなイベントなんかって、勝敗は誰が1番エースを楽しませたかで決めようって、危なかったよ」とカスミが不敵を出した。
「結局、今回は引き分けですね・・エースは銀河の奇跡の称号を贈ったのだから」とユリさんが薔薇で微笑んだ、カスミも笑顔で頷いた。
「ユリ、料理が揃う前に、1つ相談があるんだけど」とミチルが真

顔で言った。
「怖いわね～、ミチルのその顔は・・何かしら？」と薔薇で微笑んだ。
「ホノカが称号を貰って、本気でやろうと決めたみたいで、私も嬉しくて。
クラブも経験させてやりたいんだよ、あの子の将来の為にも。
週に2日で良いから、預かってくれないかね、ＰＧで」
ミチルは真剣にユリさんに言った、ユリさんも薔薇で微笑んだ。
「ホノカちゃんを1番知ってる、エースどうかしら？」と私に薔薇で微笑んだ。
『最高でしょう、ホノカなら・・ただ気合入れなおさないと、お客が流れますよ～』とニヤで返した。
「ミチル、決定ですね、曜日を決めて、ホノカちゃんを私の所に来させて」と薔薇で微笑んだ。
「ありがとう、ユリ・・ありがとうエース」とミチルが微笑んだ。

「くそ～、そのニヤは・・もしかして計算通りなのか」とカスミが私に全開不敵を出した。
『まさか・・でも楽しそうだね、カスミ』とニヤニヤで返した、カスミが笑顔で頷いた。
「本当にカスミが可愛いんだね・・少し嫉妬したよ、カスミ」とマチルダが輝きながら微笑んだ。
「そっか～、してして、嫉妬」とカスミが不敵を出した。
「や～めた、エースブロンドの方が可愛いって、言ったもん」と輝き不敵で返した。
「私とユリカ姉さんを差し置いて、何の争いしてるのかな～」と蘭が満開ニヤで言った。
「その脅しは怖すぎます」とカスミがウルをして、マチルダもウル

ウルをした。
全員の笑顔があった、そして強力なメンバーの加入が決まった。
ホノカの真の実力に、９人衆の目の色が変る、その迫力の有るホンワカ・ホノカに触れて。
最高の季節が間近に迫っていた、最強のメンバーが奏でる、最高の時が。

ミチルは３年後、ホノカに店を譲り、結婚して引退をする。
ホノカは２３歳で、一国一城のオーナーママになる、それもトップのビルの最上階の。
それから５年、常にトップを走り続ける、ジンに見守られて。
リアンのローズリップに、一歩も引けを取らなかった。
私が強く絡んだ中で、若手で唯一その心に入らなかった、ホノカ。
本当に芯の強い女性だった、そして素晴らしい心の処理能力を持っていた。
自分の分析が完璧に出来ていた、そして視野が広かった。
優しさが溢れ出す感じで、側にいるだけで楽しかった。
あの時の私の腕を掴んだ、ホノカの顔は忘れられない。
美しく可愛く輝いて、そして圧倒的に瞳が優しかった。

ホノカ・・君が称号【銀河の奇跡】を大切にしてくれたのが、何よりも嬉しかったよ。

ホノカが、ジンに遠慮して、私に入らなかったの？って聞いたよね。

違うよホノカ・・ホノカは俺には、絶対的憧れだったんだよ。

だから入ろうとも思わなかった、大切な存在だったから。

心の芯がブレない人だったから・・ずっと憧れていたかったんだよ。

今でも・・憧れてるよ・・銀河の奇跡の3人は・・大切な存在です。

カスミとホノカとリョウと・・マチルダが・・輝いてるよ。

今でも・・・あの夜街の夜空の下で・・・。

月のマチルダ

まだ陽の高い金曜日の夕方、女優達が集まった。
大きな座敷に、大きな一枚板のテーブルを囲んでいた。
全員が笑顔で話していた、料理も大量に並んだ、飲み物も揃った。

「それでは乾杯しましょう、マチルダ本当によく来てくれました。
あなたに受ける影響は、とても素敵な事だと感じています。
今後も羽を休めに、いつでも帰って来てね、歓迎します。
リンダとマチルダの想いが、少しでも届く事を祈って・・・乾杯」

ユリさんが薔薇で言って、「乾杯」と全員が笑顔で続いた。
マチルダが最高の笑顔を見せた、全員が笑顔で拍手をした。
「明日、さっきの件をホノカに伝えに行かせるよ、ホノカが1番外見的衝撃受けそうだね、マチルダに」とミチルが妖艶に微笑んだ。
「本当に楽しみです、銀河の奇跡に全て会えますね」とマチルダも輝く笑顔で返した。
「さぁ、若い人は沢山食べてね・・食が基本ですから、全てのエネルギーの」と薔薇で促した。

「ユリカ・・私達は若い人には入ってないよ」とユリカを隣で見ている、リアンが獄炎二ヤで言った。
「私、リアンみたいに、すぐお肉になったりしないから、大丈夫だわ」と爽やかに微笑んだ、美しかった内面の輝きが溢れていた。
「どうして、私は体が丈夫で、すぐお肉が付くんだろう・・お熱も出ないし」とリアンが私に獄炎ニカで言った。
『素敵な事だね、リアン・・俺も楽しみに待ってるのに』とリアンにニヤで返した。
「その時は私も行きます・・リアン姉さんは、危険過ぎるよね～、

シオン」と蘭が満開で微笑んだ。
「はい、リアンはすぐにトウッ～て飛び越えるから、大変危険です」とニコちゃんで返した。
「シオンまで・・私の事を・・エースの意地悪」と嬉しそうにリアンが言った。

『リアン、俺は絶対に1度はリアンの添い寝をするよ・・シオンが世界を見る為に旅立つ時。
それを空港で見送った夜は、リアンの側にいるから。
一晩中ヨチヨチしてやるから、俺もリアンの胸で泣かせてね』

真顔でリアンに言った、リアンも美しい真顔で私を見ていた。
「約束だぞ・・その約束がないと、シオンを見送れないよ」とリアンが炎を上げて、真顔で言った。
『もちろん、その時に俺で良ければ、絶対にリアンの側にいるよ』と笑顔で返した。
「先生・・ありがとう、シオン最高に嬉しい」とシオンが目を潤ませて私を見た。
「その時は、私も許可しますよ、そして私はユリカ姉さんの家に泊まらせて下さい」と蘭が満開で微笑んだ。
「もちろん、状況をチェックして、危険な時は2人で乗り込みましょう」とユリカがリアンに爽やかニヤを出した。
「ユリカがいたか～、ユリカを大きくリードしようと思ったのに」とリアンも獄炎ニカで微笑んだ。
全員の笑顔があった、ユリさんも優しい目でリアンを見ていた。
「そうやって、かなり前から外していくんだね・・さすがだね最後の挑戦者」とミチルが私に妖艶に微笑んだ。
「シオンに対する特別は、また違いますからね～。

ここにいるＰＧの若手は、全員特別みたいだから。
カスミのは説明は不要だし、レンは自分で腕を掴んで連れて来たし。
そしてハルカに対する物は、また全然違うよね、ハルカとミサキは。
そして全く違う特別が、リンダとマチルダ。
将来の何を見てるのか、私でも分からないですよ。
ただ、相当に楽しい事だとは、感じています」

蘭が満開で、ミチルに微笑んだ、ミチルも最高の笑顔で頷いた。
「何か、余裕が出てきましたね～・・蘭は」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「今日、ミコト姉さんを見る目が怖かったよ・・蘭」とナギサが華やかに微笑んだ。
「ばれてたの、滅多に会えないから・・必死で研究したのに」と満開ニヤで返した。
「怖い位の、負けず嫌いだな～」とカスミが蘭に不敵を出した。
「銀河の奇跡に、言われたくありません・・負けず嫌いトリオに」と満開ニヤで返した。
カスミが不敵ウルをして、全員が笑顔で見ていた。

楽しい話題で、箸も進み若手がかなり食べた、カスミとマチルダを筆頭に。
７時が過ぎた頃、解散になった、ユリさんが１人２０００円徴収した。
マチルダの分と足らない分を、ユリさんが出して、私の分をミチルが出してくれた。
私は四天女と魅宴に行くので、店を出た所で蘭達と別れた。
蘭が靴の箱の入った、袋を手渡した。
「ミサキのお祝い、私とナギサから」と満開で微笑んだ、後でナギ

サが華やかに微笑んだいた。
『了解、渡しとくよ・・マチルダ待っててね、今夜は良い所に連れて行くから』とマチルダに微笑んだ。
「楽しみに待ってるね、ありがとう」と輝きながら微笑んだ。
私は四天女とも別れて、花屋で花束を受け取り、魅宴に向かった。
キングとエレベーターで一緒になった、キングはご機嫌な笑顔だった。
魅宴の入り口で、大ママも含めて、五天女が揃って談笑していた。
キングを見て、全員が最高の笑顔で、挨拶をした。
大ママが戻り、すぐに店に通された、魅宴は２０人以上の女性が揃っていた。
キングと四天女の来店を見て、一気にフロアーに緊張が走った。
「最高の状況で、ミサキの船出をさせてやれる事が、私は本当に嬉しい。
全員で鍛えてやってくれ、ミサキにも言うよ、ユリがハルカに贈った言葉を。
ミサキの真価を問おう、舞台に上がるのか、裏方なのかを。
これからの、仕事で見せてもらおう・・その真価を」
大ママが女性達に強く言った、女性達も全員が真剣に聞いていた。
「はい」と女性全員で返事をして、拍手をした。
ミサキが純白のドレスで、ミコトに連れられて、フロアーに登場した。
四天女とキングの姿を見て、ミサキがグッと力を入れて、深々と頭を下げた。
その美しい姿を見て、私は受付のテーブルで、メッセージカード書いた。

【青島で閉じ篭もってた少女へ
あの時の凛とした背中を、忘れられない、その確かな淡い輝きも。
自分に対して厳しい生き方も、そして大きな優しさも。
トップを目指せ、その淡い光のままに・・常に側で見てる。
通り地蔵の前で、いつでも待ってる。　若草公園のベンチより】

そう書いて花束に付けた、そして前に進んだ、大ママが私を笑顔で見た。
「ミサキ、挨拶をしなさい」と大ママが促した。
「やっとこの場所に立てました、閉じ篭もっていたあの時が遠い過去のようです。
沢山の素敵な女性の背中を見ました、その背中が教えてくれました。
後悔も涙も・・全て背負って、前に進もうと。
もう私に迷いはありません、目指すべき世界が見えているから。
まだまだ未熟で足りない部分が、多いと感じています。
皆さんのご指導ご鞭撻のほど、今後ともよろしくお願いします」
ミサキは女性達を見て、最後にＢＯＸのキングと四天女を見て、美しい真顔で深々と頭を下げた。
大ママが私を目で招いた、私はフロアーに上がりミサキの前に立った。
『ミサキ、綺麗だよ・・淡く輝いてる、ミサキらしく頑張れ。
俺は自分で稼いだ金で、ミサキに贈るよ、１７本の淡い薔薇を』
笑顔でミサキを見て、花束を差し出した、ミサキも最高の笑顔で受取り。

ミコトに花束を預けて、私に抱きついて、耳元に囁いた。
「もう1つプレゼントして、もう一段上げて、今ここで」と囁いて、瞳を閉じた。
私は優しく抱き寄せて、ミサキに唇を重ねた、静寂の中、唇で伝えた。
《ミサキ・・がんばれ、ずっと見てるから》と伝えていた。
唇を離し、ミサキを見た、最高の笑顔で輝いていた。
「よし・・ミサキ、ＢＯＸが待ってるよ、一人で行きなさい」と大ママが促した。
ミサキはＢＯＸにもう一度深々と頭を下げて、ＢＯＸに向かった。
女性たちが全員、笑顔の拍手で見送った。
フロアーの奥の、ハルカの涙の横に、ミサキの母親の涙があった。

私は大ママの横に並んで、ＢＯＸに挨拶をするミサキを見ていた。
笑顔が溢れていた、キングの横にミサキが笑顔で座り、それを四天女が笑顔で囲んだ。
花束のメッセージを読んだミコトが、私に微笑んだ。
私も笑顔で返した、ミコトが花束を母親に預けた、母親が私を見て微笑んだ。
私も笑顔で返して、ハルカを手招いた、ハルカに蘭とナギサの贈り物を託して。
ＢＯＸの後からキングに挨拶をして、ミサキに微笑んで、魅宴を出た。
ミコトが見送りに来て、私に最高の笑顔を向けた。

「危なかったよ、さすがにウルウルしたよ」とミコトが余裕で微笑んだ。
『まだまだ・・ミコト楽しもうね、素敵な勝負を』と笑顔で返して、エレベーターに乗った。
「いつでも待ってるから・・たまには私を指名してね、日曜も楽し

みにしてるよ」とミコトの笑顔に、笑顔で答えた時に、扉が閉まった。
私は最高の気分で、通りに出た、そしてローズのビルのエレベーターに乗り、3階を押した。
8時を少し過ぎていた、ゴールド・ラッシュの受付に笑顔で向かった。
『お酒飲まないから、少し良いですか？』と受付の女性に笑顔で言った。
「もちろん、ご案内します」と笑顔で返されて、若いボーイがやってきた。

私はその夜の最初の客だった、1番奥のBOXに通された。
「ご指名は、誰かありますか？」とボーイが笑顔で聞いた。
『流星のセリカちゃんを、お願いします』と笑顔で返した、ボーイも笑顔で頷いた。
ゴールド・ラッシュはPGの半分程の広さで、明るい感じの店だった。
美しい20代半ばの女性が笑顔で近づいてきた、私も笑顔で返した。
《千鶴・・やっぱり綺麗だ、雰囲気もあるな～》と思った、強い波動が返って来た。

「ママの千鶴です、最高の嬉しい来店ですね」と美しく微笑んだ。
『PGの小僧です、よろしく千鶴ママ・・綺麗ですね～』と立って笑顔で頭を下げた。
「噂通り、正直なのね」と笑顔で返しながら、隣に座った。
「セリカ、すぐ来ますから・・ありがとう、セリカの変化に驚きましたよ」と笑顔で言った、明るさが輝く感じだった。
『何もしてませんよ、セリカが可愛いから、興味を持っただけですよ』と微笑んで返した。
「今、裏でセリカ大変な状況かも、皆に囲まれて」と楽しそうに笑

った。
『千鶴ママ、若いですね～、今までミコトに会ってたから・・同じ歳なんでしょ、ユリカに聞きました』と笑顔で言った。
「嬉しいね～、最高です・・凄い名前がどんどん出てくるし」と微笑んで返された。
その時、奥からセリカが歩いて来た、最高の可愛い笑顔で近づいた。
「本当に約束を守ってくれるのね、ありがとう」と笑顔で頭を下げた。
『絶対に守るよ、セリカ・・俺はセリカを見てるよ、誓いを忘れなければ』と隣に座るセリカに微笑んだ。
「心配しないで、私にも大切な誓いだから・・絶対に衝動に負けたりしないよ」と流星で輝きが流れた。
「そこまで行ってるの、ほんの数時間で」と千鶴が驚いて私を見た。
「ママ、数時間も無かったです、ほんの1時間で」とセリカが千鶴に微笑んだ。
「私も今度、抱っこをして欲しいな～」と千鶴がニヤで言った。
『もちろん、千鶴ママなら、こっちからお願いします』と笑顔で返した。
「約束よ」と笑顔を残して千鶴が、ＢＯＸを後にした。

『良い店だね、セリカ・・安心したよ』と笑顔で隣のセリカに言った。
「うん、ママも素敵な人だし・・ねぇ今度、ＰＧ見せてよ」と可愛く微笑んだ。
『いつでも良いよ、俺がいるときなら』と笑顔で返した。
「嬉しいね～、あのユリさんが作った店が、見てみたかったの」と笑顔で返した、その可愛さと輝きの流れに見入っていた。
『セリカ・・俺、セリカに本気だから、信じてね・・そしてシオンとセリカの時代を感じたよ』と真顔で言った。

「私がシオンと肩を並べられると、本気で思ってるの？」とセリカも真顔で返してきた。
『思ってるよ、俺も・・シオンも』と微笑んだ。
「了解・・私も負けないよ、自分に・・そして挑戦するね、銀河の奇跡に」と微笑んだ、可愛い瞳の中の流星が群れになって流れた。
『楽しみにしてるよ、また来るよセリカ・・そしていつでも見てるから』と微笑んだ、セリカも笑顔で頷いた。

セリカと会計に行った、１０００円だった。
『サービス良すぎませんか？』と受付の女性に微笑んだ。
「ママからの申し付けです・・エース割引」と笑顔で返してきた、私も笑顔でお礼を言った。
『セリカありがとう、また来るね・・無理だけはするなよ』と言ってエレベーターに乗った。
「待ってるからね・・誓いは絶対にまもるから」と微笑んだセリカに手を振って別れた。

ＰＧの指定席に入ると、９割の客の入りで、シオンがニコちゃんでサインを繋いでいた。
マチルダはＴＶルームだと思っていた、３人娘が来てるから、エミと話してるのかと思った。
『シオン、セリカやってみるよ・・どこまで出来るか分らないけど』とシオンに微笑んだ。
「先生、シオンは幸せです・・セリカちゃんの事も、リアンとの約束も」と目を潤ませた。
『シオン、ありがとう・・仕事中は泣かないで、シオンもプロになるんだろ』とシオンの頭に手を置いて、笑顔で優しく言った。
「はい、シオンは絶対、素敵なプロになってみせます」と笑顔で言った、美しく輝いた、純白のシオンが。
私はフロアーを見ていた、蘭の青い炎が溢れていた、そしてナギサ

の華やかさも溢れ出した。
《ユリさんのいない状況が、蘭とナギサを加速させてるよ》と心で囁いた、強い波動が返って来た。

私はシオンに断って、ＴＶルームに行った、久美子とマチルダとエミが笑顔で話していた。
ミサとマリアは疲れていたのか、眠っていた。
私はミサの手を握り、体温と鼓動を確かめて、マリアの確認もした。
「チャッピー、世界の遺産見たいんでしょ・・明日持ってくるね」とエミが可愛く微笑んだ。
『うん、それなら重いから、お迎え行くよ』と笑顔で返した。
「大丈夫だよ～、ドリーム・キャッチャー・・ベッドに付けたよ、凄く安心して眠れるよ」と少女の輝きで微笑んだ。
『そうか～、良かった・・早目にミサの分も作らないと』と笑顔で返した、エミも笑って頷いた。
マチルダが立ち上がり、二人で出かけた、通りに出て借りていた、カズ君のチャリに乗った。

「素敵な予感・・どこに行くの？」とマチルダが最高の笑顔で言った。
『星空を見に行こう・・最高の夜だから』と微笑んで、ペダルを漕いだ。
マチルダが後で私にしがみついて、英語の歌をご機嫌で、歌っていた。
私は知り合いの益田の爺さんに、電話して頼んでおいた小船を借りた。
「おま～、こんな可愛い子と・・外海に出るんか」とシワシワで微笑んだ。
『シート乗せてくれてる？マス爺』とニヤで返した。
「おう、燃料も満タン・・波も穏やか、最高じゃぞ」とシワシワ笑

顔で返してきた。
マチルダの最高の笑顔を見ながら、手を引いて桟橋に行った。
『マチルダ・・怖くない』と小船の準備をしながら、前に座ったマチルダに聞いた。
「何も怖くないよ・・最高の気分だよ」と輝く笑顔で返してきた、私も笑顔で頷いた。
モーターの紐を引き、エンジンの回転を調整して、スクリューに動力を伝えた。
大淀川を、河口に向かった、風に靡くプラチナブロンドが輝いていた。
河口の真ん中を静かに、波を乗り越えながら進んで、波の立たない場所から全開で沖を目指した。
陸の光が遠ざかり、月光と星の輝きだけの世界になった。
マチルダは夜空を見上げていた、私は位置を標す照明だけを下向きに点けて、小さな碇を沈めた。

『気に入ったかな・・月のマチルダ?』とマチルダの横に座りながら、笑顔で言った。
「最高〜!・・この世界も、月のマチルダという言葉も」と最高の笑顔で叫んだ、大きな声に驚いた。
『うん、元気が出たね、良かったよ・・ここは蘭もまだ連れてきてないよ』と真横で囁いた。
「ありがとう、シート広げて、添い寝で空を見たい」とマチルダが甘えた。
私は笑顔で頷いて、部厚いクション素材の、丸めてあるシートを広げて、マチルダに腕枕した。
空には満天の星が瞬き、月が浮かんでいた、海の深さを感じて、心が解放されていた。
マチルダも美しい横顔で、空を見ていた、輝いていたその緑の瞳が。

「絶対にフェリーとかじゃ味わえないね、この開放感」と空を見ながら、マチルダが言った。
『うん、絶対に無理だよ・・小さな小船じゃないとね』と私も星を見ながら返した。
この世界には私とマチルダしかいないと、錯覚しそうな程の、静寂に包まれていた。
「月のマチルダか～・・最高に嬉しい称号だよ、エースと私の2人だけの」と私を見た、あまりの近さに緊張した。
『急に見ないで・・マチルダはやっぱり、緊張するよ』とニヤで返した。
「無理・・今から強く行くからね・・充電して、半年分くらい」と笑顔で言って、強く抱きついた。
私はマチルダの背中を支えて、抱きしめていた、マチルダが少しずつ静かになっていった。
微かな海水のうねりに、小船が揺られ・・ユリカの揺り篭のようだった。

マチルダの寝息を感じていた、暖かい体温とマチルダの香りに包まれていた。
私は星空を見ていた、ミホを思っていた、ユリカの言葉を思い出しながら。
《ユリカ、少し分ったよ・・セリカの自傷行為の訳、悲しみに溺れてるんだね》と心に囁いた、強い波動が何度も来た。
《分ったよユリカ、今度ユリカも連れて来るからね》と囁いた、強い波動が一度来て終わった。
マチルダはぐっすりと2時間近く眠っていた、小船のすぐ横で大きな背ビレが動いた。
位置を標す下向きの照明に、小魚が集まって、それを目当てに来たなと思っていた。

マチルダも目を覚まして、私を見上げた、私は笑顔をマチルダに向けた。

『スペシャルゲストが来たよ、マチルダは運が良いね』と囁いた、マチルダは不思議そうに私を見ていた。
私はマチルダを優しく起こして、背ビレの姿を見せた、マチルダの最高の笑顔があった。
「素敵すぎる・・こんなに美しいの、イルカって」と目を潤ませて、笑顔になった。
その時イルカが反転して、顔を見せた、こっちをじっと見て、一声鳴いて深く潜った。
そして、一度大きくジャンプを見せてくれた、最高の輝きで飛んだ。月光に照らされて、美しいシルエットで、2度目のジャンプを見せた。
「ウォ〜〜！」とマチルダが最高の笑顔でイルカに向かって叫んだ。
その時3頭のイルカが同時にジャンプして、深く潜った、静寂が戻ってきた。

マチルダは最高の笑顔で振向いた、美しかった、完全復活をしたマチルダに見惚れていた。
「ここの水深はどの位あるの？」とマチルダが、一筋の涙を流して聞いた。
『多分、２００m位だよ・・釣りのポイントだから』と笑顔で返した。
「自由なんだね、イルカ達は・・そして本当に優しいんだね」と泣きながら、笑顔で言った。
『3頭のジャンプは、俺でも初めて見たよ、この辺じゃ出会うことも、難しいんだよ』と笑顔で優しく伝えた。
マチルダは海を見ていた、海に棲む美しく優しい生命を、その緑の瞳で感じてるようだった。

「エース・・本当にありがとう、私絶対に忘れないよ」と言って輝く笑顔で抱きついた。
『マチルダ、俺も絶対にマチルダを忘れたりしないよ・・だから絶対に無理はするなよ』と強く抱き寄せ、耳元に囁いた。
「うん、約束するよ・・自分を大切にするから」と私を強く抱きしめて、囁いた。

月光が海に一筋の道を照らした、遥かなる輝く道が未来を提示してるようだった。
穏やかな海が包んでくれていた、距離にも時間にも負けない、緑の瞳の女神を。
私はマチルダを抱きながら、遥かマチュピチュを想っていた、海の向こうの世界を。
太平洋に抱かれて、微かに揺れる揺り篭の中で、私はマチルダを抱いて幸せを感じていた。

私はマチルダがくれた、映像の基点、月にマチルダの存在を感じていた。

だから夜釣りで行った、この場所を思い出し連れて行った。

その後、蘭ともユリカとも行った、2人とも感動していた。

そして2人ともイルカの出迎えを受けた、蘭もユリカもその姿を見て泣いた。

月光と星の瞬きだけの光に、暗い海から現れて照らされる、その輝く姿に感動する。

そしてその瞳の優しさに癒される、私はそれで感じる、ミホの突破口を。

ミホを最終段階まで持って行った時の、最終手段を思いつく。

信じてほしい、イルカの持つ圧倒的癒しを。

その感情まで存在する、愛すべき生命体を。

奇跡を起こす・・数十頭の・・イルカ達が・・。

ミホの言葉を復活させる・・その愛らしい泣き声で・・優しい瞳で。

人は海から産まれたのだと・・ＤＮＡが反応する・・月が見ていた。

月光の下で・・奇跡を見ていた・・。

時代の色彩

生命の起源である大海原から現れた、艶々と光り輝く表皮。
その瞳の圧倒的優しさに触れて、人は何かを思い出す、遠く懐かしい故郷を。
暗黒の闇も、漆黒の海面も恐れる事はない、必ず見ている月か太陽が。

マチルダを抱きながら、私は最高の状態を感じていた。
そして衝動と闘っていた、マチルダと共に世界を歩きたいとの衝動と。
「心配しないで、いつか必ず迎えに来るから・・私達には必要だから、蘭姉さんとエースが」とマチルダが優しく囁いた。
『うん、俺もそれまでに、やらなければ成らない事が、まだまだ沢山有るからね』と囁いて返した。
「そうだよ、勉強してね・・事実を受入れる為に」と顔を離し、輝く笑顔で私を見た。
『了解、頑張るよ・・いつかリンダとマチルダの助けが出来るように』と笑顔で返した。
「誓いの儀式をして・・月に誓って」そう微笑んで、マチルダは瞳を閉じた。
私はマチルダに唇を重ねて、月に誓った。

《必ず到達します、事実を受入れて、それを心で語れる人間になるよ》と誓った、マチルダの唇から想いが伝わってきた、そして強い波動が来た。
唇を離し、マチルダを見た、最高の輝く笑顔で私を見た、私も笑顔で返した。
マチルダが船首に笑顔で座り、私はシートを丸めて、碇を上げてエ

ンジンをかけた。
「ライセンス必要無いの？」とマチルダが輝きニヤで言った。
『必要だよ・・海を愛してない人には』とニヤで返した。
マチルダの輝くプラチナブロンドが風に靡いて、最高の笑顔でウィンクして頷いた。

陸の人工的な明かりを目指して、波を乗り越えて進んだ。
マチルダの、完全復活の美しい笑顔が、月光に照らされて輝いていた。
桟橋に横付けして、マチルダを降ろし、モーターのスクリューを上げた。
ロープで縛り、シートを抱えて、益田の爺さんに燃料代を支払った。

「おっ、西洋のお嬢さん、良い者に出会ったかの？」とマス爺がマチルダに、シワシワ笑顔で言った。
「最高のイルカちゃんに会いました、珍しいんですか？」とマチルダが輝く笑顔で返した。
「奴らは、感じるんじゃよ・・自分達を必要としてるかどうかを、良かったの～届いたの」とマス爺が笑顔で答えた。
「そうなんですか！・・最高です」とマチルダも最高の笑顔で返した。
『マス爺・・早急にあと2回あるから、よろしく』と私も笑顔で言った。
「おう、いつでもいいぞ・・どんなオナゴか楽しみじゃわい」とシワシワ笑顔で言った。
マス爺にマチルダと礼を言って、カズ君のチャリで夜街を目指した。

「また、連れて行ってくれる？」とマチルダが後から叫んだ。
『もちろん、何度でも行くよ・・次はシオンが連れて行ってくれた、特別な場所にも行こう』と叫んで返した。

「ありがとう、次の約束を沢山してくれて」とマチルダの元気な声がした、その声が嬉しかった。

ＰＧの指定席にマチルダを座らせて、シオンに休憩をさせた、金曜の夜で満員状態だった。

「マチルダちゃん、凄く元気が出ましたね」とシオンがニコちゃんで言った。

「うん、シオンもエースが連れてってくれるよ・・最高の場所だったよ」とマチルダが輝きながら微笑んだ。

『シオン、デビュー前までには、連れて行くからね』と私もシオンに微笑んだ。

「凄～く、楽しみに待ってます」と最高のニコちゃんで言った。

「・・・・・・・」マチルダが英語で話しを、シオンに振った。

「・・・・・・・」シオンも最高のニコちゃんで返していた。

私はハルカポジションについて、全員を確認した、女性達は集中の中にいた。

ユリさんの歩く姿が、完璧な姿勢で、圧倒的な美を振り撒いていた。

蘭とナギサはすでに、別の世界で生きているようで、その存在感が輝いていた。

四季が笑顔でサインを繋ぎ、ユメ・ウミとのコンビネーションも、スムーズになっていた。

究極の６人チェンジを見せていた、そしてカスミが輝きを放っていた。

内面の輝きが溢れて、温もりのある優しい笑顔も出ていた。

《まずは、ホノカの加入で１段上がるな・・そこからが楽しみだね》と心で囁いた、優しい波動が返って来た。

１１時３０分に、マチルダを連れて出かけた、通りで大勢の人々の視線を受けて、腕を組んで歩いた。

先に魅宴に2人で寄った、フロアーを後から覗いた、満席だった。
マチルダも興味津々で見ていた、ミサキがミコトに連れられて動いていた。
淡い輝きが増していて、私も笑顔で見ていた、客を見送ったリョウが休憩に戻って来た。

「マチルダ！・・魔法かけてもらったね」とリョウがマチルダに、涼しげニヤで言った。
「はい、強力なやつを・・でもリョウも、綺麗だね～」とマチルダも輝きながら微笑んだ。
『リョウ・・ホノカ、週2のペースでＰＧに入るよ』と私もリョウに微笑んだ。
「それは素敵な事だね～、ホノカがクラブを、それもＰＧを経験するのは」と美しく微笑んだ。
「やっぱり素敵な仲間だね、銀河の奇跡」とマチルダも笑顔でリョウに言った。
「マチルダ、私とカスミの中じゃ、マチルダも銀河の奇跡の一員だよ、ホノカも会えばそう思うよ」と涼しく微笑んで、控え室に戻った。
マチルダはその背中を、最高の笑顔で見送っていた、嬉しそうな笑顔だった。

「どうしてあんな、素敵な表現が出来るんだろう、最高だよ・・嬉しい」とマチルダが私に微笑んだ。
『自分を認めてるから、だから他人を否定しないんだね』と笑顔で返した、マチルダも笑顔で頷いた。
ハルカが来て、3人で魅宴を出た。
通りで右からマチルダ、左からハルカが腕を組んだ。
私はニコちゃんで、ユリカの店に行った、ユリカが奥のＢＯＸを示した。

マチルダが奥にハルカがその隣に座って、私が向かいに座った、店の静寂が暫く戻らなかった。

「私、営業中は初めて来たよ、やっぱり凄いな～、ユリカさん」とハルカが微笑んだ。

「ハルカも凄いよ、私でもハルカみたいな１７歳には、初めて会ったよ」とマチルダが微笑んだ。

「マチルダさんに言われると、最高に嬉しいです」とハルカも最高の笑顔で返した。

「マチルダ・・完全復活なのね、良かった～」とユリカが爽やかに微笑んだ。

「私も驚きました、どんな魔法をかけたんですかね～」とハルカが私にニヤをした。

「ハルカ、順番ね・・次は私か蘭だから、夜の海のイルカちゃん」とユリカが爽やかニヤで言った。

「素敵～、どんどんやってね・・後が詰まってるから」とハルカが美しく私に微笑んだ。

『了解、でも会えるかどうかは、分らないよ』とニヤで返した。

「会えるまで、何度でも行くに決まってるでしょ」とハルカがニヤで返してきた、ユリカとマチルダが笑顔が見ていた。

ユリカとマチルダにお休みをして、店を出た、ハルカがご機嫌で腕を組んで来た。

「明日・・抱っこ伝説よ」とハルカが私に微笑んだ、美しかった迷いの無い笑顔が。

『覚えてるよ、明日は最高の状況だよ、月末の土曜日』と笑顔で返した。

ＰＧに２人で戻った時に、終演をを迎えた、終礼の１０番席に全員が笑顔で揃った。

「今日は・・かなり楽しそうだね～、マチルダ魔法」と蘭が満開で微笑んだ。
『報告します、昼間、豊兄さんに会いに行って、日曜の招待を受けてもらいました』と笑顔で言った。
９人衆が笑顔で拍手をした。

『それから、ゴールドラッシュのセリカに会って、ローズで抱っこして、誓いの浅いキスをしました』と反省した顔で言った。
「セリカは、きちんと誓ったんだね？」と蘭が真顔で聞いた。
『はい、誓ってくれました』と真顔で返した、蘭の満開の笑顔があった。

『それから、ミサキのデビューで薔薇の花を１７本贈って、魅宴のフロアーで、おめでとうのキスをしました』と笑顔で言った。
「大ママの前でか！」とナギサが驚いて言った、私はニヤで頷いた。
「よし、いよいよマチルダ魔法」と蘭が満開で微笑んだ。

『マチルダとの思い出に、今日思いついて、夜の海に２人で小船で出ました。
添い寝して、満天の星と月を見て、誓いのキスを１度しました』

蘭を見ながら微笑んだ、蘭は最高の満開笑顔で返してくれた。
「特殊事項は？」と満開継続で聞いた。
『イルカが３頭遊びに来て、最高のジャンプで歓迎してくれました、マチルダはそれで完全復活しました』と笑顔で答えた。
「当然、私から順番で、連れて行ってくれるんだろうね～」と蘭が満開ニヤで言った。
『もちろんです、最高の海に連れて行きます』と笑顔で返した。
「なんか・・聞くだけで素敵すぎる～」と魅冬が微笑み。
「順番待ち遠しいから、早目にバンバンやるように」とカスミが不

敵笑顔を出した。
「よし、リーダー連絡事項は？」と蘭がカスミに満開で微笑んだ。
「日曜日は、９人衆全員とシオンと久美子で、午前中から準備します、片付けは全員でお願いします」とカスミが言った。
「もちろん、私もナギサも手伝うよ」と蘭が微笑み、ナギサも笑顔で頷いた。
「私が知り合いの写真屋さんを呼ぶから、記念写真を撮りましょう」とナギサが華やかに微笑んだ。
全員が最高の笑顔で拍手をして、解散になった。
私はＴＶルームでエミを抱いて、サクラさんをタクシーに乗せ、見送った。
ＴＶルームに戻ると、全員が揃っていた、私がマリアを抱き上げた。
「驚きましたよ、ミサキちゃんも負けず嫌いですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
『ハルカとリョウに対する、挑戦状でしたね』と私もユリさんに笑顔で返した。
「ミサキは芯が強いからね～、ハルカと一緒で」と蘭も満開で微笑んだ。
「それで、セリカはどんな感じなのかな？」とカスミが不敵を私に出した。
『もし外す事が出来れば・・シオンとセリカ凄い事になりそうだね、セリカって夜の匂いがするよ』とニヤで返した。
「可愛い系でも、ホノカとは違うって事か～」とカスミが輝きながら微笑んだ。
『ホノカ、楽しみだな～・・あの心の芯は、絶対に曲がらないだろうな～』とニヤニヤで言った。
「本当にカスミちゃんは、特別ですね・・完成を目指させないから」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

「カスミの可能性が、楽しくてしょうがないのよね～」と蘭が満開で微笑んだ。
「うし、見せ続けてやるよ・・ニューカスミを」と不敵全開で笑った、美しかった。
ユリさんにマリアを渡して、見送って、一番街でカスミに手を振って別れた。

蘭とタクシーに乗ると、満開で肩に乗ってきた。
「私はいつ連れてってくれるの？本当に楽しみなんだけど」と蘭が囁いた。
『蘭、日曜の夜に行こうよ、多分潮も最高の状態だし・・日曜ならゆっくり出来るし』と囁いた。
「うん、そうしよう・・嬉しいよ」と言って瞳を閉じた。
蘭の香りに包まれて、私は完全なリラックス状態に入っていた。
深夜の夜空に無数の星が瞬いて、海を思っていた、蘭とは海に入ろうと思っていた。

アパートに着いて、タクシーを降りて、蘭を抱き上げた。
満開の笑顔を見ながら、階段をゆっくりと上がった、少し気温が下がってきたと感じた。
部屋に入り、蘭が化粧を落とし、パジャマで戻ってきた。
「罰を与える・・私よりマチルダを先に連れて行った、罰を」と満開で微笑んで、電気を消した。
私は蘭を抱き寄せて、瞳を閉じた蘭の唇にキスをした、最高の気分を楽しんだ。
『蘭、少し疲れてるね・・今夜は5秒で寝るんだよ、寝かしつけてやるから』と微笑んで、蘭を抱き上げた。
「ありがとう、私は疲れたいのよ・・こうしていたいから」と満開で微笑んで、瞳を閉じた。

蘭の鼓動が落ち着いてきて、呼吸が安定した、温度は一定の幅で安定していた。
蘭が深い眠りに入って、優しくベッドに寝かせて、腕枕で引き寄せた。
蘭の一番安心する体制を作り、額にキスをして、私も眠りに落ちた。

翌朝、自然に目が覚めて、気温が少し下がってきたのを確認した。
季節としての夏は、残暑の時期に入ってきたと、体が感じていた。
私は蘭の可愛い寝顔を、暫くニヤで見てから、ゆっくりと腕を抜いた。
洗面所に向かい、歯を磨き顔を洗って、キッチンに戻った。

トーストとハムエッグに、珍しくセロリが有ったので、セロリとキュウリのステックを添えた。
「ん～、完全復活したよ～・・幸せだから」と蘭が満開で言って、洗面所に消えた。
蘭が戻ってきて、満開で座り、朝食を2人で笑顔で食べた。

「セロリも食べれるの、食べれない物あるの？」と蘭が満開で微笑んだ。
『今までは無いよ、案外高級な物は駄目だったりして』とニヤで返した。
「フランスの時は、全部美味しかったのかな～？」と満開ニヤで、返された。
『うん、素材が何か分らない物も有ったけど・・エスカルゴも美味かった』と笑顔で返した。
「よし、楽で良いね～、好き嫌いが多いと大変だからね」と満開ニヤで答えた。
土曜日で蘭がバタバタと用意して、玄関でキスをして見送った、蘭はバスで出かけた。

朝の仕事をして、腹筋と腕立て伏せをして、シャワーを浴びた。
日記を2日分書いて、バスで出かけた、若草通りを歩いてカスミに手を振って。
靴屋を覗いて、蘭に手を振って、ユリカの店に入った。
『あれ、ユリカ1人なの？』とＢＯＸに1人で座る、ユリカに微笑んだ。
「1人じゃいけないの、マチルダがいないと、そんなに寂しいの？」とユリカが爽やかニヤをした。
『久々に、ゆっくり抱っこ出来るから、嬉しいよ』と笑顔で言って、ユリカを抱き上げた。

ユリカは爽やかな笑顔で抱かれていた、私もユリカを笑顔で見ていた。
「マチルダ、午前中は旅の準備をするって、だからゆっくり寝かせてあげたのよ」と爽やかに微笑んだ。
『そっか～、俺も寂しいけど・・ユリカが1番寂しいね』と真顔で返した。
「私は大丈夫よ、あなたが想っていれは、マチルダの存在は感じるから」と深海の瞳を深めて言った。
『じゃあ、ユリカは、リンダの存在は感じるの？』と真顔で聞いた。
「そうよ、存在だけは感じるよ、どこにいるかとかは、分らないけどね」と微笑んだ。
『嬉しいな～、ユリカが感じてるのが』と笑顔で返した、ユリカも爽やかに微笑んで瞳を閉じた。
私はユリカの、重みと温度と鼓動を確かめて、何も考えずに、ユリカの吐息と香りを楽しんでいた。

ユリカが深い眠りに落ちて、ＢＯＸに座ってユリカを抱いていた。
ユリカは1時間ほどぐっすりと眠って、爽やかに目を覚ました。

2人で店の掃除と、グラスを洗って、シュークリームで休憩をした。
「蘭の次は、絶対に私を連れて行ってね」と真横のユリカが微笑んだ。
『もちろん、問題はユリカが、いつ店を抜けれるかだよ』と笑顔で返した。
「週初めなら大丈夫よ、私の店は女性がしっかりしてるから、だから私自由行動出来るのよ」と爽やかに微笑んだ。
『OK、日取りを決めてね、俺はいつでもいいから・・ユリカ、小船だよ怖くない？』と聞いた。

「怖くないよ・・マチルダの、あんな感動を感じた場所に行けるなら」と美しい笑顔を見せた。
『俺は、蘭とユリカは、絶対にイルカの出迎えを受けると思ってるよ』と微笑んで返した。
「本当に楽しみなのよ、絶対に何か大切な物を、感じるって思えるから」と深海の瞳で微笑んだ。
ユリカと店を出て、赤玉までユリカを送って、手を振って別れた。
弁当屋に行こうと振向くと、真赤なジープから手を振る姿が見えた、私も笑顔で近づいた。

『千鶴ママ、カッケーねジープ』と笑顔で言った。
「開放感が好きなのよ、冬は寒いから乗りたくないけど」と車を降りて美しく微笑んだ。
『良いな～、俺、サーフィンするから憧れるよ』とジープを見ながら、千鶴に微笑んだ。
「お昼、今からでしょ・・お店でご馳走するから、一緒に行く？」と明るい笑顔で言った。
『もちろん、お言葉に甘えるのは、得意です』と言って、笑顔で手を出した。
「こうでしょ、私も夜街で、少し有名になるかも」と楽しそうに、

腕を組んで来た。
私は笑顔の千鶴と腕を組んで、ゴールド・ラッシュに向かった。

「ミコト、元気にやってる？」と千鶴が真顔で聞いた。
『元気だよ、魅宴のＮＯ１だし・・リョウが入って楽しそうだよ』と意識して笑顔で返した。
「そっか～、ミコトには確かに、良い刺激よね～」と言った顔が、少し寂しげだった。
エレベーターに乗り、私は階数ボタンを押さずに、千鶴の正面に立った。
『千鶴・・どうしてミコトと会わなくなったの？・・俺はミコトも寂しがってると思うよ』と真顔で聞いた。
「エース・・私がピーチを抜けたくて、スポンサーを見つけて、ゴールドを出したから・・私の方からミコトに疎遠になったの」と千鶴が真顔で答えた。
『そっか～、千鶴・・千鶴に伝説の、ユリカスペシャルをしたいんだけど』と笑顔で言った。
「うそ！本当に・・最高に嬉しいよ」と美しい笑顔を見せた。
私はエレベーターの【開】のボタンを押して、千鶴の手を引いて階段まで歩いた。

千鶴を優しく抱き上げた、千鶴はバッグをお腹の上に乗せ、私の首に腕を回した。
千鶴を見ると、美しい笑顔で私を見ていた、私も笑顔で返した。
『千鶴、目を閉じて、怖くないから・・何も考えなくていいよ』と優しく囁いた。
「ありがとう、本当に気持ち良いよ」と笑顔で言って、瞳を閉じた。
私はゆっくりと階段を登った、千鶴の早かった鼓動も安定してきた。
私は慎重に優しく千鶴を抱いていた、千鶴の少し高い温度を感じて

いた。
《千鶴・・少し後悔してるんだね、そしてミコトに会いたいんだね》と心に囁いた、千鶴に響くように、ユリカに伝わるように。
優しい波動が返って来た、その瞬間、千鶴の温度が揺れた。

最上階で、景色を見ていた、爽やかな風が吹いてきた。
私は静かになった千鶴を抱いたまま、階段に座って引き寄せた。
千鶴の前髪を風が揺らしていた、女としての最高の季節を迎えている、美しい寝顔を見ていた。
千鶴がどうしても、抜け出したかった意味を、私は理解していた。
あのピーチなら仕方ない、あの洞窟の存在だけは許せない、そう思っていた。

正午のサイレンが鳴って、千鶴が目を覚まして、最高の笑顔を見せた。
「ごめんね、気持ち良くて・・本気で寝てたよ」と微笑んだ。
『その方が嬉しいんだよ、千鶴』と微笑んで返した。
「私も会いたいの・・ミコトに、夜街で唯一の友達だから」と真顔で言った、美しかった。
『了解、その時はきちんと気持ちを伝えてね、ミコトは絶対に聞いてくれるよ』よ笑顔で返した。
「ありがとう、そうするね・・待ってるから」と微笑んだ、私も笑顔で頷いた。
抱いたまま立ち上がって、エレベーターに乗った、千鶴が抱かれたまま3階を押した。
私は千鶴の笑顔を見ていた、本当に美しい笑顔だった。
リアンとユリカの次の世代、蘭とナギサの1つ前の世代、ミコトと千鶴と感じていた。
千鶴が私を強力に援護してくれる、私がミホと自由に会うために。

千鶴とミコトは、女性としての最高の季節に咲く、真の意味での美しさを持っていた。
ミコトはその経験からくる余裕を纏い、千鶴は常に明るさを持っていた。
２０歳の銀河の奇跡では、到底その時期には届かない、圧倒的な美しさを持っていた。

ユリさんとミチル・リアンとユリカ・ミコトと千鶴・蘭とナギサ・銀河の奇跡。
そしてシオンとセリカ・ハルカとミサキ、世代の継承は続いていく。
その街には、時代を彩る、美しい女性達が常に存在する・・今現在でも。
新しい挑戦者達を、心待ちにしながら、最新型の誕生を待ちわびながら。

その後、私の心の深い部分に棲み付く、そのミコトという存在。
不思議な女性だった、美しく近寄り難そうに見える、第一印象。
しかし、本質は清々しいほどの、真直ぐな女性だった。
どんな状況でも絶対に崩れない心と、その余裕の中に、確かな優しさが有った。
魅宴という、最高ランクのクラブの、ＮＯ１に君臨していた。
ユリカが魅宴を去った時点の、ミコトが２４歳からリョウに抜かれる２９歳まで。
その５年間１度たりとも、ＮＯ１を譲らずに、魅宴を引っ張った。

３０歳で結婚引退する時に、私に余裕の笑顔で言った。

「ありがとう、３度も泣かせてくれて、最高に楽しい水商売だったよ」と美しく微笑んだ。

１７歳の私は、大きな喪失感と、寂しさを感じていた。

常に強く余裕で立っている、ミコトの姿を想っていた。

その姿に、励まされていた・・その優しい余裕の笑顔に。

ミコト・・ミコトこそが夜街ＮＯ１だったよ・・その優しさが。

俺は、堂々と酒が飲めるようになった時に・・追い求めたよ。

ミコトの余裕の笑顔と・・ユリカの深海の瞳を。

ありがとう、ミコト・・常に余裕で微笑んでくれて。

俺には、心の芯の部分の支えだったよ・・ミコトのあの・・余裕の優しさが・・。

色褪せぬ想い

緩やかに暑さが和らごうとしていた、８月が終わりのカウントダウンに入った。
私には最高の長い夏休みだった、そしてＰＧの夏は終わらないと思っていた。
千鶴をエレベーターの中で降ろした時に、３階に着きドアが開いた。
ゴールド・ラッシュの大きな金看板の前で、ボーイが掃除をしていた。
私は千鶴に連れられて中に入った、準備をする何人かのボーイが動いていた。

『人気店の土曜の準備は、忙しそうだね』と千鶴に微笑んだ。
「何言ってるのよ、最高人気店のエースが」と千鶴が美しく笑った。
千鶴に案内されて、小さな部屋に入った、４歳位の女の子と若い可愛い女性がいた。
「お昼・・何が良い？」と千鶴が笑顔で聞いた。
『肉』とウルで答えた、千鶴が笑顔で頷いた。
受話器を千鶴が取ったので、私は少女を見た、色の白い可愛い子だった。

【熊のプーさん】の絵本を見ていた、目が合ったので私が笑顔を見せると、可愛く笑った。
『読んであげようか』と微笑んで言うと、笑顔で頷いた。
私はその子を手招きして、膝に座らせて、得意の擬音を駆使して読んであげた。
千鶴も女性も、笑顔で見ていた。
私の膝の上の少女は、ケラケラと楽しそうに笑っていた。
私は少女の体温が高すぎると感じていた、読み終わり額に手を当て

た。

『少しお熱があるね・・頭、イタイ・イタイじゃないの？』と抱き寄せて、優しく囁いた。

「えっ！」と驚いて、若い可愛い女性が慌てて、少女の額に手を当てた。

「少し高いかも」と立ち上がり、体温計を取りに行った。

「しかし、噂通り・・凄いね～」と千鶴が少女の額に手を当てて、私に微笑んだ。

『子供同士ですから、子供の事は分ります』と照れて返した。

「お願い出来るかしら？」と可愛く微笑んで、女性が私に体温計を渡した。

『もちろん』と笑顔で返して、受け取った。

『お名前は、なんて言うのかな？』と優しく少女に囁いた。

「レイカだよ」と私を見上げ微笑んだ。

『可愛い名前だね～、レイカ』と笑顔で言った、レイカも嬉しそうに笑っていた。

『レイカの温度を測りま～す、上手に出来ますか～』と優しく言った。

「は～い」と可愛く答えた、私は笑顔で頷いて抱き上げた。

お姫様抱っこをして、体温計を脇に挟んで、抱きしめて押さえた。

『レイカ・・揺り篭してあげるから、目を閉じましょう』と笑顔で言うと、笑顔で目を閉じた。

私はレイカの鼓動と、体温の揺れを感じていた、レイカは静かに目を閉じていた。

千鶴と女性は、私とレイカを笑顔で見ていた。

レイカの体温は、３７．２度だった。

「微熱ですね、マユはどこですか？」と千鶴が女性に聞いた。
「もう、戻ると思います」と女性が答えた。
私はレイカを抱いたまま、静かに揺らしていた、レイカの深い眠りを感じた。
『大丈夫ですね、風邪じゃないですね、多分プールか何か水に入ったのかな』と千鶴に笑顔で言った。
「昨日、プールに行ったと言ってたよ」と女性が笑顔で私を見た、２０歳位の可愛い笑顔だった。
「どこまで分るの・・あなたの抱っこは？」と千鶴が興味津々光線を出した。
『感じだけだよ・・子供だけです』と笑顔で返した。

レイカをベッドに寝かせて手を握った、安定していて安心した。
千鶴と女性と３人で、お昼ご飯の豪華な焼肉定食を食べた。
「ＰＧの仕事は何時からなの？」と千鶴が言った、女性が驚いて私を見た。
「あなたが、ＰＧのエース・・こんなに若いんだ」と女性が笑顔で言った。
『若いんじゃなくて、ガキなんです』と女性にニヤで返して。
『ＰＧの仕事は１３時からだけど、ユリさんが特権を与えてくれて、今は自由です』と千鶴に微笑んだ。
「ユリさん素敵だよね～、憧れ続けるよ」と千鶴が美しく微笑んだ。

『千鶴も素敵だよ、第三世代のトップでしょ』と笑顔で返した。
「第三世代？」と千鶴が私を見た。

『うん、さっき千鶴を見てて感じたよ。
大ママとユリさんが今の女帝・・第一世代。
リアンとユリカが多分・・第二世代。
そして、ミコトと千鶴が・・第三世代じゃないかって。

俺の知る限りの考えだけど、そう思ったよ』

千鶴の美しい笑顔を見ながら、笑顔で言った。

「なんでそんな素敵な事が、ストレートに言えるの」と嬉しそうに微笑んだ。

『感じたままを、言葉にするだけだよ』と微笑んで返した。

「ねぇ、その下は・・エースの考えじゃ、どうなってるの？」と女性が聞いた。

私はその女性を見ていた、やはり少女の匂いの強くまだ垢抜けてない感じだった。

しかし瞳の輝きは、前に進もうとする確かな強さがあった。

そして何より、その素材としての可能性が、見てて楽しくなるほどだった。

可愛さと美しさの境で、どこか迷ってる感じだが、それでも輝きは強かった。

『お姉さん、お名前とお歳は？』と笑顔で聞いた。

「ケイコです、１８で～す・・まだ源氏名無いんです」とはにかんで、笑った。

『素敵だよね～、自信持てば良いのに・・魅力あるよね』と笑顔で返した。

「うそ、私が・・お上手ね」と笑った、可愛かった。

『どっちかに決める必要ないよ、全部取り込んで、状況に応じて出せば良いんだよ』とニヤで言った。

「そうなんだよ、そこで女性は迷うんだけど、結局後でそう思うんだよ」と千鶴もケイコに微笑んだ。

「お願い・・優しく説明して」とケイコが可愛く微笑んだ。

『ねぇ、ケイコ・・他の女性を見る時に、視点が違うんだよ。

憧れるなら、盗まなきゃ・・必死に研究するんだよ。

でもそれは、絶対に自分を知ってないといけないんだと思うよ。
そうでないと、ただの物真似になってしまう。
結局自分で自分が、訳が分からなくなるんだ。
女性は可愛い年代から、美しいに脱皮するよね。
でも、可愛いを脱ぎ捨てる必要は無いんだよ。
可愛いも持って、美しいを追い求める・・この仕事はそれが力になるから。
恋愛と違うから・・恋愛なら正直に、ありのままを見て欲しいよね。
でも夜の仕事は・・夢を売るんでしょ、女性としてお客に夢を。
その時間は女優なんだから、少女になったり淑女になったりするんだよ。
それを自分で受入れる、この時間はお金を取る・・プロの時間だと。
それで良いんだと、俺は最近思うようになったよ。
ユリさんの言葉を贈るね、最高峰に立つ人の言葉を。
たとえ心と体が売れたとしても、愛は売れないと信じている。
そう言ったよ、だから俯いて歩く必要はないとね。
その時は女優で良いんだよ、演じて良いんだよ。
それは嘘でも裏切りでもない、それが高い金を取るプロの仕事だからね。
ケイコ、捨てる必要は無いよ、全てを持とうとするんだよ、贅沢に生きないと。
それが、夜の女性の特権なんだから』

私を見ているケイコに、最後は微笑んで言った。
「さすがユリさん・・愛は売れないか～、響くよね～」と千鶴が嬉しそうに、微笑んだ。
「私でも、間違わなければ・・トップを目指せると思うの？」とケイコが真顔で聞いた。

『うん・・じゃあさっきの質問に答えるよ。
ＰＧに今、蘭とナギサがいる・・２３歳で第四世代。
そしてその下は、群雄割拠・・今からも挑戦者は出てくる。
今、俺の知る限り突出してるのは。
２０歳のトリオ・・カスミ・ホノカ・リョウの銀河の奇跡。
その下は、１９歳のセリカに期待してる、シオンという存在もいるから。
最新型は常に現れる、でも客がそれを求めるとは限らない。
お酒を飲む人もそれぞれだから、そして勝負はそんな事じゃない。
結局自分がどう生きたのか、それを競い合うんだろうね。
ケイコ・・素敵な１８歳を、俺は今１人知ってるよ。
ケイコなら、十分その女性と仲間になれるよ。
焦らずに、ゆっくりと頑張ってね』

ケイコの輝く瞳を見て、笑顔で伝えた。
「うん、ありがとう・・銀河の奇跡はお祭りで見たよ、セリカ姉さんの凄さも知ってる・・やってみるね」とケイコが笑った、可愛さの中の美しさを秘めて。
「ねぇエース、どうすれば、たまに遊びに来るようになるの？」と千鶴がニヤで言った。
『ここをフリーパスにしてくれて、千鶴って呼捨てに出来る権利』とニヤで返した。
「もちろん、ＯＫよ・・いつでも来てね、レイカも待ってるから」と千鶴が美しく微笑んだ。
その時ドアを開けて、女性が入って来た。

ドアが開いて光が差し込み、逆光に映し出されたシルエットに息を飲んだ。
細く長身の素晴らしいスタイルで、微笑んだ時に温かさを感じた。

２０代前半であろう、細面のシャープな顔で、切れ長の瞳が熱を発していた。
「千鶴ママすいません、レイカがお世話かけました」と微笑んで頭を下げた。
「微熱があるよ、プールの影響らしいけど」と千鶴が真顔で返した。
「えっ、すいません・・気付かなかった」と言って、レイカのベッドに向かった。

『多分さっき上がったんですよ・・プールは体力使うから、翌日の昼位にダメージが出るから』と笑顔で言った。
「そうなの、ありがとう・・エース」と微笑んだ、美しい笑顔だった。
「私、マユって言います・・美冬と同級生で、今でも仲良しです」と笑った。
『それは危険だ・・変な話を聞いてますね？』とニヤで返した。
「あら、良い話しばかりよ・・感動的なのとか」と微笑んだ、美しい中に熱を感じた。
『良かった～、美冬のご機嫌取っとこう』と笑顔で返した、マユも微笑んで返してくれた。

「うん、大丈夫みたいだね、病院は必要ないね」とマユがレイカを見ながら、微笑んでいた。
その時年配のボーイが入ってきて、千鶴に耳打ちをした。
千鶴は真顔になって、マユに近づき囁いて、３人で出て行った。
私もケイコに笑顔で挨拶して、レイカの額に手を当てて、安定を確認して部屋を出た。

裏からフロアーに歩いて行くと、入口で男の怒鳴り声が聞こえた。
私は壁に隠れて、話し声を聞いていた、若い男が３人来てるようだった。

「レイカに会わせろよ、勝手に出て行って・・俺の娘だぞ」と大きな怒鳴り声が響いた。
《マユ、美冬と同じ歳なら２１だから、１７か１８でレイカを産んだんだよな～》と思っていた、強い波動が返ってきた。
《ユリカ、ごめんね・・今度説明するから》と心に囁いた、暖かい波動が包んでくれた。
私は入口を覗いた、大きな体の男が２人と背の低い男がいた。
怒鳴っているのは背の低い男だった、年齢は２０歳位だった。

「すいませんが、お引取り下さい・・レイカに会わせる事は出来ませんから」と千鶴が真顔で頭を下げた。
「おい、ママ・・俺が武藤さんに言って、こんな店潰してもいいんだぜ」と凄んだ、迫力は無かった。
「何を言われても、無理なものは無理です」と千鶴もはっきりと断った。
「なぁママ、もう後ろ盾が無い事は、こっちは分ってるんだぜ」とニヤニヤで男が言った。
千鶴もマユも黙って男を見ていた、ボーイも手が出せずに後に立っていた。

『千鶴、マユ・・武藤の所に行こうか、その人達と』と私が笑顔で千鶴に声をかけた。
千鶴はリョウから聞いていたのだろう、私に笑顔を向けた。
「行ってくれるの！」と千鶴が私に微笑んだ。
『レイカの為なんだろ、それなら何処でも行くよ』と千鶴の目の前に立って、笑顔で言った。
「ガキ・・何言ってるんや」と男が声を上げた。
『武藤の所に行ってから、俺をガキ呼ばわりしろよ』と男の顔の前に、顔を突き出して微笑んだ。
男は目を逸らして、黙り込んだ。

『後の2人は、どういう事で付いて来てるの？今はっきりさせとい
て』と後の大きな男を見て、笑顔で言った。
2人とも体が大きいだけで、殺伐とした物は感じなかった。
「ただの、付き添いや」と1人の男が言った。
『お前、何年生？1人で来れんの？・・僕、おいくつ』と背の低い
男に微笑んだ、男は黙っていた。
『マユ、こいつ潰して構わないのかな？』と静かにマユに言った。
「もちろん、自業自得でしょ」とマユも笑顔で返した。
『じゃあ、行こうか・・そこの2人も付いて来るなら、同罪だから
な』と後の2人に微笑んで、エレベーターのボタンを押した。

私の後ろに千鶴とマユが乗った、3人の男達は小声で話していた。
『早く行こうよ、土曜で忙しいんだから』と笑顔で言った。
3人の男が乗ってきた、付き添いの2人は渋々という感じだった。
ピーチに着いて、背の低い男を見た。
『フロアーで待ってるから、武藤連れて来いよ』と笑顔で言って、
千鶴とマユとフロアーに行った。
手前の席に3人で座って待っていた。
「大丈夫なんだよね？」とマユが心配そうに、私に言った。
「大丈夫よ、リョウをここから出したのも、エースだから」と千鶴
が微笑んだ、マユが私に笑顔を向けた。

その時3人と武藤が来た、武藤が私を見て3人を睨んだ。
『武藤、内輪もめは後にしろよ、土曜で忙しいんだ』と武藤に大声
で言った。
それを聞いて武藤の表情を見て、3人に緊張が走った。
武藤を先頭に、私達の前に歩いて来た。

『武藤よ、そこの背の低い奴が、ゴールドを武藤が潰すって言った

んだけど』と武藤に笑顔で言った。
「お前ら馬鹿か！・・すまん俺の知らんかった事や」と武藤は3人を恫喝して、私に頭を下げた。

『武藤・・ふざけちゃいけないよ、知らんかったで済むの。
自分の名前出されて、こっちには知らんかったなの。
どうして名前出した事で、そいつら先に処分せんの。
使わせてたんやな、そしてゴールドを狙ったんやな。
武藤、力で来るなら、俺も力で行くよ。
カードを見せろよ、武藤・・カードを切れよ。
俺の方のカードは分ってるやろ、さぁ武藤出せよ』

武藤を見ながら、静かに言った。
「待ってくれ・・こいつらを、どう処分すれば良いんだ」と武藤が言った。
3人は完全に萎縮して、声も出なかった。
『まず・・今すぐに3人の、名前と住所と仕事先を書いてもらおう』と武藤に微笑んだ。
「今すぐ書いて来い・・早くせんか！」と武藤が後の3人に怒鳴った。
3人が、近くにいたボーイに紙とペンを借りて、書いていた。

『ねぇ、武藤・・まだそんな手荒いことやってるの？俺との約束忘れたのかな？』と静かに聞いた。
「奴らは昔馴染で、最近会ってなかったから」と武藤が静かに答えた。
『だから？・・結局お前はそういった事を、沢山の人間に言ってるんやね』と返した。
「昔の話や、今は・・あれからはやってないよ」と小声で答えた。
『武藤、自分勝手もいい加減にしろよ、今日だぞ・・今だぞ奴らが

来たのは』と静かに返した。
武藤は黙っていた、3人が書き終わり、その紙を私に差し出した。
私はそれを見て、ニヤで3人を見た。

『これ本気で書いたの・・お前らこんな仕事してて、あんな脅しをかけたの』とニヤニヤで3人に言った。
3人も武藤も沈黙していた、緊張感が伝わってきた。

『武藤、今回はこれで帰るよ。
但しそいつらの顔を、今度夜街で見たら。
俺に対して喧嘩売ったと判断するから、お前を狙うよ。
それとチビ、マユにも絶対に近づくなよ。
破ったら仕事も何もかも、残ると思うなよ。
良いかな、武藤？・・それと3人さん？』

私は笑顔で武藤を見て言った、武藤は少し安心した表情になった。
「分った、こいつらには今からキチンと言っとく」と武藤が言った。
『武藤、今回のペナルティー・・そこの洞窟を明るく照らす、照明をすぐに付けろよ』と武藤に言った。
「分った、今からボーイに指示する」と武藤が答えた。
『じゃあ、よろしく・・そして3人さん、また会いに行くよ仕事場に』と微笑んで立ち上がった。
3人は緊張して私を見た、私はニヤニヤで返した。

「ちょっと待ってくれ、仕事場に来られたら・・困るんや」と背の低い男が、必死に言った。
『お前も自分勝手やな～、お前らさっき何処に来て脅しかけたの？』と静かに返した。
「それは・・悪かった反省した、もうマユの前には絶対に現れんから」と反省を込めて言った。

『なぁ、誰が信じるの？そんな台詞・・お前なら信じるの？』と突っ込んだ。
「信じられんだろうが、信じてくれ」と言って頭を下げた。
『ふざけるなよ、マスコミの人間が・・ならどう落し前つけるの？』と目を見ながら、迫った。
「どうすればいいんや？」と真顔で答えた、必死さが伝わってきた。
《ここで良いかな》と思っていた。

『なら、仕事がそんなに大切なら・・レイカが成人するまで、毎月１０万振り込めよ』と静かに言った。
「それで仕事場に来ないんやな」と少し安心したように言った。
『お前が約束守ればね、言っとくけど俺、〇〇社長も知り合いだからね』と微笑んだ。
「分った、約束する・・必ず守るから」ともう1度頭を下げた。
後の2人を巻き込んだので、引っ込む訳にはいかなかったのだろう、必死だった。
『マユ、銀行口座分る？』とマユに笑顔で聞いた、マユも笑顔で頷いた。
マユに口座番号を書かせて、男に渡した。

『約束を守ってれば・・夜街制限は、西橘通りにだけで良いよ』と微笑んだ。
「分った、必ず守るかい」と真顔で答えた。
私は千鶴とマユとピーチを出た、夏の日差しが眩しかった。
「なんてお礼言えばいいの、本当にありがとう」とマユが笑顔で言った。
『お礼はいらないよ、レイカが可愛くてしたんだから』と笑顔で返した。
「エース私からも、ありがとう・・洞窟の照明も嬉しかったよ」と千鶴が微笑んだ。

『なら、千鶴・・少し付き合って』と笑顔で返した。
「もちろん、何処でも行くよ」と笑顔で腕を組んで来た。
マユとゴールドのビルの下で、手を振って別れた。
振返ると、ユリカが立って爽やかに微笑んでいた。
「ユリカ姉さん、ご無沙汰しています」と千鶴が慌てて頭を下げた。
「近いのに中々会えなかったね、元気そうで良かったよ」とユリカが爽やかに微笑んだ、千鶴も嬉しそうに微笑んで返した。

「私、千鶴と話したいから、行っておいでよエース」と爽やかに微笑んだ。
《ユリカ、分ってるんだね・・もう鋭いから》と心で囁いた、ユリカが爽やかニヤを出した。
『了解、千鶴少し行ってくるから、ユリカの店で待ってて』と千鶴に微笑んだ。
「ありがとうエース、ユリカ姉さんと話せて・・最高に嬉しいよ」と千鶴が目を潤ませた、私は笑顔で頷いた。
ユリカが笑顔で話しながら、笑顔の千鶴とエレベーターに消えた。
私は急ぎ足で、魅宴に向かった。
裏口から入ると、ミサキがいた、私は笑顔で声をかけた。

『姉御、ミコト来てる？ちょっと話しがあるんだけど』と真顔で言った。
「ふ～ん・・分ったそこで待ってて、呼んで来る」と私の表情を読み取り、笑顔で言った。
私は裏ドアを閉めて、踊場で待っていた。
《ミサキ凄いな～、感性が広がってる感じだ》と思った、暖かい波動が来た。
「どうしたの？・・嬉しいお誘い？」とミコトが美しい笑顔で私に

言った。
『ミコト、暫し休戦して・・会ってほしい人がいるんだ』と真顔で言った。
「ＯＫ、良いよ・・あんたの頼みなら」と余裕で微笑んだ。
私が笑顔で手を出すと、余裕ニヤで腕を組んできた。
「私だけ組まない訳にいかないよ、ユリさんでも組むんだから」と笑った、本当に美しさが溢れ出す感じだった。
ユリカのビルでエレベーターに乗ると、ミコトが私を見た。

「誰なんだろうね～、エース絡みで私の知り合い」と余裕の笑顔を見せた。
『ミコトもし嫌な思いしたら、全部俺が悪いんだから・・俺に言って』と真顔で言った。
「了解、そん時は覚悟しなよ」と笑顔で言った、どこまでも余裕を見せて。
私が先にユリカの店に入り、ミコトが後を付いてきた。
奥のＢＯＸでユリカと千鶴が話していた、ミコトが千鶴を見た。
「エース・・休戦だって言ったね」とミコトが私に囁いた。
『うん、今回は休戦だよ』と囁いて返した、ミコトが頷いて私の前に進んだ。

「千鶴・・元気そうだね」とミコトが声をかけた。
千鶴はその声にビクっと反応して、ミコトを見た。
千鶴は立ち上がり、大粒の涙を流した。
「ミコト・・・・ごめんね」と泣きながら、ミコトに言った。
「どうして謝るの、私はあの時反対したけど・・あんたを悪く思った事なんか、一度もないよ」とミコトが優しく言った。
千鶴がミコトに駆け寄り抱きついた、ミコトも千鶴を強く抱きしめた。

ユリカが2人をＢＯＸに促して、爽やかに微笑んだ。
「私、ユリカスペシャルしてもらうから、2人でゆっくり話してね」と微笑んだ。
「ユリカ姉さん、ありがとう」とミコトが微笑んだ、泣いていた美しく。
「休戦中だからね」と私にミコトが、泣きながら強引に微笑んだ。
『分ってるよ、ミコト・・泣顔も綺麗だよ』と微笑んで返して、ユリカと店を出た。
ユリカと腕を組んで、エレベーターに乗った。
ユリカはご機嫌だった、美しく輝いていた。

1階で降りて、階段まで歩き、ユリカを抱き上げた。
「ゴールド、素敵なメンバーが揃ってるのね」と爽やかに微笑んだ。
『うん、レイカ可愛いよ～』と笑顔で返した、ユリカもニヤで返して瞳を閉じた。

階段を登りながら、マユのレイカの発熱を聞いた時の顔を、思い出していた。
レイカを愛してるのが伝わって、私は嬉しくてユリカを見ていた。
「雑念が多いよ・・眠れない」とユリカが目を閉じたまま微笑んだ。
『ごめん、おやすみユリカ』と優しく囁いた。
南風が吹いていて、ユリカの髪を揺らしていた。
私は風に背中を押されて、快調に階段を登った。
暑さはまだ、夏を主張していた・・青空に入道雲が流れていた。

私はゴールド・ラッシュに、興味を持っていた。

若いクラブに集まる、最新型に心が動いたのだ。

そしてレイカが可愛くて、3人娘と同じ存在として接する。

ミサとレイカは友達になって、成長して親友になる。
レイカはエミの影響を強く受け、その才能が開花する。
父親はレイカの大学卒業まで、約束の養育費を支払う。
レイカが大学入学で上京する時に、私はその男と十数年ぶりに会った。
泣いていた・・影から見送り、涙を流していた。
私はその姿が嬉しかった、父親の愛情に溢れていた。
マユは再婚していたが、レイカの結婚式に、その実の父親を招待した。
「嬉しかったよ、お父さん・・私を支えてくれたんだね」とレイカが私に笑顔で言った。
私は笑顔で頷いた・・美しいレイカの笑顔を見ながら。
マユの輝く笑顔を見ながら・・幸せを祈っていた・・兄として。

認めあう輝き

空が青く澄んでいた、夏を主張する入道雲が流れていた。
南風が心地よく吹いてきた、秋はまだ欠片すら存在しなかった。
ユリカがゆりっくりと、目を開けて微笑んだ。

「どうするの、店に入る？」とユリカが爽やかに微笑んだ。
『やめとくよ、お邪魔したくないから・・ユリカにお任せで』と微笑んで返した。
「了解、マチルダをよろしく」と笑顔で言った。
私はユリカを優しく降ろして、エレベーターに乗った。
笑顔のユリカに、笑顔で手を振って別れた。

通りに出てＰＧに向かって歩いていると、腕を組まれた。
「ラッキー、１人で行くの緊張してたの」とホノカが華麗に微笑んだ。
『ホノカ・・また綺麗になったね』と笑顔で返した。
「ＰＧに勤めるなら、頑張らないとね」と笑顔で返してきた、内面が輝いて美しかった。
ホノカとＴＶルームに入った、マダムとユリさん・マチルダ・シオン・レン・ハルカがいた。

私はホノカを、マダムとユリさんの前に促した。
「ホノカと申します、この度の仕事の件大変光栄に感じています・・まだまだ若輩者ですが、何卒よろしくお願い致します」と美しい姿勢で、深々と頭を下げた。
「素晴らしいですね、さすがにミチルが認めるだけはありますね」とユリさんが、薔薇で微笑んだ。
「ありがとうございます、本当に嬉しいです」と華麗に微笑んで返

した。

「曜日はどうしましょう？」とユリさんが笑顔で聞いた。
「火曜と木曜でお願いします・・それとリアンさんとユリカさんの、復活の日もお願いしたいのですが」と美しい真顔で答えた。
「分りました、存分にその力を見せて下さいね」と薔薇で微笑んだ。
「ありがとうございます、全力で頑張ります」と華麗に微笑んで返した。

レンとハルカは、完全に圧倒されていた。
シオンはニコちゃんで見ていた、そしてマチルダがホノカを見て輝きを増していた。
私が全員を紹介して、最後にマチルダを紹介した。

『そしてアメリカからのお客さん・・マチルダ、２０歳だよ』とホノカにニヤで言った。
「ホノカちゃん、素敵だね～・・・強さを隠すのも上手いし」とマチルダが輝きニヤを出した。
「マチルダも本当に綺麗ね～・・・でも弱さを必死に隠してるの」と華麗ニヤを出した。
「ホノカ、どうしてそこまで来れたの？素敵すぎるよ」とマチルダが嬉しそうに微笑んだ。
「マチルダほどの経験はないよ・・凄いね、辛さを中に入れるんだね」とホノカも真顔で返した。

この会話は鮮明に覚えている、ホノカの凄さを改めて感じていた。
マチルダの輝きが変った、その嬉しそうな笑顔を見ていた。
一瞬にして理解しあえた２人は、その精神性により発光していた。
人が他人を認めるのに、時間は必要無いと笑顔が言っていた。

「ホノカ・・お友達になってね」とマチルダの笑顔が輝いた。
「もちろん・・マチルダも銀河の奇跡でしょ」とホノカも輝きを増して、微笑んだ。
2人は美しい笑顔で、瞳で会話するかのように、見つめ合っていた。
「楽しくなりそうです」とレンが微笑んだ。
「ホノカ姉さん、勉強させてもらいます」とハルカも微笑んだ。
「お祭りの時より、数段綺麗になりましたね～凄いです」とシオンもニコちゃんで言った。
「こちらこそ、よろしく・・分らない事は教えてね」と華麗に微笑んだ。
ホノカを案内するのに、5人でＴＶルームを出て行った。

「なるほど、素晴らしいですね・・あなたの考えが怖くなりましたよ」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
『素敵でしょ、ホノカ・・あの芯の安定感を、感じて欲しいですね』と笑顔で返した。
「しかし、この世界は飽きんの～、最新型が湧いてくるかい」とマダムが笑顔で言った。
『マダム、実は相談があるんですが』と真顔で言った。
「怖いの～、言うてみい」とマダムが返してきた。

私はゴールド・ラッシュの話をした、千鶴とミコトの話も。
『そのレイカって女の子、ここに遊びに連れて来て良いかな?』と真顔で言った。
「もちろん良いよ・・じゃがその時は、お前が責任持って見とけよ」とマダムも笑顔で返した。
『了解、ありがとうマダム』と笑顔で頭を下げた。
「千鶴も復活するんですね、益々楽しくなりそうですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「あん時、エースがいれば・・千鶴をＰＧに引っ張れたの～」とマ

ダムがユリさんに言った。
「そうですね、本当に欲しい人材でしたね」とユリさんも真顔で返した。
『さすがですね、千鶴も』と私は笑顔で言った。
「ミコトが魅宴に入ったとき、リアンの後輩を探したんです。
その時見ました、出来たばかりのピーチに出勤する千鶴を。
私の方から声をかけたんですよ、２２歳の千鶴に。
本当に素晴らしかった、歩く姿も・・その後姿も。
でも武藤さんがネックで、千鶴も踏出せなかったの。
私は千鶴が踏出すなら、なんとかしようと思ってましたよ」
私を見ながら美しい笑顔で、最後は薔薇で微笑んだ。
『そうだったんですね・・千鶴、素敵ですよね』と笑顔で返した。
「知らないようだから教えときますね、千鶴は蘭と故郷が同じで、仲良しですよ」とユリさんが真顔で言った。
『そうなんですか、知らなかった・・蘭も言わなかったし』と私は驚いて言った。
「千鶴は自分を責めたから、ミコトに対しても蘭に対しても」とユリさんが優しく言った。
『それなら大丈夫ですね、ミコトと和解したから・・蘭とも』と笑顔で返した。
「そうですね・・そして蘭は、あの最高の副職に戻るのでしょう」と薔薇で微笑んだ。
私も笑顔で頷いて、マダムとユリさんの笑顔を見ていた。
マリアが起きたので、抱き上げてフロアーに向かった。
１０番席で、ホノカも含めて楽しそうに話していた。
ユリさんが準備に帰ったので、私はマリアと散歩に出た。

一番街で靴屋を遠目に覗いていた、土曜日で忙しそうだった。
「あいしゅ」とマリアが天使全開で微笑んだ。
『アイスが癖になったね、マリア』と笑顔で言って、アイスを買いに行った。
ソーダアイスを2つに割って、ベンチで食べていた。
マリアはご機嫌で、通る人全てに天使を振り撒いていた。

「マリアのご機嫌取りなの？」と後から声がした。
『うん、アイスで心を引きとめてるの』と笑顔で振向いた、美冬が笑顔で立っていた。
「そっか～、いよいよ物で釣るんだね」と美しく笑った。
『美冬、デートだね？・・なんかおねだりしたな』とデパートの袋を持ってる美冬に、ニヤで言った。
「残念・・友達の娘が誕生日なの、だからプレゼント」と微笑んだ。
『そうなの、レイカ誕生日なんだ』と笑顔で返した。

「なぜ、レイカを知っているのかな～？」と美冬がニヤで聞いた。
『夜街の美しい人は全てチェックしてるよ、マユ綺麗だよね～』とニヤで返した。
美冬がニヤニヤで近づいた、香水の香りが微かにしてきた。
『男ができるとすぐ色気づいて、香水なんか』とニヤで言った。
「その不必要な鋭さ、どっかに捨てなさい」と美冬が笑顔で返してきた。

『最近出勤早いね～、四季は』と話題を変えた。
「夏休みだからね、まぁ普段でも中学生より帰るの早いよ」と笑顔で言った。
『大学か～、楽しそうだね』と笑顔で言った。
「楽しいよ、でもあなたは行かないよ・・エースには退屈だから」

と微笑んだ。
『そうかも・・レイカの所に今から行くの？』と微笑んで聞いた。
「うん、３丁目で待ち合わせ」と笑顔で返してきた。

アイスの食べ終わった、マリアを抱いて美冬と並んで歩いた。
土曜日で人が多かった、マリアはご機嫌継続中だった。
３丁目の銀行の前に、マユとレイカが見えた。
美冬が笑顔で手を振った、マユも笑顔で手を振っていた。

『マリア、レイカちゃんだよ・・レイカ、マリアちゃんだよ』と屈んでマリアを降ろして言った。
「れいか」とマリアが天使で微笑んだ。
「マリア、可愛い～」とレイカもマリアの手を握って、笑顔を見せた。
私は優しくレイカの額に手を当てた、レイカも笑顔でじっとしていた。

『もう大丈夫だねレイカ、良かったね～』と笑顔で言った、レイカも笑っていた。
「美冬、誰の子供？」とマユが聞いた。
「へへ～・・ユリさん」と美冬がニヤで答えた。
「うそっ！・・緊張するんだけど」とマユが驚いて言った。

「チャッピ～」と後から、エミの元気な声がした。
私が振向くと、ミサの手を繋いでエミが笑っていた。
私はエミとミサにレイカを紹介した、４人とも笑顔になった。
『美冬、マユとゆっくり水槽でも行って来いよ、レイカはＴＶルームに連れて行くから』と笑顔で言った。
「いいの！ありがとう」と美冬が微笑んだ。
「エース、本当にありがとう」とマユも美しく微笑んだ。

『マユ忘れないでね、俺はレイカの為にしたんだよ・・後で迎えに来てね』と笑顔で返した。
マユが美しく微笑んだ、美冬が不思議そうにニヤで見ていた。

『エミ、荷物持つから、2人と手を繋いで』とエミに笑顔で言った。
「は～い」と言って、ミサとレイカと手を繋いだ。
私はマリアを抱き上げて、美冬とマユと別れてＰＧに戻った。
ＴＶルームは誰もいなかった、エミとミサとレイカは遊びはじめた。
マリアが眠っていたので、ベッドに寝かせた。
エミがレイカの側に付いて、ミサとレイカを遊ばせていた。
レイカの本当に楽しそうな笑顔が出ていた。
《エミがいるから、本当に助かるな～》と思っていた、優しい波動が来た。

5人が笑顔で返ってきた、ホノカが輝いていた。
『みなさ～ん、ゴールドのマユさんのお子さんの・・レイカです、よろしく』とレイカを紹介した。
5人がそれぞれレイカに笑顔を向けた、ホノカはエミとミサにも笑顔で自己紹介をした。
「チャッピー、また綺麗な人連れてきたね・・本当に浮気者だね」とエミが可愛いニヤで言った。
『エミ、浮気者なんて・・エミ意地悪1点』とウルで返した。
「やった～！・・やっと意地悪ポイント貰った」と少女の笑顔で言った。
5人が楽しそうに笑っていた。

『ホノカ、頼みがあるんだけど』と笑顔で言った。
「教えて以外なら、良いよ」と華麗ニヤで返された。
『それもだけど・・ジンを日曜日招待したいんだけど、ホストクラブは敷居が高くて』と笑顔で返した。

「了解、聞いてみるね・・多分来るよ、エースの招待だし五天女揃うしね」と笑顔で言った。
『ありがとう、助かります』と笑顔で返した。
シオンが3人と遊びだし、ハルカとレンが最終チェックに行った。

「エース、カスミお昼仕事してるの？」とホノカが聞いた。
『うん、若草通りのブティックだよ』と笑顔で答えた。
「どこなの・・今から冷やかしに行ってくる」と華麗ニヤで言った。
「ホノカ、私が案内するよ、2人で冷やかしに行こう」とマチルダが輝きニヤで言った。
「最高だね・・リョウもいると良いんだけど」とホノカが笑顔で言った。
『仕方ないな～、待ってて』と言って。
壁の電話番号表を見て、魅宴に電話をした、ミサキが出てリョウに繋いでもらった。

リョウが出たので、ホノカに替わった。
ホノカがリョウと話して、待ち合わせをしたようだった。
「ありがとう、行ってくるね」とホノカが華麗に微笑んだ。
『うん、カスミも仕事あと1時間だから、晩飯食べて来てもいいよ』と笑顔で返した。
「本当に良いの、話してみるね」とホノカが美しく笑った。
『マチルダ、今夜仕事だからカスミと一緒に入ってね』とマチルダに微笑んだ。
「了解、エース・・私こんなに気分が高揚してるの、初めてだよ」と輝きながら微笑んだ。
私は2人を笑顔で見送った。

マダムと松さんが来て、私がレイカを紹介した。
マダムも松さんもレイカに笑顔を向けた、レイカも可愛い笑顔で見

ていた。
シオンがフロアーに戻り、ユリさんが来た。
ユリさんにレイカを紹介すると、薔薇でレイカに微笑んだ。
その時魅冬が覗いた、私は2人を招き入れた。

「私の友人でゴールド・ラッシュのマユです、レイカの母親です」
と魅冬が笑顔で紹介した。
「マユと申します、レイカがお世話かけました・・ありがとうございます」と緊張気味に、深々と頭を下げた。
「良いんですよ、千鶴も素晴らしい女性に巡りあえてますね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「ありごとうございます、最高に嬉しいです」と美しく微笑んだ。
美冬がユリさんの向かいにマユを招き、マユが座ると笑顔で話していた。
マダムも松さんも笑顔で見ていた。

私はエミに借りた、【世界の遺産】を見ていた。
私の地球に場所と画像が取り込まれ、感動しながら見ていた。
マユが帰るので挨拶をしていたら、久美子が入って来た。

『マユ、レイカにピアノ習わせないかな？ここで』と笑顔でマユに言った。
「えっ、そんな事ができるの、習わせたいと思ってたの」と振向いて言った。
『久美子先生、もう1人大丈夫？』と久美子に笑顔で聞いた。
「もちろん、大丈夫ですよ」と久美子がマユに微笑んだ。
「ありがとう、よろしくね」とマユも嬉しそうに、笑顔で返した。
マユと久美子が話して、内容が決まったみたいだった。

マユがレイカを抱き上げて、お礼を言って美冬と出て行った。

久美子とエミ・ミサが、ピアノのレッスンに行った。

「来る時凄いものを見ました」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
『ユリさんが凄いいって言うのが、怖いですね』と笑顔で返した。
「土曜の一番街の人混みが、静寂に変わっていきましたよ・・マチルダとリョウとホノカが歩いて」と楽しそうに微笑んだ。
「その3人なら、さぞ迫力があったじゃろ」とマダムも笑顔で言った。
『帰りはそれにカスミが加わるから、怖いですね』とニヤで言った。
「まさに、銀河の奇跡ですね」と薔薇で微笑んだ、私も微笑んで返した。

私はＴＶルームを出て、指定席で準備状況をチェックした。
完璧に土曜の準備が出来ていた、静寂のフロアーを見ていた。
ミサの奏でる、ドレミの音が少し力強くなったと思っていた。
「晩御飯はどうするの～？」と通路からハルカが聞いた。
『俺はいいや、少し出かけるから』と笑顔で返した、ハルカが微笑んで消えた。

私は通りに出て、ドリームキャッチャーの2個分の部品を買った。
銀行の電子時計は、１６時３５分を示していた。
気温は３２度を示していて、夏だと表示しているようだった。
月末の週末を待ち兼ねていたように、過ぎ行く人々は笑顔だった。
しかし子供達は、夏休みの終わりが近いのを感じているのだろう。
どこか寂しげで、【宿題】が脳裏から消えないようだった。

私はアーケードの上の、【一番街】の大看板を見ていた。
家出初日に税関だと思った看板を、パスポートを取得出来たのかと？
自分に問いかけた、【出来たよ】と少し自信のある答えが返ってきた。

一番街の人混みを歩いていると、靴屋から可愛い顔が出てきた。
私は足早に靴屋の前まで行って、蘭とセリカに笑顔を見せた。
「セリカちゃん気を付けて、尾行されてるよ」と私を見て、蘭が満開ニヤで言った。
「えっ、お知り合いですか」とセリカが蘭を見て言った。
『セリカ、その人がＰＧの蘭だよ』と私が笑顔でセリカに言った。
「失礼しました、知らなかったから」と可愛く微笑んで、頭を下げた。
「良いのよ～、いつも靴を買ってもらってるんだから」と満開で微笑んだ、セリカも嬉しそうに笑っていた。

「それではセリカ姫を、送ってさしあげて」と蘭が私に満開ニヤをした。
『行きましょうか、姫』と笑顔でセリカに言って、腕をくの字に曲げた。
「良いのかしら・・蘭さん、ありがとうございます」と微笑んで、腕を組んで来た。
蘭の満開笑顔に見送られ、ゴールドを目指した。

『セリカ、少し元気になったね』と真横のセリカに微笑んだ。
「うん、昨夜衝動が来たけど・・自分に勝ったよ」と微笑んだ、流星の輝きが流れた。
『そっか～、嬉しいな・・セリカ少しづつ進もうね、衝動はいつか消えるよ』と笑顔で返した。
「うん、焦らないよ・・今回は本気だから」と真顔で言った、輝きの流れが止まらない感じだった。

『セリカ、俺・・千鶴にフリーパスの権利貰ったよ』とニヤで言った。

「うそ！凄いじゃない、嬉しいね～」と可愛く微笑んだ。
『うん、セリカとレイカを見に行く為にね』と笑顔で返した。
「レイカ、良かったね」と言って、腕を強く組んできた。
『セリカ、胸大きいよね～』とニヤニヤで言った。
「そうだ！聞きたかったのよ、エースは映像で見えるんでしょ？私の全裸を見たのね～」とニヤで返された。
『気付いたのか～、でも緊張感で楽しめなかったよ、今度ゆっくり見せてね』とニヤニヤで返した。
「ダメ～、私に夢中になって尾行されると怖いから」とニヤニヤで返された。
私はウルウルでセリカを見ていた、セリカはニヤニヤ継続中だった。

ゴールドのビルの前に、暴走族風のバイクが１０台以上止まっていた。
私はそれが気になったので、セリカとエレベーターに乗って店の前まで送って別れた。
そのまま1階に下りて、入口を見たら特攻服を着た若者の集団がいた。
私はその集団を避けて、反対側の出口から裏通りに出た。
《夜町じゃ珍しい集団がいるから、ユリカ気を付けてね》と心に囁いた、強い波動が返ってきた。

歩いていると、呼び込みのショウ君に声をかけられた。
「エースが退散させるかと思ってたのに」と笑顔で言った。
『怖いよ～・・俺、平和主義者だから』と笑顔ウルで返した。
「でも、ゴールドの女待ってるらしいぞ、最近絡んでるだろ？」とショウが真顔で言った。
『うそっ！誰なの？』と真顔で聞いた。
「名前は分らんけど、店にはまだ出てない子らしいよ」と答えた。
《ケイコ・・そんなイメージじゃなかったけどな～》と思っていた。

『そっか～、まぁあの通りで無茶は出来んでしょ』と笑顔で言って、ショウと別れた。

私は公衆電話で、豊兄さんに電話をした。

「おう、小僧・・どうした珍しい」と豊兄さんの声がした。

『豊兄さん、黒蜘蛛って暴走族知ってる？』とバイクに張ってあった、ステッカーの名前を言った。

「確か、ナンパ系の奴らだろ・・最近派手にやってるらしいよ、頭が変ったらしい」と答えた。

『そっか～、今、通りに集団で来てるから、気になって』と返した。

「今の頭、お前も知ってる・・源氏君の後輩だよ」と豊兄さんが言った。

『そうなんだ～、ありがとう』と礼を言った。

「無茶するなよ、危ない時は俺の名前出せよ」と私を心配して言った。

『うん、大丈夫・・無茶はしないよ』と返して、礼を言って受話器を置いた。

私は少し考えて、裏通りを回りユリカの店に行った。

店には誰もいなかったので、ユリカに心で囁いた。

《ユリカ、状況見たいから、お店借りるね》と囁いた、暖かい波動が来た。

私は窓辺で下の集団を見ていた、数えると13人だった。

下はどう見ても、私と同じ中学生の男だった。

《俺も状況が違えば、あの中に居たのかも。

豊兄さんに出会ってなければ、その無意味な反抗の気持ちを何処にぶつけたのか。

社会とか世の中とか運命とか、理由を他に求めていたのかも。

ユリカ・・俺は運が良いんだね、蘭にもユリカにも出会えたよ》

その集団を見ながら、心に囁いた。
暖かく優しい波動が来た、私はそれに包まれていた。
ケイコは闇の中にいた、そこから抜け出したばかりだった。
厳格な家庭に育ったケイコ、しかし高校で変る。
悪い男と絡むようになり、素行が乱れ、結局高校を中退した。
この頃まだ不安定だったケイコ、だから千鶴もデビューをさせていなかった。
私はケイコに出会った時、何も感じなかった。
このケイコと暴走族との出来事で感じる、自分を許すのは難しい事なのだと。
私はどちらかと言えば、不良と呼ばれる人間寄りの性格だった。
そして改めて感じる、自分の内面を考え直す。
私はこの事件の後、ケイコのデビューを必死に後押しする。
ケイコはその才能を開花させ、夜街の華になっていく。
ケイコが成人を迎えた年の正月、ケイコは実家に帰る。
父も母も暖かくケイコを迎えた、和解するまでに3年の月日が必要だった。

「後悔ってするんだよね、でも受入れろって教えて貰ったよ・・沢山の女性達に」

そう言って笑ったケイコ、美しく輝いていたよ。

27歳で子宮癌で逝ってしまったケイコ、その時の寂しさを私は今も連れている。

ケイコが生きていれば・・そう考えなくなったよ、それは叶わぬ夢だから。

でも今でも語りかける、ケイコのあの笑顔に。

ありがとうケイコ・・直接ぶつけてくれて。

響いたよ、心の奥深くまで・・ケイコの叫びが。

あれ以来、俺は使わなくなったよ・・【未熟】という逃げの言葉を。

ケイコ、俺は絶対に忘れないよ・・凛と立つその姿と。

ケイコのあの・・優しい瞳だけは・・安らかに眠れ・・ケイコ・・。

集団の価値

青空が支配していた土曜の夕方、夏の陽はまだ高かった。
月末の週末を待ちわびた、夜街の開店準備にも力が入っていた。
そこに場違いの集団が居た、白い特攻服に漢字の刺繍を派手に入れた。
私は天空の要塞の最上階から、その集団を見ながらドリーム・キャッチャーを作っていた。
その場所に不釣合いな集団に、夜街関係者は無視を決め込んでいた。
壁の時計が5時半を過ぎた頃、ユリカが笑顔で来た。
「なんか楽しそうね～、あの集団を見てる姿が」と爽やかニヤで隣に座った。
『怖いから、こっから見てるんだよ』とウルで返した。
「嘘は分ります・・海竜にドスを抜いた人間が、暴走族を怖いなんてね～」とニヤニヤで返された。
『あの連中の方が怖いよ、無鉄砲の馬鹿だから』とニヤで返した。
「蘭、遅いんでしょ・・晩御飯食べに行く？」とユリカが微笑んだ。
『もちろん、ご馳走になります』と笑顔で返した。
「同伴じゃないの？」と爽やかウルできた。
『今は・・経済的に無理です』とウルウルで返した、ユリカは楽しそうに微笑んでいた。
その時パトカーが巡回してきて、暴走族の集団が逃げるように帰った。
私はユリカと腕を組んで、ユリカが行きたいと言った、あのメルヘン居酒屋に行った。
小さな個室に通されて、ユリカはその雰囲気にご機嫌だった。

「メルヘンチックで可愛いね」と爽やかに笑った。
『ユリカは似合うね、メルヘンチック』と笑顔で返した。
「そうでしょ、２８歳でも似合ってしまうのよ」と微笑んだ。
『ユリカも案外、年齢を気にするんだね』とニヤで返した。
「最近、子供といる時間が多いからね～」と爽やかニヤで言った、
私はウルで返していた。

その時喧騒の居酒屋が静寂に包まれた、銀河の奇跡の４人が案内されていた。
私とユリカは、その光景をニヤニヤで見ていた。
「確かにマチルダまで入ると、見てて怖いね」とユリカが微笑んだ。
『破壊力、抜群だよ』と笑顔で返した。
私はユリカと楽しく食事をしていた、ユリカの食べる量を笑顔で見ていた。

「ところで、そのケイコって子には、何も感じなかったの？」とユリカが聞いた。
『うん、暗い影とか全然感じなかったよ』と真顔で返した。
「でも将来性有るんでしょ～？」と興味津々光線を発射してきた。
『ゴールドは若いクラブだから、最新型が見れて楽しいよ』と笑顔で返した。
「千鶴の星というか、才能だよね～」とユリカも微笑んだ。
『俺もそう感じたよ、ユリさんの話しで確信した』と笑顔で言った。
「うん、確かにミコトに対しては千鶴だよね、でもピーチだったからね」とユリカが真顔で言った。

『ユリカ・・俺はピーチを残した事を、後悔するような気がするよ』と真剣に言った。
「リョウが安定する為だったんでしょ、あなたは間違ってないと思うよ」とユリカも真顔で言った。

『うん、武藤から仕事を奪えなかったよ』と返した。
「私は、正しいとか間違ってるとかで判断しないよ・・武藤との事は嬉しかったよ」と美しく微笑んだ。
『ユリカに言われると、最高だよ』と笑顔で返した。

7時少し前に、2人で席を立った。
腕を組んで笑顔で、銀河の奇跡の横を歩いた。
「同伴ですか？ユリカ姉さん」とカスミが微笑んだ。
リョウとホノカが慌てて挨拶をした。
「そうじゃないの・・私がスポンサー」とユリカが、ウルでカスミに返した。
「ユリカさん改めて、ホノカと申します、よろしくお願いします」と華麗に微笑んで、頭を下げた。
「よろしくね、楽しみにしてるねＰＧの仕事」と言って爽やかに微笑んだ、ホノカも嬉しそうに笑顔で返した。

「それとリョウ、ミコトを3年以内に抜いてね・・あなたしかいないから」と真顔でリョウに言った。
「ユリカさん・・全力でやってみます」と美しい真顔でリョウが言った。
リョウは嬉しさと緊張を感じたようだった、魅宴の人間にとってユリカの言葉は重みがあった。

「ＮＯ１のまま引退するのは、実は心残りになるのよ・・蘭の挑戦状も、そういう意味もあるのよ」と４人を真顔で見ていた。
最高の４人の笑顔に囲まれていた、ユリカという大きな存在が伝えた言葉が響いていた。
カスミもリョウもホノカも、何かを覚悟して輝いていた。
私とユリカは笑顔で別れを告げて、居酒屋を出てユリカの店に向かった。

『最近ユリカ、少し変ったよね』と笑顔で言った。
「どんな所が変ったのか、２００字以内に述べよ」とミコトの台詞を真似た。
『この前のナギサに言った言葉も、今の銀河に言った言葉も・・伝達の言葉だよね』と微笑んで返した。
「うん、そうだよ・・今の私は蘭と同じなの、毎日が楽しいからね」と爽やか笑顔を見せた。
『ユリカ、俺も最近思うよ、大ママは凄いって・・ユリカの言葉は、ユリさんの言葉と同じ説得力があるよ』と思いのままを言った。
「ありがとう、完璧な同調で言ってくれて・・最高の褒め言葉になったよ」と美しく微笑んだ。
ユリカの店の前で、ユリカに手を振って別れた。

ＰＧに戻ると、フロアーで久美子がジャズを奏でていた。
四季とユメ・ウミが１０番で談笑していた。
私は指定席でドリーム・キャッチャーを作っていた。
「話し聞いたよ、私からもお礼を言わせてね・・ありがとう」と美冬が美しく微笑んだ。
『レイカのためだよ・・レイカが可愛いから』と笑顔で返した。
「マユが喜んでたよ、レイカに友達まで作ってくれたって」と笑顔で言った。
『うん、ミサと同じ歳だし、ここにはエミがいるからね』とニヤで返した。
「それにピアノに・・まさかそれも？」とニヤで返された。
『うん、誕生日のプレゼント』と笑顔で言った。
「幸せだよ・・レイカもマユも」と笑顔を残し１０番に戻って行った。

「レイカって誰かな～」と蘭が椅子を持ってきながら、満開で聞い

た。
『ゴールドのマユっていう女性の娘、可愛い４歳だよ』とニヤで返した。
「ゴールドのフリーパス、取ったのかな～？」と満開でニヤできた。
『うん、千鶴とミコト今日和解したよ・・次は蘭の所に来るね、千鶴』と真顔で返した。
「最高に嬉しいよ・・千鶴姉さん、幼馴染なの」と笑顔で言って、肩に乗ってきた。
私は蘭の香りを感じて、リングに革を巻いていた。

銀の扉から、女性達が次々に入場してきた。
土曜独特の雰囲気が支配してきた、そして静寂が支配した。
真赤なドレスが私の横まで歩き、神聖な場所に深々と頭を下げた。
プラチナブロンドが輝いて、彫の深い陰影の強い顔が現れた。
その顔の中心で、深緑の瞳が恐ろしく輝いていた。
完璧なスタイルに、美しい姿勢のままフロアーに歩いた。

それに続いて、純白のタイトなドレスが現れた、背中の大きく開いたドレスが頭を下げた。
西洋人に一歩も引かぬ、見事なプロポーションを見せつけていた。
久々にアップにした髪が、人工的な長さを足していた。
首筋から顎にかかる、美しいラインが強調されて色気を発していた。
瞳からは止め処なく輝きが溢れ、その輝きに優しい温もりがあった。

「うん、また上がったねカスミ・・どこまで行くのやら」と満開笑顔を私に向けて、蘭がフロアーに歩いた。
その姿に見惚れていた、今までに出さなかった余裕が出ていた。
その存在の証である、圧倒的温もりも増していた。
青い炎が見えるようで、マチルダとカスミの横に立っても、存在感は圧倒的だった。

久美子がサマータイムに入った、全員が笑顔で話していた。
ボーイ達も6番に集合して、静かにピアノを聞いていた。
ハルカとレンとナギサが入場して、全員が揃った。
久美子の演奏が止まって、久美子の表情が変わった。
静寂のフロアーに、緊張が伝わっていた。
久美子は激しいジャズを弾いた、完全に鍵盤を叩いていた。
何かが乗移ったかのように、恐怖すら表現して見せた。
最後の盛り上がりの部分では、立ち上がり顔を振り鍵盤を叩いた。
演奏が終わった時に、右手に拳を作り女性達に向けた。
全員が大きな拍手を贈り、最高の集中の中に入った。

大きな円を女性が描き、ユリさんが現れた。
圧倒的な存在感と、美しい姿勢で歩いて行った。
「最高の演奏でした、土曜の夜を感じました」と久美子に薔薇で微笑んだ、久美子も微笑んで返した。
「夜の世界に必要な物は、意志だけです・・それを今夜も見せましょう」と真顔で言った。
「はい」と女性が返事をした、集中していた。
「今夜も開演しましょう」の声に、「はい」のブザーを鳴らした。
開店前の準備に入った、シオンがハルカポジションに付いた。
私は感じていた、フロアーの空気が変わってきたと。

2度目の開店時に満席を記録した、それでも入口に多くの客がいた。
熱は一気に上がった、ボーイが必死に酒の準備をした。
マチルダがユリさんと、3番の東京の大手新聞社のお偉いさんの席から入った。
その輝きと会話で、3番席に笑顔が咲いた。
蘭とナギサの同時指名の、5番席が炎を上げた。

蘭の満開と、ナギサの華やかが咲き乱れていた。
その前の６番席はカスミの指名客で、カスミとレンが入って笑顔が溢れていた。
１０番は若いスーツの１２人のの団体で、四季を指名だった。
四季がその最高のパフォーマンスである、シンクロ挨拶で観客の拍手を浴びた。
ユメの指名客の２人組にユメ・ウミコンビが付き、鮮やかなコンビネーションを見せた。

その状況に触発されて、サクラさんが存在感を増した。
日本人離れしたその容姿とスタイルで、若手を圧倒していた。
その話術は巧みで、空白の時は存在しなかった。
アイさんが癒しを発散させて、熟れた女の魅力を振り撒いた。

しかし誰よりも圧倒的な姿を、ユリさんが見せ始めた。
今までは店の状況に気を配り、どこか引いて仕事をしていた。
勿論手を抜いていた訳ではない、それでも圧倒的なＮＯ１だった。
８月のそれまでの指名実績で、２位の蘭に３２ポイントの差を付けていた。
蘭と３位のアイさんの差は、４１ポイントあり蘭の圧倒的２位だった。

シオンが的確にサインを繋ぎ、全席にマチルダが回れるように繋いでいた。
マチルダは終始笑顔で、その存在感に負けぬ会話を披露していた。
入口には順番待ちの、多くの男達が待っていた。
どうしてもその熱に焼かれたいと、男達の笑顔が言ってるような感じだった。

９時３０分過ぎに女性達も落ち着いて、満席状態でも安定してきた。

その時私は強い波動を感じた、初めて何も無い時に感じた。
胸騒ぎがして、シオンに断って通りに出た。
呼び込みと客引きの女性が、その方向を見ていた。
私は急ぎ足で歩き、その光景を見た。
バイクを置いてきたのであろう、白い特攻服が見えた。
ゴールドのビルの下に、暴走族の集団が人数を増してたむろしていたのだ。
そして若過ぎる数人を残して、階段を登りはじめた。

私は走ってエレベーターに乗り、3階を目指した。
エレベターが開くと、ボーイと暴走族が睨み合っていた。
「客なんやから、入れろよ」と先頭の男が言っていた。
「その服では入れません、お引取り下さい」とボーイ頭であろう、中年の男が丁寧に言った。
「どうして？そういう差別をするの、この店は？」と睨みながら、ボーイに迫った。
「他のお客様に迷惑になりますから、認められません」とボーイは、あくまで丁寧に答えていた。
入口を見ると、若いボーイが2人立っていた。

暴走族の面々は、人数で少しずつ押していた。
『こんばんは～、忙しそうですね』と私はボーイ頭に笑顔で言った。
「おい、俺らが先やぞ」と暴走族の集団のゴツイ男が怒鳴った。
『先って、客じゃないでしょ・・あなた方は』と笑顔で返した。
「なんやと～」と凄んできた、こいつは馬鹿やなと思っていた。
『分ったよ、頭は誰ね？』と笑顔で返した。
「俺や、お前はなんかね？」とその後の男が微笑んだ、不良というより軟派な少年という感じだった。

《そこに居たのか～、そんなに馬鹿じゃないね》と思った、強い波

動が帰っていた。
『俺はこの夜街の子供、あんたら何考えてるの？・・・このままじゃ警察呼ばれるだけだよ』と真顔で返した。
「関係ねえよ、警察だろうが何だろうが」とリーダーが静かに言った。
『あんた頭だろ、それで良いの？仲間に巻き添え食わせて』と返した。
「俺等は一心同体やかい、それは仕方の無い事なんや」と真顔で返していた。
『集団じゃないと、何も出来んって自白してるんだ』と笑顔で言った。
「俺に喧嘩売ってるの？お前」と緊張感が増した。
『この状況は迷惑だから、それを解決するためなら・・それで構わんよ』とニヤで言った。
「俺と1対1でって事やな？」と少し微笑んだ、私も笑顔で頷いた。
暴走族が階段を降りはじめ、私が後に続こうとすると。
「本当にバカなんだから」と腕を千鶴に掴まれた。
『千鶴、今夜も綺麗だね』と笑顔で言った。
「もう、警察に連絡するから、行ったら駄目よ」と千鶴が真顔で言った。
『千鶴、それじゃあ何の解決にもならんよ、ケイコが脅えて生きるのは変らんよ』と真顔で言って。
『心配ないよ、大丈夫だから』と笑顔で言って、後を追った。
「場所は？」とリーダーが言った、通りに出た時に囲まれていた。
『目立たない所なら、何処でも良いよ』と笑顔で言った。
私はリーダの横に並び、暴走族に囲まれて市役所の方向に歩いた。
「お前度胸があるの？それとも馬鹿なの？」とリーダーが聞いた。
『後者でしょうね、この状況は』と笑顔で言った。

「なんの為にやるの、お前に関係無いのに・・こんな事？」と真顔で聞いてきた。
『それはこっちの台詞、どうしてあんな事するの？』と聞き返した。
「あの店に逃げ込んでる女から、ケジメを取らんといかんのや」と静かに言った。
『頭のあんたが、主導してるの？』と真顔で聞き返した。
「いや、そこのミツが大恥かかされたらしい」と私の右横の男を顎で示した。
『お前らヤクザなの、女からケジメ取るって・・お前1人で何も出来んの？』と横のミツに詰め寄った。
全員が沈黙していた、私はあまりの下らなさに怒りが湧いてきた。
市役所の薄暗い河川敷に降りた、私は円の真ん中に立たされた。

『それで、リーダーをやったら・・次はミツ、お前やから』とミツに微笑んだ。
「お前俺らのバックに、誰がいるかも知らんで・・馬鹿やな」とミツが強がって微笑んだ。
『その台詞、あとでそっくり返してやるよ・・お前ら全員追い込んでやるから』と笑顔で返した。
沈黙が流れていた、リーダーは中学生位の男と話していた。

『何してるのリーダー、早くやろうよ』と笑顔で言った。
「お前、〇〇中のチャッピーか？」とリーダーが言った。
全員に緊張が走った、私は不満が爆発寸前だった。
『知らんよそんな事、今なんか関係があるの？』と真顔で返した。
私はずっと溜まっていたストレスが頭を持ち上げて、気分が乗ってきていたのだ。

「まぁ待てよ・・どうなんだよ？」とリーダーが聞いた。

『だったらどうなの？ここまで連れて来て、どうするの？』と静かに聞いた。
「それならやる訳にいかん、俺は豊を敵にまわすほど馬鹿じゃない」と静かに返してきた。
《チェまたか・・つまんね～》と心で呟いた、強い波動が怒っていた。
《ごめんユリカ、平和に解決します》と慌てて囁いた、優しい波動が来た。

『ちょっと待てよ、さっきケジメ取らんといかんって言ったやろ・・どうするん？』と真顔で聞いた。
「それは・・諦めさせるかい」と返してきた、私はリーダーの目を見ていた。
『馬鹿な事今さら言うなよ、ミツは俺に脅しをかけたんだぞ・・俺今夜から怖くて寝れんよ』と静かに言った。
振返りミツを見た、完全に萎縮していた。
『ミツ・・バックは誰ね？言えよそいつら潰しに行くから・・言わんと治まりつかんよ』と笑顔で言った。
私はミツの目の前まで行って、ミツの顔の３ｃｍ位の所で目を見ていた。
『早く言えよ、ミツ』と静かに迫った。

ミツは悔しかったのだろう、私を睨んで黙っていた。
『よし、ミツ２人でやろうや・・お互いバックは関係無しに』と微笑んで言った。
「やめとけよ・・俺、ボクシングやってるんやぞ」とミツがニヤで言った。
『なぁミツ、俺はボクシングやろうって言ってるんじゃないよ』とニヤで返した。
ミツが怒りの表情で両手に拳を作った、全員に緊張が走った。

《確かにナンパ系の集団やな、この位で緊張感が出るのか》と思っていた、強い波動がきた。
《ユリカ、これだけはしとかないと駄目なんだよ》と心で囁いた、優しい波動がきた。

ミツがボクシングらしく両手を構えた、私は笑顔でそれを見ていた。
『来いよミツ・・早くケリつけようよ』と笑顔で言った。
ミツは間合いを詰めて、足を動かしフットワークを見せた。
そして右ストレートから来た、私は少し体を横に反らしてかわして。
次の瞬間、ミツが踏み込んだ右足の膝に、踏みつける感じでケリを入れた。
完璧な場所に入ったのを感じた、【グキッ】という鈍い音まで聞こえた。
ミツは倒れて、膝を押さえて苦痛の表情を見せた。

『お前バカだろう、喧嘩で真っ先に相手の顔を狙うなんて』とミツを上から見下ろし言った。
『折られるならどこが良い、指定しろよ・・ミツ』と真顔で言って、右腕の間接をきめた。
私はミツの間接を徐々に反らして、苦痛の表情のミツを笑顔で見ていた。
『どうする・・右腕で良いのか？』と静かに聞いた。
私を囲んでいる集団は、沈黙したまま見ているだけだった。
「頼む・・勘弁してくれ」とミツが叫んだ。
『ミツ・・バックを言えよ』と耳元に言った、ミツの右腕の反りは限界一歩手前だった。
「源氏っていう人や、俺達の先輩」と静かに言った。
私はミツの腕を解放して、立ち上がった。
『ＯＫリーダー、明日から源氏君を狙うよ、１度勝負してみたかっ

たし』とリーダーに笑顔で言った。
「待ってくれ、それは困る源氏君には関係ない事やから」とリーダーが言った。
私はリーダーの表情を見て、振返った。
『ミツ・・じゃあどんな恥をかかされたの、それは言えよ』と静かに迫った。
沈黙するミツを、仲間たちは遠巻きに見ているだけだった。

「ミツ、お前・・金を持ち逃げされたって言ったよな」とリーダーが静かに言った。
『金額は?』と私がリーダーに聞いた。
「15万・・全財産やって言ったよ」とリーダーが返した。
『俺が確認取るよ、もし事実じゃない時は・・お前ら全員狙うからね』とミツに笑顔で言って、立ち上がった。
リーダーも沈黙していたので、私は集団に背を向けて歩き出した。

暴走族の連中は追いかけても来なかった、沈黙のままミツを囲んでいた。
私はやはり、豊の子分扱いされた事に憤りを感じていた。
そして反逆の理由のくだらなさに、ストレスは溜まっていた。
集団じゃないと何も出来ない奴らと、それを継承するように存在していた子供に。
下の者が巻き添えで処分される事を、仕方がない事と言った言葉が、怒りを増幅させた。
無責任で無秩序なその考えが、いや考える事すら拒否している心が。
豊と生きた私には、それ自体が理解出来なかった。

私はゴールドに歩きながら、遠くに見えてきた夜街の明かりを見ていた。

自分はどうなのかと問いかけながら、心の中に眠らせている反逆の想いには理由があるのかと。
無意味な事で人を傷つけていないかと、反抗期などという事で誤魔化していないかと。

客引きの女性達が、笑顔で駆け寄ってきた。
「な～んだ、無傷じゃない」とキャバレーの優衣ちゃんに、ニヤニヤ顔で言われ。
「私がヨチヨチしてやろうと、思ったのに～」とピンサロのトモちゃんが笑顔で言った。
『意地悪された、ヨチヨチして』と私はウルで返した。
私はミニスカートの危ない女性５人に囲まれて、ヨチヨチしてもらっていた。
厚化粧の香水の強い円の中にいて、笑顔で回復されていた。
ユリカの店の明かりを見上げながら。

私はリンダとマチルダの影響が強く、変化を続けていたのだろう。
夜街の個性的な人々と触合い、成長を余儀なくされていた。
そして私の頭の中に持ち上がった、ミホが大きな存在になっていた。
ミホとの再会の為に、千鶴が私の後押しをしてくれる。
美しく楽しげに笑う、感性が鋭く熱い女性だった。
千鶴はその後１０年かけて、ゴールドをＰＧクラスに押し上げる。
店名通り若い女性達に、夜の舞台に金が眠っていると言い続けた。

バブルの時に最も熱かった1人である、その面倒見の良さで惹きつける。

常に最新型が金を掘りに来る、自らの時間と才能を全て賭けて。

【ゴールド・ラッシュ】・・これほどバブルを表す店は無い。

しかしその夢を支えたのは、千鶴という圧倒的な存在だった。

どんな時でも明るさを捨てない、美しいという才能に負けない心が存在した。

私はゴールドとずっと関わった、最新型が見たくて。

千鶴に会いたくて、その蘭とは違う温もりに触れたくて。

ミホに再チャレンジした時、心の支えだったよ・・千鶴の笑顔が。

「自分が終了を宣言しない限り、終わりは来ないわ」と笑った千鶴。

千鶴・・ありがとう・・真後ろに立ってくれて。

振向くと常に千鶴がいたね・・だから俺は向き合えたよ。

ミホとも・・そして、自分とも・・。

心の歌

夜街と言われる場所、週末を待ちわびていた。
現在のように、週休2日が当たり前でなかった時代だった。
公務員や金融関係ですら、土曜の午前中は仕事だった。

土曜の午前中の時間は、私達悪ガキには大切な時間だった。
その日の夜遊びの打合せをしていた、年齢が進むに連れて危険なゾーンも近づいた。
互いに危険地帯に踏出して、その自慢をするのが恒例行事だった。
社会の懐が深くて、受入れる許容を持っていたのだろう。
今よりもどこか自由で、夢が有った気がする。

土曜の夜の雑踏の中で、ミニスカートの女性達に私は回復されていた。
危ない服の女性達が、笑顔で私を囲んでいた。
私も笑顔でその女性達に、礼を言って。
5人に手を振って別れて、ゴールドに向かいエレベーターに乗った。
3階のゴールド・ラッシュは、入口からも分る大盛況だった。

私は受付にいた年配のボーイ頭に挨拶をして、奥の小部屋に行った。
小部屋を覗くと、ケイコとレイカがいた。
レイカが私を見て、笑顔で駆け寄ってきた。
私も笑顔でレイカを抱き上げて、ケイコの向かいに座った。

『レイカ、まだ起きてるの～』と笑顔で言った。
「眠いけど・・眠れないの～」と可愛く笑った。
『仕方ないな～、抱っこしてネンネさせてあげるね』と微笑んだ、
レイカも笑顔で返してくれた。

私は立ってお姫様抱っこをした、レイカは嬉しそうに抱かれて目を閉じた。
レイカの体温は下がっていて、鼓動も吐息も安定していた。
ケイコは私の来た意味が分かっているのか、緊張してるようだった。
レイカが深い眠りに落ちて、ベッドに寝かせてケイコの前に座った。

『ケイコ・・ミツと話をつけた、お金持って家を出たのは本当の事なの？』と真顔で聞いた。
「お金？・・お金なんて持って出てないよ」とケイコも真顔で答えた。
『そっか～、やっぱり嘘だね・・ケイコが１５万持って家を出たって言ってたから』と笑顔で言った。
「まさか！１５万なんて有るはずも無いし」とケイコも笑顔になった。
『もう直接連絡無いと思うけど、もし何か言ってきたら俺に教えてね』と微笑んで立ち上がった。
「ありがとう、本当は怖かったの」とケイコが笑顔で見送ってくれた、私も笑顔でケイコと別れた。
帰ろうと裏を歩いていると、ボーイ頭に呼び止められて店内に案内された。

１番奥の席に座っていると、真赤なドレスを着たセリカが笑顔でやってきた。
『セリカ・・赤似合うね、可愛いね～』と笑顔で言った。
「可愛いでしょ～、ママすぐ来るからね」とセリカが可愛く微笑んだ。
『セリカに会えたから、いいのに～』と微笑んで返した。
「そうはいかないよ、暴走族とやりあったんだから」とセリカが輝きを流して笑った。
『暴走族だったの・・怖い』とウルウルで返した。

「本当に変な男だね～、この店じゃ噂の男だよ」と可愛いニヤで返された。

『ねぇセリカ・・衝動ってどんな感じで来るの？』と真顔で話題を変えた。

「1人の部屋に帰るでしょ・・そしてお風呂に入ると・・寂しさが襲って来るの」と真顔で答えた。

『そっか～・・寂しいよね、誰もいない家に帰るのは』とセリカの瞳を見ながら囁いた。

「ずっとなの・・子供の頃からずっと、1人の家に帰ってたから」と寂しそうな目で笑った。

『セリカ、大丈夫だよ・・セリカは絶対に愛される人だから。

今は1人かもしれないけど、今は誰かを愛せないかもしれないけど。

衝動に負けなければ、近い将来誰かを愛せるよ。

そうしたら、その人と一緒に暮らせば良いんだから。

それまでは俺がセリカを見てるから、セリカが体が辛い時は側にいるから。

その時にセリカが望めば、俺は絶対にセリカを1人にしないから。

セリカ・・焦らないで、寂しさに負けないでね』

流星の流れる瞳を見ながら、最後は笑顔で伝えた。

「うん、その約束とあの誓いがあるから、大丈夫だよ」と可愛く微笑んだ。

『セリカ、今から千鶴も誘うけど・・明日午後1時から、PGで外人さんの送別もかねたパーティーがあるの、セリカも招待したいんだけど』と微笑んで誘った。

「えっ、あのブロンドの綺麗な子の・・嬉しいPGも見れるし、必ず行くね」と笑った、美しさが溢れていた。

『そっか良かった～、シオンも喜ぶよ』と笑顔で返した時に、千鶴が近づいて来た。
「ママが行く時は、一緒に行くね」とセリカが微笑み、千鶴と交代した。

「無傷みたいね、もう心配したんだから」と千鶴が美しく微笑んだ。
『平和主義者だから、大丈夫ですよ～』とニヤで返した。
「ケイコの恐怖は取れたの？」と千鶴が真顔で聞いた。
『うん、ただ奴らは馬鹿だから・・まだ来るかも、だから提案があるんだけど』と真顔で返した。
「どうぞ、何でも言って」と千鶴が微笑んだ。

『明日午後1時から、ＰＧで外人さんの送別かねたパーティーがあるんだよ。
そこに千鶴とマユとセリカとケイコを、招待したいんだ。
セリカは今ＯＫを貰ったから、そしてケイコには紹介したい男がいる。
その人の知り合いと言うだけで、ケイコはあの連中から守られる。
ケイコには内緒で、千鶴が連れて来て欲しいんだけど。
千鶴達はパーティーを楽しんで、レイカもお友達と遊べるし。
それに・・五天女揃うし、ミコトも来る。
そして、千鶴・・蘭が待ってるよ』

私は真顔で千鶴の美しい真顔を見て、最後の蘭に力を込めた。
「ありがとう・・必ず行くね、蘭に会いたい」と千鶴も真顔で答えた。
『じゃあケイコは大丈夫だね、マユにも聞いといてね』と笑顔で言った。
「了解・・私は今日の全ての事に対して、どんなお礼をすればいいの？」と千鶴が微笑んだ。

『お礼はいらない・・千鶴1つだけ教えて、この店を始める時のスポンサーとは関係が切れたの？』と真顔で聞いた。
「うん、計算通り上手く捨てられたよ・・あっちは家庭が有るし、弱み握ってたから」とニヤで言った。

『そっか～、今度相談が有るんだよ、月曜の午後にでも会いに来るよ』と笑顔で言った。
「いつでもどうぞ・・しかし明日は緊張するな～、五天女揃いなんて」と微笑んだ。
『駄目だよ千鶴、ミコトは一歩も引かないよ・・下の世代が見てるからね』とニヤで言って、立ち上がった。
「よし、頑張るよ・・私もミコトの友として、蘭の先輩として」と千鶴も笑顔で立った。

2人でエレベーターまで歩いた、千鶴が腕を強く組んでいた。
『千鶴、蘭がユリさんに挑戦状を出したんだ』と笑顔で言った。
「うそ！・・やる気なんだね、蘭は」と嬉しそうに微笑んだ。
『うん、だから千鶴もハッパかけてやってね』と微笑んで、エレベーターに乗った。
「了解、背中を押すよ・・明日楽しみにしてるよ、本当にありがとう」と美しく微笑んだ、私も笑顔で手を振って別れた。
通りを歩いていると、呼び込みさん達から冷やかされた。

指定席に戻ると、フロアーは満員状態で熱が高かった。
シオンが休憩をしていた、私はシオンの隣に座った。
『シオン、明日セリカも来るって』と笑顔で言った。
「嬉しいです、楽しみですね・・セリカちゃん」とニコちゃんで返してきた。
『ねぇシオン・・先生心残りの女の子がいるの、守ってやれなかった』と真顔で言った。

「先生・・なんとなく知ってるよシオン、その子も先生を待ってるよ」と美しい真顔で私の目を見た。
『そうだよね・・シオン、待ってるよね』とシオンの輝く瞳に聞いた。

「先生の力みたいなの・・リンダちゃんが強めた映像。
マチルダちゃんが鮮明にしたんでしょ、それは知ってたよ。
リンダちゃんが空港で抱かれて、ど～んをする前に言ったよ。
先生がんばれって、映像のレベルを上げるからって。
それを鮮明にできる人間を送るからって。
先生の映像の意味を感じて欲しいって、そして後悔にチャレンジしてって。
リンダちゃんは先生の全てを感じたいから、髪の毛を抜いたんだよ。
リンダちゃんの力は、ユリカさんとも違うんだね。
リンダちゃんの力は・・人の過去を読み取るんだよ。
別れの前、先生の過去を読み取って・・リンダちゃんは泣いたんだよ。
リンダちゃんの髪の毛を結んだ、先生の腕が背中を押した時に伝わった。
飛行機のドアの所にリンダちゃんが来て、先生に手を振ったでしょ。
あの時の叫び、シオン唇で読み取ったよ。
その叫びは・・ミホを諦めないでって叫んだよ。
リンダちゃん・・心の底から叫んだよ」

シオンは完璧な歌で伝えてくれた、私は本当に嬉しかった。
最高の感動の中にいた・・リンダの深さに触れて、それを歌で伝えられて。
私は幸運に感謝していた、原作者の粋なシナリオに礼を言った。

熱く強い波動が包んでくれた、リンダの叫びの言葉が内側に入って来た。
マチルダをリンダが送った意味も理解できた。
私は最高の教師である、ニコちゃんに戻ったシオンを見ていた。
最高の輝きの中に、その純白を主張しながら純粋を提示していた。

『シオンありがとう、先生ミホに会いに行くよ。
シオン、先生はミホとの事をシオンには話すから。
シオンはそれを聞いて、思った事を全て教えて。
先生はそれだけで・・シオンの言葉だけで自信が持てるから。
シオンは先生の最高の先生だから、シオンの言葉は直接心に響くから。
お願いね・・詩音』

ニコちゃんシオンに、笑顔で伝えた。
「うん、シオン最高に嬉しいです・・先生の役に立てるんですね」
と最高ニコちゃんで立ち上がった。
『よろしく、シオン』と笑顔で言った、シオンはニコちゃんで頷いてハルカ席に戻った。
私はシオンの背中を見ていた、その無限の可能性に心躍らせながら。

《ユリカ・・シオンともう少し話さないと駄目だね、シオンが伝えてくれるね》と心に囁いた、暖かい波動が包んでくれた。
私は考えていた、リンダを想いながら。
私の映像の意味を考えていた、いつから始まったのかと。
記憶を辿って気付いた、あの時だったと。
ヒトミとの最後の時を迎える前年のイブの夜、ヒトミに会いに行った。
その日のヒトミは温度の揺れが激しくて、楽しそうだと感じていた。
私はヒトミに、その年の楽しかった話をした。

そして1番嬉しかったのは、ヒトミに会えた事だよ。
そう言った時に、温度が激しく揺れた。
そして映像が流れた、それは霧に霞む山を上空から見ていた。
そして私は空に浮きながら、ヒトミと手を繋いでいた。
ヒトミの瞳が可愛くて、初めて見せる笑顔に感動していた。
そして霧が晴れてきた、その真下に遺跡が見えた。

私はハッとして、我に返った。
《あの遺跡・・マチュピチュだった、ヒトミと上空から見た遺跡。
俺の映像の原点は、ヒトミの想いだったんだ。
ヒトミが俺にプレゼントしてくれたんだ、この映像が見える力を。
最高のクリスマスプレゼントだったんだ、ヒトミからの。
そしてヒトミが最後に伝えてくれたんだ、俺のやるべき事と。
そしてリンダがレベルを上げて、マチルダが鮮明にしてくれた。
全ては俺の成すべき事の為に、その難問を解くために。
ヒトミ・・俺は必ず成し遂げるよ。
そして必ず会いに行くよ、そこにヒトミが存在するんだろ。
あの天空の城に・・遥かなるマチュピチュに》

私は心に囁いて、強く熱い波動に包まれていた。
そしてフロアーの蘭を見ていた、蘭も真顔で私を見ていた。
私は蘭に笑顔を向けた、蘭も最高の満開で微笑んだ。

終演前のフロアーに、熱を増していく青い炎が躍動していた。
私はそれを見ながら、確信的に思っていた。
その青い炎は知っている、その存在の意味を。
絶対に心に従うという、その強さも手に入れている。
世界の情勢にも敏感で、知識の量も計り知れない。
そしてユリカの言った、蘭を表現した言葉。

蘭の心の容量は常人と違う、ユリさんレベルだと。
だから経験を全て、心に塗り込めるのだと。
薔薇の教えの言葉が蘇り、大きく響いてきた。
【経験はしただけでは駄目、内側に刻み込まないと】と言った言葉が。
私はその言葉を噛み締めて、蘭に笑顔を向けて立ち上がった。
蘭の満開に見送られ、裏階段から通りに出た。
土曜の夜の人混みが歓迎してくれた、少し変化をしている私を。

魅宴の裏に入り、満席のフロアーを見ていた。
笑顔が溢れていた、魅宴にしては少し騒がしかった。
ミコトとリョウが、その楽しげな騒がしさを先導していた。
《ミコトが先導してる、ユリカ・・魅宴が変化するかも》と驚いて囁いた、強い波動が来た。
私はミコトを見ていた、その余裕を纏った笑顔が少し変った気がしていた。

「鋭いね～、エース」と大ママが私の横に来て言った。
『ミコト・・魅宴の変化を望んだのかな？』とフロアーを見たまま言った。

「ミコトも私も限界を感じていたんだよ、魅宴の今後にね。
PGや新しい店を見てたから、時代が大きく変ろうとしてるよね。
酒を飲む行為も変化してきた、生活に安定感が出てきたし。
景気も上がり続けてるね、それで考えていたんだよ。
魅宴の変化をね、私はフロアーにあまり立たないから考えつかなかった。
今日、ミコトが言ってきた・・2面性だとね。
今までを捨てるじゃなく、2面を持つという方法をね。

リョウの出現とミサキのデビューで、ミコトも考えたらしい。
そして今日、エースが最後にミコトの背中を押したんだろ？
何したのかな・・どんな魔法をかけたのかね～」

大ママが私の横で、ニヤニヤで見ていた。
『魔法じゃないよ・・ミコトと千鶴の和解をアシストしただけ』と笑顔で返した。
「そうか・・それでね～、ありがとうねエース」と微笑んでフロアーに歩いて行った。
私は大ママを見送り、フロアーに目を移した。
ミコトが奥のキングの指定席に向かう所だった、リョウとハルカを連れていた。
年配のスーツを着た偉そうな3人の男が、笑顔で迎えていた。
ハルカは積極的に話してるようで、ミコトやリョウに引けをとらなかった。

私はハルカを見ていた、数週間で成長した姿を。
ハルカは巣立つイメージを、ずっと追いかけていた事を思い出した。
私も巣立ちを目指すなら、そのイメージを追わなければと思っていた。

その時に映像が流れた、病室で座っているミホの姿が。
鉄格子の遮る窓から、外の遠い光を見ているミホが映っていた。
その瞳には光が無く、無表情の顔で座っている。
だが私はミホの叫びを感じていた、早く出してと叫んでいた。
私はそのミホに語りかけた、心を込めて伝えた。

《会いに行くから待っててね・・ミホ。
待たせたね、ごめんね・・ミホ。
今度は最後まで連れて行くからね、手を繋いで一緒に出ようね。

怖くないから、ミホは俺が守ってやるから。
もう辛い思いはさせないからね、ミホのいるその小部屋のドアを開けるよ。
そして違うドアから出ようね、暗く寂しい部屋で隠れてないでいいよ。
どんな事があっても、その部屋を探し出すから。
そしてミホを苦しめ続けた、両親と兄貴を殺した男の顔を俺が見るよ。
必ず逮捕してもらおう、卑劣なその男だけは。
ミホ・・あと少し待っててね、笑顔で会いに行くから》

熱い波動に何度も包まれながら、私は自分に言い聞かせていた。
ヒトミとチサを想いながら、遥かマチュピチュを感じながら。

「どうしたのかな？何か辛い事でもあったの？」と後からミコトの声がした。
『少しね・・ミコトの胸で泣かせて』と真顔で返した。
ミコトは笑顔で両手を広げた、私はミコトを抱きしめた。
甘い香りと暖かい温度に包まれた、ミコトの優しさが伝わってきた。

「1度だけ言うね・・千鶴をありがとう」とミコトが耳元に囁いた。
『良かったね・・ミコト』と囁いて返した。
「私は魅宴の命・・もう迷わないよ、PGには負けないから」と優しく囁いた。
『そうだね、ミコトがトップだよ・・でもミコトは別の幸せを望むよね』と顔を離してミコトを見た。
「もちろん、私の夢は・・お母さんになる事だからね」と微笑んだ、美しさが溢れていた。
『ありがとう、ミコト・・元気充電できたよ』と笑顔で言って、体を離した。

「少し考え過ぎだよ、自分らしさを忘れないでね。
それがエースの魅力でしょ、それが人を惹き付けるんだよ。
何かに挑戦する時こそ、自分を忘れたらいけないよ。
どんなに難しく辛い事でも・・楽しみなよ。
それが出来れば・・結果が気にならなくなるよ。
求めるべきは結果じゃない、そのゴールを目指そうと決めた心と。
ゴールまでの過程に、費やした気持ちだから。
全力で楽しんでね・・エース。
私も見てるよ・・言い訳は許さないから」

ミコトは私を見ながら、余裕の笑顔を見せて背を向けた。
私はその背中を見送りながら感じていた、もしミコトが夜の世界のトップを目指したら。
大ママの後継者になっただろう、その優しさの表現方法が熱い。
ミコトは常に余裕を振り撒いて、熱さを感じさせない。
しかしその優しさは熱く燃える、その心は熱く燃えている。

他に類を見ない存在、命を名にした者・・ミコト。
夜に咲く花・・その存在の貴重さ、月下美人。
どんなに憧れても届かない、距離や深さを測れない。
私はそう思っていた、ミコトに憧れながら。

「さて、伝説を作りに行きますか」とハルカの声がした。
『最高の状況が君を待ってるよ、伝説の女・・ハルカを』とニヤで返した。
「祭り上げてよ・・どこまでも」とハルカも美しく笑った。
私はハルカと腕を組んで通りに出た、大勢の人々が闊歩していた。
ハルカはそれを見て、私にニヤニヤ光線を出して腕を私の首に回した。

私は笑顔で、純白のドレスを着たハルカを抱き上げた。
『行きますか・・姫』とハルカに微笑んだ。
「くるしゅ～ない・・送ってたもれ」とハルカが笑顔で言った。
私は人混みをハルカを抱いて歩いた、視線の集中を楽しみながら。
「ハルカ！・・良いな～伝説抱っこ」と客引きの女性達に笑顔で言われ。
「ハルカちゃん、綺麗になったね～」と呼び込みさんからニヤで言われた。
ハルカは笑顔を振り撒いて、都度挨拶をしていた。
美しい輝きが溢れていて、私も嬉しかった。

PGにエレベーターで上がった、エレベーターが開いた時に驚いた。
蘭とナギサと9人衆に、マチルダとシオンと久美子が笑顔で待っていた。
全員が笑顔で拍手をして、ハルカを迎えた。
私は熱の残ったフロアーまで歩いて、ハルカを降ろした。

「それでは、今日の報告を述べよ」と蘭が満開で微笑んだ。
『ユリカを抱っこして、千鶴にユリカスペシャル』まで言うと。
「千鶴って・・ゴールド・ラッシュのママかな？」とナギサがニヤで言った、私もニヤで頷いた。
全員がニヤニヤで私を見ていた。
『それから4歳のレイカを抱っこして、ミコトに抱かれて、ハルカに伝説抱っこです』と笑顔で言った。
「今夜は少ないね～、少し良い子になって来たね」と蘭が満開で微笑んだ。
『はい・・僕、良い子です』と笑顔で返した。
「特殊事項は？」と蘭が私の頭をヨチヨチしながら言った。

『暴走族の人達が、ゴールドに意地悪してたので・・説教しときました』と反省顔で言った。
「ちゃんと説教したんだね？」と蘭が満開ニヤで言った、私もニヤで頷いた。
「よし・・リーダー何かあるの？」と蘭がカスミに聞いた。
「はい、明日は9人衆とエースは、9時集合でお願いします」とカスミが笑顔で言った。
「了解です、他に何かありますか？」と蘭が全員に聞いた。
「ゲストの最終報告を、エースお願いします」と美冬が私に微笑んだ。

『はい、梶谷さんと和尚に豊兄さんが夜街以外です。
夜街関係は、魅宴が大ママ・ミコト・リョウ・ミサキ。
そしてリアンとユリカ、ミチルとホノカ。
それとゴールドから、千鶴とマユとレイカに、セリカとケイコ。
そしてジンですね』

私も笑顔で報告した、全員の笑顔が見ていた。
夏の深夜、熱の覚めやらぬ場所で・・・。

この日のシオンの、リンダの話しは忘れられない。

私はリンダの英語が理解出来なかったから、リンダは全てを言葉にしていた。

そしてシオンが読み取ったのは、リンダの心まで読んだのだ。

私は3度目にリンダに会った時に、シオンとリンダとあの湖に行く。

リンダはその青さに感動して話してくれた、シオンが通訳をしてくれた。

リンダは蕎麦屋で私の映像に気が付いていた、アルバムを見る私の目で気付いた。

そしてリンダは私に英語で伝えた、その映像を見る人間が出ると感じていた。

髪の毛を結んで、私の過去をリンダは見た。

私の強く心に残ってる事が、全て見えたらしい。

そしてどうしても伝えたくて、飛行機のドアまで走った。

ミホを諦めるなと、伝えたかったとリンダは笑った。

その時の私はミホに挑戦していた、少し迷っている時期だった。

リンダは多分それを感じて来たのだろう、優しい笑顔で私を抱きしめてくれた。

「アキラメタトキニ・ハイボクガキマル」とリンダが私の耳元に優しく囁いた。

私はリンダを強く抱きしめて、ブルーの瞳を見ていた。

『ＯＫ、リンダ・・ネバー・ギブアップ』と笑顔で返した。

リンダの楽園のブルーが輝いていた、その遥かなるブルーの輝きを

見ていた。

シオンありがとう、私に入ってくれて・・映像を見てくれて。

そして伝えてくれた・・シオンにしか出来ない方法で。

白い心のままに・・言葉を詩に変換して・・歌ってくれた。

響いたよ、シオンの歌が・・その声が。

最高だったよ、その全てが・・その存在自体が。

最高の純白・・心を歌う者・・詩音。

月下の雫

静寂のフロアーに笑顔が溢れていた、楽しい事の予感が包んでいた。
全力を使い果たした女性達は、短い休日に入った。
控え室に戻る背中にも、充実感が溢れていた。

私はＴＶルームでミサを抱き、サクラさんをタクシーに送った。
マダムが松さんと、ハルカがマリアを抱いて出てきた。
私はタクシーを止めて笑顔で見送った。
ＴＶルームに戻ると、ユリさんと蘭とマチルダにカスミとシオンが待っていた。
ユリさんが悪戯っ子を出して、唇の前に人差し指を出した。
私は喋るなと合図され、ユリさんからメモを受け取った。

【ユリカを驚かせます、マチルダとシオンと3人の振りをして】と書かれていた。
私はニヤで全員を見て、マチルダが右からシオンが左から腕を組んで通りに出た。

『マチルダ、今夜も素敵だったよ』と腕を組んで歩くマチルダに、笑顔で言った。
私とマチルダとシオンの後には、ユリさんと蘭とカスミがニヤで付いて来ていた。
「そうでしょ～、惚れ直したね」とマチルダが輝きニヤを出した。
『うん、惚れ直したよ・・マチルダとの海での誓いを忘れそうなほど』と微笑んだ。
蘭が後から私の耳を強く引っ張った、満開笑顔で睨んでいた。
「エース・・蘭姉さんに捨てられたら、私と2人で旅をしようね」
とマチルダも蘭にニヤをしながら言った。

『本当に！・・マチルダ最高に嬉しいよ』と私も蘭に笑顔で言った。
「エース行きそうですね～」とシオンがニコちゃんで蘭を見た。
『シオン疲れたね、今週よく頑張りました』と笑顔で言った。
「うん、今からリアンが頑張ったご褒美に、美味しい物を食べさせてくれるのです」と少し威張った。
『それは良かったね、楽しんでね～』と笑顔で言って。
シオンとローズのビルのエレベーター前で、手を振って別れた。
ユリカの店を私が覗くと、奥のＢＯＸとユリカが示した。
私とマチルダの後を、ユリさんと蘭とカスミが笑顔で入った。

「えっ！・・ユリ姉さん、いらっしゃいませ」とユリカが慌てて挨拶した。
「今晩はユリカ、頑張ってますね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
２組のＢＯＸの団体と、カウンターの４人の客が沈黙して見ていた。
マチルダだけでも静寂が訪れるのだから、無理からぬ事である。
ユリさんが奥に座り、マチルダが続きその横にカスミが座った。
向かいの席の奥に蘭が座って、私が隣に座った。

「やりすぎ～・・マチルダと旅をするなんて、冗談になってない」と蘭が頬を膨らませた。
『ユリカを騙すなら、あれ位やらないと悟られるよ』とウルで返した。
「そうですね～、いつもと同じ会話じゃないといけませんね」とユリさんが薔薇ニヤで言った。
「やっぱり、マチルダが自然だったもん」と蘭は頬が破裂しそうになっていた。
「本気だったよね～・・マチルダ」とユリカが爽やか笑顔で来た。
「はい・・エースの傷心旅行は、その位は必要ですから」と輝きニヤで言った。

ユリカとカスミで飲み物を作り、全員笑顔で乾杯をした。

「ユリカ・・今夜私は、正式に挨拶に来ました。
ユリカ、ＰＧの仕事を受けてくれて、本当にありがとう。
私も心から楽しみにしています、そして女性達も全員そう思ってます。
彼女達には、どれ程の勉強になるのでしょう、それが想像すら出来ませんよ。
ユリカのクラブでの、接客の姿を見れるだけで幸せです。
思う存分やってね・・ありがとう・・ユリカ」

ユリさんがユリカに薔薇で微笑んだ、ユリカも爽やか笑顔で返した。
「私ですら、楽しみでしょうがないです・・リアン姉さんにもヒントを貰ったし」と蘭が満開で微笑んだ。

「ユリさん、蘭・・ありがとう。
私は今が一番の充実期にあると、自分で感じています。
最高の女性達が周りにいるから、私も伝えないといけないと思っています。
私が水商売で学んだ事を、魅宴で経験した全ての事を取り込んで。
次世代に繋ぐバトンを持ちたい、そして繋いで欲しい。
エースが千鶴に言った、世代の継承の話が響きました。
大ママとユリさんが今の第一世代、私とリアンが第二世代。
ミコトと千鶴が第三世代、そして蘭とナギサが第四世代。
その下が群雄割拠の戦国時代、最新型が産まれて来る場所。
私も大ママやユリ姉さんのように、確かなバトンを繋ぎたいと思います。
同じ水域に棲む、同じ海流に乗る魚ですから」

ユリカは最後にユリさんの言葉を引用して、笑顔で締めた。

ユリさんの最高の薔薇の笑顔と、蘭とカスミとマチルダの笑顔に囲まれていた。
「ユリカ・・最高に嬉しい言葉です、私にとっても大ママにとっても」と薔薇のまま微笑んだ。
「私達は本当に幸せな時代に生まれたと、感じています」と蘭も満開で微笑んだ。
「やばい、またゾクゾクしてきた」とカスミが輝きながら微笑んだ。

「私にも見せてね、エースが見て強く心に残れば見れるから」とマチルダが私に微笑んだ。
『了解・・強く心に残れば、マチルダが見れるんだね』と笑顔で返した。
「私がここを旅立った後の事はね、次回見せて貰うから」と微笑んだ。
「蘭姉さん・・危ないことすると、マチルダに見られますよ」とカスミが不敵を出した。
「その方が良いのよ、2人で旅立つの諦めるでしょ」と満開ニヤで返した。

「あなたがユリカに対して、追い求めてるのは何なのかしら?」と突然ユリさんが真顔で私に聞いた。
全員が私を見た、ユリカも私を笑顔で見ていた。

『ユリさんの質問なら、しょうがないですね。
俺はユリカの記事を心に書いています、感じたままを正直に。
永い時間をかけて、書き上げようと思っています。
リンダのタイム誌に掲載された記事のように、あの記事は賛否両論ありますが。
俺は好きなんです、リンダに対する愛情を感じるから。
それで私も書こうと思った、何かに残すのでなく心に書こうと。

ユリカもカスミもいつか俺に、寂しい思いをさせてくれるから。
俺もどこかでそれを望んでいるから、その時に混乱しないように。
自分の中でその存在を確立する為に、心に書いています・・シオンのように。
【Ｙｕｒｉｋａ　Ｄｒｅａｍ】という題名で、今執筆中です。
その時が来たら、書き上げられると思っています。
俺は知りたい・・Ｙｕｒｉｋａ　Ｄｒｅａｍが、その本質が見たい。
俺にとってユリカは完璧な人間だから、その完璧はユリさんとも異なるから。
俺はユリカを、一度も異質だと思った事はありません。
ユリカの力を感じていても、それに自体に興味すら湧かない。
俺にとってユリカは、常に生身の華奢な女性です。
だから俺は追い求める、ユリカの本質を・・その夢に描く事を。
それが俺のユリカに対する愛情ですから、ユリカの本質に迫りたい。
俺に出来る事を、全てを使って・・愛も時間も惜しげなく使って。
蘭に甘えながら・・最高峰の１人を見たい。
百合の名前を受け継いだ・・百合香の頂を目指したい。
永遠にその本質を、理解など出来ないかもしれない。
でも登ろうとした人間がいたと感じてくれる、ユリカは感じてくれるから。
俺は自分なりに書き上げます、蘭だけに読み聞かせる作品を。
Ｙｕｒｉｋａ　Ｄｒｅａｍを・・私の感じたままに』

私は想いのままを素直に言葉にした、蘭の満開を感じながら。
ユリさんが薔薇で微笑んでくれた、ユリカも目を潤ませて爽やか笑顔で見ていた。
「Ｋａｓｕｍｉ　Ｄｒｅａｍも書いてくれるの？」とカスミが輝く笑顔で聞いた。

『もちろん、カスミも書いてるよ・・そしてマリアを書いている』
と笑顔で返した。

「ありがとう・・最高だった。
言葉が完全に心を追い越していた、私は感じてるよ。
私の大切な分身が、あなたに寄り添っているから。
今夜のシオンの話し、凄く感動したね。
私もシオンの可能性に心が躍ったよ、その無限の可能性に。
リンダの持つその力と、マチルダの力に震えた。
私は本当に嬉しかった・・自分が普通に思えたから。
私も自分の全てを使って、妹も全てを使って。
あなたの再チャレンジを、影で支えるから。
ミコトと同じ台詞を言うね、言い訳は許さないよ。
私も・・詩音も」

ユリカが私を深海の瞳で見ながら、優しく伝えてくれた。
私もユリカの深海の瞳を見て、笑顔で頷いた。
「シオンの感動の話をお願い」と蘭が満開で微笑んだ。
「蘭ちょっと待って、私はユリカの分身・・妹？の話を知りません」
とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「エースお願いね」とユリカも爽やかに微笑んだ。

『ユリさんとカスミは知らないんだね、和尚がユリカに伝えたんだよ・・』私はユリカの羊水の中の出来事を話した。
ユリさんは美しい真顔で、カスミはその感受性で泣きながら聞いていた。
「本当に素敵な話しですね・・マリアも力になれたんですね、最高に嬉しいです」とユリさんが最高の薔薇の微笑でユリカを見た。
「最高に素敵な話しでした・・和尚様は素敵ですよね、私も凄く助けられました」とカスミが潤む瞳で言った。

ユリカも笑顔で頷いた、蘭が私を満開で促した。

『そして今夜シオンが伝えてくれた、リンダの言葉を・・・』私はシオンの話と、ミホの話しをした。

「シオンはどうしてそれを感じたの？そして全てを記憶してるの？」と蘭が驚いて聞いた。

『祭りの夜、祭り会場でシオンを充電抱っこをしていた。

その日にリンダに会っていて、レベルの上がった映像の制御が出来なかった。

シオンを抱いたまま、俺はリンダの映像を見たんだよ。

そしてシオンもその映像を見たらしい、そして録画したんだね。

シオンは好きな事は一度で全て覚える、そして嫌いな事は全て消去する。

俺の最高の教師であるシオンは、俺の事は全て覚えるんだ。

ＰＧのサインも一度で覚えた、その方法に俺は震えたよ。

ハルカの教えた手を写真で写して、その言葉を添えて頭にファイルしたらしい。

シオンの容量は測れない、そして容量を無駄にしない。

俺はシオンの消去する強さに憧れている、そして伝えてくれる。

俺の問いかけに、その純白の心を直接伝えてくる。

そのシオンの歌の言葉は、直接心に響くから。

俺はミホに会いに行く決心が出来た、千鶴に相談する所まで来た。

そしてセリカで感じたよ、焦ったらいけないと。

寂しさや悲しみに、溺れたらいけないんだと。

今ここにいる全員に見ていてほしい、俺のミホに対する愛情を。

それが将来、俺が世界の子供に伝えたい事だから。

リンダに伝えた事、そして心の解答用紙に強く書いた事。

愛は伝わると・・どんな状況でも、どんなに閉ざしていても。

蘭が最初に教えてくれた、心に刻み込まれた言葉。

愛されたいと思うのでない、どれだけ愛したかなのだと。
俺は俺にもう1度挑戦するよ、原作者に負けない。
俺は原作者の出した、最も大切な試験には合格したから。
あの時のヒトミの瞳が常に見てるから、俺の成すべき事だと言ってるから。
それが俺の生き方だから、そう自分を信じれるようになれたから。
崇高なリンダが、アルバムを見せた人間として、それを誇りに感じてるから。
運命を拒み続ける人間として、原作者に挑戦するよ。
今までの経験と、素敵な女性達の教えと、策略を武器に。
不公平で悪質な原作者に、俺は挑戦し続ける。
それが俺の称号・・【最後の挑戦者】に込めた本当の意味だから。
ユリカ・・ありがとう、俺は気付いたよ』

最後にユリカの深海の瞳に笑顔で言った、蘭が満開で私に抱きついた。
蘭の温もりに包まれて、ユリカの優しい笑顔に見られていた。

「どうしましょう、今夜は気持ちが止まりませんね・・原作者を教えて」とユリさんが薔薇で微笑んだ、カスミが輝く笑顔で促した。
『俺は運命を受入れられない人間なんです、だから考えた・・・』
原作者の話をした。
「そこまで行きましたか、素晴らしいですね・・そしてユリカ、最高の称号ですね」と薔薇で微笑んだ。
「それでなのか・・満足なんて金で買うものだと言ったのは」とカスミが微笑んだ。
『カスミ・・カスミには話しときたい、俺の最も大切な試験の話を』と真顔でカスミを見た。
「ありがとう・・嬉しいよ」とカスミも美しい真顔で私を見た。
『この話は、ユリさんにお願いできますか』と笑顔で言った、ユリ

さんが薔薇で微笑んで頷いた。

「エースが小児病棟に通ってた2年前の春・・」ユリさんがマリアの出生の話をした。

カスミは驚きながら、泣いていた。

私はカスミの強い感受性が好きだった、全ての事柄を自分に置き換えて感じる事が。

「お前・・よくやったな、確かに最も大切な試験だったよ」とカスミは泣きながら言った。

『ありがとう・・カスミ。

だから俺は運命を受入れない、幼くして亡くなった友を背負ってるから。

悪質で悪戯な原作者を創り出す、そしてそいつと戦う。

リンダの言葉を心に刻んで、マチルダの強い意志を感じている。

ユリさんが未熟な俺に教えてくれる、ユリカが俺を感じてくれる。

カスミが不敵で背中を押してくれる、シオンが白い心の歌で伝えてくれる。

そして・・蘭が愛してくれる、その青い炎で守ってくれる。

無駄だと思った時に敗北が決まる、そう言ったリンダの言葉を支えに。

最後まで挑戦する、いつか自分を愛せる時が来るまで』

私は幸せの中にいた、蘭に強く抱かれて、最高の女性達に囲まれて。

「リンダは私に何も教えませんでした、ただエースを尋ねろと言いました。

休暇のつもりで、エースと周りの人々に会ってみろと。

そして今、私は沢山の物を、リュックに詰め込みました。

リンダへのお土産が沢山出来ました、最高の旅でした。

私の父が私の１０歳の誕生日に、贈ってくれた言葉があります。
【壁を越えろ、それだけが望みだ】と強い言葉で書いてあります。
私は祖国を知らない、心のどこかで追い求めてきました。
私がリンダと会ったのは、私が絶望していた2年前の冬です。
私は雪の降るニューヨークの、公園のベンチに座っていました。
危険な地区で、寒くて寂しかった。
その時一台の車が止まって、女性が駆け寄ってきた。
リンダでした、最高の笑顔で私に抱き付いて言いました。
【お願いだから、私を手伝って】と優しく微笑んでくれました。
見ず知らずの私を、家に連れて帰り。
暖かい食事と、部屋まで提供してくれた。
私はリンダに聞きました、どうして私を助けてくれたのかと。
蘭姉さん・・リンダはこう言いましたよ。
出会う為にそこにいると感じたと、だから私は心に従ったと。
リンダが教えてくれました、人には祖国は無いと。
地球という、故郷の星しかないのだと。
私は今回の旅で気付きました、私は必死で伝えようとし過ぎていたと。
自分が心から楽しまないかぎり、人にも響かないのだと。
エース・・沢山の話をありがとう、全て心に響いたよ。
でも一番は・・やっぱり原作者だよ、私は本当に嬉しかった。
そしてリンダの最高の笑顔が見えるよ、原作者の話を聞いた時の。
あの夜の海で見せてくれた奇跡・・最高だったよ。
明日・・聞いてもらえるから、私は今の想いを伝えるね。
そして見てるから、ミホに対するエースの愛を。
私は公園のベンチで、最高の出会いをした仲間として。
私とリンダに大切な物を贈ってくれた、最後の挑戦者を見てるから。
愛は伝わると信じてるから・・辛い時は月に囁いて。
私は月下の雫・・月のマチルダだから」

マチルダの輝く深緑の瞳を見ていた、瞳からの強い想いが伝わった。
蘭の微かな震えを感じて、私は蘭を引き寄せた。
カスミが泣いているマチルダを、抱きしめていた。

「ユリ姉さん・・私は来週の水曜日にＰＧに入ります、エースがお父さんと和解した日に」と強く言った。
全員がユリカを見た、蘭も起き上がり深海の強い瞳を見ていた。
「分りました、水曜日・・水のユリカの光臨ですね」と薔薇で微笑んだ。
『ユリカ・・親父と向き合って、和解してくるよ』と私は真顔でユリカに言った。
「お願いね・・最高のユリカが見たいのならば」と深海の奥から発光していた。
「ユリカ姉さん・・ありがとう、最高の言葉で背中を押してくれて」と蘭も青い炎を最大にして言った。

「蘭・・自分を抑えずに挑みなさい、リアンの言葉に嘘は無いから。
挑むのに最高の相手ですから、その頂に触れてみて。
誰も登頂できなかった頂に、私は今夜銀河の奇跡に伝えた言葉贈るね。
ＮＯ１のまま引退するのは、心残りになるのよ。
最高の女性に挑みなさい、私が心を込めて贈った称号を持つ者。
最高の副職・・そして最後の挑戦者が愛し続ける者。
あの時、あなたが即決で選んだ名前・・蘭。
私はあの時に感じていたよ、きっとその源氏名に意味があるって。
蘭・・その心のままに生きてね、そして見せてね。
その時の決断を・・私達の夢を背負わせてるね。
あなただから・・蘭だから・・私は夢を見るよ」

ユリカの強く優しい言葉が流れた、蘭の瞳は最高の炎に包まれていた。
ユリさんの最高の薔薇の笑顔と、カスミの真剣な眼差しが見ていた。
そしてカスミに抱かれた、マチルダが私に微笑んだ。
私もマチルダに笑顔で頷いた、蘭の体温が変化してきた。
その時が近いと感じた、水曜に光臨する透明の女神が、最後に背中を押すと思っていた。

日付が変わって、日曜の深夜になっていた。
しかし天空の要塞の熱は、冷める気配すら無かった。

その時映像が流れた、鮮明な映像に飛行機が映った。
ドアを確認する乗務員が見えた、そしてリンダが現れた。
私に両手を振って叫んでいた、その笑顔とブルーの瞳を見ていた。
【ミホを諦めるな】と響いてきた、リンダのブルーの瞳が叫んでいた。

そして驚異の世界をマチルダが見せた。
映像にマチルダが進入してきた、その存在が伝わってきた。
映像の中の私の真後ろに、マチルダが立っていた。
そしてマチルダが手を出した、映像の私はマチルダの手を握った。
その時、映像が私の視点に切り替わった、そして一瞬で月に飛んだ。
手を繋ぐマチルダが、最高の輝きで微笑んで地球を指差した。
その方向に飛んだ、マチルダと手を繋いで。
そして霧に霞む山の上に辿り着いた、私はマチルダを見た。
マチルダは微笑んで、目で方向を示した。
私がその方向を見ると、霧が晴れてきた。
マチュピチュが現れて、その中心の大きな石の上に人影が見えた。
少女が私に手を振っていた、私は嬉しくて笑顔で手を振った。
ヒトミだった、ヒトミが強い瞳で手を振っていた。

そこで映像が切れた。

私はマチルダを笑顔で見た、マチルダも笑顔で頷いた。

《月が基点・・まさに月下の雫、月のマチルダ》と感じて、感動していた。

ユリカの暖かい波動と、蘭の温もりに包まれていた。

マチルダが私の映像に進入してきた時に感じていた。

マチルダは私の側にいるのだと、ユリカとは違う方法で。

マチルダのリンダとの出会いの話は、蘭に響いていた。

私もその話に心が震えた、リンダと蘭の奇跡的偶然。

同じ日の同じ時間に生を受けた者、それは同じ心を持っていた。

私はこの夏物語が完結したら、後書きに記します。

蘭とリンダの最高の友情物語を、同じ青を背負った者の話を。

心に忠実に生きる、２人の女性の奇跡の物語。

青と青・・２つの青が重なる時に見せる・・希望の世界。

必要の無いものは無くなる・・蘭の精神の基軸。

無駄だと思った時に敗北が決まる・・リンダの強い意志。

あのベトナムの暑い夜、青の２人と緑の瞳がいた。

私は少年のまま話していた、想いを全て言葉に乗せて。

蒸し暑さと、絶望の大地に負けないように。

遠いユリカに届くように・・詩音に語りかけるように。

必ず届くと信じていた、子供達の光の無い瞳を感じながら・・・。

Yurika Dream

8月も終わりが近づく夏の深夜、人混みを見下ろす天空の要塞。
女神達の夜会は続く、想いを伝えるために。
見送らねばならぬ、友に伝えるために。

私はマチルダが映像に侵入してきた事に、喜びを感じていた。
マチルダを近くに感じたから、どんなに離れていても想いは届くと感じたから。
「ユリ姉さん、魅宴が変化を始めました・・ミコトがそれを望みました」とユリカが真顔で言った。
「そうですか・・時代は常に要求しますね、需要に対する供給ですから」と薔薇で微笑んだ。
「はい、ミコトの出した答えは・・2面性らしいですよ」と爽やかに微笑んだ。

「それが確立されれば、魅宴は安定しますね。
ミコトが持つ素質は類まれなものです、大ママがその源氏名に込めた想い。
ミコトは夜街で美しく生きて、美しく去るのでしょうね。
今26歳・・女性として心も体も、最も華やかな時代を謳歌して。
ミコトの託すバトンは、夜街の全てに対する提示でしょう。
あのミコトが夜の仕事を選んだのが、私は奇跡に感じます。
私は今まで2人だけに、その奇跡を感じました、ユリカとミコトの2人に。
夜の仕事を純粋に仕事として選んだ女性は、この2人だけですね。
ミコトは有名大学で経済を学んでいます、就職先は幾らでも有ったでしょう。
初めて紹介された時、私はミコトに聞きました。

なぜ夜の仕事を選んだのかと、ミコトは即答しましたよ。
人と関わる仕事が最高の仕事だと感じたから、接客業がしたかったと。
女性の地位向上という言葉が、世間で言われているが違和感を感じると。
本当の自由とは、違う場所にあるような気がすると。
この夜の世界は実力が全てだから、そして女の世界だから。
夜街で自分は誰かに認められたいと、その誰かを探してみたいと言いました。
私は感動して聞いていました、その熱い心が輝いて見えました。
そしてミコトは出会ってしまう、ユリカという絶対的存在に。
ミコトが自ら選択して、挑んだ世界に存在したのですね。
ミコトの経験も知識の中にも無い、範囲外の存在・・圧倒的ユリカ。
蘭・カスミ・・1つだけ教えておきます。
ユリカの魅宴の時の裏称号・・【夜の掟　ユリカ】と呼ばれていました。
それほどまでに別世界に存在しました、ユリカの接客は想像の外にあります。
ユリカはダイヤです、最高硬度のダイヤはダイヤじゃないと傷つかない。
その心が求め続ける物は、自分を壊すほどの存在です。
エースの言った、ユリカを生身の華奢な女性としか見れない。
素晴らしい表現でした、本質に近づいていますね。
ユリカに好意を持つ男性では、誰もそこまで行けなかった。
感じて欲しいユリカの本当の力、傷つくことを恐れない強さ。
生きていれば人は傷つきます、その時が最も大切な時だから。
恐れないで欲しい、最後まで自分を信じて欲しいのです。
そして謳歌してほしい、女性として最も大切な時期を。
過去に囚われるのでなく、忘れ去るのでもなく。

全てを背負って歩いてほしい、その傷がいつか優しさに変るから。
自分を探す旅は諦めないで、リンダやマチルダのように。
私は蘭にもカスミにも、出会えて本当に良かったと感じています。
そして今・・感じています、最高の時代に生きていると。
ユリカを感じなさい、ミコトが追い求めた世界。
必ずヒントが隠されています、自分らしく生きるヒントが」

静寂の中、ユリさんが流れるように伝えた。
蘭もカスミもマチルダも、強い瞳で聞いていた。
そしてユリカが圧倒的静けさの中にいた、静寂を連れていた。
私はその深海の瞳に、ユリカの集中を感じていた。
常人では到底辿り着けない、その心の集中を見ていた。

「お願い・・Ｙｕｒｉｋａ　Ｄｒｅａｍを、話せる範囲で教えて」
と蘭が真顔で言った、青い炎が溢れていた。
「それは私からも、お願いしたい」とカスミも輝く真剣な瞳で言って、マチルダも真顔で頷いた。
私は何よりも、ユリさんの厳しい瞳に押された。
その瞳が伝えなさいと言っていた、私のユリカに対する想いを。

『Ｙｕｒｉｋａ　Ｄｒｅａｍ・・。
ユリカの夢は何なのだろう？
ユリカは体の小さな女性である。
華奢な体に可愛い顔が印象的な、少女の香りを強く残す容姿である。
しかし外見に惑わされてはいけない、ユリカの内面に拡がるのは・・海。
その深さは計り知れない、その本質は輝く深海にある。
ユリカの心の花は、断崖に囲まれた絶海の孤島に凛と咲く。
ユリカの出生の秘密を知ると、常人では届かないと感じる。

人生最大の覚悟を細胞の時にした、そしてそれに耐えたのだ。
それによりユリカは力を得たのかもしれない、しかしその力が自らを苦しめる。
常人なら壊れていたであろう、その力が自分をも壊しただろう。
しかしユリカは壊れない、産まれた意味を知っているから。
ユリカの産まれた意味、それは・・【生きる】なのだと感じる。
最も純粋で、最も大切なその事自体が・・ユリカの存在だと感じている。
人は何かを成し遂げる為に、産まれたのだろうか？
この星の先住民の動物達は、産まれた意味に純粋である。
【生きる】という産まれた意味に・・生きて生命を繋いぐという事に。
人はどこかで忘れてしまう、その本来の目的を見失う。
ユリカは忘れない・・だからこそ、その行為に対し真摯である。
ユリカが感じている、その行為の拒絶・・当然の事である。
ユリカの産まれた意味からすれば、簡単には出来ないであろう。
生命を繋ぐ行為に対し、ユリカは敏感である。
人としての本来の姿を持つ、透明な色彩に彩られる女神。
強く色として主張する透明、他を映し出す色。
あなたの色はこれよと、微笑んで見せてくれる。
私は誇りに感じている、ユリカに隠し事が出来ない人間に選ばれた事を。
隠す物など何もないと、強く主張できる事を。
ユリカが見せる羊水の揺り篭、そこに響いてくる母の子守唄。
なぜ人はそれに乗ると救われるのか、簡単な事なのだ。
生きる本来の意味を、思い出させてくれるから。
自らの真の純粋の時を、感じさせてくれるから。
生きる過程での悩みや後悔など、他愛もない事だと教えてくれる。
人がいつか尋ねたい場所、記憶には無いが忘れえぬ場所。
羊水の世界・・その圧倒的安心感。

そして歌ってくれる・・唯一の望みは産まれて生きる事だと。
誰にでも存在する・・母が教える、生きてほしいと。
ユリカの求めるもの・・その本質に迫りたい。
だから俺は潜ろう、その深海の奥深くにある輝きを目指して。
ユリカが私に贈ってくれた、最高の称号・・最後の挑戦者として。
いつかユリカの背中を、輝く深海で感じたい。
羊水の揺り篭、そこに響いた母の子守唄。
最高にして完璧な者・・透明の女神・・ユリカ。
俺にとって、ユリかとは・・・永遠に忘れえぬ者である。
俺のユリカに対する唯一の望みは・・これだけである。
俺の愛を永遠に読んでね・・ユリカ』

感情的な自分を感じながら、心に書き綴った物を言葉にした。
蘭が強く抱いてくれた、ユリさんの薔薇の微笑が見ていた。
カスミとマチルダの輝く涙が、私を包んでくれた。
そして蘭が体を離し、満開笑顔で私をユリカの方に押した。

私は俯いて泣いている、ユリカを抱きしめた。
ユリカも強く抱きしめてくれた、ユリカの次なる変化を感じていた。
そのユリカの温もりに、ユリカに限界は無いと感じていた。

「私が夜の世界から引退する最後の日に、Ｋａｓｕｍｉ　Ｄｒｅａｍを聞かせてね」とカスミが涙を流して言った。
『了解・・カスミ・・頑張れよ』と静かに言った、感情を制御するのに必死だった。
「Ｍａｒｉａ　Ｄｒｅａｍは、どこまでも続くんですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
私は制御が効かない事を感じながら、ユリさんの潤む薔薇の瞳を見ていた。

『Ｍａｒｉａ　Ｄｒｅａｍ・・。
私はマリアが２歳の時に出会った、その笑顔に驚愕した。
まさに天使の笑顔だった、それはマリアの内面から溢れ出る物だった。
幼いマリアは言葉での伝達が出来ない、しかし強い意志を持っていた。
そして圧倒的伝達方法を知っていたのだ、マリアの両手に隠される熱。
マリアは悲しみに対して敏感だ、その心は全てを凌駕する。
マリアは悲しみに対して叫ぶ、その者の名を強く呼んで。
その小さな両手の平に熱を集めて、相手の頬に伝えてくる。
絶対的な癒しが溢れ出す、その熱が心の傷を溶かしていく。
私が初めてマリアを抱いた日、ケイとタクシーに乗った。
私は一安心して、疲労を感じて俯いた。
その時マリアの両手が私の頬に触れた、マリアが天使の笑顔で私を見ていた。
真実を話そう・・その時私は、マリアと会話をした。
その強い温度の揺れでマリアが言った・・諦めたら駄目だよと。
私は温度でマリアに聞いた、何を？と・・マリアは天使レベルを全開にして言った。
いつか挑むよね、いつか届くよね、ミホちゃんに・・そう伝えてくれた。
私はただ驚いてマリアを見ていた、その天使の笑顔を。
私はマリアの出生の秘密を聞いて、そのマリアの言葉が繋がった。
ユリさん・・マリアの出生の秘密で、私は１つだけ隠していました。
私はあの採血の時に、ヒトミの存在を感じていました。
それは・・手術室に感じていました、ヒトミが誕生を待ちわびていました。
それを感じて私は土下座をして、冷たい床から伝わってきた。

ヒトミの温度が、最後の時のあの温度の言葉が。
【あなたには、成すべき事があるのよ】と完璧に伝わってきた。
床に置いた私の両手から、私はだから採血にこだわった。
そして感じていました、沢山の亡くなった子供達の存在を。
手術室から・・全員がその誕生を待ちわびていた。
あの子達にとって、ミホが絶対的な存在であることは気付いていた。
ミホは病気も障害も無い、健康な少女だったから。
あの子達にとっては、そのミホの姿が忘れられない事は分っていた。
俺はマリアが産まれる頃は、ミホで挫折していたから。
そしてあの子達は感じていた、マリアの誕生を。
悪戯な原作者のシナリオを、だからヒトミは伝えに来た。
私の今成すべき事、マリアをこの世に産まれさせる事。
それが最も大切な事だと、ヒトミが伝えに来たんだと思っている。
悪質で不公平な原作者の存在を、あの子達は知っていたから。
幼くして亡くなった者達は、そのシナリオに闘いを挑もうとしていた。
だからこそ、健康なミホに執着してるのだと。
そして感じたんだと、原作者すら凌駕する者の誕生を。
その完璧な純白が誕生する事を、その誕生を拒もうとするシナリオを。
そして私は最も大切な試験に合格した、亡くなった仲間が全員で叫んでくれたから。
そしてこの世に生を受けた・・その完璧な純白が、原作者の届かない者が。
常識などの観念より最も遠い存在、マリアは地球の申し子。
生命に対して最も敏感な者、リンダと同じ生命という枠組みしか持たない者。
そしてシオンが教えてくれた、その白い心の感じ方。

好きの中の何かというくくり、嫌いなものは存在しない。
シオンは蛇が怖い、しかし蛇が嫌いではない。
好きな中の怖いだよと教えてくれた、その白い心。
そしてシオンをも凌駕するマリア、圧倒的純白。
生命は全て同じ価値があると叫ぶ、食物は連鎖する物だと微笑む。
連鎖に頂点は存在しないと、永遠に回り続ける輪廻だと。
人間が食物連鎖の頂点に存在すると考えた時に。
人間の絶滅への進行が始まる・・生命とはそういう物だと。
マリアの温度で聞いた、マリアの内包する何者かが言った。
私はその温度の言葉を感じて、原作者を創り出した。
神などではなく、悪質で悪戯な原作者を。
そして悪質でない、真の意味での原作者も存在すると。
マリアは滅多に話さない、でも私は抱くたびに感じている。
マリアの存在の意味・・それは唯一の希望なのだと。
マリアの天使の笑顔は、常に伝えてくれる。
原作者は・・人の心に棲んでいるのだと』

私は心の奥に大切にしていた、マリアとの会話を話した。
ユリさんの強い視線に促されて、感情の制御が出来ない自分を感じて。

「ありがとう、心に響きました。
私があなたをＰＧに置こうと決意したのは、マリアの変化に驚いたからです。
嬉しかった・・母親の私にとって、マリアは普通の子供です。
マリアは物分りが良いように見えますが、私と２人の時はかなりの我侭娘です。
マリアはあなたに会って変った、その理由を今理解しました。
マリアは温度で話せる相手が、出現したんですね。
それまでは、シオンだけがマリアの会話相手でした。

マリアは確かに不思議な子です、私はマリアの心のままに育てようと思っています。
あなたがずっと兄でいると誓ってくれたから、マリアには最高の兄だから。
あなたは豊を取り込んで、そして自分の経験も内側に潜ませてるから。
Ｍａｒｉａ　Ｄｒｅａｍは完結しませんね、あなたが側にいる限り。
満足など金で買うものだと、強く主張するあなたがいる限り。
私達は本当に永い楽しみを持てるのですね、完成しないマリアで」
ユリさんが最後は薔薇で微笑んだ、私も笑顔で頷いた。

「エースなのね・・やっぱりマリアの覚醒をするのは。
蘭姉さんが若草公園で拾って、マリアに出会った。
あなたは若草公園で、何かに囚われたでしょ。
私はあなたの映像で見た、それは蘭姉さんの視点だった。
まだ私がここに来る前、東京にいた時の夜。
私は何も分からなかったけど、どうしても気になってる。
あなたのベンチに座ってる背中を見た、蘭姉さんの瞳は潤んでいた。
あなたはあの時に、何に囚われていたの。
振向く前に何を見ていたの？・・それだけ教えてほしい」
マチルダは真剣な輝く新緑の瞳で、私に聞いた。

『あのベンチの後は、教会なんだよ。
そこの掲示板に、聖母マリアが描かれたポスターがあった。
俺はなぜかそのマリアから、目が離せなくなったんだ』

笑顔でマチルダに答えた、マチルダが最高の輝きで微笑んだ。
「蘭姉さん・・辛いなら答えなくていいです、なぜ瞳が潤んだのですか？」とマチルダは静かに聞いた。
「大丈夫よ・・もう乗り越えたから。
私の１６歳で亡くなった弟と、最後に会った場所があのベンチなの。
その時・・私の弟も教会を見ていたの。
思春期の弟は、話したい事があったんでしょう。
でもほとんど何も話さなかった、私は色々聞いたんだけど。
返事をするだけで・・そのまま別れたの。
それが弟と会った、最後だったの。
私はそれからＰＧで働いて、会話を必死に勉強したの。
後悔してたから、弟の話を引き出せなかった事に。
そして・・あの夜出会った、あのベンチで教会を見ている家出少年と。
私は必死に話そうと思っていた、でも一瞬でその必死さを消してくれた。
私が手で作った銃を向けた時に、笑顔で両手を上げる少年を見たから。
そして沢山の話をしてくれたから、その言葉は流れるように心に響いた。
その時期の苦悩も、自分の未熟さも・・全て言葉にしてくれた。
私はあのタクシーで手を振って別れる時には、あなたが好きだったよ。
あなたがタクシーに向かって、ずっと頭を下げていたのを。
泣きながら見ていたよ・・嬉しくて。
その時に私は弟の事を、自分の心の違う場所に置けた。
そしてお墓参りに行こうと決めた、あなたが一緒なら。

ユリさんに背中を押されて、あなたと行ったね。
そして私の心の問いかけに、あなたは強く即答してくれた。
弟にも楽しい事はあったと、好きな人もいたと。
あの言葉で・・私は戻ったよ、本当の自分に。
そして・・あなたを愛してると感じたよ。
そしてあなたが、和尚様と豊君に会わせてくれた。
和尚様の墓標には意味が無い、常に語りかければ良いんだと。
あの言葉で心が救われた、本当に嬉しかった。
豊君の生き方を、あなたの寝物語で沢山聞いていて。
出会ったときに感じた、その心の強さを。
自分に従うという事の本質を、私は確かに感じたよ。
そしてあなたが心を捕まえた、最高峰の女性・・リンダの心を。
私はユリカ姉さんに聞いて、すぐに納得したよ。
リンダがあなたに心を開いたのは、出会って3秒後だったと。
英会話をＮＯと言って、あなたが微笑んで手を差し出した時に、
リンダの心が開いたと。
私も同じだったから、リアルに感じたよ。
あなたの言葉と行動は・・すべて心を直接伝えるんだね。
私は最後まであなたの側にいるよ、ミホにチャレンジしなさい。
もう1度言うね・・私は今後何に対しても、こだわらない。
いつでも国を出る覚悟はあるよ、あなたは自分の成すべき事をしなさい。
私を愛してると言うのなら・・その生き方を見せなさい。
ユリカ姉さんと、カスミにも見せなさい・・2人を愛してると言うのなら。
私の望みは1つだけ・・あなたの生き方を永遠に愛していたい。
そういう生き方をしてほしい・・私は必ず愛してみせるから」
蘭の青い炎に焼かれていた、私は最高の喜びの中にいた。
蘭の熱い想いに触れて、ユリカとカスミに対する蘭の気持ちを感じ

て。
強く優しい蘭の深い瞳を見ていた、青い炎が燃え上がっていた。
『蘭・・俺が先に蘭に溶かされていたんだよ。
蘭が両手で作った銃で、俺の全てを撃ち抜いてくれた。
俺の未熟な反抗心も・・寂しい心も・・一瞬にして。
【自分を馬鹿だと思ったなら、もう馬鹿じゃないよ】
そう言ってくれた蘭の言葉、最高に嬉しかった。
蘭のタクシーを見送りながら、ありがとうって言ったんだ。
その時に感じた、産まれて初めて・・心から言えたと。
蘭・・俺は必ず見せるよ、俺の生き方を・・その愛し方を。
そしてここにいる全ての女性に紹介するよ、復活した可愛い少女を。
可愛い笑顔で笑う・・・ミホの事を』

私はそう言葉にして、蘭の満開の笑顔を見ていた。
その時に私は次のステップに、片足を踏出した。
後悔も背負って進めと言った、薔薇の言葉を背中に感じて。
生き方を見せろと言った、青い炎の愛に包まれて。
険しくていい・・どんなに深くてもいい・・それが選んだ道だと思っていた。

ユリカの静かな温もりが、私の根幹に迫ってきた。
ユリカがその最高の愛情表現で、贈ってくれた称号。
【最後の挑戦者】・・その重みを再確認して、ジンを想っていた。
そして翌日、私は再び道を標される。
【最後の道標】が示した・・その方向を見て。
悲しみの貴公子の本質を感じて・・道無き道に立つ道標。
それが指し示す世界は・・諦めを拒絶する場所に続いていた。

この夜の会話は、記憶の深い部分に残っている。

マチルダが去る日が近付いたのを、全員が感じていた。

ユリさんはそれに対して、この夜会を計画したのだろう。

この夜のユリさんは、私に対して強引だった。

その美しい姿と厳しい瞳で、私の心に迫って来た。

ユリさんは気付いていたのではないだろうか、今書きながら思っていた。

ユリカの覚悟を、感じていたのではないかと。

私のユリカへの想いを話させようと、その方向で進めていた気がする。

私はそのユリさんに迫られて、感情の制御を失っていた。

未熟な私などが狙われたら、逃げることは出来ない。

最高地点に立つ女神なのだから、私は操り人形のように話していた。

【Ｙｕｒｉｋａ　Ｄｒｅａｍ】も【Ｍａｒｉａ　Ｄｒｅａｍ】も、蘭以外に話す気は無かった。

ユリさんはユリカの為に、私に強引に話させたのだと思う。

私が心に執筆した、３篇のＤｒｅａｍシリーズ。

【Ｋａｓｕｍｉ　Ｄｒｅａｍ】しか納得できる完結をしていない。

必ずいつの日か、完結させたい・・【Ｙｕｒｉｋａ　Ｄｒｅａｍ】

だからもう１度潜ろう・・ユリカの棲む・・光輝く深海を目指して。

その為に探し出そう・・波動を頼りに・・爽やかな笑顔を感じながら。

透明でも見えるよ・・その心は温もりに包まれているから。

最高で完璧な唯一の存在・・掟を提示する女神・・水のユリカ。

伝達の手法

真夏の深夜、女神達の夜会は続く、お互いに伝えたい気持ちに溢れていた。
夜空の星の光が届く窓辺、青い炎が最大級の火力を見せていた。
幻想的な空間に浮き舟が揺れて、その心地よさに心が揺れていた。

「蘭姉さん・・弟さんを亡くしていたんですか」とマチルダが優しい緑で蘭を見ていた。

「うん・・私はその後悔をずっと引きずっていた。
弟の事を何も知らない自分を責めた、でもその間違いにも気付いた。
だからカスミやマチルダには、特別な想いがあるの。
２０歳の時期に私は悩んだから、抜け出せなくて苦しんだから。
私にはユリさんと、リアン姉さんとユリカ姉さんがいたから。
私はなんとか乗り越えられた、最高の相談相手がいたから。
カスミが私に旦那さんの事を相談してくれた時、本当に嬉しかったよ。
私はあの時に真剣に考えた、ユリさんならどうするだろう。
リアン姉さんなら、なんて言って背中を押すだろう。
ユリカ姉さんなら、カスミの心とどう向き合うだろう。
そしてその答えを一言で解決してくれた、あなたのあの言葉を思い出した。
良い事ばかりする中学生じゃないと、エミに伝えた言葉。
エミの寂しさも悲しみも、全て溶かした言葉と行動を。
私はカスミにナギサを重ねていたから、本当は怖かった。
でも賭けたのよ・・あの言葉に、カスミが自分の足で踏出す時。
あなたなら背中を押さないと感じた、必ず手を繋いで隣を歩くと。

でもあなたは、私の想像の遥か先にいたのね。
カスミを完全復活させて、そして今でもその歩みを止めさせない。
カスミの復活以降に見せてくれる、ナギサの復活から・・今回の千鶴姉さんの事まで。
私は全てに驚きと喜びを感じてきたよ、ユリカ姉さんの変化も。
ミチルさんの復活も・・でも1番驚き、嬉しかったのは。
シオンの変化を感じた時・・誰も出来なかった事を瞬時にやってのけた。
シオンに気付かせた・・もう1人のシオンを。
そして今私は思った、あなたは恐れないんだね。
シオンにどんなに弾丸を撃たれても、それを正面から受けるんだね。
シオンが求めていたのは、正面から向き合ってくれる相手だったんだね。
シオンが開花して見せるもの、本当に楽しみになってきたよ。
豊が言ったよ、あなたは白い心に憧れていると。
あなたの探究心は【事実】でなく、人の感情も含めた【真実】を探していると。
だから温度で伝える事が、出来るようになったんだね。
私も今感じてるよ・・悪質で不公平な原作者を、弟を若くで奪ったシナリオを。
泣いたり、後悔なんてもうしないよ・・私も闘う、この不公平な世の中に。
無駄だと思った時に、敗北が決まると言ったリンダと。
それを伝えてくれたマチルダのように、私の心も共に闘うよ。
最後の挑戦者は・・最後まで闘うのだから」

私は蘭の深い瞳を見ていた、青い炎が充満する瞳を。
私は自分の想像力の無さを再確認していた、蘭の本気は私の想像の上にあると感じて。

ユリさんの薔薇の微笑と、ユリカの爽やかな微笑があった。
カスミは蘭を見て、最高の笑顔で頷いた。
マチルダも蘭を見て、微笑んでいた。

ユリカが最後の団体を見送りに行った、そして入口で叫んだ。
夜会に登場する・・圧倒的本物が近付いていた。

「どうしたの！・・全員いるから、早くおいで」とユリカの嬉しそうな声が響いた。
私達が入口を見ていると、最高の笑顔のユリカに腕を組まれた、豊兄さんが歩いて来た。
蘭の満開が咲き、ユリさんの薔薇も咲いた。
マチルダが輝く笑顔で立ち、カスミが少し緊張して笑った。
「すいません・・社長の相手を今までさせられて、お店に行ったら閉まってて」と照れた笑顔で言った。
「よくここが分りましたね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「帰ろうと歩いてたら、小僧はここだと呼び込みさんが教えてくれました」と言いながらカスミの隣に座った。

「カスミ・・何緊張してるんだい」とマチルダが輝きニヤを出しながら、豊の隣に座った。
「き、緊張なんかしてないよ」とカスミが必死に不敵で返した。
「本当に綺麗ですね・・良かったですね、外れましたね」と豊がカスミに微笑んだ。
「あちゃ～・・カスミが制御不能になるよ」と蘭が満開ニヤで言った。
「ギリギリなりませんよ・・豊君ありがとう、凄く響いたよあの瞳の優しさが」とカスミが輝きを放ち美しく微笑んだ、豊も嬉しそうに微笑を返した。
「本当にあなたの感性も凄いよね・・同世代の女性が憧れるのも分

りますね」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「ユリカさんに聞きたいと思っていました、ユリさんとあなたは姉妹ですか？」と豊がユリカを見て言った。
「違いますよ・・どうしてそう思ったのかしら」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「流れてる物が同じだと感じて、ユリさんには感じないけど、ユリカさんは女の姉妹がいますよね」と微笑んだ。
「えっ！・・女の姉妹」とユリカが本気で驚いた。
『妹がいるよね・・ユリカ』と私は笑顔でユリカに言った。
「そうなんですね、妹さんですか・・姉妹で育った人は分ります、どこか柔らかだから」と豊が微笑んだ。
静寂が支配していた、全員が豊を見て沈黙していた。
ユリカは最高の笑顔で、豊を見ていた。

『豊兄さん、今夜は何か有ったの？・・それとも誰かに会いたかったとか』と場の空気を変えるために、私が笑顔で聞いた。
「おう、明日でも良かったんだけど・・マチルダさんに会いたくて」と笑顔で言った。
「嬉しい～・・何？、何？」とマチルダが豊に擦り寄った。
「マチルダ・・奥さんにガード頼まれたんでしょ」とカスミも少し豊に寄って、最大不敵を出した。
蘭が満開ニヤニヤで、ユリさんとユリカは楽しそうに、その光景を見ていた。

「実は俺・・この前言わなかったんですが。
俺の育った所に、もちろん小僧も知っていますが。
井戸掘りを仕事にしていた、今は老人で引退した人がいて。
俺・・その人に井戸掘りの技術を、教えてもらってるんですよ。
俺も考えてて、この前話したように・・この大きな体の使い道。

いつかその技術で、井戸を掘りに行きたいと思ってました。
昨日の夜、その師匠と会って話したんです。
そしたらもう出来るだろうと、言ってくれました。
今ならその師匠も同行出来ると、言っています。
俺は最適な水源を探るのには、まだ自信が無くて。
でもマチルダさんとリンダさんの話を聞いたら、心が止まらなくなって。
マチルダさん、これからの旅で水に困ってる地域が有ったら教えて下さい。
俺に今出来るのは・・それしか無いから。
生活に最も必要な物を、提供する手助けがしたいんです。
俺は何処にでも行きます、恭子も賛成してくれました」

マチルダの輝く瞳を見ながら、豊は真剣に伝えた。
その背中に本気が示されていて、私は震えていた。
マチルダの輝きが最高になって、美しく微笑んで一筋の涙を流した。

「豊君・・あなたは本気だったのね、そう確信はしてたけど。
最高に嬉しい・・リンダに話しますね。
必要経費はリンダが出します、それだけはさせてね。
私は今本当に幸せを感じてるよ、響く人たちに囲まれて。
強い意志で生きる人に、最高の提案をされて。
井戸ですか・・素晴らしいです。
その最高峰の日本の技術で、生きるのに最も大切な物を永久に提供する。
リンダと話したら・・提案をしますね。
でも豊君・・仕事は大丈夫なんですか？」

マチルダは輝く瞳で豊を見ながら、最後に心配して聞いた。

「それは大丈夫です、今夜社長に話をしました。
社長も凄く喜んで、賛成してくれました。
私の仕事は技術職だから、大丈夫ですよ。
生活も恭子1人なら問題ないし、多分場所によっては付いて来るし。
仕事や豊な生活などより、大切な物があると信じています。
俺は今出来る事をしたい、自分に正直に生きていたいだけです」
豊はそう言った、私はその揺れない心を見ていた。
ユリさんの最高の薔薇と、ユリカの深海の瞳と、蘭の青い炎が見ていた。
マチルダとカスミは輝きを増して、本物の存在を感じていた。
「本当にありがとう・・必ず連絡します」とマチルダが微笑んだ。
「蘭さん・・もしその時期が、学校の長期の休日の時は。
小僧を貸して下さい、俺には小僧がいるだけで助けになるから。
そして小僧に挑戦して欲しい、世界中で賛否両論があるけど。
小僧にダウンジングを、やってみて欲しいのです。
師匠に教えを受けてる時に、そのダウンジングという方法を知りました。
地上から地下の水源や、金属等の異物を探る方法です。
否定的な意見が多い事も、忌まわしい歴史が有ることも知りました。
でも俺は凄く興味を持ちました、そしてそれをやれるのは1人だと。
俺の知る限り、見えない地下を地上から探れるのは。
小僧だけだと、常に見えない物を追いかけてる奴だから。
そして言葉の通じない子供達の、心をすぐに開けるのは小僧だけです。

目も耳も不自由な子供の、心を開いた小僧なら。
言語の違いなど、些細な事でしょうから」
豊は蘭を真剣に見て言った、私は最高の喜びに中にいた。
追い求めてきた存在の豊兄さんに、最も大切な場面で必要とされて。
蘭は豊を見て、最高の満開で微笑んだ。

「もちろん・・私は笑顔で送り出しますよ。
そして場所によっては、私も恭子と共に付いて行きます。
私は何も出来ないと思うけど、見たいから。
本物の男の生き方を、その強い意志が動く姿と。
そして小僧が見せる奇跡を・・リアルに見たいから」

満開の笑顔で、笑顔の豊に答えた。
「ありがとうございます・・後の問題は、カスミさんが寂しくないかな？」と豊がカスミを見た。
「大丈夫です・・毎日ユリか姉さんに会いに来て、エースの話を聞きますから」と微笑んで返した。

「そうですか、良かった。
ユリカさんは小僧を感じてるんですね、本当に素敵な人ですね。
じゃあ後はマリアちゃんだけだな～、マリアに俺は怒られるな。
マリアにとって小僧は、自分の代弁者だから。
マリアが母親のユリさんに伝えたい事を、小僧が代弁してたのでしょうから。
マリアの天使のような笑顔は、小僧の存在が出させているからな～。
明日・・マリアにきちんと話しましょう、怨まれたくないから」
豊は笑顔でそう言った、完全なる暖かい静寂が包んでいた。

私は自分の考えの浅さに気付かされた、今までの経緯を考えていた。
そして思い出した、今でも心に深く刻み込まれてる。
あの大切なマリアの【ペチ】を、俺のＰＧに対する行動は、マリアの代弁だったと。

「豊君・・ありがとう、今その言葉で気付きました・・マリアの代弁者だったんですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

「そうですか・・そうなんですね、私も確信しました。
エースのＰＧに対しての行動、あの先の先まで読む感性も。
２人で考えていたんですね、エースとマリアで。
そして今回の蘭の挑戦、エースとマリアが望んだのですね。
ユリさんの全力の姿を、マリアも見たいと言ってるのですね。
マリアは出会えたんですね、今しか見れないものを見せれる。
それを実現させるエースに出会えて、喜びで覚醒してるんですね」

ユリカが爽やかな笑顔で言った、ユリさんも薔薇で頷いた。
「蘭姉さん、プレッシャーが強くなりすぎて、辛くないですか？」とカスミが蘭に不敵を出した。
「全然、今の言葉で私も嬉しかったよ・・マリアにまで期待されてる事が」と満開で微笑んだ。
「豊君・・１つ教えてあげる、香水臭いよ」とマチルダが輝きニヤで言った。
「やっぱりそうですか・・うちの社長そいう店が好きで」と豊が照れて笑った。
「あら・・うちに来てくれればいいのに」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「それは来週まで無理ですね、小僧が親父と話すまで」と豊が私を見て微笑んだ。
「社長さんも、小僧の事知ってるんですね」とカスミが小さな不敵

を出した。
「もちろん・・小僧を知らない人は、俺の周りにはいませんから」と笑顔で返した。
「久美子ちゃんが、エースの伝説を15は知ってるって言ってましたね～」とユリさんが薔薇ニヤで言った。
「それは知ってるでしょう、久美子ちゃんは恭子と同じ歳ですから」と豊兄さんも笑顔で答えた。
「よっぽど面白いんだろうね～、自分の事はあまり話さないからね～」と蘭が満開ニヤで言った。
「伝説は脚色されてますよ・・小僧が自分で面白く脚色してるから、小僧は自分に対しては照れやですから」と豊が私に微笑んだ。
「そうだよね～、ヒトミの話しも最近してくれたし」と蘭が満開で微笑んだ。
「それも多分・・本当に感動的な部分は削除してるでしょう、ヒトミの左手の意志は」と豊が真顔で言った。

「豊君、お願い・・教えて、左手の意志を」と蘭も真顔で返した。
「俺はヒトミが亡くなった時、通夜でヒトミの母親に聞きました。小僧の親父とお袋と姉と恭子とマキ、そして私と和尚が聞きました。
ヒトミは今の医学では解明できない、難病だったそうです。
その体を動かせない原因すら分らない、産まれながらの難病でした。
ご両親は最高の医師と設備のある、東京の病院に入院させていたそうです。
そしてヒトミの余命を感じて、生まれ故郷である宮崎の病院に転院させました。
ヒトミはそれまで、一度も自ら体を動かした事すら無かった。

そして出会うんです、伝達できる男・・小僧に。
小僧は毎日ヒトミに語りかけた、そして気付く伝達方法を。
その驚異の方法、温度での会話。
小僧はヒトミの母親だけに話していました、そして母親も必死でやった。
母親は出来るようになったのです、ヒトミの意志を感じれたと泣いてました。
そしてヒトミが見せるのです、その可能性を示した。
ヒトミの左手が動いたのです、小僧が病室で母親と話してた時だったそうです。
私の手を握って話してと言ってるようだったと、母親が言っていました。
それからヒトミは母親にも、父親にも話したい時は左手を動かした。
病院の医師も看護婦も、感動していたそうです。
あの病院の院長は懐の深い人で、小僧に病院に泊まる許可を与えました。
院長自ら、小僧の両親に話しに行ったそうです。
そして小僧の挑戦が始まる、全てを賭けた挑戦でした。
年末の寒い夜、私は心配で病院に行きました。
そして小僧の顔を見て嬉しかった、本当に納得した顔をしていたから。
病室にはヒトミの祖父と祖母の笑顔があった、ヒトミが左手を出すから。
俺はその動きを見て、本当に驚きました。
左腕だけに生命の全てが宿ってるようで、その強い意志まで感じられた。
小僧はヒトミの心を、その左手に誘ったのだと思いました。
トモミで経験した事の応用を、成し遂げたのだと。
ヒトミは翌年の成人の日に、亡くなりました。

でもヒトミの父も母も祖父母にも、悲しみの涙は無かった。
母親が私達に笑顔で言いました、ヒトミは生きていたんだと。
生きて色々な事を感じていたんだと、それが分ったから送りだせると。
小僧に感謝してると、小僧が通夜に現れない事を怒らないでほしいと。
小僧は1人で、ヒトミを送っているのを感じてると。
小僧はその時、暗く寒い冬の海に、1人で小船に乗り沖に出ていました。
そこでヒトミを心の中に入れたのでしょう、ヒトミの伝言が有ったから。
ミホが病室で座って待っていたから、そのミホに会っていたから。
暗い海で自分1人で、ヒトミを心の中に見送った・・9歳の小僧が。
私が通夜の帰り、和尚の所で話していたら、小僧が来ました。
その顔は強い意志を持っていた、悲しんでる時間など自分には無いと。
その目が言っていたから、ヒトミとキチンと別れてきたと言ってるようでした。
そして和尚に問うのです、その心の疑問を。
人は何の為に生きるのかと、小学3年の小僧が真剣に問いかけた。
和尚は嬉しそうに笑って、こう即答しました、
人が生きるのは何の為でもない、全ての生命の生まれた意味は生きる事なのだと。
小僧は笑顔になって、腹減ったと言って背中を向けました。
私はその背中が忘れられない、強いとはそういう事だと言っていたから。
小さな小僧の背中が教えてくれた、生命と向き合い続ける強さを。
人間として最高の強さを、その背中が語っていたから」

豊兄さんは私を見て最後に微笑んだ、私も嬉しくて笑顔で返した。
静寂の中、女性達の啜り泣きの声が響いていた。
蘭の温もりを感じていた、豊兄さんに伝えられて、私は最高の喜びを感じた。
そして記憶の奥に眠る、トモミが現れる。
豊兄さんの言葉で気付く、ヒトミに対した時トモミの経験が力だったと。
ミホに向き合う時は・・トモミも出さなければならないと感じていた。

「豊君ありがとう、本当に幸せを感じた・・そしてお願い、明日トモミの話を教えて」と蘭が満開で言って、私に抱きついた。
「私はどうすればいいんだろう・・リンダに全てを話すべきなのか、今迷ってしまった」とマチルダが微笑んだ。
「マチルダ・・話さないといけないよ、マチルダは大切な海に、連れて行ってもらったんだから」とカスミが美しい真顔で言った。
「あなたも小児病棟に行っていたのですね？」とユリさんが真顔で聞いた。
「はい、俺はたまに遊び相手をするだけでしたけど」と豊が少し照れて笑った。

『豊兄さんはいるだけで、少女達の元気を充電出来るから』と私も笑顔で言った。
「それはそうよね～、あなたには出来ない事よね」とユリカが爽やかニヤできた。
『ユリカ意地悪5点』とウルウルで返した、全員が笑っていた。
「豊君、今のお住まいはどの辺りかしら？」とユリさんが薔薇で聞いた。
「〇〇町です」と豊も笑顔で答えた。
「なら私と帰りましょう、マリアを預けている家が同じ方向だから」

と薔薇で微笑んだ。
「さすがユリさん、輝き2人組みに防御線を張りましたね」と蘭が満開ニヤで言った。
「はい、ユリカも含めて3人に防御線を」と悪戯っ子を出した。
「蘭・・お願い、ユリ姉さんをギャフンと言わせて」とユリカが爽やかニヤで言った。
「あら、あなたが水曜日言わせれば良いのよ・・ユリカ」と薔薇で微笑んだ。
「そうでした・・忘れてました、必ずご期待に応えます」と爽やかに笑った。
ユリカのその変化を、全員が感じていた。

「ユリカさん、もしかして小僧に毎日触れられてますか？」と豊がユリカに微笑んだ。
「うん、毎日お姫様抱っこをしてもらってますよ」と爽やか笑顔で返した。
「やっぱり・・ユリカさんもカスミさんも、小僧には最高の存在ですね」と豊が笑顔で言った。
「今夜の最後に聞かせてもらいましょう、最高の存在の意味を」と蘭が私に満開ニヤで言った。
全員が笑顔で豊を見た、豊も笑顔で返した。

「小僧の伝達方法は多種多様です、言葉から温度まで。
1番得意なのは会話だと思われていますが、実は違います。
明日話しますが・・トモミに出会って、小僧が取得した方法。
それが鼓動による伝達です、相手に安心感を与える心臓の鼓動。
小僧はそれを自在に操ります、理解できない話しですが事実です。
若い小児科の医師達が、面白がって心電図を測った時に沈黙が流れました。
現実に鼓動を制御して見せたから、医師達はただ驚いていました。

その時小僧は笑顔で言いました、机の上には無いよ本にも載ってないよと。
トモミはマリアと同じ2歳の少女でした、その心を呼び出すのに会得したんです。
その方法は毎日抱いている事でした、俺はリアルに見ましたから。
それは薄皮を一枚ずつ剥がしていくような、ゆっくりと時間をかけて。
その日々の変化に驚きました、その笑顔が出て、その笑顔が変化していく事に。
そして引きずり出した、原因不明の障害と診断されたトモミの言葉を。
俺は小僧に聞きました、トモミはなぜ何も表現しなかったのかと。
小僧は簡単に言ってのけましたよ、お腹の中が恋しかったんだねと。
ユリカさんが小僧の気持ちを読めるなら、小僧は抱いている時無心でしょう。
その時には鼓動と温度が伝わってる、ユリカさんの薄皮が剥がれているんです。
ユリカさんとカスミさんは、薄皮が無限にありそうだから。
これ以上の楽しみは、小僧には無いでしょうから」

豊はユリカを見ながら、笑顔で言った。
ユリカがそれを聞いて、最高の笑顔で私を見た、私は照れた笑顔で返した。

「私は薄皮が少ないのかな～」と蘭が満開ウルで言った。
「また蘭さん冗談を・・蘭さんが1番剥がれていますよ、多分抱っこより強い・・添い寝あたりでしょうね」と豊が微笑んだ。
「なんて贅沢なんだ・・毎晩なのかな～」とカスミが不敵を出した。
「悪い事した時の罰だけよ」と蘭が満開ニヤで言った。

「それで終礼の報告会があるのね」とユリさんが薔薇ニヤで言った。
「蘭・・普通の場合罰というのは、相手の嫌がる事ですよ」とユリカが爽やかニヤで言った。
「りゃん・・よった・・わきゃらにゃい」と蘭がりゃん語で逃げた。
全員が笑っていた、最高の夜を楽しんでいた。

豊は私を、自分に対して照れやと表現した。

確かにそういう部分もあったが、私が自分の事でその部分を話さないのは。

自分の中では、別段たいした事じゃなかったからだ。

ヒトミの左手が動き出したのも、小学生の私には驚きは無かった。

当然な事だと感じていた、ヒトミは意志があるのだからと。

ヒトミの母親が感謝する意味が、あまり理解出来なかったのだ。

伝達方法にしても同じだった、私には特別な事じゃなかった。

英語を覚えたり、手話を覚えたりするような感覚だった。

私は今になって思う、幼い小学生だから出来たのだと。

その事実として、中学生以降の私は、新しい伝達方法を得ていない。

全ては幼い子供が、必死になって楽しく遊ぶことを、考えた末の産物である。

しかしこの当時の私は、その全てを使っても足りない気がしていた。
ミホはやはり特別だった、後悔が有ったのも大きかった。
その奥底に挑戦して、その難解さに迷ってしまう。
私には強引に行く勇気が無かった、そして迷った末に最終手段に出る。
ミホにマリアを会わせるのだ、そしてミホの棲む心の部屋の全てを破壊する。
3歳になったマリアが破壊する、私はそのマリアの力に再度震える。
その圧倒的破壊力を見て、そして破壊した後に癒しで修復する姿に。
その時に感じる・・マリアの誕生を待ちわびていた。
あの仲間達の想いを、マリアは現在でも持っている。
その破壊力と・・圧倒的癒しを・・会えば誰でも分る。
その放出する温もりに、包まれていたいと・・全ての人が願うのだから・・。

継承の道標

ＴＶの表現的には、深夜から早朝に移行しようとしていた。
まだ朝の気配すら存在しなかった、深夜の夜会も終宴を迎えようとしていた。
最高の夜の終わりを、誰もが少しの寂しさを感じていた。

「蘭も酔ったみたいだし、ユリカ帰る準備をしなさい」とユリさんが楽しそうに、薔薇で微笑んだ。
ユリカとカスミとマチルダで片付けをしていた、蘭は満開笑顔継続中だった。
「豊君・・梶谷さんと知り合いなんですよ」と蘭がユリさんに満開で言った。
「そうなんですね、不思議な繋がりがありますね」とユリさんが豊を見た。
「恩人です・・昨年俺が馬鹿をやった時に、和尚が梶谷さんに頼んでくれました」と豊も真顔で答えた。
「ちょっと待って～・・今終わりますから」とユリカがカウンターから叫んだ。
「楽しい話じゃないですよ」と豊も笑顔でユリカに言った。
「あなたの話で、楽しくない話しがあるの？」と蘭が満開で微笑んだ、豊は照れた笑顔で返した。

帰る準備が整って、３人が元の位置に座った。

「昨年の春・・危ない薬が繁華街で出回りました。
俺は何も知らなかったけど、ある女子高生がそれを無理やり飲まされた。
そしてその子が錯乱して、３階の家のベランダから飛び降りまし

た。
幸い死には至らなかったけど、両足骨折の大怪我でした。
その子が恭子の先輩でした、それで恭子が見舞いに行きました。
そして帰るなり怒涛のように話してくれました、薬を無理やり飲まされたと。
私は知り合いの悪仲間に、情報を聞きました。
その薬を流してたのは、やくざのチンピラの小遣い稼ぎだと知りました。
俺は許せなくて、本職の人間が素人の未成年に手を出す事が。
それでそのチンピラ４人組を・・立ち上がれないほど、やってしまったんです。
そして北警に出頭しました、事実を伝えて取り締まって欲しかったから。
その時和尚が梶谷弁護士に、私の弁護を依頼してくれました。
私は梶谷弁護士のおかげで、少年院に行かずに済んだんです」

豊が真顔で言った、反省の気持ちを言葉に乗せて。
「あなたも、自分に対して照れやですね」とユリさんが美しい真顔で言った、豊は照れた笑顔を見せた。
「その後日談があるんですよね・・小僧の事で」とユリカが爽やかニヤを出した。
「聞かれましたね？」と豊も微笑んだ。
「梶谷さんが豊君の話を聞いて、小僧を見て驚いてニヤニヤしてました」とユリカがニヤ継続で言った。
「それは聞かないと、眠れませんね～」とユリさんが薔薇ニヤで言った。
「豊君、言って良いのよ・・小僧がヤクザと知り合いなのは、全員知ってるから」と蘭が真顔で言った、豊は笑顔で頷いた。
「俺が出頭した夜、小僧は和尚の所に行きました。

そして和尚が言ったのです、ヤクザは見栄で生きてるから。
俺が釈放されても、狙われるだろうと。
それを聞いて、小僧は親分の家に乗り込んだんです。
親分の家は私達の地区の近くに有って、有名だったから。
小僧は玄関で親分に会わせろと、若いヤクザに言った。
その時、門の前に車が止まったんです、そこから降りてきた。
Ｎｏ２の実力者の若頭が、頭を下げる若いヤクザを見て、小僧はそいつだと思った。
小僧は若頭に駆け寄って、喧嘩を売ったんです。
勝負しろと・・ヤクザの若頭相手に、小６の小僧が。
その若頭は男気の有る人で、なぜだ？と小僧に聞いた。
小僧は俺の話をして、組が俺を狙うなら、小僧が若頭を執拗に狙うと言った。
それなら仕方ないな～と言って、その若頭が小僧を連れて車に乗った。
小僧は車の中でその若頭に色々聞かれて、いつもの調子で話したらしいです。
そして豪華なステーキをご馳走になり、その若頭に貸しまで付けて。
友達になって、俺を狙わない約束を取り付けて、帰ってきました。
翌日、北警にその若頭が来て、被害は無かったと言ってくれました。
そしてチンピラの薬を売っていた４人を、出頭させました。
梶谷弁護士も来ていて、刑事を説得してくれていて、その若頭も助けてくれました。
そしてそのまま釈放されて、若頭の車で送ってもらいました。
その時にこの話を聞きました、俺は嬉しかった。
確かに無鉄砲で馬鹿な行為だけど、小僧の気持ちが嬉しかったんです。
小僧１人でやった事だから、だから若頭に伝わった。

喧嘩を売ったのも本気だったよと、若頭が嬉しそうに教えてくれました。
そして若頭が伝説として発表するんです、多分俺に誰も手を出さないように。
その若頭に最後に喧嘩を売ったのは、小学生だと。
そして若頭が、その小学生に完敗したと。
だから誰も手を出すなと、小僧と俺に手を出すのは若頭の恥になると。
そう組内におふれを出しました、だから俺は狙われずに済みました。
嬉しそうに話す若頭に、和尚の寺まで送ってもらいました。
梶谷弁護士に礼を言って別れる時に、その小学生にいつか会わせろと言われました。
小僧が自分で出会ったんですね、俺は先日それを聞いて嬉しかった。
常識を重んじる人には、到底理解出来ない事でしょう。
良し悪しで言ったら、そこまでの話しでしょう。
でも俺は嬉しかった、自分の想いが伝わってると感じたから。
男同士はそこまで踏み込まないと、絶対に相手を理解出来ないから。
お互いに本気じゃないと、熱さがないと伝わらないから。
小僧は絶対に冷めないと感じたから・・それが嬉しかったんです」
豊は笑顔で締めた、その想いが私には嬉しかった。
「望月というあの男性が、ヤクザじゃなかったら・・私は愛していたかも知れません」とユリさんが美しい真顔で言った。
女性全員がハッとして、ユリさんを見た。
私は納得していた、ユリさんとミスターのカップル・・史上最強だと感じていた。

「私も望月さんを接客した時に感じたよ、梶谷さんとは違う大きさと深さを・・どことなく豊君は似てるよね」と蘭が深い目で豊を見ていた。
「ありがとうございます・・俺には最高の褒め言葉です」と豊が微笑んだ。

「明日、ジンは来るのかしら」とユリさんが私に真顔で聞いた、強い瞳だった。
『多分・・来ると思います』と真顔で返した。
「ジンは多分泣きますね・・悲しみの貴公子が」とユリさんが意味深に言った。
「ユリ姉さん・・ジンの最後の道標は、その事だったのですか？」とユリカが驚いて言った、ユリさんが薔薇で頷いた。
「繋がるんだね、原作者の粋なシナリオは」と蘭が深い目で豊を見ていた。
「皆さんは・・明日の楽しみにして下さい、今夜は本当に最高の夜でした帰りましょう」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
ユリさんが支払って、全員でお礼を言って通りに出た。

ユリさんと豊兄さんの乗るタクシーを見送って、私がユリカを乗せるタクシーを止めた。
「カスミちゃん、我家に泊まる？・・マチルダと一緒に寝るなら」とユリカがカスミに微笑んだ。
「良いんですか～！最高です」とカスミがユリカに駆け寄り、最高の笑顔でタクシーに乗った。
私は蘭と3人が乗るタクシーを見送った、蘭が満開笑顔で強く腕を組んで来た。

「ユリカ姉さんの、薄皮を剥がしすぎ～」と私を満開笑顔で睨んだ。
『うそ！・・りゃんじゃない』とウルウルで返した。

「そうだよ～・・でも罰を与える、左手の意志を話さなかった罰を」と満開で微笑んだ。
『はい、頑張ります』と一応ウルで返した、暖かい波動が返ってきた。
蘭とタクシーに乗ると、蘭が私の肩に乗ってきた。

『明日のお楽しみが・・知りたいな～』と蘭の耳元に囁いた。
「ん～～・・帰って元気が有ったらね」とニヤで言って、瞳を閉じた。
私は蘭の香りに包まれて、豊兄さんを想っていた。
井戸を掘りに行くと言った、その背中を思い出していた。
夜空に星が無数に瞬き、少し遅くなってきた夜明けの気配は無かった。

タクシーがアパートに着き、蘭を抱き上げて部屋に入った。
蘭が化粧を落として、パジャマで戻ってきた。
私に満開笑顔を向けて、電気を消して私の手を引いた。
私はベッドで蘭を腕枕して、引き寄せて蘭の好きな体制にした。

「今年から、冬寝る時寒くなくて助かる～」と満開で微笑んだ。
『俺もだよ・・俺なんか初めての経験』とニヤで言った。
「そんなに私の過去が知りたいんだ～」と満開ニヤで返された。
『知りたくないです』とウルウルで答えた。
「お父さんの許可貰ったら、荷物どうするの？」と蘭が聞いた。

『自分で少しずつ運ぶよ。
蘭・・今年いっぱい2人、お互いにキチンと生活しようね。
そして俺が本当の自信を持って、来年の正月は俺の家に2人で行こう。
そして俺の家族に会ってよ、俺は蘭を自慢したい。

俺は一生愛する女性を、１３歳で探し出したと言うから。
蘭も心のままに、話をして欲しいんだ』と笑顔で言った。

「うん、最高に嬉しいよ・・晴着を着ないといけないわ、成人式以来の」と嬉しそうに笑って、強く抱きついて瞳を閉じた。
私は蘭の温度と鼓動を感じながら、幸せに眠りに落ちていた。

翌朝、陽の光で目覚めた・・７時１５分だった。
私は静かに腕を抜き、カーテンを閉めて洗面所に向かった。
歯を磨きシャワーを浴びた、体を拭いて着替えてキッチンに向かった。
ご飯が有ったのでお粥を作り、卵焼きと鮭の小さな切り身を焼いた。
夜遅くまで起きていた蘭を想って、軽めの朝食にした。

朝食の準備が出来て、部屋で日記を書いていた。
８時になった時に蘭の部屋に戻り、眠ってる蘭の額に手を置いた。
蘭の温度の確認をして、美しい蘭の寝顔を見ていた。

『蘭・・８時だよ、おきなちゃい』と耳元に優しく言った。
「起きてた・・おでこの手が気持ちよくて、感じてたよ温度の言葉」と目を開けて、満開笑顔を見せた。
『俺はいつも感じてるよ、蘭の温度の言葉を』と笑顔で返した。
「ねぇ、もしかして寝言って？」と蘭が満開ニヤで聞いた。
『そう・・温度と鼓動の寝言だよ、可愛い寝言』とニヤで返した。
「私は全てが可愛いの、温度も鼓動も」と満開で言って立ち上がり、洗面所に消えた。

私はカーテンを開けて、窓を全開にした。
少し熱の上がりが遅くなった、朝の爽やかな風が進入してきた。
テーブルに朝食を並べて、蘭のシャワーの音が聞こえたのでガラス

戸を閉めた。
日記の補足を書いていると、蘭が髪を拭きながら戻ってきた。
「さすが・・今朝はお粥で軽めだね」と満開で微笑んだ。
『うん・・蘭は昼から、食べ放題の飲み放題でしょ』とニヤで言った。
「うん、でも今夜は・・どうするの？」と蘭が私を真顔で見た。
『もちろん、連れて行くよ・・俺が責任を持って、蘭でもりゃんでも』と笑顔で返した。
「りゃんにはこの部屋に帰るまでならないよ・・私こんなに楽しみな事、初めてだよ」と満開で笑った。
2人で朝食を楽しく食べた、蘭が化粧をする間に私が食器を洗った。
『バスで行く？』と化粧の仕上げをしてる蘭に聞いた。
「車で行くよ・・有った方が準備の時に役立つからね」と満開で微笑んだ。
蘭の準備が整い、ケンメリで出かけた。
日曜の朝、車は信じられない程に少なかった。

「昨年の春・・繁華街で出回った薬」蘭が突然前を見て話し始めた、真剣な表情だった。

「その注意が徳野さんからあったの、だから知っていた。
若い女性に最初は無料で配り、それから金を回収してたらしいの。
若い女はいざとなれば、お金は稼げるからね。
そしてその薬は粗悪品だったのよ、チンピラが組に内緒でやってたから。
濃度もまちまちだったらしい、だから錯乱する子が出たのね。
豊が言った飛び降りた女子高生、多分・・ジンの妹よ。
ジンのクラブに何かを届けて、帰りに無理やり薬を飲まされた。

そのまま妹は帰って、その夜の深夜に・・飛び降りたの。
翌日、その話を徳野さんが聞いて、望月さんに話そうとしてたらしい。
でもジンが止まらなかった、復習を決意してたの。
そのチンピラの集まる、中央通の〇〇喫茶にナイフを持って乗り込もうとしてた。
大雨の日だったよね・・春雨に煙る日だったわ。
ジンは通りで1人で雨に打たれ、その店を睨んでいた。
そして4人が揃うのを確認して、覚悟を決めたの。
呼び込みのシュウさんがずっと見てたの、その話を聞いたのよ。
ジンが一歩踏出した時に、肩を掴まれた。
大きな若い男に、ジンが驚いてその男を見ると微笑んだらしいよ。
そして言った、男が本気の時には、ナイフなど使わぬものだと。
あんたは務所に行くことになるから、俺が少年院に行くよと言って笑った。
ジンは・・俺の妹が無理やり薬を飲まされ、大怪我をしたんだと叫んだ。
そしたらその若い男は、ジンを正面から見て。
ジンのお腹に、渾身のパンチを入れた。
膝をつき屈んだジンに、その若い男は言った。
今やるべきは復讐じゃない、妹の側にいることだろ。
そう笑顔で言って、店に1人で入って行った。
そして昨夜の豊の話しに繋がる、その若い男・・豊。
ジンは雨に打たれ俯いて泣いていた、そのジンに傘をさしかけた。
ユリさんだったの、ジンを強い瞳で見ていた。
ここからの話は、私はジン本人から聞いた。
ユリさんはジンをＴＶルームに連れて行き、ジンをマリアで回復した。
そしてジンに厳しい言葉で言った、その若者の言う通りだと。
ジンは心から反省した、そしてユリさんに自分の事を話したの。

その部分はユリさんに聞いてね、そこがジンの本質に迫る部分だから。
ジンが妹の所に帰ると言った時に、ユリさんがジンに言ったの。
あなたの心にブレーキを付けます、そう言って微笑んだ。
【最後の道標】と言う称号を贈ります、私からあなたへ。
ジンは感動して泣いたらしいよ、絶対に汚せない物を、最高の人に贈られて。
その称号の深さ・・私はその話を聞いていて泣いたよ。
ユリさんの高みを感じて、その大きさを再確認して。
あなたがジンに会った翌日、ジンが靴屋に来たの。
私はジンとランチをして、あなたの事を聞いた。
本当に嬉しかった・・悲しみの貴公子が泣きながら伝えてくれたから。
ジンは最後に笑顔で言ったよ、俺はあの大きな若者に恥じぬように。
最後の挑戦者に最後まで道を示したい、あの若者が俺に道を示してくれたから。
そう私に伝えてくれた、本当に嬉しかった。
そして昨夜の豊の話しで確信した、その若者は豊だと。
この街でそんな事ができる若者は・・私は2人しか知らない。
自分に忠実に生きる本物の男・・豊。
そして最高の称号を贈られた者・・最後の挑戦者だけよ。
昨夜ユリさんもユリカ姉さんも、そして私も涙を必死に我慢していた。
その原作者の粋なシナリオを感じて、素晴らしい時代に生まれた喜びを感じて。
カスミもマチルダも、昨夜ユリカ姉さんに聞いたでしょう。
豊の昨夜の言葉の重みに気付いたでしょう、男同士はそこまでいかないと駄目だと。
本気じゃないと、熱い心じゃないと分かり合えないと。

豊がジンにパンチで示した道標、春雨に濡れるジンの心に示した道。
その道は・・あなたに続いていたんだよ」
蘭は前だけを見て、静かに優しく伝えてくれた。
私は何度目だろう、豊兄さんに完敗していた。
ケンメリは夜街を過ぎて、橘橋の北詰交差点で信号待ちで止まった。
私はエミが駆け出した場所を見ていた、その時映像が流れた。
エミが強い瞳で、両手に拳を強く握って立っていた。
私が叫ぶあの言葉、【俺は良い事ばかりする、中学生じゃない】その言葉。
全ては豊の教えから、導き出した言葉だったと。
車のヘッドライトが照らす光道を、全速力で賭けて来るエミを見ていた。
私はエミを抱き上げて、夜空に聞いていた。
【これで良いんだよね・・豊兄さん】そう問いかけていた。
映像の中のエミは最高の少女の輝きを発して、涙を流して笑っていた。
私はそれを見て笑顔になった、その瞬間強く感じた。
エミの走り出したその場所を見ると、マチルダが最高の笑顔で立っていた。
マチルダの輝く姿の背景に、信じられない程の大きな月が浮いていた。
マチルダが最高の笑顔で叫んだ、心の底からの叫びだった。
「月光を追いかけて・・絶対に諦めないで」とマチルダが叫び映像が切れた。
その時信号が青になり、青を纏う蘭が前を見て発進した。
夏の空は限りない青を示していた、海に続くその道は希望を提示す

るようだった。
空港の方向から、一機の旅客機が機種を天空に向けて飛んでいた。
「正月・・私があなたの家に行った後、２人でパスポートを作ろう」と蘭が微笑んだ。
『うん、そうしようね・・俺は最高の人に必要とされたから』と笑顔で返した。
「頼んだよ、ダウンジングとやらで・・金の鉱脈でも発見してね」と満開ニヤで言った。
『その時は、ニューヨークに家を買おうね・・２人の家を』と微笑んで返した。
「素敵過ぎる事を言わないで・・泣くよ」と蘭が満開で睨んだ。
『駄目だよそんな話しで泣いたら・・今夜の海じゃ号泣するよ』と真顔で言った。
「それは決定事項です・・号泣するよ、あなたの大切な見送りの場所だから」と蘭は前を見て微笑んだ。

ケンメリがユリカの家に着き、私が蘭に言われカスミを迎えに行った。
呼び鈴を押すと、ユリカが素顔で出てきた。
『カスミ姫をお迎えに来ました』と笑顔で言った。
「さすがね～蘭は、本当に良く気の付く子ね～・・誰かが毎日添い寝するから」と爽やかニヤで返された。
カスミとマチルダが笑顔で出てきた。
『マチルダは、ゆっくりしてて良いんだよ』と笑顔で言うと。
「気持ちが高ぶってて、動きたいの」と輝きながら微笑んだ。
「もう、あれからマチルダ・・外が明るくなるまで話してたんだから」と靴を履いたカスミが、私の左腕を組んだ。
「カスミも、ノリノリだったじゃないの」と笑顔のマチルダが、私の右腕を組んで。

3人でユリカに礼を言って、笑顔のユリカと別れた。
マンションを出て、ケンメリの前に立つ蘭を見て。
カスミもマチルダもニヤを出して、強く腕を組んで来た。
蘭はそれを見て、最高の満開笑顔で睨んでいた。

その蘭の背景に、どこまでも続く青空が広がっていた。
その青空に道を示すように、飛行機雲が真直ぐに伸びていた。
70年代の夏、空気は澄み乾燥して爽やかだった。
私の両腕に絡む輝く女性は、その大切な時期を謳歌していた。
そして青の背景を背負う、青い炎の女に迷いを見つける事は出来なかった。

何かが大きく動こうとしていた、誰もがそのシナリオに挑もうとしていた。
自分らしく生きようと、運命などと言って逃げるのはやめようと。
不公平な世の中を楽しみながら、闘おうと誓っているようだった。
海からの風が、蘭の髪を揺らした。
蘭は身動きもせずに、満開を継続していた。
その揺れない心を示すように、逆風も楽しむように笑っていた。

ユリさんがジンに贈った、【最後の道標】に込めた想い。

私がそれを聞くのは、翌年の1月だった。

私はなぜかその事を聞かなかった、自分で感じたかったのだ。

私はジンの起業した、その当時では、まだ珍しかった人材派遣の会社を手伝う。

高校生の私は、ジンの派遣会社の、夜の女性部門を任されるのだ。

ジンは私の提案には、全て真剣に答えてくれた。

私にはユリさんが常に的確なアドバイスをくれて、蘭がその豊富な情報を教えてくれた。

そして私はあるシステムを作り出す、そのシステムをユリさんが後押しした。

そしてユリさんが六本木ＰＧの開店を決意する、１８歳の私は先乗りで上京するのだ。

私は上京して、とりあえず貸しを使って、大手ＴＶ局にバイトとして潜り込む。

そして探し出す、芸能人として芽が出ない、夜の匂いのする女性を。

そして見つけ出し・・引き抜く・・赤の女。

深夜のＴＶ局の自販機の前で、ステージはその場所だけじゃないと強く誘う。

もしこの物語の続編を書く時は、その東京物語にしようと思っている。

六本木伝説の表舞台の話を、美しく産まれた事に苦悩する女性の物語を。

ジンの【最後の道標】・・その本質を表す赤の女。

真赤な閃光のが光るとき、舞い降りる魅惑の容姿。

北の大地が産み出した、赤い魂・・氷点下を燃やし尽くす熱。

その選ばれし源氏名・・ローズ。

最高の薔薇が贈った名前・・薔薇が贈った・・ローズ。

忘れることを許さない・・圧倒的な【赤】

一輪で全てを凌駕する・・今も強く心に残るその赤い心。

書きたくなったよ・・ローズ・・俺はそこまで行けそうだよ。

あの自動販売機の前で誓ったね・・いつか教えると誓ったから。

俺のローズに対する想い・・それをいつか書くね。

ジンが道を示した時・・溢れ出る涙。

悲しみの貴公子と呼ばれし者・・道に迷い疲れ果てた女性達の目の前に浮かぶ。

【最後の道標】・・その道は・・自分へと続く。

帰り道を示す・・自分に帰ろうと・・それが幸せに続く道だから・・。

春雨の震え

青空を背負い立っている、青い炎を見ていた。
入道雲が夏を強く主張して、終りの無い熱の予感が匂っていた。
私の両脇に溢れる輝きは、夏の朝に不釣合いな発光を見せていた。

「豊満2人組みで、何強く腕組んでるのかな〜」と蘭が満開ニヤで言った。
「エースが喜ぶから〜」とマチルダが輝きニヤで言った。
「私・・睡眠不足で倒れそう」とカスミが不敵に言った。
「折角、カスミの家に着替えに寄ってあげようと思ってたのに〜」と蘭が満開ニヤで言って車に乗った。
「お姉さま・・蘭お姉さま」とカスミが言いながら、焦って蘭の機嫌をとった。
カスミが助手席に乗り、私とマチルダが後部座席に乗った。
その日のマチルダは、サクラさんのプレゼントの、チェックのミニのワンピースを着ていた。

カスミの家に着き、カスミが走って帰り着替えて来た。
その姿を3人でニヤニヤで見ていた、カスミが可愛いバージョンで来たからだ。
「私に対抗しようと思って、可愛いバージョンにしたね」とマチルダがニヤで言った。
「違うわよ・・これが1番近くに有ったから」とカスミが最大不敵で返した。
「きっと下着は凄いの付けてるよ〜」と蘭がカスミに満開ニヤで言った。
「普通です・・マチルダのに比べれば」とカスミが不敵継続で言った。

「今日は、そんなに派手じゃないよ」と後部座席に座る、私の横のマチルダがニヤで返した。

「後でエースに、どっちが派手か見てもらおう」とマチルダが最大ニヤで言った。

「良いわよ・・私の方が地味で可愛いから」とカスミも蘭に不敵を出した。

「そんなに降りたいんだね～」と蘭が満開ニヤで言った。

カスミとマチルダが、慌てて蘭の機嫌をとった。

蘭がケンメリをビルの1階に突っ込んで、４人でＰＧに上がった。

四季とユメ・ウミが来ていて、準備の確認を厨房でしていた。

「しかしここの厨房は大きいよね～、助かるけど」とカスミが言った。

「ここは元々、レストランをイメージして間取りされてるのよ」と蘭が満開で微笑んだ。

「エース・・カレーの具材確認してね」と可愛いエプロンを付けた、美冬が微笑んだ。

『了解・・美冬エプロンすると、新妻みたいで可愛いね』と笑顔で返した。

「そうでしょう・・私可愛いの～」と美冬が可愛く笑った。

「さて私も新妻になろうかな～・・裸にエプロンで」とカスミが不敵を出した。

「それ男の憧れらしいね～」とマチルダが私にニヤで言った。

『カスミ・・結婚してる頃してたね』と蘭が満開ニヤで言った。

「してません・・エースにならしても良いよ～」とカスミが私に不敵ニヤを出した。

「なんて危険な厨房なんだろう」と千夏が言って、皆で笑っていた。

シオンとナギサが来て、蘭とナギサで買い物に出かけた。

四季が唐揚げとエビフライ等の揚げ物担当。
カスミとシオンとマチルダが、焼き物担当になった。
ユメとウミが飲み物のチェックと、ご飯等の担当で準備が始まった。
私は食材を切って、カレーの製作に取り掛かった。

「やっぱり良いな～、料理が出来る男」とユメが微笑んだ。
『自分で何でもしないとね、必要に迫られたら誰でもやるよ』と笑顔で返した。
「家に寄り付かない男の言葉は重いね～」とウミが笑った。
『ウミ・・ちょっと』とウミを手招きした、ウミが笑顔で近付いた。
私は奥の少し広い所で、ウミを抱き上げた。
ウミの重さが確実に増えていて、私は笑顔で抱かれるウミをみた。
『ウミ・・頑張ってるね、もう少しで適量だね』と笑顔で言った。
「うん、適量で止めるのが難しい」とウミが可愛く笑った。
『カスミみたいに、腹筋だけでもするんだよ・・女性の皮下脂肪は、案外綺麗に燃えるよ』と微笑んで返した。
「そうなんだね、ありがとう」と言った笑顔のウミを優しく降ろした。
私はユメを抱き上げて、笑顔のユメの鼓動と温度のチェックをした。

「カスミ、案外料理できるのね」と千秋が笑顔で言った。
「結婚してましたから～・・主婦でした～」とカスミが不敵で威張った。
「捨てられた話しで、そんなに威張るんだ～」とマチルダがニヤで言った。
「捨てたんだよ・・エースがポイって感じで」とカスミが最大不敵で返した。
「誰か～・・鯛がそのままいる～さばいて～」と千夏が叫んだ。
「は～い」と元気に返事したのはシオンだった。

シオンは大きな鯛をまな板に乗せて、手を合わせて目を閉じた。
全員が手を止めて、そのシオンに見入っていた。
「お刺身ですか？」とシオンがニコちゃんで聞いた。
「うん・・できるシオン？」と千夏が言った。
「はい・・シオンお料理好きですから～」とシオンが微笑んで始めた。
その見事さに全員が固まっていた、シオンはスムーズに刺身を切り。
鯛の体に盛り付け、お造りを完成させた。

『シオン・・上手だね～、凄いな～シオンは』と私が笑顔で言った。
「ありがとう先生・・あと１匹もですね？」と千夏に言った、千夏が笑顔で頷いた。
「シオン・・上手なんてレベルじゃないよ、板前みたい」とカスミが笑顔で言った、シオンも嬉しそうな笑顔で返した。
ハルカとミサキが野菜と食器関係を持って来た、蘭とナギサが帰ってきて。
「私らは何も無さそうだね・・エミとミサでも迎えに行こうかね～」と微笑んでナギサと出て行った。

「エース・・名札作るんだけど、何を書こうか？」と煮込みに入った私の所に、美冬が来た。

『五天女は源氏名だけで良いよね、ゲストは・梶谷・ジン・豊だけで良いよ。
和尚は・・・和尚でいいよ、カッコして生臭付けるかな。
問題は女性・・ＰＧの女性はサクラさんから蘭・ナギサまでは・・ＰＧと源氏名。
その下の９人衆以下・・久美子までは、ＰＧと源氏名に年齢。
ボーイさんはＰＧに呼び名・・徳野さんは徳野にしよう。
他の店の女性は、店の名前と源氏名と年齢で良いよね。

千鶴とミコトは年齢はいらない、案外こだわるから。
子供達は下の名前と年齢と誰の子供かを書こう』

メモしながら聞いている美冬に笑顔で言った。
「エースはＰＧにエースで良いの？年齢の１３歳と称号も入れようか」とニヤで返された。
『伝説の男って大きく書いといて』とニヤで返した。
「美冬～」と厨房の入口から声がした、マユがレイカを抱いて立っていた。
「早いね・・マユ」と美冬が歩み寄った。
「レイカが行こう、行こうってうるさくて・・手伝うよ」とマユが美しく微笑んだ。
私はレイカを受取り抱き上げた、レイカは嬉しそうに笑っていた。

『レイカ・・もうすぐお友達来るから、それまで手伝って』と笑顔で言った。
「はい・・エース」とレイカも可愛く笑った。
美冬がマユを全員に紹介して、マユが四季の方に入った。
私はレイカを安全な所に座らせて、割り箸の袋詰めを火加減を見ながらレイカとしていた。
その時銀河のリョウとホノカが笑顔で来た、手伝うと言って挨拶をしていた。
四季がマユとリョウとホノカに任せて、フロアーの準備に行った。

「カスミ・・どうしたんだいその服は？」とミニスカートのリョウが涼しげニヤで言った。
「今日・・カスミの憧れの男が来るからね～」とマチルダが輝きニヤで言った。
「それは楽しみ～・・きっと良い男よね～」とホノカも華麗ニヤで言った。

「良い男だよ・・でも婚約者がいるの」と不敵ウルを出した。
「婚約でしょ・・・なら奪えばいいのよ～」とマユがニヤで言った。
「マユ姉さん・・・ついて行きます」とカスミが微笑んだ。
「母は強いな～・・・言葉に重みがある」とマチルダも微笑んだ、５人で笑っていた。
私は美しいその５人の笑顔を見ながら、レイカと袋詰をしていた。

私はカレーの最終段階に入り、味見をしてニヤニヤで火を止めた。
レイカを抱いて、フロアーに向かった。
四季とカズ君とレンと久美子が、テーブルの準備をしていた。
どこから持って来たのか、大きな部厚い絨毯がフロアーの半分を占拠していた。
右奥にカウンターが持ってきてあり、各種の酒が大量に並べられていた。
久美子が座布団を並べて、美冬が名札を書いていた。

「エース・・ゴールドを教えて」と美冬が微笑んだ。
『ママが千鶴・・千に鶴、マユはいいよね・・セリカが１９歳でケイコが１８歳』と笑顔で答えた。
「１８歳！」とレンが私を見た。
『そう１８歳・・もうすぐデビューするよ』とニヤで返した、レンが笑顔で頷いた。

その時レイカが入口に叫んだ。
「セリカ！」と言って駆け寄って行った、セリカは最高の笑顔でレイカを抱き上げた。
可愛い私服のセリカは、その輝きを放出していた。
笑顔の瞳の輝きが、無数の流星の帯を描いていた。
フロアーに居た女性達が、沈黙してセリカを見ていた。

『セリカ・・早いね、いらっしゃい』と笑顔で声をかけた。
「うん、手伝おうと思って」と流星の輝きで微笑んだ。
『じゃあ、シオンの場所をお願い』と笑顔で返して、フロアーの準備をする女性達にセリカを紹介した。
美冬からセリカの名札を受取り、厨房に案内した。

セリカを紹介すると、銀河の3人がセリカを凝視していた。
セリカが挨拶をして、笑顔でシオンの横に行き、ニコちゃんシオンと作業に入った。
「エース・・シオンとセリカの称号は考えてるよね～」とリョウが微笑んだ。
『もちろん、シオンがデビューして安定したら・・素敵なのを贈るよ』と笑顔で返した。
「本当に！・・嬉しい～、楽しみだねシオン」とセリカが最高の笑顔で言った。
「はい・・頑張りますよ～、セリカちゃん」と最高ニコちゃんで言った。
「気合入れるよ・・ぼーとしてたら奇跡のように消えるよ」とカスミが不敵を出した。
「そんな奇跡じゃ・・面白話にもならないね～」とホノカが華麗に微笑んで、3人がニヤで頷いた。
「エースがニヤニヤを出してますよ～」とマチルダがニヤで言った。
私は慌ててニヤを引っ込めて、レイカを抱いて背中を向けた。

私がレイカとTVルームに行こうとすると、千鶴とケイコが来た。
私はケイコの私服姿の可愛さに見惚れていた、少女の輝きが出ていた。
私はフロアーの女性達に2人を紹介して、ケイコをレンに任せて千鶴とTVルームに向かった。
「私・・手伝おうか？」と千鶴が言った。

『今は若手の時間だから・・千鶴はいいよ』と笑顔で返した。
ＴＶルームのドアを開けようとした時に、裏ドアから蘭とナギサがエミとミサを連れてきた。
千鶴が蘭を見て・・一筋の涙を流した、蘭は駆け寄って千鶴に抱きついた。
私はエミとミサを呼んで、レイカを抱いてナギサとＴＶルームに入った。

ＴＶルームは荘厳な世界だった、五天女が揃いミコトとマダムと松さんの笑顔があった。
私はレイカをエミに任せて、五天女に挨拶をした。
「蘭はどうしたのかしら？」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
『今そこで、千鶴と抱き合っています』と笑顔で返した。
全員が笑顔になって、暖かい空気が流れた。
その時千鶴と蘭が入って来た、五天女を見て千鶴は一瞬凍結した。

『固まらないの千鶴・・皆さんご存知でしょうけど、ゴールド・ラッシュの千鶴です』と私が笑顔で紹介した。
「千鶴です・・まだまだ未熟者ですが、よろしくお願いします」と千鶴が深々と頭を下げた。
「千鶴・・何固い挨拶してるんだい、まあそこにお座りよ」と大ママが笑顔で言った。
私は嬉しそうな笑顔の千鶴を、五天女の前に促した。

「蘭・・車はもう駐車場に入れましたか？」とユリさんが蘭に言った。
「いえ、まだ下に有りますよ」と満開で返した。
「一緒に行ってくれますか、和尚様と豊君を迎えに」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「もちろん、行きましょう」と蘭が満開で微笑んだ。

「千鶴・・ここでゆっくりくつろいでいてね」とユリさんが薔薇で微笑んだ、千鶴も微笑んで頷いた。
私はユリさんと蘭を見送った、ナギサが少し緊張していた。

『ナギサでも・・久々の一番下の存在には、緊張するんだね』とナギサにニヤで言った。
「このメンバーで緊張しないのは・・蘭とエースだけだよ」と華やかニヤを出した。
「ナギサ・・ジンにお礼言っておかないと駄目だよ」とユリカが爽やかニヤで言った。
「はい・・久々に会うから、楽しみです」と華やかに微笑んだ。
「ナギサ・・完全に戻ってるね、素敵だよ」と千鶴がナギサに微笑んだ。
「ありがとうございます、千鶴姉さんも・・変わりなくお綺麗です」とナギサが笑顔で言った。
「今の言い方は・・25過ぎたら女は下るみたいに、聞こえたね～」とミコトが余裕ニヤで言った。
「なんだって・・聞き捨てならないね～」とリアンが獄炎ニカで言った。

「まさか！そんな事ないです・・エース助けて」とナギサが華やかウルを出した。
『ナギサ・・誰に挑戦状を出したんだよ、ミコトや千鶴に押されてどうする』と私はニヤニヤで返した。
「さすがエースだ・・さてどう切り抜けるのかな・・ナ・ギ・サ」とミコトが追い込んだ。
私はナギサの華やかウルが可愛くて、助け舟を出した。

『ミコト・・あんまり追い込むと、ナギサは変な男に走るからその位にしてね』と私が微妙な助け舟を、ニヤニヤで出した。

「そうなんです、私・・危ない女だから」とナギサがミコトに華やかニヤを出した。
「不思議な助け舟に、堂々と乗る・・ナギサも凄いね～」とミコトが微笑み、全員が笑顔になった。
私は楽しそうに遊ぶレイカを見て、寝ているマリアのチェックをしてフロアーに向かった。

ケイコがレンと楽しそうに準備をする姿を見て、厨房に入った。
料理は盛り付けに入っていて、女性達の笑顔に溢れていた。
私はカレーのチェックをして、奥の丸椅子に座った。
「世界は広いね～・・セリカ姉さん、可愛過ぎるよ」とハルカが微笑んだ。
「本当に私達は、大変な時代に産まれたんだね～」とミサキも微笑んだ。
『お2人さん・・暑いですよ、瞳が燃えてるから』とニヤで返した。

「ミサキ・・今日来る豊君って凄く良い男よ、同じ歳の」とハルカが微笑んだ。
「豊・・まさかエース絡みの、チャリサーファー絡みの・・豊君！」とミサキが驚いた。
「やっぱり・・宮崎市の子は知ってるんだ～」とハルカがニヤで言った。
「知らない子はいないよ・・伝説の憧れだもん」とミサキもニヤで返した。
『ミサキ・・ドレス着て来いよ』と私もニヤで言った。
「そうしようかな～、とりあえず化粧を直さないと」と可愛く微笑んだ。
「私ね～、豊君に・・短期間で綺麗になったって言われたんだよ～」とハルカが笑顔で威張った。
「うそ！・・どうしてそこまで仲が良いのかな～」とミサキが笑顔

で突っ込んだ。
『ミサキ・・PGの事件の時、車の窓ガラス割ったの豊兄さんだよ』と笑顔で言った。
「そうなの！・・・伝説は嘘じゃないんだね」とミサキが嬉しそうに微笑んだ。

「エース・・席はどうしよう？」と美冬が来た。
『抽選にすれば・・席に番号振って、くじを引かせるんだよ・・その方が面白いよ』と笑顔で言った。
「なるほど・・さすがエース」と美冬が言った。
『子供席には俺が入るから、俺と子供の分はいらないよ』と美冬に言った。
「よろしくね・・助かりますエース」と言って美冬が小走りに出て行った。

「なんか・・エースって名前がしっくりしてるね」とセリカが可愛く微笑んだ。
『セリカ・・俺の事どんな感じで見てたの？』とウルで言った。
「生意気で・・未経験のいやらしい中学生」と流星の輝きを最大にして微笑んだ、全員がニヤで私を見た。
『セリカ、こんなに愛情注いでるのに・・意地悪3点』とウルウルで返した。
「ヨチヨチ・・泣かないの、えーしゅ」と可愛くニヤした。
「ねぇエース、セリカちゃんの個人称号が有るんでしょ？」とマユがニヤで聞いた。
『ありますよ、セリカ教えないんだね・・大切にしてるんだね、可愛いやつ』とセリカにニヤで言った。
「あの事、蘭さんにばらすよ」とセリカが最高流星二ヤで言った。
『セリカ姫・・ごめんなしゃ～い』と私は最高ウルウルで返した。
「今日も楽しい時間になりそうだね～・・私達は最高の時代に産ま

れたね～」とカスミが最大不敵を出した。
全員がニヤニヤで見ていた、シオンだけが私を心配してみていた。

『シオン・・助けてね』とシオンにウルで言った。
「はい、先生・・だから夜のイルカは、蘭姉さんユリカさんの次は私ですよ」とシオンがニコちゃんで言った、私はウルで頷いた。
「夜の海のイルカちゃん・・まさかＰＧ限定じゃないよね～、銀河の奇跡だから」とリョウが言った。
「それはあり得ないわ・・私を連れて行かないなんて」とホノカも華麗ニヤで続いた。
「ファーストキスを奪われた私は・・聞かなくて良いよね～」とミサキもニヤで来た。
「レイカが行きたがるよな～、私を連れて行かないと・・レイカ泣くな～」とマユもニヤできた。
「私に贈ってくれた称号・・流星が夜の海で見たいな～」とセリカもニヤで言った。
「流星のセリカ！・・流れる輝きか～、なんか愛情たっぷりの称号だね～」とカスミがニヤで言った。
全員のニヤに囲まれて、私はただウルウルをして見ていた。

「最後の挑戦者も、案外ウルが多いな」と入口から声がした、ジンが端正な笑顔で立っていた。
『ジン・・いらっしゃい』と笑顔でジンに歩み寄り、全員に紹介した。
「噂以上に素敵ですね～」とマユが微笑んだ。
「本当に、少し日本人離れしてるし・・優しさが瞳に出てる」とマチルダが輝く笑顔で言った。
「ありがとうございます、皆さんもお綺麗ですね～驚きました」とジンが微笑んだ。
「さすがね・・ＮＯ１ホスト」とホノカが少しすねた。

『ジン・・ウルしていいよ』と私がジンにニヤで言った。
「今、しそうだった」とジンが笑顔で返してきた。
私はジンを案内して、ＴＶルームに入った。
さすがのジンでも、五天女を見て一瞬緊張が走った。
『皆さん、もちろんご存知でしょうけど・・ジンさんです』と私が紹介した。
「あらためまして・・〇〇クラブのジンです、よろしくお願いします」とジンが深々と頭を下げた。
「ジン、良い男に磨きがかかってきたね・・まぁそこのナギサの隣にお座りよ」と大ママが笑顔で言った。
ジンも笑顔で返して、ナギサの隣に座った。

ナギサはジンを見て涙を見せていた、ジンは優しい瞳でナギサを見ていた。
私はナギサの涙を見たときの、ジンの瞳の変化に驚いていた。
優しさが瞳の色に完璧に出ていた、その優しさにナギサは包まれていた。

「ナギサさん・・良かった～、完全に戻りましたね・・さすが最後の挑戦者」とナギサに優しく微笑んだ。
「ジン・・ありがとう・・私の事も、あの時にエースを助けてくれた事も」とナギサは華やか笑顔で泣きながら言った。

「俺は何もしてませんよ・・ナギサさんの事でエースが来て。
その心の言葉が本当に嬉しかった、俺は感動してましたよ。
ナギサさんに対する愛情に満ちていたから、蘭さんの為じゃなく。
ナギサさんの為だったから、俺はエースの手助けが出来て嬉しかった。
ユリさんに少し恩返しが出来たと思えたから、俺のユリさんに対

する大きな恩の。
そして俺の称号の深さを、気付かせてくれたんです。
最後の挑戦者という、最も重い称号を背負う男が。
だからナギサさん、あなたの復活が俺にも本当に嬉しいです。
今・・初めてホストになって、良かったと感じました」

ナギサの潤む瞳に、ジンが優しく語りかけた。
「最後の道標・・ユリさんの大きさに、また震えましたよ」とミコトが微笑んだ。
「悲しみの貴公子・・夜の迷える女性が愛情を込めて呼ぶ名前、確かに感じるね」と千鶴も微笑んだ。
「そんなに素敵じゃないですよ・・まだまだ足りない物が多くて」とジンが照れた笑顔で言った。
「ジン・・ハンカチ持って来た？今日はあなたにとって最高の日になるよ」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「持ってますよ・・ユリカさんに言われると、少し緊張します」と笑顔で返した。
その時、美冬が呼びに来た、全員で立ち上がり私はマリアを抱いた。

フロアーに歩いていると、銀河とマチルダに囲まれた豊兄さんが見えた。
ジンが立ち止まり、立ち尽くしていた。
豊兄さんを見て、ジンは少し震えているようだった。

「ジン・・行くよ」とユリカが言って、ジンの手を取った。
「ユリカさん・・本当に最高の日です、探し続けた最高の男に再会できて」とジンが真顔で言った。

「豊君・・覚えてるかな？ジンと言うのよ」とユリカが豊に爽やかに微笑んだ。

豊はジンを見て、嬉しそうな笑顔になった、ジンは豊を近くで見て泣いていた。
「もちろん覚えてます、あの時は殴ったりして、すいませんでした」と豊は頭を下げた。
ジンは豊かに抱きついて、ただ泣いていた、悲しみの貴公子が。

ホノカは聞いていたんだろう、その感性で理解したようだった、その華麗な瞳が潤んでいた。

「謝るなよ・・俺には最高のパンチだったよ。
俺の全てを救ってくれた、一生心に残る最高のパンチだった。
あの春雨に打たれた心に、間違った道を進もうとした愚かな心を。
強く引き戻してくれた、最高の道標だったよ。
本当にありがとな、絶対に忘れられないあの言葉と笑顔。
今することは復讐じゃない、妹の側にいることだと言った言葉。
そして体1つで、笑顔を残し堂々とあの店に乗り込む姿。
俺は本当に憧れたよ、あんな風に生きてみたいと。
そして今・・分ったよ、豊と聞いて。
その名前・・ただの伝説じゃなかったんだな、現実に存在するんだな。
豊・・ありがとう・・俺はお前の友になれるように頑張るよ」

最後は豊の優しい瞳を見て、ジンは豊の胸に優しくパンチを入れて笑顔になった。

「あの日・・俺がジンさんの肩を掴んだのは。
もちろん自分で行こうと思ってたのもありますが、もう1つ理由があります。
1人の女性が、薬局の影から、ジンさんを見て震えていたから。
拳を強く握り、ジンさんの背中を見て震えていたから。

その美しい女性の瞳が、愛情に溢れていたから。
俺はその瞳に涙を流してほしくなかった、だからジンさんに生意気言いました。
ジンさん・・ありがとう、友達と呼んでくれて」

豊は笑顔で伝えた、ジンは驚いた表情で見ていた。
その時に豊の言った、女性の意味が全員に理解できる。
ホノカが泣きながら豊に抱きついたから、豊が優しくホノカを抱きしめたから。
開宴前のフロアーを、暖かい何かが包んでいた。
カスミとリョウとマチルダは泣いていた、ユリさんとユリカは最高の笑顔で。
ミチルが目を潤ませて、大ママとリアンが優しい瞳で。
そして蘭とナギサは泣いていた、その周りを若い女性が囲んでいた。
開宴前から・・燃え上がるフロアーに、私は大切なマリアを抱いて立っていた。

そしてマリアが空気を変える、一瞬で楽しい時間に連れていく。
「ゆたか・ゆたか」とマリアが叫んだ、私は豊兄さんにマリアを渡した。
マリアは最高の天使の笑顔になり、少し離れたホノカを見た。
「ほのか・・だめ～」と言って、最強天使全開不敵を出した。
「カスミ・・どういう事、この不敵・・教えて良い事と悪い事も分らないの」とホノカが最強華麗ニヤで言った。
「マリア・・よくやったね～、不敵上手になったね～」とカスミが全力不敵をホノカに出した。
全員が最高の笑顔になって、笑っていた。
私はマリアの力を感じて、マリアを見ていた、豊兄さんに抱かれて天使全開のマリアを。

ジンが豊に憧れたと言った言葉は、嘘じゃなかった。
その後・・現在に至るまで、その友情は続いている。
豊が整備工場を開業する時に、ジンが強力に後押しする。
経営の事から、人材の事まで・・全ての相談にのるのだ。
豊が海外に行ってる時には、ジンとホノカが恭子と娘を気遣っていた。
今、開宴しようとしているこの宴は、大きな変化を女性達に与える。
沢山の感動と、不思議な繋がりを全員が感じる。
そして全員が確信する、最高の時代と場所に生まれたのだと。
女性達は、時間を無駄にしたらいけないと、強く思うようになる。
過ぎ去る日々に囚われない為にも、そして過去を忘れない為にも。
この宴を先導する者・・その時代を代表する存在を目の当たりにする。
ユリカとミコトと蘭とカスミ、４世代の熱が溢れ出す。
全てはマチルダに向かって、その心を表現させる為に。
マチルダの伝える事実・・それが提示し問いかけるもの。

【目的】とは何かと・・強く問いかけられる。

一人一人がその心に問いかける・・生きる目的は何かと・・・。

開宴の響き

暖かい風に包まれた、巨大な空間。
２人の男は瞳で話してるようだった、全員で取囲み熱を楽しんでいた。
豊が抱くマリアは、ジンに天使の笑顔を振り撒いていた。
ジンがマリアを抱いて、最高の笑顔でマリアを見ていた。

「マリア・・面食いだね～」とナギサが華やか笑顔で言った。
「エースがウルウルするよ」とユリカが爽やかニヤで言った。
『マリアの浮気者』とマリアにウルで言った。
「えーす・・うわきもの～」と最強天使不敵で返された、私はウルウルで返した。
全員が笑っていた、楽しい事の始まりを感じて。

「それでは席のくじを引いてない方は、引いて下さい」と美冬か笑顔で言った。
私はジンからマリアを受取り、大きなテーブルの横にある可愛い丸テーブルに座った。
エミとミサに挟まれた、レイカはご機嫌な笑顔を見せていた。

席の様子を見ながら、私はニヤニヤしていた。
キングを挟んでリアンとセリカが座り、ジンを挟んで蘭とリョウが座り。
和尚は最高の笑顔でマチルダとカスミの、豊満コンビに挟まれていた。
そして豊はユリカとミコトに挟まれて、ユリさんを挟んで緊張してる千鶴とマユが座り。
大ママを挟んでホノカとケイコが座り、見事にバラバラの状況が出

来上がった。
ＰＧは男と女が互い違いに座った感じだった、徳野さんを挟んでミチルとシオンが笑顔で座った。
ボーイ達の笑顔が普段と違っていて、リラックスしていると感じていた。

進行役の魅冬と、飲み物を出すのであろう四季が席を離れていた。
「ご来場の皆様、本日は休日の日曜日にお集まり頂いて、ありがとうございます」美冬が頭を下げてはじまった。
「本日の趣旨は、互いの懇親の意味とアメリカから来ている。
マチルダの送別をかねています、ゆっくりとくつろいで、楽しんで頂きたいと思います。
それでは堅苦しい事を抜きにしたいので、開宴の挨拶と乾杯をエミにしてもらいます」

美冬はエミに笑顔を向けた、エミは驚きながら笑顔になって、美冬の元に足早に歩いた。
最初から度肝を抜く仕掛けか、やるな美冬と私は思っていた。

そして全員が驚く、突然指名されたエミの挨拶で幕を開ける。

「サクラの長女のエミです。
マチルダ・・もう旅立つ日が明日に迫ったんですね。
マチルダ・・マチルダが話してくれた沢山の事、全てで世界がイメージできました。
宝石の価値・・石に価値は無いと言ってくれましたね。
高価な物だから価値が有るのではないと、自分が美しいと思えるかだと。
私はもっと沢山勉強をしたくなったよ。
私も誰かに何かを伝える事のできる、人間になりたいから。

ＰＧの素敵な人達のように、夜街で働く素敵な人達のように。
リンダやマチルダのように、そしてユリさんやエースのように。
私は夜街の人達が伝えてくれた、大切な言葉を心の中に沢山持ってます。
そしてあのエースの言葉を、いつも持って歩いています。
良い事ばかりする中学生じゃないと、エースが私に言ってくれた言葉。
その時に気付きました、ユリさんの言葉。
世の中で悪いと言われてる事の、全てが駄目な事じゃないと・・
その言葉が。
そしてマチルダが伝えてくれた、あの言葉・・リンダの言葉。
無駄だと思った時に、敗北が決まる・・繋がりました、だからとても響きました。
マチルダ・・本当にありがとう、そして必ず帰ってきてね。
ここはマチルダの帰る場所だから、私はずっと待っています。
だから私は、マチルダにお別れは言いません。
少し旅に出るだけの・・マチルダには。
乾杯は・・今後の皆様のご活躍を願ってにします」

全員を見ながらエミが堂々と言った、静寂が包んでいた。
エミという希望を見ながら、その未来に夢を感じて心躍らせながら。
全員乾杯の為に立ち上がった、最高の笑顔が溢れていた。
マチルダが号泣して立てずにいた、和尚が優しくマチルダを立たせた。
エミは全員のグラスを確認して、最高の笑顔を私に向けた、私も笑顔で頷いた。

「それでは、皆様の今後の繁栄と健康を祈って・・乾杯」とエミが叫んだ。
「乾杯」と全員笑顔で言って、グラスを合わせた。

エミが完璧な火を点けた、座って語り始めた人々に熱が伝わっていた。
私はその6歳の無限の可能性を見て、私の隣に座るエミを笑顔で見ていた。

話の盛り上がりは、熱を帯びていた。
私は4人娘のお世話をしながら、耳だけは宴会の中においていた。
「エース・・カレー美味しいよ」とエミが可愛く微笑んだ。
『良かった～、大人向けで辛くないかな？』と笑顔で言った。
「レイカ・・大丈夫、美味しい」とレイカが笑い。
「ミサも・・大丈夫、美味しい」とミサも笑った。
「まりあ・・だいじょぶ・・おいしい」とマリアが天使で微笑んだ。
私はニコちゃんになって、マリアのエビフライを切っていた。

「よう、あれは早くやるだろう？」とカズ君が来た。
『そうだね、やろうか・・マリアいつ寝るかも分らないし』と笑顔で返した。
カズ君が久美子の所に行き、久美子がピアノの前に座った。
カズ君と美冬で準備に行った、私と徳野さんとボーイでプレゼントを用意していた。
美冬が受付の後で、サイン【OK】を出した、私は笑顔で頷いた。
エミにミサとレイカの手を繋がせて、私はマリアを抱いてフロアーのセンターに歩いた。

『ご歓談中すいません、これより徳野さんとボーイさん達と私から。
スペシャルプレゼントをします、エミの7歳とミサとレイカの5歳を祝って』

私が笑顔で言うと、フロアーの照明が暗くなった。
カズ君がロウソクが17本灯された、巨大なケーキを料理用台車に

乗せ押してきた。
エミとミサとレイカの最高の笑顔を見ていた、そしてマリアが天使全開になった。
『それでは、お祝いの歌を全員で歌いたいと思います』と言って、久美子を見た。

久美子が伴奏を始めて、全員笑顔でお祝いのハッピーバースデイを歌った。
歌が終わり全員で拍手をした、エミが合図を出して3人でロウソクの火を吹き消した。
ロウソクの火に照らされた、3人の表情が嬉しそうで私も嬉しかった。
私が抱くマリアも、3人を天使全開で見ていた。
『それでは1人すつ指名して、キスのプレゼントを貰いましょう・・まずはミサ』と私はミサの横に屈んで、笑顔を向けた。
照明が点いて、ミサの可愛い笑顔が私の耳元に来た。

『ミサのご指名は・・ジンさんです、お願いします』と私はジンに笑顔で言った。
ジンは最高の笑顔で立ち上がり、ミサの側に歩み寄りミサを抱き上げた。
最高の少女の笑顔のミサの頬に、ジンが優しくキスをした。
ミサはその素直な感性のまま、嬉しそうに笑っていた。

『次はレイカちゃん』と私はレイカに笑顔を向けた、レイカも嬉しそうに歩み寄った。
『レイカちゃんのご指名は、豊兄さんです・・お願いします』と豊に笑顔で言った。
豊も嬉しそうな優しい笑顔で、レイカに歩み寄り抱き上げた。
レイカは楽しそうに抱かれて、頬にキスされて少し照れていた。

『最後はエミちゃん』と私は笑顔を向けた、エミは照れた笑顔で近付いて。
「聞かなくても、分るでしょ」と可愛い笑顔で言って、私の横で瞳を閉じた。
私はマリアをミサに預けて、エミを抱き上げて頬に優しくキスをした。
エミが目を開けて、最高の照れた少女の笑顔を私に向けた。
『それでは引き続き、ご歓談をお楽しみ下さい、ありがとうございました』と私が締めた。

４に人娘と席に戻り、デザートを食べていた。
宴会の方も席がバラけて、マチルダが最初に動き出していた。
輝く笑顔で一人一人と話していた、広い空間で豊とジンが話しだし女性が取囲んだ。
その横に大きな円が出来た、キングと和尚と徳野さんが集まって女性達も集まりだした。

「私がＴＶルームで３人を遊んであげるから、エースが行かないと盛り上がらないよ」とエミが笑顔で言った。
『ありがとう、エミ』と笑顔で返した、マリアを抱いてＴＶルームに送った。
『３時位におやつでケーキを食べようね・・迎えに来るよ』とエミに微笑んだ。
「はーい」とエミが返事をして、４人で遊び始めた。
私は楽しそうな４人の笑顔に見送られ、フロアーに戻った。

私は最初は大きな２つの円を避けた、その迫力にいきなり入れなかった。
大きな円の少し後で話している、マダムと大ママと松さんの所に座

った。
「エース・・蘭は完全に復活するぞ、覚悟はできたか」とマダムが笑顔で言った。
『出来てるよ、それが俺の望んだ事だから』と笑顔で返した。
「あの時の蘭が、また見れるんだね～」と松さんが優しく言った。
「思い出しますね～、あの姿・・私は恐怖すら感じたよ」と大ママが真顔で私に言った。
「今のＰＧがあるのは、あの最大の危機の時に・・蘭の本気が目覚めたからやからの～」とマダムが私を見た。
『やっぱり凄いんだね、俺は最近、自分の想像力の無さを痛感してたよ』と笑顔で返した。

「私はＰＧが心配で見に来てたんだけど、リアンも居なくなってたから。
蘭は本当に凄かったよ、後光が射しているようだった。
歩く姿に炎が見えていたよ、その炎がアイに火を点けていたんだよ。
そして若手やバイトにも勇気を与えた、蘭が自分も副職だと言っていたから。
その当時、絶対的な魅宴のＮＯ１だったユリカが、自分でも蘭には勝てないと言ったよ。
その蘭の姿を見て、リアンもユリカも嬉しそうだった、そしてその姿にユリカが贈る。
【最高の副職】という、最大級の愛情を込めた称号を。
でも今回はもっと凄いね、蘭が自分で望んで本気になるんだから。
もう蘭に迷いも後悔も無いね、最後の挑戦者が愛し続けるから。
私は今日、何に１番驚いたかと言うと、あのユリの姿にだよ。
最高のユリが見れると感じてる、そして最高の蘭が挑むね、その生き方に。
そしてナギサも挑むよね、ナギサの力を私は知ってるから。

あのどこか自由な心が、今は挑戦を求めている。
ナギサに見え隠れしてきたね、最高の状態のユリカの影が。
エースありがとう・・こんな楽しみを与えてくれて。
私はワクワクしてるよ、見果てぬ夢が見れそうで」

大ママが私に笑顔で伝えてくれた、マダムも松さんも笑顔で頷いた。
「和尚様がご指名ですよ、弟子の小僧を」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
その後に千鶴がマユとセリカとケイコを連れて来た。
『刺身が食べたいから、どっか人気の無い場所を知りたいんだよ・・生臭』とニヤで言って立ち上がった。
『マユ・セリカ・ケイコ・・大ママお腹いっぱいだから食べないから、安心してね』とニヤニヤで言った。
「あなたのその言葉が、私は信じられないよ」と千鶴が美しく微笑んだ。
「何言ってるんだい千鶴、早くここにお座りよ・・お前は本当に凄い星を持ってるね、その3人を見ただけで分るよ」と大ママが笑顔で言った。
千鶴も嬉しそうに微笑んで、3人を紹介していた。
私はユリさんと腕を組んで、和尚達の大きな円に向かった。

「お前・・ユリとも腕を組んで歩くのか、少しペナルティーが必要だな」と徳野さんが笑った。
『最近ユリが、甘えん坊で困ります』と笑顔で返した、静寂がきて私は心でニヤニヤしていた。
ユリさんが強く腕を組んで、悪戯っ子を出した。
リョウとホノカの驚きの表情を楽しんで、空いている場所にユリさんと座った。
「小僧は元々、熟女好きやからの～」と和尚が笑顔で言った。
「まぁそうですの・・私でもチャンスありね」とユリさんが薔薇ニ

ヤを出した。
『やめろよユリ・・徳野さんに2人の関係を気付かれるだろ』とニヤで返した。
「あら、そうでした・・ごめんなさい」と悪戯っ子で笑った。

「その背筋が凍るような絡み、よく出来るよな～」とカズ君が私に笑顔で言った。
『またカズ君は、ユリちゃんを差別して・・若い女性と同じに扱いなさい』とニヤで返した。
「ボーイさん達が、皆で私を差別するんです」とユリさんが泣き真似をした。
『ほら、ユリちゃんも泣いてるじゃないか・・ヨチヨチ』とカズ君を見て、最大二ヤを出した。
「勘弁してください」とカズ君がウルで言って、全員で笑った。

「それでは和尚様・・熟女好きの話をお願いします」とユリカが爽やかな笑顔で、和尚の横に座った。
「さて、徳野さん場合によっては、返せと言って下さいね」と蘭が満開で、徳野さんの隣に座った。
「おう、場合によっては出入り禁止にする」と徳野さんが笑って、私はウルウルをしていた。

「ユリカちゃんと蘭ちゃんに言われたら、仕方ないの～。
小僧の初恋の相手は、幼稚園の先生なんじゃよ。
２０代前半の可愛い先生じゃった、小僧の不思議な生き方はその頃から始まった。
小僧の家の向かいに、同じ歳の少女がおった。
両手で杖をついて歩いて、上手く言葉も出ない少女が。
ワシはその子の事が気になって、よく目をかけておった。
その子が４歳で、もちろん小僧も４歳の時には、小僧はその子と

会話しちょった。
ワシはその2人を遠くから見守る、豊に聞いたんじゃよ、どうやって会話してるのかと。
小2の豊は言ったよ、多分瞳の色の変化じゃないのかと。
ワシは驚いて2人を見ていた、小僧は確かにその子の瞳を見て返事していた。
そしてその子の両親は、それを見て幼稚園に入園希望を出す。
園長は仏教を極めた、大きな心の男じゃったが。
入園許可をためらってしまった、当然じゃろう、担当する人間の負担を想えば。
その時にその若い先生が、引き受けたんじゃよ。
そして小僧と同じ幼稚園に通う、その先生と小僧が普通に接して。
その子を偏見の目から守るんじゃよ、小僧はもちろん無意識じゃったが。
その子はその年の、クリスマスに亡くなった。
小僧は後にこう言った、自分は幼くて死の意味すら分からなかったと。
そして小僧はその後悔と、闘うかのように命と向き合う。
学校に上がると、小児病棟に毎晩通い、常に死を意識してる子供と遊ぶ。
豊がそれを強力に後押しする、そして医師も看護婦も気付く。
小僧の力に、あの瞳を読み取る力に。
それ以降は皆の知ってる話じゃ、小僧は無意識にやった。
ただ楽しく遊ぶために導き出した、そのあらゆる伝達方法。
瞳の色・鼓動・呼吸・そして温度に至るまで。
小僧はワシが知る限り、１８人の仲間を見送った。
その全てに対して、自分の意志を伝達していた。
小3の小僧の所に、あの幼稚園の先生が訪ねて来た。
会ってほしい子がいると、小僧を病室に連れて行った。
それが・・ヒトミなんじゃよ・・ヒトミは隔離状態だったから。

そして小僧は全てを賭けて見せる、全身全霊を賭けて見せる。
本当の奇跡を・・ヒトミが意志を示す、生きていると左手が叫ぶのじゃ。
小僧はその先生を本気で好きだった、そしてヒトミの事も好きになる。
小僧がヒトミと交信できだしたきっかけを、小僧は話しておるまい。
それは小僧の失恋じゃった、その先生が結婚すると小僧に伝えた日。
小僧はヒトミに向かって、泣いたんじゃよ失恋の悲しみを伝えて。
その悲しみにヒトミが反応した、どうしても伝えたかったんじゃろう。
自分がついていると、自分にはちゃんと意志があると。
小僧はその帰りにワシの所に来た、その時豊も来ておった。
小僧がワシにこう言った、和尚・・失恋って辛いねとな。
それを聞いて、豊が立ち上がって小僧に言った。
小僧・・かかって来い、お前の望みを受けてやるとな。
小僧は常に豊に挑戦状を出していた、どうしてもやってみたかったんじゃよ。
負ける事を知りながら、その探究心に逆らえなかった。
豊はその時に初めて小僧の挑戦を受ける、本堂で小僧が豊に挑戦する。
豊は本気で受ける、豊はやるときは常に本気じゃから。
勝負は1発で決着する、そして小僧は笑顔になる最高の笑顔に。
豊は小僧を背負って、小僧の家まで送るんじゃよ。
豊が翌日ワシの所に来て言った、小僧の先生への愛は本物だったと。
感動したと言っておった、その溢れる愛情に感動したと。
豊は本物じゃった、幼い頃から男じゃったよ。
不遇の環境の子供や、障害を持つ子に対し圧倒的に優しい。

そして偏見や差別の視線に敏感だったよ。
その亡くなった子を、子供社会に連れ出したのも、豊じゃった。
小３の豊が、上級生に差別の目で見ることを許さなかった。
その圧倒的な強い意志で・・だからその子は普通の子供の楽しみを知った。
豊の強い意志と小僧の会話方法のおかげで、守られた・・その純粋な心が。
確かに偏見の目は常に存在する、差別の意識というものが、この国には強くある。
僅かな国土を守るためなのか、自分が差別せれないように誰かを差別するのか。
人は強くないから、自分が差別を受けるのを恐れる。
この国の人間は、常識的でない事を、極度に恐れる傾向がある。
だから・・特攻などという馬鹿げた行為に、逆らえなかった。
ワシにとっては豊が希望じゃった、そして小僧が夢なんじゃよ。
この２人は恐れない、常識の外に身を置くことも、差別の瞳に晒される事さえ。
小僧が最初に愛した女性・・その年齢差２０歳。
蘭よ・・年齢差など考えんでいい、小僧は元々年上が好きなんじゃから。
その先生の今の実年齢は、ユリさんと同じじゃよ。
人を愛するのに、年齢の障害などは存在しないと、小僧は強く言うから。
あの時・・小僧は確かに幼い子供だったが、今と同じ愛情表現をしていた。
卒園しても、その先生を常に見ていた、子供と接する先生を遠くから。
毎日学校帰りに幼稚園を覗いて、そして園児達と触合い子供社会を構築する。
その先生が子供との関係を悩んだ時は、あらゆる手を使って提案

し続ける。
その問いかけに、先生が答えを出そうとする・・その答えで気付くのじゃ。
大人には分らんぬ、子供の気持ちを。
それが小僧の最高の愛情表現・・今でも変らぬ。
その愛情は今などを見ていない、なぜならば・・年上を愛し続けるから。
小僧は時に逆らっている、未来からの逆算をしながら。
豊を追い求めたからじゃろう、その心は絶対に今を満足しない。
多分・・どんなに金持ちになっても、愛する人を手に入れても。
未来を見続ける・・それが小僧の愛しかたなんじゃろう」

静寂の中和尚が最後に蘭を笑顔で見た、蘭も最高の満開笑顔になった。
「返せとは言えないな・・良かったな、蘭」と徳野さんが笑顔で言った、蘭も満開で頷いた。
「和尚・・俺の事を良く言い過ぎだよ・・照れるからやめてよ」と豊が照れた笑顔で言った。
「そんな事言うなら、お前の伝説を話すぞ」と和尚が豊にシワシワニヤを出した。
「それは聞きたいね～・・今後の参考に」とキングも豊にニヤで言った。
「梶谷さん・・よしてくださいよ、もう仕事方でのお世話はかけません」と豊は笑顔で言った。
「ユリカどう思う、今の台詞？」とキングが笑顔で聞いた。
「無理でしょうね～・・豊君はその場所が常に必要として、呼び出しますから」と爽やかな笑顔で返した。
「ジン君が言った、豊のパンチの道標・・本気で相対した者は感じるんじゃよ」と和尚も笑顔で言った。
２つの円が１つになった、豊の隣にマチルダが最高の笑顔で座った。

「どんなんが良いじゃろうかの～、なんせ豊の伝説は数が多いから」と和尚が円が出来上がった時に、笑顔で言った。
「豊君とエースが絡む、リヤカー伝説の本当の話が聞きたいです」と久美子が言った。
「私もそれが聞きたかった、完全な話が伝わってないと思ったから」とミサキも和尚に微笑んだ。
「面白そうだね～・・期待しちゃうね」とマチルダが真横の豊に微笑んだ。
「俺もその話を聞いた時に、豊伝説は嘘なんじゃないかと思ったんです」とジンが微笑んだ。
「私もそう思った・・ありえない話だと感じました」とケイコが言った。
「か～あなた達の宮崎世代に・・少し嫉妬したよ」とカスミが不敵を出した。
「残念ね～カスミ・・その話は私でも知ってるよ、私も作り話と思ってた」とホノカが華麗ニヤを出した。
「当然私も聞いた・・絶対に誰かが作った話だと思いながら」とリョウが真顔で和尚を見た。
「和尚様・・お願いします、私はエミに伝えてあげたいから」とサクラさんが美しく微笑んだ。
全員の期待の瞳に押されて、和尚が話しだす・・あの冬の出来事を。

静寂のフロアーに出来た、大きな円を作る人々は強い意志を示した。
今、この時が大切な時だと、全ての瞳が言っていた。
私にはすでに映像が流れていた、その映像に映る豊兄さんの静けさに息を飲んでいた。

私は感じていた、ジンの言った豊のパンチの道標。

私はその時までに、３度豊に挑戦していた。
もちろん全て、一瞬で決着がついていた。
しかし豊の本質に触れるには、その方法しか思いつかなかった。
豊は私が挫折をしそうな時、その３度だけ挑戦を受けた。
愛情のある強い拳が、私の腹筋に入って来た。
私はその度に、最高の喜びを感じていた。
目指す者が存在する喜びに、体の痛みを凌駕する喜びを感じた。
送別会は続いていく、全員がエミの言葉を感じながら。
マチルダは旅に出るのだと、帰る場所はここなのだと。
エミのその一言で、全員の寂しさは消えていた。
私はあの色紙の言葉を思い出していた。
エミの心のままに書いた言葉、ケイに対する最高の感謝の言葉。
【ありがとうケイ　おめでとうハルカ】・・そう迷い無く書いた心。
学ぶ事を努力と思わぬ強い心・・常に前を見る瞳。
命に関わる仕事なら、命を賭けていい・・そう強く言う心。

エミ・・エミこそが最後の挑戦者だよ。

俺はそう思ってるよ・・多分リンダもマチルダも。

そして・・ユリカも・・・。

事実と真実

熱の高い巨大な空間に、集っている瞳は輝きを増していた。
世捨て人の老人を促していた、その瞳の意志で伝えていた。

「やはりその話になるよの～・・その伝説は豊が小僧に言って色付けをした。
小僧が面白く脚色した部分が多いからの～、作り話と感じて当然なんじゃよ。
豊も小僧も真実が伝わる事を拒絶したから、それを恐れたから。
豊も小僧もこの話しに出てくる女性を気遣った、心が深く傷ついていたから。
派手な事件じゃったから、噂になるのは明白で、気にしたんじゃよ。
それで小僧が面白い脚色をしたんじゃ、ワシしか真実を知らんのだよ。
豊も小僧もお互いの部分しか知らん、2人はこの話を互いに封印したからの。
よし・・今日は話をしよう、豊も小僧も本心では知りたいと思っておるから。
そしてその女性の傷は完全に癒えたから、ただ心を空にして聞いて欲しい。
ここにお集まりの人は大丈夫と思うが、良し悪しで判断してほしくないんじゃ。
良いの・・豊？良いの・・小僧？」

和尚が静かに言った、言葉に力が有り私も豊も真顔で頷いた。
全員が静かに和尚の言葉を待った、暖かい静寂が包んでいた。

「この話をするには、まずその当時の背景を話さんといかん。
あれは2年前の冬・・正月が終わり七草を過ぎた頃じゃった。
豊は中3で就職が決まっておった、小僧は小5の時じゃの。
豊は高校に行けと言う、祖父と教師の提案を断った。
好きな車の整備の仕事をするから、それには学問より現場で修行したいと言って。
豊は両親の記憶がないから、育ててくれた祖父に早く楽をさせたかったんじゃろう。
小僧はその前年の１０月～１２月に、立て続けに４人の仲間を失っておった。
それにミホの後悔をずっと引きずっておったから、精神的に限界やった。
その年末、新聞である記事を読んで、元旦に家出する。
北海道から東京までキセル乗車で行った、小６の少年の記事に触発される。
そして記録更新を目指し、小5で挑戦するんじゃよ・・小僧らしい考えじゃよな。
小僧は東京まで行って、帰ってきたのは４日の昼じゃった。
東京で何があったのか言わんが、かなり成長していてワシは驚いた。
まぁこんなところが、その時の2人の状況やった。
そして・・これは言いたくないが、小僧も隠してるようだから。
でも言わねばこの話は出来んから、教えよう・・ユリカに」
和尚はユリカを優しく見た、ユリカは少しの驚きを瞳に出して和尚を見た。
私は和尚が何を言うのか、検討はついていた。
「ユリカよ・・小僧はお前と同じなんじゃよ。
考えてもみろユリカ・・小僧の伝達方法を、それを得るという事

を。
ここにいる全ての人に教えよう、小僧に対し嘘はつけん。
小僧は大切な話しの嘘は、全部見破るんじゃよ。
なぜならば・・人は隠せない、瞳の変化・鼓動・呼吸・温度に出るから。
それを隠すことは絶対に出来ん、小僧はそれを読めるんだからの。
小僧は常にそれに晒される、友達関係も恋愛も教師の教えも。
だから同世代の女子を好きにならない・・いやなれないんじゃよ。
思春期とはそういう時期だからの～、小僧はそれを分ったから。
好きな人を苦しめるのが嫌じゃったし、それで何度も辛い思いをしたから。
だから・・小僧は女子と深く絡んでたのは、ここに来る前までは3人だけじゃ。
姉と豊の婚約者の恭子、そしてその親友のマキだけじゃった。
その3人は小僧の事を当然理解しちょったから、向き合えたんじゃよ。
あの幼稚園の先生依頼、小僧が愛したのは・・蘭だけじゃよ。
多分今後も愛するのは、蘭だけじゃろう。
蘭の事は説明しなくていいが、蘭はその心に忠実に生きるから。
そして絶対に大切な事に対しては、自分にも小僧にも嘘をつかないからの。
自分を誤魔化したりせんから、小僧は本当に愛しておる。
初めて出会えたその存在に触れて、全てを賭けて蘭を愛するじゃろう。
小僧は出会えたんじゃよ、愛すべき人間を探し出した。
そして出会う、常に戦い続けるカスミ、小僧はカスミのあの恐怖を分らなかった。
何かが有るのは分っていたが、それが何なのか分らなかった。
カスミが本当に強い意志を持ってたから、小僧ですら感じなかった。

だからカスミに対して特別の感情が芽生えた、強さに憧れたんじゃの。
その豊とは違う強さに触れて、そのカスミの内面を大切に愛しておるんじゃろう。
そしてユリカ・・お前は小僧にとっては、絶対的な存在じゃよ。
あの時羊水の揺り篭まで辿り着いたのは、ユリカの悲しみの本質に気付いたから。
それは小僧にしか理解できん、嘘のつけない相手と向き合う事の辛さは。
ここに来る時に、蘭が教えてくれた昨夜の話。
小僧のユリカに対する想い・・それは当然正直な気持ちよの。
小僧はユリカに対して嘘がつけない、隠し事が出来ない事に喜びを感じておる。
自分に嘘をついた人間の気持ちが分ったから、嬉しかったんじゃろう。
それをユリカに伝えたいんじゃよ、どんなに時間がかかってもの。
だから言ったんじゃよ、永遠に自分の愛を読んで欲しいとな。
小僧はどんな事があっても、全てユリカに語りかける。
それが同じ辛さを知る、小僧の永遠の愛情だからの」

和尚はユリカを優しく見ながら伝えた、ユリカが私を見ていた、静かな深海の瞳で。

「ごめんねエース・・私はあなたを読むのが楽しくて。
初めてその事に楽しみを感じて、そこまで考えなかった。
そして・・ありがとう、その強い愛で包んでくれて」

ユリカが最後に爽やかな笑顔を見せた、私も笑顔で返した。

「わたしも謝るよ、ごめんねエース。

あの時、腕を掴んだ時には、私の悲しみも辛さも全部分かってたんだね。
だから・・最後のチャンスに賭けろって言ってくれたんだね。
本当にありがとう・・今、話を聞いて嬉しかった」
ナギサが華やかに微笑んだ、私は感謝されて照れた笑顔を出していた。
「そんな話は後で個人的にしようね、全員がしたら、どれだけ時間がかかるか分らないから」と蘭が満開で微笑んで、和尚を見た。
「うむ・・その女性をA子としよう、A子はその時21歳じゃった。
ワシはこの全ての話しは、豊と小僧とそのA子から別々に聞いた。
A子は女子大生、そして付き合っていた男が警察官じゃった。
A子は相手の彼が、警察官やったから真面目な人間と勘違いしていた。
職業と内面は関係ない事じゃから、若さで勘違いしたんじゃな。
その男は性根の腐った人間やった、売春で検挙した女性を脅して関係を迫ったり。
暴力団に金をせびったり、この事件の後に判明した。
それは酷い話じゃった、悪徳などの言葉じゃ足らん人間やった。
そんな悪行をしていた奴だから、当然怨みも買うんじゃよ。
そしてある男がその警察官に対する怨みを、A子に向ける。
A子は集団に乱暴されるんじゃよ、そして心も体も深く傷つく。
その事に対して、相手の警察官は黙ってろと言ったんじゃ。
自分の悪事がばれるの怖かったんじゃろう、強引にA子を黙らせた。
それでA子も気付く、自分は相手ことを勘違いしていた事に。
そしてA子は覚悟する、その彼と乱暴をした男達に復讐しようと。
そして警察に被害を相談に行く、仲間の警察官の事で、すぐに刑事が動いた。

じゃが警察の組織の一部が腐っておった、揉み消そうとしたんじゃよ。
その相手の警察官の上司が、その上には報告せずに。
ここで誤解されぬように言っとくが、警察で腐っていたのはその男一人じゃよ。
上司の対応は、その組織の体質としての問題じゃったろう。
不祥事を極度に恐れる、その体質が産み出したんじゃな。
A子は警察署で罵詈雑言を浴びせられる、被害者のA子がじゃよ。
その頃時を同じくして、豊の中学の女子がその警察官にからまれる。
ある事をねたに脅されるんじゃよ、目的は体やったんじゃろう。
その女子はどうしようもなくて、豊に相談する。
豊は話を聞いて、その警察官の家を調べて会いに行くんじゃよ。
そして家を訪ねて発見する、ドアに鍵がかかってなくて声をかけて覗く。
そこに倒れておった、A子が最後の復讐で遺書を残し手首を切って。
絶対に揉み消せない状況を作り、命をかけた復讐を決行していた。
豊は救急車を呼び、遺書を持って同行する。
病院をあの小僧が通う病院に指定して、幸いその女性は傷も浅く助かる。
豊はあの病院では有名だから、訳を言って入院手続きをする。
身元を示す物が無くて、仕方無しに豊立会いのもと遺書を確認する。
豊はそれを読んで決意する、その男を許せないと。
そして小僧に言うんじゃよ、解決するまでA子の側にいて守れと。
小僧は豊に言われた事で、A子の側にずっといた。
小僧は泊まる事も許されちょったから、ずっと側に居たんじゃよ。
豊はその男の家に行き、その男に会って話をする。
男も部屋の血溜まりを見ていて、大変な事が起こった事に気付い

ていた。
しかし男の頭の中は、揉み消す事でいっぱいじゃった。
そしてその警察官の上司が2人来て、豊を脅すんじゃよ。
何も言うなと、言ったら家族に大変な迷惑がかかるぞと。
警官も馬鹿よの～、火に油を注いだ。
その言葉で、豊は自分らしく解決する道を選ぶ。
薬物事件と同じ方法、自分が出頭して事実を明るみにする方法を。
警察という国家権力を相手に、瞬時に判断し覚悟する。
たとえ自分が少年院や刑務所に、服役する事など恐れんかい。
そんな事より、自分に嘘をつく事の方が怖いんじゃよ。
豊はその場で、3人の警官をやってしまう、立てなくなるまで。
そして彼氏だった警官を肩に担いで、警察署に出頭するんじゃよ。
そこからが伝説の話しじゃよ、制服を着たボロボロの警官を担いで歩く豊の姿が。
豊は警察署の受付にその警官を寝かせて言った。
こいつが酷過ぎるから、やっちゃいましたと頭を下げた。
それとこの男の部屋に、あと2人転がってると言ったんじゃ。
警察署は静まり返った、そして豊は逮捕されたんじゃ。
そして豊を知る少年課が、豊を事情聴取する。
他の課から捜査を変われと言われたらしいが、譲らなかった。
豊の行為に無意味な事は無いと知っていたから、少年課の担当だと譲らなかった。
それで焦ったその上司の警官2人は、被害女性の病院に行くんじゃ。
なんとか口止めしようと、必死になっていたんじゃろう。
しかしその病院には、小僧がいた・・目を覚ましたA子を必死に笑わせてる小僧が。
A子は手首の傷も浅くて、肉体的には元気になっていた。
小僧が必死に回復して、その会話が面白くて少し笑顔も出始めていた。

その時廊下で、警官と看護婦の押し問答が聞こえた。
それで小僧はA子をベランダ伝いに連れ出して、小児病棟に行く。
そして空いてる病室を聞くと、個室は一部屋だけ空いていた。
ヒトミがいた、あの病室が・・小僧はそこにA子を寝かせてかくまった。
そしてA子の左手を握るんじゃよ・・その瞬間、小僧は号泣する。
A子がワシに言ったぞ、あんな涙は見たことが無かったと。
深い悲しみが深々と伝わって、自分の辛さや悲しみを一瞬で忘れたと。
それは確かに左手から伝わったと、A子が教えてくれた。
そしてA子は小僧に問いかける、その悲しみの原因は何かと。
小僧はヒトミの話をする、そしてヒトミがA子のそのベッドに寝ていた事も。
小僧の俯いて震える姿を見て、自分の愚かさを責めたとA子は言った。
小僧がずっと左手を握って話してくれて、その全ての想いが押し寄せて来たと。
その深い愛情を感じて幸せだったと、そして愛する者の死を送る悲しみを知ったと。
A子は両親の顔を思い出して、涙が止まらなくなったと。
A子は泣きながら、ワシに話してくれたよ。
そしてここからが、真の伝説の始まりになるんじゃよ」

和尚はそこまで言って、焼酎を一口飲んだ。
「和尚様・・トイレに行って来ますから、絶対に待っててて下さいね」と千夏が言って。
何人かがトイレに行った、和尚は笑顔で見送っていた。
「こんな話をしてて良いのかの～、マチルダに悪くないかの～」と和尚がマチルダを見た。
「和尚様・・ありがとうございます、最高の話しになりそうです」

とマチルダが輝く笑顔で返した。
「しかし警官を担いで歩いたのが本当の話だと分って、それだけでも驚きだよ」とジンが微笑んだ。
豊は照れた笑顔で返していた、暖かい視線に包まれていた。

私の横にセリカが来て静かに座った、私に左手をそっと出した。
私は優しくセリカの左手を握った、不釣合いなリストバンドが巻かれた左手を。
「ごめんね・・何も知らなくて・・今度ヒトミちゃんの話も教えてね」とセリカが静かに言った。
『うん、セリカ・・何も謝らないでいいよ、セリカは守ってるだろう』と静かに囁いて返した。
「うん、もう大丈夫だよ・・今の話を聞いたから」と可愛く笑った、私も笑顔で頷いた。

蘭の優しい笑顔がセリカを見ていた、セリカも蘭を流星の瞳で見ていた。
蘭の青い炎が包んでいた、深い瞳がセリカを見て、満開の微笑みで頷いた。
セリカの心の鉄の防御服に、強力な酸素を送り込んだ青い炎が迫った。
そしてその鉄を溶かしながら、一直線に切断した。
赤い炎では絶対に出来ないな事を、蘭が青い炎で一瞬で切った。
私はセリカの左手の温度の揺れで、セリカの心の変化を感じていた。
セリカのリストバンドを見ながら、体の傷はいつか癒えると思っていた。

全員が揃い、和尚を見た、和尚も笑顔を見せた。

「少年課は徹底的に捜査に入る、その当時の少年課は本物の組織じ

ゃった。
それが豊の救いじゃった、そして豊に相談した女子中学生が証言する。
恭子とマキと小僧の姉が同行して、その少女を守り続ける。
A子の所にも少年課の刑事が行き、A子は堂々と証言する。
そして小僧が手を繋いで、A子と少年課の刑事と共に警察署に行く。
その時初めてA子は豊を知る、本当に救われたとA子は言った。
人間不信になりかけていたA子の心を、堂々と座っている少年の豊が救った。
そして警察のトップクラスが、少年課の報告を聞いて出てくる。
素晴らしい人間じゃった、そして提案した豊を救う提案をした。
立場上難しい判断じゃったろう、しかしその男はそれを決断できた。
その提案は、A子が了承するのを前提にという事で。
その警察官に懲戒免職の処分と、上司2人にもそれ相応の処分を下す約束をした。
そしてA子の為にも、豊の為にもそれでこの事件を心に封印して欲しいと。
組織のために言ったのでない、豊とA子のために言った言葉だった。
豊は自分で判断出来ずに、少年課の刑事に相談する。
そして聞くんじゃ、裁判になったらA子は再び傷つく事になると。
そこで豊はA子と2人で話させてくれと言って、A子と小僧を交えて話す。
A子の気持ちを聞いて、豊は警察の提案を受入れる。
そして豊は条件を出す、その警官が2度とA子に近寄らないようにする事を。
豊は釈放される、そしてA子と話をする・・感謝するA子に条件を出す。

２度と自分を傷つけない約束と、乱暴した男が誰なのかを聞く。
Ａ子は約束して、加害者の一人だけ知ってる男の名を伝える。
小僧はＡ子を連れて、病院に戻るために豊と別れる。
しかし小僧は分っていた、その伝達能力で豊の考えを。
寒い夜じゃった、豊がワシの所に来たその夜は。
豊が自分のした事を話してくれて、最後に言った・・自分と折り合ってくると。
豊のその伝説に隠されてた本質、それを決行しに行った。
小僧はＡ子と必死で向き合った、小５の小僧が２１歳の女性と。
そしてＡ子が完全に心を開く、そして小僧が誓いを立てさせる。
自分が帰るまでその病室で待っていると、Ａ子は退院許可が出ちょったらしい。
待っていればＡ子を実家まで、自分が必ず送って行くと小僧が言った。
Ａ子は驚いたと言っていた、自分の心を理解してる小僧の事が。
小僧はその伝達能力で、Ａ子の復活を分っていたし望みも感じていた。
そして小僧は出かける、顔馴染の豆腐屋でリヤカーを借りて。
いつものように豊の場所を目指す、それが自分の成すべき事だと知っていたから。
豊が自分との折り合いをつける事とは、殴られる事なんじゃよ。
豊は乱暴した相手を脅迫して、４人をある川原に呼び出す。
そしてＡ子に謝れと言うんじゃ、相手の４人は少年の豊を見下して。
４人で思う存分殴りつける、豊はどんなに殴られても立ち上がり続けて言う。
Ａ子に謝れと叫び続ける、その４人は段々と恐怖を感じるんじゃ。
豊の強い意志に押されはじめる、そして小僧がリヤカーを引いて到着する。
小僧は追い討ちをかける、その４人の心を追い込む徹底的に。

最強のコンビと言われる本質はここじゃよ、豊伝説の本質は。
豊の最強は力の強さじゃない、その意志の強さなんじゃよ。
絶対に暴力や権力に負けない、その意志の強さなんじゃ。
そして豊が唯一相棒と呼ぶ小僧、その力は相手を追い込み続ける。
相手が自分自身と向き合うまで、その精神を徹底的に追い込んでいく。
その伝達方法を全て使って、相手が嘘を言っても通用しない。
小僧はその４人に静かに言う、豊を殺す覚悟があるのかと。
それが無いのなら、やめた方がいいと静かに諭す。
豊はお前達が謝らない限り、絶対にお前達を許さないと。
そして豊が殺された後は、自分が執拗に追い続けると。
４人はあまりの恐怖に耐え切れずに、その場を逃げ出す。
そして小僧はいつものように、リヤカーにボロボロの豊を寝かせて運ぶ。
唯一分っている、加害者の家までリヤカーを一人で引くんじゃ。
寒い冬の夜空を見ながら、小５の小僧がリヤカーを引く。
その憧れ続ける兄の想いのために、それを成就させるために。
その行為を小僧が何度したじゃろう、ワシの知る限りでも６回ある。
そしてその男の家まで行き、最後通告をする・・謝れと。
しかしその４人には響かなかった、小僧がそう判断した。
その部分の判断は、豊は小僧に任せていたから。
そして小僧は警察署まで豊を運び、豊を引きずって入る。
そして声の限りに叫ぶ、これが豊の生き方だと強く叫ぶ。
ボロボロの豊を長椅子に寝かせ、警察官達を睨み叫び続ける。
その伝達方法を全て使って、叫び続けるんじゃ。
お前達の警察官としての、生き方を示せと叫ぶんじゃよ。
沢山の警察官が立ち尽くし、その圧倒的な伝達で動けなくなる。
少年課の刑事が駆け寄り、豊を担ぎあげる。
そして小僧に言う、必ず傷害罪でそいつらを逮捕すると約束する。

小僧は川原で見つけた事と、相手の男を一人告げる。
そしてリヤカーを押して帰る・・病院を目指して真冬の凍る深夜の道を。
小僧の強さ・・それは向き合う強さなんじゃよ。
友の死を受け入れ、その事実と向き合ってきた・・その強さ。
その心が叫ぶとき・・問いかけられる言葉・・なぜ生きているのかと問う。
そして小僧は病室に帰り、Ａ子を見て笑顔を向けて泣くんじゃ。
Ａ子はその涙で心が締め付けられたと、小僧を抱きしめて離したくなかったと。
その涙が自分の心を鷲掴みにして、守ってくれていたと言った。
そして小僧が笑顔で言う、家に帰ろうと言うんじゃよ。
小僧は宿直の看護婦に毛布を借りて、Ａ子をリヤカーに乗せる。
Ａ子の実家は〇〇だった、その距離約１０ｋｍあるよの～。
じゃが小僧は笑顔で、Ａ子に座ってろと言ってリヤカーを引くんじゃよ。
豊に・・小僧が憧れ追い求める、豊に・・託された事だから。
小僧は深夜の道を、リヤカーを引きながら沢山の話をする。
見送った友の話を、Ａ子はずっと泣いていた・・泣きながら幸せを感じたと。
そして早朝にＡ子の家に着き、小僧はＡ子に別れを告げる。
その時に言う、もう忘れようと・・豊も自分も忘れるからと伝える。
Ａ子の存在以外は忘れると、笑顔で言って背を向けてリヤカーを引いて帰る。
Ａ子はその後姿を見送りながら、豊の座っている姿が脳裏に浮かんでいた。
朝陽に浮かぶ小さな少年の背中が、愛おしくて駆け出して抱きしめたかったと。
その背中が最後の回復をしてくれたと、前に進もうと提示してい

たと。
そのリヤカーを引く姿が、希望の道を提示していたと泣いていた。
小僧はリヤカーを返し、ワシの寺に来て腹減って死にそうだと言い。
飯を3杯食って、眠る・・ワシはその寝顔を見て確信した。
豊は出会ったのだと、全てを託す相棒に・・運命を受入れない男に。
そして豊がその夜に戻ってくる、そして小僧と話す。
小僧に面白い脚色を付けようと、そして小僧が面白話しに仕上げる。
それを小僧とワシで発信する、噂になる前に発信する。
事実と真実は違う、その脚色には愛が溢れていた。
豊は絶対に自分を正当化しない、常に自分は間違っていると思っている。
豊の考えの基本は、正しいか間違っているかでは無い。
その心が動くのかという事である、だから小僧もそうなった。
向き合い続ける・・その男・・その贈られし称号。
最後の挑戦者は・・闘うことを諦めない。
なぜなら豊が闘い続けるから、2人とも自分を許せる時が来るまで闘う。
自分に敗北する事を、絶対に認めないのだから」

静寂の中和尚が語り終わって、全員を見回した。
「和尚様・・ありがとうございました、リンダに最高のお土産が出来ました」とマチルダが輝く笑顔で言った。
私にはセリカの想いが伝わっていた、セリカの完全復活を感じていた。
蘭の青い炎に包まれて、豊兄さんの優しい瞳を感じていた。
そしてミホを感じていた・・会いたいと心から願っていた。

冬の凍る澄んだ空気の中、リヤカーを引く私が映像で流れた。
そのＡ子の座る荷台に、亡くなった全ての友が寄り添っていた。
男友達はリヤカーを後ろから押し、女友達はＡ子に寄り添い涙を拭いていた。
そして私の横には、笑顔のヒトミが一緒に引いていた。
朝の気配が漂う、その夜空の月が大きく主張した。
遠い場所に立つ、プラチナブロンドが見えた。
笑顔で立つマチルダの後ろから、リンダが笑顔で現れた。
私は最高のプレゼントを感じて、笑顔で2人に叫んだ。
Ｉ Ｌｏｖｅ Ｒｉｎｄａ・・Ｉ Ｌｏｖｅ Ｍａｔｉｌｄａと叫んでいた。
１３歳の少年のままで・・幼い自分の背中を見送りながら。
その背中に誓った・・絶対に忘れないと・・全ての友の事を。
ヒトミの可愛い瞳が笑って、１３歳の私に手を振った。
私も笑顔で・・手を振っていた・・。

Matilda

静寂の中に大きな円が出来ていた、集いし人々は暖かな時間を楽しんでいた。
私は豊の事実を知り、その強さに再び触れて、嬉しかった。
病院でA子を託された時の、豊の静かな瞳を思い出していた。

静寂の中に涙と微笑が広がっていた、美しい女性達に囲まれていた。
「和尚様、ありがとうございます・・真実に触れて嬉しかったです」と久美子が可愛く微笑んだ。
「私も嬉しかった・・エースの脚色部分最高だね」とミサキが笑って。
「まったく、あんな脚色入れるとは・・面白すぎるぞ」とジンが笑った。
私は照れた笑顔で返していた、暖かい時間が流れていた。
小さな個々の円ができて、各々話し始めた。
私は豊か兄さんに、ケイコを紹介した。

『豊兄さん、昨日のからまれていた・・ケイコです』と耳元にささやいた、豊はそれで理解したようだった。
「ケイコです、よろしくね」とケイコが可愛く微笑んで、2人で話し始めた。
私が蘭の横に座ると、千鶴と銀河とシオンとセリカが来た。
蘭は酒もかなり入って千鶴と和解して、ご機嫌満開が咲いていた。
「蘭姉さん・・火曜日から、週2でお世話になります」とホノカが華麗に微笑んだ。
「嬉しいね〜・・ホノカちゃん遠慮なくやってね」と蘭が満開で返した。
『ホノカ・・水曜日も出勤になったよ、ユリカ光臨だよ』とニヤで

言った。
全員が私を見た、私はニコちゃんで返した。
「本当に！・・ユリカ」とサクラさんが、ユリカを見た。
「はい・・大ママにミサキの了解を取りましたから、ただしエースに条件付きですけど」と爽やかに微笑んだ。
「条件は何だい？」とアイさんが、ユリカに聞いた。
「エースがその日に、お父様と和解して・・蘭と暮す許可を得ることです」とユリカが爽やか二ヤで言った。
「和尚様・・今の条件どう思います？」とアイさんが聞いた。
「皆・・小僧が親父と喧嘩して、家出しちょるから誤解があるかもしれんが。
小僧と親父は別に確執がある訳じゃない、まぁ親父は頑固一徹じゃが。
お互い意地っ張りだから衝突するんじゃの～、小僧も引かんし。
小僧の親父は素晴らしい人間じゃよ、小僧が小児科に通うのも黙認していた。
今この状況でも、迎えに来ないしの～。
ようは小僧次第じゃよ、小僧が向き合えば分かり合える。
今の小僧なら大丈夫じゃろう、何が大切か分かっておるから」
和尚は笑顔でそう言った、蘭が私を満開で見た、私も蘭を見て頷いた。
「小児病棟は・・寂しがってるんじゃないの？」とセリカが言った。
『小学生までと決めていたから、院長と俺の約束で・・中学になると難しくなるんだよ』と真顔で返した。
「どうして？」と千鶴が美しい真顔で聞いた。
『俺が思春期に入るから、女の子もいるから・・嫌がる人もいるからね』と真顔で返した。

「そうか～・・残念な話ね、入院してる子供たちにとって」と千鶴も真顔で言った、私も千鶴に真顔で頷いた。

「エース・・月曜なんて言わないで、今日・・今教えて、私に依頼したい事」と千鶴が強く言った。

『千鶴・・良いのか？皆の前で』と真顔で返した。

「もちろん・・私にもその方が良いよ」と強い瞳で千鶴が言った。

『俺が小児病棟に行っていた、小３の時・・・・』私はヒトミとミホの話をした。

『俺は幼いという言い訳を自分に使った、今の自分じゃどうしようもないと。

俺はミホの件で、院長に呼ばれて話した・・院長はできた人だから。

その時小児病棟にカズオという男の子がいて、俺は仲良しだった。

寝たきりのカズオは、俺以外と交信出来なかったから。

カズオの両親と、他の入院患者の父母が院長にかけあっていた。

俺が来なくなるような事にしないでほしいと、院長のはそれで俺と話した。

院長の息子はミホの保護者である、祖父母を説得して転院させていた。

院長も保護者の祖父母と話したが、説得出来なかったんだよ。

俺はミホの事で絶望してて、小児病棟に行くのを考えていた。

でも・・カズオや他の友達がいたから、やめなかったんだ。

そして・・豊兄さんに言われる、自分に言い訳をするなと。

今出来ないなら、出来るように成長しろと言われて・・考えたんだよ。

そして考え出した答えの１つが、貸付なんだよ。

権力者に貸付ける・・どんな方法を使っても。

それは最終的にミホに会う為に、もう１度ミホに挑戦する為に。

俺の最初の貸付けは、その院長にした。
そして俺は通い続ける、小児病棟に・・それに対して院長の息子は逃げる。
取り巻きだけを残して、別の病院を経験すると言い訳して。
俺はミホの今いる病院までは調べた、でも最終段階が難しい。
保護者である祖父母を説得出来るのは、その息子だけだから。
千鶴・・誤解しないでね、それの為に千鶴に近付いたんじゃないよ。
俺はセリカが気になって、そしてゴールドを知ったんだよ。
その最新型が集まる場所に、興味を持ったんだよ。
そして知った・・千鶴の事を、その歴史も。
本心は千鶴に頼みたくない、辛い思いをするんじゃないかって思うから。
でも俺があの馬鹿息子と話し合いを持つには、千鶴しか頼む相手はいないんだよ。
千鶴・・絶対に嫌なら断ってね、俺の勝手なお願いだから』

千鶴の美しい顔を見ながら、真剣に伝えた。

「エース・・分ってるよ、そんな目的で近付いたんじゃないって。
たとえそうであっても、マユとセリカとケイコの事だけでも十分だよ。
ＯＫエース・・私は嬉しいんだよ、あんたの力になれるのが。
最後の挑戦者が頼んでくれた事が、それが蘭の為にもなる事が。
私とあの男は、もう何も無いから・・エースの好きにやっていいよ。
強引にいきなよ、気の弱いお坊ちゃまだから。
そしてミホちゃんに挑戦して、私達に見せてね。
本当の愛情と奇跡を・・最後の挑戦者の称号の意味を。
夜街で経験した事を・・その経験で成長した姿を。

エミちゃんの開宴の挨拶、心に響いたよ・・素敵な言葉だった。
どんな状況で言ったのか分らなかったけど、最高だったよ。
私が必ず会わせてあげる・・どんな手を使ってでも向き合わす。
それが私の意志だからね、あの馬鹿は説得なんてしなくて良いよ。
何も響かないから・・大丈夫、自分の事しか考えてない奴だから。
エースにかかれば、蛇に睨まれた蛙だよ」

千鶴が最後に美しく微笑んだ、私も笑顔で頷いた。
「千鶴さんありがとう、お礼にケイコちゃんの足枷を外して来ます」と豊が笑顔で言って、ユリさんと電話をするのに受付に歩いた。
「エース・・ありがとう、後は前だけを見て頑張るね」とケイコが微笑んだ。
『よかったね、ケイコ・・頑張って』と笑顔で返した。
「よし・・ケイコ、来月にはデビューだよ」と千鶴が美しく微笑んだ。
「はい・・必ずご期待に応えます」とケイコが可愛い笑顔で返した。

「千鶴姉さん・・源氏名頼んだらどうですか、エースに」と蘭が満開で微笑んだ。
「うそ！・・エース頼めるかな～」と千鶴が笑顔で言った。
『了解・・考えておくよ』と笑顔で返した。
「良いな～ケイコ・・私面倒で車の名前にしたから」とセリカが微笑んだ、ケイコが笑顔で返した。
「車の名前だったのか！それにしては、良い源氏名だよ」とリョウが涼しく微笑んだ。
「私・・自分で選んだけど、カスミだよ」とカスミも不敵を出した。
「カスミ姉さん・・どうしてカスミを選んだんですか？」とセリカが笑顔で聞いた。
カスミは考えて、多分意味など無かったんだろう、ウルで私を見て。
「自分で言うのは恥ずかしいな～、エースお願い」と不敵で振って

きた。

『セリカ・・カスミは絶対に霞んだりしないから。
その輝きで主張するから、だから自分にカスミって名前を背負わせたんだよ。
常に上を目指して行くという、意志を示す為に。
霞んだり留まったりしないように、その挑戦を決めた気持ちを忘れないように。
自分に戒めとして、選んだ名前・・それがカスミなんだよ』

私は笑顔でセリカの流星の輝きを見ながら言った、セリカも笑顔で頷いた。
「まぁそんなとこだよ、自分じゃ言うの照れるんだよ」とカスミも微笑んだ。
「カスミ、今感動して必死に覚えてるでしょ」とホノカが華麗ニヤで言った。
「そんな事ないよ・・ホノカの命名由来はなんだよ」とカスミが不敵全開で言った。
「ミチルママが・・本当に素敵な香りは、ほのかに香るって言ったから・・ホノカにしたの」と華麗に微笑んだ。
「リョウは？」とカスミがリョウに不敵を出した。
「お婆ちゃんの名前、大好きだったから」とリョウとは思えぬ可愛い笑顔で言った。
「なんか意外だな・・その笑顔やめろ、気持ち悪い」とカスミが不敵で言った、リョウが可愛い笑顔を継続していた。

「源氏名って大切なんだよな～、第一印象のイメージがね～」とカスミが感慨深げに言った。
「カスミ・・それは源氏名に関係あるの、カスミの第一印象」と蘭が満開ニヤで言った。

「ありますよ、百合・桜・蘭・花の王道・・私はかすみ草、引き立て役」と不敵ウルで言った。
「引き立て役と言う言葉が、これほどマッチしない女もいないな～」リアンが突っ込んだ。
「リアン姉さん・・私、意外と引き立て役なんですよ」とカスミが輝きながら微笑んだ。
「その発言は、誰の技を盗んだの？」とユリカが爽やかニヤを出した。
「ハルカ」とカスミが小声で照れた。
「カスミ・・ハルカからも盗んでるのか、何かが大きく間違ってるけど」とリアンが獄炎ニカで言った。
「リアンを盗んだ時の、カスミが楽しみだね～」とユリカが爽やかニヤで言った。
「それは怖い・・大きく間違って盗むから」と蘭が満開で笑って、全員で笑った。

「大ママ・・ユリカは今、最高の状態だと思いますか？」とリアンが聞いた。
「間違いなくそうだろうね、私やミコトでも見た事ないユリカだろうね」と大ママが微笑んだ。
「自分とユリカ姉さんを比べたら駄目だよ、違う世界にいるから」とミコトが余裕で微笑んだ。
「ユリカ姉さんが座った瞬間に感じる、お客もそして自分も・・仕事中に幸せを感じるよ」とナギサが華やかに微笑んだ。
「あの時以上のユリカ姉さんか～、皆で見に来ようね」と千鶴が言った、マユもセリカもケイコも笑顔で頷いた。

私は3時が近くなり、TVルームに4人娘を迎えに行った。
4人は仲良く遊んでいた、私を見て全員で笑顔になった。
フロアーの子供用の丸テーブルに座らせて、エミと2人でケーキを

取りに行った。
小さく４つ切って、エミがジュースを４人分用意して戻った。
４人の嬉しそうに食べる姿を見ていた、宴会の方は笑い声に溢れていた。

マダムと松さんとユリさんに、千鶴とマユが来た。
「ケイコちゃんがデビューするから・・これからはレイカちゃん、夜ここで大丈夫？」と千鶴がレイカに微笑んだ。
「うん、大丈夫だよ」とレイカが可愛く笑った。
「お願いできますか、本人も言ってますから」と千鶴が真顔で頭を下げた。
「大丈夫じゃよ、うちには松と久美子にエースもおるから」とマダムが微笑んだ。
「マリアも、エミちゃんとミサちゃんが来ない時に、寂しくなくて良かったね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
千鶴とマユが嬉しそうに頭を下げてお礼をしていた、私は楽しそうなレイカを見ていた。

「そろそろ、マチルダにお願いしようと思ってるんだけど」とカスミと美冬が来た。
『そうだね、円をもう1度1つにしようよ』と笑顔で返した。
「エミ・・ワシと松で3人見てるから、お前はマチルダの話を聞け」とマダムがエミに微笑んだ。
「私達には後でエミが教えてくれよ、頼むね」と松さんも笑顔で言った。
「うん、ありがとう」とエミも少女の笑顔で返した。
大きな円が出来はじめ、マダムと松さんと3人娘を見送った。

私はエミを抱いて、マチルダの横に座った。

「お集まりの皆さん、マチルダの話を聞いて下さい。
マチルダはリンダの話と、自分で見て感じた話を世界中で伝えています。
それは１００人に話せば、一人には響くかもしれない。
その一人一人の輪が段々と大きくなって、いつか波になるという気持ちでいます。
世界の今を知りましょう、マチルダは感じたままを嘘偽りなく話してくれるから。
マチルダ・・お願いします」

美冬が笑顔でマチルダに言った、マチルダも笑顔で頷いた。

「ありがとう美冬・・そしてこの機会を与えられた事を、心から感謝します。
私はリンダという女性に、２年前の１８歳の時に知り合いました。
その当時の私は、自分の祖国である東ドイツに想いを馳せていました。
私の父は戦時中に新聞記者をしていました、もちろんナチスの管理下の。
若い私の父は、そのあまりに強引なやり方に、嫌気をさしていたそうです。
そして目の当たりにするのです、ユダヤ人に対する迫害を。
父はドイツの将来に絶望して、そんな話を結婚前の母と話していました。
その時、父に同盟国の日本に、記者として行く話しがあり父は受けました。
父は東洋に興味があって、日本語を勉強していたからでしょう。
父は母と１８歳同士で結婚して、船に乗るのです。
戦火の激しい中、私の父と母は日本に辿り着きました。
そして終戦を日本で迎えます、父と母はＧＨＱに捕まり尋問され

たそうです。
しかしその尋問が人権を重んじるもので、父は感動したといってました。
父はドイツに帰るかと言われ、日本に残りたいと言ったそうです。
父はドイツ語・英語・フランス語・スペイン語そして日本語が堪能だった。
父が尋問の時に、公然とナチスを批判したのが認められました。
日本語の通訳の数の少なさもあって、アメリカ本国より父に提案がありました。
日本語の通訳としてＧＨＱが雇うのです、日本に対してはアメリカ人として。
その後、父の仕事が認められ、アメリカの市民権を得ます。
日本では何不自由ない生活をさせてもらえました、そして私が産まれます。
私は東京産まれです、エースの歳まで東京に住んでいました。
それからアメリカに両親と渡り、父はドイツとの仕事に入りました。
アメリカに渡る時に、家族３人で西ドイツに行きました。
父も母も、あのベルリンを分断する壁を、西ドイツ側から見て号泣しました。
父と母の親も親戚も東ドイツにいます、もちろん連絡もできません。
下手に連絡すると、相手に恐ろしい事があるからです。
私は心からその壁を怨みました、両親の本当の悲しみに触れたから。
私が１０歳の誕生日に、一通のメッセージがカードが届きました。
出張先の西ドイツから、父が贈ってくれたメッセージ。
その英語の文字は涙で滲んでいます、そして震える字で書いてあります。
父はその時、終戦後初めてドイツの地を踏んでいました。

そのメッセージにはこう書いてあります、叫びのような文字で。
【壁を越えろマチルダ・・それだけが望みだ】と強く書いてあります。
２年前、私はニューヨークで、西洋の歴史を専行する女子大生でした。
その時に父と母を不慮の車の事故で、同時に失いました。
葬儀まで必死に出して、３日後にどうしようもない喪失感に襲われました。
私はアメリカで孤独を感じて、会った事のない祖父や祖母を想っていました
雪の降るニューヨークを彷徨い、疲れ果てて公園のベンチに座っていました。
写真さえ一枚も無い、祖父や祖母や親戚達の事を考えていました。
寒い夜でした、そこが治安の悪い地域だと知っていました。
私はそんな事はどうでもよくて、空虚な気持ちで座っていました。
その時一台の車が止まって、ブロンドの女性が駆け寄って抱きしめてくれました。
リンダでした、リンダは私を強く抱きしめて言いました。
私を手伝ってと言って、家に連れて帰り暖かい食事を出してくれました。
そして翌日私はリンダに話をします、父と母の事を。
そしてリンダに一言だけ言われます、私の目を見て強い言葉で言われました。
【人には祖国など無い・・有るのは地球という故郷の星だけだ】
そう言って抱きしめてくれました、私は本当に嬉しかった。
心で壁を越える方法を、リンダが教えてくれました。
それから私は両親と暮らしたマンションを引き払い、リンダの家に住んでいます。
リンダの手助けがしたくて、その感性に触れていたくて。
リンダの話は次回にでもします、今日は泣かずに話したいから。

今日何の話にしようかと、色々考えました。
世界中には一日に何千・何万という子供達が、生命の危機に晒されています。
雑誌や新聞、そしてＴＶも事実を伝えるとは限りません。
どうしても強い力が働くから、愛の無い脚色をされています。
和尚様が言われた、アメリカは常に戦争を求めている。
その言葉は事実です、そしてエースが言ったアメリカに憧れると。
だから今日はリンダと私が感じる、今のアメリカについて話します、
夢と自由の国と言われるアメリカ本当の姿、その暗い裏側。
アメリカの闇を表現する事件、それはＪ・Ｆ・ケネディ暗殺事件です。
あの犯人をオズワルド一人に擦り付け、その不可能な犯行を堂々と報告した国。
そして関わったとされる人々の死、闇から闇に葬り続ける意志。
その虚実に何も言わない、マスコミ・有識者等々、皆自分が葬られるのを恐れます。
アメリカの意志は、大統領でも国民でもないと言っています。
独裁国家とある意味では同じです、その国を動かす一握りの妖怪達。
そして大きく強く成り過ぎた組織、その意志が大統領暗殺も作り出す。
幼稚な話しで終わらせる、それで納得しろと国民に言う。
ケネディ暗殺事件は国民に違和感を与えました、その違和感は抜けないでしょう。
アメリカは確かに自由かもしれません、でも差別意識は強い。
肌の色に敏感に反応したり、産まれた場所にこだわったり。
移民の国なのに、少数派を受入れない空気もあります。
どこか閉鎖的なのに、夢に輝く部分しか発信しないマスコミ。
事実と真実・・凄く響きました、だからお話しします。

リンダと私の感じた、アメリカという国を」

マチルダは強い瞳で話していた、静寂のフロアーに響いていた。
マチルダの話は続く、私は勉強の足りなさを痛感していた。
ケネディ暗殺自体は知っていたが、犯人のオズワルドの犯行だと思っていた。
私はその後調べて驚く、その稚拙なシナリオに驚愕した。
それを堂々と国民に報告した、国家機関の陰謀を主張した報告書。
マチルダの大切にしていた、父親からのメッセージ。
私は１９歳でベルリンの壁を、蘭と見に行った。
その壁を見て圧倒的違和感を感じ失望した。
人間の心に失望しそうだった、同じ言語で話す国民を分断する壁を見て。
もちろん歴史的建造物も、あのユダヤ人の悪夢の場所も訪れた。
その時の私は、リンダとマチルダとユリカの幻影を追いかけていた。
私が１８歳で経験した喪失感に対して、ユリさんが上京を勧めた。
私は上京し六本木ＰＧを起動に乗せた、だが喪失感は拭えて無かった。
そして選んだ旅先、どうしても見たかったベルリンの壁。
私の暗い瞑想を切り裂いてくれる、明るい声が響いてきた。

観光ガイドを必死に見て私を手招きする、蘭の満開の笑顔だけが支えだった。

私は笑顔で返して駆け寄った、壁を見る蘭の瞳はあの主張をしていた。

【必要無い物は・・無くなる】と最強の青い炎で主張していた。

私と蘭はベルリンの壁の向こう、東ドイツの夜空に浮かぶ月を見ていた。

「マチルダ～」と蘭が大声で叫んだ、その深い瞳で月に叫んだ。

私も月に叫んでいた、その愛しい名前を。

私は満開の蘭と腕を組んで、レンガ通りを歩いた。

暖かい波動と・・青い炎に包まれて・・・。

偽りの銃弾

夏の日の午後遠い国から来た、緑の瞳が伝えていた。
その経験に裏打ちされる、時の代償で得た言葉を。

「アメリカは世界中に、その価値観を押し付けています。
その奥底に眠る闇を抱えたまま、正義だと主張する。
アメリカの最も大きな間違い、それは力に頼りすぎる事です。
強いものが正しいという考え、正しければ何をやっても良いという考え。
私は幼少期、日本で育ちましたから、違和感をずっと背負ってきました。
アメリカは価値を作り出しています、無機質な物に価値を付ける。
石油も宝石も価値が有ると煽り続ける、そして価値を下げる行為に対し力を見せる。
自国は銃社会を脱却しようともしない、国民は危険を常に感じて生きている。
平和とは程遠い国なのです、そしてそれを望まない国なのです。
理想を掲げ平和を望む者は、闇から闇に消えていく。
アメリカの軍事産業は、その使用場所を探し続けるでしょう。
不良少年が喧嘩相手を探すように、理由を作り出すでしょう。
アメリカは素晴らしい国です、確かに夢もあります。
しかし影の部分も感じて欲しい、見る聞くに惑わされずに感じて欲しい。
冷戦が終わった後のアメリカの歩み、それがアメリカの未来を提示するでしょう。
どんなに言い訳しても、核兵器を唯一使用した国として、責任を負わねばなりません。
あの使用は大量殺戮だったと、アメリカが認めなければならない。

アメリカが精神的にも成長して、本当の民主主義を培う国になって欲しい。
私もリンダもアメリカが好きだから、世界平和を実現出来るのもアメリカだけだから。
リンダの祖父も父も、経済的な成功者です。
そして平和を唱えた・・リンダの両親は強盗に殺されました。
その犯人は捕まっていません、リンダが2歳の時だったそうです。
リンダは莫大な財産を相続して、祖母と2人で生活していました。
祖母が亡くなる時に、リンダは聞いたそうです。
両親が亡くなった時に、忘れろと電話があったそうです。
そうすれば娘のリンダは生きていけると、祖母に脅迫があった。
リンダの根底に流れてる物は、敗北を認めない心です。
そして世界中の子供達に、少しでも人間らしい生活を提供したいという心です。
リンダは自らの幸せを、そこに見つけました。
天才と言われ莫大な財産を所有してなお、満たされない心。
満足などを絶対にしない、そして絶対に諦めない・・それがリンダです。
私はこの2年間、沢山の国に行きました。
そして感じました、人間の幸せとは何だろうかと。
劣悪な環境にいる子供達の瞳にも、輝きは存在します。
それを現実の生活が奪っていきます、産まれながらの兵士はいません。
全ては大人達が作り上げた、その光無き瞳。
アメリカの見せる豊かさに、踊らされる人々。
西欧諸国は貴族社会が今でも強く存在する、それが文化だと主張する。
人種と宗教と国に過剰に反応する、守る事だけに全てを費やす。
世界はこれから狭く感じるでしょう、移動手段も通信手段も発達して。

その時に感じて欲しいんです、惑わされずに心で感じて欲しい。
自分が求めるのは何なのか、生きる目的は何なのかを。
エミちゃんの言葉が、私にはずっと響いています。
どうして人は石油に依存するのかと、問いかけられた言葉。
探してみようね、そして理由が無いならば・・それは必要の無い物です。
人間の故郷、地球という星が生命の源であって欲しい。
進歩とは幸せに続くものであると信じたい。
いつの日か、言語も肌の色も宗教も・・主義主張さえ超越して。
本当の平和が訪れると信じています、人間なら出来ると信じています。
リンダの心の闘いに、いつか終止符が打たれると思って。
私も伝え続けます、真実を語れる人間でいたいと思っています。
エミちゃんありがとう、私は必ずこの場所に帰ります。
ここが私の帰る場所だから、素敵な仲間が待っているから。
沢山のお話しをお土産に、必ず帰ります。
皆さんの笑顔を感じながら、ピンクのリュックを抱えて。
本日はありがとうございました」

マチルダの強い意志を乗せた言葉が、大きな空間に響いていた。
マチルダはあえて、世界の悲惨な現実を避けた。
それはこの旅の経験からだと、後に私は聞いた。
焦ってはいけないと感じていたと、本当に心に問いかけるなら。
その信頼関係を構築しないといけないと、感じていたと言った。

全員が拍手をして、マチルダが笑顔で頭を下げた。
「マチルダ・・アメリカの妖怪達は、何が望みだと思うの？」とユリカが真顔で聞いた。

「彼等は地位も名誉も金も手に入れてますね、今更物欲も無いので

しょう。
だからゲームがしたい、人間が生死を賭ける時の表情が見たい。
それを安全な場所から見ることが、最高の贅沢だと思ってるような。
最近はそうじゃないかと、感じています」
マチルダも真顔で返した、静寂の中緑の瞳が発光していた。
「ケネディ暗殺は、ウォーレン委員会の報告で終止符を強引に打ちましたね。
暗殺の最大の理由は何だと感じますか、アメリカの国民はどう感じたのかしら？」
ユリさんが美しい真顔でマチルダを見て、マチルダも深い瞳で頷いた。
「リンダの友人に、無名のジャーナリストがいます。
その人が暗殺事件を追っていました、無名でも圧力は凄かったらしいです。
ケネディ兄弟は、アメリカを取り巻く全ての利権に対して強行でした。
その腐敗を許さない心と、平和を求める心に、妖怪達は恐怖を感じたのでしょう。
キューバ危機の対応も、鉄鋼・石油諸々の業界に対する対応も。
そしてマフィアに対する強固な意志も、全てが相手の心を震わせましたね。
ＣＩＡとＦＢＩも、味方だとは言えませんでした。
大統領選挙も始まる時期で、全てが複合的に絡んだと思います。
アメリカ国民は、違和感を感じながら、陰謀だと思っていますね。
ウォーレン委員会の報告書は、多分時が経てば国民は忘れると思

って出しています。
そしてその証拠資料等全ての公開を、２０３９年まで出さないとされました。
関与した全員が、確実に死んだ後ですね。
１つだけ言える事実は、オズワルドの単独犯行じゃないと言う事です。
オズワルド自身が関わったかも、疑問の大きく残る所ですが。
絶対に単独犯行じゃないですね、しかし報告書は偽りの銃弾を容認した。。
たとえオズワルドが魔法の銃弾を撃っていても、一人での犯行は不可能です。
なにしろ捜査機関も信用できないですから、謎のままに終わりそうですね。
そのジャーナリストが言っていました、キーワードはニクソンだと」

マチルダの真剣な緑の瞳が、何かを発していた。
そしてエミがその真髄を見せる、その強い瞳で問いかける。

「マチルダ・・世界は狭くなるの？
そうだよね・・移動手段は進歩するだろうし、通信手段もそうなる。
そうなれば情報を隔離されてるような国の人も、世界を知るようになるの？
その時にどうするんだろう、その国の人達は。
エースが言った不公平な世の中だから、人は進歩してきたんだろうけど。
原作者がいるのなら、そのシナリオに私達は抵抗できるのかな～」
エミはマチルダを強い瞳で見ながら言った、マチルダは輝く笑顔を

エミに向けた。

「エミ・・今、マンガや小説に出てるような物が、絶対に出てくるよ。

リンダは投資してるの、その未来に必要な研究に。

リンダの家には、科学を志す若い人が沢山来るのよ。

そして夢を語り合う、その未来図を語り合うのよ。

エミが大人になった頃には、電話は一人一台持って歩くでしょう。

そして何処からでも、世界に繋がるようになるはず。

そして根本的に変える、コンピューターが世界を繋ぐわ。

一人一台所有して、世界中の今が映像で見れるようになる。

その頃には車は石油で走らないでしょう、その未来はすぐそこに来てる。

情報統制が出来ない新時代が、だからこそ肌で感じて欲しいの。

その場所に立って、空気も匂いも全て感じて欲しいの。

そうすれば、原作者のシナリオに対抗できるかもしれない。

だから1つ提案します、ここに居る全ての人が旅をする時に。

ニューヨークに来たい時は、リンダの家を宿泊先に提供します。

遠慮は全くいりません、部屋も30近く有りますから。

連絡先を書いておきます、管理人のご夫婦が常にいますから。

リンダも大歓迎しますよ、旅人が大好きですから。

エミ・・世界を感じてね、エミが大学に合格したら。

私がエミをニューヨークに招待するわ。

必ず迎えに来るよ、それまで今の調子で頑張って」

マチルダの招待に、エミはブルっと震えてマチルダを見た。

「ありがとう、マチルダ・・最高」と少女の笑顔で言った。

「マチルダ・・一人ニヤニヤが止まらない奴がいるんだけど」と蘭が満開で私を見た。

私は慌てて真顔を作ったが、ニヤニヤが止まらなかった。

「蘭姉さん、そ奴はどんなに縛っても無理でしょう・・リンダはエースの部屋を作ってますよ」と輝きニヤで言った。
『ありがとう、マチルダ・・最高』と可愛く微笑んでみた。
「可愛くない、気持ち悪い・・今度リンダに会ったら、私の部屋も作ってもらうから」と蘭が満開不敵で言った。
『別々の部屋なの?』と蘭にウルウルで言った。
「当然です・・アメリカのナイスガイと、お知り合いになるんだから～」と最強満開ニヤで言った。

「今の方が良い見たいね・・エース」とエミが可愛い不敵を出した。
『エミ・・今・・不敵した、不敵をしたの?』と私はウルでエミを見た、エミは不敵継続で見ていた。
「あ～・・カスミ、どうしてくれるんだい・・だからカスミを雇うの躊躇したのよ」とサクラさんがニヤで言った、全員が笑顔になった。
「えっ・・いや・・多分エースの浮気性が原因だと」とカスミが慌てて返した。
「エース浮気性なの?蘭ちゃんに捨てられたら、私が拾ってあげようと思ってたのに」とエミが不敵全開で言った。
『浮気性じゃないよ・・その時はエミが拾ってね』とウルウルで言った。

「サクラさん・・あんな戯言、言ってますよ」とカスミが最強不敵を出した。
「一生抱っこしてもらえるから、良いかも～」とサクラさんが蘭にニヤで言った。
「ごめんねエミ・・そんな事にはならないから」と蘭がエミに満開で微笑んだ。
「うん、良かった～・・良かったねエース」と輝く少女の笑顔で言った。

『うん、ありがとう・・エミ』と笑顔で返した、少女の輝きを見ながら。
「レイカちゃんも、不敵出すようになるのね・・楽しみ～」とセリカが笑顔で言った。
「セリカ、やめて・・千鶴さんとマユ姉さん怖いから」とカスミがウルで返した。
「カスミ・・今差別したでしょ、マユだけ姉さん付けて、２６は姉さんじゃないのね～」とミコトが余裕ニヤで言った。

「いえ・・ミコトさんと千鶴さんは、高い位置にいるからです」とカスミが美しい微笑で返した。
「カスミ、私とユリカを呼んでごらん」とリアンが最強獄炎ニカで言った。
「えっ！・・・リアン姉さん・ユリカ姉さん」とカスミが小さな声で言った、全員がニヤニヤしていた。
「仕方がないわ、リアン・・私達は低い位置にいるんだから」とユリカが爽やかニヤを出した。
「やっぱり・・１番怖いのは、ユリカ姉さんだ」とカスミが俯いて呟いた。
全員が笑っていた、カスミも照れ笑いをしていた。

『銀河はミコトと千鶴は姉さんと呼ばないと、２人は張り合いがないんだよ』と私が助け舟を出した。
「そう言う事よ、本気でこの世界で生きるんでしょ」とミコトが微笑んだ、銀河の３人が真顔で頷いた。
「誰かさんは大ママとユリさん以外、全員呼捨てだけどね～」蘭が満開で微笑んだ。
「なんせ自分で獲得してるからね～」とリアンが獄炎で私を見た。
『親近感の表れですよ』とニヤで返した。

「ねえエース、1つ聞きたいんだけど・・リンダとの瞳での会話、英語じゃなかったの？」と千秋が言った。
「それは私も思った・・どうなんだろうって？」とユメが微笑んだ。全員の視線を感じて、私は話した。

『表現が難しいけど・・言語的区別は無いよ。
例えばマリアが本気で伝えたい事は理解できるし。
俺は表現出来ないから、自分の中では原始の伝達方法って言ってる。
言語が確立したのは、いつの時代かなんて知らないけど。
その前も伝達方法は有ったはず、イルカを見ると凄く感じるよ。
もちろん犬や猫だって、お互いに伝達してるよね。
その多くの感情を表現するのに、言語が生まれ発達したんだろうね。
でも産まれたばかりの乳児は、言語を持たないけど伝達してるよ。
とても強く伝えてくる、それが人間の本来の姿だからかな。
誰でも出来るし難しくないよ、乳児と真剣に向き合えばね。
瞳でも鼓動でも温度でも、強く伝えてくるよ。
羊水の中で伝わっていたから、母の鼓動と温度の揺れが伝わっていたからね。
自分を空にして向き合うんだよ、そうすると響いてくるから。
それが自分の子供なら絶対に理解できる、子供は発しているからね。
それは言語じゃないよ、人間の記憶の奥にある物だろうね。
リンダの瞳もそれだったよ、強い表現だった』

私は思ったままを言葉にした、笑顔に囲まれながら。
「エース的には、言葉の早い子と遅い子の差は何だと思うの？」とマチルダが聞いた。

『必要に迫られるかどうかじゃないのかな～、だから語りかけ方が大事と思うね。
絶対に言葉をかけるのは大切だけど、その時に自分で納得したらいけないよね。
伝えたいという気持ちにさせるのが、大切だと思うから。
語りかけるけ時に、子供の瞳を見て伝えてと心で言うんだよ。
それだけで良いんだよ、自分で勝手に相手の心を作らない。
どうなに小さい命でも、伝えたいんだから。
この母親は何を伝えても駄目だと思えば、言葉は遅れるよね。
大人だってそうでしょ、伝わらない相手と会話したくないでしょ。
同じだよ、私はこんなに語りかけてるのに、言葉が遅いと悩むなら。
まずは自分の事を考えてみないと、子供は常に伝えたいんだから』

私はある乳児を思い出しながら、静かに話した。

「なるほどね～、説得力があるね・・エースお願い、今度会ってほしい子供がいるんだけど」とミコトが真顔で言った。
『もちろん良いけど、過度の期待をしないでね・・何も出来ないよ』と笑顔で返した。
「ありがとう、お願いね」とミコトも美しく微笑んだ。
「小僧はある乳児の言葉を理解した、医師と母親はそれを奇跡だと言ったよの～」と和尚が笑顔で言った。
「俺、あれは怖かったよ、小僧が自信たっぷりに言うから」と豊も笑顔で言った。
「いけない人達ね～、そんな話を2人だけで持ってて」と蘭が豊に満開で微笑んだ。
「小僧は自分に照れやだから、豊君にお願いしたいな～」とカスミがニヤで言った。

「あれは小僧がミホに挑戦してる時、ある乳児が産婦人科から来た。
原因不明で常に微熱があり、泣いてばかりの生後3週目の女の子。
検査をするのに小児科に来た、その子の母親が疲れ果てていて。
産後だし旦那さんは仕事が忙しくて、病院にあまり来れないみたいで。
それで泣いているその子を、小僧が抱いていたんです。
ミホの病室や遊戯室で、不思議に小僧が抱くと泣き止んで。
母親も小僧に頼っていました、春休みでしたね桜が満開で。
検査をすると医師が来た時に、小僧が聞くんです。
何を検査するの？って笑顔で、医師が微熱の原因を探すんだよと言った。
小僧はその子を静かに見ていた、その子が少し泣いて笑顔になった。
お尻が痛いんだって中のほうみたい、小僧がそう言ったんですよ。
医師も母親も固まって、婦長がそんな小さい子も分るのと笑顔で言った。
半信半疑で調べたら、お尻の中に出来物が有ったらしいです。
まさか乳児にそんな物が有るとは、思って無かったんですね。
すぐに薬で処置して、微熱は下がりました。
母親が感動して、どうして分ったのと小僧に聞いたら。
教えてくれたよ、お尻が痛いって泣いてたよ、ウンチ出る時痛いって。
小僧は笑顔でそう言ったんです、いとも簡単に言ってのけたんですよ。
言葉を知る由も無い乳児の伝えてきた、何かを理解したんですね。
それからこっそり産婦人科の看護婦が、小僧を呼びに来るようになった。
アイスやお菓子で小僧を釣って、連れ出して行きました。
小僧は相当の乳児の通訳をしたんでしょう、小僧が学校を卒業した時には。

産婦人科の沢山の看護婦さんも、お別れに来ました。
小僧にとっては普通の事で、特別視されるのを嫌いました。
婦長が言っていたのを、俺は覚えています。
小僧は特別じゃない、覚えているのだろうと、人間が言葉を持つ前の事を。
ヒトミが気付かせた、その伝達方法を理解出来たのだからと。
俺はその言葉で納得しました、奇跡などじゃないと思ってたから」
豊は笑顔で伝えた、ミコトの視線の強さを感じていた。
「なら・・どうしてミホちゃんは分らないの？」とミコトが聞いた。
『ミホはある事情で、完全に閉ざしている。
自分を守るために、全ての表現を遮断してるんだよ。
俺も初めて会った、そこまで人は遮断出来るのかと思ったんだよ。
それは病気でも障害でもなくて、自分の強い意思で遮断している。
医学では多分どうしようもない、その恐怖を取り除かない限り遮断し続ける。
俺は夜街を経験して、強く想うようになったよ。
人は何度でもやり直せると、時間が最も大切だと教えられた。
だからミホにどうしても会いたい、今なら言ってやれるから。
怖くないよと、手を繋いでやれるから。
もう言い訳はしない、やれるまでやる・・諦めない。
俺にはそれしか出来ないから』
私は自分に言い聞かせていた、強く自分に言って少し落ち着いた。
夏の日が時を刻んでいた、その一瞬一瞬を大切に生きれない自分を感じていた。
覚悟の足りなさを実感していた、ミホと向き合えるのかと自問自答しながら。
あの何も寄せ付けない、ミホにもう1度最初からやれるのかと。

蘭が強く腕を組み、満開で微笑んで私を見た。
その時に感じた、全てを壊す強い気持ちが必要だと。
黄昏の遠い夏の日の午後、大勢の女性の笑顔で充電されていた。
情熱のフロアーに座っていた、青い炎で守られながら。
マチルダの招待に皆感激していた、私もワクワクが止まらなかった。
マチルダのエミに言った約束、マチルダはお迎えは果たせなかった。
エミが東京の医大に合格した時に、航空券が送られてきた。
差出人不明だったが、ニューヨーク往復の航空券だった。
エミは久美子を頼りに、一人でニューヨークのリンダの家を訪ねる。
そして強い瞳で帰って来た、それからも努力を惜しむ事は無かった。
リンダとマチルダとユリカに恥じぬように、必死で医学に取組んでいた。
その後、研ぎ澄まされた感性で、世界を巡る医師にまでなるのだ。
私がリンダの家を訪ねたのは、２０歳の時だった。
管理人の年配のご夫婦と、久美子が出迎えてくれた。
私は大きなリビングの、暖炉の上に飾られているメッセージを見た。
涙に滲み強く書き殴った、その文字が強い言葉を示していた。

その横にユリカを挟んでリンダとマチルダの、３人の笑顔の写真が有った。

久美子がサマータイムを弾いてくれた、私にはリンダと踊った時が映像で流れた。

マチルダと見たイルカも、そしてユリカに出会った時も美しい映像で。

私は寂しくなかった・・出会えたのだから。

それだけで、充分幸せだと感じていた。

美しく成長した、２３歳の久美子の・・魂の演奏を聴きながら・・。

瞑想の手法

夏の日の夕方、笑顔の溢れるフロアーに輝いた緑の瞳。
旅立つ気持ちが滲んでいた、それが自分の生き方だと強く主張していた。

女性達がご飯を食べ初めて、私はカレーが好評でニコちゃんになっていた。
私の隣にマチルダが笑顔で座った、私も笑顔で迎えた。
「どうしたの？・・勉強の足らなさを痛感した」とマチルダがニヤで聞いた。
『したよ、かなり反省中です・・マチルダはニューヨークに帰るの？』と笑顔で返した。
「うん、1度ニューヨークに帰って、リンダに会うよ」と言いながら、数珠繋ぎの石のキーホルダーを出した。
その中から2つ選んで、私に差し出した。
「レイカとミサの分・・マリアの分は次回にあげるね」と微笑んだ。
『ありがとう・・絶対に守らないといけない、次回の約束だね』と言って受け取った。

「うん、タージマハールで拾った石だから・・背中を優しく押してくれるよ」と輝く笑顔で言った。
『素敵だね、エミの本で見たよ・・そして地球儀に入ってるよ』と笑顔で返した。
「もうインプット出来るんだね、私の侵入も拒まないし」と嬉しそうに言った。
『拒まないよ・・マチルダが進入すると嬉しいよ』と微笑んで返した、マチルダも笑顔で頷いた。
マチルダがカレーを食べに行き、ユリカが笑顔で横に座った。

「カレー美味しかったよ・・リンダの時より、寂しさが少ないね」と爽やか笑顔で言った。
『うん、エミの言葉で心が助かったよ』と笑顔で返した、ユリカも笑顔で頷いた。
四季とユメ・ウミが来て、周りを囲まれた。
「ユリカさん、1つ聞いていいですか？」と美冬が真顔で言った。
「怖いわね～・・何かしら？」とユリカが笑顔で返した。

「ユリカさんの力・・それに気付いたのはいつごろですか？」と美冬が真剣に聞いた。
「小学6年の時よ、初恋をして・・その時に気付いたの」とユリカが爽やか笑顔で言った。
「素直に受入れられましたか？そこが知りたいんです」と美冬は真剣な瞳のまま聞いた。
「無理だったよ、自分が怖かった・・ずっと悩んだよ」とユリカも真顔で返した。
「そうですか、ユリカさんでも」と美冬も少し笑顔が出た。
『らしくないな、美冬・・そんなに悩む必要は無いよ、無理に受入れる必要は無いんだよ』と私も美冬の瞳を見て微笑んだ。
「美冬ちゃん霊感が強いのね、怖いの？」とユリカも優しく聞いた。

「夜、運転してると怖い事があって・・私の頭で作り出した物なんでしょうか？」と美冬が言った。
「それは私にも分らないな～・・エースはどう思う？」とユリカが真顔で聞いた。
『俺も感じないから、分らないけど。
絶対に無いとは言えないような気がする、あって不思議じゃないような。

でも俗に言われる魂とかじゃないと思う、強い憎しみが残ったとしても。
それで他人に何かをするとは、思えないんだけど。
怨んでる相手に来るのは、少し分る気がするよ。
専門家に聞いて見る、ニヤニヤ笑顔で来たから』

美冬がその言葉で振向いて、笑顔になった、私は和尚を手招きした。
『和尚・・美冬悩んでるんだってよ、知ってたろ～』とニヤで言った。
「そうか～、会う度に強くなるから・・少し怖いかの～」と和尚も優しく言った。
「やっぱり、強くなってるんですか・・そんな気はしてました」と美冬も真顔で返した。
「この店の君達は、その感性が強まっておるよ・・常に集中をする場所があるからの」と和尚は6人を見た。
「それは今が吸収する時だからでしょうか？」とユリカが聞いた。

「そうじゃよ・・人は集中する時に、その五感が研ぎ澄まされる。
無意識である事が大事なんじゃよ、その時に持ち合わせた感性も発揮される。
四季と言われる聡明な女性達は、時間を意識しているよの～。
その目標が別の世界にあるから、それでもこの世界で真剣に生きておる。
ユメちゃん・ウミちゃん・カスミちゃんとは、違う時間を背負ってるよの～。
だから感性が鋭くなっていく、望まない物まで鋭くなる。
美冬の感じてる霊感と言われる物、もちろん悪い事じゃない。
じゃが確かに怖いよの、理解できない世界は恐怖を感じる。
霊の存在がどうのと言う話じゃない、簡単に言えば小僧と同じじゃ。

強い意志は残ると思う、たとえ肉体が滅んでも。
愛情も情熱も・・そして怨みも残るんじゃろう。
それを読めるという事なんじゃろう、だから怖がらんでもいいんじゃが。
やはり怖いよの～・・でも打開策はある、ユリカの棲む世界まで行けば。
制御は出来るんじゃよ、切る事もできる・・捨てる事はできんが。
美冬・ウミ、やるのなら・・ワシが教えるぞ。
少し時間がかかるが、寺に来れば教えてやろう」

和尚は笑顔で締めた、美冬がウミを見て2人で笑顔になった。
「ありがとうございます、伺いますから・・よろしくお願いします」と美冬が言って、ウミと2人で頭を下げた。
「和尚様・・その方法はどんな事でしょう？」と千秋が笑顔で聞いた。
「簡単じゃよ、座禅・・というか瞑想じゃよ」と和尚も笑顔で返した。
「私達も行っていいですか？」と千夏が真顔で言った。
「もちろん良いよ、何かに気付けるかも知れんよ」と和尚も優しい笑顔で言った。
「素敵な事ですね～・・和尚様、私もお伺いしますね」とユリさんが薔薇で微笑みながら座った。
「大歓迎じゃよ、ユリの正座を見れると良いの～・・その姿勢に驚かされるぞ」と和尚が6人を見た。
6人はユリさんの薔薇の微笑を見ていた、私は凛と座るユリさんを思い出していた。
「和尚様、どうして瞑想はお寺とかが良いんですか？」とユメが笑顔で聞いた。

「簡単じゃよ、時に縛られないからじゃよ。
人は時に縛られている、例えば部屋で瞑想しても時計の音が響く。
ＴＶや電話も存在するだけで、時が縛る道具になる。
そして周りに時を意識しておる人間がいると、やはり時に縛られる。
じゃから慣れるまでは、寺などが良いんじゃよ。
慣れればどこでも出来るよ、小僧は瞳を閉じるだけで出来るかい。
無になった時、人は自分と向き合える。
そうすれば自分を再確認できる、その能力を受け入れ制御も出来る。
その世界まで行けば、必ず出来るんじゃよ。
最も大切で、常に自分を縛るもの・・時を外せれば必ず辿り着くよ。
人間は感受性を高めた代償で、恐怖を得たんじゃろう。
恐怖の根源は死なんじゃよ、人は死ぬことを恐れる。
それは克服出来ん事かもしれん、じゃが向き合う事はできる。
人生でそれをするとせんとでは、違いが出るんじゃよ。
時は平等じゃ、この世界で唯一全ての生命に・・平等に流れる。
生きる事を恐れる必要はない、死を恐れる必要もないんじゃよ。
その時が来た時に、笑顔になれる人間でいて欲しい。
それが本来の宗教の考え方じゃから」

和尚は笑顔で言った、気付くと大きな円が出来ていた。
「和尚様・・沢山の派手な女性が来ると、お困りになりますか？」
とミコトが微笑んだ。
「大歓迎じゃよ・・ワシも楽しいしの～」と和尚も笑顔で返した。
「和尚様、私にはヒントを下さい・・無になるヒントを」とマチルダが真顔で言った。
「マチルダは、もうすぐそこに有るよ・・マチルダは小僧方式が良いじゃろうの～」と和尚が私を見た。

「さぁ聞きましょう・・小僧方式」と蘭が満開笑顔で促した。
『俺の方式って・・それで良いのか分らないけど。
俺は瞑想の時に無じゃないよ、考えたい事を強く心に想う。
ミチルに話した時に、再確認したんだけど。
例えば・・悩んでる事は、今の自分と完璧に素直な自分出して話させる。
２人で会話させるんだよ、今思ってる事を素直な自分に話す。
そうすると素直な自分が何かを返してくれる、その言葉が響くんだよ。
それで自分を落ち着かせる、そこから深く掘り下げるんだ。
迷ってる時はその事自体を強く想う、そうすると映像で浮かんでくるよ。
誰でもそれは出来ると思う、マチルダがヒントをくれたんだけど。
その時は後から、自分の背中を見るんだ。
客観的に自分の背中を見る、ドラマや映画を見るように。
そうすると気付くんだよ、自分が勝手に作っていた事に。
今はあまり瞑想しない、シオンが直接弾丸を撃ち込んでくれるから。
素直な自分を出す必要も無い、シオンに話せば返してくれる。
シオンの心は常に無の世界にある、だから直接伝えてくれる。
それが出来るのは、素直な自分とシオンだけだから』
私は思いのままを言葉にした、シオンのニコちゃんを見ながら。
「そっか～、問題は完璧に素直な自分を作れるかなんだ」とマチルダが輝く笑顔で言った。
「完璧に素直な自分・・難しそうだ」とリョウが真顔で言った。
「難しいんじゃよ・・だからその為に、自分と向き合うんじゃよ」と和尚が優しく言った。
「私・・かなりの時間がかかったよ」とミチルが微笑んだ。

「よく出来ましたな～、自分に対して嘘無く生きてきた証ですぞ」と和尚がミチルに笑顔で言った、ミチルは嬉しそうな笑顔で返した。

「豊は・・瞑想するのか？」とジンが真顔で聞いた。

「瞑想なんて感じじゃないけど・・確認はする、本心かって問いかけはするよ」と豊も真顔で返した。

「それで良いんじゃよ、人の個性は全て違うから。

豊や蘭、究極である大ママとユリは・・自分の心に最も重きを置くからの。

瞑想や自分との語り合いは必要無い、確認作業だけで良い。

正解などを探すんじゃない、自分らしさを探せば良いのじゃよ」

和尚はジンを見ながら嬉しそうに言った、ジンも笑顔で頷いた。

「俺なんか、一ヶ月以上かかったよ・・自分と向き合うのに」とキングが笑顔で言った。

「お前は仕事と夜街２つで、常人の１０倍の雑念があるからの～」と和尚が笑った。

「１０倍ですか・・それは凄いですね～」とユリさんが薔薇ニヤで言った。

「１０倍の雑念が作ったのね、あの梶谷さんを」と蘭も満開ニヤで言った。

「多分その内の、９倍分が夜街だよ」と大ママが微笑んだ。

「伝説に事欠かないですから・・夜街伝説の数で抜ける可能性があるのは、小僧だけですね～」とユリカが爽やかニヤで言った。

「しかし色っぽい話は無いよね～、案外危ない趣味だったりして」とリアンが獄炎ニカで言った。

「その可能性は高いよ・・夜街七不思議の筆頭だからね～」とミチルが妖艶ニヤで追いかけた。

キングは嬉しそうに、照れた笑顔を出していた。

『キング、ウルして良いよ・好きな女性の胸で泣きなよ』と私もニヤニヤでキングを見た。
カスミが胸を突き出して、不敵を出して両手を広げた。
リョウが慌てて胸元を少し開いて、涼しく微笑んで両手を広げ。
ホノカがボタンの上２つ外して、華麗ニヤで両手を広げた。

「さすが銀河の奇跡・・対応が早いね～」とミコトが余裕ニヤで言った。
「感動して涙が出そうだったよ」とキングが笑って、全員で笑っていた。
『キングの誰かの胸で泣くところ見たかったのに、そこに同伴するから』と私がキングに笑顔で言った。
「小僧・・今度ゴールド・ラッシュに連れて行けよ」とキングが微笑んだ。
『仕方ないな～、キングは開拓者だから』と笑顔で返した。

「千鶴姉さん・・お礼は必要ないですよ、その笑顔が怖い」と蘭がニヤニヤ顔の千鶴に、満開ニヤで言った。
「そういう訳にはいかないわ・・素敵なお礼を考えよう」と千鶴がニヤで返した。
「あっ！・・忘れてた、私もお礼しないと」とリョウが涼しげニヤで言った。
「リョウは十分よ、紫のキラキラパンツで」と蘭が満開ニヤで返した。
「紫のキラキラか～、イメージ通りだね～」とリアンが獄炎ニカで言った。
「リアンも出会った時に、危ない黒ブラ見せたでしょ」とユリカがリアンに爽やかニヤを出した。
「ユリさん・・この状況どう思います？」と蘭が満開ウルでユリさ

んを見た。

「蘭ごめんなさい・・私も初めての夜、薄手のネグリジェで勝負しました」と悪戯っ子を出した。

全員がユリさんを見た、その薔薇の笑顔を見て、笑顔が溢れた。

「危険だわ・・相当に危険な状況ね、アメリカにでも駆落ちしようかな」と蘭が満開ニヤを私に出した。

「それは良い考えですね、リンダも私もいますから」とマチルダが輝きニヤで言った。

「それは尚更危険・・ブロンドに極度に弱いから」と蘭が満開ニヤニヤでマチルダに言った。

「エース・・ホストにはなるなよ」とジンが笑顔で言った。

『ジン・・怖いんだね、ＮＯ１を奪われるのが』とニヤで返した。

「それは怖い・・豊が来たら、勝てる気がしないよ」とニヤで返された。

「豊君のホストね～・・・それは素敵ね～」とホノカが豊に華麗に微笑んだ。

「それは絶対に無理ですよ」と豊が微笑んで返した。

「ジン・・計画の進行はどうですか？」とユリさんが薔薇でジンに微笑んだ。

「まぁまぁですね、あと3年でなんとかしたいですね」とジンも笑顔で返した。

「起業するんでしょ・・どんな会社を作りたいの？」とユリカが爽やか笑顔で聞いた。

「時代の変化に対応する、人材を派遣するような会社を作りたいですね。

確かに日本の終身雇用は素敵な事だけど、違和感を感じてる人も多いですよね。

自分を試してみたいと思ってる人も多い、そして求めてる企業も多いです。
その橋渡し的な仕事をしたいですね、勉強も経験も相当必要ですが。
今は資金を稼いでいます、今しかホストは出来ないから。
必死にやってますよ、沢山の女性達が大切な事を教えてくれるから。
経験にも勉強にもなる仕事です、ホストというのは」

ジンは笑顔で言った、私はジンのその考えを聞いて嬉しかった。
「夜の女性の派遣は、考えてないのかしら？」とユリさんがジンに薔薇で微笑んだ。
「えっ！夜の女性ですか・・出来ますかね？」とジンは笑顔で返した。

「夜の女性の大半がバイトですよね、だから週末しか仕事が中々ありません。
それでも若い子なら、見つける事は出来るでしょう。
でも店側は若い子だけを求めていませんよ、元プロや経験者も求めています。
事情があって復帰を願う女性に、安全で良心的な店を紹介する。
即戦力・・魅力的です、そして違う何かを持ってきてくれますから。
女性をジンが面接して雇うなら、信用は出来ますね。
十分過ぎる需要はありますよ、ＰＧは必要だと感じますね」

ユリさんが薔薇の笑顔で伝えた、ジンは嬉しそうな笑顔で聞いていた。
「魅宴も欲しいね～、絶対に利用するよ」と大ママも笑顔で言った。
「素晴らしい話ですね、うちが１番求めますね・・経験者、即戦力」

と千鶴も微笑んだ。
「ジン・・スナックも必要とするよ、私も需要は相当あると思うよ」とミチルが言った。
「ありがとうございます、目から鱗でした・・やるには夜街を深く知る社員が必要だな～」ジンは提案を喜んで、真剣に考えていた。

「ジン、その時に高校生のバイトを紹介しようか・・夜街を知り過ぎてる、最後の挑戦者を」と蘭が満開で微笑んだ。
「えっ！そっか、最高の人材がいますね～」とジンが私に笑顔で言った。
「それは楽しそうですね～・・ジンとエースが女性を見て、どの店に派遣するかが」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「今でも恐ろしいのに・・3年後のエースか～、怖い」とハルカがニヤで言った。
「想像も出来ないね、どんなになってるのか」とミサキがニヤを出した。
『ジン、俺もその時にジンに求められるように、色々な店を見に行くよ』と笑顔で言った。
「あなたは意識して頑張らなくても良いのよ、どうせ経験していくんだから」と蘭が頬を膨らませた。
全員の笑い声の中、ジンが私に微笑んで頷いた。

その時入口に子供を抱いた、女性が入って来た。
ミコトが駆け寄って、話してから私の所に来た。
「電話したら、いても立ってもいられなくなったみたい、エース良い？」とミコトが真顔で言った。
『もちろん、良いよ』と私は笑顔で返し、ミコトとその女性の所に歩いた。
「ミコトの姉の理子です、ごめんなさい突然来て」と言った、双子のような姉妹を笑顔で見ていた。

『全然大丈夫です、まぁ座りましょう』と言って、奥の5番席に誘った。
私は理子が抱いている、生後半年位の乳児を見ていた。

「この子、未来と書いてミクといいます、生後七ヶ月になります」
と理子が言った。
『可愛いね～・・良かったね、素敵な名前を貰って』と私はミクの瞳を見ながら、笑顔で言った。
「全く表情の変化が無いんですよ、産婦人科の先生はまだ気にしないで良いと言うけど・・心配で」と理子が真顔で言った。
『えっ！・・表情が出ないの、出てるけど・・抱かせてもらえます』と笑顔で言った。
私はミクのその伝達力に少し驚いていた、そして感じていた。
私は母親の過剰な心配は何度か経験していたから、その心配の中身が想像できていた。
理子は少し笑顔になって、ミクを大事そうに渡してくれた、私はミクを抱いて確信した。
白い心だと思っていた、マリアには及ばないが白を完璧に意識できた。

『表情の変化が無いって・・泣くんでしょ？』と私は笑顔で理子に聞いた、真顔の理子の横にミコトの真剣な瞳があった。
「たまに泣きます・・でも他のお子さんより、圧倒的に少ないんです」と理子が真顔で言った。
『ミク～・・お母さん心配性だって知ってるでしょ、安心させてあげなちゃい』と瞳に語りかけた。
ミクの瞳が潤みだし、私は伝わっていた、ミクの大らかで果てしなく広い心が。
『ウルしても駄目でちゅ、ミクは大きな心を持ってるんでしょ・・自分ばかり安心しないの』と優しく言った。

ミクはビッって感じで、泣顔になって私の対応を探った感じだった。
『駄目～・・泣いても無駄だよ、悔しいなら笑ってごらん』と笑顔で言った。
ミクは少し悔しそうな瞳で、意を決したように笑顔になった。

『出来るのに～・・出し惜しみしてましたね～、ミク意地悪1点』
と笑顔で言った。
「キャッキャッ」とミクが声を上げた、理子とミコトの固まる表情を感じていた。
『ママは心配なんだよミク・・ミクを愛してるから、分るよね～』
と優しく言った、温度の変化を感じていた。
「どうして出さなかったの？」とミコトが泣いている理子の代わりに聞いた。

『この子は凄い子なんだよ・・普通などと比べたらいけない。
この子の心は白いから、マリアとシオンと同じ白だから。
安心していたんだよ、理子がミクの伝える事をどこかで理解してたんだね。
だから表情で伝えなかった、それを理子が心配してる事も知っていた。
でも自分から出さなかった、多分今から育てる子供は普通と違うと伝えたかった。
理子は素敵なママだけど、普通に対するこだわりが強いんだね。
普通なんて無いんだよ、子供は羊水の中にいる時から個性があるから。
ミクは今からは表情に出すけど・・理子、比べないで、ミクを見てね。
本当に素敵な子だから、理子が全てを賭けても良い存在だよ。
俺より強い変化を、ミクにプレゼントするからね。
理子・・イメージで見ないで、ミクは心の大きな子なんだから』

私は泣きながら頷く理子を見て、潤む瞳のミコトに笑顔で頷いて。
宴会場のシオンを見た、シオンは私を見ていた。
私の表情で理解したように、シオンはニコちゃんになって歩いて来た。

『ミク・・素敵な人を紹介するね、ミクが誤魔化せない大人だよ』と言ってシオンにミクを渡した。
『シオン・・ミクちゃん可愛いでしょ』と最高ニコちゃんシオンに言った。
「ミクって言うの～、可愛いけど・・少し意地悪さんですね」とシオンがミクに微笑んだ。
「ア～、ア～」とミクがシオンに反応した、シオンは少し真顔になって。
『言い訳は許しません・・シオンお姉ちゃんには、通じません』と笑顔で言った。
ミクは困ったのか、理子を見てウルをした。
私は感動してる理子に耳打ちした、理子はニヤを少し出して私を見て頷いた。

「ミク・・ママは少し怒っています、ごめんなさいは?」と理子が真顔でミクに言った。
ミクは理子の顔をじっと見ていた、私はニヤニヤでミクを見た。
「ア～・・ウ～」とミクがウルウル顔で理子に言った。
理子はミクを受取り、優しく抱きしめた、ミクは理子に抱かれて笑っていた。
私は泣いているミコトを見ていた、その優しさに触れて嬉しかった。
シオンがＴＶルームに歩いて行くのを見て、さすがシオンと想っていた。

「ありがとう、私の負けだよ・・エース」とミコトが泣きながら微笑んだ。
『休戦中だよミコト・・それに俺に出会わなくても、ミクは近々表情は出たよ』と笑顔で返した。
「本当にありがとう、嬉しかった～・・ミクを心の広い子だと言われて」と理子が私に微笑んだ。
『事実ですから・・ミクの近い将来のイメージが知りたいですか？』と笑顔で聞いた。
「そんな事が出来るの？」と理子が驚いて言った、私は笑顔で頷いた。
その時受付の方からシオンがマリアを抱いて来て、マリアをミクの前に立たせた。

『マリア・・ミクちゃんだよ、可愛いでしょ』とマリアに言った。
マリアはミクの顔を見て、最強の天使全開で両手をミクの両頬にそっと当てた。
「みく・・かわいい」と強く言った、その時ミクが大きな声で笑った。
その声がフロアーに響いた、まさに天使の声だった。
『1年半後の、ミクのイメージ・・マリアだよ』と理子に笑顔で言った。
「本当に嬉しい・・幸せを感じてるよ」と理子がマリアを見て言った。
マリアは天使全開継続で、理子を見ていた。

爽やかな風がエレベーターホールから吹いてきて、白い3人を包んでいた。
私はミクに1つ気付かされた、感情は絶対に存在すると。
どんなに遮断しても、感情は存在してるのだと確信した。
ミクの笑顔を見ながら、ミホを想っていた・・黄昏の迫る夏の午後

だった。

ジンの計画に、ユリさんが大きな提案をした。

その提案に蘭が私を絡ませた、私は本当に嬉しかった。

ジンは本心で目から鱗と言っていた、そして本気で考えていた。

しかしその女性の派遣は、軌道に乗るまで大変だった。

夜街の多くの店が、登録したいと名乗り出たから。

その予想以上の数に、ジンも私も驚いていた。

そして女性の登録申し込みの多さにも驚いた。

時代はバブルに入った頃で、夜街も最高の熱に包まれていた。

キャバクラと言われる、大型店の台頭もあり、需要は増え続けた。

私はカズ君から相談を受けて、徳野さんと話した。

そしてカズ君がジンの会社に転職する、夜の女性派遣の責任者として。

私は実働を担当して、ジンとカズ君が面接等をしていた。

最強の爆弾が無数に湧いて出てきた、その爆弾を徹底的にＰＧに投下した。

魅宴にも、ゴールド・ラッシュにも投入し続けた。

それでも現れなかった、銀河の奇跡に対抗できる存在は。

唯一対抗できたのは、シオンとセリカにもう一人を加えたトリオだったが。

シオンの早い引退と、セリカの上京で消えた。

セリカは若き日の憧れ、東京を諦めきれなかった。

セリカは六本木ＰＧの開店メンバーになる、そして店を引っ張ってくれた。

その流星の輝きは強まり、六本木でも有名な華だった。

セリカの結婚引退する送別会で、泣いているセリカを見ていた。

その輝きの流れに涙が光っていた、それを拭う左手にリストバンドは無かった。

「心の傷も、体の傷も・・いつか癒えるね、前を見てれば」と美しい笑顔で言った。

流れる輝き・・優しさを纏う言葉。

追いかけても追いかけても・・追いつけない存在。

夜空を見上げると想う・・星が流れないかと・・あの流星のセリカのように・・。

幻想の満足

晩夏の夕暮れが近付いて、西向きの窓に映る空が紅に染まっていた。
大きな天使の声が響いていた、天使の最高の祝福を受けて。
どんなに幼くても意志はあるのだと、そう主張していた。

私は帰ると言う理子を誘って、カレーを振舞っていた。
ミクをミコトが抱いて円の中に座った、全員の笑顔にミクが囲まれていた。
「ミクの何と最初に会話したの？」と理子が笑顔で聞いた。
『瞳・・かな』と照れて答えた。
「かなって言う感じの事なのね」と理子に微笑んで返された。
『うん、意識したら難しくなるんだよ・・引き出そうとしたら駄目なんだろうね』と笑顔で返した。
「凄い勉強になるんだけど、ミコトに聞いて半信半疑で来たの」と嬉しそうに笑った。
『半信半疑で良いですよ、俺も自信有る事じゃないから』と返した。
「自信持って良いんじゃないの・・少なくとも私は信じるよ」と優しく微笑んだ。
『ありがとう・・しかし美人姉妹ですね、てか双子みたい』と笑顔で言った。

「双子よ・・ミク産む前はもっと似てたよ」と理子がニヤで言った。
『やっぱり・・お互いの事、離れてても分ったりします？』と笑顔で聞いた。
「大きな事があると、なんとなく感じる程度よ」と少し考えて言った。
『そっか～・・何かを分け合った感じはないのかな～？』と興味津々光線を発射した。

「そんなんじゃないね～、表裏一体って感じかな・・ミコトが私のもう1つの人生みたいな」と理子が真顔で答えた。
『表裏一体・・なんとなく分る気がします』と笑顔で返した。
私はユリカの妹を想って聞いていた、多分私の側に居るであろう妹の存在を意識しながら。

理子が食べ終わり、円になって話している場所に誘った。
理子をユリカの隣に座らせて、全員に紹介した。
『ミコトのお姉さんの、理子さんです・・双子ちゃんらしいです』と笑顔で言った。
「双子なんですか！」とユリカが少し驚いて、理子に微笑んだ。
「はい・・性格はかなり違いますけど」と理子が笑顔で返した。
2人が笑顔で話し出したので、私は蘭とカスミの間に入った。

「豊君・・奥さんとは幼馴染なの？」とカスミが輝きニヤで聞いた。
「はい・・物心付いた時からの」と豊が照れた笑顔で返した。
「素敵な子よ～・・もう一人のマキちゃんも素敵だったし」と蘭がカスミに満開ニヤで言った。
「恭子・マキ・シズカで限界トリオですよね・・憧れましたよ」と久美子が豊に微笑んだ。
「限界トリオ・・その称号は誰の命名なのかな～」と蘭が私に満開ニヤを出した。
「蘭さん正解です、もちろん小僧が命名しました」と豊が笑った。

「理由を述べよ」とカスミが不敵で聞いた。
『小学生から見れば・・どう見ても限界を超えてたから』とニヤで返した。
「マキが蘭さん見て、この仕事に凄く興味持ってましたよ」と豊が笑顔で言った。
「やる時は、絶対にＰＧに来てもらいます」と蘭も満開で微笑んだ。

「凄いんだ～・・いよいよ下の世代の話が出たね」とミサキがハルカに笑顔で言った。
「うん・・でも蘭姉さんのあの顔は、怖い気がする」とハルカがニヤで言った。
「怖いですよ～、マキは女子にも圧倒的人気がありますから」と豊が微笑んだ。
「だよね～・・私でも年上にいたら憧れるな～」と蘭が満開で微笑んだ。

「マキちゃん愛情表現が最高なの、私感動したよ」とマチルダが笑顔で言って、私に対するマキの挨拶の話をした。
「蘭・・夜を選んだら、必ずＰＧに引っ張ってね」ユリさんが薔薇で微笑んだ。
「任せて下さい・・問題はシズカちゃんだね～」と蘭が私に最強満開ニヤで言った。
「シズカがお姉さんなんだ～」とカスミも最大不敵で私を見た。
『普通です・・ごく普通』と私も笑顔で返した。
「豊君から見たら・・限界トリオはどんな感じなの？」と蘭が豊に聞いた。

「不思議ですね～・・確かにあの３人が幼馴染なのは奇跡でしょうね。
まぁ普通に見れば、不良少女っぽいですから。
なんせ納得出来ない校則は守りませんから、それによる罰を受けていました。
三者三様で個性も違いますね、別にベタベタと一緒にいるわけじゃないです。
恭子が１番家庭的には恵まれていたでしょう、父親は刑事で後妻さんも素敵な人だから。
でも俺を選んで・・その覚悟の証として、高校にも行きませんで

した。
マキは家庭の事情で祖母と暮らしています、多分1番自立を目指していますね。
自分に厳しい子です、カスミさんに凄く近い感じですね。
自分の決めた事に対して、真摯に向き合える人間です。
その自分への厳しさが、優しさを作りだしたような。
小僧に対する時が1番出ますね、マキにとって小僧は特別ですから。
マチルダさんが感動したと言った、あの挨拶にしてもそうです。
溢れ出す感情を直接伝える、その方法を小僧が教えました。
マキはどこかで自分を抑えていました、その感情を小僧が引きずり出した。
1対1の真剣勝負で、マキの感情を強引に出しました。
今のマキは自分に従順です、だから蘭さんを見た時に本当に喜びました。
小僧が巡り合い探しだしたと、シズカに泣きながら言っていました。
そして噂のシズカ・・常に矛盾と戦う子です。
私にとっては3人の中で、唯一妹と思える存在です。
その姿勢は常に全体を見ている、面で見て点で捕らえる。
今の小僧に1番影響を与えているのは、私より圧倒的にシズカでしょう。
成績優秀でスポーツ万能でありながら、それを全く大事な事としない。
小僧の頑固親父ですら、シズカが○○高校に合格した時に言いました。
後は好きにやってみろと、退学しようが何しようが構わんと言ったそうです。
限界トリオの中心はシズカですね、その生きる姿勢が方向を間違えさせなかった。

さっきのリヤカーの話で、私に相談してきた子が出頭する時に、3人が同行しました。
そしてシズカが恭子の親父に言った、この子をこれ以上傷つけるなと。
話したくない事を強引に聞きだすなと、それにより俺が少年院に行く事になってもと。
そう堂々と言ったそうです、恭子の目の前で。
どれだけの信頼関係があれば言えるのかと、恭子の親父は嬉しそうに言っていました。
小僧がミホと引き離された時に、寺の本堂で限界トリオ3人で小僧を袋叩きにしました。
小僧に悲しむ事も、後悔する事も、まして諦める事も、させないために。
本当に愛情に溢れた暴挙でした、小僧は肉体的にボロボロに打ちのめされた。
だから心はミホから離れなかった、あの限界トリオの愛情が止めた。
立てなくなった小僧に姉のシズカが言った、悔しかったら立ち上がり挑戦しろと。
ミホにいつか挑戦しろと、それが自分達とヒトミの願いだと言いました。
多分帰り道で3人は泣いたでしょう、悔しくて泣いたでしょう。
小僧の悔しさを直接感じたから、それを感じ自分達の想いを伝える為の行為でした。
その方法が小僧に1番響くと知っていたから、本気で向き合いました。
3人が無償の愛で接し続ける限り、小僧も愛に対して見返りを求めないでしょう。
見返りを求めるな、シズカの心を表した言葉です。
シズカは小僧に対して、常にこれだけを言っていました。

多分シズカがこの世の中で、小僧を1番理解してるでしょう。
俺も和尚も今本当に楽しみにしています、蘭さんを見た時のシズカの喜びを。
そして今の小僧を見た時の、シズカの喜びを感じているから」

豊は私を見ていた、私には豊からのエールだと思っていた。
ミホに再挑戦する私に、その想いを伝えてくれたのだと感じていた。
「見返りを求めるな・・素敵ですね」と蘭が満開で微笑んだ。
「この仕事をしてると、常に向き合わされる事だね・・見返りを求められるから」とミコトが真顔で静かに言った。
「聞きましょうか・・そろそろ、あの言葉の本質を」とユリさんが私に薔薇で微笑んだ。
「そうですね～・・私からもお願い、ずっと気になってた」とマチルダも微笑んだ。
「話さないといけなくなったね、今のマチルダの頼みなら」と蘭も満開で微笑んだ。
円が大きく1つになった、私の隣にエミが笑顔で座った。

「何の話でしょう？」と大ママが笑顔で聞いた。
「エースがカスミちゃんに、満足とは金で買う物の事だと言った言葉・・その真意です」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「ほほう、小僧そこまで行ったか・・カスミ良かったの～」と和尚が笑顔で言った、カスミも笑顔で頷いた。
「エースお願い、その真意を教えて」とカスミが輝きながら笑顔で言った。

『そんなに深い意味はないよ・・でも俺はＰＧに来て思った事がある。
さっきのミコトの言葉、この夜の仕事は見返りを求められるって。
確かにそれは大きく有るよね、お客は常に見返りを求める。

費やした金と時間に対する見返り、女性達はそれに苦しむ。
それが需要と供給だと誤解する、俺は見返りは需要じゃないと思ってるから。
俺はさっき言ったみたいに、権力者に貸付を目論んで見ていたから気付いた。
金持ちになった人の充足感の無さに、それに驚いていたんだよ。
豪邸に住んで、高級車に乗って、美味いもの食べても充足感が無い。
それで色々考えた、もちろん弱味を探すためだったけど。
なぜ充足感が無いんだろうって、そしたら気付いたんだ。
それが目標じゃなかったから、志した時に目標にしてなかったからじゃないかと。
そしてＰＧに来て、その考えが半分正解で半分間違っていると思った。
外で酒を飲む一部の男達の目的が理解出来なかった、まぁ俺がガキなんだろうけど。
供給側は楽しい時間を提供しようと必死で、確かにギリギリの夢は見せるけど。
客はそれ以上を要求してしまう、そんな行為が目的ならそんな店に行けばいいのに。
多分・・純粋に愛情を持っている人もいるんでしょう、一握りだろうけど。
ほとんどはハンティング感覚、だから拒絶される事を極度に恐れる。
でも店側はそれが商売だから、簡単に拒絶は出来ない。
ハンターはそれに甘えてる、拒絶出来ない事を逆手に取って。
自分は金と時間を使っていると、だからその分の見返りをくれと言う。
でもそれは供給出来ない、その線は越えてはいけない。
見返りを求める心に愛情は無い、ただ欲の充足を得たいだけ。

それが俺には許容範囲の外だった、今でもそうだけど理解出来ない。
確かに夜の女性に向けられる、偏見は有ると感じる。
だから俺も考えた、夜の女性達に1つの提案を。
見返りを求める心に対抗する、俺の考え出した作戦。
それをあの言葉でカスミに言ったんだよ、カスミは響くと感じてるから。
自分自身が費やした金や時間の、見返りを求めない心だと言いたかった。
金で買った物でしか満足出来ないんじゃない、満足は求める事じゃないと思ってる。
満足したと思ってる人は誤解している、ただ単に不満じゃないという事なのに。
カスミがあの時に言った言葉、俺が全員満足しない世界を作ってるって言ったね。
俺は嬉しかった、カスミの変化を感じたから。
カスミと最初にドライブした時、俺は正直に答えたけど驚いていた。
カスミの外見を見て、それにより内面を見てくれないと言った事が。
そしてカスミの恐怖を気付かなかった、それを聞いて又驚いたんだよ。
福岡に向かいながら色々考えてたんだ、そして初めてカスミの内側を見たのは。
あの飛行機で手を繋いだ時だった、その温度の揺れで恐怖が伝わった。
俺は今からの事が怖いのか、飛行機が怖いのか分らなかった。
そして相手に会った時に感じた、カスミはこの男を本気で愛したのかと思ったんだ。
俺は分らなくてずっと考えていた、そして帰りの飛行機で分った。

カスミが飛行機が怖かったんだと分って、カスミがなぜあの相手に決めたのか。
カスミはその時、疲れ果ててたんだよね、だから安定を求めた。
東京でのアイドルデビューの話まで蹴って、安定に賭けたんだって思ったんだよ。
鉄が飛ぶかって言った、カスミの瞳で感じた。
カスミは永い時間をかけて、完璧に準備しても最後に飛べないんだって。
カスミは常に努力を怠らない、その継続する強さを持っている。
でも最終目的地が自分でも分らないから、継続に疑問を持つんだって。
これでいい・・これで充分だと思う世界を探しているから。
だから疲れ果て行き詰まり、逃げ出したくなるんじゃないかって思ったんだよ。
最後の一歩が踏出せない、それはその場所に怖さを感じるから。
努力して辿り着いた世界が、満足できない世界である事に恐怖を感じてるから。
揺れる温度でそう感じたよ、そしてカスミを俺の1つの理想にしようと決めた。
俺は全て同じだと思ったんだ、裕福になっても充足感の無い人々。
費やした金と時間の見返りを求める人、そして継続する事に疑問を持つのも。
それは満足したいって思う気持ちが、作らせるんじゃないかって。
人は幸せになれても満足は出来ない、満足ってのは遥か高い場所にあるから。
理想を掲げた先にしかないから、どんなに経済的に成功しても届かない。
俺はリンダに会って感じた、生きる目的は理想の果てにあるんだって。
俺は世界に一人でも餓えてる子供がいるのなら、心は絶対に満足

はしない。
継続する事に疑問を持たない、求めるのは理想であって満足じゃないから。
成功者になりたいとか、権力者になりたいとか・・そんな事は目的じゃない。
なってどうするのか、そこから何をするのかが目的だと思う。
美しくなって、輝いて・・その後に何を残すのか。
どう生きるのか・・それが見たいんだよ、カスミのその時が。
満足を求めないで欲しい、そうする事はあの馬鹿な客と同じ行為だから。
俺は常に問われている・・今でもヒトミに、それからどう生きるのかと。
満足は出来ないけど、納得できる終焉を迎えたいと思っている。
俺は今そう思ってるんだよ・・エミ』

最後は私の隣に座る強い瞳のエミに言った、エミは笑顔になって頷いた。
「うん・・良く分ったよ、チャッピー先生」とエミは強い瞳で言った、私は嬉しくて笑顔で返した。
「繋がるんだ・・全部繋がるんだな」とカスミが真顔で言った。
「カスミ・・楽しめば良いんじゃよ、まだまだこれからじゃよ小僧の戦略は」と和尚が笑った。
「和尚、小僧の戦略って？」とキングが笑顔で聞いた。
「知りたければ、ワシを水曜の夜に誘ってくれ・・満足などから最も遠い者を見に来よう」と和尚がシワシワニヤで言った。
「そう言う事だから、ユリ予約よろしく」とキングが笑顔で言った、ユリさんが薔薇で頷いた。
全員がユリカを見ていた、ユリカは深海の瞳で微笑んでいた。
「しかし小僧・・幸せじゃの、蘭に出会えてエミちゃんに出会えた

んじゃから」と和尚が言った。
「全てはエミに伝えたいんだね・・それが最終目標なんだね～」と大ママが微笑んだ。
「私達を見てるって言った、もう1つの意味はエミが見てるって、言いたかったんだね」とハルカが笑顔で言った。
「俺も和尚と同じ感想です、小僧にとって捜し求めていた下の世代・・エミちゃんはその代表でしょうね」と豊がエミに微笑んだ、エミも嬉しそうに笑顔で返した。
「どうやって考えるの？・・その発想の方法が知りたい」とマチルダが私に微笑んだ。
「それは私も知りたいね～・・お願い」と蘭が満開で微笑んだ。

『別に特別じゃないよ・・ただ常に思った事を言葉にする。
誰も居ない所で、言葉にして自分で聞いて確認する。
瞑想もそうだけど、言葉にして確認しないと自信が持てないから。
俺は思ってるんだ、言葉に出来ない想いが大切なんだって。
ユリカの存在が教えてくれた、自分を誤魔化していたら忘れてしまうんだって。
当然、言葉に出来ない事も沢山あるよね。
特に夜の仕事をしてると、その部分が大きく成りがちなんだよ。
言葉にしないと、人は忘れてしまう。
だからこそ自分自身に確認させる、自分の想いを言葉にして自分に伝える。
蘭のように・・蘭は本当に心に従順なんだよ、心に常に問いかけるから。
だから一瞬で、相手の寂しさや悲しみを溶かせるんだね。
俺はシナリオを書いている、自分自身で確認しながら。
それは原作者に悟られないように、ユリカに隠したい部分を悟られないように。
理想の形を大まかに決めて、必要な事を考える。

それに自分の出来る事と、望む事を組み込む。
そしてゴールを目指さない、過程を楽しむんだよ。
走り出したら、状況は変るから・・理想とするゴールも修正する。
配役を勝手に決めて、全員が主役の物語を観る感覚。
俺がやるのは、舞台を諦めさせない・・途中で降ろさせない。
納得して舞台を降りて、次のステージに上がって欲しいから。
一人一人の忘れがちな理想を、思い出して欲しいから。
言葉にしなくて忘れてしまった、その本質を感じて欲しいから。
瞳の奥に残ってる理想、自分が求める世界を諦めてほしくない。
自分を否定したり、悲しみや寂しさに溺れないように。
俺は四季を見て常に感動してる、四季は夜街でトップクラスに存在してる。
でもその目標がブレない、金を稼ぐ事が最終目標じゃない。
夢と理想を追い求める、その姿に感動するんだ。
四季が卒業する時に、俺は絶対に泣くよ。
そして感謝する・・大切な事を見せてくれたと感じるから。
４人が各々追い求める世界に、踏出す背中を見送る時に。
あの空港でリンダの背中を見送った、あの気持ちが蘇ると思う。
前に進むとは何かを、その背中が教えてくれるから。
海に向かい機首を持ち上げた、あの青空に叫んだ言葉を。
四季の送別会でも叫ぶよ、感謝を込めて・・心から。
俺は関わった以上、途中棄権は許さない。
ここにいるメンバーには・・もちろんリアンでもユリカでも。
それが俺の４人娘に見せたい事だから、夜の女の背中を見て成長する。
エミ・ミサ・レイカ・マリア・・その可能性が俺の夢だから。
だから・・絶対にユリさんを絶望させない、ユリさんの存在を守り抜く。
俺の夜街に対する考え方の基軸・・ユリの生き方に挑めと誘い続ける。

美しさを身につけた・・その後の生き方を見せて欲しい。
俺はそれだけが望みだから、その楽しみの為に戦略を練っている。
見送る時に・・心から泣けるように、感謝できるように。
笑顔で・・背中を押せるようになりたいから』

静寂の中、蘭が満開の笑顔で私を見ていた。
私は想いのままを言葉にした、自分で感じていた、言葉が心を追い越したと。
「悪い事ばかりする中学生じゃない・・私はずっと見てるよ、エースの生き方を」とエミが少女の輝きで笑った。
私には最高の言葉だった、エミの強い瞳の言葉が響いていた。

晩夏の空は紅を飲込み、夜が支配を強めていた。
ユリカの深海の静寂を感じて、私は次のステップを意識していた。
自分のレベルを上げないと、絶対に到達出来ないと確信しながら。
頭の中で考えた、あるシステムを作り上げる為に。
ジンの提案を楽しむ為に、自分は完全に踏出して外に出ようと思っていた。
理解されなくて良い・・蘭だけが信じてくれるならと強く思った。
夏物語の終演を感じながら、大きな夢を追いかけていた・・少年のままで。

マチルダの送別会であるこの宴会で、私は感情の制御が出来ていなかった。
マチルダに魅せられていた、その強い意志に惹かれていた。
そしてジンに蘭が提案した事が、私の心を躍らせていた。
取組むべき物を与えられて、次なる目標設定が出来ていた。

私の未熟な想いは、全て４人娘に対する想いだったのだろう。
４人が各々違う道を進んだ、エミの強い意志に影響を受けながら。
そして誰も夜の仕事を選ばなかった、しかし私は１７年後に巡り会う。
３０歳の私の前に現れる、純白の少女・・【未来】を背負う者・・ミク。
その決断は憧れから始まっていた、ミコトのＤＮＡを強く受け継ぎ成長した。
最新型の白い少女が見せる・・【未来】
私は源氏名を本名の【未来】のままにして、読み方だけミライにした。
ミクは時代の葛藤の中に凛として立った、不況も夜街離れも鼻で笑った。
バブル崩壊後の夜街の方向性を示した、ハルカ・ミサキコンビに正面から挑んだ。
【激情の女王　ミク】・・時代の転換期に登場する女神。
その白い心が指し示した未来・・それは今に繋がったね。
ミクとの出会いを書きながら、原作者に感謝してたよ。

あの白い心を、私に三度提示してくれた事を。

ミク・・決断は必要無いよ・・心のままに進みなさい。

東京で成功することが、ミクの目的じゃないだろう。

東京ＮＯ１と認められた、今を目指したんじゃないだろう。

俺の想いは今日書いたよ、ミクの質問の答えはこの中にある。

包み込む白い温もり、崩壊が産んだ新しい感性・・常識を壊す微笑み。

認められる事を拒否し続ける者・・【未来】と表記される名前。

ミライと書いて・・ミク。

希望の笑み

夏の終わりを意識させる、爽やかな夜風が吹いていた。
送り出す大切な友人は笑顔だった、輝きを隠すこともなく笑っていた。
私は制御不能の心を楽しんでいた、伝えるべき少女の強い瞳を感じて。

「ありがとうエース、私達は最後まで全力を見せるよ・・そしてあの叫びを背に受けて、ステージを降りるね」と千春が美しく微笑んだ。
四季の４人の瞳が優しかった、私は笑顔で頷いた。
「蘭・・東京進出の鍵は、あなたとエースですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「はい・・頑張ります、私も挑戦者でいたいから」と満開の微笑で返した。
「いよいよ、その話が現実味を帯びるんだね」と大ママがユリさんを見た。
「東京進出ですか、凄いですね・・ユリさんは見せるんですね、その想いを」とジンが真顔で言った。
「ジン・・その時は力を貸してね、頼りにしてますよ」とジンを見て薔薇で微笑んだ。
「全力で頑張ります、期待に応えたいから」とジンも微笑んで返した。

「最高の夢が見れるんですね、常に考えていました・・東京で通用するのかと」とミコトが微笑んだ。
「私もそう思っていた、挑戦してみたかった」と千鶴が美しく微笑んだ。

「ユリ・・何年後を目指すのかな？」とキングが真顔で聞いた。
「5年後に設定しています、私もフロアーを離れられるでしょうから。
その時に真価を問います、カスミ・ユメ・ウミ・レン・シオン・ハルカに。
見せてもらいます、5年で何を感じて何を目標とするのかを。
私も東京進出は夢でした、でも夢に見た頃と今は違います。
通用する事を証明してあげたい、この街の全ての夜の女性達に。
そう思うようになりました、素晴らしい時代に生まれたと感じて。
そしてエースが今約束してくれましたから、私を絶望させないと。
あの言葉は東京進出の提案を、受けてくれたんだと思っています。
エースが受けるという事は、蘭も手伝ってくれるという事ですから。
その時の状況しだいですが、PGはナギサに任せます。
28歳のナギサに、リアンとユリカの今の年齢になったナギサに。
もちろんナギサがいればの話ですけど、蘭と私が東京に行くにはそれが必要です。
蘭とナギサの今回の挑戦状、私は本当に喜びを感じました。
そしてその本気の心が伝わって、決心が付きました。
第4世代が見せてくれます、蘭とナギサが宮崎のレベルを東京に提示します。
第2世代のリアンとユリカ、第3世代のミコトと千鶴の意志まで引き継いで。
大ママとミチルと私・・第1世代は最高の時を生きれると感じています。
私は東京で成功したいんじゃない、1つの作品を展示したい。
その作品を全員で作り上げて、東京で展示しましょう。
5年後・・エースが高校卒業して、蘭がリアン・ユリカの歳になった時に。

その時にもう1度このメンバーで集まりましょう、出来ればリンダも招いて。
そして互いに感じましょう、5年で何を得たのかを。
何が変りどう変化したのかを、私も全力で進みます。
4人の大切な娘達が見てるから、素晴らしい仲間が見てるから。
満足など所詮金で買うものだと、エースが支えてくれるでしょうから。
心を込めて作り上げましょう、大きなキャンバスに描きましょう。
大切な季節を賭けて描いた、作品を展示しましょう。
次世代の女性達に、託すバトンとして」

強い言葉だった、ユリさんの感情が全員に伝わっていた。
「ユリさん・・必ず到達してみせます、リアン姉さんとユリカ姉さんの精神世界に」と蘭が深い瞳で言った。
「私も全力でやります、その時に任される人間になれるように」とナギサも真顔で言った。
「私達もユリさんが何の気兼ねも無く、東京に行けるようにしてみせます」とカスミが言った。

「よし・・蘭・ナギサ、魅宴は2人を光臨させてやるよ。
いつでも来て良いよ、見たいんだろミコトとリョウを。
共に仕事をしないと、大切な物は感じない。
お前達なら分ってるよね、その大切さを。
私もユリもミチルも、リアンもユリカも、そしてミコトも千鶴も認めた存在。
蘭とナギサに賭けるよ、見果てぬ夢を見させてもらう。
どうだろう千鶴、ゴールドも許可を出してくれないかね？」
大ママが笑顔で千鶴に言った、千鶴は美しく微笑んで返した。

「もちろんＯＫです、こちらからお願いしたいですよ。
うちの女性達にとって、どれだけの刺激と勉強になるのか。
私も全力を見せます、作品に少しでも関わりたいから。
そして最新型を見せてあげます、バトンを託す存在を感じて欲しい。
蘭とナギサを見た時に、ミコトと２人で喜びを感じました。
リアン姉さんとユリカ姉さん、そして蘭とナギサに挟まれて。
ミコトと私は幸せを感じました、夜の仕事を選んで良かったと思いました。
蘭・ナギサ・・見せてあげて、次世代にその生き方を。
ユリさんに挑戦する、誇り高き女性として。
私は本当に楽しみに待ってるからね」

千鶴が笑顔で優しく伝えた、蘭とナギサの集中した顔があった。
「大ママ・千鶴姉さん、ありがとうございます」と蘭が満開になって頭を下げた。
「大切な経験をさせてもらいます・・そして盗みに行きます、よろしくお願いします」とナギサも華やかに微笑んで頭を下げた。
「うん、楽しみに待ってるよ・・エース、これでシナリオは進行したんだね」と大ママが私にニヤで言った。
「そこまでは私も考えていたんだけど、その次が分らないね～」とミコトが余裕ニヤを出した。

『ミコト・・蘭とナギサばかり優遇されて申し訳ないから。
ミコトもＰＧに光臨してよ、俺が今ユリさんの了解を取るから。
２面性を求めるなら、良い事だと思うよ。
他に類を見ない存在、命を背負う者・・ミコト。
その揺れない心を見せて欲しい、圧倒的余裕に隠された強さを。
魅宴だけで留まるのは惜しいから、それだけの価値のある存在だから。

ミコトの託すバトンは夜街全体に提示する物だと、ユリさんが言ったよ。
店の垣根など些細な事だと思う、全体が上がらないと意味が無いから。
そこからの勝負でしょ、俺はミコトが見たい。
俺が堂々と酒を飲める時には、存在しないであろう・・ミコト。
だから見たいんだよ、ＰＧのミコトを・・その時に追い求められないから。
俺の頼みを聞いて、絶対に追いつけない・・時間で後悔したくないから。
その圧倒的存在感・・命を背負い進む者・・ミコトを』

私はミコトの瞳を見ながら、強く言葉にした。
「もちろん私は大歓迎ですよ、どうかしら・・ミコト」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「ユリさん・・嬉しいです、勉強させてもらいます」とミコトが美しく微笑んで頭を下げた。
「よし・・この位で今日は良いのかい？」と大ママが私にニヤを出した。
『折角だから、わがままを追加していい？』と大ママにニヤで返した。
「遠慮するなよ・・心にも無い遠慮なんて」と大ママが楽しそうに笑った。

『次世代に提案する、そのトッププランナーの銀河の奇跡に。
ホノカがＰＧを経験する、俺は３人に全てを経験させてやりたい。
カスミに魅宴とミチルの店を、リョウにＰＧとミチルの店。
そしてホノカに魅宴を、経験させてやりたい。
そしてゴールドも、３人に経験させたい。
当然その時は、マユとセリカにも３店を経験してもらう。

今しかない、それが言えるのは・・今この時しかないから。
次世代に提案したい、そしてその経験で見せて欲しい。
未来の夜街の方向を提示して欲しい、銀河の奇跡と言われる者なら。
そしてこのシステムが起動に乗ったら、ユメ・ウミも経験してもらう。
もちろん魅宴もゴールドも、次世代を託す者を出してもらう。
今まで客の流れを考えて、ずっと守られてきた夜街の常識。
女性を外に出さない、客が流れるからという常識。
その常識を打ち破れるのは、女帝と言われる者だけ。
飛鳥とユリとミチルだけ・・今しかない、そのチャンスは。
最高の女帝が揃う、今この時しかない・・唯一無二のチャンス。
俺は強く主張しよう、全体のレベルが上がらないと駄目だと。
狭い世界で囚われていたら、未来は狭まっていく。
踏出してほしい・・女帝と呼ばれし者に。
その先に何があっても、進めるであろう強き人に。
だから共同体を作ろう、魅宴とＰＧとゴールドのクラブ。
そしてミチルとリアンとユリカのスナック、計６店で始めよう。
全ては次世代の為に、自分達が生きた世界の発展を願うなら。
踏出して欲しいんだよ・・お願いします・・アスカ』

私は大ママの真剣な瞳を見て、最後に心を込めてアスカと呼捨てにした。
大ママは私を見ていた、そして笑顔になった。

「なるほど、エースに呼捨てにされると嬉しいもんだね。
今まで取って置いたね、勝負所で使おうと決めてたね。
ＯＫエース、私は良いよ・・来週早々にも６人で集まろう。
もちろんエースも来なよ、そしてジンも来ておくれよ。
ジン・・分ってるだろうけど、エースはすでに走り出したよ。

夜の女性の派遣をするという、難しい問題に取り組みだした。
そしてその先に、東京ＰＧを視野に入れたね。
私も決めたよ、マダムと同じ道を歩むよ。
見たいからね、１０年後２０年後・・その先の夜街が。
夜の仕事を選んだ時に、常識は捨てたはずだった。
自分でつまらない常識を作り出してたんだね、反省したよ。
今初めて、女帝と言われるのが嬉しかったよ。
ＯＫエース、その時に提案を聞こう・・その未来図をね」

大ママの笑顔を見ていた、その大きさに触れて嬉しかった。
「エース・・必ず起業するからな、助けてくれよな」とジンが真顔で私に言った、私も真顔で頷いた。
「舞台は整ったね・・レンとハルカとミサキの研修に込めた想いが、成就するんだね」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「楽しみだね～、私もユリカも見せるよ・・出し惜しみなく全力を」とリアンが獄炎ニカで言った。
「どうしよう・・ワクワクが止まらない」とホノカが華麗に微笑んで。
「ホノカ・・余裕だね、私は緊張してるよ」とリョウが真顔で返した。
「とりあえず余裕を見せとこう、セリカの表情が怖いから」とカスミがセリカに不敵を出した。
「ばれました～・・銀河の奇跡、その奇跡に挑戦します」と流星の輝きを振り撒いて微笑んだ。
「ＯＫ・・でも本当に流星だね、流星のセリカ」とカスミが輝く微笑で返した、セリカも嬉しそうに微笑んで返した。
「エース、シオンはいつ頃デビューなの？」とセリカが聞いた。

『もう大丈夫なんだけど、暫くは受け入れ側がバタバタするから。
それが落ち着かないと、シオン投入で空中分解もあるし。

それにシオンには、もう少し感じて欲しい事もあるから。
１１月だね、最強の爆弾を投下するのは。
それまでは俺の先生でいてもらう、今の俺にはシオンが必要だから。
シオンは大切に送り出す、俺は寂しさを抱えて背中を押すよ。
シオンが自分で選んで、強い気持ちで歩き出す背中を押すよ。
その時にベストを尽くしたと、思いたいから。
それまで待ってもらうよ、情熱のフロアーに』

私はニコちゃんシオンを見て、笑顔で伝えた。

「先生ありがとう・・シオンはＰＧのエースが、１から作った作品だからね。
進む楽しさも、挑戦する喜びも、全部エースが教えてくれた。
そしてリンダちゃんを感じさせて、マチルダに会わせてくれた。
シオンはやってみるよ、今度こそ勇気を持って。
エースが強く言ってくれたから、シオンはそのままで良いと。
感じたままを表現すれば良いんだって、そう教えてくれたから。
シオンも塗るよ、ユリさんの言ったキャンバスに白い色を。
白は色だと教えてくれた、エースが贈ってくれた筆で塗るね。
シオンに・・もう守りはいらないよ、傷つくことを恐れないから。
リアンの愛とエースの想いが、私を守ってくれるから」

シオンが真剣な瞳で伝えてくれた、私は喜びの中にいた。
その詩の言葉が歌に乗って響いてきた、全員がシオンを見ていた。
シオンの本質を感じて、その可能性に心を躍らせたのだろう。

「シオン・・よく言ったね、完璧な詩の言葉だったよ」と蘭が最大の満開笑顔で言った。
「私も嬉しかった、そしてユリカの凄さを又感じたよ・・ユリカあ

りがとう、最高の源氏名をつけてくれて」とリアンが潤む瞳でユリカに言った。
「シオンって、漢字でどう書くの？」とセリカがシオンに聞いた。
「詩に音でシオンなのです、最高のお気に入りです」とシオンがニコちゃんで答えた。
「素敵～・・詩に音か～、まさにって感じね」とセリカも輝きを流して微笑んだ。
「私も聞いた時に感動しました、詩音・・英会話も詩の言葉だよ」とマチルダが笑顔で言った。
シオンはニコニコちゃんで頷いた、その美しさに見惚れていた。

「エース、リンダへの最後のお土産に教えて・・良い事ばかりする中学生じゃないと言った真意を」とマチルダが美しい真顔で言った。
エミが私を見た、強い瞳が私を促した。

『エミのお父さんが手術の日だった、俺は午前中にエミとミサを迎えに行った。
ミサが俺に飛びついて、その後をエミが歩いて来た。
その時にエミの瞳で感じた、必死に不安と戦っていると。
そして俺は驚いていた、ミサを抱き上げた時に鼓動で強く伝わった。
ミサはその感性で不安を感じていた、漠然とした大きな不安を。
でもエミもミサも、それを悟られないように元気な振りをしていたんだ。
俺も必死で2人を元気付けた、マダムとユリさんとハルカも一緒に。
エミは最も大切なミサを託されて、自分と戦っていたんだよ。
6歳のエミが必死で、そしてミサも姉に心配させないように必死だった。
ミサがお昼寝して、エミを泣かせてあげた時に伝わってきた。

その精神の限界を強い意志で乗り超えた事を、俺はエミに感動していた。
そしてその境地に立ったエミに、ミサを託して仕事に入ったんだよ。
遅れると連絡は入ってたけど、サクラさんが夜になっても来なかった。
ミサが寝てエミに2度目の限界が来た、そして抜け出し病院に向かうんだ。
俺はマダムに聞いて、エミが病院に向かった事は分った。
そして探しに出たんだよ、カズ君に自転車を借りて。
自転車を漕ぎながら考えていた、エミの2度目の限界はなぜ来たのかと。
あの境地に6歳で到達した、エミにどうして再び限界が来たのかと。
それは良い子でいようとする心、父の病、母の忙しさ、妹の寂しさを感じて。
母親に対して良い子でいようとする想いが、強すぎると思ったんだよ。
どうすればいいのか、俺は必死で考えた。
豊兄さんならどうする、ユリさんならどう伝えるだろうと考えていた。
考えが纏まらないうちに、橋橋を登っていくエミの背中が見えた。
俺は信号を無視して、車にクラクションを鳴らさた。
その音でエミが振向いた、俺はその顔を見て・・エミの強い眼差しで感じた。
そして思い出した、自分のやり方・・考えては駄目だということ。
エミの強い瞳が伝えてくれた、そして言葉でも強く伝えてきた。
その言葉が・・蘭の叫びと同じだった、蘭が叫んだ言葉と同じ強さだった。
そしてエミの心の叫び、父親に会いたいと叫んだ言葉に対して。

俺は会いに行こうって言ったんだ、そしたらエミが驚いた顔をして言った。
面会時間が過ぎているよと言ったんだよ、俺はその言葉で確信した。
エミを心を縛る最大の葛藤、ルールに対して従順過ぎる心だと。
だから良い子を過大評価する、それで疲れてしまうんだと。
俺はそのエミの心をを狙った、エミの心に抱える葛藤に対する弾丸を込めた。
エミに対する俺の愛情を、エミの後ろで蘭が見ていると感じたから。
正直に心を言葉にした、エミの良い子であろうとする心に伝えた。
俺は良い事ばかりする中学生じゃないと、強く伝えた。
だからどんな事をしても父親に合わせるから、一緒に行こうと。
面会時間が過ぎようが、医者がないんと言おうが必ず会わせると。
俺は強い言葉でエミの心に直接伝えた、全ての愛情を賭けてエミと向き合った。
豊兄さんならそうすると確信していた、絶対にエミの不安と葛藤を外すと。
自分もそうして貰っていたから、豊兄さんが心に直接伝えてくれてたから。
そして膝をついてエミに、両手を広げた。
ユリさんの最高の愛情表現を借りた、両手を広げ〔おいで〕と叫ぶあの言葉を。
信号待ちの車が照らす光る道を、全速力で賭けてくるエミを見て。
俺は幸せを感じてたよ、伝えられる存在に出会えた事を感じて。
エミを抱き上げて、夜空に聞いたんだ・・これで良いよね豊兄さんと。
そして月に囁いた、蘭・・俺の生き方はこうだよと。
あの言葉に真意なんてないよ、俺の想いを直接伝えただけだよ。
エミを抱いて電話ボックスに歩いた、河畔の電話ボックスに。

エミの穏やかな温度と鼓動を感じて、振向いて見た、エミの走り出した場所を。
その時確かに感じていた・・ヒトミの笑顔を感じていた。
そして6歳のエミの重みが蘇らせた、ミホの温度と鼓動を。
俺はそれからエミに執着している、エミは俺の心の芯を支えている。
ありがとうエミ・・叫んでくれて、強い瞳で伝えてくれて。
強く心に響いたよ・・エミの叫びが、俺を強く押してくれたよ。
今なら出来るかもしれないと、そう思わせてくれたよ。
小1で割算が出来る事より、勉強が出来る事より・・俺はエミの感性が好きだよ。
エミの言ったユリカのイメージ、あれで俺は羊水の揺り篭まで入れたよ。
エミの言ったあのイメージ、素晴らしい感性だと感動したよ。
リアンの温もりを【焚き火】と表現した心。
ユリカの温もりを【お風呂に浸かってる】と表現した心。
エミの心の表現が教えてくれた、だから聞こえてきたんだよ・・母の子守唄が。
エミは全てを吸収する、その心の表現方法は、シオンから吸収していたね。
ミサの強い感受性も、マリアの純白な心も・・そして今後レイカの純粋な心も。
全てはエミの強い意志に守られていく、エミが素敵な女性達から吸収して守る。
だから俺がエミに見せてやるよ、全ての夜の女性の本当の姿を。
エミが望んでいる・・サクラさんの本当の輝く姿もね。
その本気の女性達の姿が、俺がエミに伝えたい最大のメッセージだよ。
エミ・・自分を抑えないで、否定される事を恐れないで。
正しいとか間違ってるとかの、そんな判断基準じゃないよ。

エミには心に従って欲しい、そして表現してね・・詩音のように。
希望を背負いし者・・絶望から最も遠い存在・・エミ。
その小さな姿が見せる・・暗黒の中に射す一筋の光を。
俺は幸せだよ・・あの場所に行くと駆けて来るから。
強い意志を纏った瞳で、エミが全速力で駆けて来るから。
そして叫んでくれるから・・正しいって何なんだと。
エミが問いかけてくれるから・・俺も探してみるよ。
その答えを・・いつの日か、心の解答用紙に強く書けるように。
エミ・・エミらしく生きて・・俺はそれだけが望みだよ』

そうエミをを見て伝えて、泣いているエミを抱き上げた。
エミの暖かい温度が伝えてくれた、俺はただエミが愛おしかった。
マチルダの強い輝きが、エミを抱く私を包んでくれた。
蘭の青い炎が最大級で、私の周りを包んでいた。

終宴間近な空気に、寂しさは無かった。
エミの開宴の挨拶が、全員に響いていたから・・誰一人寂しさを抱いてなかった。

エミがミサ・レイカ・マリアに、与えた影響は計り知れない。
その最も大きな功績は、努力と思わせない心を植えつけた事であろう。

自分が取組む事に対し、エミは常に真摯に向き合った。
エミは学ぶ事を心から楽しんでいた、それは努力じゃないと言ってのけた。
ミサは久美子の魂の演奏を強く受けて、自らも音楽を選択した。

エミの影響を最も強く受けたミサは、音楽に対し真摯に向き合った。
レイカは学ぶ楽しみを覚えて、エミの背中を追い求めた。
レイカは現在遺伝子を研究している、その飽くなき探究心を味方にして。
環境の劣悪な地域でも栽培できる、穀物を日夜研究している。
マリアの事は・・後に表記しよう、簡単には書けないから。
この3人を支え続けたのが、エミの強い意志である。
そのエミの心には、出会った全ての夜の女性達が存在する。
エミは戦い続ける・・小児科の医師として。
悪質で悪戯な原作者のシナリオと、日々戦い続けている。
その心には確かに存在する・・青と緑の瞳が。
無駄だと思った時に、敗北が決まると言った・・リンダの心が存在する。
希望を背負いし者・・絶望から最も遠い存在・・エミ。
同じ時代に生まれてくれて・・ありがとう・・エミ。

外伝　薔薇の教え

１話だけ外伝を記します、被災した仲間を想って。

桜の花が儚く散り行く光景を、教室の窓から見ていた。
そこまで必死に走っていたのか、自分に問いかけていた。
１７歳の春・・私は葛藤の中に身を沈めようとしていた。

１３歳で家を出て、蘭と暮らす日々も４年を迎えようとしていた。
蘭とは争いも無く、楽しく充実した日々を送っていた。
２７歳の蘭は靴屋とＰＧの掛け持ちで、忙しい日々を楽しんで、青い温もりも増していた。
【最高の副職】の称号を、夜街全体に認めさせていた。
しかし自らは、常に自分らしく生活していた。

私はジンの立ち上げた、派遣会社を手伝って、夜の女性の派遣を起動に乗せた。
４月２日産まれの私は、高校の入学式の前に中型バイクの免許を取得していた。
そしてＰＧで稼いだ貯金をはたいて、蘭に保証人になってもらい。
一目惚れした、ＫＡＷＡＳＡＫＩのＦＸという４００ｃｃのバイクを新車で購入した。
豊兄さんの整備工場で徹底的に手を入れ、ＹＵＳＨＩＭＵＲＡのパーツを組みニヤニヤ全開だった。

田舎の子供は移動手段が少ない、だから自らが成長して動かすしかないのだ。
自転車に乗り、バイクから車に移行していく。
そのどれもが世界を広げてくれた、だから今でも機械に対しての思

い入れが強い。

あの頃の発展途上の機械には熱があった、エンジニアの葛藤さえも感じられた。
大量生産を第一にしなければならない、その現実と理想に立ち向かう熱があった。
それは多くの若者にとって、単なる移動手段では無かっただろう。
機械に対する愛情まで持っていた、生産側の熱に購入側の熱を吹きかけ疾走していた。

今と比較すると、信じられないほどの不便な機械に愛情を注いでいた。
私が２６歳の時に、スカイラインの３２ＧＴＲが発売された。
私はその全容を聞いた時に予約を入れて、新車で購入した。
納車されて初めて乗った時に感動した、助手席に座る蘭も感動していた。
よくぞここまでの物を発売したと、よく踏出してくれたと感じていた。

「嬉しくて・・泣きそうになるね。
私・・ケンメリに乗ってたから、最高の気分になってるよ。
青春の行き着く１つの形を見せてくれた、無為な時間も金も無かったよ。
たかが車だけど・・私は救ってもらった、ケンメリに助けてもらった。
弟が亡くなった時には、本当に優しく走ってくれたよ。
絶望しそうな心を、優しいエンジン音で励ましてくれた。
そして鋼鉄の体で包んでくれた、前に進もうと音で伝えられた。
大切に乗ろうね、ケンメリの子孫だから。
Ｌ型エンジンを引き継ぐ、この音は宝物だからね」

そう言って満開で微笑んだ、私も前を見て笑顔で頷いた。
私はこの３２Ｒから、エンジンに手を入れなくなった。
年齢でも情熱が冷めたのでもなく、失礼な事だと感じたのだ。
このエンジンに手を入れるのは、次世代の人間であって欲しいと思っていた。
給排気系と足回り以外ノーマルで乗った、思い入れの強い最後の機械である。

話を戻そう、高２の春に・・あの頃に。
その頃の私はミホに取組んで、３年目の春を迎えていた。
１５歳のミホは、外見は可愛い少女に成長していた。
マリアにミホに会わせたのが、その年の１月だった。
それ以来ミホは笑顔も出始めて、表情も豊かになっていた。
６歳のマリアは小学校に上がり、ミホの病院にもよく顔を見せてくれていた。
しかし私は大きな不安と戦っていた、ミホの最終段階が迫って来て怖かったのだ。
校庭の散り行く桜を見ながら、考えていた次の段階を。

「珍しいね～・・エースと呼ばれる男が居残りかい？」と後から声をかけられた。
私が振向くと、担任のマダム芹沢が笑顔で立っていた。
『マダム芹沢・・夕方も美しいですね』と笑顔で返した。
「さすがに夕方になると、夜街の会話になるね～」とニヤで言いながら、隣に立って校庭を見ていた。

芹沢真紀子・・年齢４３歳に見えない若作りが売りの英語教師。
夫と２人の娘を持ち、常に明るく前向きな人である。

気さくな性格が生徒の信頼を得て、特に女子生徒の間では相談窓口的存在だった。

『マダム芹沢は、なぜ教師になったんでしょう？』と私も校庭を見ながら聞いた。

「あんたみたいな、意味不明な人間に会ってみたかったからよ」と校庭の桜を見ながら、ニヤ顔で言った。

『俺が意味不明ですか～』と下校している生徒の背中を見ながら呟いた。

「意味不明でしょう、学校では気配を消してるし」と笑顔になって私を見た。

『素晴らしい生徒じゃないですか、問題起こさないし』とニヤで返した。

「学校は退屈なの？」と真顔になって私を見た。

『退屈じゃないですよ、刺激は無いけど』と笑顔で返した。

「私じゃ相談出来ないのかな？少し寂しいんだけどね～」と成熟した女を出して、笑顔で囁いた。

『マダム先生・・そんな事は無いですよ、まだ自分で整理出来てないんです』と真顔で返した。

「そうなのね、そういう時の最後の相談相手は、蘭ちゃんなの？」とニヤで聞いてきた。

『内容によります、蘭に心配かけたくない時は・・薔薇に相談します』と照れた笑顔で返した。

「薔薇か～・・聞くだけで素敵な女性ね」と言って視線を校庭に戻した。

その横顔を見ていた、目尻の皺が年齢を提示して、深い経験と乗り越えた強さを見せていた。

『真紀子・・俺の独り言を聞いてね。

４歳で両親と兄の死を目撃した少女がいる、その子はそれ以降全てを遮断した。
会話も自分の意志を提示する事もない、多分自分を守る強い防御本能だと思う。
今１０年以上が経過している、真紀子は知ってるから言うけど。
俺はその子に潜った、そして今やっと笑顔までは引きずり出した。
でも次の段階で悩んでいる、次の段階ではその記憶に触れないといけないから。
それをして良いのか・・考えてるんだよ。
でも遮断した今のままじゃ、絶対にいけないと思うんだ。
大切な季節だから、謳歌してほしいんだよ・・どんなに辛い過去を背負っても。
その子は学力はある、ＴＶをずっと見てるから常識もあると思う。
俺は間に合うと思ってる・・人はどんな状況からでもやり直せると知っている。
沢山の女性達が見せてくれたから、絶対に諦めるなと伝えてくれるから。
俺はその段階に踏み込むよ、それによりその子が闇に戻る事になっても。
その時は又１からやるよ・・俺の全ての愛情を賭けてでも。
一生を賭けてでも・・やろうと思ってるんだよ』

私は強い風に散る、桜吹雪を見ながら伝えた。
マダム芹沢も桜吹雪を見ていた、静寂の教室に春風が流れ込んで来た。

「教師として言えば・・医者に任せなさい。
人として言えば・・頑張って。
女として言えば・・急いで。
でも母として言えば・・母親ならば・・。

絶対にやりなさい・・結果を恐れずに、挑んで欲しい。
母親ならばそれだけが望みよ、たとえ死別しようが・・遠く引き離されても。
娘の幸せをなによりも願う・・それだけが真実よ。
迷うことは無い・・あなたの周りの女性達も、そして私も信じてる。
心の鍵を開けて、現実の世界に連れだして。
その世界がどんなに辛く悲しい場所でも、遮断してるよりはましよ。
私はそう思うよ・・人間として、女として、母として」

強い言葉で伝えてくれた、教師でない母親の言葉が響いていた。
マダム芹沢の背景に散る桜が、踏出せと叫んでいた・・人は散らないと伝えていた。
『ＯＫ真紀子・・終わったら、真紀子の垂れた胸で泣かせてね』と笑顔で言った。
「その時に教えてあげる・・張りのある胸の持ち主だと」と笑顔で返された。

私はマダム芹沢と教室を出て、学校近くに住む悪友のサトシの家に行った。
制服のままフルフェースのヘルメットを被り、ＦＸに跨りＰＧを目指し走った。
学校の前のバス停で、大きく手を振る姿が見えた。
同級生の沙織が、国道に出て両手を振って道をふさいだ。

『危ないぞ沙織・・轢くとこだった』とヘルメット越しに言った。
「送って、街まで・・バイトに遅れるの～」と笑顔を作って、必死さをアピールした。
『乗車料は？』とヘルメットで見えないがニヤで言った。

「女子高生の、豊満で張りのある胸の感触」とニヤニヤで返してきた。
『俺・・熟女好きだって知ってるだろ』と言って。
後頭部に【蘭】と大きく書いてある、ピンクのヘルメットを渡した。
沙織は笑顔で受け取って、それを被って後に乗った。

「たまには経験しなって・・若いのも良いよ～」と言いながら、私の腰に腕を回して強く密着した。
『案外良いかも～』と大きな声で言って、走り出した。
「マダム先生と怪しい会話してたでしょ？」と私にしがみつき、沙織が大声で言った。
『口説いたけど、振られたよ・・卒業まで駄目だって』と大声で返した。
「残念ね～、私の胸で泣く？」と笑いながら言った。
『お願いします・・沙織様～』と返しながら感じていた。
私は沙織に回復されていると、その若い時代を謳歌する姿に、背中を押された。
ミホに味わって欲しいと、その大切な季節を感じて欲しいと思っていた。

沙織をデパート前で降ろして、ユリさんのマンションに向かった。
入口の横にＦＸを止めていると、可愛い声をかけられた。
「いつ乗せてくれるの？自慢のバイク」とマリアが笑顔で立っていた。
６歳のマリアは可愛い笑顔で、私に不敵を出した。
『カスミしても駄目～・・お子ちゃまは乗れないの、転がり落ちるから』と笑顔で返して手を繋いだ。
「落ちないよ～、気持ちいいんでしょ・・バイク」と探りを入れてきた。
『もう少し大きくなってから、俺が責任重大で緊張するからね』と

笑顔で言った。
真新しいランドセルが、大きく感じるマリアの純白の笑顔を見ていた。

マリアが鍵を開けて、マリアの後ろをリビングに入った。
ユリさんが顔をパックしていて、真白い顔を見て2人で笑った。
「またパックして、それ以上綺麗になりたいのかな～」とマリアが笑顔で言った。
『マリア、地道な努力が大切なんだよ』と笑顔で言った。
ユリさんは無表情の白い顔のまま、大きく頷いた。

マリアがコーラとクッキーを出してくれ、それを食べながらマリアの宿題を見ていた。
マリアはひらがなの書取りを、真剣な表情でしていた。
『マリア、算数どこまでいった？』と書き取りの終わったマリアに聞いた。
「掛け算九九を覚えてるよ、エミ先生が厳しいから」と笑顔で返してきた。
『エミは小1の夏には、割算をしてたからね』とニヤで返した。
「伝説の夏物語ね、もう聞き飽きたよ」と笑顔で返された。
2歳の時の癖毛がどこにいったのか、それが分らない程のストレートヘアーを靡かせて。
6歳の少女の笑顔には、確実に天使が存在していた。

「学校帰りに来たのかしら？」と洗面所でパックを落としてきちた、ユリさんが言った。
『うん、・・少し煮詰まってて』と振向いて笑顔で言った。
「やっぱり・・変だったもん」とマリアが真顔で私を見た。
「ミホちゃんね・・いよいよその時が来たのかしら？」とユリさんも真顔で聞いた。

『その時が来ました・・今日担任に突っ込まれて、独り言を言ったんだけど。
母親としては、挑んで欲しいと強く言われて。
それで迷いが少し和らいで、帰りに同級生の女子高生をバイクに乗せて。
再確認しました、ミホにも味あわせてやりたいと。
その輝く素敵な季節を、一人の女性として謳歌してほしいと。
最後にユリさんの話が聞きたいんです、終戦後の・・その時の人々の本心が。
愛する者を奪われた人達が、どうやってここまで乗り越えて来たのか。
老人達に話は沢山聞いたけど、やっぱりリアル感がなくて。
ユリさんに聞きたい、俺の最後はユリさんしかいないんですよ』

美しい真顔の薔薇を見ながら、真剣に伝えた。

「わかりました・・私の感じてる事を話しますね。
マリアにも聞いて欲しいから、忘れてはいけない事実ですから。
私が物心付いた時が、終戦直後の混乱期でした。
私の実家は造り酒屋だったので、経済的には恵まれていました。
祖父も激戦地を免れて帰還して、父親も終戦間近に出征して戦地には行きませんでした。
祖父と父は無事に残った酒蔵を直して、焼酎の製造を目指していました。
町は混乱状態で、お金の価値はあまり無かったですね。
闇市以外は物々交換のような世界でした、皆生きるのに必死だったと思います。
愛する人を亡くした悲しみを、感じる余裕も無かったでしょう。
そんな時、私の母が一人の男の子を連れて来ました。

私は従兄妹だと紹介され、３歳年上の男の子の出現を喜んでいたと思います。
私の母親は長崎出身で、母の父親は造船技師だったそうです。
そしてあの原爆で、両親も姉も亡くしていました。
その男の子だけ助かったそうです、私は幼くてその事を理解できませんでした。
私と従兄妹は、まるで兄妹のように生活しました。
私は兄だと自然に思っていましたね、そして従兄妹も私を可愛がってくれました。
この話はその兄に聞きました、被爆して６年後に健康状態が悪化した時に。
医療設備も被爆という事実に対しての、経験も実績も何も無い時代でした。
私はその兄の話を書き綴って、今でも大切に取っています。
私の兄は、私の実家、鹿児島に疎開が決まっていました。
長崎は造船所があって、空襲が激しくなると予想されていましたから。
兄は疎開の前日、地元の仲間と最後の遊びに川に泳ぎに行ったそうです。
そして岩からジャンプして川に潜った時に、大きな音がして空が燃えた。
慌てて上がろうとする仲間を、必死に抑えて限界まで潜っていたそうです。
その時に下から何かが引っ張っていたと、水面に出るなと引かれていたと言ってました。
そして限界が来て、２人で水面に出た時に地獄を感じたそうです。
その焼ける匂いが初めて嗅ぐ物で、人が焼けていると感じた。
兄と友達は灼熱の山道を、焼けた人達の遺体を見ながら帰りました。
その地獄の光景の記憶が無いと言っていました、その位ショック

だったんでしょう。
そして家の有った場所に行くと、何も残って無かったそうです。
兄はどうしようもなくて、友達の家に行きました。
友達は家の合った場所の井戸の前で、立ち尽くしていたそうです。
「何も無い・・お前の家も無いな」と声をかけたら、友達が井戸を指差したそうです。
井戸を覗くと沢山の焼け焦げた人が重なっていて、強い異臭がした。
その井戸の中に、友達の母親が3歳の妹を抱いて焼けていたそうです。
2人で呆然としていると、後から駐在さんが叫んだ。
「生きてる奴が、生きんか！」と大声で叫んだそうです。
駐在さんも焼けながら、最後の力で叫んでいたと言っていました。
その言葉で兄が友達の手を引いて、山の上の子供の秘密基地行きました。
その場所に居たらいけないと、漠然と感じたと言っていました。
その秘密基地で、山菜などを採って生きていた。
7日後に友達の体調が悪くなり、兄はその症状が危機的なものだと感じていた。
その日の午後に人の気配を感じて、兄が木陰から見ると。
米軍の兵隊が5人、山に登って来ていた、兄は考えました。
その当時の教育は、敵国に囚われるくらいなら死を選べでしたから。
でも兄は友の顔を見て決心しました、友を助けようと走りました。
そして米兵の前まで行き、土下座して助けてと叫びました。
通訳の兵隊が上官らしい人に伝えて、友達を担架に乗せてトラックで町に下りました。
その時に初めて町の全様を見たと、その地獄の光景を見ながら感情を持てなかったと。
米軍の仮設キャンプに着いて、兄は服を脱がされ体を洗われまし

た。
そして着替えを貰い、ホットドックを手渡されたそうです。
そのホットドックを食べて、勝てるわけがないと確信したと言っていました。
どうしてアメリカと戦争などをしたのかと、怒りが湧いてきた。
物資も何もかもの桁が違うと、一瞬で理解できたと。
そしてアメリカ人の対応の優しさに驚いたと、兄は半年ほど健康状態を観察されました。
そして鹿児島に親戚がいると言うと、鹿児島に行く手配までしてくれました。
長崎を去るときに、何も無い焼け野原見て誓ったそうです。
もう1度戻って、町を取戻すと強く誓った。
原爆を投下したアメリカよりも、戦争に踏出した日本人が許せなかったと。
そして誰一人反対と言えない世の中が、許せなかったと言っていました。
兄はその年の11月に亡くなりました、私は最後の会話を忘れられません。
〔自分の思ったままに、感じたままに生きろ・・拒絶する強さを持て〕
そう言った言葉が今でも響いています、小6の私にも重い言葉でした。
私はそれから知覧に行き、特攻隊基地の歴史を勉強しました。
祖父母に聞き、文献を読んで・・なぜか?を知りたかった。
命を落とす覚悟をして、何を守りたかったのか。
それは国などではありません、ただ愛する者を守りたかった。
拒絶できない世界、それは愛する者を人質にとられていたから。
元来日本人は、静を美徳とする傾向を植えつけられました。
主張を許さない風潮は今もあります、体制に従えと要求します。
そこからはみ出る者を差別してしまう、常識という足枷をかける。

今の中学校の校則でも、私は違和感を感じる、同一主義が強く残る事だから。
人は各々違う、その個性を曲げようとする力に感じるから。
それが島国を運営するのに、適していると思ってる人が上に存在する。
日本が復興したのは、国民の力です。
愛する者の死を乗り越えて、必死に復興したのは国民です。
日本人の強さは、自らの手で復興した事でしょう。
人は負けない・・どんなに悲しい現実からも、やり直せる。
あの焼け野原・・０だった、０からの出発。
その全ての力の源は、一人一人の国民の意志だったと思います。
政治家でもアメリカでもなく、日本人の意志がここまで持って来た。
死が引き裂いた別れも、消えてしまった町も・・何もかも。
全てを乗り越えたのは、生きるという意志・・このままで終われないという。
焼けながら叫んだ、その駐在さんの言葉・・それだけが真実。
【生きてる人間が、生きんか！】・・これ以外の意味は存在しない。
人は乗り越えられると信じています、必ずやり直せると。
ミホちゃんの経験は激烈なものです、でも乗り越えられる。
なぜならば・・それがご両親とお兄さんの願いだから。
どんな状況も・・どんな悲劇も・・どんな不幸も。
乗り越えられる・・時がくれば、手を繋ぐ仲間がいれば。
人は産まれた時は０だった、ならば０からやり直せる。
悲しみや寂しさに涙した時間も、絶対に意味が有ったと思えると信じてる。
遮断を解き放ちなさい、私も母として言います。
解放してあげて・・ミホの閉ざされた心を。
現実がどんなに辛く悲しい場所であっても、生きるならばそれを

感じて欲しい。
祖先が繋いだ命のバトンを、無駄に終わらせてほしくない。
理不尽も絶望も乗り越えてきた、先人達に申し訳ない。
無駄だと言って、自らの敗北を認めない・・それが生きる事でしょう。
主張しても無駄だと思ったら、またあの特攻機に誰かが乗る。
そして焼け野原に立ち尽くす子供がいる、それだけは絶対にしてはいけない。
迷いを捨てなさい・・あなたは諦めないのだから。
何度でも挑み続けるのだから・・それが最後の挑戦者なのだから」
ユリさんの強い言葉が、私にもマリアにも響いていた。
春の日の夕暮れが迫っていた、公園から子供達の楽しげな声が響いてきた。
私は迷いを捨て去っていた、人は必ずやり直せると確信したから。

２０１１年３月１１日・・東北地方と関東を地震と津波が襲いました。
想定外の津波の大きさに、全てが飲込まれた状況を見ました。
エミが地震直後に、被災地に医療支援で入りたいと連絡してきて。
私はルートを探して、エミの案内で同行しました。
私も被災地に入り、その津波被害の大変な状況を目の当たりにして絶句しました。

被災者の皆さんの、避難所での大変な状況。
ライフラインの遮断、そして寒さ・・物資の遅れ、情報も無く不安な夜。
燃料の不足という大問題、医薬品も医療施設も被災している状況。
それにじっと我慢して耐えている高齢者の人々、肉親の安否が確認できない不安。

書き綴れば不満は相当にある、国の対応も・・原発問題も。

しかし私は被災者の皆さんを助ける、子供達の瞳の強さに驚きました。
自分から重労働をかってでる、高校生や中学生の男子のたくましさ。
避難所の手伝いをする、女子生徒の生き生きとした瞳。
自分自身も悲しみを抱えてるでしょう・・しかしすでに前を見ています。
私は元気付ける事もなく手伝いながら見ていました、その素敵な光景を。

そして切に願う、子供達の心のケアをして欲しいと。
阪神淡路大震災でも、日本人は復興してみせた。
その復興は前より良くしてみせた、悲しみを乗り越えて。
自然は常に過酷な試練を与える、その歴史は永遠に続く。
先人は乗り越えた、その理不尽な過酷さも・・そして繋げた命の絆を。

その根本に有る物・・人は一人ではないという事実。
今何も出来ないのなら、せめて義援金を贈ろう。
手を繋ぎ共に歩もう・・そして証明してみせよう、世界中の人々に。
保身しか考えない政治家や官僚や企業家に、見せつけよう。
絶対に諦めないと・・その意志を示そう。
そして強く叫ぼう・・被災してしまった仲間に、一人じゃないと叫ぼう。

太平洋から登る朝陽を見ながら、響いてきた・・駐在の言葉。
【生きてる人間が、生きろ】と強く響いてきた。
瓦礫の中にある、希望を探そう・・あの戦後から復興した、誇り高き日本人として。

そして冥福を祈ろう、不慮の死を遂げた仲間達の。
生命の根源である海が飲込んだ、大切な仲間達の・・。
今の悲しみの日々を、いつの日か乗り越えて欲しいと願う。

伝えることが仕事なら、その仕事に誇りがあるのなら。
マスコミの諸君・・もうやめる時期だよ、強い力の言いなりになるのは。
この情報化の時代に事実は隠せない、ジャーナリストなど日本にはいない。
専門家も解説者もいらない、言えない事があるのなら。

現場の人間は駒じゃないから、英雄視されても意味が無い。
情報統制はやめろ、その言い訳にパニックを回避したなどと言うのも。
その弊害で、ネットでデマが横行してるじゃないか。

つまらない心配は無用だ、被災者の救援に全力をあげろ。
原発は専門家に任せて、助かった命を救おう。

大丈夫・・この国は国民が復興してきた。
絶対に諦めない・・それが日本人だから。

最後にあの言葉を贈ろう、世界を巡り理不尽と向き合った、崇高な女性の言葉を。

無駄だと思った時に、敗北が決まる。

先住者の伝言

秋の香りを微かに感じる風が流れ込み、空間を爽やかに包んでいた。
誰もがユメを抱き、進むべき道を見据えていたのだろう。
発散する熱が高く、変化の季節の到来を感じていた。

私はエミを抱いて、その輝く少女の笑顔に包まれていた。
強い意志を示す瞳は、遠い未来を見ているように輝いていた。
「そろそろ終宴にしたいと思うけど、最後はどうしよう」と美冬が私に聞いた。
『マチルダと美冬とシオンで、サマータイムでしょう』と笑顔で返した。
久美子が私に微笑んで立ち上がり、ピアノに向かった。
マチルダとシオンが笑顔で立って、美冬が続いた。
銀の扉のアプローチに3人が立った、全員が笑顔で見ていた。

久美子が静かに前奏を奏で、マチルダが左右の美冬とシオンを交互に見た。
見事なハーモニーで歌い始めて、その歌声に全員の笑顔が包まれた。
久美子は徐々に力強くして、3人の気持ちを引っ張っていた。
間奏でまた聞いた事のない、強いアレンジで叫びの世界に誘った。
3人の見事なシンクロの歌声を聞きながら、久美子の教えてくれた、もう1つの意味を感じていた。
人種差別など感じた事のない、島国の田舎の子供にも感じる事ができた。
もちろんリアルじゃなかった、アメリカに渡りリアルに感じた時は辛かった。

夏の到来を喜ぶ歌・・確かに当時の黒人達にとっては、思い入れの

強い曲だった。
リンダが後に教えてくれた、差別と区別の違い。
区別が【事実】で差別が【真実】だと、生命が進化の過程で選択した色。
その事で区別も差別も有ってはならない、それは人間を否定する行為だから。
リンダはブルーの瞳を深めて、静かに伝えてくれた。
英会話の未熟な私にも、その瞳で強く伝わった。

今現在、確かに大統領のオバマも有色人種である、地位はあの頃よりも確実に向上した。
リンダとマチルダは、今のアメリカをどう感じているのだろうか？
2人ともアメリカを愛していた、真の意味での愛国者だった。
リンダの歌うサマータイムと、マチルダの歌うサマータイムは響きが違う。
伝えようとする想いが違うのだろう、私にはどちらも強く心に響く叫びだった。

拍手の中に3人の笑顔が咲いていた、全員が立って一人ずつマチルダに握手を求めた。
マチルダは笑顔でそれに答えて、次回の約束を一人一人と交わしていた。
ゲストが帰路につき、9人衆とシオン、ボーイにミサキとセリカで片付けをしていた。
私は会場の片付けを、カズ君としていた。
蘭は満開の笑顔で、ユリさんとマチルダと3人で6番に座り談笑していた。

「火曜の夜に連れてって・・復活前夜に」と後からユリカの声がした。

『了解、ユリカ・・双子話楽しかった？』と振返り笑顔で聞いた。
「素敵な話が沢山聞けたよ、嬉しかった」と爽やかに微笑んだ。
私はユリカの変化に驚いていた、静けさを纏うオーラがあった。
普段でも深い深海の瞳が、静寂を連れて穏やかな輝きを放っていた。

『ユリカ・・俺は後悔するのかも、ユリカをその場所に誘った事を』
と想いのままを言葉にした。
「大丈夫よ、あなたはそんな後悔はしない・・私が望んだ事よ」と
真剣な深海の瞳で言った。
『そうだね・・俺はユリカの望みに対して、反対も後悔も絶対しな
いよ』と笑顔で返した。
「忘れないでね、今の言葉・・私には大切な言葉だから」と爽やか
笑顔に戻った。
私はこの時の記憶が今でも鮮明に残っている、気温も匂いもはっき
りとある。
ユリカの他者を寄せ付けない、圧倒的な存在感が強く伝えてきたか
ら。
私はこの時に覚悟を決めた、ユリカに愛する人に巡り合えたと伝え
られる事を。

「まだよ・・その報告はまだ出来ないよ、あなたが最終段階に導く
までは」と爽やかニヤを出した。
『ユリカ・・その時は俺にちょうだいね、ユリカの分身・・愛する
妹を』と私は正直に言った。
ユリカの深海の瞳が見開き、大粒の涙が溢れた。
私はユリカを抱き上げて、引き寄せた時に感じた・・ユリカの妹の
存在らしき温もりを。
「そこまで考えていたの・・最終段階はそれなの？」と泣きながら
ユリカが囁いた。

『俺が本心で欲しいんだよ・・ユリカと離れるなら、愛するユリカの分身が。
俺に波動を伝えてくれるのは・・妹なんだろうから。
俺は勝手に名前をつけたよ・・ユリアって呼んでる。
ユリカ・・俺がユリアの了解とるから、一生側にいてもらう。
全てを見せるよ・・これからの挫折も葛藤も。
俺にはユリアが必要だから、教えてくれるから・・ユリカの伝言を。
羊水の箱舟・・百合香の言葉を』

私は笑顔を意識して、美しいユリカの瞳に伝えた。
ユリカも笑顔になって、頷きながら泣いていた。
「このまま、蘭の所に連れて行って」と爽やかニヤで甘えた。
蘭を見ると満開笑顔で見ていた、その横に薔薇の笑顔と輝くプラチナブロンドが見えた。
私は6番席にユリカを抱いたまま歩き、3人の前でユリカを降ろした。
ユリカは3人の前に凛として立ち、深海の瞳の最深部を深みを蘭に見せた。
蘭もユリさんもマチルダも、ユリカの何かに押されているようだった。

「私がこの仕事を選んだのは・・自分が本当に普通と違うのかが知りたかった。
私は学生の頃自分を偽っていたの、子供の頃に気持ち悪がられた経験がそうさせた。
でも卒業する時に考えたの、このままじゃ駄目だって思った。
だから本物の女性を探したの、そして巡り合えた・・大ママとユリ姉さんに。
仕事を初めて、かなりの部分を出せる事が嬉しかった。

否定されなかったから、大ママにもユリ姉さんにも。
そして巡り合えた・・リアンに・・嬉しかった～。
その規格外の自分を、理解して楽しむ女に出会って。
その奔放な心と、熱い魂が教えてくれたの。
隠していては駄目なんだと、私の心の壁を燃やし・・溶かしてくれた。
それでも全ては出せなかった、恐怖心が抜けなかったの。
でも今は・・今度は全開を見せるわ・・夜街で働く仲間に。
私を受入れてくれた大切な人達に・・百合の名を頂いた誇りに賭けて。
私は百合香・・水の百合香・・羊水の揺り篭、そこに響く母の子守唄。
エースから今称号を貰ったから・・私は羊水の箱舟・・百合香」
静かなユリカの熱い想いが溢れていた、３人はユリカを見て固まっていた。
蘭が満開の笑顔になって立ち上がり、ユリカの深海の瞳を深い瞳で見た。
「ユリカ姉さん、ありがとうございます・・見せてもらいます、大切な最高の副職という称号にかけて」と言って頭を下げた。
「ユリカ・・ありがとう、百合を大切にしてくれて」とユリさんも薔薇で微笑んだ。
「完全にまた１段上がりましたね・・羊水の箱舟、素敵です」とマチルダも輝く笑顔で言った。
「水曜が待ち遠しいですね、蘭」とユリさんが蘭に微笑んだ。
「はい・・早く来て欲しいような、もったいないような」と蘭も満開で返した。
『蘭・・もったいなくないよ、ユリカのＰＧが１度限りと決まってないよ』と私は蘭にニヤをした。
「もちろん、私もそうは思ってないよ」とユリカが私に爽やかニヤ

で言った。
「本当ですか！」と蘭が驚いて言った。
「エース・・その時の考えを述べよ」とユリカが最強ニヤで私を見た。
片付けの終わった女性達が、集まって来た。
『ユリカとリアン・・最低月1のPGと魅宴のイベントにしたい。
その時のユリカとリアンの店にも、大きなイベントを出す。
最強若手決定戦・・銀河の3人とユメ・ウミ・レンにハルカとミサキ。
その各々の個性を交代で楽しんでもらう、スナックでの会話勝負。
もちろん、蘭やナギサも1度は出てもらうよ。
ゴールドも参加歓迎だし、ゴールドにも送り込む。
そして俺の最終目標は、スナック百合を感じてみたい。
そして・・常に想像していた・・魅宴のユリが見たい。
本物の女王を見せてあげたい・・沢山の次世代の女性に』
私はユリさんの薔薇の笑顔を見ながら、全員に響くように強く言った。
「やっと言ってくれました、あなただけは私を特別扱いしないと思ってました」とユリさんが楽しそうに悪戯っ子を出した。
「ユリ姉さん・・本気なんですね」とユリカが驚いて言った。
「もちろん、全てのお店を経験させてね」と薔薇の微笑で返した。
「ちょっと待って・・ユリ、うちの店もかい？」と通路から大ママの驚きの声がした。
「大ママが了解してくだされば」とユリさんが薔薇継続で返した。
「駄目だなんて口が裂けても言うわけないよ、ありがとう・・ユリ」と大ママが微笑んだ。

『さてミチル、困ったね～・・クラブのミチルを見せないとな～』
と私は大ママの横に立つミチルにニヤを出した。
「誘うよね～・・嬉しいね～・・了解ＯＫだよ」と妖艶に微笑んだ。
「群雄割拠の中に次の最高の時が来る・・エースの考えが少し怖いよ」とマチルダが笑顔で言った。
「群雄割拠になった時に、誰が１番強く光ると考えてるのかな？」
と蘭が満開ニヤを出した。
『圧倒的熱量・・迷いの無い生き方・・そして愛に対して素直な女・・炎のリアン』とニヤで返した。
「そうなんですよ、リアン・・あの子の熱は周りが熱いほど、燃え上がる」とユリさんが言った。
「炎を纏い歩く姿が又見れるんですね、今日でも相当強かったけど」
と蘭が満開で微笑んだ。

「エースはリアンの事を、外見は１番タイプだと今でも堂々と言ってるから。
エースのリアンに対する愛情は、他とは全く別の物ですね。
海竜の件はもちろん、リアンには強く響いてるけど。
なんと言っても、シオンの変化でしょう。
そしてリアンの最も不安に感じていた、シオンの将来。
その不安と寂しさを、エースが一撃で全て破壊しましたから。
添い寝の約束で、リアンに確信させましたから。
シオンの選ぶ道を、リアンに認めさせた・・愛情に満ちた言葉で。

あの時のリアンの喜びは、私も初めて感じたものでした。
リアンは愛に対して本当に素直な女です。
今のリアンはシオンの為でも蘭の為でもなく、エースの望むことだかから。
自分の全てを曝け出すでしょう、愛に対しては愛で答える女だから。

圧倒的熱量で来ます、全てを溶かすでしょう、今のリアンの熱は。
ユリ姉さんも蘭も私も、見た事が無い熱でしょうね」

ユリカの強い言葉に、静寂が訪れていた。
「エースお願い・・私達もバラバラで良いから、スナックを経験させて」と千秋が言った。
『もちろんＯＫだよ・・個人勝負するんだね』とニヤで返した。
「それが望みだよ・・私達は夜の仕事をした経験を、誇りに感じていたいから」と魅冬が微笑んだ。
『ＯＫ・・シオンがデビューしたら、最初四季のヘルプをしてもらうよ』とニヤニヤで返した。
「私達のヘルプって！」と千春が驚いて言った。
『俺は四季のコンビネーションに、いつも驚かされている・・四季は個人としても、トッププランナーだと確信してるよ』と笑顔で返した。
「よろしくお願いします」とシオンがニコちゃんで頭を下げた。
「シオンやめて・・緊張するから」と千夏が笑顔で言った。

「正直に述べよ・・群雄割拠の時代で、１番期待するのは何？」と蘭が満開ニヤで言った。
『もちろん・・詩音、詩の言葉・・歌の会話』と笑顔で返した。
「こりゃ～まずいね、ちっと銀河も作戦練ろうかね」とカスミが不敵を出した。
「カスミ、可愛いバージョン徹底的に教えるよ」とホノカが華麗ニヤを出した。
「気持ち悪いからやめて、カスミの可愛いわ」とリョウが涼しげニヤで追いかけた。
「うるさい・・魔性の女」とカスミが最強不敵で返した。
「カスミ姉さん、魔性は盗まないんですか？」とセリカが流星ニヤでカスミを見た。

「セリカ・・まさか魔性を会得しようと思ってる？」とカスミが不敵継続で返した。
「はい、可愛い魔性ぐらいないと、シオンのコンビになれませんから」と笑顔で返した。
「流星のセリカ・・確かに最新型だね～、楽しみだね～」と蘭が満開で微笑んだ。
「はい、なんと言ってもエースに全裸を見られましたから～」と最強流星ニヤで返した。
静寂が全てを支配した、蘭がゆっくりと振返り私をウルで見た。

『いや・・その・・映像で少し・・後姿を』と私は慌てて蘭に言った。
「良かったな～・・今夜、蘭姉さんの全裸が見れるね～」とカスミが最強不敵で言った。
「映像で見なさい・・胸はもっと大きいから、忘れるなよ」と蘭が満開ニヤで言った、私は笑顔で何度も頷いた。
全員の笑い声で、最後の終宴になった。

ＰＧを出て、通りでマチルダとカスミが抱き合った。
その別れの姿を見ていた、カスミの涙が輝いていた。
そして蘭とマチルダが抱き合って、蘭の青い炎が包んでいた。
お互いに言葉は無かった、その見詰め合う瞳で会話していた。
出会った時に約束した【次回】を、２人で確認してるようだった。

私は蘭とカスミと、ユリカとマチルダの乗るタクシーを見送った。
タクシーが通りを曲がり、見えなくなった。
「うし・・明日も仕事だ、頑張るぞ～」とカスミが強く言葉にして、寂しさと闘っていた。
『カスミ・・マチルダはカスミに出会えた事が、１番の思い出になったよ』とカスミに言った。

「私もだよ・・今年の夏、マチルダとお前に出会えた事がね」と笑顔で言って、タクシーに乗った。
私は蘭と手を振って、カスミのタクシーを見送った。

「カスミ・・素直に言葉が出だしたね、素敵な言葉が」と蘭が満開で私を見て、強く腕を組んできた。
『さぁ行こうかね、イルカちゃんに会いに』と笑顔で返した。
「会えるかな～・・ねぇ確立はどの位なの？」と蘭が満開で聞きながら歩いた。
『最近はかなり低いよ・・でも蘭なら会えるよ』と笑顔で言いながら、靴屋の駐車場に着いた。

『蘭・・隠してるから、服の下に水着を着なよ』とニヤで言った。
「うそ！・・泳ぐの、夜の海で」と蘭が驚いて答えた。
『本当にイルカを感じたいんなら、海に入らないとね』とニヤで返した。
蘭は最高の満開笑顔になって、ケンメリのトランクからバックを出して助手席に入った。
私は助手席の横に背を向けて立ち、強い波動を楽しんでいた。
≪ユリカの水着姿・・楽しみ～≫と心で囁いて、強い波動を楽しんでいた。
蘭が着替えて出てきて、私は後部座席のバスタオルの入った袋を取った。

「全てにそつがないね～・・行こう、行こう」と言う満開蘭に手を引かれて通りに出た。
通りに出てタクシーに乗って、マス爺の店に行った。
『マス爺・・第二段』と奥でＴＶを見てるマス爺に声をかけた。
「おう・・今夜は最高じゃよ・・しかし綺麗な女ばかり連れてくれな～」とシワシワ笑顔で言った。

「嫌ですわ～・・もう、正直なんだから～」と蘭が嬉しそうに、営業トーンで返した。
「もしや・・最近和尚が通う店の方かな？」とマス爺がニヤで聞いた。
「はい、ＰＧの蘭で～す」と蘭が笑顔で答えた。
「ワシも今度、和尚と同行しよう」とシワシワニヤで言った。
「お待ちしてます・・今夜イルカちゃんに会えますかね～？」と蘭が満開のまま聞いた。
「君なら会えるよ・・会いたいと思う気持ちが、本心ならの」と笑顔で返した、蘭は満開笑顔で頷いた。

私は蘭と手を繋いで、小船の前に蘭を乗せてモーターのチェックをしていた。
蘭は満開継続で、ワクワク感が見ていて分った。
『蘭・・怖くないね？出発するよ』と笑顔で声をかけた。
「何も怖くない・・何も欲しくない・・海に出よう」と美しい真顔で言った、私も真顔で頷いた。
大淀川の真ん中を、河口に向かいゆっくりと進んだ。
橋をくぐり人工的な照明が遠ざかって、海の波が月光に照らされて輝いた。
蘭は海を見ていた、風に靡く蘭の髪から、蘭の香りがしてきた。
海と川の境を、ゆっくりと波を交わしながら進んだ。
波の影響を受けない場所から、速度を上げて目的地を目指した。

海の上には星屑が散らばり、入道雲の先端を照らしていた。
静寂の世界にモーター音だけが響いて、私と蘭の２人だけの世界に入った。
「これだけで充分だよ、この世界だけで最高だよ」と蘭が前を見たまま大きな声で言った。
その時に私は気付いた、併走してくる美しい輝きが右後に見えた。

その数に驚いていた、１０頭はいる群れが遊ぶように付いて来た。
『蘭・・本当にこれだけでいいの？帰ってもらう彼等に』と大声で言った。
蘭は驚いて振向いた、私は視線で方向を教えた。

蘭がその方向を見た、腰を少し浮かし見つめていた。
月光を受けて光る、泳ぐために進化した表皮が何頭も水面に出ていた。
蘭は見つめたまま、その深い瞳から大粒の涙を流していた。
私は目的地に到着して、ゆっくりと碇を沈めて、照明を下に向けた。
イルカ達は船の周りを、大きく円を描くように泳いでいた。
蘭はただそれを見ていた、青い炎を最大にして何かを伝えてるようだった。

『どうかな蘭・・素敵でしょ』と蘭の横に座り笑顔で言った。
「素敵過ぎる・・本当に他の物は何もいらない」と満開になって私に抱きついた。
『周回がもう少し狭まったら、海に入ろう・・そうすれば彼らの方から来るから』と蘭の耳元に囁いた。
「本当の事なのね・・彼らと同じ場所に入れるの？」と蘭が潤む瞳で聞いた。
『大丈夫・・俺も子供の頃に経験したから、こっちに敵意がなければ来るよ』と囁いて返した。
蘭が最高の満開になって、腕の力を強めた。
私も蘭を抱きしめて、楽しそうに、遊ぶように泳ぐイルカ達を見ていた。

そして１頭のイルカが近付き、顔を出してこっちを見た。
私は驚いて見ていた、右目の上に大きな傷のあるイルカだった。
マチルダの時にジャンプを見せてくれた、あのイルカがこっちを見

ていた。
蘭はそのイルカの瞳を見て、小刻みに震えていた・・蘭の感動が伝わってきた。

『ＯＫみたいだね・・合格したね俺達、海に入ろう』と静かに蘭に言った、蘭は私を見て笑顔になり頷いた。
私はＴシャツとジーンズを脱いで、先に静かに海に入った。
蘭が服を脱ぐのを待ちながら、感じていた・・至近距離にいる事を。
蘭が水着になって、私の所に来た、私は蘭が降りてくるのを優しく支えていた。
蘭が海に入って、私の首に腕を回した。
『蘭・・感じる・・すぐ側にいるよ』と耳元に囁いた。
「うん・・感じる、温かいんだね」と囁いて返してきた。
『蘭・・怖くないなら、ゆっくり泳ごうか・・月に向かって』と囁いた。
「うん、怖いものなんてないよ」と言って腕を外した。

私は蘭の横を、ゆっくりと平泳ぎで泳いだ・・近付いてくる温もりを感じながら。
「くる！」と蘭が私に言った時に、私と蘭の間に光る背ビレが浮き上がった。
その時の蘭の喜びの表情が忘れられない、確かに何かを感じているようだった。
そして蘭も何かを伝えてるようだった、私は蘭の表情でイルカの力を確信した。
その圧倒的な癒しに触れて、人は誰でも何かを感じるんだと思っていた。

蘭は意を決して、優しく背ビレを触った・・イルカは優しく並走を続けていた。

蘭の瞳は潤んでいた、その温もりで分かり合っているようだった。
そしてイルカ達が見せてくれる、神秘的なその存在を。

私達の間のイルカが深く潜り、速度を上げて大きなジャンプを見せてくれた。
そして私達の横を6頭のイルカが、全速力で駆け抜けて。
見事なジャンプを披露してくれた、私は呆然と浮いて見ている蘭を、優しく抱き寄せて支えた。
「人は海から産まれたんだね・・そう確信したよ、本当に温かい仲間なんだね・・イルカちゃん」と蘭が月を見ながら大きな声で言った。

蘭の背景にある、月光が海に照らす一筋の光る道。
その輝きを見ながら、私は誓いを思い出していた・・月光を追いかけようと。
暗黒の深海の色にも、恐怖を感じる事は無かった。
生命は確実に繋がり、連鎖してると感じていた。

「死を恐れる事はない・・だから生きる事を恐れる事もない・・和尚様の言葉、今理解したよ」と蘭が囁いて瞳を閉じた。
私は蘭の唇に唇を重ねて、伝えていた・・愛していると。

いつの頃からだろう、イルカの数が減ってしまった。

私の幼い頃は、船釣りに出ると確実に遭遇していた。

サーフィンで沖に出た所で、遭遇したりしていたのだ。

都会から来るサーファー達は、一瞬驚き、その姿を見て歓喜の声を上げていた。

私はその度に感じていた、私達は間借りしていると。
先住者の動物達の場所を、暫くの間、借りているのだと思っていた。
サーフィンもバイクも、私に大切な事を気付かせてくれた。
自分が間違えば、死に至る可能性がある事を感じさせてくれた。
私は先日、被災地を後にしながら、大切な事は何かと考えていた。
準備する事だと、それは物質的な事だけでなく、精神的な事まで。
その時に自分の判断に従えるように、自分を最後まで信じられるように。
あの美しい海岸線が、必ずいつの日か復活して、人々の笑顔で溢れると信じている。
あの夜の海で感じた・・イルカ達の声が、今も響いている。
生きる事を恐れなくてもいいと・・そう優しく伝えているから。

最後のピース

夜空に輝く無数の星の光が、海面に映り幻想的な世界を演出していた。
月光は一筋の道を描き、希望ある未来を提示しているようだった。
昼間の熱が冷める水温が、海の仲間の温度で上がっていた。

私が抱く蘭は、不安の欠片も見せずに満開の笑顔を出していた。
元々日南出身で、泳ぎの得意な蘭にとっては、深さの知れない事にも恐怖を感じなかった。
私は蘭の笑顔を見ながら、完全な解放を感じていた。

「どうしてあんなに優しい目をしてるんだろうね・・不思議な気分だった」と蘭が満開で言った。
『マチルダも見た時に、泣いてたよ』と笑顔で返した。
「何も考えずに、ただ泣けたよ・・幸せだった」と蘭が強く抱きついてきた。
海の中で密着する私達の体は、水着しか着けていなかった。
私はその事を全く意識していなかった、蘭との関係はそこまで進んでいた。

私と蘭は体の力を抜いて、海面に浮いていた。
海はその大きさと深さを想像できない程、広く穏やかだった。

「船で添い寝して、夜空を見よう」と蘭が満開で微笑んだ。
私も笑顔で頷き、蘭を先導して泳いだ。
私が先に船に上がり、蘭を引き上げてバスタオルを渡した。
蘭は体を拭いて、服を着た後に水着を脱いだ。
私も体を拭いて、腰にバスタオルを巻いて着替えた。

シートを広げると、欄が満開で寝転んだ、私は蘭の首に腕を通して添い寝した。

「成人の日だったら、寒かったね」と夜空を見ながら蘭が囁いた。

『うん、でも空気が澄んでて・・星が凄いんだよ』と私も夜空に囁いた。

「お別れするの？・・どうやるの？自分の中で」静かな優しい蘭の声が響いた。

『お別れはしないよ・・そんなに強くないから。

ただ忘れないって伝える、そして自分の心の別の場所に案内する。

そこには沢山の仲間がいるから、幼くして逝った仲間が笑顔で待ってるから。

物理的に会えなくなった寂しさを、嘆いたりしたら悲しませるから。

俺は和尚の弟子だから、ずっとそう言い聞かされていたから。

それが出来ないのなら、小児病棟に行ったらいけないと。

死が全てを別つのではないと、常に言われていた。

だから俺は自分なりに考えて、次の段階に進んだと思うようにしてる。

次のステップに進んだと、次のステージに上がったんだと。

俺に死別の本当の寂しさを教えてくれたのも。

生きるという事を考えさせてくれたのも。

楽しむ事の大切さを教えてくれたのも。

時間の大切さに気付かせてくれたのも、ヒトミだから。

ヒトミの想いが俺には残ってる、蘭を愛する時も。

ユリカやカスミとの関係も、リンダやマチルダに対する想いも。

俺の行動の全ての問いかけは、最後にヒトミにする。

俺は約束したんだよ、ヒトミが見てると言ったから。

だから全てを見せる・・ヒトミとチサに。

生きるという事の素晴らしさを、他人を愛する事の素晴らしさを。
そして原作者と戦う姿を・・・だから寂しくないんだ。
直接会えなくても・・見てるから。
感じてくれると、信じてるからね』

静寂だけの世界に呟いた、夜空の星を見ながら、蘭の温もりに包まれながら。

「私の弟に対する悲しみに・・いつ気付いたの？」蘭は静かに夜空に囁いた。
『合鍵を渡された時・・あの時の蘭の瞳で感じた、悲しみを背負っていると』と私も静かに答えた。
「そうなんだね・・ありがとう、大切にしてくれて」と蘭が私の方を向き、笑顔で言った。
『俺も嬉しかったよ・・ベンチの話を聞いて、出会った意味すら感じたよ』と笑顔で返した。
「うん・・原作者の粋なシナリオに感謝したよ」と満開に微笑んだ。
『そうだよね～・・俺は皆が言うように、人との出会いだけは運が良いんだよ』と微笑んで返した。

「そうじゃないよ・・あなたが出会いを大切にするからよ。
その心のままに言葉にするからよ、私の時もリンダの時も。
カスミやユリカ姉さんの解放も、ナギサの復活も。
3人娘の成長も・・でもね私が1番凄いと思ってるのは。
ユリさんの変化だよ、今のユリさんを見てると楽しくなるよ。
今夜のあのユリさんの言葉、あれは本気だったよ。
あなただけはユリさんを特別扱いしないって、本心で喜んでた。
私には分ったよ、多分・・大ママもミチルママもユリカ姉さんも。
大ママのあなたに対する想い、私は今夜それに感動したよ。
あなたのシナリオを後押しする、大ママの言葉を聞いていて。

大ママにとってユリさんは特別だから、だからこそ自分の決断を言ったの。
ユリさんを絶望させないと強く言った、あなたの言葉に撃たれたのよ。
あの言葉は・・五天女にも、ミコト姉さんと千鶴姉さんにも強く響いたよ。
そして私にも・・ＰＧの女性全てに、強く響いたよ。
競うことの本質を、あなたが提示してくれるから。
ユリさんの生き方に挑めと教えてくれるから、その頂に挑戦しろと背中を押すから。
私達は常にそうあなたに言われて、最高の時代に生きてる喜びを感じるの。
あなたの今夜の話、それで全てを理解したよ。
あなたはステージを諦めさせない、中途半端に挫折させないんだね。
それがあなたの愛情表現なんだって、全員が分ったと思うよ。
見返りを求めるなと、言われ続けた人間の重い言葉だった。
理子さんが帰る時に私に言ってくれたよ、羨ましいって。
ミコト姉さんも含めて、あの会場にいた全ての人が羨ましいって。
主張を出来る場所があるから、それが羨ましいと言ったよ。
そしてミコト姉さんが言った、私はまたミコト姉さんの凄さを感じたよ。
主張できる状況を作り出してるのは、あなただと言ったから。
あなたはその状況が１番大切だと思ってるって、ミコト姉さんが言ってくれた。
私はその言葉で気付いたよ、ＰＧの変化・・それを支えている物。
あなたのユリさんとの絡み、本気の部分と冗談の部分。
その両方で作り出してるんだね、そして強く言ってるんだね。
主張しろと・・自分の想いを言葉にしろって言ってるんだね。
あのユリさんの言葉のように、自分の言葉で伝えろって。

上手く言えなくていいから言葉にしろって、強くあなたが言ってるんだね。
そして開眼させた、カスミをその世界に連れ出した。
カスミの今の言葉・・本当に素敵だね・・優しさに溢れてるね。
誰かの真似じゃないね・・カスミの心の言葉だね。
そしてユリカ姉さんの変化・・その圧倒的な言葉の力。
私は聞いていて幸せになるよ、ユリカ姉さんの言葉は強く響くから。
だから私は本気になれる、満足を求めないから。
辿り着いた場所にあなたがいて、ニヤニヤしながら次を提示するから。
だからね・・1つだけお願い聞いて」

最後に蘭は私を見ながら、満開ニヤをした。
『何かな～・・怖い』とウルで返した。
「シズカに会わせて・・心が止まらないの、シズカに会いたいの」
と蘭が真顔で言った。
『なんだそんな事か、良いよいつでも』と笑顔で返した。
「本当に・・良かった～・・じゃあ明日の夕方、場所はユリカ姉さんの店で」と蘭が夜空に言った。
強く暖かい波動が何度も来た、私はユリカの喜びを感じて嬉しかった。
『了解・・ユリカも喜んでるよ』と笑顔で返した。

「うん、なんとなく感じたよ・・嬉しいな～。
見返りを求めるなって弟に言える、その女性に会ってみたかった。
そしてユリカ姉さんにも、会って欲しかった。
あなたに最大の影響を与えた人を、直接感じて欲しかったの。
私は幼い頃から本当に欲しかったの・・妹、シズカだけが妹になる女性だから。

そしてユリカ姉さんも、妹だと感じられる唯一の存在だと思うから。
私もユリカ姉さんも、完全復活の最後の出会い・・それはシズカだと確信した。
豊君のあの言葉で・・強く優しいあの言葉で」

蘭は夜空の星に強く言った、ユリカに伝えるために。
最大の熱を帯びた喜びの波動に、私と蘭は包まれていた。

「どうやって連絡するの？」と蘭がニヤで聞いた。
『マキに電話するよ・・マキが１番強く伝えるから』と笑顔で返した。
「ねぇ・・マキちゃんも来ないかな～？」と蘭が満開で微笑んだ。
『招待すれば、絶対来るよ・・てかマキは近々ＰＧに来ると思ってるよ』とニヤで返した。
「あの話・・マキちゃん本気だと感じたの？」と蘭が驚いて聞いた。
『本気だよ・・マキは本気じゃない事を、豊兄さんに言ったりしない』と真顔で返した。
「素敵～・・私、本気で嬉しいよ」と蘭が満開になって笑った。

『俺は感じていた・・ＰＧで仕事を初めた時に。
マキがこの場所を見たら、絶対に挑戦するだろうって。
ずっと自立にこだわっているから、俺はそれを肌で感じてきたから。
マキとハルカのコンビ・・いつも想像してたよ。
どんなに素敵な仲間になるのかって、マキが求め続けた物を持ってるから。
ハルカはその強い意志を示すから・・マキは感動するよ。
そして最強のコンビが誕生する・・ハルカとマキ、強い意志で進む者。

俺は想像していた・・そしていつかマキをＰＧに連れて来ようと思っていた。
マキが豊兄さんに言ったって事は、自分の中で挑戦を決めている。
蘭に出会って感じたんだね、自分の求めてる物が存在するって。
全力を出せる場所と、認めて欲しいと思える人がいる場所を。
俺は本当に楽しみなんだよ、マキがＰＧを見た時の喜びが想像できるから。
蘭もそう思ってるんだろ・・マキの魅力は感じてるんだから』

私は正直に気持ちを話した、蘭は満開で私を見ていた。
「うん、出会った瞬間に感じたよ・・そして今思ったよ、ハルカの喜ぶ顔が浮かんで来たから」と満開のまま抱きついた。

『じゃあ蘭、俺の提案を聞いて・・俺が今から確認を取るから』とニヤで言った。
「何？何？・・早く～」と蘭が急かせた。
『今からにしないか・・迎えに行ってユリカの家に行こう・・シズカをマチルダに会わせたいから』とニヤで言った。
強烈な波動が来た、喜びに満ちていて了解したと感じた。
「うそ！いいの？・・ユリカ姉さんは？」と蘭が嬉しそうな満開笑顔で言った。
『ＯＫだって・・蘭も良いね？』と笑顔で聞いた。
「もちろん・・最高に嬉しいよ」と蘭が満開で体を起こした。

満開蘭に急かされて、碇を上げて帰路についた。
「当然、私は何度もここに来れるのね？」と蘭が満開笑顔で聞いた、私も笑顔で頷いた。
小船を桟橋に泊めて、マス爺の店に足早に行った。
マス爺に支払って、電話を借りた。
駄菓子屋の婆さんが電話に出て、私は事情聴取を少し受けてマキが

代わった。

「どうしたの・・寂しくて、私に会いたくなったね」とマキが言った。

『うん・・今から出れる、シズカを誘って』と返した。

「本当の・・本気で言ってるの？」とマキが嬉しそうな声で言った。

『うん、シズカにもマキにも会わせたい人がいるんだ』と答えた。

「了解・・私も蘭さんに話したい事があった、迎えに来るんだね」とマキが言った。

『うん・・今マス爺の店、タクシーで迎えに行くよ』と返した。

「１５分で準備するから・・絶対に来いよ」と言って電話が切れた。

私はマス爺と談笑してる蘭に、【ＯＫ】とサインを出した。

蘭の最高の満開が咲いて、マス爺との話に蘭が点火して盛り上がっていた。

私は少し緊張しながら、久々にシズカに会える事が嬉しかった。

ユリカの波動が何度も来て、急かされていると感じていた。

タクシーが来て、マス爺に礼を言って蘭を後に乗せた。

私は前に乗って、駄菓子屋を目指した、蘭のご機嫌は頂点で満開が続いていた。

駄菓子屋が見えた時に、道路に2人の人影が見えた。

久々に見るシズカの笑顔があった、私も笑顔でシズカを見ていた。

タクシーが止まり、ドアが開いた瞬間にシズカが飛び乗り蘭に抱きついた。

蘭も最高の笑顔で、シズカを抱きしめていた、そしてマキが笑顔で乗って出発した。

「蘭さん、ありがとうございます・・小僧がお世話になります」とシズカが顔を上げて言った。

「シズカちゃん・・ありがとう、私は今最高に嬉しいよ」と蘭が青い炎を最大にして微笑んだ。
「もったいない・・この馬鹿にはもったいないです、蘭さんは」とシズカも笑顔になって言った。
「そんな事はないよ・・私には素敵な妹が3人も出来たし、本物の弟もできたから」と蘭が優しく言った。

蘭の瞳の深さに、シズカもマキも嬉しそうに笑っていた。
「小僧・・遅いぞ、なぜ恭子とマキが先に会うのかな～」とニヤで言った。
『身内は恥ずかしいだろ・・思春期だから』と笑顔で返した。
「蘭さん、いつもこうなんですよ・・都合の良い時ばかり、思春期とか反抗期とか使って」と蘭に微笑んだ。
「ね～・・私もそう思うわ・・最後に未熟だってウルウルしたり」と蘭が満開ニヤで言った。
「まだそんな作戦してるのかい、少し成長したと思ったのに」とマキがニヤで言った。
「でも成長したね・・嬉しかったよ、あの豊君の嬉しそうな笑顔の意味が分かったよ」とシズカが優しく言った、私は嬉しかった。

タクシーがユリカのマンションに着いて、蘭が支払い降りた。
「なんか緊張するような、素敵なマンションですね」と蘭の横を歩くシズカが微笑んだ。
「2人に会わせたい人がいるの、小僧を成長させている素敵な人に」と蘭が満開で微笑んだ。
2人とも嬉しそうに笑顔で頷いて、エレベーターに乗った。
「それに・・シズカちゃんにはマチルダに会って欲しかったの、明日ニューヨークに発つから」と蘭が微笑んだ。
「本当ですか、良かった～・・会いたかったんです」とシズカも嬉しそうに笑顔で言った。

エレベーターが着き、ユリカの部屋に歩いていると、ドアが開いてユリカが出てきた。
ユリカの嬉しそうな笑顔を見ていた、シズカもマキもユリカを見ていた。
「よく来てくれました、お待ちしてました」と爽やかに微笑んだ。
「はじめまして、小僧の姉のシズカです、こっちは幼馴染のマキです」と笑顔でシズカが言って、２人で頭を下げた。
「よろしくね、本当に会えて嬉しいわ」と爽やか笑顔で言いながら、部屋に案内した。
リビングに通されて、シズカもマキもその夜景に目を奪われていた。
マチルダは風呂のようで、私はユリカがマチルダに言ってないと思ってニヤしていた。

「紹介しますね・・ユリカさんです」と蘭が満開で言った。
「よろしくね」とユリカが爽やかに微笑んだ。

「よろしくお願いします・・でも驚きました、豊君に聞いてたけど。
実際に会ってみると、本当に凄い透明感ですね。
小僧は幸せな人間ですね、蘭さんに出会えて、ユリカさんに出会えて」

シズカがユリカを見ながら、嬉しそうに微笑んだ。
「本当に素敵な１６歳だね、もう一人の恭子ちゃんも想像できますね」とユリカも嬉しそうに返した。
「ユリカさんも、夜のお仕事なんですか？」とマキが真顔で聞いた。
「そうですよ・・今スナックをしてます」と爽やか笑顔で返した。
「マキが凄く興味を持ってて・・挑戦してみたいらしいです」とシズカも真顔で言った。
「本気なら・・絶対に出来るよ、私も小僧と同じ物を感じたよ」と

蘭が満開で微笑んだ。
「今度、蘭を尋ねると良いですよ・・私のお店にも3人で遊びに来てね」とユリカが微笑んだ。
「嬉しいです・・蘭さん、よろしくお願いします」とマキが頭を下げた。
「ねぇ提案・・私と蘭には姉さんを付けて呼んで、そうしてほしいな」とユリカが2人に微笑んだ。
シズカもマキも嬉しそうに笑顔で頷いた。

その時洗面所のドアが開き、マチルダが鼻歌混じりで出てきた。
「こら～・・マチルダ、その恰好は何～」と蘭が叫んだ。
マチルダは上半身にバスタオルを巻いて、下半身は下着姿だった。
「え！・・蘭姉さん」と言って、こっちを見て私の存在を確認した。
「旅立つ前に・・エースに最後のサービス」とニヤで言って、慌てて部屋に消えた。
「もう・・アメリカ人は解放的過ぎるよ」と満開で微笑んだ、全員が笑っていた。
「素敵ですね～・・でもエースは言い過ぎですよ」とシズカが言って、マキが笑った。
「女帝と呼ばれる人が命名したのよ」と蘭も嬉しそうに笑顔で返した。
「そういう事は得意ですから・・唯一の才能ですか」とシズカが笑顔で返した。

バタバタとマチルダが服を着て、慌てて出て来た。
シズカが立ち上がり、笑顔でマチルダを見た。
「待って、言わないで・・もしかしてシズカちゃん」とマチルダが輝く笑顔で言った。
「はい、シズカです・・マチルダさん、よろしくお願いします」とシズカが笑顔で頭を下げた。

マチルダはシズカに抱きついて、輝きを増してシズカを見ていた。
「ありがとう・・最後に最高の出会いがあったよ」とマチルダが微笑んで、体を離した。
シズカも笑顔でマチルダを見て、嬉しそうに頷いた。

「お姉さんでも、小僧って呼ぶんだね」と蘭が満開で微笑んだ。
「はい・・小僧も私をシズカって呼捨てにしますから」とニヤで返した。
「それは、線引き的な想いなの？」とユリカが笑顔で聞いた。
「そうですね・・私は人として小僧と接していたいから、ある時に線を引きました」とシズカが真顔で答えた。
「ある時を聞いていいの？」とマチルダが真顔で聞いた。

「はい・・それは、小僧が最初の友を見送った時です。
その時に豊君やマキや恭子の対応を見て、羨ましかったんです。
その直接伝え合う行動が、私は実の姉だから甘えが出るんです。
私にも小僧にも・・だから線引きをしました。
自分の中で・・小僧の事を、キチンと人として接したいと。
この子の最も優れている、伝達方法を自分でも感じたいと思いました。
それから私は小僧と呼んでいます、豊君やマキや恭子と同じ愛情を込めて。
ある意味で・・小僧は私達の、夢を背負っていますから」

シズカの言葉を、ユリカも蘭もマチルダも真剣に聞いていた。
私はシズカが言った、今日からあんたは弟じゃないと言う言葉を思い出していた。
「マキちゃん・・夢を教えて」とユリカが深海の瞳で言った。

「小僧はその才能に自信が持てなかった・・そう私達3人と豊君は

感じてました。
小僧がもし真の意味で自分と向き合って、そして自分と和解して。
自分に自信を持てたら・・その姿が見たかったんです。
小僧にしか出来ない事を、常に見せられましたから。
小児病棟と施設の子供達との関係で、その豊を追い続ける強い意志で。
常に命と向き合う、その姿で見せてくれました。
小児病棟の子供の想いを、親のいない子供に伝え。
親のいない子供の想いを、小児病棟の子供に伝えた。
そして双方の子供の強い意志を引き出した、その小僧の姿を見ていました。
皆さんご存知の、ヒトミとの関係。
私達は通夜でヒトミの母親の話を聞いて、帰りに3人で泣きました。
素晴らしい弟を持てた喜びに・・だから成長を願ってました。
そしてミホに対する挫折を知った時に、強く感じました。
そんな事で諦めてほしくないと、小僧と本気で向き合った帰り。
3人とも感じていました、小僧がある意味で私達の夢なんだと。
いつか必ず・・小僧なら・・ミホの笑顔を引き出すと信じています。
この前豊君に、小僧がミホに再挑戦するとい言った時に感じました。
小僧は真の意味で、自分と向き合えたんだと。
蘭さんや、今の小僧を取り巻く人達が教えてくれたんだと。
それで良いんだと、言ってくれたのだと感じました。
私達の夢は・・最後まで諦めないでほしい。
小僧が自分で選んだ道を、諦めないでほしいんです。
常識の外側に存在する、小僧という存在。
その挑戦し続ける姿こそが、私達の見果てぬ夢なんです」

マキは最後に私を見た、その真剣な眼差しで感じていた。
シズカとマキと恭子の想いを、窓に映る夜の大淀川に映像が映った。
ベッドに座るミホが、夜空を見ていた・・寂しそうな瞳に胸が締め付けられた。
必ず会いに行くよと誓って、映像を切った。

「本当に素晴らしい・・どうしたら、どうやったら１６歳でそこまで行けるの？」とユリカが言った。
「１つ年上に、圧倒的存在がいましたから・・嘘や言い訳を絶対に許さない本物が」とシズカが真顔で答えた。
「そうなんだね・・あの背中をずっと見て来たんだね」とマチルダが微笑んだ。
「はい・・全てを意志と行動で教えられました、冷めていたら駄目なんだと」とマキも笑顔で言った。
「マキちゃん・・もう1度聞くね、本気で挑戦してみたいの？」とユリカが深海の瞳で聞いた。
「はい・・そう強く思っています」とマキは即答した。

「蘭・・ユリ姉さんの喜ぶ顔が見えるね」とユリカが蘭に微笑んだ。
「はい、ユリさんとハルカの喜びが、今から楽しみですね」と蘭が満開で返した。
「ユリさんという人が、最高峰にいらっしゃるんですね」とマキが笑顔で聞いた。
「そうよ・・会えば分る、そして決断を迫られるよ」と蘭が真顔で言った。
「大丈夫です・・蘭姉さんに出会って、今夜ユリカ姉さんに出会ったから・・迷いはないです」とマキが真剣に返した。

「マキちゃん・・高校は？」とマチルダが聞いた。
「今は通信制で、お昼にアルバイトをしてます」と笑顔で答えた。

「それなら・・すぐにでも来れるの？」と蘭が驚いて言った。
「はい・・誰も反対はしませんから、小僧が親父さんの許可を取って、夜街に残れるのなら」と言って私を見た。
『了解マキ、許可を必ず取るよ・・俺はマキなら絶対に出来ると信じてるよ』と笑顔で返した。

「いつ面接に来れる？」と蘭が満開で微笑んだ。
「明日の夕方、お伺いしたいんですけど」とマキも微笑んで返した。
「それなら私のお店においで、私がユリさんに紹介して、あなたの身元保証人になるから」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「いいんですか？」とマキが驚いて言った。
「もちろん、ただ覚えていてね・・あなたの保証人は私だという事を」とユリカが深海の瞳で言った。
「ありがとうございます・・絶対に汚さないように頑張ります」とマキが深々と頭を下げた。
蘭の満開の笑顔と、マチルダの優しい笑顔と、シズカの嬉しそうな笑顔が見ていた。

マキの瞳には迷いは無かった、私は嬉しさを感じていた。
蘭の満開の笑顔を見ていた、その背景の夜景にヒトミの笑顔を感じながら。

私はマチルダとの別れを感じて、寂しさと闘っていた。
エミのあの開宴の言葉が無かったら、辛い感情でいたと思う。
ユリカが保証人だという事の意味を、マキはＰＧに入って実感する。
そして最後まで、ユリカの名前を汚すことはなかった。

情熱の舞台に、最後のピースが揃う日が迫っていた。

シオンのデビュー後にマキがサインを繋ぐ、そしマキが大きな影響を与える。

久美子に・・限界トリオを憧れていた久美子が、マキと触合い感じていく。

情熱の表現の方法を、マキがその生き方で見せる。

魂の演奏に強い熱が加わり、久美子は燃え上がる。

その演奏が後押しする・・ＰＧの夏は永遠に続くのだと。

灼熱の１２月を連れて来る、魂の音が木霊する。

そして開花する時もすぐそこに来ていた・・ハルカがその存在を主張する。

その強い意志で・・大輪の蕾を見せる。

薔薇と満開の微笑みに包まれた・・大輪が開花を迎えようとしていた。

命の言葉

暗い川面に乱反射する、ホテルの明かりが揺れていた。
夏の終わりを感じる事は出来なかった、熱い心で温められていた。
先を歩く美しい女性を感じて、少女達の気持ちも高ぶっているようだった。

「シズカちゃんの、将来の目標は？」と蘭が満開の微笑みで聞いた。
「エンジニアを目指しています・・女らしくないけど」と少し照れて笑った。
「素敵じゃない、女性もどんどん、そういう世界に出て行かないとね」とマチルダが笑顔で言った。
「アメリカには、女性のエンジニアが沢山いますか？」とシズカも笑顔で聞いた。
「まだまだだね～・・自由の国と言われるけど、案外閉鎖的な所もあるから」とマチルダが真顔で答えた。
「エンジニアでも色々あるよね～・・どんな系統？」とユリカが微笑んで聞いた。
「設計がしてみたいです・・理想は航空機です」とシズカが笑顔で答えた。

「良いね～・・物を作る仕事は」と蘭が満開で微笑んだ。
「私も憧れるな～・・自分には無い感性だから」よユリカが爽やかに微笑んだ。
「私・・え～い、言って良いですか？」とシズカらしく照れて笑った。
「何を遠慮するの・・妹のくせに」とユリカが楽しそうに微笑んで、蘭とマチルダも楽しそうな笑顔で頷いた。

「マキ・・ユリさんに会う時は、本気で伝えないと駄目だよ。
私達なんかじゃ、出会った事も無い本物の女性だよ」

シズカがマキを見て言って、私にニヤを出した。
「シズカちゃん・・まさか！ユリさんが尋ねて来たの？」と蘭が驚いて言った。
私は完全なる凍結状態で、ユリカもマチルダも驚いてシズカを見ていた。

「はい・・先日、お見えになりました。
小僧と蘭姉さんの事と、小僧の今の仕事の事を話してくれました。
内容は言えませんが、あの頑固親父が嬉しそうに聞いていました。
母もユリさんに感謝して、仲良くなって・・楽しそうでした。
今度ユリさんの家に、遊びに行くと言ってました。
ユリさんが最後に言っていました、小僧が必要だと・・真剣に。
もちろん蘭姉さんにも必要だけど、自分にも必要だと。
そして、今のお店にも・・そして3人のお子さんがいるんですよね。
その子達の為にも・・必要だと言われました。
だから小僧の話を、先入観無く聞いて欲しいと頭を下げられました。
私は感動しました・・ユリさんに会った時に感動しましたけど。
その言葉の美しさに触れて、表現方法に触れて・・感動しました。
そして今夜、蘭姉さんとユリカ姉さんに出会えて・・確信しました。
だから・・どうしても今謝りたいんです。
私はもっと暗い世界を想像してました、夜の女性の世界を。
訳ありで・・どこか投げやりな、女性達の世界のような。
マキが挑戦したいと言った時に、私は間違ったイメージだと感じました。

そして、ユリさん、ユリカ姉さん、蘭姉さんを見て・・反省しました。
私は今ここでお詫びしたい・・そうしないと、本気で甘える事が出来ないから。
私の持っていたイメージは、差別的な考えでした。
本当に申し訳ありません・・もちろん今度ユリさんにもお詫びします。
私は今・・本当に頑張れと、マキの背中を押せます。
そして・・心から姉さんと呼びたい、ユリカ姉さんと蘭姉さんと。
そしてマチルダ姉さんと・・許して下さい、私の独善的な考えを。
そして、マキをよろしくお願いします・・マキは絶対に期待に応えます。
本当にごめんなさい・・私が間違っていました」

私は久しぶりにシズカの言葉を聞いていた、絶対に感じた時に処理する強さを。

「シズカ・・今回だけ許します。
でもイメージで差別意識を持たないでね、それだけは約束して。
あなたのその感性・・そしてその勇気に、本当に感動したよ。
私は今、本当に嬉しい・・出会えたから、捜し求めた妹に。
それも2人も・・いえ3人に出会えたから。
その心の処理の方法・・最高だと感じました。
ありがとう・・私は姉として本当に嬉しいよ」

ユリカが深海の瞳を向けて、厳しく優しく言った。
蘭もマチルダも笑顔で頷いた、マキが優しい瞳でシズカを見ていた。
「ありがとうございます・・やっとスッキリしました」とシズカも微笑んで返した。
「それも豊の教えなの？」とマチルダが笑顔で聞いた。

「私達の今の基本は全てそうです、そして小僧の教えでもあります・・感じたら伝えろ、その事は」とシズカが真剣に答えた、

「あなたの幸運に嫉妬したよ・・これはＰＧのある女性が言った言葉なの。

豊に会った時に、小僧に言ったんだよ。

私は今あなたたちに言うね、あなた達の幸運に嫉妬したよ」

蘭が満開で微笑んだ、シズカもマキも笑顔で頷いた。

「豊は２人にとって、どういう存在なの？・・凄く聞きたいな～」とマチルダがニヤで言った。

「私にとっては・・兄ですね。

私が１番付き合いが長いからでしょか、物心付いた時には側にいました。

弟の小僧との関係より、長い付き合いですね。

豊君の評価は個人差がありますが、否定的な人間が多いのも事実ですね。

でも豊君は全く気にしないんです、人の評価とかどう思われるとか。

私はそこに１番憧れます、どうしても人の視線を気にしてしまうから。

そして今の話みたいに、間違って感じて、それを頭に植え付けてしまう。

その傾向が強い事を、それを改善するのが今の自分のテーマです。

その事に対して・・気付いたらその時に謝れと、豊君に言われました。

時を逃したら駄目だと、自分自身が許せなくなるから。

そう伝えてくれました・・厳しい言葉と、その行動で。

嘘や言い訳が絶対に通じない存在・・大切な兄です」

シズカは笑顔で言った、嬉しそうな笑顔だった。

「私には・・どちらかと言うと・・父親に近いです。
私は家庭の事情で、祖母に預けられました。
小１の夏に転校して、今の駄菓子屋で暮らしています。
その時は人見知りで、内気な子供でした。
駄菓子屋だから子供が集まるんだけど、馴染めずに一人で部屋で遊んでいました。
その時突然、部屋に豊君が来て、私の手を引いてシズカと恭子に会わせてくれました。
それからです・・子供の世界に入れたのは。
仲良く遊べと言って、何日か側で見ていてくれました。
私はあの行動力に憧れます、心に従う強さに。
そして守ってくれる時の、安心感・・その優しさと温もりに。
生き方で伝えてくれる・・大切な父ですね」

マキで笑顔で答えた、美しくなったと感じていた。
「カスミには聞かせられない・・嫉妬で意地悪しそう」と蘭が満開で微笑んだ。

「カスミさんの言葉ですか・・嫉妬。
私が挑戦したいと豊君に言ったら、カスミさんに会ったら決意できるよと言ったから。
会うのを楽しみにしてます・・私・・自分に似てる性格の人に会った事がないので」

マキが少し照れながら、笑顔で言った。
「確かにそんな感じがあるよね～・・自分を曲げない感じが」とマチルダが微笑んだ。

「多分・・カスミの方が喜ぶよ、マキちゃんの登場は」とユリカも爽やかに微笑んだ。
「感じてみると良いよ・・カスミとハルカを」と蘭も満開で微笑んだ。
マキは嬉しそうな笑顔で、何度も頷いていた。

「シズカちゃん・・本題に入るけど、お父さんと小僧の対面はどう思う？」と蘭が真顔で聞いた。
「蘭姉さん、大丈夫ですよ・・今の小僧なら」とシズカが笑顔で答えた。
「良かったね・・最高の人にお墨付きを貰って」とユリカが私に爽やかニヤを出した。

「それで・・いつ会うの？」とシズカが私を見た。
「水曜日の夕方にしようと思ってる」と私は真顔で返した。
「火曜の夕方にして・・お願い」とシズカが微笑んだ。
「別に良いけど・・なぜかな？」と笑顔で返した。

「ユリカ姉さん・・その時、お店を貸していただけませんか？
小僧の和解の場所に・・それから頑固親父をＰＧに誘います。
親父は客として・・実は和尚に、火曜日ＰＧで待ってるように頼みました。
親父は和尚の話だけは、素直に聞けるから。
見せてあげたいんです、親父は悪いイメージなど持つ人間じゃないけど。
見て欲しいんです・・小僧が必要とされる場所を。
そして親父が娘のように可愛がった、マキの挑戦する場所を。
そうすれば・・親父と豊君が認めて、マキを応援すれば。
マキは何の気兼ねも無く挑戦出来るから、１６歳でその世界に挑戦するから。

もちろん接客はいつになるか分らないけど、私は自分が出来る事をしてあげたい。
マキの船出に・・出来る事をしてあげたい。
ユリカ姉さん・・我侭な妹の頼みだと思って、お願いします」
シズカはユリカに深々と頭を下げた、マキはシズカを見て目を潤ませていた。
「もう頭を上げて・・それは姉にお願いしてる感じじゃないよ・・もちろんＯＫよ」とユリカが爽やかに微笑んだ。
シズカは嬉しそうに笑顔で返した。

「蘭姉さん・・同席しないといけなくなりましたね～、緊張が顔に出てますよ」とマチルダが微笑んだ。
「平気よ・・緊張なんてしません・・少ししか」と蘭が満開ニヤで返した。

「それに対しても提案があります・・和尚の提案ですけど」とシズカがニヤで蘭に言った。
「シズカ・・怖い」と蘭が満開ウルで返した。
「蘭・・覚悟を決めなさいね」とユリカが蘭に爽やかニヤを出した。

「蘭姉さんと頑固親父の出会いは・・親父の指名で始めようと和尚が言いました。
蘭姉さんの接客を感じてもらおうと、和尚は真剣に言いましたよ。
蘭姉さんの素晴らしい接客で、親父が絶対に感じ取ると。
プロならば・・ＰＧのＮＯ２と豪語するのなら、出来るはずだと。
ユリさん以外は知らないから、客として接客してほしいと。
生臭は・・蘭姉さんの事を想って、言ったのだと思っています。
私も影から見てますから・・出来ますよね～。
蘭姉さんなら・・そう信じています」

シズカは蘭の驚いた表情を見ながら、最後にニヤを出した。
「もちろん・・出来るわよ・・生臭の奴～意地悪してやる」と蘭が満開不敵で笑った。
「さすが和尚様・・リアンと2人で見に行かないと」とユリカが爽やかニヤで言った。
「エース・・ちゃんと見といてね、楽しみがまた増えた～」とマチルダが輝きニヤを出した。

「シズカ・・ありがとう」マキがシズカに笑顔で言った。
「何言ってるの・・頑張って、小僧をよろしく」とシズカも笑顔で返した。
「なんで毎日が、こんなに楽しいんでしょう」とユリカが爽やかに笑った。
「私・・すぐに帰ってくるかも～」とマチルダも輝く笑顔を見せた。
「私も・・楽しい・・やって見せる、プロですから～」と蘭も満開で笑った。
「良いな～マキ・・これから楽しそうで」とシズカも笑っていた。
「私なぜか、ワクワクしてきました～・・小僧に意地悪できるし」とマキもニヤで笑っていた。
私は一人でウルウルしながら、その5人の笑顔を見ていた。

「ごめんね、時間大丈夫・・怒られない？」と蘭が2人に言った。
「全然大丈夫です・・マキが迎えに来たから、私はマキの部屋に泊まると思ってますから」とシズカが微笑んだ。

「私の祖母は、私の事を信じてくれてますから・・夜の仕事も賛成してくれました。
それに小僧が電話してきて、シズカと出かけるのを見てましたから。

明日、小僧の事情聴取されるのが、怖いですけど」

マキも笑顔で言った。

「小僧の事・・皆、心配してるんだね」と蘭が満開で微笑んだ。

「寂しいんでしょうね・・特に家の祖母は、駄菓子屋で子供の面倒を小僧がみてましたから」とマキが微笑んだ。

「出来の悪い子ほど、可愛いと言うでしょう・・あれです」とシズカがニヤで言った。

「それは分るね・・とってもよく分る～」とユリカが爽やかニヤで言った。

「不思議なんですけど・・ユリカ姉さんみたいな人が、小僧と関わるのが」とマキが笑顔で聞いた。

「潜って見せてくれたの・・私の記憶に無い世界を、だから小僧が可愛いの」とユリカが爽やかに微笑んだ。

「なるほど、そうですか・・成人女性にも出来るのですね」とマキが笑顔で返した。

「3人で私だけその経験が無いんです・・ケチだから」とシズカが私にニヤで言った。

『なぜシズカの本質を俺が知りたがる・・怖いだけだろ』とニヤで返した。

「マキちゃんは、どんな感じで言われたの？」とマチルダがマキに微笑んだ。

「私が中学に上がる時に、入学式の前日でした。

小僧が珍しく部屋に来て、勝負しろって言いました。

和尚の寺まで色々話しながら歩いて、本堂で私は小僧と向き合いました。

小僧は4年生に上がる時で、ミホに挑戦してる時でした。

小僧が私にこう言いました、私の目を見て。

マキ・・隠すなよ、出すのが怖いのか？それとも冷めてるのかと。
私はどこかで自分を抑えてました、やはり祖母との暮らしを考えていました。
迷惑をかけたらいけないと、自分で自分を抑えていました。
それで小僧が殴りかかってきた、本気でした。
私は少林寺拳法をやっていて、小４の小僧には負けないんですけど。
相対すると、小僧の想いが強く伝わってきて・・押されました。
あの頃の小僧の伝達能力は、ヒトミからミホに続いてた時で最高潮だったでしょう。
私は完全に押されながら、無意識に小僧を押さえ込んだんです。
小僧は私の目を見ながら、言ってくれました。
それで、そんな良い子で・・婆さんが喜ぶのか？
マキを大切にしてる、婆さんのそれが望みだと思ってるのか？
マキらしく生きろよ・・今のマキはミホと変らないよ。
俺は分ってきたよ・・ミホと触れ合ううちに、それは違うんだって。
婆さんが見たいのは、自分らしく生きるマキだよ。
辛くて叫んだり、悲しくて泣いたり、嬉しくて笑ったりする・・マキだよ。
マキ・・自分で線を引くなよ、限界を作るなよ。
マキ・・隠してる限り、俺が執拗に追いかける。
マキが好きだから・・俺は絶対に諦めないと、小僧が笑顔で言いました。
本当に嬉しかった・・自分を見てくれていると感じたから。
その伝達方法の全てを使って伝えてくれた、私の心に直接。
私はそれで自分を出せました、冷めていないと叫びたくて。
人には限界など無いと、小僧が贈ってくれた・・私達３人の愛称。
限界トリオ・・私は大切にしています、小僧の愛情に溢れているから。

絶対に諦めない人間が、贈ってくれたから」

マキは私を見て微笑んだ、私は照れた笑顔で返した。

「素敵な話が沢山あるね・・本当に嫉妬しそうだよ」とマチルダが言った。

「私も～・・それにしても、２人とも話が上手だね・・驚くよ」と蘭が満開で微笑んだ。

「お話しは大先生の影響です・・小僧大先生の」とシズカがニヤで言った。

「なんせ、園児達を集めて、創作昔話を毎日してましたから」とマキもニヤで言った。

「それを聞いていたの？・・よっぽど面白いんだね」とユリカも爽やかニヤで言った。

「面白いし・・たまに泣けますよ」とシズカが笑顔で返した。

「確かにそうだよね～・・イルカ岬の話、良かったよ」とユリカが私に微笑んだ。

「完結シーンはどれでした？」とマキが笑顔で聞いた。

「身を裂いて助けたから、岬になったって感じのやつ」と蘭が満開で微笑んだ。

「へ～・・よっぽどの相手だったね、そのシリアスを伝えるんだから」とシズカが私に微笑んだ。

「今１番の相手だよ・・小１で割算を勉強してる、可愛い少女」と蘭が満開で言った。

「出会えたのか・・小１で岬の話を伝える相手に、良かったね」とシズカが私に微笑んだ。

「ごめん・・私、泣けてきた・・弟を１６で亡くしたから。

シズカを見ていて・・その姉弟の関係を見て。

後悔は捨てたつもりだったけど、感動してるの。

シズカ・・素敵だよ、本当に素敵な姉さんだよ」

蘭が泣きながら、シズカに伝えた。
私は蘭を抱きしめて、優しく抱いていた。

「蘭姉さん・・弟さん本当に残念でした、会いたかったです。
でも泣かないで・・今から私達、蘭姉さんに頼るんですよ。
恋愛の事も、仕事や社会の事も・・迷ったら頼るんです。
蘭姉さんと、ユリカ姉さんに・・全てを話して頼りますよ。
だから、思ったままに伝えて下さい、そして感じて下さい。
その後悔も経験も・・全てを伝えて下さいね。
お願いします・・姉さん」

シズカが蘭を見ながら、強く伝えた。
最後の姉さんで蘭が震えた、そして満開になって微笑んだ。
「ど～んと来なさい・・3人まとめて」と最高の満開で笑った。
「よろしくお願いします・・姉さん」とマキも笑顔で言った。
蘭は満開で泣いていた、マチルダも涙を見せて微笑んだ。

「凄すぎるね・・どうして出来るの？どうやって、その想いを直接言葉に変換できるの？」とユリカも目を潤ませて言った。

「感じたら・・伝えろ・・人に時間は無い。
そう言い続ける、命と向き合い続けた小僧に、何かを伝えたいなら。
私達も命と向き合わなければなりません、一方的に夢だけ背負わせられません。
だから私達は、残された家族と触れあいました。
そして感じてきました、沢山の後悔があるのだと。
してやれなかった事の、後悔が襲って来るのだと。

そう感じました・・そして思いました・・伝えないと駄目だと。
だから今・・本当に嬉しいんです・・出会えたから。
私達が本当に甘えたい人に・・命を後悔する人に。
ユリカ姉さん、蘭姉さん・・伝えて下さいね。
迷い多き、出来の悪い妹に・・その経験から搾り出す言葉で。
私達もいつか誰かに伝えたいから、後悔も悲しみも伝える・・命の言葉で」

マキが真剣な眼差しで、ユリカに言った。
「うん、うん・・ありがとう、本当の妹になってね」と蘭が微笑み。

「私も最高に嬉しいよ・・私も双子の妹を亡くしているから。
必ず伝えるね・・命の言葉を。
それが出来る人間になるね、経験を全て塗りこんで」

ユリカも笑顔で伝えた、シズカもマキも笑顔で頷いた。

「そしてマチルダ姉さん・・私達も知りたいです。
世界の現状を・・マチルダ姉さんの経験の言葉で。
私達・・何も出来ないけど、伝えます・・仲間達に。
目を逸らしたくないから、豊の想いだけでも感じていたいから。
小僧が到達した、原作者の話・・和尚に聞きました。
そしてリンダさんの話も、マチルダさんの事も。
闘いたい・・私達も、悪質で悪戯な原作者と。
命を金に換算するような、この世界に主張したい。
感じたら伝えろと・・父であり兄である男が、背中で言うから。
そして・・未熟で出来の悪い、伝達者が強く言うから。
お願いしますね・・マチルダ姉さん」

シズカがマチルダに笑顔で言った、マチルダも2人を見て笑顔にな

った。

「ありがとう・・本当に嬉しいよ。
私は今回の旅で、エースに出会って嬉しかった。
下の世代の伝えたいと想う人達に、沢山出会えたから。
エースが伝えてくれたから、愛は共通言語だと。
豊君がその強い意志を示してくれた、心のスタート地点の平等。
そして最後の夜に・・妹が出来たから。
伝えて欲しいと言ってくれる、最高の妹達が。
次に帰って来たら、絶対に連絡するからね。
3人に会いたいよ、そしてリンダにも会ってね。
生命という枠組みしか持たない、リンダに会ってね。
あなたたちに感じて欲しい、リンダの想いを。
伝える事に優れている、あなた達に感じて欲しい。
無駄だと思った時に、敗北が決まると言う、リンダを感じてね。
私は本当に帰って来るのが、今から楽しみだよ。
私も欲しくて欲しくて、切望した・・妹達が待っているから」

マチルダは輝く笑顔で伝えた、シズカもマキも笑顔で頷いた。

日付が変ろうとしていた、日曜から月曜に。
マチルダが飛び立つ、月曜が迫っていた。
しかし誰にも悲しみは無かった、マチルダと心は通じているから。

それまでの私に、最も影響を与えたシズカ。

実の姉でありながら、その姉弟関係を解消した。

私と一人の人間として関わる為に、甘えを捨てるために。

私はそんなシズカに育てられていた、この夜の会話で感じていた。
シズカの言葉と、マキの言葉と、恭子の言葉が・・私の会話の基本になっていると。
三者三様の個性を持ち、考え方も違う・・求める世界も違っていた。
しかし伝える言葉は同じ響きだった、常に自分に対して厳しく生きていた。
豊の影響が確かに強かっただろう、しかし自分自身と向き合っていた。
この後に見せるマキの会話力、ハルカやレンはもちろん、あのカスミでさえ震える。
その言葉には強い意志を乗せている、それが相手に響いていく。
その影響をハルカが強く受ける、どこか抑えているハルカが覚醒する。
そして自分を解放する、その時がハルカ伝説の幕開けだった。
十数年後、ハルカとミサキコンビと、唯一肩を並べて語られる存在。
マキ・・【魂の伝達者】の称号を贈られし者。
ユリカが最後に贈った称号を持つ者・・冷めないと強く主張する。
マキは多くの女性達にも愛された・・その熱い心が・・。

Matilda Dream

日付の変ることを、アンティークな置時計が示していた。
私はその秒針が動く度に、マチルダとの別れを感じていた。
混乱しそうな心に自分自身が驚いていた、マチルダに対する愛情の強さを感じて。

「シズカちゃん・・もう1つだけ聞きたい、見返りを求めるなと言うあなたの想いを」とユリカが爽やかに微笑んだ、蘭もマチルダも笑顔で促した。

「3人の姉さんには、嘘はつけませんから・・お話しますね。
もちろん、知っての通り、小僧にも嘘は通用しません。
見返りを求めるな・・私は小僧にそう言い続けて来ました。
それは・・自分に言い続けてたんです。
小僧が小児病棟に行くようになって、私達3人が最初に仲良くなった母親。
2歳のトモミという子の、母親でした。
知ってるかもしれませんが、小僧はそのトモミに、ゆっくりと時間をかけました。
そして最後にトモミの言葉まで引きずり出した、私達は母親の喜びを直接感じました。
母親と仲良くなっていましたから、そして私は母親から聞きました。
母親の言葉が・・凄く響いて、私は反省させられました。
その母親が小僧の事を、こう表現しました。
小僧は見返りを求めない、その費やした時間や愛情に対して。
だから入れるんだと、子供の心の奥深くに入れるんだと。
自分は完全に人間として、小僧より劣っていると感じたと。

全てに対して、見返りを求めていたと・・そう言っていました。
私はその言葉に撃たれました、自分もそういう傾向が強い人間だったから。
これをしてあげたから、私にはこうしてほしいとか。
これだけ勉強したから、成績が上がるだろうとか。
私がその事で反省していたら、母に聞かれました、何を悩んでるのかと。
私は正直にその事を言いました、母は真剣に聞いてくれました。
私の母は滅多に怒ったり、こうしなさいとか言わない人です。
でもその時に言われました、小僧はどうしてあれだけの友達が出来るのかと？
そう聞かれました・・私はそれでハッとして、気付きました。
小僧の交友関係、あの恐ろしい程の交友関係を維持するのは。
見返りを求めない、小僧のその心のありかたなんだと気付きました。
それを母に言うと、笑顔になって・・和尚の所に行って来いと言われて。
私は一人で和尚を尋ねました、そして和尚にその話をしました。
その忘れてはならない大切な事を、常に自分に問いかける方法を教える。
和尚はそう笑顔で言って、常に小僧に伝えろと言いました。
私はそれで楽になりました、私は幸せな事に小僧の姉だったから。
常に伝える事が出来るから、そして小僧は感じたら返してくれるから。
それはお前の事だろって、絶対に伝えてくれるから。
私は2度そう言われました・・その度に自分を戒めました。
私が小僧に言う、見返りを求めるなと言う言葉。
もちろん小僧にも忘れて欲しくない、その気持ちもありますが。
自分に問いかけてるんです、見返りを求めてないかと。
そして小僧が何も言わないと、自分の問いかけが間違ってないと

感じます。
嘘のつけない相手・・その弟が側にいるという事実。
私はその件で、その事実と向き合えました。
マキや恭子より・・ずっと時間がかかりました。
見返りを求めるな・・あの母親の心の叫びでした。
そして私が小僧に言うその言葉・・それは自分に対してと。
小僧に対して私が唯一できる、２人の絆の確認なんです」

シズカは真剣な表情で、最後に照れ笑いを浮かべた。
「その時・・あなたは何歳だったの？」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「小僧が小２でしたから・・私は小５の１１歳です」とシズカも笑顔で言った。
「凄すぎるよ・・その言葉に撃たれただけでも」とマチルダが微笑んだ。
蘭は私に抱かれ俯いて泣いていた、悲しみの涙じゃない事を全員が感じていた。

「もう・・お気づきと思いますが、全ては和尚の教えなんです。
あの生臭は、年齢なんて考えませんから。
大人にも子供にも対応は同じです、リンダさんに近いですよね。
人間という枠組みしかもっていません、だから幼い私達にも同じ教えをしました。
そしてその生臭と４歳で向き合った男、それが寺の小僧なんです。
和尚が愛情を込めて読んだ名前、それが小僧です。
和尚はその次が見たいんでしょう、小僧が成長する度に次を提示しますから。
そして今の和尚の、楽しげな顔を見るだけで感じます。
小僧の成長が・・その常識外の生き方を受入れた姿が。
和尚の心の根幹・・私達が常に伝えられている事。

主張しろと・・そして主張する場所を作り出せと。
そうしないと・・また悲劇が起こると言っています。
その和尚の想いを背負って歩くのが・・２人の弟子です。
豊と小僧・・その常識外の存在こそが。
和尚にとっての・・１つの答えでしょうね」

マキが真剣に伝えてきた、私はマキを見てワクワクしていた。
「マキ・・私は今までで、これほど期待する挑戦者はいません、その心のままにやってね」とユリカが爽やかに微笑んだ、マキも笑顔で頷いた。
「和尚・・ごめん、意地悪するなんて言って」と蘭が小動物の表情で舌を出した。
５人が笑顔になって、笑っていた。

「私もそう感じてました、そして和尚様に言われてます・・リンダに会いたいと」とマチルダも笑顔で言った。
「私も一人どうしても会いたいんです・・マリアちゃんに」とシズカが笑顔で言った。
「それは楽しみですね・・小僧に最も影響を与えた、あなたとマリアの出会いは」とユリカが微笑んだ。

「豊君が教えてくれました・・今の小僧の最高指導者は、圧倒的存在だと」とシズカが嬉しそうに言った。
ユリカも蘭もマチルダも、そしてマキも笑顔で頷いた。

ユリカがタクシーを手配して、私達は立ち上がった。
シズカがマチルダと抱き合って、笑顔を見せていた。
そしてマキがマチルダと抱き合って、見詰め合った。
「次来た時に・・１番楽しみなのは、ＰＧのマキの存在だよ」とマチルダが微笑んだ。

「はい・・自分らしく頑張ってみます、待ってますねマチルダ姉さん」とマキが笑顔で言った。
マチルダは嬉しそうに2人に笑顔を向けて、体を離した。

「明日は5時で良いかな?」とユリカがマキに聞いた。
「はい・・よろしくお願いします」とマキがユリカに笑顔で頭を下げた。
「私も昼の仕事済んだら、すぐに行くからね」と蘭も満開で微笑んだ、マキも笑顔で返した。
「小僧・・3丁目のバス停に、4時45分にお迎えよろしく」とマキがニヤで私を見た。
『了解・・マキ、リーゼントで来いよ』とニヤで返した。
「普段はリーゼントなの!素敵じゃない」とマチルダが笑顔で言った。
「素敵なんですよ〜・・宝塚の男役みたいで」と蘭が満開で微笑んだ。
「楽しみ〜・・私好きなの、宝塚」とユリカも楽しそうに笑った。

玄関でユリカとマチルダにお休みをして、手を振って分かれた。
3人の女性が、女らしいファションの話題で盛り上がっていた。
私はタクシーに歩きながら、蘭の楽しそうな笑顔を見て、喜びがこみ上げてきた。
そしてユリさんに感謝していた、あの美しい正座で頭を下げる姿が浮かんでいた。
深夜の爽やかな風が吹きぬけ、日付はマチルダとの別れの日になっていた。
寂しさを感じながら・・明日泣けばいいと思っていた。

タクシーのフロントガラスに映像が流れた、マチルダが体育座りで俯いていた。

私は嬉しくて声をかけた。
「マチルダ！」と喜びの声をかけた。
マチルダが顔を上げ、プラチナブロンドを輝かせて、笑顔になった。
「正解」と言ったマチルダを抱きしめた、嬉しくてそのまま映像を切った。

駄菓子屋に着いて、マキとシズカが蘭に礼を言って降りた。
私も降りて、ニヤニヤのシズカとマキにニヤを返して、蘭の隣に乗った。
蘭と2人で手を振って、手を振るシズカとマキを見ていた。
2人が見えなくなって、蘭が私に強く抱きついてきた。

「最高だよ・・本当に嬉しかったよ」と蘭が満開で微笑んだ。
『俺もだよ・・蘭が楽しそうだったから』と笑顔で返した。
「うん・・今夜本当の意味で、弟と和解できたよ」と深い蘭の瞳から、大粒の涙が出ていた。
『シズカもマキも嬉しくて、感情が止まらないみたいだったから』と蘭を引き寄せて囁いた。
「あなたは最後まで、マチルダのリュックに詰め込んだんだね・・楽しい思い出を」と蘭が笑顔で言った。
『うん・・明日泣いてくるよ・・そして叫んでくるね』と笑顔で返した。

「うん・・今夜の四季の笑顔、本当に嬉しそうだった。
よっぽど愛情のある叫びだったんでね、リンダに叫んだ言葉は」
蘭が満開ニヤで言った、私もニヤで返した。
「罰を与える・・リンダとマチルダに、Ｉ　Ｌｏｖｅを付けて叫んだ罰を」と満開で微笑んだ。
『明日の分まで罰が下るんだね・・頑張ります』と笑顔で返した。

暖かい波動に包まれて、深夜の道をタクシーが走っていた。
帰る場所を目指して・・希望ある未来を目指すように。

タクシーがアパートに着いて、蘭を抱き上げた。
蘭は満開笑顔で、強くしがみついてきた。
私はドアを蘭に開けさせて、蘭は抱かれたままサンダルを脱いだ。
『甘えん坊』と蘭を見て、ニヤ言った。
「やきもち・・マキのあなたに対する、愛情を強く感じたから」と満開ですねた。
『それは仕方ないよ・・あのトリオだけは』と笑顔で返した。
「添い寝した事ある？」とニヤニヤで聞いた。
『添い寝も・・キスもしたことないよ』と笑顔で返した。
「よし・・先にシャワーしてくる～」と笑顔で言って、洗面所に消えた。

私は日記を出して、思い出しながら書いていた。
蘭がパジャマで戻ってきて、私もシャワーで汗と潮を流した。
部屋に戻ると、蘭がご機嫌でビールを飲んでいた。
私がウルで蘭を見ると、満開ニヤを出した。

「仕方ないね～・・1本だけよ」と満開で微笑んだ。
私は笑顔で冷蔵庫から、ビールを出して蘭の隣に座った。
「ユリカ姉さんの、あんな嬉しそうな顔初めて見たよ」と蘭が囁いた。
『蘭でもそうなんだ～・・俺も嬉しかったよ』と笑顔で返した、暖かい波動が来た。

「私もユリカ姉さんと同じ気持ちになった・・マキの言葉を聞いていて。
限界トリオ・・その一人でも夜の世界に挑戦してくれるのが、嬉

しいよ。
私も感じたよ・・今までで、1番期待する挑戦者だよ。
豊の強い意志と、あなたの心の言葉。
その2つを持っているんだね、マキちゃんは。
シズカもマキも素敵だよ・・私は本当に嬉しかった。
あの私の弟の話を聞いた、その瞬間にあの言葉が出る・・シズカ。
そして、そのシズカの言葉を受けて、心を直接言葉にして伝える・・マキ。
凄いと感じてたよ・・喜びの中で。
マキがもたらす変化は・・きっと素敵なものだと確信した。
あなたは今夜が無くても、マキを迎えに行ってたね。
シオンに感じて欲しい最後の想い・・その答えがマキなんだね。
爆弾は次から次に用意してるんだね、素敵な爆弾を。
ユリさんの笑顔が見えるよ、マキを面接する時の。
ユリさんが認めた男、その男のために頭を下げたんだよ。
そしてマキに出会う・・最後の挑戦者と同じ言葉で話す女性に。
どうなるんだろう・・PGはどうなるんだろうね。
私は楽しくてしかたないよ・・水商売をして良かったよ」

蘭は私の肩に乗って、優しく囁いた。
『蘭・・1つだけ聞いていい？東京PG・・どう思ってるの？』と囁いて聞いた。
「本心を言うね・・最高に嬉しいよ、女として自分を試せる舞台なんでしょ」と静かに言った。
『そうだよ・・短い期間で良いから、挑戦してみようか』と優しく返した。
「うん・・最後の舞台としては、申し分ないね」と唇だけで微笑んだ。
『もう遅いから、寝ようね』そう囁いて、蘭を抱き上げてベッドに寝かせた。

電気を消して、窓を少し開けて、蘭の場所に戻った。
蘭の首から腕を通して、引き寄せると蘭は静かになっていた。
疲れたのだと思って、蘭の額にキスをして、蘭の寝顔を見ていた。
私は幸せを感じながら、眠りに落ちていた。

翌朝、車の音で目覚めた。
快晴を感じていた、その時には海に機首を持ち上げる機体が浮かんでいた。
私は洗面所に行き、力を込めて必死で顔を洗った。
寂しさに負けないように、マチルダに寂しい顔を見せないように。

キッチンに行って、冷蔵庫から鮭の切り身を出して焼いた。
お粥を2人分作って、卵焼きを焼いた。
「おはよ～、今朝も幸せ」と蘭が満開笑顔で私を見た。
「よし・・それならマチルダに会えるね」と満開ニヤで言って、洗面所に消えた。
私は朝食の用意をして、日記を書いていた。

「うん、今朝はやっぱり、お粥ちゃんだよね」と満開で座った蘭と朝食を食べた。
『蘭・・俺の頑固親父、変だからね』とニヤで言った。
「どこが、どんな風に変なの？」と蘭が興味津々光線を出した。
『お喋り』とニヤニヤで返した。
「頑固なお喋りさんなの・・楽しそう」と満開になって微笑んだ。
『和尚と同席・・不安だ～』とウルで言った。
「ユリさんが和尚に誰を付けるのかが、楽しみだね～」と満開ニヤで言った。
『それは怖い・・想像したくない』とウルウルで返した。
「ユリさんから、カスミでハルカでナギサで・・最後が多分サクラさんだよ」とニヤで言った。

『サクラさんか～・・鋭いからな～』と笑顔で返した。
「サクラさん、絶対に気付くね・・そしてお礼を言うよ」と満開で微笑んだ。
『お礼なんて・・こっちから言わないと』と真顔で返した。
「サクラさん泣いてたよ、アイさんに抱かれて、あなたがエミに伝えた時」と蘭が優しい瞳で言った。
『そうなの・・知らなかったよ』と真顔で返した。

「エミは全てを吸収する・・本当にそうだね。
開宴のあの言葉・・あれはあなたから吸収してたよ。
あなたの言葉だったよ、私は確かにそう思った。
そして、悪いことばかりする中学生じゃないねって言った言葉。
心が鷲掴みにされたよ、伝わってると感じたよ。
ミサとレイカとマリアは、エミがその強い意志で守る。
そしてエミはあなたが守り続ける、その強い伝達方法で。
サクラさんは母親として、感動してたんだよ。
エミの成長を実感して、あなたの溢れる愛情を感じて」

蘭は笑顔で静かに言った、私は嬉しくて笑顔で返した。
蘭が用意してる間に、食器を洗い準備をした。
2人で手を繋いで、バスで出かけた。
靴屋の前で蘭が立ち止まり、深い瞳で私を見た。

「泣いておいで・・そして伝えておいで・・大切なマチルダに」と満開で微笑んだ。
『うん・・泣いてくるよ、夕方までには復活するよ』と笑顔で返して、手を振って別れた。

ユリカのビルに歩いていると、その姿が見えた。

《最後の最後で厳しい試験だね・・ユリカ》と心に囁いた。
強い波動が帰って来た、私は拳を握り深呼吸した。

リンダの座っていた場所に、マチルダが同じ体制で座っていたのだ。
私は走って近寄り、笑顔で言った。
『ユー・ＯＫ？』と笑顔で声をかけた。
マチルダが顔を上げた、その時にリンダの映像が流れて、マチルダと重なった。
「イングリッシュ・ＯＫ？」とマチルダが真顔で言った。
『ＮＯだけど、目指す場所まで連れて行くよ』と笑顔で手を出した。
マチルダの瞳から涙が溢れて、私も切なくてその場で泣いていた。
そして意を決してマチルダを抱き上げた、マチルダが強くしがみついてきた。

『ＯＫ・・Ｏｋだからマチルダ、絶対に目指す場所まで一緒に行くからね』とマチルダを抱きしめた。
「・・・・・」マチルダが必死で英語で何かを言った、私はマチルダの緑の瞳を見ていた。
『マチルダ・・俺も待ってるよ・・そして寂しいよ』と囁いた。
マチルダの強く揺れる体温と、早い鼓動と、緑の瞳で伝わったきていた。
マチルダは泣きながら、輝く笑顔を見せてくれた。
私はその笑顔に伝えた、全てを使って強く伝えた。

『Ｍａｔｉｌｄａ　Ｄｒｅａｍ。
少し銀の強いプラチナブロンド、そして深緑の輝く瞳。
それがマチルダである、西洋人にしては華奢な体で美しく立つ。
その真直ぐに伸びた背骨は、強い意志を反映している。
いつどんな時でも、美しく笑う・・その辛い経験を隠しながら。
マチルダは伝達者である、その伝達は心に訴える。

波をおこすために、小さな波が大きな波になると信じている。
その心は距離を凌駕する、月が海に波を作り出すように。
マチルダの容姿は、理想を連想させる。
理想を描いた先に、その容姿が存在する。
しかしマチルダは常に、ヨレヨレのＴシャツを着ている。
２０歳の女性なりのお洒落をしない、しかし美しいと感じる。
そのヨレヨレのＴシャツが、輝いて見える。
大切に着ていると感じられる、その美しい心が滲み出ている。
私は思っている、マチルダの美しさ・・それは飾らない自然なのだと。
マチルダの持っている物に、不必要な物は無い。
リンダとマチルダ・・全く違う個性。
しかし本質は酷似している、目指す方向が全く同じである。
そしてブレない・・曲がったりしない。
マチルダは曲がる事をし知らない、目を逸らさないから。
私の心配は１つだけである、マチルダが疲れてないかと常に思っている。
どんなに遠くても・・届けてみせる、その想いは。
最後の一歩を、マチルダに踏出させる事だけは、絶対に阻止する。
私の全てを使ってでも、絶対に伝えてみせる。
月に語りかける、無理だけはするなと。
そして私は強く言おう、壁を超えるな・・マチルダ。
壁は俺も一緒に越えるから、一人で越えるなと。
マチルダが存在する、月に叫ぼう・・俺が寂しいからと。
緑の大地を反映する瞳、強い意志で進む者。
世界中に配達する・・感染させる・・笑顔を。
笑顔の伝達者・・月下の雫・・月のマチルダ。
私がマチルダに伝えたい、唯一の言葉を贈ろう。
Ｉ Ｌｏｖｅ Ｍａｔｉｌｄａと・・心を込めて『

強くしがみつくマチルダの瞳に、瞳で優しく伝えた。
私が見送るまでに発した、最後の言葉で強く伝えた。
強く熱い波動に包まれていた、ユリカの寂しさを感じていた。

泣きながら瞳を閉じたマチルダに、優しくキスをした。
寂しくて離したくなかった、唇からマチルダの寂しさを感じたから。

「エース・・本当にありがとう、幸せだった・・もう大丈夫、日本語を終わるね」と輝く笑顔でマチルダが言った。
私は無言で頷いて、優しくマチルダを降ろして、ピンクのリュックを担いだ。
マチルダが腕を組み、ユリカのビルを見上げた。
「・・・・・Ｙｕｒｉｋａ」と英語で叫んだ、これまでで最強の波動が包んだ。
ユリカの涙を感じていた、切なくて涙が出そうだった。

私とマチルダは、ユリカのビルに背を向けてバス停を目指した。
ユリカの波動が連続で何度も押し寄せて、私は必死に歩いていた。
隣を歩くマチルダも、必死に涙を我慢していた。

快晴の夏の朝、空には入道雲が浮かんでいた。
私は空を見上げて、世界に想いを馳せていた。
青空のブルーに、リンダの瞳が重なって見えた。
マチルダの温かく優しい温度に包まれて、空を目指して歩いていた。

マチルダとのこの別れは、やはり辛かった。

リンダの時はバタバタと時が流れて、あっと言う間に別れがきた。

リンダの時は、別れた後に寂しさが襲ってきた感じだった。

マチルダとは、永い時間を過ごしていた。
マチルダの心に触れる度に、マチルダを好きになっていった。
私にとってリンダは憧れだった、そしてマチルダに対してはファンだった。
芸能人を好きになるような感覚で、愛していた。
そうしないと、自分が制御できないと思うほど好きだったのだ。
マチルダのヨレヨレのTシャツ、今も鮮やかに蘇る。
どんなに美しいドレスよりも、美しく輝いて見えた。
天真爛漫な表情の中に、見え隠れする強い心。
優しさが隠せない深緑の瞳、流れるように話す言葉。
疲れてない？・・マチルダ・・それ以上は駄目だよ。
約束したよね、2度目の夜の海で・・最後の決断は自分を優先すると。
守ってるよね・・マチルダ・・感じているんだよ。
ユリカの波動に・・リンダとマチルダの微かな熱を。
距離を凌駕する心・・月に存在する緑の大地。

寂しい時、必ず思い出す笑顔・・強い意志を纏い進む。

月下の雫・・月のマチルダ・・Ｉ　ｌｏｖｅ　Ｍａｔｉｌｄａ・・。

無言の伝言

夏の朝日を受けて、目的地を目指す寂しい影。
無理に笑顔を作ることも、無理に会話をする事もなかった。
繋いだ手から感じていた、そして伝えた・・好きだよと。

マチルダは強く手を繋いで、何も話さずにバスを待っていた。
私も繋いだ手の温度に集中して、伝わってくる言葉を聞いていた。
マチルダは美しい横顔で、日頃より強く少女の香りを漂わせていた。
バスに乗り、密着して座った・・手だけは強く繋いだままで。
その時には伝達しあっていた、意味を感じる事が出来ていた。
マチルダはそれだけに集中していた、英語も日本語も発する事は無かった。
空港が見えて来た時に、マチルダの温度が大きく揺れた。
私も必死で伝えた・・１つの言葉だけを出さないように。
一緒に行くと伝えないように・・１番伝えたい言葉を、ギリギリで止めていた。

空港に着き、マチルダが登搭乗手続きをして振向いた。
プラチナブロンドが乱反射して、輝きが溢れ出していた。
そして輝く笑顔になって、私に駆け寄った。
私はマチルダを抱きしめて、マチルダを見た・・笑顔で泣いてるマチルダを。
「エース」とマチルダが言って、深緑の瞳が目まぐるしく変化していた。
『Ｉ　Ｌｏｖｅ　Ｍａｔｉｌｄａ』と言葉で伝えて。
待ってるから、無理だけはするなよ・・大好きだよマチルダ。
瞳で強く伝えた、そしてマチルダを抱き上げて歩いた。

搭乗のアナウンスが流れていた、東京行きの客を急かすように何度も流れた。
私は人混みの中、マチルダを抱いて階段を登った。
夏休みを楽しんだ家族連れで混み合う、搭乗ゲートの前で強く抱きしめた。
離せなかった・・マチルダを離す事が出来なかった。
マチルダも強く抱かれていた、私はマチルダを見て笑顔を見せた。
マチルダも笑顔になって、瞳で伝えてきた・・《ありがとう》
私も笑顔で、《ありがとう》と瞳で伝えて、ゆっくりとマチルダを降ろした。

マチルダが強く私を抱きしめて、キスをしてくれた。
唇を離すと、マチルダが輝きながら微笑んで。
一瞬だけ寂しい色を瞳に出して背を向けた、そして動かなかった。
私は震える両手をマチルダの背中に付けて、そっと押した。
『Ｉ　Ｌｏｖｅ　Ｍａｔｉｌｄａ』と囁いて、マチルダの背中を見送った。
ヨレヨレのＴシャツの背中が見えなくなって、俯いて泣いていた。
その時に発見した、私のベルトの穴にプラチナブロンドが結んであった。
私は慎重に外して、大切にポケットに入れた。
『うし』とカスミの真似をして、送迎デッキに向かった。

リンダの時と同じ場所に、飛行機が停まっていた。
窓にはプラチナブロンドは確認出来なかった、私はドアを見ていた。
乗務員が出てきて、ドアの確認をしていた。
そして現れた、マチルダが笑顔で両手を振った、私も大きく両手を振った。
マチルダが乗務員に促され、席に戻る時にサインを出した。
【指名】【エース】とＰＧのサインを出して、消えた。

私は嬉しくて立ったまま泣いていた、エンジン音を聞きながら。
反転した窓に、煌くプラチナブロンドが見えた。
マチルダが必死に手を振っていた、私は両手を大きく振った。
轟音が響き渡り、太平洋に向かい加速した。
機首を持ち上げた空に向かい叫んだ、大声でマチルダに届くように。
『Ｉ　Ｌｏｖｅ　Ｍａｔｉｌｄａ』と叫びながら、泣いていた。
青空に入道雲が流れていた、悠々と世界を見渡すように。

私はトボトボと空港を出て、バス停のベンチに座っていた。
目の前にフォルクスワーゲンが止まった、ユリカが爽やかに笑っていた。
私も笑顔になって、助手席に飛び乗った。

「寂しさを噛み締めてる暇はないでしょ、あなたには」とユリカが爽やかに微笑んだ。
『そうだね・・ユリカを復活させないといけないから』と笑顔で返した。
「よろしくね・・エース」と爽やかニヤで言って、車を走らせた。
ユリカの緊張して運転する姿を、笑顔で見ていた。

「ずっと無言だから、怖かったよ・・連れて行かれそうで」とユリカが前を見ながら微笑んだ。
『心配性だな～・・可愛い奴だ、ユリカ』とニヤで言った。
「マチルダのあなたに対する想いを感じると・・怖いよ」と爽やかニヤを出した。
『その話・・詳しく聞きたい』とウルで言った。
「駄目～・・本人に聞いて、瞳でも鼓動でも温度でもいいから」と爽やかニヤニヤで言った。
『そんな怖いこと・・自分じゃ出来ない』とウルウルで返した。

「和解のとき・・私カウンターにいて良いかしら？」と前を向いたユリカが微笑んだ。
『もちろん、一緒に座っててもいいよ・・ユリカなら』と笑顔で言った。
「言うわね～・・・そうしようかな～」と爽やかニヤで言った。
『今さら何を・・ユリカは俺の全てを、聞かないといけないんだから』と笑顔で返した。
「ありがとう・・本当は嬉しいよ、シズカもマキも嬉しかったよ」と真顔で言った。
『ユリカ・・ありがとう、マキの身元保証人』と真顔で返した。
「シズカとマキの変換スピードの速さに驚いたよ、女性であのスピードは蘭しか知らなかったから」と嬉しそうに笑顔で言った。

『女性は遅いんだね・・色々考えるからね』とニヤで返した。
「そうよ、女は魔物だから～」と爽やかニヤで言った。
『ユリカ・・似合わないよ、その台詞』と笑顔で返した。
「自分でもそう思ったよ」と少し照れて笑っていた。
私はユリカの愛情で回復されていた、寂しさは無かった、エミの言葉が響いていたから。
温度の上がりだした国道を、夜街に向かっていた。
マチルダの笑顔だけが、映像で流れていた・・私はマチルダを見ていた。

ユリカが慎重に赤玉駐車場に止めて、車を降りた。
「いつからＰＧ専用駐車場になったの？」とユリカが腕を組みながら微笑んだ。
赤玉にユリさんのＺと美冬とシオンの軽自動車が止まっていた。
『片付けだね・・美冬とシオン』と笑顔で返した。
「ＰＧに先に行こう・・ユリさんにマキの、事話したいから」と爽

やかに微笑んだ。
『俺もお礼しないと・・ユリさんに頭下げさて、申し訳ないよ』と真顔で返した。
「誇りに思いなさい・・そして取組みなさい、絶対に絶望させないでね」とユリカが真顔で言った。
『うん・・ベストは尽くすよ』と真顔で返してＰＧの裏階段を登った。

ＴＶルームに行くと、マダムとユリさんとマリアがいた。
ユリカと挨拶をして、マリアを抱き上げてユリカに渡した。
ユリさんの前に正座をして、薔薇の微笑を見ていた。

『ユリさん・・ありがとうございました。
昨夜シズカに会って聞きました、本当に嬉しかった。
明日、親父とキチンと和解します』

真剣に言って、頭を下げた。
「もういいんですよ・・驚きました、シズカちゃんに会ったのですね」と薔薇で微笑んだ。
『はい・・蘭とユリカとマチルダで、ユリカの家で会いました』と笑顔で返した。
「そうですか・・ユリカ、シズカをどう思いましたか？」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

「１６歳であの世界に到達出来るのが、信じられませんでした。
昨夜蘭の悲しみに触れた瞬間の言葉を聞いて、泣きそうになりました。
そしてもう一人、マキちゃんという子も素晴らしかったです。
２人とも自分の分析が出来てますね、感動しました。
和尚と豊とエースに囲まれて、それでも自分らしさを持っている。

素晴らしいですね」

ユリカが爽やかに微笑んで、話を続けた。

「シズカは・・・・・・」ユリカがシズカがお詫びした話をした。

「そしてシズカとマキ、蘭の悲しみに触れた時・・・・・・」ユリカの言葉が響いていた。

「蘭の後悔も悲しみも、一瞬で拭ってみせました」とユリカが笑顔で言った。

「ほ～・・それで１６歳かね」とアダムが笑顔で言った。

「本心を言いますね・・２人とも欲しいと切望しますね～」とユリさんが薔薇で私に微笑んだ。

「マダム、ユリ姉さん・・そこで相談があります。

マキが蘭を見て、夜街に挑戦を決めています。

１６歳ですが、私はもう大丈夫だと感じています。

身元保証人は、私がなります。

今日の１７時に約束しています、面接をお願い致します」

ユリカは美しい真顔で、頭を下げた。

「ユリカ、もう頭を上げて・・本当に素敵な話です・・ユリカが身元保証人になる人材・・今から楽しみですね」とマダムに微笑んだ。

「ユリカ、ありがとうな・・その筋の通し方、夜の掟じゃね」とマダムも嬉しそうに微笑んだ。

ユリカも爽やか笑顔で返していた。

「エースから見たら、マキちゃんはどうなのかしら?」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

『俺の勝手なイメージで言うと、まず1番影響を受けるのは。
ハルカですね・・マキも自立を幼い時から目指してました。
そしてハルカに出会えば、感動すらすると思いますよ。
ハルカの芯の強さを感じるでしょうから、だからハルカも影響を受けます。
まだどこか抑えてるハルカにとって、マキのストレートな熱は響くでしょう。
それも下から来る、初めての女ですから。
俺はそこだと思ってました、ハルカとミサキの精神的弱点。
暫く一番下だと思っている、最近少しそれに甘えてますね。
ハルカらしさが出てこないのも、その傾向でしょうね。
マキは絶対にハルカに点火します、そして追い続けるでしょう。
ハルカがその本質である、真直ぐに物を見れるのならば。
そしてレンもユメもウミも・・カスミでも。
震えてもらいますよ、マキはその心を直接言葉に乗せるから。
女性では滅多に見られぬ存在ですね、ユリカも変換スピードが速いと言ったし。
そしてなにより、心が強い・・豊の背中を常に見てましたから。
私はいけると思っています、身内だからじゃなく・・実力を評価して。
必ずＰＧに風を呼び込みます、少し閉塞感の出てきたＰＧに』

私も真剣に伝えた、ユリさんの薔薇を感じながら。

「さすがですね・・気付いてましたか、ハルカの弱点。
確かにそうです、甘えています・・らしくない。
今は最下位で良いと思いがちですね、年齢的な状況で。
あなたが言っているのに、経験も人脈もカスミちゃんより上だと。
閉塞感すら打破する熱、ユリカと蘭が一目で認めた存在。

本当に楽しみです・・１７時が待ち遠しいです。
ユリカ、本当にありがとう・・あなたと蘭を見たから挑戦を決めたのですから。
私が育てて見せますね、私は感じていますよ。
マキ・・女帝の匂いがするのでないかと」

ユリさんが嬉しそうに薔薇で微笑んだ、ユリカも微笑んで頷いた。
「面接はここで良いですか？」とユリカが微笑んだ。
「１０番席でやりましょう、レンとハルカとシオンの前で」とユリさんが真顔で言った。
「ユリ姉さん・・どんなに大きな期待をされても結構ですよ、１７時になれば分ります」とユリカも真顔で言った。
「ユリカ・・もう、ワクワクが止まらなくなりますよ」とユリさんが楽しそうに笑った。

その時、静寂が訪れる・・天使の声で。
「まき・・まき・・くる？」とマリアが私に天使全開で聞いた。
『うん、マリア・・マキがＰＧに来るよ』と笑顔で言った。
「まき・・くる・・しおん」と天使不敵を出した。
『マリア・・駄目だよ教えたら、内緒にしてたのに』と驚きながら笑顔で言った。
「私・・１７時まで待てるかしら」とユリさんがマリアを見て薔薇で微笑んだ。
「マリアが認めた女が来るのか、楽しみじゃの～」とマダムも微笑んだ。
「やっぱりシオンね、マリアは誤魔化せないわね」とユリカが爽やかニヤで言った。

『シオンの最後のトラウマは、俺じゃ外せない。
シオンに最後に感じてもらいたいもの、責任感。

今のシオンは前向きになって、やる気も申し分ない。
あの純白の心なら、今でも面白い存在になるけど。
それだけなら、ただのシオンになりそうで。
最後にシオンが今まで拒絶していた物・・その責任感を植えつける。
マキならやれる、シオンの白い心と、マキの心の会話。
俺となら出来るその歌う会話、それが出来る女・・マキ。
シオンは必ず感じる、年上の女性としか出来なかった。
その心の会話を、年下の女性と出来たら。
マキに執着する・・そうすればマキは必ず点火する。
シオンの心に、年下が見てるという責任感が芽生える。
そうなったら・・シオンは絶対新しい何かを見せる。
熱のある白い心・・無敵のシオンが覚醒すると思ってます』

私はマリアを抱いて、笑顔で言った。
「どうしましょう・・PGはどうなっていくのかしら」とユリさんが楽しそうに微笑んだ。
「親父さんの許可絶対取れよ・・業務命令や」とマダムも笑顔で言った。
「その話で・・とても楽しい話があるんですが」とユリカが爽やかニヤで言った。
「もう、ユリカ早く教えて」とユリさんが薔薇で促した。
「蘭とお父さんの出会いを、和尚とシズカが演出して・・・・」ユリカが楽しそうに、蘭の接客で出会う話をした。

「それは楽しみですね〜・・伝説に残りますよ、見学者が相当来ますね」とユリさんが悪戯っ子を出した。
「さすが和尚じゃな・・昔から人の心を読む男じゃわい」とマダムも笑った。
「あらマダム、聞いてませんよ和尚様と知り合いなんて」とユリさ

んがマダムに言った。
「そうじゃったかの～・・ワシらの歳であの和尚を知らん奴はおらんよ。
簡単に言えば、豊みたいなもんや・・顔は全然違ってたが。
あの和尚は戦争の時に捕まった、戦争反対を堂々と叫んで。
特攻隊の召集を受けた若者の、両腕の骨を折って救ったりしたんじゃよ。
終戦を迎えて、その死者数に絶望したんじゃろうな。
自ら生臭と名乗るようになった、その影響で梶谷は自分を悪徳と名乗る。
最近ＰＧに来るのを見て、ワシは嬉しかったよ。
あの反戦を叫んだときの、生き生きとした生臭を見たから。
そして今分ったよ・・託せる人間に出会えたんじゃな。
豊や小僧・・その３人娘、嬉しかったじゃろう。
そしてその中に夜の女も入って来た、ユリもユリカも蘭も。
昨日集まった全員を見てたよ、そしてマチルダの後にリンダを見ていた。
生臭がワシに言ったよ、エミを見て感動したとな。
希望を益々持てたと、嬉しそうじゃった。
あの日曜の集まりのようなものが、世界中で起これば変るとな。
平和の本質を語り合う、そんな時代が来てほしいと言っちょった」
マダムの話を、静かに聞いていた。
「やっぱり、素敵な人ですね～・・あなたは知ってましたね」とユリさんが私に言った。
『マキが一緒に住んでる、駄菓子屋の婆さんに聞きました』と真顔で答えた。
「ちょっと待てエース・・駄菓子屋の名わ？」とマダムが真顔で私を見た。

『〇〇屋だよ』とマダムの迫力に押されながら、答えた。
「マキという娘・・ツネさんの孫なのか・・ユリ、お前の予感当りかもな・・女帝の匂い」とマダムがニヤで言った。
「マダムいけませんわ・・ニヤだけじゃ」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

「ツネの一人娘・・その源氏名・・真の希望と書いて・・真希じゃよ」とユリさんに微笑んだ。
「あの宮崎で最初に女帝呼ばれた人・・千花の真希さんですか！」とユリさんが驚いて言った。
「大ママから、聞いた事あります・・歩くだけで輝きが溢れてたと」とユリカも驚いて言った。

「ツネとワシは闇市で知り合った、ツネはやり手での～。
しかし忽然と姿を消した、次に出会ったのが１０年後。
その時１５歳や言うて、娘を連れちょった。
不思議な娘での～・・強烈な雰囲気があったよ。
そしてクラブ千花を作る、１６歳の真希がその店を引っ張るんじゃ。
ユリカの言った通り、歩くだけで何かが溢れるようじゃった。
入りきれない輝きが、歩く振動で溢れ出すような。
じゃが真希はどんなに人気が出ても、物腰の低い温かい女やった。
それで言われ始める・・女帝とな。
真希は突然引退発表をする、全盛期の２６の時に。
理由は結婚やった、遊び人たちが泣いたもんだよ。
真希と同時に、ツネも夜から足を洗うんじゃよ。
ツネと真希が最後に出会い、１番可愛がった女がいた。
その源氏名・・飛鳥・・１８歳でリアンレベルの炎を湛えていたよ。
真希を見て、飛鳥を見て・・ワシも必死で探したよ、託せる女を。

それから5年後や・・ユリと出合ったのは。
ユリが夜街に入って、今１５年・・真希が引退して２０年。
１６の娘・・計算は合うよな～。
ユリカも蘭も一目で認める存在、そして今聞いた会話。
間違いないじゃろう・・自分の娘に託したんじゃ・・その誇り高い源氏名を。
エース・・マキの漢字はどう書くんじゃ？」

マダムはどこか懐かしそうにそう聞いた。
『真実の希望・・その頭を取って・・真希』と笑顔で答えた。
「本人は知らんやろう、この事実はここだけの話やな・・ユリ、大ママだけに話してくれ」とマダムが言った。
「はい、そうします・・エース、また大ママを泣かせるんですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

「それでですね、マキちゃんが夜の仕事の許可を、お婆さんがくれたと言ったから、よく１６歳の子にと思いました」ユリカが言った。
「１６なら・・許可するよの～・・せざるえんよ」とマダムが笑顔で言った。
「マダム・・採用したら、ツネさんに挨拶はどうしましょう？」とユリさんが真顔で聞いた。
「ワシが行ってくる、エースと2人で・・久しぶりに会いたいからの～」とマダムが微笑んだ。
「よろしくね、エース」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「ユリよ・・マキは育ててみような、そうしないと大ママに申し訳ないぞ」とマダムが真顔で言った。
「はい、必ずＰＧで花を咲かせましょう」とユリさんも真剣に言った。

「最強の爆弾を用意してるか～・・恐ろしい爆弾を用意したもんじ

ゃ」とマダムが楽しそうに笑った。
「本当に・・私を絶望させるどころか、驚きで心臓麻痺にさせそうですよ」とユリさんが薔薇ニヤをした。
「大ママが、どうして魅宴じゃないのかと・・お腹空かしてくるよ～」とユリカが爽やかニヤで言った。
私はウルウルで返していた。
「PGに決まったら、今日、その足で魅宴に挨拶に行きましょう」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「大ママ・・４度目の嫉妬は確定に近いですね」とユリカも爽やかに微笑んだ。
「なんせハルカの１つ下なら、ミサキの１つ下という事やからな」とマダムも微笑んだ。

私はユリカと昼食を食べに、通りに出た・・靴屋を覗いてユリカと２人で笑顔になった。
マキが蘭と話しながら、ハイヒールを選んでいた。
美しいリーゼントのマキは、彫の深い素顔の笑顔だった。
私はその時に初めて客観的にマキを見て気づいた、輝きが溢れ出している事に。
長身で長い足を想像させるスタイルで、本当に宝塚の男役という感じだった。
「本当に素敵だね～・・私、宝塚大好きだから、本気で惚れそうだよ」とユリカが微笑んだ。

「次女の蘭姉さんに、おねだりだね～」とユリカが笑顔で近付いて行った。
「ユリカ姉さん、おはようございます」とマキも笑顔で頭を下げた。
「まだ必要ないけど、足のサイズだけ見ときたくて」と蘭が満開で微笑んだ。
「特別なの揃えそうだね、私のもよろしく・・PGと魅宴用に」と

爽やかニヤで言った。
「マキちゃん、アルバイトは？」とユリカが聞いた。
「今日の午前中をもって、終了しました」と微笑んだ。
「ねぇ・・近くで微笑まれると、別の意味で好きになりそう」とユリカがニヤで言った。
「ユリカ姉さん、本当に好きなんですね・・宝塚」と蘭が満開ニヤで言った、ユリカもニヤで頷いた。

「マキちゃんどうでしょう・・今から面接受けない？」とユリカが微笑んだ。
「こんな恰好で良ければ、早い方が私も嬉しいです」とマキが笑顔で返した。
「全然大丈夫よ、外見を見る人じゃないから・・今、話して来た所なの」と爽やかに微笑んだ。
「そうしようよ・・私も昼の休憩になるから」と蘭が満開で微笑んだ。
「よろしくお願いします」とマキも笑顔で頷いた、それを聞いて蘭が店の裏に走った。
「エース、スペシャル幕の内３つね・・あなたはお好きなのどうぞ」とユリカが言った。
『了解・・ダッシュで行ってくるよ』と行って行こうとすると。
「小僧・・早く帰れよ・・見ててくれよな」とマキが微笑んだ、私も笑顔で頷いて走り出した。

弁当を買って、走ってＰＧに戻るとマキが小窓の所にいた。
少し緊張してる顔に、挑戦を決めた強い意志を示す瞳があった。
「全員いるから、ここでやるそうよ・・マキちゃんおいで」と蘭がマキを案内した。

マキはその少林寺で鍛えた、美しい姿勢で真直ぐ前を見て入ってい

った。
マキを見たマダムもユリさんも、最高の笑顔になった。
そしてレンと久美子が凍結していた、リーゼントだから気付いたと思っていた。
そしてハルカの視線が、あの裏方を必死でやっている時の光に戻った。

「マキと申します、突然の面接ありがとうございます」と美しい姿勢のまま深々と頭を下げた。
「よく来てくれました、どうぞそこに座って、楽にしてね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「ユリさん、私達出てましょうか？」とハルカが言った。
「いえ、ここに居なさい・・そして見ておいて、１６歳の覚悟を」ユリさんがハルカに微笑んだ。
「１６歳！」とハルカが驚いてマキを見た。

「マキちゃんですね・・１つだけ質問します、なぜこの仕事に挑戦しようと思ったのかしら？」とユリさんが真顔で聞いた。

「私は家庭の事情で祖母に育てられました、母と離れたのが６歳です。
母は肺の病で、隔離されました・・最後の面会の時に私に言いました。
自分の足で歩いて、そして転んで、自分で立ち上がってと。
それから私は自立を目指しました、祖母の負担を考えた訳じゃありません。
母の言葉の意味を感じたかった、母の静かな叫びが心に残っているから。
義務教育が３月で終了して、今通信制の高校に席を置いています。
色々とアルバイトを探しました、でも納得出来る仕事が無かった。

そんな時出会いました、蘭姉さんに・・衝撃でした。
その輝きと温もりを見て、そして花の咲くような笑顔を見て。
その時に自分の中に芽生えました、夜の仕事に挑戦しようと。
実は私の母親も、この仕事をしていました。
私は幼い頃、寝物語で聞いていました。
そして常に想像していました、美しい母の仕事をする姿を。
母は私に自慢していました、沢山の仲間と競い・・笑えたと。
それでも私は今１６歳だから、採用は無理だろうと思っていました。
蘭姉さんに１度は相談しようと思いながら・・心はまだ覚悟してなかった。
そして出会いました・・ユリカ姉さんに、その言葉に触れ覚悟が出来ました。
私は全てを賭けて挑んでみせます、いつか必ずこの店のお役に立って見せます。
今・・ユリさんを見て、どうしてもここでやりたいと思いました。
私の母が求め続けた、認められたいと思う人と。
本気で競いたい思う人が、存在すると感じたから。
お願いします、チャンスを下さい・・未成年の内は裏方を必死でやります。
そしてここに誓います、自分で歩み、転んだら自分で立ち上がると。
母が途中で諦めた・・夢の正体を感じたい。
それが他人に認められなくても、蔑まれてもいい。
私はこの世界に憧れて、職業として選択したと強く叫べます。
将来、子供の寝物語で自慢します・・私は最高の時を過ごしたと。
最も大切な時を賭けて生きたと、そう強く伝えたい。
母が私に譲ってくれた・・この真希という名にかけて誓います。
絶対に道半ばで諦めたり、挫折したりしない事を。
そして言い訳はしません・・自分が賭けた仕事に対して。

最後に必ず受入れて見せます・・自分自身の生き方を」

マキはその会話の力を全てだしていた、静寂が包んでいた。

「許可します・・今の誓いを忘れないで下さい、あなたの身元保証人のユリカに対しても」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

「ありがとうございます、絶対に失望させません」とマキは頭を下げた。

「お昼からの出勤で大丈夫かしら？」とユリさんが微笑んで聞いた。

「はい・・大丈夫です」とマキが笑顔で答えた。

「来る時はバスで来てね、１８歳になるまでは、帰りは方向が同じですから、マダムとハルカと帰って下さいね」と言って。

「いつから来れますか？」と薔薇で微笑んだ。

「出来るなら・・今からでお願いします」とマキが美しく微笑んだ。

「分りました、お願いします・・先に食事にしましょう」とユリさんが言って、食事の準備をはじめた。

「まき・・まき」とマリアが呼んだ。

「マリアちゃん・・よろしくね」とマキが微笑んで抱き上げた。

「マキ・・・」マリア語で話していた、そして衝撃が走る。

「そうなの～・・色々教えてね」とマキがマリアに笑顔で言った。

「あい」とマリアが天使全開で笑った。

「凄いです～・・分るんですね」とシオンがニコちゃんで言った、マキも笑顔を返した。

「マキ・・マリアなんて言ったの？」と蘭が満開で聞いた。

「エースが寂しそうだから、元気付けてと言ってます」とマキが笑顔で答えた。

「正解です・・楽しくなりそうですね～」とシオンがニコニコちゃんでマキを見ていた。

全員がマリアを抱くマキを笑顔で見ていた、新しい挑戦者の登場を

喜ぶように。
ハルカが、あの真直ぐな瞳の輝きで、ようやく訪れた年下の挑戦者を見ていた。
ユリさんの薔薇と、ユリカの爽やかと、蘭の満開ニヤがハルカを見ていた。

私はマキの登場で、マチルダを心のリンダの場所に置いた。
リンダとマチルダが豊兄さんを囲んで、笑顔で話していた。
８月の終わりが近付く、夏の陽射しを浴びて・・天使が輝きながら微笑んだ。

マキの登場は、大きな起爆剤になる。

六本木ＰＧが開店した時、ＰＧの責任者にナギサがなる。
２８歳のナギサ・・圧倒的華やかさの中に、知性と余裕が存在していた。

そして最強のエース・・２５歳のカスミがフロアーに君臨していた。
ツウィンズのユメとウミが、カスミと競っていた。
シオンが引退して、レンがユリカの店を引き継いで、ＰＧに居なかった。
しかし２２歳のハルカと２１歳のマキが強く存在した。
その当時マキは湧き出てくる、最新式の女性たちをまとめた。
マキと同世代以降の挑戦者は、限界トリオのマキを追って来た。

柔らかいリーゼントで、ドレスを纏う・・輝くマキが若手を引っ張った。

挑戦を決めた時の気持ちを、忘れさせないように伝え続けた。

ハルカとミサキが女帝と言われた時・・マキは女王と言われた。

無変換の言葉・・許容を超える輝き・・両性に愛されし者。

魂の叫びを伝達する者・・その名は・・真希。

無変換の想い

曇りガラスから漏れている、夏の光に照らされていた。
挑戦を決めた瞳を、天使が見守っていた。
内面を映し出すような輝きに、素顔の少女が笑っていた。

「マキ・・ここに座って、紹介するから」と蘭が満開で微笑んだ。
マキは笑顔で返して、マリアを私に渡して、蘭の横に座った。
蘭がマダム・シオン・レン・ハルカと紹介した、マキは笑顔で頭を下げた。
「そして専属ピアニストで、１６歳の」と蘭が言ったら。
「久美子ですね・・久しぶり、元気そうで良かった」とマキが言った。

「マキ・・・あの時リーゼントじゃなかったから、分らなかったよ。
本当にありがとう・・そして嬉しいよ、マキがここで働くんだね。
元気になったよ・・マキが泊めてくれて、一晩中話を聞いてくれたから。
限界トリオのマキ、噂以上だね・・灼熱のマキ」

久美子は嬉しそうに目を潤ませて、マキに微笑んだ。
「久美子ちゃん・・良かったね」と蘭が満開で微笑んだ、久美子も笑顔で頷いた。
「あの時の！・・私は久美子の姉です、本当にありがとう」とレンが笑顔で頭を下げた。
「やめて下さい、レン姉さん・・何もしてませんよ、お喋りしただけです」とマキは微笑んで言った。

「母が亡くなって・・葬儀が終わった翌日の夕方。

寂しくて・・目的も無く自転車を漕いで、気付いたら大淀川の川原にいました。
座って川原を見てたら・・立てなくなって。
夕暮れで、段々暗くなってきて・・それでも動けなくて。
その時隣に元気よく座った・・マキでした。
同じ歳だと分って、他愛も無い楽しい話をしてくれて。
私も段々元気になって、やっと立ち上がったら。
マキが泊まればと言ってくれて、レンに電話をしました。
レンにマキが代わってくれて、心配ないと言ってくれたね。
そしてその夜、私が母の話をしたら、怒ってくた。
真剣に、強く・・母が心配してるぞって・・そんな姿を見せるとって。
今すべき事は何かと・・強く手を握って言ってくれた。
本当に嬉しかったよ・・マキ・・温かかった。
誰もあんなに真剣に怒ってくれなかったから・・心がブルブル震えたよ。
そして、言ってくれたね・・今の私を支える言葉。
ピアノは学校に行かないと弾けないの？音楽ってそんなに狭い世界なの？
ショパンもベートーベンも学校を出たの？そして最後に抱きしめて言ってくれた。
久美子はなぜ音楽をしてるの？・・人に認められたいからなの？
強く問われました・・あれで私は変われたよ・・そうじゃないって叫べたから。
言葉にして叫んだら・・何かが抜けた・・そしてマキが抱いてくれてたから。
私は近々マキに会いに行こうと思ってたの、その自信が持てるようになったから。
そして・・マキの宿題を提出しようと思った。
マキ・・私は音楽が好きだから、その素晴らしさを伝えたいから。

ピアノを弾いてるんだよ、マキの言葉のような音を出したいから。
魂に響き渡るような音で・・平和の素晴らしさを伝えたいからだよ」

久美子が泣きながら伝えた、マキは久美子を抱きしめていた。
「もう、泣き虫久美子・・川原じゃ泣いてなかったくせに」とマキが笑顔で言った。
全員が優しい目で2人を見ていた、ユリさんの嬉しそうな微笑があった。
「だって・・変な奴が振向くなって言って、馬鹿な話をずっとしてたんだもん」と久美子が微笑んで返した。
「その馬鹿が、私に教えてくれたんだよ・・あなたの存在を」とマキがニヤで言った。
「そうだったの・・そうよね、あんな事が出来るのは・・あんただけね、エース」と久美子がニヤで言った。

『久美子だったのか・・なら振向かせれば良かった、後姿が可愛くない感じだったから』とニヤで返した。
「なんだって〜・・マキが来たんだよ、伝説話、無限にあるよ・・でも本当にありがとう、あの話で寂しくなかったよ」と久美子が微笑んだ。
『お礼はいらないよ・・お腹空いたよ、食べようよ』と笑顔で返した。
ユリカと蘭が夜街の面白話で盛り上げて、楽しく食事をした。
「エース1つだけ教えて、久美子ちゃんの事は、なぜマキちゃんだったの」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
『作ってる感じだったから、背中から感じるのが・・違和感があった。

俺は同級生でそんな子を沢山見てたから、だから壊す女にしました。
マキは問いかける・・その心に直接問いかけるから』
私は思ったままを口にした、ユリさんの薔薇を見ながら。
「シズカと恭子を述べよ」と蘭が満開で微笑んだ。
『恭子は・・考えさせるタイプ・・その相手の良い部分を押し上げる感じ。
何にでも興味を持ち、その相手の世界を知ろうとしながら、気付かせるみたいな。
これはどうやるの？とか、こんな時はどうするの？とか聞いて。
相手が教える事で、気付かせていくような。
シズカは・・作るタイプ・・こんな感じじゃ駄目なのって提案する。
知識の豊富さを背景に、提案し続ける。
こんなのは？じゃあこんな感じは？って提案し続ける。
相手はそれはここが駄目とか言いながら、駄目な事を気付いていく感じ。
だから・・久美子の後姿を見て、マキに決めたんだよ』
蘭の満開を見ながら、笑顔で伝えた。
「蘭姉さん・・エースが少し怖くなったですか？」とマキがニヤで聞いた。
「嬉しいよ・・多分あと少しで、ＰＧの女性の分析も終わるのね」と蘭が満開ニヤで返した。
「３人とも欲しいですね～・・無理な願いと知ってはいますが」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「さっきから・・ハルカの目が怖いんですけど」とレンがニヤでハルカに言った。

『レン、それがハルカの本当の目だよ、久々に見たよ・・出会った頃のハルカ』と笑顔でハルカを見た。

「ごめんねエース・・私、自分に言い訳してたね。
エースが言ってくれてたのに、フロアーに慣れて言い訳してた。
マキちゃん、よろしくね・・私が裏方の仕事全て教えるね。
だから思った事や、感じた事を全て伝えてね。
頑張ろうね・・私も１６歳で挑戦したから。
あなたには頑張って欲しいから、一緒に頑張ろう」

ハルカの瞳を、マキは真剣に見ていた。
「よろしくお願いします、ハルカ姉さん」とマキも真顔で頭を下げた。
顔を上げたマキに、ハルカが微笑み、マキも笑顔で返した。
「蘭・・ＰＧのピースが全て揃いましたね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「私もそう思いました・・最後尾から最強の熱が押してくるような」と蘭がハルカに満開で微笑んだ。
「レン姉さん、マキと3人で狙いましょう・・エースが最も大切にしてる、銀河の奇跡を」とハルカがレンに微笑んだ。
「やろうよ・・ターゲットとしては申し分ないから」とレンも微笑んで返した。
「私、吸収して・・出来るだけ早く行きます」とマキも微笑んだ、レンもハルカも嬉しそうに笑顔で頷いた。

「エース・・最強のニヤニヤ出てますよ」とシオンがニコちゃんで言った。
『うん、シオン・・止められない』と笑顔で返した。
「銀河もシオン・セリカコンビも大変だね～・・お尻に火がつきそう」と蘭が満開ニヤで言った。

「エースのシナリオは本当にあるのやら・・有るなら怖いよ」とユリカが爽やかに微笑んだ。

「マキちゃんに1つだけ提案があります・・源氏名も真希でやりませんか？」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

「私もそうしたいと思ってました、母がどんな仕事をしたのか知らないけど。
もう母を知る人はいないでしょうから、背負っていたい。
娘に命名するほど大切にしていた名前、夜の世界に誇りを持っていたと感じています。
だから同じ名前を背負いたい、自分に戒めとして。
ユリカ姉さんの身元保証人と、母の大切な真希という名前を背負ってると感じていたい。
そうすれば絶対に汚せないから・・自分に正直に生きられると思いますから」

マキはユリさんに笑顔で言った、ユリさんも薔薇で頷いた。

「マキ・・ワシはお前の母親をはっきり覚えてるよ。
おいおい色々聞くじゃろうが、ワシが1つだけ教えるよ。
ワシが今まで見てきた中で、真希が夜街に1番愛されちょったよ。
それだけは、隠しようのない事実だよ」

マダムがマキを見て真剣に伝えた、マキは最高の笑顔で見ていた。
「ありがとうございます・・本当に嬉しいです」と笑顔で言って頭を下げた。

蘭の仕事時間が迫って来て、ユリさんとユリカとマキを連れて通りに出た。

「マキちゃん、頑張ってね・・また後で」と蘭が満開で手を振って、マキも笑顔で手を振って見送った。
「マキちゃん、今から夜街1番の女帝に挨拶に行きましょう」とユリさんが言って、マキがユリさんと並んで歩き出した。
私とユリカはその後を腕を組んで歩いていた。
前を歩く2人は笑顔で話していた、ユリさんの薔薇を見ながら私も笑顔になった。
魅宴入ると、大ママはフロアーでミサキと打ち合わせしていた。

「大ママ、いいかしら?」とユリさんが声をかけた。
「もちろん、いいよ」と大ママがフロアーに招いた。
大ママはマキを見ていた、その瞳が強かった。
「紹介します・・今日からPGに入ります、マキです・・16歳です」とユリさんが笑顔で紹介した。
「マキと申します、未熟者ですが、よろしくお願い致します」とマキが美しい姿勢で深々と頭を下げた。
「よろしくね・・良い子だね~、マキって名前はエースが命名かい?」と大ママが笑顔で言った。
「本名です、母が源氏名として使っていました・・それを名乗らせてもらおうと思います」とマキも笑顔で返した。

「そうなのかい、素敵な話じゃないか・・娘に源氏名を命名するなんて、聞いてて嬉しくなるよ」と大ママが嬉しそうに微笑んだ。
「良かったね・・マキ」と私は大ママにニヤで言った。
「なんだいエース・・なんか企んでるね?」と大ママがニヤで言った。
「エースは、大ママの表情が見たいんですよ」とユリカが爽やかニヤで言った。
「マキ・・名前の漢字はどう書くのかしら?」とユリさんがマキに薔薇で微笑んだ。

「真実の真に希望の希です」とマキがユリさんに笑顔で返した。
大ママが固まっていた、そして一筋の涙を流した。
マキは驚いて大ママを見ていた、そして何かを感じているようだった。
「大ママ・・母をご存知なんですか？」とマキが真顔で聞いた。
大ママはマキを抱きしめて、泣いていた。
マキも大ママを抱きしめて、瞳を閉じていた、母に抱かれる娘のように。

「１６年ぶりに抱いたよ・・そうかい真希を娘に譲ったのかい」と大ママが体を逸らし、マキを見ながら言った。

「あんたが産まれて４日後に、抱かせてもらったよ。
その日が真希姉さんと会った、最後の日になった。
私が今ここに居るのは、全て真希姉さんのおかげなんだよ。
私を拾ってくれた・・馬鹿で未熟な私を。
そして夜の女に育ててくれた、優しく・・厳しく。
温かい人だった・・そして美しかった。
誰にもでも平等に接して、全てに愛情を注いだ。
私は今でも追いかけてる、２６歳の真希姉さんを。
届かないから・・あの真希姉さんの生き方に到達できないから。
マキちゃんが入って来た時に感じた、懐かしい何かに。
ユリの所で頑張るだね、覚悟は出来てるんだね」

大ママは真剣な瞳でマキに問いかけた。
「絶対に真希の名に泥を塗りません、全てを賭けて守ってお見せします」とマキも真剣な瞳で堂々と答えた。
「よし・・私も見てるからね、見せておくれよ・・お前の真希を」と大ママが笑顔で言った。

「はい・・見ていて下さい、母とは違う真希を」とマキも笑顔で言った。
大ママは体を離して、ユリさんを見て微笑んだ。
「ユリ・・私からも頼むね、ユリに育てて欲しいんだよ・・ユリは真希姉さんと同じ匂いがするから」と大ママが微笑んだ。
「全力でやります・・これだけの素材に、巡り合えたのですから」とユリさんも薔薇で返した。

『大ママ、マキもフロアーデビュー前には、魅宴研修させて』と大ママに笑顔で言った。
「断るとでも思ってるのかい」と大ママが嬉しそうな笑顔で返してきた。
「ありがとうございます、光栄です」とマキが笑顔で頭を下げた。
「その感覚・・言葉を読む能力、素晴らしいね・・頑張りなさい」と大ママがマキに微笑んだ、マキも微笑んで頷いた。

「マキ・・ミサキ姉さん17歳だよ」とマキをミサキに紹介した。
「マキです、よろしくお願いします」と笑顔で頭を下げた。
「よろしくね・・噂以上に綺麗だね、私会いたかったの宝塚が好きだから」とミサキが笑顔で言った、マキも笑顔で返していた。
「ミサキ駄目だよ、私も宝塚好きだからね」とユリカが爽やかニヤで言った。
「エース残念ね、振られたの・・明日から私を毎日抱っこに来て良いわよ」とミサキがユリカにニヤを返した。
『ミサキ・・リョウから盗んだね、最高の返しだったよ』とミサキにニヤで言った。
「ミサキ姉さん、勉強になります」とマキが笑顔で言った。
「嬉い～・・初めて夜街の女性から姉さんって言われた」とミサキが嬉しそうに笑った。
「出し惜しみしますね、ミサキ姉さん」とマキも笑顔で言った、ミ

サキは笑顔ウルを出していた。

「エース・・凄すぎない、マキ爆弾・・あんたと話してる感覚になるよ」とミサキが私にニヤを出した。

「エースに会話を、7年以上鍛えられましたから」とマキがニヤで言った。

「7年・・9歳から、なるほどね～」とミサキもニヤで返した。

「ミサキ姉さん、今・・いやらしい感じ出てますよ」とマキが微笑んだ。

「マキ教えてあげる・・これが魔性の魅力と言うのよ」とミサキがニヤニヤで言った。

「凄～く勉強になりました・・さすがです、ミサキ姉さん」とマキが微笑んで、2人で笑っていた。

「ユリ・・今夜デビューさせても、9人衆は震えるよ」と大ママが笑顔で言った。

「そうですね、さすがユリカが身元保証人になるだけあります」とユリさんも薔薇で微笑んだ。

「そりゃまた、背負わせたね・・ユリカ」と大ママが笑顔で言った。

「その位背負ってもらわないと、楽しみがないですから」とユリカが爽やかに微笑んだ。

「そうそう大ママ実は、蘭とエースのお父様が・・・・」ユリさんが演出の話をした。

「絶対見に行くよ、そんな伝説見ないと後悔するからね」と大ママが笑った。

3人の笑顔と、嬉しそうに話すミサキとマキを見ていた。

大ママに挨拶をして、魅宴を出た。

ユリカが準備に帰ると言ったので、私は駐車場までユリカを送った。

ユリカはご機嫌状態で、笑顔のユリカに手を振って別れた。

ＰＧに帰ると、ＴＶルームにマダムとユリさんがいて、マリアはお昼寝中だった。

「マキボーナス出さんとな」とマダムが笑顔で言った。
『別に俺が連れて来たんじゃないよ』と笑顔で返した。
「あなたがいたから来たんですよ、あなたがいるから、この世界を意識したと思いますよ」ユリさんが言って。
「そして私からも・・マキは最高のホームランです、あのミサキとの会話で確信しましたよ」と薔薇で微笑んだ。
「ユリ・・蘭のマキに対する熱、まぁエースの関係者ってのも強いんだろうがね」とマダムが言った。
「蘭は東京ＰＧを視野に入れましたね、ＰＧの将来像を考えて、マキの登場が嬉しいのでしょう」とユリさんが嬉しそうに返した。

私はマリアが起きたので、マリアを抱いてフロアーに行った。
１０番でシオン・レン・ハルカ・マキが笑顔でサインの話をしていた。
私はマリアと散歩に出かけた、マリアは天使全開で私を見た。
『アイシュだね、マリア』と笑顔で言うと、頬にキスしてくれた。
私はソーダアイスを買って、半分に割って、ベンチでマリアと食べていた。

「まちるだ・・いった？」とマリアが少し寂しげに言った。
『そうだよマリア、マチルダは行ったんだよ・・だから帰ってくるよ』と微笑んで言った。
「まちるだ・・かえる」と天使になって笑った。
マリアの気持ちが伝わってきて、マチルダがいない寂しさを感じていた。

「なんだい・・まだ引きずってるのか、らしくないぞ」とカスミの

声がした。
『引きずってた・・カスミ見るまで』と笑顔で返した。
「マリア・・アイスに騙されるなよ」とカスミがマリアを抱いて不敵を出した。
『カスミ・・イルカ見たいの？』と笑顔で聞いた。
「絶対見たい・・絶対連れてけよ」と不敵を出した笑った。
『了解・・考えとくよ』と笑顔で返して、カスミとＰＧを目指して歩いた。

カスミとＴＶルームに行くと、４人組がおやつを食べていた。
『カスミ、今日から入る・・マキ、１６歳』とカスミにマキを紹介した。
「カスミさんですか、マキと言います、よろしくお願いします」とマキが笑顔で頭を下げた。
「よろしく・・確かに豊が言った通りだね、全体的感じが良いね～・・体も締まってるし」とカスミが輝きながら微笑んだ。
「カスミ姉さん、怖いくらい綺麗なんで・・驚きました」とマキが嬉しそうに言った。
「怖くないよ・・美しすぎるだけ～」と不敵ニヤで返した。

『カスミ・・体の締りって、どこで見るの？』と笑顔で聞いた。
「レンとハルカが聞き耳立ててるから、言いたくないけど・・腕の初動時だよ」とニヤで言った。
「腕の初動時・・難しい」とハルカが微笑んだ。
「引き上げるか、押し上げるか・・みたいな感じですか？」とマキが笑顔で聞いた。

「むむ・・お主できるな・・そんな感じ、無駄な脂肪が付くと動きが大きいんだよ。
１番分るのは歩き方・・前屈みになりがちだし、引きずる感じも

ある。
　手の振りも小さくなるし、どこか動きがバラバラな感じになるんだよ」
カスミは真面目に話した、４人は興味津々で聞いていた。
『カスミはフロアーにいる時は、見せる歩き方だよね・・モデル時代の』と笑顔で聞いてみた。
「そうだよ・・少し大袈裟だけど、集中が高まるからね」と輝きながら微笑んだ。
「カスミ姉さん、体の中心点はどこでとりますか？」とマキが聞いた。
「私は谷間の中心・・マキは谷間が無いから無理～」と不敵ニヤで答えた。
「私１６だから・・今から牛乳飲みます・・エース、ダッシュ」とマキがニヤで返した、私はウルで返していた。
「牛乳より・・鏡の方が効くよ」とカスミが不敵で言った。
「観察するんですか？・・自分の胸を」とマキが真顔で聞いた。

「もちろん・・合わせ鏡で見る、そしてこんな感じが好き～って思いながら触るんだよ」と不敵ニヤで言った。
「やってみようかな～」とハルカが笑顔で言った。
「人の体は自分で作ってるんだから・・脳に教えれば大きくなる位できるさ」とカスミが笑顔で言った。
『ハルカ・・俺が手伝ってやろうか』とニヤで言った。
「そうして・・補助だけよ、揉むなよ」とハルカがニヤで返してきた。
「ハルカ・・少し下ネタ、スムーズな返しになったな」とカスミがニヤで言った。
「そっか～・・下ネタとか口説き文句とかの、対処もいるのか～」とマキがハルカに微笑んだ。

「マキは今でも出来そうね、自信有るでしょ～」とハルカが微笑んだ。
「未経験の子供相手なら・・大人の男性相手には自信無しです」とウルで返した。
「口説き文句の返しは、私は今でも慣れないな～」とレンが微笑んだ。
『カスミ、アドバイスしてやれよ、口説き文句』と笑顔でカスミに言った。
「簡単じゃないか・・ありがとう坊やって心で思えばいいんだよ、絶対に嬉しそうにするなよ」とカスミが不敵を出した。
「そこなんですよ～・・嬉しそうにしないで、空気を保たせる・・蘭姉さん見ると、びっくりしますよね」とハルカが微笑んだ。
「うん、私でも蘭姉さんのは今でも驚くよ・・あの返し、信頼関係が客出来てるよな」とカスミも笑顔で返して。
「もったいつけるなエース、マキの為にもアドバイス・・見返り対策」とカスミが不敵を私に出した。

『ようするに・・ＰＧで女性を口説くのは、相手もゲーム感覚でしょ。
まぁその見極めさえ間違ってなかったら、出来るでしょ。
俺は蘭を目で追ってるから、凄く分るけど。
蘭の凄さは、あれだけの指名客を持ってるけど、全員を覚えてる。
全員の前回の話や今の生活の背景、そして自分に対してどう来てるのか。
蘭は自分のお客を全員同じ場所に誘いこむ、だから相手は継続して来る。
その場所に来れば、それだけで楽しくて笑顔になれるから。
客に合わせてたら、もたないよ・・自分の世界に誘うんだよ。
本当に自信の持てる、自分の世界が出来れば楽になる。

後は笑顔だけ見せて、話聞いてやればいいから。
蘭は一組に1度しか、本気の点火はしないよ。
だから回転がかかると、その本領が発揮される。
全員に好かれる事なんて出来ない、それはユリさんでも。
お客に選ばせる・・私の世界はこれだと提示して。
そのレベルが、蘭・ナギサレベルだよ・・その上の話はまたいつか』

最後はニヤで言って、４人組を見ていた。

「そうなんだよ・・だからこいつは、シオンには何も吸収しないでいいと言うんだ。
シオンは自分の世界を持ってるから、フロアーに出てきたら分るよ。
多くの客が指示する、それに触れたくて足を運ぶよ。
私が男なら・・カスミよりシオンだよ」

カスミがシオンに不敵を出した、シオンは嬉しそうに、ニコちゃんビームを返していた。
「第七章の応用で良いんだね」とマキが私にニヤで言った。
「マキ・・第七章って何？・・述べよ」とカスミが不敵ニヤを出した。
「私の中学の卒業祝いで小僧がくれた、【豊の道】って言う本です、小僧直筆の」とマキが笑顔で答えた。
「ほほ～・・で第七章は？」とカスミが私に最強不敵ニヤを出してマキに聞いた。

「第七章・・心の世界・・現実の世界とは別にある、自分の世界。
そこは人を誘う事が出来る、伝えれば・・尋ねて来る人がいる。
私達や小僧は、豊の世界に遊びに行っていたんだと。

その世界を素敵だと思って、そこで遊び・学び・感じた。
だから自分の世界を作ろうと、そして誘ってみようと。
人と人の関係は、様々な愛の形が存在するから。
いつか私の世界に招待してと、書いてありました」

マキがカスミに笑顔で言った、カスミも輝く笑顔を返した。
「小僧・・私達にも大至急、【豊の世界】を書き下ろすように」と
カスミが最強不敵で言った。
シオンとレンとハルカが、笑顔で頷いた。

「マキ、よく来たね・・嬉しいよ・・そして私も楽しいよ」とカス
ミがマキに言った。
「私も嬉しいです、最高のターゲットが出来て」とマキは真剣な瞳
でカスミに言った。
「本当に楽しみに待ってるよ、マキ・・全力疾走で来い」とカスミ
も真顔で返した、マキも真顔で頷いた。
私は思い出していた、豊兄さんがマキに言った言葉の真意。
【カスミに会えば、決意できる】そう言った言葉の深さを感じてい
た。
カスミの嬉しそうな輝く瞳を見ながら、マキの強い意志の瞳を見な
がら。

カスミはこれ以降、変化の速度が加速していく。

マキがカスミに、女としての心の問いかけを繰返すから。

カスミはその度に、あの下手くそな愛情表現で答えていく。

その圧倒的な容姿と、温もりのあるストレートな言葉で。

カスミが後に教えてくれた、マキに初めて会った時に問われた言葉。
中心点をどこでとるのかと、そう言われた時に喜びを感じたと。
初めて下の世代に、何かを伝える事が、自分でも出来ると感じたと。
カスミが目指して、継続して追いかけた美の世界・・マキがその本質を問うた。
マキが教えてくれた、カスミが会話した後に、言ってくれたのが嬉しかったと。
よき来たねって言葉が、心に響いてきたと・・温もりに包まれていたから。
その後リアンとカスミとマキで、情熱3姉妹と呼ばれる。
3人がその愛を、無変換の言葉にしたから。
カスミの言葉は響く・・強く生きた証を連れている。
自分への厳しさが、優しさに変る・・絶対的存在。
銀河の奇跡・・永遠の憧れ・・カスミ。

無償の愛

夏の日の午後、少し爽やかになった風が、小窓から吹いていた。
少しだけ前を歩く輝きが、伝えていた大切な事を。
それを聞く4人の輝きに、笑顔が溢れていた。

「素敵なミーティングですね、カスミちゃんありがとう」とユリさんが後から薔薇で微笑んだ。
カスミは嬉しそうに、照れた笑顔で返した。
「シオン・・車じゃろ、運転手になってくり」とマダムがシオンに言った。
「もちろん、何処に行きますか?」とシオンがニコちゃんで返した。
「マキの家・・マキ、ワシからツネさんに正式に挨拶してくるかい」とマダムが笑顔で言った。
「マダム、祖母と知り合いですか・・ありがとうございます」とマキが嬉しそうに笑顔で頭を下げた。
「2つ上の姉のような存在じゃよ、ワシも会うのが楽しみじゃよ」とマダムが言って私を見た。
私とシオンが立って、マダムと出かけた。

マダムが駐車場料金を支払い、駄菓子屋を目指した。
私が助手席に乗り、シオンの道案内をしていた。
シオンはマダムに頼まれたのが嬉しいのか、ニコちゃんで運転していた。
「ツネさんはおるかの〜」とマダムが私に聞いた。
「夏休みのこの時間、駄菓子屋閉めたら暴動が起こるよ・・今はマキもいないから」と笑顔で返した。
「そうか・なるほどね〜」とマダムも楽しそうだった。
駄菓子屋に着いて、中庭に車を入れた。

婆さんが顔を出していた、私は車を降りて笑顔で頭を下げた。
「お～・・がんたれ息子、久しいの～」と婆さんも笑顔で言った。
シオンが降りて頭を下げて、マダムが降りた。
婆さんはマダムを見て、嬉しそうな笑顔になった。
「タミちゃんじゃないね～・・久しいね～」と婆さんが近付いてきた。
「ツネさん、ご無沙汰してます、お元気そうで」とマダムも笑顔で返した。
「待ってくれよ、小僧と一緒に来たって事は・・マキかい」と婆さんが言った。
「はい・・私が責任を持って預からせてもらいます」とマダムが頭を下げた。
「民子ありがとう・・よろしくお願いするね、まぁ上がって話そう」と婆さんが言った。
私は婆さんにシオンを紹介した、シオンはニコちゃんで頭を下げた。

「素晴らしい子じゃね～・・タミは昔から運が良い奴じゃね～」と婆さんが微笑んで、シオンも笑顔で返した。
「小僧・・シオンちゃんと店番よろしく・・ジュース取って飲んでくれ」と婆さんが言って、私が頷いた。
マダムと婆さんが母屋に向かい、私はシオンに手を引かれた。
『どうした、シオン』と声をかけた。
「すっっっごく嬉しいの・・駄菓子屋さんの店番」と最高ニコニコちゃんで言った。
私も笑顔で返して、店に入った。

店には見慣れた2人の後姿があった。
「悪ガキ・・くじ引きで迷うなよ」とニヤで声をかけた。
「げっ！・・チャッピー、チース・・死んだって聞いてたのに」と

悪ガキ、マサが言った。
「俺・・刑務所に入ったって聞いた」と悪ガキ、ケンジが笑った。
『情報源は想像できる・・意地悪してやる』と笑顔で返した。
悪ガキ2人組みを見ると、シオンに見惚れていた。

「このお姉さん・・シオンお姉さんがお店番だから、くじ引くのか？」とニヤで聞いた。
「シオン・・素敵な名前だ～・・シオンお姉さん、くじ一回引きます」とケンジが言った。
「はい、ありがとう・・頑張るのです」とシオンがお金を受け取り、ニコちゃんで見た。
ケンジは嬉しそうに、笑顔になって気合を入れて、くじを一枚引いてシオンに渡した。
シオンがめくり、ニコちゃんでケンジを見た。
「おめでと～う・・3等で～す」とシオンが拍手をして、ケンジは嬉しそうに照れていた。
「シオンお姉さん・・俺もくじ引きま～す」とマサが言って、シオンがニコちゃんで見ていた。
私は奥に腰掛けて、シオンの最高のニコちゃんを見ていた。

子供が集まりだして、シオンが囲まれていた。
私はそのシオンの魅力に、また驚かされていた、その輝きに。
そして思った、リンダとマチルダと旅をするシオンを・・子供の笑顔を見ながら。

「珍しい奴が店番してるね～」その懐かしい声で我に返った。
「こんにちわ～」と呼びかける、子供達の声に笑顔を向けて母が歩いて来た。
『これはお母様・・ご無沙汰してます』と動揺しながら、笑顔で言った。

「本当にご無沙汰だね〜・・まぁ元気そうで何よりだよ」と言って、私の横に座った。
『皆さん、お変わりないですか？』とニヤで言った。
「万事順調です・・息子以外は」とニヤで返された。
『明日・・親父に会うよ』と真顔で言った。
「聞いたよ・・感謝しろよ、ユリさんと豊とマキに」と母が真顔で返してきた。

『うん・・してるよ、マキもだね』と笑顔で言った。
「マキが今朝来て親父に言ったよ、挑戦を決めたって・・だから小僧を貸してくれってね」と母が笑顔で言った。
『さっき、マキ採用されたよ・・俺も親父と和解してみせるよ』と真顔で返した。
「頼んだよ、私はユリさんと友達だからね・・マキは幸せだよ、ユリさんの下なら」と母が笑った。
その時シオンが来て、母に頭を下げた。

「シオン・・俺のお袋・・お袋、シオンって言います・・ユリさんの秘蔵子」とお互いを笑顔で紹介した。
「エースには、本当にお世話になっています」とシオンが驚いて頭を下げた。

「こちらこそ、お世話になってます。
シオンちゃんですか・・少し残念な気分です。
あなたが蘭ちゃんなら良いな〜と、思ってました」

母がシオンに笑顔で言った、シオンの最高のニコちゃんが出た。
私は何度も押し寄せる、ユリカの暖かい波動が嬉しかった。
「ありがとうございます、でも蘭姉さんに会われたら分ります、私の憧れですから」とシオンが真顔で言った。

「ありがとう・・楽しみが増えました」と母も笑顔で返した。
「ねぇねぇシオンちゃん・・これさ～」と少女軍団に手を引かれて、シオンがニコちゃんで頭を下げて行った。

「なるほどね～・・帰りたくはないよね～」と母ニヤできた。
『帰らないよ・・でも近くにいるよ』と真顔で返した。
「決めたんでしょ・・その程度で驚かないわ、あんたとシズカの母親よ」と笑っていた。
私は嬉しかった、母の生き方が好きだったから。
その予想通りの対応と、その言葉が。

「律子・・律子じゃないかい」とマダムが言って、店に入って来た。
「民子さん・・嬉しい、ご無沙汰してます」と母が驚いて立ち上がり頭を下げた。
「嬉しいね～・・元気そうだね」とマダムも笑顔で返した。
私は凍結して、その２人を見ていた、その後で婆さんがシワシワニヤを私に出した。

「もしかして・・息子がお世話になってます？」とマダムの手を握り、母が微笑んだ。
「えっ！・・お前の息子か！」とマダムが驚いた。
「はい・・不束な私の息子です、本当にお世話になります」と母が笑顔で頭を下げた。
「待てよ・・て事は・・廃墟の伝道師の息子か！」とマダムが聞いた。
「残念ですが・・そうなります」と母が笑顔で返した。
「なるほどね～・・そうなんかい」とマダムが私にニヤで言った。

『廃墟の伝道師・・なんかイメージ湧かんな～』とマダムにニヤで返した。

「教えんぞ、本人に自分で聞けよ・・命名はマキの母親の真希じゃから」とマダムが笑った、私はウルで返した。
「明日、律子も来るんね？」とマダムが聞いた。
「民さんに会えるなら、行きますね」と母が笑顔で答えた、マダムが笑顔で頷いた。
「ユリが喜んだはずや・・お前達夫婦に会ったんだからな」とマダムが微笑んだ。

「民さん、見つけたんですね・・あの素晴らしいユリという女性を。
私が妊娠して、民さんの小料理屋から足が遠のいて。
次に行った時には、小料理屋さんが無くなってて。
夜街の知り合いは、ツネさんも引退されてて誰も居なかったから。
探さずにいました・・今、本当に感激しました。
民さんの強い想いが、引き合わせた・・あのユリという女性に。
ツネさん、マキは大丈夫・・民さんとユリの想いが詰まってる店でしょうから。
そして小僧も側で見てるでしょうから、本当にありがとうございます。
本当に会えて嬉しかった」

母はマダムと婆さんを見ながら、笑顔で言った。
「必ず来いよ、何度でも・・1度ツネさんを連れて来てくれよ」とマダムも微笑んだ。
母も微笑んで頷いた。

シオンの車に乗って、婆さんと母と別れて、沢山の子供達に手を振られて帰路についた。
「エース・・親父さんはマキを可愛がったじゃろう？」とマダムが笑顔で言った。
『親父にとっては、娘だよ・・シズカと全く同じ存在だと思うよ』

と笑顔で返した。
「そうじゃろう・・真希の娘じゃからの～」とマダムが言った、嬉しそうな笑顔だった。
私は深く聞かなかった、親父の事は和尚から少しは聞いていた。
しかし和尚も、本人から聞け・・それか経験で知れと言っていたから。
【廃墟の伝道師】の言葉だけが、頭に残っていた。

「シオン・・そこの給油所に入って、満タンにせい」とマダムが言って、シオンが入った。
マダムが支払い、シオンがニコちゃんでお礼を言った。
「シオン・・ご機嫌じゃね～」とマダムが笑顔で言った。
「はい・・今までで1番嬉しい言葉を、最高の人に頂きました」とニコちゃんで返した。
「律子がなんと言ったのかい？」とマダムが聞いた。
「私が蘭姉さんなら良かったと、言ってくれました」とニコニコ全開で言った。
「それは良かったの～・・シオン期待してるぞ、頑張っておくれよ」とマダムが笑顔で言った、シオンも笑顔で強く頷いた。

準備に帰るシオンの車をマダムと見送り、私はマダムをビルの下まで送った。
マダムと別れて、ユリカの店に行った。
店に入るといつもの席にユリカが待っていた。

私はユリカを抱き上げて、ユリカの深海の瞳を見た。
『ユリカ・・寂しいんだろ、充電しろよ』と優しく言った。
「ありがとう・・明日、イルカに会えるから大丈夫」と爽やかに微笑んで瞳を閉じた。
私は無心でユリカの重みと温度を確かめて、深い眠りに入ったとこ

ろで座った。
ユリカを抱きながら、ユリカの顔を見ていた、美しく滑らかな肌を。
ここからの話は、２０数年後、マダムの通夜でユリさんと大ママから聞いた。
マダムは私と別れてＰＧに帰り、ユリさんに大ママと食事がしたいと言った。
大ママとユリさんと、３人で食事をした。
そして何かを感じて緊張する、大ママにマダムが伝えた。
「アスカ・・マキを預かるのに、話しておかねばならん事が出来た」
とマダムが真顔で言った。
「はい・・何でしょう？」と大ママが真顔で返した。

「今日、マキの件でツネさんに挨拶に行った。
そこで会ったんじゃ、エースの母親に。
エースの母親・・律子に」

マダムは大ママを見ていた、大ママは驚いてマダムを見た。
「マダム・・律子って、あの律子さんですか？」と大ママが聞いた、
マダムは笑顔で頷いた。
「じゃあ・・父親は・・勝也さん」と大ママが笑顔で聞いた。

「そうじゃよ・・エースの父親は勝也や・・廃墟の伝道師。
アスカ・・勝也はマキに何も教えずに、マキを娘のように可愛がった。
真希の残した唯一の宝じゃから、律子も娘のように可愛がったんじゃろう。
ワシらはバトンを渡された・・あの真希という絶対の存在に。
だからユリにも聞いて欲しい、そしてアスカに知っていて欲しい。
マキの挑戦・・それをサポートするであろうエースの存在。

そう感じたから、和尚は演出を考えた。
勝也に見せたかった、蘭という女を・・そしてユリの作ったＰＧを。
ワシらは試される、その生き方を・・勝也がＰＧに来る。
マキを預ける場所に、そして息子の愛する女に会いに。
廃墟の伝道師・・真希が唯一他人に贈った称号。
その話からせねばなるまい・・ユリ、聞いてくれ」

マダムはそう言って、ビールを一口飲んだ。
大ママは涙を見せていた、ユリさんはそれで感じて真顔で頷いた。

「終戦の時・・勝也は多分、今のエースより、もう少し子供じゃったと思う。
焼け野原に大人達の絶望の顔があった、そこに現れたんじゃ勝也が。
家を建てようと言って、大人達を元気付けた。
しかし大人達は、絶望していて・・生きるだけで精一杯やった。
勝也は自分の家が有った場所に、廃材を集めて・・一人で小屋を建てた。
必死になって・・たった一人で・・その姿が響きだす。
大人達の心に響きだすんじゃよ、大工の棟梁だった男が教え始める。
そして小屋が家になっていく、その強い意志が伝わる。
大人達に希望を見せた、親も何もかもを無くした勝也が。
ワシとツネさんは、勝也が可愛くて・・芋や飯を食わせていた。
勝也は中学を出て、大工の棟梁の弟子になり、それから会わなくなる。
そして次に出会うのは、千花が出来た時じゃよ。
勝也が２２歳じゃったね、大工仲間に連れられて千花に来たのは。
ワシはその時、ツネさんに呼ばれて行ったんじゃよ。

久しぶりに会った、勝也を見て嬉しかった・・逞しい男になっていて。
そして勝也は真希に出会う、勝也は真希を妹のように可愛がる。
ツネさんに感謝してたんやろう、その愛情は深かったよ。
本当に深い愛情やった、恋愛対象でない愛じゃった。
そして感じたよ、その愛と同じだと。
今のエースのユリカに対する愛情は、勝也の真希に対する物と同じだと。
勝也は恋人の律子を紹介して、律子も真希と仲良くなる。
真希にとって律子は姉同然じゃった、ワシの小料理屋に3人でよく来てくれた。
そんな時、大火事がおこり、また焼け野原が広がる。
そこに立つ・・勝也が笑顔で、家を建てるぞと叫ぶんじゃ。
その姿を真希が見て贈る・・その圧倒的な強い意志に心震わせて。
愛を込めて贈った称号・・廃墟の伝道師。
あの3人は、本当に見てて素敵な関係じゃった、そして真希が愛する男を紹介する。
そして結ばれて、真希が上京する・・勝也と律子も結婚する。
勝也は棟梁になり忙しくなり、律子もシズカを妊娠して来なくなっていた。
その時にワシが出会う、ユリに・・そしてPGを作るのに小料理屋を閉める。
そうなって、律子との縁も切れてしまうんじゃ。
風の噂で、真希の旦那が娘を見ずに他界した話を聞いた。
そして・・真希自信も肺の病で、逝ったと聞いた。
ワシは辛くて、ツネさんに会えずに過ごしていた。
そして今日出会った・・真希が残したマキに。
その姿を見て・・嬉しくて、泣きそうじゃった。
そして・・分った・・理解した・・本当に感動したよ。
マキを勝也と律子が見守っていた事に、その無償の愛は永遠だと

感じて。
ツネさんも勝也も律子も、マキの挑戦を認めた。
１６歳で挑戦する背中を押した、その気持ちを感じて泣いたよ。
ユリ・・ワシらも見せんといかん、マキを預かるのなら。
その本気の生き方を、マキに伝えんといかん。
ワシらに無償の愛を見せてくれた、その大切な宝を預かるのだから。
ワシにも・・特に飛鳥には特別な女性・・あの輝ける女、真希のバトン。
この夜街の創世記に、その方向性を見せた・・真希。
託されたんじゃ・・ユリ、お前が。
飛鳥がずっと見守ってる、お前が本気で生きて見せねばならん。
エースの言葉を借りよう・・ユリ、お前が指名された。
この夜街の物語を書く・・原作者に」

マダムはユリさんに強く言った、ユリさんも美しい真顔で頷いた。
「勝也兄さんに会えるんですね・・魅宴の開店の日に会って以来です」と大ママが言った。
「ああ・・そして勝也は夜街に出だすよ、マキとエースを感じるからな」とマダムが言った。

「私も会った時に感じました、素敵なご夫婦だと。
そしてシズカちゃんと話して感じました、ご両親の子育ての素晴らしさを。
そしてあのエース・・全てを取り込んでいるのですね。
ツネさんも・・そして和尚様も存在する。
勝也さんが唯一認める男・・豊も存在する・・奇跡ですね。
そして私は託されました、マキを。
勝也さんと律子さんと、シズカと豊とエースに。
大ママ・・私は必ず全力で生きる姿を見せます、見ていて下さい

ね。
満足など金で買う物だと、そう強く言ったエースの言葉。
私はあの時、心に響き渡りました、どんな生活をしていれば言えるのかと。
あの子は知ってるんですね、あの感性なら感じたはず。
無償の愛とは何かを・・人を想うとはどんな事だと。
それを見てきたから、ああなった・・シズカもエースも。
そして多分・・豊も恭子も・・そしてマキも。
私は今喜びで震えています、原作者に挑戦できるから」

ユリさんは大ママを見ながら、真剣に伝えた。
「ユリ・・見てるよ、ずっと・・ユリ、真希姉さんが喜んでいる・・そう感じるよ」と大ママが言った。
「はい・・3人の秘密が増えましたね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「もう知る者はおらんじゃろうから」とマダムも笑顔で言った。
「マダム・・いますよ、PGの受付に」と大ママがニヤを出した。

「徳がおった!・・火曜が楽しみやの〜・・徳が泣くのが見れるかも」と大ママが言った。
「まぁ、そうですの?」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

「勝也兄さんは・・徳野さんの兄みたいな存在だったからね。
いつもヤクザは向いてないから、やめろって言ってたよ。
徳野さんの今の姿を見たら、勝也さん喜びますね」

大ママが笑顔で言った、ユリさんも笑顔で頷いた。
「徳が気付くかの〜・・まぁ気付いても、エースに手心を加える奴じゃないが」とマダムが笑った。
「逆に厳しくなりますよ・・勝也さんの息子だと知ったら」と大マ

マが微笑んだ。
「大ママ・・エースをまだ狙ってますね」とユリさんが薔薇ニヤを出した。
「マキが入ったんだ・・エースくれても良いだろう」と大ママがニヤで言った。
「それは無理です・・私が本気で生きるには、絶対必要です・・マリアの為にも」とユリさんが微笑んで返した。

「なぁユリ・・シズカって子は、夜の挑戦しないのかね～」と大ママが微笑んだ。
「本当に残念ですが・・しませんね」とユリさんが真顔で返した。
「その言い方で、益々欲しくなるよ」と大ママがニヤで言った。
「明日会っても・・さらうなよ」とマダムが笑顔で言った。
「それほどですか！・・・く～欲しい」と大ママがニヤで返した。

「ユリ・・明日共同体の話で集まろう、私が連絡するよ。
１０時からユリカの店で、どうかね？」

大ママがユリさんに微笑んだ、ユリさんも笑顔で頷いた。
「もちろん、良いですよ・・大ママ今からジンに伝説をプレゼントしましょうか、２人で指名して」と悪戯っ子を出した。
「良いね～・・・７時からだから、もうすぐ開店するしね～」と大ママも微笑んだ。
「ジンが腰抜かすぞ・・伝説確定やな」とマダムが笑顔で言った。

３人で店を出て、マダムと別れてホストクラブに行った。
受付が緊張感に包まれた、女帝２人の来店で。
ＶＩＰＢＯＸに通されて、ジンを指名した。
ジンが出てきて、２人を見て焦って頭を下げた。

「ＮＯ１が簡単に動揺するなよ」と大ママが微笑んだ。
「大ママ作戦ですよ・・可愛く演出したんですよ」とユリさんが薔薇ニヤで言った。
「勘弁してくださいよ～・・大ママ・ユリさん、本当にありがとうございます・・今後の励みになります」と笑顔で言って、深々と頭を下げた。
「まぁ、お座りよ・・説教してるみたいだから」と大ママが笑顔で言った。
ジンも笑顔で返して、２人の間に座った。

「共同体の話・・明日の１０時から、ユリカの店でやろうと思うんだけど」と大ママが微笑んだ。
「もちろん、伺います」とジンも微笑んで、３人で乾杯した。
「少し急ぎたい気持ちになってね、明日エースに初の依頼をするから」と大ママがニヤで言った。
「それは楽しみですね～・・エースの出す答えが」とユリさんもニヤで言った。
「楽しそうですね～・・どのような依頼ですか？」とジンも微笑んで聞いた。

「ＰＧに今日・・凄い１６歳が入ってね。
ジンも知っての通り、ミサキとハルカがいるからね。
うちにも早目に欲しいんだよ、最強の１６歳がね。
だからエースに探させる、奴は難しいほど燃えるから」

大ママが笑顔で言った、ジンは驚いて聞いていた。
「探してくるような気がしますね～・・難題ですから、答えを出しそうですね」とユリさんが微笑んだ。
「俺も凄く楽しみです・・ワクワクしますね」とジンが笑顔で言っていた。

私は何も知らずに、ユリカが起きて・・手を振って別れてＰＧを目指していた。

私は両親とマキの絆を知らなかった、ただマキを可愛がってると思っていた。

私が父の称号の意味を聞くのは、ユリカとの別れの前日。

ユリカが教えてくれた、その称号の意味を。

親父は私との和解の後、ＰＧと魅宴とリアンとユリカの店に行くようになった。

若い大工を誘って、顔を出していた・・そしてユリカと蘭を娘のように愛した。

親父が亡くなる少し前、私は親父から聞いた。

４人の娘が持てて、幸せな人生だったと。

長女のユリカ・次女の蘭・そして双子のシズカとマキを持てたから。

ユリカにはもう、自分は会えないだろうから、伝えてくれと頼まれた。

そのメッセージは今だ伝えていない。

ユリカの悲しみに満ちた、強烈な波動に耐えながら。

ユリカを憎む、もう一人の自分で聞いたのだ。

私が自分の言葉で、ユリカを抱き上げて・・直接伝えようと誓ったから。

ユリカが親父に書き残した手紙、親父は最後まで大事に持っていたよ。

無償の愛だったのだろうか？・・母は今でもマキと親子のような関係でいる。

廃墟の伝道師・・確かに強い生き方だった。

私は今でも追いかけているのだろう・・その背中を。

被災地の状況を見た時に映像が流れた・・瓦礫の中に親父が立っていた。

家を建てよう・・町を作ろうと笑顔で言った・・廃墟の伝道師として。

もう一人の、弱い自分

晩夏の夕方、その街は活気が出てくる。
夜の街・・その独特の匂いが鼻をくすぐる。
派手目の女性が足早に歩き、ビラを配る人々が笑顔で立っている。

ＴＶルームに戻ると、４人組と蘭とカスミが食事の準備をしていた。
松さんがマキにお茶の場所を教えていた、楽しそうな松さんの顔を見ていた。
「マキちゃん、綺麗ね～」とエミが笑顔で言った。
『そうかな～・・俺は今まで意識して見なかったから、気付かなかったよ』と笑顔で返した。
私が座ると珍しくミサが乗ってきて、笑顔を向けた。
『どうしたミサ？トオル君と進展したのか』とミサの好きだと言った男の子の名前を言った。
「今日、遊んで・・手を繋いで帰った」と笑顔で言った。
『なんだって～・・それでそれで』と笑顔で聞いた。
「トオル君・・ミサが可愛いって言った」と少女の輝き前回で笑った。
『良かったね～・・でもミサ気を付けろよ、言葉を信じるなよ』とニヤで言った、ミサも楽しそうに笑顔で頷いた。

「エミちゃん・・突っ込んで」と蘭が満開ニヤでエミに言った。
「言葉を信じるなってエースが言ったら、エースの何を信じれば良いの？」とエミが不敵を出した。
『エミ・・不敵駄目・・俺の可愛いエミが』とウルで返した。
「とことんエミには弱いな～」とカスミが不敵を出した。
『エミ・・あれが不敵だよ、嫌だろ・・あんな人になりたくないだろ』とニヤで言った。

「カスミちゃんみたいに可愛くなれるなら、一生不敵で良いよ」とエミが笑顔で言った。
「カスミ・・泣くなよ」と蘭が満開ニヤを出した。
「危なかった～・・嬉しくてウルウルした」とカスミがウルで返した。

「しかしシオン何があった、ニコちゃん継続で怖いよ」とカスミが言った。
「今日素敵な人に、最高の言葉を貰いました～」とニコちゃん全開で言った。
「誰かな～・・素敵な人」と蘭が満開で聞いた。
「エースのお母様です～」とニコちゃん全開のまま返した。
静寂が訪れて、全員が私を見た。

『マキの家にマダムと行って店番してたら、来たんだよ』と笑顔で返した。
「それで、それで、なんて言われたの？」と蘭が満開笑顔で促した。
「シオンの事を、蘭姉さんなら良かったのにと言われました～」とシオンが不敵らしいものを出した。
「シオン・・それ不敵？」と蘭が満開で笑って、全員で笑った。
「シオン、それは不敵じゃなくて不思議だよ」とカスミが言って、シオンがニコちゃんに戻って舌を出した。

「しかしやばいな・・よりによってシオンを見るとは・・カスミなら良かったのに」と蘭が最強満開ニヤで言った。
「なぜ、きゃしゅみなら良かったのか・・述べよ」とカスミも最強不敵で返した。
「私が凄く、家庭的な女に見えるからよ～」と蘭が満開で笑った。
４人組は箸を止めて、爆笑していた。

「マキ・・母親攻略法を述べよ」と蘭が満開ニヤで言った。
「蘭姉さん、心配ないですよ・・そのままで会えば」とマキが笑顔で言った。
「エースを許して・・その程度じゃ驚かないわ、あんたとシズカの母親よって言ってました」とシオンがニコちゃんで言った。
「素敵だな～・・中1の息子が23の女と同棲するのが、その程度なのか～」とカスミが笑顔で言った。
「本心で、その程度でしょうね・・シズカも私達でも、その程度ですから」とマキが笑顔で言った。
「もし、マチルダと旅に出ると言ったら？」と蘭が満開で聞いた。
「その程度でしょうね・・絶対に」とマキが可愛くニヤで言った。

「やっぱり・・危険だ足枷が無い」と蘭が私に満開ニヤで言った。
『蘭と言う、手枷・足枷が有るよ』と笑顔で返した。
「よし」と言って満開で笑った。
「マキ・・エースが好きだったのは、幼稚園の先生だけなのか？」とカスミが不敵で言った。
「特別な例外を除けば、そうでしょうね」とマキがニヤで返した。
「マキ・・特別な例外を述べよ」と蘭が満開ニヤで言った。
「私と恭子です～」とマキがニヤニヤ返しをした。
「やっぱり・・そうだと思ったよ」と蘭も最強満開ウルで返した。

「エース・・バレンタイン何個位貰うの？」と久美子がニヤで言った。
『5個くらい』とウルで返した。
「それには限界トリオも入ってるのかい？」とカスミが全開不敵で微笑んだ、私はウルウルで頷いた。
「なら2個じゃねーか・・ヨチヨチ」とカスミがウルで言った。
「その2個の相手を述べよ」と蘭が満開で微笑んだ。
『今・・6歳のミユと5歳のマイ』とウルウルで返した。

「ようするに・・０って事ね」と久美子がニヤで言った。
全員がニヤニヤしていた。

「お前虫歯ないだろ」とカスミが最強不敵で笑った。
『いっぱいあるよ、マキが貰ったチョコ食べるから・・１００個くらい』とニヤで返した。
「１００個！」とハルカが驚いて言った。
「貰うでしょ・・１００個くらい・・来年からユリカ姉さんも入るし」と蘭が満開で微笑んだ。
『ミサキもらしいぞ・・ハルカ、ミサキがね・・・・・』ミサキがユリカにニヤを返した話をした。

「やるね～ミサキ・・私でもユリカさんに、ニヤは返せない」とレンが微笑んだ。
「私も・・無理」とハルカが微笑んだ。
『何言ってるの、ハルカ・・レンはまだ仕方ないけど、ユリカにどうして姉さんを付けないの？ユリカは待ってるのに』と真顔でハルカに言った。
暖かく強い波動が来て、私はニヤしていた。

「そう思う？」とハルカも真顔で聞いた。
「私もそう思うよハルカ・・絶対待ってるよ、ユリカ姉さんもリアン姉さんも」と蘭が満開で微笑んだ。
「シオンも、リアンはそう思ってると思うよ・・ハルカちゃん」とシオンがニコちゃんで言った。
「はい・・嬉しいので、頑張ってみます」とハルカが笑顔で言った。
『ハルカ・・頑張る事じゃないよ、自然にね』と私がハルカに笑顔で言った。
「ハルカ・・エースの前で言ったんだぞ、本人に言ってるのと同じだよ」とカスミが不敵を出した。

「あ！・・そうでした」とハルカが照れて笑った。

「でも、ハルカ姉さんやっぱり凄いです、裏方の時に認められてたんですね・・私も１７でデビューできるように頑張ります」とマキが笑顔で言った。

『マキ・・駄目だぞ、記録更新を狙う気持ちがないと・・タイ記録は出せん』とニヤで言った。

「はいエース・・私にも抱っこと、お熱添い寝あるんだろうね～」とニヤで返された。

『それは・・照れるかな～・・無理だな～』と照れた笑顔で返した。

「マチルダに電話して、エースが差別したって、リンダに伝えてもらおう」とニヤニヤできた。

『分った・・抱っこも添い寝もします～』とウルで返した。

「これは蘭姉さん、今からが楽しみですね～・・マキの存在」とカスミがハルカとレンに不敵を出した。

「本当にね～・・レンとハルカとマキで、銀河を狙うらしいから～」と満開笑顔で言った。

「有名人の辛いとこだな・・狙われるのわ」とカスミが不敵で４人組を見た。

楽しげな雰囲気に松さんも嬉しそうだった、久美子とマキの存在があるからだろうと思っていた。

女性達が準備に向かい、シオンがマキに指定席でサインを教えていた。

久美子はマキの初日の緊張を和らげるように、楽しげなジャズを弾いていた。

私はエミとミサと食事をしていた、そこにマダムが帰ってきた。

「松よ～・・マキ見て何か感じたか？」とマダムが笑顔で聞いた。

「何か懐かしく感じましたね・・全体的な輝きが」と松さんが答えた。

「さすが松じゃね・・あの子の名前は母親の源氏名・・真の希望で、真希じゃよ」とマダムが笑顔で言った。
「えっ！そうなんですねマダム・・母の源氏名だと聞いたけど、真希だったの」と松さんも驚いてマダムを見た。
「よろしくな松・・鍛えてやってくれよ」とマダムが微笑んだ。
「私に出来る事は全てしますよ・・真希の娘ならば」と松さんも笑顔で返した。

食事が済み、指定席に向かうと、蘭がもうフロアーに出ていた。
蘭がマキを連れて、入ってくる女性を紹介していた。
私は指定席に座って、マキの笑顔を見ていた。
マキの存在を感じてか、女性の入りが早かった。
蘭とカスミの漫才に、マキが突っ込んでるようで、９人衆を驚かせていた。
久美子が早目の時間で止まった、そしてマキを一瞬見て集中した。
激しいリズムの曲が流れた、久美子は最初から最後まで腰を浮かせて叩いた。
強い音が響き渡り・・魂の音色が、マキの入店を祝福した。
弾き終わり久美子が全員の拍手の中、頭を下げてマキに微笑んだ、マキも微笑んで返した。

「久美子ちゃんまた1段上がったね、マキが来て嬉しいんだね」と後からユリカが言った。
『ユリカ・・さすが夜の掟』と笑顔で振向いた。
「変な称号言わないの・・恥ずかしいでしょ」とユリカが爽やか笑顔で言った。
その時ハルカが来て、ユリカに笑顔を向けた。
「ハルカ・・さぁ言ってごらん」とユリカが爽やか笑顔で言った。
「おはようございます・・ユリカ姉さん」とハルカが言って、少し照れていた。

「嬉しいよ、ハルカ・・待ってたんだよ」と笑顔で言った、ハルカも嬉しそうに微笑んだ。
その時ユリさんが入場した、珍しく真赤なドレスを纏っていた。
マダムと徳野さんとボーイも揃い、ミーティングが始まった。
私は女性達の後ろに立った、ユリカは指定席で待っていた。

「今夜集まってもらったのは、裏方に１６歳の子を入れるから紹介をする・・マキ」とマダムが呼んだ。
マキがアダムの横に立った。
「名前はマキじゃ・・当面はハルカの時と同じ感じでいく、当然フロアーを目指している・・質問は？」とマダムが聞いた。
カズ君が手を上げて、マダムが指名した。
「１６歳という事ですが、身元保証人は誰ですか？」とカズ君が真剣に聞いた。
「私です」と言ってユリカが出てきた、女性とボーイの驚く表情が見えた。

「マキ・・彼女の全ての責任は。
全て私・・ユリカが負いますので、皆さん鍛えて下さい。
よろしくお願い致します」

ユリカは美しい姿勢で、全員に向かい深々と頭を下げた。
マキはユリカを見ていた、そして深々と頭を下げた。

「了承してもらえるかの？」と固まってるカズ君にマダムが言った。
「も、もちろんです・・全く異存はありません」とカズ君が慌てて答えた。
「それではマキ、皆に挨拶を」とマダムが促した。

「マキと申します・・若輩者ですが、挑戦を強く心に誓いました。
自分の可能性を信じて、今から頑張りたいと思います。
至らぬ点が多いと思いますので、皆様のご指導お願い致します。
なにとぞよろしくお願い致します」

マキは堂々と言って、深々と頭を下げた、全員が返礼して拍手をした。
マキは嬉しそうに笑顔で答えた。

「ユリ・・何かあるか？」とマダムが言った、ユリさんが頷いた。

「また１６歳の子を迎えます・・ハルカとは違った意味で期待します。
自分で職業として憧れて来たと、マキは言いました。
その想い、見せてもらいましょう・・その行動で。
シオンのデビューも近いと感じます、マキがサインを覚えたら。
シオンをサービスに入れます、明日からホノカも週２で入ります。
エースの共同体の提案の話を、明日詰めて決めます。
いよいよ来ます、群雄割拠の戦国ＰＧが。
闘わない者は去るべきです、自分と闘わない者は必要としません。
マキが呼ばれていた、３人組の称号・・エースが名づけた、限界トリオ。
その真意は、限界を自分で作るなとの想いだそうです。
私も言いましょう、自らに挑戦しない者は、必要ありません。
状況に甘える者は、満足したと判断します。
戦国の世なら、それは死を意味するから。
闘いましょう・・私にもいます・・もう一人の弱い自分が。
その弱い自分にだけは負けたくない、そう思ってここまで来ました。
ＰＧの女だと誇りがあるなら、闘いましょう、弱き自分と。

他のお店に行った時に、見せて下さい・・闘う姿を。
私はそれだけを期待します、闘えますね？」

ユリさんの熱く強い言葉が響いた。
「はい」と全員が返事で返した、マキは立ち尽くして見ていた。
その自分の目指す世界を見て、喜びを感じているようだった。

女性が円を描き始め、ユリカがマキとシオンと私の所に来た。
「それでは今夜も開宴しましょう」とユリさんが言って「はい」のブザーを鳴らした。
マキはシオンと指定席に行き、私はユリカを送ろうとしていた。
「ユリカ姉さん、本当にありがとうございます」とマキが頭を下げた。
「マキ・・そう思うなら、全力を見せてね」と爽やかに微笑んだ。
「必ずお見せします・・全力で生きる姿を」とマキも笑顔で返した。
シオンはマキを見ていた、シオンの真剣な瞳があった。

ユリカと腕を組み裏口に歩いていて凍結した、シズカが満面の笑みでユリカに駆け寄った。
「ユリカ姉さん見てました、本当にありがとうございます」と言って笑顔で頭を下げた。
「本当に良い友達なんだね、嬉しくなるよ」と言ってユリカがシズカを抱きしめた。
そしてマダムに案内されて、母が笑顔で歩いて来た。
「ユリカ姉さん、母の律子です」とシズカが紹介した。
「ユリカさん・・本当にありがとう、マキは幸せです」と母が笑顔で頭を下げた。
「ユリカです、よろしくお願いします・・身元保証人は私自身が選んだ事です、マキの将来性を信じて」とユリカも笑顔で頭を下げた。

「お時間は大丈夫ですか？」と母が微笑んだ。
「全然、大丈夫です」とユリカが笑顔で返した。
ユリカは母と並んで笑顔で話しながら、マダムの後を歩いた。
マダムがシオンにサインを振らせ、ユリさんと蘭を呼んだ。
マキが立って、母に笑顔で頭を下げた。
「マキ頑張って・・１６歳での採用ですから、母としてケジメを付けに来たから」と笑顔で言った。
「ありがとう、母さん」とマキも嬉しそうに微笑んだ。
マダムはその光景を見ながら、目を潤ませていた。

そしてユリさんが来た、薔薇の笑顔で母に近付いた。
「ユリ、本当にありがとう・・あなただから任せます、年齢を忘れて厳しくやって、マキは応えると信じています」と笑顔で言って頭を下げた。
「分りました・・私もこれだけの素材ですから、全てを見せます」と薔薇で微笑んで頭を下げた。
「しかし想像を遥かに超えるわね、あのたのその姿・・妖怪みたい」と母が楽しそうに笑った。
「お姉さん、妖怪はあんまりです・・別人かとと言うものですわ」と薔薇ニヤを出した。

「感動してるのよ・・そこまで辿り着けた女性を、私はもう一人しか知らない。
千花という店にいたＮＯ１だけです、あなたはその女性に肩を並べています。
その子が今生きてたら、本当に喜んでると思います。
ユリ、闘って・・絶対に負けないで、必要なら馬鹿息子の全てを使ってかまいません。
私の息子は絶対に諦めない、それだけが取り柄ですから。
たまに見に来るから・・ユリが美しく生きる、この世界を」

母は笑顔でそう言った、ユリさんも薔薇の笑顔で頷いた。
そしてユリさんの後に蘭が立った、私は驚いた満開の笑顔の後に、
青い炎が見えるようだった。
「それでは姉さん・・紹介します・・蘭です」とユリさんが言った。
「蘭と申します」まで蘭が言ったときに、母が強く蘭を抱いた。

「固い挨拶はいらないよ・・娘でしょ、私は今幸せよ。
小僧は探し出したのね、そしてあなたは現時点では受入れてる。
それだけで良いよ、焦って答えを求めないで。
私はあなたを娘と思いたい、私の次女と思いたいの。
将来どんな結果になっても、その事実は消えないほどの母娘に。
蘭・・ありがとう、小僧の成長が嬉しかった。
そしてあなたに出会って、本当に嬉しいよ。
さぁ言ってごらん・・あなたの言い方で呼んで」

母は体を逸らし笑顔で蘭を見た、蘭は満開で笑った。
「母さん・・ありがとう」と言って蘭が照れて抱きついた。
「８０点・・照れがあるのね」と笑顔で言って抱いていた。

「ごめんね蘭、仕事前に集中を乱して、私達には時間が有るから、
今度ゆっくり話しましょう」と母が笑顔で体を離した。
「母さん大丈夫です・・私はプロです、妹にその背中を見せます」
と満開笑顔で返して頭を下げて、戦場に戻った。
「姉さん、嬉しそうですね、・・蘭が次女ですか？」とユリさんが
薔薇で微笑んだ。
「そう今からどうしても長女になって欲しくて・・ユリカちゃんに」
と母が笑顔で言ってユリカを見た。
ユリカは一瞬驚いて、そして笑顔になった。
「ありがとう・・ママ」とユリカが爽やかに微笑んだ。

「ユリカがママって言うと・・飛鳥のような気分になるね」と母がウルで返した。
ユリカも私も母からアスカの名前が出て、驚いていた。
「じゃあ・・おっかさん」とユリカが爽やかニヤで返して、抱きついた。
「シズカ・マキ・・良かったね、変な姉さんが出来て」とユリカを抱きしめて微笑んだ。
「変ですか？・・この程度で、あなたの娘ですよ」とユリカが潤む瞳でニヤをした。
「ユリカ・・私の事も読んでね、あなたに伝えたい事が沢山あるから」と母が笑顔で返した。
「そうします、ありがとう・・母さん」とユリカが微笑んで、一筋の涙を見せた。
母はその涙を指で拭いて、笑顔でユリカを見ていた。

「律子さん！・・ご無沙汰しています」と徳野さんが慌てて駆け寄った。
母はユリカと体を離して、徳野さんを見て笑顔になった。
「徳ちゃん・・生きてたの～、良かった」と母が笑顔で言った。
「勘弁してください・・あれから2年で足を洗いました」と笑顔で返した。
「明日、勝也が来ます・・今の徳ちゃん見て、喜ぶよ」と母が笑顔で言った。
「本当ですか・・勝也兄さんに会えるんですか」と徳野さんは嬉しそうだった。
「徳・・マキをよろしくお願いします、勝也と私の娘と同じ存在です。
だから厳しく指導してね、あなたのその経験で。

遠慮したら、勝也が怒りますよ・・徳ちゃんが側にいると知ったら。
勝也は本当に喜ぶでしょう、勝也が仲間と思った男だからね。
あの焼け野原に、資材を運んだ徳を見て・・その夜に勝也は泣きました。
徳は男だと言って・・だから足を洗うのにこだわったのよ。
仲間だと、友だと認めていたからよ。
勝也は明日以降、ちょくちょく顔を出すでしょう。
だからマキに厳しく教えて・・若さで道を間違えぬように」

母は笑顔の徳野さんに、笑顔で伝えた、あえて私の事は伏せていた。
「分りました・・引き受けます、ここの全ての女性と同じ扱いで」
と徳野さんは笑顔で言って頭を下げた。
「ありがとう、ユリも徳ちゃんも仕事に戻って」と母が笑顔で言って、2人を見送った。
「マダムとお話しするから、ユリカ少し時間ある？」と母がユリカに微笑んだ。
「もちろん、ご一緒します」とユリカが爽やか笑顔で、横に並んだ。
「私、邪魔しないので、少しここで見てて良いですか？」とシズカがマダムに聞いた。
「もちろん良いよ・・小僧の席に案内しな」とマダムが私に微笑んだ。
「じゃあ小僧・・シズカをよろしく、私はユリカに聞きます・・あなたの波乱万丈を」とニヤで言って母がＴＶルームに歩いて行った。
「ほら・・何ぼさっとしてるの」とシズカが手を引いた、私はウルで案内した。
シズカを指定席に座らせた、客は7割入っていた。
シズカは興味津々でフロアーを笑顔で見ていた。
マキはシオンの隣に座り、サインを繋ぐシオンを見ていた。

女性たちも、マキの為に簡単なサインを頻繁に飛ばした。
蘭が満開笑顔を振り撒いて、青いオーラを背負い歩いていた。

「凄いね～・・皆輝いてる、マキは最高の場所に来たね」とシズカが私に微笑んだ。
『あんまり興味津々にするなよ・・狙われてるぞシズカと恭子』とニヤで返した。
「それは嬉しい事だね～」とニヤで返された。

その時にカスミが来た、シズカはカスミを見て固まっていた。
「エース・・若葉あるか？」とカスミが聞いた。
『有るよ・・カズ君に回しとく』と笑顔で返した、カスミも笑顔で頷いてシズカを見た。
「まさか・・挑戦者かな？」と輝く笑顔で聞いた。
「かかってこいって言わないで下さいね、導火線に火が点きますから・・シズカと言います」と言って立って頭を下げた。
「そうなの！・・会いたかったよ、カスミですよろしく」とカスミが微笑んだ。
「豊君の言った通りだ・・自分の出会った女性の中で1番美しいって、言ってました」とシズカが笑顔で言った。
「仕事中に泣かすなよ・・また遊びに来いよ」と微笑んで背中を向けて。
「シズカ・・もし、もし挑戦したくなったら・・かかってこい、全力で」と振向かずにそう言って戦場に戻った。
シズカはカスミの背中を見ながら、嬉しそうに笑っていた。

「お邪魔したらいけないから・・次はマリアちゃん」とシズカが立ち上がり、私の手を引いた。
私はウルウルで手を引かれ、ＴＶルームに向かった。
ＴＶルームには松さんと久美子と3人娘しかいなっかた。

私はシズカを松さんと久美子に紹介した、久美子が驚いて笑顔を向けた。
そしてエミとミサを紹介して、マリアの寝顔を見せた。
シズカはマリアの寝顔を笑顔で見て、久美子の隣に座り話始めた。

『松さん・・マダムは？』と真顔で聞いた。
「３人で、魅宴に今行ったよ」と松さんがニヤで言った。
「行ってきて良いよ、私ここで待ってるから」とシズカがニヤで言った、私は真顔で頷いてＴＶルームを出た。
通りを走って、魅宴のビルの下で、裏口から入る３人を見た。
裏階段を駆け上がって、魅宴のフロアー裏で追いついた。
私はこの時にはまだ理解してなかった、母と大ママが知り合いだとは思ってもいなかった。

大ママは裏から、フロアーを見ていた。
その後姿に、母が声をかけた。
「よくそこまで辿り着いたね、飛鳥」と優しく声をかけた。
大ママが振向いて、大粒の涙を見せて母に抱きついた。
「真希が喜んでるよ、今の飛鳥を見て・・飛鳥こそが託せる存在だと、言っていたからね」と母が大ママを抱きしめて、優しく伝えた。

「あの時に・・真希姉さんが拾ってくれなかったら。
そして律子姉さんが、本気で怒ってくれなかったら。
私はどうなってたのか・・本当にありがとう、姉さん。
今の言葉で・・私は救われた、これまでの全ての事が」

大ママは母に抱かれて、号泣していた、それをマダムとユリカが優しい瞳で見ていた。
そのまま小さな事務所に入り、母が大ママを正面から見た。

「飛鳥・・知ってると思うけど、真希の忘れ形見が挑戦する。
見守って欲しい・・飛鳥に。
今この街で、唯一真希の本質を知る・・飛鳥に。
私は真希の最後にいた、病院から手紙を貰った。
その手紙にはこう書いてあったよ。
マキが将来どんな道を選ぼうとも、背中を押してほしいと。
そして、一人で歩ける人間になって欲しいと。
挫折も後悔も受入れて、前に進める人間になってほしいと。
私が唯一年下で憧れた、飛鳥のようにと書いてあったよ。
あなたは辿り着いてる、真希があなたに見た将来像を越えている。
私は今再会して、そう確信したよ」

母は最後に笑顔で大ママに伝えた、大ママは嬉しそうに泣きながら微笑んだ。
「見守っていきます・・私にはそれが今からの、1番の楽しみです」と大ママが微笑んだ。
「ありがとう・・でも相変わらず涙もろいね～」と母が笑顔で言った。
「最近、どっかの小僧のせいで・・拍車がかかってます」と大ママがニヤで言った。
「飛鳥気を付けて、小僧はトップを常に狙う奴だから」と母がニヤで私を見た。
「そういう所がありますよね～・・難しい方に行く感じが」とユリカが爽やかニヤで言った。

「律子姉さん・・シズカちゃん挑戦しませんかね～」と大ママが微笑んだ。
「さぁ・・本人じゃないとね、多分タイプとしてしないと思うよ」と母が笑顔で返した。
「エース・・明日の集まりで依頼しようと思ってるけど、探してく

れ・・魅宴にも最強の１６歳を」と大ママが微笑んだ。
『了解・・良いよ』と笑顔で返した。
「まさか！・・あてが有るのかい？」と大ママが笑顔で言った。
『一人だけ・・ただ挑戦を覚悟させれるかは、自信なし』と笑顔で返した。
「誰だい？」と母がニヤで聞いた。
『港のヨーコ・横浜・横須賀』と流行歌を出して笑顔で言った。
「なるほどね～・・店毎のイメージ作りは出来てるんだね、良いと思うよ」と母が微笑んだ。
「ちょっと・・エース頼むよ、もちろん正式な依頼だから・・報酬出すよ」と大ママが笑顔で言った。
『やってみるよ・・一週間時間下さい』と笑顔で返した。
「なんか凄いの連れて来そうだね～」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「ユリカ・・もし小僧が口説き落としたら、素質はマキ並だよ」と母がニヤで言った、ユリカが大袈裟に手を広げて驚いた。
『お袋・・もうやめろよ、大ママの期待の瞳が怖い』とウルで言った。
「このぐらいの重圧があった方が、お前の成功率は上がるんだよ」とニヤで返された。
「エース、ミサキの為だよ・・よろしく」と大ママが笑顔で言った、私は笑顔で頷いた。
大ママと別れて、魅宴をを出た。
母がユリカの店が見たいと言って、マダムと別れて3人でユリカの店に入った。
奥のＢＯＸに通されて、母と向き合って座った。
ユリカが準備して、私の横に座った。
母とユリカがビール、私がコーラでウルで乾杯した。

「母さんの前で、ビールは飲ませられません」とユリカが爽やかニヤを出した。
「本当に極道息子は、１０年早いよ・・親の前で飲むのは」と母もニヤで言った。
私はウルウルでユリカを見ていた。

「ユリカ・・ありがとう、和尚に聞きました。
あなたが小僧に伝えた事は、あなたにしか出来ない事だよ。
だから小僧はあなたを愛してるのね、今日見て嬉しかった。
マキの母親の真希にも、そういう関係の男が存在したの。
その男は最後まで貫いて見せた、だから私も小僧に期待します。
最後まで貫いて見せてくれると、本当にありがとう・・ユリカ」

母は笑顔で優しく言った、ユリカも嬉しそうに笑った。
「私も最近楽しいです、やっと自分の感性を受入れる事が出来ました・・小僧の存在で」と爽やかに微笑んだ。
「私も本当に嬉しい、素敵な娘が2人も増えたから」と母が微笑んで返した。
「はい・・おっかさん」とユリカが爽やかニヤで言った。
「割と好きよ・・その表現」と母もニヤで返した。
天空の要塞に響く笑い声が、新しい出会いを祝っていた。
私は母の生き方を、再確認して嬉しかった。
その自由な心が好きだった、何も他人に押し付けない生き方が。

ユリカが親父の称号の話をした後、母の事を話してくれた。

蘭はもちろん、ユリカもこの後、私の母と触れ合っていた。

ユリカが爽やか笑顔で言った、あなたも普通だと思ったよ。

あなたは気付かなかった、実の母親だから。

母さんの心は、白い心よ。

あなたは普通の男と同じ、母の幻影を追い求めてる。

その白い心に憧れる事は、母に憧れてるのよ。

私は本当に嬉しかった、心から母さんと呼べる人に出会えて。

明日、旅立つと母さんに言ったら・・抱きしめてくれたよ。

そして言ってくれた、ユリカ・・負けて良いのよ。

敗北を選択しても良いのよ、何も恥ずべき事じゃない。

堂々と帰って来てね・・そう言ってくれたよ。

ユリカが俯いて震えていた、私はユリカを抱きしめて切なかった。

ユリカの、温度の揺れの激しさに、鼓動の揺れの激しさに・・私は泣いていた。

私は母の生き方に確かに憧れていた、そのどこか自由な生き方に。

父の棺に母がそっと入れた、ユリカと蘭とシズカとマキの映る写真。

そしてもう一枚、色褪せたモノクロ写真。

そこに写る女性の美しさに目を奪われた、その華やかさに。

「これが・・真希よ、最初の女帝」と母が言った。

「ユリカ・・親父は最後まで、ユリカの事を想っていたよ」と母が私に言った。

強烈な波動が棺を包んでいた、貫き通した男を見送るために。

拳の言葉

夏の夜が全てを包む、明るいネオンが灯す頭上にそびえる。
夢の城・・その最上部の要塞に、母と娘の笑顔が溢れていた。
私も楽しくて、その会話を笑顔で聞いていた。

母が楽しげにユリカと話していた、ユリカも嬉しそうな笑顔で話していた。
３０分ほど経って、母が笑顔で言った。

「ユリカ、また来ますね・・ありがとう」と言って母が支払った。
ユリカに見送られ、２人でエレベーターに乗った。
通りに出て、母が私にニヤを出した。
「ヨーコの作戦は？」とニヤニヤ顔で私に聞いた。
『とりあえず、なんとか会ってみる・・それから、状況しだい』と笑顔で返した。
「仕方ないな～・・今から行っといで、シズカを貸すから」と母が言った。
『なぜ・・そんなに協力的なのか、怖いよ』とニヤで返した。
「私のマキへのお祝いよ・・最強のライバル」と笑顔で返された。

『シズカで会えるか・・それからだな』とニヤで言った。
「報酬出たら、お寿司が食べたい」と母がニヤで言った。
『俺の寿司で良いの？』と笑顔で返した。
「小僧でない・・カウンターで選びながら食べるやつ」と母が楽しそうに笑った。

ＴＶルームに戻ると、マリアが起きていて、シズカが笑顔で抱いていた。

母が挨拶をして、マダムと松さんの所に座った。
「シズカ・・マキとお寿司の為に一肌脱いで」と母がシズカに言った。
「お寿司ね～・・カウンターだろうね」とシズカが私にニヤを出した、私はウルで頷いた。
シズカとＴＶルームを出ようとすると、マリアが母に駆け寄って抱かれた。
母は嬉しそうに、マリアを抱いていた。

ＴＶルームを出て、通りを歩きながら説明した。
「ようするに、その魅宴って店に、マキのライバルを投入したいんだね・・で誰？」とシズカが聞いた。
『港のヨーコ』とニヤで返した。
「そう来たか～・・ヨーコ今、スパーのバイトだから・・もう少し時間有るよ・・魅宴が見たい」とシズカが言った。
『仕方ないな～・・大人しく見ろよ』と言って、方向を変えた。

「ねえ・・呼び込みさん達が、珍しいものを見てる感じなんだけど」とシズカがニヤで言った。
『あぁ、俺が女性と腕も組まず、手も繋いでないからだよ』と笑顔で返した。
「あぁ、そうなんだ～」とニヤで言って腕を組んで来た、私は驚いてシズカを見た、ニヤニヤで返された。
魅宴の裏口から入り、事務所に誰もいないので、フロアー裏に行った。
シズカは興味津々で見ていた、大ママは接客中だった。
「なるほど～・・落ち着いた雰囲気で、確かにヨーコが映える感じだね」とシズカが振向いて言った。
「シズカ！」とミサキの声がした。
『マミ先輩』とシズカが言って駆け寄った。

その時私は思い出した、マミが水泳部だった事を。

「マミ先輩、綺麗になった～・・良いな～素敵です」とシズカが言った。

「エースと来たの、シズカ・・まさか限界トリオのシズカ！」とミサキが驚いた。

「残念なことに・・そうです」とシズカが笑顔で返した。

呆気にとられてるミサキを無視して、シズカはミサキのドレスの素材をチェックしていた。

シズカが胸元を覗きこみ、ミサキが慌てて隠した。

「マミ先輩・・ケチ」とシズカがウルで言った。

「何でも興味持たないの」とマミが笑顔で返した、２人で笑顔で話ながら裏に向かった。

私はその後を歩いた。

シズカがミサキと挨拶を交わし、ミサキが控え室に消えた。

「ＯＫ行こう・・ここなら強く勧められる」とシズカが笑顔で言った。

私はシズカと腕を組んで、広島通りにあるヨーコのアパートに行った。

シズカがドアをノックすると、声が聞こえた。

「私～・・シズカ」とシズカが声をかけた。

「シズカ～・・久しぶり、どうしたの？」とヨーコが出てきた。

私は久々にヨーコを見て、ニヤニヤしていた。

「小僧！・・何・・そのニヤニヤは」とヨーコが笑顔で言った。

「少し話聞いて、時間ない？」とシズカが笑顔で言った。

「良いよ・・入って」とヨーコが招いてくれた。

私は少女らしい部屋をチェックしていた。

「何チェックしてるの？」とヨーコがニヤで言った。

『男の匂いは無いね、合格』とニヤで返した。
「残念ながらね～・・それで話って」とヨーコが真顔で言った。

『ヨーコ・・俺は今、夜街で仕事してる、先入観無く聞いて欲しい』
と真顔で言った。
「分った・・どうぞ」とヨーコも真顔で返した。

『今日から、マキが夜の仕事に挑戦した。
もちろん、接客はまだまだ先になる、でも１６歳から仕事はある
んだよ。
午後から夜中まで、大変な事も多いけど、報酬も良い。
なにより女なら夢を持てる仕事だと思う、自分で強く想えば。
ある宮崎トップのクラブから、今夜依頼があった。
マキのライバルになりうる、１６歳を探してくれと。
俺はすぐに頭に浮かんだ、清楚で美しい１６歳。
生活の為に高校に行かなかった、輝く少女を。
絶対にやりがいの有る店だ、損はさせない・・挑んでみないか。
今スーパーでバイトして、それが悪いなんて思わない。
でもその先は？・・将来は？・・結婚するのか？
そんな漠然とした事で生活するのか、そんなのヨーコじゃない。
確かに夜の女に向けられる、偏見はある。
でも、今さらだろ、ヨーコ・・誰がヨーコを助けてくれた？
あの時に誰がヨーコに手を差し伸べた？・・社会じゃないよね。
ヨーコ・・その魅力と才能で挑め、学歴も家柄も関係ない世界で。
ヨーコなら絶対トップを目指せる、俺はその姿が見たい。
考えてみないか、ヨーコ・・俺は嘘無く思ってる。
ヨーコならトップを狙えると』

ヨーコの瞳を見ながら、強く伝えた。
ヨーコの真直ぐな前髪が、綺麗な直線で眉を隠していた。

その下の目は、切れ長で美しい稜線を描き、深い二重目蓋の線が真剣さを物語り。
睫毛が長く、綺麗に上にカーブして、シャープな輪郭にマッチしている。
素顔でも充分美しく、家庭環境を逆手に取るような、清楚さが溢れていた。

「1つだけ教えて、私の何を1番重要視したの？」とヨーコが真顔で聞いた。
『清楚な雰囲気、そして優しさと穏やかな会話』と笑顔で返した。
「面接受ける前に、1度見たいんだけど」とヨーコが微笑んだ、私はこれでいけると思った。
『ヨーコ、着替えろよ・・今から見に行こう』と笑顔で誘った。
暖かい波動が来た、ヨーコは笑顔で頷いた。

ヨーコがシズカと隣の部屋に入り、笑いながら着替えていた。
私はヨーコの雰囲気に触れ、絶対にいけると確信していた。
ヨーコが可愛いワンピースで出てきて、薄いピンクの口紅だけを塗った。
私はシズカに耳打ちした、母にヨーコの身元保証人になってもらうように。
シズカは笑顔で頷いた、アパートを出てタクシーに乗って出掛けた。
PGの下でタクシーを降りて、シズカと別れてヨーコと魅宴に行った。

私は初めて魅宴の正面から、自分の意志で入った。
顔馴染のボーイ頭が笑顔で歩み寄った。
『こんにちわ、酒は飲まないから・・2人駄目ですか？』と笑顔で聞いた。
「駄目なわけないですよ、どうぞご案内します」と言ったボーイ頭

に付いて、店に入った。
ヨーコは緊張しながら付いてきた、私はキングの席である奥のＢＯＸに通された。
「ご指名は？」と笑顔で聞かれた。
『１０分後に、ミコトとミサキをお願いします』と笑顔で返した。

ヨーコは真剣な瞳でフロアーを見ていた、その瞳が強くなっていた。
私は何も言わずに、ヨーコの自由にさせていた。
フロアー奥に大ママの視線を感じた、私と目が合うと最高の笑顔になって頷いた。

「私にできると思う？本当にできると思う？」とヨーコが真剣に聞いた。
「絶対にできるよ、あなたなら」とヨーコの後から、ミコトが言った。
ヨーコはミコトを見て、その美しさに固まっていた。
ミコトが深々と頭を下げて、ヨーコの隣に笑顔で座った。

「私がＮＯ１のミコトです、踏出して欲しい・・あなたのその才能を信じて」と強く言った。
「踏出したい・・今のままじゃ嫌・・もう少し勇気が」と言ってヨーコが俯いて涙を見せた。
『ミコト・・ヨーコです』と笑顔で言った、ミコトが笑顔で頷いた。
「ヨーコ・・頑張れ、私が待ってる・・本当に楽しみに待ってる」とミコトが言って、ヨーコの手を握った。
ヨーコも強く手を握って、俯いて弱い自分と闘っていた、美しい横顔だった。
その時にミサキが来た、私はミサキをミコトの反対側の隣に座らせた。

「やりたい・・今ここを見て、ここで挑戦したい・・自分に負けたくない」とヨーコが俯いたまま言った。
「大丈夫・・私も１６で挑んだよ、あなたなら出来る・・私が全て教えるから」とミサキが優しく言った。
それでヨーコが顔を上げて、立ち上がり2人を見た。
清楚な雰囲気を振り撒いて、美しく微笑んだ。
「頑張ります・・必ず面接に合格して、この場所に来ます」と言って深々と頭を下げた。
ミコトもミサキも笑顔でヨーコを見ていた、ミサキの瞳は潤んでいた。

「よし・・約束だからね、必ず合格しろよ」とミコトが微笑み。
「本当に楽しみだよ、待ってるね・・頑張ろうね」とミサキが微笑んだ。
「はい、よろしくお願いします」とヨーコが笑顔で返した。
それからミコトが夜の仕事の面白話をして、3人で笑っていた。
私はヨーコの笑顔を見て、これで良かったと思っていた。

『ヨーコ、明日何時なら面接大丈夫？』と笑顔で聞いた。
「午前中・・１１時位がいいな」とヨーコ言った。
『ＯＫ１１時に、一番街の○○カ靴屋の前に来て』と笑顔で言った、ヨーコも笑顔で頷いた。
『ミサキ、大ママに伝言よろしく』と笑顔で言った。
「報酬凄いわよ～・・ヨーコちゃんなら」とニヤで返された。
ミコトとミサキに見送られ、魅宴を出た・・料金を取らなかった。
笑顔のヨーコと手を繋いで、ＰＧの戻った。
ＴＶルームに行くと、母とシズカが待っていた。

『マダム、松さん・・魅宴の面接受けるヨーコです、１６歳です』と笑顔で紹介した。

「ヨーコです、よろしくお願いします」とヨーコが笑顔で頭を下げた。
「よろしくね・・しかしどれだけのパイプを持ってるのか、こんな可愛い子を」と松さんが笑顔で言った。
「もう大ママに答えを出したのか・・それもこんな素敵な子で」とマダムが笑顔で言った。
ヨーコは嬉しそうな笑顔で、少し照れていた。

「小僧は私達から下の世代に対しては、交友関係なら絶対、宮崎ＮＯ１ですよ」とシズカが微笑んだ。
「まぁ楽しんで下さい、その生き方の面白さじゃ・・誰にも引けをとりません」と母が笑って立ち上がった。
母とシズカがマダムと松さんに、お礼を言って、ヨーコとＴＶルームを出た。
マダムと通りまで送って、母に保証人の話を聞いた。
「もちろんＯＫよ・・飛鳥にそう言って」と母が笑顔で言って、３人でタクシーに乗った。
私はマダムとタクシーを見送った。

「大ママ喜んだじゃろう」とマダムが笑顔で言った。
『今夜は出し惜しみした、遠くから見せたよ』とニヤで返した。
「お前が怖いよ」とマダムが笑って、２人でＰＧに戻った。
私は指定席に戻った、シオンとマキが休憩していた。
シオンの楽しそうな表情が、少し変化していた、マキとの会話を楽しんでいた。

私が指定席に座ると、蘭が満開でやって来た。
『ご機嫌だね・・蘭』と笑顔で言った。
「最高の気分よ・・素敵な母さんが出来たんだから」と満開で微笑んだ。

『だから蘭は、好きになるって言ったろ』と笑顔で返した、蘭も満開笑顔で頷いた。
「長女は何て言ったの？」と蘭が真顔で聞いた。
『おっかさんって呼んだよ・・さすがだろ』とニヤで言った。
「最高～・・４姉妹」と最強満開で微笑んで、戦場に戻った。

「今夜の出だしの騒ぎは、何だった？」とカスミが不敵で来た。
『マキの採用挨拶で、母親が来たんだよ』と笑顔で返した。
「なぜ蘭姉さんが抱かれる・・・まさか！お前のか！」と驚いて言った。
『内緒にしてね』とウルウルで返した。
「あ～もう、私も話してみたかったのに」とカスミがすねた。
『また来るよ、俺は嫌だけど』とウルで返した、カスミは最大不敵を出して銀の扉に消えた。

私はその時寂しさと戦っていた、指定席に座るとマチルダを思い出した。
輝くプラチナブロンドをフロアーに探した、どんなに探しても見つけられなかった。
《ユリカ・・俺はまだまだだね、寂しいよ・・マチルダを探してしまうよ》と目を閉じて心に囁いた。
暖かい波動が包んでくれた。

「エース・・立ちなさい」とマキの静かな声がした、目を開けてマキを見た。
美しい立姿で胸の前で、右手の拳を開いた左の手の平に当てていた。
真剣なマキの瞳を久々に見て、その視野と感性の広さを再確認していた。
私はお客から気付かれない場所に立った、沢山の女性達の視線を感じた。

「お前一人が寂しいんじゃない・・全員寂しさを抱えている。
そして1番寂しいのは・・マチルダだろ、一人で旅するマチルダだろ。
その精神の曲がりを補正する、構えて」

マキは小さな声で強く言った、シオンが真剣な目で見ていた。
私は腹筋に力を入れて、少し腰を落とした。
「甘えるな、自分に甘える事は・・私が許さん」とマキが真顔で言った。
そして美しい構えで、強い正拳を私の腹筋に入れた。
マキはそのまま動かない、私はマキの想いが伝わってきて嬉しかった。
『ごめんねマキ・・反省したよ』と真顔で返した、マキは笑顔を返しシオンの方に歩いた。
強く熱い波動が来た、ユリカの正拳のような波動が。

「マキちゃん素敵です・・シオン、感動しました」とシオンが真顔で言った。
「ありがとう、シオン姉さん・・私エースにはあれしか出来ないの」と笑顔で返した。
「マキちゃん違います・・あれが出来るのが素敵です」とニコちゃんで言った、マキも笑顔で頷いた。
私が席に座ると、ユリさんの薔薇と蘭の満開が、マキを見ていた。
私はマキの私に対する、唯一の愛情表現が好きだった。
全力で殴る、その時に気持ちが全て拳に乗ってくる。
だから体の奥まで響いてくる、その直接伝える行為が好きだったのだ。
終演前のフロアーの空気が少し変化した、マキの正拳は他の何かも

砕いた。
シオンの隣で、サインを覚えるマキは・・その無変換の伝達を身に付けていた。
私は気合を入れなおし、大学ノートを出した。
明日の共同体の話し合いの、自分の頭を整理して書いていた。
色々と思いつき、ニヤニヤで取組んでいた。
マキの正拳の言葉が、寂しさを砕いていた。
そして感じていた・・寂しいのはマチルダなのだと。

その時に終演を迎え、マキも含めたメンバーが１０番に揃った。
私はウルで歩み寄った、マキはワクワク顔で見ていた。
「日曜からの報告を述べよ」と蘭が満開で微笑んだ。

『日曜準備の時に、ユメとウミを抱っこして体調のチェックをして。
ユリカを抱っこ・・が日曜日。
今日は、マチルダを西橘で抱っこして、お別れのキス。
空港で抱っこして、さよならのキスして泣きました。
そして・・Ｉ　Ｌｏｖｅ　Ｍａｔｉｌｄａと叫びました。
後はユリカ抱っこだけです』

「お別れと、さよならは違うんだね？」と蘭が満開ニヤで言った。
『違います・・お別れは心にして、さよならは全てに対してです』
と真顔で答えた。
「上手く逃げるよね～・・少し納得させて」と満開ニヤ継続で言った。

「よし・・特殊事項」と蘭が促した。
『マチルダが思い出に、ベルトに縛っていてくれました』と笑顔で言って、ポケットのプラチナブロンドを見せた。
「日記に張るんだね」とカスミが不敵を出した、私は笑顔で頷いた。

「リーダー、どうぞ」と蘭が満開で微笑んだ。
「さっきマキの愛情表現を見て思った、どうしても【豊の道】が読みたい。
【豊の道】とは、マキの中学卒業祝いに、エースが書き下ろした本です。
面白そうで、私にも書き下ろしてと言ったけど。
エースの忙しさなら、いつになるか分らんから。
マキ・・人には見せられないかな？」
カスミがマキに微笑んだ。
「私は良いですけど・・原作者は？」とマキが私に微笑んだ。
『感想を言わないなら、ＯＫです』とウルで答えた。
「楽しみ～」と美冬が微笑んだ、全員が笑顔で話していた。
「１つだけ、提案があります。
今から群雄割拠に入って、何かあったり、疲れたりしたら。
エースに言って、夜の海に行ってみて。
素敵な世界です・・必ず元気になって帰れます。
私が全員にその権利を与えます、キスは駄目よ。
だから無理は絶対にしないように、全員で楽しみたいから」
蘭が満開で微笑んで、全員の笑顔が溢れていた。
「イルカちゃんに会ったのか？」とカスミが立ち上がり不敵で言った。
『１０匹の群れ・・一緒に泳いで、背ビレに触りました～』と最強満開ニヤで言った。
「素敵～・・良いな～」とハルカが言った。
「私、精神的に限界かも」とナギサが華やかニヤで言った。

私も～笑顔で言い合いながら、女性達が控え室に消えた。
私はマキとＴＶルームに向かった。

ＴＶルームに入るとマキが久美子の横に座って、笑顔で話しだした。
私はサクラさんが来て、エミを抱いてタクシーに送った。
戻るとマリアが起きたので、マリアを抱いてマキの横に座った。

「シズカ、噂通りだったよ・・話してて楽しかった」と久美子が笑顔で言った。
「面白いでしょ～・・なんせ小僧の姉だからね」とマキがニヤで返した。
「ここの窓から見てたよ・・あの愛情表現、素敵だね」と久美子が笑顔で返した。
「久美子のピアノで奏でる、あの愛情表現が、私には響いたよ」とマキも笑顔で言った。
マダムも松さんも、２人を笑顔で見ていた。

「楽しそうですね～・・マキ、明日１０時少し前に来れますか」とユリさんが入ってきて、薔薇で微笑んだ。
「もちろん、大丈夫です」とマキも笑顔で返した。
「明日、五天女というメンバーが集まります・・マキを紹介しますね」とユリさんがマキに言った。
「はい、よろしくお願いします」とマキが笑顔で頭を下げた。

ユリさんが座ると、蘭とカスミとハルカが来た。
「ユリ・・ワシらは少し設定を変えんといかんぞ、エースは大ママの依頼の答えをもう出した」とマダムが言って。
「それも、凄く素敵な子でね～」と松さんが微笑んだ。
「まぁ・・すでに魅宴の１６歳を提案したのですね」とユリさんが驚いて薔薇で微笑んだ。

『お袋が、俺が決めてた子の名前言ったら。
マキの入店祝いに最強のライバルをって言って、シズカを貸してくれて。
会いに行って、強く伝えました。
魅宴が見たいと言ったので、ＢＯＸから見せたら・・弱い自分と闘って。
最後の背中を、ミコトの言葉とミサキの強い意志が押して。
覚悟ができたみたいです・・俺は提案しただけです。
将来に夢を持って生きてみないかと・・１６でも出来るんだと。
そう伝えただけですよ』

私は薔薇を見ながら、少し照れて言った。
「誰なの？」とマキが真顔で聞いた。
『魅宴のヨーコ・横浜・横須賀』とニヤで言った。
「最高だよ・・私に対する提案でもあるんだね」とマキが笑顔になって言った。
『マキ・・明日リアンという女性を感じろ、ユリカの親友でライバルだよ』と笑顔で言った。
「今、確信した・・マキに対する特別は、半端じゃないね」とカスミが不敵で言った。
『同じさ、仕事の事なら・・誰に対しても、蘭を除けば』と笑顔で言った。

「ごめんね、きゃしゅみ・・私、例外の女」と蘭が満開で微笑んだ。
「見たいな～」とハルカが微笑んだ。
『蘭・・明日の１１時、靴屋の前で待ち合わせしたから、見て正直な感想を教えてね』と笑顔で言った、蘭が満開笑顔で頷いた。
「面接の前に、蘭の面接があるんですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

『はい、その後・・五天女が見る事になるでしょうから、私の大ママに対する１つの答えです』と笑顔で言った、ユリさんが薔薇で頷いた。
「楽しみだ～・・早く来ないかな、１１時」と蘭が満開で言ったときに、レンが入ってきた。
全員で店を出て、タクシーに乗ったユリさんに、マリアを渡して見送った。
マダムと松さんとハルカとマキの乗ったタクシーを見送り、カスミと手を振って別れた。
私は満開笑顔の蘭と、腕を組んで歩いていた。
夏がその力を誇示している、深夜の一番街を・・・。
ヨーコを登場させたのは、もし東京物語を書く時には、絶対に必要な存在だからです。
ヨーコは不思議な女性でした、子供の頃に悪質なシナリオに翻弄された。
しかしヨーコは一度も陰らなかった、その清楚な美しさを持ち続けた。
その褒美が来たかのように、この後、美しさも運も身に付ける。
そしてその感性で私に教えてくれる、東京ＰＧが成功する大切なヒントを。
マキの登場による変化は、この時点で訪れていた。
その無変換で伝達する心が、何かを砕いてしまう。

マキが久美子に問うた言葉、あれこそがマキの本質である。

どうして音楽をやっているの？・・人に認められたいからなの？

マキの問いかけは、女性たちに響く・・直接伝えてくるから。

そしてマキのその言葉は、常に自分に問いかけているから。

魂の伝達者・・マキ・・その言葉は心に問いかける。

踏出した時の心に帰す・・覚悟を決めた・・その時に。

空の青・海の青

心にパスポートを持たないと、通れない税関がある。
踏出すために必要なパスポート、覚悟というパスポートを提示しよう。
そこに写る顔写真には、きっと笑顔が写っているから。

蘭と腕を組んで一番街を出て、タクシーに乗った。
蘭が満開で肩に乗ってきた、蘭はその気持ちを笑顔で表現していた。
「想像以上・・違う、想像と全く違う・・そんな母さんだった」と満開で微笑んだ。
『確かに、普通の母親とは違うよ』とニヤで帰した。
「シズカで驚いた事の答えが、母さんにあったよ」と言って私を見た。
『そうだね～・・シズカのあの開放的な心は、お袋の影響だよな～』と笑顔で返した。

「私、ワクワクが止まらない、明日のお父さんに早く会いたい」と満開ニヤを出した。
『それこそ・・想像などは出来ない男だよ』と笑顔で返した。
「あの母さんが選んだ男・・凄く興味あるよ」と微笑んで瞳を閉じた。
アパートに着いて、蘭を抱き上げて部屋に入った。
蘭が化粧を落としてパジャマで来た、私はシャワーを浴びて着替えて戻った。
部屋は暗く、蘭はベッドに横になって瞳を閉じていた。
私は蘭を見て、ウルウルをしていた。

「寂しいんだろ・・そう言って」と蘭が瞳を閉じたま言った。

『蘭・・今夜は寂しいから、添い寝して』と優しく言った。
「仕方がないね〜・・寂しん坊」と目を開けて満開で微笑んだ。
私は蘭の隣に寝転び、腕を通して少し引き寄せた。

「話では聞いていたけど・・あのマキの愛情表現、ユリさんでも憧れたって言ってたよ」と私の胸に言った。
『確かに・・マキにしか出来ないね』と静かに返した。
「ユリさん・・嬉しかったみたい、母さんが筋を通してくれた事が」と蘭が言った。
『蘭・・実はあれから魅宴に行って、お袋に抱かれて大ママ号泣したよ・・昔の知り合いみたい』と言った。
「そうなの！・・マダムもでしょう、不思議だね〜・・原作者、必死で書いてるんじゃないの」と満開ニヤで言った。
『多分、徹夜続きで限界だよ・・悪質な奴は』と笑顔で帰した。
「そうだね・・休ませないよ、疲れ果てさせてやる」と蘭が言って私の胸に顔を付けて瞳を閉じた。
私は蘭の鼓動と温度を感じながら、幸せに眠りに落ちていた。

翌朝、自然に目が覚めて、ゆっくりと腕を抜いて洗面所に向かった。
歯を磨き顔を洗って、キッチンに行った。
トーストを焼きながら、ハムエッグを焼いて、その上に可愛いハート型のハムを乗せた。
レタスを乗せて完成品をニヤニヤで見ていた。

「おはよー、今日はいつも以上に幸せ〜」と蘭が満開で起きて来て、洗面所に消えた。
私は窓を全開にして、朝食を用意した。
蘭が戻ってきて、朝食を見て最高の満開笑顔になった。
「写真撮っとこうかな・・喧嘩した時のために」と満開ニヤで座った。

『喧嘩？・・俺と蘭が、想像できない』とウルで返した。
「私もだけど・・もしその時は、強引に引っ張って、夜の海に連れてって」と微笑んだ。
『了解・・でもそれは無いよ、俺が間違わなければ』と真顔で言った、蘭は満開で微笑んで頷いた。

蘭を見送り、朝の仕事をして、日記を書いた。
9時少し過ぎのバスで出掛けて、若草通りでカスミに手を振って、靴屋で蘭に手を振った。
ユリカの店に入ると、ユリカが笑顔で待っていた。
私はユリカを抱き上げて、窓際に行った。

「私も本当に嬉しかった、母さんと呼べる人に出会えて」とユリカが爽やかに微笑んだ。
『そうだねユリカ・・少ししか時間無いから、充電して』と笑顔で返した。
ユリカが瞳を閉じて静かになった、ユリカの鼓動が安定していた。

「ね～・・大ママ、ユリカ姉さんだけ特別でしょ」とミサキの声がした。
「本当にね～・・特別の存在が多すぎるよ」と大ママが笑顔で言った。
ユリカを優しく降ろして、ユリカと2人で挨拶をした。
「大ママ、ヨーコちゃんの印象わ？」とユリカが爽やか笑顔で聞いた。
「遠くからでも感じたよ、ミサキが本気になるしかないとね」と嬉しそうに笑った。
「私もそう感じました・・ミコトねえさんも感じたみたいでした」とミサキが微笑んだ。
「それほどですか～」と言いながら、ユリさんとマキが入って来た。

「うん、ユリ・・ありがとう、律子さんに会って嬉しかった」と大ママが微笑んだ、ユリさんも薔薇で頷いた。
「おはようございま～す」と元気よくリアンが入って来た。
ユリさんがマキを紹介した、リアンが獄炎で何か言って二人で笑っていた。
それからジンが来て、千鶴がセリカと来て、ミチルがホノカと来た。
全員にユリさんがマキを紹介した、マキはその都度言葉で笑顔を作ってみせた。
全員が座り、私の横に大ママが座った。

「忙しいところありがとう、日曜のエースの共同体の話。
私もあれから色々考えて、やろうと思った。
最初に確認したい、この話降りても良いよ。
それに対し何も言わない、降りて当然だから。
どうだろう、皆の意志が聞きたい」

大ママが真剣に言った。
「私は異存ありません」と1番難しい立場の千鶴が笑顔で言った。
「スナック関係は、もちろん異存無いですよ」とミチルがリアンとユリカを見た。
リアンもユリカも笑顔で頷いた。
「もちろん私も異存ないですよ、エースの提案ですから」とユリさんも薔薇で微笑んだ。
「よし・・じゃあエース、概要を話してくれ」と大ママが笑顔で言った。

『はい・・まず初めにこの共同体の趣旨は、若手の育成にあります。
俺は思っていました、この世界の女性達の選手生命の短さを。
まぁ結婚という事がありますから、仕方ないかも知れないけど。

でも短すぎる、１８で挑戦しても、あっと言う間にその時が来る。
仕事に対して、今からその本質が分るって時に、その時を迎える。
結婚と両立させるのは、難しい仕事です。
そして閉塞感がある、店毎の経営方針や客の奪い合いなど。
本物になれる、女性たちは知りたいし、感じたいと思っている。
私が今回こだわった、リアンとユリカの復活。
見せてやりたいんです、この世界に夢を描いてる彼女達に。
１つの理想の形として、そして挑ませてやりたい。
その自らの理想に、他店に行って経験する緊張感。
その緊張感が作り出す集中、その集中で感じて欲しい。
接客とは何かを、自分達が選び目指す世界の広さを。
その先に有ると信じます、次の夜街の姿が』

私は全員の瞳を見ながら、強く言葉にした。
「良いですね、さすがエース・・具体的な話をして」とユリカが爽やかに微笑んだ。

『まず、リアンとユリカの復活・・魅宴とＰＧの月１のイベントにしたい。
明日のユリカのＰＧは決定だから、来週リアンの魅宴の光臨。
そして翌週、ユリカの魅宴、そしてその次の週リアンのＰＧ復活。
そのフォローに、魅宴とＰＧで若手を送り込む。
最初はそれで、始めます。
そして、ミチルのクラブ３店の光臨を決めて行きます。
その時は最低、３人のエース級の若手をミチルの店に送り込む。
そして、ゴールド・・ミチルに蘭にナギサまでは決定済みですが。
ＮＯ１を見せます・・その若い店に、ミコトとそしてユリさんを出します。
もりろん千鶴が指名して、若手を出してもらいます。
セリカと誰でも良いですから、もちろんスナック３店の女性も。

クラブを経験してみていのなら、大歓迎で調整します。
まぁこんな感じで走り出して、調整はしましょう。
この話の最も私がこだわるのは、ユリさんの光臨です。
どうしても見せたい、圧倒的本物を・・ＰＧは出し惜しみしません。
最強で最良のユリを出す・・次の時代のために』

私は最後に強く笑顔で締めた、静寂が包んでいた。
「エース・・それは本気で言ってるの？」と千鶴が真顔で聞いた。
「本気ですよ千鶴・・私でよければ」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「ミコトもどこでも行くと言ってるから、頼むね」と大ママが微笑んだ。
「すいません・・ユリさんとミチルママとミコトを聞いて、心が震えて止まりません」と千鶴が笑顔で言った。

「若手の方はどう競わせるの？」とセリカが笑顔で言った。

「まず・・絶対条件として銀河を1人は入れる、そして一緒に入ってもらうよ。
そのサイクルで回して、次の段階に移行する。
それだけでも感じる事は多いよね、ホノカ』

私は最後にホノカに振った、ホノカは華麗に微笑んだ。
「大丈夫、引っ張って見せる・・銀河の奇跡にかけて」と美しい笑顔でセリカを見た、セリカも流星で微笑んで頷いた。

『俺の言い出した事だから、窓口はＰＧでやります・・マキ窓口お願いします』とマキに笑顔で言った。
「分りました、ハルカ姉さんと2人で頑張ります」と笑顔で返した。
『とりあえず、やってみないと誰にも分らないから・・ご協力お願

いします』と私は立って頭を下げた。
全員が拍手をしてくれた、私は笑顔で応えていた。
私はミサキを呼んで、ヨーコの迎えを頼んだ、ミサキは笑顔で頷いて出て行った。
『問題は・・報酬なんですが、その調整は皆さんでお願いします』と笑顔で言った。
「若手には、損をさせないように調整しましょう」と大ママが笑顔で言った。
経営者の5人が笑顔で頷いた。

『俺も、大きな事ばかり言ってると、思われたくないので。
1つの答えをお見せします、昨夜大ママから依頼のあった。
魅宴の16歳の挑戦者、探してきました・・今来ます。
ミサキを本気にさせて、魅宴に新しい風を呼び込む可能性の有る者。
その子が私の大ママに対する、1つの答えです』

その時にミサキが笑顔で、ヨーコを連れて来た。
少しお洒落したヨーコは、清楚な輝きを振り撒いていた。
『魅宴の面接を受ける・・ヨーコです』と私はヨーコを紹介した。
「ヨーコと申します、挑戦の覚悟をして来ました、よろしくお願い致します」と清楚な真顔で言って、深々と頭を下げた。
「どこで、どうやって見つけるの?・・信じられない」とホノカが華麗に微笑んだ。
「どんだけお尻に火を点けるの・・マキだけでも怖いのに」とセリカが流星ニヤで言った。
ヨーコも嬉しそうに微笑んで返していた。
ミサキがヨーコを若手の席に案内して、マキの隣に座らせた。

マキとヨーコは笑顔で話していた、大ママの笑顔があった。
「質問は無いかね？」と大ママが言った。
全員が笑顔で頷いた。
「それでは解散する、ジン少しは役にたったかい？」と大ママが笑顔で言った。
「もちろん、沢山収穫がありました、エースと契約書交わしとかないと」と笑顔で返した。

「大ママ、ここで面接されて良いですよ」とユリカが爽やかに微笑んだ。
私は大ママ以外が帰るのを見送っていた、千鶴が私の所に来て耳元に囁いた。
「３時に来て、話があるから」と笑顔で言った、私は笑顔で頷いた。
ユリさんとマキが最後にリアンと出てきた。

「素晴らしいですね、ヨーコ」と薔薇で微笑んだ。
「魅宴の雰囲気を今で持ってるよ、大ママ内心大感激だよ」とリアンが獄炎で微笑んだ。
私も笑顔で３人を見送って、店に戻った。
奥のＢＯＸでヨーコが大ママと向き合って座り、ヨーコの隣にミサキが座っていた。
私はカウンターのユリカの隣に座った。
『ユリカの感想は？』とニヤで聞いた。
「想像を越えたわ・・まるで魅宴で産まれた子みたいだね」と爽やかに微笑んだ。

「それより、いよいよみたいだね千鶴の話」とユリカが深海の瞳の真顔で言った。
『うん、ユリカは分ってるだろうけど・・俺は今、自分に自信を持ってるよ』と笑顔で返した。

「一度で良いから、私もミホちゃんに会いたいな～」とユリカが爽やかに微笑んだ。
『それは俺からもお願いしたいよ・・頼むねユリカ』と笑顔で返した。

「ユリカ、エース」と大ママが笑顔で呼んだ。
私とユリカは奥のＢＯＸに行った。
ユリカが大ママの隣に座り、私がその横に座った。
「採用を決めたよ、ありがとうエース」と大ママが言った。
『大ママありがとう、ヨーコの身元保証人は・・お袋、律子がなります』と笑顔で返した。
「えっ！母さんがなってくれるの？」とヨーコが驚いて聞いた。
『そうだよヨーコ・・中途半端に諦めさせないように、心の枷だよ』と笑顔で返した。
「ありがとう、嬉しいよ・・今度お礼を言うね」とヨーコが微笑んだ。
『ヨーコ、お袋は・・楽しそうに必死で生きる、ヨーコの笑顔がお礼だと思ってるよ』と真顔で言った。
「了解・・見ててねエース・・今日、今からエースって呼ぶから」と言ったヨーコは輝いていた。

「ミサキ・・ヨーコに店の案内して、お昼をご馳走して」と大ママが微笑んだ。
ミサキとヨーコが立って、笑顔で頭を下げて出て行った。
「エース・・本当にありがとう、最高だよ・・あのヨーコ、どこか真希姉さんの匂いがするよ」と笑顔で言った。
『良かった～・・俺もトップを狙う才能はあると思ってるよ』と笑顔で返した、ユリカも笑顔で頷いた。
「ミコトがね・・あのミコトが私に頭を下げたよ、ヨーコの入店に何か障害があったら、自分に言ってくれとね」と大ママが嬉しそう

に笑顔で言った。
「ミコト変りましたね・・今回の共同体の話にしても」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「変る時期に来てたんだろう、そして最後の背中をエースが押した。
あのエースの言葉、自分が堂々と酒を飲める時に、存在しないミコト。
あの言葉で、ミコトは確信したよ・・自分の時間を。
愛情に満ちた言葉だったから、ミコトは感じたんだね。
何かを自分も残したいとね、エースが全てをミコトに贈った。
ミコトが待ち望んだ、全力で自分の位置を狙う・・リョウ。
ミコトが妹のように可愛がった、ミサキの覚醒。
そして唯一の心残り・・千鶴との和解。
そして今回のヨーコに・・魅宴の将来を見てるんだろうね。
エース、人材派遣・・最初の報酬や、ユリカにランチご馳走しなよ」
大ママは笑顔で立って、封筒を差し出した。
『ありがとう、大ママ・・今、仕事する喜びが、少し分ったよ』と笑顔で頭を下げて受け取った。
大ママをユリカと送り、中身を見て驚いた。
「驚くほどだろうね・・あの大ママの喜びなら」とユリカが爽やかに微笑んだ。
『3万も入ってる・・なんか悪いな〜』と真顔で言った。
「それだけの価値があるのよ・・ヨーコちゃんにね」と笑顔で腕を組んだユリカと食事に向かった。
トンカツ屋に行って、ユリカとヒレカツ定食を食べた。
ユリカをビルの下で抱き上げて、上まで登り手を振って別れた。
TVルームには、マダムとユリさんがいて、駆けてきたマリアを抱

き上げた。
「採用されましたか？」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
『はい・・大ママに喜んでもらいました』と笑顔で返して、向かいに座った。
「あの子なら、大ママ感激ですよ・・魅宴の匂いがしますから」とユリさんが言った。
「ミサキはハルカより、受入れる力が強いから・・変化も早いぞ」とマダムが笑顔で言った。
「大丈夫ですよ、マダム・・ハルカに付いたのは、心に問いかける女ですから」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「そうじゃよな～・・昨日から変ってきたよ、シオンもな」とマダムが笑顔で言った。

「いよいよあなたも、再挑戦が始まりそうですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
『はい、千鶴に呼ばれました・・やってみます、今度は最後まで』と真顔で返した。
ユリさんもマダムも笑顔で頷いた。
その時ＴＶルームのドアが開いて、マリアが駆け出した。
豊兄さんが笑顔でマリアを抱き上げた、マリアは天使全開で抱かれていた。
「あら、嬉しいですね、どうしました？」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「午後から休みがとれて、日曜日マリアに伝える時間が無かったから・・それとマキの様子を見に」と笑顔で言って私の横に座った。

「本当に、あなた達は筋を通すんですね・・そして愛情が本物ですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「筋を通すのは、母が常に教えてくれました」と笑顔で答えた。
「さすが・・律子やね」とマダムが笑顔で言って、豊が笑顔で頷い

た。
「どんなに幼い相手でも、キチンとする・・一人の人間として、素晴らしい事です」とユリさんも嬉しそうに笑顔で言った。
「ありがとうございます・・じゃあ少しマリアを借ります」と笑顔で頭を下げて、ＴＶルームを出て行った。

「マリアは本当に恵まれている・・豊とあなたが側にいてくれるから」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
『豊兄さんは伝えます、その全ての想いを・・マリアがまた変化しますよ』と笑顔で返した。
「楽しみですね～・・毎日が本当に楽しいですね、マダム」とユリさんが言った。
「ワシも、楽しいぞ・・長生きするよ」とニヤで言って笑っていた。
私はフロアーに向かった、指定席で予約の確認をしていた。

「板についてるな・・違和感無く存在してるよ」と豊兄さんが後から言った。
『うん、必死でやってるよ・・豊兄さん、今日親父と会うよ、お袋とは昨日和解した』と笑顔で返した。
「正直に伝えろ・・それだけで良いよ」と私にマリアを渡して、マキのいる１０番に歩いて行った。
マリアは私の顔を見ていた、私はマリアを笑顔で見た。
《大丈夫だよマリア・・どこに行っても、必ずマリアの場所に帰るよ》と心で囁いた。
「あい・・えーしゅ」と天使全開で微笑んだ、熱い波動が包んでくれた。

「マキ・・頑張れよ、お前らしく・・たまに見に来るからな」と豊兄さんが笑顔で言った。
「ありがとう、兄さん・・全力でやってみるよ」とマキが立ち上が

り、笑顔で頭を下げた。
「皆さん、マキをよろしくお願いします」と頭を下げた、シオンとレンとハルカが立って笑顔で頷いた。
久美子と笑顔で挨拶を交わした豊兄さんと、エレベーターに向かい歩いた。

「小僧・・マリアの了解は取ったから、その時は頼むな」とエレベーターに向かいながら豊兄さんが言った。
『了解・・その時はベストを尽くすよ』と笑顔で返して、笑顔の豊兄さんをマリアと見送った。

「エース・・助けて～」とマキが大声で呼んだ、見るとレンとハルカと久美子に囲まれていた。
『何悪さした・・マキ』と笑顔で言った、マリアも天使の笑顔で見ていた。
「嫉妬したって言われて・・囲まれてるの」とマキがウルで言った。
「まき・・だめ～」とマリアが天使不敵を出した、マキ以外の全員がニヤで見た。
「恭子に教えないと・・最強のライバルが出現したって」とマキがマリアに微笑んだ。
全員で笑っていた、夏の日の午後・・夢を描く女性たちに光が射していた。

私はマリアをシオンに預け、ゴールドに向かった。
ボーイ頭の中年男性に挨拶して、奥の小部屋に入った。
小部屋には千鶴とセリカとケイコがいて、笑顔で私を見た。
「来たね・・じゃあセリカよろしく」と言って、千鶴が近寄り腕を組んだ。
「ママ～・・駄目ですよ、私の玩具ですから」とセリカが流星ニヤを出した、私はウルで返した。

「駄目よ・・私のお気に入り」と千鶴がニヤで返して、私を引っ張った。
赤玉駐車場まで歩いて、千鶴のジープに乗り込んだ。
『どこに行くのでしょう?』と私は初めてのジープにワクワクしながら、笑顔で聞いた。

「私・・回りくどい事嫌いなの、馬鹿息子に脅しをかけたよ。
馬鹿息子・・あんたが怖いみたいで、了承してくれた。
転院させるよ、○病院・・夜町から歩いていけるし。
医者も設備も環境も申し分ないらしい、祖父母の了解も今日取った。
エースだけは自由に会えるって、今の○病院の担当・・関口先生だよ。
知ってるでしょ・・前○○総合病院にいたから。
私の今回のお礼・・マユとセリカとケイコのね。
私自身のは考え中・・ユリさんの姿が見れるんだね、すぐ側で。
私の店で・・本当に嬉しいよ」

千鶴は一気にそう言った、私は感動していた、千鶴の行動力と熱い想いに。
『ありがとう、千鶴・・本当に嬉しいよ』と真顔で頭を下げた。
「その感謝は、ミホちゃんを解放してから言って・・待ってるから、いつまでも」と美しく微笑んだ。
私も笑顔で強く頷いた、千鶴の意志の強く美しい瞳を見ながら。

ジープは病院の坂を上がり、奥の駐車場に止まった。
千鶴が受付に行き、何かを話して、別棟の3階に行き・・何か書類を出した。
「さぁ・・会って来て、私はここで待ってるから・・明日転院だと

伝えて」と美しい笑顔で言った。
私は真顔で頷いて、中年の看護婦の後を歩いた。
病院独特の消毒液の匂いが鼻をつき、緊張していた。
ミホの病室は狭い個室だった、看護婦が鍵を開けて私を見た。
「１０分だけです」と事務的に言った、私は真顔で頷いてドアを開けて入った。

奥のベットに腰掛けて、外を見ているミホの背中が見えた。
私はゆっくりと歩み寄り、ミホの横顔を見た。
その顔は健康的な肌の色に、若さを示す肌の張りを主張して。
短い髪から出る、顎の線が大人っぽくなっていた。
瞳の大きさは相変わらずで、色の無い瞳で外を見ていた。

『ミホ・・久しぶり、綺麗になったね・・ミホ、ごめんね待たせたね』と言うのが精一杯だった。
私はミホを見ながら、必死で自分と闘っていた、その無表情が予想を超えていた。
その時ユリカの強烈な波動が来た、私はそれに押されて、ミホの前に行き屈んでミホを見た。
ミホは私を見た、意志の無い瞳で・・表情を変えずに。
私はミホの両手を握り、ミホの温度を確認した。

『ミホ・・明日転院するからね、これからは毎日会いに来るから』と言葉と温度で伝えた。
何の反応も無い、ミホが私には辛かった・・無駄な時間を過ごしたと思っていた。
私は何も考えずに、ミホの両手を握り伝えていた・・絶対会いに行くと。
看護婦が呼びに来て、私はミホに別れを告げて、千鶴の所に行った。

「やっぱり最初は辛いのね・・大丈夫？」と千鶴が真顔で言った。
『大丈夫・・絶対に今度はやりきるよ』と必死で笑顔を返した。
帰りの車で、千鶴が楽しい話をしてくれ、私も笑顔で相槌をいれていた。
しかし心は深く沈んでいた、その圧倒的ミホに触れて・・自信の欠片も残っていなかった。
千鶴にＰＧの前まで送ってもらい、お礼を言って、必死の笑顔で手を振った。
トボトボと裏階段を登り、ドアを開けると・・ハルカに手を掴まれフロアーに連れて行かれた。

そして衝撃の光景を見る、限界トリオ３人がフロアーに正座をして、目を閉じていた。
私はその前に歩み寄り、正面に立った。
１０番席には、マダムとユリさんと蘭とシオン・レン・ハルカ・久美子が真顔で座っていた。
そしてユリカがマリアを抱いていた、その横にミサと強い瞳で見ているエミがいた。
私はユリカがシズカに、連絡したのだと思っていた。

「小僧・・分りきっていた事だろう、ミホが閉ざしているのは」とシズカが言って目を開けた。
「悔しさを忘れたのか・・あの時の・・あの悔しさを」と恭子が言って目を開けて。
「今は後悔する時じゃない、後を見るな・・ミホを見ろ、ミホだけを見ろ」とマキが言って目を開けた。
３人が立ち上がり、私を囲んだ・・私は真顔で立っていた。
「あの時の私達の拳の言葉を、もう１度伝える・・マキ」とシズカが言った。

私は瞳を閉じて、その言葉を聞いた。

「あの日・・お前は諦めなかった。

小僧が、あの医者が・・ミホを転院させた時言った言葉。

今でも私達には響いている、絶対に忘れられない。

紙切れに負けないと、資格などには負けないと。

ミホを追い続け、必ず見せてやると・・そのカルテを白く塗り潰すと。

私はそれを聞いて思い出してた、あのヒトミに伝えた言葉。

遠足で郷土の歌人、若山牧水記念館に行って感じた、小３のお前の言葉を。

ヒトミに話した、あの歌の解釈・・感動したよ。

【白鳥(しらとり)は、哀しからずや、空の青、海のあをにも染まずただよふ】

放浪の歌人・・牧水の心の歌、その本質は、学者では理解できないと思ったよ。

私はヒトミの母親と、ベッドのカーテン越しに、奥の窓際で聞いていたよ。

お前は言葉と温度で、少し興奮しながら伝えた。

牧水は自分が染まっていた事を、後悔していたんだね。

人は進むに連れ、何かに染まっていくんだね。

だから白鳥の白に魅せられる、空を飛んでも、海の上を漂っても染まらない。

でもそれは、外側なんだよ・・白鳥も染まっているんだね。

だから、哀しからずやって言ったんだよ、俺・・分らないけど。

こう思ったよ・・染まることを悲しまないで良いんだと、牧水は気付いたんだ。

空の青・海の青・・それに外側は染まらないけど、内側は染まるんだね。

白鳥は牧水自身の理想なんだね、海と空の境界線を飛びたいんだよ。

何にも影響を受けずに、自分の心のままに生きてみたい。
でもそれは難しい事なんだろうね、俺は子供だから分らないけど。
でもね、ヒトミ・・俺はそこを飛んでみたいよ、その境界線を。
ヒトミのように白いままで、牧水のように何かを伝えたい。
ヒトミ・・海と空の境界線には、少しだけ白い部分があるんだよ。
そこを飛んでみたいと思ってて、気付いたんだよ・・牧水は飛んでない事に。
漂うんだ・・羽を広げて、風に任せて漂うんだよ。
何かを成し遂げようとか、こんな生き方をしようとか・・思わないんだね。
あるがままに、風の吹くままに・・漂う。
そうすれば、空の青にも海の青にも・・染まらない。
俺はね・・ヒトミに憧れてるんだよ、ヒトミは染まらないから。
動けないからじゃないよ、話せないからでもないよ。
ヒトミは境界線にいるから、生と死の境界線を漂うから。
それでも染まらないから、生きる事にも死ぬ事にも・・心が染まらない。
ヒトミのおかげで分ったよ、牧水の心の言葉。
白鳥は悲しまない、生きる事にも、死ぬ事にも・・心は染まらずに漂う。
そういう生き方をしてみたい・・牧水はそう詠んだんだよ。
この歌の続きの部分は、今考えてるから、また聞いてね・・ヒトミ。
お前はそう言った・・母親は震えながら泣いてたよ。
私はそうなんだと思ったよ、牧水はそう詠ったんじゃないかと。
定説も常識論も超えた、お前の解釈・・素敵だと感じた。
それで良いんだと教えられた、各々の解釈で良いんだと。
あの言葉を・・忘れないで欲しい、そしてミホに伝えて欲しい。
私達3人の想いは1つだ・・ミホにこだわり続けろ。
空の青・・海の青にも・・染まず漂え・・小僧。

牧水の教えを、お前に思い出させる・・・構えて」

マキが流れるように言葉にした、無変換の流れが響いてきた。
私は目を開けて、腹筋に力を入れて腰を落とした。
真ん中にマキが立ち、右にシズカ、左に恭子が立った。
「小僧・・検討を祈る」とマキが言って、３人が同じ動作で私の腹筋に拳を入れた。
さすがに効いて、私は目だけ苦痛を出してしまった。
３人は暫く止まっていた、私には強い想いが伝わってきた。

３人が離れ笑顔になった、私も自然に笑顔で返した。
「まぁ、こんな感じで～す」とシズカが笑顔で振向いて言った。
「前回は・・ボコボコにしました、自分のストレスも込めて」と恭子も振向き笑顔で言った。
「かなりのストレス解消になりますよ、お試し下さい」とマキも笑顔で振向いた。
私はウルウルで見ていた、１０番の全員が笑顔になった。

その時マリアが走ってきた、私の前で右手に拳を作って天使で微笑んだ。
私は真顔で膝をついて座り、マリアの高さに腹筋を合わせた。
「きゃまえて」とマリアが強く言った、私は構える振りをした。
マリアの渾身の可愛い拳がお腹に当たった、私はマリアを見て苦しい顔をした。
「えーしゅ」と強く言って、両手を両頬に当てて、天使全開で充電してくれた。
私はマリアを抱き上げて、マリアの頬にキスをした。

「マリア・・最強だよ」とシズカが笑って、全員が笑っていた。
「そうそう、豊君をマリアが狙ってるよ」とマキがニヤで恭子に言

った。
「それは怖い・・勝てる気がしない」と恭子がウルで返した。
「きょうこ・・だめ～」とマリアが天使全開不敵で言った。
「マリア・・そんな笑顔はいけないわ、豊が泣くよ」と恭子が言うと、マリアが慌てて引っ込めた。
全員の爆笑の中、私はマリアを抱いて天使を見ていた。
《マリアのが1番響いたよ》と心で囁いた。
「あい」と言って天使で微笑んでいた、夏の昼下がり・・笑顔の中に立っていた。

私のこの夏物語で、最後に登場する・・ミホ。

その存在こそが私に教える、伝えていくべき事を。

マキが無変換の言葉で伝えてくれた、小3の私の言葉。

私は必死で生きているうちに、忘れていた・・大切な想い。

牧水記念館で・・立ち尽くし読んだ・・その歌。

ヒトミが見せてくれた、染まらずに生きる姿。

私は確信を持って言おう、ヒトミは死を受け入れていたと。

しかしそれに囚われる事無く、その時を生きていたと。

9歳で次のステージに登ったヒトミ、しかし強い意志で生きていた。

私はヒトミの影響で、白鳥の歌に心惹かれたのだろう。

その解釈は今でも変らない、境界線で漂いたいと願っている。

心のままに、ヒトミのように・・ミホの今の生き方のように。

夏物語は・・佳境に入っていく・・ごつい男が歩いて来る。

強い足取りで、夜街を目指していた・・廃墟の伝道師が現れる。

夜街に向かい、何かを背負って歩いていた・・その生き方を提示するために。

和解の演出

降り注ぐ夏の日差しで、広い空間も明るくなっていた。
夜になれば戦場になる、その空間に響いた無変換の想い。
心を伝えるのに、変換をしない・・そのままを言葉にする。
その勇気ある女性の背中を見ていた、その将来像に夢を描いて。

「ねぇエース・・白鳥(しらとり)の歌には続きがあるの？」とエミが笑顔で聞いた。
『あるよ、凄く素敵な』と笑顔で返した。
「明日調べよ～」と少女の輝きで微笑んだ。
「エミちゃん・・調べる時は、解説を読まないでね・・解説は事実かもしれないけど、真実とは限らないから」シズカが微笑んだ。
「うん・・ありがとう、シズカちゃん」とエミが笑顔で返した。
「エミちゃん、小1で割算してるんだよ～」とマキが恭子にニヤで言った。
「すご～い・・小僧、来年には抜かれるぞ」と恭子がニヤで言った。
「来年まで持てば良いが」と蘭が満開ニヤで追って来た、全員が笑っていた。

「3人とも、格闘系の習い事をしてるのかしら？」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「マキの少林寺だけです、私は強制的に水泳部で、恭子は帰宅部でした」とシズカが笑顔で返した。
「シズカには私が教えました、恭子は実践で鍛えました」とマキがニヤで言った。
「まぁ素敵・・実践で鍛えるのですね」とユリさんが楽しそうに微笑んだ。
「マキ・・人聞き悪いでしょ、そんなに経験ありません」と恭子が

照れて微笑んだ。
「私なんて・・実戦経験って聞くだけで、憧れるよ」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「私も～」と蘭が満開で言った。
「蘭、あなたは有るでしょ、あとリアンとカスミは絶対有るわ」とユリカが爽やかニヤで言った。
女性たちがニヤで蘭を見て頷いた、蘭はウルで返していた。
「聞こうかな～・・どうしようかな～」とハルカが言った。
「ハルカ、何その言い回し・・ミサから盗んだね」と蘭が満開で笑った。
「ばれました」とハルカが笑顔で返した。
「なんでしょう？・・ハルカさん」とシズカが笑顔で聞いた。
「気を悪くしないでね・・どうして豊君は、恭子さんを選んだのかと思って？」とハルカが真顔で聞いた。
「それは私も、今でも理解できない事です」とシズカがニヤで言った。
「私の中でも、七不思議の1つです」とマキもニヤで言った。
「もう・・小僧、その豊の心の解釈を述べよ」と恭子がウルで私に振った。
『恭子を恋愛対象として、愛していると気付いたからでしょ。
豊兄さんが中2で、限界トリオが中1の時だよね。
シズカもマキも絶対に覚えてるくせに、茶化すんだから～』
私は3人にニヤで言った。
「それじゃあ、解釈の説明になってない・・述べよ」と蘭が満開で微笑んだ。

「豊兄さんが中2になった春、中3の悪が、水○高校に入学した1年にやられた。
そいつら馬鹿で、滅茶苦茶だったよ・・中学生いじめて。
うちの中学は、水○高校の通学路に有るから狙われたんだよ。
豊兄さんは中2で、自分から争いに入らないから。
中3の問題だと思って、無視していた・・3年以外被害無かったから。
その当時、中2に少し障害のある子ががいたんだ、松葉杖で歩く。
その子は見た目は普通の可愛い子だから、知らない人は骨折してると思うんだ。
そして事件が起こる、その子が帰り道で、ベンチで休憩していた。
休憩しながらじゃないと、帰れないんだよ。
そこにその水○の1年が通りかかり、からかうんだ・・2人の女子が。
松葉杖を取り上げて、遠くに置いてニヤニヤで困った顔を見ていた。
そこに通りかかる・・恭子が・・恭子は松葉杖を取り上げて。
その子に返す・・そしてその2人の女子高生を言うんだ。
障害者いじめて楽しいのかと、2人ににじり寄る。
その時の顔が伝説になる、狂う子と書いた【狂子】だってね。
恭子はやってしまう、二人まとめて・・その怒りを抑えられなかった。
でも馬鹿な高校生は・・その場で男子2人で、女子の仇をうつんだ。
恭子を殴り倒す、そこに大人が止めに入って・・その時は一旦おさまる。
そしてその話しが、当然豊兄さんの耳に入る。
恭子はその時に言うんだ、豊兄さんに・・怒りが制御できなかったって。
豊を見てきたから・・豊が好きだから・・抑えられなかったって。

そう言って泣いたんだよ・・恭子はその時に強く伝えた。
そして豊兄さんは次の日の朝、水〇高校の正門に立つ。
そしてその当時の頭だった男に喧嘩を売るんだ、そして圧倒的な強さで勝つ。
お前が駄目だから、1年が好き放題するんだと言って。
今度何か有っても、またお前の所に来るって言って帰るんだよ。
そしてその足で学校に行って、1年の恭子の教室に行って言うんだ。
俺も恭子が好きだから、俺と将来一緒にいたいなら・・もう無茶はするなと。
沢山の生徒の前で、堂々と伝えるんだよ。
その時から・・恭子は公然の豊の婚約者になるんだ。
それでも限界トリオの関係は変らなかった、俺はマキに聞いたんだ。
そうしたらマキが教えてくれた、マキもシズカも豊兄さんの気持ちは知っていたと。
俺は恭子のあの告白が忘れられないよ、本当に強い言葉だった。
その後に豊兄さんが俺に言った、反省したと・・恭子に言わせてしまったって。
それから豊兄さんが、俺の所によく来るようになって。
こんな時はどう言葉にするって聞くようになった、俺は嬉しかったよ。
自分を反省し行動できる強さを再確認できて、今じゃ俺より言葉でも強く伝えるから。
俺は本当に嬉しかった・・恭子の心の叫びが聞けたから。
そんな感じだね・・脚色してないよ』
笑顔で照れる恭子を見ながら言った、全員が笑顔で聞いていた。
「素敵過ぎる・・やっぱり嫉妬する」とハルカが微笑んだ。
「恭子・・今の話で小僧が削除した、小僧の登場場面を述べよ」と

蘭が満開で言った。
「はい・・さすが蘭姉さん、大幅に削除してます。
その松葉杖の子がからかわれてた時に、その松葉杖を取り上げたのは小僧です。
小４の小僧です・・そして男子生徒に向かって言った。
勝負してやるよって、そしたら女子が怒って小僧に近付いた。
小僧は女は殴れんと言って、その女子２人に殴られてました。
私は帰宅部でちょうど下校してました、その時に大声で呼ばれた。
今日会われたヨーコが叫びました、小僧が大変だと泣きながら。
ヨーコにとって、小僧は特別の存在だったから・・泣いていました。
私が走ってその場所に着いた時には、小僧が決め台詞を言うところでした。
お前ら・・俺を殺す覚悟が有るんだな、そこの男・・狙ってやるからな、一生。
ボロボロになりながら立ち上がり、笑顔で全ての伝達方法で伝えてました。
私は逆上して、その２人の女子の前に出た、その時の顔が【狂子】です。
小僧に話を聞いて、どうしても制御が利かなかった。
そして小僧の言った通りの展開です。
そして次の日、水〇高校の正門に立つ、小４の小僧が。
豊はそれを聞いて、駆け付けるんです・・正門に。
そして小僧の言った完結を迎えます。
その時の小僧は、ヒトミからミホに移行して、ミホに挑戦中で。
マキの解放もしていて、その心のままに生きていました。
強過ぎると思うほどの、伝達能力で日々を過ごしていました。
豊の反省は・・どこかで避け過ぎていた自分を反省しました。
修羅場に招かれる事を嫌い、大切な事からも避けていた自分を感

じたのでしょう。
水〇高校の正門に立つ、小僧の小さな体を見て・・強く伝達された。
その強い意志が、それから豊は小僧に執着するんです。
自分に持って無い物を、小僧が見せつけたから。
そして兄弟関係は今に至るんです、小僧は削除しますよね～」
恭子は私にニヤを出して、女性達に笑顔を向けた、全員が笑顔で返した。
「昨夜私は小僧とヨーコの家に行って、嬉しかった。
小僧の伝達能力が、私の知らない世界に入っていて。
小僧はヨーコにずっと憧れを抱いてました、ヨーコが施設の子だったからです。
小僧はヨーコは凄いと、幼い時から言っていました。
それはヨーコが一度も陰りを見せなかったから、その可愛さも・・優しさも。
小僧は会う度に、ヨーコに直接言っていました・・可愛い可愛いと連呼してました。
悪質な原作者に、幼少期を翻弄されたヨーコ。
でも常に前向きで、施設の下の世代を引っ張った。
その失われない清楚な美しさが、下の世代に夢を見せています。
昨夜小僧が説得する時に、暗に言った・・自分の幸せを追えと。
ヨーコの心に直接伝えた、言葉と瞳で・・もうそうして良いんだと。
強く伝えました・・トップを狙えと、夢を持って生きろと。
私も凄く楽しみです、ヨーコの将来が・・マキと同じ位。
皆さんヨーコの事も、よろしくお願いします」
シズカが真顔で言って頭を下げた、マキも恭子も頭を下げた。

「もちろん、今日共同体を結成しました、ヨーコも仲間になりましたよ」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
限界トリオの3人が、笑顔になって頷いた。

「ヨーコちゃんも、律子さんの事を母さんって呼ぶんだね」とユリカが爽やか笑顔で言った。

「豊君や私・・そして施設の子供の多くは、そう呼びます。
私やヨーコは母の記憶があるけど、豊君は記憶すらないんです。
私達は勝也さんを父さん、律子さんを母さんと呼びます。
私達は2人のおかげで、味わいませんでした。
親のいない寂しさは味わったけど、辛さは味わう事がなかった。
私は女にとって大切な事は、全て母さんが教えてくれました。
料理も裁縫も全て・・シズカに教える時は、必ず私を呼んで。
自然に接してくれました、可愛そうだからなどの感情じゃなく。
大切に接してくれました、一人の人間として。
豊君が言いました、今は何も返せないから・・せめてそう呼ぼうと。
心を込めて、愛情と感謝を込めて・・父さん・母さんと呼んでいます」

マキの強い言葉が、響いていた・・レンと久美子に涙があった。
このマキの言葉が砕いた・・シオンの心の最後の壁を。
シオンはこの言葉が入ってきて、自分の悩みの小ささが恥ずかしかったと言った。
両親に愛情を持って育てられたのに、それに甘えていたと感じたと。
シオンはマキに愛情を持って接するようになる、自分も自然に接したいと思って。
その行為がシオンを覚醒させる、人と人との関係の構築の仕方を作り出す。

シオンの方法を・・それは驚くほどの方法だった、歌の言葉がメロディーに乗る。
全てを好きだと言って、その笑顔で・・癒しを発散するのだ。
頼ってくる年下が、心に問いかけ続けて・・シオンは心に新しい部屋を作る。
私はその部屋の広さに驚く、どんなに多くの人が尋ねて来ても余裕のある広さに。

『ところでなぜ、3人揃ってるのかな？』と私が空気を変えるために二ヤで聞いた。

「小僧・・鈍くなったな、豊が今日は小僧の所に行こうと言ったよ。だから私は会いたかった、ユリカ姉さんの店にシズカと行ってたの。
鋭い時の小僧なら、豊を見ただけで感じたはず。
今から何かが起こると、お前らしくない・・ミホに会って動揺するなんて。
小僧・・何かを持つのは早いよ、お前は愛する人だけ持ってれば良い。
まだ他のものを持つな、守るべき物を持つなよ」

恭子が真顔で言った、確かにそうだと思っていた。
「そういう事よ・・そろそろ行くかね、戦場に」とシズカがニヤで言った。
『行くかな・・早く終わりたい』とウルで返した。
「勝也父さん・・ニヤニヤしながら来るね～、楽しそう」とマキが微笑んだ。
「覚悟を決めな・・親父は何に1番怒ってるか分るか？
お前が本気じゃなかった事だよ・・殴りかかった時に、手加減し

ただろ」と恭子がニヤで言った。
「したね～・・小僧とは思えなかった」とシズカがニヤで言った。
「お前は世の中で唯一、その伝達方法を使わないよな、父さんには・・人として向き合いたいからなんだろ？」とマキが真顔で言った。
『そうだよ・・今日も言葉だけで勝負する』と笑顔で言った。
全員に見送られ、ユリカとシズカと3人で出掛けた。

通りを歩いていると、後から声がした。
「背が少し伸びたか？」と懐かしい親父の声がした、私は一瞬凍結して振向いた。
『卑怯だぞ親父・・不意打ちは』と必死で笑顔を作った。
「そんな事、どうでもいいから・・その素敵な女性を紹介せんか」と余裕の笑顔で返された。
『ユリカ、これが噂の親父・・親父、お世話になってる、ユリカさん』と互いを紹介した。
「あなたがユリカさん、和尚に聞いてます・・本当に小僧の事ありがとう」と親父が笑顔で言った。
「ユリカです、よろしくお願いします・・イメージが全然違うので驚きました」とユリカが爽やかに微笑んだ。

「馬鹿息子が、悪いイメージで洗脳しようとしましたね」とユリカの横に並び楽しそうな笑顔で言った。
「まぁ、そんなとこです、頑固で石のように硬い、堅物みたいな感じです」とユリカも爽やか笑顔で返した。
「そうでしょうね～・・父親に酷い仕打ちをするもんです」とご機嫌親父と、４人でエレベターに乗った。

「ユリカさん、１０分で話は終わりますから、その後魅宴に案内してもらえませんか？」と親父が言った。
「もちろん、かまいませんよ・・大ママ、アスカママに会いたいん

ですね」とユリカが笑顔で返した。
「それもありますが、ヨーコの筋を通しに行きたいので」と親父が真顔で言った、ユリカは笑顔で頷いた。

ユリカの店の奥のＢＯＸで、親父と向き合って座った。
親父の横にシズカが座り、ユリカが飲み物を出してくれた。
「ユリカさんも座って下さい・・小僧の誓いの証人として」と親父が笑顔で言った。
ユリカは少し驚いて、笑顔で頷いて私の隣に座った。
「それじゃあ・・完結に言え、それでいい」と親父が言った。

『親父・・殴りかかったのは、本当に悪かったと思ってる。
今、俺は好きな女性がいる、２３歳だけど歳なんか関係ないと思ってる。
その人の事は省くよ、後で親父も会うから。
学校にはもちろん行く、成績も上げてみせる。
だから俺はその人と暮らしたい、覚悟はできてる』

真剣に親父を見て言った、親父も真剣に私を見ていた。

「条件は３つだ。
１つは・・月末には一度家に帰り、生活費を受け取り、蘭さんに渡す。
もう１つは、マキとヨーコを常に気にかけておく。
最後は・・ミホを絶対に諦めない・・・出来るか？」

親父は静かに言った、私は嬉しかった、その条件が。
『分った、誓うよ』と真顔で返した。
「よし・・おしまい、小僧と話してもつまらん」と親父が笑顔で言った。

私はあまりのあっけなさに、気が抜けていた。
「な～んだつまんない、リターンマッチが見れると期待してたのに」とシズカが笑顔で言った。
「ときにシズカ・・なぜお前が付いてきてる？」と親父が笑顔で言った。
「焼肉・・焼肉が食べたい・・お父様」とシズカがウルで言った。
「太るぞ・・お前はすぐに身に付く」と親父がニヤで返した。
ユリカは楽しそな笑顔で、この親子漫才を聞いていた。

「ユリカさんは、焼肉はお好きですか？」と親父が笑顔で聞いた。
「はい、大好物です・・お父様」とユリカが爽やかニヤで言った。
「じゃあ3人で行きますか・・小僧は仕事でしょうから、魅宴でお別れしましょう」と親父もニヤで言った。
「忙しいですから・・エースって呼ばれてますからね～」とユリカが爽やかニヤを私に出した。
私はウルウルで返していた。

4人で魅宴に歩いていた、親父がユリカと並んで楽しそうな笑顔で話していた。
私はシズカが面白がって腕を組んできて、ユリカにニヤで見られていた。
私はシズカに感謝していた、親父との和解の作戦を練ってくれた事を。
ユリカを感じて、ユリカの存在で話をまとめた。
蘭にいきなり会ったら、親父も難しい気持ちになっただろうと思っていた。
ユリさんの通した筋に、ユリカという絶対的存在を見せて、蘭に会わせる。
シズカの最も優れている、組み合わせて強度を上げる、その才能の

片鱗を見ていた。
魅宴の裏口から、ユリカの後をフロアーに向かった。
大ママがフロアーで、ミコトとリョウとミサキとヨーコで話していた。
「大ママ・・今、泣けますか？」とユリカが爽やか笑顔で言った。
大ママが驚いて、振向いた。
「飛鳥・・よくやった、見事だ」と親父が大ママの方に笑顔で歩み寄った。
大ママは親父を見て、泣いていた・・嬉しそうに泣いていた。
親父は大ママを優しく抱きしめて、笑顔で見ていた。

「あの不良娘が・・ここまで来たか、お前はこの街に夢を見せてるな・・真希も喜んでるぞ」と親父が言った。
「勝也兄さん・・ありがとう、本当に嬉しい」と言うのがやっとだった。
「飛鳥、戦場であまり泣くなよ・・素敵な女性達が、まだ成し遂げてないのに・・戦場で泣くようになるぞ」と笑顔継続で親父が言った。
「それはさせません・・私が目の黒いうちは」と大ママが笑顔で言った。
親父は体を離して、大ママの瞳を見ながら言った。

「飛鳥・・ヨーコを頼む、律子が身元保証人であるのなら。
俺も身元保証人だと思ってくれ、だから厳しく教えてくれよ。
ヨーコは大丈夫、今までも荒波を越えてきた。
しかし一度も自分を見失うことはなかった、どんなに厳しくても乗り越える。
優しさと美しさを維持しながら、俺はそう信じてるから。
よろしく頼むな、飛鳥・・お前の魅宴だから安心だよ」

親父が笑顔で言った、大ママも笑顔で聞いていた。
「わかりました、引き受けます・・必死にさせて、全力を引き出してお見せしますね」と大ママも笑顔で答えた、親父も笑顔で頷いた。
「ヨーコ・・綺麗になったな、頑張れよ・・たまに見に来るから、早くデビューしろよ」と親父がヨーコに微笑んだ。

「父さん・・ありがとう・・ごめんなさい、ご無沙汰してました。
日々の生活に追われて、余裕がなかった・・でも小僧が教えてくれました。
私も夢を追って良いんだと・・全力でやってみます。
父さんが言ってくれた、生きる目的を見せろと・・それをお見せします。
沢山の弟や妹が見てますから、必ずそれを探し出して・・あの子達に見せますね。
本当にありがとう・・父さんと母さんが保証人である事が、今の私の支えです」

ヨーコは目を潤ませて言った、しかし涙を見せなかった。
親父はヨーコの頭に大きな右手を乗せて、笑顔でヨーコを見て。
「楽しませてもらう・・ヨーコとマキの生き方を」と優しく言った、ヨーコも清楚な笑顔で頷いた。
「皆さんも・・鍛えてやって下さい、お願いします」と親父が頭を下げた。
「絶対に途中棄権はさせません・・楽しんで頂きます」とミコトが笑顔で頭を下げて、リョウとミサキも頭を下げた。

「さすが飛鳥だな・・素晴らしい女性に囲まれている」と親父が大ママに笑顔で言った。
「ユリの店でも、そう思われますよ」と大ママも笑顔で返した。

「楽しみだよ・・飛鳥また来るよ、お邪魔した」と親父が笑顔で言って、背中を向けた。
「エースは残って」と大ママに言われて、大ママが3人を見送りに出た。

私はフロアーに残って、ヨーコの清楚な笑顔を見ていた。
「エース・・私達3人からも礼を言う、ヨーコをありがとう・・最高の贈り物だったよ」とミコトが微笑んだ。
『それは、ヨーコがデビューしてから言って・・俺が最初にスカウトした女性だから』と笑顔で返した。
「当然・・源氏名は命名してくれるんだね」と大ママが後から言った。
『もちろん、望まれれば』と笑顔で返した、大ママも笑顔で頷いた。
「ありがとう・・エース」とヨーコが可愛い笑顔で言った。

「マキを見に行かないと・・ヨーコと両極なんだろ?」とリョウがニヤで言った。
『俺の勝手な考えで言うと・・イメージは火と水、リアンとユリカ』とニヤで返した。
「確かに・・銀河とも私とハルカとも違う、その関係に近いよね〜」とミサキが微笑んだ。
「そこまで凄いの・・ヨーコだけでも驚いたのに」とミコトが楽しそうに笑った。
「ミコト姉さん・・私はマキと比べられる事が、光栄だと思うくらいですよ」とヨーコも笑顔で返した。
「大変だね〜・・リョウもミサキも、エースはこれからも爆弾投下し続けるしね〜」とミコトが余裕ニヤで言った。
私は4人の楽しそうな笑顔を見て、魅宴を後にした。
ＰＧの裏階段を登っていくと、蘭が踊り場で待っていた。

私を見て、満開で微笑んだ、私は蘭を抱き上げて階段を登った。
『蘭・・許可取ったよ、よろしくお願いね』と笑顔で言った。
「仕方ないな～・・居候させてやる」と言って私にしがみついた。
『あまりにあっけなくて、拍子抜けしたよ・・シズカが緻密な作戦練り上げてた』と耳元に囁いた。
「姉孝行な良い妹だよ・・ユリカ姉さんもありがとう」と蘭が囁いた、暖かい波動に包まれていた。

「さっきのマキの話・・凄く響いたよ、本当にマキは心に問いかける・・ユリさんも感動してたよ」と蘭が満開で微笑んだ。
『俺もあのマキの言葉で間違えに気付いた、マキが最も影響を与えるのは・・エミだね』と笑顔で返した。
「そうよ・・あなたの最も大切な伝承者、エミだと思うよ」と蘭も満開笑顔で言った。
『蘭・・何も考えなくていい、飾る必要も緊張もいらない・・ありのままで会って』と真顔で言った。
「分ってる・・私にはそれしか出来ないから」と満開で微笑んだ。
ご機嫌蘭と手を繋ぎ、ＴＶルームに入った。

『ユリさん、ありがとうございました・・和解できました』と笑顔で言って頭を下げた。
「良かった～・・これで私も本気になれます、東京ＰＧをリアルに視界に入れますよ」と薔薇で微笑んだ、私も笑顔で頷いた。
「おめでとう・・そしてありがとう、この本はバイブルだよ・・嫉妬した、マキを」とカスミが微笑んだ。
『ありがとう、カスミ・・感想は言わない約束だよ』と笑顔で返した。

「蘭姉さん・・ご機嫌が顔に出すぎてますよ」とハルカが微笑んだ。
「ごめんね、抑えられない」と蘭が満開ニヤで返した。

「最近思うんだけど・・蘭姉さん段々若くなるよな～」とカスミが不敵を出した。
「それがエースの望みですからね～」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「エース・・その望みを述べよ」とカスミが最強不敵で言った。

『望みか～・・俺は原作者に宣戦布告した。
だから蘭で見せる、人はやり直せる・・後悔を背負っても。
肉体的な年齢は些細な事だと、原作者に提示したい。
原作者の最強の武器、時間に挑む・・その答えが蘭なんだよ。
今回の蘭の本気は、自らが選択し目指した・・その時が来たら分る。
それは１９～２２歳までの、蘭を背負っていると思ってる。
必死で生きることで、自分を誤魔化していた、その当時の蘭に今の蘭が見せる。
蘭がユリさんに言った、自分との和解・・俺はそれがずっと心に残ってる。
俺の望みは・・それ１つだけだよ、蘭に会わせてやりたい。
その頃の蘭に、だから俺はそれを望んだ・・自らが選び辿り着いた場所に居る。
必ずいると思ってる、誰にでもいる・・後悔をする自分が。
俺は出会えると思ってる、その分身に・・それはユリカを見てきたから。
あの精神世界に入る扉の鍵は、その分身が持っている。
蘭なら辿り着ける・・俺はそう確信的に思ってる。
俺はもちろん今の蘭を愛してる・・このままで良いと思ってる。
でも、蘭に心残りだけは持たせない・・蘭は心に従順だから。
１３歳の俺の望みは・・蘭の望みを叶える事だけなんだよ』
私は想いのままを言葉にした、親父との和解でスピードが増した事に自分で気付いていた。

「そう言う事よ・・そうだったのね」と蘭が私に抱きついた、私も蘭を優しく抱いていた。
全員が優しい瞳で見ていた、ユリさんの薔薇が嬉しかった。

「圧倒的だね、エース・・完全に戻ったね、ヒトミと向き合ってた頃に」とマキが微笑んだ。
『マキありがとう、白鳥の歌・・忘れてたよ、大切な事を思い出した』と真顔で返した。
「白鳥の歌のあなたの解釈・・マチルダに教えたかった、次回話してあげよう」と蘭が満開で微笑んだ。
「私も思いました・・歌の本質はそうなんだって、感じるままで良いんだって」と久美子が微笑んだ。

「リンダとマチルダは、きっと感じますね。
あの2人が目指してる、1つの形のような気がする。
空の青・海の青にも染まず漂う・・牧水は放浪の歌人ですよね。
でも定説が本当なのでしょうか、自分の異質性に悩んでいたと言う・・その説が。
もっと高みにあると感じます、その心は超越してると感じるんです。
私はエースの言葉を聞いて、文献を読んでみたけど・・しっくりこなかった。
今日のシズカがエミに言った言葉で感じた、解説を見ないでと言った言葉で。
解説は事実かも知れないけど、真実とは限らない・・素敵な解答でした。
深く考える必要はないんだと、感じたままで良いんだと。
それが高みにある人の言葉だと、そう思いました」
マキが流れる想いを言葉に乗せた、私はマキの速さに驚いていた。

「圧倒的だよ、マキ・・私は本当に嬉しいよ」とカスミが微笑んだ、マキも嬉しそうな笑顔で返した。

「マキちゃんありがとう、シオン分ったよ・・主張をする事の意味が。

マキちゃんの言葉が、心に刺さったよ・・シオンやれると思ったよ。

シオン見せるよ・・次に来るマキに、そのシオンの目指す世界を。

先に行って待っとくから・・シオンも伝えたい、次の人達に。

リンダちゃんとマチルダちゃんと、旅をしたいから。

そのためには・・大切な経験と伝える言葉が必要だから。

マキが感じてくれるから・・そして伝えてくれるから」

シオンの歌の言葉が、アップテンポで流れた。

私は嬉しくてシオンを見ていた、レンとハルカの表情が変った。

「シオン姉さん、楽しみに待ってます・・さぁエース、私とハルカの次の提示を」とレンが言った。

『もうすぐ来るでしょう・・ホノカを感じて欲しい。

あのほんわか可愛いホノカ・・その本質、強き心。

絶対に揺れない心の芯、それを包み隠す・・あの圧倒的容姿。

カスミもリョウもマチルダでさえ、一瞬で認めた・・あの強靭な精神。

俺が夜街の若い女性で、潜りたくない唯一の存在である・・ホノカ。

ずっと憧れていたいから・・そのブレない心に』

私はレンとハルカを見て、笑顔で伝えた。

「了解・・やっぱり、ホノカ姉さんだね」とハルカが微笑んだ。

「あの可愛さの裏づけを見たい、そこに答えがありそうな気がする」

とレンが真顔で言った。
私は2人に笑顔で返した。

「エース・・義務教育期間中は、ＰＧと共同体専属ですよ」とユリさんが薔薇ニヤを出した。
『ユリ・・結局、俺が1番大切なんだね』とニヤで返した。
「あら、恥ずかしい・・ばれました」と両手で顔を隠した。
全員が笑っていた、私は蘭の満開を見ていた・・散る事のない満開を。

親父と私との和解をシズカが演出した、その想いに私は感謝していた。

親父ですらシズカの事は、その当時の１６歳にして認める存在だった。

その開放的な心が、人の心を掴む・・夜街に挑戦しなかった幻。

私は常にシズカをイメージしていた、ＰＧのシズカを。

その後のシズカに最も影響を与えるのは、リンダである。

シズカの開放的心は、リンダの強い意志に憧れる。

アメリカ留学を終えて帰国した、シズカに会った時に感じた。

その開放的な心が目指す場所・・それは平穏なんだと。

シズカは探し続けた、リンダとマチルダとユリカの心の幻影を。

その開放的な心のままに、そして経験の組み合わせを駆使して作った。

その強靭な心を・・シズカは今でも、私との姉弟関係を解消している。

甘えが出ないように・・私が自分自身に甘えないように。

私はＤＮＡが最も近いであろう、このシズカに憧れ続けるのかもしれない。

そのどこか自由で、開放的な心と・・その生き方に。

手銃の言葉

戦場が静かに待っている、夕暮れにいまだ遠い時。
戦士たちは食事をしながら、集中の時間に気持ちをシフトする。
瞳の輝きが変り、女優になっていく・・笑顔を作り出すために。

女性達が食事をして、私はエミとミサと人生ゲームをしていた。
私は破産して、ウルウルを出していた。
「未来を暗示してるようで、怖い」と蘭がウルで言った。
「しそうだね～・・てか金にあまり執着しないよな～」とカスミが不敵を出した。
『執着あるよ必要な分は、生活にも夢を追うにも必要だから』と笑顔で返した。
「マチルダに言った夢・・最高だよな～」とカスミがニヤで言った。
「あら何かしら・・カスミちゃん、述べなさい」とユリさんが薔薇ニヤを出した。

「はい・・エースが将来、蘭姉さんと子供が出来て。
その子供が独立したら、南の島で暮らしたいと。
車もＴＶもいらないと、蘭姉さんと海と波の音だけで良いと。
そうマチルダに言ったそうです・・以上」

カスミはまるで上官に報告するように、ハキハキと言った。
「素敵です～」とシオンがニコちゃんで言った。
「憧れるな～」とハルカも笑顔で言った。
「だから、頑張るのよ・・全力疾走でそこまで行くんでしょう、最後の挑戦者」と蘭が満開で微笑んだ。
私は蘭の満開を見ながら、笑顔で頷いた。

その時にドアが開いて、ホノカが入って来た。
私はホノカに見惚れていた、そのクラブに挑戦する集中した顔に。
「今日からお世話になります、よろしくお願いします」と華麗に微笑み、深々と頭を下げた。
「よろしくホノカちゃん・・さすがに集中すると、違いますね」とユリさんが薔薇で微笑んだ、ホノカも笑顔で返した。
「さて・・じゃあ早目に準備して、挨拶しとこうか」とカスミが立ち上がった。
「カスミちゃん、今日だけホノカちゃんを頼みます・・次からはもう大丈夫でしょうから」とユリさんがホノカに言った。
「はい・・それで大丈夫です」とホノカが華麗に微笑んだ。

『ホノカ・・期待してるよ、ほんわか世界を見せてね』と私がホノカに笑顔で言った。
「了解・・ここなら全部出し切っても安心だから、エースがいるからね」と華麗ニヤを出して、カスミと出て行った。
「銀河の奇跡か～・・面白いね、もうＰＧの１つの本質を言い当てた」と蘭が満開で微笑んだ。
「そうですね、他の店に無いもの・・最後に抱き上げてくれる男ですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「そっか～・・他の店は帰る余力を残さないといけないのか～」とレンが笑顔で言った。

「そうですよ・・大ママがエースを欲しがるのは、その部分が大きいですね。
その時が来た時に、何のためらいも無く全てを出し切れる。
それは本当に信頼できる、後ろ盾があるからです。
ボーイさんとの関係では、やはり難しいですね。
エースは蘭に遠慮することなく、その事を全員に伝えています。

疲れ果てたら、側にいると言っていますね。
その言葉の本当の重さが分るのは、その時が来た時です。
ＰＧの女性である事の幸せを感じるでしょう、その時はエースが抱き上げてくれる。
だから出来ると思いますよ、私でもそうですから」

ユリさんが薔薇で微笑んだ、私は照れた笑顔で返した。
「エース・・早く伝えて下さいね、分ってるでしょ」とユリさんが言った。
『そうですね、案外照れ屋ですから・・蘭、どうしてユリさんに姉さんを付けない、本気で挑戦するんじゃないのか』と蘭に真顔で言った。
「ごめんなさい、照れがあって・・ユリ姉さん」と蘭が満開で言った。
「本当に嬉しいですよ・・蘭、ありがとう」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
笑顔の女性達が準備に向かい、私はマリアも起きて、４人で食事をしていた。

「蘭は凄いね～・・もう精神的には乗り越えて、楽しんでるね」と松さんが笑顔で言った。
『本当にそう思います、相当に緊張するイベントなのに』と笑顔で返した、松さんも笑顔で頷いた。
私は食事が終わり、指定席に付いた。
カスミとホノカが出ていた、ホノカのピンクのドレス姿の華麗さにニヤニヤしていた。
「さすがに２人揃うと、破壊力があるね～」とナギサが華やかニヤを出した。
『ナギサ・・さっき蘭を説教して、蘭はユリ姉さんと呼ぶようにな

ったから』とニヤで返した。
「そうだよね・・それじゃないと失礼だよね」とナギサが真顔で言った。
『練習しとけよ、自然に言えるようになるまで』と笑顔で返した、ナギサが笑顔で頷いてフロアーに歩いた。
シオンとマキの準備が終わり、席についてマキがサインをシオンに出していた。
シオンはニコちゃんで、サインで答えていた。

四季とユメ・ウミが入り、レンとハルカが入った。
そして私の横で神聖な場所に深々と頭を下げた、純白のドレスを着た蘭が立っていた。
私はその表情に息を飲んだ、今までにない集中の中にいた。
瞳に湛えた青い炎が強く、背中に静寂さえ連れて歩いていた。

「怖くなってきたね・・まだまだだよ」と後からリアンが獄炎ニカで言った。
『野次馬で来たね、リアンも好きだね～』とニヤで返した。
「これを見ずして、何を見る」と椅子を持ってきて、私の横に密着して座った。
マキがシオンと来て、リアンに挨拶をした、リアンも笑顔で返した。
「シオンに新しい魔法をかけたね」とリアンが笑顔で言った。
『俺じゃなくて・・マキがね』とニヤで返すと、リアンに獄炎ニカニカで返された。

「本当に野次馬根性が旺盛なんだから」とミチルが後から言った。
「ミチルママも野次馬でしょ・・同じです～」とリアンがニカで返した。
シオンが椅子を持って来て、ミチルが座った。
「私はホノカのＰＧデビューを見に来たの」とミチルが妖艶ニヤで

言った。
「なんかミチルママ・・色気が凄いんですけど」とリアンが獄炎ニヤで返していた。
ミチルとリアンの登場で、只ならぬ雰囲気を女性達が感じていた。
久美子が激しいリズムの曲に移行してきた。
「なるほど～、生演奏は良いね～・・気分が高まっていくんだね」とミチルが久美子見ながら言った。
「贅沢だよな～・・あれを従業員だけで楽しむんだから」とリアンが笑顔で言った。
私はその言葉で、ある事を思いつき、一人でニヤニヤしていた。
「お揃いですね、皆さんもお好きですね～」と千鶴が微笑んだ。
「人の事言わないの、大体クラブのママが、こんな時間に来てて良いのかね～」とミチルが妖艶ニヤで言った。
「たまにはいいんです、逆に勉強になるでしょうから」と笑顔で言って、シオンの出した椅子に座った。
その時に久美子が、止まった・・そして鍵盤を睨んだ。
弾いたのは、あのマチルダの最初の夜に弾いた、激しい曲だった。
腰を浮かし、時に笑い、時に怒り、時に泣いて・・それを音色でも表現した。
魂の響きが木霊して、全員を集中の中に入れた。
演奏が終わり、久美子はニヤ顔で右手の拳を女性の方に突き出した。
五天女も全員立って、女性達と一緒に拍手をした。
久美子は１６歳の輝く笑顔で、深々と頭を下げた。
「か～・・ＰＧはレベルが違いすぎる、この精神状態で開店するんだ～」と千鶴が微笑んだ。
その時受付に和尚が笑顔で来た、私は走って近付き、徳野さんに指

示され3番に案内した。

『和尚・・俺、さっき親父と和解したよ』と笑顔で囁いた。

「よし・・あとは任せんしゃい」と和尚は笑顔で言った、私も笑顔で頷いた。

指定席に戻るとユリカが来た、私はご機嫌ユリカに腕を組まれて、リアンの後に立った。

その時にユリさんが入場した、神聖な場所に美しい姿勢で深々と頭を下げた。

そして五天女を見て、薔薇ニヤを投げかけて、フロアーの女性の円に歩いた。

「違いすぎる・・存在してる世界が違う、感動してしまった」と千鶴が呟いた。

「千鶴・・蘭とナギサは、あの世界に挑戦するんだよ」とユリカが囁いた、千鶴はユリカを真顔で見て頷いた。

「今日から、ホノカちゃんが来てくれます。

エースからの伝言を伝えます、ホノカを感じて欲しい。

その輝きに隠された、心の芯の強さを。

何があっても絶対に揺れない強さを・・感じて欲しい。

私もそう思います・・あなた達の本気が真実ならば。

これから進む上で最も大切な事です、信じた心に揺れは無いですね？」

ユリさんの強い言葉が響いた、全員が心を1つにした。

「はい」と返事をして、その想いを伝えた。

「それではホノカちゃん、挨拶を」と薔薇で微笑んだ。

「ホノカです・・何も言う事はありません、行動でお見せします。

よろしくお願い致します」

ホノカが最高の言葉で、その強い意志を伝え、輝きを連れながら頭を下げた。

女性が全員返礼して、ホノカの輝きを見ていた。

「それでは今夜も開演しましょう」の言葉に、「はい」のブザーを鳴らした。

「やるね～、ホノカ・・あの挨拶には覚悟がいるよ」と後から大ママが笑顔で言った。

五天女が全員笑顔で頷いた。

『全員揃って・・バレバレだな～』とニヤで言って、大ママを私の席に座らせた。

その時に受付に親父が来た、徳野さんが駆け寄った。

「徳じゃないか！・・元気そうだな、ここにいるのか」と親父が言って徳野さんの肩を叩いた。

「勝也兄さん、ご無沙汰してます・・あれから2年で足を洗いました」と徳野さんが笑顔で返した。

「そうか・・嬉しいよ徳、律子が何も言わなかったから・・徳、マキを頼むな」と親父が笑顔で言った。

「任せて下さい、厳しくやります」と徳野さんが笑顔で返した。

「今度ゆっくり飯でも食おうな・・今夜は和尚に誘われて、マキの場所を見に来たよ」と親父が笑顔で言った。

「楽しみにしてます・・ご案内します」と徳野さんがカズ君に指示した。

「全然頑固親父じゃないぞ・・素敵な人じゃないか」とリアンが振向いて、私にニヤで言った。

「静かに・・来るよ」と大ママが囁いた。

ユリさんが和尚側から、蘭が親父側から歩いて近付いた。
蘭は親父に満開笑顔で挨拶をした、親父も嬉しそうに笑って何かを言った。
その時に衝撃が走る、蘭が全ての想像を越えて見せた。

蘭は親父の言葉を受けて、最強満開不敵を出して、ゆっくりと両手を合わせた。
そして両手で銃を作って、親父に向けて最強の満開ニヤで見た。
親父は楽しそうに、両手を上げて笑った。
蘭は両手で反動を表現しながら、バンという感じで親父を撃った。
親父は撃たれた真似をして、がっくりと肩を落とした。
蘭はその親父にすがりつき、泣き真似をした。
そこで親父が笑顔を戻した、蘭も体を起こし満開で微笑んだ。

「やりやがった・・蘭はやりやがった、全ての期待を超えた」とリアンが言った。
「戻ったね・・いや、もう越えてるね、ＮＯ１の頃より」と大ママが言った。

笑顔で話す親父と、蘭の満開を見ながら幸せを感じていた。
隣に座るユリさんと、和尚も笑顔でその光景を見ていた。
ホノカの熱い視線があった、この件でホノカも蘭を追いはじめる。
その圧倒的な存在を感じて、憧れとして追いかけるのだ。

ユリさんが次にカスミを付けた、カスミはさすがに気付いて、親父にも突っ込みを入れていた。
「あ～楽しかった」と言ってリアンが立ち上がり、大ママとミチルと千鶴と笑顔で帰って行った。
『ユリカ・・何時から出ようか？』と私は通りに出えながら、ユリ

カに微笑んだ。
「１０時からにしよう、凄～く楽しみなのよ～」と爽やかに微笑んだ。
『了解・・迎えに行くよと』と通りまで送って、ユリカを見送った。
蘭と親父は笑顔で会話をしていて、私は一安心して仕事のチェックをした。

ホノカはナギサに付いて回っていた、その会話のレベルは高く笑顔を作っていた。
ピンクのドレスを着たホノカは、可愛さを振り撒いて、その華麗な輝きを発散していた。
それで９人衆にも火が点いたようで、熱が上がってきた。
和尚にはハルカが付いていた、和尚のご機嫌が指定席からも分っていた。
蘭は２度ほど指名で離れ、そのヘルプになんとサクラさんとアイさんが付いた。
豪華なリレーに親父もご機嫌だった、サクラさんはすぐに分ったようで頭を下げていた。

和尚と親父が席を立ったのが、９時３０分だった。
見送りにユリさんと蘭が出て、徳野さんと笑顔の２人を見送っていた。
「マキ・・帰るね～」とＴＶルームにいたのだろう、シズカが手を振っていた。
蘭が見送りから帰って来て、私の所に満開笑顔で歩いて来た。

「なぜ喧嘩した・・素敵な父さんじゃないの～」と満開で微笑んだ。
『反抗期だから』とウルで返した。
「ぶっ飛んでたかな？・・野次馬５人衆」と満開ニヤで言った。
『うん・・楽しんで帰ったよ』と笑顔で返した。

「気をつけて行ってきてね・・激しいことするなよ」と最強満開ニヤで言って、銀の扉に消えた。
私は暖かい波動を感じながら、笑顔で頷いた。

シオンとマキの所に行き、シオンにユリカと海に出ると言って出掛けた。
ユリカの店に行って固まった、店内改装のため本日休業になっていた。
私は合鍵で入った、少し薄暗い店を奥に進んだ。
店内の壁紙が少し明るい色になり、カウンターのボトルを照らす間接照明が幻想的だった。

『ユリカ・・お金かけたね、素敵になった』と笑顔で言った。
「うん・・気分転換、明日かお店も変化したいから」と爽やかに微笑んで腕を組んで来た。
『何かな?・・その荷物』とニヤで聞いた。
「浮き輪ちゃん・・深い場所は怖いから」と爽やかウルで言った。
『俺が抱いて離さないから、大丈夫なのに~』とニヤニヤで返した。
「理性を失うでしょ、私のナイスな体を見たら」と嬉しそうに微笑んだ、ユリカとタクシーに乗り込んだ。

ユリカはタクシーの中でも、ご機嫌継続だった。
マス爺の店に着き、奥でＴＶを見てるマス爺に声をかけた。
『マス爺・・第三段』と笑顔で言った。
「おう、小僧・・お前いい加減にしろよ、綺麗な人ばかり」とマス爺がユリカを見て笑顔で言った。
ユリカは楽しそうな笑顔で返していた。

『マス爺・・これから２０人以上あるかも』とニヤで言って鍵を受け取った。

「楽しみじゃよ・・今夜も最高、波も穏やかじゃよ」と言ったマス爺の笑顔に見送られ、桟橋に向かった。
「イルカちゃんに、会えますように」とユリカが瞳を閉じて囁いて、小船の前方に乗った。
私はモーターのチェックをして、準備が終わってユリカを見た。

『ユリカ・・大丈夫、怖くない？』と笑顔で聞いた。
「全然怖くないよ・・連れてって、大切な場所に」と爽やかに微笑んだ、私も笑顔で頷いて出発した。
大淀川の中央をゆっくり下り、橋を潜り・・人工的な明かりに別れを告げた。
静寂の中モーター音が響き、海の稜線が見えてきた。
ユリカは海を見ていた、髪を靡かす後姿が月光に輝いていた。

波をゆっくりと越えながら、海に入って行った・・波の無い場所まで来て速度を上げた。
沖に向かっていると、ユリカが振向いた。
「ゆっくり！」とユリカが大きな声で言った。
私は慌てて速度を落とした、ユリカは右前方を見ていた。
私もその方向を見ると輝く表皮が近付いて来ていた、私はモーターを止めて待った。

静寂の中、海の微かなウネリの音だけが響いていた、ユリカは動けないようだった。
ただその方向を見ながら、瞳を潤ませていた・・月光に照らされる体は６頭確認できた。
真直ぐにこっちに向かって泳いでいた、私は明かりを下向きにして海を照らした。
そして碇をゆっくりと降ろした・・６頭は方向を変えずに近くまで迫った。

「素敵過ぎるんだね・・想像なんて、無駄な事だった」とユリカが深海の瞳から大粒の涙を流した。
私はユリカに近付いて、座ってユリカを抱きしめた。
「分かったよ・・マチルダと蘭の感動が」と私を見て言った。
『この群れは慣れて来たのかも、向こうから近付いてきたから』と笑顔で返した。
ユリカも笑顔で頷いて、バッグから浮き輪を出して私に差し出した。
私は花柄の浮き輪の空気を入れながら、ユリカを見ていた。

イルカは大きく回遊しながら、船から離れる事はなかった。
ユリカは涙を流しながら、その泳ぐ姿を見ていた。
その時にユリカがビクっと体を震わせた、ユリカの見る目の前でイルカが顔を上げた。
「あなたね、ありごとう・・右の目、大丈夫だね」とユリカが優しく言った。
右の目の上に傷のあるイルカは、ユリカを見ているようだった。
ユリカの微かな背中の震えが、その喜びを伝えていた。

『よし、入ろうか・・彼らの場所に』と笑顔で言って、浮き輪を渡した。
ユリカは爽やか笑顔で振向いて、大きく頷いた。
私は服を脱いで水着になり、先に海に入って水温をチェックした。
ユリカが服を脱ぎ、ビキニ姿を見せてくれた・・私はニヤニヤでそれを見ていた。
ユリカの体は、全く無駄の無い女性らしい体で、想像以上に大きな胸に驚いていた。

「その位にして、いやらしい感想は・・怒るよ」と浮き輪を体に通しながら、笑顔で睨んだ。

私はウルウルでユリカを見ていた、ユリカが恐る恐る海に入って来た。
私はユリカの体を支えて、プカプカとユリカを浮かせた。
「体を触る時には、いやらしくなくなるんだよね～・・悟りの境地かな？」と爽やかニヤで言った。
『うん・・ユリカ大丈夫、冷たくないね？』と笑顔で聞いた。
「大丈夫、それより・・嬉しい、感じるね・・近くにいる」とユリカが最高の笑顔で言った。
私も笑顔で頷き、ユリカの後ろに回り・・浮き輪を持って、泳ぎながら押していた。

「おいで・・おいで」とユリカが静かに言った。
私も感じていた、上がってくる温もりを感じていた。
ユリカの声に誘われるように浮かび上がった、肌が触れそうなほど近くに浮いた。
そしてそのまま止まった、ユリカのその時の顔を忘れられない。
本当に少女のような顔だった、深海の瞳から涙が止め処なく溢れていた。

ユリカはその感性で、何かを伝えていた・・そしてゆっくりと背ビレを触った。
その時イルカの方がユリカに体を寄せた、ユリカはその体を嬉しそうに触っていた。
「ありがとう・・優しくしてくれて」とユリカが優しく囁いた、その声を聞いてイルカは潜った。
『ユリカ・・月の方向だよ、月に向かって飛ぶんだ』とユリカに囁いた、ユリカは月を見た。
大きく体を反らしながら、月光に輝く水滴を引き連れて大きくジャンプした。

そしてその直後、３頭がジャンプを見せてくれた、ユリカは固まって見ていた。
そして爽やか最強の笑顔で、拍手をした・・少女のような輝きで。
『素敵だろ～・・ユリカが１番受け入れられたね』と囁いた。
「違うよ・・マチルダと蘭が見せたんだよ、その心の温もりを・・だから受入れたんだね」と振向いて笑顔で言った。
『そうだね・・上がろうか』と笑顔で返した、ユリカも爽やか笑顔で頷いた。
私が先に船に上がり、ユリカを引き上げた。
ユリカの持って来たバスタオルで体を拭いて、着替えた。
「前を見て、月を見てなさい・・振向くなよ、修行させるよ」と爽やかニヤを出した、私がウルで月を見た。
「はい、ＯＫ・・シートを広げて～」とユリカが言った、私は弾力の有るシートを広げた。
ユリカが私を引っ張って、私はユリカの首に腕を回して添い寝した。
ユリカは星空を見ていた、その横顔が美しく・・陰影の強さが幻想的だった。
「本当にありがとう最高だよ、・・私、明日の夜見せてあげるね・・私の接客を」と星空に囁いた。
『楽しみだよ・・ユリカのその姿が見たかった』と私も星空に囁いた。
「マリアの変化感じた？」とユリカが言った。
『うん・・強くなった、伝えたい気持ちが強まったね』と笑顔で返した。
「マリアは絶対に感じた・・自分も父親がいないけど、それでも幸せだと感じたよ」とユリカが私に微笑んだ。

『その寂しさは味わうかもしれないけど・・辛さは絶対に感じさせない』と真顔で言った。

「あなたと豊がついてるんだから、それは無いでしょ」とユリカも真顔で言った。

『ベストを尽くすよ』とユリカの深海の瞳に誓った。

「誓いの儀式をします・・目を閉じて」とユリカがニヤで言った、私は嬉しくて目を閉じた。

ユリカの優しい想いが唇から伝わった、私も唇で伝えた。

夏の熱を大海原の海水が冷やしていた、しかし私の夏はその陰りすらなかった。

9月が目前に迫っていた、しかし寂しさも不安も無かった。

時ばかり考えていた頃を思いだしていた、月光に照らされる、ユリカの寝顔を見ながら。

あの時に私の背中を強く押した、ユリカが贈ってくれた・・【最後の挑戦者】

その言葉を噛み締めて・・星空を見ていた、ミホの無表情な顔が映像で流れた。

だが私は向き合おうと強く思えた、失敗しても何度でもやり直すのだからと誓っていた。

ユリカの穏やかな鼓動と温度に包まれていた。

遥かなる太平洋の大きさと、限りない深さに包まれて・・月を見ていた。

追いかけ続ける・・月光の照らす、未来への道を・・・。

私はこのイルカ達の変化を驚いていた、ユリカの言った通りかもしれない。

マチルダ・蘭・ユリカと温もりのある、女性が伝えたのだろう。
仲間なのだと、全ては命を宿す仲間だと・・人は海から産まれたのだと。
この後、シオン・カスミ・ナギサ・ハルカ・・・と続いていく、夜の海。
その度にイルカ達は現れて、各々に違う対応を見せてくれた。
しかし受入れない女性はいなかった、私はそれが嬉しかった。
笑顔のミホに、蘭が浮き輪を通し、３人で入った海・・４頭のイルカが囲んだ。
そしてあの右目上に傷のあるイルカが、ミホに体を寄せた。
その体を触ったミホの瞳から涙が溢れ、イルカは顔を上げてミホを見た。
「あ・り・が・と・う」とミホの唇が動き、可愛い声で言葉が出た。
その言葉を聞いて、４頭が同時に潜った・・そして月に向かって飛んだ。
ミホを現実の世界に戻した、その強く伝える優しさで・・優しい瞳で。
何かを伝える強い周波数で、奇跡ではない・・触れてみると分かる。

誰にでも感じる・・海で生きる彼らなら、それは当然の事なのだろう。

そのジャンプする姿に感じていた・・あの遥か高みにある人の言葉を。

空の青・海の青にも染まず漂う・・あの大切な言葉を・・。

女の武器

夜空も海も暗闇ではなかった、幾数万年をかけた星の光が届いていた。
太陽光の反射とは思えぬ、月光も強く主張していた。
海面スレスレに風が吹き抜けて、爽やかな秋を想わせていた。

「ミホちゃんの何に1番驚いたの？」ユリカが目を覚まし、トロンのまま言った。

『拒絶が強まってた・・ミホも11歳になったから。
俺は感じてるんだよ、確かにミホは学校に行ってない。
字も平仮名しか書けないかも知れない、でもある程度の常識はある。
それは確信的に思ってる、だから13歳の俺を受入れる事ができるのかと。
その不安が襲ってきた、初めて感じた不安だった。
マキはそれを感じて、あの牧水の歌を引用したんだと思う。
自分らしくやれと、俺の目指してるあの境界線を漂う心。
その想いで挑めと、そう言ってくれた気がするよ。
ユリカが俺を感じている・・俺は忘れていたよ、その大切な事に。
大丈夫、もう覚悟はできたよ・・もうユリカに心配かけないよ。
もちろん蘭にも・・周りの全ての女性にも』

私は段々と脳が覚醒してくるような、トロンユリカを見ながら言った。
「そっか～・・普通だと11歳の少女じゃ難しいよね」とユリカも爽やか笑顔で言った。
『まぁね・・女は精神の成長が早いからね』とニヤで言った。

「そうよ、そして男は一生追いつけないのよ～」と爽やかニヤで返された。
『女は強いよ』とウルで返した。
「子供を産めるんだから・・男じゃウルして産めないよ」とニヤニヤで返して、体を起こした。

「当然私も何度でもあるんでしょうね・・冬も来てみたい」とユリカが微笑んだ。
『もちろん・・遠慮なくいつでもどうぞ』と笑顔で返した。
シートを丸めて、碇を上げてモーターを始動した。
船首を川に向けると、微かに港の灯りが見えた。
ゆっくりとしたスピードで走っていると、ユリカが慌てて私に手を翳した。

横を見ると3頭のイルカが、いつの間にか船の真横を泳いでいた。
「又来るからね・・元気でね」とユリカが目を潤ませて大声で言った。
『淡水が入るぞ・・もう帰りな、広い場所に』と私も大声で言った。
ユリカが笑顔で頷くのを見て、スピードを上げて川を目指した。

イルカは少しだけ並走して、沖に戻って行った。
ユリカはずっとその方向を見ていた、その美しい横顔を私は見ていた。
船を桟橋に泊めて、マス爺に支払ってタクシーで夜街に帰った。
ユリカの店に行き、ユリカが化粧直しするのを隣で見ていた。

『まだ化粧するの？・・・１１時過ぎてるよ』と笑顔で言った。
「どんな素敵な出会いがあるか、分からないでしょ」と爽やかニヤで返された、私はウルで返していた。
化粧の終わったユリカと、ＰＧに戻った・・ユリカは私の指定席に

座った。
そしてフロアーを見ていた、静かだった・・喧騒の中、ユリカの場所だけ静寂が包んでいた。
客席は満席状態で、熱が高く・・シオンもマキも忙しそうに動いていた。
マキは女性のリクエストに素早く反応し、リンさんとの意志の疎通も出来ていた。
シオンはサインに集中できてるようで、そのサインの見事さに見惚れていた。

「ユリカ姉さん・・ありがとうございました」と蘭が満開で微笑んだ。
「何もしてないよ・・しかし面白い人だったね、私も嬉しかった」とユリカが爽やか笑顔で返した。
「はい・・明日の為に集中ですか？」と蘭が真顔で言った。
「ブランクが2年以上あるからね～・・でもイルカちゃんでやれそうだよ」と爽やかに微笑んだ。
「素敵ですよね～・・私もイルカちゃんで何かが外れました」と満開に微笑んだ。
「蘭・・もうすぐそこにいるよ、楽しみにしてるね」とユリカも微笑んで返した、蘭は満開で頷いて戦場に戻った。

その時ホノカが歩いて来て、ユリカに華麗に微笑んで頭を下げた。
「ホノカちゃん・・実力は充分ね、もう意識しないで歩いていいよ」とユリカが微笑んだ。
「ばれました、まだ全てを意識してしまって」とホノカが真顔で言った。
「お祭りの舞台と同じ、見られてなんぼ・・そして距離感を作るの、自分の距離感」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「そっか！・・ありがとうございます」と嬉しそうに華麗に微笑ん

で、頭を下げて戦線復帰した。

「確かに素敵だよね～・・ホノカこそが最新型だよ」とユリカが私を見て言った。

『俺もそう思うよ・・ブレないよね～』と笑顔で返した。

「ミチルママとあんたの考えが怖いよ、ホノカにクラブを経験させる事の意味がね」とニヤで言って、視線をフロアーに戻した。

『ホノカに必要なのは、後は経験からくる自信だけなんでしょ？』とユリカに聞いてみた。

「そうだろうね～・・ホノカが自分で目指してきた世界の入口が、多分そこにあるよ」と爽やか笑顔で言った、私も笑顔で頷いた。

終演前のフロアーを2人で見ていた、ユリカの背負う静寂に包まれて。

私は気になっていた、千春の視線が落着かず定まらない事に。

千春は四季の精神的支柱だった、経済を専攻していて、その知識の広さを頼られていた。

私が千春を見ていると目が合った、千春は微笑んだが、違和感のある微笑みだった。

私は千春の瞳を見ていた、少し寂しげな色をした。

その時に終演を迎えた、ホノカも含んだメンバーが１０番に集まった。

私が１０番に向かおうとすると、ユリカが後から笑顔で付いて来た。

全員が笑顔で立ってユリカに挨拶をした、ユリカも微笑んで返礼した。

蘭がユリカをナギサの隣に座らせて、私に満開ニヤを出した。

「それでは、今日の報告を述べよ」と満開ニヤ継続で言った。

『今日はミホの手を握って・・少し動揺して』と真顔で言うと。

「覚悟は出来たんだね」と蘭も真顔で言った。
『はい、限界トリオとマリアの拳の言葉で』と笑顔で返した。
「よし・・続き」と満開笑顔で促した。

『後はユリカ抱っこと、ユリカと海に行って・・イルカちゃんの前で誓いのキスです』と反省顔で言った。
「本人の前で反省顔するんだね～」と蘭が満開ニヤで言った。
「ひどい・・遊びだったのね」とユリカが顔を手で覆って泣き真似をした。
『ユリカ泣いてない、嘘ついてる』とウルウルで返した。
「ユリカ姉さん、イルカちゃんで泣きなした？」とナギサが華やかに微笑んだ。
「不思議だよ、号泣できるよ」と爽やかに微笑んだ。
「良いな～・・私、精神的に限界かも～」とナギサが華やかニヤを私に出した、全員がニヤで見ていた。

「まぁ頑張って、順番に海に出るように・・特殊事項」と蘭が満開で促した。
『ユリカの水着姿に驚きました』とニヤで言った。
「何に驚いたのか、詳しく・・詳細を述べよ」と蘭がニヤ全開で迫ってきた。
『予想以上のスタイルの良さと、成熟した体です』と照れて答えた。
「予想が低すぎるのよ・・カスミが基準だから、青い体ばかり見てるからね～」とユリカが爽やかニヤニヤで来た。
「ユリカ姉さん・・青い体って」とカスミがウルで言った。

「結婚してた割には、心も体も青いでしょ・・ホノカの方が熟れてるよ」とユリカがカスミに爽やかニヤを出した。
「やっぱり、見る人が見ると分るのよ～」とホノカがカスミに華麗ニヤを出した、カスミは最強不敵で返した。

「熟れてる競争を２０歳でしないの・・ユリカさん、今夜は明日の集中ですか？」と美冬が笑顔で聞いた。

「クラブの仕事はブランクがあるからね、全体的な動きだけチェックしに」とユリカが笑顔で答えた。

「魅宴とＰＧでは、１番何が違いますか？」と千秋が聞いた。

「決定的に違うのは、エースも言ってるけど・・ＰＧは待ちの時間がないよね。

挨拶して席につく時に、魅宴はお客様同士の状況を見ます。

接待が多いので、いきなり入らずに様子見をしますね。

ＰＧは出だしの掴みを重要視してるでしょ、それはそれで難しい事ですね。

結局、お客様がお店を選ぶポイントは、その店の雰囲気ですから。

魅宴のＮＯ１ミコトが新たに打ち出した、魅宴に２面性を持たせる構想。

ようするにＰＧの熱も取り込む、だからこそ見極めが難しいですね。

ＰＧには２面性があります、それがユリ姉さんの考えなのでしょう。

接待する側の客が知っていますから、重要な接待の時はユリ姉さんを指名する。

接待って案外、重要な用件が済めば、接待する方も盛り上がりたんですよ。

もちろん魅宴も盛り上がるけど、全体的に静かだからＰＧまでの熱を感じない。

ＰＧは接待の話しが終われば、最強のメンバーが待ってるでしょ。

そしてフロアーの熱が吹き込んで来る、接待する側でも理想的な展開ですね。

だから客足は耐えない、プライベートも仕事も同じ場所で出来る

から。
今回の蘭とナギサの挑戦状、その点が個人でクリアーできれば面白いと思ってます。
ＰＧの魅力、全員で作り出してる確かな世界。
それを一人でこなせたら・・ユリさんでも難しいその事が出来れば。
可能性が見えて来るでしょう、静かな世界から沸点まで一人で見せれたら。
接客の本道が見えるでしょうね、その本道の先にある・・その世界。
勝負はその場所で行われるでしょうね、指名数なんてただの数字だから。
勝負の結果は本人同士にしか分らない、でも本人には確信的に分るんです。
現時点での勝敗は、ユリ姉さんが同等と認めれば・・それが勝利ですね。
この２面性・・プロを目指してる人は勿論、四季のように別の社会に出ても役立ちます。
恋愛以外ではね・・女性も女性の武器を持つべきです。
色気などでない、社会の中を渡る為の武器を・・地位の向上などを叫ぶより。
踊らせてあげなさい、単純な男性達を・・そしていつの日か本当の平等になった時。
その時に教えてあげましょう・・この世界は男と女が作っているんだと。
この世界そのものが２面性だと、ニヤニヤしながら教えてあげてね。
自分を分析出来てれば大丈夫、揺れたりブレたりしないから。
だからエースはホノカにこだわるの、２面性として最新型だから。
人と人の繋がりは、全て意味があると思います・・感じましょう、

違う個性を。
　それが生きる喜びだと思いますよ、未来は決まってないのだから」
静寂の中、ユリカが真顔で全員を見ながら言った。
女性全員が真剣な顔で聞いていた、その静寂の重い言葉を。
「ユリカさんが魅宴の時に、このお客は無理って、拒絶したお客さんはいますか？」とユメが聞いた。
「仕事ですから・・な～んて、実は沢山います」と爽やかニヤで返した。
「ユリカ姉さんは、拒絶してたよ・・まぁ棲んでる世界が違うけどね」とナギサも笑顔で言った。
「それでも圧倒的なＮＯ１だったのよ、リアン姉さんでも当時怖かったって言ってたし」と蘭が満開で言った。

「リアンの場合は、ユリ姉さんがいたからね・・私が魅宴に入った時は、群雄割拠だったから」とユリカが少し照れて言った。
「ユリカ姉さん、何歳でＮＯ１になったんですか？」とカスミが真顔で聞いた。
「２１歳です、運が良かったのよ」とユリカが爽やかテレで返した。
「それから５年、ＮＯ１を１度も譲らずに引退したのよ・・まさに生きる伝説でしょ」とナギサが華やかに微笑んだ。
全員が真顔で頷いた、ユリカはテレテレで微笑んでいた。

「それは若手のエースが、変な男にデレデレだったからです」とユリカがナギサに爽やかニヤを出した。
ナギサは華やかウルウルで返していた。
『ユリカが銀河に贈った言葉、ＮＯ１のまま引退するのは寂しいって・・重たい言葉だよ』と私は真顔で女性達に言った。
「エースはどこを見て感じる？・・お前は見た目で分かるよね、芯の強さみたいなの」とカスミが言った。

『ん～・・俺の親父、大工なんだけど、その親父がよく言ってた。
同じ材料で、内部の強度を変えて、全く同じ家を建てた場合。
見た目は同じなんだけど、受ける印象が全く違うって。
内側に補強を入れた家は、重厚感が出るんだってね。
大地震でも崩れる感じがないんだよね、がっしり、どっしりみたいな。
親父は破綻感がないって言うんだ、俺はその言葉が好きなんだよ。
そしてＰＧにきて、夜街の人達と関わって感じたんだ。
人間も同じなんだと、芯の強い人・・経験という補強が入ってる人。
そういう人は、そんな感じがあるんだよ・・破綻感がないんだ。
それで親父の話を思い出した、揺れに対する強さの話。
例えば心の揺れはあるよね・・多分誰にでもある。
その時に本当に強いのは、硬くて強い事じゃないんだよ。
しなやかで柔らかい方が強い、力を受けた場合にはね。
強くて硬かったら、限界がくると折れるんだよ。
しなやかで柔らかかったら、力をいなす・・だから揺れても折れない。
五天女やミコト・千鶴、そして蘭・・最近はナギサにも破綻感がない。
それを思い出して、銀河で当てはめてみた。
カスミもリョウも心が１度折れた、それは硬く強過ぎたからだって思ったんだ。
そしてホノカの凄さを感じた、その俺が感じた事を、マチルダが一瞬で言い当てた。
マチルダがホノカに会った時に、強さを隠すのも上手いって言ったんだよ。
その言葉で確信した、ホノカのブレない心・・その強さは柔らかさなんだと。

ホノカの心は強い力で揺らされても、しなやかにいなす。
だからブレない・・そして絶対に折れないんだと感じた。
ホノカには破綻感がない、若くして夜の仕事をしてるのに、破綻感がないんだよ。
それはなぜ持ち得たのか、産まれ持ってじゃないよね。
その部分を感じて欲しいんだ、それを得ると厚みが増すと思うから。
俺は誰が一番になるとか、実はそんなに興味無いんだよ。
全員が自分の幸せを追って欲しい、それを諦めてほしくない。
結果は関係ない・・その途中で挫折してほしくない・・折れてほしくない。
強い心・・それは柔軟な事なのだと感じてほしい。
鉄より強い竹も存在する・・揺れる事を恐れなければ、強さを手に入れる。
最近はそう思ってきたよ・・そんな感じ」

私は最後は照れて、女性達を見ていた。
「ありがとう、エース・・なんか凄く嬉しい」とホノカが華麗に微笑んだ。
「なぜだか説得力が有るんだよね～」と千秋が微笑んで。
「例え方が良いんだよね～・・分かりやすい」と美冬が微笑んで、全員が笑顔で立った。
「今後ともよろしく」と千夏が言って、全員がユリカに頭を下げて控え室に向かった。

『千春・・着替えたら、裏階段の下で待ってる・・ユリカスペシャルをサービスするから』と笑顔で言った。
「本当に！ありがとう・・急いで準備してくるね」と笑顔で言って、足早に控え室に消えた。
「シオンは私が連れて帰るから、リアンにも会いたいから」とユリ

カが笑顔で言った。
私はユリカと腕を組んで、ＴＶルームに向かった。
シオンを連れて、裏階段を３人で降りて、通りで手を振って別れた。
深夜の雑居ビルの密林を見上げていた、明日で８月が終わると思いながら。
長く楽しい夏休みだったと思いながら、若草公園のベンチを感じていた。
不安で寂しい気持ちが蘇って、蘭に感謝していた・・深夜の夜街の片隅で。

「空を見上げるなよ～・・て言うカスミの気持ちが分るね～」と笑顔で言いながら、私服のミニスカートを着た千春が降りてきた。
『ミニスカートか・・役得です』と笑顔で返した。
「太股触って、発情するなよ」と笑顔のままで、千春が私の首に腕を回した。
私は千春を抱き上げて、笑顔で千春を見た・・少し疲れを見せる瞳を見ていた。

『とりあえず・・目を閉じて充電しなさい』と優しく囁いて、階段を登り始めた。
千春は瞳を閉じて、強く抱かれていた。
最上階まで上がり、ユリカの店の暗い窓を見ていた。
「ありがとう・・少し考えてたの」と瞳を閉じたまま千春が囁いた。
『誰かに会いたいんだろ・・遠いの？』と囁いて聞き返した。

「さすが・・誤魔化せないね、お婆ちゃんが体調悪いらしくて。
私、お婆ちゃん子だったから・・心配でね。
お婆ちゃんの家が高千穂なのよ、車で３時間以上かかるから。
ＰＧを休もうか迷ってた・・大した事ないってお婆ちゃん言ったし。

でも、今日仕事してると・・頭から離れくてね」
千春が静かにそう言った、爽やかな南風が千春の前髪を揺らしていた。
『了解・・千春、俺の絶対的権限を発動する・・千春、最低明日は仕事を休むこと』と少し強めに言った。
「了解です・・ありがとう」と目を開いて千春が微笑んだ。
『自分で運転して行けるんだね？』と笑顔で聞いた。
「うん、大丈夫・・美冬と違って運転好きだから」と千春が笑った。
『よし、やっと千春の笑顔が出たね・・気を付けて行っといで』と笑顔で言って、優しく降ろした。
千春と手を繋いで階段を降りて、笑顔の千春に手を振って別れた。
ＴＶルームに帰ると、四季の３人も心配げな顔で待っていた。
『そんなに心配するなよ、千春言い難かったんだよ。
お婆ちゃんが少し体調悪いんだって、高千穂だから会いに行くの考えてたみたい。
マダム・・俺の強制休養権限を発動したから、千春明日は休みです。
精神的安定のために、強制休養させるから』
全員を笑顔で見ながら、マダムに報告した。
「分った・・その調子で頼むで、敏感度上げとけよ」とマダムも笑顔で返してきた。
「良かった～・・どんなに仲が良くても、女同士じゃ聞き難くて」と千夏が笑顔で言った。
「ユリカスペシャルに強制休養・・さすがエース」と美冬が微笑んだ。
「私が最初だったのよ・・トイレからここまでだったけど」と千秋

が照れながら微笑んだ。
「トイレからは、千秋スペシャルと命名しよう」と蘭が満開ニヤで言って、全員が笑っていた。
私はマリアを抱き上げて、女性達の後ろを蘭に腕を組まれて歩いた。

「ユリカは別世界にいますね、今夜の話・・ユリカの言葉でしたね」とユリさんが蘭に薔薇で微笑んだ。
「ユリカ姉さんが望んだ世界なんでしょうね、圧倒的存在感に押されました」と蘭が満開で返した。
「千春の迷いにも、明日のユリカさんの光臨も大きかったですね」と美冬が言った。
「1回限りだったら、明日まで仕事に出たでしょうね」と千夏が真顔で言った。
「女性の武器を持て・・響いたな〜、ジンジンしました」とカスミが微笑んだ。
「エースがいるので、感謝の報告は出来てますから・・明日を楽しみにしましょう」とユリさんが薔薇で締めた。

ユリさんがタクシーに乗り、マリアを渡して見送った。
四季の3人と、カスミと一番街まで歩いた。
夜街はかなりの人通りがあり、5人の歩く姿を男達の視線が追いかけた。
一番街の出口で4人と別れ、蘭とタクシーに乗ると、蘭が肩に乗ってきた。

『親子に同じ作戦をしたね、手の銃』と笑顔で囁いた。
「だって・・教えない」と満開ニヤで返された。
『どうせ親父が変な事言ったんだよ・・絶対そうだ』とニヤで囁いた。
「そうでもないよ・・教えない」とニヤで言って、瞳を閉じた。

蘭の髪の香りがしてきた、日付は８月３１日になっていた。
国道１０号線の夜空には、月光に映し出された入道雲が浮いていた。
夏の力は衰えを見せる事無く、熱が全てを包んでいて、冷めやらぬ夜が存在している。
私は１つの区切りを迎える、１３歳としてのやるべき事実が迫っていた。
しかし動揺も寂しさもなかった、選択した世界に全く迷いもなかった。

江平の交差点を過ぎると、月が見えた。
マチルダを想っていた、ニューヨークに着いたのだろうかと。
プラチナブロンドの煌きと、あの輝く笑顔を月に映した。
マチルダは笑っていた、必ず帰ると笑顔で手を振った。
私は蘭の寝息を感じながら、映像の中で手を振り続けていた。
マチルダの笑顔に向かって・・愛しい想いを込めて・・・。

この日のユリカの言葉は、静寂を連れて重みがあった。
女性の社会的な、地位向上が叫ばれていた時代である。
ユリカの言った女性の武器、単純な男を踊らせてやれと。
蘭にもナギサにも９人衆にも響いていた、社会で女性が生き抜くヒントだった。
声高に叫んでも反発される、だからこそ作戦を練れと言った。
男が作った閉鎖的な社会、その弊害は今でも続いている。

政治も行政も企業もマスコミも、醜態を晒す事に麻痺しているとしか思えない。

どう保障するのだろう、判断の遅さが招いた人災を。

自然を破壊し続ける行為の代償を、必要なら、守りたいなら。

あの時に瞬時に判断すべきだった、廃炉の覚悟を・・覚悟が足りない。

いや覚悟も責任も誰も取らないだろう・・それで良しとしてきたから。

今までがそれで良かったなど、いつか変えないといけない。

廃墟の伝道師と言われた親父が、常に言っていた・・あの言葉。

金で解決できる事が、1番簡単で無責任な事だと・・死をもって償うなど論外だと。

戦争責任は・・開戦時の大人達、全ての責任だったと。

大多数が反対していたのに、大多数で阻止出来なかった。

だから一部の人間に主導された、最後の責任は死をもって償うと言う、馬鹿な奴等に。

次世代に良い世界を残したいなら、自己責任として主張しよう。

煽ったり、デマを流すのでなく・・整然と主張しよう。

もう限界だと・・あなた達に、この国は託せないと。

最も大切なのは、環境であると・・安心して暮らせる、それだけが望みだと。

死をもって償わせない・・経験し反省して、人は繋がっていく。

それが永遠であって欲しい・・もう一度1から始めよう。

戦後の瓦礫から復活した、あの誇り高い先人達の子孫として・・。

継承する想い

夜の闇を切り裂いて走る車窓を見ていた、平穏な顔で眠る姫を乗せている。
区切りの日が来ていた、長い休みの終わりを告げる日が。
私は学校を感じていた、退屈な日々をどう楽しもうかと思っていた。

タクシーがアパートに着き、蘭を抱き上げて満開を見ながら2階に上がった。
部屋に入り蘭の準備を待っていた、蘭は鼻歌混じりで帰って来た。
「今夜は千春を気付いたサービスとして、部屋で寝てよし」と満開ニヤニヤで言った。
『でも・・ヒトミで動揺した罰が・・』とウルで言った。
「仕方ないな～・・明日で夏休みも終わるしね」と満開で微笑んで私の腕を引いた。
私は笑顔で電気を消して、蘭を腕枕して寝転んだ。

「荷物どうするの？・・私、明後日靴屋休みだよ」と私を見上げ微笑んだ。
『とりあえず・・必要な物だけ明日運ぶよ、シオンに車で来てって頼んだ』と笑顔で返した。
「そっか・・じゃあ大きな荷物は明後日運ぼうね」と蘭が満開で微笑んだ。
『うん・・制服姿見て笑うなよ』とニヤで言った。
「楽しみ～・・現実を見て動揺するかも」と満開ニヤで返された。

『その程度で・・蘭が参観日と3者面談来るんでしょ、進路相談』とニヤニヤで返した。
「うそっ！・・私で良いの？」と嬉しそうに驚いた。

『蘭が行かないで誰が行くの？・・・あのお袋は行かないよ』と笑顔で返した。
「シックなスーツを買わないと・・担任、男の先生？」と満開笑顔で聞いた。
『定年前のご老人』とニヤで返した。
「任せて・・得意なジャンルよ」と満開ニヤニヤで言って、私の胸に顔を付けた。
私は蘭の変化を感じていた、やはり私の事が気になっていたのだと思っていた。
蘭が静かになって、私は蘭の額にキスをして眠りに落ちた。

翌朝、朝陽で目覚めた、爽快な気分だった。
洗面所に行き、歯を磨き顔を洗った。
キッチンで朝食に、ご飯と納豆に卵焼きとレタスを用意した。
「おはよ～・・今朝も幸せ～、てか3者面談の夢を見たよ」と満開で微笑んで、洗面所に消えた。
私は朝食を準備して、蘭が来るのを待っていた。

蘭が朝食を見て、満開で微笑んで座った。
「学校・・何時に出れば間に合うの？」と蘭が食べながら聞いた。
『普通の出勤時間の、蘭と同じで大丈夫』と笑顔で返した。
「そっか～・・夕方は1度帰るでしょ？」と蘭が真顔で聞いた。
『うん・・着替えたいし、シャワーしたいから』と笑顔で返した。
「うん、私も出来るだけ帰るよ」と満開で微笑んだ、私も笑顔で頷いた。
蘭を見送って、朝の仕事をして、日記を書いた。
8月31日の文字を見て、《明日から学校か～、楽しむか》と思っていた。

9時少し過ぎのバスで出掛けて、若草通りでカスミに手を振った。

カスミが輝く笑顔で手招きをした、私は足早に近付いた。

『おはよう、カスミ・・今日も可愛いよ』と笑顔で言った。

「常に可愛い・・明日から、朝来れないね」と小さな不敵で言った。

『寂しいんだね、可愛い奴だ』と笑顔で返した。

「仕方ない・・お守りをあげよう、お前が見たがってたの」と言って、一枚の写真を出した。

私はそれを見て驚いてた、カスミの高校生の時であろう姿が写っていた。

私はその可愛さに固まっていた、制服を着たカスミは輝いていた。

「中学のは実家にしかないから・・それが全盛期の時の姿」と少し照れて言った。

『まさに学園のマドンナだったね、でもカスミは今が全盛期だよ』と笑顔で返した。

「私もそう思うよ・・常に明日がピークなんだよ」と最強不敵で返された。

『大切に魔除けにします、俺の彼女って言って自慢しよう』とニヤで返して、手を振って別れた。

靴屋で蘭に手を振って、ユリカの店に行った。

ユリカは月末の売上げ計算をしていた。

『ほら～・・さぼり過ぎてるから、赤字が出たね』とニヤで近付いた。

「儲け過ぎて・・税金対策を練ってたのよ」と爽やかに微笑んで、手を出した。

『お小遣いが欲しいのかな?』と笑顔で言うと。

「マドンナの写真が見たいの・・あなたを凍結させた」と爽やかニヤで返された。

私は財布に大切にしまった、カスミの写真を手渡した。
「凄いね～・・これは学園のマドンナだね～」とユリカが笑顔で言った。
『出来すぎてるよね・・俺、カスミがアイドルデビューしてても、成功したんじゃないかと思ったよ』と笑顔で返した。
「あなたがマネージャーなら、トップアイドルだったね」とユリカが爽やかに微笑んだ。」
『そっか！・・そんな仕事もあるんだね』と笑顔で返した。
「怖いよ・・すぐにその先まで考えるんだから」と爽やかニヤで言った。

『東京ＰＧの女性・・普通に探しても難しいよね、本物になる原石が欲しいから。
売れないアイドル探せば良いんだよ、そういう子は目立ちたがりやだし。
負けず嫌いだろうし・・良いかも・・構想練ってみよう』

ユリカを抱き上げならが、思った事を言葉にした。
「凄いのがゴロゴロいそうだね、私も東京に見に行くよ」と爽やかに微笑んだ。
『俺は探してみたい・・ユリカと同じ香りのする女性を』と真顔で返した。
「その時は・・ユリカって命名してね、楽しみだよ」と言って瞳を閉じた。
私はユリカの温度と重みだけを感じて、深い眠りに入るのを待っていた。
ユリカの深い眠りを感じて、そのままＢＯＸに座ってユリカの寝顔を見ていた。
「おはよ・・お腹空いたね」とウトウトしていた私に、ユリカの声

が響いてきた。
『おはよ、寝てたよ』と笑顔で返した。
「ねぇ・・私も、一人でいけない店に付き合って」とユリカが爽やかに微笑んだ。
『了解・・どこ?』と笑顔で返した。
「〇〇ラーメン」と照れて微笑んだ。
『おお・・伝説の開かずの店』とニヤで返した。
「月・水・金しか開かないのよ」とユリカが爽やかニヤを出した。
私はご機嫌笑顔のユリカと出掛けた、快晴の夏日に腕を組んで。

その店の外観は営業してるとは思えないほど、古びて汚かった。
暖簾も何もなく、開き戸を開けてみないと営業してるか分からない状況で。
カウンター席、８席だけの狭い店内に、全体的に油が浮いてる感じだった。
１２時前で客はいなかった、私が奥に座り隣にユリカが笑顔で座った。

「ユリカちゃん・・ご無沙汰だね～」と６０代の親父がカウンターを乗り出して言った。
「こんにちわ・・一人じゃ来づらいでしょ」とユリカが爽やかニヤで返した。
「高級店ぽいから、敷居が高いよね～」と親父らしいオヤジギャグで返してきた。
「そうなのよ～・・大盛り2杯ね」とユリカも話しに乗って注文した。
『美味そうな雰囲気がプンプンだね』とユリカに笑顔で言った。
「ここが美味しいのよ、大将変り者だけど」とユリカがニヤで囁いた。

ユリカと学校の事を話していたら、ラーメンが出てきた。
私はその豚骨ラーメンを食べて衝撃さえ受けた、その美味さに驚いていた。

『今までに食べてたのは、何だったんだろう』とラーメンを見ながら呟いた。
「ラーメンみたいな物よ」とユリカが楽しそうに微笑んだ。
『そんな気がする・・これは別物だね、てか今までのが別物かな』と笑顔で返して夢中で食べた。
私が支払い満足顔のユリカと店を出た、駐車場までユリカを送り手を振って別れた。

PGに歩いていると後から声をかけられた。
「宿題終わったか？・・家出少年」とヨーコの声がした、振向くとミサキとヨーコが笑顔で立っていた。
『1つもしてない、2人で手伝って』とウルで返した。
「諦めなさい・・毎年やらないでしょ」とミサキがニヤで返してきた。
『内申書が怖い・・高校に行けない』とウルウルで返した。
「高校に行くの！・・似合わないからやめなよ」とヨーコが楽しそうに笑った。
『君達のように、世間を渡る才能も、手に職も無いからね』とニヤで言った。
「あるでしょ・・ホストが」とミサキがニヤニヤで言いながら、3人で裏階段を登った。

『今日は何事？』とミサキに笑顔で聞いた。
「ヨーコちゃんの紹介と、ハルカに用事があってね」とミサキが笑顔で返した。
『また悪巧みだね・・いけない人達だ』とニヤで言ってＴＶルーム

に入った。
ＴＶルームには、マダムがいてミサキがヨーコを紹介していた。
フロアーに行くと、裏方４人組で打合せをしていた。

『ハルカ姉さん・・頼みがあるんですが』と丁重に言ってみた。
「教えて以外なら言ってごらん」とハルカがニヤで返してきた。
『シオンを貸して下さい・・荷物を少し運びたくて』とウルで頼んだ。
「ロッシのイチゴショートでＯＫだよ」と当時話題のケーキ屋を出して微笑んだ。
『了解しました』と笑顔で返した。
「何か臨時収入があったね～」とレンが笑顔で突っ込んできた。
『人材派遣の仕事で少しね』とニヤで返した。

「ロッシのケーキなら、全種類買えるくらいの収入ですよ」と後からミサキがニヤで言った。
「ほほ～・・でいつ同伴してくれるの？」とハルカがニヤで私を見た。
『ハルカ、お金持ちのくせに・・俺、貧乏』とウルウルで返した。
「稼ごうと思ったら・・エースは、すぐに稼ぐでしょ」とニヤで言って、ミサキに歩み寄った。
ミサキが３人にヨーコを紹介した、ヨーコは笑顔で頭を下げていた。

「ヨーコちゃんの紹介料なら、大ママ相当出したね～」とハルカが私にニヤを出した。
「出したよね～・・ユリカさんばかり優遇して、ＰＧの若手の事は飽きたのね」とレンがウルで言った。
「エースは幼い時から、飽きっぽいですからね～」とヨーコが可愛いニヤを出して。
「そうそう、すぐに飽きて次に行くんだよ」とマキもニヤで言った。

「エース行きますか・・ウルにも疲れたでしょう」とシオンがニコちゃんで言った。
『うん・・シオンが1番優しい』と笑顔で言って、シオンと手を繋いで出かけた。

私はニコちゃんシオンと、通りを手を繋いで歩いた。
『シオン・・ご機嫌だね』と笑顔で聞いてみた。
「そうなので～す・・シオンも最近毎日が楽しくて」とニコニコちゃんで言った。
『シオンも学校、明日からなの？』とニコちゃんに聞いてみた。
「ぶ～来週からです・・シオン、課題全部終わってま～す」と私を探るように見た。
『宿題全滅で～す』とウルで返した。
「さすが先生、堂々と罰を受けるのですね」とシオンが楽しそうに言った。

『うん・・でも意外と罰は無いんだよ、ちょっと苦言を言われるだけ』と笑顔で返した。
「そうなんですか～・・シオン怒られるのが怖かったから」と真顔になった。

『シオン・・皆、怖いんだよ・・相手はそれを知っててやってるんだよ。
だから俺は怒られるんだよ、そんな事は怖くないと見せたいから。
相手の卑劣な武器は無効にできる、その立場を振りかざす武器なんかに負けない。
酷い教師は内申書まで振りかざすだろ、あれは許せないよね。
それで考えたんだ・・そしたら分かった、そういう教師は弱いんだって。
自分をその立場に立たせてみて、自分なら絶対に怖いと思う事を

言うんだよ。
でもね一人でもそれが怖くないと笑顔で見せれば、相手は動揺するんだ。
所詮・・美冬や千秋と違って、お勉強だけしてた人達が多いからね。
そんな人は守る物を沢山持ってるんだ、今までの努力とか今の地位とか。
俺は別に教師に逆らってる訳じゃない、でも上から振りかざして来たら受ける。
その覚悟の無い、自分を守りたいだけの攻撃はね。
人と人に優劣はないと思ってる、もちろん教えを受ける時は感謝する。
だけど無情の攻撃は受ける・・それが俺の生き方だから。
俺、多分・・高校はすぐに退学になるかも』

美しい真顔のシオンを見ながら、最後は笑顔で言った。
「先生は大丈夫です・・退学になるのが怖くないでしょ、すぐに社会に出れますから」とニコちゃんに戻ったシオンが言った。
『うん・・それをどっかで期待してるよ』と笑顔で返して車に乗った。

ニコちゃんシオンに道案内して、実家の駐車スペースに車を入れた。
『シオン・・駄菓子屋で遊んで来て良いよ』と笑顔で言った。
「嬉しいです〜・・行ってきま〜す」とニコちゃんで歩いて行った。
私は久々に実家に入り、自分の部屋で教科書等の学校関係の荷造りをしていた。
「ほれ・・母さんから預かった」とシズカが封筒をくれた。
『何かな?』と笑顔で聞いた。
「生活費・・条件1だよ」とシズカが笑顔で言った。

『あぁ・・なるほど』と言って受け取った。

「ミホの作戦は？」とシズカが私のベッドに座って聞いた。
『当面は、毎日少しづつ会うよ・・ミホも１１歳で難しい時期だからね』と笑顔で返した。
「そうだよね、今更焦っても仕方ないからね」とシズカが微笑んだ。
『うん・・時間をかけるよ、理想はミホが１５歳までになんとかしたいけど』と真顔で言った。
「そうだね、頑張りな」と笑顔で言って部屋を出て行った。
私は荷物を車に積み終わり、駄菓子屋にシオンを迎えに行った。
駄菓子屋の中庭に子供が大勢でシオンを囲んでいて、その中心でシオンのニコちゃんが咲いていた。

「マキは楽しそうじゃの～」と駄菓子屋の婆さんが出てきて言った。
『うん、マキの望んだ世界だと思うよ』と笑顔で返した。
「まぁ・・よろしくな、お前がいると安心じゃよ」と笑顔で言って店の奥に消えた。

『シオン・・行こうか～』と笑顔で声をかけた。
「チャッピー・・生きてたの」と小２のリサが私に駆け寄った。
『死んでません、リサを残して俺は死ねないよ』と抱き上げて微笑んだ。
「そうだね・・チャッピー宿題してないでしょ～」と少女の微笑で言われた。
『俺には宿題ないから、自主学習って言うんだよ・・沢山しました、自主学習』とニヤで言って降ろした。
私の足元に４歳のモモカが待っていた、私はモモカを抱き上げた。

『モモカ・・重くなったね』と優しく囁いた。
「モモカ・・大人になった？学校行ける？」と笑顔で聞かれた。

『もう少しご飯食べて、幼稚園で楽しく遊んだら・・学校行けるよ』と笑顔で優しく囁いた。
「学校行ったら・・お嫁さんなれる？」と真剣な可愛い顔で聞かれた。
『なれるよ・・学校でお勉強したらね』と笑顔で返して、モモカを降ろした。

『哲夫・・モモカがいるんだ、道端で遊ばせるなよ』とガキ大将の哲夫に笑顔で言った。
「了解です・・シオンお姉さんまた来てね」と哲夫が私の方に歩くシオンに言った。
「必ず来ますから、哲夫君・・道端気を付けてね」とシオンが微笑んだ、鉄夫はテレテレで頷いた。

「良いな～・・素敵な世界です、シオン今日も感動しました」と蘭のアパートに向かいながらシオンが言った。
『素敵な世界？』と私はニコちゃんに聞き返した。

「上の子供が下を見る・・口出しとか、遊んでやるとかじゃなくて。見守るだよね～・・そして肝心な事だけ教えるの。
仲良く遊ぶコツや仲直りの仕方を、そして見守る・・自分も遊びながら。
そして意識はいつも、1番下の子供を見てるんだね。
だからモモカちゃんでも、1人で遊びに来れる、安全で安心だから。
存在させないんだね、意地悪や仲間外れ・・イジメが絶対に存在出来ないだね。
豊君が作り出して、エースが完成させたんだと思ったよ。
エースが私を迎えに来た時に、子供達の空気が変ったよ。
特に哲夫君・・少し緩んだんだよ、エースを見て安心したんだね。

そのくらい集中してるんだね、その責任の重さを知ってるんだね。
６年生で・・教えられたんだね、伝えられてるんだね。
その大切な事を、自分の世代で絶やさないように、伝えてるんだね。
シオン・・とっても羨ましかった、そんな世界が存在する事が。
この前のマキちゃんの話・・ど～んって撃たれたよ。
シオン・・甘えてたよ、両親とリアンの愛情に守られて。
どこかで言い訳してたよ・・普通じゃないって言われる事に甘えてた。
豊君、マキちゃん、そして今日あったヨーコちゃんも両親がいない。
それなのに・・シオンよりも強く生きてるよ。
シオンもやらないと・・そうしないと、シオンに申し訳ない。
ユリカちゃんが贈ってくれた、最高の名前を汚してしまう。
先生見守っててね・・シオンの事も、４人娘やモモカのように。
シオンもいつか子供達に伝えたい・・シオンの想いを」

シオンは前を見て美しい言葉で、リズミカルに歌った。
『シオン・・哲夫も施設の子供だよ』と囁いた。
「えっ！・・・凄すぎます・・シオン・・嬉しいです」と目を潤ませて運転に集中していた。

『哲夫は小１で施設に来た・・両親が自動車事故で亡くなった。
お父さんが運転してて、お母さんが助手席に座っていた。
哲夫は後の席の真ん中に座って、話してたらしい。
山の上り坂で、前をトラックがノロノロと走ってた。
切り出した大きな杉の木を満載にして、お父さんは車間距離を取ってたらしい。
しかしそれも無駄になった、上り坂で積荷が崩れた。
大木が車めがけて襲ってきた、運転席と助手席に刺さって車は止

まった。
両親は即死だったらしい、哲夫は奇跡的に無傷で助かった。
でも事故の瞬間を見てるから、精神的なショック状態のまま施設に入ったんだ。
そして小５だったヨーコの献身的な挑戦が始まる、哲夫の心を守りながら。
哲夫が本気で泣くまでに、半年かかったんだよ。
哲夫は背負ってるんだ、両親の願いを聞いてるから。
事故直後、母親だけは少し話せたらしい・・最後の母の言葉。
優しい人になってね、哲夫・・と言った母の最後の言葉を背負ってる。
哲夫の伝える事は、優しさなんだよ・・背負ってる物が違いすぎる。
どんな言葉よりも重い・・母の最後の言葉が心にある。
俺は哲夫に、俺の考えは全て伝えた・・託して余りある存在だから。
俺は幸せだよ・・夢を見れる後輩に託せたんだから』

蘭のアパートの駐車場で、泣いているシオンに静かに言った。
シオンは目を閉じて静かに泣いていた、私は意識して元気よく言った。
『シオンの泣き虫・・荷物運んでくるね』と笑顔で言って、荷物を３往復運んだ。
運び終えて助手席に座ると、シオンがニコちゃんに戻っていた。

「次はどこでしょう？」とニコちゃんで聞いた。
『ロッシ』とウルで答えた、シオンはニコちゃんで頷いた。
ロッシという可愛いケーキ屋で、イチゴのショートを１０個とチーズケーキ１０個を買った。
『シオン・・準備に帰るでしょ、これリアンと食べてね』と笑顔で

言って、後部座席に４個入りのケーキの箱を置いた。
「先生ありがとう・・リアン大感激ですよ～」と言ったニコちゃんシオンに、橘通りで手を振って別れた。

夏の陽射しが降り注ぐ小さな通りを、ＰＧを目指して歩いていた。
ＴＶルームには裏方３人組とミサキとヨーコがいた。
『待ってたな・・３時のおやつ』とニヤでハルカに言って、ケーキの箱を渡した。
「うん、待ってた・・この数は凄いね～」とハルカが嬉しそうに微笑んで。」
レンとマキで飲み物を用意した。

若い女子５人でケーキを食べながら、女子らしい話に華が咲いていた。
私はエミが置いている、【世界の遺産】の説明書きを読んでいた。

「エース・・今夜、ユリカさん落ち着いたら、ユリカさんの店も覗いてね・・ヨーコちゃんもお手伝いに入るから」とミサキが私に微笑んだ。
『頑張れよ、ヨーコ・・いざとなったら接客しないとね』とヨーコをニヤで見た。
「やめてよ・・緊張するでしょ、その時は挑戦するよ」と可愛い笑顔で返してきた。
『歳は１８にして、お酒は飲めないと言うんだよ』と笑顔で言った。
「了解・・緊張させるの趣味だね」とヨーコがニヤで言った。

その時カスミと久美子が入って来た、ミサキがヨーコを紹介した。
「良かったな～、ミサキ・・充実感が全体に出てるよ」とカスミが輝きながら微笑んだ。
「ありがとうございます・・嬉しくて」とミサキも笑顔で返した。

カスミと久美子もケーキを笑顔で食べていた。
「カスミ姉さん・・カロリーとか気にしないんですか？」とハルカが聞いた。
「しないよ・・身に付くかどうか、その時は分からないだろ。
自分の体を理解してれば節制は必要無いよ、調整が必要なだけ。
一流モデルなんて、案外節制はしないよ・・好きな物を好きなだけ食べる。
でも調整はシビアにやるよ、そうすれば少しの変化にも気付くようになる。
増えたその時なら、減らすのも楽だからね」
カスミは何気なく言った、女性は全員興味津々で聞いていた。
「そっか～・・敏感度を上げれば良いんですね」と、マキが微笑んだ。
「そうだよ、ハルカやミサキ・・特にマキや久美子やヨーコは増える時期だからね」とカスミがニヤで言った。
「どうして増える時期が有るんだろう」と久美子がウルで言った。
「準備段階に入ったって事だろうね、３段階目の準備に」とカスミがケーキを食べながら言った。
「３段階ですか？・・知りたいんですけど」とハルカが微笑んだ。
「私の考えだよ・・別に勉強したんじゃないからね。
私は・・女の体は変化し続けると思ってる。
幼少期の第１段階から生理が始まる第２段階。
そして子供を産む準備をする第３段階。
その次が子供を産み育てる、第４段階と続いて行くと考えれば。
第３段階に入ってる期間は、体にエネルギーを貯めようとするんだろう。

だから身に付きやすいのも当然だよね、自然の摂理だから仕方ないよ。
それが耐えられないなら、体に教えれば良いんだよ。
自分は第４段階に移行するってね、そうすれば太り難い時期が来るよ」

カスミは全員を見て、最後に不敵ニヤで言った。
「どうすれば・・それを教えられるのですか？」とレンが聞いた。
「それはエースの専門分野だろう・・エースよろしく」とニヤニヤしてる私に、カスミが振った。
「エース・・述べよ」とハルカが促した。

『なぜ気付かない・・カスミの不敵ニヤ顔で。
ようするに、経験をすれば良いんだよね、体がそう思うぐらい。
濃密で何回も経験すれば、第４段階に入るんだよ。
もう子供を産む時期が来たって、体が勘違いするから。
仕方ないな～・・俺が手伝ってやるよ』

ハッと気付いたハルカに、ニヤニヤで言った。
「なるほどね～・・説得力ありますね」とマキが笑顔でハルカをニヤで見た。
「マキ、お姉さんを抜いたら駄目ですよ」とハルカがニヤでマキに言った。
「え～・・ハルカ姉さん待ってたら、いつになるのでしょう」とマキがウルで返した。
「まぁこの子は、いつからそんな反抗期になったの」とハルカが楽しそうに睨んだ。
「マキの言葉が正解・・ハルカを待ってたら、いつになるのやら」とカスミが不敵で言った。
全員がハルカをニヤで見てた、ハルカは照れた笑顔で返していた。

私はカスミの楽しそうな顔を見ていた、年下に囲まれている笑顔を。
カスミの言葉は響いている、その圧倒的容姿が説得力を増す。
私は感心していた、節制でなく調整と言った言葉を。
カスミが追い求めた美の世界で、導き出した答えだったのだろうと思っていた。
無理をしても続かない、我慢や努力じゃない・・自分を理解して調整する事だと。
楽しめないと、継続しない・・それが人間なのだろうと思っていた。
その後カスミは、マキとヨーコを妹のように可愛がる。
カスミが言った、ハルカとミサキは、私より夜の経験が早かったから、ライバルだった。
マキとヨーコ・・その両極の2人が色々相談してくれて、嬉しかったよ。
その相談で私も気付かされた、自分がしてきた事を振返ることができた。
継続に疑問を持たなくなれたし、伝える為に考えるようになった。
お前みたいに、伝達方法を考えたんだよ・・そして感じた、見ているとな。
だから私は言葉と体で伝えた、私の考える理想はこの方向だとね。
楽しかったよ、伝える事の楽しさを実感できて。

美しい笑顔で言ったカスミ・・素晴らしい伝達方法だったよ。

カスミは輝きを継続させて見せた・・この夏物語以降、１度として翳らなかった。

そして心も折れなかった、その素晴らしい心の芯は、強い柔軟性を持っていた。

私は今でもお守りを大切に持っている、心のマドンナの写真を。

下手くそな愛情表現が温かい・・輝きに隠された強き心。

銀河の奇跡・・永遠の憧れ・・光を追い越す輝き・・カスミ。

ＭＡＫＩ　＆ａｍｐ；　ＹＯＵＫＯ

８月の最終日、子供達は寂しげで、長い休みの終わりを感じていた。宿題の最後の追い込みをする者、諦めて開き直る者。全ての人に同じ時間が流れていた、止まることもなく。

「エースも久美子も、学校が始まるね～」とカスミが不敵ニヤで言った。

「学校出ると、夏休みって憧れますよね～」とレンが微笑んだ。

「私・・退屈だったイメージしかないな～」とハルカが言った。

「私、苦しかったイメージしかないよ・・水泳の地獄の練習」とミサキがウルで言った。

「そっか～・・ミサキは水泳部だったのか～、どおりで安定感あると思った」とカスミが微笑んだ。

「安定感・・褒められてますか？」とミサキがニヤで返した。

「もちろん・・褒めてるよ。

ミサキは歩く時に横揺れが無いよね、私は凄いと思ってたよ。

重心を支える腹筋と脚力が違うよ、意識して歩くと、もっと美しく歩けるよ。

もう少し大股で足を上げる時に、かかとで少し蹴り上げる感じ。

動きの力を８割位前に向ける、そして着地する時に爪先から静かに下りる。

最初はぎこちないけど、慣れればスムーズになるよ。

これは筋力がいるんだ、女性では難しいんだよ。

でも足は綺麗になるし、動きも美しくなるよ」

カスミは笑顔で言った、ミサキは嬉しそうに真剣に聞いていた。

「ありがとうございます・・やってみます」とミサキが笑顔で返し

た。
「筋力が無い、か弱い女性にもアドバイスを～」とハルカが微笑んだ。
「それはユリさんを見れば良いだろ、あの美しい姿勢・・見るだけで勉強になるよ」とカスミが笑顔で返した。
「背中が綺麗にスライドしますよね～私、家で練習したけど・・難しくて」とマキが微笑んだ。
「マキは骨格が違うから、ミサキと同じ感じが良いと思うよ」とカスミが返した。
「骨格で違うんですよね～・・自分の動きを覚えないといけないんですね」とレンが聞いた。

「そう思うよ、私はユリさんの動きの研究はするけど・・全てを自分に入れないよ」とカスミが微笑んだ。
「ユリさんの動きで、何が1番凄いと思いますか？」とミサキが聞いた。

「マキがこの前私に聞いた、体の中心点・・聞かれて嬉しかったよ。
ユリさんはそれが真ん中にあるんだよ、多分おへそ当りに。
全ての動きの基点がそこにある、だからどんな状況でも美しく動く。
私は谷間の真ん中でしか取れない、だから動きによって基点が変るんだ。
それを中心で取るのが、今のテーマなんだけど。
相当に難しい・・ユリさんの年齢までに、自然にやれる自信がないよ。
多分、身体だけの問題じゃないよ・・心も大きく起因するんだろう。
ようするに、心・技・体・・全て揃わないと無理なんだろうね。
でも挑戦する価値はあるよ、見れば分かるよね。

仕事どうこうでなく・・あの美しい動きを手に入れたい。
それを持てれば、人生のプラスになると思うよ」

カスミは輝きながら笑顔で言った、取囲む女性達は真剣に聞いていた。
「凄いな～・・何年・何十年の目標が確かにあるって」とハルカが微笑んだ。
「エースほどじゃないよ・・奴は目標に対して、何年もの計画を立てるからね」と私に不敵を出した。
「そうなんだよね～・・学校上がった時にはそうだったよ」とマキがニヤで言った。
「どんな子供だったのか、マキ、ヨーコ述べよ」とカスミが不敵ニヤを出した。
その時にユリさんと蘭と、マリアを抱いたシオンが入って来た。
全員で笑顔で挨拶をした、ユリさんも蘭も微笑んで返した。

「楽しそうな話に、間に合ったみたいですね」ユリさんが薔薇で微笑んだ。
「はい・・今から伝説の変態少年物語が始まります」とハルカが笑顔で返した。
「それは楽しそうだね～・・さぁ始めて」と蘭が楽しそうに満開で促した。
「ヨーコちゃんからお願い、ヨーコちゃんにとってエースは特別な存在だと聞いたから」とレンが微笑んだ。

「特別ですね～・・私は１０歳の冬に、母を病気で亡くしました。
父は私が３歳の時に病死していて・・父は広島出身で被爆者でしたから。
父方の親戚は全て原爆で亡くなっています。
母は天涯孤独だったので、私は施設に預けられました。

最初は施設にも学校にも、馴染めずにいました。
そんな時7歳のエースが施設に遊びに来てました。
エースが私を見ると言うんですよ・・ヨーコは可愛いって、何度も何度も。
私は不思議な気持ちで接していました、可愛いって堂々と言う少年に出会って。
そして・・馴染めずに孤独だった、私の手を引いて連れて行ったんです。
小児病棟に連れて行って、病気や障害と闘う子供達に会わせてくれました。
その姿を見て・・触れ合って、話して・・感じました。
自分の愚かさを感じてました、その闘う姿を見て・・自分は健康じゃないかと。
これ以上、何を贅沢言うのかと・・健康以上の望みなどないんだと。
そう感じました・・そして病院を出た所に待ってました。
限界トリオの3人が、それから私も仲良くなった・・学校も楽しくなって。
そんな時期を過ごしていたら、エースが次の提案をしてきました。
哲夫という少年を元気にさせようと、それは私にしか出来ないと言いました。
哲夫は6歳で両親を目の前で亡くしてます・・自動車事故で。
救急車が来るまでの間、母親は少し意識があったそうなんです。
そして最後の力を振り絞って伝えた、哲夫に最後メッセージを。
優しい人になってね、哲夫・・そう母親は伝えていました。
哲夫が天涯孤独になる事を感じて、それでも母親は優しい人になってと言った。
私はエースに言われて気付いた、私にも出来る事があるんじゃないかと。
その当時哲夫は心を閉ざしていました、両親を目の前で亡くした

ショックで。
私は必死で哲夫と向き合いました、伝えたくて・・健康以上の望みは無いと伝えたくて。
エースがそれを見てくれていました、私を可愛い可愛いと言って応援しながら。
半年かかりました・・哲夫が私にしがみつき、本気で泣くまでに。
それからです、エースが哲夫を弟のように接し始めた。
豊君からエースが継承した子供の世界、その世界を円滑に回す方法を哲夫に伝えました。
そして今年の3月、エースが小学校卒業式の日に哲夫に言いました。
お前がやれ・・伝えられた事は次に伝えろ・・優しい人になれよ、哲夫って。
哲夫はその時に号泣しました、エースがずっと暖めてた想い。
豊君が作り出し、エースが改良を加え・・哲夫に託した。
その継承の言葉が・・優しい人になれよ、哲夫だった。
その号泣する哲夫を私は抱きしめて、エースの背中を見送った。
その時に分かりました・・エースはそのゴールを設定していたと。
私の施設を出る送別会で、エースに聞きました、なぜ哲夫を選んだのかと。
エースは笑顔で言いました、背負ってる物が自分と違いすぎると。
哲夫は絶対に今より良くする、母の最後の言葉を背負ってるからと。
その時に思い出しました、勝也父さんの言葉を。
壊れた時が大切だ、それをどうするのか・・新しく作るのか、それとも修理するのか。
どちらにしても、前より良くしようと思わないといけない。
今までで駄目だったんなら、それ以上を目指す気持ちが1番大切だと。
絶対に修復できる、形ある物ならば。

だから1番大切なのは・・形が無い物だと言っていました。
私はその言葉の真意が少し分かった気がしました、そしてエースの気持ちも。
エースは確かに変った子です、それは求める物が違うからでしょう。
エースは形が無い物にこだわり続けます、父の教えを直で受けてるから。
そして物作りの職人の父に対して、見せようとしています。
形の無い物を修復する姿を見せて・・自分を主張しているんでしょう。
エースがこの世で1番認められたい、父に見せ続けるのでしょう。
それがエースの不思議な生き方を作っていると、私は思っています」

ヨーコが最後は私に可愛く微笑んだ、私は嬉しくて照れた笑顔で返した。
「どうして・・ヨーコもマキもそうやって言葉にできる、嫉妬しそうだよ」とカスミが泣きながら言った。
「本当にあなな達は、素敵な世界で育ったんですね・・だから言葉に出来るのですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「私、今日・・哲夫君に会いました、本当に素敵な少年でした」とシオンも涙を見せて、ニコちゃんで言った。
「マキ・・お願い、あなたの言葉でも教えて」と蘭が深い目に青い炎を湛えて促した。

「ヨーコが施設に入ったと、エースが私達に教えてくれました。
私達と同じ歳で、凄く可愛いって、楽しそうに言ってくれた。
ヨーコが転校してきた時、シズカが同じクラスでした。
シズカは初めヨーコに関わらなかった、シズカらしい判断でした。
ヨーコに壁があったから、シズカは壁を本人が壊すまで手を出し

ません。
私も恭子もそれを分かっていたから、ヨーコと絡まずにいました。
でもヨーコの壁があまりのも硬そうなので、大丈夫かな～とシズカに聞きました。
その時シズカが言いました、ヨーコの存在を教えてくれたのは誰かと。
その言葉で私達は気付きました、エースだったと・・それも可愛いと言ったと。
エースがヨーコを小児病棟に連れて行く日に、シズカに言った。
後は3人でよろしくって言ったそうです、シズカは嬉しかったと言ってました。
そして病院を出てくるヨーコが私達を見て笑った、その笑顔を見て私も嬉しかった。
その姿が光って見えました、可愛さが増していたから。
エースが可愛いと言ったのならば・・そうであれば絶対に関係を深めます。
私達はそれが分かっていました、滅多に可愛いと本人に言わないから。
ヨーコの送別会で私も聞きました、ヨーコのどこが1番可愛いと思うのかと。
エースは照れながら、陰らない事だと言いました・・どんな状況でも陰らない。
馴染んでない時も、影を背負ってなかった・・可愛いままでいたんだよ。
施設でも小児病棟でも珍しい存在だと、きっと素敵な心を持ってるんだと言いました。
私はその時に確信しました、エースが可愛いって言うのは見た目だけじゃないと。
その心が可愛いねって言っているのだと、そしてそれが決定的になるんです。

ヒトミに出会って、ヒトミを可愛い可愛いって言うエースを見て。
寝たきりで、表情すら無いヒトミを・・可愛いって心から言っていたから。
エースは常に強い心に憧れます、自分もそうありたいからでしょう。
自分の生き方には、それが必要だと感じてるからでしょう。
昨日の揺れに対する強度の話、あれこそがエースの求める物ですね。
人は目を逸らせば感じなくてすむ、関わらなければ傷つく事もない。
でもエースは私達に見せ続けた、無関心は駄目だと・・関心を持てと。
何も出来なくても・・結果それで自分が傷つく事になっても。
知ろうとしようと・・その行動で教えてくれました。
エースの人間関係、私が知ってるだけでも・・恐ろしいほど広い。
そしてその下の世代との関係、豊君が3年生になるエースに託した意味。
エースは失敗を見せます、自分が失敗して見せて・・笑顔で反省する。
その教えは・・恐れるなと伝えました、失敗を恐れるなと。
周りの目や、大人の目を気にするなと・・恥ずかしいという気持ちを捨てろと。
豊という圧倒的存在に触れて、エースが自分で導き出した答え。
エースにとって豊君は完璧な人間だったでしょう、だからこそ教えれなかった。
失敗を恐れるなという事を、豊君が完璧な人間だと思っていたから。
ヨーコの言った、勝也父さんの話・・そうです、あれこそがエースの基軸。
現状より良くしたい、壊れたら・・修復するなら、前よりも柔ら

かく。
揺れで折れないように、強度を上げるのでなく・・柔軟性を上げる。
常に大きな揺れに挑み続けて出した答え・・正面から受け止める柔軟性。
エースは何度も心が折れています、その度に夜の海に一人で出る。
修復するんです、自分の心と向き合って・・本当の強さを考える。
そして辿り着いた・・柔らかい心・・それを今は目指していますね。
哲夫は確かに母の言葉を背負っている・・そしてエースは。
先に逝った沢山の友の言葉を背負っています、だから哲夫を理解して託した。
今回、エースがヨーコを魅宴に誘う時に言った言葉。
自分の夢を追いかけて良いんだと・・その言葉を聞いて、私も嬉しかった。
そしてヨーコが私に言いました・・エースが第1段階の卒業証書をくれたと。
私はヨーコのその言葉を聞いて、嬉しかったけど・・焦りました。
同じ世界で競う相手の凄さを感じて、そして幸せも感じた。
私達は見せなければなりません、親のいない私達を育ててくれた社会に。
見守ってくれた優しい瞳の大人達に、そして追いかけてくる下の世代に。
絶対に途中棄権も挫折も・・そして目を逸らして生きる事も許されない。
不思議な少年の卒業証書が欲しいから、その証書は下の世代が持っているから。
偽らず、背伸びせず・・自分らしく伝えたい。
私達が伝えてもらった大切な想いを・・その行動と意志で伝えてみたい。

豊の強い意志と、エースの失敗を恐れぬ姿を見て育った。
幸運な人間として・・大切な何かを伝えたい。
あの不思議な生き方をする、その変な男に見せつけたいんです。
私達の生き方を・・可愛いねって・・いつまでも言わせたいんです」

マキの言葉が流れるように響いて、静寂を連れて来た。
私はマキの変化が嬉しかった、その速さで想いの強さが伝わってきた。
《ユリカの言った、同調を聞いた喜びが少し分かったよ》と心に囁いた。
暖かく強い波動が包んでくれた、静寂が包む世界を。

「素晴らしい・・マキもヨーコも、私は心から期待します・・その生き方を」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「私もミサキも、幸せを感じてるよ・・素晴らしい後輩に巡り会えて」とハルカが微笑んだ。
「そして、焦ってるよ・・競い合う相手の凄さを感じて」とレンが微笑んだ。
「うし・・悪いけど君達が追いつけない世界に、全力で逃げます」とカスミが最強不敵で言った。
「カスミ・・間違った世界に踏み込むなよ」と蘭が満開ニヤで言った。
「それは危険ですね〜・・エース敏感度上げといて下さいね」とユリさんが薔薇ニヤで言った。
『了解です』とニヤで返した、カスミがウルウルで見ていた。
全員の笑顔が戻って、楽しい話に華が咲いていた。

ミサキとヨーコが笑顔で挨拶をして帰って、女性達が食事の準備をしていた。

「しかしヨーコにも驚いたが、あの子を連れてこれる、お前の事が怖いよ」とカスミが不敵で言った。

「私もワクワクして、想像しながら11時を待ってたの。
ヨーコちゃんが立った時に怖くなった、あんたの事が少しね。
その雰囲気にも可愛さにも驚いたけど、カスミが言ったように。
あの子に挑戦の覚悟をさせて、魅宴でやらせる事ができる、あなたがね。
大ママの喜びを感じてたよ、あの子は絶対にあなたじゃないと連れて来れない。
そしてさっきの話で確信した、あなたはタイミングを計ってたね。
大ママからの依頼が無くても、いずれ魅宴にヨーコを引き入れた。
ヨーコの夢を見れる世界・・確かにこの街には有るかもね。
正直に言ってごらん・・図星でしょ」

蘭が満開ニヤで言った、私もニヤで返していた。
『ジンの人材派遣の話を聞いてる時に、ヨーコを思い出していたよ・・ヨーコが18になったら会いに行こうとね』と笑顔で返した。
「やっぱり・・運の良い奴だ、それで紹介料貰って」と満開で言って、ケーキを食べた。
「ユリカ姉さんに・・ランチ何をご馳走したのかな〜?」とハルカが微笑んだ。
『〇幸のヒレカツ定食と〇〇のラーメン』と笑顔で返した。
「開かずの店!・・やってたの」とハルカが驚いて言った。
『月・水・金の昼間だけやってるみたいだよ、ユリカ常連みたいだった』と笑顔で言った。
「想像できない、ユリカ姉さんと〇〇ラーメン」とハルカが笑顔で言った。
「それは私もできない」とカスミが微笑んだ。
女性達が早目の食事を始めた、ユリカ光臨の緊張感があった。

『そうだ・・久美子、次の段階に挑戦してみない？』とニヤで久美子に言った。
「いよいよ接客を教えてくれるの？」と可愛くニヤで返された。
『それも良いけど・・夜街のオヤジマスター５人でジャズバンドやってて。
そのバンドが、ピアノ担当を探してるんだよ。
活動はリッチハートで、月１のペースでライブしてるらしい。
下手くそだろうけど、セッションの経験になるかもよ。
興味あるなら紹介するよ、マスターＪ・塚本』

私は嬉しそうな笑顔の久美子にニヤで言った。
Ｊ・塚本とは有名な音楽オヤジで、地元ＦＭのＤＪもしていた、バーのマスターである。
そしてリッチハートは、その当時１番熱いライブハウスだった。

「それは本当の話なんだね」と久美子が笑顔で聞いた。
『うん・・実力をみる面接はあるみたいだけど、久美子なら大丈夫だよね』とニヤで言った。
「実力も容姿もスター性も・・申し分ないよって、正直に言ってごらん」とニヤで返された。
『スター性ね～・・昨日までなら正直に言えたんだけど』と笑顔で返した。
「何があった？・・その言い方、おかしいぞ」とカスミが不敵で言った。

『知りたいの？・・カスミがそれを知りたいの？』と真顔で聞いた。
「知りたいに決まってるだろ・・早く述べよ」と不敵ニヤで言った。
『しょうがないな～・・スター性のある女子高生の写真を貰ったか

らだよ』とニヤで言って、写真を出そうとした。
「待て！・・分かったから、知りたくないから～」とカスミが慌てて、全開ウルウルで言った。

「私とエースに隠し事を持たせる気だね・・どうなの、かしゅみ」と蘭が満開ニヤで私に手を出した。
カスミは何も言えずに、全開ウルウルをしていた。
「エース・・業務命令です、見せなさい」とユリさんが薔薇ニヤで言った。
『ユリさんの業務命令なら、仕方ないですね』とニヤで言って、ユリさんに写真を渡した。
「まぁ・・素敵」とユリさんが薔薇で微笑んで、全員が見て驚いていた。
カスミは激しく照れていた、私はその可愛いカスミを笑顔で見ていた。

「擦れてない、可愛いきゃしゅみがいる～」と蘭が満開で微笑んだ。
「確かに・・凄いスター性だ、アイドルデビューも納得できる」と久美子が微笑んだ。
「3、4年で何があったんだろう、第4段階に入ったのかな～」とレンがニヤで言った。
「もう、いいでしょ・・エースにお守りでやったんだから」とカスミが不敵で言った。
「強力なお守りですね」と薔薇で微笑んで、ユリさんが写真を返してくれた。

『ユリさんのが見たいな～・・高校の制服姿』とユリさんにニヤで言った。
「それは・・恥ずかしいですね～」と薔薇で返された。
『もしかして・・白黒とか』とニヤ継続で言った。

「分かりました、見せてあげますね・・カラーだという証明を、本当に策略じゃ無敗なのね」と楽しそうに笑っていた。

その薔薇の笑顔を見ながら、体の中心に中心点がある、そう言ったカスミの言葉を思い出していた。

絶対に崩れない姿勢、それを保たせるのは、崩れない心だと感じていた。

どんなに揺れても曲がらない、そして絶対に折れないだろう。

その圧倒的な美に隠された、柔軟な心。

そしてその心に従う強さ、人を信じ続ける強い意志。

取り囲む女性達は、全て薔薇に呼び寄せられた。

同じ時間を生きたいと・・出会い、選んだのだ・・その頂を感じたくて・・。

私が自分が見たくて久美子にした提案、久美子は楽しんで参加する。

そして熱いステージで久美子が見せつける、その魂の叫びを。

ジャズファンの心を鷲掴みにする、その演奏は完璧な叫びだった。

アンコールは久美子のソロ演奏で、久美子はサマータイムを弾いた。

あのリンダが歌った響きで、強いアレンジを加えて弾いた。

弾き終り右手の拳を客席に突き出した、静寂の客席の熱が一気に上がった。

私はその久美子の表情を見て、ＰＧでの１時間には意味が有ったんだと感じた。

久美子がアメリカで話題になり、ジャズの専門誌にインタビュー記事が掲載された。

【私は１６歳の夏に、本当の意味での音楽を知りました。

暑い夏でした、熱が全てを溶かすような。

素敵な女性に囲まれて、全力で生きる素晴らしさを教えられました。

私が自分のリズムを取る時の音は、コツコツと響くハイヒールの音です。

集中力に満ちた、少しの緊張を纏った・・ヒールの音です。

あの音を表現したい、私は今もそう思っています。

女神達の足音を、今でも追いかけています。

その音が伝えてくれるから、全力で生きようと】

久美子・・この記事を、皆今でも大切に持っているよ。

あのライブハウスに通ってた人達の間では、今でも話題になるよ。

あのサマータイムの叫びの話しが・・魂のピアニスト・・久美子の話しが。

自傷問答

時が経過すればするほど、戻る事は難しい。
復活も復帰も復興も同じであろう、戻せないのは・・その時の気持。
それを自分に戻すしかない、その頃やあの頃に戻すしかない。

「ユリカ姉さんどんな気持ちなんだろう、2年のブランクか～」と蘭が満開で微笑んだ。
「確かに難しいですよね・・でもユリカですから、大丈夫でしょう」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「楽しみだ～・・本当に楽しみです」とカスミが微笑んだ。
『ユリカも楽しみにしてるみたいだったよ』と笑顔で言った。
「まぁでも良くやったよ、あんたじゃないと絶対無理な交渉だったよ」と蘭が満開で微笑んだ。

「明日からは、どんな予定になるのかしら?」ユリさんが私に聞いた。

『学校が終わって、1度アパートに帰って。
身支度をして、ミホに会いに行ってから。
出勤します・・当面はミホの時間は30分位にしようと思ってます。
いきなり焦って動かないように、注意しないといけないから』

ユリさんの薔薇を見ながら、笑顔で言った。
「私でミホちゃんに出来る事があれば、遠慮無しに言えよ」とカスミが真顔で言った。
「それは遠慮しないでね・・必要ならばマリアを使って良いですよ」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

『ありがとうございます、最終手段にとっておきます・・マリアだけは』と全員の笑顔に頭を下げた。
「時間をかけるんだね・・今回は」と蘭が真顔で聞いた。
『うん・・４年後を目標に、ミホが１５歳になるまでに』と真顔で返した。

「全員を使って良いよ・・私とユリカ姉さんは当然だろうけど。
ユリ姉さんも、そう言ってくれてるんだし。
カスミもシオンもハルカもレンも、当然マキも久美子も。
状況に応じて、頼んで欲しいと思ってるからね」

蘭が満開に微笑んで言った、全員の笑顔を見て、私も笑顔で頷いた。
「１５歳・・その１番大切な季節に目覚めさせて、絶対に間に合いますよ」とユリさんが言った。
私はこのユリさんの言葉が、なにより勇気を与えてくれた。

その時に後のドアが開いた、私は振向かずに分かった、静かなる流れが入って来たから。
女性達全員が固まっていた、歩み寄る気が空気を圧縮するように感じた。
「今夜はお世話になります、よろしくお願いします」とユリさんを見て、全員に向かい頭を下げた。
「よろしくねユリカ・・本当に違いますね、集中すると」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
他の女性達はユリカに頭を下げるのが、精一杯といった感じだった。

ユリカは笑顔で私の横に座った、私はその時に至近距離でユリカを見た。
『ユリカ・・綺麗だね』と本音を言った。
「ありがとう・・たまには言葉で言って欲しいよね～」と爽やか笑

顔で返された。
私は少し震えていた、ユリカの背中から出てくる何かに、強引に引き寄せられた。
「どうしよう・・今で震えてしまう」とカスミがユリカに微笑んだ。
「あら・・私、カスミちゃんに付いて回ろうと思ってたのに」とユリカが爽やかニヤで言った。
「それは・・・無理な気がします」とカスミが少し不敵を出した。
「仕方ないな～・・蘭、よろしく」と爽やか笑顔を蘭に向けた。

「がんばります・・リアン姉さん厳しい事を言ったんだな～、何かを盗めって」と蘭が満開に微笑んで返した。
「どうぞ、私で良ければ・・遠慮はいりませんよ」と爽やかニヤで返した。
それで女性全員に笑顔が戻った。

「あなたは、どうして煽るのかな～」とユリカが私にニヤを出した。
『何の事でしょう』とニヤで返した。
「ヨーコちゃんよ・・さっき来たけど、もうその雰囲気を撒き散らしていたよ」とユリカがマキにニヤで言った。
「ユリさん、お願いします・・レン姉さんがフォローに行く時に、私も同行させて下さい」とマキが真顔で頼んだ。
「もちろん良いですよ・・エースがＯＫ出してるんでしょうから」と薔薇で微笑んだ。

「超特急で来るのか～・・それで大丈夫と判断してるのか？」とカスミが私に最強不敵で言った。
『大丈夫さ・・今日の誓いは絶対だから、豊兄さんの名前を出したんだから』とマキに微笑んだ。
「当然・・私もヨーコも覚悟のある話だったよ」とマキが笑顔で返してきた。

『ＯＫ・・じゃあ乗車券を用意するよ、新幹線の』とニヤで返した。
「了解・・指定席じゃないやつでお願い」とマキが真顔で言った。
『座れないかもよ・・停車駅が無くて、お腹空いてウルするなよ』
とニヤ継続で言った。
「大丈夫・・次の停車駅は、熱い場所だから」とマキが微笑んだ。

「そこまでやりますか・・楽しいですね～ユリカ」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「本当に・・レンとハルカの顔を見てるだけでも」とユリカが爽やかニヤを出した。
「マキの足音が強くて・・私も強く踏出さないと」とハルカが笑顔で言った。
「私もフォローの時が怖いよ・・どこまでも煽る奴がいるから」とレンが微笑んだ。
『お２人も煽ってあげるよ・・セリカ覚醒で』とニヤで言った。
「あちゃ～・・それもいたんだな～」とカスミが不敵ニヤで言った。
「そしてここのニコちゃん出動も控えてるよ」と蘭が満開ニヤで言った、シオンがニコちゃんで照れていた。
「なんて素敵な時代なんだろう・・ユリカ姉さん勉強させてもらいます」とカスミが笑顔で言った。

「どうぞ・・でもセリカ覚醒は想像を超えますよ、あの子は間違いなく最新型です」とユリカが笑顔で返した。
「私も先日、昼間会って驚きました、セリカとホノカが並んで座る姿を見て」と薔薇で微笑んだ。
「セリカ覚醒は、今何％なんだい？」と蘭が満開ニヤで言った。
『日曜日に防御服を脱いだから、今からだよ・・セリカが本気なら、絶対にシオンと肩を並べる』とニヤで返した。
「覚醒イメージを述べよ」とカスミが不敵で言った。
その時にホノカが入ってきて、挨拶をした。

カスミがホノカに手招きをして、横に座らせて私を促した。
『セリカは本質的には攻撃型なんだよ、今までそれを隠していた。
でも俺に言ったよ、シオンと肩を並べて、銀河を狙うってね。
もちろん、今の時点では、銀河は圧倒的に前だろうね。
銀河はその各々の個性がぶつかり、それによって互いが上がっていく。
まさにライバル・・その3人のライバルが揃った事が奇跡。
今回のマキとヨーコは、俺にとっては理想の関係。
イメージは両極、火と水・・リアンとユリカ。
そして親友であり互いを認め合う、相手の底の部分まで知り。
そして理解し合った上で高めあう・・ハルカとミサキ。
しかし、そのどれにも属さない、強烈な個性の2人。
シオンとセリカ・・シオンは今までにない者を見せる。
その歌うように響く言葉が作り出す、癒しの世界。
どんなに求めても、手に入れられない・・シオンの世界。
そしてセリカ、間違えなく最新型・・感覚的にはエンジンが違う。
だから早すぎて止まる制御に苦しんだ、でも今は出来る。
セリカの今度の覚醒は、ペースを覚える。
常時全開でなく、マイペースで走る・・そこが次の段階。
マイペースを覚えて、その時だけ一気に加速する。
その加速力を見ると分かる、最新の技術が作り上げたエンジンだと。
だから俺は水冷式にしたいんだ、自分の熱で自分自身が壊れないように。
俺は夜の女性は、アスリートだと思ってる。
だから絶対条件として、負けず嫌いでないといけない。
目標設定の難しい世界だから、ただ流されて金を稼ぐ事だけになってしまう。
どんなに一流の選手でも、今より上に上がるにはライバルがいる。

単純で明快・・強いライバルが自分を上げてくれる。
短距離走じゃない、かといってマラソンでもない。
中距離走的な感覚・・ゴールは皆違うんだろうけど。
走るフィールドが同じだから、競い合う。
継続して競い合えるのは、相手の背中が見えるからなんだ。
そして後から迫る足音が聞こえるから、だから限界に挑戦できる。
でも最も大切なのは、たとえ周回遅れになっても・・諦めない気持ち。
継続する強い心・・それがないとゴールが見えなくなる。
競う意味は多分この辺にあるんだろうね、その一時期に出会う事に。
大切な季節を駆け抜ける、長いマラソンのような人生の一時期。
全力で駆け抜けてほしい・・燃えカスなど残さず。
灰すら残らないほど・・ただ生命を維持するだけの力だけを残して。
俺はそう考えてるよ・・だから次々にランナーの背中を押す。
この偏見で見られがちな世界を、最高のフィールドだと思っているから』

私は思ったままを言葉にした、静寂の中ユリカが私を見た。
「セリカ覚醒の最後の一押し・・私にはそれが分からないよ」とユリカが真顔で言った。

『皆の前で、衝動と戦うと言ったセリカ・・凄い進歩だと思ったけど。
相手が悪い気がする・・衝動という漠然とした相手。
俺はその相手の弱点を見つけたよ、成就させてやれば良いんだ。
その衝動が誘う世界に連れて行けば良いんだよ、そうすれば消えて無くなる。
だからタイミングを計ってる、セリカが衝動を成就させる時を。

でも常時側にいれないから、作り出す・・その時を演出する。
絶対に間違えられない、だからそれまではセリカに戦っていてもらう。
セリカを羊水の揺り篭に入れる、その時がくるまで』

ユリカの美しい真顔を見ながら、真剣に伝えた。
「蘭・・私は怖くなってきたよ、この感性が」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「私も鳥肌が立ちました・・やばい奴ですね～」と蘭が満開で微笑んだ。
「後悔とか反省を、促すんじゃないんだね？」とホノカが真顔で聞いた。

『必要ないよ・・医学的には必要なんだろうけど。
あの行為に悪意は微塵も無いと思ってる、大切だから傷つけてしまう。
俺は実はセリカが初めてじゃない、同じタイプに前に1度会ってるんだ。
セリカは感じてきている、その衝動の正体を。
それは他人に傷つけられたくない・・それが自分の中で強すぎる事を。
自分が好き過ぎるから、究極の欲望が出てくる。
他人にやられるぐらいなら、自分で先にやってしまおうと。
そうする事で、少し自分を嫌いになりたいんだよ。
溺れてるんだよ・・泳げるくせに、溺れる事に甘えてるんだ。
誰かが手を差し伸べるのを、どっかで待ってる。
でもそんなのセリカじゃない、その素質と才能をドブに捨てようとしている。
だから手を差し伸べない、限界ギリギリまで溺れさせる。
自分で本当の危険を感じ、生きたいと実感させるしかない。

それには横を泳ぐしかない、笑顔で岸を指差す事しか出来ない。
沈んだら・・潜るしかない、それが俺に出来る唯一の事だからね』

私はユリカに揺り篭を頼む為にも、正直に話した。
「マキ、前に会った相手を知ってるの？」と蘭が聞いた。
「はい、知ってます・・エースはその子で、医者達に見せつけましたから」とマキが真顔で返した。
「聞いて良いのかしら？」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「もちろん名前は言えませんが、大丈夫ですよ・・完璧に乗り越えてますから」とマキが微笑んで返した。
「興味本位じゃないから、大切な事が感じられそうだから・・マキ、お願い」とカスミが言った。

「エースがミホを遠ざけられて、最初に挑んだのがその人です。
エースが4年生の冬でした、その人はエースより5歳上の中3の女子でした。
本当に綺麗な人でした、少し大人びて・・お嬢様って感じでしたね。
私達も2歳上のその人に、憧れていました・・気品さえある姿に。
その人は医者の娘さんで、お父さんが相談して・・あの病院に入院させました。
自傷行為が止まらなかったんだそうです、お父さんは内科医で専門外でした。
その人は病院のはからいで、外科の特別室に入院しました、そして出会ってしまう。
エースが屋上で出会ってしまうんです、エースは元来高い場所が好きですから。
屋上によく行ってました、海まで見えるんですよ・・だから一人で海を見てました。

この話は今年の春、久しぶりに会ったその人に聞きました。
それは嬉しそうに、美しさに磨きがかかった笑顔で話してくれました。
その人は屋上の鉄柵にもたれて、海を見ていたそうです。
その時横から声がした、横を見ると小学生の男の子が固まっていたそうです。
もちろんエースです、そして声をかけた言葉が。
寂しいんだろ・・俺の胸で泣けよって、大人っぽく言ったらしいです。
本当に馬鹿ですよね～・・そしてその人の顔を近くで見て、固まるんですから。
そしてエースがいつもの正直な感想を言うんですよ、少年に戻って。
産まれて今までで1番綺麗な人に会った、今日は最高の日だって笑った。
その人も声を出して笑ってしまった、その少年の言葉に触れて。
その時に感じたそうです、何年振りに声を出して笑っただろうって。
エースはいつもの調子で面白話をして、病室まで行って仲良くなった。
でもその時には、復活してました・・ミホと向き合ってるレベルに。
その日の夕方、小僧は和尚の寺に来ました、私達も寺で宿題してました。
エースが和尚に聞いた・・自殺するのは、死にたいからなのかな～と。
私達は凍りつきました、小4のエースから出た言葉に。
和尚はエースを本堂に正座させ、正面に正座して座った。
それが和尚と小僧の問答のルールですから、滅多に見られない和尚の真剣な時です。

私はこの問答をはっきり覚えています、再現しますね。
和尚・・なぜそう思う？
小僧・・今日自分を傷つける人に会った、でも死にたいんじゃないと思った。
和尚・・死にたい者などおらん、死にたいんじゃない・・ならば何かの？
小僧・・生きたくないから、生きるのが辛いから・・そうじゃない、違う。
和尚・・じゃあなんじゃ・・なぜ自分を傷つける？
小僧・・自分が嫌いだから・・違う・・そうじゃない。
和尚・・傷は何処にある、自分で傷つけた以外の場所にはないのか？
小僧・・外側の傷は自分で付けたんだよ・・内側の傷・・無いよ、多分。
和尚・・ならばなぜ傷つける、なぜ内側には無いと言える？
小僧・・内側には無いよ、絶対に無い・・瞳に出なかった、悲しみは。
和尚・・ではなぜ傷つける、外側を傷つける意味はなんじゃ？
小僧・・傷つきたいから・・そうなのか・・憧れてるの・・傷に。
和尚・・なぜ憧れるんじゃ、何に憧れるんじゃ？
小僧・・不幸に憧れるの・・美人でお金持ちの家に生まれて。
和尚・・小僧は何を不幸と思うんじゃ？
小僧・・病気や障害があるとか、親がいないとか。
和尚・・それは不幸な事か・・不幸とは何ぞ？
小僧・・幸せでない事だろ、幸せってなんだろう。
和尚・・金があって何でも手に入る事かの？
小僧・・違うよ、健康で楽しく暮らす事だよ・・楽しくないのか？
和尚・・楽しいとは何ぞ？
小僧・・好きな人と一緒にいるとか、遊ぶとか・・好きな人がいないのか？

和尚・・なぜ好きな人が出来んのかの～？
小僧・・それはすっごい好きな人がいるから・・いるのか！
和尚・・誰じゃろの～。
小僧・・自分が好きなんだ、だから楽しくないんだ・・だから傷つけるのか？
和尚・・なぜ好きな人が出来んのかの～？
小僧・・だから絶対の1番好きな人がいるから・・あっ！・・・嫌いになりたいんだ。
和尚・・小僧に問う・・人に声をかける勇気が無く、でも振向いて欲しいならどうする？
小僧・・目立つ事して注意を引くね・・えっ！それだけの為なの。
和尚・・小僧に問う・・なぜ人は溺れる？
小僧・・泳げないから・・溺れてない、泳げるんだ・・溺れたいだけなんだね。
ここで和尚が笑顔で立った、小僧はそれから瞳を閉じて瞑想してました。
私達は中1でしたが、その深さに驚いてました・・瞑想する小僧を見ながら」

「マキちゃん待って・・時間ギリギリに聞いたら、まずいかも」と蘭が満開で微笑んだ。
「さすが蘭だね、私もそう思ったよ」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「そうですね・・ホノカちゃんも明日来ますから、明日の楽しみにしましょう」とユリさんが薔薇で微笑んだ、マキも笑顔で頷いた。
「しかし生臭和尚・・知れば知るほど素敵な人だ～」とカスミが笑顔で言った。

「ねぇマキちゃん、和尚様とエースの問答、どの位知ってるの？」とホノカが華麗に微笑んだ。
「えっとですね～、絶望編・葛藤編・欺瞞編・復讐編・正義編の5

作品ですか」と笑顔で返した。
「全部覚えてるの！・・凄いな～」とハルカが微笑んだ。
「あの状況を見れば、絶対に覚えますよ・・まるで言葉の喧嘩ですから」とマキがニヤで言った。
「見たいな～・・さぞ凄いんだね、小僧が本気で言葉で挑む世界」と蘭が微笑んだ。
「良いな～ユリカ姉さんは、これから全部聞けて」とレンが微笑んだ。
「その状況が来そうな時は、皆に報告するね」と爽やかニヤで言った。
「約束ですよユリカ・・一人で楽しまないでね」とユリさんが薔薇ニヤを出した。

「小僧に問う・・その瞑想の時に何を考えていた？」と蘭が大きな声で言った。

『俺・・混乱してた、子供だったから理解出来なかった。
自分を嫌いにならないと、誰かを好きになれない。
そんな事は絶対にないと思ってた、じゃあ何故なんだろうって。
和尚の問答は、結局最後の問いかけが重要なのは知ってたから。
いきなりなんで溺れる話をしたのか、それを考えていたんだよ。
結局分からずに、次の日から向き合うんだ・・結局間違ったまま進む。
俺は今でもその人に感謝してる、大切な事を教えてくれたから。
それは言えない・・明日のお楽しみなんだから』

私は蘭の満開を見ながら、最後はニヤで言った。
その時ドアが開いて、レイカが笑顔で私に駆け寄った。
『レイカ・・今日も可愛いね』と笑顔で言って抱き上げた。
「レイカ可愛いの・・可愛い？」と可愛く聞き返された。

『可愛いよ～・・レイカはとっっっっても可愛いよ』と強調して言った、嬉しそうなレイカの笑顔を見ながら。

「ユリさん、今日からお願いします」とマユが深々と頭を下げた。
「分かりました、マリアも喜びます・・ケイコちゃんもフロアーデビュー近いのかしら？」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「はい・・今夜からフロアーサービスに入るみたいです」とマユが微笑んだ。
「いよいよ、１８歳が始動ですね、揃ってきましたね」とユリさんが私に微笑んだ。
『ケイコ・・楽しみですね～』と笑顔で返して、レンを見て二ヤを出した、レンも笑顔で頷いた。

「エース・・もう少しだと思うよ、今週末あたりで疲れのピークがきそう」とマユが私に言った。
『ありがとうマユ・・助かるよ』と笑顔で返して、笑顔のマユを見送った。
「なるほど～・・セリカの状況も、情報入るようになってるのか～」と蘭が満開ニヤで言った、私はニヤで返した。

『ユリカ・・週末、揺り篭よろしく』と笑顔で言った。
「〇天で最高級焼肉ランチ」と爽やかニヤで返された、私はウルで頷いて。
女性達が笑顔で準備に行くのを見送った、マリアが起きてレイカを見て嬉しそうに遊び始めた。

私はレイカとマリアの遊ぶのを見ながら、急いで食事をしていた。
情熱のフローアーにやってくる、透明の女神が待ち遠しくて。

しかし私の想像は完全に却下される、想像の外側、届かない所に棲

んでいた。
その姿は圧倒的な静寂を連れて動いた、その本当の姿を見せる時が迫っていた。
そして私は気付く、水のユリカの、もう一つの【水】と意味を。
私はこの日の日記に書いている、この時の心境を。
私は寂しさに包まれていた、シオンのニコちゃんを見ながら。
そのシオンの変化の激しさを、喜びながら・・寂しさを抱いていた。
しかしシオンは見せ続けた、変化し続けた・・白い心のままで。
結局１１月２２日まで、デビューをさせなかった。
カスミやハルカはなぜさせないのかと、９月末には私に詰め寄った。
でもユリさんもユリカも蘭も、何も言わなかった。
私は待っていたのだ、シオンが自分の欲求を叫ぶ事を。
１１月中旬の日曜日、シオンがあのブルーの湖に連れて行ってくれた。
そこで私に向かって叫んだ、私に白い弾丸が撃ち込まれた。
「シオン・・もうできる！・・・シオン絶対に、勝って見せる！」と叫んだ。
私は本当に嬉しかった、シオンの心の白い弾丸が奥まで入ってきて。

私は見たかったのだ、負けず嫌いのシオンが。

ＰＧで仕事するだけなら、この時点で充分ＯＫだっただろう。

でも私はシオンで夢を見ていたから。

リンダとマチルダと旅をする、シオンを想像していたから。

こうしたんだよ・・シオン・・ごめんね。

私は今でも分からない・・シオンに対する感情を表現出来ない。

ただ１つだけ言えるのは、シオンを愛していたという真実だけである。

私は今でも、迷ってどうしようもない時は、国際電話をかけてしまう。

受話器の向こうから、「先生・・どうしましたか～」と言う声を聞きたくて。

圧倒的癒し・・嘘の無い世界からの贈り者・・歌う言葉。

白い弾丸に込める・・純白の想い。

心の教壇に立つ唯一の存在・・愛さずにいられない・・その名も・・詩音。

1978

透明の女神

イメージしていないと出来ない、ピークの時を肌で感じていないと。
そして常にその上があると、思っていなければ辿り着けない。
走り出したら止まる事は考えない、何かが切れるまで走りきる。
賭けた物が戻る事はない、燃焼してしまうだけ。

私は食事が終わり、マリアとレイカを抱いてフロアーに向かった。
レイカを私の指定席に座らせ、マリアを抱いて隣に座った。
久美子は静かなクラッシックを奏でていた、フロアーに独特の緊張感があった。
四季とユメ・ウミが出て、１０番で静かに談笑していた。

「緊張感が出てるね～・・私も楽しくなってきた」と後からリアンが微笑んだ。
シオンが椅子を持って来て、リアンが私の横に座った。
マリアをリアンに渡して、私がレイカを膝に抱いた。
『良い感じだね・・皆期待してるけど、それを完全に凌駕するんだろうね』とリアンに笑顔で言った。
「間違いなく・・凌駕するよ」と獄炎ニカで返された。

「何なんだろうね～・・この雰囲気、ユリカは作り出すよね～」と大ママがレイカのいた席に座りながら言った。
『大ママでも2年振りか～・・楽しみだ～』と笑顔で返した。
その時ナギサ・カスミ・ホノカ・レン・ハルカと入場した。
全員の背中に緊張感があって、ユリカの存在感の強さを感じていた。
そして蘭とサクラさん・アイさんが入って、久美子がそれを確認して止まった。

そして弾いたのは、久美子が初めて弾いたあの曲だった。
久美子が弾きながら羊水の揺り篭に揺られた、ユリカとの思い出に満ちた叫びだった。
母に届けと叫ぶ、魂の叫びは・・寂しいと叫んで。
ありがとうと泣いて・・私は大丈夫、元気ですと笑った。
弾き終わり、久美子は銀の扉を睨んでいた、美しい１６歳の輝きを発散していた。

久美子の視線を感じたように、銀の扉が開いた。
ユリカが純白のドレスで出てきた、圧倒的静寂が支配した。
コツ・コツ・コツと３歩進み、美しい立姿で深々と頭を下げた。
私は驚いていた、あの小さいユリカが大きく見えたのだ。
ハイヒール分以上に大きく見えた、頭を上げる時に横顔が見えた。
静かだった、ユリカの周りだけ深海の底にある、光輝く場所のようだった。

ユリカはこっちを見て、大ママとリアンに微笑んだ。
「ゆりか！」とマリアが大きな声で呼んだ、ユリカはマリアを見て爽やかに微笑んでフロアーに歩いた。
ユリカは久美子を見て、笑顔で頭を下げた、久美子も笑顔で返礼した。
その時に全員から拍手が沸き起こった、久美子は嬉しそうに笑顔でユリカを見ていた。

「凄すぎる・・オペラの開演みたいだ」と後からセリカの声がした。
振向くと、ドレスを着た千鶴とマユとセリカが笑顔で立っていた。
「あの先生にレイカはピアノを習ってるのね・・良かったね～」とマユがレイカに笑顔で言った。
「さすがユリカ姉さん、裏も満員状態ですね～」とミコトがリョウとやってきた。

「魅宴は大丈夫なの？２人いなくて」と千鶴がニヤをした、ミコトもニヤで返した。

女性達はユリカを囲み、笑顔で話していた、開演１０分前だった。

『ユリカって・・存在に意味があるんだね、俺は想像力の無い人間だよ』と大ママに言った。

「あの頃よりも凄いよ・・間違えなく、今がピークだよ」と大ママがフロアーを見ながら言った。

『これに対抗出来るのは、リアンの炎だけだね』とリアンに笑顔で言った。

「比べるなよ・・怖いから」とニカで返された。

その時に扉が開いた、少し緩んだ空気が一気に緊張した。

ユリさんが真赤なドレスで出てきた、全く揺れない姿勢のまま歩いて、深々と頭を下げた。

背中が上下運動にに対して、伸びる時に背骨の各部位が、綺麗に直線でスライドした。

大きく開いた背中から見える突起が、まるで別の生き物ように動いた。

頭を上げる時に、何かを収納するかのようにスムーズに戻った。

そして立姿の圧倒的な美を見せ付けて、こちらを見て薔薇の微笑を投げた。

その美しさに、全員が動けずに固まっていた。

ユリさんがフロアーに視線を戻すと、我に返ったように女性が円を描きだした。

「やりやがったね、エース・・ユリをそのステージに戻したね」と大ママが言った。

『多分、ユリカが最後のスイッチを押した』と私はユリさんの背中を見ながら返した。

「圧倒的だ・・ユリさんとユリカさん、棲んでる場所が違う」とセリカが呟いた。
「あのユリさんが、ゴールドに立ってくれるの・・幸せだよ」と千鶴もフロアーに呟いた。

ユリさんがユリカの隣に立った、女性達は全員2人を見ていた。
大ママはこの時点で泣いていた、夢にまで見た瞬間だったのだろう。
百合の横に百合香が咲く、その光景をずっと想像していたのだろうと思っていた。

「あなた達は幸せを感じるべきです・・この時代に産まれた幸せを。
そして出会った幸運を・・私は今それを感じています。
紹介します・・これがユリカです、クラブで接客するユリカです。
貴女方はユリカに見せねばなりません、自分達も同じ舞台に立つのなら。
今までやってきた、その誇りを胸に、全力の姿で感謝を表現して下さい。
PGの人間として・・出来ますね？」

ユリさんの強い言葉が響いた、女性が全員で気持ちを合わせた。
「はい」と言う強い返事で答えた。
「ではユリカ・・お願いします」とユリさんが薔薇で微笑んだ、ユリカも笑顔で返した。

「夜の街には沢山の物があるでしょう・・私もそれを見てきました。
喜びも・夢も・希望も・・そして挫折も後悔も絶望も。
でもね・・恐れる事は何一つありません、いつか必ず和解できます。
その頃の自分や、あの頃の自分と・・それまでは走りましょう。
私はこのチャンスをくれた、全ての人達に感謝して、私の世界を

お見せします。
　１０年間夜街で生きた・・その証として。
　楽しませてもらいます・・よろしくお願いします」

強かった、ユリカの言葉が強く響いて、静寂を連れて来た。
「よろしくお願いします」と女性全員が頭を下げた。
言い知れぬ気配を漂わせ、ユリカが爽やかに微笑んだ。
「それでは開演しましょう」の言葉に、「はい」のブザーを鳴らした。
女性が準備を初めて、ユリさんとユリカが受付に挨拶をした。

キングと和尚が笑顔でカズ君に案内されて、３番に向かって行った。
キング側からユリさん、和尚側からユリカが歩み寄り笑顔で挨拶をした。
その２人の動きは美しくシンクロして、その雰囲気だけで圧倒していた。

「さぁ・・私達もがんばろう」と千鶴が笑顔で言って、マユとセリカと３人で帰って行った。
私は見送りにレイカとマリアを抱いて、裏口で３人と別れた。
ＴＶルームの松さんに、２人を預けて、フロアーに戻っているとミチルが帰る所だった。

「まったく・・責任とりなよ、ユリカをあそこまで上げて」と妖艶ニヤで言った。
『ミチルのクラブでの仕事・・楽しみだよ』と笑顔で孵した。
「あんまり期待しないの」と笑顔で睨んだ。
『ミチル・・明日でも研修受けてよ、ホノカ明日もＰＧでしょ』と笑顔で聞いた。
「もちろん良いけど、誰かな？」と笑顔で返された。

『ハルカをお願い・・リアンやユリカの店じゃ、甘えが出るから』
とニヤで言った。
「了解・・ユリの秘蔵子なら、厳しくやるよ」と妖艶に微笑んで帰って行った。

指定席に行くと、全員帰っていて、シオンとマキが忙しそうに動いていた。
客席は7割が埋まっていた、熱が高くて、そのペースの速さに驚いていた。
私は指定席に座ってユリカを見ていた、笑顔が溢れて楽しげだった。
ナギサとカスミの指名が、隣の2番席に入っていて、沸点に近付いていた。

その時蘭から【受付】とサインが来た、受付を覗くと、親父が若者2人を連れて来ていた。
親父達3人は5番席に通され、蘭とレンとハルカが5番に付いた。
蘭は親父の席でいきなり沸点を目指した、若者達にも笑顔が溢れていた。
運送屋の１２名の団体が１０番に入って、満席記録を更新した。
１０番にサクラさんと四季の３人が入り、６番にユメ・ウミの指名が入った。
３番はユリカとアイさんがチェンジして、ユリさんとレンがチェンジした。
親父の隣にユリカが入って、親父は驚いた顔で迎えていた。
ユリカと蘭に挟まれて、親父の楽しそうな笑顔があった。

「先生・・これカズさんが」とシオンがメモを持って来た。
私はメモを受取り、それを見た。
〔梶谷・和尚コンビ、この後ゴールドに案内よろしく〕と書いてあった。

私はシオンに笑顔で了解と伝えて、カズ君にサイン【了解】を送った。
フロアーの熱が9時前だというのに、上昇し続けていた。
ユリカと蘭の席は、独特の雰囲気を醸し出し熱が高かった。
《ユリカと蘭も両極だね、素敵な光景だよ》と心で囁いた。
ユリカが一瞬私を見て、爽やかに微笑んだ、。
その瞳は静寂を連れ、深海に誘う力が強く、内面からの発光で輝いていた。

「勝也お父さん、面白すぎだね・・次の店どっかないかって？」とハルカが笑顔で来た。
『ローズが良いんじゃないかな、リアンも気合が入ってたから』と笑顔で返した。
「了解・・その時は送ってね」とハルカが微笑んだ、大人の色気が少し出てきていた。
『ハルカ・・明日研修頼んだけど、行ってみるか？』とニヤで言った。
「もちろん・・どこかな～？」とニヤで返された。
『ミチルの店・・ホノカの穴埋めだよ』と笑顔で言った。
「か～、緊張する～・・やってみるよ、ありがとう」と微笑んで戦場に戻った。

その時キングと和尚が立った、私はシオンに言って受付に出た。
和尚が親父の横を通る時に、親父とキングが互いを見て笑顔になった。
キングが親父に頭を下げた、親父も立って右手を出した、2人は強く握手をしていた。
和尚が私を見て、シワシワニヤを出していた。
私は予想もしていなかった、親父とキングが知り合いなどと思ってもいなかった。

親父とキングは少し会話をして、キングが受付に来た。
「小僧・・ゴールドに案内しろよ」とキングが笑顔で言った。
『ご機嫌だね、キング』と笑顔で返した。
「おう・・久々に憧れの先輩に会ったからな」と嬉しそうに笑顔で言った。
『憧れね～・・あの親父が』と呟いてエレベターに乗った。

「小僧・・知ってるのか？勝也さん」とキングが聞いた、和尚はニヤ継続中だった。
『知ってると言うか・・親父だから』と照れて返した。
「待ってくれよ・・親父って・・実の親父か！」とキングが驚いて言った。
『残念ながら・・廃墟の伝道師が親父です』と笑顔で答えた。
「そうか！・・なるほどね～・・和尚、繋がるんだな～」と和尚に言った。
「そうじゃの～・・不思議なもんじゃよな～、しかし廃墟の伝道師まで辿り着いたか」と和尚が私に言った。

『意味は聞いてないけど・・本人に聞けって言われたから』とキングにウルをした。
「それは、本人に聞けよ・・俺も言えんよ、大切な思い出やからな」とキングが笑顔で返してきた。
『キング・・今度会ってよ、廃墟の伝道師の名づけ親の娘に』とニヤで返した。
「小僧・・まさか・・真希の娘か！」とキングが言った。
『和尚も人が悪いね・・知ってたくせに』と和尚にニヤで言った。
「和尚・・本当の事なんだね？」とキングが和尚に確認した。
「本当じゃよ・・真希が娘に譲った、娘の本名が真希じゃよ」と和

尚が笑顔で言った。
「真希・・忘れられぬ女だな～、若い頃の思い出には常に出てくるよ」とキングが真顔で言った。
『今で言えば、タイプ的に誰なの？』と興味津々で聞いた。

「間違えなくユリ・・ユリにリアンを少し足した感じだよ」とキングが笑顔で言った。
『最強だ・・想像すら出来ないほどの、最強だね』と笑顔で返した。
「そう・・最強にして最良の者だったよ、ユリだけが今その世界にいるよ」とキングが懐かしげに言った。
『今度ゆっくり話すよ、今マキはＰＧで研修してる・・１６歳の挑戦者として』とキングに言った。
「楽しみだよ・・会わせてくれよな」とキングが言った時にゴールドに着いた。

大きな金看板のゴールド・ラッシュが迎えてくれた、受付に私が歩くとボーイ頭が笑顔で来た。
「エース・・ありがとう」と笑顔で頭を下げた。
『やめてよ・・案内しただけ、ＶＩＰ席に２人よろしく』と笑顔で返した。
緊張したボーイに連れられて、キングと和尚が奥の席に案内された。
私は緊張感の走る女性達を、フロアー裏に入りニヤで見ていた。
千鶴とマユが少し緊張して、キングと和尚の席に付いた。

「本当に連れて来るんだから～・・女性達全員、緊張してるよ」と後からセリカが言った。
『してもらうよ・・緊張ぐらい』と振向いて笑顔で言った。
「私も付かないと・・客としての帝王を、感じてみたい」と私の隣に立ってセリカが微笑んだ。
『セリカ・・頑張ってるね、今度の土曜の午後時間ある？』と真顔

で聞いた。
「もちろんあるよ・・デートかな?」とニヤで返してきた。
『それもあるけど・・衝動を外そう、俺を信じてね・・セリカ』と笑顔で言った。
「あんたを信じないで、誰を信じる・・ありがとう、土曜絶対だよ」と微笑んだ、可愛いセリカの瞳に流星群が尾を引いて流れた。
私はセリカに見送られ、エレベーターに乗り手を振って別れた。

PGに戻ると、満席状態継続中で熱が高かった。
しかしその喧騒の中でも探す必要はなかった、ユリカとユリさんは圧倒的な存在感を示していた。
そしてそれに一歩も引かないほどの存在感を、蘭が出していた。
青い炎を背負い笑顔で動いていた、その蘭の姿が初めて見るものだった。
私は少し興奮していた、蘭の温もりが離れていても強く感じられて。

その時ハルカからサインが飛んで、親父達が立ち上がった。
私は受付に向かった、親父と若い大工が笑顔で来て、親父が支払いながら徳野さんと話していた。
ユリさんと蘭と徳野さんに見送られ、エレベーターに乗った。
「次はどんな店かな?」と親父が笑顔で聞いた。
『獄炎か妖艶・・どっちが良い?』とニヤで聞いた。
「今夜は気分が良いから・・獄炎にしよう」と親父が笑顔で言った。
『了解・・宮崎の夜景を楽しんでもらうよ』と笑顔で返して、ローズに案内した。
私の後を歩く3人は、楽しそうに今の建設現場の話をしていた。

『親父・・ユリカの店に、今夜ヨーコが手伝いに来てる、もちろん接客はしてないけど』とローズのエレベーターの中で小声で言った。
「了解・・帰りに覗いてみるよ」と親父が笑顔で返してきた。

ローズを覗くとリアンが笑顔で手を振った。
『リアン・・3人お願いできる・・酒癖悪いかも』とニヤで言った。
「あんたの紹介なら、誰でもＯＫだよ」と獄炎ニカを出した時に、親父が入って来た。
「最高じゃない」と私に言って、親父に歩み寄った。
3人を奥のＢＯＸに案内して、女性を連れてリアンが笑顔で挨拶していた。

「また、特別なお客様みたいね～」と宴会にいた綺麗な女性がカウンター越しに笑顔で言った。
『まぁ・・特別と言えば特別かな』と笑顔で返した。
「私達・・経験できるの？クラブ」と真顔で言った。
『魅宴かＰＧかゴールドで良いなら』とニヤで返した。
「最高の3店出して、ニヤしないの」と笑顔で変えされた。
『いつでも良いよ・・調整するから』と笑顔で返して、笑顔で頷く女性に手を振って別れた。

私はローズのビルを出て、ユリカの店に行った。
店を覗いて固まった、カウンター席に3人のサラリーマンがいて、ヨーコが立っていた。
ＢＯＸは満席でミサキはＢＯＸに入って、ユリカの店の女性全員が各ＢＯＸに付いていた。
「いらっしゃい・・どうぞ、すぐに来ますから～」とヨーコが私に微笑んだ。
私は笑顔でカウンターの1番奥に座った、ヨーコは3人組と笑顔で話しながらコーラを出してくれた。
その時トイレから大ママが出てきた、私にニヤをして3人組の1番上司であろう人の横に座った。
《大ママやるな～・・もうヨーコを鍛えてる》と心に呟いた。

暖かい波動が返って来た、ユリカも余裕が出たなと感じていた。
私はヨーコの清楚な横顔を見ていた、ヨーコは元々会話は上手かった。
その表現が優しく、私はヨーコの言葉が幼い頃から好きだったのだ。
ヨーコは異性はもちろん、同性からも好かれた、マキが同性に好かれるのとは別の意味で。
マキはその容姿と竹を割った性格で、どこかボーイシュッなイメージが同性からも好かれた。
ヨーコは穏やかな性格と優しさが、同性からも受入れられていたのだ。
《マキの接客か〜・・また違う者が見れそうだね、ユリカ》と囁いた、熱く強い波動が包んでくれた。

しかしこの時の私の想像は、又も却下される。
マキが見せた接客は全く違っていた、マキとお客の関係は友だった。
気を使わない男同士の関係に近かった、だからマキを指名する客はマキが相談相手だった。
恋愛であったり、子供との関係だったり・・マキはその相談を相手の心に問いかけ返した。
笑顔で問いかけられ、お客はマキに正直に気持ちを話した。
その行為がお客の心の荷物を降ろした、そして笑顔で家路につくのである。
私はこの時に想像すら出来なかった、マキに接客が出来るのだろうかと思ったほどだった。

「ヨーコ、最強だよ」と後からミサキが囁いた。
『そうだね・・ミサキの後輩としては、合格点だね』と振向いてニヤで返した。
「私も、次の段階に行くね・・よろしく」とミサキが微笑んだ、美

しい淡い輝きを連れていた。
『了解・・スペシャルを用意してるよ』とニヤで言って立ち上がり。
大ママに目で挨拶をして、ヨーコに笑顔を向けて店を出た。

狭い通りを歩きながら、８月の終わりを感じていた。
大人達の人混みを避けて、裏通りを歩いていた・・《俺は裏通りを選ぶよ》と夜空に囁いた。
夜空の星を見ながら・・東京を考えていた、その場所が日本一なら挑戦しようと。
そう誓ってＰＧを目指した、１３歳の夏休みが終わろうとしていた。
私は若草公園のベンチで座る、あの少年ではなかった・・愛する者と目標を持っていた。

《月光を追いかけよう・・それが私達の人生だから》そう言った蘭の言葉が響いてきた。
私は裏階段を登り、指定席に座った・・その場所には熱があった。
夏は終わらないと主張していた、夏物語は続く・・あの事件が来るまで。
その日も近付いていた・・季節の変りを告げる、あの叫びが木霊する日も迫っていた。

私は必要だと要求される・・その叫びに誘われる。
敏感度を上げろと女性達が背中を押す、最強で最後の挑戦者と自負するのならばと。
そして私は覚悟を決める、今でも後悔はしていない・・だが反省はある。
人の心の難解さに震え・・愛する事の難しさを知らされる。
その９月が来た・・忘れえぬ９月・・夏物語は終演に向かい進路をとった。
全員の笑顔を連れて・・その場所を示した、心の羅針盤を信じて・・

。

マキは翌年の3月にフロアーデビューをする、ＰＧ最年少記録を塗り替えて。

私はマキを感じて、自分にはスナックの方が向いてると思ったよ。

レンがＰＧを去る時に笑顔で言った、２２歳の美しい黒魔女が。

ハルカとマキ・・最高の後輩に囲まれて、絶対的なカスミ姉さんもいた。

本当に楽しいクラブでの仕事だった、レンはそう言って笑った。

その1年後、東京ＰＧの準備で私と蘭が先に上京した、ＰＧはナギサが責任者。

そしてカスミが圧倒的な、フロアーリーダーに成長していた。

サクラさんが引退して、アイさんが結婚退職した。

ユメ・ウミがツウィンズと呼ばれ、カスミと3本の大黒柱として存在した。

そしてハルカが２２歳、マキが２１歳で若手を引っ張った。

六本木ＰＧ開店時に、私は応援部隊として、銀河の奇跡3人を2週間揃えた。

２５歳の銀河の奇跡・・その破壊力は史上最強だった、六本木で一

晩で噂になった。

バブルで踊る人間達が押し寄せた、六本木ＰＧは開店から2年以上満席記録を繋いだ。

その中心で発光した、２４歳の流星のセリカ・・最初のフロアーリーダーだった。

赤の女、ローズが追い求めた・・東京ＰＧ責任者の蘭の生き方と、セリカの輝きを。

そして作り上げる・・ローズの世界・・薔薇の生き方に迫る存在。

大ママがローズに会った時に震えた・・瓜二つだと呟いた。

永遠の存在である・・真希が蘇ったようだと。

私は未来を知る事も無く、１３歳の夏を楽しんでいた・・少年のままで。

起源の一滴

灼熱のフロアーに、透明の女神が光臨した。
同じ道を進む者達が、その透明に触れて幸せを感じていた。
存在自体が強く主張する、色無き世界・・無の原色。
生命の源・・水・・その大海を作る、最初の一滴に選ばれし者。
透明度１００％、不純物は無い・・羊水の箱舟・・水の百合香。

私は指定席に座り、熱の高いフロアーを見ていた。
ユリカと蘭で、医師会の重鎮２人が座る３番席に入っていた。
静かなる会話で笑顔が出ていた、私は蘭とカスミが挟む初老の医師を見ていた。
あの総合病院の院長だった、穏やかな顔は相変わらずで、目だけに力があった。
その時に蘭からサインが飛んだ、【３番】【エース】【指名】と出して満開で微笑んだ。
私は少し焦って、静かに裏を回って３番席の蘭の側から顔を出した。

『院長・・ご無沙汰しています』と笑顔で頭を下げた。
「久しぶりですね、元気そうだね」と笑顔で返してくれた。
蘭が立って院長の隣に座るように促した、私は一礼して隣に座った。
「ほう・・その子ですか」と同席してる恰幅の良い初老の男が微笑んだ。
「はい・・小僧と呼ばれています・・小僧、○病院の院長・・佐伯先生」と紹介してくれた。
『よろしくお願いします・・ミホがお世話になります』と笑顔で言って頭を下げた。
「よろしく・・噂は聞いてるよ、楽しみにしてますよ」と佐伯院長

が笑顔で言った。
その笑顔の穏やかさに安心感があった、医療に携わった期間の長さを感じさせた。
『楽しみと言われても・・自分では挑戦ですから』と笑顔で返した。
「楽しみだよ・・学問の外にいる人は、不思議な事をするからね」と真顔で言った。
『教養は絶対に必要ですね、でも縛られる人が多いと思ってます』と真顔で返した。
私は素直になれてる自分を感じていた、経験からくるであろう強い存在を感じて。

「そうだね・・その弊害はあるかもしれんね」と佐伯院長が笑顔に戻り言った。
『先生と呼ばれる職業は、重圧が大きいんでしょうね・・でも若い時は、公務員やサラリーマンと同じ感覚になりがちですね』と笑顔で返した、佐伯院長は笑顔のまま私を見ていた。
「組織に属せば強さを試される、覚悟が無い者は・・誰かの道を歩もうとするんだよ」と佐伯院長が真顔に戻し言った。
『職業だから仕方ない事なんでしょうね・・俺は子供だから理解できないし、認められないけど』と真顔で返した。
「認めてはいかんよ・・医師は職業だが、相手にするのは命なのだから」と佐伯院長が笑った、私も笑顔で頷いた。

「明日・・ミホちゃんに会ったら、私の部屋に来てくれんかね？」と佐伯院長が笑顔で言った。
『もちろん・・素敵なご招待ですから』と笑顔で返した。
「関口君から君の事を聞いてね、関口君の提案に驚いたんだよ・・しかし今、会って欲しいと感じたよ」と佐伯院長が言った。
『関口先生の提案なら・・かなり難解な事ですね』と笑顔で返した。

「会って欲しいんじゃよ・・ヒトミと同じ病を背負う少女に」と佐伯院長が真剣な目で言った。
『そうですか・・関口先生は強い星を背負ってるんですね』と真顔で返した。
「そうだろうね・・その子の両親が、関口君が経験者だと調べて尋ねて来たからね」と佐伯院長が言った。
『何も出来ないけど・・会いたいですね』と笑顔で返した。
「1つだけ教えてくれないかね・・ヒトミちゃんの意思を感じた事に、確信が有るのは何故なのかを?」と佐伯院長が真顔で聞いた。

『ミホを預かってもらうので、お答えしますけど。
良し悪しの判断はしないで下さい・・表現し難い事ですから。
ヒトミの温度の変化を感じた時に、私は嬉しくて集中しました。
ヒトミの小さな手の平の中の、温度の流れを感じました。
確かに血液が巡っているのだから、微かな変化はあるのでしょう。
でも違いました・・そんな有機質な感覚じゃ無かったんです。
もっと無機質というか・・気体のような感じです。
俺はヒトミの母親に教えて、母親もそう感じたと言いました。
最初の頃は、手の平の中心点から、右に回ったり左に回ったりだけでした。
俺は色々話をして、それを解読しました。
右回りがＹＥＳで、左回りがＮＯだと思って、それをヒトミに確認しました。
そうすると、大きく強く右回りで示したんです。
それから・・乳児が言葉を覚えていくように、多様な流れが出てきました。
私も英語を覚えるような感覚でしたね、たまに大きく間違ったりして。
その都度ヒトミに怒られました、そして俺が完璧に解読すると笑ってました。

その時点でも・・俺は自信が無かったんです。
そしてヒトミの体調が少し悪くなって、高熱が続きました。
私もヒトミに触れる事が出来ないで、遠目に見ていました。
その時に関口先生に言われたんです、ヒトミに聞いてくれと。
どかが痛くて、どんな感じで辛いのかを聞いて欲しいと。
俺はヒトミに聞きました、ヒトミは伝えて来ました。
腰が痛いと・・私はそう言ったと思って、ヒトミの背中に触れた。
そして段々と降ろしていくと、お尻の少し前で右に大きく流れたんです。
それで検査したら、寝たきりで骨が少し神経に触れていたそうです。
驚く医師を見て、幼い私は不思議でした・・私には当然の事だったから。
ヒトミには意思もあるし、痛みも感じると知っていましたから。
ヒトミは体調が安定した時に、私に強く伝えて来ました。
触り方がいやらしかったって、激しく怒られました。
その時はヒトミのご機嫌取るのが大変でしたよ、ずっと怒ってて。
その少女らしい怒りが、俺に自信を与えてくれました。
背中の痛みを探り当てた事よりも、その不機嫌なヒトミが教えてくれました。
ヒトミには意思があると、そして俺は交信していると。
ヒトミの温度の変化・・あれは体温じゃないと思っています。
あれは多分・・心の温度・・俺はそうだと思っています。
初めてお医者さんに話しました、関口先生にも話していません。
医学を専攻した人に話すのは・・失礼な気がしてました。
でも確信を持って言えます・・俺はヒトミと会話していたと。
一緒に笑ったし・・よく怒られましたから。
俺にとってヒトミの思い出は、他の友達の思い出と全く変りません。
ただ違うのは・・ヒトミを異性として好きだったという事だけで

す』

穏やかな初老の2人に挟まれて、感情的になっていた。
蘭の青い炎とユリカの暖かい波動が包んでくれて、私を守ってくれているのを感じていた。
「ありがとう・・私は人として嬉しいよ、そして心から期待する・・君にしか出来ない事を見せて欲しい」と佐伯院長が笑顔で言った。
『会ってみます・・私もヒトミに対して、後悔と反省があるから』と笑顔で返した。

私は2人の院長に挨拶をして、指定席に歩いた。
女性達の暖かい視線が私を見守っていた、ユリさんと目が合い薔薇で微笑んで頷いた。
私も笑顔で頷いて、指定席に戻った。
シオンがコーラを持って来て、ニコちゃんで私を見た。

「先生・・シオンもそう思うよ・・絶対に心の温度だよ」と笑顔で言った。
『うん、シオンありがとう・・そのシオンの言葉が1番嬉しいよ』と笑顔で返した。
ニコちゃんシオンの背中を見送って、フロアーを見ていた。
映像が流れていた・・不機嫌なヒトミのご機嫌を必死でとる、幼い私が映っていた。

「覚悟したのか・・何か1段上がったな」とカスミの声で我に返った。
『必死で上がらないと・・全員の背中が見えなくなりそうで』と笑顔で返した。
「そうだよな〜・・ユリカ姉さん、まさに別世界だよ」と輝く笑顔で言った。

『ユリカの水の意味・・もう1つ感じたよ、水源なんだって・・大海を作り出す、最初の一滴みたいな』と笑顔で返した。
「うん・・良く分かるよ、あの静寂を感じると」と美しい笑顔を残し、銀の扉に消えた。
私は感じていた、私に何かあると、最初に側に来るのはカスミだと。
その下手くそな表現で常に元気付けられる、温かい言葉が直接響いて来ると思っていた。

終演前のフロアーは、完全燃焼の熱が包んでいた。
私は蘭の満開笑顔を見ながら、ヒトミを感じていた。
《もう一度やってみるよ・・ヒトミ・・伝えたかった事が、まだ沢山あるから》と心で呟いた。
強く温かい波動が来て、ユリカを見た・・爽やかに微笑んでいた。
私も笑顔で見ていた、ユリカの静寂と蘭の青い炎を。

最後の5番席の3人が帰り、終演を迎えた、ユリカも含むメンバーが10番に揃った。
私は笑顔で10番席に歩いた、蘭が満開ニヤで迎えた。
「自信たっぷりな歩きだね～」と満開ニヤで言った。
『報告します・・ユリカ抱っこだけです』とニヤで言った。
「恒例抱っこ、明日からはどうするんだい？」と満開ニヤ継続で聞いた。
『出勤前にします』と笑顔で返した、ユリカがニヤで見ていた。
「よし・・カスミリーダー」と蘭がカスミを観た。

「はい・・全員でお礼を言おうと思います」とカスミが立って言うと、全員が立ってユリカを見た。
「ユリカ姉さん、本当に勉強になりました・・ありがとうございます」とカスミが頭を下げて。
「ありがとうございます」と女性全員が頭を下げた。

「喜んでもらったんなら、私も嬉しいです・・私も楽しかったですよ」とユリカが爽やか笑顔で返した。
女性達の笑顔があった、充実感が伝わってきていた。

「明日から学校の人も多いと思います、無理せずマイペースで行きましょう」と蘭が満開で微笑んで、解散になった。
私はマキとシオンとＴＶルームに行き、ユリカと蘭を待っていた。
「荷物運んだの？」と久美子が笑顔で私に聞いた。
『うん、シオンの車で、当面必要な物だけね』と笑顔で返した。
「中学は始業式、半日だよね・・良いな～」と久美子がニヤで言った。
『高校もでしょ・・久美子宿題してないから、居残りだね～』とニヤで返した。
「エースじゃないんだから・・午後からレッスンがあるのよ」と笑顔で睨んだ。

『明日・・Ｊ・塚本を7時に誘うよ、頑張れよ』と笑顔で言って、ご機嫌をとった。
「任せて・・必ず合格してみせるよ」と久美子が可愛く微笑んだ。
『かなり乗り気だね～』とニヤで聞いた。
「リッチハートのステージは、音楽やってれば憧れるよ」と久美子が笑顔で返してきた。
『俺も楽しみだ～・・ライブハウス初体験』と笑顔で言った。
「入れるのかな・・１３歳」とマキがニヤで言った。
『マキ・・俺が夜街で入れないのは、ソープだけだよ』とニヤニヤで返した。

「ソープに入れないのを、なぜ知ってる？」と後からカスミが不敵で言った。
『多分ね・・多分の話』とニヤで返した。

「入れるよ、エースなら・・挑戦してみれば」とユリカが爽やかニヤで言った。
『ユリカが楽しむだけだから、絶対に行かない』とウルで返した。
「そんな理由で行かないんだね・・実は行きたいんだね」と蘭が満開で睨んだ。
『行きたくないよ・・女性をお金で買うなんて、絶対に出来ないよ』とウルで返した。
「ヨチヨチ・・良い子だね～」と満開笑顔でヨチヨチしてくれた。

「ヨーコちゃん接客してたの？」とユリカが爽やかニヤで聞いた。
『うん・・ＢＯＸが満席で、カウンターのサラリーマン３人組の前に立ってたよ・・大ママが１番偉そうな人の横に座って』と私もニヤで返した。
「ユリカ姉さんも、煽るの好きですね～」とマキがニヤでユリカに言った。
「はい・・大好きで～す」とユリカが爽やかニヤで返した。
「マキ、今から行くよ・・ハルカも行くだろ」と蘭が満開で言った、ハルカがマダムを見た。

「マキをちゃんと送って帰るんじゃよ」とマダムがハルカに微笑んだ。
「はい、必ず送り届けます・・マキ、行くよ」とハルカがニヤで言った。
「えーしゅは明日から学校だから、お休み～」と蘭が満開ニヤで言った、全員がニヤで見た。
『行くもん・・学校も行くもん』とウルウルで言った。
「仕方ないね～・・居眠りするなよ」と満開笑顔の蘭とユリカの後に続いて、ＴＶルームを出た。
「シオンも行きま～す」とシオンがニコちゃんで私の腕を組んで来

た、私は笑顔を返した。
「きゃしゅみも～」とカスミが意を決したように、大声で言って蘭に並んだ。
「きゃしゅみ・・サクラさんの店、遅刻するなよ」と蘭が満開ニヤで言った。
「大丈夫・・ここは行かないと、ヨーコが気になる」と不敵で返した。
「気になる子が多くて、カスミも大変ね～」とユリカがニヤで言った、カスミがウルで頷いた。

ユリカの店に入って、衝撃の光景を目にする。
カウンターは親父の連れの若い大工が２人で座り、ヨーコが一人で接客していた。
親父は奥のＢＯＸで大ママと話していた。
他の２組のＢＯＸにミサキとユリカの店の女性が付いていた。
私達は大ママに手招きされて、奥のＢＯＸに入った。
笑顔の親父を蘭とシオンで挟み、カスミが大ママの奥に、私が大ママの隣に座りハルカが座った。

『マキ・・何座ろうとしてるの？・・ヨーコの応援だろ』とマキにニヤで言った。
マキがハッとしてユリカを見た、ユリカは爽やかニヤで返した。
ユリカとマキがカウンターに行って、ユリカはＢＯＸに挨拶に行った。
「厳しいな～・・夜街のエースは」と親父が笑顔で言った。
『まぁあの位はこなすでしょう』とニヤで返した。

「父さん・・もっと厳しく言って下さい、生意気で」と蘭が満開ニヤで言った。
「生意気じゃないと、ＰＧのＮＯ２と同棲はできんだろ～」と親父

がニヤで返した。
「次は私の部屋を、小僧に準備してますから」とカスミが親父に微笑んだ。
「小僧は近い内に刺されるな、親より先に死ぬなよ」と親父が笑顔で言った、全員が笑っていた。
「勝也お父さん、シオンと申します、よろしくお願いします」とシオンがニコちゃんで頭を下げた。
「よろしくシオンちゃん・・なるほど～律子が一目で気に入るわけだね」と親父が微笑んだ。
「どうしてなのか、聞いても良いですか？」とシオンが可愛いニコちゃんで言った。

「律子がねシオンちゃん見て、案外小僧も普通の男かなって思ったと言ったよ。
シオンちゃんが蘭だったらね、俺も今会ってその意味が分かったよ。
シオンは律子の１０代の時にそっくりだから、そう思ったんだと気付いたよ。
律子は今はあんな感じだけど、１０代の頃はその言動が自由過ぎて浮いていた。
なんせ戦後の復興が一段落した頃だったから、今より女性にとって不自由な時代だった。
律子はそれでも曲げなかった、自分らしくにこだわったんだ。
アスカは知ってるけど、怖いと思うほどの強い意志だったよ。
そして経験を重ねても、基本は変らない・・今でもこだわってる。
だから、今回の小僧の事も許すし、シズカの奔放な生き方にも何も言わない。
シオンは本当に似てると思うよ、俺は律子と一緒にいたから分かる。
律子はシオンが蘭だったなら、小僧は母親と同じタイプを選んだ

と思ったのさ。
だから・・案外普通の男かなって思ったと言ったんだよ。
一目で好きになるさ・・自分を好きかと聞かれるのと同じだから」
親父はシオンのニコちゃんを見て、笑顔で言った。
「確かに、似てますね・・最近のシオンは」と大ママが微笑んだ。
「シオン嬉しいです、将来像として、律子母さんに憧れてるから」
と最高ニコちゃんで言った。

『ハルカ・・そんなに睨んでカウンター見ないの、フロアーレディーが』とハルカにニヤで言った。
「睨んでないよ・・明日のイメージトレーニング」とハルカがニヤで返してきた。
「ほう・・明日は何処に、修行に行くのかな?」とカスミが不敵で言った。
「ミチルママのお店です・・エースがホノカ姉さんの穴埋めしてみろって、煽るから」と笑顔で返した。
「それは又、重圧かけたね〜」と大ママが笑顔で言った、ハルカもウルで頷いた。

「ハルカちゃんは素敵だよ・・目配りが良いよ、でも前に出るタイミングを計ってるよな」と親父が笑顔で言った。
「さすが、小僧の親父ですね〜」とカスミが笑顔で言った。
「建設現場でも同じ、目配りが出来ん奴は・・仕事覚えが遅いよ」と親父が言った。
「前に出るタイミングを計ってると、どこで思ったんですか?」と蘭が満開で聞いた、ハルカは真剣に聞いていた。
「小僧に怒られそうだけど・・そこまでは話すか」と親父が私を見た、私は笑顔で返した。
「お願いします」とハルカが微笑んだ。

「人は出るんだよ・・どんなに隠しても、行動の細部に出る。
俺は現場を預かってるから、事故が最も怖いんだよ。
だからそこは徹底的に見る、その些細な動きまで。
事故ってね、最初の頃は遭わないんだ、緊張してるし集中してるから。
余計な事を考える余裕がないから、少し慣れた頃が最も危ない。
技術が無いくせに、余計な雑念が入る余裕ができる。
悩み事を考えたり、彼女の事を想ったりして・・集中が切れる。
そんな時、人は行動に出る・・どこか散漫な動きになってしまう。
ハルカのはそれと違うけど、雑念があるんだよな。
ようするに考えてる、確かに経験不足は仕方ないだろう。
しかし考え過ぎてると思った、相手の会話の途中で返しを考えてる。
だからそれ以降の話を聞く時に、少し集中が切れる感じがした。
それは結局、前に出るタイミングを計ってる、歳上の女性達に囲まれてるから。
だがそんな遠慮は失礼だよ、蘭もカスミもそう思ってるぞ。
客に対してだけなら良いんだ、でも同じ舞台に立つ仲間に対しては失礼だよ。
ハルカ・・お前の将来性を感じて言うぞ、慣れるな・・そして計るな。
経験不足を補う方法は1つしかない、初心で取組むんだよ。
初めて舞台に立った気持ちを持ち続けろ、それが今のハルカの最大の武器なんだから。
前に出るタイミングを計るな、自分を信じて流れに任せろ。
ハルカは絶対に素敵な女性になるよ・・その目配りは常人を遥かに超えている。
今は何も作らなくて良いぞ・・ハルカらしくやってみるんだ」

親父は娘に話すように、強く優しく言った、ハルカは真剣に聞いていた。
「ありがとうございます・・悩んでた突破口が見えました」とハルカが美しく微笑んだ。
「頑張れよ・・期待してるぞ」と親父も笑顔で返した、ハルカは嬉しそうに笑顔で頷いた。
「父さん、小僧が内心怒ってるよ～」と蘭が満開ニヤで言った。
「小僧はその次の次の次まで考えてるから、1個くらい良いだろ～」と親父が蘭にニヤで返した。
「勝也兄さん、魅宴にも来て下さいね・・お願いします」と大ママが笑顔で言った。
「もちろん行くけど、楽しむだけだぞ」とニヤで返した。
「大丈夫ですよ、引き出し上手が揃ってますから」と大ママが笑顔で返した。

「小僧・・魅宴なら誰が楽しめるんだ」と親父が笑顔で言った。
『ミコト・・その本質を言い当てたら、お父様って呼ぶよ』とニヤで返した。
「皆・・今の台詞聞いたな?」と親父が笑顔で聞いた。
女性全員がニヤで頷いた。
「楽しみが増えたよ・・楽しい夜だ」と親父が笑って、全員が笑顔で私を見た。
その時リアンが笑顔で入って来た。

「もう、パパ～こんな所で浮気して」と獄炎で微笑んで、シオンを押しのけ隣に座った。
「パパって呼ぶなって、怪しい関係みたいだろ・・それにシオンに意地悪するなよ」と親父が笑顔で言った。
「いいの、シオンは私の実の妹だから」とリアンがニカで返した。
「リアン、残念でした～・・勝也父さんのタイプは、シオンなので

す」とシオンが威張った。
「えっ！・・そうなのパパ？」とリアンが笑顔で睨んだ。
「そうだよ・・そう言わないと、俺は殺される」とニヤで返した、全員が笑って、リアンがシオンを見ていた。
「シオン・・律子母さんの若い頃に、そっくりなのです」とシオンがニコちゃんで言った。
「て事は、シオンとエースが子供を作ると、エースのような子供が産まれるの？」とリアンが獄炎ニカで私を見た。

「それはそうかもです・・エース、実験しましょうか」とシオンがニコちゃんニヤで言った。
「シオン・シオンだよね、シオンに化けたカスミじゃないよね」とリアンが嬉しそうにシオンに言った。
「下ネタを、全部私に振るのは、やめてくだちゃい」とカスミが不敵ウルを出した。
全員の笑顔があった、日付は9月1日になっていた。
長い夏休みが終わった、私にとって忘れられぬ夏休みだった。

この夜、私にとって、大切な出会いがあった。

佐伯院長である、穏やかな初老の紳士だった。

精神科医だったからだろうか、その底知れる懐に驚いていた。

私は沢山の事を学ばされた、佐伯という大きな男から。

その考えは学問を超えて、悟りに近い感覚だった。

私は元来の好奇心を全面に出して、佐伯という男に挑戦した。

古狸の佐伯翁はその都度、新たな問題を出してきた。

お互いに楽しんでいた、私は必死でもあったが、余裕の演技を続けた。

私が院長室を訪ねると、いつも心理学の話をしてくれた。

私は疑問に感じた事を逐一問うた、佐伯翁はその度に自分の考えを語った。

それは和尚との問答のようで、私には大切な時間だった。

そして佐伯翁が沢山の本を私にくれた、哲学から専門書・・純文学に至るまで。

知識は財産じゃよ、そして経験が力じゃよ・・お前は学問を選ばんだろう。

しかし知りたいんだろ・・ならば学べ、学ぶ事はどんな状況でも出来るよ。

そして自分の正解を導き出せ、自分だけの正解を・・学ぶとはそういう事だよ。

優しい言葉だった・・私のミホに挑戦する姿を、ずっと影で見守ってくれた。

私が上京する時に佐伯翁が贈ってくれた・・私の原点、若山牧水歌集と。

1＋1は、2だけじゃないぞ・・と言う言葉。

最近やっと分かったよ、佐伯の爺さんの深さが。

常に選択肢を2つ以上持てと言ったんだね、絶望した時にそれを選ばないように。

あの問答が教えてくれた・・人の心に悪意は存在しないと。

悪意とは・・心に存在するものでないと、欲に存在するものだと。

ありがとう古狸・・あの声が今でも聞こえるよ・・今を生きろと言う声が・・。

2009

恩師の言葉

ネオンを見下ろす箱舟、雑居ビルの密林には冒険者が闊歩していた。
誰かが定めた暦の８月は終了して、９月がスタートしていた。
だが外気の熱は下がる事なく、夏の主張は強いままだった。

「こんな所で、ごめんねリアン」と私の後ろからユリカが爽やかニヤで言った。
「ユリカ・・怖いよ、ＰＧを引きずってるね」と獄炎ニカで返した。
「ＰＧ楽しいよ～・・でもリアンの熱の上がりが怖いよ」とユリカが微笑んだ。
「その前に、来週の魅宴が重圧だよ」とリアンがウルで返した。
「リアン、魅宴に立つのか」と親父が笑顔で言った。
「パパが開店で入って指名して」とリアンがウルで言った。
「来週・・火曜なら行けるぞ」と親父が笑顔で返した。

「大ママ、エースそれで調整お願いします」とリアンが笑顔で言った。
「了解・・いよいよ来るんだね、リアンの魅宴」と大ママが嬉しそうに微笑んだ。
『ハルカ・・調整よろしく、レンとハルカとマキ』と私がハルカにニヤで言った。
「了解・・私もローズに立つわ、やってやる」とハルカがリアンに微笑んだ。
「動き出したね・・私もゴールド早めにしてね」と蘭が満開で微笑んだ。
『来週の平日、安みの前の日にしよう』と笑顔で返した。
「私も～・・どこからかな？」とカスミが不敵ニヤで言った。

『カスミは当然、魅宴から』とニヤで返した。
「く～・・やっぱり、厳しい所からだな～」とカスミが笑顔で返した。
「カスミ・・厳しくないよ、激しい下ネタは禁止だけど」と大ママが笑顔で返した。
「カスミ・・いざとなった時が、封印だね」と蘭が満開ニヤで言った。
「カスミの魅宴・・これも楽しみだね～」とユリカが爽やかニヤで言った。
「がんばります」とカスミも笑顔で返した。

『早目に出とかないと・・ユリさんノリノリだから、急かすかも』と全員を見てニヤで言った。
「小僧・・そこまでやるのか、楽しそうだな」と親父が笑顔で言った。
『最高の演目だよ・・魅宴のユリ』と笑顔で返した。
「絶対見たい・・遅刻してでも見に行く」とカスミが言って。
「見逃せないよね～・・そこだけは」と蘭が満開で微笑んだ。
「大ママ、また泣かないといけませんね」とユリカが微笑んだ。
「そらは間違えないね・・ずっと想像してきたから」と大ママが真顔で言った。

「タミさん・・マダムはずっと探してたよな。
マキの母親真希に会って、そしてアスカに会って。
自分も託せる人材を、ずっと探していた。
そして巡り合えた、それがユリなんだよな。
強い意志は伝わるんだよ、呼び寄せる・・そしてチームができる。
魅宴はアスカ、ＰＧはユリが呼び寄せた。
何かを作り出すために・・何かを表現するために。
楽しみだよ・・数十年かけて作り上げる作品は・・強い意志を持

つだろうから」
親父が大ママに笑顔で言って、立ち上がった。
全員で立って見送った、親父がマキとヨーコに笑顔で話しかけて支払った。
ユリカとマキとヨーコが見送りに出て行った。

「素敵なお父様です～・・喧嘩はいけません」とシオンがニコちゃんで私に言った、私はウルで頷いた。
ミサキがハルカの隣に座り、マキとヨーコも帰ってきて座った。
「はい・・ヨーコちゃん・・それと少しだけどマキちゃん」とユリカが笑顔で封筒を差し出した。
「えっ！」と2人が同じ反応を示した。
『仕事の報酬なんだから・・ありがたく受け取らないと失礼だよ』と私が笑顔で言った。
「ありがとうございます」と2人が笑顔で受け取った。
「私も嬉しいわ・・あなた達の最初の報酬を渡せて」とユリカが爽やか笑顔で微笑んだ。

「大ママ・・1つ最後にお話しして欲しいんですけど」とユリカが笑顔で言った。
「今夜は気分が良いから・・どんな話だい？」と大ママが笑顔で返した。
「律子母さんの、若い時の生き方・・それが聞きたいんです」とユリカが微笑んだ。
全員が期待の笑顔で大ママを見た、大ママは笑顔で頷いた。

「私はね・・皆の想像通り、不良少女だったんだよ。
中学卒業して、出来始めの繁華街でたむろして遊んでた。
その時に街でマキの母親、真希姉さんに拾われた。

私は2日ばかりまともな食事もしてなくて、マダムの小料理屋に連れていかれた。
私が１６歳・・真希姉さんが１９歳だった。
真希姉さんは１９歳と言っても、夜街デビューして3年経っていた。
それは美しい人だったよ、歩くだけで輝きが溢れていた。
そして小料理屋に居たんだよ、律子姉さんが・・２１歳の素敵な女性だった。
真希姉さんが、律子姉さんの横に私を座らせて、隣に座った。
その当時の私は、全てに対して反抗的だったけど、反抗すら出来なかった。
２人は圧倒的に本物だった、だから逆らえなかった。
私がだまっていたら、律子さんがマダムに言った。
この子にご飯だけ出してって、マダムは笑顔でご飯を出してくれた。
それだけを食べてみて、そして忘れないで・・将来どんなにお金持ちになっても。
律子姉さんが笑顔でそう言った、私はご飯だけを食べてみたんだ。
その美味しさに驚いて、夢中で食べたよ。
食べ終わった時に、律子姉さんが私の顎を掴んだ。
ねぇ・・どうして無駄にするの？その素質と才能をと真剣に言った。
私は震えてたよ、それまでに子供としての修羅場は潜ってた。
でも顎を掴まれ目を見られて言われた、その言葉で震えていたんだ。
初めてだった、初めて正面から他人が向き合ってくれた。
私に何の才能があるって言うんですかって、私は叫んだんだよ。
押される何かを押し返したくて、必死で叫んだ。
そうしたら、律子姉さんが笑顔になって立ち上がった。
教えない・・感じるんだよ、私が今からあんたにチャンスをやる

から。
そう言って、真希姉さんの前に立った、そして頭を下げて言ったんだ。
この子を真希の店で使ってやって、私が身元保証人になるからって。
私は固まってたよ、見ず知らずの会ったばかりの相手の、身元保証人になる人を見て。
律子姉さんがそう言うんなら仕方ないですね、頑張るかい？
真希姉さんが真剣な顔で聞いた、私は何も言えなかった。
最後のチャンスだと思ってね、今を逃がしたら、何も残らないよって律子姉さんが言った。
強い言葉だったよ・・その迫力が圧倒的で、私は泣いたんだよ。
嬉しくて、そして今まで無駄な時間を過ごした事が悔しくて。
頑張ります・・その言葉を言うのがやっとだった。
よし・・今、あなたは生まれ変わるから・・名前を変えよう。
夜の女の名前を付けようね、そう律子姉さんが微笑んで。
生まれ変わるなら、スタートの意味を命名しようねって、真希姉さんも微笑んでくれた。
律子姉さんお願い、真希姉さんが言った。
あなたは時代を作れる、それだけの力を持ってる・・私はそう信じてる。
だから時代の始まりを贈るよ・・あなたは今から・・飛鳥だよ。
私がどんなに嬉しかったか、言葉に出来ない。
私は忘れる事が出来ない、あのご飯の味と・・飛鳥の由来は。
それから、必死で真希姉さんに付いて、死ぬ気で仕事をしたよ。
律子姉さんと、勝也兄さんが・・いつも遠くから見ていたから。
私もマダムもエースが２人の子供だと分って、本当に感動したよ。
今の夜街の常識・・１８歳以下の者に身元保証人を付ける事は、あの２人が作った。
律子という人は、本当に強い人だよ・・全てを受入れる覚悟があ

るんだ。
だから他人に何も強いない、私はあの顎を掴まれた時の顔を忘れられない。
本気で向き合ってくれた・・不良少女の私と・・正面から。
私は追い求めてる・・真希姉さんの生き方と、律子姉さんの生き方を。
そして感じた・・エースの言った原作者・・絶対にいると。
今回のマキの挑戦の筋も、ヨーコの身元保証人にも律子姉さんがなった。
私とユリは幸せだよ、今でもその生き方に憧れられる人がいるんだ。
２１歳の律子姉さん・・確かにシオンはそっくりだよ。
もう少し、シオンが自分の主張ができれば・・そして伝えたいと強く想えばね。
律子姉さんの生き方・・それは心に従う事なんだ。
エースは案外普通の男かも知れん、母親と同じタイプを愛したんだから。
皆にも覚えていて欲しい、今があるのは周りの全てが居たからなんだと。
そして私達は最高の時代に生まれたんだと。
追い求める者と託せる者がいる・・これ以上の幸せはないんだから」

大ママの涙の言葉が全員に響いていた、私は母が自分のイメージ通りで嬉しかった。
「やっぱり・・ユリ姉さんを戻したのは、律子母さんですね」とユリカが微笑んだ。
「そうだと思うよ・・ユリは絶対にあの生き方に憧れるよ」と大ママも笑顔で返した。
「最強の爆弾・・勝也と律子、まさかそれまで考えてたんじゃない

よね」と蘭が満開で微笑んだ。
『蘭に対してだけは考えてた、律子爆弾』とニヤで返した、蘭が満開で頷いた。
「素敵な親子関係だよな～・・なんか嫉妬しそう」とカスミが不敵ニヤで言った。
「カスミ・・シズカともっと話してみると、絶対に嫉妬するよ」と蘭が満開ニヤで言った。
「あの子の奔放な生き方・・心が自由なんだよね～」とユリカが微笑んだ、カスミも笑顔で頷いた。

「意志の強いシオン・・確かに最強だね」とカスミが不敵で言った、シオンがニコちゃんで返した。
「2人は母さんに怒られた事あるの？」と蘭が満開ニヤで言った。
「ヨーコも恭子も無いと思います・・私はあるけど」とマキが反省顔で言った。
「あ～・・あれがあったね」とヨーコがニヤで言った。
「マキ・・述べよ」とカスミが不敵ニヤで言った。

「私・・産まれつき髪が少し赤くて、小学校までは伸ばしてました。
ご存知の通り、中学は校則が厳しくて・・入学式の日に生徒指導の先生に呼ばれました。
私はちゃんと2つ結びにしてたけど注意されて、産まれつきだと言った言葉も無視されて。
その指導の女の先生から、黒く染めて切って来いと言われて。
仕方なくお小遣いはたいて、黒く染めて切りました・・祖母に言えなくて。
その夜、部屋で落ち込んでたら・・母さんが来ました。
マキ・・どうして、なぜそこで止めるのって、真剣に怒られた。
私は言われた意味が分らなくて、先生に逆らえないと言った。
逆らわなくて良いんだよ・・でもねマキ、悔しくないの？と聞か

れた。
悔しい・・悔しいけど、どうして良いか分らないと言って泣いてしまった。
マキ、泣いたら駄目・・今、ここで泣いたら負けを認めるのよ。
マキ・・母さんはマキに主張して欲しい、自分の個性を表現して欲しい。
親から受け継いだ身体を否定する、そんな教師に、無抵抗で敗北をして欲しくない。
強い言葉で言われて、私はそれで前を向けた。
母さん、どうすれば良いの？私は長く綺麗な髪が好きなのって言ったんです。
そうしたら教えてくれました、その言葉が今の私を作りました。
髪なんて卒業すれば好きなだけ伸ばせるでしょ、違う好きなパターンも有るでしょ。
母さんはそう言って、笑顔で聞いたんです・・芸能人では誰が好きかって。
私はアグネス・チャンが好きって答えた、そしたら男の芸能人は誰？って聞き返された。
私は矢沢永吉が好きで・・エーちゃんって答えた。
そうしたら母さんが笑って、ほらあるじゃない違う好きがって言うんです。
私は言ってる意味がまだ分らなくて、戸惑ってたら。
鏡の前に私を座らせて、母さんが後からポマードを私の髪に付けた。
そしてリーゼントを作ってくれたんです、私は嬉しかったんです。
母さんの熱い想いが伝わってきて、私も期待されてると思えたから。
そして母さんが笑顔で、思った通り素敵じゃない・・女子は肩までだからＯＫよ。
女子からラブレター貰うわよ、母さんがそう言って笑いながら帰

って行きました。
私は嬉しくて、それから必死で、リーゼントを綺麗に作る研究をしました。
私は唯一、一度だけ本気で怒られました・・自分を曲げてスネていた時だけ。
私にとって、このリーゼントスタイルは、大切な物なんです。
いまではどんな髪型よりも好きです、私を1番表している気がするから。
ドレスを着る時がきても、出来るだけこのスタイルでやりたいと思っています。
無抵抗で敗北を認めるなと・・大切な教えが詰まっているから。
否定されても、主張しろと・・憧れの母が教えてくれたから。
毎朝・・髪を作る時に・・あの母の言葉が聞こえてくるから」

マキは笑顔でそう言った、全員が優しい笑顔でマキを見ていた。

「マキ・・私もマキに1つプレゼントをするよ。
律子姉さんのその話の、もう1つの深い意味を。
マキのお父さんは、4分の1西洋の血が入っていたんだよ。
お父さんも、それで苦しんだ、彫りの深い顔と赤い髪で。
その事を律子姉さんは、もちろん知っている・・だからマキに伝えた。
親から受け継いだ身体を否定する、そんな教師に負けるなとね。
マキは見せてるんだね、その想いを・・私も素敵な髪型だと思うよ。
エース・・マチルダに会わせるべきは誰か・・分ったかい。
身体的差別意識に最も敏感な人・・次はその人に会わせてあげなよ」

大ママの言葉でマキは涙を見せて、私はハッとして気付いた。

「なぜそこで止めるの・・本当に素敵な言葉だよ」とカスミが呟いて泣いていた。
「本当ね～・・言えないよ、その言葉は・・愛情がないと」とリアンが微笑んで。
「マチルダの喜ぶ顔が見えるね、母さんって呼ぶマチルダが」とユリカが微笑み。
「私も目指そう・・その言葉で語れる、憧れの母を」と蘭が満開で微笑んだ、全員が笑顔で頷いて終宴を迎えた。

大ママが全員分を支払って、お礼を言って店を出た。
ハルカとマキをタクシーに乗せて見送り、リアンとシオンを乗せて見送った。
カスミがタクシーに乗り、手を振って別れた。
私は蘭とヨーコとタクシーに乗り、家路についた。

『ヨーコ、ご機嫌だね』と隣に座るヨーコに微笑んだ。
「接客の難しさが少し分って・・挑戦する楽しみが出てきたよ」とヨーコが可愛く微笑んだ。
「良いね～・・難しい事が楽しめるって」と蘭が満開で微笑んだ。
「はい・・マキと競えますから」とヨーコが蘭に微笑んだ。
「なるほど・・可愛いな～ヨーコ」と蘭が満開笑顔で言った。
「嬉しいです～・・蘭姉さんに言われると」とヨーコも清楚な笑顔で返した。
ヨーコのアパートに着き、手を振って別れた。

「最新型だね・・ヨーコも、ホノカに近いよ」とニヤで言いながら肩に乗ってきた。
『蘭はＬ２８００の、城嶋スペシャルだろ』とニヤで囁いた。
「そうなの～・・私はユリ姉さんと同じＬ型なのだ」と満開ニヤで返してきた。

『なら大丈夫だね、国産にも外車にも負けないさ』と囁いた。
「マチルダポルシェ・・今どこを走ってるのかな～」と囁いて瞳を閉じた。
『ドイツが産んだ、最高のエンジンだから・・大丈夫だよ』と囁いて夜空を見ていた。

夜空に月が浮いていた、その光で入道雲が照らされていた。
《マチルダ・・次回を楽しみに・・面白い女に会わせてあげるよ》と心に囁いた、暖かい波動が包んでくれた。
それからが大変だった、アパートに着いても蘭は爆睡していた。
部屋に入り、蘭を起こして化粧を落とすのを支えて。
照明を消してパジャマに着替えさせ、部屋を片付けて窓を開けてベッドに戻った。

『りゃん、寂しかった』と優しく言ったが反応が無かった、熟睡蘭のニヤの寝顔があった。
私は蘭を腕枕して、額にキスして眠りに落ちた。

翌朝、多分緊張で目覚めた。
シャワーを浴びて、歯を磨いた。
朝食にトーストとハムエッグにレタスとキュウリスティックを添えた。
蘭が眠っていたので、キッチンのテーブルで一人で食べて着替えた。
久々に制服を着て、少し気合が入って、蘭の部屋に行った。
蘭の寝顔の額にキスをして、歩いて出掛けた。
チャリをまだ取って来ていなかったので、早目に出たのだ。

鼻歌混じりで宮崎駅まで歩いて、駅の売店でジュースを買って飲みながら歩いた。
「か～・・誰かと思った！」と通り過ぎたチャリの女子高生が振向

いた。
『久美子・・制服が可愛いね』とニヤで言った。
「もでしょ・・・も！」と笑顔で睨んだ。
『も・・・可愛いね』と笑顔で返した。
「今朝は歩きなの・・頑張るね～」とニヤで返してきた。
『後に乗せて』とウルで言った。
「駄目～・・・胸触るでしょ」とニヤ継続できた。

「久美子・・彼氏出来たの～」と女子校生2人組が笑顔で言った。
『お姉さん・・素敵だ～、やっぱり成熟度が久美子と違う』と笑顔で言った。
「あら～・・・良い子じゃない」とニヤで返された。
「やめた方が良いよ・・じゃあねチャッピー」と久美子がニヤで言って、自転車を漕いで行った。
「あなたがチャッピー・・キャ～～」と2人が面白がって、逃げるように漕いで行った。
私はウルで見送って、学校を目指して歩いていた。

「ちょっと待ちな！・・なぜこんな方向を歩いてる」と後から声がした。
『道・・間違えた』とウルして振向いた、同級生の詩織が笑顔で立っていた。
「ぼく・・いくちゅになりましたか～」と隣に並び笑顔で言った。
『じゅーしゃんしゃい』とニヤで返した。
「で・・事実は？」とニヤで聞き返された。
『引っ越した・・俺だけ』とウルで答えた。
「事実だったな・・夏休み中、家出してたの」とニヤ継続で言われた。

『なぜそんな根も葉も無い噂が』と笑顔で返した。

「夏休みには、登校日ってあるの知ってる？」と笑顔で返された。
『何それ・・美味しいの？』とニヤでとぼけた、私はすっかり忘れていた。
「やっぱり・・何も知らないんだね、ノリ先輩の事とか」と真顔で言った。
『番長・・逮捕されたの？』と笑顔で返した。
「それなら良いけど・・〇〇高校ともめてるらしいよ」と詩織がニヤで言った。
『暇な人達だ・・高校生相手に』と笑顔で返して、正門から学校に入った。

『詩織のせいで、早く来過ぎた』とウルで言いながら、教室に入った。
「私のおかげで・・囲まれずに早く来れたんでしょ」と私の前の席に座り笑顔で言った。
『スターは辛いよ』とニヤで返した、級友がどんどん登校してきて。私は囲まれて、事情聴取されていた・・私は笑顔でとぼけていた。

「小僧・・カモ～ン」と大きな声で呼んだ、３年の女番長バルタンだった。
『バルタン・・また綺麗になったね、一夏の経験したな』とニヤで言って近付いた。
「してない・・綺麗になったけど」と笑顔で返された。
『して・・何でしょう？』と聞いた。
「屋上に・・よ・び・だ・し」とニヤで言った。
『俺まだ未経験だから、優しく教えてね』とウルで言うと、ニヤで腕を掴まれ連れて行かれた。

屋上には３年の悪女６人と、悪男３人がいた。
『怖い・・袋にされるんだ』とウルウルで近付いた。

「小僧・・生きてたか～」と口々に言われた、私はウルで頷いた。
「小僧・・○○高校の情報教えろよ」とバルタンが言った。
『偏差値低くて・・名前漢字で書ければ合格するよ』と笑顔で返した、全員が笑っていた。
「その情報じゃない・・生徒の情報」と笑いながらバルタンが言った。

『3年の普通科に、良子ってすっっっごい可愛い子がいる』とニヤで言った。
「それでもない・・素行の悪い男子」とバルタンがニヤで返した。
『マコちゃんがトップだよ、誰ともめたのノリ番長』と笑顔で聞いた。
「1年の・・ミチオって奴らしい」とバルタンが真顔で言った。
『○中出身のミッちゃんか～・・好きだな～ノリ番長も』と真顔で返した。
「やばい奴なの？」と後の女子が聞いた。
『やばいよ・・馬鹿だから、集団で来るタイプ・・それにしつこい』とウルで言った。
「ノリちゃん・・骨折受けたんだよ、それでも来る？」とバルタンが心配そうに言った。
『内容によるよ・・何したの？』と真顔で聞いた。

「女でもめた、相手が強引に手を出そうとしたらしい」とバルタンが真顔で言った。
『ミッちゃんも馬鹿やね～・・子供に手を出して』と真顔で返した。
「とにかく、注意しとこう」とバルタンが振向いて言った、全員が頷いた。
『キングを絡ませるなよ、大会前で殺気だってるから』と笑顔で言って、階段を降りた。
キングは柔道部に入り、県大会で優勝して九州大会を控えていたの

だ。

教室が見えた時に始業のチャイムが鳴った、私は笑顔で教室の前から入った。

「おや小僧君、元気そうだね～」と担任の林の爺さんが笑った。

『林先生も・・灼熱の夏を乗り切れましたね、また会えて嬉しいです』とウルで返した。

「おかげさまで、なんとか乗り切ったよ」とシワシワ笑顔で言った。

『気を抜いたら駄目ですよ、夏は続くから』と笑顔で返して席に着いた。

「いよいよ2学期が・・・」林の爺さんの始業の挨拶を聞きながら、中庭を見ていた。

《ユリカ・・やっぱり退屈だよ、迎えに来て～》と心に囁いた、強い波動で怒られた。

「ほれ・・行くよ」と前の席のカナが笑顔で言った、少し大人びた笑顔だった。

『カナ・・彼氏出来たな、笑顔が怪しい』とニヤで返して立ち上がった。

「出来ないの・・男は馬鹿やね～、将来性を見れないから」と笑顔で言って横に並んだ。

『将来性ね～・・確かにあるかもね』と言って手を出した、カナはニヤで繋いできた。

私はカナと手を繋いで、体育館に入った・・全校集会で制服が密集していた。

あの当時は子供が多く、私の中学も生徒が１２００人を超えていた。

「カナ！・・駄目よ妊娠するよ、手を繋ぐと」と女子達にニヤで言われた。

「小僧・・一人じゃ全校集会怖いって言うから～」と私にニヤを出

して、女子の列に入った。
私は男子の列の定位置に立った、後の信が背中を突いた。
「やりやがったな・・結局帰らなかったな」と囁いた。
『信・・Tシャツ新品返すよ』と囁いて返した。
「PUMAでよろしく」と返された、私はウルで振向いて頷いた。
長い校長の訓示があって、夏の大会の部活の結果報告等があった。
解散になり、教室に信にその後の事情聴取を受けながら戻った。

「小僧以外の者は、宿題を提出するように」と林の爺さんが笑顔で言って、皆が提出していた。
それでその日は終了になって、私は小さな林の爺さんと並んで職員室を目指した。
「確認したのか?・・心は答えたか?」と林の爺さんが静かに言った。
『うん・・何度も確認した、キチンと答えたよ』と真顔で返した。
「よかろう・・ワシが認める」とシワシワ笑顔で言った、私は本当に嬉しかった。
その小さな体を見て、《長生きしろよ》と心で呟いた。
暖かい波動が包んでくれた、偉大な教師と未熟な私を。

職員室に入ると、教師達のニヤ視線が降り注いだ、私は照れた笑顔で返した。
「反省してます」とバルタンの声が聞こえた、私はバルタンの横に座らされた。

「小僧・・来たね〜」と副担任のミセス祥子が、向かいに座り笑顔で言った。
『反省してます』とバルタンを真似て、反省顔を作った。
「じゃあ・・自主学習を教えて?」とミセスが笑顔で聞いた。
『23歳の好きな人が出来て、その人と暮らして・・夜街で働きま

した』と反省顔で言った。
「律子さんも、了承済みなんだね？」とミセスが言った、私は真顔で頷いた。

「どんな女性だ・・綺麗なんだろうな～？」とバルタンの前に座る、鬼の体育教師、極マサが言った。
『たいした事ないですよ・・普通です』と真顔で返した。
「一夏の経験したのか？」とバルタンが微笑んだ。
『子供には意味が分からない』とウルで返した、バルタンがニヤで見ていた。
「とにかく・・学校内で話が広がらないように、美智子も分かったね」とミセスが釘を刺した。
「は～い・・広まったら、私のせいになりそう」とバルタンがウルで頷いた。

「小僧・・ノリの話聞いたか？」と極マサが真顔で言った。
『チラッと聞きました』と真顔で返した。
「じゃあ良いな・・分かってるな」とニヤで言った、私は真顔で頷いた。
それからミセスが沢山の問題用紙のプリントくれ、一週間で提出するようにと微笑んだ。
私はウルで頷いて受け取った、職員室の入口でバルタンと一緒に頭を下げて出た。

「サンキュー小僧、助かったよ」とバルタンが微笑んだ。
『3年生は、真面目に勉強しなさい』とニヤで返した、バルタンはウルで頷いた。
「美智子～・・来てるよ、5人の軍団」と3年悪女の一人が駆け寄った。
『頑張ってね・・さようなら』と笑顔で行こうとすると、腕を掴ま

れた。
「屋上行こうね」とバルタンがニヤで言った。
私はウルで拉致されて、屋上に上った。

その連中は原付2台とチャリで、正門前の空き地にたむろしていた。
下校する中学生を睨んで、物色中だった。
『やるね～・・正門前で堂々と待ち伏せか～』と私は暢気に言った。
「ノリ来てないのに・・小僧、そう言って来てくれよ」と3年のコオロギが言った。
『一緒にいたね・・狙われてるな』とコオロギをニヤで見た、コオロギが笑顔で頭をかいた。

『俺は無理～・・極マサに言われてるから』とニヤで言った時に衝撃が走った。
懐かしいケンメリの音が近づいて来た、黒いケンメリの姿が現れた。
そのまま走ってきて、空き地の5人の前ギリギリで止まった。
そして助手席から、マキが降りてきた・・その美しい姿に見惚れていた。

「マキ先輩！」とバルタンが笑顔で言って、階段に走った。
私も慌てて、バルタンに続いて走った。
正門から出ると、マキが女子生徒に囲まれていた、その中心でマキが笑っていた。
「マキ先輩～」とバルタンがマキに飛びついた。
私は蘭を笑顔で覗いた、満開笑顔で私を見ていた。

「美智子・・ノリは？」と完全に萎縮してる、ミチオが言った。
『骨折してるから、今日は休み』とバルタンがニヤで言った。
「ミチオ・・ノリがなぜ骨折したのか、今ここで聞いて良いんだね？」とマキが真顔で言った。

5人が沈黙していた、そこに極マサが歩いて来た。
「マキ・・綺麗になったな」と極マサが嬉しそうに微笑んだ、マキも笑顔で返していた。
教師の登場を感じて、蘭が運転席を降りて、極マサに満開で微笑んで頭を下げた。

「ちょっと待ってね」と極マサが蘭に笑顔で返して、私に近付いた。
「小僧・・ふざけるなよ、どこが普通なんだ・・綺麗過ぎるぞ」と静かに言われた、私はウルで返した。
「うっそ～！」と蘭を見てバルタンが声を上げた、囲んでいた女子全員が蘭を見た。
蘭は余裕で満開に微笑んで返していた。
「先生ですね・・小僧がお世話になります」と蘭が満開継続で頭を下げた。
「いえ・・お世話してますけど」と極マサとは思えぬ笑顔で返した。
世間話をする2人を離れて、ミチオに近付いた。

『ミッちゃん・・骨折でチャラにできんの？』と笑顔で言った。
「小僧には関係ないだろ」と少し睨みながら返された。
『他の4人も同意見なんだね・・俺は関係ないよ、明日マコちゃんに喧嘩売りに行くよ』と笑顔で言って車に乗った。
「じゃあ、そう言う事で・・頑張りな」とマキがミチオに言って、助手席に乗ってきた。
蘭が極マサに笑顔で挨拶して、運転席に乗り・・マキが女子達に手を振って走りだした。

「制服姿・・可愛いじゃない」と蘭が満開ニヤで言った。
『でしょ～・・しかしナイスタイミングで来るよな～、それもマキ連れで』とニヤで返した。
「マキちゃん・・素敵だな～、女子達が駆け寄って来るんだから～」

と蘭が微笑んだ。
「女子だけです」とマキがウルで返した、蘭と私は笑っていた。
夏の昼下がり、ケンメリの優しいエンジン音に包まれていた。
実家を目指す黒いボディーの中で、少年のまま笑っていた。
私は教師達に、隠してはいけないと思っていた。
親父もお袋もそれを許さないと感じていた、自分で選んだ事なのだから。
学校内では暗黙の了解になった、多分・・全生徒が知っていただろう。
私の参観日と三者面談は、蘭が全て出席した。
担任の林の爺さんが認めたので、他の教師達は何も言わなかった。
林　清次郎・・素晴らしい教師だった。
温厚で熱い人だった、深い戦争体験が作り出した・・その言葉が強かった。
私が１９の秋に、恩師の死去の知らせを聞いた。
蘭と羽田に向かいながら、私も蘭も涙が止まらなかった。
「確認したのか？・・心は答えたか？」空の上で、恩師の言葉が何度も響いてきた。
私は棺の前で土下座して、礼を言った・・黙って認めてくれた、恩

師に。

誰よりも早く逝った・・師と呼べる人に届くように。

遺影の笑顔は・・あの9月1日のまま、優しく穏やかだった。

ありがとう・・清次郎・・本当に嬉しかった。

後十数年で、私もあの時のあなたの歳になります。

追いつける自信がないよ・・あの優しさには・・そして強さには。

次のステージで再会した時に報告します・・あの宿題の解答を。

それまでは安らかに眠れ・・人間として憧れ続ける者・・清次郎。

メモの絵画

終わらぬ夏を駆け抜ける、黒いボディーに包まれていた。
前に座る2人の女性は、姉妹だった・・心の通う言葉で話していた。
私は懐かしい町並みを見ながら、出会えた幸せを感じていた。

実家の駐車スペースに車を入れ、蘭とマキと3人で実家に入った。
「素敵だね～・・さすが大工の家だ」と蘭が関心しながら言った。
『ただの純日本風な家だよ』とニヤで返した。
蘭は私の部屋をニヤで覗き、マキと一緒にリビングに行った。
私は洋服等を荷造りしていた、ダンボールを探しに行くと。
リビングで母を交えて、3人が笑顔で話していた。

「清次郎先生の、許可は取ったの？」と母ニヤで聞いた。
『入れ知恵したな～・・説明は不要だった』と笑顔で返した。
「私じゃないわ・・シズカだよ」と笑顔で返してきた。
『シズカ・・何か企んでる、妙に優しい』とウルで言って部屋に戻った。
リビングからの笑い声を聞きながら、ケンメリに荷物を積んだ。

私がリビングに行くと、3人で台所に立って昼食の準備をしていた。
蘭が母の横で満開笑顔で、包丁を握っていた。
「まっ！・・もう嫁と姑が同じ台所に立ってる～」とシズカが帰宅して、ニヤで言った。
「シズカ、ドラマの見すぎだよ～」とマキが微笑んだ、シズカはニヤでマキに近付いた。
「短期間で、そんなに変るのか～・・良い匂いもするし」とマキに密着してクンクンしていた。
「クンクンしないの・・年齢から来る当然の色気よ～」とマキがニ

ヤで返した。
「お母様・・マキがいけない世界に入ってますよ～」とシズカが母にウルで言った。
「シズカも少し色気出しなさい・・男に全く興味が無いんだから」と母がニヤで言った。
「蘭姉さん・・色気の為に、ＮＯ１ホストを紹介して下さい」とシズカが蘭に微笑んだ。
「それなら私より、小僧の方が仲が良いよ」と満開ニヤで言った。
「こじょ～ちゃん・・お願い」とシズカがウルで言った。
『仕方ないな～・・清次郎爺さんの件もあるし』とニヤで言った。
「ジッちゃん、元気だった？・・あと２年で定年なんだから、いじめるなよ」と笑顔で睨まれた。
『元気だよ・・少し縮んだ感じがするけど』とウルで返した。
「相変わらず馬鹿だね～・・あんたがでかくなったんだろ」とニヤで返された。

昼食の準備が出来て、５人で食事をした、私は久々に母の味を感じていた。
「母さん、すいません・・生活費あんなに頂いて」と蘭が笑顔で頭を下げた。
「いいのよ～・・食費が人一倍かかるでしょ」と母が笑顔で返した、蘭も満開で頷いた。
「でも、小僧は手がかからないでしょ？」とシズカが蘭に微笑んだ。
「確かに手はかからないよね～・・朝食まで作ってくれるし」と満開で返した。
「シズカ・・小僧最近ウインナーの、カニさんタコさん作れるらしいよ」とマキがニヤで言った。
「私の弁当も作ってくれよ～・・一度で良いから～」とシズカがウ

ルで言った。
「シズカ・・私の弁当じゃ不満なのね」と母ウルを出した。
「たまには、男の愛情も感じてみたい」とニヤで返した。
『ジンに言っとくよ』と笑顔で言った。
「えっ！・・やっぱりＮＯ１はジンさんなの」とシズカが驚いて言った。
「おや～・・なぜ女子高生が、ジンを知ってるのかな～？」と蘭が満開ニヤで言った。

「妹さんが、先輩なんです・・ジンさんに、病院で会ったんです」とシズカが笑顔で言った。
「そっか～・・恭子の先輩だったね、それで豊君だったね」と蘭が微笑んだ。
「そこまで知ってるんですね～・・もう時効だから、良いよね？」とシズカがマキに言った。
「良いんじゃない」とマキは笑顔で返した。
「これはその先輩に固く口止めされていました・・小僧には言わないでと、ジンの妹さんは・・自傷の女神よ」とシズカが真顔で私に言った。
『えっ！・・そうなの、美男・美女の兄妹だな～』と私は笑顔で返した。

「昨日の話が途中の・・あの子？」と蘭が満開でマキに聞いた。
「はい・・その人です、だから小僧には口止めされました」とマキが笑顔で返した。
「小僧が聞いたら、絶対に逆上して・・相手を潰しに行くから」とシズカが微笑んだ。
「だから恭子は豊に振ったのね・・あの子も凄い子だね～」と母が笑顔で言った。
「すごーく感動する話を・・皆さんあっさり言われるんですね」と

蘭が満開ニヤで言った。

「蘭、この位でイチイチ感動してたら、小僧と生活すると疲れるよ」と母が笑顔で言った。

「確かに・・マキとヨーコが来てから、毎日感動話が聞けますよ」と満開に微笑んで返した。

「なんせあの時はヤクザ相手だったから・・絶対にやばいって思ってたよね～」とシズカが言った。

「豊君突っ込んじゃって・・怖い話だよ、そして小僧・・ヤクザの親分の家に殴りこみに行ったし」とマキが笑顔で言った。

「豊君が突っ込んだのには、訳があるの・・・」蘭がジンと豊兄さんの事を話した。

「なるほど～・・それで理解できたわ、豊も小僧も被害者を知らないのにって思ってたの」と母が微笑んだ。

「小僧が被害者知ったら・・その日に突っ込んだね」とマキがニヤで言った。

『小６で・・ヤクザ４人相手に出来ないよ～』とウルで返した。

「そんなに思い入れ強いんだ～・・自傷の女神」と蘭が満開ニヤで言った、シズカとマキがニヤで頷いた。

「ジンさん争奪のライバルは・・ホノカさんね」とシズカがニヤで言った。

「シズカ・・ホノカ姉さんに会ったら、ライバルって言えないかもよ」とマキがウルで言った。

「そんなに、素敵なの」とシズカがウルウルで返した。

「自傷の女神レベル・・似てるよ、凄く」とマキがニヤで返した。

「そんなに凄いの～・・だいたい自傷の女神って、あんたが付けたの？」と蘭が私に満開ニヤで言った。

『俺が復活した時に言ったら・・本人が気に入って、自分で名乗っ

てる』と笑顔で返した。

「多分・・背負う意味でしょうね」とシズカが真顔で言った。
「もう完全に復活してるよ、あの事故の後も、全く衝動が出ないって言ってました」とマキが微笑んだ。
「自傷を夜街に引っ張る気は、無いのかな～？」と蘭が満開で微笑んだ。
『それは無いよ・・医者の娘だよ、ジンがホストしてるのが信じられないよ』と笑顔で返した。
「それは本人に聞いて・・教えない」と蘭が満開ニヤで言った、私はウルで返した。

「でもシズカが気にいるなんて・・よっぽど良い男なのね～」と母ニヤで来た。
「良い男ですよ・・イメージ的には、豊の対極ですか」と蘭が満開笑顔で返した。
「あっ！・・それ分かる～、さすが蘭姉さん」とシズカが笑顔で言った。
「それは会ってみたいわね～・・ユリを誘って行ってみよう」と母が笑顔で言った。
「ほほ～・・勝也がいるのに、ホストクラブですか～」とシズカがニヤで突っ込んだ。
「誰かさん、昨夜も豪遊して帰って来たから・・負けられません」と母がニヤで返した。

「私は寂しく、家で一人だ」とシズカがウルで言った。
「ＰＧのＴＶルームで勉強しなさい、帰りに連れて帰るから・・エミちゃんに必殺技教えたら、小僧じゃ絶対教えられない事を」と母が微笑んだ。
「そうだった・・それがあった」とシズカが笑顔で返した。

『エミ・・まだ1年生だよ』と私がニヤで言った。
「出来るよ、あの子なら」とシズカが強く返してきた。

「シズカ・・必殺技を述べよ」と蘭が満開で微笑んだ。
「無駄な時間を削る方法・・ようするに受験の時とかの、無意味な暗記術です」とシズカが笑顔で返した。
「無意味な暗記術？」と蘭が不思議そうに聞いた。

「受験には・・無意味な暗記を必要とする部分が多いですよね。
それに時間を取られるんです、だからその・・ただ暗記すれば良い部分の方法。
私が考え出したんだけど、誰も理解してくれないんです。
それが出来るようになれば、自分の本当に学びたい事に時間がさけます。
受験勉強って・・意味が無いですよね・・学ぶ事からすれば。
日本は飛び級も無いから、でも受験は総合力だから。
無駄に時間を使ってしまいます、そのジレンマに対抗する方法です。
ただの暗記・・内容は無し・・転写するだけです」

シズカが蘭に笑顔で言った、蘭は驚いていた。

『シズカ・・俺最近少し分かってきたよ・・シズカの方法の意味。
ＰＧのシオンが、手で出す店のサイン、約２００種類を１度で覚えた。
その方法は習った手の形を写真に撮って、声を添付して。
頭の中にアイウエオ順にファイルしたって言ったから。
それを聞いて、シズカの方法を思い出したよ。
確かに訓練で出来るようになるかもね、実は俺も自分なりに挑戦中』

嬉しそうなシズカに、笑顔で言った。
「シオンさん・・素敵すぎる、まさに天才・・そしてそれを表現できるんだ～」とシズカが笑顔で言った。
「私、今シオン姉さんに付いているけど・・天才だよ、そして許容量が無限な感じ」とマキが微笑んだ。
「エミは沢山の影響を受けて、どんな大人になるんだろう・・私も一役力を貸したい」とシズカが母に微笑んだ。
「まぁ、暇があれば・・連れて行くわ」と母が笑顔で返した。
「楽しくなって来ましたね～・・松さん喜ぶね」と蘭が私に笑顔で言った。

「松さん、今が楽しいでしょうね～・・真希の娘までいるから」と母が微笑んだ。
「母さん・・意味深にそこまで言ったら・・述べよ」と蘭が満開で微笑んだ。

「知らないのね・・真希の母親が千花でデビューした時の、フロアーリーダーが松さんだよ」と母が笑顔で言った。
『想像が出来ない』と私がニヤで言った。
「あら・・松さんは有名人よ、マダムが離さない事を考えても分かるでしょ」と母ニヤで返された。
「たまに言われる事が・・凄く響きます、座り方とか立ち方とか」とマキが笑顔で言った。
「私も最初の頃・・色々教えてもらいました」と蘭が満開で微笑んだ。
「多分・・ユリに最初の頃、教え込んだのも松さんでしょう、だからユリは真希に似てます」と母が真顔で返した。
『エミは確かに、どんな大人になるんだろう・・松さんエミには違うんだよな～』と私が呟いた。

「何言ってる・・あんたが1番走らせてるくせに、伝達全部使ってるでしょ」とシズカがニヤで言った。
「使ってる・・大切な事の時は、絶対にどっか触ってるよ」とマキがニヤで言った。
「怖いのは・・マリアよ、2歳の頃から全てを注ぎ込むのよ」と蘭が満開ニヤで言った。
「なぜマリアの言葉を引き出さないの・・何にこだわってるの？」と母が聞いた。

『自然体でいてほしい・・マリアの力は想像の外側にある。
会話を伸ばそうと思えば、すぐに伸びると思う。
でも言葉に頼り過ぎて、失う物が怖い・・かな？
マリアの伝達能力って・・実は圧倒的に強い力なんだよ。
それを一生持っていて欲しい、天使の羽を携えていて欲しいんだ。
だから、自然体で行きたい・・俺も普段はマリアを読まない。
シオンとマキが自然に読めるから、マリアの自主性に任せたい。
もう少しだと思う・・ユリさんがその場所に到達したら。
マリアも自分で変化してくる・・その姿が見たいんだよ』

真剣に母に言った、母も真顔で聞いていた。
「なるほど～・・エミとマリアが両極の集大成なんだね」と母が微笑んだ。
『うん・・ある意味、理想の形』と笑顔で返した。
「ユリカ・・それで良いと思う？」と母が私に強く言った。
強い波動が何度も返って来た。
「今度聞きましょう、反対はしてないようだから」と母が微笑んだ。
「怖い事しないでよ・・一人だけ、ずるい」とシズカがウルで言った。
「私も・・本気で怖かった」と蘭が満開で微笑んだ。

「和尚かと思った～」とマキがニヤで言って、全員で笑っていた。
ユリカの穏やかで楽しそうな波動が包んでいた、４人の笑顔を。

私が着替えて、蘭とマキがケンメリで帰った。
私は自分のママチャリで、夜街を目指した、気分は爽快だった。
通り道で和尚の寺を覗くと、赤いＺと美冬の車と数台の車が止まっていた。
本堂を覗くと、ユリさんミコト・美冬・千夏・ユメ・ウミ・リョウが瞑想していた。
マリアが静かに賭けてきた、私はマリアを抱き上げて・・ユリさんの美しい背中を見ていた。
ちゃぶ台で和尚と檀家らしい４人の爺さんが、楽しそうに女性達を見ていた。
私はマリアを抱いて、ちゃぶ台に歩いた。

『荘厳な光景だね』と和尚に笑顔で言った。
「檀家の衆が、楽しみに見にきよるよ」とシワシワ笑顔で返された。
『リョウが来てるのに、驚いたよ』と笑顔で返して、座った。
「素晴らしいの～・・ユリは別格だが、ミコトとリョウ・・楽しみやな～」と和尚は笑顔で言った。
『確かに・・リョウ、揺れないね』とニヤで返した。
「うむ・・見たいの～・・ユリカの座る姿が」と和尚が私に言った。
強く暖かい波動が返って来た。
「うむ・・楽しみにしてるよ」と和尚が笑顔で言った、強い波動が返って来た。

「しかし・・皆、美しいな～」と檀家の老人が言った。
「見てるだけで、若返るよ」ともう一人の老人が言って、本堂を見ていた。
「そろそろいいの」と和尚が立ち上がり、女性達の前に進み・・大

きくドラを鳴らした。
全員がハッとして、瞳を開けた。

「どうじゃ？・・かなり精神の休養になるじゃろ」と和尚が座って笑顔で言った。
「落ち着きます、確かに家では難しいですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「やるとやらないでは・・絶対に違いますね」とミコトが微笑んだ。
「自分の雑念の多さが・・嫌になります」とリョウがウルで微笑んだ。
「それを突きつけられますね～・・感じた事は無かったけど」と美冬が微笑んだ。
「焦らずにな・・少しづつで良いんじゃ」と和尚が言って、全員が深々と頭を下げた。

「あら残念・・制服姿が見たかったのに」とユリさんが薔薇ニヤで言った。
「出し惜しみしたね～・・恥ずかしいんだね」とミコトが微笑んだ。
「夜街を制服で歩けよ・・呼び込みさん達が、楽しむぞ」とリョウが涼しげニヤで言った。
『折角魅宴の良い情報、教えようと思ったのに』とニヤで返した。

「エース・・今日も素敵よ」とミコトが背中に抱きついた。
『うむ・・しかたあるまい、来週の火曜日・・魅宴、リアン光臨じゃ～』と和尚を真似て言った。
「やった～！・・とうとう見れる、炎の女」とリョウが嬉しそうに微笑んだ。
「待ちに待った日が、来るんだね～・・良い子だ」とミコトが背中に胸を押し当てた。
『ミコト・・以外に大きいな』とニヤニヤで返した。

「カスミやリョウや美冬のばかり見てるから・・弾力が違うだろ」と耳元に囁いた。
『うん・・熟れた女は違うな～』とニヤで返した。

「和尚様・・お寺で小僧が、良からぬ事を言ってますよ」と魅冬が笑顔で言った。
「さすが・・生臭の1番弟子、羨ましいの～」と檀家の爺さんが笑顔で言った。
「小僧に問う」と和尚が大きな声で言った。
全員が和尚を見た。
「どうすれば・・そんなサービスが得られるんじゃ？」とシワシワニヤで言った。
全員が爆笑していた、ユリカの強い波動が笑っていた。

「なんじゃ～・・小僧問答が始まるかと思ったのに」と檀家の老人が笑った。
「集中せんとできんわ・・疲れるからの～」と和尚が笑顔で返した。
「小僧問答か～・・楽しそうですね」とミコトが檀家に微笑んだ。
「美しいの～・・魅宴じゃったね」と檀家の老人がシワニヤで言った。
「はい・・魅宴のミコトです」と美しく微笑んだ。
『さすが～・・ミコト、そつがない』とニヤで言った、老人達が笑っていた。

女性達と檀家さんが楽しげに話しだして、私はユリさんにマリアを預けた。
『ミホに会ってきます』とユリさんの耳元に囁いた、ユリさんが薔薇で頷いた。
「えーしゅ」とマリアが天使全開で言って、元気を満タンにしてくれた。

私はマリアに笑顔で頷いて、チャリで病院を目指した。
夏の陽を浴びて輝く、病院入り口の緑地帯を抜けて、駐輪場にチャリを止めた。
１階受付で聞いて、４階のナースステーションで記名して、病室に向かった。
南向きの２人部屋の窓際に、ミホが座って外を見ていた。
私は手前の６歳位の少女の母親に、頭を下げて奥に歩いた。

『ミホ・・良い部屋だね』と笑顔で言って、無表情のミホの前に座った。
『うん、元気そうだ・・ここは夜景も綺麗だね、良かったね』と手を握って笑顔で言った。
ミホは外を見ている、しかし最初に再会した時よりも、拒絶は弱い気がした。

『ミホ・・夏なんだよ、外は暑くて・・汗が出るよ。
もう９月になって、学校始まってね。
俺・・また宿題何もしないで、追加の宿題がいっぱい出たよ』

ウルで言ってミホを見た、その時ミホが私を見た。
『宿題ってね・・面倒なんだよ、だから一つもしないんだ。
でもね学校は楽しいよ、友達がいるからね。
ミホもいつか行こうね、俺が連れてってやるよ。
制服着て自転車に乗って行こう・・その前に自転車教えてあげるね。
楽しいよ・・風を切って走るんだよ』

笑顔で言って立ち上がり、ミホも額に手を当てた。
ミホは瞳を静かに閉じた、私は動かないでミホの温度だけを感じて

いた。
ミホの体重が私の腕にかかった、私は嬉しくてミホを優しく寝かせた。
薄い布団を肩までかけて、ミホ寝顔を見ていた、可愛い寝顔だった。
『ミホ・・また明日来るね』と笑顔で囁いた。

私は隣の母親に近寄り、挨拶をした。
『ミホがお世話になります・・何も気にしないで大丈夫ですから』
と笑顔で頭を下げた。
「後天性の自閉症なんですね」と笑顔で返された、私も笑顔で頷いてベッドの少女を見ていた。
「先天性の自閉症なんです・・沙紀と言います」と母親が笑顔で言った。
『体は健康なのに・・甘えん坊だね、沙紀』と笑顔で言った。
沙紀は確かに視点が合わず、障害児特有の雰囲気は有ったが、体に力があった。

私は沙紀の横に行き、右手を握った。
私は驚いていた、沙紀の温度の揺れの激しさに。
『沙紀・・分からないよ～、もっとゆっくり』と笑顔で言った。
沙紀は私を見ていた、そして揺れが一度止まった。
『そうなんだよ・・宿題嫌いなんだよ』とウルで言った、沙紀の揺れが笑っていると感じていた。

『沙紀は何が好きなの・・沙紀と同じ病気の人沢山知ってるけど、好きな事があるでしょ』と隣に座り優しく言った、母親は私を見ていた。
『そうなんだ～・・じゃあ書いてみれば良いのに～、手は動くだろ』と二ヤで言った。
私はこの解読には自信があった、沙紀が何かを描くのを、強く感じ

ていたから。
『何か紙と筆記具ありますか？』と母親に言った、母親が慌ててメモ用紙とボールペンをくれた。
私は優しく沙紀を起こして、母親の雑誌を下敷きにして、紙を置きボールペンを握らせた。
沙紀が私を見た、私は笑顔で頷いた。

『分かったよ・・恥ずかしがりやさんだな～』と笑顔で言って、沙紀の瞳を見て立ち上がった。
『じゃあね～・・ん～・・お父さんの顔』と微笑んで、母親を連れて窓際に行った。
「何なの・・どうなってるの？・・分かるの？」と母親が私に囁いた。
『なんとなく・・子供同士ですから』と囁いて返した。
「あの子に・・絵が描けるの？」と母親が真剣に聞いた。
『あの個性は、一芸に秀でる事が多いです、沙紀はイメージで描いてると感じたんです』と笑顔で返した。

「個性・・その言葉だけで嬉しい」と母親が静かに言った。
『個性ですよ・・障害じゃないですよ、本人には』と優しく返した。
「何人くらい出会ったの？・・同じ個性に」と母親が笑顔になって私を見た。
『６人知ってます・・全員何かしら秀でてましたよ』と笑顔で言った。
「あ～～」と沙紀が言った、慌てて行こうとする母親の腕を掴んだ。
『お母さん・・絵を見ても、絶対に泣かないで下さい・・褒めてやってね』と囁いた、母親は真剣に頷いた。

私は母親の後を続いた、母親はメモ用紙を受け取り、大きく震えていた。

私は母親の肩に手を乗せて、力を入れた。
「沙紀・・上手じゃない・・これからも何でもいいから書いてね・・ママは沙紀の絵が見たいな～」と必死の笑顔で言って、私にメモを渡した。
私は感動していた、メモ用紙にボールペンで書いた絵に、躍動感すらあった。
父親の輪郭はもとより、髪の生え際から目尻の皺まで描いてあった。
私は沙紀を笑顔で見て、横に座って手を握った。
『沙紀・・ママを喜ばせたいんだろ、明日スケッチブックと色鉛筆をプレゼントするよ。
今度は色を付けてみようね、沙紀の思った色を塗れば良いんだよ。
でもね、最初は一日一枚にしようね、沙紀は他にも覚える事があるからね。
沙紀は絵で・・ママやパパとお話が出来るんだよ、良かったね』
沙紀の定まらない視線の瞳を見ながら、優しく伝えた、沙紀は激しい温度で返してくれた。
私が立とうとすると、沙紀が強く手を握った、私は嬉しかった。
沙紀が私を戻してくれた、小児病棟に通っていた頃の私に。
『明日、また来るよ・・ミホお姉ちゃんと仲良くしてね』と笑顔で言った、沙紀は私を見て手を離した。
私は母親に笑顔で頭を下げて病室を出た、廊下に出た所に、母親が駆け寄った。
「ありがとう・・どうして泣いたら駄目なのか、それだけ教えて？」と涙を流し母親が言った。
『沙紀は純粋だから・・涙は悲しいものだと思ってます。

お母さん・・笑って下さい・・そして、怒って下さい。
俺は確信してます、あの個性は怒られたいんだと。
普通に接して欲しいんだと、そう思います』

母親の涙を見ながら、笑顔で伝えた。
「ありがとう・・本当にありがとう、やってみます」と笑顔になった母親に、笑顔で頷いて別れた。
私はナースステーションまで歩き、看護婦さんに院長室に連絡してもらった。
「来て欲しいそうですよ・・5階の左奥です」と笑顔で言われた、
私は笑顔で頷いて階段で上がった。

重厚な院長室の扉をノックした。
「どうぞ、入りなさい」と院長の声がした。
私は扉を開けて奥に進んだ、恰幅の良い院長が笑顔で迎えてくれた。
『お言葉に甘えて、来ちゃいました』と笑顔で言った。
「嬉しいね～・・まぁ掛けなさい」と高そうなソファーを示した。
『さすが、○病院の院長室は違いますね～』と笑顔で言って座った。

「そういう会話、どこで会得したのかな?」と二ヤで返された。
『経験で学びました・・院長の専門は、精神科ですね』と二ヤで返した。
「ほう・・なぜかね?」と興味津々光線できた。
『相手の表情を見る前に、全体的動きを見るでしょ・・特に指先の動き』と二ヤで返した。
「嬉しいね～・・それから」と笑顔で促した。
『目を見て話すけど・・瞳の奥の動きを見ます・・職業病ですよ』と笑顔で言った。
「それは仕方ないよ・・もう習性だから」と楽しそうに笑った。

「今日は関口君、大学病院に出てるから・・明日会ってもらうよ」と真顔になって言った。
『分かりました・・少し楽しみになってきました、沙紀ちゃんが戻してくれたから』と笑顔で返した。
「沙紀ちゃんが、戻した？」とまた興味津々光線がきた。
『歳に似合わず、好奇心旺盛ですね・・小児病棟に通っていた頃のレベルにです』と二ヤで言った。
「そうか・・で、沙紀ちゃんと交信できたのかね」と笑顔で返された。
『後で絵を見て下さい・・沙紀の秀でてる才能、素晴らしいですよ』と二ヤ二ヤで言った。
「ワシは医師だが・・待つのが苦手での～」と電話の受話器を取って内線にかけた。
沙紀の絵を借りてきてくれと頼んで、受話器を下ろした。

「何分で引き出しただね？」と院長が笑顔で聞いた。
『引き出したんじゃないですよ・・出し惜しみしてたから、怒ってやりました』と笑顔で返した。
「なるほど・・時間は？」と笑顔で促した。
『描かせるまで・・5分』と二ヤで返した、その時にノックが響いた。
年配の看護婦がメモ用紙を持ってきて、私を見て笑顔になった。
『素敵でしょ・・沙紀画伯』と看護婦に二ヤで言った。
「泣きそうでしたよ・・あなたが関口先生の言ってた、小僧ね」と笑顔で言って、院長にメモ用紙を渡した。

院長は黙ってその絵を見ていた、私はその院長の優しい瞳を好きになっていた。
「一回戦は・・君の大勝利だよ」と院長が笑顔で言った。
『負けませんよ・・トータルでも』と笑顔で返した、院長も看護婦

も笑っていた。
その時、院長室の電話が鳴って、院長が真顔で応対していた。
私は雰囲気を察して、立ち上がった。
『また楽しいお話を聞きにきます、ありがとうございました』と笑顔で頭を下げた。
「明日・・楽しみにしてるよ」と笑顔で言った院長と別れた。

年配の看護婦と階段を下りながら、笑顔で聞かれた。
「４階の婦長です、よろしくね・・母親に聞いたんだけど、どうして一日一枚なの？」とナースステーションの前で聞かれた。
若い看護婦が、笑顔で婦長に手を出してメモ用紙を見た。
「凄い・・ね～見て～凄いよ～」と言って奥に消えた。

『執着するから・・それだけに執着して、他の事が出来るのに拒絶するから。
何でも出来ますよ、俺はそう思っています。
だから一日一枚です・・そうすると渇望します、描きたい欲求が出てきます。
あのメモの絵なんて、落書きですよ・・恐ろしい世界を見せてくれます。
楽しみにして下さい・・また明日来ます』

笑顔で言って、頭を下げた。
「楽しみが増えたわ・・あなたがトータルで勝つ方に、私は賭けるわ」と笑顔で言った婦長に、笑顔を返して別れた。

私は駐輪場に歩き、光降り注ぐ場所で感じていた。
忘れていた感覚が完全に戻ったと、ミホの寝顔を思い出していた。
ユリカの波動がずっと響いていた、そのまま来いと言っていると思っていた。

《了解、ユリカ・・ユリカも好奇心旺盛だね》と心に囁いた。
強い波動に押されて、ペダルを漕いだ・・光射す、夜街に向けて。
私はミホが2人部屋なのに驚いていた、関口医師の挑戦に。
だから沙紀に関わった、私では何も出来ないと思いながら、描かせた絵が凄かったのだ。
その個性は障害と見られる、確かに不便な部分は多いだろう。
しかしある才能に特化する、多分突き詰めるのだろう。
常人では絶対に辿り着けない世界に、簡単に踏み込んで行く。
その純粋は壁も山も谷も越える、その精神世界は、真の意味での自由なのだろう。
この後に沙紀が見せてくれる絵は、主張に溢れていた。
その色使いが見せる、心の世界・・温かみに溢れ、美しかった。
沙紀が退院する時に、私に贈ってくれた、沙紀の初めての水彩画。
私は今でも書斎に飾っている、その絵が有るだけで、部屋の温度が上がる気がする。
淡い彩りに包まれた、ミホの笑顔が美しく表現されている。
沙紀は一度も、ミホの笑顔を見ていない、しかし描いて見せた。

私はこの絵を受け取った時、震えていた・・必死で涙を我慢した。

本当に嬉しかった、沙紀の優しいエールが込められていて・・頑張れと応援されて。

その後、ミホの笑顔が出た時に、ミホの関係者全員で泣いた、沙紀の素晴らしさを感じて。

全く同じであった、ミホの笑顔は・・この水彩画と、寸分の狂いも無かった。

沙紀は見ていたんだと感じた、その感性は超越したのだと。

ミホの真実を見ていたのだと・・そう感じていた。

障害ではない・・個性だと、私は確信している。

私は今でも思っている・・沙紀に比べると・・私は凡人だと。

自傷の女神

夏の陽射しが照りつける、狭い路地を抜けると聳え立つ。
塔と呼ぶべき人工物、昼間はひっそりと立っている。
夜を待ちわびるように、女神達の来場を待ちわびるように。

私はユリカのビルの下にチャリを止めて、ユリカの店に上がった。
ユリカはいつもの奥のＢＯＸで、爽やか笑顔で両手を広げて迎えてくれた。
私も笑顔でユリカを抱き上げた、ユリカは少し驚いて私を見ていた。

「何・・熱いんだけど」とユリカが言った。
『チャリ漕いで来たからだよ～・・多分ね』とニヤで返した。
「ん～～・・確かに凄いね～・・これがＭＡＸレベル？」とユリカがニヤで返してきた。
『かなりのハイレベルだと思ってるよ』と笑顔で返した。
「今日は楽しかったよ・・母さんには驚かされたけど、院長との話も面白かったよ」と微笑んで瞳を閉じた。
私は何も考えずに、ユリカの重みと温度を感じていた。
ユリカの重みが増して、深い眠りに入ってから、ＢＯＸに座った。
ユリカの穏やかな寝顔を見ていた、静かな寝息が漏れていた。

３０分程でユリカが目覚めた、爽やかに微笑んで言った。
「私にスケッチブックと色鉛筆、プレゼントさせて・・感動させてもらったお礼に」と微笑んだ。
『ありがとう、ユリカ・・沙紀も喜ぶよ』と笑顔で返した。
ユリカと手を繋いで、橘通りの画材店に行った。
大きめのスケッチブックと、小さなスケッチブックを選んだ。
そしてユリカが４８色の色鉛筆を手に取って、爽やかに微笑んだ。

「本当に楽しみなんだけど・・近い内に見れるよね」と言った。
『もちろん・・ユリカなら、近い内に連れて行くよ』と笑顔で返した。
ユリカが支払い、綺麗に包装された、スケッチブックと色鉛筆を受け取った。
ユリカを駐車場まで送り、笑顔で手を振って別れた。

私はＰＧに向かい、ＴＶルームの自分のロッカーに入れた。
ＴＶルームは誰もいないので、フロアーに向かった。
「まだこんな所でウロウロして・・蘭姉さん、今夜はハンバーグだって、張り切ってたよ」とマキがニヤで言った。
『ラッキー・・じゃあ帰ろっと』と笑顔で言って振向いた。
「待って・・誰に会った？どんな個性かな？」とマキが言った。
『自閉症の、素敵な画伯』と振向かずに言って、右手を上げてＰＧを出た。

夏の陽射しを受けながら、アパートに帰った。
蘭がエプロンを付けて、張り切っていた。
「お帰り・・ぬぬ・・何か良い事あったね？」と満開で微笑んだ。
『うん、ミホが２人部屋で・・同室の自閉症の少女が、素敵なプレゼントをくれた』と笑顔で返して、キッチンの椅子に腰掛けた。
『素敵なんだよ～・・元々あの個性は、何かに優れるんだけど・・・』私は沙紀の話をした。
「素敵ね～・・私にも会わせてね」と振向いて蘭が微笑んだ。
『もちろん、蘭にはミホにも会って欲しいから』と笑顔で返した。

夕食の準備が出来たらしく、蘭がシャワーに入った。
私はケンメリから荷物を運んで、追加の宿題プリントを見ていた。
《ミセス祥子・・意地悪したな、これ２年のじゃん》とウルで見て

いた。
「シャワー・・良いよ～」と蘭が言ったので、シャワーを浴びて着替えた。
蘭の部屋に行くと、夕食の準備が出来ていた。
２人で笑顔でハンバーグを食べた、蘭はご機嫌だった。

『ご機嫌だね・・蘭』と笑顔で言った。
「素敵な母と妹が出来たから～」と満開で微笑んだ。
『それは、シズカが１番思ってるよ』と笑顔で返した。
「シズカって・・天才なの？」とニヤで言った。
『違うよ・・変わり者、だから人と発想が違うんだよ』とニヤで返した。

「ジンがいつか知る事になるね、妹の自傷を止めた男」と蘭が微笑んだ。
『たいした事じゃないよ・・俺もあの時は楽しんでたし』とニヤで返した。
「ホノカに似てる子がいると言うだけで、凄いよ」と蘭にニヤで変えされた。
『確かに外見は似てるよ・・ジンも案外、普通の男だね』と笑顔で言った。
「ほんとだね・・妹の幻影を追ってるなんてね」と満開で言った。

蘭が化粧をしてる間に、私が食器を洗った。
６時少し過ぎにタクシーで出掛けた、蘭はご機嫌満開が咲いていた。
私は蘭を誘って、Ｊ・塚本のバーを覗いてみた。
カウンターで女性と話していた、私を見つけて笑顔になった。
「嬉しいね～エース・・それも有名人連れで」と笑顔で言った。
「マスター嫌ですわ・・有名人だなんて」と蘭が満開笑顔で返した。

『マスター・・ピアニスト、まだ探してるの？』と笑顔で聞いた。
「もちろん・・いるのか？」と嬉しそうに微笑んだ。
『高校生だけど、損はさせないよ・・見たいなら7時からＰＧで弾くから、見に来てよ』と笑顔で言った。
「嬉しいね～・・絶対見に行くよ、サンキュー」と笑顔で言ったＪ塚本に、蘭と笑顔で手を振って別れた。
「顔広いよね～・・3年後か～、確かに怖いよ」と腕を組み通りを歩きながら、満開ニヤできた。
『夜街の関係者は、個性が強くて面白いよ』とニヤで返して、裏階段を登った。

ＴＶルームにはマダム・松さん・ユリさん・カスミと、裏方４人組にホノカと久美子がいた。
４人娘が揃っていて、私はレイカの側に座った。
「確かに・・マキの言うとおり、かなり上がった感じですね」とユリさんが私に薔薇で微笑んだ。
「腕を組んで驚きました・・戻ったんでしょうね～」と蘭が満開で微笑んだ。
その時ユリカが入ってきた、爽やか笑顔で挨拶をして、蘭の隣に座った。
「ユリカ姉さんでも、直に聞きたいんですね」と蘭が微笑んだ。
「うん・・今日、沙紀ちゃんで感動したよ」と爽やか笑顔で返した。

「それでは先に、ユリカに、沙紀ちゃん話を聞きましょう」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「エースがミホちゃんの病室を訪ねると・・・」ユリカが沙紀の話をした。
私は改めて驚いていた、その表現の豊かさで、見ていたかのように話した。
「あなたに賭けるわ・・そう婦長さんが言っていました」とユリカ

が笑顔で言った。
「どうりで、戻る訳だね～」と蘭が満開ニヤで言った。
「今からが楽しいですよ・・そして怖くなります」とマキがニヤで言った。

「確かに怖そうだね～・・でも隠せない相手って、居てくれるだけで安心するよ」とホノカが華麗に微笑んだ。
「ホノカ・・やっぱり凄いよな～」とカスミが不敵で言った。
「カスミ、間違ってるよ・・そこは不敵じゃなくて、キラキラでしょ」と華麗ニヤを出した。
全員が2人の漫才で笑っていた。
「それでは・・マキ、お願いしますね」とユリさんが薔薇で微笑んだ、マキは笑顔で頷いた。

「和尚問答で和尚が最後に問うた、なぜ溺れるのか。
エースは瞑想して考えていました、私達は不思議な少年を見ていました。
そしてエースが目を開けて、笑顔でシズカを呼びました。
そして姉弟問答が始まりました、私達も初めて見ました。
小僧・・・シズカに問う、なぜ人は海水に沈む。
シズカ・・人は海水には沈まない、なぜならば・・人は海水で出来ている。
小僧・・・ではなぜ溺れる？
シズカ・・逆らうから・・流れやうねりに逆らうからだ。
小僧・・・逆らうのは、恐怖からかな？
シズカ・・厳密に言うと、イメージが悪い・・恐怖に結びついている。
小僧・・・呼吸が出来ない、最終的に死に至るイメージかな？
シズカ・・違う・・深さや広さを測れない、その事が恐怖に繋がる。

小僧・・・なぜ測れないと、恐怖に繋がる？
シズカ・・自分の世界しか認めないから、その狭さを恐怖で誤魔化す。
小僧・・・狭さを認識すれば、恐怖は消えるかな？
シズカ・・少なくとも、深さに対しての恐怖は消える。
小僧・・・広さに対しては、どうする？
シズカ・・狭さを認めた後に、深さを克服し・・そして感じねばならん。
小僧・・・無限の広がりを認めろと？
シズカ・・無限など無い・・存在する以上終わりはある。
小僧・・・終わりがあると、認めろと？
シズカ・・どんなに広くても、終わりはある・・だから焦る事はない。
小僧・・・焦りが、流れやうねりに逆らうのだな？
シズカ・・そう・・逆らっている時が、生きてる実感が湧くからだ。
小僧・・・結果、その行為が死に向かうとしてもか？
シズカ・・通常時・・繰返す日々、生きてる実感が無ければな。
小僧・・・シズカに問う・・それは何に溺れてる？
シズカ・・甘えに溺れる、そして溺れる自分に溺れるんだよ。
そうシズカが言って、小僧が笑顔になりました。
私も恭子も、この不思議な姉弟を見て、素敵だと思いました。
小僧はそれで吹っ切れたのでしょう、笑顔で帰って行きました。
帰った後、和尚がシズカに聞きました、なぜ回したのかと。
言葉を選び、表現を本質から少し離して、回したのかと。
シズカは笑顔で言いました、そうしないと負けそうだったからと。
次の日から、小僧はその人に向き合います。
毎日、夕方と夜に尋ねて・・面白話を繰出しました。
そんな日が続いて、１０日ほどが経った土曜日でした。
小僧は昼過ぎに、その人の病室を訪ねた、すると居ませんでした。

看護婦さんに聞くと、怪我をしたと教えられました。
その直後、私とシズカが病院で小僧に会いました。
小僧が真剣に言いました、俺は許す事が出来ないと言って、屋上に向かいました。
私達も後ろを付いて行きました、小僧は海を見ていました。
その小さな背中が寂しげで、声をかけずに見ていました。
そして小僧が叫びました、『ヒトミーー』と叫んで振向きました。
その顔が覚悟を決めていて、怖かった・・何をする気なのかと思いました。
小僧はその人の病室に入った、そしてその人が居るのを確認して。
ナースステーションに入って行きました、そして戻ってきて病室に入った。
その人の横に座って、黙っていた・・長い沈黙が流れました。
ごめんね・・沈黙に耐え切れなかったんでしょう、その人が言った。
なんで謝るの？・・自分でしたくて、したんでしょと小僧が言った。
凄かった・・その全ての伝達力がＭＡＸで、背中が怖かった。
ごめん・・ごめんね、とその人が号泣しました。
小僧はその人の、包帯が巻かれた腕を掴んで、包帯を外した。
ガーゼを優しく外して、傷跡を見て・・そこに触れた。
多分一瞬だったでしょう・・でも長い時間に感じました。
痛いよね・・どこが？・・痛みが分からないの？
小僧が静かに言った、その人はただ泣いていました。
私達の後ろには、医師や看護婦が大勢いました。
院長も来ていて、誰にも手出しをさせなかった。
俺・・お姉さんが好きだから、今日・・凄く怖かった。
自分の無力さを感じて、忘れないようにしようと思ったんだ。
小僧はそう言って、ポケットから医療用の剃刀を出した。
だから・・忘れないように、印をつける・・絶対に後悔しないように。
そう言って、左手に拳を握り、その手の甲に剃刀を這わせた。

その人の目の前で、ゆっくりと引きました・・鮮血がしたたって。
静寂が支配していました、その人は凍り付いていて、ハッとして。
やめて！・・と我に返って叫びました。
出来ない・・俺はずっとそう言ってきた、なのにやめなかっただろ。
小僧は静かに言って、刃を引いていました。
約束するから・・誓うから・・絶対にしないから。
体の奥からの叫びでした、そこで小僧は止めた。
小僧の血をその人が見て、痛いでしょ・・そう言いました。
痛いよね・・俺より、お姉さんの方が痛いんだよ。
俺は今日・・この何倍も痛かった。
小僧は笑顔で言いました、その人は泣きながら何度も頷いた。
その時婦長さんが、小僧の手を押さえて、応急処置をしました。
小僧が処置室に消えて、泣いてるその人にシズカが近付いて。
あなたが今度やったら、小僧は今度は手首を切るよ。
私は姉だから分かる・・あの子はそういう子だから。
シズカが真剣に言った、その人は泣きながら、シズカに謝りました。
そしたら小僧が包帯巻いて帰ってきて、笑顔で言いました。
同じ～・・やっぱり運命の２人だねって笑った。
自分でやって、運命の２人な訳ないだろと、シズカも笑顔で返しました。
痛かったよ・・本当にごめんね、誓うから・・忘れないから。
私とあなたの絆だけは・・絶対に忘れないから。
あなたは常に見える所に傷を付けた、私を一生忘れないと思ったよ。
私も忘れない・・今のこの愚かな反省と、あなただけは。
そう言って、小僧を抱きしめた、小僧はニヤ顔で固まってました。
それから、５日でその人は退院になりました。
小僧は見送りに来なかった、その人は私達に言いました。
傷跡に触れられた時に、悲しみが押し寄せて来たと。
どうしようもない悲しみが、後から後から押し寄せて来たと。
小僧がそれまで話してくれた、沢山の話しが走馬灯のように蘇って。

最後に声が聞こえたと、これ以上悲しませないでと、少女の声が聞こえたと。
確信的に思えたと・・あれは絶対ヒトミちゃんの声だったと言いました。
見送りには来ないよね・・私達はそんな関係じゃないから。
離れてても、別れてる訳じゃないから・・私も頑張ってみるね。
次にあった時に、あの傷を直視できる人間になりたい。
絶対に私を忘れない人が・・この世に一人はいるから。
それだけで、私は幸せよ・・ありがとうと伝えてね。
そう言った笑顔は、美しくて・・私は嬉しかった。
小僧が自らの自傷行為で止めた、あの人の衝動。
その事を・・手の甲を切った、その日の帰りに聞きました。
小僧を寺まで引っ張って、和尚に立ち会ってもらって、恭子も呼んで。
どうしてそこまでしたのかと、強くシズカが聞いた。
俺は調子に乗ってたよ・・伝達方法が凄いとか言われて。
なのにあの人の衝動の、正体すら分からなかった。
あんなに長い時間を過ごしたのに。
今日あの人が衝動に負けたと聞いて、初めて分かったんだよ。
その正体を探しても無駄だと、結局・・正体なんて無いんだよね。
それが分かったし・・対抗策は考え付いた・・でも怖くて怖くて。
今夜またやるんじゃないかって、そう思ったら・・耐えられなかった。
だからショック療法にしたんだ、早急の解決策はそれしか思いつかなかった。
親父には内緒にしてね・・馬鹿だって怒られるから。
小僧はそう言って、笑いました。
体の傷は癒える・・心の傷もいつか癒える・・小僧の手の甲。
それは傷じゃない・・誓いの証じゃ・・だから癒える必要はない。
和尚が笑顔でそう言って、小僧の前に正座した。

小僧に問う・・人はなぜ溺れる？・・和尚が聞きました。
手を差し伸べてくれるのを、待っているから。
誰かが自分を見てくれるのを、待ってるから。
だから手を差し伸べない・・隣を泳ごう・・岸を目指して。
小僧が笑顔で答えました、和尚も笑顔になりました。
私は初めて見ました、目を潤ませて笑う和尚を。
小僧の左手の甲には、今でも薄く傷跡があります。
小僧はそれを見る度に、自分を戒めるのでしょう。
命と向き合う意味を教えられたから、手を差し伸べるのでなく。
激流でも、どんなに広くて深くても・・隣を泳ぐのが。
それが本当の愛情だと気付いたから、その大切な教えが刻まれた。
左手の甲を・・小僧は大切にしています」

マキは流れるように言った、私はその同調に感動していた。
静寂が支配していた、私の左手をエミが掴んだ。
私の左手の甲の傷を、エミが強い瞳で見ていた。
「小僧に問う・・自分になんて誓ったの？」と手を強く握ってエミが真顔で強く言った。
『分かった振りをするな、人の心を簡単に理解など出来ない・・そう刻み込んだんだよ』と真顔で返した。
「うん・・さすが、私の愛するエースだわ」とエミが微笑んで、頬にキスしてくれた。
私は本当に嬉しかった、それからミサとレイカがキスしてくれて。
マリアが駆け寄って、私が頬を出したら、両手【ペチ】をしてくれた。

『マリア・・ごめんなしゃ～い』とウルウルで言った。
「えーしゅ・・きあい」とマリアがプイをした、私は大慌てで。
『マリア・・プイは駄目だよ、プイは』とマリアを抱き上げた。
「ゆりか～」と言って、天使全開不敵を出した。

『マリア・・いよいよ・・いよいよマリアに意地悪1点』と笑顔で言った、マリアが天使全開で返してくれた。
「大変・・頑張らないと、マリアに抜かれる」とエミが不敵を出した。
『エミ～・・不敵は駄目だよ・・不敵は』とウルで返していた。
女性達の笑い声を聞いて、エミの可愛い不敵を見ていた。

「ホノカ・・これからの話は、内緒にしてほしい・・本人が自然に知るまで」と蘭が真顔で言った。
「分かりました・・約束します」とホノカも真顔で答えた。

「この話に登場する、この少女・・今では自分で自傷の女神と名乗ってる。
完全に乗り越えているんだろうね、自分に背負わせているんだ。
その少女は昨年の薬物事件の時に、無理やり薬を飲まされて。
家のベランダから転落した、それでも衝動は蘇らなかった。
分かるよね・・その少女、自傷の女神。
それは・・ジンの妹だよ」

蘭は最後にホノカに満開で微笑んだ、ホノカは驚いて蘭を見ていた。
「蘭・・そうであるのなら、最後の道標は・・そうなんですか？」とユリさんが真顔で聞いた。
「そうです・・最後の道標は・・そこに有ったんですね」と蘭が満開で微笑んだ。
「私も今日聞いて、そして今の話で・・感動しました」とユリカが爽やかに微笑んだ。
瞳を潤ます3人を見て、女性達も私もその事は、深くは聞かなかった。

「エース・・本当にありがとう」とホノカが華麗に微笑んで、頬に

キスしてくれた。
「あ～～・・ホノカ、キスも許してないよ・・あんたのは危険だから」と満開ニヤで言った。
「カスミ～・・私のは危険なんだって」とホノカが華麗ニヤで言った。
「危ない病原菌、持ってそうだからだろ」と全開不敵で返した。

「でも・・マキも凄いけど、聞けば聞くほどシズカも凄いな～」とハルカが微笑んだ。
「あの姉弟問答・・凄いですよね～」と久美子が微笑んだ。
「ユリ・・やめんか、その者欲しそうな顔は」とマダムが笑顔で言った。
「あら・・見つかりました、欲しくて欲しくて」とユリさんが薔薇ニヤで言った。
「何かエミに勉強方法教えたいみたいで、母さんと来るって言ってましたよ」と満開で微笑んだ。
「えっ！・・嬉しい～」とエミが少女の笑顔で言った。
「それは楽しみだ・・マキと違う話しが聞けるな」とカスミが微笑んだ。
「面白いですよ～・・なんせエースに、ＤＮＡが最も近いですから」とマキがニヤで言った。
「それは怖い気がするね～」とレンが笑顔で言った。

『あっ！・・久美子、早めに練習しとけよ、面接官が来るから』とニヤで言った。
「了解・・頑張りま～す」と笑顔で言って出て行った。
「久美子ちゃんは、本当のステージに上げるのね」とユリカが爽やかニヤを出した。
『俺が見たいんだよ・・ステージで叫ぶ久美子を』と笑顔で返した。

「ユリさん、来週の火曜日なんですけど」とハルカが真顔で言った。
「良いですよ・・シオンは一人で大丈夫ですから、勉強してきなさい」と薔薇で微笑んだ。
「ありがとうございます・・やってみます」とハルカが笑顔で返した。
「ハルカちゃん、今夜はよろしくね」とホノカが微笑んだ。
「はい・・頑張ります」とハルカも微笑んで返した。

「ハルカ、分かってますね・・私はミチルに対してだけは、絶対に恥をかきたくありません」と薔薇ニヤで言った。
「重々承知しております」とハルカが笑顔で頭を下げた、全員が笑っていた。
『ユリさんの煽りは、強烈だね』と私がニヤで言った。
「絶対に見に来いよ・・スナックのハルカちゃんを」とニヤで返された。
『楽しみにしてま～す・・下ネタでウルするなよ』と笑顔で言った、ハルカが笑顔で睨んでいた。
女性達が準備に行って、私は指定席に入った。
久美子が軽快にジャズを奏でていた、フロアーは準備万端で、女優の登場を待っていた。

「ありがとう・・気持ちが凄く楽になったよ」と千春が笑顔で言った。
『うん・・千春、今度お礼して』と笑顔で返した。
「なんでもどうぞ」とニヤで返された。
『追加の宿題が山ほど出た・・習ってないのまで、教えてね』とウルで言った。
「了解・・胸でも良かったのに～」とニヤで言ってフロアーに歩いて行った。

私は自分で感じていた、忘れていた感覚が完全に戻った事を。
沙紀がメモ用紙に描いた、父親の顔を思い出していた。
灼熱のフロアーに、火種を抱えて女優達が入って来た。
９月１日の夜が幕を上げた・・私は集中の中にいた・・前だけを見て。

自傷の女神・・私は幼心に愛していた。

その明るい笑顔が、輝いていた。

マキが話したほどの、深い意味を・・私は感じていたのであろうか？

今でも自信が無い・・私はどこかで怒りに震えていた。

自傷行為そのものに、屋上で海を見ながら・・ヒトミを想っていた。

生きたかったであろう、沢山の友を想っていた。

だからその手に打って出た、何も怖くはなかった。

自分の手の甲から溢れ出る、鮮血を見ても怖くなかった。

痛みなど全く感じなかった、ただその美しい女神の顔を見ていた。

私が女神と再開するのは、この年の年末だった。

偶然に夜街で会って、腕を組まれて微笑んだ。

私は本当に嬉しかった、私の想像など遠く及ばないほど、女神が美しかったから。

私の左腕を掴み、自分に寄せて・・傷跡を指でなぞった。

「私は好きな男が出来るかな～・・これ以上の愛情を感じる事が」と微笑んだ。

『出来るよ・・俺にもできたから』と笑顔で返した。

女神は嬉しそうに笑って、抱きしめてくれた。

人混みの繁華街で、暖かい女神に包まれていた。

自傷行為・・精神的な病なんだろうか・・私には分からない。

現代では、広く知られるようになった。

リストカッターなどと、格好の良い呼び名まで付いた。

何かが違うと感じる・・私は左手を見ると・・そう思ってしまう。

だから岸を指差そう・・泳げるのだから。

社会という荒波も・・怖くはないのだから・・全てに終わりはあるのだから。

愛の描写

情熱のフロアーに響く、強く優しい旋律。
弾き手は冷静でない、内包する熱い塊を吐き出そうとする。
その椅子に座ると人格まで変る、白と黒の鍵盤と闘うかのごとく躍動する。

私は指定席に座り、ジャズの調べを楽しんでいた。
四季が揃い、ユメ・ウミが入った、シオンとマキが加わって談笑していた。
その時カズ君に連れられて、J・塚本が私の所に笑顔で歩いて来た。
私は椅子を用意して、隣に招いた。

「一瞬で分かったよ・・レベルが違う、凄い子だな～」と嬉しそうに塚本が笑った。
『今からですよ・・盛り上がります』と笑顔で返した、塚本は頷いて瞳を閉じた。
久美子は面接官の来場を感じたのか、サマータイムに入った。
強い久美子のアレンジで、リンダの叫びを表現していた。
レンと私服のハルカが入場し、ナギサ・蘭・サクラさん・アイさんと入場した。
女優が揃ったのを確認して、久美子が止まった、塚本は目を閉じたままだった。
久美子が私を見て頷いた、私も笑顔で頷いた。

激しい旋律が響いた、久美子は座る事を拒否して弾いた。
圧倒的迫力で、鍵盤を叩いた・・魂の叫びが木霊して誰も話してなかった。
久美子は瞳を閉じて、汗を流して・・狂おしく舞いながら弾いた。

最後まで座る事はなかった、弾き終わった時に静寂が訪れた。
Ｊ・塚本は俯いて泣いていた、私は音楽を深く愛する人だと感じていた。

「素晴らしい・・本物のジャズだ」そう叫んで、塚本が立ち上がり拍手をした。
女性達も我に返り、笑顔で拍手をした。
「本当にあの子が、やりたいと言ってるのか？」と塚本が私に笑顔で言った。
『リッチハートの舞台に立ちたいんだって、夜街の音楽家として』と笑顔で返した。
「俺達も・・頑張らないと」とニヤで言った時に、久美子が笑顔で歩いて来た。

『塚本マスター、久美子です・・久美子、知ってるだろうけど、Ｊ・塚本さん』と互いを紹介した。
「よろしくお願いします」と久美子が笑顔で深々と頭を下げた。
「こちらこそよろしく・・久々に泣けたよ、嬉しくて」と塚本が笑顔で返した。
「嬉しいです・・塚本さんに言われると」と久美子が微笑んだ。
「保護者の方に、一応挨拶したいんだけど」と塚本が微笑んだ、久美子が困って私を見た。

『久美子、ＴＶルームのマネージャーマダムに会ってもらえば、お話しならそこでゆっくりと』と笑顔で言った。
「そうですね、行きましょうか」と久美子が微笑んだ。
「エース、サンキュー・・たまにはバーに来いよ、フリーパスだからな」と塚本が笑顔で言って。
久美子と笑顔で話しながら、ＴＶルームに消えた。

「久美子も次の段階に入りましたね、後押しを頼みますよ」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
『了解です・・久美子は女性達にとって、希望の光ですから』と笑顔で返した。
美しい薔薇の笑顔を残して、ユリさんが女性達の円を目指した。
絶対に崩れない、美しい後姿を見送りながら、俺も頑張ろうと思っていた。

「千春・・疲れが取れましたね。
9月に入りました・・生活の状況も変ると思います。
まだ暑さが主張してます、体調管理に気をつけて。
栄養摂取を怠らないように、カスミのように自分の体を理解して。
調整に心がけて下さい、楽しみはこれからですから」

ユリさんが薔薇で微笑んだ、カスミの嬉しそうな笑顔があった。
「はい」と全員が笑顔で返した。
「それでは今夜も開演しましょう」の言葉に、「はい」のブザーを鳴らした。
ハルカが緊張気味に歩いてきた、私はニヤでハルカを見ていた。

『緊張してるね・・ハルカ』と笑顔で言った。
「誰かさんが、最初にミチルママを指名するから」と微笑んだ。
『リアンやユリカじゃ、ハルカに緊張感が出ないでしょ』とニヤで言って、腕をくの字に曲げた。
「よし・・見せてあげる、ニューハルカを」と笑顔で言って腕を組んできた。

ハルカと腕を組み通りを歩いていると、呼び込みさん達に冷やかされた。
『ハルカの時は、嫉妬が多いな～』と笑顔で言った。

「私とミサキはこの街のアイドルだからね、すぐにマキとヨーコに変るけど」と微笑んだ。
『そっか～・・ハルカも見られてるね、その生き方まで』と微笑んだ。
「うん・・だから中途半端は出来ないの、お世話になったから」と笑顔で言った。
美しい笑顔だった、巣立った雛が羽を広げた。
その羽は美しく輝き、強く柔軟であった・・どんな逆風でも飛べるように。

ミチルの店の前で、ハルカが体のチェックをして、大きく深呼吸した。
私は緊張しているハルカ見ていた、美しく微笑んで頷いた。
私が先に店に入り、ハルカが続いた。
ミチルが顔を出して、妖艶に微笑んだ。
ハルカが笑顔で挨拶をして、ミチルも嬉しそうに微笑んで。
お店の女性達に紹介した、ハルカが笑顔で挨拶をして、女性達も笑顔を返していた。
私はカウンターに座って、その光景を見ていた。

「エース・・私達もクラブを経験出来るの？」といつもいる可愛い女性が微笑んだ。
『魅宴かＰＧかゴールドならね』と笑顔で返した。
「ＰＧは凄いんでしょ？ハルカちゃん」と笑顔で聞いた。
「難しさは変りませんね、ゴールドは知りませんけど・・ＰＧは楽しめますよ」とハルカが微笑んで返した。
「ＰＧだな・・やっぱりユリさんを近くで見たい」と女性が私に笑顔で言った。
『日程決まったら、ハルカに連絡して・・ここにカスミを投入するから』と笑顔で返した。

「ホノカとカスミのコンビが見れるんだね～・・少し怖いね」とミチルが妖艶ニヤを出した。
『楽しみでしょ～・・蘭とナギサもすぐに投入するよ』と笑顔で返した。
「凄い名前がどんどん出てくるから、ワクワクする～」ともう一人の女性が笑顔で言った。
『ファイナルは・・ミチルとユリのコンビだよ』とニヤで言った、静寂が包んでいた。
「凄すぎる・・想像もできない」と女性が微笑んだ。
「か～・・楽しみだね、1度で良いから一緒に仕事をしてみたかったよ」とミチルが楽しそうに言った。
『その前に、ミチルのクラブ活動があるよ』とニヤで返した。
「いつでも良いよ・・心の準備は出来てるから」と妖艶ニヤで返された、私も笑顔で頷いた。

その時、市役所の22名の若手の団体が覗いた、ミチルが笑顔で受けた。
私はミチルに呼ばれて、BOXのソファーの椅子の配置を変えた。
『ミチル・・疲れ気味、後で強制ユリカスペシャル』と囁いた。
「本当に嬉しいよ、ありがとう・・いつも見ていてくれて」と囁いたミチルに笑顔で返して。
BOXに向かうハルカにニヤを送って、店を出た。

私は帰りに魅宴を覗いた、少し賑やかなフロアーを見ていた。
「瞑想は良い効果があるね～・・ミサキも行きたいと言ってきたよ」と大ママが笑顔で言った。
『うん・・リョウの姿に少し感動したよ』と笑顔で返した。
「リアンの前に、誰か投入予定があるのかい？」と大ママが微笑んだ。

『うん・・俺は魅宴の第一弾は、ナギサ復活を考えてる』とニヤで言った。
「そうか～、ありがとうエース・・リョウとミサキが感動するよ」と大ママが嬉しそうに微笑んだ。
『魅宴のナギサ、それを経て・・ナギサは完全復活に入ると思うから』と笑顔で返して、大ママに見送られ魅宴を出た。

ＰＧに戻り指定席に座り、フロアーの状況を確認した。
客は８割入っていて、熱が上がり始めていた。
私はシオンの所に行った、マキが簡単なサインを繋いでいた。
『シオン・・追加の宿題してくる』とウルで言った。
「先生頑張って下さい・・英語ならシオンに聞いてね、他は駄目ですよ」とニコちゃんで言った。
『シオン・・短大生のくせに、数学教えて』とニヤで言った。
「それはぜっっったい、無理です」とウルで返した。
「言わなくても分かってるだろうけど・・私にも聞くなよ」とマキがニヤで言った。

『あ～・・頼れるのは、四季だけだな～』とニヤで返した。
シオンもマキもウルで頷いた、私は蘭に勉強するポーズで伝えた。
蘭は満開で微笑んで、最後にニヤを出した・・女性達がニヤで見ていた。
ＴＶルームに戻ると、久美子とエミが宿題をしていた。
『ラッキー・・久美子がいた、数学教えて』とニヤで言って、エミの隣に座った。

「私を誰だと思ってるの・・久美子は音楽科です」とウルで返してきた。
『ただの、連立方程式だよ』とニヤで言った。
「何それ・・美味しいの？」と私を真似てとぼけた。

『頼りにならない人ばかりだ・・エミ早く来てね』とウルでエミに言った。
「は～い・・がんばります」とエミニヤできた。
私は数学のプリントを出して、考えていた。
エミが興味津々でプリントを見ていた、その瞳の強さが嬉しかった。

「そっか～・・ようするに、XとYが何かを考えるんだね」とエミが笑顔で言った。
『そのようだね～』とウルで返した。
「がんばれエース・・Xが蘭ちゃんでYがユリカちゃんだと思えば、エースなら解けるよ」と少女の笑顔で言った。
『なるほど～・・さすがエミだね』とその感性に驚きながら、笑顔で言った。
私はシズカが強く言った、【あの子なら、出来るよ】と言う言葉を思い出していた。
小3用の図形の角度を出している、エミを見ていた・・学ぶ事の楽しさに魅入られた少女を。

1時間ほど取組んで、疲れてやめた・・久美子が3人娘と遊んでいた。
エミを見て・・私はまたも凍結した、子供用の英語の本を見ていたのだ。
『エミ・・それはイングリッシュじゃないかね』と笑顔で言った。
「オー・イエス」と両手を広げて、マチルダを真似た笑顔で返された。
『オー・マイ・ガット』とウルで返した。
「エミ・・エースの英語力はそこまでだよ」と久美子がニヤで言った。
「でも良いよね～・・エースは語学がいらないから」とエミが笑顔で言った。

「エミ・・変なものに憧れるなよ」と松さんがニヤで言った。
「うん・・変な者には憧れないよ」とエミが私にニヤをした。
『俺嬉しくて泣いたのに、エミが愛するエースって言ってくれたから』とウルウルで言った。
「愛するエースだよ・・エースがユリカちゃんを愛するのと同じだよ」とエミが微笑んだ。
静寂が支配した、私は感動していた・・そして幸せを感じていた。
『ありがとう、エミ・・俺は幸せだよ』と笑顔で言った、エミが少女の輝きで頷いた。
マダムと松さんと久美子が、優しい瞳で英語の本を見ているエミを見ていた。

４人娘が歯磨きをして、私は一人一人を抱き上げて、チェックをした。
エミの照れた笑顔と、ミサの自慢話と、レイカのマユの秘密話を笑顔で聞いた。
最後にマリアを抱き上げて、寝かしつけた・・マリアは穏やかな温度で眠りについた。

「エース、ありがとう・・採用されたよ」と久美子が微笑んだ。
『良かったね、久美子・・俺も楽しみだよ』と笑顔で返した。
「塚本の兄ちゃん、良い中年になったよ」と松さんが微笑んだ。
「やんちゃも、無駄にならんかったの～」とマダムも微笑んだ。
「マネージャーですって、２人を紹介したら・・塚本さん焦ってたよ」と久美子がニヤで言った。
『さぞ怖い過去が、あるんだろうね～』とニヤで返した。

「怖い過去なんて、ありゃしないよ」と松さんが笑顔で言った。
『ねぇ松さん・・松さんが出会った中で、１番凄いと思った夜の女

性は?』と笑顔で聞いた。
「真希とアスカとユリ・・比べようがない、その3人は」と笑顔で返してきた。
『やっぱり・・比べられないんだね』と笑顔で言った。
「じゃが・・女としての生き方で言ったら、圧倒的に律子だよ」とニヤで返してきた。

「私・・泣きそうだった、律子さんが・・久美子、母さんって呼びなさいって言ってくれて」と久美子が真顔で言った。
「律子がここに来る事が、どんなに素敵な事なのか・・いつか分かる時が来る」とマダムが笑顔で言った。
「多分・・自分の子供を持って、悩んだ時に・・感謝するよ」と松さんも微笑んだ。
『そうかも知れないね・・自分の悩みなど小さいと、律子はシズカと俺の母親だったんだってね』と笑顔で返した。
3人の笑顔を見て、TVルームを出て指定席に座った。
フロアーは満席状態で、熱が高く笑顔が溢れていた。

その時【受付】とユリさんからサインが来た、私が受付を覗くと。
狸院長と関口医師と婦長が来店していた、カズ君に案内されて3番に入った。
ユリさんと蘭が3番に向かった、挨拶をして笑顔が溢れた。
蘭が関口医師と話して、婦長と笑顔で言葉を交わし・・私に【指名】とサインを送ってきた。
私は裏を回り、3番に行って挨拶をした。

『関口先生・・ご無沙汰してます』と笑顔で言って、婦長の隣に座った。
「元気そうだね・・そしてありがとう、あの絵は感動したよ」と優しい笑顔で言った。

「私も本当に感動したよ・・あなたも沙紀の父親に会ったら、感動が倍増するよ」と婦長が微笑んだ。
「素敵なお話しですよね・・私も蘭も聞いて感動しました」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「そう思って・・どうしても2人に見せたくてね」と院長がクリアファイルを鞄から出した。
ユリさんも蘭も最高の笑顔になった、院長が笑顔でユリさんに渡した。

ユリさんと蘭が真剣に見ていた、その横顔が嬉しかった。
ユリさんと蘭の美しい横顔が、そのメモ用紙に魅入られていた。

「沙紀は、自閉症の9歳の少女です。
でも私は自立できると思っています、だからこそミホと同室にしました。
互いが刺激になるのではと思って・・挑戦です、小僧に教えられた挑戦。
ミホが転院して来ると聞いて、小僧が動いたと感じました。
院長と婦長に小僧の話をして、院長が小僧に会ってくれました。
そして今日、小僧がミホを尋ねて来た。
そして沙紀に出会った、小僧はまたも私の想像を遥かに超えた。
沙紀のその絵も本当に驚いた、でも1番驚いたのは。
母親の変化です・・小僧が伝えた、その沙紀の本質。
母親はどんなに感動したのでしょう、そして覚悟を決めたようです。
母親が私に言いました、もちろん絵も嬉しかったけど。
個性と言われた事が、1番嬉しかったと・・泣いていました。
私はまた気付かされた・・医師としてしか関わってなかったと。
まず伝えるべきは母親にでした、沙紀が自立出来ると信じるなら。
母親とじっくり話すべきでした、私にも・・病院としても。

小僧をお借りしたい・・それをどうしても伝えたくて参りました」
関口医師が、その真摯な姿勢で、ユリさんと蘭に伝えた。
「本当に嬉しいお話です・・そしてこの絵、どんな芸術より強く主張してますね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「愛情に満ち溢れてる・・父親に対する想いが、描がかれていますね」と蘭が満開で微笑んだ。

「父親が夕方来て・・その絵を見て、廊下の隅で号泣していました。
若い看護婦がそれを見て、貰い泣きして大変でした。
そして看護婦達が、夜勤との引継ぎで言いました。
沙紀には、思ったっままを表情に出そうと。
教える時には真剣に、怒るべき時は真剣に怒ろうと。
私は嬉しかった・・その変化が、仕事に対する責任感が出ていて。
私はこの子に賭けました・・必ずミホの笑顔を見せてくれると。
明日からが楽しみです、いつか私を現場で号泣させてくれると思うから」

婦長は笑顔で、ユリさんと蘭に言った。
ユリさんの薔薇と、蘭の満開が咲いて頷いた。

「この絵を一晩だけ、お借りしていいでしょうか？
女性達に見せてあげたい、大切な想いを気付かせてくれるから。
大切に扱って、明日小僧に返却させますから」

ユリさんが真顔で院長に言った、蘭も真顔で見ていた。
「かまいませんよ・・明日、返して頂ければ」と院長が笑顔で言った。
「ありがとうございます」とユリさんが薔薇で微笑んで頭を下げた、蘭も頭を下げていた。

「小僧・・感謝を込めて特別許可を与える、面会時間を気にしないでいいぞ」と院長が笑顔で言った。

『ありがとうございます・・何も出来ないけど、諦める事も絶対に出来ない。
私の想いはただそれだけです、私も沙紀が自立できると確信しています。
あの子は強い意志を持ってますから、大丈夫・・負けない子です。
私が教えたいのは・・普通などでなくて良いと言う事です。
人に優劣は無いと信じているから、もし優劣が存在するのならば。
私は沙紀より劣っている人間だと感じます、沙紀の心は自由です。
常人・・普通と言われる人間では、絶対に辿り着けない。
その世界に踏み込めます、このメモ用紙にポールペンで描いた。
この絵だけで・・人々に何かを強く伝えられるのだから。
未来は決まっていないから、ミホにも沙紀にも素敵な未来もあるから。
それを探しに行きたいんです、手を繋いで・・怖くないよと言いながら。
それしか出来ないから・・それだけが俺の望みだから』

5人を見て笑顔で伝えた、蘭の満開笑顔が嬉しかった。
私は5人に挨拶をして、ユリさんからクリアファイルを大切に受取り。
笑顔で頭を下げて、3番を後にした・・女性達の視線を感じていた。
通路の奥に小さな体が見えた、ユリカが静寂を連れて微笑んでいた。
私はユリカに歩み寄り、手を引いて小窓の所まで行った。
そしてユリカにファイルを渡した、ユリカはそのまま暫くファイルを見ていた。
何かを感じて、それに応えてるようだった、私はユリカの美しい横顔を見ていた。

そしてユリカが絵を見た、震えながら・・泣いていた。
涙で滲ませないように、少し離して見ていた。

「素敵だね・・本当に素晴らしいね。
愛情が溢れている、言葉に出来ない愛情が・・すべて詰まってるね。
そしてユリ姉さんも蘭も凄いね、これを見て涙を我慢できたのだから」と静にユリカが囁いた。

『絵じゃないよね・・それは絵じゃない、愛情表現だよね』と私も囁いて返した。
「うん、そうだね・・本当に大切な事が、この中に溢れてるね」とユリカが呟いた。
ユリカの肩を抱いて、その温かい温度を感じていた・・小窓から光が侵入していた。

「すっごく元気が出た・・私は人に物を贈った事が、こんなに嬉しい事は初めてだよ」とユリカが爽やかに微笑んだ。
私はユリカを通りまで送り、笑顔で手を振って別れた。
裏ドアから入ると、久美子が待っていた・・笑顔で私に手を出した。
「マダムも松さんも待ちきれないって、私もだけど」と久美子が微笑んだ。
『見たら大切に預かっててて、見る時に離して見ろよ・・涙で滲ませるなよ』と笑顔で言って渡した。
「了解・・今で泣きそう」と久美子が言って、ＴＶルームに消えた。
私はエミを帰りに起こして、見せようと思っていた。
父親を想う、同じ世代の強い想いを・・エミは感じてくれると思っていたから。

私は指定席に座ってフロアーを見ていた、院長と関口医師と婦長が笑顔だった。
婦長が楽しげに何か言って、院長がウルウルを出していた。
シオンとマキがコーラを持って、休憩に来た。

「先生・・シオン、素敵な予感がしてますけど～」とニコちゃんで言った。
『3番のお客さんが、ミホの病院の関係者・・沙紀の絵を見せに来たんだ』と笑顔で返した。
「もしかして・・見れるんですか！」とシオンが驚いて言った。
『仕事が終わったら、皆に見せるよ・・仕事中に泣かれると困るからね』とニヤで言った。
「嬉しいです～・・楽しみだね、マキ」とシオンが微笑んだ。
「はい・・きっと素敵な絵ですね」とマキが笑顔で返した。
私はシオンの変化が激しいのに、驚いていた、シオンが他人を呼捨てにするのを初めて見た。
それが自然に流れて、マキはシオンの事を完璧に信頼してると感じていた。

「それは本当の話だね？」とカスミが笑顔で言った。
『カスミは離して見てね・・絶対に号泣するから』とニヤで言った。
「く～・・楽しみだ～」と笑顔で言って、銀の扉に消えた。
私はコーラを飲みながら、シオンとマキの笑顔の会話を聞いていた。
情熱のフロアーを、温かい何かが包んでいた・・9月はスタートしたばかりだった。

沙紀のメモ用紙の絵画は、女性達に大きく響いた。

カスミは1度実家に帰り、今の現状の報告を両親にしてきた。

ハルカも実家に一泊で帰り、両親と触れ合っていた。
四季もユメ・ウミも実家に帰って、その事を笑顔で話してくれた。
そしてナギサが覚醒する、その絵を見て号泣したナギサ。
魅宴復活後に見せてくれる、その自由な心を広げて・・愛を表現した。
そして私は蘭に付き添って、蘭の実家を訪ねる。
蘭の満開が咲き誇り、精神的な春を表現してくれた。
私は色々と爆弾を用意したが、夏物物語で一番強力な爆弾は。
今でもこの沙紀の絵だと思っている、愛情に満ち溢れた絵だった。
言葉が使えない少女が描いた、父親に対する愛だった。
感謝が溢れ出していて・・そして夢まで描いていた。
私が父親に会った時の感動は・・今でも忘れられない。
その正確な描写の中に、唯一想いを込めたのであろう・・目の描き方。
その絵の父親は・・強い瞳で描かれていた。
実際の父親は優しい目をしていた・・沙紀は本質を描く。

父に強く生きて欲しいと願ったのだと・・私は感じた。

娘を心配しないでと、強いメッセージで描いた。

私は今でもはっきりと覚えている・・あのメモの絵画を。

沙紀の心が描いた・・大切なメッセージだから・・。

涙のリレー

その想いは何かを強く伝えてくる、生活に追われて忘れがちな何かを。
無償の愛に応えた、その強い描写が訴えてくる。
愛には愛で応えた、完成などしない永遠の未完成である心のままに。

私は熱の高いフロアーを見ていた、女性達をチェックしながら。
ナギサが華やか笑顔で、休憩に歩いてきた、その美しい笑顔を見ていた。
「ナギサ様の美しさに、見惚れてるね～」と華やか二ヤで言った。
『うん・・ナギサはやっぱり綺麗だね』と笑顔で返した。
「素直でよろしい・・やっとユリ姉さんって、自然に出だしたよ」と微笑んだ。
『ＯＫナギサ・・チャレンジを開始しようか？』と二ヤで言った。
「良いよ～・・・待ってました」と華やかに微笑んだ。
『月曜の夜・・魅宴復活だよ、火曜日にリアン光臨だから』と笑顔で言った。

「よし・・やってみるよ、大ママに感謝を込めて・・リョウとミサキに見せてやる」と華やかに微笑んだ。
絶品だった、ナギサは元々美しさでは、誰にも引けを取らないのだ。
それに加え、内面の自由さが浮き出るような微笑がプラスされていた。
『期待してるよ・・必ず見に行くね』と笑顔で返した、ナギサは華やか笑顔を残して扉に消えた。

その時、院長３人組が席を立って、受付で院長が支払っていた。
ユリさんと蘭が見送りに出ていた、私もエレベーター前で笑顔で挨

拶をした。
「院長に聞いたか？・・会ってほしい子の事」と関口医師が真顔で聞いた。
『うん・・ヒトミと同じなんだね』と真顔で返した。
「ああ・・日本で３２例目だよ」と真剣な瞳で言った。
『先生、今までは関係ないよ・・残り時間を感じてるの？』と真顔で返した。

「それは無いよ・・ヒトミの時はそれとの戦いだったけど、まぁ明日会ってくれよ」と笑顔になった。
『了解・・何にも出来ないけど、俺は会いたい・・ヒトミに対して伝えきれない事があったから』と笑顔で返した。
「小僧君・・君は何も出来ないけどと言って、人を驚かすんだな」と佐伯院長が笑顔で言った。
『院長・・君を付けないでよ、なんか変だから』と笑顔で返した。
「こりゃ失敬・・心のままにやってくれ、小僧」と笑顔で言った。
『うん・・やってみたい、俺にしか出来ないと思って』と笑顔で返して見送った。

「ギリギリだったよ・・あの絵は本当に心に訴えて来たよ」と蘭が満開で微笑んだ。
「私も震えました、本当にギリギリでした・・今まで見た絵の中で、一番ですね」と薔薇で微笑んだ。
『ユリカが飛んで来ていて、見せたら号泣しました・・ユリさんも蘭も凄いって言ってました』と笑顔で返した。
「凄いのかしら・・私はまた突きつけられました、それがプロなのかと」と美しい真顔でユリさんが言った。
「あの絵は超越してましたね・・どんな状況でも強く響く物もあると感じました」と蘭がユリさんに微笑んだ。
「そうですね・・１つだけ言えるのは、幸せでしたね」と薔薇の微

笑みで返して、２人で戦場に戻った。

私はその背中を見送り、裏から出て通りを歩いていた。

自分で今の自分を考えていた、こんなんだっただろうかと。

《ユリカ・・抑えてばかりいると、駄目だね・・ユリカが蘭に言った言葉が分かったよ》と久しぶりにユリカのビルを見上げ囁いた。

強く暖かい波動が包んでくれて、それで良いんだと言ってくれたようだった。

私は元気が出て、ミチルの店を目指した。

ミチル店に入ると、ＢＯＸに３組、カウンターに３人組と単独客がいた。

私はいつものカウンターの奥の席に座った。

「ハルカちゃん・・凄いね～あれで１７歳なんだから」とコーラを出しながら、可愛い女性が微笑んだ。

『なんせ丁稚奉公からの、デビューだからね』と笑顔で返した。

「水曜で調整してみるね、ホノカがこっちの時じゃないとね」と笑顔で言って、お客の前に戻った。

私は二ヤ二ヤしていた、私は思っていたのだ。

ミチル・ユリカ・リアン、この３店の女性のレベルの高さを感じて。

クラブの女性たちも、井の中の蛙だったと感じるのではないかと。

ＢＯＸの団体が席を立って、ミチルが見送りから帰って来て、私に微笑んだ。

私は席を笑顔で立った、ミチルの少し疲れた嬉しそうな笑顔を見ていた。

「ちょっと・・ユリカスペシャルで出てくるね」とカウンターの女性に微笑んだ。

「も～・・ミチルママばっかり、今度は私にもお願いね」と可愛く微笑んだ。

『楽しみにしてます』と笑顔で返して、ミチルと店を出た。

「どうしたの～・・それは戻ったって事なのかな？」とエレベーターの中でミチルが微笑んだ。

『多分・・自分でも分からないよ、ミチルだって完全に戻ったかを、分からなかったでしょ』と笑顔で返した。

「そうなんだよね～・・多分、以前には戻らないよ、何か新しい物が付随してるんだね」と妖艶に微笑んで、私の首に腕を回した。

私はミチルを抱き上げて、階段をゆっくり登った。

南風が少し強くて、爽快な気分だった。

ミチルは静かに抱かれていた、平穏な温度に安心していた。

最上階まで登り、抱いたまま階段に座ってミチルの寝顔を見ていた。

「う～ん・・ありがとう、元気出たよ」と妖艶に微笑んだ。

『いつでもどうぞ、ミチル抱っこ好きだから』と笑顔で返した。

「前より格段に安心感が上がったよ、ユリカの揺り篭に近づいた感じだね」と微笑んで立ち上がった。

『それは最高の褒め言葉だよ』と笑顔で返して、店に戻った。

私はカウンターの奥で、ＢＯＸのハルカを見ていた。

ＰＧのようなクラブは、基本的に１対１の接客である、多くても２対１なのだ。

しかしスナックのＢＯＸの接客は、相手が大人数の場面が多い。

その感覚を感じて欲しいと思っていた、全体の流れを見極める感覚を。

ハルカはその視野の広さと、親父も言った常人を超える目配りで対応していた。

集中する笑顔のハルカを見て、私は嬉しくてニヤニヤしていた。

ＢＯＸが席を立って、ミチルとハルカが見送って帰ってきた。

「ありがとう、ハルカちゃん・・またいつでも来てね」とミチルが微笑んだ。
「はい・・凄く勉強になりました、ありがとうございます」とハルカも微笑んで頭を下げた。
私はハルカと笑顔で挨拶をして、店を出た。

「なるほどね～・・凄く勉強になるね」とハルカが微笑んだ。
『だろ・・大人数を相手にする、良い経験だよね』と二ヤで返した。
「確かに・・クラブでは中々経験できないから、たまに１０番に入ると戸惑ってた」と腕を組むハルカが笑顔で言った。
『ホノカは逆の感想だったよ、１対１・・ていうか、視線を意識し過ぎてたってね』と笑顔で返した。
「うん・・私の次の段階の提示は？」とハルカが微笑んだ。
『ハルカ・・ユリカの沙紀話覚えてる？』と笑顔で聞いた。
「もちろん・・忘れないよ、素敵な話だったから」と微笑んだ。

私は笑顔で頷いて、ハルカを連れてＴＶルームに入った。

『ハルカ・・今日の報告会、ハルカが皆に伝えて。
沙紀の話を知らない人もいるから、ユリカの言葉じゃないハルカの言葉で。
そしてその後に、これを全員に見せたいんだ。
俺は思ってる・・この絵はＰＧの女性なら・・絶対に響くと』

真剣にハルカの瞳を見て伝えて、久美子からファイルを受け取り、ハルカに渡した。
ハルカは驚いて私を見て、真顔でファイルを受け取った。
そしてゆっくりと中のメモ用紙を見た、震えていた・・ハルカの目が見開いたいた。
そして大粒の涙が溢れ出した、泣きながらもハルカの視線は絵を見

ていた。

「分かった・・ありがとう、やってみるね・・私も伝えられる人間になりたい、沙紀ちゃんに負けないように」と泣きながら微笑んだ。

『ハルカ・・ハルカは十分に伝えられる女性だよ。
ハルカ、ありがとう・・あの時に自分の過去まで話してくれて。
見ず知らずの家出少年の寂しさを感じてくれた、そして元気をくれたよ。
俺は絶対に忘れない、ハルカのあの話と・・夜空に描いた未来図だけは』

ハルカの輝く瞳を見ながら、笑顔で伝えた。
「うん、私もだよ・・絶対に忘れない、たとえ女帝になっても・・化粧直してくる」と微笑んで、ファイルを渡しＴＶルームを出て行った。
「上げたね・・２段は上げたよ、今の言葉は」と松さんが微笑んだ。
「ありがとな、エース・・ハルカは成るかもな、お前が考える・・理想の女帝に」とマダムが真顔で言った。
『うん・・でも・・母親になったハルカが見たいな、きっと素敵だよ』と笑顔で返した。
マダムと松さんと久美子の笑顔に見送られ、指定席に座った。
シオンとマキが、私が持つクリアファイルを見て、嬉しそうに微笑んだ。
私も笑顔で返した、ハルカが来て私の隣に座った。
私は嬉しかった・・久々にハルカと私の位置関係が戻って。

その時に終演を迎えた、１０番にメンバーが揃った。
ユリさん・アイさん・サクラさんも来ていた、そしてボーイが全員が６番に座った。

私がフロアーに立って、ハルカが並んで立った、蘭が満開笑顔で促した。

『今夜の終礼は、特別な贈り物にします・・ハルカにハルカの言葉で話してもらいます。
そしてその後・・一枚の絵を見て下さい、心を空にして。
強い想いが入っています、大切なメッセージが込められています。
感じて下さい・・心で・・ハルカよろしく』

私はハルカを笑顔で促した。

「今日・・私はユリカ姉さんに聞きました、エースの病院での出来事。
エースがミホちゃんに会いに行って出会った、自閉症の少女の話を。
その少女は・・・」

ハルカの言葉が流れるように響いていた、私は嬉しかった。
全員に向かい、まるで私と2人で会話をするような、ハルカの言葉が。
女性もボーイも、ハルカの言葉だから素直に入ったのであろう。
静寂のフロアーに、ハルカの言葉が熱に混じり響いていた。

「・・・そう婦長さんが言って、エースは笑顔で別れました。
私は先に見せて貰いました、このメモ用紙にボールペンで描かれた芸術を。
それは絵じゃないです、父親に対する愛に溢れています。
私は突きつけられました、なぜ小さな事にこだわっているのかと。
大切なのは愛された真実だと、そして愛しているという真実だけだと。

少し離して見るのをお勧めします、涙で滲ませないように。
沙紀の父親にとって、かけがえのない・・宝物でしょうから」

ハルカは流れる言葉で話して、最後に笑顔になった。
女性達の笑顔が咲いて、期待の視線が私に集まった。
私は右端のサクラさんにファイルを渡した、サクラさんは少し震えて受け取った。
そして絵を見て、大粒の涙を流して、震える手で隣のアイさんに渡した。
「エース・・お願い、エミにも見せてね」と泣きながら微笑んだ、私は笑顔で頷いた。

涙のリレーが続いて行き、フロアーが温かい物で包まれていた。
ナギサとカスミの反応が強かった、遠くに住む両親を想っていたのだろう。
そしてやはり、両親がいないレンとマキの反応が強かった。
レンはユリさんに抱かれ、マキは蘭に抱かれて泣いていた。
涙のリレーはボーイさんに渡り、やはり涙のリレーになった。
そして最後に徳野さんが見て、強く瞳を閉じていた。
徳野という高みに棲む男の、大きな優しさを感じていた。

ハルカが徳野さんから受け取り、私に返してくれた。

『その個性は、何か1つに優れてしまう。
私は沙紀で7人目の出会いでした、その全員が何かに優れていました。
確かに障害かも知れない、だけど本人にとっては個性だと信じています。
ある才能に於いては、別世界にに踏み込みます。
それは多分、心が真の意味で自由だからでしょう。

もし出会う事があったら、笑顔で話しかけて下さい。
必ず何かを返してくれます、その個性は伝えてきます。
大切な何かを・・ありがとうございました』

真顔で言って、ハルカと2人頭を下げた。
徳野さんが拍手をして、全員が大きな拍手で応えてくれた。
ハルカの嬉しそうな笑顔を見ていた、またステージが上がった美しい笑顔を。

女性達が笑顔で控え室に向かい、ボーイが片付けに向かった。
「最高の終礼だったよ・・さすがは廃墟の伝道師の息子だな」と徳野さんが笑顔で言って、背を向けて歩いて行った。
私は嬉しくて、その背中を見送った。
私はシオンとマキとTVルームに戻り、エミを優しく起こした。

「な～に・・エース、帰るの？」とエミが覚醒しきれない顔で言った。
『ごめんね、エミ・・エミに絵を見せたくて』と笑顔で言った。
「絵？・・・沙紀ちゃんの！」とエミが一気に覚醒した。
『そうだよエミ・・9歳の女の子が描いた、お父さんへの気持ちだよ』と言って膝に抱いた。
エミはファイルを受け取り、絵を出して見ていた・・体がビクッ、ビクッと震えた。
エミはファイルに大切に絵を戻して、横にいるシオンに渡した。
そして泣きながら私に抱きついた、鼓動の早さがエミの感動を表していた。

『シオン・・サクラさんが来たら、少し待っててと伝えて・・ユリカスペシャル』と微笑んだ、シオンはニコちゃんで頷いた。
私はエミをお姫様抱っこして、裏階段を登った。

エミは静かになって、寝顔が笑顔だった・・私は最上階でエミの涙が乾くのを待った。
《ユリカ・・俺は本当に幸せだったよ、エミのあの言葉が》と心に囁いた。
強く熱い波動が包んでくれた、私と【希望】を背負う可愛い少女を。
深い眠りに入ったエミを抱いて、ＴＶルームに戻った。

ＴＶルームのテーブルの真ん中に、沙紀の絵が出ていて全員で見ていた。
「本当にありがとう、エミは幸せだよ・・強く伝えてもらえるから」とサクラさんが潤む瞳で微笑んだ。
私は笑顔で頷いて、ミサを抱いたサクラさんをタクシーまで見送った。
ＴＶルームに戻ると、全員が揃っていて、笑顔で話していた。

『ユリさん・・月曜日、ナギサに踏み出してもらいます』と笑顔で言った。
「そうですか、いよいよですね・・やはり踏み出す場所は？」と薔薇で微笑んだ。
『当然・・魅宴復活です、華やか娘を見せ付けます・・リョウとミサキに』と二ヤで返した、ユリさんも薔薇二ヤで頷いた。
「やはりそう来るよね～・・私からも、ありがとう」と蘭が満開で微笑んだ。
「ミサキは本当に見たがっていたよ、私達には伝説だから・・魅宴のユリカ姉さんとナギサ姉さんは」とハルカが笑顔で言った、美しく輝いていた。

「１回でか、ハルカ・・何段飛んだ」とカスミが不敵で言った。
「３段は確実じゃよ・・はよ逃げんか、カスミ」とマダムが微笑んだ。

「マダムが言うと、本気で焦ります」とカスミがウルで返した。
『カスミ・・俺の提案なら受けるんだね？』と真顔で聞いた。
「もちろん・・いいぞ言ってくれ」とカスミが真顔で言った。

『一週間以内に、一度実家に帰って・・両親に今の充実感を報告して来い、それから飛び級試験をする』と真剣にカスミの目を見て強く言った。
「分かった・・そうだったな、誤魔化せないよな・・ありがとな、そうするよ」と真顔で言った。
「よし・・平日にハルカも一泊で実家に帰れ」とマダムが微笑んだ。
「マダム・・ありがとうございます」とハルカが笑顔で頭を下げた。
私は蘭を見ていた、蘭の瞳の青い炎を。

「分かってる・・あなたは私には言葉で言わない、付いて来てくれるんでしょ」と蘭が静かに言った。
『蘭・・約束しただろ、絶対に付いて行くと』と笑顔で言った。
「うん・・母さんに連絡するよ・・弟が出来たって」と満開二ヤで言った、私はウルウルで返した。
「だから～ウルウルしないの、私の母を心臓発作にさせられないよ」と満開笑顔で言った。
「そらりゃそうだ～・・普通の母親はそうなるよ」とカスミが不敵で言った。
「いきなり言いますからね～・・娘さんを下さいって」とハルカが微笑んだ。
「運命の2人だって言葉が口癖のくせに・・自分は運命を否定してるしね～」とマキが二ヤで言った。
「本気と冗談の区別が、自分でも出来てないですね～」とシオンがニコちゃん二ヤで言った。

「シオン・・いつ上がった・・いよいよやばい状況だ」とカスミが

微笑んだ。
「大丈夫ですよ～・・カスミ姉さんには、飛び級試験がありますから～」とシオンがニコちゃんで返した。
「カスミ姉さん・・多分、連立方程式ですよ」と久美子が微笑んだ。
「何それ・・旨いのか？」とカスミが不敵二ヤで返した。
「ユリ、ちとやばいな・・エースの返しに、皆感化されてるな」とマダムが二ヤで言った。
「飛び級試験が心配ですね～・・中心点を意識してるうちだと」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「私も瞑想に行って・・頑張ります」とカスミがウルで頷いた。
全員が笑って、私がマリアを抱いてＴＶルームを出た。

「蘭姉さんは、どこで取るの・・中心点？」とカスミが笑顔で聞いた。
「私は心の真ん中・・そこからしか動きは出ないよ」と満開に微笑んだ。
エレベーターが静寂に包まれた、蘭はキョトンとしていた。
「私・・変な事言った？・・ねぇきゃしゅみ」と満開ウルで言った。
「不覚にも・・感動していた」とカスミが不敵で返した。
「そこはキラキラでしょ、きゃしゅみ」と蘭が満開二ヤで言った。
「もうホノカ姉さん盗んでる・・それも自然に」とハルカが二ヤで言った。
「ホノカ・・何それ・・美味しいの？」と満開二ヤ継続で言った。

「蘭姉さんに問う・・もしかして、今の蘭は全てパクリで出来てるのか？」とカスミが不敵全開で言った。
「失礼ね～・・パクリじゃないよ、応用編だよ」と満開で笑った、全員が笑っていた。
私は嬉しかった、蘭の心の変化が・・温もりまで上がってきていて。
タクシーに乗ったユリさんに、マリアを渡して見送った。

カスミと別れて、シオンをローズにビルに送り、ニコちゃんに手を振って別れた。
蘭とタクシーに乗ったら、蘭が満開で肩に乗ってきた。

『ご機嫌だね・・蘭』と囁いた。
「あの絵を見て、元気出ない人はいないよ」と満開で微笑んだ。
『うん・・明日、スケッチブックと色鉛筆プレゼントするから、楽しみだよ』と笑顔で返した。
「もう買ったの？」と蘭が私を見た。
『うん・・ユリカが買ってくれたよ』と笑顔で返した。
「さすがユリカ姉さん・・自分に従う素敵な人だな～」と蘭が嬉しそうに微笑んだ。
強く暖かい波動が来て、私も笑顔で蘭を見ていた。

『蘭・・沙紀が水彩に上がる時に、２人で贈ろうね』と笑顔で言った。
「うん、そうしよう・・絶対だよ、忘れるなよ」と満開で微笑んで瞳を閉じた。
タクシーがアパートに着いて、蘭を抱き上げた、満開で笑っていた。
部屋まで抱いて入って、蘭が化粧を落としパジャマで戻ってきた。
「今日は・・私が寂しいから、添い寝してね」と微笑んで、電気を消して私の腕を引いた。

「ユリカ姉さん、抱っこの感想言った？・・ニューエースの」と私の胸に蘭が囁いた。
『ミチルにユリカスペシャルしたら、安心感が上がったって・・ユリカの揺り篭に似いてきたと言われて、なんか嬉しかった』と囁いて返した。
「さすがミチルママ・・そんな感じだよ、海の上に浮いてる感じ」と言って瞳を閉じた。

私は蘭の鼓動と温度を感じながら、眠りに落ちていた。
翌朝自然に目覚めて、歯を磨き顔を洗った。
爽快な気分でトーストとスクランブルエッグを焼いて、ハムとレタスを添えた。
「おはよ～・・今日も幸せ～」と蘭が満開で洗面所に消えた。
蘭が戻ってきて、2人で朝食を笑顔で食べた。

「朝食作るの大変じゃない？」と蘭が真顔で言った。
『全然大丈夫だよ・・楽しいよ』と笑顔で返した。
「今度の日曜日、日南に行こうね」と満開で微笑んだ。
『OK・・楽しみだな～、蘭父さんと蘭母さん』と二ヤで言った。
「普通の人よ・・農家のオジサンとオバサンだからね」と満開二ヤで返してきた。
『楽しみだ～』と二ヤ継続で言った。

私は制服に着替えて、蘭の満開ニヤニヤに見送られて出かけた。
チャリに乗って宮崎駅の脇を通って、狭い路地を抜けた。
西洋風の2階建ての家のガレージに、チャリを止めた。
「小僧！・・なんだ～・・噂は本当だな」とスーツを着たオヤジがニヤニヤで言った。
『噂好きの、ご近所マダムみたいな事を・・ニヤニヤで』と笑顔で返した。
「ふふ～ん・・それがガレージを借りる態度かな」と返された。
『お父様・・お願いします～』とウルで言った。
「まぁ仕方ないな・・美由紀の執事だからな」と笑顔で言って、車に乗り出て行った。

私は家の玄関から覗いて、声をかけた。
『みゆきちゃ～ん・・学校行きますよ～』と言った。

「小僧！・・何？・・噂は事実だったね」と家用の車椅子に乗った美由紀が微笑んだ。
『美由紀・・綺麗になったな、彼氏できたな』と二ヤで返した。
「まだだよ～・・てか小僧は好きな人出来たんだね～」と玄関に押してきた。
『泣くなよ、美由紀』と笑顔で言った。
「遊びだったのね」とウルで笑った。
「小僧ちゃん・・お迎え？」と母親が出てきて微笑んだ。
『これから毎日、チャリ止めさせてもらうから』と二ヤで言った。
「それはご苦労・・では参ろうか」と美由紀が手を広げた。
私は美由紀を抱き上げて、玄関の外出用の車椅子に乗せた。

『美由紀、ニューマシン、いかすね～』と微笑んだ。
「豊君がまた改良してくれて、かなり軽くなったよ」と微笑んだ。
『さすが～・・豊兄さん』と笑顔を返して、母親からバックを受け取り、出かけた。
光射す場所で、美由紀が眩しそうに空を仰いだ。

『凄いな～・・かなり軽くなったね』と車椅子を押しながら言った。
「でしょ・・最高だよ」と嬉しそうに言った。
美由紀は事故で両足を付け根から切断した、小学校に上がる前の事だった。
しかし明るく前向きな可愛い少女だった、豊は常に研究していた。
車椅子の改良を徹底的にやった、この頃ではピンクのフレームで軽量化されていた。
サスペンションでフレームを繋ぎ、乗り心地も安定感も、市販とは比べられないレベルだった。
現代と比較しようもないほど、市販の車椅子に選択肢が無かった。
だから無いものは作る、豊の強い意志がその車椅子に詰まっていた。

美由紀は晴れた日は、自分で学校に通っていた。
それを見つけた生徒は、学年など関係なく、我先に車椅子を押していた。
悪と見られた連中も、誰彼と無く笑顔で押していた。
そして学校側も、美由紀を受け入れる為に1階の教室を改良した。
バリアフリーなんて言葉すら無かった、教師が自らの手でスロープを作ったのだ。
土を盛り、セメントを流して・・卒業する生徒が手伝っていた。
それは卒業制作だった、次世代に素晴らしい物を贈った。
そしてトイレも一室改良した、その資金は卒業生が積み立て金から贈った。
その愛情に溢れた教室で、美由紀は3年間を楽しく過ごした。
私もクラス変えはあったが、3年間同じ教室だった、そして3年間清次郎が担任だったのだ。

美由紀は学校のアイドルだった、車椅子で微笑む姿が、全校生徒に勇気を与えた。
誰も特別視しなかった、自然に接する事が出来ていた。

私は美由紀の楽しげな夏休み話を聞きながら、学校に向かい車椅子を押した。
空には入道雲が浮いていた、光射す町並みを歩いていた。
楽しげな声と暖かい波動に、背中を押されて・・・。

私達の中学の卒業の日に、清次郎が涙を見せて言った。

私は教職最後の3年間が、最も充実していた。

私は教え子に優劣など感じた事はない、しかし一人だけ特別な生徒がいる。

それは美由紀だ・・私は美由紀の担任であった事を誇りに思う。

そして美由紀を受け入れる為に、力を合わせた卒業生を。

美由紀を見守り続けた、同級生を・・そして今の1・2年生を。

全ての生徒の想いを・・誇りに思う。

そしてそれに応え続けた、美由紀を・・その影の努力を、意志の強さを。

私は誇りに感じている・・ありがとう美由紀・・よく頑張った。

皆、これから高校・大学・・そして社会に出た時に、堂々と生きて欲しい。

私達は最高の学び舎で過ごしたと、この教室を思い出して欲しい。

日本一・・愛情の詰まった教室なのだから・・・検討を祈る。

清次郎は泣きながら強く言葉にした、私は生徒と父母の啜り泣きを聞きながら。

隣の美由紀を見た、真直ぐに前を見て・・涙を流していた。

美由紀が乗る車椅子は、真赤なフレームで作られていた。

豊が自分で車椅子に乗り、公道で試している姿を、生徒全員が知っていた。

豊がその当時の最新技術を使って、作り上げた真赤なマシーン。

私がゴールドのマジックでフレームに書いた名前も、ＹＵＴＡＫＡ？になっていた。

美由紀は高校も自分で通い、そして結婚して子供を育てあげた。

美由紀の家には今でも大切に置いてある、ＹＵＴＡＫＡ？から？までの歴代マシーンが。

時がどんなに経過しても、全く色褪せない想いがある。

その？～？の進化を見ると、強い意志を感じる。

無い物は作ろうと言っている、存在しないと嘆かない強い愛情がある。

宝物だよ・・この車椅子が守ってくれたし、諦める事をさせなかった。

私は車椅子に乗りたくて、外に出たんだよ・・この車椅子を自慢したくて。

私は車椅子に乗ることが・・自慢だったんだよ。

美由紀がそう笑顔で言った、あの頃のままの微笑で・・全てに感謝を込めて。

波動の言葉

夏の朝陽を受けながら、緑道の道を歩いていた。
少女の夏の思い出を聞きながら、爽やかな海風を感じていた。
厳しい現実に翻弄されない強い心が、私の背中を押していた。

「おっ！・・召使が押してますね～」とバルタンが後ろから笑顔で言った。
『美由紀が昨日、学校さぼったから・・迎えに行ったんだ』と笑顔で返した。
「違うでしょ・・昨日は1日だから、病院日でしょ」と美由紀が笑顔で睨んだ。
「元気だね～、美由紀」とバルタンが横に並び、優しく微笑んだ。
「ミチ先輩、なんか大人っぽくなりましたね～」と美由紀が笑顔で返した。
「分かる～・・一夏の経験はしてないよ」とバルタンが私を睨んだ、私は二ヤで返した。
「怪しいですね～・・」と美由紀が二ヤで言った。
「怪しくないよ・・だいたい彼氏もいないし」とウルで返した。

「それより昨日、マキ先輩が来てね、すっっっごく綺麗になってたよ」とバルタンが微笑んだ。
「うっそ～・・会いたかったな～」と美由紀が笑顔で返した。
「シズカ先輩は元気？」とバルタンが私に笑顔で聞いた。
『元気過ぎるよ』とウルで返した。
「このニューマシン、シズカスペシャルも入ってるんですよ」と美由紀が微笑んだ。
「え～良いな～・・どこに？」とバルタンが笑顔で聞いた。
「逆走防止がワンタッチで出来ます」と美由紀が少し威張った。

「凄いな～・・シズカ先輩」とバルタンが微笑んで、校門を入って別れた。

美由紀には全ての生徒が挨拶するので、忙しそうに笑顔で返していた。

私は中庭から緩やかなスロープを押して、教室に入った。

登校している全員が、美由紀に歩み寄り笑顔で再会を喜んでいた。

「美由紀・・小僧が送迎するの？」と女子Ａが笑顔で聞いて。

「私の事が忘れられないって泣くから、送迎だけ許可した」と美由紀が笑顔で返した。

「チャッピー・・案外引きずるタイプなんだね」と女子Ｂに笑顔で言われた。

『だって美由紀が、俺の抱っこじゃないと嫌だって泣くから』と二ヤで返した。

「それは仕方ない・・私の体を上手にお姫様抱っこ出来るのは、おとんと小僧だけだから」と美由紀が微笑んだ。

『俺は美由紀の体を、知り尽くしてるからな～』といやらし二ヤで返した。

「もう皆の前じゃ内緒って言ったでしょ・・一夏の事は」と美由紀が二ヤで返した。

「美由紀さん・・一夏の何でしょう？」と清次郎が教壇からシワシワ二ヤで言った。

「自由研究で～す」と美由紀が笑顔で返して、全員が笑顔で席に着いた。

「やっと全員が揃いました・・いよいよ・・」清次郎の催眠術のような話で、私はトロンになりそうだった。

「小僧・・居眠りしたら、今の君にはどんな罰が下るか想像したかね？」と清次郎が笑顔で言った。

『滅相も無い・・居眠り、ありえない・・そんな馬鹿な』と慌てて返した。
「そうだよね～・・まさかね～・・でも想像だけはするように」と清次郎が真顔で言った。
『はい、先生』と真顔で返した、強い波動でユリカに怒られた。
退屈な授業と、馬鹿話の休み時間をクリアーして、笑顔の給食がやってきた。

午後は体育でプールに入り、ご機嫌笑顔でプカプカしていた。
「小僧～！・・お前水泳強化選手だったろ、１回も夏休みの練習来なかったな」と体育の鬼瓦が睨んでいた。
『骨折してて』とウルウルで返した。
「どこを骨折した？」と鬼瓦が二ヤで言った。
『心が・・ポッキリと・・複雑なやつで』とウル全開で返した。
「小僧はリハビリとして、１コースで１０００ｍ・・美由紀チェックよろしく」とプールサイドでストップウォッチを握る美由紀に言った。
『しぇん・・しぇんメートル』と美由紀にウルをした。
「たった２０往復だよ、頑張れ」と美由紀に二ヤで言われて、ウルで頷いた。
私は退屈な１０００ｍを、犬カキや古式泳法を真似て、美由紀の笑顔を見ながら泳いだ。

私は１０００ｍ泳ぎ、美由紀の拍手にＶサインで返した。
「終わったか」と鬼瓦が美由紀に聞いた、美由紀は笑顔で頷いた。
『先生・・今１７歳の青中の自由形のマミちゃんって子知ってる？』と笑顔で聞いた。
「もちろん・・１００ｍ自由形の中学記録保持者だったからな」と振り向いて言った。
『記録はどの位？』と笑顔で聞いた。

「確か・・〇〇秒位だったぞ」と鬼瓦二ヤで返した。

『ＯＫ・・美由紀タイムよろしく』と笑顔で言った。

「了解・・頑張れ～・・まさか、まさかと思うけど女子には負けないよね」と美由紀が二ヤで言った。

「小僧・・シズカはその約１秒遅れだぞ」とニヤニヤの鬼瓦が言った。

『ちょろいな』と笑顔で返して、スタート位置についた。

「よーーい・・どん」と言った美由紀の声で、スタートした。

３度目のターンした時にやばい気がして、必死になってゴールした。

私は美由紀を見た、ニヤニヤ顔で私を見ていた。

「小僧の方が・・１秒・・・・・・・・速い」と笑顔で言った。

『ふ～～１秒か～・・凄いな～ミサキ』と青空に囁いた。

「小僧・・大会のプールは５０ｍだぞ」と鬼瓦が笑顔で言った。

『そっか～・・実力の違いを見せ付けたよ』と二ヤで美由紀に言った。

「小僧・・一流になればなるほど、ターン多い方が早いんだぞ」と鬼瓦が二ヤで言った。

『まぁ俺はリハビリ中だから・・仕方ないよな～』とウルで空に言った、ユリカの楽しそうな波動が続いていた。

６時限目に襲ってきた、強烈な睡魔と格闘して、ミセス祥子の英語の授業をクリアーした。

美由紀が興味津々光線で来る、私の夏の事情聴取をかわしながら、美由紀を家まで送り。

美由紀の母親を美しいと褒め称え、カスピスをご馳走になって、アパートに帰った。

蘭は遅番で帰れないと言ってたので、シャワーを浴びてバスで出か

けた。
靴屋を覗き満開蘭に手を振って、誰もいないＴＶルームで沙紀のプレゼントを取った。
カズ君の貸してくれたチャリで、病院に向かった。
４階のナースステーション前で、名前を書いていたら、若い看護婦に声をかけられた。

「それじゃあ分かり難いから、小僧って書いて」と微笑んだ。
『了解・・楽でいいや～』と笑顔で返した。
「沙紀ちゃんの絵、感動したよ・・ありがとう」と可愛く微笑んだ。
『俺に惚れるなよ・・火傷するぜ』といつもの台詞で笑いを取って、病室に歩いた。
沙紀は一人で眠っていた、ミホはＴＶを見ていた。

『ミホ～・・またそんなドラマ見て～・・いけない子だ～』と笑顔で言った。
ミホは私の顔を見て、無表情でＴＶを消した。
私にはその行為だけでも嬉しかった、ミホが私を見てした事だったから。
私はミホの手を握り、今日の学校での出来事を面白く話した。
ミホはずっと私を見ていた、そして眠そうな目をした。
私はミホの額に手を当てて、温度を確認していると、ミホが深い眠りに入っていた。
私はミホに明日来ると伝えて、沙紀のベッドに行って沙紀の手を握った。

その時に沙紀が目を覚まし、温度が変化して、私も笑顔で返した。
『沙紀・・約束のプレゼント、ユリカって素敵な女性が・・沙紀の絵が見たいって、買ってくれたよ』と笑顔で伝えて、沙紀を優しく起こした。

私は包装を取り、沙紀にスケッチブックと色鉛筆を見せた。
沙紀は大きな方のスケッチブックを広げ、その白い用紙を見ていた。
私は色鉛筆のケースを開いて見せた、沙紀はその色彩を見ていた。
そして私を見た、私は笑顔で頷いた。

沙紀は下書きも何も無く、淡いブルーを手にとって描き始めた。
私は小さなスケッチブックを棚に置いて、包装紙をたたんで小さなテーブルに置いた。
沙紀は夢中で描いていた、青い稜線が描かれて・・それが何かはまだ分からなかった。
その時に母親が笑顔で入ってきた、私も笑顔で挨拶をして、クリアファイルを返した。

「主人が本当に喜んでました、あなたに会いたいと言ってましたよ」と母親が笑顔で言った。
『その絵なら、喜んだでしょうね』と笑顔で返した。
「それに・・こんなにプレゼント頂いて」と母親が言った。
『これは、沙紀の絵に感動した女性からの、贈り物です』と笑顔で返した。
「ありがとうと伝えてね」と母親が笑顔で言った、私も笑顔で頷いた。
沙紀が母親に色鉛筆を見せていた、楽しそうな顔だった。

『ねえ沙紀・・沙紀がもっと上手に絵を描きたいなら、何か1つ挑戦しようよ』と手を握り笑顔で言った。
『簡単な事でで良いんだよ・・自分で何が出来そうかな～?』と聞いてみた。
沙紀が強い温度の揺れで伝えて来た、私はトイレだけ感じた。
『トイレ?・・沙紀、もしかしてトイレに一人で行くの?』と驚きを隠し、笑顔を作って言った。

温度の揺れが、ＹＥＳを示した、少し自慢げだった。
「うっそ・・沙紀ちゃん凄いじゃない」と私の後ろから、さっきの若い看護婦が微笑んだ。
『出来るよね、沙紀・・そんなに驚くなって言ってあげなさい』と笑顔で言った。

その時に私も衝撃を受ける、沙紀の温度が降ろしてと言った。
私は沙紀の定まらぬ視線を見て、笑顔で頷いて、色鉛筆を片付けて抱き上げた。
沈黙が流れていた、そして優しく沙紀を降ろして、可愛いスリッパを履かせた。
『沙紀・・行っといで、寄り道するなよ』と笑顔で優しく背中を押した。
沙紀はゆっくりと、迷い無く出て行った。

「今なら泣いて良い？」と母親が言った。
『1分で回復するなら』と笑顔で返した、母親は頷いて泣いていた。
私はドアの影から沙紀を見た、迷い無くトイレに入って行った。
《頑張れ沙紀・・絶対出来るよ》と心で応援した。
強烈な波動が何度も来た、ユリカの頑張れが聞こえるようだった。

「長くない？」と後ろの看護婦が目を潤ませて聞いた。
『まだ・・初めてなら、もう少し』と私は廊下を見ながら返した。
その時にトイレの扉が開き、沙紀が濡れた手を振りながら出てきた。
私は病室に引っ込み、母親を見た・・涙を拭いて笑顔を見せた。
そこに沙紀が帰って来て、私に手を出した。
『早かったね、沙紀・・お～手も洗えたんだ・・俺でもよく忘れるのに～、凄いな沙紀は』と笑顔で言いながら、タオルで手を拭いて、抱き上げた。
沙紀の自慢げな温度が、本当に嬉しかった、ユリカの暖かい波動も

喜びに溢れていた。

『沙紀・・今日の絵を明日楽しみにしてるからね。
トイレ無理して一人で行かなくていいよ、段々慣れるんだからね。
さぁ、お絵かきしてね・・ママが楽しみにしてるよ。
また明日来るからね・・沙紀に会うのが本当に楽しみだよ』

優しく沙紀の耳元に囁いて、優しくベッドに座らせた。
沙紀はまた、夢中で絵を描きだした、私は母親に笑顔で頭を下げて病室を出た。
廊下で看護婦が後ろから追いついた、私の横に並び微笑んだ。

「私も・・あなたに賭けるよ、ちょっと火傷した」と笑顔で言った。
「沙紀が一人でトイレに行くと思うから、ナースフォローよろしく」と笑顔で返した。
「了解・・頑張ります」と言って、私の腕を掴んで引っ張った。
廊下を奥まで歩き、特別室の前で止まった。
「関口先生呼んで来るから」と笑顔で言って、病室に消えた。
私は分かっていた、病室からあの音が聞こえたから・・ピコ〜ン・ピコ〜ンと。

私は非常階段の扉の窓から、外の景色を見ていた、気持ちは落ち着いていた。
沙紀が私に、勇気と自信をプレゼントしてくれてた。
「小僧・・お待たせ、今日少し体調悪くてね」と関口医師が真顔で言った。
『そうですか・・見るだけなら?』と真顔で返した、関口医師が真顔で頷き病室に入った。
私はその後ろを入った、一人部屋の広い室内に、沢山の機器が置いてあった。

奥のベッドに、管を沢山付けられた少女が眠っていた、酸素吸入器まで付けてあった。
私は母親であろう人に頭を下げて、側に寄った、ベッドの反対側に婦長がいた。

私は少女の顔を見た、真白な肌の少女は眠るように静かだった。
『お名前は？』と優しく母親に聞いた。
「由美子です・・5歳になります」と母親が言った、美しい女性だった。
『由美子ちゃんか～・・可愛いね』と少女に言った、私は強く感じていた。
どこにじゃなく、全体的な感じで・・ヒトミの強い存在を漠然と感じた。
『ヒトミ・・アドバイスしてくれよ』と声に出して言った。
強い波動が来た、その時に波動に乗ってきた、温度の微かな揺れが。
ヒトミが使ったと思った、ユリカの波動を・・その温度の言葉は。
温度は共通言語と言った、私はそれで覚悟が出来た。

由美子の隣の椅子に座り、左手を握った。

『由美子・・俺の名前は小僧ちゃん、可愛いだろ～・・由美子の言葉が分かるんだよ。
さぁ困ったね、我がまま由美子・・ママに心配かけて。
由美子の体は、まだまだ強いじゃないか～・・さぁここに遊びにおいで。
由美子の左手で待ってるから、お話しようよ・・楽しいお話してあげる。
どんなお話が好きかな～・・何でもあるよ、お姫様とか冒険とか。
面白い話でも・・なんなら人を好きになった話でも』

ここで来た、微かな温度の揺れが・・本当に微かな、恥ずかしがりやの温度が。
『な～んだ、由美子・・恋愛話が好きなのか～・・・おませだな～』
と笑顔で言った。
温度の揺れが少し強まった、私は優しく始めた。

『これは4歳の女の子のお話です・・その子はミサと言います。
とっても可愛いおませさんです、ミサはトオル君が好きだけど。
おませだから、好きだと言えません・・なぜかって？
相手に言わせたいのです、ミサが好きだって。
だから作戦を考えました・・それは毎日聞くんです。
トオル君、私の名前は？・・そう聞くんです。
トオル君がミサだろって言うまで、しつこく聞きました。
そしてある日、トオル君の顔を見ました、そして聞きました。
トオル君・・の好きな子はって、トオル君は答えました。
ミサだろって・・ミサは嬉しくて走って逃げました。
ミサはそれだけで良かったんです、ミサだろって言われるだけで』

私は少し強まった温度を感じながら、必死で伝えた。
そして由美子の返事が返ってきた、《それで良いのかな～》と。
『由美子は5歳だから大人だね・・それで良いんだよ、最初はね』
と笑顔で言った。
この言葉で私を信じてくれたようだった、温度の揺れが強まった。
《ヒトミ・・共通言語じゃないよ・・まさか方言かな》と心で囁いた。
そして私は怒られる・・由美子の温度に。
方言って田舎の子って事・・意地悪言ったの？と強く言われた。

『違うよ～・・由美子は洗練された、都会の可愛い子だよ。
でも最初からあんまりお話すると、由美子が疲れるからね。

毎日お話しに来るから、だから由美子・・１つだけ教えて。
どこか痛いの？・・それと由美子の誕生日？』

私は必死だった、由美子を疲れさせないように。
『そうなんだね・・分かったよ、誕生日プレゼントするね・・もうお休み由美子』と優しく伝えた。
温度の揺れがおやすみと言って、静かになった。
『お休み・・由美子』と手を離して、言葉だけで言った。

「由美子の誕生日を教えて？」と母親が美しい真顔で言った。
『１０月１２日・・午前５時２６分』と笑顔で返した、母親は驚いて私を見ていた。
「小僧・・由美子の体調は？」と関口医師が聞いた。
『鼻の奥が苦しいみたい、だから呼吸を休んでたって・・お願いします』と言って席を立った。
私は少し疲労を感じていた、由美子に対して集中していたのだと感じた。

「信じて良いの？」と母親が私に歩み寄った。
『俺を信じなくて良いですよ・・でも由美子を信じて下さい、明日から受けませんか・・温度の会話の初級講座』と間近な母親に笑顔で言った。

「は～・・なんでこんな事に、これじゃあ分からんよ～」と関口医師が笑顔で婦長に言った。
「良かった～・・酸素外しましね」と婦長も笑顔で言った。

「誰にでも出来るの？」とそれを見ていた母親が言った。
『母親なら・・娘を信じる人なら』と二ヤで返した。
「その挑戦的なとこ・・嫌いじゃないよ」と二ヤで返された。

『良いですね～・・私も好きですよ、気の強い熟れた女性は』と笑顔で言った。
「面白いね～・・楽しくなってきたよ、５年ぶりに」と微笑んだ、美しさが強まった。
『俺も楽しみですよ・・人妻は初めてだから』と二ヤで返した。
「人妻以外は？」と二ヤで返された。
『０です』とウルウルで言った。
「頑張れ～・・僕ちゃん」と美しく笑った、私も頭をかきながら笑っていた。
関口医師も婦長も笑っていた、ユリカの波動も笑った。

「私の名前は・・美千代・・古風でしょ」とウルで言った。
『素敵じゃないですか～・・未知の世界』と二ヤで返した。
「字が違う～・・どこの世界に未知世なんて名前付けるの」と笑顔で睨んだ。
『あぁ・・本名ね、雰囲気的に源氏名を名乗ったのかと』と二ヤ継続で言った。
「源氏名もあったよ・・６年前まで」と二ヤで言った。
『聞きたいな～・・その美しさなら、ＮＯ１でしたね』と笑顔で言った。
「ま～ね～・・源氏名は北斗・・変わってるでしょ」と二ヤで言った。
その時に強烈な波動が来た、ユリカの驚きを感じた。

『素敵じゃないですか～・・夜空みたいで』と微笑んだ。
「ありがとう、久々に嬉しかったし、楽しかった・・明日から楽しみにしてるよ」と笑顔で言った。
『俺も楽しみだよ・・また明日、浮気するなよ北斗』と二ヤで言って、ドアに向かった。
「あんた・・夜街にいるの？・・その歳でその会話？」と北斗が聞

いた。
『バイトしてます・・パラダイス・ガーデンで』と二ヤで言って、部屋を出た。
「嘘だね・・絶対、嘘だね」と北斗が笑顔で舌を出した、私は二ヤでドアを閉めた。

廊下を歩きながら、《さてと・・お腹空いたな～・・どうしようかな～》と囁いた。
強い波動が来た、早く来いと言っていた。
《ご馳走になりま～す、ユリカ・・ダッシュで行くね》と囁いて階段を駆け下りた。
ユリカの急かす波動が何度も来て、準備が終わった夜街をチャリを漕いでいた。
ユリカがビルの下で、爽やか笑顔で待っていた。

『お待たせユリカ・・ありがとう、ユリア』と笑顔で言った。
「私の可愛い妹が、何をしたのかな?」とユリカが爽やかに微笑んだ。
『ヒトミの通訳・・嬉しかったよ、波動に温度が乗って揺れた』と笑顔で返した。
「ねぇ・・その底無しの体力と精神力、怖いよ」と爽やか二ヤで言った。
『だって・・北斗話、聞きたかったんだもん』と笑顔で返して、腕を組んだユリカと歩いた。
「あなたがＰＧを出すから・・教えないといけなくなったよ」と微笑んで、メルヘン居酒屋に入った。

ユリカが食べ物を沢山注文して、ユリカがビール、私がウーロンにした。
笑顔で乾杯して、唐揚げを食べていた、ユリカも笑顔で食べていた。

「私・・今日のレベルが毎日だったら、笑い死ぬかも」とユリカが爽やかに微笑んだ。
『大丈夫・・今日は序の口』と二ヤで返した。
「マキに美由紀ちゃん話聞かないと・・楽しみだよ」と爽やか二ヤで返された。
『美由紀話は・・泣けるよ、俺も大好きだから・・美由紀をね』と笑顔で言った。
「美由紀といる時の、あなたの精神の安定に驚いたよ・・素敵な子だね」とユリカが微笑んだ。
『心の柔軟度なら、絶対にＮＯ１だよ・・美由紀は』と微笑んで返した、ユリカも笑顔で頷いた。

「北斗姉さん・・綺麗だったでしょ～」とユリカが爽やか二ヤで言った。
『２人目だね・・ユリカが姉さんって呼ぶ人』と二ヤで返した。
「そうね～・・最近はミチル姉さんは、ママで呼ぶからね」と笑顔で返してきた。
『北斗・・歳はユリさん位かな？』と笑顔で聞いた。
「ユリ姉さんが・・心から姉さんを付ける、唯一の人よ・・２歳上だよ」と真顔で返してきた。
『初めて会った・・ユリさんが姉さん付ける人は』と真顔で返した。

「詳しい話は、あなたにならユリ姉さんが話すでしょう。
蘭と一緒の時に、私があなたに教えてあげるのは。
原作者の作為を感じて欲しいから、その事実だけを今話すね。
北斗姉さんは、夜街デビューは千花なの・・多分１６か１７歳でね。
伝説の真希さんが引退を発表した時だと思う、衝撃的に突然現れた。
大ママがそう言ってたわ、でも真希さんがすぐに引退してしまっ

た。
それで北斗姉さんは、大ママに正面から挑んだそうよ。
その時は大ママは２３歳・・今の蘭と同じ歳だね。
そして全力で挑戦した北斗姉さんは、納得して一度夜街を去るの。
完全燃焼したと大ママに告げて、お昼の仕事に移るのよ。
それを聞いて、マダムは必死で探したらしい、託せる女性だったから。
でも探し出せなかった、上京してたの・・北斗姉さん。
大ママは本気で挑んできた、大切な存在が消えて・・喪失感に襲われた。
だから一大決心をして・・独立するのよ・・魅宴を作るの。
何かを成し遂げたかったのね、真希さんと北斗姉さんを失った寂しさを感じて。
それを払拭するために、自分に背負わせた・・借金と夢を。
そして魅宴が起動に乗った頃に出会う・・マダムが紹介する。
１８歳のユリ姉さん・・大ママは今でもはっきりと覚えていると言ってるわ。
その衝撃を忘れられないと・・１８歳の女性に感じた、本物の匂いを。
そしてマダムがＰＧを作る・・女性を必死で集めるの。
そして探してる時に声をかけられる、橘通りで・・北斗姉さんに。
マダムは北斗姉さんにユリさんを合わせる、そして北斗姉さんがＰＧに入るの。
ＰＧのオープニングメンバーになるのよ、そしてＰＧの歴史の第一幕を引っ張る。
ＰＧはその歴史で、ＮＯ１を勝ち取ったのは・・３人しかいない。
ユリ姉さんと、蘭と・・北斗姉さんだけよ。
北斗姉さんは開店から、約１年・・ＮＯ１に君臨するの。
ユリ姉さんが・・２０歳でその席を奪うまで、ＰＧを牽引したのよ。

ユリ姉さんは今でも感謝してるよ、その背中と行動が夜の女を教えたから。
北斗姉さんは、それからもＰＧとユリ姉さんを支え続けた。
リアンが入るまで・・リアンが慣れた頃、ユリ姉さんに伝えた。
ユリ・・私がいなくても、もう大丈夫だね、私は東京に愛する人を残してる。
今でも忘れられないの・・だから上京するね。
そう言ってＰＧを去る・・ユリ姉さんは寂しさを抱いていたでしょう。
そしてリアンは号泣したよ・・心から北斗姉さんを慕っていたから。
本当に素敵な人だった、私は１８で出会ったけど・・忘れられない。
その強い生き方が作り出す・・優しさの世界。
どんな状況も笑顔で乗り切る、その精神力・・今でも憧れてるわ。
今日あなたに・・北斗と言った時の私の驚きは、あなたなら感じたよね。
嬉しかった・・そして思った、悪質な原作者の存在。
北斗姉さんの愛娘・・由美子ちゃんの難病・・そして必然のように出会わせた。
最後の挑戦者に・・はっきりと１つだけ言うね。
もうユリさんは、あなた無しでは・・夢を追えない。
あなたは探し出したの・・ユリさんの最後の心残り・・北斗姉さんの今を。
あなたの答えを、切望するよ・・北斗姉さんも・・ユリ姉さんも。
あなたが由美子ちゃんの想いを伝える事を・・そこからだよ。
夜街の未来図を描けるのは・・今のあなたには、最高の女子が側にいる。
沙紀が心の描写で伝える、美由紀がその柔軟な心で見ている。
そしてミホが側で待っている・・そしてあなたには寄り添ってい

る。
ヒトミが・・私はさっき泣きそうだった、妹・・ユリアの話で。
ユリアの波動にヒトミが乗ったなら・・ユリアとヒトミは友達になったんだね。
常識なんて超越して・・由美子を見せて・・あなたが夜街に感謝してるなら。
蘭を愛しているのなら・・ユリさんの生き方を追い求めるなら。
１つの答えが必ずある・・由美子の中に絶対にあるよ」

ユリカの涙の言葉が、強く響いた・・揺り篭でない強い言葉だった。
『ユリカ・・ありがとう、俺は決めてたよ・・由美子に挑むと、可愛い由美子に』と笑顔で言った。
「うん、まだ時間早いから・・ＰＧに行こう・・私がユリ姉さんに話す」と爽やかに微笑んだ。
『うん、お願い・・明日には北斗に事情聴取されるだろうから』と二ヤで返した、爽やか笑顔のユリカと腕を組んでＰＧを目指した。

金曜の夕方・・夜街は活気に溢れていた、私はＰＧのビルを見た。
どんな歴史があるのだろう・・どれだけの女性の涙で出来ているのだろうと思っていた。
悲しみの涙を、私の出来る最大の力で・・少しでも減らしたいと思っていた。
ユリカの温かい温度を感じながら・・蘭の温もりを感じながら。

夏物語の全員が登場した・・最後のピース、北斗と由美子。

私がこの物語を書く決心をさせたのは・・エミとマリアとミホである。

私は由美子を書かないつもりだった、しかし書く決心をさせた。

被災地で孤児になった少女に問われたから、真暗な町を眺めながら。
夜空に問われたから・・その心の叫びが、私には消すことが出来ないから。
その１つの答えを・・あの時、由美子が教えてくれたから。
「悲しみを・・どうして人は覚えたの？」とあの少女の声が、夜空から聞こえてくる。
完結したら、教えると誓ったから・・あの時・・言葉では無理だった。
私の考える・・悲しみの意味を、夏物語の完結に付け足そう。
美由紀と沙紀と由美子の想いを込めよう、悲しみはいつか癒えると信じているから。
忘れる必要はない・・心の大切な部屋に、いつまでも持っていて欲しい。
悲しみにこそ大切な意味がある・・そう強く伝えてくれたから。
あの夜空の問いかけに・・強い波動に乗って、ヒトミが伝えてくれたから。

愛には愛で

待ちわびた週末の到来で、通りの関係者も笑顔が絶えなかった。
私と腕を組む透明の女神は、沢山の笑顔に挨拶をされていた。
その全てに爽やかな微笑を向けて、美しさを振り撒いていた。

私とユリカが階段を登っていると、後ろから声をかけられた。
「腕の組み方が・・自然すぎる～」と蘭が満開ウルで言った。
「そうでしょ～・・・蘭、今から食事？」とユリカが微笑んだ。
「はい・・何かありました？」と蘭がその鋭さで、ユリカの表情で読み取った。
「うん・・ちょうど良かったよ、蘭も同席して欲しかったから」とユリカが真顔で言った、蘭も真顔で頷いた。
ユリカと3人で、TVルームに入った。
マダム・松さん・ユリさん・カスミと裏方4人組に久美子がいた。
ユリカが挨拶をして、ユリさんに言った。

「ユリ姉さん・・少しお話が」と真顔で言った。
「さて・・私達は金曜だから、早目に準備するよ」とカスミが微笑んだ。
カスミと4人組と久美子が笑顔で立った。
「カスミ・・4ヶ月でこれほど成長した女性を、初めて見たよ・・ありがとう」とユリカが微笑んだ。
「ユリカ姉さん・・その言葉、最高です」と微笑んで返して、TVルームを出て行った。

ユリカがユリさんの向かいに座り、私が座り蘭が密着して座った。
「蘭・・食事しながらでも良いよ」とユリカが爽やかに微笑んだ、蘭も満開で頷いた。

ユリさんはユリカの表情で、重大な話だと感じていた。
「ユリ姉さん・・私は今日、確信しました・・悪質な原作者の存在を。
エースがミホちゃんに会いに行って、ミホちゃんと沙紀ちゃんと触れ合って。
昨夜の院長と関口医師と婦長の依頼、その意味である難病の少女。
ヒトミちゃんと同じ難病の5歳の少女・・由美子ちゃんと言います。
エースは初日で交信しました、私は感動しました。
エースの凄さを、改めて感じて・・そしてエースは大切な行動に出ました。
母親との関係の構築・・エースはそれも完璧にやりました。
そして母親から聞き出しました、母親の6年前の源氏名を。
その難病と闘う由美子の母親・・その源氏名は・・・・」
ここでユリカが堪えきれずに、涙を流した・・私はユリカの手を強く握った。
マダムも松さんもユリさんも、そして蘭も緊張して待った。
「その源氏名は・・・北斗です」とユリカが俯いて震えながら叫んだ。
完全な静寂が支配した・・ユリさんの動揺する表情を私は初めて見た。
ユリさんが小刻みに震えて、大粒の涙を流した。
蘭も泣いていた、北斗の存在を聞いていたのだと感じた。
マダムも松さんも、俯いて泣いているようだった。
「北斗姉さんとエースの会話で・・確信しました。
難病の娘を抱えても、強く明るく生きる女性を感じて。

エースが別れ際、北斗姉さんに聞かれて・・ＰＧでバイトしてると言いました。
ユリ姉さん・・ごめんなさい、仕事前に。
私は自分の中に留めておけなかった、ＰＧ終了まで・・持ってられなかった。
北斗姉さんに触れて嬉しくて・・そして悪質なシナリオに触れて。
本当に・・ごめんなさい」

ユリカは泣きながら、深々と頭を下げた。
「ユリカ・・ありがとう・・私には仕事より大切な事です」とユリさんも泣きながら言った。
その時ドアが開いた、母とシズカが真顔で入ってきた。
「ごめんねユリ・・立ち聞きしました」と母が真顔で言って。
「蘭・・今夜、ユリがいなくてもやってくれますね・・私の娘だから」と母が微笑んだ。
「もちろん・・絶対にユリさんを失望させません」と蘭が微笑んで返した。

「ユリ・・行きましょう、私と小僧が同行します」と母が微笑んだ。
「姉さん・・・ありがとう」と言って、ユリさんが俯いて号泣した。
母がユリさんに歩み寄り、抱きしめた。
「ユリ・・あなたは北斗の妹なのね、だったらもう泣いたら駄目よ・・北斗の妹でしょ」と母が優しく言った。
「小僧・・何ぼさっとしてる、面会時間過ぎたら、いなくなるよ」とシズカが微笑んで４人娘の場所に座った。

『ユリさん、行きましょう・・北斗も待ってますよ』と笑顔で言った、薔薇が戻って頷いた。
ユリさんが準備をして、通りで３人でタクシーに乗った。
「ユリ姉さん・・大ママとリアンには、仕事が終わるまで内緒にし

ときます」とユリカが微笑んだ。
「ありがとう、ユリカ・・会ってきますね」とユリさんも薔薇で微笑んだ。
タクシーが走り出し、私は振り向いてユリカを見ていた・・深海の瞳で見ていた。

タクシーは5分で病院に着いた、私が案内して4階に登った。
「小僧・・私はミホに会います、ユリをよろしく・・後で北斗に会わせてね」と母が微笑んだ。
私は先にミホの病室に案内して、沙紀と沙紀の母親を紹介して、ミホに会わせた。
母がミホの前に笑顔で座ったので、ユリさんと由美子の病室に向かった。
婦長が出てきて、ユリさんを見て・・微笑んで頷いた。
ユリさんも薔薇で微笑んで、頭を下げた。

『ユリさん・・ここで待ってて、呼んでくるから』と病室の前で笑顔で言った。
「エース・・ありがとう」と薔薇で微笑んだ、私も笑顔で頷いて入った。
奥に進むと、北斗が由美子を見ていた、優しい瞳だった。

「小僧ちゃん・・そんなに私が好きになったの？」と北斗が微笑んだ。
『うん・・北斗、俺・・由美子に大切な事をしたいから、3分で良いから出ててくれない？』と笑顔で言った。
「もちろん良いよ・・小僧、ありがとう」と言った北斗を扉まで送った。
『北斗・・俺が由美子と一緒にいるから、ゆっくりしてきてね』と笑顔で扉を開けた。

ユリさんを見て、北斗は固まった・・ユリさんも涙を流し動けなかった。
私は北斗の背中を優しく押した、抱き合う2人を見て扉を閉めた。
由美子の隣に座り、何も考えずに左手を握っていた。
ユリカの暖かい波動だけが、何度も何度も押し寄せて来た。

その時私に伝わって来た、恥ずかしがりやの・・由美子が来た。
《あれは嬉しいの？悲しいの？》と由美子が聞いた。
『嬉しいんだよ・・由美子』と優しく返した。
《ママも・・嬉しいの？》と強く聞かれた。
『うん・・そうだよ、ママもとっても嬉しいんだよ、お友達に会えたんだよ』と笑顔で返した。
《空気の波も・・喜んでるの？》と由美子が言った、私は雷に撃たれたような衝撃を受けた。
『そうだよ、由美子・・空気の波も喜んでるんだよ』と優しく返した。
強烈で熱い波動が来て、私と由美子を包んだ。
《本当だね、喜んでるね・・私も友達欲しいな～》と由美子が言った。
『由美子～・・俺は・・俺は何なの？・・友達じゃないの？』とウルで返した。
《それは悲しみだから、仕方ないから・・しょうがないから、友達になってあげる》と由美子が笑った。
『ありがとう、由美子・・嬉しいよ』と優しく囁いた。
私は太陽光を浴びた事がないであろう、瞳を開かない真白な少女を見ていた。
その別世界に棲む、可愛い少女を。
その時ＰＧで女性の円が出来ていた、私はカスミから聞いた。

「ユリさんが大切な用事で今夜は来れない・・今夜見せよう。
ユリさんに感謝している事を、その行動で示そう。
私は今、喜びの中にいる・・ユリさんが私達全員を信じている事に。
いつものＰＧで走りきる・・できるね？」

蘭が真剣に強く言った、女性全員が１つになった。
「はい」と言う返事で意志を示した。
「よし、今夜も開演しよう」の蘭の言葉に、「はい」のブザーを鳴らした。
その日は金曜日でもあり、開店３０分で満席を迎えた。
ユリさんの指名客を、アイさんとサクラさんと蘭とナギサでフォローした。
全員が集中の中にいたのだろう、マキが最高の時間だったと言っていた。

『由美子・・今夜はお休み、明日からお話しようね』と笑顔で伝えた。
《おやすみ・・ママに私は大丈夫、お友達と遊んでねって伝えて》と由美子が言った。
『由美子・・ママに伝えるね・・優しい子だね、由美子』私は嬉しくて優しく伝えた。
その時北斗とユリさんが入って来た、２人とも笑顔だった。

「由美子・・何か言った？」と北斗が微笑んだ。
『北斗の娘とは思えぬ、本当に素敵で良い子だね・・ママに自分は大丈夫だから、お友達と遊んでって言ったよ』と笑顔で返した。
「ありがとう、小僧・・私は信じるよ、あんたを・・思えぬの件は明日追求する」と北斗が微笑んだ。

「由美子ちゃんは、眠ったのかしら？」とユリさんが微笑んだ。
『はい・・今、眠りに入りました』と言って、立ってユリさんを座らせた。
ユリさんは、由美子の手を握って、笑顔で由美子を見ていた。
北斗はその光景を、瞳を潤ませて見ていた。

私は病室を出て、ミホの病室に行った。
ミホが眠っていて、母が沙紀の母親と話していた、母の手にはメモの絵画が握られていた。
沙紀が私を見て起き上がり、スケッチブックを差し出した。
私は沙紀の隣に座り、笑顔で受け取って、スケッチブックを開いた。

私は感動していた、想像など遥かに超えた幻想的な世界が広がった。
青で描かれた稜線は、水平線で・・地球が丸いと示すカーブが描かれ。
海の深さを青の濃淡で表現し、真ん中に半分沈んだ星っが描いてあり。
その星が地球の様に青く白い雲が包んでいて、その雲が表情を描き出し。
笑顔のイメージが強かった、水平線から星が昇ってきていて。
その星には輝きが強くの太陽と違う温かみがあり、異次元の温もりを感じた。
空には無数の星が瞬き、星が昇るのに応じたのであろう。
朝焼けが紅の濃淡で表現されていた、濃い部分から薄い部分にかけて波のように広がっていた。
白い部分も白で塗られていて、色鉛筆で描いたなどとは、想像も出来なかった。

私は沙紀の手を握り、笑顔で沙紀を見た。
『沙紀・・俺は嬉しいよ・・沙紀の世界が大好きになったよ、また

見せてね』と優しく伝えた。
沙紀の温度は嬉しそうに揺れ、そして三度私を感動させた。
《ユリカちゃんにお返し・・ありがとうって言って渡して》と完璧に伝わって来た。
『沙紀・・嬉しいよ、絶対に喜ぶよ』と必死でもう一人の自分を出して、ユリカに悟られないように言った。
『沙紀・・１つだけ書き足して・・沙紀のサインが欲しいから、俺が教えてあげるよ』と優しく伝えて、自分に戻った。
私は母親からメモ用紙を受け取り、沙紀にサインを教えた。
沙紀は黒の色鉛筆で、左下にＳＡＫＩと書いた、私は笑顔で拍手した。

私は沙紀を寝かせて、温度でお休みをした。
『沙紀がお返しにって、言ったんだけど』ともう一人の自分で言った。
「もちろん、どうぞ・・主人も見ましたから」と母親が笑顔で言った。
『ありがとう・・喜びます、ユリカと言う女性が』と立って頭を下げた。
慎重にスケッチブックから絵を外し、厚紙が有ったのでそれで挟んで紐で縛った。
「じゃあ・・私もまた沙紀ちゃんに会いに来ますね」と母が母親に微笑んだ。
「本当にありがとうございます・・勇気が出ました」と母親が微笑んで、２人で頭を下げて病室を出た。

「凄いね～・・今までの中で一番の才能じゃない？」と母が廊下で微笑んだ。
『間違いないね・・この絵は感動したよ』と返して、由美子の病室に案内した。

奥で北斗とユリさんが、笑顔で話していた。
「北斗・・相変わらず綺麗だね～」と母が微笑んだ。
「律子姉さん！」と言って北斗が立ち上がった。
母は動けない北斗を抱きしめた、北斗も泣きながら強く抱きしめた。

「北斗・・頑張ってるね、本当に誇らしい妹だよ」と母が囁いた。
「姉さん・・今日はなんて日なんだろう、最高の日です」と北斗が強く言った。
「何言ってるの・・今から昔馴染み巡りだよ、ユリはそのつもりでPG休んだんだよ」と母が体を離して微笑んだ。
「嬉しい～・・まだ帰省して間が無くて、バタバタしてて誰にも会ってないから」と北斗が微笑んだ。
母も笑顔で頷いて、由美子に歩み寄り、横に座って手を握り瞳を閉じた。
「小僧・・由美子は大丈夫だね、体は強い子だよね」と母が振り向いて私に言った。
『うん、体も心も強い子だよ・・北斗の娘だからね』と笑顔で返した。
その時北斗に強く抱かれた、私も優しく抱きしめた。

『北斗・・やっぱり熟れた女は良いな～』と二ヤで北斗の美しい顔を見た。
「まったく、親の顔が見たいよ」と北斗が二ヤで返してきた。
「ほれ・・北斗・・ほれ」と母が二ヤで顔を突き出した。
「えっ！・・冗談でしょ」と北斗が探りを入れた。
「本当ですよ、北斗姉さん」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「どおりで、素敵なお坊ちゃんだと思ってました～」と北斗が二ヤで返した、3人が声を殺して笑っていた。
北斗が準備してる時に、由美子の温度をチェックした、平穏に眠っていた。

「その大きな荷物は何かしら？」ユリさんが薔薇で微笑んだ、私はサインで【秘密】を出してユリさんに渡した。
ユリさんは察したらしく、薔薇二ヤで受け取った。
厚紙に挟まれた絵を見た、大きく目が見開いて、吸い込まれていた。
後ろから北斗が見て驚いていた、そして魅せられていた。
「ユリ・・まさかさっきの話の？」と北斗が聞いた、ユリさんが薔薇で頷いた。

「超越してますね、素敵ですね～・・私も今度ゆっくり会いましょう」と言って絵を返してくれた。
北斗の準備が終わり、北斗が由美子の手を握って、額にキスをして病室を出た。
面会時間終了の静かなアナウンスが流れていた。
私は３人と病院を出て、タクシーに乗ってＰＧを目指した。
《ユリカ・・会いにおいでよ～》と心に囁いた、強い波動が喜びを示した。

ＰＧに着き裏階段から、ＴＶルームに入った、北斗はマダムに駆け寄って抱きついた。
そして松さんに抱きついた、マダムも松さんも嬉しそうに泣いていた。
少し落ち着いて、私が北斗に全員を紹介した、北斗は笑顔で挨拶していた。
『北斗・・そしてこれがマリア・・ユリさんの娘です』とマリアを抱いて笑顔で言った。
北斗はマリアを見て泣いた、マリアが北斗に両手を伸ばし抱かれたがった。
北斗はマリアを抱いた、マリアは天使全開で両手を北斗の両頬に当てた。

『マリア、北斗だよ』と私がマリアに囁いた。
「ほくと！」とマリアが強く言って、天使ＭＡＸで微笑んだ、北斗は笑顔になってマリアを見ていた。
マリアは安心したように、瞳を閉じた・・私は北斗からマリアを受け取った。
マリアをベッドに寝かせて、温度のチェックををした、喜びが出ていて嬉しかった。

「なるほど～・・失うものが怖いから、言葉を引き出さないか～・・かなり上がったな」とシズカが二ヤで言った。
「昨日から、病院通いで上がって・・少し怖い」と久美子がシズカに二ヤで言った。
「久美子～・・この程度でそれなら、ミホ最終段階になったら・・死ぬよ」とシズカが二ヤで返した、久美子はウルウルで返していた。

北斗を囲む４人は、昔話を笑顔で話していた、母も楽しそうだった。
その時ユリカが入って来た、北斗を見て立ち尽くし涙を見せた。
「ユリカ！・・ユリカなの、やっぱり素敵になったね・・嬉しい～」と北斗が駆け寄りユリカを抱きしめた。
「北斗姉さん・・私も嬉しい」と囁いてユリカが泣いていた。
北斗が４人の場所にユリカを連れて行き、笑顔になったユリカと話していた。

『ユリカ・・泣き止んだ？・・ついでに泣いといて』と二ヤで言って近づき。
『沙紀が画材のお礼にって・・最初の作品をユリカにって、ありがとうって伝えてって預かった』と厚紙で挟んだ絵を差し出した。
ユリカは大きな目を見開いて、私を見た・・その喜びに溢れた深海の瞳が嬉しかった。

ユリカは静かに厚紙を外した、そして絵に魅入られていた。

「ほ～～・・素晴らしいな、凄い感性じゃな～」とマダムが言って。

「これが沙紀ちゃんの絵・・凄いな～」とシズカが笑顔で言った。

私は震えていた、ユリカが見つめる沙紀の絵を反対側から見て。

「どうした・・小僧？」とシズカが言った。

『俺は馬鹿だ・・方向なんて小さい世界を見ていた、こっちから見たら別世界だよ。

海のイメージじゃないんだ・・羊水だったんだ。

沙紀は感じたんだ、ユリカを・・由美子と同じだったんだ。

俺は感じるだけで良いんだ・・由美子も沙紀も』

私は言葉だけが出た、感動が強すぎて、整理できなかった。

反対から見た絵は、水平線と思ったカーブが妊婦の曲線に感じ。

そこに半分埋まる地球の雲が、乳児の笑顔のように描かれ。

朝焼けの紅の色の波が響きを表し、私が感じた羊水の揺り篭に重なっていた。

ユリカがゆっくりと回し、反対から見た、そして離して俯いて号泣した。

「小僧・・ありがとう、私も本当嬉しい。

沙紀ちゃん、素敵だね・・由美子に少し可能性を感じたよ、この絵で」

北斗が潤む瞳で私を見た、嬉しそうな笑顔だった。

『冗談言わないで、北斗・・明日から教えるよ、由美子の可能性は・・無限だよ』と笑顔で返した。

北斗は強く頷いて、笑顔になった・・美しかった、その成熟した輝

きが。

「沙紀ちゃん、素敵～・・2人で笑ってるんだね」とエミが絵を反対から見て言った。
「エミちゃん・・2人って？」とユリカが顔を上げて、エミを見た。
「こっちから見てここに1人・それで反対から見て寄り添うように・・ほらもう1人」とエミが笑顔で言った。
ユリカは何度目だろう、感動が次から次に来て、震えている壊れそうなユリカを見ていた。
「うん、そうだよね～・・それでここで手を繋いでるよね」とシズカが微笑んだ。
「うん・・そっくりだから姉妹だね、双子かな～」とエミが返した。
ユリカが泣きながら震える肩を、母が抱いた・・ユリさんは泣いていた。

「エース・・いつ会わせてくれるの・・沙紀ちゃんとミホちゃんと・・由美子ちゃんに」とユリカが言った。
『明日・・セリカ終了後、会いに行こう』と微笑んだ。
「私から蘭に言っとくね、お先に失礼って」と涙の爽やか二ヤできた、私も二ヤで返した。

「さて、気分転換に・・小僧、飛鳥再会の作戦は？」と母が二ヤで聞いた。
『俺が北斗を同伴して、魅宴に入る・・大ママ来てから、ユリさんと2人で入って』と二ヤで微笑んだ。
「お主も悪よの～」と母が二ヤで言った。
「アスカ姉さん・・現役なんだね？」と北斗がユリさんに笑顔で聞いた。
「もちろん・・今トップの女帝ですよ」と薔薇で微笑んだ。
「さすが、アスカ姉さん」と北斗が微笑んで、私を見た。

『仕方ないな～・・同伴だから、腕を組んでね』と二ヤで言った。
「もしかして、本当に熟れた女が好きなの？」とニヤニヤで返された。
「そうですよ・・北斗さんなら、ど真ん中のストライクです」とシズカが二ヤで言った。
「由美子良かったね～・・ママが綺麗だから、通訳できたよ～」と笑顔で立って腕を組んできた。
母とユリさんとユリカが笑顔で立った。

「マダム・・この絵は明日取りに来ます、女性達に見せて下さい」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「ユリカ、ありがとうな・・皆喜ぶよ、大切にしておくな」とマダムが笑顔で返した、ユリカも笑顔で頷いた。
通りに出てユリカのビルで、ユリカと北斗が向き合った。
「ユリカ・・ありがとう、今度お店に遊びに行くよ」と北斗が笑顔で言った。
「はい・・今夜の最後は、小僧がそのビルの最上階に案内しますよ・・リアンの店に」と爽やかに微笑んだ。
「本当に嬉しい・・最高の夜だよ～」とユリカに微笑んで、私に強く密着した。
ユリカに手を振って別れて、魅宴の正面に４人で向かった。

「北斗！」とボーイ頭が駆け寄った。
「ハシやん・・良かった～元気そうで」と北斗が笑顔で返した。
「うん、頑張ってるよ・・小僧、ドッキリか？」と二ヤで言った。
『はい、毎度お馴染みの・・今日は最強の』と二ヤで返した。
「アスカを殺さないでくれよ～・・ご案内します」と言ったボーイに連れられて、奥のＢＯＸに通された。
母とユリさんは、受付裏でニヤニヤで見ていた。

『北斗・・俯いて』と囁いた、北斗は二ヤで俯いた。
「嬉しいねーエース、やっと本当の女の魅力に目覚めたかい」と大ママが微笑んだ。
『どっちが綺麗かと思って、並んで欲しかったんだよ』と二ヤで返した。
大ママは俯いてる北斗を見た、そして北斗が大ママを見た、その時には北斗は泣いていた。
「北斗！・・北斗～」と営業中の店での声とは思えぬ、大ママは大きな声で叫んで北斗に抱きついた。
大ママの嬉しそうな涙を見ていた、北斗も嬉しそうだった。
ミコトの視線が強かった、大ママを優しく見ていた。

「アスカは・・泣き虫だね～」と母が笑顔で入ってきて。
「私は感動しました・・羨ましかったです、フロアーで泣ける世界にいる、大ママが」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「最高のメンバーが揃って・・またエースの策略だね、いつも私を泣かせるんだよ」と北斗に言った。
「私も今日会って・・もう3度泣かされました」と北斗が微笑んだ。

「じゃあ4姉妹揃ったんだから、楽しいひと時を・・俺はシズカがいるうちに、宿題してきま～す」とウルで言った。
「小僧・・じゃなくて、エース・・リアンの店は行ってくれるんだね？」と北斗が微笑んだ。
『もちろん・・大好きだから、炎の女の泣き顔』と二ヤで返して、4人の二ヤに見送られ魅宴を出た。

ＰＧに戻り指定席に入った、フロアーは満席状態だった。
蘭が私を見て満開で微笑んだ、私も笑顔で返した。
女性達の少し心配げな視線が降り注いだ、私はシオンの後ろに立っ

て全員にサインを出した。
【ユリ】【Ｎｏ】【１】【ＯＫ？】と、女性達が笑顔で【ＯＫ】と返してくれた。
私は蘭にウルで宿題ポーズをして、蘭と女性達の二ヤに見送られＴＶルームを目指した。

ＴＶルームのテーブルでシズカが、久美子とエミに何かを書いて説明していた。
マダムも松さんも興味津々で見ていた、私は寝ている３人娘をチェックした。
私は宿題プリントを持って、向かい側に座った。

「えっ！シズカちゃん、ちょっと待って」と言ってエミが瞳を閉じた、久美子も瞳を閉じていた。
「えっ！・・凄い・・凄いよ、忘れないんじゃなくて写ってる」とエミが目を開けてシズカに飛びついた。
「練習すれば、スムーズになるよ・・ただ暗記をするのに使えるでしょ」とシズカが嬉しそうに微笑んだ。
「段階があるんでしょ？」とエミが笑顔で言った。
「もちろん、その時が来たら教えてあげるよ」とシズカも微笑んで返した。
「出来ない・・てかイメージが掴めない」と久美子がウルで言った。
「久美子は無理だよ～・・おたまじゃくしの覚えすぎだから」とシズカが微笑んだ。
「許容量なのね・・音楽に賭けるしかなにのね」とウルウルで言った。

「夢破れたら・・フロアーの夢が待ってるぞ」とマダムが二ヤで言った。
「はい・その時は頑張ります」と久美子が二ヤで返した。

「マダム・・私も良いですか～・・・夢破れたら、もう1つの夢」とシズカがウルで言った。
「もちろん・・じゃが2人とも・・ユリには言うなよ、もう1つの説得に行くから」とマダムが笑った、松さんも笑っていた。
シズカも久美子も嬉しそうに笑っていた。

『美しいシズカお姉さま・・連立方程式のヒントを』とウルで言った。

「XとYを捨てろ・・あれで迷うんだ、数学だぞ・・初めに答えがあるんだ。
問題作る奴は、簡単に作ってる・・ようするに難しい数式は使ってない。
XとYがその幻想を作り出す・・お前らしくない。
見える物に惑わされるな・・答えがある物など・・分かれば簡単だろ。
代入法とか加減法とか、難しい言葉が好きな学者が作り出したんだ。
お前の嫌いな、法律用語や医学用語と同じだよ。
XもYも同じだ、ただの難しく伝える文字だよ・・小学校のように○と△でいいんだ。
簡単じゃないか・・導き出すのが存在する答えなら。
人の心を導き出すより・・これがヒント・・以上」

シズカが二ヤで締めた、私は笑顔で聞いていた。
『サンキュー、シズカ・・なるほどね～、想像力の無い奴らめ～』とプリントを見て二ヤしていた。
「エミ・・良かったの～、新しい先生は凄いな～」と松さんが微笑んだ。
「うん・・凄いよ～」とエミが笑顔で返した。

「エミに言われると、嬉い～」とシズカがエミを抱きしめていた、エミが嬉しそうに笑っていた。

私はシズカの言葉の意味が分かっていた、シズカは作り出す。
今までがベストだと思っていない、だから発想が人と異なる。
エミがシズカに学んだ事・・人と違う発想は、素敵な事なんだと。
勉強をするのでなく・・学ぶ事が大切なのだと、学ばないと今以上の物は作れないと。
エミの発想力を押し上げる・・シズカの屈託ない笑顔を見ていた。

ユリカはこの沙紀の絵を、本当に宝物のように大切にしていた。
立派な額縁で守って、家のリビングの一番目立つ場所に飾っていた。
ユリカは沙紀に、この後も何枚か、その作品を贈られた。
その全てに魅入られ、大切に飾っていた。
でもこの最初の作品が、ユリカの中では1番だったのだろう。
出会う前に描いた物だったから、沙紀も多分ユリカの波動を感じていた。
私は沙紀本人には聞かなかった、沙紀が混乱するのを恐れたのだ。
沙紀は波動で感じ、2人の乳児を描いてみせた、そしてその双子は手を繋いでいるのだ。
母の子守唄の響きの中で、2人は笑顔だった。

沙紀は・・どこまで見ていたのだろう・・何を見ていたのだろう。

下書きもなく、迷い無く描いた・・ユリカへの感謝を込めて。

ユリカをイメージして・・愛に対し愛で応えたのだ。

ニューヨークのリンダの家を、2度目に訪れた時・・私は嬉しかった。

ユリカの部屋に飾られている、この絵が無くなっていたから。

ユリカが安定して生活出来る、環境が出来たのだと感じて。

リンダの家の、マチルダの父のメッセージの上にある・・一枚の絵。

淡いピンクの花びらが舞い散る中に、ユリカが爽やかに微笑んでいる。

私はどんな写真よりも、その絵のユリカが、一番実像に近いと思っている。

愛には全て愛で応えた・・沙紀の大きな愛が込められているから。

由美子の願い

今がベストじゃないと常に思う、与えられた物に何かを足す。
その心は理想を追い求める、他人からどう見られようとも。
主張し納得させ取り組む、押し付けなど何も無いのだ、自己完結する女。

私は宿題に取り組んでいた、エミが歯磨きをしてベッドに入った。
私の横にシズカが二ヤで座り、その横に久美子がウルで数学の宿題を持ってきた。
シズカは久美子には優しく教え、私には《ブ〜〜》という音だけで間違いを告げた。
久美子は早々に終わり、マダムに断ってシズカと2人でフロアーを見に行った。

「エース・・ありがとな、そして頼むぞ・・由美子を」とマダムが言った。
「私からも、頼むな」と松さんが言った。
『うん・・ベストを尽くすよ・・だから頼みがあるんだけど』と真顔で返した。
「似合わん遠慮なんかするな・・言ってみろ」とマダムが笑顔で言った。

『難病や障害を抱えた子供を持つ母親は、勘違いしがちなんだよ。
子供の為だけを考えて、それだけで生きてしまう。
でも子供の方は、それは嫌なんだよ・・でも伝える手段が無いから。
由美子もそうなんだよ、それだけは今日確信したんだ。
俺は北斗の今の状況を知らないけど、もしそれが可能な状況なら。

提案したい・・夜街に復活して、輝く女に戻って欲しい。
その姿が由美子にとって、何よりの喜びだし・・生きる希望になるんだ。
俺は北斗なら・・今はまだ無いけど、ジンの派遣会社の最初の登録者にしたい。
そして6店に見せてあげたい、全盛期のアスカに本気で挑んで。
ユリさんに夜の女を教えた・・その北斗という、圧倒的存在を。
もし北斗がその状況で・・由美子だけを考えている時は。
提案する・・だからマダムと松さんに援護射撃をしてほしい。
そして復活した後の、フォローをして欲しいんだ』

私は真剣に、考えていた事を話した。
強烈で熱い波動が来て、同意を示していて、私は嬉しかった。

「松よ・・ワシらも久々に、熱くならんといかんようじゃな」とマダムが微笑み。
「嬉しいですね～・・目標がある生活は、ありがとうエース」と松さんが微笑んだ。
私は2人に笑顔で返して、プリントを片付けていた。
その時、母とユリさんと北斗が笑顔で帰ってきた。

マダムと松さんを含めた、5人で話していた。
「北斗・・今は気のおけぬ人ばかりやから聞くが、経済的に辛くないのか？」とマダムが真剣に聞いた。

「ありがとうございます、マダム・・それは大丈夫です。
由美子は難病指定されていて、医療費はほとんど免除です。
それにあの病院の院長先生が、難しい名前の特別なのに認定してくれて。
最新医療を受ける事も出来ます、今回の帰省は・・私が経験ある

医師を調べて。
関口先生を探しあてました、宮崎だから実家の両親のサポートも受けられるし。
関口先生と話した時に、実は聞いていました・・その少年の事を。
私は嬉しかった・・由美子にも意志があると思えて。
それで決めました・・関口先生にお任せしようと。
旦那と別れた訳じゃありません、少し精神的負担を軽くしてやりたかった。
旦那は・・由美子を愛してくれています、でも仕事と由美子でまいってしまって。
私ともギクシャクして、だから考える時間も欲しくて。
旦那は十分な生活費を、送ってくれています。
だから大丈夫です・・私は今、由美子に集中できています」

北斗はそう言った、マダムが私を呼ぼうとした時。
「小僧・・教えてやって、由美子の気持ちを」と母が真顔で私に言った。
私は真顔で立って、北斗に向き合って座った。

『北斗・・何か大きく勘違いしてないかな？
由美子は感じてるんだよ、北斗が何も言わなくても。
全て感じているんだよ・・北斗が由美子を想うように。
由美子も愛する母を想ってる、それは健常者の子供の何百倍もだよ。
伝えられないから・・それが辛いんだよ。
今日ユリさんと北斗が、泣きながら抱き合った時に。
由美子が聞いた・・あれは嬉しいの？悲しいの？・・そう聞かれた。
分かるよね北斗・・由美子は北斗を常に愛してる。
伝達なんて全く必要ない、北斗が側にいるだけで。

由美子はその全てを感じる、心の揺れもだよ。
絶対に誤魔化す事は出来ない、由美子の北斗に対する愛情は絶対だから。
北斗・・由美子を愛するのなら、由美子に見せないといけない。
生きるとは・・どんなに素敵な事かを、その北斗の輝きで見せるんだよ。
由美子は日本で３２例目だよね、それがどうした・・今までの事だろ。
由美子は今生きているんだろ、強く生きているんだろ。
俺はヒトミの時に調べた・・あの病気、アメリカで１９歳まで生きた少女がいる。
それがどうした・・過去の話だ・・由美子は記録更新なんか望んでない。
生きる意味が知りたいんだ、それを教えられるのは・・母親だけなんだ。
俺は嫉妬する・・ヒトミの母親と北斗に、嫉妬している。
本当に大切な事を伝えられる、その権利を持っている母親に。
北斗・・輝きを取り戻そう・・あの病院は保護者でも。
面会時間は１０時から２０時までだね、だから２０から夜中まで北斗に戻れ。
そして挑め・・今の女性達に・・そして輝きを取り戻せ。
充実して生きる時にしか出ない・・輝きを取り戻せ。
由美子にはそれがないと、生きる素晴らしさは絶対に伝わらない。
俺が考える・・夜の女性の人材派遣、その１号の登録にしたい・・北斗を。
時間に余裕を持たせる・・そして北斗・・俺にはあの病院に、面会時間は無い。
由美子のフォローは俺がする、必ず北斗に全て伝える・・隠さない。
復活しろ北斗・・魅宴とＰＧとリアンとユリカとミチルの店。

そしてゴールド・ラッシュという、最新型のクラブ。
全てに出てもらう・・切り札として、全盛期の飛鳥に挑んだ誇り高き女性として。
ユリさんに、その背中と行動で、夜の女の本質を伝えた女性として。
俺が送り出す・・今を悩みながら必死で生きる、若い挑戦者達に。
その経験と強い意志を見せたい、北斗という・・永遠の伝説を復活させたい。
そして北斗に輝いて欲しい・・その姿だけが伝える事ができる。
由美子に生きる意味を・・生きる希望を・・俺はそう思ってる。
やらないか・・もう1度・・北斗。
疲れ果てたら・・俺が側にいるから、北斗と由美子の・・側にいるから』

私はヒトミを思い出し、俯いて泣いていた、強烈な波動が守ってくれた。
私は北斗に強く抱かれた、私も強く北斗を抱いて伝えた。

「分かったよ・・エース・・私が間違ってたよ。
ごめんね・・ヒトミちゃんとの辛い思い出まで、思い出したね。
響いたよ・・一番底まで響いたよ、お願いするよ。
私を登録第一号にしてくれよ・・必ず見せてやるから。
エースの想像を超えてる事を・・ＰＧの最初のＮＯ１として。
今の女性達に伝えるよ・・私の考える夜の女の理想を。
だから・・約束だよ、私も抱っこと添い寝をしてね。
そして疲れ果てたら・・由美子と３人でいてね」

北斗の優しい響きが私を回復してくれた、私は北斗を笑顔で見て頷いた。

『マダム・・そういう事でお願いしたいんですけど。
ご存知の通り・・ジンの会社はまだなくて、ご老体に申し訳ないんですが。
マダムと松さんで、北斗のマネージャーを頼みます、調整はハルカとマキでしますから。
お願いします・・マダム・松さん』

笑顔で言って頭を下げた、北斗も慌てて頭を下げた。
「ご老体だけ気にいらんが・・良いよ、ワシと松も退屈しちょったかい」とマダムが微笑んだ。
「エース・・ご老体は、マダムにだけ言ったんだろうね」と松さんが二ヤで言った。
「こりゃ、松・・そんな追い込みすると、頷くじゃろうが」とマダムが笑顔で返した。
全員に笑顔が戻り、北斗も嬉しそうに笑っていた。

『じゃあもちろん、北斗のリハビリは・・現ＰＧのＮｏ１にお願いします』とユリさんに二ヤで言った。
「分かりました・・厳しいですよ、北斗姉さん」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「よろしくね・・しかし下ネタ言われて、トイレで泣いていた１９歳が、ここまで来るのかね～」と北斗が二ヤで返した。
「あっ！・・北斗姉さん、エースの前で言ったら・・ほら～ニヤニヤしてる～」とユリさんが私の全開二ヤを見て、薔薇ウルを出していた。

「よし・・上手くまとまったね、少し成長したね・・小僧。
さっきの話・・全員が乗ってたよ、あの言葉に。
ヒトミもミホも沙紀も、亡くなった子供らも・・そして由美子も。
その全ての意志が乗って強かったよ、完全復活おめでとう。

復活の証として、由美子と沙紀とミホを頼むよ。
お前は元々常識外の存在だろ、考える前に感じるんだよ。
何の為に産まれたかじゃない、何の為に生きるかだよってお前が言った。
ヒトミの母親に言ったね・・和尚の言葉の伝達、それが出来てたよ。
由美子が喜ぶね・・待ちに待った・・母の本当の姿が見れるね」
母が笑顔で言った、私は嬉しくて笑顔で頷いた、北斗は又泣いていた。
「律子ありがとう・・頼むから、暇な時は来てくれよ・・シズカを連れて」とマダムが微笑んだ。
「もちろん・・こんなに楽しそうな状況、見ないと損ですから」と母が笑顔で返した。
その時、久美子とシズカが帰って来た、シズカが状況で感じた。
「北斗さん・・小僧にスカウトされましたね～」とシズカが二ヤで言った。
「その二ヤは、やばいの？」と北斗が二ヤで返した。
「いえ、嬉しくて・・見たかったんです・・北斗さんの愛の表現方法が、きっと素敵だろうと思っていたから」とシズカが微笑んだ。
「ありがとう、背中を押してくれて・・2人ともよく見ててね、16歳の感性で」と北斗が嬉しそうに微笑んだ。
シズカと久美子も、嬉しそうな笑顔で頷いた。
「律子姉さん・・シズカが欲しい」とユリさんが母に薔薇ウルで言った。
「私にウルで言わないで・・シズカはとうに、私の手は離れてるから」と母が二ヤで返した。
「聞かなかった事にします・・もう少しで、導火線に火が点きそう

だったから」とシズカが笑顔で言った。
「エース、業務命令です・・点火しなさい」と薔薇二ヤで言った。
『それだけはご勘弁を～・・探してきますから、シズカ以外なら誰でも・・シズカ爆弾は、俺には致命傷ですから～』とウルウルで返した。
「今の・・逆に火を点けるよ」とシズカが二ヤで言った、私はウルウルで返した。
全員の笑い声の中で、ユリさんの楽しそうな笑顔を見ていた。

母とシズカが笑顔で挨拶をして、帰って行った。
北斗はこっそり由美子を見てくると言って、出て行った。
私は久美子にバンドの話を聞いていた、久美子は楽しそうに話してくれた。
ユリさんはマジックミラー越に、フロアーを笑顔で見ていた。
その横顔が充実感を漂わせ、美しく輝いていた。

「エース・・ありがとう、本当に響きました・・嬉しかったわ」と薔薇で微笑んだ。
『良かったんだろうかと思うけど・・由美子の気持ちはそうなんだと、自信があります』と笑顔で返した。
「私もそう思いますよ・・北斗復活、大ママまた泣きますね」と薔薇で微笑んだ。
『飽きさせませんよ・・大ママが夜街の意志で居てもらわないと、困るから』と笑顔で返した、ユリさんも薔薇で頷いた。
「まったく・・トップを押さえてるかい、怖いわ」とマダムが笑顔で言った。

「マダムも松さんも、演技お上手でしたよ」とユリさんが微笑んだ。
「松の演技が下手じゃかい、ばれてるの～」とマダムが笑った。
「嫌ですよマダム・・台詞回しが、わざとらしかったですよ」と松

さんが笑顔で返した。
「ブッ」と久美子が笑って、全員が笑った。
私は蘭を見ていた、充実感を浮かばせる満開の笑顔を。

私は指定席に戻り、満席状態のフロアーを見ていた。
終演前のフロアーは、熱が冷めやらず、女性が全員集中していた。
蘭が満開笑顔でやってきた、私も笑顔で迎えた。
「その顔は、上手くいったんだね」と満開継続で微笑んだ。
『蘭・・聞いてるんだね、ＰＧ最初のＮｏ１』と二ヤで返した。
「うん・・リアン姉さんが、酔うといつも話してくれるから」と笑顔で言った。
『蘭・・見せてやるよ、フロアーで・・伝説の北斗を』と笑顔で言った。
「うっそ～・・嬉しい～・・さすがだね」と満開で微笑んだ、私も笑顔で返した。

「最後の一組になると思う3番の2人、ジャズの大ファンで・・一人が明日誕生日なの、久美子にお祝いの曲を頼みたい」と満開で微笑んだ。
『了解・・準備するよ』と笑顔で返して、ＴＶルームに走った。

私は久美子にその事を話し、ユリさんを見た。
「久美子ちゃん、お願いね・・さすが蘭です、私は本当に幸せを感じてます」と薔薇で微笑んだ。
私と久美子は笑顔で頷き、ＴＶルームを出た。
ラスト2組になっていた、私はカズ君を呼び、その事を話した。
「了解・・照明演出なら、任せなさい」とカズ君が、走って位置についた。
『シオン・・ラスト1組になったら・・9人衆に、6番に集合とサイン送って』と笑顔で言った。

「了解です」とニコちゃんで返した。

3番は蘭とサクラさんが入っていて、笑顔が溢れていた。

『久美子・・最後はハッピーバースーディにしよう』と笑顔で言った。

「了解、任せて」と微笑んだ時に、5番の3人組が立った、私はマキに耳打ちした。

エレベーターが閉まるのを見て、久美子が席について合図をくれた。

6番の9人衆には、マキが裏から回りその事を伝えた、全員が笑顔で【OK】を出した。

私がそれを見て、カズ君にサインを出した。

フロアーが暗くなり、3番とピアノの位置だけスポットが当たった。

そして久美子が優しく奏で始めた、明るいジャズが流れてはじめた。

3番のお客は嬉しそうに、久美子を見ていた。

久美子は段々強く叩き、強いリズムが喜びを表現した。

そして腰を浮かせて、歓喜を表現した・・輝く16歳が笑っていた。

久美子は弾き終わり、一度立って3番に深々と頭を下げた。

3番の2人のお客も、蘭もサクラさんも立って拍手で応えた。

久美子は笑顔で座りなおした、そして照明が明るくなり、9人衆がフロアーに並んで立った。

久美子が弾き始め、9人で声を合わせて歌った。

3番のお客は嬉しそうに、少し照れてそれを見ていた。

歌い終わり9人と久美子が笑顔で拍手をした、誕生日の人が笑顔で立って。

「ありがとう・・今までで最高の誕生日です」と大声で言った。

女性達も笑顔で返して、全員で一礼して銀の扉に消えた。

「ユリ・・凄い店を作ったんだね、感動したよ」と北斗の声がした。

「実は私が１番感動してます・・託せる存在を感じて」とユリさんが薔薇で微笑んでいた。
３番席の４人は楽しそうに笑顔で会話していた、蘭は久々のユリさんのいない状況を乗り切った。
最後に自分の個性も主張した、蘭は恐れない、失敗を恐れたりしないのだ。
常に楽しいことを考える、弟に語りかけながら、自分の心に従うのだ。

３番が席を立ち、女性達が全員出てきて、１０番に揃った。
見送りに出ていた、蘭とサクラさんが座って、私がユリさんを促した。

「私は今夜を忘れない・・想像を超えてくれた仲間の笑顔を。
託せる仲間に出会えた喜びを、本当によくやってくれました。
ＰＧはあなた達の店です・・ここにいる全員の店です。
変化を受け入れましょう、次の大波を・・今夜エースが起こしました。
近い内にフロアーで出会う事になるでしょう・・伝説のＰＧ最初のＮｏ１に。
蘭・・ありがとう、最後の演出心に響きました。
あのお客様は、絶対にＰＧも貴女方の事も忘れませんよ。
私も変化をしたいと思っています、まだまだ上があると感じたから。
今夜は本当にありがとう・・お疲れ様でした」

ユリさんは嬉しそうに薔薇の笑顔で言った、女性が全員笑顔で立った。
「お疲れ様でした」と声を揃えて、頭を下げた。
そこで解散になった、笑顔で控え室に向かう女性を見送った。

私の指定席の前に北斗が立っていて、笑顔で頭を下げる女性達に笑顔で返していた。
「北斗姉さん！」とサクラさんが叫んで、北斗に飛びついた。
「サクラ・・相変わらず綺麗だね～、そして素晴らしい娘を2人も産んで」と北斗が抱きしめて微笑んだ。
「本当に復活してくれるんですか？」とサクラさんが潤む瞳で聞いた。
「サクラも、リハビリ手伝ってくれよ」と北斗が微笑んだ。
「任せて下さい・・楽しみです」と体を離してサクラさんが微笑んで、笑顔で頭を下げて控え室に消えた。

私はシオンとマキを北斗に紹介して、ユリさんと5人でＴＶルームに戻った。
「エース、私は明日から出るよ・・当面はＰＧで良いんだね？」と北斗が微笑んだ。
『もちろん、でも焦るなよ・・歳なんだから』と二ヤで返した。
「熟れてるって言うんだろ、今が一番・・脂が乗ってるよ～」と二ヤで返された。
『やめて・・心が揺れるから、人妻って響きだけでも怖いから』とウルで返した。

「隊長まずいですぜ・・奴はブロンドと人妻に弱いですぜ」と二ヤしながらカスミが入ってきた。
「ブロンドの人妻が出てきたらどうしよう」と満開ウルで蘭が入ってきて、北斗の前に立った。
「リアン姉さんから、よくお話は伺っています・・蘭と申します、これはカスミです、北斗さんよろしくお願いします」と満開で微笑んでカスミと深々と頭を下げた。
「よろしくね・・あなたの新しいエース争奪ライバルの北斗です」

と二ヤで返した。
「それは無駄です・・エースは私にぞっっっっこんですから」と満開二ヤで返した。
「ちなみに私にも、ぞっっっっっっこんですから」とカスミも輝き二ヤで返した。
「かしゅみ・・小さい【つ】が私よりも多かったよ、負けず嫌い出すとこ間違えたね」と満開二ヤでいった。
「愛の大きさの違いですよ」と全開不敵で返した。
「楽しくなりそう〜・・よろしくね」と北斗が微笑み、蘭とカスミが微笑んだ。

『蘭、リアンの泣き顔そろそろ見たいだろ？』と二ヤで言った。
「もちろん・・見に行くに決まってるでしょ」と満開で返してきた。
「その前に・・これが沙紀の処女作だよ、汚すなよユリカの宝だからな」とマダムが言って、女性達が絵に吸い込まれた。

「待って・・これ・・羊水なの？」と蘭が私を驚いて見た。
『うん・・そして乳児が2人手を繋いでるんだよ、もちろん沙紀はユリカに会ってさえいない』と真顔で返した。
「常識とかで考えたらいけないんだな・・そんな狭い世界で」とカスミが泣きながら言った。
「これは宝物だね・・ユリカ姉さんにとって、この愛は」と蘭も涙を流して見ていた。
強く暖かい波動が包んでいた、大切な宝物を。

『よし・・リアンの涙を見に行こう』と私が意識して元気に言った。
ユリさんと北斗と蘭が前を歩き、私はシオンと腕を組んで、ウルウルで我慢してるカスミに手を振った。
ローズの前で、3人全員が二ヤで振り向いた。
「盛り上げる、前振りしておいで」と蘭が満開二ヤで言った。

『3人さんも、悪よの～』と二ヤで返して、ニコちゃんシオンと店に入った。
ＢＯＸに2組だけで、奥のＢＯＸが空いていた。

『リアン・・奥良いかな～？・・あと3人』と歩み寄ってきたリアンに笑顔で言った。
「もちろん・・良いに決まってるだろ」とリアンが言った。
私はリアンを引っ張って、ＢＯＸに座らせた。
『リアン・・目を閉じてて、そして約束して・・泣かないって』と私は真顔で言った。
「私はリアンだよ、たとえ死んだ婆ちゃんが来ても・・営業中に泣くもんか」と獄炎ニカで言って、瞳を閉じた。
私はシオンに笑顔でサインを送った、シオンがニコちゃんで頷いて迎えに行った。

北斗をリアンの正面に座らせた、ユリさんも蘭も二ヤで見ていた。
『リアン・・声で当てて・・死んだお婆ちゃんでも泣かないリアン』と私が優しく言って、北斗を見た。
「リアン・・想像以上に綺麗になったね」と北斗が優しく囁いた。
リアンはブルっと震えて、両手で耳を押さえた。
「そんなはずない・・そんな期待したら、目を開けた時に落ち込むだけ」と目を強く閉じたままリアンが言った。
「目を開けて・・炎を見せて・・可愛い妹・・リアン」と北斗は涙を流して言った。
リアンはゆっくりと目を開けた、そのまま停止して大粒の涙を流した。
北斗はリアンの横に座りリアンを抱きしめた。

「リアン・・頑張ったね、よく頑張ったね」と北斗が優しくリアンに言った。

「うん・・・・うん」とただ泣いてリアンは抱かれていた。
私は隣で震えるシオンを抱きしめて、ユリさんと蘭の涙を見ていた。
リアンは北斗に抱かれ、幼子が姉に甘えるように、ただ泣いていた。
６年の時間を埋めるように、その時間の思い出を埋めるように。

『リアン・・ごめんね、学校あるから帰るね・・１つだけ教えとくね、北斗は初の６店派遣社員になったからね』と可愛いリアンに笑顔で言った。
「待って・・意味が理解できない、リアン今１３しゃいだから～」と二ヤで返された。
『ようするに・・北斗がローズにも立つって事さ』と二ヤで返して立ち上がった。
「エース・・ずっと蘭の側にいてね、私もいるから」とリアンがまた大粒の涙を流した。
『リアン・・忘れてないよね、俺が全力で挑んで・・それで木っ端微塵の吹き飛んだら？』と真顔で言った。
「私が全裸で抱いてやるよ」とリアンも炎をもどして、獄炎で微笑んだ。
『ありがとうリアン・・それが心の支えだよ』と笑顔で言って、蘭と腕を組んだ。
ユリさんと北斗に挨拶をして、ローズを出た。

「心の支えが沢山あるんだね～」とエレベーターで蘭が満開二ヤで言った。
『リアンの言葉は絶対だよ、知り合って間もない時に言ってくれたから・・熱い言葉だった』と真顔で返した。
「熱いよね～、あんたも・・由美子、素敵な子なんだね」と嬉しそうに満開で微笑んだ。
『素敵な子だよ～・・由美子も沙紀も、そしてミホも』と笑顔で返して、通りに出た。

「腕の組み方が・・自然だ～」とユリカが爽やか二ヤで言った。
「えっへん・・お疲れ様です、ユリカ姉さん」と蘭が満開で微笑んだ。
「蘭・・私、あの絵を貰って・・心が止まらないから、明日会いに行ってくるね」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「はい・・私も日曜日に行こうと思ってます」と満開に微笑んで返した。
『ユリカにも蘭も分かってると思うけど、嬉しい涙は禁止だからね』と二ヤで言った。
「そこなんだよね～・・頑張らないと」とユリカが笑顔で言って。
「私も・・気を付けないと、最近涙もろいから」と蘭がウルで言って、ユリカにお休みをしてタクシーに乗った。

タクシーに乗ると、蘭が肩に乗ってきた。
『さすがに疲れたね』と蘭に囁いた。
「うん・・充実感のある、疲労感だよ」と言って瞳を閉じた。
タクシーがアパートに着いて、蘭を抱き上げた、満開で微笑んでいた。
「また上がってる・・完璧な海だよ」と優しく言った。
『そうなの・・イルカちゃん思い出すかな』と笑顔で返した。
「うん・・また行きたくなってきた～」と蘭が満開で微笑んだ。
『いつでもどうぞ・・カスミが怒るけど』と二ヤで言って部屋に入った。

私は部屋の中まで抱いて入り、暫く蘭を抱いていた、蘭は瞳を閉じていた。
『蘭・・駄目だよ、お化粧』と優しく囁いた。
「もう・・面倒だね～女って」とウルで言って、洗面所に消えた。
パジャマで戻ってきた蘭に、両手を広げた、蘭が満開で私の首に腕

を回した。
私は何も考えずに、蘭を抱いていた、深い眠りに入った時にベッドに寝かせた。
部屋を暗くして・・窓を開けて、蘭の首に腕を回し引き寄せた。
寝顔を暫く楽しんで、額にキスして眠りに落ちた。
日付は9月3日になっていた、土曜の朝も迫ってきていた。
幼い姉弟のように眠る、私たちの部屋の窓辺にも・・。

北斗が見せる姿は、やはり別世界だった。

6年のブランクも、難病の娘の存在も・・全て自分の中に入れているようだった。

私はその姿に目を奪われていく、前を向いて生きる。

その本質を見せてくれる北斗、若い世代は気づく・・生き方の選択肢は無限だと。

ユリさんとは違う個性、北斗・・憧れに値するその生き方。

そしてその言葉が織り成す愛の世界、圧倒的経験量が作りだす温もり。

北斗の輝きが戻っていく過程を、由美子は喜んで応援した。

その別世界に棲む天使は、私に大切な沢山の事を教えてくれた。

ミホに笑顔が戻った時に、私は由美子のベッドに走り。

由美子の横で泣かせてもらった、由美子は強く手を握ってくれた。

「それは嬉しいだから・・私も嬉しいだからね・・嬉しいだから」と伝えてきた。

そして開いた事の無い閉じた瞳から、一筋の涙が流れた。

『由美子・・俺の嬉しいが、また増えたよ』と由美子に伝えた。

私は由美子のその後はだけは書かない、読まれる人の想像にお任せしたい。

しかし想像を超える者も、存在する・・そう感じて欲しい。

由美子は何度も奇跡を見せた、私には絶対の存在・・ヒトミと由美子。

その2人が教えてくれた、生きる事の意味。

ありがとう・・由美子・・一緒に泣いてくれて。

愛無きルール

小鳥達も学校が始まったのだろうか、早朝からチュンチュンと歌っている。
朝陽の熱量は夏の主張が強いが、吹き抜ける風に爽やかさが乗ってきていた。
南国の夏はゆっくりと進む、爽やかな秋にバトンを渡すまで。

私は小鳥の校歌斉唱で目覚めた、蘭は熟睡状態で二ヤ顔だった。
私は洗面所に行き、歯を磨き顔を洗った。
キッチンでご飯を確認して、卵焼きを焼いて、納豆と味付け海苔を用意した。
まだ時間が早かったので、部屋で日記を書いていた。

「おはよ〜・・日記毎日大変だね、書くこと多くて」と満開で微笑んだ。
『うん・・大変・・はい、蘭』と二ヤでプリントを渡した。
「ドキッ！」と言葉で言って、真顔で受け取った。
プリントを読みながら、段々と満開笑顔になっていった。
参観日のお知らせプリントだった、蘭は読み終わり楽しそうに洗面所に向かった。

私は朝食の準備をして、日記を書いていた。
「素敵〜・・和食も良いよね〜」と満開で微笑んだ。
『蘭の気持ちは分かってるよ、炊飯器のタイマー炊きの意思は』と二ヤで返して食べていた。
「実はかなり羨ましかった・・ユリカ姉さんの、あの絵」と蘭が満開に微笑んだ。
『そうだね〜・・あれは宝物だよね』と笑顔で返した。

「うん・・私も会いたくてたまらない、ミホと沙紀と由美子に」と満開笑顔で言った。
『うん、俺は蘭とユリカは心配してないから、ユリさんは完璧だったし』と笑顔で言った。
「でも、一応教えといて・・ユリカ姉さんも聞きたいはず」と蘭が真顔で言った。
強い波動が返ってきて、私は真顔で頷いた。

『ミホは、全く問題無い・・笑顔で話しかければ。
ミホは無表情だし、今は何も返して来ないから。
沙紀は・・あの病気特有の、視点が定まらないんだよ。
だけど話す時は全体的に、瞳を見て話すんだ。
これが案外難しい、人は目を逸らしたくなるからね。
そして由美子・・それは覚悟していて欲しい。
病室には、ありとあらゆる医療機器が置いてある。
そして由美子の体には、栄養摂取の為の管や、排泄の為の管。
それが無数に伸びている、初めて見ると衝撃なんだよ。
今日、マキと話せる時間があったら、マキに聞いて。
その対応力は、俺の知る中で・・マキとシズカ最も優れてる。
由美子は鋭すぎる感性を持っている、だから瞬時に感じる。
少しでも心が引いていたら、その相手を受け入れない。
そこが肝心・・だからマキに聞いて、マキはその覚悟が表現できるから。
大丈夫・・俺は蘭もユリカも、何の心配もしてないよ』

真剣な蘭の顔を見ながら、最後は笑顔で言った、強い波動が了解を示した。
「凄く大切な経験になるんだね、生きる意味として」と蘭が真顔で言った。
『絶対に何かを感じるよ・・常日頃意識してない何かをね』と笑顔

で返した、蘭も満開に戻り微笑んで頷いた。
私は支度をして、蘭の満開に見送られ、チャリに乗り出かけた。
少し爽やかになった風を受けて、快調に漕いでいた、朝陽に輝く町並みを。
洋風の家のガレージに、チャリを押し込み、笑顔で玄関を開けた。

『みゆ～きちゃん・・がっこ行きますよ～』と声をかけた。
「ちょっと待って～」と美由紀の声がして、母親が牛乳を持ってきてくれた。
「汗かいたでしょ・・はい、筋肉増強剤」と笑顔で言って差し出した。
『さすが・・節子は朝から、素顔も美しいな～』と笑顔で受け取り、一気に飲んで返した。
「むむ・・戻ったの、昨日も感じてけど・・強まってるね」と笑顔で返された。
『うん・・ミホに会ってる』と真顔で返した。
「小僧・・頑張れよ、最近で一番嬉しい話だよ」と節子が微笑んで、奥に消えた。

「そうなんだね、ミホちゃんに会ってるんだ・・よし、私が毎日学校で回復してやる」と美由紀が笑顔で言った。
『キスで回復して・・美由紀の唇で』と二ヤで言って抱き上げた。
「それが必要だと感じたら、迷わずするから・・覚悟しな」と耳元に囁いた。
『楽しみだ～・・元気出てきた』と笑顔で返して、車椅子に乗せて出かけた。
ユリカの楽しげな波動が何度も押し寄せて、背中を押してくれた。
「さぁ・・今日から物語を聞かせて、家出シーンから」と美由紀が

振り向いて笑顔で言った。
『夏休みに入った直後、俺は親父の大切なカメラを持って・・シティのプールに・・・』私は美由紀に物語調に話始めた。
美由紀の背中は優しさが出ていて、私は素直に自分の感情まで込めて話していた。
【それが必要だと感じたら、迷わずするから】美由紀のこの言葉に、どれほど勇気を貰っただろう。
私はその後、卒業するまで・・一緒に登下校する時は、美由紀に話した。
その行為が私に気づかせてくれた、私の間違いを。
美由紀の笑顔と涙が教えてくれた、それで良かったんだと伝えてくれたのだ。

緩やかなスロープを登り、教室に入った、楽しげな声が響いていた。
「小僧・・遅い、マコさんが来てる、公園に」とバルタンが飛んできた。
『それで・・何の用事かな?』と笑顔で返した。
「分からない・・今、ノリがギブスのまま行った」とバルタンが言った。
『番長行ったんなら、いいじゃん・・そんな怖い話じゃないよ』と二ヤで返した。
「ん〜〜・・そうだとは思うけど」とバルタンが考えた。
『バルタン・・はっきり教えろ、そうすれば行くから・・どこまでやられた、バルタン?』と強く聞いた。

「押し倒されて・・キスされそうになった」とバルタンが悔しそうに言った。
『バルタン・・ノリ番長が好きなんだな?』と優しく囁いた。
「うん・・そうかもって・・思ってる」と俯いて恥ずかしそうに言った。

「小僧・・レッツゴ～・・怪我するなよ、抱っこ出来なくなるから」と美由紀が微笑んだ。
私は頷いて、駆け出した・・公園に向けて。

学校横の小さな公園に、ノリ番長とマコちゃんとミチオの姿が見えた。
私は笑顔で歩み寄って、ノリ番長の後ろから、ミチオを見ていた。
「小僧・・久しいの～」とマコちゃんが笑顔で言った。
『マコちゃん・・またかっこ良くなったね、女だな』と笑顔で返した。
「まぁそんなとこだよ・・お前が俺に喧嘩売るって言ったから、この馬鹿が焦ってな」と真顔で言った。
『うん・・その馬鹿が分からないようだから、それしかないね』と真顔で返した、ノリ番長が慌てて私を見た。

「そうだよな～・・こいつらの責任は俺にあるよな」とマコちゃんがミチオを見て、振り向いた。
「ノリ・・すまんかった、ミチオに2度と手を出させん・・本当に悪かった」とマコちゃんが頭を下げた。
ミチオも慌てて頭を下げた、ノリ番長は驚いて固まっていた。
『どうする番長・・許せないなら、全面戦争になるよ』と静かに言った。
「マコトさん頭を上げて下さい・・ありがとうございました、俺も生意気でした」とノリ番長が頭を下げた。
『じゃあ手打ちだね・・俺、清次郎に怒られるから、ダッシュで帰りま～す』と笑顔で言って、走り出した。
校舎の窓から生徒達が大勢見ていた、そして正門の横の木陰で極マサと鬼瓦が見ていた。
そんな時代だった、だから強く伝わった・・行動に対する責任の重さを。

豊世代の当時の3年生にとって、無益な暴力は恥だとされていた。
それをやる事は、豊の顔に泥を塗り・・豊に喧嘩を売る行為だと、悪達は思っていた。

教室に帰ると、清次郎が朝の挨拶をしていた。
「おや？・・おやおや？・・美由紀と登校してたよね～小僧君」と清次郎が二ヤで言った。
『花壇のお花が枯れそうで、お水を飲ませていました・・偉い？』と笑顔で聞いた。
「ほ～・・皆も見習うように、公園の花にも愛情を注ぐ小僧を」と笑顔で返された。
どっと笑いが起きて、私は照れた笑顔で頭をかいて誤魔化した。
ユリカの波動が笑っていて、美由紀も笑っていて、私も嬉しかった。

それから、退屈と戦って・・悪質な原作者のシナリオ【お昼寝】と真っ向勝負した。
ギリギリ勝利して、美由紀と下校しながら、話の続きをしていた。
この時に使った仮名を・・この作品に全て採用した。
美由紀を家用の車椅子に乗せて、母親が持ってきたカスピスを一気に飲んで。
美由紀と母親の笑顔に見送られ、アパートに向かってチャリを漕いだ。
部屋に帰り、シャワーを浴びながら、悪戯をした。

《なんだ～・・ここに生えてるの・・これはもしかして！》と強く心に囁いた。
強い波動が動揺を示して、私はニヤニヤでシャワーを浴びて。
《ユリカのエッチ》と囁いて、何度も来る言い訳の波動を楽しんでいた。
着替えてバスで出かけて、カスミに手を振り、靴屋で蘭に手を振っ

た。
その時にユリカに腕を掴まれた、爽やかテレで微笑んだ。
「蘭・・スペシャルで良い？・・・マキ講座聞くでしょ？」とユリカが蘭に微笑んだ。
蘭が満開笑顔になって頷いて、【１０】とサインを飛ばした。
『あと１０分だって』とユリカに笑顔で言った。
「先に行ってるね～」とユリカが爽やか笑顔で言って、ユリカと腕を組み弁当屋に向かった。
スペシャル幕の内を３個買って、ユリカが支払いＰＧに向かった。
「学校だけで、笑い死にそうなんだから・・変な悪戯しないの」と睨まれた。
『ユリカのエッチ』とニヤニヤで返した。
「修行決定」と爽やか二ヤで返された、私はウルウルで返してＴＶルームに入った。
ＴＶルームには、マダムとユリさんに裏方４人組がいて、マリアはお昼寝していた。
ユリカが挨拶して座った、私もユリカの隣に座った。
「ユリ姉さん・・少し寝不足ですね」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「あれから、ローズで３人で盛り上がって・・３時でした」と薔薇で微笑んだ。
「リアン、完全復活しましたね・・強烈な演出もするし」とユリカが私に二ヤをした。
「そうですよ～・・あそこまで火力を上げて、火曜の魅宴が怖いです」と薔薇で微笑んだ。
「最後にリアン姉さんの一番素敵な部分を、確認させるしね～」と蘭が満開二ヤで入ってきた。
「あの台詞は感動しました・・全裸で抱いてやる、リアンにしか言

えません」と薔薇で返した。
ユリカも蘭も笑顔で頷いた。

「マキ・・今日はマキにお願いがあって・・私とユリカ姉さんが・・・」蘭がマキに話をした。
マダムもユリさんも４人組も真剣に聞いていた。

「・・・ユリ姉さんは完璧に出来たらしい、私は自信が持ちたい。
中途半端な気持ちでは、会ってはいけないと思ってる。
だからマキ・・教えて、アドバイスして・・心が揺れないように」

蘭が真剣にマキに話して、ユリカも真顔でマキを見ていた。
「マキ・・私達からもお願い、大切な事だから」とシオンが言った、美しい真顔で。

「私はヒトミに会う時に、小僧に同じ事を言われました。
その事を限界トリオ３人で話しました、どう覚悟すれば良いのかを。
実はその部分で最も優れているのは、恭子なんです。
恭子はイメージで物事を見ません、だから漠然とした恐怖など持っていない。
だから私たちにヒントをくれる為に、ヒトミに会いに行きました。
そして帰ってきて、笑顔で言いました。
全然大丈夫だよ・・だってあれはヒトミにとって、良いことなんだから。
あれをしてもらえるヒトミは、幸せなんでしょ・・してもらえない子供もいるんだから。
それで亡くなった子供も沢山いるよね、お金や設備や技術が無くて。
どうして動揺するの？・・幸せな事なのに、私はそっちの方が分

からないよ。
恭子は笑顔で言った、私もシズカも何も返せなかった。
それが真実だから、それを見て動揺するのは。
自分勝手な、独善的な考えだと言われたと思いました。
その日の夜、整理しようとシズカと約束して、考えました。
考えてると、恭子が笑うんです・・瞑想に出てきて。
考える事なの～・・何を考えて、何を正すの～。
そう言って笑うんですよ・・私は段々悔しくなって、考えないって叫んだ。
そしたら恭子が、正解って笑って消えた。
私はそれでハッとして気づきました、考えては駄目なんだと。
小僧を見ろと、何も考えずに飛び込んで・・それから考えると。
ユリカ姉さん、蘭姉さん・・それなんです。
自信を持ちたいとか、ここを気をつけようとか・・その想いが間違いなんです。
あの病の少女は、鋭すぎる感性ですから。
心のままに会うしかないんです、自分をさらけ出す覚悟で。
考えを捨てて、人と人の純粋な出会いとして。
それが大切なんだと、私は思っています。
アドバイスになりませんけど、それがエースの言いたい事ですよ」
マキは真剣に流れるように言葉にした、全員が真剣に聞いていた。
「マキ・・最高のアドバイスだよ、ありがとう」とユリカが爽やか笑顔で言った。
「すごく良く分かった・・小僧じゃ無理なんだね、小僧は恭子と同じだから」と蘭が満開で微笑んだ。
「最近大切な話が多すぎて、整理しないと」とハルカが笑顔で言った。
「恭子も欲しい」とユリさんが呟いた。
「ユリ・・最近そればかりやぞ、北斗まで復活するのに」とマダム

が二ヤで言った。
「シズカと恭子を感じると、欲しくなりますわ」と薔薇テレで返した。
全員に笑顔が戻って、私たちは弁当を食べていた。

「セリカは何時から？」とユリカが聞いた。
『2時過ぎに行こう・・ゴールドのフロアーでやるよ、その方が素直に泳げるから』と笑顔で返した。
「いよいよ、セリカちゃんも次の段階ですね・・先生、シオンは？」とニコちゃんで言った。

『シオンは来週早々に・・沙紀にシオンを会わせて、シオンを描いてもらう。
昨日のユリカの絵で感じた、沙紀は感じる・・その内面まで。
だからシオンしか出来ないかも知れない、沙紀の前に座って描いてもらえるのは。
シオン・・お願い、沙紀にもとっても良い事だから』

私は最高ニコちゃんシオンを見ながら、笑顔で伝えた。
「先生・・ありがとう・・シオン最高に嬉しいです」とニコニコちゃんで言った。
『うん・・シオンよろしく』と笑顔で返した。
「相互効果・・絶大だね、怖い気がする」と蘭が満開で微笑んだ。
「蘭、エースのこの上がり・・それにはもう一人登場してない、重要人物がいるんだよ」とユリカが爽やか二ヤで言った。
「マキ・・重要人物を述べよ」と蘭が満開で促した。

「両足を付け根から失っても、明るく前向きな可愛い少女。
エースの同級生で、学校のアイドル。
その名は・・美由紀です」とマキも笑顔で返した。

「本当にマキも凄いね～・・言われた事の意味を、すぐに理解して言葉にできる」とレンが微笑んだ。
「いるんですね・・エースを学校で見守る女性が」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「いますね～・・その存在は圧倒的です、エースの心を浄化するほどの」とユリカが微笑んで返した。
「マキお願い・・美由紀第一章」と蘭が満開笑顔で言った。

「皆さんお気づきかと思いますが、エースの話には昨年があまりありません。
それは全てを注ぎ込んだから、全員が1つになって同じ目標に挑んだからです。
美由紀は小学校に上がる前に、事故で両足を付け根から切断しました。
小学校は特別な学校に通っていました、でも本当に前向きな明るい少女です。
美由紀は月に何度か、あの総合病院で検査を受けていました。
そして夏休みに出会ってしまう、小児病棟に美由紀が訪ねてきて。
エースに会ってしまうんです、エースはいつもの調子で話して。
自分と同じ学年で、校区も同じだと知るんです。
そして母親とも仲良くなって、過ごしていきます・・エースがヒトミに会う前位です。
エースは美由紀の家にも遊びに行って、もうそれは恋人のように接する。
そして美由紀もその想いを返す、エースがミホで挫折した時に。
エースの心を守り続けたのは、美由紀なんです・・その前向きな心で。
だからエースも自傷の女神に、向き合えたんだと思います。
その間も・・今でも美由紀は、エースの守り神でしょう。

そして昨年の春が過ぎた頃、美由紀に届くんです。
中学の案内が、その時に始めてエースは美由紀の涙を見る。
普通の中学に行きたいと、母親にすがりつき泣くんです。
エースはその姿が耐え切れず、約束します・・必ず行かせてやると。
そう誓って、美由紀を豊君と私達3人に会わせるんです。
そして豊君が見せます、その意志を・・美由紀の車椅子を研究するんです。
徹底的に、軽くして強度を上げて乗りやすく・・それを始めます。
私達3人は担任に相談しました、その時の担任・・今のエースの担任。
林　清次郎という、話の分かる最高の教師に・・シズカが詰め寄る。
どうして受け入れられないのかと、その迫力は怖かった。
清次郎先生は調べてくれました、そして教えてくれました。
自分で教室の移動が出来て、自分でトイレに行けて。
介助できる者が常に存在する、それが決まりになっていると。
そして今からでは、予算が取れないから・・現状で組織に頼むのは無理だと。
シズカは悔しさを滲ませて、その時は引きました。
そしてそれをエースに話しました、エースは考えていました。
そしてエースが見せます、美由紀に対する愛の深さを。
エースが土下座するんです・・勝也父さんに。
そして頼むんです、設計図を書いて欲しいと・・車椅子で上がれるスロープの。
そう真剣に頼みました、勝也父さんは・・分かったと言って受けました。
そして勝也父さんが、シズカに渡すんです・・この角度なら問題ないと。
シズカはそれで始めます、私達2人も手伝って・・測量をするん

です。
もちろん専門知識もないから、徹底的に測って・・シズカが徹夜して作った。
1階のこの教室なら、可能だと言って・・設計図を作って清次郎先生に渡します。
清次郎先生は笑顔で受け取り、校長も交え教師全員で会議を持ってくれました。
翌日・・清次郎先生は朝礼で言いました、卒業制作を発表すると。
夏休み少し前の頃でした、そして黒板に書いた。
教室のスロープ・・・そう強く書きました。
私は初めて見ました、その級友全員の歓喜の声を聞いて・・学校で泣くシズカを。
そして夏休みになり、教師総出で・・生徒も他のクラスからも出てきて。
土を盛り、固めて、作業をしました・・全員で・・受験生が。
資材は家にある者が持ち寄って、土木関係の父親がアドバイスして。
そして最後に勝也父さんが、コンクリートミキサーで乗りつけた。
余ったから・・捨てるのもったいないから、くれてやると笑顔で言った。
完成した時に、皆で泣きました・・生徒も教師も。
そして2年生の技術の時間で、木工製作のテーマが階段に備え付ける傾斜版でした。
2年生男子が全員で取り組みました、校内の段差を女子が測って。
1階の全てをそれで繋ぎました、理科室も音楽室も保健室も。
それを1年生が車椅子に乗り実験して、ベストな配置で全て備え付けた。
全校生徒の力で校舎を結んだ・・車椅子の道を。
そして豊君の挑戦が始まる、試作車を持ってきて・・自分で乗って試す。

改良に改良を重ね、作りだす・・ＹＵＴＡＫＡ？と呼ばれる車椅子を。
美由紀の中学を決めなければならない、その期日ギリギリ１２月に全て完成します。
美由紀が母親と学校に来て、号泣するんです・・私達はそれを見て嬉しかった。
そして審査官みたいな人の前で、美由紀が教室に上がれるかのテストがありました。
そのＹＵＴＡＫＡ？に乗った美由紀は、スムーズに上がって見せました。
全校生徒が拍手で、美由紀を称えた・・美由紀は笑顔で返しました。
そして卒業生が積み立て金で、改良してくれたトイレも合格した。
教室の移動も完璧に出来ました、美由紀は終始笑顔でした。
そして介助の項目がきました、教師ではそれになれないという。
公務員が馬鹿な頭で作った、愛の無いルール・・その大問題。
美由紀は体の大きな方で、どうするのかと皆が思っていました。
そこにやって来ました、その想いを叶えるために・・エースが。
全ての時間をそれに費やし、病院の専門家に徹底的に指導を受け。
そして体を鍛え上げた、エースが愛無きルールに挑みました。
全ての条件をクリアーしたエースは、美由紀を抱いたまま。
一回転して、頭を下げました・・美由紀は笑顔を振りまいていました。
エースの体は、ブルース・リーに憧れたからじゃない。
そんな事では、あの歳であの体は作れない。
あの体は愛の表現方法だから・・だから出来上がった。
愛無きルールに対して挑戦した、全てを投げ出し・・全てを賭けて。
その全ての愛に、美由紀は今でも応え続けています。
車椅子に座り笑う美由紀が、どれほど生徒に勇気を与えるでしょ

う。
美由紀は2度と泣かないでしょう、見せてくれたから。
本当の愛情を見せてもらえたから、笑顔で応援するでしょう。
素敵な愛する、仲間達を・・いつまでも。
私達にとって・・あの校舎が誇りです。
強い気持ちで成し遂げたから、豊君に対し1つの答えを出せたから。
エースの抱っこの意味・・その安心感・・それは愛で出来ているからです」

マキは最後は泣きながら伝えた、私は嬉しかった・・その表現が。
「ありがとう、マキ・・それが第一章なの？」と蘭が涙を流して聞いた。
「はい・・序章です」とマキが笑顔に戻って返した。
「私は贅沢な事をされてるんだね・・毎日抱っこしてもらって」とユリカも潤む瞳で微笑んだ。
「そうでもないですよ・・抱っこ趣味ですから」とマキが微笑んで返した。

「第二章が楽しみです」とシオンが微笑んだ。
「シオン姉さん・・第二章はさらに泣けますよ、エースを復活させる美由紀ですから」とマキが微笑んだ。
「それは素敵です～・・楽しみです」とニコちゃんで返した。
「マキやめて・・もう昼休みが・・聞きたい衝動が怖いから」と蘭が満開ウルで言った。

「美由紀に会いたい・・私は美由紀に合格しないといけない」と蘭が私を見た。
『参観日に来るんだろ・・蘭』と笑顔で返した、蘭も満開で頷いた。
「まぁ素敵・・参観日は蘭が行くんですね」とユリさんが薔薇で微

笑んだ。
「蘭・・仕事休めない時は、私が行くからね」とユリカが爽やか二ヤで言った。
「あれ・・私は2人で行こうと思ってたのに」と満開二ヤで返した。
「可愛い妹～」とユリカが笑顔で蘭に抱きついた。
「ユリカと蘭が参観に行ったら、教師も男子生徒も全員見に来ますね」とユリさんが私に薔薇二ヤで言った、私はウルウルで返した。

「それは怖い・・想像を超える」とレンが微笑んだ。
「レン・・怖いの意味を述べさせるよ～」とユリカが爽やか二ヤで言った、レンはウルウルで返していた。

蘭が靴屋に帰り、４人組が仕事に向かった。
「さて・・今夜から大変です、北斗姉さんの復活・・想像すらしたこと無かったです」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「私も自分の店に立ってくれると聞いて・・緊張してます」とユリカが爽やかに微笑んで返した。
『あっ！・・肝心な大ママに話してない』と思い出して言った。
「ゴールド行く前に、報告しますかね」とユリカが微笑んで立った、私も笑顔で立ち上がった。
「エース・・由美子と沙紀とミホを頼みますね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

『ユリさん・・シオンが終わったら、沙紀にはマリアを借ります』と笑顔で返した。
「もちろん・・相互効果なんでしょう、律子姉さんの言葉で気づきました・・あなたならいつでも、マリアの言葉は引き出せるのね」と真顔で言った。
『どうでしょう・・私はマリアに教えられるばかりだから』と笑顔で返して、ＴＶルームを出た。

夏の陽射しが降り注ぐ、通りをユリカと腕を組んで歩いた。
土曜日の期待感に包まれる夜街を、その物語の幕開けを待っているようだった。
魅宴の裏口から入り、フロアーに向かった。
土曜の打ち合わせを、大ママ・ミコト・リョウ・ミサキとヨーコでしていた。

「大ママ・・少し報告があって」とユリカが笑顔で言った。
「まぁおいでよ・・また泣かそうと思っても、駄目だよエース」と二ヤで言われた。
『そんなたいした事じゃないよ・・派遣登録1号が出来て、魅宴もどうかと思って』と笑顔で言った。
「経験者なんだね？」と大ママが微笑んだ。
『うん・・俺的には、実力は未知数だし、ブランク長くて・・今一押せなくて』と真顔で言った。
「それは難しいね～」と大ママも真顔で考えた。
『そうだよね～・・じゃあ魅宴は保留にします、ＰＧで様子見るよ』と二ヤで返した。
「エース待ちな・・その二ヤは・・その子の源氏名を教えて？」と真顔で言った。
『変な源氏名で・・誰がつけたのか・・北斗って言います』と笑顔で答えた。

「本当の話だろうね・・ユリカ？」と大ママが驚いて言った。
「はい・・私はＯＫして、今緊張してます」とユリカが微笑んだ。
「エース・・良くやった、もちろん魅宴もＯＫだよ・・ＰＧの歴史に残るＮｏ１だからね」と大ママが嬉しそうに微笑んだ。
『全盛期の飛鳥に、１０代で真っ向勝負を挑んだ女だし・・皆さんお楽しみに～』と二ヤで言った。

「く～なんか悔しい・・リョウ、エースをこらしめて」とミコトが二ヤで言った。
「ユリカ姉さんが付いてるのに・・無理です」とウルで返した。
「根性ないね・・やっぱり最終兵器・・ヨーコ行け」とヨーコに二ヤをした。

「エース・・何か今の状況話したでしょう。
さっき若草通りで・・美由紀とお母さんに会ったよ。
美容院の後、靴屋に行きたいって言ってたよ。
どうして美由紀が、靴を見たがるのかな～」

ヨーコが二ヤで言った、私は驚いていた。
「ヨーコ、良くやった・・動揺したねエース」とミコトが微笑んだ。
『うん・・少し』とウルで返した。
「なんで毎日が、こんなに楽しいの～」と言ってユリカが引っ張った、私はウルウルで5人と別れた。
光射す通りに出て、ユリカのご機嫌笑顔を見ていた。

『ご機嫌ですね・・姫』と笑顔で言った。
「会える気がする、車椅子の守護者に・・その前に、セリカを水冷にするよ」と爽やかに微笑んだ。
深海の瞳が輝いて、夏の光を押し返した。

9月の最初の土曜日が、動き出していた・・ドラマの配役を揃えた。
原作者は台本も演出も無しに、舞台に上げる・・感じたままに動けと囁いて。
出会いの輪廻が速度を増し、夢舞台は幕を上げる。
後悔も挫折も悲しみも・・道連れにして・・・。

美由紀の第一章、私も他人事のように聞いていた。

私の知らない部分も多かった、シズカの強い意志を感じていた。
美由紀はその想いに、何倍もの想いで応えた。
だから私達同級生は、甘えも挫折も経験しなかった。
美由紀と比べていたから、その過酷な事実と向き合い続ける姿を見ていたから。
挑むべき壁が見えたら、怯む事無く真っ向から挑めた。
美由紀が車椅子に座り、笑顔で細かく拍手してくれるから。
「まさか、まさかと思うけど・・・」と2度強く言う口癖で、背中を押してくれるから。
全力で挑み、敗北した時は・・動かずに待っててくれたから。
だから・・美由紀を押すために、立ち上がり前に進めた。
卒業アルバムの、最後の思い出写真の真ん中に、真赤なマシーンに乗る美由紀が微笑んでいる。
左手の親指を立てて、こっちを見ている・・私達は辛いことがあると開く。
美由紀が【頑張ったね】と・・親指を立てて微笑んでくれるから。
それだけで・・次に進めるから・・それだけで・・強くなれるから。

Love　Made

筋肉質の腕を笑顔で自慢する、存在しない足で笑いをとる。
そこまで辿り着くのに、どれ程の汗と涙を流したのだろう。
健常者の努力など、努力と思って良いのかとさえ思わせる。
愛さずにいられない存在、乗り越えた壁が違う、圧倒的優しさを内包している。

ゴールドにユリカと腕を組んで入った、ボーイ頭と挨拶して小部屋に向かった。
小部屋には千鶴とセリカとケイコに、グロリアと呼ばれる女性がいた。
「おはようございます」と４人がユリカを見て、慌てて立ち上がって挨拶をした。
「おはようございます・・なんか怖いんだけど」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「ユリカ姉さんが、来るなんて考えてなかったから」と千鶴が微笑んだ。
「うん・・少し見たくて、フロアーに出てみたいと思ってるから」とユリカが微笑んで返した。
「嬉しい～、楽しみにしてますね」と千鶴が笑顔で言った。

『セリカを借ります・・千鶴、ミホ元気だよ』と千鶴に笑顔で言った。
「ありがとう・・嬉しいよ」と千鶴が微笑んだ。
「ユリカ姉さん・・私のために・・ありがとうございます」とセリカが真顔で頭を下げた。
「何言ってるの、セリカ・・この位ならいつでも来ますよ」と爽やかに微笑んで返した。

3人で一番奥のＢＯＸに座った、セリカは緊張していた。
『セリカ・・何も緊張しないで良いから、波に任せて・・怖くないから、俺が側にいるから』と笑顔で言った。
「ありがとう・・お願いね、離れないでね」とセリカが微笑んだ。
私は笑顔で頷いて、リストバンドを外した。
薄く残るためらい傷に右手の親指を添えて、ユリカに真顔で頷いた。
『なぜやるの・・どうして自分を傷つけるの』とユリカが言った。
強かった・・強い揺り篭にセリカを乗せた。
セリカはユリカを見て大粒の涙を流した、しかしユリカから視線は外さなかった。
「衝動が襲ってきて・・負けてました」とセリカが涙を流しながら言った。
ユリカはセリカを見ていた、深海深く潜っているような瞳だった。
『衝動・・それは何が作ってるの？』とユリカが静かに聞いた。
「それが分からない・・その衝動の正体が」とセリカが答えた。
その時に私に映像が流れた、洗面所で手首に剃刀を当てるセリカが。
『セリカ、もっと深く切れ、そうしないと死ねない・・死にたいんだろセリカ。
深く入れろ・・そうしないとセリカの願いは叶わない』
セリカを抱きしめて強く言った、セリカは大きく震えていた。
『それが願いなんだろ・・セリカ』と強く抱いて耳元に優しく囁いた。
セリカは大きく震えながら、私の右腕に噛み付いた。
私はセリカに噛ませていた、段々と力の抜けるセリカに。
「違うよ・・死にたくなんて無いよ・・愛されたいだけだった、誰かに見ていて欲しかった」と囁いた。

私はセリカを抱き上げて、引き寄せた・・セリカはゆっくりと瞳を閉じた。
ユリカは爽やか笑顔に戻って、小部屋の方に歩いて行った。

私はセリカの温度と鼓動だけ感じていた、穏やかな温度に安心していた。
１０分ほどして、セリカが瞳を開けた。
『セリカ・・ごめんね、辛かったね』と優しく囁いた。
「ありがとう・・嬉しかった、もう大丈夫だよ・・でもこれからも見ててね、私の事も」と可愛く微笑んだ。
『もちろん見てるよ・・セリカが幸せになるまで』と笑顔で返した。
「私ね・・ずっと憧れてるの、東京に・・だから今から頑張るから、東京ＰＧに挑戦したい」と真顔で言った。
『ＯＫセリカ・・嬉しいよ、オープニングのフロアーリーダーが見つかって』と笑顔で返した。

「プレッシャーかけるの好きだね～・・良いよ・・なってみせる、だから私も色々挑戦させてね」と笑顔で言った、流星群が流れて美しかった。
『忙しくても、ウルするなよ』と二ヤで返した。
「どっかのエースじゃないから、ウルウルなんてしないよ」と言って瞳を閉じた。
「誓いの儀式・・私がそのレベルになったら、東京に連れて行くと誓って」と静かに言った。
私はセリカの唇に唇を重ねて、誓った・・必ず連れて行くと。
唇を離すとセリカが笑顔で瞳を開けた、その笑顔が輝いていて嬉しかった。
セリカを抱いたまま、小部屋に歩いた・・セリカは静かに瞳を閉じていた。

小部屋のドアを足で蹴ると、ケイコが開けてくれた。
『ケイコ・・セリカ寝ちゃった』と静かに言った、ケイコがベッドに案内した。
私はセリカをベッドに寝かせて、可愛い寝顔の額にキスをした。
ユリカが立って、２人で黙って頭を下げて小部屋を出た。

「あんな方法・・どうして思いついたの？」と腕を組んだユリカが微笑んだ。

『自傷の女神の時も、セリカの時も・・映像が流れたんだ。
傷跡に触れたとき・・後悔が強いからかと思ってた。
だからセリカが疲れた時に、揺り篭に乗せれば、本音が出ると思った。
後悔の場面で映像が出るんじゃないかと、そう思ったんだよ。
その時しかないから、衝動に問いかけられるのは・・その時しかないと思った。
台詞は考えてなかった・・その時に浮かぶ言葉に賭けてみた。
正解であって欲しいと、願ってるよ・・自信はあるけど』

ユリカを見ながら、真剣に言った。
「大丈夫・・あの寝顔なら、心配ないよ」と爽やかに微笑んだ、私も嬉しくて笑顔で返した。

その少し前である、ユリさんがマリアが沙紀に会うと聞いて。
画材屋にマリアを抱いて来ていた、沙紀に何か贈りたくて。
棚の上のクレパスを見ていると、声がした。

「あら～・・２本も立派な足があるのに、甘えん坊でちゅね～」と女の子の声がした。
ユリさんがそっちを見ると、車椅子の少女がマリアに微笑んでいた。

「ほら～マリア・・おかしいですよ～自分で立たないと」とユリさんはマリアに言って、少女に薔薇の微笑を向けた。
「マリアちゃん・・可愛いね～、それにママが美人で良かったね～」と少女はマリアに微笑んだ。
マリアが車椅子の少女に抱かれたがった、ユリさんは少女に微笑んだ。

「立たないみたい・・抱っこしてもらえるかしら？」と薔薇で微笑んだ。
「もちろん・・嬉しいです」と笑顔で返された。
ユリさんは優しく少女にマリアを抱かせた、少女は笑顔でマリアを抱いていた。
ユリさんはクレパスを選びながら、２人の話を聞いていた。

「そうなのよ、足無くなっちゃったの～・・今は痛くないよ」と少女が言って。
「いたない？」とマリアが言った。
「うん・・でもねマリア、車には気をつけるのよ・・自分は痛くなくても、ママがずっと痛いの」と少女が言った。
「まま・・いたい？」とマリアが言った。
「そうなの・・ママの方が痛いのよ、マリアが傷つけば・・ママも痛いのよ」と少女が言った。
「うん・・きおつけゆ」とマリアが言った。
「えらいね～マリア・・もうすぐお話ちゃんとするんだね、良かったね～・・愛されてるね、強い人に」と少女が言った。

この言葉でユリさんが少女を見た、素敵な笑顔でマリアを見ていた。
「エース・・ゆたか」とマリアが天使全開で言った。
「そっかエースか・・強そうだね・・豊は私も強い人知ってるよ、同じだね～」と笑顔で言った時に母親が迎えに来た。

少女は母親にマリアを抱かせ、母親が嬉しそうに抱いて、ユリさんに返して店を出て行った。
ユリさんはマリアを抱いて、マリアの天使全開を見ていた。
「マリア・・良かったね～、お姉ちゃんに抱っこしてもらって」とユリさんが微笑んだ。
「うん・・みゆき」とマリアが笑顔で返した。
ユリさんはハッとして、急いで店を出たが、少女の姿は見つけられなかった。

美由紀は母に押され、一番街を進んでいた。
笑顔で久しぶりの街を眺めていた、卒業生の高校生に何人も声をかけられ。
その都度笑顔で挨拶をしていた、まだまだ車椅子が珍しかった頃である。
母親が靴屋に入り、美由紀は入り口の広いスペースで中を見ていた。
蘭が母親の相手をしながら、車椅子の少女を気にしていた。

「どんだけおねだりするんだ・・靴がいるのかね～？」とカスミが美由紀に微笑んだ。
「サイズが合うのが無いかと思って、４５ｃｍ位だけど」と美由紀が笑顔で返した。
「ねぇ・・私は今本当に嬉しいよ、強く生きる少女に会えて」と屈んで美由紀に視線を合わせて微笑んだ。
「近くで見ると・・自信がなくなりそうなほど、綺麗ですね」と美由紀が笑顔で返した。
「私が自信無くなったよ・・強いと思ってたから」と輝く笑顔で返した。
「実は最高に嬉しかったんです・・靴がいるのかね～って言葉、響きました」と嬉しそうに微笑んだ。
「泣かすなよ・・仕事前に」とカスミが微笑んで返した。

「もしかして・・夜もお仕事されてます？」と美由紀が微笑んだ、カスミは笑顔で頷いた。
「ちょっとお耳を拝借」と美由紀が微笑んだ、カスミは笑顔で顔を近づけた。
「蘭さんて・・母を接客してる人ですか？」と美由紀が囁いた。
「そうだよ・・あの人だよ」とカスミも囁いて返した。
「良かった～・・嬉しいな～、ちゃんと巡り会えたんだ～」と蘭を見ながら微笑んだ。
カスミは美由紀の嬉しそうな笑顔を見ていた、何も分からないが嬉しかったと言った。

母親が靴の袋を抱えて出てきた、蘭は後ろからついて来た。
「さっ・・付き合ってね」と美由紀に言って、車椅子を押した。
「ありがとうございました」と蘭は頭を下げた、その時に目に入った。
ピンクのフレームに、ゴールドのマジックで書かれた、ＹＵＴＡＫＡ？という文字に。

「待って下さい・・美由紀ちゃんですか？」と慌てて言った。
「ばれました～・・初めまして、美由紀です」と美由紀が微笑んだ。
「嬉しい～・・私は蘭です、会えて嬉しいよ」と屈んで美由紀を抱きしめた、人混みの一番街で。
「私の方が何倍も嬉しいです・・小僧が巡り会えたんだと感じて」と言って、美由紀も抱きしめた。
「合格と思って良いのね・・今は」と蘭が美由紀に満開で微笑んだ。
「１００点でしょう・・今は」と美由紀も可愛く微笑んだ。

「だから・・声をかけなさいって言ったでしょ」と母親が笑顔で言った。

「私、特徴無いから・・ばれないと思ってました～」と舌を出して微笑んだ。
「確かに無いね・・ピンクのフレームに、ＹＵＴＡＫＡ？・・目立たないよ」と蘭が二ヤで言った。
「蘭姉さん・・美由紀ちゃんとどういう関係なんでしょう？」とカスミが微笑んだ。
「妹よ・・大切な、守護者よ」と満開で返した。
「ありがとう・・蘭姉さん・・今度、パラダイス・ガーデン見せて下さいね」と美由紀が微笑んだ。
「もちろん・・いつでも良いよ、迎えに行くから」と満開で微笑んだ。
「美由紀・・美容院の時間が」と母親が言った。
「母の番なんです・・パーマは長くて、退屈で～」と美由紀がウルで言った。

「節子さん・・私が美由紀ちゃんとパラダイス・ガーデンで待って良いですか？」とカスミが笑顔で聞いた。
「ご迷惑にならないかしら？」と母親が言った、美由紀は期待の眼差しで見ていた。
「全く問題ないです・・ごゆっくりどうぞ、場所は○○ビルの３階です」とカスミが微笑んだ。
「じゃあお願いしようかしら・・よろしくね」と母親は笑顔で言って、美容院に向かった。
「さっ・・美由紀行こうかね、蘭姉さんはお仕事だから～」とカスミが車椅子を押しながら、不敵全開で言った。
「４時までだから・・待っててね、美由紀」と蘭が満開ウルで言った。
「は～い、待ってます～」と笑顔で言った美由紀と、カスミをウルで見送った。

カスミは車椅子を押しながら、美由紀の質問に笑顔で答えていた。
エレベーターでＰＧに上がり、フロアーに向かって押した。
「美由紀！」とマキが叫んだ。
「真希先輩！」と美由紀も驚いて叫んだ。
マキが駆け寄り、美由紀を抱きしめた。
「真希先輩・・女性として綺麗になった～」と美由紀が微笑んだ。

「女性として・・女性として・・前は？」とマキが二ヤで聞いた。
「内緒ですよ・・本人が聞いたら怒るから、憧れてました～異性として」と可愛い二ヤで返した。
「内緒にしとく・・怒るから」とマキも笑顔で返した。
「美由紀・・どこで覚えた、その会話術？」とカスミが笑顔で聞いた。
「カスミさんも、案外鈍いですね～・・こんな会話仕込むのは、一人でしょう」と美由紀が微笑んだ。
「エースか！・・それで蘭姉さんなのか～」とカスミが微笑んだ。
「小僧がエース・・どおりでマリア」と美由紀が嬉しそうに笑った。

「マキ、早く私達も紹介して～」とハルカが笑顔で催促した。
「あっ！すいません・・美由紀です・・美由紀こちらが・・・」とマキがシオンとレンとハルカを紹介した。
美由紀は笑顔で挨拶をしていた、全員笑顔で美由紀を見ていた。
「皆さん美しすぎますね～・・小僧が帰らない訳です」と美由紀が微笑んだ。
「美由紀、マリアに会ったの？」とマキが聞いた。
「はい・・画材屋さんで、お母さんと来てました」と美由紀が笑顔で答えた。
「絡んだね・・その言い方」とマキが二ヤで言った。
「なんの事でしょう」と美由紀が二ヤで返した。
「やっぱりエースです～・・瓜二つ」とシオンがニコちゃんで言っ

た。
「シオンさん・・それは私にとって、最低の褒め言葉です～」と美由紀がウルで返した。
「ウルが多いのも、そっくりね」とハルカが二ヤで言って、全員で笑いながらＴＶルームに向かった。

ＴＶルームに行くと、マダムとユリさんとマリアがいた。
美由紀を見て薔薇の笑顔になった、マリアが天使全開になった。
「みゆき」とマリアが言って駆け寄った。
「マリアちゃん・・先ほどは失礼しました」とマリアを見て、ユリさんに微笑んだ。
「良かった～・・後でマリアに美由紀ちゃんだと聞いて、探しました」と薔薇で微笑んだ、美由紀も嬉しそうに笑顔で返した。
「マリアちゃん、、待ってね」と美由紀が笑顔でマリアに言った。

「真希せんぱ～い」と美由紀がウルで言った。
「なんだい甘えん坊・・美由紀ジャンプすればいいだろ」とマキが美由紀に歩み寄って言った。
「おニューの、うさちゃんアップリケなんです～」とウルウルで言った。
美由紀はジーンズの裾を足の付け根で切り、包み込むように補整していた。
そして自分で動くと底の部分が擦れるので、可愛いアップリケを付けているのだ。
「仕方ないな～」と言って、マキが軽々と美由紀を抱き上げて、座敷に優しく降ろした。
美由紀がマリアを笑顔で抱いて、マリアも天使で抱かれていた。

「私もマキ抱っこ、してもらいたい」とカスミが不敵で言った。
「私も～・・エースより気持ち良さそう」とハルカが微笑んだ。

「それは無理です・・か弱い乙女に」とマキが二ヤで返した。
「マキ先輩・・絞ってますね、重心が揺れませんでした」と美由紀が微笑んだ。
「こら・・企業秘密を」とマキが笑顔で返した。
「ドレスを想定してるんだ～・・見たいな～、マキ先輩のドレス姿」と美由紀が微笑んだ。
「エース・・小僧に言っとけば、美由紀ちゃんの願いは絶対に叶えるでしょ」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「はい・・私に対しては、小僧3段名称がありますから」と美由紀が微笑んで返した。
「美由紀・・3段名称を、述べよ」とカスミが微笑んだ。
「執事・召使・奴隷・・です」と美由紀が二ヤで言った。
「素敵だ～・・私も3段名称を作ろう」とカスミが二ヤで言った、
4人組が二ヤで頷いた。

「美由紀ちゃん、さっきはマリアにありがとう・・マリア響いたみたいです」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「良かった～・・マリアは先に人を想うから、少し怖かったのよ」と美由紀がマリアに微笑んだ。
「みゆき・・きをちゅけましゅ」とマリアが天使で返した。
「マリア、自分でやりたいと思ったら、自分の足で立ってね・・そして自分の言葉で話してね」と美由紀が微笑んだ。
「みゆき、マリア・・がんばる」とマリアが明瞭な言葉で言った。
「うん・・それ以上は駄目よ、小僧に私が怒られるから」と二ヤでマリアに言った。
「あい・・みゆき」と言って、天使不敵を出した。
「その笑顔・・小僧はマリアの奴隷ね」と美由紀が楽しそうに笑った。
静寂の中、美由紀とマリアの笑い声だけが響いていた。

圧倒的な何かがあった、マキですら美由紀の姿に驚いていた。
また何かを乗り越えたと感じた、自分では想像も出来ない高い壁を。

その少し前、私はユリカと病院に着いた。
ユリカは緊張してなかった、深海の優しい瞳で微笑んでいた。
私は４階で記名して、ミホの病室に行った。
沙紀はと母親がいて、ユリカを紹介した。
ユリカと母親が笑顔で挨拶して、ユリカを沙紀の横に座らせた。
ユリカは自然に沙紀を手を握り、爽やか笑顔で話していた。
私は沙紀の瞳を見て、笑顔でミホの所に行った。

『ミホ～・・おっ！今日は可愛いパンダパジャマだね、仕方ないな～今度熊さんパジャマ買ってやろう』と笑顔で言って、ミホの前に座った。
その時無表情のまま外を見て、ミホが私に右手を出した。
私は嬉しかった、本当に嬉しくて泣きそうだった。
『ミホ、今日は素敵な人を紹介するから、楽しみにしてね・・今日ね学校・・・』と今日の出来事を話していた、ユリカが笑顔で来たので。
ミホにユリカを紹介して、ユリカがミホの前に座り爽やか笑顔で手を握り話だした。

私は沙紀の横に座り手を握った、私は驚いていた。
沙紀の温度の揺れが興奮していて、私は笑顔で沙紀の瞳を見た。
『沙紀・・嬉しかったんだね、俺も嬉しいよ』と笑顔で言った。
《素敵な人にお絵かき道具をもらった・・嬉しい》と沙紀の温度が伝えてきた。
『良かったね・・沙紀これからも素敵な人達に会わせてあげるね』
と微笑んだ。
《うん・・いっぱい会いたい、そして描くよ》と沙紀が元気に返し

てきた。
『うん・・今度沙紀に描いてもらいたい人を、連れてくるね』と笑顔で言った。
《うん、今日は朝から描いちゃった、どうしても描きたくて》と伝えてスケッチブックを出した。

私は期待しながら笑顔で表紙をめくった、そして又感動して見入っていた。
その絵は全体的に赤の色彩で表し、その濃淡で温もりを表現して。
真赤な花びらが舞い散る真ん中に、ユリさんが微笑んでいた。
その微笑みの見事な描写に驚き、髪の毛の生え際から皺の入り方まで描かれ。
微かな風に揺らされる髪の動きまで表現し、本当に温もりを感じる絵だった。
沙紀は昨夜一瞬しかユリさんを見ていない、なのに描いて見せた。
その北斗に会える喜びに震える、薔薇の微笑を。

『沙紀・・素敵だよ、写真よりその人を表現できているね』と笑顔で言った。
《良いかな・・プレゼントしても大丈夫かな～》と沙紀が伝えてきた。
『良いの・・喜ぶよ～・・絶対に喜ぶよ、ありがとう沙紀』と笑顔で強く伝えた。
《うん・・分かるよ、ユリカちゃんも嬉しかったって言ったよ》と返してきた。
『沙紀は良いの・・自分の絵を持ってなくて？』と聞いてみた。
《良いよ～・・見るために描くんじゃないもん、嬉しいが知りたくて書くんだよ》と返してきた。
『そっか～・・嬉しいが知りたくて描くんだね、素敵だね・・沙紀』と優しく微笑んだ、私は内心感動に包まれていた。

《じゃあ降ろして、２つ目見せてあげる・・小僧ちゃんの嬉しいが欲しいから》と沙紀が伝えてきた。
私は笑顔で沙紀を抱き上げて、少し抱いたままで鼓動のチェックをした。
そして優しく降ろして、可愛いスリッパを履かせた。
沙紀は自分の棚の引き出しから、薬を出して・・自分で水をコップに注ぎ。
自分で薬の袋を慎重に開けて、私の前で飲んで見せた。

「お母さん・・少しお話が」とユリカが震える母親を窓際に誘った。
『沙紀・・上手だね～、お薬の時間も分かるんだね・・沙紀は凄いな～』と笑顔で言って。
沙紀の口元に残る薬の粉を拭いて抱き上げた、沙紀の温度が少し自慢していた。
《小僧ちゃんの嬉しい・・今日も見つけた、ママの嬉しいも》と沙紀が返してきた。
『うん、俺は嬉しいよ・・沙紀に会えるだけでも、嬉しいんだよ』と微笑んで、ベッドに優しく寝かせた。
ユリカと母親が笑顔で帰ってきて、母親が大きな紙で出来たケースを差し出した。

「これから必要になるでしょう・・使ってね、今日からこれで」と笑顔で言った。
『ありがとう、この絵は感動しますよ』と言って受け取り、ユリさんの絵を慎重に外しケースに入れた。
『沙紀・・また来るね・・ありがとう』と笑顔で伝えた。
《うん・・待ってるね》と返してきた。
私はユリカと交代して、ミホに明日来ると伝えて、ユリカと母親に挨拶して部屋を出た。

「絵を見せて」とユリカが爽やかに微笑んだ。
『後で・・由美子に会う前に泣かれると困るから』と笑顔で返した、ユリカも笑顔で頷いた。
由美子の病室の前でユリカを見た、爽やか笑顔で頷いた。
小さくノックをして、扉を開けて部屋に入った、さすがユリカと思っていた。
奥の大きなソファーで、北斗と祖母らしき人がこっちを見ていた。
私はユリカと頭を下げて、笑顔で近づいた。

「ユリカ・・ありがとう、嬉しいよ」と北斗が微笑んだ。
「会いたかったんです、由美子ちゃんに」とユリカも微笑みで返した。
「あなたが、小僧君？」と祖母らしき人が立ち上がった。
『はい・・美千代さんのお姉さんですね』と笑顔で返した。
「まぁ・・噂以上に良い子じゃない」と嬉しそうに笑顔で言った。
『良く言われます』と笑顔で返した。
全員で笑いながら、北斗がユリカを紹介した。

その時に静寂に包まれる、北斗が固まっていた。
3人で北斗の視線の先をを見ると、由美子の左手が上がっていた。
『泣かないで』と静かに3人に真剣に言った。
『ごめ～ん・・由美子～・・起きてたの～』と隣に座り少し上げてる左手を握った。
《起きてる・・小僧じゅないの、空気の波の人に握って欲しい》と多分二ヤで伝えてきた。
『今、由美子二ヤってしたろ・・空気の波の人が良いんだね』とユリカを見て二ヤをした。
ユリカは嬉しそうに笑顔で歩み寄り、私はユリカを座らせた。
ユリカは由美子の手を握り、優しく語りかけていた。

私はソファーの方に歩いた、北斗がユリカと由美子を潤む瞳で見ていた。
『お姉さまは？』と二ヤで北斗に行った。
「泣きに行ったよ・・嬉しかったよ、ありがとうエース」と北斗が微笑んだ。
『何もしてないよ、由美子の意志だよ・・由美子はヒトミより体が強いよ、ヒトミは何かを削るような感じがしてた』と隣に座り囁いた。
「私は本当に自分を褒めれるよ、宮崎を関口先生を選んだ事を・・あんたに会えたから」と北斗が囁いた。
その時祖母がジュースを持って、笑顔で入ってきた。

「はい、どうぞ・・感動しました、ありがとう」と祖母がジュースを差し出し、笑顔で言った。
『ありがとう・・あの位で感動してたら、最後は心臓にきますよ』と笑顔で受け取った。
「それでも良いよ・・由美子の可能性が見れるのなら」と笑顔で言って隣に座った。
「私は信じています、可愛い由美子は・・今までを越えてくれると」と由美子を見ながら囁いた。
「よし・・私も見せるよ、ユリさんやユリカが輝きで見せた・・母の輝きも見せるよ」と北斗が囁いた。

「小僧だって・・ご指名だと思うよ」とユリカが爽やか笑顔で言った。
『凄いな～・・さすがユリカ・・透明の女神』と囁いてユリカと代わった。
『やっと小僧ちゃんが恋しくなったね・・由美子』と笑顔で伝えた。
《そうでもないよ・・でも素敵な人だね、初めて感じた》と由美子

が言った。
『由美子・・ママの本当の素敵な姿を見せてやるよ、だからママが少し疲れても心配ないよ』と優しく伝えた。
《うん・・寂しい時は小僧ちゃんを呼ぶよ・・空気の波を借りて》と返してきた。

私は驚いていた、由美子のこの言葉で感じた。
『由美子・・誰かとお話してるの？・・誰か由美子の側にいるの』と優しく聞いてみた。
《ばれちゃった・・小僧ちゃんの空気の波で友達が出来たよ、ヒトミちゃん》と伝えてきた。
『そうなんだね・・ヒトミと友達になったんだ・・隠してるなんて、意地悪由美子』と笑顔で言った。
私はソファーの3人を見た、必死に涙を我慢する3人を。
『じゃあ・・夜、寂しかったり、怖かったり、辛かったら・・すぐに呼んでね、空気の波で・・もうお休み由美子』と優しく囁いた。
《お休み、小僧ちゃん》と由美子が笑った。

私は由美子の小さな手のひらにキスをして、3人の場所に歩いた。
『ユリカが限界みたいだから、帰ります』と北斗と祖母に頭を下げて、ユリカの手を握り部屋を出た。
階段で手を繋いで下りていると、ユリカが止まった。
「もう良い？・・少し泣かせて」と私の首に腕を回した。
私はユリカを抱き上げて、慎重に階段を下りた。
裏を回って裏口から、光射す場所に出た。

「嬉しかった～・・由美子の気持ち、少し分かったよ・・沙紀も・・ユリアの喜びも」とユリカが瞳を開けて微笑んだ。
『うん・・さすがユリカだと思ったよ』と言って降ろした。
「これ見て良い」とユリカに持たせていた、ケースを見た。

『どうぞ・・一瞬だけ見て描いた、宝物』と微笑んで返した。
ユリカは絵を見て、感動しているようだった、そして大切にケースに戻した。
「沙紀はシオンをどう描くのだろう・・目の前に座るシオンを」と爽やかに微笑み、腕を組んできた。
私はご機嫌ユリカと、ＰＧを目指して歩いていた。

そのころＴＶルームでは、おやつを食べながら笑顔で話が盛り上がっていた。
「でも本当に素晴らしい車椅子ですね、静止の状態で安心感がありますね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「私も初めて見た、こんな素敵な車椅子」とカスミが微笑んだ。
「気づいていませんね～・・嫉妬したって言いません」とシオンがニコちゃんでカスミを見た。
「シオン・・嫉妬を述べよ」とカスミが不敵で返した。
「書いてあるのに～、ＹＵＴＡＫＡ？って」とニコちゃんで返した。

「まさか！・・ハンドメイドなのか、私の豊の」とカスミが驚いていった。
「私の？・・私の？・・って聞こえました」とハルカが二ヤで言った。
「私の心の・・豊」とカスミがウルで返した。

「ハンドメイドじゃないんです・・これは2号機なんですけど。
1号機は時間的制限があって、それに豊君も経験が無かったから。
取りあえず市販の物を、改良してくれました。
それでも格段に軽くて安定感がありました、これは夏休みのプレゼントです。
フレームから製作してくれて・・仕事が終わった後に、疲れてるのに。

私の父がこれを見て、感動していました・・見えない所にも手を抜いてないと。
裏側の溶接も綺麗に仕上げてあるって、私は嬉しくて・・嬉しくて。
そしてこの2号機には、シズカ先輩の考えも反映されています。
ワンタッチの逆走防止機能、凄い事なんです・・私には。
そして材料も場所も提供してくれた、整備工場の社長さん。
新しい素材をサンプルとして提供してくれた、メーカーの人々。
沢山の人達の力で作られた・・このＹＵＴＡＫＡ？。
これはハンドメイドじゃなくて・・ラブメイドだと思っています」

美由紀は輝く少女の笑顔で言った、その言葉が響いていた。
「ラブメイドだよ、美由紀・・かなり嫉妬した」とカスミが泣きながら言った。
「ラブメイド・・素敵な言葉ですね」とユリさんが目を潤ませて言った。
「皆さん・・最近涙もろくなってますね、小僧の作戦に乗ってますね」と美由紀が笑顔で言った。
「やっぱり・・作戦なんだね」とハルカが微笑んだ。
「そうですよ～・・あの小僧は」とまで言ったとき私がユリカと入った。

私はニヤで美由紀の口を後ろから塞いだ。
「にょ・・小僧、生意気に・・離しなさい」と美由紀が体をくねらせた。
『美由紀～・・その辺にして、お願いしましゅ～』と手を離してウルで言った。
「その素敵な人を紹介してくれたら・・考える」と二ヤで返された。
『美由紀・・ユリカさん、素敵でしょ～』と笑顔で紹介した。
「よろしくね、美由紀ちゃん会いたかった～」とユリカが爽やか笑

顔で美由紀の横に座った。
「ユリカさん・・透けそう、どうしたらそこまで行けるんですか？」と美由紀が微笑んだ。
「あなたと同じ・・毎日の抱っこです、美由紀少し短いよ・・たっぷり抱っこしてもらいなさい」とユリカが微笑んで返した。

「小僧のいやらしさが完全に消えたのは、ユリカさんの影響ですね・・ありがとうです」と美由紀が笑顔で言った。
「やっぱり・・前はいやらしかったんだね」とユリカが二ヤで返した。
「はい・・私が豊満な胸になった頃が、いやらしかった」と美由紀がウルウルで言った。
「悪い奴だな・・美由紀を泣かせて」とカスミが不敵で言った。
『仕方ない・・思秋期だったから・・美由紀が好きなんだし』と笑顔で答えた。
「永遠の片思い・・エースが美由紀に付けた称号です」とマキが微笑んだ。
「素敵～・・良いな～」とハルカが微笑んだ。
「どうなんでしょう・・私と小僧は、違うんですよね～・・表現できないけど、私も小僧が大好きですよ」と美由紀が笑顔で言った。
「美由紀・・表現しなくていいよ・・皆、良く分かるから」とユリカが爽やかに微笑んだ。

『美由紀・・トイレ大丈夫か？・・この辺じゃ〇〇デパートだから、早めに言えよ』と真顔で言った。
「大丈夫・・小僧見て、少し緩んだけど・・まだいいよ」と美由紀が笑顔で言った。
「緩むんですね・・そしてトイレも全てチェックしてる、素敵な関係です」とシオンがニコちゃんで言った、美由紀も笑顔で返した。

『ユリさん・・今から泣けますか？』と笑顔で聞いた。
「怖いですね・・相当の作戦ですね～、良いですよ」と薔薇で微笑んだ。
『たいした事無いです、沙紀のプレゼント、輝きを見せてくれて、ありがとうと言っていました』と笑顔で言って、ケースを渡した。
「見せてくれてって・・ほんの一瞬ですよ」と驚きながら、ケースを受け取った。
全員の視線が、ケースに集まった。
ユリさんがゆっくりと絵を出して、テーブルに置いた。
静寂が包んで、視線が動かなかった。

「本当に嬉しい・・一生大切にします、私が自分でお礼に行きますね」とユリさんが泣きながら言った。
「凄いね・・沙紀ちゃん、どんな個性？」と美由紀が私に聞いた。
『9歳の自閉症の少女』と笑顔で返した。
「そっか～・・だから内面から描いて、外面まで描ききるんだ・・温もりも見えるから、描けるのか～」と美由紀が呟いた。
「美由紀・・素敵だよ、一瞬でそこまで見える・・美由紀も」とカスミが微笑んだ、美由紀も嬉しそうに笑顔で返していた。

空間を暖かい何かが包んでいた、沙紀の愛情表現が見せた。
揺ぎ無い薔薇の心、その高みにある精神性まで描いていた。

沙紀の表現力は強さを増す、青い炎に触れて、真白な心に触れて。
だが決定打はやはりマリアだった、マリアが美由紀に触れて感じたのだろう。

そのマリアの表現し難い力、その後のマリアは、それを包み隠し言葉で伝え始める。

そして沙紀が描いたマリアの絵、その絵は女性の控え室に飾られる。
その描かれたマリアの天使の微笑が、女性達を見守り続ける。
何人かタバコを吸う女性もいたが、それからは絶対に控え室で吸わなかった。
それほど大切にしていた、マリアの本質を表現した沙紀の作品。
それは真黒に塗られた背景に、マリアの輪郭と表情だけ白く浮き出させていた。
その完璧な描写の天使の微笑が、暗黒など恐れる事は無いと笑っている。
マリアの周りだけ、白く発光している・・マリアが微笑む先にあるであろう。
その先の現実の世界を強く感じた、そしてその現実に向かって微笑むマリア。
沙紀は描いて見せた・・マリアの将来像を。
【嬉しい】の為に描き続ける画家として、その嬉しいを未来に伝える者として。
そして描く日が近づいている、沙紀の唯一の親友になる・・由美子を。

沙紀の描く由美子・・それは全てを超越していた。
そのキャンバスには・・愛しか存在できなかった。
愛を描く者・・沙紀・・忘れえぬ温もり・・。

Perfect　Balance

赤い花びらが舞い散る、暖かい場所に凛とした笑顔がある。
その視線は優しさを湛え、揺れる事なく前を見ている。。
その視線は、愛する者を捉えていると感じる。
薔薇の微笑みの背景に、赤い花びらを散らせて。

「素敵～・・喜びの中のユリ姉さん、完璧なユリ姉さんだ」と蘭が入ってきて、満開で微笑んだ。
「ワシは絶対に描いてもらわんぞ・・この精密さで皺を描かれたら、絶望しそうじゃ」とマダムが言って、全員が笑った。
美由紀を蘭とユリカで挟んで座って、談笑していた。
私は美由紀からマリアを受け取って、寝かしつけていた。

「しつじ・・めしつかい・・どれい～」とマリアが天使不敵で言った。
『美由紀～・・マリアにいけない言葉教えたね～』と美由紀に微笑んだ。
「覚えたのよ・・マリアには重要な事だから・・マリアにとってエースは？」と二ヤで言った。
「どれい～・・まりあのえーしゅ・・どれい」と不敵継続のマリアを見て、ウルウルしていた。
『マリア・・豊兄さんは？』とウルで聞いた。
「ゆたか・・しゅき・・きょうこだめ～、かすみだめ～、まきだめ～、みゆきだめ～」と天使にに戻って微笑んだ、カスミがウルで見ていた。
カスミとマキと美由紀がウルでマリアを見た。
『美由紀・・どうしてくれる、マリアが長文を話しだしたじゃない

か』と美由紀に言った。
「出し惜しみするからよ・・自分一人で楽しもうと思って」と美由紀が二ヤで言った。

「やっぱりそうでしたね～・・美由紀は誤魔化せないですね」とユリさんが薔薇二ヤで言った。
『マリア・・助けて』とマリアにウルで言った。
「ウルだめ～・・だっこねんね」と言ってマリアが瞳を閉じた。
「さぁ困ったね、最後の砦が眠って」と蘭が満開で微笑んだ。
「病院に行くしかないね・・由美子も味方じゃないみたいだけど」とユリカが微笑んだ。
「どうでした？・・ユリカ姉さん」と蘭が真顔で聞いた。
「マキの言うとおりだったよ・・蘭、由美子に触れてごらん、大切な事を感じるよ」と爽やか笑顔で返した。

「由美子ちゃんは、どんな個性？」と美由紀が私に聞いた。
「美由紀・・ヒトミと同じらしいよ」とマキが真顔で答えた。
「そうなんだ！・・ごめんね小僧、それで上がってるのに・・分からなかった」と美由紀が真顔で言った。
『美由紀・・大丈夫だよ、由美子は体が強いよ』と笑顔で返した。
「良かった～・・あの消耗していくヒトミは、私も辛かった・・それでも伝えようとするから」と美由紀が真顔で言った。
『ありがとう、美由紀・・俺は乗り越えられそうだよ、ヒトミの事を』と優しく言った、美由紀も笑顔で返してきた。
「まだあるんだね・・ヒトミの真実が」と蘭がマキを見て真顔で言った。

「あります・・それはエースか美由紀じゃないと語れません。
私達のは、どこか客観的な話だから、もちろん触れ合って感じたけど。

レベルが違うから、エースはもちろんだけど、美由紀も違います。
その経験に裏打ちされた、悲しみに対する敏感度が、私達と違いすぎる。
だから私達では語れません、そのヒトミの命を削る行為は」

マキが真剣に言った、全員が静かに聞いていた。
「無理なんだろうか・・美由紀、小僧じゃ絶対に話してくれないから」と蘭が真顔で言った。
「小僧・・挑むんだね、由美子に・・全てを賭けて」と美由紀が強く言った。
『覚悟を決めたよ・・由美子に本気じゃないと、ミホなど到底無理だと思ってる』と真顔で返した。

「ふ～・・いずれお話します、ただこれは・・マキ先輩も言ったけど。
私にとっても感覚的な話です、確証がある話じゃないんです。
小僧には聞けないから、その答えを小僧に求める事など出来ない。
そんな悲しい問いかけを、許されるのは・・この世界で由美子だけでしょう。
小僧の今言った覚悟・・それは旅立つ時が来る・・その覚悟です。
もう少し由美子と小僧が触れ合って、小僧が由美子の信頼を勝ち得たら。
その時に、お話します・・その時は、由美子の保護者の方も交えて。
私は本心を言えば、誰かに聞いて欲しかった、皆さんになら聞いて欲しいから」

美由紀は静かに、しかし強く言葉にした。

「美由紀ちゃんありがとう、由美子の母親はこの店の最初のＮｏ１

です。
昨夜、エースに母親の輝く姿を、由美子に見せないといけないと強く言われて。
今夜から復活します、充実の中にしかない輝きを取り戻すために」
ユリさんが美由紀を見て、最後は薔薇で微笑んだ。

「そうですか・・大切な事なんですよね。
両親が自分の犠牲で生きていると感じたら・・辛いんです。
私なんか・・たかが両足が無いだけですけど、分かります。
ヒトミのような病気は、常に死と隣り合わせで生きるから。
感性が鋭すぎます・・全てのエネルギーを生きる事に使うから。
自分が病気なのは、誰の責任でも無いと思っているでしょう。
運命なんて言って、簡単には片付けられないけど。
背負うのは自分だけで良いと思っています、その方が自分も楽だから。
だからこそ・・生きる意味を感じたいのでしょう、自分は動くことも出来ないから。
母親が充実して生きる姿・・それだけが、由美子の望みでしょうね。
由美子は植物人間じゃない、感受性も意志もある人間ですから。
ただ・・動けない、見れない、話せないという・・個性なだけ。
自分が何の固定観念も持たずに会えば、必ず感じます。
そして問われる・・なぜ生きるのかと、純粋に問われる。
私はその答えを探す事で・・現実を受け入れられました。
私はたかだか・・足が無いだけの個性だと」
美由紀は少女の輝きを発散して、笑顔で言った、重い言葉を軽々と。
「重いですね・・やはり美由紀が言うと、響いてきますよ・・奥まで」と薔薇の微笑みで返した。

「早く会いたい・・由美子に、私は何の固定観念も無く会えると思えるよ・・美由紀のおかげで」と蘭が満開で微笑んだ。
「ここにいる皆さんは、大丈夫ですよ・・受け入れる力がありますから」と美由紀が笑顔で返した。
「最高に嬉しいです・・美由紀の言葉は」とシオンがニコちゃんで言った。
「ねぇ美由紀・・美由紀も瞑想したりするのか？」とカスミが言った。

「もちろんしますよ・・私、和尚が大好きだから、よく寺に行きます」と微笑んで返した。
「やらないと駄目ですね・・若手の中では、シオン姉さんとマキ以外は」とハルカは真顔で言った。
「私が一番必要だよ・・エースはそう言いたいんだと、思ってるよ」とカスミが私を見た。
「良いんじゃないの・・そろそろ、カスミの飛び級のヒントを出しても」とユリカが微笑んだ。
「実家に一度帰る約束もしたんだし、出してあげなよ」と蘭が満開で微笑み、カスミが真顔で頷いた。

『俺がこの前言った・・強さとは、柔軟性って言う話。
それを俺に教えてくれたのは、美由紀とこの車椅子・・ＹＵＴＡＫＡ？なんだ。
美由紀が同じ歳であるヒトミと触れ合い、その後に見せてくれた。
両足の無い事を克服して・・今ではその個性を笑いに変える。
美由紀は多分・・ヒトミに勇気を貰った、だから自分のテーマもそれなんだ。
美由紀が言った、たかだか両足が無いだけ・・今は心から言っている。
どうしたら自分が人に、勇気を与える事が出来るのか・・それな

んだろう。
そこに辿り着くまでの、汗も涙も・・俺だけは見てきた、見せてくれた。
だから俺と美由紀の関係は、お互いにもうそんな段階じゃないと思ってる。
俺は心から贈ったんだよ、【永遠の片思い】って言葉を。
それは憧れてるから・・美由紀の心に憧れてるから。
健常者では辿り着けない世界に、憧れ続けると思ってるから。
その心の柔軟性は・・どんな衝撃を受けても、笑顔で逃がすんだ。
波に逆らわない、だけど絶対に流されない・・その柔軟な心は。
豊兄さんとシズカが考えた、この2号機・・そのテーマこそが柔軟性。
その時にシズカが言った、硬く強すぎるからいけないと。
強度が上がることが、安全性が上がる事ではないと。
組み合わせの中で、探していくんだと・・その硬さをしなやかさに変える地点を。
シズカは多分、健常者では誰よりも車椅子を理解している、ずっと乗ってたから。
病院で使用しなくなった、古い車椅子を譲り受け、乗り回していた。
それは俺や豊兄さんでは分からない世界、腕力の無い女子として。
そして今、導き出してる・・その最大のテーマが硬すぎる事なんだ。
だから動くだけで疲れてしまう、起動にも静止にも無駄に力がいる。
その原因を・・強く硬く作れば良いと思ってる事だとね。
安全性とは使用者が信頼できる上にあると、無機質を信頼できるには熱が必要だと。
それは難しい事なんだと、それを与えるには・・作り手の熱が必要なんだと。

妥協はある・・現時点でという妥協は、しかし理想を追わない限りその上は無い。
商売としてうま味が無いから、車椅子は進化が遅い。
優秀な頭脳は、高い報酬の場所にしか目を向けない。
無いからと言って諦めない・・豊兄さんは、絶対にそれは言わない。
無いならば作れば良いだろ、絶対にそう言うんだ・・そして挑戦するんだ。
シズカは豊兄さんの妹であり助手であり、そして大切な提案者なんだよ。
今年の春から2人で取り組んだ、この2号機・・現時点での2人に出来る最新型。
でも美由紀に贈った今は、もう2人の心は3号機に入っている。
この前、蘭とマチルダと行った時に、整備工場にフレームの試作が置いてあった。
理想を追い求めるのが楽しいから、美由紀の為だけじゃない・・存在しないから。
そして今の自分たちで作る事が出来る素材だから、楽しんでやっている。
そうでないと熱は乗移らない、信頼性のある物は出来ない。
自分が自分を信じない限り、信頼性は産まれない。
シズカにそう教えてもらった・・妥協点は常に存在すると。
その時点では受け入れないといけない、でも絶対に次の理想を追う準備をする。
美由紀が言う・・この車椅子はラブメイドだと。
その言葉こそが、信頼の証だと・・豊兄さんもシズカも思ってる。
俺は近い内に、会わせようと思ってた・・カスミに。
美由紀とこのＹＵＴＡＫＡ?を感じて欲しいと、理想とはそうやって追うものだと。
それを感じて欲しかった、飽くなき理想を追い求める・・カスミ

に。
２度と心が折れて欲しくないから、その姿だけは見たくないから。
俺が考える理想を・・カスミが持っているから。
俺の出来る限りの強度・・柔軟性は上げてみたい。
俺が【永遠】を使って表現した、大切な２人目の存在。
完成しない事が・・その本質である・・カスミと言う存在だから』

私は真剣に想いを伝えた、カスミの輝く笑顔を見ながら。
「了解・・私はエースの、ラブメイドなんだね」とカスミが美しく微笑んだ。
「やっぱり・・ひいきしてる、カスミ姉さんは特別・・永遠の憧れだね」とレンが微笑んだ。
「私は、また間違いに気付きました・・シズカは別の世界に、絶対に必要な存在ですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

「永遠の憧れか～・・なるほどね、贅沢な男だ～」と美由紀が微笑んだ。
「現時点での妥協点か～・・豊もシズカも凄いね～」とユリカが爽やかに微笑み。
「自分を本当に理解してないと、出来ませんよね・・それはどこか辛いことだし」と蘭が満開で微笑んだ。
「辛いことですよね・・だから大切な事なんですね」とハルカが真顔で言った。
小さな空間に、暖かい流れがあった・・美由紀の微笑を真ん中に置いて。

その時にドアが開き、シズカが制服で入ってきた。
「こんにちわ～・・お！美由紀・・お久～」と全員に挨拶して、美由紀に微笑んだ、美由紀も嬉しそうな笑顔で返した。
「噂をすると、なんとやら・・鋭いね～シズカ」とユリカが二ヤで

言った。
「悪い噂をしてましたね～・・変わり者とか、色気が無いとか」と私に二ヤで言った。
『してないよ～・・何の用で来たのかな？』と私は笑顔で返した。
「あっ・・これ・・蘭姉さんに渡しとくね、あんたの成績表・・今後の参考に」とシズカがニヤニヤで渡した。
「ありがとう、シズカ・・後でユリカ姉さんとチェックするよ」と満開二ヤで受け取った。
「それは楽しみだ～・・今度なにか悪さしたら、ここに張り出そうね」とユリカが爽やか二ヤで言って、全員の二ヤで見られていた。。
「でも、意外と驚きますよ・・それ以上に上げたいなら、エミ位の意識が必要ですよ」とシズカが言って、車椅子に座って動かした。
「それはかなり良いという、事なのかしら？」とユリさんが微笑んだ。

「もちろんユリさんや、エミちゃんレベルじゃないですけど。
小僧はその能力を持ってますから、人の話を聞く能力を。
だから授業を受けていれば、ある程度はそれだけで良いんですよ。
小僧は意外に思いますが、授業中は真面目なんです。
元来人の話を聞くのが好きだから、お喋りはその倍ぐらい好きだけど。
だから、成績は悪くないですよ・・ただ自分の好きな事以外は、学ばないだけです」
シズカが笑顔でユリさんに答えた、薔薇の微笑で頷いた。
「そうか～・・こんな風になるのか～・・美由紀は全てに対し、優しいね」と車椅子に乗ったシズカが微笑んだ。
「シズカ先輩・・」とまで美由紀が言った時に。

「美由紀・・礼など言うなよ、それは今の私を愚弄する行為だよ・・私の約束を忘れてないのなら」とシズカが笑顔で言った。
「もちろん、覚えてます・・私をいつか、両足で走らせてくれると言った言葉は」と美由紀は嬉しそうに微笑んだ。
「それが、美由紀ちゃんに対する・・シズカちゃんの目標なの？」とユリさんが驚いて言った。
全員が驚いてシズカを見た、シズカは笑顔で返した。

「目標というか・・美由紀は実験台です、きわめて短足だから。
そして前向きだから・・私の考えの間違えを指摘してくれる。
大切なモルモットです、私は美由紀に出会って・・自分のしたい事がわかりました。
出会った頃は、美由紀の笑顔が・・嘘ついていたから。
心の壁が、言い訳ばかりしてたから・・だからマシーンを作ってやった。
豊君と私の考える、飛行装置を・・壁も山も谷も越える物を。
美由紀は私達の予想の記録を、完全に塗り替えた・・だから私は約束しました。
美由紀に両足の義足をいつか作ると、そして私に夢を見せてくれたお返しに。
美由紀の夢である、走るという事を考えると・・いつの日か作り上げたい。
立ち上がり走る美由紀が見たい、その姿が地雷などという卑劣な武器で傷ついた。
善良な子供達の希望に繋がると思ってますから、それまではモルモットです。
飼育係は小僧が担当で、永遠に前向きでいさせるでしょうから。
私はたかだか足が無い事で、走れないとは思っていません。
世界記録レベルで走らせてやりたい、私の可愛いモルモット・・美由紀だから」

シズカが美由紀を見ながら、ニヤニヤで言った、シズカの言葉で。
「シズカ先輩・・短足とモルちゃんで、意地悪2点足しときます」と美由紀が笑顔ウルで言った。
「事実でウルするな・・小僧に洗脳されてるよ、美由紀」とシズカが笑った、美由紀も笑っていた。
「凄すぎるよ、シズカも美由紀も・・それで笑いあえる、信頼関係が」とカスミが微笑んだ。
「ならカスミ姉さん、測らせて下さいね・・その綺麗な足を、義足の設計図を作る時に」とシズカが笑顔で返した。
「もちろん良いよ・・良かったな～美由紀、最高のサンプルが側にいて」と不敵で威張った。
「はい・・出来れば胸も測って、義胸が欲しい」と美由紀が笑顔で返した。

「それは私も欲しいから、モルで実験して・・完成型を自分に使おう」とシズカが微笑んだ。
「シズカ・・私のも測って良いわよ」と蘭が満開で微笑んだ。
「ありがとう、蘭姉さん・・マニア向けに測っときます」とシズカが二ヤで返した。
「シズカ・・姉に対して・・意地悪3点」と満開ウルで返した。
「危ない宗教団体のように、小僧に影響受けている・・危険だ」とシズカが笑って、全員が笑った。

「ねぇシズカ・・車椅子に乗って感じる優しさって、どんな感じなの？」と蘭が満開で聞いた。

「またまた・・ケンメリのフルチューンに乗ってる人が。
ようするに物って、出来上がりは、使用者が使ってからなんですよ。

車でも有るんでしょ？使用者の乗り方で癖みたいなのが。
そんな感じがあるんですよ、作り手には分かります。
どんな風に乗ってるかは・・雑に扱えば、雑な感じになる。
不満があって乗れば、それを感じるんです。
だから大切に優しく乗ってれば、優しさを感じます。
それが作り手の喜びです・・それが楽しみなんですよ」

シズカが蘭を見ながら笑顔で言った、蘭も満開で頷いた。
「それは良く分かるよ・・車は特に癖が強く出るよね、同じ車でも全然違うよ」と蘭が満開で微笑んだ。
「ありますね～、クラッチでもブレーキでも・・車体の全体的な感じでも」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「じゃあシズカ・・どうしてユリさんが成績優秀だったと、確信的に思ったの？」とカスミが微笑んだ。

「それは・・例えばカスミ姉さんが、ユリさんを全く知らないとしても。
出会えば直感的に分かるでしょう、夜の世界で遥か上に存在する人だと。
それはその世界で真剣に、上を目指しているからだと思うんです。
そうでないと感じない、中途半端の世界の事は感じないと思っています。
私は今は学びたいから、その学ぶ世界で真剣だから。
その部分で圧倒的な人は分かります、ユリさんは圧倒的です。
そしてエミは衝撃的でした・・それだけは感じました」

シズカはカスミを見て、笑顔で言った、カスミも笑顔で返した。
「なるほど～・・分かりやすい・・律子さんの娘、シズカか～」とカスミが微笑んだ。

「そうですよね～・・律子母さんのイメージをシズカ先輩が。
勝也父さんのイメージを、マキ先輩が持っています。
小僧は小児病棟と施設の子供って、イメージですから。
私達後輩は、限界トリオの誰かに憧れたんですよ。
全員が各々違う・・自己完結をしますから」

美由紀が笑顔で言った、全員が笑顔で美由紀を見ていた。
「私はやっぱり勝也父さんなんだ・・少し複雑な心境」とマキがウルで言った。
「マキが男ならな～って言うのが、父の口癖です」とシズカが二ヤで言った。
「できの良い息子が欲しかったんだね・・勝也父さん」とユリカが私に二ヤで言った。
「口ごたえばっかりする、常識外の息子しかいないから・・かわいそうな父さん」と蘭が満開ウルで言った。
「でも父には最高の・・豊君がいますから～、物作りの継承者が」とシズカも二ヤで言った。
「贅沢と言えば、贅沢な事だな～」とカスミが不敵で言った。

「皆は感じねばならんぞ、今がどんなに良い時期なのかを。
エースのおかげで揃ったんだから、今、美由紀に会って確信したよ。
マキがＰＧに挑戦してくれた事も、シズカが来てくれる事も。
豊と恭子が来てくれる事も、そして何より。
勝也と律子が来てくれる事を、そして美由紀・・遠慮なしに顔を見せておくれ。
お前が伝える事は、素晴らしい事じゃね・・ワシはそう思ってる。
女性達にも、子供達にも・・だから顔を見せてくれよ。
ワシらはいつでも歓迎するから、美由紀にも刺激になると思ってるからの」

マダムが笑顔で美由紀に言った、全員が笑顔で頷いた。
「ありがとうございます・・私、遠慮はしない女ですから。
ご好意に甘えるのが得意技です、私も見たいですね。
皆さんの全力の姿を、そしてお会いしたい・・由美子ちゃんのお母さんに」
美由紀も笑顔で言った、マダムの嬉しそうな顔があった。
「美由紀・・タイヤの右側が磨り減る原因は？」とシズカが真顔で聞いた。
「身体バランスの問題だと思っています、やはり利き腕が強いからじゃないかと」と美由紀が笑顔で答えた。
「短足は何センチ差だったっけ？」とシズカが二ヤで聞いた。
「正確には・・右が９ｍｍ長いです、１年前のデーターですけど」と美由紀が笑顔で答えた。
「大きいよな～・・９ｍｍ差は」とシズカが車椅子で回転しながら言った。
「９ｍｍが・・大きい差なんだね」とハルカが少し驚いて言った。
「大きいですよ・・特に非力な女子には、女は男に比べて身体的バランスが悪いから」とシズカが笑顔で返した。
「それは悪いよな～・・生きる上でも、難問だよ」とカスミが微笑んだ。
「そうですね～・・矯正は出来ませんから、理解して対応するしかないですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
シオンとレンとハルカが、聞きたそうな顔をしていた。
「３人でそんな顔をして～・・シズカ、詳しく説明せよ」とカスミ

が笑顔で言った。

「女子は胸が有りますから、胸はご存知の通り左右対称じゃありません。

諸説あるみたいですが、血流が違うからとか・・心臓を守ってるなんてのまで。

まぁ重さの違いは、何gの世界かもしれませんが、その何gでバランスが崩れるんです。

だから一流の短距離選手には、豊満な胸の人は殆んどいません。

幼い頃からそれを目指すと、体が感じて、大きくなるのを拒絶するんでしょうね。

競技を引退して、いきなり大きくなる人もいるみたいです。

人間は自立式2足歩行型ですから、バランスの僅かな違いでも大きいんです。

その体のバランスを取るのは、背骨ですよね・・だから背骨が曲がる人がいます。

背骨は無数の小さな骨が、弾力材のようなクッションで繋がれてます。

だから各部位で受ける力が左右非対称だと、クッションが変わってくるんですよ。

靴の擦れ方だけでも分かりますよ、自分のバランスがどっちに向いてるのかが。

この車椅子・・ＹＵＴＡＫＡ？に対する、豊君のテーマはバランスでした。

だから車輪を繋ぐシャフトを支えるリング、その左右の精度にこだわりました。

多分０．何ミリの世界です、プロが本気で仕上げる時は０．０何ミリでしょうね。

そして溶接も見えない所までこだわっています、最終的にバランスを保つために。

手を抜いても全く問題ない箇所も、美由紀が見ることは絶対にない部分でも。
手を抜かない・・なぜならば・・自分が見てるからなんです。
豊という人間は、それだけはしません・・自分を誤魔化す事だけは。
そして納得いくバランスで、固体が完成してからが、本当の仕上げです。
使用者が乗って分かる、少しのバランスの違い・・それを改良していく。
そこからが仕上げなんです・・物を作るという行為の仕上げ。
美由紀がどんなに問題無いと言っても、擦れていく過程で証拠が残る。
美由紀が動くときに無意識で調整する、その無意識まで消してやりたい。
完全バランスは無理だなんて、口が裂けても言いたくない。
私の物作りの師匠である、勝也も豊もそれを許さないから。
私が自分で見てるのに・・自分を誤魔化す事は出来ません。
だから美由紀の体のバランスまで考慮する、そうしないと行けない。
次のテーマに移行出来ない、次を楽しみたいなら・・前を誤魔化さない。
それが大切だと・・最近気づきました、美由紀のおかげで」
シズカは最後に美由紀に微笑んだ、美由紀も嬉しそうに笑顔で返した。
「か～・・シズカ、ありがとな・・大切なヒントまでくれて」とカスミが微笑んだ。
「小僧が内心怒ってます・・小僧の者作りを進ませたから～」とシズカが二ヤで返した。
「シズカ・・今の小僧のもの作りの、ものの漢字表記は？」とユリ

カが爽やか二ヤで聞いた。
「もちろん・・人を表す・・者です」とシズカが笑顔で言った。
「自分が常に自分を見てる、だから誤魔化さない・・本当に素晴らしい事ですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「ユリさんの、その言葉が最高に嬉しいです・・完全バランスに、一番近い人の言葉だから」とシズカが嬉しそうに笑顔で返した。
「面白いでしょ～、シズカ・・エミに何を教えるのやら」とマキが微笑んだ。
「私の考えてきた、学は・・全部教えるよ、託して余りある存在だから」とシズカが返した。

「エミはユリの果たせなかった、もう1つの夢を叶えるかもしれんな」とマダムが言った。
「なんなんですか？・・マダム」とハルカが聞いた。
「東大合格じゃよ」とマダムが笑顔で言った、全員がユリさんを見た。
「無茶したんですよ・・相当無理しました」とユリさんが薔薇テレで言った。
「私には、わざと落ちたような気がしますね～・・実は行きたくなかったとか、別の夢があって」とシズカが二ヤで言った。
「シズカ・・二ヤはやめなさい、考え過ぎですよ」とユリさんが薔薇で笑った。
『動揺しましたね～・・怖い人だ』と私が二ヤで言った。
「エースが言うと、本当にそうみたいでしょう・・ユリカは黙ってなさいよ」とユリさんが笑顔で返した。
全員が二ヤでユリさんを見ていた、楽しそうに笑う薔薇の笑顔を・・。

シズカの言った、自分が見てるから、誤魔化さない。

豊を的確に表した表現だった、豊かは美由紀の為でもあったが。
存在する物が、あまりにお粗末な物しか無かったので、夢中になったんだろう。
後に豊を車椅子のメーカーの人が訪ねた、その時に豊は自分の技術を無償で渡した。
それにより車椅子が少しでも改良されれば、それで良いだろ。
そう豊は笑顔で言った、その為に時間を費やしたんだと言うように。
蘭がケンメリを豊に託すようになって言った、安心感が上がったと。
改造車として、どっかに負荷がかかる感じが、小さくなったと。
豊が目指すもの・・それは完全バランスである。
人としても・・心と体のバランスにこだわった。
自分に対し正直に生きる事で、作り上げた・・そのバランス。
栄光を拒絶する者・・修羅場に選ばれし者・・豊。

優しい空間

暑い外気温を意識する事も無く、週末を楽しむように女神が集っていた。
笑顔が溢れ、その大切な季節を謳歌していた。

「こんにちわ～」と元気よく、エミとミサが入ってきた。
私は2人に美由紀を紹介した、美由紀は笑顔で挨拶した。
「痛くないの？」とミサが美由紀に近づき、足を見て心配そうに言った。
「ありがとう・・もう全然痛くないよ」と美由紀が微笑んだ。
「良かった～」とミサが笑顔で返して、美由紀の横に座って小さなバックから写真を出した。
「美由紀ちゃんだけに見せてあげる、私の好きな子」と少女の笑顔で言って、美由紀に見せた。

「かっこいいじゃない・・ミサは面食いだね～」と美由紀が笑顔で返した。
「でもお喋りさんで、エースが言葉を信じるなって言ったの」とミサが返した。
「自分がそうだから、良く分かるのよ・・お喋り男の事は」と美由紀が二ヤで言った。
「うん・・お母さんもそう言ってたよ」とミサが返して、全員が笑った。
私はウルウルでミサを見ていた、ミサはそれに気づいて。
「だめ～・・見せない、エースは男には厳しいから・・女には弱いけど」と少女全開笑顔で言われた。
女性達の笑いが止まらずに、美由紀も笑っていた。

「シズカちゃん・・これのヒントをお願いします」とエミがプリントをシズカに差し出した。
「角度を求めてるの・３年生だよ、凄いね～」と笑顔で言って、ユリカの横に座りテーブルにプリントを置いた。
「エミちゃん、３角形の内角の和は？」とシズカが聞いた。
「１８０度」とエミが即答した、シズカは笑顔で頷いた。
「なぜ１８０度なの？」とジスカが笑顔で聞いた。
「なぜって・・なんでだろう？」とエミが図形を見て考えた。

「エミちゃん・・私の考え方で良い？・・それがエミに合わない時は捨ててね」とシズカが言った。
「うん・・シズカちゃんのが聞きたい」とエミが笑顔で返した。

「３角形は半分だと思うの、あの尖った歪な形はね。
だからもう半分をイメージして見るの、これならここに有るんだよ。
こうすると四角形になるでしょ、四角形の内角の和は３６０度だよね。
どうしてなのか・・それは元々円だったからよ。
だから内角はどんなに変な四角形になっても、３６０度なのよ。
私は、全ての形の基本は円だと思ってる、完璧な正円だとね。
図形は惑わされるの、先に目で見てしまうから。
難しそうに見えるのよ・・別に難しい話じゃないの。
内角の和なんて・・結局３６０度からの話なんだから。
テストで図形を見たら、二ヤってして良いのよ。
三角形で角度を求める時も、円と四角形をイメージするの。
お前は半分の片割れだろ～って言って、もう半分を足すのよ。
その物の形に惑わされたら駄目よ、見えない部分が大切なの。
目で見える部分って、嘘もあるし、分かり難くくさせる事が多いから。

三角形の本当の姿は四角形だと思えば、身近にあるから違和感が無いのよ。
案外三角形の物って、身近にないからね・・難しく思えてしまうの。
だからこそ大切でもあるのよ、三角形には意味が有るの。
物事をその姿だけで見るな、そう言う教えが入っているから。
基本を忘れるなってね・・全ての始まりは、柔らかで温かい円だから。
今の目で見える状態だけで、判断してはいけないと言ってるの。
これは算数だけど・・知ろうと思えば、それ以上の意味も隠されてる。
それを感じて欲しいの・・エミには」

シズカが優しくエミに言って、エミはその強い瞳で三角形を見ていた。
「ありがとう、シズカちゃん・・大切なヒントを教えてくれて」とエミがパッと輝いて、笑顔で言った。
「うん・・頑張れエミ・・私はエミと美由紀にだけは言うよ、頑張れって」とシズカが笑顔で返した。
エミがニコちゃんで頷いて、プリントを片付けて、美由紀とミサの所に行った。

「三角形の問題で、あそこまで行きますか〜・・エミは幸せですよ」とユリさんが薔薇で微笑んだ、シズカも笑顔で返した。
「しかし難しい話だよね、物事を目で見た姿だけで判断しないって」と蘭が満開で微笑んだ。
「確かに無駄なイメージってのが、多すぎるよな〜・・シオンを見るとそう思うよ」とカスミが微笑んだ。
「結局、マキのアドバイスに戻ったですね・・イメージを捨てろという」とユリカが微笑んだ。

「イメージを捨てろ？」とシズカがマキを見た。
「ヒトミに会うときの話だよ」とマキが二ヤで返した。

「あ～・・忘れられない、恭子に完敗した時の」とシズカが二ヤで返した。
「やっぱり完敗したと感じましたか？」とユリさんが真顔で聞いた。
「完敗でしたね・・私もマキも、そしてその前に恭子も完敗してました・・美由紀に」とシズカが笑顔で返した。
「ねぇ美由紀・・美由紀とヒトミの出会いはどんな感じ？」と蘭が美由紀に微笑んだ。

「私は・・小僧が何も言わずに、車椅子を押して入りました。
私・・その頃は全然乗り越えてなくて、乗り越えようともしてなかった。
我がままばかり言って、両親に迷惑ばかりかけて。
当然友達もいなくて、外に出るのもおっくうで・・特別な視線が嫌でした。
そして小児病棟で、小僧に出会うんです。
私にとっても、小児病棟の遊戯室だけは、特別な場所でした。
特別な視線が存在しない、唯一の場所だったから。
そこで小僧と小３の夏休みに知り合いました、ほぼナンパのような感じで。
それから小僧か、私の家に遊びに来るようになって。
小僧だけは私の足のことを、全く特別視しませんでした。
まぁあれだけの、病と闘う子供と関係してきたのだから、当然ですけど。
ある日部屋で遊んでて、棚の上の物が欲しくて、小僧に頼んだんです。
そしたら小僧が二ヤ顔で言うんです、立てば届くよって。
私はその小僧の顔が悔しくて、足が無くなってから初めて立って

みた。
そしたら立てたんです、そして棚の上にも手が届いた。
私が小僧に自慢したら、やっとなのか～、美由紀の短足って笑うんです。
小3ですよ・・私も小僧も、そのいたいけな少女に向かって。
私は叫びました、悔しくて・・私は短足じゃないって。
そしたら小僧が・・なら何なんだよ、まさか障害と思ってるの？
そう聞くんですよ、私はハッとしたけど、止まらなかった。
そうじゃないなら何だって言うの、両足が無いんだよって叫んだ。
両足が短いんだろ、たかがそれだけの個性だろって、小僧が言った。
私は泣きました・・嬉しくて、泣いてしまいました。
そしたら小僧が泣いてる、私の背中に言ったんです。
美由紀・・俺は美由紀の短足も含めて、美由紀が好きだよと。
だから、美由紀が足の事で泣くのは、最後にしてやるって。
そして翌日小児病棟で待ち合わせをして、その日は別れました。
それだけでも気分が変わってましたね、夜に両親に立って見せたら。
両親が凄く喜んで、それから私の両親は小僧の良き理解者になりました。
翌日母に連れられて、小児病棟に行くと小僧が待っていました。
そして笑顔で車椅子を押して、特別室に入った。
そこにいました・・私の親友になる、ヒトミが眠っていた。
小僧は私をヒトミの横に連れて行き、ヒトミの左手を握らせた。
私は感じました、ヒトミが生きてるって・・それだけは感じました。
小僧がヒトミも同じ歳だと教えてくれて、お話してあげてと言って出て行ったので。
ヒトミに語りかけました・・その時に無意識に話した。
私の両足が無いことでの悩みや悲しみまで、初めて人に話せた。

両親にも話した事の無い話を、素直に出来ました・・ヒトミが優しかったから。
本当に優しかった、その空間が優しい何かに包まれてるようで。
そして最後にこう言えました、どうしてもヒトミに伝えたくて。
ヒトミありがとう、私は馬鹿だったね・・両足が無い位でスネてたよ。
私は今から頑張るから、またお話聞いてね。
ヒトミありがとう、友達になってくれて・・優しくしてくれて。
素直にそう言えました・・ヒトミが本当に優しかったから。
それからです、私が現実と向き合えたのは。
それから前向きになれた、小僧が二ヤ顔でいつも背中を押してくれた。
両親の前で、足の話をよく引き合いに出して、それで笑いを作る方法まで教えてくれた。
笑いに変える事で・・両親が何かを降ろせたと感じて、嬉しかった。
そしてどんなに辛くても・・ヒトミが話を聞いてくれた、優しく包みながら。
両親も私の変化を喜んで、小児病棟に連れて行ってくれました。
そして私が挑戦を決めます、小僧に押されて駄菓子屋デビューをするんです。
私は怖かったけど、一瞬で怖さは吹き飛びました・・６年生に限界トリオがいましたから。
誰も私を特別視しなかった、そして優しく守ってくれました。
私は本当に嬉しかったんです、そして出会います小僧の両親に。
勝也父さんが何も言わずに、駄菓子屋の段差に傾斜板を作ってくれた。
無骨で照れ屋な優しさが、嬉しかった・・見守られてると感じて。
そして律子母さんが、私のズボンを見て・・脱ぎなさいって言ったんだす。

私は初めて、足を医療関係者以外の他人に見せました。
律子母さんは笑顔で見て、残ってるじゃない・・大丈夫、科学は日々進歩するから。
手塚アニメの世界が来るわ・・ブラックジャックも鉄腕アトムもって笑った。
私がどれほど嬉しかったか・・表現できません。
そして縫いこんでくれたんです、こんな風にアップリケを、生地が擦り切れないように。
その優しさが言っていました・・自分で立てと、強く言っていました。
私は自分の個性を否定していました、それをヒトミが教えてくれました。
生きる事では傷害だけど、生きる意味には関係が無い事だと。
その命を削るような行為で、強く教えてくれた・・生きる意味を探そうと。
私は何も聞かされずに、ヒトミに会いました・・でも何も怖くなかった。
ヒトミの周りの空間が優しさに包まれていたから、心地良い空間だったから。
医療機器もヒトミの体から伸びる管も、その優しさを演出していて。
沢山の人たちが全力で、ヒトミを命を支えていると感じて。
私の中の強いトラウマ・・あの手術室に運ばれた時の音・・その時の恐怖。
そのトラウマが消えました、自分の勘違いに気づいて。
あの音が私の命を救ってくれたのだと感じて、感謝する事が出来ました。
私はヒトミと交信できたのかは分かりませんが、ヒトミの意志は感じていました。
だからヒトミが親友です、ヒトミは今でも私の中に存在します。

そしていつも言ってくれます・・優しく囁いてくれます。
美由紀・・それからどう生きるの？・・そう問いかけられる。
それがあるから私は進める・・こうだよと見せたいから。
親友の優しいヒトミに・・教えたい・・生きるって素晴らしい事だと」

完全な静寂が温もりに包まれて存在した、美由紀は笑顔で語った。
経験から溢れ出る・・重い言葉を、優しく語りかけた。
「ありがとう、美由紀・・貴重な・・本当に貴重な話でした」とユリさんが一筋の涙を流し、薔薇で微笑んだ。
「そして美由紀にも新たな挑戦が始まる・・由美子は待ってる、美由紀が来るのを」とシズカが微笑んだ。
「そうなんだよね・・絶対そうだよね」と蘭が泣きながら言った。
「待ってますよね・・私と皆さん全員と、エミとミサとマリアを」
と美由紀も微笑んで返した。

その時にドアが開いて、泣きながら北斗が入ってきた。
何も言わずに、美由紀に抱きついた・・美由紀はそれで感じたようだった。
「駄目ですよ～・・輝きを取り戻すんですから、泣いたら駄目ですよ・・お母さん」と美由紀も優しく抱きしめて囁いた。
「ありがとう・・本当に大切な話だったよ、勇気をもらった」と北斗が顔を上げて美由紀に微笑んだ。
「じゃあ、今度由美子ちゃんに会わせてもらいます・・ヒトミの伝言を伝えたいから」と美由紀も笑顔で返した。
「約束だよ・・待ってるからね、私も由美子も」と北斗が美しく微笑んで、美由紀も笑顔で返した。

北斗の後ろを美由紀の母親が入ってきて、笑顔で挨拶をして礼を言った。

私が美由紀を抱き上げて、車椅子に乗せて、全員に見送られＴＶルームを出た。
私と蘭が通りまで送って、美由紀に手を振って別れた。

「良かった～・・本当に良かったよ、由美子に会う前に美由紀に会って」と蘭が満開に微笑んで、腕を組んできた。
『そうだね～・・良かったかもしれない、美由紀にとっても』と笑顔で返した。
私はご機嫌蘭とＴＶルームに戻った、北斗が初めての女性と挨拶をしていた。

『北斗・・早いね、やる気は充分だね』と笑顔で言った。
「今日の由美子を見たら、やる気は出るよ」と北斗が美しい笑顔で返してきた。
「どうかしたの？・・由美子ちゃん」とユリさんが聞いた。
「左手が少し動いたんだよ・・嬉しくて」と北斗が笑顔で返した。
「えっ！・・自分の意思で、意思表示でですか？」とマキが驚いて聞いた。
「うん・・小僧とユリカを呼ぶのにね」と北斗が微笑んだ。

「いけるんだね・・由美子は、ヒトミが行けなかった段階に？」とシズカが真顔で聞いた。
『行けると思うよ・・でも焦らない、由美子の体力と相談して』と真顔で返した。
「小僧・・私はもう何を聞いても大丈夫だから、ヒトミが行けなかった段階を教えて」と北斗が微笑んだ。

『ヒトミは・・意思表示をするのが精一杯だったんだよ。
転院してきた時には、かなりの衰弱状態だったから。
両親もその時が来るのを感じて、最終地点に宮崎を選んだんだ。

両親もヒトミにも故郷だったから、そうしたと聞いた。
関口医師はそれとの戦いだったんだよ、ヒトミの生命を維持するという。
俺は・・その部分は今度北斗のいる時に、美由紀が話すって言ってたから。
確かに俺には語れない・・やっぱり、今でも迷ってる部分が多いから。
俺はヒトミに対して段階を考える事はした、でもヒトミの体力じゃ無理だったんだ。
左手にヒトミの心を誘ったら、下半身の運動からさせようと思ってた。
誰かが動かしてやるんだよ、筋力の殆んど無い足を。
原因不明の難病・・染色体異常とか脳の障害とか。
色々言われてるけど・・それで思ったんだよ。
原因不明なら直るのも、原因不明じゃないかって。
結局・・あの病気は植物状態じゃないって事は、確信してるから。
気力が重要じゃないのかって、ヒトミの周りの全ての人が治ると思わないと。
そう思って色々とヒトミに接していないと、ヒトミの気力が下がるんじゃないかと。
確かに完治した前例は無いけど、俺は原因不明だろって思ってるんだ。
原因も分からないのに・・諦めるなんて出来ない、静かな余生をおくらせたりしない。
最後まで闘わせる・・全員がそう信じて、由美子と共に闘う。
それがしたかった・・ヒトミには沢山の段階を考えたんだよ。
それは何も出来なかった・・ヒトミが限界だったから。
でも由美子は違う・・体自体が、ヒトミとは全く違う。
体は病に侵されていない、ただ動けという信号が発せられないだけ。

そう思ってるんだ・・だから意思表示が有ったら、まずは足を動かす。
脳に刺激を与えるんじゃない、心と体に直接刺激を与える。
それをどの事例もやっていない、だから俺はやりたい。
俺は可能性は有ると信じている、だからどんな事でも試してみたい。
生きてるんだから・・由美子は生きてるんだから」

私は真剣な北斗の瞳を見ながら、真剣に伝えた。
「了解・・私は言ったからね、あんたを信じるって」と北斗が微笑んだ、私も笑顔で頷いた。
「1つだけ教えて・・左手は脳の信号で動いてないの？」とユリさんが真顔で言った。
『俺は脳じゃないと思っています・・そう確信してます』と答えた。
「確かに脳が命令してる動きじゃないんです・・まるで別の生き物のような感じです」とシズカが言った。
「心が強引に動かしてる・・そんな感じでした、脳を経由せずに」とマキが真顔で言った。

「植物状態って、エースから見たらどんな感じなの？」とユリカが聞いた。
『心臓が動いてるってだけ・・中身は存在しないって感じかな、各々違うけど・・ひどいのは』と真顔で答えた。
「太一は植物状態だったのか？」とシズカが真顔で聞いた。
『そう思ってた・・ユリカに会うまでは、ユリカに会って変わった・・同姓だから駄目だったのかもって』と真顔で返した。
「でも小僧は同姓でも分かるよね・・話せない相手でも」とマキが聞いた。
『それは・・動ける相手なら自信があるけど、寝たきりはどうなのか分からない』と正直に答えた。

「背負うしかないね・・お前が自分の意志として選んだ事だから、人間は万能じゃないからね」とシズカが微笑んで。
「背負うでしょう、それが小僧だから・・過酷な道だと一番知ってるんだから」とマキも微笑んで言った。
「そうやって守り続けるんだね・・限界トリオも豊も」とカスミが微笑んだ。
「厳密に言うと・・守ってるのは美由紀です、あの子の強さが守り続けるんです」とシズカが笑顔で返した。
全員が笑顔で頷いていた、私は美由紀の凄さを再確認していた。
あの経験が語る重い言葉を。

裏方４人組が準備に戻り、ユリさんが北斗と出かけ。
ユリカが準備に帰り、シズカ家に帰った。

「おはようございま～す」と久美子が笑顔で入ってきて、蘭に微笑んだ。
「蘭姉さん、私の付き人借りていいですか？」と久美子が言った。
「どうぞどうぞ・・バンドの練習？」と蘭が満開で微笑んだ。
「はい・・初めての音合わせで、相手はオヤジばっかりだから」と久美子がウルで言った。
「カスミなら得意なのにね・・オヤジ」と蘭が満開で笑った。
「なつくんですよ・・良い女には」とカスミが不敵で返した。

私は立って久美子に近づいた、久美子が微笑んで手を繋いだ。
『場所は？・・西〇のスタジオとか』と久美子に笑顔で聞いた。
「リッチのステージ・・贅沢だよね～」と笑顔で返されて出かけた。
夏の陽射しは絶好調で、夜の気配は遠かった。

趣のある、いかにも音楽の場所という雰囲気の、リッチ・ハートの

入口の前で久美子が深呼吸した。
私は二ヤで久美子を無視して、先に進んだ。
「ちょっと、待って～」と久美子が慌てて駆け寄った。
沢山のポスターが張ってある、入場口を抜けると、映画館のような扉があった。
それを開けると、客席のテーブルが広がりステージが見えた。
ステージの上に3人のオヤジが見えた、Ｊ・塚本の顔もあった。

私は久美子の手を引いて、ステージに向かった。
『塚本マスター・・人見知りの久美子、連れて来ました』と笑顔で声をかけた。
「おう、ご苦労さん・・エースはそこでジュースでも飲んどき、久美子ちゃん上がって」塚本が笑顔で言った。
久美子は少し緊張した表情で、ステージに上がり、2人のオヤジを紹介されて挨拶をしていた。
「エース、サンキュー・・可愛い子やね、あれで実力者か～」と後ろから焼き鳥屋のミノルが微笑んだ。
『ミノルさん・・楽器できるの！意外だな～』と笑顔で返した。
「こんな素敵なやつを・・かっけ～だろ～」とサックスを見せて二ヤで言った。
『かっけ～・・俺もサーフィンやめて、音楽しようかな』と笑顔で返した。
「両方やれよ・・若い時の特権やかい、そういう贅沢は」と笑顔を残しステージに上がった。

ミノルと久美子が挨拶をして、ミノルが何か言って、久美子が笑顔で返していた。
《さすがミノルのオヤジは、話が上手いな》と思っていた。
各自がチューニングに入った、久美子はグランドピアノの椅子の調整をして座った。

久美子が調子をみるのに弾いたのは、私にサービスでサマータイムだった。
久美子の音が流れ出すと、オヤジ達４人が手を止めて見ていた。
久美子は強めのアレンジで弾いた、緊張も忘れるのだと思っていた。
鍵盤の前に座ると、久美子は集中出来るのだと感じていた。

「はい、ど～ぞ」と２０代後半の女性が、コーラを出してくれた。
『ありがとう』と笑顔返して女性を見た、久美子を真剣な瞳で見ていた。
「素敵な子やね～・・良い音を出すね～・・楽しみだよ」と私を見て微笑んだ。
『激しいリズムはもっと良いよ、魂が乗ってくる』と笑顔で返した。
久美子はサマータイムが終わり、オヤジ達の視線に気づき、照れて微笑んだ。
Ｊ・塚本が何かリクエストして、久美子が頷いた。
久美子の表情が変わって、私は激しい曲が来ると思っていた、女性はステージの久美子を見ていた。

久美子は闘争本能を全面に出して、弾き始めた・・あのＪ・塚本を泣かせた曲を。
狂おしく舞いながら鍵盤を叩いた、段々と腰が浮いてきて、ペダルを踏むのを諦めた。
ステージ上の久美子は、少ない照明で照らされるだけだったが、自らが発光していた。
汗を流し、笑い・怒り・泣いて弾いた、女性は息を呑んで見ていた。
ステージ上のオヤジ達も、何かに押されながら、魅入られていた。
久美子は最後のサビの部分で、完全に腰を浮かせて叩いた。
最後に歓喜を表現して、上を向いた、まるで青空を仰ぐように。
その表情が充実感を出していて、１６歳の輝きに包まれていた。

「素晴らしい・・素敵な演奏だったよ」と女性が大声で言って、拍手をした。
オヤジ達も我に返って拍手をした、久美子は少し照れながら頭を下げた。
「まいったな～・・俺ら頑張らんと、申し訳ないぞ・・あの子に」
と初老のオヤジが言って、ステージに向かった。
「支配人・・良かったですね～、最高の逸材ですよ」と女性が笑顔で言った。
「エース、ありがとな・・俺はここの経営者で、末松って言うから」
と私に笑顔で言った。
『久美子のご指導よろしくお願いします、いずれ世界に出ますから』
と笑顔で返した。
「冗談には聞こえんよ・・その可能性は充分にあるよ」と楽しそうな笑顔で言って、ステージに向かった。

「あんな楽しそうな支配人、初めて見たよ・・気持ちは分かるけど」
と女性が私に微笑んで、奥に消えた。
支配人は久美子と笑顔で挨拶して、全員が揃い最初の曲を決めた。
私は生演奏のジャズを、貸切で楽しむという贅沢を味わいながら聴いていた。
バンドに入ると久美子は、その役割に徹してるようで。
ソロの部分以外は、気持ちを合わせて弾いていた。
そして3曲目で見せる、その熱を・・久美子が激しさに誘う。
オヤジ達5人も、徐々に熱を帯びてくる、久美子が完全にリードした。
その熱をオヤジ達も楽しんでるようで、ノリノリになってきた。
演奏が終わると、全員に笑顔が溢れた、私は一人で拍手をしていた。
最後の演奏はサマータイムで、ミノルのサックスが泣いていた。
それを久美子が喜びの世界に誘って、全員が夏の到来の喜びを表現

した。
私はリンダとマチルダを想いながら、その音を聴いていた・・旅に出たい衝動を抑えて。
夏の日の午後、心だけニューヨークに飛ばしていた・・。
由美子の存在が語りかける、その問いかけが女性達に変化を与えた。
純粋にただ生きるためだけに存在する、由美子の心を感じたのだろう。
幸せとは何かと考えさせられ、そして探しに行く。
大切な季節を賭けて探索する、自分にとっての幸せを。
美由紀はこの後、ＰＧに顔を出してくれる・・女性達と触れ合って変化する。
高校に進み、出始めのコンピューターを覚え、プログラマーになる。
美由紀がフィアンセを紹介してくれた時に、私に内緒で囁いた。
心配しないで・・私、もう処女じゃないよ・・泣くなよ。
そう美しい笑顔で言った、私はウルウルの笑顔で返した。
美由紀は３人の子供を出産し、家で仕事をしながら、子育てをした。
数年前から車の運転もしている、最新技術の恩恵を受けて。
手塚アニメの世界が、少しづつ現実になっているのだろう。

進歩とはそういう物であって欲しい、平和利用が基本であって欲しい。

美由紀が地雷で傷ついた、子供たちの前で強く言った言葉を忘れられないから。

その夜、一人で泣いている・・美由紀の背中を忘れられないから。

ハンデをやったのさ・・両足が無い位のハンデが丁度良かったんだね。

あんたと私の大切な関係は・・美由紀はそう微笑んでくれる。

ありがとう、美由紀・・今でも支えてくて、その強い優しさで・・。

音の言葉

夏の日の午後、音楽により作られた場所。
沢山の夢と希望を吸収して、その雰囲気を作り出している。
夢半ばに趣味に移行した者達の、後悔と挫折を見てきたステージが有った。

音合わせが終わり、オヤジ５人が笑顔で久美子を囲んでいた。
久美子は円の真ん中で、１６歳の輝きを発散していた。

久美子が挨拶してステージを降りてきて、私は面識が無い３人のオヤジに挨拶した。
一人は大きなクラブのマネージャーで、もう一人がジャズクラブのオナー。
そしてもう一人が、怪しいキャバレーのマネージャーだった。
私が久美子と帰ろうとすると、ミノルが声をかけてきた。

「たまには鶏食いに来いよ」と笑顔で言った。
『うん、今度行こうと蘭と話してた、ＰＧの若手のエースを連れて』と笑顔で返した。
「楽しみやね～・・・久美子ちゃんも来れたらおいで、久美子の分はサービスするかい」と楽しげな笑顔で久美子に言った。
「楽しみです～・・・鶏大好きですから～」と久美子が笑顔で返した。
「ミノルは良いな～・・・久美子を誘えて」とＪ・塚本が笑顔で言った。
「俺も誘えるよ・・久美子ちゃん、エース同伴なら単独演奏頼んで良いかな？」とジャズクラブのマスター、谷田が微笑んだ。
「本当ですか～・・・やってみたいです、９時～１１時までなら」と

久美子が笑顔で返した。
「補導には気を付けてな」と支配人末松が真顔で言った。
「大丈夫です、悪いことしてなければ・・お守りがありますから」
と久美子が笑顔で返した。
「お守り？・・見せてよ」とミノルが笑顔で言って、久美子が定期入れを出して見せた。

「おいおい・・最強のお守りじゃないか～」とミノルが言って。
「さすがにＰＧの関係者は違うな～」と支配人末松が微笑んだ。
「おい・・頑張らんと、梶谷がライブ見に来るかもしれんぞ」とＪ・塚本が二ヤで言った。
「駄目だしされるな～・・今のレベルじゃ」と谷田が言って、全員で笑っていた。
私と久美子は楽しそうなオヤジ達に挨拶をして、ライブハウスを後にした。

通りに出ると久美子が腕を組んできた、私は驚いて久美子を見た。
「サービスだよ・・大サービス、私は夜の女性達より勇気がいるんだからね」と二ヤで言った。
『噂になれば良いのに～・・学校で久美子が年下と付き合ってるって』と二ヤで返した。
「それだけなら良いけど・・それがチャッピーなら大事件だよ」と久美子が笑った。
「良い意味として取っとく・・絶対に褒め言葉だ」とニヤで返して、裏階段を登った。

ＴＶルームには蘭とカスミがいて、レイカが来ていて４人娘になっていた。
久美子はエミを誘って、レッスンに行った。

『オヤジバンドに意外な人がいたよ』と蘭の隣に座りながら、笑顔で言った。
「誰かな～・・意外な男？」と満開二ヤで返された。
『ミノルちゃん・・サックス担当でかっこ良かったよ』と笑顔で返した。
「そうなの～・・確かに意外だね」と蘭が満開で微笑んだ。
「いつ行くのでしょう・・延び延びの約束」とカスミがウルで言った。

「今日でしょう・・カスミのおごりだから、3日分食べろよ」と蘭が私に満開二ヤで言った。
『お持ち帰りもするよ・・生肉で』と二ヤで返した。
「ど～んと任せなさい・・焼き鳥なら、カスミ様に」と不適で微笑んだ。
「フランス料理とは、格差がありすぎる」と蘭がウルでカスミに言った。
「それは仕方ない・・私は今はこいつしか、誘う男がいないんだから」と不敵全開で返した。
「オヤジがいるでしょ～・・選り取り見取り」と蘭が満開二ヤで突っ込んだ。
「それは無理～・・店以外で何を話せば良いの～」とカスミがウルで返した。

「確かに・・私、お客さんに靴屋で会うけど、なんか調子出ないよね～」と蘭もウルで言った。
『特別な場所なんだろ、あのフロアーは・・客はそう思ってないけど』と二ヤで言った。
「そうなんだよな～・・そう思ってない奴が多過ぎる」とカスミが返した。
「よし・・対処方法を聞きに行こう、ミノル先生に」と蘭が満開で

微笑んで、カスミも笑顔で頷いた。
私はフロアーに行って、久美子に来たければ後でおいでと言って、場所を教えて出かけた。
蘭とカスミが笑顔で話しながら歩く後ろを、呼び込みさん達に挨拶しながら歩いた。

「カスミ、祭り以来有名人だね～」と蘭が微笑んで言った。
「どっかのエースの、足元にも及びません」と輝き二ヤで返した。
ホストクラブの前で、ジンが若手2人で話していた。

「Ｎｏ１が呼び込みかい・・頑張るね～」と蘭が満開で微笑んだ。
「ども～・・おはようございます、綺麗な人が2人歩いて来ると思って・・罠張ってました」とジンが笑顔で返した。
「ジンったら～・・正直者～」と蘭が満開で微笑んだ。
「駄目ですよ～・・土曜の夕方から調子に乗せると、怖いですから～」とカスミが不敵で言った。
『ジン・・話す暇が無くて、勝手に決めたんだけど・・登録第一号の女性を決めたんだけど』と真顔で言った。
「凄いな～・・もう見つけてくれたのか」とジンが微笑んだ。

「第一号には、最強の女性ですよ」とカスミが微笑んだ。
「どんな人でしょう？」とジンが興味津々の笑顔で聞いた。

「全盛期の大ママに１０代で真っ向勝負を挑み、ＰＧのオープニングＮｏ１を勝ち取り。
その後１年以上Ｎｏ１に君臨して、ユリさんに夜の女性を教えた人。
その伝説の源氏名・・北斗さんだよ」
蘭が驚いて聞くジンを見ながら、満開笑顔で言った。

「そりゃ～・・凄すぎますね、俺も挨拶に行かないと」とジンが嬉しそうに言った。
「今夜からＰＧに入るからね」と蘭が笑顔で返して、頷くジンと別れて焼き鳥屋に向かった。
陽はまだ高く、黄昏は遠かった・・西に向かい前を歩く２人は輝いていた。
沢山の男達が振り返り、品定めをするような視線を投げかけていた。

焼き鳥屋は暖簾が出ていて、換気扇から煙が出ていた。
「ジャズマンの、ミノルちゃんいる～」と蘭が開き戸を開けて大声で言った。
「いるよ～・・いかすジャズマンなら～」と大声で返ってきた。
３人で店に入り、私を挟んで、蘭とカスミが笑顔でカウンターに座った。
『ミノルさん、噂のＰＧ若手Ｎｏ１の』とまで私が言ったら。
「カスミちゃん・・嬉しいね～、いらっしゃい」とミノルが笑顔で言った。
「こんにちわ、カスミです」と輝く笑顔でカスミが返した。
「さすがにお祭りＮｏ１なだけあるね～、良かったな蘭」とミノルが笑顔で言った、蘭も満開で頷いた。

「今夜のおすすめは？」と蘭が笑顔で聞いた。
「今夜は気分が最高に良いから、刺身の良いとこ出すよ」とミノルが笑顔で返した。
「ラッキー・・私、宮崎に来て初めて食べましたけど・・美味しいですよね」とカスミが微笑んだ。
「そうだね～・・宮崎と鹿児島が、鶏刺しは主流だからね」とミノルがビールを出しながら言った。
「そうなんだ～・・私の家、農家だからよく食卓に出てたよ」と蘭が満開で微笑んだ。

「食文化ってのは、大切なもんだからね」とミノルも笑顔で言った。
3人がビールで、私がコーラでウルで乾杯した。

「食文化って確かにありますね、私は宮崎で明太子買って食べようと思いませんから」とカスミが笑顔で言った。
「おっ！カスミちゃんは、博多美人なんだね～」と刺身を切りながら、ミノルが微笑んだ。
「実家は玄海灘寄りの方です、部屋の窓から海が見えるんですよ」とカスミが微笑んだ。
『良いな～・・憧れの生活や～』と私が笑顔で言った。
「宮崎みたいな海じゃないよ・・冬なんか、もろ演歌の世界」とカスミが笑顔で言った。
刺身が出てきて、私は久々の鶏刺しを感動しながら食べていた。

「美味しいです・・今までで一番ですよ」とカスミも嬉しそうに言った。
「今日は一番良い感じだからね」とミノルが焼き鳥を焼きながら言った。
「それは鶏の種類の話なの？」と蘭が聞いた。
「食べてる時に話しても、大丈夫かな？・・カスミちゃん」とミノルが微笑んだ。
「はい・・私、食べ物に対しては、敬意をはらってますから」とカスミが笑顔で返した。

「良い言葉だね～・・食べ物に対して、敬意をはらう。
大切な事なんだよ・・俺が言った一番良い感じとは。
もちろん鶏が育った場所や、品種も大切だけど・・鮮度なんだよ。
人は命を食べているけど、それは加工した物が多いよね。
煮たり、焼いたり、蒸したり・・それが母の愛情なんだけど。
その愛情が美味しさを引き出すんだね、だから一生忘れないんだ

よ。
しかし、生は別の意味で美味いんだ、それは鮮度が命なんだ。
魚でも獲りたてを食べると、市販の物と全く違うよね。
それは誰でも感じるんだ、だから当然他の物でも同じなんだよ。
鮮度の良い生には、生命が残っている・・だから力をくれる。
だからこそ、子供には遠慮させる・・強すぎるからね。
子供は生命力に溢れてるから、生を食べ過ぎると・・効果が強すぎるんだよ。
この刺身の鶏は今日の昼まで生きていた、その事実に感謝するしかないんだ。
人間とは生命を摂取して生きるんだから、野菜しか食べない人でも同じ。
野菜しか食べない人が、肉を食べる人を非難する事が、西洋ではあるそうだが。
それこそが分かってない、植物だって命があるんだから。
人間が食べる物で、命の無いものは無いだろう。
だから感謝しようと思うよね、全ての生命は連鎖してるんだからね」

ミノルは焼き鳥の火加減を見ながら、笑顔で言った。
「良く分かります・・私、自分の体を作るのに・・食べ物には人一倍、興味を持ってますから」とカスミが笑顔で返した。
「植物も生きてますよね～・・私の父なんか、苗を我が子のように大切に育てますから」と蘭が満開で微笑んだ。
「我が子だろうね、それは絶対に生命としての関わりだからな～」とミノルも笑顔で言った。
ミノルのグラスにカスミがビールを注いで、ミノルが嬉しそうな笑顔で飲んでいた。
「ミノルちゃん、今日の最高の気分が良い原因は？・・もしかして」

と蘭が満開二ヤで言った。
「もちろん・・久美子ちゃん、嬉しかったよ・・あんな１６歳に出会えただけでも」とミノルが笑顔で言った。
「音楽をやってる人でも、レベルが高いと感じるんですね」とカスミが言った。

「感じるね～・・俺もクラッシックは全然分からんけど。
演奏テクニックとかはね、でも熱は感じるよ・・温度はね。
久美子の音を聞いた時に、感動したよ・・どうしてその音が出せるのかと。
１６歳の可愛い女子高生が、その世界に踏み込んでいる。
それに感動したよ、もちろん確かな基本に裏打ちされているのだろう。
でも技術はある線から関係ないんだよ、音楽は五線譜の上で成り立ってない。
あれは単なる設計図なんだよ、それをどう解釈するのか。
そこからが音楽なんだ、その人の解釈を聴きたいんだよ。
ジャズなんて、同じ曲でも全然違うよ・・それが良いんだよ。
その人の考え方、経験や歴史まで想像できるから。
久美子ちゃんが最初に弾いたサマータイム、俺はあの曲だけで久美子を好きになった。
多分他のメンバーも・・それは久美子が感じようとしてるから。
ニューヨークのスラム街を感じようと、そこに暮す人々に気持ちを感じようと。
その音で感じたいとしている、それこそが音楽なんだよ。
感じたいし感じさせたい・・それが出来れば言葉の壁は無くなるだろ。
音の言葉は、全世界で通用するから。
今日エースが言った、久美子はいずれ世界に出るからと。
俺達は感動したよ、エースの言葉に・・その愛情にね。

久美子を信じてないと言えない、愛情が無い人間が言っても冗談にしか聞こえない。
でも本気だと感じた・・あの言葉は俺たちの青春時代に、投げかけた言葉だった。
踏み出せずに、命懸けの努力もせずに・・言い訳をして諦めた、若い俺たちに。
嬉しかったよ・・エース・・あの言葉。
お前が、久美子の背中を見守り続けてるのを感じて。
最後まで語りかけるんだと思った・・絶対に諦めない、最後の挑戦者としてね」

ミノルは笑顔で言った、私も嬉しくて笑顔で頷いた。
「サマータイムは、この子にとっても思い出の曲ですからね～」と蘭が満開で微笑んだ。
「聴きたかったな～・・リンダのサマータイムも」とカスミも笑顔で言った。
「やっぱり、久美子に大きな影響を与えた存在がいるんだな?」とミノルが笑顔で聞いた。
「いますよ～・・リンダと言って・・・・」蘭がリンダの話をした、ミノルが笑顔で聞いていた。
「その後で、マチルダという２０歳の子が来て・・・・」カスミがマチルダの話をした。

「それは聴きたいな～・・そんな想いで生きてる子の歌う、サマータイムを」とミノルが笑顔で言った。

『久美子が教えてくれたよ、サマータイムのもう一つの意味。
リンダの歌は、その夏を喜ぶ歌だったって。
白人の美しい女性が、その響きで歌った事に驚いたってね。
それからだよ、久美子が強いアレンジを入れだしたのは』

私は嬉しそうなミノルを見ながら、笑顔で言った。
その時に開き戸が開いて、久美子が笑顔で入ってきた。
「こんにちわ～、ご招待に甘えました」とミノルに笑顔で言った。
「嬉しいね～・・久美子は鶏刺し食べれる？」とミノルが笑顔で聞いた。
「はい、大好きで～す」と笑顔で言ってカスミの隣に座った。
「今、良い噂してたよ・・久美子は凄いってね」とカスミが微笑んだ。
「緊張しましたよ～・・憧れのステージでしたから」と笑顔で返した。

「やっぱり憧れなんだね、リッチのステージは」と蘭が満開で微笑んだ。
「宮崎では、あそこだけですから・・夢を追う人間のステージは」と久美子が笑顔で返した。
「博多ライブ喫茶【照和】、みたいな感じなんだね」とカスミが微笑んだ。
「カスミちゃん、ちょっと比べる対象のレベルが凄すぎるよ～」とミノルが笑顔で言った。
「照和なら私でも知ってる、陽水も甲斐バンドも出てたんですよね～」と蘭が笑顔で言った。
「そうだよ、チューリップも海援隊も」とミノル返した。

「聞くだけで凄いですよね～」と久美子が笑顔で言った。
『いつか言われるよ、リッチのステージには久美子が立ってたって』と私が笑顔で返した、久美子は嬉しそうに笑顔で頷いた。
「久美子の憧れのステージは？」とカスミが聞いた。
「ニューヨークのアポロシアターですね・・最近はそう強く思います」と笑顔で返した。

「聖地だな～・・アポロは」とミノルも嬉しそうに笑顔で言った。
「かなりジャズよりになってきたって事なの？」と蘭が満開で聞いた。

「そうですね・・自分のイメージできる世界的には、ジャズの方が合ってますね。
クラッシックはどこか閉鎖的で、息が詰まる感じが前からありました。
私はＰＧに来るまで、学校しか練習場所が無くて・・こっそりジャズを弾いてました。
良い顔しないんですよ、クラッシックにどっぷりはまった人達は。
他を受け入れないっていうか、聞く耳を持たないみたいな。
私は歌謡曲も演歌も大好きです、もちろんクラッシックも。
でも・・ジャズが一番肌に合いますね、自由な感じがするんです。
私が腰を浮かして弾くのは、本当はやってはならない事なんです。
ペダルが踏めないし、音楽は音で表現するものだから。
でも・・リンダが教えてくれました、既存の行為を逸脱してもいいんだと。
表現したいなら、全身全霊でやるんだと。
そして夢まで提案してくれました、それに対してエースが確約をとった。
レンとエースが誓いを立てています、レンが嬉しそうに話してくれました。
私が将来どんな道を選択しても、レンが背中を押すと。
そしてレンの幸せを追うと、誓ったそうです・・嬉しかった～。
私の犠牲じゃないと、レンが言ってくれて・・自分の選んだ道だと言ったから。
私は将来どんな事になっても、忘れません・・ＰＧの女性達の背中と。
リンダとマチルダのサマータイムと、私にチャンスを与え続けて。

挑戦しろと二ヤ顔で誘い続けて、常に次の提案をしてくれた。
エースと呼ばれる男を・・ありがとう、エース。
あの時の言葉・・本当に嬉しかった、フロアーの準備で音が無いから寂しいって言った。
あの言葉があるから、私は言い訳も挫折も出来ないよ。
そしてリンダに会わせてくれた、あの時が私の支えだよ。
だから今日も、サマータイムを最初に弾いた・・それが一番落ち着くから。
１６歳の夏を忘れられないから・・灼熱のフロアーで弾いた季節を。
私はエースとの最初の約束、それをアポロの一番前の席で果たすね。
あの白いグランドピアノのお礼として、それが私の今の目標だよ」
久美子が最後に私に微笑んだ、私も笑顔で頷いた。

『久美子・・今度本気で弾いてもらうよ、俺の可愛い画伯を連れてくるから。
魂に訴えかけてくれよ、絶対に響くから・・久美子の音なら。
感性を広げてやりたいんだ、閉鎖してほしくないんだ。
病なんかに負けてほしくない、色々な世界を感じてほしい。
でもあの病気はどうしても、興味ある世界しか見ないんだよ。
だから直接、魂に訴えるしかない・・ダイレクトに強く。
それが出来るのは、俺の知っている中では、久美子だけなんだ。
沙紀を覚醒させる・・写実的才能に、何かがプラスされると信じてる。
俺は自立できると信じてる、沙紀もミホも・・・そして・・由美子も』
感情的な自分を感じながら、久美子に言った。

「了解・・でも一度じゃ嫌よ、何度も何度もやらせてね」と久美子が微笑んだ。
『よろしく久美子・・沙紀と、いずれミホも』と笑顔で返した。
蘭とカスミが微笑んでいた、ミノルの視線が優しかった。

鳥雑炊を食べながら、ミノルの沙紀の質問に蘭が満開で答えていた。
「明日・・実家に帰って来るよ、月曜日サクラさんの店、休みもらった」とカスミが微笑んだ。
『楽しんで来いよ・・お土産、期待してます』と笑顔で返した。
「楽しめる気がする・・今なら腹を割って話せそうだよ」と輝く笑顔で返してきた。
『カスミ・・カスミは俺やマキと同種族だよ、心を直接言葉にできる・・考えるなよ』と二ヤで言った。
「うし・・分かった、私も和解してくる・・あの頃の自分と」と言って笑った顔は、輝きに溢れていた。

3人分をカスミが支払い、久美子の分はミノルのサービスだった。
4人でミノルに礼を言って店を出て、私は病院に行くので3人と通りで別れた。
晩夏の太陽は西の空に存在していて、熱は路上からも湧き上がっていた。
週末の夜が迫っていた、カーニバルのような熱気が漂っていた。
私は病院を目指して歩いた、沈み行く太陽を追いかけるように。

病院に入り4階で記名してると声をかけられた、関口医師が笑顔で立っていた。
「由美子・・段階早くないかね」と笑顔で言いながら、ナースステーションの奥のテーブルに誘った。
『関口先生も分かってるでしょ、由美子は体が強いよ・・そして心も強い』と笑顔で返した。

関口医師は若いナースに何か指示を出して、麦茶を出してくれた。
「そっか・・心も強いんだな」と笑顔で返してきた。
『強いよ～・・よく意地悪される』とウルで返した。
「そういうタイプなんだね、ヒトミにもされてたろ」と関口医師が笑顔で言った。
『ヒトミは怖かった・・９歳で体の触り方怒るから』とウル継続で返した。

その時、乳児を抱いた母親が入ってきて、関口医師に挨拶をした。
私は驚いてその乳児を見ていた、やっと首が座った感じの子だった。
その強い瞳の意思に驚いていたのだ、それはエミに近い強さを持っていた。

「由香ちゃん、４ヶ月なんだけど・・率直な感想を言ってくれ」と関口医師が言った。
『俺は初めて、天才に会ったのかも知れない』と笑顔で返した。
「えっ！・・天才ですか」と母親が驚いて言った。
『お母さん・・お悩みは何ですか？・・心配性ですね～』と笑顔で近づいて、由香を抱かせてもらった。
「全然泣かないんです・・体は健康なんだけど、心配で」と母親が答えた、２０代前半であろう、まだ可愛いという感じの人だった。

『泣きませんよ・・この子は、自分が出来ない事に対して泣きませんよ』と母親に笑顔で言った。
「４ヶ月ですよ・・まだ」と母親が真顔で言った。

『だから天才・・天才と呼ばれる人は、変わり者だと言われますよね。
特に幼少期は・・その特異性で、偏見の目で見られたりします。
なぜならば、退屈なんですよ・・同年代より進みが速いから。

この子の今の欲求は、知りたいなんだと思います。
だからその部分を満たしてやれば、子供らしさも出てきますよ。
この子はオムツを交換してもらうのさえ、申し訳ないと思ってますね。
世界地図が良いかな・・写真の図解が沢山載ってる。
広い世界を感じさせて、自分の未熟さを理解させるんです。
体が大きくならないと、何も出来ないとね。
お母さん・・才能を伸ばしてあげて、同じ年代の子供と上手くやれないかも知れない。
だから影でサポートしてあげて、両親が理解者でいてあげてほしいです。
この子はその才能を伸ばせねばなりません、選べれた人間なのでしょうから』

心配げな母親に、笑顔で言って窓際に歩いた。
《由香〜・・駄目でちゅよ、お母さん心配してますね〜・・どうしましょう?》と由香の強い瞳を見て、心で囁いた。
波動が何度も来ていて、ユリカの興味津々光線を感じていた。
《由香・・退屈なんだよね、でもたっちして、あんよしないと・・何も出来ないよ》と囁いた。
由香の瞳は本当に強かった、４ヶ月の乳児の瞳が。
《仕方ないな〜、由香は可愛いから女優さんが出来るかな・・無理か〜４ヶ月だし》と二ヤで囁いた。
その時に瞳の色が変化した、私は内心ニヤニヤしていた、その負けず嫌いを驚きながら。
《女優さんって凄いんだよ、泣いたり笑ったりが・・どんな時でも出来るんだよ・・まぁ４ヶ月では無理だけどね》と笑顔でとどめを刺した。
由香の顔が笑顔になった。
《上手だね〜・・それが笑顔・・嬉しいときだね・・でも泣き顔は

無理だよな～》と追い込んだ。
由香はビッって感じで目を潤ませて、涙を流した。
《声は無理なんだね～・・４ヶ月じゃ無理だよね～》と追い詰めた。
「ビャ～」という感じの、少し下手くそな泣き声で由香が泣いた。
私は二ヤで由香を見ながら、母親に振り向き、慌てた顔を作って歩み寄った。
『意地悪言ったら・・泣いちゃった』と固まってる母親に笑顔で言った。
私は母親に由香を渡して、由香を見る母親に囁いた。
『お母さん・・今は泣かないで、由香が自信を無くすから』と耳元に囁いた。
母親が私を見て、笑顔になって頷いた。
私は由香の手を握り、瞳に語りかけた。
《由香・・女優さんはどんな時も女優なんだよ・・出来ないか４ヶ月では》と笑顔で囁いた。
由香の泣き声が大きくなり、私は二ヤを出さないように必死だった。
母親の可愛い女優を見る瞳が、愛に溢れていて、私は嬉しかった。
私はこの一度しか由香に会っていない、今はＴＶでその元気な姿をたまに見ている。
その笑顔でコメントする画像を見ながら、今でも呟いてしまう・・二ヤ顔で。
《女優だな～》と心で囁きながら見ている、笑顔の波動に包まれて。
久美子は私にとっても、夢だった。
音楽という成功率の低い世界、挑戦者の数は無限に存在している。

久美子は音楽家として成功したのだろうか、私には分からない。

久美子は選択の時に、全て自分らしくにこだわった。

アメリカでチャンスが何度も有ったと聞いた、しかしそれにより縛られる事を恐れた。

音楽とは自由でないといけないと言う、誰もが親しめ楽しめる物でありたいと。

だから金の為には滅多に弾かない、今でもメディアには出ない。

生音にこだわり続けた、リアルな響きに全てを賭けた。

今でも不遇な子供達の前で弾く時は腰を浮かす、そして最後に右手の拳を突き出す。

あの右手の拳の意味・・豊の強い意志を受け継いでいるのだろう。

既存を拒絶する女神・・魂のピアニスト・・久美子。

SAKI & YUMIKO

選ばれた人間がいるのだろうか、はっきりとした根拠は無い。
しかし確かにいると感じさせる者がいる、途方も無い低確率の中で選択された者が。
それが幸せな事なのだろうか・・その答えは、本人の生き方にかかっている。

私は関口医師と別れて、ミホの病室に行った。
沙紀のベッドには誰もおらず、奥に進むとミホが夕食のトマトを見ていた。
『あ～・・ミホ、トマトだけ残して・・美味しいのに』と笑顔で言った。
私は知っていたのだ、ミホは赤い物は口にしない事を。
ミホは私を見ると、食器の乗ったお盆を少し押した。
『良いの～・・ラッキー』と言って笑顔でトマトを食べた。
ミホが私を見ているので、最高に美味しそうな表情で食べて見せた。

私はお盆を廊下の配膳カートに戻し、ミホの前に座って手を握った。
ミホは夕暮れの街を見ていた、私は独り言のようにＰＧの話をしていた。
ミホは何も返して来ないが、拒絶もしていないと感じていた。
私は立ち上がり、ミホの額に手を当てた、ミホは瞳を閉じていた。
これが２人の別れの挨拶になっていた、ミホの体重が私の腕に乗ってきて。
私は優しくミホを寝かせて、カーテンを閉めた。

『おやすみ、ミホ』と笑顔で囁いて、部屋を出た。
由美子の病室に歩いていると、遊戯室で遊ぶ沙紀が見えた。

母親は離れた場所で本を読んでいた、沙紀は2歳と4歳位の男の子と積み木を積んでいた。
3人は意思の疎通が出来てるようで、沙紀も楽しそうだと感じた。
母親と目が合って、笑顔で頭を下げて病室に向かおうとすると。
沙紀が私に気づき立ち上がった、私は遊戯室に入り沙紀を抱き上げた。

《小僧ちゃん・・今日2回目、沙紀、嬉しい》と沙紀が伝えて来た。
『俺もだよ、沙紀・・沙紀、小僧ちゃんのお友達に会ってくれる？』と優しく聞いた。
《会いたい・・奥で寝てる子だね》と返してきた。
私はもう驚かなかった、沙紀と由美子は、私の想像など及ばない世界にいると確信していたから。
『うん・・由美子ちゃん、5歳だから・・沙紀がお姉ちゃんだから、友達になってね』と笑顔で言った。
《うん、早く、行こう》と沙紀が急かした。
私は母親に沙紀を借りると伝えて、笑顔の母親に見送られ遊戯室を出た。

婦長がナースステーションから見ていた、婦長は笑顔で頷いた。
私も笑顔で返して、病室を目指した。
由美子の部屋に入ると、祖母が夕食の弁当を食べていた。
私は笑顔で頭を下げて、由美子の横の椅子に沙紀を座らせた。
私が由美子の手を握った、その温度の揺れの強さに驚いた。

『由美子、お友達を紹介するね、沙紀ちゃん9歳・・お姉ちゃんだから仲良くしてね』と笑顔で言った。
《うん・・やっと会わせてくれたね、小僧ちゃんの意地悪》と返された。
『ごめんよ～・・怒らないでね』とウルで返して、沙紀に由美子の

手を握らせた。
『2人とも少しだけだよ、疲れるから・・これから毎日でも会えるんだからね』と2人の手を握り伝えた。
《は～い》と2人の返事が帰ってきた。

私は沙紀の少し後ろの椅子に座って見ていた、暖かい空間が出来ていた。
私は美由紀が初めて、ヒトミに会った時を思い出していた。
あの時と同じ、暖かい空間だと感じていた。

「交信できているみたいね」と後ろから婦長が言った。
『うん、大丈夫だよ・・2人は友達になったよ』と振り返り笑顔で言った。
「狙いは互いの刺激かしら？」と婦長が私の横に来て笑顔で聞いた。
『それもあるけど・・見たいんだよ、沙紀が描く由美子を・・大切なヒントをくれそうで』と2人を見ながら返した。
「私は作品を全て見てるけど、最初の色鉛筆の作品・・あれにも深い意味があったの？」と婦長も2人を見ながら言った。
『ありましたよ・・驚くべき深い意味が・・贈られた女性は、何より大切な宝になりました』と笑顔で答えた。
強く暖かい波動が何度も来て、沙紀と由美子を包んでいた。

「そうなんですね～・・私に出来る事が、何かあるかしら？」と婦長が聞いた。
『婦長から関口先生に、お願いしてもらえますか？・・沙紀が由美子に会う自由を』と真顔で言った。
「了解しました、どんな事をしても許可を取って見せます」と微笑んで、由美子の側に歩いて行った。
由美子の検温を婦長がしてる間も、2人は手を繋いでいた。
暫らくして沙紀が振り向いて私を見た、私は2人に笑顔で歩み寄っ

た。

『仲良くなれたみたいだね、２人とも良かったね』と２人の手を握り優しく言った。

《うん》と２人が同時に元気よく返してきた、その力強さが嬉しかった。

『じゃあ由美子はおやすみ、また明日』と笑顔で言った。

《おやすみ、由美子ちゃん》と沙紀が伝えた。

《おやすみ、沙紀ちゃん・・小僧ちゃん》と由美子が伝えてきて、眠りに入った。

私は沙紀を抱き上げて、祖母に沙紀を紹介して部屋を出た。

沙紀を抱いて部屋に歩いていると、強い伝達で沙紀が言った。

《小僧ちゃんお願い、今から、もう一枚、描きたい》と沙紀が強く伝えてきた。

『今日は土曜日だからスペシャルサービス、でもおやすみの時間には寝るんだよ』と笑顔で言った。

《やった～・・約束、守る》と沙紀が喜びの温度で言った。

『沙紀の嬉しい見つけた』と笑顔で返して、部屋に入りベッドに座らせた。

スケッチブックを沙紀に手渡し、宝物のように仕舞ってある、色鉛筆を出して描き始めた。

下書きは当然のように無く、最初に輪郭を迷い無く描いた。

それだけで由美子だと分かった、次に瞳を描いた、私は慌てて視線を移した。

沙紀が書いた目蓋の稜線は、絶対に開いている瞳だと感じたのだ。

明日の楽しみにと思ったのもあるが、泣いてしまいそうで怖かったのだ。

私は母親にスペシャルサービスと笑顔で言って、沙紀にさよならし

て部屋を出た。
興奮していた、目蓋の上の稜線を見ただけで、感動していた。
私は爽快な気分で病院を出て、夜街に歩いていた、夕焼けを背に受けながら。
歩いていると一番街の西口に、制服の集団が睨み合うのが見えた、見慣れた中学の制服だった。
緊迫感があったので、私は避けて中央通に入った所で腕を掴まれた。
「目障り・・邪魔だから、散らしてくれよ」と呼び込みの佐々木の爺さんが言った。
『蘭のスパイのくせに』とウルで返した。
「次回1回見逃してやろう」とシワシワ二ヤで返された。
『仕方ないな～・・馬鹿な子供が』と笑顔で言って、一番街に戻った。
2つの集団の向かい側には、見慣れた顔が揃っていた。
ギブスを付けたノリ番長の横に、バルタンが立っていた。

『〇中のシマは、若草通りだろうが・・番街に出張ってんじゃねえよ』と私が隣中の集団を掻き分けて前に出て言った。
「げっ！・・いつ転校した」とバルタンが笑顔になって言った。
「聞いてないぞ・・まぁラッキーな事だけど」とノリ番長も笑った。
「なんだ～・・お前」と後ろの奴に肩を掴まれた。
『なんだ～って・・正義の味方でしょ、この場面での登場は』と振り向いて笑顔で言った。
「なめとるんか～・・俺は」と強気に出てくる男を見ていた。
『名前言うの・・そしたら俺も名前言うよ、お前・・俺の肩掴んだんだから』と笑顔で返した。
「セイちゃんまずいよ」と横の男がセイと呼ばれる男に耳打ちした。

セイが私を見た、私は笑顔でセイを見ていた。
『なぁセイちゃん・・こんな所での揉め事は迷惑なんだ、こいつらも引かすから、そっちも引けよ』と真顔で言った。
「分かった、そうする」とセイも真顔で返してきた。
私は笑顔で頷いて、振り向いた。
『じゃあノリ番長、そういう事で・・解散』と笑顔で言って、ＰＧに向かった。
「了解・・帰ろうぜ」とノリ番長が言って、帰る集団に笑顔で手を振って別れた。

私が西橘に入った所で、またも腕を掴まれた。
「しかし相当にやばい男だね～」と腕を組んだホノカが微笑んだ。
『噂が一人歩きするの、ホノカなら分かるでしょ』と二ヤで返した。
「うん・・分かる～・・ホノカは可愛いって噂が、一人歩きしてる～」と華麗に微笑んだ。
『ホノカ・・ジンと付き合わないの？』と笑顔で聞いてみた。

「まだね・・私もジンを好きだよ。
でもジンがホストを辞めるまで、待ってと言ってるの。
けじめを付けて欲しいのよ、私が愛する男ならね」

ホノカは美しい真顔で言った、私は笑顔で頷いた。
『じゃあそれまでは、俺が腕を組んで、抱っこしてやろう』と笑顔で言った。
「お熱添い寝もよろしく」と華麗に微笑んだホノカに、手を振って別れた。
「１回分・・終了」と佐々木の爺さんが大声で言った、私はウルで頷いて、裏階段を登った。

指定席に行くと、久美子が最後の激しい曲を弾いていた。

女性達に緊張感があった、北斗の復活を感じているようだった。
シオンもマキも、フロアーの女性の中にいた。
私は違和感無く存在する、２人のドレス姿を想像したいた。
少しの寂しさを上回る喜びがあって、自分の変化を感じていた。
久美子が弾き終わり、全員で拍手をしている時に、銀の扉が開いた。
純白のドレスを着た北斗が、堂々と3歩進み、神聖な場所に深々と頭を下げた。

女性達の息を飲む音が聞こえるようだった、その深い経験が醸し出す存在感に押されていた。
北斗は顔を上げて、笑顔になって女性の方に歩いた。
サクラさんと蘭が北斗を囲んで、女性全員に笑顔が溢れた。
その時にスカイブルーのドレスを着た、ユリさんが出てきた。
私はユリさんの変化を感じていた、私がＰＧに来た当初は、白か赤のドレスしか着なかった。
この頃から、多彩な色を着用するようになっていた。
自分に対し飽くなき挑戦をしているようで、その常に前向きな姿勢に憧れていた。
土曜の夜で女性も多く、大きな円を描いた、そこにユリさんが歩いて行った。

「紹介します・・北斗です。
１０代で全盛期の大ママに、真っ向勝負を挑み。
ＰＧのオープニングメンバーで、歴史に残る最初のＮｏ１です。
それから1年以上Ｎｏ１に君臨して、私やサクラに夜の女を教えてくれました。
私はこの場所以外では、北斗姉さんと呼びます。
２人にだけ姉さんを付けます・・北斗姉さんと、律子姉さんにだけです。
それは2人の生き方に憧れているから、生きる姿勢に共鳴するか

らです。
感じて・・そして挑みなさい・・その生きる姿勢を感じて下さい。
では・・北斗、よろしく」
ユリさんの強い言葉が響いていた、北斗は笑顔で返した。
「北斗です、６年のブランクがありますから、新人と思って接して下さい。
私の復活の動機は、おいおい聞かれるでしょう。
でもこの場所に立った以上、私は夜の女を見せます。
私は誇りに思っています、夜の仕事をしていた事を。
それをお見せします・・だから瞬きすらせずに見ていてね。
私は復活劇で・・伝説をもう１つ作りますから」
北斗の言葉が強く響いた、私は驚いていた。
その言葉の表現が、自分に自信と覚悟がないと言えない言葉だったから。
「よろしくお願いします」と北斗が真顔で言って、深々と頭を下げた。
「よろしくお願いします」と女性達も全員で返礼した。
「それでは今夜も開演しましょう」の言葉に、「はい」のブザーを鳴らした。
私は指定席に座り、準備の確認をしていた。
「エース、ありがとう」と北斗が来て微笑んだ。
『お礼はいらないよ、北斗・・俺は再確認したよ、熟れた女が好みだって』と笑顔で返した。
「もっと強く想わせてあげるよ、１週間待ってね」と北斗が美しい笑顔で言った。

『了解・・1週間後、魅宴から始めよう』と笑顔で返して、笑顔で頷いた北斗を見送った。

その日も土曜日の恒例になった、開店時満席記録でスタートした。
北斗はユリさんとサクラさんと蘭に、交互に付いて回っていた。
その魅力は、若手には絶対に手に入らない物だった。
物腰の柔らかさが成熟した女の色気を放ち、微笑みに大きな経験量を湛えていた。
その存在が熱量を上げていた、若手に火が点いて、その若さの魅力で燃えていた。
私は一安心して、シオンの所に行った。

マキが必死でサインを繋いでいた、それをシオンがニコちゃんで見ていた。
『マキ、やるね～』と笑顔で言った。
「話かけないで・・黙ってなさい」とマキが前を見て強く言った。
『シオン・・マキが怖いから、セリカに慰めてもらってくる』とウルで言って、ニコちゃんシオンに見送られて出かけた。

夜街は土曜のスタートで活気に溢れていた、関係者も人の多さを笑顔で歓迎していた。
私はローズのビルを目指していた、ユリカの店の明かりが見えた。
《ユリカ、張り切り過ぎるなよ～、あとでチェックに行くね》と心に囁いて、波動の返事を聞いていた。
ゴールド・ラッシュの受付に歩いていると、フロアーの熱気が出ていた。
私は受付に挨拶をして、裏からフロアーを見ていた。
一瞬でセリカを発見した、それほどに輝いていた、流星群が尾を引いて流れていた。

「完全に覚醒したよ・・元々その才能に溢れていたから」と私の横にマユが来て微笑んだ。
『うん、そうだね・・レイカも覚醒してるよ、エミに触れて』と笑顔で返した。
「レイカは幸せだよ、あの3人の側にいれてね」とマユが美しい笑顔で言って、フロアーに戻った。
私はセリカを見ていた、流星の輝きと目が合って、セリカが美しく微笑んだ。
私も笑顔で返して、小さく手を振って店を出た。

そのまま最上階に登り、ローズを覗いた。
ＢＯＸに2組が入っていた、カウンターの奥に座り、リアンを見ていた。
遠くからでも、炎が強まったのがはっきりと分かった。
強気の顔が隠している、可愛いリアンの事を想っていた。
愛には愛で応える、愛に対して正直に生きる。
その素敵な心が、近い将来・・最強の女帝に導くのだった。

私はリアンに笑顔で手を振って、店を出てユリカの店に向かった。
ユリカの店のＢＯＸは満席で、さすがユリカと思ってカウンターに座った。

「巡回ご苦労・・さっきは泣きそうで逃げたね」とユリカが爽やかニヤで歩み寄った。
『うん、沙紀が由美子の目蓋の上の線を描いたから、嬉しくて目を逸らした』と笑顔で返した。
「開いてる感じだったの・・楽しみだね～」と隣に座り爽やかに微笑んだ。
『こんな楽しみが有って、なんか幸せを感じたよ』と正直な気持ちを返した。

「私も同感だよ・・今日、額に入れてリビングに飾ったよ・・あの絵があるだけで、暖かいよ」と嬉しそうに言った。

『美由紀の言葉の凄さに驚いたよ、内面を描いて、外面を描ききる。
沙紀はそうなんだよね・・そしてユリさんは、内面が全て表に出てるんだ。
あの描写は、そう言っている・・笑顔じゃなくて、微笑を描いたし。
北斗と再開できる、喜びに溢れるユリさんを。
ほんの一瞬で感じたんだね、それを撮影して描くんだよ。
沙紀が言ったんだ、自分に絵を残さないで良いのって聞いたら。
嬉しいを感じたくて描くんだから、自分はいらないと言った。
明日の由美子の絵・・今から楽しみだけど。
沙紀からじかに受け取る俺は、笑顔でいられるのかって思ってる。
もう少しなんだ・・もう少しで沙紀は分かると思う。
嬉しいの涙を・・嬉しいで流す、素敵な涙を。
俺はそれを沙紀に伝えたい、だからこだわってるんだ』

私は感情的な心を、ユリカの前だけは正直に出せた。
隠す必要が無いから、蘭との関係とは違う、ユリカという絶対的な存在だった。
エミの言ったあの言葉、【エースがユリカちゃんを愛するのと、同じだよ】と伝えてくれた言葉。
私には大切な宝物の言葉が、あれからずっと響いていた。

「その話を、あなたの周りの女性全員にしてね。
私は今、本当に嬉しいよ・・私にも出来る事があると分かって。
嬉しいの表現・・それが全員出来るでしょう、今のメンバーなら。
明日の蘭が絶対に伝える、あの青い炎で包む込む。
そしてシオンが見せる、裏表のない大人の女を。

そこからだね、私達は感謝してるから・・沙紀が描いてくれる事に。
私にとってあの絵は、妹との唯一の思い出になったよ。
本当に嬉しかった、見るたびに・・嬉しいで溢れるよ。
だから伝えたい・・沙紀に嬉しいという事を」

ユリカは深海の瞳を潤ませて、優しく囁いた。

『ありがとう、ユリカ。
俺はシオンの次は、美由紀を連れて行くよ。
沙紀にステップアップを要求する、そして由美子に感じてもらう。
俺は美由紀には言ってないけど、美由紀の想いは全てヒトミに伝わっていた。
その事を美由紀が聞かない限り、俺から話す事はない。
いつか聞いてくるだろうと思ってる、美由紀は絶対に諦めないから。
今までも、どんなに高い壁も乗り越えてきた。
その言葉が伝わる・・沙紀にも由美子にも、そしてミホにも。
3人に、ステップアップを要求出来るのは、美由紀だけなんだと思う。
障害を克服してきた・・美由紀だけが、その権利を持っている。
頑張れと言えるのは・・美由紀だけだと思ってるんだ』

間近にあるユリカの美しい笑顔に、笑顔で伝えた。
「うん、絶対にそうだよ・・私は美由紀に会えて、本当に嬉しかったよ」と爽やかに微笑んだ。

『美由紀の方がそう思ってるよ。
俺はあの話を、美由紀がしたのが嬉しかったよ。
マキの美由紀を見る表情で感じた、俺は側にいるから分からなか

った。
美由紀はまた、何か途方もない、高い壁を越えている。
常人では絶対に超えられない壁を、今日の言葉が強く重かったから感じた。
沙紀にどう響くのかが、楽しみだよ』
私は寄り添うユリカに微笑んだ、ユリカも笑顔で頷いた。
「そして・・登場するのね、同世代の星が。
エミの強い意志を感じさせ、ミサの強く優しい感受性を感じさせ。
そして切り札が登場する、マリアがその力を見せるのね。
沙紀が描くマリア・・これ以上の楽しみなんて無いよ」
ユリカが嬉しそうに微笑んだ、私も笑顔で返して立ち上がった。
ユリカと店を出て、ユリカを抱き上げてエレベーターまで歩いた。
「私は一人では行けないから、また病院に連れて行ってね」と爽やか笑顔で言った。
『もちろん、ユリカと蘭には・・どうしても手伝って欲しいから』
と笑顔で返した。
「ありがとう、嬉しいよ」と言って頬にキスしてくれた。
私はユリカを降ろし、ニコちゃんでユリカに手を振って別れた。
通りをニコちゃんのまま歩いて、魅宴に入った。
フロアーの裏から、熱の高いフロアーを見ていた。
2面性が強くなったと感じて、ミコトを見ていた、笑顔で盛り上げていた。
「あっ！・・ちょうど良かった、頼みがあるの」とヨーコが笑顔でやってきた。
私は驚いていた、ヨーコの可愛さに華やかさが見え隠れして。

清楚さが増していて、お嬢様の雰囲気は、ホノカを凌ぐ物だった。
『なんでしょう・・ヨーコお嬢様』と笑顔で返した。

「ミコト姉さんと、リョウ姉さんが大ママに提案して。
ＰＧのようなサインが欲しいって、ミサキ姉さんも少ししか分からなくて。
大ママがユリさんに話したら、即ＯＫしてもらったらしくて。
私が覚えて、皆に教える事になったの。
シオン姉さんは、何時位が良いかな～？」

ヨーコは可愛い笑顔で言った、私も笑顔で聞いていた。

『シオンは学校始まるから、でもハルカはいつでもいるから。
ヨーコの時間で良いと思うよ、マキに連絡して調整すれば。
昼間の方が互いにゆっくりあるでしょ、俺からも３人に言っとくよ。
実は千鶴からも前言われてて、ゴールドのケイコって１７歳も来るかも。
俺は３店が同じサインだった方が良いし、それで話通しておくよ』

ヨーコの嬉しそうな笑顔に、笑顔で言った。
「ありがとう・・頼りにしてます、エース」と清楚な笑顔で返してきた。
『なんか可愛さが増したな、ヨーコ・・男には気を付けろよ』と二ヤで言った。
「了解・・私も抱っこしてね」と清楚二ヤで返された。
『長年の夢が叶う日が、やっと来るんだ～』と二ヤで返した。
ヨーコも二ヤで返してきて、仕事に戻った。
私は魅宴を出て、ミチルの店に歩いていた。

夏の夜は熱を抱えていたが、風向きが少し変化していた。
爽やかな秋風を、少しだけ纏って吹いてきた。
私は忙しい生活を楽しんでいた、明日は蘭父さんと蘭母さんに会えると思っていた。
そして瞳を開いた、由美子とも会えると感じていた。

優しい風が吹き抜けた、狭い通りを吹き抜けて行った。
私は振り向くことも無く、前だけを見て歩いていた・・熱気に包まれる夜街を。

沙紀の描いたユリさんの絵、その本質を見事に言い当てた美由紀。
沙紀は内面を描く・・その行為は、知りたかったのだ。
沙紀は美味く言葉が出なかったから、人に言葉で問いかける事が出来なかった。

でもそれは身体の機能的な事で、沙紀は言葉自体は美しい物を持っていた。
私はそう確信している、だからこそ沙紀の絵には、強いメッセージが有った。
その相手の内面の描写で、問いかけているのだ。
それは嬉しい事なの？・・そう純粋に問いかけてくる。
沙紀は唯一、私の絵だけは描いてくれなかった。
私は沙紀の退院が決まった時に、沙紀を抱っこして聞いた。

どうして俺を描いてくれないのかと、ウル顔で聞いてみた。
それはまだ描きたくないの、小僧ちゃんは私とお話できるんだから。
沙紀はそう答えてくれた、私はその言葉で確信した。
沙紀の絵は、伝達方法なのだと・・だからこそ強く伝わるのだと。
私が所有する沙紀の絵は、４枚ある・・全て大切な宝物である。
しかし特別な一枚がある、淡い色で描かれたその絵には・・。
由美子とヒトミが描かれている、二人が笑顔で駆けてくる。
高原の草原を、こちらに向かい駆けてくる姿が描かれている。
躍動感と生命力に溢れた2人、まさに私に飛びつこうとするような一瞬を描いている。
沙紀はもちろん、ヒトミの写真すら見たことが無い。
しかしその絵のヒトミは鮮明に描かれている。
まるで幼い時からの、友達を描くように、緻密な描写で描かれているのだ。
私には何にも変えられない宝物だよ・・ありがとう・・沙紀。
私の心を描いてくれて・・内面を気づかせてくれて・・優しく応援

してくれて・・。

１０年後の解答

晩夏の宵闇の中に、光り輝く場所がある。
幻想の灯火に、寂しがりの放浪者が闊歩している。
子供の私はその風景に溶け込めず、流れに逆らい歩いていた。

ミチルの店は満員状態で、私はカウンターの奥で座って見ていた。
ミチルと目が合い、妖艶笑顔で近づいてきた。

「完全復活だね、おめでとう」とミチルが微笑んだ。
『やっと自分でも、自覚出来てるよ』と笑顔で返した。
「今夜はただの巡回？・・連絡事項があるの？」と妖艶に微笑んだ。
『ミチル・・北斗を知ってる？』と笑顔で聞いた。
「私らの年代で、夜の仕事をしていて、その源氏名を知らない奴はモグリだよ」と笑顔で答えた。

『北斗をジンの派遣会社の最初の登録者にした、北斗は今夜ＰＧで復活した。
もちろん６店全てに出てもらう、当然ミチルのこの店にも。
今の若い挑戦者に見せる、北斗という生き方を。
その前向きで、どんな事も笑顔で乗り越える・・強い精神力をね』

私は驚いているミチルを見ながら、笑顔で言った。
「エース・・最高だよ、緊張するけど・・月曜にでも会いに行くよ、会いたいからね」と妖艶笑顔で返された。
『うん、待ってるね・・開店少し前には来てると思うよ、ホノカに北斗の事を話といてね』と笑顔で言って立ち上がった。
ミチルにドアまで見送られて、笑顔で別れた。

人混みの本通りを避けて、裏路地を歩いていた。
怪しすぎる風俗嬢に手を引っ張られて、ウルで看板の１８禁を指差して笑いあっていた。
その時に声をかけられる、夜街のドン小林の爺さんが大声で呼んだ。
「エース・・暇か？」と相撲取りのように太ったドンが、多分微笑んでいた。
ドン小林は大きなキャバレーを3店と、妾にスナックをやらせていた。
私は存在こそ知っていたが、話した事は無かったのだ。

『嬉しいですね～、ドン小林に名前を覚えてもらえるなんて』と笑顔で近づいた。
「何を言うか・・こっちこそ知っていてくれて嬉しいよ」とニヤリという感じで笑った。
『それで何でしょう？・・楽しい話ですかね～』と探りを入れた。
「まぁな・・ちと付き合えよ」と言ったドンに並んで世間話しながら歩いた。
呼び込み達のドンへの挨拶の仕方が、あまりにも丁寧なので二ヤで見ていた。

「なんか・・楽しいのか？」とドンが笑顔で言った。
『ドンは凄いね～・・・挨拶の仕方から違うよ』と二ヤで返した。
「なんせこの街が出来た時からいるからな～」と前を見て言った。
中央通の大きなビルの3階に上った、キャバレー・ホノルルの大看板が歓迎してくれた。
ドンに案内され、一番奥の豪華なＶＩＰＢＯＸに入った。

店内は想像よりも明るく、女性たちのスカートの短さ以外は、ＰＧと変わらなかった。
『思ってた以上に明るいんだね、もっと暗いのかと思ってた』と笑

顔でドンに言った。
「今日は土曜日だから、照明を明るくしてるのさ」とドンが笑顔で返してきた。
『土曜だから明るいの？・・なぜでしょう、ご教授お願いします』と笑顔で聞いた。

「ＰＧも・・どこの店も、土曜は客の回転率を稼ぎたいだろ。
暗いと客はリラックスするんだよ、少しだけ明るくすると現実に戻るんだ。
だから長居はしなくなるんだよ、キャバレーは特にそうなんだよ。
入店料が美味しいからな、延長料金なんて土曜はいらないのさ。
だから客が押し寄せるような週末は、少しだけ明るくしてるんだよ」

ドンが笑顔で丁寧に説明してくれた、私も笑顔で頷いた。
『やっぱり凄いな～・・さすがにドンだね』と少年の笑顔で言った。
「お前だけだよ、俺に面と向かってドンと言うのは」とドンが嬉しそうに笑った。
３０前後の美しい女性が、シャンパンと豪華なフルーツ盛を持ってきた。
私にもシャンパンが注がれ、３人で乾杯をした。

「酔う前に聞きたいんだが、良いかな？」とドンが真顔で言った。
『何でもどうぞ』とメロンを食べながら、笑顔で返した。

「お前が提案した、共同体の話を・・アスカから聞いてな。
凄い事だと関心したんだよ、そして将来的には女性の派遣を考えてると聞いてな。
その基本的な考え方を、聞きたいと思って誘ったんだよ。
共同体の趣旨と、今後の展開と、今の問題点を聞きたい。

ワシも3店持ってるが、時代の先端を走る店を次に考えているんだよ。
東京の六本木で今話題になりつつある、キャバクラってやつだよ。
ようするに、キャバレーとクラブの中間って感じかな。
クラブほどの料金を取らずに、キャバレーほど激しくない。
宮崎では、ＰＧとゴールド・ラッシュがその分野に入ると思うよ」
ドンはその物腰の落ち着きで、安心感が桁違いにあった。
私は興味津々で聞いていた、ドンは中学生の私に真剣に言ってくれた。

『今現役Ｎｏ１ホストのジンが、３年後をめどに、人材派遣の会社を作りたいと言って。
それに大ママとユリさんが、提案したんだよ。
夜の女性の派遣はどうかと、ジンは考えて・・興味を持ったらしい。
そして俺も3年後に、バイトで手伝うと約束したんだ。
俺はＰＧに来て思ってた事があって、それをそのタイミングで提案したんだよ。
俺は夜のルールが、その世界を狭くしてると思ったんだ。
客が流れるから・・女性を他店に出さない。
意味は分かるけど、それじゃあレベルも上がらない。
未来永劫に、男が酒を店で飲む文化が続くとは限らない、それを守るには。
飽きさせない変化し続けるしかない、それが出来るのは女性達だけなんだよ。
どんなに奇抜な趣向の店でも、長続きはしない。
長続きする店は、結局女性のレベルが高いんだよ。
もちろん容姿も重要だけど、会話も・・極論言うと内面も。
だから俺は五天女とゴールドの千鶴に提案した、相互交流をして

刺激し合おうと。
それでしか底辺は上がってこない、レベルを押し上げるのは多数だから。
飛び抜けた5人が存在しても、夜街全体のレベルは上がらない。
それは自分の店の一人しか見れないから、同じの舞台に立たないと感じないから。
だから大ママに提案した、共同体でやってみないかと。
五天女も千鶴も賛成してくれて、今リアンとユリカを動かしている。
当然クラブの若手も、スナックのフォローに入る。
そこで気づくんだと思う、多数を相手にする事で気づくんだ。
全体の空気を読むという事を、大きな流れを感じて接客することを。
俺は経験させてやりたいんだよ、自分で選んだ場所が素敵な場所だと。
大切な季節を賭けて、必死で走ってるフィールドは素敵な場所なのだと。
個性の異なる本物達を感じさせて、全力で走りきり、心残り無く引退させてやりたい。
若い挑戦者に経験するチャンスを与える、そして夜街のレベルを底上げする。
それが今回の共同体の趣旨だよ、今スタートしたばかりだけど』
そこまで言って、シャンパンを一口飲んだ。
ドンも女性も興味津々笑顔で、頷きながら聞いていた。
『今からの展望なんだけど・・ユリさんが公然と発表したから言うけど。
現段階での俺の最終目標は、東京ＰＧの成功なんだよ。
ドンが今言った六本木の話し、さすがだと思ったよ。

東京が日本一の街ならば、それに挑戦するしかない。
ユリさんも俺も見せたいんだ、宮崎のレベルは充分トップレベルだと。
夜街を引退した女性から、今挑もうとしている女性まで全てに。
理由があって、夜の仕事を選んだ女性も多いだろうけど。
全員に誇りに思って欲しい、大切な季節を賭ける意味のある場所だと。
夜の仕事をしたことに対し、誇れる何かをプレゼントしたいんだ。
5年後・・東京に殴り込む、その為に底辺を押し上げる。
俺の勝手な夢だけど、その為に今後を展開していく。
現時点での問題点は、まだ浮き出てこない。
これから様々な問題点が出てくる、それを3年でクリアーして、1つの形にしたい。
ドンにも利用してもらえる、女性の派遣を出来るようにね』
ドンの嬉しそうな笑顔を見ながら、笑顔で伝えた。
「噂以上に面白いな・・エースと呼ばれる男は。
期待してるよ・・問題点が出たらまた話してくれよ。
俺も自分の3店のシステムを考えてみるよ、たしかに底辺が上がらんと駄目や。
ユリとお前ならやってくれると思ったよ、東京に見せ付けてくれよ。
宮崎のレベルは、東京にも一歩も引けをとらないとな」
ドンが笑顔で言った、私も笑顔で頷いた。
『じゃあドンが相談に乗ってね・・それが一番心強いから』と笑顔で言った。
「おう・・いつでも来いよ、俺は暇な隠居だからな」と笑っていた。
それから私の聞き魔癖が出て、ドンに夜街創世記の話を聞いた。

帰りに女性がエレベーターまで送ってくれて、笑顔で手を振って別れた。
私は呼び込みさん達の事情聴取を、とぼけながらかわしてＰＧに戻った。

指定席に行くと、満席状態継続中で、熱が高かった。
私は座った時に感じた、女性が二ヤで私を見ている事に。
私は不思議に思って、客席を見回して完全凍結した。
３番に清次郎と鬼瓦と極マサが来ていた、蘭とカスミと北斗が付いて笑顔が溢れていた。
私は慌ててマキを見た、最強二ヤで私を見ていた。

『意味が分からない・・どうなってるんだ』とマキに近づき言った。
「私の就職先の訪問だって・・清次郎ちゃんこういう店、一人で来れなかったみたいよ」とマキが二ヤ継続で言った。
『なぜ・・よりによって、鬼瓦と極マサの最強コンビを』とウルで返した。
「清次郎ちゃんが呟いたら、２人が進んで手を上げたって言ってたよ」とマキが笑った、私はウルで返した。
３番は鬼瓦と極マサを、カスミと北斗で盛り上げて。
清次郎爺さんは、蘭と笑顔で静かに話していた。
蘭の満開がずっと咲いていて、清次郎も嬉しそうで、私も嬉しかった。

私は挨拶をしなかった、いくら清次郎といえども、こんな場所で現役生徒には会えないと思っていた。
私は清次郎の優しさに感謝していた、その来店が意味する大きさを感じていた。

「北斗姉さん、どんな感じ～」と後ろからリアンが抱きついてきた。

『リアン、土曜の夜だよ・・さぼったら駄目でしょう』と二ヤで言った。
振り向くとリアンの瞳に涙があった、私は北斗の姿に感動したのだと思っていた。
「清次郎先生・・」とリアンが3番を見て呟いた、私は驚いていた、リアンの涙の訳に。
『リアン・・清次郎と知り合いなの？』と抱きついているリアンに囁いた。
「中3の時の担任・・いや・・恩人だよ」と強く抱きついて、私の耳元に囁いた。
『そっか～・・マキも中3の時の担任で、今の俺の担任だよ』と囁いて返した。

「そうなの！・・不思議な巡り合わせだね、確立的には相当低いよね。
今でも教壇に立つんだね、出世よりも・・教壇を、生徒を愛するんだね。
私が高校をなんとか卒業出来たのも、今・・こうして、夜街にいるのも。
全て清次郎先生のおかげなんだよ、先生が教えてくれたんだ。
高卒で昼の仕事に1ヶ月で挫折した私に、昼しかないのか？
そう問いかけてくれた、私の生きるステージは昼しかないのかとね。
それで気がついた、私のようなはぐれ者でも、認めてくれる場所があるかもとね。
そして清次郎先生が、教え子のいたPGを紹介してくれた。
そして出会ったんだ、北斗姉さんとユリ姉さんに。
ユリ姉さんも嬉しいはずだよ、清次郎先生の来店はね。
素敵な教師だとあの時言ってたから、私に絶対に汚すなと強く言ってくれた。

１８歳の・・私の身元保証人は、清次郎先生なんだよ。
教師なのに、公務員なのに・・なんの躊躇もなく、なってくれたんだよ。
だから私はここまでこれた・・汚せない大きな愛があったから」
リアンが優しく囁いた、私は心地よさを感じて聞いていた。
さすがリアンだと思っていた、無変換で愛には愛で応える言葉が。
その時ゆりさんから、サインが飛んだ・・リアンに、【指名】【３番】と薔薇の微笑で。
リアンは震えながら、最大級の炎を出して・・強く頷いた。
「エース・・私が３番に入るの見たら、ローズにこの事を伝えて・・出来るだけ早く帰るから」と極炎の微笑で言った。
『了解・・マキを同行させるから・・３人を引っ張って来いよ』と二ヤで言った、リアンは最強ニカで頷いた。
「愛の問題の宿題を提出してくる・・１０年で導き出した解答書を」
リアンは、極炎の潤む瞳で強く言った、私は真顔で頷いて、リアンの背中を優しく押した。
リアンは準備に行くのに、マキに声をかけた・・マキが真顔で強く頷いた。
私はその無変換の２人を見ていた、シオンも嬉しそうにマキを見ていた。
静寂が訪れるまでに、５分あっただろうか・・それほど早かった。
銀の扉が静かに開いた、女性達が一瞬固まった。
真赤な情熱のドレスを纏ったリアンが現れた、その体全体から炎が

燃え上がってるようで。
全てを燃やし尽くすと主張していた、大切な恩師にその姿を・・解答を見せる為に。
３歩進んで神聖な場所に深々と頭を下げた、そして頭を上げて３番の清次郎に微笑んだ。
清次郎は嬉しそうな笑顔でリアンを見て頷いた、蘭は清次郎とリアンを見て満開で笑った。

３番に向かうリアンは視線を集めていた、その極炎が燃え上がっていた。
カスミが席を立ち、リアンが笑顔で挨拶をして、清次郎の横に座った。
そして何も言わずに、清次郎に抱きついて・・泣いているようだった。
私はユリさんの言葉を思い出していた、メモの絵画を見たときに言った言葉を。
《それがプロなのか、私はまた突きつけられました》そう言った薔薇の言葉を。
嬉しそうな清次郎の胸で泣くリアンは、中３の少女のようだった。
夜街の身元保証人に、その恩人に・・リアンは、１０年の歴史を見せた。

フロアーを暖かい何かが包んでいた、ユリカの最強の波動がフロアーに向かって流れた。
私はリアンの涙で思っていた、沙紀に伝えたいと・・強く想っていた。
嬉しいの涙を・・その美しい涙の存在を、伝えたいと。
私はマキを見た、真剣なマキの表情で、リアンが何を言ったのかが想像できた。

私はマキと出かけた、マキは集中してるようで、声をかけなかった。
ローズに入り、いつもの女性がいたので、リアンの状況を言って。
マキを紹介した、やらせてみて欲しいと、リアンも私も思っている
と伝えた。
女性は笑顔で頷いて、マキと挨拶をして、マキをカウンターに連れ
出した。
若いサラリーマンと、上司であろう中年のサラリーマン２人の、３
人組の前にマキを立たせた。

マキは笑顔で頭を下げた、中年の上司が自分の頭をオールバックに
かき上げながら。
何かを笑顔で言った・・それを受け、マキもリーゼントをかき上げ
て。
「マキです・・そこんとこ、よろしく」とエーちゃんを真似て、唇
を歪めて笑顔で返した。
紹介した女性も、カウンターの３人組も、その隣の４人組の若者客
も爆笑した。
それで３人に火が点いた、沸点に向けて加速を始めた、同じエーち
ゃん好きの話題で。
私は気配を消して、厨房に入り・・奥の丸い椅子に座って見ていた。
斜め後ろから、マキの話術の巧みさを見せ付けられていた。

時に少女になり、時に美しい女性になり、時に爽やかな男になって
いた。
「ちょっと・・ＰＧの新兵器、凄すぎるよ」とローズの女性が美し
く微笑んだ。
『まだまだだよ・・照れが残ってる、１６歳だから仕方ないけど』
と二ヤで返した。
「１６歳！・・私は女帝の誕生を、目撃してるのかもしれない」と
マキを見ながら囁いた。

「奥のＢＯＸ、もうすぐ空くから、一応予約でとっとくね」と笑顔を私に向けた。
『うん・・多分リアンが、３人を引っ張ってくるよ』と笑顔で返し、笑顔で頷いた女性を見送った。

そして私は衝撃さえ受ける、マキが３人組と４人の若者達を１つにしたのだ。
上司２人に笑顔が溢れていた、若者達も年長者を立てていた。
マキが２組に話題を提供して、全員がその話の流れに乗っていた。
４人組みは、春に大学を卒業した、大学の頃の友人グループだった。
就職しての悩みを相談していた、中年の２人は嬉しそうにアドバイスをしていた。
そして少し歳上になるのであろう、３人組の若者が、経験からのアドバイスをしていた。
マキは笑顔でそれを聞いていた、優しい瞳で７人を見ていた。

カウンターの女性が大丈夫と判断したらしく、私に目で合図を送ってＢＯＸのフォローに向かった。
マキはそつなく水割りを作り、笑顔で対応していた。
私はまたも自分の想像力の無さを感じていた、マキがフロアーで見せるものも。
今までに無いものだと感じていた、その姿を見れるのが待ち遠しかった。

１時間ほど経ったころ、リアンが３人を連れて入ってきた。
マキの事を一瞬で理解したらしく、嬉しそうにマキに微笑んだ。
清次郎達を奥のＢＯＸに案内して、カウンターのお客に笑顔で挨拶をした。

「シオンより、マキの方が妹に見えるよ」と中年の上司が笑顔で言

った。
「そうでしょ～・・並ぶと似てるでしょ」とリアンが7人に微笑んだ。
7人が全員笑顔で頷いた、私もそう思っていた。
リアンが笑顔で挨拶をして、厨房を覗くふりをして私を見た。
「ユリ姉さんの許可はとった、マキを今夜借りるから・・エースもそこで大人しくしててね」と可愛いリアンを出して微笑んだ。
『了解・・マキは見てて楽しいよ』と笑顔で返した、リアンも笑顔で頷いてＢＯＸに向かった。

カウンターの４人の若者が笑顔で席を立ち、３人組にお礼を言って帰った。
暫らくして、３人組も笑顔で立った、新しいボトルを入れてくれた。
マキは見送りに行って、カウンターを片付けて・・ＢＯＸの清次郎の所に歩いた。
清次郎も鬼瓦も極マサも、嬉しそうな笑顔で迎えていた。
ＰＧは終演が迫ってきたな、北斗順調に初日を乗り切ったなと思っていた。
私は冷蔵庫からコーラを出して飲みながら、リアンとマキの笑顔を見ていた。
炎姉妹の笑顔は、嬉しさに満ち溢れていた。

その時６人組の若者が覗いた、カウンターでも良いとリアンに言っていた。
そして私はまたも衝撃を受ける、蘭が満開でニコちゃんシオンと入ってきた。
「どうぞ～・・すぐに準備しますね」と満開笑顔で客をカウンターに招待した。
リアンは蘭に極炎で微笑んだ、蘭は満開で微笑んで頷いた。
蘭とシオンがカウンターの中に入り、シオンがお客のボトルを出し

て準備した。
蘭はいきなり一番年上であろう男に点火した、５人が爆笑して、その男が嬉しそうに照れていた。
シオンは準備をしながら、蘭の凄さを間近で見ていた、最強ニコちゃんが出ていた。

蘭がシオンの天然を引き出して、シオンもニコちゃんでそれに乗っていた。
蘭がリードするコンビネーションが絶妙で、シオンも自然に溶け込んでいた。
６人の笑いが止まらずに、全員が楽しんでいるのを感じていた。
さすがに蘭だな、レベルが違う・・私は関心しながら、満開笑顔を見ていた。
リアンが嬉しそうな笑顔で、蘭とシオンを見ていた・・炎を放出しながら。

そしてユリカが入って来た、爽やか笑顔を蘭とシオンに向けて、ＢＯＸに歩いた。
清次郎たちの前に行き、爽やか笑顔で挨拶をして、最高の笑顔の極マサの横に座った。
豪華なメンバーの華麗な宴が行われていた、笑顔でない者を探したが、存在しなかった。

ローズの終演は２時を少し過ぎた時だった、私と蘭とユリカとシオンとマキでＢＯＸに座っていた。
リアンが極炎笑顔で、マキに封筒を差し出した。
「マキ・・ありがとう、本当に助かったよ」とリアンが微笑んだ。
「ありがとうございます・・少しでもお役にたてたなら、良かったです」と笑顔で立って受け取った。
「少しなんてもんじゃないよ・・私は驚いたよ、１６歳の実力を」

とローズの女性が笑顔で言って、他の3人の女性も笑顔で頷いていた。
マキも嬉しそうに笑顔で頭を下げた、リアンとユリカと蘭とシオンが優しい瞳で見ていた。

「蘭とシオンは、今度夕食をご馳走するよ・・もちろんマキもエースも一緒に」とリアンが微笑んだ。
「楽しみにしてます、リアン姉さん」と蘭が満開笑顔で返した。
ローズの女性が帰るのに挨拶をした、私は一人がＰＧ、もう一人が魅宴に挑戦と言ったので。
調整して連絡すると返して、見送った。

「私は今夜また嫉妬した、リアン姉さんとマキとあんたに・・あんな素敵な教師に巡り合った、その幸運に」と蘭が満開で微笑んだ。

その笑顔に充実感が溢れていて、私は近いと確信していた。
蘭の覚醒の時が来ていた、全てを凌駕する・・青い炎の本当の力が、頭を持ち上げていた。
蘭が実家に帰り、父親と和解して目覚める・・圧倒的な温もり。
その日になっていた・・9月は始まったばかりだった・・。

私が高2の春に、清次郎に会いに行った。

清次郎は教職を定年して、ボランティアで施設の子供達に勉強を教えていた。

「どうしたのかの～・・らしくないぞ、小僧」と私を見て、清次郎がいきなり言った。

私はその一言で、自分に戻った・・ミホの事で悩んでいた自分から。

本当に優しい人間だった、絶対に差別をしない男だった。
そしてその深い戦争経験を、私達に正直に話してくれた。
私達生徒は、清次郎の涙で感じていた・・その悔しさと悲しみを。
大切な話を・・静かに、優しく語りかけた。
教壇で嬉しい涙も、悔しい涙も見せてくれた・・その高みに存在していた。
ユリさんが言った・・フロアーで泣ける位置に存在する、大ママに感動したと。
私はその言葉で感じていた・・成し遂げた人間じゃないと、その場所で泣けないのだと。
その場所で、嬉しい涙を流せるのは・・到達した者の特権だと思っていた。
東京ＰＧの開店の日に、豪華な百合のアレンジフラワーが届いた。
差出人は・・ユリカ・リンダ・マチルダと連名で書いてあった。
受け取ったユリさんは号泣した、東京ＰＧのフロアーで。
女性達を前に、蘭に抱かれて・・ただ泣いていた。
私は到達したのだと感じていた、その遥か高みに。

しかしそこも通過点だった・・ユリの生き方にとっては。

私は涙を必死で我慢する蘭を見ていた、到達出来ていないと、強く主張していた。

目指すべき遥かなる頂を抱きながら・・蘭も私も、ユリカを想っていた。

あの爽やかな笑顔と・・深海の瞳と・・重い言葉を・・。

自立への想い

深夜の静寂が存在しない場所、ネオンに彩られた街。
探そうと思えばそれは存在する、しかし多くの誘惑に遮られている。
覚悟を決めて突破するしかない、流されだすと止まらない。
金を稼ぐだけの行為は、何かを磨り減らす・・大切な何かを。

「しかし巡り合わせとしても、確かに3人が同じ担任を経験するのは・・低確率だね」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「エースだけは、決定事項ですけどね」とマキが笑顔で言った、大人の色気が少し出てきていた。
「決定事項なの？・・担任が」と蘭が満開で聞いた。

「はい・・清次郎先生が、美由紀の担任を3年間引き受けると宣言して。
それであの卒業制作の許可を、校長から取りました。
清次郎先生は・・あと2年半で、定年退職です。
だから人事移動はもう無いそうなんですよ、だから宣言できたのでしょう。
その時の校長も話が分かる人で、条件を出しました。
美由紀だけでは駄目だと、小僧も3年間引き受ければ了承すると言ったそうです。
小僧はなんせ有名人でしたから、中学に入る前から、中学の教師達の話題の的でしたね。
清次郎先生は、豊君が中学に入る時に、移動で今の学校に来ました。
そして豊君の担任を3年間して、昨年私達トリオとヨーコの担任でした。
私達3人が同じクラスになれたのは、産まれて初めてだったんで

す。
私達の中学は1学年、8クラスも有るんですよ。
それなのに、3人が同じクラスになれた・・奇跡ですよね。
でも奇跡じゃなかったんです、清次郎先生が提案していたらしいんです。
最後のチャンスだから、3人を同じクラスにしてやろうと。
自分が担任を引き受けて、進学も就職も責任を持って面倒見ると言ったそうです。
私達は卒業式の日の朝に、律子母さんから聞きました・・本当に感謝しました。
恭子は号泣してました・・清次郎先生が、豊君との結婚を後押ししてましたから。
清次郎先生の唯一の心残りは、私だったと思います。
中途半端なままで卒業したから、だから今夜嬉しかったんです。
リアン姉さんと清次郎先生の話を聞いて、清次郎先生が私に頑張れと言ってくれたから。
あの人がいたから、私達も豊君も道を間違えなかった。
清次郎という偉大な教師の、教職の集大成が・・最後にして最大の問題児。
小僧です・・そして最高の生徒、美由紀でしょうね。
今回の小僧と蘭姉さんの同棲は、清次郎先生が担任でないと不可能でしたね。
先週私達は3人で、清次郎先生を訪ねました。
そしてシズカが強く言いました・・両親が認めたら、清次郎先生も認めて欲しいと。
真剣に頼みました・・絶対に教師としては、認められない事と知りながら。
清次郎先生は笑顔で言いました・・それ位で驚かんよと、笑っていました。
律子母さんの言葉と同じでした、その優しい笑顔で、シズカに言

いました。
ワシは教職最後の3年間が、教師の卒業試験だと思ってるよ。
今まで触れ合った全ての生徒の想いを感じて、取り組んでいるよ。
勝也と律子が了承すれば問題無い、小僧はそんな場所に元々存在しないよ。
私はどこまで許せるかと問われておる、小僧という存在で。
今までの、全ての生徒達の問いかけを感じておる、生徒を本当に信じているのかとな。
だからワシは真っ向勝負するんじゃ、今までの教師としての後悔を払拭するためにも。
最後にして最高の楽しみを与えれれた、教師冥利に尽きるよ・・小僧という存在は。
そう強く言ってくれました・・今夜ＰＧに清次郎先生が来店した意味。
それは蘭姉さんに許可を与えたのだと思います、小僧に対し保護者以上である許可を。
リアン姉さんと、豊君と私達と・・清次郎先生が関わった、全ての生徒の想いを背負って。
今夜来たんだと思います・・そして蘭姉さんに会って、喜びを感じていたと思います。
弟さんを亡くされた、その悲しみにも・・先生は触れたと思いますよ。
そして許可を与えましたね・・蘭姉さんにも・・夜街にも。
教師としてだけでなく・・人間・・林　清次郎として」
強かった、マキの感謝の言葉が響いていた、リアンはユリカに抱かれて泣いていた。
蘭は満開笑顔で、涙を流していた・・そしてシオンがマキを見ていた。
そのシオンの美しい瞳に、マキの真剣な瞳が映っていた。

「ありがとう、マキ・・私は本当に嬉しいよ、今の全てに感謝できるよ」と蘭が満開で微笑んだ。

「強かったよ・・さすがマキだね、やはり全員が感じてる事は間違いじゃない。

マキこそが、リアンの再来・・熱い心を、無変換で言葉にできる。

蘭に弟の事を、言葉にして言える・・それは愛に溢れているから。

リアンは今・・喜びの中にいるよ、マキの本質に触れて。

そしてそのマキが・・シオンを全面的に信頼して、全てを委ねている事に。

エースも認めた・・シオンの変化を促してるのは、マキだね。

これからも自分らしくやってね、私もリアンも蘭もシオンも付いている。

マキらしくやってね・・そこんとこ、よろしくと言えるマキのまま」

ユリカの言葉が優しく響いた、マキも嬉しそうな笑顔で頷いた。

リアンはこれ以来、マキを妹のように接していく。

シオンが海外に行くようになった時に、リアンを心を支え続けたのもマキである。

この2人の会話は、聞いていて楽しかった・・無変換の会話が響いていたから。

5人で店を出て、シオンが車だったので、リアンとユリカとマキを乗せて帰った。

私と蘭は駐車場で、手を振って見送った。

蘭は強く腕を組んでいた、その喜びの中に咲く満開を見ていた。

タクシーに乗ると、蘭が肩に乗ってきた。

「明日はいよいよ会えるね、ミホと沙紀と由美子に」と満開で微笑

んだ。
『うん・・蘭父さんと蘭母さんにも』と二ヤで返した。
「そうだった・・母さんご馳走作るって張り切ってたよ」と二ヤで返された。
『それは楽しみだ～』と笑顔で返した。
「私も楽しみ～・・病院が」と笑顔で言った。

『蘭・・あれから病院に行って、沙紀を由美子に会わせたんだ。
２人は交信できたみたいで、沙紀がどうしても描きたいと言って。
由美子の絵を描いていた・・俺は直視出来なかったよ。
沙紀は多分・・瞳の開いた由美子を描く。
沙紀はその相手の内面を描くんだ、それは問いかけなんだと思う。
俺が沙紀に伝えたい事は、嬉しくて流す涙も有るという事なんだよ。
沙紀が言ったんだ・・絵を描くのは、その相手の嬉しいを知りたいからだって。
蘭、手伝ってね・・嬉しいの本当の意味を伝える事を。
それが沙紀の自立に、大きく役立つと思ってるから。
蘭の次にシオン・・そして美由紀に会わせる。
美由紀に会う時には、もう少し前向きにさせていたい。
美由紀はステップアップを要求するから、その権利を持っているから。
障害を乗り越えた経験で、その権利を獲得してるからね』

蘭の耳元に優しく囁いた、蘭が私を見た。
「うん、嬉しいよ・・美由紀の話、どうして寝物語に出てこなかったのかな～」と笑顔で言った。
『美由紀には・・蘭に会って欲しかったから、だから先入観を持たせたくなかったんだよ』と笑顔で返した。
「やっぱりね・・清次郎先生と美由紀に会える、参観日が楽しみだ

よ・・私もユリカ姉さんも」と言って瞳を閉じた。
強く暖かい波動が喜びを表していた、静寂が支配する、深夜の国道１０号線で。

アパートに着き、蘭を抱き上げた、久々のトロン蘭が笑った。
私は笑顔で２階に上がり、部屋に入って洗面所で蘭を支えた。
化粧を落とした蘭を、真っ暗な部屋で着替えさせて、ベッドに寝かせた。
私は蘭の服をかけて、カーテンを閉めたまま、窓を開けた。
爽やかな夜風が入ってきた、微かに秋の香りがしたような気がした。

『りゃん・・お待たせ～』とベッドに行くと、やはり蘭は爆睡していた。
私は蘭を腕枕して思っていた、親父の許可を私が取るまでは、不安だったんだろうと。
いつか居なくなるのではと、感じていたのだろうと。
可愛い寝顔を見ながら、そう思っていた。
愛しい蘭の額にキスをして、幸せな気分で眠りに落ちた。

さすがに翌朝起きたのは、７時を過ぎていた。
学校が始まって、疲れていたのかと思っていた。
蘭は熟睡中で、私はシャワーを浴びて着替えた。
朝食にお粥と卵焼きを用意して、部屋で日記を書いて宿題をしていた。

９時近くになり、蘭を覗くとベッドに座っていた。
『蘭・・おはよう、まだ眠そうだよ』と笑顔で言った。
「大丈夫だよ・・気分は爽快」と満開で微笑んで、シャワーしてくると言って洗面所に消えた。
私は朝食の準備をして、新聞を読みながら蘭を待っていた。

スポーツ新聞のコラムに、銀座ＶＳ六本木という記事があり読んでいた。
その両地区の歴史と、今の時代背景が書いてあった。
シリーズ１とされていたから、連載物だと思っていた。

「そんなに興味のある記事があるの？」と蘭が覗き込んだ。

『昨日ね・・ある大物に招待されて、共同体の話をしたんだよ。
その時に六本木の話を聞いて、少し興味を持ったんだ』

蘭を見上げて笑顔で言った、蘭も記事を見て満開笑顔になった。
「大物を述べよ」と蘭がテーブルに座りながら言った。
『ドン小林』と二ヤで返した。
「うそ！・・それは凄すぎるね～・・爺ちゃん元気だった？」と満開笑顔で返された。
『元気だよ、現役って感じで、圧倒されたよ・・さすがに蘭はお知り合いだね』と笑顔で返した。
「２年前まではＰＧにも来てたからね・・糖尿が悪化して、最近は飲まないみたいだけど」と蘭が言った。
『あの体系なら・・糖尿は頷けるよ』と笑顔で返して、朝食を食べた。

「小林の爺ちゃんは、夜の生き字引だからね・・話し面白いでしょ」と満開笑顔で言った。
『うん・・マキの母親の真希さんも、話に出たよ・・やっぱり凄かったんだね』と笑顔で返した。
「私でも知ってる伝説だからね・・マキを見てると、納得できるよ」と満開継続で言った。

『最近のマキの変化に追いつけない、覚醒速度が速すぎる、やっぱり遺伝なのかな・・深層の記憶に眠る物が、出てきた感じだよ』と返した。
「今からのリアン姉さんが楽しみだよ～・・昨日のマキを見る目の炎は、尋常じゃなかったから」と蘭が言った。
『シオンとマキの関係うんぬんより、その無変換の言葉に反応したんだよ・・リアンと同じだからね』と笑顔で返した。
「そうだと思う、リアン姉さんは初めて会ったんだよ・・自分と同じ匂いの女に」と蘭が満開で微笑んだ。
『確かに・・シオンは真逆だしね』と笑顔で返した。

蘭が準備をする間に、食器を洗い日記を書いていた。
蘭はご機嫌で満開を継続していた、実家に帰るのを全く意識していなかった。
「先に病院で良いの？」と蘭が聞いた。
『うん、もう時間的には、大丈夫だよ』と笑顔で返した。
「何もいらないよね・・次に何か考えるよ、足のサイズを見とくね」と満開で微笑んだ。
『うん、俺もミホに熊さんパジャマを、買っあげなくちゃ』と返して、満開蘭と出かけた。

夏の日差しが強く、しかし酷暑ではなかった・・爽やかさが意識できた。
ケンメリを病院の駐車場に止めて、４階に行き記名してミホの病室を訪ねた。
沙紀がベッドの横で自分で薬を飲んでいた、私は嬉しくて沙紀に声をかけようとしたら。
沙紀が私と蘭を見て、蘭に駆け寄った。
蘭は自然に沙紀を抱きしめて、満開笑顔で自己紹介をしていた。
私は沙紀をベッドに座らせて、満開の蘭を椅子に座らせた。

ミホのベッドに行くと、ミホは窓際に立って外を見ていた。
『ミホ・・何見てるの～？』と声をかけて隣に立ちミホの視線の先を見た。
吹奏楽部であろう、制服の女子高生達がバスに乗り込むのが見えた。
『吹奏楽部だね・・演奏に行くんだよ、俺の友達にピアノの上手な子がいるよ』とミホに笑顔で囁いた。
ミホは私を見て、右手を出した、私は右手を握って話していた。
その時に感じていた・・ミホは音楽が好きなのだと、ＴＶも音楽番組をよく見てると思っていた。
『ＯＫミホ・・俺が関口先生の許可もらって、今度ピアノを聞かせてあげるよ』と笑顔で言った。
ミホをベッドに座らせて、手を握って久美子の話をしていた。
ミホはずっと私を見ていた、その時に蘭が満開笑顔でやってきた。

『ミホ・・紹介するね、蘭さん・・ミホとお話したくて来たんだよ』と言って、蘭と代わった。
蘭は満開笑顔でミホの手を握って、自己紹介をしていた。
青い炎が意識できるほど強く出ていた、私は蘭に笑顔を向けて沙紀のベッドに行った。
沙紀の横に座り、手を握って驚いた・・温度の揺れの喜びに。
『沙紀の嬉しいを、また見つけた』と笑顔で言った。
《うん、嬉しい、蘭ちゃん素敵、温かいね》と沙紀が答えた。

『そうなんだよね・・沙紀・・沙紀を由美子ちゃんといつでも会えるようにするから。
遊びに行ってあげてね、でも沙紀がお姉ちゃんなんだから。
少しづつ何回か行ってね、長い時間お話すると。
由美子はまだ疲れるからね・・お願いね、沙紀お姉ちゃん』

私は沙紀に優しく伝えた、沙紀は嬉しそうだった。
《うん、わかった、沙紀がお姉ちゃんだから、気をつける》と返してきた。
『さすが、沙紀お姉ちゃん』と私は沙紀が喜んだので、お姉ちゃんを強調して伝えた。
《小僧ちゃんから、見せて、由美子ちゃんの嬉しい出たら、あげてね》と沙紀がスケッチブックを出した。
私は笑顔を意識して受け取り、少し震えながら開いた。

私の想像を遥かに超えた、圧倒的な生命力が溢れていた。
深緑の深い緑を、その濃淡で表現して、光と影のコントラストまで緻密に彩られ。
その場所を吹きぬける風まで感じられた、その緑の高原に立つ由美子は。
立ち上がり右手で風に靡く髪を押さえて、微笑んでこっちを見ている。
緻密すぎると思うほどの描写で描かれた、その表情が少女の魅力を発散していた。
由美子の瞳は美しく開き、緑の風景の中で少しの緑を映していた。
可愛く大きな瞳と微笑を浮かべる唇、風に靡く髪まで繊細に描かれていた。
そして由美子の全体像から発せられる、その生命力の強さに驚いていた。
沙紀の描きたかった物・・それが全体から溢れ出ていた。
それは生命力なのだと確信できた、私は感動の中にいた。
沙紀は由美子の嬉しいだけでなく、由美子を見守る全ての人の嬉しいを描いた。
私は必死に笑顔を作り、沙紀を見ていた、俺も嬉しいよと何度も心で囁いて。
強く暖かい波動が、何度も何度も押し寄せて、沙紀は瞳を閉じてそ

れを感じているようだった。

『沙紀・・由美子は絶対嬉しいよ、由美子の周りの人達もね』と優しく伝えた。

《うん、ユリカちゃんも嬉しいんだね》と返してきた、私は感動していた。

『うん、ユリカの空気の波も、嬉しいって言ってるね』と笑顔で返した。

強烈な波動が何度も来て、沙紀は嬉しそうだった。

《じゃあ、小僧ちゃん、今日の分描くね、青の蘭ちゃん》と沙紀が嬉しそうに言った。

『うん、ありがとう沙紀、楽しみにしてるね』と言って、由美子の絵を慎重に外して、沙紀にスケッチブックを渡した。

沙紀は色鉛筆を出して、当然のように青を握り、一気に描き始めた。

私は絵を見ないようにして、蘭を見た、蘭が私の視線に気づき頷いた。

ミホに何かを告げて、こっちに歩いて来た、私はミホにまた明日と伝えて病室を出た。

廊下に出ると蘭が満開笑顔で私を見た。

「聞こうかな～・・どうしようかな～」と満開ニヤニヤで私に言った。

『蘭・・ミサの話術を使うのは、やめなしゃい』と二ヤで返した。

「沙紀ちゃん・・何を描いてたの？」と蘭が期待の眼差しで聞いた。

『蘭・・お楽しみに、青の女を描きたいって言ってたよ』と笑顔で返した。

「嬉しい～・・どうしよう、楽しみで楽しみで」と最強満開笑顔で言った。

私は蘭の喜びを感じて、嬉しくなって笑顔で頷いた。

その時に声をかけられる、面談室のドアが開いて、婦長が微笑んでいた。

「蘭ちゃん、ありがとう・・今、お2人少し時間あるかしら」と婦長が笑顔で言った。

「こんにちわ・・大丈夫ですよ」と蘭が満開で返した。

婦長に招かれて、面談室に入った。

院長と関口医師と北斗と母親に沙紀の母親が、笑顔で迎えてくれた。

私は沙紀の母親と、北斗の母親に蘭を紹介した、互いに笑顔で挨拶をして。

蘭が北斗の隣に座り、私がその横に座った。

「ありがとう蘭さん・・小僧ナイスタイミングだったよ」と関口医師が笑顔で言った。

『怖いですね～・・ナイスな事が』と笑顔で返した。

「うん・・実は、君のヒトミに対する、段階構想を聞いてね。

それと君が婦長に依頼した、沙紀と由美子の話も考えたんだよ。

私も両者の良い刺激になると思ってね、今日お互いの保護者も交えて話していたんだ。

君の考えなら、同意すると言ってくれているんだけど。

話してくれないかね・・本心を、沙紀と由美子に君が考えている事を。

君がヒトミの時に言った、全員が治ると思わないと駄目なんだと言った言葉。

小3の少年が、強く言った言葉が・・私には今でも響いている。

教えてくれ・・蘭さんの前で君が話すのなら、絶対に偽りじゃないと思うから」

関口医師は真剣に、私を見て言った。

『俺は・・ミホは別問題として、沙紀と由美子が好きだから。
だから触れ合っています・・俺の沙紀と由美子に対する考えは。
自立です・・将来の自立、それを考えたい。
由美子に対してでも、そうなんですよ・・自立を視野に入れている。
そう強く思っています、治るなんて次元の話じゃない。
俺は由美子本人に対して、自立を促してみせる。
そうすれば、由美子は病を克服する事以上の希望を抱く。
俺は・・ヒトミとの関係で、後悔してる事があります。
俺もどこかでヒトミが治らない、もう時間が無いと思っていた。
ヒトミ自身もそう言っていたから・・それが間違いだった。
それを受け入れたらいけないんだと、今は感じています。
あれから沢山の経験をして、教えられた。
人の生命を支えてるのも、心なんだと。
だから俺は本心で由美子に見せます、絶対に諦めないという姿を。
由美子には見せ続ける、そして由美子に弱音は吐かせない・・最後まで隣を泳ぐ。
原因不明で完治すると信じ続ける、だから今から自立を考える。
そして沙紀・・圧倒的な才能は別の事として、自立を考えます。
沙紀は充分自立出来ると感じます、俺はあの個性は絶対に自立出来ると思っています。
だから前向きでいさせる・・心は常に前向きでいさせる、それが大切です。
自閉症の最大の問題、傷つくことに過敏に反応してしまう。
純粋すぎるから、それでパニックを引き起こす。
冗談と本気の意味が理解しずらいから、勘違いでも深く傷つく。
だから徐々に免疫を作っていく、その為に私のたった一つの武器。
美しく輝く女性達を見せ続ける、沙紀は相手の内面を見る・・そして描く。

その女性達の心の傷にも触れる、それで絶対に沙紀は感じる。
恐れなくていいんだと、傷ついても・・美しく輝いて生きれるんだと。
そこまで持って行きたい、その為に最善策を用意してます。
俺は沙紀と由美子の関係に対しては、何の意図もありません。
ただお友達を作ってやりたかった、あの2人なら友達になれると思ったから。
2人はなりましたよ、仲良しの友達に・・その証拠をお見せします。
これが沙紀が描いた、大切なお友達の・・由美子です』

私は笑顔でそう言って、テーブルの上に由美子の絵を置いた。
完全なる静寂が包んでいた、強烈な波動が来た、北斗の喜びをユリカが感じたのだと思った。
北斗と母親の号泣を見て、沙紀の母も貰い泣きしていた、蘭も絵に吸い寄せられていた。
院長が目を潤ませていた、関口医師も婦長も優しい瞳で見ていた。

「よし・・了解した、保護者の同士の同意もあるのだから。
沙紀ちゃんと由美子ちゃんを自由に会わせよう、由美子の体調のチェックを万全にして。
私達も信じよう・・私は今、確信している・・私も由美子の自立を考える。
関口君や他の医師以外は、ナースも基本的な考えは・・自立を促す方向にする。
小僧・・良い説明だった、関口君にだけ段階の説明をしながらやってくれ。
どんな文献や医学書よりも、この一枚の絵に真実がある。
由美子の真実が描かれている、これを病室に飾って下さい。
それを見て、自分の心を皆で確認しよう・・自立を目指している

のだと」
院長が強く言葉にした、全員が笑顔で頷いた。
「小僧・・早急の依頼は何かあるかね？」と院長が笑顔で言った。
『はい・・ミホと沙紀の外出許可を頂きたいんです。
今日感じて・・ミホは音楽が好きなんだと思いました。
沙紀には前から会わせようと思っていました。
今ＰＧの専属でピアノを弾いてる、久美子と言う女子高生がいて。
その奏でる音が、響くんですよ・・内側に、魂の音色が響くんです。
だから2人に聴かせてあげたい、言葉などでは伝えられない。
その音楽という圧倒的な力で、心に直接伝えてみたい。
それが出来る女子高生が、今存在します・・私は絶対の自信があります。
久美子なら・・直接心に語りかけると、強く優しく囁きかけると。
だから平日の夕方で良いですから、外出許可を2時間ほど頂きたいのですが』
私は院長を見ながら、真剣に言った。
「院長先生、私も保証しますよ・・久美子なら必ずやれます」と蘭も真顔で言った。
「同じく、私も保証しますよ・・絶対に心に響かせます」と北斗が言った。
「よし、許可しよう・・ただし条件として、医師とナースで聞きたい者の同行を認めてくれればね」と院長が笑顔で言った。
『もちろん良いですよ、院長も歓迎しますよ』と笑顔で返した。
「もちろん行くよ、ワシも音楽は大好きだからね」と嬉しそうに笑った。
「大人数になりますよ、夜勤の組がスネるかも」と婦長が微笑んだ。

『もちろん、一度だけだと言ってませんよ・・継続こそ意味がありますから』と笑顔で返した。

窓から侵入している陽射しが、優しく暖かかった。
私は蘭の満開を感じながら、ヒトミの存在を感じていた。
ユリカの喜びの波動に乗って、温度の揺れが伝えてくれた。
ヒトミの言葉を・・【がんばれ、最後の挑戦者】・・そうヒトミが優しく伝えてきた。
ヒトミとユリアが波動に乗って駆け抜けた、由美子の待つ病室に向かって・・。

蘭がこの出会いで感じたものは、大きかった。

蘭は心に従う・・だからこの後、ミホと沙紀と由美子に触れ合い続けた。

ミホが自我を取り戻した時に、全ての事を蘭とユリカで教えた。

女性として生きる為に・・ユリカが去った後は、ＰＧの女性達が伝え続けた。

そして特例措置として、ミホは１７歳で高校に入学したのだ。

それに大きく力を貸してくれたのは、亡き清次郎の教え子達だった。

清次郎の人生最後の生徒・・ミホの為に、人力を尽くした。

清次郎はミホに１対１で勉強を教えていた、その情熱は恐ろしいほどだった。

清次郎は自分の癌を告知されていた、だから最後の生徒としてミホを選んだ。

ミホは今でも清次郎を父ように想っている、その厳しく優しい愛に感謝している。

清次郎の通夜の会場に、私と蘭が着いた時に、叫び声が聞こえた。

「お父さん・・お父さん」と泣き叫ぶミホの声が。

ミホの横で美由紀がミホの手を握り、反対側でマキがミホを抱きしめていた。

会場は涙で溢れていた・・ミホの悲痛な叫びが、心に響いていた。

出棺の挨拶で、清次郎の妻が言った。

清次郎は幸せな人間でした・・教職最後の年に、美由紀を送り出し。

人生最後の生徒で・・ミホに出会えたのです。

これ以上の幸せがあるものかと、常日頃言っていました。

今ここに集まって下さった、多くの大切な教え子の皆さん・・本当にありがとう。

あなた達のおかげで、清次郎は幸せな人間でした・・妻は最後に笑顔を見せてくれた。

１０００人以上の参列者が、清次郎の人格を証明していた。

長いクラクションを鳴らし、走り出した霊柩車に向かい・・全員で叫んだ。

「ありがとう、清次郎」と叫んでいた・・全ての教え子が、中学生の心のままで・・・。

リアンとマキで、美由紀とミホを囲んでいた・・４人にはもう・・涙は無かった。

後悔の通訳

夏の陽が降り注ぐ小部屋、希望でも夢でもなく目標を掲げた。
そうであって欲しいと願っていた、そして信じようとしていた。
少ない可能性を追い求め、絶望的な実績を捨てる決意を示していた。

「由美子ちゃんは、どうなのかな？・・今は体力は十分だと思うけど」と関口医師が言った。
『問題ないでしょう・・沙紀には話しときました、一度に長時間は駄目だと』と笑顔で返した。
「沙紀ちゃんの、自主性に任せるんだね？」と関口医師が真顔で言った。
『はい・・ナースの皆さんが気にかける程度で、大丈夫だと思います』と答えた。
「了解です・・引継ぎしときます」と婦長が微笑んだ。

私は蘭と立って、６人に挨拶して、北斗に今から由美子に蘭を会わせると告げた。
蘭が北斗に満開で微笑んで、北斗も笑顔で返した。
部屋を出て、由美子の部屋の前で蘭を見た。
満開に微笑んで頷いた、私は二ヤで返してドアを開けた。
入った瞬間に、蘭は大丈夫だと思って、由美子の方に歩いて行った。

由美子は起きてるようで、左手が少し動いた。
『由美子・・おはよう、今日も起きたね』と左手を握り笑顔で言った。
《小僧ちゃん、おはよ、今日も素敵な人連れてきたのね》と由美子が返してきた。
『うん、蘭ちゃん・・由美子に会いたかったんだって』と笑顔で返

して、蘭の手を握らせた。
蘭は満開で微笑んで、左手を握り、自己紹介をしていた。
私は少し下がって、丸い椅子に座って2人を見ていた。

蘭は青い炎を出して、優しく語り掛けていた。
由美子も蘭を受け入れたらしく、優しい空間が出来ていた。
北斗と祖母が帰ってきて、ソファーに招かれた。
私はソファーに座って、北斗が見ている絵を見ていた。

「最高の贈り物だったよ・・本当に嬉しかった」と北斗が微笑んだ。
『そうだね・・素敵な絵だよ』と笑顔で返した。
「後で額を買ってきましょう、そして部屋に飾らないと」と祖母が嬉しそうに言った。
『由美子・・血色が良くなったね、少し楽しみが出てきたかな』と由美子を見ながら呟いた。
「来週から・・温度の会話の初期講座、よろしく」と北斗が微笑んだ。
『了解・・マリアでやろう』と笑顔で返した。
「マリアは出来るの！」と北斗が驚いた。
『マリア・・凄い子供なんだよ、もう少し由美子が慣れたら、マリアに会わせるよ』と返した。

「楽しみだよ・・そっか～、マリアは出来るのか～」と北斗が嬉しそうに由美子を見ていた。
「ヒトミちゃんは、最初から出来たのかしら？」と祖母が笑顔で聞いた。
「多分・・出来てたんだと思います、俺が分からなかっただけで」と笑顔で返した。
「由美子もすぐに出来たし、沙紀ちゃんも出来た・・日本語なのかな？」と北斗が聞いた。

『感覚的には、何語でもないよ・・アメリカ人とも少し出来たし。
俺は説明出来ないから、原始の伝達方法と言ってる。
人間が言葉を持つ前の、今の動物達がしてる、コミニケーションみたいな感じ。
多分誰もがＤＮＡには持ってると思う、必要なくて使わないから。
退化してしまったんだと・・でも由美子や沙紀は言葉を使えないから。
その部分が発達したんじゃないかな、産まれたばかりの乳児は使えるよ。
言葉を持たない時代は、多くの乳児が使っている。
母親に伝えるために、泣くのもその中の一種類だと思うよ。
だから難しくなるんだ・・泣くという行為がね。
嬉しいで流す涙を、由美子も沙紀もまだ理解できない。
悲しい事だと思ってしまう、だから北斗や沙紀の母親にも言ってるんだ。
今は嬉しい涙は見せないで欲しいとね、由美子は北斗の涙を見ると混乱する。
北斗を愛しているから、だから嬉しくて泣いたとしても。
その部分を出さなくなるんだ、北斗を悲しませないようにね。
そうなってしまったら、中々戻らないんだよ。
今からは変化が激しくなって、大変だろうけど・・北斗頑張ってね。
俺もさっき、その絵を渡されて・・危なかったよ。
嬉しいを伝え終わるまで、頑張ろう・・そしたら堂々と、嬉しくて泣けるからね』

北斗と祖母の笑顔を見ながら、笑顔で伝えた。
「了解・・頑張ってやってみるよ」と北斗が微笑んだ。
「私が一番気を付けないと・・涙腺が緩いから」と祖母も笑顔で言

った。
その時に蘭が私を見て、満開で頷いた、私は蘭と交代した。
『由美子・・沢山お話したね・・疲れてないかな?』と笑顔で聞いた。
《大丈夫、素敵な人だね、ヒトミちゃんが言った通りだった》と由美子が伝えてきた。
『ヒトミが教えていたんだね、仲良しだね』と笑顔で言った。
《うん、仲良しだよ》と返してきた。

『由美子・・沙紀が由美子の所に遊びに来るから、お話してね。
でも一度に長い時間は駄目だよ、由美子は今から病気を治す力がいるからね。
由美子が出来るのなら、沙紀のプレゼント見せてあげるよ』

由美子の喜びを感じながら、笑顔で伝えた。
《約束するから、見せて》と由美子が返してきた。
私は北斗に絵を持ってきてもらい、北斗を由美子の前に座らせた。
そして北斗に由美子の手を握らせて、目を閉じて手だけに集中してと言った。
北斗は真剣な顔で頷いて、瞳を閉じた。
私は北斗の握ってる由美子の手を上から握り、由美子に伝えた。

『由美子・・沙紀が描いてくれたよ、これが由美子なんだよ』と言って、顔の前に絵を広げて見せた。
「あっ!」と北斗が叫んで、私は北斗を見た・・北斗は固まっていた。
蘭が静かに近づいて、北斗を誘って廊下に出て行った。
私は由美子の手を握り、笑顔で由美子を見ていた。

『由美子の嬉しい、見つけたよ』と優しく言った。
《嬉しい、沙紀ちゃんが描いてくれた、由美子、嬉しい》と返してきた。
『うん、部屋の由美子が見える所に、飾ってもらうからね』と笑顔で言って。
『由美子・・少しお休み、後で沙紀が来ると思うから』と優しく伝えた。
《うん、おやすみ、小僧ちゃん》と由美子が返してきて、静かになった。
私は祖母に笑顔で挨拶をして、廊下に出た。

長椅子で蘭に抱かれて、北斗が泣いていた。
『嘘じゃなかったでしょ、さすが北斗だよ・・一回で感じるんだから』と笑顔で言った。
「感じたよ・・はっきりと、由美子は生きてるね」と北斗が泣きながら微笑んだ。
「生きてますよ、元気に・・私もそれだけは感じました」と蘭が満開で微笑んだ。
「ありがとう、蘭・・エース・・私は最高に嬉しいよ」と北斗が微笑んだ、美しい顔で。
落ち着いた北斗と別れて、病院を出てケンメリに乗った。

「本当に大切な事を感じたよ・・私も嬉しかった、ミホも沙紀も由美子も」と満開で微笑んでエンジンをかけた。
『3人もそう思ってるよ・・久美子の段階を上げてやる、久美子が本気で伝える響きが聴きたい』と二ヤで返した。
「楽しみだね～・・絶対に凄いよ」と満開で微笑んで、南に進路を向けた。
懐かしい蘭と行った、日南に進路をとった。
蘭の目には迷いは無く、喜びに溢れていて、私も爽快な気分になっ

ていた。
海沿いの日南海岸を走って、日南市に入ってすぐに右折をした。
そして城下町【飫肥】に入った、新しい建物も、デザインを城下町風に統一されていた。
飫肥の中心街を少しそれて、小道を入ると、大きな家の敷地に入った。
蘭は庭の軽トラの横にケンメリを止めた、庭で大柄のオヤジがコンバインを整備していた。
蘭が降りて私も続いた、コンバインの方に歩いて行った。

「おう・・珍しい娘が、また綺麗になったな」とオヤジが笑顔で言った。
「前から、綺麗よ・・ただいま」と蘭が笑顔で言った。
「この子は、夜の店で一緒に働いてる・・小僧ちゃん、飫肥に来たことないって言ってたから」と蘭が私を紹介した。
『小僧と呼ばれています、よろしくお願いします』と笑顔で言って近づいて、ボルトを締めているシャフトを押さえた。
「機械が好きなんだな」とオヤジが笑顔で言った。
『三度の飯の次に』と笑顔で返した。

「一年に一度しか使わないから、痛みが激しくてな～」と言いながら、額に汗を流してボルトを締めた。
蘭は私達を見て、満開笑顔になって家に入っていった。
『稲刈りだけなんだ～・・なんかもったいないね』とシャフトを回しながら笑顔で言った。
「策略だよ、農機メーカーの・・そうしないと奴らも食えんかいな」と二ヤで返してきた。
『なるほど～・・暴利を貪るんですね』と二ヤで言った。
「あこぎな商売だよ、農協もそれで金を貸して、金利を取るんだか

らな～」とオヤジが少し強めに言った。
『お米は儲からないの？』と少年らしく聞いてみた。
「米なんて金にならんよ、作るの減らせと国は言うしな・・先行き暗いよ」と笑顔で返してきた。

ジャッキで反対側を持ち上げて、中を覗いた・・綺麗に整備されていた。
『オヤジさん、機械が好きですね～・・綺麗に整備してある』と笑顔で言った。
「三度の飯の次にな」と笑顔で返された。
『なんで、給食はパンなんだろう・・米の方が腹持ち良いのに？』と疑問を言ってみた。
「敗戦国だから・・パンは小麦で作る、その小麦はアメリカから輸入するんだよ」と真顔で返してきた。
『やっぱり駄目だな～・・勉強ばかりした奴とか、その家に生まれたからなんて奴が、政治家だから』と二ヤで言った。
「ほう・・面白いね～・・小僧ちゃん」とオヤジが嬉しそうに笑った。
『ちゃんはやめてよ、オヤジちゃん』と二ヤで返した。
2人で笑っていた、蘭父さんの安心感に包まれて、私は好きになっていた。

2人でファンベルトを交換しながら、オヤジが笑顔で言った。
「例えば、お前ならどうする・・小麦を強引に買わされたら」とオヤジが聞いた。
『断れないなら・・大きな貸しを相手に付ける、まぁ相手の将来性の見極めが肝心だけど』と二ヤで返した。
「ほう、それで」とオヤジが楽しそうに、ベルトを交換しながら聞いた。
『そいつが、一段階上がったら、さも自分が小麦を買ってやったか

らと意識させる』と笑顔で返した。
「よしよし、そこで行かないんだな」とオヤジが二ヤで聞いた。
『必要に迫られない限り、そこでは行かないよ』と二ヤで返した。
「よし・・続き」と促した、蘭と似てるな～と思っていた。

『次の段階に上がった時に、貸しを返してもらう・・少なくても倍以上で。
その貸しが次回またこっちに来るけど、その次があるからＯＫだと思ってね。
だって国と国がやることなら、自分の報酬には響かないって設定が基本だけど。
まぁ裏で金が動いて、自分も潤うんだろうけど・・そこで問われるんだよね。
金に負ける奴は話にならないよ、億万長者になって何がしたいのって思う。
自分を曲げて得た金で、本当に楽しめるのかって思うんだよ。
金にも権力にも屈しない、その精神力の勝負なんだと思う。
交渉ってそういうもんだとね、日本人はどこかで主張しない事を美徳としてる。
騙されてるんだよ・・統制するのにその方が楽だから。
でも今はそんな、カリスマ性のある政治家はいないと思うんだ。
全体を統率して、良い方に導くなんて理想を持ってる人は。
だいたい理想を持ってるのかさえ、疑問に思う奴が多いから。
国際舞台で交渉するのが、そんな政治家や公務員じゃ駄目だよ。
相手はプロ中のプロが来るんだから、信頼とか信用なんてする奴は論外だよ。
ヤクザの金庫番かなんかをスカウトしてやらせれば、相当の利を上げてくるよ。
国益を声高に叫ぶのなら・・交渉のプロを育てて。
ＣＩＡを作らないと駄目だね、良い人じゃ国益は損なわれる。

泥水を飲んでも、笑ってる奴じゃないと駄目だね。
戦争をするんじゃない・・国益を守る戦いなら、悪徳にやらせるんだよ。
なんて・・子供の考えは・・笑えるでしょ』

楽しそうに聞いているオヤジに、最後は笑顔で言った。
「面白い・・気に入った、ビール飲めるのか？」と私の肩に手を置いて、笑顔で言った。
『１３歳だから・・飲めます』と二ヤで返した。
「交渉人になれよ・・その顔なら、やれるだろ」と笑顔で言って、納屋に２人で歩いた。
納屋の小さな冷蔵庫を開けて、ビールを差し出した。

『ありがとう・・秘密の場所に、ごっそりと有りますね～』と二ヤで言った。
「特権だよ・・農家の特権、汗かいたらビールを飲むのは」と笑顔で返してきた。
『良いな～・・うちの親父大工だからな～』と日陰に座ってビールを飲んだ。
「良いな～・・大工、憧れたな～」と私の口調を真似て、オヤジが言った。
『やっぱり、家業を継ぐときに、悩んだんだ～』と二ヤで聞いた。

「今の時代なら・・悩んだろうな、あの当時は農家で良かったと思う、時代だったからな」と懐かしそうに言った。
『そっか～・・終戦の混乱期だからね』と笑顔で返した。
「混乱期は、ガキの頃・・そんなに歳じゃないぞ」と口調だけ怒った。
『物作りが好きだもんね～・・オヤジさん』と笑顔で返した。
「農作物を作ってるから、特にな・・形あるものを残したいと思う

よ」と笑顔で言った。
『確かに・・うちの親父も台風の後は、手がけた家を見て回ってるよ』と笑顔で返した。
「大事な事だよ・・仕事に誇りを持つのは」とオヤジも笑顔で言った。

「1つ聞いて良いかな?」とオヤジが2本目のビールを開けて言った。
『難しくない事なら』と笑顔で返した。

「お前がもし、農家の息子で・・親にも他人にも、上手く自分の気持ちを言えない人間で。
頑固親父に家業を押し付けられて、農業高校に行かされたら。
そこで人生が終わったら・・後悔すると思うか?・・自分の人生を」

オヤジが前を見て言った、私は亡くなった息子の話だと気づいていた。

『するね・・絶対に後悔する・・主張しなかった自分を。
もし生きていても、嫌々始めた仕事に生きがいを見つけたら、その時に後悔するよ。
どうしてあの時に、言えなかったのかとね。
農業をやって良かったて、言えなかったかと・・後悔する。
後悔って・・やった事にしか出来ないと思う、やれば良かったなんて言い訳だから。
親に逆らえなかったとか、主張を出来なかったとか・・全て自分の問題だから。
嫌なら・・本当にやりたいことが有るなら、俺は生家を出ると思う。

内気だとか、人付き合いが苦手とかは・・自分で克服していくものだから。
高校生じゃ出来なくても、働き始めたら出来るよ。
本当に自分のやりたい事があればね、どんな人間でも出来るよ。
後悔って・・やった事に対してだから、後悔するのなら。
主張を出来なかった自分に対して、後悔するんだと思う。
実は俺も親父と喧嘩して、今家を出てるけど。
親に対してとか、他人に対してとか・・大きく言えば社会に対してとか。
そんな不満は実は無いんだよ、でも近くにいるから・・ぶつかってしまうんだ。
不満の全ては自分に対してなんだよ・・未熟で、何も持たない事が怖いんだよ。
将来なんて漠然としてるし、幸せの意味すら分からない。
やりたい事を探したいけど、それが本当にやりたい事かも分からない。
そんな時代なんだよ・・物が豊富に有って、選択肢も無限にある。
幸せな事だけど・・当事者には、不幸な事でもあるんだ。
見えてこない・・選択肢が多すぎて、覚悟が出来ない。
これで良いのかと・・常に迷いを抱えてる・・そんな季節なんだ。
親が何を言おうと・・そんなのは関係ないんだよ。
次の季節が来たら、多分・・他の何かが、自分の中に産まれると思ってる。
どんなに内気でも、主張が出来なくても・・今を精一杯生きてるんだよ。
子供には避けられない・・子供の世界がある。
高校に行ってる以上・・何か楽しみがあったはず。
心の中に、好きな女の子もいて、その子の姿を見るだけで楽しかったし。
親に押し付けられたと自分に言い訳してるけど、本心は違うんだ

よ。
いつかオヤジに、正直に言おうと思ってたはず。
俺はそんなに嫌じゃなかったよ、本当は嬉しかったよって。
だから高校にも行ったし、家業も継ごうと思ったんだと。
その先が分からないなら・・良い方に想像しようよ。
そうしないと・・怒ってるよ、若くして亡くなった息子さんが。
親父は俺の事、そんな風に思ってるのかって・・怒られるよ。
俺は確信的に思う・・俺がその立場になって、陰から見守る立場になったら。
親父のその姿が・・一番の後悔になる・・どうして俺は伝えなかったんだと。
親父がこんなに悩んでるじゃないかと、自分を責めてるじゃないかと。
その親父を見て・・後悔する・・どうして言わなかったんだろうと。
俺は親父が好きだって・・どうして言葉に出来なかったのかと思うよ。
俺はそう思うよ・・13歳だから・・俺はそう確信してる』

私は思ったままを言葉にした、感情的な自分を静めようともしなかった。
ユリカの強烈な波動が何度も来て、後押ししてくれた、オヤジは静かに聞いていた。
気づくと玄関に泣いている母親を抱いた、蘭が私を見ていた、涙を流し満開で頷いた。

「小僧・・ありがとな、お前は凄いよ・・心に響いた・・そうだよな、後悔ってそうなんだよな」とオヤジが私を見た。
『そうだと信じてる・・酔ってないよ、もう一本』と二ヤで言って、冷蔵庫を開けた。

「全部飲んでいいぞ・・特別サービスや、他に欲しいものあるか？」とオヤジが笑顔で聞いた。

『娘さん・・俺がきちんと仕事をして、幸せに出来る男になったら・・１０歳年下を、反対しないで』とウルで言った。

「よし！・・約束する・・その時を心待ちにするぞ」とオヤジが強く言った。

『出来るだけ早く・・お孫を見せます』と笑顔で返した。

「孫か～・・楽しみだよ・・頑張れよ、さぁ泣き虫母さんを紹介するよ」と笑顔で立った、私も笑顔で立ち上がり玄関に歩いた。

母親が笑顔になって頭を下げた。

『すいません・・聞いていなくて、お姉さんがいるなんて知らなかった』と笑顔で言った。

「あら～・・良い子ね～、早く息子になってね」と母親が笑顔で言った。

『妹さんは、お姉さん似ですね』と二ヤで返した。

「そうなのよ・・調子には乗りますよ」と笑顔で言って、家に案内してくれた。

応接間の大きなテーブルに、豪華な料理が並んでいた。

『親不孝娘が久々に帰ってくると・・何かと大変ですね～』と母親に笑顔で言った。

「こら！・・家出中の人間が言わないの～」と蘭が満開で微笑んだ。

「大変なんだよ・・娘は難しくて」とオヤジが手招きながら言った。

『お父様・・良い方法を伝授しますよ』とオヤジの向かいに座り笑顔で言った。

「お！・・良いね～・・よろしく頼むよ」とオヤジが笑顔でビールを注いでくれた。

『でも・・貸しですよ、かなり大きな』と二ヤで言った。

「ならやめとく・・それで娘を取られたら、かなわんから」と笑った。
『もったいない・・惜しいことを・・聞くなら最後のチャンスですよ～』とウルで言った。
「残念だが・・ワシは信頼も信用もせん、交渉のプロだよ」と笑顔で言った。
『私としたことが・・話の順番間違えました～』とウルウルで返した。
オヤジも母親も蘭も楽しそうに笑っていて、私も嬉しかった。
楽しい食事が始まり、私も笑顔で食べていた。
蘭が聞かれるままに、私の事を話していた、私は茶化して笑いを取っていた。
蘭が今日の病院の話をして、ヒトミの話をした。
両親が真剣になって、私を見た。

「子供相手なら・・出来るの、まだ1歳だけど」と母親が言った。
『過度な期待はしないで下さい、でも会ってみたいですね』と笑顔で返した。
「誰かいるの？」と蘭が真顔で聞いた。
「鈴ちゃんに子供が出来たんだけど、まだ全然言葉が出なくて・・歩こうともしないのよ」と母親が言った。
「呼んでやれよ・・俺はこの小僧にだけは、期待するよ」とオヤジが笑顔で言った。
母親が頷いて、電話に向かった。

「鈴ちゃんって、私の1つ下でね・・千鶴姉さんの妹だよ」と蘭が囁いた。
『えっ！そうなの・・実家同士が、近いんだね』と笑顔で言った。
「ごめんね・・すぐに来るって、なんか千鶴に聞いてたみたい」と

母親が微笑んだ。
『千鶴って本名なんですね、源氏名かと思ってた』と笑顔で返した。
「この子がさっきの話の、ミホちゃんに・・・」蘭が私とミホの再会に、千鶴が力を貸してくれた事を話した。
両親は笑顔で頷いていた。
その時に玄関から声がして、母親が迎えに行き、女性が乳児を抱いて入ってきた。

私はその千鶴にそっくりな美しい母親と、抱かれている可愛い女の子を見ていた。
「こんにちわ・・実は姉の千鶴から話を聞いてて、今度訪ねようと思ってました」と笑顔で母親が言った。
『そうですか・・お姉さんには、お世話になってます』と言って立ち上がり、手を出した。
母親が優しく渡してくれた、抱っこして、その子を見て感じたことが確信になっていた。

「1歳1ヶ月になります・・名前は・・蘭です」と母親が蘭を見て、笑顔で言った。
「えっ！そうなの」と蘭が驚いて言った。
「はい・・憧れの先輩の源氏名を、いただきました」と笑顔で返した、蘭は嬉しそうに満開笑顔で返した。

『ちなみに・・蘭ちゃんの何が心配なんでしょう？』と二ヤで聞いた。
「言葉が・・遅くて、ハイハイや立っちはするのに・・歩こうとしないんです」と真顔で言った。
『蘭～・・悪い子でちゅね～・・ママが心配すると、何でもしてくれると思って』と二ヤで乳児に言った。
私の目を探るように見ていた、私は小さな可愛い手を握って伝えた。

『駄目でちゅ～・・これも出来るんです～』と温度で言ってみた。
《にょっ！》という感じの反応があった、それで確信した。

『鈴さん・・言っていいですか』と真顔で真剣に言った。
「良いですよ」と鈴は座り直し、緊張した。
私は鈴の向かいに座り、乳児の蘭を膝に抱いた。
『この子は、病気です・・後天性甘えん坊過剰症という難病です・・原因は母親です』と笑顔で言った。
鈴がハッとして私を見た、乳児の蘭が私を見上げた、悔しそうな温度が伝わっていた。

『鈴さん・・蘭ちゃんの最初の言葉の、希望は何ですか？』と二ヤ二ヤで言った。
「えっ！・・えっ！・・やっぱり、ママです」と鈴が笑顔になった。
『じゃあ今日デビューします、可愛い悪魔・・その名も、らん～』と言って蘭を立たせた。
鈴は心配そうに、オロオロと蘭を見ていた。

『鈴・・手を出さないの、蘭が可愛いなら』と真顔で言った、鈴も真顔で頷いた。

『蘭・・楽しいんだよ、自分で歩けると・・こっそりおやつをつまみ食いできるし。
それにね、どんなに綺麗に掃除しても、床や畳にはばい菌さんがいるんだよ。
ハイハイすると、それを吸い込むんだよ～・・怖いね～。
それにママって呼ぶと・・今より蘭を、ヨチヨチしてくれるよ。
さぁ蘭・・今から始めよう、1歳の世界に踏み出せ。
俺が後ろから見てるから・・ママの所まで歩こうね。
そして呼んでごらん・・大好きな蘭のママを』

蘭の耳元に優しく囁いて、温度で伝えた・・頑張れと。
《もう》と蘭が返してきた。
『観念しなさい・・もうなんだよ』と囁いて伝えた。
それで交信できてると信じたのか、一歩踏み出した。
私は支えてる手を離して、頑張れと囁いた。
蘭はフラフラと泥酔者のように3歩歩いて、座ってしまった。
『まだ！・・もう1つの約束が』と手を出そうとした鈴を制した。

「まま」と鈴を見て蘭が言った、可愛い声だった。
「蘭～・・今ママって言ったの・・ねえもう一度言って・・ねえお願い」と蘭を抱き上げて、鈴が言った。
『あ～あ・・この難病は完治が難しい、お砂糖ママがいるから～』と二ヤで鈴に言った。
「あっ！・・ごめんなさ～い、明日からお塩ママになりますから～」と鈴が舌を出して笑った。
オヤジも母親も、そして蘭も楽しそうに笑っていた。
晩夏の南国の夏を、海風が冷ましてくれた・・後悔する心も。

私は満開の蘭を見ていた、その満開が咲き乱れていて、精神的な春を感じさせた。
私はそれだけで良かった・・ただ蘭の笑顔が見ていたかった・・。

私はこのオヤジに話した、後悔の話だけは、今でもはっきりと覚えている。

日記に書きながら、この長文がスラスラ出てきた。

しかし自分でよく言えたな～と思っていた、何も意識せずに言葉に出した。

確かにこの物語の進行から言うと、そのレベルには到達していたのかも知れない。

でも自分の言葉とは思えなかった、日記に書きながらも、半信半疑だった。

何か他の力が作用したのでは、私はそう思っていた。

その事をユリカにだけ話した、蘭には話の内容上、言い難かったのだ。

ユリカは驚いていた、そして言った・・私は聞いてないよと。

その時、ユリカは・・土曜の疲れが出て、遮断してお昼寝中だったと言うのだ。

じゃあ・・あの波動は、ユリアが一人で出してたのか?・・そう思って考えた。

そこまでにしよう・・考えたらいけないよ。

ユリカが爽やか笑顔で言った、私も笑顔で頷いた。

私は今この物語を書きながら、また考えてしまった。

やはり・・何か他の力が介入していた、私は言葉として発しただけだった。

ユリアの何度も来る波動の、温度の言葉を無意識に、通訳しただけ

だった。

今はそう思っている・・それ以上は考えるのをやめよう。

でもオヤジの顔を見ながら話していて、嬉しさが湧き上がっていた。

その真実だけを・・ここに追記とします。

Runner

どうしてだろう、その者は存在するだけで笑顔を作る。
自分自身の【その頃】を、人は絶対に覚えていない。
どこかで変わる、途方も無く永い時間で進化した過程を、一年で進むように。
言葉を得ると変化していく、現代世界で生きる人間がスタートして行く。

「小僧ちゃん・・蘭ちゃんはどおして、歩かないし話さなかったの？」と母親が笑顔で聞いた。
『俺の考えで良いですか？・・正解じゃないですよ』と笑顔で返した。
「小僧・・お前は面白いな～、正解じゃないと言ってからやるのか～」とご機嫌オヤジが言った。
「お願い・・聞かせて、間違いを教えて」と鈴が微笑んだ。

『俺・・小児病棟で遊んでた頃・・小3位からだったかな～。
産婦人科のナースが、お菓子をチラつかせて誘いに来てたんだ。
俺が生後3ヶ月位の乳児の伝達を理解して、お尻の中の出来物を言い当ててから。
だから乳児とは、数限りなく触れ合ったんだ。
そして1つの考えが出来てきた・・それを1つの話にして、母親達に伝えた。
人間はその進化の歴史を、受精してから、約2年で進むんだと感じてね。
子宮に産まれた瞬間は、まだ生命としての細胞状態だよね。
海から陸に上がる前の祖先と同じ、だから羊水に包まれていると思う。

人は水の中で産まれるんだよ・・出産が誕生じゃない、受精が誕生なんだよね。
そして羊水の中で進化の過程を経験する、どんな人もその記憶を持てないけどね。
猛スピードで進化の過程を進むんだよ、人が愛し合い繋がった歴史をね。
羊水の中の成長期間を第一段階とすると、成長のスピードで言えば。
一生の中で一番早いんだよね、だから大切なんだよ・・お腹に語りかける事は。
絶対に聞こえてるし、喜んでいる・・母の言葉が優しく響くんだ。
そして第二段階を迎える、出産だよね・・海から陸を目指すように。
大きな進化のターニングポイントがくる、陸で生きる選択をした時が来る。
絶対的な安心感の羊水から、陸を目指す・・未知の世界を選ぶんだ。
壮大なロマンだと俺は思ってる、よくぞ陸を選択したと思うんだ。
未知の世界に最初に踏み出した生命、なんて素敵な奴なんだろうって感じる。
その強い意志で砂浜を這い上がった、そして強固な想いで繋いだ。
生命を繋いでみせた、そしてその子孫も繋いだんだ・・過酷な状況の中で。
その砂浜に這い上がった時が、出産なんだと思う。
だから一生の内で、最も大きく環境が変化するんだ。
それから約1年の、第二段階が大変なんだよ・・その進化の歴史を進むのが。
でもね・・伝達方法は第一段階で存在するんだよ、羊水の中で存在する。
海の中で生きてる時には持ち合わせていたんだ、俺はその事は確

信している。
今でも海でイルカに会うと、強く感じるよ・・イルカの発する、伝達をね。
多分・・毎日会って触れ合えば・・イルカの言葉が、解読できると思うんだ。
出産を経て移行したのが、第二段階だと思えば・・乳児の変化スピードも納得できる。
表情が出はじめて・・意思を伝えられるようになり。
ハイハイが始まる・・陸を移動するのに、より良き進化が加速する。
両足で立ち・・2足で歩く、その方が早くて安全だからね。
陸に接地してる部分が、少ないほど安全なんだよ・・その時を同じくして出現する。
圧倒的な伝達方法・・言葉が出る・・人間が進化の過程で考え出した。
より多くの感情を伝えるために、開発した・・言葉はそこで登場するんだ。
言葉を得るまでが、第二段階だと思ってる・・言葉を得てからの進化。
その進みは一気に緩やかになる・・ゆっくりと進む。
だから考えすぎる・・人間は考える時間を、永く持ちすぎてると思う。
子供時代から、青春と呼ばれる時代を超えて・・成獣になるんだけど。
鈴・・人間は動物なんだよ、アフリカのサバンナで暮す動物達と同じ。
親が子に伝えるべき事・・それは群れでの生活に必要な絶対事項。
食料の調達方法や、群れでの役割・・その数限りない事を教えるんだ。
そしてその生き方を見せるんだ・・子供に伝えるべき最も重要な

事。
愛するとは何かと言う事だよ、その無償の愛で教える。
子供にも人を愛する人間になって欲しいから・・命を繋いで欲しいから。
鈴・・鈴は素敵なママだよ・・だから過剰な心配はしないでね。
蘭は少し混乱してたんだよ・・進化して良いのか迷ってたんだ。
鈴が手を出しすぎるから・・まだなのかと・・もう少しなのかと。
歩くことも、少しの言葉も・・蘭は持ってたんだよ。
でもあまりにも鈴が進化のフォローをするから、出して良いのか迷ってた。
さっき蘭が俺に返してきた言葉は・・【もう】・・だった。
その【もう】の後ろに来る言葉は・・もう良いの？・・だと思うよ。
鈴・・蘭は素敵な子供だよ、鈴を愛しているんだ。
だから鈴の嬉しいがずっと感じたかったんだ、それで時期を逃した。
繋がりの強い親子には、ありがちな事なんだよ・・何も珍しい事じゃないんだ。
鈴・・進化を教えて・・蘭を愛しているのなら・・表情に出して伝えて。
喜びも・悔しさも・悲しみも・・それが伝えられる権利者なんだよ。
母親という圧倒的存在は・・その権利者なんだ・・自分の生きる姿で伝える。
それが許される・・唯一の存在・・母親。
蘭にその行動で教えてあげてね・・人を愛するとは素晴らしい事だと。
生きる事を恐れる事はないと、生きるとは素晴らしい事なのだと。
俺の師である・・生臭和尚が常に言う言葉がある。
人の生きる意味・・それは・・【生きる】なんだと。

それ以上の意味は存在しないと・・だから死にも意味があるんだと。
次の段階に移行したのだと、死が全てを別つのではのではないと。
愛した記憶も、愛された記憶も・・次世代に繋ぐんだ。
完成しない人間という生命の進化の、一人のランナーとして存在し続ける。
だから・・死を悲しまなくていいんだ・・常に心に存在させて。
語りかければ・・死にも大きな意味を持たせる。
悲しむべき事ではないんだ・・寂しさを背負って、内側に入れよう。
そして共に歩こう、そして繋ごう・・永遠の道を、一人のランナーとして。
蘭はランナーになったばかりだよ、今から自分の走り方を探すんだよ。
見守っていてね・・その愛で・・蘭が走るその世界を』

私は素直に想いを伝えた、この時も強い波動が来ていた。
鈴は美しく微笑み、私を見て強く頷いた。
オヤジは席を立ち、母親はまた・・蘭に抱かれて泣いていた。
「ありがとう・・伝えてみせるよ、私も権利者だから」と鈴が笑顔で言った。
『大丈夫、鈴なら・・素敵なママだし・・あの千鶴と同じＤＮＡを持ってるんだから』と笑顔で返した。

「あなたが外してくれたのね、この子の弟に対する後悔を。
私は今日会って・・嬉しかった、少し前に宮崎で会った時に感じたけど。
それが確信できる姿を見て、その晴れやかな笑顔を見て。
後悔は外れたと思ったわ・・そしてあなたが、主人に話したさっきの話を聞いて。

そして今の話で・・私も主人も外れたわ・・間違いに気づいた。
どこかで息子の話を避けていた、家族全員が・・それが思いやりだと思ってた。
馬鹿な話よね・・家族なのに・・そんな事をするなんて。
あの子が心配してるよね、こんな状態の家族を見ると。
自分の事でそうなってるって、感じてしまうよね・・話さないといけないね。
夫婦で・・家族で・・忘れてないよと、語りかけてあげないと。
心の中だけでなく・・きちんと言葉に出して・・伝えないと。
私はあの子に対し、唯一の権利者・・母親である事は・・永遠に続くのだから」

私は母親の強い言葉を聞きながら、嬉しくて笑顔で頷いた。
蘭の最高の満開が咲いて、母親に抱きついた、母親も嬉しそうに蘭を抱いていた。

鈴が笑顔で挨拶をして、帰って行った。
落ち着いたのか、オヤジが笑顔で帰ってきた。

「なぁ小僧・・たまには遊びに来てくれよ、一人ででも」とオヤジが微笑んだ。
『オヤジさん、もちろん来ますよ・・今から稲刈りも、まだあるんですよね?』と笑顔で返した。
「あぁ有るぞ、早期米は売るだけだから、自分が食うのは普通期米なんだよ」と笑顔で言った。
『了解です・・日程を教えて下さい、俺は何でも経験したいんです・・稲刈り経験をよろしくです』と笑顔で返した。
「本当か!・・約束だぞ・・なんなら婿養子修行でもするか」と二ヤで言った。
『はい・・それもやっときます、だから他の作業も来ますよ・・な

んせ不安定な仕事の、交渉人ですから』と二ヤで返した。
「なぁ小僧、ありがとな・・俺も嬉しかったよ・・娘の本当の笑顔が見れて」とオヤジが笑った。
『13歳の、俺の望みはそれだけですから・・源氏名蘭の・・笑顔が見たいだけです』と微笑んだ。
「お前・・泣かそう泣かそうって、持って行くだろう・・怖い奴だ」とオヤジが笑った。

『泣くのは、今夜にして下さい・・お母さんと2人で。
酒でも飲みながら・・思い出話を存分に・・お互いに知らない話も出ますよ。
俺が次の長期の休みには、泊りがけできて・・人脈を作ってみせます。
息子さんの、友達や仲間と親しくなって・・聞き出して見せます。
その時に号泣してください・・絶対にありますよ、家族が知らない世界が。
好きな女子も・・変え難い仲間も・・夢も・・その足跡をお見せしますから』

私は親子3人を見ながら、笑顔で言った。
「まいった・・俺の負けや・・ありがとう、いつまでも楽しみに待ってる・・足跡を見る事を」とオヤジは俯いて泣いていた。
母親がオヤジの肩をさすり、蘭が青い炎を最大限にして包んでいた。

『仕方ないな～・・泣き虫は遺伝ですね・・しょうがない、台風話をしてあげよう』と笑顔で言った。
「待ってました・・聞かせてあげて、あなたの本質を」と蘭が満開で微笑んだ。
オヤジと母親の楽しそうな笑顔を見ながら、物語調で台風桟橋事件

を話した。
オヤジの爆笑と、母親の楽しそうな笑顔が、楽しい午後を締めてくれた。

オヤジが持って帰れと、米と沢山の野菜をケンメリに詰め込み。
母親が味噌と地元の調味料を積んでくれた、私は笑顔で挨拶をした。
「稲刈り・・約束ですよ・・楽しみにしてるよ、あんな顔の主人・・久しぶりに見たわ」と2人の時に母親が微笑んだ。
『もちろん来ますよ・・お母さんの、手料理目当てに』とニヤで返した。
「必ず・・いつの日か・・本当の息子になってね」と笑顔で返してきた。
『約束します・・それだけは、絶対に諦めないと』と真顔で返した、母親は笑顔で頷いた。
蘭が来て車に乗って、手を振って別れた。

蘭は黙って運転していた、私も何も話さなかった。
人気の無い山道で車を止めて私を見た、私も蘭に微笑んだ。
「少しだけ～・・待てないから～」と私に抱きついた。
『人気の無い山道で・・これは危険な設定だ』と囁いて強く抱きしめた。
蘭は泣いているようだった、私は確信していた・・蘭が完全に次のステージに上がったと。
その温もりの強さと、青い炎に包まれながら。

「よし！・・どっか行きたい所ある？」と蘭が満開で微笑んだ。
『蘭の行きたい所～』と笑顔で返した。
「じゃあね～・・瞑想したい」と満開で微笑んだ。
『了解・・誰か来てるよ・・若手が必死で』と笑顔で返した。
「必死でする事でもないでしょうに」と蘭が満開で笑って、ハンド

ルを北に切った。
緑のトンネルを抜けると、海が広がった、私は開放感に包まれていた。

「足跡・・いつになっても良いから、見せてね・・父も母も本当に楽しみにしてるよ」と蘭が前を見て微笑んだ。
『そこは任せて・・人脈作りのプロだよ』と笑顔で返した。
「生きてれば・・来月で２０歳か～・・彼女の一人もいたのかな～」と蘭が微笑んだ。
『いたでしょう、絶対に・・蘭の弟で、あの母親の息子なら』と笑顔で返した。

「父親は～」と蘭が私に二ヤで言った。
『息子の恋愛の部分に、父親の影響って・・ほとんど無いと思うよ』と二ヤで返した。
「なるほどね～・・どうしてか、述べよ」と蘭が満開で促した。
『簡単だよ・・見せてるから、自分の好きな女はこれだとね』と笑顔で返した。
「そっか～・・そうだよね～」と蘭が満開で納得した。
太平洋の波の乱反射で、蘭の横顔が輝いていた、全てを受け入れているようだった。
自分との和解の日も近いのだと感じていた、私は幸せを感じながら蘭を見ていた。

『将来・・蘭父さんと蘭母さんの存在を、誰が一番喜ぶのか・・それは確信したよ』と笑顔で言った。
「えっ！・・誰かな～」と蘭が二ヤで探りを入れてきた。

『間違いなく・・シズカだよ。
シズカが２人に出会えば、泊まりに行くよ・・オヤジさんの考え

と合うから。
シズカは自然児なんだよ、環境に凄くこだわるんだ。
律子の妹・・ようするに叔母に当たる人が、綾の山手の方に住んでて。
シズカは集中したい時は、そこに泊まりに行くんだ。
教室のスロープの時も、美由紀の車椅子の時もね。
でも叔母の家には、物作りに興味のある人間がいない。
だから前までは、俺を無理やり連れて行ってた。
煮詰まると・・誰かに話したいんだよ・・愚痴を聞いて欲しいんだ。
でもその相手は、絶対条件として・・物作りが好きな相手じゃないと駄目なんだよ。
蘭父さんに会った時の、シズカの笑顔が浮かぶよ、その申し分ない環境もね。
次回はシズカを誘うかな・・今はシズカに煮詰まって欲しくないから。
どう思う？・・蘭』

笑顔で前を見てる蘭に聞いた、蘭は満開で微笑んだ。

「泣くよ・・オヤジが・・シズカが家に来て、これどう思うって聞いたら。
もう嬉しくて嬉しくて・・多分、号泣するよ。
私の兄も弟も・・その分野に興味が無かったから。
今日、あんたがすぐに、コンバインのシャフトを押さえた時。
あの時のオヤジの顔・・本当に嬉しそうだったよ。
やっぱり欲しかったんだね・・物作りを語り合う相手が。
その相手が・・シズカだったら、もう養子にくれって言うよ。
私は思ってたの・・オヤジが勝也父さんに会ったら、どれほど喜ぶのかって。

そして母が・・律子母さんに会ったら、なんて言うのかってね。
楽しみでしょうがないよ・・その前にシズカに会ってもらおう。
絶対にオヤジはシズカの部屋を用意するよ、いつでも遠慮なく来れるように。
そして母が嬉しそうにシズカと話す姿が見える、私も今、幸せを感じてるよ」

蘭が嬉しそうに満開で微笑んだ、私も笑顔で頷いた。
『そうなると・・分かる？・・誰が訪ねるのか～・・多分シズカは最初に、車椅子を考えるから』と蘭に二ヤで言った。
「えっ！・・まさか・・豊が実家に来る！」と蘭が驚いて言った。
『絶対来るよ・・豊兄さんは、中型バイクも持ってるし・・1時間の道のりなんて、楽しんで来るよ』と笑顔で返した。
「それこそ号泣する・・オヤジが豊を感じれば」と蘭が満開二ヤで返してきた。
『俺もそれは確信してる・・あの存在に触れれば、オヤジさんは感じるよ』と笑顔で言って海を見ていた。

「私ね・・ハルカの実家に、あなたが同行した話を聞いてて。
想像してたんだけど、でも私の両親が相手じゃ、さすがのあなたも緊張すると思ってた。
またしても裏切られた、感動したよ・・嬉しかった。
欲しいものはないかと聞かれて、即答したあの言葉・・忘れられないよ。
どんな素敵なプロポーズの言葉より、強く響いたよ。
オヤジの後悔を外してから、言った言葉だったから。
私はもう大丈夫だよ・・でも私の父と母も頼むね、感じていてあげてね。
もう一度だけ言うね・・私にはもちろん、父にも母にとっても。
あなたは誰かの代わりじゃないよ・・それだけは覚えていてね」

蘭が優しく囁いた、私は笑顔で頷いた、満開を見ながら。
その年の１１月に、シズカを誘って蘭の実家を訪ねた。
私はその前に、稲刈りの手伝いにも来ていて、もう両親とは仲良くなっていた。
シズカを紹介して、オヤジと母親の笑顔を見ていた。
シズカがいきなりオヤジに、コンバインを運転させてと笑顔で言った。
庭でコンバインの操作を教える、楽しそうなオヤジを母親と縁側で見ていた。

シズカは案の定、蘭の実家を気に入り、冬休みに泊まりに行っていた。
そしてオヤジと2人で、必死になってＹＵＴＡＫＡ？に取り組んだ。
母親が宮崎に出てきて、律子に会わせると・・すぐに意気投合した。
その時に、母親が教えてくれた。

「主人はやっと生きがいを見つけました、シズカちゃんのおかげで。
物作りの好きな人間にとって、最も重い取り組むべきテーマを、提示してくれました。
２人で交互に車椅子に乗って、話し合う姿を見て・・私は本当に嬉しかった。
そして豊という、素晴らしい青年が訪ねて来てくれた。
主人も私も感動してました、その強い想いを感じて。
そして娘が連れてきてくれました、美由紀ちゃんを・・主人の心は完全に魅せられました。
美由紀という強い生き方に触れて、そして美由紀にありがとうと微笑まれて。
自分の部屋で号泣してました・・俺は幸せだと言いながら。

形有る物を残したい・・そのずっと抱えていた夢に、最高の形で取り組める事が。
その想いを豊やシズカが感じてくれる事が、そしてなにより。
美由紀が喜んでくれる事が、その笑顔を見れる事が・・生きがいになったようです」

母親は嬉しそうに笑顔で言った、律子も嬉しそうな笑顔で返した。
私は思い出していた、オヤジが話してくれた沢山の事を。
植物を命として育てる男の言葉を、オヤジが大切な経験をさせてくれた。
人として生きる事は、命を摂取する事だと、ミノルと同じ言葉で話してくれた。
未熟な私に伝えてくれた、大切なバトンを繋いでくれと言うように。

ケンメリで玉砂利を進むと、見覚えのある軽自動車とフォルクスワーゲンが止まっていた。
蘭と笑顔で降りて、本堂に向かった。
ユリカと美冬が瞑想していた、静かなる空間が出来ていた。
ユリカの正座する姿に、見取れていた、その静寂さえ連れている姿に。
蘭は和尚に笑顔で挨拶をして、本堂のユリカの横の座布団に正座して目を閉じた。
その姿に迷いが無く綺麗に背筋が伸びていた、美しい横顔を見ていた。

「何をやったのかの・・蘭は段階が上がったの」と和尚が笑顔で言った。
『うん・・今日実家に行って来たよ、久しぶりに父親と会ったからかな』と笑顔で返した。
「そうじゃったか～・・・さすが蘭よの～・・・あのユリカの横には、

中々座れんぞ」と和尚が微笑んだ。
『確かに・・ユリカは静寂の中にいるね、瞑想してたのか～・・・どおりで波動が来なくなったわけだ』とユリカを見て言った。
「小僧～」裏口から美由紀の声がした、私が開けると美由紀が微笑んでいた。

『美由紀・・瞑想か』と笑顔で言った。
「うん・・黒いケンメリが見えたから」と笑顔で言った。
私は後ろから歩いてきた、母親の節子に俺が送っていくと伝えて、美由紀を抱き上げた。
美由紀は荘厳な光景を見て、笑顔で私に頷いた。
私は蘭の横に美由紀を座らせた、そして美由紀が瞳を閉じた。
美由紀はもちろん正座は出来ないが、その座る姿勢は、和尚も認める美しさだった。

「素晴らしい光景じゃね～・・これにユリがおれば、完璧じゃよ」と和尚が嬉しそうに言った。
『しかし、美冬も熱心だね・・形になってきたね、雰囲気が出てきたよ』と和尚に言った。
「あの子が教師を選んだ・・それだけで、希望になるぞ」と和尚が言った。
『そうだね、伝えるよ・・美冬は大切な事を』と笑顔で返した。

最初に美冬がが終わった、蘭と美由紀の存在を見て驚いていた。
「ちょっと～・・あれが噂の美由紀ちゃん？」と美冬がが来て笑顔で言った。
『そうだよ・・凄いだろ～』と二ヤで返した。
「待ってるから・・紹介してね、どうしても知り合いたい」と微笑んだ。
『もちろん、良いよ・・でも長いかもよ』と笑顔で返した。

「自信無くすよ・・かなり近づいたと思ってたのに。
ユリカさんと蘭姉さんだけでも無くすのに・・あの美由紀ちゃんの姿は、圧倒的だよ」

美冬が3人を見て言った、美由紀をじっと見ていた。
『美由紀の瞑想は、別世界だからね・・乗り越えた物が違いすぎる』と笑顔で言った。
「よく分かるよ・・そして感じたいと思うようになったよ」と美冬が微笑んだ。

その次にユリカが瞳を開けて、隣の蘭と美由紀を見て驚いていた。
爽やか笑顔で歩いて来た、私はユリカに微笑んだ。
「来たね～・・いよいよ、ニュー蘭の発進だね」とユリカが微笑んだ。
『うん・・俺も楽しみだよ』と笑顔で返した。
「しかし美由紀・・どんな世界に棲んでるんだろう・・あの若さで、気配すら無いよ」とユリカが美由紀を見て言った。
「和尚様の見解は、どんな感じですか？」と美冬が笑顔で聞いた。

「美由紀は囚われなくなった・・全ての事柄に。
人はどうしても欲があるよの～・・それは仕方ない事なんじゃよ。
生きる上で、何らかの目標を持ってないと、人は前に進めんのだから。
しかし美由紀はそれを捨て去った、全く欲が無いんじゃよ。
こうありたいとか、こうなりたいすら今は無い・・ただ美由紀でいたいんじゃ。
自分でいることだけが、美由紀の望みなんじゃよ。
両足の無い・・車椅子に乗る・・美由紀であり続けたい。
その強い想いが、あの姿を作る・・美由紀は瞑想で捨て去る。

立って歩きたいとか、健常者ならどうこうとか・・全ての願望を。
だからこそ・・周りに響く・・勇気を与える。
失敗も挫折もさせない・・それは全て、得られなかったというだけの事だから。
成功など幻想だと笑い飛ばす、たかだか何かが欲しくてした事だろうと。
金や物や名誉や権力や・・様々な何かが欲しかっただけの行為だろうとね。
その強い想いに、何かを返せる者は・・滅多に存在しない。
だからこそ、美由紀は小僧に執着するんじゃ。
小僧はそんな欲求で生きていない、貴重な人間だからな。
小僧が見せ続ける、命と向き合う行為・・それだけが美由紀の興味なんだよ。
何も欲しない、美由紀が・・唯一その先が見たいと願う事。
小僧が関わる・・あらゆる個性の子供達の、行く末だけなんじゃよ」

和尚は静かに言った、私は美由紀を見ていた。
静寂の本堂に、夕方の風が流れ込んできた、微かな秋の匂いを連れて。
女性達の想いを包みながら、本堂を吹き抜けて行った。
私が話した進化の話は、私が乳児と触れ合い感じた事だった。
生命の神秘を感じて、そう考えるようになったのだ。
その乳児達の想いを感じて、最初に陸に上がった生命の存在を感じた。
不思議な事だと思っていた、羊水の中で成長する事が。

確かに学術的に言えば、そうなんだろうと思う。
しかしなぜ・・水の中で育てるのか、そう思っていた。
そして導き出したのが、進化の歴史を体験させるという物語。
私は今でもそうであると、自分では思っている。
私は触れ合ったことがあるから、進化を出来ずに感情を持った人間に。
その純粋さに触れて感じたのだ、進化する過程で道を間違えたのだと。
文明の発達は便利を求めた、それに付随して欲が産まれた。
それは悪いことではない、しかしその欲は間違った方向に進みやすい。
人間だけであろう、欲などの為に、同じ種類で殺しあうのは。
武器は日々進歩していく、その速度の競争をする。
それにより傷ついた人を乗せる、車椅子は進歩が極めて遅かった。
私はその矛盾に嫌悪感を覚えた、下手な嘘を繰り返す社会にも。
私は映像で思い出す、庭で暗くなるまで語り合う。

ツナギを着た、オヤジとシズカの姿を・・その理想を出し合う光景を。

物を作り出し・・進歩させる・・その本質を。

理想と現実

静寂を作り出す空間に、秋を微かに思わせる風が流れ込んでいた。
高い天井が、その空間の対流を大きくしていた。
瞳を閉じて座る2人を見ていた、静寂の中に熱があった。

蘭が瞳を開けて、隣の美由紀を見て嬉しそうな満開笑顔になった。
「いつ来たの？・・全然気づかなかったよ」とユリカと美冬に挨拶して笑顔で言った。
『蘭が始めてから、すぐだったよ』と笑顔で返した。
その時に美由紀が目を開けて、私を手招きして甘えた。
私は二ヤで美由紀の側に行って、抱き上げた。

『最近、甘えん坊だな～・・美由紀』と笑顔で言った。
「ユリカさんが言ったでしょ、抱っこが短いって」と笑顔で返された。
『美由紀・・PGの美冬さん、○○大の教育学部だよ』と美由紀を蘭とユリカの間に座らせて、美冬を紹介した。
「初めまして、美由紀です」と微笑んだ。
「美冬です・・よろしくね、会いたかったのよ～」と美冬が微笑んだ。

「嬉しいですね・・教育学部の人に、会いたかったと言ってもらえるのは」と美由紀が嬉しそうに微笑んだ。
「美由紀ちゃん・・小学校は普通の公立じゃ無かったのね？」と美冬が真顔で言った。

「はい・・仕方ないことなんですけど、養護学校でした。
小学生では自分で移動も、トイレも難しかったから。

力が無くて、車椅子の移動も難しかったですね。
でもとても良い経験になったと思ってます、色々な障害を持つ友達も出来たから。
ただ養護学校は、授業も特別だったから。
私は学びたかったんです・・普通に高校を出て、手に職を付けたかった。
それに障害を持つ仲間に、頑張れば出来るって見せたかった。
だから中学は普通の学校にこだわりました、沢山の人達の愛で公立中学に入学できました。
今は感謝をしながら、中学生活を楽しんでいます」

美由紀は笑顔で答えた、美冬も笑顔で聞いていた。
「そっか～・・小学生では難しいのね」と美冬が微笑んだ。
『難しいけど、無理じゃないだろ・・美由紀』と私は真顔で美由紀に言った。
「無理じゃないよ・・フォローする人が付いていれば、そんな動きも今はあるよ・・でも中々決まらないけど」美由紀も真顔で答えた。
「美由紀がいるのといないのとの、生徒達に与える影響を感じないといけないよね」とユリカが微笑んだ。
「それが、その後に・・どれほどの良い影響であるかを」と蘭が満開で微笑んだ。
「そこなんですよね～・・その大切さを分かる人が、上にいないと」と美由紀も真顔で返した。

「美冬・・PGでは感じにくい事を1つ教えるね」とユリカが深い瞳で言った、美冬は少し緊張して頷いた。

「お酒を飲みに来るお客さんで・・その飲み方が、だらしないのは。
警官と教師なの・・総合的な平均で考えるとね。
警官はどうしようもない、結局怖い者が無いのよね。

極論言うと一般人は、ヤクザなんて怖いでしょ・・関わりたくないよね。
必要悪なんて甘い事は言いたくないけど、それでも存在する以上、意味はあるのよね。
警官はそれが怖くないの・・それで勘違いして、高圧的になるのよ。
そしてなぜか教師・・その飲み方は、だらしない人が多いの。
それは理想と現実が違い過ぎて、心の葛藤があるんでしょうね。
日教組の考え方も、教育委員会の指導方針も・・理想からは遠い。
生徒のことを、一番に考えてると思えない。
教師になりたての若者は、葛藤の中に入っていくの。
日教組に入らないと、教師としての仕事がし辛くなる。
入れば組織に従わなければならない、そして教育委員会も口を出す。
それは矛盾だらけらしい、私の知り合いで嫌気がさして辞めた人が・・3人もいるの。
夢を描き、努力して成った教師を・・1年以内に辞めた人が。
美冬・・自分を持っていてね、それは難しい世界だけど。
あなたと千秋には、私は期待してる。
エースが言うように、勉強だけした人間じゃ駄目だと思う。
教師って・・学問だけを教える人じゃないから。
一度会わせて貰えば良いよ、エースと美由紀の担任、林　清次郎と言う人に。
教師として1つの答えだと思ったよ、あの精神力・・そして強い優しさ。
美冬・・私エース以外に頑張れって言わないけど、でもあなたには言うね。
頑張って美冬・・全てを賭けても良い、その職業は・・教師という仕事なら」

ユリカは静寂を連れて、静かに強く言った、美冬も真顔で強く頷いた。
「ありがとうございます、ユリカ姉さん・・大切な話でした」と美冬が微笑んだ。
「うむ、さすがユリカじゃね・・美冬、第3土曜の3時に来れば、清次郎が来とるよ」と和尚が笑顔で言った。
「そうなんですか・・伺います」と美冬が笑顔で返した。
『美冬・・清次郎爺さん手伝ってみたら、良い経験になるかもよ』と笑顔で言った。
「何してるの？・・私で手伝えるの？」と美冬が真顔で聞いた。

『美冬や千秋なら・・出来るよ。
清次郎、第三土曜日の老人たちの勉強会で、文字を教えてるんだよ。
もちろんボランティアでね・・学校に行けなくて、字を知らない老人達に。
文字を教えるなら、誰でも出来るって事じゃないんだよ。
老人達は学校に行きたかったんだ、だから教師に教えて欲しいんだね。
だから教育学部の美冬が来たら、喜ぶと思うよ。
俺も来て・・清次郎には紹介するから、考えてみてね』

私は美冬の笑顔を見ながら、笑顔で伝えた。
「考える必要なんて無いよ・・できるなら、やってみたい」と美冬が笑顔で返してきた。
「サク爺さんとか、喜んで倒れるかもよ」と美由紀が笑った。
「作蔵は好きやからの～、若い娘が・・美冬なら豊満やから危ないの～」と和尚が二ヤで言った。
「それは和尚もでしょう・・最近艶々してるよ～、血圧高いでしょ～」と美由紀が二ヤで返した。

「美由紀・・最近厳しくなったの～」と和尚がウルを出していた、全員が笑っていた。

和尚に礼を言って、ユリカと美冬と一緒に寺を後にした。

私はケンメリに車椅子を折りたたんで乗せて、美由紀を抱き上げた。

「折りたためるの！凄いね～」とユリカが爽やかに微笑んだ。

「豊君の凄いところですよね、最初から折りたたみ式にこだわってました」と美由紀が笑顔で返した。

『ユリカ、次の土曜の午後付き合って・・美由紀を病院に連れて行くから』と笑顔で言った。

「もちろん良いわよ、蘭ほど運転上手くないけど」と爽やか二ヤで返してきた。

『蘭には日曜しか頼めないから、日曜は見舞い客が多いからね』と笑顔で言った。

「了解・・美由紀、楽しみにしてるね」と爽やかに微笑んだ。

『その日に演奏会をしよう、美由紀にも聴かせたいから。

美由紀がペダルを踏めなくて、諦めた事に対する、１つの答えを見せるよ。

ペダルなんて必要無いと主張する、魂のピアニストが本気で弾く時のやり方を。

本気のその上の状況を作り出す、美由紀とミホと沙紀で。

見逃せないよ・・久美子の次の覚醒は』

私は３人に笑顔で言った、３人も笑顔で頷いた。

「すっごく楽しみなんだけど～・・小僧、私が沙紀に会っても良いんだね？」と美由紀が私の耳元に囁いた。

『大丈夫だよ、沙紀なら・・美由紀、要求しろよ・・次のステップを』と笑顔で返した。

「それしか出来ないよ・・私はあの個性の子供に対し、優しい人間じゃないから」と美由紀が真顔で言った。
「いつか分かると思うよ・・美由紀は本当に優しい人だったって、沙紀なら分かるよ」と蘭が満開で微笑んだ、ユリカも爽やか笑顔で頷いた。
「私もそう思うよ・・エース、私にも会わせてね」と美冬が微笑んだ。

『もちろん、お願いするよ。
美由紀が要求するステップアップは、文字だろうからね。
美冬が探しておいてよ、俺が金を出すから・・1から文字を覚えるのに。
最も良いテキストをね・・平仮名だけでも覚えてもらう。
その教材を沙紀に手渡すのは、美冬か千秋にして欲しいんだ。
俺は沙紀に対しての、今の目標は・・どこでも良いから、学校に通う事なんだよ。
沙紀の最初の教師になってよ・・美冬と千秋で。
俺は沙紀に対してだけは、ただの自立を考えてるんじゃない。
本当の自立を目指させたい・・だからよろしく・・美冬』

私は真剣に美冬の強い瞳を見て言った、美冬は美しい真顔で強く頷いた。
「ありがとう・・あなたは私達には、別のステップアップも提案してくれるのね」と美冬が微笑んだ、私も笑顔で返した。
「その教材費は私と蘭で出すから、大切な宝物のお礼として・・明日、蘭も手に入れるようだからね」とユリカが微笑んだ。
「やっぱり！・・嬉しいな～、そうしましょう」と蘭が満開で微笑んだ。
笑顔のユリカと美冬に手を振って、美由紀の家を目指した。

美由紀の家の前にケンメリを止めると、美由紀の父親が出てきた。
蘭が降りて満開で頭を下げた、父親も驚いて挨拶していた。
私は美由紀を抱き上げて、車を降りた。

「お前な～・・贅沢すぎるぞ、交代しろ」と父親が二ヤで言った。
『節子がいるでしょ・・怒られるよ～』と二ヤで返した。
「こんな綺麗な人と・・一時の気の迷いなら、ポイって粗大ゴミの日に捨ててていいから」と父親が蘭に笑顔で言った。
「もう嫌ですわ～・・お父様ったら～」と蘭が満開笑顔の営業トーンで返した。
私は玄関の家用の車椅子に美由紀を乗せて、笑顔でまた明日と言って別れた。
ケンメリからＹＵＴＡＫＡ?を出して、蘭と楽しそうに話すオヤジに渡した。

「じゃあ今度、部下を誘って行くよ」と父親が笑顔で言った。
「お待ちしてますね、美由紀ちゃんのお父さんなら・・皆、大歓迎ですよ」と満開笑顔で返して、見送る父親に手を振って別れた。
蘭はご機嫌で運転していた、その横顔が充実感に溢れていた。

アパートに帰り、交代でシャワーを浴びて、私はＴＶの【さざえさん】を見ていた。
「珍しい・・ＴＶ見てるなんて」と蘭が満開で言った。
『唯一これだけは、暇だと見てたんだ・・カツオに負けたくなくて』と笑顔で返した。
「面白い見方だね～・・感覚は分かるけどね」と満開二ヤで返された。

素顔の蘭と腕を組んで、江平という町まで出て、小さな居酒屋に入った。

「地鶏が美味しいのよ・・炭火焼」と小さな個室に通されて、蘭が満開笑顔で言った。
『匂いだけでも美味そうだね』と笑顔で返して、ビールで乾杯した。
「ねぇ・・私、見た感じも変わった？」と蘭がご機嫌満開で聞いた。
『全てが揃ったって感じかな・・今からだね、ニュー蘭の出動は』
と笑顔で返した。

「美由紀との出会いだよ・・それは確信してる。
美由紀に会って、感じたよ・・その強さと優しさで。
自分の望みは何だって、自分に問いかけが出来た、そして今の答えも出たよ。
その答えは単純なものだった・・蘭でいようと思ったの。
私の理想として作り上げようと思った、蘭という個性をね。
どっかでもう一人の自分として見ていた、蘭という存在を。
重ねて行きたい・・私自身の姿として、いつか綺麗に重なると思ってる。
ユリ姉さんやユリカ姉さんみたいに、嘘偽りない本来の姿として」

蘭は深い瞳で静かに言った、私は少し驚いていた、その覚醒してきた姿に。

『ＯＫ、蘭・・じゃあ提案するよ、ミチルがクラブに出る時。
ＰＧ以外の魅宴とゴールドの時は、蘭が店の責任者で入って。
ミチルの店の女性と、銀河と若手を引っ張って。
俺がミチルに話すから、まぁ絶対にＯＫするだろうけど。
ミチルがＰＧの時は、ミコトにやってもらう。
今回の共同体の意味で最も難しい事、女帝ミチルのフォロー。
それを蘭とミコトで答えを出す、接客だけじゃない。
若い女性を牽引する女性として、責任の重い仕事として。
やってみるだろ・・これ以上ない、難しい挑戦だから』

私は満開蘭を見ながら、笑顔で言った。
「もちろん、やってやるよ・・最高の舞台なんだから」と蘭が笑顔で言った。
『よし、これで外枠は出来てきたな・・あとはナギサ覚醒を待つだけだよ』と二ヤで言った。
「ナギサ・・変化してきたよ、落ち着きが出てきたね」と蘭が満開で微笑んだ。
『北斗に一番影響受けてるのが、ナギサだよね・・どこか自由な所が似てるよ』と笑顔で返した。
「カスミもハルカも、お泊りで実家に帰ったし・・楽しみだね～」と蘭が微笑んだ。
『ハルカも帰ったのか～・・そりゃあ楽しみです』と二ヤで返した。

蘭が酔ってご機嫌になり店を出た、夜風が気持ち良かった。
昼間の熱が冷めるのが、少し早くなったと感じていた。
蘭は生ビールを4杯も飲んで、少し千鳥足気味に歩いていた。
アパートが見えた所で、蘭を抱き上げた、満開で笑ったいた。

「帰ったら、すぐに寝るから・・寝るまで添い寝しててね」と満開で微笑んだ。
『了解・・眠ったら、日記書いて・・時間割しないと』とウルで返した。
「頑張れ・・中学生」とニヤニヤで返された。
部屋まで抱いて入り、蘭が洗面所で歯磨きをしていた。
私は着替えて、蘭を待っていた、満開笑顔で帰ってきた。

「今日の日記・・プロポーズしたって書いといてね、返事は7年後に言うから」と二ヤで言って、私の腕を引いた。
『7年か～・・楽しいな～』と二ヤで返した。

「お孫見せるんでしょ・・頑張って」と言った満開蘭を腕枕した。
『やめろよ～・・添い寝する時に、子供作る話は』と二ヤで返した。
「修行よ・・修行・・ユリカ姉さんほど激しくないよ」と笑顔で言った。
『ユリカ・・怖い、本気でしそう』とウルで返した、強い波動が二ヤしていた。

「ねぇ・・明日、沙紀ちゃんの所に行って、ＰＧに来るの？」と満開で微笑んだ。
『うん、蘭が遅番だから・・病院に行ってから来るよ・・お楽しみに』と笑顔で返した。
「やばい・・ワクワクして寝られなくなる」と言って、瞳を閉じた、言葉とは裏腹に、蘭は得意技の、即熟睡を見せてくれた。
私は暫く蘭の寝顔を見ていて、額にキスして腕を抜いた。

自分の部屋に戻り、荷物を出していた。
翌日の時間割を見て、《あ！・・明日からテストだった、まずいかな》と少し動揺した。
ユリカの波動が強く来て、今から頑張れと感じた。
私は日記を書いて、少しテスト対策をしていた。
窓から爽やかな風が吹き込んで、時を忘れてやっていた。
１２時少し過ぎに、蘭の隣に戻り、腕枕して眠りに落ちた。

翌朝、新聞のポストに入る音で目覚めて、洗面所に行った。
歯を磨き顔を洗った、キッチンでハムエッグを焼いていると。
蘭が起きて来た、満開笑顔だった。
「月曜の朝は気持ちが良いね～・・今朝も幸せ」と言って洗面所に消えた。
私は朝食を準備して、英語の教科書を見ていた。

「おっ！・・良い心がけだね、何か焦ってるの？」と蘭が戻ってきて、満開二ヤで聞いた。
『大した事無いよ、今日からテストだった』とウルで返した。
「頑張れ～・・あれ以上に上げなよ・・期末では」と微笑んだ。
『良かった～・・さすがに今回は、厳しいと思ってたよ』と二ヤで返した。

私は食事を済ませて、制服に着替えて、満開蘭に見送られて出かけた。
通学する高校生の間をすり抜けて、美由紀の家のガレージにチャリを止めた。
『みゆ～きちゃん、学校行きますよ～』と玄関を開けて声をかけた。
「は～い・・おはよ」と美由紀が車椅子でやってきた。
『美由紀～・・お洒落したら駄目ですね～、校則違反です』と二ヤで言った。
美由紀は当時の女子で流行中の、淡い色のリップクリームを付けていた。

「やばいかな～・・まぁ小僧は鋭いから、祥子先生は危険だけど」と二ヤで返された。
『不良娘め・・マキやバルタンに憧れるなよ』と笑顔で言って美由紀を抱き上げた。
「マキ先輩・・綺麗になったよね～、良いな～」と美由紀が耳元に囁いた。
『土曜の夜、清次郎が店に来てね・・マキが喜んでたよ』と笑顔で返して、ＹＵＴＡＫＡ？に乗せた。
「さすが清次郎先生、チェックに行ったんだね～」と二ヤで言った美由紀を押して出かけた。
「今日からテストだよ、知ってた？」と楽しそうに美由紀が言った。

『昨夜・・9時過ぎに知った』とウルで返した。
「今日3時間だね・・給食ないよ、良く来たね～」と茶化された。
『美由紀に逢いたいから、学校は来るよ』と笑顔で返した。
「よし・・連続小僧物語～」と美由紀が言って、私が夏物語を話しながら登校した。

教室に入ると勉強してる生徒が多かった、美由紀は沙織が来てリップの話題で盛り上がっていた。
『不良娘が増殖してる・・怖い』とウルで言った。
「小僧が言うな・・史上最悪の不良が」と沙織が二ヤで返してきた。
『俺・・不良じゃないもん』とウルで返した。
「小学生でヤクザに喧嘩売るのが、不良と言わないのか？」と美由紀が二ヤで来た。
「美由紀と駆け落ちしたのは、不良じゃないのか？」と沙織がニヤニヤで来た。
『あっ！・・沙織のせいで、事情聴取される～』とウルウルで返した、強い波動が何度も来ていた。
「張り込みの刑事でもいるのか、危ない奴だ」と沙織が笑顔で言った時に、清次郎が来た。

朝の挨拶をして、清次郎の朝の訓示を聞いて、テストが始まった。
3時間のテストをなんとかクリアーして、美由紀に連続小僧物語を話しながら家路についた。
美由紀の家に着いて、美由紀を家用の車椅子に乗せて中に入った。
リビングのテーブルに、2人用の昼食が用意してあった。
『節子は良い人だ』とウルして言った。
「小僧、麦茶出してね」と美由紀が微笑んで準備を始めた。
私は麦茶を冷蔵庫から出して、テーブルに座った。
美由紀がご飯を持ってきて、隣に入ってきた。

「由美子ちゃん、感覚的にはどうなの・・やっぱり成長が早い？」と生姜焼きを食べながら美由紀が聞いた。
『うん・・5歳とは思えないね、ヒトミと同じだよ』と笑顔で返した。
「やっぱり、精神の成長が早いんだね・・仕方ない事なんだろうけど」と美由紀が真顔で返してきた。
『美由紀の考えを・・述べよ』と笑顔で聞いた。

「やっぱり・・考える時間が多過ぎるんだよね。
感性は鋭いから、相手の感情は分かるんだから。
一人の世界でずっとそれを考えてる、だから掘り下げ過ぎるんだよね。
伝える手段が無い時は、ヒトミもそうだった訳だし。
ヒトミはその期間、9年だよ・・眠ってない時間が、どれほど有るのかと思うとね。
瞑想してるとき感じるんだよね・・ヒトミや由美子の世界を。
精神的に成長するのは仕方ないよ・・自分と向き合い続けてるんだから」

美由紀は真顔で言った、私も真顔で頷いた。
「じゃあ、小僧の自閉症に対する考え方を・・述べよ」と美由紀が微笑んだ。

『美由紀も知ってるけど・・俺はあの病気を障害とは思っていない。
確かに備わってない物もあるだろうけど、感性は鋭いからね。
見た目で引く人が多いよね、やっぱり目に出る事が多いからかな。
それに言葉の発達に影響が出易いし、理解させるのは難しいよね。
目を逸らしてる人や、可愛そうだって自己満足をする人には。
和尚が言ってたけど、病名すら無い昔は・・相当に酷い扱いをされてたらしい。

強い差別を受けて・・母親まで蔑まれていたらしいんだ。
社会はどっかで弱者を探す、弱者を見つけて安心する・・あれよりましだとね。
そんな社会だから・・あの子達は絶望する。
だから俺は、沙紀にできる限りの事をしてやりたい。
マリの時に感じた事を、沙紀で挑戦したい・・自立に向けて。
今は俺の周りに、最高の人材が揃っているから・・挑戦し続けるよ。
沙紀は大丈夫だと思う・・恐怖に対してパニックを起こさない。
閉ざしていないから、俺はあの病名は大嫌いなんだよ。
何も分からない学者が付けたんだ、あの病名で人は勘違いする。
閉ざしていると思ってしまう、ただ伝えるのが苦手なだけなのに。
だから俺は伝達方法を伝授したい、天才マリで感じていた将来図を、沙紀に応用したい。
美由紀・・また手伝ってね・・美由紀じゃないと出来ないから。
頑張れって言えるのも、俺の間違いを指摘してくれるのも・・美由紀だけだからね』

私は笑顔で美由紀に言った、美由紀も笑顔で返してくれた。
「了解・・マリちゃん元気かな～・・きっと今でも、周りを驚かせ続けてるよね」と美由紀が微笑んだ。
『間違いないだろうね・・あの能力は、信じられないからね』と笑顔で返した。
節子が買い物から帰ってきて、礼を言って美由紀と別れて、アパートに帰った。
シャワーを浴びて着替えて、バスで病院に向かった、夏の陽射しが強く主張していた。
病棟の４階に上がり、記名をしてミホの病室に入った。
沙紀もミホもいなかった、私は仕方ないので由美子の病室に向かっ

た。
そこで衝撃を受ける、沙紀とミホが遊戯室にいるのだ。
沙紀は当然かも知れないが、ミホがそこにいる事が信じられなかった。
沙紀と向かい合わせに座ったミホは、無表情のままブロックを積む沙紀を見ていた。
そのミホの表情に、全く拒絶の色が無いことにも驚いていた。
沙紀の母親が私を見て、笑顔を見せてくれた、私も笑顔で返して遊戯室に入った。

『2人とも仲良しになったね～』と笑顔で声をかけた、沙紀が振り向いた。
沙紀が私に歩み寄って来たので、私は笑顔で抱き上げた。
『沙紀・・ミホちゃんと遊んでるの？』と笑顔で聞いてみた。
《うん、ミホちゃんが見ててくれるから、沙紀、嬉しい》と返してきた。
『そっか～・・沙紀はミホが見てると、嬉しいんだね』と笑顔で返した。
私が沙紀を降ろすと、沙紀は遊戯室を出て行った。

私はミホの手を握り、笑顔で土曜の夜の出来事を話した。
ミホは私を見ながら、眠い顔をしていた、私はミホの額に手を当てた。
ミホの体重が腕にかかってきたので、私はミホを優しく抱き上げた。
沙紀の母親がドアを開けてくれて、私はミホを病室のベッドに寝かせた。
『ミホ・・また明日』とミホの寝顔に言って、沙紀の所に行った。
沙紀がスケッチブックを差し出した、私は期待しながら笑顔で受け取った。

沙紀のベッドの横の椅子に座って、スケッチブックを開いた。
幻想的だった・・浅い海の中のような、明るい青の世界が表現されていた。
その真ん中に蘭が満開笑顔で立っていた、真っ白なドレスを着て両手を出していた。
その全体像が、こっちにおいでと言ってるようで・・満開の表情が完璧に描写されていた。
その奥は段々と深い青になっていて、無限の奥行きを表現し。
蘭の髪は水の流れに漂うように揺れて、それが水流だと感じていた。
蘭の奥には岩が描いてあり、その岩の隙間から泡が出ていた。

私は感動しながら見ていて、ハッ！としてゆっくりと反転してみた。
私は沙紀に意識して笑顔を向けるのが精一杯だった、それほどに感動していた。
蘭の後ろの岩のような物は、３頭のイルカだった、３等が固まって泳いでいた。
まるで蘭と戯れるように、イルカたちも楽しげな表情で描かれていた。
私は沙紀のこの画法に、感心していた。
沙紀の母親に聞いたが、沙紀は絵を反転させて描いた事は無いと言っていた。
絵を反転させる必要が無いのだろう、そもそも上下という解釈すら無いのかも知れない。
私はそう思いながら、薬を飲んでいる沙紀を見ていた。

夏の陽射しに、蘭の満開を抱えながら・・その素敵な存在を見ていた。
上下も左右も無い・・嬉しいを探す、可愛い画家を・・。

蘭は当然、この絵に感動して、本当に大切にしている。
最初に自分を描いてくれた作品であり、青の背景が海の中だったのを喜んだ。
青い炎と言われていた、蘭の青のイメージを・・海中として表現した。
沙紀はこの少し後に、ユリカを描く。
そのユリカは満開の桜の中に立っていた、その背景に桜吹雪が舞い。
それが波動を表現して、熱を表現していた・・まるで炎のようだった。
沙紀は描いて見せた・・その内面を。
炎と言われる蘭と、水と言われるユリカを・・真逆の表現で示した。
これが本当のユリカだよ、その内面は熱いんだ・・リアンが絵を見ながら言った。
そして沙紀の描いたリアンは、雪山の上でニカをしていた。
トレードマークである真っ赤なシャツの襟を立てて、その背景に似合わない半袖で。
リアンの座る場所だけ、雪が溶けていて・・新芽の緑が頭を持ち上げていた。

これこそがリアン、その熱の正体・・ユリカが爽やか笑顔で言った。
リアンの涙を見ながら、私は感じていた・・沙紀には見えるのだと。
その者が持つ・・理想の姿まで・・そこまで辿り着くのだと。
海中で微笑む蘭は、穏やかな表情で手を広げる・・こっちにおいでと言いながら。
それこそが・・蘭の求める、理想の精神世界。
散ることの無い、儚さの影すら存在しない・・永遠の満開が咲いている。

問いかけの権利

時が経てば忘れる事も重要とされる、どんなに時が経っても忘れえぬ想いもある。
証なら覚えておこう、それが存在した証になるのなら。
私は問われている、今でも・・その状況に直面すると、問われている。
その次は？・・それの延長上にある物は？・・そう問いかけてくる。

私は沙紀の描いた蘭の絵を見ながら、沙紀に笑顔を見せて手を握った。
『沙紀・・ありがとう、蘭は絶対に、嬉しいと思うよ』と笑顔で言った。
《蘭ちゃん、また来るよね》と返してきた。
『もちろん、蘭もユリカもまた来るよ』と笑顔で返した、強い波動が来た。
《沙紀も嬉しいよ、ユリカちゃんが、今約束してくれた》と嬉しそうに伝えて来た。
『そうだね、ユリカの約束の空気の波だったね』と笑顔で言った、強い波動が何度も来た。

『沙紀・・関口先生の許可取ったから、今度ピアノを聴きに行こうね』と伝えた。
《沙紀、また嬉しい出た、ピアノ聴いてみたい》と嬉しそうに返ってきた。
『うん、それと今日か明日に、沙紀がその人を見ながら、描いて欲しい人を連れて来るね』と笑顔で言った。
《うん、初めてだね、小僧ちゃんがそれを言うの、沙紀は楽しみだよ》と返してきた。

『うん、沙紀・・楽しみにしててね、裏表の無い大人の人だから、沙紀が感じたままに描いてね』と伝えた。
《分かった、楽しみに待ってるね》と返してきた沙紀を遊戯室に見送った。
ミホは診察なのか、いなかった。
私は沙紀の棚に置いてある、紙のケースに蘭の絵を大切に入れて病室を出た。

由美子の病室に向かうときに、廊下で若いナースに会った。
「小僧ちゃん、学校は？」と二ヤで聞かれた。
『テストだから、半日なのだよ』と二ヤで返した。
「そっか～・・ねぇ演奏会楽しみなんだけど～」と横に並び笑顔で言った。
『婦長に言っといて、土曜の夕方・・夕食後に、外出許可を頂きたいとね』と笑顔で返した。
「了解・・私も行くよ・・楽しみだ～」と嬉しそうに微笑んだ。
『店を見て、転職を考えるなよ・・素質あるからな～』と二ヤで返した。
「有ると思うの～・・嬉ね～」と二ヤで返された。
『素質は充分だよ・・でも、白衣の天使の素質の方が勝ってるよ』と笑顔で言って、笑顔のナースと別れて由美子の部屋に入った。

祖母が笑顔で迎えてくれた、立派な額に入った由美子の絵が飾られていた。
『沙紀も喜びますよ、こんな立派な額に入れてもらって』と笑顔で言った。
「足りない位ですよ・・主人が絵を見て、すぐに買って来ました」と祖母が笑顔で返してきた。
『そうですか・・今からかも、作品が増えますよ』と笑顔で言って、由美子の横に座り手を取った。

『由美子・・起きてるね、ご機嫌かな？』と笑顔で言った。
《うん、沙紀ちゃんの絵が見えるし、遊びに来てくれるから》と元気良く由美子が返してきた。
『そうだね～・・沙紀は由美子が、大好きだからね』と笑顔で言った。
《小僧ちゃん・・由美子、教えて欲しいの・・小僧ちゃんはヒトミちゃんを、絶対に忘れないの？》と由美子が聞いてきた。
私はその真剣な熱が染みてきて、由美子を見ていた、その時に北斗と関口医師が入って来た。

『由美子・・お話するから、由美子は何も言わないで良いよ、聞いてるだけで』と笑顔を意識して言った。
《分かった・・ありがとう》と由美子が返してきた。
私は関口医師を見た、笑顔で私を促した。

『由美子・・俺がヒトミと初めて会ったのは、小学3年生の秋だったんだよ。
俺もヒトミも9歳で、今の沙紀と同じ歳だった。
ヒトミは東京の病院から、生まれ故郷の宮崎の病院に転院してきたんだ。
俺は学校に上がった7歳から、小児病棟に遊びに行ってたんだよ。
家が近くてね・・夏、涼しくて、冬、暖かいからね。
それに友達が沢山いて楽しかったから、晩飯食べて家を抜け出していたんだ。
俺は・・由美子も知ってるけど、お喋りさんだから。
小児病棟で遊んでる時も、障害や病気の子と楽しく遊びたくて。
自分の気持ちを伝えたくてね、その時には目で伝える事が少し出来ていた。
そんな生活をしてる時に、ヒトミに会ったんだよ。

目も耳も、もちろん言葉も・・体を動かすことさえ出来ないヒトミにね。
俺はそんなヒトミを、好きになっていたんだよ。
ヒトミの周りに優しい何かがあったから、毎日ヒトミに話をしてたんだ。
そしてどうしてもヒトミと交信がしたくて、色々考えたんだよ。
ヒトミに触れる事が出来るのは、由美子と同じで左手だけだった。
だから左手を握って話をしてたんだ、ヒトミは多分・・温度で伝えてくれていた。
でもその時は何も感じなかったんだよ、微かな温度の揺れにね。
その時ね・・俺は好きな人がもう一人いて、それは幼稚園の時の先生だったんだよ。
ヒトミに会わせてくれたのも、その先生だったんだ。
ヒトミのお母さんと、その先生がお友達でね。
その日・・その先生が結婚するって教えてくれた、俺は寂しくて・・悲しくてね。
ようするに、失恋したんだよ・・どうにもならない恋だとは、なんとなく知っていたけど。
そして悲しくてね、でも誰にも言えなかった・・その事は。
寂しい心のまま・・ヒトミの手を握ったんだ、その時に感じたんだよ。
ヒトミの温度の揺れをね、ヒトミが最大限の力を出して伝えてくれたんだ。
俺の寂しい心を感じて、必死で伝えてくれた・・自分がいるってね。
ヒトミが俺の側に付いてるって・・自分には意思があるってね。
それを感じた時には、寂しさは忘れてたよ・・嬉しくてね。
俺はヒトミと話がしたくて、ヒトミの優しさに応えたくて。
一生懸命に温度の言葉を覚えたんだ、それは・・ヒトミが好きだったから。

動けなくても、目や耳が使えなくても・・言葉が話せなくても。
そんな事は関係なかったんだよ、ヒトミの優しさが好きだったから。
それからヒトミと、沢山の話をしたよ・・俺の事は正直に、ヒトミを好きだと言う事も。
でもね、ヒトミは体が弱っていた・・由美子と違って、体の限界が近づいていたんだよ。
俺も関口先生も、それは分かっていた・・ヒトミもね。
そして俺はヒトミに頼まれるんだよ・・道を教えて欲しいと。
左手に心を誘って欲しいとね・・もう左手を動かすだけの力しか、残ってないからって。
俺は考えたんだよ・・由美子・・俺は由美子との約束は守るからね。
由美子には何も隠さない・・それは、由美子には可能性が有ると信じてるから。
由美子はヒトミとは違うから、体が全然違うから・・由美子は強いからね。
ヒトミのお願い・・それをしたら、俺はヒトミの・・残り時間を減らすと思ったんだ。
俺は正直に、その気持ちをヒトミに言った。
そうしたらヒトミはこう言ったんだ・・それまでのどんな事より、強く伝えて来た。
1年ただ寝て生きるより、1ヶ月意思を示して生きたい。
ヒトミが泣きながら伝えて来た、俺はそのヒトミが愛おしかった。
その気持ちが流れ込んできて、ヒトミの願いだと強く感じたんだよ。
だからヒトミのお父さんと、お母さん、関口先生にその事を話したんだ。
お父さんも、お母さんも・・とっても辛かったと思う・・もちろん、関口先生も。

両親はずっと考えて・・最後は、ヒトミの願いを叶えて欲しいと言ったんだ。
俺は嬉しかった・・もちろん辛い事だったけど。
でもね・・由美子・・俺は嬉しかったんだよ、ヒトミの願いだと思ってたから。
だからヒトミの心を左手に誘う時に、約束したんだよ。
俺はヒトミを愛してるから・・どんな事があっても・・忘れないって。
だからヒトミの体が消滅しても、俺の側にいて見ててくれって。
ヒトミが側に寄り添って、感じていて欲しいって・・そうヒトミに伝えた。
ヒトミは約束してくれた・・ずっと見てるって、そして伝えてみせるって。
ヒトミがどうしても伝えたい事は、どんな手段を使っても、俺に伝えてくれるって。
そう約束してくれた・・だから俺はヒトミを誘ったんだ、意思を示せる場所に。
ヒトミが左手に来てから、皆にヒトミの意思を示していた。
そして体の限界が来て・・ヒトミの体は無くなってしまった。
でもね・・由美子は知ってるよね、ヒトミと友達になったんだから。
俺は絶対に、ヒトミを忘れない・・だから今までに、何度も伝えてくれた。
病院の床から熱で来たり、由美子に出会った時は・・空気の波に乗ってきた。
由美子・・覚えておいてね、俺はもう少ししたら。
由美子を一度、左手に誘う・・そうして由美子の体の、筋力を付けたい。
由美子は絶対に大丈夫・・由美子の強い体を、より強くしてから。
それから始めようね・・由美子の病気との戦いを、皆で・・全員

で。
北斗もお父さんも、お婆ちゃんも、お爺ちゃんも、関口先生も婦長さんも。
ナース全員・・そして俺も沙紀も・・全員で戦うから。
俺は由美子に約束する・・由美子に何があっても、由美子を忘れたりしない。
そして絶対に諦めない、由美子が治ると信じてる・・俺は後悔してるんだ。
俺もどっかでヒトミが治らないと、諦めていた事を、俺一人でも信じるべきだったと。
どんな状況になっても・・俺だけは諦めてはいけなかったと。
由美子・・俺は諦めない、そして心から信じているよ。
由美子が治ると信じてるよ・・俺もヒトミも』

私は必死だった、泣かないように必死で伝えた、強い波動が何度も来た。
それに乗り何度も伝えられた、ヒトミの優しい言葉が響いていた。
《私の事で何も後悔しないで・・由美子の事で何も後悔を残さないでね》そうヒトミの言葉が強く響いていた。

《小僧ちゃん、ありがとう、ヒトミちゃんの言うとおりだよ、ヒトミちゃんも嬉しかったんだね》と由美子が優しく伝えて来た。
『ありがとう、由美子・・由美子、忘れないでね・・そして絶対に諦めさせないよ』と優しく伝えた。
《うん、それは出来ないよ、ヒトミちゃんに怒られるから》と返してきた。
『そうだよ・・由美子にはヒトミが付いてる、だから負ける事は出来ないんだ』と笑顔で言った。
《うん、由美子頑張るから、その時は左手に誘ってね》と嬉しそうに返してきた。

『了解、由美子・・少しお休み』と優しく伝えて、由美子の返事を聞いて手を離した。
私は限界を感じて、北斗に微笑んで、そのまま病室を出た。
病院をトボトボ歩き、正面玄関から出た時に、フォルクスワーゲンが入って来た。

ユリカが運転席から降りて、爽やか笑顔で手を振った。
私も笑顔で駆け出した、ユリカの優しさに感謝しながら、守られてる幸せを感じながら。
「ふ～・・意外に元気そうだね」と助手席に飛び乗った私に、ユリカが微笑んだ。
『うん、守られていたよ、ユリアとヒトミに』と笑顔で返した。

「凄すぎるよ・・シズカもマキも、そして美由紀も。
美由紀の言ったあの言葉・・そんな悲しい問いかけを許されるのは。
世界中で由美子だけだって言った、あの言葉・・重過ぎるよ。
北斗姉さんは、あなたを追うことも出来なかった。
それだけ感動していたんだよ、あなたと美由紀とマキとシズカに。
自分では語れないと言ったマキ、そして挑戦が始まると、美由紀に言ったシズカ。
その言葉の重さは・・計り知れない・・無責任な言葉じゃない。
自分達も覚悟しようと言ったんだね、その確認を自分自身にしたんだね。
それが小僧に関わる人間の宿命だと、美由紀のように強くなろうと。
そう自分自身に強く言った・・そんな言葉だったんだね。
今から蘭を誘おうね・・その絵を受け取るなら、知らなければならない。
ユリ姉さんも蘭も、当然私も・・沙紀のメッセージの、奥に流れ

てるから。
全員で力を合わせようと・・由美子を心から支えようと。
そう強く言ってると思ったよ・・さぁ行こうね・・次の段階に」
ユリカが静寂を連れて、強く言葉にした、私もユリカを見て強く頷いた。
車を赤玉に止めて、蘭を見てサインを送った。
蘭は私の紙のケースを見て、【了解】【１５】と満開で送ってきた。
ユリカが２人分の弁当を買い、笑顔のユリカとＴＶルームに入った。
ＴＶルームにはマダム・ユリさんと裏方４人組が揃っていた。
ハルカの晴々とした顔が、充実感を漂わせていた。
マリアが賭けてきて、私が抱き上げると、天使全開で充電してくれた。

「今日、学校は？」とハルカが二ヤで聞いた。
『テストで半日・・ハルカ、何おねだりした・・嬉しそうに』と二ヤで返した。
「何もしてないよ・・来年、車買ってくれるって言われただけ」と微笑んだ。
『サーフボード積めるやつにしてね』とウルで返した。
「ミサキがそうするって言ってたよ、今・・日焼け対策研究中だって」と笑顔で返された。

『ミサキは良い子だ・・ねぇハルカ、後でシオンを貸して』と笑顔で言った。
「ちょっと、マダムがいるんだから、マダムの許可を取ってよ」とハルカが真顔で言った。
『何言ってるの・・裏方の時間の内は、ハルカの許可が最重要だよ』とマダムを見て二ヤで言った。

「ハルカ、エースの言う通りじゃよ・・ワシはハルカに任せちょるよ」とマダムが真顔で言った。
「はい！・・ありがとうございます・・それで、用件は」とマダムに頭を下げて、私を見た。
『沙紀に会ってもらう・・シオンを見ながら、描いてもらうんだ』と笑顔で答えた。

「もちろん良いけど・・その意図を、正直に教えて？」とハルカが真顔で言った。

『皆、沙紀の絵を見て感じたと思うけど。
もうすぐ蘭が来るから見せるけど、その蘭の絵で確信したんだ。
沙紀は本質を描く、その隠された内面にまで迫っていく。
だからこそ感じさせたい、裏表の無い大人も存在すると。
それを感じれば、沙紀は考える・・なぜ裏表があるのかと。
沙紀にそこまで行ってもらう、考えて欲しいんだ。
そしてシオンには、嬉しくて泣けない状況で感じて欲しい。
沙紀に伝えて欲しいんだ、シオンの心を。
シオン・・描かれてる時に、沙紀にお話をしてあげて。
普通と見られないで、子供の頃にどう感じていたのか。
それを正直に、シオンの言葉で伝えて、シオンにしか出来ないから。
シオン・・シオンにとって卒業試験、第一弾だからね。
その頃の自分と向き合って、誤魔化しは絶対に通用しない相手だよ。
沙紀はシオンの全てを感じるからね、出来るよね・・シオン』

真剣な美しいシオンの顔を見ながら、真顔で言った。
「先生・・出来るよ・・伝えるよ、シオンの気持ちを」とシオンがニコちゃん笑顔で言った。

『うん、ありがとうシオン・・そして、レンとハルカとマキ。
今ここでお願いするよ、手を貸して欲しいから。
沙紀と由美子に対しては、どうしても協力が必要だから。
その時が来たら、お願いします・・その心を伝えて欲しい』

そう3人の真剣な顔を見て、真剣に言って頭を下げた。
「もちろん良いよ・・私達も、それが望みだよ」とレンが美しく微笑んで、ハルカとマキも笑顔で頷いた。
「ワシも、してやれる事は協力するぞ」とマダムが笑顔で言った。

『それもあるんです・・今週の土曜の夕方に、演奏会をしたいんです。
ミホと沙紀と美由紀を呼んで、聴かせてやりたい。
あの心に直接響かせる、それが出来る・・久美子がいるから。
そしてペダルが踏めないと諦めた、美由紀にも感じさせたい。
そんな事は些細な事だと、本気で何かを表現したい時には、必要無いんだと。
ミホと沙紀の外出許可の条件は、病院関係者で聴きたい人、全員の受け入れです。
土曜で忙しいですが、開店に支障ないように準備します。
マダム・・第一回演奏会の許可を願います』

マダムを見ながら真顔で言って、頭を下げた。
「許可するよ・・4人組も準備に気を配るように、第一回だからの」とマダムが笑顔で言った、私と4人組が笑顔で頭を下げた。
その時に蘭が満開で入って来た、挨拶をして私の横に座った。
私は笑顔でケースを渡した、蘭は少し緊張した表情で絵を取り出した。
テーブルの上に絵を置いて、俯いて震えながら泣いていた。

「素晴らしいですね・・確かに本質を描いてます、蘭の理想とする世界ですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「そうじゃね～・・青を炎としなかった、海としたんじゃね・・素晴らしいよ」とマダムが笑顔で言った。
「そして、今の蘭の心に深く存在する・・イルカまで辿りついている」とユリカが爽やか笑顔で言った。
蘭はただ俯いて頷いていた、その背中が嬉しそうだった。

「私から皆さんに話しておかねばならない事が、今日また発生しました。
今日のエースが由美子に伝えた話を、それを聞いて感じたんです。
マキとシズカと美由紀の凄さを、改めて感じました』

ユリカが美しい真顔で、全員を見回した。
「ユリカ・・お願いします、大切な話を」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

「今日・・エースは由美子に問われました。
ヒトミを忘れないのかと・・エースは正直に話しました。
美由紀の言った、世界中で由美子にしか出来ない、悲しい問いかけの答えを。
エースは・・・・・・」

ユリカが静かに話していた、全員が真剣に聞いていた。

「そう由美子に伝えて、エースは病室を出ました。
私は感じました、そしてマキとシズカの言葉を思い出した。
２人は、自分自身に対して、覚悟をしたのだろうと感じました。
エースに関わる以上、避けては通れない現実・・それに対する自

分の覚悟。
美由紀は既に出来ている、いえ・・美由紀は常時出来ているんでしょう。
私達も、それを自分自身でしなければならない、そうしないで関わったらいけない。
由美子に対しては、どんな状況になろうとも・・最後まで信じる。
そして結果を恐れない・・その終着点の悲しみに、翻弄されないように。
強い意志を、自分に植え付けないといけません。
生命と向き合うのなら・・自分と向き合ってからだと感じました」
静寂を連れた、ユリカの強い言葉が響いていた、全員がその言葉を噛み締めていた。
「ありがとう、ユリカ・・皆それぞれでやりましょう、自分らしく」
とユリさんが真顔で言った。
「はい」と蘭と4人組が静かに返事をした。
「先生・・私は今のままで良いんですか？・・由美子ちゃんに会って？」とシオンが真顔で聞いた。

『シオン・・シオンは今のままで良いんだよ。
シオン・・シオンの物事の整理の仕方は？
嫌いな物は？・・蛇は嫌いなの？』

私は笑顔でそう聞いた、シオンはニコちゃんに戻った。
「シオン・・嫌いな物は無いよ。
蛇は嫌いじゃないよ・・怖いんだよ。
好きの中の怖いだよ・・そうなんだよ、先生」

ニコちゃんシオンが微笑んだ、私も笑顔で頷いて立ち上がった。
シオンがマダムに挨拶をして、立ち上がって私の側に来た。

「さて、いよいよシオン覚醒第二弾だね・・うかうかしてると、背中が見えなくなるよ」と蘭が満開二ヤで言った。
「好きの中の何かに・・感動してる場合じゃ無かった」とレンが微笑んだ。
「セリカさんも見に行かないと、銀河よりも怖い気がする」とハルカが微笑んだ。

『明日のローズ・・期待してるよ、マキに押されるなよ』と二ヤで言った。
「私にも昨日リアンから電話がありました、マキは今までで一番期待できるとね」とユリさんが薔薇二ヤで言った。
「えっ！・・あのリアン姉さんが、仕事で人を褒めたんですか」とハルカが驚いてマキを見た。
「褒めざる得なかったね・・私でも驚いたよ、その接客は」とユリカが微笑んだ。
「エース・・最後にその凄さを、述べよ」とレンが真顔で言った。

『もちろん、本当に重要な部分は言えない。
マキが自分で感じていく事だと思うから、俺が思った事は。
マキはやはり今までと違う、相手に対して仲間意識すら芽生えさせる。
男同士の気を使わない相手のように、その容姿だけでない会話も駆使して。
その魅力は・・表現できないよ、ただ強い力にはなるだろうね。
でもまだ船出もしてないんだから、未知数だよ。
ただ、ユリカもリアンも・・その言葉に、嘘は無いよ』

私は笑顔で言って、ニコちゃんシオンと腕を組んだ。
真剣なレンとハルカに二ヤを出して、空の紙ケースと勉強道具を持った。

満開蘭に見送られ出かけた、光降り注ぐ場所に。
通りに出て、シオンが車だったので、駐車場を目指した。

『ご機嫌ですね～・・シオン』と笑顔で言った。
「沙紀ちゃんに会えるんだもん、私を描いて貰えるんだよ・・嬉しいです、シオン」と最強ニコちゃんで腕を引いた。

私も笑顔で歩いていた、シオンの喜びが伝わる温度を感じながら。
沙紀と由美子の嬉しいを感じながら、夏の主張が強い、光射す場所を。
純白の心に手を引かれて、待っている嬉しいに向かって・・。

美由紀の言った言葉、確かに真実を表現していた。

私は今でも結論が出せない、それで良かったのか？

その問いかけの答えを出せていない、いや・・今では答えを求めなくなった。

それがヒトミの願いだった、それだけが真実だと思っている。

それに付随して発生した現実は、重要じゃないと教えられた。

由美子が、その生き方で教えてくれた、その強い心で訴えてきた。

私は由美子をどこまで書こうか、それだけを今考えている。

夏物語の終着駅は出来ている、しかし由美子の部分だけ迷っている。

伝えるべきだと感じながら、それでも迷宮に入ってしまう。

人はなぜ産まれたのか？どうして悲しみを覚えてのか？

その本質に迫って行く、由美子の生き方・・それは激烈なものだった。

由美子は、答えを探していたのだろうか？

そうじゃなかった・・今はそう思える・・由美子の求めたもの。

それは・・やはり【愛するとは何か？】だった・・そう確信している。

読まれた方の想像にお任せした、由美子の夏物語以降。

それを続編で登場させます、東京物語を書こうと思います。

由美子の事で、まだ迷ってるから・・ヒトミが逃げるなと、怒ってくれるから。

純白のモデル

光射す場所に隠れている、影の世界にも大切な物は有る。
向き合うことは難しいのだろう、しかしそれをしなければ前には進めない。
嘘や誤魔化しは通用しない、その相手は自分自身なのだから。

晩夏の昼下がり、ニコちゃんシオンと駐車場を目指していた。
シオンは本当に嬉しそうに歩いていた、私はそのニコちゃんを見ていた。
さすがシオン、全く心が構えてないな・・そう感心していた。

シオンの可愛い車に乗り、病院を目指した。
平日の午後で国道は空いていて、５分程で病院に着いた。
私は記名を先程していたので、詩音とだけ書いてミホの病室に入った。
沙紀は起きていて、ＴＶを見ていた、私とシオンを見て起き上がった。
私は沙紀の手を握った、その嬉しそうな熱に驚いていた。

『沙紀・・シオンちゃんだよ、描いてあげてね・・その時にシオンちゃんが、お話してくれるから』と笑顔で伝えた。
《小僧ちゃん、沙紀嬉しいよ、初めて感じた、シオンちゃん》と返して来た。
私は笑顔でニコちゃんシオンを見て、沙紀の横の椅子にシオンを座らせた。

シオンはニコちゃんで沙紀の手を握り、沙紀の瞳を見ていた。
「沙紀ちゃん、シオンです・・会いたかったんですよ、沙紀ちゃん

の絵が大好きです」とシオンが最強ニコちゃんで言った。
沙紀も何か伝えてるようだった、シオンはニコちゃん継続で頷いていた。
私は驚いていた、そして思い出した、シオンはマリアの伝達を理解できる。
それは言葉だけではない、そう思ってシオンを見ていた。

沙紀が手を離し、スケッチブックを出した。
シオンは嬉しそうに、ニコちゃんで沙紀を見ていた。

「じゃあ沙紀ちゃんにお話するね、シオンの子供の頃の話を。
シオンは9歳年上に、お姉ちゃんがいます・・リアンって言うの。
とっても素敵な人なんです、私は子供の頃から大好きでした。
シオンはね、人と同じに出来ない子だったの・・・・・」

ニコちゃんで話すシオンを見ながら、沙紀がピンクの色鉛筆を手に取った。
そして一気に描き始めた、その沙紀の情熱とシオンの言葉がシンクロしてるようだった。
私は邪魔しないように、寝ているミホのベッドの横のテーブルを出した。
そして明日の数学の試験対策をしていた、シオンの言葉が心地よく響いていた。
沙紀の母親が入ってきて、シオンがニコちゃんで挨拶をした。
母親も笑顔でシオンを座らせて、シオンと私にジュースを出してくれた。

「ありがとう、シオンちゃん素敵ね・・あなたの考えが少し分かったわ」と母親が微笑んだ。
『うん・・良い感じだと思ってるよ、絵が楽しみです』と笑顔で返

して、沙紀の方に戻る母親を見送った。
沙紀は無心で描いていた、シオンはニコちゃんで、辛い話をしていた。
この時の話は、後記します・・素敵な話だったので。

私はシオンの言葉と、沙紀の色鉛筆で描く、微かな音に押されて。
数学に取り組んでいた、集中していたのだろう、気が付くとミホが教科書を見ていた。
私はミホの方に教科書を向けて、手を握った。
『ミホ・・明日、テストなんだよ～』と笑顔で言った。
ミホは無表情のまま立って、私の横に椅子を持ってきて座った。
私は嬉しくて、何も言わずに数学に取り組んだ。
ミホは飽きもせず、数学の教科書と私のノートを見ていた。

「素敵な光景ね～・・ミホちゃんも、勉強に興味あるんだね」といつもの若いナースが笑顔で言った。
『ねぇ、美しいナースのお姉さん、昔の教科書あったら、ミホにプレゼントして』と笑顔で言った。
「了解・・ほんのちょっと前の、小学校の算数でも持ってくるね」と二ヤで返された、私も二ヤで頷いた。

「しかし・・次から次に素敵な女性が来るよね～・・他の病棟でも、男の先生達の噂になってるよ」と笑顔で言った。
『まだまだこれからだよ・・お楽しみに』と笑顔で返して、笑顔のナースを見送った。
私がミホを見ると、ミホの手が動いていた、私は驚いて未使用のノートを出した。
そしてボールペンをミホに握らせた、ミホはノートに数字を書いていた。
罫線の枠からはみ出さない、可愛い数字を見ていた。

ミホは何度も同じ数字を書いて、自分の書いた字をじっと見ていた。
『ミホ・・上手だね～、いつでも学校行けるね』と笑顔で言った。
ミホはその言葉には反応せずに、夢中で数字を書いていた。
私は嬉しくて数学を続けた、ミホが隣で必死に数字を書くのを感じながら。
２時間程経った頃、ミホがトイレに出て行った。
私はミホが書いていたノートの表紙に、ＭＩＨＯと書いて日付を入れた。
その後、私にとって大切な思い出になる、一冊目のノートがスタートしていた。

沙紀を見ると、最後の色付けなのだろう、必死に色を塗っていた。
シオンはお話も終わり、沙紀の母親と笑顔で話していた。
ミホがトイレから帰ってきたので、シオンを呼んだ。
私はミホの手を握り、ノートのプレゼントとシオンを紹介した。
シオンはニコちゃんでミホの手を握り、自己紹介をして、ミホが可愛いと言って話していた。

私は沙紀の横に座った、その色を塗る速さに驚いていた。
全く迷い無く塗るスピードと、その集中力に見惚れていたのだ。
沙紀が絵を確認して、黒の色鉛筆を取った。
そして右下にＳＡＫＩとサインをしたようだった、そして私に手を出した。
私は笑顔で手を握り、沙紀の充実感を感じていた。

『沙紀・・上手く描けたみたいだね』と笑顔で言った。
《うん、沙紀も好きな絵になった、シオンちゃんのお話も嬉しかったよ》と返してきた。
『そうだね・・素敵なお話だったね』と笑顔で言うと、沙紀がスケ

ッチブックを差し出した。
私は笑顔で受け取った、後ろに立つ母親の笑顔で、その絵の素敵さが想像できた。

しかし私は想像力の乏しい人間だった、その絵の世界に、私は一瞬凍結したのだ。
真ん中に大きく、最強ニコちゃんシオンの顔が描かれていた。
最初に手にしたピンクは唇を描いたのだろう、美しく艶のある唇に生命感があった。
シオンの顔が今までにないアップで描かれて、髪の生え際まで緻密に描写されていた。
ニコちゃんの目の輝きに、喜びが溢れていた。
しかしその緻密な描写の顔のアップの左右に、シオンの横顔が描かれていた。
左横のシオンは真顔で、瞳が寂しそうだった。
そして右横のシオンは強い瞳で描かれていた、それは私も見たことが無い表情だった。

私はその時にハッとして感じた、振り向いている、動きを表現してる。
左横の寂しいシオン・・シオンの言う、【もう一人のシオン】なんだと思った。
そして真ん中の正面に描かれているのが、今現在のシオン。
ならば・・右の横顔は・・将来のシオンなのか！
私はその絵に魅せられていた、その変化する表情の背景に描かれている光景を感じて。
ブルーの湖が広がっていた、高原の爽やかな風を受けて振り向いた。
後ろを振り向かずに、前を見るシオン・・美しい横顔に寂しさは無かった。
強い瞳で前を見ていた・・未来を見つめているようだった。

私は感動していた、そして強烈な波動に包まれていた。
私は笑顔で沙紀の手を握った、沙紀は喜びを表現してくれていた。
《小僧ちゃんの嬉しいと、ユリカちゃんの嬉しい見つけた》と沙紀が伝えてきた。
『うん、俺もユリカも嬉しいよ・・そしてシオンの最高の嬉しいも感じてね』と笑顔で言って、シオンを呼んだ。
ニコちゃんで頷いて、ミホに別れの挨拶をして歩いてきた。
私はシオンを座らせて、絵を見せた、シオンもニコちゃんのまま凍結していた。
そして最強ニコちゃんになって、沙紀を抱きしめた。
沙紀もシオンの背中に小さな腕を回し、嬉しそうに抱かれていた。
私はミホの側に行き、眠そうなミホの額に手を当てた。
ミホの体重がかかるのを感じて、ミホを優しく寝かせて、また明日と囁いた。

シオンの絵を紙のケースに入れて、シオンが沙紀にまた来ると告げて病室を出た。
シオンは紙のケースを大切に抱えて、最強ニコちゃん継続で歩いていた。
『嬉しかったね、シオン』と笑顔で言った。
「はい・・多分・・今までで一番の嬉しいでした・・右の顔、シオンの理想です」と私を見て微笑んだ。
その美しさに見惚れていた、そして感じていた・・右横のシオンを。
多分リンダとマチルダと旅をして、辿り着くであろう、その世界にいるシオンを。
その微笑の中に、感じていた・・しかし私には寂しさは無かった。
シオンが望んでる事だと感じたから、必ずあの強い瞳のシオンに辿り着くと感じていた。

由美子の病室の前で、シオンを見た、最強ニコちゃんで頷いた。
私は静かにノックをして、病室に入った。
祖母が裁縫をしていた、私は静かに歩み寄り、シオンを紹介した。
シオンはニコちゃんで挨拶をして、由美子をニコちゃん継続で見ていた。
《間違いないな、さすがシオン・・由美子と交信出来るかも》と心で囁いた、強い波動が同意を示した。

私はシオンと由美子の横に行って、シオンを椅子に座らせた。
『由美子・・今日も素敵な人を紹介するね・・シオンちゃんです』と手を握って伝えた。
《本当に素敵な大人の人だね、早く手を握って欲しい》と由美子が返してきた。
『は～い・・シオン、由美子が早く握って欲しいって』と笑顔でシオンに言った。
『嬉しいです～・・由美子ちゃん、シオンです・・会いたかった～』とニコちゃんで手を握って言った。
そしてシオンは由美子の返しを感じようとしていた、その表情で確信した。
シオンはすぐに出来るようになると、伝達方法を覚えていると思っていた。

私はソファーに行き、祖母の横に座った。
「さっきの話・・ありがとう、嬉しかったですよ」と祖母が微笑んだ。
『うん・・初めて人に話しました・・由美子だから』と笑顔で返した。
「ヒトミちゃんとの思い出は、楽しい事が多かったのね」と祖母が優しく微笑んだ。

『はい・・今では、全てが楽しい思い出ですね。
俺は夢中でやっていました、ヒトミとの季節は半年もなかったけど。
濃密で充実した時間でしたね、学校にいる時も楽しかった。
ずっと楽しい事を探していました、ヒトミに話したくて。
ヒトミが聞いてくれたから、そして問いかけてくれたから。
でも今考えると、俺は全然伝えきれていなかった。
幼かったし、未熟でしたから。
でもそんな後悔など関係無く、由美子には伝えたいですね。
俺は自然に由美子を好きになりました、だから覚悟なんて必要無かったです。
どんな結末でも、心で由美子を・・一生背負っていく事が出来ます。
沢山の見送った仲間が教えてくれました、全員が後悔は無いと言っていました。
ただ早くて残念なだけだと、そう両親に伝えてくれと言っていましたから。
どんなに医学が進歩しても、救えない命はあるんでしょうね。
でも・・救える心はあると思っています、俺は自己満足と言われて良いんです。
俺がヒトミや由美子と関わる理由は、唯一つです。
好きだから・・ヒトミや由美子が愛おしいからです。
俺は自分の気持ちは全て伝える、愛する由美子に聞いてほしいから』

私は何も考えずに、由美子とシオンを見ながら言った。
祖母の優しい瞳と、熱く強い波動に包まれていた。

「ありがとう・・由美子の事も、娘の事も。
美千代は源氏名である北斗を、大切にしてきました。

私には分かります、その名前に誇りを持っているのでしょう。
あの子はあなたの想像通り、はぐれ者でした・・不良じゃないけど。
感覚が人と違ってましたから、自分自身もそれで苦しんだのでしょう。
学生時代は友達も少なかった、でも夜街で変わりました。
千花の面接を受けた日に、本当に嬉しそうに言いました。
自分が普通に思えたと、真希と飛鳥と言う人に会って、そう強く感じたと。
そう言って泣いていました、私も嬉しかった・・だから会いに行きました。
そして2人を見て感じました、美千代は自分で生きる場所を探し当てたと。
美千代の2度目の北斗復活は、ユリさんを見て決めましたね。
素晴らしい才能に伝えたい、自分の考える理想の姿を。
そう楽しそうに言っていました、充実していましたね・・あの自由な心が。
そして今回の3度目の北斗復活、あなたが伝えてくれた・・由美子の想い。
美千代は本当に喜んでいました、自分に出来る最高の提案をされて。
自らの強い意志で復活を決めました、その喜びを感じていますよ。
北斗と言う源氏名に、真希さんが込めた想いを再確認して。
今は迷い無く生きていますね・・北斗・・それは復活の星ですから」
祖母は笑顔でそう言った、私も笑顔を返していた。
『やっぱり真希さんは、伝説以上ですね・・復活の星ですか、北斗らしいですね』と笑顔で返した。
祖母の頷くのを見て、シオンに視線を向けた、ニコちゃんで楽しそ

うに話していた。
『そろそろ良いかな・・由美子が疲れるから』と祖母に笑顔で言って、シオンの側に歩いた。

『シオン・・今日はその位にしよう、由美子が疲れるから』と笑顔で言った、シオンはニコちゃんで頷いた。
「じゃあ由美子ちゃんまた来ますね、今度来るときは写真を持ってきます・・少しお休みしてね」とニコちゃんで言った。
私は由美子の手を取って感動していた、その強い温度の揺れを感じて。
『由美子・・良かったね、シオンとお話できたね』と優しく言った。
《うん・・シオンちゃん、感じてくれたよ、次の時はお話できそう》と由美子が嬉しそうに返してきた。
『そうだね、凄いねシオンは・・由美子、お休み・・また明日』と笑顔で言った。
《お休み、小僧ちゃん》と言って静かになった。
私はシオンと祖母に挨拶をして、病室を出た。
シオンは最高ニコちゃん継続で、手を繋いできた。

私は繋いだ手だけでシオンに言った、《楽しそうだね、シオン》と伝えた。
「えっと〜・・嬉しそうかな?・・楽しそうかな〜?」とニコちゃんで私に聞いた。
『楽しそうだねって、聞いたんだよ・・凄いなシオンは』と笑顔で言った。
「間違ってなかったの・・由美子ちゃんの気持ち、少し分かったよ」と驚いて言った。

『間違ってないよ・・シオンはマリアの伝達を、言葉だけで理解してないよね。

多分、自分も知らない内に、他の何かで感じてるんだね。
でもねシオン、それが何かを考えなくて良いよ。
考え過ぎると、消えてしまう事があるからね。
今のまま自然に任せていれば、すぐに由美子の言葉も入ってくるよ。
そしてシオンの気持ちも伝えられるから、そうしてね・・シオン』

私は最強ニコちゃんシオンに、笑顔で伝えた。
「はい、先生・・シオン本当に毎日が楽しいです、マキも側にいてくれるし」と笑顔で言って、車に乗った。
「先生・・シオンこのまま帰って準備するから、絵をＴＶルームに持って行って下さい」とシオンが言った。
『了解・・自慢したいんだね～・・シオン』と二ヤで言った。

「はい・・自慢したいです～・・それと先生、今度リアンを由美子ちゃん会わせてね。
リアン、迷ってるみたいで・・会いたいみたいだけど。
リアンは、北斗さんに対する想いが強いから。
由美子ちゃんと向き合えるかと思ってるみたいで、今は迷ってる感じなの。
でもリアンは心から会いたいと願ってる、先生しか背中を押せないよ。
よろしくね・・先生」

シオンの言葉が優しい歌声で響いて、私は自然に笑顔になった。

『了解、シオン・・でもねシオン、背中を押すのは俺じゃないよ。
それはマキにやってもらおう、俺はリアンと手を繋いで、由美子に会いに行くよ。
シオンは感じてるだろう、リアンのマキに対する感情を。

シオンが海外に行ってる時に、リアンの心を支えられるとしたら。
それは俺でもユリカでも蘭でもない、マキだと思ってるよ。
だからリアンに対する問いかけは、マキに任せよう。
俺は出来ると信じている、マキなら・・リアンの心に問いかける。
熱には熱で・・愛には愛で応える2人だからね』

前を見てニコちゃんで運転するシオンに、笑顔で言った。
「はい、先生・・シオン、嬉しいです・・マキがリアンと仲良くなってくれて」と微笑んだシオンを見ていた。
美しい微笑が、シオンの今までと違う魅力を出していた。
私は橘通りで車を降りて、靴屋で蘭に紙のケースを見せて、満開蘭に手を振った。
ＰＧに歩いていると、腕を組まれた、私はその熱に驚いていた。
輝きを発散して、カスミが微笑んだ。

『カスミ・・楽しかったみたいだね、甘えてきたな』と二ヤで言った。
「うん・・おかんに甘えてきたよ、おとんとも和解できた気がするよ」と笑顔で返してきた。
『了解・・飛び級試験を用意するよ』と笑顔で返した。
「お願いするよ・・私はカスミが好きになってきたよ」と言ったカスミは、強く輝いていた。
終わりの無いカスミの覚醒が始まっていた、私は自分に言い聞かせた。
俺は想像力の乏しい人間だと、自分に確認させていた。

カスミとＴＶルームに入った、マダムとユリさんがいて、マリアはお昼寝中だった。
カスミが挨拶をして、お土産の辛子明太子をマダムに渡した。

「カスミちゃん、良かったですね・・輝きが増しましたよ」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「ありがとうございます・・自分で感じています、充実してる事を」と輝く笑顔で返した。
「飛び級試験、一科目目は何かしら?」とユリさんが私に薔薇で微笑んだ。

『一科目目は・・過去との和解です、自分の言葉にして伝えてもらいます。
カスミの熱い言葉で、絶対に誤魔化しの出来ない相手に。
まずはお見せします、シオンも自慢したいと言っていましたから。
裏表の無いシオン・・それを間近で見て描いた、沙紀はこう見ました。
これが沙紀の見た、シオンです』

私は紙のケースからシオンの絵を出して、テーブルに置いた。
静寂が包んでいて、暖かい波動に包まれていた。
「まさにシオンですね・・左の寂しそうなシオンが、もう一人のシオンですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「右は近い将来のシオンなのか・・素敵過ぎるよ、この絵も沙紀も」とカスミが呟いた。

『そう・・沙紀は本質を描く、だから最初のモデルはシオンにした。
シオンは裏表が無い、数少ない大人だからね。
沙紀はそれを感じた、シオンが子供の頃の気持ちを素直に伝えたから。
だからこの絵になった、過去から未来に目を向ける。
そのシオンを描いた・・沙紀の気持ちを込めて、エールを詰め込んで。
だからこそ、沙紀の目の前に座るモデル第二段は、プロのモデル

にやってもらう。
その時には、カスミに話をしてもらう、子供の頃からモデルになるまでを。
沙紀の前では嘘はつけない、沙紀に話すという事は、自分に語りかけるという事だから。
そして由美子に会ってもらう、カスミの輝きを見せたい。
カスミはその輝きで伝えて欲しい、生きる事は素敵な事なんだと。
由美子に憧れを持たせてやって欲しいんだ、俺はカスミなら出来ると信じてる。
飛び級第一試験は、過去との和解、後悔との決別・・そして永遠の憧れの本質を問う。
試験管は最強の少女・・沙紀と由美子。
どうするカスミ、辛い試験だよ』

私は美しい真顔のカスミに、最後は二ヤを出して言った。

「もちろん受けるさ・・最も重く、意味のある試験だから。
私は完敗したんだ・・自分は強い心を持っていると、自負してきた。
でも完全に敗北した、清々しい程に・・美由紀に完敗した。
そして今のエースの言葉で分かったよ、両親と和解しても足りないんだね。
和解すべきは、あの頃の自分なんだな・・それを後悔する心なんだな。
そうしないと、背中すら見えて来ない・・私が今、憧れ続ける。
美由紀の精神世界の扉すら見えない、自分を本当に愛せないと駄目なんだ。
後悔を背負って進まないと、目を逸らしていては絶対に辿り着けない。
五天女や蘭姉さんのような、真の意味での美しさを手に入れられ

ない。
ＯＫ・・試験を受けるよ・・そして必ず合格点を貰う。
北斗姉さんのように・・カスミと言う源氏名に、誇りを持っているから。
マキのように・・将来、自分の子供に自慢話をしたいから」
カスミは熱い想いを一気に吐き出した、私は嬉しくて笑顔で聞いていた。

『ＯＫ、カスミ・・リアンがマキを認めたよ。
そしてもちろん・・カスミを認めてる、今の流れるような言葉で確信したよ。
リアンとカスミとマキ・・その無変換の言葉。
愛には愛で応える女・・情熱３姉妹、それに成りうるカスミとマキ。
期待してるよ、カスミ・・俺もリアンも』

カスミの嬉しそうな顔を見ながら、笑顔で伝えた。
「最高だよ・・絶対にそこまで辿り着くよ・・だから今から付き合え、瞑想の場所に」とカスミが微笑んだ。
「情熱３姉妹ですか・・リアンが喜ぶでしょうね、エースの付けた称号ですから」と薔薇で微笑んだ。
「確かに、熱の種類は違うが・・情熱３姉妹だよ、もう少しだなカスミ」とマダムが微笑んだ。
カスミは嬉しそうに２人を見て、輝く笑顔で強く頷いた。

私はカスミに腕を組まれて、光射す場所に出た。
夏の輝きを押し返して、カスミが発光していた。
充実感を漂わせて、無変換の言葉を得て・・愛を表現しようとしていた。

沙紀の描いたシオンの絵、それを最も喜んだのはリアンだった。
リアンはシオンを心から愛していた、歳の離れた妹を。
シオンが憧れだったんだ、私にとって・・シオンの心が憧れだった。
私は２０年以上シオンと暮らした、だけども一度も傷つけられなかった。
その心は優しさに包まれていた、私はシオンに守られていたんだよ。
リアンが酔ってそう言った、３５歳になったリアン。
女帝の名を汚す事無く、正直に生きていた。
そしてユリカを失った私を、常に側にいて支えてくれた。
その愛は全裸の愛だった、何も隠さずに強く言葉にしてくれた。
私のユリカへの想いを、一番理解していたのもリアンだろう。
リアン・・情熱の女・・その容姿も心も極炎の中にある。
その熱は全てを溶かす、そして新たな芽を育む。
一度全てを焼き払い、そこから作り出す・・それが炎の女。
私は一生燃やし続けるよ、そうすれば・・消さないといけないと感じれば。

必ずユリカが消しに来る・・私の熱は、ユリカの水でしか消せない。

いつか再会できると信じてるよ、ユリカは必ず消しに来る。

それが私とユリカの絆・・火と水の、永遠の絆だから。

リアンはそう言って、美しく微笑んだ。

私もそう思っていた・・いつの日か、ユリカが消しに来ると。

波動にユリカの大きな喜びが、溢れていたから。

その強い想いを感じていたから・・。

卒業試験

何度歩くのだろう、家路や通学路や通勤路というのは。
風景の変化もゆっくりと流れ、帰る場所や目的を感じる。
私は輝きを連れて、狭い路地を駐車場を目指していた。
何度も何度も、様々な相手と歩いた道を。

『カスミは、美由紀を知っていたんだね？』と笑顔で言った。

「うん・・サクラさんの店の、お客さんだからね。
サクラさん、アップリケの可愛いのを探してるんだよ。
そして美由紀に取り置きしてるんだ、私も何度か美由紀に会ってた。
その時から凄いと思ってたんだ、私に色々洋服のことを聞いてくれた。
その少女らしい前向きさが、私には脅威だったよ。
そして靴屋で蘭姉さんを見てる、美由紀に声をかけたんだ。
店ではまだ、フランクに話せないから、だから話してみたかった。
美由紀という女を感じてみたかったんだ、驚愕したよ、その精神力に。
完敗だったよ・・嬉しい敗北だった。
その言葉も生き方も・・年齢など超越していて。
その後の話を聞いて、本当に嬉しかったのさ」

カスミは嬉しそうな輝く笑顔で言った、私も笑顔で頷いた。
可愛いスバル３６０に乗って、晩夏の町並みをトコトコと走っていた。
カスミは実家の話を楽しげにしてくれた、私も笑顔で突っ込みを入れていた。

玉砂利を進むと、軽自動車が2台止まっていた。
カスミはその横に止めて、本堂に2人で入った。
本堂の隅のちゃぶ台に、和尚と檀家の爺さん3人が笑顔で出迎えた。
本堂には千秋と千夏とホノカが瞑想していた、ホノカの美しさが際立っていた。
カスミが和尚と檀家に挨拶をして、和尚にお土産のヒヨコ饅頭を渡した。

「いよいよ、カスミの登場だの～・・ホノカを意識するなよ」と和尚がシワシワ二ヤで言った。
「最初から、難しい試練ですね」と輝く笑顔で返して、本堂に歩いていった。
カスミはホノカの隣の座布団に正座して座り、瞳を閉じた。
私はさすがカスミと思っていた、その美しい姿勢が全く揺れなかった。
鍛え抜かれた強靭な体を、充実感漂う心が支えていた。

「うむ・・素晴らしいの～、カスミは目指す場所に舵を切ったな」と和尚が私に言った。
『その為に継続してきたんだから、いつか辿り着いて欲しいよ』とカスミを見ながら返した。
「小僧・・ありがとな、嬉しい提案の話聞いたよ」と老人クラブの長老、政五郎の爺さんが言った。
『あぁ、美人女教師の話ね・・政五郎爺さん、心臓発作で倒れるなよ・・タッチは厳禁だよ』と二ヤで返した。
「手を触れる程度なら、よかろうが」とシワシワ二ヤで返してきた。
『和尚・・長老に瞑想させて、我欲が強すぎるよ』と笑顔で言った。
「そうじゃの～・・ワシのように、悟りの境地に行かんか・・その歳なら」と和尚が笑顔で言った。

「和尚が悟りの境地なら・・その境地は色欲の世界じゃな」と政五郎が言って、老人達が静かに笑っていた。

私は数学の教科書を出して、試験対策に取り組んでいた。

千夏が終わって私の隣に座った、私は昼間の千夏の若さ溢れる姿に、少し驚いていた。

「エース・・私、最後の看護研修が、○病院になったよ」と笑顔で言った。

『そうなの！・・よろしく、毎日行ってるから』と笑顔で返した。

「来週からなの、その前に3人に会わせてね・・どの病棟の配属になるか分からないけど」と微笑んだ。

『了解、千夏・・千夏には絶対に会ってもらおうと思ってたから、そこを志すんだからね』と笑顔で返した。

「うん、私も感じたい・・そして今の甘い覚悟の、その上の覚悟をしておきたい」と美しい真顔で言った。

『了解・・俺は千夏には、何のアドバイスもしないよ・・千夏は分かってるって、思ってるから』と笑顔で返した、千夏も笑顔で頷いた。

その時に千秋が終わって、千夏の横に座った。

「エース、魅冬から話を聞いたよ・・ありがとう、私もやってみたいよ」と微笑んだ。

『了解・・政五郎爺さん、○○大の教育学部3年生・・千秋です』と長老に笑顔で言った。

「おぉ！・・2人ともお美しい、ワシから清次郎に話すから・・よろしく頼みますぞ」と長老が笑顔で言った。

「はい、よろしくお願いします」と千秋が笑顔で頭を下げた。

その時に私の背後から、懐かしい声が聞こえた。

「関心ですね～・・和尚が言うとおり、良い環境で暮らしてるよう

ですね」と清次郎が言った。
『清次郎、不意打ちとは卑怯なり』と二ヤで振り向いた。
「何を猪口才な・・しかし良い緊張感が出てきたな、小僧なら緊張感を持っておれよ」と笑顔で言って私の隣に座った。

私は清次郎に千夏と千春を紹介した、二人は笑顔で挨拶をした。
長老が私の提案を話すと、清次郎は嬉しそうに、千秋によろしくと言っていた。
千秋が和尚に電話を借りて、美冬に電話したようだった。

「清次郎先生、一つお伺いして良いですか?」と千夏が言った。
「何でしょう・・分かる事なら、かまいませんよ」と清次郎が笑顔で返した。
「小僧に緊張感を持てと言われた、その真意を教えて欲しいのですが」と千夏も笑顔で言った。

「そうですね〜・・まぁ貴女方なら、お分かりでしょうけど。
小僧は正しさを求めていません、その生き方はどうしても過酷な方に進む。
私が初めて小僧に会ったのは、小僧が小3の時でした。
豊という生徒に、その話を聞いて・・興味を持ってしまってね。
小児病棟を訪ねて、小僧に会いました。
その時の小僧は、ヒトミちゃんに夢中になってる頃でね。
驚いたんですよ・・その小さな背中が、緊張感を纏っていて。
小3にして、これだけの緊張感を持てるのかとね。
その時に、知ってるでしょうが車椅子の少女に出会った。
美由紀でした、私は美由紀に聞いたんです、やはり小3の美由紀に。
どうして小僧は緊張感を持ってるのだろうとね、そしたら美由紀が教えてくれました。

私はその言葉に感動したんですよ、両足の無い美由紀が笑顔で言ったからね」

そこまで言ったときに、カスミの声がした。

「清次郎先生・・ちょっと待って下さい、私はまだまだだ～」と少し照れながらカスミがホノカと来た。

ホノカが全員に挨拶をして、カスミと座った。

その時に美冬が慌てて入ってきて、全員に挨拶をした。

美冬は清次郎によろしくと言われて、嬉しそうに笑顔で頭を下げた。

「すいません、話の腰を折ってしまったみたいで・・続けて下さい」と美冬が微笑んだ。

「そうですね・・教師を目指す人には、是非とも聞いて欲しいし。他の３人にも聞いて欲しい・・小僧と関わってるのだからね」

清次郎は静かに言った、女性が全員真顔で頭を下げた、強い波動が清次郎を促した。

「私は小僧の持っている緊張感に驚いた、中学教師を３０年以上してきたが。

小僧の持つ緊張感が、私の知らない物だったんです。

部活での試合前や、当然受験前には、中学生でも緊張感を持ちます。

しかし小僧のそれは全く違っていた、鬼気迫るものが有りました。

私の経験で考えた時に、ある一つの事を思い出した。

それは出征する息子を送り出す時の、両親の緊張感に近かったんです。

戦地に送り出す覚悟をした、両親の纏う緊張感に。

私は、その緊張感の意味が知りたかったんです。

だから小僧と楽しそうに話していた、少女に聞いた。
美由紀と2人になった時に尋ねました、なぜあの緊張感を持ってるのだろうと。
美由紀は私を見て、笑顔で教えてくれました。
受け入れてるからじゃないかと、死を受け入れて、それでも愛情を注ぐからだと。
人は生きてる時には、目を逸らしがちなその事に対して。
真っ直ぐに向き合っているから、緊張してるんじゃないかと言った。
自分は両足が無いけど、その事に向き合ってなかったと・・笑顔で言ったんです。
私は本当に感動した、小3の少女が・・ハンデを背負って生きる。
可愛い少女が笑顔で言ってのけた、その言葉に感動しました。
そして豊からヒトミの話を聞いた、私はそれで確信しました。
戦地に送り出す両親と同じ緊張感、その本質に気づいて嬉しかったんです。
豊と小僧、批判的な意見の方が多い子供ですね・・しかし本質は熱い。
豊は説明できぬほど、人間としての魅力に溢れています。
その強固な意志は、全てを動かせる程の力を秘めている。
そして小僧・・今までという言葉を、無にするほどの生き方を示す。
私は本当に嬉しかった、限界トリオと呼ばれる3人が、強く主張してくれたから。
和尚と豊の教えを、繋いでいると感じた。
あの美由紀を、学校に受け入れる行動で。
そしてその愛情に対し、何倍もの愛情で応え続ける美由紀。
私の教師生活も後2年半です、最後に最高の卒業試験に取り組めます。
私は幸せな教師でしょう、教壇にこだわり続けてここまで来た。

沢山の教え子を見てきた、もちろんその中には・・後悔も挫折もあります。
分かってやれなかった・・そう言う想いも相当にある。
その全てを賭けて取り組まなければならない、そんな卒教試験に巡り会えた。
美由紀と小僧・・この難題に取り組める、教師冥利に尽きますよ。
私は思っている・・小僧らしく行ける所まで、行ってみろと。
あの緊張感を常時持ち続けろと、それが小僧の選んだ道だと信じている。
私は問われています・・全ての教え子達に、どこまで許せるのかと。
どこまで分かってやれるのかと・・どこまで生徒を信じれるのかと。
教師とは何かと・・そう問われています、解答期限は後2年半。
その時に提出しなければならない、あの笑顔の試験官に。
車椅子に乗り、笑顔で全ての生徒を応援する。
美由紀に提出しなければ・・教壇を笑顔で降りれない。
今はそう思っています・・私は幸せな教師なんだと、感じてるんですよ」

清次郎の強い言葉が、広い本堂に響いていた。
私は嬉しかった、強く熱い波動に包まれながら、尊敬する恩師を見ていた。

「清次郎先生は、今の日教組や教育委員会を、どう感じていますか？」と美冬が真顔で聞いた。

「些細な事だと思っています、教師である事に対しては・・些細な事だと。
確かに理想と現実は違いますが、現場で生徒と接する教師には関

係無い事です。
生徒は一人一人、個性も考え方も違う・・育ってる環境も違います。
杓子定規に規則だけで縛ったら、はみ出す者が多く出てしまう。
私も色々と経験し考えた、だがやはりどっかで、普通を過大評価してましたね。
そして言い訳をしてましたね、自分一人ではどうにも出来ないと。
だがある3人の生徒の行動で、間違いに気づかされた。
限界トリオと呼ばれる3人、豊の教えを受け続けた3人娘。
豊と小僧は意外に思えるでしょうが、学校では問題をほとんど起こしません。
校則に逆らったりしないんです、そんな事に興味すら無いんでしょう。
豊は在学中、学校内で喧嘩した事は一度も無い・・まぁ相手もいなかったんですが。
小僧はその会話術で、教師に笑いさえ提供しますが、学校生活は真面目です。
まぁ小僧もその多くの伝説で、喧嘩を売られる事もないですが。
悪と言われる上級生の、相談に乗るほどですからね。
しかし女子生徒である限界トリオは違った、女子だからお洒落に興味を持つし。
個性を貫くという事では、豊に引けを取らない3人ですから。
校則違反を堂々としていました、そしてその罰を堂々と受けていましたね。
絶対に逃げない・・それが自分の個性だと、強く主張していました。
校則を受け入れないのではない、ただ従えないのだと・・シズカが言った。
だから校則違反に対する罰は受けると、そう職員室で堂々と言ってのけた。

そして恭子は常に笑顔で、怒られていました・・教師が呆れるほどの笑顔でね。
そしてご存知のマキ、あの髪型と行動・・存在そのものが強い自己主張です。
私は教えられた、私自身も納得できない教育方針。
それを押し付ける組織、その体制は・・あの忌まわしい過去を連想させる。
全体が示す方に歩けと強制する、多くが心で反対しながらも、体制に逆らえなかった。
その主張の無さが招いた悲劇、その反省すら出来ない組織。
戦争責任は、あの当時の全員に有る・・主張しなかった全員に。
その想いを私は持っています、だから校則に対して寛容な人間でした。
だが守らせなければならない、そうしないと示しがつかない。
その葛藤を持っていました、だが限界トリオが見せてくれました。
罰を受ける覚悟・・そして人から悪く見られる覚悟を。
その主張は生徒全員に響いていましたね、だからこそ真似をしなかった。
校則とはそういう事だと教えた、どんなに教師が力説するよりも強い行動で。
誰かが決めた決まりを守らないとは、こういう事だと示した。
私はその姿に答えを見つけた、些細な事だと・・生徒を縛ろうなど、馬鹿げた事だと。
どんなに大きな力で抑えても、必ず出てくる・・これからは主張する者が現れる。
恐れない者が・・孤独や絶望すら恐れない者が。
だから組織が繰り出す矛盾も、今は些細な事だと思っています。
生徒と直に触れ合う教師にとって・・そんな方針など、無意味な事だと。
私達が相手にしてるのは、生命であって・・生命に、優劣は無い

のだから。
本当に教えるべきは、その者の考えを引き出す事・・そして気づかせる事。
自分を気づいて欲しい・・どんな人間にも、理想とする姿が存在するのだから。
誰かに言われたから、決まりでそうなっているからでなく。
自分はこう在りたい・・それを探して欲しい。
その為の場所が、学び舎だと思っています・・いつか懐かしく感じるでしょう。
義務教育の意味を・・その大切な時期をね」

清次郎は教壇で話すように言葉にした、バトンを渡すように。
女性達は静かに聞いていた、その重い言葉を噛み締めるように。
美冬と千秋は真剣な目で、清次郎を見ていた、その偉大な教師を。

「清次郎先生、最近引き継ぎのような言葉になったね・・寂しいからやめてよ～」と清次郎の後ろからシズカが言った。
「なんじゃ～・・・シズカ、聞いてたのか・・照れるじゃろうが」と清次郎が笑顔で返した。
「照れないの・・可愛いな～、清次郎は」と笑いながら、清次郎の肩を揉んでいた。
「良いな～・・恩師とのその関係・・ホノカです、よろしくね」とホノカが華麗に微笑んだ。
「えっ！・・よろしくです・・ライバルとは言えない」とウルで返した。
「ライバル？・・その意味を述べよ」とカスミがシズカに不敵で言った。
「私、タイプとして・・ジンさんに憧れてます」とシズカが笑顔で返した。

「へ～・・意外だね～、豊の対極なのに」とカスミが二ヤで言った。
「確かに・・豊君とは対極だよね」とホノカが微笑んだ。
「和尚・・事件だよ、シズカが男に興味を持ってる・・科学以外に」と長老が笑顔で言った。
「政ちゃん・・私も乙女ですから～」とシズカが二ヤで返した。
「乙女とな！・・恭子みたいな事を言うわい」と長老が笑って、全員が笑っていた。

「シズカ・・あれはいつやるかね？」と清次郎が聞いた。
「資料は出来たから、今度の勉強会でも大丈夫ですよ」とシズカが答えた。
「そうか！・・楽しみじゃね～、分かりやすく頼むよ」と長老が笑顔で言った。
「かなり分かりやすくしたから・・それでも分からないなら、ボケが進行してると思ってね」と二ヤで返した。
「シズカちゃん、何をするの？・・教えて」と千秋が微笑んだ。
「教育学部在籍者2名を前に言うのは照れるけど、原爆の構造を説明して欲しいと言われて」とシズカが照れながら答えた。

「えっ！・・それを説明するの」と美冬が驚いて言った。
「簡単にですよ、私も分からない部分が多いから・・でも想定は出来ました」と笑顔で返した。

「清次郎は国語教師で、科学は分からんと言っての～。
ワシらは知りたいんじゃよ、その構造も知りたい。
考えたいんじゃよ、今では隠居生活をしてるかい・・考える時間が多くての。
それで勉強会の時に、皆で話し合った・・何が知りたいのかとね。
そしたら誰も知らんかったんじゃよ、原爆はどうしてあんな強力な爆弾なのかをね。

だから特別講師を招いた、シズカにその概要を聞きたくてね。
これからは千秋と美冬にも、色々と頼むから、特別講座をやっておくれ。
ワシらは学校も満足に出てないが、学びたいという心は、誰にも負けんから」

長老が笑顔で言った、千秋も美冬も美しい真顔で頷いた。
「では、打ち合わせをしますかね・・千秋さんと美冬さんも時間ありますか？」と清次郎が聞いた。
「もちろん大丈夫です」と千秋が答えて、美冬が頷いた。
清次郎と檀家３人と千秋と美冬が本堂に行った、車座に座り笑顔で話していた。
私は和尚が出してくれた、カスミの土産のヒヨコ饅頭を食べていた。

シズカはカスミとホノカと笑顔で話していた、３人とも楽しそうだった。
「ユリカから聞いたよ、由美子はどうなんじゃ？」と和尚が隣に座り聞いた。
『ヒトミより由美子は、体が相当強いから・・今度はやってみるよ』と笑顔で返した。
「そうか・・楽しみやな、今度は全てを伝えるんじゃぞ」と和尚が真剣に言った。
『うん、そうするよ・・和尚、ヒトミは俺の側にいるよ』と真顔で返した。

「知っとるよ・・一つだけ教える。
お前にリンダを会わせたのは・・ヒトミとユリカの妹じゃよ。
美冬の感性に働きかけた、美冬がその行動力で出会ったリンダを感じて。
ユリカも四季の４人も、そしてヒトミもユリカの妹も。

全員でお前に提案した、リンダという圧倒的な女性と、どう向き合うのかとな。
お前は見せたよ・・ヒトミとの約束を果たしているな。
それからじゃと思うぞ、ヒトミとユリカの妹が仲良くなったのも。
伝達が分かるのか・・ヒトミの言葉が、ユリカの波動で？」

和尚は真剣なまま、私に聞いた。

『うん、伝えてくれるよ・・由美子に会った時も、強く伝えてきた。
ヒトミの言葉が背中を押してくれる、あの時もそうだった。
和尚・・俺が採血をした時、あの出産。
あれはマリアだったんだよ、俺は原作者の一番大切な試験に合格した。
ヒトミの強い意志と、見送った仲間達の言葉で。
あの絶対的な存在、マリアの誕生に力が貸せたよ。
嬉しかったよ・・今は感謝してる、ヒトミが側にいる事に』

私は笑顔で和尚に言った、和尚も笑顔になっていた。
爽やかな風が流れ込んできて、神聖なる場所を吹きぬけた。
その風よりも強く熱い波動が、何度も来て・・私を包んでくれていた・・。

私と和尚の関係、それを上手く表現できない。

私は師と言えば、清次郎と空手のシゲ爺と佐伯院長を思い出す。

和尚は全く別の者であった、物心付いた時には側にいた。

幼い時から迷うと相談していた、その未熟な想いに、真剣に答えてくれた。

私にとってはやはり、祖父であった・・その存在自体が。

和尚は晩年、癌に侵された・・しかし延命医療を拒否した。

自然に死にたいと・・寿命に真摯でいたいと言った。

佐伯院長も梶谷弁護士も、それを了承した・・和尚の生き方を尊重したのだ。

和尚の遺言である密葬に、夜街のトップが集合していた。

その遺影には、和尚が晩年最も大切にしていた、沙紀の描いた和尚の絵があった。

断崖絶壁に座る和尚は、強い向かい風を受けて笑っていた。

和尚の背景から朝陽が射していた、夜明けの断崖に座っていた。

私はその絵を見ながら感謝していた、常に断崖に立っていた男を。

明けぬ夜は無い・・夜明けは必ず来る。

和尚の言葉が響いていた・・全ての人の心に・・。

永遠の片想い

順風満帆な時が有ったのだろうか、今まで一度も感じたことが無い。冷静でいられた時期は永く続かなかった、常に感情的な人間だった気がする。
善し悪しでなく、それが自分だと今は感じている。

広い本堂に笑い声が響いていた、私は祖父のような老人と話していた。
「小僧・・蘭はやはり、弟の事が最大の後悔じゃったのかの？」と和尚が真顔で聞いた。
『最大の後悔はそれだろうけど・・まだクリアーしてない部分があるんだ』と真顔で返した。
「身内でか？」と和尚が聞き返した。
『うん・・いまだに存在すら出てこない、兄がいるんだよ』と返した。
「そうか・・焦るなよ」と笑顔を残して、和尚が本堂に歩いて行った。
私は和尚を見送り、試験対策をしていた。

「ねぇエース・・ジンの妹さんって、私に似てるの？」とホノカが華麗二ヤで言った。
『見た目と雰囲気は似てるよ、性格は違うけど』と二ヤで返した。
「その二ヤは、いけない二ヤだね～・・分析結果を発表せよ」とシズカが二ヤで返してきた。

『ジンの妹・・自称の女神に、俺が感じたのは・・攻撃型の女性なんだと思ったんだ。
その本質は、女神の美しい外見に隠れてるし、自分も隠してるん

だけど。
でも攻撃型なんだよね、だからこそ自分に対しても攻撃した。
分かりやすく言うと、性格はリョウに近い。
限界トリオで言うと、マキに近いんだよ。
ホノカは強い心を持ってるから、守備的な要素が強いよね。
その精神世界は平穏と安定を秘めている、だから揺れないし折れない。
ジンは豊兄さんの真逆だと、蘭もカスミも言ってるけど。
実は内面は酷似してる部分も多いよね、ジンは仕事柄だと思うけど。
今は常時、爽やかな男を演出してる、だけど本質は熱いんだよね。
そして兄妹である自称の女神も熱い、でもその熱が自分に向いてたんだね。
ジンは心配したんだろうね、あの優しさなら・・相当に心配したよね。
そして乗り越えた妹を感じて、自分の好きな女性を確信したと思う。
それがホノカなんだよ、俺はそれは良く分かるよ。
別に外見が妹に似てるなんて、全く関係ないよね。
ジンは自分が一番安心できて、一番楽しい相手。
そして何より、自分らしくいられる相手を選んだんだね。
俺がジン本人からホノカって聞いた時の、ジンの瞳は愛情に溢れてたよ。
だから俺もすぐに納得して、素敵なカップルだと思ったよ』
私は笑顔で、美しい笑顔のホノカに言った。
「なんか・・本人に告白されるより、嬉しいね～」とホノカが華麗に微笑んだ。
「エース・・私は何型か述べよ」とカスミが不敵で言った。

『カスミは攻撃型に見えるけど、実は今は6対4で守備の方が強いよね。
カスミの守備とホノカの守備は、守るポジションが違うと思うよ。
今現在の話だよ、ホノカは異性との恋愛に真摯に向き合ってる感じ。
だからその守備範囲は、恋愛を前提としてるし・・相手を評価する時も、それが基準。
カスミは、今は異性との恋愛を拒絶してる、だから女性同士の関係と仕事が基準。
男をその評価軸で見ない、だからブレーキが必要ない相手となら自分が出せる。
俺は別にしても、豊兄さんも・・極論言えば、キングや和尚や勝也になら素直になれる。
今のカスミの、恋愛対象に成ろうと思えば、高い壁を壊さないといけないよね。
その壁は守備的な物じゃない、それは拒絶の壁だからね。
焦らなくて良いと思うよ、カスミはその時が来れば、愛には愛で応えると思う。
カスミは5対5がベストだよね、攻撃も守備も同じ強さが。
そのバランスが整えば、次のニューカスミの登場が見れると思ってるよ』

私は真剣なカスミを見ながら、笑顔で言った。
「なるほど〜・・シズカ、一つ教えて・・シズカの視点で、小僧と美由紀の関係を」とカスミが微笑んだ。

「そうきますか〜・・まぁマキに聞いてもらうのが一番ですけど。
マキはその部分で、小僧の一番の理解者ですから・・私の考えで言うと。
小僧と美由紀は心で誓いを立てていますね、そういう気持ちで接

しないという。
暗黙の了解みたいな感じで、互いに言葉には出さないで。
美由紀は多分今でも、両親以外なら・・唯一、小僧にだけは足を見せれるでしょう。
なんせ今年の正月・・小僧と美由紀は、駆け落ち騒動を起こしました。
その時は小僧が美由紀を風呂に入れたし、ずっと添い寝もしたんです。
その話はマキに聞いて下さい、私はマキから聞いた話だから。
小僧も美由紀も、もちろん互いのことが好きでしょう。
でもその愛は恋愛じゃない、友情に近い愛情なんでしょうね。
それは美由紀が線を引きましたね、美由紀はヒトミが心にいるから。
小僧を異性として愛することは出来ないのでしょう、小僧の中にもヒトミがいますから。
２人とも些細な事だと思ってますよね、例えば戸籍上の夫婦になるとか。
肉体関係を持つとか・・そんな区切りを考えてないんでしょうね。
美由紀は今でも、小僧の前では裸になれます、それが美由紀の愛情表現です。
強いですよね、それが出来る美由紀は・・真の意味で強い女です。
その愛を受け止めて、女として愛さない小僧・・最近はそれが完璧に出来てますね。
ユリカ姉さんの強い教えで、小僧が到達した世界でしょうね。
小僧は小児病棟を小６までと決めた、それは自分で決めたんです。
自信が無かったんでしょうね、男になってきた自分を感じて。
でも今はそれを越えていますね、だから沙紀と由美子にも関われる。
そして難しい年齢になった、ミホにも関われる。
それは絶対的な４人の教えが有るからです、蘭姉さんの異性とし

ての深い愛情と。
　ユリカ姉さんとカスミ姉さんの愛情と、美由紀の愛情が有るからでしょうね」

シズカは私を見ながら、最後に微笑んだ、強い波動が何度も来ていた。
「なるほど～・・そんな関係が、継続出来るのか～」とカスミが微笑んだ。
「美由紀ちゃんに会いたいな～・・大切なヒントが有りそう」とホノカが華麗に微笑んだ。
「それはありますね～・・ホノカ姉さんなら、美由紀の強さに共鳴しますよ」とシズカが微笑んだ。
「そうなの～・・楽しみ～・・さて準備に帰って、ＰＧに行かないと・・マキの話を聞きに」とホノカが微笑んだ。
「それは楽しみだね～・・ユリカ姉さんも来るだろうし」とカスミが不敵で言った、強烈な波動が同意していた。
「面白いですよ～・・駆け落ち話・・ただ蘭姉さんが、妬きますね～」とシズカが微笑んだ。
「それが楽しいんだよね～・・正直だからな～、蘭姉さん」と言ったカスミに手を引かれて、和尚に挨拶して車を目指した。

カスミはホノカに兎のお墓を教えて、２人で屈んで手を合わせた。
牛乳瓶には沢山の花が飾られていた、女性達の優しさを感じていた。
ホノカに笑顔で手を振って、カスミの車に乗った。
夕方の渋滞をトコトコと走って、カスミのアパートに車を止めて。
２人で腕を組んで夜街まで歩いた、私はカスミと腕を組む姿が自慢だった。
中学生や高校生の視線を意識して歩いた、カスミは不敵でそんな私を見ていた。

「なぁ・・沙紀ちゃん、私も描いてくれるかな～」とカスミが呟いた。
『描くでしょう・・でもどう表現するのか、想像も出来ないよね』と二ヤで返した。
「か～・・楽しみだ～・・少し不安だけど」と不敵ウルで言った。
『今のカスミなら大丈夫だよ、多分・・素敵な絵になるよ』と笑顔で返すと、、カスミも輝く笑顔になった。
「お前、ジンに感謝されるぞ・・あの言葉、ホノカには響いたよ」とカスミが二ヤで言った。
『真実だからね・・素敵なカップルじゃない、見た目は出来過ぎだけどね』と笑顔で返した、カスミも笑顔で頷いた。

ＰＧの裏階段の下で、ユリカが歩いて来るのが見えた。
私は笑顔を向けて、カスミは笑顔で頭を下げた。
「ユリカ姉さんも、お好きですね～」とカスミが笑顔で言った。
「美由紀との駆け落ち話なら、直に聞かないとね」と爽やか笑顔で返して、私の首に腕を回した。
私はユリカを笑顔で抱き上げた、カスミが不敵全開で見ていた。
「やっぱり、蘭やカスミの目の前での、ユリカスペシャルは気持ち良いわ～」と爽やか二ヤで言った。
「ユリカ姉さん・・最近やばい薬とか、やってませんか？」とカスミが不敵二ヤで言った。
私は２人の漫才を聞きながら、慎重に裏階段を上った。

ＴＶルームの前までユリカは抱かれていた、マダムとユリさんと北斗と裏方４人組に、４人娘が揃っていた。
ユリカとカスミが挨拶をしてると、蘭とホノカが笑顔で入ってきた。
蘭は私を見て、満開二ヤを出していた、私はウルで返した。
「あら・・今日も楽しい話が聞けるのかしら？」と蘭の表情を見た

ユリさんが薔薇二ヤを出した。
「はい・・シズカがマキに聞いてくれと言ったので・・マキ、エースと美由紀の駆け落ち話をよろしく」とカスミが最強不敵で言った。
「ありゃ～・・そこが来ましたか～・・蘭姉さん、今日は冷静ですか？」とマキが二ヤで言った。
「大丈夫よ、相手が美由紀なら・・マキが相手なら、冷静でいられないけど」と満開二ヤで返した。

「それは・・今年の元旦の話です、美由紀と小僧の逃避行。
小僧は昨年の正月、やはり元旦に家出をしました。
皆さんも少しは聞かれてると思いますが、蘭姉さんは聞いてますか？
私はそれを先に知りたいんです、小僧が話すのかが微妙だから。
出来すぎた話だから・・でも真実ですよ、私は2年前に聞きました。
源氏名　蘭の話を、聞かれましたか？」

マキが蘭に笑顔で言った、蘭は満開に微笑んで頷いた。
「やっぱり事実だったの・・素敵な話だね」とユリカが微笑んで、蘭は最強満開になっていた。
「さてと・・その源氏名　蘭物語を先に聞かせて」とカスミが不敵で言った、マキは私を促した。

『俺はその時小5でね、新聞である記事を見たんだ・・・』私は源氏名　蘭の話をした。
「ロマンチックだな～・・でも本当に出来過ぎの話だね」とハルカが微笑んで。
「しかし期待を裏切らない男だね～・・その記録更新の発想とか」とレンが微笑み。
「シオンは憧れます～・・その行動力に、小5ですよ・・驚きです

～」とシオンがニコちゃんで言った。
「私も記録更新してみたくなった・・小４で」とエミが私に二ヤで言った。
『それは駄目です・・俺が寂しいし心配だから、付いて行くよ』と笑顔で返した。

「じゃあいよいよ駆け落ち話だね・・美由紀ちゃんとの」とエミがマキを見て笑顔で言った、マキも笑顔で返した。

「今年の正月・・元旦の夜でした、シズカが私を訪ねて来たのが。
美由紀の両親が夕方小僧の家に来て、美由紀が置手紙だけ残して家出したと。
慌てて来たそうです、そして小僧も置手紙して家出してました。
それを聞いた美由紀の両親は安心したそうです、小僧が一緒なら心配ないと。
それから勝也父さんと律子母さんと４人で、宴会が始まったとシズカが笑ってました。
私はこの駆け落ち話を、家出から帰ってきた美由紀に聞きました。
勝也父さんに話してくれと、美由紀に頼まれたんです。
小僧が勝也父さんに怒られないように、私から話して欲しいと言ってきました。
美由紀は養護学校に行っていて、中学は普通の公立に、前月の１２月に決まっていました。
その頃、美由紀は養護学校の友達で、大阪に転校した子と文通をしていました。
その子も事故で片足を失い、義足を上手く使えずに、車椅子だったそうです。
そして美由紀が中学の話を手紙に書いた、すると返事が有ったそうなんです。
自分も普通の中学に行きたいと、真剣な文章で書いてあった。

美由紀は豊君に相談します、その子の話をして、車椅子をもう一台作れないかと。
豊君は作ってやると即答して、ＹＵＴＡＫＡ？の製作を約束しました。
美由紀は喜んで、その子に電話をかけた・・そして聞くんです。
大阪には私立中学で受け入れてくれる学校があると、その試験が1月下旬にあると聞きます。
それで豊君はシズカも協力して、ＹＵＴＡＫＡ？を製作して贈ったのが。
クリスマスを過ぎた頃でした、その子も喜んでお礼の手紙が全員に届きました。
車椅子って難しい乗り物なんですよ、私もシズカのに何度か乗った事があるけど。
腕力も相当に必要だし、慣れないと曲がるのにも苦労します。
その子は体の小さな方で、美由紀ほど体力が無かったんです。
美由紀は手紙で励ましましたが、自分が側にいてアドバイスしたかったんでしょう。
でも両親に相談できなかった、両親の大きな負担になると分かってたから。
その事を小僧に話します、美由紀の悩みに気付いた小僧に追及されて。
そして小僧が言うんです、正月に大阪に行こうと美由紀を誘う。
小僧が移動手段も泊まる場所も手配すると言って、美由紀を誘うんです・・逃避行に。
美由紀は本当に嬉しかったと言っていました、ハンデのある自分を誘う小僧の言葉が。
どんなに大変な事か分かってる小僧が、笑顔で誘ってくれたから。
美由紀は小僧と約束して、元旦にお年玉を集めます。
小僧は〇〇観光の社長に付けた貸しを利用して、大阪のホテルを2泊手配して。

和尚に祖父の振りをさせて、ホテルに電話をさせて信用させました。
小僧は、こういう場合は全て和尚ですね、和尚には全て話して協力を要請します。
小僧は新聞配達で貯めた、新しいサーフボードを買う金とお年玉を用意して。
大阪までの寝台特急の往復切符を2人分買った、そして決行します・・元旦の夕方。
美由紀をこっそり連れ出して、駅まで押して行くんです。
そして駅員に切符を見せて、若い駅員と2人で車椅子ごと美由紀を抱えてホームに出た。
美由紀は何の不安も無かったそうです、ワクワクしてたと笑顔で言ってました。
車椅子で旅することが、どんなに大変な事か・・2人とも知ってたのに。
2人ともワクワクしてたそうです、汽車を待ちながらお菓子を食べて。
汽車がホームに着いて、小僧は美由紀を押して入った。
寝台の個室を取っていて、そこに入った・・美由紀は始めての汽車だったそうです。
それまでは何所に行くにも、父親の車で行っていたから。
美由紀は嬉しくて、ずっと車窓から流れる景色を見ていたそうです。
小僧が弁当を買って、夕食を向き合って食べた。
美由紀は水分だけ気をつけていました、汽車のトイレは難問でしたから。
そして小僧と同じベッドで、添い寝してもらいながら、小僧の面白話を聞いて眠った。
大阪に着いたのが、翌日の早朝だったそうです。
大阪の駅のホームはエレベーターまであって、驚いたと言ってい

ました。
小僧は美由紀を駅の身障者用トイレに連れて行き、それから早朝の大阪の街を散歩した。
見るもの全てが別世界で、美由紀は寒さを感じなかった。
それから地下鉄でその子の家を訪ねた、驚くその子に美由紀が笑顔で言った。
練習しよう、絶対に出来るから・・そう笑顔で言った。
泣いているその子を、美由紀が抱きしめて。
その子の両親が、試験場所の私立中学に連れて行った。
それから2人で練習が始まりました、かなりきついスロープと傾斜を美由紀が手本を見せて。
笑顔で何度も何度も練習した、美由紀が笑顔で応援しながら。
1日目が終わりました、美由紀と小僧はその子の父親に送ってもらいホテルに入った。
その子の両親には、2人は従兄妹同士で、親戚と来てると嘘を言っていました。
部屋に入ると美由紀が言った、小僧に風呂を溜めてくれと。
そして自分の体をよろしくと笑顔で言った、小僧も笑顔で楽しみだ～と言ったそうです。
美由紀は少し胸も出てきて、やっぱり恥ずかしかったらしいです。
でも小僧が二ヤで見るから、逆に出来たと言っていました。
美由紀は小僧の前で全裸になるんです、そして全裸の美由紀を小僧が抱っこして浴室に運んだ。
小僧が半分位溜めたお湯を、アメリカの映画みたいに泡風呂にしてたそうです。
どうしたのって喜ぶ美由紀に、やっと探したよ・・宮崎には中々無かった。
そう小僧が答えて、美由紀を優しく沈めた・・その時には、全然恥ずかしくなかった。
美由紀はそう言ってました、小僧の美由紀を想う気持ちが嬉しか

ったから。
美由紀が恥ずかしくないように、考えていた小僧の優しさが嬉しかったのでしょう。
小僧は美由紀の頭と背中を洗って、シャワーで流すのを外で待っていた。
そして美由紀に呼ばれて、バスタオルで美由紀を包んで抱き上げた。
そしてドレッサーに座らせて、美由紀の体を拭いてあげた。
美由紀はその時には、小僧に全てをしてもらいたかったそうです。
楽しくて嬉しかったと・・そして感じたと、自分でも普通に恋愛が出来るかもしれないと。
どこかで諦めていたそれを、小僧は感じていたんじゃないかと思ったそうです。
小僧は美由紀の体を優しく拭いて、美由紀の用意した下着を渡した。
美由紀は下着だけ自分で着けて、パジャマは小僧に着せてもらった。
それから小僧がシャワーをして、ルームサービスで豪華な夕食を食べた。
夕食後は2人で大都会の夜景を見ながら、ずっと話してたそうです。
美由紀は本当に幸せだったと言っていました、その時間が楽しかったと。
そして難問に挑戦します、美由紀のトイレを小僧がフォローする。
美由紀は下着だけ脱いで、小僧に抱き上げられて、洋式トイレに座らせてもらう。
そして終わった後も、小僧が抱き上げてベッドまで運ぶ。
父親にでも恥ずかしい行為が、全然違和感が無かったと美由紀が言いました。
小僧が絶対に許さなかったから、美由紀が浴室の床を這わせる事

だけは。
そしてベッドが2つ有るのに、美由紀が甘えて添い寝してもらった。
2日目の夜はそうやって終わりました、翌日はその子の父親が迎えに来て。
半日練習して、午後は万博の記念公園と、大阪城に連れて行ってもらいました。
夕食をと誘う両親を、美由紀が丁寧に断った、小僧と2人の時間が大切だったから。
そしてホテルまで送ってもらい、またお風呂で体を洗ってもらった。
美由紀は本当に楽しかったと言っていました、甘えろと言う小僧が優しくて。
それから美由紀が食べたいと言った、たこ焼きを買いに2人で出かけた。
正月3日でした、明日は宮崎に帰る日だと感じて、美由紀は寂しかったそうです。
大都会の喧騒の中、小僧が後ろから押しながら、ずっと面白話をしていて。
美由紀は一度も寂しさも辛さも感じなかった、小僧が常に笑顔で話してたから。
夕食を食べて、たこ焼きを買ってホテルに帰った。
そして夜景を見ながら、たこ焼きを食べた。
美由紀は・・健常者には分からない、幸せを感じたと言ってました。
その日も小僧が優しく添い寝してくれて、美由紀は眠った。
翌日・・その子の試験と同じ内容が出来るのを見て、美由紀は嬉しかった。
そして父親に駅まで送ってもらい、帰りの汽車に乗りました。
個室で小僧が美由紀に笑顔で言った、良かったね美由紀と優しく

言った。
美由紀はそれで号泣した、嬉しくて小僧に添い寝させて泣いたまま眠った。
翌朝延岡を過ぎた頃に美由紀は起きました、隣には小僧が眠っていました。
美由紀は車窓から流れる景色を見ながら、ずっと帰り着かなければ良いと思っていた。
宮崎駅に着いて、小僧が車椅子を押して家に帰り、小僧が美由紀の両親に謝りました。
美由紀の両親は、ありがとうと小僧に言ったそうです。
私は美由紀の母親から聞きました、美由紀の成長した姿が嬉しかったと言っていました。
小僧が挨拶をして帰ってすぐに、美由紀が私に電話してきて。
私は美由紀の家に行って、両親と一緒にこの話を聞きました。
美由紀の父親も嬉しそうに聞いていました、美由紀の両親は信じています。
自分の娘と小僧の事を、だから笑顔で聞けるのでしょう。
私は話を聞いて、そのまま小僧の家に行き、勝也父さんと律子母さんとシズカに話しました。
小僧はお土産を小児病棟に届けていて、まだ帰っていませんでした。
ありがとう、マキ・・小僧を責める事は出来ないね、そう律子母さんが勝也父さんに言った。
それで終わりでした、律子母さんが言ったという事は、勝也父さんには絶対ですから。
だからこそ、滅多に律子母さんは口出ししません、小僧と父親の問題には。
それからの小僧と美由紀は、今まで以上に近づいた感じになりました。
でも、ここまで行っても、2人ともお互いを恋愛対象と見ない。

それは美由紀が決めたんでしょう、強い決意で心に誓ったんでしょうね。
美由紀には無理だったんです、心にヒトミを大切に持っているから。
小僧も心にヒトミが棲んでいるから、互いに恋愛にならないと思っています。
だから美由紀は小僧の愛に対して、最強の愛情表現で応えた。
全裸になり身を委ねて見せた、小僧を好きだと・・そしてどこまでも信じていると。
そう行動で示しました・・美由紀は今でも、小僧の前で全裸になれるでしょう。
美由紀は・・それが小僧に一番響くと知っています、全裸で抱き上げられる。
その時が一番、小僧の伝達を受けるから・・愛情がないと出来ない行為だから。
次回お話しする、美由紀物語第2章で見せた、美由紀の強い愛情。
ミホを引き離された時、小僧の心を守り続けた、美由紀の底知れぬ深い愛。
それを表現した、この逃避行物語・・私達トリオは嬉しかった。
小僧の常識外の行動を支える、少女達の強さを感じて。
小僧の幼稚園の先生に対する失恋を、その寂しい心に強く訴えた・・ヒトミ。
そしてヒトミを亡くし、ミホを引き離された喪失感を受け止めた・・美由紀。
小僧と美由紀・・その関係は超越しています、血の繋がりも・・体の繋がりも。
その最強のコンビが再度挑む、ミホと沙紀と由美子。
私は幸せを感じます、それを側で感じられて・・少しでも力が貸せるなら。
永遠の片想い・・この逃避行の噂が中学で流れた時に、小僧が堂

々と言った言葉。
その称号に込めた想い・・永遠に美由紀を愛するという、強い想いでしょう。
男と女では、そんな関係は無理だと言われています。
でも私は出来るんだと信じています、小僧と美由紀なら貫き通すと信じている。
なぜならば・・小僧も美由紀も、愛に見返りを求めないから。
その心は互いに、相手だけを想っているから・・必ず辿り着くと信じています。
そうでないと出来ない・・ミホを現実の世界に戻す事は。
無償の愛だけが戻せる・・ミホの傷ついた心を戻せるのは。
理由無き愛情だけだと信じています・・小僧も美由紀も」

マキの強い言葉が響いていた、私は嬉しかった。
私の知らない美由紀の気持ちが伝わって、美由紀を想っていた。
そして美由紀に感謝していた、大切な経験と深い愛情に・・心から感謝していた。

晩夏の夕方、狭い空間に暖かい波動が響いていた、ユリカでないユリアの波動が。
ヒトミの気持ちを乗せてきた、優しい何かに包まれていた。

私と美由紀との関係、この後も恋愛的な進展は全く無かった。

私が美由紀の全裸を、最後に見たのは１８歳の冬だった。

それは私が、ユリカを失った喪失感を抱えていた時だった。

美由紀は蘭の許可を取り、成人の日が絡む３連休に、私を逃避行に誘った。

私はその時には車の免許を持っていたが、汽車で大阪に行った。
小６で行った同じホテルで美由紀と過ごした、美由紀は全裸の強い愛情を見せてくれた。
完全に大人の体になった、全裸の美由紀を抱き上げた時。
私は自分に戻った、ユリカを失った寂しさを克服できた。
ユリカと美由紀の全裸の修行が、私に問いかけてきた。
こんな所で止まってる暇は無いと、美由紀の笑顔と強い波動が言った。
帰りの汽車の中で美由紀が言った、笑顔で優しく語りかけた。
「今日は成人の日だね、あんたにも私にも大切な・・忘れられない日だね」
私は笑顔で美由紀を見て頷いた、美由紀も笑顔で続けた。
「しょうがないな～・・今がその時だから、あの時の約束を決行する」
美由紀は笑顔でそう言って、瞳を閉じた。
私は嬉しくて、美由紀を優しく抱きしめて唇を合わせた、生涯一度だけの優しいキスだった。

【その時が来たら、迷わずするから覚悟しな】と言った、美由紀を抱きしめていた。

私にとっては今でも・・永遠に想い続ける・・美由紀。

その強さと優しさが・・永遠の片想いだよ・・美由紀、ありがとう。

存在する未来

純愛などではない、そんな表現は当てはまらない。
求めないのでも、我慢してるのでもない。
ただその関係であり続けたい、それだけがお互いの望みだった。

小さな空間に、無変換の言葉が響いていた。
女性達は考えているようだった、自分に置き換えて感じようとしていた。
「美由紀は凄すぎるね・・私には絶対に出来ないと感じた」とユリカが美しい真顔で言った。
「私もそう思いました、出来ませんね・・自分が小６の時なら」とユリさんんも真顔で言った。
「出来ない・・絶対に出来ないですよ」と蘭も真顔で呟いた。
「それが愛情表現なら、最強です・・幼い子供じゃない、１２歳の少女の行為なら」とカスミが言った。
「そうですよね・・１２歳、１番敏感な時ですよね」とレンが微笑んだ。
「シオン姉さん以外は、無理ですよね・・私も無理です」とマキが笑顔でシオンを見た。

「どうかな～・・今なら自信あるけど、１２歳なら・・自信ないです～」とシオンが微笑んだ。
「そうだよね～・・身を委ねるって、そういう事なんだね・・相手を信じるって」と北斗が微笑んだ。
「その時、どんな気持ちになったの？・・それだけは教えて」と蘭が私に微笑んだ。
『ただ綺麗だと思って見てたよ・・それ以外の感情は出なかったよ』と笑顔で返した。

「抱き上げても？・・触れても？」とユリカが微笑んだ。
『うん・・それ以外は無かったよ、その後添い寝もしたし』と笑顔で返した。

「妬けないな・・そんな対象じゃない、美由紀という存在は」と蘭が満開笑顔になった。
その時にマリアが起きた、私はマリアを抱き上げて北斗を呼んだ。
北斗は笑顔でマリアの隣に座った、マリアは私と北斗を見て笑顔になった。
私はマリアの手を握り、言葉と温度で伝えた。

『マリア・・北斗が温度の言葉を覚えたいんだよ、だから協力してね。
俺では難しいんだよ、感覚的な事を教えるのは。
最初にＹＥＳとＮＯから始めよう、お願いね・・マリア』

天使全開のマリアに、笑顔で優しく言った。
「あい・・ほくと」と天使で微笑んで、右手を北斗に出した。
北斗は嬉しそうな笑顔で、マリアの手を握った。
『北斗・・親指をマリアの手の平の真ん中に当てて、そこに集中してね』と笑顔で言った、北斗も笑顔で頷いた。
女性達は沈黙して、興味津々で見ていた。

『じゃあ、慣れるまで俺が質問するね・・答えが分かってる質問から』と笑顔で北斗に言って。
『マリアはママが好きですか？』とマリアに笑顔で聞いた、マリアは天使の微笑で温度で伝えた。
「えっ！・・ちょっと待って、分かる気がする」と北斗が驚いて言った。

『北斗なら分かるんだよ・・一番難しい、気づくって事が出来てるから。
マリアの伝達は、由美子の１０倍は強いからね』と笑顔で言った。
「凄い・・ありがとうマリア、よろしくね」と北斗がマリアに微笑んだ。
「あい・・ほくと」と天使全開で返した。

『じゃあ北斗、流れを感じてね・・流れに意味があるから』と北斗に言った、北斗は笑顔で頷いた。
『マリアはエミが好きですか？』とマリアに聞いた、マリアは天使継続中だった。
「うそ！・・分かるよ流れが、右回りだよね」と北斗が嬉しそうに言った。
『じゃあＮＯの質問をするね・・マリアはピーマンが好きですか？』と私はマリアが唯一苦手なピーマンを出した。
「うんうん、分かったよ・・左回りだね」と北斗が微笑んだ。

その時に私ですら衝撃を受ける、ミサの言葉に。
「そうだよ・・流し方の速さで、どれだけ嫌いなのかを言うんだよ」とミサが笑顔で言った。
私を含む子供以外の全員が凍結した、５歳のミサの言葉に固まったのだ。
「やっぱり、ミサちゃんは知ってましたね～」とシオンがニコちゃんで言った。
「知ってるよ・・ミサ５歳だもん」とミサが少し威張った。
「ミサ・・５歳で知ってるから凄いんだよ」とエミが嬉しそうに言った。
「そうなの～・・マリアと遊ぶには、いるもん」とミサが不思議そうに言った。

「エース・・凄いの見つけて、二ヤしてるね」とマキが二ヤで言った。
『うん・・み～つけたって感じ、嬉しくて』と二ヤ全開で言った。
『じゃあ北斗、次はミサも握ってみて』と笑顔で言った、北斗は笑顔でミサの手を握った。
北斗はミサの右手を左手で握り、マリアの左手を右手で握った。
『じゃあミサ・・ミサがマリアに質問して、簡単なのを温度で』とミサに笑顔で言った。
「マリアはエースが好きなの？」と言葉と温度でミサが言った。
「うそ！・・強いよミサちゃんの流れ・・でもマリアが答えない」と北斗が二ヤで私を見た。
私は慌ててマリアを見た、全力天使不敵を私に出していた。

『マリア・・難しい質問じゃないでしょ・・簡単でしょ』とウルウルでマリアを見た。
「えーしゅ・・うわき・・だめ～」と天使不敵継続で言った、全員が大爆笑した。
『マリア、俺は浮気しないよ～』とマリアに言った。
「まりあと、おふろ、だっこする～」と天使二ヤで来た。
『するからね・・今度マリアとお風呂するから』とウルウルで返した、女性達の笑いが止まらなかった。
「凄いね～・・エース見直したよ、こんな色々な流れを覚えたの」と北斗が微笑んだ。
「簡単だよ、言葉より簡単・・だって思い出してくるから」とミサが笑顔で言った。
「そうなの、ミサ・・お願いだから教えてね」と北斗が嬉しそうに微笑んだ。
「は～い」とミサが少女の笑顔で返して、また衝撃を受ける。
「レイカちゃんも、よろしくだって」とミサがレイカに言ったのだ。

「はい」とレイカが可愛く答えた。

「エースの言葉で良いの？・・・マリアの言葉？」とレイカが笑顔で聞いた、私は凍結状態だった。
「マリアのだよ、エースの悪い言葉だから」とミサが笑顔で返した。
「悪い言葉なの？」とユリカが楽しそうに笑顔で聞いた。
「うん・・エースのは言葉だけな感じだよ・・好き、お前、好きみたいな感じ」とミサが笑顔で返した。
「そうなんだ～・・海外に行った事がない、英語が得意と自負する人間みたいだね」とマキが二ヤで言った。
「だからヒトミに怒られたんだ、多分いやらしい言葉を連発して」と蘭が満開二ヤで言った。
「良かった～、ミサとレイカとマリアがいて・・私は悪い言葉を覚えるとこだったよ」と北斗が微笑んだ。

私は慌ててレイカの手を握った。
『レイカ、今日も可愛いね～』と言葉と温度で伝えてみた。
「温度はね・・レイカ、今日、可愛い？って聞いてるみたいだよ」とレイカが笑った。
『そうなの！・・勉強しま～す』とウルで返した。
「今の言葉で、胸に手を当てて考えてごらん・・ヒトミをどれほど傷つけたのか」とユリカが爽やか二ヤで言った。
私はウルで胸に手を当てて、天井を見た。
『ヒトミ、ごめん・・誤解だよ～』とウルウルで呟いた、全員が笑っていた。
強烈なユリアの波動に熱が乗ってきて、ヒトミが笑っていた。

北斗は暫らく、ミサとレイカの会話を温度で感じていた、その笑顔が嬉しそうだった。
その時に久美子が元気良く入ってきて、全員に挨拶をした。

『久美子・・今週の土曜日の6時から、演奏会よろしく。
観客は美由紀とミホと沙紀に、病院関係者が来るから。
心に直接響かせてね・・魂の音色で』

私は驚く久美子を見ながら、笑顔で伝えた。
「了解・・やってみるよ、全てを賭けて」と久美子が微笑んだ。
『うん・・響いたら、沙紀が久美子を描いてくれるよ』と笑顔で返した。
「うっそ～・・楽しみだな～」と久美子が笑顔で言って、エミを連れてレッスンに行った。

「私達の方が楽しみだよね～・・久美子の次の段階、その魂の響きが」と蘭が満開で微笑んだ。
「久美子・・変わりましたよ、母親を心の部屋に棲ませたって感じですね」とレンが微笑んだ。
「久美子の魂の響きを受けて、沙紀が描く絵ですか～・・本当に楽しみですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「さて、鑑賞会しましょうか・・蘭とシオンの絵を」と北斗が笑顔で言って、全員が頷いた。
テーブルの上に、2枚の絵を並べて見ていた。
蘭の満開とシオンのニコちゃんが、嬉しそうだった。

「良いな～・・素敵だな～」とハルカが微笑んだ。
「蘭ちゃんの海の中には、エースじゃない男の人がいる～」とミサが笑顔で言った。
「えっ！ミサ・・どこにいるの？」と蘭が驚いて聞いた。
「どこにって・・ここでしょ」とミサが絵の上を大きく円で示した。
私はハッとして見た、その海の深さを表現していた青の濃淡に浮き出ていた。

まだ少年らしい顔が、確かに描かれている感じだった。
その瞬間に蘭が号泣した、それでその正体が全員に理解できた。
その部分は確かに少年の顔と言えば顔のようで、だがただの偶然に出来たと言われれば、そんな感じだった。
それ程不鮮明に描かれていた、しかし蘭は確信したようだった。
その顔に確かな見覚えがあったのだろう、まさに弟の顔なのだろうと全員が感じていた。
蘭をユリカが優しく抱いて、蘭はただ泣いていた、暖かい何かが包んでいた。
しかし沙紀の絵には、まだ驚愕の事実が隠れていた。

「シオンちゃんの絵には、マチルダちゃんがいるんだね」とミサが笑顔で言った。
「ミサちゃん、どこでしょう」とシオンが慌てて聞いた。
「ここの木の所だよ〜・・この緑は目でしょ、緑の目だよ〜・・マチルダちゃんだね」とミサが笑顔で言った。
全員がそれを見て、感じていた、森の中の緑に確かに瞳が描かれていた。
まさにマチルダが微笑んでいるようだった。

「じゃあ、お池の目は誰？」とレイカがミサに聞いた。
「私も知らないよ・・青い目の人は」とミサがレイカに返した。
私達は又も驚愕した、右横を正面にして見ると。
そのブルーの湖の濃淡で、確かに瞳らしい物が浮かんでいた。
『リンダ！』私は思わず声に出してしまった、まさにリンダの瞳だった。
「リンダが見てる・・嬉しそうに、将来のシオンを」とユリカが呟いた。
シオンは俯いて泣いていた、カスミがシオンを抱きしめていた。

「私達は問われてますね、その物を常識で見るなと・・先入観を捨てれるのかと」とユリさんが真顔で呟いた。
「４人娘には見えるんだ・・先入観が無いから、沙紀の描く本質が」とカスミが呟いた。
「シオンにも見えないんだね、シオンにも上下左右の概念があるから」ちユリカが真顔で言った。

「ユリカ姉さんの言った通りだね、沙紀の絵は強く言ってるんだね。全員で同じ気持ちで挑もうと、それには先入観を捨てようと。試されてる・・それが出来るのかと・・絶対に由美子ちゃんの為に」

蘭が静かにそう言った、北斗が目を潤ませて頷いた。
「沙紀の突出した才能だとしても・・マキ、マリを知ってる?」とユリカが微笑んだ。
「もちろん、知ってます・・時をめくる者、預言者マリ」とマキが真顔で返した。
「預言者!・・怖い気がする」とハルカが言った。
「怖かったですよ・・その存在そのものが別世界にいて、それを小僧が覚醒し続けたから」とマキが真顔で返した。
「聞きましょう・・沙紀を理解したければ、必要でしょうから」と蘭が真顔で言った。

「長い話ですから、今日は出会い編を。
マリは小僧が美由紀に出会って、夏休みが終わった、丁度今頃でした。
突然現れた、１０歳の自閉症の少女です、小僧も美由紀も９歳でしたね。
マリは意思を示す事がそれまで無くて、常に柱の影に隠れて俯い

てるような少女でした。
確か階段から転落して、足を骨折したマリが入院してきたんです、小児病棟に。
そして当然のように出会ってしまう、小僧が見つけてしまう。
小僧はマリを一目で気に入ります、その不思議な魅力に夢中になる。
マリは別世界でしたね、常に俯いているんですけど・・まれに顔を上げると。
その瞳は黒目の部分が恐ろしいほど大きくて、あの個性特有の視線の症状は出て無かった。
本当に静かな・・分かり易く言うと、１０歳にして今のユリカ姉さんのような静けさです。
小僧はマリの部屋に遊びに行って、いつもマリに密着して座って話していました。
ヒトミに出会う少し前で、温度の伝達は持ってなかったけど。
最も得意な鼓動の囁きを駆使してる感じでした、マリに出会って３日後でしたね。
ミステリーが始まったのは、小僧はマリの心に触れて感じたんでしょう。
家からトランプを持ってマリの病室に行った、そしてマリをベッドに座らせた。
小僧がシズカに前日見て欲しいと頼んでいて、私達3人はマリを見ていました。
小僧はマリのベッドに全てのカードを開いて置いた、そして直ぐに伏せ始めた。
マリは俯いていました、でもカードを見たと思っていました。
でも一瞬です・・小僧は直ぐにカードを伏せ始めましたから。
そして伏せ終わり、小僧が笑顔で言うんですよ・・マリ、1からめくろうって。
そうするとマリは俯いたまま、凄いスピードでめくり始めた。

私達は固まってました、その速さと正確さに驚いていた。
マリは2枚のカードを残して、見事に順番通り4枚一組でめくった。
小僧は笑顔になって、最後の2枚をめくった・・私達はジョーカーだと思っていた。
それは小僧が予備のカードに、自分で真似て書いたハートのエースでした。
小僧はシズカに笑顔で聞いた、マリは天才なんだろうかと。
シズカは違うと言いました、暗記じゃない・・それは無理なはず。
シズカは真剣に言って、マリに近づいた・・そして笑顔でマリの手を握った。
マリ・・私はシズカ、お友達になってね・・あなたの才能を感じてみたい。
シズカはそう言って、トランプを取って混ぜました、そして一枚マリの前に置いた。
そして残りのトランプを半円状に広げた、マリは俯いたまま、その中から3枚を選んだ。
私と恭子は息を呑んで見ていました、シズカでさえ緊張していたと思います。
一枚選択したカードがハートの3、そしてマリが選んだ3枚のカード。
当然のように全て3でした、シズカはマリに抱きついて、本当に嬉しそうでした。
私達はマリの不思議な力に驚き、それを感じて嬉しそうなシズカにも驚いた。
そしてシズカが小僧に言います、このマリの力は誰にも言うなと。
見世物にされると嫌だからと、シズカが強く小僧に釘を刺した。
小僧は真剣に頷いて、マリの隣に座って笑顔で話し始めた。
私達は3人で病院を出て、和尚の所に行きました。
和尚におやつをもらい、和尚の前で話した・・和尚は興味津々で

聞いていました。
ここの部分の会話は鮮明に覚えています、衝撃的だったから。
和尚にマリの出来事を話して、私がシズカに聞いた。
マキ・・・あれは暗記じゃないの？
シズカ・・暗記じゃないよ、だって探してたよ・・まるで見えるように。
恭子・・・うん、そんな感じだったね、それに後の3枚当ては、暗記なんて関係ないし。
シズカ・・和尚はどう思うの、超能力みたいなのって有るのかな～？
和尚・・・超能力か、何をもって超を付けるかじゃね～。
マキ・・・少なくとも、スプーンを曲げるのは違うよね、あれはマジック。
恭子・・・虫の知らせとか、双子のテレパシーは？
シズカ・・その部分は、和尚と小僧の領域のような感じだよね。
恭子・・・そっか、知らない人から見れば、小僧なんて超能力者だったりして。
マキ・・・それは勘違いしそうだよね～、小僧は自分の事話さないし。
シズカ・・しまった～・・奴は何を感じてるんだ、それを追求しなかった。
和尚・・・小僧は驚かなかったんじゃな、当然のような顔をしちょったか。
マキ・・・あっ！・・そうだった、当然だという笑顔だった。
恭子・・・待って！・・最後の2枚のカードの意味、あれはジョーカーでも良かったはず。
シズカ・・そうだよ、ジョーカーでも良かった・・わざと自分が似せて書いたカード使った。
マキ・・・奴は、どれだけ鮮明に見えてるか、それを示したかったんだ。

恭子・・・あの野郎～、私らを試したんだ・・驚いた顔見て二ヤ二ヤしてたな。
シズカ・・常識的な発想しか出来なんだね～って、心の中で爆笑してたね！
マキ・・・えっ！からくりが有るの？・・・マジックなの？
シズカ・・か～、そこが分からない・・悔しい～。
和尚・・・からくりは無いじゃろう、相手は自閉症の少女じゃよ。
恭子・・・そうだよね～、からくりなんて無理だよね。
シズカ・・奴はマリと、どう関わるつもりなんだろう？
マキ・・・それは・・ほら・・やっぱり・・やばいよね。
恭子・・・かなりやばいし、かなり興味ある～。
シズカ・・もう恭子はなんで言うの～、私は自分に駄目だって言ってたのに。
マキ・・・シズカは絶対に無理だよ、興味津々な感じプンプンだよ。
和尚・・・小僧はその子と、どう接しておるんじゃ？
シズカ・・横に密着して座って話してる。
マキ・・・多分・・鼓動の囁き使ってるよね、乳児によくやるやつ。
恭子・・・薄皮はがし！・・徐々にその正体が現れるの！
シズカ・・今日のは挨拶代わり、デモンストレーションだと～。
マキ・・・正体って・・ちょっと～怖いよ。
恭子・・・今日のが挨拶なら、何なの・・その正体。
シズカ・・和尚、ニヤニヤ出てるよ、何か知ってるね。
和尚・・・いやの～、昨日小僧が来て、妙な事を聞きよったかいの～。
恭子・・・もったいぶらないの、何を聞いたの？
和尚・・・いやの～、ワシに預言者っていたのかな～っての。
マキ・・・預言者！
シズカ・・なんだ～・・そんな非科学的な事を、あの小僧が。

恭子・・・好きじゃん、小僧は、その部分は・・絶対に信じてないけどね。
マキ・・・だから怖いよ、絶対に信じてないから。
和尚・・・バラバラの配置のカードじゃろ、見えててもそんなに早く抜けるかの～。
マキ・・・無理な気がする、確かに早かったよね。
シズカ・・認めたくないけど、確かに見えてても無理な気がする。
恭子・・・じゃあ何なのよ～・・透視じゃないなら。
マキ・・・言っていい？・・笑わない？
シズカ・・今更マキが何言っても、笑ったりしないよ。
マキ・・・私カードをめくるって言葉で思ったんだけど、マリはめくってたよね。
恭子・・・もうじれったいよ、マキ・・めくってたよ。
マキ・・・だからマリのは、カードをめくってる感じじゃなかったの。
シズカ・・マキ、言って・・どんな感じだったの。
マキ・・・時間をめくってる感じ、少し先を覗いて・・その通りにカードをめくるような。
シズカ・・確かに・・何かを追ってたけど、カードじゃなかった気もする。
恭子・・・泣くよ・・私・・怖くて、泣いちゃうから。
シズカ・・もしよ、もし次の瞬間が見えるなら、そこに正解があるなら出来るかな。
マキ・・・それなら出来るかも、見たままと同じ動作をすれば良いんだから。
恭子・・・そうだとしても、どうやって、正解してる場面を選ぶのよ？
シズカ・・未来が複数存在すると仮定して、トランプならその確立分未来があるなら。
マキ・・・瞬時に選べばいい、正解の場面を・・てか正解の場面

だけ選択出来るとか。
恭子・・・らしくないよ～、マキはともかく・・シズカ～、帰ってこーい。
和尚・・・どうして瞬間瞬間なんじゃ、巻き戻してるってのはどうじゃろう。
マキ・・・カセットテープみたいに・・今話題のＴＶ録画するビデオみたいに。
シズカ・・めくり終わった時から、巻き戻す・・そして再生を見ながら真似るって感じ。
恭子・・・ねぇ・・未来ってあるの？１秒後や１０年後って・・今存在するの？
シズカ・・絶対に存在しないと思う、時は戻せないんだから・・その先も存在しない。
マキ・・・時じゃないなら・・それを望んだら、事実だけ存在するとか。
恭子・・・望んだら・・事実だけ存在する？・・それが見える人には、事実が見えるの。
マキ・・・ノストラダムスは小説家だとしても、自分が望んだら、その先に事実は発生するとか。
シズカ・・ようするにシナリオの下書きをして、時が後から色付けするみたいな。
恭子・・・その事実が見える・・マリは、実は全てのカードを見ながら、ゆっくり集めた。
マキ・・・カードをめくる事を望んだ時点でね、もう一つの事実の世界ではね。
シズカ・・そして現実にはそのゆっくりとめくった正解を、繋げて編集した。
恭子・・・それを再生して、その動きの通りに動いた。
マキ・・・そうして今の現実を作った、ゆっくりめくった事実は永遠に消去された。

和尚・・・面白くなってきたの～、小僧の話が楽しみじゃな～。
和尚の言葉で私達は、少し現実に戻って、笑顔でおやつを食べました。
でも3人とも執着しましたね、マリの正体が知りたくて。
そして小僧が始める、マリの覚醒・・それは、小説なんかより不思議な世界でした。
小僧とマリと美由紀が見せる、そのマリという圧倒的な才能。
選ばれし者、マリ・・そう、原作者が選んだ特別な者でした。
ここまでで、第一話にします」

マキは少し得意顔の二ヤで話を締めた、女性達の期待の眼差しが強かった。
「凄いね～マキ・・その話術、素晴らしいよ・・入り込んだよ」と北斗が微笑んだ。
「それにテーマが面白すぎて・・明日が待ち遠しいね」と蘭が満開で微笑んだ。
「しかし限界トリオ、面白いですね～・・この時小6なんでしょ」とユリカが微笑んだ。
「はい、小6でした・・シズカに感化させられてましたね～」とマキが微笑んだ。
「いいえ、一人一人の個性が出ていて、面白いですよ」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
マキは嬉しそうに微笑んでいた、私はマリを思い出し気分が高揚していた。

晩夏の夕暮れ、女性達は、女優の時間が迫った事を意識していた。
外気はまが夏の主張に溢れていた、南国の長い夏が居座っていた。
入道雲を呼び寄せて、青空に浮かばせていた・・。

マリ・・やはり忘れられぬ少女。

私はマリだけは登場を本気で躊躇した、何度もやめとこうと思っていた。

この夏物語が、ノンフェクションを機軸とする物語だから。

ユリカの存在だけでも不思議であろうし、それに沙紀まで登場させた。

そして気付いたのだ、沙紀を登場させたのなら、必然的にマリが登場すると。

沙紀の描く対象の、本質や憧れや理想の姿、そして後悔まで読み取る力。

その力を感じるときに、一つの実例として登場する・・マリ。

私はマキの言葉で伝えよう、それがそのマリの本質を語っているから。

限界トリオが、１２歳の少女らしい気持ちで取り組んだ、その心で感じた事が大切だと思う。

１２歳の少女の、揺れる微妙な感性で感じた事だから。

それを感じて、美由紀の凄さを再確認した・・あの全裸の行為の勇気を。

身を委ねて見せた、圧倒的に深く強い愛情だった・・その行動が語っている。

信じてるよ・・そう強く叫んでいた・・全裸で微笑んだ、美由紀が。

その自然な笑顔が、私に教えてくれた・・人を愛する事の楽しみを。

全裸の愛

不思議な空間が出来ていた、各々が自分の考えを笑顔で話していた。
結末を知る私とマキは、質問に対して笑顔でとぼけていた。
マキの横にエミが笑顔で座った、マキも嬉しそうに微笑んだ。

「マキちゃん、最初の方聞けなかったの・・教えて？」とエミが笑顔で言った。
「エースがね3年生の今頃、9月になったばかりの頃・・・」マキが嬉しそうにエミに話していた。

「望めばその先に、事実が存在する・・本当に面白い考え方ですね、驚きました」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「確かに・・でも聞いて考えると、なんとなく分かりますね・・ユリカ姉さんなら、理解出来るんじゃないですか？」と蘭が満開で微笑んだ。
全員がユリカを見た、私も興味津々でユリカの言葉を待った。

「そうですね～・・感覚的には、凄く分かる部分があります。
例えば、未来って存在するのかと聞かれれば、存在しないでしょうね。
でもエースがよく言う、未来図は存在するんじゃないでしょうか。
各自が描いた未来図は・・それが真剣に考え、決意して必死で目指す物なら。
存在すると感じます、もちろん私はそれを読めないけど。
読める感性があっても、おかしくないと思えますね。
マリちゃん話のこれからの展開、本当に楽しみですね。
私は強く感じました、マリちゃんはエースに大きな影響を与えてますね。

エースが原作者に辿り着いたのも、先を読んでいく行動も。
多分、マリちゃんから吸収した部分が多いんでしょうね。
そして限界トリオの１２歳の解釈、その少女らしい探究心。
小僧とはアプローチの仕方は全く違うけど、面白い見解ですよね。
私は凄く楽しい気分になりました、そして分かったんです。
限界トリオに出会った時、どうしてあんなに楽しい気分になれたのか。
それはやはり・・特別視されなかったから、３人とも私の個性を感じてるのに。
自然に接してくれた・・それはそうですよね。
彼女達の周りを考えれば、和尚様と豊と小僧だけでも凄い事なのに。
ヨーコや美由紀や、小児病棟の子供達に、施設の子供達。
そのありとあらゆる個性と触れ合ってきた、それも心で触れ合った。
だから私に対して、ストレートに入ってきました。
私は本当に嬉しかった、そして少女の気持ちも蘇った、後悔する季節が。
私のマリに対する感想は、今は言わないでおきます。
私も展開を楽しみたいから、１２歳の少女の気持ちで聞きたい。
そうすれば・・分かってくるんじゃないでしょうか。
今はただ・・凄いという感想しか出ない、美由紀の愛情表現の本質が。
私はずっと考えています、美由紀本人は絶対に、その部分の本音を言わないでしょう。
でもどうしても何か深い意味があると感じます、私は今・・マチルダに会いたい。
そして美由紀の話を、夜通しでもしてみたい・・マチルダの感想が聞きたいですね。
マチルダとリンダの見解が・・１２歳の全裸の愛をどう表現する

のか。
美由紀が沙紀と由美子に会う、その日が近づいている。
私はそれだけでワクワクしてしまう、その心を楽しんでしまう。
美由紀は自閉症に対して、自分は優しい人間じゃないと言った。
本当に素敵な言葉でした、美由紀の考える優しさって、どんなに大きく深いのかと思いました。
そして小僧に問いかけられるのは、世界中で由美子だけだと言った、美由紀の言葉。
その真意は、圧倒的に重く深かったですね。
私達は幸せです・・マキが無変換で、その時の心を話してくれる。
だから戻れる・・その時の自分に。
そして美由紀が、その深く秘めた表現で、伝えてくれますね。
少女の心を・・だからリアルに考える事ができる。
その頃に帰れる・・どこかで後悔し、未熟だったと反省する季節に。
振り返り、そして前を向ける・・そして前進する為の、行進曲を久美子が奏でてくれる。
素晴らしい時を過ごせる・・それが本当に・・幸せですね」

ユリカは静寂を連れて、静かに言った、私は感じていた。
マチルダに再開したら、真っ先に美由紀に会わせようと思っていた。
「さすがユリカ、確かに私でも１２歳の気持ちに帰れたよ・・嬉しかった～」と北斗が笑顔で言った。
「１２歳・・そんなに重要な時期なんだ～」とエミが笑顔で言った。

「そうですね、エミになら話して良いでしょう。
エミ、１２歳・・女性にとって大切な節目ですよ。
もちろん小学校から中学校に、上がる事も大きいです。
でも女子にはもっと大きな変化があります、その頃に生理が始まるんです。

カスミちゃんの言う、第二段階に移行していきます。
不思議な感覚なんですよ、変化の大きい人は、食べ物の好みまで変わります。
女子は突き付けられます、体が成熟していると、感じさせられる。
胸が膨らんできて、お尻にもお肉が付いて・・全体的な曲線が出てきます。
そして異性を意識してしまう、汚く感じたり・・匂いに敏感になったり。
父親に対して嫌悪感を感じたり、それは仕方がない事なんですよ。
成長の過程で、進み過ぎないように・・ブレーキがかかるんでしょうね。
個人差はあるけど、2～3年で抜けますからね。
そんな時期なんですよ・・だからこそ、12歳の美由紀の行動は凄いんです。
その時期だからこそ、相手にも響くんですね・・心を空にした行為だから。
相手と正面から向き合った行為だから、全てを委ねる行為だから。
どんなに言葉で強く言うより、響きますよね。
好きだよ、信じてるよ・・その2つの言葉は分かりますよね。
でも私も、ユリカと同じで・・もっと深い何かがあると感じています。
エミが12歳になったときに、美由紀の言葉を・・その心で感じてね。
そしてエミの言葉で教えてね、正直な言葉で。
今から楽しみにしてるから、ここにいる全員が」

ユリさんがエミを見ながら、強く優しく言った。
「はい・・その時に感じてみます」とエミが少女の可愛い笑顔で答えた。
「それも5年後ですね・・あの5年後の再宴が楽しみですね」とカ

スミが輝く笑顔で言った。
「あっ！それで思い出しました・・エース、北斗復活、キング様には報告しないと怒られますよ」とユリさんが薔薇二ヤで言った。
『えっ！それは大変だ・・事務所に行ってみよう』と二ヤで返した。
「キング様？・・誰かな～、私を知ってるんだから・・年寄りだね」と北斗が笑った、女性達が二ヤで見ていた。

女性達が食事の支度を始め、私は蘭にキングと魅宴のナギサを見てくると囁いて。
ユリカとＴＶルームを出た、ユリカにキングの事務所の場所を聞いて。
県庁の方に歩いていた、１８時少し前で、仕事帰りのサラリーマンが多かった。

橘通りの信号待ちをしてると、向かいの信号待ちの人混みに、キングの顔があった。
私は渡らずに、キングが来るのを待っていた。

「おっ！・・小僧、こんな所で客引きか～」とキングが微笑んだ。
『うん・・キング限定で、俺が派遣社員１号の登録女性を、ＰＧに入れたから・・キングに評価してほしくて』と二ヤで言った。
「その二ヤは、相当に自信があるな・・じゃあ７時４５分に予約入れてくれ、久美子の最後の曲が聞きたい」と笑顔で返された。
『それにも、面白い新情報が・・久美子、Ｊ・塚本のオヤジ・ジャズバンドに入ったから』とニヤニヤで言った。
「なんだって～・・リッチのステージに立つのか、でもあのバンドじゃ久美子がもったいないよ」と楽しそうに笑った。

『久美子がお守り見せたら、オヤジ達・・キングがライブを見に来て、駄目出しするって震えてたよ』と笑顔で言った。

「もちろん行って、駄目だしするぞ・・可愛い久美子の為だからな」と笑ったキングに手を振って別れた。
私は公衆電話でＰＧに電話して、ユリさんにキングの予約を伝えた。
そして魅宴の裏階段から、魅宴に入った・・フロアーにリョウとミサキがもう出ていた。
私服のヨーコと３人で談笑していた、私を見つけてリョウが手招きした。

『フロアー出るの早いね・・さすが一流だね』と二ヤで言った。
「なんか・・控え室、ナギサ姉さん入ってて・・緊張感があったよ」とリョウが微笑んだ。
「ミコト姉さんが、嬉しそうだったよ」とミサキが微笑んだ。
『ミコトは嬉しいさ・・可愛い妹が帰って来たんだから』と笑顔で返した、強い波動が同意を示した。
「明日から、午後にサインの講習に行くね・・ケイコ姉さんも来るらしいよ」とヨーコが微笑んだ。
『了解・・俺がいなくて寂しいだろうけど、泣くなよ・・ヨーコ』と二ヤで返した。
「はい・・エース」とヨーコが清楚二ヤを出した。
その時に女性達が入場してきて、私はフロアー裏に戻った。

１５名ほど女性が揃い、最後にミコトが入った。
私はミコトの美しさに見惚れていた、薄いブルーのドレスを纏い輝いていた。
そして静寂が訪れた、ナギサが入場した、純白のドレスを着て華やかさがＭＡＸだった。
歩く時に残像のように輝きを引き連れ、微笑みに溢れる華やかさに目を奪われた。
《魅宴のナギサ・・まさに伝説以上だよ、ユリカ》と心に囁いた。
「そうだね～・・私も嬉しいよ」と後ろからユリカの声がした。

ユリカが私の横に立った時、大ママがフロアーに入ってきた。
「今夜・・いよいよ、ナギサが復活してくれる。
伝説でしか知らない者が多いと思う、私は今ここではっきりと言おう。
夜の女の素質だけで考えたら、ナギサはミコトや・・あのユリカに匹敵する。
最高の副職と呼ばれる、蘭の唯一のライバルであり親友のナギサ。
そしてあのユリが5年後、ＰＧを任せたいと言った・・そのナギサという存在。
感じてみて欲しい・・絶対に大切な何かを感じる事が出来ると思うから」

大ママの愛情に溢れる言葉が響いていた、ナギサは目を潤ませて聞いていた。
大ママがナギサに挨拶を促した、ナギサは華やかに微笑んで頭を下げた。

「ナギサです・・本当に喜びを感じながら、この場所に戻ってきました。
私が夜の仕事をした原点である、この大切な場所。
ユリカ姉さんとミコト姉さんを追いかけた、楽しい日々。
その感謝の証として、今夜お見せします・・この夜の世界で唯一。
魅宴とＰＧを経験した誇りにかけて、今の私の考える仕事を。
大ママ、ミコト姉さん・・そして皆さん、見ていて下さいね。
この復活が私の感謝の証です、魅宴とＰＧと水商売に対しての。
よろしくお願いします」

ナギサは華やかに微笑んで、深々と頭を下げた、女性達も笑顔で返

礼した。
「ナギサ、完全に覚醒してるね・・起爆剤は？」とユリカが爽やかに微笑んだ。
『沙紀のメモの絵画と、北斗だよ・・北斗とナギサ・・同じ匂いがするよ』と囁いて返した。
「確かにそうかも・・ナギサ、嬉しかったんだね、初めて自分と同じ匂いの女を感じて」とユリカがナギサを見ながら言った。
『それも年上の、圧倒的存在だから・・憧れたんだよ、多分産まれて初めて本気で憧れた』と私もナギサを見ながら笑顔で言った。

「明日はあのＭＡＸ炎のリアンでしょ・・魅宴の２面性のお手伝いも、大変ね」とユリカが二ヤできた。
『お手伝いなんてしてないよ・・自分が楽しみたいだけです』と二ヤで返した。
「そうなの～・・来週の水曜日、魅宴でよろしく」とユリカが爽やか笑顔で言った。
『了解・・楽しみだ～』と二ヤで返した。
「ユリカ姉さん・・嬉しいです」とミコトが微笑んだ。
「手ぐすね引いて待ってるくせに・・今では自分の方が上だって」とユリカが二ヤで返した。
「滅相も無い・・そんな事、寝てる時の夢でしか見たことないですよ」とミコトが余裕で微笑んだ。

『ミコト・・依頼があるんだけど』と二ヤで言った。
「楽しそうだね～・・どっからかな？」とミコトが微笑んだ。

『ミチルをクラブ３店に光臨してもらう、。
その時に、ＰＧの時はミコトにミチルの代打を頼みたい。
接客だけでない、女性たちを牽引する者として。
店をまとめて、流れを作るママとして、それが出来るのは３人し

かいない。
魅宴の時は蘭が入る、ゴールドの時はナギサに入ってもらうよ。
やってみるだろ、ミコト・・難しい事だから。
女帝ミチルの代打・・それを任せられるのは、ミコトと蘭とナギサしかいないからね』

美しい真顔のミコトに、笑顔で言った。
「OKエース・・嬉しいよ、最高だよ・・必ず結果を出すからね」と余裕で微笑んだ。
「それも楽しみだね、うちの水曜のフォローは？」とユリカが微笑んだ。
『カスミとマキにしよう・・情熱姉妹でどうかな』と二ヤで言った。
「それは私が見たいよ・・楽しみだね～」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「て事は・まさかリョウとヨーコのコンビも考えてるの」とミコトが二ヤで言った。
『もちろん・・楽しそうでしょ～』とニヤニヤで返した。
「面白すぎだよ・・大ママ絶対にここにはいないね」とミコトが笑った。

『ミチルの店の時は、ミコトにカスミ、ナギサにリョウでやろう』と笑顔で言った。
「そのブッキング、今から楽しみだね～」と大ママが微笑んだ。
「蘭には、誰を付けるの？」とユリカが微笑んだ。
『それは・・セリカで行く、セリカが本気なら・・蘭に挑戦させる』と二ヤで返した。
「構想、そこまで出来てるのかい・・楽しみだね～」と大ママが微笑んだ。
『大ママ・・来週、月曜北斗で水曜ユリカ復活でよろしく』と二ヤで言った。

「凄い名前がどんどん出てくるね～・・涙が出そうだよ」と大ママが微笑んだ。
私は嬉しそうな大ママにユリカと挨拶をして、ナギサにサインを送り。
ユリカと2人で魅宴を出た、ユリカはご機嫌だった。

『ご機嫌ですね～・・姫』と腕を組むユリカに笑顔で言った。
「楽しいね～・・マリ話、凄く興味あるよ」と爽やか笑顔で言った。
『少し意外かな～・・ユリカは納得するかと思ってたから』と笑顔で返した。
「限界トリオの考え方で、色々気付いて・・楽しくなってきたよ」と微笑んだ、ユリカに手を振って別れた。
私は急ぎ足で、ＰＧを目指していた、北斗とキングの再会シーンが見たかったのだ。

ＰＧの裏ドアから入った時に、通路の時計が１９時４０分を示していた。
私が指定席に向かおうとすると、ユリさんに呼び止められた。
「梶谷さんを、開店まで頼みますね」と薔薇で微笑んだ。

『ユリさん・・キングに、この前マキの話を聞かれて。
今度紹介すると約束しました、キングは母親の真希さんを知ってるようで。
開店前・・マキに任せてみて良いですか？』

私は真剣に笑顔のユリさんに言った、ユリさんは薔薇の微笑みになった。
「もちろん、良いですよ・・梶谷さん、最高の夜になりそうですね」と薔薇で微笑んだ、私も笑顔で頷いて走った。
私がマキの後ろに付いたときに、キングが受付に現れた。

私はカズ君に案内を頼み、マキを見た。

『マキ・・３番に行くぞ、現役の夜の帝王・梶谷さんだよ。
ＰＧで最も大切なお客だから・・マキの母親を知っててね。
マキを紹介してくれと頼まれた、ユリさんの許可は貰った。
１５分・・開店するまで、マキに任せる。
やるだろう・・マキ』

早口で言って、最後に二ヤをした。
「もちろん・・やっと私にもステップアップの提示してくれるんだね」と笑顔で言って立ち上がった。
私はマキを連れて、３番に歩いた、久美子と女性達が驚いて見ていた。

『キング・・開店まで研修生をお願いします。
今、久美子と同じ１６歳です、その名前は母親が源氏名で使っていたものです。
その誇らしい源氏名を娘に託しました、そしてその娘も１６歳でこの世界に挑みます。
本名のまま・・誇り高き母親の源氏名を背負います。
その覚悟を感じて下さい・・よろしくお願いします』

驚いて聞いているキングに、真顔で真剣に言って頭を下げた。
マキが美しい姿勢で、私の横に立ってキングに微笑んだ。
「マキと申します・・よろしくお願い致します」と深々と頭を下げた。
「マキ・・真希の娘さん・・顔を見せて」とキングが立ち上がってマキを見た、優しい瞳だった。
マキは嬉しそうに微笑んで、キングを見た。

「うんうん・・確かに真希の娘だね、内側から出てる物が同じだよ」と笑顔で言って、マキを席に招いた。
久美子はそれを見て感じたのだろう、この時間には珍しい旅情的な曲を弾いていた。
私は3番の2mほど後ろに立っていた、女性達の緊張感を感じた。
シオンが真剣な顔で見ていた、シオンも女性達も頑張れと応援していた。

「私・・本当に嬉しいんです、お客様として母を知る人に初めて会えました」とマキはキングに微笑んだ。

「マキ・・俺は君のお母さんに、助けられたんだよ。
本当に優しい人だった、そして心の言葉で話す人だった。
男は皆憧れたよ・・真希という優しく美しい大きな星に。
そしてその娘さんに、今巡り会えて・・本当に嬉しいよ」

キングは優しくマキに囁いた、マキは嬉しそうな笑顔で聞いていた。

「母が幼い私に寝物語で話してくれました、夜の仕事の話を。
とても楽しそうで、その時だけは、母がキラキラと輝いて。
私も大好きな時間でした、その沢山の話の中で、はっきり覚えてる物があります。
それはある男性の話でした、その青年は弁護士を目指す苦学生で。
必死にアルバイトをしながら、司法試験の勉強をしていたそうです。
でも辛い状況が続いて、その青年はお酒に溺れたそうです。
母はその青年が好きでした、恋愛感情だったのかは分かりませんが。
大好きだったと言っていました、だから母はその青年に復活して欲しかった。

その青年は乗り越えたんです、その状況を自ら切り開いた。
本当に素敵な人間なんだと、母は嬉しそうに言っていました。
あの青年こそ弁護士に成るべき人間だと、人の痛みを感じれる人だから。
マキ・・人の痛みの感じれる人間になってね、それは簡単な事じゃない。
転んだ時の痛みを、絶対に忘れないで・・あの青年のように。
マキ・・男性を好きになるなら、人の痛みを分かる人を選んでね。
それ以外は何でも良いから、生活能力が無いなら、あなたが食べさせれば良いのよ。
あの青年のような男を捜してね、本当の優しさに辿り着ける男を。
母が強く言ってくれました、幼い私に・・私は覚えています。
その男性の名前を・・その人は必ず辿り着くと、母が言ったから。
その母の笑顔が嬉しそうで、キラキラと輝いていたから。
その男性は絶対に素敵な人だと思っていました・・ありがとうございます。
私の大切な思い出を、そして私の想像を超えた姿を見せてくれて。
その優しい青年・・苦労して司法試験に合格した、強い意志を持つ男。
その梶谷という人に、会いたかった・・だから探そうと思ってました。
どんなに時間がかかっても、どうしても会いたかった。
私と母を繋いでくれる・・素敵な男性だから・・本当にありがとうございます。
梶谷さん・・母はずっとあなたを愛していました」

マキが一気にその思いを言葉にした、キングは俯いて号泣していた。
久美子が暖かい曲で、キングとマキを包んでいた、強烈な波動が何度も来ていた。
マキはキングの手を両手で握り、寄り添っていた、父に甘える娘の

ように。
女性達には、もちろんマキの話は聞こえていない、しかし感じていた。
マキの表情とキングの涙で、マキを意識していた、その圧倒的な言葉の力を。

「ありがとう・・本当に嬉しかったよ、マキ・・その言葉、母を超えてるよ」とキングが笑顔でそういった。
「頑張ります・・梶谷さんに指名を頂けるように」とマキも少女の笑顔で返した。
「それは・・難しいぞ」とキングが嬉しそうに笑った。
「難しいから、楽しいんですよね・・努力を惜しむと、得るものもそれなりになる・・生意気な青年の口癖です」とマキが二ヤで言った。
「小僧・・ヘルプ・・マキ、怖いぞ」とキングが私に二ヤで言った。
「梶谷さん・・それは通用しません、小僧は私の弟ですから・・ちなみに、今の父は勝也、母は律子です」とマキが二ヤ二ヤで追い詰めた。
「やばい・・絶対に逆らえない名前が出た」とキングが楽しそうに言った。

その時に久美子が静かに演奏を終えた、私は久美子の凄さを感じていた。
その状況を読む感覚を、久美子は嬉しそうにキングとマキを見ていた。

「やばいのは・・誰でしょう?」とマキが笑顔で聞いた。
「小僧にも言ってないが・・律子という名前には、絶対に頭が上がらない」とキングが笑顔で言った。

その時銀の扉から、北斗が現れた、マキは横目で確認した。
「やはりそうですか～・・でももう一人いますよね、愛し続けた人が」とマキが微笑んで視線をフロアーに振った。
キングもそれでフロアーを見た、そして北斗を確認した。

北斗は視線に気付きキングを見た、その表情が喜びに変化していった。
「梶谷と言う青年が、妹のように愛した人がいたと聞きました・・その名は、復活の星・・北斗さんですね」とマキがキングに囁いた。
強烈な波動が何度も来て、ユリカの感動を感じていた。
私はマキの作り出す世界を驚きながら見ていた、どこまでも伝えたい想いに溢れていた。

「そう、勝也兄貴を見て・・俺も欲しかった・・妹のような存在が」とキングがマキに微笑んだ。
「えっ！・・勝也父さんにも、妹のような存在がいたんですか？」とマキが驚いて聞いた。
「マキ・・今日のお礼に教えよう、勝也と律子が妹のように愛した女性・・その名は真希だよ」とキングが優しく微笑んだ。
「ありがとう・・梶谷さん・・ありがとう父さん・・ありがとう母さん」そう言って、マキは両手の拳を強く握った。

「マキ・・俺が許す・・泣いていいぞ」とキングが言って、優しくマキを抱きしめた。
マキはキングに抱かれて、父に抱かれる娘のように泣いていた。
北斗はずっと嬉しそうにキングを見ていた、キングもマキを抱いて北斗を見ていた。
その時ユリさんが現れた、マキはそれを感じたのか、顔を上げてキングに微笑んだ。

「私は今まで黙っていました、マキの母親の事を・・北斗姉さんに。
それは私や大ママよりも、梶谷さんに伝えて欲しかった。
それはこの出会いには、全てエースが関わっていたからです。
エースとマキに、その事実を話すのは、梶谷さんであるべきだと感じたからです。
エースの父、勝也さんと・・母、律子さんは・・マキの母親、真希さんを。
妹のように愛していたそうです・・私はマダムに聞きました。
それは無償の愛だったと、今のエースがユリカを愛するのと同じだったと。
私はその話に本当に感動しました、その無償の愛を貫いた話に。
この夜の世界にも、そんな愛が存在した事に・・存在し続ける事に。
北斗姉さん・・マキは母親の源氏名を、本名として受け継ぎました。
マキの母親・・その源氏名・・真実の希望・・真希さんです。
その関係を見て感じて、梶谷さんは夜街で妹を育てました。
梶谷さんが無償の愛で愛した女性・・その名は北斗ですよね。
皆さんも感じて下さい、とかく騙し合いだとか、嘘の世界だとか。
そう言われる夜の世界にも、強く優しい愛も存在する事を。
そして私は今・・ある想いの意味を感じて、幸せの中にいます。
１２歳の全裸の愛の深い意味を感じて・・もしそうであるのなら。
私は１３歳の少女に、今夜完敗しました・・カスミと同じ気持ちです。
嬉しい敗北です・・だから前に進める・・そう思っています。
皆さんも感じて下さい・・自分の愛とはどんな形かを、探して下さい。
そしていつの日か、誰かを心から愛して下さい・・全てを賭けて。
全てを委ねて・・全てを信じる事ができる相手を。
私は楽しみに待ってます・・その時の輝く笑顔を」

ユリさんは優しく言った、北斗の喜びが溢れていた。
私は感動して聞きながら、蘭の満開を見ていた、強烈な波動に包まれながら。

私はこの時に、マキの母親と父と母の関係を知った。

勝也という男の生き方を感じて、嬉しかった。

母の生き方は常日頃感じていた、しかし父の生き方に目を向けていなかった。

私はこの時に感じていた、蘭の父親に言った、後悔の話。

やはり自分の言葉じゃ無かったと、強く感じていた。

勝也の真希への愛が、私がユリカを愛するのと同じだと聞いて。

私は考えていた・・俺は貫けるだろうかと・・ユリカに囁いてみた。

強く暖かい波動で感じていた、貫いて見せろと強く言われた。

私のユリカに対する愛・・それは無償の愛ではなかった。

どこかで何かを我慢していた、求めることを恐れていた。

5年で別れが訪れたから、その後の関係は分からないが・・無償では無かった。

私が今、無償の愛だと言えるのは、実の2人の娘に対してだけであ

る。

４人娘に対しても、ユリカに対しても・・私の心は、無償の愛ではなかった。

だが１つだけ言える・・私はユリカを愛していた、そして何も求めた事は無かった。

それが私の愛の形だと思っている、２人の娘にも全てを正直に話している。

今１７歳になった下の娘が、この夏物語を読んで・・その愛を理解してくれた。

私はそれだけで良いと思っている、２人の娘に理解してもらえるだけで。

ユリカに対して、答えを探していたのではない・・自分の形を探していたのだから・・。

月光の誓い

情熱の場所に、暖かく爽やかな風が吹き抜けた。
女神達は集中の中に入った、遥か高みに咲く薔薇に包まれながら。
私は最上部からそれを見ていた、熱が目で見えるようだった。

「久美子・・素晴らしかったです、その状況を読む感性。
マキを想い奏でた心、どんなに強く激しい曲よりも響きました。
土曜日が楽しみです、あなたが何を語りかけるのか。
そしてマキ・・私もリアンとユリカと同じ言葉を贈ります。
あなたのその視野、そして全てを伝えたいという心。
無変換の言葉・・そして何より、自分から絶対に逃げない生き方。
私も今までで一番期待する少女です、梶谷さんの涙でそう確信しました。
私達もその経験と感性を見せましょう、１６歳の大切な2人の妹に。
今夜も開演しましょう」

ユリさんの流れる美しい言葉に、「はい」のブザーで応えた。
3番に北斗とユリさんが上がってきた、マキは立ち上がり北斗を見ていた。
北斗はキングに微笑んで、美しい姿勢で頭を下げた。
マキがキングに挨拶をして、戻ろうとした時、北斗がマキを抱きしめた。
マキも北斗を優しく抱いていた、目を閉じて母を感じようとしていた。
キングもユリさんも優しい瞳で見ていた、北斗が体を離し微笑んだ。
マキも微笑んで、北斗をキングの隣に促した。

ユリさんとマキはキングに一礼して、笑顔で3番を後にした。
私は楽しそうに話す、2人の後ろを歩き指定席に戻った。
女性達の熱が、開店前に上がっていた、マキを感じて燃え始めていた。
マキはニコちゃんシオンに迎えられ、笑顔で指定席に着いた。
その時に開店した、順調な客足に熱が上がり続けていた。

私は30分ほど状況を見て、フロアーの動きが安定してきたので。
満開蘭に【勉強】サインをウルで送って、女性達のニヤに見送られてTVルームに戻った。
TVルームでは、久美子とエミが勉強をしていて、その隣でミサとレイカが平仮名を書いていた。
私はレイカの隣に数学の教科書を持って座った、マダムと松さんは静かにTVドラマを見ていた。
マリアは両足を広げる、蛙のような寝姿を披露していた。

『おっ！ミサもレイカも上手だね～』と笑顔で言った。
「エース、その部分でゴマをすらないでね」とエミが二ヤで言った。
『は～い、エミ先生』とウルで返した。
「エース・・【む】っていう字が難しいの」とレイカが可愛く微笑んだ。
「うん、上手く書けない」とミサも笑顔で私を見た、私は2人のノートを見た。
5歳の字とは思えぬ、綺麗な文字が並んでいた。

『【む】、か～・・難しいよね、むのお母さんは丸なんだよ。
一度丸を書いて、その丸の中に書いて練習すると綺麗に書けるようになるよ。
【の】とか【ぬ】とかも丸の仲間だね、仲間で分けるんだよ。
【あ】も【お】も仲間かな～、仲良しグループを作ってみるんだ。

漢字になったら仲良しグループ分けが、役に立つからね。
2人とも上手だよ・・でももっと上手くなりたいって思うのは大切だね。
字でもピアノでも・・何にでも、もっと上手くなりたい。
知らないから、知りたい・・とても大切な事だよ。
エミ姉ちゃんを追いかけなくていいんだよ、自分の知りたいを探すんだ。
ミサが言ったよね、ユリちゃんになりたいって。
その気持ちを忘れないで、どんなお仕事をしたいかなんて、今の俺でも分からない。
ゆっくり考えればいいんだよ、それが決まるまでは・・ユリちゃんになりたいって。
そう思っていてね、そうすれば成りたいものが見つかった時。
それを目指すことが出来るから・・今は頑張らなくていいんだよ。
お勉強は大切だけど、人と競う事じゃないよ・・エミは人と競ってないでしょ。
字を覚える時も・・楽しいやりかたを考えてね。
俺はミサとレイカが可愛い大人になった姿が、今からとっても楽しみです』

可愛い2人を見ながら、笑顔で伝えた。
「その時は、抱っこと添い寝してね」とミサが笑った。
「私も～・・お風呂も～」とレイカが笑った。
「エミちゃんは？・・言っておかなくていいの？」と久美子がエミに微笑んだ。
「私・・考えてたの、私ね・・今で・・7歳で、エースとお風呂は恥ずかしい」とエミが照れて笑った。
「それは成長早すぎです・・成長は、お勉強の部分だけにしなさい」と久美子が笑顔で言った。
「は～い・・久美子先生」とエミが笑った。

ミサとレイカがケラケラと笑い、マダムと松さんも笑顔でエミを見ていた。

３０分程して、ミサとレイカが歯を磨き、お休みをした。
私は２人を交互に抱き上げて、温度と鼓動のチェックをしてベッドに寝かせた。
「エース・・ミサとレイカに、由美子ちゃんを会わせるの？」とエミが言った。
『うん・・来週かな・・もちろんエミも会ってね』と笑顔で言った。

「うん・・嬉しい・・私のステップアップの提示ね。
私はマキちゃんに聞いたの、恭子ちゃんに負けた話。
自分はどうかって思ってるの、そして考える事はやめたよ。
ミサやレイカは、絶対に自然に友達になるよ。
ミホちゃんとも、由美子ちゃんとも、沙紀ちゃんとも。
私は心で負けたくない、だって・・お医者さんを目指すって言ってるんだから。
私は私らしく、会ってみる・・とっても楽しみなんだよ」

静寂が訪れていた、エミの言葉が響いていた、強烈な波動が感動を伝えていた。

『よし・・エミ、俺の本音を言うよ、そしてエミに挑戦権を与える。
俺は沙紀に対しては、ステップアップを要求する。
週末、久美子があの魂の音色で、沙紀の心に直接何かを伝える。
そして美由紀がステップアップを要求する、それは文字を覚えるという事なんだ。
沙紀にとっては平仮名でも、難しい事なんだよ、その勉強道具を千秋と美冬が渡す。
近い将来教師になる２人が手渡す、そして教える・・でもそれだ

けじゃ無理なんだ。
沙紀が必死になっても、多分覚えるのは難しい・・俺の知る限りそれが出来るのは。
沙紀の心に直接、文字を覚える事の意味をを伝えられるのは・・エミだけだと思ってる。
沙紀に対しては、俺はエミに一番期待している。
エミは自分らしく沙紀と触れ合って、そしてエミの心を正直に話して。
それだけで沙紀は感じる、２歳年下の素晴らしい少女を。
そうなれば・・沙紀は必ず取り組む、その文字という難解な問題に』

この言葉からだった、私がエミを子供として接しなくなったのは。
エミの瞳は強く輝いていた、私はそれだけで嬉しかった。
「エース・・ありがとう、私には今まで生きてきて・・一番嬉しい言葉だった」とエミが微笑んだ。
『期待してるよ、エミ・・俺の大切な、愛する・・エミ』と笑顔で言って、両手を広げた。
エミは私に抱きついた、私はそのまま抱き上げて、ＴＶルームを出た。
マダムと松さんと久美子の微笑が優しかった、ユリカの波動が優しく何度も来ていた。

裏階段を上りながら、エミを見た・・瞳を閉じて静かだった。
私は最上階まで上り、ユリカの店の明かりを見ていた。
平穏で少し熱いエミの温度を感じていた、私は原作者に語りかけた。

《原作者、聞いてるかな・・最近忙しそうだね。
あんたが俺に提示した難問・・ミホの突破口が見えたよ。
あんたは意外と優しい奴だね、俺にこんなに武器を持たせてくれ

て。
でもね、あんたは想像力の乏しい奴だよ、エミを甘く見すぎてる。
俺は今、この時から、エミを子供と思わない。
自分と同等の年齢だとして接する、エミは絶対に答えを出し続ける。
あんたや俺じゃ想像も出来ない答えを、あんたを凌駕した、あのマリのように。
あんたの浅知恵を看破した、マリの恐怖を忘れたんだね。
次はエミを送り出す、あんたのあの恐怖の表情がまた見れるよ。
あんたの最強の武器、時を越えて見せる。
時を戻したマリ・・そして次は、時を追い抜くエミだよ。
俺はエミを最後まで見守る、エミがリンダの右腕になるまで。
大切に育てる・・託して余りある存在・・エミをね。
そして由美子には、ミサとレイカで行くよ、同じ歳のお友達として。
あんたがどんなに引き裂こうとしても、それは無理な話だよ。
だってその後ろにいるんだから、あんたが絶対に手を出せない。
天使のマリアが立っている・・永遠に羽を携えてね。
白旗を掲げろよ、原作者君・・今なら許してやる。
蘭の弟の事も、幼くして亡くなった友の事も。
そして・・ヒトミの事も・・俺はここまで来たよ。
会えるのを楽しみにしてるよ・・震えるあんたを見るのをね》

私は強烈な波動を受けながら、月に語りかけた。
その時に鮮明な映像が流れた、ニューヨークであろう高層ビル群の上を飛行して。
一軒の大きな家に入った、リビングのソファーに座る2人の後姿が見えた。
ブロンドとプラチナブロンドの後姿が、そしてリンダが振り向いた。
リンダが美しい笑顔で言った、「マチルダ・バック・ユー」と私に

分かるように英単語で微笑んだ。
そしてマチルダが振り向いて言った、「待ってろよ・・すぐに帰るから」と微笑んだ。
そこで映像が切れた、私はただ嬉しかった。

《ユリカ・・俺にもう1つ、最強の武器が手に入るよ。
今、リンダが贈ってくれた・・俺の最強の武器、マチルダが帰ってくる。
絶対に由美子の為に・・俺は嬉しいよ・・ユリカ》

そう心に呟いて、月を見ていた、月光の下に蘭の満開を感じていた。
ユリカの最強の波動が、私の後ろから月に向かって飛んだ。
私は月光に誓いをたてた、絶対に諦めないと・・その月光の先にいるであろう、蘭に向かって。
私は月に二ヤを出して、エミを優しく抱きながら、TVルームに戻った。

私は裏階段を下りながら、ハッ！としていた。

《役者が揃いだしている、やはりあれが来る・・由美子の体が強くても、来るんだな。
でも大丈夫だと思ってるよ、今は最強のメンバーがいる・・ユリカもそう思うだろ》

私は心で囁いて、ユリカの優しい同意の波動を受けながら、TVルームに入った。
私はエミをそのままベッドに寝かせて、手を握ってチェックしていた。
「お前・・サクラが泣くぞ、エミの成長で」とマダムが微笑んだ。
「ほんとだよ～・・シズカ効果だけでも凄いのに」と松さんが微笑

んだ。
「私にも、プレッシャーをかけ続けるんだね・・良いよ、絶対に伝えてみせるよ」と久美子が真顔で言った。
『久美子よろしくね・・何かが大きく動き出している。
今・・リンダからメッセージが届いた、マチルダが帰ってくる。
俺は、絶対に由美子だと感じている、今の全ての流れは由美子に向かっている。
俺は何なのか分かっている・・その対応の為には・・絶対に沙紀の覚醒が必要なんだ。
沙紀だけが伝えてくれる、由美子の居場所を。
マダム、松さん・・北斗を頼みます・・支えて下さい、あの強い心が折れないように。
俺は少し急ぎます、必ず近いうちに・・全員が1つに成る時が来る。
その先に有ると信じます、由美子の希望ある未来が。
それを感じたんです、あの最高峰の女性・・リンダが感じてる。
だから最強の武器を貸してくれた、マチルダが笑顔で帰ってくる。
何かを伝えに・・そして見せてくれる、今度こそマチルダの本質を。
俺は楽しい緊張感の中にいます、明日・・律子に会ってきます。
俺にはどうしても必要だから、だからきちんと話してくる・・俺の想いを。
美由紀を明日、ミホと沙紀と由美子に会わせます・・美由紀の全力を出し切らせる。
全ては未来の為に・・由美子の未来こそが、全員の進むべき場所の道標になる。
久美子・・今、2人で誓おう・・俺達は絶対に諦めないと』
私は正直に想いを話した、久美子は立ち上がり私を抱きしめてくれ

た。
「誓うよ・・私も絶対に諦めない・・最後の挑戦者のように」と久美子が優しく囁いた。
私は強烈な波動に包まれて、久美子に抱かれていた。
「エース・・私らも誓うよ・・絶対に諦めないとな」とマダムが言った。
「諦めるもんかい・・由美子は自立するんだろ」と松さんが強く言った。

『ありがとう・・由美子に会って、ユリカの所に行ってきます』と笑顔で返してＴＶルームを出た。
ユリカの波動を道連れに、病院まで歩いた、暗い１階のロービーを抜けて階段で上がった。
小僧と記入して、静かな廊下を歩いて、ミホの病室に入った。
眠っている沙紀の手を握って、温度を確かめて、《お休み》と囁いてミホの所に行った。
ミホはベッドに座り、月を見ていた、可愛い横顔だった。
私が静かに歩み寄ると、ミホが振り向かずに、私に右手を出した。
私はミホの横に密着して座り、ミホの手を握った。

『ミホ・・俺を見ててね、俺はそれだけで勇気が出るから。
明日連れて来るよ、ミホの大好きな・・美由紀を。
ミホ・・俺は今ね、楽しいんだよ・・ミホと沙紀と由美子に会えたから。
俺のミホに対する想いを、先に由美子で見せるから。
感じていてね・・ミホ』

私は優しくそう言って、ミホの額に手を当てた。
ミホは瞳を閉じて、私に体重をかけてきた、私はミホを優しく寝かせた。

『ミホ・・お休み・・また明日』と囁いて病室を出た。
私は高揚してる気持ちを抑えずに、廊下を歩いていた。
そして静かに由美子の病室に入った、由美子は左手を上げて待っていた。

『由美子・・消灯時間過ぎてるよ・・悪い子です』と手を握り笑顔で言った。
《本当だ、小僧ちゃん・・温度の言葉、綺麗になったね》と由美子が返してきた。
『えっ！・・そうなの、嬉しいな～』と笑顔で返した。
《うん・・何か良い事を、お話に来たんでしょ》と由美子が言った。
『うん、由美子・・ママが温度の言葉、ＹＥＳとＮＯが分かるようになったからね』と優しく言った。
《小僧ちゃん、ありがとう、由美子嬉しい》と強く返ってきた。

『うん、でも強く伝えたら駄目だよ、すぐにママが慣れるから。
最初に強く伝えると、ずっとそうしないといけなくなるからね。
それは由美子の体力を無駄に奪うから、出来るよね・・由美子』

私は優しく囁いた、由美子の側にいる時の、いつもと違う強い波動が何度も来た。
《うん、出来るよ、今まで待ってたんだから》と由美子が言った。

『うん、そうだよね・・由美子、１つだけ約束して。
どんなに小さい事でも、体調の変化を全て俺に伝えてね。
それを約束してくれるなら、明日・・素敵な人に会わせてあげるから』

私は優しく由美子に伝えた、由美子は嬉しそうだった。
《はい・・約束します、全部教えるよ》と可愛く返ってきた。

『よし、由美子・・もうお休み・・眠るまでここにいるから』と優しく言った。
《小僧ちゃん、ありがとう、おやすみ》と返してきて、由美子は静かになった。
私は由美子を見て、由美子の絵を見ていた。
そして衝撃を受ける・・沙紀の底知れぬ、強い愛を感じる。

私は絵に近づき、間近で確認した、もう一人の自分を出して、感情を切っていた。
ユリカに悟られないように、明日ユリカがこの絵を見るのに、先入観を持たないように。
ユリカの強烈な波動が何度も来て、意地悪、意地悪と言われていた。
私は由美子の額にキスをして、病室を出た、そこで感情を戻した。
《ユリカ、ごめん・・居眠りしてた～・・今から行くね》と囁いて。
ユリカの波動に説教されながら、狭い路地を歩いていた。

私は初めて感じる充実感を背負い、狭い路地を通りユリカの店を目指していた。
ユリカの店に入ると、ユリカが二ヤで待っていて、奥のＢＯＸに引っ張られた。
「マチルダが・・帰ってくるの」と爽やか笑顔で聞いた。
『うん、映像で強いメッセージを貰った・・マチルダ・バック・ユーって、リンダから』と笑顔で返した。
「リンダ、上手になったね・・エース式英会話」とユリカが楽しそうに笑った、私はウルで返した。

「私も感じてるよ・・夕方から、あのマリの話から・・何か大きな変化を」とユリカが美しい真顔で言った。
『うん・・実は俺も、昨日の蘭を見ながら・・感じてたよ』と真顔で返した。

「明日・・学校に迎えに行くよ、あんたと美由紀を」とユリカが微笑んだ。
『よろしく、11時には終わるから・・それから律子に会いに行く』と笑顔で言った。
「とうとう、登場するのね・・律子母さんの本質・・その伝達能力が」とユリカが微笑んだ。
『さすがユリカ・・感じてたね』と二ヤで返した。
「もちろん・・あなたが母さんに頼る、その重さも感じてるよ・・蘭も私も」とユリカが微笑んだ。

『その時が来たら、律子に側にいてもらう・・俺が限界が来た時の、保険でね』と真顔で返した。
「どんな事だと感じているの？」とユリカが真剣に聞いた。

『ヒトミの時も何度かあった、あの病気は成長の段階の節目で奪おうとする。
その生命の灯火を・・由美子の意思が消える、原作者が誘拐する。
その時に強く呼び戻さないといけない、その時に問われるんだ。
どこまで本気だと、どれだけ由美子を愛しているのかと。
由美子がどれだけ必要なのかと、ヒトミの時は俺も体力が無くて。
限界が来た、その時に律子が代わってくれた。
律子はその時に見せる、その本質を・・強く伝達する、自由とは何かを伝える。
俺は今までで、ただ一人・・原作者に従わなかった人間を見た。
マリだよ・・でもその強い意志を植えつけたのは、律子なんだよ。
俺は絶対に由美子を呼び戻す、原作者に挑戦する。
その悪質なシナリオに挑む・・だからユリカ・・その時は側にいて。
そして波動で力を貸して、俺にはユリカの波動と、蘭の青い炎が絶対に必要なんだ。

リンダが感じてる・・リンダは感じるんだよ、悪質なシナリオに挑み続けてるから。
だから俺の心が折れないように、最強の戦士を貸してくれた。
マチルダが側にいてくれる、俺は今・・その時を楽しみにしてるよ・・絶対に諦めない。
由美子を連れ戻す・・明るい未来に続く道まで』

私は真剣な深海の瞳に、真剣に伝えた。
「完璧だったよ、心を完全に追い越してた・・もちろんずっと側にいるよ、蘭も私もマチルダも」と爽やかに微笑んだ。

『ありがとう、ユリカ・・今夜の報告会で全員に伝える。
北斗との約束を守るよ、全てを隠さずに伝えるという約束を』

私は爽やか笑顔のユリカに見送られ、エレベーターに向かった。
「由美子の絵、本当に楽しみだよ・・意地悪されたし」と爽やか二ヤで言った。
『それはお楽しみに、明日待ってま～す』とユリカに笑顔で手を振って別れた。
そのまま魅宴を覗いて、ナギサが輝きながら華やかさを撒き散らす姿に見惚れていた。
ナギサと目が合い、二ヤでサインを送り、魅宴を出た。

夏の熱が少し冷めていて、時が確実に動いているのを感じていた。
私は高揚している気持ちを楽しみながら、指定席に戻った。
終演前の熱いフロアーを見ていた、久美子が椅子を持ってきて、私の横に座った。
その行動で女性達が感じた、何かがあると感じたようだった。

『久美子・・俺が報告会で話をする、その時にサマータイムを弾い

てよ。
リンダを側に感じさせて、それだけで・・俺は正直になれるから』
フロアーを見ながら、静かに囁いた。
『了解・・リンダのサマータイムを弾いてあげる、あなたの夏が終わらないように』と久美子もフロアーを見ながら囁いた。
その時に終演を迎えた、久美子がピアノに向かい、私は１０番の前に立った。
女性達全員が集まっていた、ユリさんも、サクラさんもアイさんも。
蘭が深い瞳で私を見て、静かに促した、久美子のサマータイムが響いてきた。

『今夜、俺はメッセージを受け取った、崇高な高みにいるリンダから。
最強の戦士、マチルダを派遣すると・・マチルダが帰ってくる。
俺はその理由を感じている、今・・大きく何かが動いている。
それは全て・・由美子に向かっている、全員で気持ちを１つにしないといけない。
由美子の病・・それは成長過程で何度も、その命の灯火を消そうとする。
由美子の心をどこかに連れて行く、そして諦めさせようとする。
全員で心を１つにして、呼び戻さないといけない時が、近づいている。
北斗と俺だけじゃ、到底届かない場所に、由美子の心が誘拐されるから。
悪質な原作者が、その隠れ家で微笑んでいる。
俺は絶対に諦めない・・必ず由美子を探し出し、連れ戻す。
その為に・・全員の力を貸して欲しい、心で由美子を呼んで欲しい。
生きる事は素敵な事だと叫んで欲しい、その心で伝えて欲しい。

由美子に生きようと・・諦めるなと、そう伝えて欲しい。
どこからでも届く・・その想いに嘘が無いのなら、絶対に届く。
サクラさんユリさん・・エミとミサとマリアを借ります。
あの子達なら、絶対に届く・・由美子の心に直接訴える。
俺は大至急、沙紀の覚醒を促します・・沙紀だけが由美子の居場所を教えてくれる。
絶対に探し出して、描いてくれる・・その囚われてる場所を。
俺は全てを賭けて挑む・・蘭の青い炎とユリカの波動も駆使して。
必ず連れ戻す・・たとえ律子を使ってでも、必ず連れ戻してみせる。
だから全員の力を貸して欲しい、由美子を呼び戻す力を。
久美子が奏でてくれている、サマータイム・・俺はリンダに誓う。
俺は絶対に諦めない・・リンダがアルバムを見せた、誇り高い人間として』

久美子の熱いサマータイムに守られながら、強く言葉にした。
「お前・・何言ってるんだ・・貸して欲しいじゃないだろ、一緒にやろうだろ」とカスミが立ち上がって強く言った。
「そうだよ・・そう言って」とハルカが立ち上がって叫んだ。
『出来るんだな・・じゃあ一緒にやろうか』と私は不敵で言った。
「それでこそ、エースですよ・・私も伝えてみせます」とユリさんが薔薇で頷いた。
「もちろん私も・・そしてエミもミサも」とサクラさんが微笑んだ。
「よし、やろう・・その時は、絶対に呼び戻そう」と美冬が叫んで、全員が立った。
北斗だけが俯いて泣いていた、ユリさんが優しく北斗を抱いていた。
『北斗・・立てよ・・そして今ここで誓って・・絶対に諦めないと』と私は強く言った。
北斗が顔を上げて私を見て、強い瞳の笑顔で立って、私に歩み寄っ

た。

「みんなありがとう・・私は今ここに誓います・・由美子に・・絶対に諦めないと」と北斗が強く言って頭を下げた。

全員が笑顔で拍手をした、拍手は暫らく鳴り止む事はなかった。

まるでカーテンコールのように、過ぎ行く夏に・・アンコールを求めるように響いていた。

映像が伝えてくれたメッセージ、そのリンダの強いブルーで感じていた。

そしてマチルダの微笑で確信した、その時が近づいている事を。

私は忘れられない、この時のカーテンコール。

全員の気持ちが1つになっていた、本当に嬉しかった。

クライマックスを前に、蛙のような姿で眠る、天使の覚醒が始まっていた。

その圧倒的な破壊力が目覚めようとしていた、原作者の想定外の破壊力が。

その時ニューヨークの空港に、緑の瞳が座っていた、ピンクのリュックを隣に置いて。

コーヒーを飲みながら聴いていた、スピーカーから流れるサマータイムを。

そしてもう一人、最後の重要人物が感じていた、俯きがちな姿勢で

夜空を見ていた。

黒目の部分が恐ろしい程大きい瞳で、少し上目使いで、月を見ていた。

マリが感じていた・・何かの始まりを、そしてその結末を探していた。

唇にだけに、微かな笑みを湛えながら・・原作者のシナリオを解析しようとしていた。

そして美由紀が月を見ていた、眠れない夜を楽しんでいた。

美由紀とマリが、同じ月を見ていた。

その月に・・由美子が浮かんでいるようだった・・。

消えない種火

情熱のフロアーに響くカーテンコールが、いつまでも響いていた。
過ぎ行く夏に、アンコールを要求するように。
私は喜びの中で、成熟した女性を抱いていた、戦う決意をした母親を。

「どの位で、その時は来そうなの？」と蘭が深い瞳で聞いた。
『一週間以内だと思う、だから明日・・美由紀を病院に連れて行く』と真顔で返した。
「私、靴屋木曜が休みだから、でもいつでも休むからね」と蘭が満開に戻り微笑んだ。
「ありがとう、蘭」と北斗が微笑んだ、蘭も満開で頷いた。
「律子姉さんの登場ですね、あなたは完璧に準備するんですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
『はい・・俺が限界が来て倒れる想定をしてます、その時は律子を出す』と真顔で返した。
「エース」と北斗が私を見た。

『大丈夫だよ、北斗・・北斗は自分と由美子の事だけを考えてね。
由美子に北斗が、温度のＹＥＳとＮＯが分かるようになったって言ったら。
由美子、凄く喜んでたよ』

私は意識して笑顔でいった、北斗も嬉しそうな笑顔で頷いた。
「私達９人衆に、注意事項は？」と千夏が微笑んだ。
『早急にもう一度瞑想に行って、自分の心の確認をしていて欲しい・・千夏は明後日、夕方病院に付き合って』と笑顔で言った。
「了解・・嬉しいよ」と千夏が微笑んだ。

「よし・・明日、カスミ以外は寺に集合しよう・・そして和尚の話を聞こう」と千秋が言った。
「了解」と全員が返した。
「カスミも行っといで、夏休み終わって暇だから大丈夫だよ」とサクラさんが微笑んだ、カスミも笑顔で頷いた。

「シオン・・明日の午後は大丈夫ですか？・・サイン講習」とユリさんが微笑んだ。
「はい、大丈夫です」とシオンがニコちゃんで返した。
「なら、レンとハルカも瞑想に参加しなさい・・シオンとマキは大丈夫でしょうから」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「ありがとうございます」とレンが笑顔で頭を下げて、ハルカも笑顔で頭を下げた。

「この位で良いんですか？・・私達の準備は」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
『ユリさん、サクラさん、アイさんと蘭とナギサには、準備は必要無いですから』と笑顔で返した。
「エース、１つだけ言わせて・・私達を誘ってくれてありがとう、本当に嬉しいよ」と千春が微笑んだ。
『俺は絶対に出来ると信じてるよ・・その時を楽しみに待ってるよ』と笑顔で返した。
「う～し・・燃えてきたよ」とカスミが笑顔で言って、女性達が控え室に戻って行った。

私はシオンと久美子とマキと、ＴＶルームに戻った。
「エース・・演奏会はいつでもいいぞ、久美子も大丈夫じゃろ」とマダムが笑顔で言った。
「もちろん、いつでもＯＫです」と久美子が微笑んだ。
『ありがとう・・明日、病院で話してみます』と笑顔で言って、サ

クラさんが来たので、エミを抱いてタクシーに送った。
TVルームに戻ると、全員が揃っていた。

『マキ・・頼みがあるんだ』と真顔で言った。
「何！・・その顔・・怖いよ」とマキが笑顔で返した。

『今日のキングと話したマキを見て、やっぱりマキだと確信した。
今からローズに行こう・・マキ、リアンの背中を押してくれ。
リアンは由美子に会いたいけど、北斗に対する想いが強いから躊躇してる。
俺は由美子に見せたいんだ、あの極炎の炎を・・強く優しい熱を。
そして愛には愛で応える女を・・マキ、お前にしか出来ない。
リアンの葛藤をぶっ壊せ、そして連れ出せ・・マキが明日、由美子の場所まで。
リアンと一緒に行ってくれ、そして由美子に伝えてくれ・・マキから。
人は熱い心が大切なんだと・・熱ければ諦めないんだと。
リアンとマキで伝えてくれ・・そして由美子に点火してくれ。
その熱で・・リアンとマキの熱で』

私はマキを見ながら静かに伝えた、マキは真剣に聞いていた。
「分かった・・やってみる、リアン姉さんに憧れる妹として・・必ず連れ出してみせる」とマキは真顔で言った。
その集中した美しい顔が嬉しかった。
「よし・・行こう、シオン行くよ・・かしゅみも行くよね～」と蘭が満開で微笑んだ。
「もちろん・・絶対に見逃せない、マキ・・楽しみにしてるよ」とカスミがマキに不敵を出した。
「カスミ姉さん・・そこは不敵じゃなくて、キラキラです～」とマキがウルで返した。

「カスミ姉さん・・指名取られて、怒ってます～」とシオンがニコちゃんで言った。

「あ～・・シオンが私にとどめを刺しました～」とカスミがウルをして、蘭に抱きついた。
「ヨチヨチ・・かしゅみ、マチルダが帰ってくるのよ」と蘭が抱きしめて言った。
「嬉しくて・・仕方ないです～」とカスミがシオンを真似た。
「ユリ・・何か物真似が流行ってるぞ」とマダムが微笑んだ。
「困りましたね～・・エースがマダムの真似をするからですね」と薔薇二ヤできた。
「なに・・エース、見せておくれ」とマダムが二ヤで言った。
『急に言われても、ワシじゃ出来んの～』とマダムの真似で言った。
全員が一瞬躊躇して、そして大爆笑した。

「上手いの～・・じゃが、もう少し可愛い声じゃぞ」とマダムも笑いながら言った。
『あら・・明日から気をつけますわ・・おほほほほ～』とユリさんの真似で返した。
一瞬静寂が包んだ、全員がユリさんを見た。
「おほほほほ～・・とは言いませんわ・・おほほほほ～」と薔薇二ヤで返された。
全員の大爆笑に見送られ、ＴＶルームを出た。

「お前が怖い・・ユリさんに、あの返しは恐ろし過ぎる」とカスミが不敵を出した。
「でもユリ姉さんの方が、一枚上だったね」と蘭が満開二ヤで言った。
「でもさすがエースです、帰る前には笑顔を作りましたね～」と腕を組むシオンが微笑んだ。

『意識し過ぎて欲しくないからね、自然体でいて欲しいんだ』と笑顔で返した。
「マキ・・緊張してるね」と蘭が満開二ヤで言った。
「いえ・・今、シュミレーションしてました・・本心か確認してました」とマキが笑顔で返した、蘭は満開で頷いた。

「あっ・・野次馬発見」とカスミが二ヤで言った。
ローズのビルのエレベーター前に、ユリカが爽やか笑顔で立っていた。
「野次馬とは・・きゃしゅみに意地悪1点」とユリカが爽やか二ヤで言った。
「やばい・・全員の意地悪リストＮｏ1に、君臨してしまう」とカスミがウルで返した。
全員で笑いながらエレベーターに乗った、ユリカが私を見た。
「あなたの予想で、マチルダはいつ帰って来ると思う?」とユリカが微笑んだ。
『さっき少し映像が流れた、多分ニューヨークの空港にいたよ・・マチルダ』と笑顔で返した。
「そうすると・・水曜には宮崎に入るわね・・蘭、水曜の夜、我が家に招待するよ、カスミもシオンもマキもね」とユリカが笑顔で言った。

「嬉しい～・・ありがとう、ユリカ姉さん」と蘭がユリカに抱きついた。
「でも・・雑魚寝よ」とユリカが微笑んだ。
「雑魚寝・・最高です」とカスミが微笑んだ。
『ユリカ・・俺は?』と二ヤで言った。
「蘭をりゃんにしてね・・ベッドで待ってるから～」と蘭に爽やか二ヤで言った。
「マキ・・お酒の飲まないんだから、長女の監視よろしく」と蘭が

満開二ヤで言った。
「またまた・・難しい立場の練習が厳しいですよ～・・りゃん」とマキが二ヤで返した。
蘭の満開と、ユリカの爽やか笑顔がマキを見ていた。

「本気でやばい・・マキ覚醒」とカスミがウルで言った。
「シオン・・楽しいです～・・多分リアンも来ますよ～」とシオンがニコちゃんで言った。
「いよいよやばい・・シオン、リアン姉さんのガードよろしく」と蘭が満開二ヤで言った。
「仕方ないですね～・・じゃあシオンがエースの添い寝して、守っときます～」とニコちゃんで返した。
「それが一番危ない・・覚悟してるから～」と満開二ヤで返した。
「エース・・早く私も修行させて～・・怖くなった」とカスミが不敵で言った。

『今、決めてるのは・・来週水曜・・ユリカの店、カスミとマキでいきたい・・ユリさんの了解まだだけど』と二ヤで返した。
「絶対に了解とれよ・・現時点での大きな差を知らしめてやる」とカスミがマキに不敵で言った。
「そこは不敵ですね～・・カスミ姉さん、美由紀の次に、マキに完敗しないで下さいね」とマキが二ヤで返した、カスミは嬉しそうな不敵で返していた。
「私・・PG休んで見に行こうかな～・・楽しそう」と蘭が満開で微笑んだ。
「私の店を、壊さないでね」と爽やか二ヤで言ったユリカからローズに入った。
ローズは月曜の深夜で客はいなかった、私達を見てリアンが嬉しそうに微笑んだ。

「最近嬉しいことが多いね～・・でもユリカ、最近大ママみたいになってるね」と極炎ニカで言った。
「リアン・・緊張が出てるよ、魅宴ごときで」とユリカが爽やか二ヤで返した。
「本気で凄すぎる・・この2人の絡みは」とカスミが微笑んだ。

「たいしたことないですよ・・リアン姉さんは。
私、リアン姉さんを最初に見たとき、本当に嬉しかった。
それはカスミ姉さんを見た時よりも、ずっと嬉しかったんです。
その炎が真っ直ぐに上がってたから、一瞬で憧れました。
そして清次郎先生を見たときのリアン姉さん、その瞳の美しさに見惚れました。
でも・・なぜ・・どうしてですか、リアン姉さん。
待ってるのに・・由美子はずっと待ってるのに、母親が妹のように愛した女性を。
まさか、何か躊躇してるんですか・・炎の女が。
言い訳するんですか・・私の憧れの女性が・・自分に言い訳するんですか？
今を延ばして良いんですか？・・由美子にとっての、明日は確実に訪れますか？
それとも後で後悔すれば、良いと思ってるんですか？
私は憧れていたい・・その真っ直ぐな炎に、圧倒的熱量に。
私は今日やっと、エースに許可をもらいました、明日由美子に会いに行きます。
そして由美子の心に点火してみせます、必死でやってみます。
由美子が自分に負けないように、心を熱く燃やしていて欲しい。
でも・・私の熱じゃ、由美子の濡れた導火線には点火出来ないかも。
でも私がやらないと・・どんな事をしても、私が成し遂げないといけない。

だって・・だって・・だって、圧倒的熱量の極炎の炎が、風下に立っている。
私は向かい風を正面から受けても燃え続けて見せる、私の憧れのリアンという女性のように。
言い訳など絶対にしない、シオンの姉の、リアンに憧れているから。
憧れ続けていたいから・・こんな風で風下に逃げない・・向き合ってみせる。
だって私の炎は・・リアンが点火してくれたんだから・・極炎の種火で。
絶対にそれを消さない・・そして汚さない・・だから逃げない。
私の大好きな・・大切な・・あの・・リアンの極炎の種火だから」

強かった、マキはリアンを睨んで一気に吐き出した。
全員が固まっていた、リアンの店の女性も。
マキは大粒の涙を流しながらも、一度もリアンの極炎の瞳から目を逸らさなかった。
リアンはその炎を最大限に上げて、マキを見ていた。
その表情は誰が見ても、喜びに溢れていた。
リアンはゆっくりとマキの隣に座った、そしてマキと見つめ合った。
その時にリアンの極炎の瞳から、大粒の涙が止めどなく溢れ出した。

「マキ・・ありがとう・・でも、マキじゃまだ無理だよ。
だから明日、私と一緒に行ってね・・由美子の所に。
そしてマキが伝えてね・・そうしたら、私が点火するよ。
必ず点火してみせる・・だから見ていてね、私の大切な種火を分けた妹。
マキに見ていて欲しい・・ユリ姉さんが教えてくれた。
私とカスミとマキで、情熱3姉妹・・エースがそう称号を贈ってくれた。

私が馬鹿だったよ・・逃げてたね、風下に・・私は、リアンなのに。
危なく情熱3姉妹に、私が入れないとこだったよ。
ありがとう、マキ・・マキの炎で再点火してくれて、明日見せるね。
本当の極炎の炎を・・だからずっと見ていてね、これからずっと。
そして私が風下に逃げたら・・また、今のように伝えてね。
マキの炎で・・私に再点火してね・・ありがとう・・マキ」

そう言いながら、リアンはマキを抱きしめた。
「はい・・リアン姉さん、生意気な妹でごめんなさい」とマキがリアンの耳元に囁いた。
「欲しかったんだよ・・生意気な妹が、それが2人も出来たから・・最高だよ」とリアンが囁いて返した。

「強かったよ、マキ・・やばかったぞ、敗北を認めそうだった」とカスミが涙を見せて微笑んだ。
「遠慮しないで、認めてくれても良いですよ～」とマキが二ヤで返した。
「そうだよね～・・この世界で3つも称号持ってる女って、今までいたっけ？」とリアンがユリカにニカで言った。
「知らないね～・・ちょっと贅沢だから、情熱3姉妹は保留だね」とユリカが爽やか二ヤで言った。

「エース・・情熱、誰か探して来い」とリアンが二ヤで来た。
「お待ちになって～・・情熱はどうしてもほすい」とカスミがウルウルで言った。
「じゃあ、永遠を捨てるんだね」と蘭が満開二ヤで突っ込んだ。
「カスミ姉さん・・永遠の憧れ・・早く捨てて、すぐに拾いますから～」とマキが二ヤで言った。

「マキ・・それは、シオンが拾います～」とニコちゃんで言った。
「ぜっっっったい嫌、永遠も情熱も・・私は贅沢な女・・カスミだから～」とカスミが全力不敵で返した。
「贅沢な女という、称号も付けるのか～・・欲張りな女だな～」と蘭が満開で微笑んだ。
「明日、瞑想行って、皆に迷惑かけないのよ・・かしゅみ」とユリカが爽やか二ヤを出した。
カスミはウルウルで返していた、全員の笑顔で終了を迎えた。
シオンが車でユリカとカスミとマキを送ると言ったので、蘭と2人でローズを出た。

「ごめんね・・私はただ喜んでいたね、由美子に会って・・あなたの覚悟も分からずに」と蘭が強く腕を組んで囁いた。
『蘭・・良いんだよ～・・蘭が俺の側にいてくれるんだろ』と笑顔で返した。
「当然・・絶対に離れないよ、あなたが由美子を連れて帰るまで」と満開で微笑んだ。
私は満開蘭とタクシーに乗った、蘭が肩に乗ってきた。

「さっきの話聞いてて・・私は思い出してたよ、美由紀の深いため息。
あなたに由美子に対しての覚悟を聞いた後、は～と吐いたため息。
あのため息の重さを感じてた、美由紀は全て分かってるんだね。
そしてマキも・・マキのリアン姉さんへの言葉。
ビンビン心に響いたよ、私にさえ響いた。
リアン姉さんには、どれほど響いたんだろう。
そして、カスミに・・どれだけ響いたんだろう。
本当に嬉しかったよ・・マキの言葉と美由紀のため息が」

蘭は静かにそう言って、瞳を閉じた。
私は蘭の吐息を感じながら、自分の中の集中してる何かを楽しんでいた。
タクシーがアパートに着き、蘭を抱き上げて部屋に入った。
蘭が化粧を落とす間に、時間割を確認して着替えた。
蘭が満開で抱きついて、私はそのまま抱き上げてベッドに優しく寝かせた。
部屋の電気を消して、蘭に腕枕して引き寄せた。

『水曜、ゴールドに出ますかね・・いよいよ蘭が』と囁いた。
「もちろん・・千鶴姉さんの所からか～・・嬉しいな～」と蘭が満開で微笑んだ。

『蘭・・セリカが東京に、ずっと憧れてるらしいんだ。
そして5年後、東京ＰＧに挑戦したいと言ってきた。
セリカを蘭に任せるよ・・東京ＰＧの、最初のフロアーリーダーになって欲しい。
それだけの素質があると思ってる、流星のセリカなら』

私は蘭に静かに囁いた、蘭は満開で顔を上げて私を見た。
「了解・・楽しみだね～」と微笑んで、私の胸に顔を付けて瞳を閉じた。
蘭の眠るのを感じないまま、私も眠りに落ちていた。

翌朝自然に目が覚めた、集中していると感じていた。
洗面所で歯を磨き顔を洗った、キッチンでご飯を確認して。
鯖の切り身を焼いて、納豆を用意した、時間があったので味噌汁も用意した。

「おはよ～・・今朝も幸せ～」と満開蘭が洗面所に消えた。

私は朝食を用意して、蘭を待っていた、満開で戻ってきて座った。
２人で笑顔で朝食を食べていた、蘭はご機嫌だった。

「今日は、ユリカ姉さんが迎えに来るの？」と蘭が微笑んだ。
『うん、俺と美由紀を・・それから律子に会いに行くよ』と笑顔で返した。
「本当に心強いよね・・律子母さんがいるだけで」と蘭が満開で微笑んだ。
『うん・・それは認める』と笑顔で返した。
「その時はどんな体制でいくの？・・人員は？」と蘭が真顔で言った。

『北斗と母親でしょ、父親もいるだろうし・・北斗の支えでユリさん。
そしてユリカに蘭とマチルダ・・そして美由紀と沙紀。
そして別の部屋で、律子とマキに４人娘と待機してもらう。
最終手段・・その切り札・・それがマリア』

「了解・・マチルダの存在、ありがたいね」と蘭が満開で微笑んだ。

『うん・・北斗や祖父母は大変なんだよ、ずっと抱えてきてるから。
由美子なら５年も、その恐怖や寂しさを抱えて来てるから。
だから北斗には絶対にユリさんが必要なんだよ、ユリさんなら絶対に北斗を支える。
そして沙紀の側にユリカにいてもらう、沙紀はそれが１番落ち着くから。
沙紀には酷な事かもしれないけど、どうしてもいて貰いたい。
そして美由紀の側に、マチルダにいてもらう・・絶対にお互いに何かを感じる。
マチルダと美由紀なら・・大切な何かを感じると思うよ。

そして俺の側には、青い炎にいてもらうよ』

「うん・・了解、離れないよ」と蘭が満開で微笑んだ。

「マチルダ、喜ぶよ～・・美由紀と律子母さん」と蘭が満開で微笑んだ。

『だろうね・・マチルダか～・・もう1年位離れてた気がするよ』と笑顔で言った。

「まだ・・1週間です」と蘭が笑顔で睨んだ。

『1週間・・長かった～』と二ヤで返した。

「私もいよいよ・・プイしようかな～」と満開二ヤで来た。

『蘭・・それだけは勘弁して～、プイは心臓に悪いから』とウルで言った。

満開蘭に手を振って、チャリで出かけた。

少し汗を感じた時に、美由紀の家に着いた。

『せ～つこちゃん、学校行きますよ～』と母親の名前を呼んだ。

「は～い」と言って、笑顔で節子が出てきた。

「何・・何があったの？」と私の顔を見て節子が聞いた。

『節子・・今のミホの病院に、ヒトミと同じ病気の子がいるんだ。

5歳の少女なんだけど・・もうすぐ来そうなんだ。

段階の場面が、だから美由紀を借りたいんだ。

今回は一気に段階を乗り越えたい、どんな事をしても。

だから今日、美由紀に会ってもらう・・美由紀には辛い事かも知れない。

でも俺にはどうしても・・美由紀が必要なんだ。

ごめんね節子・・美由紀を借ります』

私はそう真剣に言って、頭を下げた。

「小僧・・怒るよ、美由紀も私も。
誰が一番辛いんだい・・あんただろ、２人目に挑戦する小僧だろ。
美由紀を頼むね・・最後まで、美由紀もやらせてね。
小僧・・ベストを尽くして・・そして、絶対に諦めないでね」

節子は優しく抱きしめてくれた、私は嬉しくて抱かれていた。
「小僧・・いつ位になりそうなんだい？」と美由紀が真顔で言った。
『今週中だと思う・・週末までもつかどうか』と真顔で返した。
「母さん・・５日分の下着用意しといて、小僧の側にいるから」と美由紀が節子に微笑んだ。
「了解・・あんまり調子に乗らないでね」と節子が笑顔で言った。
私は美由紀を抱き上げて、ＹＵＴＡＫＡ？に乗せて、学校を目指した。

「でも落ち着いてるね～・・なんか段階上がったね」と美由紀が言った。
『まぁね・・美由紀、今日は物語少し飛んで・・青い目の試験の話です～』と言った。
「それは面白そう～」と美由紀が声を強めて言った。
『その日、俺がユリカの店に行くと、張り紙が・・・』私はリンダと出会いの話をしていた、マチルダまで話しておきたかったのだ。
美由紀の背中は興味津々オーラを出して、夢中で聞いている感じだった。

教室に入る手前で、リンダの話が終わった。
教室に入ると、静かだった、数学の試験前の独特の雰囲気だった。
清次郎が入ってきて、朝の挨拶をした。
２時間の試験をなんとかクリアーして、掃除して終礼があった。

解散になって、清次郎に私と美由紀が呼ばれた。
私は美由紀を押して、職員室に向かった。
奥のテーブルに座って、清次郎を待っていた、美由紀はミセス祥子と話していた。

「小僧・・どうした、その緊張感は・・由美子かね」と私の前に座りながら、清次郎が真顔で言った。
『うん、和尚に聞いたんだね・・由美子、段階の場面が迫ってきた』と真顔で返した。
「そうか～・・美由紀も側にいるんだな」と清次郎が真顔で聞いた。
「もちろん・・ずっと側にいる、終わるまで」と美由紀が微笑んだ。
「分かった・・その時は学校休んでいいぞ、ワシが許す」と清次郎が笑顔で言った。
『ありがとう、清次郎・・俺は今度は、最後までやり通すよ』と笑顔で返した。

その時に職員室の入り口から、極マサと鬼瓦の声が聞こえた。
「まぁどうぞどうぞ、むさ苦しい所ですけど」と言って、ユリカを連れて来た。
「すいません・・失礼致します」とユリカが爽やかに微笑んで頭を下げた。
教師全員の視線が集まった、ユリカは笑顔を振りまいて歩いて来た。
「清次郎先生、お世話になります」とユリカが深々と頭を下げた。
「いえいえ、こちらこそ・・まぁどうぞ」と笑顔で言って、自分の隣に招いた。
「また悪さしたのね、小僧と美由紀・・私が呼び出されました」と爽やか二ヤで言いながら、座った。
「ごめんなさい・・小僧が誘ったんです、気持ち良いからやろうって」と言って美由紀が頭を下げた。
「小僧・・何が気持ち良いんだね？・・言わないと返さないぞ」と

清次郎が笑顔で言った。

『美由紀が・・胸が大きくならないと悩んでいたから。
掃除機で吸わせれば大きくなるよって、教えてあげました。
それに気持ち良いらしいから、やってみようって・・誘いました。
ごめんなさい・・もう掃除機はしません』

私はそう言って頭を下げた、職員室が笑いに包まれた。
「美由紀・・まだまだ口では小僧に勝てんね」と清次郎が笑顔で言った。
「そんな返しで来るか～」と美由紀が二ヤで言った。
ユリカが清次郎に挨拶して、極マサと鬼瓦に挨拶をした。
ユリカと私が美由紀を押して校舎を出た、正門の前にフォルクスワーゲンが止まっていた。
「カブトムシ！・・良いな～可愛いな～」と言っている美由紀を抱き上げて、助手席に乗せた。
ＹＵＴＡＫＡ？をたたんで、後部座席に積んで、私が乗った。
ユリカが楽しそうに美由紀と話しながら、運転していた。
美由紀が笑顔で道案内しながら、ユリカに矢継ぎ早に質問していた。

私の実家の駐車スペースに車を入れ、私は美由紀を抱いてユリカを案内した。
キッチンに母がいた、ユリカと美由紀を見て嬉しそうに微笑んだ。
「まぁ・・素敵な訪問者ですね～・・美由紀、久しぶりですね」と母が微笑んだ。
「小僧が家出したので、お久しぶりになりました～」と美由紀が笑顔で返した。
「ほんとに・・美由紀が全裸にまでなったのに、繋ぎ止めておかないから」と二ヤで返して、ユリカをリビングに誘った。

「ユリカ、美由紀・・緊張感が出てますよ・・駄目でしょ、今から病院に行くのでしょ」と母が微笑んだ。
「鋭すぎますよ～・・怖くなります、律子母さんが」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「あなたに鋭すぎると言われると・・日本一じゃないかと思えるわ」と母が楽しそうに笑って。
「さて・・小僧、聞きましょうか・・私に話があるんでしょ」と真顔で私を見た。

『お袋に回りくどく言わないよ、単刀直入に言う。
由美子の段階の時が近い・・俺の精神的保険として、お袋に待機していて欲しい。
俺が限界を気にせず、取り組むために、どうしても律子保険がいるんだよ』

私は母を見ながら真顔で言った、母は静かに聞いていた。
「了解です・・ユリカも美由紀もいるんですね」と母が微笑んだ。
「もちろん、私は沙紀と一緒にいます・・そして美由紀はマチルダと言う女性といます」とユリカが微笑んだ、美由紀が驚いて私を見た。

「そうですか・・やはり素晴らしい人間なんですね、リンダとマチルダは。
私も会えるのを楽しみにしてます・・美由紀・・いよいよですね」
母が美由紀に微笑んだ、美由紀は真剣な瞳になって頷いた。
「母さん・・由美子に伝えてみせます、ヒトミの伝言と・・私の想いを」と美由紀は真顔で言った。
「美由紀・・肩に力が入りすぎです、あなたらしく・・笑い飛ばしてきなさい」と母が笑顔で言った。

「そうしてきます・・そうだった」と美由紀が舌を出した。
「ユリカと蘭で、美由紀をお願いしますね・・この子は夜帰りませんから、そういう女です・・美由紀は」と母がユリカに微笑んだ。
「引き受けます・・蘭も、美由紀も私の家に泊めて・・スタンバイしますね、面白話でもしながら」とユリカが笑顔で返した。

「さすが・・ユリカですね、シズカには黙っておきます・・おしかけますから」と母二ヤで言った。
「大歓迎ですよ・・シズカはどう考えてるんでしょう・・由美子のそれが来ることは、分かってるでしょうから」とユリカが真顔で聞いた。

「あの子は、小僧の姉です・・策略なら天下一品ですよ。
先週からコンタクトを取っています・・いつでも連れ出せるように。
そして感じさせてるようです、そして今、その子は探しているのでしょう。
シズカじゃないと絶対に連れ出せない、その子を準備しています。
きっと結末を探し出し、巻き戻してくれます。
シズカはシズカの、最強の切り札を用意してます・・マリという少女を」

母はユリカに笑顔で言った、ユリカの喜びに満ちた笑顔が広がった。
「さすが、シズカ・・最強の切り札を用意してますね」とユリカが嬉しそうに微笑んだ。
「揃った～・・全ては由美子ちゃんの為に、小僧・・揃ったね」と美由紀が微笑んだ。
『うん、完璧だよ・・マリが来る可能性が有るだけで、俺には心の武器になるよ』と笑顔で言った。

9月初頭・・風は夏の匂いを連れていた、南国の9月。
私は集中する自分の何かを楽しんでいた、そしてマチルダを待っていた。

吹き抜けた風に、得体の知れない何かを感じた。
私は思い出し、感じていた・・マリがカウントを取り始めたと。
小さな手の指を微かに曲げて、カウントアップを始めたと・・結末の地点に向けて。

マキのこのリアンへの点火、本当に強かった。

そしてこの言葉に、一番強く影響を受けたのは、カスミだった。

カスミは自分に足りない物を見つけ出した、そしてそれを追い求め続ける。

カスミの輝きに、炎が点火される・・マキが種火で点火した。

情熱3姉妹が揃っていく、3人が全員・・変換する事を知らない。

綺麗な言葉や、優しい表現など・・その言葉には存在しない。

ダイレクトに愛だけを伝える・・仕事を離れれば、それしか存在しなかった。

美由紀が帰らないと聞いて、ユリカも蘭も喜んでいた、その行動力に。

しかし私は心配していた、美由紀の後悔を知っていたから。

ヒトミに対する美由紀の後悔を、だから私は節子に謝ったのだ。

しかし私の心配など吹き飛ばす、美由紀の覚悟は別世界だった。

夏物語は加速を始めた・・全員が１つの事を目指していた。

脳の策略

生まれ育った場所・・・どうして落ち着くのだろう。
刻まれているのだろうか、その香りも優しさも。
私は３世代の女性に囲まれて、心の何かの集中を楽しんでいた。

母がお昼をご馳走すると言って、ユリカと台所に立っていた。
ユリカは楽しそうに母と話しながら、包丁を握っていた。
「小僧・・緑の瞳の話し・・しといてよ～」と美由紀が微笑んだ。
『そうだね・・リンダと別れて、数日後・・蘭の靴屋の慰安旅行が・・・』私はマチルダの話しをしていた。
美由紀は笑顔で聞いていた、そしてマリアの誕生秘話になった。

私はそれまでも、美由紀には何も隠さなかった。
それが私と美由紀の関係で、最も大切な約束だった。

「ちょっと待って、あの時の採血・・マリアちゃんだったの」と美由紀が驚いて言った。
『うん・・不思議な巡り会わせだろ』と笑顔で返した。
「それでも運命を受け入れない、あんたが不思議だよ」と二ヤで返された。

テーブルに料理が並び、４人で食べた、楽しい昼食だった。
ユリカが楽しそうで、私も嬉しかった。

「小僧・・何の部分が集中してるんだい？」と母が二ヤで聞いた。
『それなんだよね～・・昨夜からなんだけど、自分でも分からない』と笑顔で返した。
「あんた・・集中すると、どっか抜けるよね～・・波動はどうした

の？」母二ヤで言った。
『あっ！』と私が言って、「えっ！」とユリカが言った。
私はそれで感じていた、ユリカと一緒にいても、常にユリアの波動は感じていた。
ユリアの波動が来なくなっていた、ユリカの体が発する波動が来るだけだった。
昨夜のリアン点火位から、ユリアの波動が来なくなっていた。
「来ないの？」とユリカが真顔で聞いた。
『うん、多分ローズあたりから、ユリアの波動を感じてない』と真顔で返した。
「一人歩き始めたね～・・学校上がる前かな、ユリカの妹にしては行動力あるね～」と母が楽しそうに笑った。
「妹さんなんですか～・・ヒトミが連れ回してる感じでしょ？」と美由紀が母に微笑んだ。

「美由紀・・かなり上がったね、さすが両足が短いだけあるね」と母が嬉しそうに微笑んだ。
「凄いでしょ～・・なんとなく分かるようになりました、ずっとヒトミに話しかけてたら」と美由紀が笑顔で言って。
「あれ～・・お姉さんが、妹の入学式で泣いてます～・・過保護ですね～」とユリカの涙を見て、美由紀が二ヤで言った。
「嬉しくて・・学校上がる前とか、入学式とか・・嬉しくて」とユリカが微笑んだ。
「ユリカ・・妹は由美子の側に付きましたね・・素晴らしい妹ですね」と母が微笑んだ。
「ありがとう、母さん、美由紀・・何よりも嬉しいです」とユリカが笑顔で言った

『それでか～・・感覚が集中してるのか～』と私が言った。
「そうだろうね・・アンテナ伸ばしとけって事だよ」と美由紀が微笑んだ。

「通信手段はそれで良しとして、北斗のフォローは？」と母が聞いた。
『もちろんユリさん』と返した。
「そうだよね～・・関口先生に話しなさい、それと婦長に・・ナースの意識が大切だよ」と母が微笑んだ。
『了解・・行って来るよ、お袋・・よろしく』と笑顔で言った。
「あんたは・・本当に緊迫した場面で、ヘルプを要求するから・・今回は無いと思ってるけどね」とユリカの肩を抱いて母が言った。
『うん・・下手すると俺の出番も無いかも、ユリカの妹ユリアとヒトミで』と笑顔で言って、美由紀を抱き上げた。
「そうだね～・・それに恭子が突入したら、隠し場所は無くなるかもね」と母が二ヤで言った。

「恭子？・・まだ私達の知らない何かがあるね、車の中で美由紀に聞きましょ」とユリカが私に爽やか二ヤで言った。
「怖いです～・・黙秘権はありますか？」と美由紀がウルで言った。
「残念ね～・・美由紀・・それは無いのよ」とユリカが爽やかに微笑んだ、本当に楽しそうなユリカだった。
見送りに出た母に、３人で手を振って美由紀の家を目指した。
私が着替えを取りに行き、節子から受け取った。
節子が出てきて、ユリカと挨拶を交わしていた。

「小僧・・毎朝、家に来るんでしょ？」と節子が聞いた。
『うん、もちろん・・学校は行くよ』と笑顔で返した。
「ユリカさん、お願いします・・大切な経験をさせてやって下さい」と節子がユリカに深々と頭を下げた。

「お預かりします・・私も美由紀と過ごすのが、楽しみですから」
とユリカが微笑んで、車に乗った。
節子に3人で手を振って、病院を目指した。

「さぁ、美由紀・・恭子の話」とユリカが隣の美由紀に微笑んだ。

「恭子先輩って・・爆撃機なんです・・実像も好戦的ですけど。
恭子先輩は数々の武勇伝がありますけど、そのほとんどは、相手がすぐに引いています。
対峙すると分かるんです、私は守ってもらった時に強く感じました。
その背中から出るものは、破壊を強くイメージ出来ました。
私・・小僧から聞いて、リアンさんに会いたくて。
リアンさんの炎が、全てを燃やす極炎なら・・恭子先輩は、全てを破壊する・・爆弾。
それも強力な、史上最強の爆撃機・・そんな感じです。
ヒトミの段階の時、小僧がヒトミの手を握り・・呼び続けました、約３０時間。
小３の小僧はそれが限界でした、倒れてしまって・・その小僧を豊君が抱き上げた。
そして恭子先輩に言ったんです、母さんを呼んでくる、それまでに壁を壊せって。
は～い・・しょうがないな～小僧は、体力無いから～と笑顔で言って。
私に微笑んで、ヒトミの手を握ったんで。
そして目を閉じていました・・5分位だと思います。
あ～・・もう面倒だから、全部ぶっ壊すからね・・ヒトミ～どっか影に隠れてて～。
そう大きな声で言った、私は真後ろの特等席で見てました。
そして恭子先輩は叫んだんです、【ヒトミを返せ～】って・・何

度も何度も。
私はその背中を見て、爆撃機だと思いました・・人質救出に来た、爆撃機だと。
小僧がヒトミの状況を、心がどこかに誘拐されたから、探しに行くと言っていて。
それで私も限界トリオもイメージ出来ていました、そして小僧は必死に探し続けた。
小僧のやり方は、広大な場所を・・ヒトミを呼びながら、歩いて探します。
それが一番安全だから、ヒトミを絶対に傷つけないから。
でも・・当然なんですけど、３０時間で限界が来た。
それを見て、瞬時に豊君が判断しました、時間が無いと判断した。
だから恭子先輩に指示を出した、壁を壊せと。
凄まじかったです、腰を浮かせて、ヒトミの手を握り叫ぶ姿が。
私は完全にイメージ出来ました、爆撃を続け・・全てを破壊して行く光景が。
そして律子母さんが来て、恭子先輩と代わりました。
そして1時間で連れ戻したんです、母さんは笑顔で言いました。
恭子のおかげで探せたけど、少しは瓦礫を掃除しときなさいって笑顔で言った。
母さん、ごめんなさ～いと、恭子先輩が舌を出して笑った。
私は羨ましかったんです、その感覚で話す事が・・憧れました。
だからヒトミにずっと話しかけました、そうすれば行けるかもしれないと。
和尚が私に教えてくれたから・・今、少し感じれるようになりました。
今日のユリカ姉さんの妹さんの話し、私も嬉しかったです。
感じていたから、小僧に寄り添う、少女の香りを感じていたから」
美由紀は表情豊かに、隣のユリカに話していた、ユリカは終始笑顔

だった。
「本当にあなた達は、凄いことを・・さらっと言うんだから～」とユリカが微笑んで赤玉駐車場に入れた。
「ここから歩きましょう、私に美由紀を押させてね」とユリカが微笑んだ。
美由紀は嬉しそうな笑顔で返していた。
私がＹＵＴＡＫＡ？を出して組み立てて、美由紀を抱いて乗せた。
ユリカは嬉しそうに、美由紀に語りかけながら押していた。

靴屋にユリカが入って行った、美由紀を連れて。
「蘭・・注文品届いてる？」と蘭に声をかけた、蘭が振り向いて美由紀を見て、満開が咲いた。
「はい・・届いてます」と蘭が靴の箱を選び、ユリカに渡した。

「蘭・・準備してね、まぁあんたは車が有るから大丈夫だけど。
今夜から美由紀を家に泊める、小僧の側にいたいらしい。
その気持ちが強かったから、私が引き受けた・・我が家は洋式トイレだからね。
だから今夜から、蘭とエースも来てね。
３人で寝ましょう、エースをベッドで一人で寝かせて。
美由紀の覚悟をフォローしたい、手伝ってね・・蘭」

ユリカは蘭の耳元に早口に囁いた、蘭の最強満開が咲いた。
「もちろん・・美由紀、後でね」と美由紀に満開で微笑んで、ユリカに頷いた。
ユリカが靴の支払いをして、病院を目指して歩いた。

その頃、和尚の寺で９人衆とホノカとリョウが、瞑想をしていた。
ちゃぶ台で、ユリさんと和尚が話していた、由美子の話を。
「さすがユリですね、落ち着いているし・・肩に無駄な力も入って

ない」と笑顔で律子が入ってきた。
「律子姉さん・・良かった～、今から訪ねようかと思ってました」と薔薇で微笑んだ。
「あら、何でしょう・・ドレスなら、なんとか着れますよ」と母二ヤで言った。
「それはＮｏ１を取られそうだから、遠慮しますわ」と薔薇二ヤで返した。

「今回は・・アドバイスが欲しくて」とユリさんが真顔で言った。
「ユリ・・分かってると思うけど、あなたが北斗の側にいないといけません。
そして北斗を泣かせて、叫ばせて、北斗の心を、自由にさせてあげて。
北斗は5年間ずっと、片時も忘れる事無く・・それを背負ってきました。
その時の寂しさや、悲しさと・・ずっと向き合ってきました。
だからその想いを発散させてあげて、小僧はその為に準備しています。
北斗の心を、自由にする為です・・準備は整いました。
今・・この瞑想する光景を見て、感じています・・由美子は希望なんだと。
さっき小僧とユリカと美由紀に会って、その集中した感性が素敵でした。
そしてあなた・・ユリがいるから、小僧は出来ると信じてるんですよ。
最後の叫びが一番重要です、それは母親にしか出来ません。
だからユリ・・北斗に吐き出させて・・そして戻しておいてね。
ユリにしか出来ない・・ユリだから出来る・・北斗を現実に戻してね。

そこには希望が有ると、全員が信じてるんでしょ」
母は笑顔でユリさんに言った、ユリさんは薔薇の微笑で返した。
「律子姉さん・・ありがとう・・私も信じています、そこに希望があると」と薔薇の微笑で返した。
それを聞いて、和尚が本道に歩き、ドラを大きく鳴らした。
全員がハッとして我に帰った、和尚は笑顔で正面に座った。

「どうじゃね・・話せたかな、自分の心と」と和尚が言った。
「向き合えましたけど・・和尚様・・覚悟って、自分にするものですよね」と千夏が言った。
「うむ・・よし・・特別じゃぞ、お前達は運が良いの～・・特別講師を呼んでやる」と和尚が笑顔で言った。
「律子・・ちと、頼むわい」と和尚が大声で呼んだ、全員が律子を見て笑顔になった。
「何ですかね～・・古い刺身でも食べて、調子でも悪いんですか」と母二ヤを和尚に出しながら歩いてきた。
「これだけの女性と相対すると、さすがにの～」と和尚が照れ笑いを浮かべた。
「色欲是空ですね～・・まぁそこが、和尚の魅力ですけど」と微笑んで和尚の隣に座り、全員を笑顔で見た。

「今の覚悟の質問は誰・・源氏名をお願い」と母が笑顔で聞いた。
「はい、ＰＧで四季と呼ばれてる４人組の千夏といいます、看護系の専門学校に行っています」と千夏が言った。
「千春・千夏・千秋・美冬で四季ですね・・やはり千夏の質問ですか」と母が言って始まる、世紀の問答。
１対１１の問答、ユリさんは震えながら聞いたと言っていた。
和尚が書きとめた物より、ここに記載します。

律子・・・千夏、人が死の場面で、人が人に何が出来ると思いますか？
千夏・・・医師ならば医療行為、他の人は・・手を握り語り掛ける事でしょうか。
律子・・・全員に問います、なぜにその段階でも・・語り掛けたいのでしょう？
ホノカ・・ホノカです、２０歳です・・言葉で伝えきれないから、その想いが溢れるような。
美冬・・・四季の美冬です・・日々の生活の中で、言葉に出していないからだと。
ユメ・・・ユメです２０歳です・・どうしても常識などで縛られて、伝えられなかったから。
律子・・・なぜに人の心は縛られますか、心の何を縛るのですか？
カスミ・・欲だと・・心の中のあらゆる欲が、外の世界と繋がっている。
リョウ・・リョウです２０歳です、それと恐怖だと・・漠然とした恐れが縛るんだと。
ウミ・・・ウミです２０歳です、死という恐怖と、傷つきたくないという想いだと。
千秋・・・四季の千秋です、確信できないから・・幸せが何なのか確信できないからだと。
律子・・・幸せとは・・確信できるものでしょうか？・・幸せって固体ですか？
ここで沈黙が訪れた、ユリさんは全員の横顔を見て、嬉しかったと言っていた。

千春・・・四季の千春です・・もちろん固体じゃないです、しかし気体でもない。
ハルカ・・手で触れられないし、匂いとか温度なども存在しないから。

レン・・・小僧の理論で考えると、心は少し固体的で、愛は完全な気体だと言ってた。
ホノカ・・でも気体でも感じる物はあるよ、熱と匂いは感じるよね。
リョウ・・ようするに難しくなるのは、目で見えないからだろうね。
千秋・・・そっか～目で見えないから難しく感じるんだ。
カスミ・・あっ！・・違う・・目で見えるから、簡単に解釈してしまうんだよ。
レン・・・沙紀ちゃんの絵！・・そっか～目で見えるものを、簡単に処理し過ぎてる。
千春・・・実感って、どこか目で見てる感覚だよね。
ユメ・・・うん・・目で見て触れてる感じが強いですね。
ウミ・・・そして自分に言い聞かせてる感じです、実感したって表現は。
ホノカ・・そう・・脳が心に言い聞かせてる感じ、実感してるからって。
ハルカ・・怖いんですけど・・でもそうですよ、脳が心を支配しようとする感じです。
カスミ・・じゃあ・・本題の・・確信はどうだろう？
美冬・・・どう考えても、脳が言ってる言葉だね・・確信しただろって。
千夏・・・ちょっと待ってよ・・脳と心をどうして別々に考えるの？
カスミ・・あれだ・・蘭姉さんが体の中心点を、心の中心で取るって言った言葉。
リョウ・・それ凄すぎる・・感覚的には分かるけど。
ホノカ・・絶対に脳じゃなくて、心に従うって言った・・強い言葉だよね。
千秋・・・行動の指令・・それはどこが出すのかって事でしょう。
ユメ・・・運動部位に伝えるのは、当然脳だけど・・指令場所は？
千春・・・絶対に心だよ・・そうじゃないといけない気がする。
カスミ・・エースが言ってた、１００ｍを、世界記録で走るとき、

いちいち脳が指令を出さないって
千夏・・・確かに私達でも、無意識に走るよね。
美冬・・・逆に心は色々感じてるよ、前を走る背中を見て、悔しいとか感じたりするよ。
ホノカ・・確信とか実感するもんじゃない、幸せって・・そうじゃないんだ。
ハルカ・・カスミ姉さん、私・・思い出して怖くなったんですけど。
カスミ・・何だよハルカ、述べよ。
ハルカ・・エースが言いましたよね、さらっと・・幸せなんて所詮。
レン・・・満足の延長線上にあるんだろ・・・だった。
律子・・・カスミに問う・・満足とは何？
カスミ・・所詮・・金で買った行為です・・手にとって、目で見て実感するレベルです。
千春・・・悔しいけど、また教えられた・・エースはずっとそれを言ってたんだ。
リョウ・・私には、直接心に言ったよ、脳の策略に支配されるなって。
千夏・・・満足も幸せも・・心を納得させようとする、脳の策略。
美冬・・・策略では無敗・・俺は俺に勝ったよって、ユリカさんに言ったらしいよ。
ハルカ・・怖い・・本気で怖いんですけど・・その言葉の真意が。
カスミ・・マチルダから聞いた、奴は・・自分でもう一人の自分を作り出したらしい。
ホノカ・・何それ・・カスミ教えてよ。
カスミ・・奴はユリカ姉さんに、悟られたくない事を隠す為に。
自分で二重人格になった、そしてもう一人の自分で、ユリカ姉さんを憎んだ。
そうすれば、ユリカ姉さんは読めないらしいんだ。
ユリカ姉さんを憎む方を出してる時は、エースを読めない。

その為に奴は、挑んでみせたんだ・・自分が壊れる覚悟をして。
マチルダが言ってた、ユリカ姉さんは幸せだったろうと。
愛という物に触れる事が出来て、温度も感じる事が出来たんだからって。
今気付いたよ・・マチルダの言葉の深い意味が。
美冬・・・律子さんに問う・・小僧の行動、その目指す場所とは？
律子・・・簡単です・・単純な事です・・子供の考える事ですから。
しかしそれに対して、あの小僧は本気です。
そう在り続けるためには、命をも賭けてしまう。
そして周りの環境にもこだわります、全員がそうである事を望みます。
難しい事と知りながら、絶対に諦めない。
小僧の求めるもの・・簡単にして単純明快。
【楽しい】という事です、ただそれだけを求めている。
自分がユリカに隠し事が出来れば、ユリカは楽しいだろう。
由美子が少しでも元気になれば、由美子も北斗も楽しいだろう。
そうしないと、自分が楽しめない・・だから全力で戦う。
だからこそ、褒められたり・・感謝されることを嫌う。
それは全て、最終的に・・自分が楽しくなる為の行為だからです。
蘭に対する愛情以外は、最終的にそこに向かっています。
小僧の求める唯一の物・・それは【楽しい】ですよ。
ホノカ・・やばい奴だよね～・・私達の楽しいをずっと考えてくれてる。
千春・・・そして提案し続けてくれる、挑戦しろって。

千夏・・・その先に楽しいが有るよって、二ヤ二ヤしてるんだ。
千秋・・・そして限界が来たら、抱っこしてくれる。
美冬・・・よく頑張ったねって、笑ってくれるんだ。
リョウ・・結局・・由美子に対しての覚悟なんて必要ないんだ。
レン・・・ベストを尽くそうって言ってるだけ。
ユメ・・・ベストを尽くすと楽しいからって、笑ってるんだ。
ウミ・・・もう一度瞑想して、自分の心と話してって言ったんだよね。
ハルカ・・そうです、確認してって言いました。
カスミ・・それが楽しい事なのか、確認しとけって言ったのかな？
律子・・・私から皆さんに、メッセージとして贈ります。
由美子の病・・その原因不明の難病。
その病は成長の段階の節目で、命を奪おうとする。
その時に小僧の言う、原作者が由美子の心を誘拐する。
そして由美子を諦めさせようとする、生きてても無意味だと。
小僧はヒトミ時に探しに行きました、ヒトミの名前を呼びながら。
歩いて探す感じです、小僧は絶対に歩いて探す。
どんなに広大な場所でも、それが一番相手を傷つけないから。
ヒトミの時は３０時間連続で探しました、たった一人で。
そして倒れたんです、まだ小３で体力が無かったから。
その反省に立っているんでしょう、だからこそ今回は、愛する仲間を集めた。
皆さんは、心で由美子を想って、呼んで下さい。
小僧が一人で呼んでも届かない、でも１０人なら、２０人なら。
可能性は上がるでしょう、小僧が確認してと言ったのは。

その事を信じる事が出来るのか、確認してと言ったのでしょう。
目で見えない事を、信じる事が出来るのかと、言ったんだと思いますよ。
「よかろう、そこで・・後は個人の問題じゃ、よくそこまで辿り着いたよ」と和尚が笑顔で締めた。
「和尚様、律子さん・・ありがとうございました」とカスミが代表で言って、全員が続いた。
「自分に正直にね・・期待しています」と律子が笑顔で返した。
「律子姉さん・・私からも、ありがとうございました」とユリさんが頭を下げた。
「もう、良いのよ～・・ユリ車でしょ、PGまで乗せてね」と母が微笑んだ。
「はい・・姉さんが、側にいてくれるんですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「うん・・それとね、マリアに伝えておきたいから・・恭子と約束してます」と母が微笑んだ。
「楽しみですね、限界トリオで唯一の・・感覚的な女性の登場は」と薔薇で微笑んだ。
「ユリなら感じてるでしょう・・恭子はマリアに伝えると言いましたよ」と母が笑顔で返した。
「エースがマリアに頼る状況が来ますかね～・・今のエースに」とユリさんが微笑んだ。
「万全を期す・・そうしたいんでしょうね・・小僧は自分の出来る範囲で。
それを知ってるから、限界トリオも美由紀も裏で力を貸すんでしょうね。

今はマキが側にいるから、シズカと恭子が後方支援。
しかし・・この後方支援が用意する切り札が、強力なんですよ」
車に歩きながら母が微笑んだ、ユリさんも笑顔で聞いていた。
「シズカちゃんの切り札は、凄そうですね」と薔薇二ヤで言った。
「ユリカも知ってたようだったから、ユリも知ってるでしょう・・
それは、マリです」と母が二ヤで言った。
「それは最強ですね・・今現在でも、その力を有するんですね」と
ユリさんが驚いて聞いた。

「そうらしいです・・唯一原作者に対してだけは、牙をむくと・・
シズカが言ってました」

母の声が広い中庭に響いていた、大きな楠木の枝を強い海風が揺ら
した。
母とユリさんが大きな石を見ていた、牛乳瓶に沢山の花が飾られて
いた・・。

私は恭子の爆撃機の話を、この時に初めて聞いた。

美由紀も限界トリオも話してくれなかった、その時私は限界が来て
眠っていて。

起きた時には、ヒトミが戻っていて・・迎えに来なかったと、ヒト
ミに怒られていた。

母と女性の問答は、母がレールに乗せただけで、女性達が到達した
答えだったのだろう。

私の真意は・・母の言った通り・・全ては【楽しい】の為だった。

深く読みすぎな部分が多いと、和尚の書いた言葉を見て思っていた。
ただ私はマリと関わってから、幼心にずっと心に秘めていた。
脳に騙されるなと、常に自分の心で反復していた・・脳の策略を感じて。
そしてある漫画を読んで、脳の侵略という仮説を立てていたのだ。
その漫画は、人間が作り出したロボットが、自我に目覚め暴走し。
最後は、人間を支配しようとする物語だった。
私はその漫画と、老人達の戦争話で・・仮説を立てた。
そうしないと納得できなかったのだ、あの戦争を人間同士で出来た事が。
脳が心を支配していて、脳が行動の指令を出していた、私はそう仮説を立てた。
そして脅えたのだろう、幼い私は・・それから固執した、策略に。
１３歳のこの時点では、満足も幸せも・・脳の策略だと思っていた。
心を騙す脳の策略だと・・脳が自我を持ち、暴走しようとしてると。
日記に真剣に書いている・・そして今でも・・そう思っている・・。

男のルール

バラバラのピースだからといって、１つにならない訳ではない。
組み合わせていくと、１つの作品になっていく。
どれが欠けても完成しない、全員が主役の物語なのだから。

ユリさんの赤いＺが赤玉駐車場に滑り込んで、ユリカのワーゲンの横に駐車した。
晩夏の熱は容赦なく、気温を上昇させていた。
ユリさんと母がＴＶルームに入ると、マダムがいて、豊がマリアを抱いていた。
マリアの天使全開を見て、ユリさんも母も自然に笑顔になった。

「母さん・・やばいな～・・・ここで出会うのは」と豊が照れて微笑んだ。
「やっちゃって・・手心を加えないでね」と母が微笑んだ。
その時にカスミが入ってきて、豊を見て驚いた。
「あら、カスミちゃん・・豊君がいるから、慌てて来たんじゃないの？」とユリさんが薔薇二ヤで言った。
「いえ・・律子さんと話したくて」とカスミが微笑んで、豊の隣に笑顔で座った。

「らしくないですね～・・カスミ、誰に押されてるの？」と母が二ヤで言った。
「マキに昨夜、強烈に押されました・・昨夜・・・」とリアンの点火の話しをした。
「それは押されましたね・・でも視点がずれてるよ」と母が微笑んだ。
「視点ですか？」とカスミが真顔で返した。

「あなたはカスミでしょ・・小僧が指名したのは、マキがまだデビューしてない少女だからですよ」と母が微笑んだ。
その時、ハルカとレンが入ってきた。

「すいません・・律子さん、詳しくお願いします」とカスミが微笑んだ。
「嫌です・・私はＰＧの若い女性に、【さん】で呼ばれるのが嫌いです」と母二ヤで言った。
「律子母さん・・ご教授をお願いします」とカスミが嬉しそうに言った。

「小僧がどうしてマキを選んだか・・もちろんマキの言葉の力もあるでしょう。
でも最大のポイントは、まだデビューしてない１６歳の少女だからです。
リアンの事は勝也から聞いてます、ストレートな熱い女性で驚いたと言ってました。
だから直球勝負を小僧は選んだ、ピッチャーは少女が良いんです。
同じ世界で生きる者同士なら、やっぱりどっかで素直になれない。
だからマキを選んだんです、あなたが押される事は何も無いんですよ。
考えてごらんなさい、ユリでもユリカでも蘭でも・・まして自分でもなく。
マキを選んだのだから、あなたがそれを深く感じる事ではないわ。
小僧は一石二鳥を狙ったのよ、リアンだけがターゲットじゃなかったんです。
そこが小僧の策略です・・あなたにも点火しようとしたんでしょう。
輝きに炎を加えた時の・・その姿が見たいんでしょうね」

母は最後に二ヤ二ヤを出した、カスミはハッとして気付いた。
「あっ！あの野郎～・・私の悩んだ時間は、きっちり返してもらいます」とカスミが不敵で言った。
「あら・・少し点火されてますね」とユリさんが薔薇二ヤを出した。
「いえ・・かなり点火されてます」とレンが微笑んだ。
「小僧はカスミさんの、そんな素直な所が好きなんですよね」と豊が微笑んだ。
「豊がそう言うんなら・・許す」とカスミが微笑んだ。
「かしゅみ～・・だめ～」とマリアが全開天使不敵を出した。
「あ～マリア・・師匠に向かって不敵を出したわね～」と最強不敵で返した、全員が笑っていた。

「律子姉さん・・豊君に言った、言葉の意味は何ですか？」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「あぁ・・豊は小僧を殴りに来たんですよ、小僧の闘争心を消すためにね」と母が微笑んで返した。
「殴って消すんですか！・・素敵ですね～」とハルカが微笑んだ。
「小僧本人は、相当苦しいですけどね・・なんせ豊の本気のパンチですから」と母が二ヤで言った。
「本気でないと外れないんですね・・男同士だから」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

「はい・・小僧の時は特に・・今回は3日かけて準備しました」と豊が笑顔で返した。
「3日！・・何を準備するの？」とカスミが驚いて聞いた。

「自分の精神状態です・・小僧を殴るとき、強烈にその伝達が返ってくるから。
絶対に中途半端な気持ちじゃ出来ない、だから完全に素直な自分を表に出す。

それが俺と小僧の、男のルール・・絶対に破れない、約束ですから」

豊は笑顔でさらっと言った、全員が笑顔で聞いていた。

「久美子が憧れ続ける訳だよね～・・・あの子は本当に納得できる演奏の後は、右手の拳を突き出す・・憧れの男のように」とレンが微笑んだ。

「そうなんだ～・・素敵だな～、心にずっと持ってるんですね」とハルカが微笑んだ。

「ワシは昨日感じたよ・・エースにとって久美子は大切な存在じゃと。

フロアーを目指してないから、そして夢を見せてくれてるからじゃろう。

エースは久美子と誓いを立てた、絶対に諦めないとな。

それは久美子に、絶対に諦めるなと言っておったよ」

マダムは嬉しそうに微笑んだ、全員が笑顔で頷いた。

その時リアンが入ってきた、その熱量にユリさんですら驚いていた。

リアンが笑顔で挨拶をして、律子を見て極炎ニカを出した。

「お会いしたかったですわ・・律子マダム」と言って律子の正面に座った。

「リアン・・マダムと言われると、２０程老けた感じがします」と母ウルで返した。

「これは失礼・・律子姉さん」とリアンも楽しそうに微笑んだ。

「そうですね～・・あなたには姉さんが良いです・・ユリカには母さんが良いけど」と母二ヤで返した。

「え～・・同じ歳ですよ～」とリアンが極炎ウルで返した。

「あら・・勝也もユリカは娘のように見てるけど・・あなたには、

指名にわざわざ行くようだし」と母が笑った。
「ユリ姉さん・・律子姉さん、噂以上に怖いです」とユリさんにウルで言った。

「情熱3姉妹を引っ張るリアンには、厳しいですよ・・マキを託したと言う事ですよ」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「はい・・必ず引っ張ってみせます」と嬉しそうな笑顔で母に言った。
「よろしくね、リアン・・そして点火してね、あなたにしか出来ない・・由美子の点火は」と母が微笑んだ。
「はい・・やってみせます・・ユリ姉さん、マキを借ります」と真顔で言った。
「お願いしますね、リアン・・やっと北斗姉さんに恩返しが出来るわね」とユリさんが優しく言った。
「はい・・清次郎先生にも、北斗姉さんにも・・少しでも恩返し出来るのが、幸せです」と笑顔で言って頭を下げてＴＶルームを出て行った。

「怖かった～・・入ってきただけで、2℃位室温が上がった気がする」とハルカが微笑んだ。
「炎がいる・・情熱3姉妹は、絶対に獲得する」とカスミが微笑んだ。
「もしかして・・カスミ姉さん、まだ補欠ですか？」とレンが微笑んだ。
「レン・・あんたも情熱じゃないでしょ」と不敵で返した。
「はい・・でもそれを聞いたら、リョウ姉さんとセリカ姉さんが、どう出るのか」と二ヤで返した。
「怖いこと言うなよ～・・絶対に2人には言うなよ」とカスミがウルで返した。

その時恭子が入ってきた、豊が驚くほどの熱量で。
恭子は全員に挨拶して、マリアに笑顔で手を出して、マリアを抱き上げた。
「恭子・・今そこで炎の女に遭遇しましたね・・リアンに」と母が微笑んだ。
「リアンさんって言うんですね・・初めて熱に押されました」と恭子が微笑んだ。
「絡んだな・・恭子」と豊が二ヤで言った。
「お互いに、進行方向を譲らなかっただけよ・・５ｃｍ位の近さで、名前を聞かれたけど」と恭子が照れて微笑んだ。
「良かった～・・恭子がこの世界を選んでなくて」とカスミが二ヤで言った。
「カスミ姉さん・・私まだ１６ですよ、今後は未定です」と恭子が二ヤで返した。

「でも・・豊が心配して、反対するだろ～」とカスミが笑顔で聞いた。
「しませんよ・・恭子の人生の部分に対して、反対なんかしません・・俺との人生をキチンとするのなら」と豊が笑顔で返した。
「駄目だ～・・響いた～・・恭子ちゃんに嫉妬した」とハルカが微笑んだ、カスミがウルで頷いた。

「怖いから・・マリア、私と散歩に行こうね」と恭子がマリアに微笑んで、ユリさんに頭を下げて出て行った。
「カスミ・・情熱３姉妹・・マリアに取られないようにね」と母が二ヤで言った。
「リアン姉さんに一歩も引かない、恭子・・マリアに何を伝授するんだろう、怖い」とカスミがウルで言った。
その頃、私とユリカと美由紀が病院に着いて、エレベーターで４階

に向かっていた。

『ユリカ、美由紀を頼むね。
美由紀が俺の側にいるなら、今日は沙紀とミホだけにしよう。
由美子には情熱姉妹が行くから、美由紀に沙紀をお願いする。
美由紀・・沙紀の覚醒を促して、沙紀なら絶対に由美子の場所を探し出す。
俺は関口先生と婦長に会ってくるよ』

笑顔で2人に言った、2人とも笑顔で頷いた。
「了解・・沙紀ちゃん喜ぶよ、私はミホと話したいし」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「楽しみだな～・・沙紀ちゃん」と美由紀が微笑んだ時にエレベーターが着いた。
ナースステーション前で、記帳してると声をかけられた。

「美由紀・・綺麗になったね」と関口医師が微笑んだ。
「関口先生、ご無沙汰してます・・皆さんそう言うんですよ～」と美由紀が微笑んだ。
ユリカが関口医師と挨拶をして、関口医師がＹＵＴＡＫＡ?をチェックしていた。
「美由紀・・後で車椅子を貸して欲しいんだけど」と関口医師が微笑んだ。
「もちろん、良いですよ」と美由紀が笑顔で返した。

「ありがとう・・俺には小僧が話しがありそうだから、後でね」と言って私のほうに歩いてきた。
『さすがに、鋭いですね～』と笑顔で言った。
「誰を呼ぼうか?・・院長は空いてるから・・院長室でやろう」と関口医師が真顔で言った。

『関口先生と婦長・・北斗と沙紀の母親、ナースの若手エースを一人』と真顔で返した。
「了解・・院長に連絡しとくから、小僧は先に院長室に行っててくれ」と関口医師が言った、私は真顔で頭を下げて階段を上った。

院長室の重厚なドアをノックして、返事を聞いて中に入った。
狸院長が笑顔で迎えてくれた、私はソファーに座った。
「楽しいだけの、雰囲気じゃないね」と院長が笑顔で言った。
『はい・・近いです、由美子が囚われる時が』と真顔で返した。
「小僧のその表現・・私は好きだよ、犯人をどう表現するんだね？」と院長が真顔で聞いた。
『俺は運命を受け入れない人間なんです・・・』原作者の話をした。

「なるほど・・ようするに神とか仏とか言って、逃げないって事だね」と院長が真顔で聞いた。
『はい、別に神仏を否定してる訳じゃないんです、その世界と別の設定としての、原作者です』と笑顔で返した。
その時にノックが響いて、関口医師と婦長と北斗と沙紀の母親に、あの若いナースが入ってきた。
院長がソファーに招いて、全員が座った、私の横に若いナースが座った。

「小僧・・来るんだね、段階の時が」と関口医師が真顔で言った。

『来ます・・それも間近に迫ってる気がします。
あの病気の難関・・心が誘拐される、そして諦めさせようとする。
神でも悪魔でもない、人生の原作者が・・生きてても無意味だと誘う。
私はそう誘われたと、ヒトミに聞きました。

私は由美子の心が誘拐されたら、探しに行きます、由美子を呼びながら。
そして私の周りにいる女性達が、心で由美子に語りかけてくれる。
生きることは素敵な事だと、そう言って由美子を呼び戻してくれる。
お母さん・・沙紀を貸して欲しい、沙紀だけが由美子の居場所を探し当てる。
そして描いてくれると思っています、沙紀には辛い事かもしれない。
でも私はどうしても沙紀にいてほしい、ユリカがずっと沙紀の側にいますから。
そして婦長とナースの皆さんも、強く想っていて欲しいんです。
生きることは素敵な事だと、由美子に早く帰って来いと・・強く想っていて欲しい。
由美子が最初に誰の声を聞くのか分からない、もし原作者が選択できるなら。
一人でも投げやりな気持ちが有ったら、駄目ですから。
私は空想の物語を話してるのでも、妄想でもない・・自信を持って話しています。
だから信じて欲しい・・これを乗り越えたら、必ずある。
由美子の希望ある未来への道が・・絶対あると信じています』

私はその想いを静かに強く言葉にした、久々にユリアの強い波動が返ってきた。
「もちろん・・沙紀は良いですよ、私は感じました・・それが沙紀の望みなのだと」と沙紀の母親が微笑んだ。
「もちろん、私も信じます・・そしてナースも全員、信じてくれると思っています」と婦長が微笑んだ。
「信じますよ、あの沙紀ちゃんの変化で、あなたが交信してると思ってますから」と若いナースが真顔で言った。

「よし・・私は医療とは、全てにベストを尽くす事だと思っている。
全員で想いを1つにしよう、当然私もそうする。
医師もナースも事務員も、全員で取り組もう・・その場で出来る事なのだから。
小僧は私に言ったのだから・・トータルでも、原作者に勝ってみせると」

院長が強く言葉にした、全員が真顔で頷いた。
「皆さん・・本当にありがとうございます・・由美子も私も幸せです」と北斗が立って頭を下げた。
『院長・・沙紀の覚醒の為に、第一回演奏会を急ぐかもしれません』と笑顔で言った。
「かまわないよ・・沙紀とミホなら」と院長が笑顔で言った。
「第一回ですからね・・次回があるんですから」と婦長が微笑んだ。
「では・・関口君、万全の準備を頼みますよ」と院長が言って、関口医師が頷いた。
全員で院長に挨拶をして、階段で4階に下りた。

私が病室の廊下に行くと、遊戯室で美由紀とブロックで遊ぶ沙紀が見えた。
美由紀も沙紀も嬉しそうだった、ミホのベッドを覗くと、ユリカが手を握り笑顔で話していた。
優しい空間が出来ていて、私は声をかけずに由美子の病室を目指した。

由美子の病室に入り、祖母に笑顔で頭を下げて、由美子の横に座った。
『由美子・・ご機嫌どうかな?』と手を握り笑顔で言った。
《とっても良いよ、ママが温度の言葉分かってくれたよ》と嬉しそ

うに返してきた。
『そっか～、良かったね・・由美子』と笑顔で言って。
『由美子、少しの間だけ、由美子の絵を借りて良いかな？・・素敵な人達に見せてあげたいんだ』と笑顔で言った。
《良いよ、見せて欲しい、由美子を》と返してきた時に、マキとリアンが入ってきた。
北斗が笑顔で駆け寄り、リアンとマキが祖母と挨拶していた。

《素敵な2人、2人とも熱いね》と由美子が伝えてきた。
『うん、由美子・・感じてね、大切な事だよ・・人の心は熱く燃えるんだ』と笑顔で言って、マキを見た。
笑顔でマキが歩いてきた、その後ろをリアンが極炎の微笑で歩いてきた。
私はマキを座らせた、マキは笑顔で由美子の手を握った。
私はマキに任せて、北斗の所に歩いた。

『北斗・・由美子の絵を借りて良いかな・・由美子の了解は取ったから・・女性達に見せたいんだ』と笑顔で言った。
「もちろん良いよ・・ありがとな」と北斗が微笑み、祖母も微笑んだ。
私は慎重に額を外し、北斗と祖母に挨拶をして病室を出た。
遊戯室には誰もいなかった、ミホの病室に行って驚いた。
沙紀が美由紀を目の前に座らせて、美由紀を描いていた。
ミホは眠ったようで、ユリカと沙紀の母親が笑顔で話していた。

その時婦長が、車椅子の少女を連れて来た、小学校高学年のようだった。
足は綺麗に有ったので、半身不随だと思って笑顔で見ていた。
私が沙紀の手を握り確認した、沙紀は色を塗るだけだから良いよと返してきた。

『美由紀・・もう色づけだけだから、良いよって』と美由紀に笑顔で言った。
美由紀は笑顔で車椅子を反転させて、少女に近づいた。

「お名前は？」と美由紀が笑顔で聞いた。
「理沙です」と可愛く答えた。
「理沙、可愛いね・・私は美由紀です・・私のに乗ってみる？」と美由紀が微笑んだ。
「良いの！・・嬉しい～」と理沙が笑顔で言った。
私が美由紀を抱き上げて、沙紀のベッドに座らせて、理沙を抱き上げてＹＵＴＡＫＡ？に乗せた。
理沙は嬉しそうに、少し動かしていた。
私は美由紀を理沙が乗っていた、病院の車椅子に乗せた。

「理沙・・廊下で乗ってみよう」と美由紀が笑顔で言って、先に廊下に出た。
理沙も笑顔でスムーズに廊下に出て行った、私はユリカに由美子の絵を二ヤで預けて後を追った。
廊下の広いスペースで、美由紀が理沙に笑顔で乗り方を教えていた。

「素敵な子だね、美由紀ちゃん・・理沙のあんな笑顔初めて見ました」と婦長が言った。
『理沙も乗り越えるよ・・美由紀だって出来たんだから』と笑顔で返した。
「あの車椅子、ハンドメイドでしょ・・頼めるのかしら？」と婦長が微笑んだ。
『期間的な猶予を貰えるなら、美由紀に頼んでもらいます』と笑顔で返した。
「両親に話しておきます、明日、私を訪ねて来てね」と婦長が言って、２人の場所に歩いた。

美由紀と理沙に笑顔で話して、私を呼んだ、私は美由紀を長椅子に座らせて。
理沙を病院の車椅子に乗せた。

「理沙・・また明日ね～」と美由紀が笑顔で手を振った、理沙も嬉しそうに手を振っていた。
婦長が押していく理沙を見送って、美由紀をＹＵＴＡＫＡ？に乗せた。
「ちょっと～・・嬉しさが止まらない・・沙紀ちゃんの絵」と美由紀が私に笑顔で言った。
『楽しみだね、美由紀』と言って、病室に戻った。
沙紀が夢中で塗ってたので、母親に挨拶をして、３人で病室を出た。
エレベーターに歩いていると、反対側からリアンとマキが笑顔で歩いてきた。

美由紀はリアンだと感じたらしく、笑顔でリアンを見ていた。
「美由紀・・リアンさんだよ・・リアン姉さん、噂の美由紀です」とマキが互いを紹介した。
「リアンです、よろしくね」とリアンは屈んで視線を合わせて微笑んだ。
「美由紀です・・本当に、消防車呼びたくなりますね」と笑顔で言った。
「３度呼ばれた事あるよ」と極炎ニカで返した。
「やばい・・点火されそう、私じゃ挑戦出来ないのに」とウルで返した。

「美由紀・・何言ってるんだい、出来るさ・・自分の店を持つ覚悟があるんならね」と極炎で微笑んだ、美由紀は本当に嬉しそうな笑顔で返した。
リアンが美由紀の後ろに回り、ユリカを押しのけて美由紀を押し始

めた。
私とユリカとマキは、その楽しそうなリアンの後ろを、ニヤニヤで歩いた。
真昼間の夜街を、五天女の炎と水を引き連れて、美由紀が通っていた。
その美由紀の嬉しそうな後姿を見ていた。

「由美子に点火できたの？」とユリカがマキに笑顔で聞いた。
「はい・・完全に点火しました、由美子に情熱姉妹に入れと、リアン姉さんが誘うから」とマキが微笑んだ。
「今夜の魅宴は見逃せないよ～」とユリカが私に爽やか二ヤで言った。
『仕方ないな～・・美由紀と、勝也の特等席で見よう』と二ヤで返した。
「本気だろうね、エース」とリアンが極炎ニカで振り向いた。
『うん、勝也は美由紀の頼みは、絶対に断らないよ』と二ヤで返した。
「待ってるね美由紀・・見てなよ、そして感じろよ・・私は本気で言ったんだからね」と美由紀に言って、ユリカに代わった。
「はい、見てます・・ありがとう、リアン姉さん」と美由紀が笑顔で返した。
「よ～し・・準備してくる、たかだか魅宴だけど」と極炎ニカで言ったリアンと別れた。

「あ～あ、リアンが将来の女帝決定だね・・責任取ってね」とユリカが私に二ヤをした。
『ユリカは？』と二ヤで聞いた。
「決まってるでしょ・・可愛いお嫁さん」と最強爽やか二ヤできた、私はウルウルで返していた。

「小僧・・私の豊満な胸で泣いて良いよ」と美由紀が二ヤで言った。
『豊満じゃない、美由紀の胸で泣かせて』とウルで言った。
「ぜっっっったい駄目、一生駄目～」と美由紀が笑顔で言って、ＰＧのエレベーターに乗った。

ＴＶルームに入ると蘭が来ていて、恭子とマリアも帰って来ていた。
美由紀を見て、全員が笑顔になった。
「恭子先輩・・なんか燃えてますよ～」と美由紀が微笑んだ。
「美由紀・・あんたも会ったね、炎の女に」と恭子が二ヤで言った。
マリアが美由紀に駆け寄った、私が美由紀を抱き上げて恭子の横に下ろした。
美由紀は笑顔でマリアを抱いた、マリアは天使全開で抱かれていた。

「マリア・・爆撃したら、瓦礫を掃除するのよ」と美由紀が微笑んだ。
「あい・・みゆき」とマリアが天使で返した。
「美由紀には、かなわないよ～」と恭子が微笑んだ。
「よし・・小僧、やるか・・久しぶりに」と豊が笑顔で言った。
『良いですね～・・ありがとう、豊兄さん』と言って２人でフロアーに歩いた。

ＴＶルームでは、マジックミラーの前に全員が集まっていた。
私はフロアーのセンターで、豊と向き合って立った。
サインの講習で６番に座る、シオンとハルカとヨーコとケイコが見ていた。
さすがに徳野さんが察したのか、ボーイをアプローチに集めた。

「良い顔になったな小僧・・由美子を頼むぞ」と豊兄さんが言った。
『うん、ベストを尽くすよ』と言って、Ｔシャツを脱いだ。
「よし・・やるかな」と豊が微笑んだ。

『うん、今回こそ、一発は入れるよ』と笑顔で返して、間合いをとった。
久々の緊張感に包まれていた、豊の大きな体が、さらに大きく見えた。
豊はいつものように、私の目だけ見て、全く構える様子も無かった。
私は意を決して、右腕を豊の脇腹めがけて放った。
その瞬間、豊の右ストレートが私のレバーに入っていた。
私は立ってられずに、崩れ落ちるように倒れこんだ。

「危なかったよ、ヒヤッとした・・来る時に気が無かったよ・・成長したな、小僧」と微笑んで、私を抱き上げてくれた。
『まだまだだね、最後に勝つイメージしたよ』と嬉しくて笑顔で言った。
「そこがお前の良いとこさ」と微笑んで、徳野さんに一礼した。
徳野さんは嬉しそうな笑顔で、右手を上げた。

豊は私を抱いたまま、ＴＶルームに連れて行き、簡易ベッドに寝かせてくれた。
「少し寝ろ・・走り過ぎだぞ」と笑顔を残して戻っていった。
蘭がマリアを連れてきて、私の横にマリアを寝かせた。
マリアが私にしがみつき、天使全開で充電してくれた、それを見て蘭も戻った。
私はマリアを抱きしめて、マリアと幸せに眠りに落ちていた。

マリアの少し熱い温度と、優しい鼓動が、私を包んでくれた。
私の子供染みたストレスは、全て豊の拳が払ってくれていた・・。

豊という男はどうしてだろう、その状況に誘われる。

普段通らない道を何気に選んだり、長く会ってない友を何気に訪ねたり。

豊が自分から喧嘩を売った事は皆無に近い、そして意識は常に避けていた。

それでも数々の武勇伝が存在し、今に至るまで・・無敗なのだ。

豊の無敗とは、最後まで自分を曲げなかったという事実である。

この豊の私に対する行為を見て、一番心に響いたのは・・シオンだった。

シオンの中には絶対に無い、暴力という項目・・それをシオンは心に残した。

シオンが旅をして帰ってきた時に言った、どこにも存在しなかったと。

愛のある暴力は存在しなかったと、それが悲しかったと言った。

憎しみに満ちた、暴力しか無かったと泣いていた。

豊のパンチの伝達・・私はそれを超えるものを持てなかった。

今でも響き続けている・・豊の教えが私の中に有る。

自分を偽るなと・・強く言ってくれている・・永遠に・・・。

心の仮説

可愛い寝息に包まれて、私は幸せに眠っていた。
小さな体の少し熱い温度が、私を守り続けていた。
私は全てを忘れて、久々の熟睡を楽しんでいた。

「嬉しそうだね～・・小僧、記録更新はしたんだね」と恭子が豊に微笑んだ。
「したよね～・・初動がああ来るとは、想像出来なかったよ」とマキが微笑んだ。
「でも・・次の瞬間、ニヤってしましたね・・イメージが巡った、まだまだだね～」と美由紀が笑った。
3人は笑っていた、女性達はその笑顔を見て、呆気にとられていた。

「豊・・今の会話、説明せよ」と蘭が満開で微笑んだ。

「小僧は確かに今までを越えた、新記録を出しました。
奴の初動の気を、全く感じなかった・・少しヒヤッとしました。
奴自身も認めたけど、次の瞬間にイメージしましたね・・俺に勝つイメージを。
俺はそれに反応して、奴より一瞬早く入れる事が出来た。
常に紙一重なんですよ・・人間同士だから、差なんて微々たるもんです。
奴は今回越えて来ましたね、体格の差を・・嬉しかったですよ」
豊は嬉しそうに微笑んだ、その時シオンとヨーコが入ってきた。
「反応した？・・何に反応したの？」とカスミが微笑んだ。
「イメージです・・奴が脳で描いたイメージ」と豊が微笑んだ。
「カスミ・・喜びが顔に出過ぎてますよ」と母が二ヤで言った、カ

スミは輝く笑顔で頷いた。
「でも、小僧・・自分で入ったね、状況とかじゃなくて・・意識してその世界に入ったよ」とヨーコが恭子の隣に座りながら言った。
「ヨーコもなのか～・・まじでやばい・・ヨーコ、その世界を述べよ」とカスミがウルで言った。

「上手く表現できないけど・・小僧の初動の右腕に、ヒトミの左手を感じた」とヨーコが微笑んだ。
「あ～・・ヨーコ、段階上がってる～・・少し焦った」とマキが二ヤで言った。
「マキ・・必死に付いておいで、私のライバルと呼ばれたいなら～」とヨーコが二ヤで返した。
「ヨーコ・・本質出てるよ～、清楚バリアが切れてるよ～」と恭子が二ヤで言った。
「恭子の熱が強いから・・溶けたじゃない」とヨーコが二ヤで返した。

「清楚はバリアだったの・・毎日が楽しいわ～」とユリカが爽やか二ヤで言った。
「楽しめていない女性がいますね～・・カスミ、固まってるよ」と蘭が満開二ヤで言った。
「律子母さん、あなたが悪い・・こんな最強の娘達を育てて」とカスミがウルで言った。
「何言ってるのカスミ・・まだ全員揃ってない状態なのに」と母が二ヤで返した。

「マキ先輩・・シズカ先輩が、準備してるそうですよ・・最終兵器を」と美由紀が二ヤで言った。
「うっそ！・・マリ出撃体制なの・・怖いよ、シズカ」とマキが驚いて言った。

「私・・泣いちゃうよ、怖くて泣いちゃうよ」と恭子がウルで言った。
「私・・素早く魅宴に逃げようかな・・今にもそこから入って来そう」とヨーコがウルで言った。
「嬉しいな～・・マリちゃんに会える気がする」とユリカが嬉しそうに笑った。

「それは怖すぎる・・ユリカ姉さんとマリの出会いだけでも」とマキがウルウルで言った。
「マキ・・怖いってな～に？」とユリカが爽やか二ヤで言った、マキはウルで返していた。
「今なら大丈夫ですよ・・マリちゃん来ても、豊君にスリスリするだけだから」と美由紀が笑った。
「恭子を、強烈に威嚇しながらね」とヨーコが笑った。
「だから～・・泣いちゃうって言ってるでしょ・・豊、何とか言って」と恭子が豊にウルで言った。
「俺は恭子の人生の部分には、口出ししないよ」と豊が微笑んだ。
「豊・・今場合は二ヤだよ」と蘭が満開で微笑んだ。
「そうでした、間違いました」と豊が笑顔で返した。
「楽しいですね～・・ありがとう、緊張感を解いてくれて」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

「ほら～・・ヨーコの演技が下手だから、ばれてる」とマキが二ヤで言った。
「恭子よ・・豊君に頼りすぎだよ・・狂う子出せば良いのに」とヨーコが恭子に二ヤで言った。
「だいたい・・美由紀が生意気なのよ、ヨーコを見て・・サイン出すから」と恭子が美由紀に二ヤを出した。

「私、リアン姉さんに怒られたから・・自分の店を持つ覚悟があれ

ば。
挑戦出来るって・・最初に諦めから始めるなって、強く熱く言われた。
嬉しかった～・・だから集中してますよ。
今は限界カルテットを、射程距離に捕らえようと思っています。
私らしく生きるために・・油断しないで見せて下さいね。
憧れの先輩は・・ずっと憧れでいて下さい・・豊君のように」

「美由紀・・生意気だよ、射程距離は遠いよ」と恭子が微笑んだ。
「あんたがどんなに小僧と過ごしても・・3年の差は埋められないよ」とマキが微笑んだ。
「たとえ、小僧の瞳に自分の姿を映して・・あんたが自分の心を見ても、圧倒的差は埋められない」とヨーコが微笑んだ。
「あっ！・・ヨーコ、言っちゃった」とマキが二ヤで言った。

「そうだったの！・・嬉しいよ、そうだっのね・・私はまだまだだった」とユリカが目を潤ませて言った。
「そっか～・・それで、でも・・それならなおさら凄い」と蘭が満開で微笑んだ。
「私は昨夜の台詞を・・正式に認めます」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
全員の笑顔に見られて、美由紀は照れた笑顔を出していた。

「くそ～・・感動したじゃないか、美由紀」とカスミが不敵で微笑んだ。
「シオンも嬉しいです・・シオンも分かりました、エースの瞳に映る自分の姿・・偽りの無い姿ですよね」とニコちゃんで言った。
「そうだとしても・・全裸の自分を映す事は出来ない・・それも12歳で」と蘭が微笑んだ。
「駄目ですよ、蘭姉さんは・・近い将来、その状況が来ますから」

と美由紀が二ヤで返した。
「ありがとう、美由紀・・じゃあ最初から、疑問に思ってる部分を解明しよう」と蘭が微笑んだ。

「まずは、イメージの話・・脳のイメージに反応した詳細」とカスミが豊に微笑んだ。
「ん～・・美由紀頼むよ」と豊が美由紀に微笑んだ。
「仕方ないですね～・・その代わり、後で1つお願い聞いてもらいます」と笑顔で返した、豊も笑顔で頷いた。

「私は小僧の話を沢山聞きました、多分・・誰よりも。
それが小僧と私の約束です、小僧の健常者としての経験と、感じた事を話すというのが。
小僧は自分でも言いますが、成長過程で、人より回り道や、寄り道をします。
とかく社会は真っ直ぐ進めと言いますが、小僧はキョロキョロしながら歩きます。
草むらを掻き分けて覗いてみたり、暗闇や洞窟に入ってみたり。
本当に好奇心の塊です、暗ければ暗いほど覗いてしまうんです。
小僧はある時、大きな仮説を立てました・・今でも基本はそれです。
その変化に影響を与えたのは、マリです・・マリの話は途中らしいですから省きます。
マリの不思議な力・・その【時】に対する執着、小僧はそれで感じた。
そしてある漫画を読んで、そして老人たちの戦争の話を加味して・・仮説を立てた。
ヒトミと交信できた時に、その仮説を完成させました。
それは・・脳が心を支配しようとしているという・・仮説です。
そうでなければ、あの戦争の説明がつかないと言っていました。

あの戦争は、脳に支配された人間が始めたのだと。
そうでないと人間同士が、あそこまで殺しあう事は出来ないと。
その結論に辿り着きました、それからですね・・策略に敏感になったのも。
小僧は仮説で物語を作りました、紙芝居です・・私も絵を描かされました。
そして自分より年下だけをこっそり集めて、紙芝居を見せていました。
面白話に仕上げて、伝えたい部分を強調して。
２２枚の大作を完成させました、その内容を簡単に説明すると。
美しい景色を見て感動するのも、好きな人にドキドキするのも。
血を見て怖いと思うのも、防御の為の心の言葉だと。
そして満足するのや、諦めるのは・・脳が心を支配しようとする行為だと。
闘っているんだと、人の心は・・自分が指示を出すんだと、常に脳と闘ってる。
心が脳に指示を出し、体が動く・・脳はそれが不満なんだと。
脳は全てを取り込んで、記憶という回路を武器にする。
心の武器は・・愛と経験なんだという事に、辿り着きました。
この仮説は、年下にしか話しません・・年上には絶対に話さない。
でも間接的に伝えますね・・小僧は好きな人には、満足をさせません。
豊君が言ったのは、小僧が脳で感じたイメージに反応したんです。
私達には良く分かります、それは小僧がずっと伝えてくれたから。
ヨーコ先輩が言った、小僧の右手が、ヒトミの左手のようだったと。
さすがヨーコ先輩だと思いました、その感性も表現方法も。
私はずっと思ってたけど、限界はトリオからカルッテットになりましたね。
確かにさっきの小僧の初動時は、ヒトミの左手と同じ動きでした。

心が直接指示を出して動かした、だから【気】が出なかった。
小僧が言います、【気】というのは・・脳が何かを要求しているから出るんだと。
殺気なんて、完全に脳の策略だと・・多分、脳は生きることに飽きていると。
心に支配されない世界を望んでいると・・その世界とは・・死なんだと。
小僧は到達しようとしてる、心だけで体を動かす世界に。
その教えは・・絶対にヒトミが授けたものです。
小僧はさっき、勝てるかもしれないと思って、勝てるシーンをイメージした。
その脳の要求に、豊君が反応した・・豊君の凄い部分です。
私は思っています・・豊君の不敗神話。
その不敗の本当の意味・・それは一度も、脳に負けた事がないという事実だと。
豊君の強さ・・それは心が直接、体を動かす事が出来るという事だと。
私も小僧も・・そう思っています」

美由紀はその想いを直接伝えた、美由紀の言葉の力が静寂を連れてきた。
「美由紀、よっぽどのお願いだな・・俺を持ち上げすぎ」と豊が微笑んだ。
「持ち上げてないよ・・感じてるままを、言葉に乗せただけ」と美由紀が笑顔で返した。
「素晴らしかったよ、美由紀・・女子で始めて感じた・・追い越してたよ、心を」とユリカが微笑んだ。
「美由紀・・私も言います、あなたが店を出す覚悟があるなら・・絶対に出来ますよ」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「その時は・・情熱姉妹に入ります」と美由紀が嬉しそうな笑顔で

返した、カスミがウルで返した。
「そうなったら・・勝也は大変だね・・夜街に、マキとヨーコと美由紀が存在したら」と母が笑った。

「それは大変だ・・父さん心配で毎日出て、肝臓壊しますね～」と恭子が微笑んだ。
「それはリアンが阻止するでしょう・・リアンが目指す女帝になるのには、勝也父さんの存在が不可欠ですから」とユリカが微笑んだ。
「ユリカ・・リアンは進路をとりましたか、その方向に」とユリさんが真顔で聞いた。

「マキを感じ、由美子に出会い、美由紀に触れて・・自然に開花しましたね。
あの圧倒的熱が・・その熱の意味を感じていますね。
美由紀に出来ると言った時のリアン・・恐ろしく、強く熱かったです。
覚醒を始めました・・愛には愛で応える、その本質が」

ユリカは確信的に強く言葉にした。
「勝也がリアンの話をした時の目は・・若い時に、飛鳥の話をした時の目と同じでしたよ」と母が微笑んだ。
「その言葉をリアン姉さんが聞いたら・・泣きますね、炎を上げて」と蘭が満開で微笑んだ。
暖かい何かが包んでいた、私はマリアを抱いて深い眠りの中にいた。

豊と恭子とヨーコが挨拶して、帰って行った。
母とユリさんと蘭で病院に行った、ユリカは部屋の掃除に帰った。
カスミが帰り、レイカが来て、美由紀はレイカと遊んでいた。
私はレイカの声で目を覚ましたマリアに起こされて、マリアを抱いてレイカの所に行った。

「小僧・・トイレ、今のうちに行っとくよ」と美由紀が微笑んだ。
私はマダムに2人を頼み、美由紀を押してＴＶルームを出た。
強い日差しが迎えてくれた、美由紀は楽しそうに笑っていた。
○○デパートに行き、身障者用トイレの前で、美由紀を待っていた。
出てきた美由紀を押して、雑貨屋に寄って、一番街のベンチでアイスを食べていた。

「美由紀・・デートか？」と親父の声がした、珍しくスーツを着て立っていた。
「父さん、素敵です～・・同伴ですね」と美由紀が二ヤで返した。
「ちょっと組合の会議があってな、今から懇親会なんだよ」と美由紀に微笑んだ。
「父さん・・私、リアンさんの仕事する姿が見たい」と美由紀がウルで甘えた。
「いいぞ・・小僧、美由紀と来いよ」と笑顔で言って、夜街に歩いて行った。
『美由紀には、とことん甘いな～』と二ヤで言って、美由紀を押してゴールドに向かった。

ゴールドの入り口で、ボーイ頭に挨拶して。
美由紀にすぐ終わると言って、美由紀をフロアーの見える位置で待たせて、小部屋に走った。
小部屋には千鶴とケイコがいた、私を見て千鶴が抱きついた。
『サービス良いな～・・さすがゴールド』と抱きしめて二ヤで言った。
「鈴から聞いたよ、ありがとう・・嬉しかったよ」と千鶴が囁いた。
『千鶴・・ありがとう、ごめん時間無いから、業務連絡』と体を離して笑顔で言った。

「待ってました・・どうぞ」と千鶴が微笑んだ。
『明日・・蘭を頼みます・・そして明後日、セリカをＰＧに出したい』と笑顔で言った。
「了解・・嬉しいね～・・蘭と仕事が出来るなんて」と嬉しそうに笑った。
『蘭もそう言ってたよ・・じゃあ明日来るね』と笑顔で言って、ケイコに手を振って部屋を出た。

走って美由紀の場所に行くと、美由紀の後ろにセリカが近づくシーンだった。
私は少し距離をとって、その出会いを見ていた。
「そんなに興味があるの？・・挑戦者歓迎中だよ」とセリカが流星の笑顔で声をかけた。
「金脈を探してました・・掘り当てましたか？」と反転して美由紀が微笑んだ。
「今から・・でかい金脈を掘り当てる」とセリカが微笑んだ。
「それ、どこに売ってるんですか？・・瞳に流れる電飾」と美由紀が笑顔で返した。
「非売品・・教えない・・私はセリカ、よろしく」と屈んで視線を合わせて微笑んだ。
「私はエースの飼い主の、美由紀と言います・・よろしくです」と笑顔で返した。

「美由紀が飼い主なのか～・・繋いどきなよ、悪い病気持ってるから」とセリカが笑った。
「セリカ姉さん、噛まれましたね・・感染してます～」と美由紀が二ヤで返した。
「うん・・だから噛み返した」とセリカも二ヤで言った、美由紀も笑顔で返していた。

『楽しいのか・・そんな会話が』と私が後ろから二ヤで言った。
「楽しいよ～・・・ねぇ、美由紀ちょうだい」とセリカが流星二ヤで言った。
『駄目～・・俺の玩具だから。
セリカ、明日蘭がゴールドに入る、そして明後日セリカがＰＧだよ。
セリカ・・誓いを守りたいなら、蘭に挑めよ』
流星の流れを見ながら、笑顔で言った。
「了解・・やってやる、見せてやるから」とセリカが微笑んだ。
『楽しみにしてるよ・・見に来るからね』と笑顔で返して、美由紀とエレベーターに乗った。
セリカが美由紀に手を振って、美由紀も笑顔で手を振っていた。
『美由紀・・ご機嫌だね』と通りを押しながら笑顔で言った。
「うん、皆・・ストレートに伝えてくれるから、嬉しいよ」と返してきた。
私は呼び込みさん達に挨拶をしていた、美由紀も笑顔で挨拶してるようで。
キャンディーやクッキーを沢山もらって、美由紀の膝の上は豪華になっていた。
私が美由紀と、ＰＧのエレベーターに乗ろうとすると、声がした。
「待って～・・・乗るから～」とホノカが走ってきた。
『美由紀・・ホノカさん、ＰＧに週２で入ってるの、２０歳だよ』と美由紀に紹介した。
「会いたかったのよ～美由紀ちゃん・・ホノカです」と屈んで華麗に微笑んだ。
「美由紀です、よろしくです・・ホノカ姉さん、誰にも内緒ですよ」

と美由紀が微笑んだ。
「何？何？」とホノカが楽しそうに微笑んだ。
「私・・今まで会った、夜の女性の中で・・外見はホノカ姉さんに、一番憧れます～」と美由紀が笑顔で言った。
「嬉しい～・・ねぇ、カスミには言って良い？」と華麗二ヤで言った。
「意地悪言われた時の返しなら」と美由紀がニヤで返して、ホノカが笑顔で微笑んだ。
エレベーターを降りて、ホノカが笑顔で美由紀を押していった。
私は指定席で準備の確認をして、ＴＶルームに入った。
美由紀を抱き上げて、ホノカの隣に下ろした。
裏方４人組が打ち合わせをしていた、ホノカと美由紀は笑顔で話していた。
『ハルカ・・明日、蘭がゴールド・・明後日、セリカがＰＧ』と笑顔で言った。
「了解・・今夜はシオン姉さんに、お任せでローズに行くね」とハルカが微笑んだ。
『大丈夫だよ、ホノカも動きが自然になったし・・サインはそんなに必要無いから』と笑顔で返した。
「私は？・・まだかな～」とホノカが華麗に微笑んだ。
『とりあえず・・ミチルを先に動かすよ。
その時はホノカがいないと困るから、女帝ミチルの代打は。
ミコトとカスミ、ナギサとリョウ、蘭とセリカで回す。
ホノカの腕の見せ所だよ、カスミとリョウのスナック対応。
実力の違いを見せ付けて良いよ、冷や汗かく位の』

美しい笑顔のホノカに、二ヤで言った。
「冷や汗・・ホノカがあまりにも駄目だから、かくんだな」と不敵全開でカスミが入ってきた。
「カスミ・・絶望して、博多に帰らないでね」とホノカが華麗二ヤで返した。
「ホノカ・・女としての限界感じて、ジンに走るなよ」と最強不敵で返した。
「銀河の奇跡・・強い星ですね～」と美由紀が微笑んだ。
「何さ・・美由紀が、一番良い称号持ってるくせに～」とカスミが不敵で返した。
「確かに・・永遠の片想い・・良いよね～」とホノカが微笑んだ。
「情熱姉妹の、永遠の片想いです」と美由紀が威張った。

私はその漫才を聞きながら、奥に置いていた由美子の絵を取って、マダムの前に出た。
『マダム、後でこれを女性の控え室に飾らせて下さい・・これが由美子です』と笑顔で言って、マダムの目の前のテーブルに置いた。

静寂の中、全員の瞳が吸い寄せられていた。
「由美子ちゃん・・良かったね」とシオンが泣いていた。
「沙紀・・素敵過ぎるよ・・愛に溢れてる」とカスミが目を潤ませた。
「由美子・・絶対に伝えてみせるから、耳を澄ましていてね」とホノカが囁いた。
「うん・・私も、伝えてみせるよ」とハルカが囁いた。
「由美子・・大丈夫だよ、怖くないんだよ・・沙紀がそう教えてくれたでしょ」と美由紀が微笑んだ。
暖かい空間で、マダムが微笑んでいた。

「もちろん良いよ、飾ってくれ・・控え室は禁煙にするかい」とマ

ダムが笑顔で言った。
その時に、母とユリさんと蘭が帰ってきた。
「私帰って、ユリカ姉さんと来るから・・何を運んどけば良いかな？」と満開で微笑んだ。
『取りあえず、上着のシャツと体操服と日記だけで良いよ・・教科書は借りるから』と二ヤで返した。
「今日着てた制服と荷物は？」と蘭が満開二ヤで言った。
『ユリカの車に置いてきた』と笑顔で返した。

「蘭・・家まで送って、先に愛の巣を見せてね」と母が二ヤで言った。
「やばい・・姑に見せるほど、片付けてない」と満開ウルで返した。
「それは楽しみですね～・・チェックします」と母二ヤ継続で言った、蘭はウルウルで返していた。
「何なのかな～・・ユリカ姉さんの、家にお泊りわ？」とカスミが不適で言った。
「美由紀が家出したから・・小僧の側じゃないと、寝れないってね」と蘭が満開で微笑んだ。
「え～・・楽しそうだな～・・明日のお泊り、ユリカ姉さんに交渉しよう」とカスミが私に不敵を出した。
強く暖かい波動が、ＯＫを示していた。

『不敵だから・・微妙な返事だった、明日位にマチルダ来そうなのに』と二ヤで言った。
「やばい・・ゴマ擂らないと」とカスミがウルで言った。
母が挨拶して、満開蘭と出て行った。

「素敵な絵ですね、由美子ですね・・自立した」とユリさんが絵を見て薔薇で微笑んだ。
『女性の控え室に、暫らく飾ります・・明確にイメージできるよう

に』と笑顔で返した。
そう言って絵を取って、４人組と控え室に向かった。
ハルカが覗いて誰も着替えていないので、私が一番目立つ場所に掛けた。

「由美子ちゃんなの！・・可愛いね、沙紀ちゃん素敵だね～」と奥からウミが出てきて微笑んだ。
私とハルカは笑顔で頷いた、ウミは優しい瞳で絵を見ていた。
『ハルカ・・マダムの業務命令、控え室に禁煙マーク張っといて』と笑顔で返した。
「了解・・張らなくても、吸わないだろうけどね」と笑顔で返してきた。
私は指定席で、準備の確認をした。
裏方４人組も準備が整ったらしく、５人でＴＶルームに戻った。
松さんとエミ・ミサが来ていて、賑やかなＴＶルームに松さんの笑顔があった。
そこに久美子が来た、全員に挨拶をして、美由紀を見て嬉しそうに微笑んだ。

「私は久美子です・・ここでピアノを弾いてるの、レンの妹です」と久美子が美由紀に微笑んだ。

「美由紀です、よろしくです・・演奏、楽しみにしてます。
私・・ペダルが踏めないから、無理だって・・ピアノの講師の人に言われて。
それで諦めてました、ピアノってそういうもんなんだって。
でも小僧が教えてくれました、本当に伝えたい時には関係ないんだって。
見せて下さいね、私の諦めは・・間違ってるという事を」

美由紀は笑顔で言った、久美子の瞳の輝きが増した。

「その講師は、音楽を知らない人だったのね・・美由紀、ペダルなんていらない。
技術も・・基本さえしっかりしてれば、関係ない。
五線譜に書かれた音階もリズムも、ルールじゃないんだよ。
見ててね、美由紀・・私の求める音楽を」

久美子は輝く笑顔で強く言った、美由紀も嬉しそうに笑顔で頷いた。
女性達は久美子を見ていた、その無限の可能性に心躍らせていた。

その頃、羽田に緑の瞳が舞い降りた、沢山の視線を浴びて、モノレールに乗っていた。
その手には、アメリカのスポーツ誌が握られていた。
マチルダは感じていた・・その意味を感じようとしていた、夕暮れの東京を見ながら。

この後のリアンの変化・・確かに凄かった。

その当時、夜街の仮説として語られていた、リアンとユリカの将来。

ユリカが公然と、次の時代はリアンだと宣言した。

それはリアンを後押しする為であり、自分は秘密の覚悟をしていたからだろう。

リアンは大ママやユリさんとは違うものを、夜街に提示した。

リアンは下の世代の女性達からも、圧倒的に人気があった。

大ママとユリさんとミチルは、その雰囲気が作り出すものが、近寄りがたかった。

本質は3人とも気さくなのだが、多くの伝説がそうさせていたのだろう。

ユリカが消え、大ママがフロアーを降り、ユリさんが東京兼務になった時。

リアンは女帝と呼ばれた、そして共同体もジンの派遣会社も、手助けしてくれた。

その熱い言葉で、若い挑戦者達に語りかけた。

【あなたなら、出来るよ】・・そう優しく微笑んでいた。

その言葉は、リアンが２０年以上、繰り返した言葉だった・・シオンに。

リアンの熱に乗り伝えられる、その言葉こそが・・若い挑戦者達の支えだったのだろう。

私は女帝と呼ばれてるが、それはカスミとマキがいたからです。

私はまだまだ、人間として、ユリカには及ばない・・だから、前を見てるんだ。

いつかユリカに再会した時に、自慢話をする為に。

カスミの披露宴で、リアンがそう挨拶を切り出した、泣き顔のカスミを見て泣きながら。

私はユリさんと蘭と、女性達の涙に囲まれて。

ユリカの席を見ていた、カスミが来ないことを分かっていても用意した。

リアンとユリさんに挟まれている、誰もいない・・ユリカの席を・・・。

一本道の果て

不思議なベールに隠された、鮮明に映らない世界。
現実のリアルな世界だけを見るのは、息が詰まってしまう。
どこかで非現実を追いかける、納得のできる答えなど無いと知りつつ。

６時少し前に、ユリカと蘭が笑顔で来て、続いて北斗が来た。
私は美由紀が焼肉定食が食べたいと言ったので、それを注文していた。
女性達がテーブルを囲み、食事を始めた。
この日からホノカも一緒に食事をしていた、賑やかな食事風景に、松さんの笑顔が絶えなかった。

「じゃあ、マキ・・マリ第二章」と蘭が微笑んだ。
全員の期待の視線を浴びて、マキが笑顔で頷いた。

「結局、私達３人は・・明確な答えを出せずに、おやつを食べていました。
食べ終わる頃に、小僧がニヤニヤ顔でやって来ました。
私達はその顔に腹が立って、シズカが小僧を正座させて問いただした。
マリの能力をどう感じているのかと、かなり強く言った。
小僧は笑顔で答えました・・そんなに驚くような事じゃないよ。
小僧・・・マリは何かを見てるけど、それが何か分からないよ。
シズカ・・さっきのトランプに仕掛けは無いんだね？
小僧・・・それはないよ、俺もあんなに早くめくれると思わなかった。
マキ・・・なぜトランプであれをやろうと思ったの？

小僧・・・マリと美由紀と3人でトランプで遊ぼうと思って、マリに教えたら。
マリがババ抜き連戦連勝で、神経衰弱をしたんだよ。
そしたら、マリが一回で全部開いたんだ。
恭子・・・どうしてそれが、驚くような事じゃないなんて言えるんだ！
シズカ・・遊んでる時のスピードは？あんなに早くなかったんだね。
小僧・・・うん・・やる度に早くなっていくよ。
マキ・・・お前、和尚に預言者っていたのかな～ってきいたんだろ。
恭子・・・なぜだよ、絶対信じないお前が。
小僧・・・うん・・マリに会った日、少し交信できて。
その時に言われたんだよ、突然・・ナハだよって。
俺、何の事だか分からずに、ありがとうナハだねって言ってたんだ。
次の日の社会の時間、先生に沖縄の県庁所在地を聞かれた。
恭子・・・怖い・・やっぱり怖い。
マキ・・・それでマリに夢中になって、預言者扱いか～。
シズカ・・県庁所在地って、今習ってるとこなのか？
小僧・・・違うよ、先生の話がそれて、沖縄返還の話になって聞かれたんだ。
すごい勉強出来る子って感じになったよ、那覇だけで。
シズカ・・その後、何かあっただろ？・・それだけで預言者とは言わない。
ここからの話は、私もためらいます・・本気で怖いから。
マリの小僧への伝達を、和尚が書いていて、今日見に行って確認しました。
だから間違いないです・・でも作り話と思って聞いて下さい」

マキは二ヤでそう言った、全員が頷いた、私の横にエミが座っていた。
エミの瞳は好奇心に溢れ、強く輝いていた。

「マリは小僧が那覇と答えた日、小僧がありがとうって言うと。
小僧にこう伝えてきた、その時は何の事だか誰にも分からなかった。
小僧ちゃん・・ヒトミ来る、ミホ来る。
蘭・・蘭だね、お花の名前の場所。
百合が香り・・咲き・・由美子来る。
そう小僧が教えてくれたけど、私達も分からなかった。
今なら誰でも分かりますよね、小僧も私達もヒトミが現れた時には怖かった。
その時にはマリは退院していて、いなかったけど・・背筋に冷たい汗が流れました。
小僧はその事も有って、ヒトミに執着します。
そしてミホに出会って、家出して東京で蘭に出会います。
私達は・・東京の蘭が、そんなに重要人物なのかと考えていました。
そして今年の夏に、その本当の意味を知ります。
今日、和尚がその書いた部分を訂正しました、咲きの部分の漢字を。
それを花が咲くの【咲き】で書いていましたが、可愛い画家の沙紀の名前に。
和尚は、これならどうじゃ・・ワシでも少し怖いがね。
笑顔でそう言ってました、私も久しぶりに、背中に冷たい汗が流れた。
その和尚が書いた、マリの語録・・その表紙に小僧が書いた題名。
【マリの預言書】と小僧が書いています、私達は悪ふざけだと思

っていました。
でもヒトミの登場以降、その題名が現実味を帯びてきます。
マリは小僧の事と、美由紀にしか提示していません。
美由紀の部分は、後で美由紀本人に話してもらいます。
マリは産まれて初めてだったのでしょう、その存在に出会ったのが。
自分と交信が出来・・自分の個性を認めてくれる。
そんな人間に出会えたから、嬉しくて小僧の未来を見たのでしょう。
小僧はどんな気持ちだったのでしょうか、蘭姉さんが・・その源氏名を名のった時に。
小僧はマリの預言書を、一切見ようとしません・・先入観を持ちたくないからでしょう。
その後の、小僧がマリに促す覚醒は・・私達には驚きの連続でした。
小僧は・・マリに伝えられた名前を、自分では書き残していません。
全てを和尚に話して、和尚が書きとめています。
小僧はそれを見ない、多分・・二度と見ない。
和尚は私達にも、小僧が出会う前の未来の部分は、見せてくれません。
そこに何が書かれているのか、和尚しか知らない。
小僧は和尚に言っています、和尚が墓に持って行ってくれと。
自分には必要が無いからと、言っているそうです。
今日、預言書の残りの枚数を、こっそり数えました。
３枚有りました・・その部分に何が書かれているのでしょうか。
それは和尚しか知らない、小僧もマリも覚えていないでしょうから。
シズカは、ヒトミが現れてから・・マリとの関係を続けています。
マリに勉強を教えながら触れ合ってる、でも一度もその力を引き

出そうとしてません。
マリに自覚させたい、その後で目覚めないと・・駄目な気がする。
シズカはそう言っています、あの科学の申し子が、夢中になる非科学的な存在。
マリ第二章はここまでにします、覚醒と目覚めは・・第三章からのお楽しみにして」

マキはさらっと笑顔で言った、作り話のように。
「マキ・・今の部分だけでも、秘密にしてる名前があるね？」とユリカが爽やか二ヤで言った。
「ありますけど・・それは、内緒にしときます」とマキが笑顔で返した。
「感覚的には、マキの言うとおり・・作り話と思っていた方が良いですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ、全員が笑顔で頷いた。
「誰まで覚えてた・・正直に述べよ」と蘭が私に満開二ヤで言った。

『正直言うと・・蘭までだよ・・百合が香り、咲き・・そんな言葉は覚えてなかった。
マリの伝達は不思議なんだよ、言葉にすると忘れていくような感じで。
だから和尚に話した、和尚は何でも書き留めるから。
マリの預言書って書いたのは、ヒトミが亡くなった翌日。
実はあの日・・成人式の日・・看護婦さんが迎えに来て、病院に入ると。
１階の誰もいない受付に、マリが母親と立っていた。
そして伝えてくれたんだよ・・ヒトミは幸せだと感じてる、ヒトミの願いを聞いて。
そして挑んでね・・何があっても、諦めないで。
その意味こそが、未来に続く道になるよ。
そう強く伝えてくれた、マリは知っていたんだろう・・ヒトミの

終演を。
だから俺は・・由美子に可能性を感じている、マリがあの時に伝えてきたのは。
由美子に続く道だと言ったんだから・・俺が親父と喧嘩した原因。
それは親父が前日に言ったんだ、ミホを諦めたのかって強く言われた。
その時は、諦めてないって返したけど、ずっと心で感じていたんだ。
俺はどっかでミホを諦めてるんじゃないかって、もう一人の自分が問いかけ続けた。
だから翌日、親父に怒られて・・自分が悪いのを分かってて、反抗したんだ。
親父に反抗したんじゃない、もう一人の自分に反抗した。
そして感じたんだ・・家にいたら駄目だって、何も始まらないって。
その心を背負って・・若草公園のベンチで、教会のマリアを見てたんだ。
マリの伝言で覚えていた・・マリアという名前を、思い出していたんだよ』

私は正直に話した、蘭の満開を見ながら。
「美由紀のを教えて？」とカスミが微笑んだ。

「私は絵で貰いました、マリちゃんが直筆で描いてくれた。
それは学校らしき場所で、スロープを登っていく、車椅子の少女でした。
私はありがとうと言って受け取って、その時には意味を感じませんでした。
私が６年生になった春、今の中学校を見に行きました。
同じだったんです、校舎も体育館も花壇の配置まで・・マリちゃ

んの絵と。
もちろんスロープは有りませんでしたが、リアルに想像できました。
だから私はあれほどこだわったんです、普通の中学に行く事を。
マリちゃんが不可能じゃないと、伝えてくれたから。
私は小僧と一緒に、腕の筋力を鍛えました・・スロープを登る為に。
スロープが出来上がった校舎を見た時に、涙が溢れました。
寸分違わぬ光景を見たから、沢山の愛情と、マリちゃんの気持ちを感じていたから。
嬉しくて、マリちゃんに心で語り掛けた・・ベストを尽くすと誓いました。
マリちゃんの能力・・私は預言だとは思っていません。
強い気持ちで、努力した後に辿り着く場所を、教えてくれるのだと感じています」

美由紀は笑顔で言った、女性達の笑顔が見ていた。
「そっか、未来は決まっていない・・努力すればここまで出来るって、提示なのか～」とハルカが微笑んだ。
「正夢みたいなもんなんだね、このシーンどっかで見た、みたいな」とレンが笑顔で言った。
「マリを最終兵器にする、シズカも怖いね～」と蘭が満開で言って。
「どうやるのか・・楽しみだね～」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「由美子は恵まれてる・・ベストなメンバーが揃ってる」と北斗が嬉しそうに言った、全員が笑顔で北斗を見ていた。

「今夜の魅宴は凄いでしょうね、リアンの全力は怖いですから」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「新記録を出しますよ、リアンは気付きましたから・・美由紀に出会って」とユリカが爽やかに微笑んだ。

「気付いたんですかね・・抑えてたんでしょか？」と美由紀が笑顔で返した。
「再確認したんだよ、それはリアン姉さんには喜びだったよ」と蘭が満開で微笑んだ。
『リアン・・最近、無意識に抑えてたよね・・海竜の件以降』と私が真顔で言った。
「愛に愛で返せなかったからね・・リアンには辛い事だった」とユリカが真顔で言った。

「あの～、何に気付いたのかが、知りたいんですけど～」とカスミが照れて微笑んだ。
ユリさんとユリカと蘭が互いを見て、３人で私に二ヤを送ってきた。

『もう・・振るんだから～・・リアンは無意識なんだよ。
俺はリアンの一番凄い所は、曲げない事だと思ってるんだ。
リアンは、北斗とユリさんの下で、夜の仕事を覚えたよね。
そしてライバルであり、親友であるユリカがいる、この３人は炎じゃない。
北斗も今は炎だけど、元々というか本質は違うと思ってる。
北斗のは取り込んだ炎だと、そしてそれを自分の物にした。
それも凄い事なんだと思ってる、北斗の凄さ・・その協調性なんだよ。
そして説明は不要だけど、ユリさんは遥かに広く暖かいし。
ユリカに至っては、炎の真逆の水なんだよ。
でもリアンはその３人の誰の影響も受けてない、リアンは誰からも影響を受けない。
それこそがリアンの本質だと思う・・炎は迷わないし、他を求めないんだ。
リアンはリアンという存在が好きなんだ、だからリアンで在り続けようとする。

もちろん無意識でやってるんだろう、だから最近は少し炎が抑え気味だった。
海竜の件があって、その後シオンが自分の手を離れた。
リアンは考えてたんじゃないかな、自分の本当の幸せが何かと。
でもそれが迷宮に入る、リアンは考えたら駄目なんだよ。
無変換で言葉が出てる時が、一番リアンらしいと思う。
今日、美由紀に出会って感じたんだろう、美由紀の唯一の望みを。
美由紀の望みは、美由紀であり続けることなんだよ。
両足の短い、車椅子に乗る・・美由紀でいたいんだ。
リアンはそれを感じ取った、そして無意識に戻った。
リアンらしいリアンに、火力を意識しない・・極炎の世界に。
幸せが何なのかなんて、分かりもしない事を考えない。
リアンは棲む世界が違う・・誰の影響も受けない、他を求めない。
だから手に入れた、最強の火力を・・全てを焼き、灰すら残さない、極炎の炎を。
一度でも何か他に者に憧れ、要求したら届かない・・一本道の果てにある世界。
リアンは又歩み始めた・・その一本道を、多分リアンは無意識に到達する。
最強の女帝に・・リアンが最も優れてるから、同姓との気持ちを通わす事が。
大ママやユリさんとの違い、リアンには壁が無い・・棲んでる場所は遥かに上だけど。
その棲む世界の違いで、相手が感じる心の壁も、リアンは焼き尽くしている。
リアンが見せる世界は、次の段階を提示すると思う。
それが今から楽しみなんだよ、一本道を歩く背中を見るのが』
私はリアンを想いながら、正直に言葉にした。

「やっぱりね、あなたのリアンに対する愛情は深いよね。
だから海竜の事も、突っ込んで行けたし。
エースはリアンを常に感じている、リアンにはそれが分かる。
だからエースを愛し続ける・・愛には愛で応え続けるんだね」

ユリカが爽やかに微笑んだ、私も笑顔で頷いた。

「そうだよね～、リアン姉さんが女帝候補だからとか。
シオンの姉だからじゃない、リアン姉さん自体が好きだからやっている。
ユリカ姉さんに対するものとは違う、愛の形で」

蘭も満開で微笑んだ、私は照れた笑顔で返した。
「何種類あるんだ・・愛の形が」とカスミが不敵を出して言った。
「それは無限ですよ・・特に下の少女に対してわ」と美由紀が微笑んだ。
「そうそう、下の少女に対しては・・数限りなくありますね～」とマキが二ヤで言った。
「話題が尽きない男だね・・私も最近楽しくて」と北斗が二ヤで言った。
「シオンも楽しみが増えました～」とニコちゃんで言った。

女性達が笑顔で準備に行き、ユリカが店に行き、美由紀を連れてシオンが指定席に行った。
美由紀を押すシオンが、ニコニコちゃんで楽しそうだった。

私は４人娘と夕食を食べた、マリアの天使が全開モードだった。
『マリア・・ご機嫌だね』と隣のマリアに笑顔で言った。
「みゆき・・まちるだ」と天使で返してきた。
『マチルダ、近いんだね・・楽しみだね～』と笑顔で返した、４人

娘の笑顔があった。
４人娘は楽しそうに食事をしていた、私は食べ終わり指定席に向かった。
歩きながら、久美子の強いリズムを聞いていた。
美由紀が聴いてるから、最初から飛ばしてるな～と思っていた。

指定席に着くと、ピアノの横に美由紀がいた、真剣に久美子の弾く姿を見ていた。
美由紀の後ろにシオンがニコちゃんでいて、美由紀と久美子を見ていた。
四季とユメ・ウミが入り、美由紀を囲んで話していた。
美由紀は笑顔で挨拶をして、楽しそうに話しているようだった。

私は指定席でタバコをチェックして、座って聴いていた。
「ローズを覗きに来れないね・・残念だ」と後ろからマキが言った。
『見に行くよ、美由紀には久美子がいるし』と振り向いて返した。
私はマキのワンピース姿を見て驚いていた、その女性らしいシルエットに。
「ジロジロ見るなよ・・少し恥ずかしいんだから」とマキが照れて微笑んだ。
『ハイヒール履くなよ、ノッポさん』と二ヤで返した。
「蘭姉さんのプレゼントだから、嬉しいのよ～」と笑って、シオンの側に歩いて行った。

マキは、四季やユメ・ウミに冷やかされ、照れて微笑んでいた。
「か～・・背が欲しい、それだけは無理だけど」とカスミが入ってきて二ヤで言った。
「意識すれば伸びるよ・・そうなんでしょ、人の体は」と蘭が満開二ヤで言った。
「しかし遺伝ってのは強いんだね～・・醸し出す雰囲気が同じだよ」

と北斗が笑顔でマキを見ていた。
「進化した姿が怖い・・マキも一本道だから」とカスミがウルで言った。
「何言ってるのよカスミ、あんたは私と同じ匂いを感じてるんだから・・頑張りな」と笑顔で言って、北斗がセンターに歩いて行った。
カスミは最高の笑顔で、その強く美しい後姿を見ていた。

蘭とカスミがセンターの女性達に加わり、ハルカとレンが私服で入場した。
そして静寂が訪れる、真っ赤なドレスを着たナギサが現れた。
神聖な場所に深々と頭を下げて、顔を上げるときに、華やかさが溢れ出していた。
ナギサは女性達を見て微笑んだ、その微笑に何かが棲みついていた。
《魔性が入った！・・ユリカ、ナギサは一晩で魔性を手に入れた》
と心で囁いた、小さな波動が返ってきた。

「見惚れたね、エース」とナギサが最強華やかに微笑んだ。
『うん・・さすがナギサ、魔性も手に入れてるね』と笑顔で返した。
「あれは欲しかったよ、リョウの魔性なら」と微笑んで、女性の方に歩いて行った。
ナギサは美由紀の前で屈み、笑顔で自己紹介をしていた。
美由紀も笑顔で挨拶をして、得意の出会った時に笑顔を作る言葉で、ナギサと笑っていた。

久美子が全員の登場と時間を感じて止まった、シオンが美由紀を押してベストな位置についた。
久美子は美由紀に微笑んで、一度上を向いた、そして集中した顔で鍵盤を見た。
戦士が出ていた、出征する覚悟を決めた瞳で見ていた。
久美子はいきなり鍵盤を叩いた、強い音だった。

初めて聴く強いジャズが流れた、久美子は腰を浮かせていた。
鍵盤を見ずに、前を見て弾いた・・表情豊かかに。
美由紀は圧倒されていた、その迫力の響きに・・そして腰を浮かして弾く、久美子を見ていた。

短い曲ではなかっただろう、しかし一瞬の出来事のように感じた。
久美子は最後に歓喜の表情で終わり、美由紀に笑顔で右手の拳を突き出した。
美由紀は車椅子を押して、久美子の右手に自分の右手の拳を当てた。
久美子は席を立ち、美由紀を抱き締めた・・その時に拍手が起きた。
受付にキングが来て、笑顔で拍手をしていた、それで我に返って女性達が拍手をした。

私はキングに駆け寄って挨拶をした、キングが美由紀を紹介しろと言ったので、美由紀を呼んだ。
『梶谷さん、美由紀です・・美由紀、梶谷さん・・称号は、夜の帝王』と美由紀に二ヤで言った。
「美由紀です、よろしくお願いします・・王子様をお持ちですか？」と美由紀が微笑んだ。
「残念だが・・子供はいないんだよ、今は妻もいません」とキングが笑顔で答えた。
「お寂しいですね、私でよければ・・お手伝いさんで伺いますよ」と美由紀二ヤで返した。
「それは素敵だけど・・請求額が怖そうだね、その笑顔は」とキングが楽しそうに言って、名刺を出して後見人と書いた。

「何か困った事があった時には、それを見せなさい・・あまり無茶するなよ」と笑顔で言ったキングを、カズ君が案内した。
美由紀はその名刺を見て、嬉しそうに笑顔で頷いた。
久美子が美由紀を押して、楽しそうにＴＶルームに帰っていった。

私は3番にシオンを連れて行って、キングに挨拶をした。

『キング、俺・・魅宴のリアンを見に行くので、シオンが開店までお相手します』と笑顔で言った。

「おう、俺も勝也の兄貴と交代で、リアンを見に行くよ・・シオンちゃん、どうぞ」と笑顔でシオンを招いた。

「よろしくお願いします」とシオンが深々と頭を下げて、ニコちゃんで座って水割りを作りだした。

女性達の視線が強かった、私はカスミと目が合い、二ヤを送った。

カスミは不敵を我慢していた、キングの方向に不敵を出せまい、そう思って3番を後にした。

フロアーを出る時に振り向くと、キングとシオンが笑顔で盛り上がっていた。

それを入場したユリさんが見て、薔薇の微笑が出ていた。

私は美由紀を迎えに行き、エレベーターで降りて通りに出た。

夏の熱が覚めやらぬ、下からの温度を感じていた。

美由紀のご機嫌な背中を押して、狭い通りを急いだ、炎が燃え上がるのを感じながら。

ナギサは吸収する女だった、その部分も北斗と同じだった。

ナギサは不思議な女だった、その自由な心を隠さなかった。

ホストで失敗した経験も、自分のステップアップに利用した。

私はナギサがＰＧを任された時に、称号をくれと言われた。

私は考えずに即答した・・【放浪の女神・・風の渚】

ナギサは喜んでいた、風の渚のフレーズを大切にしてくれた。

ナギサが夜街を去るのは、ナギサが３３歳、私が２３歳の時である。

父親が病で倒れて、母の手助けをする為に、故郷の京都に帰った。

ナギサが宮崎に来た理由を、ナギサの送別会で聞いた。

それはやはり風のような生き方だった、帆を広げ風に任せるような。

ナギサは京都で結婚して、今は歴史ある、大きな旅館の女将をしている。

私は年に何度か訪ねる、華やかな笑顔に会いたくて。

その心は還暦が近い今でも、風の中にいる・・京都の桜吹雪の中に存在する。

美しい放浪者・・風の渚・・永遠に自由な心を持ち続ける女神。

PRIDE

危険だから立入り禁止だと言う、校則も社会も。
そのルールが教えてくれた、その場所に何かを隠していると。
ルールが提示していた、危険こそ魅力的だと。

私は狭い通りを、美由紀を押して歩いていた。
呼び込みさん達が笑顔で美由紀に声をかけた、美由紀も笑顔で応えてるようだった。
『一気に有名人になったね～・・美由紀は目立つからな～』と魅宴のエレベーターの中で言った。
「皆、優しいね・・特別な目で見ないよ」と嬉しそうに微笑んだ。
『挫折や後悔をしてる人が多いんだって、今から行く店の女帝が言ってたよ』と笑顔で返した。

エレベーターの扉が開き、入口に向かうと、ボーイ頭が歩み寄った。
「今日も素敵なお客様をお連れで」と笑顔で言った、美由紀も笑顔で返していた。
『勝也さん来てますか？』と笑顔で聞いた。
「お見えです、ご案内します」と言ったボーイ頭に付いて、奥のＢＯＸに向かった。
勝也は一人で来ていた、魅宴は開店前で女性達が集まり緊張感があった。
勝也にはヨーコが付いていて、私は美由紀を抱き上げて勝也の隣に座らせた。

「オペラの舞台の幕開けみたいな、素敵な緊張感です～」と美由紀が親父に微笑んだ。
「リアンの凄さだよ、これだけの緊張感を作らせる」と親父が笑顔

で返した。
「ヨーコ先輩も、お店では違いますね～」と美由紀が二ヤで言った。
「美由紀、その笑顔はやめて・・バリア張ってるんだから」とヨーコが笑顔で返した。
その時に大ママに連れられて、リアンが真っ赤なドレスで入ってきた。
静寂の中、フロアーのセンターに立った、親父と美由紀を見て微笑みを投げた。
「今夜いよいよ、リアンが魅宴のフロアーに立ちます。
私はずっとこの時を想像してきました・・私は贅沢な女です。
ユリカが存在していた時に、リアンも欲しかった。
それは自分と同じ匂いがする女だったから、そして私より強い炎だったから。
リアンと蘭のコンビを見て、私は嫉妬を覚えました。
その軽やかなコンビネーションと、熱を主張していたからです。
リアンは学生時代、苦しんだと言っています・・誰にも認められずに。
その強烈な個性は、日本では浮いていたのでしょう。
ラテンの血が流れているような、流れてる血流の温度が違うような。
その熱い存在を感じて下さい、女として。
リアンは変化をしない、一度も変化を求めなかった。
北斗とユリに育てられたのに、一度も無いものねだりをしなかった。
今・・ここに立つリアンが、今までで一番熱い・・そう確信しています。
私も、ユリカも・・リアンよろしく」

大ママが強く言葉にした、リアンは笑顔で頷いた。

「どうしてでしょう・・人は迷いますね。
私も多くの迷いを抱えていました、認められたいと強く思っていた時期もあります。
今も・・迷いの中にいるのでしょう、でも前に出ます。
そう決めました、考えない・・答えの出ない事を。
私はリアン・・炎の女・・燃え尽きるまで、燃え続けるだけです。
今夜・・お世話になります、よろしくお願いします」

リアンは笑顔で言った、瞳の極炎の温度を感じるほど強かった。
「よろしくお願いします」と女性達が返礼した。
リアンはミコトと2人で、笑顔でＢＯＸにやって来た。
ヨーコが席を立ち、２人が笑顔で挨拶をした。
親父と美由紀の間にリアンが入り、親父の横にミコトが座った。

「私はミコトです、よろしくね」とミコトが美由紀に微笑んだ。
『美由紀です、よろしくお願いします・・ミコトさんは、何系か分かりませんね～』と美由紀が笑顔で返した。
「その部分が、私の魅力なのよ・・研究してね」と余裕で微笑んだ。
「パパ・・早く当てて、ミコトの本質・・お父様って呼ばれたいんでしょ」とリアンが極炎ニカで言った。
「確かに難しいな・・少しもったいないね、トップを目指さないのは」と親父がミコトに微笑んだ。

「嬉しい言葉です・・２年前まで、迷ってました・・でも綺麗に結論が出ました」とミコトが微笑んだ。
「ほほ～・・その結論に至らしめた、要因は？」とリアンが笑顔で聞いた。

「存在感ですね・・私が夜の仕事を覚えたのは、ユリカ姉さんのヘルプからです。
ユリカ姉さんを、ずっと心で追い続けています・・今でも、その生き方を。
そして2年前、ユリカ姉さんが独立して感じました。
私はトップを目指していたのでないと、自分を探していたのだと。
この世界で、トップを狙うべき人間ではないと感じました。
それでも狙う事は、自分を偽る行為だから、自らが選んだ仕事を愚弄する行為だからです。
私には、この世界では永遠に超えられない、2歳上の2人が存在します。
リアンとユリカという、圧倒的な存在。
私は伝えられない・・この世界で、その2人のように伝える事が出来ない。
そう確信して、気持ち良いほどの結論がでました」

ミコトは流れる言葉で話した、私は驚きながら聞いていた。
その言葉の流れに、ミコトの熱い部分が乗っていた。
そして感じていた、ミコトこそがトップを目指すべき人間じゃないのかと。

「良いね～・・ミコトの言葉は、お世辞に聞こえないよ」とリアンが微笑んだ。

「知識に裏付けされてるよな、今リアンのように、心をそのままに話したけど。
知識と経験を加味している、そして今の言葉には誤解がある。
リアンとユリカの存在が大きすぎて、大切にし過ぎるあまり。
ミコトの一番コアな部分で、その存在を見れなくなっている。
俺の感想を1つだけ言うよ、ミコト・・お前こそがトップを狙う

べき女だった。
俺はそうずっと覚えておくよ・・ミコトという素晴らしい女性をね」
親父は笑顔でミコトに言った、ミコトは嬉しそうに微笑で返した。
「ありがとうございます・・本当に嬉しい言葉です」とミコトが笑顔で返した。
「さすが、パパ・・エースを産んだだけあるね～」とリアンが極宴ニカで言った。
「産んだのは、律子・・パパはやめろって、変な響きで聞こえるだろ・・美由紀の笑顔が怖いよ」と親父が笑顔で言った。
「美由紀から報告して、律子姉さんに・・私とパパは怪しいって」とリアンが二ヤで言った。
「了解です・・父さん、外出禁止令が出ます～・・ドンマイで～す」と美由紀が二ヤでいった。

「美由紀・・何が欲しい？・・俺は物で釣るよ」と親父が二ヤで返した。

「仕方ないですね～、じゃあ設計図を書いて下さい。
ピアノを弾きたいから、片手で自由に高さを調整できる、椅子の設計図。
父さんの設計図で、豊君とシズカ先輩が作ってくれれば。
私は必死で楽しめますから、お願いしますね・・パパ」
美由紀は笑顔で言った、リアンもミコトも優しい笑顔で見ていた。
「おやすい御用さ・・美由紀、疲れたら休めよ」と親父が笑顔で言った。
「大丈夫です・・小僧が休まない限り、私も休まない・・明日が必ず来るとは限らないから」と美由紀が笑顔で返した。

「美由紀・・その時がもし来たら、パパに設計図書いてもらいなよ」とリアンが微笑んだ。
「はい、リアン姉さんの言葉・・響きました、どんな言葉よりも」と美由紀が笑顔で返した。
「何の設計図だよ・・もったいぶるなよ」と親父が笑顔で聞いた。

「私が、この世界には挑戦出来ないって言ったら。
リアン姉さんに怒られました、それが言い訳の言葉だったから。
リアン姉さんが言ってくれたんです、強く熱く。
店を持つ覚悟があるなら、私にも出来るんだって。
本当に嬉しかったんです、そのストレートな言葉が熱くて。
本気で言ってるんだと分かって、凄く響きました」

美由紀は笑顔で言った、その笑顔が嘘偽りが無く、喜びを表現していた。
「美由紀、私もそう思うよ・・出来るんじゃなくて、トップを狙えるよ」とミコトが美しく微笑んだ、美由紀は嬉しそうな笑顔で返した。

「約束するよ、もしその時が来たら・・俺が設計して、改装してやる。
成功間違いなしだよな、美由紀の言葉は大切な想いに満ちているから。
それに、夜街のエースが・・召使だからな。
どんな事があっても、美由紀だけは守り抜くだろうから。
それにお前は、ユリに認められている。
ユリから電話があって、明日ＰＧに業者を入れる。
ＰＧのトイレを一室改良するんだよ、身障者用にな。
美由紀・・感じてろよ、その研ぎ澄まされた感性で。
そして今のように伝えろよ、次世代の子供達に・・諦めるなと。

人間は素敵な生き物だと・・伝え続けろ。
俺は誰よりも、シズカや小僧よりも・・美由紀に期待する。
成長して、どこに辿り着くのかをね・・楽しみにしてるよ、美由紀」

親父の言葉が優しかった、美由紀は笑顔で聞いていた。
「ありがとう、父さん・・行ってみます、自分が行ける所まで」と美由紀は笑顔で言った。
3人の優しい笑顔に囲まれて、美由紀も楽しそうに笑っていた。
しばらくリアンの蘭の面白話で盛り上がり、客が徐々に入りだしたので。
私は美由紀と挨拶をして、魅宴を出た、美由紀はご機嫌だった。

通りを曲がった所でそれにぶつかった、黒いスーツの集団が誰かを出迎えていた。
私は黒いベンツが止まっていたので、それを避けて反対側に渡ろうと思っていた。
呼び込みさん達の緊張感で、その集団が何なのか分かっていた。
私が渡ろうとした時に、誰かが出てきたようだった、私は意識して視線を逸らせていた。
しかし次の瞬間、夜街が静寂に包まれる・・美由紀の声で。

「こんな場所に、こんな大きな趣味の悪い車を止めたら・・私のイカス車が通れないよ～」と美由紀が大声で言ったのだ。
夜街関係者も、通りがかった人々も、全員凍結したようだった。
私は慌てて集団を見た、やくざの組長が笑顔で美由紀を見ていた。
その横にミスター望月と海竜の姿もあった。

「ごめんよ～・・美由紀、怒るなよ～」と初老の組長が歩み寄った。

「嫌・・もう許さない、２本も足があるのに・・こんな事して、もう嫌い」と美由紀がプイをした。
「小僧、助けてくれよ～・・美由紀に嫌いと言われると、俺も辛いぞ」と組長が私に言った。
『美由紀・・親分、反省してるって・・今回だけは勘弁して、手打ちにしなよ』と私は美由紀に笑顔で言った。
「小僧がそう言うなら、今回だけは勘弁してあげます・・お爺」と美由紀が笑顔で言った。
「良かったよ～・・社会見学も程ほどにね、気を付けて帰りなさい」と組長が笑顔で言った。
「ありがとう、お爺・・お爺も気を付けてね・・流れ弾に当たるなよ」と美由紀が二ヤで言った。
「了解・・最新の注意を払うよ」と組長が笑顔で言って、ベンツに消えた。
私は笑顔のミスターと海竜に笑顔で頭を下げて、美由紀を押してＰＧを目指した。
この件以来、美由紀は夜街で【アネゴ】と呼ばれるようになった。

『美由紀、脅かすなよ・・いくら仲良しの、ご近所だからって』と私はＰＧのエレベーターの中で言った。
「なんか、お爺・・最近大変なんだって・・だから元気付けたのよ」と美由紀が笑顔で返してきた。
『色々大変なんだね、どんな世界も』と笑顔で返して、裏からＴＶルームに入った。
久美子と４人娘が遊んでいて、私は美由紀を抱き上げて、その中に下ろした。
美由紀も笑顔で遊びに加わったので、私は指定席に向かった。
客席は満席で、熱が高かった。
シオンが一人なので、女性達も内々にサインを繋いでいた。

3番はキングにホノカが付いていた、華麗な笑顔が溢れていた。
「美由紀は、大丈夫かな？」と蘭が来て満開に微笑んだ。
『うん、全然問題無いよ・・順応性が強いからね』と笑顔で返した。
「楽しみだ～・・眠れるかな～」と微笑んだ。
『俺は一人で寂しい』とウルで返した。
「可愛い事、言えるようになったじゃない・・頑張れ～」と満開二ヤで言って、戦場に戻った。

私はシオンに宿題してくると告げて、TVルームに戻った。
エミ以外の3人は眠りに落ちていて、3人のチェックをしてテーブルに宿題を持って行った。
「あら、美由紀ちゃんは宿題無いのに、エースは有るんだ～」と久美子が二ヤで言った。
『俺は学校から期待されてるから、特別なんだよ』と二ヤで返して。
『美由紀、最後の3枚付き合って』とウルで言った。
「頑張ったね、残り3枚まで漕ぎ付けたのか～」と美由紀が微笑んだ。
「さすが美由紀ちゃん、お勉強出来るんだね」とエミが笑顔で言った。
「エミちゃんに、出来るって言われる程じゃないよ」と微笑んだ美由紀の横に座った。

私は夏休みの追加の宿題を、美由紀に聞きながら完成させた。
久美子とエミのニヤニヤ顔に、ウルウルで対抗しながら。
『よ～し、俺の夏休みも終わった～』と嬉しさのあまり言葉が出た。
「長い夏休みだったね」と美由紀に二ヤで言われた。
「私も長い、最高の夏休みだったよ」とエミが少女の笑顔で言った。
「うん、私も・・忘れられない夏休みだった」と久美子が微笑んだ。

『夏休みか～・・後５回しか経験出来んのか～・・大学行こうかな～』と呟いた。
「もう、エース・・大学は夏休みの為に行く所じゃないでしょ・・それにエースが大学に行っても、退屈なだけでしょ」とエミに笑顔で言われた。
「可愛い女子大生を引っ張って来るんなら、大学でも何でも行って来い」とマダムが二ヤで言った。
『女子大生なんて、四季のようなの見つけるの苦労するだけだから・・もう計画は出来てるよ』と二ヤで返した。
「５年後の計画を述べよ」と久美子が二ヤで言った。

『〇〇ＴＶの社長の貸しを使って、東京の大手ＴＶ局にバイトで潜入して。
芸能界で芽が出ない、売れないアイドルを引き抜く。
アイドルを目指したんなら、負けず嫌いだし・・目立ちたがり屋だろうから。
それに華があるんだろうし・・多分、覚悟も出来ると思うんだ。
少しでも売れた子は駄目、ずっと葛藤していた子を探し出す。
そしてステージはそこだけじゃないと、引っ張って来るよ。
今から楽しみだよ、どんな少女がいるのかがね』

私は二ヤで言った、久美子と美由紀が二ヤで聞いていた。
「それは凄そうだね～・・本当にやりそうで、怖い」と久美子が二ヤ継続で言った。
「私も東京ＰＧを見に行こう」と美由紀が笑顔で言って。

「私もね、私の中学入学祝いで、エースが東京に連れて行ってね。
美由紀ちゃんみたいに、ホテルで・・私も抱っこして、１２歳の私を。
その時に感じたいから・・美由紀ちゃんの心を」

エミが強い瞳で言った、私は嬉しくて笑顔で返した。
「エミ、それは全裸になるって事だね～」と美由紀がニヤで言った。
「それが出来るかどうかを感じたいの、そんなに難しい事なのかが・・今は分からないから」とエミが笑顔で返した。

「そうだね、でもエミなら出来るよ。
エミには今から5年、エースが側にいるんだから。
その存在が当たり前に成ってるよ・・感じてみてね。
エミの心と体で・・その時に教えてね、エミの心を。
私と久美子姉さんだけにでも、楽しみに待ってるね」

美由紀は優しく語りかけた、エミは強い瞳で頷いた。
マダムと松さんの笑顔が優しかった、エミは元気良く歯磨きに向かった。
戻ってきたエミを抱き上げて、チェックをしながらエミを見ていた。
少し照れた笑顔の、大切な存在を。

私はエミをベッドに寝かせて、美由紀が大丈夫と言ったので、ローズに向かった。
夜街は火曜であるのに、人通りが多かった。

全体的な生活の向上が、大人達の背中を押して、増えた収入を吐き出させていた。
そのレールは無意味な時代に向いていた、まさに泡のような時代に。
誰の物でもない、ただ権利を取得してるだけの土地に付加価値を付け。
成長は永遠に続くと嘯き、何かを見失ってしまった。
ただ楽しいだけの、黄金の時代。
バブルが口を開けていた、そこにしか行き場が無いように。

私がローズに入ると、満席状態だった。
私は業者を装って、カウンターの奥に進んで、厨房に入って見ていた。
ＢＯＸには、１４人と１０人の団体が入っていて、レンとハルカが別々に付いていた。
もう１つのＢＯＸは親父で、建設業者７人を連れている、いかつい団体だった。
親父の席にはローズの女性と、マキが入っていた。

「良いね～、良い経験になるよ・・日頃どれだけ、リアン姉さんに頼ってたのかが分かるよ」とカウンターのローズの女性が微笑んだ。
『うん・・でもさすがローズ、リアン不在でも満席だね』と笑顔で返した。
「私達にも、プライドがあるからね・・お得意様に召集をかけたよ」と二ヤで言って客の前に戻った。
《予想通りの展開・・プライドか～、良い言葉だよ》と心で囁いた。
ユリカの優しい波動が来て、私は嬉しかった。

親父達が席を立ち、マキが見送りから戻って、カウンターの４人組に付いた。
カウンターの客は、見慣れぬ若いマキを見て笑顔を出した。
「若い子が好きなんだから～・・マキちゃんです」とローズの女性が紹介して、マキが笑顔で挨拶をした。
「マキちゃん、お酒飲めないの？」と４人組の中年の男が残念そうに言った。
「１８ですから・・お客さんによりますね、こそっそり飲んでみなよって言われたら・・嬉しいです」とマキが微笑んだ。
「こっそり・・飲んでみなよ～」と男が嬉しそうに言った。
「こっそりは・・言葉じゃなくて～」とマキが微笑んで、４人組に

笑顔が溢れた。
マキが薄いのを飲んでみようと言った時に私を見た、その強い瞳で感じた。
私は冷蔵庫からウーロン茶を出して、マキに微笑んだ。

マキはお客のボトルから、ほんの少しだけウイスキーを入れて。
氷を入れる振りをして私の所に来た、私はウーロン茶をマキのグラスに少量入れた。
マキは私を見て笑顔のサインを送って、氷入れに氷を入れて客の前に戻った。
ほとんどウーロン茶の水割りのグラスを手にして、マキは４人組に微笑んだ。
「じゃあ、こっそりいただきま～す」と大きな声で言って。
４人組と笑顔で乾杯をして、少し飲んだ。

「やばい・・酔ってきた～」とマキが笑顔で言った。
「もしかして、初めてなの？」と部下であろう若い男が二ヤで聞いた。
「はい、皆さんが初体験の相手で～す」とマキが笑顔で返した。
その時一瞬、レンとハルカがマキを見た、マキは視線に気付いていたのだろう。
だから余裕の笑顔をお客に出していた、その存在感を誇示するように。
《マキは怖い女だよ・・２人を強引に引っ張った、確かにリアンの再来かもね》と心に囁いて、ユリカの同意の波動を確認した。

『終わりました～・・もう問題ないです』とマキに業者風の言葉をかけて、ローズを出た。
エレベーターを待ちながら、夜景を見ていた、海風に少し秋を感じていた。

ＴＶルームに戻ると、久美子が美由紀に楽譜を見せていた。
美由紀の楽しそうな顔に笑顔を送って、指定席に戻った。
終演前のフロアーが熱く、女性達が２人欠けた時間を乗り切っていた。
３番には親父が４人で来ていた、ユリさんと北斗と蘭に囲まれていた。
北斗が親父と楽しそうに話していた、やはり昔馴染みかと思いながら見ていた。

「ローズはどうでしたか？」とシオンがニコちゃんでコーラを持ってきた。
『満席だったよ、さすがローズだね』と笑顔で返して受け取った。
「それは凄いですね～・・シオン、額縁を買いました・・大切な絵を部屋に飾りましたよ」とニコちゃんで言った。
『良かったね、シオン・・俺もシオンのあの絵が大好きだよ』と笑顔で返した。
「確かに・・緊張感がありますね～、清次郎先生が言った」とシオンが真顔で言った。
『うん・・でも楽しめてるよ、今は一人じゃないからね』と笑顔で返した、シオンはニコちゃんで頷いた。
シオンと２人でフロアーを見ていた、最後の客が帰り終演を迎えた。

女性達は美由紀の存在を知っていたので、報告会の終礼は無かった。
私はシオンとＴＶルームに戻り、美由紀の帰る準備をしていた。
サクラさんが来たので、エミを抱き上げタクシーに送った。
ＴＶルームに戻ると、蘭が満開で車椅子の後ろで待っていた。
私は美由紀を抱き上げて、車椅子に乗せて、全員に挨拶をしてシオンと出た。
蘭が満開で車椅子を押して、エレベーターに乗った。

「美由紀、大丈夫・・眠くない？」と蘭が聞いた。
「全然大丈夫です～・・私、夜型人間ですから・・普段も2時位まで、深夜放送を聞いてます」と返した。
「そっか、良かった～・・美由紀もオールナイト日本娘だね」と蘭が言った。
「はい・・不良娘です」と美由紀が楽しそうに返した。
通りに出ると、蘭とシオンが固まった。

「姉御・・お帰りですか、ご苦労さんです」と呼び込みさん達が、美由紀に笑顔で言った。
「お疲れ様・・しっかりお稼ぎ」とそんな台詞をどこで覚えたのか、美由紀が返していた。
呼び込みさんと、客引きの女性達の笑顔に見送られ、シオンとローズの下で別れた。
ユリカの店に行こうとすると、ユリカが出てきた。

「さぁ、帰りましょう」と爽やかに微笑んだ。
ユリカは車で来ていた、美由紀の為に酒を飲まなかったのだ。
「ユリカ姉さん、ありがとうです・・私の為に、お酒飲まないで仕事したんですか」と美由紀が真顔で言った。
「美由紀、気にしないで・・私クラスの女は、お酒飲まなくても問題ないのよ」と蘭に爽やか二ヤを出した。
「最近、煽るんだけど・・ユリカ姉さんが、あんたの影響だね」と蘭が笑顔で私を睨んだ。
『蘭、もしかして・・お酒飲まないと、仕事が出来ないの？』と二ヤで返した。
「まさか！出来るに決まってるでしょ・・私クラスの女なら～」と満開で返してきた。

４人で笑いながら車に乗って、ユリカの家を目指した。
私は蘭と後部座席に乗って、３人の女性の話を聞いていた。
ユリカのマンションに着いて、蘭が車椅子を押し玄関に入った。
私は玄関で美由紀を抱き上げて、ソファーに座らせて、ユリカに雑巾を借りた。
車椅子のタイヤを綺麗に拭いて、部屋の中に入れてソファーに向かった。

「小僧・・私、お風呂入るから・・よ・ろ・し・く」と美由紀がニヤニヤで言った。
「えっ！・・そうなの」と蘭が驚いた。
「動揺しましたね～・・一人で全然問題ないです、ホテルじゃないですから」と美由紀が微笑んだ。
「今の動揺は、かなり強かったよ」とユリカが二ヤで言った、蘭は満開ウルを出していた。
私は美由紀を抱き上げて、美由紀が着替えを持った。
脱衣所でユリカが説明して、美由紀は笑顔で聞いていた。

「じゃあ、終わったら呼ぶから」と美由紀が私に微笑んだ。
『了解、あまり楽しみ過ぎるなよ』と笑顔を返して、ユリカとリビングに戻った。
「ねぇ、ホテルとの違いって何？」と蘭が真顔で聞いた。
『あのホテルは、浴室とトイレが同じ場所だったから・・美由紀をトイレの近くに、下ろしたくなかったんだよ』と笑顔で返した。
「それで泡風呂なの・・小学生でそこまで考えるのね」とユリカが微笑んだ。

『うん・・俺は美由紀の存在で、考えるようになったよ。
初めての場所を歩いていても、ここなら美由紀は通れるだろうかとか。

こんな場所にチャリ止めたら、邪魔だとか・・色々考えるようになった。
美由紀の影の努力を見ていたから、戦う姿を見てたからね』
私は爽やかと満開の笑顔を見ながら、笑顔で言った。
大淀川のゆっくりとした流れを感じて、心が穏やかだった。
美由紀が学友に与えた影響は計り知れない。
私達は常に考えさせられた、どうすれば美由紀が一人で進めるのかと。
理不尽な作りの校舎も、体育館も・・そして町並みも。
常時側にいて押してやるのは不可能な事で、それが心に有ったのだろう。
だから徹底的にやった、美由紀の通学路から邪魔な物を取り去った。
私達は感じていた、自立を目指す美由紀の強い意志を。
だから影で応援していた、美由紀が自分で進めるように。
どんな授業よりも価値のある学びだった、その教師は常に笑顔で存在した。
あんなに素敵でも、凄くもなかったよ。
美由紀がこの物語の自分の部分を読んで、笑顔で言った。

俺は言葉じゃ照れて言えないから、ここで伝えるね・・美由紀。

ありがとう、美由紀・・その強い意志を見せてくれて。

美由紀がいたから、俺はここまで来れたよ・・あの美由紀の背中が、映像で流れるから。

その背中が諦めるなと、強く叫んでくれたから。

反転しない者・・常に前を向き進む者・・永遠の片想い・・美由紀。

ZERO

その道の果てに何かがあるのだろうか、誰にも分からない。
先人達は言う、行って見るしかないと。
それが出来ないのなら、普通という括りを受け入れろと、静かに言っている。

私は蘭とユリカに、リアンの魅宴光臨の話をしていた。
「小僧・・終わった～」と美由紀の声がしたので、浴室に向かった。
パジャマを着た美由紀を、笑顔で抱き上げてリビングに連れて行った。
ユリカと蘭が化粧を落としに行き、美由紀はご機嫌で、ユリカの化粧品でお肌の手入れをしていた。

『ご機嫌だね、美由紀』と笑顔で声をかけた。
「雑誌でしか見たこと無い、高級化粧品が揃ってるから・・ワクワクする～、化粧水と乳液しか使えないけど」とウルで返してきた。
『へ～・・そんな物でワクワクするのか～、女は幸せだね』と二ヤで返した。
「小僧なんか、女性の胸でワクワクするんだろ・・男は幸せだね～、単細胞で」と二ヤで返された。

「ほんとに、単細胞で困るよね～」とユリカが微笑んで。
「困った生物だよね～」と蘭が満開で微笑んだ。
「それじゃあ、召使さん・・美由紀を寝室に、女の楽しい会話をするから」とユリカが爽やか二ヤで言ったので、ウルで美由紀を抱き上げた。
６畳の和室に、布団が３組敷いてあり、私は美由紀を布団の上に降

ろした。
「おやすみ～」と3人に笑顔で言われて、ウルでベッドルームに向かった。
大きなベッドに座って、大淀川の流れを見ていた。
隣の和室は遅くまで笑い声が聞こえていた、私は知らぬ間に眠りに落ちていた。

カーテンを開けたままだったので、朝陽で目覚めた。
私はユリカの用意した、来客用の歯ブラシで葉を磨いた。
高級そうな洗顔石鹸が有ったので、興味津々で洗ってみた。
その爽やかな使い心地に驚いて、値段を見て再度驚いた。
《やっぱり、高級な物は違うな～》と納得して、キッチンに向かった。

ご飯がタイマー炊きでセットされていたので、卵焼きを焼いて味噌汁を作った。
美由紀を喜ばそうと思って、タコさんカニさんを添えた。
納豆と麦茶を用意してたら、女性達が起きて来た。
私は美由紀を車椅子に乗せて、美由紀を洗面所に連れて行った。

美由紀が制服に着替えて、蘭の化粧も終わった。
4人でテーブルに座り、笑顔で朝食を食べた。

「小僧は何でも、作るの好きだね～・・カレーも美味しいし」と美由紀が微笑んだ。
「確かにカレーも美味しいよね・・どこで覚えたの？」と蘭が満開で聞いた。
『盆と正月に、子供を集めて、カレーパーティーをしてたんだよ』と笑顔で返した。
「相当に盛り上がったんだろうね、エースの仕切りなら」とユリカ

が爽やかに微笑んだ。
「盛り上がりましたよ～・・3回目からは、母親達も沢山来ていました」と美由紀が微笑んだ。
「なぜ始めたのかな～？」と蘭が美由紀に、二ヤで聞いた。

「小僧が施設の子供達は、盆と正月が寂しいんだと感じて。
最初に正月にやりましたね、おせち料理って、子供は好きじゃないでしょ。
だから小僧が悪ガキ仲間に声をかけて、具材をそれぞれ持ち寄った。
それで施設の子供を招待したんです、公民館で作りました。
律子母さんと、施設の女性が来て・・作り方を教わったけど、全ては子供だけで作りました。
持ち寄った物も様々で、きのこも魚介も全部入れて作ったら。
もの凄く美味しくて・・全員で残さず食べましたね～。
それから全員で片付けをして、ゲームをして遊びました。
私はその時にヨーコ先輩に出会いました、とっても可愛くて優しかった。
限界トリオとは違う、優しさに触れました・・私は忘れられないんです。
その時のヨーコ先輩の言葉が、勇気を与えてくれた言葉だったから。
自分の状況を嘆いてる時間は無いんだよ、人に与えられた時間はそんなに永くないから。
私が嘆いたら、下の子達はどうすればいいの・・だから笑顔で暮らすのよ。
そう私に言ってくれた、中1のヨーコ先輩の・・強い言葉だった。
それから毎年やっています、今年のお盆もやりました。
私は哲夫という子に招待されて、行きました・・盛り上がってましたよ。

小僧が刑務所に入ったとか、厚生施設に入所したなんて噂話で」
美由紀が笑顔で言ったときに、電話が鳴った。
ユリカが出て、急に英語で話し出した。
私も蘭も美由紀も、その英会話で誰だか分かり笑顔になった。
ユリカが受話器を置いて、爽やか笑顔で戻ってきた。
「マチルダ・・今日の1時に着く便で来るって」と嬉しそうにユリカが言った。
「楽しみです〜・・マチルダさん」と美由紀が笑顔で返した。

「私・・思ったんだけど、マチルダは美由紀を欲しがるよ。
美由紀に会えば、その乗り越えた強さを感じる。
その強く伝える生き方も、言葉もね。
覚悟しときなよ、美由紀・・絶対に一緒に旅をしようと言うから」

蘭が満開笑顔で言った、美由紀も嬉しそうに微笑んでいた。
蘭と美由紀と3人で、ユリカに行って来ると言って出かけた。
ユリカが迎えに来ると言ったので、笑顔で頷いてケンメリに車椅子を積んだ。
美由紀の家に送ってもらい、美由紀を家用の車椅子に乗せて、満開蘭を手を振って見送った。
美由紀が学校の準備をして出てきたので、二人で学校に向かった。
私は夏物語を話しながら、気分が高揚してるのを感じた。
マチルダに会える喜びで、自然に笑顔になっていた。

授業を4時間、眠気と格闘してクリアーし、給食を笑顔で食べた。
昼休み、男どもが私の所にやって来て、体育祭の棒倒しの作戦を練った。
そして6時間目の英語の授業で衝撃を受ける、ミセス祥子が笑顔で言ったのだ。

「今日は、皆さんに・・生の英語を聞いてもらいます」と笑顔で言って廊下を覗いた。
そしてマチルダを連れて入ってきたのだ、教室は静寂に包まれた。
「私は小僧の彼女のマチルダです、よろしくね」と輝く笑顔で言った。
プラチナブロンドが輝いて、理想の美しさに、全員が息を呑んでいた。
マチルダは私に二ヤを出して、左前の生徒から順番に英語で話しかけた。
男子は照れた笑顔で、女子は嬉しそうに、必死に英語で答えていた。
一人一人と握手をして話していた、マチルダも楽しそうな笑顔だった。

私の隣の美由紀はワクワク顔で、自分の番を待っていた。
マチルダが美由紀と私を最後に残した、そして美由紀の横に屈んだ。
マチルダは笑顔で英語で何かを言った、美由紀もかなり難解な英会話で返した。
その時にマチルダが輝く笑顔になって、美由紀を抱き締めた、美由紀も笑顔で抱かれていた。

そしてマチルダが私の横に立った、私もマチルダの目の前に立った。
「ラスト・メッセージ・プリーズ」と私の目を見てマチルダが微笑んだ。
『Ｉ　Ｌｏｖｅ　Ｍａｔｉｌｄａ』と笑顔で返すと、マチルダが頬にキスをしてくれた。
私も自然にマチルダの頬にキスを返した、男どもの冷やかしの声を楽しみながら。
マチルダが教壇に戻り、全員を笑顔で見た。

「私は日本の教壇に立てて、本当に嬉しかった。
皆さんの英語力が、予想以上に高いと感じましたよ。
皆さんが成人した時には、世界はもっと近いでしょう。
恐れずに行って見て下さい、必ず何かを持って帰れます。
言語も文化も違う人々に出会って、感じてください。
それは人生の宝物になると信じています。
ありがとう・・楽しかった」

マチルダは笑顔で言った、美しい笑顔だった。
ミセス祥子が日直に指示を出し、全員で礼を言った時にチャイムが鳴った。
マチルダがミセス祥子と職員室に向かい、清次郎が入ってきた。
終礼が終わり、私は笑顔の美由紀を押して、職員室に清次郎と歩いた。

「全校生徒が妬むぞ・・うちのクラスだけの特別講師を」と清次郎が笑顔で言ったときに、職員室が見えた。
沢山の生徒が中を覗いていた、《田舎者め～》と思いながら近づいた。
マチルダとユリカが、ソファーで麦茶を飲んでいた。
新聞部の連中が来ていて、マチルダに話を聞いて写真を撮っていた。
私と美由紀を見て、ユリカとマチルダが挨拶をして出てきた。
マチルダが笑顔で美由紀の車椅子を押して、ユリカの車に向かった。
美由紀の車椅子をトランクに入れて、後部座席にマチルダと美由紀を座らせた。
多くの生徒が見送ってくれて、マチルダが手を振って出発した。

『中々の教師姿だったよ、マチルダ』と後ろのマチルダに言った。
「でしょ～・・夢が1つ叶ったよ」と笑顔で返してきた。

「マチルダさん・・贅沢ですね～、プラチナブロンドか緑の瞳をくだちゃい」と美由紀がウルで言った。
「仕方ないでしょ・・持って生まれた物だから～」と輝き二ヤで返した。
「私も大人になったら、プラチナブロンドに染めよ～」と美由紀が笑顔で言った。
「今以上に目立ちたいの・・美由紀は素敵だね～」とマチルダが笑顔で返した。
それから2人で掛け合い漫才をしていた、私は楽しそうなユリカの横顔を見ていた。

ユリカのマンションに着き、美由紀を浴室に連れて行った。
リビングに戻ると、マチルダがユリカの絵を見ていた。
「エース・・私も、沙紀ちゃんに会わせてくれるんだよね」とマチルダが振り向いて微笑んだ。
『もちろん・・マチルダ、ありがとう・・心強いよ』と真顔で返した。
「お礼はリンダに言って・・リンダが感じてたよ」と輝く笑顔で返された、私も笑顔で頷いた。

私はリビングでユリカとマチルダに囲まれて、マチルダが帰った後の経緯を話していた。
マチルダは時折頷きながら、笑顔で聞いていた。
話終わり、美由紀の話をしていると、美由紀に呼ばれた。
私は脱衣所で美由紀を抱き上げて、ソファーに座らせた。
マチルダも美由紀も、楽しそうな笑顔だった。

「私は、豊に会いに行かないといけなくなったよ・・美由紀の車椅子を見て」とマチルダが微笑んだ。
「アメリカは車椅子文化の、先進国なんじゃないんですか？」と美

由紀が真顔で聞いた。
「そう言われているけど、それは負傷兵が作り出した文化で・・子供用はまだまだだよ」とマチルダが真顔で返した。
「そうなんですね・・少し辛い歴史ですね」と美由紀は寂しげに返した。
「ベトナムの傷は、アメリカにも大きく深く存在するからね」とマチルダが真顔で言って。
ピンクのリュックに手を突っ込んで、ゴソゴソと何かを探していた。
そして一冊の雑誌を出して、美由紀に微笑んだ。

「NYの空港でこれが目に止まって、思わず買っちゃった。
普段は興味も無いんだけど、必要だと感じてね。
美由紀の話をユリカ姉さんに聞いて、美由紀に会って分かったよ。
美由紀・・アメリカでは、こんなスポーツも始まってるよ。
車椅子でする、バスケットボールやテニスがね」

マチルダが笑顔でそう言って、ページを開いて美由紀に渡した。
その雑誌を見た美由紀の瞳が輝いた、本当に嬉しそうな美由紀の笑顔が溢れた。
美由紀は夢中で見ていた、ユリカもマチルダも優しい笑顔で美由紀を見ていた。

「小僧が言ったことは、間違ってなかったね。
人は楽しもうとする、どんな状況でも・・どんなに難しくても。
あの時の小僧の言葉が、ここに載ってるよ」

美由紀が笑顔で雑誌を私に差し出した、私は車椅子でバスケットに興じる写真を見ていた。
「小僧が何て言ったのかな?」とマチルダが美由紀に微笑んだ。

「小僧がヒトミと交信できだして、私も前向きになれた頃です。
小僧が私に言ったんです・・ヒトミも楽しい事が好きなんだって。
私はヒトミの楽しみが分からなかった、体を動かせないヒトミの楽しみが。
だから小僧に聞いたんです、ヒトミの楽しみは何なのって？
そしたら小僧が教えてくれました、妄想する事なんだって。
私や小僧の話を聞いて、それを健康な自分に置き換えて妄想する。
それがヒトミの楽しみだから、美由紀も全部話さないといけないって。
感じた事を・・どんな障害があって、何が辛くて・・何が楽しいのかを。
ヒトミはそれを聞いて、自分に置き換えて感じるから。
それがヒトミの楽しみだと思ってるって、小僧が言いました。
私はその言葉で感じました、どうしてヒトミには全てが話せるのかが。
ヒトミは私の話を、両足の無いヒトミで聞いてくれていたんです。
だから話せた・・私はそれが分かって、本当に嬉しかった。
そして小僧が口癖にように言う、言葉の意味を感じました。
美由紀・・それが楽しいの？楽しいに繋がるの？って、小僧が言っていた言葉が。
小僧は小児病棟の子供たちに、この言葉だけを投げかけます。
楽しいを探そうって・・どんな状況でも、それは探せるはずだって。
去年の夏・・小僧はミスター望月さんと、私をサーフィンに連れて行ってくれました。
私が泳いでみたいと言ったら、小僧が望月さんに話してくれて。
車で連れて行ってくれました・・私は沖で浮いているだけで楽しかった。
サーファーの人達が、優しくて・・見守られてるのが分かって。
そして小僧が私に言ったんです、陸を見ながら・・海に浮かびな

がら。
美由紀・・何でも出来るさ、頑張ろうとか努力しようとかじゃなければ。
楽しもうと思ってれば、何でも出来るよ・・小僧が笑顔でそう言った。
私はボードに乗り、水平線上に浮かびながら、間違えに気づきました。
その当時・・私は理由は知らなかったけど、小僧が体を鍛えてて。
私も一緒に上半身を鍛えていました、腕の力をつけたくて。
私はそれが自分に必要な事だと、自分に言い聞かせていました。
この努力は必要なのだと、だから頑張ろうと・・言い聞かせていた。
そんな気持ちでいたから・・精神的に、少し辛い状況が来ていました。
小僧はそれを感じて、サーフィンに誘ってくれました。
そして私を海に入れてくれました、小僧が抱きしめてくれながら。
そして私に体の力を抜けと言って、小僧が体を離した。
私は感動しました、その感覚に驚きました・・自由だったんです。
海に浮かぶと、両足が無い事を忘れられた。
そして確信できました・・楽しもうと思えば出来るって。
私は少し離れた小僧の方に、腕だけで泳いで抱きついて。
小僧の耳元に、ごめんねって言いました。
何も分かってなかった事を、小僧に伝えて・・海に浮かんでいた。
あの時が、私の生まれ変わった時でした・・そう感じていました。
そして確かに感じていました、ヒトミの存在を・・ヒトミの笑顔を。
この雑誌に写る車椅子のプレイヤー、楽しそうですよね。
マチルダ姉さん、本当にありがとう・・素敵なプレゼントです。
いつか私も、アメリカに行ってみます・・楽しむために」

美由紀は笑顔で言った、マチルダの嬉しそうな笑顔が見ていた。
「エースは意地悪だね・・前回、美由紀に会わせてくれなかった」
とマチルダが二ヤで言った。
「そうだよね～・・出し惜しみするからね～」とユリカも爽やか二ヤできた。
「本当に意地悪だよ・・家出先を、私にも教えてくれなかったし」
と美由紀も二ヤをした。
『美由紀は知りたければ、すぐに調べられただろ』とウルで返した。
「どうやって調べるの？」とユリカが美由紀に微笑んだ。
「豊君に聞けば、すぐに分かります～」と美由紀も笑顔で返した。
「さすがの豊も、美由紀には弱いのね」とユリカが楽しそうに笑った。
「最強だね、美由紀」と言ってマチルダも笑っていた。
私は3人の笑い声に背を向けて、浴室に向かった。

私がシャワーを浴びて、着替えて戻ると、3人が笑顔で話していた。
「それじゃあ、行きますか」とユリカが言って、私が美由紀を抱き上げた。

美由紀とマチルダを後部座席に乗せて、私が助手席に乗った。
夕方の渋滞前で、スムーズに赤玉駐車場に滑り込んだ。
美由紀を車椅子に乗せると、マチルダが嬉しそうに押して、一番街に向かった。
靴屋の前でマチルダが覗いて、蘭が満開で出てきた。

「マチルダ、お帰り～」と言って、マチルダに抱きついた。
「ただいま・・蘭姉さん」とマチルダも笑顔で抱かれていた。
「どこにお出かけ？」と蘭が私に微笑んだ。
『病院に行って来るよ』と笑顔で返した、蘭は満開で頷いて見送ってくれた。

熱の高い歩道を、私はユリカと腕を組んで歩いていた。
前を歩くマチルダの、プラチナブロンドが輝いていた。

病院に着き、エレベーターで４階に上がった。
ナースステーション前で、その光景に出会った。
シズカが車椅子に座る理沙の体を測っていた、理沙の後ろには母親らしき人が立っていた。
「マチルダ姉さん！・・お帰りなさい」とシズカが嬉しそうに笑顔で言った。
「ただいま、シズカ・・紹介して」とマチルダが微笑んで、理沙の前に屈んだ。
理沙はマチルダを見て固まっていた、美由紀が理沙の側に行った。

「理沙・・マチルダさんだよ、アメリカの人だよ」と美由紀が笑顔で言った。
「リサちゃん、マチルダです・・よろしくね」と微笑んだ。
「理沙です・・嬉しいな～、初めて外人さんとお話ししました」と理沙が少女の笑顔で返した。
「今からいっ～ぱい会えるよ、理沙が大人になったら・・何処にでも行けるよ」とマチルダが微笑んだ。
「理沙でも？」と理沙が真剣にマチルダに聞いた。
「もちろん、理沙・・信じてね、自分の力を・・理沙には見せてくれるよ、美由紀姉さんがね」とマチルダが笑顔で答えた。
「うん」と理沙が元気に返した。
「よ～く見といてね、理沙」と美由紀が微笑んで、理沙が笑顔で頷いた。

「ＯＫ理沙、美由紀と同じフレームが残ってるから・・それで作ってやるよ。

美由紀と同じマシーンを・・だから理沙、諦めるなよ。
どんな事でも、チャレンジしてね・・そして探してね、理沙の望みを。
それが理沙のマシーンを作る、私と豊という男の・・たった1つの望みだよ」

シズカが理沙を見て、強く言葉にした。
「はい・・ありがとう、シズカちゃん」と理沙も強い言葉で返した。
母親が全員に礼を言って、笑顔の理沙を押して病室に戻った。

『ユリカ、マチルダを沙紀に会わせて。
俺はシズカと美由紀を、由美子に会わせる。
マチルダは明日、由美子に会ってね』

私は笑顔で言った、マチルダの輝く笑顔があった。
「了解、行こうマチルダ」とユリカが爽やかに微笑んで、笑顔のマチルダとミホの病室に向かった。
私は美由紀を押すシズカと、由美子の病室を目指した。
由美子の部屋のドアを静かにノックして、3人で入った。
北斗と祖母が笑顔で迎えてくれた、私はシズカと美由紀を紹介して、由美子の側に座った。

由美子の左手を握ると、強い温度が揺れていた。
『由美子・・楽しそうだね、今日もご機嫌ですね』と笑顔で伝えた。
《うん、やっと来てくれた、ヒトミちゃんのお友達、もう一人の人も素敵》と返してきた。
『じゃあ、もう一人の人から紹介するよ・・シズカちゃん、俺のお姉さん』と伝えてシズカを座らせた。
シズカは笑顔で由美子の手を握り、瞳を閉じた。

「由美子、私はシズカだよ・・名前に負けて、静かじゃないけど、よろしくね」とシズカが話しだした。
私はソファーに行き、美由紀の隣に座った。
「シズカちゃんさすがだね～・・経験者は、雰囲気が違うよ」と北斗が微笑んだ。
『うん・・その後の美由紀を見て、驚かないでね』と笑顔で返した。
「楽しみだね～」と北斗が美由紀に微笑んだ。
「北斗さん・・由美子は本当に強いですね、ここからでも感じます」と美由紀が笑顔で返した時に、シズカが美由紀を呼んだ。
美由紀は自分で車椅子を動かして、由美子の横に行き、由美子の手を握った。

「由美子・・駄目だよ、そんな気持ちでヒトミの妹になってるの。
ヒトミが寂しく感じてるよ・・由美子がそんな気持ちだと。
由美子・・由美子は大丈夫だよ、何も怖くないんだよ。
ヒトミは一度も怖がらなかったよ・・それは怖い事じゃないんだよ。
由美子には、お母さんも、お爺ちゃんも、お婆ちゃんもついてるんでしょ。
それに小僧も沢山の素敵な女性も・・お医者さんも、ナースの人達も。
そして由美子の大切な友達の、沙紀ちゃんも。
みんな由美子を愛してるでしょ、だからね・・由美子・・大丈夫だよ。
由美子が強い気持ちでいればね・・私は美由紀だよ。
由美子にとって2人目のお姉さんです、だから由美子に宿題を出すね。
由美子・・今度答えを聞くからね・・由美子は何が楽しいの？
それを考えていてね・・由美子・・由美子のいるその場所は。
暗い場所じゃないでしょ、ヒトミはそう言ってたよ・・白い世界

だって。
由美子・・その白い場所に描いてみてね、沙紀ちゃんのように。
由美子の色で描いてみてね・・由美子の夢も憧れも。
それが出来るまで、私が沢山の宿題を出します。
由美子が好きだから・・由美子を大切に想っているから。
私とヒトミの大切な妹・・由美子だからね。
由美子・・楽しみしてるね・・少しお休み。
また明日ね・・由美子」

美由紀の瞳は真剣だった、そして強い言葉と温度で伝えた。
私はユリアの強い波動に包まれていた、ユリカの喜びも感じていた。
北斗も祖母も美由紀を見ていた、その瞳が強かった。
美由紀は最後に笑顔で由美子を見て、優しく由美子の左手を、由美子の胸に置いた。
私はシズカと挨拶をして、美由紀を押して病室を後にした。
美由紀は少し放心状態で、背中から強い何かを発していた。

「美由紀・・行くしかないよ、美由紀にしか出来ないんだから」とシズカが美由紀の背中に言った。
「はい・・やってみます、ヒトミの親友として」と美由紀は前を見て強く答えた。
「マリが絵で教えてくれたよ・・由美子の希望は、美由紀になるんだってね」とシズカが真顔で言って。
「じゃあね・・私は、豊君の所に行ってくるよ」と笑顔で階段に向かった。

「シズカ先輩！」と美由紀が振り向いた、シズカは美由紀を真顔で見た。
「全てに終わりがある・・だから貴重なんですよね・・始まりも途中も」と美由紀が真剣に言った。

「そう思うよ、終わりに意味は無いと思ってる・・０に戻るだけだとね」とシズカが笑顔で言って、階段を下りて行った。
「私は、あの人に憧れてるんだ・・絶対に伝えて見せるよ」と美由紀が私に微笑んだ。
『肩肘張るなよ、美由紀・・笑い飛ばせよ』と笑顔で返した、美由紀も笑顔で頷いた。

ミホの病室に向かう廊下の、突き当たりの非常扉の小窓から、光が差し込んでいた。
晩夏の熱を伝える日差しに向かう、美由紀の背中にも、熱が存在していた。

美由紀は理沙に、強く生きる姿を見せ続けた。

理沙はこの時１１歳だった、私もシズカも美由紀も、理沙の病名を知らなかった。

理沙が段々と体が動かなくなる難病だと知るのは、これから約半年後の事だった。

この６日後、シズカは理沙に、ＹＵＴＡＫＡ?を贈った。

理沙はその感謝を、強い生き方で見せてくれた。

理沙は必死に車椅子を練習した、そして翌年の４月、学校に復帰して見せたのだ。

１学期を学校で過ごし、夏休みに再入院した。

美由紀は理沙を励まし続けた、理沙も戦い続けた、最後の最後まで

戦った。

２年後、理沙は動くことも、話すことも出来なくなった。

その時に美由紀は見せた、その強い想いを理沙に伝えたのだ。

由美子の伝言を、理沙に伝えた・・諦めるなと、強く伝えた。

自分も諦めないからと、美由紀は難関高校の受験に取り組んだ。

理沙は告知された余命と、戦い続けた。

そして宣告された余命を、８ヶ月延長させて旅立った。

その日が美由紀の合格発表の日だった、私は病院の廊下の長椅子に座り待っていた。

美由紀がエレベーターから出て来て、私に笑顔を向けたが、すぐに異変に気付いた。

動けない美由紀に近づくと、俯いて両手の拳を強く握っていた。

「約束は守ったよ」と美由紀が私を見上げて、無理やりに微笑んだ。

『理沙も約束を守ったんだろ、最後まで諦めなかったよ』と静かに返した。

「うん」と言って、美由紀は俯いた、その背中が震えていた。

「小僧・・１つだけ教えて・・私の想いは伝わっていたの？」美由

紀は俯いたまま聞いた。

『伝わってたよ・・ヒトミの時からね』と美由紀を抱きしめて、耳元に囁いた。

「嬉しいよ・・さぁ、由美子に会いに行こう」と美由紀が微笑んだ。

その笑顔は強く美しかった、そして瞳の奥に・・理沙が確かに存在していた。

私は美由紀を押しながら、シズカの言葉を思い出していた。

終わりに意味はない・・ただ０に戻るだけだと・・。

優しさの基点

夏の終わりを告げる事もなく、熱を発散する光に包まれている。
医療機関特有の匂いが鼻を衝き、少しの緊張感に覆われていた。
前を向く美由紀の背中は、始まりの喜びを示していた。

ミホの病室に入ると、沙紀の横にマチルダが座り、沙紀がマチルダを描いていた。
ユリカは沙紀の母親と笑顔で話しながら、沙紀の顔を見ていた。
ミホはベッドに座り、ミホの手を握って、千夏が笑顔で話していた。
私は美由紀をミホの所に連れて行き、千夏と美由紀を交代させた。

『早いね、千夏』と笑顔で言った。
「うん、早く会いたくてね・・廊下でユリカさんに会って、2人を紹介してもらったよ」と千夏が笑顔で返してきた。
『千夏・・将来の就職先で、この病院はターゲットに入ってるの？』と二ヤで聞いた。
「そりゃー入ってるでしょう・・私じゃ、かなり厳しいけど」とウルで返された。
『そうなんだ～・・難しいの？』と真顔で返した。
「学校のレベルで考えるとね・・かなりの難関だよ」と真顔で返してきた。

『そうなんだ～・・じゃあ行こうか、千夏』と笑顔で言って、千夏と病室を出た。
「由美子ちゃんの所に行くの？」と横に並んだ千夏が少し緊張して言った。
『その前に、千夏の研修の挨拶をしとかないと』と笑顔で返して、ナースステーションを覗いた。

「あら、小僧ちゃん・・誰に用事かな？」といつもの若いナースが微笑んだ。
『上の親分いる？』と笑顔で返した。
「いるよ・・ちょっと待ってね」と微笑んで、内線電話をかけて【ＯＫ】と指でサインをくれた。
私は笑顔で頷いて、千夏と階段で５階に上がった。

「ちょっと、待って・・本気で入るの？」と院長室のドアの前で千夏が慌てて言った。
『当然・・俺の知り合いが研修で世話になるんだから、ご挨拶しとかないとね』と笑顔で返して、重厚なドアをノックした。
狸院長の返事を確認して、緊張した千夏と入った。

「おっ・・珍しいね、女性連れで」と佐伯院長が笑顔でソファーに促した。
『院長・・来週から研修でお世話になります・・千夏、自己紹介して』と笑顔で言った。
「○○看護専門学校の、○○香織です・・よろしくお願いします」と千夏が真顔で言って、深々と頭を下げた。
「おお、そうですか・・しっかり頑張って・・まぁ座って、小僧も」と院長が笑顔で促した。
私は千夏と２人でソファーに座り、緊張した千夏を二ヤで見た。

「香織さんは、ＰＧに勤めているんですね」と院長が笑顔で言った。
「はい、源氏名を千夏と言います」と緊張しながら答えた。
『千夏、そんなに緊張しなくていいよ・・院長は夜の仕事に、偏見なんて持ってないから』と千夏に笑顔で言った。
「もちろん、持ってませんよ・・自分に正直にやるのなら、素晴らしい経験だと思っています」と院長も笑顔で言った。

「はい・・ありがとうございます」と千夏が少し微笑んだ。
「それで、ナースを目指す千夏ちゃんを、由美子に会わせるのかね」と院長が私に真顔で言った。
『はい・・千夏が俺に、由美子に会いたいと言った時に。
今の覚悟の、その上の覚悟がしたいと言いました。
ナースを職業とて目指すのだから、そうしたいのだと言ったと思いました。
でも・・俺はその言葉に違和感を感じました、上の覚悟という言葉に。
千夏の言った覚悟の意味は分かります、命と向き合う仕事ですから。
それ相応の覚悟は必要でしょうね・・でもその上の覚悟は必要じゃない。
俺はそう思ったから、千夏を由美子に会わせようと思いました。
由美子に会えば必ず感じる、千夏なら必ず感じると思ったんです。
もちろん俺は千夏の学校の成績も、ナースとしての適正も分かりません。
でも確信的に思ってる事があります・・千夏なら素敵なナースになるだろうと。
千夏の夜の仕事は、受身なんですよ・・ＰＧでは珍しい存在です。
でもその受身が素敵なんです、相手の話を聞くときの視線が美しい。
綺麗な姿勢で、視界の中に常に相手を捉えている。
そしてキチンと返す・・その返す言葉に、ほんの少し本音を入れているんです。
たとえ仕事としての会話でも、どこかに自分の心を入れる。
まぁ・・それが分かる、若い男はいませんけど。
俺はそんな千夏の会話が好きで、よく聞いていました。

そして思ったんです、千夏はもうナースをイメージしてるんだろうと。
強い気持ちで取り組んでいるんだなって・・そう感じていました。
そして覚悟の上の覚悟って言葉を聞いて、ヒトミの言葉を思い出した。
難病を背負っても、それ自体は自分の問題であって・・不幸な事じゃない。
体を動かせないのは、とても残念な事だけど・・不幸な事じゃない。
生きる時間が短いのは、悔しい事だけど・・不幸じゃないよ。
ヒトミが俺に強く伝えてくれました・・その言葉が、本当に嬉しかった。
それからですね、俺は病気や障害を個性と思うようになった。
千夏にも感じて欲しいんです、ヒトミの伝言を・・由美子も同じ事を伝えてくるから。
水商売をして、千夏は何かを得た・・その何かが必ず役に立つ。
千夏は必ず由美子に言葉を返す、その言葉には・・千夏の心が入っている。
俺は千夏を信じている・・だから由美子に会ってもらいます。
感じて欲しい・・由美子の想いを。
ナースとして、女として・・そして人間として』

私は隣の真剣な千夏の瞳を見ながら、最後に笑顔で言った。
「エース」と千夏は私を見ながら言った。

「よし、了解した・・千夏、４階での研修を命ずる。
私から婦長に連絡しておく、君の担当は・・沙紀と由美子だよ。
そしてこの研修は、就職試験と思ってくれ。
期待してる・・自分らしく、頑張ってくれ」

院長は真顔で言った、瞳には厳しさを湛えていた。
「ありがとうございます・・全力でやってみます」と千夏は立ち上がり頭を下げた。
私も立って笑顔で挨拶をして、院長室を後にした。

「エース・・本当にありがとう」と階段で千夏が微笑んだ。
『お礼はいらないよ・・就職が決まった訳じゃないから』と二ヤで返した。
「でも、チャンスは貰ったよ」と千夏が笑顔で言った。
『頑張ってね、千夏・・俺のさっきの台詞に嘘は無いよ』と笑顔で言って、千夏が笑顔で頷くのを見て、由美子の病室をノックした。
千夏を連れて病室に入り、祖母に紹介して、千夏を由美子の横に座らせた。
千夏は自然に手を握り、笑顔で話し始めた。
私は祖母に笑顔で一礼して、病室を出た、千夏に対してはそれが良いと思っていた。

ミホの病室に入ると、沙紀が必死で仕上げの色塗りをしていた。
マチルダは美由紀とトイレに行ったと言って、ユリカが微笑んだ。
ミホを見ると、静かに眠っていた。
私はミホの温度をチェックして、沙紀の隣に座った。
沙紀の顔を見ていた、集中していて可愛かった。

「就職の世話までするんだね〜」とユリカが私に微笑んだ。
『別に就職のお世話じゃないよ・・何もしてません』と笑顔で返した。
その時に沙紀が私を見て手を出した、私は笑顔で握った。
《小僧ちゃん、ありがとう、外人さん素敵だね》と沙紀が強く伝えてきた。

『そうだろ～・・素敵だよね』と笑顔で返した。
《沙紀・・少し迷っちゃった、マチルダちゃん、小僧ちゃんが見て》とスケッチブックを差し出した。
私は笑顔で受け取って、完全な凍結をしてしまった。

後姿のマチルダが振り向いて微笑んでいた、その場所はゴツゴツのクレーターだらけの場所で。
上空は美しい星空だった、そして間近に青い星が浮いていた。
月の上にマチルダが立っていた、ヨレヨレのTシャツにジーンズ姿で。
プラチナブロンドの輝きが美しく、微笑みの奥に深い新緑の瞳が存在した。
そしてマチルダの真横に、万里の長城のような壁が、地平線の彼方まで続いていた。
マチルダの右手の拳が、その壁に触れていた。
その右腕の筋肉の躍動で、その力強さまで、緻密に表現されていた。
無機質な空間の、一点だけ有機質な色に染められ、その緑が強烈な印象を与えていた。
マチルダの瞳は笑っていなかった、唇に湛えた微笑とは逆の、戦闘的な強い瞳だった。
そして私は絵を反転させた、気付いた事を確認するために。
反転した絵の地球には、雲のような白い部分と海のような青い部分の濃淡で。
青い瞳が描かれていた、青い瞳がマチルダを見ていた。
優しい瞳だった、その瞳だけで確信できた・・完璧なリンダの瞳だった。

私は沙紀に笑顔を向けて、ユリカに絵を渡した。
ユリカも一瞬凍結して、沙紀に爽やか最強笑顔を向けた。
『沙紀・・素敵だよ、沙紀は迷わなくて良いんだよ・・もうすぐマ

チルダの嬉いを感じるから』と笑顔で言った。
《うん、ありがとう小僧ちゃん、サインするね》と沙紀が返してきた。
ユリカが沙紀に優しく微笑んで、沙紀に絵を返した。
沙紀が黒の色鉛筆でサインをしている時に、美由紀を押してマチルダが帰ってきた。

『マチルダ、座って』と笑顔で言って、マチルダの耳元に『泣くなよ』と囁いた。
マチルダは美しい真顔で頷いて、笑顔に戻り沙紀の横に座った。
そして沙紀から絵を受け取り、いきなり立ち上がり凍結していた。
絵に吸い寄せられたマチルダの背中が、小刻みに震えていた。
マチルダは必死の笑顔で沙紀を抱きしめた、沙紀も嬉しそうに抱かれていた。
「宝物だよ、沙紀・・本当に嬉しいよ」とマチルダが輝く笑顔で言った。
沙紀も何かを伝えていた、マチルダはそれを感じてるようだった。

そして沙紀が私に手を伸ばした、私は笑顔で手を握った。
《美由紀ちゃんがケースの中》と沙紀が伝えてきた、私は笑顔で頷いた。
私は棚のケースを出して、中の絵を出した時に必死になった。
限界ギリギリだった、美由紀の絵に完全に心を奪われた。

鬱蒼と生い茂る密林の、拓けた場所に、スポットライトの様な日差しが差し込み。
美由紀が立って笑っていた、本当に楽しそうに。
美由紀の立つ緑の地表から、美由紀の両足の付け根にかけて。
植物のツルが無数に巻きつき、沢山の美しい花を咲かせていた。
その花の周りに、無数の美しい蝶とミツバチが飛び。

地表にはウサギが2羽、美由紀を見上げて寄り添っていた。
白い夏服の制服を着た美由紀の上半身に、温もりが溢れ。
胸の前で開いた両手の上で、2匹の可愛いリスが遊び。
右肩に可愛い小猿が乗って、美由紀の耳元に何かを囁いていた。
笑顔の美由紀の頭には、緑の冠が乗り、それを暖かい光が照らしていた。
美由紀の奥に広がるジャングルに、沢山の生命を感じる事が出来た。

私は沙紀を笑顔で見て、美由紀に絵を渡した。
美由紀の喜びが、その背中から発散していた。
美由紀は暫く絵に釘付けになり、ユリカに絵を渡して、沙紀の横に行った。
そして沙紀の手を握って、強く伝えた。

「沙紀、ありがとう・・最高に嬉しかったよ。
沙紀・・沙紀なら出来る、美由紀は信じてる。
私は沙紀が大好きです、だから・・沙紀、美由紀と頑張ろう。
私の大切な沙紀なら・・必ず出来るよ」

美由紀は強くそう言った、沙紀はそれを聞いて、自分でベッドを降りた。
そして美由紀に抱きついて、何かを伝えた。
美由紀は嬉しそうな笑顔になって、沙紀を見て、何度も頷いた。

「約束だぞ〜・・楽しみに待ってるね、沙紀が私を押してくれる時を」と美由紀が笑顔で言った。
その時だった、沙紀が美由紀に向かって頷いたのだ。
ユリカが沙紀の母親を連れて窓際に行った、マチルダは美由紀と沙紀を嬉しそうに見ていた。
沙紀が私に駆け寄った、私は沙紀を抱き上げて、頬にキスをした。

《小僧ちゃん、みんなをありがとう》と沙紀が伝えてきた。
『沙紀・・俺の方がありがとうだよ、沙紀に出会えて良かったよ』と強く抱きしめた。
《沙紀、出来るよ、見せてあげる、小僧ちゃんと美由紀ちゃんと、素敵なみんなに》と沙紀も笑っているようだった。
『よし・・沙紀、平仮名を覚えようね・・素敵な先生を紹介するから』と笑顔で言った。
《ありがとう、先生、楽しみ》と沙紀が強く返してきた。
私は嬉しくて、沙紀を抱いていた、振り向くと窓際で母親とユリカが微笑んでいた。
私が沙紀を降ろすと、沙紀がユリカに抱きついた、ユリカも屈んで抱きしめた。
そして沙紀が母親を見た、母親は笑顔で沙紀を見て頷いた。
沙紀も頷いて、母親に抱きついた、母親はしっかりと沙紀を抱いていた。

ユリカが真顔で歩いてきたので、3人で先に出てと言って、2枚の絵をケースに入れた。
そしてミホに、また明日と囁いて、私も部屋を出た。
1階に降りて、入り口に歩いていると、中庭に3人の姿が見えた。
3人とも、嬉しそうに泣いていた、私は少し離れてそれを見ていた。
晩夏の熱が包んでいたが、不快な暑さを感じる事は無かった。

『思う存分、泣けたかな?』と3人に歩み寄り、笑顔で言った。
「泣けたよ・・今までで一番嬉しかったよ」とマチルダが微笑んで美由紀を押した。
私はユリカと腕を組んだ、ユリカの少し高い熱を感じて抱き上げた。
ユリカは爽やか笑顔で私を見た、私も笑顔で返した。

『姫・・どこまででしょう?』と笑顔で聞いた。
「ワラワは疲れたのじゃ～・・・PGまで送ってたもれ～」と爽やか二ヤで言った。
『姫～・・・ご勘弁を～』とウルで言いながら歩いていた。
マチルダと美由紀の「ガンバレ～」と言う、応援に後押しされながら。

夜街に入る手前でユリカを下ろし、その当時話題になっていたアイス屋に寄った。
ユリカが沢山のカップアイスを買って、PGを目指した。
早出の呼び込みさんが、美由紀に笑顔で深々と挨拶をした。
美由紀も笑顔で応えているようで、呼び込みさんも楽しそうだった。

TVルームに入ると、マダムとユリさんと4人組が、笑顔で迎えてくれた。
マチルダも笑顔で挨拶をしていた、暖かい空間にマリアが眠っていた。

皆でアイスを食べていると、カスミが飛び込んできた。
マチルダとカスミは抱き合って、再会を喜んでいた。

「沙紀は変化してきたね」とユリカが私に微笑んだ。
『うん・・沙紀は全ての想像を超えてくる、感動したよ』と笑顔で返した。
「あら・・ユリカいけませんね、自分たちだけで」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「そうですね・・まず、見て下さい・・素晴らしいですよ」と言って、ユリカが私を見た。
私はケースから2枚の絵を出して、テーブルの上に広げた。
静寂が包んでいた、全員の息遣いが感じられた。

「幻想的な表現になってきましたね・・自信が出てきた感じですか？」とユリさんがユリカに聞いた。
「そうだと思います・・自分の感じてる事と、現実が重なってきた感じでしょうね」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「まさか・・それがお前の求めた、シオン効果なのか？」とカスミが言った。
『それを少しは期待したけど・・遥かに超えてくるよ』と笑顔で返した。
「シオン・・私にも見せてね、私は全てが見たい・・沙紀の全ての作品が」とマチルダが微笑んだ。
「は～い、お見せします～」とニコちゃんで返した。

「しかし美由紀、どうしてそこまで行けるの？・・私は帰ってきて、美由紀に魅了されてるよ」とマチルダが微笑んだ。
「私もまた、美由紀に教えられました・・美由紀は強引に引き出した、強い言葉と生き方で」とユリカが美由紀に微笑んだ。

「何を引き出したのでしょう？」とカスミが真顔で聞いた。
「沙紀の自己主張・・沙紀が頷きました、美由紀に・・自閉症の沙紀が、強く頷いたのよ」とユリカが爽やか笑顔で言った。
「素晴らしい・・美由紀という存在だけは、その言葉が必要ですね」と薔薇で微笑んだ。
「ユリさん、マダム・・ありがとうございます、トイレ・・嬉しかったです」と美由紀が頭を下げた。
「美由紀・・些細な事です、あなたが来てくれる事に比べれば」とユリさんが微笑んだ、優しい微笑みだった。

その時に北斗と蘭が入ってきた、ユリカがマチルダを北斗に紹介した。

２人は笑顔で挨拶を交わし、北斗がマチルダを抱きしめて、お礼を言ってるようだった。
そして北斗と蘭が、２枚の絵を見ていた、嬉しそうな笑みが出ていた。

「沙紀ちゃん・・大きく変化してるんだね」と北斗が私に微笑んだ。
「今・・何段階目なのかな～」と蘭が満開で微笑んだ。
『俺の中では、３段階だね・・全てで想像を超えてくるけど』と笑顔で返した。
「自立は美由紀担当でしょ・・あなたの次は何？」とユリカが爽やか二ヤできた。

『輝きの描写・・そして久美子の魂の響き、そこまでやっておきたい。
そして沙紀の世界が大きく広がる・・由美子を探す事で。
沙紀は感じる、その人間の内面の広さを・・必ず感じてくれる。
俺は美由紀同様、沙紀を信じてる・・必ずそれを感じると。
それで変化したら、マリに会わせる・・同じ病の、別の圧倒的個性に。
そして・・天使の描写、それまでが第１クールだよ』

私はカスミを見て、笑顔で言った。
「明日だな・・ＯＫ、見せてやるよ・・圧倒的輝きを、後悔を伝えながら、永遠の憧れに恥じぬように」とカスミが真顔で返したきた。
「今で、第何クールまであるの？」とマキが微笑んだ。
『現時点で、４クール』と笑顔で返した。
「ほほ～・・現時点で、マリより多いね」とマキが二ヤで言った。
「マリちゃんには、小僧も最後は腰が引けてたからね～」と美由紀が二ヤで言った。
「そうだったね～・・マリは刺し違える覚悟だったしね」とマキが

二ヤ二ヤできた。
『マリは特別の中の特別だから・・確かに怖かったよ』とウルで返した。

「今日は何物語ですかね～・・楽しみだ～」とハルカが微笑んだ。
「何か聞かないと、調子が出ないからね～」と北斗が微笑んで。
「私は・・本人もいるけど、美由紀第2章が聞きたいですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「賛成ですね・・私もそこにとても興味があります、マチルダには話しましたから」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「よろしく、マキ」と蘭が満開で微笑んで、マチルダが笑顔で促した。

「ヒトミと触れ合って以降の、美由紀の変化は凄まじかった。
その頃、私たちヨーコも含めたカルテットは、小僧から美由紀を紹介されてませんでした。
もちろん、話したり遊んだりしてましたけど。
だからこそ小僧は、中学の話の時に・・豊君と私達に、美由紀を正式に紹介した。
小僧と美由紀がヒトミと触れ合っている時は、私達は6年生でした。
秋になる頃にヒトミが転院してきて、翌年の成人式で旅立つまで。
4ヶ月なかったと思います、それほど短い季節でした・・でも濃密な時間でした。
私達でさえ、濃密な時を過ごした・・小僧と美由紀は、どれほどだったのでしょう。
想像すら出来ません・・想像する事が、失礼な事だと感じています。
美由紀の変化は、見ていて怖いくらいでした・・その心の本質が開花していくようで。

美由紀は小僧がヒトミの所にいると、遊戯室で他の子供達と遊んでいた。
美由紀の側には、常に哲夫が付いていました・・誰かが頼んだのでなく、哲夫の意志で。
哲夫は2年生・・ヨーコが心の開放をして、1年が経過していました。
哲夫の解放の後、小僧が哲夫を連れまわした・・豊君や私達に紹介して。
そして小児病棟に連れ出した・・小僧はその時点で、哲夫に繋ぐ事を決めていたのでしょう。
小児病棟以降は、全て哲夫の意志に任せましたね・・そして哲夫は応え続けた。
優しい人になってね・・あの母の最後のメッセージ、命を賭けた強い愛。
その意味を探すように、哲夫は向き合いました・・小僧の背中を追いながら。
優しいとは、何なのかという事を・・探し始めました。
そして出会ったんです・・美由紀に、覚醒し続けるその存在に。
哲夫は美由紀に魅せられた、美由紀の中にあると感じたのでしょう・・優しさの意味が。
美由紀も小僧がいない時は、全てを哲夫に委ねた・・自分で出来ない事は全て。
そして小僧がヒトミと交信できるようになり、哲夫をヒトミに会わせます。
私達より先に、哲夫を会わせました・・哲夫も急激な変化をしました。
ヒトミを感じて、変わりました・・哲夫の根本的な何かが。
哲夫はヒトミに語り掛けるんです・・この事はヨーコに聞きました。
私達トリオよりも、ヨーコの方が早かったんです・・ヒトミに出

会うのは。
哲夫は自分の想いを、吐き出すようにヒトミに話していたそうです。
泣きながら、強く伝えていた・・父と母との別れまで。
それまで誰にも話せなかった、哲夫の背負う・・悲しみや辛さを。
毎日毎日、同じ話を・・泣きながら伝えた。
ヒトミが聞いていたから、優しく包みながら聞いていたから。
特別室の自分とヒトミだけの世界、ヒトミの作り出す、優しく暖かい世界で。
哲夫は覚醒していきます、ヒトミの強い意志を感じたのでしょう。
そして導き出す・・哲夫の優しさを。
その話はいつかします、私達カルテットに大きな影響を与える。
哲夫の愛・・ヒトミと美由紀が強く伝えた、優しさの本質。
私達は愕然として感じました、その私達を見て・・小僧がニヤニヤしていた。
その年の年末は、楽しい季節でした・・施設と小児病棟のクリスマス会を合同で開いて。
小児病棟の遊戯室に、沢山の子供達の笑顔が溢れていました。
そして小僧が年末に、ヒトミの心を左手に誘った。
年が明けて、ヒトミの病室が笑顔で溢れました・・私達も哲夫も、自然に笑っていました。
ヒトミに語りかけて、ヒトミの優しさに触れて・・楽しい時を過ごした。
そしてヒトミが旅立ちました、葬儀には小僧の姿は無かった。
私達がヒトミとお別れしてると、斎場が静寂に包まれて。
ヒトミが眠る棺に向かい、哲夫が美由紀を押して入ってきた。
そして美由紀が笑顔で言った・・ヒトミありがとう、愛してくれて・・静かに語りかけた。
そして哲夫を美由紀が促した、哲夫はヒトミの安らかな姿を見て。
両手の拳を強く握って、心の底から搾り出すように言いました。

ヒトミ姉さん・・俺は絶対なってみせるよ、だから親父とお袋に伝えて。
哲夫は大丈夫だと、ヒトミ姉さんが伝えて・・さようなら、俺の初恋の人。
誰よりも一番好きだった・・ヒトミ姉さんの優しさが。
哲夫はそう言って、その場に土下座して・・ありがとうと呟いた。
私達は立っていられませんでした、哲夫の想いが広い空間を支配して。
でも・・この美由紀と哲夫の言葉で、全ての悲しみは吹き飛んだ。
斎場には暖かい空気が充満して、私は確かにヒトミの存在を感じました。
哲夫が美由紀を私達の所に連れてきて、美由紀をお願いしますと言いました。
俺はチャッピーに呼び出されてる、初めて俺の挑戦を受けてくれるんだ。
哲夫は笑顔でそう言って、斎場を出て行きました。
その背中が大きくて、私は嬉しかった・・哲夫が両親を背負っているようで。
残酷な境遇に対して、それを受け入れ・・前に踏み出したから。
親のいない私には・・本当に嬉しかった・・哲夫の強さが。
愛する人を見送る強さが・・優しさを抱いていたから。
母が望み・・ヒトミが伝えた・・その場所に、歩いて行くようで。
見送りながら、泣いていました・・1月の寒い日でした。
でも寒さを感じなかった・・ヒトミの温もりに包まれていたから」
マキはここで限界だったのだろう、俯いて少し震えながら泣いていた。
マキの横に座る北斗が、マキを優しく抱きしめていた。
「マキ・・ありがとう、続きは明日でいいよ・・マキ成長したね、

一週間でこんなに・・私は本当に嬉しいよ」とマチルダが優しく言った、マキは顔を上げ笑顔を見せた。

「いえ・・まだまだです、その程度で詰まって・・マキらしくもない。

マキ・・あなたの称号を忘れたの、それとも捨てるの？

小僧が唯一、限界カルテットの個人に送った称号・・灼熱のマキ。

あなたは灼熱でしょう・・リアンの極炎に対抗できる、灼熱でしょう。

マチルダを見なさい、リンダやマチルダに憧れるのなら。

マチルダを姉さんと呼ぶのなら・・ユリカとリアンを姉さんと呼ぶのなら。

自分の中に綺麗に収めなさい・・辛い過去も、厳しい現実も。

それでないと伝わらない・・マキの想いは伝わらないわ。

言葉が熱を帯びない、熱が伝わない・・砂漠の真ん中で叫ぶような。

あなたの言葉が出てこない・・マキ、少し満足感が出てますね。

明日の朝・・哲夫に会って来なさい、今の話の続きをするのなら。

哲夫に伝えなさい・・マキの気持ちを、砂漠の真ん中に誘って。

私は１６歳だろうが、娘だろうが関係ありません・・マキ、戦いなさい。

もう一人の、弱き自分と・・灼熱のあの場所で」

圧倒的迫力で、母が後ろから強く言った。

「母さん・・ごめんなさい、調子に乗ってました」とマキが真顔で謝った。

全員が動けない状況で、母は笑顔になりマチルダに近づいた。

マチルダが輝く笑顔で立つと、母が強く抱きしめた。

「マチルダ・・私は小僧の母の律子です。

小僧の母という事は、あなたの母だという事です。
マチルダ・・何を抑えているの、大切にするという事は・・そうじゃないでしょ。
伝えてあげてね・・その強い想いを、正直に。
広い世界を感じさせて・・私もいつか必ず、リンダに会いに行きます。
どんなに遠くても、たかだか距離の問題でしょ。
人は阻めないわ・・物質的な事では、どんなに高く強固な壁でも。
人と人の繋がりを、阻む事など不可能でしょ・・精神の壁を越えなさい。
マチルダ・・あなたの父親のメッセージ・・心の壁を越えろなのでしょ。
あなたは分かっている、その深い意味を・・リンダの相棒なのだから。
壁を越えて、マチルダ・・それこそが、あなたの存在です。
沙紀の描いたこの絵・・この壁を感じてね・・これは無機質じゃないよ。
壁を壊してマチルダ・・由美子のその時に見せてね、その破壊力を。
私は楽しみにしています、緑の瞳の本当の輝きが見れる時を」
母は笑顔でマチルダに言った、マチルダも泣きながら笑顔に戻り頷いた。
暖かい何かに包まれていた、ヒトミを感じさせる温もりに。
2年後、母はシズカと久美子を連れて、ニューヨークに旅立った。
シズカの留学と久美子の武者修行の為に、リンダを尋ねたのだ。
もちろん母もその前に、リンダに会っていた、だが筋を通す為に渡

米した。

母はそれから何度も渡米し、アメリカを感じていた。

身体的差別に敏感な母は、自由の国の裏側を嫌った。

敗戦国で幸せだったのかもね・・十数年後、母はそう言っていた。

この時、母がマキに強く言った言葉、嘘偽りの無い愛情が存在していた。

そんな所で満足するなと、強く背中を押していた。

マキは急激な変化を始める、その強さに熱が加わり・・砂漠の果てから響いてくる。

無変換の熱い言葉が・・灼熱の大地の上を吹き抜けて来る。

誰にも消すことの出来ない炎・・圧倒的熱量。

女王と呼ばれし者・・ＤＮＡを凌駕する・・灼熱の真希が誕生していた。

白い弾丸？

近道があるのだろうか、真直ぐな道が有ったのだろうか？
夕焼けを背に受けて歩いた、あの堤防に沿って続く道。
私は問われていた、何処に行くのかと。

「しかしマチルダ、綺麗だね～・・私の若い頃みたいだよ」と母が二ヤで言った。
「おかんも、美しすぎて苦しみましたね～」とマチルダが二ヤで返した。
「律子・・あの頃と変わらんね、飛鳥に出会った頃と」とマダムが笑顔で言った。
「まだ２０年ですからね・・まだまだ２０代の、青いお尻には負けません」と笑顔で返して、マチルダと座った。
「ユリカでさえ、青いお尻と言われましたね～」と北斗が二ヤで言った。
「青いですよ、お尻も心も・・若いですから～」とユリカが爽やか二ヤで返した。
「エース、ユリカと少し離れな・・これ以上の変化は怖いよ」と北斗が私に微笑んだ。
「賛成です・・ユリカと離れて、私を毎日抱っこしてね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

「ユリはまだ探求するんだね、自分の可能性を・・まだ見ぬユリを探す旅を」と母が微笑んだ。
「それこそ恐ろしいですね～・・やはりエースは離せませんね」とユリカが二ヤで言った。
「まぁ、ユリカは最近挑戦的ですわ・・美由紀にも、相当の責任がありますよ」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

「まぁその位ないと、張り合いがありませんから・・まだ1割も見せてもらってませんから。
ユリカ姉さんの秘めた力を・・そのベールに覆われた、好戦的な心も。
華奢な体と、水のイメージに隠してる・・魅惑のパワー。
最近妹さんが家出して、見え隠れしてますよね。
強大なユリカパワーが・・おっぱいミサイルでも、隠していそうですね～。
まだまだ覗きに行きますよ、憧れの羊水の揺り篭を目指して。
いつの日か私も揺られてみたい、羊水の揺り篭に。
そして聞いてみたい・・母の子守唄を」

美由紀はユリカに二ヤで言った、ユリカの最強爽やか笑顔が出た。
「困った姉御だよ、美由紀は・・そこに本気で行こうとするんだから」と蘭が満開二ヤで言った。

「だって～・・そうしないと見えないんでしょ、ユリさんの背中が。
私は今のユリさんの歳になるまでに、登ってみたいんです。
その頂に・・そこに吹く風を感じてみたい、どんな風が吹いているのか。
だから目を逸らさない・・リアンとユリカ、2人の姉さんの本質だけは感じたい。
青い炎も取り込んで、必ず挑戦してみせます。
私は小僧の相棒、勝也と律子の最終兵器・・永遠の片想いと呼ばれる者。
姉御の美由紀ですから・・登ってみせます、車椅子で登ってみせます」

強かった、美由紀は蘭の瞳を見ながら、一気に言葉にした。

「分かったよ、美由紀・・私も抑えない・・見せてあげるよ、蘭パワーを」と蘭が満開二ヤで言った。
「美由紀、生意気です・・私が母さんに怒られたから、私のお尻に火を点けようとして」とマキが微笑んだ。

「あれ～・・冷めたと思って、チャンスと感じてたのに～。
２年前の５月８日です、そこにいました・・熱の魂が。
私を守ってくれた、美しい戦士・・その時の言葉を受けて、小僧が贈った称号。
灼熱のマキ・・私は忘れない、その熱に焼かれたから。
熱くて強い熱が教えてくれたから・・私でも出来るんだって」

美由紀は自分の伝えたい想いを、回り道をしてようやく口にした。
マキを見ながら、美由紀不敵を出した、マキも二ヤで返した。
「ありがとな、美由紀・・冷めないよ、あんたが後ろから見てるからね」とマキも不敵で言った。
「いけませんね～、すぐに姉妹喧嘩して」と母が楽しげに笑った。
「４姉妹の姉妹喧嘩ですね～、迫力があります」とユリさんが薔薇二ヤで言った。
「まだまだじゃよ、律子と真希と飛鳥と北斗の、４姉妹喧嘩に比べれば」とマダムが笑った。

「それは怖いですね～」とユリさんが北斗に二ヤで言った。
「末娘の私は、美由紀のように強くなかったよ・・美由紀は最強だよ、今の話の流し方」と北斗が美由紀に微笑んだ。
美由紀は北斗の手を取って、私の右手を握らせた。
「分かりますよね～、北斗さんなら」と美由紀が笑顔で言った。
「うん・・かなり美由紀を怒ってるね、点火しすぎたから」と北斗が美由紀に二ヤで言った、美由紀はウルで頷いた。
「小僧は、私だけには厳しいんです・・私も女なのに」と美由紀が

ウルウルで言った。
「それは美由紀が全裸を見せたからですよ・・小僧は美由紀を、女として見なくなったんです」と母が微笑んだ。

「そうなのね、私のナイスな体が目に焼きついているのね・・可愛い奴だ」と美由紀が私に二ヤで言った。
『もうすっかり、忘れたよ』と二ヤで返した。
「もう、照れ屋さん・・小僧の全裸は見せてくれなかったし～」とニヤニヤできた。
「見せてと言ったのか！・・美由紀」とカスミが驚いて聞いた。
「はい、そうしないと不公平でしょ・・でも食いつきますね～、さすが下ネタ番長です」と美由紀がカスミに二ヤで言った。
「下ネタなら任せなさい、その部分では蘭姉さんを超えたから」とカスミが不敵を出した。
「絶対に欲しい・・カスミ姉さんの不敵」と言って美由紀は観察していた。

その時にヨーコが入ってきて、雰囲気に驚いて挨拶をした。
蘭がマチルダを紹介して、2人とも笑顔で挨拶をしていた。
「なんか美由紀が、ご迷惑をかけていませんか？」とヨーコが可愛く微笑んだ。
「さぁ美由紀、困ったね～・・天敵の登場で」とマキが美由紀に二ヤで言った。
「美由紀の天敵は、ヨーコちゃんなんだ～」とユリカが爽やか二ヤで言った、全員が美由紀を二ヤで見た。

「マキ、天敵と言う言い方は駄目でしょ・・相変わらず、表現が不良なんだから」とヨーコが清楚二ヤで言った。
「ヨーコ、やめてよ・・施設で育ったのに、そのお嬢さんオーラを出すの」とマキが二ヤで返した。

「マキ、施設にも入れなかった娘が、妬まないのよ・・私の幸運を」と清楚オーラを発散して微笑んだ。
「あらヨーコ、私が駄菓子屋の御曹子だからって・・嫉妬してるのね」とマキが二ヤで返した。
「嫉妬？・・私は今までに一度しかしてないわ・・美由紀の短足にしただけよ」とヨーコが美由紀に二ヤで言った。
「ヨーコ先輩、やっと気付きましたね～・・女は付け根で勝負です」と美由紀が二ヤで言った。

「付け根なら自信あるわ・・誰かさんみたいに、筋肉じゃないからね」とマキを見て二ヤを出した。
「ヨーコ、失礼だよ・・カスミ姉さんの事、そんな風に言ったら」とマキがカスミにパスを出した。
「子供だね～・・未使用の青い果実が歌ってるのね、付け根が不良品かもしれないのに～」とカスミが最強不敵で返した。
「カスミ姉さん、ありがとう・・勉強になりました」とヨーコが清楚笑顔で言った。
「ヨーコは可愛いね～・・それに引き換え、マキと美由紀は反抗期でね～」とカスミが微笑んだ。
「本当に困ったもんですね、カスミお姉さま～」と美由紀が少女の笑顔で言った。
「あっ！美由紀・・早過ぎるよ、変わり身が」とマキが二ヤで言って、全員が笑っていた。

ヨーコがハルカの横に座り、何か打ち合わせをしていた。
「エース、大ママの依頼・・リョウ姉さんを早めに経験させてって」とハルカが微笑んだ。
「リョウ姉さん、最近なんか凄くて・・ウズウズしてるみたいだよ」とヨーコが微笑んだ。

『よし・・明日リョウがミチルの店、ホノカは木曜でＰＧだから。
それにＰＧにはセリカも入るし・・カスミ、魅宴に出撃するか？』
私はカスミに二ヤで言った、カスミは少し緊張を出して微笑んだ。
「もちろん・・銀河３人を、互いのフォローで入れるんだな」とカスミが二ヤで言った。
『そうなるみたいだね～・・女帝３人の代理戦争』と二ヤで返した。
「心配ないですよね～・・私が敗北する事は、ないですよね～」とユリさんが薔薇二ヤで言った。
「ご心配なく・・下ネタを封印しても、圧倒的差を見せ付けます」とカスミが微笑んで返した。

「嬉しいわ、期待してます・・蘭はセリカを頼みますね」と薔薇で微笑んだ。
「了解です・・楽しみですね～、流星のセリカ」と満開で微笑んだ。
「ワクワクしてきました、セリカ姉さんを見れるんですね」とレンが微笑んだ。
「セリカ覚醒は脅威の世界ですよ・・間違いなく、最新型のエンジンです」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「ユリカ・・完璧に外しましたね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「エースが外しました、セリカの望みを気付かせました」とユリカが微笑んだ。

「そうですか・・一気に飛び出して来そうですね、あのセリカという素材は」とユリさんが４人組を見て微笑んだ。
「銀河の１つ下の世代ですね、動き出しますね・・私達の世代が」とハルカが真顔で言った。
「ハルカ・・何言ってるの、あなたとミサキは動き出してるでしょ」と蘭が満開で微笑んだ。
『まぁあまり考えないの、今から続々登場するよ・・銀河世代以降

はね、楽しみだ～』と私はニヤニヤで言った。
「悪い男だな～」と美由紀が二ヤで言って、４人組とヨーコが二ヤで頷いた

「皆さん気付いてませんね、この場所も相当に変化してますよ。
何か熱いですね～・・北斗さんとマキとヨーコと美由紀の加入で。
エースがほとんど喋らないし、驚きました。
それにユリさんとユリカ姉さんの変化が怖い、律子マミーの影響ですね」

マチルダが楽しそうな笑顔で言った。
「限界カルテットが生意気～・・その話術が恐ろしい」とカスミが不敵で言った。
「生意気なのがチャームポイントですから、美由紀ほどじゃないけど」とマキが微笑んだ。
「マキは昨夜も、ウーロンの水割り飲んで・・酔った振りして、初体験だと叫んだし」とレンが二ヤで言った。
「そうなのよ・・マキが１８って言うから、私が１９でレン姉さんが２０歳になったし」とハルカが微笑んだ。
「いけない子達だね～・・年齢のサバをよむなんて」と蘭が満開で微笑んだ。

「私も２２歳って事にします・・よろしくね、蘭姉さん」とユリカが爽やか二ヤで言った。
「通用しそうで怖い・・ユリカ姉さん、免許書見せて」と蘭が満開二ヤで返した。
「ごめんね蘭・・私は昭和３０年代生まれよ」とユリカが楽しそうに笑った。
「年齢の話題はいつまで続くの・・入れないんだけど」と北斗がウルで微笑んだ。

「あっ、思い出しました・・エースは私よりミチルの方が、５歳若く見えると言ったんですよね」とユリさんが私に薔薇ウルを出した。
『営業ですよ～・・ユリさんの美しさは、年齢を超越してます』と慌てて笑顔で返した。

「ミチル・・元気なんだね」と北斗が微笑んだ。
「もちろん、一国一城の女帝です」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
『ミチル、北斗に会いに来るって言ってたけど・・忙しいんだね』と笑顔で言った。
「ビビッてますね、ミチル・・正面切って北斗姉さんに、宣戦布告した実績がありますから」とユリさんが笑顔で言った。
『やっぱり女帝は、波乱万丈だな～』と私が言って。
「あら、私の波乱万丈は何かしら？」とユリさんが二ヤで聞いてきた。
『年末には分かりますよ・・大変な状況になったと、実感します』と二ヤで返した。

「怖いわね、ユリ・・シオンを借りて良いかしら？」と母が笑顔で言った。
「もちろん・・何でしょう？」とユリさんが微笑んで返した。
「一緒に病院に行ってもらいたくて、シオンじゃないと駄目なの」と母が真顔で言った。
「大丈夫ですね？シオン」とユリさんが真顔でシオンを見た。
「もちろんです」とシオンが嬉しそうなニコちゃんで答えた。
母とシオンが立って、ヨーコが挨拶して、３人で出て行った。

女性達が夕食の準備をして、ユリカも一緒に食べると言って注文していた。
「律子姉さんは、シオンと何をしようとしてるの？」と北斗が私に聞いた。

『多分・・沙紀の迷いを払うんだと思う。
律子は交信出来るんだよ・・温度じゃないけど、伝達方法を持ってる。
シオンも持ってるんだ・・シオンは初日に、沙紀と由美子と交信したよ。
沙紀の絵は伝達方法だから、俺と律子は描かないんだと思う。
伝えることができる相手は描かない、沙紀は絵で問いかけてる。
だから俺はシオンを描いてもらった、そして沙紀は感じたんだね。
シオンの乗り越えようとする心を、それに共鳴してるんだと思う。
その変化が、マチルダと美由紀の絵に表れてるけど。
沙紀がマチルダの絵を描いた後、迷ったと言ったんだよ。
もちろん、迷ったり考えたりするのは、良い傾向だと思うけど。
律子はまだ早いと判断してるんだ、律子の伝えるのは・・自由という事だから。
縛られない心を伝えたいんだと思う、だから今からシオンに伝えるんじゃないかな。
シオンが無意識でやってる、伝達を・・シオンに気付かせる。
俺じゃあ分からないんだよ、多分・・律子にしか分からない。
勝也が言った・・シオンは、律子の若い時にそっくりだと。
もちろん、外見的な事じゃない・・伝達方法が、そっくりだと言ったんだ。
シオンはマリアと交信できる、その方法をシオンに気付かせる。
ある意味、賭けだけど・・律子は今だと感じたんだろうね。
そして沙紀の迷いを、シオンに払わせる・・それはシオンにしか出来ないから。
シオンが自分の強い想いを、沙紀に直接伝えるしかない。
強く自分を主張すれば、シオンも気付く・・真実のシオンが登場するよ。
シオンとセリカ・・歴史も常識も破壊する、最強コンビが完成す

る』

私は笑顔で言った、全員が笑顔で返してくれた。

「美由紀は感じてるでしょ、母さんの伝達方法」とマキが言った。

「多分ですよ・・多分、空気の揺れ・・だからユリカ姉さんの波動を、リアルに感じてたんだと」と美由紀が真顔で答えた。

『なるほどね・・それでシオンは、白い弾丸だったんだ』と私は美由紀に笑顔で言った。

「それじゃよ・・律子が本気の時は、周りの空気が違うよ・・飛鳥に会った時は、怖いくらいじゃったよ」とマダムが笑顔で言った。

「分かりますね～・・瞑想の時の女性達との問答、強かったですよ」とユリさんが微笑んだ。

「美由紀、いつ気付いたの？」とユリカが聞いた。

「ヒトミを呼び戻した時です・・爆発的に強い波動が、何度も押し寄せてきました」と美由紀が笑顔で答えた。

「シオン覚醒、楽しみだ～・・ワクワクする～」と蘭が満開で微笑んだ。

「白い弾丸が問いかける、それに正面から答えないといけない・・影響力が強いですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

「ちょっと待ってよ、エース・・まさかシオンは攻撃型なのか？」とカスミが驚いて聞いた。

『そうだよ、シオンは超攻撃型・・だから自分に不必要なものは削除する、誰も傷つけないように』と二ヤで返した。

「守備的な人間じゃ、行けない世界なんだね・・他人を絶対に傷つけない、嘘の無い世界は」とハルカが笑顔で言った。

「どうして？・・そうなったのかな～」と蘭が私に満開で微笑んだ。

『例えば、豊兄さんは修羅場を意識して避ける。

そういう雰囲気を察して、避けるんだよね・・でも招待されるけど。
やればかなりの高確率で勝てる、それは間違いない。
豊兄さんは超攻撃型だけど、好戦的じゃないんだ。
それは圧倒的に強いから、怖いんだと思う・・相手に残る深い傷が。
だから相手によっては、ただ殴られる・・殴らせて勝つ。
暴力的な勝利など無いんだよ、結局・・心が引いた方が負けになる。
シオンも同じだったんじゃないかな、子供の頃・・色々と陰口を言われて。
普通と違うから、仲間外れにされたり・・いじめられたりしたんだろう。
でもシオンは自分の強さを知ってたから、戦うことを拒絶した。
自分の心の狭い部屋に閉じこもり、一人でいる事を選択したんだ。
その根本にある物は、自分が攻撃したら・・相手のダメージが強すぎる。
そう無意識に思っていたと思う、それが人間関係を難しくさせていた。
今に至るまで、自分を隠し続けていた。
俺は、さすがリアンとユリカだと思ったよ・・シオンを夜街に連れ出した事を。
リアンもユリカも、多分・・シオンの殻を破らせたかった。
リアンはシオンを蘭に会わせた・・シオンは今でも、蘭を憧れだと言う。
シオンは感じたんだよ、蘭に出会って・・心に従うとは、どういう事かを。
シオンはもう間違いに気付いている・・抑えすぎていた自分を、確認している。
ユリさんの言葉で気付いた、避けすぎていた自分。

そう・・シオンは、もう一人の弱い自分との、戦いまで拒絶していた。
シオンの精神の根幹にある、最も敏感な部分・・それは、言い訳に対して敏感なんだ。
シオンは確信した・・自分が一番言い訳をしていたと、確信したんだ。
マキとヨーコに触れて・・その運命と戦う姿を見て、自分の甘えに気付いた。
そして最後の背中を押してくれた・・哲夫が押した、シオンの心の壁を壊した。
哲夫の優しさが伝えた、恐れる必要はないと。
優しさとは、自分に対する厳しさの上にあると・・哲夫が伝えた。
俺は本当に嬉しかった・・哲夫の伝達が、優しく強い物だったから。
シオンの世界は今日、転換するのかもしれない・・今までと、これからに。
もう一人のシオンに、白い弾丸を撃つ込む時が来る。
シオンがシオンに問いかける・・心を詩に変換して、流れるような歌の言葉で。
それこそが・・ユリカの伝えたかった事、その源氏名に込めた強い想い。
詩の音・・嘘のない世界からの旅人・・その名も・・詩音』

私は感じていた事を、考えずに言葉にした。
「あなたは気付いていたのね・・あの時には、シオンに回復されてる時には」とユリカが微笑んだ。

『なんとなくだったよ・・やっぱりあの日。
リンダに出会った日・・祭りの後の、あの白い弾丸の言葉。
俺には大切な宝物になった・・シオンが、その強い心で発砲した。

最強の白い弾丸が、心の一番深い場所に届いたよ。
今でも深く刺さっている・・一生外れない、大切な白い弾丸が』

私はユリカの笑顔を見ながら、笑顔で伝えた。
「哲夫君か～・・会いに行かなければ、私は哲夫に会わないといけない」と蘭が満開で微笑んだ。
「それは私も感じていた・・シオンが感じて、あなたが話した時に」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「驚きますよ、その存在に・・そして感じますよ、４人娘の希望を」とマキが微笑んだ。
「マキ、第二章の続きに・・その本質が垣間見えるのですね」とユリさんがマキに言った。
「はい・・哲夫の求める世界、その強い想いが出てきます」とマキが真顔で返した。

「哲夫が来年家出したら、誰が拾うのでしょうね～」と美由紀が二ヤで言った。
「それは、私に決まってるでしょ」とユリカが爽やかに微笑んで。
「それは譲れない・・私が拾ってみせます」とカスミが不敵で言った。
「カスミ・・やっと私に不敵を出したわね、良いですよ・・全力で来なさい」とユリカが笑顔で言った。
「よろしくお願いします、リアン姉さんでもマキでもない・・強い炎を得るために、最強の水に潜ります」とカスミが輝く笑顔で言った。

「成長しましたね、カスミ・・今のセリフを待っていたのですよ、あなたの創作者は」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「気付いたか～・・私もウカウカしてられない、次に登るよ」と蘭が私に満開で言った。

『了解・・ミチルを動かす予定を組むよ。
女帝ミチルの代打、その3人の個性が交差する。
蘭にはセリカ、ナギサにリョウ・・そしてミコトには、カスミだよ。
そして3人の穴埋めを、北斗にしてもらう。
それが終われば・・ユリさんに出てもらうよ。
その時のＰＧのフロアー責任者は、北斗だよ・・頼むね、北斗』
北斗を見ながら笑顔で言った、北斗も笑顔で返してくれた。
「了解・・やってあげましょう」と北斗が二ヤで返してきた。
『そして四季をバラで経験させて、レンとハルカもゴールドに出して。
フロアーが最高に温まった状態で、シオンを送り出す。
天狗になった君達の鼻を、ポッキリと折ってあげます。
お楽しみに～・・さぁ、食事をどうぞ』
全員を見回して、二ヤで伝えた。
ユリさんと北斗とユリカと蘭以外は、悔しそうな顔で見ていた。
その時、久美子とマユとレイカが入ってきた、私はレイカを抱き上げた。
マユが笑顔で挨拶をして出て行った、久美子はマリアが起きたので、マリアを抱いてきた。
私はレイカとマリアを遊ばせて、美由紀と側に付いていた。
久美子は笑顔でマチルダと抱き合って、再会を喜んでいた。
『久美子、準備しといてね・・明日か明後日』と私が久美子に笑顔で言った。

「了解・・準備出来てるよ、自分の心は確認したよ」と久美子が笑顔で返してきた。
「久美子・・熱くなったね、素敵だよ」とマチルダが輝く笑顔で言った。
「頑張らないと・・ニューヨークに、笑顔で行けませんから」と久美子が笑顔で返した。
「リンダも私も、楽しみにしてるよ・・久美子が来るのを」とマチルダも笑顔で言って、もう一度抱きしめた。
暖かい何かが2人を包んでいた、久美子の笑顔が輝いて、未来という言葉が浮かんでいた。

フロアーの女性達が食事を始め、マチルダと美由紀が久美子とレイカとマリアに、互いの絵を見せていた。
そしてまたも衝撃が訪れる、レイカの言葉で静寂が訪れる。

「美由紀ちゃんの森は、由美子ちゃんの後ろの森なんだね」とレイカが言ったのだ。
「えっ！・・由美子ちゃんの後ろ」と美由紀が驚いて言った。
「うん、由美子ちゃんの絵の後ろに描いてあった、森だよね、マリア」とレイカがマリアに聞いた。
「あい・・みゆき、ゆみこ、しおん」とマリアが天使全開で答えた。
「そうなんだ～、シオンちゃんにも森があったんだ」とレイカが笑顔で返した。

「レイカちゃん、なぜそう思ったの？」とユリカが優しい笑顔で聞いた。
「なぜって～・・同じだから・・緑の色も、匂いも、温度も」とレイカが笑顔で返した、静寂が続いていた。
『レイカ・・その森の場所は分かるかな？』と私は驚きを隠しながら、笑顔で言った。

「ここだよ・・この星の、青の目の中・・ここだよ」とレイカが、マチルダの絵の地球を指差して言った。
「どうしてなのかな～？」と美由紀が笑顔でレイカに聞いた。
「だって～・・青い目の人は、森の場所を知ってるよ。
マチルダちゃんが、この壁を壊したいのに・・硬くて壊れないんでしょ。
だから青い目の人が教えてるんでしょ、その壁を壊したいなら、ここにおいでって。
それが由美子ちゃんのいる場所だよ、ここにいるの・・由美子ちゃんも美由紀ちゃんも。
シオンちゃんもいるんだろうね、美由紀ちゃんの森の中にいるよ。
その場所にみんないるよ、ＰＧの人がみんなが」

レイカは笑顔で言った、マチルダが凍結して小刻みに震えていた。
「沙紀は、なんて素晴らしい人間なんだろう・・全てを感じていたんだ」と蘭が瞳を潤ませて、満開で微笑んだ。
「由美子は、本当に素敵な友達に巡り合えたんだね」と北斗俯いて泣いていた。

「えーしゅ・・れいか、みさ、ゆみこ、あう？」とマリアが天使で微笑んだ。
『マリア！・・サンキュー、やっぱりマリアだね・・分かったよ、レイカとミサなんだね』と嬉しくて笑顔で言った。
「ゆみこ、さがす・・れいかとみさ」とマリアが私に手を伸ばし言った。
『ありがとう、マリア』と言って、マリアとレイカを抱き上げた。
私は両腕に2人を抱いて、ＴＶルームを出て裏階段を登った。
晩夏の夕暮れ、南風が吹いてきた・・爽やかな海風に、リンダを感

じていた。

《ありがとう、リンダ・・俺を助けてくれて》と心に囁いた。

優しいユリカの波動が、可愛い２人の天使を包んでいた・・。

レイカの純粋無垢な感性、子供なら誰でも持ち合わせているのだろう。

ミサとレイカが、特別鋭かったのではない。

エミは幼い頃から、その家庭環境も影響して、自立心が強かった。

だからこういう感性は失っていたと、現在の小児科医のエミ自身が分析している。

人は目で見た事に対して、今までの記憶にある経験と照らし合わせる。

記憶の中の経験で、情報を処理してしまう・・仕方がない事なのだろう。

私はこの時に、寂しさを感じていた・・沙紀の絵を見て、感じる事の出来ない自分を。

どこかで常識に囚われ続ける、自分の狭い心が悔しかった。

この後のシオンは、沙紀の絵の想いを全て感じていた。

シオンは完全に分離させた、心と脳を別な物にしてしまった。

シオンは必要のない時は、脳を切る事が出来るようになる。

その世界は、私では到底表現出来ない。

シオンは自分の脳に、白い弾丸を撃ち込んだ。

勝手な事をするなと、脳に強く釘を刺した・・シオンの強い心が。

私にもシオンにも、今でも深く刺さっている・・大切な、白い弾丸が・・・。

無意識な明日

神様の場所って言いながら、憎しみが溢れているの。
仲直りさせないんだよ・・宗教家も政治家も、そうしようとしないの。
私には分からなかった、それが何故なのか・・誰も答えてくれなかった。
何を憎んでいるのか・・それが民族の歴史だと言うだけで。
【詩音語録・・中東より】

フロアーの女性達が食事をして、準備に向かった。
食事の終わった蘭が、準備をしてくると微笑んでＴＶルームを出て行った。
ユリカも準備に行き、私はマチルダと久美子と美由紀で食事をしていた。
レイカとマリアは特別な、松さんの手料理を笑顔で食べていた。

『マチルダと久美子で、美由紀をよろしく』と笑顔で言った。
「了解・・私も少しだけ、ゴールドを覗きに行くよ」とマチルダが微笑んだ。
「覗きに行くだけで、注目の的ですね～」と美由紀が二ヤで言って。
「外を歩くだけで、注目の的だよ・・宮崎では、めぐり合えない存在だもん」と久美子も二ヤで追った。
「最近視線に疲れたから、髪を黒くしようかな～」とマチルダも二ヤで返していた。

律子とシオンが帰ってきて、シオンのニコちゃんを見て、嬉しかった。
「シオン・・良い事があったね」とマチルダが笑顔で言った。

「はい・・沙紀ちゃんの、気持ちが分かりました」とニコちゃん全開で答えて、久美子とフロアーに向かった。
私も立って、マチルダが美由紀を押して、指定席に向かった。
久美子が楽しげなジャズから始めた、シオンのニコちゃんが咲いていた。
「シオンの予定は、いつ頃なの？」と後ろから律子が言った。
『11月かな・・シオンには時間をかけるよ』と振り向いて返した。
「そうだね・・もう、大丈夫だけどね」と律子が言った時に、蘭がブルーのドレスで現れた。

「蘭・・気合入ってるね～」と律子が母二ヤで言った。
「後ろからの熱が強くて、ウカウカしてられませんから」と満開で微笑んだ。
「蘭・・由美子の時は、小僧を頼むね」と母が真顔で言った。
「はい・・任せて下さい」と蘭も真顔で強く答えた。

『蘭・・行こうか』と私が笑顔で言うと。
「うん、行きますかね・・楽しみだな～、ゴールド」と満開で微笑んだ。
私が蘭と通りに出ると、呼び込みさん達が歩み寄って来た。

「最高の副職、初めて仕事モードを見たよ」と佐々木の爺さんが笑顔で言った。
「もう、佐々木ちゃんが来てくれないから～」と蘭も満開二ヤで返した。
「やっぱりドレス姿は違うね～・・誰かと思ったよ」とキャバレーのシン君が言って。
呼び込みさん達が、ニヤニヤで頷いていた。
「あんまり調子に乗せないの」と小動物の笑顔で舌を出して、私の

腕を組んで別れを告げた。
私はゴールドの正面から入り、蘭を連れて小部屋に向かった。
途中ですれ違う、ゴールドの若い女性達と挨拶をして、蘭はご機嫌満開になったいた。
私が小部屋を覗くと、千鶴とセリカとケイコがいた。

『千鶴、今夜はお世話になります』と笑顔で言って、蘭を招いた。
「千鶴姉さん・・勉強させてもらいます」と蘭が満開で言って、頭を下げた。
「蘭・・よろしくね、嬉しいわ～」と千鶴が笑顔で言った。
「私も、千鶴姉さんとセリカの仕事を感じる事が出来て、嬉しいです」とセリカに満開で微笑んだ。
「こちらこそ、勉強させてもらいます」とセリカが立って、流星群を流しながら頭を下げた。

「エース・・セリカから東京の話は聞いたから、私からユリ姉さんに話すね」と千鶴が笑顔で言った。
『お願いします、きっと喜ぶよ・・でもゴールドのエースをもらって、良いのかな～』と笑顔で返した。
「宮崎ＰＧにやるんじゃないからね・・東京ＰＧのエースになるように、私も厳しくやるよ」と千鶴がセリカに二ヤで言った。
「よろしくお願いします・・絶対になってみせます」とセリカが強く言葉にした。

『ＯＫセリカ・・女帝ミチルのフォローで、蘭が入るから・・セリカが蘭をフォローしてね』と笑顔で言った。
「了解・・最高だよ、ありがとう」とセリカが可愛く微笑んだ。
「よし・・じゃあ行きますかね」と千鶴が微笑んで、蘭とセリカと出て行った。

私は派手な制服を着ている、ケイコと並んで後ろを歩いた。
『ケイコ、可愛くなったね～・・やっぱ素質あるよ』と笑顔で言った。
「そうなのかな～・・セリカ姉さんが側にいるから、そう思えないよ」と真顔で返してきた。
『そんな事言うと、セリカが怒るよ・・意識してるんだから』と二ヤで返した。
「まさか！・・私なんかを」とケイコが驚いて言った。
「ケイコ・・私なんかをなんて言ったら駄目だよ、早く来なよ・・楽しみにしてるから」とセリカが振り向いて真顔で言った。
その瞳の流星群が尾を引いて輝き、セリカの美しさの本質が出てきていた。
「はい、頑張ります」とケイコが少し緊張気味の笑顔で返した。

「千鶴姉さんは、強い星を持ってますよね～」と蘭が満開で千鶴に言った。
「自分でも、その部分はそう思うよ・・でもセリカをここまで引っ張ったのは、誰かさんだよ」と千鶴は二ヤで返した。
「セリカ・・あれから、全裸を見せてないでしょうね～」と蘭がセリカに満開二ヤで言った。
「私は見せてませんけど、勝手に見てるかもですよ・・奴は思春期ですからね～」と流星二ヤで返した。
「セリカと美由紀の全裸・・どっちを思い出すの？」と蘭が私に満開ニヤニヤで聞いた。
『どっちも思い出しません・・セリカなんて、一瞬だったし』と二ヤで返した。
「美由紀がエースの飼い主って言ったけど、本当の事だったんだね」とセリカが微笑んだ。
「そうなのよ～・・美由紀の奴隷なんだよ」と蘭が満開で微笑んで、

２人で笑っていた。
私はフロアー裏に残り、蘭が千鶴に連れられて、フロアーに歩いて行くのを見ていた。
１０人以上の若い女性が、立ち上がり笑顔で迎えた。

「いよいよ今日から共同体のシステムが、この店でも始まります。
トップバッターは、ＰＧの蘭です・・もちろん名前は知ってると思います。
ユリ姉さんが産休の時、蘭は２１歳でＰＧのＮｏ１になりました。
私はその時の姿を１度だけ見て、驚愕しました・・蘭は、別世界に棲んでいました。
そして感じました、ユリさんが存在しても、Ｎｏ１になったのではないのかと。
その時も・・今でもそうですが、蘭はお昼の仕事をメインにしています。
その強い意志を讃えて、あのユリカ姉さんが贈った称号・・最高の副職。
私と魅宴のミコトは、その称号で感じました。
自分がプロだと言うのなら、誤魔化せないと。
ユリカ姉さんは、プロに対して提示したんだと・・蘭が見てると。
最高で最強の副職が見てるから・・私はここまで来れました。
みんなも感じてね、その生き方に対し２１歳にして、最高を贈られた女性を。
蘭はまだ２３歳です、貴方達と同世代のトップを・・その熱を、感じて下さい。
蘭・・よろしく」
千鶴が笑顔で強く言葉にした、ゴールドの女性達は蘭を見ていた。

「ＰＧの蘭です・・実像はおちょこちょいで、無鉄砲です。
私は今夜、楽しみにして来ました、そして皆さんを見てワクワクしてます。
私は１つだけはっきりと言えます・・私は水商売が大好きです。
今夜はお世話になります、一緒に楽しみましょう。
よろしくお願いします」

蘭は楽しそうに満開笑顔で言った、女性達も笑顔が出て、全員で返礼した。
「それでは開店します」の千鶴の言葉に「はい」のブザーを鳴らした。
女性達が準備を始め、蘭はセリカに付いていた。
私はゴールド特有の雰囲気を楽しんでいた、ＰＧとも魅宴とも異なる緊張感を。

そして私がボーイに呼ばれる、受付に最初の客でＪ・塚本とミノルが立っていた。
私は笑顔で歩み寄り、挨拶をした。
「ここだって、佐々木の爺さんに聞いてね、少し良いか？」とＪ・塚本が笑顔で言った。
『もちろん・・中に入ります？』と笑顔で返した。
「噂のゴールドも見たくてね」とミノルが二ヤで言った。
私達３人はボーイに案内されて、奥の広いＢＯＸに入った。

「ご氏名はどうしましょう？」とボーイが微笑んだ。
「１５分後に、千鶴ママと蘭と・・あと誰だ？」とミノルが私に聞いた。
『セリカでお願いします』と私がボーイに笑顔で言って、ボーイも笑顔で頷いた。
２人は楽しそうにフロアーを見ていた、プロとしてのチェックをし

てるようだった。

『ミノルさん・・お店さぼって、良いんですかね～？』と私はミノルに二ヤで言った。

「今日は良いんだよ、昨日バンドのオヤジだけで話して・・お前に聞きに行こうと決めたのさ」とミノルが笑顔で返してきた。

『俺に聞きたいって・・久美子の何をでしょう？』と真顔で言った。

「エース・・俺達は、お前の言葉が忘れられないんだ。

久美子の事を、いつか世界に出ると言った・・あの言葉が。

俺達の若い時の夢に、強く投げかけた言葉だったよ。

そしてお前の本気さも、伝わってきた・・だから嬉しかったのさ。

久美子は家庭の事情を、あまり話したがらないんだよ・・だから聞けなくてね。

でも俺達バンド仲間は、久美子の将来を応援してやりたいんだよ。

直接的な支援は、久美子の性格からすると、断ると思うんだ。

教えてくれエース・・久美子をどうやって応援すれば良いのかを？」

J・塚本が真顔で言った、塚本もミノルも優しい瞳だった。

『久美子は母子家庭で育ったらしいです、そして母親が5月に亡くなった。

今は姉のレンと2人暮らしです、レンが8月からPGで働いています。

レンは仕事も起動に乗ってきて、今は2人とも精神的に安定していると思います。

久美子の将来ですけど・・ジャズを志すなら問題無いです。

ニューヨークの資産家の友人が、ニューヨークでの、生活の援助を申し出ています。

クラッシックを選択した場合は、不透明ですが・・大学の推薦位は取るでしょう。
久美子・・最近変わりましたよ、バンド活動を始めて。
久美子は父親の記憶が、ほとんど無いらしいんです・・レンが言ってました。
だから・・梶谷さんの優しさに、凄く感動してたと。
多分・・オヤジバンドの皆さんに対しても、父親像を重ねているんでしょうね。
バンドの皆さんの支援・・それは仲間として、そして父親を感じさせる者として。
久美子の精神的支援をして下さい・・あなた達にしか出来ないから。
そして沢山のステージを経験させてやって下さい、久美子の才能を信じるなら。
久美子の望みはそれだけだと思います・・物質的、金銭的支援じゃなく。
精神的な繋がりとして・・バンド活動を楽しませて下さい。
俺は最後まで久美子の背中を押し続ける・・それしか出来ないから。
それが俺の望みだから・・久美子が魂の響きで弾く姿を見るのが。
俺の楽しみだから・・絶対に金銭的な事で、諦めさせたりしません。
久美子の夢が・・俺の夢だから、最後まで見ます・・久美子だけは』
私はオヤジ達の優しさが嬉しくて、強く言葉にして伝えた。
「了解・・ありがとな、さすが最後の挑戦者だな」とJ・塚本が笑顔で言った。
「魔法使いと呼ばれるだけはあるな・・久美子は幸せだよ、お前が背中を押すからな」とミノルが言った。

その時に、千鶴と蘭とセリカが笑顔で挨拶をして、ＢＯＸに入ってきた。

「塚本さん、ご無沙汰してます」と千鶴が微笑んで、セリカを紹介した。
蘭がミノルを面白おかしく、千鶴とセリカに紹介して、笑顔が溢れた。
私と塚本の間に千鶴が入り、塚本とミノルの間に蘭が入り、ミノルの横にセリカが付いた。
私は喋らずに、その会話を聞いていた、蘭が先導してセリカに火を点けた。
セリカも瞬時に対応して、その流星の輝きを見せていた。
《蘭とセリカ・・良いコンビかもしれないね》と心に囁いた、ユリカの同意の波動を感じていた。

1時間ほどで塚本とミノルが立ち、私も後ろに続いて見送りに出た。
料金を支払い、エレベーターを待っていた。
蘭とセリカが2人に笑顔で語りかけ、塚本もミノルも笑顔だった。
エレベーターが開くと、塚本とミノルが固まった。
マチルダが降りて来たのだ、その輝く姿に、さすがの2人も固まっていた。

「マチルダ、タイミング計ってたね・・オヤジ達が固まってるよ」と蘭が満開二ヤで言った。
「いけない人だ～・・田舎のオヤジを凍結させて」とセリカが流星二ヤで言った。
「素敵な男性の香りに誘われて、今だと思ってました～」とマチルダが輝く笑顔で返した。
「仕方ない・・エース、マチルダと一緒にアフターしてきなさい」と蘭が私に満開二ヤで言った。

「蘭は良い子だ・・マチルダちゃん、時間有るの？」とミノルが嬉しそうな笑顔で聞いた。
「もちろん・・お暇娘で～す」とマチルダが笑顔で返した。
私は蘭の凄さを感じていた・・多分蘭は、私と2人の話す姿を見て感じていたんだと。
久美子を想うバンドのオヤジの優しさを、だからこそマチルダに触れ合わせたいのだと。
そう感じながら、蘭の満開笑顔に見送られていた。

エレベーターを降りて、マチルダを塚本とミノルで挟み。
マチルダが両手で2人と腕を組み、楽しそうに歩く後ろを歩いていた。
赤玉駐車場に近いビルの3階に、谷田の経営するジャズクラブがあった。
広い店で、小さなステージがあり、グランドピアノとドラムセットが鎮座していた。
その日は生演奏がないようで、ＢＧＭの静かなジャズが流れていた。
渋い大人な感じで、私はすぐに気に入っていた。

「何事だよ～・・ちょっと待ってくれよ～」と奥のテーブルに歩いていると、カウンターから谷田が慌てて言った。
塚本もミノルもマチルダと腕を組み、ニヤを出して奥に歩いた。
４組いる客もマチルダに視線を送り、マチルダも視線に応えるように笑顔で歩いた。

「ビール3杯とコーラ・・ピザとチキンバスケットにオニオンスライス」とミノルが谷田に笑顔で言った。
「その前に、素敵な彼女を紹介してくれよ～」と谷田が二ヤで返した。

「ＰＧのお客さんの、マチルダちゃん・・ＮＹ在住の、２０歳」と塚本が聞いたばかりの情報を、自慢げに言った。
「マチルダです・・久美子がお世話になっています」とマチルダが立って笑顔で頭を下げた。
「谷田と言います、よろしく」と言って、谷田のオヤジが手を出した。
マチルダは輝く笑顔で両手で握り、強く握手をした。

「エース・・久美子ちゃん、いつ頃が良いかな～」と注文の指示をした谷田が私に言った。
『いつでも大丈夫ですよ、ここなら喜びますね』と笑顔で返した。
「最近生演奏の予定が少なくてね・・久美子に頼ろうかな、自給高めで」と谷田が塚本とミノルに二ヤを出した。
「調律出来てるのか・・久美子を独り占めするなよ」と塚本が二ヤで返した。
「久美子がここで弾くんですか・・素敵ですね、見たいな～」とマチルダが私に二ヤで言った。
『マスター・・今から、ピアノの調子みさせようか』と谷田に二ヤで言った。
「良いのか！・・頼むよ～」と谷田に笑顔で返された。

『長い時間はいないから、中学生の少女もＯＫなら、その子も梶谷お守り持ってるから』と返した。
「もちろん、ＯＫだよ・・酒は飲まないんだし」と谷田に笑顔で返された。
『じゃあ迎えに行って来るよ・・マチルダが言い出したんだから、サマータイム歌ってね』とマチルダに笑顔で言った。
「嘘だろ～・・マチルダちゃん、お願いだから聞かせてよ」と塚本が驚いて言った。
「下手でも良いなら、やりますよ」とマチルダも笑顔で返した。

「小僧・・走れよ、待ち遠しいからな」とミノルが二ヤでいった、
私は笑顔で頷いて店を出た。
ＴＶルームで、松さんに状況を説明して、美由紀を車椅子に乗せて
出かけた。
久美子は楽しそうに、美由紀と話しながら歩いていた。
店に入ると、谷田が久美子と美由紀を見て、嬉しそうに笑顔で招い
た。
塚本もミノルも美由紀を優しい笑顔で招いて、久美子がステージに
上がり準備を始めた。
他の客達も、若い久美子に興味津々らしく、注目が集まっていた。
久美子は椅子の調整をして、横にいる谷田と打ち合わせをした。
久美子は笑顔で何度か頷いて、前を見た・・谷田がステージを降り
た。
久美子は静かに弾き始めた、そしていきなり激しいリズムに変わっ
た。
鍵盤の端から端に大きく動いて、激しいリズムを刻んだ。
久美子は戦闘体制で前を睨み、強く鍵盤を叩いた。
そして徐々に笑顔になって、喜びを表現した。
曲の終盤のサビの部分では、久美子は腰を浮かして踊ってるようだ
った。
客席に笑顔を振りまき、体はスイングしていた。
そして盛り上がった頂点で、演奏が終わった。
久美子は輝く笑顔で、美由紀に右手の拳を突き出した。
美由紀も楽しそうに、笑顔で拍手をした、そして大きな拍手が起き
た。
久美子は一度立って、ステージの前に進み、深々と頭を下げてピア

ノに戻った。
そして少し寂しげな表情で、旅情的な曲を弾いた。
久美子が優しく語り掛けてるようで、客席は静寂に包まれていた。
その次の曲が、久美子がＰＧで最初に弾いた曲だった。
母に伝える強い想いに溢れていて、最後に元気ですと叫んで終わった。
大きな拍手を受ける久美子は、笑顔で一礼して、ステージセンターにスタンドマイクを用意した。
そしてマチルダに微笑んだ、マチルダも笑顔で立ち上がり、スタンドマイクの前に立った。
照明が暗くなり、マチルダと久美子だけを、スポットライトで照らした。

マチルダのプラチナブロンドが輝いて、息を呑むほど美しかった。
マチルダが久美子を見て、互いに気持ちを会わせるように合図を送った。

「サ～マタイム・・・」マチルダの美しい歌声が響いた。
久美子も静かな出だしで始めた、２人は互いを見ることも無く、ピタリと気持ちを合わせていた。
そしてマチルダの方から、夏の到来の喜びに誘った。
マチルダが腹筋に左手を当てて、右手はゆっくりと動き、夏の到来を表現していた。
間奏の部分で、久美子が強いアレンジを入れて、熱が上昇した。
マチルダの額から汗が流れ、マチルダの美しい歌声は叫びになっていた。
最後のサビを３度繰り返して、マチルダも久美子も充実感を漂わせてやりきった。
久美子がマチルダの隣に立って、静寂を楽しむように２人で頭を下げた。

美由紀が大きく拍手をして、それで皆、我に返り大きな拍手で賞賛した。

２人は笑顔で何度か頭を下げて、テーブルに戻ってきた。

「素敵でした～・・サマータイムって喜びの歌なんですね」と美由紀が笑顔で言った。

「美由紀・・ＮＹは寒い街なんだよ、冬は雪が積もるんだよ。

ＮＹは他国の人が感じるほど、豊かな街じゃないんだ。

多様な人種の受け皿になってるけど、貧富の大きな差も歴然と存在する。

特に人種間の心の壁が、今なお強く残っている。

黒人問題もマイノリティに対する偏見も、何一つ解決出来ずにここまで来たの。

小さなマンハッタン島を目指して、夢を抱きやってきた挑戦者達を絶望させる。

自由の女神が見ているのに、自由を求めるのは難しいんだよ。

大都会なのに、危険な地区が多く存在する・・そして多くのホームレスも存在する。

ホームレス達は、冬が怖いんだよ・・常に凍死の恐怖が付いてまわるんだよ。

だからサマータイムがラジオの音波に乗ると、喜びが湧き上がるんだよ。

凍死を恐れる時期を乗り切ったと、もう一度やり直そうという想いが沸いてくる。

公園の芝生の上で寝ようと、大地の息吹に力をもらおうと・・伝えてくる。

１０年後・・２０年後、アメリカはどう変化してるのだろうね。

でもね・・希望も無限にあるよ、アメリカには確かに希望が有る。

リンダは、久美子のサマータイムしか聴いていないけど。

その一曲、一度のセッションだけで、久美子を認め・・好きになった。
久美子のサマータイムは、知りたいと響いてきたと言っていた。
だから夏を喜ぶ、響きで歌えたと・・嬉しそうに言ってたよ。
私も久美子の才能を高く評価している、ＰＧの一時間・・あのプロの時間が教えた。
自分を偽ってはいけないと、自分と向き合い表現しろと・・あの素敵な女性達が伝えた。
私は今回帰ってきて、その全員の変化に驚いた・・その中でも久美子は脅威だったよ。
どこまでも行ける、そう感じさせる・・久美子の演奏は。
底など知れない・・底など無い、久美子が知ろうとする限り。
私もリンダも今から楽しみにしてる・・久美子がＮＹで叫ぶ姿を。
その音が必ず伝える・・人種や文化の違いなど、些細な事だと。
希望という言葉を思い出させる、それは音楽にしか出来ない。
音楽だけは国境を簡単に越える、音楽には言語が必要無いから。
心に直接伝えてくるから・・それが出来る人は、選ばれた人間なのかもしれない。
久美子・・久美子は、原作者に選ばれたんだよ・・だから楽しんで挑んでね。
私は思ってる・・久美子の音と、美由紀の言葉がなぜ響くのか。
不運な状況と戦い続けるから・・乗り越えて気付いた心が、強く伝えるからだね。
私は少し反省したよ、世界の劣悪な環境を見てきて・・それを伝えてるけど。
置き換えが不十分だったと・・自分に置き換えて感じる事が、出来てなかった。
ありがとう・・久美子、美由紀・・私は、今日のこのステージを忘れないよ。
久美子の演奏と、美由紀の瞳だけは・・楽しかったよ」

マチルダは感情的になっていた、嬉しさがその言葉から溢れていた。
谷田を含む３人のオヤジは、静かにマチルダの話を聞いていた。
私はＮＹに想いを馳せていた、どうしても行って見たいという衝動が襲ってきた。

「私はそんなに強くないです、乗り越えたと言われるけど。
自分では、まだまだの状況です・・今でも、足があればと思ってしまう。
私は難病の親友・・ヒトミに勇気をもらいました。
美由紀の障害なんて、足が無いだけでしょ・・私には、明日が無いのよ。
この言葉だけは、ヒトミが強く伝えてきました。
普通の人は、明日が必ず有ると思ってるよね・・それは幸せな事なのかな。
私は明日の事なんて考えないよ、明日が存在するなんて考えない。
そんな贅沢な希望は持てないから、だから今日を・・今だけを考える。
美由紀は贅沢だよ、足が無いと嘆きながら、明日は来ると思ってるんだから。
美由紀、教えて・・美由紀にとって足と明日の、どっちが大切なの？
今ここで教えて・・私に教えて、美由紀の答えを。
そう強く迫られた、私は凍結してました・・全く動けなかった。
ヒトミが全力で伝えてきた、その強い想いに縛られていた。
私は必死で伝えました・・明日に決まってるでしょ、ヒトミ。
そう無我夢中で伝えました・・ヒトミは良かった～と返してくれました。
それが私と生きているヒトミとの・・最後の交信でした。
私は常に心に置いています・・足の事で何かを感じた時に、すぐ

に明日が出るように。
ヒトミの言葉を忘れないように・・明日を生きたいのなら、今だけを考えようと。
私は何も乗り越えていない・・ただ、ヒトミの言葉を持っているだけ。
明日が来ると思っているのは・・贅沢な事なんだと。
そう感じているだけです・・そうしないとヒトミに怒られるから。
美由紀・・また贅沢な夢を見てるねって、今でも怒られるからです」

美由紀は笑顔で言ってのけた、マチルダの緑の瞳から大粒の涙が溢れた。
オヤジ3人も、美由紀を潤む瞳で見ていた、久美子は笑顔で美由紀に頷いた。
「美由紀ちゃん、そのヒトミちゃんとの事は、何歳の時なの？」とミノルが聞いた。
「9歳でした、私もヒトミも・・そして小僧も」と美由紀が笑顔で返した。

マチルダが美由紀に抱きついて、嬉しそうに泣いていた。
美由紀は少し照れた笑顔で、マチルダを強く抱いていた。
ＢＧＭの静かなジャズの調べが、広い空間を包んでいた。
私は美由紀を見ながら、心だけＮＹに飛ばしていた・・リンダの幻影を追って。
あの楽園ブルーの瞳を追いかけて、【ど～ん】と叫びながら・・。
久美子はオヤジ達の支えで、沢山のステージを経験した。
東京も大阪も経験して、高校を卒業した。

久美子がＮＹに旅立つ前日の日曜日、リッチは久美子の単独公演を開いた。

ＰＧの関係者全員と、五天女に若手のエース級の女性が全員揃っていた。

キングもオヤジバンドも、勝也も律子もシズカも、豊も恭子も揃っていた。

「私は夜の街で音楽を学びました、沢山の女性達が、その生き方で見せてくれました。

私は感謝の証として、このステージに上りました。

ありがとう、美しい女神達・・ありがとう、優しいオヤジ達。

ありがとう、純粋な子供達・・ありがとう、姉さん。

ありがとう、お父さん・・ありがとう・・お母さん」

久美子はスポットライトに照らされて、大人の美しさを纏い輝いていた。

その日の演奏は、私では書くことが出来ない。

ただ居合わせた全員が思っていた、その場に居れて幸運だったと。

魂の叫びが天空に木霊するようで、私はリッチの上に青空を感じていた。

初めて久美子を見た、あの狭い路地裏から見えた・・真青な夏空を。

久美子は何度も帰国して、何度もその演奏を聴かせてくれる。

その度に、表現方法が違っている・・久美子は多様性を手に入れた。

多くの人種が住む、ＮＹで感じたのだろう。

そして久美子は冷めなかった、灼熱のマキの親友として・・冷める事はなかった。

５０歳を超えた今でも、久美子の音は魂の響きがする。

著名なアメリカの音楽評論家が、久美子に贈った言葉。

久美子の手は心が動かしている、そうでないと出ない・・あの音だけは。

心が音に乗り移り、溢れ出てくるのだ。

音楽を感じたいなら・・誰よりも、久美子をお勧めする。

そう書かれていた・・私はその記事を大切にファイルしている。

鍵盤に愛されし者・・音に選ばれし女神・・ＮＹ棲む熱い魂・・ＫＵＭＩＫＯ。

女帝誕生

薄暗いステージに、熱だけが残っていた。
熱い歌と、熱い旋律が・・その場の空気を一変した。
音楽という、その強い伝達を受けて・・全員が楽しそうに笑っていた。

「美由紀は、今でもヒトミを感じてるの？」とマチルダが笑顔に戻り聞いた。
「はい・・いざという時には、存在を感じます」と美由紀も笑顔で返した。
『美由紀は・・【いざ】が多すぎるよ』と私が二ヤで言うと。
「小僧の足元にも及びません」と美由紀にニヤで返された。
マチルダがが座り、楽しい話題をオヤジが3人が振って、笑顔で話していた。
美由紀の話術が炸裂し、オヤジ達の笑顔が絶えなかった。

「マチルダ、リンダのサマータイムは、マチルダのより強いのか？」と塚本が興味津々で聞いた。
「もちろん・・全然パワーが違います」とマチルダが微笑んだ。
「俺はマチルダのパワーでも驚いたよ・・リンダのも聞きたいな～」とミノルが笑顔で言った。
「リンダも歌いますよ、久美子の伴奏なら」とマチルダが輝く笑顔で返した。
「エース、頼むよ・・チャンスがあったらな」とミノルが私に笑顔で言った。
『了解です』と笑顔で返した。
「なんか嬉しいね～・・久美子が世界に出るのが、リアルに感じる

よ」と谷田が嬉しそうに微笑んだ。
「久美子は今の調子で頑張れば、後はステージ経験だけですね・・素敵なおじ様達が付いてるから、大丈夫でしょうけど」とマチルダが3人を見て微笑んだ。
「了解・・ステージの経験なら、させてやるよ・・将来の自慢話の為に」と塚本が笑顔で言って。
「東京も経験させてやるからな・・久美子、覚悟しなよ」とミノルも笑顔で言った、久美子も笑顔で頷いた。
「楽しいな～・・まじで楽しい」と谷田が笑い、オヤジ3人で笑っていた。
1時間ほど過ぎて、オヤジ3人に笑顔でお礼を言って、4人で店を出た。
私はTVルームまで美由紀を送り、指定席でPGの満席を確認して、ゴールドに戻った。

ゴールドも満席状態で、私はフロアー裏で蘭を見ていた。
蘭はマユとセリカと、スーツの中年サラリーマン3人組に付いて、満開で沸点を目指していた。

「蘭はもうあの頃を超えているよ・・自分じゃ感じてないけどね」と後ろから千鶴が言った。
『そうなんだろうね・・今回はハードルが高いからね』と振り向いて二ヤで返した。
「高すぎるよ、あのハードルは・・でも、蘭とナギサならって思えるんだよ」と私に並び、千鶴が蘭を見ながら言った。
『そうなんだね、俺は完全燃焼させてやりたいって思ってたけど・・蘭には底が無い気がしてきたよ』と私も蘭を見ながら笑顔で言った。
その時に蘭が、マジックミラー越しの私に、満開二ヤで【受付】とサインを送ってきた。

私と千鶴が受付を見ると、ドン小林がのっそりと立っていた。
私は笑顔でドンに近づいて、焦っている千鶴と挨拶をした。

『ドン・・糖尿大丈夫なの？・・若い店に出現して』とニヤで言った。
「お前が入るのを見て、少し話したくてな」とドンが笑顔で言った。
『嬉しいですね～・・入ります？』と笑顔で聞いた、ドンも笑顔で頷いた。
緊張したボーイ頭に案内されて、一番奥のＢＯＸに通された。
店内の空気が変わっていた、ドンの凄さを改めて感じていた。

千鶴と蘭がドンに笑顔で挨拶して、蘭が私の横に満開で座った。
『ドン・・ありがとう、蘭が仕事の時に初めて同席したよ』と横のドンに笑顔で言った。
「おう、そうか・・俺を忘れるなよ」とドンが笑顔で返したきた。
「小林の爺ちゃん、顔色良くなったね・・若い娘のエキスでも飲んでるね」と蘭が満開で微笑んだ。
「蘭～・・お前は変わらんね、嬉しいよ・・俺はそんな元気、無くなってきたよ」とドンが笑顔で返した。
「あら～、駄目ですよ・・小林さんと大ママとユリ姉さんには、元気でいてもらわないと」と千鶴が微笑んだ。
「千鶴・・安定してきたね、開店当初は心配したよ」とドンが優しく言った。
「素晴らしいメンバーに巡り会えて、なんとかやってます」と千鶴が嬉しそうな笑顔で、頭を下げた。
千鶴と蘭でドンを盛り上げて、ドンも楽しそうに、ウーロン茶を飲んでいた。

「そうそう、忘れないうちに・・エース、一人お前が面接してくれ。
うちのキャバレーにいる子なんだが、女性達と色々あったみたい

でな。
まぁ、俺の管理体制の責任なんだが、俺の所には居辛くなってな。
そうなると・・他の一流店には、採用されないんだよ。
一度見てくれよ・・このまま水商売を引退させるのも、２流以下で働かせるのも。
本当にもったいない人材なんだ・・まだ１９歳なんだがね。
まぁ、お前には説明は省くよ・・見て感じてくれ。
そしていけると判断したら・・ジンの派遣会社に、登録してくれないか。
損はさせないよ・・育て方では大輪を咲かせる・・女帝ですら狙える逸材だよ」

ドンは中学生の私に、真剣に話してくれた。
『ありがとう、ドン・・嬉しいよ・・会わせてもらいます』と笑顔で言って頭を下げた。

「そうか・・ありがとよ、個性が強すぎてな。
今のままじゃ、専属契約したら・・またはみ出してしまいそうで。
そう考えたら・・お前を思い出してね。
お前にしか出来ないと思ったんだよ・・望む場所を気づかせてやってくれ。
ずっと不運な人生だと思ってる・・運命など無いと、教えてやってくれ」

ドンの言葉が優しくて、私は笑顔で頷いた。
「来週早々にお願いするよ・・連絡する」とドンが言って席を立った。
『了解・・ドン、ありがとう・・俺は嬉しかったよ』と私も立って頭を下げた。
「お前がなれ・・俺は見れないが、お前がドンになれ・・それが夜

の女性達の、幸せに繋がると信じてる」とドンが言って、私の方を叩いて受付に歩いた。
私は嬉しくて、ドンの背中を見ながら後ろを歩いた。

『じゃあ来週、楽しみにしてるよ・・ドン、体を大切に・・見ててよね、ドンが』とエレベーターに乗ったドンに言った。
「簡単にはくたばらんよ・・俺は夜街のドンだぞ」とドンが笑顔で言った時に、扉が閉まった。
「怖くなってきたね～・・PGのエースが」と蘭が満開二ヤで言った。
『ドンは凄いな～・・棲んでる場所が、想像も出来ないよ』と笑顔で返した。
「私はあんたの辿り着く場所が、想像も出来ないよ」と千鶴がニヤニヤで言った。
「困ったもんです」と蘭が千鶴にウルで言った。
「蘭・・覚悟を決めな・・蘭も、波乱万丈だよ」と千鶴が蘭の肩を抱き、2人で楽しげにフロアーに戻った。

11時を過ぎて、客が3割になった時に、蘭が上がってきた。
私は裏口からドレス姿の蘭と出て、裏通りを腕を組んで歩いて、ユリカスペシャルで裏階段を登り、PGに戻った。
蘭が着替えに行ったので、私は指定席でフロアーの状況を確認していた。
PGも5割の客になっていて、終演を迎えるだけとなっていた。
TVルームに戻ると、蘭が着替えて来ていた。
マチルダと久美子と美由紀で、蘭を囲んで話していた。

「マダム・・私、怖くなりました・・こ奴、小林さんから・・お前が将来ドンになれって言われました」と蘭が満開ウルで言った。
「お前は・・どこまで行くんじゃ、恐ろしいわい」とマダムが二ヤ

で言った。
「小林さんを、なんて呼んでるんだい？」と松さんが二ヤで聞いた。
『ドン』と照れて微笑んだ。
「小林さんがドンで、梶谷がキングか！・・・あ～恐ろしや」とマダムが笑った。
「お前はもう、伝説は残せんよ・・これから何があっても、誰も驚かん」と松さんも笑っていた。
２人の笑い声に包まれている時、フロアーが終演を迎えた。
シオンとマキが帰ってきて、話に加わって笑顔が出ていた。。

私はサクラさんが来て、エミを抱いてタクシーに送って、ＴＶルームに戻った。
カスミが慌てて入ってきた、息を切らして必死の形相だった。
「かしゅみ、何を焦って来たの？」と蘭が満開二ヤで言った。
「は～・・置いて行かれたら、どうしようかと思って」とカスミがウルで言った。
「そんな事はしないよ・・馬鹿な子だね～」と満開に微笑んで立ち上がった。
私は美由紀を抱き上げて、車椅子に乗せて、エレベーターで通りに出た。

ユリカのビルの前に、ユリカとリアンが立っていた。
『人気店が、２店も早仕舞いして～』と２人に二ヤで言った。
「たまには良いの・・こんなに買い込んで来たし、楽しみだ～」とリアンが極炎ニカで言って、美由紀の後ろに回った。
全員で赤玉を目指し、ユリカの車に美由紀を乗せて、蘭とリアンとマチルダが乗り込んだ。
私とカスミとマキはシオンの車に乗り込み、ユリカのマンションを目指した。

「シオン・・運転上手いよな～」と助手席のカスミが笑顔で言った。
「シオン・・運転好きですから～」とシオンがニコちゃんで返した。
「あ～・・早く免許が欲しい」とマキがウルで言った。
『マキ・・中型バイク買わないの？』と私が笑顔で聞いた。
「１１月には買えるかな～」と嬉しそうな笑顔で言った。
「良いな～バイク・・爽快感が最高なんだよな～」とカスミが言った。
「良いですよね～・・自分じゃ乗るの、自信が無いけど～」とシオンも前を見て言った。

「マキは背も有るから、似合うよな～・・チェッ」とカスミが振り向いて小さな不敵を出した。
「チェッって・・新技ですね・・実験しましたね～」とマキが二ヤで返した。
『なるほど～・・同性から好かれる作戦だな、小さな不敵』と私も二ヤで返した。
「お前達は鋭すぎる・・もう嫌い」とカスミが言って、プイをして前を見た。

「プイまで！・・開発してます～」とマキが笑顔で言って。
『可愛いよ、カスミ』と私が笑顔で言って、シオンと3人で笑っていた。
カスミが照れた笑顔を出した時に、ユリカのマンションに着いた。
私は美由紀を抱き上げて、車椅子に乗せ、リアンが楽しそうに押して入った。
私は最後尾をシオンと腕を組んで、入っていった。
マキが美由紀を抱き上げてリビングに連れて行き、私はユリカから雑巾を受け取ってタイヤを拭いた。
私が車椅子を押して入ると、既に宴会が始まっていた。

「ユリカ・・ここは苦情出ないのか？」とリアンが聞いた。
「大丈夫だよ・・角部屋で、お隣は空家だから」と爽やか笑顔で返した。
「そうか・・ならＯＫだね・・マチルダお帰り～」とリアンが言って、グラスを上げた。
全員がグラスを上げて、乾杯をした。
私はウルで蘭とユリカの間に座った。
「エース・・いたのか」とリアンが極炎ニカで言った。
『せっかく、今夜リアンと添い寝しようと思ってたのに・・リアン、意地悪２点』とウルで返した。

「ごめんよ～・・反省したから、添い寝してくれよ～」とリアンが極炎ウルで返してきた。
『リアンのウル、初めて見た・・可愛いね』と笑顔で返した。
「今夜は駄目ですよ～・・エースは美由紀とベッドで寝ます」と蘭が満開二ヤで言った。
「そうだね～・・学校の２人は、少し早めに２人で寝なさいね」とユリカが爽やか笑顔で言った。
「仕方ないな～・・私が小僧のガードをしときますね・・全裸で」と美由紀が二ヤで言った。
「ダメ～・・美由紀、全裸はダメ～」と蘭が満開ウルで言った。

「蘭姉さんって、懐が深いな～って感動してたのに、意外と浅いですね～」とマキが二ヤで言った。
「不思議な人だな～・・自分が全裸になれないからって」とカスミが二ヤで言った。
「ねぇ・・全裸って、美由紀・・エースに全裸を見せたの？」とマチルダが驚いて聞いた。
「マキ・・お願い」と蘭が満開で言って、マキが駆け落ち話をした。

「美由紀は素敵だね～、私は感動したよ」とリアンが嬉しそうに美由紀に言った。
「いたね、もう一人・・12歳で全裸になれる女が」とユリカがリアンに二ヤで言った。
「ん？・・出来ないのは、ユリカだけだろ？」とリアンが不思議そうに言った。
「私は・・出来ません、悔しいけど・・出来ない・・それだけの自信が持てない」とマチルダが真顔で言った。
「ねっ・・美由紀とリアンだけなのよ」とユリカが笑顔で言った。
「そうなのか～・・好きな奴の前で、裸になるだけだろ・・そうなんだ～」とリアンは考えていた。

「リアン姉さん、やっぱり素敵です～・・私、この話を好きになりました」と美由紀が笑顔で言った。
「うん・・私も好きだよ、美由紀の自己主張は」とリアンが極炎ニカで言った。
「自己主張なんだ・・それが、美由紀の主張なんだ」とカスミが驚いて言った。
「そうだろ・・美由紀は歩けないんだ、その程度の自己主張はするさ」とリアンがさらっと言った。
「嬉しいな～・・なんだか本当に嬉しいです～」と美由紀が笑顔で隣のリアンにもたれた。
「美由紀の甘えん坊」とリアンが極炎ニカで言った、美由紀は嬉しそうに甘えていた。

「リアン姉さん、さっきあの絵を見てましたよね・・どう感じたんですか？」と蘭が満開で聞いた。

「素敵な絵だな～って思ったよ、でもどうしてユリカは、平面で飾るんだってね。

多分描いた奴は、球体をイメージして描いたのに。
ユリカをイメージして描いたんだろ、多分筒状にして飾るのが本当だよ。
繋げないと完成しないよね・・まぁ額に入れるには、そうするしかないけどね」

リアンはビールを飲みながら、楽しそうに言った。
全員が絵を見ていた、私は絵を見ながら、イメージで繋げてみてハッとした。
「エース・・取って」とユリカが真顔で言った。
私は額をゆっくりと外し、ユリカに渡した。
ユリカは絵を取って、筒状にして見ていた、全員がその絵を驚いて見た。
筒状に繋げると、子守唄をイメージした波の部分が、球体のから発せられた物になった。
まさにユリアの波動だった、2人で手を繋ぐ姉妹から発せられる、強い波動を表現していた。

「やっぱりね・・素敵な絵だよね～、まさにユリカだよ」とリアンが笑顔で言った。
「リアン・・私はあんたに会えて、本当に良かったよ・・ありがとう」とユリカが言った。
「なんだよユリカ・・私の台詞を先に言うなよ、それは私の台詞だろ」とリアンが笑顔で返した。

「やっぱりそうなんですね・・両極でも、北極と南極ですね。
外側は最も遠くて、内側は最も近い・・素敵な両極です～」

美由紀がリアンにもたれながら、ユリカを見て笑顔で言った。
「美由紀・・ありがとう、最高の表現だよ」とユリカが瞳を潤ませ

て言った。
「ん？・・なんか湿っぽいぞ・・ユリカのせいだな」とリアンが極炎ニカで言った。
『ねぇ、リアン・・リアンはなぜ、極炎を手に入れたのかな～？』
と私が笑顔で聞いた。
その夜のリアンは新しい世界に入っていて、その表現自体が変化していた。
だから私は本質的な事が聞きたかったのだ、極炎と呼ばれる熱の正体が。

『好きだからだろう、人は好きな物しか手に入らないよ。
備わるってのが、私には分からない、確かにミチルママの生き方を感じると。
経験により備わる物も有るのかもしれないけど、外せるだろ・・そんな物は。
実際、ミチルママのは、お前の問い掛けが外した。
私はミチルママ本人から聞いたよ、そしてエースが益々好きになった。
ナギサの時、私もユリカも・・ミチルママが教えたから、お前に賭けたんだ。
ミチルって女性は・・いや、人間は・・自らの全てを差し出し、愛を貫いた。
私にとっては、カスミの称号の人なんだよ・・永遠の憧れ。
ユリ姉さんとも、北斗姉さんとも違う・・人を愛するとき、必ず私の中に存在する。
ミチルという女性が・・愛を貫けるのかと、強い言葉で問いかけてくる。
そんなミチルママが、お前に教えた・・ナギサの存在を。
私もユリカも、ユリ姉さんでも躊躇していた・・蘭にとってのナギサの存在。

ユリカは絶対に泣いてたよね・・そのミチルママの言葉を感じて。
お前は感じてるだろうが、ミチルママは炎の女だったんだよ・・最強の。
私は１８で出会った、ミチルママがクラブにいた時に。
誰も話さないだろうが、ミチルママは・・千花最後のＮｏ１なんだ。
大ママが千花を出て独立して、千花は傾いてしまった。
真希さん、北斗姉さん・・そして大ママという、３大巨頭が居なくなり。
店自体にパワーが無くなったんだろうね、それは分かるよ。
魅宴が起動に乗り、客がほとんど魅宴に流れた。
もう千花は駄目だと、言われ始めた時に現れるんだ。
ミチルママが、１８歳で千花に入るんだ、圧倒的熱量だったと大ママから聞いた。
ミチルママは３ヶ月でＮｏ１になるんだ、いくら傾いてたと言っても。
老舗のクラブ、千花のＮｏ１だから・・まさに伝説だよね。
ミチルママは周りの妬みもあって、色々と陰口を言われたらしい。
そんな世界に嫌気がさしていた時に出会う、大ママに紹介されるんだ。
同学年で圧倒的な存在感を持っている、ユリ姉さんに出会う。
ユリ姉さんに出会って、ミチルママは変わる・・周りの雑音が気にならなくなる。
自分が女として競っているのは、ユリ姉さんなんだと感じてね。
そんな時、真希さんが千花に来るんだ・・産まれたばかりの娘を抱いて。
上京する前に、千花を見に来るんだよ・・ミチルママは、その出会いで点火される。
この部分は大ママから聞いた・・その大きな存在に触れて、開花するんだ。

それからの5年間は凄まじかったらしい、千花を建て直し維持した。
私が出会った頃は、近づいて来るだけで・・熱を感じたほどだったよ。
私はその熱に点火された、追い求めた世界を感じたから。
私の極炎を点火したのは、ミチルママの種火なんだ。
そのミチルママに点火したのは、真希さんの種火なんだよ・・マキ。
時代がどんなに流れても、途絶えない物もあるんだ。
ミチルママに対し、大ママもユリ姉さんも・・マキの出生の秘密を言っていない。
私が紹介しろと言ってるんだと思う・・女帝に、熱の継承をしろと言われている。
私は今が一番充実している、ユリカと蘭が楽しそうに笑い。
シオンが前を見て進み、カスミとマチルダに出会った・・嬉しかったよ。
そしてマキが再点火してくれた、その存在に触れ・・幸せさえ感じた。
そして・・美由紀、お前に出会えた・・実は押されてたんだよ。
美由紀の内包する熱に・・美由紀の熱に・・私が熱に押されたんだよ。
そして分かったんだ・・その全ては律子姉さんの種火だって。
真希さんの熱は、律子姉さんの種火で点火されていた。
そしてその全ての熱を、最大限に上げてみろって・・エースが煽る。
律子姉さんに、情熱姉妹を頼むと言われて、本当に喜びを感じた。
火を始めて使った偉大な先人に、言われた気がした・・そしてこう言われた気がしたんだ。
リアン・・使用方法を間違わなかったねってね。
ＰＧの通路で前から歩いてきた、１０代の少女・・驚愕したよ。

その熱量に・・私を避ける事無く、正面に立った・・その距離５ｃｍ。
「名前は？」と私が聞くと、笑顔になって答えた。
「勝也と律子の隠し子・・豊が愛する唯一の女・・私が恭子です、以後よろしく」ってね。
嬉しかったよ・・本当に感動した、マキと美由紀の周りの女を感じて。
そして私と正面から向き合った少女を感じて・・私も伝えたいと思ったよ。
そして熱の意味を感じていた・・律子という憧れの女性が、太陽光線で点火した。
それを受け継いで行きたいと・・そして伝えたいと・・私は極炎。
エースが言ってくれた・・全てを焼かれるまで、諦められない存在だと。
その時に感じたんだよ、エース・・極炎は全てを焼き払い、その後に生命を育む。
それが私の理想・・極炎の意味・・私はリアン。
誰よりもリアンを愛する・・私が極炎の女・・リアンなんだってね」

私は感動していた、リアンの無変換の言葉が入ってきて。
女帝の誕生を確信して、その将来像を感じて、感動して言葉が出なかった。
「辿り着いたね・・おめでとう、リアン」とユリカが言った、優しさに包まれた言葉だった。
「まだまだだけどね・・でも絶対に伝えたいんだよ・・由美子に伝えたい」とリアンが微笑んだ。
「本当に素敵だと感じました・・女性の友情として、理想の関係だと」とマチルダが目を潤ませて言った。
「私も・・嫉妬すら感じた、そんな出会いをした２人を」とカスミ

が真顔で言った。
「何言ってるんだ・・銀河の奇跡、その４人の友情を感じろよ」とリアンが極炎ニカで言った。
カスミとマチルダは本当に嬉しそうに、笑顔で頷いた。
「エース・・私の可愛い美由紀が寝たよ、よろしく」とリアンが静かに言った。

私は笑顔で美由紀を抱き上げて、全員に笑顔を向けて、ベッドルームに入った。
美由紀をベッドに寝かせて、私はベッドに座り、大淀川の流れを見ていた。
美由紀は幸せそうに寝ていた、リアンに甘えて嬉しかったのどろうと思っていた。
美由紀の手を握り、温度をチェックして、ジャージに着替えて美由紀の首に腕を回した。

リビングの楽しげな声を聞いていた、シオンが元気に話していた。
《リアンの言葉が嬉かったね、シオン》と心に囁いて、ユリカの波動と青い炎を感じて。
私も幸せな気分で眠りに落ちた、美由紀の鼓動と寝息を感じながら。

翌朝、カーテンを閉めてなかったので、朝陽で目覚めた。
慌ててカーテンを閉めて、美由紀の寝顔を見て、洗面所に向かった。
歯を磨き顔を洗って、タイマー炊きの炊飯器を確認して。
卵を焼いて、鮭の切り身が有ったので、それを焼いて味噌汁を作った。
その時ベッドルームから、美由紀が出てきた、私は美由紀を抱き上げて車椅子に乗せた。
美由紀が洗面所に行った時に、シオンが起きてきた。

「今朝は私が送ります～・・全員熟睡してますから」とニコちゃんで言った。
『ありがとう、シオン・・助かります』と笑顔で返した。
シオンが洗面所に入り、シオンと美由紀の笑い声が聞こえていた。
美由紀が出てきて、制服に着替えた、私も着替えてシオンと3人で朝食を食べた。

「ぜっったい、リアンはエースを欲しがりますよ・・この朝食を食べたら」とシオンがニコちゃんで言った。
『怖い』とウルで返した。
その時にマキが起きてきた。
「ダッシュで準備しますから、シオン姉さん・・付き合ってもらえますか？・・哲夫の所に」とマキが真顔で言った。
「もちろん、哲夫君に会えるなら・・嬉しいです～」とシオンが返した。
マキはあわてて準備して、朝食を食べた、元々シオンとマキは化粧をしないので早いのだ。

静かに4人で出かけた、朝の空気が爽やかで、爽快な気分だった。
私は美由紀の家に送ってもらい、少し早かったので、美由紀の家に上がり、節子とオヤジに状況報告をした。
節子もオヤジも真剣に聞いてくれた、2人の優しさに触れて嬉しかった。

私は夏物語を話しながら、登校して、睡魔と闘いながら授業を受けた。
睡魔に勝利して、終礼があり、私は美由紀を押して、待ち合わせの和尚の寺を目指した。

その2時間ほど前、ユリカと蘭とカスミとマチルダがランチを食べて、寺に着いていた。
ユリさんとマリアに、ホノカとリョウが来ていて、7人で瞑想していた。
瞑想が終わり、お茶を飲んでる時に、裏口から和尚を呼ぶ少年の声がした。
「どうした・・何かあったな、まぁ入れ」と和尚が言った、意識して名前を呼ばずに。
和尚は少年をちゃぶ台に招き、煎餅を出した。
少年は美しい7人に見惚れていた、その迫力に動けないでいた。
そしてマリアが駆け寄り、少年は慣れた手つきで抱き上げた。
マリアは少年に天使全開で抱かれ、それを薔薇の微笑が見ていた。

「して・・どうした、らしくないぞ」と和尚がマリアを抱く少年を座らせ、笑顔で言った。

「うん・・今朝、マキ姉さんが来て・・聞かれたんだよ。
ヒトミ姉さんと、俺の関係・・俺のヒトミ姉さんに対する想いを。
俺・・分からなかったんだ・・表現出来ないんじゃなくて・・分からなかった。
ずっと考えてたけど・・分からないんだよ・・だから律子母さんに会って来た。
考える事じゃないって言われて・・それでも、考えちゃって・・和尚に話したくて。
俺はチャッピーには聞けない・・そんな事、聞けるはずがない。
俺は交信出来たのかな・・ヒトミ姉さんと・・俺が一方的に話しただけなのかな。
それが分からない・・だから・・分からない・・ヒトミ姉さんに対する俺の本心。
和尚・・俺は子供だね・・豊兄さんとチャッピーに申し訳ないよ・

・もっと成長しないと」

少年は和尚を真剣な瞳で見て、一気にその想いを吐き出した。
7人が動けないでいた、その少年の言葉の強さに、動くことが出来なかった。
和尚は7人を見た、そして少年を見て言った。

「問いかけろ・・それこそが小僧の望み・・問われるのが・・哲夫に問われるのがの」と和尚が真剣に言った。
その時にユリカが哲夫を後ろから抱きしめた、哲夫は驚いたが、その温もりに包まれて目を閉じた。
暖かい何かに包まれて、哲夫には蘇っていた・・あの大切な言葉が。
【優しい人になってね、哲夫】・・大切な母の言葉が、波動に乗り響いてきた。

リアンの変化を、誰もが驚き、そして喜んだ。

リアンは温もりまで強くなる、その生き方が示す、やってみろと誘う。

先に言い訳をして、諦めから始めるなと・・強く燃やす。

その炎は、全てを燃やし尽くす・・そして焼け野原に、新芽が頭を持ち上げる。

次の希望を提示する、新たな夢が持ち上がる。

リアンの歩いた道、そこには平坦な場所は存在しない。

しかしリアンは気にもしない、平坦な場所なんか・・この世にある

のか？

そう極炎ニカで笑い飛ばす、リアンには存在しない・・挑戦しようとか、努力しようとか。

そんな感覚を、全く持っていない・・だから感じることが出来たのだろう。

私は感動していた、あのユリカの絵を・・球体でイメージして描いたと。

筒状にして飾るのが、その作品の姿だと・・瞬時に理解した、リアンを。

私はその時に感じていた、リアンとシオンは姉妹なのだと。

その選ばれたＤＮＡは、固定観念を持たない・・いや、外せるのだと。

リアンは何にも囚われない、・・それは、リアンという存在を。

誰よりも愛しているのだから・・私にとって、絶対に外せない存在。

リアンのあの言葉が、今でも響いている。

全裸で抱いてやる・・強い言葉が響いている。

ありがとう、極炎の女神・・炎の女・・愛には愛で応える・・その名は、リアン。

未来の色

大切な母の伝言を背負っている、最後の言葉が包んでいる。
常に前を向いている少年は、天使を抱いていた。

「駄目じゃない、小僧の継承者が、そんな弱気で・・ニヤニヤ顔で笑い飛ばさないと」とユリカが哲夫に囁いた。
「ユリカさん、ごめんなさい・・そうだった、美由紀姉さんに怒られる」と哲夫はマリアを見ながら笑顔で言った。。
「蘭よ、小僧はここに来るのかな？」と和尚が蘭に聞いた。
「はい・・待ち合わせしてます」と蘭が満開で頷いた。
哲夫は蘭を見ていた、蘭も哲夫を満開笑顔で見ていた。

「チャッピー・・やっぱ、すげーな」と哲夫は思わず呟いて、慌てて照れた笑顔を出した。
その表情を見て、7人に笑顔が溢れて、ユリカが哲夫から少し離れた。
「哲夫君、誰まで分かるのかな～？」とユリカが体を離して、爽やか笑顔で言った。

「あなたが、ユリカさんですね・・それとユリさん、マリアちゃんは分かります。
蘭さんもすぐに分かりました、聞いてたイメージ通りだったから。
そして緑の瞳は、マチルダさん・・でも分からないな～。
3人の誰かが、カスミさんですよね？」
哲夫は女性を見回して、ユリカに笑顔で言った。
「誰からの情報かな？」とユリカが爽やか笑顔で聞いた。

「俺・・今、豊兄さんの、車椅子製作の補助をしてて。
豊兄さんと、恭子姉さんと、シズカ姉さんの話すのを聞いてたから。
すぐに分かりました、ユリさんとユリカさんと蘭さんとマチルダさんは。
でも後の3人の人は・・分かりません、どの人がカスミさんなのか。
3人が銀河の奇跡ですよね・・永遠の憧れですか～？」
哲夫は照れた笑顔でユリカに言った、ユリカは楽しそうに笑顔で頷いた。
「じゃあ・・当ててみて、この3人の中にいます」と蘭が満開で哲夫に微笑んだ。

「え～・・難しいな～・・右の人は、可愛い感じだからホノカさんだと思うんです。
残りの2人なんですけど、俺は・・照れるけど、左の人が一番タイプです。
俺・・女で失敗するタイプだって、いつも美由紀姉さんに言われてて。
俺とチャッピーは、好みが違うから・・左の人がリョウさん。
チャッピーが、永遠の憧れって命名するとしたら。
真ん中の人だと思うんですけど・・俺にとっては、3人とも永遠の憧れだけど」
哲夫は照れながら、3人を見て言った。
「ピンポ～ン・・正解です・・最高に嬉しい～」とリョウが嬉しそうに笑顔で言った。
「凄く衝撃的だった、魔性に負けた・・でも最後の言葉が嬉しかったよ」とホノカが華やか笑顔で言った。

「哲夫・・将来、本当に女には気をつけなよ」とカスミが微笑んだ。
「それじゃあ、私が悪女みたいじゃない」とリョウが2人に不敵で返した。
哲夫は3人の漫才で、笑顔になっていた。

「哲夫君・・車椅子の製作補助って、何をしてるの？」とマチルダが輝く笑顔で聞いた。
「ヤスリがけと、色塗りと試乗です・・今度の？は、俺がピンクを選んだんです」と哲夫が少年らしく自慢した。
「物を作るのが、好きなんだね」と蘭が満開で微笑んだ。

「うん・・自然に好きになったよ、チャッピーが豊兄さんの整備工場に連れて行ってくれて。
社長さんと、豊兄さんに話してくれて・・今、アルバイトで行ってる。
俺の今の担当は、恭子姉さんの原チャ・・モンキーの整備。
それと車椅子の製作をさせてもらってる・・中学生になったら、溶接も教えてもらえるんだ。
下校して、下の面倒を見てから行ってるよ」

哲夫は楽しそうな笑顔で言った、7人も笑顔で頷いた。
「アルバイトなんですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

「うん・・俺がお金はいらないって言ったら、豊兄さんに言われたんだ。
少しだけど、金は払うって・・そうしないと、金を受け取る仕事じゃないと。
責任は持てないって・・原チャも車椅子も、命を乗せるんだから。
そうしないといけないって言われて・・それから、バイトになったんです」

哲夫はユリさんを見ながら、笑顔で言った。
「豊君は本当に素晴らしい、私は教えられてばかりです」とユリさんが薔薇の笑顔で言った。
「豊兄さんが言ってたよ、恭子さんに・・将来、ユリさんの世界に行ってみせろって」と哲夫は笑顔で言った。
「本当に嬉しい言葉だわ・・ありがとう、哲夫君」とユリさんが笑顔で返した、マリアが天使全開で哲夫を見ていた。

「マリアちゃん、可愛いね～・・でも繋げなくていいよ、まだ言葉を繋げなくていいと思うよ」とマリアを見て哲夫が優しく言った。
「あい・・てつお・・・」とマリアが天使で返して、マリア語で話した。

「マリア・・難しい事聞くんだね、俺も分からないけど。
でもねマリア・・重ねれば良いんじゃないのかな。
何か他の色じゃなくて、今の色・・白に白を重ねていけば良いんだよ。
チャッピーはそう言ってるんだと思うよ、白は色なんだから。
俺ね、美由紀姉さんの車椅子を塗るときね・・ピンクを自分で作ったんだよ。
ピンクを作るときってね、白に赤を少しづつ足していくんだよ。
それを混ぜながら、色を見ていくんだ・・自分の求める色になるまで。
それをしながら思い出してたんだ、チャッピーの言葉を。
自分の今の色は何か・・そして次にどんな色を求めるのか。
選択は無限にある、過去を塗り替える事は出来ないけど。
未来は塗り替えられる・・色は選択出来るっていう言葉をね。
俺、その時は分からなくて、考えもしなかったよ。
チャッピーの言葉は、ストレートじゃないんだよ・・変化球なん

だ。
大きく曲がるカーブなんだよ・・だから目を逸らしたら打てないんだね。
曲がって来る軌道を見ていないと、対応は出来ないんだよ。
俺ね・・最近だよ、分かったの・・6年生になってからだよ。
あの男は、どんなに幼い相手でも・・カーブを投げるんだ。
目を逸らすなって・・自分で感じろって言ってるんだよ。
そしていつか打ち返してみろって、言ってるんだね。
マリアに言ってるその言葉も、同じだと思うよ。
マリア・・今考えないでいいんだよ・・いつかハッとして、思い出すんだ。
この事だったのか～ってね・・それが楽しいんだよ。
チャッピーの伝達は、それが楽しいんだから・・考えないで良いんだよ。
いつか分かるんだよ、きっと・・自分に嘘をつかなかったらね」
哲夫はマリアの瞳を見ながら、優しく伝えた。
「あい・・てつお、ありがと」とマリアが言って、天使全開で返した。
圧倒的な言葉の力に、7人は黙って哲夫を見ていた。
「哲夫・・今、ハッとしたか？」と和尚が哲夫を見て笑顔で言った。
「うん・・凄い子だね、マリア・・俺に気付かせてくれたんだね・・ありがとう、マリア」と哲夫がマリアに笑顔で言って。
「和尚・・いつか分かるんだね、その時に打ち返せば良いんだよね」と哲夫が笑顔で言った。
「そういう事じゃろうな・・焦ったぞ・・このメンバーの前で、問答をせないかんかと思っての」と和尚が笑顔で返した。
「残念だ～・・見たかったな・・哲夫問答」と蘭が満開で微笑んだ。

「私も見たかった～・・哲夫、やって見せてよ」とカスミが二ヤで言った。
「俺のは問答まで行ってないから・・激励されるだけだから」と哲夫が照れた笑顔で返した。
「哲夫君は・・どれ位の人数の子供と、関係してるの？」とマチルダが輝く笑顔で聞いた。
「施設が今・・３２人で、地区と学校で２００人位かな？
数えた事ないです・・そんなに多くないよ」
哲夫は考えながら、最後はマチルダに笑顔で言った。
「２３０人が、少ないの？」とホノカが驚いて聞いた。
「少ないよ～・・チャッピーに比べれば」と哲夫が笑顔で返した。
「哲夫君、教えて・・小僧が関わったのは、どれ位だったの？」と蘭が満開二ヤで聞いた。
「えっと～・・小児病棟で、常時３０人位でしょ。
施設も入れた、自分の学校が８００人・・それに周りの学校で５００人位かな。
それに中学生が５００人として、高校生が２００人だったら。
全部で・・２０００人位だ！・・化物だなやっぱり。
大人を入れないで、そんなにいるのか～」
哲夫は笑顔で蘭に言った、蘭も二ヤで返していた。
「２０００って言ったのは、まんざら嘘じゃなかったのね」とユリカが微笑んだ。
「いると思うよ・・俺の知る限りでいるんだから」と哲夫も笑顔で言った。
「ねぇ、哲夫・・小僧は哲夫にとって、どういう存在なの？」とカ

スミが微笑んだ。

「難しいんだよね～・・たまに大人にそれを聞かれるけど。
男として憧れるのは、豊兄さん・・これは間違いないんだ。
チャッピーは兄貴って感じでもないんだよ、いつも一緒に馬鹿な事ばかりしてるし。
俺は老人会でそれを聞かれて、その時の感じを言ったら、老人達に教えてもらった。
自分でもそれだって思って、今は自信持って言えるんだけど。
上官です・・戦友に近い感じの・・生死をかけた場所で、一緒に戦ったみたいな。
それになりたいと思ってるんだ、いつか戦友だって思われたいって。
どんな時でもチャッピーに求められれば、すぐに出撃出来るような。
哲夫、手伝ってくれよって言われる、そんな人間なりたいと思ってるんだよ。
両親の死で・・泣いてばかりいる俺を、小児病棟に連れて行ってくれた。
そしてヒトミ姉さんに会わせてくれた、・・・ヒトミ姉さんが旅立ったとき。
俺に言ってくれたんだ・・ありがとなって・・そう言ってくれた。
嬉しかったんだよ、初めて言われたから・・あの男は、男には厳しいから。
女にはとことん優しいけど・・だから嬉しかったんだ。
どんな関係よりも強いと思う・・戦友って、命ギリギリの世界で戦ったんだから。
俺はあの上官が認める、戦友になりたいんだよ・・そう認められたい。
命とずっと関わってる、強い人間に・・戦友だって思われたい。

俺はどんなに辛い時でも、上官のニヤニヤ顔が浮かんでくるんだ。
だから悔しくて、諦めないし・・続けられる。
俺の上官は絶対に諦めない男・・最後の挑戦者と呼ばれる男だから。
だから俺も戦うんだ・・探しださないといけないから。
その先にあるって、ヨーコ姉さんが教えてくれたから。
命と向き合って、自分と戦った先に・・有るんだって。
母の言葉の意味が、そこに有るって言ってくれたから。
だから小僧と呼ばれる人は、上官です・・いつか戦友と呼ばれたい男だよ」

哲夫が想いを言葉にした、圧倒的静寂の中、ユリカの瞳から涙が溢れていた。
「今で戦友だよ、綺麗に重なってた・・心と言葉が」とユリカが微笑んだ。
「ありがとう、嬉しいな～・・言葉は徹底的に鍛えられたから」と哲夫が笑顔で返した。
女性達の優しい笑顔に囲まれて、哲夫は少年の笑顔を返していた。

「哲夫君は、チャッピーって呼ぶんだね？」とリョウが笑顔で聞いた。

「うん・・年下の男はそう呼ぶよ。
女子は小僧ちゃんって呼ぶけど、俺達は小僧とは呼べない。
本人はなんて呼ばれても気にしないけど・・俺達には、小僧の意味が大きいから。
まだ小僧にもなってない、俺達には・・小僧とは呼べないんだよ」
哲夫は笑顔で答えた。
「哲夫・・聞き魔の前でそれを言うと、大変じゃぞ」と和尚が笑顔

で言った。
「あるんですね、小僧と呼ばれだした訳が」とユリさんが哲夫に薔薇で微笑んだ。
「そっか～・・自分の話だから、してないのか～・・しまった」と哲夫が返した。
「しまったね～哲夫・・話してごらん」とマチルダが二ヤで言った。
「春雨の話って・・みんな知ってるのかな～？」と哲夫が聞いた。
全員が笑顔で頷いた、哲夫も笑顔で続けた。
「俺は、あの春雨に打たれて、土下座してるのを見てたんだ。
駄菓子屋で見てたんだよ、ヨーコ姉さんに連れられて行ってたんだ。
駄菓子屋に行くと、限界トリオが待っていて、駄菓子屋の婆さんが見とけって言った。
俺は駄菓子屋の小窓から見てたんだ、チャッピーは殴られ、それでも土下座していた。
そして和尚が来て、オヤジ達を怒ったんだ・・その時に勝也父さんが、オヤジ達に言った。
その子の親父の子供に対する気持ちを、知ってた奴は手を上げろって。
怖かったよ・・本当に怖かった、迫力が凄くて。
何人かのオヤジ達が黙っていた、そしたら和尚が、こう言ったんだ。
お前等・・こいつはワシの弟子だぞ、寺の小僧を土下座させたんだぞ。
それに対するのが、その態度なんだなって。
それを聞いて・・よし分かった、了解した。
そう勝也父さんが言って、その子の母親に、娘を連れて帰れって言ったんだ。

後の責任は自分が持つからって、そう笑顔で言って帰らせた。
そしてチャッピーに言ったんだよ・・小僧、やれって・・そう強く言った。
その言葉で、チャッピーは立ち上がって、その子の親父を外に引きずり出した。
俺はその時に分かってた、完全に戻ってるって思ったんだ。
チャッピーはその時、ミホちゃんを引き離されてた時で、伝達力が落ちていた。
でも勝也父さんの言葉で、完全に戻ってたんだ。
ヒトミ姉さんの左手を誘った、自分も命懸け戦ってた、あの時の力に戻ってた。
そしてその子の親父に全伝達を使って、凄い力で言ったんだよ。
子供は所有物でも、寂しさを埋める道具でも、恨みを晴らす道具でもない。
お前は死に際で言えるか?・・あの子に言えるのか。
優しい人になってと言えるのか?・・そう言ったんだよ。
春雨に打たれながら、全身ずぶ濡れで・・その親父の肩を掴んで。
言葉と鼓動と温度も使って・・最強の伝達者が、強く問うたんだ。
俺は泣きながら見てたよ・・嬉しくて、ヨーコ姉さんに抱かれて。
その子の親父は俯いて何も返せなかった、春雨に打たれる2人は動かなかった。
そしてチャッピーがこう言って帰るんだ、その子の親父の顔を上げさせて。
娘にそう言えないうちには、絶対に会うなよ・・破ったら、俺が相手だ。
どこまでも行くよ、あんたがどこに逃げようとも・・必ず探し出す。
そう言って、豊兄さんと帰って行った。
凄かったよ・・その歩く姿が、雨が濡らす背中から・・なんか湯気が立っていた。

その話が広がって、みんな小僧って呼び出したんだ。
多分・・大人達はそう認めて、先輩達や同級生は愛情を込めて。
下の女子も、大好きな名前として・・だから俺達、下の男子は呼べない。
小５で、春雨に打たれて叫んだ、小僧に行き着いてないから。
その勇気が、自分の気持ちを伝える事が、まだ出来ないから。
だから俺は心の中で呼ぶんだ・・小僧ならどうするだろう。
迷った時はいつもそう考える・・あの子の笑顔を思い出しながら。
下の子供に、どうやって伝えようかと考えるんだ。
あの春雨の伝達のように・・心に響かせるには、どうすれば良いのかって」

哲夫は感情的になってたのだろう、母の言葉が響いてきていたのだろう。
静寂の中、哲夫はユリさんを真剣に見た。

「ユリさん・・聞いてもいいですか？」と哲夫が真顔で言った。
「何かしら・・良いですよ」と優しく薔薇で微笑んだ、６人が哲夫を見ていた。
「母親が子供を愛するのって・・無意識なんですか？」と哲夫が真顔で聞いた。
静寂が包んでいた、ユリさんの真剣な瞳が哲夫を見ていた。
その時私が美由紀を抱いて、裏口から入った、美由紀は黙って聞いていた。

「無意識じゃないですよ、どんな時も・・眠っている時でも。
そして離れていても、ずっと想っています・・それを常に感じています。
その存在を追いかけていますね・・どんなに離れても。
たとえ会話や、抱きしめる事が出来なくなっても・・ずっと想っ

ていると思いますよ。
それが親の愛だと思います・・哲夫君も、いつか分かります。
子供が出来たら・・父親になった時に」

ユリさんが真剣に優しく伝えた、哲夫は笑顔で聞いていた。
「ありがとう・・律子母さんと同じ答えで、嬉しかった」と哲夫が笑顔で言った時に、私が美由紀を抱いて入った。

「甘えん坊の哲夫・・まだそんな段階で、足踏みしてるのか」と私に抱かれた美由紀が、大声で哲夫の背中に言った。
哲夫はビクッと背中を震わせて、ゆっくりと振り向いた。
私は美由紀を下ろして、哲夫の瞳を見ていた。
7人と和尚とマリアは、真剣な美由紀の瞳を見ていた。

「哲夫・・私は今動けない、本堂まで連れてけ」と美由紀は哲夫に強く言った。
哲夫は真顔で頷いて、マリアをユリさんに渡して、美由紀に歩み寄った。
美由紀を必死で抱き上げて、本堂まで歩いた。

「小僧・・やらせるのか、哲夫に・・美由紀問答を」と和尚が私に静かに言った。
7人が私を見た、私は本堂に歩く哲夫の背中を見ていた。
『それが美由紀と哲夫の望みだよ・・ヨーコの願いだよ』と真顔で返した。
哲夫は本堂の座布団に美由紀を優しく下ろして、正面に正座して座った。

美由紀と哲夫は見つめ合っていた、私は久しぶりに、美由紀の真剣な表情を見ていた。

美由紀・・哲夫、人はなぜ人を愛すの？
哲夫・・・1人じゃ寂しいから？・・・自分に持ってない物があるからかな？
美由紀・・1人が寂しいの・・哲夫は1人だから寂しいの？
哲夫・・・違うの？・・・1人だから寂しいんじゃないの？
美由紀・・私は周りに何万人の人がいても、寂しい時は寂しい。
この世の中に、たった2人だけでも、愛する人となら寂しくないよ。
哲夫・・・寂しいからじゃないんだ、違うんだ・・人を愛する事は。
美由紀・・哲夫、両親がいなくて、何が一番寂しかったの？
哲夫・・・ＹＵＴＡＫＡ？が完成した時だよ、喜びを伝えたかった。
美由紀・・なぜ喜びを伝えたかったの？なぜ悲しみは伝えたくなかったの？
哲夫・・・喜びなら、相手も喜ぶから・・悲しみなら、相手も悲しむから。
美由紀・・喜びを伝えたいのはなぜ？
哲夫・・・俺のことを、愛してくれてるから・・だから伝えたかったんだ。
美由紀・・愛してくれてるから、伝えたかったの？
哲夫・・・違う・・愛しているから、伝えたかった。
美由紀・・哲夫に問う・・なぜ、ヒトミには悲しみを伝えた？
哲夫・・・ヒトミ姉さんだけだった・・俺が両親の事、伝えたいと思ったのは。
ヒトミ姉さんが優しくて・・・好きだったから。
そうだよ、俺はヒトミ姉さんを愛してたから。
だから伝えたかった、一緒に悲しんで欲しいんじゃなくて。
慰めて欲しいんじゃなくて、励まして欲しいんでもなかった。
俺の事を知って欲しかったんだよ、感じて欲しかったん

だよ。
哲夫って言う人間を、ヒトミ姉さんに・・覚えていて欲しかった。
俺はヒトミ姉さんを、絶対に忘れないから。
忘れる事が出来ないから・・愛してるから。
ＹＵＴＡＫＡ？の時も、そうだったよ・・成長した俺の事を知って欲しかった。
そして感じて欲しかったんだよ・・今でも愛してるから、親父とお袋を。
美由紀・・哲夫・・人はなぜ人を愛するの？
哲夫・・・分かって欲しいから、そして相手を分かりたいから。
自分の事も、相手の事も・・そう思えるのが、愛する事なんだね。
チャッピーの、あの時の言葉・・今分かったよ。
ありがとう、美由紀姉さん。
美由紀・・優しい人になったね、哲夫。

美由紀のこの言葉で、哲夫は俯いて泣いていた。
美由紀が私を見た、私も真顔で頷いて本堂に歩いた。

『哲夫・・お前に泣いてる暇は無い。
俺が今から、お前に提案する・・顔を上げろ、哲夫』

私は哲夫に静かに言った、哲夫は涙を拭き、正座をして私を見た。

『哲夫・・もう一度、俺を助けてくれよ。
俺は今、ヒトミと同じ病気の、５歳の少女と関わってる。
その子の、段階の時が近いんだ。
だから、お前から伝えてくれ・・ヒトミの言葉を、伝えてくれよ。
それが出来たら・・お前がその子に伝達できたら。

俺もお前に伝えるよ・・お前に対する、ヒトミの最後の伝言を。
哲夫がその段階になったら、伝えてくれと頼まれた。
大切なヒトミの伝言を・・伝える時が来たと、判断する。
もう一度やれるか、哲夫？・・今でも自分の弱さと向き合えるか、哲夫。
辛い経験を、もう一度出来るか？・・やるのなら、誓え。
今ここで誓え・・ヒトミと美由紀に・・絶対に諦めないと、誓うんだ』

私は哲夫の強い意志を映した瞳を見ながら、想いを伝えた。

「美由紀姉さん、ヒトミ姉さん・・俺は会いに行くよ。
どうしても伝えないといけない、俺の感じたヒトミ姉さんの言葉を。
俺に優しさを教えてくれた、愛するヒトミ姉さんの言葉を。
俺が伝えてみせるよ・・今、ここで誓うよ。
俺も絶対に諦めない・・そして、諦めさせない。
必ず呼び戻す・・大切な、母の言葉に賭けて・・誓います」

哲夫は美由紀を見ながら、強く言葉にした。
「今の言葉、忘れるなよ・・ずっと見てるよ、ヒトミが」と美由紀は真顔で静かに言った。
「ありがとう、美由紀姉さん・・見せてやるよ、今度こそ・・俺が小僧の継承者だって事を」と哲夫が悪ガキの笑顔で言った。
「お帰り哲夫・・遠くまで行きやがって、疲れたぞ・・皆の所まで送ってたもれ～」と美由紀が二ヤで言った。
「美由紀姉さん・・やっぱり、少し太ったな・・重くなったよ」と笑顔で言って、哲夫が美由紀を抱き上げた。
「胸がね・・胸がよ」と美由紀も笑顔で返していた。

「あなた達は・・本当に素敵な場所で、生きているのですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

「完璧に嫉妬したよ・・感動したよ・・そしてありがとうエース。
私もあの時のエースの言葉が、今分かったよ。
必ず辿り着いて見せるよ・・私はエースが引きずり出してくれた。
エースが期待してくれてる、人間なんだから・・やって見せるよ」

リョウの輝きを見ていた、また一段階上がった輝きを。
『約束だぞ、リョウ・・今夜、ホノカの代打だよ・・ミチルの試験を受けて来い』と笑顔で返した。
「了解・・必ず合格点を貰ってくるよ」と猟が笑顔で強く言った、
私も笑顔で頷いた。

「哲夫君・・家出した時は、私が拾いに行くまで待っててね」とカスミが微笑んだ。
「無駄だよカスミ・・指名された、私が拾うから」とリョウがカスミに二ヤで言った。
「ダメよ、2人は危ないから・・私が女性の本当の美しさを、教えてあげるね」とホノカが華麗に微笑んで。
「その3人じゃ勉強にならないから・・私と世界中を旅しようね」とマチルダが微笑んで。
「哲夫・・20歳位じゃ勉強にならないから、私が教えます」とユリカが爽やか笑顔で言って。
「哲夫君・・危ないから、マリアの側に来なさいね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「哲夫〜・・豊君みたいに、モテモテだね〜」と美由紀が二ヤで言った。

『困ったな、哲夫・・誰にする?』と私が哲夫に二ヤで言った。

「蘭さん」と哲夫が二ヤで返してきた。
「哲夫は良い子だね～・・女の魅力が分かってるね～」と蘭が嬉しそうな、満開笑顔で言った。

「それじゃあ、これからどうするの？」と蘭が満開で微笑んだ。

『哲夫・・雅代さんに断ってこい、今夜は小児病棟で、俺の手伝いがあるって。
今から帰って、宿題して・・駄菓子屋で待ってろよ。
晩飯は、俺が美味いもの食わしてやるから、お前が雅代さんの了解を取れ。
今夜はヨーコの部屋に泊まるって、そうしたいなら・・自分で許可を取れよ。
明日の学校の準備持って来いよ・・ヨーコ喜ぶぞ』

私は少年に戻った、笑顔の哲夫に二ヤで言った。
「分かった・・絶対に許可を取るよ」と哲夫が言って、全員に頭を下げて走って帰って行った。

「ヨーコ先輩、泣くね～・・哲夫を使うなんて、悪い男だよな～」と美由紀が私に二ヤで言った。
『美由紀・・それ以上言うなよ、興味津々光線が怖いから』と二ヤで返した。
「まさか！・・ヨーコちゃん、哲夫君のお泊りで覚醒するの？」とホノカが聞いた。
「多分、そうなんだろうな・・食えない奴だよ」とカスミが不敵で言った。
「結局・・律子母さんの言うとおり、楽しいを探してるのさ」と涼が二ヤで言った。
私は銀河に二ヤで返して、マリアを抱き上げた。

本堂から爽やかな風が吹いてきた、天使全開のマリアを包みながら。
夏はまだ、その力を誇示したままだった・・。
哲夫は、その後も探し続けた、母の最後の伝言の意味を。
強く優しく成長した、そして貫いて見せてくれている。
私は子供世界を、哲夫に継承できた事を、今でも幸せに思っている。
哲夫が改良を加え、優しさに満ち溢れた世界にしてくれたから。
美由紀の問答・・和尚とは違う、迫力があった。
私は3度、美由紀と本堂で向き合った・・3度とも、美由紀に誘われて。
そして教えてもらった、女性の微妙な心を・・ストレートで教えてくれた。
私は和尚の書きとめたいた、この哲夫の話を見た時に、喜びが溢れた。
あのマリアに伝えた、色の話を聞いて・・本当に嬉しかった。
私にとって、唯一・・戦友と呼べる男・・哲夫。
共に悩み、共に挫折し、共に立ち上がった・・命を同時に感じていた。
まさに戦友である・・哲夫がいなければ・・私もどこかで諦めてい

たのかもしれない。

自分に対する厳しさが、優しさを作り出した・・母の伝言を背負いし者・・哲夫。

ヒトミの策略

晩夏の真青な空に入道雲が湧き上がり、夏の主張をしていた。
乾燥した風が爽やかに吹き抜け、雨の記憶を遠い過去にしていた。
水不足という言葉が、新聞の紙面に登場し始めていた。

陽の沈む時間が、早くなってきたと感じていた、天使を抱きながら。
美由紀が大丈夫と言ったので、ユリカと蘭と美由紀を準備に帰らせた。
ユリカに哲夫の迎えと、病院まで連れてきてと頼んだ。
私は寺の奥の小部屋で着替えて、カスミとマチルダとカスミのアパートに、ホノカに送ってもらった。
マチルダがカスミの部屋をチェックして、私も二ヤでチェックしていた。

「こら～・・チェックしないの～」と準備をしてるカスミが不敵で言った。
「淋しいくらい、男の影すら無いね～」とマチルダが二ヤで言った。
『でも、カスミは綺麗好きだよね～・・車でもそう思ったけど』と私は冷蔵庫を覗いて笑顔で言った。
「片付いてないと駄目なんだよ・・落ち着かない」とカスミが笑顔で返してきた。
「料理も出来るし・・さすが元主婦」とマチルダが微笑んだ。
「元を強調するなよ・・少し黙っといて、沙紀に会うんだから・・集中したいの」とカスミが真顔で言って、瞳を閉じた。
私はマチルダと顔を見合わせて、マチルダのニヤに二ヤで返していた。

カスミの準備が出来て、3人で歩いて出かけた。

5時少し前で、車も人も少なかった、カスミの部屋から病院までは5分で着いた。
私は4階で記帳して、ミホの病室に入った。
おやつを食べた沙紀が、自分で薬を飲んでいて、私を感じて振り向いた。
マチルダが沙紀の手を握って、笑顔で挨拶をして、奥のミホの所に歩いた。
私は沙紀を抱き上げて、ベッドに座らせて、手を握った。
私の後ろで、カスミが嬉しそうな笑顔で沙紀を見ていた。

『沙紀、今日も描いて欲しい人を連れてきたよ、カスミちゃん・・シオンちゃんと同じで、子供の頃の事を話してくれるから』と沙紀に笑顔で伝えた。
《うん、嬉しいよ、カスミちゃん綺麗だね～》と沙紀が嬉しそうに返してきた。
私は笑顔で振り向いて、カスミを沙紀の横に座らせた。
カスミは沙紀の手を笑顔で握って、輝きを放っていた。

「沙紀ちゃん、会いたかったの・・私はカスミです、よろしくね」
とカスミが輝く微笑で言って、沙紀の瞳を見ていた。
カスミも何かを感じたのだろう、笑顔で頷いた。
沙紀はスケッチブックを出して、色鉛筆のケースを開けた。
そして最初に手に取った色が、赤だった。

私は大丈夫だと思い、奥のミホの手を握るマチルダの所に行った。
ミホは眠ってるようで、私はミホのチェックをして、マチルダと病室を出た。
由美子の病室の前で、マチルダを見た、輝く笑顔で返してくれた。
《さすがマチルダ、経験量が違うな～・・楽しみだ》と心で思った、強烈な波動が病室から来た。

私は小さくノックして病室に入り、北斗と祖母に挨拶をして、マチルダを祖母に紹介した。
その時には、由美子の左手が上がってるのに気づいていた、マチルダはその左手を見て笑顔になった。
私は由美子の手を握り、笑顔で言った。

『由美子・・今日はアメリカの人だよ、マチルダちゃん』と笑顔で言った。
《うん、可愛いな～、素敵だな～、早く早く》と由美子に急かされた。
私は笑顔でマチルダを座らせた、マチルダも輝く笑顔で手を握った。
優しい空間がすぐに出来て、私はそのまま病室を出て、ナースステーションに行った。
婦長がいたので、笑顔で声をかけた。

「しかし、外人さんも凄いけど、カスミちゃんも凄いよね～・・ナースが全員見に行ったよ」と婦長が楽しそうに微笑んだ。
『迫力あるでしょう、あの容姿は・・婦長、明日の夕方にします・・第一回』と笑顔で返した。
「了解・・ナイスタイミング、私も行きますね」と婦長が笑顔で言った。
『それなら安心です、6時に迎えに来ます・・ミホと沙紀は俺が送ります』と笑顔で返した。
「了解です・・帰りは私が連れて帰るから」と婦長が笑顔で言った、私も笑顔で頷いて病室を覗いた。

カスミは沙紀に真剣に、子供の頃の話をしていた。
沙紀はカスミの表情を見ながら、嬉しそうに絵を描いていた。
私は雑誌を読んでいる、沙紀の母親に笑顔で頭を下げて、母親の笑顔に見送られ由美子の病室に戻った。

マチルダと由美子の空間が、暖かい場所になっていて、私も笑顔で奥のソファーに向かった。
「由美子は幸せだね・・あんな素敵な外人さんに会えて」と祖母が私に微笑んだ。
『由美子が呼び寄せたんですよ・・マチルダは分かっています、世界中の子供を見てきたから』と笑顔で返した。
「そうなんだろうね、あんな空間は初めて見たよ・・マチルダ、経験量が違うよね」と北斗が2人を見て笑顔で言った。
私も2人を見ていた、強い波動が何度も来ていた、ユリアとヒトミの喜びを感じていた。

『北斗・・今日はもう一人会わせるよ・・俺の最強の秘密兵器を』と二ヤで言った。
「まだいるんだね、秘密兵器が」と二ヤで返された。
『うん・・今度は男・・ヒトミの伝言を伝えられる・・哲夫っていう男』と笑顔で返した。
「嬉しいね〜・・最高だよ」と北斗が笑顔で返してきて、祖母に哲夫の話をしていた。
強く熱い波動が来て、ヒトミの確かな存在を感じていた、笑顔のヒトミの。

マチルダが笑顔で、由美子に挨拶をして、立ち上がった。
その時にノックが聞こえ、ユリカと蘭が、哲夫を連れて入ってきた。
私は何も言わずに、哲夫に由美子を示した、哲夫は真顔で頷いた。
そして笑顔になって、由美子の横に座って手を握った。

「由美子ちゃん、俺は哲夫だよ・・6年生なのだ。
小僧の弟子だよ、・・俺ね、ヒトミちゃんが初恋の人なんだよ。
由美子ちゃんが、ヒトミちゃんと友達になったって聞いたから、

会いたかったんだよ」
哲夫は優しく由美子に語りかけ、由美子の返事を聞いていた。
そして嬉しそうな笑顔になって、由美子を見ていた。
「そうだよ、恋のライバルだったんだよ、勝敗は分からなかったけどね。
多分・・俺の勝ちだったと思ってるよ」
哲夫は嬉しそうに笑顔で言った、そして由美子を見ていた。
「ありがとう、由美子・・由美子も優しいね」と哲夫が言って、少し真剣な目になった。
私は哲夫を見ていた、ユリカも蘭もマチルダも、ソファーで哲夫を見ていた。
「由美子・・俺の話を良く聞いてね、小僧はまだ伝えてないだろうから。
俺が教えるからね・・由美子はもうすぐ、知らない部屋に閉じ込められる。
怖くないよ・・ヒトミは怖くなかったって言ってたよ。
そこで、色々と言われるかもしれない・・でもね由美子、忘れないで。
お母さんが待ってる事を、忘れないで・・由美子が帰るのを、沢山の人が待ってる事を。
もちろん俺は小僧と一緒に迎えに行くよ、由美子が大好きだからね。
どんな事をしても探し出すから・・由美子は何を言われても、お母さんの事を考えててね。
俺は今、由美子に会って、本当に大好きになったよ。
由美子・・淋しい時は、耳を澄まして・・そうしたら、聞こえて

くるから。
お母さんの声が、聞こえてくるからね・・出来るよね、由美子」
哲夫は真剣に、そして優しく伝えた、由美子の顔を見ながら。
「もちろん、由美子・・俺も毎日来るよ・・チャリで来るからね、由美子に会いに。
由美子の可愛い声を聞きに、由美子のおませな話を聞きに。
だから約束を守ってね・・俺も約束を守るから。
少しおやすみ・・由美子、俺は明日から楽しみだよ」
哲夫は笑顔で言って、由美子の手を優しく胸の上に置いた。
哲夫は私達の方に顔を向け、真顔で頭を下げて、病室を出て行った。
『北斗・・頼むよ』と私が北斗に真顔で言った。
「任せて・・私も母親だよ」と美しい真顔で頷いて、哲夫を追って病室を出た。
「哲夫君・・強い子だね、母親の言葉を背負ってるんだね」と祖母が呟いた。
「由美子に正直に事実を伝える・・その重い責任を抱いて、ここに来たんだね」とユリカが呟いて。
「車の中では、楽しそうにしてたのに・・凄いよ、哲夫も」と蘭が満開で微笑んだ。
祖母に挨拶をして、病室を出た、長椅子に北斗と哲夫が座り話していた。
北斗が哲夫に密着して座り、哲夫にも笑顔が出ていた。
私達が哲夫の前を通り過ぎ、遊戯室の前に行くと、美由紀が理沙と話していた。
理沙に笑顔が出ていて、理沙の母親も嬉しそうだった。

私は公衆電話に向かい、ユリカに聞いた魅宴の番号にかけた。
ミサキが出て、冗談を言って、大ママに繋いでもらった。

「なんだいエース・・電話なんて、緊張するだろ」と大ママの声が聞こえた。
『ごめんね、今病院から・・大ママに頼みがあって』と返した。
「何だよ～・・何でもどうぞ」と明るい声が返ってきた。
『今日・・ヨーコを貸して欲しいんだ・・絶対にヨーコにもプラスになる事だから・・内容は今度ゆっくり話すよ』と真剣に伝えた。
「なんだい、緊張させて・・何時でもいいよ、迎えに来るんだね」と大ママが言った。
『ありがとう、大ママ・・後で迎えに行きます』と礼を言って、受話器を置いた。

そして私は電話帳で調べて、大将にいつか来いよと言われていた、焼肉屋に予約の電話を入れた。
８人の予約を入れて、《足りない時は、蘭に借りよう》と思っていた。
ミホの部屋を覗くと、蘭がミホの手を握り話していて、ユリカが沙紀の母親と話していた。
沙紀は仕上げの色塗りのようで、カスミは沙紀を笑顔で見ていた。
私は蘭の側に行き、ミホの手を握った、ミホが私を見て瞳を閉じた。
私はミホの額に手を当てて、ミホを見ていた、蘭の満開を感じながら。

『ミホ・・明日、ピアノを聴きに連れて行くね』と体重をかけてきたミホに言って、優しくミホを寝かせた。
沙紀と沙紀の母親に挨拶をして、美由紀を迎えに行った。
美由紀と哲夫で、理沙と笑顔で話していて、理沙にまた明日と哲夫が言った。

理沙の母親に笑顔で頭を下げて、７人で病院を後にした。
「チャッピー・・何食べさせてくれるの？」と哲夫が私に二ヤを出した。
『肉だろ・・食った事のない、美味い肉を食わせてやる』と笑顔で返して。
『蘭・・全員で〇〇焼肉に先に行っといて・・俺は少し用事を済ませて行くから』と笑顔で言った。
「了解・・急げよ、肉が無くなるよ」と満開二ヤで返された。
私はその言葉を聞いて、笑顔で頷いて、走って魅宴を目指した。
魅宴に着いて、大ママに頭を下げて、ヨーコを連れ出した。

「何？何？・・怖いな～・・どこを挑戦させてくれるの？」と手を繋いだヨーコが楽しそうに聞いた。
『今日は楽しむの・・ヨーコが頑張ったから、ご褒美だよ』と笑顔で返した。
「楽しみだ～・・そうだ、私もこうしないとね」と言って腕を組んできた。

「ヨーコちゃん駄目だよ～・・エースと腕組んじゃ・・俺の可愛いヨーコが」と二ヤ顔の呼び込みさんに声をかけられながら、腕を組んで歩いた。
２人で焼肉屋の個室に通された、個室の前のＹＵＴＡＫＡ？を見て、ヨーコが笑顔になった。
『ヨーコ・・今夜泊めてやってよ、悪ガキを』と笑顔で言って、ヨーコと個室に入った。
哲夫を見て、ヨーコの笑顔が咲いた、哲夫も嬉しそうな笑顔になった。

「哲夫・・小僧の真似して家出したの・・悪い奴だ」とヨーコ笑顔

で言って、哲夫の横に座った。
私は指定席のような、ユリカと蘭の間に座った。
「記録更新をしたくて・・小６で同棲」と哲夫が笑顔で返した。
「それはさせれないね・・今夜は我家に泊まりなさい」とヨーコが二ヤで返した、哲夫も嬉しそうに頷いた。
「駄目って言えば良かったのに・・私が休んで、泊めるから～」とカスミがヨーコに不敵を出した。
「哲夫・・あれが不敵な笑顔って言うのよ、かなりの経験をしないと出来ないの」とヨーコが笑顔で哲夫に言った。
「メモしとくよ・・さすがカスミ姉さんだね」と哲夫が笑顔でカスミに返した。

「哲夫、生意気だ～・・どうせ、タイプはリョウなんだろ」とカスミが二ヤで言った。
「リョウ姉さんに会ったの！・・そうだよね～、あんたのタイプだね～・・それで、何がそうさせたの？」とヨーコが二ヤで言った。
「美由紀姉さんに、喝を入れられた」と哲夫が照れた笑顔で返した。
「美由紀問答・・凄く良かったよ」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「あんた・・ユリカ姉さんとも絡んだの、１０年早いよ」とヨーコが嬉しそうに言って。
「美由紀、ありがとう」と美由紀に微笑んだ。

「哲夫の馬鹿が・・よりにもよって、ユリさんに甘えたから」と美由紀が二ヤで返した。
ヨーコが哲夫を見て、沈黙していた、私達は二ヤでヨーコを見ていた。
「言葉が出なかった・・我が弟ながら、怖くなった」とヨーコが全員に笑顔で言った。
楽しい夕食会が続いていた、全員の食べる量に驚きながら、私も笑顔で食べていた。

「ねえ、ヨーコちゃんは・・なぜ美由紀の天敵なの？」とユリカが微笑んだ。

「美由紀が障害を肉体的に乗り越えた時に、満足感が出てました。ヨーコ、美由紀を粉々に粉砕してって、小僧が二ヤで言ったんです。

それで美由紀と向き合ったんです、美由紀が小3で私が小6の時です。

ヒトミがいて、その存在に包まれていた時です。

私も必死でしたよ・・後で考えたら、小僧の一石二鳥に乗せられたんだと思いました。

私は美由紀に伝えたかった、美由紀の親友がヒトミなんだから。

ヒトミと美由紀にしか出来ない事、誰かに勇気を与えられる事を伝えたかった。

だから肉体的に乗り越えた先にある・・精神の壁を、乗り越えて欲しかった。

小僧は2度と見たくなかったんでしょう、美由紀が足の事で泣く姿だけは。

私にとって、施設以外で妹と呼べるのは、美由紀だけです。

その後に美由紀が見せてくれた、哲夫に対する想いで感じました。

私が哲夫に出来たのは、現実を意識させれる所まででした・・それが第一段階。

その後、小僧が哲夫に豊君と限界トリオに会わせた・・それが第二段階。

第二段階で、哲夫は豊君を感じて、普通の子供より強いレベルに到達してました。

そして私が美由紀を粉砕した後、小僧は美由紀の事を哲夫に託した。

この行為も一石二鳥でしたね、美由紀は哲夫に全てを委ねて見せ

ました。
哲夫は嬉しかったのでしょう、美由紀に執着してました。
だから、今でも哲夫の天敵は、美由紀ですね。
ヒトミが肉体を失った、その時の襲ってきた・・哲夫の喪失感。
哲夫の脳裏には、あの忌まわしい記憶が蘇っていた。
哲夫が部屋で閉じ篭ってた時に、施設の前に美由紀が来ました。
ヒトミの葬儀の日・・冬の冷たい雨の日でした・・美由紀は雨に打たれてました。
施設の門の前で、ずぶ濡れでずっと動かずに待っていました、哲夫は2階の部屋から見て。
慌てて走って美由紀の側に行った、そして美由紀が言ったんです。
哲夫が押してくれないと、今の私は前に進めないんだよ・・だから押してね。
前に進まないと、ヒトミに怒られるから・・美由紀、何してるのって怒られるから。
だから哲夫・・ヒトミの場所まで押して、ヒトミのいる暖かい場所まで。
小3の美由紀の強い言葉でした、私は美由紀の体を拭いて、髪を乾かした。
そして私の服を貸して、美由紀の準備をしました・・本当に嬉しかった。
その美由紀の強さが・・私の想像も出来ない世界に入っていて。
外に出ると雨がやんでいて、哲夫が美由紀を押した・・哲夫も前を見てました。
ヒトミに恥じぬように、美由紀に恥じぬように・・優しさを探してるようでした。
私も美由紀に沢山の勇気をもらいました、だから私も美由紀に返したい。
私に出来ること、それは美由紀に満足をさせない・・それだけしか出来ないから。

だから今でも美由紀にとって、私は天敵なんです・・そう呼ばれると、嬉しいんですよ」

ヨーコが笑顔で答えた、美由紀の嬉しそうな笑顔が出ていた。
「素敵だよ、ヨーコ・・私は心から言えるよ、ヨーコ魅宴を頼むね」とユリカが潤む瞳で言った。
「はい、全力でやってみます」とヨーコが嬉しそうな清楚笑顔で返した。
「粉砕はなぜ?・・限界トリオじゃなかったの?」とマチルダが私に聞いた。

『美由紀の身体的特徴、それを乗り越える・・健常者じゃ分からないと思ったんだ。
だから限界トリオでも無理じゃないかと、ヨーコしかいないと。
ヨーコは悪質な原作者に、幼少期を翻弄された・・でも一度も後ろを見なかった。
施設の沢山の弟や妹の為に、自分で乗り越えていたんだ・・それだけは感じていた。
だからヨーコに頼んだんだよ・・美由紀を強くしてくれって、ヨーコレベルに。
限界トリオが本気の時の伝達は、生きる方法を提案する・・生き方に問いかける。
ヨーコが本気の時は、なぜ生きているのかと問いかけるんだ。
俺はヒトミとヨーコの関係で、それに気付いた・・ヒトミが教えてくれたんだ。
美由紀の粉砕の話・・あれを提案したのは俺じゃない。
今夜、俺は正直に話すよ・・その真実を。
俺はヒトミの提案を、繋いだだけだよ・・一石二鳥を狙ったのは、ヒトミなんだ。
自分の残り時間を感じて・・心残りを無くす為に。

素敵な姉と、親友と、愛する弟の事で・・後悔をしない為に。
俺は子供だったから、そこまで出来る訳ないよ・・全てはヒトミの考えだった。
ヒトミや由美子は、精神的な成長が恐ろしく早い・・ずっと自分と向き合ってるから。
そして人の心を感じるから、色々な情報も入ってくる・・そして考える。
一人の世界で、ずっと考えてる・・だから精神的な成長をしてしまう。
俺は子供の心を正直に伝えた、ヒトミには嘘も隠すことも出来ないから。
だからユリカの力を感じた時に、本当に嬉しかったんだ。
成長したヒトミを感じたから・・その精神世界が、俺には大切な存在だから。
俺は必ず辿り着いてみせる・・そして伝えてみせる、ヒトミの出した難題に。
その解答用紙に強く答えを書いてみせる、それが俺に対するヒトミの唯一の望みだから。
小僧を作り上げるのは、ヒトミの強い意志だから・・俺は諦める事が出来ない。
あの頃の俺の提案していた事は、全てヒトミの伝達だった。
俺はヒトミで成長した・・ヒトミが心の全てを教えてくれたから。
春雨の時・・あの親父に言った言葉、あれは熱が言わせた。
春雨に乗り熱が伝わった・・あれはヒトミの問いかけだった。
今までに3度だけ、俺はヒトミの通訳をした。
無意識にしていた・・それはヒトミが俺に問いかける言葉だった。
4度目が近い・・それを感じている、全ては由美子の為に・・ヒトミは伝えようとしてる。
自分の後悔も反省も・・全て伝えようとしている・・愛する者、全員を使って』

私は感情的になっていた、由美子に触れて感じていたのだ。
由美子のすぐ側に原作者の存在を、強く感じていて、自分に言い聞かせていた。
ヨーコと美由紀が泣いていた、そして強い瞳で哲夫が私を見ていた。
静寂の中、ユリカが優しく抱いてくれ、蘭が満開の笑顔で青い炎で包んでくれた。

「チャッピー・・今の潮は朝引きだよ、土曜の早朝だよね・・台風が直撃しそうだし」と哲夫が真顔で言った。
『哲夫・・感じたか、悪質な存在を・・台風が直撃するのか？』と私は哲夫を見て言った。
「少しはＴＶ見なよ～・・かなり強い奴が来てるよ・・嵐の中にいる、自分で言ったくせに」と哲夫が二ヤで言った。
「嵐の中にいる？」と蘭が哲夫に満開で聞いた。

「うん・・ヒトミ姉さんの段階の時、チャッピーが自分で言ったんだ。
チャッピーがトイレと食事をする時に、俺が１時間だけ交代した。
俺、嬉しくて・・代わりはお前だって言われた事が。
その時に言ったんだ、ヒトミはどこかの部屋の中に誘拐されてる。
敵は上にいると思う・・嵐の中にいる、気付かれるなよって。
その日も台風が上陸していて、停電になって・・病院が自家発電で、照明が暗かった。
俺はイメージして、ヒトミ姉さんの左手を握ったけど。
何も見えなかったんだ、ただ凄い雨と強風が吹いていて・・そこを歩きながら、叫んでた。
ヒトミ～って呼びながら歩いたんだ、頭の中の映像を見るなって言われてたのに。
ずっとそれを見て歩いてたんだ・・ヒトミ姉さんが戻った後。

チャッピーに未熟者めがって、言われたんだよ・・だから今度は入ってみせる。
今度は俺が連れ戻す・・俺こそが豊の義弟で小僧の継承者。
ヒトミが唯一愛した男・・哲夫だからね」

哲夫が私に二ヤで言った、私も二ヤで返した。
私は嬉しかった、哲夫の成長が、私に火を点けようとする姿が。

『哲夫、生意気な・・ならお前に由美子の右手を任すぞ・・泣くなよ坊や』と哲夫に二ヤ継続で言った。
「任せなさい・・体力は付けたかね、小僧・・倒れても、俺は忙しいぞ」と哲夫に二ヤで返された。
「哲夫・・気をしっかり持っててね・・シズカ先輩の切り札は、マリちゃんだよ」と美由紀が二ヤで言った。
「今から降りても良いですか？」と哲夫が美由紀にウルで言った。
「それは出来ない相談だね・・そのウル顔の継承はやめなさい」とヨーコが二ヤで言った。
「これしか教えてくれなかったんだよ、ウル顔は徹底的に鍛えられたよ・・必ず役に立つって言われて」と哲夫が笑顔で返して、全員に笑顔が咲いた。

「今、少し分かったよ・・哲夫がどうして、リョウがタイプなのかが」とカスミが二ヤで言った。
「あら～・・カスミ、述べよ」とマチルダが二ヤで返した。

「だって、ヨーコを見て育ったんだろ・・それに限界トリオを見ていた。
姉に圧倒的に可愛いヨーコが存在したし、限界トリオの熱も感じていた。
恋愛対象で見れない存在が、それだけ居たんだよね。

それに美由紀もいるんだし、施設の妹達だっている。
その中に存在しない個性・・それがリョウなんだよ。
今の・・少年の段階の哲夫には、出会う事が出来ない相手。
それが魔性の女なんだね・・あの涼しげな微笑に隠された、何かに反応した。
リョウは本当に喜んでた、そして何かに気付いたと思う。
エースが嬉しそうだったから、奴もリョウの変化を感じたんだ。
心酔の涼がいよいよ覚醒する・・魅宴のＮｏ１を本気で狙うよ。
私も楽しみでしょうがないんだ・・ミコト姉さんと仕事できるのが。
リョウの目指す頂を感じたいから、その遥かに高い頂を。
そしてヨーコ・・哲夫が家出したら、私が拾うからね」

カスミが笑顔で言って、哲夫に小さな不敵を出した。
「なるほどね・・カスミ、あんたが一番覚醒してるよ・・それは私にしか分からないよ、一週間離れてたからね」とマチルダが二ヤで返した。
「本当に覚醒速度が速いね・・でも哲夫は私が拾うから・・私にはその時が分かるかも～」とユリカが爽やか二ヤで言った、カスミが不敵で返していた。
「カスミの絵・・楽しみだね」と蘭が満開で微笑んで、ユリカも爽やか笑顔で頷いた。
「もう言わないで・・エースお願い、魅宴で頑張るから・・絵を貰ってきて」と可愛いカスミでウルをした。
『仕方ないな～・・可愛いカスミで言われたら』と二ヤで返して頷いた。
「よし・・準備に行こうかね」と蘭がユリカを見た、ユリカが伝票を見ていた。

「エースが自分と哲夫の分を払ってね・・カスミは自分の分だけ。
残りは私と蘭で支払いますね」

ユリカが爽やかに微笑んで、マチルダとヨーコと美由紀が笑顔で礼を言った。
私が蘭に金を渡していると、哲夫が礼を言いに来た。

『覚えてろよな、哲夫・・忘れるなよ』と哲夫に二ヤで言って。

『ヨーコ・・哲夫に魅宴を見せてやれよ、俺も後でカスミと行くから。
それから一緒にＰＧに行こう、哲夫に４人娘を紹介したいから』

笑顔のヨーコに笑顔で言って、２人と別れてＰＧに向かった。
マチルダが美由紀を押して、その後ろをユリカと蘭とカスミが歩いて、夜街関係者の視線を集めた。
ユリカのビルの前で、ユリカと別れて、ＰＧに入り蘭とカスミが準備に向かった。
マチルダが美由紀を押して、フロアーに入っていった。
四季とユメ・ウミとシオンとマキが出ていて、マチルダと美由紀も加わって笑顔が溢れていた。

『久美子・・明日の６時３０分から・・演奏会よろしく』と曲の合間をみて久美子に言った。
「了解・・期待して良いよ」と久美子が強く言った、私も笑顔で頷いた。
『シオン・・そういう事だから、ハルカに伝えといてね』と笑顔でシオンに言った。
シオンのニコちゃんとマキが笑顔で頷いたのを見て、私はＴＶルームに行った。

４人娘が夕食を食べていた、私は演奏会の了解をマダムにもらい、礼を言った。
マダムと松さんがＴＶの天気情報を見ていた、台風の影響は土曜の早朝からと言っていた。
その時、セリカがドレスで入ってきた。
私は一瞬固まって、その姿を見ていた、マダムと松さんに笑顔で挨拶をして。
４人娘に笑顔を向けた、流星の輝きがキラキラと尾を引いて流れた。
そして私の腕を取って、可愛く微笑んだ。

「固まってないで・・フロアーに案内してね、エース」と流星二ヤで来た。
『誰かと思ったよ・・さすがだね、流星のセリカ』と笑顔で返して、フロアーに向かった。
裏口からフロアーに入ると、静寂が訪れた、全員がセリカを見ていた。
「よろしくお願いします」と可愛くセリカが微笑んで、流星を流した。
「やっぱりほすい・・瞳の電飾」と美由紀が笑顔で言った。
「美由紀、無理～非売品・・もう製造中止してるよ」とセリカが笑顔で返して、全員に笑顔が出た。

「困った時代だよ・・行くよ」とカスミの声がした、振り向いて凍結した。
カスミが、お祭りの白いタイトなドレスで立っていて、その後ろにホノカがピンクのドレスで立っていた。
「まじで困った時代だね・・エースが楽しい時代は」とホノカが華麗に微笑んだ。
「群雄割拠か～・・楽しいね～」とその後ろからナギサが華やか二

ヤで言って。
「戦国時代だ～・・少し怖いですね、将軍」と蘭が満開二ヤで隣の北斗に言った。
「飛び道具を使う奴までいるのか～・・この世界は飽きないね～」と北斗がセリカに二ヤで言った。
私は北斗にセリカを紹介して、カスミと魅宴を目指した。

『カスミ・・パンツ穿いてるの？』と通りで視線を浴びながら、腕を組むカスミに聞いた。
「今日は穿いてるよ・・小さいやつ、隠しきれないやつをね」と最強二ヤで返された。
『やめろよ～・・想像した』と笑顔で返して、ニヤニヤカスミと魅宴の裏階段を上った。
魅宴に入ると、女性達が１５人ほど出ていた、大ママが笑顔でカスミに手招きした。
カスミは少し緊張した笑顔で、フロアーに歩いて行った、私は哲夫と一緒に裏から見ていた。
「永遠の憧れやね～・・すげな～」と哲夫がカスミを見ながら呟いた。

私は哲夫の背中を見ていた、緊張感を纏っていて、たのもしく見えた。
女性達の前に立ったカスミは、強く発光しながら、ミコトを見ていた。
ミコトの嬉しそうな余裕の笑顔が見えた、晩夏の戦国物語が開演していた。
群雄割拠の中の、自分の個性を主張しようと・・女戦士が舞台に揃った・・。

カスミが沙紀に話した、子供の頃の話。

後日私は沙紀の母親から聞いた、母親が素敵な話だったと教えてくれた。

シオンとカスミの後悔の話、自分の心を探すように話している。

大切な想いに溢れてるので、夏物語の後書きに加えます。

ヒトミと由美子の感性を感じ、そこから始まるユリカの覚醒・・それは驚きの連続だった。

自分の感性を認め、そのレベルを上げ続けた。

将来リンダの手助けをする為に、その力を強めていった。

ユリカの精神世界は無限をイメージできた、底の無い深海であり、宇宙の果てのような。

華奢な体で隠した、好戦的な心・・その戦いたい相手こそが・・弱い自分。

大ママがフロアーを降りる時に、女性達に伝えた。

私が次の世界で、誰かに成れると選択出来るなら・・迷わず、ユリカになりたい。

その精神世界を覗いてみたい・・想像すら出来なかったから。

貴女方も、そこで満足しないで・・次を、その上を目指して下さい。

伝説の女神、ユリカの後輩として。

大ママの愛情溢れる言葉に、強い波動が何度も押し寄せた。

押し付けは無い、強い主張も無い・・深く静かな世界。

静寂の中に存在する、不純物０の水・・透明の女神・・百合香。

星の支配者

静寂のフロアーに舞い降りた、輝きを連れた女。
変化を楽しみ、飽くなき理想を求める、強い意志を連れて。
女優達に頭を下げて、輝きを放出していた。

カスミがミコトに付いて、準備をしていた。
私と哲夫の所に、大ママとヨーコが笑顔で歩いてきた。
「エース・・哲夫をいつ派遣してくれるんだい？」と大ママが楽しそうに言った。
『６年後に・・哲夫が望めば』と二ヤで返した。
「哲夫・・バイトで良いからおいでよ、ヨーコの場所に」と大ママが笑顔で言った。
「ありがとう・・その時は、頑張ります」と哲夫も笑顔で返した。
私とヨーコと哲夫で、大ママに挨拶をして魅宴を出た。
ヨーコと哲夫の楽しそうな話を聞きながら、裏口からＰＧに入った。

私の指定席で哲夫にフロアーを見せた、シオンがニコちゃんで、マキがニヤニヤで歩いてきた。
「哲夫・・１０年早いよ、誰が回復したのかね～？」とマキが言った。
「マキ姉さんの意地悪・・登校前にダメージ与えて、シオン姉さんがいなかったら・・登校拒否してたよ」と哲夫がウルで返した。
「哲夫君、いつでも言ってね・・マキが意地悪したら」とシオンがニコちゃんで言った。
「うん・・俺はやっぱり、家出したら・・シオン姉さんに拾われたいな～」と哲夫が照れて言った。
「嬉しいです～・・必ず拾ってあげますね」と最高ニコちゃんで返した。

『哲夫・・お前はそう言うと思ったよ』と笑顔で言って、哲夫がシオンとマキに頭を下げてＴＶルームに向かった。

ＴＶルームで哲夫をマダムと松さんに紹介して、４人娘の紹介を美由紀に頼んだ。

私はマチルダに出ようと誘って、久美子を見ていた、少し緊張感が出ていた。

『久美子・・今からマチルダと病院に行って来る、帰ったら美由紀と４人で出よう』と笑顔で言った。

「何？何？・・どこに行くの？」と久美子が笑顔で聞いた。

『年に数回のチャンス・・今夜がその夜だよ・・嵐の前の静けさを感じに行こう。

４人で海に出よう、イルカちゃんが待ってるから』

久美子の輝く笑顔を見ながら、笑顔で伝えた。

「本当に・・本気で言ってるんだね」と久美子が笑顔で確認してきた。

『美由紀と宿題しとけよ』と笑顔で返した。

「台風前か～・・静寂の海、嬉しいな～」と美由紀が笑顔で言った。

「うん・・早く帰ってきてね、マイ・ダーリン」と久美子に二ヤで返された、私も笑顔で頷いた。

『哲夫・・今夜だけヨーコに甘えろよ・・明日から頼むぞ』と笑顔で言った。

「了解・・任せてくれて、ありがとう」と哲夫が笑顔で返してきた。

「ねぇ・・エース、私もいつか夜の海に行きたい」とエミが少し寂しそうに言った。

『もちろん連れて行くよ、お母さんもミサも一緒にね・・出来ればお父さんも』と笑顔で返した。

「うん」と少女の笑顔で笑った。

「エミなら、いつでも俺が連れて行くよ・・夜の海に」と哲夫が笑顔で言った。

「哲夫兄さん・・いやらしい感じが出てるよ～」とエミが不敵で返した、哲夫は驚いてエミを見ていた。

「馬鹿だね～哲夫・・お前がかなうわけないよ・・エミは小1で割り算を理解した、小僧の愛弟子だよ」とヨーコが二ヤで哲夫に言った。

「参りました～」と哲夫がその場で土下座をして、全員が笑っていた。

マダムと松さんも楽しそうで、私とマチルダはその笑顔を見て出かけた。

通りに出ると、マチルダが笑顔で腕を組んできた。

『やっと2人っきりになれたね、マチルダ』と渋く言ってみた。

「うん・・帰ってきて、嬉しくてね～」とマチルダが輝く笑顔で返してきた。

『俺と腕を組むのが、そんなに嬉しいんだ～』と二ヤで返した。

「それもだけど・・リンダに全ての話をしたよ、リンダ・・本当に喜んでた。

その中でね、リンダが一番羨ましがったのが・・やっぱり夜の海。

いつか絶対に連れて行ってもらうって、楽しそうに言ってたよ。

あんなに楽しそうなリンダ、久しぶりに見て・・私も嬉しかったよ。

その海に・・それも最高の状態の海に・・久美子と美由紀と行ける。

嬉しいに決まってるじゃない・・ユリカ姉さんと、蘭姉さんの嫉妬が怖いよ」

マチルダが嬉しそうに笑顔で言った、ユリカの少し強い波動が来ていた。
『もちろん、リンダも連れて行くよ』と笑顔で返して。
《久美子の為だよ～・・明日の演奏会の為です》と心に囁いた、ユリカの優しい波動が来た。

病院に着き、面会時間が過ぎていたので、マチルダを廊下の長椅子に待たせて病室に入った。
沙紀がＴＶを見ていた、ミホはお風呂でいなかった。
私は笑顔で沙紀の横に座った、沙紀がＴＶを消して手を出した。

『沙紀・・良い子だね～、１人でＴＶを見てるんだね』と笑顔で言った。
《うん、沙紀、寂しくなくなったよ、ミホちゃんと由美子ちゃんがいるから》と返してきた。
『そうだね、２人も沙紀の事が大好きなんだよ』と笑顔で返した。
《うん、カスミちゃんの絵、沙紀は好きになったよ》と言って、沙紀がスケッチブックを差し出した。
私はその言葉で、少し緊張した、沙紀自身が好きだと言った作品を感じて。
『そっか～・・沙紀の自信作、楽しみだな～』と言って、手を離し受け取った。

私は完全な凍結状態で、その絵を見ていた。
高原を走る列車の中だろう、右奥の席に寂しげな表情の、今のカスミが車窓を見ていた。
頬杖をつき、少し疲れの見えるカスミが、外の景色を何気に見ている。
その向かいの席に、中学の制服を着た、ショートカットのカスミが、

今のカスミを見ていた。
その表情は寂しげだったが、瞳には強い意志が表現されていた。
そしてその横に、小学生のカスミが無表情で、今のカスミを見ていた。
無表情のカスミは、今のカスミに何かを言いたげで、今にも話し出しそうだった。
そして今のカスミの横に、園児服のカスミが、可愛い笑顔で楽しそう描かれていた。
園児のカスミは、本当に楽しそうに、車窓を左手で指差して笑っていた。
右手は今のカスミの上着の袖を引っ張り、「ほら見て～」と言ってるようだった。
車窓にはカスミの大きな顔が映っていた、最強の不敵で微笑む、輝きを連れたカスミだった。
奥に広がる高原も森も緻密に描かれ、そしてその不敵のカスミは窓ガラスに映っていた。
４人に不敵で微笑むカスミは、あの下手くそな愛情表現で、４人を包んでいるようだった。
列車自体が過ぎ行く時のようで、今のカスミは、まだ絶望の中にいるようだった。
その４人を背負って、全ての経験を自分の中に入れてこそ、出るのであろう。
他を圧倒する最強の不敵と、熱い愛情表現が。
メッセージが強まってる、シオンの絵以降、強い伝達が出てきてると感じていた。

《カスミは沙紀に不敵を出すはずがない、それに暴力から逃げた話しなんてしないよな～》と思っていた。
ユリアの強烈な波動と、ユリカの優しい波動に包まれていた。

『沙紀、素敵だよ・・カスミも絶対に喜ぶよ』と手を握って伝えた。
《沙紀、嬉しい、明日はピアノの人が描きたい》と返してきた。
『了解、沙紀・・ありがとう、もうすぐ消灯の時間だよ・・明日迎えに来るね』と笑顔で伝えた。
《うん、待ってるね、ありがとう》と言った沙紀の額に、お休みのキスをした。
嬉しそうな沙紀を見ながら、カスミの絵をケースに入れて、沙紀に手を振って病室を出た。

マチルダが長椅子で、首を長くして待っていた。
私は笑顔でケースを渡した、マチルダも絵を見て凍結していた。

「沙紀・・素敵すぎるよ・・どうして描けるんだろう、カスミ号泣するね。
リンダも描いてもらいたいな～、沙紀がリンダをどう表現するのか？
楽しみだよね～・・考えるだけで、ワクワクするよ」

『今度、マチルダがリンダに会った時。
リンダが一番羨ましがるのは、マチルダの絵を見た時だよね』

私は二ヤで言った、マチルダも二ヤで頷いた。
マチルダと腕を組み、ＰＧに歩いていた。
静かな夜を感じて、嵐の前の静けさを感じていた。

「エース・・由美子は強い子だよね？」とマチルダが前を見て言った。
『強いよ・・マチルダだって、感じてたろ』と私も前を見て返した。

「リンダが私に、もう一度帰れと言ったんだ。

帰れと言われて・・嬉しかったよ。
そしてこう言った、マチルダにしか出来ない事をしてね。
その行為で、マチルダも何かに気付くから。
自分に正直にね、私は感じてるからって言ったんだよ。
そしてレイカの、私の絵の解釈を聞いて、本当に嬉しかった。
根源的な何かが有るんだよね、由美子の世界に・・そこに有るんだと感じてる。
私は世界中で、子供達の悲惨な状況を見てきた。
死の場面も、亡骸も沢山見たんだよ・・見過ぎてたのかも知れない。
今日、由美子を感じてそう思ったよ・・私は死を恐れすぎてきた。
死する事が最大の不幸だと・・その想いが強過ぎてたよ。
エースの白鳥の歌の解釈、昨夜マキが話してくれた。
生にも死にも染まらずに漂う・・私の理想だと感じたよ。
牧水の本を買って帰るよ、私も触れてみたい・・高みに存在する人に。
これからも伝えたいから・・世界中の人々に、真実を伝えたいから。
空の青、海の青にも染まず漂いたい・・由美子のように。
私に出来ること・・今は分からない、でもあるんだよね。
必ず連れ戻そうね・・大切な由美子を」

マチルダは腕の力を強めて、最後に私に微笑んだ。
私は間近の美しいマチルダの、深い緑の瞳を見ていた。
『マチルダ、ありがとう・・俺はマチルダにしか出来ないこと、なんとなく分かってるよ』と笑顔で返した。
「エース・・お願い、教えて？」とマチルダが真顔で言った、私はその真剣さに押されて話した。
『俺の映像は、ヒトミのクリスマスプレゼントなんだよ。

その映像のレベルを上げて、制御する力を、リンダがプレゼントしてくれた。
そしてマチルダが、鮮明な画像にしてくれたよね。
俺は今回・・由美子の時には、それが使えるんだよ。
頭で考えたイメージじゃ駄目なんだ、それは脳の考えが入ってくるから。
沙紀が絵で伝えてくる最大の事は・・それなんだよ、既成概念を外せって言ってるんだ。
だから俺は自分の感じてる事を、映像に映し出し、それで由美子を探す。
俺は1人じゃないよね・・今回は1人じゃない、マチルダが付いている。
一緒に探してくれるよね・・マチルダだけだよ、それが出来るのは』

マチルダの嬉しそうな笑顔を見ながら、笑顔で伝えた。
「当たり前だろ、最後まで一緒に探すよ・・私は自分の力が好きになれそうだよ、ユリカ姉さんのように」とマチルダが前を見て言った。
PGのビルが見えていた、不夜城のように、夜空の下に立っていた。

TVルームを覗くと、久美子と美由紀が笑顔になった。
「エース・・ワシがサクラの許可をもらったかい、3人は寝てるかい・・エミも頼むな」とマダムが笑顔で言った。
『ありがとう、マダム・・エミ、怖くないからね』と笑顔で言った。
「エースと一緒なら、何も怖くないよ」と嬉しそうな少女の笑顔で返してきた。
私も笑顔で頷いて、美由紀を抱き上げて、車椅子に乗せた。
マダムと松さんに、全員で静かに頭を下げて、TVルームを出た。

通りに出て、タクシーを止めて、ＹＵＴＡＫＡ?をトランクに入れて出発した。
エミと久美子の笑顔を見て、私も自然に笑顔になっていた。
「美由紀ちゃんは、何回目なの?」とエミが笑顔で聞いた。
「３回目だよ・・でも楽しい気持ちで行くのは、初めてなの」と美由紀が笑顔で返した。
「そっか～、別れの海だよね・・イルカちゃんは?」とエミが聞いた。
「今から会えれば、２回目だよ・・凄く素敵なの、美しく輝くのよ」と美由紀は笑顔継続で返した。
「どうしよう・・会えなかったら」と久美子がウルで言った。
『それは心配ないよ・・マチルダ・蘭・ユリカで、信用を勝ち取ったからね』と笑顔で返した、久美子も笑顔になった。

マス爺の店に行き、笑顔のマス爺に鍵を借りた。
小船に私が美由紀を抱いて乗り、エミを抱き上げて乗せて、マチルダと久美子の手を引いて乗せた。
マチルダと久美子でエミを挟んで座った、美由紀は指定席の一番前に座っていた。
『エミ・・怖くないね?』と笑顔で言った。
「全然大丈夫・・ここでも素敵なんだけど」と笑顔で返してくれた。
「エミ・・前を見ててね、海が見えてくる時が綺麗なんだよ・・今夜は最高だね、静かだよ」と美由紀が微笑んだ、エミも笑顔で頷いた。
私はモーターに動力を伝え、ゆっくりと海を目指して出発した。

町の明かりが遠ざかり、南洋に存在する大きな低気圧の渦が、大気の淀みを取り払っていた。
空気が澄み渡り、満点の星空が現れ始めた。
「見えた!、波が立ってる・・空と海の境界線の白い場所、地球と

宇宙の境界線なんだね」とエミが振り向き私に言った、私も笑顔で頷いた。
河口が迫り、私は速度を落として、穏やかな波を超えていた。
本当に静かな海だった、間近に来た時にも、小さな波頭が立ってるだけだった。

沖の空には入道雲の欠片も無く、無限の世界を表現する黒の濃淡に、無数の星が瞬いていた。
４人に言葉は無かった、全員が沖を見ていた、海と星空だけの世界を。
その時点でエミと久美子は泣いていた、初めての世界を感じて。
私は波の立たない場所まで来て、少し速度を上げた、星空のパノラマを楽しみながら。

そして衝撃的に現れる、沖に向かう小船の、エミの真横で、一頭のイルカがジャンプしたのだ。
「うっそ～」と久美子が叫び、エミがあまりの事に固まっていた。
私は目的地に着いて、小船を泊めて碇を下ろした。
イルカは一度ジャンプしたきり、姿を見せない、４人は海を見ていた。
「来る・・あっちだよ」と美由紀が叫んだ、全員がその方向を見た。
１０頭はいるであろう、黒い表皮の背ビレが見えていた、４人は黙って待っていた。
イルカは小船の側で回遊を始めた、その回遊範囲が狭まった事に、私は驚いていた。

「なんて綺麗なの・・なんて優しいの」と久美子が呟いて泣いていた。
「素敵だね・・優しい仲間だね」と美由紀が泣きながら海に向かって言った。

「何度見ても感動するよ・・どうしてだろう、嬉しさがこみ上げてくる」とマチルダが涙を流して言った。
エミはただ泣いていた、イルカを見つめて、笑顔で泣いていた。
私はエミの後ろに周り、エミを後ろから抱いていた、エミが私を見て笑顔を見せた。

「次は・・絶対に触ってみたい、優しい体に触れてみたい」とエミが言った。
『了解・・浮き輪を持ってこようね』と笑顔で返した、その時である奇跡を見せてくれた。
小船の真横に浮かび上がったのだ、星の光を反射する背ビレが浮かんだ。
そして顔を見せてくれた、あの右目に傷のあるイルカだった。
そのイルカは確かにエミを見ていた、私はそう思ってエミを抱き上げた。
そしてエミをイルカの方に出した、エミは最高の笑顔で優しく背ビレに触れた。
その瞬間に瞳から大粒の涙を流して、私にしがみついた。
そして美由紀、久美子、マチルダが触っていた、3人とも笑顔で泣いていた。

そしてイルカが深く潜った、私はエミを月の方向に向けた。
『月だよ・・月に向かって飛ぶんだ』と4人言った、4人が月を見たときに飛び上がった。
輝く水滴の尾を引いて、あのイルカが高くジャンプした。
真っ直ぐに上をめがけて、体を反らして大きくジャンプをした。

そして子供のイルカであろう、4頭のイルカ達が何度も何度もジャンプを見せてくれた。
楽しそうに遊ぶように、誰が一番飛べるのかを競うように。

４人は笑顔で拍手をしながら見ていた、その美しい姿を目に焼き付けるように。

どの位の時が経ったのだろう、私達は時を忘れて楽しんでいた。
イルカ達は真っ直ぐに小船を目指し、全速力で泳いできた。
そして小船の下を潜り、ジャンプをしながら沖に泳いで行った。
静寂の世界が戻ってきて、私はエミの笑顔を見ていた。

「エース、ありがとう・・私も絶対に忘れない、この夜の海の事を」と久美子が１６歳の輝きで微笑んだ。
「うん、忘れられない、こんなに素敵な事は」と美由紀が笑顔で言った。
「私も・・絶対に忘れないよ」とエミが笑顔で言って。
「さぁ・・これで準備は整ったね、後は全力でやるだけだね」とマチルダが微笑んだ。
私も笑顔で頷いて、マチルダにエミを渡した。

私が陸を目指していると、４人は楽しそうに話していた。
満点の星空の下で、４人の笑顔が水面に映ってるようで、私は八ッとして気付いた。
《カスミの絵は、鏡なんだ・・カスミが絵を見る時は・・不敵に微笑めというメッセージなんだ、過去に囚われるなという》私は心に呟いた、ユリカの優しい波動が来た。
《分かってるよ、ユリカ・・また来ようね》と囁いた、強く優しい波動が何度も来ていた。

私が河口を目指していると、海を見ていたマチルダが叫んだ。
「エース！止めて！・・あれは何？」と大声で指差した。
私も他の３人も、そっちを見て固まった。
『マンタ！・・なぜこんな浅瀬に』と私は驚いて言って、慌ててエ

ンジンを止めた。
マンタは悠々と船に向かって泳いで来る、３mはある大きな羽のような鰭を靡かせて。
「マンタって何？・・種類は何なの？」とマチルダが聞いた。
『エイダよ・・確かオニイトマキエイ、頭にドリルのような角が有るんだよ・・こんな浅瀬にはいないはずなんだけど』と返した。
「おっっっきい～・・凄くおっきい～」と近づいてくるマンタを見てエミが叫んだ。

マンタは小船を気にする事も無く、たまに浮かんで悠然と泳いできた。
私は慌ててスクリューを上げて、マンタを見ていた、その大きさに全員が圧倒されていた。
「なんなの～・・これがエイなの」と美由紀が叫んだ時にマンタが船の真下に入った。
その特徴である角が見えた、真下に入ったときに、鰭を広げた全長が小船よりも大きかった。
マンタの移動の力で、船がゆっくりと揺れた、私はエミを見ていた。
エミは反対側に行き、マンタを見送っていた、恐怖など無いようだった。
マンタは黒い大きな体を海面に見せて、海に道を作るように泳いでいた。
マンタが行く方向を5人で、呆気にとられて見ていた。
ユリカの波動が何度も来ていて、私は困っていた。
《ユリカ・・それは無理だよ、奇跡なんだから～》と囁いた、ウルの波動が帰ってきた。

「世界は広いな～・・あんなエイがいるのか～」とマチルダが笑顔で言った。
「小僧も初めて見たの？」と美由紀が聞いた。

『うん・・生きてるのは初めて見たよ。
死骸を漁船が回収したのを、港に見にいった事はあるけど。
もっと暖かい南の海の、沖合いにしか居ないって聞いたよ。
奇跡だよ・・多分・・会える、確立は３％以下だよ』

４人の笑顔に笑顔で言って、スクリューを下ろし、河口を目指した。
エミが興奮して手を広げて話していた、３人も興奮してるようで、笑顔で聞いていた。
「小さな魚が、マンタちゃんに張り付いてたよ」とエミが興奮して言った。
『コバンザメだよ、エミ・・多分マンタは、プランクトンを食べるんだね』とマチルダが笑顔で言った。
「マンタのおこぼれを貰うのか～・・要領の良い奴だ、どこぞのエースみたいに」と美由紀が二ヤで言って３人で笑っていた。

マス爺に金を払うときに、エミがマス爺にマンタの話をした。
「ほう・・そりゃ～今度の台風は強いぞ～、奴は嵐の警告者って、漁師に言われちょるかいね」とマス爺がエミにシワシワ笑顔で言った。
「そうなんだね、マンタちゃん、安全な場所を知ってるんだね」とエミも嬉しそうな笑顔で返した、マス爺も笑顔で頷いた。
「嵐の警告者か～・・素敵だったな～、あの悠々と泳ぐ姿」と久美子が笑顔で言った。

「オニエイは、海に棲む生き物の中で・・唯一泳ぐでなく、飛ぶって表現されるんじゃよ。
その悠々とした姿を見ると、誰もがそう思うよの～。
鯨とは違う、その大きな存在・・確かに鯨も海で会うと、不思議な何かを感じるが。

あの大きさの意味・・それこそが何かを伝えるんじゃろうね。
人間が地球の支配者じゃない・・本物の漁師たちは全員、そう思っておるよ。
海に生きる命を知れば知るほど、その考えが強くなるんじゃ。
深海にはどんな生き物がおるんじゃろうね・・それを考えるだけで、楽しいんじゃよ」

マス爺は笑顔で言った、４人が嬉しそうな笑顔で頷いた。
マス爺に全員で礼を言って、タクシーで夜街を目指した。
エミを抱いて４人をＴＶルームに送り、指定席に着くと、満席で熱が高かった。
蘭とホノカが休憩に歩いて来た、蘭の満開二ヤ顔を見て二ヤで返していた。

「どうして覚醒するんだろうね～・・あれは怖いよ」と二ヤ継続で蘭が言った。
「私も欲しくなったよ、瞳の電飾」とホノカがウルで言った。
『確かに・・飛び道具だよな～』とユリさんに連れられてるセリカを見て言った。
流星の輝きが強く、離れていても尾を引いてるのが分かった。

「４人を連れてどこに行ったの？」と蘭が満開で微笑んだ。
『久美子に緊張感があったから、海に出てきたよ』と笑顔で返した。
「良いな～」とホノカが言って、「まぁエミが居たんなら、何も無いか」と蘭が微笑んで、２人が扉に消えた。
私はセリカと目が合って、セリカに二ヤして、小さな流星二ヤを確認して出かけた。

ミチルの店の前で夜景を見ていた、遠くに海の存在を感じながら。
最上階でもほとんど風はなかった、湿度も感じず爽やかだった。

静寂の夜空に暗雲の姿は無く、月が幻想的な光を放っていた。
《嵐の中にいる・・低気圧の渦こそが奴の意志なのかな？》と心に囁いて、ユリカの優しい波動に押されて店に入った。
カウンターの隅に座り、ＢＯＸを見ていた、ミチルとリョウで１４名の団体を仕切っていた。
カウンターの女性がコーラを出してくれた、私は笑顔で返した。

「銀河の奇跡、怖いよ・・リョウちゃんって、夜に選ばれた人間だね・・ホノカとは違う魅力だよ」と楽しそうに言って客の前に戻った。
私はスーツのオヤジ達に囲まれた、リョウを見ていた、一番偉そうなオヤジに密着していた。
そして飛んでくる下ネタに、少し激しい下ネタで応戦していた。
オヤジ達もミチルも楽しそうな笑顔で、リョウが場の雰囲気を引っ張っていた。
私はリョウと目が合って、笑顔で頷いて、瞳で返してきた猟を見て店を出た。

魅宴に裏口から入り、フロアー裏で熱いフロアーを見ていた。
少し騒がしいフロアーで、カスミが発光していた、その圧倒的な美を見せ付けていた。
その輝く姿からは想像できない、開放的な会話で笑顔を作っていた。
初めてカスミと話す客は、そのギャップに驚き、魅了されるのだ。
普通に出会ったら、声をかけるのを躊躇するほどの美しさ、俺じゃ無理だと思わせてしまう。
攻撃的な美が隠している、カスミの可愛い心を、今はそれで良いんだと思っていた。

「強烈だよ・・同じ場所に立たないと分からないね、あんたが怖くなったよ」と後ろからミサキが言った。

『必死になれよ、ミサキ・・奴が現時点での若手Ｎｏ１だ、だけどまだ才能に頼ってる』と振り向いて笑顔で言った。
「もちろん負けないよ、私は淡いだからね」とミサキが美しく微笑んで、控え室に入って行った。
私はミコトとカスミのコンビを見ていた、カスミと目が合ったのでサインを出した。
【依頼】【ＯＫ】【迎え】【来る】と出して、カスミが【了解】と出すのを見て魅宴を出た。

ユリカのビルの１階でエレベーターを待っていると、ユリカが降りてきた。
爽やか笑顔で私の首に腕を巻いた、私も笑顔で抱き上げて階段を上った。
最上階まで上がり、夜景を見ながら、少し出てきた風に吹かれていた。

「マンタちゃん、見たいな～」とユリカが爽やかウルで言った。
『いつか見れるよ、ユリカなら』と笑顔で返した。

「強烈だったよ、マチルダの反応が一番・・誰かが個性を確認させた後だからね～。
私も知らなかった・・そこまで強い力だとは」

ユリカが笑顔で静かに言った、私も深海の瞳を見ながら笑顔で返した。

『俺もだけど、リンダもマチルダも手に入れたんだよね。
誰かのプレゼントなんだよ、幼くして亡くなった子供の、最後のプレゼント。
和尚の言葉が少し理解出来たよ、そして問われてる事を、考えれ

るようになれたよ。
俺はユリカに教えられたよ、ユリカの感性とユリアに。
俺は最近その2つが別の物だと感じてる、ユリカもプレゼントされたんだよ。
幼くして亡くなった、ユリアのプレゼントなんだね・・大切な物なんだよ。
俺も次の段階に行くよ、明日・・関口医師に聞かなければならない。
なぜ沙紀は入院してるのか・・そして理沙の病を』
私は真顔で、真剣な深海の瞳に語りかけた。
「沙紀！・・まさか隠されてる事があるの？」とユリカが慌てて聞いた。
『沙紀には無いと思うよ、だから不思議なんだよ、入院してるのがね。
沙紀なら、自宅で生活出来るよね。
理沙は違うんだ・・理沙の母親の目、最近何かに絶望してると思う。
だから俺は極力、理沙との関係を今は作らない、由美子の段階が終わるまで。
それが終われば、理沙と母親との関係を作ろうと思ってる。
美由紀が何かを感じながらも、関係を深めてるからね。
俺も美由紀の世界まで行きたい、受け入れる人間に成りたいんだよ。
死を受け入れて、それでも生きることを問い続ける。
今夜、再確認したよ・・俺の理想。
あの高みにいる人の言葉・・空の青、海の青にも染まず漂う。
その言葉を追いかけていたい・・いつか納得できるまで』

私は少し感情的な心のまま、ユリカに話した。
ユリカには何も隠す必要がない、その大切な存在を抱きながら。

「そうなんだね・・理沙ちゃん。
美由紀は凄い子だよ、今日の問答・・本当に、素晴らしかった。
哲夫に気付かせ、引き出した・・押し付けなんて、何も無かった。
ユリさんの表情を見てるだけでも、私は幸せな気分になったよ。
そして銀河の3人に強い影響を与えたね、美由紀の言葉は影響力がある。
遥かに遠い理想の世界から響いてくるような、そんな言葉だよね。
マチルダが誘拐しないように、気を付けとかないとね」

私はユリカの静寂を連れた言葉で、揺り篭に乗せられていた。
羊水の揺り篭に揺られて、映像が流れた・・ヒトミを探している、幼い自分が見えた。
そしてヒトミが起き上がり、見ている私を見た。
「自然の摂理じゃないよ、悪質な強い意志だよ・・実像は無い、目では見えないよ」とヒトミが言った。
私はヒトミの真剣な表情を見て、真顔で頷いた、ヒトミの横には幼い私が手を握っていた。
私は自分の背中を見ながら、映像を切った・・爽やかな風が吹いてきた。
その風に力があり・・嵐が主張を始めたと感じていた。
ユリカと海の方向を見ていた、遠くから暗雲が迫ってきていた・・。
今では有名になったマンタ、そして鯨を見る観光まで発生している。
確かに水族館とは比べ物にならない、私はイルカショーなど見ようとも思わない。

悲しい気持ちになってしまうから、そこでしか見れないのだから仕方ないのだろうが。

水槽にいるものは、ただ大きさや不思議さを感じるにすぎない。

棲むべき場所に棲むものは、その存在意義さえ伝えてくれる。

戦闘機が飛ぶ南の海に、今でもマンタが悠々と泳いでいる。

国家間で利権争いをしている海は、人間が権利を主張できるのだろうか。

今現在の国際情勢だから、それは仕方のない事なのだろう。

だが常に心に違和感を持っておきたい・・地球の支配者は人間じゃないという事を。

自然の摂理ではない、地球はそれその物が、生きているのだ。

人間は常に自然と向き合い、進化を遂げた・・環境に対応する為に。

その行為は、地球に愛されたいと願っていたと感じる。

何かを忘れたのだろうか、どこかで捨てたのだろうか。

いつから人は、地球の支配者になったのだろうか？

もう一度会いに行こう・・あの南の海に、飛ぶように泳ぐ大きな体に会いに。

低気圧の渦も・・大地を揺らす力も・・波が大地を襲う事も。

全ては地球が生きている証・・地球が死すれば、人間に未来は無い。

全ての生命に、その後は存在しない・・私達は、地球の一部なのだから。

生きた証

星が瞬く夜空に、暗雲が存在を表し始めていた。
吹き抜ける生暖かい風に力があり、南国の民は準備を余儀なくされる。
何度経験しても、絶対に甘くみない、その教えが息づいていた。

私はユリカを降ろして、笑顔のユリカに笑顔で手を振って別れた。
魅宴に歩きながら、風の強さを楽しんでいた。
夜街関係者の男たちが、看板などをチェックして、対策に余念が無く。
週末の襲撃に備え、昼間に通過するのを祈ってるようだった。

私が魅宴に入ると、カスミがフロアー裏に帰ってくる所だった。
大ママにカスミが挨拶をしていた、その姿が発光していて、充実感を示していた。
大ママも笑顔で返して、楽しそうに話していた。

『下ネタ封印、できたみたいだね～』と私が二ヤで声をかけた。
「なんとかね、楽しかったよ」とカスミが輝く笑顔で返してきた。
「良い刺激になったみたいだよ、特にミサキがね」と大ママが笑顔で言った。
私はカスミと大ママに挨拶をして、魅宴を後にして通りに出た。
カスミは通りで、夜街関係者の男達が出てるのを見て、私に最強不敵を出して首に腕を回した。

「さぁ、当然私にも抱っこ伝説、プレゼントしてくれよね～」とカスミが耳元に囁いた。
『カスミも好きだね～・・そんなドレスでね～、祭り上げられるよ』

と二ヤで返して抱き上げた。
カスミは私を二ヤで見て、前を見て輝きを放出した。
「カスミちゃ～ん・・俺が抱っこするのに～、エースばっかり」と呼び込みさんに言われ。
「カスミ～、お祭りでも抱かれたでしょ～、代わってよ～」とキャバレーの客引きの女性に冷やかされた。
カスミはその度に、輝く笑顔で返していた。
私はカスミを抱いたまま、ＰＧの裏階段を上った。
カスミは目を閉じて静かだったが、期待に胸を膨らませていると感じていた。
カスミが着替えに行き、私は指定席で状況をチェックした、終演前で女性も一段落していた。

「ありがとう・・帰ってきたエミの顔見て、嬉しかったわ」とサクラさんが美しく微笑んだ。
『素敵な奴にも会ったから・・エミ喜んでました、サクラさん上がりですか？』と笑顔で聞いた。
サクラさんが頷いたので、少し話があると言って、ＴＶルームで待ち合わせをした。
私は蘭を確認し、セリカの流星を見て、ＴＶルームに戻った。
カスミが来ていて、私に三つ指を付いて微笑んで頭を下げた。
私は二ヤで返して、奥からケースを持ってきた。

『カスミ・・離して見ろよ、滲ませるなよ』と二ヤで言って渡した。
「ありがとな・・緊張するよ」と真顔で受け取って、ケースから絵を出してテーブルに置いた。
カスミの背中が小刻みに震えていた、マチルダがカスミを優しく抱いた。
マダムと松さんが絵を見て、目を潤ませてカスミを見ていた。
「素晴らしいの～・・よくここまで辿り着くよの～」とマダムが絵

を見ながら言った。
「良かったね、カスミ・・乗り越えたと、認められたね」と松さんが優しく言った。
カスミは泣きながら頷いていた、視線は絵を見ていた。

「うん・・カスミだね、頬杖ついてるのが・・ＰＧに来た頃のカスミだよ。
良かったね、カスミ・・強い子だよ、あんたは」

サクラさんが笑顔で優しく言った、カスミはそれで又号泣していた。
サクラさんがカスミに笑顔をおくり、私の前に座った。
「お待たせ・・どうぞ、何でも驚かないから」とサクラさんが微笑んだ。

『明日・・エミとミサを借りたいんです、病院の３人に会わせます。
レイカも一緒に・・ミサは場合によっては、傷つくかも知れない。
友の死など、経験しなくてすむ事を、俺は経験させるのかもしれない。
それにより、あのミサの鋭い感受性が、どれほど傷つくのか。
俺には分かりません・・でも・・それでも、俺はミサに期待してしまう。
どうしてもミサとレイカに会って欲しい、そしてお友達になってほしい。
由美子の同学年で友達になれるのは・・ミサとレイカだけだと信じてる。
でも・・サクラさんにはこう言います、俺に必要だから、エミとミサを貸して下さい。
俺の可愛い妹なら、絶対に大丈夫だと信じてる・・だから貸して下さい』

私は想いを言葉にして、サクラさんに頭を下げた、その時にセリカとマユが入ってきた。
「何言ってるのよ・・もう、頭を上げて・・私はエースを信じてるわ、大切な経験をさせてあげてね」とサクラさんが言って、優しく抱きしめてくれた。
「もちろん、私も・・サクラさんと同じ気持ちだよ、レイカに大切な経験をさせてね」とマユが微笑んだ。
『ありがとう・・嬉しいよ』と笑顔で2人に返した。

「エース・・1つだけ教えて？
世界記録で走る時、脳はいちいち指令を出さない。
なんとなく分かるけど、その考えの真意は何？
エミがずっと考えてるの・・あの子は感じようとしてるの。
私は母親として聞いておきたい・・私の感じてる事と、エースの考えの違いを」

サクラさんが真顔で聞いた、その時に着替えを終えた全員が帰ってきて、マユを誘って座った。

『ヒトミが段階の時・・原作者に映像を見せられ。
ずっと言われ続けたと、教えてくれました。
映像は今までの忌まわしい歴史の場面で、目を逸らしたくなるような物だったと。
それを見せられた後で、こう言われたと・・生きてる意味があるのかと？
お前は体を動かす事も、話すことも、食べることも、排泄すら自分で出来ないだろうと。
存在自体無意味な人間が、お前のような人間が、これからも生きる意味は無いと。
そう言われたそうです・・俺はそれを聞いて、どう思ったのかと

ヒトミに聞きました。
ヒトミはこう答えました・・あれは、あの声は内側から聞こえたと感じたと。
どこからかと考えようとしたら、何かを慌てて切られたと感じた。
それで自分に戻った・・心が理解した、追い詰められてた心が復活した。
それは脳が直接言葉にして伝えてきた物だと・・心を奪われていたと。
狭い部屋をイメージさせられて、さも天からの声のように言っていた。
でもそれは脳の言葉だと感じた・・その時に心が目覚めて、律子の声が聞こえた。
そんな感じだったと・・そして今もそう思ってると言ったんです。
俺はそれで感じたんです・・確かにあるのかもと、脳の暴走が。
例えば、自殺する人っていますよね。
無責任な他人は・・死ぬ位なら、何でも出来るのにって言うけど。
当人には選択肢が無いほど、追い詰められてしまう。
全ての思考回路が、悪い方に考えさせる。
その呪縛が解けない・・だから自らの死を選択する。
どうして呪縛が解けないのか・・それは他の思考回路を切られてるから。
全ては脳が支配してる・・思い詰めた人の心は、疲れ果てて動けない。
脳は支配される事に飽きている・・心に命令される事に飽きている。
その状況を打破する方法は1つ、生命を終わらせれば良い。
もちろん自分も存在しなくなるが、それでも良いと思うほど・・飽きている。
戦争もそう・・あんなに人と人が殺しあえるのは、脳に支配された人間が指示したから。

そうでないと出来ない・・そう思いたい、人間を信じたい。
そう思ったんです・・それを伝える為に、俺は色々考えた。
年下には、ぼかした表現で、物語で伝えました。
エミに言った、世界記録の話・・あれは年上用なんです。
エミだからそれにしました・・世界記録で走る時、いちいち脳が指令を出さない。
かなり回りくどい表現です、でも俺はそう思ってる。
その根拠は・・ヒトミの左腕なんです。
あの心が直接動かしているような、ヒトミの意志を伝える左手。
俺の話で、不思議な事をみんな感じてるでしょう・・ヒトミが左手に誘ってと言った言葉。
不思議な言葉ですよね、その左手までの道を教えて欲しいなんて。
その言葉にも意味があります、俺が感覚的にヒトミの考えを理解した時に言われた。
ヒトミは脳に悟られないで、心を左手に移したいと言ったんです。
死するにしても・・脳の意思じゃなく、寿命として死にたいと言ったんです。
だからこそ、自分は意志を示したいと・・次にこの病に陥る仲間の為に。
この病気も意志が有ると証明したい・・そう強く伝えてきた。
無の半年より、意志ある半月・・それがヒトミの心の望みだと。
それが自分の生きた証だと、そして生きた意味になるんだと言いました。
私はこの事を誰にも言えずにここまで来た、そしてやっと言葉に出来た。
それは由美子を感じたから・・由美子は同じだから、ヒトミと同じ事を感じてる。
ヒトミや由美子の世界、それは一人でずっと考えてる。
だからこそ気付いた、脳の暴走に気付いてしまった。
俺は戦った先に希望が有ると信じてます、だって由美子の脳は機

能してると感じるから。
脳に生きる意味を認識させたい、どっかで人間という生命に絶望してる脳に。
記憶の担当にさせられて、多くの辛い現実を蓄えさせられた脳に。
それでも人間は素晴らしい生き物だと・・生きる意味のある生命体だと。
その先にあると信じる・・由美子の輝く未来が。
ヒトミがどうしても伝えたい事・・俺だけじゃとても無理な事。
それこそが、生きる事が素晴らしいという事です・・それには全員の力がいる。
そして友情が絶対に必要なんです・・ヒトミに対する美由紀のような。
それになれる存在・・ミサとレイカ、最高の2人が存在してる。
俺は由美子にどんな未来があっても、それ自体には執着しません。
ただ由美子が人を愛してほしい、生きた事に誇りを持って欲しいんです。
人間で産まれた事に喜びを感じて欲しい・・心で感じて欲しいんです。
世界記録で走る時、脳は指令を出さない。
脳が指令を出すレベルは、考える余裕のあるレベル・・脳が介入できるレベル。
人が人を好きになる時に、脳は何の指令も出せない・・脳は気づけない。
それは心でしか感じないから・・心が動かしてるから、愛という全ての想いは』
ここまでだった、私は俯いて動けないでいた。
ヒトミの感情を再確認して、未熟だった自分を責めていた。
「嵐の中にいる・・そう奴は、嵐の中にいるんだよ・・それは自分

が作り出した。
嵐とは、自分で作り出した映像・・そう言ったよね、ヒトミは。
そして小僧が哲夫に言った・・無になれ、脳を切れって。
小僧・・何を俯いてる、何を後悔してる・・冷めるなよ、怖くなったのか？
何に染まってる？・・成功したいとか、絶対にそうするとかじゃないだろ。
漂えよ、小僧・・何にも染まらず、無で漂え・・それは小僧にしか出来ない。
お前は自分で立候補して、原作者に選ばれたんだろ・・こんな所で止まるなよ。
私の楽しみが無くなるだろ・・ニヤニヤで笑い飛ばせ、それこそが小僧の武器。
諦めないという本質・・お前こそが和尚の継承者で豊の実弟。
最後の挑戦者だろ・・まだ前に進むよ、一歩でも前に。
由美子の場所に近づくよ・・お前が進まないなら、私は一人で行く。
車椅子で行ってみせる・・私は人間が好きだから、全ての生命が好きだから」
美由紀の強い言葉が響いていた、私はそれで完璧な状態に戻った。
『誰が冷めたって？・・泥道だから、美由紀一人じゃ・・３ｍでウルだな。
仕方ない・・美由紀を押して行くか、その場所に何が有るのか。
２人で見に行く約束だからな・・お腹空いても、ウルするなよ』
私は二ヤ顔の美由紀に、二ヤで返した。
「エース・・あんたはそれを、由美子に教えてないよね・・なぜなの？」と北斗が真顔で聞いた。

『由美子にも、自分で感じて欲しいんだよ・・それが大切だと思ってる。
ヒトミは段階以降、凄く体調も良くなったんだ。
でも基本的な体力が無かった・・由美子なら、絶対に安定期が来る。
その為にも、由美子自身が感じて欲しいんだ。
そして強い意志を持ってほしい、由美子自身で気付いてほしいんだよ。
今回は一気に越えたい・・大丈夫、俺は由美子を信じてる』

私も真剣に北斗に伝えた、北斗は笑顔になった。
「そうだね・・今回の段階の時なんて、由美子にとっては第一段階だもんね」と北斗が笑顔で言った。
『そうだよ・・そして2度と誘拐される事はない、由美子なら』と笑顔で返した。
「土曜だって聞いたけど、何時頃だと思っているのですか？」とユリさんが真顔で言った。
『早朝だと思っています・・ハルカに頼みがある』とユリさんに言って、ハルカを見た。
「何でもど～ぞ」とハルカが微笑んだ。

『今回は半日で勝負を決めたい、だからハルカが早朝、ＰＧを開けてくれないか。
営業前には勝負をつける・・その最後の場面を考えてる。
由美子と一緒に帰る時に、その方向を探す時には、声を信用できないと思う。
道を示せるのは、真似の出来ない音・・そう久美子のピアノの音を頼りに帰る。
だからＰＧを開けてくれよ、そして久美子・・ピアノを弾いて。

俺は久美子の音だけは分かるから、その音なら信じられるから』

私はハルカと久美子に笑顔で伝えた、ハルカも久美子も笑顔で返してくれた。

「了解」とハルカが言って、「任せなさい」と久美子が微笑んだ。

「よし・・９人衆も出来るだけＰＧに集まろう、由美子の絵を見ながら瞑想しよう」とカスミが言った。

「了解です」とレンが笑顔で返した。

「リョウも来るだろうから・・銀河は揃うよ」とホノカが微笑んで。

「私も仲間に入ります・・お願いします」とセリカが流星で微笑んだ。

「もちろん私も、大切なレイカのお友達の為にも」とマユが微笑んだ。

「それにミサキとヨーコだね・・エース、ゲストを招いて・・和尚様」とハルカが笑顔で言った。

『了解・・絶対に来るよ』と笑顔で返した。

「ありがとう・・本当にありがとう」と北斗が泣きながら頭を下げた。

『北斗・・何言ってるの、俺は策略家だよ・・今回の、由美子の段階の時だって。

一石何鳥も狙ってる、それに女性達も由美子の為だけじゃないよ。

自分の次の段階の為に挑むんだ、本気で自分と向き合うんだよ。

北斗はそれに対し、何も感謝をする事は無いよ。

俺はいつの日か、由美子が自分の言葉で・・可愛い声で。

ありがとうって言ってくれると思ってる、それだけで良いんだ。

それだけが望みだよ・・全員、それだけが望みだよ。

あとは自分の為にやるんだ、次の段階に上る為に。

由美子と一緒に次の段階に、挑戦するんだよ。

北斗は母親として、由美子に見せて・・全ての想いを伝えて。
泣いて叫んで・・伝えて・・何も隠さずに、曝け出して。
そして最後の言葉を強く伝えてね・・そこが一番大切だよ。
全員確認してるよね・・今回のことは、由美子を借りて自分に挑む。
由美子に届かせるには・・自分に届かせないといけない。
俺は絶対に感じてみせるよ、全員の・・一人一人の強い想いを。
明るく楽しい未来を目指すなら、避けては通れない相手だから。
幸せなど求めないと・・笑い飛ばしてやれ、お前の存在には気付いたと。
ニヤニヤしながら言ってやれ・・楽しみにしてる』

私は北斗を見て、全員を見回して二ヤで言った。
北斗に笑顔が戻った、ユリさんの薔薇を囲んで、女性達のニヤに囲まれていた。

「あ～・・今日は出来の悪い、小僧と哲夫で疲れた～・・今夜も添い寝よろしく、私は全裸だよ」と場の空気を変えるために、美由紀が笑った。
「ダメ～・・美由紀、全裸はダメ～」と蘭が満開ウルで言った。
「蘭姉さんの牙城、中々に硬いな～・・小僧に大きな貸しを付けたいのに～」と美由紀が蘭に二ヤで返した。
「怖い子だよ・・姉御は」と蘭が満開ウルで言った。
「美由紀・・私と旅をしようよ・・飽きただろ、出来の悪い男は」とマチルダが二ヤで言った。
「嬉しいです～・・青い目のイカス青年を、よろしくです～」と美由紀がマチルダにウルをした。
「美由紀・・あなたは本当に」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「やばいよ～、美由紀・・ユリさんが本気でＰＧ改装しそうだよ、車椅子用に」とサクラさんが微笑んだ、ユリさんも薔薇二ヤを出し

ていた。

「それは怖すぎる・・私達が死に物狂いにならないと」とカスミが不敵で言った。

「そこはウルですよ～・・カスミ姉さん」と言って、美由紀がホノカに二ヤを出した。

「瞬時に制御出来ないのよ・・不敵以外は、脳の指令だからね」とホノカが二ヤで返した。

「ホノカ姉さんは、脳を切れますもんね～・・素敵です～」と美由紀が私に二ヤで言った。

「そっか～・・その事だったのか、ホノカ姉さんの芯の強さ」とレンが笑顔で言った。

「なるほどね～・・確かに脳を切ってる感じだよね～」とマユが二ヤで言った。

「やめて下さいよ～・・それじゃあまるで、私が現実逃避してるみたいじゃないですか～」とホノカが華麗二ヤで私を見た。

『ホノカ、そこまで・・ヒント出し過ぎ～』と二ヤで返して、美由紀を抱き上げた。

美由紀を車椅子に乗せて、エミを抱き上げて、全員でＴＶルームを出た。

エレベーターで蘭が私を満開二ヤで見て、美由紀を見た。

「美由紀、夜の海で何があったの？・・エミのこの寝顔、イルカだけなの？」と満開二ヤで言った。

「え～・・行ったのか、良いな～」とカスミが私に不敵を出した。

「えへ～・・マンタちゃんに会いました・・３ｍ以上ある、大きなエイちゃんです」と美由紀が二ヤで言った。

「うっそ～！・・そんなのがいるの、宮崎の海に？」とホノカが叫んだ。

「か～・・見たいな～」とカスミが言って。

「マンタちゃん」と蘭がウルで私を見た、私はウルウルで返した。
「そのウル顔は、奇跡に近い事なんだね」とカスミが言った、私はウルのまま頷いた。
「マチルダ～・・見たいよね～」とカスミがマチルダにウルで言った。
「ごめんねカスミ・・私は銀河の奇跡の中の、マンタの奇跡なの」とマチルダが最強輝き二ヤで返した、カスミはウルウルで返した。

「マリアも見たいね～・・イルカちゃんとマンタちゃん」とユリさんが薔薇で微笑んだ、私も笑顔で頷いた。
「マリアは見れそうだな～・・私もマリアと一緒が良いな～」とセリカが流星二ヤで言った。
「セリカ・・私でもまだなんだからね」とカスミが不敵で言った。
「沙紀は凄いな～・・不敵・・緻密過ぎる描写だ～」と流星二ヤで返した。
「カスミちゃん・・ごめんね、今週はお店休むね・・週末開けても、台風で意味なさそうだし」とサクラさんが言った。
「分かりました・・ユリカ姉さんの家に行こ～」とカスミがマチルダの腕を組んだ。

「私は靴屋、日曜出勤の子と変わってもらうね」と蘭が真顔で言った。
『ありがとう、蘭・・大丈夫、土曜のＰＧの営業までには終わらすよ』と笑顔で返した、蘭は満開になり頷いた。
「その感じだね～・・てか、夕方までには終わらすよ」と美由紀が笑顔で言った。
『そうだね・・お腹空くしね』と笑顔で返した。
「お寿司が良い・・頑張った美由紀には、お寿司が似合う」と美由紀が少女の笑顔で言った。
「本気で怖い・・美由紀の話術と、その多様な表情」とカスミがウ

ルで言った。
「良く出来ました～・・そのウルが、正解です」と美由紀が二ヤで返した。
全員が笑って、笑いながら通りに出た、ユリさんも北斗も楽しそうだった。
サクラさんのタクシーを見送り、ユリさんとマリアを見送った。

ローズのビルの前で、セリカとシオンを見送り、ユリカが爽やか笑顔で出てきた。
「あれ？・・ホノカ、帰るの？」とユリカが二ヤで言った。
「私も良いんですか！？」とホノカが嬉しそうな笑顔で言った。
「遠慮はいらないよ・・雑魚寝で良ければね」とユリカが笑顔で返した。
「ありがとうございます、嬉しいです」とホノカが嬉しそうな笑顔で言った。

「カスミちゃん、今から魅宴の前を通ると・・魔性が帰る所だから、誘って良いよ・・タクシーで来てね」とユリカがカスミとホノカに微笑んだ。
「はい・・誘ってみます」とカスミが笑顔で返して、ホノカと歩いて行った。
「銀河４人揃い・・楽しみですね～」と蘭が満開で微笑んだ。
「蘭は体力あるよね～・・睡眠不足なのに」とユリカが爽やか笑顔で返した。
「ユリカ姉さんの家のお泊り・・楽しくて」と満開で微笑んだ。
「小僧の添い寝より、楽しいんだ～」と美由紀が私に二ヤで言った、私はウルで返していた。

ユリカの車に乗り、マチルダと美由紀がマンタの話をしていた。
蘭がずっと満開ウルで私にもたれていた、私もウルで返していた。

「ようするに・・台風前の静かな海なら、可能性あるんだね」とエレベーターで蘭が言った。
「そうなんだろうね・・蘭、次の台風前は、一緒に行こうね」とユリカが微笑んで、蘭が満開で頷いた。
リビングに入り、私はシャワーを浴びて、着替えて戻ると銀河が揃っていた。

『リョウもホノカも、眉以外は素顔でも変わらないね』と二ヤで言った。
「眉はしょうがないでしょ、最近細いのが雑誌に出だしたよね・・てか、マチルダのそれは？」とホノカが言った。
「整える程度だよ、でも色を足してる・・そうしないと、無いみたいだから」とマチルダが笑顔で返した。
7人でワイワイと化粧の話をしていた、美由紀が楽しそうに、真剣に聞いていた。

「ユリカ姉さんは、元々眉が細いんですか？」とリョウが聞いた。
「うん・・寂しい位細いの、今は少し太目が流行りだよね」と爽やかウルで返した。
「でも絶対細くなりますよ、シャープな感じだし・・素敵です」とリョウが笑顔で返した。
『凄いね・・色々研究するんだね、マチルダでもするのか～』と私が何気に感想を言った。

「そりゃ～するよ・・もちろんリンダもね。
普段は着る物にこだわれないから、NYで2人揃うとパーティーに出かけるよ。
ドレスを着て、キラキラにして・・それでバランスをとろうと、リンダが言ってる。
女性としての楽しみを持たないと、煮詰まった時が辛いからね。

だからど派手に着飾って、芸能人主催のパーティーとかに繰り出すの。
年に3・4度かな・・楽しいよ～」
マチルダが笑顔で言った、女性達の憧れの目がマチルダを見ていた。
「素敵過ぎます～・・素敵な男性が、大勢いるんですね」と美由紀が笑顔で言った。
「いるよ・・素敵な奴も、とんでもない奴も・・世界中の、代表みたいなのが」とマチルダが二ヤで返した。
「一度でいい・・行ってみたい、凄い女もゴロゴロいそうだな～」とカスミが笑顔で言った。
「いるよ～・・凄いのがゴロゴロね。
でもその中に入っても、ユリさんとユリカ姉さんは別格だと思うよ。
人の輪が出来るよ、2人を中心に」
マチルダが笑顔で言った、ユリカが少し照れていた、女性が全員笑顔で頷いた。
『ようするに・・炎系が多いって事だね』と私が笑顔で聞いた。
「そうだね、元来ラテン系とか南米とかアフリカ系の人は、生まれた時に強い炎を持ってるから。
でもリアン姉さんはその中にいても、別格だね・・誰も日本人とは思わないよね」
マチルダが笑顔で言った、私も笑顔で頷いた。
「エースは多分、一度リンダが連れて行くよ・・リンダの初の同伴者で。

世界選手権に挑ませるかって、楽しそうにリンダが言ってたから。
その世界でも中心になれるのか、楽しみだね～って・・リンダが二ヤしてたよ。
あんたが悪い、リンダを点火したから・・リンダ楽しんでるよ。
その時は私も、ユリカ姉さんと蘭姉さんと美由紀を誘って見に行くよ、ニヤニヤで。
リンダは、日本からの訪問者を楽しみにしてるよ・・もちろん、銀河の奇跡もね」

マチルダの笑顔の言葉に、全員に笑顔が溢れた。
「それは楽しみだ～・・何をしでかすのやら、最後の挑戦者」と蘭が満開二ヤで言った。
「ブロンドに囲まれて、冷静でいられるのかしら」とユリカが爽やか二ヤで言った。
「国際問題に、発展させるなよ」とカスミが不敵で言って。
「絶対、その中で一番難しい子に行くよ・・ニヤニヤで」とリョウが楽しそうに笑った。
「そして、ウルを何度も出すのね・・そして、ウルは世界共通言語って言うのよ・・通用するのやら」とホノカが笑って、全員が大爆笑していた。

私はウルウルを出しながら、喜びに包まれていた。
リンダとマチルダの、女性らしい一面を感じて、嬉しかったのだ。
私は美由紀の笑顔を見ていた、すぐに追いつくからと心で囁きながら・・。

私が海外に初めて出たのは、１５歳の夏だった、豊に同行して旅立った。

その場所での作業が終了した日に、リンダとマチルダが尋ねて来た。

そして私は空港で豊を見送らされた、両側からリンダとマチルダに腕を組まれていた。

豊が別れ際、土産話楽しみにしてるぞと、拉致状態の私に二ヤで言った。

それから香港のホテルに連れて行かれ、タキシードを着せられた。

その姿を後ろから見ていた、ユリカと蘭がドレス姿で二ヤで見ていた。

何枚も写真を撮られて、リムジンに乗り5人で出かけた。

大きなホテルの玄関に着いて、リンダをエスコートしてパーティ会場に入った。

本当に楽しかった、別世界に連れ出され、沢山の高みにいる人に出会えた。

全員が中国の未来を話していた、私は英会話がまだまだで、必死に拙い英語で話していた。

ユリカと蘭の周りには人が集まって、2人が笑顔で話していた。

しかし私はここで出会ってしまうのだ、私の必死の状態に、一人の女性が反応した。

東京物語で重要人物になる、ある女性に出会うのだった。

私には本当に楽しく、有意義な時間だった。

多様な人種が笑顔で集っていた、リアルに世界を感じていた。

その後もリンダは、私に経験という、大切な沢山の贈り物をくれた。

絶対にリンダにしか出来ない、自分ではどんなに頑張っても、その時じゃ出来ない。

そんな経験をプレゼントしてくれた、常に笑顔で、楽園ブルーで背中を押してくれた。

「チャレンジ」と言って二ヤを出した、その度に私はリンダを驚かせたくて。

挑戦を続けた・・そして自分の考えを伝えた、リンダはそれに全て応えてくれた。

ありがとう、リンダ・・青い目の冒険者・・楽園の微笑み。

ブルーが輝くときに、溢れ出す希望・・閉ざされた、扉の鍵を探す者。

Ｌａｓｔ　Ｃｈａｉｉｅｎｇｅｒ　Ｒｉｎｄａ・・・Ｉ　ｌｏｖｅ　Ｒｉｎｄａ・・。

心の餌

暗い夜空に、先発隊のような黒雲が、進軍をしていた。
重い空気を払うように、女性達の笑顔が咲いていた。

全員で盛り上がっていた、ユリカが珍しくお酒がすすんで、少し酔っていた。
そしてカスミにいきなり美由紀が倒れこんだ、得意の瞬間睡眠を披露していた。
「くそ〜・・美由紀、可愛すぎるぞ〜」とカスミが私に二ヤで言った。
「疲れたんだね、出来の悪い男2人で」と蘭が満開二ヤで言った。
私が美由紀を抱いて、ベッドルームに入った。
盛り上がるリビングの声を聞きながら、大淀川の流れを見ていた。

少し風が強くなったのを、木々が揺れで教えてくれた。
私は目覚まし代わりに、カーテンを開けたまま、美由紀の首に腕を通して眠りに落ちた。
美由紀の少し高い温度が、集中する心を表現していた。
私は美由紀の少し女っぽくなった香りを楽しんで、眠っていた。

翌朝目覚めて、美由紀を起こさないように、静かに洗面所に向かった。
雨はまだ降っていなかったが、風が強く、空は暗かった。
重たげな雲に覆われた空に、青は存在しなかった。
私は歯を磨き顔を洗い、朝食に卵を焼いて塩サバの切り身を人数分焼いた。
ホノカとリョウにサービスで、カニさんタコさんを作り。
揚げと豆腐の味噌汁を作って、美由紀を起こしに行った。

「う～ん・・おはよ」と美由紀が起きて、学校の準備をしてる私を見た。
「今日は昼までだよ、覚えてる？」と美由紀が笑顔で言った。
『聞いてない』とウルで返した。
「小僧が話を聞いてないの・・給食までだよ」と言った美由紀を抱き上げて、車椅子に乗せた。
リビングに出ると、蘭が起きていて、化粧をしていた。
美由紀が洗面所に行き、蘭の横に笑顔で座った。

『蘭・・少し疲れてるね』と真顔で言った。
「大丈夫だけど、夕方充電してね」と満開笑顔で返された、私も笑顔で頷いた。
美由紀が準備が終わり、私も着替えて、蘭と3人で朝食を食べた。
「今日の味噌汁、美味しいね・・味噌が違うの？」と蘭が私に微笑んだ。
『うん、ユリカコレクション・・味噌の種類が、凄いんだよ』と二ヤで返した。
「他のコレクションは？」と美由紀が笑顔で聞いた。

『香辛料も凄い、見た事ない物がかなりある・・それと包丁の種類、怖い位あるよ』と二ヤで返した。
「怖いって、どう言う意味なの？」とユリカが後ろから二ヤで言った。
『凄いな～っていう意味・・良い奥さんになるな～って意味です』と振り向いて笑顔で返した。
「まだなれないと思ってるのね・・私も一気に段階を超えるよ」と爽やか二ヤで言って、洗面所に消えた。
「ね～・・好戦的でしょ、バリア切れてるよね」と美由紀が小さな

声で二ヤで言った。
「美由紀・・小さな声でも同じだよ、小僧の前なら」と蘭も小さな声で二ヤを出した。
『正解』と私も二ヤで美由紀に言った、美由紀はウルで舌を出した。
「楽しいの？・・その小声の会話」と爽やか二ヤで言いながら、ユリカが帰ってきた。
蘭と美由紀と私は、笑顔でユリカに返した。
「それで、今日の予定はどうなるの？」とユリカがソファーに座りながら言った。
『今日は1時に終わるから、お迎え着て・・美由紀をゆっくりさせといて。
俺は寺で少しトレーニングをするよ・・和尚に土曜の件と、書き物頼まれてるから。
そして夕方エミ・ミサ・レイカを連れて、病院にミホと沙紀を迎えに行こう。
雨だと思うけど、ユリカお願いします』
私はユリカに笑顔で言った、ユリカも笑顔で聞いていた。
「初耳の話が2つ・・トレーニングと書き物・・美由紀、それを述べよ」とユリカが美由紀に振った。
「小僧は瞑想じゃ駄目なんですよね、変態だから・・腕立て伏せが一番集中できるんです。
それも夢中でやるレベルの、それで自分と向き合うんです・・疲れを超えた場所で。
限界まで行って、やっと無になれる・・未熟者で～す。
それと、小僧は毛筆書きは凄いんです・・上手いのかどうか、私は分からないけど。

老人達の評価が高くて、和尚は勉強会のテーマ書きをさせてます。
集中した時の字は、なんか怖い感じですよ・・だから和尚は今だと思ってるんですね」

美由紀が笑顔で言った、ユリカも蘭も二ヤで私を見た。
「それは見たいね～」と蘭が満開二ヤで言った。
「楽しみだね～・・・６店分、何か書いて来るように」とユリカが爽やか笑顔で言った。
『何かって・・何を書こう』とウルで返した。
「得意でしょ・・あんたの心のイメージよ」と蘭が笑顔で言った。
「私とリアンの違いが楽しみだ～」とユリカが爽やか笑顔で言った。
私はウルで頷いて、蘭と美由紀で出かけた。

雨はまだ降ってなかったが、豪雨の準備万端という感じの空の下を、ケンメリが駆け抜けた。
美由紀の家に着き、満開蘭に手を振って見送り、夏物語を話しながら登校した。
台風の話題で持ち切りの教室に入ると、清次郎がやってきた。
「明日は台風で臨時休校になる・・小僧、台風で休みになるんだ、どんなに波が立っても、サーフィンに行くなよ」と清次郎が言って、級友の笑いを取った。
『了解です』と私はウルで返した。
「過ぎた後、桟橋にも行くなよ」と美由紀が追ってきて、爆笑を取った。
『はい、美由紀お嬢様』とウルウルで返していた、ユリカの爆笑の波動が来ていた。

４時間の授業をクリアーして、笑顔で給食を食べて、掃除をして終礼があった。
私と美由紀はいつものように、清次郎に呼ばれて、職員室に向かっ

た。
「小僧・・いよいよみたいだね」と私の前に座った清次郎が言った。
『うん・・明日だと思う・・大丈夫、今回は落ち着いてるよ』と笑顔で返した。
「そのようだね・・月曜に会うのを楽しみにしてるよ」と清次郎が言ったときに、ワーゲンが入って来るのが見えた。
私は美由紀と、清次郎に挨拶をして、職員室を出て正門に歩いた。

美由紀を助手席に乗せて、私が後部座席に乗った。
「分かってるね～・・一緒に行くのが」とユリカが爽やか二ヤで言った。
『美由紀は隅で少し寝るんだぞ、明日のために』と美由紀に真顔で言った。
「は～い・・大丈夫、寝るのは得意よ」と笑顔で返された。
寺の敷地にに入ると、見慣れたＺと軽自動車が数台止まっていた。
カスミのスバル３６０の隣に、親子のようにワーゲンを止めた。
「可愛いね・・本当に親子みたいな車だ～」と美由紀が楽しそうに言った。
私は車椅子を出さずに、美由紀を抱いたまま寺に入った。

ユリさんと銀河の４人とセリカが、瞑想をしていた。
本堂の奥の涼しい場所に、布団が敷いてありマリアが寝ていた。
美由紀が笑顔になって、マリアの隣に寝転んで、すぐに眠ったようだった。
ユリカが和尚に挨拶をして、瞑想の場所のユリさんの横に正座して瞳を閉じた。
美しい光景だった、百合の隣で百合香が咲いていた。

「素晴らしい・・あの２人が並ぶ光景は」と和尚が大きな半畳の和紙と硯を持って来ながら、笑顔で言った。

『今日は何を書くのやら』と言って本堂の広い部分まで歩いた。
下敷きの板を敷いて、半畳の和紙を広げた、それだけで集中できた。
すぐ横にマリアと美由紀の寝顔があった、そして私の横に、あの子猫がチョコンと座った。
「白鳥の歌でどうじゃ」と和尚が笑顔で言った。
『了解・・和尚、色紙6枚ある？』と返した、和尚は笑顔で頷いて取りに行った。
私は硯に墨を落とし、少量の水を足して、墨の色と粘りを見ながら磨っていた。

一人の世界に自然に入っていた、牧水の歌を心で口ずさみ、半畳の和紙を見ていた。
《私の世界は、真っ白な世界だよ》と言った、ヒトミの言葉が蘇ってきた。
白い世界に、牧水のイメージが重なり、ヒトミの世界のイメージが重なった。
私は目を閉じて、ヒトミを映し出していた、かなりの時間が過ぎたと思う。
私は目を開けて筆を握った、そして最も緊張する一筆目を入れた。
そこから一気に書いてみた、験し書きの気持ちで書いた。
そして今の気持ちで、自分の漢字表記で、心のままに書いてみた。

白鳥(しらとり)は　哀しからずや
空の青　海のあをにも
染まずただよふ
幾山河(いくやまかわ)　超えさり行かば

寂しさの　はてなむ国ぞ
今日も旅ゆく
いざ行かむ　行きてまだ見ぬ
山を見む　この寂しさに
君は　耐ふるや　　歌人　若山牧水

書いてみて、遥か高みにいる人の言葉が響いてきた。
《君は耐ふるや・・耐えられるか？なのか・・分からないな》素直にそう思っていた。
「うむ・・良いんではないかな」と和尚が色紙の束を持って横に座りながら言った。

『牧水の世界・・まだ全然分からないよ・・ゆきてまだ見ぬ、行くで良いんだろうか？
生きるっていう意味じゃないのかな～・・いざ生かむ、生きてまだ見ぬなら。
命の限り生きて、まだ見ていない頂を見よう・・だと思うんだけど。
そうしない事の寂しさに、君は耐えられるのかって続くと思うよな～。
確か上の2句と、この最後のいざ行かむの句は・・3年の月日が経ってるんだよね。
3年で少し考え方が変わったのかな、最後の句は問いかけてると思うんだよ。
でも君はの【君】は・・多分自分自身だと思うんだ。
自分に対して・・それに耐えれるのかと言ってる感じなんだよね。

遥かに遠いな～・・考えても無駄だと分かってるのに、考えさせられるよ。
和尚・・書いて良かったよ、少し内側に入ってきた気がするよ』
私は和尚に笑顔で言った、和尚も字を見ながら頷いた。
「エース、お願い・・その書を、リンダにお土産でちょうだい」とマチルダが後ろから言った。
振り向くと全員が笑顔で見ていた。
『お土産って・・人に見せるレベルじゃないよ』と照れた笑顔で返した。
「謙遜しないで良いですよ・・文字に力がありますね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「うん・・素敵な字だよ・・そして素敵な歌だね」とセリカが微笑んだ。
「お願い・・銀河の奇跡って書いて、プレゼントして」とホノカが華麗に微笑んだ。
「当然・・４人分な」とリョウが笑顔で言った。

「それに各店に一枚、色紙を書いてくれる約束ですよ」とユリカが色紙を見て、二ヤで言った。
「まぁ、素敵・・それは楽しみです」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「ねぇエース・・私にはそれを、お願い」とマチルダが微笑んだ。

『そりゃー良いけど・・恥ずかしいな』と笑顔で返した、マチルダが笑顔で頬にキスしてくれた。
「さぁ小僧ちゃんの、集中を邪魔してはいけません」とユリさんが全員を連れて、ちゃぶ台に向かった。
私は最後の部分に、小僧と名を入れて、自分で彫った印を押した。
それを和尚が持ってきた、厚紙の上に乗せて乾かした。
そして色紙を置いて、魅宴の分から書いた。

わりとスラスラ書けて、最後にユリカの店の分が来た、私はもう一人の自分を出して書いた。
書き終りちゃぶ台を見ると、ユリカが爽やかウルで私を見ていた。
そして銀河の奇跡と色紙に書いてみた、中々だと自分で思い、一筆づつ足した。

カスミに・・・銀河の奇跡　永遠の憧れ　光のかすみ

ホノカに・・・銀河の奇跡　ほのかに香る　誘惑の香り

リョウに・・・銀河の奇跡　魔性の囁き　心酔のりょう

マチルダに・・銀河の奇跡　笑顔の伝達者　深緑の輝き

そしてリンダに・・最後の挑戦者　冒険の女神　楽園の青

そう書いて一人で納得して、名を入れて印を押した。
私は本堂の奥の小部屋に、色紙を持っていき、乾燥の為に置いて戻り。
乾いた和紙を厚紙に貼り付けて、もう一枚の厚紙で挟んだ。
《リンダにお土産って、どうやって持って帰るんだろう？》と思っていた。
そして最後に、第一回　特別勉強会　原爆の脅威　特別講師　しずか。
そう書いて、そのままにして、子猫に二ヤを出した。
子猫はずっと私の側で大人しく見ていた、不思議な子猫を見ていた。
私が腕立て伏せを始めると、マリアが起きて、美由紀が起きた。
私は美由紀を抱き上げて、マリアを連れてちゃぶ台に行った。

そして戻って腕立て伏せをしていた、夢中になって必死にしていた。限界を通り越した時に、やっと雑念が消えた、そこでうつ伏せのまま寝転んで。
強くなった風を感じていた、疲労は感じたが、気分は爽快だった。
私の脇腹に小さく柔らかい体が触れた、それは体重をかけて丸くなったようだった。
その小さな子猫の体から、早い鼓動を感じていた、そして私はハッとして気付いた。

『そうだったよな～・・シズカのあの話、忘れてたよ』
私は子猫を見ながら、そう呟いた・・その時子猫が私を見て、立ち上がり、日陰に歩いて行った。
私は起き上がり、楽しそうに話すちゃぶ台に向かった。
ユリカとマチルダの間に座り、草もちを食べていた。

『マチルダ・・あんなに大きな物、どうやって持って帰るの？』と隣のマチルダに二ヤで聞いた。
「それなんだよね～」とマチルダが考えた。
「仕方ないの～・・ワシが掛け軸にしてやろう」と和尚が笑顔で言った。
マチルダが輝く笑顔で和尚を見て立ち上がり、和尚の横に座った。
「和尚様・・ありがとう」と言って和尚の頬にキスをした。
「人生最高の日じゃ～」と和尚が大声で言って笑った。
『人生最高の日が多すぎるよ・・な・ま・ぐ・さ・ちゃん』と美由紀が二ヤで言った。

「師匠・・すいません・・改心します」と和尚が反省の笑顔で返した、美由紀は二ヤで頷いた。
「な・ま・ぐ・さ」とマリアが和尚に抱かれて、天使全開で言った。
全員が爆笑していた、和尚の嬉しそうな笑顔を見ながら。

「さぁ・・忘れていた、シズカちゃんの話を教えて？」とユリカが二ヤで言った。

『今・・あの子猫が添い寝してくれて、その早い鼓動で思い出させてくれた。

俺がまだ学校に上がる前、飼ってた犬が死んで・・俺はただ悲しんでた。

そしてシズカに言ったんだよ、亡骸を見て、シズカが涙を我慢してたから。

犬は１０年ちょっとしか生きれないで、可愛そうだねって。

そしたらシズカに怒られたんだ・・なぜ可愛そうなんだって。

寿命が短い事がそうだと思ってるなら、それはお前の間違った考えだって。

泣きながら、激しく怒られたんだ・・俺、５歳だよ。

そして教えてくれたんだ、生命の肉体的寿命は同じなんだって。

それは鼓動の回数がほぼ同じなんだって、そう言ったんだ。

俺がキョトンとしてると、俺の胸に手を当てて・・ここ、心臓の動く回数だよ。

そう教えてくれた・・平均寿命で換算するとね。

犬も猫も、生涯心拍数は人と変わらないんだって、出来るだけ分かりやすく教えてくれた。

そしてこう言ったんだよ・・お前が感じてる時間って、誰かが作った物なんだ。

一日を時間に割って、それを分に割っただけの事だ。

犬や猫には通じない、奴らは継承してきた体内時計で暮らしている。

だから人間を見て、なんてゆっくりと動くんだろう。

どうして無駄な時間をそんなに使うんだろう・・そう思ってると思う。

長く生きて、可愛そうだと思ってるかも知れないよ。
長い時間だと勘違いして、無駄な時間を過ごす事をね。
犬や猫の、人間の時間に対する短い寿命・・それは可愛そうな事じゃない。
一生懸命に、全ての時間を生きる事に費やした、その寿命なら。
素敵な事なんだ・・だから、笑顔で言ってやるんだ。
よく頑張ったね・・ありがとうってな。
そう強く言って、走ってどっかに行った・・俺はその時に思い出してた。
俺が産まれる前から、我が家にいたその存在を。
俺がやっと散歩させれるようになった時、もう老犬だったんだよ。
でもいつも俺に散歩をせがむんだ、行こう行こうって引っ張るんだよ。
多分・・自分自身も、散歩をするのが辛かったと思う。
そして俺に教えてくれたんだ、道の歩き方や・・信号の渡り方。
家の周りの小道や危ない場所まで、その犬が全部教えてくれた。
俺はシズカの話で、嬉しくなって言ったんだよ。
よく頑張ったね、ありがとう・・そう笑顔で言えた。
そして思い出していた・・ハァハァと散歩の途中で舌を出す顔と。
体を密着して座った時に感じた、早い鼓動を・・俺はその早い鼓動に守られてた。
そう思ったよ・・だから成長して、鼓動に執着したんだ。
それが時を刻む物だと感じたから・・何かを伝えられる物だと感じたから。
時間に戦いを挑むときの、唯一の武器だと思ったからね』
私はシズカの強い言葉を思い出しながら、想いを言葉にした。
「シズカちゃん・・知れば知るほど、魅了されますね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「あの子の感覚・・超越してますね、考えるときの基軸が大きく違

いますね」とユリカが爽やか笑顔で言った。
「美由紀・・あなたにとってのシズカって、どんな存在なの？」とマチルダが真顔で聞いた。
女性が全員笑顔で美由紀を見た、美由紀も笑顔で返していた。

「限界カルテット、その類稀な存在・・私たちは3歳下で、中学は入れ替わりでした。
それでも自分の憧れは誰って、皆で話す存在ですね。
男子は外見重視ですから・・圧倒的にヨーコ先輩が人気です。
可愛いいし、優しいから・・女子で外見で選ぶ時は、マキ先輩とヨーコ先輩ですね。
そしてマキ先輩は、男としての憧れで・・絶対的な存在です、理想の男みたいな。
でもその存在をリアルに感じてきた、私達の上の世代は違いますね。
今の中3と中2の先輩は、完全に4人に分かれます。
シズカ先輩・・全く別の生命体・・そんな感じですね。
シズカ先輩は本当に凄いんです、勉強の部分では、学年で常にトップ3に入ります。
そして水泳部で県大会に出たり、全校リレーの女子のアンカーで走ったり。
運動神経も抜群です・・でもそんな事、気にもとめてないんです。
いつも笑顔で不思議な話をしてくれます、その表現方法が面白くて、入り込みますね。
例える時の、例え方が・・他の人と全く違います。
分かりやすく、リアルに感じるように話してくれます。
清次郎先生が、よく授業で引用しますね・・シズカはこう解釈したって、教えてくれます。
それを聞く度に、私達は驚かされますね・・どうやったらそうなるんだろうって。

シズカ先輩の基軸・・それは、今存在する物は、ベストじゃないって思う心ですね。
製品として出てきた物は、もう古いんだって・・それが口癖です。
私の車椅子を豊君が研究する時、シズカ頼むなって言ったんです。
そして1号機も2号機も渡される時・・美由紀、ごめんな・・昨日までのベストはこれだよ。
そう言ってくれます・・私は一度も、シズカ先輩には、車椅子のお礼は言っていません。
それは今の私を愚弄する行為だぞ・・いつもその言葉が響いてるから。
小僧に最も影響を与えた存在・・そうシズカ先輩も絶対に諦めない。
そして豊君の強い教えを一番受けてます、だから心でしか動かない・・自分を評価しない。
自分は常に間違っていると思っている、その強さは知識に裏打ちされています。
そしてシズカ先輩は、知識より経験を重んじます・・そしてこの言葉。
それは最良品じゃない、最良な物など存在しない・・理想とは辿り着く世界じゃない。
追い求めるための心の餌だ、追い求める時に燃やすエネルギーなんだ。
お前を必ず世界記録で走らせてやる・・それが私の生きるエネルギーだからね。
そう私に言ってくれました、強く優しい言葉でした。
理想とは追い求める物で、辿り着く世界じゃない。
この言葉が、シズカ先輩の世界でしょうね。
私は胸を張って堂々と言えます、他の3人の素敵な先輩の前で。
限界カルテット全員の前で・・私の憧れはシズカ先輩だと、強く言えます。

白鳥は哀しからずや、空の青、海の青にも染まず漂う。
この歌の小僧の解釈を聞いたときの、シズカ先輩の顔・・今でも忘れられません。
恐ろしい程の、二ヤ顔でした・・そしてこう言いました。
奴だけには敗北できない、私は小僧だけには敗北を許されない。
奴が友を背負って登るなら、私は理想を燃やし続ける。
白鳥の歌の解釈・・同等だと認めよう、小僧は私と同等の位置まで来た。
加速装置を研究するよ・・私の方が、遥か高みにいると教えてやる。
私は和尚と約束したんだ、絶対に小僧に満足をさせないとね。
ウルウルで付いて来いって言うよ・・小僧という、大切な私の心の餌に。
そう言って、限界カルテット４人で笑ってました。
私はそれからです・・感じた事を、言葉に出そうと思ったのは。
そのシズカ先輩の、独り言のような愛情表現に憧れたから。
今の存在は、最良品でないと・・自分の事を表現した言葉に、撃たれたから。
弟が、心の餌だという・・愛に溢れた言葉に、包まれたから」

美由紀は笑顔で一気に伝えた、私でも早いと感じた、そして美由紀の集中を感じていた。
「素晴らしいですね、シズカも美由紀も・・美由紀、ベストな状態ですか？」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「もう少しだと思います・・間に合わせて見せます、明日の朝には」と美由紀が笑顔で返した。
「和尚様・・美由紀のベストな状態って・・もしかして、そうなんですか？」とユリカが和尚に言った。
「さすがに、ユリとユリカ・・気付きましたね。

美由紀が全力を出すには、準備が必要なんじゃよ。
美由紀は常に学友や先輩を応援している、だから美由紀は自分の部分を抑えてる。
それを開放しないといけない、それには小僧の側にいるしかない。
美由紀の両親でも、それを分かっています。
そして、それを一瞬で理解した・・蘭は多分、瞬時に理解したんでしょう。
そこじゃね、蘭の凄さ・・感覚で感じる、そしてそれに従う。
自分に従順である・・難しい事じゃよね。
じゃがそれが出来る・・あの蘭という女は、それをいとも簡単にやってのける。
だから小僧を拾えた・・そして大切な、カスミを託した。
そして今回・・蘭が小僧に、美由紀の添い寝をさせた。
全ては心に従った行為じゃね・・凄い事じゃよ。
豊が言ったよ・・蘭という人間を感じると、自分は正直かと問われるとな。
本当に自分が自分の心に正直なのか、そう問われるとな。
蘭が昨日、ワシにこっそり言った、自分は分からないんだと。
小僧の言う、脳の策略・・それが分からないと。
分からんじゃろう、蘭には分からんじゃろうな・・蘭の中には心しか存在しない。
蘭の脳は意思を持たない・・いや持たせなかったんじゃね。
蘭の脳はその回路としての役目しかない、ずっとそうしてきたからの。
小僧が愛情を注ぐ、その存在・・感じているよな、ユリとユリカは。
そして若い女性達も・・何かを感じておる。
明日、ワシも行くよ・・先に生きた者として、何かを伝えられるのなら。
明日の若い女性達の感じるべきヒントは、蘭の中にある。

自分の心に、従順になってみてこそ感じる・・そこに有るんじゃよ。

一人一人の・・エネルギーと餌がの」

和尚が笑顔で言って、女性達に笑顔が咲いた。

私は和尚を見ていた、和尚の蘭の見解が嬉しかった。

風が強く吹き込んできた、本堂の縁側で、子猫が空を見上げていた。

その後ろで、マリアが空を見上げていた、マリアの天使の瞳は空を映していた。

その瞳に暗雲は映し出されなかった、澄んだ心が映っていた・・。

このシズカの心拍数の話、私は生物学的に、調べた事はありません。

間違っていたら、ごめんなさい・・子供の話だと、お許しを頂きたい。

シズカが伝えたかった事は、時間の概念でした。

その後も、シズカは言っていました、なぜ時間を作ったのだろうかと。

やはり管理統制する為じゃないのかと、ずっと考えていました。

もちろん今でも、明確な答えは出ていない・・探し続けています。

今現在、仕事をするにも、何をするにも・・全ては時間で決められる。

その事に対して、違和感を感じる・・シズカらしい部分です。

和尚の言う、時が縛るという言葉も、同じ響きでした。

時間・・迫ってきたり、追いかけてきたりする・・常にそれを感じさせられる。

佐伯院長との会話で、私は1つ気付きました。

明日の朝、早く起きないといけない、眠れない夜・・人は時に脅迫される。

本質が見えなくなってる・・そんな時は、こう思うんだよ。

一晩ぐらい眠らなくても、死にはしないさってな。

そう思えれば、眠れなくても疲労は取れる。

睡眠障害もそう、やはり時に脅迫されてる事が多いんじゃよ。

人間の本質は何か・・生物の本質は何か・・そう考えれば、克服できる。

それは生きる事だからね・・眠れなくて死ぬ人間などいない。

それが原因で死する事はありえない・・限界が来たら眠れるんだよ。

治療が必要なのは、環境に対してなんだよ・・生活をする上での状況だよね。

眠れなければ、仕事に支障をきたす・・その事を前提として、治療

する。

正しいのだろうか・・私は今でも悩んでしまうよ。

病原体は時間・・その感染力は凄まじい・・世界中に広がってる。

特効薬は無い・・私は怖いよ・・同じ病に苦しんでる事が。

時間に対する免疫が、人に備わらないのがね。

佐伯院長はそう言った、私は考えてしまった・・答えは無いと知りながら。

私は途上国という表現に違和感を感じる・・何が途上なのか？

先進国とはどういう基準なのか？・・明確な基準など無い。

先進国・・私には時に縛られてる国としか思えない。

マリのヒント

暗雲が空を支配していた、風に力を与えて送り出して行く。
南国の民は覚悟を決めて、幼きものは少しの期待を抱いていた。

私は本堂奥の小部屋に入り、墨の渇きを見て、色紙を持ってちゃぶ台に戻った。
『はい・・銀河の４人・・セリカの分は、シオンがデビューした時に書くね』と言って色紙を渡した、セリカが流星笑顔で頷いた。
「ありがと～・・素敵だよ～」とホノカが微笑んで。
「うん・・心酔って字で見ると、嬉しいもんだね」とリョウが笑顔で言った。
「うし・・２つ目の飾るものが出来た」とカスミが微笑んで。
「嬉しいよ～・・リンダにお土産が２つも出来たし」とマチルダが笑顔で言った。
私は笑顔で返して、ユリカのウルを見ていた。

『恥ずかしいけど・・ユリさん、ＰＧ分です』と言って渡した。
私は感じたままを書いていた、ＰＧ用が・・・咲く夢に　儚さは映らない。
そう書いていた、ユリさんが薔薇の微笑で私を見た。

魅円が・・沈黙の言葉　静寂の心。

ゴールドが・・今という事実　明日という真実

ミチルの店が・・氷河の温もり　妖艶な光

リアンの店が・・愛には愛で　全裸の心で

そう書いていた、さすがに渡す時には照れていた。

『ごめんね、ユリカには・・これしか出なかったよ』と言って渡した。

私はユリカの店用は・・水源の揺り篭　深海の子守唄。

そう書いていた、ユリカがそれを見ていた、優しい波動が出ていて嬉しかった。

「水源まで来ましたか・・到達してますね、ユリカ」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

「嬉しいです・・水源と深海、相反する物での表現が」とユリカが笑顔で返した。

「ユリさん・・控え室に飾ってもらえるんですね？」とカスミが笑顔で言った。

「もちろん、銀の扉の上にかけましょう・・これを見て出撃しましょう」とユリさんが薔薇で返した、カスミも笑顔で頷いた。

「魅宴のは難しいけど、きっとみんな感じるよ」とリョウが笑顔で言って。

「ミチルママ・・泣きますね」とホノカがユリさんに微笑んだ、ユリさんも薔薇で頷いた。

「ゴールドは若手に対してだから、ストレートで良いですね～」とセリカが流星で微笑んだ。

「リアンには、直球勝負ですね・・うん、良い集中だね」と美由紀の後ろから、母が笑顔で言った。

全員が笑顔で挨拶をして、母が笑顔で返して、美由紀の横に座った。

その時、美由紀の顔が硬直して、薄笑いを浮かべた。

美由紀は本堂のマリアの方を見ていた、マリアの笑い声が聞こえてきた。

私は振り向けないでいた、その存在を感じていた。
「美由紀・・どうしたの？」とユリカが美由紀の表情を見て真顔で聞いた。
「今・・笑った・・絶対に笑ったよ、マリアに会って・・アのない子が」と美由紀が訳の分からない言葉を発した。
「アの無い子？」とカスミが聞いた、その時にホノカが本堂を見て固まった。
「あれが・・アの無い子なの、なんだかここからでも凄い」とホノカが真顔で言った。
「アの無い子って何だよ～」と言いながらカスミが本堂を見て固まった。
それでユリさんとユリカが気付いて、本堂を見た。
そこには夏なのに、白いフードの付いた長袖の服を着て、フードを深く被って俯く少女が立っていた。

「マリちゃん！」とユリカが爽やか最強笑顔で言って、歩み寄って行った。
私はそれで振り返り、マリを見た・・少し顔を上げて、大きな黒目でユリカを見ていた。
その横でシズカが天使全開のマリアを抱いて、笑顔でユリカを見ていた。
私も美由紀同様、驚いていた・・マリの唇が笑ったのだ、ユリカを見て嬉しそうに。
《シズカ・・マリをどこまで連れて行ったんだ》と思っていた。

ユリカはマリの両手を優しく握り、楽しげに挨拶をしていた。
マリもユリカを見ていた、顔を上げて黒い瞳で。
「素敵ですね、マリちゃん・・嬉しそうですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

「別世界だ・・異次元だ・・あの2人の出会いは」と美由紀が呟いた。
「私・・まだ話、何も聞いてないけど、凄くワクワクする」とマチルダが笑顔で言った。
「私も何も知らないけど・・ワクワクです」とセリカが流星の尾を引いて言った。

「あなたの、お名前は？」と律子が聞いた。
「セリカと申します・・お母様、よろしくお願いします」と微笑んで頭を下げた。
「あなたが、流星のセリカちゃんですか・・楽しみにしてますね」と律子が微笑んだ。
「えっ！・・楽しみにですか？」とセリカが驚いて聞いた。
「そうです・・楽しみにですよ、マリが教えてくれましたから」と律子が笑顔で言った。
『律子～』と私が慌てて言った、ユリさんと美由紀がセリカを見ていた。

「いつか分かりますよ・・あなたの言葉が本気なら・・私は楽しみに見ています」と律子が微笑んだ。
「はい・・意味は分からないけど、頑張ります」とセリカが笑顔で返した。
「リョウ・・外し方、間違ったら駄目よ、無理やり外すと壊れるから・・邪魔にならないんだから、持ってなさい」と律子が二ヤでリョウに言った。
「母さんには、かなわないな～・・ありがとうございます、そうします」とリョウが笑顔で返した。

「こんにちわ～・・小僧、ユリカ姉さんがお呼びです・・それとマリちゃんが」とシズカが二ヤで私に言った。

私は立ち上がり、ユリカを見た、本堂でマリと向き合って座り、楽しげに話していた。
私が近づくと、ユリカが微笑み、マリが私を見た。
『マリ・・綺麗になったね、可愛いよ～』とマリの手を握って笑顔で言った。

《前から可愛い、小僧、麻雀牌出せ》と強く返してきた。
『ヒントをくれるの！・・待ってて』と私は慌てて小部屋に入った。
小部屋の奥に和尚が隠している、麻雀卓と牌を持って本堂に戻った。
「マリ～・・なんで知っちょるのかの～」と和尚がバツの悪そうな笑顔で言った。
私がマリの前に卓を置くと、ユリカの手を引いて自分の左隣に座らせた。
そして私に正面に座れと指で示し、律子を見た。
律子は笑顔で歩み寄り、マリの右隣に座った。

全員が卓の側に来て、固唾を呑んで見ていた。
私はマリの手を握り、笑顔で頷いて牌を卓上に、全て伏せて置いた。
そしてゆっくりとかき混ぜて、マリを笑顔見た。

その瞬間、マリの右手が動いて、パンパンと音を立てて、１６枚の牌をめくった。
そのスピードに私でも固まっていた、開いた牌は【東】・【西】・【南】・【北】と書かれていた。
それを４枚一組でめくったのだ、そして私の前に、【北】。
律子の前に、【東】・・自分の前に、【南】・・ユリカの前に、【西】を４枚置いた。
そしてパンパンと４枚をめくった、それは、【中】と書いてあった。
私はマリが手を出したので、握った。

『な～んだ、簡単だね・・真ん中はここだろ』と言って、４枚の【中】を卓の真ん中に置いた。
マリは私を見た、微かに唇の右側が上がり、二ヤだと私は思っていた。
そして首を横に何度か振って、【中】の４枚を、四方の角に置いた。

『マリ・・じゃあここは、この真ん中に何があるの？』と私は驚きながら聞いた。
その時にマリがユリカを見て、律子を見た。
そしてマリが伏せたままの牌を一枚選んだ、静寂が包んでいた。
「私達も、一枚選べと言ってるみたいだね」とユリカが二ヤで私に言った。
「さすがユリカ・・そうみたいですね」と律子も私に二ヤを出した。
私はこれだと思った牌の、わざと隣を選んだ。
律子は考える様子もなく、右側の牌を選び、ユリカが目を閉じて一枚選んだ。
そうやって３人で牌を選び、伏せたまま自分の前に置いた。

その牌を見て、マリが真ん中に自分の選んだ牌を開いて置いた、それは真っ白な牌だった。
『マリ・・予備の牌だね』と私が言うと。
「小僧、違うぞ・・それは【白】という、正規の牌なんじゃよ」と和尚が教えてくれた。
『そうなんだね・・じゃあこれは？』と笑顔で言いながら、私の選んだ牌を真ん中に置いた。
それも【白】だった、私は呆気にとられ、本堂は完全な静寂が包んでいた。

「ユリカ・・私が先に出しますね」と母が二ヤでユリカに言った、ユリカはウルで頷いた。

母が真ん中にゆっくりと開いて牌を置いた、それも当然のように【白】だった。
圧倒的静寂の中、全員がユリカを見た。
ユリカは慣れた手つきで牌を右手で持ち上げて、親指で牌の裏を触った。
そして最強爽やか二ヤを出して、マリを見た。

『マリちゃん、あなたは・・本当に素敵な少女だね』と笑顔で言いながら、牌を真ん中に置いた。
当然それは【白】だった、女性達の驚きが伝わってきた。
「うっそ」とセリカが呟いた、その言葉だけが響いていた。

静寂の中マリが黒目で私を見た、真剣だと感じて緊張した。
そして右手の中指と人差し指を開いて、ピースサインのように、私の目の前に出した。
そしてそのまま2本の指で、【白】の牌を指した。

そしてユリカに擦り寄り、得意の好きな人に対する、スリスリ甘えを発動した。
ユリカは本当に嬉しそうに、笑顔でマリを抱いて。
「凄いね～マリ・・私は自分が普通に思えて、嬉しいよ～」とユリカがマリに微笑んだ、マリは唇だけで照れを表現した。
「マリちゃん・・私はマチルダです、マリちゃんがとっても好きになりました・・お友達になってね」とマチルダがマリの側で微笑んだ。
マリはマチルダをジッと見て、近寄ってスリスリを発動した。
マチルダがマリを見ながら、嬉しそうに抱いていた。

「さっ・・問題は小僧と美由紀用だから、私達はおやつにしよう」とシズカがマリに笑顔で言って。

全員が私と美由紀に二ヤを出して、マリと一緒にちゃぶ台に向かった。

私の向かいのマリがいた場所に、美由紀が真顔で座り、卓上の開かれた牌を見ていた。

『どう思う？美由紀』と私も牌の並びを見て聞いた。

「小僧の目を指して、それから真ん中を指したよね・・あれがヒントだね」と美由紀が言った。

『目で見ろって事かな？』と返した。

「ん～～・・違う、目だろって感じだったよ」と美由紀が返してきた。

『確かに・・目だろって感じだったね・・目？目ね～』と私は考えながら呟いた。

ちゃぶ台方を見ると、笑顔で盛り上がっていた、ユリさんの楽しそうな薔薇が出ていた。

私達の横で、和尚が私の白鳥の歌を、掛け軸用の巻物に貼り付けていた。

その時、私の左横に、マリアが笑顔で座った。

「しろ～・・しろ・・ない・・ない」と【白】の牌を見て言った。

『えっ！・・マリア、白の意味は無いなの？』と私が聞いた、マリアは天使全開だった。

「分かった！・・白は何も無いことを示してるんだよ。

段階の時にイメージさせられるのは、台風でしょ。

台風の中心は目だよね、でも目には何も無いよね、低気圧でもない。

それを表現してるんだよ、この白い麻雀牌は

てことは・・あれで、あれがあれね～」

美由紀は二ヤで言って、マリアを見た。
「やった～・・・1抜け～・・マリア、行こう」と言って、美由紀ジャンプしながらマリアとちゃぶ台に行った。
私はウルで見送り、卓に視線を戻した。

方位を考える必要はないな、中心が角にあるんじゃないよな。
中心はいたる所にあるんだな、卓全体がその場所としたら。
その場所の真ん中には何も無い、中心も無い、方角も無い。
それならば、存在しない・・存在すらしない。
心が誘拐される場所、それは存在しない場所・・台風はまやかしなんだから。
ならばなぜ、台風が接近する日を選ぶんだろう？
リアリティを出すため？・・その方が封じ込めやすいから？
騙しやすいから・・そうなんだろうか？・・・・・や～めた。
そう心で言って、牌と卓を片付けて、ちゃぶ台に戻った。

「エース、マリちゃんが・・私だけに、ガル～って威嚇する」とカスミがウルで言った。
『そうされたくないなら・・心に棲ませてる、豊兄さんを追い出しなさい、マリは豊兄さんの大ファンだからね』と二ヤで返した。
「それは・・・出来ない」とカスミがウルで答えた。
それを聞いて、マリがカスミを見て、和尚が用意していたメモ用紙に何か書いた。
そしてメモ用紙を折って、カスミに差し出した。
カスミは緊張して受け取って、ゆっくりと開いた。

そこには数字が並んでいた、１９○○０４１６と１９○○１００８と書かれていた。
「マリちゃん、ありがとう」とカスミが笑顔で言った、私はカスミを見ていた。

なぜか嬉しそうに、大切に財布の中に入れていた。

「ほれ、マチルダ・・見栄えが良くなったじゃろう」と和尚が掛け軸を持って笑顔で言った。

「和尚様～・・素敵です、ありがとうございます」と和尚に駆け寄り、頬にキスをした。

「あら、和尚・・人生最高の日って言いませんね～」と律子が言った。

「母さん・・もう言いましたから～」と美由紀が二ヤで言った。

「2度目なんだね・・和尚、死ぬよ」とシズカが二ヤで言った。

「やめんか、死ぬ話は・・マリが数字を書いたらどうするんじゃ」と和尚が笑顔で言った。

マリがそれを聞いて和尚を見た、和尚がシワシワウルで返していた。

「初めて見ましたわ・・師匠のウルを」と楽しそうにユリさんが笑って、全員で笑った。

「集中は出来たね・・でも人物の背景を、少し勉強しても良いだろ」と白鳥の歌を見て、シズカが私に言った。

『やっぱ、漢字表記に問題ありかな？』と真顔で返した。

「そんな問題じゃなく・・牧水だって、男だって事だよ。

お前は高みにいる崇高な人物を、そのイメージを、自分で作りだしている。

リンダさんを思い出してみろ、高みにいる崇高な女性を。

女性として見なかったのか？・・素敵な女性だったろう。

ユリさんは？・・ユリカ姉さんは？・・素敵な女性だろ。

牧水が白鳥の歌を詠んだ時、確か24才だったと思うよ。

絶対に素晴らしい人間であり、素敵な男性だったはず。

苦悩する生き方が、とかく取り上げられるが・・そこには他者の

脚色も入るよな。
出版物としての売り上げ等を考えて、ドラマを作るだろ。
あれだけの脚色をしてきたお前が、それが分からん訳がないだろう。
牧水が・・染まず漂うと、自分の理想を考えたら。
次は何かな？・・そして最後は誰に宛てる？・・その想いは誰に向かう？
君は耐ふるや・・ここで感じろ・・ここで泣け。
心で感じたなら、そこで泣け・・お前も男ならな。
私の解釈は以上・・早く登って来いよ」

シズカが最後に二ヤで言った、私は又、シズカに気付かされていた。
そのシズカの言葉を聞いて、セリカがシズカを見た。
「シズカちゃん・・私はセリカ、以後よろしく」と最強の流星の微笑で言った。
「よろしくです～・・それ電池式ですか～、欲しい」とシズカが笑顔で返した。
「自家発電式だよ・・企業秘密です」とセリカが笑顔で返した、シズカはウルで流星を見たいた。

「シズカ・・ありがとう、この歌がもっと好きになったよ」とマチルダが微笑んだ。
「リンダさんには、マチルダ姉さんが、翻訳するんですか？」とシズカが笑顔で聞いた。

「それは絶対に、リンダがさせないよ。
必ず自分で調べるよ、一字ずつ調べるよ。
そして自分で感じるよ・・それが、リンダだよ」

マチルダが嬉しそうに、シズカに言った。

「母さん・・決まりです」とシズカが笑顔で律子に言った。
「そうみたいだね、まぁ頑張りな・・自分を試すのなら、最高の国なんだろうから」と律子がマチルダに微笑んだ。
「ちょっと待って下さいよ～・・意味が分かりませんけど」とマチルダが慌てて律子に歩み寄った。

「シズカが大学は、アメリカ留学したいんだって。
マチルダ、暇な時でも遊んでやってね」
律子は笑顔で言った、マチルダの喜びの笑顔が出た。
「素敵じゃないですか・・学校によっては、リンダの家でお預かりします」とマチルダが笑顔で言った。

「ありがとう、頼むねマチルダ・・私も一度はＮＹに行くよ。
シズカと・・多分、久美子を連れて・・２人の母親として。
リンダに正式に会いに行くよ、それが今から楽しみだよ」

律子は笑顔でマチルダに言った、マチルダも潤む瞳の笑顔で頷いた。

「しかし小僧、意外じゃったの～」と和尚が雰囲気を変えるのに、私に笑顔で言った。
『俺もあまりにも意外で、ビッッッックリしたよ』と二ヤで返した。
「私も、自分の目を疑いました～」と美由紀が二ヤで言った。
「あれはプロの手つきだったね～・・盲牌って言うんだよ」とシズカも二ヤで言った。
「着物を半分脱いで、肩を出して・・決め台詞を言いそうですよね～」とセリカが二ヤで言って。
「多分・・接待で覚えましたね、でも連戦連勝でしょうね～」とユリさんが薔薇二ヤで言って。

「小僧は絶対に勝てないね・・全部ばれるからね～」と律子が最後に二ヤでユリカを見た。

「映画で見たんです・・真似しただけですよ～」とユリカが爽やかウルを出した。

「それか～・・やばいよ、セリカが反応して・・銀河全滅だったよ」とホノカがウルで言った。

「流星のセリカ・・恐るべし」とリョウがセリカに魔性二ヤで言って。

「大丈夫・・セリカは早目に、お嫁さんに行くタイプだよ」とカスミが不敵で言った。

「カスミ・・セリカは立候補してくれました、東京ＰＧのフロアーリーダーに」とユリさんが薔薇二ヤで言った。

「えっ！・・本気か？セリカ」とカスミが言って、全員がセリカを見た。

「エースと誓ったんです・・そのレベルになれたら、東京に連れて行くって・・やってみせます」とセリカが堂々と言った。

「セリカとシオンコンビ・・恐るべし」とリョウが二ヤで言った。

「もう一人登場しそうですよ、１９歳の新星が。

エースは派遣会社での、女性の面接を頼まれました。

その依頼者が言いました、１９歳だが育て方では・・女帝を狙えると。

それだけの素質があると言いました・・夜街のドン・・小林さんが」

ユリカが爽やか最強二ヤで銀河を見た、銀河は固まっていた。

「エース・・面接するのね？」とセリカが微笑んだ。

『もちろん、ジンと２人でするよ』と笑顔で返した。

「小林さんの依頼なら、楽しみですね～・・ＰＧはいつでも受け入れＯＫですよ」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「もう少し、瞑想して帰ろう」とカスミが言って立った。
「そうしよう」とホノカとリョウが後に続き、本堂に歩いて行った。
私達は二ヤで見送った。

「しかし凄いね～・・銀河の奇跡も」と律子が笑顔で言った。
「楽しみですね～」とユリさんも薔薇で微笑んでセリカを見た。
「頑張ります」とセリカが笑顔で返した。

『マリ・・ありがとう、勇気が出たよ』とマリの手を握り笑顔で伝えた。
《まだだろ、明日近くにいるよ、小僧と美由紀じゃ心配だから》と多分二ヤで伝えてきた。
『ありがとう、マリ・・じゃあＰＧにいてね、俺はそれだけで気分が楽だよ』と笑顔で返した。
《そうみたいだね、小僧、道を繋げたね》とマリが返してきた。
『うん・・マリ、これからも道を繋げてみせるよ・・どんなに狭い道でもね』と笑顔で返した、その時にマリが頷いて美由紀に手を出した。

「うん・・うん・・やってみるよ、マリちゃん・・ありがとう」と言って美由紀が泣いていた。
マリが美由紀の頭に手を置いて、美由紀を見た。
美由紀は明るい笑顔に戻って、マリに抱きついた。
マリも美由紀を優しく抱いていた、そしてユリカを見て微かに微笑んだ、ユリカは爽やかに微笑んで頷いた。

私はユリカとマチルダと美由紀で挨拶をして、マリにありがとうと伝えて。

ユリカの車に乗り、ユリカのマンションを目指した。
車に乗ると、ユリカがマチルダに、マリ話をしていた。
マチルダの瞳がキラキラと輝いて、私は美由紀と二ヤで見ていた。

部屋に入り、美由紀にシャワーを浴びさせた、私はユリカに電話を借りて駄菓子屋にかけた。
駄菓子屋の婆さんに、今夜マキを借りると言って、了解をもらった。
『ユリカ・・今夜、俺は病院に泊まるから、マキをここに泊めてね・・美由紀が安心するから』と笑顔で言った。
「了解・・さすがに、万事ぬかりないね」とユリカが微笑んだ時に美由紀が呼んで、私が抱いてリビングに連れて行った。
マチルダ、ユリカとシャワーをして、私は最後にシャワーをしてリビングに戻った。

「今から、どうやって行くの？」とユリカが化粧をしながら微笑んだ。

『ＰＧに行って、エミ・ミサ・レイカをシオンの車で、俺が連れて行く。
帰りはマチルダがシオンの方に乗って、ユリカの車で、ミホと沙紀をＰＧに連れて行こう。
沙紀はユリカが一緒の方が、一番安心するから・・沙紀の母親は婦長と来るらしいから。
そして、美由紀・・１つ頼みがある。
ＴＶルームに、いつものように、皆が集まった時に話してくれ。
沙紀にいきなり大勢の女性が挨拶したら、沙紀が混乱するから。
注意事項を言っといて、美由紀に任せるよ・・多分、明日マリも来るだろうし』

３人を見ながら、笑顔で言った。

「了解・・初対面の人用だね？」と美由紀が笑顔で聞いた、私も笑顔で頷いた。
「ねぇ、エース・・マリちゃんをどう感じたの、病気的に」とユリカが真顔で聞いた。

『マリは・・もう自閉症じゃないよ・・治ったんじゃない。
元々違ったんだよ・・ユリカには、説明の必要はないだろうけど。
マリは多分・・幼い頃に怖がられ、気持ち悪がられたと思う。
俺が出会った時は、自分で殻を作ってたんだ。
それは強い防御本能だったんだろうね、その力を恐れていたんだよ。
使い方が分からずに、自分でも・・どうして良いのか、分からなかった。
確かに・・言葉の遅れはあるし、あの雰囲気だから。
そう判断されたんだろう・・俺は今でも、自閉症という病名を否定している。
その病名が悪い、漢字表記が誤解を招く・・そして医師の逃げ場所になる。
関口医師が言ったんだよ・・ヒトミの時に、ガキの俺に言ったんだ。
原因不明ってさらっと言える、医者が信じられないと。
自分はそれを言う時に、悔しさが溢れ出すって・・自分の無能さが嫌になるって。
そう言ったんだ・・そして、原因不明も自閉症も・・医者の逃げの言葉だって。
俺はそれで思ったんだ、それまでに出会った、自閉症の友を思い出して。
だれも自分を閉ざしてなかったから、伝えたい想いに溢れていたから。
それを伝えるのが苦手な、そんな・・ただの個性だと思ったんだ

よ。
マリは骨折での入院だったから、俺は少しの期間しか関係してない。
今日・・マリを見て、俺は又・・シズカに敗北したよ。
そして教えられた、沙紀に対する要求のレベルを、２段位上げようと思った。
マリは好きな人に、スリスリで甘えるよね・・あのスリスリは、豊兄さんが発動させたんだ。
マリの心を一瞬で開かせた、俺は本当に驚いて・・そして調子に乗っていたと感じた。
マリはシズカに対しては、スリスリをしないだろう。
シズカは・・マリにとって、それ以上の存在になった。
その信頼を勝ち取った・・だからこそ、知らない人があれだけ見てる前で。
その力を見せることが出来た・・それはシズカを信じ、ユリカに触れたから。
マリは今日・・希望と憧れに出会ったんだよ。
ユリカという・・自分と同じ香りのする、憧れの存在にね。
俺はそう思って、明日のＰＧにマリを誘ったんだ。
シズカが目で、上げるよって伝えてきたからね・・一石何鳥になるのやら。
マリの瞑想する姿・・それは異次元に存在するからね』

私は最後にユリカに二ヤで言った、ユリカの爽やか笑顔を見ながら。
「それは興味あるね～・・マリちゃんの瞑想する姿」とマチルダが微笑んだ。
「エース・・私も、本当に嬉しかったのよ・・マリという存在に触れて」とユリカが微笑んだ。
私も美由紀も、ユリカに笑顔で返していた。

窓の外が夜のように暗かった、しかしまだ雨は落ちて来なかった。
限界まで溜めて、一気に放出しようとするように、雲が速度を上げて移動していた。

これから2年半の後、母はシズカと久美子を連れて、ＮＹを訪れる。

リンダとマチルダが、空港に迎えに来てくれていた。

シズカはそれから5年、ＮＹのリンダの家に住んだ。

最後の2年間は、リンダが地下に潜り、3人が存在しなかった。

しかしシズカも久美子も、自分の成すべき事を黙々と行った。

シズカがＮＹに行って4年後、マリの家庭に不幸な事が起きて、マリが経済的に困窮した。

シズカはそれを聞いて、マリを迎えに来た。

「マリ・・一度だけ、生涯一度だけだよ・・マリの将来の為に、その力を使おう」

そう言って、マリを連れてラスベガスに向かったのだ。

そして一晩で、マリは３０年分の生活費を稼いだ。

ルーレットで、全ての目張りを的中させたのだ、シズカはマリと逃げるようにＮＹに飛んだ。

帰国後も、マリは贅沢をする事もなく、自分らしく暮らした。

そして愛する人に巡り会い、結婚が決まった時に・・残っていたお金を、全て寄付した。

シズカ姉さんならそうするから・・マリもそうしたいの。

ユリカ姉さんなら・・そうするマリを、好きだと言ってくれるから。

マリもそうしたいんだよ・・マリは2人が好きだから。

そう伝えてくれた、マリ・・マリ、ユリカも喜んでたよ。

ユリカにとって、マリこそが妹だからね。

ユリカは今のマリを見ても言うよ・・・凄いね、マリは・・そう言うよ。

Music　Power

夕方の町並みも、暗い表情をしていた。
全ての人が家路を急いでるようで、その流れを逆走していた。

ユリカの車に乗り、４人でＰＧを目指した。
赤玉駐車場に止めて、マチルダが美由紀を押した。
雨はまだ落ちて来なかったが、その空は恐怖すら抱いていた。

ＴＶルームに入ると、マダムとユリさんが笑顔で迎えてくれた。
４人娘が揃っていて、私に駆け寄ってきた。
「エース・・お友達に会わせてくれるの～」とミサが駆け寄った。
『うん・・ミサとレイカと同じ歳の、由美子ちゃんだよ』と笑顔で返した。
「嬉しいな～・・楽しみだね、レイカちゃん」とミサが微笑んだ。
「うん・・マリアと同じ、優しい言葉に会えるね」とレイカが笑顔で返した。
私は本当に嬉しかった、そのレイカの表現が心に響いた。

「マリアは？・・自分でまだだって言ってるけど」とミサが私に笑顔で言った。
『うん・・マリアはもう少しね、いっぺんに沢山の友達に会うと・・由美子は疲れるんだよ』とミサとマリアを見て笑顔で言った。
「あい・・えーしゅ」とマリアが天使全開で笑った。
私はユリさんを見た、薔薇の微笑で頷いた。
『じゃあ・・美由紀がマリアと遊んでくれるから、エミ２人の準備をしてて』とエミに笑顔で言った。
「は～い・・さぁ、どれを持って行くの」とエミが２人を促した。
私は一人でＴＶルームを出て、フロアーに歩いて行った。

４人組が最後のチェックをしていた、全員が集中していた。
『ハルカお姉様～・・・お願いがあります～』とウルでハルカに声をかけた。
「ほほ～・・やっと上下関係が分かったのね」とハルカに二ヤで返された。
『反省してます・・シオンを貸して、３人娘と病院に行くから』と笑顔で言った、シオンがニコちゃんになった。
「もちろんＯＫよ・・エース、私達・・沙紀ちゃんに会えるのが嬉しいんだけど、注意事項は？」とハルカが真顔で言った。

『その件は、美由紀に頼んどいたから・・美由紀が話すはずだよ』と笑顔で返した。
「了解・・ありがとう」とハルカが笑顔で返してきた。
『それと、今日・・寺で面白い事があったから、それも聞くと良いよ』と二ヤで言った。
「悪い二ヤだね～・・・どんな話かな？」とレンが二ヤで返してきた。
『マリが来ててね・・麻雀を見せてくれたよ』と笑顔で言った。
「えっ！・・それは楽しみだね～」とマキが二ヤで言った。
『マキ・・婆さんのＯＫは取ったから、今夜ユリカの家に泊まって・・美由紀を頼むよ』と笑顔で言った。

「了解・・あんたは由美子の側で寝るんだね？」とマキが真顔で言った。
『うん・・早めに寝といてね、ユリカが起こすまで』と真顔で返した。
「了解・・電話も必要無いのか～・・凄い連絡体制だね」とマキが笑顔で言って、私も笑顔で頷いた。
私はニコちゃんシオンと、ＴＶルームに向かった。

3人娘の準備が出来ていた、私はマリアを抱き上げて、温度で伝えた。
《マリア・・頼むね、その時はマリアを呼ぶから》と強く伝えた。
「あい・・まりあのえーしゅ」とマリアが天使全開で笑って充電してくれた。
私はマリアを美由紀に渡し、ミサとレイカを抱き上げてＴＶルームを出た。
ユリカとマチルダでエミの手を繋ぎ、駐車場に歩いた。
ミサもレイカも楽しそうで、私は2人の存在に感謝していた。
私はシオンの車の助手席に乗り、後ろに3人娘を乗せて出発した。
ユリカがマチルダを乗せて、後ろから付いて来た。
病院に着いて、記名をした。

『ユリカ・・シオンとエミを頼むね・・エミ、沙紀をよろしくね』とエミを笑顔で見た。
「は～い・・楽しみだ～、沙紀ちゃん」とエミが笑顔で言った、私も笑顔で頷いた。
「じゃあ・・エミ行こうね」とユリカが爽やか笑顔で、シオンとエミと病室に入って行った。
私はマチルダとミサ・レイカを連れて、由美子の病室に入った。

入った瞬間に、2人に笑顔が溢れて、由美子のベッドに駆け寄った。
マチルダが北斗と祖母に挨拶をしていた、私は2人の後姿を見ていた。
《俺はまだまだやな～、あの2人に比べれば》と思っていた、ユリアの優しい波動が包んでくれた。
3人は完璧に意志の疎通が出来てるようで、ミサが左手を握り、レイカが反対に回り、右手を握った。
そして笑顔で話していた、プレゼントの色紙で作った、お花の飾り

を出して見せていた。
そしてミサがトオル君の話をして、レイカが突っ込んで、笑っていた。

私はソファーに向かい、マチルダに2人を頼んで、病室を出た。
ナースステーションで、婦長に関口医師の所在を聞いた。
ミホの部屋にいると言われて、ミホの部屋に入った。
沙紀はベッドを降りて椅子に座り、向かいにエミが座っり、手を握って笑顔で話していた。
沙紀も嬉しそうで、私は笑顔を沙紀に向けて、奥で沙紀の母親とユリカとシオンと話す、関口医師の方に歩いた。

「残念だよ・・次回は私も演奏会を聴きに行くよ」と私を見て、関口医師が笑顔で言った。
『そうですか、残念です・・今夜は出来るだけ早めに寝てください』と笑顔で返した。
「了解・・明日だね」と関口医師が真顔で言った、私も真顔で頷いた。

「それで・・聞きたい事があるんだね・・沙紀かな由美子かな?」と関口医師が笑顔で言った。
『1つだけ・・沙紀はなぜ、入院してるんですか?』と真顔で聞いた。

「やっときたね・・沙紀は喘息なんだよ、今は安定してるけどね。
発作の時に、パニックになってね・・少し危険だから、入院させてるんだよ。
ナースが対応しないと、ご両親の負担が大きくてね。
でもね・・俺は期待してるよ、君が聞いてきたという事は。
沙紀は次の段階に上がるんだね、次の目標はそれだよ。

発作に対する、沙紀の心の問題・・入院中にそこまでやろうな、絶対に出来るから」

関口医師の真剣な瞳と、沙紀の母親の瞳を見ていた。

『了解・・やってみようね、ユリカ、シオン』とユリカとシオンに微笑んだ。

「もちろん・・絶対に出来るよ、沙紀なら」とユリカが爽やかに微笑んだ。

「嬉しいです～・・シオンも出来る事をしてみます」とシオンが最強ニコちゃんで言った。

「ありがとう・・沙紀は変化を繰り返します、私は本当に毎日が楽しいですよ」と母親が私に微笑んだ。

『まだまだ・・明日が過ぎれば、ニュー沙紀が登場しますよ』と笑顔で返した。

「楽しみですね」とユリカが母親に微笑んで、母親も笑顔で頷いた。

その時に元気な声で入ってきた。

「チース・・沙紀ちゃん、何してる～？」と哲夫が笑顔で入ってきた。

哲夫の右手には、駄菓子屋で買ったのだろう、イチゴキャンデーが握られていた。

「げっ！・・エミ様・・アチャ～、関口先生まで」と哲夫がウルで言った。

「哲夫・・大きくなったね、その飴はプレゼントかな？」と関口医師が笑顔で聞いた。

「駄目なの？・・沙紀は大丈夫だよね？」と哲夫が真顔で聞いた。

「あぁ、良いよ」と関口医師が笑顔で返した。

哲夫は嬉しそうな笑顔になって、沙紀に1つ、エミに1つ手渡した。そして自分も1つ口に入れて、沙紀に笑顔を出した。

エミも口に入れて、沙紀に笑顔を向けた。
沙紀は飴を見て、口に入れて・・2人を見た、その顔が笑顔だと確信的に思った。
母親が後ろの窓辺に立った、ユリカが母親の横に立った。

「さすがだね・・小僧の後継者、哲夫・・それ以上に、エミちゃんが凄いけどね」と関口医師が笑顔で言った。
『エミは将来、医者を目指していますから・・立派な医者を見せて下さいね』と二ヤで言った。
「そうなんだね・・なんだか凄く嬉しいよ」と関口医師が微笑んで、病室を出て行った。
沙紀は2人を見ながら、美味しそうに飴を舐めていた。

『哲夫・・由美子に会いに行くぞ』と哲夫を誘って、病室を出た。
「エミは凄いね・・沙紀の笑顔を出したね」と哲夫が私に並び言った。
『お前のキャンディー魔法も、中々だったよ』とニヤで返して、由美子の部屋に入った。
ミサとレイカで部屋を飾っていた、色紙の鎖が由美子を包んでいた。
哲夫を見て、レイカが駆けてきて、哲夫の手を引っ張って由美子の横に座らせた。
哲夫はミサとレイカにキャンディーを渡して、由美子の手を握った。

「由美子のは、このガラスの入れ物に入れとくね、いつか一緒に食べようね。
美味しいんだよ・・駄菓子屋のが一番美味しいんだよ。
高級なやつは、子供の口には合わないんだ・・由美子を駄菓子屋に連れて行くよ。
俺が美味しいのを教えてやるから・・それが分かれば、学校も大

丈夫だよ。
おしゃれは・・おませのミサとレイカが教えてくれるから。
由美子・・俺が由美子を守ってやるよ・・由美子が学校に行く時は。
楽しみだな～・・由美子のランドセル姿」
哲夫は笑顔で由美子に言った、ミサもレイカも笑顔で由美子を見ていた。
北斗と祖母が必死の笑顔で哲夫を見ていた、マチルダが輝く笑顔を出していた。
「な～んだ、そんな事を気にしてたのか。
由美子・・急がなくて大丈夫だよ～・・一年生からじゃなくて良いんだよ。
ゆっくりで良いんだよ・・皆そう思ってるからね」
哲夫は優しく由美子に言って、私を見た、私は笑顔で頷いた。
「よし・・由美子、少し眠ろうね・・明日また来るからね」と哲夫が言って、由美子の手を胸の上に置いた。
そしてミサとレイカを連れて、病室を出て行った。
私は由美子の額に手を当てて、穏やかな由美子の寝息を感じていた。
私がソファーに歩いて行くと、３人が笑顔で迎えてくれた。
「哲夫君・・本当に素敵な少年だね」と祖母が微笑んだ。
『はい・・俺も哲夫がいると心強いです』と笑顔で返した。
「飴を見えるように置いて、ランドセルの話をする・・嬉しかった～」と北斗が微笑んだ。
私もマチルダも笑顔で頷いた、北斗の嬉しそうな笑顔を見ながら。
マチルダと、北斗と祖母に挨拶をして、病室を後にした。

マチルダとミホの病室に歩いていると、夕食が始まり、遊戯室でシオンと哲夫が3人娘と遊んでいた。
ユリカが遊戯室の窓際で婦長と笑顔で話していて、そこにマチルダが笑顔で加わった。
私はミホの部屋に入り、沙紀の食べる顔に笑顔を向けて、ミホの所に行った。
ミホは無表情で食事をしていた、食欲はあるようで、私は笑顔でミホを見た。
そしてミホの棚を確認して、可愛いいワンピースを発見したので、それを用意した。
そして遊戯室に戻り、ユリカとマチルダと婦長の場所に行った。

『ユリカ・・もうすぐミホの食事が終わるから、マチルダとミホの着替えを手伝って』と笑顔で言った。
「了解・・可愛い服があったみたいだね」とユリカが微笑んだ、私も笑顔で頷いた。
その時に蘭が入ってきて、満開笑顔で私を見た。
「間に合った～・・ミホと沙紀の靴」と言って満開に微笑んだ。
『じゃあ3人で、お着替えよろしく』と笑顔で返した。
ユリカと蘭とマチルダで、ミホの病室に歩いて行った。
「さぁ・・私も準備してくるよ・・今日は院長と私とナース5人と、事務員2人だから」と婦長が笑顔で言った。
『了解です・・帰りはよろしく』と笑顔で返して、婦長を見送った。

私がシオンと話していると、可愛い熊のTシャツを着た沙紀がユリカと現れた。
可愛い赤いスカートに、真新しい赤い可愛い靴を履いていた。
エミが駆け寄り、ミサとレイカも駆け寄った。
「可愛い～」と沙紀に3人で言って、沙紀は照れてる感じだった。
そして白いワンピースを着た、ミホが蘭と現れた、それを見て3人

娘が可愛いを連発していた。
ミホは髪を結ってもらって、少し唇に紅を塗られて、真っ白い可愛い靴を履いていた。
ミホは無表情だが、拒絶の感じは全くなかった、３人娘も自然に接していた。

ミホが蘭と手を繋ぎ、沙紀がユリカと手を繋ぎ、シオンがミサでマチルダがレイカと繋いだ。
エミが二ヤで哲夫に手を出した、哲夫が照れた笑顔で手を握った。
「エミ・・その二ヤはやめろよ～・・怖いよな～、夜街の女は」と哲夫がウルでエミに言った。
「怖いって、どういう意味～？」とエミが不敵を出した、哲夫はウルで返していた。
ユリカの車の助手席に沙紀を乗せて、後ろに蘭が乗り、ミホを乗せ私が乗った。
哲夫がチャリを出してきて、私の所に来た。

「明日の朝来るよ」と哲夫が言った。
『哲夫・・蘭が黒いケンメリで、美由紀とマキで迎えに行くから、施設で待ってろよ・・台風だからな』と笑顔で言った。
「そうだよ・・待っててね」と蘭が満開で微笑んだ。
「了解、ありがとう・・ミホ、また明日」とミホに笑顔で言って、哲夫が帰って行った。

シオンの車が出たので、その後ろを付いて出た。
雨はまだ降っていなかった、金曜日の夜が迫っていた。
沙紀はユリカを見ていた、ご機嫌だと感じていた、ミホは街の明かりを見ていた。
ＰＧの前でユリカが降ろしてくれたので、沙紀を抱き上げた、蘭がミホの手を繋いで降りた。

「すぐに来るから～」とユリカが笑顔で言って、駐車場に向け発車した。
私は沙紀を抱いたまま、エレベーターを待っていた。
「明日・・靴屋臨時休業になったよ、日曜休めるよ」と蘭が満開で微笑んだ。

『良かった～・・心配してたよ、蘭が休み無しになるから。
しかし2人とも、よっぽど靴が気に入ったんだね。
汚さないように、気にし過ぎだよ』

私は満開笑顔の蘭に笑顔で言った、蘭は嬉しそうに2人の靴を見ていた。
エレベーターに乗っても、沙紀はご機嫌で、キョロキョロしていた。
エレベーターが開くと、3人娘が待っていた。
私が沙紀を降ろすと、エミが手を握り、ミサとレイカがミホの手を握りフロアーに歩いた。
フロアーには小さな絨毯が敷いてあり、そこに小さなテーブルが出ていた。
そこに5人で座ると、カズ君が笑顔でジュースを出していた。

ミホが興味を持ったのか、フロアーを見回していた。
ナースと事務員であろう女性が5番席に座って、ワクワク顔で話していた。
１０番にはドレスを着て、四季とユメ・ウミが入っていた。
その時にマチルダが美由紀を押して来た、私は美由紀を抱き上げて、ミホの隣に降ろした。
美由紀はミホの手を握り、フロアーの説明を笑顔でしていた。
院長と婦長と沙紀の母親が5番に入り、カスミ・ナギサ・ハルカ・レン・蘭・北斗と入場した。

マチルダとシオンとマキを含めた女性達が、１０番に揃い笑顔で話していた。
沙紀はずっとエミの手を握り、女性達の笑顔を見ていた。
《女性達の方が、沙紀に見られて緊張してるな》と思って、指定席座り二ヤを出していた。
その時にユリカがユリさんと１０番に入った、そして少し照明が落とされた。

静寂の中、銀の扉が開き、純白のドレスを着た久美子が登場した。
久美子は3歩進んで、神聖な場所に深々と頭を下げた。
そして子供達の前で笑顔を見せて、頭を下げた。
ミホも沙紀も久美子を見ていた、そして久美子はピアノに座った。
美しかった、集中をした視線が戦闘モードに入り、静寂が訪れた。

そしていきなり鍵盤を強く叩いた、激しいリズムで一気に静寂を破った。
強かった、強い響きが木霊して、フロアーで反響して何度も押し寄せた。
私は久美子の凄さを再確認していた、旅情的な曲から始めると思っていたからだ。
久美子は万全の状態を作り出していた、だからこそ一気に燃え上がったのだ。

狂おしく舞う久美子の魂の響きが、ある奇跡をすぐに起こす。
ミホが立ち上がったのだ、そして裸足で久美子の方に歩き出した。
隣にいた美由紀でさえ、何が起こったのか分からない状態だった。
私は素早くミホの後ろに行き、ミホがどうするのかを見ていた。
ミホは久美子の真横に立ち、久美子を見ていた、強過ぎる音を全身で浴びながら。

久美子はミホを見て、笑顔を出して腰を浮かせた、そして踊るように弾いた。
ミホは久美子の手元をジッと見ていた、魂の音色に包まれて。
そのままの状態で、久美子は一気に弾ききった。
静寂のフロアーで久美子の笑顔がミホを見ていた、その時に美由紀が拍手をした。
そして沙紀が美由紀を真似て拍手をしたのだ、病院関係者以外の全員が拍手を送った。
病院関係者はその光景に固まっていた、そして院長が拍手をして、全員が笑顔になり拍手をした。

私は椅子を持って、久美子の隣に置いた、ミホが私を見て手を出した。
『ミホ、座って良いよ・・近くで感じたいんだろ』と笑顔で言った、ミホは無表情のまま座った。
久美子は嬉しそうに、ミホを見て、沙紀に笑顔を送った。
そして次の曲がサマータイムだった、夏の到来の喜びが爆発して、私はリンダの映像を見ていた。
ミホはずっと久美子の指を追いかけていた、必死で追いかけているのだ。
《ミホが必死になってる、凄いよ久美子は》と心に呟いた、ユリカの同意の波動が来た。

そして次がダンスナンバーだった、久美子が腰を浮かせて踊りながら弾いた。
この曲が大好きな、ミサとレイカが立って踊っていた。
その時である、沙紀が立ち上がったのだ、ミサが沙紀の両手を握り腰を振った。
沙紀は少しずつ体を揺らした、そしてエミも立ち上がり、笑顔で一緒に踊っていた。

久美子はそれを見て、笑顔でサビの部分を何度も繰り返した。
４人が踊るのを見て、美由紀が笑顔で細かく拍手していた。
沙紀の母親が席を立ち、後ろを向いて泣いていた。
カズ君がおしぼりを持って、沙紀の母親に渡していた。

「素敵だな～・・久美子には、勝てる気がしないよ」と後ろからホノカが言った。
私は振り向いて驚いた、ホノカにリョウにセリカとマユに、ミサキとヨーコがいて。
受付にはマリアを抱いた大ママに、マダムと松さんに徳野さんとミチルとリアンと千鶴がいた。

大きな拍手を浴びて、久美子がダンスナンバーを終えた。
沙紀と３人娘も拍手をして座った、そして照明が暗くなった。
ピアノを灯したスポットライトに、久美子とミホが浮かんでいた。

その時に久美子がミホの手を取って、鍵盤を叩かせた、可愛い音色が木霊した。
ミホは自分でもう一度叩き、久美子を見た、久美子は笑顔で頷いた。
そしてミホの響きを追いかけるように、悲しいメロディーを奏でた。
ミホは久美子の表情と手元を交互に見ていた、沙紀はずっと久美子を見ていた。
《沙紀の描く久美子とエミ、本当に楽しみだ》と心に呟いて、同意の波動を感じていた。
悲しげなメロディーを、久美子は優しく奏でた。
少し寂しそうな表情を、ミホと沙紀が見ていた。
久美子は最後は笑顔を見せて、復活を表現して終えた。
拍手が中々鳴り止まず、久美子は笑顔で静寂を待っていた。

最後の曲は、あの久美子がＰＧで最初に弾いた、母に捧げる曲だった。
ミホの心に届けと強く願って、魂の響きで、心に直接伝えた。
最後に強く叫んだ、私はここにいます、幸せですと叫んで終わった。
そしてミホを見て、ミホを抱きしめた、その時ミホが両手を久美子の背中に回した。
鳴り止まない拍手の中、沙紀が靴を履いて、久美子に駆け寄った。
ミホが沙紀を見て、体を離して、沙紀の手を取って久美子の方に引き寄せた。
久美子は沙紀を笑顔で抱き上げて、少し前に出て、全員に向かい何度も頭を下げた。

沙紀の母親の必死の笑顔を見て、私は嬉しかった。
そしてミホの突破口を確信した喜びを感じていた。

私はミホと沙紀をテーブルに戻らせ、ジュースを飲ませていた。
院長と婦長と沙紀の母親に、ユリさんと北斗とユリカと蘭が近寄り、笑顔で話していた。
久美子は病院関係者の女性に囲まれて、照れた笑顔で話していた。
ジュースを飲んだ沙紀は、カスミに駆け寄った、カスミが最強の輝く笑顔で抱き上げた。
沙紀は側にいた、マチルダでもシオンでもなく、カスミに駆け寄ったのだ。
カスミは本当に嬉しそうに、沙紀を抱いていた、そしてありがとうと言っていた。
その光景を女性達が優しい笑顔で見ていた、沙紀も一人一人を見ていた。

ミホは戻って来た久美子を見ていた、久美子が小さな楽譜をミホに差し出した。

ミホは久美子を見て、楽譜を見て、もう一度久美子を見た。
「ミホちゃんにプレゼント・・音楽が好きな、ミホちゃんと沙紀ちゃんに」と久美子が微笑んだ。
ミホは受け取り、大事そうに両手で持って、胸に押し当てていた。
沙紀を抱いてカスミが来た、久美子が沙紀にも楽譜を渡した、沙紀も嬉しそうに受け取った。

そして私が美由紀を車椅子に乗せて、沙紀を抱き上げた。
《小僧ちゃん、ありがとう、ありがとう》と沙紀が興奮して伝えてきた。
『沙紀・・俺の方がありがとうだよ』と頬にキスして降ろした、沙紀は美由紀に駆け寄り抱きついた。
美由紀も嬉しそうな笑顔で、沙紀を抱きしめていた。
婦長が来たので、エレベーターまで2人を送った。
沙紀は母親と手を繋ぎ、ミホは婦長と手を繋いでいた。

女性達が全員笑顔で見送った、沙紀とミホに手を振った。
その時だった、沙紀が私達の方に手を振ったのだ、可愛く小さく・・しかし力強く。
『お母さん・・頑張って』と私は沙紀の母親に二ヤで言った、母親は必死の笑顔で頷いた。
エレベーターのドアが閉まり、私の横のカスミが屈みこんだ。
そして手で顔を覆って泣いていた、全員が優しい瞳でカスミを見た、蘭が私に二ヤを出した。

『カスミ・・ありがとう』と耳元で囁いて抱き上げた。
「時間が無いんだ、もう泣かすなよ」とカスミが言って、私にしがみついた。
私はカスミを抱いて、控え室の前まで歩いた、カスミを降ろすと笑顔で入って行った。

私は片付けを手伝い、準備の確認をしていた、その時に激しい雨の音が響いた。
恐ろしいほどの雨音に、全員が外を見ていた。

『満席記録、最大のピンチだね』と腕を組んできた蘭に微笑んで、抱き上げた。
小窓まで抱いて行き、蘭の瞳を閉じた顔を見ていた。
「最高だった・・最高の時を過ごしたね」と蘭が目を開けて満開になった。
『うん・・凄いね、久美子』と笑顔で返した。
「マリもね・・話聞いたよ、私の色紙は？」と蘭が二ヤで言った。
『まだ書かないよ・・蘭にだけは』と二ヤで返して、蘭を降ろした。
私は指定席に座り、開演前の緊張したフロアーを見ていた。

「私はこの場所が、本当に好きになりました。
全員の優しさを感じて、そして強さを感じて・・幸せでした。
久美子の響きが今でも響いています・・雨音に負けない響きが。
ヒトミの言葉をここで送ります・・ヒトミが伝えた、美由紀にとって大切な言葉を。
明日が来ると思っているのは、贅沢な事なんだ。
私は明日の事なんて考えられない、いつも今日・・今の事しか考えない。
本当に素晴らしい言葉です・・今日を生きましょう。
今を全力で生きましょう・・出来ますね？」

ユリさんの強い言葉が響いた、全員が心を1つにして。
「はい」と強く返事をした。
「それでは今夜も、開演しましょう」の言葉に、「はい」のブザーを鳴らした。

豪雨にもめげず、客足は順調だった、豪雨を金曜という力が跳ね返していた。
その時に一瞬静寂が訪れた、銀の扉からマチルダが、純白のドレスで現れたのだ。
マチルダは深々と頭を下げて、フロアーに歩いて行った。
ユリさんの薔薇と、蘭の満開が咲いて、フロアーの熱が一気に上がった。

私はフロアーが落ち着いて、ＴＶルームに戻った。
私の夕食だけが残っていて、私はウルを出して一人で食べていた。
「エース・・ありがとう」とエミが言って、ミサとレイカが笑顔で頭を下げた。
『俺の方が、ありがとうだよ』と笑顔で返した。
「よし・・マリア、エースに甘えて、よし」とミサが言うと、マリアが天使で駆けてきた。
私はマリアを抱き上げて、天使の微笑を見ていた。
マリアが眠りにつくまで、私はマリアを抱いていた。
久美子と美由紀で、３人娘と遊んでいた。

雨音がメロディーを作り、その調べに包まれていた。
風が小窓を叩いていた、訪問者のノックのように。
そして由美子に迫っていた、訪問者がノックも無しに、訪れようとしていた。
晩夏の夜は、嵐の中に入って行った・・。

音楽の力、私はその巨大なパワーに圧倒されていた。

久美子は今現在でも、この時が一番ベストな精神状態で弾けたと言う。

ミホが目で追いかける自分の指が、自分の想いよりも強く早かったと。

自分は制御する方に集中していてね、早くなりすぎないように必死だったよ。

手は私の支持で動いていなかったよ、その時に少し分かったよ。

ヒトミちゃんの左手の動きがね、リアルに想像出来たよ。

自分でも楽しい時間だったよ、今でもあの演奏が、私の中ではベストなんだよ。

そう笑顔で久美子が言った、私も笑顔で頷いていた。

本当の集中とは、何かを越えないと入らない。

その時は自分を客観的な視点で見れる、現実感すら無くなる。

そこが本当の集中した場所じゃよ・・そう空手のシゲ爺が言っていた。

今思うと・・ヒトミは約2週間、その世界にいたのかも知れない。

明日が来ると思っているのは、贅沢な事なんだ・・私も常に自分に言い続ける。

そうしないと、すぐに忘れてしまうから、漠然と生きてしまうから・・。

先住者の場所

雨音が強い主張をして、風のノックが響いていた。
私は天使達の顔を見ていた、恐怖も不安も無く、どこか楽しんでるようだった。

徳野さんとカズ君が、ＴＶルームに入ってきた。
「マダム・・満席は更新しました、準備に入ります」と徳野さんが真顔で言った。

「そうじゃね・・カズ、エースを使え・・共同体の女性も受け入れる。
全部出して準備しろ、それと表階段は最上階から点灯しろよ。
内扉を閉めよう、最後の客を表まで見送るように。
カズ以外のボーイは、全員客に集中・・カズとエースで準備。
徳・・帰る女性は頼むぞ」

マダムが真剣に指示した、私はマリアをベッドに寝かせた。
「了解です・・行くか」とカズ君が私に笑顔で言った。
私も笑顔で頷いて、カズ君の後を続いた。
「最初に１階の倉庫から、キャンドルを出そう」と言ったカズ君と、表階段を下りた。
１階の大きな倉庫のドアを開けて、無数のテーブルキャンドルの乗った台車を押した。
エレベーターでＰＧに入り、受付横を通って、ハルカポジションで火を灯した。
それをボーイが各テーブルと通路に並べた、私とカズ君は表階段に向かった。

「3段おきに置こう、エースは上に向かってくれ」とカズ君が言って、私は頷いた。
表階段はコンクリートの壁があり、雨も風も問題なかった。
キャンドルケースは丈夫な鉄で出来ていて、重量もあり倒れる心配もない物だった。
私は最上階まで、キャンドルを並べ、PGに戻った。

その時代、台風となるとすぐに停電していたのだ。
それからカズ君と、収納式の大きな鉄の扉を引き出した。
エレベーターホールと受付の間に、大きな鉄の扉が座った、私はその存在すら知らなかった。
そして鉄の扉を閉め、小さなドアから中に入った、外は激しい雨と、強風の世界だった。
客も続々と帰り、ボーイ達がタクシーまで見送った。
そしてPGの奥の倉庫に向かい、台車に乗ってる絨毯を通路まで出した。

『ここに有るんだね・・俺、鉄の扉も知らなかったよ』と笑顔で言った。

「おう、台風の時だけだからな、この奥に敷き布団と、タオルケットがあるんだ。
PGは泊まれるんだよ、女性達に嵐の中、停電の家に帰らせたりしないのさ。
飲料水も非常食もギッシリあるよ、マダムの考えだからな。
戦争を生きた人間は、準備が違うよな」

カズ君が笑顔で言った、私も笑顔で頷いた。
「カズ・・あと1組」とボーイのシュウさんが言って、私とカズ君はモップを準備した。

最後の客が帰り、女性が着替えに入って、私とカズ君とボーイ達でモップをかけた。
そして大きな絨毯を、フロアーに４枚敷いた。
布団の乗った台車をフロアーに入れた時に、ブチッて感じで停電になった。
フロアーは幻想的な空間になった、キャンドルが灯す明かりだけの空間に。
私達は少し離して、布団を敷いた、全部で５２組の布団が敷けた。
タオルケットを各布団に置いて、空気を入れて膨らます枕を置いた。

「カズ・・ＯＫか？」と徳野さんが言った。
「ＯＫです」とカズ君が返した。
「お前一人に女性全員を任すぞ、大丈夫だな？」と徳野さんが二ヤで言った。
「はい、大丈夫です」とカズ君が真顔で強く答えた。
徳野さんとボーイは、豪雨の中帰って行った。
女性達が続々とフロアーに入って、その幻想的な空間に笑顔になったいた。
私はＴＶルームに戻り、美由紀と久美子を誘った。
美由紀を一番通路寄りの場所にした、すぐに蘭が隣に来て、カスミとマチルダが来た。

「ここは、ユリカ姉さんで、こっちがリアン姉さん」と蘭が笑顔で言った。
その台詞で女性達に笑顔が溢れて、女性達の期待の視線が見ていた。
「エース・・これを用意するぞ」とカズ君が言った。
台車に沢山の酒とジュースにスナック菓子の山が見えた。
「カズ君・・気が利くようになったね～」と蘭が満開で微笑んだ。
「５番に用意しますから、グラスと氷はセルフでお願いします」とカズ君が微笑んだ。

「了解、ありがとう」と蘭が満開で返した。
私がカズ君と準備をしていると、四季がグラスを持ってきた。
「強力な魔法は？・・私と千春にはいつ？」と千秋が笑顔で私に言った。
『何？・・だれか魔法にかかったの？』と千夏を見て二ヤで言った。
「千夏にかけたろ・・ずるい」と千春が二ヤで言った。
「千春は、ユリカスペシャルで少しかかったろ・・私だけ」と千秋がウルで言った。
『千秋は、千秋スペシャルでかけたのに～』と私が二ヤで言って、全員で笑った。
四季が４番で飲み始めて、サクラさんとナギサが仲間に入った。

私は子供達を一人一人抱いて、一番安全な手前の真ん中に寝かせた。
ユメとウミがその横に場所を確保した、私は笑顔でよろしくと言って、ウミの笑顔を見ていた。
マダムと松さんが奥に入ると、続々と共同体の女性が鉄の扉の出入口から入ってきた。
カズ君の用意したタオルで、濡れた体を拭いて、着替えに行った。
ユリカがリアンと自分の店の女性を連れてきた、ミチルがホノカと来た。
魅宴の女性も来て、ゴールドも来た、布団は足りそうだと思っていた。

「さぁ・・濡れて寒いでしょ、少し飲みましょう」とユリさんが他店の女性に微笑んで誘った。
リアンが3番にユリカと入り、皆を手招いてた。
女子高の修学旅行のような光景が広がっていた、私は鉄の扉の前でそれを見ていた。
大ママがミコトと最後に現れて、その光景を見て笑顔になった。

「さすがＰＧだね・・マダムを尊敬するよ」と大ママが私に微笑んだ。
『なんせ戦争を生き抜いた人の考えですから』と笑顔で返した。
「マダム・・俺はＴＶルームにいますから、何かあったら呼んで下さい」とカズ君が言って、私に右手を上げてＴＶルームに歩いて行った。
私は鉄の扉を出て、エレベーターホールのチェックをした。
夜街は暗かったが、市役所の方と病院の方は明かりが点いていた。
私が鉄の扉を閉めると、マリアが駆けてきた、私は笑顔でマリアを抱き上げた。
美由紀を久美子とマキとヨーコが囲んで、笑顔で話していた。

ハルカとミサキは薄い水割りを、リアンに飲まされていた。
女性達の笑顔が溢れ、盛り上がっていた、私はマリアを抱いて美由紀の輪の中に座った。
「エース」と北斗が来た、その心配げな顔を見ていた。
『北斗、まだ大丈夫だよ・・俺と後で一緒に行こう、少し飲みなよ』と笑顔で言った。
「ありがとう・・そうするね」と言って、ＢＯＸの方を見て二ヤを出した。

ミチルが３番から北斗を見ていた、妖艶笑顔になって頭を下げた。
北斗がミチルに近付いて何かを言った、ミチルは笑顔になり一筋の涙を流した。
そしてユリさんの席に２人で入り、女性達と笑顔で話していた。
１０番の席に銀河と若い女性が集まり、盛り上がっていた。

１１時過ぎまで宴会が続いて、お開きになったようだった。
私は眠ったマリアを抱いて、エミの隣に寝かせた、ウミがユリさん

を見た。
「ウミ・・お願いね」と薔薇で微笑んだ、ウミは最高の笑顔になってマリアの横に寝転んだ。

「皆さん、今夜はゆっくりとして下さい・・今から全員に寝物語をしてもらいます。
ＰＧのエースにしてもらいますので、楽しんで下さい」

ユリさんが突然小さな拡声器で言って、私に薔薇二ヤを出して、大ママの横に入った。
私はユリさんが椅子の上に置いた拡声器を取って、銀の扉の前の椅子に座った。
全員の期待の顔が、キャンドルに灯されていた、北斗の顔を見てそれに決めた。

『あれは去年の7月の終わり、小６の俺は、２度目の本格的な家出を決行した。
理由は何も無かった、ただ家にいても退屈で、ふらっと家を出た。
その頃俺は、体を鍛えてきて・・それだけに集中してたから。
多分・・退屈だと勘違いしてたんだよ、なんか煮詰まってて。
いつものように、３０分以上かけて、青島までチャリを漕いでいた。
子供の国の前で、サーフボードに乗って沖を見てた。
この先にアメリカが有るんだな～って、一人で思ってた。
穏やかな波の日で、サーフィンには最低の日だった。
俺が仕方なくサーフショップに戻ると、鹿児島のサーファー、ユイちゃんがいた。
ユイちゃんは１９歳で、すっっごく可愛かった・・だから俺のお気に入りでした。

「どした？・・小僧らしくないね～」と、ユイちゃんが二ヤ顔で言ったので。
退屈で家出したから、恋が浦まで乗せてと頼んだんだ。
ユイちゃんが志布志に帰る感じだったから、少年の爽やかな笑顔で頼んでみた。
恋が浦って、海岸線を日南を過ぎて、南郷を過ぎて。
幸島の先にある、素敵なサーフポイントです。
俺は一度行ってみたくて、チャンスだと思って頼んだ。
「ＯＫ・・ボードを乗せな」・・ユイちゃんは笑顔で言ってくれました。
俺は嬉しくて、ボードを乗せて、助手席に乗り込んだ。
俺のポケットには、５８０円しか入ってなかった、そんな事気にもしてなかった。
２時過ぎだったよ、堀切でヤングのドックを２人で食べて出発した。
俺は隣のユイちゃんの可愛い横顔を見て、ニヤニヤを出して。
ビキニの水着しか付けてない、上半身の胸を見て、緊張したりして楽しんでた。

「退屈なんだよ、そう思えば・・生きてるって、退屈の連続なんだよ」
いきなりユイちゃんが前を見て強く言った、俺はユイちゃんの顔を見た。

「まっすぐって無いよな、左右に曲がったり、上下に傾斜したりだろ。
この道なんか、クネクネだろ・・だからその方向に自分で舵を切る。
はみ出さないよに、必死になるんだよ・・普通の人はね。
だから退屈だと感じるんだ・・はみ出せないからね。

私がサーフィンをするのは、それに疲れるからなんだよ。
海の上だけが自由だよね・・・・私はお前が好きなんだ。
小学生でチャリでサーフィンに来る、そしてサーファー全員と友達になる。
年齢なんて関係なしにね・・チャリで来てチャリで帰る、不思議な少年。
サーファー仲間は・・お前に憧れてるんだよ。
子供の頃、お前みたいに生きもしないで・・言い訳ばかりしてたから。
お前が退屈だって言うなよ、お前が退屈だったら・・私らは何て言えば良いんだよ。
お前が退屈だと言ったから、今から・・私は、はみ出す事にした。
私が恋が浦でお前を落とす、それからのお前は、退屈とかけ離れた状況になる。
野宿をして、声を聞けよ・・恋が浦には、何かが棲むと言われる。
私も一度聞いたことがある、それは恐ろしい感じじゃない、懐かしい感じだったよ。
夜の海から何かが上がってくる、沢山の何かがね。
恋が浦は特別な場所なんだ、都会のサーファーに教えたくない。
マナーが悪いサーファーに来て欲しくない、素敵な地名に隠された意味。
感じておいで、チャリサーファー・・そして宿題を出す。
退屈とは何か？・・お前が帰り着く事が出来たら、教えてもらうから。
もうすぐ着くよ、あの岬を曲がると、恋が浦だよ。
ここからはゆっくりと走るんだ、それがルールなんだよ。
私達は先住者の場所を間借りしてる、その時だけ間借りしてるだけなんだ。

ここからは先住者の場所だからね・・ほらお猿の親子だよ、島流れだね」

俺がその方向を見ると、親子の猿が歩いていた、ゆっくりとこっちを見て。

そしてゆっくりと車は進み、恋が浦でボードを降ろして、ユイちゃんにお礼を言った。

「まぁ頑張りな、運良くキャンプをする奴もいないしな・・そこの奥に古井戸があるから。

飲み水はそれで大丈夫だよ、民家も見える場所には無いからね。

サバイバルゲームだよ、お前には良い事さ・・生還を祈ってる。

死んでも私の所に化けて出るなよ・・検討を祈る」

そう笑顔で言って、ユイちゃんは手を振った。

俺は少し寂しかったけど、ワクワクの方が勝っていて、ビーチに向かった。

夕方の小さなビーチには誰もいなくて、俺は準備運動を声を出してして。

沖に出たんだ、その時に感じていた・・青島あたりと全く違う水の感触を。

少し濃いかな？・・俺はそう思ったんだ、肌に纏わりつく感じがね。

そして何度か波に乗って、井戸に行って水を飲んだ。

夕暮れが迫っていて、ビーチがキラキラしていた。

俺は考えて、ビーチのゴミ箱とか、キャンプをしたであろう場所を探した。

そしてやっと見つけた、使いかけのマッチを。

それから山の方に入り、焚き火に出来そうな木を集めた。

ビーチの右側は、なんか境界線がロープで引いてあって。
俺はそれを避けて、ビーチの左側で火を起こした。
そしてボードを砂の上に敷いて、その上に寝転んだ、もうすっかり暗くてね。
そしてら圧倒されたんだ、物凄い星空に魅了された。
腹が減ってるのも忘れて、俺は空見てたよ・・ずっと星空を見てた。
蝉の大合唱が山の方から響いてきて、人工的な明かりは一切存在しなかった。
車も一台も通らなくて、俺は怖くもなくて・・そして感じたんだ。
火を消そう、そう思った・・そして砂で消してみたんだ。

凄かった、真っ暗じゃなかった・・月光と星の輝きで十分だったんだ。
青白い光で照らされた海が、月光の道を映していて、素敵だったよ。
そして俺はボードに乗って沖に出た、漆黒の海の上をパドリングして。
かなり沖に出て、サーフボードに寝転んだ、本当に静かな海だった。
そして完璧な自由を感じてたよ、星空に包まれて、それを海面が映していた。
遠く都井岬の灯台の明かりが、クルンって感じでよぎって、他の人間もいると感じた。

俺が一人で楽しんでると、ボードにゴツンって固い何かが当たって揺れたんだ。
俺がバランスを崩して海に入ると、固い大きな何かが沢山いるんだよ。
俺にぶつかってもお構いなしに、ビーチを目指してる。

なんだろうと思って、俺は潜って見た・・その光景に我を忘れたよ。
沢山の海亀だったんだ、俺は慌てて邪魔にならないようにボードに乗った。
ボードの上に正座して、両手で漕いでビーチに向かった。
その時に海亀の最初の一段がビーチに上がっていた、あの仕切られた場所を目指していた。
産卵場所だったのか、それで仕切りがあったんだな～と思って、沖から見ていた。
そしてユイちゃんの言葉を思い出した、先住者の場所だという言葉を。
俺は波打ち際まで来て、慌ててボードを持って、邪魔にならないように走った。
そして火を焚いた場所から、海亀達を見ていた、一心不乱にその場所を目指してたよ。
俺はボードを敷いて、横になってそれを見ていた。
必死に砂を掘って、涙のような水滴を目から流しながら、産卵する姿を。
俺はその砂を掘る音が子守唄になって、いつの間にか眠っていた。

そして翌朝、日の出前の、早朝に起こされるんだ、俺の背中を誰かが触るんだよ。
俺はどこにいるのかも忘れていた、姉のシズカが悪戯してると思ったんだ。
もう、やめろよ～シズカって寝返りしたら、ピョンって感じで後ろに飛んだ。
まだ成獣でない、小さな小猿が少し威嚇しながら、俺を見てたんだ。
それで俺は恋が浦にいると思い出して、ごめんよ～って小猿に謝った。

小猿は不思議に逃げなくて、威嚇するのもやめて、俺を見ていた。
腹減った～・・どっかに食べ物ないかな～？と子小猿に言ってみた。
意識して笑顔で言ったよ、小猿は俺に興味があるらしく、ボードを触ってみたりしていた。

俺が立って井戸に歩き出しても、少し離れて付いて来るんだ。
俺は気にしない振りして、水を飲んで、道を北に向かって歩いたんだ。
確か岬の反対側に、家が有ったと思い出して、歩いたんだよ。
本気の夏の太陽が上がる前に、何か食べ物を探そうと思ってた。
小猿は１０ｍ位後ろを、付いて来ていた、俺は楽しくなって歩いてたよ。

店みたいな、でも営業してると思えない、バラックが見えた。
一軒だけポツンと、少し山側に入った場所に立ってた。
錆だらけの、コカコーラと金鳥の看板があった。
俺は恐る恐る敷地に入ってみた、そしたら爺さんがスイカを運んでたんだ。
『手伝うよ～』と俺は出来るだけ、素直な少年の笑顔で言ったんだ。
「おお？・・見ない子だね～、嬉しいね～」って、シワシワ笑顔で言った。
俺はスイカ運びを手伝って、店に入れてもらった。
そして事情聴取を受けて、冷汁を食べさせてもらったんだ・・美味かったよ。
外には小猿がいて、爺さんが芋とリンゴを食べさせた。
「双子みたいやな～・・この猿とお前は」って爺さんが笑った。
『はぐれ者だから？』って俺は聞いたんだ。

「お前も、あの猿も・・はぐれ者じゃなかろう。
ただ好奇心に逆らわないだけじゃろ、昔の子供はそんなだったよ。
世界が狭かったかいの～・・海の向こうに、まだ見ぬ世界の存在は知ってたが。
そこに行けるのは、ごく一部の限られた人間だけやった・・そしてあの戦争や。
好奇心を満たす事が出来ずに、海を見て妄想ばかりしちょったよ。
今はＴＶとかで、映像で見れるよな・・幸せな事かは分からんが。
金さえ出せば、誰でも海の向こうの国に行けるしな。
じゃが・・それで忘れる事もある・・不幸な事もな。
お前は昨夜・・何かに会ったか？・・浜で寝て、何かを見たか？」

爺さんがそう言ったから、俺は海亀の産卵を見たって言ったんだ。
「まだやな・・絶対に感じて帰れよ、夕方手伝いに来い・・飯を食わせるかい」
爺さんにそう言われて、礼を言ってビーチに戻った。
３人のサーファーが来ていて、その内一人が知り合いだった。
俺は波に乗って、その３人組にお菓子をとジュースを貰って食べた。
昼近くなって、サーファーの数も１０人を超えていた。
あの境界線の場所は、昼間に日陰になるんだよ。
休憩する絶好の場所なのに、誰もそこに入らなかった。
夏の陽が照りつける場所で、休憩するんだよ・・境界線の中には入らない。
それがルールだと知ってるんだ、間借りしてる者の絶対的ルール。

俺は嬉しくて、それを感じてたよ・・小猿だけが、境界線の中の隅で昼寝をしていた。
それが許されるべき先住者として・・でも小猿も産卵場所を、踏むことすら無かった。
ＤＮＡに刻まれた歴史が、大切なルールを守らせていた。
サーファー達が全員帰り、俺は小猿と爺さんの店を目指した。
その小猿との距離が近づいて、俺は嬉しくて歩いたよ・・まだ熱い熱を浴びながら。
そして爺さんの屋根を修理する手伝いをして、夕食をご馳走になった。
漁師から買ったという刺身があって、それが本当に美味かった。
そして少し焼酎を飲んで、爺さんと話していた。
その時に、爺さんが俺に聞いたんだ・・なぜそんなに背負ってるんだって。
俺は意味が分かってたから、酔いも手伝って、小児病棟の話をした。
そしてヒトミからミホに移った時に、泣いてしまったんだ。
その時小猿が入ってきて、俺の横に座って・・俺を見ていた。
俺はミホに対する悔しさを話した、初めて他人に話したよ。
小猿が聞いてたから、小猿に伝えたくて・・話してた。

「足りなかったんじゃよ・・その段階では、お前は足りなかった。
だから一度引き離された、それを悔しいと思うのなら。
忘れるなよ・・絶対にミホを忘れるなよ、ヒトミのように」

爺さんの言葉が優しくて、俺は笑顔になって頷いたんだ。
そして爺さんに礼を言って、浜を目指して小猿と歩いた・・月明かりの道を。
その時には、俺の真横を小猿が歩いていた・・俺は小猿に面白話をしてたよ。

浜に着いたら、昨夜と同じ・・青白い光が包んでいた。
小猿がボードから少し離れた、草むらに寝転んだから・・俺は沖に出たんだ。
時間なんて全く分からなくて、海も穏やかだった。

沖でボードに寝転ぶと、ミホの顔を思い出して・・星空を見ていた。
その時に感じたんだ、沖から何かが来るのを・・それは海面を歩いてるような感じだった。
俺はうつ伏せになって、沖を見た・・海面に大きな波紋の道が出来ていた。
それがこっちに向かって来るんだよ、背ビレが作る波紋の道が。
俺はイルカだと思っていた、でも近づくほどに・・その大きさが分かった。
巨大だったんだ・・５m以上あるって思った、そして背ビレの大きさにも驚いた。
俺はボードに正座して待ってた、ゆっくりと近づいてきた。
巨大な体に斑点が浮き出てた・・ジンベイ！って声を上げたよ。
なぜこんな場所にって思った・・俺は海の生き物が好きだったから。
図鑑で見てた、図鑑でしか見たことない、ジンベイザメがボードの真下を潜ったんだ。

その時に聞こえた・・おいでって、確かに海中から聞こえた。
ジンベイは人間を食わないよな～って、自分で自分に確認して、海に入った。
凄かったよ・・俺の４倍、６mはあるジンベイが、ゆっくりと泳いでた。
いや泳ぐって言うより、漂ってたんだ・・小魚を沢山連れて。
水深が２０m位の場所を、悠々と泳いでいた。

俺がジンベイに近づいても、無視された・・体に触っても、反応無くて。
俺は楽しくなって、ジンベイと遊んでいた・・夢中になって。
しばらくして、ジンベイは小魚と帰って行った、俺はボードの場所まで泳いで浜に帰った。

小猿が起きてて、2人で水を飲みに行って、俺はボードに寝転んだ。
すぐ横に小猿がチョコンと座って、俺は小猿にヒトミの話をしていた。
誰にも言えない、ヒトミの言葉を・・全て小猿に話した。
俺は焼酎と泳いだので、疲れていつの間にか眠っていた。
ザワザワって音で目が覚めたんだ、まだ真っ暗だった。
小猿がいなくて、俺は音のする波打ち際を見た・・そこに小猿が座ってた。
沖を見ながら、何かを待っているように・・俺はずっと小猿の背中を見ていた。

そうしたら海から上がってきた、目では見えないけど・・確かに感じたよ。
小猿が急に砂浜に寝転んで、嬉しそうにスリスリしてるんだ。
甘えてるって思った、小猿が何かに甘えてるって思ったんだ。
そして沢山の何かが上がって来た、それは少し浮いてる感じだった。
俺の横を通り抜けて、山の方に行った感じだった・・怖くなかったよ。
ユイちゃんが言った通り、懐かしい感じだった・・そんな香りが微かにした。
小猿は浜に寝転んで、眠ったようになっていた、幸せそうだったよ。

そして気付くんだ、俺の真後ろに誰かがいるのを・・確信的に分かってた。
温度で分かってたんだ、俺は振り向かずに言った。
『ヒトミ・・久しぶりって』って嬉しくて、小声で囁いた。
《な～んだ、驚かそうと思ったのに》ってヒトミが言った。
静寂の夜に、俺とヒトミと小猿と母猿しかいなかったんだ。
俺はヒトミを感じた時に、分かったんだ・・小猿を抱いた、母猿だって」

その時フロアーから声がした。
「お願い、待って・・トイレに行かせて、絶対に待っててね」とミコトが言った、私は笑顔で頷いた。
何人かがトイレに行った、少し話し声が聞こえた。
蘭がジュースを持って来てくれた、私は笑顔で受け取った。
「美由紀が今で泣いてるよ、知ってるんだね・・リアン姉さんに抱かれてるよ、幸せそうに」と蘭が満開で微笑んで戻った。
私は美由紀の方を見た、リアンとユリカが美由紀を挟み、優しい笑顔を返してくれた。
エミが起きていて、私を強い瞳で見ていた。

雨音と強風が激しく響いていたが、恐怖感は誰にも無いようだった。
私はエミの側に行き、エミを抱き上げた、エミは嬉しそうに少女の笑顔で返してくれた。
「怖くないよ・・素敵な話だね」と私の耳元にエミが囁いた、私も笑顔で抱きしめた。

ユリアの優しい波動が、まだ大丈夫と言っていた。
その側に、ヒトミの存在を感じていた・・その温度を・・。

恋が浦は、今では有名なサーフポイントになった。
観光地化されて、民宿も店も出来た。
そして何かが無くなった、あの不思議な雰囲気が消えた。
しかし今でも先住者の場所である、その場所に夜いると、そう感じる。
生命の営みの場所である、あらゆる生命が共存する。
私は成人して、ジンベイとマンタの話を、ある海洋学の大学教授にした。
それは嘘だと言われた、私は二ヤで舌を出して、嘘だという事にした。
こんな人間には、理解出来ない事だと感じたのだ。
生命を科学でしか捉えられない、狭い世界の人間には、無理な事なのだと。
私がこの話をしたのは、多分・・マンタの影響が強かった。
あの存在を感じて、この話をしたのだろう。
私にとって、事実として話しにくい・・創作話のような話だから。
だが私の他に、もう一人同じ場所にいて・・同じ経験をした者がいる。

私の双子の兄弟の・・あの小猿が知っている。

私はそれだけで良いと思っている・・ジンベイもヒトミも存在したのだから。

波打ち際で、あの小猿が・・母猿に抱かれていたのだから・・。

母猿の伝言

波音だけの世界に響いた、忘れえぬ声。
夢だと感じながら、現実の中で喜びを噛み締めていた。
「ＯＫで～す・・エース、よろしく」とミコトが微笑んだ。
私は全員を見渡して、拡声器を持って、笑顔で始めた。
『真後ろのヒトミの微かな熱が嬉しくて、自分の頬を平手で何度か打ったんだ。
夢じゃない事を確認したんだよ、痛かったよ・・それに小猿が俺を見たし。

「振り向かないでね・・裸だから」とヒトミが静かに言った、俺は二ヤをしていた。
「相変わらす、スケベちゃんだよね～・・女の胸が異常に好きだし」ってヒトミ笑った。
『１２歳だからね・・ヒトミは何歳になったの？』と海に向かって囁いた。
「１２歳に決まってるでしょ、正確にはもうすぐ１２歳だよ」と返してきた。
ヒトミの初めて聞く声が、イメージ通りの可愛い声で嬉しかったよ。

『そっか～・・そっちでも成長するんだね』って自然に笑顔になって言った。
「選べるのよ・・だから２０代の人が多いよ、老人はいないよ」とヒトミが言った。
『選べるの？・・好きな歳を？』って俺は不思議に思って聞いた

んだ。
「そう・・だけど私は成長を望んだの、９歳だったからね」そう言って、一瞬間があった。
「こんな話はやめようよ・・小僧、膝枕してあげるから、目を閉じて寝転んで」
ヒトミがそう言った、俺は嬉しくて、目を閉じてボードに寝転んだ。

頭の所に柔らかい太腿を感じて、俺は体の力を抜いた。
そしたら、ボードが揺れたんだ、海の上に運ばれたように。
その小さなうねりで感じた、かなり沖の海の真ん中だと。
底知れぬ深海の上だって、そう思ったんだよ。

『かなり沖だね、下が深海だね・・気持ち良いよ』って俺は目を閉じたまま言った。
「太平洋だよ、南半球に入ってるよ・・深さを感じる？」そうヒトミが聞いた。
『かなり深い事は感じるよ・・でもどれくらいかは、分からないよ』って正直に答えた。

「それで良いのよ、深いって分かれば、後は想像しないの。
宇宙だってそうでしょ、広いって分かってても・・どれ位なんて分からない。
死後の世界も、無いと言えば無いし・・あると思っても、どんな場所かは考えない。
でもね・・なぜ地球に生命が誕生したかとか、古代の文明の謎とか。
それは想像してね・・小僧が想像して、私はその変化を感じたいの。
答えなんて無いけど・・でも想像してね、イメージで見せてね。

私は悪い子だよね・・小僧に辛い経験ばかりさせてるね」

優しかったよ、ヒトミの言葉が大海原に響いていた。
俺はその言葉で感じてたんだ、自分の無力さを痛感してた。
『ごめんね、ヒトミ・・俺はミホに対して・・足りなかったよ』
悔しさがこみ上げてきて、目を閉じたまま海に向かって言った。

「当たり前だよ・・ミホは繋ぐ者だよ、あの子の強さが繋ぐんだよ。
簡単に解決なんて出来ないよ、ミホは最強なんだよ。
心が本当に強いから、あそこまで閉ざせるんだよ・・だからこそ選ばれた。
ミホは繋ぐから・・あなたが諦めないのなら。
マリの言葉を忘れたの？・・ミホの後にも、沢山の人が出たでしょ。
私は、あなたが選ばれると信じてるよ・・そうじゃないと駄目だよ。
あなたは、まず美由紀でしょ・・美由紀がその場所まで行かないとね。
絶対に見せて・・あなたの経験で出す答えを、私に見せて。
はみ出して、普通とか常識じゃ・・辿り着けないから。
ナスカの地上絵って知ってる？」

ヒトミは強く言って、最後にそう問いかけた。
『知ってるよ・・鳥や蜘蛛の絵だろ・・空から見ないと分からない』って答えた。
「そうだよ・・空から見ないと分からない絵を、古代の人がどうやって描いたの？」
ヒトミの質問する言葉に力があって、俺は和尚との問答のような気持ちになった。

『描けるよ・・多分描ける、人はイメージで描けるから。
確かにあれだけ正確に描くのは、難しいだろうけど。
でも誰かに伝えたいなら・・あれくらい描けると思うよ』

俺は正直に答えた、ヒトミは笑った感じだった。
「うん・・描けるよね、誰かに伝えたいから」ってヒトミは嬉しそうに言った。
『誰に伝えたいのか・・それは分からない、でも存在したんだね・・上から見る何かが』
俺は言いながら、楽しくなったいたんだ・・大好きな分野だから。
「どうだろうね・・でもあれだけの絵が、無意味な物じゃないよね」ってヒトミが言った。

『無意味じゃないけど・・深い意味が有るのかな～？
深い意味って・・秘密って事だよね・・あんなに目立つ秘密？
それは無いよな～・・多分、二ヤのメッセージだね。
いつか人間が空を飛ぶって想像した、そんな偉大な奴がいたんだ。
誰もそんな話を信じないで、多分・・変人扱いされたよね。
でも自信があったから、残したんだね・・いつか驚けってね。
学者は馬鹿だね～・・色々難しく研究して。
多分、描いた人は、その姿を見て・・ニヤニヤしてるね』

俺は楽しくなって、そう言った、ヒトミがケラケラと笑った。
「やっぱり小僧だね・・素敵だよ、変人さん」ってヒトミが笑ってた。

『だってそうじゃん・・ピラミッドだって、俺の方が偉いって。
馬鹿な競争したんだろ・・高い方が偉いみたいな。

歴史に残る人って・・絶対普通じゃないよね、少し壊れてるんだよ。
日本の城だってそうだろ、あんなでかい城を建てて。
石を積んで、堀を作って・・無駄な事だよね。
だって・・落とされる時は落とされる・・だったら、すぐに捨てれる物が良い。
捨てる時に、何も意味を残さない・・そんな物の方が良いんだよ。
城を守れなんて、馬鹿な話さ・・相手にとっては、動かないんだから。
こんな楽な事は無いよね・・結局、シンボルだろ。
俺は天下を取ったんだって・・それを表現する、ただのシンボル。
実はそれ自体に意味なんか無い、士気を高める為に、どこからでも見える物にした。
そうだよね・・味方の為に目立つ物にしたんだ、それを守らせる為に。
誘導なんだね・・心を捕らえる為の、目で見える物。
そして炎に包まれ、落城する時の悲しさを・・強烈に演出する。
何の為に戦ってるのか、何を守りたいのか・・それを間違わせるんだね。
あの戦争も同じだね・・城と同じ意味の物が有ったんだね。
ナスカの絵には、深い意味は無い・・目で見て間違わせる、それを楽しむ。
俺は知ってたぞって、現代人に二ヤする為の遊びだよ。
宇宙人はいるだろうけど・・円盤なんて作れるんだから、そんな遊びはしない。
あれは過去からの問題・・よく出来ました〜って答えてやれば良いんだね』

俺は楽しくて、目を開けそうになった。
「駄目・・目を開けないの、１２歳の裸は・・小僧は一人しか見れないんだから」
ヒトミが強い言葉で言って、俺は慌てて閉じた目に力を入れた。
『１２歳の裸が見れるのか～・・楽しみだ～』ってニヤニヤで言った。
「まぁ・・小僧次第ね、未来は決まってないからね」、ヒトミはそう言って。

「小僧・・忘れて良いよ・・私の事・・もう充分だよ」
その言葉が寂しく響いて、俺は辛かった・・夢なら覚めろと思っていた。

『ヒトミ・・それは俺の決める事だろ、忘れようと思って忘れる事ができるの？
出来るのなら、その方法を教えてよ・・それだけはしないように、気を付けるから』

無意識に出した言葉が、これだった。
ヒトミが俺の顔に顔を近づけたと思った、そして水滴が俺の頬に落ちた。
小さな震えも感じてた・・ヒトミの温度が少し上がった。

「幼稚園の容子先生でしょ、恭子ちゃんに、マキちゃんに、ヨーコちゃんでしょ。
自傷の女神に、リヤカーのお姉さん・・そして美由紀。
小僧は浮気性だよ・・私は誠実で一途な人が好き・・だから小僧は無理～」

ヒトミは元気を出して、明るく言った。

『その誰よりも・・俺には、ヒトミだよ』って少し照れながら言った。
「知ってる・・だけど、来年の夏休みが終わっても、そう言えるのやら」ってヒトミが笑った。
『ヒトミ・・ずるいぞ、自分だけ想像して・・自分だけ先に進んで、俺を置き去りにして』
俺は言った後、しまった～と思った・・ヒトミの反応が無かった。
「小僧・・忘れないでね、約束だよ・・私は側にいるから。
ありがとう、楽しかった・・嬉しかった・・大好きだよ・・小僧」
ヒトミが優しくそう言って、俺の頭をボードの上に置いた。
ヒトミが立ち上がったのを感じて、別れの時だと感じてた。
俺はその時・・体が動かなかった、何も言えなかったんだ。
「小僧・・選択出来るの、人生の一場面だけ・・それだけは持っていられるの。
私はね・・あの小僧が左手に、私を収めた時にしたよ。
ありがとう・・そしてごめんね・・小僧は辛かったね。
私は嬉しかったよ・・小僧が笑ってくれたから、心で泣いてくれたから。
また来るね・・次はどこで会うのかな～・・楽しみだね。
小僧・・夢なんだよ・・これは全て夢なんだよ・・明日の朝、起きたら分かるよ。
お休み・・小僧・・またね」
ヒトミがそう言った、俺はその時は強烈な睡魔と闘っていた。
その時、俺の背中を思いっきり引っかいたんだ、それで完全に目が覚めた。

小猿が俺を引っかいて、海を見た、俺も海を見たら。
沢山の何かが海に帰るようだと感じた、小猿が海に走り出した。
俺はそれを追いかけて、走ったんだ・・小猿が下手な泳ぎで沖を目指すから。
俺は小猿を捕まえて、必死で抵抗する小猿を抱きしめた。

『行ったら駄目なんだ・・まだ早いんだ・・お母さんが泣くぞ』って小猿の目を見て叫んだ。
それで大人しくなった、俺は小猿のおかげで・・寂しさを忘れていた。
『ありがとな・・夢だと思うところだったよ』と小猿に言った。
小猿は沖を見て、俺にしがみついた・・その温度が復活を示していた。

俺は浜に上がり、小猿をタオルで拭いて、一緒に寝たんだ。
夢も見ずに眠ったよ・・小猿の温度を感じながら。
幸せだったんだ・・小猿の温度が、楽しそうだったから。

翌朝、早朝に小猿に起こされて、水を飲んで爺さんの店を目指した。
爺さんが俺を見て、笑顔になって言った。
「良い事があったの～・・今日、帰るんか？」と爺さんが言った。
『うん・・気分爽快だから、帰るよ・・やらないといけない事があるし』って笑顔で返した。
「そうか～・・また来いよ」って言ってコーラをくれた、俺は礼を言って聞いたんだ。
『小猿・・どこの奴かな～』って爺さんに聞いた。
「幸島だろ・・たまにおるんよ、冒険好きが」って爺さんが笑って。
「今から行けば、三戸って婆さんが餌やりに行くかい・・聞いて

みな」って爺さんが言った。

俺は小猿を連れて、幸島を目指した・・幸島の見える橋の所に、婆さんがいた。

芋の入った籠を小船に運んでた、小猿は離れずに付いて来てた、そして島を見ていた。

『手伝うよ～・・三戸さんて人に会いたいんだけど』って笑顔で声をかけた。

「ありゃ・・どうしたもんかね～、黒丸を連れて来たのか？」

小猿を見て婆さんが言った、俺は笑顔で頷いた。

『黒丸か～・・忍者みたいでカッケ～な』って小猿に言った。

「忍者じゃよ・・すぐに脱走するかい・・でも、少し大人になったね」

婆さんが優しい笑顔で、黒丸を見てた・・黒丸はずっと島を見てた。

俺は芋の籠を運んで、幸島に渡った・・黒丸も大人しく付いてきた。

婆さんが呼ぶと、沢山の猿が集まってきて・・芋を海水で洗って食べるんだよ。

「珍しい事なんだと・・芋を海水で洗うのがの～。

お偉い大学の先生が来て、研究しちょるが・・ワシには普通の事なんじゃが。

黒丸・・はよ～皆の場所で食べんか・・無くなるぞ」

婆さんがそう言うと、黒丸は俺を見た・・俺は子供にするように、屈んで黒丸を見た。

『黒丸・・ありがとう、お前のおかげで楽しかったよ。
また会いに来るよ・・ミホに挑戦始めたら、報告に来るよ。
だから・・お前もボスを目指せ、お母さんが見てるだろ。
２人の秘密だろ・・俺は絶対に忘れない、必ず会いに来るよ。
俺達は双子だろ・・黒丸、頑張れよ・・ありがとな』

俺は・・昨夜のヒトミと別れる時と同じ位、この黒丸との別れが辛かった。
黒丸は分かったように、群れの方に駆け出した・・すると小猿が黒丸にジャレついた。
楽しそうに遊ぶ、黒丸と小猿を見て・・嬉しかった。

「黒丸は・・母親に会ったのかい？」って三戸の婆さんが言った。
『うん・・昨日の夜、恋が浦の波打ち際で』って、俺は黒丸を見ながら言った。
「そうか～・・恋が浦の夜会で会ったか・・良かったの～」と婆さんも黒丸を見ていた。
『恋が浦の夜会？』って言って、俺は婆さんを見た。

「伝説の話さ・・お前は信じるようだがね。
恋が浦は何かが棲む・・何かが海から上がってくる。
でもそれを感じた者は、夢か現実か区別がつかん。
だから伝説と言われるんじゃよ・・伝説でも真実はあるよの～。
夢で良いんじゃよ・・夢で良い・・それで前に歩けるのなら」

婆さんが笑顔で言った、俺も嬉しくて笑顔で頷いた。

『俺・・泳いで帰るよ、ありがとう』って言って、Ｔシャツのまま海に入った。
泳ぐ必要も無い浅瀬で、歩いていて・・振り向いた。

波打ち際で、黒丸が俺を見ていた・・俺は黒丸に手を振って、振り返らずに泳いだよ。
そして岸に着いても、振り返らずに・・恋が浦まで走った。
寂しくて、寂しくて・・それを振り払うために、全力で走った。

恋が浦の浜が見えた時に、赤い車が見えた・・ユイちゃんが笑顔で手を振っていた。
俺は嬉しくて、笑顔で駆け寄った。

「仕方ないな～・・一度だけ、大サービス」って言って、ユイちゃんが抱きしめてくれた。
『案外小さいな・・ユイ』って動揺を隠して必死で言ったよ。
真夏の砂浜に、白波が立っていて・・沖に夏の入道雲が沸いていた。

俺はボードを車に積んで、助手席に乗り込んだ。
「相当に良い事があったね・・感謝しなさい」ってユイちゃんが笑顔で言って、出発した。
幸島の側を通る時に、黒い小さな体が見えた・・周りの猿より、少し黒い小さな体が。
《頑張れよ・・黒丸》って心で囁いたんだ。

「宿題を提出せよ」・・ユイちゃんが前を見て言った。

『ユイちゃん・・生きる事は退屈じゃないよ、必死なんだね。
海亀も猿も・・みんな必死なんだよ。
退屈って、無いんだよね・・俺には無いよ。
やりたい事が多すぎて、時間が足りない。
いつまで生きるのかが、分からないなら・・時間は無いんだね。
俺は少し分かったよ・・太平洋の真ん中で、教えてもらった。

ユイ・・ありがとう、素敵なプレゼントだったよ』

俺はユイちゃんの顔を見て、答えを出さなかった。

「まぁ・・正解にしとこう、正解なんて・・答えなんて、無いんだから」

ユイちゃんは前を見て、二ヤを出して運転していた。

日南海岸の青い海の水平線が、緩やかなカーブを描いて、地球が丸いんだと思っていた。

俺はそれから、こだわらなくなった、死ぬ事に多くの意味を持たなくなった。

あの恋が浦の夢が、俺に教えてくれた・・そして沖に泳ぐ黒丸が、俺を戻してくれた。

必死に泳ぐ黒丸を、母猿が支えていたから。

まだ早いって言葉を、母猿が俺に温度で伝えて来たから。

だから俺も追いかけなかった・・ヒトミの幻影を追わなかった。

俺は今日・・マリに言われた・・道を繋いだねって。

嬉しかったよ・・だから俺は、今日も笑顔でＰＧに帰ってくる。

北斗・・行こうか、由美子の場所に・・連絡が来た。

ユリアの波動に乗って・・ヒトミの熱が来た、俺は約束を守る。

由美子との約束を・・そして、ヒトミとの約束を』

私は北斗を見て真顔で言った、北斗も真顔で頷いた。

「私達は・・どうすれば良いの？」と蘭が真顔で言った。

『少し眠って欲しい・・俺がユリカを起こすまで』と笑顔で言った。

「了解・・そうしよう」とユリカが蘭に微笑んだ、蘭も満開で頷いた。

「エース・・約束を守れよ、ＰＧに笑顔で帰れよ」とリアンが最強極炎ニカで言った。

『もちろん・・ニヤニヤで帰りま～す』と笑顔で返した。

「エース・・ありがとう、素敵な話だった・・私達も伝えてみせるから、感じてろよ」とカスミが立って微笑んだ、私も笑顔で頷いた。
「よし・・少し寝よう、朝が早いよ」とミコトが言って、全員が頷いた。
私はエミの側に行った、エミは笑顔で私を見た。
『エミ・・エミからミサとレイカに伝えて、由美子の事を心で呼んでって』と笑顔で言った。
「うん・・分かった・・エース、ヒトミちゃんによろしく」とエミが笑顔で言った。
『ありがとう、エミ・・行って来るね』と笑顔で言って、北斗と鉄の扉を目指した。

「頑張る美由紀には、お寿司が似合う～・・お寿司食べようね、お昼ご飯で」と美由紀が大声で言った。
『なんなら・・朝飯でもいいぞ』と二ヤで返して、扉を開けた。
強風と豪雨の世界がそこに有った、私は北斗を見た、ニヤを出した北斗と手を繋いだ。

傘を使うのが無意味だと分かっていたので、私と北斗は濡れながらタクシーに乗った。
一瞬でびしょ濡れだった、北斗がタオルを2枚持ってきていて、二人で拭いていた。

「ありがとな、エース・・さっきの話・・響いたよ」と北斗が真顔で言った。
『北斗、俺があの話をしたって事は・・由美子には、万が一は無いって事だよ』と笑顔で返した。
「そっか～・・そうだよな」と北斗も笑顔になった。
タクシーのワイパーが、必死に雨を払っていた。

病院の明かりが霞んで見えた、由美子の笑顔が窓に映っていた、沙紀の描いた由美子が。

私は北斗と病室に入った、由美子は穏やかに眠っていた。
私は由美子の手を握った、その時に大きく左回りに動いた。
《なぜ・・俺に基本信号を・・お前誰だ？》と温度で伝えた。
《どんなに準備しても、どんなに人数をかけても・・無駄だ》と温度が強く返してきた。
《な～んだ・・そんな感じなの、普通だね～》と二ヤで返した。
《まぁいい・・それでは試合開始だな、ゴングは鳴ったよ》と言った瞬間。

医療機器が警戒音を鳴らした、北斗は呆然と立っていた。
私は意識して笑顔で北斗を見て、ナースコールを押した。

宿直の医師とナースが来た、関口医師から言われていいたのだろう、素早く対応した。
「小僧君、関口先生から言われてるんだけど、もう一度確認したい」と医師が真顔で私に言った。
『生命を維持するだけで良いです、意識不明じゃないですから』と真顔で返した。
医師は頷いて、由美子に酸素マスク付けて、グラフを見ていた。

『北斗・・大丈夫だから、少し座ろうよ』と北斗に笑顔で言った。
「ごめんね・・驚いちゃって」と北斗が返してきた。
『驚くさ・・良いんだよ、北斗・・驚いても、泣いても』と言って北斗の手を握った、北斗が強く握り返してきた。
医師とナースはグラフを見ながら、処置をしていた、私は怒りに震えていた。
《なめやがって～・・後悔させてやる》と心で呟いた、ユリアの強

い波動が来た。

その時、病室の扉が開いて、沙紀が入ってきた、スケッチブックと色鉛筆を持って。

私は笑顔で沙紀に駆け寄り、抱き上げた。

《由美子ちゃん、大丈夫だよね》と沙紀が心配そうに伝えてきた。

『大丈夫さ～・・沙紀、俺を手伝ってくれる・・由美子を探す時に』と笑顔で伝えた。

《うん、由美子ちゃんを探せば良いんだね》と沙紀が返してきた。

『そうだよ・・ありがとう、沙紀』と笑顔で言って、ソファーの北斗の横に座らせた。

北斗は沙紀を見て、少し落ち着いたようだった。

沙紀は目を閉じていた、何かを感じようとしてるようだった。

私は沙紀の隣に座り、医師の処置が終わるのを待っていた。

1時間ほどで、安定したようで、医師が私に頷いた。

私は由美子の横に行き、由美子の手を握った、その冷たさに驚いていた。

《そこまでするのか～・・小心者め》と笑顔で言って、目を閉じた。

由美子の存在は無かった、私は探す事無く、ただ立っているイメージで止めていた。

真っ白い世界の中に私は立っていた、奥行きも分からない、白い世界にいた。

《由美子・・今から迎えに行くから、待っててね》と強く伝えた。

《ユリカ、少し寝たかな・・準備して、ユリカはユリさんとマチルダと来て。

蘭にマキと美由紀を連れて、哲夫を迎えに行ってから来てと伝えて》

心に強く囁いた、ユリカの強い波動が返ってきた。
私は由美子の手を離し、病室を出て、ミホの部屋に行った。
ミホは起きていて、豪雨の外を見ていた。
ミホが私を見て、右手を出した、私は笑顔でミホの手を握って横に座った。

《ミホ・・始めるよ・・ありがとう、ミホ・・繋いでくれて》と笑顔で伝えた。
ミホは私を見た、その瞳が少し変化した、私は嬉しくて笑顔で頷いた。
窓を叩く風は強いが、雨は弱まっていた、台風一過で今日は良い波が立つかも。
私はそう思って、外を見ていた・・ミホは無表情で、瞳に雨を映していた。

私はミホの部屋を出て、由美子の場所に歩いていた。
廊下の掲示板に、歯の磨き方の説明のポスターが張ってあった。
私は自分を落ち着かせる為に、その説明を読んでいた。
風の音が強く、ガタガタと非常口を揺らした。
私は何故か笑顔になって、由美子の部屋に入った。

「まだなの？」と北斗が真顔で私に言った。
『うん・・北斗、由美子は大丈夫だからね・・もう一度来る、身体的な危機が・・それからなんだよ』と笑顔で返した。
その時、病室に関口医師が入ってきた、その後ろを婦長が続いた。
「まだ一回だね」と関口医師が言った、私は真顔で頷いた。
関口医師は医療機器のグラフを、目で追っていた。

私は沙紀の隣に座り、沙紀の手を握っていた、沙紀は何かに集中していた。
北斗はずっと由美子を見ていた、私は沙紀の手を握り目を閉じて、瞑想の世界に入った。
瞑想の映像に、浜辺が映し出された・・黒丸が泳いで沖を目指してた。
私が黒丸に追いつき、抱きしめた。
『行ったら駄目なんだ・・まだ早いんだ・・お母さんが泣くぞ』と私が叫んでいた。
それを見てる私は、少し違和感を感じていた。

まだ早いって・・俺は勘違いしてたな、俺が思ってる場所なら。
母親なら・・そこに行くなって言うだけだよな、まだ早いなんて言わないよな。
俺は間違ってたね・・その場所じゃないんだね、ヒトミ。

その時、扉が開いて、ユリさんとユリカとマチルダが入ってきた。
その瞬間だった、ピコ～ン・・ピコ～ンと鳴っていた音が、ピーーと長く鳴った。
北斗が顔面蒼白になり、無意識に立ち上がった、私は北斗の腕を掴んだ。
ユリさんが駆け寄って、北斗の肩を抱いた。
私はユリカに沙紀を預けて、マチルダと関口医師の後ろに立って見ていた。
関口医師が、心臓マッサージをしていた、その横で婦長が由美子を呼んでいた。

「あんたは凄い奴だよ・・ヒトミの時は9歳だったんだろ」とマチルダが私に囁いた。
『うん・・9歳だから、怖さも無かった』と由美子を見ながら呟い

た。

その頃、強風が吹き荒れる町並みを、黒いケンメリが走っていた。
「哲夫〜・・緊張してるね」と美由紀が哲夫に笑顔で言った。
「俺は馬鹿だった・・嵐の中にいる、俺はヒトミ姉さんにヒントをもらってたんだ」と哲夫が美由紀に言った。
「どういう事？」と美由紀が真顔で返した。
「風が変わったんだよって・・律子母さんの声が聞こえる、少し前に・・風向きが変わったって」と哲夫が返した。
「ナイス、哲夫・・よく思い出したね・・マリのヒントが分かったよ」と美由紀が微笑んだ。

強風を切り裂いて走る、ケンメリの運転席に、青い炎が燃えていた。
今回の最大の鍵を握る、その青い炎を最大限に燃やしていた。
夏は終わらない・・冷める事を拒絶する限り・・。

恋が浦のこの話をしたのは、私はこの夜が2度目だった。

最初は美由紀との逃避行の、初日の夜に美由紀に話した。

現実か夢だったのか、実は私には明確な答えは無い。

黒丸に引っかかれた事も、黒丸を追って海に入った事も、夢と言えば夢になる。

私にとってはどうでも良いのだ、ヒトミとの時が鮮明に残ってるから。

由美子の段階の時が過ぎた、次の日曜日に、ケンメリで出かけた。

ユリカと蘭と美由紀と４人で、幸島を訪れた。

三戸の婆さんと、黒丸が出迎えてくれた・・成獣の大きさになった黒丸。

私を見て、私の横の波打ち際に走った・・そして振り向いて私を見た。

私は黒丸に笑顔で・・ミホに再挑戦してるよと伝えた。

黒丸はそれを聞いて、何頭もの小猿を引き連れて、島の奥に入っていった。

そして恋が浦に行った、女性が３人で沖を見ていた。

帰りの車内でユリカが言った・・恋が浦には確かに何かが有るんだろうね。

でも探す事でも、体験しに行く場所でもないよね。

もっと神聖で気高い何かがあるよね・・原点だと思ったよ。

だからこそ生命を育むんだと・・世界中にそんな場所が、沢山あるんだろうね。

誰が名付けたんだろう・・恋が浦・・素敵な名前だね。

全員がユリカの言葉を聞きながら、笑顔で頷いた。

探す事じゃない・・その時がくれば感じる。

今でも何かが上がって来るのだろうか・・それを感じる人がいるのだろうか。

恋が浦には、今でも波が押し寄せている・・。

幻影の塔　？

見せられる映像は虚像を示す、反省や後悔をしてはいけない。
試されるのは、自分自身なのだから・・信じるしかない。

私はマチルダと関口医師の背中を見ていた、優しく心臓マッサージをしていた。
その時、蘭とマキと美由紀と哲夫が入ってきた、蘭は驚いた顔をして由美子を見た。
私はユリカと沙紀を呼び、病室の奥で小さな円を作った。
私は床に座り、沙紀を抱いて手を握った。

『大丈夫・・体は戻る、必ず生命の維持状態には戻ってくる。
誘拐の場所・・ヒトミの時は、石畳の町のような感じだった。
中東のゴーストタウンみたいな、誰もいない空家だらけの。
今回は・・やっぱり広大な森だと思う、さっき由美子に触れて感じた。
沙紀の絵のメッセージ通りだと思う・・哲夫、初めはお前に任せる。
一人でやれるよな？・・広大だぞ』

私は意識して、二ヤで哲夫に言った。
「もちろん・・小僧は塔に登るの？」と哲夫が真顔で返してきた。
『あぁ・・マチルダと美由紀と塔に登る、今回は登ってみせるよ』
と笑顔で返した。
「塔って何？」とユリカが聞いた。

『ヒトミの時にも塔は有ったんだ、でもそこにヒトミがいないのが分かってたから。

俺は無視してたんだよ、かなり誘われたけど・・そんな暇が無かった。
原作者はそんな演出が好きなんだよ、あたかも自分が神のように演出する。
今回の奴は・・悪魔の演出が好きらしい、小心者だよ。
今回は塔に登る・・それが由美子の未来に繋がる気がするから。
ユリカは哲夫を感じていて、哲夫に何か有ったら俺に教えて。
美由紀はマチルダの手を握ってろ、それだけで入れると思ってるから。
マチルダ・・辛いかもしれないよ、頼むね。
蘭は俺の真後ろにいて・・そして俺がユリカに誰が必要か伝えるから。
その時はマキと迎えに行ってね、よろしく。
マキ・・とりあえず、シズカに電話して・・律子とマリをよろしくって。
マリが必要になると思う・・最後の勝負の時に。
そして沙紀・・沙紀はユリカの手を握って、由美子を心で探して。
何か感じたら絵で描いて教えて・・今日は何枚描いても良いからね』

私は意識して笑顔で、最後に沙紀に言った。
沙紀は私を見上げて、可愛く頷いた。
『じゃあ・・トイレと水分補給をしとこう』と笑顔で言った、全員が笑顔で頷いた。
ソファーの北斗は顔面蒼白で、ユリさんが抱きしめていた。
私はユリさんと目が合ったので、笑顔で頷いた、薔薇の微笑で返してくれた。
私が麦茶を飲んでいると、ピコ～ン・・・・ピコ～ンと少し波が戻った。

関口医師が笑顔になり、グラフを見て、点滴の量を調整した。
脈拍も血圧も安定して、関口医師が私の所に来た。

「目標タイムは？」と関口医師が笑顔で聞いた。
『朝飯前』と笑顔で返した。
関口医師が右手を出したので、私も笑顔で右手で握った。

そして私が由美子の左手を握り、哲夫が右手を握った。
私が由美子の胸の上を、哲夫の方に左手を伸ばした。
哲夫が自分の右手を伸ばしてきた、そして哲夫とガッチリと手を繋いだ。

『さぼるなよ、哲夫・・ウルばかりするなよ、ユリカが見てる』と二ヤで哲夫に言った。
「睡眠不足で倒れるなよ・・塔は高いぞ、ウル出すなよ」と二ヤで返された。
私は二ヤ継続で目を閉じた、哲夫も目を閉じたのを感じた。

そして白い部屋に入った、哲夫が後ろから近づいた。
「森じゃないじゃん、何ここ？」と哲夫が私に言った。
その時にマチルダと美由紀が入ってきた、美由紀は嬉しそうな笑顔だった。
「すっっっごいね、マチルダ姉さん・・凄いです～」と美由紀が笑顔で言った。
「唯一の特技だからね・・しかし哲夫も凄いね～、自分で入れるの」とマチルダが微笑んだ。
「凄いでしょ～」と哲夫が二ヤで言った、マチルダも笑顔で頷いた。

「で、ここは？」とマチルダが私に微笑んだ。

『俺は思ってたんだよ・・イメージする場所って。
原作者の演出で作ってるんだから、俺も演出を入れようってね。
ここが由美子の部屋、ここに連れて帰るんだ。
あのドアがその世界への入口なんだろう、俺は演出でも負けないよ。
策略じゃ無敗・・無敵の男だからね』

私は笑顔で言った、全員が二ヤで頷いた、ユリカの強い波動が来た。
久しぶりに、ユリカとユリアが重なった、強い波動を楽しんでいた。
真っ白な部屋の、真っ白な扉に・・金のノブが付いていた。
私はノブを握り、前に押した、眩しいほどの太陽光線で目を細めた。

私達が出たのは、大きな木の根元にある扉だった、出た場所は鬱蒼としたジャングルだった。
そして目の前に、真っ白い塔が天空に伸びていた。
「エレベーター、有るかな～」と美由紀がウルで言った。
「有るでしょ・・こんな高層ビルなら」とマチルダが塔を見上げて言った。
「美由紀・・ウル出し過ぎるなよ・・行って来るよ、必ず探し出す」と哲夫が言って、走り出した。

「哲夫・・生意気だよ・・頑張りな」と美由紀が二ヤで言った。
「了解・・美由紀もな」と哲夫が振り向き二ヤで返して、走って行った。

『さてと・・入口でも探しますか』と2人に言って、マチルダが美由紀を押した。
「な～んだ・・リアリティ無いね、全然重くないよ」とマチルダが笑顔で言った。
『そりゃそうでしょ・・このセット、金をケチったな』と笑顔で返

して。
『だいたい、美由紀も足を付けて、歩いて登場すれば良かったのに』と美由紀に二ヤをした。
「げっ！・・それが出来たのか～・・・リセットしない・・小僧リセット」と美由紀がウルで言った。
『無理～・・それは無理～』と二ヤで返した、３人で笑いながら塔の周りを歩いていた。

「楽しそうだね～・・私を置いてきぼりにして」と後ろから蘭が言った。
「やっぱり、来ましたね～」とマチルダが二ヤで振り向いた。
「来れるわよ・・これ位・・少し迷ったけど」と私の腕を組み満開で微笑んだ。
「小僧の予想通りだね・・素敵な人だ～」と美由紀が蘭に笑顔で言った。
「パニックになって、誰かさんが全裸になると困るからね～」と満開二ヤで返していた。

私達は塔の入口の前に立った、広く大きな入口の門柱の上に、気味の悪い悪魔っぽい像が置かれていた。
「ブッ・・想像力無さすぎじゃない、この像」と美由紀が笑いながら言った。
「円谷プロに頼めば良かったのに～・・・貧相な悪魔ちゃんだ」と蘭が満開二ヤで言った。
「ハリウッドじゃ、爆笑されるね」とマチルダが笑った時に、ユリカの笑顔の強い波動が来た。

３人が笑顔で私を見た。
「はっきりと感じた・・良いな～・・・こんな感じで交信するのか～」と蘭が満開で微笑んだ。

「素敵だな～・・世界中どこからでも、交信できて～」とマチルダが輝く笑顔で言った。
「ユリアちゃん戻ったね、波動強くなったね」と美由紀が笑顔で言った。
強烈な喜びの波動が来て、全員笑顔のまま、塔に入った。

広いエントランスに、大きなジャンデリアが下がっていた。
そして壁伝いに螺旋状に上に伸びる、通路が見えないほどの高さまで続いていた。
「ここは、まぁまぁ素敵～・・ベル薔薇みたい」と美由紀が笑顔で言った。
「でも、エレベーターは無いよ」とマチルダが二ヤで美由紀に言った。
「原作者に、意地悪５点」と美由紀がウルで返した。

私はマチルダと交代して、美由紀を押して、螺旋の通路を登った。
マチルダが言ったように、全く車椅子の重みを感じなかった。
相当高い場所まで登って、蘭が下を見ていた、通路には手摺も無かった。

「ここから落ちたら、どうなるんだろう?」と蘭が言った。
「多分・・あ～れ～～って言いながら落ちて、気付いたら病室だとか」とマチルダが笑顔で言った。
全員が二ヤ頷いて、上を目指した。

その頃、哲夫は小川沿いを下っていた、太陽が照り付けて、キラキラと周りが輝いていた。
「変だよな～・・これじゃ、楽園じゃん」と言って、小川の水を手で触った。
確かに水で、靴も濡れていた。

哲夫が川沿いを下ると、少し開けて、突然それが現れた。
国道が現れたのだ、その国道の登り坂を乗用車が上っていた。
その前に大型トラックが、フラフラと上っていたのだ、切り出した大きな杉の木を満載にして。
哲夫は駆け出した、叫びながら、全力疾走で。

「止まれ～・・止まるんだ～」と乗用車に叫んだ。
その時、前を走るトラックの積荷が崩れた、哲夫は呆然として立ち止まった。
哲夫の目の前で、スローモーションのように、杉の木が乗用車に突き刺さった。
哲夫は膝を付き、拳を握り締め、アスファルトを叩いた。
ユリカは焦って、私に連絡しようとしていた。
その時、哲夫が意を決して顔を上げた、そしてその時哲夫が見た物は。

哲夫の目の前で微笑む、１３歳のヒトミだった。
「泣き虫・・成長が遅いね～・・て・つ・お」とヒトミが笑顔で言って、手を出した。
ユリカの強烈な波動が、哲夫を包んでいた。
哲夫は笑顔になって、ヒトミの手を握って立ち上がった。

「ヒトミ姉さん、綺麗になったね・・泣き真似だよ、騙された振りをしてたんだ」と笑顔でヒトミに言った。
「生意気まで継承したのか～・・さぁ、行くよ・・由美子を探しに」とヒトミが手を繋ぎ歩き出した。
「ヒトミ姉さんの、その体って・・ヒトミ姉さんの、イメージ？」と哲夫が笑顔で聞いた。
「そうだよ～・・素敵でしょ～」とヒトミが笑顔で言った。

『胸大きすぎだよ～・・マチルダみたい・・１３歳の、日本人がね～』と哲夫が二ヤで言った。
「胸に過剰反応するのも、継承したのか～・・無駄な物ばかり」とヒトミが二ヤで言って、２人で川を下っていた。

その頃ＰＧのフロアーでは、女性達が早朝から起きて、布団を２つ折りにして話していた。
共同体の女性達が、今の状況を聞きたがり、カスミが由美子の話をしていた。
その時、カズ君がシオンを呼んだ、シオンがカズ君から受話器を受け取った。

「了解・・すぐに行きますね」とニコちゃんで言って、受話器を下ろした。
そして銀の扉の前に進んで拡声器を取った、その時にカスミの話が終わった。
「エースからの伝言です・・由美子ちゃんは、森・・と言うか、ジャングルの中にいます」とシオンが強く言った。
「了解・・シオン、全員で探しに行くよ」とミコトが微笑んだ。

その時、鉄の扉を誰かがノックした、カズ君が開けると、和尚が笑顔で入ってきた。
「雨はやんだぞ・・始めるかの～」と和尚が全員を見て笑顔で言った。
「和尚様・・よろしくお願いします」とミチルが笑顔で言って、全員が笑顔で和尚を見た。
和尚はシオンの場所に歩き、シオンがニコちゃんで、拡声器を渡した。

「シオン・・お前が沙紀の側にいろ、沙紀を導け・・シオンなら出

来る」と和尚が強く言った。
「はい・・やってみます」とシオンが真顔で強く返した。
「シオン・・頼んだよ」とリアンが微笑んだ、シオンは真顔で強く頷いた。
シオンが鉄の扉を出ると、強風だけの世界だった、空は少し明るさを取り戻していた。

「さて・・準備は良いかな?・・まずは、目を閉じよう」と和尚が言った。
マダムも松さんも大ママも、布団の上に正座して瞳を閉じた。
女性達も全員、ユリカとリアンの店の女性も、正座して瞳を閉じた。
そしてエミとミサとレイカも、座って瞳を閉じた。
カズ君がマリアを抱いていた、マリアは天使全開で和尚を見ていた。

「目を閉じた世界・・それは暗黒じゃない。
徐々に目が慣れてくる・・その場所には上下左右も無い。
だから自分で作るのじゃ・・皆が知ってる場所にしよう。
堀切峠の展望台・・そこに集合しよう。
慌てずとも良い・・待っておるから。
先に着いた者は・・海を見ておれ」

和尚は静かにそう言って、全員の集中した表情を見ていた。
3人娘を見て、その集中した表情を見て、笑顔になった。

「良いようじゃね・・素晴らしいよ、全員が集合した。
では、堀切の看板前に集合・・・・。
この目の前の断崖に飛び込む、そして海の上を飛ぶ。
絶対に飛べる・・勇気を出せば、必ず飛べる。
そして真直ぐに飛べ・・すると島が見える。
そこに有る・・由美子のいる、ジャングルが有る。

さぁ行くぞ・・ついて来い」

和尚は強くそう言った、エミもミサもレイカも飛び込んだ。
そして海の上を飛んでいた、３人娘は笑顔で海を見ていた。

一方私達は、赤い大きな扉の前に来ていた。
赤い扉の真ん中に、獅子の紋章が飾られていた。
「おいでって、誘ってますね～・・ライオンちゃん」と美由紀が笑顔で言った。
「白いライオンだから、レオと命名しよう」と蘭が満開二ヤで言った。
「さてさて・・レオの間に、何があるのやら」と笑顔で言って、マチルダが扉を開けた。

大きな広間に入ると、扉が閉まり、ガチャっと大きな音がして鍵が閉まった。
「中々の演出だね～・・もったいぶらないで、早く出しな！」と蘭が大声で天井に叫んだ。
「やっぱ最強です～・・りゃんちゃん」と美由紀が笑顔で言った。
「じゃあ・・りゃんにお任せで～・・あの大きな猫ちゃん」とマチルダが部屋の奥を指差して、ウルで言った。
そこには大きな白い雄のライオンが、口からよだれを垂らして蘭を見ていた。

「まぁ・・西洋の貴族が太らせましたね～・・猫ちゃん」と美由紀がウルで言った。
「どこにいるの？・・猫ちゃん」と蘭がウルでこっちを見た。
「やっぱり見えませ～ん・・お～い・・試験が、簡単すぎるよ～」と美由紀が笑顔でライオンに言った。
その瞬間、ライオンが猛然と蘭の方に駆け出した。

「ストップ！レオ！」と叫んで、蘭が右手をライオンの目の前に開いて出した。
私達はリアルに目撃した、蘭の背中から、青い炎が燃え上がり右手に走った。
蘭は見えていないレオを、その右手で止めてみせた。
「つまんね～んだよ、原作者・・すぐに行くから待ってろよ」と蘭は満開二ヤで言って、レオに背を向けた。
ライオンは宙に浮いたまま、静止していた。
私達3人は、顔を見合わせ笑顔になって、蘭の背中を見ていた。

「どうやって・・開けるの？」と扉の前で蘭が振り向いて、満開ウルで言った。
「もう、決め台詞まで言ったのに～・・詰めが甘いです～」と美由紀が二ヤで言って。
「でも、確かに難題だ・・内側にはノブが無い」とマチルダがウルで言った。
「こんな時は～・・ひらけ～～・・ゴマ～」と美由紀が両手を広げながら叫んだ。
その瞬間に扉がゆっくりと開いた。

「奴も、笑いのセンスは有るんだね～」と蘭が満開で笑った。
「私の秘めた力です～・・ユリカ姉さんとマリと私で・・魔女っ子3姉妹ってのはどう？」と美由紀が私に二ヤで言った。
強い波動が却下を示して、笑っていた。
「残念だね～美由紀・・ユリカ姉さん、却下みたいだね～」とマチルダが二ヤで言って、蘭と並んで登りだした。
私はウルウル顔の美由紀を押して、後を続いた、ユリカの笑顔の波動に押されながら。

由美子の段階が終わった時に、ユリカが最強爽やか笑顔で言った。
本当に楽しかったと、素敵なファンタジー映画を、２本同時に見てるようだったと言った。

「なんか、全員楽しそうだね～」と少し落ち着いた北斗が、ユリさんに笑顔で言った。
「本当ですね～・・特にユリカが楽しそう・・終わったら、話が楽しみですね～」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
北斗も隣に座るマキも笑顔で頷いた。
その時にシオンが入ってきた、沙紀が駆け寄り、シオンが抱き上げた。
「沙紀ちゃん、どうしましたか？・・はい、分かりました～」とシオンがニコちゃんで言って。
シオンはその場に座った、沙紀が床にスケッチブックを開いた。
そして緑の色鉛筆を握り、猛烈な勢いで描き始めた。
シオンは後ろから沙紀を支えていた、あまりにも入り込み過ぎていると感じていた。

その頃、私たちは緑の扉の前に来ていた、白蛇の紋章が有った。
「緑だから・・マチルダにお任せで～」と蘭が満開ウルで言った。
「もしかして、蘭姉さん・・蛇が嫌いですか～？」とマチルダが二ヤで言った。
「違うよ～・・蛇は嫌いじゃないよ～・・好きの中の、怖いだよ～」と満開ニコちゃんで返した。
「出た～・・パクリです～」と美由紀が二ヤで言った、強い波動が笑っていた。
「失礼な・・応用編よ～」と満開笑顔で言って、扉を開けて中に進んだ。

真白な大広間だった。

「何もいませんね～」と美由紀が笑顔で部屋を見回した。
「いる・・壁が動いてる、でかい！」とマチルダが言った。
私が壁を見ると、壁紙だと思っていた純白の模様が、ズルズルと動いていた。
部屋の何周分もある大蛇が、トグロを巻いていた。
その顔には真赤な目が存在した、そして舌をチョロチョロと出していた。

「大きすぎます～・・加減が分からない、駄目な人です～」と美由紀がウルで言った。
「マチルダ・・やっちゃって」と蘭が私の背後から言った。
『蘭・・見えないのに、怖いの？』と二ヤで聞いた。
「ニョロって感じがする～」と満開ウルで言った。
「しょうがないな～」とマチルダが言って、部屋の真ん中に歩いた。
「ほほ～・・どんな作戦ですかね～、緑の戦士」と美由紀が笑顔で言った。
マチルダは蛇を見て、右手の人差し指で、おいでと誘った。
蛇がマチルダの方に、顔を向けて近付いた、その顔だけでマチルダよりも大きかった。

「私の名前は、サマンサ・・旦那様の名前はダーリン・・そう、奥様は魔女だったので～す」とマチルダはアメリカのＴＶドラマを真似て、蛇に向かって言った。
そして石のコレクションの中から、茶色い小さな石を選んで、床に置いた。
マチルダは石に両手をかざして、唇を小刻みに震わせた。
その瞬間、ボンッという音と共に煙が上がった。
そして石の有った場所に、猫程の小さな茶色い動物がいた。
「可愛いです～・・モグラちゃん」と美由紀が笑顔で言った。

「マングースなの・・イメージが掴みきれなかったのよ」とマチルダがウルで言った。
「ほほ～・・あれがマングース」と蘭が後ろから満開二ヤ言った。
『蘭・・マングースは見えるの？』と笑顔で言った。
「見えるよ・・原作者以外のやつは」と満開笑顔で返してくれた。

「それじゃあ・・マンちゃん、こらしめてやりなさい」とマチルダがマングースに二ヤで言った。
マングースは可愛く頷いて、蛇の前に出た。
そしてタイミングを合わせて、蛇の舌に噛み付いた、蛇は慌てて奥に逃げて行った。
「カッカッカッカ」と両手を腰に当てて、マチルダが笑いながら振り向いた。
「奥様は魔女と水戸黄門が、ごちゃ混ぜです～」と美由紀が二ヤで返した。
「行きますかの～・・スケさんカクさん・・そしてハチベイ」とマチルダが最後に私を見て二ヤを出した。
そして扉の前で、唇を小刻みに動かした。
扉の下でボンッと音がして、煙が上がり扉が開いた。

「凄いです～・・マチルダ姉さんも入れて、魔女っ子４姉妹にしましょう」と美由紀が笑顔で言った。
強い却下の波動が、爆笑を連れて来た。
「やっぱり却下だね・・残念ね・・み・ゆ・き」と蘭が二ヤで言って、マチルダに並び登りだした。
私は半泣きの美由紀を押して、２人の後を追った。

そして黒い扉の前に来た、人類の進化を示す、右から段々に進化する絵が張ってあった。
「さて・・いよいよ本番みたいだね、前置きが多いよ」と蘭が扉を

見て、真顔で言った。
「相当のダメージを覚悟しよう、自分の過去を整理しよう」とマチルダが静かに言った。
「どうしよう・・私・・過去が多すぎる、謎多き女」と美由紀が笑顔で言った。
「美由紀がいて良かったよ・・そうだね、笑い飛ばしてやる」と蘭が満開で言って、扉を開けた。
生暖かい風が吹いてきて、私達は真っ暗な部屋の中に入っていった。

その頃、ヒトミと哲夫は、崖の上に来ていた、一望にジャングルが見渡せた。
「広いな〜・・すげーや」と哲夫が言った。
「哲夫・・マリのヒント持ってるんでしょ？」とヒトミが笑顔で言った。
「うん・・美由紀姉さんが描いてくれたよ」と哲夫はポケットから、紙を取り出した。
マリの麻雀牌の図が描かれていた、２人は座って見ていた。

「小僧が北なんだね・・この図は、結局小僧が問題なんだよ」とヒトミが哲夫に言った。
「うん・・小僧が真北に存在するんだ・・あの塔の後ろは何も無いだろうから」と言って塔を見て、哲夫は方位磁石を取り出した。
「あの塔を真北に見るのは・・多分、あの湖辺りだね」と哲夫が崖下に見える、大きな湖を指差した。
「そうだろうね〜・・手前じゃないよね、降りてみよう」とヒトミが笑顔で言った。
哲夫も頷いて、立ち上がりヒトミと手を繋いだ。

それを感じて、ユリカが強い波動を2人に送ってみた。
「はい・・何ですか？ユリカさん」とヒトミが笑顔で言った。

ユリカはこの時、涙が溢れていた、それほどに感動していた。
「今ね、沙紀ちゃんが絵を描いてるから、少し待ってね」とユリカは声に出して言った。
その声をユリアが強い波動で伝えた。
「分かりました、ありがとう・・少し休憩してますね」とヒトミが笑顔で返した。
ユリカはその時に、映像が見えた、ジャングルの崖の上に座る、哲夫と少女が見えていた。
ユリカは何も言えずに、2人を見ていた、ただ涙だけが頬を伝っていた。

沙紀は必死に描いていた、シオンは沙紀の背中を支えながら、絵を見ていた。
島の中のジャングルの外枠だけ描いて、沙紀の手が止まった。
「沙紀ちゃん・・焦らないで良いよ、感じるのよ・・由美子ちゃんの温度を」とシオンが沙紀の耳元に囁いた。
その時、沙紀が絵のジャングルの真ん中に、青で湖を描いた、そしてそこを赤い丸で示した。
その絵を手に取って、ユリカに向けた。
マキがユリカを呼んだ、ユリカが瞳を開けて沙紀を見た、爽やか笑顔で沙紀に頷いた。
それを見て、沙紀がスケッチブックのページをめくった、次の絵を描くために。

「ヒトミちゃん、哲夫・・やっぱり湖だよ、湖の側に由美子ちゃんがいる」とユリカは強く言葉にした。
その声を聞いて、北斗もユリさんも、瞳を閉じてるユリカを見た。
「ヒトミ・・ありがとう、本当にありがとう」と呟いて、北斗が泣いた。
ユリさんが優しく北斗を抱きしめた。

ユリカの波動を受けて、ヒトミが立ち上がった。
「ありがとう、ユリカさん、沙紀ちゃん・・行って来ます」とヒトミが言った。
《気を付けてね・・また連絡するね》とユリカの波動の言葉が返ってきた、ヒトミは笑顔で頷いた。

「哲夫・・正解、湖だよ」と手を繋いだ哲夫に、ヒトミが笑顔で言った。
「今日の俺は、冴えてるな・・任せなさい」と哲夫がヒトミを引っ張って、湖を目指した。

その頃、ＰＧにシズカとマリが着いて、フロアーに入った。
「凄いね～・・素敵な光景だ」とシズカが和尚に言った。
「まだ・・だれも辿り着けんのじゃよ、由美子の森に」と和尚がマリに言った。
マリはフードの下の顔を少し上げて、和尚を見て唇の右側を上げた。
「やってくれるのか・・ありがとう、マリ」と和尚が笑顔で言った。

マリはカズ君の所に行き、マリアに手を出した。
マリアがマリに手を伸ばし、マリが抱いた、カズ君は動けずにマリを見たいた。
マリは3番までマリアを抱いて行き、3番に座ってマリアを見た。
マリアは天使で頷き、瞳を閉じた。

その時、カスミは海の上を飛びながら、焦っていた。
島が見えない事に、こんなに遠いのかと思っていたのだ。
近くに何人か飛んでる感じは有ったが、それさえも自信は無かった。
その時、強烈な何かが後ろから来るのを感じた、そして声が聞こえ

てきた。
「ほのか～・・りょう～・・みこと～」と一人ずつ呼ぶ、マリアの声が聞こえた。
そして自分の真横に来て、マリアが天使全開不敵でカスミを見た。
「かしゅみ～」とマリアが言った瞬間に、遠くに緑の島が見えた。
「マリア！」と言って探したが、マリアは遥か先を「ちじゅる～」と言いながら飛んでいた。

カスミは緑の島を見ながら、その広さに驚いていた。
地平線が緑で繋がるほど、広大な島だった。
《ここかよ～・・どうやって探すんだよ～》と心で囁いた。
その時、視界の中に線が上下に左右に何本も走った、そしてその線の端に数字が並んだ。
カスミは止まって考えた、島を見ながらその線をたどった。

その時、《ガルル～》と声が聞こえた。
「マリ！・・そうか、あの数字・・これでもあるのか！」と声を出して言った。
《えっと・・最初が１９○○０４１６だから、縦の線だな》と自分で確認しながら。
その場所を上空から探していた、横の線を合わせると、湖が重なった。
「湖～・・湖の近くだよ～」とカスミは出来る限りの大声で叫んだ。

《湖？・・湖だね！・・了解》と沢山の声が返ってきた。
「うし・・待ってろよ、由美子」と最強不敵で言って、カスミは湖の畔にゆっくりと着陸した。

同じ世界の離れた場所に、全員が集結した。
シナリオのエンディングは誰も知らなかった、ただ夢中で成すべき

事を探していた。

イメージの世界を繋げる、非常に難しいと思っていた。

人は全て違う個性で、違うものを求めるから。

夏物語のクライマックスは、不思議な世界に入って行く。

あなたの中ではフィクションですか？

幻影の塔　？

静かな森の静寂の湖、その場所だと確かに感じていた。
女神たちが集い、何かが動き出す。

《良い所じゃない》カスミはそう思いながら、湖を見ていた。
日光を受けて、湖面がキラキラと輝いていた。

「お前のその顔が有るから、俺は心配事が無くならんのや」と真後ろから声がした。
カスミは凍結していた、忌まわしい声が響いて、あの夜を思い出した。
「やりなおそう・・なぁ、また殴ってやるから」と冷たく言われた。
カスミは振り向くことが怖かった、体は動かない。

「見てくれは、良い男だったんだ～・・性格最悪だけどな」とリョウの声がして、後ろでバタっと倒れる音がした。
「またつまらぬ者を切ってしまった」とリョウがルパンの五右衛門を真似て言った。
カスミは振り向いて絶句して、爆笑した。
「リョウ・・面白すぎだよ」とカスミは笑いが止まらなかった。
リョウは真赤な忍者衣装を着て、背中に刀を背負っていた。

「助けてやったのに～・・そんなに笑うなよ～」とリョウはウルで言った。
「なぜ、そんな事になった?」とカスミは笑いながら聞いた。
「堀切から飛んで、海が見えた時に・・忍者なら、水の上を走れるのにって思った」とリョウが照れながら言った。
「そういう事か～・・雑念が多いよ、未熟者め～」とカスミが不敵

で言った。
「他の人を見た？」とリョウがウルで返した。
「まだ・・楽しみだな～、仮装パーティーみたいだろうな～」と不敵で言って、リョウと2人で湖畔を歩いた。

「湖の周辺なのか、由美子」とリョウが湖面を見ながら言った。
「マリが私にくれた、あのメモは・・ヒントだったんだ」とカスミが笑顔で返した。
「5歳か～・・必ず見つけてやるよ・・辛いよな、閉じ込められるのは」とリョウが真顔で湖に呟いた。
「湖の中なら・・底の方とかなら、どうすれば良いんだろう」とカスミも湖面を見ながら言った。
「大丈夫さ・・誰かが魚になってるだろ・・5人ぐらい」とリョウが魔性二ヤで言って。
「それは楽しみだな～」とカスミが不敵二ヤで返した。

その頃、哲夫はヒトミと手を繋ぎ、急な坂道を下っていた。
「ねぇ、哲夫・・誰かに会った時、私をヒトミって紹介しないで」とヒトミが笑顔で言った。
「ん？・・どうしてかな？」と哲夫が笑顔で返した。
「オバケみたいでしょ・・私も源氏名付ける・・何にしようかな～」とヒトミが考えた。
「ルーシー」と哲夫が二ヤで言った。
「可愛いね・・それにしよう」とヒトミが嬉しそうな笑顔で言った。
「可愛いだろ～」と哲夫が二ヤで返した。
「命名理由を、言ってごらん」とヒトミが二ヤで返した。
「チャッピーの双子の妹・・ウサギだけどね、お転婆娘だったよ・・でも凄く長生きしたんだ」と哲夫が笑った。
「ありがとう、哲夫・・嬉しいよ」とヒトミも嬉しそうに笑った。
ジャングルに笑い声が木霊していた。

一方私達は、暗い部屋を進んでいた、生暖かい嫌な空気が立ち込めていた。
「停電かな～」と美由紀が言った時に、左側にスクリーンが現れ、明かりが照らした。
「映画だね・・早いね～・・・蘭姉さん対策だね、見えるように」とマチルダが二ヤで言った。
「ローマの休日が良いな～」と蘭が満開で微笑んだ。

スクリーンに映し出されたのは、アフリカであろう、黒人の子供達が屈んでいた。
飢えを示すお腹の張りと、絶望の瞳がこっちを見ている。
そして画面が引いていき、沢山の子供の亡骸が横たわっていた。
恐ろしいほどのハエが、その亡骸にたかっていた。
その横でマチルダが両手の拳を握り締め、呆然と立っていた。

マチルダは立ち止まり、その映像を睨んでいた。

《無力・・あまりにも無力だな・・マチルダ》と太い男の声が響いた、マチルダは悔しさを瞳に滲ませていた。

「無力なんだよ・・人間なんて、一人じゃ無力さ。
急に世界を変える事など、誰にも出来ないんだよ。
でも明日は今日より良くしようと思うんだ、明日は一人でも救おう。
救えない命は、無数に存在するけど・・一人でも多くを救おう。
そう思ってるんだよ・・お前こそ、無力だろ。
そんなに人間が自分に逆らうのが、嫌なのか・・我侭野郎。
辛い経験を思い出させて、全ての人が絶望するとでも思ってるのか？

お前自身が絶望するからって、誰もが絶望する訳じゃない。
よく見ろよ、その映像を・・マチルダの瞳に迷いは無い。
お前には分からない・・分かるはずがない。
お前は小心者で、逃げ続ける・・それしか出来ない、無力な者だから。
リンダもマチルダも諦めない・・そして現実から逃げない。
そんな映像は無駄だよ・・マチルダの強さを引き出すだけ。
お前にはそれが分からない・・震えてるんだね、弱き者。
逃げ出すなら、今のうちだよ・・由美子を置いて、逃げ出せよ。
私達は逃げないよ、必ずお前を笑いに行く・・指差して笑ってやる。
その痩せ細った頭と、腐った回路を・・待ってろよ、無力な者」

蘭は真顔で一気に言った、強烈な波動が、蘭の言葉を後押しした。
マチルダはその言葉を聞いて、緑の瞳が発光した、美由紀は蘭を笑顔で見ていた。
強烈な青い炎で周りが明るくなっていた、蘭は返事が無いので、前に歩き始めた。
マチルダが蘭の腕を組み、２人が笑顔で歩いていた、私も美由紀も笑顔で後を追った。

何事も無く、薄暗い石壁の通路を進んでいた。
そして映像が再び映し出される。
４歳位であろう少女が、庭で一人で遊んでいた。
「可愛いです～・・凄く可愛いです～・・美由紀ちゃん」と美由紀が笑顔で言った。
私はハッとして確認した、映像の美由紀には足が綺麗に有った。
そして驚くべき事を、美由紀がやってのける、美由紀の覚悟はレベルが違った。

「そして・・あれ～馬鹿ですね～・・ありゃりゃ、こんな風に事故に合います～」と美由紀は笑顔で映像の解説をしていた。
苦痛に歪む幼い美由紀の顔、潰れた足からの大量の出血、救急車のサイレン。
そして手術台に横たわる美由紀、医師が美由紀の母親に告げる、命を救うには切断しかないと。

「おとんもおかんも辛かったね、でも美由紀はこの時に全然痛く無かったよ。
そして美由紀は足を失うのです～・・ありゃ～俯いてますね～。
いけない子ですね～・・いじけ虫ちゃんです～・・お顔は可愛いけど。
もう少しです～・・もうすぐ、小僧とヒトミに会いますよ～」

美由紀が笑顔でそう言った時に、映像が切れた。

「は～～・・バッカじゃないの！・・これからが良い所なのに。
お前・・私が辛いとでも思ったのか、まさに弱き者だな。
私は足の無い自分が好きなんだ、足を失った事に感謝してるんだ。
足を失わなかったら、ここまで来れなかったから。
お前には分からない・・お前には、不幸の意味が分からない。
馬鹿だから・・そして現実から目を逸らしてるから。
単細胞で弱いから、だから理解出来ない・・不幸の本質が分かっていない。
お前には絶対に勝てない・・私の中にはヒトミがいる。
お前の考える不幸など、どうでもいい事だ。
悔しいなら・・今、この場所で・・私を殺してみろ。
私は笑顔で死んで見せる・・それは不幸な事じゃないから。
由美子を返せよ・・諦めろよ・・お前は手も出せないでいるだろ。

最後の挑戦者が怖いんだろ・・敗北を認めろよ。
私にも勝てないなら・・絶対に無理だ、小僧は刺し違える覚悟だから。
お前はそれが分かってる・・小僧を一人にしようと焦ってる。
誰も逃げないよ・・パニックになって、現実に戻ったりしない。
全員が何かしらの、傷を乗り越えて来たから・・それが強さだから。
お前の追い込み方は、間違ってる・・さぁ殺せ・・私を殺してみろ。
お前に出来るのか・・ヒトミを2度・・殺す事が」

強烈な美由紀の叫びが、狭い通路に木霊して、塔がグラッと揺れた。
ユリカの強烈な喜びの波動が、何度も後ろから押してくれた。
「嬉しいです～・・魔女っ子4姉妹、OKですね」と美由紀が笑顔で言った。
ユリカの却下の二ヤの波動が来た。
「まだ駄目みたいだね～・・頑張れ魔女っ子」と蘭が満開二ヤで言った。
「美由紀がそのまま来るから・・私みたいに、魔女設定で来ないからね～」とマチルダが二ヤで言って歩きだした。
『頑張れ、美由紀・・魔女っ子、美由紀』と私はウルの美由紀に笑顔で言って、美由紀を押して後を追った。
《原作者君・・俺にはないの？・・せっかく色々と、用意しるのに～》と心にニヤで囁いた。

その時、蘭が驚愕の言葉を発する。

「なぁ、小心者・・1つお願いがある。
弟の事故の場面を見せてくれよ、私は知りたいんだ。
お前なら見せれるんだろ・・頼むよ～」

蘭は真顔で強く言った、静寂だけしか、その場所に存在しなかった。
「お部屋に逃げましたね・・近いですね～・・お部屋臭そう」と美由紀が二ヤで言った。
「多分・・混乱してるんだよ、ウルウルで」とマチルダが二ヤで言った。
「チェッ・・後で脅迫して、見せてもらおう」と蘭が満開二ヤで言った。
ユリカの波動を道連れに、上を目指して笑顔で歩いていた。

「泣いたり、笑ったり・・忙しそうだね、ユリカ」と北斗が二ヤでマキに言った。
「そうですね～・・羨ましいですね」とマキも笑顔で返した。
「マキ・・どんな感じで、受け止めれば良いのですか？」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

「小僧は・・律子母さんから、伝授されたんです。
ヒトミの段階の時、さすがの小僧も慌てて。
その時、母さんが言ったんです・・イメージに負けるなって。
ヒトミを誘拐した、何者かが作り出す、イメージに負けるなって言いました。
誘拐犯は、自分で手を出せないのだろうと、だからヒトミに選択を迫る。
ヒトミが自分でそれを選ばない限り、絶対に手を出せないのだろうと。
だからヒトミを探して来いと・・相手のイメージに入れと言いました。
母さんは多分、過去に同じ経験をしてたんだと思います。
それで小僧は挑戦したんです、小僧はイメージには入れました。
それを後ろで見て、母さんは言ったんです。

1度でも出たら、2度と入れないから・・見つけるまで、帰るなって。
何があっても、パニックになるなって・・そう強く言いました。
今の現状もそうでしょうね、全員が入ってる・・多分ＰＧにいる女性達も。
そして誰も帰って来ない・・誰もパニックになっていない。
素敵ですよね・・最強のメンバーが、救出に向かってます。
みんな何を持って帰って来るんでしょう・・楽しみですね」

マキは北斗とユリさんを見ながら、笑顔で伝えた。
「さすがですね、マキ・・良く分かりました」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

「そうか～・・それでシオンとマキを残したのか～。
策略家だね～・・切り札を取っておく。
白い弾丸と灼熱を・・最後の最後まで余力を残す。
ユリ、ありがとう・・私はもう大丈夫、叫んで呼び戻してみせるよ。
由美子を・・私も最後の切り札だからね」

北斗は笑顔でユリさんとマキに言った。
ユリさんもマキも笑顔で頷いた。
「北斗姉さん・・それに小僧は、最強の切り札を持っています・・律子とマリとマリアがいますから」とマキが微笑んだ。
「終わったら、会いに行こう・・どうしても会いたいよ、マリちゃんに」と北斗が笑顔で返した。
「凄いですよ・・特にユリカといる時は」とユリさんも薔薇で微笑んだ。
3人が優しい笑顔で、由美子を見ていた、外は明るくなってきていた。

その頃、やっと湖に出てきてホッとした、セリカが辺りを見回した。
《みんな・・何かに変身したのかな～・・かなりやばい状況だ》と
セリカがウルで思っていた。
その時、ドスン・・ドスンと地響きがして、セリカは木陰に隠れた。
「何なのよ～・・あっちに行ってよ～」と言ってホノカが走ってきた、必死の形相だった。
《あの人は、どんな時でも自分を忘れないんだ・・強敵だな～》と
セリカが思っていた。
ホノカは真白なドレスを着て、髪は１９世紀の西洋貴族のような感じだった。

ホノカがセリカの横を走り抜けると、地響きが大きくなった。
そしてセリカが隠れてる木が、１m程を残して、バキッと音を立てて飛んでいった。
セリカの頭上から、大きな恐竜の顔がセリカを見ていた、よだれをダラダラと垂らして。

「こんにちわ～、あなたは・・象じゃないね、カバでもないし。
私・・あなたの事知らないから・・人違いだよ。
ドレスの人は・・向こうの方に走って行ったから。
私・・可愛い系じゃないから・・美味しくないよ。
早く行かないと・・逃げられるよ～」

セリカはウルウルで言った、一瞬沈黙が流れた。
「そんな衣装で、何をウルしてるんだい？」と後ろから声がした、
セリカは慌てて振り向いた。
そこにはカスミと忍者のリョウが二ヤで立っていた、セリカは恐竜を忘れて照れた笑顔で返した。
「あれは地球防衛軍ですかね～？」とカスミが二ヤで言って。

「かなり貧相なイメージですな～」とリョウも二ヤでセリカに言った。
「だって・・一番飛べそうだと思って・・シュワッって」とセリカがウルで返した。

「しかし、あれは肉食ですかね～？」とリョウが恐竜を見ながら笑顔で言った。
「確かティラノザウルスとか言う、雑魚ですな～」とカスミが二ヤで言った。
「あなた！・・雑魚ちゃんなの～？」とセリカが二ヤで立ち上がった。
「雑魚って聞くと、俄然やる気になりますね～」とリョウが魔性二ヤで言って。
「じゃあ、お任せで」とカスミが振り返ると、ホノカが立っていた。白いドレスで、モジモジしていた。

「なぜ？どうして？・・堀切から飛んで、それを想像するんだ」と言って、カスミが爆笑した。
「不思議な女だ～・・心が柔すぎるな～」とリョウも振り返り笑った。
「死ぬって思ったら・・これだけ着てないのが、心残りだったのよ」とホノカがモジモジで返した。
「あの～・・手伝ってもらえないですかね～」とセリカがウルで言った。
「その腰にぶら下げてるのは、玩具なのか？」とカスミが二ヤで返した。
セリカは腰を探って、最強流星二ヤで恐竜を見た。
そしてペンライトのような棒を、右手に握り空にかざした。
「お前・・負け決定」と恐竜に言って、ボタンを押して。

「シュワッ」と言ってセリカがジャンプしたが、変身はしてなかった。
着地してセリカは半泣き状態で、恐竜を見た。
「ちょっと待ってね・・少しだけ待ってね」とセリカが恐竜に言って、ウルウルで振り向いた。
「やっぱりね・・キャラが確立されてないから、変身しないんだね～」とリョウが笑った。
「ねぇ・・どうして奴は攻撃しないの？」とホノカが聞いた。
「そういえば、そうだな～」とカスミが恐竜を見た。
「まさか！・・オバケ屋敷と同じで、驚かすだけとか」とリョウが二ヤで言った。

それを聞いて、セリカが二ヤ二ヤになった。
「ほれ、お食べ・・ほれほれ」と自分の左手を、恐竜の顔の前に出した。
恐竜は口からよだれを流すだけで、動かなかった。
「な～んだ・・私の勝ちね」とセリカがニヤで言って、３人の方に歩いた。

「さてと・・遊んでる暇はないから、探しに行きますか」とカスミが言って、４人で湖の方に向かった。
「驚かすだけって・・ここから追い出したいだけって事ね」とホノカが笑顔で言った。
「しまった～・・元旦那、私が殺しとけば・・気分も晴れたのに～」とカスミがリョウにウルで言った。
「固まってたくせに、よく言うよ」とリョウが二ヤで返した。

４人で湖沿いを歩いていると、叫び声が聞こえた。
駆け寄ると、競泳水着を着たミサキが震えて泣いていた。
「ミサキのは聞かなくても、理解できる衣装だ・・さすがだね～」

とカスミが不敵で言った。
「そんな事より・・大変なんです、あれ」と水際を指差した。
「ほほ～・・あれはホノカ用だね」とリョウが魔性二ヤを出した。
「良く出来てるね～」とホノカがそれを見て微笑んだ。

そこにはジンの水死体が浮いていた、スーツを着て苦痛の表情を浮かべていた。
そしてジンの目が開き、ホノカを見た。
「ホノカ・・助けてくれ」と弱々しく手を伸ばした。

「触らないで！汚れるでしょ・・私はホノカじゃありません、マリー・アントワネットよ」と華麗二ヤで言った。
ジンはそのまま沖に流れて行き、沈んでしまった。
「懲りないですね～・・もう意味無いのに～」とセリカが笑顔で言った。
４人でミサキに説明しながら、笑顔で歩いていた。

「相手もいよいよ、本気になってきましたね～・・どうします？」とセリカが洞窟の入り口でウル言った。
洞窟の立て札に、【由美子の隠れ家】書いてあった。
「立て札に、【罠】って書いてあるね～」とカスミが不敵二ヤで言った。
「でも、そう思うことを狙って・・本当だってりして」とホノカが笑顔で言った。
「どっちでも良いだろ・・確認すれば良いんだから、洞窟なんて嫌いだよ」と言いながらリョウが先を歩いた。
リョウの後を全員が続いた、暗闇に足を踏み入れて行った。

その頃、ＰＧの３番席で、マリがマリアと遊んでいた。
「和尚様、脱出の時は教えて下さい」と久美子が微笑んだ。

「分かったよ・・全員ピアノの音で帰って来るんじゃな」と和尚が笑顔で返した。
「はい・・届けてみせます」と久美子が強く言った。

「しまったの～・・松もかい」とマダムが目を開けて笑った。
「あれを見せられたら、動揺しますね・・残念な事をしました」と松さんも笑顔で返した。
「やはり・・戦争を見せられたかの？」と和尚が2人の側に寄り真顔で言った。
「はい・・今でも、一瞬で動揺しますね～」とマダムが返した。
「仕方ないですな～・・あまりにも強烈でしたから」と和尚が言って、3人が話していた。

「そういう事だったのか～・・しまった～」とリアンの店の若い女性が言って。
「修行が足りなかった～・・悔しいですね」とユリカの店の女性がウルで言った。
「本当だね・・PGも魅宴も銀河もゴールドも帰らないよね、凄いね～」と2店の6人の女性達が笑顔で話していた。

「シズカはどう思ってるの？・・今回の事」と久美子がシズカに笑顔で聞いた。
「私は今回、少し悔しいの・・小僧の戦略が読み切れない事が」とシズカが二ヤで返した。
「今で分かってる戦略は？」と久美子が笑顔で聞いた。
「こっちに来んかね・・聞きたいんじゃろ」と和尚が女性達に笑顔で言った。
6人が笑顔になって、マダムの側に座った。
「それじゃ・・シズカの見解を述べよ」と久美子が笑顔で言った。

「昨日、私は小僧に会って、その静けさが怖かった。
メラメラと燃えてる小僧を想像してたから、静かな小僧を怖いと感じた。
何かを覚悟したとかじゃなくて、違う世界に入ったみたいで。
逆に美由紀は熱い集中が近づいてた、美由紀の本質・・内側の熱。
それが外側の温度も上げていた、そして銀河４人もセリカ姉さんも集中の中にいた。
今回の事で、小僧は詳しい説明を誰にもしていないですね。
多分、先入観を持たせない為に、自分を確認しろと言っただけ。
今、戻られた６人の女性は、仕方がないですよ・・今聞いて、入ったんだから。
入れただけでも、凄い事だと思います。
マキに電話で聞いたら・・病院は小僧と哲夫、マチルダと美由紀。
この４人が予定通り入ったみたいなんです・・そして自分で入った。
蘭姉さんが、自分の意志で入ったらしいです。
どんなに凄い事かは、皆さんなら分かりますよね。
小僧は賭けたんでしょう、愛する蘭姉さんを信じて。
それが小僧の１つ目の作戦でしょうね、心しか持たない人が、自らの意志で入る。
これほど心強い同行者はいないでしょう、それが愛する人であるんだし。
小僧は由美子の捜索は、初め哲夫に任せたそうです。
自分は塔を登ることを選んだ、その塔にいると確信してる。
誘拐犯が、その塔にいると・・そこに行かねばならないと。
私はその部分の作戦までは、読めていました。
小僧は策略家です・・挑戦するとき、常に一石二鳥を狙う。
絶対に蘭姉さんとマチルダ姉さんと美由紀の、段階も上げる気です。

そして女性達に捜索を手伝わせる事で、由美子の帰還の可能性を上げる。
その行為が、女性達に何かを気付かせる、それも狙ってるのでしょう。
少しでも入れた皆さんなら、感じられたと思います。
ヒトミの段階の時、小僧の前に一人入っています。
小僧の師匠である、和尚が入った・・しかし和尚はすぐに戻された。
無理なんです、和尚やマダムや松さんは・・あの戦争を実体験してるから。
後悔してもしきれない、その経験を見せ付けられるから。
それから小僧は一人で約３０時間入りました、最後は体力が尽きた。
あの子は哲夫に代わらせた時も、意識を切らなかったんです。
流動食を美由紀が強引に飲ませ、トイレは我慢してた・・１時間の休憩しか取らなかった。
その３０時間で、何があったんでしょう・・何も話してくれません。
哲夫は小僧が１時間で強引に戻らせた、戻った哲夫は号泣しました。
相当の我慢を強いられたのだと感じました。
小僧はその時の反省を持っている、奴はそれだけは抜かりがない。
今の小僧に、体力は問題ないでしょう、ならば後は心の問題。
そしてあの男は、同じ相手に２度の敗北はしない、相手の弱点を探し出す。
３０時間で探し出した、相手の弱点・・それが何なのか分かりません。
小僧は哲夫と女性達が、由美子を探し出すと信じてる。
自分は犯人と勝負しようと決めた・・それをしないと、同じ恐怖を持ったままだから。

多分・・それが由美子の未来の、可能性を広げると思ってるのでしょう。
私はそれだけは感じたから、最強の武器を用意しました。
マリという、最強の武器を・・もうすぐでしょうね、最終戦が始まります。
その前に、由美子を探し出せるのか・・そこがポイントですね。
まぁ、私達は楽しみましょう、滅多に無い事ですから」

シズカは笑顔でそう言った、女性達が笑顔で頷いた。
「やはり・・塔に登ったのか」と和尚が真顔で言った。
「私も塔は見ました・・不気味な演出でしたよ」とユリカの店の女性が言った。
「結局、あの世界に意味の有る物って・・由美子ちゃんだけなんじゃないですかね」とリアンの店の女性が言った。
「さすがですな～・・そこまで感じましたか」と和尚が笑顔で返した。

「由美子ちゃんを見つけ出す、鍵になるのは誰ですか？」と久美子が聞いた。
「エミじゃろうな・・エミの場所に、相当数が集まる事が出来れば、連れ戻せるじゃろう」と和尚が答えた。
全員が瞳を閉じて座るエミを見た、静かな笑みを湛えていた。

その頃、ヒトミと哲夫が、湖が見える場所まで降りていた。
「小僧は巡り会ったんだね、本当に素敵な子だね」とヒトミが前を見て言った。
「えっ！・・誰のこと？」と哲夫がヒトミの視線を追った。
そこにはエミが白衣で立っていて、その前にミサとレイカが屈んで何かを見ていた。
２人で小枝を握り、黒い物体を突いていた。

「もう、行くよ・・そんな物、いつまでも触ってないの」とエミが笑顔で2人に言った。
「オネエ・・これ、なんて言う種類？」とガッチャマンの衣装を着たミサが聞いた。
「毛だらけで、気持ち悪いね」と孫悟空の衣装を着た、レイカがウルで言った。
「タランチュラよ・・本物は猛毒で、あなた達ならイチコロよ」とエミが二ヤで言った。
「チャランタラめ・・悪い奴だね、科学忍法火の鳥を出すよ」とミサが言って。
「伸びろ、如意棒～」とレイカが言うと、右手に持った棒が少し伸びた。

「イカスな～・・さすが最強４姉妹」と哲夫が後ろから声をかけた。
「おや～・・哲夫兄さんが、女連れとは珍しい」とエミが振り向いて、哲夫に二ヤで言った。
「こんにちわ・・私は哲夫の守護神のルーシーです」とヒトミが３人に微笑んだ。
「初めまして、私は哲夫の教育係のエミです・・こっちがミサで、この子がレイカです」とエミが笑顔で言って、３人で頭を下げた。
「エミちゃん最高です～・・一緒に探しましょ」とヒトミがエミと握手して。
ミサとレイカを抱き上げて、笑顔で挨拶をしていた。

５人で歩き始めた、ヒトミとエミが前を歩き。
哲夫がミサとレイカを、両手で繋いで、後を続いた。

「哲夫君も、好みがエースと同じね」とミサがレイカに笑顔で言った。

「ね～・・オッパイの大きい人が、好きなんだから～」とレイカが笑顔で返した。
ヒトミとエミがニヤニヤで振り向いた、哲夫はウルウルを出していた。

暑くも寒くもない、素晴らしい天気の下だった。
ユリカの楽しそうな波動が包んでいた、最強の戦士達を・・。

幻影の塔　？

楽しんでいた、全員が楽しみながら探していた。
同じ目的を目指して、その幼稚な演出を楽しみながら。

沙紀は由美子の病室で、一心不乱に絵を描いていた。
湖の正確な形を描き、その湖畔の中央に階段を描いた。
その反対側の湖畔に、トンネルの様な物を書いた。
階段の方に赤い小さな丸を４つ描いて、そこに哲夫の顔を足した。
反対側のトンネルの入り口に、カスミの顔を描いて、赤い丸を7個描いた。
そして湖に蟻の巣のような、無数の通路を描いて・・その中にミサとレイカの顔を描いて。
その後ろに、赤い丸を2つと青い丸を1つ描いた。
そして湖の真ん中の大きな四角の場所に、由美子の笑顔を描いた。

沙紀はそこまで描いて、シオンを見た、シオンは最高ニコちゃんで頷いた。
沙紀はそれを見て立ち上がり、ユリカの所に駆け寄った。
それを感じて、ユリカが目を開けて沙紀を見て、絵を受け取った。
「ありがとう、沙紀・・何か飲んで、少し休憩してね」とユリカが爽やか笑顔で言った。
沙紀は頷いて、シオンと手を繋ぎ、部屋を出て行った。

ユリカはその絵を確認して、マキに絵を渡し、瞳を閉じた。

「ヒトミちゃん、沙紀ちゃんが見つけたよ・・由美子ちゃんの場所。
そこから湖沿いに行くと、地下に入る入り口があるはず。
階段のような・・そこを入って、そして中は無数の分かれ道があ

るから。
ミサとレイカを先に歩かせて、あの子達なら分かると思う。
その通路で辿り着く、四角い大きな部屋・・そこに由美子がいるよ。
反対側からも8人が向かってるからね・・気を付けてね。
こっちも、もう少し絵を研究するから・・また連絡するね」

ユリカはそう言葉にして、ユリアが波動で強く伝えた。
その言葉を聞いて、北斗とユリさんとマキで真剣に絵を見ていた、見逃さないように。

ユリアの強い波動を受けて、ヒトミが笑顔になった。
「わかりました、探してみます」とヒトミが空に向かい言った。
「なんて？・・ユリカさん」と哲夫が笑顔で聞いた。

「湖の地下に入る、入口が有るんだって・・階段のような場所。
そこから入って、ミサちゃんとレイカちゃんに案内を頼めば。
由美子の部屋に辿り着くって、沙紀ちゃんが絵で示してくれたらしいよ」

ヒトミは笑顔で全員に言った、3人娘の笑顔が咲いた。
「2人とも、責任重大だよ～」とエミがミサとレイカに笑顔で言った。
「簡単だよ・・由美子ちゃんの場所まで続く道に入れば」とミサが笑顔で言って。
「あそこだから・・やっぱり地下で行くんだね」とレイカが湖の沖を指差して言って、ミサが笑顔で頷いた。

ヒトミとエミと哲夫は、驚いて2人を見た。
「よかった～・・私まだ泳げないから」とミサがウルで言って。

「私も～・・河童のサゴジョウにすれば良かったって思ってた」とレイカが笑った。
2人の笑って話す姿を見て、哲夫は助け出せると確信していた。
その頃、対岸の洞窟の入口に、笑い声が響いていた。
「リアン姉さん・・なぜにそのような事に」とミコトが笑って。
「予想すら出来なかった・・圧倒的だ」と千鶴が笑った。
「仕方ないだろ～・・死ぬって思ったら、お嫁さんにだけ行ってないって思ったんだから」とリアンが獄炎テレを出した。
リアンは可愛いエプロンを着け、少し所帯染みた感じで、地味な服を着ていた。

「あんたら2人は、さすがだね～」とそのままの衣装のミコトと千鶴に言った。
「そんなオプションが有るなら、何かイメージしたのに」とミコトが余裕で微笑んだ。
「私も無我夢中で、余裕が無かった」と千鶴が微笑んだ。
「他の奴等の、仮装が楽しみだね～」とリアンが笑顔で言った時に。

「カスミ・・やっぱり出よう」とリョウの声がした、3人は声の方を見て爆笑した。
「ほら～・・見つかったじゃない・・セリカ、笑われてるよ」とホノカが華麗二ヤで言った。
「それは勘違いです～・・この場に一番不釣合いなのは？・・誰でしょう」と流星二ヤで返した。
「そりゃ～・・競泳水着だね」とホノカが華麗ウルでミサキを見た。
「アントワネットに、意地悪3点」とミサキが二ヤで返した。
所々に火が灯された洞窟を、5人でリアン達の場所まで歩いた。
そして5人で二ヤを出して、リアンを見た。

「普通の姿で、こんなに驚かす・・遥かに遠い人だ～」とカスミが不敵二ヤで言った。
「カスミ・・変身しなかった理由を述べよ」とリアンが獄炎ニカで返した。
「失神してました・・海水に触れて戻って・・慌てて飛びました～」とウルで返した。
「やっぱりね～・・ミコト姉さんや千鶴姉さんとは、違うのね」とホノカが二ヤで言った。
その時、ミコトと千鶴がウルで手を上げて、全員で爆笑した。
洞窟の中に、笑い声が木霊していた。

「それでお3人さんは、どんな敵を倒しましたか？」とリョウが奥に歩きながら、笑顔で言った。
「私は昔の男・・6人にとどめを刺した」とリアンが獄炎ニカで言った。
「リョウ、ごめんね・・武藤は私がとどめを刺したよ」と千鶴が笑顔で言った。
「あ～やっぱり・・現れないから、探したのに～」とリョウがウルで返した。
「ミコト姉さんが、自白しませんね～」とセリカが二ヤで言った。
「私は・・父親が腕組みしてた、夜の仕事は許さんって・・蹴り入れといた」と余裕二ヤで返した。

「こりゃ～・・ハルカとレンは、ビビッて戻されてるね～」とカスミが不敵で言った。
「その可能性は高いですね～」とミサキが二ヤで言った。
「いやいや・・あの2人は、お魚になった可能性が大きい・・問題はヨーコだよ、あの子は読めない」とリョウが二ヤで言った。
「お魚か～・・そりゃ～絶対に見たいね～」とリアンが笑って、全員で笑った。

洞窟を進むと、それが現れた。
女性達の目前に４本の別れ道が見えた、全員が沈黙してそこまで歩いた。
別れ道の上に、【Ａ】【Ｂ】【ＡＢ】【Ｏ】と看板が付いていた。
「血液型ですかね～・・・問題ですかね～？」とミコトが言った。
「そのようですね～・・・難問だから、ミコト担当で」と千鶴が笑顔で言った。
「意味が有るのかね～・・・騙しじゃないの」とリアンが言った。
全員が沈黙して考えていた。

「由美子の血液型なんて知らないし・・マリ、ヒントくれよ」とカスミが目を閉じて呟いた。
「そっか・・Ｏだね」とミコトが笑顔で言った。
「なぜですか？」とホノカが聞いた。

「ここは幻想の場所でしょ・・こんな記号に意味は無いのよ。
ＡとＢはいづれＡＢに繋がるんだよ・・カスミちゃんが教えてくれた。
マリちゃんのヒント・・真ん中が【白】だったんでしょ。
そこが由美子ちゃんの場所なら、何も無いって事よね。
何も無いの意味は、何も意味が無いって事だと思うの。
だからＡでもＢでも、ましてＡＢでもない。
ゼロだと思ったの・・これは下手くそな字なだけで、意味は無い。
何も無い、ゼロって書いてあるんだよ・・そう思わない」

ミコトがそう余裕の笑顔で解説した、全員の笑顔が出た。
「ミコト・・１００点」とリアンが獄炎ニカで言って、【０】の通路に入っていった。
全員笑顔で後に続いた、納得した表情で。

そして対岸を歩く5人の子供会に、恐怖が迫っていた。
子供会の左の林から、背丈が３０ｍはある、真赤な鬼が現れたのだ。
「何これ、私達を馬鹿にしてるのね・・子供だと思って」とエミが二ヤで鬼を見て言った。
「なんか・・桃太郎に出てくる奴みたい」とレイカが笑顔で言って。
「こんなに大きいんだね・・お家はどのぐらいかな～」とミサが笑顔で言った。
「でも・・正面に立ったから、邪魔ね」とヒトミが笑顔で言って。
「さてと・・どうしますかね～」と哲夫が考えた。

「決まってるよね～」とミサがレイカに笑顔で言った。
「うん・・豆で追っ払うの」とレイカが笑顔で返した。
「なるほど～・・確かにそうだ」と哲夫が言った時。

「きゃ～～」と鬼の後ろから叫び声が聞こえた。
その姿を見て、ヒトミが木陰に二ヤで隠れた、３人娘は不思議そうにヒトミを見ていた。
「あの～・・驚き過ぎですよ～」と哲夫が二ヤで叫んだ。
「哲夫！・・エミちゃんミサちゃんレイカちゃん・・大丈夫だからね、私がなんとかするから」とヨーコが必死で微笑んだ。
「ありがとう、ヨーコちゃん」とエミはウルを出して、大声で言った。
「俺はやっぱり・・エミが一番怖い」と哲夫がエミに小声で言った、エミは不敵で返した。

「さて・・どうするのやら、あの格好で」と哲夫がヨーコを見て言った。
ヨーコは顔以外は青い着ぐるみで、首に大きな鈴が付いていて、お腹にポケットが有った。

必死でポケットを探り、二ヤで水鉄砲を取り出した。
「ババ～ン・・大きくなったり、小さくなったり銃～」と二ヤで言って、鬼に向けて構えた。
「すっご～い・・どらえもんみたい」とミサが言った。
「どらえもんみたいな、ぬいぐるみを着た変な人だよ」と哲夫が笑った。
「道具の名前が、長いね」とレイカも笑った。
「でも一番役に立ちそうね」とエミも笑顔で言った。
「小さくな～れ」とヨーコが叫んで。
真剣に引き金を引いた、水が勢いよく出て、鬼の足にかかった。
すると鬼は見る見る縮んで、最後は見えなくなった。
3人娘は笑顔で拍手をした、ヨーコは4人に駆け寄った。
「大丈夫？・・怪我は無い？」とヨーコが真剣に聞いた。
「ヨーコちゃんのお陰で助かりました」とエミが言って、3人娘が頭を下げた。
「ヨーコさんですか・・私は哲夫の守護神のルーシーです」とヨーコの後ろからヒトミが言った。
ヨーコは振り向き、涙を流して抱きついた、ヒトミもヨーコの背中に手を回した。
「ありがとう、ルーシー・・哲夫を守ってくれて」とヨーコが顔を離し笑顔で言った。
「はい・・まだまだ未熟だから、大変です」とヒトミも笑顔で返した、ヨーコは二ヤで頷いた。
目的地の話をヨーコにしながら、歩いていた。
「でも・・なぜ？そんな青い猫に」と哲夫が後ろから二ヤで言った。

「小僧の前の時の話を思い出して、何が最強か考えてたの。
考えが纏まらない内に、飛び込んで・・結局これしかイメージ出来なくて。
それも中途半端で飛んだから・・この状態・・最強でしょ」

ヨーコが振り向き、哲夫に二ヤで言った。
哲夫が二ヤを出した時、湖で何かが跳ねた、全員がその方を見て固まった。
「ヨーコ・・お願い・・何も言わないで」とハルカがウルで言った。
陸上に上がったハルカは、人魚の姿でウルウルを出していた。

「ハルカちゃん、可愛い～」とミサが言って、レイカも笑顔で駆け寄った。
「素敵～・・本当に可愛い～」とエミも笑顔でハルカに言った。
「ヨーコ・・人に二ヤ出せるの？・・そんなぬいぐるみで」とハルカが二ヤでヨーコに言った。
「そっちの方が素敵です～」とヨーコがウルで返して。
哲夫とルーシーを紹介した、ハルカは哲夫を見ていた。

「哲夫君・・終わったらPGに来て、本物はもっと胸が大きいから」とハルカが二ヤで哲夫に言った。
「了解です・・楽しみです」と哲夫が笑顔で返した。
「で・・エースは？」とハルカが聞いた、その言葉でヨーコも哲夫を見た。
「あの塔に登ってるよ」と哲夫が二ヤで返した。

「ふ～・・良かった～・・こんな姿を見られたら、変な称号付けられるとこだった」とハルカが言って。
「安心しました・・絶対付けますよね～・・変な称号」とヨーコが

笑顔で返して。
ハルカに状況を説明をすると、ハルカが笑顔で頷いた。

「ミサ、レイカ・・方向はどっち？・・湖底を調べてみるよ」とハルカが笑顔で言った。
「あっちの湖の真ん中～」とミサが言って、レイカと2人で指差した。
「了解・・行ってみる、あなた達も気を付けてね」と笑顔を残して、ハルカは泳いで行った。

実はその時、私達は爆笑の中にいた。
スクリーン2面に、2つの団体の状況が、リアルに映し出されていたのだ。
それを見て4人で爆笑していた、ユリカの波動も大爆笑していた。

「苦しいです～・・この映像は、危険過ぎます～」と美由紀が涙を流し笑っていた。
「ダメージが・・かなり残りそう、奴も中々やるね～」と蘭が満開笑顔で、脇腹を押さえて言って。
「奴の考えと、全く別の攻撃を受けてます～」とマチルダが膝をついて笑っていた。
『しかし・・ハルカとヨーコの、素敵な称号を考えんと』と私が二ヤで言うと、また3人が大爆笑した。
ユリカの爆笑の波動が止まらずに、何度も何度も来た。

一方病室では。
「困りましたね～・・早く終わらないかしら」とユリさんがユリカを見ながら薔薇二ヤを出した。
「何がそんなに楽しいんだろう？・・想像が出来ない」と北斗が二ヤで言って。

「ユリカ姉さんでこれなら、現場は爆笑の渦ですね」とマキも二ヤで言った。
ユリカはニヤニヤ顔で、涙を流しながら、目を閉じていた。
その時、シオンと沙紀が部屋に戻り、沙紀がスケッチブックの前に座った。
シオンがその横に座り、沙紀をニコちゃんで見ていた。

「いよいよ、最終決戦が近いですね」と律子が笑顔で入ってきた。
「そのようですね、最終兵器の登場ですから」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「まぁ、ユリカの顔を見れば、私もマリアも出動は無いわね」とユリカを見て、母二ヤを出した。
「マリは有るんですね？」と北斗が笑顔で言った。
「それは有るでしょう・・だからマリは来たのでしょうから」と母が笑顔で返した。
ユリさんと北斗とマキが、笑顔で頷いた。

私達は映像も落ち着いて、笑いながら立ち上がった。
「さて・・楽しい番組も終わったし、行くかね」と蘭が満開笑顔で言った。
「そうですね～・・震えてる顔でも、見に行きますか～」とマチルダが笑顔で蘭と腕を組んだ。
「ありがとう、ルーシー」と美由紀が一筋の涙を流して言った。
スクリーンの映像には、ヒトミの歩いて行く背中が見えた。

「やっぱりそうなの！」と蘭が驚いて美由紀を見た。
「ヒトミ・ルーシーなのね！・・本当に素敵な子だね」とマチルダが瞳を潤ませて言った。
『さっ・・俺達もやろうか・・ルーシーに負けないように』と私は

意識して笑顔で言った。
蘭とマチルダ笑顔で返してきて、前を向いて歩き始めた。
私は美由紀を笑顔で見て、笑顔に戻った美由紀を押して、２人の後を追った。
優しい波動が強く背中を押してくれた、私達に恐怖は無かった。

その時だった、ＰＧでマリが動いた、シズカと話してる久美子に近づいた。
そして久美子に手を出した、久美子は微笑んで手を握った。
その瞬間に見えた、リアンたち８人が、無数に伸びる別れ道の前で考える姿だった。
久美子はそれを上から見ていた、そして強引に手を引かれた。
洞窟の奥の広い場所に、白いグランドピアノが有った、そして久美子は強引に座らされた。

「了解、マリちゃん・・必ず導くよ」と言って、久美子は鍵盤を睨んだ。

その頃、リアン一行は、扇状に広がる、無数の別れ道で立ち尽くしていた。
「ここがノーヒントってのは、難しすぎるね～」とリアンが言った。
「どういう事だろう？」とホノカが考えた。
「辿り着く、人数を減らしたいんだ・・だから別々の道を行かせる」とカスミが言った。
「そうだろうね・・一本に一人が入っても、足りないよ」とミコトが言った。

その時、右端の洞窟の奥から聞こえた。
《ここだよ・・こっちだよ～》と少女の声が聞こえた。
「どう考えますか？・・今の罠の誘い」とセリカが真顔で言った。

「確かに、どう考えても・・罠の響きだった」とミサキが言った。
「でも・・そこを外す事も出来なくなったね」と千鶴が言って。
「意味は無いんだから・・逆に外せるとも言えるし」とリョウが言った。

「何本も見に行く時間は無いよね・・ここはバラけるしかない、右端は私が入る」とリアンが獄炎ニカで言った。
「そうですね・・一人一本で行きましょう、自分で選んで」とミコトが真顔で言った。
「誰が辿り着いても、必ず奪還しましょう」と千鶴が全員に言って、全員が真顔で頷いた。
そして自分が選んだ洞窟の前に立って、全員で心を1つにした。
「よし・・行こう」とリアンが言った瞬間。

「待って・・私の洞窟から聞こえる」とホノカが大声で言った。
「何がだよ？」とリアンが聞いた。
「聞いて下さい・・だれもが聞いた事のある、魂の旋律が聞こえます」とホノカが最強華麗笑顔で言った。
全員が集まり、耳を澄まして笑顔になった。
「やっぱり・・この洞窟にいるんだね」とミコトが笑顔で言って。
「そう書いてあったろ・・入口の表札に」とリアンが獄炎ニカで言って、洞窟に入って行った。
全員が笑顔でリアンの後を追った。

全員が洞窟に入った瞬間に、久美子はＰＧのピアノの前に戻された。
マリが二ヤをして頷いた、久美子も嬉しそうな笑顔で頷いた。

「なるほど、マリはその為に、ここに来たのか」と和尚が言った。
マダムと松さんと女性６人は、厨房で笑顔で食事を作っていた。
全員分の食事が、完成を迎えようとしていた。

一方、哲夫達は一行は、古びた石の階段の前に立っていた、不気味な雰囲気が漂っていた。
「雰囲気は有るね～・・楽しそう」とヨーコがミサとレイカの手を握り、入って行った。
「鬼は怖いのに、この雰囲気は楽しいのか～」と哲夫が二ヤで言って、3人で続いた。
階段を下ると、明るい大理石の通路に入った、ミサとレイカが迷わずに歩いた。

「でも・・由美子ちゃんを、どこに連れて帰るの？」とエミが聞いた。
「それは大丈夫、小僧が由美子の部屋を作ってるから」と哲夫が笑顔で答えた。
「ルーシー・・小僧は勝つよね？」とヨーコが真顔でヒトミに聞いた。
「大丈夫でしょう・・同じ相手に、2度は負けないでしょう」とヒトミが笑顔で返した。
その笑顔をエミが見ていた、そしてエミが笑顔になった。

沢山の分かれ道を、迷い無くミサとレイカが先導して、大きな扉の前に着いた。
大きな悪魔の像が、両側に立っていた。
「ここなのね？」とヨーコが静かに聞いた。
「うん・・この中だよ、由美子ちゃん眠ってる」とミサが言った。
「ミサとレイカは哲夫が手を繋いで、エミはルーシーがお願い・・行くよ」とヨーコが言った。
全員が頷いた、ヨーコはそれを見て、扉を押した。
部屋の屋根はガラス張りで、湖の底が映っていた、その上を沢山の

魚が泳いでいた。
奥に進むと、机があり婆さんが座って６人を見ていた。
その後ろの段の上に、大きな椅子があり、由美子が手錠で繋がれ、眠ってるように座っていた。
「由美子ちゃん」とレイカが言った、由美子は起きなかった。

「辿り着いたか～・・じゃが由美子は渡せんよ」と婆さんが二ヤで言った。
鼻が以上に大きく、１００歳を超えていそうな皺が刻まれていた。

「魔女って感じだね・・出来損ないの」とエミが婆さんに笑顔で言った。
「ほほ～・・気の強い子じゃね～」と婆さんが笑顔で言った。
エミは婆さんの机の前の椅子に座り、真剣な瞳で婆さんを見た。

「由美子ちゃんを、連れて帰るから・・邪魔しないでよ」とエミは笑顔で言った。
「それは無理だよ・・お前はすぐに現実に帰る」と婆さんが二ヤで返した。

「ちょっと待ちな、ババア！・・ブッ・・ヨーコ、こっちからの入り口が無い」とリアンの声がした。
ヨーコが探すと、小さな覗き窓から、獄炎の瞳が見えた。
「リアンさん・・今、ブッって言いました」とヨーコがウルで聞いた。
「言ってないから・・何か道具を出して、ドアを作って」とリアンが言った。

「道具？・・ヨーコ、大工にでも変身したのか」とリョウが笑顔で言った。

「か～・・楽しみだ～、ワクワクする～」とカスミが二ヤで言った。
「こら、静かに・・ヨーコがウルするから」とリアンが獄炎ニカで振り向いて言った。

ヨーコはウルを出しながら、ポケットを探って、笑顔になった。
「ババ～ン・・ここにもドア～」と笑顔で言って、小さな玩具のドアを出した。
そしてそれを覗き窓の下に置いて、ドアを開けた、リアンのサンダルが見えた。
「ヨーコ・・この小さなドアで、どうやって入るんだい？」とリアンが覗き窓から言った。
ヨーコが困ってると。

「出せば良いのにね～」とミサが言って。
「うん、さっきの長い名前の銃」とレイカが言った。
その言葉を聞いて、ヨーコが笑顔になってポケットを探った。

「ババ～ン・・大きくなったり、小さくなったり銃～」と笑顔で言った。
「もう説明は良いから・・早く」とリアンが言った、ヨーコはウルで頷いて。
「お～きくな～れ」と言って、水をかかた。
すると扉が大きくなって、８人が入ってきて、お互いに相手を見て爆笑した。

「しかし・・ヨーコ、面白すぎ～」とミコトが笑って。
「それも中途半端な」とリョウが笑って。
「でも・・役には立ったね」とミサキが笑った。
「もう、皆さん・・天井をご覧下さい、笑い死なないでね」とヨーコが二ヤで言った。

全員が天井を見上げると、ハルカ人魚が驚いていた。

「ハルカ・・予想を完全に凌駕する奴だ」とカスミが笑って。
「可愛すぎるよ、ハルカ」とリアンが笑って。
「お魚でも・・素敵なのを選んだね」とホノカが笑った。
ミサキは屈んで、脇腹を押さえて、死にそうな表情で笑っていた。
ハルカはウルウルでその光景を見ていた。

「さて・・婆さん、由美子を返してもらうよ」とリアンが婆さんの目の前、３ｃｍに顔を近づけて言った。
「仕方ないね～・・なら、私とそっちで、ゲームをしよう」と婆さんが二ヤで言った。
「勝たないと、由美子は返せないって事なのかな？」とミコトが二ヤで言った。

すると婆さんは鍵を机の上に出した。

「この手錠の鍵が無いと、由美子は動かせん。
この３つのカップのどれかに入れる、それを動かすから。
どこに有るかを当てるだけの、簡単なゲームだよ」

婆さんは机の上に、３つのカップを置いて、二ヤで言った。
全員が一度部屋の後ろで輪を作った。
その時に、ヨーコが哲夫とルーシーを紹介した。

「どうも胡散臭いよな～」とリアンが言った。
「でも・・腕ずくじゃ、奪えない感じですよね」とリョウが言って、全員が頷いた。
「やるしかないね・・全員で動きを見ておこう」とミコトが笑顔で言って、決まった。

「婆さん・・受けるよ、仕掛けは無いんだね？」とリアンが真顔で言った。
「心配するな・・フェアーだよ」と婆さんが微笑んだ。
全員で机を囲んで、静寂が訪れた。

「じゃあ、ここに入れるよ」と言って、真ん中のカップの中に入れた。
「待った・・もう一度、見せろ」とリアンが強く言った。
婆さんは二ヤを返して、カップを上げた、そこに鍵が有った。

「じゃあ・・やるよ」と婆さんが言って、カップを動かした。
かなり早かったが、目で追えないレベルでは無かった。
「さぁ・・だれでも良いよ、どこに有るのか答えな」と婆さんが二ヤで言った。

「まぁ、焦るなよ」と言って、リアンが奥に全員を誘った。
「誰か・・自信のある者？」とリアンが聞いた、誰も手を上げなかった。
沈黙が続いていた、婆さんはニヤニヤでそれを見ていた。

その時、病室の沙紀が小さな二ヤを出して、絵を描き始めた。
カップを3つ描いてる絵に、何かを足して、そこを赤い丸で囲んだ。
そしてユリカの元に走った、ユリカはそれを見て、笑顔で頷いた。
そして瞳を閉じて、ユリアと波動で伝えた。
しかし波動が届かなかった、ユリカは返された波動を感じて、焦った。

「やばい・・結界が張られてる、ルーシーに伝えられない」とユリカが言った。

「もう・・仕方ないわね、ようするにここって事ね」と律子がユリカに笑顔で絵を指差した。
「はい・・そこに有ります、手錠の鍵が」とユリカが答えた。
「ちょっと、行ってきます・・シオン、マキ・・何か有ったら、次はあなた達よ」と律子が真顔で言った。
「はい・・任せて下さい」とシオンが言って、マキも強く頷いた。

それを見て、母は哲夫の横に座り、哲夫が握ってる上から由美子の手を握った。

「真ん中で良いね・・それが一番多い意見だから」とリアンが全員を見回した。
全員が真顔で頷いた、それを感じてマリはマリアを抱いた。
リアン達が机の前に集合した、マリは瞳を閉じて集中してその存在を感じて、マリアに二ヤを出した。

「さぁ・・どこだい？」と婆さんが言った。
リアンが真ん中を指そうとした時、婆さんに動揺の色が浮かんだ、リアンはそれを見逃さなかった。
「お前は・・今来たんだから、駄目だよ」と婆さんが怒鳴った。
「あ～疲れた・・歳かな～」と母は二ヤで言った。
全員が振り向いて、笑顔が咲いた。

「誰でも良いって言わなかったの、マジシャンの婆さん」と律子が二ヤで女性達に聞いた。
「言いましたよ～・・間違いなく、誰でも良いって」とカスミが最強不敵で婆さんを見た。
「はは～ん・・魔女じゃなくて、マジシャンだったのね」とミコトが二ヤで言った。
「ミコトらしくもない、婆さんは何と聞きましたか？」と母二ヤで

言って、ヒトミを抱きしめた。

「あなたがルーシーだね、ありがとう・・あんたって子は」と母がヒトミの耳元に言った。

「母さん・・ありがとう」とヒトミは泣きながら、耳元に囁いた。

「あんた！・・どこに有るのって言ったね！」とミコトが婆さんに詰め寄った。

「そうだよ・どれだと言わずに、どこだと聞いた」と千鶴も二ヤで言った。

全員が婆さんを見た、その時律子が、婆さんの右手の手首を掴んだ。

「ここで良いね、決定で」と母二ヤを出した、全員が笑顔で頷いた。

婆さんの右手が開き、鍵が落ちた、それをリアンがキャッチした。

「同じ事・・その鍵を使ったら、3分でこの世界は無くなるんだ。戻れなければ、それで由美子は植物人間、結果は同じさ。だれも飛べない状況で、どうするんだ・・同じ事だよ」

婆さんは二ヤで言って、消えた。

「誰も・・飛べないの？」と母が全員を見た。

「ヨーコ、竹とんぼ入ってないの？」とカスミが聞いた、ヨーコは慌てて探した。

「無い」とヨーコがウルで言った。

「哲夫・・由美子の帰る場所は？」と母が真顔で聞いた。

「塔の横だよ」と哲夫が答えた。

「私が飛びます・・哲夫が由美子を背負えば、私が飛びます」とヒトミが強く言った。

「ルーシー・・やってくれるのかい？」と母が真顔で聞いた。

「もちろん・・その為に来たんですから」とヒトミが微笑んだ。
母は座って考えた、全員が円になって座った。
「どんなに飛べても、3分でしょう・・ここから出るだけで、無理だよ」とミコトが言った。
「そこなんだよね～」とカスミが返した。
「真上に飛べば・・あのガラスを何とか破って」とエミが天井を見上げて言った。
「さすがね、エミ」と母が笑顔で言った、全員の笑顔がエミを見た。
「マリ・・聞こえるだろ、アリアを頼むよ」と母が目を閉じて言った。
「よし・・作戦を言うよ、あの天井をマリアが破壊する。
その直前に、リアンが鍵を開ける・・そして哲夫が由美子を背負う。
それを全員で囲んで、ルーシーを出来るだけ濡れないようにする。
全員・・この世界を堪能したね、帰るよ・・由美子と一緒に」
母は強く言葉にした、「はい」と全員が返事をした。
母はそれを聞いて、天井を見た。
「ハルカ・・真上に上がってマリアに場所を教えて・・マリアが来たら、合図を送って」と母が言った。
ハルカは真顔で頷いて、泳いで行った。
「ユリカ・・小僧に伝えて、後5分位しか無いと・・由美子は大丈夫だと」と母が天井に笑顔で言った。
全員が笑顔で立ち上がった、完璧な集中の中にいた。
わたし達4人は、最後の部屋の純白のドアの前で、ユリカの報告の

波動を受けた。
「5分有れば充分だろ・・小僧」と美由紀が真顔で言った。
「ウルトラマンと同じ時間で、大丈夫」と笑顔で返して、ドアを開けて。
純白の世界に、足を踏み入れた・・。

幻影の塔　？

晴天を映し出す空に、雲は存在しなかった。
風も香りも熱も存在しない・・不思議な世界。

私達は白い部屋を奥に進んだ、全面を窓に囲まれた部屋は明るかった。
「あそこだね～」と蘭が満開で言った、奥に祭壇のような場所が有った。
「小僧・・作戦は？」と美由紀が二ヤで言った。
『3人で窓際にいて、マリアが来たら教えて・・俺は奴と話してくる』と笑顔で蘭を見た。
「了解・・一緒じゃないと、帰らないよ」と蘭が満開二ヤで言った。
『もちろん・・腹減ったし、一緒に帰ろうね』と笑顔で返した。
3人が笑顔で頷き窓際に行って、湖の方を見ていた。
私は祭壇への階段を上っていた、マリアの熱が近づくのを感じながら。

その頃、由美子が座る椅子の前に、母とリアンを中心にして、円が出来ていた。
「不足の事態を想定しよう」と母が笑顔で言った。
「そうですね・・まず鍵が外れなかった時は」とリアンが言った。
その時、哲夫達が入ってきたドアが開いた。
「間に合った～・・感じかな？」と真っ黒魔女のレンが入ってきて、二ヤを出した。

「見事だね、レン・・自分を確立してるね～」とカスミが笑顔で言った、レンも笑顔で返した。
「もう・・レン早いよ～」と四季の4人が入ってきて、一瞬躊躇し

て爆笑した。
「四季・・さすが学歴が有るね～」とミコトが余裕で微笑んだ。
「４人で手を繋いで飛んだから、大丈夫でした」と千春が微笑んで。
「残念です・・何かイメージすれば良かった」と美冬が笑顔で返した。
四季は全員、そのままの姿だった。
「カスミ、今の状況は？」と千夏が真顔で言った。
「由美子の鍵を・・・今は鍵が開かない時の、対処を考えています」とカスミが概要を説明した。

「その時は、やれますね・・レン」と母が笑顔でレンを見た。
「はい・・青い猫より、期待して下さい」とレンが笑顔で返した、ヨーコがウルを出していた。
「よし次・・ルーシーが飛べなかった時は？」とリアンが言った。
「あの屋根は破れますよね？」とミコトが笑顔で言った。
「マリアなら、大丈夫でしょう」と母が微笑んで、全員が笑顔になって頷いた。
「水の上まで上がれれば、私がキントン雲を呼べるよ」とレイカが笑顔で言った。
「そっか・・レイカも・・いや３人娘を守ろう、最強の戦士は？」とリアンが二ヤで言った。

「セリカ・・変身出来ないの？」と千秋が二ヤで聞いた。
「できましぇ～ん」とセリカがウルウルで返した。
「じょうがないね～、３人娘は四季にお任せを・・体力余ってますから」と千春が言った。
「ＯＫ、任せたよ」とリアンが極炎で微笑んで。
「ルーシー・・ありがとな」とリアンがヒトミを見た、ヒトミは笑顔で返した。

「しかし、ハルカには参ったね～」とレンが二ヤで言った。
「それを見たんなら、この世界に心残りは無いわね」と千鶴が笑顔で言った。
「はい・・帰りましょう」と美冬が笑顔で返した。

その頃、私は祭壇の手前の椅子に座った。
『時間無いんだろ、早くルールを決めよう』と向かいの無人の椅子に話しかけた。
「お前・・絶対的不利だぞ、分かってるんだな」と男の声がした。
『分かってるよ・・マリがマリアを飛ばしてるから、使えないんだろ』と二ヤで返した。
「予想してたか・・由美子に何をしたんだ？」と聞いてきた。
『自分を隠す方法を、ちょっと伝授した』と二ヤ継続で言った。
「なるほどな～・・面白い」と少し声色が笑った感じだった。
『さぁ・・決めようか』と笑顔で言った。

「こっちのルールは分かってると思うが、今この世界にいる人間は使えない。
この場所にすぐにこれる人間しか、同行者になれない。
それが絶対的ルールだ・・律子もマリもマリアも使えん状況だな。
いよいよユリカを出すかい・・どうするんだ？」

静かにそう言った、《すぐに行く》と言うユリカの強い波動が来た。
「何なの・・そんなルール、知ってたの？」と蘭が叫んだ。
「小僧・・どうするの？」とマチルダが叫んだ。

『ユリカ、そこにいて・・ユリカがいないと、全員の安全が確保されない。
奴の幼稚な作戦なんだよ、奴はユリカが一番邪魔なんだよ。
俺は一人で大丈夫・・そのつもりで来たから。

これをやらないと、意味が無いんだ・・同行者は必要ない』
私は強く言った、ユリカの了解の波動が悔しさを連れて、強く返ってきた。

「必要ないと強がるか・・存在しないと言えよ。
この世界に一瞬にして飛べる者、それは限られている。
それは・・この世界をずっとイメージしていた者だけ。
律子とマリとマリアに・・そしてユリカだけだ。
そうか、もう一人いるが・・沙紀を危険な事には、誘えんだろ。
もう誰も来れないだろう、私は分かってるんだよ・・残念だな。
さて・・そっちの要求を聞こうか？・・帰り着いた時の要求を。
由美子の完治とかいう、そんな事は無理だぞ」

その声が少し強気になったと感じていた。

『そこまでの贅沢は言わないよ。
由美子のこれからの病との闘いに、あんたが力を貸す。
前向きに全力で取り組む・・そして最後まで諦めない。
そして信じる・・由美子が必要だと、信じて全力を出す。
それだけが、俺の要求だよ』

私は考えていた事を、笑顔で伝えた、その時に感じていた。
「え～しゅ」と大きな声が外から響いた。
マリアが窓の外に浮いていた、天使全開で私を見ていた。
『マリア・・頼んだよ、よろしく』とマリアに強く言った。
「あい、えーしゅ・・もうひとり、いゆよ・・ぷえぜんと、くゆよ」
と最強天使二ヤを私に出した。
「楽しみだよ、マリア・・ありがとね」と私も笑顔になって返した。

「マリア・・由美子を頼むね、スーパーマリアマン」と蘭が満開笑顔で叫んだ。
それを聞いて、マリアは両手を開いて、その全身を見せてくれた。
青い全身タイツに、真赤な靴と長めの手袋。
胸から幼児体形のポッコリお腹にかけて、三角の黄色い縁取りがあり。
その中にMと赤い文字が書かれていた、背中には真赤なマントを背負っていた。

「マリアが一番素敵だよ～」と美由紀が笑顔で叫んで。
「頑張れ・・スーパーマリアマ～ン」とマチルダが笑顔で手を振って、3人で手を振っていた。
マリアは天使全開で頷き、猛スピードで湖の方に飛んで行った。

「残念だな・・あのマリアを使えなくて。
今回は戻れんかもしれんぞ・・その時はお前も、植物人間かもしれんぞ。
良いんだな？・・盤を出すぞ」

静かに言った、その言葉で後ろの3人の緊張が伝わってきた、ユリカの焦りの強い波動が来た。

『やめろよ・・緊張させようと思って、俺は必ず帰るよ・・戦略も策略もある』と二ヤで言って振り向いた。
蘭の真剣な深い瞳が私を見ていた、マチルダも美由紀も真剣だった。
その時、広間の床が2つに割れて、夜街の精巧な模型が上がってきた。

『やっぱりね・・あんたは負けたいんだよ、本当は由美子と生きてみたい。

このイメージの世界のどれもが、優しくそう言ってたよ。
でも信じる事が出来ない、信じたいんだろ・・由美子を。
信じたいんだろ、人間を・・見せてやるよ、愛情ってもんを。
要求を忘れるなよ・・紳士協定だ、俺はあんたを信じてる』

私は笑顔でそう言って、3人を笑顔で見た。
『そんなにシリアスになるなよ～・・夜街の迷路だろ、必ず探し出すよ』と二ヤで3人に言った。
「良かったね・・夜街で」と蘭が満開で微笑んでくれた。
「本当に・・奴は負けたかったんだね」とマチルダが輝く笑顔で言った。
「小僧・・早くな、お腹空いた・・お寿司～」と美由紀がウルで言った。

『了解・・すぐに帰る・・大好きなみんなの場所に、愛する蘭の世界に』と笑顔で返して、模型の前に立った。

「分かってると思うが、ゴングは由美子の鍵を開けた時だ・・3分しかないぞ。
まぁ・・見せてもらうよ・・その時は、約束を守る」

その言葉が強く響いて、私は信じる事が出来た。
その時、マリアの言った、最高のプレゼントが届く。
祭壇の階段に現れたのだ、しゃがんで膝に顔を付けている姿が。
ブロンドの髪で、ヨレヨレのTシャツを着た、その姿が現れた。

3人は凍結していた、私は嬉しくて駆け寄った、ユリカの強烈な喜びの波動が来た。
『ユー・・OK』と笑顔で言って、手を出した。
「来てやったよ・・私が最終兵器だろ」と日本語で言って、ゆっく

りと顔を上げた。
そして私を最強楽園ブルーで見た、私は嬉しくて泣いていた。
『ありがとう、リンダ・・日本語設定で来てくれて』と笑顔で言った。
「泣き虫・・仕方ないだろ～・・時間が無いんだから、言葉がないと」と笑顔で言って、私の手を握り立ち上がった。

「だいたい・・蘭が悪い、この時に登場する設定だったのに。
それにマチルダの魔法使いも、甘すぎる・・まだまだだね～。
美由紀も覚悟が強すぎて、先走りして・・制御不能になりかけるし。
でも・・3人とも・・いいえ、この世界にいる全員。
そして病室にいる人・・由美子を想ってる全ての人。
素敵だった・・嬉しかった・・素敵な物語をありがとう。
私がリンダ・・最強の戦士・・必ず連れて帰るよ。
出来の悪い・・愛すべき、最後の挑戦者を。
最後の挑戦者として・・約束するよ」

リンダは笑顔で3人を見て言った、3人の最高の笑顔が咲いた。
ユリカの強烈な波動が来た、リンダは波動を浴びていた。

「リンダ・・ごめんね～」と蘭が満開ウルで言って。
「反省してます～」とマチルダが輝きウルで言って。
「ばれました～・・すいませ～ん」と美由紀が楽しそうなウルで言った。

「ユリカさん・・3人に、後できつ～く注意して下さい」とリンダが二ヤで言った。
強い波動が《了解》と言って、爽やか最強二ヤを示していた。
3人はウルウルで、波動の言葉を聞いていた。

その少し前、ハルカは必死にマリアに手を振っていた。
マリアはハルカを見つけ、最強天使二ヤを出した。
「マリア・・その二ヤはやめて・・少し待っててね」とハルカがウルを出して潜って行った。

「来たよ・・人魚姫」と千鶴が言って、全員が天井を見上げた。
ハルカがサインを出した、【準備】【ＯＫ？】とＰＧのサインを出した。
【ＯＫ】と全員で笑顔で返した、そしてハルカを見送った。

「じゃあ・・帰ろうかね」と律子が笑顔で言った、全員が笑顔で頷いた。
「土曜日だから、早く帰るよ・・由美子と一緒に」とリアンが大声で言った。
「はい」と全員が心を１つにして、返事をした。

リアンは由美子の手錠に鍵を挿し、回した。
【カチャッ】と音がして、手錠が開いた。
由美子の前の哲夫の背中に、リアンとミコトが由美子を抱いて乗せた。
哲夫が由美子の両手を持って、首に巻かせ、体制を立て直した。

その時に響き渡る、マリアの叫びが響いてきた。
「かえるよ～」と大きな声と同時に、強烈な爆風が天井のガラスに当たり。
ガラスが吹き飛んで、大量の水が入ってきた。
哲夫の体をヒトミが笑顔で抱きしめた、哲夫も笑顔でヒトミを見た。
その哲夫をヒトミごと、リアンとミコトと千鶴で持ち上げた。
その周りを、全員で囲んでいた。

そして3人娘を、四季の４人で囲み抱き上げていた。
全員がずぶ濡れで、水圧と戦っていた。

「カスミまだか？」とリアンが叫んだ。
「まだ・・見えない」とカスミが上を睨みながら言った。
頭上の水は、風呂の栓を抜いたように、回転しながら流れ込んでくる。
そして、青空が見えた・・光が全員を包んだ。

「ＧＯ・・飛べ～」とカスミが叫んだ。
ヒトミはゆっくりと浮いて、少しずつ上がっていった。
その時には、全員の膝まで水が溜まってきていた。

「ありがとう～・・ヒトミちゃん、ありがとう～」とエミが泣きながら叫んだ。
全員がハッとして、ヒトミを見た、ヒトミは優しい笑顔で全員を見ていた。
「ヒトミ～」とカスミが叫んだ時に、大量の水が襲ってきて、全員が流された。

ヒトミが必死に湖の上に浮いていた、そして塔を見た。
絶望しそうなほど、遠かった。
「哲夫・・やってみるけど、私の限界の場所から走ってね」とヒトミが言った。
「えっ！」と哲夫が返事した時に、哲夫のＴシャツの襟を、小さな手が掴んだ。
「マリアちゃん！」とヒトミが叫んだ。
「あい・・ひとみ」と天使全開で言って、猛烈な力で引かれた。
一瞬で塔の前に着き、マリアが降ろした。

地表は大地震のように揺れていて、崩れてくる塔の壁が降っていた。
哲夫は木の扉を開けて、由美子を背負って入った。

「哲夫・・病室に帰って、お母さんに叫んでって言いなさい。
よく頑張ったね、哲夫・・強くなったね。
優しい人になったね・・哲夫」

そう言って、ヒトミは扉を閉めた。
「ヒトミ〜」と哲夫が叫んだ。
叫んだ哲夫は目の前には、病室のベッドに眠る由美子がいた。
「哲夫！」とマキが叫んで、哲夫は我に返り振り向いた。

「お母さん・・由美子に、叫んで」と哲夫が言った。

ヒトミは扉を閉めて、笑顔でマリアを見た、マリアも天使全開でヒトミに抱かれた。
そしてマリアは上に向かいゆっくりと飛んだ、最上階の窓際まで上がった。

その時、蘭とマチルダと美由紀は、私とリンダを見送って。
大きく揺れる塔の床の上に座り、蘭とマチルダで、美由紀の車椅子を支えていた。

「小僧は大丈夫です・・リンダさんとなら、必ず帰ります。
蘭さん・・ありがとう、本当に嬉しかった。
あなたがベンチで声をかけたのを、泣きながら見てました。
そして、マチルダさん・・思い詰めないで、あなたの心は必ず届きます。
これからも、真実を伝えて下さい・・リンダさんと共に。
そして美由紀・・頑張ってるね、いつも見てるよ。

私は美由紀が誇りだよ・・ありがとう、美由紀」

ヒトミはそう言って、マリアを美由紀に渡した。
「ヒトミ・・私」とまで美由紀は言ったが、涙で次が出なかった。
「美由紀・・また会えるよ・・少しだけ、さようなら」とヒトミが美由紀に言った時に。
床が抜けて、４人が落ちた、ヒトミだけ浮きながら笑顔を向けた。
「ヒトミ～」と３人が叫んだ時に、全員が病室に戻った。

ＰＧのフロアーでは、和尚が目を閉じていた。
「久美子・・お願いする」と和尚が笑顔で、ピアノに座る久美子に言った。
久美子も笑顔で頷いて、サマータイムを弾いた、何度も何度も繰り返し。

「ヒトミ～」と叫んだカスミが目を開けて、その場に崩れて泣いた。
そこに、ホノカとリョウが来て、３人で抱き合って泣いた。
リアンもミコトも千鶴も戻った、四季が戻り、レンもハルカも戻った。
全員が抱き合って、笑顔で泣いていた。
そして３人娘が戻って、サクラさんに抱かれて泣いていた。

「シズカ・・残りは？」と和尚が言った。
「大ママとマリア！」とシズカが返した。
「マリアは良いが・・誰か大ママを見たか？」と和尚が聞いた。

「あの～・・絶対に黙ってろって、言われたんですけど～」とサクラさんが手を上げた。
「緊急事態じゃ・・言いなさい」と和尚が二ヤで言った。
「大ママ・・・・ジンベイザメになってました」とサクラさんが二

ヤで言った。
フロアーが一瞬静寂に包まれ、爆笑が起こった。

「それで、お母さんは？」とエミが二ヤで聞いた。
「私とアイは・・・・・マンタちゃん」とサクラさんがウルで言って、アイさんもウルしていた。
それを聞いて、大爆笑になった時。
「ああ～・・水が無くなる～」と叫んで大ママが戻った。
その声で静寂が戻り、全員が二ヤで大ママを見た。

「大ママ・・どこでさぼってたんですか？・・水が無くなるって？」とリアンが極炎ニカで言った。
「皆のその笑顔は・・知ってるんだね・・仕方ないだろ、エースの話を思い出したんだから」と大ママが笑って、全員で笑った。

その時マリがブルッと震えて、マリが抱くマリアが目を開けた。
「まり」とマリアがマリの両頬に手を当てて、天使全開を出した。
マリはマリアを見て、微笑を出した。
「和尚・・全員帰還」とシズカが言った。
「えーしゅ・・えーしゅまだ」とマリアが久美子に言った。
久美子は笑顔でマリアに頷いて、サマータイムを弾いていた。

その瞬間、マリがシズカの腕を掴んで、メモ用紙に書いた。
【サキニ　ミギ】と書いて、シズカに見せた。
シズカは笑顔で頷いて、電話に走った。

蘭とマチルダと美由紀は。
「ヒトミ～」と3人とも叫んで、病室に戻った。
美由紀はその場で、マチルダと抱き合って泣いた。
蘭は私を後ろから抱きしめて泣いていた、ユリカが号泣しながらも

目を閉じていた。
呆然とするユリさんと北斗に、戻った母が言った。
「北斗・・急いで・・多分、小僧の最後の作戦は・・由美子です」
と母が北斗に言った。
北斗は由美子の右手を握り、言葉と温度で伝えた。
「起きなさい、由美子・・いつまで寝てるの、朝ですよ」と叫んだ、
由美子の温度が右回りで返ってきた。
北斗は必死に涙をこらえて。
「お帰り・・由美子」と笑顔で言った、全員に笑顔が戻った。

その時、婦長が慌てて入ってきて、沙紀を見て言った。
「沙紀ちゃん・・右だって、マリちゃんから」と婦長が沙紀に言った。
沙紀は頷いて、スケッチブックを開いた。
開いたページに3つの扉が描いてあり、右側の扉を赤い丸で囲んだ。
そして由美子に駆け寄った、北斗が笑顔で沙紀に由美子の右手を譲った。
沙紀は由美子の手を握り、絵を見せて何かを伝えた。

私とリンダは、模型の中の、ユリカの店の前の路地に飛ばされていた。
「作戦はあるんでしょ？」と腕を組んだリンダが笑顔で言った。
『リンダが来たから、確信したよ・・あそこだろ』と笑顔で返した。
「あそこだね、久美子の音が聞こえるね・・じゃあ蘭さんだったら？」とリンダが歩きながら笑顔で聞いた。
『そりゃ～・・ベンチだろうね』と笑顔で返した。

「なるほどね～・・やっぱり、奴は負けを望んでたのね」とリンダが笑った。

『実はね・・俺、ヒトミの時に、塔の最上階に強引に連れて行かれた。
そしてこれと同じゲームをやった・・それに最後に負けて、気を失った。
後で考えたんだよ・・それでも奴は時間を与え、最後はお袋が戻した。
どうしてだろうってね・・そしたら簡単な答えだった。
全力で生きてみたいんだって、ヒトミと生きたいんだって。
そう思ってるってね・・だから最後のこの試験。
単純明快なんだよ・・それを信じれば良いんだ。
同行者により、内容は変わる・・なぜなら、その相手との思い出だから。
結局・・問題は最後の3枚の扉・・その選択だけなんだ。
俺の作戦はそこだけ・・最後の選択の、１００％の正解を導き出す。
その事だけを考えたんだ・・やっぱり、ここだね。
サマータイムが聞こえてるね』

私は水槽の喫茶店の前で、リンダのブルーに笑顔で言った。

「素敵な解答ね・・ありがとう、楽しかったよ。
必ずまた会いに来るから・・私の事も忘れるなよ。
ここでお別れだね・・最後に私を戻してね。
あの言葉と、忘れない事を誓う・・誓いの儀式で」

リンダは美しく微笑んで、楽園ブルーを閉じた。
『Ｉ　Ｌｏｖｅ　Ｒｉｎｄａ』と私は言って、唇を合わせた、強く優しい波動が包んでくれた。
私が瞳を開けると、リンダはいなかった。

『ユリカ・・ありがとう・・全てはユリカの存在が有るから、出来たよ。
もう良いよ、今から届かない世界に入るね・・すぐに帰るよ、ユリカ』

私は笑顔で、声に出して言った。
《待ってるね》とユリカの優しく強い波動が来た。
私は笑顔で振り向いて、水槽の喫茶店のドアを押した。
薄暗い店内に入ると、3つの扉が有った。
久美子のサマータイムは、全体から響いていた。
《やっぱりな・・最後の扉だけは本気だったな、久美子の音じゃ分からなかった》と思っていた。

私は右手を床に当てて、目を閉じて伝えた。。
《由美子・・お部屋に帰ったかな?》と伝えた。
《うん・・小僧ちゃん・・右の扉だよ》と由美子が伝えてきた。
《お帰り、由美子・・俺も帰るね》と返した。
《うん・・まってるね、エース》と返してきた、私は笑顔で頷いた。

『俺はあんたを信じてるよ・・約束は守るとね』と言葉に出して、右の扉を開けて入った。

《お帰り・・エース》と右手に伝わってきた。
『ただいま由美子・・俺は勝ったよ』と目を開けて、ベッドに眠る由美子に伝えた。
蘭が後ろから強く抱いてくれた、私は蘭の温度を感じていた。
《ありがとう・・エース》と由美子が返してきた。
『由美子、疲れたろ・・少しお休み』と笑顔で言った。
由美子の返事を聞いて、由美子の左手を胸の上に置いた。

『みなさん、楽しめましたか？』と笑顔で言った。
「面白すぎだよ・・心配させやがって」と蘭が私の耳元に優しく言った。
「エース・・ありがとう」と北斗が強く抱いてくれた、蘭が体を離し満開で見ていた。
『北斗・・お礼はいらないよ、由美子にもらったから』と笑顔で言って。
『ユリさん、ＰＧに連絡して下さい・・由美子は戻ったって』と薔薇の笑顔に笑顔で言った。
「そうですね・・報告してきますね」と薔薇で微笑んだ。

『哲夫・・よくやったな、お前に小僧と呼ぶ権利を授与する』と右手を出して、笑顔で言った。
「守護神がいたからね・・ありがとう、小僧」と哲夫が笑顔で、右手で強く握ってきた。

私は沙紀を抱き上げて、笑顔で沙紀の頬にキスをした。
『沙紀・・俺は沙紀に会えて、嬉しいよ』と沙紀に言った。
《沙紀も小僧ちゃんに会えて、嬉しいよ》と沙紀が返してきた。

ユリさんが電話で報告し、マダムが全員の前に立って、拡声器を持った。
「由美子もエースも帰ってきた・・全員帰還した」とマダムが笑顔で言った。
全員が笑顔で立ち上がって、拍手をで喜びを表現した。
外は雲１つ無い、青空が広がっていた。

『じゃあ、ＰＧに帰ろう・・お腹空いて、ウル状態の娘がいるから』と私が笑顔で言って、全員が笑顔で頷いた。

廊下に出ると、若いナースが立っていて、右手を上げた。
私も右手を上げて、ハイタッチをした。
「トータルでも勝ったの？」とナースが笑顔で聞いた。
『これからだよ・・由美子が自立するまで、ナースもトータルで勝つと信じてる』と笑顔で返した。
「了解・・また明日」と笑顔を返して、由美子の病室に入って行った。

外に出ると、台風一過の晴天だった。
西風が爽やかに吹いていた、遥か霧島の峰から。
《秋が来た》と思っていた。

「風が変わったね・・ヒトミの伝言・・風が変わって、次の段階が始まる」と美由紀が空を見ながら言った。
「よし・・やるよ～・・やってやる・・ヒトミが見てるから」と蘭が空に向かい強く言って。
「私も・・もう迷わない・・ヒトミが信じてくれるから」とマチルダが空に向かい微笑んだ。

秋風に乗り、夏が手を振っていた。
《少しだけ、さようなら》と言うように、水平線の彼方に背を向けた。
どこかの国に、熱を届けるために・・旅立って行った。
私の１３歳の・・忘れえぬ、夏物語は終わった。
しかしその瞬間には、冬物語がスタートしていた。
寒さを凌駕して燃える、最高温度・・群雄割拠の・・冬物語が。

この物語を書き始めたのは、エミの問いかけが始まりでした。
「あの時は、どんな気持ちで過ごしてたの？・・私以外に対する気持ちが聞きたいな」と現在のエミが問いかけた。
『言葉じゃ照れるから・・ブログでも作って載せようか？』と返すと。
「小説にして・・仮名で、少し作り話風で・・それが良い」とエミが笑顔で言いました。
『了解』と受けて、その時点で・・結末の場面は決めていました。

しかし大震災があり、私も想う事有って・・夏物語の結末をここにしました。
本来ならこの後に・・蘭との今を書こうと思っていました。
【月光を追いかけて】・・その題名に対する結末を。

しかし、ある女性の言葉で、東京物語を書くことを決めました。
だから物語自体を、終了させられませんでした。

どこか非現実的で、中途半端な夏物語の終了。
自分でも納得が出来ない部分も多いですが、伝えたい気持ちに嘘はありません。
これ以降・・東京物語に入るまでの４年半。
その期間での大切な部分を、この夏物語の後書きで加えます。

幻影の塔・・私は今でもリアルに思い出す。

あの響いてきた声を・・忘れる事が出来ないでいた。

その声の正体を感じるのは・・赤の女・・その秘めた熱。

美しい事に、苦しみ続ける・・理解不能の感性。

その姿が示す・・人間の本来の姿・・原点を求め続ける強い意志。

散ることを望み咲いた・・真赤な一輪の薔薇。

ローズの生き方の中に・・あの声が・・木霊していた。

回想録　？　【華恋】

風の変化で季節を移ろいを知る、雲の流れで、時の流れを感じる。
繰り返す季節を感じるとき、喜びが寄り添っている。

病院の駐車場に全員で出て、ユリカの車に母とユリさんが乗って。
蘭の車にマキと美由紀と私が乗って、ニコちゃんシオンがマチルダと哲夫を乗せてＰＧに向かった。
ＰＧに入って、全員とハイタッチをして、検討を称え合った。

ＰＧでワイワイと食事をした、思い出話で盛り上がって。
ホノカとハルカとヨーコが終始、ウルを出していた。

「ハルカとヨーコが、一番可愛かったよ」と蘭が満開二ヤで言った。
「えっ！・・見られてました～」とハルカがウルで言って、ヨーコと2人で私を見た。
『分かってるよ・・称号考えるから』と二ヤで言った。
「いらないから・・絶対にいらない」とハルカが言って、ヨーコが何度も頷いた。
爆笑の中、私は二ヤを出していた。

「でも、不思議だよね～。
　知ってたのに、エースは変身してなかった。
　絶対派手なヒーローに変身しそうだけど」

マチルダが二ヤで言った。
「してたよね～」とユリカが私に、爽やか二ヤで言って。
「してましたね～」と美由紀がニヤで追いかけてきた。
「うっそ・・誰に？」と蘭が驚いて美由紀を見た。

「小僧にとって、最強のヒーローです・・口数が少なかったでしょ」と美由紀が二ヤで言った。
「私も最初驚いたよ・・そして少し感動した、誰よりもそれを選ぶ事に」とユリカが微笑んだ。
「豊か～！・・そうだったのね」と蘭が満開で微笑んだ。
「蘭・・残念だったね、ユリ姉さんに変身してれば・・凄く参考になったのにね」とユリカが二ヤで言った。
「あっ！・・しまった～」と蘭が満開で言った、女性達が笑顔で見ていた。

「でもマチルダ、残念だね・・私は本当に残念だよ」と蘭がマチルダに言った。
「そうですね～・・ユリカ姉さんの波動、感じなくなりましたね」とマチルダが笑顔で返した。
「感じてたんですね・・素敵な経験でしたね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

「あれが、ユリカちゃんの波動だったの・・凄く優しかった～」とエミが笑顔で言った、ユリカが嬉しそうな笑顔で返した。
「うん・・そしてルーシーが優しかった・・また会いたいな～」とミサが言って。
「でもいるから良いよね・・美由紀ちゃんの中に」とレイカが笑顔で返して、ミサが頷いた。
美由紀がポロポロと泣いて、シオンが優しく抱いていた。

「哲夫君・・どうしてルーシーなの？」とユリさんが笑顔で聞いた。
「ウサギのチャッピーの、双子の妹です・・ルーシーは凄く長生きしたから」と哲夫が笑顔で返した。

「哲夫・・夜のバイトをする時は、必ず魅宴においでよ」と大ママが微笑んだ。
「はい・・よろしくお願いします」と哲夫が笑顔で返した。
暖かい何かに包まれて、全員笑顔で食事をした。

食事が終わり、解散して。
ユリカと蘭とマチルダと美由紀と5人で、ユリカの部屋に帰り。
夕方まで爆睡して、ＰＧに出勤した。
ユリさんが私と美由紀の夕食に、高級握り寿司をご馳走してくれて、
美由紀がニコニコで食べた。

美由紀はその夜まで、ユリカの部屋に泊まり。
リアンと銀河とセリカが来て、大いに盛り上がった。
リビングは朝方まで、笑い声が響いていた。
翌日、ケンメリでマチルダを空港に送った。
見送る私が泣いたのを見て、蘭が恋が浦に車を向けた。

恋が浦の帰り、４人で食事をして。
美由紀を家に送り、ユリカに手を振って別れて。
私は久々に蘭に添い寝をして、午後８時には眠りに落ちていた。

翌日の月曜、北斗を魅宴に連れて行き、ジンに会いに行った。
翌日の面接に、同行してもらう約束を取り付けた。

そして翌日の火曜の夜、私はジンとドン小林を訪ねた。
ドンのキャバレーの事務所に案内された。

「すまんね・・すぐに来るよ」とドンが笑顔で言った。
その時に扉が開き、細身の女性が入ってきた。

私は固まって見ていた、振り向いて顔を見せた時に。
微かに微笑んで頭を下げた、その時に振り撒いた、誘惑の怪しい何かを。
そして顔を上げた、幼さの残る美少女だった。
薄化粧に映える目が印象的で、肌の張りが若さを示した。
そして微笑む時に、圧倒的な何かが強く誘うのだ。
不思議な魅力を、最大限に引き出すのが、微かな微笑みだっだ。
その微かさが、幸薄さを感じさせ・・守りたくなる。
今まで苦労したねと、見た目だけで、そんな台詞を、言ってしまいそうになる。
男の琴線に触れる、強い何かを内包していた。

「水商売を続けたいんだね？」とジンが笑顔で言った。
「はい・・自信が持てる仕事は、これしか知らないので」と笑顔で返してきた。
その笑顔で感じた、強引に作り出してると。
「小林さんの店で、色々あったなら・・難しい事は分かってるね？」とジンが優しく聞いた。
「はい・・色々言われたり、見られたりするのは・・覚悟してます」と真顔で答えた。
「了解・・俺の方はＯＫだけど・・問題は夜街のエースだよ」とジンが笑顔で言った。
女性はその言葉に微笑んで私を見た、私は私を映している瞳を見ていた。

『条件は・・リハビリを受けるのなら』と私は二ヤで言った。
「何のリハビリ？」と女性が二ヤで返してきた。
『水商売からだよね・・その作り笑い、その地点からのリハビリ』と笑顔で言った。
「なるほど～・・最後の挑戦者ね～」と楽しそうに笑った。

『はい、ストップ・・それが作り笑い、それを抹消する』と真顔で言った。
「そうなったら・・私は、水商売出来なくなるかもよ」と女性も真顔で返してきた。
『俺はその方が良いよ・・そうなったら、あなたが幸せになれるから。
俺はそれで良い、俺はロボットを派遣するんじゃない。
生身の女性を派遣するんだ、機械的な笑顔はいらない。
無理して仕事する人は、どっかで専属契約させる。
俺が派遣会社で欲しいのは・・圧倒的個性か、完全な経験者かだよ。
その才能を信じて挑むなら、圧倒的個性として、2号登録するよ』
私は笑顔で言った、女性の微かな微笑が出た。
「リハビリ終了の、条件を教えて？」と微笑んだ。
『過去との和解・・そして・・これから、今からだけで生きる事』と真顔で言った。
「よろしくお願いね・・やってみるよ、私にはこれしか無いから」と笑顔で言った。
『了解・・明日6時半にPGに来て・・それから暫くは、俺のアシスタント』と二ヤで言った。
「了解・・付き人ね」と笑顔で返された。
『いや・・秘書』と二ヤで返した。
「危ない響きが好きね～」と笑顔で返された、私も二ヤで頷いた。
「名前はどうしよう？」と女性が言った。
「生まれ変るんだから・・エース、命名しろよ」とジンが笑顔で言った。

『じゃあ、俺の願望で・・１９歳のトップに肩を並べたいのなら。
その幸薄さを武器にして、幸せを手に入れろ。
幸薄い影を、逆の手法で強調させる、言葉の響きと文字のイメージで惑わす。
華のある恋で・・華恋（カレン）でどう？』

私は頭の中の源氏名リストから、お気に入りの名前を言った。
「サンキュウ～・・素敵じゃない」とカレンが笑顔で言った。
『そうだろ～・・お気に入りをあげるよ』と笑顔で返した。

笑顔のドン小林にお礼を言って、カレンと別れて、ジンと歩いていた。
「しかし、凄いの見つけるよな～」とジンが笑顔で言った。
『ジン・・カレンの給料なんだけど』とジンを見た。
「大丈夫・・秘書の時の給料は、俺が出すよ・・そんなに長期間じゃないだろ」とジンが笑顔で言った。
『うん・・一週間で大丈夫』と二ヤで返した。
「了解・・今後ともよろしく」と言ったジンと、ホストクラブの前で別れた。

私がＰＧの裏階段の路地に入ると、カレンが立っていた。
『どうした？・・カレン』と二ヤで言った。
「無給で良いから・・今からＰＧ見せて」と腕を組んできた。
『痩せてる割に大きいね』と二ヤで言って、ニヤのカレンとＰＧに入った。
マダムと松さんに、カレンを紹介して、指定席に向かった。
カレンを私の席に座らせて、満席状態のフロアーを見せた。

「全然違う・・別世界だ、凄い」とカレンは呟いて、フロアーを見ていた。

９人衆の視線が強かった、そしてユリさんがカレンを見ていた。
《ユリカも見てね、よろしく》と心に囁いて、優しい波動を感じた。
私は幻影の塔にいた時のようには、波動の言葉が分からなくなって、少し寂しい気持ちでいた。

「まさか・・挑戦者かな？」とカスミがカレンに微笑んだ。
「はい、派遣２号を目指してます・・カレンです」と笑顔で頭を下げた。
「まさか・・１９歳？」とカスミが笑顔で聞いた。
「はい、正確にはもうすぐ１９歳です」とカレンは笑顔で返していた。
「頑張ってね」とカレンに笑顔で言って、私を見て最強不敵を出した。

私はシオンとマキをカレンに紹介して、カレンを誘って通りに出た。
カレンはニヤで腕を組んできた。
『秘書なのに～』とニヤでカレンを見た。
「小林さん所の悪い噂を払拭してよ・・エースが認めたってね」とカレンが笑顔で言った。
『カレンは凄いね、頭の回転が速いし・・分析力もあるね』と笑顔で返した。
「全能力を使わないと、ＰＧでは存在感が無いでしょ・・それにシオンに、肩を並べられない」とカレンが前を見て言った。

本当に可愛かった、制服を着れば、充分女子高生で通用した。
美少女という表現がぴったりで、それに幸薄さがプラスされるのだ。
『破壊力抜群だよ・・カレン』と笑顔で言った。
「リハビリ、よろしく・・期待に応えてみせるから」と笑顔で返された。
私は久々に、ドキッとした・・私の持つ女性の免疫の中には無い、

不思議な魅力だった。
私はカレンを連れて、ゴールドを受付裏から入り、フロアー裏からセリカを見せた。
「く～～・・凄いな～、シオンとセリカ・・まさに両巨頭だね」とセリカを見ながら微笑んだ。
『割って入れ、カレン・・3大巨頭に成ってみせて』と二ヤで言った。
「信じてるの？・・私を信じてくれるの？」とカレンが前を見て静かに言った、少し寂しげな瞳だった。

『なぁ、カレン・・俺は信じられない相手を、雇ったりしない。
そして絶対に、源氏名なんて付けない。
俺が源氏名を付けたって事は、夜街に存在する限り。
その相手を見続けるって事だよ・・カレン挑め、強烈な個性の2人に。
カレンなら出来ると信じてる、2人に肩を並べ、謳歌しろ・・大切な季節を。
これから、今からで生きろ・・過去を捨てろ、カレン。
その才能を使い切れ・・カレンなら狙えると思ってる。
夜街トップでも狙えると・・嘘無く思ってるよ』

私も前を見ながら、カレンの手を握り伝えた。

「うん・・探してみたいって・・ずっと思ってた。
でも・・私なんかが、そんな事を望んだら駄目なんだと思ってた。
良いんだね・・私でも、それを望んで。
良いんだね・・それを目指して、それを目標にして。
やってみるよ・・私はカレン・・夜のエースが命名してくれた。
エースだけは、私を期待をしてくれるから」

カレンは最後に私を見て微笑んだ、私も笑顔で頷いた。
「エース・・ゴールドはいつでも良いよ・・立ち聞きしたよ、カレン・・待ってるね」と千鶴が微笑んだ。
「よろしくお願いします」とカレンが笑顔で頭を下げた。

ゴールドを出て、私はカレンをタクシーに乗せた。
『明日から、忙しいから・・今夜はゆっくりお休み』と笑顔で言った。
「ありがとう・・明日から、よろしくね」と微笑んだカレンを、手を振って見送った。

「楽しいね～、この街は・・さすが小林さん、凄い原石だね」とユリカが爽やかに微笑んだ。
『面白いね、カレン・・ジンの派遣会社の、核になるとか？』と笑顔で言って、ユリカを抱き上げた。
「わからな～い・・私はマリじゃないから～」とユリカが爽やか二ヤで言って、瞳を閉じた。
私は爽やかな風に背中を押されて、最上階まで登った。

カレンは父子家庭で育った、母親はカレンが2歳の時に亡くなった。
父一人、子一人で生活をしていた、父親は真面目な男で、必死にカレンを育てた。
カレンも父を助け、幼い頃から家事をしていた。
その父親が病に倒れたのが、カレンが高校3年の時。
父親はカレンの看病の甲斐も無く、カレンの高校卒業の、3日前に亡くなった。
カレンは喪失感を拭い切れずに、決まっていた就職先に、出社する事が出来なかった。
そんなカレンを見て、ドンの店でバイトしていた先輩いが、カレン

を誘ったのだ。

カレンはそこで初めて気付く、カレンは高校まで真面目だった。
父の助けをしていたので、あまり友達とも遊べなかった。
カレンは知らなかったのだ、自分の容姿が秀でている事を。
トップクラスの美貌を、普通クラスだと思っていた。

そして迷宮に入る、カレンは男相手の仕事で、迷ってしまうのだ。
それまでのカレンにとって、大人の男＝父であった。
そして父＝愛する者であり、尊敬する者だった。
夜街の多くの女性と、その部分では真逆だった。
夜の女性は、家庭環境に悩んだ者が多かった。
その中でも、父親との確執がある者が多かったのだ。

カレンは現実を見せられ、悩み苦しんだ。
「それまでの自分を、否定された気分だった」とカレンが言った。
だから女性達と対立し、人間関係が上手く作れなかったと。
そして作り笑いを覚え、自分を隠して、生活の為だけに仕事をしていた。

私はそれを聞いて、カレンを病院の3人に会わせた。
それ以降、カレンは自分の意志で、昼の暇な時間に、病院を尋ねていた。
カレンは芯の優しい女だった、父親を助け続けた事で、手に入れていたのだろう。
本当の優しさを、さりげなく出せる女性だったのだ。

カレンの変化はそこから始まる、そしてマキとヨーコに触れて開花する。
両親がいない、過酷な少期を過ごした2人を感じ、自分の甘さを知

る。

圧倒的ともいえる、美少女という憧れの美貌。
それに加わる、幸薄い影・・そして明るい会話。
その明るさまでもが、けなげに思える。
男心の殺傷能力１００％、一撃必殺の微かな微笑み。

俺が行って・・指名して応援してあげよう。
カレン・・疲れてないかな～・・無理してないかな～・・顔見に行こう。
これがカレンの指名客の気持ちだった、カレンはこれで登る・・トップを目指して。
シオンにもセリカにも銀河でも持てなかった、幸薄いという罠。
相手のイメージを操る、強い心・・騙しているのではない。
男がそれを望んで作り出した、勝手なイメージ・・まさにアイドルのような存在。

【儚さの誘惑　華恋】・・私はカレンに、この称号を贈った。
東京ＰＧ開店の時、空港にセリカを見送りに来て泣いていた。
その頃、ジンの派遣会社の揺るぎない中心だった、カレンに感謝を込めて贈ったのだ。

カレンが見せた世界、それは優しさに包まれていた。
肉体関係を目当てに誘われる事が、他の女性より圧倒的に少なかった。
その壊れやすさに、男は手を出す気にもならなかったのだろう。
その心が、頑丈な見えないガラスに囲まれている事を、見抜けなかった。

沙紀が退院して、最初にＰＧに送られてきた水彩画。

西橘通りに、カレンが立っていて、そして反対側に背中を向けるスーツの男がいる。
その男は賞状を読んでいる、カレンは美しい真顔で男を見ている。
西橘名物の柳の木が、全て桜の木になっていて、満開の桜が花びらを散らせている。
桜吹雪の中に立つ2人は、お互いを想っている事が伝わってくるようで。
その賞状が何か分かった・・卒業証書なのだ。
愛娘の高校を卒業する姿を見れなかった父が、その愛娘に卒業証書を読んでいる。
父親からの卒業を認める、卒業証書を今渡そうとしている。
美少女の顔には、幸薄さの影も無く・・儚さを探したが、存在しなかった。

「サキーー」と叫んで、カレンは震えながら号泣した。

私には分かっていた、沙紀がどうして、退院後最初の絵をこの絵にしたのか。
その時の沙紀は知っていた、嬉しくて流す涙の存在を。
でもカレンのそれは、見たくなかったのだ。
沙紀にとって、カレンは友達だったから、友達の泣き顔は見たくなかったのだろう。

カレンは33歳で結婚引退するまで、ハルカとミサキを引っ張り続け。
マキとヨーコを支え続けて、トップを作り出した。

「私は誰からそう言われても、自分で自分の事を・・女帝とは思えない。
私の中で理想の女帝は、私ではないから。

私の理想の女帝は・・常にカレン姉さんです。
その優しさの、その温もりの世界を・・いつの日か、覗いてみたい。
そしていつの日か・・私も・・。
私も父に卒業証書を・・授与される人間になりたいと思っています」

カレンの送別会で、当時【右大臣】と呼ばれていたハルカが強く言った。

カレンは泣きながら、笑顔でハルカを見ていた。

その笑顔には、幸薄さも儚さも無く・・幸せを映していた。

一度も散ることが無かった・・儚さの誘惑。

作り出すのは、優しさの世界・・イメージの描かす者・・華恋。

回想録　？　【沙織＆理沙】

順調な時、流れが自分に向いてる時こそ、準備しよう。
悪い流れをイメージしておこう、本当の楽しみは、悪い流れの中にある。
それを乗り越える時の、必死さの中に有るのだ・・【楽しみ】の本質が。

カレンを見送り、ユリカにユリカスペシャルをして。
ＰＧ終了後、蘭と手を繋ぎ帰宅して、添い寝しながら眠りに落ちた。
翌日の水曜日は、学校の水泳大会だった。

「小僧・・水泳大会、何に出るの？」と登校しながら、美由紀が笑顔で聞いた。
『俺は・・誰も出ないから、背泳ぎと・・クラス対抗リレー』と笑顔で返した。
「ほほ～・・Ｃ組のニョンが、リレーにだけは出るらしいよ」と美由紀が二ヤで言った。
『それは卑怯だ・・強化選手の、水泳部員がね～』と二ヤで返した。
「恥かかせてやるって、瞳に出てるぞ」と美由紀が笑った。
『美由紀・・いつから瞳を、読み取れるようになったんだ？』と二ヤで返して、教室に入った。

教室に入ると、沙織が机に顔を伏せて泣いていた。
「どーしたの？・・沙織・・ねぇ、沙織」と美由紀が慌てて、沙織の横に行った。
「小僧・・ちょっと」と悪の義弘に呼ばれた。
私の後ろを美由紀が付いて来た、義弘は美由紀を見て微妙な笑顔を向けた。

私達は、義弘の後を音楽室に入った、ノリ番長と3年の悪に、バルタン達女悪が１０人以上いた。

『何だ～・・何がどうして、3年の悪と沙織の涙が関係するんだ？』
私はノリを見ながら言った。
「小僧・・沙織の兄貴知ってるよな？」とノリが言った。
『もちろん、ユウリ君』と真顔で返した。
「昨日・・ユウリ先輩がバイク事故を起こしたんだ、危険な状態らしい」とノリが真剣に言った。
『なぁ番長、隠すなよ・・事故原因は？』とノリに迫った。
「暴走族に煽られたらしい・・それを見た奴がいる」とノリが言った。
『まさか・・豊兄さんは知ってるのか？』と慌てて聞いた。
「知ってると思う・・豊先輩とユウリ先輩は、仲が良いから」とノリが答えた。
『病院は？』とノリに聞いた。
「〇病院に、救急車で運ばれたらしい」とバルタンが言った。

『回りくどいんだよ、了解。
美由紀、俺と沙織は休みだって、清次郎に上手く言っといて。
義弘・・お前が背泳ぎと、リレーに出ろよ』

私は美由紀が頷くのと、義弘がウルで頷くのを見て、教室に戻った。
そして沙織を抱き上げた、沙織は驚いて私を見た。

「小僧」と沙織が言った、目に涙を溜めて不安が出ていた。
『沙織・・可愛い顔が台無しだろ、病院行くぞ・・俺はフリーパスだから』と笑顔で言った。
「小僧・・ありがとう」と沙織が少し笑顔になった。
「そうですか～・・小僧と沙織は休みですか、沙織は良いとしても・

・小僧は確認が必要ですかね～」と教壇で、美由紀と話す清次郎の声がした。

私は清次郎に笑顔で頭を下げて、沙織を抱いたまま教室を出た。
私は大通りで沙織を降ろし、タクシーに乗った。
沙織の手を握って、病院を目指した。

私と沙織は不思議な縁で結ばれていた、沙織は４月３日生まれ。
私の産まれた翌日に、同じ病院で産まれた。
私の一枚だけある、新生児室の色褪せた写真には。
猿のような私の隣に、髪の毛がふさふさの、可愛い沙織が泣いている。

そして幼稚園も、年少から同じクラスで、小学校も３年から６年まで同じクラスだった。
まるで双子のような感覚で、幼少期は私と沙織とチサで遊んでいた。
私の瞳での会話を、最初に気付いたのも、沙織だった。
明るく元気なお転婆娘で、常に笑顔で・・そして私に一度も、嘘をついた事が無かった。
１６５話の外伝で、高校の下校時に私を強引に止めて、回復してくれたのも沙織だった。
幼稚園から高校まで同じ学校に通い、そして大学で夜の女になる。
その進路を決定する事件が、今幕を上げたのだ。

私は病院に入り、顔馴染みの外科医に、ユウリ君の状況を聞いた。
そして外科の集中治療室を目指した、治療室の前の長椅子に、両親と祖母らしき人の顔が見えた。

『美代子・・沙織を側にいさせて、沙織には知る権利がある。
沙織には心配する権利がある・・兄を愛してるんだから』

私は母親の目を見て、父親の顔を見た。
「小僧・・ありがとな、そうだよな」と父親が言った。
私は沙織を長椅子の、祖母の隣に座らせた。
『俺は小児病棟にいるから、沙織・・辛い時は言えよ』と沙織に微笑んだ、沙織は真顔で頷いた。

私がミホの部屋に行くと、沙紀の手を握っていた、あまりにも絵になる光景に驚いた。
『豊兄さん』とその大きな背中に声をかけた。
「おう・・やっぱり来たか、学校ふけたな」と振り向いて笑顔で言った。
私はそれで一安心した、豊の顔に静けさが無かったから。
『沙織を連れてきたよ・・学校どころじゃないみたいだから』と笑顔で返した。

「沙紀ちゃんありがとう、また来るね・・小僧と話してくるよ」と豊が優しく言って、2人で病室を出た。
豊が大きな荷物を持って、2人で廊下の長椅子に座った。

「小僧・・心配するなよ、何も手出しはしないから」と豊が言った。
『ユウリ君はどうなの？』と真顔で聞いた。
「命は大丈夫らしい・・後遺症は分からないが・・大丈夫、ユウリなら」と豊が言った。
『そうだね・・沙織と美由紀の兄貴だからね』と笑顔で返した。

その時、婦長と母親が理沙を連れて来た。
私は不思議な事に気付いていた、沙を名前に持つ3人が揃った事を。
豊が理沙に笑顔を出して、大きな荷物を開いて組み立てた。
美由紀のより少し濃いピンクのフレームで作られた、理沙の車椅子

が登場した。
理沙は嬉しそうな笑顔を出して見ていた、母親も嬉しそうだった。
豊が私を見たので、私が理沙を抱き上げて、車椅子に乗せた。
理沙は嬉しそうに、少し動かして、豊が微調整をした。

「本当にありがとう・・お値段は？」と母親が豊に囁いた。
豊は母親を見て、理沙の前に屈んで、理沙を優しい目で見た。

「理沙・・理沙が大人になって、お仕事をして。
その時に車椅子のお金をちょうだいね、俺はそれでしか受け取れないよ。
俺は理沙に作ってやったんだ、今から体に合わせて、何台でも作ってやるよ。
理沙が素敵な女性になって、働いたお金でもらうからね」

豊は笑顔で理沙に言った、理沙も笑顔で豊を見た。
「はい・・理沙、頑張ります」と理沙が少女の笑顔で返した。
豊はそれを聞いて、ゴミを持って立ち上がり、母親と婦長に頭を下げて帰って行った。
母親は理沙に見えないように泣いていた、婦長も目を潤ませていた。

私は理沙に笑顔を送り、母親と婦長に頭を下げて、由美子の病室に入った。
由美子の祖母に笑顔で頭を下げて、由美子の手を握って驚いた。

《どうして意地悪するの！・・なんで会わせてくれないの！》と強く怒られた。
『あ～・・ごめんよ由美子、今度必ず連れてくるから』と私はウルで謝った。

《沙紀ちゃんが、ドキドキしてたから、楽しみにしてたのに、小僧嫌い》とプイをされたと思った。
『由美子、許してね・・プイは駄目だよ、プイしないでね』とウルウルで伝えた。
祖母の笑い声が聞こえていた。
私は必死に由美子の機嫌を、面白話で取って、由美子にお休みをして部屋を出た。

沙紀の手を握ると、ほんわか状態で、私の話にも心ここに有らずだった。
「どうしましょう・・沙紀、初恋かしら」と母親が楽しそうに笑った。
『沙紀・・初恋は俺じゃないの？』とウルで伝えた。
《小僧ちゃんには、蘭ちゃんとユリカちゃんがいるでしょ》と多分二ヤで言われた。
『豊兄さんには、奥さんがいるんだよ』とウルで返すと。
《それでも良いの、豊さんなら》と返された、私はウルウルで頷いた、母親の笑い声を聞きながら。

沙紀が絵を描き始めて、私がミホの手を握っていた時に、沙織が笑顔で入ってきた。
「ミホちゃん！」と沙織が笑顔で言って、私が沙織と交代した。
沙織が笑顔で手を握り、ミホと話してる姿を見て、私は安心していた。

そして沙織を沙紀に紹介して、沙織は笑顔で沙紀の手を握り話した。
沙紀の母親に挨拶をして、２人で病室を出た。
『ユウリ君は？』と沙織に真顔で聞いた。
「大丈夫・・頭は傷ついてないって、足のリハビリに、時間がかかるみたいだけど」と沙織が笑顔で言った。

『そっか・・良かったね、飯でも食いに行こうか』と笑顔で言った、沙織も笑顔で頷いた。

両親の所に2人で行った、両親にも祖母にも笑顔があった。
その後ろに院長の姿が見えた、私は院長に笑顔で頭を下げた。
『院長ありがとう、俺の大事な先輩だったんです』と真顔で頭を下げた。
「おお、そうだったか・・大丈夫だよ、運も体も強い青年だよ」と院長が笑顔で言った。
院長と父親が話し出したので、私は母親を見た。

『今日はここに面会時間内はいるんでしょ、沙織は俺が飯を食わせて見張っとくよ。
○○ビルのパラダイスガーデンに帰り迎えに来て、ゆっくりして良いから』

母親に笑顔で言った、母親が笑顔を出して、父親が私を見た。
「小僧・・夜街にいるって噂を聞いたが、パラダイスガーデンだと・・出世早すぎだな」と父親が二ヤで言った。
「私の今の研究材料ですよ・・常識の範囲外にいる、その不思議な生き方が」と院長が笑顔で言った。
「常識外ね～・・本当にね～」と母親が二ヤを出したので、私はウルで沙織と階段に向かった。

「楽しみだな～・・夜の世界、凄く興味があるよ」と沙織が笑顔で言った。
『だろうね、沙織ならね』と笑顔で返して、手を繋いで通りを歩いた。
快晴の空の下、熱が優しくなっていた。

私は佐織が食べたいと言ったので、出来たばかりのハンバーガー屋に行った。
そしてＰＧのＴＶルームに沙織を連れて行って、マダムとユリさんに状況を説明して、沙織を紹介した。
２人は笑顔で迎えてくれて、沙織はユリさんの美しさに見惚れていた。

「沙織・・面接かい？」とマキを含む４人組が入ってきて、マキが二ヤで言った。
「はい・・マキ先輩でも出来ると聞いて」と沙織が二ヤで返した。
「本当に、あんたと美由紀は、生意気ちゃんだよ」とマキが二ヤで言って、３人を紹介した。
私がマキにユウリ君の事を話した、マキは驚いて聞いていた。

「ふ～・・脅かすなよ、ユウリの奴」とマキが微笑んだ。
「マキ先輩が、見舞いに行って喝を入れて下さい・・リハビリが大変そうだから」と沙織が笑顔で言った。
「了解・・お尻を蹴飛ばして、ウルさせとくよ」とマキが二ヤで返した。

「ユウリって、素敵な呼び名ですね」とシオンがニコちゃんで言った。
「本当ですね・・由来があるのかしら？」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「沙織・・よろしく」とマキが二ヤで言った。

「私と小僧は不思議なんです、何かが繋がってる感じです。
小僧が４月２日産まれで、私が翌３日に、同じ病院で産まれました。
私の兄、ユウリは３歳上で、マキ先輩やシズカ先輩と同じ学年で

す。
兄とシズカ先輩も、幼稚園から一緒で、母と律子母さんも仲良しです。
私が産まれた時、母は難産で大変だったそうなんです。
父も仕事が忙しくて、兄をどうするのかと考えていました。
祖母の家が有ったのですが、兄が嫌だと母にごねたらしいんです。
兄は母が死ぬんじゃないかと、不安だったと言っていました。
それを見て、シズカ先輩が、泣いてる兄の手を引いた。
そして律子母さんが笑顔で言ったそうです、家にいれば良いと、シズカも寂しいからと。
それで、勝也父さんが兄も連れて、家に帰ったんです。
私の兄の名前は、祐樹と言います・・でも3歳のシズカ先輩が、上手く発音出来ずに。
ユウリって呼んでたそうなんです、それからずっとそう呼んでいました。
私の兄は我が強くて、幼稚園・小学校と問題児でした。
それを見ていたシズカ先輩が、小学3年になった時に、豊君に会わせます。
兄はそれで変わりましたね、自分もあんな風になりたいと思ったんでしょう。
凄く優しい男の子になりました、私にはずっと優しかったんですけど。
それを上手く出せずにいたのでしょう・・自分に正直になって、変わりました。
その時から、兄は自分の事を・・ユウリと皆に呼ばせるようになりました。
忘れない為に・・自分の事をずっと見ていてくれて、そしてアドバイスしてくれた。
シズカ先輩に感謝して、大切な思い出の名前を背負いました。
兄は私の出産の時の、不安と寂しさを忘れてません。

そしてその寂しさに、小さな手を伸ばしてくれた。
シズカ先輩の事を、忘れないでしょう。
兄はユウリと呼ばれる事が、好きなんでしょうね。
その時の嬉しさを思い出せるから・・あの小さな手を、思い出すからでしょうね」

沙織は笑顔で話した、沈黙が流れていた。
「何故なのでしょう、あなたや美由紀の言葉は・・なぜそんなに素敵なのでしょう」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「美由紀は特別です、重みが違いますから」と沙織が笑顔で言った。
「その美由紀ですら、小僧と出会ったのは小3だよね・・沙織は生まれた日だからね～」とマキが笑顔で言った。
「どんな感じなの？・・沙織ちゃんにとって、小僧との関係って？」とハルカが笑顔で聞いた。
「完璧に双子ですね・・出来の悪い兄みたいな」と沙織が二ヤで言った。

それからユリカ・カスミ・蘭がと来て、沙織は楽しそうに過ごしていた。
ユウリ君は、リハビリも2ヶ月で終わり、高校を留年する事もなかった。
これ以降の沙織は、ＰＧに月一程度顔を出し、大学進学と同時にＰＧにバイトで入った。
3代目千春を譲り受け、3代目四季を引っ張った。

家庭環境に恵まれ、何不自由無く育った沙織。
憧れの職業としての選択で、ユリさんも蘭も喜んだ。
2代目四季は、2年間という短い季節だったが、全員が卒業して就職をした。
3代目は、初代と並ぶ奇跡のメンバーだったと言える。

同学年の女性４人で構成して、全員が大学生だった。
生活の為に選んだ２人と、夜の仕事に憧れた２人。
地元という事もあり、沙織がリーダー的役割で、精神的な支柱だった。
沙織は天性の明るさと、巧みな話術を駆使して、Ｎｏ４にまでなってみせた。
ナギサがいて、カスミとツウィンズに、ハルカ・マキが全盛期の時にである。

私は東京との兼務で、あまり宮崎にはいなかったが、会う度に変化する沙織に驚かされた。
私の知る中で、最も夜の仕事をエンジョイしたのも、この沙織だろう。
鼻歌交じりで歩くような、軽快なステップが特徴だった。
そして盛り上がると、相手の肩をバシバシと叩いて、屈託無く笑っていた。
娘との関係に悩む父親に、笑顔で的確なアドバイスを出し。
口説いてくる男を、ひらりとかわすように笑顔を出した。

そして東京ＰＧの、最初の夏物語に大きく関わる沙織。
沙織が開花して見せる、その精神の柔らかさ。
六本木の人混みを、軽快なステップで踊るように歩き。
バブルの熱を、無為な物だと気付いていた、長くは続かないと。
付加価値を価値とする時代など、長くは続かないと、二ヤで言っていたのも沙織だった。

理沙は可愛い少女で、この時小４だった。
小３の終わりに、足が痛いと言って、個人病院で検査したが判明で

きず。
総合病院に検査で入院した、病名は書かないが、徐々に筋肉が硬くなる難病だった。
その当時では（今がどうなのか分からない）、手の施しようが無く、この時には足を動かす事も出来なくなったいた。
私は母親と仲良くなり、母親からその病気を聞いた。
美由紀は私にも、もちろん関口医師にも病名を聞かなかった。

美由紀は・・理沙の重い病を感じていたのだろう、その関係は深かった。
理沙に寄り添い、車椅子に乗るコツを全て伝授した。
美由紀にしか出来ない事だった、理沙も本当に必死になって会得したのだ。

理沙は強い意志で拒絶した、手が動かなくなる現実を。
その揺るぎない想いで、介助つきで公立小学校に復学してみせた。
その戦いは壮絶だった、私はそれを見ながら、自分を戒めていた。
私は理沙に対しては、私に出来る唯一の事をしただけである。

理沙を由美子に会わせたのだ、2人はすぐに仲良くなった。
由美子の存在が、理沙の戦いの精神的な支えになっていく。
「由美子ちゃんには、負けられないから」と理沙はベッドから体を起こし。
私がプレゼントしたゴムボールを握って、握力の強化をしていた。
美由紀は理沙が寝たきりになった時に、私に聞いた・・理沙の病状を。
私とシズカがいる場所で、自分に問いかけるように言った。

「私は大バカ者だね、理沙に無駄な努力をさせたのかな？
辛い練習や、車椅子に乗れる事に・・何か意味があったの？

どうにもならない事がある、それは知ってる。
でも・・それでも、なぜって・・自分に言ってしまう。
私はどうしたかったのか・・何を伝えたかったのか。
自分でも分からなくなった・・私はただの、自己満足だったのかもしれない」

美由紀は静かにそう言った、自分に問いかけ、シズカの言葉を待ってるようだった。

「美由紀・・お前は大バカだよ、自己満足だよ。
そんな言葉しか出ないなら・・お前はヒトミが旅立った時。
どう思ったんだ・・由美子に対して、頑張ろうって言う時・・何を感じてるんだ。
どうしようもない事・・確かにあるさ・・それがどうした。
私は理沙に対する、自分の答えを見せてやるよ。
あの蘭姉さんのように、自分に正直に・・理沙に贈るよ。
美由紀・・明日見てろよ・・それが私の答えだ・・私の自己満足だから」

シズカは強くそう言って、私達に背中を向けた。
そして翌日持ってきた、真赤な車椅子を、ＹＵＴＡＫＡ？の姉妹モデルを。
それを理沙のベッドの横に置き、笑顔で理沙の手を握った。

「理沙・・２号機を持ってきたよ。
理沙が大人になって、仕事して払うんだろ。
豊にそう約束したんだろ、私は理沙を信じてる。
理沙・・諦めるなよ、お前には・・マシーンがある。
海も山も谷も・・全て越えるマシーンがあるんだ。
理沙・・私に作らせてくれよ・・理沙のマシーンを・・老人にな

るまで」

シズカは笑顔で伝えた、理沙のベッドの横には、真新しい靴が置いてあった。

蘭が満開笑顔でプレゼントした、可愛い靴が、理沙を待ってるようだった。

「自己が満足なんてしないだろ、美由紀・・私達はしないだろ。

不公平な世の中である限り、満足なんてしないだろ。

お前は満足なんてする事はないだろ、生きてる限りしないだろ。

好奇の目や、可愛そうなんて視線が存在する限り、満足なんてしないだろ。

あの靴を見たか美由紀・・私らはあの姉さんの妹なんだぞ。

どんな気持ちで贈ったんだ、あの靴を・・どんな気持ちで、贈ったと思ってるんだ。

絶対に諦めないで・・そう言ってるよな、あの靴は。

不必要な物など無い、不必要な行動も無い。

私達は何も出来ない・・だからと言って、何もしない訳じゃない。

それだけだろう・・美由紀・・行動に理由を求めるな。

ただ心に従っただけ・・あの憧れの、蘭姉さんのように。

私達の兄である・・豊のように」

病院の廊下で、シズカは強く美由紀に言って、背を向けて階段を下りて行った。

美由紀はシズカの背中を睨んでいた、涙を流さないように。

そして美由紀は決意する、シズカと同じ難関高校を目指すと。

絶対にシズカの後輩になると、その負けず嫌いの心が点火されるのだ。

理沙が旅立った、高校合格発表の夜、私は美由紀と夜の海に出た。

美由紀はイルカ達に囲まれて、海に飛び込んだのだ。
私は慌てて後を追って飛び込み、美由紀を抱きしめた。
2頭のイルカが美由紀に寄り添い、守るように浮いていた。

「こんな所で止まってられない・・理沙に怒られる。
ヒトミに怒られる・・私は美由紀だよ。
ターゲットはあの女・・シズカだから・・必ず背中にタッチする。
そして言うんだ・・まだ満足なんてしないよってね」

泣きながら美由紀が言った、私は笑顔で頷いて。
「シズカに参りましたって、言わせろよ・・美由紀」と二ヤで言った。
「任せなさい・・私は美由紀よ」と泣きながら笑った。

まだ冬の気配の強い風が吹いたが、私も美由紀も寒くなかった。

春風を感じていた、月光が照らす光の道を、手を繋ぎ歩く後姿が見えた。

ヒトミと理沙が歩いていた、次のステージを目指して・・。

回想録　？　【小夜子】

光り輝く表舞台にいる、主役と言われる存在。
しかし主役が存在出来るのは、裏方がいればこそである。
そして裏方の中にいる、本物と呼ばれる怪物が。

沙織の母親が迎えに来て、沙織と入れ替わりで、北斗とカレンが入ってきた。
私は正式にカレンを紹介した、カレンも笑顔で挨拶をしていた。
「で・・カレンちゃんの、漢字表記は？」と蘭が二ヤでカレンに聞いた。
「華のある恋で、カレンです・・イメージで惑わすって言ってました」とカレンが二ヤで返した。
「ほほ～・・それは又、入れ込みましたね～」とカスミが二ヤで言った、カレンも笑顔で返した。

「カレンちゃんの、今後の予定は？」とユリさんが笑顔で聞いた。

『とりあえず、基本姿勢のリハビリを今週末まで。
北斗に全店を経験してもらって、カレンは最初にクラブ３店に入る。
リハビリは今夜まで俺の付き人で、明日はＰＧのフロアーサービス。
できるだけ基本サインを覚えてもらって、それからフロアーかな。
まぁ、接客の点だけは、安心してて良いから。
派遣会社は、１号北斗が絶対的経験者で、２号カレンが圧倒的個性で行こうかと。
まぁこの２人だけで、共同体以外の店からも、オファーが有りそうだけど。

きちんと会社が出来るまでは、共同体だけで。
ジンが大ママに、ギャラの交渉に行くと言ってたから。
どう評価されるのか・・そしてクラブでは、指名料も有るしね。
俺はカレンに賭ける、カレンが派遣会社の方向性を、背負ってると思ってもらう。
北斗の存在は絶対だから、北斗で格はついたと思ってる。
そういう感じでお願いします・・すぐにフロアーに出しますから』

私は真顔でユリさんに言って、頭を下げた、カレンが慌てて頭を下げた。
「分かりました、PGはいつでもOKです・・楽しみですよ」とカレンに薔薇で微笑んだ。
「ご期待に応えたいと思っています」とカレンは真顔で頭を下げた。

「楽しみだね～・・シオンとセリカとカレンの称号」と蘭が満開二ヤで言った。
「えっ！・・頑張ろ～、楽しみだ」とカレンが笑顔で言って。
「3匹の変質者・・なんてのが良いよね～」とカスミが不敵で言った。
「それは酷いです～・・煉瓦の遺跡の人が」とシオンがニコちゃんで言った、一瞬静寂が訪れた。

「シオン、いつ会得したの？・・煉瓦の遺跡、最高の返しだったよ」と蘭が満開で笑った。
「銀河の奇跡が煉瓦の遺跡・・凄すぎる」とレンが二ヤで言って。
「驚き過ぎて返せなかった」とカスミがウルで言って、全員で笑っていた。
カレンも楽しそうで、私は一安心していた。
カレンに女性達と一緒に食事をさせて、7時過ぎに魅宴に行った。

カレンを大ママに紹介して、リョウとミサキとヨーコの反応を楽しんだ。
そしてカレンとフロアー裏から見ていた、透明の女神の復活を。
女性が全員、緊張した顔で待っていた、あのミコトですら緊張していた。
そしてユリカが純白のドレスで現れた、静けさを連れていて、静寂が支配した。
隣で見ている可憐が、見入ってるのに気付いて、私は一人で二ヤを出していた。

「噂以上だ・・何かが違う、何かが大きく違ってる」とカレンが呟いた。
ユリカは爽やか笑顔で挨拶をして、私とカレンを見て笑顔で歩いて来た。
私はユリカにカレンを紹介した、カレンも緊張してるようだった。

「うちの店も、今夜８時に３０名の団体が入るの・・カスミとマキだけで大丈夫？」とユリカが二ヤで言った。
『仕方ないな～・・カレン、フォローに行くか？』と私も二ヤでカレンを見た。
「うふ・・第一戦の相手が、カスミ姉さんなら、燃えますよ～」とカレンも二ヤで言った。
２人でユリカに別れを告げて、ユリカの店を目指した。

私はカレンをユリカの店の女性に紹介した、カレンが笑顔で挨拶した時に団体が入った。
私はカウンターの隅で座って見ていた、そしていつもの様に、自分の想像力の無さを痛感していた。
接客に入ると、カレンは全く違った、相手の受け入れるスピードが違うのだ。

確かにカスミは、その圧倒的な美しさで、話すまでは相手と壁がある。
マキも若すぎるという理由で、その点では壁が有るのだ。
カレンはその雰囲気で、一言目の前に壁が出来ないのだった。

私はドンに感謝していた、カレンの才能を見抜き、派遣の方が面白いと判断したのだろう。
ドンが直接一流店に紹介するのなら、カレンはどこにでも入れたはずだと感じていた。

「なるほどね～・・凄いね、派遣システム」とカウンターで準備する、ユリカの店の女性が微笑んだ。
『紹介者が凄いからね』と笑顔で返した。
「ん～・・誰かな？」と二ヤで聞いてきた。
『ドン・小林』と二ヤで返した、女性は大袈裟に驚いていた。

この女性、ユリカの店のエース、源氏名を小夜子（サヨコ）とユリカが命名していた。
落ち着いた雰囲気の東洋的な美人で、美しいストレート黒髪が背筋まで伸びていた。
綺麗に切られた前髪から覗く瞳が、迫力すら感じる力を持っていて。
雰囲気と真逆の面白トークで、頭の回転の速さでは抜きん出ていた。
ユリカが店を空けれるのも、このサヨコの存在が大きかった。

この時サヨコは２１歳、お昼に事務の仕事をこなし、昼夜働いていた。
１９歳の時に父親が病気療養で、実家の生活の援助をするのが、夜の仕事に入ったきっかけだった。
蘭の靴屋のお客さんで仲が良く、蘭に夜の仕事を相談したのだ。
クラブは自信が無いから、スナックを紹介してくれと頼まれて。

蘭はリアンでなく、ユリカを紹介していた。
私は蘭の凄さを感じていた、確かにユリカの店の方がサヨコには映える。
その雰囲気がユリカに近いし、会話の面白さはユリカには無い物だった。

そしてこのサヨコが見せる、クラブの経験で見せ付ける、この世界も広いのだと。
その面白トークは、客を引き付けて、美しい黒髪が怪しく誘う。
ほのかに香る黒髪の怪しい香り、後ろ髪を引かれるという存在。
自分でも届きそうと感じさせる、ギリギリの高さを演出する容姿。
精神的強さは、真面目さに裏打ちされ、揺れる事を拒んでいた。

半年後、サヨコはユリカに、独立を目指したいと相談した。
ユリカはその前向きさを喜んで、サヨコを手放した。
サヨコの将来の為に、派遣登録にしてくれとユリカが申し出た。
私はユリカの店を中心として、派遣でサヨコを回した。
カレンもサヨコに対し、絶対的な信頼を示し、サヨコをフォローした。

サヨコを最も必要としてきたのは、魅宴だった。
ミコトとサヨコのコンビは、阿吽の呼吸で素晴らしいものだった。
そしてリョウが必死にサヨコを研究した、その点がリョウの凄さである。
リョウはカスミ同様、その美しい容姿のために、第一印象の壁があった。
リョウの飽くなき探究心、手に入れて自分の形に変化させる力。
カスミは壁を武器にした、遠い世界に棲む者だと、男達に強く提示した。
リョウは壁を取り払い、魔性の美しさに親しみやすいという、ギャ

ップを付けた。
このギャップが、リョウがミコトに迫る武器になった。
サヨコはそれを遠めに見て、いつもニコニコと楽しそうだった。
四季が卒業したＰＧの、年齢的穴埋めもサヨコがしてくれた。
一歳下のカスミとユメ・ウミにとって、サヨコの存在は大きかった。
サヨコの落ち着いた雰囲気が、安定感を作り出してくれる。

ユリカが街を出た後に、サヨコが言った。

「私はね・・誰が何と言おうとも、ユリカ姉さんの教えを一番受けている。
１９歳で出会って、未熟な私に夜の女を教えてくれた。
ユリカ姉さんは、仕事の事は何も言わなかった、でも姿勢には厳しかった。
生きる姿勢、そして自分の心と向き合う・・そんな姿勢を教えてもらった。
私はユリカの愛弟子、羊水の箱舟で生まれ、透明な子守唄を聴いて育った。
絶対に汚せない源氏名、小夜子を持っている。
だから自分を偽らない、次の挑戦をさせて」

サヨコの真剣な瞳が潤んでいて、私は笑顔で頷いた。
ユリカが大きな存在だったから、サヨコも相当の喪失感を抱えていたのだろう。
それでも私を気遣い、私の喪失感を心配してくれた。
深い女性・・そうサヨコは深い女だった、精神的な深さを持っていた。
ユリカの深海に匹敵する、静かな深みに棲んでいた。

そして東京ＰＧ開店の時に、サヨコは東京専属を願い出る。
チーママ小夜子の誕生だった、２６歳の黒髪の誘惑が、六本木に舞い降りた。
蘭が２８歳、小夜子が２６歳、セリカが２４歳・・これが東京ＰＧの開店時の主力だった。

サヨコは東京採用の若手女性をまとめ、その行動で引っ張った。
そして３年後、ユリさんの強い後押しもあり、銀座のスナックのママになる。
サヨコは閉鎖的な夜の銀座に、新風を引き込んだ。
私も圧倒的個性を、サヨコの店に派遣した。
蘭も友人として、サヨコをフォローし続けた。

サヨコの店の一周年パーティーに、私は蘭と出席した。
サヨコは笑顔で迎えてくれた、私は蘭とカウンターに座った。
サヨコの店のカウンターの写真立てには、ユリカと写る、１９歳のサヨコが笑っている。
ユリカは爽やかな笑顔で、サヨコを見ている、ユリカの深海の瞳にサヨコが映っていた。

『ユリカ・・サヨコの源氏名の由来は？』と私はある時、酔ったユリカに聞いてみた。

「大きな存在が、絶対的な者じゃないわ。
小夜子に初めて会った時、小夜子は必死だったの。
私は夜の仕事は、そんな必死さを捨てないといけないと思ってる。
流されがちな仕事だからね、流されて望まない方に進む子が多いから。
小夜子は才能も素質も充分にあった、蘭はそれを見抜いていた。
私はこの子は、本物の夜の女性になると思ったの。

だから小夜子・・小さい夜にしたのよ。
その名前が魅惑を出すから、小さい夜を背負って、大きな花を咲かす。
私には詩音と並ぶ、大好きな源氏名よ・・小夜子、素敵でしょ」
ユリカが爽やかトロン笑顔で言った、その嬉しそうな笑顔を見ていた。

小夜子が派遣になって、約1年後、ユリカに言われた。
「小夜子の次の段階の為に、あなたが称号を贈って」とユリカが小夜子の前で、爽やか笑顔で私に言った。
『1キャラットの至宝　小夜子』と笑顔で答えた。
「ありがとう、嬉しい～」と小夜子が私に抱きついた、ユリカは私を笑顔で見ていた。

私はユリカの命名由来を聞いて、その時に思いついていた。
小夜子のダイヤの心を感じて、大きい事が絶対的でないと言った、ユリカの言葉を感じて。
自分で美しいと思う事が大切だ、そう宝石を表現した、マチルダを想いながら。

美しい至宝を抱いていた、伝説の影に隠れがちな存在を。

光り輝く世界にも、それを支える人間達がいる。

裏方の人々も輝いている、その輝きを探す事が、私の楽しみだった。

東京物語の主軸、小夜子・・存在する事自体に、意味を感じる女。

羊水の揺り篭で産まれ、透明な子守唄を聞いて育った、小さな夜の

女。

ユリカの意志を繋ぐ者・・1キャラットの至宝・・小夜子。

回想録　？　【詩音？】

爽やかな秋の風が吹いていた、冷たさを微かに纏って。
季節は南国にも冬をイメージさせ、夜街は待望の季節の到来に沸いていた。

いよいよシオンのデビューである、私は題名を最初に書いて、書いただけで感傷的になっている。
東京物語に、ほとんど登場しない、ユリカとシオン。
ユリカは波動が残るから、側に感じるが、シオンは登場数も少ない。

私が家出して、いや夏物語と東京物語２つを考えても、蘭以外で言ったら。
唯一、恋愛対象として感じていた女性だろう。
《蘭に対する夢破れて、それを乗り越える事が出来たら、俺はシオンを追い求める》
あの時に感じたこの事は、ずっと私の中にあったような気がする。

《かわいそう》に対する白い弾丸、あのシオンの表現で、私は二度とその気持ちを持たなかった。
私はそれ以前に、美由紀に《かわいそう》という、視線が嫌だと聞いていた。
自分の両足に向けられる、そんな自己満足の視線に、腹が立つと美由紀は言った。
自分の中でその言葉を言って、自分を納得させる、それだけの行為だと。
指差され笑われる方が、自分には理解できる行為だと。
私はあんた達に、《かわいそう》などと言われる筋合いは無い、そう美由紀は強く言った。

私はそれを聞いていて、美由紀の気持ちを感じてたのに。
つい言葉として《かわいそう》を使ってしまった、その言葉を持ってる私の心を狙った。
シオンの心の白い弾丸は、言葉と空気の揺れ、そう言葉と波動で私に問うた。
そして弾丸が外れないように、シオンは最後の言葉で埋め込んだ。
「・・・だから先生には使って欲しくない！」と涙の叫びで、ねじ込んでくれた。
私には何にも変え難い、シオンの白い弾丸である。

それ以降も、私には大切な白い弾丸が、何発も埋まっている。
そのどれもが観念無き、嘘無き世界から発射された、強力な白い弾丸だった。
そしてシオンが表現してくれた、心を描いた言葉で伝えてくれた。

由美子の段階の時、あの全員が持てた同じイメージ、それはシオンと沙紀の影響だろう。
全員がシオンを感じ、心の描き方を教えてもらった。
そして沙紀の絵が、その明確なイメージを持たせた。

その心を描く方法を、最も強く受け継いだのが、エミであろう。
エミがその後に見せる、全てを超越した世界、その世界にはシオンが確かに存在した。
リンダとマチルダの生き方を感じ、シオンを憧れとして、エミの感性は広がった。

シオンの水商売に対する想い、それが少しでも表現したいと思っている。
嘘無き世界の住人が、虚実の世界と言われる、夜の女の世界をどう

愛したのか。
私が感じただけの世界であるから、シオンの世界の3割も表現できるだろうか。
少しの不安と、かなりの楽しみで・・私は日記のページをめくっている。

私は9月から順調に派遣も始動出来て、北斗とカレンも楽しんでいた。
北斗はその存在感を示し、カレンも3店での存在感を見せていた。

１０月初旬には、ミチルが北斗に全てを任せ。
親孝行の旅行で、長期休暇を取れるまでになっていた。
その旅行が終了して、ミチルをクラブ3店に光臨させた。
ミチルは若手に見せ付けた、その妖艶な立ち振る舞いで、ユリのライバルだと示した。
千花最後のＮｏ1という歴史に恥じぬ、魅惑の世界を見せてくれた。

そしてミチルのフォローで見せた、そのコンビで流れを作った。
まずはミコトとカスミが、余裕ＶＳ不敵で火花を散らし。
ナギサの華やかな魔性に、リョウが魔性の華やかさで挑んだ。
そして蘭の満開に、セリカが流星で華を添えた。
常連客が予定をチェックして、ミチルの不在の時は、別の熱が客にも高かった。
その中で、棲家であるホノカが存在感を示し、その華麗さを強めた。

ユリカとリアンのフォローにも、趣向を凝らし、ＰＧはユメ・ウミと四季もバラで挑ませた。
そしてリアンとユリカの店の女性も、何度もクラブを経験させた。
その中で、女性達の一番の話題になったのは、やはり小夜子だった。

そのユリカを連想させる静かな雰囲気が、接客で一変する。
話の流れを巧みに作り、最終地点できちんと爆笑で落としてみせた。
「ユリカ姉さんと、蘭姉さんが共存してる・・化け物だ」とカスミが小夜子をそう表現した。
私はその言葉で、ある事をユリさんとユリカに提案した。
ユリカの穴埋めを、シオンとマキでやりたいと。
その2人の教育係を、小夜子にお願いしたいと、2人に言った。
ユリさんも薔薇でユリカに依頼した、ユリカも爽やか笑顔で快諾してくれた。

シオンはローズで、一応のスナック経験はある、しかし全く状況が違う。
自分とマキで、ユリカの穴埋めをするのだ。
シオンにとって、偉大な2人目の姉であり・・大切な存在のユリカ。
その穴埋めという大きな責任を、シオンに負わせたかった。
マキと2人なら、シオンが引っ張らないといけない、その状況が欲しかった。
それが出来たのも、小夜子の存在が有ったからである。

ユリカと蘭が共存するような、小夜子の世界、それがシオンに与える影響。
私はそこを期待した、ユリさんもユリカも小夜子に託した。

私はユリカと、小夜子にこの話をした、小夜子は笑顔でこう言った。
「了解です、やってみます・・私は嬉しいですよ、ユリカママとエースの依頼だから」と嬉しそうに言った。
私は笑顔で小夜子に礼を言って、日程を調整した。

１１月の初旬、ユリカのゴールド光臨を決めて、その前日にシオン

とマキの2人に伝えたのだ。
TVルームの夕食前、PGのメンバーに、ホノカとカレンがいた。
『シオン・・いよいよ明日、シオンも共同体のシステムを経験してもらう。
シオンはPGデビュー前だけど、スナックに出てもらうよ。
マキと2人で・・明日の夜、ユリカの穴埋めをしてもらう。
シオン・・ユリカの代打だよ、その意味は分かるよね。
俺は絶対に出来ると思ってる、ユリさんもそう思ってOKしてくれた。
そしてユリカもそう信じてる、だからこそユリカも了承したんだ。
難しい事だけど・・やってみるよね、シオン』
私はビックリ顔のシオンに、笑顔で言った、全員がシオンを見た。
「もちろん、やります・・ユリカ姉さんの穴埋め、シオンでは力不足だけど。
マキを引っ張って、全力でやってみます」
シオンは真顔で強く言った、私は笑顔で頷いた。
「何言ってるんだい、シオン・・シオンならやれるさ」とカスミが不敵で言った、暖かい言葉だった。
「お顔が不敵じゃなかったら・・最高の言葉でした～」とシオンがニコちゃんで返した。
「さぁいよいよシオンの出番か～、楽しみだよ、シオン」と蘭が満開で微笑み。
「私の方が見たいよ、シオンの接客」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「私も、気合入れなおさないと」とカレンが笑顔で言って。
「実に困った時代だよ」とホノカが華麗二ヤを出した。

「ありがとうございます、頑張ります」とシオンがニコちゃんで返した。

蘭・ナギサ以降の女性にとって、やはり大きな存在だったシオン。シオンを感じれば感じるほど、あの個性の強い女性達でも、シオンを好きになった。

その純白の心は、勝敗を求めない・・そして絶対に、他人を傷つけない。

自分がそれでいられなかった、純粋な時を思い出させる。

しかしシオンの接客は、またも私の想像を遥かに超えてきた。

私はそうとも知らずに、その日も少しの不安と、大きな期待を抱いていた。

寂しさが無かったと言えば嘘になる、シオンは特別の中の特別だったから。

「今夜と明日は、シオン不在です・・マキ一人ですから、内部でサインを通します。

カスミちゃん、９人衆に連絡してください。

マキはカレン中心で、サインを流して下さい・・ＰＧスタッフは集中するように。

すぐにその時が来ますから、最終的には・・内部だけでサインを通しましょう。

それで上手く回せるようになるのが、当面の目標という事にします」

ユリさんが美しい真顔で強く言った、全員が一瞬で集中した。

「分かりました、繋ぎます」とカスミが真顔で言って。

「了解です・・大丈夫です」とマキも真顔で答えて。

「よし・・カレン、私のフォローをしな・・内部サインでの動きを

感じてね」と蘭が満開で微笑んだ。
「はい、ありがとうございます」とカレンも笑顔で返した。
「フロアーのサイン塔は、ハルカとレンでお願いね」とユリさんが微笑んだ。
「了解です」と2人が笑顔で頷いた。

女性達が食事を始め、私はマリアとママゴトで、初めて人間の役を任された。
私が笑顔で男の子の人形を手にとって、マリアに聞いた。
『マリア・・俺の役は？』とニコちゃんで聞くと。
「めしつかい」と天使不敵で返された、私はウルで頷いた。
女性達の爆笑の中、レイカが来て二ヤで加わった。

「エース・・そこが汚れてますよ、もっと真剣に掃除をしなさい」とレイカお嬢様に怒られ。
「くび・・てつおと、ちぇんじ」とマリアに言われて。
『ご勘弁を～、お嬢様～』とウルウルで言って、人形に掃除をさせていた。
女性達の笑いが止まらずに、私のウルも止まらなかった。

「何が有るんですかね～・・今夜のシオン」とカスミが不敵二ヤで私を見た。
『当然・・夜の海』と私が笑顔で返した。
「嬉しいです！・・ありがとう、先生」とシオンが最高ニコちゃんで言った。
「やはりシオンと来たか」とカスミがウルで言って。
「そこは仕方ないわね」とホノカもウルで言った。
「夜の海って何ですか？」とカレンがウルで聞いた。

「エースの大切な場所です、1番がマチルダで・・・」とシオンが

ニコちゃんで説明した。
「エース・・まさか自分の会社の従業員は、連れて行くよね～」とカレンが二ヤで言った。
『もちろん・・その時はカレンが、派遣女性のリーダーだって事だからね』と二ヤで返した。
「何言ってるのよ、北斗姉さんがいるのに」とカレンが真顔で言った。

『カレンこそ、何言ってるんだよ、由美子と触れ合ってるくせに。
カレン・・由美子にそう言えるのか？お母さんに頼ってるって。
そうじゃないだろ・・カレンが派遣を引っ張って。
北斗の時間を出来るだけ、由美子に向けさせる。
それがカレン・・カレンにしか出来ない、由美子への贈り物だよ。
どうするカレン・・無理だと思うなら、今言ってくれ』

私は真顔で強くカレンに言った、カレンはハッとした表情になった。

「ごめんなさい・・やって見せるから、許して。
私は・・今本当に嬉しいよ、由美子に何も出来ないと思ってたから。
全力でやってみる・・必ずそうなってみせる。
それが出来ないなら、私は何の意味も無い、ただの派遣2号になるから。
北斗姉さんに・・昼間は夜の事を、何も考えないで良い状況を目指すよ。
夜の海・・いつか行けるのを、楽しみにしてるね。
私は今、確かな目標設定が出来たよ。
生まれて初めて、大切な意味のある目標設定が」

カレンは真顔でそう返してきた、私は笑顔で頷いた。

「頼んだよ、カレン・・ありがとう」と北斗が優しく微笑んだ、カレンも笑顔で頷いた。

「困ったね～・・カレンは自分の仕事だから、そこまで行くのか～」とカスミが不敵で言って。

「厳しさが違うよね・・それに由美子ちゃんへの贈り物、これ以上の意味は無いよね」とホノカが華麗に微笑んだ。

女性達が食事が終わり、シオンが車を取ってくると言って、帰って行った。

私はレイカとマリアと夕食を食べて、指定席に座った。

「いよいよなの・・シオン姉さん」とマキが笑顔で言った。

『うん・・少しスナックを経験させて、それからデビューをさせるよ』と笑顔で返した。

「寂しそうだよ・・泣くなよ、小僧」とマキが二ヤで言った。

『大丈夫・・泣いてる暇は無いから、出来の悪い１６歳がいるからね』と二ヤで返した。

「最年少記録を出すよ・・絶対に記録を塗り替える」とマキが笑顔で言った。

『期待してるよ、マキ・・そのＯＫは、ユリさんが出すんだから』と二ヤで返した。

「エースより、良いかも・・私にとってわ」とマキがニヤで指定席に着いた。

久美子がバンドのライブ前の練習で、フロアーは音が無く寂しかった。

しかしカスミがユリさんの言葉を伝えて、全員が一瞬で緊張したようだった。

私はその状況を見て、通りに出て呼び込みの佐々木の爺さんと話し

ていた。
情報交換をして、私はある情報を手に入れ、二ヤでクラブ3店の客入りの情報を流した。
共同体のクラブ3店は、他店の参考にならないのだ・・3店とも満席記録を更新中だったのだから。

佐々木の爺さんの情報は、ピーチを武藤と揉めて辞めた女性がいるとの事で。
その子がかなり可愛くて、風俗が狙っているとの情報だった。
「リョウちゃんに聞けば、知ってると思うよ・・かなりの原石らしいぞ」と佐々木の爺さんが二ヤで言った。
『武藤の奴・・今でも自分の店を辞めた子には、何かで縛るのかね～』と真顔で返した。
「とどめ刺せよ、エース・・武藤はチンピラ以上に、この街では不要だよ」と佐々木の爺さんが眼光鋭く言った。
『その時が来たら、迷わずやるよ・・俺は武藤とは、いつでも刺し違える覚悟だから』と真顔で返した。
「お前が刺し違えるほどの、相手じゃないよ・・姉御の奴隷が」と佐々木の爺さんが笑って。
『そうなんだよね～・・姉御が一番怖いよ』と私も笑った。
その時、シオンが車で現れた、最強ニコちゃんが嬉しかった。

「シオンちゃん、今夜はデート？・・気を付けなよ、エースは言葉が巧みだから」と佐々木の爺さんが笑顔で言った。
「はい・・十分気を付けます～、佐々木さんもガンバです」とニコちゃんで返して、笑顔の佐々木の爺さんに手を振って出発した。

『ご機嫌だね、シオン』と私は道案内しながら言った。
「もちろん・・待ちに待った海ですから～」とニコニコちゃんで返された。

『シオン・・シオンには、俺からもう一度お願いするよ。
沙紀の退院が決まったら、ユリカと蘭とシオンで、沙紀と一緒に海に出よう。
俺は沙紀に見せたいんだよ、だから沙紀が一番安心できる、３人が必要なんだ。
沙紀が夜の海で、何を感じるのか・・そして何を描くのか。
それが楽しみなんだよ・・その時は、お願いね・・シオン』

私は最強ニコちゃんで前を見る、シオンに笑顔で言った。
強烈な喜びの波動が何度も来て、私は嬉しかった。

「最高に嬉しいです・・シオンはあの、沙紀ちゃんの発作の克服。
それを関口先生が言って、エースがそれを受けて言ってくれたよね。
ユリカ姉さんとシオンに、やってみようと言ってくれた。
あれがシオンの生まれて初めての、目標設定になったよ。
今夜のカレンちゃんの言葉、本当に素敵だった。
シオンも言うよ・・シオンも大切な意味のある、目標設定が出来たよ」

シオンの横顔が美しかった、私はシオンのあの絵を思い出していた。
《将来の強い瞳のシオン、その時が確実に近づいている》そう思っていた。
ユリカの優しい同意の波動に押されて、軽自動車が走っていた。
日が暮れると、少し肌寒さを感じ、人恋しさが増した季節の中を。
マス爺に鍵を借りて、小船にシオンを乗せた、シオンは薄手の上着を羽織っていた。
『シオン・・大丈夫だね、怖くないね？』と笑顔で聞いた。

「怖い事なんて、何も無いよ」とニコちゃんで返してくれた。
シオンは私の近くに座り、前を見ていた、その瞳が期待の大きさを物語っていた。

私はゆっくりと出発した、穏やかな快晴の秋の夜空が迎えてくれた。
夏とは、空気の純度が違うのが、はっきりと分かった。
夜空の星の輝きが強く、薄雲だけが僅かに存在していた。
シオンはその時点で、瞳から大粒の涙を流していた、ユリカの波動が優しく包んでいた。

波打ち際をゆっくりと進み、波の無い場所まで来て、少しだけスピードを上げた。
シオンを怖がらせたくなかったのと、あまりの星空の見事さに圧倒されていた。
シオンはニコちゃんで星空を見上げて、大粒の涙を流していた。
私は間近でその顔を見て、その美しさに感動していた。

そして現れる、大群がやってくる・・純白の妖精に会いに来た。
キラキラと輝く表皮が、１０頭以上見えてきた、シオンは夜空を見上げている。
その集団の真ん中に、小さな可愛い体も見えた。
《可愛い赤ん坊がいる・・それを連れて来た》と私は驚いていた。
強烈な波動が何度も来て、私は二ヤをしていた。
《分かってるよ、ユリカ・・近い内に来ようね》と心に囁いて、優しい波動を確認した。

『シオン・・もう泣いて、あれを見てどうするの？』と船を止めて、二ヤで言った。
シオンが私の視線の方向を見た、その時には集団の先頭が、小船の前まで泳いで来ていた。

シオンが立ち上がりそうになって、私は慌ててシオンの上着を掴んだ。
シオンが見ているその真下を、ゆっくりと集団が潜って通過した。
浅い海中の美しい体が、鮮明に見えた、その神秘の姿態を見せてくれた。
シオンは我を忘れて、反対側の泳いでいく方に移動した。
私はシオンを離せずに、碇を下ろせないでいた、小船が少し回転していた。

「イルカちゃ～ん・・もう一度おいで～」とシオンが優しく叫んだ。
シオンは号泣状態で、私はシオンを後ろから優しく抱きしめた。
シオンの言葉に呼応するように、イルカ達が戻ってきた。
そしてゆっくりと、小船を潜って見せてくれた。
「ありがとう・・ありがとう」とシオンは何度も言っていた。
シオンが少し落ち着いて、私は碇をゆっくりと下ろした。

「本当に素敵です・・嬉しかったよ、シオン・・本当に嬉しかった」と言って私に抱きついた。
『良かったね、シオン・・俺も嬉しいよ』とシオンの耳元に囁いた。

シオンが体を離し、イルカの方を見たとき、突然シオンの横にそれが出現した。
大きな背ビレが、シオンの真横の小船の脇に上がった。
シオンはあまりの驚きと喜びに、凍結状態だった。

『シオン・・触ってあげて、それが望みなんだよ』と優しくシオンに言った。
シオンは我に返り、最強ニコちゃんになって、手を伸ばした。
私は後ろから、シオンの上着を掴んでいた。

シオンの背中がビクッと震えた、それで触れているのだと感じた。
「ありがとう・・優しいのね、嬉しかったよ」とシオンは優しく、イルカに語り掛けた。
その時である、あの右の目に傷のあるイルカが、シオンを見た。
見つめ合う時間が長く感じた、実際は一瞬だったのかもしれない。
そしてイルカが、「キュッ」と言った。
私は確かに言ったと思った、シオンに対して言葉を発したと感じた。
鳴いたのではない、伝える為の言葉を発したようだった。

「忘れないよ・・また来るよ」とシオンは泣きながら、笑顔で言った。
それを聞いて、イルカが深く潜った。
私はシオンの肩を抱いて、月の方向を見せた。
『シオン・・ジャンプのプレゼントだよ』と笑顔で言った、シオンの涙の瞳に期待が溢れた。

そして月光に照らされて、水滴の宝石の輝きを引き連れて、高くジャンプをした。
体を大きく反らし、美しい姿を見せてくれた。
それから子供のイルカが3頭で競争して、飛び上がり。
それに対抗して、可愛い赤ちゃんイルカが、チョンって感じでジャンプした。
シオンはずっとニコちゃんで、拍手を贈り続けた。
私はそのシオンの嬉しそうな顔を見て、私も嬉しくなっていた。

イルカの群れが、最後に小船をゆっくりと潜り、沖の棲家に帰って行った。
「ありがとう・・ありがとう」とシオンは何度も叫んで、ずっと手を振っていた。

私はシオンが落ち着いて、シートを広げて、シオンを添い寝した。
青い湖以来の添い寝で、私も嬉しかった。

『ねぇ・・シオン、イルカは何て言ったの？』と夜空に向かって聞いてみた。
「また会える？・・そう言ったよ」とシオンも夜空に言った。

『やっぱり・・シオンは素敵だよ、シオンの伝達能力。
律子と同じ・・そしてユリカと同じなんだね、波動の言葉。
それがミホと沙紀と由美子にも、届いたんだね・・シオンの言葉が。
シオン・・シオンらしくやるんだよ、ミホも沙紀も由美子も見てるから。
シオンを信じてるからね・・だから今のままでいて。
シオンは今のままでいて・・それが俺の願いなんだよ』

私は星空に向かって、素直な気持ちを話した、シオンが私の胸の上に顔を乗せた。

「エースが教えてくれたんだよ・・鼓動の会話で。
沈黙を怖がっていた私を、一人の部屋まで迎えに来てくれた。
鼓動で迎えに来てくれたよね・・シオンは本当に嬉しかった。
そしてお祭りの夜・・素敵なお話と、宿題を出してくれた。
そして・・何と言っても、リンダちゃんを見せてくれた。
私はリンダちゃんの生き方を感じて、自分が変わったと思ったよ。
そしてマチルダちゃんに会わせてくれた、シオンがどんなに感動したか。
先生なら分かってるよね・・シオンは幸せだったよ。
マチルダちゃんと、シオンの約束・・先生とユリカ姉さんにだけ教えるね。

先生は気付いているから、だからリアンに、あの添い寝の約束をしてくれたんだよね。
シオンがＰＧで働いて、シオンがシオンに対して、２人が和解できたら。
マチルダちゃんが招待してくれるの、リンダちゃんの場所に。
その時は・・絶対に手伝ってって、リンダちゃんが言うから。
その覚悟をしてねって、マチルダちゃんが言ってくれた。
シオンは本当に嬉しかったよ、シオンがやりたいと強く感じた事だったから。
リンダちゃんに、そう言われる人になりたいって、今でも強く思ってる。
ヒトミちゃんと由美子ちゃんに対する、先生の生き方。
シオンはそれで感じたんだよ・・何も出来ないと言って、諦めたりしない。
深く関わって、傷つく事を恐れたりしない。
シオンも感じたんだよ、本当は泣きそうだった。
由美子ちゃんを感じて、嬉しくて・・泣きそうだった。
どうしても知りたいと思ってた、シオンの大好きな言葉・・先生が言った言葉。
心の温度・・それを感じる事が出来たよ、律子母さんのおかげで。
シオンはそれで自信が持てたよ・・リンダちゃんと旅をする自信が。
だからシオンは必ずやります、それが未来に繋がる道だから。
大切な出会いが、シオンに与えてくれたチャンスだから。
全ての人に感謝をして、シオンも全力で挑みます。
大切な詩音という名前に誓って、エースの最初の作品として。
もう一人のシオンに正直に伝える為に、美由紀ちゃんのように。
シオンはシオンでいたいから、それだけがシオンの望みだよ。
シオンは描くよ・・大好きな沙紀ちゃんのように。
真白いキャンバスに、白い絵の具で・・白い世界を」

胸の上にあるシオンの顔から、想いが直接入ってきて、私は幸せを感じていた。
星空がシオンを包んでいるようで、私は目を閉じていた、優しく強い波動が何度も来た。
微かなうねりが、小船を揺らして、私には映像が流れた。
ＰＧの最上階の階段で、シオンを抱いている自分が見えた。
シオンは白い弾丸を詰めていた、そして私の心に照準を合わせた。
「それを言っていいのは、蘭ちゃんにだけだよ」
「一生面倒をみる相手にしか、言ったらいけない言葉だよ」
「弱い人が、もっと弱い人に向かって言う言葉だよ」
星空に響いていた、シオンの白い弾丸が私に命中した。
瀕死の私をニコちゃんで回復するシオンを見て、私は嬉しくて映像を切った。
爽やかな風に、冬の匂いがした・・待望の季節が目の前まで来ていた。
群雄割拠に登場する、白い妖精を迎えに来たようだった。
薄着の私は寒さを感じなかった・・白い妖精が、その心の温度で温めてくれたから。

熱く燃える、白い弾丸が目を覚ました・・ターゲットを見据えて・・・。

回想録　？　【音々】

今までに無いから・・必要が無い。
そんな事は絶対にない、チャンスを掴みたいのなら。
新しい何かを生み出そう、それが道を拓く物だから。

シオンと夜の海を後にして、マス爺に支払って夜街に戻った。
シオンを連れて、谷田のジャズクラブに行った。
ジャズクラブの重厚な木製のドアに、ＫＵＭＩＫＯ　ＮＩＧＨＴ５
というポスターが張ってあった。
《もう５回目か～、早いな～》と思いながら、ドアを押した。

ニコちゃんシオンと店内に入ると、満席状態で盛り上がっていた。
私は奥のお迎え用指定席に向かって、久美子の後姿を見ながら、シ
オンと座った。
シオンは嬉しそうに、久美子を見ていた。

久美子が曲の合間に振り向いて、シオンを見て笑顔になった。
そしてリズミカルなダンスナンバーを弾いた、客席の熱が高かった。
久美子は腰を浮かして、踊るように弾いていた。
その背中が楽しそうで、スポットライトの逆光に栄えていた。

久美子は最後は決り事のように、サマータイムで燃え上がった。
弾き終わり、久美子はステージのセンターに立って、笑顔で深々と
頭を下げた。
大きな拍手がアンコールを要求し、久美子は笑顔でピアノに戻った。
そしてテーマソングのように、母に捧げる曲を弾いた。
天空に木霊するような響きが残り、大喝采を浴びてステージを降り
てきた。

「久美子ちゃん、素敵でした～」とシオンがニコちゃん拍手で迎えた。
「ありがとうございます・・シオン姉さんが来てくれたから、嬉しかった」と久美子は笑顔で返した。
『様になってきたね・・違和感無く存在してるよ』と私も笑顔で言った。
「付き人が厳しいからね～」と久美子に二ヤで返された。

私は谷田に挨拶をして、3人で店を出た、肌寒さが増していた。
「今週の土曜、リッチライブだから・・よろしく」と久美子が笑顔で言った。
『おお・・2度目のステージか～、今回は衣装用意するかな～』と二ヤで返した。
「良いね～・・貸衣装屋さんとも、仲良しでしょ？」と久美子が二ヤで言った。
「エースは誰とでも、仲良しさんです～」とシオンがニコちゃん二ヤできた。
『まぁね・・俺、ボーナス出たから、久美子に派手な衣装を着せよう』と二ヤで返した。

「楽しみだ～・・招待券が4枚あるから、美由紀ちゃんを招待してね」と久美子が笑顔で返してきた。
『了解・・喜ぶよ』と笑顔で返して、PGの裏階段を上った。
シオンが持場に戻り、私は久美子と宿題をした。

宿題が終わり、久美子と衣装の話をしていた。
「エース・・久美子の衣装代は、PGが出すからな」とマダムが笑顔で言った。
「ありがとうございます、マダム」と久美子が笑顔で頭を下げた、

マダムも笑顔で返した。
「さて、エース・・共同体の年内の構想は？」とマダムが真剣に言って、松さんも身を乗り出した。
『本人に話してないけど、来週から火曜・木曜で・・ユリさんを出したい。
リアンの店・ゴールド・ユリカの店・魅宴って感じで。
北斗も完璧に戻ったし、火・木なら・・ホノカも入るし、カレンも入れるよ。
そして最後に・・翌週の水曜にミチルの店、その時はセリカをＰＧに入れる。
それで、一応の年内の相互交流は終了で、シオンをデビューさせる。
そして１１月末から、年末にかけて・・一気に走りたい。
相互交流は、また１月からで・・その前にあと２人位、派遣に登録したいと思ってる。
今日、佐々木の爺さんから、美味しい情報を貰ったし。
それで行きたいと思います・・どうでしょうか？』
私は２人に笑顔で言った。
「うむ・・よかろう、そんな感じやな」とマダムが笑顔で言って。
「いよいよ・・シオンか～、楽しみじゃね」と松さんが微笑んだ。
『うん・・俺も楽しみだよ』と笑顔で返した。
「寂しいくせに」と久美子が二ヤで言って、私はウルを出していた。
「それで・・佐々木の旦那の情報は？」とマダムが二ヤできた。
『ピーチを武藤と揉めて、辞めた子がいるらしいんだ、かなり良い子らしい。
風俗が触手を伸ばしてるらしいから・・ピーチ出身は今でも転職

難しいんだね。
だから俺が先に会ってみる、今からリョウに情報を聞いてくるよ。
それからだね、派遣かＰＧで行けそうな子なら良いけど』
興味津々の３人に、笑顔で言った。
「お前の強みじゃな、武藤が手出しできんのは」とマダムが笑顔で言って。
「ピーチは不思議に、可愛い子が揃うらしいね」と松さんが言った。
『武藤は、その嗅覚だけでやってるんだよ・・つまんね～男だよ』
と二ヤで返した。
「武藤も馬鹿よの～・・最悪の相手を敵にまわして」と松さんが二ヤで言った。

「なんせ、梶谷の一番のお気に入りで、望月・海竜の友達で・・小林さんの弟子じゃからな。
大ママ・ユリ・ミチルの女帝と腕を組み、リアンとユリカの愛人。
最高の副職と同棲して、それを関係者全員が知っちょるし・・お～怖い怖い」

マダムが笑顔で言って、２人が笑った。
「それに最近は・・塚本・谷田の２大マスターの、お気に入りですよ」と久美子が二ヤで言った。
「そしてＮｏ１ホスト、ジンの右腕か～・・３年後、恐ろしいわい」とマダムが二ヤで言った。
私は二ヤで立って、ＴＶルームを出た、指定席で満席を確認した。
蘭とカレンが、笑顔で歩いてきた。

『カレン・・凄いね～、もうサインは問題ないね』と笑顔で言った。
「３店がほぼ同じだからね、自然に覚えたよ」と微笑んだ。
「カレンは凄いよ～・・ユリさん専属で欲しかったみたいだよ・・

四季があと1年だしね」と蘭が満開で微笑んだ。
「本当ですか！、嬉しいです・・か～、益々やる気出る～」とカレンが笑顔で言った。
『探すよ・・専属も、ＰＧの分はね・・カレンはどうしても、派遣に欲しいから』と笑顔で返した。
蘭が満開で頷いて、カレンも笑顔で頷いた、私も笑顔で2人を銀の扉に見送った。

私はＰＧを出て、魅宴を裏口から入った、リョウは接客中だった。
「今夜の指名は誰かな？」と後ろからヨーコが言った。
『クノイチのリョウ』と振り向いて二ヤで言った。
「私には、その表現は禁止だからね」とヨーコがウルで言った。
『ここにもドア～・・素敵な命名だったよ』と二ヤで言った。
「センスあるでしょ・・来たよ、リョウ姉さん」とヨーコがウルで言った。

「また、私の可愛いヨーコに、意地悪したね」とリョウが二ヤで言った。
『道具を借りに来たけど・・ヨーコ・・ケチ』とウルで返した。
「おーきくなったり、小さくなったり銃って・・あの下ネタの」とリョウがニヤニヤで言った。
『そう、それ・・魅宴じゃ絶対に使えない、あの銃』と二ヤでヨーコを見た。
「私、わからな～い」と二ヤで言いながら、ヨーコが逃げた。

私はリョウと二ヤ二ヤで見送り、リョウと並んで控え室の方に歩いた。
「なんだよ・・どっか凄い店に挑戦か？」とリョウが言った。
『それは、また来年ね・・凄いの用意するよ・・リョウの情報が欲しくて』と笑顔で言った。

「何だよ・・もったいぶるなよ」とリョウが二ヤで言った。
『ピーチの○○って子が、武藤と揉めて辞めたらしい・・どんな感じの女性？』と真顔で聞いた。
「えっ！そうなのか・・それはお前が、面接したいって事だな？」
とリョウが驚いて言った。
『風俗が狙ってるって聞いたから、むかついてね』と真顔で返した。

「ＯＫ・・まず間違いなくお前は気に入る、歳は私より１つ上。
私と○○姉さんでＮｏ１を競ってたんだ、勝率は５分だったよ。
ただ・・不良娘上がりで、性格が激しい・・ユメ・ウミと同じイメージ持つなよ。
でも素質は怖い位あるよ・・あの反発心が消えれば、凄い事になるだろうね。
激情なんだよ・・自分が受け入れられない事に関してね。
私は今でも仲が良いから、明日でも会ってみるか？
お前なら、なんとかするかもな・・派遣が難しいなら、ＰＧかゴールドだよ。
魅宴では魅力を消してしまう・・まぁお前に説明は、必要無いか」

リョウはどこか嬉しそうだった、私はその表情で期待を持った。
『リョウ、お願いします・・明日の１８時に来るよ・・一応、俺が会ってみる』と笑顔で返した。
「了解・・今夜、アポ取っとくよ・・多分、喜ぶよ」とリョウが微笑んで、控え室に消えた。
私は通りを歩きながら、２１歳の反逆者か～と思っていた。

ユリカのビルでエレベーターを待ってたら、ユリカが降りてきた。
私はユリカを抱き上げて、階段を上った。
最上階で少し冷たい風に吹かれていた、ユリカが薄着なので引き寄

せた。

『ユリカ・・最近、感性広がってるだろ・・エレベーターで降りてくるし』とユリカに二ヤで言った。

「ばれたの・・自分でもそう感じてる」とユリカが目を開けて、爽やか笑顔で言った。

「ちょっと考えるよね、２１歳の反逆者」とユリカが二ヤで言った。

『でもね・・２１歳なら、四季と同じ歳なんだよ・・ＰＧは欲しいよね』と真顔で返した。

「ユリ姉さんがいるから、ＰＧなら大丈夫よ・・あのリョウとＮｏ１を争ったんでしょ」と爽やか二ヤで来た。

『そうだよね・・はは～ん、それで少し体温が高いのか・・ユリさん光臨で興奮してるね』とユリカに二ヤで言った。

「それはするでしょう・・自分の店に、ユリ姉さんが入るんだよ・・嬉しいよ」とユリカが笑顔で言った。

『大ママとリアン・・泣くな』と二ヤで言った。

「それは間違いないね・・私も危ないよ・・多分、千鶴も」とユリカが微笑んだ。

『そしてユリとミチルの共演・・楽しみだな～・・宣伝しよう』と笑顔で返した。

「想像すら出来ないね・・見に行かないと」とユリカも笑顔で言った。

「ねぇ・・土曜のライブの夜、美由紀と蘭と、我が家にお泊りが良いな～」とユリカが微笑んだ。

『了解・・２人とも喜ぶよ』と笑顔で返した。

私はユリカを優しく降ろし、笑顔で手を振って別れた。

ＰＧ閉店後、蘭と帰りながら、２１歳の反逆者とユリカの家のお泊りの話をした。
「良いんじゃないの・・ユメ・ウミもね、入った時はそんな感じだったよ」と蘭が満開で微笑んだ。
『そっか～・・それに、大ママもそうだったんだし』と二ヤで返した。
「ユリ姉さんに会えば、変わるよ」と蘭が満開で言った、私は蘭を抱き上げて部屋に入った。
蘭と添い寝をして、迷いが消えて、幸せに眠っていた。

翌日、美由紀に久美子とユリカの招待の話をして、大喜びの美由紀を見て。
学校をなんとかクリアーして、病院に行った。
カレンが来ていて、カレンと２人でＰＧに出勤した。

シオンが少し緊張していて、可愛かった。
私はシオンに迎えに来ると二ヤで言って、魅宴に行って、リョウと水槽の喫茶店に行った。
その女性はリンダの席に座っていた、後姿で美人だと感じた。

「お待たせしました・・紹介の必要ありますか？」とリョウが向かいに座りながら、女性に微笑んだ。
「私の方は、必要無いわよ」と笑顔で返した。
私は笑顔で頭を下げて、座りながらワクワクしていた。
「〇〇姉さん・・２１歳だよ」とリョウが紹介してくれた。

私は正面から見て、もう心は決まったいた。
強いパーマのセミロングの髪が、リアンのようで、少しキツイ感じの眉が印象的だった。
その眉の下に意志の強い瞳があった、唇が少し厚くセクシーで、少

し傾ける顔が可愛かった。
申し分ない美人と称される外見を持ち、不良娘上がりの独特の魅力を備えていた。

『やっぱり、噂通り綺麗ですね・・少しキツイ感じが良いな～』と笑顔で言った。
「悪い噂でしょ、私のは・・やっぱりキツイ？」と微笑んだ。
微笑み時に少し首を傾ける、その癖がなんとも可愛いのだ。
『自分でも、そんなイメージを描いてるんじゃないの？・・俺は好きです』と笑顔で返した。
「脱却できないのよ・・イメチェンしたいけど、難しくて」と笑顔になった。
本当に美しいという感じだった、そして明るいキャラクターなのだ。

『リアンが言ってたんです、人間は好きな物しか備わらないって。
リアンは炎の女に憧れて、ああなったたんだって。
経験で備わる物は、絶対に外せるって言ってましたよ』

私はリアンを引き合いに出してみた、その時に表情が変わった。
「そっか～、嬉しいよ・・私、リアンさんに憧れてるの・・もちろん話した事ないけど」と嬉しそうに微笑んだ。
『そうなんだ・・なら今夜付き合ってよ、リアンに最後に会わせるから』と笑顔で言った。
「本当に！・・嬉しい～」と笑顔になった、表情豊かな人だと思っていた。

「私でも、どっか採用してもらえそうかな～？」と探りを入れてきた。
『でもと、どっか・・それを訂正して、言い直して・・私、一流店にチャレンジしたいって』と二ヤで返した。

その女性は私の瞳を見た、真剣になった瞳に迫力があった、私はそれで益々好きになっていた。
「私、一流店にチャレンジしたい・・必ず結果を出すよ、だからよろしく」と真顔で言った、美しかった。
『それは本気でやるって事だね？』と私も真顔で返した。
「もちろん・・私も最後のチャンスだと思ってる、もう中途半端は嫌なんだ」と真顔で返してきた。
『了解・・俺がチャンスを作ってみるよ・・武藤の事は、もう忘れて良いよ』と笑顔で返した。
「ありがとう・・リョウ、ありがとね」と笑顔に戻った、リョウも笑顔で頷いた。

『さてと、名前を付けとかないとね』と笑顔で言った。
「まさか！・・・エースが付けるの？」とリョウが驚いて私を見た。
「やった～・・・お願い」と彼女が笑った。
「私にも付けてくれなかったのに～」とリョウが魔性ウルで言った。

『リョウは祭りで有名になったから、変えない方が良かったんだよ』と二ヤで返した。
「そっか～・・・順番が悪かったのか」とリョウが言った。
「称号・・それも銀河の奇跡なんて素敵なの貰ったくせに、贅沢だよ」と彼女が二ヤで言った。

『ギャップでいこうか・・その不良ぽさ、良いと思うから・・源氏名でギャップを付ける』と二ヤで言った。
「良いと思うの？・・・この感じ」と女性が聞いた。
『女同士の関係を気を付ければ、男に対しては・・強力な武器だよ』と笑顔で返した。
「えっ！・・・もう少し詳しくお願い」と真顔で返してきた。

『昨日リョウから聞いて、今あなたに会って・・それで感じたんだけど。
あなたはリョウとは仲良くやれる、それはリョウを認めてるからだよね。
年下だけど、認めてる・・あなたは、激しい性格だと言われるんだよね。
それを言うのは、女性なんだよね・・苦手なんでしょ、女性同士の関係が。
それは、自分の経験が、そうさせてるんだよね。
本当は楽しくやりたい・・でも構えてしまう。
それは少女の頃から、誰も自分の事を分かってくれないって思ってたから。
本当は自分のこと、伝えたくて・・でも上手く伝わらない。
その葛藤が、苛立ちを増幅する・・そして激しい言葉になってしまう。
なんで分かってくれないの・・それになってしまう。
不良だったのか、不良っぽいのが好きだったのか、分からないけど。
そういうキャラである以上、女性との関係は気を付けないとね。
合わせろって言ってるんじゃないよ、簡単に言えば・・客と思えば良いんだ。
万人に分かって欲しいなんて、贅沢なんだよ・・価値観が違うから。
だから、この女はどうでもいいや～って思ったら、客だと思うんだよ。
そうすれば、苛立ちは出ないよね・・あなたはプロなんだから。
何を認められたいかじゃない、誰に認められたいのか・・それを探そうよ。
そうすれば自然に上手くいくと思うよ、リョウとの関係のような女性が増えるよ。

不良を連想させるキャラ、絶対に悪い物じゃない。
男はそれを好きな人、多いんだよ。
まぁ尻軽に見えるってのも、あるんだろうけど。
良いじゃない、それでも強力な武器になるなら・・実際が尻軽じゃなければ。
客を恋愛対象と見ない、本物のプロなら・・外見の偽りも武器にする。
それはルール違反じゃない、相手が勝手にイメージした事だからね。
本心を言うよ・・それが出来れば、あなたはＰＧ専属でやれる。
どうかな～・・俺はそう思うけど・・やってみない？』

私は美しい真剣な瞳に、最後は笑顔で言った。
「私が・・ＰＧ」と呟いた。
『出来るって言ってるんじゃないよ・・トップを狙えるって言ってるんだよ』と笑顔でとどめを刺した。
「本気で言ってるんだね？」と強く返してきた。
『あなたに嘘を言う必要が、今の俺に何かある？』と二ヤで返した。

「やってみたい・・本当は最近のリョウを見てて、羨ましかった。
会う度に、輝きが増していて・・楽しそうに、前向きに生きていて。
それが心を支配してきて、ピーチが嫌になった。
水商売から足を洗って、適当な男でも捜そうと、投げやりになってた。
でも私もやってみたかった、リョウのように・・一流の女性達を感じながら。
自分を試してみたい・・お願い、頑張るから・・チャンスをちょうだい」

美しい真剣な瞳に、迫力があり、嘘は無かった。

『了解・・今夜は体験見学って事で紹介するから。
きちんと見てね・・君は女帝ユリの、面接に合格しないといけないんだよ。
今日会って、感じていてね・・面接対策を』

私は二ヤで言った、彼女は笑顔で頷いた。

『じゃあ源氏名は、俺の一番好きな響きの名前・・音を2回書いて、ネネにしよう。
歴史に残る女でありながら、とっても可愛い響き・・そのギャップで勝負しよう』

私は笑顔で言った、彼女が明るい笑顔になった。
「ありがとう、可愛い～・・嬉しいな～」とネネが嬉しそうに笑った。
「なるほど～、ギャップってそう言う事なのか～・・良いな～」とリョウが笑顔で言った。

私が支払い、3人で水槽を出た。
ネネがリョウに礼を言って、私はネネとPGに向かった。

「また、見知らぬ女性と歩いてるね」と裏階段の上り口で、後ろからカスミが言った。
『うん・・体験見学のネネちゃん・・ネネ、カスミちゃん・・1つ下の20歳』と紹介した。
「ネネです、よろしくね・・お噂はかねがね聞いてます」とネネが笑顔で言った。
「こちらこそ、よろしくです・・良いな～、ネネって可愛いですね」

とカスミが笑顔で返して。
２人で並び、裏階段を上り始めた、ネネが楽しそうに話していた。
ＴＶルームに行くと、いつものメンバーに、ユリカと蘭がいた。
私は緊張してるネネを全員に、体験見学と言って紹介した。
ネネはユリさんだけでなく、ユリカまでいて驚いていた。

「あら～・・面接じゃないのですか？・・残念です」とユリさんがネネに薔薇で微笑んだ。
その時のネネが凄かった、ユリさんの目の前に正座して、ユリさんを正面から見た。

「私は、先日までピーチに在籍していました。
最近のリョウを見て、ピーチにいる自分が嫌になり・・辞めました。
そして今日・・エースが私に会いたいと、リョウを通して、連絡をくれました。
私はさっきまで、中途半端な人間でした・・反発を繰り返すだけの。
無意味な反発心の、その根源を・・自分自身を見ていなかった。
でもエースに言われて、気付く事が出来ました・・今はどうしても、自分を試したい。
リョウのように、本物の女性の中で・・自分の力を試してみたい。
そう強く思っています・・ユリさん、試験期間でかまいません。
私にチャンスを下さい・・私は必ず合格してみせます」

ネネは一気に想いを言って、深々と頭を下げた。

「分かりました、明日から一週間・・試験期間としましょう。
ネネ・・ありがとう、素敵な提案でした・・試験期間。

その本気さを伝えるために、自分で考え出したんですね。
伝わりましたよ、そして期待します・・あなたのその能力。
そしてその素質・・２１歳、一番欲しかった年齢です。
私は期待しています、あなたが合格する事を。
試験官は、私と蘭とカスミでやります。
自分らしくやってみて、個性を大切にして欲しい。
あなたには、それだけの素質と能力があるのですから」

ユリさんの優しく厳しい言葉で、ネネは一筋の涙を流した。
蘭が真剣な深い瞳でネネを見ていた、カスミは驚いてユリさんを見た。
「ネネ・・私も期待してるよ、お願いだから・・合格って書かせてね」と蘭が満開で微笑んだ。
「私もそう書きたいです、頑張って下さいね・・少し舌を噛みそうだけど、ネネ姉さん」とカスミが笑顔で言った。
「ありがとうございます・・必ず合格点を取ります」とネネが泣きながら言った。

「エース・・契約する時は、ＰＧ専属で良いんですね？」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
『もちろん、よろしくお願いします』と言って頭を下げた。

「しかし、源氏名付けるのは、天才的だよね・・なるほど、ギャップね～」とユリカが爽やか二ヤをネネに出した、ネネも笑顔で返した。
「良いよね～・・凄く可愛いな～・・漢字表記は？」と蘭が満開でネネに聞いた。
「音を２回書いて、ネネです」とネネが笑顔で返した。
「可愛い～・・でも姉さんを付けると、確かに舌を噛みそう」とハルカが笑顔で言った。

『日本語発音の悪い君達の、練習でもあるのだよ・・ね～ね～姉さんって呼ぶなよ』と二ヤで言った。
「やめろよ、そんな事言うと・・意識してしまうだろ」とカスミがウルで言った。

私はネネも一緒に食事をさせて、楽しそうな食事風景を見ていた。
ユリカが純白ドレスに着替えてきて、シオンとマキにネネを連れて、TVルームを出た。
ユリカが通りをドレスで歩くので、呼び込みさん達が集まってきた。

「ネネ・・エースと腕を組みなさい、武藤を払拭出来るから」とユリカがネネに囁いた、ネネが嬉しそうな笑顔で頷いた。
そして私の横に来て、強く私の腕を組んで二ヤを出した。

「ユリカ姫・・本日はいずこへ？」と佐々木の爺さんが笑顔で聞いた。
「少しばかり、ゴールドに行って来ますわ」と爽やか笑顔で返して。
「佐々木さん、ありがとう・・元ピーチ、明日からPGの試験受ける、ネネです」とユリカがネネを紹介した。
ネネはユリカを見ていた、瞳に涙を溜めていた。
ネネは分かっていた、ユリカが紹介したという事の、その大きな意味を理解していた。

「それは良かったね・・頑張って合格してね、期待してるよ」と佐々木の爺さんがネネに言った。
「はい、頑張ります」とネネは笑顔で返した、呼び込みさん達が優しい笑顔で見ていた。

シオンとマキがユリカの店に行き、私はユリカとネネとゴールドのエレベーターに乗った。

「ユリカさん、本当にありがとうございます」とネネが深々と頭を下げた。
「ネネ・・必ず合格して、合格したら・・姉さんと呼んでね」とユリカが笑顔で言った。
「はい・・合格すると、約束します」とネネは真顔で強く言った。
その時エレベーターが着いて、３人でゴールドに歩いた。

ボーイ頭が慌てて飛んできて、ユリカに挨拶をした。
「お世話になります」とユリカも笑顔で返して、頭を下げた。
その時、千鶴が飛んできて、ユリカを見て笑顔になった。
ユリカと千鶴の後を歩き、私とネネはフロアー裏から見ていた。
女性達の緊張と期待が、そこからでも感じる事が出来た。
ネネはユリカを見ていた、その顔は美しく高揚していた。

「エース、必ず合格するよ・・絶対にあの人と、同じステージに上がってみせる」とネネはユリカの背中を見ながら強く言った。

迷いの無い、その横顔を見ていた・・ＰＧの潤滑剤になる、ネネ。
その発想力が助けてくれる、女性の派遣も・・東京ＰＧも。
ネネの能力は、今覚醒を始めたばかりだった。

そしてシオンの開花の時が・・目前に迫っていた・・。

【詩音？】

静かな世界にいる、その場所を棲家にしている。
好戦的な心を、深い深海に沈めている。

私はネネと、ユリカを見ていた、ゴールドの若い女性達が緊張していた。
ユリカは静かに笑顔で挨拶をして、千鶴が号令をかけて開店した。
どこで噂を聞きつけたのか、有名な遊び人のオヤジが、開店と同時に何人か入った。
ユリカ目当ては明白で、千鶴ですら対処に追われていた。
ユリカは一組ずつ笑顔で相手をして、そのフォローにセリカが回っていた。

そしてキングが和尚と一番奥に入り、若い女性達の緊張もピークだった。
「一番奥のお客さんって、もしかして？」とネネが二ヤで私を見た。
『帝王梶谷さんだよ・・ユリカのクラブ光臨には、絶対に顔を出すんだよ』と二ヤで返した。
「ゴールドも恵まれてるよね～・・ピーチじゃ絶対に経験できないよ」とネネが呟いた。
『ネネ・・今からは、彼らがお相手だよ』と二ヤで返して、２人でゴールドを出た。

私はネネを連れて、ユリカの店に向かった。
ユリカの店はＢＯＸを１つにして、信用金庫の２８名の団体が入っていた。
シオンがＢＯＸのお偉いさんの横に座り、ニコちゃんで話していた。
マキは若手の真ん中に座り、年齢をクイズに出して盛り上がってい

た。
小夜子が全体を見るように、端の席で話題を提供し。
ユリカの店の女性が、シオンをフォロー出来る位置に座っていた。
「素敵な店だね～・・この広さ、凄いな～」とネネがカウンターの端に座り、店内を見渡していた。
『ここも経験させてやるよ、リアンの店もね』と二ヤで返した、ネネは笑顔で頷いた。

「ねぇ・・シオンちゃんって、ＰＧデビュー前なんでしょ。
あのレベルでデビュー前って、怖いよ～。
あのレベルだったら、他の店ならエースだよ。
ピーチなら、確実にＮｏ１を狙えるよ・・あの雰囲気、素敵だよね～」

ネネはシオンを見て、私に探りを入れた。
確かにその時のシオンは、積極的に話の流れを作っていた、ニコちゃん笑顔で。
『先に、ネネのシオン分析を教えてよ？』と私は笑顔で言った。

「もちろん、会ったばかりだから・・何も分からないけど。
でも会った瞬間に感じたよ、友達になりたい子だって。
初めて出会ったタイプだった、懐かしい・・何か小学生位の時の。
そんな頃に出会った、友達みたいな・・何も考えずに仲間になれた頃のような。
優しい子なんだな～って感じた、女性同士でそれを感じさせる。
凄い子だな～って感動したよ、カスミも・・もちろん凄いと思ったけど。
それは女として競う相手で見た場合でしょ・・シオンは別の世界だよね。

私はシオンと女として、今は競えないよ・・歴然とした差があるから。
女である前の、人としての差があるからね。
シオンは人間的に、私より優れている・・それを認めざる得ない。
そんな感じかな・・エースが、あのシオンの何を待ってるのか。
そこが知りたいと思ったの・・そこにヒントが有りそうでね」

ネネは笑顔で流れるように言った、私は感動して聞いていた。
ユリカの波動が、少しの驚きと嬉しさを連れて来た。

『ネネ・・やっぱり素敵だよ、ネネは。
そこまでの分析を即座に出来る・・だから今までが、難しかったとも言えるよね。
ネネの試験期間の提案、ユリさんは本当に嬉しかったと思うよ。
チャンスを生み出す為に、ネネが考え出した。
その言葉に、真剣さと必死さが有ったんだよね。
俺も嬉しいから・・ネネにだけ話すね、シオンに不足してる物。
シオンは今で・・今日ＰＧのデビューをしても、素敵な世界を作れる。
カスミもハルカも、先月には俺に詰め寄った。
なぜシオンをデビューさせないのかと、強く言われたよ。
俺の貧相な表現力で言えば、シオンは嘘の無い国からの旅人。
絶対に他人を傷つけない・・それを見ただけで感じる事が出来るよね。
ＰＧだけなら、俺もそれで良いんだ・・でもシオンの最終目標は違うんだよ。
海外を飛び回り、世界の子供たちの現実を、伝えているアメリカ人がいるんだ。
悲惨な状況や、辛い現実・・それを伝えて、波を起こそうとしてる。

一人が響いたら、誰かに伝える・・その一人一人が、最後に大きな波になる。
そう信じて旅をしてる女性がいるんだ、シオンはその手助けがしたいんだよ。
その為に、自分を強くしようとしてる、そして伝える力を身に付けようとしてる。
だからこそＰＧデビューを望んだ・・今のシオンで充分だろう。
ただ夜の仕事としてやるのならね・・シオンは求める物が違う。
将来、過酷な旅をして、真実を伝えたいのなら・・闘争心が欲しいんだ。
シオンの心に強く持ってる、闘争心を出させたい・・そしてそれを制御して欲しい。
シオンが闘争心を封印してるのは、出すと怖いからなんだよ。
自分の強さを知ってるから、それを封印した・・誰も傷つけないために。
俺の最後に欲しいのは、その闘争心の封印解除。
今のシオンなら大丈夫、それを解除しても、絶対に他人を傷つけない。
その闘争心が向かうのは、もう一人の弱い自分に対してだけだと思ってる。
だから俺はそれを望むんだ、それは俺にしか出来ないから。
シオンが唯一、正面から攻撃できる・・俺の特権だから。
それを待ってるんだよ、ネネ・・その封印解除の時を』

私は隣の強い瞳のネネを見ながら、自分の想いを伝えた。
優しい波動が包んでくれて、嬉しかった。

「うん・・響いたよ、よく分かった。
そして大切なヒントも貰った、真逆の私だから理解出来るよ。
私もシオンが好きだから、少しでも何かを伝えたいから。

闘争心を見せてあげる・・それで私も教えてもらう。
闘争心を制御する方法を、シオンなら教えてくれるよね。
もう一人の弱い自分に対して、闘うという事を。
私はこのチャンスを絶対にものにする、ユリさんユリカさん蘭さん。
リョウ・カスミ・カレン・レン・ハルカ・マキ・・そしてシオン。
まだ見ぬ、まだ知らない・・沢山の女性達。
その中で自分を主張してみたい、私の個性を示してみたい。
必ず合格する・・私らしく仕事をして」

ネネは笑顔でそう言った、私も笑顔で頷いた。
その時に８人の団体が入った、カウンターで良いと言って、カウンターに座った。
小夜子が来て、慌てて準備していた。
『ネネ・・やるか、今はネネしかいないよ』と二ヤでネネに言った。
「良いの！・・お願い、やってみたい」とネネが笑顔で言った、ユリカの許可の波動がきた。

『小夜子・・この子はネネ、ＰＧの試験を受けるんだ・・ユリカの許可は取った、カウンターを任せて欲しい』と小夜子に耳打ちした。
「本当、良かった～・・お願いします」と小夜子がネネに微笑んだ、ネネも笑顔で頷いた。
『ネネ、小夜子ちゃん・・ネネと同じ学年だよ』と紹介して、笑顔のネネを見送った。
２人は笑顔で準備して、小夜子がネネを客に紹介した。

「噂は本当なんだね、ユリカママがいない時は・・凄い若手が入るって」と一番上らしい３０代の男が笑顔で言った。
「ほんとだな～・・楽しいね～」と若い部下が笑顔で言った。
「それは、ママや私達は飽きたって事なのね」と小夜子がウルで言

った、ウルの波動がきた。
「違いますよね～、私の方が落とせそうって思ったんですよね～・・簡単じゃないですよ～」とネネが二ヤで言った、小夜子も二ヤで客を見た。
「面白いな～・・嬉しくなるよ、その返し」と上司が二ヤで返して、客に火が点いた。

《み～つけた、ユリカ見つけたよ・・待望の銀河を覚醒するコンビを》と心に二ヤで囁いた。
ユリカの強い波動が、喜びを示していた。
《ユリカ、それでか～・・小夜子の相棒と感じてたんだね、それで強く押したんだね》と返した。
今気づいたかという二ヤの波動がきた、私も一人で二ヤしていた。

その時だった、ＢＯＸに静寂が訪れた。
私は慌ててＢＯＸを見た、２０代前半の若い男が、シオンの隣の上司を睨んでいた。
両手に拳を握り、今にも飛び掛りそうな感じだった。

「マサルさん・・両手の拳はいけません。
あなたの気持ちを一番分かってるのは、岸本さんだと思いますよ。
お酒の席で想いを伝えるのは良いけれど、感情的では駄目ですよ。
私はこう思っています・・岸本さんは今、思い出しています。
自分があなた位の時の事を、今思い出して・・嬉しい気持ちでいますよ。
その拳を何度自分も握ったのか、何度仕事を辞めようと考えただろう。
俺は今分かった、あの頃の上司の気持ちがって・・そう思っています。
私はいつかあなたにも、それを感じて欲しい・・あなたは拳を握

らされた。
拳の継承者でしょう、大切な継承者なんですよ・・だから今握ってはいけません。
その大切な拳は、一人の時に握るんでしょ・・自分に負けないように。
いつか誰かに繋げる、大切な選ばれた継承者なんだから。
お願いですから、拳をしまって・・楽しく飲みましょう」

完全な静寂の中、シオンがニコちゃんで言った。
私は嬉しくて泣きそうだった、シオンは上司の心の波動を通訳をした。
岸本という上司は、俯いて泣いていた、それをマサルが見ていた。

「申し訳ありません、俺が若かった・・お許し下さい、岸本さん・・シオンちゃん」とマサルは立って、堂々と言って頭を下げた。
マキが笑顔で拍手をして、全員が笑顔になって拍手をした。
岸本が立って、頭を下げてるマサルに近づき、右手を出した。
マサルも笑顔になり、強く握った、素敵な光景の中に、シオンのニコちゃんが咲いていた。
ユリカの強烈な感動の波動が、何度も何度も押し寄せた。

「あの子は、だ～れ？」とカウンターの上司が聞いた、瞳が潤んでいた。
「シオンちゃんです、もうすぐＰＧにデビューします・・ＰＧの最終兵器と呼ばれています」とネネが笑顔で答えた。
「さすがＰＧ・・素晴らしい最終兵器を持ってるね・・シオンの言葉、俺は本当に嬉しかった」とその上司が笑顔で言った。
「私も・・嬉しかったです、同じ仕事を選んだ女として」と小夜子が微笑んで返した。

それからＢＯＸも、カウンターも大盛り上がりになった。
私はネネに迎えに来ると言って、ＰＧに戻った。
最高の気分で通りに出て、リアンに聞かせたかったと思って夜空を見た。
ハルカと描いた未来図に、リンダと旅をするシオンが見えた。
波動の通訳を無意識でする、ニコちゃんシオンが、リンダと話していた。

私は指定席に座り、シオンもマキもいない、フロアーを見ていた。
内部サインが頻繁に飛んで、四季がカレンに繋いでいた。

《四季はカレンに教えるんだな、自分達のサインの技術を。
そうする事が、共同体の店に繋がるから。
明日からもう一人頼むよ、ネネに伝承してね。
四季がもう１つ夢見た世界を、ネネが将来見せてくれるよ》

私はそう思っていた、優しい波動と蘭の満開を見ながら。
その時、珍しくユリさんが歩いてきた。

「良い事が有りましたね・・シオンですか？」と薔薇で微笑んだ。

『はい・・シオンとネネで。
ユリさん、シオン・・今月の２２日にします。
まだシオンには内緒で、勤労感謝の日の前日にデビューさせます。
今夜、それがシオンに相応しいと感じました、よろしくお願いします』

私は真顔でユリさんに言った、ユリさんは薔薇の微笑で私を見ていた。

「了解しました、シオンを預かります。
必ず世界を旅するレベルに、到達させますよ。
それと依頼が有るのでしょう？・・今、少し聞かせて」

ユリさんは強く言って、最後に薔薇二ヤを出した。

『来週から、火曜・木曜で・・ユリ光臨をやりたい。
リアンの店・ゴールド・ユリカの店・魅宴って流れで。
火・木なら、ホノカがＰＧだし・・北斗が完全に戻ったし、カレンも入れます。
そして最後に水曜に、ミチルの店で、今年の相互交流は終了です。
その後、デビューさせます・・最終兵器、シオンを。
それでやりたいんですけど・・ご検討下さい』

私は最後に二ヤを出して言った。
「嬉しいですね、もちろんＯＫです・・ネネも入ってるでしょうから、ＰＧは大丈夫です。
ネネをありがとう、私はあの試験期間という提案。
本当に嬉しかったのですよ、蘭とカスミの間に入るネネ・・楽しみですね」

私はユリカの喜びの波動を受けながら、ハッとして、薔薇二ヤを見送った。
《ユリさん、だから蘭とカスミを試験官にしたんだね・・カスミに認めろって言ったんだ》と心に囁いた、喜びに満ちた同意の波動がきた。

「シオン覚醒できたみたいだね、あんたの顔とユリ姉さんの笑顔で分かった」と蘭が来て満開で微笑んだ。

『うん、嬉しかったよ・・蘭、靴屋明日休みでしょ。
終わったら少しだけローズに行こうよ、ネネにリアンに会わせるって約束したし。
俺も今夜は、リアンに会いたいんだ』

私は笑顔で正直に言った。
「良いね～、カスミも誘うよ・・私は本当に嬉しかった、ユリ姉さんの試験官の依頼が」と満開笑顔で言って銀の扉に消えた。
私は席を立って、ゴールドを目指した、爽やかな風に冬の気配を感じながら。

１１時を過ぎて、ゴールドは５割の客になっていた。
私はフロアー裏から、ユリカを見ていた、爽やか笑顔で若い男を相手にしていた。
「ふ～・・凄すぎるよ、ユリカ姉さん・・同席すると、幸せな気持ちになる」とセリカが笑顔で言った。
『そうらしいね・・セリカ、気合入れとけよ・・来週木曜、ユリさんが入る』と二ヤで返した。
「うっそ！・・楽しみだな～、ＰＧで何度も経験したけど・・ここでか～」と楽しそうに言った。

「もう一度、言って・・待って、心の準備するから」とセリカの後ろから千鶴が現れた。
『千鶴・・来週木曜日、ユリを頼みます・・色々と教えてあげてね』と二ヤ二ヤで言った。
「ありがとう・・本当に嬉いよ」と千鶴が潤む瞳で微笑んだ、私も笑顔で頷いた。
ユリカの席の男が立って、ユリカが笑顔で見送って、上がって来た。
私はユリカと、千鶴に挨拶をして、ゴールドを出た。

「嬉しかったよ、シオンもネネも・・ネネと小夜子、良いコンビになるよ」とユリカが言って、通りで私の首に腕を巻いた。
「伝説の交換して、抱っこ伝説を・・お互いに」とユリカが爽やか二ヤで言った。
『好戦的だね、ユリカ・・美由紀が二ヤするぞ』と二ヤで言って抱き上げた。
「魔女っ子のくせに、生意気だね～・・・美由紀」と笑顔で言って、笑顔を振り撒いた。
私は呼び込みさんと、客引きの女性の驚きの表情を楽しんで、ユリカと挨拶をしながらＰＧを目指した。
ユリカはＰＧの控え室前まで、抱かれていた。

「私が蘭とカスミと行くから、あなたは私の店にいて」と爽やかに微笑んだ。
『了解・・ハルカに、マキは家に送るからって伝えといて』と笑顔で言って、ユリカの店を目指した。
ユリカの店も、落ち着いていて、ＢＯＸに２組とカウンターに３人組だけになっていた。
シオンとネネが別々に、ユリカの店の女性とＢＯＸに付いて、マキが小夜子とカウンターにいた。

「ネネ・・凄いじゃない」と小夜子が笑顔でコーラを出してくれた。
『小夜子の同学年の、ライバルになれたかな？』と二ヤで聞いた。
「それはネネに聞いて」と二ヤで返された、私も二ヤで頷いた。

平日で最後の客が帰って、女性全員で笑顔で片付けをしていた。
シオンがニコちゃんで、ネネも嬉しそうに話していた。
ユリカと蘭とカスミが来て、女性達が嬉しそうに、危ない話題で盛り上がった。

「ネネ・・ありがとう、ネネの素敵な仕事を感じてたよ」とユリカが笑顔で封筒を差し出した。
『ありがとうございます・・私も楽しかったし、勉強になりました』とネネが笑顔で受け取った。
「待って下さいよ～・・小夜子姉さんとネネ姉さんは、同じ歳ですね？」とカスミが聞いた。
「そうよ・・それは、あなたが驚く事じゃないわよ～」と小夜子が二ヤで言った。
「さ～て・・明日ホノカを見て来るから・・作戦練ろうね、小夜子」とネネが二ヤで言った。
「そうだね～・・エースに称号もらう作戦でも」と小夜子が二ヤで返した。

「２人とも、まだその話はやばいよ・・カスミがビビッて、不合格って書くかも」と蘭が二ヤで言った。
「そんな私情は、挟みませんよ～」とカスミが真顔で言った。
「カスミ、よろしくね・・私は誰よりも、カスミに合格が貰いたい」とネネも真顔で言った、カスミも真剣に頷いた。
シオンはネネを見ていた、その表現方法を感じてるようだった。
マキはネネを見ながら、嬉しそうだった。

私達は店を出て、ローズを目指してた、小夜子も付いて来ていた。
ローズも終了したばかりで、リアンが私達を見て笑顔になった。

『リアン・・ＰＧの試験を受ける・・ネネです、２１歳』とＢＯＸで私がリアンに紹介した。
「ピーチの〇〇だったね・・良かったね、絶対に合格しろよ」とリアンが極炎で微笑んだ。
「ありがとうございます・・頑張ります・・嬉しいです、知っていてもらえて」とネネが嬉しそうな笑顔で頭を下げた。

「知ってるよ・・あんたが、中央通の〇〇クラブで、馬鹿男に言った言葉。
私は素敵だと思ったよ・・あんたの生き方、私は好きだよ。
頑張りなよ・・ＰＧなら、絶対に夢が見れるよ」

リアンは真剣に言った、圧倒的熱量が言葉に乗っていた。
「必ず合格します・・本当に嬉しいです」と言ってネネは泣いた、小夜子が優しく抱いていた。
「さぁ、湿っぽいの嫌だから、飲もうよ～」とリアンが言って、マキとシオンで準備に行った。

『リアン・・今夜はマキに練習させて、お酒の』と私が二ヤで言った。
「おっ！待ってました・・マキ、ウーロン持ってくるなよ」とリアンが二ヤで言って、マキがウルで頷いた。
「マキは、煽り続けるんだね～・・最年少記録、出しそうだね～」と蘭が満開二ヤで言った。
「そりゃ～出すでしょう、灼熱のマキなら」とユリカが爽やか二ヤで言った。

「当たり前だよ、情熱姉妹なんだから・・エース次女を見つけて来たのか」とリアンが二ヤで言った。
「あっ！・・お待ちになって～、リアンお姉様～」とカスミが慌てて言った。
「カスミ、ちょっと待って・・どう言う話かな～？」とネネが私に二ヤで言った。
『リアンとマキで情熱姉妹なんだけど、次女のカスミが、現在保留状態なんだよ』と二ヤで返した。
「素敵な話ですね～・・情熱姉妹」とネネが二ヤでカスミに言った。

「ネネ、熱いよ・・冬は我家に泊まりに来て、添い寝してね・・私、冷え性だから」と小夜子が二ヤで追いかけた。
「小夜子はユリカに似てきたね～・・でも熱もあるよね、贅沢な奴だ」とリアンが笑顔で言った。

お酒が揃い、私と車のシオンだけ、コーラだった。
「乾杯前に、私・・ユリカは今夜認めます、シオンを夜の女として・・マキ、シオンの話をお願い」とユリカが笑顔で言った。
シオンは驚いて、ユリカを見ていた、その顔が喜びで震えていた。
「今夜の団体さんの中で・・・・」マキがシオンの話をした。
リアンが号泣して、蘭もカスミも泣いていた。

「蘭・・乾杯してくれよ」とリアンが下を向いて言った。

「シオン・・よくここまで来たね、私もカスミも・・本当に嬉しいよ。
あとはエースの許可を取るだけ、シオンにとって最も大切な。
唯一シオンが心をぶつけられる・・エースの許可を勝ち取ってね。
私も小夜子もネネもカスミも、今夜認めます。
シオンは夜街で共に戦う、仲間だという事を。
シオンの大好きな、哲夫がエースとの関係を表現した言葉。
自分は小僧の戦友と呼ばれたい、あの素敵な言葉を借ります。
私とカスミにとって、シオンはＰＧの戦友になりました。
そして・・ネネとマキが、戦友になってくれる事を、心から願ってます。
シオンの将来が、どんなに辛い道でも・・私達が付いています。
シオンの夜街デビューを祈って・・乾杯しましょう」

蘭は優しい笑顔で、シオンを見て言った。
シオンはニコちゃんで泣いていた、私は嬉しくてシオンを見ていた。

全員がグラスを持った、ネネも小夜子も嬉しそうな笑顔だった。
「乾杯」と蘭が言って、「乾杯」と全員で言った。
「ありがとうございます・・シオン嬉しいです、頑張ります」とシオンは言うのがやっとだった。

『リアン・・泣いてる暇は、リアンには無いよ』と私が雰囲気を変えるのに、二ヤで言った。
「何だよ～その顔・・怖い」とリアンがウルで返してきた。
『来週の火曜・・研修をさせて、厳しく指導してね・・ユリさんを』とニヤニヤで言った。
「マジの話だね？」とリアンの炎が強くなった。

『俺はユリ光臨の最初の店は、ローズと決めていた。
ローズの開店に関しては、ユリさんは責任を感じている。
感じる必要は無いと誰が言っても、あの人は感じる。
俺はユリさんのその後悔を、少しでも和らげたかった。
ユリさんは絶対に、自分に嘘をつかない・・だから今回の光臨も、心から望んだ。
リアン・・伝えてあげてね、ユリさんに感謝してるって。
このローズ・リップでしか伝えられない、この場所でしか伝わらない。
リアンの気持ちを、ユリさんに伝えてね』

私は笑顔でリアンに言った、リアンは炎を上げながら泣いていた。
「了解・・泣いてる暇は無いって言って、なぜ泣かす」と言いながら、リアンが泣いていた。

「あは～・・泣き虫だな～長女は、歳なのかな～・・涙腺が緩くて」とマキが二ヤで言った。

「あっ！マキちゃん・・もう一杯目、空になってる」とシオンが驚いて言った。
「マキ～・・涙腺緩い年寄りって、言ったのかい？」とリアンが二ヤで言った。
「はい・・お姉様、マキは悪い子です」とマキは二ヤで言って、シオンにグラスを出した。
シオンが困った顔で、ユリカを見た。

「シオン・・飲ませなさい、失敗は最初にした方が良いのよ」とユリカが二ヤで言って。
「そうだよ～・・シオンは大丈夫～？」と蘭が満開二ヤで言った。
「シオンはその点は、大丈夫なんだよね～・・不思議に酒には強い」とリアンが二ヤで言った。
「マキちゃん、今夜はシオンの家に泊めますね・・エース、お婆さん大丈夫でしょうか？」とシオンが心配そうに言った。
『大丈夫、後で律子に電話して・・明日の朝でも連絡してもらうよ』と笑顔で返した。

「ネネ姉さんって、本物ですよね～・・匂いで分かります」とマキが笑顔でネネに言った。
「同じ匂いがするもんね～・・でもマキのは圧倒的だよ・・マキはいくつなの？」とネネが笑顔で返した。
「１６の若輩者です・・以後、よろしくお願いします」とマキが笑顔で頭を下げた。
「じゅーろく！・・マジでか・・凄すぎるよ、マキ」とネネが嬉しそうに言った。
「えへ・・見てくれだけの、小心者です～」とマキがウルで言った。
「やばい・・可愛すぎる、欲しくなる・・可愛い弟」とネネが二ヤで言った。
「小僧・・今、弟って聞こえた？・・お前が拾ってくる女性は、な

ぜそんなに意地悪なんだ」と私がマキに怒られた。
『誰が一番意地悪なんだ？・・告白しろ、マキ』と二ヤで返してみた。

「カレン姉さん・・昨日、病院で会ったら・・マキ、手を繋いでって言って。
嬉しそうに手を繋いでて、その後に腕組んできて、街まで帰ってきたら。
久々に良い男と腕組んで、楽しかったって・・二ヤ顔で、意地悪言った」

マキがウルで言った、私達はその言葉と表情で爆笑した。
「やばいよ、本気で可愛い～」とネネが笑顔で言って。
「ちょっと待って、マキは私のよ」とユリカが爽やか二ヤで言った。
「今、また意地悪言った・・水の女が、水商売の水のユリカちゃんが」とマキがウルで言って。
爆笑が止まらなくなった、私はマキのトロンを見ていた。
「誰か録音しとけよ・・ユリカに、水商売の水のユリカって言ったの・・マキが、自分でそれを聞いたら驚くよ」とリアンが楽しそうに笑った。

「そういう時のケジメは、どうやって取らせるの？・・ネネ」と蘭が満開二ヤで言った。
「マキの場合は、ボウズでしょうね・・それ位の、問題発言でしょう」とネネが二ヤで返して。
「エース・・もしかして、今・・意地悪言われたの？」とネネが私にウルを出した。
『遅いぞ、ネネ・・そんな事じゃ、カスミの合格は貰えんぞ』と二ヤで返した。

「ネネ・・どこを掃除したの？」とカスミが二ヤで、窓枠を指でなぞった。
「すいませ～ん、お義母様～」とネネもＴＶドラマ風に返した、全員の爆笑の中を。

楽しい時間の中で、私はシオンを見ていた、美しく笑っていた。
シオンがフロアーに出る、その季節が到来していた・・。

回想録　？　【久美子？】

魂の響きが木霊した、あのフロアーは・・今は存在しない。
あの熱いステージも無くなってしまった、だが響きだけは存在する。
その女性が弾き続ける限り、存在し続けるだろう。

久美子・・私にとって唯一、夢を見た存在だった。
私は久美子と出会った、あのＰＧの裏階段越しに見た、夏の青空を
今も鮮明に覚えている。
制服姿の美少女を見た時に、楽しい事の始まりを感じていた。
久美子がＰＧの１時間で、音楽の楽しさも、素晴らしさも教えてく
れた。
その夢見る世界の大きさに、私の夢も重ねていた。

東京物語の重要な場面で、少しだけ登場する久美子。
マキの親友で、シズカの戦友となった久美子。
私は限界カルテットに対する愛情と、同じ愛情を久美子に感じてい
た。

私のリンダとの思い出にも、常に久美子が存在する。
あのサマータイムも、ワルツで踊った映像にも、久美子の笑顔が欠
かせない。

そして久美子とは沢山の思い出がある、ライブに同行して東京にも
大阪にも行った。
ＮＹで迎えてくれて、ＮＹを案内してくれたのも久美子だった。
ブロードウェイのカフェで、深夜まで夢を語り合った。
絶対に諦めないという、あの時の誓いを、久美子はずっと守ってく
れている。

楽しい宴会が終了し、蘭と部屋に帰って、久々のりゃんの登場を楽しんでいた。
朝方まで眠れずに、翌朝眠い目を擦りながら、美由紀と登校した。
必死で睡魔と闘って、美由紀の面白話を聞きながら下校した。

蘭と病院に行って、２人でＰＧに出勤した。
ネネは公言通り、昼から来てシオンにサインを習っていた。
私はネネに笑顔を送り、ＴＶルームに入った。

「それでは、打ち合わせをしましょう」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
『そうですね・・カレンもお願い』とマリアと遊ぶカレンを呼んだ。
「いよいよ、ユリ姉さんだね」と蘭が満開で微笑んだ、私も笑顔で頷いた。
その時、北斗が来て、４人組とネネが入ってきた。
シオンが北斗にネネを紹介した、北斗に頑張れと言われて、ネネも嬉しそうに返していた。

『北斗・・ちょうど良かったよ、打ち合わせ・・ネネ、聞き耳立ててね』とマリアの横に座ったネネに笑顔で言った。
「大丈夫、耳には自信あるから」とネネが二ヤで返してきた。

「それでは、お願いします」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

『今年最後の共同体の交流として、いよいよユリさんを出す。
来週の火曜・木曜と、翌週の火・木と、次の週の水曜日。
順番は、リアンの店、ゴールド、ユリカの店、魅宴で、最後がミチルの店。

ＰＧの対応は、北斗を柱として、アイさんサクラさん。
それに蘭とナギサで、ユリさんの指名のフォロー。
火・木なら、ホノカが入るし、カレンも入れる。
その時にトップ５のヘルプの体制が、磐石であって欲しいんだ。
カレン、腕の見せ所だからね、そして不透明だけど、ネネもいると信じている。
ネネもそれまでに、流れは覚えてくれると、俺は思ってるから。
問題は来週だと思う、慣れない時が怖いよね・・絶対に客を満足させて帰す。
それが出来なければ、共同体自体の存亡に関わってくる。
北斗、全体をよろしくね・・北斗が最高責任者だよ。
そして蘭、ナギサと２人で・・９人衆とカレンとネネを引っ張って。
人員的に厳しい時は、リョウかセリカを用意するから。
万全の体制で行こう・・ユリさんに、他店を楽しんでもらう為にも』

私は真顔で全員を見回して言った。
「了解・・任せてもらうよ、ユリ」と北斗が微笑んだ、ユリさんも薔薇で頷いた。
「了解・・若手は私とナギサに任せて」と蘭が満開で微笑んだ。
「私もそれまでに、もう少し流れを覚えます」とカレンが笑顔で言った。
「私も出来る限りの事は、準備してみます」とネネも笑顔で言った。

『うん、よろしく・・それじゃあ、シオンとマキ。
シオンが自分で流れを作って、ヘルプのタイミングもね。
無指名客の担当も、シオンが考えて・・マキに伝えて。
マキがリクエストと、無指名客のサインを出す。
シオンとマキで、全体の流れをコントロールする、全ての統制は

シオンに任せる。
シオン・・ハルカがデビュー前にやってたレベルだよ。
ハルカ、シオンにその要領を伝授して・・あの2×2の頃の。
それが出来れば、シオンがフロアーに出たときの武器になるから。
だからレンがフロアーのサイン塔だよ、フロアー内の問いかけは、レンがさばく。
レンがさばいて、シオンに繋ぐんだ、沢山のサインがシオンに集まらないように。
ハルカの意識は、シオンのサインの流れのチェック。
ユリさんが言ったように、最終的には内部だけでサインを繋ぐ。
近い将来、マキもフロアーに入るんだから、それを目指そう。
ユリさんの夢、東京ＰＧを応援したいなら。
ユリさんのその夢が、自分の夢だと感じるのなら。
このユリ不在の時しかない・・それを伝える手段は、この時しかない。
俺の夢も、裏方４人組に賭けるよ・・俺は・・今回は、結果にこだわる』

私は強く言葉にして、その想いを伝えた。
「了解・・シオン姉さん、頑張りましょう」とハルカが言って。
「よろしくね、ハルカちゃん」とシオンがニコちゃんで返した。
「了解・・私も大丈夫だよ、管理塔引き受けました」とレンが言った。

『よろしく・・それじゃあ、カレン・・そろそろ出してもらおうかね、カレンスペシャルを・・もう良いだろ』とカレンに二ヤで言った。
「了解・・雰囲気に合わせるのは、今夜からやめるよ」とカレンが二ヤで返していた。

『うん・・そしてネネ・・この計画はネネがいないと成立しない、分かってるね？』とネネに言った。
「もちろん・・合格と同時に、戦力になってみせるよ」とネネは真顔で言った。

『ユリさん、これで行きたいと思います』とユリさんに真顔で言った。

「ありがとう、みなさん・・ありがとう、エース。
共同体の事に関しては・・私は、エースに全てを任せてるわ。
私はＰＧの女性を全員信じてますから、楽しんで行ってきますね」

ユリさんが薔薇で微笑んだ、女性が全員が笑顔で頷いた。
その時に大ママとヨーコが入ってきた、私は２人にネネを紹介した。
ネネはさすがに緊張して、大ママに笑顔で挨拶をした。

「リョウから聞いてるよ、頑張りなさい」と大ママが笑顔で言って座った。
「ありがとうございます、頑張ります」とネネも笑顔で頭を下げた。

『大ママの話を先に聞こうかな？・・それとも俺の話が先が良い？』と二ヤで言った。
「楽しそうな、二ヤだね・・エースのを先にしておくれ」と大ママが笑顔で言った。

『再来週の木曜日、ユリをお願いします・・厳しくやってね』と二ヤで言った。
「本当の話だね、ユリ」と大ママが驚いて言った。
「不束者ですが、お手柔らかにお願いします」とユリさんが薔薇で頭を下げた、大ママも嬉しそうな笑顔で頷いて。

「でかしたエース・・それと、私のお願いを聞いておくれ」と大ママが笑顔で言った。
『何でしょう？・・怖いな～』と二ヤで返した。
「北斗とカレンの１２月の予定なんだが、金曜・土曜は一人、魅宴が欲しいんだよ。
なんとかしてくれるかい・・頼むよ」
大ママは真顔で言った。
『了解・・大丈夫だよ、どっちかを派遣するよ。
大ママに求められるなら、２人とも嬉しいだろうし。
ＰＧはネネも残るだろうし、シオンもデビューするから。
ありがとう、大ママ・・俺も嬉しかったよ』
私は笑顔で大ママに言った、北斗もカレンも嬉しそうに頷いた。
「ありがとう、助かるよ・・魅宴も満席記録出そうだよ」と大ママが嬉しそうに言った。
『昨日のユリカの店で確信したけど・・良い影響が出てるよね』と笑顔で返した。
「そうみたいだね、ミチルも喜んでて・・またクラブ活動するってよ」と大ママが言った。
『うん・・ママがいない時は、凄い若手が入るって、噂になってるらしいね』と二ヤで返した。
「エース・・来週からユリを出すのかい？」と大ママが言った。
『うん・・ホノカが入る、火曜・木曜で・・来週はリアンの店とゴールド』と笑顔で返した。
「よし・・エース、来週の火曜と木曜・・ＰＧに銀河の奇跡を揃えろよ、私からのお礼だよ」と大ママが笑顔で言った。

『ありがとう、大ママ・・凄く助かります』と笑顔で頭を下げた。
「初めてですね・・1店に銀河が揃うのは、楽しそうですね」とユリさんが薔薇で微笑んで。
「シオン、頑張って・・大変だよ～、あのトリオは」と蘭が二ヤで言った。
「問題は、カスミ姉さんです～・・極度の負けず嫌いですから～」とシオンがウルで言った。

「何言ってるんだい、シオン・・リアンに比べれば、可愛いもんさ」と大ママが二ヤで言った。
「はい、そうでした～」とニコちゃんで返した。

「ところでユリ・・マキのデビューは、考えているのかい？」と大ママが言った。
全員がユリさんを見た、マキが驚いた表情で見ていた。

「もちろん・・このまま成長してくれたら、来春には考えています。ハルカの持つ最年少記録ですから・・ネネが提案してくれた方法で。
試験官はマダムと北斗姉さんと私、そして蘭とナギサとカスミとハルカで決めます。
全員一致の合格が出た場合は、4月2日を予定してます。
エースとマリアの誕生日に、デビューさせます。
後はマキ次第ですね・・そんな感じですか」

ユリさんはマキを見ながら、美しい真顔で言った。
「ユリさん・・ありがとうございます、必ず合格します」とマキが真顔で頭を下げた、喜びで背中が震えていた。

「なるほどね～・・使わしてもらうよ。

ヨーコ・・お前も４月２日にデビューしたいなら。
私とミコトとリョウとミサキの、全員一致が必要だからね。
頑張っておくれよ・・マキと同じ日にデビューしたいなら」

大ママも真顔で強く言葉にした。
「ありがとうございます・・私も必ず合格してみせます」とヨーコも真顔で頭を下げた。

『頑張れよ・・２人とも、忘れられない日にしろよ』と私が二ヤで言った。
「デビューの日が、マリアの誕生日なんて・・素敵～」とマキが笑顔で言って。
「本当にね～・・マリアだけの誕生日、素敵だわ～」とヨーコが笑顔で言った。
全員の笑い声の中、私は一人でウルを出していた。

「それと、エース・・久美子の派遣は、お前で良いのか？」と大ママが笑顔で言った。
『久美子の派遣？・・まぁ俺が付き人だから、聞きますけど』と二ヤで返した。

「来週の土曜に、結婚披露宴の、２次会の貸切予約が入ってね。
１４時から１９時までの、３時間なんだけど。
生のピアノ演奏が出来ないかって、依頼が有ったんだよ。
それと歌を歌うのに、伴奏としてね・・久美子にやって欲しいんだよ。
もちろん仕事でね・・久美子に話をして、連絡してくれよ」

大ママが笑顔で言った。
『了解・・連絡します、決まったら一度、魅宴のピアノの調子をみ

させます』と笑顔で返した。
「ありがとう、よろしく」と大ママが言って、挨拶してヨーコと帰って行った。

「噂以上に忙しいんだね～・・夜街のエースは」とネネが笑顔で言って。
「そうですよね～・・面白い噂だと思ってましたけど、事実だったなんてね～」とカレンが二ヤで言った。
「趣味ですからね～・・今は無報酬なのにね～」と蘭が二ヤで言って。
「報酬で出したら、どこに遊びに行くのやら・・怖い」とハルカが二ヤで言った。

『義務教育の内は取りません、ジンの会社が出来てからです・・それまでに、確かなシステムを作り上げるよ』と二ヤで返した。
「マンション買ってね・・ユリさんのマンション、まだ空いてますか？」と蘭が笑顔で聞いた。
「空いてますよ、お隣が・・マリアが喜ぶわ～」と薔薇二ヤで返した。
私はウルウルを出して、全員の笑顔を見ていた。

カスミが来て、４人娘が揃い久美子が来た。
ネネの食事も注文して、久美子に二ヤを出した。
久美子に魅宴の話をして、笑顔のＯＫをもらい、２人で魅宴に出かけた。

「緊張するな～・・魅宴は」と久美子が真顔で言った。
『久美子、歌謡曲や演歌を弾けるの？』と二ヤで聞いてみた。
「楽譜があれば大丈夫だよ、流行歌なら楽譜無しでも」と二ヤで返してきた。

久美子と裏から魅宴に入って、大ママの探してフロアーに行った。
『大ママ、久美子ＯＫだって・・今からピアノの調子みていい？』
とフロアーにいる大ママに笑顔で言った。
「そうかい・・ありがとね、久美子・・調律は昨日したから、頼んだよ」と大ママが振り向いて笑顔で言った。
「ありがとうございます、良い経験になります・・頑張ります」と久美子が笑顔で言って頭を下げた。
私はフロアーの隅の、黒いグランドピアノに案内した。

「素敵～・・○○○のグランド、良いな～」と久美子が嬉しそうに見て、椅子の調整をした。
『サマータイムからね』と私が二ヤで言って、久美子が笑顔で頷いた。

優しい感じで久美子は弾き始めた、鍵盤と会話するような、優しいタッチだった。
ボーイ達が入口に集まりだし、フロアーにミコトとリョウとミサキも出てきた。

久美子は感じを掴んだのか、徐々に熱が上がりだし。
夏の到来を喜んでいた、サビの部分を強調して、何度も繰り返し強く叩いた。
久美子の強いアレンジで、最後は燃え上がる感じで締めた。

静寂のフロアーで、大ママが拍手をして、全員が笑顔で拍手をした。
久美子は一度立って、全員に少し照れながら頭を下げて、座りなおした。
そして悲しげな曲を、表情豊かに弾いた、久美子の表情も寂しげだった。

そして復活のポイントを確かに表し、徐々に強くなっていった。
そして最後は強く叩いて、歓喜を表現した。

そして次がダンスナンバーで、楽しげに弾いて、腰を浮かせて踊っていた。
久美子も笑顔が溢れて、全員が笑顔で手拍子をした。
演奏が終わり、久美子は笑顔で立って、深々と頭を下げた。

「久美子、お願い・・〇〇〇〇〇〇をやって」と笑顔でミコトが言った。
私は英語のその曲が何か分からずに、久美子が笑顔で頷くのを見ていた。

クラッシックの強い響きが木霊した、重厚な音で驚いていた。
大波が押し寄せる感じで、力強く久美子は叩いた。
鍵盤の上を、久美子の両手が端から端に動いて、躍動感を表現した。
久美子は最後の部分では、クラッシックではタブーとされる、腰を浮かせて弾いた。
嵐の中を生還したように、久美子は弾き終わり虚空を睨んでいた。

全員が立って拍手をした、知らぬ間に女性達が１０人を超えていた。
久美子は我に返り、１６歳の輝きを連れて深々と頭を下げた。

「さすがだね、久美子・・今まで聴いた中で、一番だったよ」とミコトが笑顔で言った。
「素敵だよ～・・あのホノカでさえ、久美子には勝てないって言った意味が分かったよ」とリョウも笑顔で言った。
「ありがとうございます・・素晴らしいピアノで、少し興奮しました」と久美子が笑顔で返した。
「ＰＧは良いよね～・・この演奏を聴いて、気持ちを高めるんだか

ら」と大ママが言って、女性全員が笑顔で頷いた。
私は久美子と挨拶をして、ＰＧに戻った。
久美子はそのまま、ピアノに向かい、私も指定席に座っていた。
その時銀の扉が開き、ネネが真赤なドレスで現れた、私はその背中に見惚れていた。
そのスタイルの良さは、女性の美である曲線を強調していた。
隣に立つカレンが、スレンダーだったので、ネネの成熟感が強調されていた。
シオンがネネを四季とユメ・ウミに紹介していた。
２１歳の登場に、四季が嬉しそうに話していた。
私は女性達に近づいて、ニヤを出して話した。
『いよいよ、ユリさんを出す・・来週の火曜・木曜から、２週連続で。
そしてその次の週の水曜、ミチルの店で・・今年の交流会は終了する。
その後に、シオンをデビューさせて、１２月を一気に乗り切る。
ホノカも含めたＰＧのスタッフに、北斗とカレンを加えたメンバー。
来週は大ママのプレゼントで、リョウが加わり銀河を揃える。
それでも厳しいと思ってる、ユリさんが抜けると言うのは。
俺はネネに期待してる、必ず試験に合格して、戦力として残ってくれると。
四季にはサインを伝授して欲しい、カレンに伝授してるように。
四季が常に描いてる、もう１つの夢・・夜の世界で生きたならという、見果てぬ夢。
俺は必ず同学年の、ネネが見せてくれると信じてる。
協力して欲しい・・ネネとカリンを、四季にお願いする。

その会話すら出来る、サインの技術を伝授して欲しい。
そしてユメ・ウミ・・最近頑張ってるね。
ここが2人の見せ場だよ、ユリ不在で見せてもらうよ。
俺から2人のコンビ名を贈るよ、スウィート・ツウィンズ・・ユメ・ウミ。
呼び名は・・ツインズだね・・2人で1つじゃない。
1人で半分でもない・・あの佐伯院長が教えてくれた。
1＋1＝2だけじゃないと、2だけだと思ってたら、人生は面白くないと。
ツインズは1＋1＝2以上になれると信じてるよ、1人で1つ。
でも2人揃えば・・3にも4にも成り得る・それがツインズだと思ってる』

私は久美子がサマータイムで押してくれて、素直な想いを伝えた。
「了解、エース・・響いたよ、伝授しましょう」と美冬が笑顔で言って。
「見果てぬ夢を、見せてくれるんだね・・ネネ」と千春が真顔で言った。
「お見せします・・ここまで行けたという、その到達地点を」とネネも真顔で返した。

「カリン、3店に繋いでくれるんだね・・私達の水商売に対する、想いが詰まったサインを」と千夏が真顔で言った。
「必ず繋ぎます・・その複雑な中に隠された、強い想いまで」とカレンも真顔で返した。
「よし・・楽しんで、全員で乗り切ろう・・期待してるよ、ツインズ」と千秋が笑顔で言った。

「はい・・エース、ありがとう・・きっと2以上にするね」とユメが笑顔で言った。

「なんせ伝説の先輩が入ってきたし、嬉しいよ」とウミが笑顔で言った。
「ありゃ～・・ばれました、ユメ・ウミ・・内緒にしてね」とネネがウルで言った。
「じゃあ・・貸しって事で」とウミが二ヤで言って、ネネがウルで頷いた。
女性全員が笑って、ネネもカレンも楽しそうだった。

「エース・・マジの話だな・・銀河揃い」と後ろからカスミが言った。
『うん、全てを出しても足らないからね・・俺は今回は、結果にこだわるよ』と振り向いて二ヤで言った。
「了解・・見せてあげるよ、銀河の奇跡と呼ばれる理由を」とカスミが二ヤで返してきた。
「どこまで煽っても良いよ・・ユリ姉さん不在、全員で乗り切るよ」とナギサ強く言った。
「はい」と全員が笑顔で返した。
私はナギサに、ネネを紹介した、２人は笑顔で話していた。

「ねぇ・・マキ、何かあったの？」と美冬が二ヤで聞いた。
「そうなんだよ～・・今日のマキ、灼熱だよ」とカスミも二ヤで言った。

『ユリさんが、試験期間を提示した・・それに合格すれば、来春デビューできる。
かなり厳しい試験だけど、マキが狙ってるハルカの最年少記録は。
ＰＧにはそれだけの重みが有るからね・・ケイが残した記録だから』
私はハルカを見ながら、笑顔で言った。

「私は・・マキに塗り替えて欲しい、心からそう思ってるよ」とハルカが微笑んだ。

「一流店って、こういう事なんだな～・・私、本当に嬉しいです」とネネが笑顔で言った。

「私もそう思っていました・・女性同士の関係を感じて、嬉しかった」とカリンが笑顔で言った。

「将来、その中心メンバーになるんだろ・・ネネ、カリン・・そう成りたいなら、今を全力で行くよ」とナギサが笑顔で言った。

2人は強く頷いて、全員が笑顔になった。

「なぎしゃがじぇんぶ言って、わたちの出番ぎゃにゃい」と蘭が私の後ろでウルで言った。

『良かったね・・りゃん』と二ヤで返した、蘭も満開で頷いた。

久美子が静かに染み渡るような曲で、全員の笑顔を包んでいた。

私は開店後のネネを見て、その接客の見事さを確認して、ミチルの店に行った。

ミチルにユリカスペシャルをして、ユリさんの話をした。

嬉しそうな笑顔のミチルと別れて、久美子を誘って貸衣装屋に行った。

『オヤジ達は今回、どんな感じなの？』と衣装を見ながら笑顔で聞いた。

「カントリースタイルだって、好きなのよね～・・目立つのが」と久美子が笑顔で言った。

「これとか・・いい感じ～」と久美子は西部劇に出てきそうな、女性のドレスを手に取った。

私は二ヤで見つけていた、ガンマンのような可愛い衣装で、下が皮

のホットパンツだった。
斜めに入るベルトに、ガンホルダーまで付いていて、上着の茶色のベストは皮だった。
ベストの下のシャツは白で、可愛いボタンのアレンジがあった。
ベストの胸には真赤な薔薇の刺繍があって、私は二ヤでそれをテーブルの上に置いた。

「なるほど～・・素敵じゃない」と久美子が笑顔で言って、靴を見に行った。
私は帽子コーナーに行って、可愛いテンガロンハットを持って戻った。
「うん・・いい感じ、試着してみる～」と久美子が編込みブーツを持って、笑顔で試着室に消えた。
私は備品コーナーで、マグナムの玩具のピストルを用意した。

久美子が試着室を開けて、私はその可愛さに二ヤを出した。
「合格二ヤだね」と久美子が笑顔で言って、私も笑顔で頷いた。
久美子にピストルを渡すと、嬉しそうにホルダーに収めた。
『久美子・・網タイツを俺が買ってやるから、危ないのを買って来いよ』と二ヤで言った。
「了解・・派手に行くよ～・・オヤジ達を、ぶっ飛ばす」と久美子が二ヤで言った。
『楽しみだ～』と私も二ヤで返して、衣装を包んでもらった。

それから水槽に2人で行って、チョコパフェを食べていた。
『久美子は音楽家で、誰が好きなの？』と笑顔で聞いてみた。
「やっぱり・・ジョン・レノン」と久美子が微笑んだ。
『そっか～、多いよね好きな人・・シズカもビートルズが好きだよ』と笑顔で返した。
「そうなんだ・・少し意外かな」と久美子は笑顔で言った。

『久美子・・ピアノってやっぱり、癖とかあるの？』と聞いてみた。
「そりゃーあるよ・・弦は金属だし、弾き方でかなり変わるよ。
温度や湿度にも敏感に反応するし、ピアノは微妙なチューニングは難しいからね。
日本じゃピアノの本来の音を出すのって、難しいんだよね。
湿度の変化が激しいからね、弦楽器は乾燥した場所が良いんだよ。
よくミュージシャンで売れたら、海外でレコーディングするでしょ、ロスとかで。
あの意味は音楽機材じゃないのよね、機材なら日本だって変わらないよ。
やっぱり楽器なのよ・・渇いた音って、中々出ないんだよね。
それに癖も当然あるよ、シズカが車椅子の時に言ったでしょ。
使用者が使ってこそ、製品は完成する・・正にそれだよ。
個人所有のピアノなんて・・もろ、その人の癖が出てるよ。
他人が弾くと凄く弾き難い、鍵盤の押さえる場所も違うしね。
常に鍵盤の真ん中を押さえるのって、難しいんだよね・・左右にブレる癖も出る。
叩き方も、個人差があるし・・それで大きく変わるよ。
ＰＧのピアノ・・私は驚いたのよ、何の癖も無くて。
誰も弾いてない感じだった、魅宴のピアノは何人かが弾いてるね。
お金を取るレベルの人が・・学校のなんて、訳分からないくらい、癖だらけだよ」
久美子は楽しそうな笑顔で言った、音楽の話は楽しいんだと思っていた。
『一番衝撃的なピアノは、どんなの？』と興味津々で聞いてみた。
「リッチのピアノ・・何かが違うよ、怖いくらい。

多分・・沢山の夢を感じてきたんだよね、あの鍵盤が。
汗も涙も見てきた、そして挫折も諦めも感じたんだよ。
何かが乗り移ってる・・そんな感じだよ。
中途半端な気持ちじゃ、絶対に弾いてはいけない。
そんな感じがする・・だから私も徹底的に準備をする。
豊君があなたを殴る時のように、完璧に素直な自分を出したい。
上手くやろうとか、響かせようとかでなく・・何も考えない世界。
あの第一回の演奏会で、ミホが私の指を追ってた時。
あの時に感じたの・・その世界の入り口を。
世界記録で走る時、脳はいちいち指令を出さない。
エースの言う世界・・あの時、少し感じたよ。
私も求めてるよ・・そのレベルに到達してみたい。
脳が指示する余裕が無い程の、高みを目指したい。
心が直接指を動かすような・・そんな世界を感じてみたいのよ」

久美子の笑顔を見ながら、私は嬉しかった。
この水槽でのひと時は、今でもはっきりと覚えている。
私も本当に楽しくて、久美子の言葉が嬉しくて・・私は時を忘れていた。

そして久美子のリッチ2度目の、伝説のライブが近づいていた。
第一回ライブのアンコールで、ソロでサマータイムを弾いた久美子。
その噂は、音楽好きの中を駆け巡っていた。
そして集まってくる、音楽を愛する者達が、呼び寄せられるように。
リッチのステージに立つ、１６歳の魂のピアニストを見るために。

【久美子？】

思い出の場所・・水槽の中で泳ぐ魚たち。
鮮やかな色彩の南洋の小魚が、小さな世界で泳いでいた。

『強情娘だよね～・・久美子も、ハルカを盗んだな』と二ヤでズバッと聞いてみた。
「そっか～・・気付いてるよね」と久美子が真顔で返してきた。
『久美子だから、恋愛じゃないから・・学校だね？』と聞いてみた。
「なぜ私は恋愛じゃないの？・・正解だけど」と二ヤで返してきた。
『久美子・・誰にも言わないから、俺には話せよ』と真顔で言った。

「うん・・付き人だから、話さないとね。
実はオヤジバンドで活動してるのが、学校のある先生にばれて。
多分、生徒の誰かが見て、その先生に報告したんだと思う。
女の世界は難しいね、妬みとか・・嫌になるよ。
その先生は、良い先生なんだけど・・クラッシックの世界に埋没してて。
ジャズのバンド活動なんて、不良のする事だ！・・みたいな感じ。
私はお金を貰ってる訳じゃない、純粋に趣味だって言ったんだけど。
理解してもらえなくて・・明日、レンを連れて来いって言われてるの。
私はレンには相談出来なくて・・バンドは絶対続けたいのよ。
でもその先生は理解できないと思う、私は学校とバンドを・・選択しないといけない。
今の私は、将来ジャズの方向に進みたい・・だからバンドを選択しようと思ってるの」

久美子は真剣に言って、私の返事を待っていた。
『久美子・・大きく間違ってるよ、選択しないといけない？
しなくて良いよ、久美子はバンド活動で、校則に触れてる訳じゃない。
久美子・・１６歳で将来を決めて良いのか？
今の学校には意味があるだろ、久美子の選択肢を残す為にも。
今、久美子がジャズを選んでも、誰も喜ばないよ。
レンは当然だけど、リンダもマチルダも喜ばない。
そんなに早く、結論を出して欲しくないんだよ。
俺はさっきの魅宴の最後の曲、あのクラッシック・・凄く好きだった。
久美子・・バンドも続けて、学校も卒業しろよ。
２年後の文化の日の前日、ここに２人で来よう・・その時に結論を聞く。
久美子・・諦めるなよ、そして可能性を追えよ。
久美子は灼熱のマキの親友だろ、冷めるなよ。
音楽に関しては、贅沢に生きろよ・・俺は久美子に諦めさせない。
久美子の付き人として、久美子に夢を背負わせた仲間として。
その先生との、明日の面談は何時なの？・・俺を信じろよ、久美子』
私は久美子に強く言った、久美子は真剣な目で私を見ていた。
「１４時３０分に、呼び出されてる・・どうするの？」と久美子が真顔で聞いた。
『ねぇ久美子・・あの女は冗談で言ってるんじゃないよ。
レンや久美子に対して、本気で言ってるんだよ。
呼び出しなら、当然行くでしょう・・久美子の母親が。
律子が行くに決まってるだろ、久美子は安心して待ってろよ。

そして不運な先生をウルで見てあげて、律子が本気で行ったら。
多分・・校長が飛んでくるよ・・久美子、自分の気持ちを確認して。
そして１６歳で結論を出さないで、後２年・・その２年で探して。
俺はどっちでも良いんだ・・リンダもマチルダも、そう思ってるよ。
明日はそれで行こうね・・久美子も、律子に怒られるからね。
久美子が甘えないことが、律子には辛い事だよ』

私は久美子の瞳を見ながら強く言った、強い波動が同意を示した。
「私は・・甘えて良いの？・・相談して良いの？・・母さんに」と久美子が目を潤ませて言った。
『それが律子の、唯一の望みだよ・・久美子の相談を待ってるんだよ』と笑顔で返した。
「うん・・ありがとう・・明日、母さんに謝るよ」と久美子も笑顔になった。

私も笑顔で頷いて、久美子と腕を組んでＰＧに向けて歩いていた。
ＰＧのビルが見えた時に、夜空に星が見えた。
ハルカと描いた未来図に、久美子の魂の叫びが加わった。
私は久美子に出会えた事を、原作者に感謝していた、優しい波動に包まれながら。

私は久美子をＴＶルームに送り、指定席に座った。
シオンとマキの集中を感じていた、２人でシュミレーションをしていた。
フロアーでは、ネネが蘭に付いていた、蘭は満開笑顔で引っ張っていた。
その姿には、厳しさがあった、ネネを一人の夜の戦友だと認めていた。

ネネも美しい笑顔で、お客の笑顔を作っていた、私は安心して見ていた。
「何の試験が必要なんだよ、あのネネ姉さんに」とカスミが来て真顔で言った。

『カスミ・・ユリさんは。
９人衆のリーダーに、採点しろって言ったんだ。
ネネのあの個性を、９人衆が受け入れるかと聞いてるんだ。
ユリさんは、チームを認めたんだよ・・自分はそれには、口を出さないって。
チームがチームとして、結論を出せって。
蘭に対しては、将来のＰＧとして・・ネネが必要かと聞いている。
ユリさんは、自分に嘘はつかない・・ＰＧの女性全員を信じると言った。
だから・・自分だけで、女性の採用を決める事をやめた。
マキの試験官は、マダム・北斗・ユリさん・蘭・ナギサ・カスミ、そしてハルカなんだ。
その全員一致の合格が必要だと、ユリさんは言ったんだよ。
カスミ・・蘭を見ろよ、新人として接してないだろ。
夜街で生きる、女性として・・その戦友として、ネネと接してる。
ネネが言った、カスミの合格が一番欲しい・・あれは絶対に本音だよね。
カスミ・・年齢は関係ない・・ネネが四季の穴を埋められるのか。
そしてチームの輪を、乱さないのか・・それを採点しろよ。
それがリーダーカスミの、大切な仕事なんだよ』

私は輝くカスミの瞳を見ながら、強く言った。
「了解・・自分に正直にやるよ・・ありがとな」とカスミは微笑んで、銀の扉に消えた。

私は見送って、フロアーを見ていた。

「ユリカ姉さん、ごめんなさい・・私はお馬鹿な妹でした」とマキが私に頭を下げた。
強烈な二ヤの波動が来て、私も二ヤでマキを見ていた。
「何？・・その二ヤ、怖い」とマキがウルで言った。
『困ったね～・・マキ、水商売の水のユリカ・・ご機嫌斜めだよ～』と二ヤで言った。
「今から謝りに行って来る」とマキが全開ウルウルで言った。
ユリカの優しい波動が、意地悪言うなと言っていた。

『マキ、ユリカが許すって・・その条件は、試験に合格すると誓うこと』と笑顔で言った。
「ユリカ姉さん、マキは誓います・・必ず試験に合格します」と真顔で言った。
ユリカの喜びの波動が来た、私も笑顔で頷いた。
『マキ・・もう忘れて良いよ・・でも酒での失敗は、忘れるなよ』と真顔で言った。
「うん・・忘れないよ・・忘れられない」と微笑んで、指定席に戻った。
ユリカの波動が嬉しそうで、私も笑顔でマキを見ていた。

私は蘭の笑顔を見て、ＰＧを出て、公衆電話で実家のダイヤルを押した。
シズカが出て、私は久美子が招待してたので、それを伝えた。
シズカは恭子にも連絡すると嬉しそうに言って、律子に代わった。
私は律子に、久美子の事を話した、律子は黙って聞いていた。

「了解・・当然私が行くよ・・ライブにもね、チケット買っといて」と律子が楽しそうに言った。

『お袋だけので良いんだね？』と返した。
「勝也は今、現場が忙しいからね・・誰か来るの？」と律子が言った。
『美由紀が来るよ・・それと、梶谷さんが来ると思うよ』と私は二ヤを出しながら言った。
「それは楽しみだ～・・カジやんには言うなよ」と律子も多分二ヤで言った。
私は礼を言って、ユリカのビルに歩いた、ユリカはエレベーターから降りてきた。
ユリカを抱き上げて、階段を登った、ユリカは瞳を閉じて静かだった。

私は少し冷たい風が気持ち良くて、夜景を見ていた。
「久美子のライブ・・良いな～」とユリカが言った。
『さすがのユリカでも、土曜の夜だからね・・でも聞けるでしょ、無料で』と二ヤで言った。
「でも見たいよね～・・可愛いガンマン」とユリカが微笑んだ。

『可愛いよ～・・7時からだから、見にくれば・・マキには見せようと思ってるし。
限界トリオ揃い、面白いよ～・・特に久美子のライブだからね』

私はユリカに二ヤで言った、ユリカも笑顔になった。
「私の分もチケット買っといて、売れ上げに貢献するね」と笑顔で言ったユリカを降ろした。
『了解・・今から寄って帰るよ』と笑顔で言って、手を振ってユリカと別れた。
私は楽しい気分で、狭い通りを歩いていた。
リッチの通路を入ると、激しいロックのリズムが聞こえた。

リッチの受け付けに、女性が座っていて、私を笑顔で迎えてくれた。
『キヌちゃん、今晩は～・・盛り上がってるね～』とリッチの絹子という女性に笑顔で言った。
「もうすぐ終わるからね、ラストスパートでしょ・・鹿児島出のバンド、まぁまぁだよ」と笑顔で返してきた。
『ジャズナイトの券、まだ有るの？』と笑顔で聞いた。
「あるよ～・・売れ行き好調だけどね」と笑顔で言って、券を出した。

『2バンド出るの・・オヤジ達、前座だね』と二ヤで言った。
「1つはプロだからね、通しじゃなくて良いんでしょ？・・前半だけで、7時～8時半があるよ」と笑顔で言った。
『そんなシステムなんだね、後半が多いんだね・・プロを見に』と券を見ながら言った。
「まぁね・・でも両方買う人が多いよ、久美子が噂になってるよ」と嬉しそうにキヌちゃんが言った。
『とりあえず、3枚・・明日また買いに来るよ』と笑顔で言った。
「ありがと～・・支配人喜ぶよ」とキヌちゃんが券を差し出して、私が支払った。

『キヌちゃん、前半だけなら・・子供も良いのかな～？』と聞いてみた。
「1区画、準備するよ・・10人以上ならOKだよ」と笑顔で言った。
『幼稚園児と2歳児は？・・駄目かな？』と真顔で言った。

「良いよ・・小学生以下は、無料だよ・・久美子の応援だろ」と支配人が出てきて言った。
『うん・・久美子の教え子に、見せてやりたくて』と笑顔で頭を下げた。

「それなら歓迎するよ、楽しみだよ」と支配人が笑顔で言った。
『ありがとう、明日また来ます・・キヌちゃん、１区画よろしく・・人数揃えるから』と笑顔で言って。
支配人にお礼を言って、ＰＧに戻った。

『マダム・・土曜日、マキを９時まで貸して欲しいんですけど？』と笑顔で言った。
「かまわんけど・・何だい？」とマダムが笑顔で返してきた。
『久美子のライブ応援部隊を結成したくて、今リッチで４人娘の許可は取ったから』と笑顔で言った。
「本当に！・・嬉しい～」とエミが笑顔で言った。
「エース・・ありがとう」と久美子が微笑んだ。

「もちろん、マキも良いぞ・・それで足りるのか？」とマダムが言った。
『限界トリオと律子にユリカ、それにエミと俺で７人・・あと３人』と笑顔で返した。

「ワシが大ママの許可を取るかい、ヨーコでカルテットになるじゃろ。
　それにレンを許可するよ、レンとマキとヨーコとエミの分はワシが出す」

マダムが笑顔で言った、久美子が本当に嬉しそうだった。
『ありがとう・・それじゃあ、久美子に大サービスで・・豊兄さんを招待するよ』と笑顔で言った。
「ありがとうございます・・頑張ります」と久美子が笑顔で頭を下げた。

私はマダムにお金を受け取り、リッチに戻って追加分を買った。

ＰＧに戻ると、満席状態で熱が高かった。
ネネは積極的に動き、カスミがネネを連れて、若者の席に付いた。
２人のコンビが自然で、若者も楽しそうだった。
終演を迎えた時、９人衆と北斗にナギサと蘭、それにカレンにネネが１０番に座った。
私はシオンとマキと3人で、１０番に歩いた、その時にユリさんが来た。

「一週間という予定でしたが、蘭・カスミ・・何かありますか？」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「私はナギサと話して、結論を出しました・・ネネに期待も込めて、満点の合格を贈ります」と蘭が満開で微笑んだ。
ネネはハッとして蘭を見た、喜びで瞳が潤んでいた。

「私は・・ネネ姉さんに誓って欲しい、自分を正直にぶつけると。
私達仲間には・・隠さずに、自分の想いを伝えてくれると。
仕事面に対しては、なんら問題は無いと・・９人衆は認めます。
教えて欲しい事も、沢山あると感じました。
その誓いがあれば・・今夜、今から・・１０人衆になります」

カスミは強く言った、ネネはカスミを見ていた。
「私、ネネは誓います・・自分に正直に生きて、必ず仲間になる事を・・ここに誓います」とネネも立って強く言葉にした。
「了解です・・ユリさん、私も満点を贈ります」とカスミが真顔で言った。
「分かりました・・ネネ、私も満点を贈りますね・・四季の見果てぬ夢、私も期待しています」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「ありがとうございます・・必ず、ご期待に応えます」とネネは頭を下げて泣いていた。

ユリさんが私を見た、私は笑顔で返した。

『ネネ・・おめでとう・・今からだよ、頑張ってね』と笑顔で言った、ネネも笑顔になって頷いた。

女性が全員笑顔で立って、ネネに拍手を贈った、ネネはまた泣きながら何度も頭を下げた。

解散になって、私はシオンを送って、蘭と腕を組んで帰った。

蘭にライブの話をしたら、行きたいと言ってウルしていた。

オヤジバンドのライブを、次は日曜で交渉すると約束させられた。

翌日、美由紀と登校して、すでに明日のライブでテンションが高い美由紀に驚いて。

文化祭の準備だけの、楽しい学校を終了し、美由紀と下校した。

アパートに帰り、少し厚手の上着を着て、病院に行った。

由美子の調子が良いので、自然に笑顔になって、考えていた。

《左手に誘う日も近いかな》と思いながら、優しい波動に押されて、夜街を目指した。

夜街が遠くに見えた時に、クラクションが鳴った、私はその方向を見た。

真赤なZが路肩に止まっていた、私はZに駆け寄った。

「ごめんなさい、今夜お得意さんのパーティーが急に入って、北斗に頼みましたから・・マリアをお願い出来る？」と薔薇で微笑んだ。

『もちろん』と笑顔で言って、助手席を開けてマリアを抱いた。

天使全開のマリアとZを見送って、マリアを抱いて夜街に歩いていた。

私が一番街を歩いていると、律子と久美子が靴屋の中で蘭と話していた。

久美子の笑顔が楽しそうで、上手くいったんだと思っていた。
「りつこ～」とマリアが天使全開で呼んだ、律子は笑顔になって手招いた。

私は律子にマリアを渡した、律子は笑顔でマリアを抱いていた。
「ありがとう、母さんのおかげで終わったよ」と久美子が微笑んだ。
「今・・私も久美子を怒ってたの、どうして相談しないんだって・・レンだけが、姉じゃないんだから」と蘭が満開に微笑んだ。
「ごめんなさい、蘭姉さん・・今度から相談します」と久美子も笑顔で頭を下げた。
「約束だぞ～・・はい、久美子、母さんと私から・・制服の靴」と蘭が満開で手渡して、久美子が嬉しそうにお礼を言っていた。

「小僧・・ユリはパーティーだって？」と律子が二ヤで言った。
『うん・・最近、ユリカ並にエンジョイしてるよ』と二ヤで返した。
「蘭・・ＰＧは仕上がってきたね、いよいよ楽しい季節だね～」と蘭に二ヤで言った。
「母さんは、楽しむんですね～・・私も楽しみですけど」と蘭が満開で返した。
その時シズカが制服で現れて、律子とシズカと久美子で食事に行った。
私はマリアを抱いて、３人を見送った。

蘭がすぐに靴屋が終わると言ったので、雑貨屋でアイスを買って、ベンチでマリアと食べていた。
蘭が来てマリアを抱いて、ＴＶルームに入った。
ネネもカレンも来ていて、シオンと３人でサインを練習していた。
「熱心だね～」と蘭が満開で言って、３人も笑顔で返した。

『レン、マキ・・ほい、マダムにお礼を言ってね・・土曜は９時出

勤の許可と、このチケットのプレゼント』と二ヤで言って、チケットを渡した。
「ありがとうございます、マダム・・嬉しいです」とレンが笑顔で言って、マキも頭を下げた。
「楽しんでおいで」とマダムも笑顔で返していた。

「絶対、次は日曜にしてって、オヤジ達に言っといてね」と蘭が私にウルで言った。
「絶対だぞ」とカスミも不敵で追ってきた。
『了解・・J・塚本に交渉しとくよ』と笑顔で返した。

その日は金曜で、北斗もカレンもPGに入り。
ネネは四季に付いていた、ネネはその能力で、サインをかなり覚えていた。
私は週末の5店巡回をして、最後にユリカの店に行った。
ユリカスペシャルをすると、限界カルテットをお泊りに誘いたいと言った。
私は聞いてみると答えたが、来ることは間違いないと思っていた。

PGは開演から終演まで満席が続き、女性達も完全燃焼だった。
蘭と帰りながら、律子の学校での話を聞いて、私も嬉しくて笑顔で頷いていた。

翌日、ハイテンションの美由紀と登校して、ユリカが迎えに来ていた。
ユリカのマンションに行って、昼食を食べて、美由紀がシャワーを浴びて着替えた。
ユリカが美由紀に、微かに化粧をして、ピンクのルージュを塗った。
美由紀は最高の笑顔で、ハイテンションで自慢してきた。
私は『可愛い』という言葉を、何度も強要させられて、ウルで3人

で病院に行った。
美由紀はミホと沙紀と由美子にも、可愛いだろ～と自慢していた。
婦長が来たので、私は第二回演奏会の打ち合わせをした。
そして靴屋を覗いて、蘭の満開を見て、ＴＶルームに入った。
ネネに美由紀を紹介した、ネネは嬉しそうに挨拶していた。

「ネネって良いな～・・カレンは美しくて、ネネは可愛いな～・・逆取りしたのね」と美由紀が私に二ヤで言った。
『まぁね・・ギャップだよ』と笑顔で返した。
「逆取りってな～に？」とユリカが二ヤで美由紀に聞いた、ネネもカレンも興味津々になった。

「小僧がよく言ってたんですよ、私が他人の視線が嫌だって言った時期。
私の足に向けられる特別な視線、それを気にしてた時です。
どうして美由紀は、正面からしか取らないのかって。
美由紀の足を見て、その人がどう思うかじゃないよ。
どう思わせるか・・逆に取ってみろよって言ったんです。
私が笑顔で生活してたら、それが無理をしてるのでなければ。
私の足を見た人の、視線が変わるよって。
私はそれで感じたんです、自分の方が決めていたんだと。
他人の視線を勝手に決めていた、その行為が伝わって。
私を見る視線が、そうなってるんだって・・そう思いました。
小僧が命名した名前・・お２人の名前も、その小僧の感覚・・逆取りですね。
カレン姉さんの魅力・・儚さっていうか、幸薄さを逆に取らせる。
そしてネネ姉さんは、その素敵な不良性を、逆に取らせるんですね。
人の視線を気にするな、嫌なら自分で変えさせろ・・そんな想い

が入ってますね。
　カレンもネネも素敵です～・・その中には、沢山の期待が込められてるから。
　小僧が逆取りを選んだなら・・それは愛情表現だからです」
美由紀は笑顔で言った、ネネもカレンも笑顔になった。
「なるほどね～・・そうやって、命名るのね～」とユリカが二ヤで言った。
「美由紀ちゃん、ありがとう・・私は益々、カレンが好きになったよ」とカレンが微笑み。
「私もだよ・・ネネを大切にするよ・・美由紀、ありがとう」とネネも笑顔で言った。

「ユリカ姉さん！」とマキが入ってきて、真顔で言った。
「もう良いよ、マキ・・何も気にしてないから」とユリカが笑顔で返した。
「マキ先輩・・ユリカ姉さんを、体育館の裏に呼び出しましたね～」と美由紀が二ヤで言った。

「美由紀・・変な事言わないの、やってたみたいじゃない」とマキがウルで返した。
「ネネ姉さん・・どう思います？」と美由紀が二ヤで言った。
「確実に・・やってたね」とネネが二ヤで言った。
「やってたでしょうね～・・限界カルテットの、武闘派代表だからね」とユリカが二ヤで言った。
「限界カルテット！・・あの豊の妹分の・・あのマキなの？」とカレンが驚いて言った。
「残念ながら・・そうです」とマキがウルで返した。
「そうなんだ～・・豊君は元気？」とカレンが笑顔で言った、その

時に蘭とカスミが入ってきた。
「はい・・元気ですよ、お知り合いなんですね」とマキが笑顔で返した。
「私でも知ってるよ、豊なら・・４つも下だけどね」とネネが笑顔で言って。
「私には恩人だよ・・絡まれてる時に、助けてもらったんだよ・・会いたいな～」とカレンが嬉しそうな笑顔で言った。
「良いな～・・素敵な思い出があって」とカスミがウルで言った。

「ユリカ姉さん、悪い二ヤが出てますよ～」と蘭が満開で微笑んだ。
「えっ！そう？・・思い出し笑いです」とユリカが二ヤで返した、私は必死で二ヤを我慢した。

その時マリアが立ち上がって、入り口の方に駆け出した。
マリアはドアを見て、両手を広げた、女性達が不思議そうにマリアを見ていた。
ゆっくりとドアが開いて、豊が顔を見せた。

「ゆたか、ゆたか」とマリアが跳ねた、豊はマリアを笑顔で抱いた。
「それでユリカ姉さん・・二ヤでしたね～」と蘭が笑顔で言った、ユリカは二ヤを返していた。
「それにしても、マリア・・恐るべし」とカスミが不敵で言った。

「あれ、お久しぶりです・・お２人とも、綺麗になりましたね～」と笑顔で言って、豊が入ってきた。
「豊・・口も上手くなったね、最強だよ」とネネが笑顔で言った。
「豊君、あの時も、今の言葉もありがとう・・嬉しいわ～」とカレンも笑顔で言った。
「かれん、だめ～・・ねね、だめ～」とマリアが天使最強不敵で言った。

「カスミ・・どうしてこんな伝承をするの」とネネが二ヤで言った。
「守護神、マリアですから・・悪い虫除けです」とカスミも二ヤで返した、ネネが楽しそうな笑顔で返していた。

「マキ・・もう良いんだろ?・・久美子と5人で食事するってよ、ヨーコがもう来るよ」と豊が微笑んだ。
「ありがとう、兄さん」とマキが微笑んで、淡いピンクの口紅を出した。
「ありゃ・・驚きです～」と美由紀が言った。
「美由紀、お黙り」とマキが二ヤで返した。
「良いじゃない・・やっぱりその色が良かったよ」と蘭が満開で微笑んだ。
「うん・・マキらしくて良いね、さすが蘭だね～」とユリカが微笑んだ。
「高級です～・・プレゼントですね～・・私のが無いです～」と美由紀がウルウルで言った。

「美由紀は中学生でしょ・・小僧におねだりしなさい」とユリカが二ヤで言った。
「小僧・・私も高級なやつ、誰も持ってないやつが良い」と美由紀がウルで言った。
『しょうがないな～・・ヨーコが来たら、ポケットから出してもらうよ・・誰も持ってないやつ』と二ヤで返した。
大爆笑の中で、カレンとネネがウルを出していた。

その時、ヨーコと久美子が入ってきた、久美子の可愛い衣装で、全員が笑顔になった。
「豊さん・・ありがとうございます」と久美子が笑顔で言った。
「久美子ちゃん、楽しみにしてるね」と豊は微笑んで、右手の拳を久美子に出した。

久美子はパッと輝いて、輝く笑顔で右の拳を当てた。

「恵まれ過ぎてる・・久美子は、贅沢だ」とカスミが不敵で言った。
「はい・・私、恵まれてます～」と久美子が笑顔で返した。
『久美子・・銃は？ベルトは？』と私が二ヤで聞いた。
「今から食事なの・・銃は持って行けないでしょ」と久美子が二ヤで返していた。
『なんだ～・・忘れたのなら、ヨーコに借りれば良いと思ったのに～・・下ネタ銃』とニヤニヤで言った。

「大きくなったり、小さくなったり銃・・下ネタ銃です～」と美由紀が二ヤで言った。
全員が爆笑して、ヨーコがウルを出していた。

「美由紀・・何がどうして、下ネタなの？」とヨーコが二ヤで返した。
「それは、下ネタ番長に解説してもらいます～」と美由紀がカスミに二ヤで振った。
「ヨーコ・・ここにお座り、図で解説するから」とカスミが二ヤで言った。
「参りました・・ご勘弁を～」とヨーコがウルウルで返して、全員が笑っていた。

笑い声の中、久美子とマキとヨーコが出て行った。

「カスミ・・45分だけ見るよ、ドレスで行くよ」と蘭が二ヤでチケットを見せた。
「ほいきた姉さん・・ドレス、地味なのにします？」とカスミが笑顔で聞いた。
「土曜の夜だよ、それは許されないよ」と蘭が満開二ヤで言った。

「そりゃ～そうですね～」とカスミも不敵二ヤで言った。
「困った人達です～・・気配を消して下さいね」と美由紀が二ヤで言った、蘭もカスミも二ヤで頷いた。

久美子が燃え上がる、ライブが幕を開けようとしていた。

仲間が揃って、その時を待っていた・・笑顔で。

【久美子？】

期待が興奮を連れてきた、心が先に楽しんでいた。
素敵な時間を過ごしたいと、仲間達が集まってきた。

エミとミサとレイカが可愛い洋服で来て、３人が楽しそうだった。
蘭とカスミが食事を先にしながら、笑顔で３人を見ていた。
ユリさんが入ってきて、３人娘に微笑んだ。
「エミ・・花束を用紙しましたから、演奏が終わったら、久美子ちゃんに渡してね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「はい・・分かりました」とエミが笑顔で返した。
「あら～やっぱり行くのですね、食事が早いこと」と薔薇で微笑みながら、ユリさんが座った。

「次回のライブは、全員で行きましょう・・塚本さんに、次回は日曜にするよう頼んでおきました」とユリさんが薔薇二ヤを出した。
女性達全員が笑顔になって頷いた。

「決まりやな・・ユリに言われたら、絶対に断れん」とマダムが二ヤで言った。
「だいたい、塚本と谷田が同じバンドで、仲良くやれるのかね～」と松さんが二ヤで言った。
「何か・・怪しい二ヤですね～」とユリカが言った。

「塚本さんと谷田さんは、昔ユリのファンで・・ライバルだと思ってたのよ、お互いだけ」と北斗が笑った。
「笑ってはいけませんわ～・・北斗姉さん、私は嬉しかったんですから」とユリさんが微笑んだ。
「これは失礼・・あの２人も、ユリには弱いからね～」と北斗が笑

っていた。
私は焼肉定食が来て、ユリカとレンと豊と美由紀で食べていた、子供達は食事は終わっていた。

「塚本と谷田なの？・・久美子のバンドは、奴らなのかい」と律子が二ヤで入ってきた。
「さぁ大変だよ～・・あの2人、冷静で演奏出来るのやら」と北斗が二ヤで言った。
「それは無理だな・・それに問題は、梶谷が逃げ出さねば良いが」とマダムが二ヤで言った。
「聞きたいですね～・・千花で遊んでた頃の、梶谷さん」とユリカが二ヤで言った。

「梶谷兄さんにとっては、勝也兄さんが憧れで・・律子姉さんは。
母親であり、姉なのよ・・梶谷兄さんは、戦争で両親を失ってる。
司法試験の勉強をしてる時、辛くて孤独だったらしい。
だからお酒に溺れた時期があるのよ・・その時に真剣に向き合った。
律子姉さんが、梶谷さんを本気で怒ったの。
そして勝也兄さんが、誓わせた・・必ず弁護士になるって。
梶谷兄さんにとって・・律子姉さんは絶対的存在なのよ。
自分の孤独な心に入って来たから、寂しい心を救ってくれたから。
梶谷兄さんが、あの優しさを手に入れたのは・・3人のおかげなのよ。
勝也兄さんと、律子姉さんと・・真希姉さんのおかげだと、今でも感謝してる。
だからこそ、夜街に返してるんだと思う。
あの人は・・梶谷という人は・・筋を通し、借りは必ず返す。
それが律子姉さんの教えだから・・絶対に逆らえない、大切な人の教えだから。

梶谷兄さんが言ってた・・その時が来れば、また巡り会う。
その時に失望させない男でいたい・・その想いが帝王を作ってる。
廃墟の伝道師と律子と真希の想いが・・今の帝王を作ったのよ」

北斗は嬉しそうに話した、母は照れた笑顔を出していた。
「巡り会いますね・・今夜、２人にとって大切な娘である・・久美子が巡り会わせますね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「母さんにお礼を言わないと・・女性を守り続けてる、帝王のお礼を」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「ユリカのその言葉だけで良いわよ・・それだけで、嬉しいから」と律子が笑顔で返した。

「本当に楽しみだ～・・準備してきま～す」と蘭が満開で言って、笑顔のカスミと出て行った。
「あの２人・・ドレスで行くの！・・・やるね～」と北斗が二ヤで言った。
「レンも、ドレスで行けば良いのに」と律子が二ヤで言った。
「それは・・無理です、恥ずかしい」とレンがウルで返した、全員が笑っていた。

私は律子にネネを紹介した、２人は笑顔で話していた。

「あっそうそう、カレン・・あのアパート、ＯＫらしいですよ。
契約してきなさい、勝也が交渉して、保証人になっといたらしいですから。
角部屋の可愛い感じで・・素敵だったよ」

律子が笑顔でカレンに言った、カレンは驚いていた。
「母さん・・ありがとうございます、保証人までなってもらって」とカレンが真顔で頭を下げた。

「何言ってるのよ、小僧の大切な派遣社員でしょ。
実家は勝也が手直しして、きちんとした人に貸すように、手配しますから」

母が笑顔で言った、カレンは目を潤ませて頭を下げた、私は勝也に感謝していた。
私はカレンの悩みを聞いて、勝也に相談したのだ。
カレンの父が残した生家は、大きな家で、カレン一人では持て余していた。
父の思い出が詰まった家を、売る気にはならず、しかし大きな維持費がかかる状態だった。
勝也が、生家はリフォームして貸せば良いと言って、カレンとアパートを探した。
カレンが気に入った物件を交渉して、保証人になってくれたのだ。
生家は勝也がリフォームして、大手企業の赴任者用で貸す段取りまでしていた。

「そうだったんですね、カレン・・カレンは派遣の社員ですけど。
何か困った時は、私にも相談して下さいね。
私は北斗もカレンも、PGのスタッフだと思っていますから」

ユリさんが薔薇で微笑んだ、カレンは泣きながら頭を下げていた。

「そうそう、豊君・・私の車の車検整備を、お願いしたいのですが」
ユリさんが豊に言った。
「本当ですか、ありがとうございます・・引取りに行きます」と豊が笑顔で返した。
「お願いしますね、いずれエースの車になりますから」と薔薇で微笑んだ。

「そうなんですね・・小僧、車種は何だよ？」と豊が二ヤで言った。
『真赤な、Ｓ３０Ｚ』と笑顔で返した。
「生意気すぎだぞ・・４年以上先の事を」と豊が二ヤで返してきた。

「豊、自動車整備やってるの・・私の車の調整も、お願いするよ」
とネネが笑顔で言った。
「それは嬉しいですね・・ネネさんのなら、凄そうだ」と豊が笑顔
で返した。
「箱のＧＴＲ・・少し調子悪くてね、よろしく」とネネが笑顔で言
った。
『うっそ！・・かっけ～・・ハコスカのＧＴＲか～』と私は驚いて
言った。

「嬉しいですね、ハコスカＧＴＲに、Ｓ３０Ｚに、ケンメリのＬ２
８城嶋スペシャル」と豊が笑顔で言った。
「ケンメリＬ２８城嶋スペシャル！・・黒でしょ・・誰なの？」と
ネネが驚いて言った。
「ネネ、私よ・・尊敬しなさい」と蘭が入ってきて、二ヤで言った。
「蘭お姉さま～・・一生付いて行きますから、飽きたら譲って下さ
い～」とネネが言った。
「検討しときましょう・・手放す気は無いけど」と蘭が二ヤで言っ
て、ネネがウルで返していた。
全員がネネを見て笑っていた。

私は美由紀を抱き上げて、車椅子に乗せて。
豊がマリアを抱いて、レンがミサ、カスミがレイカの手を繋いだ。
律子とユリカと蘭が並んで先に出て、私はエミの手を繋いだ。

美由紀をユリカが押して、蘭が律子と、エレベーターに向かった。
私達は裏階段を降りた、４人と合流して、リッチを目指した。

リッチの前には行列が出来ていた、キヌちゃんが私を見て手を振った。

「エース・・お先にどうぞ、右から入ってステージ前の３つのテーブル」とキヌちゃんが笑顔で言った。

『ありがとう、助かります』と笑顔で返して入った。

並んでる客が、ドレス姿の蘭とカスミを見ていた。

リッチの時計は、１８時４０分だった。

４人娘はワクワク顔で、すでに興奮状態だった。

美由紀もニコニコでハイテンションだった、私が扉を開けると、限界カルテットが座っていた。

ステージでは真剣に、オヤジ達が音合わせをしていた。

律子が正面に座り、二ヤでそれを見ていた。

４人娘は興味津々で、店内を見回していた。

オヤジ達に緊張感があって、久美子がオヤジ達を引っ張るように、強く弾いていた。

ステージ前の反対側に、バンドマンらしい数人が、それを見て話していた。

《久美子、やっちまえ・・プロが見てるぞ》と心に囁いた、ユリカが二ヤを出した。

「ＯＫ・・久美子、ソロをやってよ・・俺達は挨拶してくるよ」と塚本が言って、律子をウルで見た。

塚本と谷田が、律子に向かって歩いてきた、律子はニヤニヤで待っていた。

「姉さん・・ご無沙汰してます、久美子の応援ですか？」と谷田が笑顔で言った。

「久美子は私の、大切な娘の一人です・・よろしくね、谷ちゃん塚

ちゃん」と律子が笑顔で返した。
「緊張するな～・・姉さんに、ユリカ姫まで・・さっきはユリも来て、ハッパかけるし」と塚本が笑顔で言った。
「さすがユリ・・なんなら、北斗も呼びましょか？」と母が二ヤで言った。
「勘弁してくださいよ～・・打ち上げはＰＧでしますから」と谷田がウルで言った。

その時、久美子がサマータイムを始めた、いきなり夏の到来を叫んだ。
そして熱を上げ続けた、私も初めて聞く、スーパーアレンジだった。
久美子は首を大き振って、鍵盤を睨んでいた、谷田も塚本も見入ってた。
『リンダスペシャルだ・・久美子、乗ってるな～』と私は呟いた。
「これがリンダスペシャル・・怖いレベルだな～」と谷田が久美子を見て言った。

久美子は鍵盤を叩いていた、その表情は集中していて、１６歳の輝きに溢れていた。
久美子は最後まで、夏の到来を喜んで、歓喜の場面を作り出した。
演奏を終えて、静寂の中・・４人娘に向かって右手の拳を突き出した。
エミをミサとレイカが、嬉しそうな笑顔で、右手の拳を突き出した。
私達は拍手を贈った、その時プロの集団からも大きな拍手が起こった。
久美子は照れた笑顔で立って、プロの集団に深々と頭を下げた。

「感動した・・久美子はやりやがった、あの連中の拍手を勝ち取った」と塚本が笑顔で言って。
「よし・・準備するぞ」と谷田が言って、律子に笑顔で頭を下げて、

ステージに向かった。

その時、場内に客が入りだし、少し照明が落とされた。
私はマリアを見たが、豊に抱かれステージの久美子を見ていた。
3人娘もワクワク顔で、レンと美由紀で挟んで座っていた。
レンの嬉しそうな笑顔が、ステージを見ていた。

「ここにどうぞ～」とユリカが後ろを見て、爽やか笑顔で誘った。
「おお・・お揃いだね、久美子は幸せだな～」とキングが笑顔で言った。
「夜街の帝王に、後見人になってもらえて・・幸せだよ、久美子は」と律子が笑顔でキングを見た。
「姉さん・・ご無沙汰してます」とキングは驚いて、それだけを言った。
「まぁ、お座りよ・・本当に辿り着いたね、素敵だよ・・真希も喜んでるよ」と律子が言った。
「まだまだですよ・・今でも女性達に、借りてばかりで、返せないでいます」と嬉しそうに微笑んで律子の横に座った。

「しかし豪華なメンバーだな、豊も来て・・可愛いお嬢さんも揃って」とキングは笑顔で言った。
「もう嫌ですよ～、照れますよ～・・梶谷さんは、正直さんです～」と美由紀が笑顔で返した。
「マジで早いよな～・・そういう言葉に反応するのは、小僧の悪影響だね」とシズカが二ヤで言って。
「美由紀・・絶対夜の仕事を選ぶなよ・・怖いから」とヨーコが二ヤで言った。
「警戒してますね～、魔女っ子姉妹の末娘・・車椅子の女神、美由紀ちゃんを」と美由紀が二ヤで返した。
限界カルテットが二ヤを出した時に、照明が消えた、そしてステー

ジが浮かび上がった。

「今日は来てくれて、感謝します・・楽しい時を過ごして頂ければ、幸せです」と塚本が言って、拍手が起きた。

客席は、ほぼ満員だった。

最初の曲は楽しげなカントリー調の曲で、全員が笑顔で演奏していた。

久美子も笑顔で、客席を見ながら弾いていた、久美子の腰にはマグナムが揺れていた。

客席も徐々に乗ってきたらしく、手拍子が出始めて、私達も手拍子をしていた。

塚本が一人ずつメンバーを紹介して、そのメンバーがソロ演奏で応えた。

そして曲が終わり、ステージが暗くなった。

「そして、最後に紹介します・・ピアノ・・久美子～」と塚本が叫んだ。

スポットライトが、久美子を照らした。

久美子は客席に最強不敵を出した、カスミの不敵を研究し続けた、その結果をカスミに見せた。

そして鍵盤を睨み、一気に炎を上げた、一瞬で燃え上がった。

あのJ・塚本を泣かせた、激しいリズムが魂の音で響いた。

久美子は圧倒的に押した、客席に強い熱が押し寄せて、手拍子も消えていた。

久美子は狂おしく燃え、泣いて笑って怒りに震えた。

その表情と強い音で、全ての感情を表現した、完全に客席の方が押されていた。

久美子は1曲をソロで弾いて、終わった時には天井を見上げていた。

その顔は笑顔だった、満天の星空を見るように、青空を見上げるように。

静寂の会場に、響きが残っていた、木霊するように響いていた。
「久美子〜」とキングが叫んで拍手した、それで大喝采が起きた。
ステージのオヤジ達も、嬉しそうに拍手をしていた。
久美子は照れた笑顔で、座り直した。

そしてサマータイムだった、ミノルがサックスで先導した。
最初は静かな大人の感じで、会場も静かに聴いていた。
そして一瞬演奏が止まって、久美子がポロンと音を出した。
何度かポロンと問いかけた、そして久美子の夏の到来が一気に爆発した。
公園で寝て、大地の息吹を感じよう・・やり直そう。
そう叫んでいた、オヤジ達もそれに呼応するように燃えた。
最後は歓喜の瞬間を表現して、やりきった。
大喝采の中、バンドの全員が笑顔で充実感を出していた。

次が静かな曲で、久美子も旅情豊に弾いていた。
少し寂しそうで、女性達がウットリと聴いていた。
その曲が終わった時に、蘭とカスミが席を立った。
久美子が笑顔を2人に向けた、蘭が満開笑顔で、カスミが輝く笑顔で返していた。

そして次がダンスナンバーで、会場が盛り上がり。
ソロのパートで、久美子が腰を浮かせて、踊りながら弾いた。
会場の手拍子が、楽しさを伝えていて、全員が笑顔だった。
ＰＧのフロアーのように、熱が全てを包んでいた。

最後が楽しいカントリーで、久美子が何度も音色で問いかけて。

それにオヤジ達が、一人ずつ応えた、バンド全員が楽しげだった。
演奏が終わり、鳴り止まぬ拍手の中、バンドメンバー全員が前に立った。
そして手を繋ぎ、充実感漂う笑顔で頭を下げた。
客席の拍手は鳴り止まず、エミは花束を持ったが、まだ行かずに待っていた。

「ありがとう・・ＯＫ、皆さんの期待に応えましょう」と塚本がマイクで言って、久美子を見た。
久美子は笑顔でピアノに座った、拍手が消えて、期待の空気が場内を満たした。

久美子はあのミコトがリクエストした曲を弾いた。
強めのアレンジを入れて、ジャズっぽく仕上げて、強く波を出した。
客席に大波が押し寄せて、客席は静寂に包まれていた。
波を起こそう、今を変えよう、変化を楽しもう・・久美子はそう叫んでいた。
強い弾丸を何発も発射して、客の心を撃ち抜いて、最後のサビに入った。
完全に腰を浮かして、髪を振り乱し、鍵盤と戦うように引いていた。
演奏が終わった時、久美子は前を見て、右手の拳だけ４人娘に突き出した。

３人娘が右手の拳を突き出し応えた、全員が感動の可愛い笑顔だった。
「くみこ～」とマリアが天使全開笑顔叫んで、可愛い右手の拳を久美子に向けた。
久美子は本当に嬉しそうな笑顔を向けた、大切な教え子に見せた。
自分の求める音と音楽を、教え子に示した、ミサの涙がその感動を伝えていた。

エミがミサに花束を渡した、ミサが笑顔で私達を見た、全員が笑顔で頷いた。
ミサが立ってステージに歩いた、久美子も笑顔でステージ前に出てきた。
ミサが花束を持って、ステージに上がった、そして笑顔で久美子に花束を差し出した。
久美子は屈んで受け取って、ミサを抱き上げて、笑顔で頭を下げた。

その時に拍手が沸き起こった、感謝を伝える指笛と、久美子と叫ぶ声に包まれた。
久美子に抱かれたミサは、呆然と客席を見ていた、そして笑顔になった。
オヤジ達が久美子を囲み、最後にもう一度全員で挨拶をして、大きな拍手に包まれた。
久美子が私を見たので、私はステージ前まで行き、ミサを受け取った。

私達の区画の全員が立って、拍手を続けていた。
律子もキングもユリカも豊も、最高の笑顔で拍手を贈り。
限界カルテットも興奮状態で、拍手をしていた。
美由紀は泣きながら笑っていた、その瞳が感動を表現していた。
そしてレンが嬉しそうな笑顔で、久美子を見ていた、大切な妹を。

私はマキにミサを預けて、俺は久美子と帰ると伝えた、マキは笑顔で頷いた。
豊に４人娘をＰＧまで頼むと伝えて、豊の頷くのを見て、見送っていた。
会場は明るくなり、バイトらしい若者が、テーブルの位置を動かしていた。

後半戦の客が入り初めて、前半からいる通しの客が、飲みながら話していた。
会話の熱が高いようで、興奮が伝わってきた、私は客席の右隅でそれを見ていた。

プロのバンドがチューニングに入った、８人構成の中年バンドだったが。
雰囲気があり、さすがプロだと感じていた。
後半開始まで、まだ１５分あった、バンドマン達はチューニングは終わったみたいだった。

その時にピアノ担当の、オールバックのオヤジが手招きした。
久美子が現れて、会場が静まった、ピアノのオヤジが久美子に何か囁いて。
久美子は笑顔で頷いて、オヤジの隣に座り鍵盤を見た。
会場は期待感で充満し、２人を見ていた、他の７人のバンドマンも笑顔で見ていた。

オヤジがポロンで問いかけて、久美子が可愛い感じのポロンで答えた。
３度それを繰り返し、連弾で弾いた、私は初めて見る連弾演奏に感動していた。
２人は楽しそうに、会話するように弾いた。
そして徐々に久美子が熱の世界に誘った、プロのピアニストのオヤジがそれに乗った。
２人は陣地を取り合うかのように、大きく動き楽しそうに弾いた。
演奏が終わると、２人で立ってステージ前に出て、頭を下げた。

大きな拍手の中、久美子が笑顔で私を見て、【帰る】とＰＧのサインを送ってきた。

私も笑顔で【了解】と返して、扉を開けて通路に出た。
拍手が鳴り止まず、会場が興奮状態であるのが分かった。
私は嬉しくて、その拍手を聞いていた。

5分ほどで久美子が出てきて、私の腕を組んできた、笑顔がキラキラと輝いていた。
PGに帰りながら、久美子は興奮状態で話していた、私も笑顔で話していた。
久美子の高い温度が、ありがとうと言っていて、私も嬉しかった。
私はTVルームの前で、久美子と別れて、指定席に向かった。

レンもフロアーに入っていて、笑顔を振りまいていた。
3番にはキングが豊を連れて入っていて、カレンとネネが少しの緊張を出していた。
豊がそれを感じたのか、珍しく饒舌なようで、2人の緊張が解けて笑顔になった。

蘭もカスミも興奮状態継続中で、笑顔が溢れていた。
北斗もユリさんも楽しそうで、満席のフロアーの熱が高かった。

そしてオヤジバンドの支配人以外が現れた、キングが3番に招いた。
豊がキングに挨拶をして、キングと握手をして入口に歩いてきた。
ネネとカレンと私で、豊をエレベーターに見送った。

3番には谷田と塚本の間に、ユリさんが笑顔で入って、ミノルの横に蘭が付いた。
そして北斗が二ヤで挨拶をして、谷田と塚本がウルを出して、全員が笑っていた。
キングも楽しそうに、駄目出しをしていた。

「凄かったな・・感動したよ」とカスミが笑顔で言った。
『うん・・凄いよ、久美子は』と笑顔で返した。

「今夜、お前死ぬかもな・・場所はユリさんの家になったよ。
限界カルテットに久美子、それにリアン・ユリカコンビ。
蘭姉さんと私・・どうする？・・逃げるなら今のうちだよ」

カスミは最強不敵を残して、銀の扉に消えた、私はウルウルで見送った。
ユリカの強い二ヤの波動がきて、私は席を立ちＴＶルームを目指した。
ＴＶルームでは、シズカと恭子が久美子と話していた。
私は眠っている、４人娘の高い温度をチェックして通りに出た。

夜街は土曜の夜で輝いていた、私は人混みを避けながら歩いた。
そしてユリカのビルに見えた、ユリカが興奮を残したまま笑顔で立っていた。
私はユリカを抱き上げて、階段を登った、ユリカも興奮冷めやらず、温度が高かった。

この２度目のライブで、久美子は一気に有名になる。
谷田のジャズクラブの、ＫＵＭＩＫＯ　ＮＩＧＨＴは満員御礼を続け。
地元情報誌も、久美子を写真付きで紹介した。
それで久美子のバンド活動は、学校に認められて、久美子は楽しんでいた。

久美子はどんなに有名になっても、生きるスタンスが変わる事はなかった。

「私なんて・・まだまだだもん、人間的に未熟だから。
私はＰＧで生きてるんだから、こんなもんで喜べないよ。
辿り着きたい、精神的世界と演奏の世界があるから。
私は進むよ・・付いて来てね・・付き人ちゃん」

久美子は笑顔で言って、私の手を引っ張って、リッチのステージを目指した。

３度目のライブの、燃え上がるステージに向かって。

回想録　？　【恭子？】

奇跡だったのだろうか、何かの意図が働いたのか。
そう思わせてしまう、そんな４人組だった。

私の幼い記憶にも写真にも、必ずと言っていいほど現れる・・可愛い笑顔。
恭子は常に可愛い笑顔で、私の側に寄り添っている。
その距離はシズカよりも近く、燃える心で背中を押してくれている。

恭子も母の記憶が無い、２歳下の弟を出産して、産後半年で母は亡くなっている。
恭子は３歳で弟を任される、後妻さんがくるまでの約１年間。

父親と後妻さんの経緯を、私は後に母に聞いて、素敵だと思っていた。
恭子の父親は刑事で、自分の仕事に誇りを持っていた。
しかし妻が他界し、２人の幼い子供を背負った。
父親は悩み、刑事から内勤に移動願いを出そうと思っていた。

それを親友である勝也に相談した、勝也は律子に相談して。
律子が自分が昼間面倒見る、自分には母親もいるから大丈夫だと言った。
そして駄菓子屋の婆さんが、自分も手を貸すと言ったのだ。
勝也も律子も婆さんも、父親に刑事でいてほしかったのだろう。

恭子は駄菓子屋で育った、シズカと共に３歳で弟の面倒を見ながら。
この時に出会うのだ１つ上の兄、豊も駄菓子屋で昼間過ごしていた。
豊は恭子の弟をおぶって、シズカと恭子と遊んでいた。

こんな関係であるから、その絆は深く濃いものになって当然なのだろう。

恭子の父親と後妻さんの出会いは、後妻さんが夜の仕事をしていて、ストーカーに悩んでいた。
その話を聞いて、相手の男に直接話しに行ったのが、恭子の父親だった。
ストーカーと言う言葉など無かった時代である、父親はその女性に好意を持っていた。
しかし自分の状況を考え、子供を他人に預けてる、そんな自分がとの想いが強かった。
父親は進展を望まなかった、しかしその女性は強い意志で進展を望んだ。

朝から駄菓子屋に来て、婆さんと母にその気持ちを話し、子供と触れ合うのだ。
その時、その女性は２０歳だった、その必死さに婆さんも母も撃たれたのだ。
それから半年後、豊が幼稚園に通うようになり、その女性も恭子と弟と心を通わせていた。

そして勝也と律子が父親に迫った、このままじゃあの女性が不憫だと。
律子が強く父親の結論を迫ったのだ、そして父親が再婚を決意する。
恭子も本当に喜んだ、私は物心付いてからも、この母親と恭子は本当の親子だと思っていた。

しかし幼い恭子は喪失感を抱いてしまう、それまで必死に弟を守ってきたから。
後妻さんが弟の面倒を看るのを、嫌だとも言えずに、寂しい気持ち

でいたのだろう。
その恭子を見て、律子が預けるのだ、やっと立てるようになった私を。
シズカと恭子に託すのだ、恭子は毎日我家に来て、私の面倒を看てくれた。

その愛情がどれほど深かったのか、もちろん私の記憶には無いが、心には強く残っていた。
シズカと恭子が幼稚園に通いだした時、私は幼稚園に行くと駄々を捏ねたらしい。
それを感じて、母がチサと沙織に会わせてくれた、私達は3歳だった。

私は幼稚園に年少から入る、自分の意志で律子に強く言ったのだ。
その当時、共稼ぎでない限り、年少からの入園は珍しかった。
私はシズカと恭子を追いかけた、しかし2人は小学校に上がっていたのだ。
私は午前中を幼稚園で佐織と過ごし、午後からチサも加えて遊んでいた。

私は恭子との関係を、ずっと重ねていた、姉のような存在であり憧れだった。
多分私の初恋は、幼稚園の先生でなく、恭子だったのだろう。

恭子は私を愛してくれた、その豊かな愛情表現で接してくれていた。
そして一度も私から目を逸らさなかった、正面から向き合ってくれた。
シズカが突き放し遠くから見守り、恭子が寄り添い背中を押した。
私は幸運な少年だった、その2人にマキとヨーコが加わるのだ。
この4人の構成が、私を施設と小児病棟に向かわす、原動力になっ

ていた。

この四者四様の愛情と、豊の強い教えが私を作り出していた。
私は両親から何かを習った記憶が無い、勉強は全てシズカが教えてくれた。
会話の仕方や、友達の作り方を、恭子が教えてくれた。

あのクリスマスの夜、真赤な服の恭子が家に帰るのを見送って、私は寂しさを抱えていた。
大切な何かが奪われた、そんな初めて感じる想いに、幼い私は混乱していた。
恭子の相手が豊でなかったら、追い求めていたと思う、それほど大切な存在だった。

私はマキがデビューした後、ユリさんに裏方を探してくれと頼まれる。
シオンとレンとハルカを、フロアーに集中させたい。
それがユリさんの考えだった、私はユリさんの気持ちを感じて探した。
ユリさんの本心は、昼間に時間を与え、様々な経験をさせたいと思っていたのだろう。

その話を聞きつけて、豊と恭子がＰＧを訪れるのだ。
そして恭子が笑顔で強く言った、自分に裏方の仕事をさせてくれと。
ユリさんは感激して、恭子を採用する。
恭子は１８で出産するが、産休も４ヶ月しか取らず。
乳飲み子を連れて、裏方の仕事をしていた。
恭子の想いは、豊の独立資金の手助けだったのだろう。
恭子はサインを覚えて、サインまで繋いだ。
そして東京物語の重要な場面で、フロアーに登場するのだ。

東京物語で登場する、恭子の生き方、それは女性達に大きな影響を与える。
そのきっかけとなる夜が訪れていた、薔薇の側で眠る夜が。

開店から閉店まで満席で繋ぎ、土曜の夜が終了した。
女性達は、笑顔で控え室に向かった。
「久美子をよろしくね」とレンが笑顔で言った。
『レン、来ないの？』とウルで聞いた。

「四季とツインズとネネ姉さんとカレン姉さんに、ディスコに連れてってもらうの～。
シオン姉さんも、ハルカ、ミサキもくるみたい。
楽しそうでしょう～・・そのメンバーで行くんだよ」

レンが嬉しそうに言った、私もウルで頷いた。
『そっちの方が、楽しそうだな～』とウルウルで見送った。

《しかしそのメンバーで行って、迷惑にならないのかな～？》と思いながら、ニヤの波動に押されていた。
ＴＶルームに戻ると、恭子と久美子と美由紀を、シズカがトランプで占っていた。
シオンとマキが興味津々で見ていた、私はサクラさんをタクシーまで送った。

戻っても、シズカがトランプ占いをして、美由紀がウルを出していた。
「どうして・・何度やっても男運が悪いの、いかさまです～」と美由紀がウルでシズカに言った。
「失礼ね美由紀、あなたの男を見る目が無いのよ・・言っとくけど、

この占いはマリ直伝よ」とシズカが二ヤで言った。
『とどめを刺しました～・・あんまりです～』と美由紀がウルで言って、全員が笑っていた。

ハルカが覗いて、シオンが笑顔で出て行った。
『シオン・・変な男がナンパしてきたら、ネネに言うんだぞ』と笑顔で言った。
「分かりました～・・行って来ます～」とシオンがニコちゃんで言った。
「良いな～・・ディスコ、行ってみたい」と恭子が私にウルをした。
『俺もさすがに、ディスコの関係者は知らないよ』と二ヤで返した。

「おや？変なことを言うね～・・○○ビルの、ディスコ○○○は塚本の店だよ。
　責任者は嫁さんで、経営状態も良好らしいね」

マダムが笑顔で言った、私は驚いて聞いていた。
『やるな～・・J・塚本』と私は二ヤで言った。
「じゃあ、久美子に頼もう・・見るだけね、見るだけで良いから」と恭子が笑顔で久美子に言った。
「シズカ・・恭子を信じても良いの？」と久美子が二ヤで言った。
「もちろん駄目よ、一人で行かせなよ・・絶対に踊りまくるから、久美子は退学になるよ」とシズカが二ヤで言った。
恭子がウルして、全員で笑っていた。

蘭とカスミが笑顔で入ってきて。
「エースはヨーコちゃんを迎えに行って、ユリさんの家に来てってよ」と蘭が二ヤで言った。
『了解』と言って立ったら、マダムがタクシーチケットをくれた。
私は足早に魅宴を目指した、魅宴のビルの方から、女性の大集団が

歩いてきた。
夜街関係者が、その集団を笑顔で見ていた。

『ヨーコ姫、お迎えに来ました』と二ヤでヨーコに言った。
「うむ、ご苦労」とヨーコが私の腕を組んだ。
「ヨーコ・・ついでに抱っこ伝説をしてもらえば？」とミサキが二ヤで言った。
ヨーコが二ヤで私の首に腕を巻いた、私は驚きながら抱き上げた。

『姫・・どこまででしょう？』とウルでヨーコに言った。
「当然・・一番街を縦断よ」とヨーコが二ヤで言った。
『挑戦的だな、ヨーコ・・・俺は、長年の夢が叶ったけど』と二ヤで言って一番街を目指した。
「がんばれ～」と女性達が手を振って、私はウルで振り向いた。

「ヨーコ！駄目だよ～・・抱っこは俺がするのに～」と呼び込みさんがウルで言って。
「あ～・・ヨーコ、早過ぎ～・・代わってよ～」と客引きの女性達が二ヤで言った。
ヨーコは笑顔を振りまいて、嬉しそうだった。
若者達がたむろする、一番街をヨーコを抱いて歩いて、出た所でタクシーを止めた。

「ヨチヨチ、うい奴じゃ、褒美を取らすぞ」とヨーコが二ヤでタクシーに乗った。
『何とか言って、緊張してるぞ・・ヨーコ』と二ヤで言った。
「するでしょう・・ユリさんの家なのよ」とヨーコが真顔で言った。
『大丈夫だよ・・リアンもユリカも来るから』と二ヤで返した。
「いよいよやばい・・着替えないと、青い猫に」とヨーコが笑った。
私も笑って、ユリカの波動も笑っていた。

ユリさんのマンションに着くと、ヨーコは目を輝かせた。
「夢を見ておいでって、大ママが言ったけど・・その意味が分かるな～」と言ったヨーコの手を引いて部屋を目指した。

ユリさんの部屋に入ると、マリアが起きていて駆けてきた。
私はマリアを抱き上げて、リビングに向かった、ヨーコはユリさんに挨拶をしていた。
大きなテーブルには、豪華な握り寿司とオードブルが、盛大に並んでいた。
限界カルテットと久美子は、嬉しそうな笑顔で夜景を見ていた。

「何度目だ、ここに泊まるの？」と恭子が二ヤで私に聞いた。
『数えてない・・分からない』と二ヤで返した。
「最初はいつ？」とシズカが二ヤで返してきた。
『家出・・2日目』と二ヤで返した。

「私の家より、ここの方が先なのよ・・贅沢でしょ～」と化粧を落とした蘭が、笑顔で手招きをした。
女性達が座り、私はマリアと窓際で遊んでいた。
リアンとユリカが笑顔でやってきて、全員が挨拶をして、2人が化粧落としに行った。
カスミと蘭で、飲み物を用意して、ユリさんが来た。

「楽にしてね・・楽しくやりましょう」とユリさんが薔薇で言って、笑顔が溢れた。
リアンとユリカが来て、私はリアンとユリカの間に座らされた。
蘭はシズカと恭子の間に座っていて、カスミがその横でマキとヨーコに挟まれた。
久美子がユリさんの横で、笑顔で座っていた。

リアンと久美子に挟まれた、美由紀はニコニコだった。

「それでは・・久美子、素敵だったらしいですね。
久美子は夜の女性の誇りです、久美子は言ってくれています。
自分は夜の街で、自分の音楽と出会ったと。
そして夜の女性が、全力で生きる事を教えてくれたと。
私は何よりも、その言葉が嬉しかった・・久美子、ありがとう。
久美子と限界カルテット・・１６歳の今後を祈って、乾杯をしましょう。
・・・乾杯」

ユリさんの優しい言葉が響いて、全員笑顔で乾杯をした。
「お寿司は大ママからです、オードブルはリアンとユリカからです・・残さず食べてね」とユリさんが最後に私に微笑んだ。
『もちろん、美由紀もいるし』と笑顔で返した。
「私、大丈夫かな～・・もう、小僧のお寿司は食べれない、贅沢な女～」と美由紀が寿司を食べながら言った。

「自分の店を持てば、好きな物食べれるぞ・・でもそうなったら、そんな物どうでも良くなるけどね」とリアンがビールを飲みながら笑顔で言った。
「でも物欲って、きっかけとしては大事な事よ」とユリカが爽やか笑顔で言った。
「そうですね、意志を貫く時は・・目で見える何かも必要ですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

「難しくなってきた・・シズカ先輩、分かりやすく解説を～」と美由紀がウルで言った。
全員が笑顔でシズカを見た、シズカは美由紀に二ヤで返していた。

「もう、美由紀がある挫折の時、私は伝えたでしょ。
美由紀・・今食べてたのに。
目標と目的・・目標は目で見えぬもの、目的は目で見える物。
その2つが必要だって、美由紀はそれを感じてくれたよね。
私は嬉しかったよ、美由紀の強い心が・・私に勇気をくれたから」

シズカが笑顔で言った、美由紀も嬉しそうに笑顔で返した。
「説明になってないね～・・シズカ、詳細」とリアンがニカで言った。

「リアン姉さんに言われると・・仕方ないですね～。
美由紀の車椅子、1号機を研究してる時に、美由紀は腕を鍛えてました。
学校のスロープの傾斜を登るために、必死でやっていました。
それで煮詰まってしまったのでしょう、私の家に美由紀が訪ねてきた。
申し訳ないって言って、美由紀が泣いたんです・・私の部屋で。
恭子とマキとヨーコも来ていて、私達はその涙が辛かった。
両足が短い美由紀が、必死に頑張って、それで限界が近づいてる事を感じて。
私達では絶対に理解できない、美由紀の苦悩を感じて。
それに対する、言葉を捜したけど・・私は持ってなかった。

美由紀・・もうやめよう、お前は頑張った・・そこがお前の限界だよ。
ヨーコが優しく言いました・・でも表情は厳しかった。
美由紀にとって、天敵と言われるヨーコ・・その意味に触れました。
小僧が美由紀の覚醒に、ヨーコを指名した、その想いを感じましたね。

ヨーコは幼い頃、その悪戯なシナリオに翻弄された。
しかし全て自分で乗り越えた、小僧がそう言っていた、言葉の真意に触れました。

限界じゃない！・・こんな場所が限界じゃない！・・そう美由紀が叫んだ。
美由紀・・美由紀は何が目標で？、何が目的なの？
美由紀は褒められたいから、凄いと言われたいから・・腕を鍛えてるの？
当然、マキの台詞です・・両親のいないマキの強い問いかけ。
美由紀は黙ってマキを見ていた、その時には涙は無かった。
違います・・普通の中学に行きたい、そして同じ歳の仲間を感じたい。
それを目指して、私は私に出来ることをしている・・それだけです。
そう美由紀は静かに、でも強く言葉にした。

美由紀それは目標でしょ、なら目的は何・・目的を持ってないの？
私はそう聞きました、美由紀は私を見て、笑顔になった。
シズカ先輩・・お馬鹿な後輩に、教えて下さい・・目標と目的の違いを。
美由紀が笑顔で言ったので、私も嬉しくって・・私の考えを、美由紀に伝えた。
目的って・・物欲的な物で良いんだよ、これを手に入れたい。
そう思う気持ちは、絶対に悪い事じゃない・・その為に計画を練るんだ。
小僧を見ろよ・・あいつは案外物欲の塊だよ、じゃないと出来ないだろ。
小学生で新聞配達をして、新しいサーフボードを買おうとしてる。
律子にも、当然勝也にも・・奴は絶対に、ボードが欲しいなんて

言わない。
それは自分の目的だから、自分が好きでしてる事に対する・・大切な目的だから。
親に言って手に入れたら、それがどういう事になるのか、奴は知ってるから。
自分の大切な時間に、口出しされるのを拒絶してる。
買ってもらえば、その権限を与えると思ってるんだ・・だから自分で稼ぐ。
もちろん親だから、口出しできるんだけど・・意味が違うよな。
奴はその為に、早朝から起きて新聞を配るんだ。
でも・・金が貯まった時に、奴は何に使うんだろうね。
美由紀・・私は物欲的目的の意味って、そこにあると思ってるよ。
達成した時の、その価値に対する想いこそが、大切だと思ってる。
私は自分の気持ちを正直に伝えました、美由紀は笑顔で頷きました。

そして出てきます、美由紀の復活した心に、強くクサビを打ち込む。
狂う子の狂子が美由紀の前に立つ、その瞳は破壊を提示する。
美由紀・・なら小僧の目標は何だ、奴はなぜ体を鍛えてる。
それをお前は感じてない、ブルースリーみたいに成りたいだと。
サーフィンするのに、カッケーからだと・・そんな事で出来ると思ってるのか。
甘えるなよ、美由紀・・愛情に甘えるな、小僧はお前を愛してる。
そしてお前を信じてる・・美由紀、辛いのはお前だけじゃない。
小僧はお前を抱き上げるため、その時にお前が不安にならない為に鍛えてるんだ。
目標は何だよ、美由紀・・目標はどんな時でも・・愛だろ。
恭子はそう言って泣いた、美由紀も泣いて・・何度も何度も、恭子に謝った。

笑顔の戻った美由紀を押して行く、律子の背中を見送っていました。
私達４人は、本当に嬉しかった・・美由紀に出会えたから。
その必死の問いかけで、自分達も大切なことに気付いたから。
そして最後に小僧が、その素敵な解答を見せてくれます。
ボードの為に貯めた金を、何の躊躇も無く、美由紀との大阪逃亡に使ってしまう。
美由紀はどんなに嬉しかったのでしょう、その愛情に返した愛が。
あの全裸の愛でした・・私達４人はそれを聞いて、泣きました。
素晴らしい、美由紀という妹を持てた喜びで」

号泣してる美由紀に、シズカが優しく言葉にした。
限界カルテット以外の、女性達が泣いていて、ユリさんも嬉しそうに泣いていた。
久美子が優しく美由紀を抱いていた、５人目の素敵な姉として。

「美由紀、ありがとう・・私はあなたが作った、抱っこでここまで来たよ」とユリカが微笑んだ。
「それはＰＧの全員からも、礼を言うよ・・ありがとう、美由紀・・全裸の愛を見せてくれて」とカスミが微笑んだ。

「よし・・仕方ない、ボードは私が買ってやろう」と蘭が満開笑顔で言った。
『ありがとう、りゃん』と私も場の雰囲気を変える為に、少年の笑顔で言った。
「蘭姉さん・・それは必要ありません」とマキが二ヤで言って。
「うん、全く必要ありません」と恭子が二ヤで言って。
「奴は手に入れました・・それも最高級品を」とヨーコがニヤで追いかけた。

「ほほ～・・どうやって手に入れた？最高級品」と蘭が満開二ヤで聞いた。

『美由紀がある人に、ウルでボードって高いのかって聞いて。
その人に事情聴取されて、その人が俺にお古をくれたんだよ。
噂の真赤なボード、直輸入の高級品・・美由紀のプレゼントだと言って』

私は二ヤで美由紀に言った、美由紀も笑顔に戻り舌を出した。
「誰かな～？・・美由紀」と蘭が満開二ヤで言った。
「私の大ファンの、ミスター望月さんです」と美由紀が二ヤで返した。
女性達が驚いて美由紀を見た、美由紀は照れた笑顔で返した。

「ユリカ・・どうして美由紀は、夜街で姉御なんだ？」とリアンがユリカに聞いた。
「リアンが魅宴光臨の日、その魅宴の帰り・・・」ユリカが親分との事を、笑いながら話した。
ユリさんリアン・蘭・カスミ・久美子は唖然として、限界カルテットは大爆笑していた。

「怖いよ、美由紀・・でも素敵だよ、それが言えるお前が」とリアンが笑顔で言った。
「それなら、どうしてエースはあの時、親分の家に殴り込みに行ったの？」と久美子が聞いた。
『あの時は、俺も知らなかったんだよ・・確かに美由紀の家の、すぐ側だったけど』と笑顔で返した。

「実はあの話には、後日談があって。

小僧がミスターの車に乗せられるのを、美由紀が部屋の窓から見てました。
美由紀が豊に電話しても連絡が取れずに、和尚に話を聞いていました。
それで親分を訪ねて、美由紀の必殺技・・美由紀ブイを発動してました。
私は父からその事を聞きました、あの親分にとって、美由紀は大切な存在だと。
自分をヤクザとして接しない、唯一の存在が美由紀だからです。
美由紀は心から、その親愛の情を込めて・・一人の人間として呼びます。
親分の事を、近所で暮す大切な者として・・お爺と呼びます」

恭子が笑顔で言った、美由紀も笑顔で返していた。

全員に笑顔が咲いて、美由紀が面白話を発動して、私はマリアを抱いて食べていた。

「リアン姉さんは・・恭子の炎を、どう思うんですか？」と久美子が笑顔で聞いた。
全員が笑顔でリアンを見た、恭子も興味津々だった。

「凄いと思ったよ、初めて会った時にね。
それでユリカに少し話を聞いて、エースにも思い出話を聞いた。
それで感じたんだけど、確かに恭子はその時には、破壊を提示するだろう。
でもその優しさは・・ユリカと同じ感じの、深い場所にあるよね。
エースが教えてくれた、自分でも記憶は無いけど、心には確かに残ってるって。
恭子の優しさが残ってるって言った、恭子は乳飲み子の弟を3歳

で託された。
開花せざる得なかったんだろう、私も母親を亡くし、後妻さんが来たから。
シオンは後妻さんの子だし、仲が良いけど・・最初は互いに難しかった。
恭子は後妻さんと打ち解けて、弟を託す・・それまで大切に育てた弟を。
私はそれで気付いたんだ、その時に炎を得たと・・恭子は3歳で獲得した。
それも火を初めて使った、偉大な律子の種火で点火された。
乳飲み子の弟を守る為に・・その恭子を支えたのが、シズカと豊。
そしてツネさんなんだ、あの伝説の真希さんの母親・・千花を作った人だよね。
何を伝えたのか・・私は本当に、それが知りたい。
エースの幼い頃の話でも、その大切な場面で登場する・・駄菓子屋。
マキが育った場所に存在する、ツネという偉人・・夜街の創始者の一人。
ツネという人が、どんな考えで何を伝えたのか・・4歳の豊と3歳の恭子とシズカに。
恭子の炎は、その存在意義さえある・・さっきのシズカの話。
本当に素敵だった、4人がその個性で伝えた、だからこそ美由紀はここにいる。
私も撃たれたよ、恭子の炎の言葉・・目標はどんな時でも、愛だろって言葉に。
嬉しかったよ、そして少し残念だよ・・恭子がこの世界にいない事がね」
リアンの極炎の言葉が、恭子に向かって吹いた。
この言葉だっただろう、その後に恭子をPGに招いたのは。

私はその時に、日記を読み直し、この台詞だと確信していた。

「リアン姉さん、本当に嬉しかった・・私の未来は決まってませんよ」と恭子は笑顔で返した。

「その台詞、忘れないよ」とリアンも笑顔で返した。

「さてさて・・情熱姉妹、難しい状況になりましたね～」と蘭が満開二ヤで言った。

「豊が悪い、恭子の人生の部分には口出ししないって・・素敵な台詞を吐くから」とカスミが二ヤで恭子に言った。

「実はあの台詞・・私も嬉しかったんです、初めて言われたから」と恭子は笑顔で返した。

「もう恭子は、火に油を注いで・・好きなんだよね～、カスミ姉さんタイプ」とシズカが笑顔で言った。

「点火しないでよ・・今で遠い存在なんだから」とマキが二ヤで恭子に言って。

「恭子・・狂う子は駄目よ、絶対駄目」とヨーコが二ヤで言って。

「2人ともターゲットが遠いほど、燃えるのね～・・点火しようとして」と久美子が二ヤで言った。

「限界五つ子になってます～・・小僧、大変です～」と美由紀が言った。

『魔女っ子探せよ、美由紀・・マリは拒絶するだろうけど』と二ヤで返した。

「マリちゃん・・元気？」とユリカがシズカに聞いた。

「はい、元気です・・マリ、沙紀ちゃんに会いたいと言ったから。明日、病院に行こうと思っています、ユリカ姉さんもどうですか？」

シズカが笑顔で言った、ユリカが爽やか最強笑顔になった。
「私の車で迎えに行こうね、嬉しいな～」とユリカが微笑んだ。
「なぁ・・ユリカ、マリは似てるよな・・背中から出てる物が」とリアンが真顔で言った。
「私もそう思いました・・同じですね」とユリさんも真顔で言って。
「そうなんです・・マリは同じです、あの一瞬で吹き抜けた・・サチコと同じです」とユリカも真顔で返した。
「ごめんなさい・・いつか話しますね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
私達は笑顔で頷いた、蘭の真剣な瞳が、無理に微笑んだのを見ていた。
楽しい宴会は続いていく、未熟な者達に、大切な事を伝えながら。
沙紀の覚醒が近づいていた・・同じ病と診断された、強い力が近づいていた。

回想録　？　【マリ？】

不思議な事と思ってしまうのは、受け入れる力不足なのだろうか。
私は完璧な異質に出会った事がある、その異質は異質を隠し、今も存在する。

マリである・・私はマリの事は自分の感じた事と、女性達が感じた事しか書けない。
真実を書くことは出来ないだろう、それほどマリは不思議な存在だった。
不思議とは、自分の世界に無いものを言うのだろう、わたしの世界が狭かったのかもしれない。

私はマリの登場には躊躇したと書いている、確かに書く時は躊躇した。
しかし反響があり、私の感じた事だけでも、書いて欲しいと要望されました。

私とマリは、この後も関係を切る事は無かった。
私は心のどこかで、マリを頼りにしていました。
もちろん私の方から、マリに助言を求めた事はありません。
マリは自分の意志で・・感じた時に、私に会いに来てくれました。
私はマリの姿を見ると、嬉しくて・・それでいて緊張しました。
何かある・・そう感じずにはいられませんでした。

マリは成長しながら、言葉も文字も覚えた、外見は黒目が大きいだけで。
なんら普通と変わらなかった、ただ俯き加減は中々治らなかった。
黒目が大きいと言っても、よく見るとってレベルでした。

現在の若い女性は、黒目の部分をコンタクトで足すようですから。
マリのその特徴も、プラスに働いて、マリは美しい女性に成長します。

しかし人間関係は苦手で、組織での仕事は出来ず、マリは悩みます。
マリの人間関係は、両親が他界した後に消滅する。
アメリカから帰国したマリは、家に閉じ篭りがちで、私はどうしようかと思ってた。
シズカが留学で国内にいなかった、私は誰にも相談できずにいました。
しかしマリは自分で動いた、最初ユリカを訪ねるのです。
ユリカのその時の喜びは強烈で、夜の女性達にマリを紹介した。
マリはユリカの店の準備の手伝いをして、報酬を貰ってました。

そしてマリがその才能を見せます、マリの飾る花が凄かった。
ユリカの店で見せたアレンジフラワー、それを見てユリさんがＰＧのを依頼した。
本当に見事だった、幻想的な表現に熱まであるようでした。
アレンジフラワーという言葉が、その当時あったのか定かでありません。
しかしマリはその世界を見せた、それは芸術の域に入っていました。
共同体の全店がマリに依頼して、マリも楽しんで、仕事としてやっていた。

それを見たデパート関係者も依頼してきて、そこで私はマリを派遣会社に登録した。
アレンジフラワーをやる派遣として、依頼者に花だけを指定させ。
それ以外は任せるとの契約で、マリに仕事をさせた。
マリは楽しんでやって、それが噂になり依頼は増え続けた。
デパート業界とホテル業界が依頼してきて、大作も作り始めた。

私はマリと上手くやれる助手を探して、２人で楽しそうに製作していました。

マリは夜の女性とも打ち解け、仕事にもやりがいを見つけた。
その事がマリの人間関係を形成する、訓練になっていきます。
そしてユリカを失っても、マリは自分らしく生活していた。

その結果、マリは愛する男に巡り合う、花屋を営む優しい男だった。
歳の差は、男の方が１５上だったが、女性達は暖かく見守っていた。
マリが結婚すると言って来た時、私は本当に嬉しかった。
「ありがとう、小僧・・小僧に会えて良かったよ」とマリが言葉で伝えてくれたから。
高い熱で幸せを表現してくれたから、私はおめでとうと心から言えた。

マリは今でもその力を持っている、私はそれだけは感じている。
マリは2度、ユリカとリンダとマチルダを救った。
私に伝えてユリカに伝えた、その巻き戻した世界を。
マリはどんなに離れていても、ユリカの危険を感じていた。
その能力は、私などでは表現できない・・作り話になってしまう。

それでも書こう・・マリは存在したのだから・・今も存在してるのだから。

「シズカは最初、マリちゃんの何に惹かれたの？」とカスミが笑顔で聞いた。
「それは聞きたいね～」と蘭が満開で微笑んだ。

「小僧がトランプめくりを見せて、その後小僧を問い詰めた。
もちろん明確な答えは、誰にも出なかったんです。

私は好奇心を必死で抑えて、小僧とマリの関係を遠目に見ていた。
そして私のマリへの見方が変わった、マリはピュアだったんです。
本当の純心・・純粋な心・・何にも囚われない、強い心。
それを感じて好きになりましたね、自分がどっかで捨てた物を感じて。
それでも・・マリとの関係を深める自信が無かったから、私は見ていた。
私の心を決めさせたのは、小僧がマリから得た物を感じた時です。
私は小僧がそれまでに得た、伝達方法を・・凄いと思っても、羨ましくは無かった。
でもマリから得た物を感じた時は、強い嫉妬を覚えました。
それは私が求め続けた物の、大きなヒントだったからです。
それから私はマリとの関係を深めます、マリと触れ合いたくて。
そのヒントを、私も違う形で知りたくて。
自分に正直に、マリと触れ合うと誓って・・マリとの時は、今でも楽しい時間です。
私はマリと触れ合う内に、ヒントはどうでも良くなった。
だから今でも得ていません・・今はマリが好きだから、関係を続けています。
その存在そのものに、惹かれ続ける・・マリは純真な心で接してくれる。
私は・・マリといる時だけ、素直な自分でいられるから。
マリが好きだから・・今もこうしています」

シズカは笑顔で言った、楽しそうな笑顔だった。
「小僧が得たものって、何だと思ってるの？」とユリカが爽やか二ヤで聞いた。

「予測の粋を出ませんが・・多分ですよ、小僧は言わないでしょうから。

小僧は夢をコントロールできるようになった、寝てるときに見る夢を。
だから夢でシュミレーションを出来る、だからこそ・・先の先まで考える事も出来る。
自分の今日を繰り返せる、それを夢で見れるんです。
そして小僧は、一日を夢で繰り返すようになった。
その日にあった事を、夢でもう一度確認できる。
だから間違いに気付く・・だから補正していける、人間関係を補正できる。
私はそうじゃないかと思っています・・どうなんだい？」

シズカは私を見て、二ヤで言った。
「ちょっと待って・・夢をコントロールするの？」と蘭が驚いて言った。
「もしそれが出来るのなら・・通常の倍の時間を手に入れたに等しいですね」とユリさんが真顔で言った。
「シズカ・・ほとんど正解みたいね、私に読まれないようにしてる」とユリカが二ヤで言った。
「小僧・・私との約束忘れたの？・・何でも話すって」と美由紀が真顔で言った。

『別に隠さないよ・・自分でも表現し難い事だから、言えなかったんだよ。
俺はマリと触れ合って、段々と感じた事があった。
マリの能力の片鱗に触れて、考えたんだよ。
マリのは予知とか予言じゃないと仮定して、ならなんだろうと仮説を立てた。
マリは想像力が緻密なんだと仮定したんだ、想像力が緻密で正確だとね。
マリの事はそんな仮説じゃ、説明は全然出来ないんだけど。

それで感じた事があって・・俺の考えをマリにぶつけてみた。
マリに空想物語を作って話したんだ、そしてマリが感想をくれたんだ。
その感想があるヒントをくれた、シズカが言うほどの物じゃないよ。
本気で聞きたいの？・・作り話と思って、聞き流せるかな？
心に残すと、久美子以外は混乱するかもよ・・俺は話すのは良いけど。
今からマリアを寝かせて来るから・・どうするのか、話し合ってね』

私は全員を見回し、二ヤで言って立った。
「やばい二ヤを出したね～・・誘ってるね～」とリアンが笑顔で言った。
「私・・反対しようかな～・・怖いから」と恭子がウルで言った。
「聞かないで、寝れるの？・・確かに怖いけど」とマキもウルで言った。
「美由紀どう思う？・・あの二ヤを」とシズカが真顔で聞いた。
「本気でした・・間違いなく、本気二ヤでした」と美由紀が真顔で返した。

「私以外は混乱するって、どういう事なのかな？」と久美子が言った。
「久美子は到達しようとしてる・・気付きかけてるって、事だろうね」とユリカが微笑んだ。
「久美子・・最近小僧に何か話した、自分の理想みたいな事？」とシズカが聞いた。

「えっ！・・話した・・演奏の話をしたよ。
ミホちゃんと沙紀ちゃんが来た時の演奏で、ミホちゃんが私の指

を目で追った時。
私、初めて不思議な感覚で弾いてたの、自分で客観的に自分の手を見てるみたいな。
それで感じたの・・エースの言ってた、世界記録で走る話を思い出したの。
脳が指令を出してないって、こんな感覚なのかなって。
そう思ったんだよ・・その時私は自分の手の、制御だけをしてたのよ。
早くなり過ぎないように、強く叩き過ぎないように・・それだけをしていた。
だからエースに言ったの・・あれがヒトミちゃんの、左手の動きじゃないのかと。
私の求める世界を感じたと・・正直に言ったんだよ」

久美子は驚きを隠さずに言った、全員が真剣に聞いていた。
「その話を聞いてね・・エースは喜びに溢れたよ」とユリカが真顔で言った。
「それだ、間違いない・・奴はマリ、ヒトミ、ミホの流れで、会得したから」とシズカが二ヤで言った。
「待って・・じゃあ、自傷の女神の時のあの行動も・・シュミレーションしてたの？」とマキが真顔で言った。
「そうですよ、だって・・すぐにあの行動に出たんだから、シュミレーションしてたんだ」と美由紀が言った。
「奴は・・女神が、次に行動に出た時を狙ってた、そのショック療法も考えてたんだな」とシズカが言った。
「楽しくなってきたね～・・私、大好きだ～・・こんな話」とリアンが極炎ニカで言った、恭子がウルを出していた。
「小僧は読んでたよね・・私はそれを見て驚いたから、あの時シズカに聞いたよね？」とヨーコが真顔で言った。

「まさか！・・あの脳科学と睡眠の本・・分からないくせに～って、皆で馬鹿にした」と恭子がウルで言った。
「ミホを引き離された時だったよね・・医者にでもなるのかって、笑いながら聞いたよね」とマキが言った。
「美由紀・・なに冷や汗かいてるの？・・述べよ」と蘭が二ヤで言った。

「脳科学も睡眠に関しても、学者は馬鹿だねって・・小僧笑ってました」と美由紀がウルで言った。
「何かに気付き・・奴は自分で実験したんだ、奴は探究心に逆らえない人間だから」とシズカが言って。
「それは間違いないよ・・自分で躊躇無く、２重人格になったしね」とユリカが微笑んだ。
「リアン姉さんとユリカ姉さんが怖い・・楽しそうで」と恭子がウルで言った。
「実は私も・・ワクワクしてます」とユリさんが薔薇二ヤで言った。

「あ奴・・寝てる時ニヤニヤするんだよ、思い出し笑いするよ」と蘭が満開二ヤで言った。
「寝言は言わないんですか？」とカスミが二ヤで聞いた。
「言葉じゃ言わない・・でもね、私の寝言が多いって言ったの、多分・・鼓動か温度の」と蘭が笑顔で返した。
「私の時は、切ってたんだ・・瞑想状態で寝てたんだね」とユリカが微笑んだ。
「いけませんね～・・私も早くお熱にならないと」とユリさんが薔薇で微笑んで。
「シオンを、海外旅行に行かせるかな」とリアンが極炎ニカで言った。

「限界カルテットの問題だよ、こっちは聞く気でいるからね」とリ

アンが二ヤで言った。
「聞きましょう・・でないと眠れないし」とヨーコが恭子に二ヤで言った。
「大丈夫だよ・・奴は心に残すと、大切なヒントになるって言ったんだから・・さっきのは演出だよ」とシズカが言って、恭子とマキがウルで頷いた。

「あっ！そうでした・・アルコール分３％のシャンパンが有ったわ。
それを全員で飲みましょうね、用意しますね」

ユリさんが笑顔で言って、カスミが立って２人でキッチンに向かった。
１６歳の５人は嬉しそうな笑顔で、美由紀はワクワク顔で待っていた。
その状況を見て、私はリビングに二ヤで戻った。

カスミがグラスとキャンドルセットを持ってきて、５つのキャンドルに火を灯した。
そしてユリさんがシャンパンを２本持ってきて、照明を落とした。
幻想的な空間で、２度目の乾杯をした。
シャンパンは甘く、私にはジュースとしか思えなかった。
しかしマキを省く５人は、楽しそうに飲んでいた。

「マキ・・気にしないで飲みなさい、もうこんな物じゃ酔わないよ」とユリカが二ヤで言って。
「酔えば良いのに、可愛いから」とリアンが極炎ニカで言った、マキはウルで飲んでいた。
「さぁ初めて・・この雰囲気なら、最高だよ」と蘭が満開で微笑んだ。

『ここにいる全員が知ってる、俺の仮説・・脳の暴走。
それはヒトミとの関係で完成したんだ、そしてきっかけはマサルなんだよ。
美由紀に出会う前に出会った、小3になったばかりの5月だったよ。
マサル君が入院してきたんだ、マサル君は限界カルテットと同じ歳だった。
自閉症で呼吸器系が弱くて、その頃体が変化する頃で、体調が悪くなってた。
でも昼間は元気だったんだ、夜に発作が出てたんだと思う。
マサル君は言葉が不明瞭で、精神的に臆病だったんだと思う。
俺はマサル君がいつも持ってる、時刻表に興味を持ったんだ。
どんな時も持ってるんだよ、遊戯室で遊ぶ時も、時刻表を側に置いていた。
俺も汽車とか電車とか、移動をする乗り物が大好きだったからね。
その頃から、旅に異常に憧れてたんだ・・だから知りたかった。
時刻表の調べ方が知りたかったんだよ、それでマサル君と仲良くなる。
すぐに仲良しになったよ、そしてすぐに気付いたんだ。
2人の遊びを開発して、その時に驚いたんだ。
マサル君が持ってたのは、分厚い全国版の時刻表だった、北海道から九州までの。
国鉄の時刻表なんだよ・・それをね、全部覚えてたんだ。
全部だよ・・発車時刻から到着時刻まで、全て覚えていた。
マサル君の突出した能力、それは自分の好きな物に対する記憶力だった。
それまで誰も気付いてなかった、マサル君が伝えてなかったからね。
マサル君には普通の事で、誰でも出来ると思ってたんだね。
幼い俺も凄いと思うだけで、時刻表の読み方だけ知りたくて、ゲ

ームを考えたんだ。
２人で遊ぶとき、俺が時刻表の好きな所を開いて当てるゲーム。
例えば、宮崎が開いたら・・ニチリン何号って、汽車の名前を言う。
そして、例えば北九州って・・到着駅を指定するんだ。
そうするとマサル君が、何時何分って発車と到着時間を紙に書く。
それを２人で時刻表に照らし合わせる、そうする事で俺も時刻表の読み方を覚える。
俺もマサル君も楽しくて、２人でよくやってたよ。
マサル君の母親も、嬉しそうでね・・俺におやつを用意してくれてた。
５日が過ぎた頃だった、俺は次の段階をやってみたんだ・・時刻表を少し理解したから。
乗り換えて、最短時間で行く・・その問題を出してみたんだ。
国鉄だけを使って、乗り換えは自由で・・最短時間を計算する。
もちろんマサル君は、何も見ずにだよ・・その本当の凄さも、俺は分からなかったけど。
さすがにマサル君も考えた、それまでは即答だったから。
最初の問題は、大分市の滝尾って小さな駅が目に止まった。
そこの何号に乗ってって言って、次に開いたのが・・忘れたけど新潟の田舎の駅だった。
マサル君は俺を見た、俺は一番早く着くには？って二ヤで言ったんだ。
マサル君は瞳の症状が強かったけど、唇が少し動いて二ヤしたと思った。
そしてマサル君が目を閉じて考えたんだ、最初に何時何分って書いた。
そして２８号って書いて、何時何分って書いたんだ。
俺は必死で時刻表で追いかけた、大分駅での乗り換えだった。
そこでマサル君は考えたんだ、俺は何を考えてるのかって興味津

々でね。
それで時刻表で追ってみたんだ、まず悩むのが・・新潟に向かうのにどの線を選ぶか。
その乗り継ぎ駅をどこに設定するのか、そして新幹線をどう使うのか。
沢山の難関があるよね・・俺はマサル君を見てた。
そしたら、紙の最後の方に１８時２２分って書いたんだ。
その新潟の田舎駅の到着時間、そっからスラスラと逆算しだした。
到着時間から書き始めたんだ、俺は驚いてそれを見て・・その時に分かったんだ。
時刻表ってそうやって使うんだって、到着駅からの逆算をするんだな～てね。
でもマサル君は、暗記してる物を逆算するんだよ、凄いよね。
それで出た答えをマサル君と調べて、正解だったんだ。
どこが難しかったのって聞いたら、新幹線からの乗り換えだったって伝えてきた。
俺が興味津々の目を向けたら、詳しくは忘れたけど・・大阪と京都かどっかで迷ってた。
最終的に乗換えが、５分の誤差で無理なのに気付いて、そのルートに決まったって。
マサル君が楽しそうに伝えてきたんだ、俺が凄いな～って言ったら。
小僧、将棋出来るかって聞くんだよ、俺はやり方だけなら知ってるって答えた。
将棋の上手い人に聞いてみると分かるよ、そう伝えてきたんだ。
マサル君は、ＴＶで将棋の名人の話を聞いて、その方法を作ってたんだ。
俺はその日の病院の帰り、空手道場に寄った・・そして師匠と話した。
空手の師匠、ＰＧにも来たよね・・あの仙人シゲ爺は、将棋も強

くて有名だったから。
それでマサル君の話をしたんだ、シゲ爺は楽しそうに聞いて、教えてくれた。
将棋って先を読むゲームなんだって、何手も先を読んで、最終型を導き出す。
戦況の変化で、先の読み方も変化していく・・それが将棋の面白さなんだって。
そして先を読むには、もちろん技術も大切だけど。
最も大切なのは、経験なんだって・・経験則で読み手の幅が広がる。
戦略は無限にあるから、先を読むには戦略を覚えないといけない。
経験した相手の戦略を、どれほど架空の将棋版に反映させれるか、そこが勝負ポイント。
頭の中の将棋版は、猛スピードで動く・・それと自分の戦略。
その２つを同時に行う、だから・・先読みの部分は脳の仕事なんだな。
シゲ爺はそう言ったんだ・・シゲ爺が楽しそうだと思って聞いてた。
その言葉が引っ掛かってた、でもその時の俺には・・掘り下げる事は出来なかった。
マサル君は病状も安定して、退院が決まった。
俺はマサル君と約束してた、駄菓子屋にマサル君を連れて行った。
マサル君は楽しそうだった、子供だけで駄菓子屋に初めて来たからね。
そして会うんだよ・・覚えてるよね、シズカ・・俺の得た物のヒント。
その出発点はマサル君だったんだよ・・シズカとマサル君のゲームで感じた。
あの脳と脳の問いかけで感じたんだよ、その時に仮説を立てたんだ』

私はシズカに二ヤで言って、一口シャンパンを飲んだ。
「忘れる訳ないだろ・・衝撃的だったんだから」とシズカも二ヤで返してきた。
「今までの疑問点の整理をしよう」とリアンが言って、全員が笑顔で頷いた。

「時刻表って、変わるよね・・確か春に、その時はどうなるの？」とカスミが笑顔で聞いた。

『新しいのを覚えるらしいよ・・マサル君は、時刻表が好きなんじゃないからね。
いつか自分一人で乗りたいと思ってたんだよ、列車が好きなんだよ』

私は笑顔で返して、寿司の残りを食べていた。
「考えられないよね～・・常識的には、絶対に無理な話だよね」と蘭が満開で微笑んだ。
「そうなんですよね、あの時刻表でしょ・・天才という範囲に入りますね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「先にシズカに聞くべきだね、マサルとのゲームの話を」とリアンが二ヤで言った。

「私が家に帰ると・・駄菓子屋でお菓子を買って、小僧がマサルと家で食べてました。
母が楽しそうに、マサルに問題を出してるんです。
私は何気に見て、凍結しましたね・・乗り換えを瞬時に逆算してるのを見て。
私は慌ててマサルの前に座り、自己紹介をして・・小僧に伝えてもらった。

私はこう聞きました、それは自分の中でページをめくってるのかと。
時刻表のページをめくってるの？・・そう聞きました。
私は知りたかった、自分でずっと考えていた事を、マサルが見せてくれたから。
マサルはこう答えたと、小僧が教えてくれました。
ページをめくったりしないよ、その部分だけ・・着時間だけ頭に出てくる。
それを線路に乗せて走らせる、そして乗換駅で降りて、また着時間を出して線路に乗せる。
そうやって走らせるのが楽しいから、そうしてるって。
私は嬉しくて、ありがとうって心から言いました・・そして問題を出しました。
青森から宮崎まで、普通列車だけを乗り継いで、行けるのかと聞いた。
マサルが頷いたので、私はその最短時間って言ったんです。
マサルは青森６時８分と書きました、そして次に書いたのが・・仙台だった。
仙台から東京を書いて、考えましたね・・日本海側を考えたのでしょう。
数字の羅列を書き始めた、私は時刻表をめくりながら、夢中でそれを見てました。
当然数字の羅列は、時間を示していました。
そのスピードの速さに、私はワクワクして見てました。
感じてましたね、マサルの中で超高速で走る、いくつもの列車を。
そして１つの事を確信しました、マサルには暗記した事は意味がないんだと。
マサルは走らせたい、自分の中の列車をリアルに走らせたい。
その為に時刻表を覚えただけ、自分の楽しみの為に、純粋に覚えたんだと。

暗記の凄さに目を奪われたらいけないんだと、大切なのは走らせ方だと思いました。
走らせ方が理解できれば、暗記のしかたは付随してくる・・そう感じました。
約5分で、マサルは導き出した・・答え合わせをしながら、私は楽しくて。
そして驚愕の正解を、笑顔で見てましたね・・私の時刻表は東京で止まってました。
時刻表ではそんなに早く、調べられないんです。
それでマサルに聞いた、時間の逆算は難しくないのかと。
足し算と引き算なら、足し算の方が簡単だろって、私の知識にある問いかけをした。
それに対するマサルの答えが、最高の解答でした。
俺は言ってる意味が分からないけど・・列車には足し算、引き算は無いよ。
あるのは・・上りと下りだよ、線路は同じ長さだよ。
マサルの解答はそれでした、私がどんなに嬉しかったのか・・表現できません。
上りと下り・・同じルートを走る、だから距離も同じ。
それに付け足すのは、時間的誤差・・待ち時間や停車時間の。
マサルの書いた数字の羅列は、その待ち時間と停車時間の補正の為でした。
リアルに走らせたい・・その想いが作り出した、楽しむ為の部品。
マサルは停車時間まで、リアルに自分の世界に繁栄させていた。
私はそれを感じて、自分の大きな間違いに気付いた。
暗記しようなどと思っても出来ないと、自分の世界にリアルに組み込まないと。
全体を線路で繋がないと、とても到達できないと感じましたね。
その応用で作りました、エミに教えてる・・暗記術を。
無意味な暗記をする方法を、下り列車で作りました」

シズカは笑顔で言った、全員が興味津々で聞いていた。
私はこの時に知った、シズカの感じた物を・・私はシズカに又驚かされていた。

「面白いな～・・かなり楽しくなってきた」とリアンが笑顔で言って、トイレに向かった。
「本当に面白いですね、マサル君の次にマリちゃんが登場するのですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ、私は笑顔で頷いた。
「展開的にも奇跡でしょうね・・真逆のマリが登場するのは」とユリカも笑顔で言った。

『ユリカ・・蘭、大丈夫？』と私は心配で聞いた。
マリと同じ匂いのサチコの話が出た時に、２人の瞳に寂しさが過ぎっていたから。

ユリカも蘭も笑顔を見せてくれた、マリの話は今ホームを出ようとしてる。

発車のブザーを待っている、終着駅の無い・・マリの列車が・・。

【マリ?】

自分の分析をする、難しい事である。
理想も夢も入れずに、今の自分と向き合う。
足りない物の多さに、愕然とするのかもしれない、小さな自分に。

私はシズカの話を受けて、全員に笑顔で促されて始めた。

『シズカの話を、今聞いて・・俺はシズカの半分も、気付いてなかったよ。
俺がマサル君の話で一番心に残ったのは、上りも下りも同じ距離と言った。
距離の部分なんだよ、同じレールなんだから、当然同じなんだな〜って思ってた。
そしてそんな事も忘れていた時に、美由紀に出会って、マリがやってくる。
俺はマリを一目で気に入った、上手く表現できないけど。
その雰囲気を見て、俺の知らない者だ〜・・そんな感じで、好奇心が溢れた。
マリ瞳を最初見たとき、驚いたんだ・・その圧倒的な瞳の伝達に。
あんた、まさか分かるの?・・マリがそう伝えてきた、俺は二ヤで頷いた。
それからマリは俺を指名してくれた、マリの話は本当に面白かったよ。
マリの話を聞きながら、俺はファンタジーの世界に連れて行かれた。
俺は面白話で返して、それで仲良くなった・・そして美由紀に紹介した。
美由紀と3人でトランプをして、その力に気付いた。

そして限界カルテットに見せて、あのマリ話になるんだ。
見せた後・・俺はマリに対して、その事は触れないようにした。
マリが自分の力を嫌っているのが分かったから、俺は興味も無かったし。
俺はユリカに対してもそうだけど、その力に不思議と興味を持てないんだ。
でもマリは俺には見せてくれた、全て自分の意志で見せてくれたんだ。
俺はマリの退院が決まって、寂しくて・・また会えるかな～って聞いたんだ。
会いに来るよ、私の方から・・その時が来ればねって、マリが言った。
俺はその時に聞いたんだ・・マリの力みたいなのって、巻き戻してる感じなのって。
シズカに聞いてた、巻き戻すって仮説を聞いてみたんだ。
ん～・・表現するのは難しいの・・小僧はどう思ってるの？マサルと私の違い。
俺はマリにマサル君の話をしてたから、マリはそう聞いてきた。
マサル君のは、覚えた事を引き出してくる・・真直ぐな線路だとしたら。
マリのは円の線路みたいな感じかな・・出発点も終点も無い円を描く線路。
俺は思ったままを言ってみた・・マリはクスクス笑って、こう返してきた。
もう少しだね、私が自分で思ってるのは・・螺旋の線路だよ、永遠に続く感じの。
螺旋？・・俺は螺旋が分からなくて、聞き返した。
グルグル回ってる階段があるだろ、あれを螺旋階段って言うんだよ。
回転しながら上がって行く感じ、グルグルと回りながらね。

マリはそう教えてくれた、俺はそれで充分だった。
一度に沢山の事を聞いても、処理しきれないから・・それで話を終えた。
そして創作物語を作るんだ・・マリの螺旋で感じた事をね』

そこでシズカの声がした。
「ちょっと待って・・整理するから」とシズカが言って、瞳を閉じた。
「螺旋か～・・なるほどね、感じは分かるな～」とユリカが笑顔で言った。
「もう分かるんですか・・さすがユリカね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「螺旋と上り下りか～・・線路に例えたのは、マサルの流れだったからだとして・・螺旋ね～」とリアンがビールを飲みながら考えた。
「螺旋でイメージできる物があるよね・・楽しみだ～」と蘭が満開で微笑んで、ユリカが笑顔で頷いた。

「すいません・・小僧、続けて」とシズカが言って、私も笑顔で頷いた。

『俺の作った創作話は・・時間は渦を巻いて、白い螺旋状で流れてるって話。
だから過去が存在して、未来も無限に存在する。
その螺旋の白い部分に、絵を描きながら上って行く。
だから描いた絵は歴史として残り、未来は自分で描かない限り存在しない。
絵を描かない限り、前には進めない・・それが時間という、白い螺旋。
まぁ小3の普通の子供が必死で考えても、ここまでだったよ。
そしてここから始まる、マリ問答・・俺は本当に楽しかったよ。

小僧、イメージする時って、何がイメージしてるんだ？
そうマリが聞いてきた、俺は素直に答えたよ。
俺・・・脳ミソだろ。
マリ・・脳ミソなの、脳ってそんなに大きいの？
俺・・・大きさは関係ないんじゃないの？
マリ・・脳は新しいものを、考えられるの？
俺・・・そうじゃないの？・・だから新製品は出来るんだろ。
マリ・・脳が今存在しない物を、想像出来るの？
俺・・・今ある物を、進化させるんじゃないの？
マリ・・じゃあ作家は、宇宙とか未来の物語を書く。
俺・・・やっぱり、想像するんだよね。
マリ・・何を目安に想像するの、基点は何？
俺・・・キテンって何？
マリ・・考える、最初の地点よ。
俺・・・やっぱり知ってる事だよね、そこから膨らますんだよ。
マリ・・それなら、そんなに壮大なロマンは書けないよね。
俺・・・そうかもね、枠を出れないって事でしょ。
マリ・・そうよ、良い感じになってきたね。
　枠を出れないのはなぜ？
俺・・・だから、脳が考える事だから、基点がそこだからだろ。
マリ・・基点は変えられないの？
俺・・・基点を変えるの？・・脳を変えるの？
俺はここで考えたんだ、全く意味が分からなかった。

マリ・・脳しか無いの？・・全ては脳が指示するの？
俺・・・脳以外にあるの？・・分からないよ。
マリ・・今、目で見える物だけを、考えさせられてるでしょ。
　今の自分を考えてごらん・・何かを切られてるでしょ。
俺・・・目で見えない物？・・切られてる？
マリ・・人間には無いの？・・人の意志は全て脳が作ってるの。

俺・・・あっ！・・・心だね、目で見えない物。
意志を作り出すし・・切られてたのか？
マリ・・それは分からないのよ、でも枠を出れなかったでしょ。
俺・・・うん、確かに枠を出れなかった。
マリ・・例えば、宇宙の果ての物語って、有名な作品は無いのよね。
私が知る限り無いのよ、それは物語にしても、受け入れられない世界なの。
そこまでの想像をしてはいけない、そう遮られてるって思ったの。
私はタブーなんだと感じたのよ・・人間が触れてはいけない世界みたいな物。
それで自分で考えてみたの、例えば無限とされる宇宙がね。
実はある生命体のお腹の中で、その空間に出来ているものだとしたら。
人間の小ささは表現できないでしょ、だから小さな世界も無限に広がるよね。
ほとんどの人は、想像の基準を、科学と経験でとってるのよ。
その枠をはみ出さないようにね、それ以上の無限まで行かせない。
今の人間が持つ、無限に対するイメージは、無限じゃないのよ。
どこかで枠を出れない、その想像を超えさせない・・その為の言葉。
俺・・・マリ待ってよ、大きい世界は難しいよ。
小さい世界で考えさせて、小さな方が俺には分かり易い。
マリ・・それなら、顕微鏡でしか見れない世界、微生物だとして。
その微生物の中の空間に、宇宙があるとする。

その宇宙に小さな星があって、生命がいるとするでしょ。
その生命が、人間並みの知識を持ってたら。
夜空を見て、何を想うの？・・宇宙をどう感じるの？
俺・・・想像もできないほど広い、無限に広がる世界だね。
マリ・・無限に意味があるの？
俺・・・無いから、無限だと思ってたよ。
思わされてたんだね、それ以上は・・無限だって。
マリ・・よしよし、さすが小僧・・瞳の会話を思い出しただけあるね。
俺・・・思い出したの・・持ってたの？
俺は驚いて聞いたんだよ、それまで考えた事も無かったから』

私はここでシャンパンを飲んだ、女性達は考えてるようだった。
「凄いよね～・・大きさと小ささの話だけでも、何か世界が広がった感じだよ」とカスミが微笑んだ。
「マリちゃんも、ヒトミや由美子と同じなんだね・・一人の世界で、ずっと自分と向き合ってたんだ」と美由紀が笑顔で言った。
「マリは近い将来言葉を得る・・そう確信的に思ったよ」とシズカが笑顔で言った。
「私もそう思うよ、絶対にマリは成長を続けるね」とユリカが爽やかに微笑んだ。
『その話が出て来るんだよ、マリは空想物語だと言ったんだ』と私も笑顔で言った。
全員が笑顔になって促した。

『俺はその頃自信があったのは、瞳を読み取る事だけだったんだ。
鼓動はどっか会話じゃなくて、響きあう波の伝達だったから。
一方的だったから、乳児だけに使ってた・・マリが最初だったんだ。
俺はマリの可能性が見たかった、でもマリの方が俺よりかなり先

を走ってた。
俺はヒトミで温度を覚えた時に、一度マリに会いに行ったんだ。
その時、マリに言われた・・道を繋いで見せろって。
俺が道を繋ごうと生きる限り、諦めない限り。
マリは必ず大切な場面で、俺に会いに来るって、強く温度で伝えて来た。
俺はその時に仮説を完成させた、ヒトミの段階の時とマリの言葉で。
話を戻すね。
俺は驚いてた、瞳の伝達を思い出したと言われて。
俺は考えもしなかった、瞳を読み取れるようになったのは。
幼馴染のチサと遊ぶためだったんだ、チサと楽しく遊ぶためだけの行為。
俺は凄いと言われても、何が凄いのかさえ分からなかった。
誰でも出来るのにって思ってたんだ、深く考えた事もなかったよ。
ミサがマリアと遊ぶ為に、温度の伝達が無意識に出来るよね。
あれを表現できて、5歳でも持っていられる。
それはミサやレイカの凄さであり、マリアの力なんだよ。
でも幼い子供同士を遊ばせると、不思議な伝達をして遊んでるよ。
俺は幼稚園の先生に会いに、幼稚園に行ってたから分かったんだ。
瞳や温度の伝達なんて、当たり前に使ってる子供がいる。
それが顕著に出るのは、施設の子供なんだ。
施設にいる3歳以下の子供は、強い伝達で互いに交信してるんだよ。
多分危機的状況を感じて、その部分が目覚めたんだと思う。
動物だったら、両親の死は・・自分の死を意味するよね。
そのＤＮＡに組み込まれてる、進化前の記憶が蘇る。
防御本能として、言葉を使う前の伝達が蘇ると思うんだ。
俺が哲夫を小児病棟に連れて行ったのは、哲夫なら出来ると思ってたから。

温度の伝達が出来ると思ってたからね、哲夫の言葉は相手に伝わってる。
哲夫が返事を読み取れないだけ、それは難しいんだよ・・やっただけだから。
英会話も何でもそうだろうけど、経験量がものを言うよね。
俺は家を抜け出して、毎晩遅くまでヒトミの授業を受けたんだ。
まぁ塾に行ってたみたいな感じ、かなり厳しい先生だったよ。
だから覚えられたんだ、哲夫は今・・出来る限りの時間を、由美子に当てている。
あいつは負けず嫌いだから、特に俺に対してはね。
俺は助かってるよ・・安心していられる、哲夫が由美子に会っているから。
少しの変化でも気付くから、哲夫は生命に対し敏感だからね。
施設の子供でも、言葉の伝達がキチンと出来るようになると。
伝達方法を忘れてしまう・・まるで何も無かったかのように、綺麗に消滅するんだ。
消滅を恐れた・・あの天使は消滅を恐れていたんだ。
自分のじゃなかった、大切な2人の姉の、温度の伝達の消滅を恐れていた。
俺はそれを感じて、感動したよ・・俺はその時に思ったよ。
マリや沙紀や・・マリアに比べたら、俺なんて凡人だってね』

私は二ヤで言った、女性達がハッとした顔になった。
「それで言葉を出さないの、マリアはそこまで考えてるの？」とユリカが真顔で言った。
『考えてるんじゃないと思う・・感じてるんだよ』と笑顔で返した。
「だからあなたも引き出さなかった、マリアの自主性に任せたのね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「失う物の方が怖い・・それだったのか」とシズカが呟いた。

『俺はマリアはその不思議な力を、楽しんで欲しいんだ・・だから制御を教えたい。
そのヒントはマリに寺で貰った、マリがマリアを抱いてるときに感じた。
俺はマリアの力を消滅させない、ユリカやマリのように。
制御を覚えて、好きでいて欲しいと願ってる。
だから俺の想いは全て伝える、ずっと側に付いているって決めたんだよ。
まぁマリアの話は、またいつか。
それで、瞳の伝達を思い出したって言われて、俺はマリに聞いたんだ。
持ってたの？・・マリに聞いてみた、マリはこれから話すのは創作話だと言った。
俺は了解って伝えて、ワクワクしたたよ。

人が進化して今の形になったのは、知ってるよね。
簡単に言えば、猿が人になった。
じゃあ猿には伝達方法は無いの？・・絶対に有るよね。
じゃあもっと過去・・海で生きてる時は？・・私は有ったと思ってるよ。

ある所に一人の少女が産まれました、その子は不思議に泣かない子でした。
少女が1歳になる頃、両親は心配して、病院に検査に連れて行きました。
病院で沢山の検査を受けて、両親は医師に言われました。
この子は耳が不自由です、話せないと思います・・そう告げられた。
その少女は驚いた、自分は耳は聞こえてると思ってたから。
だって両親の会話も、外を走る車の音も聞こえていたからです。

悔しかったけど、伝えることが出来ませんでした。
だから少女は考えました、なぜ話せないのかと考えた。
機能的な問題なんだと感じて、どこだろうと考えたんです。
その時に、自分の知識に驚いた・・医学的専門知識の豊富さに、驚愕したのです。
それで感じた、私は普通じゃない・・1歳の子が、こんな感覚の訳がない。
そう思いました、そして考えるという事を実験した。
少女は驚愕の事実に気付いたのです、その知識の歴史分野の豊富さに驚いた。
西暦何年とかは分からないけど、歴史的事実が頭に鮮明に浮かぶんです。
少女は混乱しました、私は何なのだろうと・・怖くなりました。
自分の力を必死で無視して、一人の障害児として過ごしていた。
9歳になる頃でした、少女はそれまで何も主張しなかった。
俯きがちで、殻に閉じこもっていた・・しかし検査で病院に行ったある日。
自分が嫌になってしまいました、臆病な自分が嫌になって、解決しようと考えた。
8年間封印していた、深く考えるという扉を開けました。
その時・・開けるなら契約をしなければならない、そう声がした。
契約？・・あなたは誰？・・その少女は驚いて聞きました。
私が誰かなど問題じゃない、お前が知識の扉を開けるなら、契約をしろ。
強く言った言葉が、少女には嘘っぽいと思った。
どんな契約なの・・私の言葉と文字を奪ってるくせに。
少女は強く言い返して、相手が動揺してると感じていた。
お前は問題のある人間だから、その言葉と文字を奪った、それを取り戻したいか？
取り戻すのに、契約がいるの？・・本題を言えば。

少女は楽しくなっていました、自分の考えが正しかったと思って。
お前の記憶を読む力、それは偶然の産物なのだ・・それを捨てろ。
それを持ったまま、言葉や文字の表現は与えられない。
そう言われて、少女は気付きました・・その相手の正体まで辿り着いた。
じゃあいらない・・私は今教えてもらったよ、私の力の意味をね。
だからあんたは私から伝達方法を奪った・・でもね、私はいつか出会うよ。
私は今はっきりと分かった、私の力の意味が・・はっきりと提示されたよ。
いつか出会う、健常者で伝達でき、理解できる者と出会える。
それまで待つよ、あんたの指図は受けない・・私が指示を出す方だよ。
引っ込んでなよ、あんたは自分の意志など持てない・・ただの回路だろ。
少女は強く言って、記憶を辿っていました。
その記憶量の豊富さを感じて、はっきりと確信した・・これは罠だと。
歴史を覚えていたとしても、伝達を奪う理由にはならないと。
いつか出会うと確信的に感じた、あの現象こそが本質なんだと感じました。
記憶を読む力・・奴はそう言った、記憶を読む・・変な表現だ。
少女はそれで考えた、記憶を読むと表現するのかと。
歴史的事実は記憶じゃない、知識だろって感じたのです。
その時に少女に見えた、大きな白い塔が見えました、少女は中に入ってみた。
そこには螺旋状に天まで伸びる通路があって、少女は上ってみた。
下が見えないほど上って、今の自分の絵が描いてある所に来ました。
振り返ると足跡が綺麗に残っていて、目の前には当然足跡は無か

った。
でも沢山の人の足跡があるんです、だから少女は上ってみた。
不思議と自分の足跡は残らなかった、そして上った先に少年が立っていました。
その子は少女に向かい、意味深な笑顔を向けて。
あれ～・・足折ったの、痛いでしょ～と言いながら近づいた。
少女は驚いていました、自分の瞳を読んでくる少年を見て。
そこで少年は止まった、少女はどうしようかと思った。
そして感じたのです、どうせ自分で作り出した世界だから・・怪我はしないと。
だから通路から飛び降りてみた、下は見えないほど高かったが恐怖は無かった。
そしてポンと落ちた場所は、あの自分の絵が描いてある地点でした。
少女はそれで分かりました・・記憶を読むと言った意味を。
その記憶が読めるのか～・・少女は気付きました、嬉しかったのです。
だから少女は契約を拒絶した、その力に意味があると思ったから。
失わずに、持って行こうと決めました・・あの場所まで。
あのいやらしい笑顔で近づく・・少年に出会う場所まで。

マリはそう言って、ケラケラと笑った、俺は当然ウルを出してたよ。
この話の事は触れなかった、俺は嬉しかったから、マリが空想話と言ったから。
そしてマリは退院する、退院の前日・・こう俺に伝えて来た。
小僧・・辛いって思った時は、相手の事を先に考えろよ。
美由紀に対しても・・次の者に対してもね。
美由紀を頼むね、私は美由紀で夢を見るからね。
小僧・・結論は心で出せ、その時の結論は絶対に心で出せ。

ごめんね小僧・・私は出会わせない事も出来る、でもお前を信じる。
お前なら乗り越える、その悲しみを内側に入れると信じてる。
ごめんね小僧・・私は悪い子だね・・でも繋いでくれるよね、小僧なら。
私はその時に、必ず小僧の側にいる・・絶対にお前を戻す。
ありがとう、小僧・・私は本当に嬉しかった。

マリの強い伝達で、俺は内容より別れの寂しさが溢れて、マリにもたれて泣いていた。
マリの優しい鼓動が、俺を守ってくれていた。
俺は幸せだった、そして心に強く残った。
結論は心で出せ・・そう泣きながら叫んだマリの言葉が。
ヒトミが俺に、あの言葉を言った時に・・マリのこの叫びが蘇ってきた。
ヒトミが・・無の半年より、意志のある半月・・そう叫んだ時に。
結論は心で出せって・・マリの叫びが響いてきたんだ。
俺はマリに感謝してた、マリの叫びが無かったら・・俺は間違ってたかもしれない。
ヒトミの心を優先出来なかったと思う、自分の悲しみに負けていたと思う。
マリの力・・それは分からない、この中にヒントがあるのかも知れない。
俺にはそれ自体は、どうでもいいんだ・・マリが存在するだけで。
マリが言ってくれるから・・道を繋げたね、小僧。
そう言ってくれるだけで良いんだ・・俺にはその言葉が、最高の褒め言葉だから。』

私は思い出していた、ヒトミの叫びに呼応したマリの叫びを。
全員が静かに聞いていた、美由紀の涙が切なかった。

『マリのこの話は、大切なヒントだったんだ。
マリのヒントは、ヒトミの段階の時に現れる。
マリは多分、螺旋を意識させるために、螺旋で表現したんだと思う。
マリの力は表現できない物で、知ろうとする物じゃないと思っていた。
ヒトミの段階の時に現れた、白い塔・・俺はそれを見て、そこじゃないと感じた。
その場所に犯人はいるが、ヒトミはいないと分かっていた。
俺はヒトミを探していて、いきなり拉致されて塔に連れていかれた。
頭にきて怒りに震えて、螺旋の通路を走って上った。
全てのドアもヒトミの絵も無視して、最上階の部屋に入った。
そして三枚の扉の試験を受ける、俺は選択で迷わなかった。
ヒトミの温度を感じたから、しかしそれが罠で、俺は戻された。
律子がヒトミを連れ戻した時に言ったんだ、なぜ螺旋の階段を走ったのかと。
あの螺旋にこそ意味があっただろうと、そう言ったんだ。
どうしてヒトミの絵の場所から、飛び降りなかったのかと。
飛び降りた場所に、今のヒトミがいたんじゃないかと言われたんだよ。
律子は螺旋を上って、ヒトミの絵を見ていた、そして塔が揺れて律子は落ちた。
落ちた場所は、深い井戸で・・そこを潜ると、ヒトミの部屋が有ったんだ。
俺はそれで分かったんだ、マリはそこまで、ヒントを出していたって。
あの空想の物語は、ヒトミの段階の時のヒントだったんだと感じた。

自分の感覚を表現しながら、出した大切なヒントだった。
そして・・その事で感じてしまった・・ヒトミとは別れる事になるんだと。
だから全ての思い出を、記憶にきちんと残したくて。
俺はマリのヒントを自分の中に作った、螺旋階段を作ったんだ。
そうとしか表現できない、そして夢をコントロールした。
一日を繰り返したり出来ないよ、でもヒトミとの時間を繰り返す事は出来た。
毎晩、ヒトミと夢で話した・・なぜそこまで出来たのか。
マリのヒントと、温度の会話を覚えたい・・ヒトミと話したい。
その気持ちが、俺の心に螺旋階段を作った、脳を取り囲む螺旋階段を。
記憶の番人である、脳という回路を取り囲む螺旋階段をね。
俺は確かに、ミホを引き離されて、子供向けの脳科学や睡眠の本を読んだ。
それはこの螺旋階段を、伸ばしたくてね・・でも学問には無かった。
脳は臓器だという感覚や、その信号を受ける場所・・解明されてない分野。
睡眠も同じだった・・だから俺は自分で教えた、脳に教え込んだ。
今日を覚えてろって、そして映像を夢で見せろって。
ヒトミのプレゼントの、映写機で見せろって・・そう教え込んだ。
お前の見せる、訳分からん夢など見たくないから・・そう伝えたんだよ。
俺が表現出来るのは、こんなとこかな・・やっぱり無理だよ。
俺は眠りに落ちる前に、常に螺旋階段の上をイメージする。
そして上りながら、内側にある脳の上にあるスクリーンを見る。
そこにはその日人と話した場面が映る、映画のように映るんだよ。
もちろんそれは夢なんだ、でも真実の夢なんだよ。
これを確立したのは、あの恋が浦の夜・・ヒトミが強く言った。

これは夢なんだよって言った言葉、あれで完成させたんだ、螺旋階段を。
俺は確かに、その日の重要な部分を繰り返す、それは瞳で読み取りたいから。
自分の思い込みが怖いから・・それが命と向き合う、俺の唯一の武器なんだ。
間違いは許されない、俺の大切な武器なんだよ』

私は話しながら、自分の気持ちの、半分も表現できないと思っていた。
女性達は黙って感じていた、その顔を見て、私は決意する。
マリの幻想物語・・その最も大切な、あの作品を伝えようと。
そう決心して、美しい女性達を見ていた・・少しの後悔を感じながら・・・。

常識や文化や歴史が、壁を作るのだろうか。
その壁が枠組みを作りだす、その枠が守ってると錯覚する。
守ってはいない、閉ざしているだけ、楽しみを閉ざしている。

【マリ?】

私は真剣な女性達の顔が嬉しくて、付け足した。

『マリが俺に提示した物で、はっきりとした表現は、ヒトミとミホの名前だけなんだ。
それ以降は、どっか川柳のような感じで、意味深な提示なんだよ。
それが俺とマリのルールみたいな、2人のゲームのルールだった。
俺はマリと沢山の話をした、そして気付いていた、何と会話してるのかって。
それが自分でもはっきりとは分からなかった、俺は考えなかったんだ。
混乱しそうな気がして、それを察したマリが話してくれた。

小僧が素敵なのは、考えないよね・・理解不能な事は、とりあえず考えない。
それが普通は出来ないんだよ、どうしても理解しようとする。
自分の知識と経験に照らし合わせて、自分なりの解答を求める。
それが出来ない場合は、認めない・・存在すら認めないんだよ。
小僧・・振動だよ、全ては振動なんだよ・・伝える方法は振動。
言葉も音だから、振動だよね・・それを鼓膜が捉える。
鼓膜も当然振動する・・鼓動は当然だけど、瞳の変化も揺れなんだよね。
人はその情報のかなりの部分を、目に依存してしまった。
視覚的情報に偏ったんだね、触覚やヒゲや尻尾さえ退化した。

それは伝達方法を得たからなんだろうね、言葉を得たから必要無くなった。
瞳の変化は目の発達で得たんだろうね、直接繋がってる部位なんだね。
瞳は直接繋がってる、だから涙も流すんだね。
表情の中でも、瞳の表情は、他の部位とは比べ物にならないよね。
その心の状況までも伝えるよね、愛も友情も感謝も・・全て伝える。
瞳で会話する・・絶対に出来るよね、表情を突き詰めればね。
その揺れを感じるよね、そして読み取れて、伝える事も出来るよね。
小僧・・考えるな、揺れなんだよ・・お前が考えなければ、届くかもしれない。
次の段階に気付けるかもしれないね、その揺れに・・振動にね。
小僧、大切なのは、気付く事だからね。
小僧・・心はどうなんだろうね～・・言葉の表現でもあるよね。
《心に響いた》という表現が、誰でも理解できるよね、経験してるから。
心は感じるんだよ、振動を感じる・・そこには他の何も介入出来ない。
心は直接感じる・・何かの振動は感じる、強い何かの振動はね。
マリちゃん今日は、スペシャルサービス・・いつか分かるよ、小僧なら。

俺は嬉しくて、マリありがとうって言った。
嬉しかったんだよ、自分の感じてた事を、マリが表現してくれて。
俺は自分の伝達方法が好きになった、そして少し自信が持てたんだ。
このヒントがヒトミの温度を気付かせてくれた、だから俺は素直に思えた。

これは心の温度なんだって、ヒトミが直接心を伝えてくれたんだって。
何の疑念も無く、受け入れる事が出来たんだ。
そして俺はマリとの伝達を、最近やっと分かった。
由美子の段階の時に、それに気付いたんだ。
俺はあの時の事が嬉しくて、全員にその感想を聞いたよ。
お魚になった、ナギサとツインズの話も素敵だった。
ナギサはイルカになっていた、そしてあの島の浜まで来て、カスミの叫びを聞いた。
あの自由な心のナギサは、イルカなのに浜に上がったんだよ。
ナギサの心は常識などに縛られない、だから浜に平気で上がった。
そうしたら、進化を始めたんだって・・あの短期間で猿人にまでなってたらしい。
ナギサが言ったんだよ、本当に楽しかったって、足が生えて、腕が生えた。
這い這いから両足で立って、その全ての変化が、楽しかったって。
あの世界が崩れだして、え～・・もう少し～って叫んだって。
嬉しくて、楽しくて・・もう少し経験したかったんだね。
せめて人間の形まで、そこまで経験したかったって、ナギサが華やかに笑ったよ。
俺はナギサを夜の海に連れて行こうと思ってる、俺はナギサの心に憧れてる。
何にも縛られない、放浪する事を楽しめる心に。

話が反れたから、戻すね・・マリの伝達方法。
それを確信したのは、スーパーマリアマンを見た時だった。
ユリカは気付いてたかな？蘭は感覚的に感じてたよね。
蘭が最強だよって、マリアに言ったからね。
俺はまさに最強だと思ったよ、マリアマンの胸のMの文字。
あれはマリアとマリのMだったから、マリアの中にマリが存在し

てた。
だからこそ、《もう一人いるよ、プレゼント来るよ》って言えたんだ。
姿無き男が、《残念だったな、あのマリアが使えなくて》って言ったよね。
【あの】って言ったのさ、完全にビビッてたよ、あの台詞は。
マリはシンクロ出来る、心と心を繋げてくる。
多分・・シズカは感じてる、そして当然・・ユリカは感じてる。
すぐに出来るよ・・何かに気付けば、会話を出来るよ。
マリはシンクロ出来るんだ、心とならシンクロ出来る。
俺はマリの力で、そこが一番凄いと思ってる。
少し喉が渇いたから、ユリカの感じてる事を聞かせて。
ユリカが一番楽しんだんだから、特等席で・・２画面を同時に見て。
一番感じてるんだから・・マリをどう感じてるの？』
私は二ヤでユリカに振った、全員が笑顔でユリカを見た、ユリカも爽やかに微笑んだ。
「ありがとう、エース・・凄く素敵な話だった。
それにマリの創作話が最後にあるようだし、楽しみだよ。
私はマリを見て、本当に嬉しかった・・その力を受け入れてる少女が。
その圧倒的な力を感じて、初めて自分が普通だと思えたよ。
私はマリの表現した、螺旋はよく分かるの・・表現は出来ないけど。
マリも一点しか読めないよね、エースを点にしてその周りを読む。
私もそうだから感じたよ・・どこにその点を決めるのか。
それが大切なんだって事に、興味本位や考える相手じゃ駄目なんだね。

マリは変化してるって、エースは言った・・それはシズカの力だよね。
私も感じてたよ・・マリとは会話が出来るはずだと。
そして今のエースの話で、突破口は見えた・・シンクロするって言葉で。
シンクロって・・同調って事だよね、同調できれば交信できる。
そしてその段階にマリはきてる、シズカが連れて来た。
エースもマリアも感じたんだね、もうマリは大丈夫だって。
言葉を得ても、その力は消滅しないよね・・マリは気付いてるから。
シズカの言葉を思い出して、その凄さに驚いてるよ。
マリが自分で気付かないと駄目な気がするって、マリとの関係を始める時に言った。
マキが教えてくれた、シズカの言葉を思い出したよ。
凄い言葉だよね・・マリが力を選択した事を、シズカは感覚的に気付いていた。
私は子供の頃、力に気付いて・・混乱して、失敗したの。
それから隠し続けてきた、その間に・・何も知ろうとしなかった。
どうにかして捨てられないか、そう思っていたの。
マリは違う、混乱もせずに・・自分で自分の力を理解した。
そして捨てられたのに、持つことを選択した。
言葉と文字は自分の力で取り戻すと、強く心に誓ったんだろうね。
その時に見えたんだよ、その方法が現れた・・エースの映像が現れたんだね。
私はマリが好きだよ、それだけは自信を持って言える。
そしてマリに伝えたい事が、山ほどあるの・・そしてマリの心も、感じてみたい。
私はあのスーパーマリアマンの事は気付いたよ、でも間違いにも今気付いた。
私はマリアがマリに変身したんだと思ってたの、同調してたんだ

ねマリアは。
マリは出会えたんだね、同調して共に戦える相手に。
嬉しかったんだね、マリもマリアも・・だからマリは次の段階に来る。
シズカの言葉が響いてる、マリは原作者に対してだけ牙を剥くと言った言葉が。
マリに理不尽な選択を迫ったのも、あの姿無き男なんだね。
私はマリと会話した時に、私のマリに対する感想を言いますね。
私は本当に楽しみです・・マリの心を感じる事が」

ユリカが爽やかに微笑んだ、私は笑顔で返した。
女性達が嬉しそうな笑顔で、ユリカを見ていた。

「エース、聞きたいんだけど・・自閉症や由美子みたいな病気の子。
そのほとんどは、言葉を持ってるの？・・言葉で表現できるの？」

リアンが真顔で言った、いつになく真剣な顔だった。

『持ってるよ・・少なくとも、自閉症と言われる子供は持ってたよ。
由美子のような難病の子も、ほとんどは持っていた。
言葉も意志も持ってない子って、本当に稀なんだよ。
脳の機能が全て停止してる、そういう状態で生きるのは難しいよね。
口に出して言葉に出来るか、それには体の機能が必要だよね。
体の機能が正常で、それでも出ない・・そんな子が世界中にどれだけいるのか。
俺はリンダと旅をしたいのは、そこなんだよ・・両親に伝えたい。
寝たきりでも、意志はあるんだと・・悲しい顔をしては駄目だと。
正直に伝えて欲しいんだ・・自分の辛さも、そして楽しみも。
両親が謳歌してみせて欲しいんだよ、そして見せてやって欲しい。

生きることの素晴らしさを・・その意味を』

私は笑顔で言った、リアンも笑顔になった。

「ありがとな、エース・・お前にとっては、シオンの開放は簡単な事だったな」とリアンが笑顔で言った。

『簡単だったよ、シオンは気付いてたから・・リアンを見て、意味を感じてたからね』と笑顔で返した。

「そうか～・・シオンも自分の個性を、どうして良いのか分からなかったんだ」とカスミが言った。

「否定され続けたから、家族以外はその個性を否定してた・・だから分からなくなったのですね」とユリさんが真顔で言った。

「往々にしてありますよね、そういう風潮は・・日本は特に強いって、和尚が言ってました」とマキが言って。

「私達も、危なかった事があります・・その風潮に乗りそうだった」とシズカが真顔で言った。

「うん・・自分が理解できない事を、否定しそうだったよね」と恭子が言って。

「キムちゃん・・元気らしいよ」とヨーコが笑顔で言った。

「聞かないといけないね～・・キムちゃん」と蘭が笑顔で言った。

「お願いね・・大切なヒントでしょ」とカスミが笑顔で促した。

４人が互いを見て、ヨーコがウルで始めた。

「小僧がミホを引き離された時でした、私達が中学２年に上がった時です。

新学年になる時に、転校してきました・・キムという少女が。

お分かりと思いますが、韓国人の可愛い少女でした。

在日でなく、韓国から転校してきました・・母親の再婚だと思い

ます。
その経緯は詳しくは知りません、母に連れられて転校してきた。
日本語は全く出来なかったですね、キムは私と同じクラスになりました。
私は学校の事を教えていました、身振り手振りで・・キムは真剣に聞いていた。
先生方も大変だったと思います、英語なら出来る先生もいたでしょうが。
韓国語でしたから・・誰も出来なくて、私も細かい事を教えられなかった。
クラスメートも困っていました、そしてキムが荒れだすんです。
多分、過度のストレスだったのでしょう、今なら私にも分かります。
知らない国に転校してきて、言葉も文化も分からない状況。
それに韓国ですから、悲しい事に・・日本を恨んでいても、仕方なかったですね。
そういう教育を受けて、歴史的事実を感じていた・・１４歳の少女です。
パニックになって当然ですよね、私はそれが、リアルには分からなかったんです。
最初、誰が言い出したのか・・韓国人は我侭だとの、根拠の無い噂が流れて。
それから性格が激しいとか、色々と根も葉もない噂が流れた。
それで生徒はキムを避け始めた、私は何とかしたいと悩んでいて。
キムに話しかけるけど、強く拒絶されて・・悩んでましたね。
限界カルテットで話したけど、解決策は出なかったんです。
教師もアドバイスしようにも、出来ないようで、キムは孤立を強めた。
そんな時・・連れて来るんですよ、豊君が小僧を連れてきた。
それは清次郎先生の依頼だったそうです、清次郎先生が豊君に頼

んだ。
終礼が終わった教室に、豊君が小僧を連れてきて、キムを紹介した。
キムちゃんって言うの、可愛いね～・・韓国じゃ多い名前なのかな～。
小僧は笑顔でそう言って、キムの手を握った・・私は驚きました。
キムが拒絶を示さずに、小僧を見てたから。
その瞳が嬉しそうだったから・・韓国人でも出来るのか！
そう思って驚きながら、小僧を見てました。
俺はね、小学5年で・・コゾウって呼ばれてるんだよ・・コゾウ。
コジウ？・・私は涙が出そうでした、初めてキムの日本語を聞いた気がして。
コジウじゃなくて、コゾウだよ・・コジウでも良いよ。
ねぇキム・・韓国のおやつが食べたいな～と、いつもの調子で小僧が言って。
キムが笑顔になって、鞄を抱えて、小僧と手を繋いで教室を出て行った。
私は自分が恥ずかしかった、小僧に対して・・恥ずかしい気持ちでいました。

ヨーコ・・奴には言語は関係ないよな、文化の違いも関係ない。
やつは人間が好きなんだよ、だから相手も素直になれる。
それはどんな形の表現でも、愛情を表現するからだよな。
俺も小僧が羨ましいと、また思ったよ・・先入観０の男がね。
奴は来る時こう言ったよ、どうして互いに仲良く出来ないのかな～。
俺も少しは日本と韓国の歴史は知ってるけど、それはそれなのに。
戦後生まれた俺達は、それはそれだと思う、忘れてはいけない事だけど。
人と人の関係に入ってくる問題じゃないよね、その子だってそう

なはずだよ。
言語の違いって、意思の疎通が出来ない事じゃないと思うよ。
俺はそう思ってるよ、初めて外人さんと話すけど・・出来ると思ってる。
楽しみだな～・・どんな料理食べてるんだろうね、おやつはどんなんかな～？
何が子供の間で流行ってるかな～・・寂しくないのかな～。
友達と別れて、こんな遠い国まで来て・・言葉も通じなくて。
寂しいに決まってるだろ、辛いに決まってるだろ。
なぜ分かろうとしない・・どうして分かった振りをするんだ。
なぜ限界カルテットは黙って見てるんだ、偉そうな事ばかり言ってるけど。
結局・・枠からはみ出せない、全体の支持する方向を見る。
言語とか文化とか歴史とかの、枠から出れない。
そんな人間なら・・寺に行くべきじゃないよ、それを見る和尚が辛いから。
小僧はそう強く言ったよ・・ヨーコから3人に伝えてくれよ。
豊君はそう言って、教室を出て行った・・私は暫らく立ち尽くしていた。
小僧の言葉で、動けなかった・・私は分かってる振りをしてたんだと確信して。

その騒ぎを聞いて、3人が私の教室に来た、私は豊君の伝言を伝えた。
そして小僧の見せた、キムとの事も話した・・そして私は言ったんです。
小僧は絶対にキムと友達になる、そして美由紀を紹介するよね。
美由紀も瞬時に友達になる・・美由紀に触れて、キムは前向きになる。
そのシナリオは分かるよね・・私は馬鹿だった、キムに対して自

分をぶつけなかった。
小僧と美由紀が、なぜそれが出来るのか・・私は忘れてた、伝達能力じゃない。
あの2人は置き換えが出来る、自分にその相手の状況をリアルに置き換える。
だから相手の寂しさに、触れる事ができるんだよね。
ヒトミの教えを持っている、あの2人は持ってるんだよ。
私は美由紀の前に友達になる、そうなってみせるよ・・私は施設で育ったんだ。
このままじゃ、ただ施設で育っただけの・・そんな人間になりそう。
これ以上、小僧に敗北できない・・私は一生可愛いって、言ってもらうから。
自分をぶつけてみるよ、私の気持ちを表現してみるよ。
笑顔で友達になってみせる・・私はキムが好きだから。
私はそう言って、教室を出ました・・反省を背負って。
小僧の言葉を心に持って・・ヒトミの笑顔を感じながら。
キムの家を目指しました・・もう迷いは無かった」

そこまで言ってヨーコは、マキを見た。

「私達3人は黙ってヨーコを見送った、悔しくて・・自分が情けなくて。
そして3人で寺に行って、和尚にキムの話をして。
和尚に心から謝って、瞑想をしました・・瞑想の中に、素直な自分が出てきて。
素直な自分に話した、キムの事を。
そうすると言うんです、素直な自分が・・嘘つくなって。
どこかで避けてただろう、気持ちのどこかで先に避けてた。
ようするに面倒くさかったたんだろ、1からの関係を構築するの

が。
１４歳になって、１からの関係構築・・その作業が面倒だった。
良い人間ぶるなよ、それがお前の本質だから・・悩む事はないだろ。
受け入れれば良いんだよ、ほとんどの生徒はそれを受け入れてる。
だから根拠の無い噂が広まる、自分達の世界を守る為に弾き出したんだ。
それはいけないと言いながら、お前は何もしなかった。
何もしないのは、認めたと同じ事だろ・・受け入れろよ、自分を。
お前は面倒だったんだ・・言葉が通じない事が、面倒だった。
それはキムが面倒な存在だったんだろ・・認めろよ、真希。
後で３人で話したら、３人とも・・ほぼこんな台詞を返されてました。

シズカが和尚に聞いたんです、なぜ小僧はそこまで瞬時に置き換えられるのかと。
和尚は笑顔で言いました・・それは道を繋げたからじゃろう。
マリの言葉じゃよの・・マリの次にヒトミが現れ、小僧は本気でヒトミを愛した。
そして別れの時も、奴は見送ったよの～・・自分の内側に。
そしてミホじゃろ、小僧はミホの・・あの強烈な拒絶をこじ開けたんじゃよ。
笑顔まで出させたよな・・それをやるには、ミホを感じねばならんよの～。
ミホの悲しみも、寂しさも、恐怖も・・小僧は感じたんじゃよ、自分の事として。
マリの言う、道を繋げろ・・マリの提示は、小僧の事しか言わんよの～。
美由紀に２度ほどあったが、それ以外は全て小僧じゃよな。
そして常に小僧に言うのは、道を繋げろだよな・・今までを考え

てみろ。
小僧の小児病棟だけでも、順番に狂いは無かったよの～。
マリに会わなかったら、ヒトミは無理じゃったろう。
ヒトミが存在しなければ、ミホの笑顔など出せなかっただろう。
伝達を持っていなければ、マリと出会う事もなかった。
小僧はこう思っちょるよ、どんな出会いでもおろそかに出来ない。
道を繋ぎたければ、出会いだけは大切にしないと・・道が途絶える。
そう・・小僧の道は、経験で得たものが必要なんじゃよ。
だから小僧は置き換えるんじゃ、初対面の相手の事を自分の事にの。
小僧は言ったよ・・そうしないとね、俺にはマリみたいな力は無いからね。
そう言いよった・・それが小僧の人間関係構築の柱じゃよ。

和尚・・小僧はどうやって、最初の信頼構築をするのかな～？
恭子が聞きました、和尚は二ヤ顔で言いました。
簡単じゃろ、今日のキムを誘った言葉、今まで誰も言わなかったじゃろ。
韓国のおやつが食べてみたいだった！・・私はそう叫んでしまった。
そうじゃよ、奴はキムの大切にしてる、文化が知りたいって言ったんじゃ。
日本の何かを教えるのでなく、韓国の文化を教えてと言ったんじゃよ。
限界が来てパニック状態のキムにとって、その言葉がどれほど嬉しかったかの～。
自分の大切な懐かしい国の文化を、知りたいって言われて。
それは日本人に、初めて韓国の友人を認められた、そんな気分になれたよの。

大切な宝物を見せてと言われて、それがどんなに素敵な物か知りたいと言われて。
嬉しくて心を開いた、その心には国境は存在しない・・言語も存在しない。
国境も言語も存在しない、思い出にはそんな物は必要ない。
そしてキムは今から、次の思い出を作り始める・・きっかけは、変な少年。
寂しい心に、す～と笑顔で入ってきた・・変な少年。
文化も言語も超えた場所に誘ってくれた、その少年を・・キムは忘れんじゃろう。
人の出会いに感謝するじゃろう・・そして日本が好きになるじゃろう。
小僧は道を繋げた・・自分が楽しいに続く道をな。

和尚のこの言葉で、私達は決定的な間違いに気付きました。
何かを教えてやろう、大変だろうから、どうにかして助けてやろう。
そう思ってる時点で、押し付けだった・・ただ自分を納得させていた。
先に面倒くさいがあった・・そう感じました。
私達は誰もキムを知ろうとしなかった、言葉が通じないからと、言い訳していた。
誰も自分の気持ちを表現しなかった、出来なかった・・自己満足で完結してたから。
それから3人で、キムの家を目指した・・小僧の幻影を追いながら」
マキはそこまで言って、ヨーコを見た。
「私がキムの家の前に行くと、縁側で小僧がキムとおやつを食べて

いました。
小僧は話す時に、必ずキムの手を握って、笑顔で美味しいと言っていました。
キムの母親も嬉しそうで、色々と出していました。
私が覗いてるのをキムが見つけて、笑顔で手招きしてくれた。
私は嬉しくて笑顔になって庭から入った、母親に頭を下げて。
キムに近づいた、そしたらキムが言ったんです。
ヨーコ、タベルカ、ウマイゾ・・そうキムが言って小僧を見た。
キム、ニホンゴ、ウマイゾと小僧もキムを真似て言った。
2人は笑っていて、私も嬉しくて笑ってました。
私はキムから薄いお好み焼きみたいな物を受け取って、ありがとうと言った。
カムサハムニダだぞヨーコと小僧が言って、キムを見た。
コジウ、チガウとキムが言ってまた笑った。
私は食べてみて、美味しくて・・美味しい～って笑顔で言いました。
デリーシャスだぞヨーコと小僧が笑って。
デンジャラス、ダゾ、ヨーコと、キムが突っ込んで笑った。
トレビアーンと私が返すと、2人が爆笑して、3人で笑ってました。
そこに美由紀が来て、キムは笑顔で美由紀に駆け寄った。
そして美由紀に韓国語で挨拶をしたんです、私達の前ではほとんど使わなかった韓国語で。
その顔が嬉しそうでした、そして美由紀が最強の返しをします。
ワタシ美由紀マネヨ、可愛いアルヨ、おやつクレヨ・・韓国風に返したんです。
キムは大爆笑で、私達も笑ってました、美由紀は二ヤでキムを見てました。
それから3人で・・キムの笑顔の、韓国語講座を聞いていました。
私は楽しい時を過ごしながら、キムに謝りました。

キムごめんね、私は何も分かってなかったねって、心から謝った。
ヨーコ、アリガト、トモダチとキムが言ってくれて、私は泣きながら頷いた。
本当に嬉しかった、そしてキムの努力を感じてました。
あの短期間で、これだけの日本語を覚えたのかと、感動してました。
ヨーコ、ワタシ、マルヤマとキムが笑顔で言ったんです。
キムって苗字みたいだよ、お母さんが再婚して、丸山さんになったんだって。
小僧がそう言った、私は本当に嬉しかった、キムが日本を好きになってくれたと思って。
マルちゃんだねって私が言うと、キムは笑顔で頷きました。
可愛い笑顔で強く頷いてくれました、母親が本当に嬉しそうに泣いていて。
私は小僧と美由紀の笑顔を見ながら、絶対に負けられない。
自分にそう誓っていました、この2人には敗北できない・・それは自分に敗北する事。
そうなったら、私の楽しい場所に行けない・・そう思っていました。
それから3人が来て、3人もキムと打ち解けて、私達は仲間になりました。
キムは1学期で東京に転校しました、今でも手紙を沢山くれます。
その写真には、笑顔のキムを囲む、沢山の日本人の友達が写っています。
キムは弟が出来て・・弟をこう呼んでいるそうです。
コジウと呼んでいるそうです、その名前が一番好きだからと書いてありました。
小僧は道を繋げた、このキムとの事で経験した。
だからこそ何の躊躇も無く、NOと言って手を出せた。
あの高みにいる女性の心を一瞬で開いた、小僧のNOの言葉には、

愛情が有ったんでしょう。
言語など問題ない、愛が世界共通言語だという答えに、辿り着いたのでしょう。
キムに向けた愛情で、キムが小僧に贈った何か・・その何かが開花した。
小僧にとって大切な存在、リンダさんとの出会いで、それが開花したのでしょう。
その全ては一度、由美子に向かった・・次は何が起こるのか、楽しみですね。
私が夜の仕事を選べたのは、小僧の誘いの言葉と・・あの時の反省があるからです。
知りたいと思え、そう自分に強く誓わせた・・小僧の言葉が蘇ったから。
小僧の誘いの言葉に、あの言葉が入っていたから。
枠からはみ出すのが怖いのかと・・小僧が二ヤで言うからです」

ヨーコの言葉が響いてきて、私は嬉しかった。

私の映像には、キムが笑って手を振っていた・・コジウと二ヤで呼びながら・・。

【マリ?】

成長を実感できる時がある、変化する自分を感じてしまう。
変化を楽しもう、それは若さの特権なのだから。

ヨーコの言葉で、全員が静かに考えていた。
「素敵な話ですね・・そして自分ならどうしたのかと、考えさせられます」とユリさんが美しい真顔で言った。

「そうですね・・私も何も出来なかった、そう思ってしまいます。
こんな話の時は、私はいつも考えますね。
リアンなら、蘭なら・・どうしたのだろうかと」

ユリカが真顔で言った、リアンはユリカを見た。
「自信ないね・・噂を流した奴には、やめさせに行くだろうけど」
とリアンが言った。
「私は・・その場面にならないと、分かりません」と蘭が真顔で返した。
カスミが考えていたので、私は雰囲気を変える事にした。

『さて、カスミ・・あのマリのメモは何だったの、ヒントは2つあるんだろ?』と二ヤで言った。
「えっ!・・2つあるのかな〜」と蘭が満開二ヤで言った。

「はい・・8桁の数字が2つ書いてありました。
1つは19〇〇〇416だったんです、私はすぐに分かりました。
今年の4月16日に、あの夜汽車に乗ったんです。
私は人生の転機だったと、今では確信できる日付ですね。
もう1つは・・未来の日付でした、もう忘れましたけど。

財布の中に入れてあります、見ないでいようと思っています。
多分、次の転機を示してるんだと感じました、だから楽しみにしておこうと。
これだなって感じたときに、開いてみます。
嬉しかったんですよ、マリが私に贈ってくれたから。
一度目は由美子の場所の提示だったから、私を信じてくれたと思えて」

カスミは嬉しそうに言った、女性達は笑顔で聞いていた。
「なぁ小僧・・お前はマリと何か打ち合わせしたのか？・・最後の扉とか」とシズカが二ヤで言った。
「それは興味ありますね～・・不思議なんですよね～」と美由紀が二ヤで言った。
『何も無いよ、ＰＧに招待しただけだよ』と二ヤで返した。
「でも小僧は１００％の自信が有ったんだろ、最後の３枚の扉は」と恭子が言って。
「マリでない限り、１００％の自信なんて持てないだろ」とマキが二ヤで言った。

『もちろん、マリじゃないと１００％は持てないよ。
でもマリに俺から何かを依頼したりしない、それが俺とマリの暗黙のルール。
俺はマリの力に頼って生きない、それが大切なルールだと思ってる。
もちろん・・その事をマリと話した事はないよ、でも互いに分かってる。
俺はマリは感じてくれると信じてた、その信頼に疑問を持った事はないよ。
だから１００％の自信があった、マリは勝負の場面では、必ず提示してくれるって。

それを信じる事が出来たよ・・俺はマリに対しては、それが一番大切だと思ってる』

私は笑顔で言った、全員が私を見ていた。

「もし、万が一・・マリが読んで無かったら、手詰まりだったの？」と蘭が二ヤで聞いた。

『まさか・・もう一人いたよ、９９％がね』と二ヤで返した。

「やっぱりね・・２重の安全装置だったよね～」とユリカが二ヤで言った。

「ユリカ～・・一人で楽しむなよ～」とリアンが極炎ニカで言った。

「沙紀ちゃんがね、由美子ちゃんの部屋で最初に描いた絵・・３枚の扉だったのよ。

沙紀はギリギリまで待ってたの、マリの解答を。

沙紀がマリの解答を聞いて、右の扉に赤丸を付けたのよ。

でもね・・右の扉の赤丸は、２重丸だったのよ・・沙紀も右に丸を付けてたの。

９９％が１００％の答えを待ってたの、２人は出会ってもいないのに。

互いに感じてると確信したわ・・沙紀の嬉しそうな顔を見て」

ユリカが爽やか笑顔で言った、女性達に笑顔が咲いた。

「小僧はどうして、マリを沙紀に会わせてないんだ？・・まだだと思ってたのか？」と恭子が笑顔で聞いた。

『最もベストな日、最もベストな状況は・・俺じゃあ分からないからね。

俺の沙紀への構想を感じてるなら、マリが自分で会う日を決めるよ。

それが最もベストな日だから・・それが明日なんだろうね。

ユリカも存在する、明日をマリは指定したんだと思うよ。
マリは多分・・ユリカにも伝えたい事があるんだね。
楽しみだね・・ユリカ』

私はユリカに二ヤで言った、ユリカの喜びの笑顔が出た。
「こら～・・眠れなくなるでしょ、意地悪しないの」とユリカが爽やか二ヤで返してきた。
「楽しそうだな～・・ユリカ」とリアンが極炎ニカで言った。

「私も1つだけ質問させて・・マリちゃんはなぜ、あの世界にマリアを飛ばせたの？」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
全員が私を見た、私は二ヤで返した。

『俺も確信は無いですよ、全員にあの時の感想を聞いて思ったんです。
マリはあの世界の一人と同調してました、その一人とマリアを同調させた。
マリアの凄さ、純白の心は・・全てと協調が出来る。
だから道を示した、その島に続く道を・・相手の名前を呼ぶだけで。
マリはあの時マリアを島に入れなかった、まだ駄目だと言ったんでしょう。
切り札だったから、不測の事態の切り札が・・マリにも俺にも、マリアだった。
マリは実は、マリアだけを飛ばしたんじゃないんですよ。
リアン達8人が、無数の分かれ道に来た時、久美子を飛ばしてます。
それだけなら、俺にはさほど驚く事じゃないんですけど。
マリはピアノも飛ばしてたんです、久美子は意味をすぐに理解して弾いた。

でもＰＧでピアノに座ってはいたけど、実際は弾いてはいなかった。
久美子はイメージで弾いた、その音をホノカが感じた。
あの世界は感性が上がるんだと思います、俺はユリカの波動が読めたし。
蘭・マチルダ・美由紀も、ユリカの波動を感じた。
マリとの同調は、凄く気持ち良いんですよ・・心が開放される感じなんです。
俺は無意識でしてるから、その同調の方法は分かりません。
久美子以外は混乱するかもって言ったのは、久美子は同調出来たからです。
久美子はもうその世界に行ける、マリと会話できると思います。
マリにとっては、嬉しかったでしょうね・・同世代の女子との絡みですから。
それで考えたんです、どうしてシズカじゃなくて久美子なのかと。
マリがここまで前向きでいられるのは、間違い無くシズカの影響です。
シズカに対する信頼、その後ろ盾があるから出来ると感じた。
そして分かったんです、マリがあの世界の誰と同調してたのかが。
俺は鍵を握るのは、エミだって和尚の言葉があったから、エミだと思ってた。
でも違いました・・マリはヒトミと同調してました。
マリの出会った事のある人間は、あの時はまだ少なかったですよね。
だから洞窟の８人を作り出す為に、そのメッセージをカスミに託した。
あの８人の中の３人がマリと出会ってます、銀河の奇跡が。
マリは最低３人は洞窟に入ると思っていた、なぜかと言うなら。
リョウがいたからです、洞窟に強い思い入れがあるリョウ。
そのリョウは超攻撃型だと感じていた、だから絶対に入ると思っ

ていた。
そして久美子の音なら、ホノカが感じると信じていた。
ホノカの心には、久美子の音は強烈に残っていたから。
勝てる気がしない、ホノカは久美子に対してこう言っています。
どれほど強烈な印象かは、この言葉で理解できますね、あのホノカの言葉だから。

そしてマリは哲夫に付いた、哲夫に付ける事を知っていた。
マリは遠隔で同調出来るヒトミが、現れると知っていたんです。
洞窟の銀河とヒトミがその時点で、ある程度の距離に近づくと信じた。
そして久美子を飛ばした、このマリの計画の重要な部分、それが久美子。
当然マリはあの日に久美子に出会った、なのに出会う前に知っていた。
そこなんですよ・・なぜ知っていたか、それはマリが出会ったメンバー。
その全員の心の中に、同じイメージとして残る存在が久美子だった。
相手のイメージって、個人個人で違いますよね・・好き嫌いもあるし。
でも久美子に対してだけは、その音がリアルに残ってるんですよね。
だからマリは自信が持てた、久美子なら同調出来ると感じた。
マリはマリアに出会い、久美子を感じて・・マリの作戦を完成させた。

そのマリでも・・予測を超える出来事があった、２人がマリの予測を超えた。
蘭の侵入とリンダの侵入でした、マリはＰＧで俺に嬉しそうに言

いました。
蘭のあの時点での侵入は、自分は消去してたと、無理だと感じていたと。
俺が蘭を誘わない、でも俺は蘭が入ると思ってた、それを無理だと判断した。
もちろん俺は信じてた、そして蘭には自分の意志で入って欲しかった。
心しか持たない蘭が入ってくれば・・俺は勝利を確信出来ると。
そう思ったんだよ・・俺には賭けじゃなかったよ、絶対に来ると信じていた。
そしてマリは泣きそうになったと、リンダの侵入を塔の前でマリアと感じて。
その距離を完全に凌駕して入ってくる、ブルーの瞳を感じて。
マリアの強烈な喜びも感じて、感動したと言ってました。

自分にも、まだまだ分からない事が沢山有ると感じて、嬉しかったと。
そして久美子に出会えて、感動したと・・リンダも同じイメージだったと。
一度しか出会ってない、リンダが久美子に持つイメージが、皆と同じだった。
そう言っていました・・そして、ありがとうと言いました。
４人と一度に話が出来て、本当に嬉しかったって。
シズカに出会えて、ユリカに出会わせてくれて。
お話に来てくれたと、マリが言った。
ユリカと出会った、前日の夜に・・マリに会いに来たとね。
ユリカ・・ごめんね、明日が待てなくなるかもね。
マリに会いに行ってたんだよ・・ユリアはヒトミとマリと同調してたんだ。
あのマリの作戦は、マリとユリアとヒトミが作ったんだよ・・全

ては由美子の為に。
姿無き犯人と闘う為に・・ユリアがヒトミを連れて、マリと作戦を作った。
だからマリは巻き戻せた・・ユリアとヒトミが、イメージで見せたから。
悪質な原作者のシナリオに、翻弄された3人が作ったんだ。
あの3人は・・由美子で見せるんだ、本当の真実を追いかけるんだよ。
今も生きながら闘う・・マリの強い意志を信じて。
俺はマリの創作話をしようと思ったけど、それは全員が揃った日にします。
今年の年末忘年会で、話します・・それまでお楽しみに。
当然・・豊兄さんと、恭子もゲストで呼ぶからね。
豊兄さんはＰＧとって、今年の最高殊勲選手だから・・共同体全店でやりましょう。
年末の締めを・・大忘年会で、どうですか・・ユリさん』

私は最後に笑顔で言った、ユリさんは薔薇で返してくれた。
「もちろん私はＯＫですよ・・ＰＧも使って良いですよ」とユリさんが言って。
女性が全員笑顔で拍手した、ユリカだけ泣いていた。

「嬉しいね～・・エース、ユリカの心が止まらなくなったよ。
全部話せよ・・お前はマリとずっと話してたよな。
ＰＧで食事する時、お前はマリアを抱いて・・長い時間話してた。
皆、マリと触れ合いたかった、でも自閉症はいきなりは無理だと聞いていた。
だから我慢したんだよ、いつか触れ合えると思ってたから。
北斗姉さんも、ユリカや蘭や美由紀でさえ・・挨拶しただけだった。

教えてくれよ、エース・・私にも大切な思い出なんだ。
そして絶対に大切な事なんだ・・まずマリは４人と話したと言った。
ヒトミとユリアとマリア・・あと誰なんだい？」
リアンの極炎の熱い言葉が、私に向かって吹いた。
全員が私を見て、ユリカが私の手を強く握った、その強さに押されて話した。
『マリが興奮していて、色々話してくれたんだ。
４人と同時に話せたと言った、４人目は・・当然、沙紀だよ。
同じ病と診断されてる、マリと沙紀・・マリは沙紀を感じたんだ。
沙紀が描いた由美子の絵で、沙紀を感じて・・絵に話しかけた。
そうしたら沙紀が返してきたらしい、マリは感動したと言ってた。
どれほどの想いを描けば、絵にそれだけの力を与えるのかと思ったてね。
沙紀は由美子の病室で瞳を閉じていた、イメージしてたんじゃないよ。
同調してたんだ、マリを通してヒトミのいる世界を見ていた。
そしてヒトミとユリアが描けたイメージは、沙紀が授けた物だった。
俺達だってそうだったよね、沙紀が描いたイメージで、同じ物を描けたんだよ。
マリが俺を読むように、沙紀は由美子を読んでいた。
俺は本当に楽しみなんだ、明日沙紀がマリに出会う。
それは沙紀が待ち望んでいる、マリに出会えるんだ・・沙紀は次の段階に行く。
あの由美子の段階の時以降、久美子を描いて・・沙紀は絵を溜め込んでいるよね。
多分全員分が描けるまで、溜めているんだ・・最後のマリを描く

まで。
楽しみだね・・月曜には仕上がるよ、夜の女性達の作品が。
マリで完結する・・俺はその次に、いよいよマリアを連れて行く。
沙紀が心から会いたいと願う、マリアも会いたいと願ってる。
その出会いが・・沙紀の未来に繋がると思ってるよ』

私は笑顔で言って、全員が嬉しそうな笑顔になった。
「嬉しいな～・・本当に楽しみだ～」とマキが笑顔で言って。
「本当だね～、楽しみだけど・・青い猫じゃありませんように」と
ヨーコがウルで言った、全員が笑った。
「見たいな～・・ヨーコの青猫」と恭子が二ヤで言った、ヨーコは
ウルで返していた。

「小僧・・次、私の疑問を解いて・・マリはどうして、カタカナが
書けたの？」とシズカが真顔で言った。

『我慢できなくなったね、シズカ・・あの時に、聞かなかったくせ
に。
そんなの決まってるだろ・・同調した5人に、文字を持ってる子
はいないよ。
マリはシズカの教えを使ったんだよ、その時に文字の意味を感じ
たって言ったよ。
マリにも俺にも予想外の出来事があった、それはあのマジシャン
の婆さん。
あの時ユリカの波動が遮られて、律子があの場所に飛んだんだ。
俺は蘭が来ると信じてたし、マリも蘭が入っても安心してた。
俺は最後のあの迷路で、俺の一番信頼できる女を出そうと思って
た。
もちろん律子だよ、最後の関門は律子が必要だったんだ。
でも律子はあの時に仕方なく飛んだ、その時に次何かあったら頼

むと2人に言った。
シオンとマキだよね・・でも俺は危険な事に、その2人は使えない。
マリも焦ってたんだ、どうしようと・・でもマリアを飛ばすにはマリが必要だった。
マリアがどんなに凄いと言っても、まだ2歳だからね・・一人では入れない。
マリは当然、由美子を優先した・・だからマリアを飛ばした。
俺は一人で何とかするって、マリも思ったし・・マリアもそう言ったらしい。
だからリンダが登場するのを感じて、マリもマリアも感動していたんだ。
由美子を救出して、蘭達が落ちるのを見送って・・マリはヒトミと別れた。
その時に同調が全部切れた、ヒトミが繋いでた同調だったからね。
マリは焦ったんだ、沙紀に伝える方法が無くなって。
その時にシズカの顔を見て、全てを思い出した・・シズカが教えてくれた。
平仮名とカタカナを思い出したんだ、そしてカタカナで書いたんだ。
サキニ　ミギ・・そう書いて、文字の意味を感じたと言っていた。
全てはシズカの教え、どんなにマリが覚えなくても諦めなかった。
シズカの教えの意味を理解した・・マリはもう文字を持ってるよ。
今は一人で練習してるんだろう、シズカを驚かせたくてね。
マリは俺にこう言った・・全てシズカが教えてくれた、文字の意味を教えてくれた。
私を愛してくれた・・そして今、感謝するという気持ちを教えてくれたよ。
マリはそう言ったよ・・さすがだね、シズカ』

私は久々に見る、シズカの涙を見ながら、笑顔で伝えた。
カスミがシズカを優しく抱いて、シズカは嬉しそうに泣いていた。
「凄すぎるよ、シズカ・・継続した愛情が、届いたんだね」とリアンが微笑んだ。

「本当にそうですね・・そして次は、私達で沙紀ちゃんなんですね。
私はエースの言葉を聞いて、そうだと思いました。
自閉症という病名が悪いと、何も閉ざしていないのだと。
ただ表現するのが苦手なだけ、それだけの個性だと言いました。
そして沙紀ちゃんのあの絵、本当に素晴らしいですね。
私達も愛情を持って接して、その愛情を継続させて見せましょう。
シズカのように、最後まで相手を信じて・・変化を望んで。
シズカ・・ありがとう、素晴らしい物を見せてくれて。
繋ぎましたね、あなたとエースの姉弟で・・ミホ・沙紀・由美子に繋ぎました。
私は本当に嬉しいですよ・・自分もその一員になれた事が」

ユリさんが優しく言って、リアンもユリカも蘭もカスミも、笑顔で頷いた。

「ありがとうございます、本当に嬉しい言葉です。
小僧ありがとう、そして教えて・・なぜ私は同調出来ないと思う？」

シズカの言葉が、広い部屋に木霊して、静寂が訪れた。
全員の興味津々が分かった、私は自分の感じてる事を話した。

『マリにとってシズカは、それ以上の存在になったんだと思うよ。
シズカにはスリスリもしないだろ、本当なら一番しそうだけど。

マリは好きな人にそうするよね、シズカはそれ以上なんだよ。
そしてマリはその存在に出会った、ユリカに出会ったんだ。
初めて自分と同じタイプの人間に出会った、そして当然のように憧れた。
マリは俺に一言だけ言った、私もこれからは見せるよ。
私の可能性を見て欲しい、そう思える人が2人もいるから。
この2人、間違い無く・・ユリカとシズカだよね。
マリは絶対に、初めての文字と言葉はシズカに伝える。
だからこそシズカとは同調しない、最初の言葉を聞いて欲しいから。
だからだと思ってるよ・・自信はあるよ』

私は二ヤでシズカに言った、シズカ必死の二ヤで応戦した。
「沙紀ちゃんの次の段階は、いよいよそこを目指すの？」とカスミが真顔で言った。

『もちろん・・発作に対しての、沙紀の揺れない心を目指す。
文字は先生2人が通って教えてるし、あの先生2人はミホにも教えてる。
そしてエミが会いに行ってくれてるし、哲夫もフォローしてる。
そして最近の沙紀には、友達が出来たよ・・カレンは凄いよ。
友達になれた・・カレンは父親を助けてきた、その行為が作り出した。
さりげない優しさを持ってるね・・だから俺達は、揺れを制御しよう。
一人ずつ行って欲しい、ユリさんもリアンも・・そして女性全員。
自分の後悔を伝えて欲しい、その時は沙紀が描いてくれるから。
沙紀に感じさせて・・人は傷を背負っても、前に進めると。
押し付けでなく・・自分の過去の話を通して、伝えて欲しいんだ。
沙紀は必ず感じる・・そして描いてくれる、その事でまた感じる。

俺はマリと違って、沙紀の力は消滅して良いと思ってる。
描く力は残るだろうから・・俺は絶対に沙紀を自立させたい。
原因不明の病を克服させたい、それが最も由美子に響くから。
俺はミホと由美子と触れ合いながら、沙紀のレベルアップは女性達に任せるよ。
大丈夫・・沙紀にはマリが付いている、絶対に危ないと感じたら。
マリが来る・・だから沙紀に要求しよう、絶対に出来ると信じて。
よろしくお願いします・・恭子もシズカもだよ』

私は全員を見回して、二ヤで言った。
「引き受けましょう・・会話のプロとして、伝えてみせましょう」
とリアンが極炎ニカで言った。
「嬉しいですね、もちろん私もやりますよ」とユリさんが薔薇で微笑んで。
「やっとそれを、やらせてくれるのね・・楽しみだな～」と蘭が満開で微笑んだ。
それから女性達が盛り上がって、楽しい話題で笑顔が溢れていた。

私は美由紀が眠ったので、窓際に布団を敷いて寝かせた。
全員の二ヤで見られながら、美由紀の首に腕を回すと、美由紀が私にしがみついた。

「可愛いな～・・美由紀は、全然嫉妬しないな～」と蘭が満開で微笑んで。
「最強のガードだな・・美由紀は」とリアンが極炎で言って、全員で片付けをしていた。

布団を敷いて、全員が眠りに落ちたのは3時だった。
皆が面白がって、私の反対隣にはシズカが二ヤで眠っていた。
私は美由紀の少し疲れた温度と、楽しそうな寝顔を見て、安心して

眠りに落ちた。

翌朝、私が朝食を作っていると美由紀が起きて、手伝ってくれた。
次にユリカが起きて、少し興奮状態で美由紀と話していた。
全員で朝食をとったのが、１０時少し前だった。
ユリカと蘭がタクシーで車を取りに行き、私は美由紀とマリアと遊んでいた。
シズカを省く限界トリオとカスミと久美子が、ショッピングに行くと出かけて。
蘭が来たので、リアンと美由紀と４人で病院に向かった。

沙紀は少し興奮状態だった、感じてるなと思っていた。
そして沙紀は紙のケースから、リアンの絵を出した、あの雪山の絵を。
リアンは最強の炎を上げて、沙紀を抱いて嬉しいを伝えた。
沙紀も嬉しそうに抱かれていた、蘭がミホの手を握って話していた。
美由紀は理沙の病室に行っていて、私は窓際でリアンを見ていた。

その時、私に強烈な喜びの波動が来た、私は驚いて固まった。
そして次の瞬間に気付いた。
『ユリカ・・良かったね、同調できたんだね・・運転気を付けろよ』
と声に出して言った。
蘭が私を見て、満開笑顔を出していた。
何度も何度も喜びの波動が来て、私も嬉しかった。

リアンがシオンの姉であるのを、証明するかのように、ニコニコちゃんだった。
それを見て、私も蘭もニコニコちゃんになっていた。

そして病室をユリカが覗いた、リアンが沙紀にありがとうと言って

席を立った。
そしてユリカがマリを促した、マリは俯かずに真直ぐに入ってきた。
その雰囲気に、私も押されていた、圧倒的な何かが背中から溢れていた。
沙紀がポンとベッドから降りて、マリに駆け寄り抱きついた。
マリも屈んで沙紀を抱きしめ、スリスリを発動した。
沙紀の母親も固まってるようだった、沙紀のその行動に驚いたのだろう。

私はユリカを残し、リアンと蘭を連れて由美子の部屋を目指した。
遊戯室には笑顔の理沙を囲んで、シズカと美由紀がいた。

「リアン姉さん、嬉しそうですね～」と蘭が満開に微笑んだ。
「嬉しいよ・・この絵は本当に嬉しかった」とリアンが笑顔で返した。
由美子の部屋に入り、リアンが先に由美子の手を握って、自分の絵を見せていた。
私は蘭とソファーに座り、そのリアンの笑顔を北斗と見ていた。

沙紀の強烈な変化が始まる、マリは信じられない事を、平気でやってのけた。
医学の常識を超越した、マリは表現できない存在だった。

東京物語で見せる、マリの生き方・・それは衝撃を連れて、今も神話として残る。

東京ＰＧの開店前のフロアー裏で、私が覚悟を決めた時・・受付に立つ、俯いた立ち姿。
マリが美しい二ヤ顔で立っていた、私は嬉しくて泣きそうなのを堪えて走った。

「行こうか、小僧・・私が代打だよ」と明瞭な言葉で、最強二ヤ顔で言ったマリ。
その姿を見て、蘭はフロアー裏で泣いていた。
小夜子とセリカと、3人で抱き合いながら・・泣いていた。
マリの笑顔で・・勝利を確信して。

そしてマリは忘年会に訪れる、スペシャルゲストとして。
私はマリの隣で、マリの創作話をする・・完全なる静寂に包まれながら。

沙紀は女性達の絵を完成させる、マリを描いて完成する。

回想録に、いよいよ沙紀を登場させる、私にとって今でも可愛い妹の沙紀。

沙紀の変化は、感動と驚きの連続だった。

沙紀に足りないものは何も無かった、その心は嬉しいだけを求めている。

その人の嬉しいが、沙紀の嬉しいなんだよ・・だから描くんだよ。

私の絵に嬉しいがあるのなら・・私はそれが嬉しいだから・・。

回想録　？　【沙紀？】

夢も理想も描いてしまう、その感性は何かを失ったから得たのだろうか。
失った物は何も無いと思える、その純粋さに触れるだけで。

沙紀・・私はあのメモの絵画を見た時に、心が躍った。
小さなメモ用紙に、普通のボールペンで描いた絵を見た時だった。
その可能性を感じて、嬉しさがこみ上げてきた。

この１１月までに、沙紀が描いた作品は、かなりの数になっていた。
ユリカのイメージ画から始まって、由美子の段階の時が終わって、久美子を描いた。
それ以降、沙紀は絵を自分で持っていた、女性達を一人ずつ描いているのは分かっていた。
全員が描き終わるまで、完成しないのだと思い、私は楽しみに待っていた。

この日マリに出会って、沙紀は全てに対して前向きになる。
文字をなぞって書くようになり、千秋も美冬も喜んだ。
しかし難関は解決しなかった、沙紀には根本的な意味が分からないのだ。
沙紀にとっては、文字の意味する事が分からない。

そこで２人の教師は考えて、漢字から教えようと思い付いた。
漢字はその物の形を変化させた物が多い、例えば【川】【山】など無数にある。
沙紀は形を変化させるのなら、イメージ出来るのではないかと考えたのだ。

その頃研修で沙紀の担当だった千夏と、千春も手伝って教材を作り出した。
これが大正解だった、沙紀は文字の意味を感じた、伝える為の物だという事を。

その強力な後押しをエミがした、沙紀に平仮名の使い方を教えたのだ。
【川の水】と書いて、この【の】の重要性を教えた、エミの感性で伝えたのだ。
沙紀はそれで理解して、言葉を繋げる楽しみを覚えていく。
この事は後に記します、千秋も美冬もエミの感性に驚愕していた。

沙紀が第一回演奏会で感じて描いた、久美子の絵は幻想的だった。

ピアノを弾く久美子の大きな横顔が、下から上に移動していく。
アニメのような3分割の表現に、久美子の表情の変化を描いた。
一番下は戦う久美子が強く描かれて、強い瞳で鍵盤を見ている。
真ん中の表情は笑っていて、輝く笑顔に汗が浮かび、１６歳の輝きの強さを示した。
そして上を向く表情は、歓喜を表現をして、やりきった充実感に溢れていた。
久美子のバックには、沢山の観衆を影で表現して、その瞳が無数の星をイメージさせた。
久美子が見上げる頭上には、鍵盤が波のように描かれて、その空には大きな月があった。。
幻想的なステージに、月に向かってイルカがジャンプしている。
沢山の輝く水滴を連れて、体を反らし跳ね上がっている。
笑顔の久美子はそれを見てるようで、楽しそうに輝いていた。

久美子はこの絵をＮＹのリンダの家の、ピアノの横にかけている。

「私は必ずこの絵を見てから始めるの、出発点を忘れないように。
あの第一回演奏会を思い出しながら、ヒールの音を追いかける。
そうすると、ミホが私の真横に立ってくれる、そしてユリカ姉さんが隣に座ってくれる。
ミホが私の指を目で追いかけてくれる、私は誤魔化す事が出来なくなる。
そしてユリカ姉さんが、囁いてくれる・・羊水の揺り篭に入れてくれる。
その世界に行くと見えてくる・・沙紀の笑顔が見えてくるのよ」

久美子はＮＹでこの絵を見ながら、笑顔でそう言った。
今でも色褪せないその絵は、輝きを放ちながらＮＹに存在している。

話を戻そう、由美子の病室に。
私は由美子の手を握り、お休みと伝えて、リアンと蘭と病室を出た。
遊戯室のシズカと美由紀は楽しそうに、理沙を囲んでいた。
その時、マリがユリカと出てきた、そしてリアンに近づいてスリスリしたのだ。
私は驚いてマリを見ていた、ユリカも嬉しそうに２人を見ていた。
リアンが嬉しそうにマリを抱いて、マリに極炎で話していた。

「ユリカ姉さん、良いな～・・マリと話せましたね」と蘭が満開で微笑んだ。
「話せたってほどのレベルじゃないよ、でも強くその想いは感じたよ」とユリカが爽やか笑顔で返した。
『沙紀は取り掛かったの、マリの絵に？』と私が笑顔で聞いた。
「夢中で始めたよ、恐ろしい程の勢いでね」とユリカも笑顔で返してくれた。
そしてマリが蘭に抱きつき、スリスリしていた。

蘭も本当に嬉しそうな満開笑顔で抱いて、何かを伝えていた。
病院の昼食の放送があり、シズカが理沙を押して病室に連れて行った。
私達は帰る為にシズカを待っていた、その時に院長が降りてきた。

「これは素敵な女性がお揃いで、お昼まだでしょう・・ご馳走しますが、一緒にどうですか？」と院長が笑顔で言った。
「嬉しいです～・・お言葉に甘えましょうよ～」と美由紀が笑顔で全員を見回し、全員が院長に笑顔で頷いた。
「嬉しいですね～・・実は美由紀ちゃんと、話したくてね」と院長が笑顔で言って、美由紀も笑顔で返していた。
シズカが来て、院長がうなぎで良いかと聞いて、全員大丈夫だったのでそれを頼んだ。
美由紀のご機嫌ニコニコちゃんを押して、エレベーターに乗った。

院長室の大きな応接室に入り、リアンとユリカとシズカが挨拶して。
シズカがマリを紹介した、院長もマリに微笑んで、内心は興味津々という感じだった。
院長が全員に楽にするように言って、ソファーに座った。

『院長が美由紀に聞きたい事って・・興味ありますね～』と私が二ヤで口火を切った。

「美由紀ちゃん、言いたくない事は言わないで良いからね。
私は院長なんて立場にいるが、最近少し迷っててね。
それは小僧に会ってからなんだけど、色々と考えるようになった。
私は健常者だから、障害や病気を持つ人の本当の気持ちは分からない。
今・・外科に12歳の少女が入院してるんだ、その子が片腕を切

断したんだよ。
それ以来、内に篭りだしてね、当然最初はショックでそうなるんだけど。
かなり長い期間でね、私は専門が精神科だから、今は私が診てるんだけど。
突破口が全く掴めないんだよ、どうかな・・感じた事で良いんだ。
何でも良いから、話してくれないかね」

院長の真剣な顔に、美由紀もいつになく真剣だった。

「私は5歳で両足を失いました、そして転機が来るのが9歳です。
それまではいじけてましたね、自分の不運を嘆いて。
外に出るのも嫌でした、他人の視線が気になって。
公園で走り回る、同じ位の子供の姿を見たくなくて、閉じ篭っていました。
12歳で腕を失ったのなら、尚更でしょうね・・もう世の中が分かる時期ですから。
でも・・自分でやるしかないんです、両親もお医者さんも、サポートしか出来ません。
取り返せないのは、腕じゃないんです・・その閉じ篭った時間なんです。
院長先生は鬼になれますか？・・自ら進んで嫌われ者になれますか？
それは健常者の大人じゃ無理なんです、説得力が無いんですよ。
でも誰かが強い意志で、嫌われ者にならないといけません。
私には小僧でした・・小僧が私に立ってみろって笑った。
そしてそんな物は障害じゃないと言った、嫌われる覚悟をしてたと思います。
私がその言葉の意味を無視して、言葉だけを捉えたら、私は小僧を嫌いになった。

でも小僧はそれで諦めたりしない、絶対に諦めない・・それが覚悟だと思います。
院長先生・・その嫌われ者・・鬼の役・・私にやらせてもらえませんか？
私は今・・この時間すら惜しい、１２歳ならもったいない。
私が嫌われ者になって、その後に由美子に会わせます・・それが一番早い。
その段階を踏むのが、一番早いと思います・・どうでしょうか？
私ならその子が嫌っても、その子には傷は残りません。
お願いします、院長先生・・私にやらせて下さい・・鬼の役を」

強かった、美由紀の強い意志が木霊した。
院長は真剣な瞳で美由紀を見ていた、女性達も美由紀を見ていた。
「美由紀ちゃん、ありがとう・・結論は待ってね・・小僧どう思うかね？」と院長が私を見た。
『そうですね～・・ここはシズカの出番でしょうね』と私はシズカに二ヤで言った。

「美由紀・・オヤジさんと野球を見てるよな、少し質問するよ。
お前はプロ野球選手、そして舞台は日本シリーズ。
対戦成績は３勝３敗、この試合に勝てば日本一だね。
九回裏２アウト満塁、２ストライク３ボールだとして。
１点負けてる場面、同点の場面、１点勝ってる場面。
その３つの場面で、美由紀はピッチャーが良いか、バッターが良いのか？
少し考えて良いよ・・答えを教えて」

シズカのこの質問で、院長はハッとしてシズカを見た、嬉しそうな顔だった。
女性達は考えているようで、私も考えていた。

「まず、同点なら・・絶対にバッターですね、自分で決めたいから。
フォアーボールでも、サヨナラ勝ちの場面ですからね。
三振や凡打なら、責任を感じますけど・・でも自分で決める立場が良いです。
ピッチャーなら、抑えても延長戦に入るだけですから。
1点勝ってる場面なら、ピッチャーですね、理由は同じです。
自分で決めたいから、抑えれば勝ちですからね。
もちろんボールを投げれば、同点になりますし、打たれたら多分サヨナラ負けでしょう。
でもピッチャーが良いですね、責任は自分が背負いたいですから。
問題は1点負けてる場面ですね、この場面だけは違いますね。
バッターなら、1点負けてるなら・・繋ぐ事も考えないといけない。
自分で決めようと思ったら、多分高確率で失敗する。
ピッチャーなら、少し楽な状況ですよね・・もしフォアボールでも同点。
それならきわどい勝負球を投げれる・・ここが問題なんですよね。
1点負けの展開・・やっぱり、ピッチャーですね・・自分で勝利を決めたい」

美由紀は笑顔で言った、シズカも笑顔で聞いていた。
「じゃあ小僧、言ってみな」とシズカが二ヤで言った。

『俺は全部バッター・・全ての場面で満塁ホームランを打つ。
この問題は成立してないんだよね、1点勝ってて9回裏は有り得ない。
まぁシズカの質問の意図はなんとなく分かる、だから正直に答えるとそうだよ。
俺は全ての場面で、満塁ホームランを打つ・・1点勝ってるなら、

勝ちを確定させる。
失敗しても、俺が罵声を浴びればすむ事だから。
俺は自分が好きで野球をやってるんだから、大一番の場面ならヒーローになる。
美由紀の言ってる、自分で決めるって感じじゃないよ。
俺はヒーローか悪役になる・・それで良いと思ってる。
ヒーローも悪役も、ファンのイメージだから・・悪役もいないといけないから。
だからフルスイングする・・結果は関係ない、フルスイングするだけ。
自分の力の最大限を出して、自分が納得する結論をだす。
そこには勝ちも負けもたいした意味は無い、俺は満塁ホームランを打ったんだから。
自分の心に対しては、サヨナラホームランを打った・・ヒーローなんだから。
まぁそれが俺の答えだよ、カッケーだろ〜・・ミ・ユ・キ』

私は美由紀に二ヤで言った、美由紀はハッとした顔で聞いていた。
「理解できたね、美由紀・・肩に力が入りすぎてたよ・・院長先生、私も美由紀の提案に賛成です」とシズカが院長に微笑んだ。
「素晴らしいですね〜・・こんなに納得できる答えは、考えもしなかったよ」と院長は笑顔でシズカに返した。
「ねぇ・・シズカ、詳細を教えて？」と蘭が満開ウルで言った。

「美由紀の心のあり方なんです、私もこの嫌われ役は、美由紀しかいないと感じてました。
でも美由紀は院長先生に、自分から提案した、それで余分な力が入る。
その美由紀の状況が、日本シリーズの最終戦9回裏です。
美由紀は自分で決めたいと言いながら、周りの目を意識し過ぎて

いた。
失敗は許されない場面だと、自分で作り出していたんです。
嫌われ役になると言いながら、成功しようと思っている。
それは矛盾する心なんですよ、小僧が美由紀に嫌われて良いと思った時は。
美由紀の両親にも、そして私達にも嫌われて良いと思っています。
成功しようなんて気持ちは、必要ないと思ったから、小僧にも答えを聞いた。
小僧の答えは聞かなくても分かる、全てバッターなんですよ。
小僧はベストを尽くすだけ、駆引きなんてそこには存在しない。
失敗なんて・・はなから恐れない、失敗しちゃったってウルするだけ。
そして次の打席に向かい、準備を始めるんです・・それが諦めないという事ですから。
美由紀の力の根源は、その状況に負けない強い心です。
自分が乗り越えてきた物も、笑い飛ばす強さなんだから。
笑い飛ばせば良いんですよ・・な～んだ片腕が無いだけかって。
それが言えるのも、言う権利を持っているのも・・美由紀だけですから。
笑い飛ばせよ、美由紀・・それが悪役の決め技だろ」

シズカは笑顔で強く言った、美由紀も笑顔で強く頷いた。
「なるほどね～・・さすがエースの姉で、美由紀の憧れの女だね」
とリアンが極炎ニカで言った。
「一瞬にして、あの質問が出せる・・凄いよね～」とユリカが微笑んで。
「やめて下さいよ～・・小僧の姉だから、調子に乗りますよ～」とシズカが照れて返した。
「シズカちゃん、ありがとう・・本当に素晴らしかったよ」と院長

が笑顔で言って、シズカも笑顔で返した。
「美由紀ちゃん、紹介するから・・やってみてくれ、期待してるよ」と院長が笑顔で言って、美由紀も笑顔で頷いた。
高級店のうなぎが来て、全員で楽しい話をしながら食べた。
マリが楽しそうで、私も安心していた。

そしてマリがメモ帳を出して何か書いていた、マリはそれを2つ折にして美由紀に差し出した。
美由紀は驚きながらそれを見て、マリを見ていた、マリは二ヤを出してるようだった。

「院長先生・・その子12歳ですけど、学年は?」と美由紀が聞いた。
「中学1年生になるよ、確か2月生まれだよ」と院長が笑顔で言った。
「ありがとう、マリちゃん」と美由紀がマリに笑顔で言って、マリは二ヤで頷いた。

「美由紀ちゃん、そのメモ見せてくれないかね〜・・見たいな〜」と院長得意の興味津々光線を発射した。
「仕方ないですね〜・・院長先生にだけですよ」と美由紀が折って院長に渡した。
院長はそのメモに見入っていた、そしてマリを見て笑顔になった。
「私は小僧に会えて良かったよ、間違いに気付けるから」と院長が私に二ヤで言った。
その時ノックが響いて、関口医師が入ってきた。

「院長・・ハーレム状態ですね」と院長に二ヤで言った時、マリが立ち上がって駆け寄った。
「マリ!・・元気そうだね」と関口医師が優しく抱いて、マリがス

リスリしていた。
関口医師がマリを連れて、ソファーに座った。
「シズカ、まさかマリを由美子に会わせたの？」と関口医師が笑顔で言った。
「それはまだみたいですね、今日は沙紀とミホだけと・・マリが決めましたから」とシズカが笑顔で返した。
「そっか～・・マリ、ありがとう」と関口医師がマリに微笑んだ、マリも小さな笑顔で頷いた。
「マリ・・まだ薬飲んでるの？」と関口医師が聞いた、マリは頷いた。
「シズカ・・マリの母親に、一度ここに検診に来てくれるように、言ってくれないか。
マリはもう薬はいらないと思うからね、マリはもう病気じゃないよ。
これだけの自己主張が出来るんだから、よく頑張ったね・・マリ」
関口医師は笑顔で言った、マリは少し自慢げに頷いた。
「分かりました、伝えてみます」とシズカが笑顔で返した。
『関口先生・・沙紀も克服の段階に入ります、俺はその壁を越えて見せるよ。
女性達の力を借りて、沙紀もマリのように、自立の道が確かにあるから。
マリ・・沙紀は喘息なんだよ、発作で苦しくてパニックになるんだ。
それを克服させたいんだよ、マリなら分かってるだろうけど』

私はマリに真剣にそう言った、マリは強く頷いた。
「小僧・・沙紀は小僧を嫌いになったりしないよ、大丈夫だよ」と関口医師が笑顔で言った。
女性が全員笑顔で頷いてくれた、私も嬉しくて笑顔で返した。
美由紀が院長と、明日の約束をしていた、美由紀は迷いの無い顔だった。
私達は院長と関口医師に挨拶をして、院長室を出た。

「美由紀・・明日学校に迎えに行くよ」とユリカが笑顔で言った。
「ありがとうです、助かります」と美由紀が笑顔で返して、シズカとマリの乗る車を見送った。

蘭のケンメリに4人で乗り、リアンのマンションに行った。
リアンがお茶でもと言ったので、豪華なエントランスを入りエレベーターに乗った。
「凄いです～・・素敵です～」と美由紀はご機嫌ニコニコだった。
「たいしたことないよ、ユリさんのマンションに比べれば」とリアンが二ヤで返した。
リアンがドアを開け招いてくれた、中に進むとシオンがソファーで読書をしていた。

「いらっしゃい、嬉しいです～」とシオンがニコちゃんで言って、シオンの隣に美由紀を座らせた。
「シオン・・ほら～」とリアンが沙紀の絵を広げて見せた。
シオンはニコちゃんで、その絵を見ていた。
「沙紀ちゃん素敵です～・・リアンですね」とシオンがニコちゃんで言った、リアンも嬉しそうな笑顔で返した。

女性達がコーヒーを飲みながら盛り上がっていたので、私はシオンの読んでいた本を手に取った。

ミステリー小説だったので、少し意外に思っていた。
『シオン・・沙紀の発作対策にかかるよ、マリの感じじゃ時間はあまり無い。
次の発作で精神的壁を壊す、パニックを長びかせない。
協力してね、シオン』
私はシオンに笑顔で言った、シオンが私を驚いて見た。
「もちろんです・・でも何をするんですか？」とシオンが真顔で言った。
『シオンが正義の味方・・俺が怪獣コゾウザウルスなの』とウルで返した。
「ほほ～・・今回はそういう設定なのか」と美由紀が二ヤで言った。
「エース・・じらさないの、詳しく述べよ」とシオンが頬を膨らませた。
私は二ヤでシオンの頬を優しく押した。
「プシュ～」と言って元に戻った、３人が大爆笑していた。
『シオン・・沙紀の発作って、処置すれば・・すぐに楽になるんだって。
でも沙紀は引きずるんだよ、半日位パニックを引きずるらしいんだ。
まずはその半日を無くす・・だから沙紀のその時のイメージに入る。
俺がそのパニックの時のイメージを、沙紀になんとか描かせるから。
沙紀はその時ずっと怖い世界にいるんだって、本人から聞いたんだ。
悪者がうようよいる、怖い世界でずっと隠れてる。
だからその世界から変える、沙紀のそのイメージの世界から。

沙紀に実写版ドラマで伝える、その世界の悪者を殲滅する。
第一回は・・【正義の味方がやってきた】という物語。
悪役の親玉怪獣は俺がやるよ、そして沙紀をお姫様にする。
俺が沙紀を誘拐するから、正義の戦士が助けに来て欲しい。
かなりの雑魚悪役がいると思う、そいつらを全部やっつけて欲しい。
その第一候補がシオンなんだよ、あと誰が出来るかな～』

私は４人に二ヤで言った、４人の笑顔が咲いた。
「エース・・ここにいるだろ、正義の味方・・鉄腕リアンが」とリアンが極炎ニカで言って。
「ウルト蘭もいるでしょ・・無敵の」と蘭が満開二ヤで言って。
「マジンガー美由紀もいるよ・・オッパイミサイルの」と美由紀が胸を張った。
ユリカの強烈な波動が、当然私もと言ってるようだった。

『今回は入るの難しいよ・・由美子の時のようにはいかないよ・・入れるの、スーパーマリアマンだけかな～』と二ヤで言った。
「絶対入るよ・・明確なイメージ作りをしないと・・セリカやヨーコみたいな事にはなれない」とリアンが楽しそうに笑って。
「それだけは許されない・・変身出来ないなんて」と蘭が笑って。
「顔だけ人間だったら、末代までの恥だわ」と美由紀が笑った。
「シオン・・キューティーシオンにします～」とシオンがニコちゃんで言った。

笑顔で盛り上がる女性達とは裏腹に、私は不安を抱えていた。
難しい事だと感じていた、沙紀がどれほど正直に描いてくれるかが、勝負の分かれ道だった。

リアンとシオンに挨拶をして、美由紀とケンメリに乗った。

美由紀を家に送って、手を振って別れて、スーパーで食材の買い物をして帰った。
ご機嫌蘭と夕食を食べて、添い寝して眠った、私は沙紀の映像を見ていた。

翌日、ご機嫌美由紀と登校して、終業時にユリカが迎えに来ていた。
ユリカもご機嫌で、私も二ヤで返していた。
そして病院に着き、記帳しながら2人を見た。

『ユリカ・・今日はユリカが美由紀に付いててよ、俺だと邪魔になるから』と笑顔で言った。
「もちろんそのつもりだよ、少し離れて見とくから」とユリカが美由紀に微笑んだ。
「よろしくです・・小僧、行って来るね」と美由紀が笑顔で言って、私は2人を見送った。

私がミホの部屋に入ると、沙紀が薬を飲んでいた。
私は薬を飲む沙紀の横の椅子に座った。
沙紀が私を見て、顔を出したのでタオルで口元を拭いてやった。
沙紀は珍しく、椅子を出して私の正面に座って手を出した、私は笑顔で握った。

『ご機嫌だね、沙紀・・マリちゃん嬉しかったんだね』と沙紀に笑顔で言った。
《うん、そしてマリちゃんに教えてもらったから、今日描いたよ》
そう伝えてきて、スケッチブックを差し出した。

私は受け取って開いて、マリの凄さを再確認していた。
そこには暗い世界が表現されて、暗い空に不気味な赤い星が浮いていた。

死霊のような気味の悪い者が、無数に歩いていて、大型の肉食恐竜も無数にいた。
地中からが数え切れないほどの腕が伸びて、空には円盤のような物が飛んでいた。
左の隅に沙紀らしい少女が、怯えながら隠れている姿が描かれていた。

『沙紀・・これが沙紀の苦しい後の世界なの？』と意識して笑顔で聞いた。
《そうだよ、怖いでしょ、退治してくれるの？》と返してきた。

『もちろん・・だから沙紀、次に苦しいことがあったら、沙紀はお姫様をイメージしてね。
白いドレスを着てるお姫様だよ、それなら誰でも見つけるからね。
ぜーんぶやっつけてやるよ、沙紀の怖い世界の悪者を』

私は嬉しくて笑顔で言った、沙紀も嬉しそうだった。
《ありがとう、小僧ちゃん、そして皆にありがとうって伝えてね》と沙紀が言って、棚を見た。
私は棚のケースを取って、その重みに驚いていた。
ケースを開けると、ぎっしりと薄紙で仕切りをされた絵が入っていた。

『凄いね～沙紀・・みんなの嬉しいが出るよ』と笑顔で言った。
《うん、沙紀分かるよ嬉しいわ、小僧ちゃんのがココだから、恥ずかしいから後で見てね、マリちゃんの分だけ沙紀が渡すね》と嬉しそうに返してきた。
『沙紀・・ありがとう、俺の分まで描いてくれて・・嬉しいよ』と笑顔で返した。
私はワクワクで、見たい衝動を必死で抑えていた、沙紀が手を伸ば

したので抱き上げた。
温度と鼓動をチェックして、沙紀をベッドに座らせた、スケッチブックを手に取った。
私は沙紀の額に手を当てて、重いケースを持ってミホのベッドに行った。

ミホは宝物の楽譜を見ていた、久々にミホの祖母に会い、笑顔で挨拶をした。
私を見てミホが手を出したので、ミホの手を握り話していた。
その時、ユリカと美由紀が入ってきた、美由紀が笑顔だったので安心していた。
美由紀が沙紀に笑顔で挨拶して、奥にやってきた、祖母と挨拶をしてミホの手を握った。
ユリカは沙紀の手を握り、笑顔で話していた、私は沙紀の母親を誘って廊下に出た。

『お母さん、近い内に発作が来ます、その時は俺が来ますから。
発作後の沙紀を任せて下さい、沙紀の怖い世界をぶっ壊します』

私は真顔で母親に言った、母親は微笑んでくれた。
「よろしくね、私は誰が何と言っても、あなたを信じるから」と母親が笑顔で言った。
『ありがとう・・次の段階は楽しめますよ』と二ヤで返して、母親の笑顔を見ていた。
母親に沙紀の状況を聞いていると、白衣の千夏が来た。

「その分厚いケースは何かな～？」と千夏が笑顔で言った。
「千夏ちゃん・・期待してね、あなたのも素敵だったよ～」と母親が二ヤで言った。
「キャ～・・お母さんやめて下さいよ～・・仕事が手に付かなくな

ります～」と2人で笑いながら病室に消えた。
入れ替わりでユリカが美由紀を押して出てきた、私達は由美子の部屋に行った。

由美子が元気で強く伝えていたので、私も笑顔になって由美子を見ていた。
哲夫が来たので、帰りにＰＧに寄れと言って、３人で病室を出た。

ＴＶルームに美由紀を押してユリカが入った、マダムとユリさんに裏方４人組が打ち合わせをしていた。
４人娘が揃っていて、楽しそうに遊んでいた。
『全員フロアーに集合・・沙紀のプレゼントを配ります』と二ヤで言った。
女性全員が笑顔になった、４人娘が私を見た。
『もちろん４人分も有るよ・・沙紀お姉ちゃんから』と笑顔で言って、全員でフロアーに向かった。

私は慎重に一枚ずつ出した、フロアーは静寂に包まれ、その絵に見入っていた。
徳野さんもボーイも来て、その絵を見ていた。
絵はＰＧの全員分があった、マダムも松さんも徳野さんもボーイも。

全てが緻密に描かれて、その幻想的な世界に存在していた。

作品は全部で５１点・・先に渡したリアンと久美子を除く全員が現れた。
由美子の段階の時に関わった、全ての者が描かれていたのだ。

私は最後の自分の分の絵を出して、凍結していた。

１３歳のヒトミが、崩れる塔の上で夜街の模型を見ていた。

その顔は嬉しそうな笑顔だった・・私は動けずに泣いていた・・沙紀を想いながら。

【沙紀？】

理想の世界とはどんな物だろう、平和とは何なのだろうか。
その世界は理想を描いていた、全ての人々が笑顔で暮らす平和な世界を。

絵を並べながら、私は興奮していた。
その全てに愛情が満ち溢れ、丁寧に描写させていた。
イメージの世界に入った物は、その世界で輝きを放ち。
入れなかった者は、幻想的な世界で描かれていた。

沙紀が演奏会で出会った、一瞬しか見ていない者を緻密な描写で描ききり。
出会ってもいない、イメージの世界で見た者まで鮮明に描いていた。
私は和尚の遺影になる、あの絵が出てきた時に、一瞬凍結した。
和尚は覗いてはいただろうが、入ってはいなかったからだ。
それなのに描いて見せた、断崖に座り朝日を浴びる和尚を。
和尚の心のあり方を、明確に表現していたのだ。

マリと同じ病の強い力は、その集中した世界で開花したのだろう。
そして沙紀は理想の世界を描いていた、そこには沙紀が求める物まで表現している。
ユリカがあの桜吹雪、いや桜の波動の絵の前で、嬉しそうに泣いていた。
沙紀は桜が好きなのである、その散る姿に何かを感じていた。
沙紀の描く満開の桜が散る姿に、儚さは微塵も無い・・温もりがあるだけなのだ。
その集大成が、あのカレンの卒業の絵だった。
カレンとネネが来て、羨ましそうに笑顔で見ていた。

私は興奮しながら並べていた、静寂の空間に笑顔が咲いていた。
そして最後に４人娘・マチルダ・リンダときて、最後の私の分がヒトミだった。
私は嬉しくて、その絵を見ながら泣いていた、沙紀の大きな愛情に触れて。
私に対してヒトミを描いてくれた事に、感動して嬉しさのあまり涙が出たのだ。

「凄すぎる光景やの～・・沙紀は優しいの～、皺が少ないわ」とマダムが言って。
「本当に嬉しいですね～・・家宝にしますよ」と松さんが笑顔で返していた。
「電話しましたから、○○屋さんが簡易ケースを持って来てくれます・・絵に皺など入れたら大変ですからね」とユリさんが私の肩に手を置いて優しく言った。
『そうですね、怒られますよ・・大切に扱わないと』と笑顔で返した。
４人娘が嬉しそうに自分の絵の前で、静かに見ていた。

徳野さんもボーイ達も嬉しそうで、ゆっくりと全員の絵を見ていた。
プラスチックのケースが届き、私と４人組で全ての絵を、一枚ずつ慎重にケースに収めた。
画材屋から受け取った、スケッチブックを持って、徳野さんが私に差し出した。

「何もお返しが出来んから、これは俺からだよ・・ありがとうと伝えてくれ」と笑顔で言った。
『了解です・・喜びますよ』と笑顔で返した、徳野さんは大事そうに自分の絵を持って行った。

徳野さんの絵は、フロアーを見ていたであろう、振り向いた場面だった。
優しい顔の徳野さんだった、そして強い意志まで隠すように描かれて。
その優しい顔が、深い愛情を示していて、背景に女性達の笑顔があった。

『美由紀・・帰りはどうするの？』と４人娘の絵を見せられてる美由紀に聞いた。
「おとんが迎えに来るから、大丈夫だよ」と美由紀が笑顔で返してきた。
私はそれを聞いて、店ごとに絵を分けていた。
ＴＶルームに絵を運んで、座って絵を見ているユリカを見た。
ユリカは自分の桜吹雪の絵を、嬉しそうに見ていた。

『好戦的なのがばれてるね、桜の波動・・まさにユリカだ』と二ヤで言った。
「嬉しくてね～・・あの場所に行かなかった、病室の私達の絵が・・こんなに素敵だなんて」とユリカが爽やか笑顔で言った。
『そうだよね～・・ユリさんも、シオンもマキも嬉しそうだったし・・律子も喜ぶよ』と笑顔で返した。
「ユリ姉さん・・マリアの絵が一番嬉しかったみたいだね・・ヒトミと一緒だから」とユリカが微笑んだ。
『うん・・４人娘とヨーコと哲夫は、ヒトミとツーショットだから、嬉しいみたいだね』と笑顔で返した。

その時全員が帰ってきて、美由紀を抱き上げて座敷に下ろした。
「エース・・沙紀ちゃんに、何かお返しがしたいんだけど」とレンが笑顔で言った。
「うん・・お願い何かさせてよ、心が止まらないよ」とハルカが微

笑んだ。
『そうだね、じゃあ全員集まって・・子供達も』と４人娘も集めた。
私は沙紀の恐怖の世界の絵を、テーブルの上に出した。
全員がその絵に驚いて私を見た、ユリカとシオンだけ絵に集中していた。

『沙紀は喘息で入院している・・喘息の発作でパニックになるんだ。
発作自体は処置も簡単で、すぐに楽になるんだけど、沙紀は引きずってしまう。
半日位その世界から出られない、それがこの場所なんだよ。
俺は次の発作で、この場所に入る・・悪役の親玉として。
親玉が必要なんだよ・・最後に親玉を倒さないと、その世界は壊れない。
この世界を壊したいんだ・・悪者を殲滅して、２度と沙紀をそこに入れない。
その沙紀が目で見る安心感が欲しい、だからドラマ仕立てで行きたい。
第一回公演は【正義の味方がやってきた】にする、全ての悪者を退治して欲しい。
入れる女戦士で殲滅してくれ・・イメージはこの絵だけ・・入るのは難しいよ。
昨日マリが俺に発作の日時を、提示してくれると約束してくれた。
そんなに時間は無いと思う・・それまでにこの世界を明確に入れて。
参加は自由だよ・・スーパーマリアマン一人じゃない事を祈ってるよ。
沢山の参加を期待してる・・それが沙紀へのお礼になるよ』
私は全員を見回し、ニヤを出して、マリアを抱き上げた。
「やっと入れる～・・待ちに待った、サイボーグ００マキで」とマ

キが嬉しそうに言った。
「私もそれが嬉しくて、何にしようか考えるだけ楽しいわ～」とユリカが笑顔で言って。
「私もワクワクしてます・・楽しみですね～」とユリさんも嬉しそうに薔薇で微笑んだ。
「私も絶対に入ってみせる・・沙紀の怖い者を退治してやる」とカレンが言って。
「いよいよ私の出番だね・・殲滅してやる」とネネが迫力のある二ヤで言った。
女性達が楽しそうに話していて、3人娘も盛り上がっていた。

「やばいよ、ハルカ・・入れなかったら」とレンがウルで言った。
「それを言わないで下さいよ～」とハルカがウルで返した。
『マリア・・一人で頑張ってね』と私がマリアに二ヤで言った。
「あい・・しゅーぱーまりあまん」と天使二ヤで返していた、レンとハルカがウル継続中だった。
「レイカちゃんどうするの？・・また孫悟空？」とミサが言った。
「うん・・お気に入り」とレイカが笑顔で返した。
「私、何にしようかな～・・飛べるのが良いな～」とエミが嬉しそうに言っていた。
美由紀がオッパイミサイル構想を話して、3人娘と笑っていた。

蘭とカスミが入ってきて、絵を見て喜びを爆発させて。
カスミは沙紀の話を聞いて、最強不敵を出していた。
「ねぇ・・このルーシーの絵も、部屋に飾るでしょ」と蘭が満開笑顔で言った。
『もちろん、飾らせてね』と笑顔で返した、蘭は満開のまま強く頷いた。

私は女性達が盛り上がりだしたので、リンダの絵を見ていた。

塔の祭壇の階段に立つ、リンダは笑顔で模型を見ていた。
楽園ブルーの青が深く澄んでいて、美しいブロンドが揺れていた。
距離など物ともしない、高みにいる存在のリンダが輝いていた。
美由紀が私の横に来て、リンダの絵を笑顔で見ていた。

『どうだった？・・・片腕の少女は？』と笑顔で聞いた。
「凄く良い子だったよ・・素敵な友達になれそう」と嬉しそうに言った。
『良かったね、楽しみだね』と笑顔で返した、美由紀は笑顔で頷いた。
その顔には迷いが無く、また一段上がった美由紀を見ていた。

それからヨーコがミサキと来て、絵を見ながらヨーコが泣いていた。
ヨーコの絵は青い着ぐるみだったが、可愛く描かれて、ヒトミと手を繋いでいたのだ。
緑のジャングルを歩く2人は、未来への明るい道を歩いてるようだった。

「ハルカ・・見せて」と雰囲気を変えるのに、ミサキが二ヤで手を出した。
「うふ・・見たいのね」と二ヤで返して見せた。
ハルカの人魚は美しかった、水中を自由に泳ぐ姿が美しく描かれていた。

「人魚にすれば良かった～」とミサキが笑顔で言った。
「じゃあ今回なれば」とハルカが二ヤで返した。
「今回！・・今回ってなに？」とミサキが言って、ハルカが説明した。
「名誉挽回のチャンスだ・・今度は美しいヒーローになる」とヨーコが笑顔で言った。

『完成型を見せるんじゃないのか？・・・青猫の？』と私が二ヤで言った。
「それが良いよ、ヨーコ・・最強だし、飛べるし」とミサキが二ヤで言った。
「やめて下さいよ～・・・イメージが入るのが怖い」とヨーコがウルで返した。
全員が笑っていた、楽しそうな光景だった。

それから哲夫が来て、ヒトミと手を繋ぐ自分の絵を見て。
「沙紀・・・ありがとう」と呟いて、涙を見せた。
ヨーコが優しく哲夫を抱いて、哲夫も嬉しそうに抱かれていた。
魅宴の分をミサキとヨーコで持って、哲夫と出て行った。
入れ替わりで美由紀の親父が顔を出した、美しい女性達を見てさすがに固まった。
そして笑顔で挨拶して、ユリさんを見て驚いていた、ユリさんは薔薇が咲いていた。

「ユリ・・相変わらず綺麗だね、歳をとらないサイボーグだな」と親父が笑顔で言った。
「お久しぶりです、政治さんがいらしてくれないから・・歳を取りましたわ」とユリさんが薔薇で返した。
「ほほ～・・おとんも勝也父さん並に、隅には置けないね～」と美由紀が二ヤで言った。
「こら美由紀、比べる相手が悪すぎるぞ・・足元にも及ばないよ」と笑顔で返した。
全員が笑顔でその会話を聞いて、優しい親父を見ていた。

「ユリ・・聞いてるのか？・・多分知らないよな～」と親父が笑顔で言った。
「いけませんね～・・昔から意味深な言い方が、お好きですね」と

薔薇の微笑で返した。
「スナック百合は、俺しか知らんからな～・・恭子の母親は、ミナミだよ」と親父が笑顔で言った。
「えっ！・・そうなんですか・・そうでしたか、だから夜を辞めたんですね」と百合さんが嬉しそうに言った。
「そうだよ・・そして小僧の初恋の洋子先生・・あれはリンだよ」と親父が二ヤで言った。
ユリさんの美しい薔薇が咲き誇り、私はその表情を驚いて見ていた。マダムも松さんも驚いて、親父の二ヤ顔を見ていた。

「リンでしたか・・なるほど良く分かります、園児にしてその魅力の虜になりましたね」とユリさんが薔薇二ヤで私を見た。

「ユリ、皆さん、ありがとう・・美由紀は素敵な経験をしてるんですね。
美由紀は小僧と出会い、色々な経験をしている。
俺は寂しさ半分、嬉しさ半分で見ています・・美由紀をお願いします。
大切な経験をさせて下さい・・ユリに再会できて、嬉しかったよ。
俺たちが描いた未来像を、遥かに超えていたからね」

親父は嬉しそうにそう言って、全員を見回し頭を下げた。

「ありがとうございます・・こちらの方からお願いします。
美由紀ちゃんの存在が見せる、そして話してくれる。
その世界に触れる度に、私達は喜びを感じています。
そして今分かりました、政治さんのお嬢さんなんですね。
さすがですね政治さん・・私は感動しました」

ユリさんがそう言って頭を下げ、全員が笑顔で頭を下げた。

親父は照れた笑顔で立ち上がり、私を見たので、私は笑顔の美由紀を抱き上げた。
親父と美由紀が挨拶して、ユリさんが見送りに出た。

「恭子の義母がミナミで、幼稚園の先生がリンだと・・不思議な話やな～」とマダムが松さんに言った。
「そうですね～・・そして美由紀の父親が、政治さんですか～」と松さんが返した。
「なんや、全員でそんな目をして・・ユリカまで、ユリに聞きな」とマダムが二ヤで言った。
「いえいえ、松さんからですわ・・こんなに嬉しい話なら」とユリさんが戻っときて薔薇で微笑んだ。

「そうじゃね～・・ユリもミナミもリンも、そしてミチルも同学年。全員が１８で夜の世界に入った、今で言う・・銀河の奇跡みたいなもんだよ。
ＰＧが出来る前、スナック百合をしていたのは知ってるだろう。
ミナミは母親がスナックをしておった、今は無いが・・有名店だったよ。
ミナミの加入で、その当時出来たばかりのビルの最上階に店を移す。
洋子は魅宴にバイトで入った女子大生、あの飛鳥が初めて専属バイトを入れた。
それも１８の女子大生、どれほどの魅力なのかは想像出来るだろ。
そしてミチルは、千花に入った・・この４人組はすぐに噂になったね。
４人が異なる美しさを持ち、その性格も接客も違った。
もちろんスナックとクラブでは違うんだが、個性が強くて面白かったよ。
ミナミは母を見て育ったからだろう、１８にして存在感があった

ね。
落ち着いた美しさと、若さ溢れる容姿・・そのギャップが魅力だった。
リンは魅宴の存在には無い、芯から明るい娘で・・魅宴に新風を吹き込んだ。
飛鳥がそれを喜んで、リンを後押ししたんじゃ、リンは卒業までの４年間働いた。
３年目にはＮｏ１を勝ち取った、それまでの魅宴の記録を塗り替えた。
リンは大学をキチンと卒業して、保母になる・・飛鳥は号泣して送り出した。
それほど飛鳥には大切な存在だった、本当に嬉しそうだったよ。
不良少女だった飛鳥には、リンの生き方は夢じゃったんじゃろう。
リンが卒業して、魅宴は群雄割拠の時代になる、その１年後に登場する。
ユリカが魅宴に入る、その１８歳は・・リンの記録を全て塗り替えるんじゃね。
ミチルは傾きかけた千花に入り、千花を救う・・１８でＮｏ１になるんじゃ。
今の夜街関係者のトップ達は、その事を覚えているね・・それほど衝撃的だった。
ユリより先にミチルが高い評価を受ける、その持って生まれた夜の花が開花する。
ユリは憧れが強すぎて、デビュー当時は悩み苦しむ。
ユリは真面目じゃったから、今のハルカみたいな感じじゃった。
そのユリの殻を破ったのこそ、その３人じゃった・・私やマダムじゃない。
その３人に触れて、ユリは脱皮の時期を迎える、サナギが美しい姿に変わる。
その圧倒的変化こそが、他の３人にも拍車をかける・・そして一

気に駆け上がる。
２年でその４人は押しも押されぬ存在になる、そしてあっさりミナミが引退する。
その情報は全く流れなかった、結婚したとは噂で聞いた。
多分・・刑事の後妻で入るから、相手を想って封印したんじゃね。
ミナミは本当に暖かい女じゃった、それが恭子の母親なら話は繋がるよ。
２０歳で、幼い恭子と乳飲み子の弟と触れ合い、信頼を勝ち取る。
ミナミなら出来る・・いや・・ミナミにしか出来んだろう。
ミナミは今で表現すると、蘭じゃからの～。
心に従う強い女じゃった、だからこそ母親も許したんじゃろう。
娘が心で決めたなら、それは反対しても無駄じゃと知っていたからの。
他の３人はミナミから手紙を受け取ってた、ミナミの気持ちを知って封印した。
誰も・・一度もミナミのその後を語らなかった、強い友情が暗黙の掟を作った。
そしてリンが魅宴の卒業の時、ミナミは一度現れる・・美しい女性のままで。
４人でリンを送り出した、リンの強い生き方に・・曲がらないその背中に。
誇りすら感じていたのじゃろう、３人の涙にはそう書いてあった。
次に４人が揃うのは、ミチルが千花を辞める時じゃった。
ある事でボロボロになったミチルを、蘇らせたんじゃ・・３人の友情が。
そしてミナミが提案する、母親の店を引き継いで欲しいと言うんじゃ。
ミチルはそれで覚悟を決めて、今の店を作り出す。
そのミチルを本当の復活に導くのは、ミナミが近くで触れ合い、リンの教え子。

リンを愛した男・・夜街のエースが、誰も出来なかった事をやってのける。
ミナミもリンもユリも感じた男・・それこそがエースなんじゃね。
政治がそれを伝えた・・それこそが原作者の粋なシナリオじゃったよ。
マダムも私も嬉しかった・・夜街の友情物語が続いている事が。
ユリ・・ミチルに話せ、それが本当のミチルの復活になるよ」

松さんが珍しく饒舌に、強く言葉にした。
私は嬉しくて、そして感じていた、松さんの経験と女性に向ける愛情を。

「素敵な話ですね・・私もリンさんの話は沢山聞きました。
ユリ姉さんは、だからこそ四季という、素晴らしいメンバーに巡り合い。
育てる事が出来たんですね・・私は大ママに言われてました。
私が天狗にならないように、戒めとして言われました。
記録を塗り替える度に、それでもお前はリンに届いていない。
リンは学生だったんだ、プロならプロの道を示せと言われてました。
その言葉の深い意味が今分かって、私も嬉しかったです」

ユリカが爽やかな微笑で、重い言葉を言った。

「ありがとう、ユリカ・・私は本当に嬉しかった。
ミナミからの手紙には、相手の事は何も書いてなかった。
ただ愛する人の後妻になると、相手に迷惑がかからないように姿を消すと。
そう書いてあって、私達はミナミの気持ちを感じて封印しました。
リンは今でも付き合いがあります、たまに電話をしてます。

リンは子育ても落ち着いて、今年の春から保母として復活してます。
私がマリアを出産した時、2人も来てくれて・・泣いてました。
その涙の訳を私は聞きました、あまりに悲しい涙だったから。
その時に2人は言いました、この病院には思い出があるんだと。
ある少女の思い出があって、それに関わった子供達の思い出が詰まっていると。
今分かりました・・それはヒトミちゃんだったんですね。
ヒトミをエースに紹介したのは、リンですから・・そしてミナミは恭子の母親ですから。
政治さんも近くにいたんですね、リンもミナミも知ってたんですね。
政治さんは素敵な人です、男気のある筋の通った人です。
勝也さんと律子姉さんの近くにいるんですから、当然ですよね。
政治さんは・・スナック百合閉店の時期に、結婚しました。
それから夜街が遠のいたと思います、そして一度だけ現れる。
ミチルが店を出したばかりの頃、閉店前にずぶ濡れで入ってきて。
ミチルを見て号泣するんです・・俺は辛いと言って泣きました。
私はミチルから連絡があって、駆けつけました・・政治さんは俯いて泣いていた。
娘を不幸にしてしまった・・政治さんはそう言って泣いてました。
あまりの悲しみの強さに、私もミチルも何も言えなかった。
その時・・2人が来るんです、リンとミナミが。
そしてその時に言った言葉・・今鮮明に思い出しました。
政治さん・・泣いてる暇は無いでしょ、律子姉さんが待ってるよ。
そい言いました・・それで政治さんは2人を見て、自分の頬を何度も打った。
そして笑顔になり・・やばいよな～、泣いてなんかいられない。
チサに申し訳ないな、俺がしっかりしないと。
そう言って立ち上がり、2人と出て行きました。

この時に出た名前・・律子とチサ、私は今感動の中にいます。
美由紀ちゃんの事故で、絶望しそうな政治さんに対して、それを思い出させた。
律子という遥かに遠い人を、その目を逸らさない生き方を。
そしてチサちゃんを感じて、障害がありながら強く生きたであろう少女を感じて。
今・・嬉しさで一杯です・・ありがとうエース、その生き方。
あなたは本当に繋いで見せた、政治さんも感動しながら帰ったと思いますよ。
私はリンに聞いた事があります、人間の可能性は無限だと感じると。
私はそれを見せ続けられている、ある少年の生き方で見せられてる。
その子は絶対に諦めない、心を通わすことは諦めない。
素敵な少年だと言っていました・・エースお願いがあります。
私に同行して下さい・・リンは今悩んでいます、受け持った園児の事で。
多分・・心からあなたに会いたいと、思っていますよ。
お願いしますね・・私達４人の想いを背負った男、あなたがエースです。
そして今からミチルとリアンに会いに行きましょう、絵を持って。
マキを連れて、リアンにマキを紹介させて、今の話をします。
そして帰りに大ママに会いましょう、リンが初恋の人だとの報告に。
原作者の粋なシナリオに感謝して・・そうしましょうね」
ユリさんの強い言葉が嬉しくて、私は久々に洋子先生を思い出していた。
その明るい笑顔と、子供の心に向き合い続ける生き方に。
『了解です・・行きましょう・・洋子先生、リンにも会いに』と笑

顔で返した。
「律子母さんはどこまで知ってたんだろう・・聞いてみたいな～」と蘭が満開で言った。
「ねぇエース・・美由紀との出会いは、偶然よね？」とユリカが微笑んだ。
『うん・・偶然だよ、美由紀は学校が違ったからね』と笑顔で返した。
「マキは何か知ってるのか？」とカスミが聞いた。
「沙織とチサは近所だったんです、チサは小僧の家の向かいですから。
美由紀の家は学校に上がらないと、幼稚園児じゃ行けない距離でした。
美由紀は5歳で事故に遭いますから、それで母さんは紹介しなかったんでしょうね。
美由紀の父親の政治さんと、勝也父さんは、昔からの知り合いだと思います。
政治さんは、よく小僧の家に飲みに来てました、小僧が美由紀と知り合う前から。
恭子の母親と政治さんは、昔馴染みでしたね。
勝也父さんと律子母さんは、恭子の母親が夜の世界の頃は、知らないと思います。
私は小学校で宮崎に来ましたから、幼稚園は知らないんですけど。
洋子先生と恭子の母親が、親友なのは知っていました・・本当に仲が良いんです。
そしてヒトミの母親は、2人の姉的な存在だったと思います。
小僧は恭子の母親の、大のお気に入りなんです・・不思議な関係でした。
小僧はもちろん、綺麗な女性が大好きだから、恭子の母親を大好

きでした。
物心ついた時からです、小僧は幼稚園の年中で、誰かの絵を描けと言われて。
普通は父親か母親か兄弟の絵を描くんですけど、恭子のお母さんを描いて。
洋子先生に褒められて、恭子の母親にプレゼントしました。
とんでもない奴だとシズカが言って、律子母さんと笑ってました。
その記憶が鮮明に残ってますね・・全員が嬉しそうに笑ってたから」

マキが笑顔で言って立ち上がり、リアンの店の分の絵を持った。
私はゴールドとミチルの店の分を持って、女性達の笑顔に見送られ、TVルームを3人で出た。
ユリさんが楽しそうに、マキにミナミの話をしていた。

リアンの店に入ると、リアンが化粧をしていた。
「ユリ姉さん・・おはようございます、先日はお世話になりました」とリアンが笑顔で頭を下げた。
「楽しかったですよ・・またやりましょう」とユリさんが薔薇で返して、マキが絵を渡した。
「凄いな～・・沙紀はこの3人をあの世界で見て描いたんだ、素敵だな～・・泣くな」とリアンが絵を見て言った。

「リアン・・ミチルの店に行きましょう、分かってますね」とユリさんが言った。
「はい・・私もマキを連れて行こうと思ってました」とリアンが微笑んで、私に手を出した。
私はミチルの店とゴールド分を見せた、リアンは黙って絵を見ていた。

ミチルは由美子の段階の時、鳥になっていた。
沙紀の絵は青空に浮かぶ、人間のミチルだった。
強い風が吹いているのだろう、しかし和服のミチルは揺れていなかった。
妖艶な氷の瞳で、斜め下を見ている、その表情が落ち着いていて美しかった。
ミチルの背景の雲の切れ間から、エベレストのような切り立った山頂が見えていた。
それにより、ミチルの存在する高さが想像できた。
山頂には万年雪が積もっていて、それが日光で輝きを発していた。

「こりゃ～・・泣きますね、ミチルママ」とリアンがユリさんに微笑んだ。
「ミチルは、今から3度号泣します・・それでミチルの完全復活ですね」とユリさんが薔薇で返した。
4人でリアンの店を出て、ゴールドに寄った。
千鶴とマユとセリカに4人の若い女性が、フロアーで話していた。
千鶴はユリさんとリアンを見て、駆け寄ってきた、若い女性達は固まっていた。

「ユリ姉さん、リアン姉さん・・おはようございます」と千鶴が頭を下げた。
『おはよう、千鶴・・来週はよろしくね』とユリさんが笑顔で返した。
「よろしくお願いします・・本当に楽しみです」と千鶴が言いながら、フロアーに案内してくれた。
若い女性が緊張気味に挨拶をして、リアンが面白く返して、笑顔が出ていた。
ユリさんとマキはフロアーを見ていた、私はセリカに絵を手渡した。

セリカの表情が喜びに変わり、マユを呼んで手渡した。
2人は嬉しそうに、絵を見ていた、千鶴はユリさんに説明をしていた。
『千鶴に後で渡しといてね、マユ・・レイカの絵も可愛かったよ』
と笑顔で言った。
「ありがとう、私もレイカを連れて、沙紀ちゃんの所に行くね」と
マユが微笑んで。
「エース・・私も連れて行ってよ」とセリカが強い流星で微笑んだ、
私は笑顔で頷いて。
沙紀の発作の話をして、絵がＰＧに有ると説明した。

「今度こそ、変身する・・絶対変身する」とセリカが流星二ヤで言って。
「私も正義の味方になるよ・・ぶっ壊してやる」とマユも笑顔で言った。

私は2人の笑顔を見ながら、少し自信が湧いてきていた。

女性達に強く問いかける事になる、沙紀の恐怖の世界。

沙紀の心の世界が見せる奇跡・・沙紀が【嬉しい】にこだわる理由が提示される。

沙紀は次の段階に移行する・・天使のスーパーマリアマンに出会って・・・。

入り込む世界、連れ去られ閉じ込められる。
恐怖を感じると導かれる世界、抜け出せないのは・・現実を恐れてるから？

【マリ?】

４人でゴールドを出て、マキが突然腕を組んできた。
『やっぱマキが一番照れくさいよ～・・シズカよりも』とウルで返した。
「仕方ないでしょ・・この状況なら、組んどけばプラスに働くんだから」と二ヤで返された。
「さすがマキ・・良く分かってるね～」とリアンが二ヤで振り向いた。
「やはりマキが、一番照れますか・・ヨーコには土曜の夜の、一番街抱っこ出来たのにね～」とユリさんも薔薇二ヤで振り向いた。

「なんだって～・・ヨーコが先なのかい、今週の土曜往復でよろしく」とマキが笑顔で睨んだ。
『了解です』とウルウルで返して、ミチルの店に入った。
ミチルは準備が終わったのか、奥のＢＯＸで経済紙を読んでいた。

「これは素敵なメンバーで、少し怖いね～」と妖艶二ヤでミチルが言った。
ミチルの向かいに、ユリさんとリアンが座りマキが座った。
私は笑顔のミチルに手を引かれて、ミチルに密着して座った。

「何か重要な話なの・・クラブ活動ならいつでもするよ」とミチルが妖艶に微笑んだ。
『ミチル・・２０日の水曜日、ユリさんをお願いします』と二ヤで

言った。
「よろしくね、ミチル」とユリさんも薔薇で微笑んだ。
「嬉しいね～・・よろしくね、ユリ」とミチルも嬉しそうに返した。
「ミチルママ・・マキを正式に紹介します、ミチルママに点火された私から」とリアンが真顔で言った。
「正式にって何なの？・・秘密があるの？」とミチルが驚いて聞いた。
リアンが頷いて、マキが立って美しい姿勢で頭を下げた。
「マキは母親の源氏名を、本名として受け継ぎました。
どれほどの想いがあれば、娘に源氏名を付けれるのか。
私はそう思いました・・マキの母親は、幼いマキを残して亡くなりました。
そしてマキは１６歳で挑戦を決めました、母親の背中を追いかけて。
マキの母親は・・伝説の千花初のＮｏ１で、最初の女帝。
夜街創世記の華・・真実の希望、真希さんです」
リアンの極炎の言葉が強く吹いて、ミチルは驚いてマキを見ていた。
そして立ち上がり、マキを抱きしめた。
マキも母に抱かれるように腕を回した、ミチルは静かに泣いていた。
「あなたのお母さんに、私は救われたよ・・たった一度の出会いが、今の私を作った。
本当に素敵な人だった・・あなたは、その時抱かれていたよ。
私も抱かせてもらった、同じ匂いだよ・・あんたは真希姉さんと。
頑張ってね・・私も見てるから、辛い時はいつでもここに来てね」
ミチルは静かに、マキの耳元に言った。

「ありがとうございます、嬉しいです・・頑張ります」とマキも静かに返した。
２人は体を離し、笑顔で見詰め合って元の場所に座った。
「リアンの紹介だから、喜びが倍増したよ・・ありがとう、リアン」とミチルが微笑んだ、リアンも極炎で微笑んだ。

「ミチル・・私からも報告があります、大切な」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「何だよ・・その笑顔、怖いよ・・再婚でもするの？」とミチルが妖艶二ヤで返した。

「残念ながら、その報告はまだまだ出来ないわ。
ミチルも話を聞いてるし、一度会ってますよね・・マキの友人の恭子に？」

ユリさんがミチルを見た。
「もちろん・・マチルダの送別会で話を聞いて、一度ＰＧでチラッと会ったよ」とミチルが返した。

「あの恭子の両親・・刑事さんの父親と美しい後妻さん。
私もさっき聞いたんですが・・その母はミナミですよ。
ミナミは幼い恭子と乳飲み子の弟と、２０歳で心を通わせたそうです。
今でも恭子とは、姉妹みたいな仲の良い親子だそうです。
そしてミナミはマキともエースとも、今でも強く繋がっています。
マキが１６歳でここまで来れたのも、あのヨーコがあそこまで辿り着いたのも。
ミナミの影響も大きいと、マキが言ってくれました。
そしてエースには大切な存在なのだと、エースが言ってくれましたよ」

ここでミチルが話を遮った、嬉しそうな笑顔だった。
「本当なのかい・・素敵な話だね～・・嬉しいね～」とミチルが美しい笑顔で言った。
「そうなんです・・でも驚きは、それだけじゃないんですよ」とユリさんが薔薇で返した。
「早く～・・じらさないの、ユリ」とミチルも笑顔で返した。

「マチルダ送別会で聞いた、エースの初恋。
あの幼稚園の先生は・・リンです。
ミナミとリンは近くにいて、触れ合っていたみたいですね。
ミナミの状況を考えて、黙っていたのでしょう・・刑事の後妻ですから。
迷惑がかからないように、細心の注意を払っていたのでしょう。
でももう大丈夫でしょう、恭子は独立して豊の婚約者だし。
弟さんも中学生ですから、時はその段階に来ましたね。
私達４人に、友人としての時が戻りますね。
エースはミナミに憧れて、リンを愛した・・そして私に出会った。
そのエースが最後にミチルに出会った、エースは繋いでくれました。
あなたの解放をしたエースは、私達３人の想いも背負っていました。
その経験をフルに使って、あなたに問いかけた。
あの時・・エースが混乱した時、迷わずにミチルを選んだそうです。
エースはあなたを選んだ・・ミチルが愛を伝える事を、許された人間だから。
この事を教えてくれたのは・・政治さんです。
あの時の政治さんの悲しみ・・ミチル、政治さんは美由紀の父親です。

美由紀の事故で悲しみに包まれた、そして絶望しそうな心を背負って選んだ。
それもミチルでしたね・・私は今日敗北感を抱きました。
何度目か分かりませんが、またミチルに敗北しました。
本当に嬉しい敗北でしたよ・・素晴らしい友を持てた喜びで。
４人の友を持てた喜びで・・そして愛を伝える、友を持てた喜びで。
ありがとう、ミチル・・私達に見せてくれて。
自分の幸せより大切な、愛も存在すると・・強く教えてくれて。
私はミチルに出会えて・・幸せです」

ユリさんの熱い言葉で、ミチルは私に抱きついて号泣していた。
私はミチルの喜びの熱が伝わって、ミチルを強く抱いていた。
強烈な喜びの波動が何度も来て、私とミチルを包んでくれた。
リアンもマキも泣いていて、ユリさんも瞳が潤んでいた。

『ありがとう、ミチル・・俺は嘘無く言えるよ。
この世界に今でもいれるのは、あのミチルの叫びが有るからだよ。
強い涙の叫びが、俺の中でずっと木霊してるからだよ。
ありがとう、ミチル・・愛してくれて』

私はミチルの耳元に、優しく囁いた。

「もう・・泣かさないの・・私の方がありがとうだよ。
そうだったんだね・・リンを愛し、ミナミを感じて育った。
そしてユリに出会い・・最後に私に繋いでくれた。
本当に嬉しかったよ・・ありがとう、エース」

ミチルは顔を上げ、妖艶に微笑んだ、氷河の瞳から美しい涙が流れていた。

『ミチル・・ついでに泣いといて、これは沙紀からのプレゼント』
と笑顔で言って手渡した。
ミチルは座り直し、その絵を見ていた、ミチルの瞳から涙が止め処なく溢れていた。

「ありがとうと伝えてね、私も会いに行くよ・・宝物だよ」とミチルが言った。
私はホノカにも伝えてと言って、沙紀の悪者殲滅計画を話した。
「そうなの・・私も行くよ、感謝を込めて・・最強の戦士でね」と
ミチルは微笑んだ。
私も笑顔で頷いて、美しいミチルを見ていた。

ミチルに4人で挨拶をして店を出た、ユリさんの嬉しそうな笑顔が嬉しかった。
魅宴に向かっていると、大ママがミコトとリョウと前を歩いていた。

『怖いな～・・その3人で歩くと』と私が二ヤで声をかけた。
3人が振り返り、笑顔になった。
「今から沙紀の絵を見に行くの、絶対に入ってみせるからね」とミコトが笑顔で言った。
「あんな素敵な絵を貰ったんだ、入ってみせるよ・・今でも、私が最強だよ」と大ママが笑顔で言って。
「今度はクノイチじゃないからね・・美しい戦士になる」とリョウも笑顔で言った。

全員でTVルームに入った、その時衝撃を受ける、シズカとマリが来ていた。
マリがマリアを抱いて、3人娘とトランプで遊んでいた。
女性達が沈黙して、それを夢中で見ていた。

『マリ・・ありがとう、沙紀に怖い世界を描かせてくれて』と笑顔で言った。
マリは二ヤしたようで、強く頷いた。
「どうしましたか・・緊張感のある雰囲気ですよ」とユリさんが笑顔で言って、大ママと座った。
「マリがエミに会いたいと言ったみたいで、今トランプをしてるんですけど。
凄いんです・・まぁ見て下さい、あの3人娘を」
ユリカが真顔で言って、全員がマリの手元を見た。
トランプのゲームは、伏せて円状に広げたカードを順番に一枚開いて。
表示されてるカードより、数字が小さかったら、出ているカードを取るという。
ミサやレイカにも分かる、簡単なゲームだった。
その時に2回戦が始まるとこで、マリが両手を広げ、3人娘と手を繋ぎ円を作った。
3人娘が笑顔になって、マリが頷いた。
最初がミサで、引いたのはハートのエースだった。
次がレイカでスペードの2、そしてエミがダイヤの3。
次がマリでハートの4・・この繰り返しで進み、最後まで誰も取らずに終了した。
マリは嬉しそうに、一人ずつ頭を撫でて、エミがマリにおやつにしようと言った。
私達は静寂の中にいて、ただ驚きながらその光景を見ていた。
マリを含めた、4人娘は小さなテーブルを出して、笑顔でおやつを

食べていた。
「シズカ・・あの現象を説明せよ」と蘭が満開ウルで言った。
女性全員がシズカを見た、シズカはウルで返していた。
「それはユリカ姉さんの方が・・分かると思います」とシズカがユリカに言った。
「ユリカよろしく」とリアンが極炎ニカで促した。
「マリちゃん・・あの４人娘と、練習するって言ったと思うんです。
マリアは出来るから、残りの３人と・・今回もエミが鍵を握るらしくて。
そうしたら、いきなりあれですよ・・一回目のゲームは時間がかかったけど。
今の二回目は、スムーズでしたね・・あれはマリと同調してるんでしょう。
エミに聞いたら、そのカードが少し光って見えるそうです。
あの４人娘は、絶対に沙紀の世界に入ります。
私達も入らないと・・保護者がいない状況になりますね。
４人娘とエースと美由紀だけなら・・子ども会ですよ」
ユリカが嬉しそうな笑顔で言った、全員が驚いて聞いていた。
ユリカが私に爽やか二ヤを出したので、私はウルで返していた。
「絶対に入る・・私が引率するよ」とリアンが笑顔で言って。
女性達が沙紀の絵を見ていた、真剣な表情で私も嬉しかった。
その時突然マリが、大ママとユリさんの間に入った。
２人は嬉しそうにマリを見ていた、マリは絵を少し傾けて、右角にジョーカーを置いた。
そして２人の手を握って、微かに二ヤを出した。

「えっ！」と大ママが言って。
「マリちゃん・・あなたは！」とユリさんが驚いてマリを見た。
マリは手を離し、４人娘の場所に戻って行った。
２人は放心状態で、沙紀の絵を見ていた、女性達は２人を見ていた。

『そこが入口ですか？・・マリも女帝にはサービスが良いな～』と私が二ヤで言った。
「そうです、ここが入口です・・大きな渦でした、宇宙の」とユリさんが言って。
「ユリカ・・お前は普通の人間だよ、今確信したよ」と大ママがユリカに微笑んだ、ユリカは最高の笑顔で返していた。
女性達が変身内容で盛り上がっていた、私はマリアを抱いてマリの横に座っていた。

『マリ・・嬉しかったんだね、沙紀に会えて』とマリの手を握って笑顔で言った。
《うん、嬉しかったし、怖かったよ・・沙紀は壊れやすいから》とマリが返してきた。
『マリも壊れやすかっただろ、あの頃は・・沙紀は、俺がマリに会った時と同じ歳だよ』と返した。
《沙紀のあの世界、強敵だよ・・それに団結が必要、チームでないと壊せない》とマリが返してきた。
『チーム戦なんだね・・数も凄いの？』と聞いてみた。
《はいっきりとは分からないけど、沸いてくる感じ・・小僧、あの世界の発生原因を感じろよ》とマリは言って、エミの本を覗いた。

エミが笑顔で宇宙の説明をして、マリは嬉しそうに頷いていた。
私はマリアを抱いて、立って絵を見ていた。
右角のジョーカーが笑ってるようだった、暗い世界に赤い月が浮いていた。

「こわい・・あかいちゅき」とマリアが私を見て言った。
『マリア・・あの赤い星は、月なの？』と笑顔で聞いた。
「月だよ・・赤い月」とミサが言った。
『じゃあ、沙紀が隠れてる世界は、地球なの？』と笑顔を意識して聞いた。

「違うよ～・・沙紀ちゃん、飛ばされるのか、円盤に乗せられるのか分からないけど。
宇宙に飛ぶんだと思うよ、そこにあの世界が有るんだよ。
沙紀ちゃんの世界は広いの、私達では想像出来ないくらい。
だから帰れないの、怖いけど帰れないと思うよ。
沙紀ちゃん、現実じゃないと分かってるんだよ。
でも帰れないんだよ・・方法が分からない、だから抜け出せないんだよ」

エミが強く言った、私は間違いに気付いた、帰る方法が分からないと聞いて。
『それでエミは何になるの？・・沙紀の救出作戦は？』と笑顔で聞いた。
「もちろん・・アポロに乗る、女宇宙戦士・・キャプテン・エミ」と少女二ヤで返した。
「私も～」とミサとレイカが笑顔で手を上げた。
そしてマリが手を上げた、私は固まってそれを見ていた。

『マリ、行くのか！・・怖くないの？』と驚いて聞いた。
マリは少し俯いて、強い二ヤを出していた。

「ナイス、エミ・・そう言う事ね、私もアポロに乗るよ・・ようは発射台の場所を、決めれば良いんだ」とカスミが笑顔で言った。

「なるほどね～・・堀切の代わりを、発射台を作れば良いのか」とリョウが微笑んだ。
「エミ・・もうイメージで作ったんでしょ？」と蘭が満開で微笑んだ。

「うん・・平和台の平和の塔の下から、発射台が出てきて・・アポロ０号が発射準備に入るよ」とエミが笑顔で言った。
「さすがエミ・・それなら明確にイメージ出来るよ」とミコトが笑顔で言った。
「勝負は衣装デザインと、武器になりましたね」とユリさんが薔薇で微笑んで。
「負けられない・・変なデザインだったら、サクラさんに怒られる」とカスミがウルで言った。
「それに酸素供給装置も、個人差が出ますね・・どこまで未来をイメージ出来るのか」とシズカが二ヤで言った。
「やばいな～・・シズカは得意分野だ」と蘭が満開二ヤで返した。

「はい・・マリが行くのなら、私は同行しますよ・・未来の宇宙服で」とシズカが笑顔で返した。
「未来の宇宙服ね～・・楽しそう」とユリカが爽やかに微笑んだ。
『金魚鉢かぶらないように』と私が二ヤで言って、女性全員に睨まれた。
「それを、イメージから消そうと思ってたのに～」とハルカにウルで怒られた。

「シズカちゃん・・未来のロケットって、どんな感じかな～？」とエミが笑顔で聞いた。

『そうだね～・・多分沢山の人が乗れるように、飛行機の進化型だと思うよ。

滑走路で離着陸しないとね、あんな帰還用の箱を、海に落としちゃ駄目だろう。
飛行機のゴツイ奴、その素材は熱に強くて・・大気圏突入も出来る。
そしてミサイルを装備してね、最後の小僧を倒すのに、強力なやつを。
ヤマトで出てる、ワープ航法も・・もう少し突き詰めれば出来るだろうね。
時間で区切られない、そんな広大な場所なら・・波の中心を飛べるかも。
今回は発射台にセットしよう、飛行機型の宇宙船を。
ユリさんが言った、渦を目指せば入れるよ・・宇宙船はエミに任せるね。
エミが小僧に聞いて・・エミなら絶対に出来るよ。
小僧が由美子のときに作った、由美子の部屋のように・・発射台を作ってね。
帰還場所は・・橘通りにしよう、沙紀を連れて帰るのは』

シズカが楽しそうに笑顔で言った、エミは嬉しそうに笑った。
「了解です・・作ります」とエミは笑顔で言って、敬礼をした。
「よろしく、キャプテン・エミ」とシズカも敬礼で返した。
「いよいよ楽しくなってきました～」とシオンがニコちゃんで言った。
「４人娘とユリカ姉さんとシオンとシズカは決定だな・・それとマリ、楽しそうだ」とカスミが言って。
「カスミ、蘭までは決定よ・・前回も自分で入ったのよ、蘭は」とユリカが笑顔で言った。
女性達がワイワイと楽しそうで、私はマリアが眠ったので、ベッドに寝かせた。

その時、私には衝撃が訪れた、マリが私の首に腕を回したのだ。
私は驚きを必死に隠して、マリを抱き上げた。
『マリ・・どうした、甘えん坊』と言うのが精一杯だった。
《ユリカスペシャルをお願い》とマリは多分二ヤで返してきた。
『特別だぞ・・ユリカスペシャルは』と笑顔で言って、静寂のＴＶルームを出て、裏階段を上った。

私は驚いていた、瞳を閉じたマリは、生きてるのかと思うほど静かだった。
私は最上階の踊り場で、冬を感じる夕暮れの冷たい風を受けていた。
マリが寒くないように、少し引き寄せて密着していた。
ユリカの波動が優しく何度もきた、その波動が寒さからマリを守ってるようだった。

美しい夕焼けに、秋の薄雲が浮いていた。
そよ風がマリの前髪を揺らして、夕焼けに映るマリは可愛かった。
私はただ嬉しかった、出会った頃のマリを思い出していた、拒絶の強いマリを。

《人間の可能性は無限だよね、洋子先生》と夕焼けに向かい心に囁いた。
強い波動が答えてくれた、私もそう思うと、同意してると感じていた。
マリを抱く私は地球では小さな存在で、地球も宇宙では小さな存在だと感じていた。
その宇宙でさえ、小さな存在だと思えば、自分の大きさなど考えなくなった。

《小僧、よく考え付いたね・・沙紀の世界を壊すって、いつ思いついたの？》とマリが言った。

私は同調に入ったのを感じて、その気持ち良さを楽しんでいた。
『由紀子の段階の時、俺は嬉しかったんだ。
そして可能性を感じたよ、ヒトミの時は、俺もその世界を表現出来なかった。
由美子の時は、沙紀が表現してくれた・・鮮明に。
そして全ての女性が入ってくれた・・それが嬉しかった。
誰も疑念を持たず、知りたいと思っていた。
だから・・沙紀の場所を、破壊しに行こうと思ったんだ。
時間をかけないで、沙紀に克服させるには、それが一番だと感じた。
その計画を作れた中心は、もちろんマリだよ。
マリが側にいてくれるから、俺は出来るんだよ・・マリはいるだけで良いんだ。
マリ・・もうすぐだね、マリの可愛い声が聞けるのも。
俺は忘れてないよ、マリとのあの約束は。
いつか必ず見せるよ・・ミホの笑顔も言葉も・・自立して生きる姿も。
マリは約束を守ってるから・・俺も必ず約束を果たす。
あの姿無き男と決着をつける、今は最強の戦士に囲まれているからね。
マリ・・ありがとう、俺は自分が好きになれそうだよ』
私はマリの耳元に囁いた、マリは瞳を閉じて静かだった。
強い波動が何度も来て、私を守ってくれた。
《小僧は元々、自分が好きなんだよ。
でもいつでも崖っぷちに立ってるから、そう思うんだよ。
良かったね、小僧・・心から愛する人に出会えて。
絶対に嘘も、隠し事もしない・・蘭さんに出会えて。

あの時の小僧の問いかけに、私は答えられなかった。
同じ悩みを抱えていて、私の方が1つ年上なのにね。
良かったね小僧、ユリカさんに巡り会えて・・伝える方になれたね。
小僧はもう分かってるんだね、私の言う・・道を繋げの意味を。
私は言葉を持てるよ、もう自分を理解したから・・普通に暮らせる。
私の力は・・唯一生命に対してだけ使う、悪質なシナリオに対してだけ。
小僧・・ありがとう、私はやっとマリになれたよ。
小僧と美由紀のおかげで・・シズカ姉さんとユリカ姉さんのおかげで。
生まれてきた事に、感謝できるようになったよ」

マリは静かに伝えてきた、私はマリの顔を見ながら、嬉しさに包まれていた。
薄暗くなっていく世界に、私とマリの場所だけ、暖かい光に照らされていた。

『よ～し・・明るく楽しい未来の為に、一丁やりますか』と意識して元気良く言った。
《よし、心配だから、私が同行てやるよ》とマリも強く返してきた。
『それで、戦闘開始はいつ頃かな?』と笑顔で聞いた。
《今ははっきりしないけど、深夜だよ・・居眠りするなよ》と返してきて、二ヤを出した。
『そっか～・・深夜の決戦だね』と二ヤで返した。
《美由紀に伝えて、明後日お泊りしなって・・ユリカ姉さんの了解取って、美由紀と私とシズカ姉さんの》マリが返してきた。
『明後日だね・・ユリカ、シズカと美由紀と・・そしてマリをお泊

りさせて』と声を出して言った。
強烈な喜びの波動が来て、了解を伝えていた。
《波動良いね～・・今、波動で返してみたよ・・ユリアに、届いたかな～》とマリが返してきた瞬間。
圧倒的に強い波動が帰ってきた、ユリカが泣いてるのが分かった。
『届いたね、マリ・・人間の可能性は、無限だよ』と優しくマリに言った。
《洋子先生、リンさんって、素敵な人なんだろうね・・必ず明日会っときなよ》とマリが返してきた。

『そこにも何か有るんだね・・偶然は存在しない、マリの言葉を思い出したよ』と私は笑顔で返した。
《偶然も必然も存在しない、シナリオも無い・・自分で書くんだ、シナリオは》とマリが強く返していた。

『偶然も必然も無い、シナリオも無い・・シナリオは自分で書く。了解、マリ・・心に持って進むよ、マリの言葉を』

私はそう言って、マリの額にキスをした。
強烈な波動に怒られて、私は焦っていた、何度も何度も怒られていた。
《無理やり額にキスされたって、波動で言ってみた》とマリが二ヤで言った。
『ユリカ、誤解だよ～・・マリのジョークだよ～』と私はウルで言った。
爆笑の波動が来て、私は感じていた、マリと同調してれば波動が読める事を。

私はマリを優しく降ろして、2人で手を繋いで階段を下りた。
消えかけてる太陽が、最後の力を振り絞って、真赤に燃えていた。

夜街は南国の冬支度を始めた、待望の季節を待ちわびるように。
沙紀の世界が変わる日が迫っていた、その中心に存在するマリ。
その覚醒は、衝撃的変化を伴い舞い降りる、そして無限を提示する。
人間の可能性は無限なのだと叫ぶ、そんな小さな無限じゃないと笑い飛ばす。
マリは沙紀の為に、全ての力を曝け出す・・マリ自体も怖いはずだった。
マリは回復してるとはいえ、数年前まで臆病な自閉症と呼ばれていたのだ。

しかしマリが女性達に見せるのは、沙紀の恐怖の根源だった。
それは普通の感性の人間が持つ、【突き詰めれば死の恐怖】などの単純な物ではなかった。
複雑なパズルのピースを集めて、それを組み込んで完成させないといけない。
沙紀の心に強くある、世の中に対する不信感、人間に対する恐怖感。
答えなど無い、しかし前に進むには完成させないといけない。

沙紀の世界が迫ってくる日が近づいていた、全員がその答えを探す。
その行為により、全ての女性が次の段階に上がった。

私は消えかける太陽を見ていた、マリもその光を見ていた。
《明けぬ夜はない・・和尚は凄い人だよ》とマリが言った。
『そうだね・・また朝が来るんだね、どんなに拒絶しても』と暗くなる空に囁いた。

《明日が来ると思う事は、贅沢な事なんだ・・私は今日、この時しか考えない》

マリが同調で言った、それが強い言葉で響いた、あの恋が浦のヒトミの声で。

私はマリの横顔を見ていた、不思議な輝きに満ちていた。

マリには迷いが無い、元々迷う事を知らない・・自分に従う人間なんだ。

私はそう思っていた、マリの横顔を見ながら・・・。

【沙紀？】

淋しいと言われると、切なくなる。
愛してると言われると、かまえてしまう。
だから手を繋ごう、それが一番伝えられるから。
言葉では無理だから・・その心を伝える事が、出来ないから。

私がマリとＴＶルームに戻ると、リアンと魅宴の３人が帰っていて。
ミチルにホノカとマユとセリカが来て、絵を見ていた。
セリカが流星の微笑でマリに近づいた、マリはセリカの瞳を見て。
セリカに抱きついて、スリスリしながら流星を見ていた。

「ユリカ姉さんに何をした？・・正直に述べよ」と蘭が満開二ヤで言った。
『俺じゃないよ・・マリが波動で話してた』と二ヤで返した。
「それで泣いたり笑ったりしてたのですね、ユリカ」とユリさんが薔薇二ヤで言った。
「はい・・嬉しくて・・明後日お泊りＯＫよ、美由紀と蘭とシズカと・・マリちゃんは」とユリカが爽やか二ヤで言った。
「明後日なの？」とミチルが驚いて言った。

『うん・・明後日の深夜だよ、多分日付が変わってから』と私が真顔で返した。
「ふ～・・必ず入るよ、沙紀・・最高のプレゼントのお返しだからね」とホノカが絵に向かって言った。

シズカが笑顔で立って、女性達に挨拶して、マリも頭を下げていた。
私は通りまで２人を送って、手を振って見送った。

夜街はすっかり暗くなり、呼び込みさんも気合が入っていた。
西風が強く、少し寒さを感じていた、行きかう人も足早に目的地を目指していた。
一番外のパチンコ屋が、気の早いクリスマスツリーを出していた。
子供達がそれを見ながら、笑顔で母親に甘えていた。

私にはマリの言葉が響いていた、シナリオは自分で書けと言った言葉が。
「どうしたのかな～・・黄昏てるの？」と美冬に腕を組まれた。
美冬の後ろに、千秋と千夏に笑顔で立っていた。

私は裏階段を上りながら、沙紀の話をした。
それを聞いて3人は駆け上がった、私はそれを見送って、裏ドアの踊り場から夜街を見ていた。

「自信がないの？・・それとも怖いの？」と私に横に密着して、手を繋ぎホノカが言った。

『自信とか最初から無いよ、俺は理想を追うんだ・・沙紀に対する俺の理想を。
それが沙紀に良い事なのかは、俺には分からない。
思い通りにはいかないし、人はそれぞれだから・・強制はしない。
ただ・・沙紀に楽しんで欲しい、人生を楽しんで欲しいんだ。
挫折も失恋も感じて欲しい、そこから目を逸らさないで・・次に向かって欲しい。
俺が伝達を手に入れた意味は、それだけなんだと思う。
楽しみを伝えたい・・たとえ傷ついても、その中に楽しい事もあるんだって。
俺は臆病なんだよ、ホノカ・・俺は怖いんだ。
沙紀から、由美子から・・淋しいとか、辛いとか、悲しいとか伝

えられるのが。
どうしてと問われるのが・・俺は怖いんだ、答えを持ってないから。
どうして、私なの？・・そう問われるのが、俺は怖い。
ヒトミは一度もそれを問わなかった、答えが無いと知っていたから。
俺の中にその答えが無いと、知っていたから・・俺は答えを探したよ。
そして俺のやるべき事を見つけた・・それが楽しいを提案する事なんだ。
俺は絶対に諦めない・・まだあの問いかけの答えを、見つけていないから。
それまでは、楽しいを提案していく・・それしか出来ないから。
俺はね、ホノカ・・いつか自分を許してやりたいんだ。
何も出来なかった自分を、許して・・そして好きになりたいんだよ。
だから命と向き合う・・それだけが、答えに続く道だからね』

私は強く握ってるホノカの左手に、言葉と温度で強く伝えた。
私には憧れの存在のホノカ、その強くしなやかな心に伝えた。

「どこまでも上がろうよ、エース・・折角生れ落ちたんだ。
この星に、この時代に、この世界に、この国に、この街に生まれたんだ。
それだけが事実だよ、そして真実は生き方で作るんだろ。
人の感情まで含めて、完成する世界・・それが真実の世界だろ。
伝えよう、正直に・・沙紀に伝えようね。
泣いて、叫んで、怒って・・そして笑って伝えようね。
それしか出来ないんじゃないよ・・それが出来るんだろ。
私はエースが好き・・いつでも楽しいを追いかけるから。

楽しいを提案してくれるから・・悲しいときには、素直に泣いてくれるから。
エースは生身の人間だと、伝えてくれるから。
だから連れて行ってね、何度でも行くから・・必ず正直に答えるから。
私はこの世界で・・この時代で良かったと、今は心から言えるよ」

ホノカは強く言って、私の頬にキスをしてくれた。
「さぁ・・やるよ、必ず殲滅して・・沙紀に笑顔を見せてやる」とホノカが言って、手を離した。
『サンキュー、ホノカ・・ぶっ壊せよ』と振り向いてホノカを見た。
「知ってるでしょ・・私は超好戦的よ」と華麗に微笑んで、階段を下りて行った。
私はホノカを見送っていた、裏ドアが開いてユリカが出てきた。

ゆっくりと私に近づいて、強く抱きしめてくれた。
「さすがホノカだね・・私はこうするだけで済んだよ」とユリカが爽やか二ヤで言った。
『ありがとう、ユリカ・・一丁やりますか』と笑顔で返した。
「楽しみなんだよ〜・・今回は入れるからね、でも通信係はいらないの？」と微笑んだ。
『今回は指令本部に、律子通信係を用意しましょう』とニアで返した。
「なるほどね〜・・完璧に準備するんだね〜」と爽やか笑顔で言って、手を繋いだ。
私はユリカを通りで見送って、迷いが消えていた。

その時に映像で見ていた、沙紀が楽しそうな笑顔で駆けて来た。
私は屈んで、両手を広げて笑顔で叫んだ。
『沙紀、おいで』と叫んでいた。

私は気分爽快でスキップを踏みながら、足早にＰＧに戻った。
ＴＶルームでは女性達が食事をしていた、四季とツインズと久美子が来ていて、沙紀の絵を見ていた。
『またまた、入れない人々が絵を見て』とニヤで言った。
「今度こそ入るよ、高所恐怖症だから・・この前は魚だったけど」とウミがウルで言った。
「素敵な絵を貰ったんだから、絶対入るよ」と千夏が笑顔で言った。
私が４人娘の側に座ると、ミサが膝に乗ってきた。
『どうした、ミサ・・何のおねだりかな？』と笑顔で言った。
「夜遅くなんでしょ？・・ミサ、起きたら駄目かな～」と寂しそうに言った。
『そうだな～・・早く、今ぐらいに寝れば良いよ・・お母さんには俺が言っとくから』と優しく言った。
「ありがとう、早く寝ま～す」とミサが笑顔で言って、レイカも頷いていた。

「エース・・私も病院に連れてってね、２枚も貰っちゃって」と久美子が微笑んだ。
『もちろん、ミホも沙紀も待ってるよ・・由美子もね』と笑顔で返した。
「ありがとう、楽しみだ～」と久美子が笑顔で言った。
久美子の自然な姿に、私は感心していた、高い段階まで到達した１６歳を見て。

その日もＰＧは大盛況で、満席記録を更新した。
終了後、蘭と腕を組んで帰り、添い寝して眠った。
翌日、美由紀と登校して、ご機嫌で美由紀に、洋子先生の事情聴取を受けた。

私は宇宙戦隊の話をして、美由紀もニヤニヤで空想していた。
授業終了後、美由紀の母親に病院まで送ってもらった。
美由紀は片腕の少女に会いに行き、私はミホの病室を目指した。
カレンとネネが４階の廊下にいて、私を見て笑顔で歩み寄った。

『ネネ・・ありがとう』と笑顔で言った。
「来たかったのよ・・カレンちゃんが、紹介してくれたよ」とネネが微笑んだ。
「沙紀ちゃん緊張してる感じだよ、よろしく」とカレンが微笑んだ。
『了解・・まぁ、今回まで緊張してもらうよ』と笑顔で返して、２人を見送った。

病室に入ると、沙紀がミホとおやつを食べていた。
私はミホのベッドに近づき、笑顔で２人を見た。
沙紀は私にポッキーを差し出して、私は笑顔で食べていた。
ミホが沙紀を見る目が優しくて、私は嬉しかった、ミホも感じてると思っていた。

沙紀が検診で千夏が呼びに来て、私は沙紀を送り出し、ミホの手を握った。
『分かってるよ、ミホ・・沙紀は大丈夫だよ・・久美子が近い内に、ミホに会いに来るよ』と伝えた。
その時、ミホの温度が微かに揺れた、私は嬉しくてミホを見ていた。
私にはそれで良かった、その薄皮をゆっくりとめくるような変化だけで。
私はミホに沙紀の世界の話をして、女性達の侵入の仕方まで話した。
そしてミホの額に手を当てて、優しくベッドに寝かせた。

それから由美子に会いに行った、由美子の病室に哲夫がいた。
私は哲夫と交代して、由美子にも沙紀の世界の話をした。

《沙紀ちゃん、大丈夫なの？》と由美子が心配そうに返してきた。
『大丈夫だよ、由美子・・由美子も沙紀を応援しててね』と笑顔で返して、由美子にお休みをした。
哲夫と病室を出て長椅子に座り、沙紀の話を詳しくした。

「了解・・遠隔で入ってみせるよ、リンダさんなんて、海外から入ったんだから」と哲夫が笑顔で言った。
『よろしくな、哲夫・・正義の味方で男はお前だけだぞ・・４人娘を頼む』と笑顔で返して。哲夫を見送った。
沙紀が病室に戻っていて、私は沙紀の手を握った、確かに少し緊張してるようだった。

『沙紀・・どうしたの、緊張してるの？』と二ヤで聞いた。
《違うよ、ワクワクだよ、楽しみなの》と沙紀が返してきた。
『そっか～・・ワクワクか～、素敵な戦士に言っとくよ・・嬉しいが出るよ』と笑顔で返した。
《うん、はい、エミちゃんに》とスケッチブックを出した。
私は受け取り、開いて見た。

そこには輸送用軍用機より太目の飛行機が、発射台に備え付けられ、天空に頭を向けていた。
その真後ろに平和台の平和の塔が描かれていて、空は快晴の秋空だった。
飛行機は真っ赤な機体に、ミサイルを主翼の下に備え。
尾翼にゴールドのハートのマークがあり、可愛い戦闘機という感じだった。
それを見上げるように、美しい戦士の後姿が描かれていた。
その中に、４人の少女と哲夫らしき小さな背中もあった。
女性の数は２０人を超え、私は自然に二ヤを出していた。
沙紀は、より鮮明なイメージを作る為に、この絵を描いたのだと思

い。
その力の強さを感じていた、エミのイメージを読む不思議な力を。
ユリカの優しい波動が来て、沙紀は波動を感じてるように前を向いていた。

『沙紀、ありがとう・・エミの嬉しいが出るよ』と笑顔で言った。
《うん、カレンちゃんとネネちゃん描くね、ネネちゃんも可愛いね》と返してきた。
私はスケッチブックから、絵を切り離してケースに入れた。
絵を描き始めた沙紀に、さよならして病院を出た。

廊下に出るとユリさんが立っていた、私は笑顔で歩み寄った。
「行きましょうか」よユリさんが薔薇で微笑んだ。
『行ってみますか、愛しのリンに会いに』と笑顔で返した。

Zに乗ると橋を渡り、大塚の方向に向かった。
『どんな子を相手にすれば、あのベテラン先生が迷うのかな～』と笑顔で言ってみた。

「あなたなら、良くあるパターンかもしれませんが。
表情も無く、言葉も出ないそうです・・４歳らしいです。
リンは今、保育園に勤めています・・だから母親も昼間仕事してるようで。
母親も心配して、病院の検査を受けたんですが・・原因不明らしいです。
暫らく様子を見ようとなってるそうです、友達も出来ず・・いつも一人ぼっち。
ご飯もトイレも問題無いし、平仮名はほとんど覚えてるそうです。
だから知能的にも、他の子より良いぐらいで、問題ないんだそうです。

ただ表情も表現も言葉も無い、その原因も分からないらしいです」

ユリさんの前を見る目が真剣で、私も静かに聞いていた。
ユリさんの約束した時間より15分早く着いて、保育園の正面の空き地に車を停めた。
私は保育園の園庭を見ていた、鉄柵にもたれて道路を寂しげに見てる、少女を見ていた。
その瞳が悲しみに溢れていて、私は心が締め付けられた。
『ユリさん、時間になったら先に入っていて下さい』と言って車を降りた。

私はゆっくりと少女の瞳を見ながら近づいた、少女は私に気付いたが逃げる気配は無かった。
私は出来るだけ優しい笑顔で近付いた、私は震えていた。
こんな幼い少女が、これ程に悲しむ事が有るのかと思っていた。
施設の幼い少女でも、こんな悲しい瞳を見た事は無かった。

《親の死より深い悲しみって・・そんな物が有るのか?》
私は思わず心で言ってしまって、しまったと思っていた。
ユリカの驚きの強烈な波動が来た。
《ユリカごめん・・後で話すね》と囁いて、波動を確認した。

私と少女の距離は1mほどになり、私は止まって少女に笑顔を向けた。
瞳では必死に【怖くないよ、何もしないよ、お友達になりたいんだ】と繰り返していた。
少女は警戒の雰囲気を崩さなかった、私はそれで少し分かって、強烈な怒りが沸いていた。
《こんな小さな少女に、誰が暴力ふるうんだ!》と強く心で叫んだ、ユリカに聞いてもらいたくて。

強烈な強く熱い波動が何度も来て、私の後ろから少女の方に吹き抜けた。

その時、一瞬少女の表情が変化した、少し警戒が取れた。
私は３０ｃｍに近付いて、屈んで少女に笑顔で手を出した。
少女が握るまで、私は笑顔で瞳で伝えていた。
ユリカの優しい波動が続いていた、少女は私の手を見ていた。
《ユリカ・・優しい波動で、この子の背中を押して、波動を感じてるから》と心で囁いた。
ユリカの強く優しく暖かい波動が、少女の背中の方から来た。

それに押されるように、少女が私の手を握った。
私は驚愕していた、その悲しみの深さに、そしてその原因を少し感じていた。

『頑張ったんだね・・もう良いんだよ、もう大丈夫・・俺が守ってやるから。
必ずママに気付かせるね・・ママは君の事を、好きに決まってるよ。
そんな心配をしなく良いんだよ・・もう良いんだよ。
おいで・・抱っこしてあげるから』

言葉と温度で優しく伝えて立ち上がり、低い鉄柵越しに手を伸ばした。
その時、ユリカの強烈で優しい波動が来て、少女は私に手を伸ばした。
私は抱き上げて、少女を抱きしめた・・その時に少女が叫びながら泣いた。
私は優しく抱きしめて、少女の涙を私の上着で拭いていた。

『いっぱい泣いて良いよ・・沢山泣くんだよ』と耳元に囁いた。
ユリさんが慌てて駆け寄って、ハンカチで涙を拭いていた。
秋の早い夕暮れが迫って来ていた、肌寒さも感じずに、私は怒りで震えていた。
生目神社の方向から、西風が吹いてきた、少女の涙を払うように。

私は園庭の先に立ち尽くす、洋子先生を見ていた、多分・・睨んでいた。
洋子先生の少し後ろに、若い女性の保母と、園長らしき初老の女性が立っていた。
沢山の園児の笑顔の中に、洋子先生の直向な瞳が私を見ていた。
私は瞳で伝えた、《そうじゃない》と強く伝えていた。
それを受けて、洋子先生か駆け出した、私に・・いや少女に向かって。

私は少女から、ずっと強烈に伝えられていた。
《ママに嫌われたくない・・良い子になる》と連呼されていた。
その伝達が強過ぎて、私は足の震えを止められなかった。
洋子先生の距離は２０ｍ位だっただろう、全力疾走だっただろう。
だが私はスローモションで見ていた、その瞳を読み取っていた。

「安奈ちゃん、ごめんね・・先生何も分かってなかったね」と洋子先生が潤む瞳で安奈に言った。
『安奈って言うの、可愛いね・・どうしようか、洋子先生許してあげる？』と安奈の手を握って笑顔で伝えた。

安奈は涙を流していたが、洋子先生を見て、小さく頷いた。
それを見て、洋子先生は屈んで号泣した。
強烈な優しく暖かい波動が、何度も何度も来て、安奈とリンを包んでいた。

若い保母が駆け寄って、洋子先生の肩を抱いた、その後ろから園長が笑顔で来た。

「ユリさんですね、お待ちしてました・・どうぞ」と園長がユリさんを見て、私に微笑んだ。
私は安奈を抱いたまま、ユリさんと正門に歩いた。
洋子先生は、若い保母と園長と歩いていた。

『安奈・・約束して、俺が必ずママに伝えるから・・安奈はママって呼んであげてね』と笑顔で言った。
安奈は私を見ていた、そして可愛い笑顔を出して。
「うん」と可愛い声で言って、頷いた。
ユリさんは安奈を見ていた、優しい薔薇の笑顔で包んでいた。

私達は園長室に通された、私は園長室の前で安奈に微笑んだ。
『安奈・・少しお話してくるから、可愛い先生と遊んでてね』と温度と言葉で伝えた。
「うん」と安奈は可愛い声で返してくれた。
園長と洋子先生と若い保母の凍結を二ヤで見て、若い保母に安奈を渡した。
私は笑顔で安奈に手を振った、安奈も可愛い笑顔で小さく手を振った。

私とユリさんは、園長室の応接室に通されて、挨拶をしてソファーに座った。
「ずばり聞いて良いのかしら?・・安奈の原因を」と園長が真顔で言った。

『安奈は暴力的虐待を受けてます・・それを我慢していた。
それはママに嫌われたくないからです・・いますね、安奈を虐待

する人間が。
母親は、まだ迎えに来ないんですか？・・安奈は限界ギリギリですよ。
言葉も表情も、封印していたんです・・怒られる原因でしかないから。
立場上、園長先生や洋子先生じゃ手を出せませんよね、でも俺は潰しに行きます。
安奈と約束しましたから・・俺は洋子先生は知ってますが。
小児病棟や施設の子供達と、触れ合ってきました。
だが、安奈のような悲しみには、初めて会った。
両親の死よりも、辛いんです・・母親に嫌われるというのは。

洋子・・らしくないぞ、どうして分からない。
あの子はサインを出してたよ、必死にサインを出してたよ。
鈍ったのか、洋子・・冷めてるのか、洋子。
俺の初恋をどうしてくれるだ、洋子・・どうして心と向き合わないんだ、洋子。
あの頃のように、どうして向き合わないんだ、洋子。
忘れたのか、洋子・・ヒトミを忘れたのか、洋子。
洋子・・チサを忘れたのか・・あのクリスマスの夜空を。
夜空を見上げて、涙を堪えたのを・・忘れたのか・・洋子』

私は向かいに座る、洋子先生の手の上に手を乗せて、全ての伝達で強く伝えた。
ミホと沙紀と由美子の想いも乗せて、ヒトミとチサの言葉も乗せて。
最強の波動が強烈に後押ししてくれた、洋子先生は強い瞳で私を見ていた。
「小僧・・ごめんね、私は大切な事を忘れていたね」と洋子先生が言った。

『洋子先生・・罰として、明日徹夜覚悟でＰＧに来て・・大切な事を思い出させるから』と笑顔で言った。
「ありがとう・・必ず行くね」と洋子先生も笑顔になった。
その時、園長室のドアがノックされた、園長が出て招き入れた。
まだ若い女性が入ってきた、少し疲れた表情が印象的だった。
洋子先生は分かってるらしく、その女性を私の前に座らせた。

「安奈ちゃんの、お母さんです」と洋子先生が紹介した。
「あなたですね、ありがとう・・安奈の表情を見て、嬉しかった」と母親が笑顔で言った。

『お母さん、冗談言ったらいけません・・根本的問題は解決してません。
安奈は誰かに暴力的虐待を受けてます、その相手とお母さんが手が切れないなら。
俺はその相手を潰しに行きます、そうしないと・・安奈は駄目になる。
可愛い安奈は・・虐待を受けても、ひたすら我慢した。
それはママに嫌われたくないからです、その為に表情も言葉も封印した。
誰なんですか？・・その虐待してる相手は。
言わなくても、俺は探し出す・・それが俺と安奈の約束ですから。
あなたは、その人間と安奈を、天秤にかけられるんですか？
どうなんです・・相手は誰ですか？・・お母さん』

私は真顔で強く言葉にした、母親の動揺した顔を見ながら。
「安奈にも、暴力を振るっていたんですか！」と母親が叫んだ。
『間違いないです・・あなたが暴力に耐えてるから、安奈もそうしたんだす』と真顔で返した。

「内縁の夫というか、離婚して知り合った男です・・私にも暴力を振るいます。
付き合ってる時は優しくて、私の前では・・安奈にも優しくて。
暴力が怖くて、別れたいと思ってるんですが。
その相手は土建屋で、怖い系の友達も多くて。
逃げたらどうなるか、分かってるなって・・脅されています。
私の事を愛しているとは思いません、でも・・怖くて。
警察なんかに相談しても、恐怖を背負って生きなければと・・そう思ってしまって。
ここまで来てしまいました・・でも、安奈への暴力は絶対許せません。
どんな事をしても、今日・・別れます」

母親は両手の拳を強く握り、私を見ながら強く言った。
『了解・・何時に帰ってきます？・・大丈夫です、俺に任せてもらいます』と笑顔で言った。
「えっ！・・でも、やくざ相手になるかもしれませんよ？」と母親が驚いて言った。
「大丈夫ですよ、やくざ相手なら・・信じて下さい」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
『洋子先生、安奈を連れてきて・・ユリさん、安奈をＴＶルームで頼みます』と笑顔で言った。
洋子先生が笑顔で頷いて、ユリさんも薔薇で頷いた。

『お母さん・・安奈の不安を外してね、愛してると伝えて』と笑顔で言った、母親が真顔で頷いた。
安奈が洋子先生に抱かれて入ってきた、母親が立ち上がり手を伸ばした。
安奈も笑顔で手を伸ばした、母親も笑顔になって抱きしめた。

「安奈、ごめんね・・ママが馬鹿だったね。
安奈・・ママは安奈が一番大切だよ、安奈が一番好きだよ。
誰よりも、安奈が好き・・だからこれからは、２人で暮らそうね。
安奈・・もう怖くないよ、２人だから・・ママが側にいるから。
ごめんね・・安奈・・ママは安奈が大好きだよ」

母親は泣きながら優しく伝えた、安奈は可愛い笑顔になった。
「うん・・ママ」と可愛い声で、母親の耳元に囁いた。
母親は大粒の涙を流しながら、安奈を強く抱きしめた。
ユリさんが安奈にハンカチを渡した、安奈は母親の涙を優しく拭いていた。
強く優しい波動が、何度も何度も来て、二人を包んでいた。
園長も洋子先生もユリさんも泣いていた。

「ありがとう・・そしてごめんね、小僧」と洋子先生が私の耳元に言った。
『仕方ないな～、今回だけ許すよ・・リン』と私も耳元に囁いた、洋子先生が美しく微笑んだ。
リンの片鱗を見せた、その笑顔を見ていた。

私は安奈にお友達がいるから、ユリさんと一緒に行って待っててと伝えた。
安奈は笑顔でユリさんに抱かれて、嬉しそうにZに乗って行った。
私は母親と洋子先生と、笑顔で手を振って見送った。

「旦那・・帰り遅いよ、どうするの？」と母親が言った。
『会社に行こうよ・・こっちがこそこそしなくて良いでしょ』と二ヤで返した。
「何か・・凄く期待しちゃうね～、行こう」と母親が言った。
『リン・・明日、待ってるね』と二ヤで言って、笑顔の洋子先生と

別れた。
旦那の建設会社は小さな会社で、雰囲気から危険な感じが漂っていた。
私は母親と事務所に入った、事務員以外はいかつい集団だった。
「ご用件は？」と事務員が私に言った。
『４歳の少女に暴力を振るう、馬鹿な男を潰しに来た』と奥に叫んだ。
事務所が静寂に包まれて、一人の男が慌てて出てきた。

「まさみ、てめーどういう事だ！」とその男が激しく言った。
『お前か～・・安奈に暴力を振るったのは』と私は男の腕を掴んだ。
「ガキ・・怪我するぞ、引っ込めや」と私の腕を振りほどいた。
若い男が５人出てきて、私を取り囲んだ。

『マサミちゃん・・面倒だから、一気にやっちゃって良いですか？』と母親に二ヤで言った。
「遠慮無く、どうぞ」と母親が二ヤで返した。
『おい・・どっちが良い、海竜と望月と』と私は真顔で男に言った。
「お前、そんな名前出したら、ただじゃ済まんぞ」と男が動揺を隠して言った。
『良いから選べよ・・どっちが良いんだ？』と真顔で返した。
静寂が支配していた、私を男達が見ていた。

「そこまでにせんと、この会社・・無くなるぞ」と奥から大きな声がした。
私が声の方を見ると、親父の昔の仕事仲間の、マサという爺さんが笑っていた。

『マサ爺・・ここの社長なの、どうりで危ない訳だね～』と私は二

ヤで言った。
「真っ当な会社だよ・・まぁこっち来いよ」とマサ爺が笑顔で手招きした。
私は母親と手を繋いで、奥のソファーに座った。

「お前ら、そこに並べや」とマサ爺が怒鳴った。
６人の男が慌てて整列した、マサ爺は厳しい目で６人を見ていた。

「このガキが小僧じゃ・・勝也の息子だよ。
望月にも海竜にも、大きな貸しを持つ男や。
お前らみたいな、チンピラとうわべだけで付き合ってるの違う。
お前らが束になっても敵わん、覚悟が違うからな。
４歳の少女に手を上げたのは、本当の事か・・正直に言えよ。
後で嘘と分かったら、この小僧が追い回すぞ・・どうなんだ？」

マサ爺の強い言葉で、旦那は考えていた。
『ねぇ・・安奈は今日、言葉が出たよ・・正直にね・・刑務所に行くかどうかの、瀬戸際だよ』と二ヤで言った。
「少し・・やりました」と静かに言った、静寂が支配した。

「どうするね？・・小僧」とマサ爺が言った。

『絶対条件として、２度と２人に近付かない。
それを破ったら、徹底的に追い回すから・・地の果てまでも。
そして、安奈に慰謝料として・・毎月５万振り込んで。
今から１６年間・・安奈が２０歳になるまで。
だからマサ爺は、今回の事で、会社的に処分しないでね。

考えろよ・・４歳の少女だぞ、それが表情も言葉も出さなかった。
どれほどの恐怖だったんだ、それと同じ恐怖を味あわせたい。

俺の本音はそうだよ・・でもやめとく、あんたら6人を見たら。
そんな事は馬鹿げてると思った・・俺の姿、街で見たら逃げろよ。
次会ったら、俺は何をするか分からんよ・・その6人。
子供を虐待した人間に付いた、5人・・全員覚えたから。
あんたらに、何か不幸な事があったら・・今日の事を思い出せよ。
当然の報いだと・・そう受け止めろよ』

私は6人を見て真顔で言った、6人はただ俯いていた。
その姿は萎縮してるだけで、悔しさすら無かった・・私はそれが悔しかった。

「それで良いな？・・良い条件だぞ」とマサ爺が言った。
「はい・・必ず守ります」と男が答えた。
『ありがとう、マサ爺・・今度、勝也と飲みに来てね』と笑顔で言って立ち上がった。
「必ず行くよ・・サービスしろよ」とシワシワ二ヤを出した。
『任せなさい・・明日事務員さんに、銀行口座連絡するから・・給料引きでよろしく』とマサ爺に二ヤで言った。
「了解・・万事抜かり無しだな、さすが小僧だよ」と笑ったマサ爺に頭を下げて、事務所を出た。

私はすっかり暗くなった空を、母親と手を繋ぎ見ていた。

「今のＢＧＭは、上を向いて歩こうだね」と母親が夜空に言った。

『見上げてごらん、夜の星を・・だよ』と夜空に言った。

母親の穏やかな温度と、優しい波動に包まれていた。

私には、安奈の深い悲しみの瞳が、夜空に映っていた・・。

【沙紀？】

出会った瞬間には意味が無い、その次の瞬間に意味を付ける。
それが出来れば、楽しい事が動き出す。

渋滞の大通りを、母親の車がすり抜けて。
赤玉駐車場に入れてＰＧに向かった、母親は笑顔で昔話をしていた。

『それで、どこに勤めてたの？』と二ヤで聞いた。
「クラブ○○○だよ、人気有ったんだからね～」と二ヤで返された。
私は母親を見ながら、疲れが取れれば、綺麗だろうな～と思っていた。

『そっか～・・ドン小林の、お店だったのか～』と笑顔で返した。
「ほほ～・・本人に対しても、そう呼ぶのかな？」と母親が二ヤで返された。
『当然』と二ヤで返した。
「でも、まさかあの人が・・ＰＧのユリさんだとは思わなかった・・綺麗な人だと思ったけど」と母親が嬉しそうな笑顔で言った。

『俺ね、夜の女性の派遣をやってるんだよ。
仕事で困ったら、連絡してね・・あなたなら、是非欲しいから。
安奈は今から行けば分かるけど、お友達がいる安全な場所があるから。
派遣だから、時間的にも自由だし・・休みも確保出来るから。
その時は、選択肢に入れてね・・よろしく』

私は手を繋ぐ母親に、笑顔で伝えた。

「嬉しいね～・・もう少しして、安奈が安定したら。
自然に笑顔が出るようになったら、あなたの側にいさせるかな。
今の仕事、残業多いし・・その割りに、収入少ないし。
あの５万は、貯金したいの・・安奈が好きな事を目指す時の為にね。
真剣に考えるよ・・その時はよろしく」

母親は嬉しそうな笑顔で言った、私も笑顔で頷いて裏階段を登った。
ＴＶルームを覗くと、マダムと松さんだけだった。
母親を紹介すると、松さんは知り合いらしく、母親は2人に笑顔で挨拶した。
私は母親を連れて、フロアー裏に向かった、４人娘が安奈を連れていた。
エミが強く笑顔の安奈の手を握って、久美子の演奏を聞かせていた。

私は母親を指定席に座らせて、その光景を見せていた。
母親は楽しそうな安奈を見て、本当に嬉しそうな笑顔だった。

久美子は安奈に微笑んで、最後の曲を弾いた。
強い音色が響いて、安奈の復活を祝福してるようだった。
安奈は久美子を見ていた、強い魂の音色に包まれながら。
久美子は強く優しく弾いた、腰を浮かせて安奈を見ていた。
最後に歓喜を表現して、安奈に笑顔を向けた。

安奈は久美子に駆け寄った、久美子は笑顔で抱き上げた。
女性達が大きな拍手を贈って、母親は俯いて泣いていた。
安奈は嬉しそうに、美しい女性達を見ていた。

その時、銀の扉が開き、純白のドレスのユリさんが現れた。

母親はその姿を見ていた、ユリさんは神聖な場所に、美しい姿勢で深々と頭を下げた。
そして母親に気付いて、歩み寄って薔薇で微笑んだ。

「上手くいったみたいですね？」と薔薇の微笑で、母親に言った。
「ありがとうございます、全て終わりました」と母親も微笑んで、深々と頭を下げた。

「たまには、安奈ちゃんと遊びに来て下さい。
それとも、もうエースがスカウトしましたか？
私はいつでも良いですよ・・あなたなら、すぐにでも。
このフロアーは、あなたを待っていますね」

ユリさんはそう言って、薔薇の微笑を残して、フロアーに歩いた。
母親は嬉しそうな笑顔で、美しい背中を見送った、安奈がエミに連れられて来た。
母親は笑顔で抱き上げた、安奈も嬉しそうな笑顔で抱かれていた。

「私は今日経験しました・・春雨の叫びを。
本当に強く熱く心に響きました、言われた本人にどれほど響いたのか。
私の大好きな、マキの言葉の意味を感じました。
想像するのが、失礼な事だと感じると言った・・マキの言葉を。
今日のエースの叫びで、私もそう感じました。
エースは一瞬で悲しみを理解した、そして解決の道を作った。
その覚悟を瞬時に出来た、出会ったばかりの少女を・・強く愛してみせた。
その少女の笑顔の為に、全ての伝達を使ってみせました。
私達も見せましょう、この場所で培った経験で・・その誇りに賭けて。

強く伝えてみせましょう・・私達の想いを表現しましょう。
それを出来るようになれた、この場所に感謝して。
誰もが問題を抱えています、悩みも後悔もあるでしょう。
それも全て背負って、強く叫んで届けましょう・・私達の方法で。
あの春雨の叫びを想って・・どんなに難しくとも諦めない。
楽しいに全てを賭ける・・あの少年のように。
明日の終了後、見せましょう・・ニヤニヤで笑う少年に。
ウルを出させて、泣かせましょう・・出来ますね？」

ユリさんが強く言って、最後に薔薇二ヤを出した。
「はい」と全員で強く返して、全員が二ヤを出していた。
ユリカの強い二ヤの波動が来た。
私はウルを出してマリアを抱いて、母親とＴＶルームに戻った。

『安奈は、ご飯食べたのかな？』とＴＶルームに座って、５人で遊び始めた安奈に言った。
「うん」と安奈が笑顔で返してくれた。
私は母親と自分の分を注文して、久美子を見た。
『さて・・久美子、営業かけるか』と久美子に二ヤで言った。
「お願いします、付き人ちゃん」と久美子が笑顔で返してきた。

『お母さん・・安奈にピアノ習わせませんか？・・お安いですよ、講師が高校生ですから』と二ヤで言った。
「えっ！久美子ちゃんが教えてくれるの？・・それは是非お願いします」と母親が笑顔で言った。
「ありがとうございます、頑張ります・・楽譜、用意しますね」と久美子が笑顔で返した。

「ありがとう・・ねぇエース、ユリさんの言葉で、覚悟を決めたから。

近い内に派遣に入れて、そして今・・源氏名を付けて。
松さんに聞いたよ、それはあなたが担当なんでしょ？」

母親が笑顔で言った、私は二ヤで返した。
『絶対に汚せない名前を、背負う覚悟があるのなら？』と二ヤ継続で返した。
「もちろん・・その位の覚悟をしろと言う事ね」と二ヤで返された、私は真顔で頷いた。
『絶対に今日の後悔を忘れない・・常に側で感じて欲しい・・源氏名はカタカナで、アンナでどう？』と真顔で言った。
母親が沈黙して私を見ていた、少し復活したのか、美しい顔だった。

「了解・・背負うよ、今日の後悔を絶対に忘れない為にも」と真顔で返してきた。
『じゃあ、俺は基本呼び捨てだから、可愛い方には【ちゃん】を付けるよ』と二ヤで返した。
「可愛い方は、私じゃないのね」とウルで返された。
『そうだよ・・アンナ』と笑顔で返した。
アンナが笑って、私も笑った、マダムと松さんの笑顔が優しかった。

アンナは派遣の中核をなす、その接客は見事だった。
落ち着いた雰囲気を醸し出し、明るい雰囲気で人気があった。
アンナはこの時２９歳、リアン・ユリカの１つ上だった。
ゴールドの千鶴が、アンナの空いてる時は、全てゴールドに投入してと言ってきた。
アンナは若い世代を可愛がった、若い女性達の良き相談相手になった。

そしてマリアの４人目の姉になった安奈、不思議な感性の少女だった。

明るく屈託無く笑い、それでいて確信を突く事をいきなり言う。
その観察力と運動神経に惹かれて、私は安奈に挑戦をさせ続けた。
安奈はそれを全て楽しんで成長した、安奈は１８歳でプロサーファーになった。
現在は競技を引退したが、今でも美しいハワイの住人である。
女プロサーファーなど、ほとんど認知されてない時代である。
安奈はあの男が支払った慰謝料、７００万を握り締めて、世界の海を転戦した。
その勇気ある挑戦の背中を、私は強く押した。

初の海外遠征を決意した、安奈を見送りに行った。
成田空港で探していると、安奈は搭乗口の鉄柵にもたれていた。
私は静かに笑顔で忍び寄った、安奈は黙って私を見ていた。
私は３０ｃｍ手前で、手を出した・・美しく成長した安奈は、真顔で握った。
そして号泣した・・私は本当に嬉しかった、安奈の感謝の熱が伝わってきた。
私にも安奈と出会った瞬間が、鮮明に蘇っていた。

『安奈・・良く頑張ったね、後は楽しめ』と鉄柵越しに抱きしめて、耳元に囁いた。
「うん・・納得出来るまでやってみるよ・・私は最後の挑戦者の、妹だから」と強く返してきた。
『笑顔で帰国するのを、待ってる・・ＧＯ、安奈』と言って、安奈を振り向かせ背中を強く押した。
安奈は強い足取りで、３歩進んで止まった。
『安奈・・振り向くなよ・・これは嬉しいだから、見せたくない』
と私は背中に向かって言った。
「うん・・私のはありがとうだから・・行って来る、兄さん」と振

り向かずに言って、前に向かって歩いた。
安奈の背中が見えなくなって、私はシオンを初めて見送った時の映像を見ていた。
《淋しくないよ、ユリカ・・俺はあの頃の、俺が好きだよ》と心に囁いた。
強く熱い波動が背中の方から吹き抜けた、翼を手に入れた少女の背中を押すように。

食事をして、私はアンナ親子を通りでタクシーに乗せた。
可愛い笑顔で安奈が手を振った、私も笑顔で手を振って見送った。
「良く出来ました、嬉しかったよ」と後ろからユリカの声がした。
『ユリカ・・俺はどこに行くんだろうね、それが知りたくなってきたよ』と振り向かずに言った。
「とりあえず、あのビルの最上階よ・・抱っこしながらね」とユリカが私の前に来て、腕を巻いた。
『準備万端だな、ユリカ・・好戦的過ぎるぞ』と二ヤで言って抱き上げた。
「ぶっ壊してやる、私は水のユリカよ・・無敵の揺り篭だよ」と爽やか二ヤで返された。

私はユリカを抱いて、通りを歩いてビルを登った。
最上階で星空を見ていた、ユリカは瞳を閉じていた。

「今のＢＧＭは・・見上げてごらん、夜の星をなの？」とユリカが爽やか笑顔で言った。
『スローバラード・・ＲＣサクセション』と二ヤで返した。
「素敵だよね～」とユリカが笑顔で言った。
その声が夜空に響いていた。

その夜も順調に推移して、満席記録を更新してＰＧは終了を迎えた。
蘭と腕を組み帰りながら、私は安奈の話をしていた。
「うん・・最高の話を前日に聞いた、明日は任せなさい・・私が最強よ」と蘭が腕を私の首に回した。
私は蘭を抱き上げて、１０号線を北に向かって歩いていた。
深夜の夜空に満点の星が瞬いて、道を照らしてくれた。

「明日、一番何に期待してるの？・・隠してるでしょ、私とユリカ姉さんにだけ教えて」と蘭が満開二ヤで言った。
『蘭・・沙紀の描いた、宇宙船の絵を見た・・ヨーコには見せられないやつ』と二ヤで言った。
沙紀の宇宙船の絵には、女性達の後姿の中に、青猫らしき後姿があったのだ。

「もちろん見たよ・・ヨーコには、絶対に見せれないのでしょ」と満開二ヤで返してきた。
『あの絵で・・子供を抱いてる後姿が有ったよね、あれだよ』と笑顔で返した。
「えっ！・・あれはマリアを抱いた、ユリ姉さんでしょ？」と蘭が言った。
その時に、強烈な感動の波動が来た。
『さすが、ユリカ・・早いな～』と蘭に二ヤで言った。
「えっ！・・何、何なの？」と蘭が満開ウルで言った。

『良く思い出して・・４人娘は手を繋いでたよ、マリアもね』と笑顔で返した。
「じゃあ、あの子は誰なの？」と蘭が真顔で言った。
『蘭・・絶対にお返しに来るんだよ、俺は状況の説明を今日したんだ・・あれは、由美子だよ』と真顔で言った。

蘭は大粒の涙を流して、私にしがみついた。
「そうなんだ・・北斗姉さん、感動するね・・由美子を抱けて」と蘭が泣きながら言った。
『そうだね・・多分、その為に・・マリは入るんだよ』と静かに言った。
「マリちゃん・・素敵すぎるよ」と蘭が嬉しそうに微笑んだ。
私は蘭の涙が乾くように、アパートまで歩いた、波動に背中を押されながら。
熱の少し高い蘭を抱きしめて、眠りに落ちた、安奈の悲しい瞳が何度も蘇っていた。

翌朝、美由紀のお泊りセットを持って登校しながら。
青猫の背中の話をしたら、美由紀は爆笑していた。
そして安奈の話をして、私はヨチヨチしてもらっていた。
教室に入ると、沙織が二ヤ顔で寄ってきた。

「今度は何かな～・・その異常な2人？」と私と美由紀に二ヤ継続で言った。
「今日、悪者を撲滅してくる・・宇宙で」と美由紀が二ヤで返した。
「良いな～・・楽しそうだ、次は私も誘ってね」と沙織が微笑んで、私は二ヤで頷いた。
清次郎が来て、朝の訓示を述べていた。

「小僧・・今回の武器は何だ？」と清次郎が教壇から言った。
『チームワーク・・信頼関係が武器です』と立って真顔で返した。
「なるほどね、結果を報告するように・・宿題だよ」と清次郎が笑顔で言った。
『納得いく結果を報告します・・お楽しみに』と笑顔で返して座った。

学校が終了して、ユリカが迎えに来ていた。
３人でユリカのマンションに行って、シャワーを浴びて病院に行った。
美由紀が片腕の少女に会いに行き、私はユリカと別れて、由美子の病室に行った。
由美子の穏やかな熱と、心の集中感じて、必ず由美子は来ると思っていた。
ユリカと交代して病室を出て、私は沙紀の手を握った。

『沙紀、今日もご機嫌ですね』と笑顔で言った。
《うん、小僧ちゃんは、沙紀の側にいてくれるんでしょ？》と返してきた。
『もちろん、ずっと側にいるから・・２人で見ようね、強い戦士の生き方を』と優しく伝えた。
《うん、ありがとう》と沙紀が強く返してきた。

沙紀が絵を描きだして、私はミホの手を握った。
ミホの集中を感じて、私は無表情のミホを見ていた。
ミホは窓の外の空を見ていた、その横顔が意志を示してるようで、私は嬉しかった。
ミホを寝かせて廊下に出ると、ユリカが反対から歩いてきた。
美由紀もエレベーターから降りてきた、その顔が集中していて輝いた。

《片腕の少女も、近いんだな・・頑張れ、美由紀》と心で囁いた。
ユリカが爽やか笑顔で美由紀の後ろに付いて、３人でエレベーターに乗った。

ＰＧに入ると、フロアーが女性達で溢れていた。

全員で沙紀の2枚の絵を見ていた、宇宙船の絵は下の後姿の部分が、紙で隠されていた。
隠した紙に、【先入観を持たないように、隠しています】と書かれていた。
全員がユリカを見て笑顔で挨拶して、美由紀がその輪に加わった。
「エース・・お願い、アドバイスをして」と小夜子が笑顔で言った、女性が全員私を見た。

『何も無いよ・・ユリさんの許可を取ったから。
営業終了後に、ここに絨毯を敷くよ。
誰でも来て良いよ・・マリが来るから、全員で円になって手を繋ぐ。
それで入れるよ・・今沙紀に会って来た、沙紀も楽しみにしてるから』

私は女性達を見て、笑顔で言った。
「ありがとう・・注意事項は？」と小夜子が微笑んだ。
『栄養と水分の補給・・それとトイレだよね、お酒の飲み過ぎに注意だね』と二ヤで返した。
「了解・・ユリカママ、今夜は？」と小夜子が聞いた。
「大丈夫・・ミチルママとリアンと、3人で打合せしたから・・3店とも、12時閉店よ」とユリカが微笑んだ。
「ありがとうございます・・さぁ全ては整った」と小夜子が強く言った、美しい小夜子を見ていた。
その引っ張るリーダーシップは、蘭に近い感じであり、私は小夜子を好きになっていた。
TVルームにユリカと行くと、ミサとレイカはもうパジャマだった。
マリアは蛙状態で、爆睡中だった。

『やる気満々ですね～・・女宇宙戦士』と2人に笑顔で言った。
「うん・・エース、安奈ちゃんまた来る？」とミサが聞いた。
『来るよ・・お友達になったんだね』と笑顔で返した、3人娘は笑顔で頷いた。

私はユリカの横に座って、ユリさんの薔薇を見ていた。
「ユリ姉さん、楽しそうですね」とユリカが笑顔で言った。
「エースがリンを誘ってくれましたから・・嬉しくて」と薔薇で微笑んだ、ユリカも微笑んで返した。

その時、律子が入ってきて、ユリさんに二ヤで挨拶した。
「ユリを見たいって、知り合い連れてきたんだけど・・良い？」と律子が二ヤで言った。
「怖いですけど・・良いですよ」とユリさんが薔薇ウルで返した。
律子が招き入れたのは、恭子の母親だった。

「ユリ・・化け物だね、物の怪だね～」とミナミが笑顔で言った、美しい笑顔だった。
「ミナミこそ・・主婦のくせに」とユリさんが楽しそうな笑顔で返した。
ミナミはマダムと松さんに挨拶して、立ち上がったユリカを見た。

「あなたがユリカちゃん・・素敵だね、恭子が言った通りだ・・私はこの場所じゃ、ミナミと名乗ります」とミナミが笑顔で言った。
「ユリカと申します、よろしくお願いします」と爽やか笑顔で言って、頭を下げた。
ミナミは笑顔で返して、私とユリカの間に座った。

「小僧・・贅沢過ぎだぞ、今靴屋に寄ってきた・・ペナルティーが必要だね」とミナミが二ヤで言った。

『全ては、憧れのミナミの教えです』と二ヤで返した。

「昨夜・・リンから電話があったよ、泣いてたよ。
ありがとう、小僧・・チサに報告してきたよ、律子姉さんと。
小僧・・お前は背負えるよ、どんなに多くても・・どんな人数でも。
重くないだろ・・実は背負ってないから、手を繋いで歩いてるんだね。
今夜・・私達４人は、新たな関係を始める・・大切な友人として。
お前が繋いでくれた・・それが嬉しかったよ」

ミナミが私を抱きしめて優しく言葉にした、私はミナミを強く抱いていた。
『了解・・今日からミナミって、呼び捨てにするよ』と耳元に返した。
「許可しましょう・・大切な息子に」とミナミも二ヤで返してくれた。
私はミナミの美しい瞳を見ていた、沢山の思い出が映像で流れていた。

蘭・カスミが来て、ミナミと笑顔で挨拶をした。
４人組も戻ってきて、シズカとマリも来た、そして北斗が来た。

「北斗姉さん！・・ご無沙汰してます」とミナミが嬉しそうに言って、頭を下げた。
「ミナミ！・・元気そうだね、素敵な娘を育てたね」と北斗が笑顔で抱きしめた。
女性達が笑顔でその光景を見ていた、暖かい世界の中にミナミの涙があった。

「私も・・抱いてもらえますか」と後ろから声がした、リンが美しい笑顔で立っていた。
「リン！・・なんて日なんだろう、嬉しいよ～」と微笑んで、北斗が抱きしめた。
ユリさんの最高の薔薇が咲いていた、私はそれが何より嬉しかった。
リンが全員に挨拶して、マダムも松さんも嬉しそうだった。

ネネとカレンが来て、フロアーの女性達が食事を始めた。
私は律子とミナミとリンに、沙紀の説明をした、マリが私の横に座り絵を見ていた。

『リン・・入ってみて、絶対に大切な何かを感じるよ。
俺は今でも・・洋子先生が、最高の保母だと思ってる。
嘘無くそう思ってるからね・・楽しみにしてるよ』

私は笑顔でリンに言った、美しい笑顔で返してくれた。
「ありがとう、最高の言葉を大切にするね・・必ず届けてみせるよ」とリンが笑顔で言った。

律子がリンとミナミと3人で食事に行った、帰りにミチルに会って来ると笑顔で言っていた。
私は3人を見送って、ベッドで眠ってる4人娘をチェックした。
女性達が準備に行って、私はシズカとマリと美由紀で食事をした。
美由紀の面白話に、シズカが鋭い突込みを入れて、マダムも松さんも笑っていた。

女性達は全力で仕事に取り組んだ、そして日付が変わる時が近づいてた。
私は美由紀の寝顔とマリの寝顔を確認して、薄暗いＴＶルームを出た。

カズ君に準備を頼み、強く背中を叩かれて、ＰＧを出た。
病院に続く深夜の道は、夜街を過ぎると誰も歩いていなかった。
私の目の前には、大きな月が浮かんでいて、白く発光していた。
寒さを感じる事は無かった、女性達の笑顔が映像で流れていた。

病院の４階に上がると、あの若いナースが、沙紀の病室から駆け出してきた。
そして私を見て立ち止まった、私は意識して笑顔を向けた。

「知ってたのね？・・何か約束したのね？」とナースが言った。
『うん・・処置は終わったの？・・母親を呼ばないで良いよ、俺が許可を貰ってるから』と笑顔で返した。
「終わったよ・・今パニック状態」とナースが言った。

『了解・・沙紀の体調のチェックだけ、よろしく』と返して病室に入った。
沙紀はベッドの上で、寝転んで体を激しく動かしていた。
私はそのまま上から抱きしめて、沙紀に怖くないよ、すぐに行くよと伝えた。
静かになった沙紀の右手を握って、沙紀を想っていた。

沙紀の今までに描いた絵が、一枚ずつ映像に出てきた。
そして最後にマチルダの月の壁の絵が現れた、その瞬間月に飛んだ。
マチルダが強引に引っ張った、私は月の表面で少し浮いていた。
見回したが、マチルダはいなかった。

《サンキューマチルダ・・ユリカ行って来る、待ってるよ》と心で囁いた。
目の前の青い地球との間に、黒い巨大な渦が有った。

強い波動に背中を押されて、私は渦に向かって飛んだ。
真暗な世界を、強力な力で吸い寄せられて、ぬかるんだ地面に落とされた。
『やっぱり・・痛みは無いな、変な感じだ』と二ヤで言った、強い波動が来た。

『ユリカ・・心配なく、波動は届くよ』と言葉で言った。
私は波動を感じながら、見回して沙紀を探した。
奥には山脈らしき物があって、広大な台地が暗い世界の中に存在した。

赤い月は出てなかった、私の後ろは大きな赤い正方形が有った。
コンクリートでない、少し柔らかな素材で、陸上競技場のレーンのような柔らかさだった。
私がその正方形の上を歩いていると、強烈な光が空を照らした。
大きな円盤が頭上にあった、その不思議な輝きを見ていた。

《やばい・・円盤の着陸場所だ》と思って、慌てて正方形を出て岩陰に隠れた。
円盤は上空１m位で止まって、底の部分から光の帯を出して、赤い正方形を照らした。
そして一気に飛び去った、その瞬間に不気味な声が響いた。
恐ろしいほどの狂気を感じた、私が振り向くと腐敗した人間らしき者が、無数に地底から這い上がって来ていた。

『臭いよユリカ・・覚悟してね』と叫びながら、赤い正方形に走った。
ユリカのウルウルの波動が、何度も来た。

赤い部分に近づくと、純白のドレスを着た、沙紀お姫様が倒れていた。
『沙紀お姫様・・大丈夫？』と優しく声をかけた、沙紀は眠りから覚めるように目を開けた。
「小僧ちゃん・・本当に来てくれたの」と沙紀が可愛い声で言って抱きついた。
『約束したろ・・来るよ・・沙紀、可愛い声だね』と笑顔で言って抱き上げた。
「そうでしょ・・ずっと、どんな声が良いか考えてたの」と沙紀が笑顔で言った。
強烈な喜びの波動が何度も来た、沙紀は嬉しそうに笑っていた。

『それで、いつもは何所に隠れてるの？』と笑顔で聞いた。
「ここだよ・・この赤い場所には、入って来ないの」と沙紀が真顔で言った。
『そうなんだ～・・ここで何してるの？』と意識して笑顔で聞いた。
「ＴＶが映るの・・怖い世界の、山の場所とか・・沢山」と沙紀が私にしがみついた。
『大丈夫だよ・・小僧がいますから、姫』と言って座って、沙紀を膝の上で抱いた。

『さぁ・・始めてくれよ、平和台の発射台から』と空に叫んだ。
突然正方形の外側に、大きなスクリーンが現れた。
映像は平和台を上空から写していた、画面が２画面になって。
１つが平和台の下の駐車場だった。
もう１画面が、発射台を広場から遠目に映していた。

まだ誰も来ていなかった、その時３画面目が現れて、ＰＧのフロアーが映っていた。
営業が終わり、ボーイ達がモップをかけて、大きな絨毯を敷いた。

マリとシズカが現れて、真ん中に2枚の絵を置いた。
マリは絨毯の端に座って、少し俯いていた・・その顔が上がり、スクリーンに目線を合わせた。
マリが強烈な二ヤを出した、その顔をアップで映像が捉えていた。

『マリ・・分かってるのか、写されてる場所が』と私は驚いて言った。
「分かってるよ、マリちゃん・・この場所も、分かってるよ」と沙紀が嬉しそうな笑顔で言った。

女性達が着替えて出てきて、マダムと松さんが用意した、おにぎりを食べていた。
魅宴の女性が来てゴールドが来た、ユリカとリアンの店も揃った。
ホノカが来て、大ママとミチルはＴＶルームだと思っていた。
全員がおにぎりを食べて、水分補給をしていた、緊張感があった。

マリは動かずに、俯いて座っていた。

映像からも、背中から何かが出てるのを感じていた。

沙紀の笑顔が全員を見ていた、女性達は期待を背負っていた。

提示される問題に、自分の心に正直にピースを合わせる。

そうしないと完成しない・・難問が待つとも知らずに・・。

回想録　??　【赤い月?】

情熱のフロアーに仲間達が集まった、少しの緊張感を持って。
しかしどこかで楽しんでいた、一人じゃないと確認しながら。

私は真赤な正方形の場所で、沙紀を抱いて座っていた。
沙紀はワクワクしながら、笑顔で映像を見ていた。

ＰＧのフロアーは、女性達が少しずつ、円を描くように座り始めた。
マリは俯いて、集中してるようだった。
ユリさんが大ママとミチルと来て、ミナミとリンを全員に紹介した。
女性達は笑顔で挨拶をして、ミナミもリンも笑顔で応えていた。
そこに４人娘と久美子と美由紀が来て、女性達が全員絨毯に集まって、大きな円を描いた。

ＰＧがユリさんを筆頭に、アイさんサクラさん、蘭とナギサに１０人衆。
それにシオンにマキと久美子と４人娘に、カレンを加えていた。
魅宴が大ママにミコト・リョウ・ミサキに、ヨーコが加わり。
ゴールドが千鶴とマユとセリカにケイコで、ミチルの店がミチルとホノカ＋１名。
ユリカの店がユリカと小夜子＋２名で、リアンの店がリアン＋３名だった。
それにミナミとリンに、シズカとマリと美由紀が加わった。

総勢４８名が大きな円を作っていた、そして律子がその円の中心に入った。

「緊張する必要はありません、絶対に入れます・・マリがいますか

ら。
ただ集中して、平和台を浮かべなさい・・それだけで良いです。
イメージ作りは出来ましたか？・・何か質問のある人がいますか？」
律子は笑顔で言って、全員を見回して。
「パニックに陥らないでね・・全員が一緒に帰還する事を祈ってます。
エミ・・本部の通信は、私が引き受けます。
シズカ、小型無線機を全員分準備して。
何か困った事があったら、その無線機で通信して下さい。
楽しんで来てね・・検討を祈ります・・手を繋いで」
律子が強く言った、全員が手を繋いだ。
「キャプテンはエミです、操縦をシズカとしてね・・そして総司令艦長は。
この戦闘的場面では・・飛鳥よりも・・現役のリアンですね。
最終決定はリアンに任せます、副指令でユリを当てますから。
一度深呼吸しましょう、肩の力を抜きましょう」
律子はそう言った、リアンが真顔で頷いて、エミは笑顔で頷いた。
全員が深呼吸をしていた、その時・・画面2に人影が現れた。
駐車場に走ってきたのは、哲夫だった。
銀の宇宙服に、バイク用のヘルメットを手に持って、黒いサングラスをかけていた。
髪をテカテカのリーゼントにして、大人びた雰囲気だったが、サイズは子供のままだった。

『哲夫・・なぜ大きくイメージしないんだ・・抜けてるな～』と言って私が笑うと。
「かっこいいね、哲夫君」と沙紀が嬉しそうに、哲夫を見ていた。

「やっべ～・・・遅刻か～」と言って、哲夫が階段を駆け上がった。
平和の塔を見上げる広場には、宇宙船が有って、人影は無かった。
「やっほ～・・・一番だ～」と哲夫が叫んで、自分の装備の点検をしていた。

『しかし貧相な宇宙服だな～・・どうして【あれ】にしないんだろう』と二ヤで言った。
「あれって、何？」と沙紀が私を見上げた。
『女子は１０人以上それになるよ・・モリ・ユキちゃんに』と笑顔で返した。
「そっか～・・・ヤマトね」と沙紀も笑顔で言って、映像を見ていた。

「しまった～・・・ヨーコ姉さんのイメージが入った～・・・帰ろうかな～」と哲夫がウルで言った。
哲夫の手には薄緑の水鉄砲が握られていた、私は一人で爆笑していた。
「大きくなったり、小さくなったり銃だね」と沙紀も楽しそうに言った。

哲夫はウルのまま、花壇の花に照準を合わせた。
「大きくな～れ」と言って、花に水をかけた。
見る見るうちに、花は哲夫よりも大きくなった。
哲夫は俯いて、水鉄砲を見ながらウルウルを出していた。

私は一人で大爆笑して、沙紀を抱きしめていた。

「そんなに面白いの？・・・素敵な銃だよ～」と沙紀が笑顔で言って、私も涙目の笑顔で頷いた。

女性達は手を繋いで、全員が美しい真顔で律子を見ていた。
「目を閉じて・・行ってらっしゃい」と律子が大きな声で言った。
全員が目を閉じて、１つになったようだった。

最初に駐車場に現れたのは、ユリカと蘭とミコトだった。
「しまった～・・・それだった～」と蘭がミコトを見て言った。
ミコトはモリ・ユキにそっくりの、ピッチリ宇宙服を着ていた。
「何、あれ？・・・流行ってるの」とユリカが笑顔で聞いた。
「ユリカ姉さん、凄すぎます・・そうくるとは」とミコトが笑顔で返した。

ユリカは迷彩柄の体にフィットするピッチリスーツを着て。
腰にはマシンガンと、大きな銃を下げていた。
背中にロケットランチャーのような物を背負って微笑んだ。
その体の線をなぞる様な、柔らかそうな素材が体全体を包んでいた。
編み上げの黒いロングブーツを履き、可愛い顔を隠すように迷彩で頬を塗られていた。

「蘭・・その谷間は何、足しすぎだよ～」とユリカが爽やか二ヤで言った。

蘭はやはり体にフィットする青いピッチリスーツを着て、ファスナーを胸元まで下ろしていた。
その胸にはくっきりと谷間が有り、かなり強調されていた。
美しいスカイブルーで体を包み込み、やはり同色のショートブーツを履いていた。
腰には光線銃のような物が下がり、右腕にかなり大きなマシンガン

が握られていた。
蘭は満開ウルでユリカに返していた、そして女性が続々と登場した。
銀河の奇跡は打合せをしたのか、ピンクのピッチリスーツの背中に、銀河の奇跡と漢字で刺繍されていた。
モリ・ユキバージョンが１３人、セリカもそうだった。
四季もきっちり打合せしたのだろう、白く美しいピッチリスーツを着ていた。

ＰＧは沙紀の絵を見ていたので、シルバーのピッチリスーツで統一されていた。
全ての女性達が、体のラインを強調するスーツを着て、突っ込みを入れあっていた。

その中で目を引いたのは、小夜子とナナだった。
ナナは真赤なピッチリ特攻服で、ゴールドの刺繍で漢字が無数に書かれていた。
ナナはウルウルを出して、突っ込みに対し、必死に言い訳していた。

小夜子は紫の幻想的なピッチリスーツで、肩から腰にかけて金属製のパイプで繋がれ。
上半身の胸まで隠す、シルバーの金属板が、胸の形で膨らんでいた。
ブーツもシルバーで、どこかサイボーグ的なイメージで。
薄いサングラスをかけ微笑む姿が、近未来を想像させて美しかった。

４人娘が赤い可愛い宇宙服で現れて、レイカの額には悟空のリングが光っていた。
マリアの背中には、真赤なマントが靡いていた。

そして美由紀は両足が有ったが、車椅子に乗っていた。

その車椅子は浮いていて、飛行できるようだった。
多種多様な武器が、あらゆる部分に装備されている、強力な車椅子だった。
その車椅子には、ＹＵＴＡＫＡ　ＭＡＸとゴールドで書かれていた。
全員が思い思いの武器を持って、ジャラジャラと広場に向かった。
壮観な光景だった、しかし私はマリが現れないのを、不思議に思っていた。

「哲夫・・行く前から、何ウルしてるんだい？」とリョウが二ヤで言った。
「別に・・ウルなんてしてないよ」と哲夫が慌てて、銃を後ろに隠した。
「いけませんね～・・何か隠しましたよ、艦長」とユリさんが薔薇二ヤで、リアンに言った。
「哲夫・・命令だ、出せ」とリアンが極炎ニカで言った。
哲夫はウルウルを出して、ゆっくりと水鉄砲を前に出した。

「下ネタ銃だね・・それでその花か～」とカスミが最強不敵で言って、全員が大爆笑していた。
「あれ・・ヨーコがいないよ、入れなかったのかな？」とホノカが言った。
「あそこの木の陰から見える、青いぬいぐるみは何でしょう？」と美冬が二ヤで言った。
全員がその方向を見て、二ヤを出した。

「隠れきれてないよ・・ヨーコ、来なさい」と大ママが大声で言った。
青猫の着ぐるみを着たヨーコが、俯いて出てきた、女性達は必死に笑いを堪えた。

ヨーコは頭も被っていたが、顔はそのまま出ていた。
しかし可愛い感じで、愛らしかった。

「入る時・・武器を足そうと考えたら、あの銃が浮かんで・・必死で消そうとしたら、この状態です」とヨーコが半泣きで言った。
「良いな〜・・ヨーコちゃん、可愛い」とミサが言って、ヨーコはパッと笑顔になった。

「さすがヨーコ、昔から切り替えが早い」とミナミが二ヤで言った時に、大爆笑が起こった。
ヨーコはウルウルで、必死に返していた。

「全員揃ったかな？・・店ごとにチェックして」とリアンが言った。
「マリが・・・来ました」とシズカが入口を見ながら言って、震えていた。

ジャラジャラと音がして、階段からマリの顔が上がってきた。
ブロンドのショートカットで、髪を立たせて、鋭い視線のマリは美しかった。
マリはゆっくりと階段から上がって来ながら、最強の二ヤを出した。
その右腕には、可愛い宇宙服の、由美子が笑顔で抱かれていた。
完全な静寂が包んでいた、北斗はその場で凍結して、震えながら由美子を見ていた。
マリは階段を上りきった所で、優しく由美子を下ろした。

由美子は笑顔で北斗を見て、駆け出した。
北斗も我に返り駆け出して、由美子を抱き上げた。
北斗は必死に涙をこらえた、そして美しい笑顔で由美子にキスをした。
由美子も北斗に抱かれ、嬉しそうに笑っていた。

「ママ・・いつも、ありがとう」と由美子が笑顔で言った、可愛い声が響き渡った。
「由美子・・これは嬉しいの涙だからね」と北斗は言って、由美子を抱きしめ号泣した。
「知ってるよ・・嬉しいでも、涙は出るんだね」と由美子が笑顔で返した。
女性が全員、笑顔で泣いていた、その視線の先に美しい母娘が存在した。

完璧な晴天の下、チームの心は1つになった。
由美子の沙紀に対する愛情を感じて、その病を乗り越える強い意志を感じて。
ユリさんが北斗に近づき、由美子を抱いた。
北斗はマリを抱きしめた、マリも笑顔で北斗を抱いていた。
4人娘が駆け寄り、ユリさんが由美子を下ろすと、5人で笑っていた。
由美子の笑顔が楽しそうで、私も嬉しかった。

「嬉しいでも、涙が出るの？」と沙紀が私に聞いた。

『沙紀・・今、泣くのを我慢してるでしょ、泣いても良いんだよ。
それが嬉しいで流れる涙だよ・・沙紀、泣いて良いんだよ』

私は出来るだけ優しく、笑顔で伝えた。
「由美子ちゃん・・良かったね」と沙紀は言って、私に抱きつき泣いた。
私は沙紀を優しく抱きしめて、本当に嬉しかった。

《ユリカ・・やった意味がもう有ったよ、沙紀が嬉しいで泣いてる

よ》と心に囁いた。
由美子を見て泣いているユリカが、ハッとして号泣した。
強烈な喜びの波動が、何度も何度も来た。

「艦長・・全員揃いました」とエミがリアンに笑顔で報告した。
「よし・・乗り込むよ、由美子も連れて・・全員で」とリアンが潤む瞳で強く言った。
「はい」と全員で返して、乗り込んだ。

その宇宙船は、内部も完璧なイメージで作られていた。
操縦席が3席あり、シズカがエミを真ん中に座らせた。
そしてマキに耳に装着する、小さな無線機を配るように言って渡した。

「この無線機は耳に装着するだけで、交信できます。
交信したい相手の名前を先に言って、話してください。
名前を呼ぶことで、ＯＮします・・それとこのガム。
噛むだけで、酸素吸入が出来る設定になってます。
ですから、外に出てもそのままで大丈夫です。
まぁ哲夫のように、イカスメットを持ってる人は、装着して下さい」

シズカは最後に二ヤを出した、哲夫はウルを出していた。
一人に1つ近未来的な椅子があり、全員が場所を選びながら座った。
操縦席のすぐ後ろに5つの席があり、その真ん中にリアンが座った。
その両横に大ママとユリさんが座り、ユリさんの横にユリカが座った。

その後ろに小さな椅子が3つあり、真ん中の一番小さな椅子にマリアが座った。

マリアの横に美由紀が飛びながら来て、マリアが美由紀に天使全開を出した。
大ママの横の、椅子が2脚くっついてる席に、北斗が由美子と座った。
ミサもレイカもワクワク顔で、マリアを挟んで座った。
その後ろの女性達は、大きな窓の外の景色を笑顔で見ていた。
操縦席の右にシズカが座り、左にマリが座った。
前方の視界は大きく3つに分かれていて、真ん中が実際の景色で、左右がモニターのようだった。
左のモニターに【ベルト着用】のサインが赤文字で出た、全員がベルトを装着した。
右のモニターに、少し緊張したシズカの顔が映った。
「気分を高めるのに、リアリティを追求します。
加速のGが相当きついと思います、手前の5席と、子供席は無G席にだから大丈夫。
大気圏を出る瞬間に、相当の熱を感じると思います。
その外・・宇宙に出ると、素敵な景色が広がると思いますよ。
沙紀のイメージですから、きっと素晴らしい景色でしょう。
それでは発射準備に入ります・・エミキャプテン、カウントダウンを」
シズカの映像が消えて、エミの強い瞳の顔のアップが映った。
「ラジャー・・カウントダウン・・６０」とエミが強く言った。
エミの映像が消えて、６０・・５９・・５８と数字が表れ下がりだした。
その下に文字が出た、【メインエンジン点火】と出た。

機体が少し揺れて、小刻みに震えていた。
私と沙紀は内部映像と、広場からの映像を同時に見ていた。
宇宙船の後部から、白煙が上がり、発射台が角度を上げた。

カウントダウンの数字は３０を切った、全員が緊張して前を見ていた。
カウント１０になって、機械的な男の声が、数字を英語でコールした。
機体の揺れが激しくなって、動力の大きな力を感じさせた。

５・・４・・３・・２・・１・・ＧＯ
大きな音が響いて、一気に機体は発射台を離れた。
女性達の体がシートに張り付けられ、全員が必死にＧに耐えていた。
機体は猛スピードで真上に上がり続けている、窓の外は段々と明るくなった。
機体の外側は、熱を帯びてオレンジ色に発光していた。

『さすがシズカ・・そこまでリアリティを追求するか～』と私は画面に二ヤで言った。
「乗りたいな～」と沙紀が呟いた。
『沙紀・・乗れるよ、あれで帰るんだよ』と優しく囁いた・
「うん・・嬉しい～」と振り向いて、沙紀が笑顔で言った。

機体のオレンジが赤に変わった瞬間、機内が真暗になって、照明が点灯した。
揺れも振動も無くなっていた、全員が外の世界に魅了されていた。

圧倒的な広い空間に、無数の星が輝いていた。
地上から見る星とは、全く比べ物にならない星が、強く光で主張していた。

真下には、美しい青い地球が浮いていた、アフリカ大陸の稜線がはっきりと分かった。

『にょ～』と美由紀が叫んだ、美由紀はベルトをしていなかった。無重力で美由紀は、最高の笑顔で浮いていた、一人で楽しんでいた。４人娘と由美子が羨ましそうに見ていた、女性達もウルで美由紀を見ていた。

「安全を確認します、その後で無重力を楽しんでもらいます。
その後、重力を強制的に入れます・・無重力は帰りに、充分楽しみましょう。
ユリカ姉さん・・沙紀の場所の座標は分かりますか？」

右のモニターに出たシズカが言って、女性に笑顔が溢れた。
「地球と月を結ぶ直線上にあるよ、黒い大きな渦が」とモニターに映ったユリカが言った。
「了解です・・エミ操縦桿を握って、ゆっくりと地球を一周しよう」とシズカが言った。
「ラジャー・・地球の軌道を周回します」と強く返して、操縦桿を握った。

マリが目の前の装置を見て、スイッチを何個か押した。
左のベルト装着のサインが消えて、【無重力・経験ＯＫ】と出した。

「キャ～・・すご～い」と蘭が言って、浮き上がった。
「あっ！・・蘭、外してましたね～」とユリさんが言って浮いた。
女性達の歓声が木霊した、全員に笑顔が溢れていた。

「素敵だね～・・楽しいね～」とレイカが言って。
「うん」と由美子が返した、そしてレイカとミサと由美子で、手を

繋いで円になった。
その円の中心でマリアが浮かんでいた、天使全開で由美子を見ていた。

操縦の3人を残して、全員が笑顔で浮いていた。
後ろの広いスペースに集まって、窓からの景色を見ていた。
圧倒的迫力の地球の上を飛んでいた、全員が地球を見ていた。

「なんて美しいんだろう・・汚したらいけないね」と蘭が言った。
「幸せですね・・この星に住んでるだけで」とシオンが涙を流して言った。

「日本だ！・・小さいな～」と北斗が言った。
「九州が豆粒だ・・人間は小さいんだ、その存在も・・悩みも」とカスミが言って。
「この為に、エースは・・マリちゃんの無限の話をしたんですね」とユリさんが言った。
「そうですね～・・エースはこれを見た事が、絶対にあるんですね」とユリカが言った。

「ユリカ・・エースの、マリ無限話を述べよ」とミチルが言った。
「マリちゃんが創作話だと言って、エースに話したそうです・・・・」ユリカが無限の話をした。

「マリは凄いな～・・その言葉が納得できる、この光景を見るだけで」とミコトが地球に微笑んだ。
「沙紀・・ありがとう、こんなに素敵な世界を見せてくれて」とホノカが微笑んだ。
女性達は地球と宇宙を見ながら微笑んでいた、私と沙紀はその光景を外側からも見ていた。

「美由紀～・・足長すぎだよ～」とカスミが横に立つ美由紀に、不敵二ヤで言った。
「８頭身を作りました～・・素敵でしょ～」と美由紀が二ヤで返した。

「私も大人で、登場すれば良かったな～」と由美子が言った。
「由美子、駄目だよ・・それは現実に、自分でなって見せてね・・楽しみにしてるから」と美由紀が笑顔で言った。
静寂が包んで、全員が２人を見ていた。

「はい・・見せますよ、美しい由美子を」と由美子が笑顔で返して、美由紀に抱きついた。
「約束だぞ～・・それまで私が、お尻をぶってやるから～」と美由紀が笑顔で言って、由美子を抱きしめていた。
北斗はユリさんに抱かれて、泣いていた・・全員が嬉しそうな笑顔で２人を見ていた。

その時、警告音が響いた。
全員がモニターを見た、シズカの笑顔が映っていた。

「目的地発見・・その場に足を着けて下さい。
子供達の状況の確認願います、重力を入れます。
その後・・シートに座って、ベルト装着願います」

シズカがそう言って、５人娘を床に立たせて、状況のチェックをした。
「シズカ・・準備完了」とリアンがが無線で言った。
「了解・・重力補正・・ＯＮ」とシズカが言って、無重力が消えた。

「こんなに重いものを、常に背負ってたのか～」とセリカが言って。
「胸が下がる訳だな・・蘭姉さん以外は」とカスミが蘭に最強不敵を出した。
「まごう事無き・・正真正銘の本物よ」と蘭が満開ウルで返した。
「言葉と表情が合ってないな・・騙されるとこだった」と哲夫が二ヤで言った。
「あ～・・哲夫に、意地悪5点」と蘭がウルで返してシートに座った。
全員が笑いながら、自分の席に着いた。

正面には大きな月の手前に、不気味な黒い渦があった。

「ユリカ姉さん・・着陸場所の目印はありますか？」とシズカがモニターで呼びかけた。
「赤い正方形があるみたい、その場所は意味がありそうだから・・その横に着陸しましょう」とユリカがモニターで返した。
「了解です・・館長、突入前に一言お願いします」とシズカが真顔で言った。

「私はエースの、回りくどい表現で感じた・・今回は探せと。
恐怖の根源と、希望の意味を探せと言った・・奴は今回は傍観者だ。
多分、最後に何かを用意してるだろう・・私達に賭けたんだ。
必ず殲滅する・・最後の一人になっても、やりきるよ。
私達は・・生まれた事に感謝してる、今の時代を生きる事にも。
探し出すよ・・全ての敵を退治して、その意味を探し出す。
さぁ行こう・・沙紀が待ってる」

リアンの強い言葉が響いた、モニターには極炎の瞳が映っていた。
「はい」と全員が強い返事で返した。

「突入に備えて下さい・・不足の事態に対する、心の準備をして下さい・・入ります」とシズカが言って、映像が切れた。
前方のモニターが消えて、全てが黒い渦を映していた。
「かかってきな・・雑魚ども」とユリカが二ヤで呟いた。

機体が大きく揺れた、照明が点滅して、赤いライトが回転した。
窓の外は真暗な世界だった、美由紀は心配でマリアを見た。
最強天使不敵を出して、前を見ていた。

ガタガタと外側からの音がして、機体の揺れが激しくなった、警報音が響いた。
次の瞬間・・静寂の世界が訪れた、キリモミ状態で真下に降下していた。
マリが操縦桿を引いた、機種が上を向き安定した。
「広いな～」と蘭が真顔で言った。
「真黒か～・・演出好きだな～」とカスミが不敵で言った。

「座標確認・・垂直で降ります・・ベルト装着確認・・３０秒後、降下します」モニターに映るシズカが真顔で言った。

その時だった、私と沙紀は透明な丸いカプセルに、閉じ込められた。
沙紀が私に抱きついた、私は意識して笑顔で抱きしめた。
白いソファーが有ったので、そこに沙紀を抱いて座った。
カプセルが浮き上がり、赤い正方形の上３０ｍに浮いていた。
３つのモニターが現れて、映像が写された。

赤い正方形に、無数の黒い線が表れた。
私は上から見て、ジグソーパズルの枠のようだと思っていた。
私達のカプセルの真横を、宇宙船が垂直に降下してきた。

着陸場所に、大量の蠢く黒い姿が照らされた、気味の悪い巨大なムカデが蠢いていた。

『蘭とシオンは泣くな・・誰がやっつけるのか、楽しみだ～』と私はモニターに二ヤを出した。

沙紀も落ち着いたらしく、それを見て顔をしかめていた。

機体は静かに着陸した、全員がほっとした表情になった。

「安全確認しますので、ベルトはそのままで」とシズカが言った瞬間。

前方にも横の窓にも、沢山の巨大なムカデが走り回った。

「ギャ～～！」と蘭が叫んで、シオンがウルを出していた。

半数以上の女性がウルで震えていた、リアンのニヤ顔がモニターに映った。

「シズカ・・作戦本部をここの外に作ろう、あのゲジゲジを何とか出来る？」とリアンが言った。

「この機体の装備じゃ、近過ぎて無理です。

下の格納庫に、沢山の戦闘車両が有りますが・・操縦に慣れる前ですから。

誰かが退治するのがベストですけど、数が多いですね。

それに女性の一番苦手な、足の多い奴ですから・・少し考えます」

シズカが二ヤで返した。

「りつこ」とマリアが律子に通信して、律子が「了解」と二ヤで返した。

そして右のモニターに律子が映った、全員がそのモニターを見た。

「到着おめでとう・・ゲジゲジが大量発生ですか。
スーパーマリアマンが行くそうです・・ヨーコ、電話ＢＯＸを出しなさい。
頑張ってね・・期待してます」

律子は二ヤで言って、映像が切れた。
「電話ＢＯＸ？」とカスミが言って、ヨーコを見た。
ヨーコは慌ててベルトを外して、ポケットを探って最強二ヤを出した。

「ばば～ん・・モシモシＢＯＸ」と言って玩具の電話ＢＯＸを出して、哲夫に二ヤを出した。
哲夫はウルでベルトを外し、玩具の電話ＢＯＸの前に立って。
「大きくな～れ」と言って水鉄砲で水をかけた。
電話ＢＯＸは見る見る大きくなり、普通サイズの大きさになった。
それを見て、マリアが天使全開になって駆け込んだ。

マリアが入った瞬間、電話ＢＯＸが白く発光して、全員が目を逸らした。
発光が収まると、青い衣装のスーパーマリアマンが、天使最強笑顔で立っていた。

「マリア・・変身にもこだわるね～・・素敵だよ～」と美由紀が笑顔で言った。
「マリア・・よろしくね、あれだけは苦手なの～」と蘭が満開ウルで言った。
「あい」とマリアが天使全開で返した。

「マリア・・真上のハッチを開けるね・・全員ベルト外して、戦闘態勢確保」とシズカが言って。

全員に緊張が走った、そして自分の装備を準備した。
「先に言いますが・・機体に傷をつける武器は、もちろん不可です。
一番戦闘力が低いヨーコ、５歳トリオを連れて前に来て」
シズカが二ヤで言った、ヨーコはウルで子供の手を引いて操縦席に向かった。
女性達は自分の装備の威力が分からずに、ウルしていた。
「ハッチオープン、１０秒前・・９・・８・・７」とシズカがカウントダウンを始めた。
緊張感が全てを包んでいた、蘭とシオンがウルウルで上を見ていた。
「２・・１・・ＧＯ」とシズカが言った瞬間、ハッチが開いた。
マリアは一気に飛び出したが、２匹の巨大ムカデがバサって感じで、機内に落ちた。
「小さくな～れ」と哲夫が言って、水をかけた。
ムカデは小さくなって、普通サイズになった。
女性達がその処分に顔を見合わせた、その瞬間ドンとムカデを踏みつけた。
ユリさんが薔薇二ヤで下を見ていた、そしてドンと音がした。
ユリカがもう一匹を、踏みつけていた。
ユリカが爽やか最強二ヤでユリさんを見た、ユリさんも薔薇二ヤで返した。
「やっぱり・・最強の名前を継承する者だ」とカスミ不敵で言って、全員が二ヤを出していた。
私は沙紀と、マリアに手を振っていた、マリアは状況を確認しながら飛んでいた。

暗い世界に・・希望の光のように・・マリアが白く発光していた。

沙紀はその姿を・・夢中で見ていた・・あの名作を描くために・・。

【赤い月？】

暗黒の世界を天使が飛んでいた、白い羽でなく赤いマントを翻して。
白く発光しながら、笑っていた。

空には黒い渦だけが存在していた、無風で生暖かい空間だった。
沙紀はなぜ宇宙の、それも暗い世界を選択したのだろうかと思っていた。

マリアは宇宙船の周りの状況を確認して、私達のカプセルを発見した。
猛スピードでカプセルの前まで飛んで来た、私と沙紀は笑顔で手を振った。
マリアは天使全開で頷いて、宇宙船の正面に戻った。

「しずか・・やゆよ」とマリアが無線で言った、天使の笑顔がモニターに映っていた。
「マリア、沙紀ちゃんと小僧を確認できたの？」とシズカが笑顔で返した。
「まるいの・・ういてる」とカプセルの方向を指差した。
その時、左のモニターに透明のカプセルが映し出された。
私と沙紀は笑顔で手を振った、窓から女性達が手を振っていた。

「シズカ・・あのカプセルは、結界だよ・・全く読めない」とユリカが言った。
「そうですか・・マリアがやった後、外の安全確認をしたいんですけど」とシズカが返した。
「あの赤い正方形は、安全地帯らしいよ」とユリカが笑顔で返した。

「了解です・・美由紀、マリアがやった後・・ハッチを開けるから飛び出して。
そして船の周りの安全確認をして・・マリアの体力を、出来るだけ温存したい。
最後の切り札だから・・スーパーマリアマンは」

シズカが真顔で言った、美由紀は二ヤを出していた。
「了解です」と美由紀が二ヤ継続で答えた。
「マリアから合図が有ったら、ハッチを開けるから・・哲夫、よろしく」とシズカが言った。
「了解です」と哲夫が返した。

「マリア・・右手を上げたら、お願い・・終わったら、赤い場所で待っててね。
全員衝撃に備えて、戦闘態勢継続・・準備状況報告よろしく」

シズカが強く言って、マリアは天使全開で頷いた。
「美由紀、スタンバイ・・ＯＫ」と美由紀が言って。
「哲夫、スタンバイ・・ＯＫ」と哲夫が言って。
「全員、スタンバイ・・ＯＫ」とリアンがが言った。

「行きます・・マリア・・ＧＯ」とシズカが言って、右手を大きく振り上げた。

マリアは大きく息を吸い込んで、宇宙船を睨んだ。

「きら～い・・あっちいけ～～」と宇宙船に向かって叫んだ。
その叫びの強烈な衝撃波が、機体を大きく揺らして、カプセルも大きく揺れた。
私は沙紀を抱きしめて、巨大ムカデが宇宙の果てに飛んで行くのを

見ていた。

「マリアちゃん、すっご～い」と沙紀が笑顔で言った。

船内では女性達が床に手を付いて、天井を見ていた。

美由紀はハッチの真下で、上を睨んでいた、哲夫は水鉄砲をかまえた。

マリアは高速で、宇宙船の周りの安全を確認して。

シズカに両手で丸を作って、赤い正方形の真ん中に降りた。

「美由紀・・ＧＯ」とシズカが言って、エミがハッチの開閉ボタンを押した。

ハッチが開き、美由紀が飛び出した、何の侵入も無くハッチは閉まった。

美由紀は低空で、何周か周り確認した。

「安全確認しました～・・ＯＫで～す」と笑顔で報告して、赤い正方形に着陸した。

「了解・・ヨーコ、何かトンネルになりそうな物は無い？・・あの正方形まで」とシズカが言った。

ヨーコはポケットを探って、二ヤを出した。

「ばば～ん・・透け透けホ～ス」と笑顔で言って、透明のホースを出した。

「ＯＫ・・外に出たら、哲夫よろしくね」とシズカが言った。

「了解です・・大活躍だ、この銃」と哲夫が少し威張った。

「いよいよ女戦士の出番ですよ・・最後部のリアハッチを開けます。哲夫が大きくするのを、何人かでフォローして下さい。

リアン艦長・・人選をよろしく、残りのメンバーはリアハッチに集結。
船を死守して下さい・・ホースのトンネルの安全確認後。
全員で一度赤い場所に集結しましょう・・よろしく、艦長」

シズカが早口で言った、リアンが全員を見回した。

「とりあえず・・哲夫のガードで五天女と千鶴にミコトで行こう。
ハッチの警備責任者は、蘭とナギサでよろしく。
私達の少し後ろを・・銀河と四季が来てくれ。
他の全員で・・後部ハッチ死守・・絶対に船は守りきれ」

リアンは獄炎の瞳で、強く言った。
「はい」と全員で応えて、最後部に歩いた。
哲夫がホースを持って、最前列に立った。
その哲夫の前にリアンとユリカが、マシンガンを持って立った。
哲夫を大ママとユリさんで挟んで、その後ろを千鶴とミコトで固めた。
銀河が二ヤで3人横並びになって、それを四季が2人ずつで挟んだ。

「リアハッチ・・オープン」とシズカ言って、エミがハッチのスイッチを押した。
カチャカチャと武器の金属音が響いて、全員が戦闘準備に入った。
ハッチはゆっくりと開いた、暗い世界が姿を現した。
暗いリアハッチを、美由紀が車椅子のライトで照らした。
美由紀の横には、マリアが笑顔で立って見ていた。

ハッチが開ききり、斜めに傾斜した出口が出来た。
「ユリカ、行こう」とリアンが真顔で言って、ユリカも真顔で頷いた。

リアンとユリカが先頭を進み、その後ろを哲夫が進んだ。
周囲を確認しながら、赤い正方形と宇宙船の真ん中辺りに、哲夫がホースを置いた。

哲夫を五天女で囲んで、それを9人で大きく囲んだ。
「大きくな～れ」と哲夫が慎重に、水をかけた。
リアハッチの出口には女性達が並び、武器を外に向かってかまえていた。
「雑魚ちゃんおいで～」とその先頭でセリカが二ヤで言った。

哲夫は少しずつかけて、両端を四季が2人ずつで引っ張り、方向を調整した。
「哲夫・・宇宙船側、方向補正ＯＫ」と美冬が言って。
「哲夫・・赤正方形側、方向補正ＯＫ」と千春が言った。

「了解・・おっきくな～れ」と哲夫が叫んで、勢い良く水をかけた。
ホースは一気に膨れ上がり、宇宙船の後部と赤い正方形のギリギリをトンネルで繋いだ。

「ヨーコ・・リアハッチの隙間、どうにかして」とシズカが言った。
ヨーコは二ヤで準備していた。
「ばば～ん・・ここにも、壁～」と二ヤ継続で言って、紙に描かれたレンガの壁を出した。
それを4人で広げて、ハッチを囲んだ。
そして綺麗にトンネルの部分をくりぬいて、リアハッチの隙間を塞いだ。

「最強のレンガの壁にな～れ・・最強のトンネルにな～れ」とヨーコが叫んだ。
紙は硬いレンガの壁になり、ホースは硬いトンネルになった。

「一番活躍するね、ヨーコ」とミサキが微笑んだ。
「戦闘力は０ですけど」とヨーコがウルで返した。
哲夫達一行は、トンネル周辺の安全を確認して、赤い場所に集まった。
ユリさんが薔薇の微笑みでマリアを抱き上げた、マリアは嬉しそうに笑っていた。
「シズカ・・トンネルの安全確認・・ＯＫ」とリアンが無線で言った。
「了解・・蘭姉さんとナギサ姉さんが、先頭で入って下さい。
それ以降は順次で・・北斗さん、サクラさん、リンさん、ミナミさん。
ここに来て、４人娘と一人ずつ手を繋いで入って下さい。
最後尾は私とマリで行きます」
シズカが言って、全員が笑顔で頷いた。
「蘭・・行こう」とナギサが華やかに微笑んだ。
「行きますかね～・・早くぶっ放したい」と蘭が満開二ヤで返して、
２人でトンネルを歩き出した。
その後ろを２人ずつ並んで、赤い正方形に歩いた。
シズカとマリが最後に正方形に着いて、全員が正方形に揃った。
エミがモニターを用意して、小さなカメラを出した。
ヨーコが机を出して、その上にモニターを置いた。
マリが上空から写した、黒い世界の航空写真を広げた。
「美由紀、その車椅子のエネルギー設定は何？」とシズカが二ヤで

聞いた。
「温度です・・放出する体温を、エネルギーにしてます」と美由紀が二ヤで返した。
「さすが、美由紀・・じゃあこのカメラで上から撮影して。
もしかして、飛ぶ敵がいるかもしれないから、充分注意してね。
マリア、一応準備しててね・・美由紀よろしく」
シズカが笑顔で言った、美由紀とマリアが笑顔で頷いた。
エミが車椅子に下向きにカメラを装着して、モニターを見た。
真赤な地表が写っていた、シズカが美由紀に頷いた。
「いってきま～す」と美由紀は飛び上がった。
そしてカプセルの真横に来て、沙紀に笑顔で手を振り、私に不敵を出した。
美由紀は山の方向に、ゆっくりと飛んで行った。
私は沙紀と笑顔で手を振って、美由紀を見送った。
女性達は全員で、モニターを見ていた。
その時、正方形の正面にスクリーンが現れた、飛行する美由紀が映っていた。
「美由紀・・気を付けて、敵が美由紀を写した」とシズカが言った。
「了解で～す・・アイドルは辛いな～」と美由紀が返した。
「げっ！・・何じゃあれ～」とセリカが美由紀の写してる、地表の映像を見て叫んだ。
大量の腐敗した人間のような軍隊が、整列していた、１万体はいそうだった。
「ほほ～・・これは楽しみだね～」と大ママが二ヤで言った。
「最近ストレスが溜まってたから、嬉しいわ～」と千鶴が二ヤで言

った。
シズカは航空写真に、状況を書き込んでいた。
「にょ～」と美由紀が叫んだ。
山の麓の大地に、見た記憶がある怪獣が大集合していた。
「凄い数です～・・加減を知らない、馬鹿者です～」と美由紀が無線で言った。
その時画像が揺れた、スクリーンに映る美由紀の側を、巨大なトンボが飛んでいた。
「でかいです～・・目が怖いです～」と美由紀が止まって二ヤで言った。
マリアは美由紀の方向を見て、リアンを見た。
「待ってね、マリア・・美由紀、まだ余裕があるから」とリアンがマリアに微笑んだ、マリアも笑顔で頷いた。
スクリーンの映像は2画面になって、美由紀がアップで写された。
美由紀の目の前に、巨大なトンボが口を開いて止まっていた。
「邪魔ですね～・・仕方ないな～、スコープ」と美由紀は二ヤで言った。
美由紀の目の前に、サングラス型のスコープが出現した。
「無敵美由紀ミサイル、ロックオン・・トンボちゃん、さよなら～」と二ヤで叫んで、右手で赤いボタンを押した。
車椅子の下部から、ミサイルが2発発射されて、トンボに命中した。
ど～んと音が響いて、空が明るくなり、大輪の花火がトンボを包んだ。
巨大トンボは、焼けながら地表に落ちて消えた。
5人娘が笑顔で拍手して、全員が笑顔で拍手した。

「美由紀・・ナイス、一応そのまま帰還せよ」とシズカが言った。
「了解・・帰ります」と美由紀が返して、反転した。
「艦長・・とりあえず、あの奥の怪獣ランドからやりましょう、作戦を」とシズカがリアンに言った。
「ありがとう、シズカ・・あんたとマリがいて、本当に良かった」とリアンが極炎で微笑んだ。
シズカとマリが照れた笑顔で返した、その時美由紀が帰還した。
「艦長・・こんな物が、トンボから飛んできました～」と美由紀が白い３０ｃｍ四方の型紙を見せた。
その形はジグソーパズルのピースのような、凹凸が付いていた。
「この赤い正方形は、パズルの台紙だ！」とミコトがそのピースを見て言った。
「そっか～・・敵を倒すとピースが出るんだ」とホノカが言って。
「パズルを完成させると、敵は全滅という事ね」とユリカが微笑んだ。
「真っ白いジグソー・・最も難しいと、言われてますね～」とシズカが言った。
「よし・・パズルの製作は、エミを中心にして5人娘でよろしく。
その5人娘の側に、ヨーコが付いているように。
危ない場面では、道具で守りきれよ。
エミ・・戦闘車両の種類と数を教えて？」
リアンが真顔で言って、ヨーコが真顔で頷いた。
「２０人乗り攻撃型ヘリが3機、戦車が3台、機銃装備ジープが４台。

それに地対空ミサイル装備、人員輸送用トラックが3台。
それに攻撃型バイクが5台、あとは武器の装備がごっそり入ってます」

エミが書類を見ながら笑顔で報告した、リアンも笑顔で頷いた。
「シズカ・・ヘリの操縦方法は難しいの？」とリアンがシズカに聞いた。

「ヘリも戦車も、基本的に車の運転と変わりません。
ハンドルも車用の、小さいやつを装備してます。
ペダルは、クラッチは無いので、オートマと思ってもらって結構です。
ヘリ以外の車両は、車と全く同じレイアウトにしています。
ヘリにはブレーキもありません、ライトやワイパーは車と同じです。
ヘリはハンドルを引けば上昇し、押せば下降します。
方向調整は、車のハンドルと同じです。
アクセルから足を離すと、ホバリング状態になり、浮きながら停止します。
全車両のナビ席が攻撃用の席で、言葉で武器名を言えば、モニターに使用方法が出ます。
戦車とトラックには、車幅を移すカメラが付いていています。
運転席の左のモニターに映ります、戦車だけリアリティーは求めていません。
車と同じ感覚でＯＫです・・バイクは万が一の為の装備です。
車の運転に自信がある・・蘭姉さんとかなら、すぐに操縦出来ます」

シズカが真顔で説明した、蘭の満開笑顔が咲いた。
「ＯＫ・・蘭は決定で、他に運転に自信がある者？」とリアンが聞

いた。
ネネとリョウが笑顔で手を上げた。
「OK・・蘭とネネとリョウで、ヘリの操縦を頼む。
最初の攻撃席は、ユリカと千鶴とミコトで行こう。
戦闘に余裕があれば、随時皆に経験してもらう。
大ママとユリ姉さんと私で、各チームのリーダーになる、リーダーに従って。
ミチルママがここの指令本部責任者、シズカとマリは連絡係でここに待機。
チーム割を各リーダーで作るから、全員で船から車両を降ろして。
そしてユリカ・・実働部隊の3チームの、統合作戦責任者。
ユリカ、車両搬出指示よろしく・・準備にかかろう」
リアンが強く言って、全員が頷いてトンネルを船に向かった。
大ママとユリさんとミチルとリアンが、航空写真を見ていた。
5人娘は、美由紀の持ってきたピースの場所を探していた。
「まず・・基本を確認しましょうね、ここはイメージの世界です。
だから怪我もしないし、もちろん死にはしませんね。
動揺してパニックになったら、戻されます。
その時点で、その人はゲームオーバーという事でしょう。
どらだけの人数が最後まで残るかが、勝負ポイントでしょうね。
どんなに気持ちを高めても、視覚的恐怖はパニックを引き起こします。
団体戦で行きましょう・・それがエースの作戦でしょうから。
この手前の窪みに、作戦本部を作りましょう」
ユリさんが、航空写真を指差して言った。

「そうだね・・絶対に一人になる状況を作らない、それが第一条件だね。
２人以上なら、パニックにはならないからね。
どんなに相手が大きくても、相手の攻撃は直接受けない。
それなら・・正面から総攻撃をしよう、ヘリで場所を確保して」
大ママが二ヤで言った、３人も二ヤで頷いた。

宇宙船では、格納庫の照明をシズカが点けた。
「ワーオ・・ワクワクする～」と小夜子が笑顔で言って。
「凄いな～・・楽しいな～」とセリカが言った。
黒光りする車両を見て、全員が笑顔になった。
哲夫が武器を選んでいた、女性達がニヤで哲夫を見ていた。

「フロントハッチ、オープンします・・準備完了の合図を下さい」
とシズカが無線で言った。
マリは宇宙船の前方を、カメラで写して見ていた。

「それじゃあ・・トラックからだね・・ヘリの台車が付いてるみたいだから。
ヘリの操縦者がトラックの運転席に、攻撃役が助手席。
戦車はベテランドライバーの、サクラさんとリンさんとミナミさんで。
アイさんとナギサとカレンが別れて一緒に乗って、それとジープは四季でよろしく。
カスミとホノカと小夜子とセリカで、助手席に乗ろう。
バイクは一番奥だから、マキが１台出して、あとはとりあえず置いとこう。
残りの人員で、不測の事態に対処する・・絶対に船には侵入させないでね。

じゃあ乗り込んで・・もうすぐストレス解消の、楽しい時が来るから」

ユリカが笑顔で言って、全員が笑顔で頷いて配置に着いた。
「シズカ・・準備完了」とユリカが無線で言った。
「了解・・フロントハッチ・・オープン」とシズカが言って、マリがハッチのスイッチを押した。
ゆりっくりと操縦席の下のハッチが開き、マリが宇宙船のライトで前方を照らした。

蘭がトラックをゆっくりと走らせて、ヘリの台車を引いて出た。
その後をネネとリョウが続いた、赤い正方形の方に向けてトラックを停車させた。
その横に続々と車両が並んだ、ハッチがゆっくりと上がり閉じた。
残る全員が赤い正方形に、トンネルを通り終結した。

「自分のチームを確認して、チームで集まって。
とりあえずミチルママとヨーコとシズカとマリ、それ以外全員で行こう。
自分の武器の威力や、誤差なんかを確認する為にも。
美由紀はピースが出たら、ここに届けてくれ。
絶対に単独行動をしない、それが基本だよ・・そして周りの仲間に注意を払う。
全員で・・沙紀とエースも連れて、船で帰還する。
たとえ攻撃を受けないと分かっててても、絶対に気を緩めないで。
でも・・面白会話は許可します、私達にはそれが最大の武器だからね。
笑い飛ばそう・・それを沙紀に見せよう、それが最も大切だと思ってる。
シズカ・・何か注意事項があるかい？」

リアンがシズカに聞いた、シズカは頷いて、二ヤでマキに歩み寄った。
「この世界では味方の攻撃は受けません・・その証拠をお見せしましょう」とシズカがマキに最強二ヤを出した。
マキが不思議そうに見ていると、シズカが腰のマグナムを抜き、マキの胸を無造作に撃ち抜いた。
ドンという大きな音がが響いて、マキは呆気にとられてシズカを見た。

「ほら～、このように安全です・・だからと言って、仲間を狙わないように」とシズカが二ヤで言った。
「普通・・胸を撃つか～・・・乙女のハートを」とマキがウルで返して、全員が笑った。

「胸だったのか～・・・凹凸が無くて分からなかったよ。
そしてもう1つ、自分の武器の最初の一発目を撃つ時。
イメージを入れて下さい、反動0と心に囁いて。
そうでないと、非力な女性には・・リアルな反動はきついですから。
それと・・久美子のようなライフルは、スコープで見たままで大丈夫です。
空気抵抗も摩擦も関係ないでしょう・・風速も0でしょうから」
シズカが笑顔で言って、マキがウルを出していた。
女性達が笑いながら、楽しそうに頷いた。

「私からも1つ・・さっきのトンボで分かったんですけど。
奴等のどこかに赤い丸があります・・それを撃ち抜けば良いんです。

どんなに大きい敵でも、小さな銃の一発で消滅すると思います」
美由紀が笑顔で言った、全員が二ヤで頷いた。
「それじゃあ、先に皆で自分の武器を一発撃っとこうか。
あの山の方向に向かって、反動０だよ・・忘れるなよ」
リアンが言った瞬間、ドン・ダッダッダッと武器の音が鳴り響いた。
ユリカとミコトと蘭とシオンが、二ヤ顔で撃っていた。
「気持ち良いです～・・楽しいです～」とシオンがニコちゃんで言って。
「最高～・・楽しい～」とユリカが叫んで。
「うっほ～・・気持ち良い～」とミコトと蘭が叫んだ。
女性達がダッシュで、４人の後ろに並び、期待溢れる笑顔で待っていた。
私はシオンの笑顔を見て、二ヤを出していた、沙紀が私を見た。
『シオンがね、攻撃的なのが嬉しいんだよ・・攻撃できる相手が現れて、シオンも嬉しいんだね』と沙紀に笑顔で言った。
「そうなんだ・・シオンちゃん、頑張ってね」と沙紀が笑顔で手を振った。
正方形の端で、女性達が歓喜の表情を出していた。
リョウとセリカに至っては、嬉しさのあまり泣いていた。
その泣き顔に、カスミとホノカが突っ込みを入れて、大爆笑が起こっていた。
美由紀が由美子を抱いて、カプセルの横まで上がってきた。
沙紀は笑顔でカプセルに手を付けた、由美子もカプセル越しに手を合わせた。

由美子の嬉しそうな顔があった、私も由美子に笑顔を向けた。
美由紀は3人娘を順番で運び、沙紀は全員に笑顔で手を伸ばした。
最後にマリアが自分で来て、沙紀と手を合わせて、私に天使全開をくれた。

「それじゃあ・・ヘリに乗り込むよ・・5人娘を、ミチルママお願いします」とリアンが極炎で微笑んだ。
「任せなさい・・いざとなったら、昔に戻るよ」とミチルが妖艶二ヤで返した。
ワイワイと話しながら、女性達がヘリに乗り込んだ。

「無線チェックします・・各パイロット、応答願います」とシズカが言った。
「1号機、蘭・・OK」と蘭が応えて。
「2号機、ネネ・・OK」とネネが応えて。
「3号機、リョウ・・OK」とリョウが応えた。

「右上の赤ボタンで、エンジンスタートして・・アクセルは踏まないで下さい」とシズカ言った。
バタバタと大きな音がして、ヘリの羽がゆっくりと回転を始めた。
「3機・・ライト点灯確認」とシズカが言うと、3つの機体のライトが点灯した。
「OKで～す・・1号機・・発進」とシズカが言った。

「ラジャー・・1号機発進します」と蘭が応えて、ゆっくりとアクセルを踏んだ。
機体が少し浮いた瞬間に、ゆりっくりとハンドルを引くと、ヘリは浮かび上がった。
「よし・・ネネ、リョウ・・ゆっくりやれば簡単だよ」と蘭が言っ

た。
「了解」と2人の返事があった。
「次行きます・・2号機・・発進」とシズカが言って、2号機も順調に浮かび上がった。
「ラスト・・3号機・・発進」とシズカが言って、3号機もスムーズに離陸した。

「それでは・・各リーダーさん、お願いします」とシズカが交信を切った。

「蘭・・この機で引っ張ります・・方向は右の、あの山です」と蘭とユリカの間に座る、ユリさんが指差した。
「ラジャー」と言って、蘭は満開で頷いた。
「1号機が道案内します・・行きま～す」と蘭無線で言って、2機の「了解」を確認した。

蘭は楽しそうな満開笑顔が継続中で、ユリさんもユリカも、それを二ヤで見ていた。

1号機がPGのメンバーで、蘭が操縦・ユリカが攻撃席、ユリさんがリーダー。
2号機がスナックチームで、ネネが操縦・千鶴が攻撃席、リアンがリーダー。
3号機が魅宴とゴールドの合同チームで、リョウの操縦・ミコトが攻撃席、大ママがリーダーだった。
リンとミナミは3号機、カレンと美由紀が2号機に、ワクワク笑顔で乗っていた。

「蘭、あの窪地に・・前線本部を作ります、状況を確認しましょう」とユリさんが前方を見て言った。

「了解・・降下します・・揺れる可能性あり」と蘭が無線で言った。
「機銃、バルカン」とユリカが言うと、前面からレバーが出てきた。
そしてスコープが上から降りてきた、ユリカは最強爽やか笑顔でスコープを装着した。

「あの黒く動いてるのは・・何ですかね～？」と蘭が二ヤで言った。
「ミサ命名の、チュランタラの大群だね・・蘭もう少し下りて」とユリカがスコープを見ながら、二ヤで言った。

「2号機、3号機・・クモの化け物を蹴散らす、左から右に追い込もう。
機銃で撃って・・最後に焼き払うよ」

ユリカが無線で言った、「了解」と2機が嬉しそうに応えた。
蘭が大きく左に旋回して、3機が横に並んだ。
「よし・・やっちまうか」とユリカが呟いた。
「よし・・GO」とリアンが言って、3機から轟音が響き、一斉射撃を始めた。
赤丸を撃たれたクモは消えて、クモの大群が右方向に逃げ出した。
ユリカも千鶴もミコトも、最強二ヤ顔を出して撃っていた。

クモの集団は洞窟に逃げこんだ、3機はホバリング状態で浮いていた。
「ミサイル」とユリカが言った、右手の位置にレバーが現れた。
「洞窟の入口を封鎖する・・ロック・オン・・発射」と言って赤いボタンを押した。
ミサイルが1発洞窟の入口の上に命中して、大きな岩が崩れて入口が塞がった。

「2号機・・美由紀を出します」とナナが無線で言って、ヘリのリ

アハッチが開いた。
そこから美由紀が飛び出して、窪地の安全確認をした。
「問題なし・・着陸ＯＫで～す」と美由紀が言って、３機がその場に着陸した。

その頃、赤い正方形では、マリがライフルを小さな三脚の上に乗せた。
マリはうつ伏せに寝転び、山の方に向かい、ライフルのスコープを覗いていた。
その時１ｋｍほど先の岩陰から、巨大な芋虫が５匹、赤い正方形に向かって這って来た。
猛烈な勢いで、突進してきた。
芋虫の触覚の間に赤い丸が有った、カプセルから肉眼で見ると、それは豆粒ほどの大きさに見えた。

「あれが蝶になったら・・大きいね～」とミサが笑顔で言って。
「蛾だったら・・モスラちゃんだね」とレイカが言って、５人娘が笑っていた。
それを見て、ミチルもシズカも笑顔になった。

ドンと鈍い音がライフルから響き、一番手前の芋虫が消えた。
マリは躊躇無く、ドン・ドンと４匹を撃った、５発で５匹を消し去った。
そして白いピースが１枚、マリの目の前に降ってきた。

レイカが正方形を出てピースを取ろうとしたのを、マリが手を翳して止めた。
マリはライフルをピースに伸ばした、ライフルの先が正方形を出た瞬間。
ライフルの先に、大きな蟹のハサミが地中から突き出して、ライフ

ルの先を挟んだ。
マリは二ヤを出して腰の拳銃を抜いた、巨大な蟹が顔を出した時に頭に赤丸が見えた。
マリはその赤丸を至近距離で撃ち抜いた、蟹は消滅していた。

マリはピースを拾い上げ、笑顔でレイカに渡した。
「マリちゃん、ありがとう・・もう外に出ないね」とレイカが笑顔で受け取った。
マリは笑顔で頷いて、ライフルの横に座った。

「マリちゃんがいれば、安心ね」とミチルがシズカに微笑んだ、シズカも笑顔で頷いた。

マリは空を見ていた、激しく渦を巻く黒い雲を。
巻き戻しをしてるのか、マリは集中してるようだった。

沙紀はマリをカプセルから見ていた、マリは視線を正面に移して、二ヤで立ち上がった。
そしてミチルの手を引いて、ライフルの前に座らせた。
ミチルの瞳を見ながら、強く両手を握った。

「マリ！・・了解・・任せなさ～い」とミチルが妖艶笑顔で返した。
マリはミチルに二ヤで頷いて、ヨーコに近づき、無造作にポケットに右腕を突っ込んだ。
「何？・・何？・・マリ、くすぐったいよ～」とヨーコがウルで言った。
マリは二ヤを出して、右腕を引き抜いた。
マリの右手には、スプレー缶が握られていた。

マリはヨーコに背を向けて、シズカに二ヤを出して、マシンガンを

背中に担いだ。
そしてバイクに跨り、右側の崖の上を、山の方向に走り出した。
マリがバイクで崖の上を失踪する姿を、沙紀は強い瞳で見てた。
《マリ・・その為に来たのか、素敵だよ・・マリ》と私は心に囁いた。
波動は返って来なかった、私はマリの横顔を見ていた。
美しい瞳の中の、大きな黒目が輝いていた・・未来を見据えて・・。

【赤い月?】

暗黒の世界に人工的な光が走っていた、前だけを見て。
自分のやるべき事を確信している、瞳の中の黒い光を見ていた。

マリは崖沿いを怪獣ランドに向かって、バイクを走らせていた。
私の手を握る沙紀は、その映像に見入っていた。

マリは２０ｍはあるであろう谷を、減速も躊躇も無く飛び越えた。
そして前傾姿勢になり、燃料タンクに胸を押し付けた。
最高速を計るかのように、右手アクセルは全開だった。
透明のサングラスをかけた奥の瞳は、黒目の中心から外に向かい、景色を流していた。

「マリちゃんは、一人で大丈夫なの?」と沙紀が心配そうに私を見た。
私は笑顔で沙紀を抱き上げて、ソファーに抱いたまま座った。

『ねぇ、沙紀・・みんなは沙紀の、怖い世界が知りたいんだよ。
それは自分も同じ怖いを持ってるからね、それと戦いたいんだよ。
怪獣や虫やお化けなんかが怖いんじゃない、本当の怖い物は違うんだよ。
俺は・・マリのヒントで分かったから、今回は女性のチームを作ったんだよ。
その怖いより強いのは、今はまだ・・マリと美由紀だけなんだよ。
だから2人は大丈夫なんだ、怖いより強い心を持ってるからね。
マリは見て欲しいんだよ、沙紀に見て欲しい・・マリの強い心をね。
マリは沙紀に伝えたいんだよ、だから・・あんなに強くなったん

だ。
沙紀は見てれば良いんだよ・・みんなのやる事を見てればね。
沙紀・・怖い事は悪い事じゃない、誰にでも怖いは有るんだよ。
でも自分の目で見て・・心で感じないといけないんだよ。
沙紀・・俺が付いてるから、見てようね・・戦士達を。
理想を描くために、怖いと戦う・・女戦士達をね』

私は笑顔で言葉と温度で強く伝えた、沙紀はマリの映像を見ていた。
「うん、ずっと見てるよ・・マリちゃん、ありがとう」と沙紀は握った手の力を強めて言った。
私は沙紀の笑顔を見て、本当に嬉しかった。

その時、芋虫の発生した岩場から、巨大なドブネズミが１０匹現れた。
「くっさ～い・・お風呂入ってないのね」とエミが二ヤで言った。
４人娘は眉間に皺を寄せて、鼻をつまんでいた。

ミチルが最強妖艶二ヤで、ライフルのスコープのカバーを開けた。
ドブネズミは額に赤丸があった、岩場で集団になって相談してるようだった。
シズカが二ヤでオートライフルを担いで、ミチルの横にうつ伏せでライフルをかまえた。
ヨーコはマリアを抱いて、４人娘の前に立った。

ドンとライフルの銃声がして、一匹が消えた。
「か～・・気持ち良い～」とミチルが顔を上げて、シズカに最強妖艶笑顔を向けた。
「じゃあ・・怒ってるみたいだから、やっちまいますか」とシズカが笑顔で返した。
「そうだね、シズカちゃんが右からよろしく」とミチルが二ヤで返

して、スコープを覗いた。
ドン・ドン・ドンと何発も銃声が響いて、ドブネズミは消えていった。
残り2匹が突進してきた、ドンとミチルが撃って一匹が消えた。
最後の一匹が知能が高いのか、ジグザグで走ってきた。
「近すぎる！」とシズカが叫んだ。

その時ダンって感じの大きな音がして、ドブネズミが正方形の手前１０ｍで消えた。
白いピースが飛んできて、正方形の中に転がった。

シズカの背中を跨いで、ヨーコが怖い位の最強二ヤで立っていた。
右手のショットガンから煙が出ていて、ガチャとヨーコが両手でショットガンを折った。
空の薬きょうが、ショットガンから飛び出した、ヨーコはシズカを二ヤで見ていた。
「残さないでよ、シズカ・・臭いでしょ」とヨーコがいつもの清楚笑顔に戻った。

「い～な・・ヨーコちゃん、変身できて」とミサが笑顔で言った。
「ミサ・・ヨーコの今の変身は、いつもの・・現実の世界でも出来るのよ」とシズカが二ヤで言った。
「え～・・良いな～」とレイカが言って、エミが二ヤをヨーコに出した。
「エミ・・駄目よ～、折角ミサとレイカに褒められたのに～」とヨーコがウルで返した。
ミチルとシズカとエミが笑っているのを、他の４人娘が不思議そうに見ていた。

一方ヘリ部隊は、全員が窪地に出て作戦本部を作っていた。
本部とヘリを大きく囲んで、若手が二ヤで武器をかまえていた。

「じゃあ・・チームで3方に分かれましょう。
赤丸狙いで消していって、一番奥のあの大きな遺跡前に集合。
多分・・あそこに怪獣ランドの、ボスがいるでしょうから。
各リーダーが、覚悟を決めさせて下さい。
ボスは想像を超える奴かもしれません・・動揺しないように。
ヘリは帰りがあるので、使わないで・・地上戦で殲滅しましょう」

ユリカが言って、各リーダーが頷いた。
集合させようとリアンが振り向いた時、セリカが空を指差した。
「うえ～・・ラドンちゃん、でっけ～」とセリカが叫んだ。
上空を見ると、真黒な羽を広げた巨大な鳥が飛んでいた。
原始時代の恐竜のような尖った顔をした鳥が、3羽女性達の上を旋回していた。

「ラドンの出来損ないだね、ドランにしよう・・赤丸が見えないね～」とユリカが見上げて言った。
「頭か背中に、有るんでしょうね～」とユリさんも見上げながら言った。
「行きまましょうか？」と美由紀が笑顔で言った。
「待って美由紀・・何かが猛スピードで来る・・強い力が」とユリカが二ヤで返した。
女性達がユリカを見た、ユリカは瞳を閉じて集中していた。

そしてユリカが目を開けて、爽やか最強笑顔を出した。
「全員・・ドランに照準を合わせて、赤丸が見えるまで・・待機」
とユリカが無線で言った。
女性が全員、武器を上空に向けて、ドランに照準を合わせた。

ドッドッドッと崖の上からバイクの音がして、ドンと銃声が響いた。
ドランが一羽消えた、そして2羽が崖の上に向けて方向を変えた。
ドンと2発目が響いて、1羽が消えたが、最後の一羽は崖に向かって腹を見せて威嚇した。
その体勢で下の女性達に、ドランの頭の赤丸が見えた。

ドンと女性達の中から銃声が響いて、最後のドランが消えて、白いピースが落ちてきた。
女性達の視線は、ライフルをかまえる久美子を見ていた。
久美子はライフルを下ろし、ニヤを出した。

「私の後ろに立つな・・私はゴルゴ・久美子よ」と笑顔で言って、崖の上に右手の拳を突き出した。
全員が崖の上を見ると、マリが二ヤで右手の拳を久美子に向けていた。

「やっば～い・・早く活躍しないと、ヒーロー称号が無くなる」とセリカがウルで言った。
「それはまずい、素敵なの取らないと・・無線で確認しよう、早いもの勝ちで」とカスミが最強不敵で言って。
「大物を仕留めた時だけよ・・雑魚じゃ駄目、リーダーの許可制にしようね」とホノカが華麗二ヤで言った。

「了解・・リーダは厳しく判断しますよ、倒した敵の名前の勲章を授与します。
倒した相手の強さと、勲章の数で称号選択件を与えます・・頑張りたまえ」

リアンが極炎ニカで言った、女性達に笑顔が溢れ、マリも崖の上か

ら笑顔を向けていた。
その映像をスクリーンで見て、赤い正方形のメンバーにも笑顔が出た。
「ヨーコ・・ヒーロー称号、ガンバ・ヨーコを許可する」とミチルが二ヤで無線で言った。
ヨーコが嬉しそうな、清楚笑顔で頷いた。
「ネズミの称号が、そんなに嬉しいのか？・・変わった猫だ」とシズカが二ヤで言った。
ミチルとシズカと5人娘の笑い声が、無線から響いた。

「ガンバの冒険！・・取られました～・・欲しくないけど」と美由紀が二ヤで言って。
「猫だから・・欲しかったのよ～」と蘭が満開二ヤで言った。
窪地の女性達が爆笑していた、ヨーコはウルウルを出していた。

「それじゃあ・・ヒーローになりに行くよ。
1号機が右から、2号機が正面、3号機が左から。
出来損ないの怪獣を消して、あの奥の遺跡を目指す。
取りこぼさないように、可愛い奴でも遠慮するなよ。
覚悟を決めて、ボスは想像を超えるかもしれない。
人数的に2号機が、平均的に若く危険なので。
リンさんミナミさんは2号機に移って下さい、お願いします。
装備点検後・・リーダーの合図で突入する」

リアンが強く言った、女性達から笑顔が消えて、全員が真顔で頷いた。
ユリカはマリを見上げた、崖の上で涼しい顔で微笑んでいた。
3チームが持場に集まった、全員が装備の点検をしていた。

「突入します・・ＧＯ」とリアンが言って、３チームが広大な平原に入って行った。
マリはバイクに跨り、崖沿いを遺跡を目指して走り出した。

「みっけ・・エレキングの出来損ない、エレ庶民」と小夜子が言った。
「エレ庶民ときたか～・・・赤丸は無いですね？」とホノカが言った。
「背中かな～・・・でかいね～」とリアンの店の女性が言った。
「面倒だね・・とりあえず、撃とう」とミナミが二ヤで言った。
全員が二ヤで頷いて、一斉射撃をかけた。

「お待ちになって～」とネネが駆け寄って、マシンガンをかまえた。
エレ庶民は気付いたのか、女性達の方向に口を開いて、何か光るものを噴出した。
「一応・・よけるよ」とミナミが言って、全員が岩陰に隠れた。
「見たよね」とリンが岩陰に来て言った。
「見ましたよ～・・・赤丸が、口の中にありました」と小夜子が笑顔で返した。

「誰かが囮の餌の役になろう・・多分、エレ庶民は・・可愛い系がタイプだよ」とネネが二ヤで言った。
「そうですか～・・・案外、人妻がタイプかも～」とホノカがウルで返した。
「そうかもね～・・・特に子供を産んだ人妻が」とミナミが二ヤで言って。
「いえいえ・・不良系が好きかもね～」とリンが二ヤでネネに戻した。
「やっぱり・・ジャンケンですね、負けた２名が・・餌の役で」と小夜子が二ヤで言って、全員が頷いた。

ジャンケンの結果は、ミナミとリンの負けだった。
2人はウルウルで両手を上げて、エレ庶民の前に出た。
岩陰で他のメンバーが、ライフルの照準を合わせた。

「こんにちわ～・・お一人ですか～」とミナミがエレ庶民を見上げて笑顔で言った。
「耳が無いのかね～・・あのクルクル回ってるのは・・角なの？」とリンがミナミに聞いた。
「そっか～・・触覚だね・・あれを撃とう、そうすれば気付くよ」とミナミが言って、背中のロケットランチャーを担いだ。
「なるほどね～」とリンが二ヤで言って、バズーカを担いだ。
「やるよ～・・発射」とミナミが言って、2発が轟音と共に飛び出した。
エレ庶民の顔に当たり、エレ庶民が顔をブルブルと振って2人を見た。

「逃げようか～」とリンが言って振り向いた。
「そうだね～」とミナミが振り向いて、駆け出した。
エレ庶民は口をゆっくりと開いた、その瞬間ドン・ドンと何発もの銃声が響いた。
エレ庶民が消えて、白いピースが振ってきた。

「命中したのが、誰のか分からない～・・勲章エレキング・ホノカが～」とホノカが言って。
「仕方ない・・エロキング・ホノカを授与する」とリアンが二ヤで言って。
「良いな～・・銀河の奇跡の・・エロキング・ホノカ」と小夜子が二ヤで言った。
「私の銃弾・・外れてました～」とホノカが華麗ウルで返して、女性達が笑っていた。

その頃、セリカの左肩を誰かが叩いた。
「ちょっと待って・・今、勲章級の大物を見つけたの」とセリカが振り向かずに言った。
それでも何度も左肩を叩かれ、セリカは振り向いて二ヤを出した。

「あなたは、カネゴンの出来損ないの・・ゼニゴンね」とセリカが流星二ヤで言った。
ゼニゴンは頷いた、平らな鍋蓋のような顔に、カタツムリのように目が飛び出していた。
２m位のサイズで、大きな口が常に笑ってるような印象を与えた。

「どっか変よね～・・何かが違うよね～」とミサキが二ヤで言った。
「ゼニゴンちゃ～ん、赤丸はどこに有るの？・・教えて～」とリョウが魔性笑顔で言った。

ゼニゴンはピョンと飛んで、背中を向けて振り向いた。
どこか自慢げに、背中の赤丸を見せた。
その瞬間ゼニゴンの飛び出した目がウルを出した、バンと音がしてゼニゴンが消えた。
ミサキがワルサーで撃っていた、リョウとセリカが銃をかまえながらウルを出した。

「私の指名客を取ったね、ミサキ」とリョウが二ヤで言って。
「私が客引きで捕まえたのに～」とセリカが二ヤで言った時、リョウとセリカが青ざめた。

「ゼニゴンは、ミサキ担当で」とリョウがウルで言って。
「そういう事でよろしく」とセリカもウルで言った。
ミサキが恐々振り向くと、ゼニゴンが１００匹近くいた。

「これだけの数の背中を、どうやって撃つの」とミサキが後ずさりしながら言った。
「まわれ～・・右」と後ろから哲夫の声がした。
ゼニゴンがピョンと全員背中を向けた、その瞬間ダッダッダッと哲夫のマシンガンが火を噴いた。
「哲夫・・ちょっと待ちな」とリョウが言って、マシンガンに持ち替えた。
セリカもミサキもマシンガンに持ち替えて、４人で銃弾の雨を降らせた。

「3号機は派手だね～・・無駄弾撃ってるな～、多分リョウとセリカだな」とカスミが不敵で言いながら歩いていた。
「いくら無制限に弾が有るからって、一匹にあんなに撃って・・駄目な子だ～」と蘭が満開二ヤで言った。

その時シオンの右腕を、何かがカプッと噛み付いた。
「カプッって・・噛んでます～・・ベビーギドラが～」とシオンがウルで言った。
シオンの右腕には、小さな黄金の3首竜が、3首で噛み付いていた。

「その系もいるのか！・・円谷さん大忙しだな～」とナギサが華やか二ヤで言った。
「そういえば・・ドランもいたしね～」とサクラさんが笑顔で言った。
「シオンちょっと待ってね・・親が出てきた時の為に、赤丸を確認するから」と蘭がギドラの体を調べた。
「こら・・いい加減離しな」とカスミがコンと、ギドラの真中の頭を叩いた。

ギドラが口を離し、三方向を別々に見た、瞳はウルを出していた。
「キュ～～」と3つの顔で空に向かって鳴いた。
次の瞬間、大きな炎の柱が女性達の周りを走った。
「とりあえず、退避」とユリカが後ろの岩陰から叫んだ。
全員が岩陰に隠れた、巨大な黄金の竜の首が3本現れた。

「でかすぎるよ、リアルすぎ・・キングギドラの出来損ない、キングギラド」とレンが二ヤで言った。
「もう・・カスミが短気でブツから、赤丸が分からないでしょ」と蘭が二ヤで言った。
「真ん中の顎の下に有りました～・・赤丸」とシオンがニコちゃんで言った。
それを聞いて、久美子がライフルのスコープを覗いた。

「あ～・・またもやゴルゴ・久美子に・・そうはさせないよ」とカスミが駆け出した。
「待って～・・カスミ～、単独行動は駄目よ～・・私のギラドよ～」と蘭が慌てて追いかけた。
「カスミ姉さんを、心配してたんじゃないです～・・勲章を心配してました～」とシオンがニコちゃんで言った。
「シオン・・正解」とナギサが二ヤで言って、全員が二ヤを出した。

「駄目ですね～・・動きが早いし、顎を上げません」と久美子がユリさんに言った。
「確か・・シリーズでも最強ですよね、ギラド」とハルカがウルで言った。
「首を上げさせる方法ね～」と千春が言った。
「何を食べるのかしら？・・ギラドちゃん」とユリさんが言って。
「あの大きさですからね～」と美冬が言った。
「まぁ・・PGの漫才コンビが何とかするでしょう、次行きますか」

とユリカが爽やか二ヤを出した。
「そうですね・・無敵のコンビですから」とユリさんが薔薇二ヤを出して、全員が二ヤで立ち上がった。
蘭はカスミに追いついて、ギラドの足元の岩陰に2人で隠れた。
「しかしでかいね～・・・ライフル以外、届かないね～」と蘭が言った。
「それに顎を上げませんね～」とカスミがギラドを見ながら返した。
その時、無線が全員に入った。
「優秀賞・・勲章授与・・勲章名・・ゼットン・小夜子」とリアンが全員に言った。
女性達が一瞬凍結した。
「勲章！・・ゼットン！・・羨ましい～」とカスミが言った。
「勲章・・キングギドラ・・欲しい」と蘭が満開二ヤで言った。
「同じく優秀賞・・勲章授与・・勲章名・・レッドキング・マユ」と大ママが無線で言った。
「やばいですぜ、姉さん・・ＰＧまだ勲章０です」とカスミが不敵で言った。
「大丈夫・・私がキングギドラを取るから」と蘭が満開二ヤで返した。
「優秀賞・・勲章授与・・勲章名・・ウー・シオン」とユリさんが言った。
「しまった～・・カスミが先走りするから、ウーちゃん取られたじゃない」と蘭がウルで言った。

「ウー・シオン・・良いな～」とカスミもウルで言った。
「もしかして・・ギラド、私達に任されたの？」と蘭がカスミに言った。
「そんな感じですな～」とカスミがウルで返した。
その時ギラドの顔の前を照明弾が飛んで、ギラドの頭上で強い光を放った。
ギラドは3首を上に向け、その光を見た。
次の瞬間、ドンと銃声が響きギラドが消えた。
ウルウル顔の蘭とカスミに向かって、白いピースが振ってきた。
「優秀賞・・勲章授与・・勲章名・・キングギドラ・四季」とユリさんが言った。
「しまった～・・チームできやがった」とカスミがウルで言って、ピースを拾った。
「四季め～・・横取りしやがって」と蘭がウルで言って、カスミと歩き始めた。
「優秀賞・・勲章授与・・勲章名・・モスラ・マリ」とユリさんが言った。
「か～・・モスラか～、ギドラ級だな～」とカスミが言った。
「カスミ・・いたよ、勲章級・・名前は知らないけど・・あのシマシマ」と蘭が最強二ヤで言った。
そこには少し淋しげな、体中がシマシマの宇宙怪獣が立っていた。
赤丸が胸に大きくあって、撃って下さいと言ってるようだった。
「蘭姉さん・・有名ですよ、勲章級です。
いつも姉さんにはお世話になってるから、お譲りします。

遠慮無く退治して下さい・・勲章を取って下さい」

カスミが真顔で言った、蘭は感動して瞳を潤ませた。
「ありがとう、カスミ・・嬉しいよ」と蘭が潤む瞳で返した。
「自分で取るより、蘭姉さんが勲章を取った方が・・私は嬉しい」
とカスミも潤む瞳で返した。
「本当にありがとう、カスミ・・その気持ち受け取ったよ」と蘭が半泣きで言って振り向いた。

淋しげなシマシマ怪獣は、動かずにそこにいた。
蘭は潤む瞳でライフルのスコープを覗いた、照準が涙で中々定まらなかった。
「さようなら・・シマシマちゃん」と蘭が言って、ドンという音がしてシマシマは消えた。
後ろから1号機のメンバーが拍手した、蘭は振り返り満開笑顔を振り撒いた。

「優秀賞・・勲章授与・・勲章名・・ダダ・蘭」とユリさんが薔薇二ヤで言った。

無線機から爆笑の笑い声が聞こえた、蘭はウルウルを出していた。
「カスミ・・奴の名前・・知ってたね」と蘭が満開ウルで言った。
「はい・・自分の事のように・・嬉しいです」と最強不敵で返した、蘭はウルで睨んでいた。
それを見て、1号機の女性達が爆笑していた。

3チームとも遺跡がかなり近づいた、美由紀がピースを3チーム分回収した。
美由紀がピースを正方形に届けると、5人娘がちゃぶ台でおやつを食べていた。

由美子が初めて食べたのか、嬉しそうな笑顔が出ていた。

「エミ・・パズル難しい？」と美由紀がピースを渡しながら、エミに聞いた。

「大丈夫・・数は少なそうだから」とエミが笑顔で返して、美由紀は笑顔で頷いて飛んで行った。

美由紀は飛びながら焦っていた、続々と勲章授与者の名前が呼ばれていた。

そして衝撃の名前が呼ばれる。

「優秀賞・・勲章授与・・勲章名・・メカゴジラ・北斗」とユリさんが言った。

「凄いです～・・メカゴジ・・羨ましいです～」と美由紀が叫んだ。

しかし美由紀はその時二ヤで前方を見ていた、上空でクルクルと回る甲羅が見えた。

「奴は悪者なんだよな～・・ここにいるんだから」と呟いて、美由紀は上に回った。

回転する甲羅を見ている、女性達が見えた。

「ラッキー・・赤丸上でした～・・メカゴジ級いただき～」と美由紀は甲羅の赤丸に狙いを定めた。

「美由紀・・その高速回転の赤丸を、撃てるのか？」とリアンが無線で聞いた。

「大丈夫で～す・・中心点ですから～・・勲章いただき～」と言って赤いボタンを押した。

ミサイルが甲羅に当たり消滅して、白いピースが振ってきた。

「優秀賞・・勲章授与・・勲章名・・ガメラ・美由紀」とリアンが無線で言った。

「リョウ・ホノカ、いよいよやばいよ・・銀河０だよ・・セリカも取ったのに、ゴモラだけど」とカスミがウルで無線で言った。
「やばいよね～・・ゴモラだけど、ゴモラだけど・・セリカ取ったし」とリョウが隣のセリカに聞こえるように言った、セリカはウルを出していた。
「シオンはウーだし・・マジやばいね」とホノカも無線で返してきた。
そして銀河が凍りつく、１９歳トリオが個性的な名前の勲章を揃える。

「優秀賞・・勲章授与・・勲章名・・ジャミラ・カレン」とリアンが無線で言った。

「ダダ・・撃っとけば良かった」とカスミが呟いて。
「本音が出たね・・きゃしゅみ」と蘭が満開二ヤで突っ込んだ。

３チームとも、遺跡の目の前に来ていた、敵の姿は確認できなかった。
「まさか・・終わりじゃないよね、これで終わりじゃ」とホノカが呟いた。
女性達が笑顔で自慢しあってた、銀河は離れて３人で固まってウルを出していた。

その時上空が光って、不気味な声がした。
「フェッ・フェッ・フェッ」と言いながら、ゆっくりとその姿を見せた。

「フォッだろ、フェッって・・抜けてるね～・・・バカタン星人だね」と北斗が二ヤで言った。
「やはりボスは奴ですね～・・・それもかなりリアルだ」とナギサが言った。
女性達は戦闘体制に入った、銀河は二ヤで銃をかまえた。

「赤丸は？」とカスミが叫んだ。
「見えない・・背中か？」とリョウが言った。
その時ハサミが開いて、光線のような物を出した、銀河は岩陰に隠れた。
ホノカは自分の銃を見て、青ざめた。

「報告します・・さすがにボス、バカタン星人の攻撃。
体には影響ないですが・・武器が熔けます、ドロドロに」

ホノカの緊迫した声で、女性達が緊張した。
「一度体制を立て直す・・近くの岩陰に退避」とユリカが言って、全員が岩陰に隠れた。

「見たよね」とホノカが小声で言った、2人は真顔で頷いた。
「どうする？・・・ハサミの中だぞ」とカスミが言った。
「撃つ前に、撃たれて弾は鎔けるよな」とリョウが真顔で言った、2人は頷いた。

沈黙の中、ホノカが捨てた銃を見てハッとした。
「金属だけだよ、熔けるの・・プラスチックは残ってる」とホノカが2人に言った。
「金属以外の武器・・何かないか？」とカスミが言った。
「こらなら持ってるけど・・矢の先は鉄だし」とリョウがアーチェリーの弓を見せた。

「それだ！・・矢の先を変えれば？」とホノカが言った。
「そうだね・・何に・・何に変える？」とカスミが言った。
3人が考えた、その時崖の上からスプレー缶が飛んで来て、3人の足元に転がった。
3人が崖の方を見上げると、マリが二ヤでバイクに跨っていた、そして崖を疾走して帰って行った。
カスミはスプレー缶を慌てて拾い上げて、缶の名前を見た。
【何でも変換スプレー】と書いてあった。
「サンキュー・マリ・・リョウ矢を出せ」とカスミが最強二ヤで言った。
リョウが慌てて、5本の矢を出した。
カスミが矢の先にスプレーして、最強不敵で2人を見て言った。
「同じ重さの、最強プラスチックにな～れ」とカスミが言うと、黒い金属が青いプラスチックに変わった。
「うん・・いけそう、作戦は？」とリョウが聞いた。
「マリちゃんは、正方形に帰ったよね。
私達にスプレー缶を投げて・・私達に託したんだよね。
沙紀が見てるからよろしくって、そう言ったんだよね・・あの二ヤは。
ならば・・真っ向勝負だよ、私とカスミで盾になるから。
後ろからリョウが射止めて・・バカタン星人の赤丸を。
私達は銀河の奇跡だよ、ウルトラマンより強い称号を持ってるんだ。
勇気を見せるよ・・銀河の奇跡に賭けて」

ホノカが強く言葉にした、２人は真顔で頷いた。
３人で立ち上がり、武器を全てその場に下ろした。

「ユリカ・・銀河・・やる気だ」と北斗が作戦を練っている、４人に向かって言った。
女性が全員、岩陰から銀河を見た、３人は装備を全て降ろしたようだった。

３人は肩を組んで、小さな円を作った。
「やるよ、パニックになるなよ・・必ず仕留める」とカスミが言って、３人で頷いて離れた。

カスミとホノカが腕を組んで、バルタンの前に出た、その後ろにリョウが屈んだ。
バルタンは３人を見ていた、そしてゆっくりと右手のハサミを向けた。
パカっとハサミが開いて、青い光線が発射された。

銀河の３人は光線に包まれて、強く押されていた。
私の手を握る沙紀の手に、力が入った。

その時リョウが立って、弓をかまえた、美しい３人の背中だった。
背中の刺繍の【銀河の奇跡】が全く揺れずに、その強い意志を見せた。
リョウは右手を引いて、狙いを定めた。

「なめるなよ、バルタン・・私達３人が、銀河の奇跡だ」とリョウが叫んで、右手を離した。
矢は真直ぐに飛び、融ける事無く赤丸に命中した、バルタンが消えて白いピースが降って来た。

3人はその場に座り込んで、泣きながら抱き合っていた。

「最優秀賞・・勲章授与・・勲章名・・バルタン・銀河の奇跡」とリアンの声が響いて、女性達の大きな拍手が聞こえた。

沙紀は強い力で私の手を握り、映像で笑う銀河の3人を見ていた。

リョウが涼しげに微笑んで立ち上がり、ホノカが華麗に微笑んで立ち上がり。

カスミが不敵に微笑んで、立ち上がって3人で右手を上げた。

その3人を赤い光が照らした、黒い渦がどこかに吸い込まれるように消えて。

大きな月が左側に現れた・・燃えるような真っ赤な月が・・。

【赤い月？】

塗られたのでも、燃えているのでもない。
人工的な色でなく、有機質な赤い何かで出来ている・・そんな色だった。

静寂の中、浮かび上がった月を女性達が見ていた、赤く発光する月を。
空には無数の星が、無限の広がりを主張していた。
誰一人笑顔は無かった、その危険を提示する色に包まれていた。

銀河の3人が装備を背負って、笑顔の戻った女性達と合流して、ハイタッチをしていた。

「ユリカ、あの月をどう思う？」とリアンが真顔で聞いた。
「演出としとこう・・分からない事を、気にしてもしょうがないでしょ」とユリカが微笑んだ。
「最近似てきましたね～、抱っこの影響かしら・・一度正方形に、戻りますか？」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「大きく周って、全体の確認をしながら帰りましょう」とユリカが微笑んで返した。
「了解・・ヘリに乗り込むよ、一度帰還する」とリアンが言って、全員が頷いた。

バタバタとプロペラの回転する音が響き、砂煙が上がった。
「1号機・・発進します」と蘭が言って、離陸した。
「蘭・・充分気を付けてね、金属を熔かす相手が出るなら・・今後も同様の敵が出るかも」とユリさんが微笑んだ。
「了解です」と満開で返して。

「各機・・右回りで大きく旋回して帰還ます」と蘭が無線で言って、2機の返事を確認した。
3機は崖沿いの上空を飛んでいた、崖下に大きな洞窟が見えた。

「チッ・・また洞窟かよ、懲りない奴だな～」とリョウが呟いた。
「待って・・1号機、待って・・あの洞窟変だよ」とミコトが無線で言った。
全員が洞窟を見た、大きな入口で奥は真っ暗で何も見えなかった。

「ミコト・・何が変なの？」とリアンが聞いた。
「動いてる・・ほんの少しずつ左に動いてます」とミコトが言って、全員が息を呑んだ。
確かに少しずつ左に動いていた。

「ユリ姉さん・・入口のあの文字」とユリカが言った。
「そうなんでしょうね・・今、確信しました」とユリさんが真顔で返した。

「降りて確認しよう・・それが一番だね」と大ママが無線で強く言った。
「そうしましょう・・あの明るい平原に」とユリさんが無線で返して。
「全員戦闘準備・・着陸する」とリアンが言った。
カチャ、カチャと武器の音が響いて、全員が緊張した。
3機が下りて、若手で小さな円を作って、外に向け銃を構えた。
「艦長・・私、ピースをを届けるのに往復して、感じたんですけど。
あの軍隊・・ハリボテの人形です。

沙紀を、ここに来させない為に、人形の軍隊と怪獣ランドでガードしてた。
この洞窟が奴に続く場所ですよ・・そう思います」
美由紀が、作戦を練る四天女に言った。。
「美由紀・・何かヒントを貰ったの？」とユリカが聞いた。
「小僧は今回の事、最初の内は・・自分が悪の親玉になるって言ってました。
でも、その設定を変えてます、何にも変身してない。
多分、豊君にも・・それはマリを、ユリカスペシャルしてからだと思います。
その時に何かヒントが有った、ユリカ姉さんでも感じてない。
なら・・絶対、マリと同調した時ですよね。
そして今回の沙紀の絵・・あの宇宙船の絵なんですけど。
全てを描いてないんです、女性の人数とか・・沙紀らしくない。
読みきれていない・・それが小僧の出した答えだと思います。
マリでも沙紀でも読みきれていない・・だから自分はそのまま来た。
そして傍観者で沙紀の側にいる、そうならば・・絶対にいます、姿無き男が。
その男は・・今は最後の勝負の内容を考えていない。
だからマリにも沙紀にも読めない、小僧はそこまで到達していたはず。
最後の勝負は・・絶対にあのパズルですよね、その時に何人残るか。
何人が沙紀の恐怖に気付き、向き合えるのか。
そこが勝負でしょう・・姿無き男も、今回は少し本気です。
バルタンの設定で、そう思いました・・武器を熔かしたから。
それほどまでに奴には大切な事、人間に対し大切な設定なんだと

思いました。
この考えに至ったのは・・シズカ先輩の指示です。
なぜ先に怪獣ランドを選んだのか、私は不思議だったんです。
正方形の近くにいる、あの軍隊に意味が無いと気付いたから。
多分・・何かに気付いた・・そうですよね？・・シズカ先輩」
美由紀は無線で強く問いかけた、その表情は集中していた。
「確信は無かったんですけどね、小僧は策略家だけど。
絶対に本題が成功する確信がある時にだけ、一石何鳥を狙う。
今回は傍観者・・それは最後のゲームが、想像出来ないから。
だけど・・それまでの道程を、奴は・・多分想定が出来ている。
だから・・律子を連絡係で置いた。
それは、律子がいると精神的に頼ってしまって、女性達が気付かないから。
連絡係なら・・ここには来れない、帰還の安全が保障されなくなるから。
私はそう思って、感じた・・沙紀の恐怖は、視覚的な物じゃない。
あれだけの絵を描ける沙紀が、視覚的恐怖で動けなくなんてならない。
そして死の恐怖でも・・傷つきたくないでもない。
武器などで倒す相手じゃない・・多分、もっと本質的な恐怖。
小僧の一石何鳥は、その部分に気付けと言ってる・・若い女性達に。
それを感じ向き合えと言ってる、さっきの銀河の状況で確信しました。
もちろん私の感じてる、沙紀の恐怖は言えません。
それを誰かが口にすると、一気に姿無き男が登場する可能性があるから。
ピースが揃わない内に出現したら、沙紀は恐怖を抱えたままで終

わる。
絶対にその洞窟です、それは国境のゲートですね・・入国を審査する。
あの軍隊はハリボテの人形です・・カカシです、沙紀に対する。
それはすぐに分かってました、熱感知装置に・・何も出なかったから。
1機だけ戻して下さい、もう1機であの軍隊を焼き払って。
残る敵も倒さねばなりません・・それには車両が必要でしょう。
このパズルは完成させないといけない、絶対に最後の勝負がこれだから。
大丈夫です・・今、双眼鏡で確認しました・・小僧は二ヤしてます」

シズカ最後は私に二ヤで言った、私は二ヤ継続で頷いた。

「私の怖いわ・・違うの？・・何だろう？」と沙紀が私を見て言った。
『沙紀・・考えないで良いんだよ・・見てれば分かるよ』と笑顔で返した。

「やはりそうでしたか、だからマリの話をしたんですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「それならば・・この洞窟は生きてるんだね、私の答えが正解ならば」とミコトが二ヤで言った。
「生きてるよ、絶対・・昔から小僧は、食えない奴だよ」とミナミが二ヤで言って。
「そうだよね～・・小僧は5歳の時に、それと向き合ったから」とリンが真顔で言った。
その言葉で全員がリンを見た、美しい真顔で若い女性達を見ていた。

「おめでとう、リン・・全盛期に戻ったね・・全盛期の保母に」と映像を見ていたミチルが無線で言った、リンは嬉しそうな笑顔で頷いた。

「やられたね・・私等はすでに、エースの作戦で・・一段上ったよ」と大ママが二ヤで言って。

「そこまで信じてくれたんですね・・あ奴は」と蘭が満開で微笑んで。

「やるよ～、答え合わせを・・まだな人は答えを出せ、そこにある」とリアンが洞窟を見て言って。

「そうだね～、楽しんだから・・最後まで楽しもうね」とユリカが爽やかに微笑んで。

「エース・・本当にありがとう、由美子を抱かせてくれて・・ありがとう」と北斗が言った。

若手の女性達が洞窟を見ていた、集中して美しかった。

その背景に、赤い月が浮いていた。

「それじゃあ、車両は何を運ぶ？」とリアンが言った。

「とりあえず全車両を、何が起こるか分からないから。

答えに気付いた、全員で・・ここと正方形を守ろう。

アイさんとミナミさんとリンさんが戦車を。

あのハリボテを掃除しながら来て、この入口で待機して下さい。

絶対にスクリーンが出ますから、楽しんで下さい。

そして入口を守って下さい、彼女達が帰れるように。

トラックはカスミとセリカとシオン、ジープが四季。

その7台の同乗者が、リアンと私の店の7人。

マキ、バイク1台出して来て・・今出てるのは、マリのだから。

それが2号機に乗り込んで、取りに行って下さい。

そして3号機でハリボテを焼き払う、ＰＧの残りの１０人衆でガソリンを撒いて。
その為のドラム缶でしょう、あのヘリの側面に付いてるのは。
ヘリの攻撃役は無しで、美由紀が火を点けてね・・ミコトも千鶴も作戦会議に出て。
そして北斗姉さんとサクラさん、ヨーコと交代して下さい・・５人娘を頼みます。
ホノカも残って、作戦会議・・あなたとヨーコです、洞窟の切り札は。
エースはそう想定してる、私は確信的に思えます。
残りの若手で、ここの警備・・蘭・ナギサまでが作戦会議。
今はまだ考えないで、答えを探さないで・・集中してやりましょう」

ユリカが強く言った、「はい」と返事をして、全員が頷いた。

バタバタとヘリが2機飛んで行き、静寂が訪れた。

「そっか～・・ホノカとヨーコの存在で、エースは女性に任せたんだね」とリアンが微笑んだ。
「そうでしょうね・・ヨーコがそれと、向き合ってるからでしょう」とユリさんが薔薇で微笑んで。
「そしてホノカも見事に期待に答えたね、あの判断・・仲間を信じ、自分を投げ打つ心・・素敵だったよ」とナギサが微笑んで。
「エースの思惑通りで少し悔しいけど・・ホノカ、良くやったよ」と千鶴が微笑んで。
「マリと美由紀じゃ伝わらないんだね、あの2人は・・女性達にも、特別な存在だから」と蘭が満開で微笑んだ。

「あの～・・私まだ答え、出せないんですけど～・・てか自信が持

てません」とホノカが真顔で言った。
ホノカの顔を見て、ユリカが全員に通じるように無線機を入れた。
「だから切り札なのよ・・ホノカ、あそこには私達は入れないのよ。
答えを持たない人間しか、探してる人間にしか・・入れないの。
あの洞窟の上の文字、あれはある有名な物語に出てくるの。
神門に刻んである文字なの・・それが姿無き男のメッセージ。
その意味を日本語に直訳すると・・【心の検閲】って書いてあるの。
多分・・四季までは気付いてる、その恐怖の意味が分かってる。
だから入れない・・入れるので1番年上は、２０歳だと思う。
リーダーは・・ホノカ、あなたよ・・あのバルタンの時の試験に合格したの。
マリが投げたスプレー缶、あれはマリとエースの試験だったのよ。
マリも美由紀もシズカも、そしてエースも入れない状況。
だから全てを銀河に託したの・・銀河を信じたのよ。
その銀河を引っ張ったのは、ホノカだったでしょ・・マリの気持まで読みきった。
そして2人を信じて、自分を賭けたよね・・素晴らしかった。
エースはそれが出来ると確信していた・・あの裏階段の踊り場で。
自信を持って、ホノカ・・銀河の奇跡は3人じゃないでしょ。
マチルダも側にいるわ・・あなた達の心に、寄り添ってる。
洞窟内は、外との無線交信は出来ないでしょう、最後はあなたの判断に任せます。
エースの言葉を贈るね・・マリが言った、エースには大切な言葉。
心で決めて、ホノカ・・心に問いかけられたなら、絶対に心で決めてね」
ユリカは強く言葉にした、ホノカは美しい真顔で頷いた、若手の女性が集中の中に入った。

それを映像で見ていたマリが、ヨーコに二ヤで歩み寄った。
ウル顔のヨーコのポケットに右手を突っ込んだ、バタバタとヘリの音が近付いて来ていた。
マリは玩具の銃一式を出した、西部劇のガンマンが付けるベルトと銃だった。

マリはそれを持ってエミの前に座って、エミの腰にベルトを巻いた。
「マリちゃん！」とエミがマリを見て言った。
マリは微かに微笑んで、エミを抱きしめた。
「うん・・私もそう思ってた、絶対に戻ってくるね」とエミが強くマリの耳元に言った。
シズカがヘリから降りたサクラさんを呼んだ、サクラさんは駆け寄りながらエミを見ていた。

「エミ・・頑張って、必ず戻りなさい・・あなたが5人娘の長女ならば」とサクラさんも膝を付いて強く言った。
「はい・・答えを持って戻ります」とエミは真顔で強く返した。

「リアン・・エミを洞窟に行かせて、エミはそれを望んでる。
シズカもマリも許可してくれた、そしてエースも望んでる。
お願いだから・・エミを許可して・・リアン」

サクラさんの無線を全員が聞いていた、リアンは目を閉じて黙っていた。
「誰か・・エミの参加に異議のある者？」とリアンが無線で言った。
「ありません・・私達がずっと側にいます」とカスミが強く言った。

「異議無しとみなす・・エミ、準備しな・・期待してるよ」とリアンが言った。

「艦長・・ありがとうございます・・必ず答えを持って帰ります」とエミが強く言った。

「本物にな～れ」とヨーコが言って、エミの小さな銃は本物になった。

マリアがエミをに抱きついて、カプセルまで運んでくれた。
沙紀はエミの強い瞳を見ていた、エミは沙紀に笑顔で敬礼をした。
沙紀もエミを真似て、敬礼で返した。
私はエミに二ヤで頷いた、エミは二ヤ返してきて手を振った。
私も沙紀も笑顔で手を振って、エミを見送った。

マリアが降りて、エミはヨーコと手を繋ぎヘリに向かった。
それを見て、マリは正方形のライフルの場所に、３丁のマシンガンを用意した。
そして北斗とミチルとサクラさんに二ヤを出して、マシンガンを担ぎバイクに跨った。
宇宙船のフロントハッチをシズカが開いて、マキがバイクで出てきた。
その前にマリがバイクで出て、マリの後を追ってマキが走り出した。

「こりゃ～・・楽しそうだね～」と北斗がマリの用意したマシンガンを見て、二ヤで言った。
「嬉しいね～・・ネズミの次だから、何かな～」とサクラさんが二ヤで言った。
「マシンガン・・撃ってみたかったのよ～」とミチルが妖艶二ヤで言った。

その時、ハリボテ軍隊の方から火柱が上がった、その炎の凄まじさに３人は見入っていた。

「は～い４人は頑張って、パズルをしましょう」とシズカが言って、４人娘は笑顔で始めた。

炎の中を戦車が進んでいた、マキは左側の崖沿いを、マリを追いかけて走っていた。
突然マリが減速した、そして燃え盛る炎を指差した。
マキはその方向を見て凍結した、炎の中に銀色に輝く姿が有った。
胸のライトが青く輝いた、そして目が黄色く光った。

「艦長・・炎の中に巨大ロボット発見、メカバルタンが・・目覚めます」とマキが言った。

「全員戦闘配置・・炎の方から来るよ」とリアンが言って、全員が炎の方を見た。

「まさか・・金属を熔かすのだろうか？」と大ママが炎を見て言った。
「そう思っておいた方が、良いですね」とユリカも炎を見ながら言った。
その時炎の中から、銀色に輝く上半身が起き上がった。

「でかい・・さっきのバルタンの2倍はある！」とホノカが言った。

「リアン・・全員戻して、ホノカ洞窟前に集合させて。
揃ったら躊躇なく入ってね・・ジープで入りなさい、行ける所まで。
乗り捨てて良いからね・・頼んだよ、ホノカ」

ユリカが強く言った、ホノカは真剣な瞳で見ていた。
「了解です・・必ず全員で戻ります」とホノカが言って、周りの若

手に声をかけて洞窟前に走った。

「全員・・洞窟前に集合・・バルタンは無視せよ」とリアンが無線で言った。
メカ・バルタンは、ゆっくりと立ち上がった。
その大きさで、静寂が流れていた。

その時、マリとマキが到着した、マリはヘリ1号機からスプレー缶を取り出した。
そしてバイクに乗ったまま、上半身を地面スレスレ下げて、スプレーで何かを描いた。
それは大きな長方形だった、バルタンはハサミの光線でヘリを狙っていた。
ネネとリョウが必死にかわしていた、リアンは唇をかみ締めた。
ヨーコは上空から、マリのスプレーで描いた長方形を見ていた。

マリと目が合い、マリがクロールの真似を腕だけでした、ヨーコは笑顔で頷いた。
「プ～ルにな～れ」とヨーコが叫んだ、長方形はプールになった。
マリはそれで、照明弾をかまえた、照準は飛んでいる美由紀に合わせた。

美由紀はバルタンの気を引こうとして、バルタンの周りを飛び回っていた。
それに気を取られている内に、2機のヘリが到着した。
だがまだトラックが、バルタンの側にいた。

それを見てマリが照明弾を撃った、美由紀をギリギリでかすめてバルタンの目の前で弾けた。
「も～・・下手くそは誰ですか～・・怖いです～」と言って美由紀

がウルで反転した。
マリがニヤで美由紀にプールを指差した、美由紀は最強ニヤニヤでプールに向かって来た。

「何なんだろう、あのプール？」と蘭が呟いた。
「多分・・ショータイムね、あの美由紀のニヤニヤは」とユリカが二ヤで言った。

美由紀はプールが近付いて、最強二ヤのまま大きく息を吸い込んだ。
『マジ～～ン・・ゴ～～』とプールに向かって叫んだ。

プールの底が２つに割れて開き始めた、水が勢い良く底の開いた部分に吸い込まれた。
そしてせり上がって来た、最初にピンクの頭の部分が見えた。
「マジンガー」とミコトが叫んで。
「違う・・アフロダイ・エース！」と千鶴が叫んだ。

「なんと言うコンビネーション、言葉も交わさずに・・瞬時にやりやがった」とナギサが言って。
「美由紀・・最初から言ってたね～、オッパイミサイル」とユリカが全身が現れたロボットを見て、爽やか二ヤで言って。
「良いな～、美由紀・・それで歩けるのに、車椅子にこだわったんだ～」と蘭が笑顔で言って。
「しかし見事なイメージですね、永井さんもお喜びになりますわ」とユリさんが薔薇二ヤで言った。

「ＹＵＴＡＫＡ　ＭＡＸ・・オ～ン」と叫んで、美由紀はロボットの頭の空洞に車椅子で入った。
その美由紀を包むように、透明の蓋が閉まった。
バルタンはロボットを見て、ゆっくりと近付いていた。

その隙に、トラックが洞窟のほうに走り込んだ。
「とりあえず、銀河が運転する・・3台に別れて入ろう・・ハルカとミサキでエミを頼むね」とホノカが言って、全員が頷いた。
洞窟班は、銀河の奇跡が3人、シオン・セリカ・カレンの19歳トリオ。
レンとケイコの18歳コンビ、ハルカとミサキの17歳コンビ。
マキとヨーコの16歳コンビに、哲夫とエミが加わり、総勢14名だった。

「洞窟班・・突入します・・美由紀、頑張ってね」とホノカが無線で言った。
「お土産待ってます〜・・こっちは大丈夫、いきなり必殺技でケリをつけます〜」と美由紀が返した。
それを聞いて、若手の洞窟班がニヤで洞窟に入った。

「アフロ・・行くよ、雑魚をやっつけに」と美由紀が言って、レバーを引いた。
アフロはスムーズに歩いて、バルタンと向き合った。
不思議にバルタンは攻撃をしなかった、美由紀はそれで最強ニヤを出した。

「私も・・あなたが、大好きです〜」とアフロのスピーカーで美由紀が叫んだ。
そしてアフロでバルタンに抱きついた、バルタンは黄色い目の光がピンクに変化した。

「あの攻撃は・・対オヤジ用最終兵器・・カスミスペシャル！」と蘭が無線で言って、全員が爆笑した。

「それから、どう決めるんだ・・どうやって、奴のハサミの中の、赤丸を撃ち抜くのやら」とリアンが笑いながら言って。
「応用編ね・・美由紀の真価が問われるわ」とユリカが爽やか二ヤで言った。

「良いのよ、触って・・恥ずかしがらないで」と美由紀は優しく言って、バルタンの右腕を握った。
そしてアフロの胸に持ってきた、バルタンはピンクの目に、沢山の赤い線が走った。

「おやおや、バルタン・・興奮して、目が血走ってる」とナギサが二ヤで言って。
「さすが策略家の飼い主・・美由紀、恐るべし」とミコトが二ヤで言った。

「ほら・・恥ずかしがらないの、挟んで良いのよ・・柔らかいよ～」と美由紀が二ヤ言った。

「柔らかいのか・・金属が～」と千鶴が笑って。
「子供には見せられない、いけない番組だわ」とサクラさんが笑って、全員が爆笑した。

ゆっくりとアフロの右腕が、バルタンの背中に回った。
バルタンはアフロの胸を見ながら、意を決するようにハサミを開いた。

「さようなら・・メカ・エロ・バルタン」と美由紀が言って、オッパイミサイルを発射した。
メカバルタンの右手が吹き飛んで消滅した、白いピースが降って来た。

「ＭＶＰ・・勲章授与・・勲章名・・メカバルタン・美由紀」とリアンが無線で言った。

女性が全員、爆笑しながら拍手した。
アフロは照れた感じで、頭をかいていた。
その瞬間、アフロが消えた、美由紀は急降下した。
「あれ～・・なぜですか～」と言いながら、美由紀は体勢を立て直してピースを拾った。

マリがユリカにスプレー缶を見せた、注意書きに【変換時間５分】と書かれていた。
「注意事項を言う・・アフロの使用時間・・５分」とユリカが最強爽やか二ヤで言った。
女性達がまた爆笑した、美由紀はウルで正方形に向かった。

「にょ～・・大群が正方形に、向かってますよ～・・巨大ゴキブリちゃんです～」と美由紀が叫んだ。
正方形の３人が二ヤでマシンガンをかまえた、シズカは四人娘と二ヤで見ていた。

「蘭・・行こうかね、ゴキブリ退治」とユリカが爽やか二ヤで言って。
「ぶっ放しに行きますか」と蘭が満開二ヤで言った。
「千鶴・・ジャンケン、どっちが操縦するか」とミコトが二ヤで言って、ジャンケンをした。
千鶴が勝って、ミコトがウルをしながらヘリに歩いた。

「こっちにも来ましたね～」とユリさんが薔薇二ヤで、マシンガンをかまえた。

「でかいのは、ティラノですね～」とナギサが言って、ライフルをかまえた。
戦車のアイさんもミナミもリンも二ヤで揃い、ゴキブリと恐竜軍団に照準を合わせた。

「スナックの女性は、1号機に搭乗・・正方形と船を守る。
四季はそのまま、洞窟の入口を死守」

リアンが無線で言って、女性達が走った。
マシンガンの音が響き渡り、女性達に笑顔が溢れた。

赤い正方形でも、マシンガンの音が響いていた。
シズカは4人娘をトンネルに入れて、ヨーコから受け取った【ここにもドア】で塞いだ。
そしてマシンガンを二ヤで担いで、北斗の横に立った。

「赤丸は無いのか～・・当たれば消えるんだ」とシズカが言った、北斗が二ヤで頷いた。

「ヘリ・・ゴキブリに赤丸無し、ミサイルで攻撃願う」とシズカが無線で言った。
「了解」とユリカが答えた。

「私が操縦する・・行くよ」と千春が言って、美冬が頷いてヘリ3号機に走った。
「千秋・・あれには、確か・・地対空ミサイルが有ったね」と千夏が二ヤでトラックを指差した。
「やりますか～」と千秋も二ヤで返して、トラックに走った。
1号ヘリはミサイルを撃ちながら、一度着陸してスナックの女性を

降ろした。
そして再び舞い上がった、ユリカは全体的状況を見ていた。
軍隊がいた場所の地面が透明で、上空から地下が確認できた。
強化ガラスのような地面が、爆風と炎で掃除されていた。
その地下は碁盤の目のような、正方形の美しい白い床だった。

「本題が見えましたね～・・何の間ですかね～」と蘭が満開二ヤで言った。
「通路は・・赤い正方形に伸びてるね、洞窟の入口は必要ないね」とユリカが爽やか二ヤで言った。
「あれが・・あの正方形が洞窟の出口だ、最後のゲームはそれを賭けるんだ」と蘭が真顔で言った。

「リアン・・洞窟の入口はもう意味が無い、全員正方形に戻ろう」とユリカが無線で言った。
「了解・・トラックで攻撃しながら帰ろう」とリアンが言って、全員が頷いた。

マリはバイクに跨って、透明の平原を目指した。
炎を無視してスロットル全開で突っ込んで行った、熱で揺れるマリの背中を女性達が見送った。

「どこまでも、自分を信じる・・マリは凄すぎるよ」と大ママが言って。
「最後のゲームが分からないから、そこまで全力で進む・・それがマリの生き方ですね」とユリさんが言った。
「さぁ・・行きましょう、マリのように・・道を繋ぐ為に」とリアンが言って、全員が頷いた。

マリは炎を潜り、巨大ゴキブリの大群の中を疾走していた。
その真上を美由紀が飛んで、上から明かりを照らしていた。
沙紀はマリの姿を見ていた、マリの透明のサングラスに炎が映っていた。
炎が弱くなってきて、上空にいる私には沙紀の世界の全貌が見えてきた。

《姿無き男・・お前は馬鹿だよ。
俺にユリカと交信させない為に、カプセルに入れたんだろ。
それにより・・お前も俺を読めなくなった、俺の状況は誰にも分からない。
俺は今・・勝利を確信したよ》

私は心でそう言って、二ヤを出してマリの映像を見ていた。
マリは透明の地面の真ん中で止まり、中を見ていた・・最強の二ヤ顔で。
その横に美由紀が下りた、マリは美由紀に手を出した、美由紀が笑顔でタッチした。
２人の背景には・・真赤な月が浮かんでいた・・。

【赤い月？】

無意識に生きる事が出来れば、幸せなのだろうか。
目を逸らし生きれば、それは2度と起こらないと言えるのだろうか。

ジープのエンジン音が、洞窟で反響して、何かに追われてる感覚になる。
急なカーブをジープが進み、狭い洞窟の入り口の前に3台が停車した。

「ツインズはどうした？」とカスミがハルカに聞いた。
「入れませんでした・・2人だけ」とハルカが二ヤで答えた。
「やるね～・・・元不良娘」とリョウが二ヤで言った。

「じゃあ・・これだけだね、人数確認の時は・・同じ学年をチェックしてね」とホノカが言って、全員が笑顔で頷いた。
「哲夫・・この洞窟、正直どう思う？」とカスミが聞いた。
「由美子の時の・・塔と同じだと思う」と哲夫が真顔で返した。
「そうだろうね～・・・試される訳だ～」とセリカが流星ウルで言った。
「でもエースの話じゃ、最上階以外はたいした事ないよね」とリョウが言って歩き始めた。
最前列に銀河、エミと哲夫を真ん中に置いて、最後尾に19歳トリオが歩いた。

「ただ・・俺も驚いたけど、バルタンの攻撃・・今までと違うよね」と哲夫が言った。
「確かに・・前回と違うよね～」とレンが真顔で言った。
「もう、考えても仕方ないでしょ・・前に進むしかないんだから」

とホノカが笑顔で言った。
「きたよ～・・暗黒のドア」とリョウが二ヤで言った。
「紋章は？」とセリカが聞いて、全員が見て沈黙した。

「死神だね～」とカレンが誰も口に出来ない事を口にした。
「死神なんだ～・・いきなり重要ポイントだね」とエミが笑顔で言った。
「エミ・・余裕だね～、なんかヒント貰ってるの？」とホノカが笑顔で聞いた。

「エースってね・・自分の心に入れる事とか、ユリカちゃんに知られたくない事は。
一度書くの・・そして破いて捨てるの。
私達４人だけは、覗いても何も言わないの。
まぁ、私しか・・漢字は読めないし、意味も分からないから。
この前、マリちゃんをユリカスペシャルした時ね。
わざと私が覗くような場所で書いたの、そして私に二ヤを出したの。
エースは今回・・多分、相手に読まれないように注意してた。
さっきの話で分かったけど、マリちゃんも沙紀ちゃんも読めないからだと思う。
だからエースも相手に読まれないように、心でも唱えなかった。
そしてあのカプセルに入ったから、今のエースの心はユリカちゃんでも読めない。
エースは姿無き男が、エースの行動を読んでると思ってたと思う。
もう、ここまで来たら、言って良いと思うから言うけど。
エースはこう書いたよ、マリちゃんの言葉を。
偶然も必然も無い、シナリオも無い・・シナリオは自分で書く。
それがエースが私にくれたヒント・・この扉の向こうにそれが有るよ。

シナリオは自分で書く・・その答えが」
エミは笑顔で言った、女性達が考えていた。
「エース、そこまでエミを信じてたの・・小1の少女を」とサクラさんが言った。
「信じてますよ、あ奴は・・エミに託せないなら、誰にも託さない」と蘭が満開で微笑んだ。
「その事実をあそこまで持って行った、エミも凄いよね～」とシズカが映像を見ながら言って。
「鍵を持たせたんだね、マリもエースも・・鍵をエミに託した」とユリカが爽やかに微笑んだ。

「さぁ・・子供達は船に行って、おやつにしよう」とシズカが笑顔で4人娘に言った。
シズカと北斗が4人娘の手を引いて、宇宙船に歩いて行った。

「さすが、シズカ・・ここからの場面は見せられないと、判断しましたね」とユリさんが真顔で言って。
「私等でもきついよね・・実際の映像で見た事はないから」と大ママも真顔で言った。

「ピースは後2つ・・ドアが2枚有るのかな？」とリアンが言った。
「2パターンは辛いよね、1度だけでも・・相当辛い」とミチルが映像を見ながら言って。
「エースは強いよ、今も笑ってる・・沙紀に見せるのに」と千鶴が言って。
「満墨ホームランしか狙わない・・奴は確かにそうかも」と美由紀が私を見上げて言った。

「満塁ホームランって何？」とリンが美由紀に笑顔で聞いた。
「先日病院で、院長先生から・・・・」美由紀がシズカの質問の話をした。

「シズカ・・そこまで分かってたのか！・・昔から食えない姉弟だよ」とミナミが二ヤでリンを見た。
「カスミが必ず、その時にそれを思い出す・・シズカもエースも、そう思ってるんだ」とミコトが言って。

「シズカとエース・・あの2人は絶対に、打ち合わせなんてしてない。
なのに互いに、表現を回しに回した・・読まれない為に。
それも直接でなく間接的に伝えたシズカ。
美由紀には最高の問題として、その時に大切な事を気付かせた。
そしてエースは、その問題の意図が分かると言った。
エースはそう言って、正直に答えた・・全てで満塁ホームランを打つと。
自分の心では、ヒーローになれるから、全てはバッターだと。
ヒーローも悪役も、ファンのイメージ・・勝敗に意味は無い。
だから自分は自分の心に・・満塁ホームランを打つと、言ったのか～」

リアンは私を見上げて言った、全員が私を見上げた。
そうとも知らず、私は沙紀と、悩む若手を二ヤで見ていた。

「行こうよ・・大丈夫、過去は過去・・今からが、新しいシナリオでしょ」とエミが笑顔で言った。
「それが来るよね・・そうだよ、今から変える・・その気持なら大丈夫」とホノカが言って、全員が頷いた。

「エミは凄い子だね・・もう分かってる、本当にエースの伝承者だね」とユリカが映像を見ながら言った。

「あの子は、四六時中考えています・・エースが問題を出し続けるから。

そしてエースが命と向き合い続けるから、あの子は憧れる。

エースの生き方を追いかけてる、だから辿り着くのね。

あの子は今が一番充実してるでしょう、憧れの人に託されたのだから。

シナリオを、自分で書こうとしている・・エースの最後の答えが知りたいから。

あの子は帰ってくる、それを見る為に・・エースの生き方を知る為に」

ユリさんが真顔でスクリーンに言った、女性達はドアを開けるホノカを見ていた。

真白な碁盤の目のような床が現れた、洞窟班は横に並んで見ていた。

天井は透明なガラスのようで、真赤な月が空に浮いていた。

「マリちゃんと美由紀ちゃんがいる・・あそこまで来いって言ってるんだ」とエミが笑顔で言った。

その時床の正方形の大きさが変わった、大きくなって横が１４になった。

「１４になったね、横に並べと言ってるね～」とカスミが言った。

「そうだね～・・ここは並ぶしかないね、ゲームのルールだろうから」とホノカが言って、全員が真顔で頷いた。

「私がここに入るから、エミが右横でその隣がカスミ・・哲夫が左横で隣がリョウ、後は年齢順に広がろう」とホノカが言った、緊張した表情だった。

「ホノカ姉さん・・これ変ですよ、正方形に意味は無いです。
奴は直接手を下せない、出来ても金属・・武器を熔かせる程度。
どうせ過去の人間の殺戮シーンとか、その人間の忘れられないシーンを見せるだけ。
この正方形に乗ると、その映像が流れる感じになるんでしょう。
でもどこにもルールが表示されないし、音声案内も出ない。
私達が想定する事は無いですよ・・相手の思惑だから。
奴はここの内容も考え無かった、マリに読まれない為に。
多分・・映像は奴自信の、手動操作ですよ。
だから並ばせたかった、そして将棋やチェスのように一人ずつ動いて欲しかった。
それなら、奴も手動でその相手の場面を選べるから。
偶然も必然も無い・・シナリオは自分で書く、それがマリのヒントなら。
ルールも何も無い・・これから先に奴の意図は無い。
私はそうだと思います、エースは危険だと少しでも感じるなら行かせない。
エミが入る可能性が強い、この状況に・・少しでも不安があるなら。
だから視覚的恐怖だけ、必要なのは覚悟だけ・・そうだよね、マキ」

ヨーコが二ヤでマキに言った、全員がマキを見た。

「間違い無いでしょう、エースは危険じゃないと判断した。
エミはそのレベルに来たと、だから見せても大丈夫だと思ってる。
皆さん、もう気付いてますよね、沙紀の恐怖の根源。
どうしてヨーコが重要なのか、ヨーコはそれと向き合って来たから。

下の世代の為に、ずっと向き合って来たからでしょう。
全員で正面突破、あのマリの下まで・・それで良いと思いますよ」
マキも全員に二ヤを出した、女性達に笑顔が出た。
「忘れるとこだったね、私達の武器は・・笑い飛ばす事だよ」とカレンが笑顔で言って。
「そうだったね、美由紀に笑われるよ・・シリアスになってたら」とセリカが言って。
「行きましょう・・哲夫君が今日の学校で居眠りしたら、私達の責任になりますよ～」とシオンがニコちゃんで言って。
「それはまずいね・・いつもの事なのに」とレンが二ヤで言って、全員が笑った。
哲夫はウルで返していて、それを見てエミが二ヤを出した。
「じゃあ、銀河でエミを囲んで、１９歳トリオで哲夫を囲む・・あとはお好きにどうぞ」とホノカが華麗二ヤで言って、エミの手を握った。
エミの前にリョウが立って、カスミがエミの横に立った。
ホノカが一歩目を踏み出した、区切られたマスに赤い光が走った。
「光の演出はもういらないいよ～、私達のルールには無いから～」とホノカが振り向いて笑顔で言った、全員がが笑顔で頷いた。
全員が一段となって、白い床を進んだ、屋根が光って映像が流れた。
ナチスの軍服を着た将校が、沢山のユダヤ人を強制的に歩かせていた。
歩かされる人々の、絶望の瞳が映されていた。
白床がその映像と同じ景色を作って、演劇の舞台セットのようだっ

た。
洞窟班の横を８人の将校が囲んだ、映像と同じ軍服を着ていた。
その将校の顔は紋章の死神で、大きな鎌を持っていた。

天井の映像はアウシュビッツだった、虐殺の場面まで、事実をそのまま映像で流した。
そして無造作に亡骸が捨てられた、その亡骸が折り重なっていった。
乳飲み子から老人まで、男も女も・・そして引き裂かれた家族の泣き叫ぶ場面も。
圧倒的静寂が支配した、その映像に声も出なかった。

「いきなりが、アウシュビッツですか」とユリさんが静かに言った。
「視覚的効果は絶大だよね、ひど過ぎる・・馬鹿な事を」と大ママが強く言った。

「ねぇ・・死神、あんたらがあれをやっただろ？
だから今も軍服を着てるんだろ、もしかして・・自慢なのか？
それとも反省しろって言ってるの？・・人間は確かに、反省が足りないよね。
それともなぜやったのかって聞きたいの、それならお門違いだよ。
奴らに聞いてきな・・お前等と同じ軍服を着てる奴らに。
多分・・誰も答えは持ってない、明確な答えなんか誰も出せない。
誤魔化してきた・・善と悪・・その設定で誤魔化した。
私等は産まれてもいない時代だ・・だから反省しか出来ない。
二度とこんな事はしないと・・誓うことしか出来ない。
お門違いだよ、こんな映像は・・消えな、出来損ないの死神。
私等は選択しない・・自分の死も・・他人の死も」

セリカの強い言葉が響いた、その心を乗り越えた姿が、私には嬉しかった。

沙紀は映像に見入っていた、少し震えていたが、目を逸らす事は無かった。

「お見事、セリカ・・その類稀な素質が、開花の時期を迎えた」とユリカが映像に微笑んで。

「大輪ですね・・流星のセリカ、その飽くなき探究心は・・エースのそれに酷似している」と千鶴が嬉しそうに言って。

「セリカも違う・・乗り越えた物が違いすぎる」と蘭が満開で微笑んで。

「リアルにイメージ出来ました・・東京ＰＧが、そのフロアーに流れる流星も」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

セリカの言葉で死神が動いた、映像もセットも消えていた。

死神が８体で女性達を囲み、鎌を大きく振り上げた。

「差し出すよ・・それがあんた等の望みなら、やってごらん・・死神ちゃん」とリョウが自分から目の前の鎌に首を近づけた。

死神は静止していた、リョウは猟だった、最強の魔性の笑みで死神を見ていた。

「魔性の女、やるね～・・その挑戦的な心が作る、強い精神力」とリアンが言って。

「相手に全く付け入る隙を与えなかった、全員の恐怖を背負って吹き飛ばしたね・・心酔のリョウ」とミコトが微笑んで。

「２人は見せたよ・・ホノカとリョウは・・カスミ、次の場面はあんただよ。

銀河の奇跡、その中心はあんただろ・・カスミ・・マチルダが絶対に見てる。

満塁ホームランを打って来いよ・・自分の心に」

蘭は映像に向かって強く言った、全員が静かに映像を見て頷いた。
「リョウの首を取れないのか、頑張れよ～・・出来ないなら、臭いから離れろよ」とカスミが真横の死神に蹴りを入れた。
死神はバラバラと崩れて粉になって消えた。

「くっさーい・・駄目～、無視しよう・・攻撃すると臭いから」とハルカがウルで言った。
「はい、さようなら・・もう来ないでね、出入り禁止」とミサキが二ヤで言って。
「次行こう・・次は悪魔ちゃんかな～」とケイコが笑顔で言った。

「良かった、ケイコが一番危なかったから・・やっと笑顔が出たね～」とカスミが不敵で言って。
「暴走族と付き合ってたのに、案外根性無いよね・・まぁナンパ集団だけど」とリョウが二ヤで言って。
「でもリーダー、良い男らいいよ・・可愛い系の、ヒロミみたいな感じ」とホノカが二ヤで言った。

「君たち男の子、君たち女の子って・・当たり前の事言う男が、好きなのか～」とセリカが流星二ヤで言った。
「顔だけよ・・可愛いじゃん」とホノカが笑顔で返した。
「私・・秀樹の方が良いな～・・野生的で」とハルカが笑顔で言って。
「駄目だよ・・奴はローラをいつまでも忘れられない、ウジウジ男だよ」とミサキが二ヤで言った。

「じゃあ・・五郎は？」とカレンが笑顔で聞いた。
「兄なら良いけど・・彼氏は却下・・お客でも面倒そう」とホノカが二ヤで言った。

「それは有りますね～・・客なら嫌だな～」とレンが笑顔で言った。
「ヨーコとマキは誰なの？・・・芸能人のタイプ」とリョウ二ヤで振り向いた。

「私は松田優作です・・ワイルドで、スタイルが良くて・・素敵です～」とヨーコが清楚笑顔で言った。
「良いよね～・・私も好きだ～」とカレンが言った。
「ワイルド好きが多いのね・・不思議だ～・・マキは？」とホノカが笑顔で聞いた。

「私は・・エーちゃん・・顔も歌も、一途です～」とマキが照れながら言った。
「ファザコンだね、マキ・・デビューしたら気を付けてね、ファザコンは危ないから」とセリカが二ヤで言った。
「ファザコンは危ないんですか～・・なぜでしょう？」とシオンが少しウルを出して言った。
「危ないよ～・・お客の7割は、オヤジだから・・さぁ、シオンのタイプを述べよ」とカスミが二ヤで聞いた。

「文太様・・エースが好きだって言ったから、興味を持って映画を見に行ったら。
　好きになりました～・・素敵なんです～・・声と表情が、素敵です～」

シオンがニコニコちゃんで言った、全員がその意外さに驚いてシオンを見た。
「シオン・・文太は好きの中の何なの？」とセリカが二ヤで聞いた。
「文太様は・・好きの中の・・王子様です～」とシオンがニコちゃんで答えた。
洞窟班も外で待つ女性も、一瞬沈黙して・・大爆笑が起こった。

シオンは照れたニコちゃんで返していた、私はシオンの話術を見て嬉しかった。

「あの子の存在なんだね、小僧の作戦の基盤は」とミナミがリンに笑顔で言った。

「間違いないね・・あの子は別世界にいる、それも素敵な世界に。
その存在自体が、他の１３人を支えている・・あの子が一緒にいる事が。
絶対的信頼・・それが有るよね、絶対に裏切らないという信頼。
凄いよね～・・あの子はそっくりだよね、あんな素敵な女性になったんだ。
そう思えるよ・・ヒトミが１９歳になったら、シオンのようになってる。
それを感じられて・・小僧は嬉しかったんだね・・良かったね、小僧」

リンの言葉が響いて、女性達がリンを見た。

「そうなの！・・そう感じるの？」とユリさんが驚いて聞いた。
「限界カルテットも、出し惜しみするね～・・やっぱり話してなかったね」とミナミが二ヤでリンに言った。

「多分・・カルテットも、小僧の考えに賛成してるんだね。
あのシオンという星が輝くのを待ってる・・あの子の星がヒトミと同じなら。
小僧がヒトミを称した言葉が響く、カルテットには忘れられない言葉が。
他者の光で輝かない、自らが発光する星・・小僧はヒトミをそう表現した。

その言葉を、全員がシオンに重ねているんだね・・大きな期待を持って。
月でなく太陽だと・・あの時小僧が叫んだ言葉。
限界カルテットにも、美由紀にも哲夫にも・・そして豊にも響いている。
今でも強く響いてる・・愛情に満ち溢れた、小３の少年の言葉がね」

リンは笑顔でユリさんに言った、全員の笑顔が溢れた。
リアンが泣いていた、ユリカに強く抱かれながら。

「リン・・エースはそれを、どんな状況で言ったの？」とミチルが真顔で聞いた。

「無の半年より、意志のある半月・・小僧が、ヒトミのその言葉を伝えた時。
ヒトミの両親と関口医師と豊と限界カルテット、美由紀と哲夫。
それに和尚と勝也さんと、律子姉さんに向かって叫んだんだよ。
それこそが、あの子達が直接伝えられた・・春雨の叫びなんだよ。
私も昨日、直接伝えてもらった・・春雨の叫びで。
言葉でも他の伝達でも無かった・・その叫びは、遠い過去から響いてきた。
忘れるな、目を逸らすな・・そう言って響いてきたよ」

リンも強く言葉にした、女性達がリンを見ていた。

「大丈夫だね、あの１４人は・・全員の心に、伝達者の言葉が響いてるからね」と大ママが笑顔で言って。
「さぁ・・いよいよみたいですよ、見せてもらいましょう・・その心の向きを」とユリさんが映像をみながら言った。

全員が映像を見た、マリと美由紀の真下に１４人が来ていた。
天井の映像は、大きなキノコ雲が現れていた。
原爆投下の映像だった、エミの瞳が怒りを映して強かった。
誰も目を逸らす事無く、その映像を見ていた、表現できないほどの残酷な映像を。

そしてその映像の上に、文字が出た【恐怖？】と赤文字が現れた。

「もういいよ演出は、全員分かったよ・・沙紀の恐怖が何なのか。
私達は、常日頃無意識に感じていた、だから気付かなかった。
その恐怖とは・・【失う】という恐怖だったんだ。
愛する者・・家族や友人・・それを失う事だった。
それを失う事が、沙紀は怖いんだよ・・誰でも怖いよ。
愛する者を失う事は・・愛する者の死など、考えたくも無い。
お前の見せてる戦争が、確かにその究極だよ・・戦地に行ったのは。
特攻まで出来たのは・・愛する者を守る為だったんだよな。
でもそれは・・敵の愛する者を奪う行為でも有ったんだ。
矛盾する行為・・それをお前は提示してるんだろ。
その恐怖をどう克服するのか、それを示せと言ってるんだろ。
だが、お前は間違ってる、私達は克服など求めない・・無意味な事だから。
失う怖さを克服などしない・・それは誰も愛さないという事だから。
怖さを連れてでも、私達は人間を愛したいんだ。
お前には分からない・・絶対に理解できない、だからこれしか教えない。
私達は最後まで捨てない、愛する事を捨てたりしない。
歴史がどんなに血塗られた物でも、未来にどんな悲惨な現実があ

ろうとも。
大きな不安を常に抱えようとも・・それでも良いんだ。
歴史を乗り越えたりしない、背負って行くよ・・反省も一緒に。
お前の絶望は分かったから、お前はやはり・・弱き者だよ。
逃げる事しか出来ない・・弱者だ・・愛を持てない、ただの回路だ。
沙紀の心は開放される・・いつか必ず開放する、沙紀自身の手で。
お前が閉ざした扉を、必ずこじ開ける・・マリのように。
指示を出すのはお前じゃない・・行動の指示を出すのは。
愛を持てる心だけなんだよ・・最後の勝負をしろよ、姿無き弱者。
奴が待ってるぞ・・失う恐怖を抱え続ける男が。
お前は怖いんだろ、理解出来ないから・・あの男の行動が理解出来ない。
無理な事だよ、お前には絶対に理解出来ない。
お前には、分からない・・何に対しても、答えを求めるお前には。
愛の意味など・・理解出来ない」

カスミは最強不敵で天井を見ながら、静かに言った。
映像が消えて、カスミは笑顔でエミの手を握り歩き始めた。

その時、赤い正方形に向かって、空から白いピースが降ってきた。
ウミが笑顔で受け取って、ピースをはめた。
最後に真ん中に丸い空白が残った、女性達はその空白を見ていた。

「お見事、カスミ・・飛び級試験に合格したね、銀河の奇跡・・次の世代の代表に決定したよ」とユリカが爽やかに微笑んで。
「マチルダが笑ったよ・・銀河の3人が追いついた、マチルダに・・未来で奇跡を見せる為に」と蘭が満開で微笑んだ。
14人は奥の通路に入ろうとして、全員で振り向いた。

マリと美由紀が手を振っていた、１４人も笑顔で手を振った、迷い無き笑顔で。

「さぁ、この下に来るんだね・・全員戦闘配置、この正方形を取り囲む」とリアンが笑顔で言って、全員が頷いて正方形の外側を囲んだ。

北斗とシズカが４人娘と戻ってきた、マリと美由紀も正方形に戻った。

「そうだったよ・・私、いつも怖かった。
お父さんや、お母さんも・・いつか死ぬと言われて。
そうなったら、お前はどうする・・何も出来ないくせにって言われてた。
この場所が怖いんじゃなかったよ、あの言葉が怖くて耳を塞いでた。
だから聞こえなかった、みんなが呼んでる声が。
小僧ちゃん・・教えて？・・怖いの？
ヒトミちゃんの時も・・怖かったの？」

沙紀は強くそう言って、私を見ていた。

『沙紀・・ヒトミの時は、俺も怖かったよ・・別れが怖かった。
でもね沙紀・・ヒトミが教えてくれたんだ、沙紀だって知ってるだろ。
ヒトミは確かに死んだけど・・失われていないよ。
俺や美由紀や哲夫の中に居る、沢山の人の心の中に居るんだよ。
だから・・失う事は怖いけど、寂しくて悲しいけど。
逃げ出す事じゃないんだよ・・相手の事を知りたいって思って。
自分の事も知って欲しいいって思って、そうすると仲良くなって。
そうなれば、たとえ失っても・・残るんだよ、自分の中に。

沙紀には今でも・・お父さんも、お母さんも残るよ。
だからお友達や、好きな男の子を捜して欲しいんだ。
辛い事が沢山あるかもしれないけど、それでも知りたいと思って欲しい。
少しずつで良いんだ・・探してみようね・・沙紀』

私が沙紀を抱き上げ強く伝えた、沙紀の笑顔が嬉しかった。

１４人が正方形の下に入ると、扉が閉まって消えた。
カスミがエミを抱き上げた、その時スクリーンが現れた。

「いよいよ、クライマックスだね～」とリョウが笑顔で言って。
「エース、お腹空いてウルしてないかな～」とエミが言って、全員で笑った。

正方形の外枠に光の壁が出来て、誰も入れなくなった。
そして空白の丸から、光が伸びてカプセルを引き寄せた。
カプセルが着地すると、パンと割れて消えた。

沙紀が丸い空白から出てる光に包まれて、動けなくなった。
沙紀は光の中で３０ｃｍほど浮いていた、私は手を伸ばしたが入れなかった。

『なぁ・・早くやろうよ、お腹空いた・・俺、おにぎり食べてないから』とウルで空に言った。
ユリカの波動も感じなかった、正方形を包む光が結界だと感じていた。

「まぁ・・この結界までは想定してただろう、奴には切り札が有るのかな？」とシズカが隣のマリに二ヤで言った。

マリの顔のアップがスクリーンに映った、マリはその写してる物に向かって、強い二ヤで頷いた。

「最後のゲーム・・もちろんそのピースだよ」と声が響いた。
『だろうね・・それで、どうやるの？』と私は空に返した。

「想定していたろ・・そのピースは、ここに誰かが届けなければならない。
お前は今回、カプセルの中にいた・・結界の中に。
だから誰もお前の、緊迫した状況に気付けない。
ここに入れる可能性のある・・リンダ・マチルダ、それに和尚と豊と恭子。
今気付いても遅い・・もう入れない・・だれも持って来れない。
最後のピースは、埋められないよ・・残念だったな」

そう言った、私は必死に笑顔を出さないように、真顔を作っていた。

『まぁ、そうだとして・・誰かがピースを持ってきた時は。
俺の条件は・・由美子の時と同じだよ。
あんたが沙紀の挑戦に、全力で手を貸す。
沙紀がやろうとする事を邪魔せず、全力で応援する。
それで良いんだね・・紳士協定で良いから』

私は真顔で言った、自信の無い表情を作ってみた。

「良いだろう・・残り3分でこの世界は崩壊する、その前にピースを組まなければ。
全員強制的に帰される、沙紀には今後別の恐怖の世界が現れる。
絶対に入れない世界が・・始めようか、今から3分だよ」

そう言った時に映像に、１８０と出て数字が下がり始めた。
沙紀の周りの光と、正方形の結界の光が消えた。
私は沙紀を抱きとめて、駆け寄ったユリカに渡した。
「大丈夫なんだね、エース・・切り札がいるんだね？」とリアンが強く言った。
『もちろん、最強の切り札がいるよ・・奴には想像すら出来ない最強が。
ずっと現実の世界で、俺の手を握ってる、俺に温度で伝えてきてる。
失う怖さを一番知る者がね・・でも引っ張らないと無理かな』
私は二ヤで言った、全員に笑顔が溢れた。
マリが私にスプレー缶を差し出した、私は笑顔で受け取った。
円の空白に、スプレーを満遍なく吹きかけた。
『海水にな～れ』と言うと、円の中が水になった。
私は笑顔で右手を入れた、そして手を繋いで引っ張った。
円の中から可愛い手が現れて、私は手を離した。
その姿はゆっくりと上がって来た、右手を伸ばしたミホの無表情な顔が現れた。
「ミホ！」と姿無き男が叫んだ。
「奴が気付かない・・最強の切り札だ！」と美由紀が笑顔で言った。
ミホの左手には、丸い真っ白なピースが握られていた。

空に浮かぶ赤い月を、ミホは見ていた・・・。

【赤い月?】

暗黒の世界から生還するように、ゆっくりと上がってきた。
その表情が動くことは無かった、ただ一点・・赤い月を見ていた。
女性達の笑顔が、上昇いてくるミホを見ていた。
沙紀の瞳が輝いていて、私は沙紀を笑顔で見ていた。
「そういう事だったの、自分の全てをミホに賭けたの」とユリカが爽やか笑顔で言って。
「姿無き弱き者では、想像も出来ない・・ミホが沙紀の為に、ここに来る事は」と蘭が満開で微笑んだ。
ミホの全身が現れた瞬間、手に持ってたピースが空高く舞い上がった。
舞い上がったピースの裏面は、月と同じ真赤な色だった。
「しまった〜、撃たないといけないんだ!・・あのピースも」とシズカが叫んだ。
女性達がハッとして空を見上げた、ピースはかなりの高さに有った。
全員正方形を固めてたので、近距離用の銃しか持っていなかった。
ミホがゆっくりと右手を上げて、山の方を指差した。
ドンと銃声がその方向から響き、ピースに当り、両面真白のピースが落ちてきた。
全員がその方向を見た、久美子がライフルを下ろす姿が見えた。
「みんな・・ひどい・・私が洞窟に入れなかったの、気付かなかった。

レンも気付いてくれなかった、たった2人の家族なのに。
マキもシズカもヨーコも、友達と思ってたのに。
ひどすぎるよ・・私、あの入口から歩いてきたの・・遠かった」

久美子がウルウルで言った、全員が顔を見合わせた。
『久美子・・一人だけ知ってたよ、マリは知ってたさ・・久美子が最後の切り札だって』と私が二ヤで言った。
マリは久美子を見て、二ヤで頷いた。
「依頼者はマリだったのね・・1億で良いよ、スイス銀行に振り込んでね」と久美子が笑顔で言って、全員に笑顔が戻った。

リアンが丸いピースを受取り、最後の空白に入れた。
赤い地面が消えて、透明のガラスになった。
下にいる14人が手を振っていた、私はガラスの床の小さな蓋を開けた。
14人が階段を上って外に出てきた、沙紀はミホに笑顔で抱かれていた。
私の横には由美子が来た、私は由美子を笑顔で抱き上げた。

『想像よりも重いね、由美子』と笑顔で言った。
「また、意地悪言った・・小僧ちゃんに意地悪1点」と笑顔で返された。
『誰がトップ?』と二ヤで聞いた。
「もちろん小僧ちゃんがトップ、2位が哲夫君・・意地悪点数付いてるの、2人だけだけど」と二ヤで返された。
私は嬉しくて、ウルで返していた。

その時地面が大きく揺れた、私は北斗に由美子を渡した。
ミホがユリカに沙紀を渡して、私に手を出した、私は笑顔で握った。

『了解、ミホ・・リアン、早く全員を船に乗せて。
あと６０秒しかないよ・・俺とミホは強制的に帰る。
最後にミホの望みを叶えるから・・ユリカ、沙紀をよろしく。
シズカ、最強の武器はどれ？・・作ってるよね、シズカなら』

私は最後にシズカに二ヤで聞いた、シズカも二ヤで返してきた。
「ヘリの操縦席の上、赤いロケットランチャー・・広島原爆の１００万倍の威力」とシズカが二ヤ継続で言った。
『了解・・蘭、お腹空いたから・・何か用意しててね、すぐ帰るよ』と蘭にウルで言った。
「仕方ないな～・・早く帰って来いよ」と満開で微笑んだ。

「よし・・全員大至急乗船し、ベルト装着」とリアンが言って。
「はい」と全員が答えた。

「トンネルも壁も、戻れ～」とヨーコが言うと、トンネルがホースに戻った。
全員が船に向かって走り出した、私はマリアを抱き上げて頬にキスをした。
マリアは天使全開を出して、猛スピード飛んで船に入った。
大きく揺れる暗黒の世界で、私はミホを抱き上げて、ヘリ１号機の助手席に乗せた。

操縦席に乗り、エンジンを始動して、頭上の棚を覗いた。
真赤なロケットランチャーが有った、それを取り出し、ミホに渡した。
ミホは無表情で受け取って、シートに置いてあったスコープをかけた。

宇宙船の下部から白煙が上がって、ゆっくりと宇宙船が浮き上がっ

た。
私もゆっくりとアクセルを踏んで、ハンドルを引いた。
ヘリはスムーズに揺れる大地を離れた、ミホが暗黒の世界を見ていた。
黒い大地が崩れだし、破片が宇宙の果てに消えていくのが見えた。
崩れる暗黒の世界が隠していた、その姿が現れた、白く輝く月が姿を現した。
ミホの横顔は月光で照らされて、幻想的な美しさだった。
宇宙船はヘリと少し離れて浮いていた、窓から女性達が崩れる世界を見ていた。
沙紀が右手を由美子と繋ぎ、左手をマリと繋いで見ていた。

「エース・・何をするの？」とエミがヘリに無線で交信したきた。
コックピットの小さなモニターに、エミの笑顔が映されていた。

『エミ・・よく頑張ったね、俺は本当に嬉しかったよ。
エミ・・あの月は何だと思う、あの赤い月は？』

私は赤い月に方向を向けながら、エミに笑顔で聞いた。

「塗られた色じゃないよね・・全体がそれで出来ているよね。
私はそれとしか思えない・・あれは人間の血で出来ている。
多分・・人間同士で、殺しあって流された血。
人類の歴史で、今までにあれだけの血が流れた。
それを提示してる、姿無き男の演出だよね。
エースの問題、恐怖の根源・・エース、私は今気付いたよ。
人間の持つ恐怖の根源は、人間という存在に対する不信感なんだね。
生きる為以外の理由で、同じ種族を殺す・・人間に対する不信感。

欲の為に、殺し合いをする・・そんな馬鹿げた行為に。
理解出来ない行為に・・姿無き男は、絶望してたんだね。
ありがとう、エース・・見せてくれて。
絶望しても未来と戦えると、教えてくれたね。
エースがミホちゃんを信じる事で・・ミホちゃんが登場する事で。
それで感じたよ・・シナリオは無い、シナリオは自分で書くんだね。
ミホちゃんが何をやるのか、今分かったよ。
あの星を破壊するんだね・・次の歴史を作る為に、忘れないように。
残虐な歴史も忘れないように、破壊して・・地球に還すんだね」

エミは真顔で強く言った、私はエミの強い瞳を見ていた。
『エミ・・１００点だよ、よく頑張ったね・・エミは俺の誇りだよ』と笑顔で言った。
「早く帰ってきてね・・次の難問が待ち遠しいから」とエミが笑顔で言って、映像が消えた。

『シズカ・・もう少し離れててね、強い衝撃波が来るよ・・カウントダウン６０』と無線で言った。
「了解・・ミホ・・ぶっ壊せよ、血塗られた歴史を」とシズカが言って消えた。
モニターには、６０と数字が出て下がり始めた。

「そうだったの！・・エースはその一石二鳥まで狙ってたの」とユリカがシズカに言って。
「ミホの記憶に深く眠る、血塗られた経験・・それを吹き飛ばしたかったんだ」と蘭が言って。
「赤い月の意味を、沙紀の絵で理解してたんですね」とユリさんが言って。

「歴史を地球に還す・・エミ、凄すぎるよ」とミコトが言った。

「エミ・・本物の月に向かって、全速前進」とシズカが強く言って。
「ラジャー・・月を目指します」とエミが返して、レバーを引いた。
宇宙船が小さくなって行くのを、ミホと2人で見ていた。

私はヘリを反転させて、後部ハッチを開けた。
ミホを連れてハッチの方に歩いた、真赤な月が浮いていた。
ミホを座らせて、ロケットランチャーをセットして渡した。
ミホは肩に担いで、スコープで赤い月を見ていた。
私はミホを後ろから抱きしめて、赤い月を見ていた。

機械的な男の声が聞こえた、「１０・・９・・８」と英語でカウントしていた。
『ミホ・・ありがとう、来てくれて嬉しかったよ』とミホの耳元に囁いた。
ミホは動かなかったが、温度が少し変化した。
「３・・２・・１・・ＴＨＥ　ＥＮＤ」と男の声がして、ミホが引き金を引いた。

小さなロケットミサイルが真直ぐに、赤い月に向かって飛んでいた。
赤い月に到達する直前に、ミホが振り向いて私を見た。
ミホが笑顔で私に抱きついた、私も嬉しくて笑顔で抱きしめた。

その瞬間光に包まれて、私とミホは病室に戻った。
私はミホを見た、ミホは無表情のままベッドに戻った。
私は笑顔でミホを追いかけて、ベッドに座ったミホの額に手を当てた。
ミホは目を閉じて眠りに落ちた、私はミホを優しく寝かせた。

『ミホ・・可愛い笑顔だったよ・・俺はそれが1番嬉しかったよ』とミホに言った。
強烈な喜びの波動が来た、私は久々に波動を感じて嬉しかった。
宇宙船では、全員が静かにカウントダウンの数字を見ていた。
機械的な男の声が、「ｔｅｎ」と言った。
「ｎｉｎｅ」とエミが叫んだ、その声で全員が「ｅｉｇｈｔ」と叫んだ。
全員でカウントダウンをしていた、遠くに見える赤い月を見ながら。
「ｔｗｏ」・・「ｏｎｅ」と女性達が叫んで、静寂が訪れた。
「ＴＨＥ　ＥＮＤ」と機械的な男の声だけが響いた。
赤い月が光に包まれて消滅した、全員が拍手を贈った・・ミホの勇気に。

「それでは、成功を祝して・・月面に降りてみますか」とシズカが二ヤで言った。
「えっ！・・可能なの？」と大ママが言った。
「ヨーコが出せるなら・・無重力でも浮かない重りを」とシズカが二ヤで言って、女性達の期待の視線がヨーコに集まった。

「ヨーコ・・出せたら、勲章を与える」とリアンが極炎ニカで言った。
ヨーコは焦ってポケットを探って、最強清楚二ヤを出した。
「ばば～ん、地に足付けるリング～」とヨーコが言って、リングの束を出した。
「ヨーコ、付けてみな」とシズカが二ヤで言った。

ヨーコはリングを1つ抜き、リングを広げて右足首に巻いた。
シズカがそれを見て、エミに二ヤで頷いた。
エミが重力を切った、女性達が笑顔で浮き上がり、ヨーコは浮かなかった。

「ヨーコ・・歩いてみて」とシズカが二ヤで言った。
ヨーコが歩くと、少し浮かんだが問題無かった。

「OK・・先に月に着陸します、その後で帰りに無重力を楽しみましょう」とシズカが笑顔で言った、女性達の歓声が起った。
シズカがスイッチを押した、操縦席の上に、古びた鳩時計が出てきた。
その鳩時計は12時45分を指していた。

「お分かりの通り・・今の日本の時間は0時45分です。
宇宙時差でしょうね・・この世界に、半日位いた感覚ですが。
この世界に入って、地球では時間計経過は・・まだ約30分です。
ゆっくりと月面を楽しみましょう」

シズカが二ヤで言った、女性達に笑顔が溢れた。
「エミ・・月の軌道に乗る、着陸場所の座標は・・アメリカ国旗」
とシズカが笑顔で言った。
「ラジャー・・人類の偉大なる足跡を探します」とエミが笑顔で返した。

女性達が浮きながら、美しい月を見ていた、マリアが浮かびながら蘭の横に来た。
「げっこう・・おいかける?・・りゃん」とマリアが天使の笑顔で聞いた。
「マリア・・うん、月光を追いかけるよ・・それが楽しい未来に続

く、道標だからね」と蘭が満開に微笑んで、マリアを抱きしめた。
間近にある月の光が、２人を優しく包んでいた。
女性達は月面を楽しんで、無重力も楽しんだ。
大気圏突入の熱も経験して、宇宙船は橘通りの交差点に垂直で着陸した。
女性達が船を降りて、真直ぐ一列に並んだ。

一人一人が順番に沙紀を抱きしめて、笑顔で話をした。
そして由美子を抱き上げて、可愛い戦士に、笑顔で話をしていた。
最後に北斗が由美子を抱き上げた、由美子も嬉しそうな笑顔だった。

「由美子、ママはもう泣かないよ・・由美子を抱けたからね。
由美子が約束してくれたから、大人になった姿を見せてくれるって。
だからママはもう泣かない・・嬉しい時しか泣かないよ」

北斗は笑顔で言った、由美子の笑顔を見ながら。
「うん・・約束を守るね」と由美子は笑顔で返した。
北斗は優しく由美子の頬にキスをして、沙紀の横に由美子を降ろした。
沙紀は笑顔で由美子の手を握った、由美子も沙紀に笑顔を向けた。
２人は女性達に笑顔で手を振った、女性達も必死の笑顔で手を振った。

沙紀と由美子は、手を繋いだまま振り向いて、一番街のアーケードに入った。
その時に強烈な光が射して、全員がフロアーに戻された。

「生還おめでとう・・本当に素敵な物語でした」と律子が笑顔で強

く言った。
女性達に涙が溢れて、抱き合って泣いていた、律子は優しい瞳でそれを見ていた。

「今夜は徹夜で、事情聴取してやる・・策略男を」と美由紀が泣きながら言った。
「美由紀、お寿司を用意しますから・・その報告を、明日して下さいね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「了解しました・・全ての疑問を、ゲロさせます」と美由紀が二ヤで返した。

「よし・・艦長を解任される前に発表する、最優秀戦士は・・久美子。
最初の敵、ドラン討伐と最後のピースの撃ち抜き・・しかし、何よりも。
１６歳にして、あの洞窟に入れなかった・・その強い心。
その強靭な心を評して・・最強戦士の称号を・・ゴルゴ・久美子に授与する」

リアンが笑顔で言って、女性が全員笑顔で拍手を贈った。
久美子は立ち上がって、少女の輝きを放ちながら、笑顔で深々と頭を下げた。

「艦長・・私もです～・・ガメラにメカバルタン。
最強の敵、２匹討伐・・最強の戦士です～。
アフロ・美由紀にも、何か称号くだちゃ～い」

美由紀がウルで言った、リアンは極炎ニカを出した。

「メカバルタンとの一戦・・下ネタが過激すぎた。

サクラさんよりクレームが有った、子供に見せられない番組だと。
その行為により、減点が入る・・よって美由紀の称号は。
メカ・エロ・美由紀に決定する・・全員覚えてくれ」

リアンがニヤで言って、全員が大爆笑した。
「ひどいです～・・あんまりです～・・でも、ダダ・蘭より良いです～」と美由紀がウルで蘭を見た。
「こら～、美由紀・・変な称号付けるな～」と蘭が満開ウルで返した。
笑い声が広いフロアーに木霊していた、女性達の美しい笑顔を連れて。

サクラさんがエミを抱いて、ヨーコがミサを抱いてタクシーに乗った。
律子がミナミとタクシーに乗って、家路についた。
女性達が笑顔で挨拶をして、通りで手を振って別れた。

ユリカが美由紀を押して、駐車場に歩いていた。
マキが美由紀を抱き上げて、ワーゲンに乗せた。
シズカとマキと美由紀が乗り込んだ、蘭はリアンとシオンの車に乗った。

「じゃあ、先に帰ってるから・・策略家を拾って来てね」とユリカが爽やか笑顔で言った。
「了解・・逮捕してくるよ」とリアンが極炎ニカで返した。

私は沙紀が戻ってきて、沙紀が眠りにつくまで手を握っていた。
そして由美子の部屋に行き、由美子の深い眠りを確認して病室を出た。
病院の入口を出ると、大きな月が浮いていた。

秋空に無数の星が瞬いて、その中に月が白く滲んでいた。
《ファン・ファン》とクラクションの音がして、軽自動車が入ってきた。
「逮捕する・・神妙にしろ」と蘭が窓を開けて言った。
『申し訳ありません』とウルで車に乗った。
蘭が密着してきて、私は蘭の香りに包まれて、ようやく緊張が解けていた。

「やっぱり、緊張してたね～・・話が楽しみだ～」と蘭が満開二ヤで私の手を握った。
『緊張したよ・・蘭がシマシマを撃つ時に』と二ヤで返した。
「カスミの奴～・・こうなるから、撃たなかったんだね～」と蘭が満開ウルで言った。
「私も危なかったよ・・ダダって、名前しか知らなかったから」とリアンが極炎ニカで言った。

「先生・・今回はチャレンジャーでしたね～」とシオンがニコちゃんで言った。
『覚悟してたよ・・１４人中、残るのは・・エミとシオンだけかもと思ってたよ』と笑顔で返した。
シオンの可愛い軽自動車が、トコトコと橘橋の坂を登っていた。

私はエミの駆け出した場所を見ていた、エミの映像が流れていた。
《正しいって、何だろう？》とエミが言った、今でも探してるのだと思っていた。
大淀川の水面に、月光の道が伸びていた。
少しだけ、冬の匂いがした・・蘭の髪の匂いに混じって。

ユリカのマンションに着くと、ユリカがチャーハンを作ってくれて

いた。
蘭とリアンが化粧を落として戻り、ユリカがビールを出した。
「今夜はご褒美ね・・一杯だけよ」と爽やかに微笑んで、私にもビールを注いでくれた。
全員のグラスが揃い、ユリカがリアンを笑顔をで見た。
「じゃあ・・生還を祝って、ミホと沙紀と由美子の今後を祈って・・乾杯」とリアンが言った。
「乾杯」と全員笑顔で言って、グラスを合わせた。
私がチャーハンを夢中で食べていると、美由紀が私のグラスに手を伸ばした。
一口ビールを飲んで、顔をしかめた。
「にっが～い・・これが美味しいの？」と美由紀がシズカに渡した。
シズカも一口舐めて、眉間に皺を寄せた。
「私は子供だ・・美味しくない」とシズカがウルで言ってマキを見た。
マキがグラスを受け取り、一気に飲みきった。
「美味しい～・・2人はお子ちゃまね～」と二ヤで言って、私の前に空のグラスを置いた。
私はグラスを見ながら、ウルウルをユリカに出した、ユリカが二ヤで注いでくれた。
「さて・・私から事情聴取・・いつ気付いたの、沙紀の恐怖に？」と美由紀が二ヤで聞いた。
全員が私の顔を二ヤで見た、私はチャーハンを食べ終わり、ビールを一口飲んだ。

『由美子の段階の時の話だよ、ユリカに聞いたんだ。
沙紀は由美子の病室にいて、集中してたよね。
そして俺達が、由美子のイメージに入った瞬間に描いたんだ。
３枚の扉を・・俺はそれを聞いて、思ったんだよ。
沙紀は失うことを極度に恐れてる、だから最終地点から浮かんだ。
沙紀にとって俺は、唯一お話が出来る大切な存在だよね。
それを失う事を恐れた、それが一番強かったんだ。
由美子は見つからなくても、失う事は無いと感じてたんだろう。
俺に対してでもそうなら、両親に対しては、どれほど強いのかと思った。
沙紀は今なら、女性達が沢山周りにいて、交友関係も拡がった。
でも・・それ以前は、両親と病院関係者だけだった。
そんな狭い世界だから、失う恐怖に勝てない・・逃げてしまう。
自閉症と言われる子供の悪循環、逃げ場が有る・・病名に逃げる。
医師が作り出した、逃げ込む病名に・・当事者も逃げ込む。
自分は病気だから、何も出来ないと・・現実から逃げる。
それだけは、分かってた・・マサル君とマリとの経験で。
だから最初の頃、俺は悪役の親玉になろうと思ってたんだ。
俺を倒す事で、あの場所・・沙紀の暗黒の世界が無くなると思ってた。
あの場所は・・逃げ場所だから、沙紀には大切な場所だった。
沙紀は怖いと言いながら、その世界に頼っていたんだ。
だから俺は、女性兵士を揃えた・・ぶっ壊す為に。
沙紀の逃げ場所をぶっ壊す為に、沙紀の病名をぶっ壊す為にだよ』
私は笑顔で言って、ビールを飲んだ。
「じゃあ、いつ姿無き男の存在を気付いた？」とシズカが二ヤで言った。
『シズカだって、そうだったろ・・マリが沙紀に出会った時だよ。

あの時・・沙紀と別れて、マリは別の集中に入ったよね。
巻き戻しをかけた、俺はそれを感じて分かったんだ。
絶対に奴がいると、そうでなければ・・マリはその集中に入らないと思った。
そしてシズカの美由紀への質問、あの質問で確信したよ。
だから考えた・・まず、自分を読まれないようにしようと。
マリが途中で集中を解いたから、読みきれてないと感じたんだ。
その後の美由紀に対しての、片腕の少女の提示は・・一瞬だったから。
瞬間的に集中して、すぐに何かを導き出した。
それを感じて、マリの力は上がってると思った・・そのマリが読みきれない。
多分・・奴も結末を決めていない、それが今回の奴の武器だと思った。
だから俺も読ませなかった・・肝心の部分はね』

私はシズカに二ヤで言った、シズカも二ヤで返してきた。
「肝心の部分を述べよ」とリアンが極炎ニカで言った。

『まず・・もちろん、ミホの集中・・それだけは隠した、ユリカにも。
奴が波動を読めるなら、危険だと感じた。
奴の武器が設定しない事なら、最後のゲームは誰かをあの世界に来させる。
そのゲームだと思った、それが奴には一番コントロールしやすいからね。
俺とユリカを切って、俺と沙紀を結界に閉じ込めれば良いんだ。
そうすれば奴は、あの世界に飛べる者のチェックをするだけ。
そこに隙が出来るんだ・・だから俺も、最後のゲームにそれを望んだ。

マリは俺のその設定を感じて、自分も入ると意思表示した。
奴にとっては、こんなに願い通りの展開はないよ。
マリが入るなら、マリはあの世界の事しか気付けない。
最後の切り札にもなれない・・そのマリの意志で、奴は確定した。
最後のゲームを確定した・・それがマリの誘導とも知らずに。
だから奴は、最後のあの部屋、死神の部屋の入口までしか設定しなかった。
マリに読まれない為に・・奴は誘導された、マリを恐れるがあまり。
マリはそれにつけ込んだ、その甘い思考回路を誘導したんだ。
その作戦の提示こそが、マリのあの言葉だよ。
偶然も必然も無い、シナリオも無い・・シナリオは自分で書く。
その言葉だった・・この言葉は、ユリカは知ってる。
俺は自分にも強く心に入れた、大切な言葉として。
でもユリカ以外は知らない、奴はそのチェックを必死にしただろう。
俺が誰かに伝えないかとね・・俺は初めから決めていたんだ。
この言葉は・・エミに伝えようと、エミなら何も言わずに持って行くと。
勝負の時まで、持って行ってくれると信じてた。
そして奴も、まさかエミに託すとは想像出来なかった。
奴の最大の弱点・・自分の考えが正しいと思い込む。
だから枠を出れない、自分の常識と経験と知識の枠から出れない。
だから想像すら出来ない・・俺がミホとエミを信頼するなんてね。
そんな事は、奴の中には無いから・・俺はそこを突いたんだよ。
だからこそ、この沙紀の世界の話を・・最初にシオンにした。
奴がマリの次に恐れる、シオンとマリア・・その純白の心。
奴は多分・・シオンを中心に追いかけたと思う、徹底的にね。
それに対抗できるのも、シオンだけだった・・奴は焦っていたと思う。

どんなにシオンを読んでも、策略も戦略も無いからね。
シオンの心には、そんな物は無い・・有るのは、沙紀に対する愛情だけ。
純粋に知りたいという想いだけ、沙紀の恐怖を感じたいという想いだけ。
それだけしかない心に触れて、奴は混乱したと思うよ。
俺の入る前の策略はそれだけ、最後の部屋以外は１００％の自信があった。
マリがいれば、何人かが部屋までは辿り着く、それは確信してたよ』

私は最後に笑顔でシオンを見た、ニコニコちゃんで返してくれた。

「エース、教えてくれ・・そしてお前の言葉で伝えてくれ。
シオンに・・リンさんの言った言葉、お前もそう思ってるのか？」

リアンの強い極炎の瞳が私を見ていた、シオンも私を見た。

『そうだよ・・俺はシオンに重ねてる、多分限界カルテットも。
哲夫も美由紀も、そして豊兄さんも重ねてる。
シオンを感じる度に、俺は喜びに溢れてる。
あの好きの中の何かというくくり、シオンがニコちゃんで教えてくれた。
それを聞いた時は、感動して泣きそうだった。
そして白い弾丸も、本当に嬉しかった・・強い言葉が心に埋め込まれた。
俺はシオンを知る度に、その純白の心を感じる度に。
嬉しさが溢れ出す・・ヒトミが１９歳になったら、こうなると確信的に思える。
俺は蘭にも堂々と言える・・シオンとマリアは愛さずにいられな

いと。
俺にとってシオンの夢は、俺自身の夢であると堂々と言える。
だからシオンに夢を追って欲しいと願う、その為なら俺は何でもする。
俺はシオンを愛してる、それはヒトミが重なるからじゃない。
シオンの純白の心を愛してるんだよ・・その存在こそが今回の切り札。
純白のシオンとマリアの存在・・それは絶対に手が出せない。
奴には近づく事さえ出来ない、その心は何にも染まらない。
俺はカプセルの映像を見ながら、シオンの映像を見た。
リンダとマチルダと旅をするシオンに、ヒトミが寄り添っていた。
悪質なシナリオと戦える、最強の戦士を見たよ・・シオンという戦士をね』

シオンが私に歩み寄り、強く抱きついた、私はシオンを優しく抱きしめた。

「完成したね、最良のシオン・・今のが卒業の言葉だったね」と蘭が一筋の涙を流して微笑んだ。

暖かい空間に、リアンの涙があった・・ユリカに抱かれて泣いていた。

窓の外に月が浮かんでいた、水面に道を照らしていた・・未来に続く道を・・・。

回想録　??　【冬物語?】

何かが終わると次の何かが始まる、冷めている暇は無い。
その街は次の何かを提示してくる、止まったら下りはじめる。
下り坂になると止まらない、ブレーキの無い車輪は走り続ける。

『シズカ・・マリは帰ったの?』と笑顔で聞いた。
「うん・・明日学校で試験があるんだって」とシズカが笑顔で返してきた。
『マリ、○○中学の特別クラスだよね、実験台にされないの?』と真顔で聞いた。

「馬鹿だね〜・・される訳ないでしょ、マリはその力を見せないから。
マリの力に対して信頼のある、小僧の前でしか出さないよ。
普通の障害を持つ生徒として存在してる、でも級友はラッキーだよね。
マリが教えてるから、そして守り続けてるからね。
障害を持つ級友が、宮崎市全域から集まってる・・凄い子もいるらしいよ。
選ばれた人間が、一人いるってマリが言ってる。
その力はマリでも表現できない、強烈な力らしい。
その子事は、マリでも全く読めないらしいよ。
その子の力は、薄いベールに何重にも覆われてる。
マリはそう表現した・・そしていつか、出会うのかも知れないと言ったよ。
それが楽しみだって・・伝えられる人間に出会うのかどうか。
その時そいつが伝達出来るのか、向き合えるのかが楽しみだって・・マリが言った。

言葉でね・・可愛い声だったよ、そして伝えろと言われたと思ったよ。
道を繋ぐ者にね・・マリはもう少し練習したら、皆の前で言葉を出すだろうね。
だから同調する最後の健常者に、ユリカ姉さんを選んだ。
マリはもう新しい同調相手は、言葉を持たない者しか選ばないと思う。

小僧の小５で言ったあの言葉・・脳に障害が有る人間は、強い力を持ってる。
脳がそれを感じて、重要な回路を切ってる・・そう言ったよね。
私は最近・・ていうか、昨日だけど・・院長先生に招待をされて。
３時間ほど病院で話をした・・あの人は、本当に素敵な医学者だね。
医学の枠を平気で出る、その飽くなき好奇心で・・簡単に出てしまう。
科学を専攻してる人間にとって、最も重要な要素を持ってるね。
院長に・・今の小僧の話をしたら、１つの事例を教えてくれた。
ある先進国で、その力の研究が、本気で行われていたらしい。
医学の闇の部分の世界では、周知の事実らしいんだ。
国家予算を使っての、極秘のプロジェクトだったらしい。
しかしその研究した全ての書類は消えた、そして事実も消された。
その研究の趣旨が・・最強の兵士を作るという、軍事目的だったからね。
どこかの国が持ち去ったんだろうね、そこまで研究は進んでいたんだ。
価値のある結果だったから、持ち去らなければならなかった。
戦時下の独裁国家でしか出来ないよね、人体実験なんだろうから。
実験された人間は、多分・・死を宣告されたと同じなんだよ。
小僧の考え、間違っていないかもしれない・・院長はそう言った。

院長が私に興味を持ったのは、あの質問もあったけど、マリの提示だった。
美由紀に対するマリの提示を見て、院長が言ったよね・・小僧に。
小僧に出会えて良かったと、自分の間違えに気付くからだと。
小僧は行けるかもしれない、人体実験無しで・・結論に辿り着くかも知れない。
それは、小僧がその事に興味が無いから・・不思議な事なんですよね～。
小僧は好奇心・・探究心の塊です、でも人間の不思議な力に興味を持たない。
解明されてない、常識では考えられない・・不思議な力は存在する。
それを否定する科学者は、科学に敗北してると思う。
科学の根源は探究心だと思うから、それの利用方法にこそ価値がある。
小僧が興味を持てない理由、その力の存在が、楽しい事に繋がらないから。
その力を消そうとさえする・・だから当事者は、小僧の前で見せる。
唯一の、交信できる相手であり、自分を理解してくれる人間。
そして興味本意でなく、その力を持つ事による、苦悩を感じてくれる。
苦悩の部分にだけに、興味を示す・・それが小僧なんだね。
私は科学を専攻したい人間として、大切な事を教えてもらったよ。
全ての好奇心も、探究心も・・人の幸福が基本でないといけない。
そうしないと・・不幸に向かってしまう、人間は歴史的にそうしてきた。
今回の沙紀の世界で・・それを確信できたよ」
シズカが二ヤで私に言った、私も二ヤで返した。

「マリですら、選ばれたと感じる人間・・会ってみたいな～」とユリカが爽やか笑顔で言った。
「マリで充分だよ・・あの自分を信じ続ける姿だけで」とリアンが笑顔で言った。
「マキちゃんもだけど、恭子ちゃんはマリを怖いと言いますよね・・なぜでしょう？」とシオンがニコちゃんに戻り言った。
「小僧の見解が聞きたいね～」とマキが二ヤで言った。

『マキは霊感が元々は強かった、だから半分マリと同調してる・・だから怖さを感じるんだろ』と二ヤで返した。
「そっか！・・それでか～、今気付いた」とマキが笑顔で返してきた。
「じゃあ・・恭子は？」と蘭が満開笑顔で聞いた。

『恭子は知っての通り、限界カルテットじゃ唯一・・感覚的な人間なんだ。
その感覚が鋭すぎて、子供の頃は変わった子だと言われてたんだよ。
まぁ学校に上がってからだけど・・その前は、シズカと2人で遊んでたからね。
シズカも当然変わった子だったから、2人でいると互いに目立たなかった。
由美子の段階の時・・恭子はマリアに、何かを伝えに来たよね。
マリがマリアを飛ばせたのも、恭子の引継ぎがあったからだと思う。
俺が小児病棟に行くきっかけになったのも、実は恭子なんだよ。
恭子が入院してる同じ歳の少女と、少女の散歩中に仲良くなった。
その少女に会いに、小児病棟に行き始めた。
小4の恭子が教えてくれたんだ、1年生の俺に・・小児病棟は楽しいって。

遊戯室に色々玩具や本が有って、夏・涼しく、冬・暖かい。
それに遊び相手を探す必要も無い、お前には天国だって言って、俺の手を引いた。
それからだよ、俺は晩飯食べると退屈で、家を抜け出すようになった。
俺は元々あまりＴＶを見ない、面白いと思わなかったんだ。
アニメは友達関係の話題の為に見るけど、お笑い番組やドラマはほとんど見ない。
だから脱走してた、もちろん勝也も律子も知っていた。
でも律子が何も言わなかったので、勝也も放任したんだろう。
俺は何かない限り、毎晩行ったよ・・ヒトミの時は、皆勤賞だったよ。
恭子の仲良くなった少女・・それは小児麻痺の少女だったんだ。
車椅子に乗り、言葉も出ない少女・・その子を母親が散歩をさせてた。
それに近寄り、恭子は友達になった・・凄い事だよね。
恭子は不思議な伝達を持っている、今でもね・・それを律子が覚醒した。
その力が発揮されるのが、ヒトミの段階の時・・恭子爆撃機。
恭子は無意識にマリの感性が分かる、その強さも意味も感じてる。
あのマリの最初のトランプの時、一番嬉しそうだったのは恭子だった。
恭子は感覚的に分かる、だからこそ・・怖いと表現する。
その怖いの意味は・・その力を持っているのに、自分らしく生きる。
マリの強さを感じて、その強さを賞賛してるんだと思う。
恭子の言う怖いは・・憧れの言葉だよ、マリに憧れる言葉だと思うよ』
私は笑顔で言った、女性達は笑顔だった。

女性達が闇の世界の思い出話で盛り上がって、私は美由紀が眠ったので、ベッドで添い寝した。

赤い月が夢に出てきて、私はそれを見ていた。
本当の意味は何だったのか、自分でも確信は持てなかった。

冬に進路をとった南国は、急降下で寒さが主張を始めた。
私はＰＧの給料で、皮のジャケットとパンツを揃えた。
シャツを着てＴＰＯに対応して、ネクタイも締めるようにした。

そしてユリさんの５店光臨に同行して、圧倒的な存在を再確認した。
情報は客にも流れていて、全ての店が開店から満席状態だった。
５店の経営者の感動の涙を見て、ユリさんの楽しそうな笑顔を見ていた。
ユリ不在のＰＧも、満席記録を更新し続けて、全員でその大きな穴を埋めた。

蘭の集中が美しく燃え始め、ナギサの心にも火が点いた。
銀河の３人の変化が激しくて、レベルアップの火花が散った。
確実に群雄割拠の時代の匂いがしていた、その雰囲気に一番影響を受けたのが。
カレンだった、その美少女という武器が強烈に発光を始めた。

カレンの大切なお客である、大きなデパートの部長に頼まれて、地元ＴＶのＣＭモデルを引き受けた。
カスミがその経験でアドバイスして、カレンはチラシのモデルもやった。
セーラー服を着たカレンは、どう見ても女子高生だった。
若者の間で話題になり始めて、私はカレンと話した。
どっちの方向で今後の仕事をしようかと、カレンに聞いた。

モデルはモデルとして、謎の女子高生で貫いて、若者達の想像を楽しませ。
夜は別人として、その事実を隠してやりたいとカレンは言った。
私もジンも、その２面性に賛成して、カレンのモデル以外の仕事は受けなかった。

ジンの派遣会社にアンナを登録して、すぐに高い評価を受けた。
ユリ不在の中で、北斗とアイさんとサクラさんとアンナの４人で、ＰＧの精神的な支柱となった。
アンナは気さくで、若い女性との壁が無く、何でも話せる良い相談相手になった。
ユリカもリアンもアンナに店を任せた、その信頼関係は強かった。

４歳の安奈も、４人娘とすぐに仲良くなり、ＴＶルームを楽しんでいた。
上の３人に無い感性だった安奈に、マリアは喜び、言葉も綺麗に出始めた。

沙紀は前向きになり、文字を楽しんで覚えていた。
絵は幻想的な物から、写実的な物まで描き、表現も多様になっていた。
喘息の発作も何度か有ったが、パニック状態になる事は無かった。
クリスマス前に退院が決まりそうだと、１１月の終わりに関口医師に聞いて。
私は嬉しさと、少しの寂しさを抱えていた。
沙紀の自宅は車で走って、病院から１時間ほどの距離であり。
その当時の私では、自分で行く事は困難だったのだ。

由美子は安定期が続いていて、私は北斗に構想の話をして。

新年になったら取り組みたいと伝えて、北斗の了承を貰っていた。
そして私はシオンに誘われて、青い湖でシオンの白い弾丸の言葉を受ける。
シオンにデビューは１１月２２日と伝えて、共同体に対し公式に発表する。
シオンは美しさを増して準備する、ユリさんはシオンを裏方から外す。
シオンにフロアー集中をさせる為に、学校が有る時期は裏方から外した。

寒い１１月の金曜日の朝だった、私は美由紀のお泊りセットを持って登校した。
「さすがに淋しいか・・シオン姉さんだからね～」と美由紀に二ヤで突っ込まれた。
『嬉しいが８０％、淋しいが２０％だよ』と強がって二ヤで返した。
学校が終了して、ユリカが迎えに来て、ユリカの部屋で準備した。

３人で病院に行き、私は初めて片腕の少女に会った。
由美子の部屋に美由紀が連れてきて、その少女は由美子に駆け寄った。
そして右手で由美子の手を握り話していた、その瞳が強く潤んでいた。

片腕の少女の退院が決まり、その子の両親が美由紀に伝えた。
引越しをしたから、学校でもよろしくと言った。
その少女・・秀美は転校が決まっていた、私達の学校に。
そして当然のように、清次郎が担任を引き受けた、新しい仲間が来る事が決まった。

私は沙紀の外出許可を貰っていて、沙紀を連れて病院を出た。
沙紀はご機嫌で、包装された額に入った絵を持っていた。
そしてリアンの店に行き、緊張気味のリアンと一緒に5人で食事をした。
私はシオンの最初の指名に、リアンを口説いていた。

8時5分前に、リアンとユリカと沙紀を、ＰＧの3番席に案内した。
準備の整った女性達が、そのサプライズを見て笑顔が溢れた。
私と美由紀は指定席についた、美由紀もワクワク顔だった。

ユリさんが銀の扉の前に立った、女性達が横一列に並んだ。
そしてユリさんが銀の扉を開けた、純白のドレスのシオンが3歩進んだ。
私はその美しさに見惚れていた、そして寂しさと闘っていた。

シオンは深々と頭を下げて、頭を上げて3番を見た。
ニコニコシオンになって、リアンを見ていた。
リアンは潤む瞳でシオンを見ていた、その顔は喜びに溢れていた。

その時沙紀が立ち上がり、シオンを見て可愛く拍手をした。
女性達がそれを受けて、大きな拍手で待ちに待った仲間を迎え入れた。
シオンはニコちゃんで一礼して、3番に向かって歩いた。

3番席で挨拶をして、リアンと沙紀の間に座った。
シオンも3人も嬉しそうで、私も嬉しかった。
「やっぱり、違うな～・・こりゃ～、気合入れ直さんと」と後ろからセリカが言った。
振り向くと、流星の笑顔で返してくれた。
その後ろに、ホノカとリョウの笑顔も有った、3人の笑顔も待望の

デビューを喜んでいた。

沙紀の贈ったシオンの絵は、砂漠の中に立つ美しいシオンだった。
広大な砂漠の稜線の中に、シオンがニコちゃんで立っていた。
真っ白な放牧民の衣装を着て、風に吹かれていた。
シオンの足跡が手前から続き、振り向いた瞬間だった。
シオンの足跡の左右に、２人分の足跡が遥か彼方まで続いていた。
シオンは追いかけていた、リンダとマチルダの足跡を。

シオンも順調にフロアーの仕事にも慣れ、その接客が話題になった。
シオンが付いたお客は、楽しそうな笑顔が出ていた。
シオンのリピート率は恐ろしい数字だった、だから無指名客を中心に接客した。
それまで指名を一度もした事の無い、常連客がシオンを指名しはじめた。
それによりシオンは指名の数も、トップレベルに増え始めた。

私はマキが忙しいので、マキのフォローをしながら、派遣の割振りに忙しかった。
１２月の各店の要望が多く、私は派遣の女性を探していた。

そして１２月がやってくる、忘れ得ぬ・・嵐の冬物語が幕を開けた。
ＰＧは完全に群雄割拠に入った、女性達がその個性を主張した。
そして魅宴で大きな話題があった、１１月の指名成績で、リョウがミコトに肉薄したのだ。
ミコト２８６ポイント、リョウが２７２ポイントで、その差１４ポイントだった。
しかしこの事実が、ミコトの夜の世界での、最後の開花をさせる。
比類なきその素質が成熟期を迎えた、精神的な余裕で微笑んでいた。

そして訪れる・・強烈な嵐の暴風域が、私を包む時が。
１２月の初旬だった、私は裏階段の最上階で風に吹かれていた。
なぜその場所に行ったのか、日記にも書いていないので、定かでない。
私はユリカの店の明かりを見ながら、その影が動くのに気付いた。
ユリカの店の少し手前の、５階建ての大きな雑居ビルの屋上に人影が見えたのだ。

その影は低い鉄柵を乗り越えて、屋上の縁に座り、ミニスカートから出る足を投げ出した。
足をブラブラと振り、ビルとビルの狭い隙間を覗いていた。
私は慌てて走り出した、ユリカの問いかけの波動に返事する余裕も無かった。
通りでは平静を装って、足早に雑居ビルに入った、エレベーターは４階で止まっていた。
私はその横の狭い階段を駆け上がった、ユリカの波動が何度も何度も来た。
私は屋上まで駆け上がって、鉄の扉が開いていたので、ゆっくりと女性の方に歩いた。

女性のコートを羽織る背中が見えて、酔っているのか横に揺れていた。
私は鉄作を乗り越えて、女性の横に足を投げ出して座った。
そして女性の横顔を見て、完全に凍結していた。

『酔ってるでしょ～・・落ちたら痛いよ～、リリー』と笑顔で声をかけた。
強烈な波動が驚きを連れて来た、それほどの有名人だった。

その女性は有名な老舗クラブのＮｏ１、リリーだった。
私はもちろん顔は知っていたが、話した事は無かった。
リリーは滅多に店外に出ない、店の前にタクシーで来て、店の前でタクシーに乗って帰る。

リリーは２年前の冬、突如彗星の如く現れたらしい。
そしてその美貌と会話術で、入店２ヶ月目に老舗クラブのＮｏ１になった。
経験者であるのは間違いなく、しかしどこから来たのかも明かされなかった。
経営者の方針だったのだろう、謎の女リリー・・夜街関係者はそう呼んでいた。
美しさでは夜街の若手Ｎｏ１と囁かれ、銀河の３人は秘かに会いたがっていた。
私も当然興味は持っていたが、宮崎有数の高級クラブであり、敷居が高くて行けなかった。

「痛いって、自分で分かるかな～？」とリリーが私を見た、悲しさを湛えた瞳が切なかった。

『絶対に分かるよ・・そして救急車で運ばれて、噂が駆け巡る。
謎の女リリー・・飛び降りの真相ってね』

私は意識して笑顔で言った、完全に押されていた、その幻想的な雰囲気に。
「そうなんだ～・・それも良いかな～」とリリーが下を覗いた。
私はリリーを抱きしめた、リリーは全く抵抗しなかった。

『酔ってる時は駄目だよ、素面の時じゃないと・・そんな決断は』

とリリーの耳元に優しく言った。
「同じだよ・・どんな時でも、同じなんだよ」とリリーも静かに返してきた。
しかし温度は激しく揺れていて、私は強く抱きしめた。
ユリカの強い驚きの波動が、何度も来た。

「私とやりたい？・・こんな私とでも・・正直に答えなさい、エース」とリリーは顔だけ離して二ヤで言った。
切れ長の目に長い睫毛が主張して、柔らかなパーマの流れが、人気アイドルを真似ていた。
２０歳そこそこであろう、若さの肌の張りを隠せずに、傾けた泥酔の顔が可愛かった。

『リリーとなら、誰でもやりたいでしょう・・可愛いし、谷間ちゃんだし』と二ヤで返した。
「谷間ちゃんだよ～・・脱いだら、失神するよ・・未経験の中坊ならね」と二ヤで返された。
『今で失神しそうだから、落ちないようにこうしててね』と笑顔で返した。
「噂通りの、お節介さんだね～」とリリーが言って、強く抱きしめてくれた。
酒の匂いに混じって、何か懐かしい香りがしてきた。

『リリー・・どうしてなの？・・遺言で聞かせてよ』とリリーの耳元に優しく聞いた。
「幻だったんだよ、リリーって現実にはいなかったんだよ」と言って体重をかけてきた。
私は抱きしめながら焦っていた、この状況で眠るとは考えてなかったのだ。
私は足場を確かめて、華奢なリリーを抱き上げ柵の中に降ろした。

『火事場の馬鹿力・・確かにあるな』そう言って、柵を乗り越えてリリーを抱き上げた。
古びたソファーが捨てて有ったので、そこにリリーを抱いたまま座った。
風が強く寒かったので、引き寄せて顔を見ていた。

ネオンの明かりに照らされたリリーは、普通の人間と思えなかった。
彫の深い顔立ちが、点滅するライトで色が変化して、その度にイメージが変わった。
《怖いな～・・恭子がマリに言う言葉と同じ、怖いという表現が似合うよ》
ユリカの心配げな波動が、優しく何度か来た。

《リリーがなぜ自分を幻なんて言ったのか、分からないよ・・ユリカ》と心に囁いた。
ユリカの優しい波動が包んでくれて、暖かかった。

そして私は後ろから、いきなり殴られる、私が頭を下げるとリリーの谷間だった。
「てめ～・・何してやがる、どこのチンピラだ」と後ろから男の声が聞こえた。

「あれ・・大丈夫？・・どうしたの？」とリリーがその声で目を覚まし、私に言った。
『いきなり後頭部をぶたれた・・リリーの彼氏に』とウルでリリーに言った。
「リリー・・そいつ誰だよ、どんな関係だ？・・答えによっては、ただじゃ済まんぞ」と男が迫力を出して言った。
「あんた、相手の確認もしないで殴って・・知らないよ、若いって

だけで殴ったんだろ」とリリーが二ヤで言った。

「おいおい、リリー・・俺もこの世界は長いんだよ、若造なんぞにビビらんよ」と強気で言った。

「どうするの？・・怒ってるでしょ、カード出すの？・・武藤に出さなかった」とリリーが二ヤで私に言った。

『この世界長い人・・怖い・・だから今から店に行くよ・・怖いの外しとかないと』と二ヤで言って、リリーを抱いたまま立った。

「当然、私を指名ね」とリリーが微笑んだ、幻想的な美しさだった。

『もちろん』と二ヤで返して振り向いた。

「エース！」とそのボーイは言った、３０歳位の痩せた男だった。

『案内しろよ、もちろんＶＩＰ席に・・お前と話す気はないから。

最高責任者呼べよ・・でなきゃお前、終わりだよ。

いきなり殴って・・俺は酔ったリリーが落ちそうだったから、助けたんだぞ。

それに対するのが、この行為なら・・俺もそんな行為で返すよ。

今いるお客、全員帰らせた方が良いよ・・この世界が長いお兄さん』

私は真顔でそう言って、その男を無視して、リリーを抱いたままエレベーターに乗った。

男はエレベーターのドアの前に立っていた、階数指定のボタンを押さなかった。

「どうすれば、勘弁してくれるんだ？」と男は前を見たまま言った。

『リリーを開放しろ、それがお前に出来るのか？』と静かに言った、リリーが私を見た。

その顔で確信した、何かに縛られているのだと。

「それは・・俺には出来ない」と男も静かに返してきた。
『なぁ・・お話にならんよ、俺の事は知ってるんだろ・・早く案内しろよ。
時間稼いでも同じ事だよ、あんたじゃ解決できんよ・・分かってるだろ。
それとも俺を敵に回すか、それでも良いよ・・全面戦争だね。
どうするの・・ボタンを押せよ、この世界が長い人』
私は強く言った、その男は覚悟を決めたらしく、3階を押した。
エレベーターのドアが開くと、大きな受付に向かい男が走った。
私はリリーを抱いたまま、受付を見て止まっていた。
『リリー・・望みは何だよ、自由で良いの？・・それで屋上に行かなくなる？』とリリーに笑顔で聞いた。
「約束するよ、あんたの噂が本当なのを見せてくれれば。
私の接客の噂が本当だと、教えてあげるよ・・どんな店でも」
リリーが笑顔で返してくれた、私は二ヤで返した、内心は嬉しくて仕方なかった。
私が受付に歩くと、中年のスーツの男が、痩せた男と駆け寄った。
「申し訳ない、エース・・ここでは何だから、どこか静かな場所で話をしよう」と中年の男が言った。
『話をしようって・・あんたに権限が有るの？・・さっきの条件の』と真顔で返した。
「それは・・無い」と中年男が言った。
『店に案内しな・・出来ないなら、今ここで警察を呼ぶよ。
夜街の噂になるよ、大恥かいて・・店の看板汚しなよ。

それで良いんだね？・・・どうなの？』

私は中年男に詰め寄った、２人の男は考えていた。
私は不思議に思っていた、すんなり店の奥に通した方が、目立たないのにと思っていた。

「今・・奥のＢＯＸにお客様がいて、そこにお通し出来ません。
なので・・どこか静かな場所でと思いまして。」

中年男は丁寧に言った、私はその丁寧さで気付いた。
卑屈なまでの丁寧さが、どんな事をしても店には入れたくないと言っていた。

『あんた・・丁寧に言ってるけど、何か勘違いしてない？
俺は店に通せって言ってるんだ、それが飲めないなら、決裂だよ』

私は静かにそう言って、振り向いてエレベーターのボタンを押した。
「分かりました・・ご案内します」と中年男が言った。
『面倒くさいよ・・最初からそうしろよ』と真顔で返した。
私は中年男に連れられて、リリーを抱いたまま、店内に入った。
手前の方の席から静寂が訪れて、客も女性も沈黙して私を見ていた。

私が指定された席に座ろうとして奥を見た、キングが笑顔で手を振っていた。
《やっぱりね・・大正解》と心で囁いて、奥のＢＯＸを目指した。
中年男と痩せた男は青ざめていた、リリーは私に二ヤを出した。

『キング、こんばんは・・奇遇ですね～』と二ヤで言った。
「奇遇だね～・・俺のリリーを届けてくれたのか？」とキングが二ヤで返した来た。

強烈な波動が笑っていた、ユリカの安心した波動だった。

『キングのなのか～・・スカウトしたんだよ、殴られた相殺でね』
と笑顔で言って、笑顔のリリーをキングの横に座らせた。
「ほ～・・今でも夜街のエースを殴れる奴がいるのか～、凄い奴だな～」とキングが大声で言った。
店にはＢＧＭの音しか存在しなかった、キングは中年男を見ていた。

『観念しなよ・・この状況だよ、経営者呼べよ。
そうしないと、俺はキングに詳しく話さないといけない。
そうなると、それはキングに仕事を依頼する事になる。
この店の相手はキングになる、それがどういう事か分かってるだろ。
それでも良いの？・・早くしな』

私は中年男を見て静かに言った、中年男は頷いて奥に消えた。

リリーは私を笑顔で見ていた、私は内心ワクワクで、リリーを笑顔で見ていた。

嵐の女、リリーの派遣登録の夜が来た、キングは二ヤで飲んでいた。

群雄割拠の戦国に、彗星の如く現れる・・嵐の女。

他者に作られた偶像を壊す時、中から現れるのは・・選ばれし女。

偶然と必然が重なり、奇跡が作り出した・・選ばれし者。

残像を伴い待ち受ける、究極の美・・それは心を映す鏡。

炎を全て消し去るほどの強風・・そして豪雨・・南洋で産まれた強い力。

冬に到来した嵐・・リリーが登場した・・伝説の冬物語を、語り継ぐために・・・。

【冬物語？】

広い店内に会話の声は無かった、女性達も集中を乱していた。
異常な事態に気付いたのか、客が帰り始めた。
高級クラブの客である、金も地位もある人間ばかりなのだ。

『リリー・・縛られてる条件は？』とリリーに真顔で聞いた。

「借金の肩代わりされてるの、私・・名古屋人で、そこから引っ張られた。
父の残した借金の、母が連帯保証人だった・・父は事業の失敗で失踪した。
悪質な業者からも借りていて、母は必死に支払った。
私も母を助けようと、１８から夜の世界で働いて・・そこで出会ったの。
ここの社長と・・私も馬鹿だったよ、美味しい話に乗せられて。
何の自由も無く、ここで働かされた・・辛い事ばかりで、屋上に上がったの。
また馬鹿な事をしようとしてたよ・・ありがとうエース、ここまでで良いよ。
嬉しかったよ・・私は契約書を書かされてる、これ以上は無理だよ」

リリーは寂しげにそう言った、私はリリーの瞳を見ていた。
キングは静かに飲んでいた、私は任されたと思って嬉しかった。
経営者は初老の紳士だった、キングに丁寧に挨拶をして、私を見て座った。
「大変な事を、うちの従業員がしたみたいで・・申し訳なかった」

と爺さんは丁寧に謝った。
『もう良いよ・・子供に手を上げただけだろ、そういう判断だと感じてる』と真顔で返した。
「どう侘びを入れれば良いんだね？」と私の向かいに座り、真剣に言った。

『侘びはいらないよ、俺は俺のやり方で生きるから。
あなたからの侘びは受け取ったよ、でも奴がやった事はこの店の方針だから。
俺は俺のやり方で型を付けるよ、交渉はこっちからしないよ。
リリーの話を聞いて決めた、ガキの俺では・・問題の解決は出来ない。
どんなに紳士ぶっても、あんたは紳士じゃない。
先に俺の息の根を止めなよ、そうするしか無いよ・・俺は交渉はしない。
もちろん交友関係も使わない、そんな噂で俺は馬鹿にされてるんだろ。
俺は今夜・・今からＰＧを辞める、もう何も関係ない。
ただのガキに戻るよ、だから国の法律と自分の掟で戦う。
徹底的に追い回す、それが俺の生き方だから。
俺は俺の結論が出るまで、ここの男全員を追い回す・・それだけだよ。
それじゃあ・・また近い内に会いましょう』

私はそれだけ言って、キングに頭を下げて出口に向かった。
「分かった・・待てよ、俺の負けだよ・・もう一度座れよ」と経営者の爺さんが言った。
『座ってどうする・・俺は気分が悪いんだ、そっちの座らせる条件を言えよ』と私は爺さんの顔の５ｃｍ前で大声で言った。
この言葉で最後の２組の客が席を立った、私はそれを確認した。

「リリーの開放だろ・・その条件を提示するよ」と爺さんも真顔で返してきた。
《さすがに経験豊富だな～、余裕あるな～・・強敵だよ、ユリカ》と心で言って、席に戻った。
強い波動が興味津々で吹き抜けて、私はその時多くの女性の視線を感じた。
それで元来の目立ちたがり屋が起き出して、集中してきた。

『条件って何だよ・・借金の事？・・まだ残ってると言うの？』と真顔で聞いた。
「あぁ・・契約は5年で返済となっている、まだ2年少しだから半分だよ」と爺さんが言った。
『1日何時間働いての計算？・・報酬のどの位引いてるんだよ？』と返した。
「1日20時～1時までの5時間・・もちろん残業分はカウントしてるよ」と爺さんが言った。

『ねぇ・・冗談言ってるでしょ、報酬って拘束時間だよ・・あんた1日何時間拘束してるの？』と真顔で言った。
「それは契約外の事だよ、住む場所も食事も提供してるんだから」と爺さんが少し焦った。
『だから・・リリーを何時間拘束してるんだ？・・自由時間は何時間なんだよ？』と強く言った。
「それは、契約期間中は逃げられたら困るから・・当然拘束してる」と爺さんが言った。
『ようするに・・奴隷契約なんだね、契約書のコピーを貰おうか』と二ヤで言った。
「それは見せれんよ」と爺さんが迫力を出して返してきた、ボーイが数人後ろを囲んだ。

私はボーイを見回して、二ヤを出して立ち上がった。

『何のつもりなの、交渉決裂だよ・・ふざけるなよ。
今夜からお前ら、暗い夜道は気を付けろよ。
本気の相手とやった事もないで、看板に頼ってるのはお前等だろ。
爺さん、あんた梶谷さんを取り囲んで・・本気なの？
今まで運が良くてここまで来たね、今夜までだから楽しんどけよ。
もうすぐ終わる・・あんたは日本で唯一、奴隷契約を持ってる男だからね。
さようなら・・後でね、下で待ってるよ・・いつまでも』

私はそのまま出口に歩いた、爺さんの声も無視していた、爺さんは走って近寄った。
「まぁ待てって」と爺さんが私の腕を掴んだ。
私は受付の電話の受話器を取った、そして１１０を回した。

「どうしましたか？」と担当警察官の声が聞こえた。

『俺・・中１の１３歳なんですけど、○○ビルのクラブ○○のボーイに殴られて。
今・・経営者の男に腕を掴まれて、拉致されてます。
助けて下さい・・大至急来て下さい・・人が来たので切ります』

そう早口で言って、爺さんを見た。
『ゴングは鳴ったよ・・言い訳でも考えなよ、俺は下で来るのを待ってるから』と二ヤで言って、エレベーターを押した。
「ちょっと待ってくれよ・・どうしたら良いんだ？・・どうすれば丸く収まる？」と爺さんが焦って言った。
私は爺さんを見ていた、後ろにボーイ達が沈黙して立っていた。

私は何も言わず待っていた、あの音が聞こえるのを。
パトカーのサイレンが聞こえてきた、派出所の制服警官の姿が階段に見えた。

私は爺さんの襟首を掴み、受付の裏に入った。
あの中年男が一緒に入ってきた、爺さんは緊張していた。
制服警官が受付で聴取してる声が聞こえた、受付の男は「いたずらでしょう」と惚けていた。

『さて・・爺さんどうするね、たまには本気の人間とやると楽しいだろ』と大声で言った。
「分かった・・俺が悪かった、無条件でお前の条件を飲むよ」と爺さんが言った。
『契約書持ってきな・・今すぐだよ』と真顔で言った。
「おい・・持って来い」と中年男に言った。

『なぁ、爺さん・・この先リリーに何かあったら。
変な噂でも立ったら、あんたが主導したと判断する。
俺は納得が出来なければ、たとえ相手がドン・小林でも追い回す。
警官が帰ったら、第2ラウンドだよ・・今からが楽しいんだ』

私は爺さんにそう言って、黙って丸椅子に座った。
パトカーの刑事も来たようで、キングが話して、いたずらで処理して帰って行った。
私は奥のＢＯＸに歩いた、キングとリリーが二ヤで待っていた。

私は元の席に座り、向かいに爺さんが座った。
そして契約書を差し出した、私は見もせずにテーブルの上に置いた。

『寝ていた時間と食事や諸々で、１０時間取ってやるよ、１日１４

時間労働。
住居と食事だと、ふざけるな・・リリーでどれだけ稼げたんだ。
今までが5時間の計算で、半分返済だから・・プラス5時間で10時間。
て事は、残り4時間分のリリーの自給を、2年半分計算して渡して。
そしてリリーはここを今辞める、俺の派遣社員に登録する。
2度とリリーに近づくな、そしてリリーの変な噂でも流れたら。
この店が流したと判断する、その時はどっちかが潰れるまでやろう。
俺はその方が性に合ってる・・それがリリーに対する条件』
私は爺さんの顔を見ながら、強く言った。
「分かった、了承しよう・・明日、差額を支払う・・他の条件は？」
と爺さんが言った。

『もちろん、あの殴った男・・やつに一筆書かせてよ。
13歳の子供を殴りましたって、私はどんな復讐でも受け入れますってね。
奴隷契約を持ってたあんただ、最高責任者として一筆入れろよ。
あんたが保証人としてサインと捺印してね、俺のターゲットはあんただよ。
そして奴にここを絶対に辞めさせるなよ、通りを歩く度に生き恥さらさせろ。
あんな馬鹿に貸しなど付けない、あんたに大きな貸しを1つだ』
私は痩せた男を見ながら言った、爺さんは頷いて、中年男に顎で指示した。
私は契約書を丸めて、痩せた男を見た。

『おい、ボーイ・・客がタバコを出したら、火だろ・・火を点けろよ』と言って、契約書を口にくわえた。
痩せたボーイは爺さんを見て、爺さんに促され膝を床について火を点けた。
私は契約書を下向きにして、火が勢い良く上がって来るのを見ていた。

リリーもその火を見ながら、私に強く腕を組んできた。
私は大きな灰皿に契約書を落とし、リリーを抱き上げた。
リリーは笑顔で腕を私の首に巻いた、私も笑顔で返した。

『リリー・・荷物持って来い、明日母親に会いに名古屋に帰れよ』
とリリーに笑顔で言った。
「持ってくるから・・絶対待っててね」と笑顔で言ったリリーを下ろした。
「俺の会計もしてくれ」とキングが言った。
「梶谷様は、ご迷惑おかけしたので・・本日はいりません」と爺さんが言った。
「馬鹿な事を言うなよ・・将来奴隷契約の裁判で敵になるかもしれん相手の、サービスは受けんよ」とキングは3万をテーブルに出した。
爺さんとボーイ達に緊張が走った、それほどの迫力がキングの言葉にあった。

笑顔のリリーが荷物を持って来て、キングと3人で店を出た。
『キング・・ありがとう、嬉しかったよ・・キングの沈黙と帰らなかった事が』とキングに真顔で言って頭を下げた。
リリーも慌てて頭を下げた。

「なんでもね～よ・・俺も見たかったしな。

次のドンになれって、指名された男の解決方法を。
本気の覚悟を使ったか、さすがだよ小僧・・奴等にはあれが1番だよ。
お前の言う通り、奴等は看板で生きてるからな・・覚悟なんて無い。
小林さんやマダムや飛鳥は、者が違うし・・覚悟が違うからな。
それに俺もリリーの噂は聞いてたが、その部分に気付かなかった。
ただ暢気に楽しんでたよ・・その反省さ」

キングは笑顔で言った、どこまでも深い男だと思っていた。
『ありがとう、キング・・俺はまだまだだよ、キングの存在に頼ったよ』と素直に返した、キングは笑顔で頷いた。

『リリー・・もう自由だよ、名古屋に帰っても良いんだよ』とリリーに優しく言った。

「明日一度帰って、母さんの様子を見てくるよ・・そして必ず帰ってくる。
私は必ずあんたに見せる、私の接客を・・そして少しでも、あんたの力になる。
それしか出来ないから・・それだけが今はしたいから」

リリーは強く言った、私は笑顔で返していた。
「リリー・・俺が許可を取る、今からＰＧのフロアーに立て・・派遣社員として」とキングが笑顔で言った。
「梶谷さん・・ありがとうございます」とリリーが真顔で頭を下げた。
私はキングを3番席に送って、リリーをＴＶルームに案内した。
マダムも松さんも、リリーの登場はさすがに驚いていた。

久美子がリリーの美しさに、固まって挨拶をした。
私がキングの話をすると、松さんがリリーを着替えに連れて行った。
「いい加減にしてくり、ワシは心臓が心配になってきた・・リリーを引っ張るとわ」とマダムが笑顔で言った。
『有名なんだね、リリー』と二ヤで返して、ＴＶルームを出た。

指定席に行くと、キングが3番でユリさんに話していた。
ユリさんは私を見て、薔薇の微笑で【ＯＫ】とサインをくれた。
私は笑顔で頭を下げた、その姿に女性達が気付いて、不思議そうに見ていた。

《群雄割拠・・それがどんな事なのか、見てなさい》と心でニヤをした。
強い波動が楽しそうに来た、その時銀の扉が開いた。
真赤なドレスのリリーが現れた、女性達が一瞬固まった。
ユリさんも誰なのか聞いてなかったらしく、驚いた表情を出した。

私はリリーの横顔を見ていた、まさに怖いほどの美がそこに存在した。
リリーは堂々と3歩進み、神聖な場所に深々と頭を下げた。

照明に照らされた瞳の中に、光の輪が綺麗に出来ていた。
店全体を微笑みで見回して、女性達の視線を楽しんで、3番を見た。
ユリさんとキングに向かい、もう一度深々と頭を下げた。
顔を上げるとき、煌く光の細かい粒子が飛び散るようだった。
魔女が悪戯で作り出した、そう感じさせる、幻想的な美しさだった。

カズ君がリリーに近づき、3番に案内した。
客も女性もリリーの姿を目で追った、カスミが私を真剣な眼差しで

見ていた。
私は女性達の視線を無視して、リリーを見ていた、3番でキングに挨拶をした。
そしてキングの隣に座り、ユリさんに笑顔を向けた。
ユリさんは薔薇で返して、リリーに任せるように笑顔だけを出していた。

「誰・・何者なの？」とマキがコーラを持ってきて、私に二ヤを出した。
『あぁ・・今夜、派遣の試験を受ける・・名前はリリー』とニヤで返してコーラを受け取った。
「あの人がリリーさん・・噂以上だね、強い星だね～」とマキが驚いて3番を見た。
嬉しそうなマキの表情を見ていた、それを感じて私も嬉しかった。

《さすが灼熱のマキ・・相手が強いほど燃えるね～》と心に囁いた。
「凄いね～・・確かに怖いほどの美が存在するね～」とユリカが私の横に座りながら言った。
『またさぼって、アンナが入ってるからって』と二ヤで返した。
「アンナ姉さん、素敵だよ・・私も安心できたよ、いつでも休めるからね」とユリカが爽やか笑顔で言った。
『贅沢だよな～・・小夜子もいるのに』と笑顔で返した。

その時大ママがヨーコと来て、リリーを真剣に見ていた。
「エース・・リリーは派遣に入ったのかい？」と大ママが二ヤで言った。

『どれだけの情報網持ってるの？・・怖い人だ～。
まだ未確定、明日実家に帰らせるから・・それにジンにも話して

ないし。
リリーしだい・・帰ってきたら、魅宴もお願いします』
私は笑顔で返した、大ママは二ヤ継続中だった。

「もちろんＯＫだよ・・真の伝説を持つ女だからね。
接客するその姿、初めて見たけど・・本物だね。
情報網は夜街全てに存在するよ、連絡網もね。
夜街にパトが入れば、情報はすぐに流れる。
その後で、梶谷さんとリリーとエースが出てくれば、既に大きな噂さ。
リリーを開放したんだね、演出が派手だったね～。
轟の爺さん、死ななかったか？・・呼び込み達が嬉しそうだったよ。
リリーの事を、関係者は心配してたのさ、あの美しさなら当然だね～。
リリーなら・・お前は全てを賭けてでも、欲しかったよね～」

大ママは二ヤが止まらずに、私を見ていた。
その時、ミチルとリアンと千鶴が来た、３番のリリーを嬉しそうに見ていた。
フロアーの女性達の、私に対する視線が強かった。
私はリアンとユリカに挟まれて、ニヤを出していた。

キングが席を立ち、私とユリさんとリリーで見送った。
『ユリさん、ありがとうございます・・正式に紹介します、リリーです』と頭を下げた、リリーも美しい姿勢で頭を下げた。
「よろしくね、リリー・・噂以上ですね・・行きましょうか」と薔薇で微笑んだ。
「よろしくお願いします」とリリーは笑顔で、もう一度頭を下げた。

リリーがフロアーに戻った瞬間、蘭からサインが飛んだ。
3番の新客、若いキャリア官僚3人組に、蘭とナギサが向かっていた。
蘭が満開笑顔でリリーを指差した、ユリさんは薔薇で頷いた。
リリーも状況が分かったらしく、笑顔で頷いて3番に歩いた。

その時のリリーは凄かった、後から挨拶して座った瞬間に火を点けた。
蘭とナギサに一歩も引けを取らずに、瞬時に3人で巧みなコンビネーションを見せた。
挨拶代わりだと若手達に言ってるようで、私はニヤで3番を見ていた。

指定席に座ると、案の定カスミがすぐにやって来た。
「誰なんだ・・あの化け者は?」とカスミが不敵で言った。
『カスミが会いたがっていたから、スカウトしてきたよ』と二ヤで返した。
「リリー!・・姉さん」とカスミが3番を見た、楽しそうな笑顔だった。
リリーもカスミを見ていた、その微笑み返しは、怖さを感じる美を纏っていた。

『姉さんなんだ?・・リリー』とカスミに笑顔で聞いた。
「空白の場所を埋めたんだろ・・確か22歳だよ、リリー姉さん」
とカスミが最強不敵で言って、銀の扉に消えた。

『蘭・ナギサの1つ下、四季・ネネの1つ上。
見つけました〜、一人で存在を示す女・・リリー』

私は嬉しくて、独り言を声に出した。
蘭の満開とナギサの華やか笑顔に囲まれる、リリーの笑顔を見ながら。

その夜もＰＧは順調に推移して、終演を迎えた。
１０番に蘭とナギサと、シオンを含めた１１人衆に、カレンとマキが座った。
私はリリーを横に立たせた、リリーは面白がって強く腕を組んできた。
蘭が嬉しそうな満開二ヤで、私達を見ていた。

『紹介します、まだ決定じゃないですけど・・派遣登録したい、リリーです』と笑顔で紹介した。
「クラブ〇〇に在籍してました、リリーと申します・・よろしくお願いします」とリリーは美しい姿勢で頭を下げた。
「よろしくお願いします」と女性も全員立って、笑顔で返礼した。

「リリーは、２２歳だよね？」と蘭が満開二ヤで言った。
「はい・・正確には、１月で２２歳になります」とリリーが笑顔で返した。
「リリーって、素敵な源氏名の由来は？」とナギサが華やか二ヤで言った。
「男はつらいよで・・寅が愛した、浅岡ルリ子さんから頂きました～」とリリーが笑顔で返した。

「それか～・・良いな～」とカスミが笑顔で言った。
「あら・・カスミも良いじゃない、私がいたあのクラブでも噂だったよ・・霞まないカスミちゃん」とリリーが笑顔で返した。
「嬉しいな～・・みなさ～ん、聞きました～」とカスミが二ヤで言った、全員が二ヤで返した。

リリーも楽しそうな笑顔だった、私はその笑顔で一安心していた。
「リリー姉さん、老舗高級クラブって・・難しいんですか？」とカレンが笑顔で聞いた。
『変わりませんよ、どこも同じでしょう・・私より貴女方の方が、経験多いでしょう』とリリーは微笑んで返した。
「見たいね～・・スナックと魅宴とゴールドのリリー」と蘭が満開で立って。
「大ママが飛んで見に来る逸材・・楽しみだね～」とナギサが華やか笑顔で立って、リリーを連れて控え室に消えた。
私は若手女性達に笑顔で睨まれながら、ウルを出してマキとＴＶルームに戻った。
私はこの時点から今までを考えて、夜の女性達をこの当時の女性に置き換えて、タイプ別けしてきた。
どれだけの人数をタイプ別けしたのか定かで無いが、多分５００人は超えている。
その中で同タイプが現れなかった存在が、３人いる。
ユリカと、東京物語で主軸のローズ・・そしてこのリリーである。
ユリさんでもミコトでも、あのシオンでさえ、同タイプに出会った事がある。
時代は常に変化して、当然価値観も変わってきた。
携帯電話の普及とバブルの崩壊で、夜の仕事も時代の変革期を迎えた。
確かに若い男性の欲も変化したように感じる、少しの寂しさを伴って。

しかし女性達はいつの時代も逞しく、その大切な時代を翻弄されながら謳歌している。
偏見や差別的視線が無くなる事はないだろう、最近はそれで良いのだと思える。
そうさせてやるのが仕事だから、金を受け取るプロの仕事なのだから。

女性達が必死に稼いだ金を狙う奴も常に存在し、危険な罠も多様に存在する。
男や薬に溺れる女性も少なくない、稼いでもそれ以上の出費をする女性も多い。

今の私は薬以外は、それで良いと思っている。
自分で選んだ事なのだから、その才能で稼いだ金の使い道なのだから。

本物とは溺れない人間を表す言葉である、自分に溺れない。
辛さや寂しさを言い訳にしない、努力なんて言葉を持たない。
実生活と仕事を区別出来る、確固たる自分を持つ者の称号が・・本物である。

その本物の中でも、異質の存在・・ユリカ、リリー、ローズ。

ユリカは存在自体が別世界で、他者と比べようが無かった。
私の想い入れが強過ぎるのも有ったのだろうが、近い存在にすら出会った事が無い。
ユリカとの約束、ユリカと同じ匂いの女に出会ったら、源氏名をユリカにする。
この約束は今まで果たせないでいる、今後も果たせる気がしない。

ローズは東京物語で詳しく書くが、このリリーも別世界だった。
私はリリーの美しさと生き方に、何度も恐怖を感じた。
絶対に何かの強い意志が働いて作り出された、そんな感性と能力だった。

リリーの母親に出会った時の驚きを、私は今でも忘れられない。
この年の年末に、リリーも生活が安定し母親を招いた。
そして母親がＰＧに挨拶にやってきた、私はその成熟した美しさに凍結さえした。
母より年上の、４８歳の女性に凍結したのだ。
どんな生活苦を経験しても、全く影響を受けない、完成された美が存在した。
その強力なＤＮＡを持ち、それに沢山の何かが加わった。
偶然と必然の産物、魔女の悪戯・・私はリリーをそう表現した。

しかしリリーは、外見的美しさの前に、それを凌駕して余りある能力に優れていた。

会話術は多様であり、相手に合わせて瞬時に変身した。
少女にも若さ溢れる女性にも淑女にも、そして娼婦にすらなって見せた。
頭の回転の速さは天下一品で、その情報量の豊富さには常に驚かされた。
政治経済の教養に卓越し、老人や権力者などの地位の高い男に愛され。
若者や海外の文化や流行にも敏感で、若者達には憧れの存在で君臨した。

そして何より、生き方が見事だったと言える。
この時の、拘束された生活の後悔と反省を持っていたのだろう。
リリーは常に自由を求め始めた、精神的な自由を追い求める。

リリーを病院に連れて行くと、すぐに3人と打ち解けた。
そして由美子と触れ合い感じていく、自分の求める自由という事を。
その精神は行動と直結していた、行動力は今でもＮｏ１だと確信している。

リリーは夜の仕事をしながら、昼間はボランティア活動を始める。
誰かに頼まれたので無く、リリーが自ら選択した。
草の根的な活動を地道にやった、その姿に大きな影響を受けて、カレンが手伝った。

そしてリリーは出会った、必死で基金を設立しようとしている男と。
リリーとカレンが豊に相談して、その男を応援したのだ。
子供の車椅子普及の基金の設立に向けて動き出した。
その行動を聞きつけた、税理士である、美由紀の父親がボランティアで手を貸した。
キングの紹介で、理事長には元県会議員の人格者が就任した。

基金団体が成立して、リリーの手を離れた時に、私は始めてリリーの涙を見た。
美しい涙を見ていた、私の隣には、やはり美しい涙を流すカレンが立っていた。

そしてリリーは必然的に出会ってしまう、リンダとマチルダに。
その生き方に触れ、リリーは計画を練り行動する。
これから4年後の事である、ＮＹのリンダの家にリリーは旅立った。

そしてリリーはリンダと旅に出て、リンダとマチルダを助ける。
リンダは地下に潜る時、リリーに託した・・シズカと久美子を。
その当時のリリーは、リンダに研究費の援助をされていた、科学者と恋に落ちていた。
素朴で優秀な科学者だった、その2人の関係をリンダは喜んでいた。

リリーはその科学者と結婚して、今はアメリカで裕福に暮らしている。
しかしその精神は、今でもリンダを追いかけている。
夫婦2人で追いかけ続ける、リンダの求める理想と自由に・・到達できるその日まで・・。

リリーが今始動した・・灼熱の冬物語のシナリオを書く為に。

選ばれし者・・選べし生き方・・比類なき才能。

自らに溺れぬ者・・自由を追い求める女神。

魔女の悪戯・・その名は・・リリー・・。

【冬物語？】

結末は分かっていたと、後から言っても意味が無い。
行動に移せなければ、事実すら消えて無くなる。

リリーが着替えてＴＶルームに戻って来たので、２人で受付に向かった。
徳野さんにリリーを紹介して、リリーの開放の取決めを話した。

リリーの金の受け取りは、徳野さん同行してくれると快く引き受けてくれた。
そしてリリーの荷物の持ち出しと、空港までの送迎をカズ君に同行させると言って、リリーをカズ君に紹介した。
リリーは２人に笑顔で挨拶して感謝を伝えた、カズ君は照れた笑顔で返した。

リリーを蘭とアパートに連れて帰り、私はベッドの横に布団を敷いて、蘭と添い寝した。
蘭とリリーは既に打解けていて、夜の面白話で盛り上がっていた。
蘭がアパートが決まるまで居れば良いと満開笑顔で言って、リリーは嬉しそうな笑顔で礼を言っていた。

翌朝、私が作った朝御飯を見て、リリーが嬉しそうな笑顔を見せて食べていた。
そして私の制服姿をケラケラと笑い、笑顔のリリーが玄関まで見送ってくれた。

『リリー・・何泊でも良いんだからね、楽しんできてね』と笑顔で手を振った。

「1泊で良いよ・・母さん実家に居るんだから、そんなに心配してないよ」とリリーも笑顔で手を振ってくれた。
私は爽快な気分で寒い冬の朝、チャリで美由紀の家を目指した。
美由紀と登校してると、後ろから声が聞こえた。

「おはよう、美由紀」と笑顔の秀美が駆け寄った。
「おはよう、秀美・・リップの色がきついよ～」と美由紀が二ヤで言った。
『秀美・・激しいリップ言いつけてやる、美由紀にしか挨拶無かった』と私はウルで秀美に言った。
「いや～ん・・小僧は意識するのよ、良い男だから～」と二ヤで返された。
『そうなんだ～・・その気持ち、良く分かるよ～』と笑顔で返した、秀美は二ヤで返してきた。

秀美は骨の病気で、左腕を肩の下５ｃｍで切断した。
美由紀の献身的な応援で、前向きになっていた。

『秀美・・義手って、そんなにお粗末な物しかないの？』と私は意識して笑顔で聞いた。
「無いみたい・・マネキンから奪ってきたような、こんな物しか」と違和感ある肌色の義手を差し出した。
私は握手するように触れてみた、硬いプラスチックで出来ていた。
指先も硬く、ほとんど曲がらなかった。
この当時は車椅子同様、義手もまだまだ発展途上の物だった。

『よし・・発明家を紹介するよ、これよりサイボーグの方が良いだろ』と二ヤで言った。
「ありがとう、サイボーグの方が良いよ・・これは似せて作ってる

んだろうけど、大きく間違ってるよ」と秀美も笑顔で返したくれた。
3人で教室に入ると沙織も来て、朝のリップ談義が盛り上がっていた。
私は悪友の喧嘩話を笑顔で聞いて、拳の傷を見せられて、恐怖のウルを出していた。

清次郎が来て朝の訓示があり、私は学校生活にも体が慣れたのか、睡魔には襲われなくなっていた。
午後の体育がマラソン大会で、校庭を２５周も走らされた。
美由紀と秀美が応援してくれ、私は序盤でペースを上げすぎ、最後の3周は地獄の中を走った。

疲れ果てた体で美由紀を押して下校して、アパートに帰りシャワーを浴びた。
冬の寒い夕暮れを、バスで病院に向かった。
繁華街は気の早いクリスマスツリーで飾られ、消費しろと誘惑している。

私は蘭とユリカのプレゼントを考えながら、間の抜けたサンタのマネキンを見ていた。
１１人衆と派遣社員用のプレゼントは決まり、業者に手配していたが、肝心の2人が決まらなかった。
5人娘はサンタを信じていたので、プレゼントは贈らない事になっていた。

病院に着き3人娘に会って、私は久々に院長を訪ねた。
院長は笑顔で迎えてくれ、高級な苦いだけのコーヒーを、自慢顔で出してくれた。

『院長・・車椅子もそうだけど、義手もあんなお粗末な物しか無いの？・・金を出せば良いのが有るの？』と真顔で聞いた。
「有ると言えば有るが、それだけの金を支払う価値が無いんだよ」と院長も真顔で返してきた。
『大差無いって事なんだ・・研究開発が遅いんだね』と返した。

「そうなんだよね・・科学の進歩には金がかかるんだよ。
研究費に余裕がある企業なんて、ごく僅かだからね。
薬品メーカーなんて、莫大な研究費が発生する。
その研究費を薬の代金で回収して、次の研究費に当てる。
だから薬は安くならない、人間を救う物が高額な事には、違和感あるよね。
どんな研究にしても、優秀な頭脳は、研究費の潤沢にある場所に集まる。
その頭脳が新しい素材を開発しても、最初は高額で使用範囲が限定される。
高額でも売れる物・・車や電化製品などの、売れる物から使われるんだよ。
そして素材メーカーも、研究費を回収すると値段を下げる。
そうなって日用品に使用される、その流れで段々と拡がるんだね。
車椅子も義手も、必死に研究開発してる研究者はいる。
しかし金にならない、儲からないんだよ・・大量に売れないから。
資本主義とはそういう事かもしれんが、だからこそ国が援助しなければならない。
アメリカは戦争が続き、国がその方の研究支援までしている。
それもまた悲しい事ではあるがね、戦争などしなければ良いんだから。
２度の世界大戦もベトナムも・・全ての戦争は、科学の進歩に大きく寄与した。
それは万人が認める事実だよ、だがその進歩も・・医学や機械工

学の世界が主だった。
捕虜で人体実験をしたり、人を殺す兵器の開発の賜物だ。
そして原爆などという、馬鹿げた兵器まで開発してしまった。
小僧が義手の話を持ち出したなら、何か考えがあるんだろう。
また楽しみが増えたよ・・シズカちゃんに、いつでも愚痴は聞くと伝えてくれ」

院長は最後に笑顔を出した、私も笑顔で頷いた。
院長と雑談をして、礼を言って部屋を出た。
夜街に歩きながら、私は院長の言葉を考えていた。

《無い物は作ればいいだろう、無いからと言って諦めるな》豊の言葉が響いてきた。
冬の夜空に一番星が輝いて、私はシズカに会いに行こうと決めていた。

その日が水曜日で、私はアンナをゴールド、カレンを魅宴に送って。
谷田の店のＫＵＭＩＫＯ　ＮＩＧＨＴ　に同行して、久美子の演奏を間近で聞いていた。
私は久美子の指を見ていた、別の生き物のように動く指を。
そして自分の指を触ってみて、その複雑な構造を再確認していた。

ＰＧは蘭とナギサの２枚看板の独壇場で、２人のオーラが席巻していた。
ユリさんは流石に余裕があり、１２月の序盤は全体的な様子見の雰囲気だった。
１１人衆もシオンの加入で火が点いて、集中して仕事をしていた。
ＰＧは平日でも常時満席状態が続いて、私は１２月の凄さを感じていた。

RGが無事終了して、蘭と腕を組んで帰路に着いた。
『蘭・・明日休みでしょ、水彩絵具買ってきてよ』と笑顔で言った。
「えっ！・・そうなの、退院決まりそうなんだね」と蘭が驚いて返してきた。
『うん・・クリスマス頃には、大丈夫そうだよ』と意識して笑顔で言った。
「無理しないの・・淋しいくせに・・私がいつでも、会いに連れて行くよ」と満開笑顔で強く腕を組んだ。
『うん・・淋しいけど、嬉しいよ』と夜空に返した。

翌日、蘭がリリーを空港に迎えに行き、カズ君の車からリリーの荷物を取って来た。
リリーの荷物は着替えと化粧道具だけで、旅行バック2つ分しかなかった。
アパートの物件を見に、蘭とリリーで回って、カスミと同じアパートが空いていた。
リリーはそこを二ヤで決めたらしく、保証人には蘭がなった。

私がシャワーを浴びて準備してると、蘭とリリーが部屋に帰って来た。
3人で出かけて、画材屋に寄って、店長お勧めの水彩絵具に筆やパレット一式を買った。
そして3人で病院に行きながら、私はミホと沙紀と由美子の話をリリーにした。
リリーは真剣に聞いていた、リリーの特徴である、瞳の中に光のリングが出ていた。

病院に着き、ミホの病室に3人で入って、私は沙紀にリリーを紹介した。
リリーは嬉しそうな笑顔で、沙紀の手を握り話していた。

私は眠っているミホのチェックをして、沙紀の場所に戻ると、蘭が水彩道具を渡して説明していた。

『沙紀・・土曜日、美由紀を連れて来るよ・・その時に使い方を聞いてね、美由紀は絵を描くのが好きだから』と伝えた。

《うん、ありがとう、沙紀、嬉しい沢山出たよ》と嬉しそうに返してきた。

沙紀の夕食が運ばれたので、３人で由美子の病室に向かった。

リリーは真剣な表情だった、その真剣な美しさに、私は押されていた。

由美子の病室に入り、北斗と祖母に挨拶をして、由美子にリリーを紹介した。

リリーは笑顔で手を握り話していた、私はその後姿を見て凍結していた。

《リリー・・何者なんだろう、強い伝達を持ってる》と心で囁いた。

驚きの強い波動を感じながら、私はリリーの背中を見ていた。

３人で由美子におやすみをして病室を出て、メルヘン居酒屋で夕食にする事にした。

蘭の横にリリーが座り、私が向かいに座ると、ユリカが突然来て私の横に座った。

ユリカの登場で、リリーが慌てて立ち上がった。

「ユリカさん・・派遣に入りました、リリーと申します・・よろしくお願いします」と深々と頭を下げた。

「よろしくね、リリー・・あなたには姉さんと呼んで欲しいわ」とユリカが爽やか笑顔で返した。

「ありがとうございます・・私、この街でどうしても会いたかった

んです。
炎のリアン姉さんと、水のユリカ姉さんに・・もちろん顔は知ってました。
話してみたくて・・近くで感じてみたいと、そう思ってました」
リリーは座ってユリカを見て、嬉しそうな笑顔で言った。
「私も同じだよ・・昨夜はＰＧに、噂のリリーを見に行ったよ」とユリカも爽やか笑顔で返した。
女性達が盛り上がって、私は食べるのに集中していた。
「沙紀ちゃん・・いよいよだね」とユリカが私に言った、深海の深い瞳だった。
『うん・・正直・・淋しさの方が強いよ』と素直に返した。
「退院じゃない・・良い事でしょ、あなたにはミホも由美子もいるんだから」とユリカが爽やか笑顔で返してきた。
『由美子の次の段階に進む・・年明けの成人の日に、左手に誘うよ』とユリカと蘭を見ながら言った。
「その日にすると言うのは・・自信の表れと取って良いのね？」と蘭が強く言った。
「蘭・・大丈夫だよ、覚悟じゃない物を持ってるみたい」とユリカが蘭に笑顔で言った。
「蘭姉さん、教えて下さい・・私も由美子ちゃんを好きになって。
聞きたいんです・・左手に誘う意味を」
リリーが真顔で蘭に言った、蘭は満開笑顔で頷いた。
「エースが小児病棟に・・・」蘭は丁寧に私とヒトミの話をした。
蘭も自分で話したのは初めてだったので、最後は泣きながら話した。

リリーは真剣に聞いていた、強い瞳の中に光のリングが現れた。

「エースは成人の日に誘うと言った、その意味は大きい。
私達は何も出来ない・・だからと言って、何もしない訳じゃない。
このシズカの言葉が、今の私には響いている。
私もそうでありたいと心から想う、結果にこだわらない。
受け入れる強さを持って、由美子への愛を伝えようね。
リリー・・あなたも仲間よ、自分らしく接してみて。
絶対に大切な事を感じるわ・・私は期待してるよ・・リリー」

ユリカが優しい言葉でリリーに言った、リリーは笑顔に戻り強く頷いた。

『俺もそう思ってるよ、ユリカや蘭は当然だけど。
今はリリーとカレンに期待してる、由美子に伝えて欲しい。
生きる事は素敵な事なんだと、辛い事も・・悲しい事も有るけど。
それでも生きる事は素敵な事だと、伝えてね・・リリー。
あの屋上で出会った・・それにこそ意味が有ると思ってる。
リリーにしか伝えられない事がある、俺はそう思ってるよ』

私はリリーの笑顔を見ながら、笑顔で伝えた。
「うん・・伝えてみたい、私の想いを」とリリーが微笑んだ、光のリングが回転していた。
リリーの美しさは息を呑むほどで、私は期待に胸を弾ませていた。

ユリカがご馳走してくれて、3人で礼を言って手を振って別れた。
TVルームに入ると、女性達が食事をしていた。
リリーは5人娘に挨拶をして、笑顔で遊んでいた。

「カスミ・・男の出入りを、お互いにチェックしてね」と蘭が満開

二ヤで言った。
「お互いとは・・何でしょう?」とカスミがウルで返した。
「あなたの部屋の奥の間に、私が入ります」とリリーが二ヤで言った。
「大奥ですね、はは〜・・よろしくお願い致します〜」とカスミがその場で土下座をした。
「くるしゅうない・・面を上げなさい」とリリーが笑顔で返して、全員が笑っていた。

リリーが登場してからの、フロアーの熱の高さは尋常でなかった。
蘭もナギサも、初めて下の世代の足音を確認したのだろう。
その足音は強く、すでに並ばれてるような感覚だったのかも知れない。

蘭・ナギサコンビは、次の覚醒の時を迎えた。
待ちに待った、下の世代の本物の足音に押されて。
次世代を担う者として、その強い意志まで示して輝き始めた。

蘭の才能は、その場の雰囲気を支配する力である。
どんなに難しい場面でも、一瞬にして変える言葉の力だっただろう。
蘭は弟との苦い思い出の反省を踏まえて、夜の仕事に取り組んだ。
思春期の弟の気持ちを引き出せなかった、忘れ得ぬ後悔を背負って。
会話を勉強したいと、真摯に仕事に取り組んでいた。

その4年の集大成が、この言葉の力だったのだろう。
その雰囲気は温もりに溢れ、青い炎で包み込む。
美しいと言うより、まだ可愛さが勝っていて、キュートな魅力だった。
天然キャラを演出してる時の、小動物の笑顔が、一撃必殺の武器だった。

ナギサの才能は、夜の申し子と呼ばれたように、その圧倒的華やかさだった。
現実から一瞬にして非現実に誘う、外で金を出して酒を飲む価値。
その価値を提示した強烈な華やかさと、気さくな会話のギャップが人気だった。
美しさは申し分なく、年齢より上に見られがちで、それを武器にしていた。

その心の自由さが、どこか軽い女の印象も与えて、男達は挑戦した。
誰一人勝利者は現れなかったが、皆納得して敗戦を認めた。

ナギサは夜の申し子だっただろう、持って生まれた物が確かに有った。
私の出会った中で、夜の才能だけを言うなら、間違いなくベスト3に入る。

ユリさんやユリカや蘭は、夜の才能に優れていたかは疑問である。
確かに美しさは持っていた、しかしその美しさに付随する匂いが無かった。
もちろん経験で醸し出す雰囲気は身に付けていたが、持って生まれた物じゃ無かった。

銀河の3人もセリカも11人衆も同様で、匂いを持っていなかった。
マダムが私にある時言った、真希は存在自体の匂いが夜の女だったと。
歩く姿だけで、夜の怪しい匂いが溢れ出していたと言った。

ナギサこそがそれに近かっただろう、華やかな雰囲気を持って生まれた。

私は出会った時の、ナギサのあの疲れた華やかさを忘れられない。どんな苦境でも隠せない、体から溢れ出る、本質的な華やかさだった。

話を戻そう、１２月初旬のあの日まで。
週末まで、私は派遣の割り振りに忙しく、リリーの投入依頼もきていた。
リリーを魅宴に投入して、ミコトとリョウの笑顔を確認した。
ミサキは私にウルを出して、私は二ヤで応戦していた。

夜街を埋め尽くす人混みを掻き分け、金曜の夜を必死で５店巡回した。
アンナはリアンの店に投入していて、すでにチーママと呼ばれていた。
リアンが初めての年上の存在が楽しいのか、笑顔で炎を上げていた。

ミチルの店にはカレンが入り、オヤジ達の嬉しそうな二ヤ顔が、美少女を見ていた。
ホノカとカレンが並ぶと圧巻で、可愛い系好きには天国状態だった。

ゴールドで千鶴と話して、翌週にリリーの投入を決めた。
ケイコがフロアーサービス終了で、デビューが翌週の金曜だと聞いて。
源氏名を用意すると約束して、ユリカの店に向かった。

ユリカの店は完全満席状態だったが、その夜は私がネネをスナック経験させていた。
小夜子とネネの見事なコンビネーションを、カウンターの隅で、二ヤで見ていた。

ネネが不良ぽい会話で話を作り、そこに優等生の発言で小夜子が突っ込む。
そして小夜子が最後に、アネサン言葉で落とすと言う、ベタな漫才だった。
ネタもジャンルも豊富で、私も笑って見ていた。

嵐の金曜の夜が無事終了して、蘭と私は添い寝しながら爆睡した。
土曜の半日授業を受けて、誘っていた美由紀と秀美を連れて、お迎えのシオンの車に乗った。
秀美はシオンに笑顔で挨拶して、シオンもニコちゃんで返していた。

「楽しみだな～・・噂のＰＧ・・でも何よりも、久美子先輩」と秀美が美由紀に笑顔で言った。
「秀美・・久美子先輩知ってるの？」と美由紀が驚いて返した。
「もちろん・・ピアノをやってる私達世代で、知らない人はいないよ」と秀美も笑顔で返した。
「どこぞの、小僧みたいな存在ですね～」とシオンが前を見ながら、ニコちゃんで言った。

「シオン姉さん、それは違います・・豊君みたいな存在です～」と秀美が笑顔で返した。
「そうですか～・・納得です～」とシオンが隣の私にシオン二ヤを出した。
『シオン・・二ヤ顔上手になったね・・不敵はどう？』と二ヤで返した。
「不敵は諦めました～・・残念ですけど」とニコちゃんで返してきた、私は美しいシオンの横顔を見ていた。

４人で病院に行き、バラバラで３人に会いに行った。
沙紀は美由紀と秀美から、水彩絵の具の使い方を習っていた。

２人の話と、身振り手振りが理解できるようで、沙紀は嬉しそうだった。
沙紀が私を見て、棚のケースを指差した。
沙紀はこの頃、病院関係者を描いていて、私に差し出すのは久しぶりだった。
私は笑顔で受け取り、ケースを開けて絵を見て凍結した。

《そうなのか！・・提示なのか？》と心で叫んだ。
ユリカの強烈な波動が、何？何？と言ってるようだった。

沙紀の絵は、リリーの絵だった。
小さなフェリーの甲板に立つ、美しいリリーが見上げる姿が描かれていた。
少し暗い感じの水面に、船の先端から出来る波紋も緻密に描かれ。
夕暮れなのか、天気が悪いのか、全体的に少し暗い雰囲気だった。
しかしリリーは、希望に満ち溢れる瞳を向けていた。
美しく甲板に立ち、瞳の光のリングを輝かせて見上げていた。
手前の見上げてる方向に、銅像の頭の冠が描かれていた。
その尖った部分だけで、確信が出来た、自由の女神だった。
リリーは自由の女神に挑戦するように、その姿を瞳に焼き付けてるようだった。

《自由になったリリーの象徴なのか・・それとも将来の提示なのか、楽しみだね・・ユリカ》と心でささやいた。
ユリカの強い波動が、何度も来て同意を示した。

私達は４人で病院を出て、ＴＶルームに入った。
ＰＧのメンバーに、アンナとリリーとカレンも来ていて、待ち合わせをしたシズカも来ていた。

私は秀美を紹介して、秀美は笑顔で挨拶をした。
「それで・・珍しく私に頼みって、何だい？」とシズカが二ヤで言った。
私は秀美を連れて、シズカの前に座った。
『シズカ・・この義手を見てくれ、こんなお粗末な物しか存在しない。
こんなマネキンの腕なんかより、メタルの骨組みの方がまだましだよ。
秀美もそう思ってる、こんな物は当事者の気持ちを無視した物だと。
これは好奇の目で見られるだけで、それ以外の何も存在しない。
シズカ・・メタルの骨組みで製作してくれ。
現時点で動く物なんて無理は言わない、出来る限り軽く便利にして欲しい。
必要経費は俺が出す・・秀美の為じゃない、自分で挑戦出来ないから。
シズカにしか、挑戦出来ないから・・正式に依頼する。
シズカ、作ってくれ・・好奇な視線を、恐怖の視線に変える位の代物を。
秀美はサイボーグになる、車椅子とは違う・・もう１つの挑戦。
サイボーグ義手・・ＳＩＺＵＫＡ？を作って欲しい』
私は真顔でシズカを見ながら、一気に伝えた、秀美は頭を下げていた。
「ＯＫ・・やってみるよ、今・・美由紀の義足の設計をしてたから。
それで応用も出来る部分もあるし、やってみるよ」

シズカは秀美に笑顔で言って、義手を触っていた。
「ありがとうございます」と秀美が笑顔で頭を下げた。

「ねぇ、秀美・・最初の1号機は、掴むだけしか出来ないよ。
もちろん、脳で命令するんじゃないからね。
試作品と思ってね・・徐々に良くしていくから。
最後は必ず、脳の指令で動くものを作って見せるから。
だから・・秀美に条件を出す、絶対に腕の無い事で何事も諦めない。
それを約束して・・私はそれだけで良い、完成するまで感謝もいらない」

シズカは秀美の瞳を見ながら、強く言葉にした。
「約束します・・そして期待します、いつの日か・・自由な腕が持てると信じて」と秀美は瞳を潤ませて言った。
「OK・・了解した・・身長と各部位を測らせてね」とシズカが微笑んで、バッグからメジャーを出した。
美由紀にメモとペンを渡して、秀美を立たせて計測していた。

「メタルの骨組みですか・・さすがに考えましたね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「確かに、今のよりも良いですよね・・主張さえ感じますよね」とアンナが言って。

「中途半端に似せる行為が、当事者の心を卑屈にさせる。
絶対に本物じゃないと、常時確認させるだけの物になってしまう。
その連続する時間が、そう思わせてしまう・・好奇な目で見られてると。
私は今感動しました・・美由紀と秀美に会って。
彼女達は超えている、状況に負けない確かな強さを身に付けてい

る。
そして・・シズカちゃんの条件、本当に素敵だった。
生きているステージが違うね・・シズカという女性は。
さすがエースの姉・・最後の挑戦者、シズカなんだね」
リリーはシズカを見ながら、流れるように言葉にした。
若手女性は凍結していた、その言葉の強さと豊かさに。
「素晴らしいのは、リリーもだね。
状況を瞬時に理解し、自分の言葉に出来る。
辛い時期も肥やしにしたんだね、そして真摯に取り組んだ。
どんな時でも、どんな状況でも前向きに吸収してきた。
そうじゃないと言えない、今の言葉は出ないよ。
リリーも持ってるね、状況に負けない強さを。
私もナギサも・・本当に嬉しいよ、最強の１つ下に出会えて」
蘭が満開で言った、リリーは照れた笑顔で返した。
『リリー・・あんまり若手を驚かすなよ。
リリーの本質を見事に見抜いた、これが沙紀のプレゼントだよ。
自由という価値を、一番知る・・リリーだよ』
私は二ヤでケースを差し出した、リリーは驚きを隠さずに受け取った。
リリーは緊張しながら、絵を出して見た。
その瞳の変化に私は又も凍結した、リリーの瞳は別の意志を持ってるようだった。
《直結してるんだ・・リリーの心と瞳は直結してる、そう感じたよ》と心で囁いた。

「私もそう感じてたよ」とユリカが後ろから言った。
全員が笑顔で挨拶をして、シズカが秀美を紹介した。

「ねぇ、シズカ・・掴ませるって、その方法は？」とユリカが座りながら二ヤで聞いた。

「1号機はマグネットでやろうと思ってます、加工も楽だし。
小さくて済みますから・・重量負担が最初の壁ですね。
繋がってない物を足す訳ですから、軽量化が最初の勝負です。
関節の研究は、足でかなりやりましたから・・何とかなると思います。
今のこれ以上の物なら、作る自信はあります。
ただ・・2号機からの勝負は、果てしない感じですね。
だから私の理解者に、手を貸してもらいます・・義理の父に」

シズカが笑顔で言った、ユリカも爽やか笑顔で返した。
「誰なの？・・義理のお父さん？」とハルカが笑顔で聞いた。
「蘭父さんです・・私の大切な、物作りの理解者です」とシズカが笑顔で返した。
「いつにする？・・シズカ」と蘭が満開笑顔で言った。
「明日でも行きたいですね・・高校はもう、3年の受験対策で行く必要もないし」とシズカが笑顔で返した。

「よし・・明日迎えに行くよ、久々に日南海岸を走りたいし」と蘭が満開で返した。
「蘭姉さん・・私も同行します、行きがけ車を交換しませんか？」とネネが笑顔で言った。
「良いね～・・・GTR、乗ってみたかったよ」と満開で返した。
「ラッキー・・最高です」とネネが嬉しそうな笑顔で返した。

「じゃあ・・私もヨシムラのマフラー装着したから、様子見に走ろう」とマキが二ヤで言った。
「ねぇ・・マキ、私を後ろに乗せて・・バイクの爽快感が好きなのよ」とユリカが笑顔で言った。
「もちろん良いですけど・・寒いですよ」とマキが笑顔で返した。
「大丈夫だよ・・マキの背中で暖まるから」とユリカが爽やか二ヤで返して、マキがウルを出していた。

「よし・・私の車じゃ付いて行けないから、リョウのサバンナを出させよう」とカスミが二ヤで言って。
「それじゃあ・・行きたい人〜？」と蘭が手を上げた。
リリーもカレンも手を上げて、美由紀も秀美も手を上げた。

女性達が盛り上がる中で、リリーは絵を見ていた。

「提示だと感じる？・・・リリー」とユリカが笑顔で聞いた。
「不思議に・・そう感じています」とリリーが笑顔で返した。
「もうすぐ分かるかも知れないね・・出会うから、必ず出会うよ」とユリカが静かに言った。

その言葉が響いて、女性達も優しい笑顔でリリーを見ていた。

絵の中のリリーは、見上げ続けていた・・自由のシンボルを。

その瞳は強く輝いて、光のリングを映し出す。

心と直結してる・・心の自由を表す・・光のリングを・・・。

【冬物語？】

何故だろう？・・週末は空気が違う、期待と言う物質が混じっている。
その頃はまだ、週末とは土曜の夜の事だった。

土曜の夜で女性達の揃いが早く、ＴＶルームは大賑わいだった。
久美子が来て、秀美を見て笑顔を出した。
「久美子先輩・・お久しぶりです」と秀美が嬉しそうな笑顔で言った。
「秀美、元気そうだね、右手の練習はしてるんだね？」と久美子は笑顔で聞いた。
「はい・・やってます、右手一本で表現してみせます・・いつか必ず」と秀美が真顔で返した。
「楽しみに待ってるよ・・今夜は聴いて帰ってね」と久美子が微笑んだ。
「はい、その時間に迎えが来てくれます・・次のライブは小僧が招待してくれます」と秀美が笑顔で返した。
「秀美と美由紀の分は、私が招待するよ・・大切な妹だから」と久美子は微笑んで、バンドの練習に向かった。

「凄いな～・・久美子先輩・・確かに凄みが出てきたな～」と秀美が笑顔で言った。
「ピアノ経験者の間じゃ・・久美子は相当の有名人なんだね？」とネネが微笑んだ。

「伝説的有名人ですよ・・滅多にコンクールに出ないから。
コンクールの優勝者は、常に久美子先輩を意識してますね。
久美子先輩が中１で特別賞を受賞した、ジュニアコンクール。

今では伝説的な演奏ですね、他の出場者の曲の解釈と全く違ったんです。
他の生徒は、高名な先生に指導を受けていて、解釈も似ていました。
久美子先輩は、基礎だけしか先生の指導を受けていません。
だから自分で解釈したんです、その結論が・・楽しんで作ったでした。
有名な作曲家は、歴史的背景や育った環境まで取り上げられます。
その作曲家自身が書いたとされる文献も、本物かどうか定かでないですよね。
でもクラッシックって、どこか閉鎖的な部分があって。
解釈まで強制される事がが多いんです、そこに疑問に感じるんです。
久美子先輩はそれを無視して、自分の解釈で主張しました。
作曲家は・・作曲が好きだったんだから、楽しい気持ちで作ったんだって。
その曲のサビの部分で、強く主張しました。
その音の強さで、ホールを圧倒した・・私は小４で、震えながら聴きました。
そして心が救われた気分でした・・その当時の私は、忘れていました。
音楽が好きだという事と、ピアノを弾くのが楽しいという大切な事を。
毎日のレッスンで、要求される音が出せない苛立ちで、すっかり忘れていた。
好きと楽しを思い出せて、本当に嬉しかったんです。
そのコンクールで久美子先輩は、３位内にも入賞しなかった。
私達・・小学生の参加者は、その現実が嫌でした。
でも・・最後に東京から来ていた、高名な音楽家の先生が特別賞を授与しました。

そしてその先生が言いました・・久しぶりに音楽を楽しんだ、本当に嬉しかった。
そう言って、笑顔で久美子先輩にトロフィーを渡しました。
久美子先輩は笑顔で受け取って・・こうスピーチしました。
私は音楽が大好きです、音楽には何のルールも存在しないから。
五線譜に感情は記入されていないから、ただ愛してくれと書いてあるだけだから。
久美子先輩はそう言って、笑顔でトロフィーを高く掲げてステージを降りた。
私達小学生は嬉しくて、大きな拍手を贈りました。
私が左腕を失った時、久美子先輩は一度だけ会いに来てくれました。
そしてこう言ってくれました・・絶対に右手のレッスンを続けろと。
右手だけで表現してみせて、音楽には何のルールもないんだからと。
私は本当に嬉しかった・・私がここまで来れたのは。
美由紀の、たかだか片腕が無いだけと言って笑った言葉と。
由美子ちゃんの、必死で生きる姿と。
あの久美子先輩の中１の時の演奏の響きと、あのスピーチがあるからです。
五線譜には、ただ愛してくれと書いてあるだけだと言った。
大切な言葉が・・今でも心に響いてるからです」
秀美は笑顔でそう言った、美由紀は嬉しそうな笑顔で秀美を見ていた。
「本当に素敵だよ・・秀美も美由紀も、感動したよ」とネネが笑顔で言った、秀美は照れた笑顔で返した。

「久美子はそれで、小僧の白鳥の歌の解釈に感動したんだ。
尋常じゃない反応だったから、私は不思議に思った。
久美子も戦っていたんだね、たった一人で・・閉鎖的な環境と。
解釈は一人一人の心で決める、そう言っている小僧の言葉に共感したんだ。
あの白鳥の歌の話から、久美子の音色が変わった。
そして小僧に絶対的信頼を表し始めた、久美子は聴いて欲しいと感じたんだね。
小僧に自分の解釈はこうだと、伝える行為が今の段階まで連れて来た。
そしてミホと沙紀と由美子の存在に触れ、又も段階を上った。
今は心の自由を求め続けている、そんな感じになってきたよね」

マキがシズカに笑顔で言った、シズカも笑顔で頷いた。

「それに熱が加わったよ、誰かが点火するから。
そして煽り続けるから・・灼熱の女が」

シズカが二ヤで返した、マキも二ヤでシズカを見ていた。
「エースの白鳥の歌の解釈を、教えて？」とカレンが微笑んだ。
「エースが小3の遠足で、牧水記念館・・・」マキが説明をした。
「うん・・素敵だ～、私もあの白鳥の歌は好きです」とカレンが笑顔で言った。

「私も・・実家が日向で、牧水の故郷に近いから、
子供の頃から牧水に触れ合いました、学校に歌碑も沢山あって。
その中でも・・白鳥の歌は響きますよね、難しい言葉じゃないから。
言葉自体は難しくなく、しかし込められた想いは深く隠されてる。
子供でも知りたいと思わせる、そんな響きの歌ですよね。

空の青、海の青にも染まず漂う、ずっと心に残るフレーズです。
私もヤンチャしてた時期があったけど、捨てた事は無かったです。
辛い時、迷った時は・・必ず流れます、このフレーズが。
私は幸せな教育を受けたんだと、今感謝しました。
牧水が心に囁いてくれるから、染まっていないかと」

ネネが自分の言葉で、素直に表現した。
私は嬉しくて笑顔で3人を見ていた、リリーとネネとカレンを。
繋いだ道に現れた、3人の素敵な女性達を。

「本当にエースは、探してくるよね・・巡り会ってしまう。
そんな感じだよね、アンナ姉さんもカレンもネネも。
そしてリリーまで・・どっか強引に出会ってしまう。
そして一瞬で決断させる、それがマリの教えなんだね。
道を繋げ・・その言葉の深い意味を追い続ける。
その根幹は・・知りたいと想う心、その飽くなき探究心。
だからこそ巡り会ってしまう、本物と呼ばれる女性に」

ユリカが爽やか笑顔で言った、私は照れた笑顔で返した。
アンナとリリーとネネとカレンの、嬉しそうな笑顔を見ていた。

「なぜなんだろう?・・エースの関係者は、素直に言葉が出せるんだろう」とカスミが言った。
「確かに難しいですよね・・特に中学・高校の時は難しい時期なのに」とカレンが笑顔で言った。

「私は最近です・・つい最近気付かされました。
私は今の忘れられない言葉と同時に、忘れる事が出来ない言葉があります。
小僧が私に言った、出会って最初の言葉・・秀美は片腕を失って

不幸なのか？
確かに残念な出来事だよね、俺は両腕が有るから分からない。
秀美はトーナメントを戦っているの？・・一戦の敗北で決まるの？
俺は何度も何度も敗北した・・大切な心の一部を何度も失った。
でも自分に対しての敗北は認めない、何度でも挑戦する。
俺の体に動く部分が残ってる限り・・最後まで、言葉だけになっても。
秀美・・敗者復活戦を始めよう、今度はニュー秀美で。
秀美にしか出来ない事をしよう、美由紀のように想いを伝えよう。
その言葉が、仲間達の勇気に変わる・・俺は美由紀と秀美に嫉妬してる。
困難な設定で生きれる2人に・・その言葉の力を、俺は持つことが出来ないから。
小僧はそう言いました、当然同学年の私は、小僧の噂も知っていたし。
美由紀に小児病棟の事も聞いていました・・ヒトミちゃんの事も。
そして由美子ちゃんに出会った病室の帰りに、廊下で小僧に言われました。
私は突きつけられた、閉ざしていた心に直接迫られた。
小僧の言葉は強い怒りを連れている・・そう感じました。
私が内に篭る事は、両親を苦しめ続ける行為だと叱責されたと思った。
それからです・・私は自分の言葉で語ろうと思いました。
両親に素直に自分の悔しさも話して、最後に次の挑戦を始めると誓った。
両親の喜ぶ顔を見て、私はもう少しで一生後悔するとこだった。
そう思いました・・小僧の伝達の力、それは直接迫って来ます。
私は美由紀には心を開いていたけど、殻を破らなかった。
破る事はいつでも出来たのに、そうしなかった・・そこを狙われました。

あの頃の私なんかが狙われたら、一撃で破壊される・・伝説の男ですから。
私は負けれない・・自分に対して敗北を認めない。
だってあのいやらしい男が、ニヤニヤ顔で言うんです。
困難な設定で生きることに、嫉妬してるって言うから。
私は絶対に小僧よりも強い言葉を持ちたい、美由紀のように心の言葉を。
ずっと嫉妬させてやりたい・・私達、宮崎の同学年の女子の大切な伝説。
月影の星伝説の主人公に・・嫉妬させてやりたいんです」

秀美は最後に私に二ヤを出した、私はウルで返していた。
「出ましてね～・・いよいよ、月影の星が」とマキが二ヤでシズカに言った。
「秀美が封印解くのなら、文句は無いでしょう」とシズカが美由紀に二ヤを出した。
「振りました～・・パスが来たよ、どうしよう・・小僧」と美由紀がウルで言った。

「美由紀・・観念しな・・初めて」と蘭が満開二ヤで言った。
「ここからが楽しいんですよ、リリー姉さん」とネネが微笑んで。
「私、ワクワクしてま～す・・聞かなければいけない話が、無限に存在して」とリリーが笑顔で返した。
「月影の星伝説・・素敵な題名だね～」とユリカが爽やか二ヤで言って。
「それに同学年女子の大切な伝説って、誰かのイメージに無いね～」とカスミが不敵を出して。
「それでは、お願いしましょう」とユリさんが薔薇で促した。
「月影の星・・この物語の始まりは、小僧の創作紙芝居からです。

小僧は駄菓子屋で、自分の創作話を、紙芝居にして披露していました。
月影の星は、その中でも名作です・・特に女子に人気がありました。
話の内容は、月の裏に隠れてる星があって、それを月影の星と呼んでいる。
月影の星を見ることが出来れば、何でも願いが叶う。
1人に1つどんな願いでも叶うという、設定でした。
そして両親を戦争で失った少年が旅をします、月影の星が見たくて。
両親を生き返らせたくて、果てしない旅に出るんです。
その旅の途中で盲目の少女と出会い、一緒に旅をします。
旅の途中で困難な事や、楽しい事を経験して、2人は仲良くなっていきます。
そしてある高原で、少年は熱病に犯されます。
夜の高原で夜空を見ながら、ここまでだと少年が諦めていたら。
夜空の月が輝いて、星が姿を現すのです。
そして星に向かって、少年は願いを叫びます・・少女の目を治して欲しいと。
自分の病でも、両親の復活でもなく・・少女の瞳の復活を願った。
そして少女は目が見えるようなって、月影の星に願うのです。
私は愛する人と曾孫の顔まで見て、寿命が尽きるまで一緒にいたいと。
そう願うのです、そうすると少年は見る見る元気になりました。
そして2人は曾孫の顔まで確認して、幸せに死んでいきます。
これが、月影の星の物語です・・この話を大好きな少女がいました」
ここで美由紀は止まって、私の顔を見た。
『OK、美由紀・・俺は決めたよ、年明けの成人の日に・・由美子

を左手に誘う」と笑顔で言った。
「えっ！・・ちょっと待って美由紀・・その少女って？」と驚いて秀美が言った。
「そう・・その少女こそ・・ヒトミよ」と美由紀が秀美に返した。
「ごめんね、小僧・・そうとは知らなかった、あんたには辛い話なんだね」と秀美が私に言った。
『良いんだよ、秀美・・俺にも大切な思い出だから』と笑顔で返した。
女性達が2人の会話を聞いて、私を見ていた、私は無理に微笑んで返した。

「ヒトミは小僧にたった2つだけ、願いを言います。
左手に誘ってと願った・・無の半年より、意志を示す半月と。
そして・・自分が死んだら、月光の海に連れて行ってと願うんです。
ヒトミは医療機器が外せなかったから、外に出るのは不可能でした。
小僧は約束します、小僧にとってヒトミの願いは絶対でしたから。
小僧は年が明けた、13日にこの話を、ヒトミの両親と関口先生にします。
忘れもしない・・寒い冬の日でした、ヒトミは体調が悪かった。
両親も関口先生も・・こっそり連れ出してくれと、小僧に言いました。
そしてヒトミが亡くなった15日の夜、私は父に連れられ病院に行きました。
小僧はリヤカーに、暖かい毛布を沢山積んで来ました。
そして私を乗せて、ヒトミを抱いてきた。
病院関係者は、全員見て見ぬ振りをしてました・・涙を流しながら。
そして小僧は私にヒトミを抱かせた、ヒトミは体温は確かに無か

ったけど。
可愛い寝顔のような、今にも起き出しそうな感じでした。
そして哲夫が走ってきて、小僧と一緒にリヤカーを引いた。
桟橋で小僧が私を先に乗せて、ヒトミを連れてきた。
哲夫にヒトミとの別れをさせて、海に出ました。
静かな寒い冬の海でした、快晴で星空が凄かった。
そして月が浮いていました、月光に照らされた海面の道が、遥かに続いていた。
小僧は沖に船を止めて、ヒトミを抱きました。
そして月を3人で見ました・・ヒトミが喜んでるね、私がそう言うと。
そうだね、月影の星の話・・ヒトミが好きになってくれて、嬉しかったよ。
なぜあの話をヒトミが好きなのか、美由紀は分かる？
そう小僧が言いました、ヒトミの顔を見ながら、私を見て笑顔で言った。
互いの願いが、相手を想っての願いだから・・私は感じたままを言った。
うん、そうだよ・・そして少女の願いが、寿命が尽きるまでって願いだったから。
ヒトミはそこが好きだと言ったんだ・・そして自分も寿命だと言ったんだ。
短いけど・・それが自分の時間で、不幸な事じゃないと言ったんだよ。
残される俺の事を心配してね・・ヒトミは凄い子だよ、ありがとうヒトミ。
小僧はそう言って、ヒトミを抱きしめていました。
私は必死に涙をこらえた、泣く訳にいかなかった。
小僧が泣かないのに、私が泣く訳にいかなった。
その時です・・水面に現れたんです、一頭のイルカが。

そして船の周りを泳いだ、私達はイルカを見てました。
イルカはまるでヒトミを迎えに来たように、ゆっくりと泳いでいました。
そして一度高くジャンプして、沖に戻って行きました。
それだけで、私達は元気が出ていましたね・・例えようも無い嬉しさで。
その時でした・・流星が尾を引いて流れたんです。
小僧が夜空に叫びました、流星に向かって。
もう一度、ヒトミと同じ病の子供に出会わせてくれと・・そう叫びました。
私はそれで限界で、1人で泣いていました。
小僧がヒトミを抱いて私の横に座って、そしてヒトミの顔を私に見せた。
ヒトミ見てよ、美由紀はまだまだだね・・泣き虫だね～。
だから俺が、美由紀の側にいるよ・・美由紀がヒトミの伝言を忘れないように。
そう言って小僧が私に笑顔を向けた、私はヒトミの顔を見ていた。
笑ったと感じました、確かにその時ヒトミは笑った。
月光が照らす海面に、ヒトミの笑顔が映っていました。
この話が変な噂になりかけて、でも小僧は精神的に疲れ果てていて。
脚色する余力が無かった・・だから私が素敵な話に脚色したんです。
小僧は愛する盲目の少女と、月影の星を追いかけて・・その星を見つけたと。
そして少女の願いを叶えた・・その少女の願いは。
いつまでも小僧がその少女を忘れない事だと、愛し続ける事だったと。
そう脚色しました・・真実はここだけの話にして下さい。
私は嬉しかった・・小僧と由美子との出会いが。

そしてあの海に、皆さんを連れて行けるようになった小僧の変化が。
私には嬉しかったんです、小僧は月影の星を追いかけている。
それを発見した時に、何を願うのか・・それが楽しみです。
私はマチルダ姉さんに出会った時に感じました、小僧の存在の意味を。
小僧がマチルダ姉さんに贈った称号・・月下の雫・月のマチルダ。
どれほどの愛情が込められてるのか、私には分かります。
そして蘭姉さんに誓った言葉・・月光を追いかけるという約束。
小僧にとって、これ以上の誓いの言葉は存在しません。
小僧は絶対に諦めない・・なぜならば、勝利を望まないから。
あの流星に願った叫び・・それはヒトミに誓った叫びだから。
何度でも挑戦すると誓ったから・・永遠のヒトミに」

美由紀は優しい笑顔で話した、静寂の空間で秀美が泣いていた。
私の膝にエミが座って、私に抱きついた、私はエミを優しく抱いていた。
「ありがとう、エース・・私を夜の海に連れて行ってくれて」とエミが私の顔を見上げて言った。
『お礼はいらないよ、エミ・・エミが喜んでくれて、嬉しかったよ』と笑顔で返した。

「そっか～・・真実はそうだったの、シズカは知ってたの？」とマキがシズカに聞いた。

「知らなかった・・でもね、あの親父が泣いてたんだ、１５日の夜。
前日、小僧が金を貸してって頼んでた、親父に頭を下げてね。
理由を話して、借りてたんだよ・・船のリース代金だったんだね。
そして１６日の通夜の時も、小僧は海に出たんだね。
美由紀だけが知っている、素敵な話だったよ・・私も嬉しかった。

小僧が由美子に出会えた事と、その変化が・・あの大切な海。
そして大切な誓いの言葉、月光を追いかける。
その表現が出来るようになった事が、嬉しかったよ」

シズカが私に笑顔で言った、私も笑顔で返した。
「ありがとう、美由紀・・私も本当に嬉しかった」と蘭が満開で微笑んだ。
「美由紀・・ありがとう、話してくれて」と秀美が泣きながら言って。
「私も嫉妬した・・美由紀と秀美の言葉の力に」とリリーが潤むリングで微笑んだ。

「嬉しいです～・・秀美、あのリリーさんが嫉妬したってよ」と美由紀が秀美に二ヤで言った。
「ちなみに・・リリーさんの称号は？」と秀美が笑顔で聞いた。
「ど忘れした・・何だったっけ、エース」とリリーが二ヤで言った。

『魔女の悪戯、リリー』と二ヤで返した。
「ありがとう、素敵～・・私好きなのよ～、そんな雰囲気」とリリーが嬉しそうに言った。
「魔女の悪戯か～・・聞くだけで会いたくなるよな～」とカスミが言った。
「永遠の憧れが言わないの・・私なんか、一生貰えないんだから」と蘭が満開二ヤで言った。
「蘭姉さんは、あります～・・ダダが」とシオンが二ヤで言った。
「成長が早すぎます～・・白い弾丸、シオンが～」と蘭がシオンを真似て、ウルで言った。
女性達が笑って、リリーがダダの理由を聞いていた。
マキが話して、アンナとリリーが爆笑していた、蘭は満開ウルを継続していた。

「次が有るのかな?・・・イメージに潜入する」とリリーがニヤで聞いた。
『俺と関わる限り、その可能性は常に有るよ』とニヤで返した。
「毎日が本当に楽しくなってきた、ユリ姉さんの言葉の意味が分かったわ」とアンナが笑顔で言って、女性達が準備に行った。

マキが美由紀と秀美を連れて、フロアーに向かった。
私は5人娘と食事をしていた、安奈が可愛い笑顔で私の隣に座り、私はマリアを抱いていた。
「エース・・月影の星ってあるの?」と安奈が私に聞いた。

『安奈・・有るんだよ、安奈はサンタさんがいるって知ってるよね』と優しく聞いた。
安奈もミサもレイカもマリアも、可愛く頷いた、エミがためらいがちに頷いた。

『それと同じなんだよ・・自分の心で信じる限り有るんだよ。
大人になって、サンタさんが来なくなるのは・・信じなくなるからなんだ。
いると信じていれば、必ず出会える・・俺はそう思ってるよ。
考えないで良いんだよ・・いるのかな~とか、あるのかな~とかね。
誰がどんな事を言っても、それはその人が考えた事なんだ。
考えて出した話を、自分の中に入れなくて良いんだよ。
自分が信じている事は、自分だけで持ってれば良いんだよ。
正しいとか、間違ってるとか関係ないんだ・・誰にも迷惑をかけないんだから。
ただ自分が信じている、それだけで良いんだよ。
信じる限り出会える・・それが一番大切な事だと思うよ』

私は5人の瞳を見回して、笑顔で言った。
「すご～く分かった、ありがと・・エース」と安奈が笑って、４人が笑った。
私も笑顔を残して、フロアーに向かった。
指定席に到着する前から、久美子の強い響きが聞こえてきた。

《まだ7時１５分だよ、飛ばしてるな～久美子》と心で囁いた。
強い波動に押されながら、私は指定席に座った。
久美子の近くに、秀美と美由紀の背中が見えた。
秀美は間近で聞く、久美子の魂の叫びで、少し震えてるようだった。

女性達も続々と入場して、カレンが純白のドレスで、私の隣に座った。
『今夜は特に強いね・・美少女光線』と二ヤで言った。
「魅宴なら強く出さないと・・リョウ姉さんが怖いから」と笑顔で返してきた。
『ホノカとカレンのコンビ、強烈だったよ』と笑顔で返して、立ち上がった。
カレンと手を繋いで、秀美と美由紀に手を振って通りに出た。

あまりの人の多さに、カレンと顔を見合わせた。
その瞬間、カレンが最強美少女二ヤを発動して、私の首に腕を巻いた。
『挑戦的過ぎるぞ・・カレン』と抱き上げて笑顔で言った。
「伝説を頂戴ね・・いつか称号も勝ち取るから」とカレンが微笑んだ。
私は二ヤで返して、人混みを掻き分けながら歩いた。
沢山の視線と、呼び込みさん達の冷かしの言葉を楽しみながら、通

りを歩いた。
狭い通りの雑居ビルの隙間から、夜空が見えた。
その果てに月が静かに浮いていた、私は立ち止まりカレンと月を見ていた。

「月影の星に・・私は何をお願いしよう・・何も言えない気がするよ」とカレンが静かに言った。
『俺もだよ・・多分、何も言わない・・ただ感謝するだけ、生まれた事に』と笑顔で返した。

「うん・・さぁ行こう、熱い冬物語のシナリオを書きに。
いつの日か・・笑顔で思い出話が出来るように」

カレンの言葉が雑踏の中、夜空に響いた。

最強の女性達が揃い、冬物語は進行して行く。

月だけが知っている、その真実を・・その心を。

そして空の上にいた、《ど～ん》と心で言って、二ヤを出していた。

楽園ブルーが日本に舵を切った、次の難問を提示する為に。

楽しく新年を祝う為に、ブルーが笑っていた・・月光に照らされて。

【冬物語？】

師走の週末、好景気が強力な後押しをしていた。
私は人混みの視線を楽しみながら、美少女を抱いて歩いていた。

魅宴の裏階段を上がり、カレンを降ろしてフロアーに入った。
カレンは魅宴にも慣れたようで、笑顔で女性達の中に入って行った。
私はカレンに笑顔を送り、魅宴を出てユリカの店に向かった。

ユリカはエレベーターで降りてきた、私はユリカを抱き上げて階段を上った。
最上階まで上り、ウヨウヨと動く多くの人を見ていた。
ユリカは静かに瞳を閉じていた、精神的な安定を感じていた。

『そうそう・・ユリカは正月何するの？』と瞳を開けたユリカに微笑んだ。
「別に予定無いよ」と爽やか笑顔で返したきた。
ユリカは両親が４０過ぎて産まれた子供で、既に両親とも亡くしていた。

『それじゃあ・・律子が招待してるから、我が家においでよ。
予定が無い女性達を、全員招待するように言われてるから。
ユリカが来ると、親父も蘭もシズカも喜ぶから』

私は笑顔で言った、ユリカも爽やか笑顔で私を見ていた。
「ありがとう、必ず行くよ・・楽しみだ～」とユリカが微笑んだ。
『賑やかなのが好きなんだよ・・律子は特に』と笑顔で返した。
「素敵だよね、母さん・・お年玉はシズカと久美子と美由紀と哲夫だけで良いのかな？」とユリカが二ヤで言った。

『それと、まだ誘ってないけど・・沙紀を招待しようと思ってる』とウルで言った。
「素敵じゃない・・来てくれると嬉しいね～」とユリカが楽しそうな笑顔で言った。

その時エレベーターの扉が開き、ドン小林が降りてきた。
ユリカを抱く私を見て、笑顔で右手を上げた、私も笑顔で返してユリカを降ろした。

「小林さん・・ご無沙汰しております」とユリカが丁寧に頭を下げた。
「いつまでも若いね～・・ユリカちゃん」とドンは嬉しそうに微笑んだ。
『ドン・・顔色良いね、１２月は忙しいでしょ？』と私も笑顔でドンに言った。
「隠居じゃから・・暇じゃよ、少し話があるんだが・・ユリカちゃんの店で」とドンが笑顔で言った。
『良いですよ・・入りましょう』と笑顔で言って、ユリカが嬉しそうにドンを案内した。

ユリカの店は開店少し前で、女性達がドンを見て、緊張した笑顔で招いた。
１番奥のＢＯＸに招かれ、ドンは最高級ウイスキーをキープで入れた。
私はドンの向かいに座り、乾杯をして雑談をしていた。
「小林さん・・私、外しましょうか？」とユリカが笑顔で言った。
「いやいや、良いんだよ・・出来ればユリカちゃんの意見も聞きたいから」とドンが笑顔で返して、座り直した。
「エース・・実はね、リリーがいたあのクラブのオーナー。

轟と言うんだが・・彼から相談が有ったんだ。
轟もエースに奴隷契約と言われたのが、よほど堪えたみたいでね。
それにリリーという大きな存在が抜けて、店も厳しい状態らしい。
女性達の心がバラバラな感じなんだろうね、轟は男を育ててなかった。
そう悔やんでいたよ・・かなり反省もしているようなんだ。
それで私の所に相談に来た、エースともう一度話がしたいとね。
君の派遣を入れたいらしい、もちろん純粋にビジネスとしてね。
当然、共同体より自給を多く出す、それに何人でも受け入れると言ってる。
どうだろうエース・・話して見る気はあるかい。
もちろん、ワシから無理になんて言わんよ。
ワシは今回のエースの判断を評価してるしね・・ただ、分かって欲しい。
轟は性根の腐った奴じゃ無い・・どうだろうね、エース」

ドンは真剣に言った、私は嬉しかった、中学生の私を認めてくれる事が。

『ドン・・ありがとう、わざわざ来てくれて。
嬉しい話です・・俺もリリーに聞いていて、轟さんに蟠りは無いですよ。
リリーは確かに拘束されてました、でもその時に誰からも体を迫られてない。
きちんと守られてたと言っています、だからある意味感謝をしてますね。
轟さんの肩代わりが無かったら、リリーは別の苦労をしたでしょう。
私もそれは分かります、だからリリーも恨んではいません。
お話聞きたいですね、あの老舗高級クラブなら、こちらからお願

いしたい。
女性達も良い経験になるし・・今は派遣に、経験豊富な人材が２人います。
一人は北斗・・もう一人はドンの店にいた、〇〇です。
リリーも望まれれば、行くような気がします。
それに平日ならば、俺は蘭やナギサを出して良いですよ。
勉強になるだろうし、バラバラな女性の気持ちも、少しは緩和するでしょう。
お話聞きます・・俺の方から尋ねても良いですよ』

私は笑顔でドンに言った、ドンも笑顔になった。
「小林さん・・話が決まれば、私も行っても良いですよ」とユリカが爽やか笑顔で言った。
ドンも私も驚いて、ユリカを見た。
「それを聞いたら、轟君は泣くよ・・五天女の、それもユリカちゃんなんて」とドンが笑顔で言った。
「最高級クラブの経験なんて、滅多にできる事じゃないですから」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「そう言ってくれると嬉しいよ・・それに〇〇と北斗もいるんだね、素晴らしいメンバーを揃えたね」とドンが笑顔で言った。

『〇〇さんは、現在アンナという源氏名でやっています・・素敵ですよね、さすがドンの店にいただけあります』と笑顔で言った。
「良い子だよ・・仕事もだが、なんせ面倒見が良いから・・女性達からも信頼されてたよ」とドンが嬉しそうな笑顔で言って。
「ならば・・今からワシが轟君の所に行って、ＰＧに連れて行くよ・・よろしくたのむ」とドンが笑顔で言って、私も笑顔で頭を下げた。

ドンが支払い、ユリカに見送られ通りに出た。
私はドンとビルの前で別れ、指定席に戻って状況を確認した。

3番だけ空いていたので、リンさんに3番キープと伝えて、指定席に座った。
ドンと轟の爺さんはすぐにやってきた、徳野さんが出迎えて丁寧に挨拶した。

「徳野君・・色々迷惑かけた、すまんかったね」と轟爺が頭を下げた。
「とんでもない、頭を上げて下さい」と徳野さんが慌てて言って、私を見た。
【3番】と笑顔でサインを送った、徳野さんは頷いてカズ君に案内させた。

『ユリさんを振れるなら、お願いします・・無理なら蘭で』とリンさんに笑顔で言って、3番に向かった。
女性達はドンの来店に緊張していた、私はニヤで歩いた。

『轟さん・・この前は言い過ぎました、反省しました・・すいませんでした』と真顔で謝って頭を下げた。
私はビジネスモードに入っていた、派遣の相手としては申し分ない相手だった。
そして私は恩を売っておきたいと思っていた、だから丁寧に謝ったのだ。

「いやいや・・私の方が完全に悪かったよ、奴隷契約だった。
本当に反省したよ・・すまなかったね」

轟の爺さんも立って、深々と頭を下げて右手を出した、私は笑顔で右手を握った。
私は轟爺を座るように促して、隣に座った、その時ユリさんが薔薇の笑顔で挨拶した。

「ユリ・・益々女としての磨きがかかってるな、驚きだぞ」とドンが笑顔で言って。
「素晴らしいな・・一人で良いから、ユリレベルを育ててみたかった」と轟爺も笑顔で言った。
「ありがとうございます・・お2人に言われると、嬉しいですわ」と薔薇の微笑で返した。
『轟さん・・ごめんね、リリーなら成り得たのにね』とウルで言った。
ウルを出す事で、私の雰囲気をユリさんに伝えたかったのだ。
「そうだったが・・俺の店では、あんな素敵なリリーは見れなかったよ」と笑顔で接客しているリリーを見ながら笑顔で言って。
「ユリも聞いててくれ、今から小僧と和解して、仕事を依頼するから」と轟爺が笑顔で言った。
「それは素敵ですわ・・楽しみですね」とユリさんが薔薇で返した。
『轟さん・・もう和解してますよ、ビジネスだけで良いですよ』と私は笑顔で言った。
「エース、ありがとう・・君に会って、今、徳野君に会って確信したよ。
私は男を育ててなかった、ワンマン経営の弊害だよ。
私は小林さんほどの器が無いのに、右腕になるべき人材を育ててなかった。
リリーの件以来、私の店も女性達が浮き足立っている。
核になるべき人材がいないんだよ、それに成り得る候補者はいるがね。
もう一歩踏み出せない、それに店に対する不信感も・・今は当然有る。

全ては私の責任なんだ・・だが私も彼女達の生活を背負ってる。
このままという訳にはいかないんだよ、無責任に店をたためんのだ。
そこで考えた・・そして方法は１つしか無いと思ったんだ。
今・・この素晴らしいＰＧに来て、その考えが間違ってないと確信したよ。
エース・・派遣して欲しい、エースの派遣なら無条件で受け入れる。
その事が、女性達の心を変えると感じてる、お願いだよ・・受けて欲しい。
もちろん、共同体より・・自給で５００円上乗せする。
純粋なビジネスとして、受けて欲しいんだ・・どうだろう？」

轟の爺さんは真剣だった、そして紳士だと思っていた。
確かにリリーを拘束していたが、その気持ちも分からない事では無かった。
それほどまでにリリーは別世界にいた、どんな事をしてでも欲しいと思えるほど。

『ありがとうございます・・嬉しい話です。
ご存知の通り、派遣会社はまだ存在しません。
ですから・・私は会社が出来るまで、共同体だけと考えていました。
社長のジンもそういう考えです・・しかし特例としてでも、お受けしたい。
クラブ幻海・・宮崎の最高峰、そして最高級店ですよね。
私もあんな状況の経験でしたが、素晴らしいと感じていました。
最高額の金を取る仕事を、見ただけで感じました。
だからこそ、こちらとしても経験させたい、その最高級の本質を。
絶対に良い経験になると思っています・・ですからお受けします。

まずは幻海の女性達の心を１つに戻しましょう・・最初の派遣は。
ユリカを出しましょう・・本人も了承してますし。
もちろんユリカは派遣社員でないですが、一人目としてはベストでしょう。
ユリカの価値は、轟さんの報酬で示して下さい。
その後、続々とベテランを投入します・・ただ１２月の週末は厳しい状況です。
来週の月曜から初めて、週末には幻海の女性達を１つにしましょう。
私も轟さんへのお詫びも込めて、蘭・ナギサも出します・・必ず良い影響が出ます。
それでどうでしょう？・・私はいけると思っていますが』

私は驚く轟の爺さんの顔を見ながら、笑顔で言った。

「本気で言ってるんだね・・１番バッターがユリカ姫で。
蘭とナギサまで出してくれると・・本気なんだね」

轟の爺さんは信じられないと言った顔で、私に確認した。
強い波動が【了解】と言っていて、ワクワクな感じだった。

「轟さん・・彼はＰＧのエースです、本気ですわ。
私でお力になれるなら・・私も行きますよ」

ユリさんが薔薇で微笑んだ、ドンと轟の爺さんが、驚いてユリさんを見た。
「ユリ・・やってくれるのか、本当なのか？」と轟の爺さんが強く言った。

「もちろん、ユリカ・蘭・ナギサ・私で・・何かのお役に立てるな

ら。
私もリリーと話しました、リリーは言っていましたよ。
轟さんに感謝をしてると、拘束されて辛い事もあったけれど。
それが無ければ、別の苦しみが残っていたと・・そう言っていました。
轟さん・・リリーをありがとうございます。
どんな経緯であれ、よくぞ宮崎に連れて来て下さった。
あなたの女性を見る目・・本当に感服しました。
もちろん私は、今回のリリーの件は、エースを支持します。
しかし今のエースを見て、その反省も感じました。
エースが幻海の女性達に、何らかの影響を与えたのなら。
当然、私が参ります・・それがこの世界の筋だと思っています。
私もユリカも蘭もナギサも・・そう思っていますから」

ユリさんは美しい真顔で強く言った、轟の爺さんは少し震えていた。
「本当にありがとう・・最高のメンバーを提示してくれて」と轟の爺さんは静かに言った、ユリさんは薔薇で微笑んだ。

『それでは、月曜にユリカ、火曜にユリ、水曜が蘭、木曜がナギサで決めます。
蘭とナギサは当然自給設定がありますので、ジンに報告させます。
ユリさんとユリカの分は、轟さんにお任せします。
そして翌週は、北斗とアンナというベテランを送ります。
その2人で、必ず女性達の精神的安定に繋がると信じています、
その後に若手に経験させて下さい、エース級を送り込みます。
最高級とは何かを・・高額な金を取るプロの仕事とは、どんな物かを。
経験させてやって下さい・・私も一度梶谷さんと見に行きますから。
轟オーナー・・よろしくお願いします』

私は真顔でそう言って頭を下げた、強い波動が了承を示していた。
「本当にありがとう、エース・・末永く頼むよ」と轟の爺さんが言った。
『こちらこそ、よろしくお願いします』と笑顔で返して、マキにサインを送った。

【3番】【指名】【リリー】と送った、ユリさんは私に薔薇で微笑んだ。
リリーが私の横に立って、轟の爺さんを見て嬉しそうな笑顔になった。

『轟さん・・紹介します、派遣のエース・・リリーです』と私は笑顔で言って、席を立った。
「ご無沙汰しています・・轟様のお力添えで、ここまで来る事が出来ました・・ありがとうございます」とリリーは美しい真顔で深々と頭を下げた。
「嬉しいよ、リリー・・本当に美しくなったね・・俺の目に狂いは無かったよ」と轟の爺さんが笑顔で言って、涙を見せた。
私はその顔が嬉しくて、笑顔で頭を下げて指定席に歩いた、優しい波動に守られながら。

私はそのまま指定席で見ていた、リリーは嬉しそうに話していた。
そしてユリさんが、アンナとチェンジした、アンナはドンを見て本当に嬉しそうだった。
ドンも嬉しそうな笑顔で、アンナを招きいれ、笑顔で話していた。

私は嬉しかった、夜街の素敵な物語のような光景が。
女性達にも何かが伝わったのか、熱は加速しながら上がっていた。
私はドンにカレンを見せたかったと思っていた、ドンの愛したカレ

ンの今を。
私は笑顔で立って、ＴＶルームに向かった。
５人娘は可愛い寝顔で眠っていた、私は全員のチェックをした。
そしてニヤニヤで待ち構える、マダムと松さんの前に座った、久美子もニヤを出していた。

『マダム、松さん・・少し忙しくなります。
轟さんの店の派遣を受けました・・もちろんクラブ幻海です。
リリーの件以降、女性達が浮き足立ってるみたいで。
良い条件も提示して貰ったし、女性達も良い経験になると思って。
ユリさんもその場で了承してくれました、マダムと松さんの力も貸して下さい。
なんせ宮崎有数の最高級クラブですから、ハードルは高いと感じています。
ですから、浮き足立った女性達を落ち着かせる為に、ベストメンバーで始めます。
来週の月曜がユリカ、火曜がユリ、水曜が蘭、木曜がナギサ。
週末は厳しいですから、この４人で幻海の女性達を落ち着かせて。
翌週に北斗とアンナを投入して、安定感を作りたい。
そして銀河とセリカとカレンを投入していきます、リリーも行くと思います。
そしてシオンの他店経験第一弾も、幻海でやってみたい。
ネネと小夜子も経験させて・・最後はＰＧの若手全員を一度は送り込みます。
経験して欲しい、高額な金を取るプロの仕事を。
その緊張感の中で何を感じるのか・・そこに期待します。
お忙しいとは思いますが、よろしくお願いします』
私は真顔で言って、２人に頭を下げた。

「エース・・嘘偽りは無かったの、底辺のレベルを押し上げる。
そう強く言ったお前の言葉、ユリは本当に喜んじょったよ。
クラブ幻海・・間違いなく、夜街関係者全員が認める最高峰じゃよ。
よかろう、私もフォローは出来るだけするよ。
若手の時は、松を付き人で付ける・・松の厳しさを感じるだろう。
松・・できるな・・今でも、ユリを育てた時のように」
マダムは最後に松さんに二ヤで言った。
「やりましょう・・銀河の奇跡から、もう一段上がってもらいましょう」と松さんも二ヤで返した。
『ありがとうございます・・本当に助かります。
そして久美子、来週の蘭とナギサの2日間・・水曜・木曜。
幻海でピアノを弾いて、グランドピアノがあるから・・19時から開店前まで。
女性達の集中を促して、当然・・派遣会社から自給を出す。
プロとして、チャレンジして欲しい』
私は2人に頭を下げて、真剣に久美子に言った。
「了解・・私にも経験させてくれるんだね、最高峰の雰囲気を」と久美子が微笑んだ。
『そう言う事だよ・・ユリカとユリさんで、絶対に纏まってる。
そして同世代のトップランナー、蘭とナギサに触れて気持ちも上がる。
そのタイミングを狙う・・久美子の音で、心を打ち抜く。
前向きにチャレンジする気持ちになる・・久美子なら、出来ると

信じてる』

私は二ヤで言った、久美子は笑顔で聞いていた。

「次に上がれって事ね・・了解、必ずやってみせるよ」と久美子も二ヤで返してきた。

「マダム・・私より厳しい男が、この店にはいますね～」と松さんが二ヤで言った。

「特権じゃよ・・煽り続けて限界がきても、最後は自分で抱き上げる。

その後ろ盾を持たせてる、エースの特権じゃよ。

敏感度ＭＡＸで頼むぞ、エース」

マダムが笑顔で言った。

『了解です・・そうそう、マダムも松さんも、正月律子が招待すると言ってました。

ツネの婆さんも来ますから、２人が来ると喜びますよ。

当然、マキも・・そしてユリカとレンとカレンと久美子は決定済です。

後は実家に帰らない、予定の無いメンバーを全員集めます。

楽しく正月を祝いませんか？・・参加をお待ちしてますよ、勝也も律子も』

私は笑顔で言った、３人の笑顔を見ながら。

「嬉しいね～・・もちろんご招待受けますよ」とマダムが笑顔で言って。

「ありがとう・・私も伺います、ツネさんにも会えるなら・・良い正月だよ」と松さんも嬉しそうに言った。

『久美子・・良かったね、お年玉増えそうだね』と二ヤで久美子に言った。
「うん・・でもエースは除外なんでしょ、もう社会人みたいなもんだから・・くれる方よね」と久美子が二ヤで言った。
『もちろん、ユリカにもそう言われた・・俺は13歳にして、限界ファイブにお年玉を配ってやる』と二ヤで言った。
「エース・・限界ファイブ、それだけで・・その言葉だけで、嬉しいよ」と久美子が嬉しそうに笑った。

『カルテットが、全員一致で承認したよ・・提案したのは、美由紀と秀美だよ・・良かったね、久美子』と笑顔で言った。
久美子が潤む笑顔で頷くのを見て、私はＴＶルームを出た。

そのまま通りに出て、魅宴に向かった。
フロアー裏に入ると、満席状態で熱が高かった。

「共同体・・成功だったね、エース」と大ママが横に来て笑顔で言った。
『大ママ・・派遣の設定を変えるよ、次の段階に行くよ』と二ヤで言った。
「もったいぶるなよ・・早く話して」と大ママも二ヤで返してきた。

『今日・・轟さんと和解した、そして仕事を受けた。
クラブ幻海・・リリーの件で、女性が浮き足立ってるらしい。
それで派遣を投入してくれと、轟さん自身から正式に依頼された。
俺も派遣の今後の為にも、何より女性達の経験として。
最高級クラブの経験できる、このチャンスを大事にしたい。
だから来週ベストメンバーを投入する、幻海の女性達を１つにする為に。
月曜から、ユリカ・ユリ・蘭・ナギサの順で投入するよ。

そして翌週に北斗とアンナで安定感を作り、それから若手を経験させる。
もちろん魅宴の女性で、経験したい人は全員挑戦してもらうよ。
高額な金を取るプロの仕事、その時の緊張感・・それで感じる事。
そこに期待する・・だから派遣の設定を変える。
轟さんの条件提示は、共同体の自給にプラス５００円。
良い条件でしょ・・ご検討願います・・大ママ』

私は驚く大ママの表情を楽しんで、笑顔で言った。

「良い経験・・そんな物じゃないよ、クラブ幻海なら。
またもや段階が上がるね、お前は本気だね。
底辺の底上げ・・やりきるつもりだね」

大ママが笑顔で言った、私も笑顔で頷いた。

『その為に・・ＰＧは最終兵器を出す。
若手の時は、松さんが同行する・・そして厳しく指導するよ』

私は止めの二ヤを出した、大ママは驚きの表情を隠さなかった。
「それだけで充分だよ・・あの松姉さんの、指導が受けられるのなら」と大ママが笑顔で言った。

『それと、大ママ・・律子が正月暇なら、我が家に招待するって。
ツネの婆さんも来るから、飛鳥が来ると喜ぶと言ってたよ』

私は笑顔で言った。
「必ず行くよ・・嬉しいよ、ツネさん、勝也さん、律子姉さんと正月を祝えるんだね」と大ママが嬉しそうに言った。
『うん・・暇な女性達も全員来るから楽しいよ・・もちろんヨーコ

も来るし』と笑顔で言った、大ママは笑顔で頷いた。
カレンが上がってきて、私は大ママに挨拶して、カレンと腕を組んで帰った。
ドレス姿のカレンに、通りの視線が集まっていた。
ＰＧに戻ると、終演したばかりだった、私はカレンを１０番に座らせた。
「楽しみだね～・・大御所２人の来店・・話を聞きましょう」と蘭が満開二ヤで言った。
女性達の期待の笑顔が溢れていた、私はリリーの笑顔を見て、二ヤで返した。

『今夜・・クラブ幻海、轟オーナーから依頼があった。
リリーの件・・俺は何の蟠りも無く和解した。
幻海の女性達が、リリーの件で動揺して、浮き足立ってるらしい。
そこで轟オーナーから、派遣投入の正式なオファーがあった。
俺は派遣の設定を変えてでも、そのオファーを受ける。
それは・・最高級店を経験できる、チャンスだからだ。
最高額の金を取るプロの仕事、その緊張感を経験して欲しい。
だから、幻海の女性達の気持ちを、元の状態戻す事から始める。
来週から投入する、女性達の気持ちを落ち着かせ、再点火する。
月曜・ユリカ、火曜・ユリ、水曜・蘭、木曜・ナギサで行く。
そして翌週、北斗とアンナで安定感を出す。
それをやって、来年から・・若手に挑んでもらう。
ただ今回は、自己申告制にする・・強制はしない。
自信が無い者を投入する訳にはいかない、幻海は正式なママがいないのだから。
もちろん、カレンは強制だよ・・派遣なんだから。
リリーは後で話そうね、轟さんとも話さないといけないから。

今回俺は１１人衆に問う・・このクラブ幻海の挑戦を、ＹＥＳかＮＯかを。
ユリさんの言葉・・もう一人の弱い自分と話して欲しい。
絶対に良い経験になると思う・・挑戦する者は、松さんが同行する。
そしてその経験を全て使って、徹底的に指導してくれる。
多数の参加を期待してる・・無理強いはしない、ご検討願う・・
以上』

私は一気に想いを伝えた、女性達の緊張を感じていた。

「どこまでも、果てしなく・・挑戦場所を用意してくれるんだな」
とカスミが二ヤで言った。
「クラブ幻海なら、相手にとって不足無し」とネネが二ヤで言って。
「価値が有るね、仕事だけでなく・・人生経験としての、価値があるね」と美冬も二ヤで言って。
「検討する必要なし・・私達はＰＧの若手１１人衆・・どんな挑戦でも受ける」と千春が笑顔で言って。
「そう言う事・・決定だよ」とカスミが不敵全開で言った。

「ねぇ、エース・・オーナーがＯＫなら、私がデビュー直後に、マキとヨーコと入るよ」とリリーが笑顔で言った。
「リリー姉さん・・ありがとうございます」とマキが立って笑顔で頭を下げた。
『了解、リリー・・ありがとう、その方向で話してみるよ』と笑顔で返した。

『蘭・ナギサ・・難しいだろうけど、よろしく・・久美子を開店前に投入するから』と笑顔で言った。
「任せなさい・・必ず再点火するよ、リアンの妹の誇りに賭けて」

と蘭が満開で微笑んで。
「私も任せてもらうよ・・ユリカの妹の誇りに賭けて」とナギサは華やかに微笑んだ。

『よし・・北斗とアンナは、全く問題ないね？』と二ヤで言った。
「見せてやるよ、エース・・必ず安定感を出すよ、由美子に誓って」と北斗が微笑んで。
「私も見せるよ・・安定感を確立するよ・・安奈に誓って」とアンナが微笑んだ。

私は喜びの中にいた、群雄割拠の時代・・その選ばれし最強軍団に囲まれて。

冬物語は加速していく・・次の目標を射程に捉えて・・。

【冬物語？】

その街の一番暑い季節は、夏ではない。
１２月の週末である、冬の週末の夜に最高気温を更新する。
それは女性達の心の熱が上げる、限界は無いと上げ続けるのだ。
寒い季節の熱帯夜、そこにこそ楽しみが隠れている。

女性達が控え室に入り、私はマキとＴＶルームに戻った。
エミを抱いて、サクラさんをタクシーに見送った。

寒い深夜の狭い通りを埋め尽くすように、人が溢れていた。
私はＴＶルームに戻り蘭を待っていた、リリーが来て私の横に座った。

『どうした、リリー・・楽しそうだね』と笑顔で言った。
「轟さんの事、ありがとう・・気分が凄く晴れたよ」とリリーが微笑んだ、私も笑顔で返した。
『リリーは正月帰るの？』と笑顔で聞いた。
「まだ未定・・何か招待があるの？」と笑顔で返された、瞳のリングが回転していて美しかった。
『うん・・俺の実家に、予定の無い人を招待してるんだ・・帰らない時は来てね』と笑顔で言った。
「ありがとう・・律子さんに会ってみたいな～」と腕を強く組んできた。
『律子もそう思ってるよ、その前に会うだろうけど』と二ヤで返した。

「どうもリリーは怖いよね～・・何かが違うんだよね～」と蘭が満開二ヤで言った。

「しまった～・・ばれたよ、どうするの？」とリリーが私に二ヤをした。
『2人で名古屋に逃げるか』と二ヤで返した。
「ところが、私は名古屋が嫌いです・・残念でした～」と二ヤで返された、私はウルで返した。

「お腹空いたね・・何か食べて帰ろうか・・久しぶりに、ピザが食べたいな～」と蘭が私の横で言った。
「蘭姉さん・・谷田マスターのジャズクラブのピザ・・お勧めで～す」と久美子が笑顔で言った。
『確かに美味いよ・・こだわってるって自慢してた』と私も笑顔で言った。
「今夜はイベントやってないの？」と蘭が満開で言った。
「もう、終わってますよ」と久美子が微笑んだ。

『客が引くのが早いんだよ、遅くまでやってるけど・・今から行けば貸切だよ』と私が笑顔で言った。
「じゃあ私も～・・リリー姉さんも行くでしょ？」とカスミが笑顔で言った。
「もちろん、行きま～す」とリリーが笑顔で言った。
「マキ・・行こうか？」とハルカが笑顔で言って、マキも笑顔で頷いた。
「じゃあ・・久美子も行かないとね、案内で」とレンが笑顔で言って、カレンとシオンも手を上げた。
「当然・・私も～」とネネが笑顔で言った。

「ほいじゃ・・行きますか～」と蘭が言って、全員で通りに出た。
裏通りを歩いて、谷田のジャズクラブに行った。

「マスター・・奥の大テーブル空いてますか？」と久美子が覗いて

谷田に言った。
「もちろん・・どうぞ～」と谷田の声がした。
久美子の後ろを私が蘭と入り、カスミ・リリー・ネネ・カレン・シオン・レン・ハルカ・マキと入った。
４組いるお客が呆然と見ていた、谷田が嬉しそうに笑っていた。
奥の１８人掛け大テーブルに座って、女性達が笑顔でメニューを見ていた。
ステージでは一人の男が、ギターを弾いていた。

「いらっしゃい・・こんなに嬉しい事も無いね～・・話題のＰＧの女性の来店は」と谷田が嬉しそうに笑顔で言った。
「久美子のお勧めで、ピザが食べたくて・・生ギター演奏まであって素敵です」と蘭が満開で返した。
「あぁ・・あれはお客さんだよ、東京から来てる音楽関係の人」と谷田が笑顔で返した。
『レコード会社とか？』と私が二ヤで聞いた。

「そんな感じ・・さすが宮崎Ｎｏ１の付き人、良い二ヤだね～」と谷田が二ヤで返してきた。
『もちろん・・久美子、気分を高めとけよ・・次、行くぞ』と久美子に二ヤで言った。
「はい・・マネージャー」と久美子が笑顔で返してきた。
「楽しみだね～・・必ず俺には感想言うだろうから、皆さん乞うご期待」と谷田が注文を聞きながら言った。

「素敵です～・・久美子ちゃん、頑張って」とシオンがニコちゃんで言って。

「チャンスってのは、案外そういうもんだよ・・久美子がここのピ

ザを紹介した。
そして珍しく付いて来た・・そこに居た・・そう言うもんなんだよね～。
私の所属していた、福岡の芸能事務所に居たんだよ。
○○さん・・今はＴＶにも出てるよね、ＣＭやドラマにも出だしたし。
そのデビューのきっかけも、そんな感じの出会いだった。
強い意志は引かれ合う・・ユリさんの言葉、絶対に有ると思うよ。
道を繋げろってマリの言葉を大切にしてる、エースは出会いを大切にする。
それが本当に大事な事なんだ・・常にベストを尽くす。
そうしないと、後悔する・・久美子、鍵盤の前では常にベストだよ」

カスミが笑顔で言った、久美子は真剣な目で頷いた。
「素敵だな～・・どうして福岡は、芸能人が多くデビューするんだろう」とカレンが笑顔で言って。
「○○さん・・綺麗ですよね～、あの人と同じ事務所だったのか～」とハルカが笑顔で言って。
「良いよね～・・清楚な感じで・・タイプ的には青猫だよね～」とレンが微笑んだ。

「カスミは・・本心はどうだったの？・・トップアイドルに成りたかったの？」とリリーが二ヤでカスミに言った。

「本心を言うと・・嫌でしたね、自分の性格に合ってないと思ってました。
話が進むにつれ、大人達と私の心の差を感じていました。
ただ私は福岡から脱出したかった、自分の中で閉塞感があって。
私の父は真面目を絵に描いたような人で、押し付けが強かった。

それに幼少期に、あまり良い思い出が無くて・・ただ上京したかった。
ようは家を出たいだけでした・・だから好きな男が出来たとき、それに走った。
内面なんて見もせずに・・まぁ、若かったと言えばそうなんですけど。
でもそれは今は言えません・・レンより下は、その時の私よりも若いから。
私はあの時・・ボロボロで家を出た時、博多駅で新幹線に乗らなかった。
上り線に興味が無かった、だから下り・・南行きに飛び乗った。
南行き・・なぜかその響きに希望を感じた、漠然とした覚悟を持てた。
汽車の窓辺に頬杖付きながら、車窓から見える景色を見ていた。
その時に、今までの思い出が走馬灯のように、車窓に流れてました。
私にとって・・あの沙紀の絵は、本当に宝物です。
私は沙紀に、宮崎に来たきっかけすら話してない、まして不敵も出していない。
なのに描いてくれました、私に対する応援のメッセージを込めて。
本当に嬉しかった、私は巡り会えたと感じた・・南行きに間違いは無かった。
私は今ならはっきりと言えます・・あの南行きを選択した時。
あの時が生まれて初めて、自分の心に忠実に従った時だったと。
私はアイドルデビューしなかった事を、一度も後悔した事は無いです。
デビューしても芽は出なかった、マネージャーにエースがいない限り。
成功は無かったですね・・偽り続ける私には。
エースは東京で芽の出ないアイドルを探すと言う、楽しみですね。

奴は自分の力を知ってる、奴にしか出来ない・・他のステージを提案するのは。
そして覚悟させ挑ませるのは・・今夜のリリー姉さんの笑顔で感じた。
奴は私達の為に、楽しいを提案してくれる・・そして心残りを外してくれる。
だからあそこまで行っている、あの若さで全てを凌駕している。
美由紀を見ると、私はそう思いますね・・そして最高の時代に生まれたと感じる。
今夜のクラブ幻海の話・・心が震えました、次の挑戦場所を聞いて。
それをユリさんとユリカ姉さんが、自分で受けたと聞いて。
そして奴は、最も大切な2人組み、蘭とナギサコンビを出すと聞いて。
哲夫の言葉を思い出しました・・戦友と呼ばれたい。
哲夫はエースとの関係をそう表現した、私は衝撃さえ受けました。
命と向き合って、命ギリギリ戦った・・戦友になりたい。
哲夫、またやろうと言ってもらえる、戦友で有り続けたい。
そう言った哲夫に・・感動しました。
ユリさんもユリカ姉さんも、絶対にそう思ってますね。
そして蘭姉さんと、ナギサ姉さんと久美子は・・もう戦友になってる。
奴は3人を指名した・・幻海の女性達の心を戻す切り札として。
私も必ずそれに成りたい、他の物は何もいらない。
カスミ、頼んだぞ・・そう言われる女に成りたい。
ここにいる全員、夜の女性全員に・・戦友と呼ばれたい。
そしてまだ見ぬリンダさんと・・親友のマチルダに、戦友と呼ばれたいんです」
カスミは強く言葉にした、強烈な喜びの波動が吹き抜けた。

私はカスミの言葉と、蘭の満開が嬉しかった。

「うん・・カスミ、あんたは本当に素敵だよ。
私は嘘無く言える、クラブ幻海よりＰＧ・・いや共同体の女性。
その方がレベルは上だよ、私もネネもカレンもそう感じてる。
戦友と呼ばれたい・・そして私も出会いたい、リンダとマチルダに。
沙紀の私を描いてくれた、あの宝物の絵・・ユリカ姉さんが聞いた。
提示と思うかと・・私は確信的に思っていた。
提示だと・・沙紀が私を応援してくれた、全力で生きた先の提示だと感じた。
だから嘘偽り無く生きなければならない、そうしないとあの表情は出ない。
私は今が一番楽しい・・本気を出さないと絶対に届かない、２人の姉さんがいる。
蘭とナギサが目の前にいる・・絶対に追いついて、背中に触れる。
心に従う絶対的な２人の姉に、リリー行くよ・・そう言われたい。
私もカスミと同じ・・戦友と呼ばれたい。
そして勝也と律子と豊と哲夫・・その４人に出会いたい。
私は天狗の鼻を、真っ二つに折られた・・気持ち良いほどに。
美由紀と秀美に折られた・・だから私は全力になれる。
遥かなる百合の咲く頂を目指せるから・・その先に女神が待っていると思うから」

リリーの言葉には迫力があった、瞳のリングが高速回転をしていた。
蘭はこれ以上ない、満開笑顔で聞いていた、下から追い上げてくる足音を。

「エース・・私達にリリー姉さんを授けてくれて・・ありがとう。

私達は本当に幸せだよ、伝説の実話を持つ、３人の姉が存在するから。
私はピーチで心がどうしようもなくなった、リョウを見る度に。
その増して行く輝きと、楽しげな笑顔を見て。
本物の女性の中で競っているのだと感じて、自分の現状が嫌になった。
でも・・ＰＧに来て、自分の想像力の希薄さに愕然とした。
五天女は当然だけど・・蘭姉さんとナギサ姉さんに触れて。
伝説は嘘だと思った・・そんなレベルじゃないと感じた。
圧倒的に違う・・２人は個性が全く違う、でも２人とも心に従う。
異質だと感じました、私達が成長過程で捨ててしまった、それを持ってる。
取り戻さないといけない、そうしないと絶対に追いつけない。
そう感じている頃に、現れました・・最強の伝説を持つ女性。
リリー姉さんが登場した・・又もや伝説は嘘だと思った。
あのリリー姉さんが来た日・・３番で一気に点火した炎。
蘭姉さんとナギサ姉さんにも、会ったばかりなのに・・瞬時に見せた。
あのコンビネーション・・心がブルブル震えました。
幸せだと感じた・・私はこの場所にいる、だから絶対にあの３人に追いつく。
銀河の奇跡の足音を強く感じながら・・私はあの３人に割って入る。
そう思っていて、私は感じた・・私の大好きな美由紀が、大切にしてる存在。
限界ファイブ・・憧れの女性だと、美由紀は堂々と言った。
そして私達にも出来たんだと・・限界トリオが。
蘭姉さん、ナギサ姉さん、リリー姉さん・・それが私にとっての、限界トリオ。
異なる個性を持ち、異なる美しさを持つ・・憧れに値する絶対的

存在。
私は本当に嬉しかった・・限界トリオが自分にも出来て。
ありがとう、エース・・リリー姉さんを授けてくれて」
ネネが笑顔で言った、私は嬉しくて笑顔で返した。
「私もそう思いました・・本当に嬉しかった。
私は限界カルテットは、高校の頃にその存在を知っていた。
自分の上にいたのなら、どんなに幸せな事かと思ってた。
そして巡り会った、その４人・・圧倒的に本物だった。
１６歳にして女として・・いえ、人間としての高みにいた。
そして美由紀の表現と、その信頼関係を見て・・本当に嬉しかった。
リリー姉さんが入って、私も感じた・・自分にも限界トリオが出来たと。
それも私には2組も出来た、蘭姉さん、ナギサ姉さん、リリー姉さん。
そして私達1つ下の世代には、銀河の奇跡というトリオも存在する。
あの沙紀の恐怖の世界で、私は本当に嬉しかった。
あの背中・・銀河の奇跡と書いてある背中・・全く揺れなかった。
ホノカ姉さんの言葉を無線で聞いていて、涙が出そうになった。
そして問いかけの部屋で見せた、リョウ姉さんの勇気。
そしてカスミ姉さんの言葉・・幸せだった、追いかけるべき本物の出会えて。
私も、今お礼を言うね・・エースありがとう、本当に嬉しかった。
リリー姉さんとネネ姉さんを授けてくれて、私達は全力を出すしかなくなったよ。
私は誓える・・来年、２０歳で・・銀河の奇跡の精神世界に入ってみせる。

そして２３歳までに、偉大なる４人の姉・・私にとっての限界カルテット。
蘭・ナギサ・リリー・ネネ・・この４人の世界に踏み込んで見せる。
今夜・・魅宴に小林さんが来てくれた、ＰＧを出てから会いに来てくれた。
そしてこう言ってくれた・・必ずその生き方で返せと。
エースはそれしか望まないと、それでしか感謝を示す事は出来ないと。
全力で生きる姿でしか・・エースは喜ばないと言った。
ありがとう、エース・・必ず見せるね、私の生き方を」

カレンが美少女の微笑で強く言葉にした、私は3人を見て本当に嬉しかった。
強烈な波動が何度も来て、喜びを表現してくれた。
《道を繋いだね、小僧》とマリの同調の声が聞こえてきた。

「噂は嘘だったね・・そんなレベルじゃない、ＰＧという店は」と谷田がピザを持って言った。
「最高の言葉です・・夜街神話・・極寒の谷田さんの言葉ですから」と蘭が満開で返した、谷田は照れながらピザをテーブルに並べた。
全員に笑顔が溢れて、美味しそうに食べていた、幸せそうな笑顔だった。

「ねぇ・・エース、イメージの世界・・次も本当にあるの？・・・私楽しみなんだよ～」とリリーが微笑んだ。
全員が笑顔で私を見た、私はニヤを出した。

『もう良いかな、発表して』と全員を見回し二ヤで言った。
「もう・・早く、早く～」と蘭が満開で微笑んだ、全員が笑顔で促

した。
『沙紀がクリスマスには退院が出来そうなんだ、俺は関口先生と話した。
この話はユリカにも隠した、今度はユリカが最も重要だから。
先入観を持って欲しく無かった、だから関口先生と俺と美由紀。
3人で話して、関口先生と沙紀の母親の許可を貰った。
俺は沙紀を連れて、ユリカと蘭とシオンと美由紀で、夜の海に出る。
その夜・・ユリカの家に5人で泊まる。
そして翌日・・沙紀を羊水の揺り篭に入れる、俺はその覚悟が出来た。
沙紀に残っている、女として絶望してる世界・・それをぶっ壊す。
沙紀は絶対に、揺り篭でそれを見る・・そして引きずる。
ユリカは揺り篭の中の世界なら、絶対に見れる。
だからユリカのイメージを、全員で共有する・・それを壊滅しに行く。
その道案内を、マリに頼んで・・了承して貰ってる。
今回の相手は、強力だと思ってくれ・・でも女性達にしか出来ない。
沙紀は女性達を信じている・・俺も信じてる。
沙紀の絵が宝物だと言うのなら、沙紀に感謝してるなら。
自分ともう一度向き合って欲しい、今度の挑戦は自分自身。
その記憶・・そこに残る女としての、恐怖や後悔を狙い撃ちされる。
今回こそ、何人の残れるか分からない・・でも俺は信じる。
必ず誰かが辿り着くと・・そして沙紀と手を繋いで出てくると。
俺も哲夫も同行出来ない・・沙紀の絶望の部分、それは女性の根源だから。
女性しか入れない・・俺と哲夫は本部の連絡係りをする。

最後の姿無き女・・そう今回は女、それと対決しなければならない。
辿り着いた者に、全てを任せる・・その判断に任せる。
素敵な物語が見れると思ってる・・俺は期待するよ、リリー。
沙紀のあの絵は提示だよ・・今度は多分、深海の中にある。
全員で海に出ろ・・恐怖を捨てろ、潜って見せろ。
そこにある・・深海の輝きの中に、希望という宝箱がある』

私は強く言葉にした、強烈な喜びの波動が、何度も何度も押し寄せた。
女性達の嬉しそうな笑顔があった、私はそれに囲まれていた。
「時期は・・いつ頃なの？」と蘭が満開で微笑んだ。

『１２月２８日までが、共同体の営業日。
昨日、共同体で話して、合同忘年会は２９日に決定した。
２７日が日曜日なんだ、だから２７日に海に出る。
そして２８日の朝、ＰＧのフロアーで揺り篭に乗せる。
俺も美由紀も冬休み・・俺は沙紀の母親の了解は全て取った。
そしてシズカと恭子の了解も取った、今回は限界ファイブも揃える。
もちろんエミも、サクラさんの了解済みだよ・・当然、律子も来る。
しかし残りの４人娘は使えない、当然スーパーマリアマンも。
あの子達は幼すぎる、だからその部分は理解出来ない。
成功すれば・・沙紀が忘年会に参加する、そして正月を一緒に祝える。
沙紀の両親が承諾してくれた、俺に全てを任すと・・女性達を信じてると。
俺は何の疑念も無く信じてる・・戦友である、女性達を。
必ず最後の難問の答えを出して、沙紀と手を繋いで水面に姿を見

せると。
最強の敵と戦え・・女性である為の恐怖と戦え。
その先にある・・次の階段が、百合の咲く頂に続く階段が』
私は強く言葉にした、あまりに波動が強くて、体が少し揺れていた。
「ふ～・・間に合った～・・仕事なんて出来ないよ」とユリカが爽やか笑顔で入ってきた、その後ろに小夜子が微笑んでいた。
全員が笑顔で挨拶して、２人が笑顔で座った。

「先入観を持たせないか～・・やられたね～」とユリカが爽やか二ヤで言った。
『凄いだろ～・・また2段ぐらい上がったよ、美由紀の奴』と二ヤで返した。
「そうだよな～・・エースは読まれない事が出来ても、美由紀は一緒にいて何も感じさせなかったんだ」とカスミが言って。
「2段上がったって・・凄すぎるよ、美由紀」とハルカが微笑んだ。

「それで・・方法は、聞かないと誰も帰れないし・・久美子も弾けないよ」とユリカが二ヤで言った。
全員の興味津々光線が痛かった。

『簡単だよ・・ユリカが沙紀の絶望の世界を見る。
その時にマリが同調してる、ようするにマリと沙紀は一緒に入る。
マリはそれを道案内する、そうすれば全員が入れる。
でもそれは・・その世界の中に、マリは入れないことを意味する。
だから俺は今回・・ユリカが主軸だと思ってる。
前回はリアンの炎が支え、今回はユリカの水が支えだよ。
俺は確信は無いけど、今回は母である人は入れないと思う。
段階が違いすぎるから・・だから律子も北斗もユリさんもアンナも入れない。

年齢的な経験者として、大ママとミチルも難しい。
ならば・・今回はユリカとリアンしかいない、全てを纏めるのは。
ユリカとリアンの最強コンビしかいない、可能性を示せるのは。
その友情が本物でないと、導くことはマリにも出来ない。
最強の女性戦士に道を示せるのは、ユリカとリアン。
対極であり最も近い存在、その2人の友情しか・・道は示せない。
出来なければ、蘭とナギサに移行されると思うよ』

私はユリカを見て、強く言葉にした。

「嬉しいよ、エース・・あなたは誰も特別視しない。
私にも提案し続ける、挑んでみろと誘う・・私の好戦的心に。
さっきの最後の決め台詞に、嘘は無かったね。
その先にある・・そこに百合の咲く頂に続く、階段があるんだね。
必ず全員に道を示す、私とリアンで・・そして私が必ず辿り着く。
沙紀の絶望の根源に・・私はユリカ、深海の揺り篭」

静寂が支配した、ユリカの言葉に静けさが溢れていた。

『よろしく、ユリカ・・道を繋げ、ユリカ。
そこにある、俺はそう思ってる・・ＹＵＲＩＫＡ　ＤＲＥＡＭが。
その答えに隠されてると信じてる、俺の策略はそれだよ』

私は真顔でユリカに言った、ユリカの深海の瞳が輝きを増した。

「それ以上言わないの、読まれるよ・・姿無き女に」ユリカが爽やか二ヤで返してきた。
『よし・・大丈夫だね、ユリカ・・明日、日南海岸をバイクで楽しんでね』と二ヤで返した。

「シズカの奴～・・それで日南に誘ったのか～」とマキが二ヤで言った。
「海を感じとけって事ね・・回りくどいよね～、シズカ」と久美子が二ヤで返した。
「それに美由紀、絶対心でニヤニヤしてたね・・明日お灸をすえないと」とネネが二ヤで言った。
「ひどいです～・・あんまりです～。
まさか、まさかと思うけど、入れないなんて事、無いですよね～。
絶対にそう言うよ・・美由紀は」
小夜子が見事な物真似で言った、全員が爆笑した。
「やばい・・本気でワクワクが止まらない、どうしよう」とリリーが言った。
「リリー・・エースが言った通りよ・・あの絵は提示よ、助けてと言う」とユリカが爽やかに微笑んだ。
「アンナ姉さんには悪いけど・・私が入って、必ず沙紀を海上に連れ戻します」とリリーは真顔で返した。
「うし・・久美子、お願い・・集中の中に戻して。
そしてリンダとマチルダを感じさせて、夏を喜ぶ・・サマータイムで」
カスミが輝く笑顔で言った、久美子も笑顔で頷いた。
すぐ後ろの席で、楽しそうに音楽関係者とこっちの話を聞いていた谷田が、笑顔で頷いた。
久美子はステージから、客席全てを見回して、笑顔で深々と頭を下

げた。
「サンキュー、久美子・・最高の夜だよ～」と客席から声が飛んだ。
「サマータイム、よろしく～」と違う男が笑顔で叫んだ。
久美子は笑顔で返して、頷いて座った。

久美子は静かに始めた、音を確かめるように。
久美子は既に、集中の中にいた、静寂さえ纏って。
そして徐々に燃え上がった、喜びを音と全身で表現した。

《公園で寝よう、芝生の上で大地の息吹を感じよう。
そしてやり直そう、人は何度でもやり直せる。
だから手を繋ごう、愛する人と手を繋ごう》

久美子の音はそう叫んでるようだった、女性達は全員瞳を閉じていた。
美しい光景がそこに広がった、強い意志を連れたまま。

久美子は徐々に燃え上がった、久々のリンダスペシャルだった。
店にいる誰にも会話は無かった、全員が耳を久美子に向けていた。
久美子は意識すらしてなかった、東京の音楽関係者を見もしなかった。
ただ強く自分の音楽を主張した、これが私の求める世界だと叫んでいた。
万感の想いを込めて、強く鍵盤を叩いた、沙紀に届くように。

感謝と愛情を込めて躍動していた、私には映像が流れていた。
久美子とシズカが笑顔で、マンハッタンで屋台のホットドッグを食べてる姿が見えた。
そしてセントラルパークの芝生の上で、夢を語り合う2人が見えた。
そこに駆け寄った、楽園ブルーと新緑の瞳が。

４人で夢を語り合っていた、サマータイムを聴きながら。

私はこの沙紀の世界・・本当に悩んだ、学校でもう一人の自分を出していた。

最初から結論は１つだった、打破するしか無かった。

それにより女性達が傷を背負う事になっても、私はやりたかった。

私は探究心に逆らえない、愚かな人間なのかもしれない。

そう思って久美子を見ていた・・リンダの歌声を聴きながら・・。

【冬物語？】

白と黒の世界に入ると、全てを忘れる。
白と黒の鍵盤が、集中の世界に誘う。
その世界を愛し信じている、そう確信させる姿だった。

久美子は弾き終わり虚空を睨んでいた、納得した良い表情だった。
私はさすが久美子だと思っていた、前回【最強戦士】の称号を贈られた本質を見ていた。
大きな拍手を受けて久美子は我に返り、ステージ中央に歩き笑顔で頭を下げた。

東京から来てる音楽関係者が立ち上がり、久美子に笑顔で右手を出した。
久美子も１６歳の輝く笑顔で、右手で握った。
谷田が紹介してるようで、谷田の嬉しそうな笑顔を見ていた。

「最強戦士が、潜水モードに入ったね～・・強い子だよね～」と蘭が満開で言って。
「凄いよな～・・あの集中力」とカスミが笑顔で久美子を見ていた。
「気合入れないと、脇役も貰えないね～」とリリーが言って、全員が笑顔で頷いた。

「明日・・１０時にＦドライブインに集合で行こう」と蘭が満開で微笑んだ。
「蘭姉さん・・日南辺りで海での集中なら、何所がお勧めですか？」とネネが聞いた。
「少し遠いけど・・やはり、恋が浦だろうね～」と蘭が満開で微笑んだ、全員に笑顔が咲いた。

「しまった～・・誰か、お席は空いてませんか？」とハルカがウルで言った。
「ハルカとレンと久美子は・・私が乗せるよ、リアンの車借りるから」とシオンが微笑んだ。
「ありがとうございます・・嬉しい～」とハルカが言って、レンも笑顔だった。

「リアンさんの車・・凄そうだね～」とネネが二ヤで聞いた。
「エース、何でしたっけ？・・名前」とシオンがウルで聞いた。
『フォード・サンダーバード』と私はネネに二ヤで言った。
「震えてしまった・・あまりに似合うから」とネネが笑顔で返してきた。

各自が待ち合わせの予定を話し合い、笑顔が溢れ賑やかだった。
久美子以外全員から１０００円を徴収して、残りはユリカが支払った。
店を出てユリカにお礼を言って、笑顔で手を振って別れた。

ご機嫌蘭と部屋に戻り、蘭を洗面所で支えて、爆睡寝顔を見ながら眠った。
翌朝起きて、お粥と卵焼きだけにした、私は蘭の母親の手料理が大のお気に入りだったのだ。

８時に蘭を起こして、蘭はシャワーを浴びていた。
私は朝食を用意して、新聞を読んでいた。

「さぁ・・食べようか・・さすがだね～、軽い朝食」と蘭が満開で微笑んだ。
『蘭母さんの手料理が好きだから、朝は軽めだよ』と笑顔で返した。

「母さん喜んでたよ、何でも沢山食べるから」と満開笑顔で返された。

『何でも美味しいよね～・・特にご飯が違う、やっぱり水が違うのかな～』と笑顔で言った。

「確かに、水の味が全然違うよね・・私、宮崎市内の水に慣れるまで大変だったよ」と蘭が返してきた。

『そうなんだよね、綾の叔母さんの家・・水が美味いよ』と笑顔で返した。

蘭が準備をして、私は食器を洗い日記を書いていた。

満開蘭と美由紀の家に迎えに行き、笑顔の美由紀と秀美を乗せた。

そしてシズカを乗せて出発した、快晴の冬の日曜日、気分も快晴だった。

女性４人で盛り上がって、アイドルの話をしていた。

ドライブインの駐車場には、白い箱スカＧＴＲと真赤なサバンナＲＸ３に、セリカ２０００ＧＴが止まっていた。

「２０００ＧＴは誰？」と蘭が驚いて聞いた。

『決まってるでしょ・・同姓同名』と二ヤで返した。

「流星号か～・・やるね～」とシズカが二ヤで言った、蘭がＧＴＲの横に止めた。

「く～・・素敵だ～、エンジン見せて下さい」とネネが微笑んだ。

蘭が満開でボンネットを開けた、ネネがボンネットを持ち上げ固定した。

蘭のケンメリはエンジン内部を豊、外側の配管等の取り回しをシズカがしていた。

シズカの機械に対するこだわりが強く表現され、妖しく美しい仕上がりだった。

ネネとリョウはその美しさに見入っていた、私はニヤでシズカと車を降りた。
美由紀と秀美は開けた窓から、笑顔でカスミとセリカと話していた。

「何なんですか・・この美しい仕上げ、元々ですか？」とネネが笑顔で聞いた。
「城嶋さんのも綺麗だったけど、これは特別・・外側はシズカスペシャル」と蘭が満開で返した。
「シズカちゃん、私のも今度お願いできる？」とネネが笑顔で言って、リョウも自分を指差した。
「もちろん良いですよ、私も楽しいから」とシズカが笑顔で返した。

その時、真っ赤なＨＯＮＤＡ　ＣＢ４００Ｆｏｕｒが入ってきた、良い音だった。

「Ｆｏｕｒか！・・さすがマキ、センスが良いね～」とネネが微笑んだ。
「ヨシムラの音、良いですよね～・・マキはノーマルの、流れるマフラーが好きだったけど」とシズカも笑顔で言った。
マキがケンメリの横にバイクを止め、ユリカが降りてヘルメットを脱いだ。
最強爽やか笑顔を見て、楽しそうだと思っていた。

『ユリカ・・楽しそうだね、寒くない？』と二ヤで言った。
「全然・・最高の気分だよ、マキは運転も上手いし」と爽やか笑顔で返された。
「良いな～・・素敵だな～」とセリカが笑顔で言った。

ワイワイと女性達が笑顔で話していた、その時静寂が訪れる。
重厚な音を響かせて、美しいスカイブルーのサンダーバードが入って来たのだ。
左の運転席にシオンがサングラスをかけて座り、その横に黒魔女が座っていた。
シオンはニコちゃんで、マキの隣に車を入れた。

「素敵過ぎる～・・何なのこれ～」とホノカが私に笑顔で言った。
『フォード・サンダーバード・フレアーバース・・リアンスペシャル』と二ヤで返した。
「素敵過ぎる・・さすがリアン姉さん」とリリーが笑顔で言った。
「運転してる気分になります・・最高で～す」と黒魔女レンが笑顔で言った。
「ほな・・行きますか、取りあえず我が実家に」と蘭が満開で微笑んだ。

蘭がＧＴＲに乗り、私が助手席に乗った、その後ろに小夜子とリリーが乗っていた。
ネネがケンメリに笑顔で乗って、シズカが助手席、美由紀と秀美が後ろに乗って。
リョウのＲＸ３に銀河の奇跡と、ミサキが乗って。
セリカの２０００ＧＴにカレンと、ケイコとヨーコが乗った。
サンダーバードには、シオンとレンとハルカに久美子が乗っていた。
マキがユリカを乗せてスタートして、その後ろを蘭が満開で付いた。

「何かが違う・・さすがＧＴＲ、良いね～」と蘭が前を見て満開笑顔で言った。
「私も車を買おう・・凄く欲しくなった」とリリーが笑顔で言った。
『小夜子は何に乗ってるの？』と私が笑顔で聞いた。

「今は軽だけど、多分来年出る・・それを狙ってるよ」と二ヤで返された。
『まさか・・リョウの進化型？』と驚いて聞いた。
「正解・・ＲＸ－７、魅惑のロータリー」と小夜子が微笑んだ。
「リリーはやっぱり、トヨタ狙いなの？」と蘭が満開二ヤで言った。
「いいえ・・私は名古屋が嫌いです」とリリーも二ヤで返した。

「理想は？」と蘭が満開で聞いた。
「理想なら、もちろん・・ポルシェ９１１ターボ」とリリーが美しい笑顔で言った。
『買って・・リリーお願い・・買って』と私は振り向いてウルで言った。
「理想と現実は違うのよ・・残念」とリリーに二ヤで返された、私はウルで返していた。
それからリリーにクラブ幻海の情報収集があり、３人が盛り上がっていた。

蘭の実家に着いたのが、お昼少し前だった。
その豪華な車列を見て、オヤジに笑顔が溢れた。
そして美しい女性達が降りて、全員で笑顔で挨拶していた、オヤジは終始笑顔だった。
蘭に家に案内されて、女性達が入っていった。
私は美由紀を車椅子に乗せ、オヤジに秀美を紹介した。

「父さん・・また一緒に考えて、秀美のサイボーグ義手を作りたいの」とシズカが笑顔で言った。
「シズカ・・了解、俺は本当に楽しいよ」とオヤジが笑顔で返した。
「ありがとうございます・・期待してます」と秀美が笑顔で返した、オヤジは本当に嬉しそうだった。

広い応接間に入ると、巨大なテーブルに、豪華な昼食が用意されていた。
ユリカが母親にお土産を手渡し、マキとヨーコと久美子が準備の手伝いをしていた。
１６歳に囲まれた母親が楽しそうで、私も嬉しかった。
女性達は一列に仏壇の前に並び、線香をあげて手を合わせていた。

「お父様、すいません・・大勢で押しかけてしまって」とユリカがオヤジの横に座り、ビールを注いでいた。
「全然かまいませんよ・・楽しいですから」とオヤジが嬉しそうにビールを飲んでいた。
「父さん、美味しいでしょ～・・宮崎最高級のビールの味は」とシズカが二ヤで言った。
「やはりユリカさんは、宮崎最高ランクなんだね」とオヤジが笑顔で返した、シズカは二ヤで頷いた。

「父さんが酔う前に見せるね・・これが私の今の方向性」とシズカが設計書のコピーを出して、バッグを開けてテーブルに出した。
私は震えていた、銀のメタルに輝く骨格が出てきた。

完全なる静寂に支配された空間で、ユリカがシズカを見ていた。
私は、その妖しい輝きを見ていた、シズカは既にそこまで到達していた。

女性達が沈黙して集まってきた、秀美はそれを見て震えてるようだった。
上腕から伸びる3本の円柱を2箇所のメタルのリングで支え。
真ん中に一本、少し太いメタルパイプが入っていた。
間接の部分のメタルのボールを取り巻くように、見事なメタルの部

品で組んであった。
その下に手首まで円柱が伸びていて、その全体から妖しい光が出ていた。

「さすがシズカ・・もうここまで来てるのか～」とオヤジが手にとって言った。
「そこまでは苦労なかったけど、手首と手の平と軽量化が問題なの」とシズカが真顔で返した。
「シズカ先輩」と秀美が潤む瞳で言った。
「秀美、駄目よ・・それは今のシズカ先輩を、愚弄する行為だから」と美由紀が笑顔で制した。
秀美が美由紀に頷いて、女性達が優しい瞳で秀美を見ていた。

「私、話を聞いて・・自分なりに想像したけど、完璧に超えられた」とリリーが笑顔で言って。
「既に妖しい輝きが有る、完成品は恐怖すら纏うね」とミサキが笑顔で言って。
「想いが乗ってますね、作り手の強烈な熱が乗ってる」とセリカが流星で微笑んだ。
全員がその未完成の義手を見ていた、秀美の嬉しそうな笑顔を見ながら。

その時、庭に１台のバイクが入ってきた、真黒なタンクのＣＢ４００Ｆｕｏｒだった。
庭のマキの赤の横に黒を止めて、後ろからピンクのヘルメットの女性が降りた。
全員が庭を見ていた、上下黒皮で身を包んだ女性は、ピンクのヘルメットを脱いだ。
恭子の笑顔が女性達を見ていた、その後ろで豊がヘルメットを脱い

で微笑んだ。

「絵になり過ぎるよ・・あの男だけは」とオヤジが笑顔で言って、2人を手招きした。

「もしかして・・あれが？」とリリーがカスミに二ヤで言った。

「豊ご夫妻です」とカスミがウルで返した。

「か～・・いるんだね～・・本物が」とリリーが笑顔で言った。

豊と恭子は笑顔で全員に挨拶して、豊がユリカの隣に座った。

その隣にリリーが笑顔で座り、自己紹介をしていた、豊かも楽しそうに返していた。

恭子はシズカの隣に座り、オヤジに笑顔で挨拶していた。

「シズカ・・少し考えてみたよ」と豊が笑顔で言って、恭子がバッグからメタルの手の平を出した。

美しい仕上がりだった、その指は金属で出来ていたが、形は美しい女性の指だった。

シズカが驚いて手にとって、笑顔が溢れた。

「さすが兄さん・・父さん、これで行こうよ1号機・・後は父さんの腕の見せ所だね」とシズカが笑顔で言った。

「了解・・今回の問題は軽症化だね、肩から下げるんだから」とオヤジも笑顔で返した。

「うん・・後で量るけど、１ｋｇ以下にしたい・・秀美の負担を考えるとね」とシズカが二ヤで返して、オヤジが2つを持って考えていた。

「さぁ・・食事にしましょう、沢山あるから遠慮無く食べてね」と母親が笑顔で座って、限界ファイブが飲み物を注いでいた。

「それじゃあ、よく来てくれました・・乾杯」とオヤジが笑顔で言って。
「乾杯」と全員笑顔で返して、グラスを合わせた。
私は久々の蘭母さんの手料理を夢中で食べていた、女性達も笑顔で食べていた。
蘭と母親の楽しそうな笑顔の横に、シオンがニコちゃんで座っていた。
女性が一人一人笑顔で立って、会話のプロらしく、面白おかしく自己紹介をした。
母親も楽しそうで、女性達とすぐに打ち解けたようだった。
豊はオヤジと庭に出て、全ての車のボンネットを開けて、2人で笑顔で話していた。

「しかし・・よく隠したね～・・・シズカも美由紀も」とカスミが不敵で言った。
「本当にね～・・・ユリカ姉さんに悟られないなんて」と蘭が満開で微笑んだ。
「ユリカ姉さんが、MAXパワーの時なら無理でした・・今は次段階に移行してる時ですからね～」と美由紀が二ヤで言った。
女性全員がユリカを見た、ユリカは二ヤで美由紀を見ていた。
「どうやら正解みたいですね～・・怖くなった、美由紀が」とネネが笑顔で言った。
「なぜ分かったの？・・美由紀」とハルカが二ヤで聞いた。
「最近の波動が変わった気がして、原因は感じてました。
関口先生と小僧と3人で話した時、私はゲームをしました。
小僧がニヤで私を見て、その瞳がいつもと違ったから。

もう一人の小僧だと思いました、だから私も試してみた。
ユリカ姉さんが、ユリアで愛を読むのなら、私の考え出した方法を。
私は小僧の話を聞きながら、心で先にユリアに語りかけた。
大切な事だから内緒にしよねって言ってみた、全然自信は無かったけど。
後でユリカ姉さんが感じてないのを感じて、嬉しかったんです。
でも・・超えてきました、底知れぬ深海の女は。
それを自分の感性で感じたように、次の段階に自然に踏み出した。
それが今のユリカ姉さんです、その感性を愛し・・上げ続ける。
だから小僧も私も次の手を考える、それがユリカゲーム。
小僧と私は隠れて、ユリカ姉さんが探す・・楽しいゲームです」
美由紀はユリカに二ヤで言った、ユリカも二ヤ継続で返していた。
女性達は沈黙して、その2人を見ていた。

『美由紀・・言ったら早くなるだろ・・ユリカは想像の外側にいるんだから』と私が美由紀に二ヤで返した。
「良いのよ・・小僧が沙紀の女性としての壁を話したんでしょ・・ならユリカ覚醒は絶対必要でしょ」と美由紀が二ヤで返してきた。
「そこまでは、昨夜のエースの話で感じたんだけど・・どう促すのか、それが分からなかったわ」とユリカが爽やか二ヤで言った。

「それは、私じゃ考え付きませんでした・・その提案者が来てますから、聞きたいな～」と美由紀が二ヤで恭子を見た。
女性全員が恭子を見た、母親も楽しそうな笑顔で恭子を見た。

「皆さん・・これから海で集中するんですよね？」と恭子が二ヤで返した。
「うん・・蘭姉さんのケンメリ同乗者以外は、恋が裏に行くよ」と

シオンがニコちゃんで返した。
「私・・疲れちゃって、帰りはマキの後ろで帰るから・・ユリカ姉さんは、豊の後ろでお願い出来ませんか？」と恭子がユリカに微笑んだ。
全員がユリカを見た、最強爽やか笑顔が出ていた。

「仕方ないね～、恭子・・ありがとう」とユリカが微笑んだ、恭子も笑顔で返した。
「しまった～・・2段上がってしまう・・どうしよう、小僧」と美由紀がウルで言った。
「美由紀、責任取りなさいよ・・又遠くなるじゃない」と蘭が二ヤで突っ込んだ。

「お願いします・・詳細を教えて下さい、2段上がる」とホノカがウルで言った。
ユリカと蘭と私が、二ヤで美由紀を見た、美由紀はウルで始めた。

「ユリカ姉さんは、その力ゆえ・・男性との関係に悩んできました。
大人の女性としての悩みでした、でも本当の悩みはそれじゃない。
全員分かっていると思いますが、聡明なユリカは・・そんな事で悩まない。
ユリカという人は、駆引きに晒されて来た・・愛する男の心に、何度も絶望した。
恋愛を成就する為に繰り出す、嘘と偽りを感じ過ぎてきた。
だから強力な殻を作っていた・・それは小僧にしか破れなかった。
小僧はユリカ姉さんが自分を感じてると、出会ってすぐに感じたでしょう。
多分・・小僧の最も敏感な温度で感じた、出会った時の抱っこで。
愛する人を読む事が出来る、ユリカ姉さんの力を感じたんでしょう。

だから2度目の抱っこで深く潜れた、羊水の揺り篭、そこに響く子守唄まで。
何故かと問われれば、簡単な事です。
その時にはもう、小僧はユリカ姉さんを愛していた。
ユリカ姉さんの悩みを感じ、それが自分の悩みでも有ったから。
ユリカ姉さんの悩みは、マリちゃんと小僧にしか分からない。
その深い悩み・・それを小僧は、今でも深海と表現する。
私は今回の沙紀の絶望の話で感じた・・小僧が授業中ずっと考えてたから。
もう一人の自分を出して、真剣に考えてた。
それは沙紀に対する不安じゃないと思った、何なんだろうと考えた。
沙紀に対する不安が有るのなら、小僧は絶対に実行しない。
自分が同行出来ない状況で、沙紀を危険な事には誘う訳が無い。
小僧は沙紀の次の段階の為にどうしてもしたい、でも何か大きな不安が有る。
そう思ってハッとしました、それなら蘭姉さんかユリカ姉さんに対してなんだと。
小僧は、この2人に対してだけは、沙紀の世界に行くなとは言えない。
カスミ姉さんや、他の女性には・・行くなと強制出来るでしょう。
それならば・・この2人に対してだと、確信しました。
そして理解出来ました・・その不安の対象は、ユリカ姉さんなんだと。
小僧はユリカ姉さんの、根源的な不信感を払拭出来ない。
それは・・小僧はユリカ姉さんに、全てを晒すから。
小僧の自分のいやらしさも欲求も晒す、何も隠さずに向き合っている。
だからこそ、ユリカ姉さんの信頼を得られる、それでしか信頼は得られない。

そう考えているんだと思いました・・それを感じて私は怖くなりました。
今回の沙紀の絶望の世界、本当に強敵なんだと感じた。
小僧はユリカ姉さんを信じて、関口医師と話した・・そして話したんです。
シズカ先輩と恭子先輩に・・同行して欲しいと、頭を下げた。
マキ先輩・ヨーコ先輩・久美子先輩、この3人には言えなかった、ユリカ姉さんの近くにいるから、ユリカ姉さんが先に気づくと止まるから。
今踏み出した次の段階へのステップが止まるから、沙紀の世界への集中の為に。
小僧の真剣な表情を見て、それを見ただけで・・2人は感じたようでした。
小僧の悩みを感じた・・それがユリカ姉さんの事だと、瞬時に理解した。
恭子先輩は即答しました・・了解、私も潜るよ・・憧れのユリカ姉さんと。
次の段階に入った、ユリカ姉さんとね・・恭子先輩は笑顔でそう言った。
その時には手段を思い付いていた・・その高みにある人に次の提示が出来る者。
それは豊さんしかいない・・それを提案出来るのは、自分しかいないと。
恭子先輩は、そう感じていたんですね・・今分かって、本当に感動しました。
バイクに乗って体を密着する、そうなれば・・ユリカ姉さんは絶対に感じる。
男の心を感じる・・それで不信感を払拭できる、それが出来る唯一の男。
豊しかいない・・豊なら出来る、なぜならば豊には裏が無い。

心に忠実に生きる男だから・・恭子先輩は、何の疑念も無く託した。
大切なユリカ姉さんの心を・・愛する豊の心に」
美由紀は笑顔で言った、ユリカの笑顔が美由紀を見ていた。
「そうだったのか～・・そこまで人を想えるのか、嬉しくて涙が出そうだよ」とリリーが潤むリングで言って。
「それならば・・沙紀の世界、最強だね・・私達も上るしかない、次の段階に」とセリカが言って。
「試験が待ってるんだね・・偽らないと言う、大切な試験が」と小夜子が笑顔で言って。
「エース・・それならば、もしかして入れるの？」とカレンが私に微笑んだ。
『多分入れる・・女性達の心の相談相手なら、それが偽りの無い姿なら・・アンナは入れる』と笑顔で返した。
「入って欲しい・・今朝、リアンと話したけど。
2人でそう思ったよ、アンナ姉さんに入って欲しい。
それが女性達の支えになると、私もリアンも感じたよ」
ユリカが爽やか笑顔で言った、女性達も笑顔で頷いた。
「ここまで来たんだ、もうヒントを出して良いだろ・・姿無き女に対する、お前の考えを」とカスミが強く言葉にした。
女性達が全員、真剣な瞳で私を見た。
『俺は自閉症という病を、認めていない・・何も足りないと思っていいない。

強い能力得た選ばれた人間が、強制的に何かを切られてる。
今でもそう思っている、その力を表現させない為だとね。
脳が判断して、大切な部分を切っている・・当事者も何かを感じてる。
だから恐怖とか不安に強く反応してしまう、それがパニックになる。
マリはそれを乗り越えた、自分の強い意志で乗り越えた。
だからマリは今では、何の不安も無く自立できると思える。
俺は沙紀を、その世界に連れ出したい、だから今回の事を決断した。
沙紀が抱えてる絶望・・それは姿無き女が洗脳した。
お前には女としての幸せなど存在しないと、繰り返し伝えて洗脳したんだろう。
その理由も映像と言葉で伝えたと思う、だから沙紀はその部分に絶望している。
それを打破する事も、その方法も言葉も・・男の俺には分からない。
女性としての幸せとか、女性として愛されたいとか・・理解できない。
姿無き女は最後に問いかけるだろう、それを沙紀も聞くだろう。
姿無き女に勝つんじゃない・・沙紀の心を動かせるのか、それが勝負。
確固とした心と、断固とした決意・・それが必要になるだろう。
綺麗事を言った瞬間に戻されるだろう、それが本心でなかったら。
今回は誰が辿り着くのかなんて、想像も出来ない・・そして最後のゲームも。
リアンとユリカと蘭・・この3人でも無理かも知れない。
何故ならば・・夜の仕事の経験が、あまりにも深いから。
常人の何倍も、男の駆引きに晒されて来たから・・それを読み対応してきたから。

難しいかもしれない・・だから俺は限界ファイブも用意した。
そして・・俺は心から信頼して、エミを送り出す。
限界ファイブと美由紀と秀美、そしてエミ・・それに期待してる。
夜の女性達は向き合わねばならない、今度は自分の心の最深部と。
そうしないと届かない・・あの純粋の、沙紀の深海には』

私は強く言葉にした、美しい女性達を見ながら。
北風が冬を連れて吹いていた、しかし庭にいる、豊の背中は揺れることは無かった。

「行っといで・・恋が浦には何かが有る、その場所なら気付けるかも知れないよ」と蘭が満開で言った。
「私も行くよ・・豊の後ろなら、どこまでも」とユリカが笑顔で言った。
「ユリカ姉さん、寒い時はすぐに代わりますから」とカスミが不敵で言って。
「その時の為に、ジャンケンでもして、順番を決めとこうか」とリリーが笑顔で言って。
「それだけは必要ないわ・・寒い訳無いでしょ、あの熱い背中の後ろが」とユリカが爽やかに微笑んだ。

限界ファイブが片付けはすると言って、女性達を送り出した。
ユリカの嬉しそうな笑顔を見ていた、少しの寂しさを抱えながら。

豊にユリカが笑顔で言って、豊も笑顔でヘルメットを被って、バイクに跨った。
ユリカが後ろに乗って、2人でオヤジに礼を言っていた。
女性達もお礼を言って、車に乗り込んだ。
豊が先頭で走り出し、ネネがそれを追って、順番に出て行った。
静寂が戻ってきて、私は自分でビールを注いで飲んでいた。

「小僧・・ヤケ酒だね、オヤジさんに付き合って貰えば」と美由紀が二ヤで言って。
「淋しそうだね～・・私が酌をしてやろう、光栄に思いなさい」と秀美がビールを注いでくれた。

蘭と久美子が、残った料理を大皿に集めて、私の前に二ヤで置いた。
私は食べながら、実は嬉しかった、そこまで回復していた。

《ユリカ・・俺は淋しさより、楽しいよ・・楽しんでしまう、次のユリカを》と心に囁いた。
優しく暖かい波動が何度も来た、嬉しそうなユリカの波動が。

片付けも終わり、シズカがメタルの義手を秀美に装着した。
秀美と美由紀の嬉しそうな笑顔と、蘭父さんと蘭母さんの笑顔と。
恭子とマキとヨーコと久美子の笑顔に囲まれた、満開の笑顔を見ていた。

時は忠実に進み、１２月も半ばに入っていた。

ユリカは覚醒し続ける、そして踏み込んでいく、誰も到達していない世界に。

沙紀の絶望の世界、その根源は・・私の予想を遥かに超えていた。

そのヒントを持って現れる、楽園ブルーがヒントを提示する。

そして女性達に強く問いかける・・何を目指して生きるのかと。

満足でも、幸せでもないのなら・・それは何かと。

高みから響く、その言葉が・・響き渡る日が近づいていた・・・。

【冬物語？】

北風にも寒さにも揺れない、心の熱が守ってるような立ち姿。
中心に芯が一本有ると感じる、完璧な中心を貫く真直ぐな芯が。

私の隣にオヤジが座り、私はビールを飲みながら笑顔で話していた。
オヤジは豊の作った掌を触りながら、嬉しそうだった。
限界ファイブと蘭が、母親と美由紀と秀美を囲んで楽しそうに話していた。

その時、庭に可愛い蘭を抱いた鈴が笑顔で入って来た。
若い男を連れて、蘭の母親に招かれて、玄関から入って来た。
私は可愛い乳児の蘭を抱き上げて、男に挨拶をした、乳児の蘭はご機嫌だった。
歩くのもかなりスムーズになり、言葉の表現も増えていた。

男は蘭の両親に挨拶をして、仏壇の前に座り、手を合わせた。
その背中に愛情があり、私は弟の友人なんだと感じていた。
乳児の蘭を満開蘭が迎えに来て、鈴と一緒に女性達の中に入った。
乳児の蘭を奪い合うように皆で抱いて、乳児の蘭も嬉しそうだった。

『ここにどうぞ・・あの女子連合は怖いですよ～』と私が男に二ヤで言った。
「怖そうだね・・パワーが凄いね」と笑顔で言いながら私の横に座った。
『小僧です・・てか、チャリサーファーと名乗った方が良いですね』と笑顔で言った。
「油津の修だよ・・時々木崎で会ったよね」と笑顔で返された。

私は海で何度も会っていた、その男は有名なサーファーだった。
日南の港町【油津の修(シュウ)】と呼ばれて、サーファー仲間にも慕われていた。
冬でも真黒の肌で、その中に真白い歯を見せて笑う、精悍な感じの男だった。

「あなたが、油津の修君ですか」と母親が笑顔で言って、修の横に座った。

「お父さん、お母さん・・すいません、線香手向けに来たかったのですが。
俺もあの時１６で・・凄くショックを受けました。
大切な仲間を失って、喪失感に襲われて・・心の対処が出来なかった。
洋を忘れた事はありません・・本当に良い奴でした」

修は静かにそう言った、私は蘭の弟の名前が【洋(ヒロシ)】だとこの時に知った。
蘭がオヤジの横に座り、修にグラスを渡しビールを注いだ。

『それで修さんは、サーフィンを始めたんだね。
俺は修さんの友達の、カイ君から聞いた事があるよ。
修さんのサーフィンに取り組む姿勢が、素敵だと俺が言ったら。
カイ君が教えてくれた・・修は海に出ると、仲間を思い出すんだと。
その仲間と海を見ながら、夢を語り合ってたらしい、
だから海と一生触れ合うんだろう、その仲間を感じたいから。
その仲間の名前が、海を意味する名前だと言ってたよ。
修は忘れたりしない、そして感じたいと思って海に入る。
だから海にも、サーフィンにも・・真摯に向き合えるって。

カイ君も嬉しそうに言ってたよ、俺はそれで好きになったよ。
【油津の修】を・・だから逆に声をかけ難くなってたよ』
私は正直に話した、修は私に笑顔を見せてくれた。
「カイ先輩に誘われたんだよ、海と一生付き合うなら、サーフィンが良いとね。
俺は１７で始めたよ、そして１８で車を持って出会ったんだ。
伝説のチャリサーファーに、見てるだけで嬉しかったよ。
小学生にして、チャリでサーフィンしに来る事より、その姿がね。
俺はミスター望月さんから聞いたんだ・・小僧は背負ってるんだよって。
望月さんが教えてくれた、俺が何かを背負ってると感じたんだろう。
あの高みにいる人は・・それで教えてくれたんだと思う。
小僧は沢山の仲間を見送ってる、それでも新しい関係を作る。
その行為が、又新しい喪失感を招いても、絶対にやめたりしない。
それが仲間達との友情だと信じてるんだ・・お前も海に何かを求めるな。
純粋に海を楽しめよ・・そうしないといけない、友情か愛情か分からんが。
相手はそれを望まないよ・・お前の笑顔だけを望んでるんだろ。
それが【情】という物だろう・・俺はそう思ってるよ。
嬉しかったです、表現できないほど・・望月さんの背中を見送りながら。
間違いに気付きました・・それから、真の意味でサーフィンが好きになりました。
そして海が好きになったよ・・あの少年の笑顔のおかげでね」
修が精悍な笑顔で言った、蘭の両親も蘭も嬉しそうな笑顔だった。

私も嬉しくて修の笑顔を見ていた、鈴に感謝をしながら。
『修さん・・海で語り合ってた夢が有ったんですね、教えて下さいよ。
両親も姉もそれを望んでいます・・洋さんを忘れないのだから。
自分達では知る事が出来ない、洋さんの夢も・・好きだった女子も。
知りたいと願っています・・お願い出来ませんか？』
私は笑顔で言った、両親も蘭も笑顔で頷いた。
「それは良いけど・・その前に、美由紀ちゃんに聞きたいんだよ。
昨年の夏・・美由紀ちゃんを海で見て、俺は感動したんだ。
海から上がった時の笑顔も、沖にいる時の笑顔にも。
そして上がった時に、ミスターにこうお礼を言ったんだ。
ヒトミを感じたよ、海水に含まれてる・・ヒトミの優しさを。
そう笑顔で言って、ミスターに抱きついた。
その顔が喜びで輝いていた、俺はその言葉の意味が知りたかった。
美由紀という、俺では絶対に到達できない場所に棲む。
その少女の感性が捕らえた、海の優しさをね」
修は美由紀に笑顔で言った、美由紀も笑顔で返していた。
「私は・・ずっといじけていました・・足が無いことに・・・・」
美由紀はヒトミとの思い出を話した。
美由紀が笑顔で話すのを、修は真剣に聞いていた。
蘭の両親も鈴も、美由紀の笑顔を見ながら聞いていた。
「・・それで煮詰まってしまって、小僧に海で泳いでみたいと言った。
小僧がミスター望月さんに相談して、ミスターが車で連れて行っ

てくれました。
私は沖でボードから海に飛び込んで、小僧に支えて貰っていた。
そして力を抜けと言われて、力を抜いてみました。
小僧が私から体を離すと、私は浮いていました・・その時に感動しました。
足が無い不便さを感じなかったから・・それまで一度も感じた事が無かった。
自由だったんです、海が支えてくれてるような感じでした。
それを感じて、思い出しました・・ヒトミを思い出しました。
ヒトミの優しさは、これだったんだって・・確信的に思った。
海は懐かしい場所なんですよね・・人はそこから上がって来たから。
その時には・・海で生きる時には、当然足は無かったですよね。
その場所に戻って、私は気付くことが出来ました。
ヒトミの優しさを、それは遠い過去からの想いだったんだと。
常に死を意識して生きていたヒトミは・・気付いていたんだと思いました。
ヒトミが私の心を支えてくれた時と、海が私の体を支えてくれた時。
同じでした・・その優しさと温もりが、同じだった。
だから私は私の言葉で表現したかった、ミスターに感謝の言葉を。
それがヒトミが海水に含まれてるでした・・私は心からそう思った。
海には含まれていると思います・・沢山の生命の想いが。
小僧が教えてくれた、恋が浦の仙人の言葉・・それが響いていましたね。
私は月光の海でヒトミを見送った・・でもそれはヒトミの体をです。
物質的な体を見送っただけ、心は見送ったりしない・・一生側にいる。

海を見ると今でも思い出します・・陽の光に当たった事の無い。
真白なヒトミの体を・・そして私の中に蘇る、純白のヒトミの心が」

強かった、美由紀は全力で想いを語った。
それは修に真実を話させたいから、蘭と両親を想っていたのだろう。
美由紀は久々の全力で話して、笑顔で強く伝えて締めた。

修は嬉しそうで、両親と鈴は泣いていた、限界ファイブが美由紀を笑顔で見ていた。
蘭は満開で美由紀を見ていた、感謝しているのがはっきりと分かった。
強烈な波動が何度も何度も押し寄せて、美由紀の想いを喜んでいた。

「ありがとう、美由紀ちゃん・・小僧、恋が浦の、マサキ爺さんの話をしてくれよ」と修が笑顔で言った。

『俺は恋が浦で出会った・・昨年の夏休み家出して・・・』私は恋が浦の話をした。
蘭の満開と、両親の笑顔を感じながら。

『帰る時・・爺さんの店に寄った・・ヒトミの話をして、そしてこう言われた。
海は全てを受け入れる・・引く時に思い出を。
満ちる時に夢を、全ての想いを受け入れてくれる・・だから現れる。
その受け入れた物を、地上に帰す時がある・・その場所は必ず有る。
恋が浦には何かが棲む・・それは目で見える物ではない。
心が感じる事なんだ・・覚えていれば、忘れなければ感じる。

何も無くしていないと感じる・・生命は無くならない。
必ず想いが繋がって進む・・全ての想いは、消えることは無い。
海が消えない限り・・その深海に生き続けている。
そうマサキの爺さんは言った、俺は嬉しかった・・そう感じていたから。
俺はある少女の言葉を常に持っている・・道を繋げという言葉を。
その意味は・・ヒトミの想いを繋げと言ってると思ってる。
生きる事にも、死ぬ事にも・・こだわるなと言われてる。
死に大きな意味を持たせるなと言われてる・・それは辿り着く場所じゃない。
帰る場所なんだ・・海に帰るだけなんだと、最近は感じてるよ』
私は修の笑顔を見ながら、笑顔で伝えた、ユリカの波動に押されながら。

「俺は洋と高校で出会いました、入学式で・・同じクラスでした。
俺が油津で洋が飫肥出身、学校はその真ん中にありましたね。
洋は穏やかな男でした、俺はそれを感じて、すぐに意気投合しました。
俺は漁師町の男で、中学時代はヤンチャで、高校では友達が欲しかった。
ヤンチャ時代の友達とは、どっか心の距離があって、馴染めずにいました。
俺の家は油津の海寄りにあります、台風の時はすぐに非難するような場所です。
２階の部屋から、海が見えます・・洋はそれを気に入りましたね。
洋が俺の家に初めて来たのは、高校に入学した週末でした。
俺は洋を泊めて、一晩中話していました・・その時に聞きました。
洋が〇〇高校の伝説の女の弟である事を、洋は楽しそうに話していました。

とんでもない姉だって・・でも自分は大好きだって言っていました。
性格が違いすぎて、本当の姉弟かと思うけど・・憧れてると言っていました。
俺は羨ましかった、実の姉を友人に対して・・憧れてると言える事が。
いつか誰かと付き合ったら、その時に自分が悩んだら・・必ず姉に相談するだろう。
洋はそう照れて笑いながら言っていました、嬉しそうでしたよ。
姉はお袋に似ていて、自分は親父に似ていると、洋は言ってましたね。
オヤジは言葉で言わないから、自分もこんな性格で言えないから。
互いに伝わらないと、反省を込めて言ってました。

洋は農業を継ぐことは、嫌じゃなかったと思っています。
俺も本人から聞いた事は無いけど、授業を受ける洋を見ていて感じました。
その直向さと真剣さが、将来を見据えていたと思っています。
そして洋はお袋さんの事をこう表現してました、理想の女性だと言っていました。
俺はマザコンかも知れないと、照れながら・・でも強くそう言いましたね。
男同士だから、母親の話はあまりしなかったけど・・それだけは覚えています。
そして洋が好きになった女子を聞いた時、なるほどと思いました。
〇〇高校のマドンナと言われながら、難しい女と言われ続けていた相手でした。
洋はその子が登校していて、自転車のチェーンが外れて困っている時に出会った。
洋は話しかける事は出来なかったけど、黙ってチェーンをはめた

そうです。
緊張して話せなかった・・俺は駄目だな～、ずっと前から憧れてたのに。
最大のチャンスだったのに、俺は馬鹿だと言っていましたね。
でもそれから、登下校で会うと、互いに挨拶をする関係になっていました。
洋はそれだけで嬉しそうでしたね、そして仲良くなる出来事があります。
その子の妹が小学生で、母親が仕事に行っていて、鍵っ子でした。
その子が帰るまで、妹は一人で留守番してたのでしょう。
その日はその子が帰っても、妹がいなくて。
６時を過ぎた頃、その子も不安になった。
洋は駅の近くで、不安を抱えて探しているその子に会った。
話を聞いて、一緒に探したそうです・・そして洋が見つけるんです。
母親のパート先の洋品店を、遠くから見ている少女を。
少女に洋が優しく声をかけて、その子の家に連れて帰った。
その事がきっかけで、妹は洋に遊びに来てと言うようになります。
それで洋はその子にも誘われて、家に遊びに行っていました。
緊張して、妹としか上手く話せないと言っていました・・楽しそうに。
その妹が素敵な子で、洋をフォローしてたみたいですね。

洋は付き合う段階までは行っていません、告白すら出来ないで逝ってしまった。
でも通夜で会ったその子の涙を見て、お互いに愛情を持っていたと感じました。
その子は今、福岡にいます・・確か美容師になったと聞いています。
お父さん、お母さん・・そしてお姉さん、洋にはいました。

愛する女子が、心を通わせた憧れの存在が・・互いに相手を想い合った存在が。
洋が亡くなって以降の、その子の変化が俺は嬉しかった、明るい女子になったから。
その子は母子家庭で、それまで必死に生きてたのでしょう。
でも洋の優しさに触れて、その存在を失って・・何かを感じたのでしょう。
それで変わった、いえ戻ったと言った方が良いんでしょうね。
本来の自分に戻った、さっきの小僧と美由紀ちゃんの話でそう思いました。
あの子も洋を心の中に入れた、だから自分らしく生きることを選択した。
そうしないと、洋が悲しむと感じたんでしょう・・素敵な少女だったから。

洋が語った夢・・1つだけ紹介します、海を見ながら語った夢を。
アメリカに行ってみたいと言っていました、自分は殻に閉じこもっているから。
自分の事を誰も知らない場所で、自分がどう変化すのかが知りたいと。
農業を継いで、精神的に余裕が出来たら・・一度渡米したいと。
そして自分を試してみたいと言っていました・・あの憧れの姉のように。
自分の心に忠実に生きる、生き方の憧れ・・あの姉のようにと、言っていました。
俺は今日、鈴先輩に誘われて来ました・・小僧という名前が出て、俺は驚いた。
そして蘭ちゃんに対する、小僧の話を聞いて嬉しかった。
俺も洋の思い出を、ずっと心に抱いていたから、話したいと思っていたから。

今・・気持ちが軽くなりました、お話できて」

修はそう静かに言った、本当に素敵な男だと思っていた。
そして私は感動していた、ある事に気付いて。
オヤジも母親も蘭も泣いていた、その顔は嬉しそうだった。

「小僧・・何に気付いた、出し惜しみするなよ」と美由紀が潤む瞳の二ヤで言った。

『洋さんの愛した女子、俺はその子を知らない、写真しか見た事がない。
本当に可愛い少女だった、その人の妹が・・自慢しながら見せてくれた。
その妹・・洋さんの姉に対する想いを感じて、その気持ちをフォローした。
その妹を・・俺は知ってる、今確信的にそう思ってる。
その妹の名前は・・ケイだよ・・そして今の源氏名は、ハルカだよ。
素敵な話だね、修さんありがとう・・俺も嬉しかった』

蘭が私を見て凍結していた、女子達も凍結して私を見ていた。
両親が泣いていて、蘭の母親に乳児の蘭が抱っこと言って甘えていた。
母親は本当に嬉しそうな笑顔で、乳児の蘭を抱いていた。

「小僧・・そうだよ、その子の妹は・・ケイという名前だよ。
その子はケイに洋の死を隠した、ショックを受けると思ったんだろう。
洋はアメリカに留学したと言ったらしい、ケイはそれを喜んでいたよ」

修が驚いて話してくれた、私は笑顔で返した。
「出会う為にそこにいる・・素敵です、蘭姉さん」とマキが潤む瞳で言って。
「出会わせたと感じますね・・洋さんが出会わせたと」とシズカが言って。
「それを繋いだね・・繋いでみせたね、さすがだね・・エース」とヨーコが微笑んだ。
蘭が満開で泣きながら、私に抱きついた、私は強く蘭を抱きしめた。強烈な波動が私と蘭を包んでくれた、蘭の覚醒する青い炎を感じていた。

「又来ます」と笑顔で言って、修と鈴が帰って行った。
私は鈴に礼を言って、乳児の蘭を抱き上げてお別れをした。
両親と蘭は、いつまでも2人を見送っていた。

両親に礼を言って、シズカに手を振って帰路に着いた。
美由紀と秀美とヨーコを後ろに乗せて、私が助手席に乗り、蘭が満開で運転していた。
目の前には、恭子を乗せて走るマキの姿が見えていた。

美由紀の家に送り、ヨーコをアパートに送った。
蘭はそれ以来、弟の話をしなかった、私も話さなかった。
蘭のご機嫌満開を見ながら、他愛も無い馬鹿な話をしていた。

添い寝をして、蘭の少し高い温度を感じながら眠った。
翌朝起きて、ご機嫌継続中の蘭に手を振って登校した。
学校で沙織に突っ込まれて、２８日の沙紀の話をした、当然自分も

行くと笑顔で言った。
授業が終わり、美由紀を押して帰り、病院で3人に会った。
由美子の体調が良く、その頃は何でも話してくれるようになっていた。
沙紀は昼間、水彩画にチャレンジしてるようで、私が行く頃には何も描いてなかった。
ミホは少しだけ温度の変化が出て、私はそれだけで嬉しかった。
夕方ＰＧにいつものように皆が集まった、ユリカも集中して来ていた。
『ユリカ・・それはクラブ幻海用なの、それとも豊効果なの？』とウルで聞いてみた。
「豊効果です・・クラブ幻海ごときで、特別な集中はしません」と爽やか二ヤで返された。
「凄いな～・・豊効果・・それに蘭姉さん、何があったんだろう？・・その変化」とカスミが蘭に二ヤで言った。
「今はまだ言えません・・忘年会まで、取っておきます」と満開笑顔で返した。
「楽しみだな～・・きっと面白い話だ」とカスミがニヤで言った。
「エース・・そろそろ、決めましょうか・・蘭も上がったみたいだし」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
『そうですね・・どっかで線を引かないと、次の段階に進めないから』と笑顔で返した。
『3月末までにしましょう、蘭とナギサの挑戦期間。
3月末にユリさんが、結果発表して下さい・・その時にマキの試験も。

試験官全員の結果を聞きましょう、マキがＯＫの時は、俺が１日で準備します。
来年は初めから飛ばします、若手にはクラブ幻海の挑戦がありますし。
共同体の各店に、リリーを出します・・その凄さを感じて貰いましょう。
俺の現時点での構想はこの位ですか、どうでしょう？』

私はユリさんに笑顔で言って、満開蘭を見ていた。
「良いですね、了解です・・蘭、ナギサに繋いで下さい」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「了解です」と蘭も満開笑顔で頷いた。

「それと・・年末の休みに、店の改装の為に業者が入ります。
このＴＶルームの横、小窓まで打ち抜いて１部屋作ります。
ジンと話して決めました、ジンが電話を引くそうです。
派遣の仮の事務所を作りますね、机とソファーだけでも置くらしいです。
別のビルに事務所を借りられて、エースが５人娘と離れるのは避けたいから。
私が提案しました・・レンとハルカとマキは、派遣の電話も取るように。
カレンとリリーが居ない時は、３人でフォローして下さい。
それが私の今ある構想です・・エース、良いですね」

ユリさんが薔薇で微笑んで、レンとハルカとマキも笑顔で頷いた。

『ありがとうございます、助かります。
共同体以外の店が出ましたから、専用電話が欲しかったです。
リリーとカレンも忙しくなりそうだし、北斗が集中してきてます

ね。
そしてアンナ・・俺はアンナに難しい提案をするよ』
私はアンナに笑顔で言った、アンナは少し緊張して微笑んだ。
私はエミを手招きして、膝に抱いて手を握った。
『沙紀がクリスマス頃に、退院が決まりそうなんだ。
俺は沙紀の不安をもう1つ外したい・・それは女性としての絶望なんだ。
沙紀は洗脳されている、姿無き女が洗脳してきた。
沙紀に女性としての幸せは掴めないと、ずっと伝えて来たんだろう。
その部分で沙紀は絶望してる・・だから俺は、その絶望の世界を壊したい。
沙紀に希望を持たせ、挑戦を促したい・・沙紀なら出来ると信じてる。
今回は・・男の俺は絶対に入れない、そして母親である人も入れないと思う。
律子も北斗もユリさんも、サクラさんも入れない。
そして高みに居る、大ママとミチルも無理だろう。
今回もやはり、リアンとユリカ・・ユリカが中心になると思う。
だが・・俺は今回は難しいと思ってる、夜の仕事をしてるメンバーには。
男の心を読んできた、その仕事としての経験が邪魔になる。
でも捨てる事は絶対に出来ないだろう、そうである限り困難な事なんだ。
だから限界ファイブを揃えた、そして美由紀と秀美と沙織も参加する。
そして俺は・・エミを送り出す、期待を込めてその背中を押す。
俺は想定していない、今回の難問など・・男の俺には想定出来な

い。
だから、俺は入って欲しい・・アンナに入って欲しいんだ。
難しい事だと思ってる・・でもアンナなら出来ると信じてる。
アンナが入れれば、女性達の精神的な支えになる。
ユリカもリアンもそう思ってる・・俺が今からアンナにヒントを出し続ける。
潜入予定日は、１２月２８日・・どうだろうアンナ、チャレンジしてみないか。
母親であるアンナ、しかし若い女性の相談相手であるアンナ。
俺は心から期待するよ・・アンナなら出来るって、そして守ってくれるとね』

私は想いを真剣に伝えた、アンナも集中した良い表情だった。
「もちろん、挑戦させて貰うよ・・絶対に入ってみせるよ」とアンナが笑顔で言った。
『ありがとう、アンナ・・嬉しいよ』と笑顔で返して、エミを見た。

『エミ・・今回は辛いかも知れない、エミ以外の４人娘は入れない。
幼すぎて入れないんだ、スーパーマリアマンもいない。
今回は深海だと思ってる、その場所は海の深く・・深海に有る。
俺はサクラさんの許可は取った、でも本心を言うと・・迷ってる。
その場所のエミを見たいと思うのは、俺の好奇心なんじゃないかと思ってる。
エミに・・７歳のエミに、辛い経験をさせるのかも知れない。
それでも俺はエミの背中を押す・・そしてその姿に期待してしまう。
俺は正直に言うよ・・今回も１番期待するのは、エミだよ。
俺が想定も想像も出来ない世界・・だからこそ、期待してしまう。
俺の想いを一番感じてくれてるであろう・・エミに期待する。
エミの出す答えが、その時の言葉が・・俺の言葉だと思ってる。

行って来い、エミ・・俺の好奇心を満たしてくれよ、エミ。
そして沙紀の心と話してくれ・・沙紀が退院出来るように。
沙紀の心の病室から・・退院出来るように・・よろしく、エミ』
私は言葉と温度で強く伝えた、エミの温度の変化が嬉しかった。
「好奇心で良いよ、エース・・私はエースに提案されたいの。
二ヤ二ヤ顔で、やってみろと言われたいんだよ。
今の言葉で２つヒントを貰ったよ・・必ず私が辿り着く。
夜の女性に難しいのなら・・１６歳の限界ファイブにも難しいんでしょ。
美由紀ちゃんと、秀美ちゃんと、沙織ちゃんが、最後の砦なんだね。
私は正直に答えるだけで良いんだね・・こんなに簡単な事はないよね。
エースはそう言ったんでしょ・・姿無き女、存在しない者。
それは経験により備わる・・自分が作り出す、存在なんだね。
それがなぜ沙紀ちゃんの中に存在するか、それが今回の問題でしょ。
潜水艦を作るよ・・橘橋の下から出航するよ、深海を目指して。
多分そこに着くまでに、相当に強い敵が存在しそうだね。
今度は私が頂きます・・最強女戦士の称号を、ユリカちゃんから。
私は最後の挑戦者の愛弟子・・キャプテン・エミだよ。
その教えは絶対に守り抜く・・絶対に諦めないと言う、大切な教えは」
エミの言葉が響いていた、静寂の空間に暖かい何かが浮遊していた。
私はそれを感じて、エミを送り出す決心がついた。

私は本当に嬉しかった・・エミの言葉に、希望が重なっていた。

光の届かない深海の輝く場所を目指して、エミは出航しようとしていた。

純粋という武器に、未熟という弾丸を込めた。

最強の武器を担いで、エミは笑った・・姿無き女に、二ヤを出すように・・・。

【冬物語？】

その時は必ず来る、どんな一流選手でも。
その時を自分で判断する、誰にも教える事は出来ない。
最も辛い判断は、自らが下すしかない・・自分の心に。

女性達が食事をして、私は5人娘と遊んでいた。
『カレン、ご機嫌だね～』と笑顔で隣のカレンに言った。
「恋が浦・・素敵だったよ～」とカレンが可愛く微笑んだ。
『素敵でしょ・・あのメンバーなら、目立ったね』と笑顔で返した。
「そうだけど・・誰もいなかった、本当に素敵な場所だったよ」とカレンは嬉しそうに言った。

ユリカが着替えて来て、その純白のドレス姿に見惚れていた。
「さて・・行きますか」とユリカが私に爽やかに微笑んだ。
『行ってみますかね・・リリー、次の幻海の中心になるとすれば誰なの？』と二ヤで聞いた。

「アイコ姉さん・・間違いなく、その人だろうね」とリリーが二ヤで返してきた。
「それじゃ、エースのお手並み拝見といきますかね」とユリカが腕を組んだ。
『ユリカは・・一番バッターとしての、繋ぎに徹するのか～』とウルで返した。
「次がユリ姉さんだから、場を暖めるのが私の使命よ」とユリカがユリさんに微笑んだ。
「了解、ユリカ・・頼みますね」と薔薇で微笑んで返した。
「はい・・勝負は蘭とナギサですから」と微笑んだユリカと、蘭の

満開を確認して通りに出た。
佐々木の爺さんがユリカのドレス姿を見て、笑顔で歩み寄って来た。
「ユリカ姫・・今夜は何処へ？」と佐々木の爺さんが笑顔で言った。
「クラブ幻海を経験に・・少し行って来ます」とユリカが爽やか笑顔で返した。

「え！・・エース、和解したと聞いたけど・・いきなりユリカ姫なのか？」と佐々木の爺さんが驚いて聞いた。
『まぁね・・新しいビジネス相手だから、出だしはベストメンバーで』と二ヤで返した。
「ほほ～・・噂に乗せるよ・・今後の予定は？」と佐々木の爺さんが返してきた。
『ユリ・蘭・ナギサで行くよ・・そんな感じ』と二ヤで言った。
「完璧な本気モードだね・・轟も喜んだな」と笑顔で言った佐々木の爺さんと別れて、エレベーターに乗った。

幻海は大きな受付に、あの痩せた男が立っていた。
ユリカを見て慌てて駆け寄って、笑顔で丁寧に挨拶した。

「エース・・この前は」と痩せた男が言った。
『もう良いよ・・俺も生意気でした』と笑顔で返した、痩せた男も笑顔で返してくれた。
中年のボーイ頭が来て、ユリカに挨拶してフロアーに案内した。

私は轟の爺さんに、女性には派遣が入るとの報告しか、しないでくれと頼んでいた。
女性達はミーティングを待っていたのだろう、１５人ほどが座っていた。
ユリカを見て、慌てて全員が立った。

「派遣から、今夜入ってくれる・・紹介は不必要だろうが、ユリカさんだ」とボーイ頭が紹介した。
女性達に笑顔が溢れて、全員が頭を下げた。
「ユリカです・・よろしくお願いします」とユリカが爽やか笑顔で頭を下げて。
「よろしくお願いします」と女性も全員で笑顔で返礼した。
私とユリカは真ん中の席に促され、座ってボーイ頭の話を聞いた。

「俺も・・今回はオーナー同様、反省した。
リリーの件は間違いだった、利益だけを追求していたと思う。
君達が店に不信感を持っても仕方ないと思ってる、だが頑張って欲しい。
リリーが抜けた、今が一番大事な時期なんだよ、だから今回派遣を投入した。
そのオーナーの気持ちを汲んで欲しい、よろしくお願いする」

ボーイ頭は真顔でそう言った、ユリカは私を見た。
女性達の反応はどこか冷やかだった、ボーイ頭はユリカを見ていた。

「何かありますか？・・ユリカさん、エース」とボーイ頭が言った。
ユリカが私を促した、私は立って女性達を見た。

『俺は今回、轟さんと・・正式な契約で仕事を受けました。
それはクラブ幻海が、一流の店であり・・一流の女性達の場所だと思ったからです。
だから第一弾をユリカにしました、それは最高級店のハードルが高いと感じたから。
どこに出しても恥ずかしくない、ユリカを用意した。
高額の金を要求する、その世界にいる女性は・・仕事に真摯であ

ると思ったから。
リリーを見て、そう感じたからです・・でも今、少し不安を抱えました。
店に対する不信感、確かにあるでしょう・・しかし主張をしない。
主張もしないのに、態度に出す・・その程度のレベルなのかと思いました。
リリーの件で芽生えたように装ってるだけ、不満の本質を見てない。
今は攻める材料が有るから、経営陣を攻めている・・それだけとしか思えない。
私がユリカを用意したのには、意図があります。
その意図を感じて欲しい、次の幻海を背負う女性の誕生を見せて貰います。
今日のユリカと、明日のユリで・・最高級老舗クラブの次の世代を。
その女性は夜街に君臨する、次の方向を示す・・そうであると思っています。
提案を受けます・・このままの雰囲気なら、私はユリカを出せない。
そんな事をしたら・・ユリカを知る夜街関係者に、申し訳が立たない。
今の心に抱える、不信感を払拭しましょう・・そこから始めよう。
どんな理由にせよ、この仕事を選んだのなら・・そして最高峰で働いてるなら。
それだけの責任が有る・・これから挑戦する者に、説明する責任が有る。
経営側に言い難いなら、私が聞きましょう・・ユリカに仕事をさせるのだから。
主張して下さい・・そうしないと、お客に失礼だと思います』

私は女性達を見ながら、一気に言葉にした、美しい女性が手を上げていた。
その瞳は強く、熱を隠しているようで、でも隠せない確かな熱が存在した。

『どうぞ』と笑顔でその女性を指名した。

「アイコです・・確かに私達も主張しませんでした。
今のエースの話を聞いて、そうだと感じました。
だから私が代表で質問します、もちろんリリーの件です。
轟オーナーも・・いえ誰も、あの件を説明していない。
時が経てば、忘れるとでも思ってるのでしょうか？
私達は忘れる事など出来ない、エースが奴隷契約だと言った言葉を。
それを言われて、動揺した経営陣を・・何とか丸く収める事だけを考えてた。
それだけで、他の事は目に入らなかった・・店の状況ですら、見てなかった。
自分の事しか考えてない、そう思わざる得ませんでした。
あの時・・エースは見てました、店の状況をチェックしていた。
そして客が全員帰ったのを確認して、勝負に出た・・その最中も見てました。
私達の表情を・・それは他に奴隷契約がいないか、見てたんだと思います。
私達はあの後、全員で話しました・・全員が抱えた不信感。
それはリリーの奴隷契約じゃなかった・・私達は守られていない。
そう思ってしまった・・いざという時には、自分の事しか考えない。
私達は、経営側もボーイもそうなんだと、判断せざる得なかった。
だから設定を変えたかった、その方法を考えていました。

エース・・お願い、打開案を考えて・・それが有れば見せれるから。
私は誰よりも、エースに見せたい・・私達の接客を、見て欲しい。
ユリカさんにも、ユリさんにも・・ベストな精神状態の時を見せたい。
何か良い方法を考えて・・この不信感を払拭できる方法を。
お願いします・・エース」

アイコは最後に美しく微笑んだ、私はその美しさでワクワクしていた。

『了解・・俺がオーナーに提案するよ。
体制を変える・・フロアーのボーイを半分に減らす。
俺は囲まれて思ったんだけど、多すぎる・・だから固まってしまう。
集団になれば、それに慣れれば・・個人の覚悟が薄れるんだ。
誰かの判断を待つから、自分の判断は遅れる・・そして出来なくなる。
たとえ満席でも、今の半分に減らす・・残りの半分は外に立てば良い。
そうなれば集中しなければならない、そして何が大切なのか。
それを常に持っとかねばならない、でないと変化する状況に対応出来ない。
その評価を女性達でする、その権限を貰うよ。
その代わり、女性達も今以上の集中が必要になる。
フォロー出来る事は、お互いにフォローしなければならない。
ボーイも遠慮せずに、女性達の問題点を指摘する。
それは閉店後に、きちんと話し合う・・わだかまり残さない。
良くする為だと、そう心に誓って指摘しあう・・そして改善出来なければ。

その人に、この場を降りてもらおう、それは一流店は無理だったという判断として。
女性もボーイも、一度崖っぷちに立とう・・後が無い状況でやろう。
それで良ければ、俺がオーナーに交渉する。
それでどうかな？・・アイコ、５分で解答して下さい』
私は笑顔でそう言った、アイコも笑顔で返してくれた。
「少し待ってね・・全員の意見を聞くから」とアイコが微笑んで、女性達が円になった。
その時、奥から轟オーナーが笑顔で現れた。
ユリカが立って笑顔で挨拶した、私も頭を下げた。
「エース・・ありがとう、俺はＯＫだよ・・素晴らしい提案だった」と轟爺が笑顔で言った。
『どう出るのか？・・それが楽しみですね、自分達にも厳しい事ですから』と二ヤで返した。
「間違いなく受け入れますよ・・仕事に誇りを持ってますね、彼女達は」とユリカが爽やか笑顔で言った。
「エース・・待たせてごめんなさい、全員一致の結論が出たから。
その提案、女性側は全員受けましょう、今いないメンバーにも繋ぎます。
そして教えて、そうなった時の最大の問題点を」
アイコが真顔で言った、私は笑顔で頷いた。
『皆さんありがとう、轟オーナーの了解は貰いました。
最も大きな問題点は、意思の疎通ですね。

俺はこの前、幻海は高級店だから、その部分が甘いと感じました。
接客中に、ボーイが言葉を使い過ぎる、その行為で客がしらける。
でもどっか看板に頼ってるから、それが最高級店の方針だと押してしまう。
だから意思の疎通が言葉でしか出来ない、それが問題になるでしょう。
ボーイの数が減れば、上手く流れなくなる・・下手すると、動かなくなる。
はっきり言うと、その部分はあまりにも未熟ですね。
ＰＧはボーイがほとんど女性に話しかけません、全てはサインで繋ぐ。
チェンジもフォローも全部です、お客には分からないサインで話す。
だからしらけない、お客には分からない・・女性の動きが。
そしてこのサインで動くと言う事は、誰の指名で、フォローが誰か。
全てのスタッフが共有できる、だから不信感も生まれない。
そして流れも共有できる、全員が今の店の状況を全て分かってる。
凄いのになると、サインで会話が出来るレベルに到達しています。
だから、意思の送り方を考えましょう、そうすれば変わりますよ。
変わらないといけなくなる、緊迫した状況も全員が共有するから。
その時に逃げるような人間は、すぐさま解雇で良いですね。
それは約束して下さい、轟オーナー『
私は真顔で轟の爺さんに言った。
「もちろん、そうする・・そんな人間は必要ない」と轟の爺さんが強く言った。
「エース・・基本中の基本で良いから、誰か教えてくれないかな？」とアイコが笑顔で言った。

『了解・・派遣で基本サインが分かってる女性を来させるよ、7時からで良い？』と笑顔で聞いた。
「ありがとう、もちろんそれでお願いするわ」とアイコが笑顔で返してきた。

『それじゃあ、開店時間も迫って来たので・・ユリカ、一言お願い』とユリカに笑顔で言った。
ユリカは爽やか笑顔で立って、女性達を見た。

「なぜその仕事を選んだかではありません、どうその場所で生きたかです。
理由は必要ありません、この世界にそれは必要無いでしょう。
理由は無い、でも全てを懸けて挑んだ・・それだけで良いでしょう。
共同体の女性達の、今の基本的考えを伝えます・・戦友と呼ばれたい。
夜の仕事を選んだ、全ての仲間に・・同じ気持ちで戦った女性達に。
戦友と呼ばれたい・・彼女達は、それだけを望んでいます。
誰かに認められたいのでなく、ただ心で戦友だと思われたい。
私もそう思ってます、だからお見せします・・私の考える接客を。
私もそう思って欲しいから・・戦友だと、心で思われたいから』

ユリカは静かに、しかし強く言葉にした、女性達の表情が変わった。
《ＯＫ、ユリカ・・第一弾成功だね、後は接客よろしく》と心で囁いた。
優しい波動が、了解を示していた。

開店を向かえ、私は奥の小部屋から見ていた。
最初の客が入るまで、ユリカの周りに女性が集まっていた。

最初の客は5人組の老人で、ユリカとアイコを含む5人が付いた。
老人の内3人はユリカを知ってるようで、他の2人に紹介していた。
老人達も楽しそうで、ユリカも爽やか笑顔が出ていた。

私はユリカを見ながら、弱い揺り篭を出してるのを確認した。
それで一安心して、裏を回り階段を降りて、ユリカの店に向かった。
ユリカの店には、アンナとカレンを投入していて、スムーズに店は回っていた。

私はＰＧに戻り、指定席に着いた、ＰＧは既に満席だった。
3番にキングが来ていたので、蘭にユリカが幻海に入っていると報告してもらった。

「上手くスタート出来たみたいですね」とユリさんが珍しく後ろから来て、薔薇で微笑んだ。
『はい・・さすがユリカです』と笑顔で返した。
「ユリカは存在しただけでしょ、ユリカの出かける表情で分かりました」とユリさんが私の横に座った。
私も驚いたが、女性達がユリさんのその行動を見て、集中を増した。

『感謝してます・・ユリカにもユリさんにも、私の考えを後押ししてくれて』と真顔で言った。

「ユリカも当然私も、あなたにも段階を上がってもらわないと。
私はユリカがその場で受けたのを感じて、本当に嬉しかったのです。
ユリカが東京ＰＧを、応援してくれてると感じて。
あなたに対しての行動で、それを感じさせてくれて。
その行動に厳しさを連れていましたね、それはあなたの2度のイ

メージ潜入。
あれでユリカは確信しました、人を信じて託すとはどういう事かを。
あなたはユリカに対し、微塵も無かった・・疑念も不安も無かった。
そして厳しさも有った、それは私に対しても・・リアンに対しても。
そして愛する蘭に対しても・・信じる事の厳しさを提示してくれました。
私もＰＧ自体を次の段階に押し上げます、それをこの１２月で。
最も忙しい季節に、それを促して見せます・・あなたならそうするから。
策略家のエースなら、バトンは全力疾走の時に渡すでしょ。
それが出来れば後は自分のペースで走れる、信頼関係は増しますね。
あなたは準備してくれました、アンナの登場で揃えた。
あなたは北斗にだけは、負担をかけませんよね・・由美子の為に。
だからどうしても経験者が欲しかった、それを強く望んでいた。
そして強引に出会ってしまう、そして全力で少女を愛して見せた。
響かない訳が無い、母親には絶対に響く・・その行為が出会いに意味を持たせる。
私も次に進みます、指名以外の接客を抑えていきます。
そして他店に出ましょう・・私のいない状況を、私が楽しんで見せましょう。
私は信じています・・今の派遣も含めた、ＰＧの女性達を。
ベストなメンバーが揃ったと感じています、だから私は指名以外は接客しません。
サインを繋ぎます・・店自体の覚醒を促しましょう。
ＰＧ自体の変化を楽しんでね・・ＰＧのエース」

ユリさんが最後は薔薇二ヤで私に言った、その距離の近さで女性達に示した。

『了解・・さすがユリさん、厳しさに楽しさを乗せてくる。
それならば、明日から7時から8時前まで、マキを借ります。
俺は幻海の女性達が抱えた不信感払拭の為に、フロアーのボーイの数を半分にした。
それにより集中を余儀なくされる状況を作った、しかし意思の疎通が出来ない。
今まで大きな顔して、ボーイがフロアーを歩いて・・言葉しか使ってなかった。
基本中の基本だけ、サインを教えてと・・アイコという女性から依頼がありました。
カレンでも行かそうかと思っていたけど、ベストはデビュー前のマキですから。
貸して頂けますか・・マキの将来の為にも』

私もフロアーの女性の視線を意識して、ユリさんに近寄り耳元に強力な二ヤで言った。
ユリさんは少し大げさに頷いて、強い薔薇の微笑を出した。

「許可します・・アイコ、素敵ですね・・自分達の不満をキチンと言葉に出来ましたね」と薔薇で微笑んで立ち上がった。
『アイコ覚醒・・ユリに任せます』と笑顔で返した、ユリさんも薔薇で頷いた。

ユリさんはマキの席に歩いて、マキと話していた。
マキの驚いた表情が、最後は二ヤに変化した。

そしてマキが立ち、ユリさんが座った。

女性達にはマジックミラー越しなので、状況が分からなかった。
その時、ユリさんが右腕を上げて、【5番】【蘭】【チェンジ】【リリー】と送った。
女性達が一瞬固まった、ユリさんの指がサインを出した事で。
蘭が【了解】を満開を必死に抑えて出し、【了解】とお客を送って戻ったリリーが出した。
強烈に熱が上がり始めた、若手は炎に包まれた。
ユリの特別授業の幕開けだった、北斗とアイさんとサクラさんだけ、楽しそうに笑っていた。
蘭とナギサが今までにない集中に入った、北斗がサインをユリさんに出したのだ。
【フロアー】【責任者】【蘭】【ナギサ】と北斗が二ヤで出した。
【了解】【任せる】とユリさんがそれを受けて、フロアーに出した。
ユリさんはマジックミラー越しに、最強薔薇二ヤを出していた。
「あ～ん・・フロアーに出たい、この状況のフロアーに」とマキが来てウルで言った。
『マキにも用意してるよ・・チャンスを』と二ヤで返した。
「楽しみだね～・・聞きましょう」と隣に座って二ヤで返してきた。
『幻海の女性が抱えた不信感・・それは経営者とボーイに対する物だった。
俺はそれの打開策として、フロアーのボーイの数を半分にした。
そうなると、女性とボーイの意思の疎通が難しくなる。
それで女性達に頼まれた、基本中の基本で良いからサインを教えて欲しいと。

俺は受けて、最初派遣のカレンに行ってもらおうと思っていた。
でもベストはマキなんだよ、デビュー前のマキがベストなんだ。
今ユリさんと話して、その了承も貰った、明日から7時から開店前まで。
マキが行って、サインを教えて・・そして仲良くなって。
そして点火してみろ、灼熱で点火してみろよ。
絶対にマキの将来にプラスになる、それは確信的に思ってる。
俺はそう確信してるよ・・情熱3姉妹の末娘、極炎の妹・・灼熱のマキ』

私は二ヤで言った、マキも強い二ヤを出していた。
「了解・・最高峰の女性と触れ合わせてくれるのね、そして挑戦させてくれるのね」とマキは嬉しそうな笑顔になった。

『マキ・・ユリさんの行動、分かってるだろ。
PG自体がその時に来た、ユリさんはそう判断した。
アンナ、リリーの加入で、全てのピースが揃ったと判断した。
だから12月という、最も忙しい時期に店の覚醒を促した。
その背景には、4月にマキがデビューする・・その設定がある。
マキ・・必ず勝ち取れよ、俺がマキにしてやるのは。
この幻海の提案だけかも知れない、俺は側にいないヨーコを意識する。
来年から、ヨーコに提案する・・挑戦もさせる。
俺はマキを信じてるよ・・必ず合格すると、俺もユリカも蘭も信じてる』

私は久しぶりに、マキに対して強く言葉にした。

「了解・・必ず合格する、私は大丈夫・・ヨーコを頼むね」とマキも強く言葉にした。

強い波動が喜びを示した、私はユリカの余裕を感じて安心していた。
マキがユリさんの隣に付いて、その女性達の動かし方を真剣に見ていた。
私は女性達の燃える瞳を確認して、ＴＶルームに向かった。
５人娘の可愛い寝顔を見ながらチェックをして、ニヤニヤ３人組の方に歩いた。

「煽り続けるの～・・ユリがそう出るとは、ワシでも思わんかったわ」とマダムが笑顔で言って。
「ＰＧの次の段階・・楽しみじゃね」と松さんも笑顔で言った。

『俺も嬉しかったよ・・女性達がどっかで抱えてた不安。
それをユリさんが一瞬で払った、それも厳しい状況を作って。
ユリさんでも、いつかフロアーを降りる時が来る。
どんな一流選手でも、長嶋でも王でも引退の時は来る。
その判断は、ユリさん自身しか出来ない・・女性達はそれが不安だった。
その淋しさをどっかで抱えていたと思う、近い将来に必ず来るから。
それをユリさん自身で提示した、まだまだ進むと・・飽くなき向上心で。
だからフロアーに常時存在しない、その状況こそが東京ＰＧへの道。
それこそが、新しいＰＧの姿・・ユリは違う意味で、大ママと同じ存在になる。
そう強く提示したね・・アンナとリリーの登場で、その時が来たと。
俺は嬉しかったよ・・ユリさんに、派遣が認められたと思って』

私は感情的な自分を楽しみながら、素直に言葉にした。
「認めてるよ、ユリは・・ユリが認めた、最も若い男・・その記録だけは破られんよ」とマダムが笑顔で返してくれた。
私も嬉しくて、2人に笑顔で返した。

『久美子・・状況は難しくなった。
明日から、マキが幻海の女性に基本サインを教える。
7時から開店まで、俺のマキへの提案は・・幻海の女性と仲良くなり。
点火する事・・灼熱で点火しろと、強く提示した。
マキが明日で信頼されれば、明後日から久美子が加わる。
マキ・久美子の最初のコンビでの仕事だよ、最強コンビが点火しろ。
そうすれば、蘭とナギサは煽るだけで済む・・2人の姉を楽にさせろ。
マキの灼熱の言葉と、久美子の魂の響きで・・点火してくれ。
俺はその光景が見たい・・限界無き2人の可能性が』

私は久美子にも、強く言葉にした。
「了解・・最高の提示だよ、マキとのコンビなら・・絶対に点火する、最初のコンビの仕事だから」と久美子も嬉しそうな笑顔で、強く返してきた。

「怖くなったよ、私は・・エースは私の娘を勝手に連れて行く、次の世界に」と松さんがウルで言った。
『松さん、ご心配なく・・隠居はさせません、次々に難しい娘を連れて来ますよ』と二ヤで返した。
「隠居など出来るかい・・こんなに楽しい場所があるんだから」と松さんも笑顔で返してくれた。

私は笑顔で頷いて、ＴＶルームを出た。

通りに出ると、月曜なのに人で溢れていた。
私は通りに出てる、【クラブ幻海】の大看板を見ていた。
東京ＰＧの道を示す、大看板だとも気付かずに、その看板を見ていた。
北風に背中を押されて、冬の気配を楽しみながら、南国の冬の熱を楽しんでいた。

幻海に戻ると、満席に近い状況だった、私は奥の小部屋に入った。
一番奥のＢＯＸにキングが座っていて、その横にユリカが笑顔で座っていた。
キングの横にいるユリカは、絶対的な信頼に包まれて、休憩してるようだった。

「凄すぎるね・・棲んでる世界が違うよ」と後ろからアイコの声がした。
『まだまだ・・今のユリカは、段階の途中だから・・全力は出ない』と振り向いて二ヤで返した。
「そうなの！・・怖い気もする」とアイコが隣に立って笑顔で言った。

『アイコは歳は、なんちゃいでちゅか？』と歳を聞くのでおどけて見せた。
「蘭・ナギサ世代・・２３歳の不束者です」と二ヤで返された。
『そっか～・・それは楽しみだ、水曜・蘭で、木曜・ナギサだから』と二ヤで返した。
「うっそ！・・楽しみ～・・蘭は靴屋で知ってるけど。

もちろん夜の接客は、最高の副職モードは知らないし。
ナギサは顔しか知らないの・・どっか閉鎖的だったから。
クラブ幻海の看板が、邪魔だったんだね・・てか、使い方間違ってたよ。
井の中の蛙だった・・明日のユリさんで、全員がそう感じるよ。
楽しくなって来た・・割って入るよ、蘭・ナギサのコンビに」

アイコが楽しそうに笑顔で言った、私はワクワクが止まらなかった。

『期待してるよ、アイコ・・同じ台詞を土曜の夜に聞いたよ。
蘭とナギサに割って入ると・・そう本人の前で強く言ったよ。
アイコがその実力を一番知る・・リリーがね』

私は真横のアイコの美しい横顔に、二ヤで言った。
「最強のそれがいたね～・・楽しい時代だよ」とアイコが微笑んで、フロアーに歩いた。

私はアイコの美しい背中を見ながら、ワクワクを心から楽しんでいた。

ユリカの反対側から、アイコがキングに挨拶して、笑顔で座った。

嬉しそうなユリカの笑顔を見ていた、その瞳は深い深海を示していた・・。

【冬物語？】

衝撃的事件、その裏には何が隠れているのか。
今回は宣伝だった、新しい条例の宣伝だったと感じる。
そして視点を逸らす作戦でもあった、権力同士が利害が一致し、手を組んだのだろう。

私は感想を聞かれて、正直にそう答えた。
一方が宣伝の為に、もう一方が泥沼の権力闘争から、国民の視線を逸らす為に。
そんな気分の悪くなる、幼稚なシナリオを見せられて、３．１１は過去に追いやられる。

本質は誰も語らない、ＴＶも新聞も語らないだろう。
国民は漠然とした不安を、又背負わされただけになる。
有識者は正義だと価値観を振りかざし、一人の人柱を埋め込んで、終息させる。
何の解決も、何の変化も与えずに・・無責任に去る事で、責任を取ったとされるのだろうか。

その事実を持っている事に、ペナルティーが科せられるのは当然だろう。
認識の違いだと言うのは、何の説明にもならない。

そして原因に対する詰めは無い、国民はどうすれば良いのか。
同じ立場に立たされた時に、どう解決すれば良いのかが示されない。

事実と現実と真実は違う、権力者は事実だけを語り。
黒い世界と言われる世界の住人は、現実を提示する。

何処にも無い、この国には・・真実だけが語られない。

つまらない愚痴を、つらつらと書いてしまった、話を戻そう。

日付の変わる時間が近づき、客も3割になり、ユリカが上がって来た。

私とユリカはボーイ頭に挨拶して、裏階段から通りに出た。

ユリカが爽やか笑顔で呼び込みさん達に挨拶して、私をＰＧの裏階段に引っ張った。

私はユリカを抱き上げて、裏階段を上り、控え室の前まで運んだ。

ユリカは眠ったように静かだった、そして深海の瞳を開き微笑んだ。

「合格点は取れたかな？」とユリカが爽やか二ヤで聞いた。

『少し俺に振り過ぎだけど・・１００点だよ、ユリカ』と二ヤで返して、優しくユリカを降ろした。

「エースにも上って貰わないとね、私の背中も見えなくなるよ」と爽やか笑顔を残して控え室に消えた。

《重々承知しております》と心に囁いて、二ヤの波動を感じていた。

指定席に戻ると、女性達が１０番に集まるところだった。

私を見つけて、カスミが最強不敵で手招きした。

私はウルを出して、女性達の前に立った、ユリさんも薔薇で座っていた。

「さて・・幻海の報告から、やってもらおうか」とカスミが私の前に立ち、不敵のまま言った。

『ユリカの圧倒的存在で、幻海の女性達に気付かせました。

不満の根源は何かと・・それは経営側と、ボーイに対する不信感でした。

いざと言う場面で、守ってもらえない、女性達はそう感じていた。
だから俺は提案しました、フロアーのボーイの数を減らそうと。
そして互いの問題点を話し合おうと、それで話が纏まり。
ユリカが一言で女性達の気持ちを変えた、共同体の女性の望みを話した。
ユリカの静かなる強い言葉で・・戦友と呼ばれたいんだと。
そのユリカの言葉で、女性達の表情が変わった・・戻った感じでした。
明日のユリさんで、完全に戻るでしょう・・でも俺はご存知の通りの人間です。
元に戻るなどで納得しない、前より良くする・・次の段階を希望する。
その為に、明日からサインの講習で、マキを送り込む。
そして蘭とナギサ投入と同時に、久美子も送り込む。
俺は提案した、そして試験を出した・・マキと久美子のコンビに。
幻海の女性を点火しろと、灼熱のマキの言葉と、久美子の魂の響きで。
蘭とナギサの負担を軽くしろと、２人に煽るだけの仕事をさせろと。
皆さん楽しみにしてて下さい・・マキと久美子、その１６歳の可能性を。
フロアーの女性だけが、煽られてるんじゃない・・俺は当然、マキも久美子も煽る。
そしてユリさんに対しても、挑戦しろと煽り続ける。
誰もリタイヤしない事を祈ってる・・限界を自分で作らないと信じてる。
俺はそれが何よりも楽しい・・戦友の必死の表情を見るのが楽しい。
だから心から言える・・挑戦しろと、笑顔で言えるよ』

私は女性達を見ながら二ヤで言った、当然二ヤで返されていた。
「ようするに・・ＰＧは店自体の段階を、上げると言う事だな？」
とカスミが私に聞いた。
私はユリさんを二ヤで見た、ユリさんは薔薇二ヤで返してくれた。
『出来るのか？・・今の派遣も加えたメンバーで、出来るの？
俺はユリさんに、大反対をしたよ・・今のＰＧで充分だろうと。
女性達が生き生きと仕事に取り組み、和気藹々と仲良くしてる。
今で充分だろうと、ユリさんに言った・・でもユリさんの意志は固い。
絶対に次の段階に行けると、ユリさんが言うんだよ。
俺はこの素晴らしいＰＧを、大切にしたいってウルで言った。
そんな賭けに出る必要はないと、強く反論した。
今が楽しいなら、変化は必要ないと・・必死に主張した』
ここまで言った所で、カスミに肩を掴まれた。
「もう良いよ・・そんな笑えない、一人コントは必要無い。
ＯＫ・・当然私達も、変化を望む・・絶対に満足なんかしない。
たとえＰＧが宮崎１だと言われようが、そう認められようが。
次の変化を望む・・上には上が有るんだから。
それを渇望する・・いつまでも貪欲に目指す、理想の世界を。
ユリさん・・ありがとうございます。
私達は幸せを感じています、託された事に・・信頼して貰える事に。
必ず期待に応えます・・私達の夢でもある、東京ＰＧの為にも。
もう一人の弱い自分に、挑戦し続けます・・それがＰＧの女だから。
今後ともご指導ご鞭撻の程・・よろしくお願い致します」

カスミが真顔で言って、女性が全員立ち、深々と頭を下げた。
ユリさんも立ち上がり、薔薇の微笑で返礼した、本当に嬉しそうな薔薇だった。

女性達が控え室に戻り、私は少し熱いマキとＴＶルームに戻った。
ニヤニヤ顔のサクラさんを、タクシーに送った。

ＴＶルームに戻ると、全員が戻っていた。
アンナも帰ってきて、安奈を抱き上げた。

「エース・・いざと言う時の私の体制を作って、私は今夜感じたの。
ユリカちゃんに上がってと言われて、中途半端で出たくないんだよ。
最後に付いたお客さんが帰るまでは、責任を果たしたいんだ。
その時に、エースが安奈を預かって・・必ず迎えに行くから。
蘭にもお願いするよ・・どうかな？」

アンナは真剣に言った、私はその真剣さが嬉しかった。
「もちろん私はＯＫですよ、アンナ姉さんの帰り道だし・・問題無いです」と蘭が満開で微笑んだ。
『個人的恋愛に使わないなら』と私は二ヤで言った。
「約束するよ・・本当に条件に、そつが無いよね～・・可愛くない」とアンナが二ヤで返してきた。

「エースが安奈ちゃんの添い寝したら、あの鋭い感性が上がるかも」と北斗が二ヤで言った。
「それは凄そうだ・・安奈ちゃん、今でも鋭い突っ込みの質問するし」とネネが二ヤで言って。
「エースのウルが増えます～・・５人娘には、とことん弱いですか

ら～」とシオンがニコちゃん二ヤで言った。
「ユリ姉さんにも、ユリカ姉さんにも、リアン姉さんにも強気に出るのに。
エミに突っ込まれると、すぐにウル出すし。
ミサとレイカの召使だし、マリアに対しては奴隷だし。
でもなぜか安奈に対しては、煽るよね～・・なぜかな？」
蘭が満開二ヤで言った、全員が私を二ヤで見た。
『安奈を初めて抱いた時・・皆知ってるけど、安奈は悩んでいた。
それなのに、安奈は・・体の力が凄かったんだ。
全体的な体の持つ力が、４歳の少女とは思えなかったんだよ。
俺は小児病棟で、その感覚を覚えたから、その部分に対しては自信が有る。
俺は他の４人娘と違い、安奈にはその部分も促してみたい。
大きな才能だから、伸ばしてやりたい・・だから挑戦をさせる。
年齢の段階に応じて・・将来の選択肢を増やせるように、沢山の事を経験させたい。
スポーツ面も提案したい・・俺はその楽しみを手に入れた。
だからアンナ・・俺を可愛い安奈の、兄にしてね。
俺は公言してるように、５人娘で夢を見る。
その為には、女性達の本気の姿が必要になる・・だから煽り続ける。
俺の楽しいの為に・・５人娘の、将来の笑顔の為に』
私はアンナに笑顔で言った、アンナも笑顔で返してくれた。
「あの日に、なってくれたんだろ・・安奈の大切な兄に・・私が反対する訳ないだろ」とアンナが笑顔で返してくれた。

『ありがとう、アンナ・・そして潜水しろよ、耳栓して』と笑顔で返した。
「く～・・絶対潜ってやる、沙紀の為なんだろ・・あの安奈の絵を描いてくれた」とアンナが強く言葉にした。
『そうだよ、あの名作の作者だよ・・アンナ』と笑顔で返して、全員でＴＶルームを出た。

ご機嫌蘭と部屋に帰り、添い寝して眠った。
翌朝寒さで目覚めた、蘭が布団を体に巻きつけて、私は布団を奪われていた。
私は一人でウルを出して、朝食を作り2人で食べた。

美由紀と登校して、教室で美由紀と秀美と沙織に囲まれた。
『俺・・何も悪い事してないもん、囲まれる事してないもん』と3人にウルウルで言った。
「してる・・沙織に聞いて気付いた、絶対変だよね～」と美由紀が二ヤで言った。
「私もそう思った・・それは何かの作戦なのかな～？」と秀美も二ヤで言った。
「私達と、ユリカさんにだけ教えろ・・なぜ気付いた、沙紀のその絶望を？」と沙織が二ヤで言った。
強烈な波動が【吐け】と叫んだように、強く吹きぬけた。

「どう考えても、おかしいだろ・・沙紀本人ですら、意識してない世界なのに」と秀美が言って。
「絶対何か隠してる・・それは私達の一石二鳥には、関係ない事だろ」と沙織が強く言って。
「小僧まさか！・・沙紀に潜ったのか？」と美由紀が言った。
私はウルで頷いた、３人の驚きの顔に向かい、強烈な波動が吹き抜

けた。

「お前・・本気か！回復しても・・沙紀は自閉症の少女だぞ」と秀美が言って。

「マリちゃんにも潜らなかったくせに、なぜ潜った・・混乱したらどうするんだ」と沙織が言って。

「まさか！・・あの時、マリちゃんにも潜ったの？」と美由紀が驚いて言った。

私は二ヤを出して強く頷いた、３人の驚き全開の顔に、強過ぎる波動が何度も来た。

「待って、今はやめよう・・今日で期末試験終わりだから、終わった後にしよう」と秀美が言って。

「ユリカ姉さん、ごめんなさい・・今日１１時には終わりますから」と美由紀が微笑んで。

「今日は３人で期末試験の打ち上げで、お昼【マンボウ】でお好み焼きを食べる予定だから・・招待するよ、小僧のおごりで」と沙織が二ヤで言って、３人が席に戻った。

強い波動が【迎えに行く】と言ってる様で、私は一人でウルを出していた。

「小僧・・そんなに英語のテスト、自信がないの？・・もうウル出して」と教壇からミセス祥子が二ヤで言った。

『俺、日本人だもん・・英語なんて分からないもん』と少しスネてみた。

「マチルダが日本語話せるからだね、だからそんな言い訳するんだね」とミセスに二ヤで返された。

「早く言えよ、小僧・・英語じゃない、愛が世界共通言語だって」と美由紀が二ヤで言って。

「今日の試験の解答用紙に、そう強く書いて・・０点取りなよ」と秀美が二ヤで言って。
「俺には瞳と鼓動と温度が有るから、英語など必要ないって・・春雨で叫んでごらん」と沙織が二ヤで言った。
クラス全員が二ヤで私を見た、私はウルウルを出していた、ユリカの波動が爆笑していた。

「楽しみだね～・・解答用紙を見るのが」とミセスが言った時に、チャイムが鳴ってテストが始まった。
私は必死にテストを受けて、賭けに出た山も当り、好感触で期末テストを終えた。

私は尋問を受ける為に、３人に囲まれ正門を出た、そこにワーゲンが入って来た。
３人が笑顔になって、私は美由紀を抱き上げて乗せ、助手席に乗った。
後ろの３人がユリカに笑顔で挨拶して、ユリカもご機嫌笑顔で返した。

ユリカが当時出来たばかりの、話題のレストランに連れて行ってくれて、私も笑顔になっていた。
全員でサイコロステーキセットを頼み、事情聴取が幕を開けた。

「まずは、マリちゃんからだね」とユリカが爽やか二ヤで言った。

『マリに対しては、俺は潜ったんじゃないよ。
潜らされたんだ・・まぁそれで、俺は潜る方法を感じたんだけど。
マリが同調してきて、俺を自分のイメージの世界に誘った。
小３の俺は、ただの好奇心で、誘われるままに入って行った。
そこはマリの作った、未来都市だった・・車が浮いてるような感

じの。
高層ビルの世界で、全てはコンピューターで動いてる感じだった。
マリに手を引かれて、大きなビルの最上階に登った。
そこには床に大きな赤丸が描いてあって、その中心に2人で座った。
そしてマリが言ったんだ、アフリカって言った。
そしたら周りがサバンナになって、沢山の野生動物が現れた。
凄くリアルだったけど、触れなかった・・凄いねマリ。
少年の俺は素直に感想を言った、そしたらマリが教えてくれた。
人はイメージを描けるよね、練習すれば鮮明に描けるようになるよ。
前話した、心と脳の話・・心と脳はどう繋がってるのかって、小僧が聞いたよね。
私の考えだよ・・どう繋がってるかなんて、私にも分からない。
でも繋げ方は分かったんだ・・イメージなら繋がるんだよ。
例えば現実の世界を見てる時、心と脳は別の事をしてると思う。
感動したり、何かを感じるのは心で・・それを記憶するのが、脳だとしたらね。
だからこっちから脳に何かを伝えたいなら、共有できる世界が必要なんだと思う。
そう考えて、それはイメージの世界じゃないかと思ったんだよ。
イメージするのは心だよね、でも何かをイメージする時の基本は、記憶と知識だよね。
記憶も知識も脳の仕事だよね・・だからイメージの世界では、脳と話せると思った。
その研究室がここなの、素敵だろ〜・・小僧が最初のお客さん。
光栄に思いなさい・・マリはそう教えてくれた。
俺はそれから、イメージで自分の世界を作るのに没頭した。
楽しかったんだ・・不可能な事は何も無いから、自由に何でも描けるから。

その訓練が、ヒトミの段階の時に役立った・・律子にイメージに入れと言われて。
律子は知ってたんだよ、俺がその訓練をしてる事を・・だからそう言った。
俺はその時に試したんだ、マリの同調思い出しながら、ヒトミの手を握った。
そしたら入れたよ、ヒトミの世界に・・その応用が、由美子と沙紀のイメージの世界。
俺はマリに伝授された、イメージに侵入する方法を。
それはマリが、ヒトミの段階の時を感じていたから・・俺に伝授したと思うよ』

私は笑顔で言った、４人も笑顔で返してきた。

「なるほどね、さすがマリちゃん」とユリカが楽しそうに微笑んだ。
「それを踏まえて・・沙紀に潜った話でしょ」と美由紀が二ヤで言った。

『俺が沙紀に潜ったのは・・実は失敗だったんだ。
４歳の安奈の絵を受け取った時、その時沙紀の手を握ったら入った。
安奈の絵は、朝陽が昇る浜辺に座る安奈だった。
その顔が喜びに溢れてて、とても可愛く描かれていた。
俺は感動して、沙紀の手を握った・・でもその時俺は、制御が利かない状態だった。
沙紀の手を握る寸前に、安奈の問いかけを思い出したんだ。
安奈を沙紀に会わせた帰り、アイスを食べながら安奈が俺に問いかけた。
どうして沙紀ちゃんは、大人になりたくないんだろう・・安奈は早く大人になりたい。

そう言ったんだよ・・俺は驚いて安奈に聞いた。
安奈・・沙紀は大人に成りたくないって言ったの？
そう笑顔で優しく聞いてみた、安奈は素直に答えてくれた。
大人になっても、何の幸せもないって言われてるんだって・・沙紀ちゃん。
そう安奈が言ったんだ・・俺はそれ以上は聞かなかった。
安奈にはまだ理解出来ない事だから、女の幸せとか分からないから。
俺はそれを考えてた・・内容が内容だから、ユリカに隠した。
だからユリカが読む、沙紀と俺の絡みの時に注意したんだ。
その日、安奈の絵を貰うと思って、もう一人の自分を出して受け取った。
もう一人の自分だから、制御が上手く出来なくて、安奈の問いかけが響いた。
響いたまま沙紀の手を握った瞬間、沙紀のその絶望の世界に入った。
そこには何も無かった・・ただ声が響いていた、沙紀を絶望させる言葉が。
俺は慌てて何とか切って、沙紀に必死の笑顔でお礼を言って病室を出た。
そこにいたんだ、マリが廊下に立っていた・・そしていきなり同調してきた。
そのまま・・もう一人でいろ、作戦会議をする・・マリがそう言った。
それで俺はマリと作戦を立てた・・沙紀の洗脳の声を切る作戦を『
私はそこでステーキが運ばれ、ニコちゃんで食べようとしていた。
「食べれないよ、エースは・・終わるまで話して、私達は食べながら聞きましょう」とユリカが爽やか二ヤで言って。
「いただきま～す」と3人が嬉しそうな二ヤを私に向けた。

私はウルウルを出しながら、話を続けた。
『この話は、女性達には内緒だよ、先入観になるから』私はウル継続で言った。
４人が口をモグモグしながら、笑顔で頷いた。

『俺はマリに聞いたんだ、あの声は奴なのって聞いた。
マリ・・他に誰がいる、奴の女版だろ。
俺・・・なぜまだ子供の沙紀に、あんな事言うんだろう？
マリ・・先手を打つんだよ、その事で心の成長を早める。
俺・・・成長を早めるの、その理由は？
マリ・・心と体を離すんだよ、体が成長した時の為に。
俺・・・体が成長した時に、絶望するように仕向けるのか。
マリ・・そうだと思うよ、私もお前に会う少し前にやられた。
俺・・・それは力が強いからなの？・・それを強制的に抑える為？
マリ・・違うと思うよ、多分ＤＮＡを切るためだと思う。
俺・・・子孫を作らせない、その為にその部分を絶望させる。
マリ・・私はそう思ってる、私達が突然変異じゃないならね。
俺・・・突然変異じゃないでしょ、人に突然変異って無いだろ？
マリ・・少し成長したね、人には無いよね。
俺・・・進化には、ゆっくりとした時間が必要だよね。
マリ・・絶対にそうだと思うよ、それに私達の力は進化型じゃないよ。
俺・・・そうなんだよね、マリや沙紀は捨てる前を覚えてるんだよね。
マリ・・感覚的には、そうだと思ってる。
俺・・・俺は本で読んだ・・虫の中には、急激に進化するのがいるよね。
マリ・・いるよ・・凄いのは、殺虫剤に対応して変化してくる。
俺・・・でも人はそうなれない、なら覚えてるんだよ。

マリ・・そうだろうね、多分・・覚えてる人間が、世界中には沢山居るよ。
俺・・・ねぇマリ・・マリは、ノストラダムスをどう思うの？
マリ・・１９９９年７の月になれば分かるよ。
俺・・・小説家だって分かるんだ～。
マリ・・予言という題名の小説だろ、お前が和尚に書かせてるのと同じ。
俺・・・あれと同じなら、俺は１９９９年が怖いよ。
マリ・・未来なんて無いんだろ・・そんなに遠い世界が読める訳ないだろ。
俺・・・話を戻そうよ、怖いから。
マリ・・そうだね、お前は声しか聞こえなかったろ。
俺・・・うん、暗闇の世界で女の声だけ聞いた。
マリ・・だろうね、お前も一応男だから入れない。
俺・・・そっか、俺は男だから入れないのか。
マリ・・だから難しいよ、あの声を切る事は。
俺・・・やっぱり、姿無き相手なら・・あの場所だよね。
マリ・・そう、そして今度は深海だよ・・沙紀も無意識の世界。
俺・・・じゃあ、沙紀も描けないの・・難問だね。
マリ・・私が道案内する事は出来る、ただ沙紀にあの世界にどう行かせるか。
俺・・・マリ、それは出来るよ・・ユリカの揺り篭。
マリ・・そっか！・・それがあったね。
俺・・・ユリカの揺り篭で、沙紀をその世界に入れて、マリが道案内する。
マリ・・そうなれば、私は入れない・・だから女性達だけの勝負。
俺・・・色々と考えてくるね～、奴も・・楽しんでるね。
マリ・・絶対に楽しんでる・・今回は特にそうだと思う。
俺・・・ようするに、奴は今回・・女性としての恐怖を狙うんだ。
マリ・・そう・・それも若いと言う理由が強い部分だろうね。

俺・・・限定してくるね・・じゃあ母親は入れない。
マリ・・そう思うよ、母になると・・女性は別の生き物になるから。
俺・・・強さを手に入れるから？・・それとも血を分けるから？
マリ・・簡単に言うと、幸せの意味が変わるからだろう。
俺・・・そっか・・子供の幸せが、自分の幸せに変化するからだね。
マリ・・お前が正解なんだろうね、幸せなんて脳が心に言ってる言葉。
俺・・・母親になると、幸せの本質に気付くんだね。
マリ・・それが繋がってきた証だね、人間が繋がった意味だろうね。
俺・・・じゃあ、母になっても入れる人もいるね。
マリ・・いるよ・・子育てに反省してる人なら、入れると思うよ。
俺・・・よし・・やろうよマリ、それしか方法が無いよ。
マリ・・お前・・良く考えろよ、女性の根源的な恐怖だぞ。
俺・・・ユリカか～・・そうだよね、今はまだ俺でも怖いな。
マリ・・揺り篭を使う以上、誘わない訳にいかない。
そしてお前は絶対に、入るなと言えないだろ。
俺・・・女として最強の敵、自分が作り出した姿無き女か～。
マリ・・お前の決断に、私は従うよ。
俺・・・時間を頂戴・・年末までに、ユリカを次段階に誘ってみせる。
マリ・・よし、年末だね・・メンバーは？
俺・・・女性達で入れる者、それに限界ファイブと美由紀かな。
マリ・・他は？・・あの子をどうするんだ、それもお前に任す。
俺・・・大丈夫だよ・・俺は行かせる、エミを。
マリ・・よし、この話は、ユリカ姉さんが踏み込んでから発表しろよ。
俺・・・了解・・マリは発表したら、来るんだね？

マリ・・もちろん、新しいメンバーにも会いたいし。
今の私の中で、どうしても会いたい人が来るからね。
俺・・・誰なのか、楽しみにしてるよ・・ありがとう、マリ。
俺はそう言って、沙紀に会いに行くマリを見送った。
これが沙紀の絶望を感じた真実です・・いただきますして・・良い？』

私は箸を持って、ユリカにウルウルで聞いた。
「よし・・良いでしょう」とユリカが爽やか二ヤで言って、私は夢中で食べ始めた。

「今回も、奴は設定していない・・最後の勝負を。
それに完全に楽しんでる、ニヤニヤしながら誘ってる。
マリも小僧もマリアマンも、そして律子母さんも入れない事を楽しんでる。
私達はなめられてる・・絶対にぶっ壊し、その声を切る」

美由紀が怖いほどの二ヤで言った。
「深海の勝負か・・楽しそうだね」と沙織が二ヤで言って。
「絶対にぶっ壊し・・切断する、私は必ず到達する」と秀美が二ヤで言った。
「楽しいね～・・勝負は勝つから、楽しいんだよね」とユリカが爽やか二ヤで言って、3人が二ヤで頷いた。

「でもエミちゃんは凄いよね～・・小僧が行かせるんだから」と沙織が笑顔で言った。
「エミは小僧の言葉の裏まで読むよ、才能とか能力じゃないよね」と美由紀が言って。
「知りたい事に対して、純粋なんだよね・・私達はエミにも問いかけられるよね」と秀美が微笑んだ。

「小僧がエミを誘った時、エミはこう言ったよ。
経験で現れる姿無き女が、沙紀の中にいる事が今回の問題。
そう言った・・多分エミは想定を始めた、そしてイメージを入れ始めた。
橘橋の下に潜水艦を用意するらしい、そこから全員で深海を目指す。
シズカちゃんに電話したみたいだから、2人で最強の潜水艦を作るね」

ユリカが爽やか笑顔で言った、3人も嬉しそうな笑顔で頷いた。
私は久々のステーキを夢中で食べていた、そして話を聞きながら感じていた。

『誘ってるね・・やっぱり誘ってる、罠だよって二ヤしながら』と
私は食べ終わり4人を見て言った。
「それは演出なの？・・それとも意識させたいからだと思う？」と
沙織が返してきた。

『奴も進化する・・だからこっちを読みながら、対策を考えてる。
ゲームを楽しんでるよね、沙紀の世界の姿無き奴は・・前回、驚愕してる。
ミホの登場は、奴の中には微塵も無かったからね。
奴は知りたくなってきてると思う・・変化してると思うよ。
奴は絶対にこっちを読める・・沙紀の中の奴が、沙紀の知り得ない事を知っていた。
由美子の段階の時の事で、沙紀が知り得ない部分を知ってたんだ。
奴が何を読んでるのか分からない、言葉なのか記憶なのか・・何なのか。
だから考えないんだよ・・ゲームなら楽しめば、エミやシズカの

ように。
中1トリオは、3人で作戦を話し合って・・楽しめば良いんだよ。
読ませてやれよ、互いに楽しめ・・その先にあるんだろ。
所詮、中1トリオには分からない部分が多いよね・・処女である限り。
でもそれが重要な事なの？・・そんな事が重要なの、俺は違うと思うよ。
ユリカのように楽しみなよ・・今回のリアンとユリカと蘭とナギサ。
この4人が楽しみだよ・・夜の経験が作り出す、その解答が』
私は二ヤで言った、ユリカの笑顔を見ながら。
中1トリオが笑顔で盛り上がっていた、私はユリカを見ていた。
年末の足音を演出している、クリスマスツリーがユリカの背景に輝いていた。
快晴の冬の陽射しが流れ込み、ユリカの顔を照らしていた。
私はマリを想っていた、マリは何処まで踏み込むのかと感じていた・・。

【冬物語？】

クリスマスの近づく足音で、子供達は笑顔になっていた。
不便な時代だからこそ、そのイベントに重みがあった。

レストランを出て、ユリカにお礼を４人で言って、中１トリオを美由紀の家に送った。
ユリカと２人で病院に行って、別々に３人に会った。
カレンが沙紀に数字を教えていて、沙紀も楽しそうだった。

私はミホの手を握り、期末テストの話をして、由美子の部屋に行った。
アンナ親子が来ていて、ユリカと北斗と３人で話していた。
私は由美子の手を握って、笑顔で保育園の話をしてる安奈の後ろに座った。
年下の登場に由美子も嬉しそうで、私は由美子の顔を見ていた。

関口医師と婦長が入ってきて、私は関口医師に手招かれソファーに向かった。

「沙紀の退院が、１２月２２日に決まったよ・・ありがとう、小僧」と関口医師が笑顔で言った。
『良かったですね・・クリスマス前に退院出来て』と笑顔で返した。
「今日は泣きなさいね・・沙紀の最初の水彩画、完成したようですよ・・あなたにだと思いますよ」と婦長が微笑んだ。

『それは楽しみです・・週末、第２回演奏会を開きます』と笑顔で返した。
「了解です・・喜びますよ」と婦長が笑顔で返してくれた。

「ねぇエース・・3人はサンタを信じてるよね」とユリカが爽やか笑顔で言った。
『存在するから、信じてるよ・・だから沙紀に対して、退院祝いだけだね』と笑顔で返した。
ユリカも北斗もアンナも、笑顔で頷いた。

「エース・・沙紀ちゃんが呼んでるよ、泣いておいで」とカレンが後ろから笑顔で言った。
『了解・・素直に泣いてくるよ、楽しみだ～』と笑顔で返して、沙紀の病室に向かった。

沙紀はベッドの横の椅子に座っていた、私は母親に頭を下げて、沙紀の向かいの椅子に座った。
『沙紀・・退院決まったんだね、おめでとう』と手を握って笑顔で伝えた。
《ありがとう、でも少し寂しい》と沙紀が返してきた。

『沙紀・・何も寂しくないよ、確かに沙紀のお家は少し遠いけど。
女性達はみんな車を持ってるから、俺も蘭やユリカやシオンと一緒に会いに行くよ。
沙紀の事を誰も忘れたりしないよ、みんな沙紀の絵を大切に飾ってるからね。
沙紀が側にいるんだよ、俺は沙紀の事をいつも近くに感じてるよ。
あのヒトミの絵で、沙紀がプレゼントしてくれたヒトミの絵でね。
ヒトミの笑顔の横に、沙紀の笑顔が見えるよ』
私は寂しさを抱えながら、意識して笑顔で優しく言った。
《うん、それとこれで感じてね、3枚完成したの。

1枚が小僧ちゃん、1枚がミホちゃん、もう1枚が由美子ちゃんに。
これが小僧ちゃんの・・最初の水彩の絵だよ》
沙紀が嬉しそうに伝えてきて、ケースを差し出した。
私は笑顔で受け取って、ワクワクしながら絵を出した。
私はその絵を見て、自然に涙が出た、沙紀の優しさが嬉しかった。
あのミホの笑顔の絵が出てきたのだ、淡い色彩を背景に、ミホの笑顔が大きく描かれていた。
まだその段階に到達していない、ミホの笑顔が鮮明に描かれていた。
私は絵を手に取ってるだけで、温もりを感じていた、沙紀は水彩画の特徴を見事に捉えていた。
淡い色を表現する事が、色鉛筆よりも繊細に描けるのが嬉しかったのだろう。
見事な濃淡で無限の奥行きと温度を表現した、ミホの皮膚の奥の心まで色で見せた。
ミホの笑顔は一点の曇りも無く、心の開放を提示していた。
私は涙を隠さずに、沙紀の手を握り沙紀を見ていた。
『沙紀・・ありがとう、俺は本当に嬉しいよ』と笑顔で言って、沙紀を抱きしめた。
《小僧ちゃん、ありがとう、沢山の素敵な人と、物語を見せてくれて》と沙紀も泣きながら言った。
私はただ沙紀を抱きしめていた、ユリカが来てミホの絵を見て泣いていた。
《それと、色鉛筆での最後の絵、やっと仕上がったよ》とスケッチブックを差し出した。

私は笑顔に戻り受け取った、ユリカが私の真後ろに立った。
スケッチブックを開いて、私とユリカは又も泣いていた。

あのマリアの暗黒の世界の絵が出てきたのだ、暗黒の中でマリアだけが白く発光していた。
本物と寸分狂わぬ天使の笑顔の描写が、黒い世界に希望を提示していた。
そしてマリアが見てるであろう場所に、明るい未来を感じていた。
暗黒の時でも未来に微笑むマリア、この絵の提示は３０年以上経った今でも続いている。
沙紀のこの絵も想いも、マリアにとって、一度も色褪せる事は無かった。

私が何も言えないでいたら、ユリカが沙紀の手を握り、感激を伝えていた。
私は嬉しくて嬉しくて、ただ沙紀を見ていた、沙紀の母親も堂々と泣いていた。

そして沙紀が見せる、ミホに対する愛情を見せ付ける。
沙紀が次に出した水彩画は、最後の空白のピースから表れたミホだった。
真直ぐに前を向く無表情のミホ、だがその顔には優しさが溢れていた。
ミホは美しい立ち姿で、少し浮いていた。
左手に丸いピースを持って、宇宙の中心に浮いているようだった。
幻想的な表現に、ミホに対する感謝と愛が描かれていた。

沙紀の母親が立派な額を、笑顔で私に差し出した。
私も笑顔で頭を下げて、ミホの絵を額縁に収めた。
そして沙紀の手を引いて、ミホの横に歩いた、沙紀と2人でミホを

見て絵を見せた。
ミホはじっと絵を見ていた、そしてベッドから降りて、屈んで沙紀を強く抱きしめた。
沙紀もミホの背中に手を回し、力強く抱きしめていた。

関口医師と婦長が、病室の入り口からその光景を見ていた。
婦長は号泣していた、その暖かい2人の姿を見て。
私には嬉しそうな関口医師の笑顔と、婦長の涙が何よりも嬉しかった。

私はミホが一番見やすい、正面の上段の時計を外し、ミホの絵をかけた。
それだけで部屋が明るくなり、温度も上がった気がした。
ミホと沙紀が体を離し、ミホがベッドに戻り絵を見ていた、嬉しそうな無表情だった。

そして沙紀がベッドに戻り、最後の絵を出した。
それを見てユリカは号泣して、関口医師ですら涙を見せた。

そこには宇宙服を着て、無重力で由美子を強く抱く、北斗の美しい笑顔が描かれていた。
その北斗の表情は、喜びを爆発させて、由美子も喜びに包まれていた。
沙紀は描いた、《真実の嬉しい》を描ききった。
その絵には愛しか存在しなかった、沙紀は愛を描き切っていた。
愛情と友情と感謝を込めて、その想いを全て表現した。

沙紀の母親が号泣しながら、額縁を出した。
私は大切にその絵を額縁に収め、笑顔の戻ったユリカに沙紀を抱かせた。

そして母親と関口医師と婦長に見送られ、由美子の病室に歩いた。
廊下の突き当たりの、非常口の窓から光が溢れていた。
ミホと沙紀と由美子の未来への道のようで、沙紀を抱いたユリカは光に向けて歩いていた。

私はその時に感じた、ユリカが次の段階を完全に上がった事を。
そして覚醒し続けるユリカが行き着く先には、私との別れがあると。
だが私はそれで良いと思えた、それが私とユリカの永遠の関係の始まりなのだと。
何故だかそう感じていた、沙紀を抱き光に歩く、逆光に映るユリカを見ながら。

由美子の病室に入り、沙紀を北斗と祖母の前に立たせた。
由美子の手を握って、カレンが笑顔で話していた。

『北斗・・沙紀が退院するので、お友達の由美子に感謝を込めた贈り物です』と笑顔で言って、絵を渡した。
北斗は絵を受け取って、凍結していた。
祖母は崩れるように泣いて、沙紀を強く抱きしめた。
沙紀は祖母の背中に手を回して、北斗を見ていた、絵から目を離さずに号泣する北斗を。

北斗が沙紀を抱きしめて感謝を伝え、由美子の側に歩いた。
そして右手を握り、由美子に絵を見せた。
由美子の喜びを感じたのだろう、北斗はベッドに顔を埋めて、由美子の真横で泣いていた。
カレンが沙紀を迎えに来て、沙紀に由美子の左手を握らせた。
沙紀は何かを伝えながら、《うん、うん》と由美子を見て強く頷い

た。
由美子の絵を見ている、アンナの瞳からも涙が溢れていた。
その横で少女の安奈が、嬉しそうな笑顔で絵を見ていた。

私はカレンに沙紀を頼むと言って、ユリカを連れて病室を出た。
階段まで歩き、ユリカにケースを持たせて抱き上げた。
そして屋上まで上って、遠くに見える平和台の平和の塔を見ていた。

ユリカは瞳を閉じて、静寂を連れていた。
私は平和の塔を見ながら、沙紀の暗黒の世界を思い出していた。
そしてその時に気付いた、あの赤い月のもう１つの意味と、姿無き女の存在の意味を。

《美由紀・・お前だ、次は中１トリオが核だよ》と心で囁いた。
ユリカは波動を出さずに瞳を開けて、爽やか笑顔で頷いた。

私はユリカとＴＶルームに行き、女性達の中に二ヤで入った。
「どうしたの？・・楽しい事みたいですけど」とユリさんが私とユリカの顔を見て、驚いて言った。
『皆さん、沙紀が２２日に退院が決まりました・・ありがとうございました』と笑顔で言って頭を下げた。

「良かったね・・良かったね、沙紀」とネネが天井に向かって言って。
「淋しくないよ沙紀・・みんなは沙紀の側にいるよ」とリリーが上を向いて笑顔で言って。
「こんなに嬉しいんですね・・何よりも嬉しいです」とハルカが笑顔で言った。
「本当に嬉しいですね・・良かったね、沙紀」とユリさんも薔薇で微笑んだ。

『これが沙紀からのお礼です・・多分全ての女性に対する感謝と、勇気を教えられた事に対する感謝です』と笑顔で言って。

ユリさんの正面にマリアの絵を出した、完璧な静寂が支配していた。
ユリさんの瞳から、止め処無く涙が溢れていた。
女性達も泣いていて、私はマリアを抱き上げて、マリアに絵を見せた。

「さき・・ありがと」とマリアが言って、一筋の涙を見せた。

「本当に見事ですね、沙紀は到達しました・・最後の色鉛筆の絵で。
このマリアの絵には、沙紀の夢も希望も全て描かれています。
そして女性達に対する感謝も、５人娘に対する愛情も。
全てを集約させた、この暗黒の世界で発光するマリアで」

ユリカが静かに言葉にして、私を笑顔で見た。

「そしてエースには特別の物を贈りました、今までの全ての感謝を込めて。
そして心からの熱い応援も込めて、その世界を表現した。
誰も見たことの無い、本人ですら知らない・・真実を描きました。
最初の水彩画として・・エースとの出会いに感謝を込めて」

ユリカが爽やか笑顔で言って、全員が私を見た。
私はマリアの絵の横に、ミホの笑顔の絵を出した。
全員の涙がその絵を見ていた、私は２枚の絵の両極の世界を見ていた。
どちらの絵にも確かな温もりが存在した、同じ温度だった。

「本当に嬉しいです・・私は次に踏み出せます、沙紀が背中を押してくれました」と強く言って、ユリさんが立ち上がった。
「エース・・額を買いに行きましょう」と薔薇で微笑んだ。
『行きましょうかね、俺も額に入れないと』と立ち上がりユリさんと腕を組んだ。

「ユリさん・・このマリアの絵は」とハルカが言った。
「もちろん、控え室に飾ります・・女性達全ての宝物ですから」と薔薇で微笑んだ。
女性達に笑顔が溢れ、レンとハルカとマキが掃除に行った。
私は笑顔のユリさんと、腕を組んでデパートに向けて歩いていた。
少し高いユリさんの温度が、別世界に踏み出した事を示していた。

「沙紀ちゃんが退院すると、ミホちゃんが淋しくなりますね」とユリさんが私を見て言った。

『そうですけど・・次が決まっています、理沙が入ります。
関口先生は賭けました、女性達に力を貸して欲しいと言ってるのでしょう。
沙紀と由美子の世界に対する、女性達の対応で感じたのでしょう。
辛い事かもしれないが、信じていると・・関口先生は言いました。
俺も、もちろん同意見です・・だから何も言わず、理沙と触れ合わせたい。
由美子とは違う、理沙の存在を感じて欲しい・・もう1つの大切な想いを。
辛い未来を感じながらも、心で触れ合ってる・・美由紀の心も感じて欲しい。
理沙と由美子・・その2つの存在が見せます、もう一人の弱い自分を。

その本質を見せると思います・・乗り越えるのでなく、心で手を繋ぐ。
それが出来ると信じています・・今のメンバーなら』
私は真顔で前を見て言った、ユリさんも前を見ていた。
「出来ます・・私も出来ると信じます・・そして私も出来ますよ」
とユリさんが薔薇で微笑んだ。
強烈な波動が何度も来た、理沙の病気の事は、私とユリカと蘭しか知らなかった。
ユリさんが私の分も額縁を買ってくれて、私が持って2人でＴＶルームに戻った。
蘭とカスミとカレンも揃っていた、マキが早目の食事を久美子と食べていた。
「最高だったね、この2枚の絵は」と蘭が潤む満開で言った。
『うん・・蘭、沙紀の退院は２２日に決まったよ・・そして沙紀の後には、理沙が入るよ』と笑顔で返した。
「そうなの！・・了解、また楽しくなるね」と蘭がユリカを見て、私に言った。
「私もそれで淋しさが和らいだよ・・次の理沙を聞いてね」とユリカが爽やか笑顔で言った。
私はミホの絵を額に収めて、ＴＶルームにかけた。
ユリさんがマリアの絵を額に収めて、ハルカが大事そうに持って控え室に行った。
『マダム、ユリさん・・そして久美子、沙紀の退院祝いもかねた演奏会を開きたい。

１２月の土曜日ですが、今週の週末に・・１年で最も熱いであろう、その日に。
街自体が持つエネルギーで、沙紀の背中を押してやりたい。
準備は完璧にやります、裏方４人組と俺とカレンとリリーで。
沙紀に感謝を示す退院祝いは、俺にはそれしか思いつかない。
許可をお願いたいと思います・・絶対に営業に、支障はきたしません』

私はマダムを見て、真顔で言って頭を下げた。

「もちろん良いよ・・共同体全店に知らせろ、６時から開演しよう。
ミホと沙紀の夕食を、ＰＧが用意する・・感謝を込めてな」

マダムが笑顔でそう言って、ユリさんも薔薇で頷いた。
『ありがとう・・それじゃあ、久美子よろしく』と笑顔で頭を下げて、久美子に言った。
「了解・・いつでも大丈夫だよ」と久美子が微笑んだ。

「ＰＧと派遣は今夜話し合おう、沙紀の退院祝いを」と蘭が満開で微笑んだ。
「はい」と女性達が笑顔で言った。

「蘭・・ＰＧには当然、マダムも松さんも・・全てのスタッフを入れて下さいね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「もちろんです・・平等に出資してもらいます」と満開で返した。

「エース・・今夜５店巡回して、私の店は多分全員出すから・・蘭、全員で１つを贈ろう」とユリカが笑顔で言った。
「はい・・そうしましょう、沙紀の将来の作品に貢献できる物を」と満開で返した。

女性達がワイワイと盛り上がり、北斗とアンナ親子が来た。
エミとミサとレイカも来て、ミホの絵を笑顔で見ていた。
「ミホちゃん・・リンダちゃんに会うんだね、嬉しそうだね」とレイカが笑顔で言った。
「そうだね、ミホちゃんの目に映ってるの・・青い目のリンダちゃんだね」とミサが笑顔で返した。
私は慌ててミホの絵を見た、その瞳に映るように描かれていた、楽園ブルーが。

「リンダちゃんって言うんだ、ミホちゃんに思い出させるの」と安奈が2人に笑顔で言った。
「そうだよ、青い目がリンダちゃん、緑の目がマチルダちゃん」とミサが言って。
「思い出させるんだ・・そうなんだね」とレイカが嬉しそうに言った。
「安奈・・ミホちゃんに、思い出させるの？」とエミが笑顔で聞いた。

「うん・・ミホちゃん、忘れちゃったんだって・・なが～く笑わなかったから。
沙紀ちゃんが・・安奈は良かったねって、笑い方を覚えていたからって言ったよ。
ミホちゃんは今思い出してるんだって、だから沙紀ちゃんはこれを描いたんだよ。
沙紀ちゃんは、ミホちゃんが大好きだから・・ミホちゃんが助けてくれたから。
沙紀ちゃんが怖い場所に行く前に、ミホちゃんが始めて、お話してくれたんだって。
そして沙紀ちゃんに、怖くないよって言ってくれたんだって。

ミホちゃんが必ず助けに行くって、言ったんだって・・沙紀ちゃんが言ったよ」

エミが安奈に笑顔で返して、絵を見ながら泣いていた。
「エースの言葉、今分かったよ・・失う怖さを一番知ってるんだね、ミホちゃん」とエミが絵を見ながら言った。
私は何も言えなかった、喜びだけが溢れていた。

「ミホは誰にも言わなかった、今でも全てを拒絶している。
でも沙紀の恐怖を感じて、自分が作った強固な拒絶の壁を壊した。
そして沙紀に伝えたんだね、怖くないと・・自分が助けに行くと。
沙紀を愛しているんだね、ミホは何よりも沙紀が大切だったんだね。
ミホは本当に強い子なんだね、自分の意志を貫ける人間なんだね。
その強さが優しさを作ってるんだね、沙紀はそれを感じてるんだね。
だからこの笑顔を描けた、この笑顔を沙紀は見てるんだね」

蘭が泣きながらそう言った、私もそうだと思っていた。
私は感動して話しているＴＶルームを、マキと出た。
マキは集中してるようで、笑顔で腕を組んできた。

『初日から、飛ばすなよ・・マキ』と二ヤで言った。
「大丈夫だよ・・ゆっくりやるよ」と笑顔で返された。

幻海の受付を通り、フロアーに歩いた。
アイコを含む女性が１２人と、ボーイが６人座って待っていた。
私はマキを紹介して、マキが笑顔で挨拶をした、女性もボーイも笑顔で返していた。

マキは大きなＢＯＸの端に座り、基本を話していた。
その話がスムーズで分かりやすかった、女性もボーイも笑顔で頷きながら手を動かしていた。

「名前を指名するのは、難しいよね？」とアイコがマキに微笑んだ。
「そうですね、少し高度になりますね・・営業中は視線をそんなに動かせませんから」とマキが笑顔で返した。
「何か良い方法がある？」とアイコが聞いた。

「普通ならお勧めしませんが・・１２月で時間も無いですから、１２月限定で。
各自に番号を付けたらどうでしょう、番号の名札を付けて。
それなら数字で簡単に伝えられます、そして１月から名前のサインを覚える。
人を番号で示すのは、抵抗がありますが・・この状況なら仕方ないですね」

マキは真顔で言った、女性もボーイも頷いた。
「そうしましょう、１２月限定で」とアイコが女性達に微笑んで、女性達も笑顔で頷いた。

「指名が重なった時に、女性に優先順位を聞きたい時は・・どうやるの？」とボーイが笑顔で聞いた。

「ＰＧでは、後先を示すだけですね・・指名された女性が、どちらかを決めます。
先に入った人か、後に入った人か・・指名された女性が、後先のサインで送ります。
その権限は全て女性が握っています、各自が周りの状況を判断して決めますね。

ユリさんは最終的には、フロアーの中だけで、サインを繋ぐ世界を目指しています。
だから指名の重なりは、当事者の女性が判断します。
蘭・ナギサ姉さんクラスになると、一瞬で状況を判断しますね。
その重なった2人のヘルプは、誰が良いのかを全て覚えています。
そしてヘルプの女性の状況を瞬時に確認して、どちらを優先するか判断しますね」

マキが笑顔で答えた、全員が驚いていた。
「そんなレベルで仕事をしてるの・・凄すぎるね」とアイコが笑顔で言った。
「権限を貰うと言うのは、それだけ難しい事なんですね」と若い女性が笑顔で言って。
「何でも欲しがったらいけないんだね、それだけの覚悟がいるんだ」ともう一人の若い女性が言った。

「マキちゃん、教えて?・・今のあなたの考えを」とアイコが真顔で聞いた。
強い言葉だった、美しいアイコがマキの瞳を見ていた。

「そうですね・・何かを与えられる時、必ず新しい責任も付随してきますね。
でもＰＧの女性達の心は、全てを要求してしますよ。
それに付随される責任も要求している、私はそうだと思っています。
多分・・責任の方を欲しがっていますね、託される存在に成りたいと願ってます。
昨夜の終礼でも話が出ました、たとえ宮崎１だと認められようとも。
変化を望むと確認しあいました、理想の世界を目指すと主張した。

その主張の根底には、全員の信頼関係があります。
刺激しあい、競い合う・・その果てにある、本当の信頼関係です。
そうなればサインもあまり必要無くなる、目を見るだけで意思は伝わりますね。
そこに行くには、自分を認めなければならないのでしょう。
自分に足りない物を認め、今の自分を客観的に理解する。
それは辛い行為ですよね・・だからこそ意味があるんですね。
私は今、フロアーデビューの試験を受けています。
その試験の問題は、それだと思っています。
今の自分を理解し、それに向き合えるか・・理想も目標も全て外した、裸の自分。
足りない物が多過ぎる、自分を認められるのかと・・問われていると感じます。
私の今の目標は・・ＰＧの最年少記録を塗り替える事です。
そして私の目的は、自分の試験に合格する事です。
誰かじゃない・・自分自身がもう大丈夫と言える、そんな自分に辿り着く事です。
不安も怖さも全て内側に入れて、それを持ったまま・・挑戦の舞台に立ちたい。
私は憧れてこの仕事を選んだ・・それを確信した、その時の自分が見てますから。
その挑戦の覚悟を決めた時の自分に、笑顔で手を振って舞台に向かいたい。
その時に・・覚悟をした時の自分が、背中を押してくれる。
ＧＯ、マキ、行って来い・・そう言って貰える、人間に成りたいと思っています」
マキは一気に言葉にした、灼熱の砂漠から熱が吹き込んできた。
幻海の女性達に笑顔が咲いた、マキは種火を点火した。

「あなたですら、試験が必要なんですね・・ＰＧという最高峰の店には」とアイコが嬉しそうな笑顔で言った。
「私などでは、まだまだですから・・だから楽しいんですけれど」とマキも笑顔で返した。
女性達にも笑顔が溢れて、また基本サインをマキが教え始めた。

「さすがＰＧ・・秘密兵器も凄すぎるね、マキちゃん・・今で女帝の匂いがするよ」と私の後ろから轟爺が言った。
『さすが轟さん・・マキは母親の源氏名を、本名で受け継ぎました・・マキの母親は、千花の真希さんです』と二ヤで返した。
「本当か！・・それは素敵な話だね、小林さんにも話せよ・・喜ぶよ、あの人は」とマキを見ながら、轟爺が笑顔で言った。

女性もボーイも楽しそうに、笑顔でサインを出し合っていた。
その時、アイコが急に立って、深々と頭を下げた。
全員がその方向を見て、慌てて立って頭を下げた。

ユリさんが薔薇の微笑で、歩いて入ってきた。
ユリさんは美しい和服を着ていた、その貫禄が既に別世界だった。

「轟さん・・本日はお世話になります」と美しい姿勢で深々と頭を下げた。
「ユリ・・ありがとう・・和服での登場で、嬉しさ3倍だよ」と轟爺が笑顔で返した。
「クラブ幻海ですから、気合が入りましたわ」と薔薇で微笑んで、女性の方を見た。

「今夜はよろしくお願いします・・楽しみましょね」と薔薇で微笑んだ。
「よろしくお願いします」と女性達も全員笑顔で返礼した。

「何か、注意事項が有るかしら？」とユリさんがアイコを見て、薔薇で微笑んだ。
《さすがユリさん、一目でアイコを見分けた》と心で囁いた、強い波動が帰ってきた。

「何も有りませんが・・１つだけお願いがあります」とアイコが笑顔で返した。
「なんでしょう？・・遠慮なさらないで良いですよ」とユリさんが薔薇で返した。

「開演の響き・・それをお願いしたいんです、一度だけでも経験したい」とアイコが真顔で言った。
「分かりました・・ただし条件があります、明日からあなたが引き受けるなら」とユリさんも美しい真顔で返した。

「私がですか！・・私で良いんでしょうか？」とアイコが真顔で言った。
「異議無し」と一人の女性が手を上げて、「異議無し」と女性全員が手を上げた。

「了承されましたね、アイコ・・明日からは頼みますよ」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「ありがとうございます・・ありがとう、みんな」とアイコが潤む瞳で頭を下げた。

マキは女性達を見て嬉しそうだった、私もアイコの強い決意をした瞳が嬉しかった。

クラブ幻海、その最高級店の女性が元に戻った、確実に集中は増し

ていた。

そして私は目撃する、アイコという才能に驚愕する。

その秘められた才能が開花する、薔薇の世界で開花の時期を迎える・・。

【冬物語？】

自分を信じる事は難しいのだろう、人は無い物ねだりをする。
なぜそれを手に入れたのか、どうすれば手に入るのか。
その方法にこそ意味がある、開花の季節はその意味に隠されている。

最高級クラブ幻海の、フロアーの女性達が自分の準備をした。
そしてフロアーの中心で、円を描いて立った。
その中心に薔薇が咲いていた、全員を見回して表情が変わった。

「この世の中は、理不尽で不公平です。
努力では届かない世界もあります、結果を求める限り不満も残る。
解決法は１つしかありません、納得できる方法は。
結果を途中で求めない、道半ばに求めない事です。
終着点のイメージを、常に上げていく・・遠い世界を目指す。
その過程を楽しんで、謳歌しなさい・・それが若さの特権です。
自分の心の変化を楽しみ、一箇所に留まらせない。
流れに身を任せない、流れを自分で作る・・そして漕ぎ出す。
次のステージを目指して、成長した自分を愛して。
どんな世界で生きようとも、最も大切な事・・自分を愛する。
それが出来なければ、他人を愛する事は出来ません。
出来ますね？・・裸の自分を愛する事が・・出来ますね？」

ユリさんは美しい真顔で全員を見回した、その瞳には厳しさがあった。

「はい」と女性全員が真顔で返事をした。
「それでは、今夜も開演しましょう」の薔薇の言葉に、「はい」のブザーを鳴らした。

女性達の表情は、確かに変わった。
それが店全体の雰囲気まで変えた、最高級店の緊張感が出てきた。
開店と同時に、夜街の生き字引的な爺さん６人が入った、ドンが一番後ろから入ってきた。
奥のＢＯＸにボーイが案内して、ユリさんの後ろに、アイコと４人の女性が整列した。
ユリさんが薔薇の微笑で挨拶して、女性達も深々と頭を下げた。
私はドンと爺さん達の笑顔を確認して、マキを連れてＰＧに戻った。
マキが指定席に座り、フロアーの状況を確認した。
開店直後に７割の席が埋まっていた、フロアーに浮き足立った感じは無かった。
私は北斗・アンナ・リリー・カレンの、派遣４人組を全てＰＧに投入していた。
それに火曜日でホノカが入っていた、ホノカの指名が増え始めていた。
私はその事に感心していた、週２のホノカに会いに来る客が増えた事に。
ホノカは指名客の５番の２人組みに付いた、フォローにはカレンが付いていた。
美少女姉妹のような２人が、一瞬で客の笑顔を作った。
北斗と蘭とリリーで、３番のユリさん指名の県会議員３人組をフォローしていた。
静かな会話でスタートして、蘭が点火して、リリーが強烈に煽った。
６人に笑顔が溢れて、権力者も楽しそうに笑っていた。

サインの８割以上を、フロアー内で繋ぎ、シオンとハルカが司令塔だった。
マキは２人の見事なサイン捌きを見ていた、相手を見ずにサインを送っていた。
９時少し過ぎに、満席記録を更新した。
《１２月の満席記録は、全く問題ないな》と思って、私は席を立った。

５店巡回して、沙紀の退院祝いと演奏会の話を繋いだ。
全店が忙しく、私は連絡事項だけ話して、谷田のジャズクラブに行った。
ジャズクラブのＫＵＭＩＫＯ　ＮＩＧＨＴ　は大盛況で、入れない客が階段で数人待っていた。

私はステージの久美子を見て、谷田に笑顔で頭を下げてた。
谷田の店のバイトの女性が、久美子を送ってくれると言ってくれた。
私は礼を言って、谷田の店を出た。

通りは沢山の人で溢れていて、女性の客も目立っていた、１２月の独特な雰囲気だった。
私は呼び込みさんと笑顔で挨拶しながら、中央通りに入ってそれに出くわした。

救急車が１台と、パトカー４台の回転する光を囲んで、野次馬が溢れていた。
野次馬の多くは夜街関係者で、騒然としていた。
私は中学生であり深夜だったので、補導を恐れて、慌てて裏通りに戻った。

その時私の視線の隅を横切った、大きな若い男がサッと横切ったの

だ。
【アマリ】と私は心で叫んで、視線で追ったが、もう何処にもいなかった。
ユリカの波動が、何？何？と言う様に何度も来た。
《ごめんねユリカ、知ってる先輩を見た気がしたんだよ》と平静を必死に装って伝えた。
私は嫌な予感に包まれながら、ユリカの波動を確認していた。
アマリとは恐怖の執行者と呼ばれて恐れられ、狂ってると言われた男である。
私より５つ上で、中学を出て町を出たと聞いていた。
アマリの数え切れない伝説のどれもが、信じられない色で塗られていた。
少年院を往復するような男で、更正施設でも手放したと言われていた。
１８０を超える長身で、実戦で作られたのであろう、強靭な筋肉を持ち。
その精悍な顔の中に、鋭過ぎる目が怪しく光る、不気味さを纏う男なのだ。
私はアマリが入院して来た時に、病院で何度か会っていた。
アマリは大人数を相手に喧嘩して、大怪我を負って入院していた。
私は小学生だったので、アマリにも可愛がられた。
しかし幼い私は、初めての感覚を感じていた。
アマリと一緒にいる時は、ずっと緊張していたのだ。
何も悪い事をしてる訳じゃないのに、常にピリピリとした緊張感が

有った。
アマリの仲間達が醸し出す緊張感が、子供の私のも伝わっていたのだろう。

私はユリカに悟られないように、何も考えずに裏から幻海に入った。
幻海も満席だった、フロアーの女性も２０人を越えていた。
その中でアイコが輝きを放っていた、存在感を出して笑顔を振り撒いた。

蘭ともナギサとも違う、落ち着いた雰囲気のアイコ。
その美しい姿勢に、確かな自信が加わった感じだった。

ユリさんは出来るだけ動き、お客全員を相手にしていた。
その雰囲気は完璧にママで、初めて来た人ならそう確信しただろう。
最高級クラブのママの雰囲気を、醸し出していた。

その薔薇のオーラを感じて、アイコは踏み出したのだろう。
ゆっくりと動く笑顔の視線は、店全体を捉えていた。
女性達もアイコに信頼感を示し、流れを作っていた。

大きな存在であったリリーの穴を、アイコを中心に、全ての女性達で埋めようとしていた。
《リリーの指名客を、幻海にどう引き止めるのか、それが彼女達の今の課題だね》と心に囁いた。
強い波動が同意を示していた、私は波動を感じながらアイコを見ていた。

ジンの派遣会社の夜の女性派遣、その成功の鍵を握っていたのは、アイコだった。
アイコの提案が、派遣を次のステージに押し上げた。

アイコは私に二ヤで提案した、私も二ヤで返して受けた。
リリーと小夜子とカレンの背中を押して、挑戦の舞台に立たせた。
しかしアイコも私も想定が甘かった、リリーは別世界に存在した。
リリーは予想を遥かに超える答えを出し、それを小夜子とカレンに繋いだ。
その伝説が広がり、私の所に派遣の依頼が殺到した。

それにより派遣の面接依頼も増えて、私はジンと面接していた。
その中に登場する、復帰を目指して訪ねてくる、私はその姿を見て凍結した。
背中から溢れ出ている物が、マリと全く同じだったのだ。
サチコが笑顔で登場する、その道を繋ぐのが、美しいアイコだった。

私は未来を知る事も無く、アイコの美しい姿を見ていた。
ユリさんが圧倒的オーラで、幻海の女性達を引っ張った。

クラブ幻海は、最高級店の名に恥じぬ雰囲気を出し始めていた。
私は心にアマリの残像を残し、気分の晴れぬままフロアーを見ていた。

幻海が閉店を迎え、私は女性全員に見送られ、ユリさんと幻海を出た。
ユリさんとＰＧに入った時には、ＰＧのフロアーには誰も居なかった。
私はユリさんと控え室の前で別れて、ＴＶルームに入った。
マキと久美子がいて、私はマダムの前に座って意識して笑顔を出した。

『マダム・・中央通にパトカーが入ってたよ、何かあったの？』と

平静を装って聞いてみた。
「危ない風俗のボーイが、磔(はりつけ)の刑に遭ったらしいぞ。
若い男に店のアイスピックで、左手の掌を壁に貫かれたらしい。
その貫き方が絶妙の場所での・・刑事達も緊張してたらしいぞ」
マダムは真剣な表情で言った、私も真顔で聞いていた。
私はマダムの話で確信していた、犯人はアマリだと感じていた。
《掌の絶妙の場所、運動部位に影響を与えない場所を貫いた。
緊迫してるその場面で、それが出来る・・アマリしかいない》
私はもう一人の自分を出して、心に強く言っていた。
マダムと松さんの視線を感じて、意識して恐怖のウルを出した。
『怖い奴がいるね・・アイスピックって、そんなに細くないのに』
とウルで言って、サクラさんが来たのでエミを抱き上げた。
私はサクラさんをタクシーに乗せて、タクシーが見えなくなるまで見ていた。
嫌な予感は膨らんでいた、その予感は現実の世界に現れようとしていた。
私はＴＶルームに戻りながら、頭の中のアマリを削除した。
シオンの方法を練習していたので、なんとか削除出来た。
蘭と面白話をしながら部屋に帰り、添い寝して眠りに落ちた。
翌日、美由紀と登校して、中１トリオの集中を感じていた。
３人を土曜の演奏会に招待して、笑顔で盛り上がる３人を見ていた。
美由紀と下校をして、病院に行き３人に会って、ＰＧに入った。

TVルームに入ると、マダムとユリさんと徳野さんと、中年の男が2人座っていた。
私は見覚えのある2人に笑顔で挨拶した、1人は夏の事件の時の中年刑事だった。
そしてもう1人は、あのミホに写真を見せた時に、大丈夫かと何度も聞いた刑事だった。

『ドキッ！・・大丈夫、俺は無実だ』と私は驚きを隠して、笑顔で言って挨拶した。
「大きくなったね・・驚いたよ」とミホの時の白髪の刑事が言った。
『ご無沙汰してます・・まぁご無沙汰の方が、俺には良い事ですけど』と笑顔で言って刑事の横に座った。
「そうだよな・・面白いよな～、伝説の小僧は」と中年刑事が二ヤで言った。
『少年課でない人には、ビビリませんよ・・俺、外しましょうか？』と笑顔で返した。

「いや・・君に会いに来たんだよ、昨夜の事件関係でね」と白髪の刑事が言った。
『磔事件ですか？』と真顔で聞いた。
「そう・・見事な磔事件だよ」と中年刑事が真顔で返してきた。
「通りかかったんだろ？・・何か見たのか？」と徳野さんが真顔で言った。

『俺は補導が怖くて・・あの状況を見て、すぐに裏通りに入りました。
でも・・その時視線の隅で捕らえました、事件に関係が有るかは分かりません。
ただの偶然かも知れません、宮崎を出たと聞いてたので、少し驚

きました。
アマリ君を見ました・・〇〇ヒロミ君でした、間違いないです』
私は2人の刑事を見ながら、真剣に言った。
「やはり・・アマリが帰ってるのか」と白髪刑事が中年刑事に言った。

「事件を聞いて、嫌な予感がしてね。
夜街関係者の目撃者が、誰も知らない奴だったから。
その若い男の特徴を聞いて、脳裏にどうしても1人の男が浮かんでね。
呼び込みから・・小僧が野次馬の中に、誰かを探していたと聞いてな。
それで来たんだよ・・そうか、やはりアマリか」
中年刑事が静かに言った、少し寂しげな表情だった。

『そうでしょね・・自白してるのと同じですよ、磔の刑なら』と私も真顔で返した。

「小僧はなぜ、アマリと呼ぶようになったんだ?
俺は昔取調べをしていて、アマリ本人から聞いたんだよ。
小僧が命名したと聞いてね、その理由が聞きたいと思っていたんだよ」
白髪の刑事が真顔で言った、中年刑事を私を見た。

『俺が刑事さんにミホの事で会う、あの年の春です。
アマリ君が大怪我で、あの病院に入院してきた。
俺は小4に上がったばかりで、アマリ君は中3でしたね。

アマリ君は外科じゃなく、小児病棟の個室に入りました、その意味は知らなかった。
多分・・子供の中に入れた方が、アマリ君の為だと院長が判断したんでしょうね。
アマリ君が車椅子で動けるようになって、俺は出会いました。
アマリ君が俺に言ったんです、美由紀を押してる俺を見て。
屋上に行きたいから、押してくれないかと言った。
だから俺はアマリ君を押して屋上に行き、アマリ君と屋上から海を見てました。

なぜそんな大怪我したの？・・俺は興味津々で聞いたと思います。
喧嘩したんだよ、高校生１４人相手に・・俺は馬鹿だから。
アマリ君は笑顔で言いました、相手が小学生だから、警戒心が無かったんですね。
そりゃ～・・凄いねって、俺は素直に返したと思います。
凄くないよ、そんな事・・全然凄い事じゃないんだ。
アマリ君はそう言って海を見てました、瞳が寂しそうだと思いました。
雰囲気を変えるのに、俺は自分を小僧と名乗って、アマリ君の名前を聞いた。
アマリ君の本名は、ヒロミですよね・・女みたいな名前だと言って、嫌っていました。
女みたいか～・・あの歌手の雰囲気もそうだし、嫌だよねって俺は言った。
親が付けた名前だから、俺は嫌なのかもな・・俺は両親からすると、余りの子供だから。
そう言った・・俺は幼かったけど、余りの子供って言った表現に驚きました。
施設の子供と触れ合っていたから、その表現が理解出来なかった。
それから俺は苗字でアマリ君を呼んでいました、アマリ君も俺や

美由紀には優しかった。
小児病棟の入院してる子供にも・・そして何より、ミホに対しては愛情さえ感じてました。

アマリ君がかなり回復して、仲間達が見舞いに集まりだした。
その頃から、アマリ君は遊戯室に来なくなりましたね。
俺は夜会って、何度か2人で屋上に上がりました。
仲間達が集まりだして、アマリ君は緊張感を背負った感じでしたね。
アマリ君が松葉杖で歩けるようになって、退院が決まりました。
退院する前日の夜、俺がミホの部屋にいると、アマリ君が来ました。
そしてミホの手を握って、「頑張れよ・・ミホ」と言いました。
優しかった、俺はそれが嬉しかった・・アマリ君の本当の姿を見た気がして。
ミホはその頃、笑顔も出ていて・・笑顔で頷いていました。

その後2人で屋上に上がって、夜の海を見てました。
俺はもう一度だけやらなければならない、あの男だけは許せない。
アマリ君が海に向かって言いました、俺はアマリ君の横顔を見てました。
何も聞かないんだな、小僧は・・アマリ君がそう言った。
子供の俺に分かる事じゃないんでしょ・・それに誰にも止められない。
俺は思ったままを言いました、そしたらアマリ君が俺を見た。
静かな顔でした、優しい瞳でした・・そしてこう言ったんです。
俺の呼び名を付けてくれよ、お前が俺を忘れないように。
ミホにも伝えてくれよ・・ミホが俺の名前を呼べるように。
アマリ君がそう言った、俺も嬉しくて・・そして思ってた名前を言いました。

俺、施設の子供とも友達なんだ・・だからどうしても分からないんだ。
だから背負って欲しいんだ、その言葉を背負って欲しいんだよ。
そしていつかその意味が分かったら教えて、俺はその意味が知りたいんだよ。
俺は殴られようともそう呼ぶ・・アマリ君って呼ぶ、俺は知ってるから。
俺だけは知ってるから、アマリ君の優しさを知ってるから。
俺とミホは知ってるから・・だから俺とミホはそう呼ぶ、アマリ君って。
俺はアマリ君が好きだから・・ミホもアマリ君が好きだから。
アマリ君・・ミホがあんなに嬉しそうに笑ったの、俺も初めて見たよ。
俺は何があっても、噂は信じない・・俺の友達のアマリ君の噂は。
そして忘れないよ・・俺とミホは、アマリ君の事を。
俺は何故だか感情的になっていました、アマリ君の覚悟に押された感じでした。
何かをやると感じて、その恐怖も感じてた・・だから正直に言葉にした。

ありがとな、小僧・・俺は気に入ったよ、アマリって呼び名が。
俺は中学出たら町を出る、誰も俺を知らない場所でやり直すよ。
この町にいたら、同じ事を繰り返すからな・・ミホを頼むな。
俺は初めて普通に接して貰ったんだ、小僧だって俺の事少し警戒したろ。
それは俺がそうさせてるんだから、仕方ないんだよ。
でも、ミホは俺に対し何も無かった・・俺は嬉しかったんだよ。
ミホを戻してくれ・・小僧なら出来ると思ってるよ。
ありがとう小僧・・俺はアマリと名乗るよ。

それが俺とアマリ君の最後の会話でした、その後にあの両手磔事件が起こります。
アマリ君が初年院に行ったと聞きました、俺は寂しさを抱えました。
でもその頃の俺は、ミホを引き離されたばかりで、精神的にまいっていた。
アマリ君がアマリ君と呼ばれてるのも、事件の半年後に知りました。
昨夜、俺の視線の隅を横切ったアマリ君は・・優しいアマリだったと思います。
理由を調べて下さい・・必ず何か理由が有る、俺はそう思っています。
アマリ君が逃げてるなら・・まだ終わってないですね。
アマリは逃げる人間じゃない・・終われば自分で罰を受ける。
今までそうしてきたから、それがアマリの生き方だと思うから。
俺はそう信じています・・アマリ君の友人として』

私は感情的な自分を全て出して、伝達を全て使って2人の刑事に伝えた。
「小僧・・戻ってるのか、お前もあの頃に」と白髪の刑事が言った。
『ミホと会っています・・今回はやりきります』と真顔で返した。
「よし・・次にミホの笑顔が出たら、俺も話すよ・・あの時のお前の問いかけを」と白髪の刑事が言った。
『お願いします・・必ずミホの心の事件を解決したい、それが無ければ・・ミホは永遠に一人の世界にいる』と私も真剣に返した。
「理由は突き止める・・だからアマリにもし会ったら、出頭しろと言ってくれ」と中年刑事が言って、2人が立った。
私も2人に頷いて、徳野さんが2人を送ってTVルームを出て行っ

た。
私はユリカの強い波動を何度も受けながら、ミホを想っていた。
鮮明にあの時が映像で蘇っていた、写真を見せられたミホの瞳が蘇っていた。

「おい、ちょっと」と徳野さんがＴＶルームを覗いて私に言った。
私は立ち上がり、徳野さんを追ってＴＶルームを出た。
受付裏の小さな事務所に、徳野さんの後を入った。
徳野さんが自分の席に座り、前の席を私に示した。

「あの店の話を、何か聞いてるか？」ろ徳野さんが言った。
『聞いてません・・危ない店だと、呼び込みさんに聞きました』と真顔で返した。
「未成年を雇ってるらしいんだ・・警察も目を付けてて、内定をしてたらしい」と徳野さんが二ヤで言った。
その表情で感じた、何かを教えようとしていると。

『経営はどんな人ですか？・・やばいの？』と二ヤで聞いてみた。
「やばくないよ・・元小林さんの店のボーイ頭で、くびになったのさ。
チンピラと付き合ってて、何かやったらしい。
まぁそのチンピラとの付き合いで、あんな風俗店を出せたんだろうが。
小林さんはあの店が、すぐに手入れにあって、潰れると思ってたんだろうね。
今回の磔の話・・店は公にしたくなかったようだ。
でもそれを見た女性が、慌てて警察に連絡したらしいよ。
今も経営者は事情聴取されている、店の女性を調べられてね。

電話した子も、１７歳だったらしい・・店はもう終わりだろうね。
ただ・・ボーイで一人逃げてる奴がいるらしい、そいつがスカウトもしていた。
アマリという男も・・そいつを狙ってるのかもな。
とにかくお前は手を出すなよ・・会ったら必ず出頭させろよ。
それがアマリのためだぞ・・分かってると思うが」

徳野さんが二ヤで言った、私は真顔で頷いた。

『その逃げたボーイの事は、誰に聞けば分かりますかね～』と俯いて二ヤで言った。
「確か・・ＰＧって店のカズと、知り合いだと聞いたな～」と徳野さんが机の書類を見ながら言った。
『さて・・お仕事してきます』と笑顔で立って、徳野さんに頭を下げて背中を向けた。

「出頭させろよ・・それならば罪も軽くなる、まだ１８歳だろ・・やり直せるさ」と徳野さんが笑顔で言った。
『肝に銘じます・・ありがとうございました』と深々と頭を下げて事務所を出た。
私は徳野という男の、深い優しさを感じて嬉しかった。

私はフロアーでカズ君を探した、エレベーターホールの掃除をしていた。
『カズ兄さん・・少しお話が』と二ヤで声をかけた。
「ドキッ！・・怖いな、何か聞いたのか？」とカズ君がウルで返してきた。
『何も聞いてない・・美冬と喧嘩したなんて』と二ヤ二ヤで返した。
「まさか！・・俺は自白したのか？」とカズ君がウル継続で言った。

『さぁ・・屋上にでも行こうか、カズ』とカズ君の肩に手を置いた。
「お供します・・エース」とカズ君がウルで言って、2人でエレベーターに乗った。

私はカズ君と美冬の、犬も食わない話をニヤニヤで聞いて、カズ君を慰めていた。

「それで、俺に対する話は何だよ?」とカズ君が二ヤで聞いた。
『実は昨夜の風俗〇〇の事件・・俺の知り合いの先輩で・・・』とアマリの話をした。

「ちょっと待てよ・・アマリなのか?・・・アマリがやったのか」とカズ君が驚いて聞いた。
『そうだと思う・・俺はアマリ君を見たし・・カズ君も知ってるんだね、アマリ君』と真顔で返した。

「知ってるも何も・・アマリは俺の2こ下で仲が良かった、グレる前だけどな。
小学校の時は、いつも遊んでたよ・・家が近くてな。
あの店の逃げたボーイ・・アマリの同級生だよ、対立してた男なんだよ。
俺も当然、そのボーイも知ってる・・同じ中学だったからな。
いけ好かない奴さ・・集団で暴れて、酷い事をしてたよ。
女癖も悪くてな・・だからチンピラに目を付けられて、仲良くなって調子に乗ったのさ。
夜街で馬鹿やって、あの店に逃げ込んだ・・チンピラが匿った。
そして今は少女に対して、強引なスカウトをしてたらしいな。
近い内に捕まるって言われてたよ、だから誰も手を出さなかった。
何があったのか・・多分、アマリには許せない何かが発生したんだな。

俺も探ってみるよ・・これ以上、アマリに罪を犯させたくないからな」

カズ君が真顔で強く言った、私も真顔で頷いた。
カズ君を見送って、私は屋上から雑居ビルの森を見ていた。
北風が強く吹き抜けて、気温を下げていたが、私は寒さを感じなかった。

夕焼けが西の空を朱に染めて、私はその方を見ていた。
ミホを頼むな・・そう言ったアマリ君の顔が、映像で流れていた。

「やばい集中が出てるよ・・夜街のエース」とユリカの声がした。
『やばいかな？・・やばくないよ、ただ俺は生き方を確認しただけ』と言って、ユリカを抱き上げた。
「間違うなよ・・ミホが見てるよ」とユリカが私の耳元に囁いた。
『そうだね・・俺はミホの笑顔が見たいんだ、悲しい顔を見たいんじゃないよ』と笑顔で返した。
ユリカは深い深海の瞳で私の表情を確認して、深海の瞳を閉じた。

私はユリカを抱いて、夕焼けを見ていた。
ユリカの少し高い温度で、私は集中していた。

しかし私の感じてる事よりも、事態は深刻だった。
その逃げているボーイは、とんでもない事をしていた。
夜街とは自浄する街だった、良し悪しは別として、それが秩序を保っていた。
しかし今回の事は、自浄作用が働かなかった、国家権力の介入を皆が期待していた。

その反省を迫られる事になる、夜街の裏側が動き出す。

強い自浄作用が動き出す、その強い反省を込めた大鉈が振り上げられる。
私はその裏の意志を感じて、自分の考えを押してしまう・・未熟なままで。

私にとって忘れ得ぬ事件がスタートした、自分の甘さを認識させられる。

光の届かない暗黒からの声がする、その声は無駄だと叫ぶ。

その声に対して、私は叫んで返す・・大切なあの言葉を。

無駄だと思った時に、敗北が決まると・・叫ぶしかない。

理想の世界とは・・その上にある、諦めない想いの果てに存在する。

希望の青が近付いていた、次の提案の為に・・強さとは何かと、問いかける為に。

私は何も知らずに・・ミホの笑顔を想っていた、夕焼けに包まれて・・。

【冬物語？】

他人の評価を気にしてしまう、仕方の無い事であろう。
誰もが良く見られたいと願う、それが秩序を保たせてるのだろうか。

ユリカとＴＶルームに戻ると、女性達も揃っていた。
マキと久美子が食事をしていて、蘭がやって来た。

「むむ・・異様な緊張感、何があった？」と私の顔を見て満開二ヤで言った。
私は蘭と2人で小窓の場所に行き、アマリ君の話をした。

「徳野さんのその感じなら良いでしょう・・無茶するなよ」と蘭が真顔で言った。
『うん・・約束するよ、無茶はしないよ』と真顔で返した。
「でも・・自分の生き方も曲げるなよ、ミホが見てるよ」と満開で言って、私の手を引いた。
私は蘭とＴＶルームに戻り、派遣の予定を話していた。

『リリー・・轟オーナーと話したよ、リリーの幻海は来春からにするよ。
マキ・ヨーコがデビューしてから、幻海に入ろう。
今の幻海の女性は、リリーの指名客を引き止めるのが課題だからね。
その方向でよろしく・・スナック全店を年内に経験しとこうね』
私は笑顔でリリーに言った。
「了解・・スナック楽しみ～、初体験だから」とリリーが微笑んだ。
『ユリカはいつでも良いよね？』とユリカに二ヤで聞いた。

「もちろん良いよ、小夜子も楽しみにしてるから」と爽やか笑顔で言って、リリーも笑顔で頭を下げた。

『マダム・・１２月は満席記録問題ないでしょ？』とマダムに聞いた。

「まだまだやね～・・一年でベスト３に入る厳しい日が有るよ、考えてみな？」とマダムに二ヤで返された。

『えっ！・・そんな日が１２月にあるの？』私は意外な質問に考えていた。

「私の店・・去年は、お客様４人でした」とユリカがウルで言った。

「ＰＧも満席にならなかったですよ」とユリさんが薔薇で返した。

「難しいんだよね～、あの日の対応は・・休みたくなるよ」と蘭も満開ウルで言った。

「ピーチは皆でたかりますよ、怖い店です」とネネが二ヤで言った。

『イヴか！・・確かに男同士で飲みに出るのは、嫌だろうね～。

色気を売りにする店は、逆に戦争なんだね。

共同体の店は確かに厳しいね、プレゼントなんてどうにか拒否したいし。

でも相手にはそれを贈る、既成事実が発生するのか～』

私はそれに気付いて、二ヤで言った。

「所帯持ちは家族サービス、若者は何とかカップルを目指すし。

カップル成立出来なかった大半の若者は、家に閉じ篭るよね。

プライドが有るから・・男同士で飲んでると、自分達で意識するんだよ。

俺達はどう見られてるのかって・・夜の女性はそんな事、気にもしないのに。

だからこっちも・・自然に相手をするのは、相当に難しいのよ。
最初のその壁が有るからね・・笑顔ですら出すのを考えるよ」

蘭がウルで言って、女性達もウルで頷いた。
「そっか～・・私の想定は甘かった」とカスミがウルで言って。
「私・・想定さえしてなかった、仕事か～って思っただけだった」
とレンもウルで言った。

『なるほど・・問題は一人で勝負に出たい男に、理由を与えれば良いんだね。
盛り上げれば良いんだよね、お客さんの気分を盛り上げれば。
そして理由を作り出してやれば良いんだよ、飲みに出る理由を。
それが有るからイヴだけど、出てきてやったぞって状況を作れば良いんだ。
クリスマスだから、少しお客様に感謝のプレゼントでもしますか？
それにユリさんとサクラさんと北斗とアンナを、気分良く休ませたいし。
そんなに難しい日なら、クリスマスを逆手に取りますか？』

私はマダムとユリさんを見て、二ヤで言った。
「もったいぶるなよ、作戦を言ってみろ」とマダムが二ヤで返してきた。

『クリスマス感謝祭、完全予約制・・独り占めナイト・・かな。
ようはイヴの1時間の予約を先に取って、その時間は女性が動かない。
完全指名制とする・・これは客には、理想の世界だよね、
だからクリスマスプレゼントになる、女性側も誘いやすいし。
女性達も今夜から週末までに、これと思うお客に声をかける。
クリスマスに予定の無さそうな、プライドの高そうな・・勘違い

しない客に。
店の方針で変なイベントがってウルで言って、少し困ってる感じで話せばＯＫ。
８時から１２までの４時間かな、蘭・ナギサとその下の若手だけで。
マンツーマンだろうから、予約の状況で席を作る。
予約だけで満席状態を目指す、飛び込みのお客には満席だと断れるし。
まぁそんな日なら、飛び込みのお客も皆無だろうけど。
事前に計算が出来るし、完全予約だから対応も楽・・何より客が喜ぶ。
相手は来店する事が、お気に入りの女性に対する、プレゼントになるし。
プレゼントを何とか避けたい、その対策にもなるよ。
価格は指名料を引いた位で・・どうでしょかね？』

私はマダムとユリさんに、二ヤで言った。
「面白いですね・・やりましょうか、年に一度の感謝祭」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「怖い男だよ・・そんなに競わせたいのか」とマダムが二ヤで言った。

「強引には誘えない状況・・どれだけ信頼のある客がいるのか、その勝負か～」とカスミが言って。
「エース・・派遣は全員ＰＧと思ってて良いの？」とカレンが二ヤで聞いた。
『もちろん・・どこも暇だから、ＰＧだよ』と二ヤで返した。
「今夜から予約を取って良いぞ・・１時間、〇千円で良いよ・・報告はマキにしてくれ」とマダムが言った。

『電話勧誘は無し・・運の良い客だけで勝負、明日ポスターだけ貼るよ』と私が二ヤで言った。
「予約が満席になった状態で、打ち切りますね・・早い者勝ちです」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

『期待してるよ・・それは女性達にしか出来ない。
北斗とユリさんとサクラさんとアンナが、安心して休める状況を作るのは。
そして若手女性も休めるよ、大切な日だからね・・堂々と休んで良い。
満席を作り出せば、誰でも休めるよ。
５人娘と由美子・・その大切な６人に、クリスマスプレゼントを贈れ。
女性達でしか出来ない・・母親と過ごせる、クリスマスプレゼント贈るのは』

私は二ヤで言った、若手が笑顔で頷いた。
「良かったね、由美子」と北斗が天井を見上げて微笑んだ。
「私も休めそうですね、嬉しいわ」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

「煽りますね～・・運の良いお客様が来ますように」と蘭が満開で微笑んだ。
「まずいよ、相当にまずい状況だ・・おじ様に頼ってた私は」とカスミがウルで言った。
「イヴは木曜ですよね・・ホノカ姉さんも入りますね」とカレンが二ヤで言った。
「ホノカは、明日の木曜一発で・・予約を決めそうだね～」とリリーが二ヤで言った。
「煽りますね～・・私がお見せしましょう、４時間フルの予約を」とカスミが不敵で返した。

盛り上がる女性を残して、私はマキと久美子とＴＶルームを出た。
少し緊張してる久美子に二ヤを出して、幻海に入った。
少し早かったので、女性が６人座っていてボーイは準備をしていた。
私は久美子を女性達に紹介して、久美子をピアノに案内した。

「すごっ！・・〇〇〇のグランド、嬉しいな～」と笑顔で言って、椅子の調整をした。
久美子は静かな曲を奏でていた、サインの講習の邪魔にならないように。
それでも一瞬で女性達の心を掴んだようだった、アイコが嬉しそうに久美子を見ていた。

「マキ・・ＰＧは、あのピアノで気分を高めるの？」とアイコが笑顔で言った。
「はい・・開演の響きの直前まで、気分を盛り上げてくれます」とマキが笑顔で返した。
「良いな～・・素敵だな～」と若い女性が言った。

女性達が１５人になり、ボーイも来て、サインの講習が始まった。
私はピアノの近くの席で、笑顔が咲くサイン講習を見ていた。

マキはフロアーでサインの振るときの、注意点と要領を身振り手振りで話していた。
女性達が少し離れて、ボーイもフロアーの端に行って、サインを飛ばして練習していた。
久美子は楽しげな曲で、その講習の後押しをした。

開店２０分前に、蘭がドレスで入ってきた、女性達に笑顔が溢れた。
「よろしくお願いします」と満開で微笑んで頭を下げた。

「よろしくお願いします」と女性とボーイが笑顔で返礼した。

「アイコ・・よろしくね、緊張するわ～」とアイコの隣に座りながら、満開で微笑んだ。

「やっと見れるよ、最高の副職が・・嬉しいよ」とアイコも美しい笑顔で返した。

「プレッシャーかけないの・・明日のナギサの方が、アイコには参考になるよ」と満開二ヤで言った。

「それも楽しみだよ、あの華やかさ・・素敵だよね～」とアイコが嬉しそうな笑顔で返した。

「明日はナギサさんですか！・・凄いです、楽しみです」と若い女性が笑顔で言って。

蘭も含めた女性達で盛り上がった、楽しそうな光景に満開が咲いていた。

開店１０分前になって、蘭が久美子にサインを送って立ち上がった。女性達でフロアーに円を描いた、蘭は瞳を閉じた、それを見て女性達も瞳を閉じた。

久美子はその状況を見て、表情が変わった。

そして弾いたのは、マチルダの夜に弾いた激しい曲だった。

久美子は完全燃焼するように、狂おしく燃えながら弾いて、種火を煽った。

女性達の表情が変化していた、久美子は強い熱を放出して弾ききった。

「アイコ・・行くよ」と蘭が瞳を開けてアイコに言った、アイコは真顔で頷いた。

「新幻海の船出です・・微力ながら、私もベストを尽くします。

気付いた事、改善して欲しい事・・何でも提案して下さい。
自分達で作り上げましょう・・ＰＧのように。
最高の曲で船出を出来る事に感謝して、サインを教えて貰える事に感謝して。
バラバラの私達の心を戻してくれた、憧れの女性達に感謝をして。
感謝の証を見せましょう・・このニュー幻海の仕事で」

アイコはそう言って女性達を見た、女性達も真顔で頷いた。
「それでは、今夜も開演しましょう」のアイコの言葉に「はい」のブザーを鳴らした。

私はマキと久美子と、奥の小部屋に入って見ていた。
最初の客は勝也だった、和尚と美由紀の父親の政治と入って来た。
蘭の喜びの満開が咲いて、奥のＢＯＸに通された、蘭とアイコと若い女性が挨拶していた。

勝也と和尚が、蘭に二ヤで何かを言って、蘭は両手の銃を満開二ヤで出した。
アイコと若い女性と、後ろの幻海の女性達が凍結するのを楽しんで。
蘭は勝也と和尚を撃ち抜いた、手の反動が大きくて、強い弾丸を表していた。
勝也も和尚も大袈裟に撃たれた振りをして、蘭は手の銃にフッと息を吹きかけた。

蘭の幻海第一幕は、最も得意の手の銃劇場で幕を開けた。
私はマキと久美子と二ヤで見て、裏から幻海を出た。
ＰＧの指定席にマキと戻ると、既に満席状態だった。

私はフロアー内でサインを繋ぐのを確認して、倉庫に行ってポスター用紙を取った。

ＴＶルームに戻り、鉛筆で薄く下書きをした。

「イラストを入れるのか？」とマダムが二ヤで聞いた。

『もちろん・・サッサッと描いて貰うよ、俺の専属画家に』と二ヤで返した。

「沙紀に描いて貰うのか・・素敵なのが出来そうだね～」と松さんが笑顔で言った。

『うん・・楽しみだよ』と笑顔で返して、下書きをしていた。

その日も順調に時が流れ、終演を迎えた。

蘭は幻海の女性を煽り続けたようで、私と蘭を女性全員が笑顔で見送ってくれた。

翌日が休みの蘭と、ラーメンを食べて帰り、添い寝して眠りに落ちた。

翌日の学校で、沙織に得意の装飾文字で、ポスターを書かせた。

見事な出来栄えに感動して、沙織の頬に感謝のキスをしようとしたら。

グーで殴られて、ウルを出していた、中１トリオの笑顔と爆笑波動に包まれていた。

下校して、蘭の手作りの夕食を食べ、病院に２人で行った。

沙紀にポスターの説明をして、１２色のマジックを渡した。

沙紀が楽しそうに描き始めたので、私はミホの手を握り学校の報告をしていた。

蘭は由美子の部屋に行っていて、私はミホが眠ったのでベッドに寝かせた。

沙紀の側に戻ると、絵はほとんど出来ていた。

私はその絵に感動していた、美しい女性が3人、サンタの衣装を着ていた。
楽しそうな笑顔で、可愛いサンタの衣装を着て手招いていた。
三者三様の美しさを描き、ＰＧの誰かに似てるようで、しかし誰とは言い難かった。
１２色のマジックで描いたとは思えず、その美しく楽しそうな出来栄えに感動していた。
沙紀は背景まで明るい色で塗り、納得したように右下に小さくＳＡＫＩと書いた。

私は沙紀を抱きしめて嬉いを伝えて、慎重にポスターを丸めた。
沙紀にまた明日と手を振って、手を振る沙紀と別れて、蘭と病院を出た。

ＴＶルームに女性が集まっていて、ナギサとホノカも来ていた。
予約の話で盛り上がっているようで、蘭が慌てて予約表を見た。

ナギサとリリーとシオンが2時間、ネネ・千春・千秋・カレン・レン・ハルカが1時間取っていた。

「リリー！・・ＰＧデビュー間が無いのに、もう2時間取ったの」
と蘭が満開二ヤで言った。
「運が良くて・・持って生まれた星ですかね～」とリリーも二ヤで返した。
「あれ？・・おやおや？・・あれれ？・・若手のエースの名前が無い」と蘭がカスミに最強満開二ヤで言った。
「様子見です・・今夜、４時間取ります」とカスミがウルで返した。
『でも・・ナギサは当然だけど、さすがシオンだね～』と私はシオンに笑顔で言った。

「お話したら、予約してくれました・・シオンが心配だからって」とシオンがニコちゃんで言った。
「シオン・・オヤジだね、ファザコン出したね～」とカスミが不敵で言った。
「オヤジ様じゃないです～・・○○ＴＶの○○さんと、○○物産の○ちゃんです」とシオン二ヤで返した。

「まぁ、素敵な２人ですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「凄いな～・・さすがシオン」とネネが微笑んで。
「本気で言ってるね、その２人なら・・シオンとクリスマスを過ごしたいんだね」と蘭が満開で微笑んだ。

「カスミ・・ウル過剰症が出てるよ、イヴはお休みしなさい」とホノカが華麗二ヤで言って。
「若手のエースも、休ませてあげるよ・・予定有りそうだし」とリリーが二ヤで追った。
「私がいない訳にはいきませんよ・・若手のエースですから～」とカスミは必死に強がった。

『これを貼る必要はないかな？・・良いのが出来たのに』と二ヤで言って、テーブルの上にポスターを広げた。
「まぁ・・素敵なポスターですね」とユリさんが嬉しそうに言った。
「マジックで描いたの・・凄いな～・・さすが沙紀ちゃん」とカレンが笑顔で言った。

「私を真ん中に描いてくれて・・ありがとう、沙紀」とホノカが二ヤで言って。
「それは勘違いだろ、真ん中は私だよ」とカスミが不敵で言って。
女性達が異様な盛り上がりを見せた、ユリさんとアンナが２人で笑っていた。

蘭がナギサに幻海の話しをして、ナギサが華やか二ヤを出した。
私はマキと久美子を連れて幻海に行き、座ってピアノを聴いていた。
マキも久美子も幻海の女性と打ち解けて、ケーキをご馳走になり笑顔が出ていた。

意思を伝えるだけのサインは通りだして、私も一安心してケーキを食べていた。
サインの飛ばしあいをマキが確認して、自然に飛ばす要領を説明した。
その時入り口の方から、ナギサが笑顔で入っていた。
珍しく真紅のドレスを纏って、華やかさＭＡＸの笑顔で歩いてきた。

《やりやがった、ナギサが華やかＭＡＸで登場したよ》と心に囁いた。
強い波動が二ヤを出してるようで、私は波動を受けながらナギサを見ていた。
ナギサは女性達と笑顔で挨拶を交わし、女性達に囲まれて微笑んでいた。

女性達がフロアーに円を描き、久美子が集中の中に入れた。
アイコの開演の言葉も自然になって、女性達の気持ちを１つにしていた。
ナギサがその夜も華やかさで煽って、幻海の女性も完全に点火されたようだった。
マキと久美子は轟オーナーから報酬を受け取り、その額に驚いていた。

私はユリカをユリカスペシャルして、リアンに会いに行って、シオンの予約の話しをした。

リアンも喜んで、新年は我が家にシオンと来ると言ってくれた。
私は心のどこかに、アマリの事を抱えながら、意識しないようにしていた。
自分から動かないでいた、私にはアマリの気持ちが分からなかった。
理由を探る事もしなかった、私は自分に言い聞かせていたのだ。
《偶然も必然も無い・・会うべき時は、会うだろう》と心に言っていた。
同意の優しい波動に包まれて、私はどこかでその時を楽しみにしていた。

その日も順調に終了して、ナギサを迎えに行きＰＧに戻った。
蘭と部屋に帰り、添い寝して眠った。
蘭の充実した少し高い熱が、私には何より嬉しかった。

翌朝、美由紀を迎えに行って、美由紀の表情で何かあったと感じた。
美由紀を押して学校を目指すと、美由紀が真剣な口調で切り出した。

「小僧・・何か隠してるね？・・昨日電話があった。
アマリ君から夜電話があったよ、小僧とミホは元気かって。
私は元気だと伝えて、今のミホの状況を話した。
アマリ君・・緊張感と寂しさを連れてた、何か辛そうだった。
私がどうしても会いたいって言っても、今は会えないって言うんだよ。
何があった、小僧・・お願いだから、教えてよ」

美由紀は前を見て、静かに強く言った。
『火曜の夜・・・』私はアマリを見た話しと、刑事の話をした。
「何が有ったんだろう・・どんな理由があるにしろ、罰は相当に厳

しいね」と美由紀が言った。
『多分・・成人と同じ判断で裁かれると思う、刑事の瞳がそう言ってた』と静かに返した。
「そうなの・・私は、アマリ君は素敵な男になると思ってる・・今でも私はそう思ってる」と美由紀が強く言葉にした。
『俺もそう思ってるよ・・そして近い内に、もう一度出会うと思ってる』と返した。

「小僧・・必ず出頭させて、アマリ君もそれを願ってると思う。
自分の中で止めたいと思ってる、それが出来ない事が辛いんだよ。
でも・・覚えてるよね、心の隅に置いてるよ・・ミホの事を。
優しい人間なんだよ・・アマリ君が私に言った言葉。
私には大切な言葉なんだ・・だから、頼むよ・・小僧」

美由紀の真剣な言葉が響いて、優しい波動が吹き抜けた。

『分かってるよ、美由紀・・俺もそう思ってるよ』と無理やり笑顔を作って言った。
「警察より、小僧が先に会えると祈ってるね」と美由紀も笑顔で返してくれた。
私は笑顔で頷いて、校舎を見ていた、冬の暗い空の下に立っていた。

私は気分が晴れぬまま、授業を受けて美由紀と下校した。
美由紀は翌日の演奏会が楽しみなのか、笑顔で話していた。

私は部屋に帰り、シャワーをして病院にバスで向かった。
沙紀も演奏会が楽しみなようで、ミホもほんの少し温度が変化した。
由美子も調子が良く、楽しそうに話してくれた。

私は病院を出て、ＰＧに向かって歩いていた。

突然後ろから美冬に腕を組まれた、美冬は二ヤを出していた。
『怖い・・美冬の二ヤ、怖い』とウルで言った。
「カズ君が話しがあるって、今から屋上に行ってね」と美冬が微笑んだ。
『美冬・・予約取ってないな、でもカズ君は仕事だぞ』と二ヤで返した。

「状況次第だね、昨夜でかなり埋まったから・・私はパスかな、イヴ位は安心させてあげたいから」と美冬が笑顔で言った。
『優しい所があるじゃないか・・犬も食わないやつには、気を付けろよ』と二ヤで返して。
裏階段をＰＧを通り越し、屋上を目指した。

屋上で冷たい風に吹かれていると、カズ君が上がってきた。

『仲直り出来たんだね・・おめでとう』とカズ君に二ヤで言った。
「おかげさまで・・クリスマスは乗り切れそうだよ」と二ヤで返された。

カズ君は私の横に立って、雑居ビルの森を見ていた。
一年で一番熱い週末の訪れた夜街が、開店前から熱を発散していた。

「アマリが狙ってるボーイ・・とんでもない事をしていた。
高校生と中学生の、売春の斡旋をしてたらしい。
かなりの強引なやり口で、少女達を集めたらしいよ。
その中に、アマリの関係者がいたんだろうな、その話がアマリの耳に入った。
詳しい事は分からない、警察もその部分を調べてるらしい。
アマリは姿を隠してる、そのボーイを探してると思うよ。

磔事件の犯人は、今はまだ不明となってるらしい・・今なら間に合う。
出頭すれば、刑事事件になるか・・少年犯罪になるか、微妙な状況だと思う。
しかしアマリが何所にいるのか、誰にも分からないんだ。
夜の特殊部隊もボーイを探し始めた、多分・・あのボーイは排除される。
今まで黙認していた、夜街の意志が動き始めた。
今更だけどな・・それとアマリが絡む事は、どうしても避けたい。
あの店の経営の後ろ盾のチンピラも、逃げたらしい・・夜の意志は本気だよ」

カズ君は、夜街を見ながら真剣に言った。

『やっぱりあるんだね？・・意志を示す特殊部隊が、秩序を守る為に』私も夜街に向かって言った。
「ある・・闇を統制する、闇の世界はあるよ」とカズ君が言った。
『排除するのか・・でもその機関は、今回失敗したよね・・沈黙で容認した』と私は返した。
「そうだな・・だから焦って、目立つ行動をしてるよ」とカズ君が言った。

『部隊の本部は何所にあるの？・・俺も気を付けるよ』と二ヤで言った。
「二ヤか～・・俺はお前が怖いよ」とカズ君も二ヤで返してきた。
カズ君は考えていた、熱の上がる夜街を見ながら。
「御大（おんたい）を知ってるか？・・マリーレインの御大・・加々見さん」とカズ君が言った。
『名前と顔なら知ってるよ・・リムジン加々見だよね？』と笑顔で

返した。
「そこまでしか言わない・・絶対に会いに行くなよ」とカズ君が真顔で言った。
『行かないよ・・紹介状も持ってないし』と笑顔で返した。
強烈な波動が約束しろと言うように、何度も吹き抜けた。
「とにかく、アマリを見かけたら、絶対に出頭させような」とカズ君が言って。
『了解・・そうしようね』と私も笑顔で返した。
私はカズ君を見送って、好奇心が頭を持ち上げたのを意識していた。
ユリカに悟られないように、注意しながら意識していた。
加々見とは、大きなクラブ2件と料亭と寿司屋を持つ、御大と呼ばれてる中年の男だった。
リムジンで夜街に乗り付けて、常に高級そうなスーツに身を包んでいた。
見た目はやり手の青年実業家という感じで、危険な雰囲気は無かった。
しかし加々見は、夜街で噂すら無かった、その事実が力の強さを示していた。
《闇の番人は、影を背負わないもんだよ》私はミスター望月の、この言葉を思い出していた。
強い北風に吹かれて、私は嫌な予感に囲まれていた。
TVルームに入ると、同時にユリカが入って来た。
私の顔を覗き込み、深海の瞳で私を見た。
「やっぱり、好奇心が出てる・・駄目だよ」とユリカが強く言った。

『はい、ユリカ・・分かってるよ』と笑顔で返した、ユリカも爽やか笑顔で頷いた。

私はユリカと座り、予約表を見て驚いた。
蘭・ナギサ・リリー・ネネ・千春・カレン・カスミ・ユメ・ホノカ・シオンが3時間を取っていた。
千夏・千秋・ウミ・レン・ハルカが2時間だった。

「バタバタと入れ替えは失礼ですから、一人3時間までにしました。
一人の指名の入れ替えに、３０分の時間差を付けますね。
満席は確定しました、後は6時間分しか空いてませんよ」

ユリさんが楽しそうな薔薇で言った、私もユリカも笑顔で返した。

『凄いな～・・楽しみだな～』と私は二ヤで言った。
「蘭は休みかと思ってたけど、本気でやるんだね～・・美冬とは違うね～」とユリカが爽やか二ヤで言った、私はウルで返した。

「沙紀ちゃんのポスター効果で、お客様の方から話がありました～」とシオンがニコちゃんで言った。
「ポスターは剥がしましたよ、これ以上は断る事になりそうですから」とユリさんが薔薇で言って。
「ポスター可愛いから、控え室に貼ったから」とハルカが微笑んだ。

『了解・・じゃあ明日の演奏会の打ち合わせをしよう』と笑顔で言って、４人組とカレンが集まった。
私は打ち合わせをしながら、心は好奇心に溢れていた。
闇の番人に興味が湧いて、それを止められない事を楽しんでいた。
アマリが私の方向に歩いていた、鬼気迫る雰囲気を出しながら。

冬物語は1つ目の節目が近づいた、次の難問を抱えながら・・・。

【冬物語？】

年末独特の空気が忙しさを演出し、心がそわそわと揺れる。
若い恋人達にとって、１年で最大のイベントが間近に迫っていた。
私は裏方４人組とリリーとネネとカレンを加えて、第２回演奏会の打ち合わせをしていた。
ミホと沙紀を、私がユリカと迎えに行き、夕食をＴＶルームで５人娘と食べる段取りで。
演奏会の開演時間が１８時なので、１７時に連れて来る事にした。
５人娘も嬉しそうで、私は裏方４人組に準備を任せた。

『１年で１番熱い土曜日だろうから、よろしく』と笑顔で言った。
「了解・・シオン姉さんもいるし、大丈夫」とハルカが笑顔で返してくれた。
「ハルカ・・私達にも遠慮無く、何でも頼んでね」とリリーが微笑んだ。
「その時は、よろしくです」とハルカも笑顔で返した。

金曜日で準備が早く、女性達が夕食の準備を始めた。
北斗と蘭が来て、私は北斗とアンナを呼んだ。

『幻海・・来週の月・火が北斗・・水・金がアンナで良いかな？』と笑顔で聞いた。
「了解・・良いよ」と北斗が笑顔で言って。
「イヴは休みで良いんだね・・ありがとう」とアンナが微笑んだ。
『うん・・それと年末最後の土曜日は、北斗が魅宴でアンナがゴールドだね』と笑顔で返した。

2人が笑顔で頷くのを見て、リリーとカレンを呼んだ。
『リリーは、月曜ユリカ、火曜がミチル、水曜がリアンの店で。
カレンは魅宴の依頼が来てるから、月・火で魅宴。
残りは全てＰＧで、今年は終了・・そんな感じかな』
私は2人を見て笑顔で言った、2人も笑顔で頷いた。
「スナックの時は、終了まで入って良いんだね？」とカレンが聞いた。
『もちろん・・各店のママが、上がってと言うまで良いよ』と笑顔で返した。
「了解・・楽しみ～」とリリーが微笑んだ。
「見たいな～・・リリーのスナック」と蘭が満開で微笑んだ。
『楽しみだよね～・・小夜子ですら、楽しみにしてるんだから』と私がリリーに二ヤで言った。
「やっぱり・・スナック3店では、小夜子がトップだよね」とネネが笑顔で言った。
「小夜子姉さんの、正直な感想を述べよ」とカスミが私に不敵を出した。
『カスミが言った通りだよ・・小夜子は、ユリカと蘭が共存してる。
手に入れて自分の物にしてるよね、実は小夜子はどっちにも近くない。
小夜子の本質は、超攻撃型・・高熱の女なんだよ。
熱さを隠して、静けさと温もりを纏う・・水を炎で暖めた、温泉みたいな感じ。
俺は魅宴に小夜子が入った時に感じた、ミコトと小夜子のコンビを見てね。
あのミコトが本気で楽しんでた、小夜子の存在に触れてね。

多分・・初めて自分と、同じ匂いの女に出会ったんだと思う。
ミコトと小夜子・・その魅力は、本質が見えないほどのベール。
そのベールが美しく、魅力的なんだよ・・自らが望み、作り出した世界だから。
仕事とプライベートを、完璧に分けている・・それが出来るんだ。
その2つの世界、両方を楽しんでいる・・だからどこにも、負担がかからない。
調整が凄いんだよね、自分の調整が出来てる・・どこで自分に戻るのか。
多分、部屋に帰り化粧を落とした時だろうと思う、夜街にいる時は絶対に脱がない。
それは由美子の段階の時に感じた、本当の姿が現れてたから。
感動したよ・・その徹底した女優業に、プロ意識にね。
ミコトと小夜子は彼氏の前では、全く違うんだろうね・・本当の姿は。
案外・・凄い甘えん坊で、かまって欲しいタイプだと思う。
俺が夜街のゲームの中で、1番楽しんでるのは・・ユリカとのカクレンボ。
それとミコトとの、夜街でミコトを泣かせるというゲームなんだ。
俺があの時・・俺が堂々と酒を飲める時に、存在しないであろうミコト。
そう表現したのは、本気だったよ・・本当に残念だと思ってる。
その接客を、金を払う純粋な客として感じたかった・・そう思うんだ。
大ママが命を背負わせた、その存在・・それに近い感性の女、小夜子。
小夜子が選んだ道の果てにある、その世界が見たいと思ってる。
ミコトとどう違うのか、何を求めて・・何を取り込むのか。
それを期待させる存在だよね・・小夜子は来年から夜一本になる。
プロを目指すと言った・・それはミコトに触れたからだろう。

ユリカは導いた、２人のプロを・・実はユリカが、１番楽しみにしてる。
ミコトと小夜子の将来を・・自分の考えを託した２人だから。
自分が出来なかった、もう１つの理想を・・２人に見てるから。
ミコトが大ママに提案した２面性、それこそがミコトの答え。
ユリカにも示した、ミコトの解答だったと思う。
それを聞いた時の、ユリカの喜びは特別だと思った。
ユリカは託してる、ミコトと小夜子に・・次の提案をしろと言ってるよ』

私は最後にユリカに二ヤを出した、女性が全員ユリカを見た。
「なるほどね、さすがユリカ・・あの２人、本物だよね～」と北斗が微笑んで。
「本当に素敵だよね・・あのブレない感性と、自分に対する自信」
とアンナが笑顔で言った。

「そうですね・・小夜子はクラブ未経験でした、ＰＧに最初に入りましたね。
それでもスムーズに出来た、あのホノカでも初日は苦労していました。
小夜子はイメージしてましたね、そして状況で感じて選んだ。
自分の中に有る、クラブのイメージに近い小夜子を出した。
そして慣れるほどに、違う小夜子を見せる・・飽きさせない為に。
出し惜しみするように、少しずつ見せる・・相当の種類を保有してますね。
私も小夜子を見て、新しい感性を感じました・・プロを目指しますか。
楽しみですね・・次にどんな小夜子を見せてくれるのか、期待します」

ユリさんがユリカに薔薇で微笑んだ、ユリカも嬉しそうな笑顔で返した。

「私は・・どっかで卑屈だった、この仕事を選んだきっかけに対して。

自分が本当に普通じゃないのか、私はそれが知りたかった。

だからこそ、個性的な女性が集まる、夜の仕事を選びました。

私以上の個性に触れたくて、探していました。

魅宴に入って、大ママに言われた続けた事・・常に比べられた存在。

それがリンさんです・・学生のバイトだったリンさん。

リンさんが夜のバイトを選んだ理由は、憧れでした・・夜の仕事に憧れた。

その部分を大ママは、私に伝えたかったのでしょう。

記録を塗り替える度に、リンさんの事を話してくれました。

私はその本当の意味を、誤解してました・・ミコトが入るまで。

ミコトは有名大学を卒業して、夜の世界に入ってきました。

その頃の魅宴は、ナギサが入って半年だったと思います。

私はミコトを見て、驚きさえ感じましたね・・その強い意志を感じて。

ミコトは女性の世界で、きちんと評価されたい・・そう堂々と言いました。

嬉しかったですね、その言葉が本当に嬉しかった。

だから入ってすぐに、ミコトを私のヘルプに指名しました。

そして変化するミコトを見て、それを自分に取り込む姿を見て。

私は感じました・・憧れて入ったという、その精心の凄さを。

私が知っていた、憧れて選択した女性は・・その頃、ユリ姉さんだけでした。

私はユリ姉さんと、ミコトの2人で感じました・・理由の大切さを。

エースに出会うまで、それを感じて・・少し卑屈な部分がありましたね。
その卑屈さを外してくれたのも・・エースの言葉です。
女性を復活させる時に使う、トップを目指せという言葉。
そしてミコトに対して感じた言葉・・ミコトこそ、トップを目指すべき女。
エースはそう言いました・・それからですね、私の気持ちが変わったのも。
次の世代に、何かを伝えたい・・そう強く思うようになりました。
私の想いを伝えた、ミコトを感じてくれて・・私にもそれが出来ると感じました。
そして命と向き合う意味を教えてくれて、大切な出会いを演出してくれた。
そして会わせてくれました・・私が捜し求めた存在に、マリに会わせてくれた。
私は本当に嬉しかった・・その強い力を受け止め、自分を持ち続ける。
マリという存在に触れて・・自分の未熟さも感じて、後悔は消えましたね。
私にとって、確かに・・ミコトと小夜子は特別な存在です。
自分に無い物を見せてくれたから・・その強い意志が、一度もブレなかったから。
ナギサに対する物とは違う・・別の意味での、特別な存在ですね」
ユリカが爽やか笑顔で言った、ユリカの新しい一面を見ていた。
「困りましたね～、蘭・・どこまでも押し上げますね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「遠い存在が、さらに遠くなる感じです・・ユリカ姉さんに対しては、どんな時でも本気で押すから」と蘭が満開二ヤで返した。
ユリカの楽しそうな笑顔を、女性達が笑顔で見ていた。

女性達が食事を始めて、私は5人娘と遊んでいた。
その時突然マリが入ってきた、女性達に驚きと笑顔が溢れた。
マリは頭を下げて挨拶して、私の横に座った。
私は緊張していた、マリが入った瞬間に同調してきたのだ。

『マリ・・何なの？』と手を握り小声で聞いた。
「楽しそうな事するから、付いて行く・・その難問が見たいの」と
マリが同調で二ヤで言った。
『楽しそうな事が、今からあるのか～』と私は笑顔を作って言った。
「感じてるだろ・・好奇心出てるよ、好きだよね～」とマリが二ヤ
で言った。
『マリ・・それを押しに来たね、そんなに楽しい事なの？』と二ヤ
で返した。
「私にはね・・小僧は私が来なくても、行ったよ・・それが小僧だ
からね」とマリが笑顔で言った。

その時カズ君が覗いて、私を手招きした。
私は一人でＴＶルームを出た、カズ君の顔は緊張していた。

「ボーイ仲間から連絡が有って・・捕らわれたらしい、特殊部隊に・
・アマリかも知れない」とカズ君が真顔で言った。
『そう言う事ね・・了解です、カズ君・・御大に会いに行って来る
よ、その為にマリが来た』と笑顔で返した。
「えっ！・・マリちゃんが来たのか」とカズ君が驚いて聞いた。
『うん・・だから大丈夫、行って来るよ』と笑顔で返して、ＴＶル
ームに戻った。
ユリカが二ヤで私を見ていた、私は笑顔で返した。

『蘭・・ちょっとマリと出てくる、加々見御大に会って来るよ』と

笑顔で言った。
静寂が訪れて女性達が私を見た、蘭が私の顔を見ていた。
「行ってらっしゃい、マリが一緒なんでしょ・・大切な事なんだね？マリ」と蘭がマリに笑顔で言った。
マリは二ヤで頷いた、それで女性達の緊張感が取れた。

「御大と仲良くなるなよ・・これ以上は怖いぞ」とカスミが不敵で言って。
「奴がトップだよ、良し悪しは別としてな・・気を付けろよ、ゲーム好きのオヤジだから」とマダムが二ヤで言った。
「早くしな・・ユリカ姉さんが、ここに居る内にいっといで」と蘭が満開二ヤで言った。
私はマリと手を繋いで、ＴＶルームを出た。

通りに出ても、マリはワクワクな感じでご機嫌だった。
私は中央通りに出て、大きなクラブ・マリーレインの入口に立った。

「エース・・何の用かな？」と若いボーイが歩み寄り、笑顔で言った。
『アポは無いんだけど、加々見さんにお話があって』と丁寧に言った。
「ちょっと待ってな」とボーイが笑顔で言って、受付の電話を取った。

内線で二言三言話して、ボーイが戻ってきた。
「社長喜んでるよ・・こっちだ」と言ったボーイの後ろを歩いた。
店の横の狭い通路を通って、社長室にドアの前に案内された。
私はボーイに礼を言って、マリと部屋の奥に進んだ。
大きな部屋で、古い西洋の家具で揃えてあり、重厚な雰囲気だった。

加々見は一人で机に座って書類を見ていた、どこから見ても社長という感じだった。

『加々見社長・・すいません、アポ無しで突然来て・・ＰＧのエースと呼ばれています。
　この子はマリと言います・・少し障害が有って、話す事が出来ません』

私は出来るだけ丁寧に挨拶して、マリと一緒に頭を下げた。
「良いんだよ・・俺も会いたかったよ、夜の女性の人材派遣・・興味あるよ」と御大らしい余裕の笑顔で返してきて、ソファーに案内された。

私はマリとソファーに座った、マリは横にある小さな机を見ていた。そこにはやりかけのチェスが並んでいた、古く高級そうな物だった。

『マリ・・チェスだよ、西洋の将棋みたいな物だよ』とマリに笑顔で言った。
マリはじっとチェスボードを見ていた、私は御大が正面に座ったので立って頭を下げた。

「用件は？・・それを先に聞こうか」と御大が笑顔で言った。
経験から来るのであろう、余裕の笑顔を見て、私は御大を好きになっていた。

『実はご相談があって・・加々見さんに相談する事じゃないんですが。
　誰にも相談出来なくて・・困ってしまって、聞くだけで良いですから。
　火曜の風俗〇〇店の磔事件、あの犯人と思われる男が私の先輩で

す。
今もあの店のスカウト担当のボーイを、探してるようなんです。
そのボーイに対しては、どんな報復をするのか分かりません。
関係無い店のボーイが磔だったから、相当の事をすると思います。
俺はそれを止めたい・・でも夜の意志が動き始めたようで。
そのボーイを狙っているようなんです、それに関わる私の先輩も危険です。
誰にも言えない・・ドン・小林にも相談出来ません。
加々見さんなら、知ってるかと思って来ました・・夜の意志の発信場所を。
今回の件は、闇の番人も失敗でした・・沈黙し黙認していた。
国家権力の介入で済ませようとした、その身勝手な方針で遅れた。
知らなかったじゃ済まされない、今回の件はそれじゃ済まない。
そんな統治能力なら、必要無いでしょう。
秩序を守るなんて、正義を振りかざすけど・・結局、状況に流される。
今回の夜の意志に、俺は物申したいんです・・身勝手な事で動くなと。
加々見さん・・知っていたら教えて下さい、身勝手な闇の番人を』
私は加々見の目を見ながら、真剣に一気に伝えた。
加々見は私に二ヤを出した、私も二ヤで応戦した。
「夜の意志の発信場所は教えられんよ、ただエースの今の話は通しておく。
私の聞いた話と、かなり違うからね・・その部分の確認をするよ。
ちょっと待ってね・・電話してくるよ」
加々見はそう言って立ち、机に座って受話器を取った。
静に話していて、内容は分からなかったが、言葉自体に迫力があっ

た。
加々見は１０分ほど話して戻ってきた、マリはずっとチェスボードを見ていた。
「今、確認したよ・・君の言ってる方が事実のようだね。
そのボーイ以外には、手を出さんらしいよ・・そのボーイも反省させられて。
警察に引き渡されるだろう・・闇の番人も反省していたよ」
加々見は笑顔でそう言った。
『ありがとうございます、助かりました』と私は立って頭を下げた。
「礼はいらんよ・・まぁ座りなさい、マリちゃんはチェスに興味があるようだね」と加々見がマリを見て笑顔で言った。
『勝負の途中みたいですね・・俺はチェスは全然分からないけど』と笑顔で返した。
「昔・・親友がね・・フランスに住んでて、私もフランスに行ったんだよ。
１０年以上前にね、私はその頃の日本に絶望してね・・ようするに逃亡だよ。
その親友が先見の目のある男で、ヨーロッパでビジネスをすると言ってね。
私も興味を持って、手伝いに行ったんだよ・・そしてまた絶望したんだが。
その親友は頭の切れる奴で、チェスの大会で何度も優勝していた。
ビジネスも新しい感覚でね、融資の目どもついて・・これからという時だった。
成功寸前で親友が裏切られてね、その親友は不思議な事故で死んだんだよ。
警察も真剣に調べた様子も無くてね、俺は親友の部屋の片付けに

行ったんだ。
そこにこれと同じチェスの場面があった、そのチェスボードにメモがあってね。
そのメモにこう書かれていた・・【逆転の手段は無いのか？】
そう殴り書きの日本語で書いてあったんだ・・俺はずっと考えてるんだよ。
そのメモが日本語で書いてあったから、俺に宛てた物だと感じてね。
ライバルであり親友だった男の、遺書だと思ってね・・でも見つからない。
どう考えても、逆転は無理なんだ・・俺の実力じゃ考えつかないんだよ。
それからずっとそのままの状態で置いている、チェスの実力者とも何度もやった。
だが誰も無理だと言った、どうやっても結果は同じなんだよ。
俺は勘違いしたのかもな、その親友のメッセージを。
そんな気も最近してるよ・・逆転の目は無いとね」

加々見は懐かしそうに言った、男の魅力が溢れ出すような雰囲気だった。

『王手なんですか？・・将棋で言う』と笑顔で聞いてみた。
「その一歩手前だよ・・だが将棋で言うと、参りましたと言いたくなる状況だよ」と加々見が笑顔で返してきた。

『そうですか・・難しいですね、加々見さんでも思いつかないなら。
ただガキの俺が感じた事なんですけど・・逆転の手段は無いのか？
なんか文章としておかしいですよね、【手段】という表現は。
それがチェスと関連してるなら、【手段】という表現は違和感ありますね。

普通なら、逆転の方法だと思うんです、【方法】なら考えてる感じです。
この時の【手段】は、ルールを無視してでも・・そんな感じですよね。
相手に追い詰められて、もう逃げ場が無い。
形振り構わず、どんな事をしてでも・・それを打開するなら。
【方法】じゃなくて【手段】です・・そしてそれをチェスで示したなら。
多分・・その手段は考え付いていた、でもそれを実行する事が出来なかった。
ルールに背き実行する事は出来ない、しかしその打開策にも気付いた。
だからチェスに残した、そしてメモは日本語で書いた。
加々見さん以外が先に見た時に、日本語の難しさなら分からないと思った。
そのメモは遺書じゃないですよ、メッセージです。
多分・・何かを伝えるメッセージ、絶対に逆転の方法は有りますね。
親友に宛てた、大切なメッセージだと思いますから』

私は得意の言葉の問題で、感じた事を正直に話した。
しかし感じた事の半分も、自分の言葉で表現出来なかった。

「噂以上に面白いね、夜街のエースは・・なぜチェスなのかな、そこが知りたいね」と加々見が笑顔で言った。

『多分・・悔しかったんでしょう、だからどうしても伝えたかった。
それを妨害する何かを感じていた、だから日本語の手紙も避けた。
日本語を翻訳されたら、元も子も無いですから。
だから自分の一番得意な、そしてすぐには分からない。

チェスの難解な場面で表現した、そしてメモを残した。
そこに自分の気持ちが出た、どうしても抑えきれない感情。
【方法】でなく【手段】という言葉の選択、それこそが悔しさの表れ。
そう思っただけです・・ガキの想像です、忘れて下さい』

私は笑顔で言った、加々見は興味津々だった。

「よし・・素晴らしい見解だよ、君の気持ちも分かった。
俺との出会いを強くする為に、その能力を全て使うんだね。
興味あるかね？・・夜の仕事で成功したと言われる人間が。
まずは話してくれ、夜の女性の派遣のコンセプトを」

加々見は二ヤで言った、私は必死にニヤで応戦した。

『正直言うと、加々見さんに・・相当に興味があります。
加々見さんはその力で、夜街に噂すら出ませんよね。
そして夜の世界にビジネスを持ち込んだ、会社組織としてのビジネス。
今までの夜の世界は、やはり個人経営の延長線上にありました。
だからワンマンで閉鎖的な空気が強かったから、新しいアイディアが出ない。
持っていても出す場所が無い、私は最近それに気付きました。
ある経営者の反省の言葉を聞いて、その根深い問題点を感じた。
その経営者は右腕を育てなかったと言った、ワンマン経営の弊害だと。
ワンマン経営でも良いでしょう、その人の時代だけで終わる設定なら。
でも自分が生きた世界の、次の場面は誰でも見たいでしょう。
どう変化して、どういう成長を遂げるのか・・それは見たいはず

です。
加々見さんの考えが、１つの方向だと感じましたね。
ただこれ以降は厳しいですよね、マリーレインは宮崎最大級の店です。
だから女性の人数を確保する事も、大変な事ですよね。
強引な引抜をかなりやったと聞いてます、それは男性社員が実績を上げたかった。
でも相手にするのは、生身の女性です・・感情も主張もある人間です。
そう簡単にはいきませんよね、強引な引き抜きは・・敵も作る。
そして引き抜かれない為に、強引な引き止め工作も出てくる。
悪循環です、地に足が着かない・・女性達が浮き足立ってしまう。
打開策は有るのに、楽な方向に走る・・目で見える実績が評価されるから。
長期のスパンで見れない、社員は出世だけに走る・・それじゃあ公務員です。
結局・・自分を卑下する部分は変わらない、所詮夜の仕事などと言う。
人に言われる前に、自分で言ってしまう・・逃げの台詞を出す。
男はその部分が強いですよね、女性はその部分を出さない。
それは競うからでしょう、競える世界だからだと思います。
ジンが派遣の会社を立ち上げると聞いて、女帝が夜の女性の派遣を提案した。
その提案は本気でした、次の段階を望んだんだと思います。
俺の派遣での考え方は、底辺のレベルを引き上げたい。
その為に若手に経験させる、閉鎖的なこの世界だから出来なかった。
夜の女性の選手生命は、野球選手より短いのに、自分の店しか経験出来ない。
その状況で本物になれるのは、選ばれた一部の人間だけです。

強烈な個性だけが辿り着く、しかし辿り着いた場所は寂しい場所ですね。
孤高になってしまう、まだまだ競いたいのに・・誰もいなくなる。
可能性を上げたい、競うべき選択肢を広げたい・・それがコンセプトです。
夜の女性の派遣に対する、俺の考えはそれです。
底辺を引き上げて、次の挑戦者に希望を持たす・・そうすれば選択肢に入る。
仕事を前向きに考えた時、夜の世界も選択肢に入る。
そうすれば本物も沸いてきます・・待ってれば、向こうから来る。
その世界に憧れたと言って出てくる・・それが私の目指す次の段階です』

私は加々見を見ながら、一気に言葉にした。
楽しかった、マリが隣にいる安心感と、加々見という本物を目の前にして。
自分の想いを主張できる場所を感じて、それを真剣に聞いている高みを感じて。
私は楽しかったのだ、そして自分でも感じていた、変換速度の速さを。
強い波動が何度もきて、私とマリを包んでいた。

「うん・・理想を追い続けるという事だね、最後の挑戦者は」と加々見が微笑んだ。
『追い続けます、今はベストなメンバーに囲まれてますから』と笑顔で返した。
「それはマリちゃんも含めてという事だね、ベストなメンバー」と加々見がマリを見て言った。
『もちろん・・マリは私にとって、最高のアドバイザーですから』と笑顔で返した。

加々見のマリを見る目が強く、その瞳の中に深い優しさを感じていた。

「話せないマリちゃんが、アドバイザーなんだね・・マリちゃんは何かを持たされてるんだね」と加々見がマリに言った。
私は驚いていた、加々見の人を見抜く才能の片鱗に触れて。

その時マリが加々見を見た、二ヤを出して立ち上がった。
そしてチェスボードの前に立って、加々見に手招きをした。
加々見のその時の表情は忘れられない、少年の喜びの表情のようだった。

マリは加々見が正面に立ったのを確認して、チェス駒を1つ動かした。
加々見は椅子に座り考えていた、マリも椅子に座って加々見を見ていた。
加々見はかなりの時間考えた、そして意を決するように駒を動かした。

マリはそれを受けて、瞬時に駒を動かした。
加々見は長考に入った、その瞳は真剣だった。
マリはチェスボードを見ていた、集中した良い表情だった。
ユリカの弱い波動が来ていた、ユリカはマリの集中を乱さないように、必死に波動を抑えていたのだろう。

加々見が笑顔になって、駒を動かした。
そしてマリも二ヤを出して、駒を動かした。
そしてマリが加々見に右手を出した、加々見は嬉しそうな笑顔で右手で握った。

「マリちゃん、本当にありがとう・・俺は最初を間違ってたね。
エースの言ったように、これは大切なメッセージなんだね。
生きる為のメッセージだったんだね、あの事故は不慮の事故だった。
そう思えるよ・・どんな時にも諦めるな、自分を投げ打つ覚悟を持て。
あいつは自分に言い聞かせてたんだね・・諦めないように。
それを俺に繋いでくれたんだ・・死のメッセージじゃない。
生きる為の、自分らしく生きる為の・・メッセージだったんだね」

加々見の笑顔は少年のようで、喜びに溢れていた。
マリは笑顔で強く頷いた、マリの表情は強い光を放っていた。
強烈な喜びの波動が何度も来て、マリはそれを感じて笑顔になった。
加々見と私の大切な出会いを、マリが強力にアシストしてくれた。
私は次の段階に自然に踏み出す事になる、御大と言われる男の影響で。
夜街は時代の大きな変革期に入った、そして手薬煉引いて待っていた。
バブルという怪物が、口を大きく開いて、早く来いと誘っていた。
そして私は問われる・・強く熱く問われる・・アマリが問いかける。
人はやり直せるのかと・・正直に答えるしかない、自分に正直に・・。

【冬物語？】

忙しく動く人の熱が、１２月を表現していた。
連続するイベントに対応する為に、大人たちは準備に余念がなかった。

「なるほど、マリちゃんは最高のアドバイザーだね」と加々見が笑顔で言って、向かいに座った。
マリも少し自慢げな笑顔で、私の隣に座った。

『マリは、逆転の方法を導き出したんですか？』と加々見に笑顔で聞いた。

「違ったよ・・だが最高の解答だった。
私が最初の段階で間違ってたよ、逆転の手段の意味をね。
私は親友の事故死を、作為が有る物だと・・そう勝手に決めていた。
だから追い詰められた、死のメッセージと取ってしまってたね。
あのチェスの状況が、自分に言い聞かせる物ならば違うんだよ。
マリちゃんは負け方を提示してくれた、それで目が覚めたよ。
私は逆転の手段ばかりに目が行っていた、チェスの達人達もね。
マリちゃんは次に繋がる負け方を示したよ・・本当に嬉しかった。
逆転の手段は無いのか？・・その意味を感じたよ。
あの時あいつは裏切られて、その時に一度負けを認めていた。
自分の甘さを感じたと、私に言ってたんだよ。
その状況を再現したのが、あのチェスだったんだね。
そして逆転の手段は無いのか・・その意味は、次の挑戦の事だった。
あいつは次を考えていた、だから次に繋がる負け方を模索してい

た。
タフな奴だったんだ、私はそれを知っていたのに・・今まで気付かなかった。
気持ちが晴れたよ・・ありがとう、エース・・マリちゃん。
最高の気分だよ、俺は素晴らしい友に出会ったんだと確信できた」
加々見は本当に嬉しそうだった、私も笑顔で加々見を見ていた。
『そうだったんですね・・素敵ですよね、負け方を模索するって』
と私は笑顔で言った。
「そうだよな・・その時にこそ、その人間が問われる・・負けを認めた時にね」と加々見も笑顔で返してきた。
『加々見さんも、連戦連勝じゃなかったんですね』と笑顔で聞いた。
「負けてばかりだったよ・・私は貧乏な家に生まれてね。
まぁ、あの当時は、９割が貧乏だったが・・戦後だったからね。
満足な教育も受けれずに、社会に出た・・そして闇の世界に身を置いた。
私は度胸が無くて、やくざにも成れない・・中途半端な人間だった。
表舞台には、自分は向かないと言いながら、裏の世界を極度に恐れた。
煮詰まって、海外に逃げるように出た・・しかしその経験がチャンスをくれた。
私は東京の闇の世界で成功した、そしてそれなりの財産を得た。
しかし疲れてしまって、故郷の宮崎に帰ってきたんだ。
手持ちの金で、最初のクラブを開いた・・それが時代に乗って、成功した。
そしてここまで来たんだよ・・でも、エースの言ったような事じ

ゃないんだ。
私が会社組織にしたのは、面倒だったからなんだ。
私はクラブ経営に携わる事すら、興味も無くてね。
ただ自分が贅沢に暮らせれば良かった、持ってる金を減らさなければ良かったんだ。
２度と貧乏に戻りたくない、その気持ちだけだったよ。
だから今、組織としての問題が出てきた、それにどう対処しようかと考えてた。
エース・・来年早々に、もう一度訪ねて来てくれよ。
その時にビジネスとして難問を出す、その答えをどう出すのか・・楽しみにしてる。
もちろん場所は、この店・・宮崎最大のクラブ、マリーレインだよ。
フリーパスにするから、いつでも覗きに来てくれ・・それで問題を探りな。
その答えが納得出来る物なら・・派遣と正式に契約したい」

加々見は笑顔でそう言った、しかし瞳には厳しさが有った。

『受けましょう、その試験・・加々見さんの試験なら、難問でしょうから』と私は真顔で返した。
「なぁ・・小林さんが、ドンで・・梶谷さんが、キングだろ・・俺にも何か付けろよ」と加々見が二ヤで言った。
『それなら、１つしかないですね・・御大と呼びましょう』と二ヤで言った。
「なるほど・・夜街で唯一・・俺を御大と呼ぶんだな」と加々見も二ヤで言った、私は笑顔で頷いた。

御大に挨拶して、マリと２人で社長室を出た。
受付のボーイに２人で頭を下げて、ボーイに見送られ通りに出た。

マリをタクシーに乗せて、私も隣に乗った。

『マリ・・ありがとう、助かったよ』と笑顔で言った。

「良かったね・・私は自分の興味で来たのよ、あのチェスを見たかったの」と同調でマリが言った。

『答えを探さなかったよね・・何を探したの？』と興味津々で聞いた。

「不思議だったのよ・・勝負してる状況なら、あのチェスの場面はあり得ないの。

絶対にそんな状況にならないと感じたの、だから見たかったの。

本物のチェスボードの上の状況を、そして感じたかったの。

あれはシナリオよ、自分で次を書こうとしてる・・シナリオだった。

現実に戦いを挑む、強い意志が反映されてた。

あのチェスの状況こそ、悪質なシナリオ・・世間が言う、運命ってやつ。

それを感じたかったの・・私の経験としてね、滅多に出会えないから。

あんな強い感情には、そう簡単に出会えない・・凄い人だったんだよね。

だからこそ、その親友も凄くなった・・頑張ってね、小僧。

そしてありがとね・・あのチェスに出会えて、嬉しかったよ」

マリはそう返してきた、私も嬉しくて笑顔で返した。

『そっか・・マリは感じたかったんだね』と笑顔で言った、マリは私を見ていた。

マリの大きな黒目に私が映っていた、その瞳で私は緊張した。

「深海の魚は光射す場所を目指さない、光輝く場所に価値を求めない。
周りの仲間がどんなに光を目指そうとも、その心は揺れる事がない。
深海の魚は、他者の光を受けて輝く事を拒絶している。
深海の魚は光射す場所を、好まないのではない。
自らの内なる光を信じている・・深海こそ、棲む場所であると信じている。
深海の魚は暗黒の世界に棲むのではない、自らが輝く光に包まれている」

マリが同調で静かに言った、私は必死にその言葉を記憶した。
マリの家の前に着いて、私はマリを玄関まで見送り、手を振って分かれた。
言葉は何一つ発せずに、マリの言葉を復唱していた。
待たせていたタクシーに乗り、運転手にメモ用紙とボールペンを借り、マリの言葉を書いていた。

空はすっかり宵闇に包まれて、夜街の派手な明かりが見えてきた。
私は充実感を感じながら、夜街の明かりを見ていた。

ＰＧに戻り指定席に座ると、満席状態で熱が高かった。
リリーが美しい二ヤ顔で歩いて来た、私も二ヤで返していた。

「マリちゃん、帰ったの？」とリリーがウルになって言った。
『うん・・送ってきたよ、中学生だからね』と二ヤで返した。
「どこぞのエースも中学生でしょ・・又来るかな～・・マリちゃん」
とリリーが笑顔で言った。
『明日来ると思うよ・・沙紀も来るからね』と笑顔で返した。
リリーは美しい笑顔を残して、戦場に戻って行った。

「楽しい事が有ったね・・仕事取ったのかな？」と蘭が来て満開で微笑んだ。
『うん・・仕事は来年頑張って取るよ・・楽しい話は、寝物語で蘭とユリカだけに話すよ』と笑顔で返した。
「すご～く楽しみ～・・・頑張ってお仕事しよう」と満開で言って、戦場に戻った。

私は蘭を見送り、ＴＶルームに戻って夕食にした。
興味津々光線を発しながら、マダムと松さんと久美子が待っていた。

『凄い人だったよ、御大・・来年頑張れば、仕事を貰えるかも』と３人に二ヤで言った。
「ちょっと待て、まさか・・御大と呼ぶ権利を取ったのか？」とマダムが驚いて言った。
『うん・・それとマリーレインのフリーパス・・マリのおかげだけど』と二ヤで返した。
「上手くいけば、マリーレインにも派遣するって事かい？」と松さんも驚いて言った。
『そうなるように、頑張るよ・・これ以上ない、ビジネス相手だからね』と笑顔で返した。
「ジンが怖くなったと言うぞ・・クラブ幻海にマリーレインと聞いたら」とマダムが笑った。
「底辺の底上げ・・そんな状況じゃ無くなるよ、怖い話だよ」と松さんも笑った。
私は３人の笑顔を見ながら、食事をしていた。

５人娘は仲良く遊んでいた、エミが強い集中に入っていた。
私は食事が終わり、４人娘を代わる代わる抱っこして、ベッドに寝かせた。

そして葉書用の書道セット出して、墨を磨っていると、エミが私の隣に座った。

私は宛名書き用の小筆を握り、試し書き用の葉書サイズの紙に、マリの言葉を書いた。
私の書く字を見ながら、エミの瞳は強さを増していった。
私は1枚書き終わり、エミを笑顔で見た。

『エミにプレゼント・・マリの詩だよ』と笑顔で言った。
強烈な波動が、私の分もと言ってるように何度も来た。
「ありがとう・・素敵だね、さすがマリちゃん」とエミは嬉しそうに言って、受け取って見ていた。
私は2枚目に取り掛かり、用紙が8枚有ったので、8枚書いた。
久美子がその一枚を手にとって、真剣な表情で読んでいた。

私は6枚を残し、1枚持ってTVルームを出た、通りは人で溢れていた。
私は人混みを避けながら、ユリカの店のビルのエレベーターを待っていた。
予想通り、ユリカはエレベーターから降りてきて、私の首に腕を巻いた。

私は久々に、ユリカの少し酒臭い匂いを感じて、12月の忙しさを再確認していた。
私がユリカを最上階まで運ぶと、ユリカが爽やか二ヤで手を出した。
私はマリの言葉を二ヤで渡した、ユリカは真剣に読んでいた。

『感想は言わないでね、ユリカ・・その時が終わるまで』と笑顔で言った。
「了解・・でもマリちゃん、本当にどんどん素敵になるね」と嬉し

そうな笑顔で言った。
『うん・・変化のスピードが怖いくらいだよ』と笑顔で返した。
私はユリカを優しく降ろして、ユリカの店に入った。
店内はほぼ満席状態で、カウンターだけ４席空いていた。
私は一番奥の席に座り、カウンター越しに小夜子の笑顔を見ていた。
ユリカは小夜子にマリの詩を渡し、引き出しに入れといてと二ヤで言った。
小夜子はその二ヤで感じたようで、酒を作る振りをしながら読んでいた。
「はい・・ど～ぞ・・あれは誰の言葉なの？」と小夜子がコーラを出しながら、小声で聞いた。
『マリの詩だよ・・意味は分からない、感想は今は駄目だよ』と二ヤで返した。
「は～い・・楽しくなってきたね～、明日は演奏会もあるし」と小夜子が美しく微笑んで、客の前に戻った。
私はそれから金曜の５店巡回をして、全ての見せの満席を確認して、ＰＧに戻った。
ＰＧはスタートから終了した１時まで、満席状態だった。
女性達も疲れ果てたようで、そのまま終了になった。
ワクワク状態の蘭と部屋に帰って、私は添い寝しながら御大とマリの話しをした。
最後にマリの同調の話をすると、強い波動が何度も来た。
「それを受けての、あの詩なんだね・・楽しくなってきたね」と蘭は満開で微笑んで、眠りに落ちた。
私は蘭の髪の香りを感じながら、眠りに落ちていった。

翌日、ハイテンションの美由紀と登校して、同じくハイテンションの中1トリオをニヤで見ていた。
半日の授業が終わり、中1トリオが早目に行くと笑顔で手を振った。
私も笑顔で手を振って、帰ろうとすると、ワーゲンがやって来た。
私は助手席に飛び乗って、笑顔でユリカを見た、ユリカもご機嫌だった。

私はユリカのマンションで、シャワーを浴びて着替えた。
ユリカの手料理を笑顔で食べて、PGに向かった。
TVルームに2人で入ると、大ママとミチルが来ていた。
私はユリカと挨拶して、リリーの横にユリカと座った。

「まさか、エース・・ユリカ姉さんに、お昼ご馳走して貰ったの？」とリリーが二ヤで言った。
『うん・・ユリカの部屋で手料理を、シャワーも浴びました』と二ヤで返した。
「まさに愛人だね・・私の愛人になるんじゃなかったの？」とミチルが妖艶二ヤで言った。
『それはリンとミナミが絶対に駄目だって、きつく言われたよ』とウルで返した。
「それは絶対に逆らえませんね・・一安心です」とユリさんが薔薇二ヤで言った。
ネネとリリーが初めて見たのか、その薔薇二ヤに驚いていた。

「さて聞きましょうか・・大きな夜街の噂になってる、加々見さんとの話を」と大ママが二ヤで言った。

『詳しい話は出来ないけど、火曜日の風俗店の磔事件。
あの犯人が、俺の先輩だと思ってる・・それで難しい状況なった。

昨日・・マリが突然来て、一緒に行くと言ったんだよ。
その後で磔事件の話が動いて、俺はマリとどこに行くのかが分かった。
それで確信して、加々見さんに会いに行ったんだ。
磔事件の話をして、俺の気持ちも話して、納得してもらった。
そしてマリが、加々見さんの抱えていた問題を解いた。
加々見さんも喜んで、来年俺に問題を出すと言ってくれた。
その問題に対して、俺が納得出来る答えを出せたら。
派遣契約をすると言ってくれたよ・・当然、マリーレインでね。
だから俺は何としてでも、その問題の解答を出すよ。
これ以上ないビジネス相手、そしてこれ以上ない挑戦場所。
マリーレインを提示したいからね・・必ず契約を取るよ』

私は驚く女性達を見ながら、ニヤで言った。
「ほほ～・・それは来年の大きな楽しみが出来たね、幻海とマリーレインなんてね」と大ママも二ヤで言った。
「最高級と最大級ですか・・素敵な話ですね」とユリさんも薔薇で微笑んだ。
「どこまでも提示するんだね・・東京を意識させる為に、上には上がいると」とミチルが妖艶二ヤで言った。
『まぁ、宮崎程度の最高級と最大級に押されるなら、東京なんて夢物語でしょうから』と二ヤで返した。

「嬉しいな～・・最大級か～、楽しみだ～」とリリーが微笑んだ。
「嬉しそうですね～、リリー姉さん・・私、少し緊張してます」とカレンがウルで言った。
「駄目だよ、カレン・・あんたは派遣でしょ」とアンナが二ヤで言った、カレンは笑顔で頷いた。

『そうだよ、カレン・・俺の構想じゃ、他の若手女性の為にも。

カレンが幻海、リリーがマリーレインを手中に収めてくれないと。
女性達の挑戦の背中を押せないよ、期待してるからね・・カレン』
私はカレンに笑顔で言った、カレンも可愛い笑顔で頷いた。
「私には、期待しないんだね」とリリーがウルで言った。
『リリー、何言ってるの・・たかだか宮崎最大級だよ、そんな相手・・リリーなら当然だろ』と二ヤで言った。
「まぁ・・当然だけどね」とリリーも二ヤで返してきた。
「エース・・まさか東京ＰＧも、全員経験させようと考えてるのか？」と大ママが言った。
『当然です・・旅費がかかるから、難しいけど。
その状況を作り出したい、経験させてやりたいんです。
日本一の場所を・・リアルに感じて欲しい、その為のレベルアップですから。
その時にいるメンバーと、新しく生まれたメンバーに経験させます。
派遣社員は当然ですけど、共同体の女性達も・・作品の展示ですから。
あらゆる個性を展示します、そして感じてもらいます。
どこまでも、上には上が有ると・・満足なんか、絶対にさせません』
私はユリさんに二ヤで言った、薔薇の微笑を見ながら。
「当然、私もそう思ってますよ・・リアンもユリカもですよ」とユリさんがユリカに薔薇で微笑んだ。
「お見せしましょう・・３３歳のユリカを」とユリカも爽やか笑顔

で返した。
「楽しくなってきた～・・２７歳のリリー」とリリーが笑顔で言って。
「私もです・・２４歳のカレン」とカレンも笑顔で言った。
「５年後で、２４歳なのね・・て事は、マキとヨーコは・・まだ２１歳なの！」とアンナがウルで言った。
『アンナ・・可愛い安奈は、まだ９歳だよ』と私がアンナにニヤを出した。
「そうよね・・私もまだまだ若いわ～」とアンナが笑顔で言って、全員が笑っていた。

裏方４人組が入ってきて、準備ＯＫとハルカが笑顔で言った。
「先生・・あのマリちゃんの詩、感想言えない詩なんですけど・・発表しても良いんですか？」とシオンが聞いた。
『良いんだよ、シオン・・今回は俺は入れないから、策略は無しだから』と笑顔で返した。
「意味深だよね～・・ようするに、策略を練ってみろって言ってる感じだね～」とレンが二ヤで言った。
「それにマリちゃんの事だから、絶対深い意味を潜ませてるよね」とハルカも二ヤで言った。

「問題はシズカと美由紀だね・・あの２人だけは、予想を超えるのを趣味にしてる」とマキが二ヤで言って。
「今回は、恭子も来るのよ・・そこはどうなの？マキ」とレンが二ヤで言った。
「恭子だけは想像しません、無駄な事ですから・・あの感性は飛び出してます、あらゆる物から」とマキが笑顔で返した。
「ねぇエース・・今回も倒すべき、目に見える敵がいると思うの？」とリリーが聞いた。

『それは絶対にいるよ・・どんな相手か分からないけど、その設定は必ず存在するよ』と笑顔で返した。
「よし・・いよいよだ、最強のリリーの見せ場が」とリリーが二ヤで言った。
「最強と言えば・・久美子が不思議な集中に入ってる、姉の私でも怖い」とレンがウルで言った。
「あの子は最強だよ・・どんな時でも自分を感じてる、俯瞰で自分を見れるよね」と大ママが笑顔で言った。

「エースの言う、一本道の果て・・そこに居ますね、久美子という存在は」とユリカが微笑んで。
「昨日帰りに、通りでアイコ姉さんに会ったら・・誰よりも久美子の音が欲しいと、言ってましたよ」とリリーが笑顔で言った。
「そうだろうね・・私もあの演奏が欲しいよ、ＰＧは贅沢だよ」と大ママが笑顔で言った。

「久美子は挑戦者です・・だからエースの言葉を、ストレートに受けますね。
エースがシオンの言葉を、ストレートに受けるように。
久美子はその変化を主張します、あの魂を乗せた音色で。
どんなに賞賛されても、常に変化を望みますね・・そしてそれを女性達に伝える。
だから奥底まで響きます・・変化を望み、受け入れた音で主張するからでしょう。
久美子は音色で煽り続けますね、それがあの子の愛情表現ですから。
私達は本当に贅沢ですね・・お金では買えない物を持ってますから」

ユリさんの言葉が響いて、女性達も笑顔で頷いた。
レンの嬉しそうな笑顔を見ていた、愛情の深さが笑顔に出ていた。

「エース・・ちょっと付き合って、○○屋さん・・苦手なのよ、ごつい集団」とハルカがウルで立った。
『行きましょう・・尼崎屋のタコ焼きで良いよ』と二ヤで返して、ハルカと2人でＴＶルームを出た。

１２月の午後の日差しが気持ち良く、ハルカが腕を組んできた。
『最近、頑張ってるね・・ハルカ姫』とハルカに笑顔で言った。
「カレン・ネネ・リリーと投入されれば、燃えざるえませんわ」とニヤで返してきた。
『ハルカは正月、日南だね？』と笑顔で聞いた。
「今年は楽しみに帰れるよ・・律子母さんのお誘いに行けないの、残念だけど」と返してきた。

『福岡のお姉さんは、正月帰るの？』と笑顔で聞いた。
「うん・・正月は帰るよ」と嬉しそうに微笑んだ。
『俺と蘭・・２日は蘭の実家にお泊りするから、暇なら遊びにおいで』と笑顔で言った。
「そうなの、ありがとう・・じゃあ3日に、蘭姉さんの車で一緒に帰ろうかな～、言ってみよう」と楽しそうにハルカが笑っていた。

《蘭は忘年会で告白するのかな？・・多分、お姉さんに先に会いたいよね》と心に囁いた。
強い同意の波動が来て、私とハルカの背中を押してくれた。

「私ね・・クリスマスが過ぎて、年末モードに入った時の夜街が、１番好きなの」とハルカが大きなクリスマスツリーを見て言った。
『地獄のチェンジって言ってるよ、ボーイさん達は』と二ヤで返し

た。
「そうだよね～・・それから1週間で、正月用にチェンジだしね」
とハルカがウルで返してきた。
『俺も冬休みだから、手伝うよ』と笑顔で返した。
「ありがと・・来年もよろしく、煽ってね」とハルカが二ヤで言った。
『任せなさい・・来年は１８だね、いよいよ勝負の年ですな～』と前を見て二ヤで言った。

私はハルカと○○屋という、乾き物屋に入った。
○○屋は、テキヤ稼業もしていて、ごつい男が数人いた。
ハルカはニヤニヤ男にからかわれ、ニヤで必死に応戦しながら、店主と話していた。

「エース・・最近派手な噂が多いな」と店主のオヤジが二ヤで言った。
『単なる噂ですよ・・スターは辛いですね～』と二ヤで返した。
「ちょっと待ってな・・おーい、道彦～」と店主が奥に叫んだ。

のっそりと道彦が出てきた、長身の寡黙な１０代の男だった。
私はお祭りで仲良くなっていたので、笑顔で道彦を見ていた。
道彦は何も言わずに私の腕を掴んで、表に出て細い路地まで引っ張った。

『道彦兄さん・・どうしたの？』と驚いて必死の笑顔で言った。
「お前・・アマリを探してるんだろ？・・探してどうするんだ？」
と道彦が静かに言った。
『出頭させる・・今ならまだ間に合うと思ってる』と真剣に返した。
「絶対にあのボーイに会わせるな・・奴は本気だよ、ここにいる」
とメモを差し出した。

『道彦兄さん、アマリ君の友達なんだね・・ここはどこなの？』と真顔で聞いた。
「アマリはダチだよ・・それはアマリの、唯一信頼してる女の家だよ」と道彦が早口で言った。
『ありがとう・・会いに行ってみるよ』と笑顔で返した。
「頼むな・・俺たちの言うことは、聞かないんだよ」と言って、道彦は店の奥に消えた。

ハルカが私を見ていた、逆光に照らされた美しい顔だった。
私はメモをポケットに押し込み、ハルカと腕を組んでＰＧを目指した。
強い波動が何度も来て、早く帰れと言っていた。

「タコ焼きはキャンセルみたいね・・急用でしょ」とハルカが二ヤで言った。
『鋭すぎるよ、ハルカ・・急用です』と二ヤで返した。
「私、最近・・エースのその生き方、好きになったよ・・逃げない生き方」とハルカが真顔で言って、強く腕を組んだ。
『俺は出会った時から、ハルカの生き方が好きだよ・・正面から受け止める、生き方が』と前を見て返した。
私はハルカの腕から伝わる、優しい熱を感じながら、自分の心を確認していた。

《正直に伝えるしかないね、マリ》と何故かマリに向かって、心に囁いた。
強烈な波動が何度も来た、それは喜びを示しているようだった。
私はハルカをフロアーに見送り、メモを見た。
その住所はそう遠くない場所だった、それを確認してＴＶルームに入った。

「行きますかね？」とユリカが爽やか笑顔で言った、私も笑顔で頷いた。
『カレン・・一緒に行って、ユリカと2人を連れてきて・・俺は急用なの』と笑顔で言った。
「良いよ・・行きましょう」とカレンが笑顔で立った。
「無茶は駄目ですよ・・マリアがペチしますよ」とユリさんが薔薇二ヤで言った。
『大丈夫です・・ずっと残ってますから、大切なペチが』と笑顔で返してＴＶルームを出た。

3人で駐車場に歩きながら、ユリカに場所を教えた。
「了解、近くまで送るね・・４時半までは病院にいるから」とユリカが微笑んだ。
『ありがとう、助かるよ』と笑顔で返して。
『カレン・・ミホを頼むね、演奏会楽しみにしてるみたいだから』と笑顔で言った。
「了解・・でも演奏会にエースがいないと、2人は不安だよ」と二ヤで返された。
『それまでには、必ず戻るよ』と笑顔で返した。

3人でワーゲンに乗り、クリスマス一色のデパート前を通った。
華やかな飾り付けに、道行く人は笑顔で歩いていた。

ユリカが小戸神社の近くで降ろしてくれた、私は2人を手を振って見送った。
住所を頼りに狭い路地を入って、小さな公園の横を歩いていた。

その時、手前の路地から大きな男が現れた、私はそれを見て自然に笑顔になった。

「小僧か！・・でかくなったな～」とアマリが笑顔で言って、私に駆け寄った。
『小４だよ、最後に会ったの・・もう中１の大人だよ』と笑顔で返した。
「小僧、俺に会いに来たのか？」とアマリが真顔で言った。
『もちろん・・友達として、アマリ君を止めに来た』と真顔で返した。
私は嬉しかった、アマリの最初の笑顔が優しかったから。
私はアマリと小さな公園のベンチに座った、アマリは何も言わなかった。

遊具も無い小さな公園に、子供の姿は無かった。
落ち葉が風に靡いていて、カサカサと音を立てた、私はアマリの横顔を見ていた。
何かを伝えたい、アマリの瞳にそう映っていた、私は黙ってアマリの言葉を待った。

北風を押し返すように、強い波動が何度も来て、私は落ち着いていた。

快晴の冬空に、美由紀とミホの顔が浮かんだ・・７歳のミホの笑顔が・・・。

【冬物語？】

懐かしさとは、何故だか香りで覚えている。
その香りを先に感じてしまう、記憶の中に残る確かな香りを。

沈黙がアマリの真剣さを表現していた、私は言葉を待っていた。
肌寒い冬の風が、剥き出しの頬に当たり、私の集中は増していた。

「あの時・・小僧がアマリと呼び名をくれた時も、お前は今のように静かだったな」とアマリが静かに言った。
『そうだったね・・でも俺はあの時と違うよ、あの後に色々経験したよ』と前を見て静かに返した。
「誰にも止められない、お前はそう言った・・今も同じ状況だよ」とアマリも前を見て言った。
『そうかも知れない・・でも今の俺は、何もしないなんて事は出来ないよ』とアマリを見て言った。
「何か反省したのか？・・あの後」とアマリも私を見て、少し苦笑いを浮かべた。

『アマリ君が退院して・・少ししてから、刑事がミホを尋ねてきた。
院長の息子の医者が許可して、ミホに事件の写真を見せたんだ。
俺は必死に反対したけど、押し切られた・・ミホはそれで遮断した。
全てを遮断してしまったんだ、俺はその時・・自分を責めた。
守ってやれなかった自分を、でもね・・言い訳もしたんだ。
子供だったからって、理由を使ったんだよ・・自分に対して。
最後はそこに逃げたんだ・・でも後で考えたんだ。
同じ状況でアマリ君だったら、どんな事をしてでも、守ったんじゃないかって。

豊兄さんやアマリ君なら、小４でも守ったんじゃないかって・・そう思った。
それで俺は思い出した・・アマリ君との最後の場面、あの時も同じ言い訳してた。
怖さがあって、自分は子供だから何も出来ないと・・自分に言い訳してた。
今年の夏にミホに再会して・・それを感じたんだよ、無表情のミホを見て。
もう同じ後悔はしない・・だから俺は、アマリ君を止めに来た。
もうここで終わりにしようと、言いに来たんだ』

私は正直に自分の気持ちを話した、アマリは私を見ていた。

「ミホはどうなんだ？・・何かを伝えてくるのか？」とアマリが聞いた。
『今・・やっと、ほんの少しだけ・・温度が揺れる』と真顔で返した。

私は必死だった、アマリに久々に再会して、ミホに対する後悔が押し寄せていた。
押し切られた事で費やした、ミホの貴重な時間が迫ってきた。
7歳のミホの笑顔が映像で流れていた、あのまま順調に行っていたら。
考えても意味の無い事が、私を支配していた。
私は怒りを感じていた、自分に対する大きな怒りが沸々と湧き上がっていた。

「そうか・・焦るなよ・・小僧、俺はこんな人間なんだ。
怒りを抑えられない・・抑えたいと思っても、その時に制御が利かない。

自分のその部分を、どんなに嫌っても・・出来ないんだよ。
どっか壊れてるんだよな・・望んでないのに、そうなるのは」
アマリは静かにそう言った、私もアマリも空を見ていた。
私は制御の利かない自分を感じていた、自分の本心を感じてそれに驚いていた。
私はアマリという男に挑戦したいんだと、それに気付いて内心は焦っていた。

『嫌ってるから出来ないんだよ・・アマリ君は自分を嫌ってる。
前からそう思ってた、そして今分かったよ・・なぜ嫌うのか。
アマリ君も自分に言い訳してるんだ、嫌いだと言って逃げてるんだろ。
制御が利かないとか、壊れてるとか言って・・正当化しようとしてる。
自分の最も得意な・・暴力でしか解決できない、一番楽だからそこに逃げてる。
それだけの事だろ・・今更自分を正当化するなよ、アマリ。
アマリ・・勝負しろ・・俺にはその方法しか思いつかない』

私は感情に任せていた、アマリの言葉に怒りだけが湧いてきた。
「やめとけ・・それはやりたくない、俺はやる時は本気だから」と
アマリが私も見て言った。
『知ってるよ・・でも俺が負けると、決まってる訳じゃない』と返した。
私は制御が利かなかった、勝てるなどとは考えてなかった。
だが怒りだけが湧いてきて、その怒りに動かされていた。

私は立ち上がり、アマリの前に立った。
「小僧・・今回の俺の理由を知ってるのか？」とアマリが私を見ながら言った。
『関係無いし、興味も無い・・これは俺の問題だから、俺は良し悪しで考えない』と強く言葉にした。
「良し悪しで考えないか・・そうだったな、それでこそ小僧だな」とアマリが立ち上がった。
私はその身長差にも、恐怖を感じなかった。
しかしアマリは私の後ろを見ていた、どこか嬉しそうな笑顔が出ていた。
「楽しそうだな、小僧」と後ろから豊の声がした、私はビクッと背中を震わせた。
「豊・・久しいな」とアマリが笑顔で言った。
「アマリ君・・ご無沙汰です」と豊が返した、私はそれで振り向いた。
豊は静けさを連れていた、私はそれを見て恐怖を感じた。
この2人をやらせてはいけないと、そう思って緊張した。
『豊兄さん・・俺の問題だから、手を出さないで』と豊に言った。
「それは出来んな・・俺はミホに頼まれたから、ミホがそう願ってるからな」と豊が静かに言った。
「どう願ってるんだ、ミホは？」とアマリが豊に言った。
「ミホはもう少しで笑顔が出る・・それをアマリ君に見せたいと言ってるよ」と豊が返した。

１８５ｃｍを超える大男２人が、互いの瞳で意思を確認していた。
豊とアマリの対決など、私には想像すら出来なかった。
何かを間違えば、どちらかが死ぬ・・私は漠然とそう思っていた。

「一度やらないとな・・決着をつけるか、豊」とアマリが笑顔で言った。
「そうだよね・・やらないと駄目だな、アマリという男とは」と豊が静かに言った。

その言葉で強烈な波動が来た、私はそれで気付いた、豊は病院にいたんだと。
ユリカに聞いて、ここに来たのだと感じていた。

「俺が勝ったら、何も口出しするなよ」とアマリが笑顔で言った。
「もちろん・・俺の条件は、出頭だよ」と豊が笑顔で返した。

豊が私を押しのけて、アマリの正面に立った、私は何も出来ずに立ち尽くしていた。
自分の役割は分かっていた、見届け人に指名された事を。

２人は至近距離でお互いを見て沈黙していた、その時私は結果が想像出来た。
この間合いでアマリに勝ち目は無いと確信していた、自分から逃げてるアマリには不利な距離だった。

今まで、アマリはその強力なパワーと、何も恐れない度胸で戦ってきた。
百戦錬磨のどれもが、自らが選択した勝負だった、今初めて出会ったのではないのか。
１対１で自分と同じパワーと度胸を持つ相手に、それを感じて楽し

んでる。
私はそれを感じて、勝負の結末の場面を提案した。
『ＯＫ・・１発入るまでの勝負だよ、そうしないと・・ミホが悲しむから』と私は２人に強く言った。
「良いだろう」とアマリが言って、「了解」と豊が微笑んだ。
どの位の時間だっただろう、多分１分は無かったと思う、しかし私には長い沈黙だと感じた。
２人は互いの目を見て、至近距離で立っていた。
お互いに拳は握ってなかった、動く事が出来ないように、じっと立ったままだった。
強い波動が静かに来ていた、ユリカの緊張を感じていた。
先に動いたのは、やはりアマリだった、声も発せずに右の拳を出した。
そのスピードと静けさに私は凍結していた、自分の目指す理想のパンチを見ていた。
豊は少し斜めに動いて、ギリギリでかわした、アマリは体制を少し崩した。
だが豊はまだ攻撃をしなかった、それほどアマリには隙が無かった。
《やばいな～・・百戦錬磨同士の勝負は》と心に囁いた。
強く緊張した波動が押し寄せた、私は２人を見ていた。
そしてアマリが、今度は正面から放った、豊の強さを確信して賭けに出たのだ。
豊は左手でアマリの拳を払った、そしてアマリの懐に向かい突っ込んだ。
右足を思いっきり踏み込んで、右の拳をアマリの腹に埋め込んだ。

【ドン】という鈍く大きな音が響き、2人の動きは止まっていた。
まるで抱き合っているように、2人の体は密着していた。
豊は捨て身を選んだ、かわされたら豊の負けだっただろう。

「そうか・・そうくるか、さすがだな豊」とアマリは苦しそうに笑った。
「隙が無ければ、作るしかないよ・・生まれて初めて、負ける覚悟が出来たよ」と豊も笑顔で返した。

豊はアマリの肩を支えて、ベンチにアマリを座らせた。
アマリは俯いて座っていたが、清々しい笑顔だった。

「小僧・・悪かったな、お前の言う通りだよ・・罰を受けてくるよ、いつかミホの笑顔が見たいからな」とアマリは私を見て、笑顔で言った。
『うん・・待ってるよ、ミホも俺も・・ミホと俺と豊兄さんは知ってるから、アマリと呼ばれる男の優しさを』と笑顔で返した。
「小僧・・アマリ君は俺に任せろよ、沙紀とミホが待ってるんだろ・・行って良いぞ」と豊が笑顔で言った。
私も笑顔で頷いて、アマリの前に立ち右手を出した。

『アマリ君・・ミホを引きずり出すよ、ミホも逃げてるからね・・約束するよ』と笑顔で言った。
「頼んだぞ・・俺も必ず会いに行く、たった一人の可愛い妹に」とアマリも笑顔で言って、右手で握った。
大きな安心感のある手だった、私はその温度が嬉しかった。

『豊兄さん・・後で来るんでしょ、待ってるよ』と豊に笑顔で言った。

「もちろん行くよ、恭子に怒られるからな」と豊も笑顔で返してきた。
私は豊に頷いて公園を出た、その時アマリの声が聞こえた。
「小僧、ちょっと待て・・お前、絶対にあのボーイに手を出すなよ」とアマリが二ヤで言った。
『何の事か分からないよ・・アマリ君、次に会うの楽しみにしてるよ』と笑顔で返した。
「怖い奴だよ・・忘れるとこだったよ、お前の伝説を」とアマリが笑顔で右手を上げた。
『伝説は大袈裟なんだよ・・俺は小心者です』と二ヤで右手を上げて、アマリに背を向けた。

ユリカの強い波動が背中を押してくれた、私は間違いに気付いていた。
しかしそれで良いと思っていた、良し悪しで考えたらそこまでの事だと、自分に言っていた。

澄み切った冷たい風が、心に吹き抜けて、嫌な予感を吹き飛ばした。
私は冬の青空に、ミホと沙紀の笑顔を見ていた。
青空の青に、蘭の顔が現れた・・その時、楽園ブルーが強烈に迫ってきた。

《リンダ・・どうしたの？・・何なの、リンダ》と私は心に叫んだ。
強烈な波動が何度も何度も押し寄せた、私は青空を見ていた。
《大丈夫だと思うよ、ユリカ・・緊迫感は無かったよ》と心に囁いた。
強い波動を確認して、病院を目指した。
小戸神社の前に出ると、シオンが車の横にニコちゃんで立っていた。

私はシオンに向けて駆け出した、ニコちゃん全開のシオンに向かって。

『シオン・・お迎えありがとう』と笑顔で言った。
「怪我、無いですね～・・合格です」とニコちゃんで返された。
『うん・・あのバイクを見て、分かってるでしょ』と笑顔で返した。
「はい・・あれを見て安心しました」と豊のバイクを見て、シオンが車に乗った。
私も豊のバイクを見て、助手席に乗り込んだ。

「まだ時間あるから、病院に行きましょう」とシオンが元気に言って、冬の町並みを走り出した。
私は助手席で面白話をしていた、シオンの笑顔を見ながら。

病院に着いて、私はシオンと別れて由美子に会いに行った。
由美子は元気良く鋭い突込みを入れてきて、私はウルで返していた。
由美子にお休みをして、ミホの部屋に行くと、2人は着替えて嬉しそうに待っていた。

『沙紀もミホも可愛いね～・・みんな驚くよ』と笑顔で言った。
沙紀は嬉しそうで、ミホは無表情だが嬉しそうだと思っていた。

ユリカが沙紀と手を繋ぎ、カレンがミホと手を繋いだ。
シオンは準備に帰ると言ったので、私はユリカの後ろを歩いていた。
1階に下りて、駐車場に歩いていると、いきなりミホが正面玄関に走り出した。
私もカレンも驚いて、後を追って走った。

その時、正面玄関のロータリーに、豊のバイクが入ってきた。
後ろにヘルメットを被った、アマリの姿が見えた。

ミホはアマリに向かって駆け寄った、無表情のままで。
私はカレンの腕を笑顔で掴んだ、カレンが私を見て笑顔になった。
アマリはバイクから降りて、ヘルメットを脱いで、ミホに笑顔を向けた。
ミホは無表情のまま右手を出した、アマリは嬉しそうに優しく握った。

「ミホ・・俺はお仕事で、少し遠くに行って来るよ。
必ずミホには会いに来るよ・・だからミホも、自分らしく頑張れ。
ミホには小僧がついてるだろ・・美由紀も側にいるんだろ。
俺は本当に楽しみにしてるよ、次はミホの笑顔が見れるから。
ミホ・・何も怖くないよ、ミホには最強が側にいるからね。
豊と俺と小僧がいるから・・安心して良いよ・・ミホ。
俺はミホに怖い事があったら、どこからでもすぐに飛んで来るよ。
そして必ず守ってやる・・だから安心しろ・・ミホ」

アマリは優しくそう言った、ミホはアマリの瞳を見ていた。
私はミホを迎えに行き、ミホの手を握った、微かな温度の揺れが嬉しかった。

「小僧・・ミホを頼むな」とアマリが笑顔で言った。
『了解・・あの時と同じだね、今度は俺も間違わない』と笑顔で返した、アマリも笑顔で頷いた。
「ミホ・・行って来るね」とアマリは笑顔で言って、ヘルメットを被った。
ミホはアマリの背中が、見えなくなるまで見送っていた。

「ミホ・・必ず会いに来るよ、彼は約束は守る人だよ・・執行者と言われた男だからね」とカレンがミホに言った。

ミホはカレンを見て、２人で手を繋ぎ、ユリカと沙紀の方に歩いた。
私はその背中を見ていた、カレンの優しさが嬉しかった。
沙紀を助手席に乗せ、ミホをカレンと挟んで後部座席に乗った。
ミホはワクワクな感じだった、アマリの言葉を理解してる、私はそう思っていた。

赤玉駐車場に車を止めて、５人でＰＧに歩いた。
一年で一番熱い土曜日で、夜街の準備にも活気が有った。
ミホも沙紀もキョロキョロと周りを見ていた、嬉しそうな感じだった。
呼び込みさん達が、優しい目で２人を見ていた。

ミホと沙紀をＴＶルームに案内すると、５人娘が笑顔で飛んできた。
中１トリオが、その光景を笑顔で見ていた。
私とカレンは、ユリさんとユリカに任せて、フロアーに向かった。

フロアーの奥にパイプ椅子が並べてあり、１時間前だというのに女性達が集まっていた。
共同体の女性達に、幻海の女性をリリーが紹介して、笑顔で話していた。
カレンがその輪に加わって、笑顔で挨拶をしていた。

私を見て、久美子が笑顔で近づいた。

「私も一緒に夕食を食べるのよ・・すっごい豪華な夕食だよ～」と久美子が二ヤで言った。
『２人をよろしく・・余ったら、キープしててね』とウルで返した。

私は久美子を見ていた、久美子は凍結して通路を見ていた。
『どうしたの？・・久美子』と私は久美子に聞いた。

その瞬間、私の耳に入ってきた、忘れたことの無い声が響いた。

「ド～～ン」と大声で言って、私の背中に飛び乗った。
私は嬉しくて動けなかった、懐かしい楽園の香りに包まれていた。
リンダの体温が背中から入ってきた、私は涙が自然に流れた。
久美子もリンダを見て、泣いているようだった。
強烈な波動が吹き抜けた、フロアーの女性達の視線が集まった。

『リンダ～・・びっくりするだろ』と振り向いてリンダを見た。
楽園ブルーが雨季を迎えていた、私は必死に笑顔を出した。
リンダも私の瞳を見て、美しい笑顔になった。

『リンダ・・お帰り』と楽園ブルーを見ながら言った。
「イマ・カエッタゾ・・・・クミコ」と私に最強楽園ニヤを出して、
リンダは久美子に抱きついた。

私はウルウルで、リンダに抱かれ泣いている久美子を見ていた。
「お帰りなさい・・リンダ姉さん」と久美子は震えながら言った。
「クミコ・ピアノ・タノシミニシテル」とリンダは笑顔で言った、
久美子はリンダを見て強く頷いた。

通路の奥に、ユリさんとユリカの笑顔が見えた。
私はフロアーを見た、凍結してる美冬にニヤを出した。

『美冬・・ヘルプ、通訳』と二ヤで言った。
美冬はそれで駆け出して、リンダに近づいた。

「Ｍｉｆｕｙｕ・・・・・」リンダは嬉しそうに、美冬に抱きついた。
「Ｒｉｎｄａ・・・」美冬は泣きながら、英語で返していた。
ユリさんとユリカが２人を囲んだ、美冬も笑顔に戻り。
リンダにユリさんを紹介した、リンダは美しい姿勢でユリさんに挨拶した。
ユリさんが英語で挨拶して、２人に笑顔が溢れた。
そしてリンダがユリカに抱きついた、ユリカも嬉しそうに強く抱いていた。
２人は英語で話していた、美冬が私の横に立った。
「リンダ、沙紀ちゃんが来てるよ、会いたいでしょ」と美冬がユリカの言葉を訳してくれた。
「先にお食事をして下さい、私はエースを説教します、その後でゆっくり会わせてもらいます、絵のお礼もしたいから」と美冬がリンダの通訳を二ヤでした。
ユリカもユリさんも笑顔になって、久美子を連れてＴＶルームに戻った。
リンダは最強楽園二ヤで、美冬と私の手を引いて、フロアーに歩いた。
女性達の嬉しそうな笑顔が、リンダが近づくのを待ちわびていた。
「私はリンダです、エースの雇い主です」と美冬がリンダの言葉を言った。
全員が笑顔でリンダを見ていた、リンダもブルーを深めて笑顔を返した。

「リリーです、よろしく～」とリリーが回転しながら、笑顔で言った。
《さすがリリー、行動力も自分を表現する力も、抜きん出てる》と心に囁いた。
同意の強い波動が来た、リンダは嬉しそうな笑顔でリリーを見ていた。

「オゥ、リリー・・ワタシ・リンダ～」と回転しながらリンダが返した。
それで爆笑が起こって、ＰＧから一人ずつ笑顔で挨拶した。
一人一人にリンダは大袈裟なリアクションで返して、女性達も嬉しそうだった。
カスミが喜びの輝きを出し、レンとハルカは再会を喜んだ。
共同体の女性達も、幻海の女性達も笑顔で挨拶をした。

全員との挨拶が終わった時に、全力疾走でシオンが入ってきた。
「Ｓｉｏｎ・・・」リンダは一目でシオンと分かったようで、シオンに抱きつき耳元に囁いた。
「Ｒｉｎｄａ・・・」シオンは震えながら抱かれ、喜びを英語で表現していた。
シオンの喜びが、涙のニコちゃんで伝わって、私は必死に涙をこらえた。

「リンダ！」と蘭が叫んで、駆け寄った。
「オゥ・・ハニ～、ラン」とリンダが楽園二ヤで言って、私に強く抱きついた。
リンダが私を二ヤで見たので、私もニヤニヤで蘭を見ていた。
「リンダ・・ユー・ラスト・チャレンジャー」と蘭が満開二ヤで言

った。
「イエス・・エース・ハニー・リンダ～」とリンダが楽園二ヤで返して、蘭に抱きついた。
「ウェルカム・リンダ」と蘭も満開でリンダを抱いていた。

「凄い人だ・・語学など、簡単に飛び越す」とリリーが二ヤで言って、女性達が笑っていた。
『もう一人来たよ・・語学を簡単に飛び越す人が』と私はリリーに二ヤで言った。
リンダは何かを感じて、ビクッと背中が反応した、蘭はエレベーターの方を見て満開が咲いた。

「リンダ・ユー・ラッキーガール」と蘭がリンダの耳元に囁いた。

エレベーターホールから、俯き加減で歩み寄って来た。
マリはその背中から、強烈に何かを発散しながら歩いて来た。
女性達はそのマリの雰囲気に、固まってマリを見ていた。

リンダはゆっくりと振り向いた、そして最強楽園笑顔を出した。

「Ｍａｒｉ」とリンダは呟いた、マリはニヤ出しながらリンダの目の前に立った。
そしてリンダの両手を握って、マリは瞳を閉じた。
リンダも瞳を閉じた、リンダの背中が小刻みに震えていた。

《どうしても会いたい人・・マリはリンダに会いたかったのか～》と心に囁いた。
強烈な波動が同意を示して、フロアーを吹き抜けた。

「リンダ」とマリが瞳を開けて、言葉で言った。

私も蘭も女性達も凍結していた、マリの可愛い声を聞いて、その明瞭な言葉に触れて。
制御が利かなくなったような、強過ぎる波動が連続して来た。

リンダも瞳を開き、マリを見ていた、そのブルーは喜びに溢れていた。
マリは笑顔でリンダの手を離し、場所を譲った、リンダの前にシズカが笑顔で立った。

「Ｓｉｚｕｋａ・・・」リンダはシズカを抱きしめて、嬉しそうに言った。
「Ｒｉｎｄａ・・・」シズカは流暢な英語で、喜びを表現していた。
そしてリンダは隣の恭子に抱きついた、恭子は嬉しそうに抱かれていた。

「リンダ・ユー・バスト・デンジャラス」と恭子が二ヤで言った。
「マイ・バスト・ド～ン」とリンダも楽園二ヤで返した。

「ど～んって・・そう言う意味だったのね」とセリカが私に二ヤで言った。
「なんとも、期待を裏切らない男だね～」とリリーが二ヤで言って。
「愛が共通言語なんて、良く言えたね～」とネネが二ヤで言った。
女性達が二ヤで私を囲んだ、私はウルウルをシオンに出した。

「駄目です・・ウルは受け付けません、シオンは怒ってます。
ど～んの本当の意味を、言ってごらんなさい・・エース。
何に心を撃たれたのか・・正直に言いなさい」

シオンが最強ニコちゃん二ヤで言った。
「さぁ、困ったね・・白い弾丸が飛んできて」と蘭が二ヤで言った。

リンダの後ろで、美冬が会話の通訳をしていた。
「エース・ダスゾ」とリンダが最強楽園二ヤで言った。
『リンダのピンクの小さなパンティーに、心を撃ち抜かれました』
と私はウルウルで告白した。
女性達が大爆笑して、リンダも嬉しそうに笑っていた。

リンダが蘭に二ヤを出して、私の首に腕を巻いた。
「エース・コドモタチ・アワセテ」とリンダが言った。
『了解・・相変わらず、甘えん坊だな・・リンダ』と笑顔で返して、
リンダを抱き上げた。
私はリンダを抱いて、ＴＶルームを目指した
リンダは私を見ていた、穏やかな温度だった。

ＴＶルームの手前で、リンダを優しく降ろした。
ＴＶルームのドアを開くと、マリアが両手を広げて天使全開で待っていた。

リンダは最高の楽園笑顔でマリアを抱き上げて、頬にキスをしてマリアを抱きしめた。
「マイ・ドリーム」とリンダは私に向かって、嬉しそうに言った。
私も笑顔で頷いて、２人を見ていた。

リンダはマリアを優しく降ろし、アンナを抱き上げて私を見た。
『アンナだよ、リンダ』と笑顔で言った、リンダも笑顔で頷いた。

「アンナ」と優しくアンナに言って、頬にキスをした。
「リンダ」とアンナも笑顔で返して、リンダの頬にキスをした。

リンダは次にレイカを抱き上げた、私が名前を教えようとしたら。
「レイカ・ゴクウ」とリンダが微笑んで、レイカにキスをした。
「ブルーのリンダちゃん」とレイカが笑顔で言って、キスを返した。

リンダはレイカを降ろし、泣いているミサを抱き上げた。
「ミサ・ガッチャマン」とミサの涙を拭いて、頬にキスをした。
「嬉しいよ、リンダちゃん」とミサが笑顔になって、キスを返した。

リンダは本当に嬉しそうに、ミサを降ろしてエミを見た。
エミの瞳は強く輝き、リンダのブルーを見ていた。

リンダはエミを抱き上げて、エミを抱きしめた、エミも強くリンダに抱きついた。
「エミ・・シンカイ・エミ・マッテル」とリンダが笑顔で言って、エミの頬にキスをした。
「了解です、リンダちゃん」とエミは笑顔で言って、キスを返した。
リンダはエミを優しく降ろして、沙紀を見ていた。

沙紀もリンダを見ていた、私は震えていた、沙紀の瞳から涙が流れていたのだ。
その純水に触れて、私は心が震えていた、リンダは屈んで沙紀を見ていた。
そのブルーの深さに、中1トリオも凍結していた。

リンダは沙紀に両手を広げた、沙紀はリンダに飛び込むように抱きついた。
リンダは沙紀を抱いて立ち上がり、優しいブルーで沙紀を見ていた。

「サキ・アリガト・ウレシカッタ」とリンダが微笑んで、沙紀の頬にキスをした。

沙紀もリンダにキスを返して、強く頷いた。

間近にいるユリカの波動と、ユリアの強い波動が重なって、暖かい熱を感じていた。

ヒトミの熱が確かに存在した、それを感じて、私は美由紀を見た。

美由紀は俯いて泣いていた、秀美と沙織に抱かれながら。

リンダの登場を私はただ喜んでいた、しかしリンダの伝える言葉で緊張する。

リンダは女性達に提示に来た、中途半端な覚悟で潜るなと言いに来た。

仲間である女性達に、その経験から溢れ出す、想いを伝えに来たのだ。

リンダに触れて変化が始まる・・女性達にも、中1トリオにも。

沙紀にも・・そして・・ミホにも・・。

【冬物語？】

心に強く残る、それは残像を連れ、香りまで発散する。
五感に強く残っている、しかしその内なる想いを知る事は難しい。

冬の中に暖かい空間が出来ていて、沙紀は深いブルーに抱かれていた。
その深い青を沙紀は見ていた、リンダも沙紀の定まらない瞳を見ていた。
リンダは沙紀を優しく降ろして、ミホの前に座った。

ミホはリンダを見ながら、右手を出した。
リンダはミホの右手を優しく握って、美しい笑顔を向けていた。
リンダは言葉でない何かで伝えていた、ミホの心に何かを伝えた。

そして中1トリオに、美しい楽園ブルーを向けた。
沙織がリンダに近づいて、笑顔で挨拶した。
リンダは沙織の必死の英語を聞いて、笑顔で沙織を抱きしめた。
沙織も嬉しそうに抱かれながら、リンダがゆっくりと話す英語を聞いていた。

そして秀美がリンダに挨拶した、リンダは秀美の義手を握っていた。
そして優しく秀美を抱いて、嬉しそうに何かを伝えていた。
秀美も笑顔で抱かれながら、リンダに何度も頷いて、美由紀に場所を空けた。

リンダは美由紀に笑顔を向けた、美由紀も笑顔に戻りブルーを見ていた。
「リンダ・ブルー・ド～ン」と美由紀が笑顔で言った。

「ミユキ・スマイル・ド～ン」とリンダも笑顔で返して、美由紀を抱きしめた。

「マイ・スマイル・ワールドレベル？」と美由紀がリンダの耳元に二ヤで言った。

「ミユキ・トップレベル・ライフスタイル」とリンダも二ヤで英単語で返した。

そして深いブルーになり、中1トリオを見た。

「シンカイ・サンニンデ・モグリナサイ」とリンダが言った、3人は真顔で強く頷いた。

リンダがマダムと松さんに挨拶して、ユリカが通訳をしていた。

マダムも松さんも、笑顔で嬉しそうだった。

ユリさんとユリカとリンダで、笑顔で話していた。

ユリカがリンダを誘って立ち上がった、私は美由紀を抱き上げて車椅子に乗せた。

そしてマリアを抱き上げた、エミがアンナの手を繋いで、沙織が美由紀を押した。

フロアーに行くと、女性達がパイプ椅子に座っていた。

美しい女性が４０人以上座っていて、その雰囲気だけで圧巻だった。

大ママとユリさんとミチルとリアンが１０番席に座り。

オヤジバンドの面々と、キングが3番に座っていた。

院長を中心に、病院関係者が１０人以上５番に座り、関口医師と沙紀の母親の笑顔も見えた。

ボーイ達がピアノの後ろに立ち、主役の登場を待っていた。

フロアー中央に小さな絨毯が敷いてあり、小さなテーブルが出ていた。
４人娘が沙紀とミホの手を引いて座り、私はマリアを降ろした。
美由紀を抱き上げて降ろし、その横に秀美と沙織が座った。

ユリカがシオンを呼んだ、シオンはニコちゃんで、リンダとユリカの前に立った。
リンダが手紙を出して、シオンに差し出した。
「・・・・・」英語でシオンにリンダが話した、美しく真剣な表情だった。
リアンの強い極炎の瞳が、その２人を見ていた。

「私は自分の想いを伝えに来ました、それは次の挑戦を感じたからです。
ここに書いてます、演奏会が終わったら、シオンから伝えて欲しい。
シオンが翻訳して、シオンの言葉で・・女性達に伝えて欲しい。
よろしくね・・シオン」

ユリカがリンダ言葉を、日本語で話した、静寂が包んでいた。
「・・・・」シオンも真剣な表情で返して、手紙を受け取った。
シオンの右手が小刻みに震えていた、シオンにとって最初のリンダから託された事だった。
リンダは美しい笑顔で頷いて、ミホと沙紀の間に座った。
ユリカが１０番のリアンの横に座り、シオンが席に戻った。

そしてフロアーが暗くなり、銀の扉が開いた。
純白のドレスを着た久美子が登場した、私は久美子の瞳を見ていた。
久美子は完全に別の世界に入っていた、私は久美子の段階が上がったと確信した。

久美子は3歩進み、神聖な場所に深々と頭を下げた。
女性達が息を呑んでその姿を見ていた、久美子は微笑を浮かべて絨毯の前まで歩いた。
そしてミホと沙紀を笑顔で見た、その久美子の瞳に楽園ブルーが映っていた。

久美子がピアノに歩くのを、ミホが立ち上がり追いかけた。
私はミホの後ろを歩き、用意していた椅子を、ピアノの椅子の横に置いた。
ミホが私を見た、私は笑顔で頷いた、ミホはそれを見て椅子に座った。

久美子はミホに笑顔を送り、ミホの左手を取って、鍵盤の上に持っていった。
久美子が手を離すと、ミホは鍵盤に触れた。
【ポロン】と可愛い高音が響いた、久美子は笑顔で頷いた。
ミホはそれを見て、もう一度【ポロン】と弾いた。

久美子は優しい音色で、ミホのポロンを追いかけた。
ミホは久美子の指先だけを見ていた、必死に追いかけた、その指が奏でる音を聴きながら。
久美子は優しい音色に、段々と熱を込めていった。
久美子の額に汗が浮かんで、その指先を追うミホの額にも汗が浮かんだ。

久美子は次の段階を見せた、弾き始める前の集中の場面を削除した。
本当の集中とはそんな場所じゃないと、強く主張してるようだった。
一曲目で完璧に場内を撃ち抜いた、久美子は弾き終わりミホに笑顔を見せた。

場内の静寂を破り拍手が響いた、リンダが笑顔で拍手をしていた。
そして場内から大喝采が沸き起こった、久美子はリンダに笑顔を送り、沙紀を見た。
そして5人娘に二ヤを出した、ミサとレイカが笑顔で立ち上がり、アンナも立った。
それを見て沙紀が立って、エミも沙紀の隣に立った。

リンダはマリアを抱いて、隣の美由紀から、身振り手振りの説明を受けていた。
リンダは笑顔で5人の少女を見て、美しいブルーでウィンクを投げた。
それを見て、久美子はダンスナンバーを弾いた、5人の少女が笑顔で腰を振って踊った。

後ろで見てる女性達から手拍子が起こり、少女達の楽しそうなダンスを後押しした。
それを受けて、ボーイも含めた全員で手拍子を贈った。
腰を振りながら踊る沙紀が嬉しそうで、私も笑顔で手拍子をしていた。
盛り上がった会場を感じて、久美子がサビの部分を強く3度繰り返し、演奏を終えた。

5娘も充実した笑顔で、久美子に拍手で返した。
そして沙紀が女性達の方に歩き、マリの横の行き、マリに右手を出した。
マリは笑顔で沙紀の手を握り、沙紀に引っ張られて、絨毯のリンダの横に座った。

そしてマリにリンダの右手を握らせ、反対のマリの右手を自分で握

った。
私は凍結して見ていた、沙紀が自分の意思で、そこまでの行動をしたのである。
病院関係者は呆然としてその行動を見ていた、沙紀の母親だけ涙を見せていた。

《沙紀はリンダの心を感じたいんだ、だからマリに同調を頼んだんだね》と心に囁いた。
ユリカが私を見て、潤む瞳で爽やかに微笑んで頷いた。

久美子がマリを見た、マリは久美子に笑顔で頷いた。
久美子はミホを見て微笑んで、少し寂しげな表情に変わり、静かな曲を奏でた。
ミホは久美子の表情を見ていた、その音を聴きながら、久美子の表情に重ねていた。
久美子は優しく盛り上げて、最後は希望を表現して終えた。

拍手の鳴り止むのを待って、久美子は母に捧げる曲を弾いた。
天空に届けと、ミホと沙紀の心に届けと叫んでいた。
リンダもマリもサキも瞳を閉じていた、３人は共有していた、互いの想いを。
久美子は弾き終わり右手を沙紀に突き出した、５人娘と沙紀が右手を突き出して応えた。

大きな拍手を浴びながら、久美子はリンダを見て二ヤを出した。
リンダはそれで理解したらしく、マリアをマリに預けて、立ち上がりピアノの横まで歩いた。

その当時の日本ではまだ珍しかった、白いダウンジャケットを脱いで私に差し出した。

私は笑顔で受け取って、それをそのまま羽織った、リンダの匂いと温もりが残っていた。
リンダが私に楽園二ヤを出した、私も二ヤで頷いた。
リンダのサマータイムが聴けると感じて、本当に嬉しかった。

フロアーの照明が暗くなり、ピアノとリンダをスポットライトで照らした。
リンダが美しい姿勢で立ち、大きく息を吸い込んだ。

「サ～マタイム・・・・」リンダが先に強い歌声で始めた。
迫力すら感じさせる強い歌声で、強烈な何かを発信した。
リンダの声に呼応するように、久美子がリンダスペシャルで色付けした。
久美子にまだ上げろ、もっと上げないと届かないと言うように、リンダが叫んでいた。

久美子はリンダスペシャルを強く叩いた、最強の戦士の顔が出ていた。
リンダが強い歌声で、久美子を煽り続けた、腹筋を右手で押さえて汗を流した。
最後の場面でリンダと久美子は綺麗に重なった、私でもそれがはっきりと分かった。

リンダは最後に両手を広げ、虚空を見上げて瞳を閉じた。
スポットライトの光を反射して、ブロンドが輝いていた。
久美子も虚空を見上げて、瞳を閉じて充実感を表現した。
最高の協演を賞賛するように、完全な静寂が訪れた。

「ブラボー」とキングが叫んで、立って拍手を贈った。
そして全員が立って、大きな拍手を2人に贈った。

ミホが久美子に抱きついた、久美子は嬉しそうにミホを抱きしめた。
沙紀がリンダに駆け寄って、リンダに飛びついた、リンダは沙紀を受け止めて抱き上げた。
鳴り止まぬ拍手の中で、４人は輝いていた、私はただ嬉しくてリンダを見ていた。

最後に久美子とリンダが手を繋ぎ、全員に向かって何度も手を上げて頭を下げた。
誰一人笑顔でない者はいなかった、その光景を通路から豊が見ていた。

婦長と沙紀の母親が、ミホと沙紀を迎えに来た。
女性全員でミホと沙紀に、笑顔で手を振って見送った。

ボーイ達が忙しそうに、椅子を片付けていた。
女性達は全員残り、シオンの翻訳を待っていた。
リンダは私にピンクのリュックを手渡して、私は笑顔で受け取った。

「チャイナ・イッテキマス・ネンマツ・マチルダ・ト・クル」とリンダは女性達に笑顔で言った。
そして私に駆け寄り、私の手を引っ張った。
リンダは振り向いて、呆然と見ている女性達に、楽園ニヤを出して手を振った。

「バックしろよ・・マチルダと・・約束だぞ、リンダ～」と蘭が満開で叫んで手を振った。
「約束だよ～」とリリーが笑顔で手を振って、
女性達が思い思いの言葉を叫んで手を振っていた、リンダも笑顔で手を振って私を見た。

『タイム、無いんだね、リンダ』と私はリンダに笑顔で言った。
「オフコース」と楽園ニヤで返された、私はリンダの手を引いて裏口を目指した。

マダムがＴＶルームの前で待っていて、タクシーチケットをくれた。
リンダがマダムの頬にキスをして、２人で裏口から通りに出た。
タクシーを止めて、２人で乗り込んだ。

『大至急・・空港にお願いします』と私は運転手に言った。
「了解・・どこ行きに乗るのかな？」と運転しながら運転手が聞いた。

『リンダ・・ブ～ンどこ？・・宮崎ブ～ンどこ？』と慌てて聞いた。
「ＭＩＹＡＺＡＫＩ・ブ～ン・ＦＵＫＵＯＫＡ」とリンダが笑顔で返してきた。
「了解・・必ず間に合わせるよ」と運転手が言って、アクセルを踏んだ。

私はリンダの顔を見ていた、ブ～ンと言って思い出したのか、ブルーが潤んでいた。
私は無理やり笑顔を作って、リンダを抱きしめた。

『リンダ・・嬉しかったよ・・今日も、あの塔に現れたリンダを見た時も』私はリンダのブルーを見ながら、日本語で伝えた。
リンダの楽園が変化して、ブルーの濃淡で伝えてきた。

「・・・・・」リンダは潤むブルーで私を見て言った。
《私がエースの最後の切り札・・エースが私の最後の切り札》そう言ったと思った。

リンダの言葉を聞きながら、私はブルーを見ていた。
深海の明るさを示す、ブルーを見ていた。

一方、リンダと私を見送ったフロアーに、女性達が集まっていた。
その正面にシオンが立って、リンダの手紙を開いた。

「宮崎の美しい、大切な友へ・・こんにちは、リンダです。
私の身勝手な行動、慌ただしい出発をお許し下さい。
どうしても伝えたくて、中国に行く途中で寄りました。
私はご存知の通り、世界を旅しています。
世界中の理不尽を伝えたくて、子供達の現状を伝えたくて・・旅をしています。
辛いことも多く、私はどこかで投げやりになりそうでした。
○○大学の○○教授を訪ねた時も、煮詰まった心を抱えていました。
大学の正門で、私は目的も目標も見失いかけてた・・その時声をかけられました。
美冬でした・・嬉しかった、同世代の勇気ある女性に出会えて。
そしてその夜に提案されました、ある少年の挑戦を受けてくれと。
その少年の話を聞いて、私は即決で受けました・・非常に興味を持ったからです。
翌日、巡り会いました、不思議な少年に・・本当に嬉しかった。
言語の違いなど全く気にしない、伝わらない事など些細な事だと言ってくれた。
私の抱えていた、自分に対する不満や・・世界観まで変えてくれました。
その瞳の感情を読み取ろうとする姿と、何とか笑わせようとする姿で。
私は世界中を旅して、初めて別れが辛かった・・手を繋いで連れて行こう。

そんな衝動も初めて感じました・・心の底から、喜びに溢れていました。

その少年の事が知りたくて、日本語の堪能なマチルダを、休暇で行かせました。

マチルダが帰ってきて、話してくれた全ての事が嬉しかった。

そして私が感じた事は、間違いじゃなかったと確信しました。

マチルダが宮崎を離れて、エースはすぐに由美子に出会いました。

私はそれを強く感じました、それは私の後悔する部分に響いたからでしょう。

私もヒトミや由美子と同じ病気の少女に、４年前に出会った事があります。

そして段階の時も経験しました、その時に後悔が残りました。

由美子のその時、エースがどうするのか。

それが知りたくて、そしてマチルダにも経験させたくて、マチルダを帰しました。

あの由美子の段階の時、私はマチルダで感じていて・・涙が止まりませんでした。

女性達が全員侵入した事に気付いて、それをフォローする強い力を感じて。

その全てが、由美子を想う全ての人に・・愛が溢れていて。

私は感動しながら、泣いていました・・だから最後に、塔に入れました。

私は痛感しました、一人では何も出来ないと感じました。

沙紀の暗黒の世界を感じて、それに対する皆さんの答えも感じました。

私もずっと抱えていた、子供達の心の壁・・その意味を。

私は何とか行動でこじ開けようとしていた、それは一人だったからです。

感覚的な事で、マチルダにさえ・・言葉で伝えられなかった。

一緒に入って欲しいと願いながら・・どう表現して良いのか分からなかった。
エースのやり方を感じて、感動さえしました・・その時間を充分かけて導く。
そして楽しみも同時に連れている、心を先にその場所に誘う。
強制など何も無しに・・行きたいと、感じたいと思わせる。
そうやって、素敵なメンバーを集めていく・・そしてメンバーのレベルも上げる。
それをエース自身も、心から楽しみ・・優しく背中を押す。
エースは素敵な答えを見せてくれました、私が想像も出来ない答えを。
信じる人々を誘って、イメージの世界に入り、それを壊すという荒技を見せました。
私は喜びに包まれました、希望の光を確かに感じていました。

しかし・・今回の沙紀の絶望の世界、それは罠です・・リベンジを狙ってる。
奴は今度は狙っています、女性達をバラバラにする事を。
信頼関係を壊す事を狙ってると思います、私の経験からそう感じています。
エースとマリとマリアと律子が入れない、その状況を作り出した。
まずは女性達をバラバラにする、それが目的だと思います。
貴女方は既にそのレベルまで来ました、邪魔だと思われるレベルまで。
中途半端な想いだと、精神的にダメージを受けます。
そして大切な仲間を失います・・心の繋がっている大切な仲間を。
私はそれで大切な仲間を失った事があります、強い力を有する仲間を。
その原因は、最後の最後で・・私は自分を信じる事が出来なかった。

当時の私は常識に囚われ、その場所が平和で理想の世界だと誤解した。
美しい場所が輝いて見えて、私は多数という現実に負けた。
その失敗で感じました、この世界には・・悪質なシナリオが存在すると。
エースの辿り着いた世界・・原作者・・それを聞いて、心が震えた。
私はその答えに共感しました、原作者を作り出しそれに挑む。
そうする事で、心の壁を壊す・・病だと言って諦めない。
心の壁と言うのだから、心の外側にあります。
それは心が作った物じゃないと思います、覚悟など必要ありません。
大切なのは、自分を信じる事・・自分の心を信じる事です。
その為には・・今の想いが、心で感じてる事なのかを確認する事です。
それが難しい・・五感を遮られると、それが難しいのです。
確固たる決意をして挑んで下さい・・心から期待しています。
深海の世界・・それは五感に働く、そして五感を遮るでしょう。
深海の世界を目で見ないで、音で感じないで、匂いに惑わされないで。
触れる温もりに意味を持たないで、五感を捨てて下さい。
そうすれば現れるでしょう・・研ぎ澄まされた感性が、その心の本質が。
全員で入り、誰かが沙紀と帰還する事を祈っています。
年末にマチルダと戻ります、沢山の土産話をリュックに詰め込んで。
その時はゆっくりと、深海の思い出話を聞かせて下さいね。
それまでに、もう少し日本語を覚えますね。
誰よりも宮崎の友を信じる・・リンダより』

シオンの言葉が響いて、全員が沈黙していた。
「リンダですら、失敗したのか」とカスミが静かに呟いた。
その時、マリがカスミに手渡した、私が書いたマリの詩を。

「ガル」とマリはカスミに言葉で言って。
ヒョンヒョンと笑顔で跳ねて、後ろの豊に飛び込んだ。
豊が笑顔で受け止めると、マリは豊に抱かれ最強スリスリを発動した。

「美由紀・・お願い、マリを何とかして～」と恭子がウルで美由紀に言った。
「俺は恭子の人生の部分には、口出ししないよ」と美由紀がニヤで渋く言った。
「似てないよ～、美由紀」とヨーコが二ヤで言った。
「ひどいです～・・あんまりです～」と小夜子が美由紀の真似で言った。
「小夜子お姉さま！・・ひどいです～、あんまりです～」と美由紀がウルウルで返した。
女性達が美由紀のウルで笑っていた。

「そう言う事ね・・笑い飛ばせって事ね・・サンキュー・マリ」とカスミが笑顔で言った。
「どうせ読んでも分からないだろって、そう言ったんだよ・・マリちゃん」と蘭が満開二ヤで言って。
「そうだと思うよ・・カスミは銀河で唯一、感覚的な女でしょ」とリアンが極炎二ヤで言って。
「そうよね～・・炎じゃないから、そうだと思うよ」とユリカが爽やか二ヤで言って。
「さて・・情熱3姉妹、頂きましょうかね～」とネネが二ヤで言った。

「それは聞き捨てならないお話ですね～・・情熱3姉妹、補欠だったのね」とリョウがカスミに二ヤを出して。
「さて、私も隠していた炎を出しましょう・・強烈なのを」とセリカが二ヤで言った。
カスミのウルを見ながら、女性達がワイワイと笑顔で解散した。

「マキ・・お願いだから、お話に来て・・イメージ潜入の話、お願いね」とアイコがマキに言った。
「良いですよ・・いつにしますか？」とマキが笑顔で言った。
「明日はどう？・・ランチをご馳走するよ」とアイコが返した。
「じゃあPGに来ませんか？・・私、少し片付けがありますから・・裏は開いてますから」とマキが微笑んだ。
「ありがとう・・そうさせて貰うね、楽しみだよ」とアイコが美しく微笑んだ。
「アイコお姉さま・・私もお話得意です～、ランチ食べるのも～」と美由紀が笑顔で言った。
「それは素敵ね・・美由紀ちゃんも、お願いするわ」とアイコが微笑んで。
幻海の女性達が嬉しそうな笑顔を向けた。

「美由紀・・明日、バイクで迎えに行くよ」とマキが二ヤで言った。
「お願いします・・キカイダーみたいなサイドカーを付けて・・背中にギターをしょって来てね」と美由紀が二ヤで返した。
「それは素敵だね～・・変身の場面とか、私もカメラを持って見に来るよ」とリリーが言って、ハッとした。

「そっか！・・深海の魚は光射す場所を目指さないのか、なるほどね～・・凄いよ、マリ」とリリーが笑顔で言った。
「やばい女が、何かに気付いたよ」とナギサが蘭に華やか二ヤで言

った。
「大丈夫・・多分間違ってるから、瞳のリングが弱いからね」と蘭が二ヤで返した。
「あれは、蛍光灯を見てるんだろ？」とリアンが二ヤでユリカに言って。
「違うわよ、リアン・・あれは、白内照明って言う病気よ・・駄目でしょ、傷つけたら」とユリカが二ヤで返した。
「じゃあ、流星は何だよ・・あれも病気か？」とリアンが二ヤで言った。
「あれはショッカーに移植されたのよ・・不運の改造人間なんだから、２０００ＧＴちゃんわ」とユリカが二ヤで返した。
「蘭・・久々に見たね・・恐怖の漫才」とナギサがウルで言って。
「ネタにされないで良かったね・・こっちに飛び火する前に、準備に行こう」と蘭が満開ウルで言って、２人で小走りに控え室に消えた。
ウルウルのリリーとセリカを残して、女性達が二ヤで静かに消えていった。
ボーイ達の営業準備も、女性達の準備も問題無く終わった。
北斗とリリーはＰＧ、アンナがゴールド、カレンが魅宴に出ていた。
私はリンダを抱きしめていた、楽園ブルーを見ながら。
遠くの暗闇に、空港の眩しい明かりが見えてきた。
私には淋しさは無かった、リンダが年末の約束をしてくれたから。
マチルダと一緒に必ず来ると、楽園ブルーで強く言ってくれたから。
空港の正面玄関で、タクシーを降りた。
「待ってるから・・帰るんだろ、夜街に・・思う存分泣いて来い」

とタクシーの運転手のオヤジが言った、私は真顔で頭を下げた。
リンダの手を引いて、右肩に重たいリュックを背負って、搭乗受付カウンターに行った。
ギリギリの時間で、受付の女性が慌てて手続きをした。
リンダはリュックから黒い皮の上着を出して着て、リュックを預けた。

「プレゼント・ニアウゾ」とリンダが振り向いて、笑顔で私の着てるダウンジャケットを示した。
『サンキュー、リンダ・・素敵だ～』と私も笑顔で返した。

福岡行きの搭乗を呼びかける、アナウンスが響いていた。
リンダがチケットを持って、私の手を繋いだ、私は笑顔でリンダに頷いて。
リンダの手を引いて走った、階段を2階に上がり、受付前でリンダを抱きしめた。

「ソラノアオ・ウミノアオニモ・ソマズタダヨウ」とリンダが美しい笑顔で言った。

『白鳥は哀しからずや、空の青・海の青にも・・染まず漂う。
幾山河、越えさり行かば寂しさの、はてなむ国ぞ今日も旅ゆく。
いざ行かむ、ゆきてまだ見ぬ山を見む、このさびしさに・・君は耐ふるや。
放浪の歌人、若山牧水の歌だよ・・リンダ』

私はリンダの嬉しそうな楽園ブルーを見ながら、牧水の想いを感じて泣いていた。
リンダが強く抱いてくれた、その熱と強烈な波動が守ってくれた。

「キミハ・・タフルヤ」とリンダが私の耳元に言った。
リンダの優しい言葉で入ってきた、牧水の強い想いが。
私はリンダを強く抱き、その想いを温度で伝えた。
リンダも強くしがみ付いて、その想いを返してくれた。

『必ず行くよ、リンダ・・俺も、必ずそれを見る・・リンダの目指す理想を』とリンダに笑顔で言った。
「ゴウカク・チョット・イッテクル」と美しい笑顔で言って、リンダが背中を向けた。

『ＧＯ・・Ｒｉｎｄａ・・Ｉ　Ｌｏｖｅ　Ｒｉｎｄａ』と言って、リンダの背中を押した。
リンダは振り向かず、金属探知を潜って行った。
私はリンダの背中を見ていた、寂しさよりも嬉しさが強かった。

リンダは奥に消える寸前に振り向いて、雨季の訪れた楽園ブルーで私を見た。
そして美しい笑顔を見せて、【了解】【戻ります】とＰＧのサインを出した。
私も笑顔でリンダを見て、【待ってる】と返した。

リンダが右手の親指を立てて、私に突き出した、私も右手の親指を立ててリンダに向けた。
最高の楽園笑顔の残像を残して、リンダの姿は見えなくなった。

『このさびしさに、君は耐ふるや・・ユリカ』と声に出してユリカに囁いた。

強烈な波動が私を包んだ、その時に感じていた・・ユリカを見送る時が来ると。

その時に・・俺は耐えられるのかと・・もう一人の自分で問いかけた。

自信の無い１３歳の姿が、暗い空港の窓に映っていた・・リンダの残像の横に・・・。

【冬物語？】

冬の夜空は、その冷たさで、不純物を排除していた。
私は窓ガラスに映る自分の姿を見ていた、それも良いと思いながら。
リンダが見えなくなって、私は空港の出口に歩いていた。
タクシーの運転手は、車の外でタバコを吸っていた。

「なんだつまらん・・号泣しながら、帰って来ると思っとったのに」と運転手のオヤジが二ヤで言った。
『初めての見送りじゃないからね・・少し泣いたけど』と二ヤで返した。
「あんなブロンド美人なら、何度でも泣くよ」とオヤジが笑っていた。

『こんな時に、タバコって吸いたくなるのかな～』と運転手のオヤジの横に立ってニヤで言った。
「1度や2度は、吸った事あるんだろ」とオヤジが二ヤで、ポケットからハイライトを出した。
私は1本抜いて口に加えた、オヤジがライターで火を点けてくれた。
私は少しだけ吸い込んで、むせそうになっていた。
強い波動に何度も怒られて、ユリカは最後にプイの波動で来た。

『やっぱり、不味い・・俺は子供だよ』と笑顔で言って、灰皿に吸いかけのタバコを落とした。
「吸わない方が良いさ・・百害有って一利無しだからな」とオヤジが言って、帽子を被って運転席に乗った。
私は一度振り向いて空港の明かりを見て、後部座席に乗り込んだ。

「ジャストだな・・さて帰るかね」と言ってタクシーが走り出した。
タクシーは空港の敷地を出て、夜街でなく海の方向に走った。
滑走路を囲む鉄柵の横の狭い車道に出て、タクシーは止まった。
「覚えとけよ・・ここだよ、最高の見送るポイントは」とオヤジが言って、後ろのドアを開けた。

私は降りて鉄柵を両手で握った、飛行機が管制塔の方向からゆっくりと近づいて来ていた。
海風が強く吹いていて、飛行機のエンジン音が響いてきた。
機体の下部と滑走路を照らす光が、私の方を照らし迫ってきていた。

《こんなに近くで見れるんだ・・凄いよ》と心に囁いた。
機嫌の戻った強い波動が来て、私は笑顔で飛行機を見ていた。

間近の飛行機が、私の目の前でUターンをして、その時明るい機内が窓から見えた。
外を見てるリンダのブロンドが見えた、私は必死で両手を振った。

リンダはハッとして私を見た、そして両手を小さく振った。
私には見えていた、美しいリンダの笑顔が見えた。

飛行機は轟音を上げて、加速しながら遠ざかって行った。
街の明かりの方に加速して行き、機首を夜空に持ち上げた。
私は両手を振りながら、叫んでいた。
『Ｉ　Ｌｏｖｅ　Ｒｉｎｄａ』と叫んで、小さくなる飛行機の点滅を見ていた。

私は点滅が見えなくなって、タクシーに乗った。
「リンダか～・・素敵な子だよな～」とオヤジが運転しながら優し

く言った。
『遠いんだよ・・まだまだ遠い存在だよ』と窓の外の明かりを見ながら返した。
「近付くには・・経験するしかないな」とオヤジは前を見ながら言った。
『それしかないね・・時間はかかるけど』とオヤジの背中に返した。

「同じ歳の仲間の何倍も、経験なら早いだろ・・焦っても良い事ないぞ」とルームミラーを見て二ヤで言った。
『そうだね・・楽しませてもらうよ、子供という時期を』と笑顔で返した。
「あぁ・・楽しめ、それだけしか肥やしにならんよ」とオヤジは嬉しそうに言って、アクセルを踏んだ。

夜街の赤の多い明かりが見えてきた、私はそのクリスマスの色を見ていた。
橘通りでタクシーが止まった、私はタクシーチケットを渡した。

『ありがとう・・最高の見送りが出来たよ』と笑顔でオヤジに言った。
「いつか見送られる時に感じろよ、あの場所から見送る意味をな」とオヤジが笑顔で言った。
『うん・・いつか必ず』と笑顔で返して、タクシーを降りた。

「成長したな、驚いたよ・・そこで頭を下げてた、同じ男とは思えなかったぞ・・次に会うのを楽しみにしてるよ」とオヤジが大声で言って走り去った。
私はタクシーを見送りながら頭を下げていた、あの時の気持ちが蘇っていた。

蘭と出会った夜を、そして蘭の乗ったタクシーを見送った時が蘇った。
その時の感情を感じて、私は頭を上げて夜街の方に振り向いた。
振り向いた目の前に、ユリカが笑顔で睨んでいた。
『ごめんにゃしゃい・・ユリカ』とウルで反省を示した。
「何に対してのお詫びなの？・・タバコじゃないよね」と爽やか二ヤで言った。
『変な事言ってごめんなさい・・反省してます』と真顔で返した。
ユリカは私に近付き強く抱きしめてくれた、人で溢れる橘通りで。
「あれは駄目だよ・・大切な事は、私を見ながら・・言葉で言って」とユリカは私を見上げて言った。
その瞳に私は何も言えなかった、無意識にユリカの瞳を読んでいた。
それは優しく強い想いだった、私はユリカを抱く腕に力を入れた。
『ごめんね・・約束するよ、ユリカ』と笑顔で返した。
「タバコ吸ってなければ、キスしてあげたのに・・残念でした」と爽やか二ヤで言った、私はウルで返した。
ユリカと手を繋いでユリカの店に行き、ユリカの用意してくれたお寿司を食べた。
満席になったので、ユリカに手を振って店を出た。
祭りのような人混みの、狭い通りをＰＧに向けて歩いていた。
指定席に行くと完全満席状態で、１年で１番熱い夜が展開されていた。
私は蘭が満開笑顔をくれたので、笑顔で返してＴＶルームに入った。

5人娘はエミ以外は眠っていた、久美子とエミが楽しそうに話していた。
私は4人娘のチェックをして、エミの隣に座った。

「エース・・リンダちゃんに会えて、嬉しかったよ」とエミが笑顔で言った。
『うん・・俺もだよ』と笑顔で返した。
「バンドのオヤジ達、サマータイムの迫力に圧倒されて帰ったよ」と久美子が二ヤで言った。
『ライブ前に、良い刺激だったろうね』と二ヤで返した。

「今度は27日の日曜日だね、楽しみだな～」とエミが笑顔で久美子を見た。
「前半は、ほぼ売切れだって・・支配人喜んでたよ」と久美子が私を見た。

『喜んでいられないよ、あのメンバーが揃うんだから。
五天女に共同体の女性ほぼ全員が揃う、沙紀も来るしね。
ミホも交渉しようと思ってる、違う音楽も聞かせたいからね』

私は笑顔で返して、構想を考えていた。

「そうそう、エース・・リンダが置いて行ったぞ。
蘭に渡して欲しいと、沙紀の退院祝いにどうかっての。
ユリにそう言って、それを置いて行ったらしいぞ」

マダムが棚の上に置いてある、包装された物を指差した。
私はそれを持って、絵だと感じてテーブルに持って行き。
包装を解いてみた、美しい油絵のブロンドの少女の絵が出てきた。

古い物らしく、少女の服がそれを示していた。
美しい絵だった、油絵特有の立体感で生命を宿し。
塗り重ねられた色で、体温まで表現されていた。
私達はその絵に魅入られ、沈黙して見ていた。

「素敵ね～・・この絵を見ながら、沙紀ちゃんが成長したら・・素敵な絵を描くね」と久美子が言って。
「リンダちゃん・・素敵だね～」とエミが言った。
私は同封されてた手紙を開いて、英文を見てウルを出していた。

「ウルを出さないの・・お勉強しなさい」とエミに二ヤで怒られた。
『はい・・エミ先生』とウルで返した。
私はＴＶルームにその絵を掛けて、手紙を久美子に預かってもらった。

そして最も熱い日の巡回に行った、共同体の店は全て満席だった。
幻海に行くと満席で、女性達も忙しそうに動いていた。
サインもなんとか通ってるようで、ボーイの動きも自然だった。

私は幻海を出て、マリーレインのビルの裏階段を上った。
マリーレインの裏口を開けてみた、若いボーイが私を見て、笑顔で手招いた。

『今晩は・・覗きに来ました』と笑顔で言って頭を下げた。
「聞いてるよ、いつでもどうぞ・・そこが一番良く見えるからね」
とボーイがフロアー裏の場所を示した。
『ありがとうございます・・少し見させてもらいます』と頭を下げて、その場所まで歩いた。

そこには３０代のボーイと、４０代の女性が座っていた。

私を見て、４０代の女性が笑顔で椅子を指差した。
私も笑顔で返して、ボーイに頭を下げて座った。

私はその広さに驚いていた、ＰＧの2倍近い大きさだった。
しかし違和感が強かった、その店の流れの澱みを見ていた。

「感想は？」と隣の女が言った、律子位の歳だと思っていた。
『広過ぎて、安定感が無い感じですか』と笑顔で返した。
「ほほ～・・確かに面白いね～・・私はフネちゃんです」と笑顔で言った。
『可愛いですね、サザエさんのお母様・・自分にちゃんを付けるし』と笑顔で返した。
そのフネと言う女性が楽しそうに笑って、ボーイも笑っていた。

「安定感が無いと思った理由は？」とボーイが笑顔で聞いた。

『これだけ広いのに・・ボーイさんの背中が何人か見えるから。
裏から見た時、ボーイの背中が見えるのは・・ＰＧでは緊迫した時です。
どうしても客席の状況をチェックしたい、ユリさんから緊迫の場面が見えない。
そんな状況の時だけですね、だから滅多に無いんですよ。
ここは広いという理由を押し付けてる、自分勝手な状況で正当化してますよね。
客は感じてますよ、自分達が見張られている事を・・良い気持ちじゃないですよね。
学校の正門の前に、生徒指導の鬼教師が立ってる感じ。
何も悪い事してないのに、なぜか緊張する・・嫌な感覚です。
誰でも経験してるから、思い出しますよね・・俺は中学生だから、リアルに感じます。

その状況が有る限り、客はどっかでくつろげない・・絶対にそれは伝わる。
客のその状況が緩和されない限り、店自体に安定感は出ません。
お客が主役ですから・・安定感はお客が感じて、女性達も感じる。
あの赤いドレスの若い女性、今から後ろの席に行くんでしょう。
お客に挨拶をした・・今です、あの歩く時・・視線を意識してない。
ボーイを見てます・・あれじゃあ、お客もしらけてしまう。
常に客の視線を感じて歩かないと、それにより指名されたりしますから。
お客は常に見ていますよね、女性の動きを目で追います。
それも大きな楽しみだから、クラブで金を払って飲む楽しみの１つですよね。
マリーレインは確かに、最大級のクラブでしょう・・しかし評価はそう高くない。
それは客の決める事ですよね、最大級の難しさも有るんでしょうけど。
ＰＧはマリーレインより接客なら上だと、俺は胸を張って言えますね。
この状況のマリーレインなら・・女性達は単なる仕事をしてるだけ。
金を取るだけの仕事を、その拘束時間内だけしてるだけ。
だから危険な事も多いんです、ボーイが見張ってる以上・・緊張感は出ない。
だから女性達が無防備ですよね、それともマリーレインは風俗店なのかな？
あの無防備さは危険です、中途半端は・・ただ勘違いさせるだけ。
性質の悪い客が増えるだけ・・それが最も危険な事だと、気付かないのなら。
この店は面白いと言われる・・その面白いの意味にこそ、危険が

潜む。
そんな気がしますね・・安定感の無さで』
私は初対面だったのと、フネという女性が重要人物だと感じていた。だから初対面用の言葉を出して、強く興味を引くように感想を伝えた。

「なるほどね～・・確かにボーイの背中が見えるね」とフネがフロアーを見て言った。
「女性達が無防備だと、どこで見るんだ？」とボーイが興味津々で言った。

『あの右から3番目の席の、白いドレスの女性。
お客に太股を触られたくないから、お客の太股に手を置いてました。
普通なら絶対に、意識的で緊張した状況でないといけません。
そしてお客が顔を寄せて、耳元に話しかけますよ・・見てて下さい。
その程度の展開は、かなりあるはずですよね・・今はお酒を作っていますね。
そして酒を客の前に置いて、ガードの意味の手を置くはずです。
でも客の方は、話したくて仕方ない・・それはあの子に近づけるから。
それを女性が許している、それを勘違いしてる・・それを提示します、目で。
あの若者は、そのレベルに達してない・・一人でクラブで飲むレベルに。
だからマリーレインに来てる、ここなら一人で何とか楽しめるから。
見てて下さい、あの若者の目です・・顔を寄せる時の。

自分の膝に置いた女性の手に、自分の手を重ねて顔を寄せる時です。
今です、ゆっくりと動きます、今・・女性は俯いた、それが大問題。
これが接客と言うのなら、マリーレインは風俗店です。
あの場面で、俯いて顔を近づけさせるのは、相当の信頼関係がないといけない。
あの若者の目を見ましたか、大きな勘違いをしてる目を。
あれは弱肉強食を勘違いしてる目です、弱者が獲物を捉えた目ですね。
俺は、あんな若者が一番怖いです・・どんな凶暴な男よりも。
それは自分の世界しか持ってないから、その世界ではあの女性はあの男の者です。
それを必ず、ある一線で女性は拒絶しないといけない、それが危険なんです。
あの男は認めないから、自分の世界だけしか・・存在しないから。
ボーイがプライベートも守るのなら、問題無いですよ。
２４時間守ると言うなら問題無い・・あの若者は拒絶しますよ、現実と真実を。
ＰＧの女性なら絶対に太股に手を置かないし、顔を寄せてきても・・相手の目を見てる。
そうされたらあの若者は、顔を寄せる事は絶対に出来ません。
拒絶されるのを極度に恐れる、自分が弱い人間だと・・知りたくないからです』
私は一気に言葉にした、今までの経験で感じた、自信のある解答だった。
強い波動が同意を示して吹いた、マリーレインのフロアーに。
「なぁ・・面白いだろ」と後ろから加々見の声がした。

『御大・・お言葉に甘えて、研究しに来ました』と振り向いて笑顔で言った。
「御大って呼ぶの！・・・やるね～」とフネが二ヤで言って、ボーイは凍結していた。
加々見は笑顔で私の横に立って、フロアーを見ていた。

「さて、ならば安定感を出す為の手段は？」と加々見がフロアーを見ながら言った。
『ボーイをフロアーから、少し減らす・・そして言葉を減らす、そこからでしょう・・幻海と同じ作戦です』と私もフロアーを見ながら言った。
「来年からやるかな・・私もこれ以上、自分の店の女の子が傷つくのは、見たくないからな」と加々見が言った。
『危険は避けれますよ・・俺はそれだけを考えて来たから』と笑顔で言った。

「基本は、蘭を守る為なのか？」と加々見が二ヤで言った。
『そうです・・でも俺が心配する必要など、何も無かったですよ』と笑顔で返した。
「そのレベルに行って欲しいよな・・同じ仕事をするなら、上を目指して欲しいよ」と加々見は笑顔で言って、奥に歩いて行った。

『くそ～・・何か出来すぎてて、遠すぎて・・目標にもならない』とフネの視線を感じて、ウルで呟いた。
「どんな時でも、視線を意識するね～・・最後の挑戦者」とフネが二ヤで言った。
『バレました・・又来ます』と笑顔で2人に頭を下げて店を出た。
私はマリーレインを出て、その難しさを実感していた。
≪大き過ぎる・・あれじゃあ目が届かない、チーム戦に持ち込むし

かないね》と心に囁いた。
強い波動が二ヤな感じで吹き抜けた、人混みの狭い通りを。
私は気分転換に、魅宴に寄った。
リョウを見たかったのだ、魔性と呼ばれるリョウが、その対策の鍵を握ると感じて。
リョウは魔性で引き付ける、その美貌と魔性の雰囲気で誘うのだ。
だからこそ難しい、相手を見極めなければ、難しいだろうと感じていた。

魅宴に入ると、フロアーは満席で大ママも出ていた。
私は裏からリョウを見ていた、中年の偉そうなオヤジの相手をしていた。

「最近・・リョウ姉さんに、ご執心だね～」と横にヨーコが立って二ヤで言った。
『リョウのアドバイスを貰いにね、マリーレイン用のアドバイス』と二ヤで返した。
「そう言えば、デビュー出来れば・・幻海を経験出来るの？」とヨーコが聞いた。
『リリーに感謝しろよ・・リリーが一緒に入るから、俺は行かせるんだから』と笑顔で返した。

「うん・・頑張るよ、絶対デビューするよ」とヨーコが清楚に微笑んだ。
『当然・・来年から、俺はヨーコの応援をするよ・・俺の最初のスカウトした女だから、マキなんぞに負けさせせんよ』と二ヤで返した。
「よろしくね・・それでリョウ姉さんの、どんなアドバイスを見に来たの？」とヨーコが二ヤで返して来た。

『リョウが相手にしてる、挑戦してみろって誘ってるような・・若い客はいる？』と二ヤで聞いた。
「そこか～・・なら相当に難しいんだね、マリーレイン」とヨーコが二ヤで返してきて、フロアーを見ていた。

「あの右の奥・・一人で来てる若い男、あの人だよ・・リョウ姉さんの挑戦者」とヨーコがフロアーを見て言った。

私は視線を追って、その一人で来ている客を見た、少しヤンチャな感じの２０代の男だった。
その時はリョウが離れていて、バイトの女の子が付いていた。

「少し危ない感じだけど・・仕事は〇電の技術者よ」とヨーコが私に二ヤで言った。
『なるほど～・・大学の時に、きちんと遊んだタイプだね』と私は男を見て言った。
「それで、どんな展開が見たいのかい？」と大ママが後ろから言った。

『怖いよ、その地獄耳・・カレンを振ってみて、あの男に』と笑顔で言った。
「ヨーコ・・やりな」と大ママが二ヤでヨーコに言った、ヨーコは頷いてフロアーを見た。

大ママは私の横まで来て、その対応を見ていた。
『この忙しい状況で、一人で来てる若者に・・カレンを振る事は考えられないよね？』と大ママに言った。
「絶対に無いね・・リョウはすぐに感じるよ」と大ママが二ヤで言った。

カレンがバイトと変わって、男に挨拶をした、男は美少女の登場を笑顔で迎えた。
私は男の対応を見て、リョウを見た、リョウは私を見ていた。

「時間は・・どの位でいく？」と大ママもリョウを見ながら、私に言った。
『５分でいこう・・それがリョウの勝負のゴングだよ、見せてもらおう・・魅宴のＮｏ１を狙うと言った言葉の意味を』と私はリョウを見て二ヤで言った。
リョウはお客を見るのに、顔を動かしながら、横顔で最強魔性二ヤを私に出した。

『やるね～・・さすがリョウだよ』と私は笑顔で言った。
「怖かった～・・あんな本気の横顔、初めて見た」とヨーコが言った。
「それで何が見たいんだい？・・マリーレインの問題点は？」と大ママが二ヤで言った。

『勘違いさせない、その方法・・蘭やカスミ達のは参考にならない。
初めから、その方向で持って行くからね・・でもリョウは違うよね。
それは魔性の魅力だから、性的部分が強く出されるよね。
どんな事をしても手に入れたい・・それ思わせる、匂う様な色気。
その場面を想像させる、どうしても経験したくなる・・男の本能に呼びかける。
その妖しい誘い・・だからこそ難しい、勘違いはさせれない。
リョウが魔性を背負って、導き出した答えが知りたい。
客との関係の基本姿勢が見たいんだ・・それがマリーレインのヒントになる。
そう思ったんだよ・・最大級の大きさの、難しさを感じて』

私は大ママに正直に言った、大ママは二ヤで頷いた。
カレンは美少女笑顔や可愛いウルを繰り出して、男の笑顔を作っていた。
さすがカレン、1対1なら一撃必殺だなと思って見ていた。

「よし・・ヨーコ、リョウとカレンをチェンジ」と大ママが言った、ヨーコは頷いてサインを出した。
先にリョウが動き、カレンの横まで歩いた。
その時カレンが男にウルを出して、立ち上がった。

「カレン、やるね～・・気付いてたね」と大ママが笑顔で言った。
『リリーが入って、カレンも変化したよ・・その本気モードを出し始めた』と私は二ヤで言った。

リョウは男の横に二ヤで座って、距離を置いた。
絶妙な距離感だと思っていた、男は少し焦って笑顔で機嫌を取った。

「なるほど～・・絶妙の距離だ」とヨーコが呟いた。
『最初はそうだよね～・・意思を伝えて、状況を自分の流れに向ける』と私は二ヤでヨーコに言った。
「問題は、それをどう縮めるか・・あの男は案外意気地が無いんだよ」と大ママも二ヤで言った。

リョウは真顔で男と話していた、男は少し必死さが出ていた。
『ここが勝負・・あまり引っ張ると、客の心が離れる・・でもすぐに許すと、つけあがる』と私は二ヤで言った。
ヨーコは真剣に見ていた、遠い存在の姉の接客を。

リョウは少し斜めに動いて、男の右後ろ視界ギリギリに顔を持って行った。
そして後ろから男の耳元に囁いた、男はそれで笑顔になった。
リョウはそれでも笑顔を出さなかった、男からはリョウの表情は見えない。
だが笑っていないという事は感じたであろう、男は前を見て何かを言った。
真剣な表情だった、その言葉でリョウは少し前に出て男の横顔を見た。

男もリョウを見た、その距離は１５ｃｍ位だっただろう。
その距離でリョウは伝えた、あなたを信頼してると強く伝えて、美しい笑顔になった。
男もやっと笑顔が出て、少し照れながら頭をかいていた。

『うん・・さすがリョウ、お見事』と私は笑顔で言った。
「距離で伝える・・難しいよね、間違ったら終わりだよ」と大ママがヨーコに二ヤで言った。
「でも言葉じゃ無理ですよね・・あの距離の意味を伝えるのは」とヨーコが呟いた。

『がんばれ、ヨーコ・・来年、面白いチャレンジを準備してるから』と二ヤで言って、背中を向けた。
「よろしくね・・エース」とヨーコが返して来た。
私は振り向かず右手を上げて、魅宴を出た。

寒い夜風が強かった、私はリンダのダウンを着てたので、寒くなかった。
通りは人で溢れていた、しかしタクシーは無数に客待ちをしていた。
まだその時代には入ってなかった、客待ちのタクシーが消える、バ

ブルは遠かった。
私は指定席に戻り、満席の熱いフロアーを見ていた。
ユリさんがマキの席でサインを繋いでいた、フロアーはその状況に慣れたようだった。

「良いな～・・白のダウン、貰ったの？」とマキがコーラを差し出して、二ヤで言った。
『うん・・リンダサンタのプレゼント』と笑顔で返した。
マキは腕の部分を触って、その柔らかい感触を確かめた。

「これ、絶対高級品だよ・・軽いもん」とマキが笑顔で言った。
『そうだろうね・・軽いし暖かいよ』と自慢二ヤで返した。
「白だから、汚すなよ・・アマリ君に勝負挑んだりするなよ」と二ヤで返して、ユリさんの方に歩いて行った。
私はマキのその表情で、アマリ君は出頭したんだと感じていた。

ＰＧが終了したのは、１時２０分だった。
土曜日で元気が有るのか、１０番に全員が集まった。
私はリンダの持ってきた絵を持って、女性達の前に笑顔で立った。
そして美冬を呼んで、リンダの同封していた手紙を渡した。
美冬は笑顔で受け取って、手紙を開いた。

「この絵は、私とマチルダからの・・沙紀への退院祝いで用意しました。
皆さんも退院祝いを探してるそうで、一緒にどうかと思いました。
この絵は、私の祖父が集めたコレクションです。
私は祖父のコレクションを、寄贈していました。
私は絵の価値がそれほど分かりません、だから宝の持ち腐れでした。

私には祖父のコレクションよりも、沙紀が描いてくれた絵の方が価値があります。
しかしこの絵は、ブロンドに緑の目だったから・・手放せずにいました。
でも最近強く感じました、この絵は持つべき人間が持つべきだと。
沙紀が持っているのが、一番作者が喜ぶのではないかと思いました。
それで沙紀に贈ります・・ご一緒に贈るのならば。
集めた善意のお金は、寄付して下さい・・私はそれで結構です。
私とマチルダの2人で贈るのを、少し考えていました。
将来・・沙紀の負担になるのではと、心配していました。
全員で贈りませんか・・沙紀に感謝を込めて・・リンダ」

美冬が読み終わり私を見た、私は絵を女性達に見せた。
完全な静寂が、その感動を伝えていた。

「エース・・そんな持ち方はいけません、これは人類の宝ですよ」
とユリさんが近付いて、真剣に絵を見ていた。
『えっ！・・そんなに凄いの』と私は驚いて返した。
女性達が静かに集まった、全員が絵に魅入られていた。

「ユリカに見せないと分かりませんが・・本物なら、大変な物です・・そして新発見かも知れません」とユリさんが言った。
強烈な波動が何度も来て、興味津々を示していた。

「価値は分からないけど・・本当に素敵な絵ですね」と蘭が満開で微笑んで。
「この絵を見ながら、沙紀がどう成長するのか・・楽しみですね～」
とカスミが笑顔で言って。
「決めましょう・・これを全員で贈りましょう、価値は伏せたまま」

と蘭が満開で微笑んだ。
女性達が笑顔で頷いた、私はその絵の少女を見ていた。
美しいリンダと同じブロンドで、緑の瞳がマチルダのような少女を。
沙紀の嬉しいを感じながら、リンダの香りに包まれていた。
フロアーには、サマータイムの木霊が残っていて・・熱を持っていた・・・。

【冬物語？】

制御できなければ壊れる、パワーが上がれば上がるほど難しくなる。恐れずにやるしかない、次のレベルに上げるしか、制御する方法は無い。

女性達が充実感を纏い、笑顔で控え室に消えた。
私は大切に絵を持って、マキとＴＶルームに戻った。
私はＴＶルームに絵をかけて、少し離れて見ていた。

その時扉が静かに開きユリカが入ってきた、ユリカは絵を見て凍結していた。
近づく事すら出来ないようで、静かに絵を見ていた。

「本物でしょう？・・ユリカ」とユリさんを先頭に女性達が入って来た。
「そう思います・・たとえ贋作でも、名画ですね」とユリカは絵を見ながら返した。
「○○ですよね？・・有名な作品の中にありますか？」とユリカの横にユリさんが立って薔薇で言った。
「私の記憶には無いですね・・でもあの有名な○○の少女には、もう１つの姉妹的作品が有ると言われています」とユリカが爽やか笑顔で返した。

「○○作なんですか！・・うっそ～」とリリーが驚いて言った。
「名前なら聞いた事がある・・それの新発見なの」と蘭が満開笑顔で言った。

「名画・・○○の少女は・・少女なのに白髪だから、色々と憶測が

ありますよね」とユリさんが言った。
「そうなんです、何を表現した色なのかと・・色々と言われていますね」とユリカが返した。
『その絵の少女は、瞳は何色なの？』と私はユリカに二ヤで聞いた。
「そうなのよ・・その二ヤが正解かもね、その少女は真青なブルーの瞳よ」とユリカが笑顔で返してきた。

『なるほどね～・・○○さんもやるね～、マリに近いな』と私は絵を見て二ヤで言った。
「その二ヤの説明をせよ」と蘭が満開二ヤで言った。
『だってこの絵の少女・・影しか見えないけど、右手に握ってるのは絵筆だよ』と二ヤで返した。
女性達が少し近寄り、絵を凝視していた。

「そんな気がする・・持つべき人が持つべき物・・リンダ、怖いよ」と蘭が満開ウルで言った。
「それが作者が一番喜ぶ・・まさにそうなのかも」とカスミが笑顔で言った。

「○○の母の日記が残っていて、○○は幼い頃から知能が遅れていた。
人と同じ事が出来ず、言葉も出ずに・・母は悩んで、あらゆる事をさせてみた。
そして気づく・・絵の才能が有る事に、それから画材を与えるの。
貴族で裕福な家に生まれてたのよ、絵の先生を就けてモチーフを与えた。
でも○○の描いた絵は、目で見た物じゃ無かったの。
空想の世界をこんなに鮮明に描いたの、その画力は高い評価を受ける。
しかし存命中は有名にならなかった、死亡して約１００年後に高

い評価を受ける。
その高い評価を受けた絵こそ・・〇〇の少女だった。
それは生命が宿ると言われたの・・１００年の時を経て、生命を宿したと言われた。
〇〇の作品は、有名になる前に・・全て愛好家の物になってしまった。
滅多にオークションにも出ない、それほど持主に愛されてるのだと思う。
リンダがこれを手放したのは・・心に従ったからでしょう。
この絵の本質を感じたからでしょう・・確かに、〇〇はマリに近いかも。
そうであるなら・・沙紀にも近いのでしょう。
沙紀がこの絵で、どんな影響を受けるのか・・本当に楽しみですね。
さぁエース、あなたの見解を教えて？・・怖いけど聞きたいな」
ユリカは爽やか笑顔で言って座った、サクラさんを含めた女性全員が笑顔で座った。

『もちろん、空想物語だと思って聞いてね。
俺は最近、変化の激しいマリと話して、今この絵を見ていて思ったんだ。
俺はマリに聞いたんだよ・・マリはノストラダムスをどう思うのかと。
マリは１９９９年になれば分かると、二ヤで言った。
俺は小説家だと分かるんだねと返した・・そうしたらマリが言ったんだ。
未来なんて無いだろ・・そんな遠い未来なんて読めないだろ。
ここまでの話は、ユリカと蘭と中１トリオは知っている。
でも言ってない最後の台詞があるんだ・・マリはこう付け足した。

自分が強い想いで作り出す物ならば、それは見えるかも知れない。
何かを感じる事は出来るかも知れないね・・それを感じる感性はあるかもね。
そこにメッセージを送る事は出来るかもね・・でも何年後なんて分からない。
だからノストラダムスは小説家・・というよりも、解読した専門家の小説だよ。
後付の解釈が生み出した、予言という名の小説だよ。
マリはそう言ったんだ・・俺はそれで当てはめて、この絵を見たんだ。
この作者は・・真白なキャンバスを見て、この絵の行く末を見た。
だからメッセージを残した、一枚はこの絵・・ブロンドで緑の瞳。
もう一枚は白髪で、ブルーの瞳を描いた・・白髪なら分かる。
プラチナブロンドは光線の当たり方で、白髪に見える時がある。
○○はどちらの絵が手元に届くかが、分からなかったんだね。
だから2枚を描いた・・そしてその絵が行き着く先を希望した。
そこに自分の望みを描いた・・それが見えない絵筆なんだ。
この作者は・・メッセージを残した、その絵筆を持つ場所に辿り着くように。
ブルーとグリーンの瞳に、メッセージを残した・・道を？いでと言うメッセージを。
その才能までの道を繋いでと・・強く残したんだと思った。
この作者は・・１００年以上先の、大切な仲間に描いたんだよ。
これが私の絵だと、見せたかったんだね・・凄い人だったんだよ』
私は静寂を楽しんで、ニヤで言った。
「そこまで読む、あんたが怖い」と北斗がウルで言って。
「でも説得力が有った、空想物語」と久美子が笑顔で言った。
『まぁ、いずれにしても、この絵の価値を一番分かるのは・・沙紀だね』と私は笑顔で言った。

女性達が笑顔で頷いて、私はエミを抱き上げた。

ハルカが何度もＴＶルームに鍵が掛かったかチェックして、全員でＴＶルームを出た。
深夜の通りに、人が溢れていた。
私はサクラさんをタクシーに乗せ、手を振って見送った。
そしてユリさんとマリアの乗ったタクシーを見送って、全員で一番街に向けて歩いた。

「あ～・・今夜は寒いな～」と蘭が私に満開二ヤを出した。
私はダウンを脱ぎ蘭に着せて、アンナに笑顔を送り、可愛い寝顔の安奈を抱いた。

「すっごい・・軽くて、あったかい」と蘭が満開で笑った。
カスミがダウンのメーカータグを見ていた。
「ゲッ！・・○○○ですよ、日本では東京にしかありません・・良いな～」と笑顔で言った。
「有名なんだ・・登山家が着そうな服だけど、可愛いですよね～」とレンが言って。
「機能美ですよね・・シズカちゃんが言った」とハルカが微笑んだ。
「機能美？」とネネが聞いた。

「秀美ちゃんの義手の話を聞いた時、シズカちゃんが言ったんです。
デザインは考えないって・・それを考えたら、永遠に仕上がらないから。
機能を追及した先に、必ず美しい機能美が有ると信じてる。
そう言ったんですよ・・機能美が美しいって」

ハルカが笑顔で言った、全員が歩きながら笑顔で聞いていた。
「なるほどね～・・さすがシズカ、良い言葉だな～・・機能美」と

カスミが笑顔で言った。
「やっぱりね・・あんたが追求してるのも、機能美だもんね」とリリーが二ヤでカスミに言った。
「それは凄く分かりますね～・・絶対に機能美ですよね」とマキが笑顔で言って。
「そうだね～・・動く為の美だよね」とアンナが微笑んだ。
カスミは照れながら、本当に嬉しそうだった。

「機能を追及した先に、機能美があるか～・・それで機械に執着するんだね」と蘭が私に微笑んだ。

『うん・・間違いなくそうだよ、シズカは感じようとする。
豊兄さんがそう言った・・シズカはエンジニアの葛藤を感じる。
大量生産の為に諦めた理想の姿を、追い求める人間だと。
機械が好きなんじゃない、技術者の葛藤が知りたいんだって言ったよ。
今は目に見えて、触る事が出来るのは・・車が一番だよね。
だから車という機械にこだわる、シズカの夢は航空機なんだよ。
航空機には妥協は無いと思ってる、本当にそうなのか知りたいんだよね。
航空機はその時代の、最先端の技術を駆使して作られる。
そして安全の為に妥協はしない、大量生産でもないしね。
それが本当にベストな物なのかが知りたいんだよ、そして感じたいんだね。
蘭のケンメリのエンジンルーム、あの配管の取り回し。
機能と効率が優先されている、それでも妖しく美しい。
シズカは俺に言ったんだ、ユリさんの車を譲り受けたら。
自分に預けて欲しいと、ターボを装着してみたい・・そう言った。
いきなり城嶋スペシャルに、その冒険をする事は出来ない。
城嶋さんとは技術レベルが違いすぎて、そんな失礼な事は出来な

い。
だけど見てみたい・・城嶋さんが理想で描いた、強大なパワー。
それにはターボ化しかない、その実験台でZを出してくれって。
あまりに真剣に言うから、押されて・・思わず頷いたよ』
私は蘭にニヤを出して言った。
「ちょっと待ってよ・・ターボを装着出来るの？」と蘭が驚いて言った。
「L型エンジンに・・ターボが着けれるの！」とネネが驚いて言った。
『着けれるでしょう・・アメリカじゃ、Zにターボを着けてるよ』とニヤで返した。

「ターボってようするに、空気を送り込むんだよね・・燃焼を促す為に」とリリーが微笑んだ。
『そうだよ・・だから外側に装着できる、でもそれによりエンジンは壊れる』と笑顔で返した。
「発生する強大なパワーが、自分の体を壊すのか・・大切なヒントだな～」とカスミが笑顔で言った。
「負荷をかけすぎると、本体が壊れるのよ・・確かに大切なヒントだよ」とアンナが笑顔で言った。
私は安奈を抱いて、蘭とアンナとタクシーに乗って、女性達に笑顔で手を振った。

アパートに着いて、アンナに手を振ってタクシーを見送った。
蘭はご機嫌で、2人でビールを飲んで添い寝して眠った。
翌朝、私が朝食を作っていると、蘭が起きてきた。

『早いね、蘭』と笑顔で言った。
「今日は高校頃の友達と会うの、あなたはPGに行く？」と満開笑

顔で言った。
『うん・・高校の友達って・・男?』とウルで聞いた。
「残念・・女だよ・・女４人組、半年に一度会うの・・今年は忘年会出来ないから、ランチするのよ」と満開二ヤで言った。
『そうなんだ～・・ＰＧで待ってるよ』と笑顔で返した。
蘭は鼻歌交じりで、洗面所に消えた。

私は蘭と遅い朝食を食べて、１０時過ぎに出かけた。
蘭は美由紀の家に寄った、私は美由紀を迎えに行きケンメリに乗せた。

「小僧・・それで良い、その白いダウンで良い・・私のクリスマスプレゼント」と美由紀がウルで言った。
『これは駄目～・・リンダのプレゼントだもん』と二ヤで返した。
「え～・・良いな～・・宮崎じゃいないよ、白いダウンなんて」と美由紀がウルウルで言った。
『スキーでも始めるかな・・美由紀も連れて行くよ、ソリで遊びなさい』と二ヤ継続で返した。

「その時は作ってもらうもん、ユタカスペシャル・・スキー車椅子」と美由紀も二ヤで返してきた。
『２本足より、早そうだな』と笑顔で返した。
「当然だよ・・問題はどうやって止まるかだね」と美由紀は笑っていた。

『ところで、美由紀・・今日は何事なの?』と笑顔で聞いた。
「アイコ姉さんのお誘い、イメージ潜入の話をすれば・・ランチをご馳走になれます」と美由紀が笑顔で返してきた。
『アイコか～・・面白いかもね、今回は気合入れろよ』と二ヤで言った。

「もちろん・・リンダ姉さんに任されたんだ、絶対に辿り着くよ」と笑顔で言った、美由紀は迷いの無い笑顔だった。

ＰＧのビルの前で、美由紀と2人でケンメリを見送った。
ＴＶルームに行くと、ハルカとマキが年賀状を書いていた。

「良い時に来たね～・・はい、重要人物リスト・・宛名よろしく」とハルカが私に二ヤで言った。
『仕方ないな～・・ランチで良いよ』と二ヤで返して受け取った。

ハルカとマキは筆ペンで書いていて、私は硯を出して墨を磨っていた。
美由紀は○○の絵を見ていた、ずっとその絵に吸い込まれていた。

「絶対に本物だよ・・凄すぎるね、生きてるよね・・この子」と美由紀が私に微笑んだ。
『確かに・・体温まで感じるよね』と笑顔で返した。

「それで・・この子の瞳は何て言ってるの？」と美由紀が二ヤで聞いた。
『大丈夫、出来るよ・・そう言ってると思うよ』とニヤでさらっと返した。
強烈な波動が何度も来た、それで美由紀も二ヤを出した。

「今の、マジな台詞だったね」とマキが二ヤで言って。
「背筋に冷たい物が流れた」とハルカがウルで言った。
「応援なんだね・・同じ個性を持つ仲間に」と美由紀が絵を見て呟いた。
強烈な波動が同意を示していた、私も絵を見てそう思っていた。

私は宛名を書いていた、ハルカとマキは終わったらしく、美由紀を連れてフロアーに行った。
私はマジックミラーで、3人が楽しく掃除してるのを見ていた。
カズ君が来て、美由紀に茶化されてウルを出していた。

そしてアイコ達がやって来た、9人の女性が揃っていた。
私はその人数が嬉しくて、笑顔でフロアーを見ていた。
女性達がＴＶルームに入ってきて、絵を見て笑顔が溢れていた。

「ほほ～・・色んな特技を持ってるね」とアイコが私の書いた年賀状を見て言った。
『家出少年は、頑張らないとね』と笑顔で返した。

「轟さんに雇ってもらえば・・エースになら、今の倍出すって言うよ」とアイコが二ヤで言った。
「最近は加々見さんとも、絡んでるんですよ・・怖いですよね～」とハルカが二ヤで言った。
幻海の女性達が凍結して私を見た、私はニヤで応戦して美由紀を降ろした。

「何に成りたいんだ・・帝王じゃないのか？」とアイコが二ヤで言った。
『ドンになるの・・夜街のドンちゃん』と二ヤで返した。
「どうも冗談に聞こえない・・無視しよう、子供の戯言は」とアイコが言って、女性達が笑っていた。

「それでは、私が概要を話します・・イメージの世界は、美由紀に頼むね」とマキが言った。
「了解です」と美由紀が笑顔で返した、ハルカが飲み物を出して座った。

マキと美由紀の巧みな会話のリレーで、女性達は入り込んでいた。
カレンが笑顔で入ってきて、私の横に座った。

『カレン・・何買ったの？・・危ない下着だね』と二ヤで言った。
「ジーパンを買ったの・・来年早々から、自動車学校に行くのよ」
と美少女笑顔で返された。
『サーフボードが乗る車にしてね』とウルで頼んだ。
「サーフィン教えてくれるなら」とカレンが笑顔で返してきた。

『もちろん良いけど・・大変な気がする、教えたい男が増殖しそう』
と二ヤで返した。
「そうかな～・・私、目立たないよ」とカレンが美少女笑顔を出した。
『その笑顔で、よく言うよ』と二ヤで返した、カレンは嬉しそうに
微笑んでいた。

『カレン、昨日の対応・・お見事だったよ』と二ヤで言った。
「リョウ姉さんが、怒ったたよ・・忙しい時に試験出しやがってって」とカレンが二ヤで返してきた。
『マリーレイン用の、ヒントが欲しくてね』と笑顔で返した。
「そうなのか～・・キャバレーに近いんだね」と笑顔で返してきた。

『ねぇ、カレン・・キャバレーの難しさって、どんな感じ？』と興味津々で聞いた。

「私のいた店はソフトだったから、そう難しく無かったけど。
激しい店は大変なんだよ・・それが売りだからね。
お客の歯止めが利かない感じになる・・ネネ姉さんの方が良く分かると思うよ。

ピーチはそれが売りだからね・・怖い店だよ、そこでＮｏ１だったんだよ。
ネネ姉さんもリョウ姉さんも・・凄いよね～」
カレンは笑顔で言った、私も笑顔で頷いた。
カレンが郵便番号を書いてくれ、病院に行って来ると言って出て行った。
ランチは高級焼肉店のスペシャル定食で、ハルカが私の分を出してくれた。

「ねぇエース・・マリちゃんがいれば、誰でも入れるの？」と幻海の若い女性が言った。
『入るのは入れるだろうけど・・すぐに戻されるよ』と二ヤで返した。
「どんな準備が必要なの？」とアイコが微笑んだ。
『この短期間なら、寺に行って瞑想しかないね・・自分と向き合う』と笑顔で返した。
「勝也さんといらした、和尚様」とアイコが笑顔で言った。

『うん・・○○の近くの○○寺だよ、女性なら誰でも大歓迎だよ・・今頃は共同体の女性もかなり行ってるよ』と笑顔で返した。
「そうなんだね・・明日でも行ってみよう、和尚様面白かったし」とアイコが女性達に微笑んだ、女性達も笑顔で頷いた。
「潜入どうこうは別にしても・・凄く意味深いですよ、瞑想」とハルカが笑顔で言った。
「そうだろうね・・すごく興味がある～」と幻海の女性達が返していた。

その時、ＴＶルームのドアが開き、マリが笑顔で入ってきた。
驚く女性達に頭を下げて挨拶して絵を見ていた、嬉しそうな横顔だ

った。
そして注目する女性達の真ん中の、美由紀の横に二ヤで座った。
「何でしょう？・・マリちゃん」と美由紀がウルで言った。
「美由紀・・修行」とマリが言葉で言った。
美由紀は嬉しそうにマリを見ていた、名前を呼ばれて嬉しいんだと感じていた。
強い波動が興味津々で吹いてきて、女性達も興味津々で見ていた。
マリはトランプを出して、伏せたまま円を描いた。
そして私に同調してきて言った。

「小僧・・アイコさんに、何かカードをイメージしてもらって」とマリが同調で言った。
『アイコ・・マリが何かカードをイメージしてだって』と笑顔で言った。
「えっ！・・分かった、待ってね」と言ってアイコが瞳を閉じて、頷いた。

マリは考える様子も無く、一枚のカードを選んだ。
そしてそれをアイコに差し出した、アイコはかなり緊張して開いた。
「すっご～い！・・マジックみたい」とアイコは驚いてマリを見て言った、マリは二ヤを出していた。

「次・・ハルカちゃんがイメージ」とマリが言ってきた。
『ハルカだって・・イメージの指名』と二ヤで言った。
「了解・・待ってね」とハルカも言って瞳を閉じた。

マリはそれを見て、ハルカと美由紀の手を握って瞳を閉じた、美由紀も瞳を閉じた。

「美由紀に、ハルカちゃんをイメージ」とマリが言った。
『美由紀・・ハルカをイメージしろ』と美由紀に言った。
美由紀は動かずに目を閉じていた、静かな空間が出来ていた。

「ハートの7」と美由紀が言った。
「正解だよ・・怖い」とハルカがウルで言った、女性達が沈黙していた。

マリはマキの両手を握った瞳を閉じた、マキも瞳を閉じた。
「マキちゃんに、ユリカさんをイメージ」とマリが言った。
『マキ・・ユリカをイメージして』と言った。
強烈な波動がワクワクで何度も来た、マキは静かに目を閉じていた。

「ユリカさんに、波動で何か言ってと言って」とマリが言った。
『ユリカ・・マキに波動で何か言ってみて』と私が言った。
ハルカも美由紀も女性達も、沈黙して見ていた。

強烈な波動が吹いてきた、でも私には言葉は分からなかった。
「今のがそうなの？・・こんなに強いの・・水商売の水のユリカって言ったよ」とマキがウルで言った。
強烈な驚きの波動が来た、そして爆笑の波動が来た。
『正解っだったね』と私は二ヤで言った。

マリはそれで、ハルカとマキと美由紀の手を繋がせた。
そして自分の肩を、ハルカとマキに掴ませて円で繋げた。

マリが目を閉じていた、そしてユリカの弱い波動が来た。
「えっ！・・分かるよ」とハルカが言って。
「集中しましょう・・この弱さで感じろって事ね」とマキが言って、
3人が瞳を閉じたまま頷いた。

「小僧・・この9人の人に手を繋いで貰って」とマリが同調で言ってきた。
『アイコ・・全員で手を繋いで、円を作って』と笑顔で言った。
「うっそ・・ちょっと待ってね」とアイコが笑顔で言って、女性達が楽しそうな笑顔で広がった。

アイコがマリの右手、もう一人の若い女性が左手を握って円が出来た。
全員が瞳を閉じていた、マリは集中した良い表情だった。

「小僧・・5人娘としたゲームをする」とマリが同調で言った。
『順番にカードを引くゲーム、出てるカードよりも大きな数字を出すんだよ』と笑顔で言った。
女性達が瞳を開けて、全員真顔で頷いた。

マリが最初に引いた、それはダイヤのエースだった、マリはアイコを見た。
アイコは頷いて、迷い無くカードを引いた、それはハートの2だった。

「そうなんだね・・自分を信じれば良いんだよ」とアイコが嬉しそうに言った。
かなり時間がかかる女性もいたが、全員が順番に開いて。
全てのカードを開ききった、女性達が喜びの笑顔で拍手をしていた。
マリも笑顔で拍手をしていた、嬉しそうな笑顔だった。

『それが同調だよ、マリは期待してるんだよ・・相手が全く情報を持たない、新しい女性達に』と私は笑顔で言った。
「凄く気持ち良かったよ・・ありがとう、マリちゃん・・必ず入っ

てみるね」とアイコが笑顔で言った。
マリも笑顔で強く頷いた、ハルカ達3人も瞳を開けた。

「了解だよ・・マリちゃん、やってみるね」とハルカが嬉しそうに言った。
「よ～し・・頑張るぞ～」とマキも笑顔で言った。
美由紀はマリを見ていた、マリも美由紀を二ヤで見ていた。

「それでも足りないんだね、マリちゃん・・そう思ってるでしょ？」と美由紀はマリに真顔で言った。
『マリ・・あとは誰だよ？・・誰に伝えるの？』と私は笑顔で聞いた。
マリは二ヤで入口を見た、ユリカが爽やか笑顔で入って来た。
幻海の女性達が慌てて挨拶をした、ユリカは爽やか笑顔で挨拶をして、緊張を解いていた。

「もう・・早く言ってくれれば、来てたのに～」とユリカがマリに笑顔で言った。
マリは笑顔でユリカの手を握った、そして同調してきた。

「同調の方が上手く話せるから、ユリカさん・・今夜泊めて下さい。
私と蘭さんシオンさんともう一人・・その人がここに来れば、お願いします。
その人が自分でそれを選択出来れば、今回の切り札になる可能性があります」

マリが同調で言った、私はユリカに伝えようとした。
「凄いね～・・綺麗な言葉で話すんだね・・もちろんＯＫよ」とユリカが同調で言った。

私は驚いて少し凍結していた、女性達は興味津々だった。
『マリは・・もう一人、その人が今からここに現れれば・・切り札になる可能性があるんだって』と私は言葉に出して、全員に伝えた。
その時ＴＶルームのドアがゆっくりと開いた、全員がドアを見た。
「何！・・何？・・何でしょう」とリリーがウルで言った。
「やっぱり、リリーだね・・新たなる挑戦者」とアイコが笑顔で言って、全員が笑顔でリリーを見た。
リリーは不思議そうに挨拶をして、アイコの隣に座ろうとした。
その時リリーの手をマリが掴んだ、リリーは嬉しそうな笑顔でマリを見た。
マリも嬉しそうな笑顔を出した、リリーはマリの正面に座った。
マリはリリーの両手を握って瞳を閉じた、リリーも瞳を閉じた。
その時だった、カタカタと音がしたのだ。
全員が音の方を見た、〇〇の少女の絵が小刻みに震えていた。
全員が凍結して動けなかった、ユリカでさえ動けないようだった。
「小僧・・力を制御したい、リンダの映像を出せ。
リンダに出会った場面を出して・・早く」
マリが同調で言った、ユリカが私を見た。
私は目を閉じて、リンダに出会った場面を想った。
あの路地が現れて、リンダの姿が鮮明になり始めた、私はリンダを見ていた。
「ここで会ったのか～」と後ろから声がした。

私は驚いて振り向いた、マリとリリーが立っていた。
『リリー・・凄いね、全然驚かないんだね』と笑顔で言った。
「少し驚いたけど・・マリちゃんに教えて貰ったから」とリリーが笑顔で言った、瞳のリングが綺麗に出ていた。

「小僧、今夜訓練しよう・・私にも分からない、新しい感覚の制御が。
だから・・小僧の映像で入りたい、小僧の方が体力があるから。
私は小僧の映像に女性達を導く・・それがベストだと思う」

マリが真顔で言った、リリーは嬉しそうな笑顔だった。
「そうしよう・・蘭とシオンも泊めて、私の家で」とユリカが、ユリカの店のビルから出てきて言った。
「ありがとうございます、ユリカ姉さん」とリリーが笑顔で言った。
「しかしリリー、あんたは凄いよ」とユリカが笑顔で言った、リリーは嬉しそうな笑顔で返した。

「よし・・小僧、映像切ってみて」とマリが言った。
『じゃあ切るよ』と3人に言った、3人が頷くのを見て映像を切った。

「小僧・・戻ったのか！」と美由紀が叫んだ。
『うん・・どうした？』と目を開けて、笑顔で返した。
「どうしたも何も・・オカルト映画みたいだった、色々動いて怖かった」とハルカがウルウルで言って。
「こんなに楽しい事が、この世の中にあるなんて・・嬉しい～」とアイコが笑顔で言って。
「この位で驚いたらいけないんだ・・マリの二ヤがそう言ってる」とマキがウルで言った。
全員がマリを見た、マリはニヤニヤで絵を見ていた。

「最高の時が来る・・漠然と確信した」とリリーも絵を見ながら言った。

『マリと特訓しないと・・現実を壊すな』と私は二ヤで言った。

女性達の視線がマリを見ていた、マリは強い意志を黒目で表現していた。

ゴングが鳴ろうとしていた、その場所は罠を張って待っていた。

マリは挑戦を止めない、それが産まれた意味だと信じている。

マリがリンダに出会って感じた、その驚異の世界が・・今幕を上げた・・。

【マリ?】

脱ぎ捨てて現れる、真実の姿。
後悔も挫折も絶望も纏う、真実の自分。
それを見たいと要求する、それこそが強さなのではないだろうか。

女性達がマリを中心に、ワイワイと盛り上がっていた。
ユリカがシオンに電話して、シオンを誘ってＯＫを取ったらしく、
爽やか二ヤを私に出した。
私も笑顔で返して、ＴＶルームの奥で世界の遺産を読んでいた。

「小僧・・どう思ってるんだ、カタカタ動くの？」と私の側に来て、
美由紀が言った。

『マリは受け入れたんだと思うよ、多分・・リンダとの出会いで。
美由紀、思い出してみろよ・・あの病院の水槽を。
美由紀に提示した、ヒトミの段階の時のマリの言葉を。
忘れてただろ・・さっきあの絵が震えた時に、俺は思い出したよ』

私は美由紀に二ヤで言った、美由紀はハッとして思い出したようだ
った。

「そこ・・２人で楽しい話をしないの・・美由紀、何を思い出した
の？」とユリカが爽やか二ヤで言った。
「マリちゃんの１０歳の時の言葉です・・強過ぎて使えない」と美
由紀がマリに二ヤで言った。
「強過ぎて使えない？・・詳細を述べよ」とマキが二ヤで言った。

「マリちゃんが退院して、私が次に会ったのが・・ヒトミの段階の

時です。
小僧が倒れて、恭子先輩が入ってる時・・マリちゃんが病室を覗いた。
そして遊戯室で、律子母さんと私に言ったんです、強過ぎて使えないって。
もちろん律子母さんが、マリちゃんの言葉を教えてくれたんですけど。
その時、律子母さんがマリちゃんに言ったんです・・絶対に持ってろって。
今は制御が出来ないかも知れないけど、自分のレベルが上がれば出来る。
そして仲間が現れれば出来るから・・そう母さんが言ったんです。
マリちゃんは、その時見せてくれたんです、強すぎる力の片鱗を。
マリちゃんは瞳を閉じて、集中した感じでした・・するとカタカタと音がした。
その音の方向を見ると、遊戯室の窓辺に置いてあった、水槽が小刻みに揺れていた。
そして水槽の真ん中に、渦が出来ていたんです・・回転運動で出来るような。
母さんはそれを見て・・ありがとう、マリ・・時は止まらない、螺旋の系譜だね。
そう言ったんです・・私は子供で、ただ驚いてその水槽を見てました。
マリちゃんは、その母さんの言葉で瞳を開けて・・そのまま帰って行きました。
そして母さんが、塔の螺旋を登って、ヒトミを連れ戻した。
私は混乱してて・・何も分からなくて、小僧が目を覚ました時に話したんです。
そしたら、小僧が教えてくれたんです・・螺旋が有ったって。
そして律子母さんが言った・・どうして螺旋を走ったんだと。

あの螺旋にこそ意味が有っただろうって・・そう言ったんです。
私は最近の2回の潜入の力が・・女性達を導いたあの力が。
マリちゃんの言った、強過ぎる力だと思ってました。
でも違うみたいですね～・・まだ有るんだね？・・小僧」

美由紀が二ヤで私に言った、女性達が私を見た。
私はマリを見ていた、マリは二ヤで頷いた。

『もちろん俺はマリ本人から、聞いた話じゃないよ。
あの2回の潜入のマリを見てて、感じたんだよ。
マリは制御出来るようになったんだと、俺も美由紀と同じ考えだった。
マリが強過ぎると言った力を、制御出来るようになって・・導けるようになった。
でも・・その間違いにも、前回気付いたんだ・・由美子が教えてくれた。
マリがどうやって由美子を連れて来たのか、俺はそれが分からなかった。
遠隔の同調は出来ないはずなんだ、マリは由美子に会ってないからね。
沙紀の絵のような、強いメッセージなんて・・由美子にはあり得ない。
それでずっと考えてた・・そして分かったんだよ。
さて・・ユリカ、ハルカ、マキ、美由紀に問題です。
マリはどうやって、由美子を連れ出せたのでしょう？』

私は二ヤで4人に言った、その時慌てて蘭とシオンが入ってきた。
「ちょっと待ってね・・私達も参加するから」と蘭が必死の形相で言った。
全員に挨拶していたが、頭の中は考えてるようだった。

「怖いですよね～・・その負けず嫌い」と美由紀が蘭に二ヤで言った。
「蘭の苦手な問題よ・・ネイビーブルーに近いよ」とユリカが爽やか二ヤで言った。
「大丈夫です・・なんとなく感じてたんです」と蘭が満開二ヤで返した。

「エース・・４人が考えてる間に、ネイビーブルーの話を教えて？」とアイコが微笑んだ。
『夏休みに・・俺はＴシャツを買って・・・・・』私の話で、女性達が爆笑していた。
シオンもマキもマリも笑って、私はそのマリの顔を見ていた。
実は私自身も、その考えに確固たる自信は無かったのだ。

「同調もしてないですよね・・あの前は、由美子の段階の時だったんだから」と美由紀が言った。
「してないよ・・由美子はずっと寝てたでしょ」と蘭が返した。
「あの時の同調は、ヒトミが繋いでたんだから・・由美子は関係ないよ」とユリカが言った。

「沙紀は同調したヒトミで、その世界を感じて・・由美子の居場所を導き出した。
でも変ですよね・・私はそこが変だと感じてました、だから意味が有るんだと。
由美子の居場所を・・どうしてマリは教えなかったのか。
絶対にマリは知ってた・・あの時の姿無き男は、設定してたから。
最後のゲームまで設定してた・・ならば、マリは由美子の居場所は知っていた。
マリの想定の中での予想外は、蘭姉さんとリンダさんの侵入。

それとマジシャンの婆さんの結界による、律子母さんの侵入ですよね。
律子母さんが入ることは、絶対に想定外です・・シズカに聞きましたから。
あの時・・マリはマリアを抱いて準備しました、ならば想定外だった。
結界だったから・・マリでも読めなかった、それを表現した言葉が。
私でも分からない事が、沢山あると感じたと言った、マリの感想です。
マリはそれを踏まえて、沙紀の世界の準備をした。
でも・・確かに、マリは由美子に会っていない。
沙紀の絵のような、強い同調できるアイテムも無い・・ならば・・なぜ？」

マキは自分に言い聞かせるように、自分の頭の中の整理を言葉にした。

「小僧は知ってたよ、由美子が入る事を・・沙紀の絵で。
だから奴は、絶対にその方法を考えたはず・・奴は好奇心に逆らえない。
導き出したんだよ・・マリの由美子を連れ出す作戦を。
そして今分かった・・奴はあのカプセルの中で、間違いに気付いた。
そうならば・・奴は沙紀と由美子が、同調すると思っていた。
でも、それなら・・沙紀がカプセルに入った瞬間に、由美子の同調は切れる。
そうじゃなかったんだよね・・それで感じたんだよね」

蘭は私を見て、満開二ヤで言った。

「私・・今、マリちゃんの同調に入って思ったんですけど。
マリちゃんの同調って、入る感じじゃないですよね。
上手く表現出来ないけど・・扉を開ける感じじゃないです。
すり抜ける感じです、透明人間になったような。
自分の世界があるとしたら、その世界からスーと抜ける感じ。
どんな障害物も、すり抜けて行けるような感じでした。
マリちゃんの存在だけが分かるんです、だからその方向に向かうだけ。
何も気にせず・・真っ直ぐに入れる感じだったですよ」

リリーが笑顔で感想を言った、私は驚いて聞いていた、それを表現できる事に。
女性達も驚いてリリーを見た、ユリカだけ爽やか二ヤを出していた。

「リリー！・・同調出来たの？」と蘭がウルで言った、リリーは自慢二ヤで返した。
そしてハルカとマキと美由紀も、二ヤで手を上げた。
アイコと幻海の女性達も、ニヤで全員が手を上げた、蘭とシオンはウルウルを出していた。

「蘭・・マリは出し惜しみしてるのよ。
蘭とシオンとの同調は、大切な事なんだろうね。
今夜、私の家に泊まってね・・特訓するよ。
蘭とリリーとシオンでね・・マリの次の世界の同調を」

ユリカが爽やか笑顔で言った、蘭の喜びの満開が咲いて、シオンが最強ニコちゃんを出した。

「沙紀でもないし、小僧でもない・・カプセルが結界なら」と美由

紀が呟いた。
「扉を開ける感じじゃない・・すり抜ける感じ・・確かにそうだった」とハルカが言って。
「自分の世界って、もちろん普段は意識してないですよね・・でもそれが現れる」とマキが言った。

「でも・・例えば、誘うって言っても・・由美子はマリの存在すら知らないよね」と蘭が考えながら言って。
「誘えないでしょうね・・出会ってない限り、無理な気がするね」とユリカも真剣に言った。
「でも、沙紀と小僧以外・・マリちゃんとの、遠隔同調は出来ませんよね」と美由紀が返した。
「あと2人います～、ヒトミちゃんとユリアちゃんですね・・遠隔できるのは」とシオンがニコちゃんで言った。

「ユリアはエースの側にいた！・・それは分かってる」とユリカが言って。
「まさか！・・ヒトミが繋いでたの、由美子とマリを」と蘭が私に言った。

『そうだと思うよ・・ヒトミにしか出来ない、そんな強い想いで繋ぐのは。
由美子の同調できる力って、ほんの微かな力だと思うんだ。
だから繋ぐ方に、余程の強い想いがないと無理だと思った。
多分・・マリは相談されていた、ヒトミの強い願いを聞いたんだろう。
ヒトミが繋ぐと言ったんだろう、自分は存在しなくて良いと。
そしてその事を、マリに口止めしたんだろう・・マリはその約束を守った。
ヒトミにしか理解できない、由美子の本当の気持ちは・・同じ病

の人間にしか。
由美子の心と、完璧に同調出来るのは・・ヒトミしかいない。
母親に抱かれたかった・・それだけが望みだった。
ヒトミにしか出来ないと思ったんだよ・・そうだよね、マリ』
私は真顔でマリに言った、マリは少し俯いて泣きながら頷いた。
「どうして・・どうしてそんなに強いの・・マリちゃんもヒトミも」と美由紀が叫んで、マリに抱きついた。
全員が俯くマリを見て泣いていた、私はそれを見ながら考えていた。
それを持ってしてでも、今回は厳しいとマリが言ってる事を。
「エース・・大切な事だよ、もう少し詳細を教えて・・エースが感じてる事を」とリリーが潤むヒトミで言った。
私はリリーを見ていた、その高速回転する瞳のリングを。
『俺はマリに聞いたんだ・・由美子の段階が終わった時に。
マリはどんな死者とも、同調出来るのかと・・思い切って聞いたんだ。
マリはこう言った・・それは出来ないと、余程の強い想いでないと無理だと。
祈祷師とか霊媒師とか存在するけど、９９％以上は詐欺師だと言ったんだ。
でも・・それならば、１％以下の確立でも・・それは存在すると思った。
マリは最後に教えてくれた・・私はヒトミもユリアも、死者と思った事は無いと。
厳密に言うならば・・同調する時に、相手が生存してるかどうかは分からない。
同調とは・・世界を変えることだから、生きている事が重要じゃ

ないと。
現世界の生死は関係ない、想いの強さが重要だと言った。
俺はそれを聞いてたから、沙紀の世界でのマリを見て感動したよ。
マリはずっとヒトミを抱えていた、ヒトミは多分・・同調の中で話す事も出来なかった。
全ての想いを、由美子の同調に当ててたはず、そうしないと出来ないと感じた。
最初から最後まで・・由美子を存在させた、ヒトミはその強い想いで繋ぎきった。
そして由美子も沙紀もそれを感じていた、ヒトミの愛情を感じてたんだ。
だからこそ分かったんだ・・嬉しいで流す涙の存在を。
あれは・・ヒトミが2人に伝えたんだね、感謝する時の涙を。
愛情を感じて、溢れ出す涙の存在を・・ヒトミが伝えたんだよ』

私はリリーを見て、マリを見て言った。
リリーは潤む瞳で床を睨んでいた、私はリリーの泣かない部分が好きだった。
無理に我慢してるのでないと思えたから、リリーの瞳は心と直結してる。
だからこそ簡単に泣かないと思っていた、その瞳が潤んでいたのだ。

「沙紀の世界の時・・マリは強く表現した、沙紀と由美子に見せるために。
勇気の本質を見せる為に・・そして友情を見せる為だったんだね。
ヒトミを背負って、自分に従う行為が・・沙紀と由美子に響かない訳が無い。
マリは教えたんだね・・強さとは信じる事だって、強く2人に伝えた。
あの炎の中に走り去るマリ・・その背中は、全く揺れなかった。

銀河の3人が揺れなかったように、互いを信じる時に・・不信感など存在しない。
銀河が3人で見せた事を、マリも見せた・・ヒトミを背負って戦う事で。
マリだって・・ほんの数年前まで、臆病と言われる存在だったのに。
何がそこまで連れて行ったの・・シズカの教えだけじゃないよね。
何がマリの心を、そこまで強靭にしたの？・・マリ、教えて」
ユリカはマリを見て、深海の瞳で言った。

「美由紀の・・全裸の愛」とマリは強く言葉にして、美由紀を見ながら微笑んだ。
美由紀はマリに抱かれながら、顔を上げてマリを見た、嬉しそうな笑顔だった。

「やはりそれだったね・・今回の切り札は、そこに有るんですよね？」と蘭がユリカに微笑んだ。
「それを伝える為だったんだ・・マリちゃんの行動は」とシオンがニコちゃんで言った。
「だから行かせるんだね、エミを・・あの子なら、7歳で気付くと信じてるんだね」とユリカが私を見た。

『美由紀の全裸の愛・・その感想は、十人十色だと思う。
それで良いんだよ・・それこそが、今回のテーマに近いんだよね。
自分の心の答えを探す、それを要求される・・女としての生き方だろうね。
奴は本気で知りたくなった、俺はそう思ってるよ。
奴も素直じゃないから、緊迫の場面でしか・・相手を信じる事が出来ない。

今回は誰も残れないかも・・そう想定してる、マリも俺も・・多分、ヒトミも。
それでも俺は感じたい・・7歳のエミの出す答えを、感じてみたいんだ』
私は笑顔で言った、正直な気持ちだった。

「マキ・・美由紀の、全裸の愛の話をして」とリリーが言って、アイコがマキを見て微笑んだ。
「今年の正月でした・・・・」マキが逃避行の話をした。

「凄過ぎるよ、美由紀・・本当に素敵な話だよ」とリリーが笑顔で言って。
「絶対に出来ない・・私には、そんな自信は無いよ」とアイコが微笑んで。
「嫉妬さえ感じた・・その強い心に」と幻海の若い女性が微笑んだ。
美由紀は照れた笑顔で返していた、マリはそれを見て嬉しそうだった。

その時、カレンが笑顔で帰ってきた、紙のケースを持っていた。

「全員お揃いですね・・間に合いましたね、沙紀のメッセージ」とカレンが微笑んだ。
全員がカレンを見た、美少女笑顔を振り撒いて、ユリカにケースを渡した。

ユリカはケースを開き、絵をテーブルに出した。
完全なる静寂が、全員の凍結を示していた。
その水彩画は海の絵だった、大海原にイルカの大群が朝陽を目指し

ていた。
上り来る太陽がオレンジ色に輝いて、光のグラデーションを描き。
無限を感じさせるほどの、水平線が緩やかに湾曲して。
その深さを表現した青の濃淡が、自由を感じさせ。
イルカの大群の躍動感が、生命力に溢れていた。

「素敵だな～」とアイコが言った。
「そうですよね～・・そして初めて、沙紀が題名を付けましたよ」
とカレンが笑顔で言った。
「絵に題名を付けたの！・・そうよね、誰かに向けたのよね」とユリカがカレンに言った。

「そうみたいです・・沙紀が可愛い文字で、書いてくれましたよ」
とカレンが笑顔で言った。
そしてテーブルの上にメモ用紙を出した、それを見て女性達が笑顔になった。
そこには【げんかい】と書かれていた、私もそれを見て嬉しかった。

『それでイルカが9頭で・・ジンベイが1頭か、ジンベイなんだねリリー』と二ヤで言った。
「どこにいるの？・・ジンベイちゃん」と蘭が驚いて言って、リリーが私を見た。

「このイルカ達が目指す海の道・・ジンベイの残像なんだね」と美由紀が言った。
全員がそれを見た、私は美由紀に二ヤで頷いた。

「あの時、屋上で出会った・・せれにこそ意味が有るか～・・食えない男だよ」とリリーが二ヤで言った。
「面白くなってきましたね～・・シオンも気付きました、深海の魚

は光射す場所を目指さない」とニコちゃんで言って。
「自らの輝きに包まれているか～・・楽しんでますね～、マリちゃんと小僧」と美由紀が二ヤで言って。

「よし・・答え合わせは、今は出来ないよ・・それぞれ気持ちを確かめよう」と蘭が満開で微笑んだ。
「そうですね・・私達は明日から瞑想しないと・・エース、この絵は？」とアイコが私に微笑んだ。
『皆に見せたら・・持って行くよ、幻海の控え室に飾ってよ』と笑顔で返した。
幻海の女性達に笑顔が咲いて、全員で帰る準備をした。

ハルカがＴＶルームの鍵とＰＧの戸締りを、入念にチェックして、全員で通りに出た。
幻海の女性達に手を振って別れて、ハルカを後ろに乗せた、マキのバイクを見送った。

「エース・・食材揃えるから、夕食にカレーをよろしく」とユリカが爽やか二ヤで言った。
『了解』と笑顔で返した。
「カレンも来るでしょ？」とユリカがカレンに微笑んだ。
「えっ！・・良いんですか？」とカレンが嬉しそうな笑顔で返した。
「もちろん良いよ・・シオンの車で来てね」とユリカがカレンに笑顔で返して、美由紀を二ヤで見た。

美由紀はウルウルを出して、ユリカを見ていた。
「ウルしないの・・自分でご両親の許可を取りなさい、美由紀を駄目だなんて言わないよ」とユリカが爽やか二ヤで言った。
「は～い・・嬉しいです～」と美由紀が笑顔で返した。

私は美由紀をケンメリに乗せて、マリとリリーを乗せたユリカを見送った。
シオンがカレンの部屋に寄ってから行くと言って、手を振って別れた。
私はケンメリの後部座席に乗って、ご機嫌蘭と美由紀の漫才を聞いていた。

美由紀の家に着き、美由紀を抱き上げて、蘭と玄関に入った。
美由紀のオヤジが笑顔で出てきた、美由紀は降りもせずにウルで説明した。

「あまり迷惑かけるなよ・・蘭ちゃんよろしくね。
月曜・・明日が事務所の忘年会だから・・9時に7人の予約良いかな？
突然で悪いけど・・急に決まってね」

オヤジが笑顔で言った、美由紀は最高の笑顔で返していた。
「もちろんＯＫです、お待ちしてますね・・お父様の指名が誰なのか、楽しみです」と満開二ヤで蘭が言った。
「もちろん蘭ちゃんだよ・・小僧には言えないけど」とオヤジが二ヤで返した。
『ユリに言いつけてやる・・今夜、電話しとく』とウルで返した。

「小僧、大丈夫だよ・・オトンのタイプはリョウ姉さんだよ、絶対に」と美由紀が二ヤで言った。
『なるほど～・・危ない人だ～』と私もオヤジに二ヤを出した。

「小僧、今度会わせろよ・・リョウちゃんに」とオヤジが笑顔で言った。
「小僧ちゃん・・この家で、誰が一番の権力者か分かってるよね～・

・出会いの必要無いから」と後ろから節子が二ヤで行った。

『重々承知してます・・夜街での行動は、全てチェックして報告します』と私は節子に二ヤで言った。

「よろしくね・・蘭さん、美由紀をお願いします」と節子が微笑んだ。

「はい・・お預かりします」と蘭が満開で返した。

ウルウル顔のオヤジを残して、美由紀の家を出た、節子が笑顔で見送ってくれた。

ユリカの家に向かいながら、突然美由紀が振り向いた。

「どうしても不思議なんだよね～・・沙織が言ったんだけど、私も分からない。

沙織は小僧と双子だから、感覚的に分かるんだよね～・・違和感みたいなの。

小僧・・なぜお前はヒトミと同調しない、小僧もヒトミもそれを望んでるだろ。

マリちゃんに頼めば良い事だろ・・それなら頼めるだろ。

もしかして出来ないのか？・・それとも何か障害が有るのかな？

マリちゃんでも、小僧とヒトミは繋げないのか？・・後で理由を述べよ。

全員の前でね・・どうしてもそれが不思議なんだよね～」

美由紀が二ヤで言った、強烈な波動が何度も来た。

「確かにそうだよね～・・もしかして、ヒトミが拒絶してるとか」

と蘭が美由紀に二ヤで言った。

「その可能性は大ですね～・・いやらしいから、小僧は」と美由紀も二ヤで返していた。

爆笑する2人の後ろを、ウルを出して歩いて、ユリカの部屋に入った。

私は車椅子のタイヤを拭いて、そのままキッチンに立たされた。
ユリカのマンションは、その当時では珍しい対面式で、女性達の話は聞こえていた。
シオンがカレンと来て、2人がキッチンに入り手伝ってくれた。

シオンとカレンの、見事な包丁捌き見ていた。
『シオンは知ってたけど・・さすがカレン、家事経験が長いね～』
と笑顔で言った。
「うん・・ずっとしてきたからね、好きなのよ・・料理は」とカレンが微笑んだ。

女性達は交代で風呂に入っていた、リリーはユリカのパジャマを着て。
蘭は置いてある、お泊り用パジャマを着ていた。
マリは最初から計画してたようで、自分の可愛いパジャマを着ていた。
私は煮込むだけになったので、シオンとカレンに風呂に入るように言った。

シオンもカレンもお風呂に入り、自分の可愛いパジャマを着ていた。
私は美由紀を抱いて脱衣所に連れて行き、キッチンに戻り、煮込み具合を見ていた。
カレー粉を投入して、味見してニヤで火を止めた。

美由紀が呼んだので迎えに行き、ソファーまで連れて行って。
私は置いている着替えを持って、風呂に入った。

風呂から上がると、食事の用意が出来ていた、カレーの良い香りが漂っていた。
私が座ると、全員が笑顔で私を見た。
「でわ・・いただきます」とユリカが笑顔で言って。
「いただきます」と女性が全員で言って、食べ始めた。

マリが一口食べて、私の頭をヨチヨチしてくれた、私は笑顔で返していた。
「美味しいよ～・・欲しくなった」とリリーが二ヤで言った。
「確かに、リリーは危ない感じだね・・カスミとは何かが違うね～」とユリカが蘭に二ヤで言った。
「そうなんですよ～・・何でしょう？」と蘭が満開ウルで返した。

「簡単です～」とシオンがニコちゃんで言った、全員がシオンを見た。

「えっ！・・同じだからでしょ・・一番深い部分が同じだから、蘭姉さんとリリー姉さん」とシオンが恐々言った。
「そっか！・・それなら分かる～」とカレンが微笑んだ、マリがカレンの笑顔を見ていた。
「嬉しい～・・それは嬉しい答えです」とリリーが嬉しそうな笑顔で言った。
女性達が笑顔でリリーを見ていた、マリはカレンをじっと見ていた。

「マリちゃん・・何？・・何でしょう？」とカレンがウルで聞いた。
「卒業、おめでとうございます」とマリがゆっくりと言った、カレンはマリを見て笑顔になった。

「ありがとう、マリちゃん・・エース、卒業したよ・・作り笑い」とカレンが嬉しそうに言った。

『そうみたいだね・・マリの言葉なら、間違いないよ』と笑顔で返した。

しかしマリのこの言葉には、それ以上の深い意味が有った。
沙紀はこの時、描き始めたのだろう、あの名作【父の卒業証書】を。

マリのこの時の言葉は、本当に温かかった。
マリのこれだけ長い言葉を、私は初めて聞いていた、女性達も嬉しそうだった。

沙紀は１２月２２日、これから2日後に退院する。

そしてカレンに卒業の絵が送られて来たのは、２４日のイヴだった。
多分、退院前に沙紀は仕上げていたのだろう、マリはこの時にはその絵を感じていた。

沙紀は絶対にカレンが号泣すると分かっていた、だから郵送にした。
そしてクリスマスプレゼントとして贈った、大切な友人のカレンに感謝を込めて。

これから始まる、マリの特訓・・それは別世界だった。

そして私は感じる・・なぜマリがこれ程に執着するのかを。

マリは挑戦状を握り締めていた・・自分の能力に対する、挑戦状を。

ずっと守っていた、心のベールを・・マリは脱ぎ捨てる・・自分らしく生きる為に・・。

【冬物語？】

南国の冬は寒さを増していた、迫り来るイベントの期待に胸を弾ませる様に。
目標を見据えた女性達は、楽しもうと心に誓っているようだった。

女性達が笑顔でカレーを食べていて、私はその笑顔が嬉しかった。
「ねぇ、エース・・私も不思議なのよ、相手が情報が乏しい女性に期待するの？」とリリーが微笑んだ。

『そうなるだろうね・・俺は今回だけは想定しない。
そう言ってるけど、ここに居る5人は信じてないよ。
俺はマリと計画を練った、初めての事なんだよ・・マリがそれを望んだのは。
マリはその力を、唯一悪質なシナリオを相手にする時だけ使う。
生命に対してだけ使うと決めている、そこが今回のポイントなんだよね。
俺もマリも計画は練ったけど、お互いの作戦は話さない。
今までもそうだけど・・俺はマリと内容を深く掘り下げたりしない。
俺はマリの力に挑戦してる、ユリカの力とゲームをするように。
マリもそうなんだよ、マリは自分の力に挑戦してると思う。
力を超える感性を得ようとしてる感じなんだ、マリは支配される事を拒絶する。
だから出来るんだと思う・・ここまで来れたんだと思うんだよ。
マリも女性としての絶望の言葉を聞いている、それを自分で克服してる。
だからこそ今回の難しさも分かってる、俺には分からないけどね。
特訓なんて言葉がマリから出るなら、今回は相当に難しい。

その難しさを感じて欲しいんだ・・俺は少しだけ分かってるんだよ。
由美子の段階の時とも、沙紀の恐怖の世界とも違う・・今回の恐怖。
それを克服するのは難しい・・その状況的な部分だけ、特訓したいんだ。
今までに入ってない人なら、その恐怖を感じてるから大丈夫なんだよ。
でもリリーは違う、リリーは話を聞き過ぎてるし・・自分の中でイメージしてる。
そこがリリーの凄さなんだけど・・だからこそ難しくなったんだ。
だから、今回の主要メンバー・・ユリカと蘭とリリーとシオンを特訓する。
カレンと美由紀は、大丈夫なんだよ・・今から分かるけどね。
今夜成功すれば・・明日から他のメンバーも入らせる、４人がクリアーすればね。
明日が終業式だから、明後日からは俺は冬休みだから・・徹底的にやるよ。
状況に対する特訓だけを・・それが出来なければ、絶対に成功は無いからね』

私はリリーの瞳のリングを見ながら、二ヤで言った。

「それなら、マキの言った・・あの意味を教えて？」と蘭が満開で微笑んだ。
「そうそう、由美子ちゃんの場所を、マリちゃんが教えなかった訳」とリリーが微笑んだ。

『簡単だよ・・ユリカは分かってるだろうけど。
沙紀の覚醒の為だよ、沙紀に集中させ由美子を探させる。

その事により、沙紀は自信が芽生えてくる。
それは経験させるしかないんだ・・だからマリは由美子の場所を探させた。
マリは絶対の自信があったのさ、自分であの世界を覗いていたからね。
ギリギリまで沙紀に任せても大丈夫だって、それはマリが見ていたからね。
マリは由美子に導くフォローだけした、カスミに湖を提示して。
洞窟メンバーを久美子で導いて、そしてレンと四季も実はマリが導いてた。
あの久美子のピアノが聞こえたんだよ、湖の畔を歩いていたレンに。
だからレンは入口の階段を下りて、迷路を探して、あの部屋まで辿り着いた。
マリは本気で経験させたんだ、結局最後まで沙紀に任せた。
沙紀もそれに応え続けた、最後の3枚の扉で・・2人は重なった。
マリは同調でも教えなかった、3枚の扉の正解を。
最後の最後まで・・沙紀に考えさせた、そのプレッシャーを与えた。
そして答え合わせをした・・正解だった事で、沙紀は自信になったよね。
マリは準備を怠らない、完璧な準備を目指すんだよ。
次に沙紀の恐怖の世界があると、由美子の段階の時には気付いてたんだね。
マリはそれに気付いて・・沙紀の準備をしたんだよ。
最も大切で重い・・経験と自信という準備を』
私は笑顔で言った、美由紀の真剣な瞳が私を見ていた。
「何があるんだ?・・おかしいだろ、今の話は。

沙紀の覚醒をそこまで急いだのは、何か理由が有るんだろ。
だって沙紀の恐怖の世界でも、次の絶望の世界にも・・必要無いよね。
自信は必要かも知れないけど、覚醒は必要無いだろ。
だって小僧は、沙紀の力は・・無くなって良いと思ってるって言ったよな。
なのにマリちゃんは覚醒を急いだ、かなりのリスクを背負いながら。
何かが有るんだよね・・多分・・由美子の為の準備だよね。
沙紀の覚醒が必要なのは、由美子を左手に誘う事に関係してる。
小僧が沙紀の絶望を壊しに行かせる決断にも、それが起因してる。
だってそうだろ・・小僧が時間をかければ、そんな絶望は外すだろ。
確かに、沙紀の家は遠いけど・・小僧が距離なんか気にしないだろ。
小僧もマリちゃんも時間を気にしている、急ぎたいと思っている。
そして沙紀が必要だと感じている・・沙紀の覚醒が必要だと。
その為に・・今回の絶望の世界を壊しに行く、リスクを犯してでも決行する。
その決断をした・・今夜話す予定なんだろ、姿無き誰がいるんだ。
由美子の世界に・・何が存在するんだよ・・小僧、述べよ」

美由紀の強い言葉で、女性達が私を見た。
私はマリを見ていた、二ヤを出して頷いた。

『その話は・・特訓が終わってからだね。
俺はマリと作戦を立てたって言ったけど、その作戦の最大の問題点。
それをクリアー出来ないと、今回の絶望の世界は諦める。
美由紀が言うように、沙紀の絶望は・・俺が時間をかけて外す。

どうなるのかは・・これからの、特訓しだいだね。
美由紀は分かってたろ・・だから、マリは美由紀を誘わなかったんだよ』

私は真顔で美由紀に言った、美由紀も真顔で頷いた。

「沙織が教えてくれたんだ・・絶対にジョークだって。
沙織は爆笑して言った・・そんな言葉を真に受けたのか、美由紀らしくないって。
本気で爆笑されて・・私は気付いた、絶対ジョークだったてね。
小僧が言った・・俺には分からない、男の俺には女の望む幸せなんて分からない。
それは嘘だって・・小僧が一番分かってる、あらゆる女を感じてきたから。
小僧は女の事は感じてきた・・私等女は、所詮自分の事しか分からない。
ユリカ姉さんが、少し他の女性を感じてるだけ。
だから今回はユリカ姉さんが中心なんだよね、マリが入れない以上。
でもお前は入ろうと思えば入れる・・でも今回は入らない。
前回・・律子母さんを入れない状況にして、女性達に考えさせた。
今回は小僧が入らない事で考えさせる・・それは賭けだよな。
確かに、相当の数の女性が戻される・・そんな気がする。
ＯＫ・・特訓には私も行くよ、道案内でね・・作り上げたんだね。
道場を・・特訓する世界を・・数多くの女の心を知る、最強の男が」

美由紀が二ヤで私に言った、私も二ヤで返した。

「よし・・行きましょう、その特訓の世界に」とユリカが爽やか二

ヤで言った。
「準備は何をするの？」と蘭が満開で微笑んだ。
『トイレに行って・・イメージしてよ、ダイバーのウェットスーツ。
ボンベはいらないよ、美由紀がシズカ作の、例の酸素供給ガムを持って入って。
それとあの無線機も・・場所はエミが言った、橘橋の下。
そこに潜水艦が有る・・それで向かうよ、俺の作った深海に』
私は笑顔で言った、女性達が笑顔になって頷いた。
何人かがトイレに行って、女性達は瞳を閉じてイメージに入った。
私はマリを見ていた、マリは二ヤで女性達を見ていた。

『良いかな・・可愛いスーツをイメージしたかな？
蘭が潜水艦の操縦をして、もちろんユリカが総司令艦長。
美由紀はオブザーバーだよ・・深海に到着するまでは。
それじゃあ・・円になろう、こっからは俺もマリも入れない。
お任せします・・宝箱を隠したから、それを持って帰れれば成功。
戻されないように・・頑張って』
私は意識してニヤニヤで言った、全員に二ヤで返された。
全員で円になって手を繋いだ、私は右手を蘭と左手をマリと繋いだ。

『じゃあ・・少し待ってね、マリが目を閉じたら・・橘橋をイメージして、検討を祈る』そう言って目を閉じた。
準備していた世界なので、すぐに橘橋が映像で現れた。
私は管制塔を作っていた、豪華な部屋に大きなモニターを１０台揃えていた。
管制塔の横に巨大なプールを作って、そこを隔離状態にしていた。
管制室の大きなソファーに座って、モニターの電源を入れた。

画面1に、大きな黒い潜水艦が、市役所の前の大淀川から頭を出していた。
《可愛い色にすれば良かったな・・しまった》と思っていた。
私が見ている映像は、既に2画面になっていた、画面2に河川敷の駐車場が映っていた。

「小僧・・入れるよ」とマリが同調で言ってきた。
そしてマリが私の管制室に入ってきて、ニヤで私の横に座った。
『マリ・・早くなったね、同調速度』と二ヤで言うと。
「何事も訓練よ・・しかしさすがシズカ姉さんの弟だね～、こだわるね～」とマリが笑顔で言った。
『マリ・・表情が豊かだよね、可愛いよ』と笑顔で返すと、マリがモニターを顎で示した。

河川敷の駐車場に、ユリカと蘭が現れた。
「蘭・・またもや足したね～」とユリカが蘭の胸を見ながら二ヤで言った。
「正真正銘の本物です」と蘭が満開ウルで返した。

ユリカは青のウエットスーツで、赤いラインがシャープに入っていた。
蘭はスカイブルーで、ピンクのラインが体の線に沿って入りセクシーだった。

そしてリリーが白いスーツで現れて、その光沢のある素材がセクシーに煌いた。
「なるほど・・素材はそれが良いね、本番ではそうしよう」と蘭がリリーに微笑んだ。

「素材しかイメージ出来ませんでした、まだまだ未熟です」とリリーがウルで言った。
「慣れれば・・すぐにあんな事が出来るよ」とユリカが二ヤで視線で示した。

美由紀がピンクのスーツを着て、長い両足で立っていた。
背中に大きく【ＭＩＹＵＫＩ】と入っていて、その上にイルカがデザインされていた。
右胸にも小さく同じデザインが入っていて、シャープなラインが体を引き締めて見せた。
腰を斜めにベルトを通し、右サイドに光線銃が下がっていた。

「あの短時間で、そこまで行けるのか～」と美由紀の後ろから、紫のスーツのカレンが微笑んだ。
「凄いです～・・さすが美由紀ちゃん」とその横の白いスーツのシオンが、ニコちゃんで言った。
「少し準備してましたから～」と美由紀が笑顔で返して、６人が集まった。

「しかし・・見事な世界だね、マチルダやるね～」と蘭が潜水艦を見て嬉しそうに言った。
「イメージ映像とは思えないね・・このリアリティ、見事だよ」とユリカも爽やか笑顔で言った。
「早く乗りましょうよ・・楽しみだ～」とカレンが先頭で潜水艦に乗り込んだ。

上部ハッチから全員が乗り込んで、私は自動でハッチを閉めて密封した。
潜水艦の操縦席は、前面が強化ガラス張りで視界を確保して。
各種レーダーが置かれ、モニターも多様に設置していた。

「すっご～い・・ワクワクする～」とリリーが3席有る操縦席の右に座った。
「操縦方法は・・ヘリとほぼ同じだね」と蘭が真中の操縦席に座り、モニターを見て言った。
「それなら、私はここですね」とシオンがニコちゃんで言って、左の操縦席に座った。

美由紀がガムと無線機を配り、ユリカが2列目の真中に座り。
美由紀が右の海図席に、カレンが左のレーダー席に座った。

「それじゃあ・・エンジン始動」とユリカが言った。
「エンジン・・始動します」と蘭が言って赤いボタンを押した。
動力が伝わって、小さな振動が船体を包んだ。

正面の大モニターに、【ベルト着用】のサインが出て、全員がベルトを着用した。
「リリーとシオンが攻撃役みたいだから、武器の使用方法見といてね」と蘭が満開で言った。
「了解です」と2人が嬉しそうに返した。

「それでは・・潜水せずに、海を目指そう・・沖に出れば、座標は見えるでしょう」とユリカが笑顔で言った。
「了解・・海を目指します」と蘭が満開で返して、ゆっくりとアクセルを踏んだ。
潜水艦はゆっくりと桟橋を離れ、大淀川の真中に出て海に方向を向けた。
船内の6人は、ワクワクの笑顔だった。
「すぐに戻されるね・・あの感じじゃ」とマリが私に二ヤで言った。

『美由紀でも感じてないかな、最初の難関を・・多分、現時点では・・シズカとエミしか分かってないな』と私もモニターを見て二ヤで言った。

潜水艦はゆっくりと航行して、海を目指していた。
完璧な晴天を私は作っていて、波もほとんど立たせなかった。

潜水艦は海に入り、速度を少し上げた。
その時、カレンの目の前の大きなレーダーが反応した。
回転するレーダーの軸に、ピコーンと大きな点が標された。

「レーダーに反応あり・・右２８度・・距離４９００ｍ」とカレンが言って。
「右２８度に進路をとる、１０ｍ潜水して進行しよう」とユリカが言った。
「了解・・潜行します・・不測の事態に備えて下さい」と蘭が返して、全員に緊張が走った。

潜水艦は海面から姿を消して、１０ｍほど潜り座標を目指した。
「素敵です～」とシオンがニコちゃんで叫んだ。

正面の窓にイワシの魚群が現れた、億を超える数のイワシが１つの固まりで泳いでいた。
その一つ一つの個体が、海中の太陽光線を反射して、キラキラと輝いた。
女性達はそれに見入っていた、突然イワシの群れが泳ぐ速度を上げた。

潜水艦の後ろから現れた、イルカの大群が捕食に来た。
その見事な泳ぎでイワシの群れに突っ込み、美しい狩りを見せてく

れた。
２０頭以上のイルカが、どんなに捕食しても、イワシは全く減る感じは無かった。
「サービス良いね～・・戦闘態勢、奴は策略家だよ・・素敵な光景の裏に何かあるかも」とユリカが言った。
「了解」と５人が二ヤで返した。
「座標までの距離・・１０００」とカレンが言った。
「少し速度を落とそう・・イワシで前が見えない」とユリカが言った。
「了解」と蘭が返して、速度を落とした。
潜水艦はゆっくりと進み、その地点まで来た。
その地点だけ海の色が濃く、濃紺で深さを表現していた。
「なるほどね・・ここに潜れって事ね」とユリカが言った。
「そうでしょうね・・深そうですね～」と蘭が返した。
「行きますか、楽しむしかないんでしょ」とリリーが言って全員が頷いた。
「潜行する・・不測の事態に備える、パニックにならないように」とユリカが二ヤで言って。
「了解」と全員が二ヤで言った。
「潜行します」と蘭が言って、潜水艦がゆっくりと潜り始めた。
私はマリと表示を見ていた、深度は１０００ｍを超えようとしていた。
『始めるよ、マリ』と隣のマリに二ヤで言った。
「悪い奴だ・・いきなり、深い地点からだなんて」とマリも二ヤで

返してきた。

私はモニターを見ながら、目の前のＡボタンを押した。

潜水艦内は女性達が緊張して、前方の世界を見ていた、太陽光線が届かない暗い世界を。

その時、パキッと強化ガラスから音がして、斜めに線が走った。

「それだよな～」と美由紀が呟いた時には、その斜めの線から無数の線が広がった。

ユリカも蘭も一瞬の事で、対処が出来なかった。

前方の強化ガラスが粉々に割れて、大量の海水が船内に流れ込んだ。

船内が海水で満たされた時には、美由紀しか船内にいなかった。

「やっぱり・・駄目だな～」と美由紀が無線で言った。

『美由紀・・一度戻すよ』と私が無線で言った。

「了解・・修行が足りないよ～」と美由紀が二ヤで返してきた。

女性達５人は、強烈な水流に押し上げられて海上に出た。

そこは管制室の横の巨大なプールだった、５人は水面にプカプカと放心状態で浮いていた。

そして潜水艦がプールの真中に浮かび上がった、ハッチを空けて美由紀が出てきた。

「修行が足りません～・・分かってたのに～」と美由紀が二ヤで言った。

「怖かった～、水は怖いんだ～」と蘭が浮きながら満開ウルで返した。

「そっか～・・宇宙と違って、水の恐怖は実体験で分かってるからか～」とカレンがウルで言って。

「まず、その恐怖を克服しないと、駄目だという事ね」とユリカは私とマリがニヤで見ている窓を見て言った。

『そうだよ、まずはそこから・・イメージと分かってても難しいんだ。

俺はサーフィンするから良く分かる、水は怖いよね。

それは呼吸が出来なくなる苦しみを、誰でも知っているからね。

1度や2度は誰でも少しは経験してる、そして強烈に残ってる。

脳が記憶してるその恐怖の克服は、分かっていても難しいんだよ。

複合的に来られたら、パニックを引き起こすだろうね。

美由紀以外はあのひび割れを見て、その時に自分でイメージを入れたんだよ。

海水が流れ込んで来る恐怖のイメージを、だからパニックになって戻された。

溺れない、苦しくない・・究極、死なない。

それを分かっていても、経験した恐怖が勝ってくる。

深海での勝負は、そこから始まるんだよ・・今夜はそれだよ。

潜水艦の左サイドの倉庫に、1人用の潜水ボードが有るから。

それでそのプールを潜って、深海に通じてるから。

深海にガラスの街を作ってる、そこまで辿り着いてみて。

敵はいないから武器はいらない、実在する生物しかいないからね。

美由紀はここに来て、今日はそこまで・・あれをクリアーしたんだから』

私はスピーカーでそう言って、潜水艦の左側面のハッチを明けた。

5人が泳いでそこに集まった、そしてカレンが倉庫に入り潜水ボードを5台出した。

潜水ボードは両手で握りる、大きなビート板のような物で。

小さなスクリューと照明用ライトが付いてるだけの、シンプルで機能的な物にしていた。

5人は笑顔でそれを握って、円になった。
「1回で辿り着くよ・・悔しいから」とユリカが爽やかニヤで言って。
「当然です・・こんな事に時間はかけれない」と蘭が満開ニヤで返して。
「サメや海蛇に注意です～・・怖くないです～」とシオンがウルで言った。

「ニョロがいるのね・・海にもニョロが」と蘭が満開ウルで返して。
「でかいタコとかイカもいますよね～・・ヌルの」とリリーもウルで言って。
「楽しそう・・行きましょう」とカレンが笑顔で言った。

5人が笑顔で頷いて、潜って行った。
美由紀が管制室に入ってきて、ソファーに座りモニターを二ヤで見ていた。
モニターには5つのライトが映っていて、各モニターに5人の楽しそうな笑顔もアップで映っていた。

5人は海に出て、ひたすら底を目指していた、小魚だけが周りを泳いでいた。
5人が笑顔で楽しんでると、突然それが横切った。
7mはあるホオジロザメが5人の目の前を、悠然と横切って5人を見ていた。

「ありゃ～・・言ってたのに、ジョーズで2人戻ります～」と美由紀が二ヤで言った。

リリーとシオンがウルでプールに浮かんだ、2人は顔を見合わせて

すぐに潜った。
蘭が海蛇の大群で戻り、ユリカが巨大イカに絡まれて戻り。
４人は何度も戻らされ、同じ道を何度も往復した。

結局１回目のトライで辿り着いたのは、カレンだけだった。
カレンはガラスの街の入り口から入り、ガラスの街のプールに浮かび上がった。

「やっほ～・・・１番乗り～、さすがカレンちゃん」とカレンが笑顔で自画自賛をした。
『おめでとう、カレン・・右奥にエレベーターが有るから、最上階に来てね』と私が無線で言った。
「了解・・楽しかったよ～・・特に最後のクジラちゃん」とカレンが微笑んで、プールから上がった。

「凄いよな～・・あの外見で、あの精神力」と美由紀が笑顔で言って。
「本質はもっと凄いよ・・少し怖いくらい」とマリが二ヤで返した。
『カレンは安定感があるよ・・後はリリー覚醒だね』と私は笑顔で言った。
マリが二ヤで頷いて、美由紀もニヤを出していた。

私達がモニターのリリーを見ると、リリーは巨大なタコに右足を絡まれていた。
「ちょっと・・やめてよ、急いでるの・・たこ焼きにするよ」とリリーはタコにウルを出していた。
リリーは必死に振り払って、海底を目指した。

ユリカ、蘭、シオンとガラスの街に辿り着いて、疲れ果てていた。
「最後のあれは、デカ過ぎでしょ」と蘭がウルで言って。

「そう思うよ、いくらシロナガスでも、やり過ぎだよ」とユリカが爽やか二ヤで返して。
「でも鯨ですから・・人間を食べません」とシオンがニコちゃんで返した。

その時、頭上に微かに光が見えた。
「リリー・・頑張ってますな～」と蘭が上を見ながら二ヤで言って。
「何にでも興味を持って、ツンツンして・・それで絡まれてるからね～」とユリカが爽やか二ヤで言って。
「そうなんですよ、すぐにどっかに行ってしまいます～」とシオンがニコちゃんで言って、エレベーターに乗り込んだ。

私達は爆笑の中にいた、リリーが全てを触って確かめる姿を見て。
リリーの溢れる好奇心を見ながら、その対応に爆笑していたのだ。

「みっけ～・・やっと見えました～」とリリーが笑顔で言って、ガラスの街を目指していた。
ガラスの街の少し手前で、リリーの目の前を発行する何かが通った。

「行きますよ～・・絶対に追いかけます」と美由紀が二ヤで言って。
「本当に楽しむ人だな～・・尊敬するよ」とカレンも二ヤで言った。

リリーは止まっていた、その光が去った方向を見ていた。
「お待ちになって～」とリリーは叫んで、光を追って行った。

「不思議な女だ・・あの好奇心」と蘭が後ろから満開二ヤで言って入ってきた。
「恐怖や目的の上をいく、あの好奇心・・切り札だね～」とユリカが爽やか二ヤで言って。
「エース・・あの光は何ですか？」とシオンがニコちゃんで聞いた。

『さぁ・・俺も分からないよ、エミの図鑑で見ただけだから・・光る奴ね～』と二ヤで返した。
「空想の生物も入ってるね・・深海だから」とユリカが笑顔で言った。
『それは図鑑を作った人に聞いてよ・・俺は素直な人間だから』と二ヤで返した。

「まぁ・・素敵じゃない、あなたは誰でしょう」とリリーが発光する魚の５ｍ手前で言った。
魚は１ｍ位の体調で、体全体が発光していた。
その光は淡い薄緑で、幻想的な光だった。

リリーはそれを見て笑顔になって、振り向いてガラスの街の方向を見た。
リリーの目の前には、大きな黒い物体が迫っていた。
「なに～・・でかいよ～」とリリーは慌てて、その黒い物体を避けた。

真横を通る巨大な物体の流れで、リリーは発光する魚にぶつかった。
「ごめんね～・・奴が悪いの、あのピノキオに出てくる鯨が」とリリーは発光する魚に言った。
その時リリーは見ていた、奥に沈没船があり、その中に発光する体が無数に存在した。
リリーの側の発光する魚も、その沈没船に入って行った。

「行きたいけど・・次回にしよう」とリリーが自分に言い聞かせて、ガラスの街を目指した。
リリーにエレベーターに乗るように言って、私は考えていた。

「まさか・・あの沈没船は、あんたが作ったんじゃないの？」と蘭が私を見ながら聞いた。
『うん・・沈没船なんて、イメージしてない』とウルで返した。
「えっ！・・ならどうして有るの？」とユリカが驚いて言った。

「追試だね・・リンダ・マチルダの」とマリが映像の沈没船を見ながら二ヤで言った。
『それしかないよね・・マチルダにしか、出来ないよ』と私は女性達を見て二ヤで言った。

「入るんだった～・・私が発見しました～」とリリーが入ってきて、笑顔で言った。
「ナイス、リリー」と蘭が満開で返した、リリーは自慢二ヤで返した。

「この人数じゃ無理ね・・あの沈没船は」とユリカがウルで言った。
モニターの沈没船を見て、女性達がウルを出した。

私はマリを見ていた、映像を見ている大きな黒目を。
その黒目が映像を映していた、マリに対する試験問題を読んでいた。
マリは解答を導き出そうとしていた、能力を超える感性を使って。
リンダの難問を、マチルダが出題した・・それが出来ねば無理だと提示した。
深海は暗く静かだった、海面を感じることも出来なかった。
光を奪われた場所で、光を感じることが出来るのかと・・静かに問いかけていた・・。

【冬物語・・リンダの試験？】

出題者の意図は読まない、ただ夢中で挑戦するしかない。
無意識の果てにある集中を目指して、その場所に有る・・次の扉が。

モニターの映像には、大きな海中都市が映されていた。
ガラスで囲まれた大きな都市に、沈没船の空母が横たわっていた。
その空母の船体に、【ＭＡＲＩ】と船名が記されていた。
そして空母の甲板に、銀色の人型ロボットが、数え切れない程に居たのだ。

その人型ロボットは、軍隊のように整然と並んでいた。
右腕にマシンガンを持って、壊れてるように全く動かなかった。

マリはモニターを見ながら集中していた、巻き戻す集中じゃないと思えた。
その横顔の唇が、薄笑いを浮かべていた。

「水中は難しいよ～」とユリカが爽やか笑顔で言った。
「そうですね・・他に気を取られると、パニックになりますね」と蘭が満開で返した。
「明日から、マリちゃんと他の女性もやるの？」と美由紀が聞いた。

『そうなるだろうね・・マリの今の集中は、そう言ってるね』と二ヤで返した。
「小僧・・あれは挑戦状だよね？」と振り向いてマリが二ヤで聞いた。
同調のマリの鮮明な言葉に、女性達の笑顔が咲いた。

『間違い無く・・マリに対する挑戦状だよ、同調で導くマリに』と二ヤで返した。
「マチルダ姉さんなら、挿入出来るんだね？」とマリが笑顔で聞いた。

『うん・・俺の映像はヒトミのプレゼントなんだ。
それをリンダが拡げてくれて、制御する方法も提示してくれた。
そして最後にマチルダが、より鮮明にしてくれたんだよ。
それ以降のマチルダは、俺の映像に侵入出来るようになった。
マチルダは俺の映像に、何でも持って入れると思うよ』

私は嬉しそうなマリに、笑顔で返した。
「挑戦状なんだね、リンダも好きだよね～」と蘭が満開で微笑んで。
「同調するマリちゃんが、切れたら大変だからでしょうね」とユリカがマリに微笑んだ。

「そうでしょうね・・私は小僧のイメージを想定してたけど。
あの沈没船は分からなかった・・だから、嬉しかったんです。
リンダさんとマチルダさんの、強い想いを感じました。
そんな所で止まるなと、満足するなと言われたみたいで。
距離や常識など物ともしない、偉大なる2人に出会えて。
自分が少し、調子に乗っていたと感じました。
危なかったです・・今のままで律子母さんに会ったら、怒られました。
今回私が出来るのは・・同調で導くだけです。
女性達に全てをお任せします、私も小僧も。
沙紀の根源的な絶望を、外してやって下さい。
私は沙紀が妹のように可愛いんです、よろしくお願いします」

マリは立って真顔で言って、女性達に深々と頭を下げた。

その表情も姿勢も真剣で、女性達もマリを見ていた。
「了解・・マリ、必ず外すよ」とユリカが爽やか笑顔で言って、マリを抱き寄せた。
マリを抱くユリカの表情は、本当に嬉しそうだった。

「頑張るぞ～・・私が切り札です」とリリーが場の空気を変えるのに笑顔で言って。
「初心者は気を付けてね・・好奇心旺盛の割りに、すぐにパニクルから」と蘭が満開二ヤで返して。
「ヌルが苦手ですもんね～・・リリー姉さん、吸盤ヌルが苦手です」とシオンがニコちゃんで言って。
「蘭姉さんとシオンは、ニョロが苦手でしょ」とリリーが二ヤで返した。

「はい・・でも足がいっぱいの奴が、1番の苦手です～」とシオンがニコちゃんウルで返した。
「海にはいないよね？・・足がいっぱい」と蘭が満開ウルで言った。
「いますよ～・・そう思っといた方が良いですよ～」とカレンが二ヤで言って。
「サメよりも、ニョロの方が怖いのが・・私には分からない」と美由紀も二ヤで言った。
女性達がワイワイと盛り上がり、私はそれを笑顔で見ていた。

『ＯＫ・・映像を切るよ、ある程度の女性が揃ったら・・あのロボットと対戦だね』と私は女性達に二ヤで言った。
「私達は、個人でイメージしてれば良いの？」とカレンが聞いた。
『そうして・・2日位で、特訓を終わらせるから』と笑顔で返した。
女性達の笑顔を確認して、私は映像を切った、リビングに戻ると女

性達も戻ってきた。
「さて・・来る時の、美由紀の質問の答えを教えて？」と蘭が満開二ヤで言った。
全員が私を見たので、私は正直に言葉にした。
『俺の感じてる事だよ・・マリに聞いた訳じゃないから。
マリがヒトミやユリアと同調出来るのは、相手から交信があった時だけだと思う。
死者との交信は特別な物だと思うんだ、だからマリから誘う事は出来ない。
この考えは・・恋が浦の夜会で感じたんだ、ヒトミの言葉を感じて。
あのヒトミとの再会は・・まぁ、夢物語だとしても・・同調だった。
マリが教えてくれた、同調だったと思う・・そして最近気付いたんだよ。
あの恋が浦で、俺とヒトミを繋いでくれたのは・・マリなんだよね。
そしてマリは、ヒトミのイメージの世界に入れてくれた。
俺が1年後に出会うと信じて、由美子に出会えた時を仮定したんだ。
マリのその仮定を感じて、ヒトミが頼んだんだよね・・同調してと頼んだ。
俺が恋が浦に進路をとれば、ヒトミと俺はマリの同調を共有できる。
あの場所・・恋が浦の、あの時しかないんだと思う。
ミホの事を引きずっていた、未熟な俺に気付かせる為に来た。
俺の中のヒトミが、それを強く望んだと思うんだ。
ミホは簡単じゃない、諦めるなと伝えに来た・・ミホの強さが繋

ぐんだと。
沙紀と由美子に繋がる道を繋ぐんだと、そう伝えてくれたんだ。
俺は恋が浦でヒトミと再会して、吹っ切れたんだよ。
それからミホに対しても、後悔する事をやめたんだ。
そしてヒトミが言った・・まずは美由紀だと言った言葉で、自信が持てた。
俺は美由紀に対してだけ、ずっとこだわっていたから。
だから逃避行にも、躊躇無く行けたんだ・・それこそがヒトミの提示した未来。
今はこれ以上の、俺の考えは言えない・・読まれたくないから。
ただ・・俺は1つだけ言うよ・・ユリカに。
沙紀もそれを願ってる・・そしてマリもそれを待ってる。
もう大丈夫だよね、ユリカ・・もうその段階に来てるよ』

私は最後にユリカを見た、ユリカの真剣な深海の瞳が、私を見ていた。

「何なの？・・ずっと隠してたでしょ、隠してる事だけは分かってた」とユリカが真顔で返してきた。
私はユリカの両手を握った、温度の激しい揺れが、ユリカの緊張を伝えてきた。

『ユリカ・・ユリアを存在させて、その姿を教えてあげて。
ユリアは細胞の状態で消滅した、だから実像が無いんだと思う。
ユリアはヒトミと出会い、自分の姿が欲しいと願っていると思うんだ。
その容姿を教えられるのは・・この世の中で、ユリカだけなんだよ。
ユリカのイメージこそが、ユリアの姿なんだよ。
怖がらないで、ユリカ・・それで良いんだよ、ユリカの正直なイ

メージで。
それ以外の正解は存在しない、どんな容姿でもそれがユリアなんだ。
ユリカ・・完全に素直な自分で、心を空にしてユリアを想って。
ユリカには必ず有るんだよ、心の深くに封印した・・ユリアの姿が。
ユリカ自身にも感じる事は出来ない、でも必ずある・・俺は知ってるから。
俺がユリカに揺り篭を振り戻した時に、ユリカは出会ったと言ったよね。
その時に姿を見たのなら、ユリカは必ず知っている・・ユリアの姿を。
だからユリカが無の心でユリアを想えば、絶対にその姿が現れる。
その時にマリの同調に、ユリカと沙紀が入ってれば、描いてくれるよ。
ユリカ・・この話を俺にしたのは・・沙紀なんだよ。
沙紀がどうしても描きたいと言ったんだ、空気の波のお友達の姿をね。
ユリアは自分でイメージしない、ユリアには大切な事なんだと思う。
自分の姿を知っている、愛する姉のイメージが・・自分の真実の姿。
だからユリアはイメージしない・・いつの日か、ユリカが教えてくれるから。
和尚からその存在を聞いて、それから変化したユリカを感じて。
その時が近いと感じてる・・ユリアは待ってるよ・・ユリカ。
ユリカ・・恐れる事は何も無い、それこそが到達なんだと思う。
永遠に上り続けるユリカの、１つの段階に到達した証明だと思う。
ユリカ・・そうしようね・・沙紀が待ってるよ・・憧れのユリカを。

沙紀にとって、憧れ続ける存在でいろ・・ユリカ。
その精神を見せろ、ユリカ・・偶然も必然も無い、出会った事に意味は無い。
意味はその後に出来る・・シナリオは自分で書く。
悪質なシナリオが奪った、その姿を復活させろ・・ユリカ。
マリも沙紀も・・そして俺も・・それだけが望みなんだよ』

私は全ての伝達を使って、強烈な波動の熱の通訳をした。
真上から押し潰すような波動が、強烈に繰り返されていた。
ユリカは深海の瞳から大粒の涙を流して、私に抱きついた。

「ユリアは待ってる・・それを待ってる」とマリが静かに言葉にした。
その静かな言葉に、強い説得力が有った。
ユリカは体を起こし、マリを見て笑顔になった。

「私は幸せだよ・・マリ・・マリと沙紀に出会えたから」とユリカは笑顔で言って、マリに抱きついた。
女性達の涙の笑顔に囲まれた、到達したユリカの涙を見ていた。
ユリアの波動も喜びを伝えて、ユリカを包んでるようだった。

「完全に上げたね・・ユリカ姉さんに対して、春雨の叫びで」と蘭が満開で微笑んで、私に抱きついた。
「どこまででも上がる、そう確信的に感じました」とリリーが笑顔で言って。
「楽しみですね・・ユリアちゃんの姿」とカレンが微笑んで。
「待ち遠しいです〜・・早く見たいですね」とシオンがニコちゃんで言った。

「よし・・女子だけの大切な、お喋りをしましょう・・お布団で」

とユリカが最強爽やか二ヤで言って。
「は〜い」と女性全員で二ヤで言って私を見た、私はウルウルで返していた。

私は美由紀を抱き上げて、和室の布団の上に降ろした。
女性達の嬉しそうな笑顔に見送られ、一人でベッドルームに入った。

私はベッドに座り、穏やかに流れる大淀川を見ていた。
対岸のホテルの明かりが川面に映り、静寂の中で淀みなく繰り返す日常を見ていた。
私は久々のソワソワ感を楽しんでいた、その理由も分からぬままに。

いつ眠りの落ちたのか記憶が無かった、私は翌朝寒さで目覚めた。
リビングのストーブに火を入れて、キッチンで朝食のメニューを考えた。
卵と小さな鮭の切り身を焼いて、リリーとカレンにサービスで、カニさんタコさんを作った。
味噌汁が出来上がる頃に、美由紀が這い出てきた。

私は美由紀を抱き上げて、車椅子に乗せて洗面所に連れて行き。
朝食の準備をしてると、蘭とシオンが起きて来た。
４人で朝食を食べて、蘭の車に美由紀と乗って、美由紀の家まで送ってもらった。

満開蘭を手を振って見送って、美由紀と登校した。
その日が終業式で、全校集会と掃除だけで終了した。
私は期末試験の成績表と通知表を受け取って、ホッとため息をついた。
強い波動が二ヤで来て、その雰囲気がいつもと同じなので安心していた。

沙織と秀美が、翌日ＰＧにマリを訪ねてくると言ったのに、二ヤで返して。
美由紀と下校した、美由紀もご機嫌全開だった。

私はアパートに帰り、着替えてバスで街に出た。
昼食にラーメンを食べようと、デパートの前を歩いていた。

私はかなり遠目に、その姿を発見していた。
不思議な感覚だった、その小さな姿を見ながら現実感が無かった。

私はデパートのバス停の前で、ウロウロと挙動不審な少女を見ていた。
有名付属小学校の制服を着ていたが、その雰囲気で弱障害といった感じだった。
どう見ても小学４・５年にしか見えない身長で、子供にしてはお洒落さんだと思っていた。
髪に少しの人工的なウェーブがあり、揃えた眉の下の意志の強い瞳が印象的だった。

しかしパニックの手前なのか、挙動が落ち着かずに、ソワソワ感が全面に出ていた。
バッグを覗き込み、必死で何かを探してる感じだった。

『どうしたの？・・何か困ってるの？』と私はその少女の瞳を見て、意識して笑顔で言った。
「ていき・・ない・・おかね・・ない」と少女は私を見て、ウルで言った。
外見的には健常者と変わらないが、言葉はたどたどしく不明瞭だった。

しかし驚くほど表情は豊かなのだ、私はそれを感じて自然に笑顔になった。

『ありゃ～・・せれは困ったね、バス代あげるよ』と笑顔で返した。
「もらえない・・だめっていわれてるの」と強く返してきた。
『そっか～・・なら、貸してあげる・・それなら良いでしょ？』と笑顔で返した。
「うん・・それならいい」と少し笑った。

『小学生だから・・２００円で足りるかな？』とポケットに手を入れながら聞いた。
その瞬間だった、私は驚愕の世界を見せられる。

「周りに女ばかりのくせに、意地悪言うんだね・・１３歳の子供が。
瞳や温度の伝達くらいで調子に乗って、同調も不十分だし。
周りに助けられてるくせに、主導してるなんて思ってる。
私は１４歳、中２だよ・・お姉さんです。
小学校の制服じゃないでしょ、まだまだだね～・・目で見て判断する。
マリの匂いがすると思ったら、この程度の男とは。
深海は無理だよ、諦めなさい・・諦めないって、言い訳するボーヤ」

強い何かの同調で、私の内側のある部分に直接伝えられたのだ。
私は完全凍結状態だった、ピクリとも動けないで少女の瞳を見ていた。
強烈な問いかけの波動が何度も来た、私はそれに応える事も出来なかった。

「強い波動だね・・素敵な人なんだね。

あんたがこの人に言った事は間違ってない、でも急ぎ過ぎるなよ。
あんたもマリも間違ってる、その急ぐ心が操られてる証。
私の事は、マリには絶対に言うなよ、今日マリに会って集中を感じてた。
そんな事だったのね・・バス代のお礼にヒントをあげる。
絶望なんて幻想だよ、それは何が何に言ってるんだ。
幸せや満足が、お前が考えるのであるのなら・・絶望や挫折は何なんだよ。
常識で判断してるだろ、どうしてなの？・・幸せや満足に辿り着いたのに。
外しなさい・・考えるという行為を外せ、そうすれば分かるよ。
なぜに深海なのかが、その幼稚な理由がね。
２００円で良いよ、必ず返しに行くからね・・今分かったよ。
私が定期を無くすなんて、それが有り得ない事だから。
隠されたね・・あんたはそれが才能だよ、伝達なんて才能じゃないよ。
吸引力だね、それがあんたの最大の武器なんだよ。
相手があんたを想定できないのは、あんたが策略家だからじゃない。
あんたの吸引力が読めないんだよ、マリの先を読む力と同じでね。
今日の出会いは、良くできました・・褒めてあげましょう・・小僧」

強く響く同調の言葉で、その少女は二ヤを出していた。

『ありがとう、嬉しいよ』と私は必死で笑顔で礼を言いながら、お金を渡した。
「ありがとう・・たすかりました」と静かに言葉で返してきた。
「私はルミ・・また会いましょう、その時に解答を教えてね」と同

調で言って微笑んだ。
『やってみるよ・・ルミ姉さん、お気を付けて』と笑顔で返した。
強烈な波動が、何？何？と何度も聞いてきた。
私が困っていると、制御の利かない波動が吹き荒れた。
「内緒って・・波動で返してたから、私の事は内緒にしてね」とルミが二ヤで伝えてきた。
『いきなりの難問・・意地悪だね、ルミ』とウルで返した。
「ウルはすてきだよ・・じゃあね」と言葉で言って、ルミはバスに飛び乗った。
私は小学生のような小さなルミに、二ヤで手を振った。
ルミも二ヤで手を振ってくれた、その時に街の喧騒の響きが蘇った。
デパートの中から、クリスマスソングが罠のように響いていた。
私はルミの同調が気持ち良くて、一人で二ヤを出しながら歩いていた。
一番街に入った所で、ユリカが笑顔で睨みながら近付いて来た。
「私に意地悪するのが、最近の趣味なの？」とユリカが爽やか二ヤで言った。
『だって・・口止めされたんだもん、ユリカもマリに黙っていてね』とウルで返した。
「えっ！・・マリちゃんの知り合いなの？」とユリカが驚いて返してきた。
『うん・・何か知り合いなんだって、近所なのかもね』と惚けて答えた。
私はユリカに強く腕を組まれて、ラーメンの予定を強制的に変更された。

２人でイタリア料理の店で、【パスタ】と呼ばれるスパゲッティーを食べた。
その時代、パスタなんて洒落た呼び方は、私は聞いた事が無かったのだ。

私はペペロンチーノという、危ない名前のを挑戦的に注文した。
持って来られたペペロンを見て、その普通の見た目に安心した。

『ユリカのも美味しそうだね・・何とかナ～ラ』と食べながら笑顔で言った。
「カルボナーラだよ・・ペペロンはどう？」と爽やか笑顔で返された。
『ん～～・・何か物足りない、俺は水槽のナポリタンの方が好きだな～』と正直に感想を言った。
「日本人だね～・・ナポリタン」とユリカが楽しそうに笑っていた。
私はユリカの機嫌が良いので、笑顔でユリカを見ていた。

「明日からの、ご予定は？」とユリカが二ヤで探りを入れて来た。
『午前中・・ユリカの店の準備の手伝い、午後からマリと同調特訓です』と笑顔で返した。
「良く出来ました・・今日の夕方、マリちゃんが来るから・・病院に付き合ってね」とユリカが真顔で言った。
『さすがユリカ・・決めたら早いね』と笑顔で返した。
「私も見たいのよ、ユリアの顔を早く見たいのよ」とユリカが微笑んで、私も笑顔で頷いた。
ユリカがご馳走してくれて、２人でＴＶルームに入った。

私が来たのを感じて、裏方４人組が入って来た。
「エース、いつやるの？・・マリちゃんとの特訓」とハルカが笑顔で言った。

『明日の午後かな・・出来るだけ人を集めるよ、何回もするとマリが疲れるから』と笑顔で返した。
「了解・・午前中に準備終わらせるよ」とレンが嬉しそうな笑顔で言って。
「楽しみだな～・・深海」とマキも笑顔で私を見た。

『ダイバースーツだけ、イメージに入れといて、ボンベはいらないから』と笑顔で返した。
「了解・・可愛いのにしよう」とハルカが微笑んで、レンとマキも頷いた。

私はユリさんとユリカが出かけたので、派遣の予定をチェックしていた。
リリーとカレンが来て、女性達で盛り上がっていた。

私が予定のチェックを終えると、ジンが笑顔で入って来た。
「やってるね・・エース」とジンが笑顔で言った。
『うん・・今年の分は終了したよ、事務所が待ち遠しいよ』と笑顔で返した。
「マリーゴールドをよろしく頼むよ、これは俺からのボーナス」とジンが封筒を差し出した。
『ありがとう・・遠慮なく頂きます、助かります』と嬉しくて笑顔で返した。
「当然の事だよ、最強のメンバーを揃えてるんだからな」と笑顔で言って、振り返った。

「リリーさんとカレンさんにも、少ないけどボーナスです」と2人に言った。
「ありがとう・・嬉しいよ」とリリーが微笑んで。
「本当に助かります、でも・・儲け出てないでしょ？」とカレンが

返した。
「儲けは出ないけど・・俺も損はしてないから、大丈夫です」とジンが笑顔で返した。
ジンは北斗とアンナの分をマダムに渡し、女性達と少し雑談をして出て行った。

3時過ぎには5人娘が揃い、私はエミに二ヤで通信簿を見せられた。
私は予想通りの結果に凍結していた、体育が4で残りはオール5だった。

『エミ・・凄いね～、俺は体育だけが、ずっと5だよ』と笑顔で言った。
「小学校の成績なんて、何の参考にもならないよ」とエミは笑顔で返してきた。
『そんな事ないよ・・こんな成績、中々取れないよ』と笑顔で返して、エミに手招きした。

私はエミとTVルームを出て、小窓の場所に行った。
マリの特訓の話をすると、嬉しそうにガッツポーズで返してくれた。
私はエミだけTVルームに戻らせて、フロアーに向かった。
ピアノの音が響いていて、私は久美子に近付いた。

『久美子・・付き人として、成績のチェックをする・・悪い場合はバンド活動休止だよ』と二ヤで言った。
「残念・・忘れちゃったよ、想像より良いんだから」と二ヤで返された。
『その想像は・・マキや恭子と比べてるな?・・シズカと比べなさい』と二ヤで言うと。
「それは無理だよ・・シズカの音楽の成績だけと、比べるなら良いけど」とウルで返してきた。

私は久美子にも、翌日のマリの特訓の話をして、笑顔のＯＫを貰った。

久美子と別れて、ＴＶルームに戻ろうとすると、通路にマリが立っていた。
私は平静を装うのが精一杯だった、私を見ているマリの瞳は恐ろしい集中だった。

『どうしたの、マリ・・怖いんだけど』とウルで言いながら近付いた。
「待って・・どこかおかしい」といきなり同調で言ってきた。
私はマリに手を引かれ、１０番席に座らせられた。

ユリカが目敏く見つけて、ユリカとマリに挟まれて、ウル継続状態だった。
「今日・・何があった？・・学校終わってから」とマリが同調で強く言った。
『何も無いよ・・ユリカとパスタ食べた・・パスタって、スパゲッティーなんだよ』と笑顔で返した。
「そんな事は知ってる・・そのランチを食べる前だよ」とマリは強く問い詰めてきた。
「何かあったの？」とユリカが真顔で惚けた。
『何も無いよ～』と私はウルで返した。

「絶対に変だよ・・小僧が新しい思考を手に入れてる。
それに影響を与えたのは、強い力なのに・・全然分からない。
こんな事は初めてだよ・・誰に出会ったの？
私は蘭姉さんも、ユリカ姉さんも・・リンダさんの時だって分かったのに。
それ以上の力なんて、想定どころか・・有り得ないと思えるから。

誰かに関わったでしょ、どんな人だったの？」

マリの真剣な問いかけに、私は答えるしかなかった。

『あぁ・・そういえば、バス停で小学生の女の子に会ったよ。
定期を失くして、お金も無くて困ってたから・・２００円貸してやったよ。
その時・・お礼を言われてね、そしてこう言ったんだよ。
俺の才能は伝達じゃない、吸引力だってね。
もっと話したかったけど、バスが来て帰っちゃったんだ。
不思議な少女だと思ったけど、名前も聞いてなくて・・その事かな？』

私は出来るだけマリが納得するように、話を作った。

「その子だね・・会いたいな～、凄い力なんだろうね。
その部分だけ何も無い、まるで消しゴムで消されたみたいに。
隠してるんじゃないのよ・・消してるって感じなの。
嬉しいな～・・この世界は広いんだね、楽しくなってきたよ」

マリは明るい声で、嬉しそうに言った。
「私はマリちゃんで、同じ事を感じたよ」とユリカが微笑んだ。
「私なんて・・まだまだです」とマリも笑顔で返した。

３人で病院に行くのに席を立つと、久美子がウルでこっちを見ていた。
『何のウルかな～？』と私は久美子にニヤで聞いた。
「変なヒソヒソ話してるから・・見てて怖かった、言葉が出てないのに笑うから」と久美子がウルウルで返してきた。
「久美子ちゃんも、明日にはその仲間よ・・彼氏には見せたら駄目

よ」とユリカが爽やか二ヤで言った。
「気を付けま～す」と久美子は笑顔で返した。
私達3人は、久美子の笑顔に別れを告げて、エレベーターで降りた。
通りは師走の華やかな雰囲気で溢れていて、歩くだけで気分が高揚した。

私はユリカとマリの後ろを歩きながら、不思議に思っていた。
ルミの事を考えても、ユリカもマリも何も感じない事に。
消しゴムで消した感じ・・そう言ったマリの言葉が響いていた。

一番街の西口を抜けると、北風が強かった。
私は寒そうなマリに、私の白のダウンを着せた、マリは振り向いて笑顔を見せた。

「リンダさんの香りがするね・・暖かいよ」とマリが微笑んだ。
『そうだろ・・いつまでも消えないよ、リンダの香りは』と笑顔で返した。

西の空に沈み行く太陽の彼方に、リンダの存在する中国があると思っていた。
まだまだ遠い国だった、情報も少なく、知る事さえ難しい時代だった。

私は2人の背中越しの夕暮れに、感じなければならないと思っていた。

深海の理由を・・幼稚な理由と言った、ルミの言葉が響いていた。

和尚の言葉、「明けぬ夜はない」の対義語であろうヒトミの言葉。

「明日が来ると思ってるのは、贅沢な事なんだ」

対義語でありながら、深い意味では同じ言葉が・・夕暮れに木霊していた・・。

【冬物語・・リンダの試験？】

夕陽に向かい歩いている、姉妹のような後姿。
何かに囚われるのを、拒み続ける2人だった。

病院に向かい、ユリカとマリの後ろを歩いていた。
マリが楽しそうなので、私も嬉しくて寒さを感じなかった。

私は久々の自由を感じていた、心のある部分が開放されていた。
ルミの事を考えても、ユリカが読めない事で感じたのだ。
やはり隠し事が出来ないという事は、気付かない内に重圧になっていた。
そしてシズカの言葉を思い出して、ハッとして気付いた。

《ルミ、君がそうだね・・マリの同級生で、全く読めない・・選ばれし者》と心に囁いた。
ユリカの波動も、ユリアの波動も来なかった。
ユリアの波動はずっと楽しそうに、リズムを刻んでいる感じだった。

病院に着いて記名して病室に入って、私は沙紀の手を笑顔で握った。
《小僧ちゃん、ありがとう・・今からなんだね、空気の波のユリアちゃん》と沙紀が強く伝えてきた。
『うん・・沙紀、お願いね・・ユリカも楽しみにしてるから』と笑顔で返した。
《うん、描いてみるよ、沙紀も楽しみだよ》と沙紀も嬉しそうだった。

私はユリカとマリに場所を譲り、ミホのベッドを覗いたが居なかった。

私は病室を出て、由美子の部屋に歩いていた。
廊下の掲示板に、ワクチン支援のポスターが貼ってあり、それを見て由美子の部屋に入った。

北斗と祖母がいたので、挨拶をしようとして驚いた。
由美子の左手が勢い良く上がっていたのだ、私は2人に頭を下げて由美子の左手を握った。

『どうしたの、由美子・・元気だね』と温度と言葉で伝えた。
《少し黙ってて、感じられそうなの》と由美子が強く返してきた。
私はその強さに驚きながら、由美子の無表情な顔を見ていた。

《凄いな～、早く会いたいな～、マリちゃんとバス停の人に》と由美子が言った。
『由美子、バス停の人を感じたの？』と私は驚いて聞いた。

《小僧ちゃん、人の感性は足りない物を補うの。
普通の人は、その能力の２０％位しか使ってないのよ。
多い人でも３０％、世界的レベルの一流アスリートでも４０％。
最強の軍人でも５０％はいかないのよ。
でもね、私は寝たきりで、死と隣り合せで生きてるから。
感性で補うしかないの、だから分かるのよ、強い能力には反応するの。
なんてね・・バス停の人の、私への言葉だったよ。
言葉の最後に、私は能力の７０％を使ってみせてって言われたよ。
嬉しかったよ・・その部分だけ、消してなかったから》

由美子の嬉しそうな温度の揺れで、私は凍結していた。
『由美子・・そんな話は、俺も聞いてないよ～』と必死のウルで返した。

《私宛だもん、小僧ちゃんが勘違いしてるのよ、バス停の人はマリちゃんとは違うよ》と由美子が返してきた。
『そうだよね、同調じゃないんだよね』と笑顔で返した。
《教えない、内緒って言われてるから》と由美子は多分二ヤで言った。

『意地悪まで習ったね、由美子の二ヤ顔可愛いよ』と二ヤで返した。
《小僧ちゃん、ありがとう、表情の事を言われると、由美子嬉しいよ》と返してきた。
『そうだよね、俺も行ってみせるよ、７０％の由美子の世界に』と笑顔で言って、おやすみをした。
私は由美子の左手を胸の上に置いて、北斗と祖母と雑談をして部屋を出た。

沙紀のベッドを覗いたら、３人で手を繋いでいた。

「またもや、不思議な事をしてるのね」と後ろからいつもの若いナースが微笑んだ。
『怖いよね・・危ない黒魔術みたいだ』と二ヤで返した。
「あんたが筆頭だよ、危ない魔術使うでしょ」と二ヤで返された。
『使います・・意地悪されると、その相手を石にします』とレンの決め台詞を使った。
「相当の女性が、石にされたんだね～」と言って笑っていた。

『ところで・・ミホはどこでしょう？』と笑顔で聞いた。
「ミホちゃん、年末からお正月まで、一時帰宅出来そうだから・・その最終検査よ」と笑顔で返された。
『そうなの・・良かったね、ミホの好きな音楽番組が見れるね』と笑顔で返した。
ナースも笑顔で頷いて、沙紀の母親に薬を渡して出て行った。

私は沙紀の母親に、２学期の成績の事を突っ込まれ、ウルを出していると。
３人が瞳を開き、ユリカが最強爽やか笑顔を出した。
私はその笑顔で一安心した、沙紀はそのままベッドに上がり、鉛筆で薄く下書きを始めた。
３人で沙紀の母親に挨拶をして、病室を出た。

『マリには、ユリアが見えたの？』と笑顔で聞いてみた。
「見えないよ・・薄くぼんやり発光してる感じだったよ」と同調で返してきた。
「うそ・・手を繋いでなくても、同調が分かる」とユリカが驚いた。

『成長したね、ユリカ』と私は嬉しそうなユリカに二ヤで言った。
「生意気です・・反省が足りないようね」と爽やか二ヤで返された。
『反省してます』とウルで返した。
「何の反省なの？」とマリが聞いた。
『俺が・・いやらしいから』とウルで誤魔化した。
「それはそうだよね・・思春期で、好奇心の塊だからね」とマリが二ヤで言った。

ユリカとマリは２人で盛り上がり、病院を出て夜街に歩いていた。
私はその後ろを歩いていた、中央通りの一方通行をリムジンが入ってきた。

ユリカとマリの手前で、リムジンが止まり加々見が降りてきた。
夜街関係者がそれを見て、全員頭を下げて挨拶をしていた。

「加々見さん・・ご無沙汰してます」とユリカが笑顔で深々と頭を下げた。

マリも私も笑顔で頭を下げた、加々見も笑顔で返してくれた。
「ユリカちゃん、いつまでも若くて綺麗だね」と加々見がユリカに微笑んで。
「マリちゃん・・近い内にエースともう一度、俺を訪ねて来てくれないかな。
マリちゃんのあの答えで、俺も色々考えてね。
俺の答えを見つけたんだよ、それをマリちゃんに見せたいんだ。
どうかな？・・いつでも良いから」
加々見は笑顔で言った、マリも笑顔で頷いた。
「ありがとう、マリちゃん・・よろしくな、エース」と加々見が私に言った。
『了解です』と笑顔で返した。
加々見の乗ったリムジンを、3人で見送った。
この事を呼び込みさん達が見ていて、マリも夜街の有名人になってしまう。
夜街で、美由紀が【姉御】、マリが【プリンセスマリ】と呼ばれるようになる。
それ程に、加々見の力は強大な物だったのだ。
私はユリカがマリを送ると言ったので、2人を駐車場で見送った。
靴屋を覗き、満開蘭に笑顔でサインを送り、TVルームに入った。
女性達が揃い、ワイワイとマリの特訓の話をしていた。
「エース・・特訓は、そんなに難しいのか？」とカスミが不敵で聞いた。

『内容は言えないけど・・最初の難関をクリアーしたのは、美由紀だけだったよ。
ユリカも蘭も、シオンでさえ戻されたよ』
私は二ヤで返した、女性達が驚いてシオンを見た。
「戻されました～・・・2問目も戻されました」とシオンがニコちゃんウルで言った。
「シオンでさえ戻された・・恐るべし、深海」とカスミがウルで言った。
「次に1回目をクリアー出来るのは、誰だと思ってるの？」とハルカが私に微笑んだ。
『まず・・シズカは問題ないだろうね、なんせ準備が徹底してるから。
それとエミだろうね、エミはシズカの弟子だからね。
それにミコトと小夜子はいけると思う、なんせ協調性が凄いから。
順応性では他の追随を許さない、すぐにその世界に溶け込むからね。
あとは・・期待するのは、ホノカだろうね・・その強靭な精神力。
それとヨーコが青猫にこだわったら、面白いだろうね。
そして、全く予想が出来ないのが・・恭子だね、あの女だけは分からない。
でも・・感覚的なユリカでも失敗した、それほど難しいんだよ。
PGでも誰かクリアー出来るのを、楽しみにしてま～す』
私は女性達に二ヤで言って、笑顔で睨まれていた。
「相当に煽るね～・・・それにリリー姉さんの二ヤが気になる」とカスミが不敵で言った。
「私もまだまだだと思ったよ、確かに有るね・・自分のイメージに

負けるって」とリリーが二ヤで返した。
「シオン姉さんでも、自分のイメージに負けたんですか？」とレンが驚いて聞いた。
「負けました～・・経験から来る記憶に」とシオンがニコちゃん二ヤで返した。
「経験から来る記憶か～・・私にも有るのかな～？」とエミが私に微笑んだ。
『どうだろうね？・・まぁ、特訓が終わったら話すけど。
俺の考えは少し違うんだよ、経験から来る記憶だと思いがちだけど。
乳児でもそれは有るんだ、だから経験じゃないと思ってる。
ＤＮＡ、遺伝子に組み込まれた記憶みたいな、そんな感じだと思ってるよ。
後から経験して、その経験の記憶だと思ってしまうんだ。
だから、経験してなくても・・その事に恐怖を感じたりするんだよ。
そんな遺伝子に組み込まれた、恐怖の記憶の中にも色々あって。
確かに自分の身を守る為の物も有るけど、作為的な物も有ると思うよ。
操る為の道具のような・・例えば、幼児でも不思議と暗闇を怖がる。
それをエミ位になると、自分の見たり聞いたりした経験だと思ってしまう。
怖い映画やＴＶや人の話を聞いたりして、それが有るから怖いと思ってるってね。
暗闇の恐怖の本質を誤魔化されてる、例えば・・幽霊が怖いの？
実在するか分からない、確かに見える人はいるらしいけど・・証明できないよね。

俺は幽霊を怖いと思わないよ、まぁいるとも思ってないけど。
ヒトミやユリアは幽霊じゃない、ただ体を失った強い想いなんだよ。
俺は何となく分かってるんだ、多分・・人は死んでから気付くんだよ。
大切なのは体じゃなかったってね・・なんて無駄な時間を過ごしたかって。
そう後悔するような気がするよ・・だって、欲の根源は・・幸せになりたい。
自分の幸せが何なのかより、他人に提案された幸せに乗ってる人が多い。
豊かな生活が素敵な事だと、それが幸せに繋がる道だと思ってる。
消費と浪費をさせる為に、成功とは・・裕福とは、金銭を得た事だと洗脳する。
マチルダの送別会の話で考えたんだ、今の世界を牛耳る妖怪の事を考えた。
そいつ等は、もう欲が無い・・物欲って、手に入らないから有るんだ。
何でも手に入ると、物欲も消える・・他の欲も案外そうだよね。
何かを手に入れたい、それが金で手に入る物なら・・大した意味は無いよ。
人間の物欲を喜ぶのが・・妖怪達なんだろうから。
奴等は物欲を煽り続ける、便利だと言う理由で・・自然を破壊する。
正義だと言う不確かな理由で・・人間を傷つける。
エミ・・マチルダの価値の話の、次の段階に入ろう。
エミ・・俺はね、紙幣を見ても・・ただの紙切れにしか見えないんだよ。
通貨の価値は、統制する力が作っている・・でも国単位でその価値が違うよね。

俺は、その部分が納得できない・・金銭的価値とは、万人に同じ物であると思う。
国により違うなら・・同じ商品の値段が違うなら。
それは人間に優劣を付けてるだけなんだよ・・そんな物に価値は無い。
今有る価値とは・・幽霊と同じなんだよ、後付の記憶。
幽霊なんて、所詮・・宇宙人と同じレベルの、空想の存在だよ。
証明できない・・でも存在しないとは言えない、そんな曖昧な存在。
それに対して、恐怖を感じることは・・後付の記憶なんだ。
後付の記憶には、作為有る事が多い・・高い能力の作り出した、作為がね。
俺にとっては、全て同じに感じるよ・・幽霊も宇宙人も金銭的価値も。
誰かが、何かの意図で作り出した・・心を惑わす罠だと思ってる』

私は真剣な瞳のエミの手を握り、ニヤで締めた。
「うん・・分かったよ・・私も何となく、そう思うよ」とエミも二ヤで返してきた。

「準備万端だね、エミ・・マリが言ったよ、沙紀の絶望を外してって。
マリにとって、沙紀は妹のような存在だから。
よろしくって言ってたよ・・そしてね、エミ。
マリも多分小僧も・・エミの解答が楽しみだって、嬉しそうに言ってたよ。
エミ・・小僧の深海に潜ろう・・そこに待ってる、エミの冬休みの試験が。
出題者は、リンダとマチルダ・・これ以上の出題者はいないよね。
エミ・・マリからの伝言・・直接言うのは照れるからって。

マリはエミにも言うよって・・マリが小3の小僧に言った、あの言葉を。
心で決めて、最後の判断は必ず心で決めてって・・そう伝えてと言ったよ。
小僧がヒトミちゃんを左手に誘う決心をした、あの大切なマリの言葉。
それを小1のエミに贈るって・・それが出来る事が、嬉しいんだって。
マリちゃんは、本当に嬉しそうに言ってたよ」
蘭が久美子と入ってきて、エミに向かって満開笑顔で言った。
「ありがとう、蘭ちゃん・・やってみる」とエミは少女の笑顔で返した。

「リンダの試験が有るのか～・・か～、楽しみだ～」とカスミが笑顔で言って。
「ワクワクしますね～」と久美子が微笑んだ。

「エース・・大ママとも話したんですけど、私達は見る事も出来ないのかしら？」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
『ちゃんと準備しています・・映写室を作ってますから、そこでお楽しみ下さい』と二ヤで返した。
「それは素敵ですね・・楽しみですよ」とユリさんが笑顔で返してくれた。

「今回は間接的なヒントが多すぎて、一度自分で整理しないと」とハルカがウルで言った。
「確かに・・マリの詩だけでも、難解なのに」とカスミがウルで言って、女性達で盛り上がっていた。

私はマリアを抱いて、４人娘と遊んでいた。
８時少し前にリリーを連れて、ユリカの店に行った。
ユリカの店の女性達が、嬉しそうにリリーを迎えた。

８時少し過ぎに、１６名の予約の団体が入った。
リリーは笑顔で挨拶して、お偉いさんの真中に入った。
小夜子が紹介して、リリーが面白く自己紹介して、２人の漫才で幕を開けた。
私は想像以上のリリーのスナックでの接客を見て、リリーに笑顔でサインを送って店を出た。
ユリカがエレベーターまで送ってくれて、ユリカの嬉しそうな笑顔に手を振って別れた。

私は残りの４店を巡回して、翌日の特訓の話を繋いだ。
ホノカとセリカの反応が強く、セリカの流星の流れの速さに驚いていた。

ＰＧも順調に１２月のラストスパートに入り、満席状態を確保して終了した。
私は満開蘭と家路に着いて、腕を組んで一番街を歩いていた。

「正月・・日南に帰るかどうか、迷ってるの」と蘭が急に静かなトーンで言った。
『それなのか～・・何が有ったの？』と意識して笑顔で聞いた。
「兄貴がね・・珍しく、東京から帰省するのよ・・私と兄貴は、弟の事で確執があるの」と前を見て言った。
『東京にいるんだね、お兄さん・・蘭が決めれば良いよ、俺はそれに従うよ』と笑顔で返した。

「私一人の事なら良いんだけど・・あなたは好きなタイプじゃない

のよ」と私を見て言った。
『そうなの・・俺は大丈夫だよ、営業と思ってやるから』と二ヤで返した。
「そうよね・・あなたはそれが出来るけど、父さんは出来ないから・・母さんが板挟みで大変なのよ」と蘭が少し微笑んだ。

『なら、帰ろうよ・・そうしないと、蘭母さんが大変でしょ。
蘭が母さんをフォローして、俺がオヤジの相手をするよ。
それにね・・ハルカの姉さんも、帰ってくるんだって。
蘭の実家に、暇なら遊びにおいでって誘っといたよ。
出来れば・・何も言わずに、お姉さんも連れてくる作戦を練ってる。
まぁ・・俺はハルカのオヤジにも貸しがあるからね、協力してもらうよ。
蘭父さんも、蘭母さんも会いたいでしょ・・だから新年祝いでね。
お兄さんとの折り合いが悪いなら、シズカも誘って、オヤジの気分を晴らそう。
俺の作戦はそんなとこ・・結論は蘭に任せるよ』

私は腕に力を込める蘭に、笑顔で言った。

「了解・・さすが策略家だね、ハルカにはお正月話すよ。
ユリさんとマダムと松さんには、明日でも話すね。
明日はどうするの？・・沙紀ちゃんの絵は包装したよ。
明日の夕方退院でしょ・・持って行ってくれる？」

蘭が満開に戻り笑顔で言った。

『了解・・渡しとくよ、沙紀は喜ぶだろうね。
それと寄付のことだけど、どこにも決めてないなら。

病院の掲示板に、ワクチン援助のポスターが有ったよ。
アフリカとかの子供用のワクチンだって、少しのお金でかなり救えるみたい。
まだ決めてないなら、選択肢に入れといてね』

私は蘭の瞳を見ながら、笑顔で言ってタクシーを止めた。
強い波動が寄付の賛成をしてるようで、私は笑顔でタクシーに乗った。

「よし・・明日でも、五天女に話して決めるね。
それと・・来年早々の1大イベントを発表します。
来年の1月中旬には、引越しをする事にしました。
勝也父さんに探してもらって、あなたの校区内で美由紀の家の通り道。
そして夜町も近くて、家賃は少し上がるけど・・タクシー代考えると得だし。
私も3DKのマンションに昇格します、なんとエレベーターで5階に上がるのよ。
ゲストルームも欲しいし、ユリカ姉さんみたいに・・それに病院も近いから。
お互いの家のお泊まり合いも出来るし、若手が体調悪い時も対応出来るし。
そういう事なので・・引越しの時はよろしく、頑張ってね」

蘭は一気に二ヤで言って、私の反応を見ていた、嬉しそうな波動が来ていた。

『素敵だね～・・蘭も朝が少しゆっくりで良いし。
俺も校区内の方が、堂々と出来るから・・嬉しいよ。
なんと言っても・・夜街や病院まで、歩いて行けるのが良いよね。

だからと言って、飲み過ぎないようにね』

私も蘭の提案が嬉しくて、笑顔で返した。
アパートに着いて、蘭を抱き上げて、ご機嫌蘭と添い寝した。

翌日は寒かった、私は朝食を蘭と食べて、満開蘭を見送った。
朝の仕事を済ませて、日記を書いてバスで街に出た。
クリスマスの追い込みの、デパートの前を通って、カスミを覗いて一番街に入った。

「止まれ・・止まらないと、撃つ」と後ろから声がした。
私は立ち止まり振り向いた、シズカと恭子が二ヤで立っていた。

『お2人お揃いで・・何か危ない事だな』と二ヤで言った。
「午前中お買い物して、午後から特訓なんでしょ？」と恭子が二ヤで返してきた。
『来るの！・・・特訓の必要は無いでしょ、特に恭子は』と少し驚いて返した。
「まぁね・・でもトレーニングになるんでしょ」と二ヤ継続で返してきた、私は笑顔で頷いた。

「小僧・・私等2人に、クリスマスプレゼントで・・ルージュを買って」とシズカに右腕を組まれ、恭子に左腕を組まれた。
私はウルウルを出して、引っ張られて靴屋の前に連行された。
蘭がそれを目敏く見つけて、二ヤで表に出てきた。

「蘭姉さん・・素敵な弟に、クリスマスプレゼントを買って貰いま～す」と恭子が笑顔で言って。
「それで、どんな状況でしょう？・・・小僧の経済状態」とシズカが二ヤで言った。

「遠慮は要らないわ・・昨日、ジンからボーナスが出てるから」と蘭が満開で微笑んだ。
「了解です・・少しお借りしま～す」とシズカが二ヤ返して、デパートに引きずられた。
私は少し大人びたルージュを2本買わされ、恭子に教えてもらって。中1トリオ用の、少し色の強いリップを3本買った。

「早く社会に出ると、何かと大変だね～」とシズカが二ヤで言って。
「さぁ・・ユリカ姉さんのお店に行こう、準備の手伝いをするから」と恭子が二ヤで言って腕を組んだ。
ユリカの嬉しそうな波動が来て、私はウルで2人に腕を組まれた。
私は拉致されたまま、準備をしてる夜街関係者に、二ヤで見られて歩いていた。
ユリカの店に着くと、ユリカが爽やか笑顔で待っていた。
先に店の掃除を4人でして、シズカと恭子が楽しそうにグラスを洗っていた。

準備が終了して、４人で陽の当たるＢＯＸに座ってジュースを飲んでいた。
「蘭も凄いよね～・・あの行動力」とユリカが爽やか笑顔で言って、引越しの話を2人にしていた。
「ラッキー・・何の気兼ねも無い、家出場所が出来たね」とシズカが二ヤで恭子に言って。
「私等でも、こんなに嬉しいんだから・・美由紀がどれ程喜ぶのやら」と恭子が笑顔で返した。
『恭子は家出なんかしないだろ、豊兄さんの場所から』と笑顔で言った。

「それは分からないよ～・・まぁ、あんたには分からない・・豊を完璧だと思ってるからね」と恭子が二ヤで返してきた。
「恭子ちゃんの感じる、豊君の未熟な部分って・・どんな事なの？」とユリカが笑顔で聞いた。

「そうですね・・一番が、自分を否定し過ぎる傾向ですね。
今はそれで良いですけど、近い将来・・父親になった時が心配です。
子供に対しては、自分は間違ってるなんて言ってほしくない。
堂々と生きて欲しいんです・・その私の想いに対する1つの答えが。
あの井戸掘りの提案だと思います・・豊も小僧も自分を許したいんです。
自分を許せない意味は、全く違いますが。
小僧はご存知の通り、何も出来なかった事でそうなっています。
今まで見送った仲間に対して・・ずっとそれを抱えています。
でも小僧はやめない・・どんなに後悔しても、どんなに辛くても。
又同じ喪失感を味わうとしても、新たなる関係を構築します。
豊は小僧に対して、その部分・・やめないし諦めない。
そこを一番好きなんでしょうね、その部分に憧れてると思います。
豊が許したい自分とは、暴力的に他人を傷つけた事に対してです。
どんな理由が有るにせよ、豊はその行為に関して・・自分を正当化しません。
確かに暴力は正当化できる行為じゃないし、それでしか解決できないだけです。
豊はその結論に辿り着きましたね、小僧がそう言ったんですよね。
アマリ君に対してそう言った、豊はその言葉を聞いていたんです。
俺に言われたと思ったよ・・小僧は本気で言ったし、本気で喧嘩を売ったよ。
豊が私に、そう話してくれました・・その時、少し変化した豊を

感じました。
私は豊に・・正当化して欲しいなんて思わない。
でも・・自分の心で決めて実行した事を、否定的な話だけにして欲しくない。
父親になった豊には、それを望みます・・勝也父さんのレベルを。
正当化もしないけど、否定もしない・・自分の生き方はこれだと示す。
最もコアで純粋な部分で、子供と接して欲しいんです。
そうしないと、私達の子供は気付いてしまう・・幼くして、否定的な父親を。
最強の伝達者が側にいるんですから、その伝達者がどれほど愛情を注ぐのか。
それだけは確信的に感じます・・全てを注ぎ込んでしまうだろうと。
豊の子供に対しては、あの5人娘と同じでしょうから。
だから私はその部分だけを心配しています・・それが豊の未熟な部分です」

恭子は珍しく真剣に、自分に問いかけるように言葉にした。
ユリカは嬉しそうな微笑を向けて聞いていた、シズカも笑顔だった。

「確かに・・豊君には、そう言う部分が強いよね～。
多分・・あの時からだね、リヤカー事件の時の警察官との事から。
自分はこんな解決方法しか出来ない、そう強く感じたんだよね。
だから薬物事件が終わって、当事者が自傷の女神だって聞いて。
あの時に言ったよね・・豊君が、俺は小僧に問われてるんだって。
どう解決するのか見せろと、問われてると感じたって。
今回の薬物事件を、小僧が先に聞いてたら・・どんな行動を取ったのか。
それが知りたかった・・そう言ってたよね、真剣だったよ。

豊君も小僧も、他人の評価を全く気にしない。
でも互いの評価を重んじるよね・・小僧は常に、豊君ならどうするか。
それが行動の基本だし、それが勝也の教えでもある。
そして最近の豊君も同じだよね、小僧ならどうするのか？
それを考えてるよね・・今回のアマリ君との件も、そうだったよ。
小僧はキチンと理由を提示して、勝負を挑んだと言ったよね。
だからこそ、あのアマリ君が・・買わなかったって。
豊君は考え方が変化してきたよ、私は助手として感じてる。
基本が変化してきた・・機械に対する方向性も、自分に対する方向性もね。
恭子・・豊なら大丈夫だよ、今まで一度だって、裏切られた事は無いよね。
私達の過度な期待を、裏切った事など無い・・それ程の高みに居る。
私は今まで通り、期待し続けるよ・・憧れの男の生き方を。
それが私に許される、唯一の愛情表現なんだから」

シズカの強い言葉で、恭子も笑顔になった。
ユリカも優しい笑顔で、恭子を見て頷いた。

私は自分の未熟さが恥ずかしかった、豊に対し申し訳なかった。

その場所まで行こう・・崖を這い上がり、強風の吹く豊の頂まで。

そう自分に誓っていた、冬の暖かい陽射しに包まれながら・・。

【冬物語・・リンダの試験？】

大切な出会いが、大切な別れを作り出す。
寂しさを抱えて、思い出を抱きしめよう・・次の出会いの為に。

シズカの言葉で、恭子も嬉しそうに笑っていた。
私は５年後に聞いた、恭子はやはり重圧を感じていたんだと。
１６歳で結婚を決意して、豊にそれを背負わせた事を。
それで良いのかと、自問自答を繰り返していたと、楽しそうな笑顔で教えてくれた。

「素敵だよ・・あなた達の愛情も友情も」とユリカが微笑んだ。
「ありがとうございます、ユリカ姉さんに言われると嬉しいです」と恭子が笑顔で返した。

シズカも恭子も出前が良いと言ったので、名物海鮮丼をユリカが注文した。

「ねぇ、シズカ・・シズカの感じる豊の変化って、どんな感じなの？」と恭子が笑顔で聞いた。

「ん～～・・上手くは言えないのよね、優先順位が変わった感じなのよ。
心にあるじゃない、自分が優先する順番・・その２番目が変わった感じ。
例えば仕事で言えば・・自動車整備にしろ、違法改造にしろ。
安全性が１番、もちろんこれは変わらないのよね。
でも今までの豊君は、客の要求が２番だった感じなのよ。
パワーが欲しいと言われれば、エンジンが壊れる覚悟をしても応

えてた。
豊君はまだ免許も無いし、整備も現場で覚えたのよね・・だから感覚的なのよ。
そのセンスが凄いんだけど、裏付けが自分の感覚だから、限界を恐れるのよね。
だから私が助手になれるの、私はまず計算で求めるからね。
私は逆に、自分の計算の成否が知りたいの、限界はここだと出た計算値の合否がね。
でもね、エンジンそのものにも部品にも、製品としての精度の誤差が有るのよ。
そして乗り手の運転技術にも、かなりのレベル差があるよね。
今までの豊君は、依頼者の安全が犯されないのであれば、要求に応えてきた。
それにより、エンジンが壊れても仕方がないと思っていた。
でも最近は変わってきたの、お客の運転レベルを考慮しだした。
お客に踏み止まらせる話をしてるのよ、段階を踏んで行こうとね。
今の現状で、エンジンのパワーの制御が出来るのは、ドライバーだけなの。
エンジンは要求に応えるだけ、乗り手の意志を全て受け入れる。
今話題のターボ装着を望み、リッチな客が何人かいる。
装着は出来るの、装着だけならそんなに難しい事じゃない。
でも制御が出来ない、発生するパワーが大きすぎるからね。
それを制御してきたのよ、メーカーとしてのプライドで・・ドイツ人が。
物作りの先駆者のプライドとして、世界中に車の未来を提示してきた。
それがポルシェ９１１ターボなの、私はあのＲＲのレイアウトが嫌いなんだけど。
バランスが悪すぎるから・・後ろのタイヤを駆動して、重量物を全て後ろに積む。

確かに後輪は路面を捉えるでしょうね・・でも前輪の安定感は無くなる。
それが最も大切な、安全を犯す行為だと感じるからね。
でも・・そのターボ制御技術は素晴らしいのよ、人間に制御させない。
人間の感覚を信じない、だから制御を自分達で作り出した。
それに近い感じなの・・最近の豊君は、制御の方に興味を持ってる。
その証が・・美由紀の３号機、ＹＵＴＡＫＡ?に込められている。
美由紀が自分で気を付けている、制御してる部分を、車椅子にさせようとしてる。
豊君は・・自分の力の制御方法を、変えようとしてるのよ。
今までのように、単に避けるのでなく・・暴力的でない解決を目指してる。
自分の制御を研究してる感じだよ・・その基本は、なぜと言う問いかけ。
自分がなぜ、大きな体で、強い力で産まれてきたのか。
その問いかけを、次の段階に入れたよ・・今は模索中だろうね。
だから最近、会話が増えたでしょ・・やると決めたら、絶対に曲げない。
豊がいよいよ走り出した・・次の段階を見据えてね」

シズカは流れるような言葉で、自分の感想を語った。

「さすがシズカちゃんだね・・あの話題の９１１は、そんな車なの？」とユリカが微笑んだ。
「私としては・・最上級難解車ですね」とシズカが二ヤで返した。
「ほらね・・エースが私の次の車は、９１１ターボが良いよって言ってるのよ」とユリカが私に二ヤで言った。

「悪い奴ですね～・・絶対に自分が乗ろうと思ってますよ。
その魅力は好きな人間には魔力ですから、見ただけで魅入られる感じです。
小僧のような、普通と違う価値観の人間には麻薬です。
私もレイアウト以外は、大好きですね・・魅了されます。
性能も当然だけど、そのスタイル・・止まってるだけで絵になるんです。
圧倒的な異質性があります、雰囲気で表現すると・・集中してるマリですね。
９１１は小さい車なんですよ、内装も全然凝っていません。
それでも中古の家が買えるほどの高級車です・・それが良いんですよね。
これだけ高い金を払ってでも、乗りたい・・そんな奴だけが乗れ。
そう強く主張してる感じなんです、国産には絶対に無い考えですよね。
日本車では永遠に作られない、そう感じさせるドイツの魂です。
同じ敗戦国でも、そこが違いますね・・確かに日本も豊かに成ってるけど。
物を作る人間には、閉鎖的な環境なんです・・売れる事が１番のような。
発想は有っても主張する場所が無い、今でもそうなんだろうと感じます。
私はポルシェのエンジン技術者は、小躍りしたと思います。
あの９１１ターボを販売すると聞いて、飛び上がって抱き合ったでしょう。
それ程の熱があるんです・・だからその姿を見ただけで魅了される。
好きな人間には分かるんです、内側の熱も感じますから」
シズカは笑顔で言った、私は二ヤで返していた。

「シズカは結局・・好きなの？嫌いなの？」と恭子がシズカに二ヤで言った。
「外見も中身も好きだけど、生き方が嫌い・・だから恋愛対象として見れないのよ」とシズカが二ヤで返した。
「それは分かり易い表現ね」とユリカが笑顔で言って、３人で笑っていた。

海鮮丼が来て４人で食べて、病院に沙紀を見送りに行った。
私は包装された、退院祝いの絵を持って歩いていた。
恭子が由美子に会えるのが嬉しいようで、テンションが高かった。

私は病院に着いて記名した、沙紀のベッドに行くとマリが来ていた。
私は沙紀に包装したままの絵を見せて、母親に渡した。
沙紀はその包装された絵を見ていた、小刻みに震えてるようだった。

「本当にありがとう・・他の皆さんには、忘年会の時にお礼を言いますね」と沙紀の母親が嬉しそうに言った。
『リンダの提案で決めました、全員で１つの物を贈ります・・沙紀の将来に期待して』と私も笑顔で返して。
ミホのベッドに行った、ミホは恭子をと手を繋ぎ、笑顔で話す恭子を見ていた。

私はミホの額に手を当てて、温度のチェックをした。
シズカが来たので、恭子を連れて由美子の部屋に向かった。

「由美子は、体に力が有るんだよね？」と恭子が真顔で聞いた。
『うん、大丈夫・・いきなり全開恭子でいいよ』と二ヤで返して部屋に入った。
私は祖母に恭子を紹介して、北斗と挨拶を交わした。
そして恭子を連れて、由美子の横まで行って、恭子を促した。

恭子は由美子を見て、何かを感じたんだろう、いきなり全開モードに入った。
恭子の全開は、手も握らずに語りかけるのだ。

「由美子・・な～んだ、元気じゃない。
少し甘えてるんじゃないよね～・・動いたら、勉強しないといけないし。
運動会もマラソン大会もあるしね・・水泳もあるよ～。
でもね、由美子・・楽しいんだよ、そりゃ～辛い事や、悲しい事も有るけど。
でも楽しいんだよ・・1つでも楽しいが有れば、それで良いの。
私はそう思ってるの、1つの楽しいで・・全てが許せるのよ。
感じようね、由美子・・ゆっくりで良いんだよ、由美子には時間が有る。
ヒトミにはそれが無かった・・でもね、ヒトミは楽しいが有ったんだよ。
私はそれを知ってるの、私はヒトミの恋愛相談担当だったから。
だから私は由美子が見たい、由美子が楽しそうに笑う顔が。
一人で歩く姿が・・そして、誰かを好きになるところが。
誰かを好きになって、悩んだり苦しんだりする顔も見たいのよ。
由美子・・大丈夫だよ、由美子ならやれる。
私は恭子・・ヒトミの恋愛の先生です・・だから由美子の恋愛の先生です。
由美子、だから私に楽しいを頂戴ね・・由美子の恋愛相談が、私の楽しいだよ。
由美子に会いに、何度も来るからね・・そして私は分かるから。
由美子が困ったり、迷ったりしたら・・私は分かるんだからね。
その時は飛んで来るよ・・私の大切な教え子、由美子の場所に」

恭子は由美子の顔を覗き込みながら、一気に想いを伝えた。
私は初めて感じていた、美由紀の言った爆撃機の意味を。
恭子の背中は力に溢れていた、そしてその想いに熱があった。
その時由美子が左手を上げた、そこに恭子の頬が有った。
由美子の左手は恭子の頬に触れたまま、動きが止まっていた。
「了解、由美子・・今度、豊との馴初めを話してあげるよ」と恭子が二ヤで言って、由美子の手を握った。
「うん・・そうだよ、ヒトミは楽しい事が沢山有ったんだよ」と恭子は由美子を見ながら言った。
北斗と祖母が真剣な表情で恭子を見ていた、その瞳に驚きと感謝が溢れていた。
「了解、約束するよ・・じゃあ少しお休み、由美子」と恭子は優しく微笑んで、由美子の左手を胸の上に置いた。
私は充実感漂う恭子と、笑顔の北斗と祖母に頭を下げて病室を出た。
恭子は病院の廊下で鼻歌交じりに歩いていた、私は恭子の嬉しそうな横顔を見ていた。
その柔軟な精神力と、豊の教えを受け継ぐ、自分に正直に生きる横顔を。
私は沙紀の部屋に行って、沙紀の荷物を母親の車に運んだ。
全てが運び終わり、私と沙紀を残して全員が部屋を出た。
私は沙紀の手を繋ぎ、ミホのベッドに行った。
ミホは沙紀を見てベッドを降りて、屈んで沙紀を抱きしめた。
沙紀も強くミホを抱いていた、２人は会話していると思っていた。

ミホが沙紀から体を離し、沙紀の肩に両手を置いて振り向かせた。
沙紀もそのまま振り向かずに、入口に歩き出した、私はミホに笑顔を送り沙紀と病室を出た。
そして沙紀を抱き上げて、由美子の部屋に入った。

沙紀の母親が北斗と祖母に挨拶をしていた、私は沙紀に由美子の手を握らせた。
沙紀と由美子は楽しそうに話していた、元気な由美子を感じて嬉しかった。

そして沙紀は涙の北斗に抱かれ、号泣する祖母に抱かれて、別れの挨拶をした。
私は沙紀を抱き上げて、沙紀に由美子をもう一度見せて、病室を出た。
沙紀の母親とナースステーションに行き、沙紀はナース全員に抱かれた。

沙紀は関わった、全ての医師とナースの絵を描いていた。
その感謝を全員が沙紀に伝えていた、最後に婦長が強く抱いて、私の元に連れて来た。

「沙紀に対しての、トータルもまだ出てないのよね？」と私に沙紀を渡しながら、婦長が微笑んだ。
『もちろんです・・沙紀がマリの世界に辿り着くまで』と笑顔で返して、母親とエレベーターに乗った。
沙紀は少し寂しそうで、私は意識して面白話をしていた。

病院の駐車場に、ユリカとシズカと恭子とマリの姿が見えた。
私は恭子の前に沙紀を降ろした、恭子は沙紀を優しく抱いていた。

そしてシズカもユリカも、沙紀を強く抱いて感謝を伝えた。
沙紀はマリの前に立った、マリは屈んで沙紀の目を見ていた。
「沙紀・・見えない、聞こえないは・・怖い事じゃないよ」とマリが言葉で言った。
沙紀はマリを見ながら、強く頷いた。
それを見てマリは沙紀を抱きしめた、沙紀も嬉しそうに抱かれていた。

私はシズカに持たせていた荷物を受け取って、沙紀の前に屈んだ。
そして自然に笑顔になって、沙紀の右手を握った。

『沙紀・・これは俺の作った、ドリームキャッチャーだよ。
アメリカのインディアンのお守りだよ、真中の石はマチルダのプレゼント。
ピラミッドの石だって、強い想いが入ってるんだよ。
沙紀のベッドの側にかけてね、俺はそれで沙紀を感じるからね。
沙紀の描いてくれた、ヒトミとミホの絵で、俺が沙紀を感じるように。
そしてこのチケットは、久美子の次のコンサートだよ。
沙紀をお迎えに行くからね、その夜はユリカの家にお泊りしようね。
沙紀・・本当にありがとう、俺は沙紀に会えなかったら。
まだミホとも上手くやれなかったし、由美子とも仲良くなれなかった。
全部沙紀が応援してくれたね・・俺は本当に嬉しかったよ。
沙紀・・大丈夫、遠くないよ・・俺はいつでも沙紀に会いに行くから。
楽しんでね、沙紀・・そしていつか学校に行こう。
その時は、最初の日は・・俺も一緒に行くからね。

またすぐに会えるよ・・ありがとう・・大好きだよ、沙紀』

私は淋しさより、喜びの方が強い事を感じながら、沙紀を抱きしめた。

沙紀は何も言えずに、高い温度だけで伝えてくれた。

私は笑顔で沙紀を抱き上げて、母親の車に乗せた。

全員笑顔で手を振って、沙紀の乗る車を見送った。

私はただ嬉しかった、沙紀が次の段階に踏み出したと思えて。

出会った時の沙紀の映像が流れた、私には忘れる事が出来ない、メモの絵画が蘇っていた。

『やっぱり・・沙紀の1番の作品は・・メモの絵画だよ』と青空に呟いた、ユリカの波動が優しかった。

「まだ感傷に浸るな・・これからが勝負だろ」とマリが私の横で二ヤで言った。

『そうだね、マリ・・俺も次の段階に行くよ・・バス停でヒントを貰ったから』と二ヤで返した。

「やっぱり、何か隠してる・・私に隠し事をしてるの！・・素敵だよ、小僧」とマリが強い同調で言った。

『何も無いよ・・ただ、自分の間違えに気付いただけだよ』と返してマリと歩き出した。

私達の前をユリカとシズカと恭子が、笑顔で話しながら歩いていた。

私はマリに手を掴まれ、手を繋いで歩いていた、マリはそれで感じようとしていた。

マリは途中で諦めて、私にウルを出した、私は二ヤで応戦していた。

ＰＧに戻ると、フロアーに女性達が集まって盛り上がっていた。
絨毯が敷かれて、その上に円になって座って話していた。
共同体のほぼ全ての女性と、幻海から９名が来ていた。
中１トリオも揃い、エミも美由紀の横に座っていた。
私はマリと並んで立って見ていた、マリもその人数を見て笑顔が出ていた。
五天女も揃い、ワクワク顔で私を見ていた。

『それでは、特訓を開始します・・ダイバースーツのイメージは入りましたね。
私の作った映像ですから、この場所には戻されません。
戻される場所も確保しています、第一の難関を突破する為です。
最初の侵入のイメージは、橘橋にして下さい。
市役所の前に潜水艦が浮いています、全員が入れると思います。
経験者のユリカは管制室に来て、女性達が精神的に頼るといけないから。
リリーとカレンとシオンもだね・・美由紀だけは入って、内容を伝えて。
シズカの作った、酸素吸引ガムと無線機を・・美由紀が用意して。
総司令艦長は大ママ、両隣の副艦長がユリさんとミチル。
操縦がネネとリョウで、ナビ席にリアンが入って。
海図席がミコト、レーダー席が千鶴で行こう。
シズカは潜水艦の確認をしておいて、そして終了後、改良のアドバイスをしてね。
何か質問は有りますか？・・何でもどうぞ』

私は全員に向かい、笑顔で言った。

「深海を目指して、どうすれば良いの？」とミコトが微笑んだ。

『俺の作った深海都市に入れれば、そこに答えが有るよ・・最初は辿り着く事だね』と笑顔で返した。
「通信は・・マリちゃんとエースとも出来るの？」とセリカがワクワク流星で微笑んだ。

『当然出来るよ・・そして俺とマリは、全ての行動をチェック出来ます。
前回の6人、ユリカ・蘭・リリー・カレン・シオン・美由紀で潜って。
第一関門を突破したのは、美由紀だけでした・・その事実を感じてね。
聡明なユリカでも、心に従う蘭でも・・出来なかった。
その難しさを体感して欲しいいんだ・・それが出来れば、次が有る。
リンダが試験を侵入させてる、その試験に合格しなければ。
俺は今回の沙紀の世界は諦めて、自分で時間をかけて外す事にしてる。
中途半端な気持ちで入ったらいけない、リンダの試験がそう強く言ってる。
そう感じてるからね・・まずは第一段階、それを感じて欲しい。
トイレは大丈夫かな？・・エミは俺の横に来て、俺とマリの間に入って。
それじゃあ始めよう、全員集中して・・橘橋をイメージしてね』

私は笑顔で言って、女性達の頷くのを見て座った。
エミが笑顔で歩み寄り、私とマリの間に座った。
私はエミの温度の変化をチェックしたかったのだ、エミは大丈夫だと思っても、まだ7歳だったから。

『じゃあ・・マリが瞳を閉じたら、入ってみて・・待ってるね』と

二ヤで言って、私は瞳を閉じた。

私は映像を出して、潜水艦をチェックした。
ピンクの可愛い色で塗装されて、大きな物に変更されていた。
私は管制室に入り、後ろの座席の数を見ると、１００席は有ったのでニヤを出した。
管制室は小さな映画館のような感じになっていて、私がモニターの電源を入れていると。
ユリカとマリが笑顔で入ってきて、リリーとカレンも入ってきた。

「素敵になったね～・・この映画は楽しいからね～」とユリカが爽やか二ヤで言って。
「さて・・夕食を賭けて、誰が１回でクリアー出来るのか賭けましょう」とリリーが笑顔で言って。

「エースが行けそうだと言った・・シズカちゃん、エミちゃん。
それにミコト姉さんと小夜子姉さん、それにホノカ姉さん。
そして青猫なら、ヨーコ・・そして恭子ちゃんも外して。
それに五天女も外しましょう、それ以外での選択でやりましょう」

カレンが笑顔で言って、全員が楽しそうな笑顔で頷いた。

『待って・・マリには負けた人がご馳走しよう、マリは１００％勝つんだから』と私はマリに二ヤで言った。
「そうよね・・参考になるから、マリちゃんは勝利という事で・・潜水艦に乗った段階で指名しましょう」とユリカが爽やか笑顔で言った。
全員で笑顔で頷いてモニターを見た、そして爆笑が起こった。

ヨーコが最初に現れて、その進化型を見せてくれたのだ。

迷い無くそれにしたのだろう、青猫の着ぐるみの愛らしいヨーコが、笑顔で立っていた。

「やっぱり私が1番ね、完成してきたよ・・素敵だろ～、小僧」とヨーコが潜水艦を見ながら無線で言った。

『うん・・完成度が上がってるね、可愛いよ、ヨーコ』と返した。

「可愛いよ、ヨーコ・・ヨーコも対象外になったよ」とユリカが笑顔で言った。

「間違いなく、1回でクリアーしますね～」とリリーが二ヤで言って。

「私、ヨーコちゃんに賭けようと思ってたのに～」とカレンが二ヤで言った。

「楽しんでますね～・・私もワクワクですけど」とヨーコが言った時にヨーコの後ろに現れた。

真赤なウェットスーツの、銀河の3人が現れて爆笑した。

「ヨーコ・・ありがとう、青猫がいるだけで安心できるよ」とホノカが華麗に微笑んで。

「確かにね～・・しかし完成度を上げてくるね～」とカスミが不敵で言って。

「可愛いよ、ヨーコ・・でもその素材、水を吸収しそうだから、溺れないでね」とリョウが魔性二ヤで言った。

「気を付けます～・・それにしても、お3人さん・・そのスタイルはリアルですか？」とヨーコが二ヤで返した。

「私のはリアルだよ、いじる箇所は無いから・・後の2人は、怪しいね～」とカスミが不敵全開で言って。

「真実の姿よ・・蘭姉さんみたいに、足してないよ」とホノカが笑顔で返して。

「そして、何も引いてないよ・・真実の姿だよ」とリョウが魔性二

ヤで言って、４人で河川敷に歩いていた。
銀河の3人の背中には、【銀河の奇跡】と漢字で大きく入っていた。
河川敷には、かなりの数の女性が集まり始めた。
店毎にデザインを揃えていて、全店可愛い感じだった。
銀河と四季が別に揃えて、限界ファイブも中1トリオも揃えていた。
限界ファイブはシズカがイメージしたのだろう、まるでイルカの輝きのようだった。
近未来的なデザインで、その素材は光沢の有る、皮膚に近い感じだったのだ。
「限界ファイブも対象外だね・・さすがシズカ、あのスーツだけで適応しそうだよ」とユリカが笑顔で言って、全員が笑顔で頷いた。
「よし・・店毎の人数を確認して、責任者が報告して・・ユリカの店は、小夜子よろしく・・幻海はアイコだね」と大ママが言った。
「はい・・全員揃ってます」と小夜子が笑顔で返した。
「了解です・・幻海もＯＫです」とアイコが嬉しそうに微笑んだ。
人数確認も順調に終わり、全員笑顔で潜水艦に乗り込んだ。
操縦席の真ん中にネネが座り、右の席にリョウが座った。
その後ろの3席に、大ママを挟んで、ユリさんとミチルが座り。
リアンが極炎笑顔でナビ席に座って、モニターを見ていた。
「さぁ、席も決まったね・・指名しましょう、シオンから・・歳の若い順で良いよ・・当然、エースは最後だよ」とユリカが爽やか二ヤで言った。

「シオンはリョウ姉さんと思ってたけど、操縦席は厳しいと思うから・・セリカちゃんでお願いします」とシオンがニコちゃんで言った。

「そっか～・・確かに操縦席は厳しいよね・・私はやはり、その泳力で・・ミサキちゃんにします」とカレンが笑顔で言って。

「か～、カレンに取られた・・じゃあ私は、その精神力を一番知ってるから・・アイコ姉さんにします」とリリーが笑顔で言った。

「そうだよね～・・その3人は期待できるよね～・・私はその乗り越えた姿が、美由紀に近いので・・秀美ちゃんにするわ」とユリカが爽やか笑顔で言った。

私はその言葉で秀美を見た、左手が綺麗に存在していた。

『なるほどね～・・俺は決まってるよ、その精神力は負けない・・俺はリョウに賭ける』と笑顔で言った。

「ほほ～・・どこまでも、銀河を信じるのか～」とリリーが二ヤで言って。

「確かに・・リョウ姉さんは、克服してそうなんだよね～」とカレンが微笑んで、全員でモニターを見た。

「シズカ・・何か注意事項は有るかな？」と大ママが笑顔で聞いた、前方のモニターに大ママとシズカが映っていた。

「小僧は今回、何の意図も策略も無いでしょうから・・楽しめば良いと思います」とシズカが笑顔で返した。

「了解・・そうだよね、私達にも入って良いって言ったんだから・・策略は無いよね」と大ママが二ヤで返して。

「それでは・・海に進路を取る、リアンよろしく」と大ママが笑顔で言った。
「了解・・海を目指します、発進します」とリアンが笑顔で返して、ネネを見た。
ネネとリョウも笑顔で頷いて、動力をゆっくりと伝えた。
私達はゆっくりと進みだした、ピンクの可愛い潜水艦を見ていた。
「さすがシズカちゃんです～・・完璧に準備出来てますね～」とシオンがニコちゃんで言って。
「多分・・第一関門は理解して、完璧なイメージ作りをしてるね・・だから楽しもうって、ヒントを出したんだ」とリリーが笑顔で言った。

「エミは出来そうな気がする・・そんな瞳をしてる」とカレンが呟いた。
「7歳にして、恐怖も迷いも無い・・エミは自分で成ろうとしてる、選ばれし者に」とマリが明瞭な同調の言葉で言った。
「選ばれし者に、自分で成る・・自らが選択して、それになる・・まさにエースです～」とシオンがニコちゃんで言った。

『エミはレベルが違うよ・・俺の7歳の頃は、思い出したくないよ』とウルで返した。
「7歳をリアルに思い出せるのね・・さすが13歳」とユリカが二ヤで言った。
『ユリカ・・7歳をリアルに思い出せないの？・・思い出が白黒だね』と二ヤで返した。
「思い出は、カラーでしょ・・どう考えても・・写真は・・白黒よ」と爽やかウルで返された。
ユリカの可愛い表情で、全員が笑っていた、ユリカの新しい一面が

出始めていた。

潜水艦は快晴の空の下、穏やかな海を目指していた。

行く手を遮る物は、何も無かった・・穏やかな波が迎えていた。

女性達のワクワク笑顔が、恐怖の表情に変わる時が近づいた。

どんなに強くイメージしても、動揺してしまう・・それが記憶。

記憶を制御しなければ、そうでなければ・・常識に敗北する。

常識とは・・それで作られている、人類の記憶で構成されているのだから・・。

【冬物語・・リンダの試験？】

自分で抑えてる部分は誰にでも有る、社会生活を営む為に。
異質な者は受け入れられない、好奇な視線の的になる。
だから隠してしまう、どんなに素晴らしい異質でも。

潜水艦の女性達はワクワク笑顔が咲いていて、幻海の女性だけ緊張していた。
潜水艦は波打ち際を抜けて、大海原に入って行った。

「シズカ・・目標地点は、どうやって探すのかな？」とリアンが笑顔で聞いた。
「千鶴姉さんの、レーダーに反応すると思いますよ・・奴はリアリティが好きですから」とシズカが笑顔で返した。

「そろそろ美由紀を締め上げて・・ゲロさせようか」とカスミが不敵で言って。
「カスミ、言葉が汚いよ・・買収しようよ、高級ルージュで落ちるから」とホノカが華麗に微笑んだ。
「美由紀・・落ちるのか？」とセリカが流星二ヤで聞くと。
「悩みます～・・非常に悩みます～」と美由紀がウルで答えて、女性達が笑っていた。

その時千鶴のレーダーが反応した、ピコーンと音が響いた。
「座標の反応有り、右３４度・・距離・・５８００ｍ」と千鶴が無線で言った。
「了解・・右３４度に進路をとる」と大ママが笑顔で言った。
「１０ｍ位、潜水した方が楽しめますよ・・お魚ちゃんで」と美由紀が笑顔言って。

「了解・・右３４度に、１０ｍ潜水して航行」とリアンが言った。
潜水艦が沈むと、そこには３０頭以上のイルカが、潜水艦の横を泳いでいた。
女性達笑顔が溢れて、その光景を窓から見ていた。
「今日は、イワシちゃんじゃないですね～・・設定が変わってます～」とシオンがニコちゃんで言った。
『海の中とかは、俺は生き物をイメージで入れてるだけだからね。
何がどう出てくるのかは、俺でも分からないよ。
だから一人で潜る時は、運なんだよ・・何に遭遇するかはね』
私はシオンに笑顔で言った、女性達が二ヤで頷いた。
「艦長・・前方から何か来ます、大きな黒い物体です」とリョウが前を見て言った。
「レーダーの反応は？」と大ママが慌てて聞いた。
「ありません・・反応無しです」と千鶴が返した。
「多分・・生物ですね、レーダーが探知出来ないなら」とシズカが二ヤで言った。
「生物なのか？・・かなりでかいよ～」とリアンが前を睨んで言った。
「あのキラキラ光ってるのは、何でしょうね？」とネネが真顔で言って。
「黒い物体消滅・・見えません」とリョウが報告した。
「速度を落とそう・・ゆりっくり航行」と大ママが言った。
「了解」とネネが答えて、速度を落とした。

「キラキラは小魚ですね・・イワシかアジか」とリアンが言って。
「凄い数ですね～・・美しいです」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
女性達がその姿に見入っていると、イルカ達が猛スピードでイワシの群れに突っ込んだ。
チームで追い込んで大きな塊にして、狩を始めた。

その時、急にイルカ達が潜水艦に向かってきた。
潜水艦の２０ｍ位前にイワシの大群がいた、そして下から大きな鯨が巨大な口を開けて上がって来た。
鯨と潜水艦の距離は１０ｍ無かった、潜水艦はその鯨の出した流れで大きく揺れた。
「面舵一杯・・避けるよ～」とリアンが叫んで。
「ウリャ～」とネネが叫んでハンドルを切った。

鯨は勢い良く口を開いたまま、海上に姿を現して、そのまま横に成りながら海に落ちた。
潜水艦は舵を切っていて、衝突は避けたが、大きな鯨の衝撃波で回転しながら流された。
船内は赤い警告ライトが点滅し、警報ブザーが鳴り響いた。

全員ベルトをしていたので、叩き付けられる事は無かった。
「冷静に・・動力オフ、そのまま待てば基本姿勢で止まります・・ハンドルも自由にして」とシズカが叫んだ。
ネネもリョウもハッとして、両手を離し、アクセルから足を降ろした。

その段階で、映写室の横の巨大プールに、女性の姿が１１人見えた。
幻海の女性が８人と、リアンの店の女性が１人、そしてハルカがウ

ルで浮いていた。

『お疲れ様です・・少し待ってて下さい、もうすぐ大勢がそこに来ます』と私はスピーカーで言った。

「エース・・あれは演出なの？」とハルカがウル継続で無線で言った。

『違うよ・・あれは自然の営みです』と無線で返した。

「ところでハルカ・・どこにいるんだ？」とカスミが全開不敵で無線で言って。

「今・・プールで泳いでま～す、カスミ姉さんも早く来てくださ～い」とハルカが無線で返した。

「プールに戻されるのね・・しかしハルカも、人魚で来れば良かったのに～」とホノカが無線で言って。

「しまった～・・その手があった」とハルカが返して、沢山の笑い声が無線で響いた。

「でも凄いな～・・アイコ姉さん、初めてなのに・・あの衝撃に耐えた」とセリカが微笑んだ。

「危なかったよ・・半分パニックだった」とアイコがウルで返した。

「さて・・船体も安定したね・・千鶴、目的地の座標は？」と大ママが笑顔で言った。

「右１４度・・距離・・４００ｍ！」と千鶴が驚いて言った。

「よし・・一度上昇しよう、それで目的地の確認をする」と大ママが言った。

潜水艦が浮上すると、その部分だけ海の色が違っていた、深さを示す濃紺だった。

「ＯＫ・・海上には何も無いね、じゃあ潜るよ・・全員、覚悟を決めな」と大ママが言って、女性達が頷いた。
「潜行する・・もう一度ベルト確認・・不測の事態に備える」とリアンが言って、全員が確認を始めた。

「ＯＫ・・ネネ、リョウ行くよ」とリアンが微笑んで、ネネとリョウも笑顔で頷いた。
潜水艦は潜航し始めた、私は手動で深度計の画面を、潜水艦の右のモニターに出した。
深度１０００ｍを超えても、私はＡボタンを押さなかった。

１５００を超えて、１８００に来た時に二ヤを出した。
『よし・・行ってみよう、深度２０００で耐えられるのか？』と笑顔で言った。
「悪い男だね～」とリリーが二ヤで言った。

私は１９５０ｍに来た時に、Ａボタンを押した。
船内の女性達は、緊張して暗い海中を見ていた。

その瞬間、前方の強化ガラスに、一本の線が走った。
女性達の緊張感が伝わってきた、その線に沿って何本もの線が走った。

「ベルトを外して！」とシズカが叫んだ時に、前方のガラスが吹き飛んで、海水が襲ってきた。
猛烈な勢いで船内を海水が満たした、美由紀はニヤを出していた。

船内に残ってたのは、大ママとユリさんとミチルに、北斗とアンナ。
リアンとミコトと千鶴に、ナギサとアイコと小夜子とネネ。
ホノカにリョウとセリカにミサキに、ＰＧの美冬とレン。

そして限界ファイブと、中1トリオ。
それにエミが笑顔で、久美子に抱かれていた。

『お見事・・美由紀、海中に潜水機を出すから・・全員外に出て、深海を目指して』と潜水艦の無線に言った。
「了解・・あれ？・・海中なのにちゃんと話せる、水も入ってこない」と美由紀が笑顔で言った。
「ほんとだ～・・凄いな～」とエミが笑顔で言った。

『さすがエミだね・・良く頑張ったよ』と私はエミの笑顔を見ながら言った。
「うん・・あれだけヒントが有るなら、出来るよ」とエミが笑顔で言って、美由紀と手を繋ぎハッチから海中に出た。

美由紀が全員に潜水機の説明をして、大ママとユリさんでエミを挟み潜って行った。
私達は呆然とプールに浮かぶ、女性達を二ヤで見ていた。

『お疲れ様です・・潜水艦が戻ります』とプールのスピーカーで言った。
「しまった～・・私だけ戻ってる～」とカスミがウルウルで言った。
「あ～・・美冬だけ成功してる～」と千秋がウルで言って、千春もウルを出した。

ウルウル顔の女性達の横に、ピンクの潜水艦が浮かび上がった。
私はシオンとカレンをプールサイドに向かわせた、シオンもカレンも二ヤでプールサイドを歩いた。

「しかし、リアンは当然としても・・操縦席のネネとリョウは凄いよ」とユリカが笑顔で言った。

「そうですよね～・・直接感じる場所ですから、音も衝撃も・・えっ！・・衝撃は無いよね？」とリリーが気付いて私を見た。
『有る訳ないでしょ・・エミが入るのに』と私は二ヤで返した。
「視覚的効果・・イメージだけの勝負だったのね」とユリカが爽やか二ヤで言った。

プールではシオンとカレンの説明を、女性達が真剣に聞いていた。
その時、プールにリョウとセリカが浮かんだ。

「あちゃ～・・セリカも映画、ジョーズを見たの？」とホノカがウルで言った。
「見ました～・・あの姿見たら、バババン・バババン・バババババンってＢＧＭが流れました～」と流星ウルで返した。

そして説明を聞いてる女性達の視線を感じて、２人で二ヤを出して潜った。
「了解・・とにかく、深海の街に着けば良いんだね・・サンキュ～」と言ってカスミが２人の後を追った。
女性達もそれで覚悟が出来たのか、全員が潜って行った。

「しかし、さすがシズカだったね・・あのベルトを外せって叫んだ事で、何人も助けたね」とユリカが爽やか笑顔で言った。

『そうだよね～・・あの状態で一番怖いのは、溺れる恐怖なんだよね。
それを助長するのが、ベルトを締めてるという事実なんだよ。
逃げれないって思ってしまう、その事でイメージの世界の設定を忘れる。
シズカは俺のやり方を感じて、即座に的確なヒントを出した。
あの言葉を聞いて、即座にベルトを見た人間は・・恐怖の映像を

見ない。
海水が流れ込んで来る、その衝撃の映像を見ない。
気付いたら、船内が海水で満たされてる・・それでクリアー出来る。
でもパニックのあの状況で、シズカの言葉に従える。
それだけで十分だよね・・第一段階は』

私は笑顔で返した、ユリカもリリーも笑顔で頷いた。
シオンとカレンが戻ってきて、笑顔でモニターに映る女性達を見ていた。

私の海中都市に最初に現れたのは、大ママとユリさんとミチルとエミだった。
その後ろを美由紀と秀美と沙織が到着して、美由紀がエレベーターを教えた。
美由紀はその場に残り、3台あるモニターの映像を二ヤで見ていた。

「極炎の女も、好奇心の塊だね～」とユリカが二ヤで言った。
モニターには、ウツボの入った穴を覗くリアンの姿が見えた。

「リアンって、怖い物がありません～・・良い男だけが、怖いって言ってます～」とシオンが言って笑った。
「素敵な人だよな～・・あの笑顔、まるで少女のようだよ」とリリーがリアンの映像に微笑んだ。
「リリーも近いわよ・・好奇心と少女の笑顔なら」とユリカがリリーに微笑んだ。
「確かに・・好奇心の塊です」とカレンもリリーに微笑んだ、リリーは照れた笑顔で返した。

「楽しかったよ～・・エース」とエミが笑顔で入ってきた。

私はエミを抱き上げて、笑顔のエミを笑顔で見ていた。
「素敵な映写室ですね～・・これは楽しめそう」とユリさんが薔薇で座って。
「ホノカ・・戻ったね、何に遭遇したの？」とミチルが二ヤで聞いた。
「ホノカ姉さんとセリカは、映画のジョーズを見てたらしくて・・サメに遭遇して戻ったみたいです」とカレンが笑顔で言った。
「なるほどね～・・イメージって、そういう部分も強いよね～」と大ママが微笑んだ。

私はモニターを見ながら、やはりリアンしかいないと思っていた。
『リアン・・映像が見たいんだ、少し寄り道を頼んで良いかな？』
私は無線で全員に聞こえるように言った。
「ウツボちゃんにも飽きたから、行ってやるよ」とリアンが極炎ニカで返してきた。

『ありがとう・・そこをもう少し潜って、俺の海中都市が見えるから。
見えたら左に向かって、下りながらで良いから。
その方向に有るんだ、リンダの試験が』と無線で言った。

「了解」とリアンが返してきた、それを聞いて美由紀が飛び込んだ。
「あっ！・・美由紀、やっぱり行ったよ～」と秀美が二ヤで言って。
「怖い奴だよね・・美由紀だけわ」と沙織が二ヤで返した。

リアンと美由紀は、合流して深海を進んでいた。
「有りました～・・凄いでかいよ、そして多いよ」と美由紀が言った。
映像には空母が映っていた、全く動かない人型ロボットが整列して

いた。

「こりゃ～・・・難解な試験だね～」とリアンが近付きながら言った。
『リアン・・周りを一周してみて、今はまだ入れないから』と返した。
「了解・・美由紀、行くよ」とリアンが美由紀に微笑んで、２人で海底都市の上を進んでいた。

「あれは・・あの空母の後ろ、あの場所は？」とリリーが言った。
空母の後ろにガラスのモニュメントがあり、その横から海上に透明の円柱が延びていた。
その円柱の中に、透明な螺旋の通路が見えていた。

「透明な螺旋の通路が、海上まで延びてます・・これが最終目的地ですね」と美由紀が真顔で言った。
「美由紀・・違うよ、その螺旋は・・別次元まで延びている」とマリが真顔で返した。
「別次元？」とユリカがマリを見た。

「はい・・多分、次元が違います・・私には何も分からない、その高さも距離も」とマリが返した。
「リンダは本気だって事だね・・それほど難しいんだね、沙紀の世界は」とリアンが極炎ニカで言った。

「リアン姉さん・・やっちゃいますか、７人いれば行けるかも」と後ろから恭子が言った。
私は映像にアップになった恭子を見て焦った、完全に【狂子】だったのだ。
恭子を囲んで、限界ファイブが二ヤで揃っていた。

『恭子・・駄目だよ、武器も人数も足りないよ』と私は無線で慌てて言った。
「心配するな、行かないよ」と恭子は二ヤで返してきた。
「シズカ・・あのロボットどう思う？」と久美子が聞いた。
「多分・・何かのきっかけでスイッチが入って、動くだろうね」とシズカが返した。
「動くよね～・・かなりの強敵だね」とマキが空母を見ていた。
「でも・・実際問題、あの空母の有るガラスの世界は・・空気が有るんでしょ？」とヨーコが笑顔で言った。

「多分・・あるだろうね、水が無いんだから」とシズカが笑顔で返した。
「シズカ・・空母って言うんだから、あの甲板は滑走路だよね？」とマキが聞いた。
「もちろん、滑走路だよ・・多分下の倉庫に、戦闘機がごっそり入ってる」とシズカが二ヤで返した。
「空中戦もあるのか！・・あの透明の円柱は、戦闘機の放出口でもあるのか～」とリアンが極炎で微笑んだ。
「そうでしょね・・リンダのメッセージなら、深海だけに囚われるな・・そんな感じですね」とシズカが笑顔で言って。

「小僧・・空母もいるぞ、私がすぐに設計するから。
それをイメージに入れろよ、出来るだけ早目に、リンダの試験をこなす。
そうしないと、対応は出来ないよ・・相当の提案がこの世界には有るね。
女性達は潜水艦と空母・・２つに分かれないといけない。
空母は戦闘機乗りだから、適正が必要だよ・・バランス感覚だね。
空中戦は怖いんだよ、上下左右の感覚が消えるからね。

とにかく戻るよ・・作戦を練り直そう」

シズカが笑顔で言って、リアンと限界ファイブが頷いて、戻ろうとした。

「どうしたの・・美由紀？」とヨーコが動かない美由紀を見ていた。

「この世界の全体図・・何かおかしい・・絶対変だ」と美由紀が呟いた。

「全体図がおかしい？・・どこがだよ、美由紀」とリアンが返した。

「ガラスで区切られてる、あの空母からこの円柱までは。
きちんとリアルに存在してます、でもあの円柱の後ろの空間。
海底だけの空間は、何も存在しないですよね。
でもあの海底の端を、ガラスで区切られてる場所を見てて下さい。
やっぱり・・動いてる・・この空間は動いてます。
もしかして・・あの空母は、あれじゃないのかな～？」

美由紀は最後に二ヤを出した、７人が空母を見ていた。

「だったら・・こっちも、それが要るのか～」とシズカが二ヤで言った。

「なるほど～・・異次元って、マリちゃんが言ったよね」とマキも二ヤで言って。

「私・・どれにしよう？・・やっぱり、モリ・ユキちゃんが良いな～」と恭子も二ヤで言って。

「えっ！・・もしかして、あの空母？」とリアンが驚いて聞いた。

「宇宙空母・・ＭＡＲＩなの！」とユリカが驚いて言った。

「そうだと思います・・確かに美由紀の言う通りですね」とシズカが返した。

「困った～・・ワクワクで、どうにかなりそう」とリリーが笑顔で言って。
「楽しむしかないですね・・結局リンダ姉さんも、それを言いたいんだ」とカレンも笑顔で言った。

女性達が続々と笑顔で帰ってきた、幻海の女性達も笑顔だった。
その時、現実の私の右腕と左腕を誰かが掴んだ、そして蘭と北斗が侵入してきた。

「もう、待ってられない・・楽しい事してるでしょ～」と蘭が満開で微笑んだ。
「凄い世界を作ったね～・・楽しい映画は終わったの？」と北斗が笑顔で言った。

『蘭は当然入れるけど・・北斗も凄いね～』と私は北斗に微笑んだ。
「うん・・右手をエース、左手でマリちゃんに触れてるからね」と北斗が二ヤで言った。
蘭と北斗はモニターを見ていた、カレンが状況の説明をしていた。

「空中戦が出来るのか？・・それも宇宙で」と北斗が二ヤで言った。
「素敵だ～・・夢がまた１つ叶う～」と蘭が満開で微笑んだ。

「戦闘機乗りを、誰が志願するのか・・楽しみだね～。
まぁ・・ユリとリアンと蘭は、決定事項だろうけど。
ユリ・・本質出てるよ、スピード狂の血が溢れてるよ」

北斗がユリさんに二ヤで言って、ユリさんも薔薇二ヤで返した。
限界ファイブがエレベーターで戻り、全員が管制室に戻った。

『お疲れ様でした・・艦長、どうでしたか？』と笑顔で聞いた。
「確かに、海中は難しいね、私は美由紀の凄さを感じたよ。
あの状況を、６人の時に乗り越えた・・凄い事だよね。
美由紀はその６人の中でも、一番年下だったんだよね。
今回クリアーした女性は、やはり人数的な安心感に助けられた。
そしてシズカの的確な指示、ベルトを外せと叫んだ指示があったし。
何より・・エミがいたから、私達はエミの状況を確認する事で乗り越えた。
あの時・・ガラスに線が走った時に、私達はエミを見たんだよ。
そしてエミに助けられたんだ・・エミの落ち着いた表情を見てね。
エミは前を見て、二ヤ二ヤ顔を出してたんだよ。
それで気付いた・・この状況が作戦だってね、それで自分に戻ったよ。
全員がもう一度、自分自身で確認しないといけないね。
美由紀やシズカやエミのように、一人の時に何があっても揺れないように」
大ママが最後に美由紀に微笑んだ、美由紀は照れた笑顔で返した。
『そうですね・・確かに今回はエミの存在と、シズカの指示が大きかった。
でも感動的だった、操縦席の３人がクリアーした事は。
リアンは当然でしょうけど、ネネとリョウの凄さが光りました。
ただ・・この２人は、戦闘機乗りを切望するでしょうね。
チームを２つに分けます・・潜水班と空母班に。
自己申告制にします・・ただし戦闘機乗りは、撃墜されたら戻されると思います。
あの透明の円柱が繋げてる世界、その２つに意味が有るんだと思

います。
リンダがマリに出した問題ですから、螺旋の系譜ですね。
マリが幼い頃から、ずっとこだわってる・・螺旋。
それを出題したリンダ・・全員で楽しんで、この難問を解きましょう。
多分・・上空、宇宙にも入口が有ると思います。
空中戦で勝利して辿り着く入口が・・上からと下から、宇宙と深海。
両方からあの透明の螺旋を進んで、両方から開かないといけない。
多分・・そんな感じだろうと、俺は推測します。
海底は・・あの人型ロボットとの地上戦でしょうね。
自己申告にします・・俺は今からシズカと相談して、空母と戦闘機を作ります。
映像を切りますね・・もう一度、あの透明の螺旋を見て、強く入れて下さい』

私は女性達の笑顔を見ながら、真顔で言った。
女性達はモニターに映る、透明の円柱の中を壁沿いに伸びる、螺旋の通路を見ていた。

『それでは・・映像を切ります』と笑顔で言って、映像を切った。
私が戻り瞳を開くと、女性達も瞳を開けて笑顔が溢れた。

私の側にシズカが来て、マリとＴＶルームに行った。
私はボーイさん達と片付をして、ＴＶルームに戻った。
ＰＧと派遣の女性に、ユリカとリアンが残っていた。

「小僧・・半々な感じで分かれるのが、ベストだと思うか？」とシズカが聞いた。

『まぁ、そうだろうけど・・好きな方に行けば良いよ。
多分・・大ママは潜水艦だろうし、ユリさんは空母だろうから。
ただ・・ユリさんは戦闘機に乗るだろうから、ミチルが空母で艦長。
ユリカは潜水艦だろうから、リアンが空母で良いだろうからね。
俺の要望としては・・北斗とアンナが、分かれて乗ってくれると助かる。
女性達の精神的な支えになるからね・・2人に、副艦長をお願いしたい。
そうすればリアンとユリカが、前線に出れるから。
この2人は最前線が好きだからね・・それで、後は自己申告で良いよ。
多分・・戦闘機乗りは少ないだろうけど』

私はシズカに笑顔で返した、北斗もアンナも笑顔で頷いた。

「私が空母に乗るよ・・ミチルを助けたいから、アンナが潜水艦で」と北斗がアンナと話して言った。
『了解です・・マキ、女性達の申告を聞いて纏めといて』とマキに笑顔で言った。
「了解・・私は当然、戦闘機よ」とマキが二ヤで言った。
『聞かなくても・・分かってるよ』と二ヤで返した。

「マキ・・当然私も戦闘機」と恭子が二ヤで言った。
「マキ・・私は言わなくて良いよね」と蘭も満開二ヤで言った。
「全く必要ありません・・もう書きました、ユリさんとリアン姉さんと蘭姉さんは」とマキが二ヤで返した。

マリが私の横に来て私を二ヤで見た、私も二ヤで返してマリの両手を握った。

『分かってるよ、マリ・・正直に話すよ。
俺はシオンから聞いたんだ、リンダの力は・・過去を読み取るんだよ。
俺の時は、リンダがブロンドの髪の毛を、俺に腕に巻いたんだ。
別れの時に空港で、その髪の毛を巻いたまま・・俺はリンダの背中を押した。
その時にリンダは俺の過去を見たらしい、俺の心に強く残ってる出来事を。
だからリンダは別れの時、飛行機の入り口まで出てきて、俺に叫んだんだ。
ミホを諦めるなって叫んだらしい・・俺には聞こえなかったけど。
それをシオンが、リンダの口の動きで読み取ってくれたんだ。
リンダは過去を読める、その力は・・多分、世界中の子供達が贈った。
リンダはマリの過去を見たんだよ、出会った時に・・マリと手を繋いだ時に。
あの同調で見たんだろうね・・だから螺旋の問題を出したんだ。
俺はあの透明の螺旋の通路を見て、確信したよ・・リンダの望みを。
マリ・・次の段階に踏み出せ・・リンダはそう言ってるよね。
そろそろ良いんじゃないのかな・・その覆い隠してる、ベールを脱ぎ捨てて。
マリ自身の望みに挑戦して・・言葉も文字も取り戻したよね。
でも・・そんな事は、ただ取り戻したにに過ぎない。
マリ・・進化型を見せろよ、何も恐れることは無い・・今は誰もいない。
マリを特別視する人間も、漠然と避ける人間も・・差別する人間もいない。
ベールを脱げ、マリ・・戦おう、マリ・・悪質なシナリオと。

もう制御できるだろ、あの強い力を・・姿無き奴が、恐れ続ける力を。
マリ・・マリは特別じゃない、そして異質な人間じゃない。
俺は出会ったよ・・異質の中の異質な者に、特別の中の特別に。
その子は普通に暮らしてたよ・・その子の瞳はこう言ってたよ。
普通だと言われる評価は、重要じゃないけど・・必要なんだとね。
その子の言葉を伝えるよ・・今まで隠してたけど。
俺もマリやユリカに隠し事が出来て、嬉しかったよ。
マリ・・その子はこう言った、同調でもない心に直接伝える言葉で。
絶望とは何だと・・幸せや満足が、俺の考えてる物ならば。
絶望や挫折は何なんだと・・そこを俺もマリも勘違いしてるって。
なぜ深海なのか・・その幼稚な理由を感じろって。
俺は少し分かってきたよ・・深海の理由を、あの透明の螺旋でね。
マリ・・あの時の約束を、俺はこのリンダの試験で果たす。
マリと約束した・・マリがベールを脱ぐ時は、俺が側にいると言った。
あの大切な約束を果たす・・マリの側にいるよ、どんな事が起こっても。
俺の映像だから・・限界が来たら、俺が必ず切るから。
マリ・・勇気を出せ・・あの沙紀の暗黒の世界で見せた、マリの勇気を。
そうしないと・・いつまでも会えないぞ、会いたくてたまらないんだろ。
由美子に出会う事は出来ないぞ、マリ・・逃げてる以上は、それは出来ない。
マリが1番それを分かってるだろ・・マリ自信が決めた事だから。
また・・あの時のように、淋しい顔で誤魔化すのか？
あの成人の日の朝・・病院のロビーで出した、淋しい顔で誤魔化すのか？

ヒトミと会う勇気が持てなかった事を、忘れたのか・・マリ。
由美子にも・・いや全ての人間に、明日は確実には存在しないだろ。
マリでも分からない事が有るんだろ・・なら分からないよね、完璧な明日など。
マリ・・大丈夫、今なら制御出来るよ・・今のマリなら出来るよ。
由美子と出会っても、力の制御は出来る・・マリの恐れてる事は起こらない。
２つの力が重なっても、何も壊さないよ・・現実は壊れない。
奴には手が出せない・・マリという存在には、絶対に手が出せない。
今カタカタと動いてる、この現象こそが・・奴の罠だろ。
マリにその力を使わせない為の、奴の幼稚な演出だろ。
マリ・・次の段階に踏み出そう、俺がずっと側で見てるから』

完全な静寂の中、テーブルの上の沢山のグラスが、カタカタと小刻みに震えていた。
それを女性達が凍結して見ていた、マリは俯いて集中していた。

その時だった、もう一人の特別の中の特別が見せた、その力の意味を。
「うるしゃい・・カタカタ、やめ～」とマリアがマリに天使全開で言ったのだ。
グラスの震えはピタッと止まった、マリはマリアを見た。

「マリ・・おかえり」とマリアは天使不敵全開で言った。
「マリア・・お迎え、ありがとう」とマリもニヤを出して、言葉で返した。

「何が始まるの？・・震えが止まらないよ」とユリカが真顔で言っ

た。

『今回の上演作品は・・【意味と理由】という、難解な文芸作品です。

話題の問題作ですから・・ご期待下さい』

私は凍結している女性達に、ニヤニヤで言った。

マリも二ヤを女性に向けた、私はマリアを抱き上げた。

マリアは天使全開で充電してくれた、私はマリアを見ていた。

マリの背中を、マリアが押した・・マリは遠い世界から帰還した。

お迎えありがとう・・マリのこの言葉の、深い意味を知る事になる。

その時に私は知る・・あのルミの言葉の、深い真意を・・。

【冬物語・・リンダの試験？】

人はいつ自分の行動の基本を、手に入れるのだろう。
私は唯一覚えてる基本が有る、悲しいときは空を見る。
あの頃の未熟な自分と話す為に、それだけは４０年以上続けている

静寂の空間に、女性達が凍結していた。
「だから・・私が言ったでしょ、怖いでしょ」とハルカがウルでレンに言った。
「怖いんじゃないよ、ハルカ・・凄いんだよ、次回作」とレンが二ヤで返した。
「そうですよね～・・怖いと思う私だから、最初の段階で戻されたんだ」とハルカが言って考えた。

「小僧・・やるよ」とマリが言葉で言って、ハルカを見ていた。
『ＯＫ、マリ・・ありがとう』と私は笑顔で返して、ハルカを見た。

「何？・・何かな～？」とハルカが無理やり微笑んだ。
『特別サービスだよ・・ハルカ、ここに来て』と二ヤで誘った。

ハルカは嬉しそうな笑顔で、私とマリの前に座った、私はとマリはハルカと手を繋いだ。
３人で小さな円を作った、女性達が興味津々で見ていた。

『ハルカ・・怖いと思う心は悪い事じゃないよ、それで良いんだよ。
ハルカのその部分は大切にしながら、他も認めないといけないんだ。
ハルカは自分で自分の事を、制御し過ぎてるんだと思うよ。
だから許容量を自分で制限してる、本当はまだ３０％も溜まって

ないのに。
もう制御しないと、危ないと感じてる・・だから恐怖を感じるんだ。
守る心が強すぎる・・石橋を叩き過ぎて、渡れない。
それは悪い事じゃないよ、その部分を変えようとしないで良いんだよ。
ハルカが今まで生きてきて、身に付けた事だろうから。
ただ・・受け入れる部分を開けば良いんだ、この前ハルカが言ったよね。
俺の生き方を、最近好きになったって・・俺は本当に嬉しかったよ。
俺はあの言葉で、ハルカの設定を変えたよ・・未来図を書き換えた。
ハルカなら辿り着くと、そう思ったよ・・俺の理想とする、女帝に。
ハルカ・・捨てるなよ、その心の芯の部分を・・生真面目なハルカを。
それがいつか支えになると思う・・ハルカ自信にも、周りの女性達にも。
ハルカ・・イメージして、自分がカスミの歳になった時、3年後の姿を。
その時の理想の姿のイメージを、後輩が沢山出来た状況を。
どんな先輩で在りたいのかを、自分の理想をイメージしてね。
ハルカ・・望んで良いんだ、どんな理想でも・・望んで良い。
リンダを感じて、ハルカ・・リンダの理想は、困難で不可能な場所に有る。
それでも理想を追い続ける・・それがリンダの生き方なんだよ。
誰がどう思うかは関係ない、ハルカの理想に対して・・それは無関係だよ。
ハルカ・・イメージして、自分の到達したい世界を。

ハルカの表現で言う、俺の大好きな言葉・・理想とする精神世界を。
それをイメージしてないと、入口を見逃すよ・・ハルカ、制御を解け。
自分を変えるのでなく、余りある許容量の入口を解き放て。
そうすれば出来る・・最強のハルカが現れる、その姿は全てを凌駕する。
自立を目指してた、あの頃を思い出そう・・俺も、もう一度そこに戻る。
あの若草公園のベンチに戻って、あの時の気持ちを確認する。
ハルカ・・戻ってみよう、今から・・あの一番街に、屈みこんだ瞬間に。
そこに有る・・ハルカは制御を解き放つ鍵を、そこに忘れてきたから。
イメージしろ、ハルカ・・マリが誘い込み、俺が映像で見せてやる。
２０歳の理想のハルカを、この瞬間でイメージしろ、そして語りかけろ。
一番街で屈み込んでいる・・ケイに語りかけろ、２０歳のハルカの想いを。
目を閉じて、ハルカ・・一番街で待ってる・・俺とマリが』

私はそう強く伝えて瞳を閉じた、一番街が映像で現れた。
私は誰もいない一番街の、靴屋の前に立っていた。
マリがすぐに入ってきて、私の横に並んだ。

「考えたね～・・そう来るとは思わなかった、今の自分じゃなく・・３年後の理想の姿で会わせるのか～」とマリが二ヤで言った。
『ハルカは、強情娘だからね・・そこがハルカの強さなんだよね、マリもそれに期待してるんだろ』と二ヤで返した。

「ハルカさんは、素敵な人なんだよ・・今でも・・そして未来でも」とマリが前を見て言った。

一番街のアーケードの入口から数えて、１つ目の狭い通りから少女が出てきた。

その少女は淋しげな瞳で天井を見上げて、フラフラと角の壁に背中を付けて。

ゆっくりと座り、膝を曲げて体育座りをして、膝に顔を埋めた。

『ケイ・・頑張れ、そこからだよ』私は感情的になっていた、そのケイの姿を見て。

強い波動が何度も来た、ユリカの感動を感じていた。

私とマリの横を、女性が走り抜けた、後姿でハルカだと分かった。

ハルカは少し大人びて、美しい顔で必死に走っていた。

そしてケイの前に立った、ハルカはケイの前に屈み、いきなりケイの顎を掴んだ。

ケイは恐怖の表情でハルカを見た、ケイの瞳は震えながら潤んでいた。

「歳は？」とハルカが真顔で強く聞いた。

「１６です」とケイは震えながら答えた。

「頑張るんだね・・そう決めたんだね」とハルカが強く言った。

その時にケイの表情が変わった、そして強い瞳が蘇った。

「頑張ります・・何でもします・・絶対に投げ出しません・・あなたのようになれるなら」とケイが叫んでハルカに抱きついた。

「約束だぞ・・忘れるなよ」とハルカも号泣しながら、ケイを抱きしめていた。

私は泣いていた、涙が止まらなかった、ハルカに抱かれるケイを見て。
私の隣でマリも泣いていた、嬉しそうな笑顔でケイを見ながら。
ハルカが私とマリを見た、私は笑顔で頷いて映像を切った。
私が瞳を開けるのと同時に、ハルカが瞳を開けた。
ハルカの笑顔が私の胸に飛び込んできた、私はハルカを優しく抱いていた。

『強情娘め～・・だからユリカの揺り篭が使えなかったんだよ、ハルカには』とハルカの耳元に二ヤで言った。

「ありがとう・・時間をかけてくれて、大切に扱ってくれて。
今分かったよ・・シオン姉さんを、どうして１１月２２日まで延ばしたのか。
エースは時間を惜しまないんだね、関わり合った全ての人に。
その時が来るのを待っていてくれるんだね、どんなに時間がかかっても。
本当に嬉しかったよ・・１６歳のケイを抱きしめる事が出来て。
エース・・約束を忘れないでね、私がどこに辿り着くのか。
それをずっと側で見てると言った・・あの大切な約束を。
そして７年後の花火大会の夜・・あなたは指名するんだよね。
ＰＧの現役Ｎｏ１のハルカを・・その時に見せてあげる、そして書き換えさせる。
私達の大切な未来図を、もう１つ上の段階に・・書き換えさせるよ」

ハルカが笑顔で言って、私の胸に顔を戻した。
『楽しみにしてるよ、ハルカ・・そして楽しみにしてろ、出会った意味を』と笑顔で返した。

「意味があるの？・・出会った事に」とハルカが顔を上げた。
『俺じゃないよ・・でも素敵な意味が有ったんだ・・一番街にね』
と笑顔で返した。
「うん・・いつか分かるんだね、楽しみにしてるよ」とハルカが笑顔で返してきた。
蘭は俯いて泣いていた、ユリカも限界ファイブも、美由紀も秀美も泣いていた。

「カスミ、シオン、レン、マキ・・今聞き捨てならない、台詞が有ったね」とネネが雰囲気を変えるのに、二ヤで言った。
「はい・・暴言が有りました、夢物語の・・7年後の現役Ｎｏ１と言う、暴言が」とカスミが最強不敵で言って。
「本当ですよ・・２５歳のレンを差し置いて」とレンが二ヤで言って。
「嫌ですよ～・・皆さん、間違ってますよ・・その時には君臨してます、２３歳のマキが」とマキが二ヤで応戦した。

「まっ、気を付けてね・・派遣のリリーにＮｏ１を取られないように」とリリーが二ヤで煽って。
「成熟した、カレンも強敵だと・・私は思いますよ～」とカレンも二ヤで入った。
「ハルカちゃん・・頑張って、シオンは応援してるよ」とシオンがニコちゃんで言った。

「駄目だ～・・シオンが一番怖い」とネネがウルで言って。
「私は派遣だから・・シオンに負けるのは仕方ない、まぁ・・カレンはそうはいかないけど」とリリーが二ヤで言った。
「私は運が良いのでしょうか、それとも悪いのでしょうか・・こんな時代に生まれて」とカレンがウルで言った。
『カレン良かったね・・シオンとセリカとカレンは、最強に囲まれ

て』と私が二ヤで言った。

「ところで、エース・・どうしてケイコのデビューは延びたんだ？」とレンが真顔で聞いた。

『千鶴と話してね・・今、ケイコに宿題を出してる。
ケイコはまだ遠慮してるんだ、ゴールドだから難しいんだよ。
世代が全員近いからね、だから来年から・・アンナを付ける。
ケイコのある部分を開放させる、それをしてから送り出す。
ケイコも面白いよ・・絶対に最新型だよ、あの感性は』

私はレンに二ヤで言った、レンは笑顔で返してくれた。
「了解・・やってみるよ、最新型のチューニング」とアンナが二ヤで言った。

「エース・・ワシはお前に今まで、1度しか礼を言ってない・・2度めを言うよ、ありがとな」とマダムが微笑んだ。
『お礼は・・ハルカがＮｏ1になった時に貰いますよ』と笑顔で返した。

「小僧・・踏み出したな、そんなに豊に離されたくないのか」と恭子が二ヤで言って。
「だから、嫌だったのよ～・・小僧の前で、豊君の踏み出した話は」とシズカが二ヤで言った。

「いけませんね～・・聞いてませんよ、豊君の次の段階の話は」とユリさんが薔薇で微笑んで。
「私もです・・さぁ、シズカ・・始めて」と蘭が満開二ヤで言った。
ハルカも体を起こして、女性達がシズカを見た。

「恭子に聞かれたんです・・私から見た、豊君の変化を・・・・」シズカが豊の変化の話をした。
女性達が笑顔で聞いていた、ハルカもマリも楽しそうだった。

「凄いよな～・・その変化を望む、豊の強靭な精神」とカスミが恭子に微笑んだ。
「確かに・・普通なら求めない、いや・・私が豊なら、全てを持ってると誤解するね」と北斗が二ヤで言った。
「あら・・北斗姉さんの意見としては、珍しいですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「ユリは豊に理想を重ねるから、厳しいんだよ・・普通に考えたら、あれで十分だよ」と北斗が微笑んだ。

「確かに・・あれで十分です、て言うか・・今で理想の形ですよ、外も中も」とカレンが二ヤで恭子に言った。
「そうだよね～・・私、年下で初めて男を感じたよ」とリリーもニヤで追いかけた。
『リリー・・俺は?』とウルで聞いた。
「あぁ・・感じたよ、思春期のいやらしさなら」と二ヤで返された。

「屋上で何をした?・・正直に述べよ」と蘭が満開二ヤで言った。
『何もしてないよ・・抱っこしただけ』とウルで返した。
「さて・・マリとリリーで手を繋ごうかな～・・事実確認で」と蘭が満開二ヤで言った。
『額にチューをしました・・リリーの寝顔が可愛くて』とウルで返した。

「蘭姉さん・・それは許してあげて、私の寝顔は可愛すぎるから～」とリリーが二ヤで言った。
「ほら、瞳のリングが回転するよね・・自分の自信のある話の時は」

とナギサが華やか二ヤで言った。
「なるほど～・・私もショッカーに、拉致されよう」とリアンが極炎ニカを出して。
「リリーのリングとセリカの流星は、反則だよね～」とユリカが爽やか二ヤで追い込んだ。

「仕方ないんです・・改造人間ですから～」とリリーがウルウルで返した。
全員でリリーを見て笑っていると、松さんが来た。

蘭が松さんとマダムとユリさん、ユリカ・リアン・ナギサを誘って、フロアーに行った。
私は弟とハルカの事を話すのだと思って、笑顔で見送った。

「小僧・・こんな感じ、適当で良いよ。
空母は下に戦闘機を入れよう、滑走路は本当は要らないけど。
垂直離着陸すればＯＫだからね、でも雰囲気重視でこんな感じ。
戦闘機は任せるよ・・旋回性もスピードもＭＡＸでよろしく。
大きい物を作るなよ・・小さくてコンパクトが基本だよ。
相手のターゲットにも成るんだから、それとエネルギーは。
宇宙も視野に入れて、美由紀と同じ設定の体温にしよう。
空母もだよ・・そこを間違えるなよ、リンダさんの設定が読めないから。
ミサイルは、ロックオンしたら追いかける・・探知型にしようね。
金属でも熱でも無い・・ロックした映像を、追いかけるタイプ。
ようするに、ロックできればＯＫ・・後は発射するだけ。
出来るだけ小さいミサイルにして、１００発は装備してね。
あとは機銃と大きなミサイル・・破壊力ＭＡＸの奴を６発かな。
そんな感じでやろう・・あとは任せる、私はエミと最終チェックが有るから」

シズカが簡単な空母の下書きを渡しながら、二ヤで言った。
『了解・・一人乗りで良いんだね？』と笑顔で返した。
「そうしないと・・人数が確保出来ないよ」とシズカが二ヤで返した。

「シズカ先輩は、潜水艦ですか？」と沙織が笑顔で聞いた。
「もち・・私は地上戦が好き、空中戦は自信無し」とシズカが笑顔で返した。
「シズカ・・あのロボットは、狙う場所が有ると思うの？」とカスミが聞いた。
「ありますね・・中心点に、赤い小さな丸がありました」とシズカが二ヤで返した。

「やっぱり、あれだよね～・・小さいよね」と久美子がウルで言った。
「でもあのロボット、動きは悪いと思うよ・・間接の出来は今一だったよ」とシズカが二ヤで返した。
「ゴルゴ・久美子なら・・大丈夫だね～」とマキが二ヤで言った。

「ねぇ、シズカちゃん・・あのロボットにも、ボスが存在すると思う？」とカレンが微笑んだ。
「いるでしょうね～・・多分、恐ろしい奴が」とシズカが笑顔で返した。

「私・・どうしよう・・決められない～」とリリーがウルで言った。
「マキ・・私は、潜水艦でお願い」とカレンが笑顔で言った。
「私も潜水艦・・ハルカもでしょ？」とレンが笑顔で言った。
ハルカが考えていた、その姿が以外で、全員がハルカを見た。

「考えるのか？・・ハルカ」とカスミが驚いて聞いた。
「私・・子供の頃、パイロットに成りたかったんです」とハルカが照れて返した。
「良いかもよ、ハルカ・・案外才能あるかも、好きこそなんとやらだから」と北斗が微笑んだ。
「はい、そうですね・・マキ、私は戦闘機にするわ」とハルカが微笑んだ。

『ちょっと待ってね・・ユリさん、リアン、蘭、ネネ、リョウ、セリカ、ハルカ。
それにマキと恭子と秀美は決定だね・・戦闘機？』

私は笑顔で秀美を見た、秀美は二ヤを出していた。
「当然だよ・・私は飛行気乗りになる」と秀美が笑顔で言った。
「だよね～・・秀美は戦闘機、私は潜水艦にします」と沙織が言って、美由紀が考えた。

「私も潜水艦・・車椅子、ＹＵＴＡＫＡ　ＭＡＸで乗り込みま～す」と美由紀が笑顔で言った。
「そうくるのか～・・両方経験しようと思ってるね」とアンナが二ヤで言った。

蘭達がＴＶルームに戻り、女性達が食事の準備を始めた。
中１トリオが私の側に来たので、私は二ヤで包装されたリップを出した。

『２学期、良く頑張った・・沙紀の世界ではよろしく』と言って３人に差し出した。
「おりょ・・おりょりょ！・・何かな～」と美由紀が受け取って。
「美由紀・・爆発物かも知れないよ」と秀美が二ヤで受け取って。

「危ない下着じゃないの・・着けたとこ見せろって言うんだよ」と沙織が二ヤで受け取った。

3人が包装を開いて、笑顔が溢れた。

「小僧・・良い子になった～、沙織は嬉しいよ～」と沙織が右の頬にキスをしてくれ。

「本当に改心したんだね・・良い子だ～」と秀美が笑顔で、左の頬にキスしてくれて。

「うい奴じゃ～・・褒美を取らす」と美由紀が笑顔で額にキスをしてくれた。

私は嬉しくて二ヤで返していた、3人は嬉しそうな笑顔だった。

「中1で、異性にキスが出来る関係か～・・凄いと言えば凄いね～」とリリーが二ヤで言って。

「羨ましいですよね～・・そんな存在は滅多にいないですよ」とカスミが微笑んだ。

「そうなんですか～・・小僧はこれが、一番喜びますから」と沙織が笑顔で返した。

「沙織はずっと、最後の表現はそれだよね～」とマキが二ヤで言った。

「物心付いた時からだよ・・私は最初を見てる、その行為は感動的だった」とシズカが微笑んだ。

「あら・・今日は素敵な日ですね、もう1つ感動の話が聞けるのね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

女性達がシズカを見て、沙織も興味津々でシズカを見た。

「そっか～・・沙織も覚えてないのか、まぁそうだろうね。

沙織には自然な事だったから、強くは残らないよね。

でも私にも律子にも勝也にも、和尚と豊と恭子とマキにも・・強

く残ったよ。
沙織が初めて小僧にキスをしたのは、８年前の１２月２５日のクリスマス。
チサの葬儀会場だった・・小僧は前日の通夜で、洋子先生の涙で感じた。
小僧はその夜、私の部屋に来て・・私に聞いたんです。
人は死んだらどこに行くのかと・・幼い５歳の小僧が。
私は正直に、分からないけど・・素敵な場所だと思うと答えました。
小僧は自分で言ってるように、幼くて死の意味も悲しみも。
その寂しい現実も、理解出来なかった・・だから洋子先生の心が分からなかった。
小僧はその夜・・聖夜、イヴの夜・・ずっと庭で星を見ていました。
律子がホットミルクを持って、小僧の横に座った。
そして始まるんです・・親子問答が、小僧の初めての問答。
小僧は生まれて初めて、律子に問うんです・・人間という生命を。
私の部屋には・・心配して恭子とマキが泊まりに来ていて、３人で聞いてました。
聖夜に響く・・小僧の問いかけと、律子の回答を。

小僧・・お袋、人は死んだら会えないんだよね、どこに行くの？
律子・・どこにも行かないよ、側にいるんだよ。
小僧・・どうして、子供でも死ぬの？
律子・・寿命は決まってるのかもね、でも長い短いは大切な事じゃないよ。
小僧・・でもチサは寂しくないのかな～？・・一人じゃないの？
律子・・チサは一人じゃないでしょ・・あんたが忘れないなら。
あんたと沙織が忘れない、それならチサは一人じゃないよ。

チサのお父さんも、お母さんも・・絶対に忘れない。
だからチサは寂しくないのよ・・チサを忘れないでしょ？
小僧・・忘れないよ・・そう思ってるけど、分からないんだ。
俺は3歳より前の事、全然覚えてないんだよ。
チサの事もそうならないかな～・・どうすれば良いの？
律子・・いつも、何かあったら・・楽しい事や困った事。
嬉しい事や、悲しい事・・そんな時はチサに話しなさい。
空に向かって話すのよ、チサの顔を空に映して。
そうすれば忘れない、チサの事も・・未熟だった今も。
小僧・・それで良いんだね・・さっき和尚が言ったのと同じだね。
律子・・ねぇ・・何を考えてたの？・・らしくなかったよ。
小僧・・洋子先生が夜空を見上げて、サンタを探したんだよ。
でもね・・洋子先生の目は、寂しいって言ってたんだ。
俺は何が寂しいのか分からなかった、それを考えてた。
洋子先生の気持ちが知りたくて、それを考えていたんだよ。
律子・・そうなのね、洋子先生は寂しいのよ・・教え子だからね。
大切な教え子の初めての死だったから、寂しいのよ。
もう何も教えられないから、それが寂しいのよ。
小僧・・えっ！・・そっか、もう遊べないし話せないんだよね。
俺も寂しいよ、今分かったよ・・でも一番寂しいのはチサだよ。
俺はこれからも、沙織とも遊べるし・・皆と話せる。
分かったよ、ありがとうお袋・・俺は忘れないよ、チサの事を。
律子・・うん・・そうだね、あんたならそうする。
あんたはその考えが出来る、それを絶対に捨てるなよ。
普通と違うと笑われるかも知れないし、変わってるって言われるかも。
それでも捨てるな・・自分は人と違うと思っといて。

あんたは5歳でチサを受け入れた、チサに絶対に嘘はつくな。
全てに答えがある訳じゃないよ、答えだけを探すなよ。
そうるれば、チサは側にいる・・永遠にお前の側に。

そう言って律子は部屋に帰りました、小僧は夜空を見上げてた。
恭子とマキが泣いていて、でも私は内心焦ってました、小僧の本質に触れて。
律子は一石二鳥を狙った・・数年後、私はそう思いました。
律子は私達が聞いてるのを知っていた、だから小僧には難しい表現を選んだ。
全てに答えがある訳じゃない、答えだけ探すな・・これは私に投げかけた言葉です。
全てに答えを探していた、未熟な8歳の私に問うた言葉でした。

そして翌日の葬儀の時、見送りの最後の焼香を・・小僧と沙織にさせました。
チサの母親は、小僧と沙織に感謝してました・・ずっと遊んでいたから。
豊君と小僧と沙織がいたから・・チサは子供らしい楽しみを知った。
駄菓子屋で豊君は、ずっとチサの側にいました・・偏見に晒されないように。
純粋だから危険な、子供の差別の視線からチサを守るために。
そして沙織がチサの親友として、優しく厳しく接していた。
沙織は素敵な少女です、一度も豊君に注意された事が無いんです。
沙織は一度たりともチサを特別視しなかった、普通の友達として貫いた。
小僧はチサを守ろうと必死でした、でもその根底には・・チサの病があった。

沙織にはそれが微塵も無かった、チサの友達として存在した。
チサがどんなに沙織の事を信頼していたのか、私には分かります。
最後の焼香台に2人で立って、そして棺を覗きに行きました。
2人でチサの安らかな姿を見て、沙織が小僧の手を強く握った。
そして寂しそうな小僧に、沙織が笑顔を向けて言ったんです。

チサ・・小僧は泣き虫だよね～、私は困ってるよ。
チサが側でしかってくれなくなるから、私一人で頑張るよ。
だからチサも見ててね、小僧が泣き虫と闘うとこを。
分かってるよ・・チサ、私が必ず勝たせてみせるよ。
小僧・・チサが怒ってるよ、大人の真似して悲しそうにすると。
悲しくないでしょ・・チサは凄い子だから、先に行ったんでしょ。
もしかして悔しいの？・・悔しくて泣くな、豊君が見てるよ。
小僧・・悔しくて泣くなよ、悲しくないのに泣くなよ・・泣き虫。
チサは友達でしょ・・死んだって友達でしょ？
死んだって・・ずっと友達でしょ・・小僧・・寂しくて泣くな。
私がチサと誓った約束を、今からする・・小僧が負けないように。
チサが私に言ったんだよ・・小僧を応援してって言ったよ。
私はチサとの約束は守る・・小僧、寂しさに負けないで。
沙織はそう叫んで、小僧の頬にキスをしました。

凄かったです、5歳の沙織の叫びが・・いつまでも木霊して。
その強い愛情を表現して、小僧は強引に笑顔に戻されました。
小僧はそれを覚えています、だからこそ出来るんです。
さっきのハルカ姉さんに対してもそうでしたが、小僧の春雨の叫び。
その真実は・・チサの強い想いと、沙織の双子としての愛情なんです。
小僧の最強の武器・・春雨の叫び・・その叫びには乗り移る。

チサとヒトミが乗り移る・・だから響き渡る、全ての根源に問いかける。
その問いは永遠の難問・・なぜ生きてるのかと、強く問いかける。
チサは知ってたのじゃないかと、私は最近そう思っています。
小僧がヒトミに出会う事を・・それ以降の、沙織がずっと言ってたから。
小僧にそんな事じゃ駄目だって、それから口癖のように言ったから。
せれから半年後に・・恭子は小僧を小児病棟に連れ出す。
その時に、私とマキに恭子が言った・・ニヤニヤ笑顔で。
見せてもらいましょう、答えを探さない生き方を・・そう言ったんです。
小僧にとって、沙織は特別じゃないんです・・一心同体・・いえ表裏一体。
一卵性双生児・・だから自然に出来る、沙織のキスは伝言だから。
良く頑張りましたと言う・・沙織とチサの伝言だからでしょう」

シズカの話は流れるようで、愛情が溢れていた。
シズカは妹である、沙織を笑顔で見ていた。
沙織は初めてシズカに褒められて、嬉しそうな笑顔で返した。
完全なる静寂の中、私は思い出していた、チサの葬儀の時を。
そして洋子先生と見上げた、聖夜の星空を。
「サンタが見えないかと思って・・・」そう呟いた、美しい女性の頭上に。
星空が広がり、未熟な私を包んでいた・・忘れ得ぬ、イヴの夜だった・・。

【冬物語・・リンダの試験？】

遥かなる頂上から聞こえてくる、先人の声が響いている。
ここはまだ頂上じゃないと、強く叫んでいる。
待っていてはくれない、上るしかない・・追いつけないと知りながら。

「何で・・どうしてそんなに、素敵な話があるの？」とネネが微笑んだ。
「素敵でしたよ・・あの時の沙織は、本当に強い５歳の少女でした」とマキが笑顔で言った。
「最強の沙織・・私にも堂々と意見した事があるよね、私は嬉しかったよ」と恭子が微笑んだ。

「今でも最強ですよ、沙織が・・私と秀美にとっては、最強の女です。
私は沙織と小３で出会いました、小僧と出会って少ししてから。
私が少し前向きになって、小児病棟に通い始めた時でした。
小僧から紹介されて、笑顔で挨拶して、２人で遊戯室に行った。
そこで沙織が私に言った、最初の言葉・・それこそが沙織の経験から出る強さ。
チサちゃんの経験を、内側に入れてる・・沙織の強い言葉でした。
美由紀・・美由紀は死なないんだから、ラッキーだったね。
両足は短いけど・・生きてるんだから、それだけで素敵な事だよ。
沙織は笑顔でそう言ったんです・・私は凍結してました。
あまりにもストレートな表現で、直球の言葉を聞いて嬉しくて。
震えていましたね・・私には誰も、そんな事は言わなかった。
いえ・・言えなかったのでしょう、健常者だから言えなかった。
でも沙織は笑顔で言ってのけました、その言葉には嘘など微塵も

無かった。
目を見てストレートに言ってくれた、心の全てをぶつけて来た。
そして凍結している私に、チサちゃんの話をしてくれたんです。
私は本当に嬉しかった・・そして初めて、女の友達が出来たと感じました。
沙織は全く同じ台詞を、秀美に出会った時にも言いました。
１３歳の今でも・・その表現がストレートに出来る、最強の女なんです。
沙織は一度も、一瞬も・・私の事を特別視した事はありません。
沙織と小僧は正に一卵性双生児です、沙織はヒトミとも交信しています。
沙織も伝達を持っています、チサちゃんのプレゼントである、瞳の伝達を。
だから小僧の内面を、全て感じてしまう・・小僧は持っていました。
隠せない相手を、小僧は持っていた・・だから出来たんです。
マリちゃんとも、ユリカ姉さんとも・・信頼関係を構築できた。
沙織が教えてくれました・・沙織は小僧の事だけは分かるんだと。
だから楽しみに待ってるんだと・・沙織、由美子に会いに行こうと。
小僧がいつかそう言う事を・・その時こそ、左手に誘う時だと。
沙織はそう確信してるんです・・今回の沙紀の世界の話。
小僧がそれを沙織にした時に、沙織は小僧の瞳を見ていた。
そして即決しました・・自分も行くと、その場で強く言った。
小僧は、今回入らない・・だから分身を行かせる、沙織とエミを。
自分の分身として、その答えが聞きたいんだよね？・・小僧」
美由紀は笑顔で沙織を見て、私に二ヤを出した。
「もう・・やめてよ、美由紀まで・・私は小僧じゃないから照れる

よ。
それに、もしかして・・私から伝えろって事なの？
さっきのハルカさんの話の感じなら、１１月２２日の意味を話してないの？
小僧と私達にとって、その日がどんなに大切な日なのか。
それを誰も話してないんだ・・シズカ先輩もマキ先輩も美由紀も」
沙織は美由紀に照れた笑顔で言った、美由紀は二ヤで頷いた。
「えっ！・・何かあるの？・・沙織ちゃんお願い、教えて？」とシオンが真顔で聞いた。

「１１月２２日・・勤労感謝の日の前日ですよね、その日なんです。
その日が、ヒトミの誕生日なんですよ。
１１月２２日は、小僧には忘れられない日なんです。
ヒトミが産まれた日に、シオンさんを誕生させた・・それは強い愛情ですね。
小僧は多分・・相当前から、その日を選んでいたんでしょうね。
私には分かります・・私も本当に嬉しかったから。
シオンさんに初めて会った時・・嬉しかったんです、明確にイメージ出来て。
ヒトミが１９歳になった時を、明確にイメージ出来て・・幸せでした」
沙織はシオンに笑顔で言った、シオンは最強ニコちゃんを出していた。

「エースは１０月の終わりには、私に言いましたよ・・１１月２２日にしたいと」とユリさんも薔薇で微笑んだ。
「ありがとう、エース・・シオンも幸せだよ」とシオンがニコちゃんで泣いていた。

『お礼はいらないよ、シオン・・俺の勝手な想いだったから』と笑顔で返した。

「あなた達は、相談もせずに・・この事を言わなかったんですね」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

「私や恭子やヨーコは、マキが言わない限り・・言えません」とシズカがマキに微笑んだ。

「私も美由紀が側にいるのに・・私から言う事は無いですね」とマキが美由紀に二ヤを出した。

「私は・・私じゃないと思ってました。

小僧は多分、知られなくて良いと思ってたんだと思います。

だから私が言う事は、偶然を強引に必然に変えそうな気がして。

だから・・自然な必然に任せました・・必然的に沙織がＰＧに来るのなら。

この話が出来るのは、沙織だけだと感じたから・・それに任せました。

１１月２２日・・小僧と沙織と私は・・初めて３人同時に感じました。

ヒトミの想いを共有できました・・そしてその理由を、今感じました。

あの日・・私はプレゼントを持って、病院に行ったんです。

病院の受付で会ったんです・・マリちゃんに、マリちゃんは定期健診でした。

私はマリちゃんに、手作りのプレゼントを見せて自慢しました。

マリちゃんは包装されたそれを握って、瞳を閉じたんです。

そして・・私に返してくれました・・それだったんだよね、マリちゃん。

私は思い出したよ・・あの時の３人で感じた、ヒトミの想い。

あれは同調だったよね、マリちゃんの・・同調だった。

3人のプレゼントを、ヒトミのお腹の上に乗せて・・小僧に伝えた。
全員で手を繋ごうって・・そして手を繋いだ時に感じたんだよ。
ヒトミの確かな想いを感じたんだよ・・ありがとう、マリちゃん。
マリちゃんは・・生きてるヒトミと同調したんだね。
私達に・・大切な思い出を、プレゼントしてくれたんだね。
何も言わずに・・自分を表現せずに・・自分の気配まで消して。
ありがとう、マリちゃん・・あの時、私達は幸せだったよ」
美由紀は笑顔でマリに言った、マリは美由紀を見ていた、優しい瞳だった。

「美由紀と沙織に・・ありがとうの・・気持ちだったよ」とマリが言葉で言った。
ゆっくりとした優しい響きで、美由紀も沙織も潤む瞳でマリを見ていた。

「エース・・ありがとう、私にも出来たよ・・私の限界トリオ。
美由紀ちゃんと沙織ちゃんと秀美ちゃんが・・嬉しかったよ」
エミが笑顔で言って、私の膝に乗ってきた。

「エミ!・・それは最高の言葉だよ〜」と秀美が笑顔で言って。
「泣かされるとこだったよ、エミ・・凄い子だよ、エミは」と沙織が笑顔で言って。
「私に憧れさせる・・エミだけは譲れない」と美由紀が笑顔で言った。
女性達にも笑顔が戻り、食事を始めた。
私はエミの成長に付いて行けなかった、その成長スピードをただ楽

しんでいた。
美由紀のオヤジが迎えに来て、前日蘭を指名した事で、ユリさんに薔薇プイを出された。
オヤジは焦って私にヘルプを求めてきて、私は貸しだと二ヤで言って助けた。

オヤジが笑顔で挨拶して、中1トリオを連れて帰って行った。
マリは女性達と嬉しそうに食事をしていた、シズカも恭子も笑顔で食べていた。

『ちなみに・・シズカと恭子とマリは、時間大丈夫なの？』と二ヤで聞いた。
「私達は母さんがＰＴＡの懇親会だから、後で迎えに来るのよ・・あなたは、マリと誰かに会いに行くんでしょ？」とシズカが二ヤで言った。
『あぁ・・加々見さんの招待、今夜行くんだね・・マリ』と笑顔で言った、マリも笑顔で頷いた。

「律子母さんが来るの？・・ゆっくり話したかったな～」とリリーが微笑んだ。
「ＰＧの客席に入るかもですよ、なんせメンバーが・・清次郎先生を筆頭に、教師全員出てますから」とシズカが二ヤで返した。
「うちにも来ないかな～・・清次郎先生には、サービスするのに～」とリアンが極炎ニカで言って。
「エース・・次はうちにもお誘いして、私も清次郎先生のファンだから」とユリカが爽やか二ヤで言った。

「素敵な先生なんだろうな～・・２人がそう言うなら」とナギサが微笑んで。
「凄く素敵な人だよ・・安心感が格段に違う、梶谷さんでも・・ま

だまだだと感じるよ」と北斗が二ヤで言った。
その言葉で若手女性が驚いて、北斗を見ていた。

「私も安心できます・・清次郎先生の前なら、全裸になれますよ」とカスミが二ヤで追いかけて。
「それは危険です、爺ちゃん心臓悪いから・・それでなくても、小僧の担任で心臓に負担がかかってるし」とシズカが二ヤで返した。
「来ないかな～・・会いたいな～・・私、教師に良いイメージが無いから」とネネが真顔で言った。
「この仕事をすると・・それはあるよね～」と蘭も真顔で返した。
「正直な気持ちを話してあげな、エース・・現役の生徒として」と北斗が二ヤで私に言った。

『清次郎は、教壇でも泣くんだよ・・戦争の話をしながら。
そのレベルに達してる・・簡単に言うと、フロアーで泣ける大ママと同じ世界。
常に生徒に対し、自分も生身の人間だと主張する・・だから信じる事が出来る。
教師は聖人君子じゃないよね、完璧などとはほど遠い・・生身の人間なんだ。
でも世間は多くを求める、大人達は・・保護者は教師に多くを求める人がいる。
生徒はそんな者を求めていない・・先人として、心で話す教師を求めてる。
教師だって、経験で段階が上がるんだろうから・・最初から上にはいない。
どんな世界でもそうだと思う・・人間に崇高さを求めたらいけないよ。
時が来たら辿り着く・・本物とと呼ばれる人間なら、その世界に入る。

でも道半ばで悩んでる教師からも、教えられる事は多いよね。
その段階ごとに、教えられる事は違うんだろうね・・どれでも良いんだよ。
教師の価値は・・段階じゃない、まして教える技術じゃない。
生身が出せるのか・・自分を出せる勇気が有るのか・・それだと思う。
万人に分かって貰う事など出来ない、だから自分を曝け出すだけ。
それが生徒に対して出来るのか・・俺はそれだけだと思ってる。
生徒にとって、良き教師とは・・見せてくれる教師だと思う。
清次郎は見せてくれる、悔しいや嬉しいの涙を。
俺は絶対に、自分の行為で清次郎を泣かせない、それだけは心に誓っている。
俺にとって、清次郎の涙とは・・それだけ重く、大切なものだから』

私は正直に自分の想いを言葉にした、師と慕う尊敬する恩師を想って。

「教師生活最後にして、最大の問題児か～・・深いね～、さすが清次郎」と恭子が微笑んだ。
「多分・・秀美まで現れて、清次郎ウキウキだよね～」とマキが二ヤで言って。
「私達が可愛い生徒だったって、感慨に耽ってるよ・・爺ちゃん」とシズカも二ヤで言った。

「私の担任の時は、まだまだ若くて・・少し悩んでる感じだったよ」とリアンが真顔で言って。
「それはリアンがいたからでしょ・・この子は将来どんな事になるんだろう、そう悩んでたのよ」とユリカが爽やか二ヤで返した。

「私は忘れられないよ・・清次郎先生が、リアンをここに連れて来た時の事を。
私とユリを見て、深々と頭を下げて言ったんだよ。
この子は、認められない人間じゃない、進みが速いだけなんです。
認めない社会の方が遅れてる、だからここで使ってみて下さい。
次の段階を示せる人間だと、私は信じています・・この世界の次を。
必ずや・・持って生まれた物に、大切な何かを背負うでしょう。
私はただ、気付かせてやりたい・・この子の本心を、気付いて欲しい。
そこに本当に有るのかを・・誰かに認められたいと思う心が。
そう言ったんだよ・・私は嫉妬したよ、リアンの幸運にね。
ユリは震えていたよ・・感動してね、その本物の教師の姿に。
だってその時のリアンは、清次郎先生の手を離れて3年も経ってたんだ。
普通なら、現役生徒にでも出来ないよ・・それを3年も経ってるのに。
そしてリアンの身元保証人に、何の躊躇も無く自分でなった。
私はあれ以来・・教師を好きになったよ、その本来の姿を見たからね」

北斗の言葉が真剣で、リアンも潤む瞳で頭を下げた。
女性達に笑顔が咲いて、私は北斗が戻ったと感じて嬉しかった。
女性達が準備に向かい、リアンがリリーを連れて、ユリカと出て行った。
私は5人娘と食事をして、マリアの愚痴を聞いていた。
『分かってるよ、マリア・・マリアは秘密兵器だよ』と私はマリアの耳元に静かに言って、機嫌を取った。

「あい・・えーしゅ」とマリアは天使で返してくれた。
ＰＧの開店の確認をして、私はマリと出かけた。
クリスマス一色の狭い通りを抜けて、マリーレインの受付のボーイに頭を下げた。
ボーイに案内されて社長室に入り、笑顔の加々見に迎えられた。
私とマリは加々見に挨拶して、ソファーに座った。
加々見はマリを笑顔で手招いて、向き合ってチェスボードの前に座った。
加々見が笑顔でマリを促した、マリも笑顔で頷いて１駒動かした。
加々見はそれを受けて、少し考えて動かした。
マリはそこで考えた、その瞳の黒目は集中に入っていた。
そしてマリが動かして、加々見が考える、この行為を数度繰り返した。
今回はマリも集中し、かなりの時間をかけた、マリの表情は楽しそうだった。
「そうか！・・そういう結末も存在するのか～」と加々見が笑顔で言って、マリに右手を出した。
「結末は無限」とマリも笑顔になって、言葉で言って右手で握った。
２人はソファーに戻ってきた、加々見が嬉しそうだった。
『結末は無限か～・・さすがマリ、でしたか？』と笑顔で加々見に聞いた。
「さすがと言うより、最高だよ・・マリちゃんは」と加々見が笑顔で言った。

『どんなに追い詰められても、結末は多様に存在するって意味なの？』とマリに聞いた。
「シナリオ・・無いなら・・そうだよ」とマリが二ヤで言葉で言った。

「そうだよね・・シナリオは無いんだよ、人生という物語には。
結末って、自分で作り出す事だよね・・諦めたり、納得した振りをして。
私はマリちゃんに会って以来、仕事にも興味が出てきたよ。
エースの言葉も響いたからね、確かに見たいよ・・自分の生きた世界の次が。
次の段階が見たくなった、永遠に結末など無い世界がね。
エース・・来年早々に始めるか、マリーレインの変革を。
手伝ってくれるんだろ・・報酬は考えとくから。
その後に派遣を投入してくれ、その世界に踏み出せたらね」

加々見は仕事の話なので、最後は真剣な瞳で言った。
「分かりました・・出来る限りの事はやってみます」と真顔で返して頭を下げた。

それから加々見のヨーロッパの話を聞いて、私はワクワクになって質問を繰り出した。
1時間程、加々見の事務所で話して、私はマリと挨拶をして事務所を出た。
加々見が表まで見送ってくれ、私がタクシーに乗ろうとしたら、タクシーチケットをくれた。
私はマリとお礼を言って、マリとタクシーに乗って加々見と別れた。

『マリ・・ご機嫌だね』と隣のマリに笑顔で言った。
「素敵な人だよね、あの加々見という人は」とマリが同調で返して

きた。
『そうだね、俺も男として押されるよ・・遠すぎる存在だよ』と笑顔で返した。

「小僧・・リンダさんの試験、いつやる？」とマリが返してきた。
『明日までに、俺の準備をして・・それから決めるよ、マリはいつでも大丈夫だね』と笑顔で返した。
「もちろん・・ねぇ、小僧・・バス停の少女、次に会ったら必ず会わせてね」とマリが強く言った。
『分かってるよ、マリ・・必ず紹介するよ』と笑顔で返した。
マリの家に着きタクシーを待たせて、マリを玄関まで送った。

マリの母親が笑顔で出てきた、私も笑顔で挨拶した。
「あら～・・タクシー待たせてるの？・・残念」とマリの母親の佳代が微笑んだ。
『素敵な招待でもありましたか？』と笑顔で返した。
「頂き物のケーキが有ったのに、シズカちゃんに・・明日でも来れたら来てと伝えてね」と佳代が言った。
『了解です・・暫くの間、マリを借りると思います』と笑顔で返して頭を下げた。
「遠慮無くどうぞ・・マリが自分で決めてる事だからね」と微笑んだ佳代に頭を下げて、タクシーに乗った。

クリスマス商戦が、ラストスパートのデパートはまだ開いていた。
大きなクリスマスツリーに派手な電飾が輝いて、道行く人も盛り上がっていた。

私はＰＧに戻り、指定席で満席の確認をして、屋上に上がった。
イメージを入れ直すために、一人になりたかったのだ。
私はぼんやりと見える、ユリカの店の明かりを確認して、瞳を閉じ

た。
映像に管制室を出して、空母を大淀川に浮かべてみた。
内装をイメージして戦闘機を製造していた、その時肩を叩かれる、イメージの世界で。
私が振り向くと、マチルダが笑顔で立っていた。

『マチルダ・・嬉しいよ、いらっしゃい』と笑顔で言って立ち上がった。
「リンダに対する時の方が、嬉しそうだよ」とマチルダがウルで言った。
『そんな事ないよ〜・・比べられないよ、リンダとマチルダを』と笑顔で返して抱きしめてみた。
リアルにマチルダの体を感じたが、温度を感じられ無かった。

「どうしたの？」とマチルダが私の耳元に言った。
『温度を感じられなくて、少し残念』と耳元に返した。
「そこまでは・・無理だよ」と体を離してマチルダが笑った。
私は管制室の隣の席に、マチルダを招いた。

「素敵な空母じゃない・・さすがシズカ」とマチルダモニターを見て微笑んだ。
『それで・・提案に来たのかな？・・それともヒントをくれるのかな？』と二ヤで言った。
「提案だよ、今回はその提案が必要だと・・リンダが思ってる」とマチルダが二ヤで言った。
『そうだろうね・・マリも何かを感じてるよ』と笑顔で返した。

「エースは分かってるよね、リンダがなぜ強引に日本に寄ったのか？」とマチルダが微笑んだ。

『マリに会うためだろ・・同調で導くマリに』と二ヤで返した。
「そうだと思うよ、会って感じたかったんだと思う。
そしてリンダが私に電話してきたよ、エースにそれを提案しろって。
エース・・深海組の女性達に、赤丸を付けて・・直径１０ｃｍの。
そこにダメージを受けると、戻される設定にして。
今回はそのレベルまでやらないと駄目だよ、その位の覚悟がいる。
精神だけで乗り越えられない、そんな設定が沙紀の世界にある。
これがリンダの伝言・・そしてリンダの試験だよ。
入りたくなったでしょ～・・好奇心出てるよ」
マチルダは二ヤで言った、私は二ヤ二ヤで応戦した。
『入りたいけど・・今回はやめとくよ、俺はどう考えても邪魔になるよね』とウルで返した。
「そうだよ・・我慢してね・・年末楽しみにしてるよ、リンダを夜の海に招待してね」とマチルダが微笑んで、私の頬にキスをしてくれた。
『ありがとう、マチルダ・・嬉しかったよ』とマチルダの頬にキスを返した瞬間、マチルダは消えていた。
『ユリカ・・今、マチルダがリンダの提案を持ってきたよ・・かなり厳しいよ』と二ヤで言葉に出した。
強烈な波動が何？何？と言って、何度も来た。
『後で店に行くよ』と笑顔で返して、波動を確認しながらイメージ作りをしていた。
大半のイメージ作りが終わり、フロアーに降りると、律子と清次郎と節子が５番に座っていた。

蘭とネネが付いて、５人で笑顔で話していた。
ネネが清次郎に寄り添うように座り、楽しそうな笑顔が出ていた。

「母さんからの伝言、清次郎先生を案内して・・リアン姉さんの店に行ってね」とマキが笑顔で言った。
『了解・・清次郎、何か話が有るのかな～？』と笑顔で返した。
「そうみたいだよ・・何か悪さしたね～」とマキが二ヤで言った。
『何も無いよ・・成績も少しだけ上がったし』とウルで返した。
「あんたの成績なんて、清次郎・・興味も無いよ」とマキは笑いながら席に戻った。

それから３０分ほどで、５番の３人が席を立ち、私は受付に歩いた。
清次郎が笑顔で歩いてきた、私も笑顔で頭を下げた。

『怖いな～・・清次郎先生の指名は』と清次郎に二ヤで言った。
「うむ・・少し話が有るんだよ、どこか静かな店に連れて行け」と清次郎が笑顔で言った。
『了解・・ならリアンよりユリカだね、その代わりリアンの店にも寄ってね』と笑顔で返した。
「もちろん良いよ・・ボーナス出たからな」と清次郎も笑顔で返した。
強烈な喜びの波動が吹いて、私と清次郎の背中を押してくれた。

「しかし・・どんな世界にいても、馴染む奴だよね～」と通りに出て、節子が少し酔った二ヤで言った。
『節子・・酔ってるよ、政治に美由紀のお守りをさせて～』と二ヤで返した。
「たまには良いのよ、娘と2人で過ごすのも」と節子が笑顔で言った。
「それは良い事ね～・・特に政治には」と律子が二ヤで言った。

「ねぇ、小僧・・美由紀は何も欲しがらないのよ、クリスマス何が良いと思う？」と節子が言った。
『美由紀が、節子と政治に望むものは１つだよ・・自分では、さすがの美由紀も言えないか～』と私は二ヤで返した。
「ほう・・美由紀が、両親に望む物が有るのか？」と清次郎が私を見た、節子も律子も私を見た。

『清次郎・・字が違うよ、ものの漢字表記が・・物質的な物じゃないよ。
人間を示す、者だよ・・美由紀は心から望んでいる、弟か妹が欲しいと。
美由紀は自立する自信が持てたから・・それを願ってると、俺は感じてるよ』

私は真顔で節子に言った、節子も真剣な瞳で私を見ていた。

「今から・・それを私に望むの？」と節子が真顔で返した。
『望むのは自由だよ、言葉にしないんだから・・美由紀はそこまで辿り着いてるよ』と笑顔で返した。
「今からでも無理じゃないでしょ、節子・・政治と話しなさい」と律子も微笑んだ。
「そうですね・・産むのは無理じゃないけど、子育てですか」と節子が考えた。

『節子・・子育ては心配ないよ、美由紀がするんだから。
美由紀はそれをしたいんだ・・節子、美由紀はそれを願ってる。
正直な気持ちで政治と話して、美由紀が言葉に出来ない想いを感じて。
美由紀は自分の事で何一つ、政治と節子の犠牲に成りたくないん

だよ。
考えてみてね、節子・・俺は見たいよ、美由紀が育てる子供の将来を。
絶対に素敵な人間になる・・それ以外には成り得ない。
節子・・出来るのなら、宝物を産んで・・美由紀に宝物をプレゼントして。
それが出来るのは、政治と節子だけだよ・・それが贈れるのは』
私は美由紀を想って、正直に言葉にした。
強く優しい波動が何度も来た、清次郎も律子も笑顔で節子を見ていた。

「ありがとう、小僧・・真剣に、政治と話してみるよ。
小僧・・ありがとう、美由紀の心を守ってくれて。
私も政治も本当に感謝してるよ、小僧という存在に」
節子が強く抱いてくれた、私も嬉しくて強く節子を抱きしめた。
『ありがとう、節子・・その言葉が、最高のクリスマスプレゼントだよ』と笑顔で返した。

「まじで熟女好きだよね～・・節子さんまで狙うのか～」と裏通りから、恭子が二ヤで言って。
「美由紀に関わってる、最終目的は・・それだったね」とシズカが二ヤで追いかけた。
『言うなよ～・・ばれただろ～』と私もニヤで返して、清次郎も含めた全員で笑った。
私は清次郎と４人の乗ったタクシーを見送って、ユリカの店に清次郎を案内した。
ユリカは一番静で眺めの良い、奥の角のＢＯＸを用意してくれてい

た。
ユリカが爽やか笑顔で清次郎に挨拶をして、焼酎の用意をした。
「清次郎先生、私・・外しときましょうか？」とユリカが笑顔で聞いた。
「いえ・・できれば、そこで一緒に聞いて下さい」と清次郎が私の横に促した、ユリカは嬉しそうな笑顔で座った。

「実は・・今しがた、蘭さんには話したんだが。
蘭さんは素敵な事だと、賛成してくれたんだよ。
ご存知と思いますが・・私は教員生活を、あと2年少しで退職します。
その後はボランティアで、子供達に勉強を教えようと思ってます。
今の学歴社会は、不公平な部分を改善できないで来てしまった。
金をかけれる家の子供の方が、どうしても有利な状況になっている。
まぁ確かに・・極一部、シズカのような子は例外ですが。
だが大半・・平均的に見ても、塾などに行ってる子供の方が有利です。
それで私は、退職後は・・施設の子供の勉強を、見てやろうと思いました。
そう思ってた矢先、私に聞いてきたんです・・美由紀がね。
定年後は何をするのかと、聞いてきました・・私は今の話をしました。
そうしたら・・美由紀にある提案をされたんです、私は嬉しくてね。
美由紀がこう言ってくれました、私の最後の生徒で預かって欲しいと。
ミホを最後の生徒にして欲しいと、美由紀が真剣に言ったんです。
あと3年で、小僧と美由紀で・・絶対にその段階まで引っ張るか

らと。
強く言葉にして言いました、その真剣さに押されました。
ミホちゃんは現時点でも、勉強に興味が有るとも聞きました。
もちろん私も、2度ほど7歳のミホに会っています。
私はこの美由紀の提案を受けたい、そうしたいと思う気持ちが止まらない。
だから今夜、小僧に許可を貰いに来ました・・小僧とユリカさんと蘭さんに。
ミホを私が預かる許可を頂きたい、そう思って今夜伺いました。
私は必ず、ミホを社会生活が出来るまでにしてみせる。
私の最後の教え子として、私の教職の全てを賭けて・・ミホに伝えたいのです。
ミホと2人で考えたい、人生という難解な問題を・・2人で考えたいのです」
齢57歳の、清次郎の強い言葉だった。
私は動けずに、清次郎の深い皺の奥にある、強い瞳を見ていた。
私の隣で、ユリカは俯いて泣いているようだった。
私はあのフレーズが、清次郎の後ろから流れていた。
幾山河　超えさり行かば　寂しさの　はてなむ国ぞ　今日も旅ゆく。
教えの師の後ろに、精神の師が立っていた・・強いオーラを放出しながら。
私は挑むべき山の、登山口さえ発見できずに・・高みからの声を聞いていた。
いざ行かむ　行きてまだ見ぬ　山を見む　この寂しさに　君は耐ふ

るや。

「キミハ・・タウルヤ？」とリンダの声が響いてきた。

高みからの聞こえる、３人の声に包まれて・・私は頂を睨んでいた・・。

【冬物語・・リンダの試験？】

その男は準備を怠らない、次の準備を着実にしていく。
自分に休息を与えない、心に休息する事を許さない。
戦地に見送った教え子の背中を、忘れられないから。
自分が止まる事を許さない、その命が尽きるまでは。

１２月のピークも過ぎた、広い天空の要塞。
恩師は真剣な表情で、未来を語った。
その瞳は強い生命力に溢れて、繰り返してきた覚悟を表現していた。

『清次郎・・ミホの事をお願いします、絶対にあと3年で何とかするよ』と清次郎に笑顔で言った。
「私からも、お願いします・・ミホは幸せですよ」とユリカも爽やか笑顔で言った。
「ありがとう・・やってみますよ、ミホの将来の為に」と清次郎も笑顔で返してきた。

ユリカが清次郎の焼酎を作り、3人で乾杯をした。
「清次郎先生から見て、リアンはどんな生徒でしたか？」とユリカが笑顔で言った。

「リアン・・やはり忘れる事が出来ない生徒ですね。
リアンと言う呼び名は、中学に入る前から呼ばれてました。
あの南米人のような熱い雰囲気を、中学生で持っていましたよ。
だから悪く見られる事も多くて、本人はそうでもないんですけど。
だが主張は強くする生徒だったから、やはり浮いていましたね。
成績は悪くなくてね、行動は個性的でした。
絶対にいじめなんかを許さない、そういうタイプでしたね。

そして何より、孤独を恐れない子でした・・一人を恐れない。
無理に合わせる位なら、一人を選ぶ・・そんな強さを持っていました。
本当に芯の優しい子でね、母親と別れて・・父親が再婚した。
そして妹が産まれてね・・それで変わり始めたのでしょう。
中学時代は変革期だったと思います、変化する自分を楽しんでました。
幼い妹を愛することで、自分を理解していきましたね。
中学時代は孤立気味で、高校の時も、女子とは打ち解けられなかった。
高校を卒業して、立派な会社に入った・・でもそこにも無かった。
リアン求める者も、理解してくれる人間も・・存在しなかった。
私がリアンをこの夜の世界に入れて、3ヶ月位した時に訪ねて来ました。
その時に本当に嬉しそうに言いました、初めて友と呼べる女が出来たと。
自分が普通に感じられて、嬉しかったと笑顔で言いました。
夜の世界で巡り合ったんですね、自分など普通に思える圧倒的個性に。
ユリカと呼ばれる人に出会えて、リアンは本来の姿に戻ったと思いますよ」
清次郎は優しい笑顔でユリカを見て言った、ユリカは潤む瞳で微笑んでいた。
『清次郎も・・リアンの担任の頃は、悩んでたの？』私は笑顔で聞いた。
「悩みはあったよ・・もちろん今でも有るよ。
小僧には言わなくても分かるだろ、理想を追うとはそういう事だ

よ。
納得できる時等は無いんだよ、充実感を感じる事は有っても。
それは一瞬の事で、次の瞬間には新たなる問題が出てくる。
だから飽きないんだよ、人間の一番の悪い癖・・それが飽きる事なんだ。
突き詰められないから、飽きてしまう・・そして飽きたと平気で言う。
継続する事の意味を探さない・・自分に向いてないなら良いんだよ。
飽きたからやめるは駄目なんだ、まぁ小僧はその部分は大丈夫だが。
私は今まで関係した生徒の中で、一人だけ現状をチェックしてる生徒がいる。
シズカだよ・・あの子がどう考え、どう進路を選択するのか。
そしてどんな道を選び、どんな事を目指すのか・・楽しみなんじゃ。
予想すら出来ないから、そして無限の選択肢を持っているからな。
シズカは塾などにも行かない、それに水泳部に所属していた。
それでも学年で、3番以下に落ちた事は無い・・不思議な生徒だからね。
その最も優れた才能は、継続する力なんだよ・・物事を突き詰めていく。
学問より経験を大事にする、机上の理論に囚われない。
今は理数系では宮崎トップの高校で、トップに君臨している。
しかしそんな事は、ただの事実だと笑い飛ばす・・宮崎ごときでと言う。
シズカは憧れ続けるんだろう、感覚的な人間に・・マリのような人間に。
恭子やユリカさんや・・実弟である小僧・・そして何より、律子に。

母であり、尊敬する人間である律子に・・いつか認められたいと願っている」

清次郎は楽しげだった、私はその顔を見ながら、シズカの事を考えていた。

「やはりあの子は、律子母さんに認められたいんですね」とユリカが微笑んだ。

「そうじゃろうね・・常にそれを考えて生きておる」と清次郎が笑顔で返した。

『清次郎・・シズカは大学を、アメリカに行くと言ってるよ』と二ヤで言った

「そうか・・収まりきらんか、日本では」と清次郎も笑顔で返してきた。

「多分・・閉塞感が有るんでしょうね」とユリカが微笑んで、清次郎が笑顔で頷いた。

それから清次郎が、ユリカの学生時代の話を聞きたがり。

私も興味津々で突っ込みを入れて、ユリカは二ヤで答えていた。

1時間ほどでユリカの店を出て、ローズに行った。

リアンが清次郎を見て極炎笑顔で迎えて、奥のＢＯＸに招いた。

『１２月も落ち着いたね、ユリカの店も満席じゃなかったよ』と笑顔で言った。

「今年のピークはもうお仕舞い・・また来年頑張るの」とリアンが笑顔で返してきて、清次郎の横に座った。

リリーが清次郎に挨拶して、私の横に座って微笑んだ。

「リアン・・戻りましたね、おめでとう」と清次郎が笑顔で言った。
「ありがとう、先生・・何とか帰還しました」とリアンが極炎ニカで返した。
「リアン・・由美子に会ったのかね？」と清次郎が聞いた。
「はい、由美子と・・先生の大切な教え子の、美由紀で戻りましたよ」とリアンが嬉しそうに返した。

「受け入れたね・・リアン、もう少しだね・・真実の姿が現れるまで」と言って、清次郎はリアンを見ていた。
「真実の姿って・・有るんですかね？・・分からなくなっています」とリアンが返した。
ユリカの強く優しい波動が、連続して来て2人を包んでいた。

「リアンが中3の時・・私は二度と、真実の姿には戻れんかもと思った。
妹を背負って歩こうと覚悟をしたからね、あの時に・・小学校の職員室で。
リアンは土下座をしてたね、叫びながら・・妹は出来ると叫んでいた。
リアン、良かったね・・妹さん美しく、素晴らしい女性になったね。
私も今夜挨拶されて、本当に嬉しかったよ。
リアンの叫びは間違ってなかった・・教師達が間違っていたね。
詩音という名前は、リアンが巡り会った親友・・ユリカさんの命名。
妹さんを理解して、愛情を込めて贈った名前・・詩音。
あの時のリアンは強く言ったよね・・妹は特別なんだ、最上級の人間なんだ。
私は何よりもリアンの叫びが響いたよ・・リアンは、あの時に得たんだよ。

強力な炎を得たんだよ・・常識を打ち破る為に、愛する妹の為に。
何も考える必要は無い・・リアンは自然に戻る、本来の姿に」
清次郎の言葉は、生徒に諭すように優しく囁いた。
リアンの喜びの笑顔が咲いて、リリーも微笑んでいた。
「先生の最大の問題児が、自立させてくれました・・シオンの望みを気付かせました」とリアンが微笑んだ。
「そうだろうと思ってたよ・・最大の問題児だからね」と清次郎は焼酎を飲みながら笑っていた。
「問題児は・・行動がですか？」とリリーが笑顔で聞いた。
「そうですね・・行動というより、生き方がそう言えるよね。
それは普通という、常識論で考えれば・・これだけの問題児はいないね。
中１で２３歳の女性と同棲して、夜街で働いてるんだから。
だが担任である私は、それを許可してしまった。
もちろん、両親の承諾が有ったのもあるが、私の心が許可をしたんじゃよ。
些細な事だと思ってしまった、私の想定してる中では・・些細な事だったよ。
その状況が小僧を向かわせたのだから、再び命と向き合わせたんだから。
それこそに意味がある、そう思ってしまった。
小僧は学校ではほとんど問題を起こしません、中学に入り安定感が増した。
それは美由紀と同級生になったから、そして沙織も同じクラスだからね。
中学には小学校から、次に入学する生徒の分析評が来るんです。

小僧のそれに書かれていた、小６の時の担任の言葉が素敵でした。
小僧という人間は、何を学びたいと願うのか・・それを探している。
小僧は子供社会を支配している、その行動力と失敗を恐れない心で。
周りの全ての子供が、最終的に小僧の判断を待っている。
いつの日か、小僧が自分自身に、自分の願いを伝える事を願っている。
春雨の叫びで伝える事を、私は願っている。

そう書かれていました・・私は初めて、分析評で感情的な文面を見ました。
多分・・最後に小僧の分を書いたのでしょう・・考えながら感情が溢れた。
小僧という生徒を客観的に考えた時に、感情の制御が利かなかった。
私はそう思いました・・その文面から溢れ出す、愛情を感じてね。
確かに小僧は、子供社会を支配しています、その経験と人脈で。
しかしそんな事は、小僧にとってはどうでもいい事なんです。
私にとって、小僧と美由紀は表裏一体・・教師という仕事の、最終問題です。
最終問題が一番難しい、試験という物の常ですね。
どちらが欠けても、答えは出せない・・小僧と美由紀が存在するから挑める。
私は問われているんです、今まで関係した全ての生徒達から。
どこまで信じて、どこまで許せるのだと・・そう出題されている。
生徒を信じられないのであれば、教師など辞めないといけない。
私はそれだけを自分に命じてやってきました、その集大成がこの２人。

命と向き合い続ける、最大の問題児の小僧と、最良の存在である美由紀なんです」

清次郎は少し酔ったのか、饒舌になっていた。

リリーは嬉しそうな笑顔で聞いていた、瞳のリングが綺麗に出ていた。

「素敵ですね、生徒の分析をする時に・・感情的にさせる存在」とリリーが笑顔で返した。

「今夜は気分が良いから、面白い話をしましょう」と清次郎が私に二ヤで言った。

「やった〜・・先生、早く早く〜」とリアンが少女のような笑顔で促して、リリーも嬉しそうに笑顔で頷いた。

「私が小僧に会ったのが、小僧が小3でヒトミちゃんに夢中の時期です。

私はそれから何度も、暇を見つけると小児病棟を覗きました。

小僧はヒトミを見送って、ミホにチャレンジして挫折した。

それでも小児病棟通いを続けた、入院してる仲間がいたからでしょう。

自傷の女神との出会い以降、小僧は変化しました。

私は他のどの事実よりも、自傷の女神の復活方法に驚いた。

小僧のその強い想いと、自分の全てを賭ける実行力に。

その時に思い出してね、自傷の女神が退院した後で小僧に話した。

病院の屋上でジュースを飲みながら、私はある教え子の話をした。

その子も美しく、成績も優秀なのに・・誰にも認められなかった。

この国を支配する常識が、その存在を許さなかった感じだった。

そう話したんです・・そうしたら、小僧が笑顔で言いました。

素敵な人なんだね、認められないなんて・・絶対に素敵な人なんだ。
俺も・・多分、豊兄さんも・・この国では認められないよね。
俺はそれで良いと思ってるよ、ミホの時にそう思ったよ。
医学を専攻した、優秀とされる頭脳に失望したから。
先生・・机の上で、人は何かを学べるのかな～？

小５の小僧は海を見ながら、私に問いかけました。
私はそれではっきりと思い出した、その認められなかった少女の言葉を。
その言葉を小僧に話しました、中３の少女の言葉を。
その子がね、こう言った・・普通と言われるのは、褒め言葉なの？
人間は同じでなければいけないの？アメリカのような国はどうなの？
肌の色も習慣も違う、そんな人が沢山いる国に・・普通ってあるのかな。
私は従えないルールは守れない、でも自分が決めたマナーは守ります。
そう言ったんだよ・・私は思っている、机の上で人は学べない。
机の上でやるのは、教えを受けるだけだから・・学ぶとは別の意味だと。
学ぶとは経験でしか出来ない、その事に大きな意味が有るんだと言いました。
小僧は笑顔で聞いていました、そして私に忘れられない言葉を伝えてくる。

清次郎先生は間違ってないよ、今の悩みは豊の心に近いと思うよ。
豊兄さんは・・爺さんを楽にさせたいとか、恭子と結婚したいとか。
そんな事で高校に行かないんじゃないよ、学びたいんだよ。

自分の選んだ仕事を学びたい、そう強く勝也に言ったよ・・本気だったよ。

私は本当に驚いた・・小僧に私の抱えてる悩みなど、話してなかった。

私はその時、中３の豊が高校に行かないと言っていて、それを考えていた。

清次郎先生・・俺はいつか出会うよ、その素敵な女性に。

その時に話してみたい・・どうやって自分のマナーを作るのか。

マリが俺に言い続けてる事、道を繋げって言われてるんだ。

俺は自傷の女神でやっと分かったよ、マリの言葉の意味が。

人との関わりを大切にして、道を繋げば再会できるんだね。

ミホにまた会える・・それがマリの言いたい事なんだよ。

マリも後悔してるんだ、俺は最近それが分かった・・マリが強く言うから。

マリはあの写真をミホが見せられる事を感じてた、でもそれを阻止しなかった。

マリは今回はそれが大切な事だと感じた・・だから俺は道を繋ぐよ。

その道の途中に、その女性と会いたいな〜・・大切な何かを持ってる気がする。

清次郎先生らしくないよ、何ももったいなくないよ・・豊は望みを叶えるだけ。

自分の心の望みを叶えるだけ、それが豊という男だよ。

清次郎先生が一番良く知ってるでしょ、それが豊の生きる道だよ。

豊も繋ぐんだよ・・修羅場に愛される訳を探しながら。

小僧はそう言い残して、笑顔で小児病棟に歩いて行きました。

その背中を見送りながら、私は確信していました・・小僧が最終

問題だと。
私の教師生活を締めくくる、最終試験が・・隠せない生徒。
自分を偽ることが許されない、その存在に触れる事が出来る。
私は嬉しかったですね・・春雨の叫びの片鱗を、小僧が見せてくれて。
小僧は無意識に読み取ります、人の悩みや苦しみは・・読み取ってしまう。
それが自分には辛い事なのに、それでもヒントを出してくれます。
小僧のヒントの出し方、あの本質から逸らした出し方は。
シズカとマリの影響ですね、相手に気付かせる・・それに時間を費やす。
道を繋げる為にね・・道を繋げたな、小僧・・あの時話した少女。
それこそが・・リアンだよ、お前は巡り会った・・そして道を繋いだ。
夜街で・・ミホに続く道を・・由美子に続く大切な道を」

清次郎が私を見ながら、笑顔で言った。
私も嬉しくて笑顔で返していた、清次郎と一緒にいる時の安心感に包まれていた。

『ありがとう、清次郎・・俺は感じてたよ、リアンじゃないのかって。
あの時・・リアンが清次郎を見た時の、涙を見て感じたよ。
俺は誓いを守るよ・・清次郎に誓った大切な事を、今回は守り抜く。
ミホを復活させて、由美子を諦めない・・由美子が誰かに繋いでくれるから。
清次郎の言った・・生きたくて死んでいった、沢山の命に対する解答。
俺は俺の考えで、その解答を出すよ・・生きるという解答を』

私は素直な自分を楽しみながら、正直に伝えた。
清次郎もリアンもリリーも笑顔だった。
クリスマスの足音が響いている天空の城で、私は安心感に包まれていた。

それからリリーの面白話で、清次郎も楽しそうだった。
１時間ほどで清次郎と店を出て、通りで清次郎の乗ったタクシーを見送った。
それから魅宴を覗いて、ミチルの店に寄った。

指定席に帰った時は、終演前で客も４組になっていた。
私はシュミレーションを繰り返した、リンダの問題の真意を探っていた。

夢中でやっていると、終演を迎えていた。
蘭とアパートに帰り、添い寝して眠りに落ちた。

翌朝、朝食を作り、満開蘭と食べていた。

「清次郎先生の話し、聞いたんでしょ？」と蘭が笑顔で言った。
『うん・・お願いしといたよ、嬉しかったよ』と笑顔で返した。
「私も嬉しかったよ・・本当に素敵な人だよね」と蘭は満開で微笑んだ。
『確かに・・あの歳になるまでに、辿り着くのだろうか』とウルで返した。
「それは難しいね～・・なんせ夜街のドンですから」と蘭は笑っていた。

私は蘭を見送って、朝の仕事をして日記を書いた。

早めにアパートを出て、その当時の宮崎最大の書店に入った。
そして戦闘機の専門書を立ち読みして、ポルシェの専門書を読んでいた。

「そんなに、ポルシェが欲しいの？」と後ろからユリカが二ヤで言った。
『ユリカ・・何買ったの？・・・女性誌かな？』と振り向いて二ヤで返した。
「ダイバー雑誌・・深海に潜るから」と爽やか笑顔で返された。
『ユリカ・・怒るなよ～、昨夜は清次郎がいたから話せなかったよ』と二ヤで返して、２人で書店を出た。

私はユリカに連れられて、大きな美容室に入った。
ユリカは常連のようで、店長らしきマダムが挨拶に来た。

「それで、リンダの設定は・・どんな難題なの？」とユリカが爽やか二ヤで聞いてきた。

『潜水チームの胸に、直径１０ｃｍの赤丸を付けろって。
そこにダメージを受けると、戻される設定を要求してきたよ』

私も二ヤで返した、ユリカは珍しく可愛い不敵を出していた。

「そこまで行くんだね、今回は」とユリカが言った。
『そこまで行かないと、駄目だって事だろうね』と笑顔で返した。

ユリカが美容師に呼ばれ、私は雑誌を何気に見ていた。
ユリカは髪を揃える程度切って、笑顔で戻ってきた。

『何も変わってない感じだね・・それにお金を払うのか～』と二ヤ

で言った。
「変化を感じさせない、大切な事なのよ・・私にとって」とユリカが笑顔で腕を組んできた。
私はユリカのご機嫌笑顔を見ながら、クリスマスソングが鳴り響く街を歩いていた。
１２月２３日になっていた、その当時は祭日ではなかった。
私はユリカに手を引かれ、デパートに入った。
ユリカは時計売り場で、腕時計を見ていた。
「防水の優れてるモデルは、この辺のですか？」とユリカが店員に聞いた。
「そうですね・・日常防水でしょうか？」と店員が笑顔で聞いた。
「サーフィンをやるのに、問題が無い程度です」とユリカが笑顔で返して、私に二ヤを出した。
私は慌ててユリカに側に行って、ユリカの笑顔を見ていた。
「それならば・・この辺りなら、問題ないと思います」と店員が笑顔で言った。
「黒かシルバー・・どっちが良いの？」とユリカが最も高級な腕時計を指差し、笑顔で聞いた。
『やっぱり・・黒かな』と嬉しくて笑顔で返した。
「じゃあ・・黒を頂くわ、ベルトの調整をお願いします」とユリカが店員に言って。
店員が頷いて、奥に品物を取りに行った。
『ユリカ・・良いのかな～、こんなに高級な物を貰って』と真顔で言った。

「らしくない事言わないの、私の感謝のプレゼントだから」と爽やか笑顔で返された。
私は店員にベルトの調整をしてもらい、そのまま腕時計をはめてデパートを出た。
「私と蘭には、手作りよね～？」とユリカが笑顔で探りを入れてきた。
『内緒です・・明日のお楽しみで』と笑顔で返した。
「それで・・蘭からは何なの？」とユリカが二ヤで聞いてきた。
『実用品で・・新車のチャリを買って貰うのだ～』と笑顔で威張った。

「カスミ達は、何なのかな～？」と又もや探りを入れてきた。
『人数が人数だから・・俺の先輩が、博多で露天のアクセサリー売っててね。
その人に電話して、ネームのキーホルダーを作ってもらった。
源氏名のキーホルダーは持ってないでしょ、だから今年はそれにしたよ。
５人娘はいらないし、だから共同体全店・・しめて５５個。
お安くしてくれて、助かったよ・・まともに取られたら無理だった。
まぁ、貸しを使ったんだけど・・素敵な感じに仕上げてくれたよ』
私は笑顔で、ユリカの笑顔を見ながら言った。
「そつが無いね～・・全員とは、やりますね～」とユリカが二ヤで言って、２人で蕎麦屋に入った。
ユリカが二ヤで、リンダとマチルダが座った席に歩いた。

「寒いから・・残念だけど、ホットにしよう」とユリカが二ヤで座って言って。
『俺もホットだな』と笑顔で言うと、後ろから声が聞こえた。
「アイス・プリーズ」とマリが後ろから二ヤで言葉で言った。

『マリ・・寒いから、ホットにしなさい』と笑顔で返した。
マリは頷きながら、ユリカの隣に座った。
私は蕎麦を注文して、２人が笑顔で話すのを見ていた。
同調で話していたから、他人が見ると不思議な光景だと思っていた。

「それでは小僧、聞きましょう・・リンダさんの提案?」とマリが同調で言ってきた。
『潜水チームの・・・』私は赤丸を着ける提案を話した。

「了解、その設定じゃないと駄目だよね」とマリが二ヤで言った。
「いつにする?・・蘭は金曜日が休みでしょ?」とユリカが笑顔で聞いた。
『うん・・靴屋はイヴまで忙しいらしい・・２５日に決行しよう』と笑顔で返した。
「何時からやる?」とマリが返してきた。
『今回は時間設定が出来ないから、午前中には始めよう・・１０時位から』と返した。

「そうしようね、ＰＧの開店に間に合う時間に終わらなければ・・アウトって事で」とユリカが言った。
『了解・・それで繋ぐから、ユリカの店はよろしく』と笑顔で言って、蕎麦がきたので食べていた。

ユリカにご馳走になり、マリと2人で礼を言ってＰＧに向かった。

ＴＶルームには、いつものメンバーが揃っていた。
マリアが天使で駆けてきて、ユリカとマリに代わる代わる抱かれて。
最後に私に手を伸ばしたので、私はマリアを抱いて眠そうな天使を見ていた。

「眠る時は、エースが良いんですよ・・私よりも」とユリさんが薔薇二ヤで言った。
「温度で会話しますからね～・・寝物語を話すんでしょうね」とユリカが爽やか二ヤできた。
『マリアとは、伝達は使いません・・いざと言う時以外は』と二ヤで返して。

『ハルカ・・準備の状況はどうかな？・・空母に乗ってもらいたくて、調整をしたいから』と二ヤで言った。
「うっそ！・・・１時間待って、終わらせてくる」とハルカが二ヤで返してきて、４人で慌てて出て行った。
『ノリノリだな～、ハルカ・・パイロットに成りたかったか～』と背中を見送りながら呟いた。

ユリカが他のメンバーに、リンダの提案を話していた。
「そのレベルを、リンダは要求するのですね」とユリさんが驚いて言った。
「当然、戦闘機は撃墜されたら戻されるのね？」とネネが二ヤで言った。
『そうなるだろうね・・空中戦は難しいよ』と笑顔で返した。

私は盛り上がる女性達と離れて、眠ったマリアを抱いて、イメージに戦闘機を入れていた。
管制室で空母を見てると、私の横の席に誰かが座った。
私が驚いて見ると、マリアが天使全開で空母を見ていた。

『マリア・・お昼寝したんじゃないの？』と私は平静を装って、笑顔で言った。
「ねんね、してゆよ」とマリアが私を見て、天使で返してきた。
私はそれ以上聞かなかった、マリアに関しては何も詮索しなかった。
マリアとは私にとって、それほど大切な存在だったのだ。

「ひこうき、とぶね」とマリアが笑顔で言った。
『うん・・今回は飛行機が飛ぶんだよ、マリアはここで見ようね・・他の４人と』と笑顔で返した。
「うん、そらにいくよ、すーぱーまりあまん」と管制塔から見える空を見ながら、天使全開で言った。

私はマリアを見ていた、何を感じてるのだろう・・そう思っていた。
そして思い出した、マリアがマリに言った・・《おかえり》と言う言葉。
マリアはマリが、どこから帰ってきたと思ったのだろう？
私はそんな事を考えながら、マリアを見ていた。

管制塔の前の大淀川には、シズカのデザインの空母が浮いていた。
感覚的な人間に憧れる、情熱的な知識者であるシズカ。
その根源的な夢を、私は垣間見てしまう、シズカの本質が憧れ続けるもの。
それは計算できない世界、確固たる正解が存在しない世界。
シズカはリンダの難問に、自分の問いかけも加えた。

天才と呼ばれるリンダに、シズカは独自の組み合わせで挑む。
そしてその2人を凌駕する、エミの発想力が強烈に問いかける。
3人の異なる知能に、最後に微笑みかける・・感覚的な人間の至宝。
マリアはその存在の意味を知らしめる、その時が近付いていた。
チサを見送って、8年後のクリスマスだった・・。

【冬物語・・リンダの試験？】

実感できる変化とは、あまりに大き過ぎて負担がかかる。
微かな変化が望ましい、微かの連続が作り出す。
歩幅は自分の距離で作る、広く取りすぎても続かない。

私はイメージの世界でマリアと遊んで、映像を切った。
女性達は、クリスマスの話題で盛り上がっていた。
マリアは私の腕の中で、深い眠りに入っていた。

久美子が来て、マリを誘ってピアノに向かった、マリは嬉しそうだった。
女性達は、クリスマスの話題で盛り上がっていた。
私はマリアをベッドに寝かせて、女性達の話を聞いていた。

「は～・・今年もシングルベルが鳴り響く～」とネネがウルで言って。
「私なんか・・本当のシングルベルを、2度も経験したよ」とリリーが二ヤで言った。
「寂しい話題が耐えないね～・・妥協すれば、簡単に克服するメンバーなのに」とユリカが爽やか二やで返した。

「そこなんですよね～・・妥協できないですよ」とネネが笑顔で返して。
「妥協する位なら、シングルの方がましですから」とリリーも笑顔で返していた。

「私は分からないな～・・今まで男性と付き合った経験が、ほとんど無いから」とカレンがウルで言った。

「カレンは良い子だ・・シオンは意外と、付き合った経験は豊富らしいよ」とネネが二ヤで突っ込んだ。
「シオンは女子大生ですからね、出会うチャンスも豊富ですよ」とカレンが笑顔で返した。

「そうですね・・リアンはつい最近まで、その部分を心配してましたよ」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「シオンは安定しましたね・・自分のタイプを確認できて、ＰＧでの経験も加味されましたから」とユリカが笑顔で返した。

「シオンが確認できた、自分のタイプって・・どんな感じなんですか？」とカレンが笑顔で聞いた。

「自分を正面から受け止めてくれる人だよ、白い弾丸を発射出来る相手。
シオンはそれが家族以外には出来なかった、出来ない事だと自分で決めていた。
でもその発射口の扉を抉じ開けた、噂の夜街のエースがシオンを迎えに行った。
シオンが閉じ篭る心の部屋に、自分から入って行ったのよ。
そしてシオンが開かないと思っていた、普通に続く出口だと思っていた扉でない。
反対側の別の扉を示して、そこでも良いんだと伝えたの。
そして手を繋いでその部屋を出たのよ、この表現はシオン自身の言葉なの。
本当に素敵な言葉だったよ、自らのイメージを明確に言葉で表現できる。
エースはその時に気付いたの、命名した私でも何となくしか感じてなかった。
シオンは自分の心を詩に変換する、それを歌うような流れで話す

の。
その時がシオンの開放の時間なのよ、あの純白の心が開放される時なの。
それをシオン自身に提示したの、自分がターゲットになる事でね。
エースは確かに・・あのお祭りの夜に、心に瀕死の重傷を負った。
リンダに出会った日で、リョウにもその夜に出会ったの。
本当に超過密な日だった、リンダの影響を無意識に受けてたし。
自分の持っている映像という能力が、別の世界に入ってしまって。
エースは制御が利かなかった、疲れ果て混乱してて・・私が少し戻したの。
でも私では少ししか戻せなかった、そこにシオンが現れるの。
シオンは瞬時に感じたのよ、エースの疲労を・・そして寂しい心を。
それを感じて無意識に弾丸を込めた、エースの心に問いかけたくなった。
初めて他人に自分の強い想いを伝えたくなって、銃口を向けたの。
シオンの強い白い弾丸は、その本質を撃ち抜いた・・心に問いかけた。
エースはそれで決めたのよ、シオンをＰＧでデビューさせようと。
ＰＧに絶対に必要だと確信して、シオンにも大切な経験になると感じたの。
エースはその時に設定したわ、シオンが将来リンダと旅をするって。
それからゆっくりと時間をかけた、デビューまでの歩みを見守った。
そしてシオンは開花したの、今はお客さんに対して必要だと感じた時には。
優しい白い弾丸を発射するのよ、それがどんなに響くのか分からないわ。
最後に１つだけ教えるね・・本人がいないから。

エースは確信的に感じたの、シオンなら届くかもしれないって。
百合の咲く頂に、届くかも知れないと思ったのよ。
エースは2人の女帝候補を失っているの・・ミコトとシオンを。
ミコトの自分自身を結論を尊重して、その引き際を見たいと願っている。
だからこそあの言葉を贈った、ミコトには一番深い部分に響いたわ。
自分が堂々と酒を飲める時に、存在しないであろうミコト。
愛の有る言葉だった・・その寂しさを、ストレートに表現した。
ミコトもあの言葉で舵を切ったわ、何かを伝えて・・何かを残したいと。
エースはその時が来れば、必ず伝えてくれるよ・・正直な想いを。
どんなに時間がかかっても・・必ず伝えてくれる。
私は伝えられて分かった・・春雨の叫びと呼ばれる、最強の武器の本質を。
昨夜、清次郎先生が教えてくれた・・春雨の叫びには乗ってくると。
幼くして命を奪われた・・チサちゃんとヒトミちゃんが乗ってくる。
その問いかけは強く響く・・なぜ生きてるのかと、問いかけてくるから」

ユリカの静かな言葉が響いて、静寂が訪れた。

「ユリカ・・また踏み出すんですね、エースは準備してますよね。
そろそろ話してもらいましょう、なぜ幻海にこだわるのかを」

ユリさんが薔薇二ヤで私を見た、女性達も驚いて私を見た。
「確かに何かありますよね・・私にも隠してる何かが」とユリカも二ヤできた。

『そうきますか～・・俺は不思議に思って、情報源に聞いて回ったんだ。
幻海になぜ、ママと呼ばれる責任者が存在しないのかと。
それが不思議だったから、情報を収集したんだよ。
幻海は最高級店だから、リッチな客ばかりなんだ。
だからお気に入りの子に、店を出させるなんて簡単なんだよ。
店のリーダーに成り得る子は、魅力的だから誘惑も多い。
幻海のフロアーリーダーは、俺が聞いただけで６人も独立してる。
俺はその話を聞いて、問題点を考えていたんだ。
確かに今の時代の独立は魅力的だよね、上手くやれば稼げるし。
それに一国一城の主だから、誰に気を使う事も無い。
そう考えてて、蘭の言葉を思い出したんだ・・俺は蘭に聞いたんだよ。
蘭は本業として靴屋を大切にしてるのかと、そう聞いてみた。
蘭は即答したよ・・そうじゃないと、別に靴屋に何かを求めていない。
ただ仕事に対して、真摯でありたい・・自分には本業なんて無い。
靴屋にいるときは、靴屋・・ＰＧにいるときは、ＰＧが本業だと。
自分は接客業がしたいんだと・・さらっと言ったんだ。
俺はリアンに出会った時に聞いたんだよ、蘭も相当の誘いが有ったんだと。
ＰＧが店を閉める話の時に・・蘭は大きなクラブや、独立の誘いもあった。
それを全て丁寧に断った、そしてＰＧ閉店後に、ローズに行く事を決めていた。
俺はそれはなぜかと尋ねた、蘭は笑顔で答えたよ。
独立に夢を感じないし、ＰＧ以外のクラブに行く気は無かったと。
その当時の蘭は、別に経済的な問題で夜の仕事をしていない。
確かに車に金がかかるけど、それは別問題だし・・夜を辞める事

もできた。
蘭は今でも、ＰＧを愛している・・自分の居場所だと感じている。
俺はそれを考慮して、幻海の事を考えてた・・そんな時、出会ったんだ。
マリーレインのフネという女性に、フロアーをチェックしてる人に。
その人が俺に聞いたんだ、俺は幻海の話だったから・・ユリカに隠した。
面白い話な感じだったからね、今はそれをユリカに気付かせたくなかった。
フネさんが俺に聞いたんだ、幻海は上手く行きそうかと。
俺は概要と提案の話をして、フネさんに聞いたんだ。
なぜ幻海の女性は独立を選ぶのかとね、フネという人が詳しいと感じたから。
フネさんはこう教えてくれた、勘違いするからだと。

幻海の客はリッチな企業家や、大手企業や上級公務員、医者や弁護士等々。
そんな客ばかり見てると、自分が貧しく感じていく。
同世代の女性の、何倍もの収入が有るのに・・貧しく感じてしまう。
だから勘違いしたまま、金を稼ぐ事ばかり考えるようになる。
自分も客と同じ位置まで行きたいと、そう願うようになる。
その勘違いに中々気付かない、だから甘い誘いに乗ってしまう。
独立しても、経済的状況は変わらない・・下手すると、手取りは落ちる。
お前の愛人の、リアンとユリカのようにはいかない。
しかし幻海の女は、あの２人のように出来ると勘違いしてる。
自分達が最高級店のリーダーだった自負から、レベルの違いに気付かない。

その最大の問題点は、契約に対して曖昧だという事なんだよ。
リアンは梶谷さんと、契約を交わしていた・・もう完済しただろうけど。
銀行で金を借りるように、キチンと契約して始めた。
ユリカは大ママだったから、当然キチンと返済した・・この重大さに気付かない。
この街はすぐに噂が流れる、誰が独立して・・誰がスポンサーなのか。
その契約が曖昧ならば、愛人だと言われる・・それにより客足は伸びない。
現実は厳しいんだよ・・クラブの客を引っ張るのは、難しいんだよ。
それでも独立の話に乗る・・貧しいと勘違いしてるからね。
フネさんはそう教えてくれたんだ、俺はそれで少し分かったんだよ。
轟オーナーが、なぜあんな強引な手を使って、リリーに仕事をさせたのか。
リリーに賭けていたんだよ、本物のフロアーリーダーが欲しくてね。
俺はこの話でなんとなく分かった、だから幻海に次の提案も考えた。
でもその必要は無さそうなんだ、アイコは行ける・・多分、肩を並べる。
同世代の、蘭・ナギサ・リリーに割って入る・・その可能性は大きい。
俺は来年から・・アイコを出す、手始めにＰＧと魅宴とゴールドに。
その時には、幻海にユリさんを投入する・・次のリーダー発掘の為に。

アイコに火を点ける・・あの落ち着いた物腰に、炎を纏わせる。
それが出来れば・・俺は6人の経営者に、許可の申請をする。
幻海を共同体に入れる申請を、もちろん責任者は・・アイコでいく。
俺はその状況により、次の点火を目指す・・蘭とナギサの次の点火を。
同世代が責任者になった時、蘭とナギサが何を求めるのか。
仕事に対して真摯でいたいなら、絶対に踏み出してくる。
それが出来れば・・リアルに東京ＰＧが見える、蘭とナギサの次の覚醒で』

私は最後に二ヤで言った、ユリさんもユリカもニヤで返してきた。
「そこまで考えてるの！・・幻海にもプラスになって、あの3人を覚醒するの」とリリーが驚いて言った。
『その位ないと、あの2人は難しいんだよ・・そのレベルまで来てるから』と二ヤで返した。

「だから・・きっかけは分かったから、私への作戦は何なの？」とユリカが促した。

『もちろん・・マリーレイン対策、その最大の問題点。
広すぎるという、物理的な問題点に挑みたい。
マリーレインはＰＧの約2倍の面積が有る、だから女性を揃えるのも大変なんだ。
かなり強引な引抜をやってたのは、皆知ってると思うけど。
加々見御大は、会社組織でマリーレインを作った。
その理由は俺の予想と違ったけど、夜街に新しい提案をしたのは事実だよね。
その弊害として、ボーイは会社員なんだよ・・実績で評価される。
だから目立つ実績に走るんだ、その影響で強引な引抜が発生した。

その1番のターゲットになった店が、ピーチなんだよ。
武藤はその対抗策として、あんな締め付けを始めたんだ。
なんせ武藤は元公務員の、小心者だから・・御大と喧嘩など出来ない。
強引な引き抜きなんて、何も良い事はないんだよ・・店も女性も。
店は敵を作るだけだし、女性も後ろめたさを持ってしまう。
だからマリーレインは女性とボーイが、互いに相手に責任を擦り付ける。
その雰囲気が店に充満してて、ボーイはフロアーの監視員になっている。
だから客はくつろげない・・そんな状況だから、2流以下の客しか来ない。
そして女性達が無防備なんだ、ボーイが見てるという安心感で仕事してる。
それがどんなに危険な事か分かってない、分かろうともしない。
ただ拘束時間内だけ、笑顔を出してれば良い・・そんな感覚になっている。
俺は色々作戦を考えた・・そしてマリーレイン第一弾は、四季を出す。
4人を揃えて、そのコンビネーションを見せ付ける。
女子大生であり、副職である四季が見せる・・レベルの違いを。
それで少しでも変化が有ったら、出動してもらうよ。
水のユリカに・・今回のマリーレイン・・その店の改革。
その柱こそ、夜の掟・・ユリカしかいない。
今回はユリカに問う、次世代に何を伝えるのか・・それが見たい。
ミコトでも小夜子でもない、常時側にいれない相手に。
だから行動と言葉で伝えるしかない、私のやりかたを見ろとは言えない。
広過ぎて見えないから・・だから直接伝えるしかない。
必ずいる、2人や3人は絶対にいる・・次の世代を牽引する者が。

ユリカ・・逃げるなよ、リアンが次の女帝だと公言して。
そんな段階で逃げるなよ、まだユリカは責任を果たしてない。
夜の仕事に感謝してるなら、想いは残してもらう・・次の世代に。
理由などいらない、俺はその幻影を切望する・・ユリカの幻影を。
俺が堂々と酒を飲めるようになった時、存在するのか分からない
ユリカ。
その時・・幻影がいなければ、俺はどうすればいいんだ。
何を求めて彷徨えば良い、幻影を残せユリカ・・それが俺の次の
提案だよ。
俺はその子に執着してみせる、必ず全力でトップを取らせる。
ユリカに取らせられなかった、何の意味も無い・・夜街のトップ
を。
栄光も名誉も賞賛もない、幻のような称号・・女王を作り出す。
ユリカの想いを引き継いだ、その女性を導いて見せる。
その時に感じてね、ユリカ・・俺は心で叫ぶから、素敵だよ・・
ユリカって』

私は感じている想いを全て伝えた、感情的な部分を隠すこともしな
かった。
ユリカは深海の瞳の最深部を見せて、私を見ていた。

「分かったよ、エース・・やってみせるよ・・ありがとう、嬉しか
った」とユリカが爽やかに微笑んだ。
『約束だぞ、ユリカ・・俺は絶対にユリカだけは感じてる、限界の
一歩手前で抱き上げる』と笑顔で返した。
「安心してるよ、私はあなたに対して・・疑念なんて、微塵も無い
よ」とユリカが静かに言った。

「いよいよ来ますね、ユリカの次の姿・・私は本当に楽しみですよ」

とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「次の段階じゃなくて、次の姿ですか・・楽しみです」とリリーが微笑んで。
「ＰＧの２倍の店でも、存在感が違うでしょうね・・見たいです」とネネが微笑んだ。
「ＰＧの２倍ですか・・確かに難しいでしょうね」とユリさんが真顔で言って。
「大きすぎますよね、ＰＧでもかなり大きいのに」とユリカが返した。
「ところでエース・・そのフネという女性は、どんな感じなんだい？」とマダムが聞いた。
『歳は律子位かな～、綺麗な人だから、元プロって感じだよ』と笑顔で返した。
「サツキだね・・麗しの５月と呼ばれた、幻海の幻だよ」とマダムが二ヤで言った。
「幻海のオープニングＮｏ１の！・・あのサツキさんですか？」とリリーが驚いて聞いた。
「そうだと思うよ、サツキの本名は・・確か船井だったよ、呼び名はフネなんだよ」とマダムが返した。
「最近、有名人が現れますね～・・麗しの５月、私も聞いた事があります」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「確か・・大ママと仲が良いんですよね？・・私も聞いた事があります」とユリカが微笑んだ。
「そうじゃよ、飛鳥が姉さんと呼ぶ女じゃよ。
ここ１０年以上、噂も聞かなかった・・夜を辞めて１５年以上経

つ。
嫁に行って、主婦をしちょると・・１０年位前に聞いた。
加々見が探して来たんじゃね、それほどに難しいんだろう。
ＰＧの２倍の規模と言う事は、今のＰＧの２倍のメンバーがいる。
女性の選り好みは出来んじゃろう、だから中途半端な人間も使う。
そうなると、出来る者も出来なくなる・・やる気が失せるんじゃよ。
どんなに頑張っても、報酬はほとんど変わらない・・それを見るからの。
いい加減にやっても、同じ報酬だと感じれば・・そこまでなんじゃ。
だからＰＧも魅宴も、専属には厳しい・・今はバイトもあまり入れない。
もっと厳しい男が、派遣してくれるからね・・バイトは週末に入れるだけ。
ワシは出来る女になら、専属よりも支払って良いと思っちょる。
飛鳥とユリが決めた、派遣の自給・・それを半年に一度見直すと言う。
昇給を付けようと決めた、その検討を半年に一度行う。
ワシは新しい時代を感じてるよ、昇給・・おおいに結構。
それで少しでも、やる気の助けになるのなら・・必要経費じゃよ。
エースは間違わなかった、派遣に対する自分のルールを守り続ける。
だからこそ、ネネはＰＧじゃったんじゃろう・・ネネの問題点を感じて。
女性同士の関係の確立を促した、当然ネネでも派遣は出来る。
しかしそれでは・・ネネが女性達との、信頼関係を構築するのが難しい。
その判断で、ネネをユリに預けた・・エースは常に、最初に女性の事を考える。

幻海とマリーレイン、面白いだろうね・・フネまで存在するのなら。
松が喜ぶよ・・フネは辞める前こう呼ばれた、真希を背負いし者とな」
マダムは女性達を見回して、ニヤで言った。
「最近は本当に不思議ですよね、復活劇が多すぎます」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
「それに真希さんの娘まで登場して、夜街の物語の原作者も・・粋な人ですね」とユリカが爽やか笑顔で言った。
「繋げたのかもな・・真希と北斗が消えて、飛鳥は喪失感と戦う為に魅宴を出した。
その少し前、轟が幻海を作った・・魅宴の開店の日、勝也が同伴したんじゃよ。
サツキを連れて魅宴の開店日に来店した、そしてサツキを飛鳥に紹介したんじゃよ。
飛鳥は多分、一瞬で好きになっただろう・・サツキの雰囲気は圧倒的だった。
タイプは違うが、真希と同じ夜の匂いに溢れていた。
世界の広さを実感した・・飛鳥はその時にそう言ったよ、嬉しそうにね。
飛鳥の喪失感は、サツキが消したんじゃ・・だから飛鳥は魅宴に集中できた。
飛鳥が後に言った・・サツキに何も返せなかった、自分は支えて貰うばかりだった。
そう悔しそうに言った事がある・・今回、ユリカがマリーレインを起動に乗せれば。
飛鳥の喜びは計り知れない、自分が育てたユリカが・・サツキの

手助けをすれば。
ユリカも飛鳥に恩返しが出来る事になる・・ユリはあの時、泣いたよの～。
由美子の段階の時が終わった時、北斗に少しだけ恩返しが出来たと・・泣いた。
多分・・ユリカのリアンも、同じ想いだったじゃろう。
エース、良くやった・・道を繋いで、そして背中を押したな。
お前にしか押せん・・水のユリカの背中だけは、お前以外には押せんよ」

マダムが私に笑顔を向けて、私も笑顔で返した。

「夜街の物語に、クライマックスは無いんですね・・永遠に続く物語ですね」とリリーが嬉しそうな笑顔で言って。
「何かを伝えたい、その本当の意味が・・今分かりました」とネネも笑顔で言った。
「上がったね、ネネ・・エース、ネネに次のメッセージは？」とユリカが微笑んで、ネネが私を見た。

『継承し継続して、伝承しろ・・和尚はそう言う。
俺は和尚の弟子だから、その教えは託したよ。
感じたら、伝えろ・・俺はそう言って来た、哲夫を筆頭に次の世代に。
今は5人娘に伝える・・感じる事を大切に、感じたままを表現しろと。
俺が今一番こだわるのは、ミサとレイカと安奈の感性。
あの沙紀の絵の全ての想いを読み取れる、その感性を継続させたい。
だからサクラさんとマユとも話してるけど、絶対に否定しない。
人はどこかでそれを覚える、感じたままを表現すると恥ずかしい

と。
エミも危なかった、エミは発想が飛び越えてるから・・時間を飛び越える。
純粋な子供は、否定されると・・悪い事だと思ってしまう。
否定される事自体が、悪い事でも・・間違いでもない。
はっきり言えば、良い事や正しい事など・・曖昧で分からない。
感じたままを、表現してみる・・そして相手の反応を楽しむ。
楽しむんだよ、ネネ・・否定されようが、馬鹿にされようが。
そんな事は、些細な事なんだよ・・だから笑って楽しむ。
そうすれば、相手の対応も・・自分の雰囲気も変わる。
ネネ・・変化は目指す事じゃない、受け入れる事なんだ。
自分が好きな物を受け入れて、嫌いな物を外してみる。
変化は実感できない、実感できる変化なんて・・たいした意味は無い。
受け入れた時に、どっかに微かに現れる・・それが変化なんだ。
ネネ・・感じたままを、表現してみて・・言葉と行動で。
否定される事を恐れないで、状況は変化したんだ・・だから大丈夫。
ネネが望んだんだろ・・状況の変化を・・楽しんで、ネネ。
これからが楽しいんだ、ネネは間に合った・・遅れてもいない。
ネネのコンビは誰なの？・・あの小夜子だろ、絶対に親友になる小夜子だろ。
ネネ・・感じたままを表現して、それを待ってるんだよ・・俺も小夜子も』
私はネネの強い瞳を見ながら、笑顔で伝えた。
「了解・・ありがとう、エース・・次に踏み出してみるよ」とネネが笑顔で返してくれた。

その時に、バタバタと4人組が入ってきて、その後ろを蘭と久美子とマリが入ってきた。

「間に合ったみたいだね～・・空母の調整なら、私が必要でしょう」と蘭が満開二ヤで言った。

「蘭、間に合わなかったですよ・・今、上げました・・ネネを一段とユリカを次の世界に」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

「次の世界！・・早過ぎじゃないの～」と蘭が満開ウルで言った。

「蘭・・大丈夫だよ、あんたにも有るよ・・次の世界への策略が」とユリカが爽やか二ヤで返した。

「受けましょう・・気付かないまま」と蘭が私に満開二ヤを出した、私も二ヤで返した。

「エース・・準備ＯＫよ」とハルカが笑顔で催促した。

『じゃあ、こっちに集まろう』と私が言った時に、アンナ親子が来てマリアが飛び起きた。

「えーしゅ・・えーしゅ」とマリアが呼ぶので、私は二ヤでマリアを抱き上げた。

そして私の膝の上に、マリアと安奈を座らせた。

『アンナは出来るから、目を閉じて・・俺を感じてね』とアンナに微笑んだ。

「は～い・・嬉しい」と安奈が笑顔で返してきた。

私達はマダムを残して、円を描いて座った。

『アンナの横にマリがいるから、安心して・・じゃあ、戦闘機乗りだよ。

イメージを入れて・・場所は、橘橋の下の河川敷。
先に安奈とマリアで行って、待っときま～す』
私はそう二ヤで言って、安奈とマリアに微笑んで瞳を閉じた。
すぐに管制室が出てきた、慣れたなと思っていた。
そして次の瞬間には、マリとマリアと安奈が入ってきた。

マリアはスーパーマリアマンで、安奈はなんとウルトラ安奈になっていた。
可愛い顔だけを出して、皮の着ぐるみのような銀のツナギに、赤いラインが見事に入っていた。
マリは笑顔で2人を見て、頭を撫でていた、2人は自慢げな笑顔だった。

『安奈・・誰に聞いたのかな～？・・可愛いよ』と笑顔で言った。
「エミ姉ちゃんに聞いたよ、マリアが飛べるのが良いって、教えてくれた」と可愛い笑顔で返された。
『飛べるのか～・・凄いね～』と笑顔で返して、安奈とマリアを座らせた。

河川敷には、既に全員が揃って、互いの衣装に突っ込みを入れていた。

『ユリカ・・全員揃ったなら、空母に乗って・・滑走路脇の小部屋に、無線機があるから』と言葉で言った。

「了解・・空母に乗りましょう、滑走路に準備してるようです」とユリカが微笑んで、全員がワクワク笑顔で乗船した。

「しかし、凄いね～・・リアルに感動する」とリリーがその大きさ

を感じて言って。
「どうしよう・・ワクワクで、足が震える」と蘭が満開で微笑んだ。ワイワイと滑走路脇の、小さな部屋に入り、全員が無線機を装着した。

『それでは、概要を説明します・・空母は今日は動かしません。
戦闘機のチェックをしたいんです、ですから全員離陸してもらいます。
操縦方法は、従来通り・・基本的には、車の運転と同じです。
違いは、ハンドルを引くと上がり、前に押すと下がります。
ハンドルの右手の親指の位置に、赤いボタンがあります。
それが全開の加速装置です、垂直離着陸も出来ますが、今日は離陸をして下さい。
その方法は、停止状態でアクセルを踏み込んで・・赤ボタンを押します。
加速Gも少し加えてあります、赤ボタンを押すと滑走路を走ります。
機種を上げるタイミングは、滑走路を出た地点です。
早く上げると、後部が滑走路に接触します。
もちろん遅すぎると、そのまま墜落します・・ようは、出てすぐには落ちません。
余力でかなりの時間浮いています、その時にハンドルを引くと離陸します。
専用ヘルメットを用意してあります、雰囲気満点の戦闘機とヘルメットです。
ヘルメットのサンバイザーに、小型モニターを付けました。
そこに攻撃用の画像が出ます、ロック状態は一目で分かります。
ロックして発射すれば、後は追尾して命中します。
相手がロックしそうな時は、警告がでますから・・回避して下さい。

まぁ、概要はこんな感じです・・何か質問は？』

私は二ヤで言った、女性達が全員二ヤで返してきた。

その二ヤ顔が楽しそうで、私は内心楽しんでいた。

それほど難しい状況設定をしていた、リンダの試験に対抗する為に・・。

【冬物語・・リンダの試験？】

自然界ではありえない、完璧な晴天の下に集まった。
挑戦を求め続ける女性達には、笑顔が咲いていた。
私の話を聞いて、女性達は全員二ヤ顔になった。
「試されるんだね、ギリギリまで我慢する行為で・・その勇気を」と蘭が満開二ヤで言った。
「かなりの勇気と覚悟がいりますね、墜落のイメージを乗り越えないと」とハルカがウルで言った。
『その位はやってもらわないと、チェックにならないよ』と二ヤで返した。
「それよりも、武器説明の意味は？・・敵が現れるのかな？」とユリカが二ヤで言った。
『どうだろう・・でも現れたら守ってね、大切な宮崎の町を』とニヤで返した。
「く～・・楽しそう」とリリーが笑顔で言った。
「良いね～・・夢にも見たこと無いよ、空中戦」とアンナも楽しそうな笑顔で言った。
『それじゃあ、時間が無いから・・1機目を出すよ、尾翼に名前が書いてあるから』と二ヤで言って、女性達が笑顔で頷くのを確認した。
私はマリに二ヤを出して、蘭と表示されているボタンを押した。
西向きに停泊している、空母の後部ハッチが開き、台車に乗った真

赤な戦闘機が現れた。
その尾翼に大きく毛筆体の漢字で、【蘭】とゴールドで書かれていた。
蘭の満開が咲き誇り、女性達に向けて敬礼をした、女性達も笑顔で敬礼して見送った。
蘭は乗降用の階段付の台車から、戦闘機の狭い操縦席に乗り込んだ。前面に置いてあるヘルメットを被り、サンバイザーを下ろした。そして上部の強化ガラスのハッチを閉めて、操縦席は密封された。
『蘭・・ガムは噛んだ？・・上空に上がり過ぎると、酸素が足りないから』と無線で聞いた。
「噛んだよ・・大丈夫、落ち着いてるよ」と満開笑顔で返された。
女性達は小部屋に戻り、モニターで蘭の表情と、戦闘機から見える風景を見ていた。
「短い・・そう感じますね、滑走路」とマキが言って。
「確かに短い感じがするね、操縦席から見ると」とレンが真顔で言って。
「乗り込んで見ると、もっと短く感じるかもです」とシオンがウルで返した。
「管制塔・・準備・・ＯＫ」と蘭が無線で言った、集中した良い表情だった。
『了解・・蘭、飛び上がったら・・九州一周でもして待ってて』と笑顔で返した。
「了解、嬉しいね～・・大宰府で成績上がるように、祈願してやるよ」と満開二ヤで返してきた。

『よろしく・・それじゃあ・・メインエンジン点火』と返した、私は蘭の表情を見ていた。
マリも安奈もマリアも、空母の女性達も、固唾を飲んで見守った。

「ラジャー・・メインエンジン点火」と蘭が強く言って、右横の赤いボタンを押した。

戦闘機の後ろから轟音が響き、噴射口が震えて、機体全体が振動していた。
蘭の目の前の空母の滑走路は、西向きの大淀川上流を向いていた。
操縦席から見る滑走路は、短いと感じるのに十分な感覚だった。

『快晴・・風力0・・蘭号・・発進せよ』と強く言った。
「ラジャー・・蘭・・発進します」と蘭がアクセルを目一杯踏み込んだ。

エンジン音が大きく響いて、振動が激しくなった。
蘭は一呼吸入れて、赤ボタンを右手の親指で押した。
その瞬間に、猛烈なスピードで機体が走り出した。
蘭は加速Gでシートに張り付けられたが、目だけは前を見ていた。
ハンドルを強く握り、過ぎ去る滑走路を睨んでいた。

あまりの戦闘機の加速力で、滑走路を走る時間は一瞬だった。
後方から映す映像で、蘭の機体は滑走路を離れ、落ちて消えた。
私が一瞬失敗かと思った次の瞬間、蘭の機体は舞い上がり上空を目指した。

「最高〜・・最高だよみんな・・最高の瞬間があるよ〜」と蘭が叫んだ。

「おめでと～う」と女性達が笑顔になって、蘭の映像を見ながら言った。
蘭の機体はすぐに見えなくなった。
私は次のボタンを押した、ハッチから【百合】と書かれた機体が出てきた。
「当然・・私ですね、お先に失礼」とユリさんが薔薇で微笑んで、機体に向かった。
女性達も笑顔で見送り、マリアも天使全開で映像を見ていた。
ユリさんはヘルメットを被り、集中した美しい顔で前を見ていた。
『それでは・・百合号機・・メインエンジン点火』と私が言うと。
「ラジャー・・メインエンジン点火します」とユリさんが真顔で返して、エンジンを点火した。
私は感心していた、その落ち着いた表情に。
蘭の離陸は、決して成功とは言えなかった、恐怖を与えた方が強かっただろう。
それなのにユリさんは落ち着いて、肩に力も入って無かった。
『それでは・・楽しんで下さい・・百合号機・・発進』と強く言った。
「ラジャー・・発進します」とユリさんも強く返して、アクセルを踏み込んだ。
そうして流れるような仕草で、赤ボタンを躊躇無く押した。
機体は猛スピードで加速して、滑走路を過ぎた。
後からの映像でも、機体が消える事は無かった、少し下がった程度

で離陸した。

「素晴らしい・・本当に最高の時ですよ・・全てから開放されます」とユリさんが珍しく興奮気味に伝えてきた。

「やっぱり・・お好きですよね～・・スピード感」とユリカが爽やか二ヤで言って。

「初めて聞きました・・ユリさんの興奮してる言葉を」とハルカが微笑んで言った。

「興奮しますよ・・最高です」とユリさんが薔薇で返して、消えてい行った。

私の横のマリアは、本当に嬉しそうな笑顔でユリさんを見ていた。

私は次に【アンナ】を出した、アンナが笑顔で乗り込み、綺麗に離陸した。

次に【百合香】で、その好戦的な精神力で美しく離陸して。

【リリー】も楽しそうに、綺麗な曲線を描いて離陸して。

【音々】がその自信のある技術で、落ち着いて離陸して。

【詩音】は楽しそうなニコちゃんのまま、綺麗に離陸した。

そしていよいよ、車の運転免許を持たないメンバーの順番になった。

私が【華恋】を出すと、声が聞こえた。

「お待ちになって～・・まだ間に合うよね？」とカスミが走って来て、戦闘機に向かうカレンに言った。

その後ろに、ナギサと美冬の姿があった。

「全然大丈夫です・・あの部屋で説明を聞いて下さい・・私がお見せします、華麗な離陸を」とカレンが笑顔で返した。

3人が笑顔で返してカレンを見送り、小部屋に走った。
カレンは落ち着いた表情で、操縦席に乗り込んだ。
『カレン・・免許を持たないメンバーには、加速Gを半分にしてあるからね』と無線で言った。
「ありがとう・・大丈夫、ワクワクしてるよ」と美少女笑顔で返された。

『よし・・華恋号・・メインエンジン点火』と言った。
「ラジャー・・メインエンジン点火します」とカレンが真顔で返して、エンジンを点火した。

小部屋では、マキと久美子が3人に説明していた、3人が真剣な顔でモニターを見ていた。
レンとハルカは発進が迫って、滑走路横で緊張して待機してた。

『行ってこい、カレン・・華恋号・・発進』と強く言った。
「ラジャー・・華恋・・発進します」とカレンが強く言って、アクセルを踏み込んだ。
一瞬の沈黙の後、カレンは赤ボタンを押した、機体は少し下がって離陸した。

そのスピードにカスミも美冬も沈黙し、ナギサだけが二ヤを出していた。
私は次に【蓮】を出して、レンも見事に離陸して。
次の【遥】も、憧れた片鱗を見せて、美しく離陸した。

私は次に【渚】を出した、ナギサは終始ニヤニヤ顔で、難なく離陸して。
【美冬】が少し緊張気味に、少し下がりながらも離陸して。

【カスミ】が不敵で自分を鼓舞して、離陸した。
最後の１６歳コンビに対して、私は二ヤで煽って。
【久美子】を出した、久美子はその精神力で離陸して。
【真希】が最後に、そのスピード狂を見せ付けて、美しく大空に舞い上がった。

『全機発進成功・・おめでとう』と私は全員に無線で言った。
「最高だよ、この感覚・・百合姉さんが言ったように、全てから開放される」と蘭が言って。
「戦闘機も捨てがたい・・迷ってしまう」とカスミが言って。
「シオンもです～・・素敵な開放感です～」とシオンがニコちゃんで言った。

私はその表情を楽しんで、二ヤで警報ボタンを押した。
全機の操縦席の警報音が鳴って、モニターに赤字で【敵機来襲】と出した。

『お楽しみのところ、大変申し訳ありませんが。
宮崎の沖、１００ｋｍ地点に・・敵機確認。
宇宙空族・悪悪団と思われます・・壊滅願いたし。
全機戦闘態勢で終結願う・・宮崎港・・沖合い１００ｋｍ地点』

私は必死に真顔を作って、強く言った。
「ラジャー」と全員が二ヤ顔で返してきた。

「宇宙空族・・悪悪団・・なんてセンスの無い名前」とマリが二ヤで言った。
『分かりやすい方が良いんだよ・・悪悪団・・悪そうだろ～』と二

ヤで返した。
「悪悪団・・悪い奴」と安奈がマリアに言って。
「あい」と言って、マリアが強く頷いた。
「それで・・悪悪団の設定は、強いの？」とマリが聞いた。
『最初のＢチームは、２軍だから弱い・・でも次のＡチームは強いよ』と二ヤで返した。
「悪い奴だな～」とマリも二ヤで返してきた。
私は空母を垂直に離陸させ、沖合い１００ｋｍ地点に浮かべた。
空には真黒な戦闘機が、無数に飛んでいた、その尾翼に【Ｂ】と銀の文字で入っていた。
「管制塔・・敵機確認・・攻撃して良いのか？」と一番近くにいたのだろう、マキが言った。
『一機では無理・・もう一機を待て・・囲まれるぞ』と無線で返した。
「マキ・・真後ろにいるよ」と久美子が言った。
『ＯＫ・・任せる・・後ろを取らせるな、後ろを取れ・・そしてロックしろ』と私が早口で言って。
「了解・・久美子は左から、私は右から・・試しにあの、単独機を狙おう」とマキが言って。
「了解・・状況で、どっちかがオトリになるんだね？」と久美子が返した。
「そうしよう・・撃墜一機目は、１６歳コンビがいただきま～す」とマキが言って、機体が右に傾いた。
「ごゆっくりどうぞ～・・掃除しときま～す」と久美子が言って、

機体が左に傾いた。
「あ～・・もう、最後に飛ばしてよ～・・まだ阿蘇のモーモーちゃんが見えるよ～」と蘭が言って。
「こんなに早いのに、遅く感じる・・今・・別府の湯煙が見えました～」とカスミが言って。
「私は桜島です・・実家を見に行ってました」とユリさんが言って。
「私は久美子が見えました～・・エースが何も無いのに、九州一周なんて言いません」とユリカが二ヤで言った。
「もう一人の自分だったのか？・・読まれてるよ～・・私は博多上空なのに～」とナギサが言って。
「マキ・・何をする・・とんでもない奴だ」とモニターを見てるネネが叫んだ。

マキは単独で飛行してる、敵機の上を旋回し、正面から敵機に向けて突っ込んだ。
敵機は驚いた様子で、マキとギリギリで交差して、マキを追う為に上昇した。
その上昇した真下に、久美子が上昇していた。

「ロックオン・・さようなら、一人ぼっちの悪悪団」と久美子が言って、ミサイルを発射した。
ミサイルは敵機を追いかけて命中した、敵機は爆発と同時に消えた。

「いえ～い・・ナイス、久美子」とマキが言って。
「ナイス、マキ・・次行こう」と久美子が返した時に、久美子の警告音が響いた。
久美子が慌ててモニターを見ると、【ロック危険】と出ていた。

「やばい、後ろを取られた」と久美子は叫んで、右に旋回した。
敵機は2機で、久美子に迫りながら、同じ方向を目指した。

「右から行くよ～・・ロックオン・・発射」とユリカの声がして、
右の敵機が爆発して消えた。
「サンキューです・・ユリカ姉さん」と久美子が言って。
「久美子・・少しだけ、真直ぐ飛んで・・もう一機を落とす」とユリカが返した。
「了解です」と久美子が返して、水平飛行に入った。

その時、ユリカの警報音が鳴った、ユリカの後ろにも敵機が付いた。
ユリカは先に目前の敵をロックした、自分の機体の警報音が強くなっていた。
ユリカが目前の敵に発射して、右に旋回しながらモニターを見ると。
【危険・ロック率・８５％】と赤い画面で表示されていた。

「にゃろ～・・やられてたまるか～」とユリカの言葉とは思えない台詞が出た。
私とマリは顔を見合わせて、ニヤを出し合った。

ユリカの機体の警報音は強さを増していった、ユリカは蛇行を繰り返していた。
「ユリカファン・・ロックオン」とアンナの声がして、ユリカの警報音が消えた。
管制室の安奈が、笑顔で飛び跳ねて拍手をしていた。

必死で向かってる、他のメンバーは沈黙していた、その光景を目の当たりにして。
「サンキューです、アンナ姉さん」とユリカが言って。
「なんて事ないよ、さすがユリカ・・自分より、久美子を優先した

ね」とアンナが返した。
「2人の左方向・・敵機8機と遭遇・・大至急、応援願う」とマキが言った。
「了解」とアンナとユリカが返して、左に旋回した。
「どうにかして、これ以上早く飛べないの？」と蘭が叫んだ。
『赤いボタンは何ですか？』と二ヤで返した。
「加速装置！」とリリーが叫んだ。
『その代わり・・上空で使うと、Gが凄いよ』と二ヤで返した。
「Gなんて・・関係なし」と蘭が言って、親指で赤いボタンを押した。
蘭はシートに貼り付けられながら、海を見ていた。
辿り着いていない全員が、その状態になっていた。
戦闘中の4機は、蛇行しながら敵機8機と空中戦を展開中だった。
「発見しました・・アンナファン、ロックします」とユリさんが言って、薔薇二ヤで発射した。
「その後ろ・・ユリさんファン、落とします」とカスミが不敵で言って撃墜した。
「見えた～・・ウヨウヨいる～」とリリーが叫んで、敵機の集団に突っ込んだ。
「恐ろしいほど、無茶な奴め～・・リリー右旋回せよ、リリーファンを落とす」と蘭が言った。
「お願いします～・・警報がうるさくて～」とリリーがウルで返した。
リリーの後ろには3機が付いていた、蘭が狙いを定めていると、真横にシオンが並んだ。

「シオン！・・センターをお願い、私が右を落とす」と蘭が言って。
「了解です・・ロックします」とシオンが返した。
「じゃあ左は私が落とすよ・・リリーもファンが多くて大変だね～」
とナギサが二ヤで言った。
3人で3機を消して、リリーがウルで礼を言っていた。

そしてハルカとレンとカレンが見せる、見事なコンビネーションを。
「4機引き付けます・・応援よろしく」とハルカが言って。
「了解・・左旋回で、追い込もう」とカレンが返して。
「私も回りこみます、上から行きます」とレンが言った。

ハルカは4機の相手を引き付けて、ゆっくりと左に旋回した。
それを後方の上からレン、下からカレンが入って、後ろを取った。
2機をスムーズに消したが、残る2機は2手に別れた。

ハルカには、別の敵が付いていた。
「ハルカファンは任せな」とネネが言って、ハルカの真後ろに高速で侵入した。
ネネは加速装置を使いながら、ロックするという荒技を見せ付けた。

「凄いね～・・さすが、ネネだね」と美冬がネネの後ろの敵を撃墜して言った。
「サンキュー、美冬・・助かったよ」とネネが笑顔で返した。

全員が空中戦に慣れたのか、スムーズになっていった。
敵機の数も減り、少し余裕が出たのか、観戦に回ってるメンバーもいた。

『それでは・・潜水チームは帰還せよ。

アンナ・ユリカ・リリー・美冬・カスミ・シオン・カレン・レン・久美子。
空母に帰還せよ・・空母の真上で左のペダルを踏めば、垂直に降下します。
その後は自動で船内の格納庫に入ります、若い順に久美子から帰還せよ』

私は全員に無線で言った。
「了解・・久美子、帰還します」と久美子が返して、空母に向かった。
順番で潜水班が帰還して、小部屋に入りモニターを見ながら盛り上がっていた。
全員が興奮状態で、笑顔が絶えなかった。

「敵機全滅・・レーダー反応無し」とユリさんが言った。

『了解です・・さすがでした・・そして新たな敵機来襲です。
今度はAチーム・・1軍の登場です。
マンツーマンの戦いです、尾翼に名前が書いてあります。
誰かがクリアー出来るまで、やってみて下さい。
自分の名前の機を追って、撃墜して下さい』

私は二ヤで言った、戦闘機の6人は二ヤで返してきた。

最初に姿を見せたのが、尾翼に【遥】と入っていた。

「行ってきま～す」とハルカがその後を、加速装置を使って追った。
敵機は大淀川の河口から、上流に向けて飛んでいた。
他の戦闘機の女性達は、上空で静止して、コックピットの小さなモニターで見ていた。

ハルカは鉄橋の手前で、後ろに付いてロックしようとした。
その時に敵機が猛スピードで上昇した、ハルカは一瞬そのスピードに目を奪われた。
敵機は綺麗な円を描いて、ハルカノの後ろに付いた。

ハルカの操縦席の警報音が鳴り響いた、ハルカは右に旋回しながら考えていた。
ハルカの機体は平和台上空を旋回して、橘通りの上を飛行していた。

ハルカはモニターを見て、対策を考えていた。
【操縦と回避】２つの事を同時にこなさねばならなかった。

ハルカの操縦席のモニターは、画面が赤くなっていた、【危険・ロック率・９０％】と出ていた。
そしてハルカは感じた、警告よりも早く相手のミサイルの発射を。

『ハルカ・・時速７００ｋｍ以下に落とすなよ、追いつかれるぞ』と無線で言った。
「了解・・何とかしてみる」とハルカは集中した表情で返してきた。

操縦席のモニターは、ずっと赤い画面で、ミサイルとの距離が表示されていた。
その距離は徐々に詰まっていた、ハルカは宮崎の町の上空を蛇行していた。

「管制塔・・追撃ミサイル、回避のヒントを！」とハルカが蛇行しながら叫んだ。

『ハルカ・・追撃と言っても、ハルカと全く同じラインを通って来

る訳じゃない。
ハルカに追いつく為に、内側のラインを選んで追ってくる。
自分に当たる前に、何かに当てれば良いんだ・・内側を通って来る。
分かるよね・・自信を持って感覚で感じろ、自分より内側を通ってくるなら。
これをかわせない・・そう判断すれば良い・・後は実行あるべし』
私は早口で叫んだ、ハルカはそれで表情が変わった。
「了解・・やって見せるよ」とハルカは前を見ながら、二ヤで言った。

「難しいね～・・操縦だけでも相当に気を使う状況で。
後ろからミサイルが迫ってきて、勇気を持ってギリギリを飛ぶ。
試されるね～・・その勇気が」

アンナが小部屋のモニターを見て言った、女性達が全員で頷いた。

ハルカは再び大淀川に進路を取った、ミサイルはハルカの後方４０ｍに迫っていた。
ハルカは市役所の上空で右旋回をして、下降しながらスピードを上げた。

「やる気だ！・・ハルカの奴」とネネが叫んだ。
「あのスピードで・・行けるの！」とマキが叫んで。
「度胸なら、トップだよ・・ハルカがね」とナギサが二ヤで言った。

ハルカは集中した良い表情だった、機体はスピードを落とさずに。
橘橋に突っ込んだ、ハルカは戦闘機を少し左に傾けながら。
橋げたの間を潜り、橘橋の下をすり抜けた、見事な飛行だった。

次の瞬間に、橘橋の橋げたが爆発した、ハルカはその炎を二ヤで見て、レーダーに視線を移した。
敵機はレーダーの中心点に反応した、ハルカはハッとした表情になった。

「真上か！」とハルカが叫んで顔を上げて、目視で確認した。

『ハルカ・・あの位置が一番安全なんだ、相手の真上がね。
攻撃するにも、機種を上げないといけない・・それには時間がかかる。
だから真上で待機するんだよ、この世界の設定上、待機が出来るからね。
普通なら動いてないと墜落するんだ、でもここなら上空で待機出来るんだよ。
ハルカ・・戦う時の基本は、相手の隙を突く事なんだよ。
前回の俺のミホに託した行為も、それだったんだ・・隙を感じろ、ハルカ。
相手の心を読め・・その中に有る、敗北のシナリオ・・油断という項目が』

私はハルカの集中した顔を見ながら、強く言葉にした。

「だからハルカをケイに会わせたんだね～・・策略家」とユリカが爽やか二ヤで言って。
「ハルカ・・遠慮無く、やってしまって良いですよ」とユリさんが言った。

「了解です・・真上から、高見の見物か～・・馬鹿にするなよ」とハルカが恐ろしい二ヤで言って。

「管制塔・・上空で動力を切ればどうなるの？」とハルカが聞いた。
『もちろん、真っ逆さま墜落します・・お尻から』と二ヤで返した。
「了解・・やってやるよ・・高見の見物で安心してる奴に」とハルカが言って、動力を切った。
ハルカの機体は墜落しながら、真上を向いた。
「ロックオン、発射」とハルカは墜落しながら叫んで、動力を入れた。
戦闘機の後方から熱が発散され、ハルカはアクセルを踏み込んだ。
戦闘機の最後部が少し大淀川の水に触れたが、次の瞬間に飛び上がった。
敵機は油断してたのか、ミサイルを回避出来ずに爆発して消えた。
「ナイス、ハルカ」と蘭が叫んで、女性達がハルカに賞賛の言葉を贈った。
『お見事、ハルカ・・まさか最初のハルカでクリアー出来るとは。
今日は時間の関係上、ここまでにします・・ハルカが見せてくれたから。
俺の今日の目的も達成できました、１００点以上の解答でした。
他の戦闘機乗りのみなさんも、自分の飛行イメージを明確にして下さい。
じゃあ・・ユリさんから、帰還願います』
「ラジャー・・少し残念ですけど、帰還します」とユリさんが薔薇で微笑んで、空母に向かった。
順番に戦闘機班が帰還して、ハルカが最後に帰還して全員が揃った。

ハルカは全員と笑顔でハイタッチをしていた、女性達も全員笑顔だった。
嬉しそうなハルカの顔は、確実に次の段階に入っていた。
その時だった、隣に座るマリがビクッと震えた、私はマリを見た。
マリは空母から海を映す映像を見ていた、私もそれを見ていた。
海面が盛り上がり、静かにゆっくりと姿を現した、巨大な空母ＭＡＲＩが浮かび上がったのだ。
女性達が小部屋から駆け出して、滑走路の先端に走った。
空母マリは私の作った空母の、２倍の大きさがあった。
甲板の滑走路に、人型ロボットの姿は無かった。

「でかい・・でか過ぎる」と蘭が呟いて。
「なぜ、今浮上してきたんだろう？・・何かあるね」とナギサが二ヤで言った。

空母ＭＡＲＩの後部ハッチがゆっくりと開き、一機の黒い戦闘機が現れた。
その尾翼を見て、全員が沈黙した。
【ＡＮＮＡ&ＭＡＲＩＡ】と尾翼に書かれていたのだ、私はそれを見て二ヤで２人を見た。

「なんて書いてあるの？」と安奈が笑顔で聞いた。
『安奈とマリア・・そう書いてあるんだよ』と笑顔で返した。

「あい・・リンダ」とマリアが最強天使不敵で言って。
「行きま～す」と安奈が笑顔で言った。
私は嬉しそうな笑顔の２人の耳に、小型無線機を装着した。

『しょうがないな～・・リンダにも困ったもんだ』と私は無線で全員に言った。
その時、空母マリから戦闘機が発進した、そのスピードに私も固まった。

肉眼で追うのが難しいほどの速さだった、戦闘機は女性達の上を猛スピードで飛んで行った。
一瞬の出来事で、女性達は視線で後を追う事も出来なかった。

《人間が操縦するのは無理な早さだ、そこまでやるのか～》と心で叫んだ、強烈な波動が同意を示した。

ユリさんとアンナが最初に我に返り、小部屋に走った、それで全員が気付いて小部屋に走った。
黒い戦闘機は、宮崎市の上空をゆっくりと旋回していた。

『安奈・・マリアを頼むね、遊んでおいで』と私は笑顔で言って、2人が頷くのを確認した。
私は管制塔の屋根のハッチを開いて、青空を見た。

『ウルトラ安奈・・スーパーマリアマン・・発進せよ』と二ヤで言った。

「らじゃ～」とマリアが言って飛び出し。
「シュワッ」と言って安奈が飛び出した。

アンナがマリアに近づいた時には、黒い機体が接近していた。

「あの子が鬼ね・・鬼ごっこだね、マリア」とアンナが言って。

「おにごっこ」とマリアが天使で返して、２人で猛烈な勢いで飛び去った。

リンダの考えは、マリにも私にも分からなかった。

無意味でない事だけは確信していた、安奈とマリアの出撃が。

アンナもマリアも、楽しそうな笑顔で飛んでいた。

その飛行速度は戦闘機を凌駕していた、おにごっこを楽しんでいた。

私はマリを見ていた、２人の映像を見ながら集中していた。

完璧な快晴の空を、純粋な笑顔が飛行していた。

そして安奈が教えてくれる、私とマリの間違いを。

圧倒的スピードの中で、嬉しそうに笑いながら・・。

【冬物語・・リンダの試験？】

快晴の空を飛行する、２つの小さな影。
その無垢な笑顔は、見ている者を笑顔にする。
心を強引に閉ざしていた、その心の真実の開放の時が来ていた。

安奈は不思議な子供だった、いや４０歳が近い今でも不思議な女性である。
安奈を私が初めてサーフィンに連れ出したのが、安奈が７歳の時だった。
ライフジャケットを着せて、ボードに乗せて沖に連れ出した。

私は海面に座り、沖から見る景色を見せたかったのだ。
安奈が７歳に至るまでの３年間、私は夜街の近くに有った、出来たばかりのバレエ教室に通わせ。
空手道場にも連れ出して、安奈の笑顔を見ていた。

バレエ教室の経営者である初老のマダムは、その才能に惚れ込み徹底指導をした。
安奈の柔軟性は群を抜いており、準備運動の時点で他者との違いを見せ付けた。
安奈は前屈をして、股から顔を出して、私に笑顔を向けていた。
引率してる母親達が、その光景を見て固まっていた。
柔軟運動時点で、中国雑技団レベルの柔らかさを披露した。

そして何より、バランス感覚が優れていた。
それは持って生まれた才能だったのだろうか、私には得た物のような気がしていた。

安奈は自分で閉ざした、私は母親のアンナに聞いた。
あの虐待男と母親が付き合い始めたのは、安奈が1歳になる前だった。
安奈は多分、1歳になった頃には自分の状況を感じた。
そして自分で選択し決意して、閉ざす事を選んだのだろう。

それは自分を守る行為であり、母親を守る方法だと思っていた。
自分が表情も言葉も出さない事で、母親の負担を軽減した。
当然母親はその事で悩むのであるが、安奈には他の方法が思いつかなかった。

沙紀が安奈に言った言葉、「安奈は覚えてて良かったね」
笑顔を覚えていた安奈に言った、沙紀の愛情溢れる言葉だった。

安奈は全てを覚えていた、そして言葉も会話方法も会得していた。
私が出会った時、安奈は4歳の平均よりも、優れていたと思っている。

安奈は自分でバランスをとった、確かに未熟な部分は多かった。
しかしその遮断してる期間も、必死に学んでいた。
同じ年代の子に遅れを取らないように、必死だったのだろう。

アンナはバレエよりも空手に惹かれていた、その精神が選択した。
バレエ教室の若い先生も、経営者のマダムも、安奈を何度も説得に来た。
しかし安奈はバレエを選ばなかった、安奈は後にこう話してくれた。
私は久美子先生の生徒だったから、久美子先生をずっと見てたから。
私には出来ないと感じてたの、人の書いた物語を表現する事は出来ない。

他人の感情を表現する事は、私には出来ないと・・漠然と感じていたの。
今考えると、自分を表現したかったんだよね、閉ざした期間を埋めるように。
私は兄さんに連れ回されてる時、本当に楽しかったのよ。
バレエも空手も体操も、全てが新しい世界を見せてくれた。
でも全く違った、その世界がまるで違った・・サーフィンだけが。
開放されるんだよね、全ての事から・・イメージの世界で飛んだ時のように。
初めてマリアと飛んだ時、私は嬉しくて泣いてたんだよ。
マリアが誘ってくれたの、飛べる変身をして、大空を飛ぼうってね。
今でも私達5人姉妹を繋いでいるのは、マリアなんだよね。
私達は・・特にエミ姉さんにとって、マリアこそが絆の証なんだよね。
私は答えを求めなかった、自分が進むべき道を模索してる時に。
常に2歳下のマリアが、その自由な心を表現してくれたから。
私が高2の空手部の時、空手をしながら型に囚われていたの。
型を完璧に美しく見せる、その競技をする事で間違っていた。
インターハイから帰って来た時に、マリアが見せてくれた。
アメリカの雑誌を、プロサーファーの特集記事だったの。
その時に決意したよ、自分も世界の海を転戦しようと、世界の波が知りたいと。
本当に楽しい時間だった・・必死で世界の海を回り、仲間も出来た。
恋を何度も経験して、私は最後にこの地を選んだ。
楽園で待ってるよ・・ここにおいでって、大切な姉妹に言いたいから。
疲れたら羽を休めにおいでって・・兄である最後の挑戦者が、今でも想い続ける。
楽園ブルーと深緑の輝きと・・深海から響く、子守唄が待ってるから。

そう言う事が今出来て、私は幸せなんだよ・・海を愛して良かったよ。

私は成熟した安奈の、少し酔った笑顔を見ながら、波音を聞いていた。
大きな自宅の庭から見える、夜の海は月光で輝いていた。
乾燥した風が吹き抜けて、私は悔しさを感じていた。
その乾いた風が、記憶を呼び戻した。

《あの頃の宮崎の風も、こんな乾燥をしてたよね・・ユリカ》と心に囁いた。
同意の優しい波動に包まれて、私は海を見ていた。

人間は取り戻す事が出来ない行為を繰り返す、愚かな生命体なのだろうか。
便利と言う進歩で得た物は、こんなに空虚な気持ちなのかと思っていた。

「ハワイも変わってきたよ・・ワイキキなんて、今じゃ湘南と変わらない。
確かに先住者達も、豊かになったのかも知れないけど。
それを求めていたとは、私には思えないよ・・この島が最後の砦。
文明というビックウェーブが来ても、誰も乗らないよ。
それは人工波だから・・私達が求めるのは、月が作り出す波。
生命を育んだ・・生命の誕生に関わった、故郷から押し寄せてくる。
その波を楽しませてもらうの・・海の揺り篭に揺られながら」

安奈は私の表情で察したのか、そう海に向かって言葉にした。
昭和が終わり、２０世紀も終わって時が流れた南の島で。

乾いた風に包まれて、安奈の笑顔を見ていた。
話を戻そう、完璧な快晴の空に、７０年代の宮崎の乾いた空気の中に。
安奈がマリアの側に着いた時には、戦闘機の機体は肉眼で確認できた。
「おにごっこ」とマリアが安奈に返して、安奈は笑顔で頷いた。
安奈が先にマリアを飛ばせ、マリアの真後ろを飛んだ。
マリアのスピードは、由美子の段階の時よりも速くなっていた。
そのスピードに、安奈は余裕で付いていた。
安奈は戦闘機との距離を確認して、マリアは楽しそうに自由に飛んでいた。
マリアは低空飛行をしていた、車の存在しない通りの１m上を飛んでいた。
戦闘機も低空飛行で付いていた、ギリギリの幅を超高速ですり抜けていた。
「速いし、上手いね～・・あれとやるのか～」と蘭が満開二ヤで言った。
「マリアも相当のスピードですよね・・それなのに余裕がありますね、安奈も戦闘機も」とユリさんが真顔で言った。
「結局・・恐怖を克服しろって、言ってるんですよね。
技術じゃないんですよ、私は橘橋を潜った時に感じました。
どんなスピードでも、どんなに難しくても・・強くイメージすれば。

その瞬間はスローモーションになります、ゆりっくりと景色が流れる。
そんな感じでした・・安奈もマリアもそうなんでしょうね。
無意識に出来ている・・あの笑顔はそう言ってますね」

ハルカがモニターを見て、笑顔で言った。
「そっか～・・強くイメージ出来れば良いんだ」とネネが笑顔で返して。
「パニックにならない、その次の段階が・・強くイメージするなんだ」とカスミが不敵で言って。
「潜水チームにも、赤丸が付くらしいよ・・それにダメージ受けると戻される」とリリーが二ヤで言った。

「リンダも好きだね～・・楽しむね～」とナギサが二ヤで返した。
「強制送還があるんだ～・・緊張感が出ますね」と久美子が微笑んで。
「さすが久美子・・余裕の笑顔だね」とマキが二ヤで突っ込んだ。

「シズカがね・・集中した時の、ブツブツ呟きをしててね。
私はそれを聞いてたの、その内容が面白かったよ。
動きは鈍い・・ならば近距離戦じゃないのか、マシンガンは無視。
撃ち合いは不利・・近距離戦が有利・・戦国時代。
そう言ってたよ、面白いよね～・・シズカ」

久美子は笑顔で返した、女性達が久美子を見た。

「面白いね～、久美子も・・嬉しそうで」とユリカが爽やか二ヤで返した。
「そんなに楽しいの・・指を気にしないで戦えるのが」とレンも二ヤで突っ込んだ。

「楽しみですよ、なんせライブの前で・・沙紀の世界は、ライブ翌日ですから・・集中してます」と久美子が笑顔で返した。

「称号は譲らない、そう聞こえるね～」とカスミが最強不敵で返して。

「譲る気なんて、毛頭無いよね～・・その笑顔は」とリリーが二ヤで言った、久美子もニヤで頷いた。

「いよいよだよ・・安奈が仕掛ける、あの子は本当に面白い」と蘭がモニターを見ながら言った。

全員がモニターを見た、マリアは夜街の狭い通路を飛んでいた。

「りあん・・ゆりか～・・あしゅか～・・みちる～」とマリアはビルの前で言っていた。

「マリア・・そのままクルクル飛んでね、私・・鬼を見てくる」と安奈がマリアの横に来て、笑顔で言った。

「あい・・あんな」とマリアが天使で返した。

後ろの戦闘機は、機体を真横に傾けて、狭い通路を飛行していた。

マリアは中央通りを抜けて、一番街のアーケードに入った。

戦闘機はアーケードの上を飛んでいた、アンナは速度を落とした。

アーケードの屋根に映る、戦闘機の影を見ていた。

マリアが西橘通りに飛び出すと、戦闘機もマリアの後を追った。

その後ろから安奈が猛スピードで追って、戦闘機の操縦席の真上に来た。

「何これ・・誰もいないよ、自分で飛んでるんだ～」と安奈が驚いて言った。

モニターに映る操縦席にも、ロボットすら存在しなかった。

「エースの言う、姿無き男かな？・・だから怖くなかったんだね、追われてて怖くなかったもん」と安奈が無線で言った。
『怖くなかったの？・・鬼じゃなかったんだね、安奈』と私も無線で返した。

「うん・・保育園で鬼ごっこする時は、怖いんだもん。
鬼が走って来るのが、見なくても分かるんだよ。
鬼の気持ちを感じるの、だから怖いんだよ・・今は怖く無かったよ。
かけっこみたいな感じだった、後ろからこの飛行機に追われたけど。
でもね・・他の人じゃないんだよ、自分が後ろから来てる感じだったよ」

安奈は超高速で戦闘機の上を飛びながら、余裕の笑顔で言った。
その言葉を聞いたように、戦闘機はマリアを追うのをやめて飛び上がった。
そして海の方に進路を取って、空母に静かに帰還した。

『さすが、安奈とマリア・・１００点だったね』と私は笑顔で無線で言った。
「やった～・・１００点取ったよ、マリア」と安奈が笑顔で言って。
「あい・・えみとおなじ～」とマリアが笑顔で返して、管制塔に帰還した。
私は笑顔の２人を抱き上げて、マリが２人の頭を撫でていた。

「後ろから追ってくるのが、自分自身・・素晴らしいですね、安奈」とユリさんが薔薇で微笑んで。
「追われるんですよね、自分自身の何かに」とユリカが爽やか笑顔

で返して。
「今は駄目でしょう、安奈の見解の解釈は」とアンナが嬉しそうな笑顔で言った。
女性達が全員笑顔で頷いた、私はそれをマリと二ヤで見ていた。
私は女性達に確認して、映像を切った。
全員がＴＶルームに戻った、私はマリアと安奈に笑顔を向けて、２人が遊び始めるのを見ていた。
「生意気に腕時計なんかして、すいませんユリカ姉さん」と蘭が満開笑顔で言った。
「良いのよ・・気持ちだから」とユリカが爽やか笑顔で返した。
「エース・・私は誕生日に一緒にしますね、恭子とシズカに話を聞いて。
来年の春、４月２日にあなたにＺを贈ります、私は新型が欲しいから。
もちろんエースは免許をまだ取れないから、豊君に預けますね。
豊君が免許を取得しても、車を買うのはまだ難しいみたいだから。
それは仕事に対しては、障害になるでしょうから。
私が豊君とエースに対する、感謝の気持ちとして贈ります。
最初に豊君の名義にしますね、それを豊とシズカで手を入れる。
完成された驚愕のマシンを、あなたが受け取りますよ・・５年後に」
ユリさんが薔薇二ヤで言った、私は驚いてユリさんを見ていた。
その深い愛情が嬉しかった、私はワクワク感が充満していた。
『ありがとうございます、楽しみだな～』と笑顔で返した。
「な、生意気すぎだよ・・１８でそれに乗るのか～」とネネが言っ

て。
『うん・・高校に通うの、俺のスペシャルZで』と二ヤで返した。
「そっか～・・・4月2日生まれってのは、高校3年の春に免許を取れるのか～」とナギサが二ヤで言って。
「想像も出来ない、Zのフルチューンで通学する高校生」とネネがウルで言って。
「高3まで学校に行ってればね、退学にならないように」と蘭が満開二ヤで言った。
「それは危険だ・・多分退学になってる」とカスミが不敵で突っ込んだ。

『退学って、校則違反したからでしょ・・俺には校則は無いよ』と二ヤで返した。
「大きな貸し・・使うのか・・私もあそこにする」とマリが二ヤで言葉で言った。
「貸しで学校を決めるの？・・怖い奴だ」とユリカが爽やか二ヤで言った。

『別に貸しで学校を決める訳じゃないよ、俺は自分の将来の為に選ぶんだ。
俺はその学校の、ある教師が好きなんだよ・・その生き方がね。
小児病棟で出会ったんだ、本当に素敵な女性だった。
母親である場面で出会った、その時に沢山の話をしてくれた。
母親として、人間として話してくれた・・俺がミホで挫折感を抱いてる時に。
真剣に向き合ってくれた、子供の俺の未熟な心と。
俺はその人の教えが受けたい、どうしても知りたい・・その頂を見上げてみたい。
その人はユリさんに近い、ユリさんに出会った時にそう感じた。

清次郎とは違う・・もちろん、男と女だから違うんだけど。
精神的なある部分が、遥かなる高みに存在してる・・俺はその学校に行く。
清次郎の教えを持って、次の段階に挑んでみせる・・清次郎に感謝を込めて。
シズカが物理を学ぶなら、俺は人間を学ぶ・・最後は同じゴールを目指す。
姉弟関係を解消したシズカに見せる、俺も学んだんだと言ってやる。
シズカの存在が俺に満足をさせないなら、俺の存在がシズカに満足をさせない。
リンダが俺に言ってくれた、瞳の伝達で伝えてくれた。
リンダが俺の切り札、そして俺がリンダの切り札・・それに成りたいと思う。
必ずその頂に登ってみせる、手を繋いで登ってやる。
大切な5人娘の手を繋いで、その頂からの絶景を見る・・そして示そう。
遥かなる次の段階を・・永遠に存在しない、ゴールをイメージして』

私はユリさんとユリカと蘭を見ながら、最後に二ヤを出した。
「了解・・あんたの意志と、安奈の見解は聞いたよ・・ワクワク感が止まらないよ」と蘭が満開で微笑んで。
「そうですよね～・・エースがシズカを煽り続けてきた、満足なんてさせなかった」とユリさんが薔薇で微笑んだ。

「清次郎先生が言われました・・清次郎と言う人は、現実を超えた場所にいますね。
自分は関わった生徒の中で、唯一現状をチェックしている生徒がいると。

それがシズカなんだと、その心が何を選び・・何を求めるのかが見たい。
シズカは無限の選択肢を持っている、理数系の人間でありながら、答えを求めない。
その心が求める者は、感覚的な人間・・シズカは認められたいと願っている。
尊敬する人間である、母親の律子に・・感覚的な人間である、律子という存在に。
いつの日か、認められたいと切望している・・そう言われました。
今回のリンダの試験・・それを見るシズカの目は、あの時の目でした。
エースが由美子に出会った事に対して、自分の覚悟をした時と同じでした。
シズカは挑むんでしょうね、天才と呼ばれる感覚的な人間のリンダに。
リンダもそれを楽しみにしてるんでしょう、シズカとマリとエミの挑戦を。
価値がありますね・・今回の挑戦は、全ての女性に価値ある物です。
エース・・エミは凄いね、気付いてたんだね。
だからエースは次に行こうと言ったんだね、マチルダの価値の話の。
その次の段階に行こう・・そう言ったんだね。
知性のシズカ、感覚のマリ・・そして発想のエミ・・最強を揃えたね」
ユリカが爽やか二ヤで言った、私も二ヤで返した。
「困った～・・今回は、本気で難しい」とカスミがウルで言って。
「確かに難しい・・でも楽しい」とハルカが笑顔で返した。

『最後にもう1つだけ・・俺は大事な事に気付いた。
ユリカと蘭とマリしか知らない、加々見御大との出会いの場面。
そこでマリが提示した解答、それがあのマリの詩に込められている。
マリは御大に提示した、勝利の方法を模索していた御大に。
負け方を提示したんだ・・次に繋がる負け方を、チェスで見せた。
人間は負けを認めた時に問われる・・御大はそう言ったよ。
負けを認めるのは、自分自身・・その時に何を、誰に問われるのか。
そこに有るのかも知れない・・今回の最後の場面が、幼稚なシナリオが』

私は女性達に二ヤを出して、腕時計を見てＴＶルームを出た。
１２月の冷えた風に背中を押されて、病院を目指して歩いていた。
クリスマスソングが鳴り響く、一番街で見上げた。
アーケードの屋根に、戦闘機の影が映像で流れた。

《ＯＫ、リンダ・・挑戦を受けるよ》と心に囁いた。
強く暖かい波動が包んでくれて、私は快晴の気分で歩いていた。

病院で記名をして、ミホの病室に入った。
手前のベッドに可愛い理沙の笑顔が見えた、私も笑顔で返して理沙の横に座った。

『理沙・・ご機嫌だね、ミホと仲良くしてね』と笑顔で言った。
「うん・・嬉しいよ、ミホちゃんが優しいから」と理沙も笑顔で返してくれた。
『車椅子に慣れたかな？』と笑顔で聞いた。

「うん・・素敵な豊さんと、シズカ姉さんが作ってくれたから」と理沙は嬉しそうに返してきた。
私は理沙の母親を見た、母親も笑顔で返してくれた。
『後で理沙を借りて良いですか？・・会わせたい少女がいるんです』と母親に笑顔で言った。
「もちろん・・ありがとう、理沙にも気を使ってくれて」と母親に笑顔で返された。
私は理沙に後で行こうと言って、理沙が笑顔で頷くのを見て、ミホのベッドに歩いた。
私はミホの手を握り、微かな熱の揺れを感じながら、リンダの話をした。
そして久美子のライブに、ミホを連れて行くと約束した。
ミホの額に手を当てて、ミホをベッドに寝かせて、理沙のベッドに戻った。
理沙はワクワク笑顔で私を見た、私は笑顔で理沙を抱き上げて、車椅子に乗せた。
理沙は母親に手を振って病室を出た、私は理沙を押しながら、由美子の話をした。
理沙は真剣に聞いていた、その背中が集中を出していた。
《やっぱり・・理沙は気付いてる、自分の病を》と心に囁いた。
強烈な波動が吹き抜けた、私はユリアの驚きだと思っていた。
《ユリア・・理沙もよろしく、ヒトミにもそう伝えて》と心に囁くと。
制御の利かない爆発的な波動が、何度も吹き荒れた、ユリカとユリアの波動だった。

「なるほど～・・空気の波だね、沙紀ちゃんの言ってた」と理沙が言った。
私は凍結して理沙の背中を見ていた、強烈な波動が繰り返し来ていた。

『さすが、理沙・・空気の波が分かるの？・・波動って言うんだよ』と笑顔で言った。
「分かるようになったよ・・不思議だよね」と理沙が振り向いて笑顔を見せた。
私も笑顔で返しながら、由美子の言葉を思い出していた。

ルミがバス停で私の中に残した、由美子へのメッセージ。
人間の持つ能力の７０％までを出せと、由美子に贈ったメッセージを。
理沙の感性が上がってるのを感じて、もしかして行けるかもしれないと思っていた。
理沙と由美子なら、その７０％の高みに、辿り着くのではないかと。

そう思いながら、由美子の部屋に理沙を押して入った。
私は笑顔の北斗と祖母に理沙を紹介して、由美子の横に理沙を連れて行った。
哲夫が来ていて、場所を笑顔で空けて理沙を促した。

理沙は笑顔で由美子の左手を握り、嬉しそうに話していた。
私は少し離れて、哲夫とその光景を見ていた。

『哲夫・・面白い映画が見たいなら、２５日の１０時頃にＰＧに来いよ』と二ヤで言った。
「その二ヤは面白そうだね、必ず行くよ」と哲夫も二ヤで返してき

た。
『帰り一緒に病院を出よう、少し話がある』と笑顔で言うと。
「了解・・少し怖いな」とウルで返してきた。
理沙の背中は嬉しそうで、私も哲夫も笑顔で見ていた。
私は由美子が疲れないように、理沙を止めて2人に約束した。
理沙が自由に由美子に会いに来れる許可を取ると、2人に笑顔で約束していた。
私は病室に理沙を送り、ベッドに寝かせて、哲夫と病院を出た。
哲夫はチャリを押しながら、私の横に並んで歩いていた。
西風が強く寒い夕暮れだった、哲夫は少し緊張していた。
『哲夫・・来年の成人の日に、由美子を左手に誘う・・手伝ってくれ』と前を見て言った。
「了解・・成人の日に始めるんだね」と哲夫も前を見て返してきた。
『そう・・もう一度時計を戻そう、あの時に・・諦めてしまった、あの時に』と静かに言った。
「そうだね、あの日以来・・一度も諦めなかったよね、最後の挑戦者は」と哲夫が私を見た。
『もう諦めないよ、どんな現実が待っていても・・それを受け入れる。
ヒトミが見てるから、そしてミホと理沙と沙紀が・・俺達を見てるから。
哲夫・・お前と美由紀と沙織が、今回の俺の武器だよ』
私は笑顔で哲夫に言った、哲夫も笑顔になった。
私は哲夫を連れてデパートに入り、赤い靴の中にお菓子の入った物

を注文した。
施設の子供の数、３６個を配達で注文して、哲夫に受け取り配ってくれと頼んだ。
哲夫は笑顔になって礼を言った、私は笑顔の哲夫を手を振って見送った。

私はクリスマスソングに背中を押されて、賑やかな街を歩いていた。
デパートのバス停の前で立ち止まり、ルミに出会った場所を見ていた。

その時に映像が流れて、私はその映像を見ながら凍結していた。
私と話しているルミが、映像を見ている私の方に歩いてきたのだ。
マチルダの侵入とも違う、全く別の感覚だった。
映像の全てが止まり、映像の中の私の背中も止まっていた。

ルミは私の目の前に立った、感覚で言うなら、ＴＶカメラの前に立ってる感じだった。
それを私がＴＶで見てる、その私にルミが二ヤ顔で語りだした。

「かなりの進歩をしたね、でも根本的な問題が解決してないよ」とルミが二ヤ継続で言った。
『そこなんだよ・・根本的な問題が見えない』とウルで返した。
「探すからだよ、探すから見つからない・・何かを無くした時もそうでしょ」とルミが微笑んだ。
『確かに探してる時は、見つからないよね・・後でヒョッコリ出てくる』と笑顔で返した。

「探そうと思う心が、逆に隠してしまう・・焦りが視点を逸らす。
見つからないんじゃない、見つけられないんだよ。
一度止まってリセットする・・そうすれば見えてくるよ。

もう少し楽しませてね、今のままじゃ・・私は楽しめないよ。
マリを連れ出して、その姿が見たいの・・小僧にしか出来ないよ。
マリを連れ出せ、その為には・・マリにリセットを促せ。
マリが最後に拭えない恐怖、自分の力に対する恐怖を払え。
マリなら出来る、常に０であり続ける事が・・全てをリセットする事が。
楽しみにしてるから・・頼んだよ、小僧」

ルミが笑顔でそう言って、映像は強引に切られた。
街の喧騒が蘇って、私はバス停を見ていた。

母親と手を繋ぐ幼い少女が、不思議そうに私を見ていた。
私は意識して笑顔を送り、振り向いて歩き始めた。

一番街に入ると、またも映像が流れた。

角の壁に背中を付けて、ケイが屈みこんでいた。

私はそれでハッとした、道を繋ぐ意味を感じた。

西口から強い風が吹いてきた、澄んで乾いた風だった・・。

【冬物語・・リンダの試験？】

繁華街に響くメロディーは、気分を高揚させる媚薬。
歴史の設定を無視して成長した文化が、人々に楽しみを与える。
贈る者、贈られる者の笑顔の中に、サンタは存在するのだろう。

師走という月名が心を煽るのか、道行く人は皆忙しそうだった。
家路に向かう者、待ち合わせのワクワク顔の若者達。
全ての光景が、クリスマスと年末を表現していた。

《ユリア・・何か楽しそうだね》と私は心に囁いた。
ユリアの波動が嬉しそうに、リズムを刻んでいたから聞いてみた。
強い二ヤのユリアの波動と、何？何？と言うユリカの波動が来た。

《ユリアがね、ご機嫌なの・・初恋かもね》と二ヤで心に囁いた。
二ヤ継続のユリアの波動と、驚きのユリカの波動が来た。

ＰＧのビルが見えた時に、北斗に笑顔で腕を組まれた。
私は北斗とＴＶルームに戻って、凍結してその女性を見ていた。
その女性も笑顔で私を見ていた、女性達が私の表情を注目していた。
その女性の横に、洋子先生・・リンが二ヤ顔で座って、私を見ていた。

「エース・・紹介して下さい、リンが意地悪して紹介してくれないの」とユリさんが薔薇ウルで微笑んだ。

『ご無沙汰してます・・美代子、相変わらずお綺麗で。
皆さん、この人は美代子さんです・・ヒトミの母親です』

私は再会が嬉しくて、笑顔で紹介した。
完全なる静寂が包んで、北斗が美代子を凝視していた。

「大きくなったね、小僧・・優しい雰囲気になったね、嬉しいよ。
リンに小僧の事を聞いてね、会いたくなったの。
由美子ちゃんだっけ・・良かったね、巡り会ったんだね。
あなたの強い意志と、ミホの心が出会わせたんだよね。
ヒトミを忘れないんだね・・ありがとう、小僧・・嬉しかった」

美代子は立ち上がり、私の側に来て抱きしめてくれた。
私はただ嬉しかった、美代子の香りの中に、確かにヒトミの香りが有った。

『由美子だよ、美代子・・そしてこの人が北斗、由美子の母親だよ』
と体を離して、笑顔で北斗を紹介した。

「そうですか、あなたが北斗さん・・私は美代子です。
頑張ってますね、無理をしてる感じを受けません。
そして見せるんですね、充実して生きる姿を・・大切な事ですよ。
私は誰がなんと言おうとも、あなたの戦友です・・そう思ってますから。
些細な事でも、何でも話したい事がある時は、遠慮無く連絡下さいね。
私はいつでも待っています・・戦友の言葉を」

美代子は笑顔でそう言って、北斗を強く抱きしめた。
北斗は声を上げて号泣していた、私は初めて北斗の心の叫びを聞いた。
由美子の段階の時でも、北斗は声を上げて泣かなかった。

同じシナリオを共有した、母親同士の出会いだった。
ユリアの強烈な波動の中に、確かにヒトミが存在していた。
ユリさんとリンが2人を誘って、フロアーに向かって行った。
『マキ・・黙ってたな』と潤む瞳のマキに二ヤで言った。
「だって、洋子先生が二ヤで見るから」とマキがウルで返してきた。
私は5人娘の間に座って、マキの嬉しそうな顔を見ていた。
「素敵な人だね、ヒトミちゃんのお母さん」と蘭が満開で微笑んで。
「雰囲気あるよね、乗り越えた感じを見ただけで分かるよ」とユリカが爽やかに微笑んだ。
『素敵な人だよ、優しい人なんだ』と笑顔で返した
女性達が笑顔で食事を始めて、私はマリアを抱いて、4人娘の人生ゲームを見ていた。
ユリさん達が帰ってきて、リンと美代子が私の横に座った。
マリアが美代子に手を伸ばして、美代子は嬉しそうにマリアを抱いていた。
「ミホはどうなの？」とリンが笑顔で言った。
『少し変化が出てきたよ、ミホには時間をかけるよ』と笑顔で返した。
「由美子ちゃんは、体は強いんでしょ？」と美代子が真顔で聞いた。
『うん・・体は大丈夫だと思う、強さを感じるよ。
美代子・・ヒトミはどうだったの、5歳の時の状況は？
俺は衰弱してるヒトミしか知らないんだ、その部分で自信を持てない。

俺は由美子を絶対に諦めない、必ず自立出来ると信じてる。
アドバイスが欲しいんだよ・・美代子にしか聞けないから』
私も真剣に美代子に問いかけた、どうしても聞きたかったのだ。
女性達の緊張した沈黙が流れて、北斗の強い瞳が美代子を見ていた。
「ヒトミは弱かったよ、生まれた時から体も弱かった。
小僧は知ってるよね、それも伝えないと駄目だよ。
母親である北斗には、全てを伝えないといけないよ。
北斗は大丈夫・・今話して感じたよ、向き合える素敵な母親だよ。
小僧・・奇数周期はあるんだよ、あの時の小僧の仮説は間違ってない。
あの病気には確かに有るよ、奇数年齢で段階の時が来る。
ヒトミも偶数年齢の時は、安定してる時期が長かった。
関口先生は医師だから、その話を出来ないでしょ・・科学的証明が無いから。
でも確かに有るよ・・私はそう感じてる、悪意ある設定があるとね。
あの時、シズカちゃんが必死で調べてくれたよね、ヒトミの病気を。
マキと恭子とヨーコも手伝って、沢山の病院に手紙を書いてくれた。
その強く熱い愛情が響いて、沢山の返事が来たよね。
それを小僧が読んで、導き出した仮説・・全員が奇数年齢で亡くなってる。
偶然の一致じゃないよ、その周期に意味が有るのかも知れない。
医学は関口先生がいるんだから大丈夫、そして伝達は小僧がいるんでしょ。
私も由美子ちゃんに会いに行くよ、来年の成人の日が過ぎたら。
由美子ちゃんが左手に宿ってる時に、私も伝えたい事があるから。

小僧・・恐れないで、間違いも失敗も・・あなたにしか出来ないよ。
由美子ちゃんにそれを伝えるのは・・小僧、結果を恐れないでね。
ヒトミはあなたと美由紀の側にいます、私はそれだけは自信を持って言えるよ。
ヒトミが生きた意味は続いている・・小僧と美由紀が挑戦を続けるなら。
シズカとマキと恭子とヨーコ・・その４人が、冷めないなら。
哲夫が探し続けるなら・・優しさの意味を・・探し続けるなら」
美代子の愛情が嬉しくて、私は美代子を見ていた。
美代子は笑顔で私を見て、振り向いて北斗に笑顔を向けた。
北斗は泣きながら頭を下げた、その横でマキが静かに泣いていた。
『美代子・・俺はさっきまで哲夫といたよ、哲夫が手伝ってくれてるよ。
この世で哲夫が母さんと呼ぶ、２人の存在・・美代子と律子。
その２人の教えを持ったまま、今でも探してるよ。
哲夫は必ず自分の答えを探し出すと思う、母親の最後の言葉に対して。
ヒトミが、いつの日か教えてね・・そう哲夫に言った言葉を大切にしてる。
優しいとは何なのか・・哲夫は探し続けるよ、ヒトミに伝える為に』
私は息子のように哲夫を愛した、美代子を想って言葉にした。
「ありがとう、小僧・・本当に嬉しいよ、私も・・ヒトミも」そう言って、美代子はマリアを見ていた。

私はその横顔を見ながら、ヒトミの映像を見ていた。
ユリアの優しい波動が、ずっと美代子を包むように繰り返していた。
その中にヒトミの熱があった、愛情と喜びと感謝を伝えているようだった。

美代子とリンが女性達に挨拶して、私は2人を通りまで送った。

「はい・・私の家の電話番号、迷ったら電話してね・・私はそれが望みだよ」と美代子が笑顔でメモをくれた。
『ありがとう、美代子・・俺も嬉しかったよ』と笑顔で返して、タクシーに乗った美代子を見ていた。
私とリンで、美代子の乗ったタクシーを見送った。

タクシーが左折して見えなくなると、リンが強く腕を組んできた。
『初恋の人が強く組むのは、罪だぞ・・リン』と二ヤで言った。
「魅宴を久々に見たいのよ、案内してね」とリンが笑顔で引っ張った。

その光景を見て、驚いた表情で佐々木の爺さんが飛んで来た。

「リンじゃないか！・・まさか、派遣で復活するのか？」と爺さんが慌てて言った。
「佐々木さん、ご無沙汰してます・・もう私には無理ですよ、ユリとは違いますから」とリンも笑顔で返した。
「全く問題無いよな、エース」と佐々木の爺さんが二ヤで言った。
『そうかな～・・俺は、旬は過ぎてると思ってるんだけど～』と二ヤで返した。

「なんですって～・・どの口が言ったの、恩師に対して」とリンが

二ヤで返してきて。
「恩師なのか！・・リンもそんな歳になったか」と佐々木の爺さんが笑って。
「ユリとミチルと同じですよ・・佐々木さんがそう言ったと、２人に報告します」とリンが二ヤで返した。
「それだけは、ご勘弁を～・・表に出れなくなるよ～」と佐々木の爺さんがウルで返した。
通りで３人で笑って、佐々木の爺さんと別れて、魅宴に裏から入った。

フロアー裏にリンが歩き、フロアーを懐かしそうに見ていた。
「洋子先生！・・リンお姉様～」とヨーコが笑顔でリンに飛びついた。
「ヨーコ、頑張ってるね・・私の後輩なんだからね」とリンが笑顔で返した。
「はい・・マキには負けませんわ」とヨーコが二ヤで返した。
「その意気だよ・・ヨーコなら大丈夫だよ」とリンが微笑んで、２人で盛り上がっていた。

「あの素敵な人は、新しい派遣さんかな？」と後ろからミコトが言った。
『残念だけど違うよ・・ミコトの２代前だよ』と二ヤで返した。
「２代前？・・その意味を述べよ」と余裕二ヤで返された。
『リンさん、沙紀の世界の時に会ったでしょ・・ユリカの前のＮｏ１だよ』と二ヤ継続で返した。

それを聞いてミコトはパッと輝いて、２人に駆け寄った。
ミコトがリンに挨拶して、ヨーコが現役Ｎｏ１だと紹介した。
３人で楽しそうに話してると、大ママとユリカが来て、笑顔で加わ

った。
私は少し離れて、その3世代Ｎｏ1会談を二ヤで見ていた。
「なんか楽しそうだな・・何の会議かな？」と後ろからリョウが言った。
『3世代Ｎｏ1会議だよ、リンはユリカの前のＮｏ1だからね・・早く入れよ、リョウ』と二ヤで返した。
リョウは嬉しそうな魔性二ヤを出して、歩み寄った。
「リンさん、正式にご挨拶を・・私が次のＮｏ1になる、リョウと申します」と言って深々と頭を下げた。
「素敵な挨拶だわ・・期待してるよ、リョウ」とリンが笑顔で返した。
「必ずやなって見せます・・ユリカ姉さんとミコト姉さんに、感謝の証として」とリョウは魔性笑顔で言った。
その笑顔に強い決意が現れて、リンもユリカもミコトも微笑んで返した。
ミコトの嬉しそうな笑顔を見ていた、充実した良い表情だった。
リンが開店時間が迫ったのを察したのか、笑顔で挨拶して私の側に来た。
私はリンとユリカと3人で、魅宴を後にした。
「ユリカ・・ありがとう、記録を塗り替えてくれて・・そして、小僧を守ってくれて」とリンがユリカに微笑んだ。
「リンさんの偉大な記録が有ったから、私はここまで来れました・・ありがとうございます」とユリカは真顔で頭を下げた。
「嬉しいよ、ありがとう・・小僧、メリークリスマス・・明日は夜空を見上げるね」とリンが微笑んでタクシーに乗った。
『リン・・サンタは見えるよ、俺にはチサが今でも見えるよ』と笑

顔で言った。
リンも笑顔で頷いて手を振った、私もユリカも手を振って見送った。
私はユリカを抱き上げて、ユリカのビルを上り、最上階で夜空を見ていた。

「ユリアは美代子さんに会えるから、嬉しかったんだね」とユリカが爽やか笑顔で囁いた。
『違うよ・・初恋だよ、おませなユリア』と二ヤで返した、強烈なユリアの波動に少し押された。
「なんか楽しんでるでしょ、私とユリアで」とユリカが爽やか二ヤで言った。
『ユリカとユリアが、同調じゃない時は楽しいよ』と二ヤで返した。

「最近・・単独行動が多いみたいね、ユリアは何に気を付けてるの？」とユリカが笑顔で聞いた。

『多分・・俺がバス停の少女に再会するのを、待ってるんだよ思うよ。
あの時の経験が強烈だったんだよ、ユリアでさえ遮られたから。
だからユリアは試したいんだね、単独なら読めるのかをね。
好奇心旺盛だよ、ユリア・・双子だから、もちろん好戦的だし』

私はユリカに二ヤで返した、ユリカは私の表情を見ていた。
ユリアの強烈な波動が、正解と言ってるようだった。

「やっぱり遮られたんだね・・マリちゃんの言った、消しゴムで消された。
凄い表現だと感じたけど・・強い力は無限に存在するんだね。
ユリアは挑戦するんだね、頑張ってね・・ユリア」

ユリカは楽しそうな笑顔で言った、ユリアの優しい波動がユリカに吹いた。
私は笑顔でユリカを降ろし、笑顔で手を振って別れた。

夜街の狭い通りも、人影が少なくなっていた。
呼び込みさんもどこか余裕のある表情で、集まって雑談をしていた。

私は指定席に帰り、フロアーの状況を確認した。
客は５割しか入っていなかった、私はマキに二ヤでサインを送り、
ＴＮルームに戻った。
一人で夕食を食べながら、久美子のライブの話を聞いていた。

「エース・・いつやるの？・・・リンダちゃんの試験」とエミが私の
隣に座り笑顔で聞いた。
『２５日の１０時から・・エミを迎えに行こうか？』と笑顔で返し
た。
「大丈夫だよ・・４人も、見るだけなら良いんでしょ？」と笑顔で
返してきた。
『もちろん、リンダの試験なら見ても良いよ』と返した。

「うん・・赤丸付けるんだよね？」とエミが二ヤで来た。
『エミもね・・それがリンダの試験だから』と二ヤで返した。
エミは嬉しそうな笑顔で立って、４人を歯磨きに連れて行った。

私は歯磨きから戻った、ミサとレイカ抱き上げてベッドに寝かせ。
マリアを抱いて寝かしつけていた、マリアは穏やかな温度だった。
マリアが深い眠りに入って、私がベッドに寝かせた時に入ってきた。

私が振り向くと、フネが笑顔で立っていた。

フネはマダムと松さんを見て、美しい笑顔になって歩み寄った。
そして笑顔で挨拶をした、マダムも松さんも嬉しそうな笑顔だった。
フネはマダムに招かれ、座って久美子とエミに挨拶をした。

『フネちゃん・・どうしたの、何かあったのかな？』と私はフネの向かいに座り笑顔で聞いた。
「エースの想定通りの展開だから、解決策を見せてもらおうと思ってね」とフネが二ヤで返してきた。
『想定通りの展開？・・まさか、あの男？』と驚いて返した。

「そう・・あのクラブで、一人で飲むレベルになってない男。
自分の世界しか認めない、世間知らずの男が切れた。
クリスマスイヴに同伴しないって、あの子が言ったらね。
今店に来て飲んでる・・おとなしく飲んでるから、手が出せない。
でも見てるだけで怖いんだよ、何かをやりそうで。
エースの言ったように、うちのボーイはサラリーマンだから緊張してる。
その緊迫感が耐えられない感じなんだ、加々見さんの正式な依頼だよ。
エース・・解決策を出してくれ、それが依頼内容だよ」

フネは二ヤでそう言った、マダムと松さんも二ヤで私を見た。

『あの男が、2度と来なくなっても良いんだよね？』と私も二ヤで返した。
「もちろん・・こっちから出入り禁止さ」とフネが微笑んだ。
『なら簡単だよ・・行きましょう』と笑顔で返して立ち上がった。

「マダム、松姉さん・・今度ゆっくり遊びに来ますね」とフネが2人に挨拶して立った。

「いつでも大歓迎じゃよ」とマダムが笑顔で返して。
「昔話でもしような、私もそれが出来るようになったよ」と松さんが微笑んだ。
「はい、私もそれをしたいと思うようになりました・・どこぞのエースに、伝えろと言われて」とフネが笑顔で返して、２人でＴＶルームを出た。

私は暇そうに話してる、キャバレーの呼び込みのシュウ君に耳打ちした。
シュウは二ヤで頷いた、私も二ヤで返してフネの横に戻った。

フネが私に腕を組んできた、私は笑顔でフネを見ていた。

「夜街関係者が、エースと歩く時の決まりだろ」とフネが二ヤで言った。
『決定事項だよ・・また有名になりそうだよ、佐々木の爺さんの顔を見ると』と二ヤで返した。
佐々木の爺さんは私達を見て、凍結しながら二ヤを出していた。

『あの子の源氏名は何て言うの？』とフネの耳元に囁いた。
「マイだよ・・Ｎｏ５には入ってる、才能は有る子なんだよ」とフネが囁いて返してきた。
『あの仕事でＮｏ５入るなら、魅力はあるんだね・・楽しみだ～』と二ヤで返した。
「確かにそうだね・・本気になったら、面白いよ～」とフネも二ヤで返してきた。

私はフネとマリーレインの受付に向かい、受付のボーイに例の男の隣に通して欲しいと言った。
ボーイは笑顔になって、私を案内してくれた。

私は初めてマリーのフロアーを歩いて、その広さに再度驚いていた。
マリーは単独の若い客が多かった、クリスマス前の最後の追い込みという感じだった。

マリーの女性は、楽だから女を全面に出して仕事をする。
だから請求される、客が費やした時間と金の見返りを請求する。
クリスマスは特にそれが現れる、私はそう思ってＢＯＸに座った。

私の隣の席では、あの男が不機嫌そうに飲んでいた。
ベテランであろう女性がついて、機嫌を取っていた。

私がその光景を見てると、マイが笑顔で歩いてきた。
隣の男は自分の席に来たのだと勘違いして、座り直したようだった。

マイはその男を見もせずに、私の前に来て笑顔を向けた。
「マイです・・嬉しいな～、最高の指名だよ」と微笑んだ。
『可愛いね～、マイ・・本当の姿は、そんなに可愛いんだ～』と正直な感想を返した。

「さすが夜街のエース・・上手いわね～」と二ヤで言いながら、私の横に密着して座った。
私はマイを見ていた、小さな作りの顔がキュートで愛らしかった。
常時出ないエクボがチャームポイントで、笑うときに少し下がる瞳が可愛かった。

私の隣の席の男は、マイの背中を睨んでいた。
マイは全く気にする様子も無く、コーラを注いでいた。

『マイ・・１つだけ確認させて、後ろの危ない男・・もうマイの前

から消えて良いよね？』とマイの耳元に囁いた。
「その為に来てくれたの！・・ありがとう、怖いからお願い」とマイが私を見て真顔で言った。
『了解・・マイ、君は無駄にしてるよ・・その大切な季節を』と真顔で返した。

「無駄にしてるよね・・それは夜の仕事だからかな？」とマイが微笑んだ。

『笑顔を出すだけの、夜の仕事だからだよ。
マイ・・夜の仕事は本気になれば、得る物も多いと思うよ。
同じ時間拘束されるなら、楽しくて充実してた方が良いよね。
マイ・・今までに何かで1番になった事がある？
自分じゃ無理だと諦めた事がある？・・この世界は資格はいらない。
トップになるのに必要な資格は無い、必要なのは本気と偽らない心。
マイ・・君なら成れるよ、トップを目指せる。
今度誘いに来るよ、本気の同世代の仕事を見せてあげるよ。
俺はマイの笑顔が見たい・・可愛いエクボが出る笑顔がね』

私は意識してマイを引き寄せて、耳元に言った。
マイも私の行動を察して、強く抱きついてきた。

「約束だよ・・忘れないでね」とマイが私の耳元に言った、息がかかるほど近かった。
私は見せていた、あの男が入れない距離を見せ付けていた。
私とマイは、ほぼ抱き合ってるような距離感にいた。
その時限界が来たのだろう、あの男が私とマイの前に立った。

通常ならボーイが飛んでくる状況だったが、ボーイは無視をしていた。

「おい、ガキ・・その女を借りるよ、ガキの来るとこじゃないぞ」と凄んで見せた。
２０代半ばであろう、必死の虚勢が現れて、瞳は小刻みに震えていた。

『久しぶりに聞いたよ・・この街で、俺をガキって呼ぶ声を』と男の目を見ながら静かに言った。
「はったり言うなよ、怪我するぞ・・お家にお帰り」と男は必死の二ヤを出した。
『あんた誰？・・本気で俺に言ってるの・・困った人だね』と笑顔で言って、男の目の前１０ｃｍに立った。

『ここじゃ迷惑だから、表に出ようか』と静かに言った。

その男の目は震えていた、元来喧嘩もしたことが無い、真面目な人間なのだ。
それを自分で否定して、自分で世界を作っていた、それを現実だと言い聞かせた。
その世界では自分が最強のヒーローなのだ、だからどんな敵でも怖くない。
そしてヒーローであるのだから、自分の愛は誰にでも受け入れられると思っていた。

その男は戦っていたのだろう、現実に戻されないように。
そしてヒーローである自分を誇示する為に、私の誘いに乗ってきた。
マイの前での無様な姿など、その男の設定に無かったのだ。

エレベーターに2人で乗っても、その男は俯いて黙っていた。
私はその姿を見ながら、嫌悪感を覚えた。
《殴り倒せば良かった・・こんな奴》と心に吐き捨てた。
ユリカの波動が強く来て、私はごめんなさいと心に謝った。
1階に着いて、通りに2人で歩いていると、男が最後の防御反応を見せた。
「今夜は勘弁してやるよ・・もう帰りな」と男が後ろから静かに言った。
『まだ現実を認めないんだな・・じゃあしょうがないね、教えてやるよ・・現実を』と振り向いた。
男は私を必死で睨んでいた、その顔が急激に青ざめていった。
「エース・・その男なのか?」と後ろからシュウの声がした。
『そう、俺にガキって喧嘩を売って来たの・・ガキだという理由で』と振り向いて返した。
そこには15人ほどの呼び込みさんが立っていた、私は笑顔で頭を下げた。
「それで・・その男に対するペナはどうする?」と1番いかつい須崎のオヤジが二ヤで言った。
『どうしようか〜・・何が良いかな?』と振り向いて男を見た。
完全に震えながら俯いていた、私は男の側に行き顎を掴んで顔を上げさせた。
『あんた・・飲みに出るのは10年早いよ。
10年間夜街出入り禁止だよ、証人がこれだけいるからな。

そして2度とマイに近づくなよ、今度近づいたら宮崎にいれないと思えよ。
分かったのかな・・現実逃避の兄さん』
私は男の目を見ながら真顔で言った、男は必死に頷いた。
「了解・・そう言う事だから、全員チェックしてくれ」と須崎のオヤジが言って、全員が返事して解散した。
私は男を離して、逃げるように走り去る男を見ていた。
なぜだか寂しさがあった、妄想の世界に逃げ込む気持ちが分からなかった。

「エースには簡単すぎたと、加々見さんが言ってたよ」と後ろからフネの声がした。
『面倒だったから、呼び込みさんに頼りました』と二ヤで返した。
「報酬じゃなくて、クリスマスプレゼントだって」とフネが笑顔で封筒を差し出した。
『ありがとうと伝えてね・・また遊びに来ます』と受け取って頭を下げた。

私はフネに見送られ通りに出て、呼び込みさんにお礼を言いながら帰った。
須崎のオヤジに二ヤで冷やかされ、頭をかきながらウルで返した。
一人一人と雑談をして、かなりの時間を費やしていた。

全員に礼を言って、ＰＧを目指していると。
通りのビルの時計が、２３時５５分を示していた。
私はＰＧの裏階段を屋上まで上がり、夜空を見ていた。

『チサ・・イヴが今年も来たよ、俺も佐織も１３歳になったよ。
俺は体と同じ位、心も成長したのかな？・・自信が無いよ。
チサ・・俺は正しくないけど、間違ってないよね。
恭子が言った、豊兄さんの未熟な部分・・あれは俺に対しても言ったよね。
俺も探してみるよ・・自分らしさって、まだ分からないから。
チサ・・俺はハイヒールの、コツコツと響く音が好きなんだ。
チサが近づいてくる、杖の音と同じ響きだからね。
俺は音だけで誰か分かるよ・・蘭でもユリカでも・・チサでもね。
チサ・・見ててね、俺の生き方を・・いつまでも。
ミホと理沙と沙紀・・そして由美子に対する生き方を。
ヒトミとユリアと手を繋いで・・チサが見ててね。
俺に寂しさを教えてくれた・・大好きな、チサが見ててね』

私は夜空を見上げて、月に呟いた。

優しい波動に包まれながら、ユリカの想いを感じていた。

イヴと成人の日の夜に・・私は今でも、その頃に戻って行く。

幼く未熟な自分に・・その時を愛おしいと感じながら。

聖夜の星空に、映像が流れていた・・私は知らぬ間に、笑顔に戻されていた・・。

【冬物語・・リンダの試験？】

ホワイトクリスマスの甘い歌声が、街中に木霊していた。
南国の民は憧れ続ける、白い雪に包まれたクリスマスを。
北国の民の苦労を置き去りにして、幻想的な妄想の中で憧れている。

クリスマスイヴに日付が変わった、若い恋人達にとって、今も昔も一大イベントである。
時代により贈る物も変化してきた、その想いも変化したのだろうか。

私の２人の娘は、クリスマスに携帯電話の機種変更を要求する。
私はウルで腕を引かれて、携帯ショップに連行され。
スマホだの何だのと言う、若く可愛い店員さんの話を聞かされる。

私自身は3年も同じ機種を使い、スマホを手に取って見ては、無理だと感じている。
タブレット端末は自分でも使用しているが、どうもタッチパネルに苦手意識がある。
スマホの小さいタッチパネルは、多少老眼の入った私を拒絶してると感じてしまうのだ。

私は携帯電話に内蔵された機能の、電話とメールしか使用しない。
弱老眼の私には、使用出来ないと言った方が正確である。
携帯のゲームなど、自らの老化を確認させられるだけなのだ。

母の律子は、７０を超えた今でも新し物好きで、２０歳の孫娘と同じ機種を使用して。
何とかロワイヤルなどと言う、携帯ゲームを楽しんでいるようだ。

私は機械好きだが、動く機械が好きであって、パソコン等にも興味が無い。
私の家のパソコンは、全てシズカの製作品である。
シズカが考えた組合せで作ってくれ、ネットゲームもサクサク動く。
私は滅多にゲームはしない、やってもゴルフと麻雀だけである。
しかし私のパソコンの処理能力は、群を抜いているのが分かる。

時代は変化して楽しみも増えた、それは間違いの無い事実だろう。
この小説の時代には、夢物語で語っていた。

ピコン、ピコンと鳴り響く、インベーダーゲームの音が支配した喫茶店。
その奥の隠れ家のような席に座り、「ＴＶでゲームが出来るようになるよな～」
そんな夢物語を仲間達と話して、誇大妄想を加速させていた。
その当時、任天堂は花札メーカーだと思っていたし、ソニーはウォークマンの会社だった。

ＴＶも回転するスイッチでチャンネルを変え、不鮮明な画像で百恵ちゃんを見ていた。
ＴＶと大きなステレオは、家の格式の高い場所に恭しく置かれ。
電話もプッシュ式が珍しく、我家の電話は黒く輝く姿で鎮座していた。
先日、私の１７歳の次女は、あの回転ダイヤルの黒い電話の前に立ち、私にウルでこう言った。

「どうやって使うの？」と聞いたのだ、私はその言葉に凍結した。
《そうなんだ！・・操作に自信が持てないのか》そう思い、その表情に愕然としたのだった。

その次女は、シズカのＤＮＡを色濃く引き継いだ、理数系のコギャルで。
シズカやエミに憧れずに、安奈に憧れるサーファーである。
科学雑誌を愛読書にして、最新情報という四文字が何より好きなのだ。
登校する制服のスカート丈の短さを、ニヤで突っ込むのが、私の朝の日課になっていて。
有名進学校での、スカート丈の短さの新記録を作ったと、ニヤで返すのが次女の日課である。

その理数系次女が、自分の想定に自信が持てなかった。
回転で発信するダイヤル、その構造を見ながら想定していた。
その想定は正解だったのだが、それに自信が持てなかったのだ。
それ程に経験の中に無い、歴史的遺産になったのだろうと思っていた。

そんな老化の進む私でも、クリスマスは楽しみにしている。
クリスマスには５人娘が連絡をくれるのだ、それが私達の約束になっている。
ミサとレイカは母親になり、今でも近くで暮らしている。

エミはここ数年は東京に落ち着いているし、安奈がハワイ、マリアは地球上にいる。
今年はその３人も揃う、久々に５人娘が揃うクリスマスが来る。
それが今の私には何よりの楽しみであり、喜びである。

私は今年もイヴの夜空を見上げながら、楽しそうな話し声を聞くのだろう。
この時にＰＧの屋上で見上げたように、イヴの夜空にチサを映して。

私はチサに語りかけ、優しい波動に包まれながら、指定席に戻った。閉店前の店内に、客が2組しかいなかった、１０時過ぎに満席記録は更新していた。

『危なかったな～、満席記録』と側に来たマキに二ヤで言った。
「3番がね・・梶谷さんが来なかったら、アウトだったよ」とマキが二ヤで返してきた。
『さすがキング・・肝心な時は締めるな～』とニヤで返してフロアーを見ていた。

終演を迎え、私は指定席の横の棚から、キーホルダーを包装した小袋を出した。

『マキ・・良く頑張った、メリークリスマス』と言ってマキの分を渡した。
「嬉しいね～・・来年、素敵なお返しをするよ」と笑顔で返された。
『マキだけは、本名だからね』と二ヤで返して。
控え室に向かう、サクラさんとアイさんに笑顔で渡した。

そして１０番に向かい、女性達に笑顔で渡して。
控え室に消える背中を見送って、マキとＴＶルームに戻った。

私はマダムと松さんと久美子に渡して、笑顔でお礼を返されていた。
私はユリさんに少し大きめの袋を差し出した、ユリさんは笑顔で受け取ってくれた。

『ユリさんには感謝を込めて、あの手作りを贈ります・・マリアには誕生日に』と笑顔で言った。
「ありがとう、本当に嬉しいです・・何処の石ですか?」と薔薇で微笑んだ。

『恋が浦です・・波打ち際で拾いました、特別な場所で』と笑顔で返した。
「素敵ですね、何かが棲む・・先住者の場所の石ですね」と嬉しそうな薔薇で返してくれた。

女性達とＴＶルームを出て、私は蘭と腕を組みユリカの店に寄った。
波動が待ち遠しいと、何度も吹いていたので寄ったのだ。
蘭は奥のＢＯＸにユリカと座り、私は小夜子と残りの３人にキーホルダーを渡した。

小夜子と２人でＢＯＸに戻ると、ユリカが笑顔で待っていた。

『はい・・ユリカ、色々ありがとう・・来年もよろしく』と言って渡した。
「ありがとう、嬉しいよ・・私のも恋が浦？」とユリカが爽やか笑顔で受け取った。
『うん・・ユリさんとユリカとリアンと蘭とカスミは、お揃いの恋が浦だよ』と笑顔で返した。
「嬉しいな～・・５人お揃いだね、学校で作ったんだね」と蘭が満開で微笑んだ。

『お昼休みにね・・中１トリオもそれを察して、話しかけてこなかったから・・ユリカにも気付かれなかったよ』と笑顔で返した。

「うん・・安心できそう、ベッドルームに飾るね」とユリカが出して見ていた。
「素敵ですね～・・噂のドリームキャッチャーですね」と小夜子が微笑んで。
「完成度が上がってるね・・でも、最初のエミのが印象的だよね～」と蘭が私に二ヤで言った。

『俺もそう思うよ・・最近それに気付いたよ。
完成度は確かに上がったけど、エミのには想い入れが強いよ。
沙紀を駐車場で見送った時に、感じたんだ・・沙紀の最高の作品を。
俺にとっては、あのメモの絵画なんだよ・・その時の嬉しさを忘れられない。
人間の可能性を見せてくれた、沙紀がメモ用紙にボールペンで描いてくれた。
父親に対する愛情を、その心の描写を表現してくれた。
沙紀の作品は変化をしてるけど、全て素敵な作品だよね。
でも分かるよ・・女性達も出会う事になるから、忘年会で沙紀の父親に。
その姿を見た時に確認できるよ、沙紀の愛情の深さを・・父親の姿で。
俺は沙紀の父親に初めて会った時に、泣いたよ・・その愛の描写の緻密さに。
そして沙紀のメッセージを感じた・・父親に対する、沙紀の希望を感じたよ。
絶対に成功させて欲しい、今回の沙紀の絶望の世界を壊す事を。
そうすれば感動的に出会える・・あのメモの絵画のモデルに。
俺は沙紀の母親に頼んでるから、持って来てくれると思うよ。
沙紀の絶望の世界に入る時には、あのメモの絵画で集中しよう。
原点を思い出そう・・沙紀を愛した原点を、理由無く愛せた意味を。
沙紀の心の表現に触れて、愛さずにいられなかった・・メモの絵画で』
私は3人に真顔で強く言った、3人も真剣に私を見ていた。

「了解・・ラストメッセージは受け取ったよ」と蘭が満開で微笑んで。
「私も・・多分、ＰＧの全ての女性も・・そう思ってるよ、最高の作品はメモの絵画だと」とユリカが爽やかに微笑んで。
「本当に嬉しいよ、見れるんだね・・私達の中では伝説の、メモの絵画が」と小夜子が嬉しそうに微笑んだ。

「小夜子・・来年にはプロに転向するんでしょ、頑張ってね」と蘭が小夜子に微笑んだ。

「ありがとうございます、蘭姉さんに言われるのが一番嬉しいです。
私達・・副職の心を守ってくれている、最高の副職と呼ばれる人だから。
ネネが言った言葉・・私もそうだと感じました。
蘭・ナギサ・リリーが、私とネネの限界トリオです。
その生き方に憧れ、目標とする3人です。
私は将来独立する事を目指して、来年から取り組もうと思います。
私がその段階まで行けたら、東京ＰＧも経験させて下さい。
私は今のユリカママの年齢、２８歳までの独立を目指してやろうと思います。
自然に覚悟が出来ました、共同体の3店のクラブ経験で」

小夜子は蘭を見ながら、強い決意を言葉にした。
蘭は嬉しそうに笑顔で返し、ユリカは小夜子の横顔を笑顔で見ていた。

「小夜子・・エース、そこで相談なんだけど。
来年から、私は小夜子に、スナックの経営方法を教えるの。
春までには終わると思ってるから・・小夜子を預かって。
来春・・マキとヨーコがデビューする、４月2日に派遣登録して。

小夜子を派遣登録して、最も大切な経験を積ませて。
それが私が唯一出来る、小夜子の独立の夢に対する応援だから。
小夜子・・本当に嬉しかったよ、あなたの強い想いを聞いて。
常に私を助けてくれて、本当に感謝してる・・ありがとう、小夜子」

ユリカは深海の瞳で小夜子を見ながら、静かに言った。
静寂の響きで、その場の空気が変わっていた。
小夜子はユリカを見ながら、涙を流し頭を下げるのが精一杯だった。

『了解・・預かりましょう、小夜子の初期の仕事の中心は。
この店とＰＧと・・マリーレインだよ、難しい状況だと思う。
俺は小夜子とカレンで変化を促すよ、ユリカが提示した後に。
ユリカの教えを受け継いだ、小夜子で勝負するからね。
よろしくね、小夜子・・５年後の東京ＰＧも、派遣の確立も。
俺は約束するよ、小夜子が独立する時は・・必ず最強のメンバーを揃える。
ユリカとリアンと蘭を受け継ぐ、３人を揃えてみせるからね』

私はユリカに抱かれ泣いている小夜子に、笑顔で言った。
小夜子は起き上がり姿勢を正して、私と蘭を見た。

「必ず到達します・・ユリカママが贈ってくれた、小夜子という名前に誓って」と小夜子が微笑んだ。
蘭が満開笑顔で頷いて、ユリカも爽やか笑顔で頷いた。
私も笑顔で小夜子を見ていた・・小さな夜が、その意味を見せる季節が近付いていた。

【銀座の黒船　小夜子】・・今でも夜都市伝説として語られる、小夜子が銀座に舵を切った。

その瞳は輝きを増していた、１キャラットの至宝が研磨に入った。
どんな角度から見ても輝いている、ブリリアントカットの小夜子を目指して。

私は蘭と店を出て、家路に着いた。
蘭はご機嫌で私の肩に乗り、翌日のイヴの指名客の話を二ヤでしていた。
私はウルウルを出していた、その表情を蘭が楽しんでいた。

部屋に帰り、蘭がパジャマで戻ってきた時に、蘭にプレゼントを渡した。
蘭は満開笑顔で受け取って、ドリームキャッチャーをベッドの横の壁にかけて。
【ＲＡＮ】と流れるような文字で作られたキーホルダーに、鍵を付け替えていた。

蘭がイヴのプレゼントにキスをしてくれて、添い寝して眠りに落ちた。
私は寒い夜だったので、蘭を抱き寄せて眠っていた。
蘭の楽しそうな温度が、私の体を温めてくれた。

翌朝、私が朝食を作っていると、蘭がバタバタと起きて来て。
素早く仕度を済ませ、２人で朝食を食べた。
イヴで９時には靴屋が開店するようで、蘭はバタバタと出て行った。

私は蘭を見送って、朝の仕事をして日記を書いた。
さぼり気味だったトレーニングを念入りにして、バス停に歩いた。
バスで街に出て、人の多い若草通りを歩いて、掃除をしてるカスミを二ヤで見た。

「おはよう・・どうした、ご機嫌だね～」とカスミが微笑んだ。
『ひいきしてるから、渡し辛くて・・はい、カスミにも恋が浦』と笑顔で言った。
カスミは輝く笑顔になって、その袋を受け取った。

「ありがとう、嬉しいよ・・来年も、ひいきよろしく」と言って抱きついた。
カスミは人目を気にする様子も無く、人の多い若草通りで、私の頬にキスしてくれた。

「これが一番喜ぶからね、中1トリオよりも貴重だよ」とカスミが微笑んだ。
『ありがとう、カスミ・・素敵なクリスマスになりそうだよ』と笑顔で返して、カスミに手を振って別れた。
私は橘通りを渡り、靴屋を覗いてユリカの店に入った。
ユリカもご機嫌笑顔で迎えてくれて、私はユリカを抱き上げた。

「想いが強く乗っていて、安心して眠れるようになったよ」とユリカは瞳を閉じたまま言った。
『良かった、喜んでくれて』と私は笑顔で返した。

「深海の魚は、光射す場所を好まないのではない・・自らの輝きを信じている。
本当に深いよね、マリは到達するんだね・・そして脱ぎ捨てるんだね。
ずっと纏っていた最後の衣を脱いで、真実の姿で挑むんだよね。
挑むべき存在である、リンダを感じて喜んでいる。
リンダはそれを見せに来た、マリに自分の真実の姿を見せに来たんだね。
リンダは感じてたんだね、塔に侵入した時に・・マリの存在を感

じてた。
マチルダの話を聞いてたし、マリアの侵入方法も感じていた。
リンダの試験、本当に楽しみだね・・何を伝えたいのかが」
ユリカは瞳を開き、爽やか笑顔で言った。
『そうだね～・・そして素敵な物語が見れるよ、俺も少し気付いたよ。
安奈の言葉で・・追いかけてくるのが、自分だと言った言葉でね。
リンダが最後の扉を開いてくれた、安奈が強制的に閉じていた扉を。
リンダとマリアでこじ開けた、その証明が・・あの言葉だと思ったよ。
安奈はどんな道を選ぶんだろう、俺は最近気付いたんだよ。
沙紀が描いた安奈の絵・・浜辺で微笑む安奈、あれは朝陽じゃない。
空も海も赤く染められてる、あれは夕焼けなんだよね。
海に太陽が沈む浜辺なら、宮崎じゃないよね・・あれも提示だね。
安奈も自分で進むべき道を選ぶ、その場所には太陽が沈む浜辺があるんだよ。
俺は楽しみになってきたよ、５人娘の将来が・・何を求めるのかがね』
私もユリカに笑顔で返して、ユリカを降ろして店の掃除をした。
グラスを洗い、お昼の焼肉定食を食べ終わった頃に、マリが笑顔で入ってきた。
ユリカが最強爽やか笑顔で迎えて、マリはユリカの隣に座った。
『皆勤賞だね、マリ・・今日は誰をご指名かな?』と二ヤで言った。
「リアンさんと、銀河の２人とセリカさん・・それにミコトさんと

千鶴さんが大丈夫なはず」と同調でマリが言った。
ユリカが笑顔で頷いて、電話をかけにカウンターに歩いて行った。

『マリ・・どう思った？・・空母と戦闘機』と二ヤで聞いた。
「気付かせるための、強いアイテムだね・・リンダさんは手を抜かないよね、シズカ姉さん並みに」とマリが返してきた。
『そうだよね～・ユリさんから、蘭・ナギサまでは・・気付いた感じだったね』と笑顔で返した。

「うん・・そして、リンダさんの試験の鍵は・・秀美になったよ、今装着したから」とマリが二ヤで返してきた。
「装着した？・・シズカ、仕上がったのね、メタル義手1号を・・クリスマスプレゼントで」とユリカが戻ってきて、驚いて言った。
「はい・・怖い位の義手ですよ、秀美の背中を完全に押し出しました」とマリが笑顔で返した。

3人で雑談をしてると、続々とメンバーが来て、全員が笑顔で揃った。
私はソファーで円を作り、笑顔の6人に説明した。
6人はワクワク笑顔で頷いて、リアンが私を急かした。

私はユリカにも入ってと頼み、ユリカが空母で全ての説明をしてくれた。
私とマリは管制室で見てるだけだった、最初にユリカが離陸して見せた。
それを笑顔で見て、リアンが美しく離陸した、そして残る5人も見事に離陸した。

悪悪団との戦闘には、ユリカは加わらずに観戦していた。
リアンとリョウのコンビネーションが見事で、ミコトと千鶴も難な

くこなした。
ホノカとセリカが楽しそうな笑顔で、必死に戦っていた。
悪悪団を全滅して、全員が空母に帰還して、私は映像を切った。
６人とも興奮が覚めやらぬようで、少し高いトーンで話していた。
私は６人にキーホルダーと、リアンにはドリームキャッチャーを渡した。

リアンが頬にキスしてくれて、私は二ヤで返していた。
「シオンが欲しがるね～・・エミの時に、欲しそうだったから」と極炎ニカで言った。
『来年の女性達の誕生日には、出来るだけ作ろうと思ってるよ』と笑顔で返した。
６人が源氏名のキーホルダーを見て、笑顔になって話していた。

ユリカが買っていたクリスマスケーキを振舞って、女性の笑顔もＭＡＸだった。
私はマリにもキーホルダーを渡し、マリも嬉しそうにそれを見ていた。

「エース・・リンダさんの戦闘機は、早いんだろ・・カスミに聞いたよ」とリョウがケーキを食べながら言った。
『早いし上手い・・悪悪団とは比べ物にならないよ』と二ヤで返した。
「潜水班も、赤丸付けるんだよね？」とホノカが聞いた。
『うん・・平等な設定で挑む事になるね』と二ヤで返した。

「２５日の１０時だね・・楽しみだ～」とセリカが流星で微笑んで、全員が笑顔になった。
ホノカとリョウとセリカで片付けて解散して、私はユリカとリアン

とマリでＰＧに向かった。

『マリ・・楽しそうだね？』と隣を歩く笑顔のマリに言った。
「名作が見られるから・・楽しみ」とマリが言葉で返してきた。
『名作？・・沙紀だね、誰かにプレゼントだね』と笑顔で返すと、
マリも笑顔で頷いた。

３人でＰＧに入ると、ＰＧのメンバーにリリーとカレンも来ていた。
女性達が盛り上がっていたので、私はマリアを抱いて散歩に出た。
ＰＧのエレベーターを待ってると、郵便配達の人が降りてきた。

私は荷物を受け取って、受け取りにサインをした。
私は受け取った時に分かっていた、絵だと感じていた。
私は宛名を見た、ＰＧの住所の後に【華恋様】と書かれていた。

《名作はカレン宛だよ・・号泣するね》と心に囁いた。
「あい」と言うマリアの返事と、強烈な波動が吹いてきた。

私はＴＶルームに戻り、カレンを二ヤで見た。
「何かな～？・・特別なプレゼントとか」とカレンが二ヤで返してきた。
『うん・・カレンの大切な友達の、沙紀からね』と笑顔で返して、
包みを差し出した。

カレンは慌てて立ち上がり、包みを受け取って宛名を見ていた。
立ち尽くしその字を見ていた、嬉しそうな表情だった。

カレンは逸る心を必死で抑えて、慎重に包装を解いていた。
そして薄紙を剥がし、絵をテーブルの上に置いた。
全員が凍結して静寂が訪れた、名作【父の卒業証書】が姿を現して

いた。

「沙紀〜〜」とカレンが叫んで、うずくまり号泣した。
隣のリリーがカレンを抱きしめて、潤むリングで絵を見ていた。

『マリ・・卒業おめでとうって、この事だったんだね・・お父さんの卒業証書だね』とマリに言った。
マリは嬉しそうに泣きながら、強く頷いた。

「沙紀の想いが、強すぎますね・・カレン、本当に素敵ですよ・・そこまで行けた、あなたが」とユリさんが薔薇で微笑んで。
「手渡せなかったんだね・・あまりにも強い感謝だったから、沙紀は手渡せなかった」とリアンが微笑んで。
「沙紀ちゃんは感じたんだよ・・お父さんの心を、それを表現したんだね・・卒業証書で」とユリカも微笑んだ。
「素敵です、カレン姉さん・・本当に素敵です」とハルカが泣きながら言った。

父のいない、レンもマキも号泣していた、その愛に触れて。
シオンは泣きながら、マキを優しく抱いていた、その心に触れながら。

桜吹雪の舞い散る西橘通りに、背中を向けて堂々と立っていた。
その父親の背中には、愛娘に対する愛が滲み出ていた。
その父の姿を見ながら、凛と立つカレンの瞳には、強い意志が描かれていた。
桜吹雪が表現する強い風を受けても、２人は全く揺れる気配も無かった。
お互いに相手の瞳を見て、何かを伝え合い、確認しあっているようだった。

居合わせた全員の心に、沙紀のクリスマスプレゼントが届いていた。
父という存在を描かせると、沙紀は感情を全て描いてしまう。
翌年の沙紀の最初の作品は、正月に出会った勝也の絵だった。
その絵の事は後に記すが、勝也はその絵を本当に大切にしていた。

勝也の遺影になる沙紀の絵は、その本質を貫いていた。
その絵を見て、律子もマダムも松さんも・・駄菓子屋の婆さんも泣いた。
【廃墟の伝道師】と称号を贈られた、焼け野原に勝也が立っていた。

律子は今でも、その絵を仏壇の上に飾っている。
毎日の食事と酒を手向ける時に、その絵を見ながら話しかけている。
その場所には存在するのだろう、真希という2人にとって大切な妹が。

その絵はどんな写真よりも、勝也の真実の姿を映しているのだろう。
私は一度も見る事が出来なかった、勝也の本質である部分。
大工という仕事にかけた強い想い、その根底に流れる敗戦時の日本。

負け方を模索出来なかった、戦時中の指導者に対しての強い憤り。
少年だった勝也が感じた、負けるという現実。
それはどんなに強烈な経験だったのか、私には想像すら出来ない。

ただ沙紀の絵は、今でも表現してくれる。
父である勝也の言葉の真意を、私に伝えてくれている。

壊れた時が大切なんだ、修理するにせよ、新しい物に変えるにせよ。
大切なのは、前より良くするという想いなんだ。

今までで駄目なら、必ず僅かでも良くする・・些細な事にもこだわる。
そんな想いが繋がれば、必ず良くなるだろう、出来損ないの社会でも。

勝也の言葉が響いてくる、沙紀の描いた廃墟の町から。

今年の３月下旬、私は沙紀の絵に込めた想いに触れた。

私がエミを残して、被災地から実家に帰ると、沙紀が尋ねて来た。

そして親父の仏壇に手を合わせて、自分の描いた勝也の絵を静かに見ていた。

「良くなるよね、勝也父さん・・日本人なら、良くするよね」と沙紀が言葉で言った。

廃墟の伝道師は力強く立っていた、その瞳が沙紀を見ていた。

『大丈夫だよ・・日本人なら』と勝也が言ってるようだった。

４０歳を超えた母親である沙紀は、強い瞳の幼子を連れていた。

その幼子は沙紀の隣に座り、沙紀の右手を握って瞳を閉じていた。

原作者が存在させたくなかった、沙紀のＤＮＡを強く受け継いだ少女。

沙紀の一人娘・・沙紀が強い想いで命名した。

その名は・・・百合香・・・。

【冬物語・・リンダの試験？】

友に贈った心の描写は、友の心に深く残る想いに触れていた。
友人になるのに、年齢など意味を持たない。
沙紀の絵はそう表現していた、感謝の気持ちを伝える事で。

高３で父の闘病を支え続けてきた、カレンはずっと抱えていたのだろう。
高校を卒業し、社会に出る姿を見せられなかった悔しさを。

女性達は心に贈られたクリスマスプレゼントに、感謝していたのだろう。
暖かい空間が出来ていて、笑顔に囲まれながら、カレンが泣いていた。

私がマリアを抱いてＴＶルームを出ると、ユリさんが後を追って来た。
私はユリさんとケーキ屋に入り、マリアとクリスマスツリーを見ていた。
ユリさんは予約していたのであろう、ケーキの代金を支払っていた。

人で溢れるケーキ屋を出て、デパートの１階でユリさんを待っていた。
その時マリアが呼んだ、天使の笑顔でその少女を見ていた。

「ひでみ～」とマリアが呼んだのだ、秀美は母親と近付いてきた。
私は秀美の笑顔の下の、銀色に妖しく光る手の平を見ていた。

「マリア・・メリークリスマス」と秀美がマリアに微笑んだ。

マリアは秀美の母親に手を伸ばし、秀美の母親が嬉しそうな笑顔でマリアを抱いた。

『1号機、完成したね・・自慢したくて出してるな』と私は秀美に二ヤで言った。

「ありがとう・・自慢だよ、素敵だろ～」と秀美が左腕のセーターを捲り上げた。

美しいメタルの骨格が現れて、私は再度驚いていた。

手首の緻密な製作に、蘭父さんの強い想いが反映されていて。

肘の部分のシズカの感性と、手の平の部分の豊の感性が融合していた。

それを蘭父さんが繋いでいた、3人の強い想いが妖しさを出していた。

私はその義手に触れながら、その軽さにも驚いて、秀美を笑顔で見ていた。

通りかかる人々が、それを見て驚いた表情を出していた。

『さすがシズカ、これで1号機か～・・2号機が楽しみだね』と秀美に笑顔で言った。

「うん・・私も楽しみだよ～、最高のクリスマスプレゼントだったよ」と秀美に笑顔で返された。

私は秀美の母親からマリアを受け取って、2人を見送った。

マリアとベンチで遊んでいると、ユリさんが戻って来た。

私はご機嫌なユリさんと腕を組み、マリアを抱いて駐車場に向かった。

「私はこれで帰りますね、マリアと2人でイヴを過ごします・・あ

りがとう、エース」とユリさんが薔薇で微笑んだ。
『素敵なイヴを楽しんで下さい、ＰＧはお任せを』と笑顔で返して、マリアをＺに乗せた。
私は笑顔で手を振って、天使のマリアを見送った。

準備が忙しそうな食べ物屋の裏を通り、狭い裏通りを抜けてＰＧを目指していた。
飲み屋はゆっくりと準備していたが、予約が多いのだろう、食べ物屋は忙しそうだった。
私は暇そうな呼び込みさん達と雑談して、ＴＶルームに戻った。

ＴＶルームには、ユリさんの差し入れの、大きなケーキが切り分けられて。
女性達が笑顔で食べていた、この頃からナギサも仕事前に来るようになっていた。
私はナギサの変化が嬉しくて、華やか笑顔を見ていた。

私はマキからケーキを受け取って、マリの隣に座って食べていた。

「エース・・クリスマスボーナスや、良く頑張ってくれた」とマダムが笑顔で封筒を差し出した。
『ありがとう、遠慮無く頂きます』と笑顔で返して受け取った。
マダムは派遣も含む女性達全員に配って、女性達が感謝の言葉で受け取った。

「さて・・これはユリ姉さんと蘭を除く、ＰＧと派遣の女性から、エースに・・素敵だぞ～」とナギサが華やか二ヤで大きな袋を差し出した。
『ありがとう・・嬉しいな～』と全員に笑顔を向けて、袋を受け取って開いて見た。

本皮の黒い皮ジャンが出てきた、その背中に美しい金の刺繍が施されていた。
ＰＧの真赤な薔薇の紋章の下に、【Ｐａｒａｄｉｓｅ　Ｇａｒｄｅｎ】と大きく刺繍されて、その下に【Ａ　Ｃ　Ｅ】と刺繍されていた。
私はニコニコちゃんになって、革ジャンを羽織って、女性達に背中を見せた。

女性達の拍手が聞こえて、私はニコちゃんで振り向いた。

「今は現役引退した、伝説の刺繍師に特別に頼んだんだからね・・貴重だよ」とネネが二ヤで言って。
「素敵な刺繍だな～・・美しいですね」とリリーが笑顔で言った。

私がニコニコちゃんで立っていると、マリが私を俯きがちに見ていた。
集中したマリが顔を上げて、私にニヤを出した。

『何かな～？・・マリ』とウルで言った。
「私からのプレゼント・・ローズにかけろ、小僧・・それが東京成功の鍵だよ」とマリが静かに言葉で言った。
『ありがとう、マリ・・素敵なプレゼントだよ』と笑顔で返した。
私は何も考えなかった、マリの久しぶりの提示が嬉しかった。

私はユリさんが源氏名をローズと命名した時に、このシーンを思い出した。
マリの提示の名前を思い出したのは、蘭とマリアとローズの３人だけである。

マリの提示の言葉を初めて聞いて、ユリカは微かに震えながら、マリを見ていた。
ユリカの鋭い感性は、マリの提示に何かを感じたのだろう。
私には到底分からない世界だった、私はただユリカの嬉しそうな笑顔を見ていた。

私はルンルンで見せびらかしたくて、ニコちゃんでＴＶルームを出た。
一番街に歩いて、靴屋の前で蘭と目が合って、ニヤを出して背中を見せた。
蘭は満開二ヤで頷いて、私もニヤで返して病院に向かった。

ユリさんと行ったケーキ屋に立ち寄って、その時狙いを定めていた。
銀の靴下型の入れ物に入った、可愛いお菓子セットを３つ購入した。
私はマダムのボーナスの封筒を出して支払って、ポケットにもう１つ封筒があるのを確認した。

加々見ボーナスと思い出し、通りの影で封筒を開けて凍結した。
１万円札が５枚も出てきたのだ、約４０年前の５万円である。
現在の価値に換算など出来ないが、私は大金持ちになった気分だった。
私は最高ニコちゃんになって、軽快なステップで病院を目指した。

病院の４階で記名してると、若いナースに革ジャンを冷やかされた。
私は銀の靴のお菓子を渡して、夜勤の巡回の人に、３人のベッドにこっそり置いてと頼んだ。
若いナースは笑顔で頷いて、受け取ってナースステーションの奥に消えた。

私はミホの部屋に入り、理沙がいないのでミホの手を握って、革ジ

ャンを自慢していた。
ミホは無表情のまま、私のニコちゃん笑顔を見ていた。
ミホの祖母が来て、私は笑顔で挨拶をした。

「ミホの一時帰宅の許可が出ましたよ、色々とありがとう」と祖母が微笑んだ。
『良かったですね・・いつからですか？』と笑顔で返した。
「２７日の日曜日、午前中には出れますよ」と笑顔で返された。
私は２７日のライブの話をした、祖母は快く了承してくれた。
「うちの主人も、２８日まで仕事だから・・助かりますよ、ミホも喜びますし」と祖母が微笑んだ。

『じゃあ・・ミホを預かりましょうか、２８日に自宅に送りますよ。
ユリカの家に泊めますから、安心して下さい。
私も蘭も美由紀も泊まりますから、３人も喜ぶと思います。
どうでしょうか？・・それに沙紀も来ますから』

私は笑顔で言った、強烈な波動が了承を強く示した。
「ありがとう・・お願いしますね、沙紀ちゃんも来るのなら・・ミホは喜びますよ」と笑顔で返された。
『了解です・・沙紀も喜びます』と笑顔で返した。
その時に、ミホの温度が変化した、私は嬉しくてミホの顔を見ていた。
優しい波動がミホを包んでいた、ミホの無表情の中の瞳が、沙紀の絵を見ていた。

暗黒の世界に浮かび上がったミホ、そのミホの愛に対して、愛で返した沙紀。
その愛を表現したミホの絵には、暗黒の中の確かな光が輝いていた。

私は祖母に挨拶をして、由美子の部屋に行った。
由美子もご機嫌で、皮ジャンを褒めてくれた。
私は北斗に礼を言って、祖母と雑談をして部屋を出た。

病院を出ると、夕暮れに包まれていた。
子供達が笑顔で家路に走っていた、イヴのワクワク笑顔で手を振りながら。

私は夜街に歩きながら、前方のカップルを二ヤで見ていた。
その2人の距離感が視線を気にしてるように、少し離れて歩いていた。

私は無言で追い抜いて、2人に背中の刺繍を見せた。
「素敵じゃない・・似合うよ、エース」と美冬が言って。
「かっけ～・・良いな～」とカズ君が言った。

『サンキュー、美冬・・かっけ～だろ～』と振り向いて美冬に笑顔で言って、カズ君に二ヤを出した。
2人は笑顔で返してくれた、私はニヤニヤで返した。

「何の二ヤかな～？」と美冬がニヤで言った。

『芸能人みたいに、人目を気にするカップルだと思ってね。
そんな距離感の方が、関係者が見て怪しく感じるよ。
俺のように密着して腕を組んだほうが、この街では自然なんだよ。
何なら今から、一番街でキスするとか・・その方が逆に噂にならないよ』

私は二ヤ継続で言った、2人も二ヤ継続だった。

「そんな事は、どこぞのエースしか出来ません」と美冬が言って。
「してみたい」とカズ君がウルで言うと、美冬に睨まれていた。
食事に行くという2人と別れて、私はリッチハートに向かって歩いた。
久美子のライブ前の練習を覗きに行った、受付でキヌちゃんに冷やかされて、二ヤで応戦した。
キヌちゃんにキーホルダーを渡すと、嬉しそうな笑顔で返された。
私はリッチの客席に座り、オヤジバンドの真剣な表情を見ていた。
その時トコトコと、マリア位の少女が私に駆け寄った。
私は笑顔で抱き上げた、少女は私の顔をじっと見ていた。
少し首を傾ける表情が可愛くて、私は少女の手を握った。
『お名前は？』と言葉と温度で聞いてみた。
《谷田七海です》と温度で返された、私はその温度の強さに驚いていた。
『可愛いね、ナナミちゃん』と笑顔と温度で返した。
《どうして出来るの？》と七海が笑顔で返してきた。
『俺はね・・・』私は抱いたまま席に座り、簡単にヒトミとの事を話した。
不思議な感情だった、私は自然にヒトミの事を話していた。
七海の温度を懐かしく感じていた、モモカと同じ温度だったのだ。
私はモモカとの出会いの場面を思い出しながら、七海の温度を楽しんでいた。
七海の可愛い好奇心が、私の心を癒してくれた。
七海は笑顔になって、私の瞳を見ながら、温度で聞いているようだ

った。
私は七海の無垢な笑顔が嬉しくて、辛い話まで笑顔でしていた。
私の言葉の部分を感じて、ユリカの波動が驚きを連れて吹いていた。
私は初めて笑顔で話せた、ヒトミとの別れの場面までも。

そして純粋無垢に強く問われる、私の心に漂っている矛盾を突かれる。

《悲しいお話じゃないのに、悲しい気持ちになるのは・・変だよ》
と七海が首を傾けて、温度で伝えてきた。

私はその問いかけに凍結した、正に心の真を突かれた。
私にはヒトミとの全ての思い出に、悲しみは存在しなかった。
確かに強い喪失感と淋しさは存在したが、悲しみの欠片すら無かったのだ。

そして自分が感じてると思っていた、悲しみの部分を分析できた。
初めてその原因に気付いた、七海の純粋無垢が教えてくれた。
私の大きな勘違いを、気付かせてくれたのだ。

その時にルミの言葉が蘇ってきた、俺もマリも勘違いしてると言った言葉が。
絶望や挫折は、何が何に言ってる言葉なんだと・・強く問いかけた言葉が。
私の中に文字で蘇ってきた、私はその文字をリアルに意識できた。

そして私は完全凍結をする、純粋の力に触れてしまう。
《字はまだ分からないよ〜》と七海が伝えてきたのだ、私は七海の瞳を見ていた。
その瞳は確かにモモカの2歳の頃と同じ、不思議な輝きに満ちてい

た。

『ごめんね・・そしてありがとう、ナナミ・・大切な事を教えてくれて』と笑顔で返した。
強烈な波動が来て、詳細の説明を要求された。

《良かった～・・ヒトミちゃんも喜んでるから》と七海が言って笑っていた。
私は震える腕を必死に抑えて、七海を強く抱いていた。

《モモカに会いに施設に行こう、今こそモモカに話そう・・俺の本心を伝えよう》と心に誓った。
ユリカの強烈な波動が、何度も吹いてきて、私と七海を包んでくれた。

私は七海の笑顔を見ながら気付いた、ステージの音が止まっていた。
私が顔を上げてステージを見ると、オヤジ達の驚きの表情の後ろに、久美子の二ヤ顔があった。
ステージの下に女性が泣きながら立っていた、私は七海の母親だろうと思っていた。

『ナナミ・・もしかして、お父さんとお母さんに意地悪してたね？』と七海に二ヤで言った。
《意地悪なんてしないよ・・少し待ってもらってたの、大好きだから》と温度で返してきて、キャッキャッと笑っていた。

『そっか～・・お父さんとお母さんに、クリスマスプレゼントで取ってたんだね』と笑顔で言うと、母親であろう女性が駆け寄った。
私は七海を抱いたまま立ち上がり、母親に七海を渡した。

「ありがとう・・最高のクリスマスプレゼントです」と母親が笑顔で言った、美しい人だった。
『それはナナミに言って下さい・・素敵なお子さんですね、ナナミってどんな字ですか？』と笑顔で返した。

「七海と話したんですか！・・七つの海で、七海です」と母親が驚きながら教えてくれた。
『素敵だ～・・七つの海で七海か～・・さすが谷田の親分』と七海に笑顔で言った。
七海は楽しそうに声を上げて笑っていた、その瞳に私が映っていた。
谷田はステージ上で凍結していた、他のオヤジも声をかけれなかった。

「凄いでしょ・・あれが夜街のエースの本質です、私を煽り続ける」と久美子は谷田に微笑んだ。
「俺は今分かったよ・・ミホちゃんと沙紀ちゃんを見て、感動した訳を」と谷田が久美子に笑顔で返した。
久美子は笑顔で頷いて、ステージを降りて私の腕を組んだ。

「久美子はいずれ世界に出る・・あの言葉が響いたのは、言葉の力だけじゃなかったな？」とミノルが二ヤで言った。

『本気の時は無意識ですよ・・あの言葉は本気でした。
今度のライブには、ミホと沙紀が来ますから・・よろしく。
２人の心に直接伝えて下さい、音楽の素晴らしさを。
音楽に魅入られた少年達が、辿り着いた音で伝えて下さい』

オヤジ達に二ヤで返して、七海に笑顔を向けて、久美子と出口に向かった。

「背中の刺繍がロックだな・・絶対に伝えてみせるぞ、見とけよな・・エース」と塚本の声がした。
私は右手の親指を立てて、振り向かずにオヤジ達に向けた。
オヤジ達の笑顔を感じながら、ドアを開けてリッチを後にした。
久美子は私を二ヤで見ていた、私は久美子に二ヤで返した。
「段階が上がったね・・腕を組んで感じたよ」と久美子が微笑んだ。
『サンキュー、久美子・・七海に出会えて良かったよ』と笑顔で返した。

「美由紀の言葉でそうしたの・・そうしようと思ったの。
私は七海ちゃんを見て、エースを紹介したかったけど。
それは大切な偶然を、必然に変えそうで・・嫌だったのよ。
七海ちゃんに必要なら、必ず出会う・・それがエースと呼ばれる男でしょ。
カレン姉さんも、ネネ姉さんも、アンナさんも、リリー姉さんも。
そして当然、レンも・・私も。
全員に必要だった・・エースという存在が、必要だったのよ。
ミホにも沙紀にも・・そして由美子にも、必要な存在なのね。
道を繋げ・・マリちゃんの言葉は、切望なんだね。
その出会いの世界を見せて欲しいと、切望してる言葉だね」
久美子の言葉が、イヴの夕暮れに木霊した。
私は笑顔で返して、久美子と腕を組み裏階段を登った。
ＴＶルームは若手の女性達の笑顔で溢れていた、私と久美子は奥に座った。
久美子はマキからケーキを受け取り、笑顔になって食べていた。

忙しかったのだろう、蘭とカスミが最後に現れて、全員が揃った。
ユリさんも北斗もアンナもいない、独特の緊張感があった。
その雰囲気を、ユリカとリアンが笑顔で引っ張っていた。

「マキ・・食事の前のお話で、モモカ物語をして欲しいんだけど」
とユリカが微笑んだ。
「モモカ・・初耳だね～」と蘭が満開二ヤで私を見た。
「可愛いですよ～・・４歳のモモカ姫」とシオンがニコちゃんで言った。
「水源・・生命の源・・モモカ」とマリが俯いて静かに言った。
その言葉の静けさで、女性達がマキを見た。

「モモカ・・私達にとって、忘れ得ぬ響きを連れています。
今の私達には、マリアと同じ響きを持っています
無垢な温もり、モモカ・・その完璧な純粋が示した、生命の意味。
小僧の挫折も哲夫の葛藤も、粉々に破壊した・・強烈なる純度。
不純物０・・澄み切った透明・・私のイメージで言うと。
モモカは、幼き日のユリカ姉さんですね・・その圧倒的透明度が」

マキは静かに言葉にした、全員がマキを見ていた。
「マキ・・お願い、リンダの試験前・・最後の話として」とユリカがマキに微笑んだ、マキも笑顔で頷いた。

「モモカは孤児です・・１０月の早朝、生後半年で施設の前に捨てられました。
毛布に包まれて、早朝に発見されました・・新聞配達の少年に。
その新聞配達の少年、もちろんエースです。
ミホを引き離されたエースに、顔馴染みの新聞屋の主人が依頼しました。

新聞配達をしないかと誘ったんです、エースの喪失感を感じたからでしょう。
新しい何かを、させたかったんだと思います。
エースの周りの大人達は、感じていたようでした・・その喪失感を。
和尚が話していましたし、小児病棟でのヒトミとの話は有名でしたから。
大人達はずっと見守ってました、和尚の弟子の・・小僧という存在を。

モモカは眠っていたそうです、小僧は抱き上げて家に連れて帰りました。
律子母さんを起こして、悔しそうに状況説明をしたそうです。
母さんがモモカを受け取って、小僧は残りの新聞を配りに行きました。
母さんがモモカが包まれていた毛布を開くと、手紙が入っていました。
その手紙には、モモカの生年月日と、たった1つの言葉が記されていました。
よろしくお願いしますという言葉だけが、書かれていました。
モモカの名前すら書いてなくて、小僧はそれで怒りに震えてました。
小僧が帰って、律子母さんと一緒に施設に行きました。
警察も現場検証に来て、市役所の担当者も来ていました。
色々と捜索はされたようですが、モモカの出生は今でも謎です。
小僧は哲夫に頼むと言って、毎日モモカに会いに施設に行きました。
その姿は・・ヒトミやミホに会いに行く、小僧の姿と同じでした。
それから1ヶ月が過ぎた頃に、正式にモモカを施設が預かる事が

決まりました。
その時に、小僧が命名者に選ばれました・・小僧はモモカを抱きながら。
春に生まれて、甘い匂いがするから・・桃の香りで、桃香にしよう。
小僧はモモカを抱きながら、モモカを見て言いました。
多分、モモカには温度で伝えていたのでしょう、モモカは笑っていました。
それからの小僧は、モモカに全ての愛情を注いでいました。
モモカは本当に素敵な少女です、そして不思議な力を有してました。
モモカは成長が早く、2歳の誕生日には・・言葉を園児並みに話していました。

施設の子供達のアイドルになったモモカ、その笑顔は絶対的な癒しです。
マリアの天使の微笑と同じ、圧倒的な癒しが・・モモカの微笑には有りました。
そして私達は見せ付けられる、モモカの純粋という強烈な問いかけを。
小僧が自称の女神の時に、和尚と問答をした後に、シズカと問答をして。
瞑想に入った時に現れる、トコトコと歩み寄る小さな影。
そして瞳を閉じている小僧の前に座った、可愛い2歳のモモカでした。
私達の後ろから哲夫が入ってきて、こう言いました。

モモカが、和尚・和尚ってうるさくて、連れて来たよ。
モモカ・・小僧に会いたかったんだね。

哲夫は2人を見ながら、笑顔で言いました。
その話を聞いた和尚の、モモカを見る瞳を忘れられません。
本当に嬉しそうな瞳でした、和尚の喜びを感じました。
その時に響き渡ります、モモカが強く問いかけます。
迷いのある小僧に向かって叫ぶ、純粋という弾丸が小僧に問います。
自分を誤魔化している、小僧の心を狙い撃つ・・透明な弾丸で。

こじょうの嘘つき・・桃香は好きなのに・・お馬鹿なこじょうが。

本当に強い言葉でした、その小さな体のどこに有るのか。
強烈な透明な弾丸を、モモカは発射しました。
小僧はその言葉で瞳を開けて、モモカを見ていました。
モモカは小僧を見ながら、笑顔になりました・・癒しを振り撒きながら。
小僧も笑顔になって、モモカを抱き上げて楠木に歩いて行きました。
2人でチャッピーの墓の前に行って、小僧はモモカに何かを伝えてました。

モモカの透明の弾丸に対する、小僧の解答こそが・・あの自傷行為です。
考えてる小僧に強く問いかけた、お馬鹿な小僧が好きだと叫んだ。
モモカの言葉で小僧は気付いた、自分らしい馬鹿げた解決方法を。
馬鹿げた行為だからこそ響いた、自傷の女神の心に響きました。
後に小僧が和尚に言いました・・モモカの言葉は弾丸だったと。
透明な弾丸が突き刺さって、その時に見えたと・・モモカを見つけた場面が。
その映像に響いてきたと・・マリの言葉が・・道を繋げと響いたと。

小僧は静かにそう言いました、和尚は笑顔で頷きました。

その時が来れば、モモカは絶対に会いに来ます・・自分が必要だと感じれば。

小僧にとって自分が必要だと感じれば、必ず会いに来ます。

ユリカ姉さんから、モモカの名前が出て・・私は緊張しました。

小僧は必要と感じたんでしょう、今こそモモカの言葉が。

今回の沙紀の世界に対する、自分の迷いを感じて・・そう思ったのでしょう。

小僧の迷いはモモカが消す・・それが小僧の妹と言われる、モモカの本質。

モモカが選択したと感じる、自分で選択して捨てられたんじゃないのかな。

そう思えるほど・・小僧とモモカの関係は、不思議な線で結ばれている。

誰にも入れない、強い境界線の中にある・・そう美由紀は真剣に言いました。

美由紀でも入れない、小僧とモモカの世界・・そこに入れるのは。

ただ一人でしょう・・天使の微笑を持つ、マリアだけだと感じます。

私はモモカの強い弾丸が、導いたと感じています・・マリアの世界に。

最高指導者の元に、モモカが送り出したと感じています。

それほどに近いんです・・モモカとマリアの存在は、重なってしまう。

私もシズカも恭子もヨーコも・・そして豊君も、そうだと思います。

哲夫がマリアに出会った時に言いました、私はその言葉で震えま

した。
マリアは全く同じだと・・モモカの2歳の時の温度と同じだと。
小僧は嬉しかったよね、モモカの双子の妹に会えて。
哲夫は笑顔でそう言いました・・それが真実なのでしょう。
小僧はモモカの事をこう表現します・・まるで自分がいるようだと。
モモカが近くにいると、自分に見られてる気がすると言いました。
同じ台詞を最近聞きました・・安奈の言葉で。
そこにこそ有るのでしょう、今回の最も大切なポイントが。
モモカが小僧に向けた言葉だと感じるから、私は確信的にそう思います。

モモカは普段は可愛い普通の少女です、施設で暮らしながらも笑顔が絶えない。
明るい少女です・・その天真爛漫が、施設の仲間の支えになっています。
モモカはその時だけ弾丸を込めるのでしょう、愛する兄の迷いを感じた時にだけ。
小僧がヒトミとミホの喪失感を克服出来たのは、最後はモモカ存在でした。
その存在が有るからこそ辿り着いた、それが春雨の叫びです。
最初の春雨の叫びには、モモカの叫びが乗り移っていました。
自分の娘の不幸を選択しようとする、父親に対して・・モモカが叫んだ。
境界線の中から、小僧の言葉に乗せてきた・・私達は全員がそう感じました。

先日シズカがこう言いました、エミの笑顔を見ながら呟いた。
エミも自分も、天才なんかじゃない・・私は天才を知っている。
天が与えた才能を有する者・・それがモモカとマリア、全ての根

源に棲み者。
言葉などで表現出来ない存在・・モモカとマリア。
いつの日かこの2人は出会うのだろう・・小僧が繋ぐ道の途中で。
その時に、モモカは何を伝え・・マリアは何を返すのだろう。
それを見たいと感じてしまうよね、私達も・・そしてマリも。

シズカは嬉しそうにエミを見ながら、そう言いました・・私も同じ気持ちでした。
モモカ第一章はここまでにします・・モモカ第二章・・マリとモモカ。
その時に見せるモモカの強い熱・・マリが初めて表情を出す。
強過ぎるモモカの熱に溶かされる、その熱は全てを溶かす。
マリの涙を強引に引き出す・・モモカの透明の熱い弾丸が、マリに照準を合わせる。
発射された弾丸は、無色透明・・不純物0・・水源からの弾丸。
マリの強い拒絶の壁を粉々に粉砕した、たった一発の透明の弾丸。
マリが了承してますから、次回はそれをお話します」

マキは最後にマリに二ヤを出した、マリも二ヤで応戦していた。
女性達に笑顔が咲いて、マリの二ヤを見ていた。

私はマリの横顔を見ながら、モモカと出会った場面を映像で見ていた。

朝陽を浴びて輝いていた、毛布に包まれたモモカを抱き上げた時に感じた。

生きている事の素晴らしさを、モモカの温度で感じていた。

生と死の意味を考えていた、当時の未熟な私。

その未熟な私にモモカが伝えてくれた、生きる意味。

私はモモカの温度を感じて、モモカの鼓動を感じて、ただ嬉しかった。

モモカが生きている事が、何よりも嬉しかった。

モモカの過酷な運命を感じながらも、モモカが生きている事だけで良いと思えた。

その時に戻った自分を感じていた、ヒトミを左手に誘った頃に。

モモカの温度と甘い香りに包まれて、私は笑顔で朝陽を浴びていた・・。

【冬物語・・リンダの試験？】

秋風に揺れる木々が守っていた、小さくて大切な命を。
その場所は暖かい日差しに包まれて、まるで別世界のようだった。
天使を抱き上げて鼓動を感じた時、それだけで幸せだった。

マキの話を受けて、女性達は何かを感じてるようだった。

「凄いですね、モモカちゃんも・・シオンは全然感じなかった、可愛い少女だと思っただけでした」とシオンが真顔で言った。
「モモカは淋しくないのかな？・・小僧が側にいなくて」と蘭が少し心配顔でマキを見た。
「それは大丈夫です・・モモカには守るべき、哲夫がいますから」とマキが笑顔で返した。

「モモカが守ってるのね、哲夫を」とユリカが微笑んだ。

「モモカの今の感性は・・兄である小僧と、母であるヨーコの影響でしょうね。
小僧は子供社会を哲夫に繋いで、モモカに何かを伝えてましたね。
そしてモモカのお世話は、今年の春まで、ずっとヨーコがしてました。
執着してたと言った方が良いですね、ヨーコは多分・・自分の全てを伝えた。
母が娘に伝えるように・・それは本当に深い愛情でした。
ヨーコと小僧が側にいない状況、それで今年の夏、モモカは変化しましたね。
私は駄菓子屋の店番をしてて、ずっとその変化を見てました。
現在のモモカは、４歳の少女としての理想を追ってる感じですね。

モモカは成長を望んでます、その心が目指すのは・・自立でしょう。

律子母さんの表現で言うと・・モモカは体内暦を持っている。
西暦じゃない、生命のサイクルで作られた・・体内暦。
それを正確な体内時計が刻んでいる、モモカの１日は２４時間じゃない。
そして１年は３６５日じゃないと言いました・・モモカは常に小僧に確認します。
モモカ・・大きくなった？・・学校行ける？・・お嫁さんに行ける？
この３つを、可愛い笑顔で小僧にだけ問いかけます、それが挨拶のように。
小僧はそれを聞くと、真剣に答えますね・・モモカの全てをチェックして。
シズカが天才と表現した最も大きな理由は、このモモカの体内暦と体内時計です。
時を否定できる・・時に逆らうマリとも違う、モモカは時という概念を否定してる。
モモカの１秒は、１回の鼓動なんだよね・・遠い記憶、全ての生命の原点。
モモカはそれを覚えてる・・人間の誕生時に近い記憶を、心のどこかに持っている。
心の成長を望む、モモカ・・そして自分らしい成長を望む、マリア。
貴重だよ・・貴重すぎるよ、この２人は・・美由紀が言った境界線は、源の仕切り。
人類が進化する途中で捨てた、大切な物を持っている・・小僧はそれを守ってる。
それこそが最終兵器だと無意識に感じてる、原作者に対する最終

兵器。
原作者が人間に絶望する以前の、人類の姿・・それがモモカとマリアの中に有る。
シズカはそう表現しました・・集中したシズカでした。

皆さんも感じていると思います・・小僧とマリアの特別な関係を。
蘭姉さんが言いましたよね・・蘭姉さんでも入れないと、それが嬉しいんだと。
小僧とマリアの世界には入れない・・その事に喜びを感じると。
本当に素敵な言葉でした、私は感動しながら聞きました・・そして感じたんです。
私は感じています・・ユリという頂に立つ人は、マリアの変化で天空を見上げた。
ユリさんはその方向に歩き出した・・愛娘のマリアの世界、源に舵を切った。
辿り着けるかもしれない・・あの人なら、ユリという高みにいる人なら。
そしてもう一人・・水源と言われる、水のユリカと呼ばれる人なら」

マキはユリカを見ながら強い瞳で言った、砂漠の彼方から灼熱の熱風が吹いていた。
ユリカも深海の瞳でマキを見ていた、その表情を女性達が沈黙して見ていた。

「マキ・・あなたの伝達能力は何なの?。
私は今確信したよ・・あなたはマリアを感じてる。
小僧はマリアを読まない、それはシオンとマキが読めるからって言った。
マリア語が分かるなんてレベルじゃないよね、マキが来てマリア

は変化した。
シオン・マチルダ・マキ・美由紀・マリの流れで、マリアは覚醒したよね。
マキは出会った時に決めたのよね・・私に挑戦すると、自分に誓ったのよね。
私は当然それを感じたよ・・嬉しかったよ、最高の挑戦者だから」
ユリカの真剣な深海の瞳に、好戦的な喜びが映し出されていた。
リアンと蘭とナギサの二ヤがマキを見ていた、他の女性達は沈黙が続いていた。

「放射熱で感じる・・灼熱のマキ」マリが静かに言葉で言った。
マリの強烈な二ヤに、マキも強いニヤで対抗した。

「あっ！・・放射熱だった・・あの時も」と久美子がマキに微笑んで。
「やっぱりね、そんな感じだよね・・エースの称号には意味が有るよね、灼熱のマキ」とナギサが微笑んで。
「砂漠の真中から響いてくる、あなたの言葉が出ないって怒ったよね・・律子母さんが」とカスミが不敵二ヤで言った。

「ばれたね、マキ・・私は何となく分かってたよ、マキの熱風の叫びを受けたから」とリアンが嬉しそうに微笑んだ。
「拳の言葉じゃなかったんだ・・熱風を表現した拳だったんだね」とハルカも笑顔で言った。

「自分じゃ分かりません・・マリアの言葉も、強い感情しか感じません」とマキが照れた笑顔で返した。
「シオンは・・シオンはどんな感じなの？・・マリアの言葉」とカレンがシオンに言った。

「えっと～・・原語かな？・・シオンの思ってる感じだと。
シオンは３ヶ国語を話せるような感じだよ、日本語と英語とマリア語。
でもマリア語はヒアリングだけで、話す事は出来ない感じ。
マリア語は・・スーって入ってきて、意識できないどこかで変換される感じだよ。
律子母さんが教えてくれた・・シオンは記憶で伝える事が出来るって。
シオン・・その言葉を持って沙紀ちゃんの手を握った、そしたら入ってきたんだよ。
沙紀ちゃんと由美子ちゃんの感情が・・シオン嬉しくて、嬉しくて。
だから今は、シオンの想いを伝えたい・・その練習段階です」
シオンがニコちゃんで言った、再び静寂が訪れて、女性達がシオンを見ていた。
その時ＴＶルームのドアが開いて、ニヤニヤ顔のヨーコが入って来た。

「マキ・・バレバレじゃない、まだまだ私には及ばないわね」とヨーコがマキに二ヤで言って、全員に笑顔で挨拶した。
「及ばないよ・・バリアをすぐに破っちゃう、まだまだだ～」とマキがウルで言った。

「あら・・最近は素直になったね、良い心がけだね。
マキ、小僧・・ありがとう、施設の子供達は喜んでたよ。
マキと小僧が仕事をしたお金で、ケーキとお菓子を買ってくれたって。
哲夫が嬉しそうに配ってたよ・・私からお礼を言ってって、頼ま

れたよ。
　あの子達は感じてるよ、働いて得たお金の価値を・・それが嬉しかった」
ヨーコは清楚な笑顔で伝えてくれた、私も喜びを感じていた。
「ヨーコ・・少しは時間有るんだろ、まぁお座りよ」とリアンが極炎ニカで言った。
「はい・・少し怖いですけど」とヨーコはウルで返して、私とマリの間に座った。
「モモカの香り・・メッセージ！」とマリがハッとしてヨーコを見た。
「もう、マリは・・緊張してる時に、怖いんだから～」とヨーコが清楚二ヤで返した。
「あるの！・・モモカのメッセージ」とユリカがヨーコを見た。
「モモカ話・・聞きましたね～・・小僧にメッセージがあります」とヨーコが笑顔で返した。
女性達の視線がヨーコに集まって、ヨーコは驚いてウルを出した。
「ヨーコのウルが可愛いのは知ってるから・・早く述べよ」とリアンが二ヤで催促した。
「モモカがいつものルンルン笑顔で、私に言いました。
小僧に今度教えて欲しいから、小僧に伝えてと。
海の水は、引いてる時はどこに行くの？・・満ちる水はどこから来るの？
海の深さは変わるの？・・深いって、背が届かない事なの？
そう言いました・・小僧、モモカを強く想ったね・・何か問いかけたね。

モモカの必殺技が炸裂したよ、問いかけのオウム返しが。
対小僧用秘密兵器・・ルンルン笑顔の、問いかけ返しが」

ヨーコが私に二ヤで言った、私は自分の間違いをはっきりと理解していた。
七海とモモカの問いかけで、子供の自分に戻っていて、その場所で理解していた。

「小僧は・・準備完了・・絶望の世界」とマリが私に二ヤを出した。

『マリ・・今回は勝負だね、俺は初めてマリに勝負を挑むよ。
マリにも有るね・・いや、ここにいる女性全員に有るよ。
マリ・・壊してやるよ、俺が・・マリの勘違いの恐怖を』

私も二ヤでマリに返した、マリの黒目が変化を繰り返し、深い漆黒になった。
マリは少し俯いて私を見ていた、カタカタといたる所から音が響いた。
女性達の凍結を感じていた、その音は徐々に大きくなっていた。

「深海の魚は・・光射す場所を目指さない」とマリが搾り出すように言った。
何かと必死に戦ってるような響きだった、マリは両手の拳を強く握っていた。

『そこには光しか無いから・・輝きは存在しないから』と私はマリの両手の拳を握って強く返した。

カタカタと鳴り響いた音がピタリと止まり、マリが顔を上げて笑顔を見せた。

『準備完了だね、マリ・・信じようね、素敵な女性達を』と笑顔で言った、マリも笑顔で頷いた。

「今回の作品は、意味と理由か～・・最高の時が来る、私はもう止まらない」とリリーが笑顔で言った。

瞳のリングが高速回転していて、私はその幻想的な光の輪を見ていた。

「ありがとう、モモカ・・私も最後の不安が解けたよ・・必ず会いに行くからね」と蘭が満開笑顔で上を向いて言って。

「蘭・・ミホも来るらしいよ、２７日に一時帰宅出来るんだって」とユリカが爽やか笑顔で言った。

「本当ですか！・・嬉しいな～」と蘭が満開笑顔で返した。

リリーのリングと、蘭の満開・・そしてユリカとリアンとナギサの余裕を感じて、若手が焦った。

「ヨーコ・・お願い、ラストヒントにモモカ話をして・・秘密兵器、問いかけ返しを」とカスミが焦った様子で言った。

「お願い、ヨーコ」とネネもウルで促した。

「モモカは風の中にいる・・小僧は今年の春に、私にそう言いました。

私が施設を出る日に・・施設の門の横の桜の木の下で、モモカを抱きながら。

満開の桜を散らす、春風に吹かれて・・モモカは私を笑顔で見てました。

寂しさを抱える私の背中を、モモカの笑顔が押してくれました。

小僧がモモカを発見したのは、３年前の１０月の中旬です。

体育の日が過ぎて、運動会も終わった頃でした。
風が秋の気配を連れていて、朝は肌寒さを感じる頃です。
小僧は新聞配達をしていて、施設が見えた時に不思議な何かに気付きました。
小僧は遠くから感じたそうです、その場所だけ朝陽に輝いていた。
小僧は手前の配達を飛ばして、施設の敷地に入りました。
そしてモモカを桜の木の下で発見します、スヤスヤと眠るモモカを。
小僧はモモカのいた場所だけが、光に照らされ暖かかったと言いました。
小僧はモモカを抱き上げて、全てのチェックをしたのでしょう。
鼓動と温度のチェックをした、小僧はその頃・・ミホを遠ざけられたばかりでした。
だから全体的な伝達が落ちていて、私はその姿を見るのが・・辛かった。
小僧の喪失感を埋めてやることが出来ない自分が情けなく、無力感を感じてました。

小僧と律子母さんが、モモカを連れて来た場面を、私は忘れる事が出来ません。
モモカを抱く小僧は、完璧に戻ってました・・ヒトミを左手に誘った頃に。
モモカは小僧に抱かれて笑ってました、生後半年のモモカが嬉しそうに。
私が小僧に駆け寄ると、小僧がモモカを抱かせてくれました。
私はモモカを抱いた瞬間に感じました、モモカの温もりと甘い香りを。
確かに乳児はミルクの香りがします、懐かしい甘い香りがしますよね。
でもモモカの香りは独特で、果実のような甘い香りなんです。

南の島の熟れた果実のような、温もりのある甘い香りです。

モモカの出生の秘密が分かるまで、施設が預かる事になって、私は嬉しくて。

執着しましたね・・学校からダッシュで帰って、ずっとモモカの側にいました。

小僧も毎日来て、モモカを抱いていました・・モモカは小僧が来ると笑うんです。

それから正式に、モモカは施設の子供になって、私がお世話係でした。

モモカは１０ヶ月で最初の言葉が出ました・・【コジョ】・・そう言いました。

私は嬉しさ半分、悔しさ半分でしたね・・本心は、悔しさの方が強かったですね。

娘の最初の言葉が、【パパ】だった母親の気分でした。

それから3日後に、モモカが【ヨコ】と言った時には・・不覚にも、泣きました。

シズカに過保護ママだと言われ、恭子に負けず嫌い出すとこ間違ってると言われ。

マキにヨコってヨーコなの？と二ヤで言われても、私は笑っていました。

楽しくて・・モモカの毎日の変化を見るのが、楽しくて・・確かに私は過保護でした。

私はモモカが４人目の、お世話をした妹です・・４人全てに、楽しい思い出があります。

私は幸せな時間を過ごしたんだと、最近は感じています・・素敵な時間だったと。

モモカの成長の速さに、子育てのプロである、施設の職員でも驚いていました。

確かに施設に乳児で入ると、成長は早いんです・・生きる為に早くなるような。
どこか悲壮感を連れながら、乳児が成長する事が多いんです。
でもモモカは全く違いました、その成長は笑顔で飾られていて、温もりを纏っていた。
モモカが施設に来て半年後、1歳に成長したモモカが見せます。
小僧とモモカの深い繋がりを見せ付ける、満開の桜の下で問いかける。
1歳のモモカが小僧の心の迷いに、問いかけて返す・・春風の囁き。
その日小僧は総合病院の院長に、ミホが入院してる病院を聞き出して。
その病院に行って、遠くから病室の窓辺に座る、無表情のミホを見ていました。
小僧は悔しかったのでしょう、近づくことも出来ない自分が。
小僧は無意識だった言いました、小僧は無意識に施設の桜の木の下にいた。

その淋しげな小僧に歩み寄る、ルンルン笑顔のモモカが、拙い足取りで。
そして桜の花を見ている小僧に、モモカが秘密兵器の銃口を向ける。
私は哲夫とモモカの後を追って立ち止まり、玄関から見ていました。

「コジョ・・こう・・こう」とモモカが小僧に言って、笑って見せたんです。
『モモカ・・嬉しいときは?』と小僧が屈んでモモカを抱いて聞きました。
「こう」と言ってモモカが可愛く笑った。

『うん・・じゃあ楽しい時は？』と小僧も笑顔になって聞いた。
「こう～」とモモカが言って、キャッキャッと笑った。
その笑顔が本当に楽しそうで、私も哲夫も笑顔になりました。
そして炸裂する、モモカの秘密兵器・・問いかけ返し。

「コジョ・・こう・・さびし？」とモモカが無表情で言ったんです。
私は凍りつきました、初めてモモカの無表情を見たから。
「モモカは感じてるんだ！・・小僧は今日、ミホの姿を見てきたんだよ」と哲夫が言って。
私はその言葉で完璧に凍結しました・・無表情のモモカを見ながら。
小僧はモモカの無表情の瞳を見て、モモカの手を握っていた。
桜の花びらが雪のように降っていて、２人を包んでいました。
『淋しいんじゃないよね、モモカ』と小僧は静かに伝えた。
「こう・・かなし？」とモモカは無表情のまま返した。
『悲しくないよ、モモカ・・そうじゃないよね』そう言って小僧はモモカを抱きしめた。
小僧の涙を感じて安心したように・・モモカは小僧に抱かれて眠りました。

私と哲夫の後ろには、沢山の施設の子供と美由紀の姿が有りました。
「狙い撃ちだ・・モモカは小僧の心を狙い撃ちした」美由紀はそう呟きました。
私もそうだと感じてました・・その翌日です、春雨が降っていたのが。
小僧が春雨に打たれて叫んだのが・・完璧な伝達状態の小僧でした。
あの春雨の叫びには、確かに香りが有りました・・果実のような

甘い香りが。

モモカは風の中にいる・・その風は、甘い香りがする。
遥か遠く・・時を越えて吹いてきて、懐かしい記憶を呼び起こす。
だから離れていても良いんだよ・・モモカは必ず伝えてくれる。
柔らかな風に乗って、ヨーコを訪ねてくるから・・ヨコ、ヨコと言いながら。
施設の門を出た私の背中に、小僧がそう言ってくれました・・私が振り向くと。
桜吹雪の下に、モモカの笑顔がありました・・甘い香りを漂わせた、春風の中に」

ヨーコは嬉しそうな笑顔で、優しく言葉にした。

「お見事、ヨーコ・・素敵だったよ」とリアンが微笑んで。
「ヨーコ、ありがとう・・私達も準備出来そうだよ」とホノカが微笑んで、女性達が笑顔で頷いた。
ヨーコが嬉しそうな笑顔で立ち上がり、挨拶してＴＶルームを出て行った。

女性達が食事の準備を始めて、私はマリを送って通りに出て、タクシーに乗った。

「小僧・・私、自分の家くらいは、言葉で言えるよ」とマリが同調で言って笑った。
『知ってるけど・・送りたいんだよ、良いだろ』と笑顔で返した。
「また伝達強くなってる・・モモカを感じたりするから」とマリが微笑んだ。
『マリ・・七海をどう感じた？』と探りを入れてみた。

「探るね～・・あの子は素敵な子だよね、でもマリアと違うよ。
あんたはマリア、七海には大切な人を繋げよ・・それを期待するよ。
明日は9時には行くから、待っててね・・楽しみだよ」

マリが笑顔で言って、私も笑顔で頷いた。

私はマリといる時の安心感を楽しんでいた、それは蘭にもユリカにも無い安心感だった。
マリの横顔を見ながら、マリの後悔を感じていた。
大きな黒目に窓の外の光が流れて、マリは夜空を見上げていた。

「後悔してるよ、小僧の言う通りだよ・・私は自分の臆病さを悔やんでる。
ヒトミに会いに行けなかった事を・・今でも悔やんでる。
だから・・沙紀の絶望の世界が終わったら、連れてってね。
由美子の場所に・・由美子が待ってるのは、分かってるから」

マリは夜空を見上げながら、同調で静かに言った。

『了解・・マリ、連れて行くよ・・由美子が待ってるからね』とマリの横顔に囁いた。
強烈な波動が喜びを連れて来て、マリも夜空を見ながら笑顔になった。

私はマリを玄関まで送り、メリークリスマスと言って別れた。
そしてタクシーに病院を告げて、マリのように夜空を見ていた。

病院に着いて、ミホの部屋を覗くと、理沙もミホもいなかった。
消灯前に変だと思いながら、由美子の部屋に歩いていると。

遊戯室のテーブルに、クリスマスケーキを囲む、理沙とミホの姿が見えた。

若いナースが私を笑顔で手招いた、私は笑顔で遊戯室に入った。
ミホと理沙の他に、５人の入院してる子供達がケーキを食べていた。

ミホは理沙の隣で、黙々とケーキを食べながら、理沙の話を聞いていた。
理沙は自然にミホに話しかけ、無表情のミホを気にする様子も無かった。
私はそれが嬉しくて、理沙の笑顔を見ていた。

「はい・・ケーキ」とナースがケーキを差し出した。
『ありがとう』と笑顔で返して、私は手を付けなかった。

「嫌いだった？・・ケーキ」と食べない私にナースが言った。
『好きだよ・・由美子と食べるよ、クリスマスだから』と笑顔で返した。
若いナースは私を見て笑顔になって頷いた、優しい波動が包んでくれた。

「小僧ちゃん、クリスマスのお話して」と理沙が私に笑顔で言った。
子供達の笑顔が私に向いて、ミホも私を見た、私は笑顔で頷いた。

『遠い・・海の向こう、船に何日も乗らないと着かない、遠い国のお話です。
その国には沢山雪が積もります・・寒い国なんです。
その国にロースと言う男の子が住んでいました、ロースは９歳でした。
ロースのお父さんもお母さんも、病気で死んでしまって。

お婆ちゃんと、２人で住んでいました。
ロースはお婆ちゃんを助ける、とっても優しい子でした。
ロースが１０歳に成った時に、お婆ちゃんが言いました。
ロース・・１０歳になったら、竜の谷に行かねばならんよ。
そう言ったんです・・ロースはびっくりしました。
竜の谷って、とっても怖い場所だと、ロースは聞いていました。
でもお婆ちゃんが言ったので、ロースは勇気を出して、竜の谷に行きました。

一人ぼっちで、寒くて暗い山の道を、何日もかけて歩きました。
そして竜の谷に着きました、ロースが湖を見ていると、湖から竜が現れました。
大きな竜にロースは驚いてました、竜は空に浮かんでロースを見てました。
そしてこう言ったのです、１０歳になったら３つの中から１つ選ばないといけない。
そう言って、３つの大きな箱をロースの前に出しました。
その中から選べ、３つの中から１つを選べ・・竜は強い言葉で言いました。
ロースはその声に押されて、左の箱を開けてみました。
そこには一枚の絵が入っていました、その絵には王様になったロースが描いてありました。
でもロースの周りの沢山の人達は、全員が泣いていて悲しそうでした。
ロースは次に真中の箱を開けました、そこにも絵が入っていました。
その絵には、大金持ちになったロースが描かれていました。
そして周りの人達は、怒った顔で喧嘩をしていました。
ロースは最後の右の箱を開けて、絵を手にとって見ました。
その絵にはお父さんと、お母さんと楽しそうに暮す、ロースが描

かれていました。
でも周りの人は、淋しそうな顔をして俯いていました。
どれにする・・1つだけ決めろ、ロース・・竜がそう言いました。
「嫌だ」とロースは竜に向かって叫びました。
「何故だ？・・王様にも、お金持ちにも、両親と暮す事でも出来るんだぞ」と竜が聞きました。
「だって・・笑顔じゃないもん、周りの人が笑顔じゃないもん」とロースは言いました。
「3つから選ばずに、周りの人の笑顔を選ぶんだな。
そうなると、お前は老人になるぞ」と竜が言いました。
「それで良い・・それがお婆ちゃんとの約束だから。
みんなを笑顔にするような人になるのが」とロースは笑顔で言いました。
竜は黙ってロースを見ていました、ロースも竜を見ていました。
「よかろう・・お前は3つの試験を断った、最初の人間だから。
老人になるが特別な力を与えよう、1年に1度だけ。
夜空を駆け巡る事の出来る力を、私から贈ろう。
ロース・・お前は人々の笑顔選択した、三択の箱を選ばなかった。
3つから1つを選ぶ事を、三択と言う・・だからそれがお前の名前。
今夜から、三択ロースと名乗るんじゃ、そうすれば人々は笑顔になる。
世界中の子供達が、その名前を聞くだけで笑顔になる。
それが三択試験を拒否したロース・・サンタクロースの力だよ」
竜はそう言うと、湖に帰って行きました。

ロースが湖を見ていると、湖に自分の姿が映っていました。
その顔には真白な髭があって、顔中に皺がある老人でした。
でもロースは嬉しかった、誰も泣かずに、怒らずに、淋しくならなかったから。
ロースは今でも生きています、遠い寒い国で・・一年に一度だけ空を飛びます。
トナカイのそりに乗って、プレゼントを持ってきます。
その日だけは、世界中の子供達が笑顔になるという、魔法の贈り物を。
ロースは幸せを手に入れました、笑顔を見るという幸せを。
それはお金持ちになるよりも、ずっと幸せな事でした・・おしまい』

私は1年前に、モモカの問いかけに答える為に作った、創作話をした。

子供達の笑顔をと、ミホの無表情が私を見ていた。

私はそれが嬉しくて、ケーキを持って遊戯室を出た。

廊下を由美子の部屋に向けて歩いていると、暖かい風が吹いてきた。

その風に乗って、甘い香りが漂った・・「コジョ」と呼ぶ声が聞こえた。

『大きくなったよ、モモカ・・学校にも、お嫁さんにも行けるよ』
と言葉に出した。

優しい波動に包まれて、由美子の部屋のドアを開けた。

由美子の左手が迎えてくれた、メリークリスマスと言う様に・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9995o/

月光を追いかけて

2011年10月11日01時52分発行